異世界ハーレム奮闘記

文房具

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日見つけたドリームワールドなるアプリによって異世界に飛ばされた夜月　翔。

その異世界は、様々なアニメ、ラノベの世界が混じり合った世界だった。

手に入れたのは『女の子とセックスすることで新しい能力を生み出す』能力。

何もかもがウハウハな世界だが、現実はそこまで甘くはなかった！

これは女の子とイチャイチャして、強敵と戦い、そして成り上がっていく物語。

活動報告のアンケートで、登場させて欲しい女の子、能力、シチュエーションを募集しています。

能力はオリジナルでも構いません。

皆さんのアイディアを待っています。

注意：作者が知っている原作はタグにある物だけです。それ以外の要望については答えることが出来ない可能性があるのでご注意ください。

と思ったのですが、タグには１００字までしか入れることが出来なかったため、入りきらなかったものをここに書いていきたいと思います（随時追加あり）。

インフィニット・ストラトス、問題児たちが異世界から来るそうですよ？、魔法科高校の劣等生、食戟のソーマ、魔法少女リリカルなのは系、学戦都市アスタリスク、ＴｏＬＯＶＥる系、ハイスクールＤ×Ｄ、ガンダム系、僕のヒーローアカデミア、魔法先生ネギま！、ＵＱＨＯＬＤＥＲ、フルメタル・パニック！、メタルギア、ゴジラ、Ｒｅ：ゼロから始める異世界生活、プリンセスコネクト　Ｒｅ　：Ｄｉｖｅ、ＨＥＬＬＳＩＮＧ、金色のガッシュベル、ウルトラマンシリーズ、ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか、スーパーロボット大戦シリーズ、ｏｎｅ－ｐｉｅｃｅ

※この作品に出てくるキャラクターは様々な作品が混じり合っている関係上、強化されたり弱体化されたりとバランス調整される場合があります。

※作者から見てＲ１８の描写があると判断した話には誰とのＨかがわかるように名前が書いてあります。

※この小説はストーリー重視であるため、Ｈシーンが長期にわたってない場合があります。

更新告知用のＴｗｉｔｔｅｒ

ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／Ｈａｍｅｌｎｈｕｎｔｏ２９２３

目次

新しい世界　編
チュートリアル　1
緊急ミッション　その1　6
緊急ミッション　その2　（雪菜）　14
2人目の女の子　24
朝の不意打ち　（クロ）　32
初めての依頼　（クロ）　41
依頼達成、そして3人目　52
アスナさんと一緒　61
翔の悩み　71
迷いを晴らす剣巫　80
真新しい雪を踏むように　（雪菜）　93
初めて　（雪菜）　102
手に入れた矛盾の力　110
一つの区切り　119
時間で遊ぼう　（アスナ）　128
2人目と初めて　（アスナ）　139
武偵殺し　編
通学路にて　149
パーティー　157
つかの間の休息　168
バスジャック　176
アリアのお母さん　（アリア）　186
空の決戦　～蜂蜜の誘惑編～　194

空の決戦　～2つの激闘編～　202
空の決戦　～スタンド編～　215
お風呂での秘め事　（狂三）　225
ジャンヌとのひと時　235
雪菜の憂鬱　（雪菜）　244
聖天子護衛　編
護衛任務　253
襲撃　263
狙われた翔　272
入り乱れる戦場　283
後味の悪い結末　293
退院して　306
幼い2人　（クロ、ティナ）　315
覇王と疾風迅雷　編
決闘の申し込み　326
進化の兆し　337
2人の戦う理由　346
敬意を払え　358
寒くなったら　368
危険な2人　378
お見舞い　雪菜、耀、綺凛の場合　387
お見舞い　狂三の場合　（狂三）　398
お見舞い　ヤミ、ちびっ子集団の場合　407
お見舞い　理子、アスナ、アリアの場合　416
レベルアップパー　編

思わぬ再会 425
勇気の決断 434
再燃する劣等感 443
後は任せた 453
真犯人は 464
決戦 474
まさかの援軍 485
事件の終焉 493
久しぶりの我が家（アスナ） 501
朝の訓練 511
鑑賞会の裏側で（理子） 520
蜂蜜の甘さ（理子） 529
ブラド決戦　編
無意味な話し合い 539
レティシアの事情 549
ブラドとの決戦　～決意と覚悟編～ 559
ブラドとの決戦　～スタンド編～ 568
ブラドとの決戦　～外道の戦い方編～ 574
ブラドとの決戦　～決着編～ 583
Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　編
開戦の夜 592
変わらない大本 600
信用 610
交渉へ（桜） 620
交渉の結果 630

新しい力 638
闇の魔法 649
動き出す戦い 658
ゆっくりと次の戦場へ 667
聖杯問答へ 675
聖杯問答 683
敗北 691
敗戦処理 698
お風呂でご奉仕？　前編（桜） 707
お風呂でご奉仕？　後編（桜） 716
市街地戦 722
撃ち込まれる楔 732
悪人たちのやり取り 741
亀裂 749
急襲 758
決起 767
騎士王の説得 777
騎士王との　前編（アルトリア・ペンドラゴン） 786
騎士王との　後編（アルトリア・ペンドラゴン） 794
最後の休息 804
穢れた奇跡の決戦　臓硯編 814
穢れた奇跡の決戦　綺礼編 824
穢れた奇跡の決戦　ギルガメッシュ編 832
希望の聖杯を未来に託して 842
現代への帰還 852

変化する日常　編
お早い再会 ―― 860
日常的な買い物 ―― 869
裏・日常的な買い物 ―― 878
突然の宣告 ―― 888
桜色の劣情（間桐桜） ―― 898
黒い騎士王の劣情（セイバー・オルタ） ―― 906
家宅捜査　前編 ―― 918
家宅捜査　後編 ―― 927
新しい繋がり ―― 937
オフトレーニング　編
オフトレーニング旅行～出発～ ―― 945
オフトレーニング旅行～到着～ ―― 953
オフトレーニング旅行～ＢＱ～ ―― 961
オフトレーニング旅行～温泉　男湯編～ ―― 971
オフトレーニング旅行～温泉　女湯編～ ―― 980
オフトレーニング旅行～温泉での～（理子、雪奈） ―― 989
オフトレーニング旅行～川遊び①～ ―― 999
オフトレーニング旅行～川遊び②～ ―― 1007
オフトレーニング旅行～仲直り作戦①～ ―― 1017
オフトレーニング旅行～仲直り作戦②～ ―― 1027
オフトレーニング旅行～仲直り作戦③～ ―― 1037
オフトレーニング旅行～仲直り作戦④～ ―― 1044
オフトレーニング旅行～仲直り作戦⑤～ ―― 1054
オフトレーニング旅行～仲直り作戦⑥～ ―― 1062

オフトレーニング旅行　～帰宅～　1071
8月に向けて　編
訪れる転校生　1080
転校生の目的　1090
少女たちの特訓　（アインハルト）　1098
アゼンダの取り調べ　1107
新谷航平の記録　起　1117
新谷航平の記録　承　1128
新谷航平の記録　転　1138
新谷航平の記録　結　1147
騎士王と閃光と　前編　（アルトリア、アスナ）　1157
騎士王と閃光と　後編　（アルトリア、アスナ）　1167
繋がるココロ　（メア）　1179
アインハルトのデバイス①　1189
アインハルトのデバイス②　1198
話し合いの結果　1205
悪夢の中の『デス13』①　（ヤミ）　1214
悪夢の中の『デス13』②　1223
2人の少女との初めて①　1233
2人の少女との初めて②　（綺凛）　1244
2人の少女との初めて③　（綺凛）　1254
2人の少女との初めて④　（アインハルト）　1265
2人の少女との初めて⑤　（アインハルト）　1278
陸戦試合　編
陸戦試合①　1291

陸戦試合②　1302
陸戦試合③　1313
陸戦試合④　1327
陸戦試合⑤　1336
陸戦試合⑥　1346
陸戦試合終了、そして新しい事件　1357
妹達　編
情報提供　1369
２人の名前　1378
くっついて離れない　前編　1387
くっついて離れない　中編　1397
くっついて離れない　後編　1406
島の裏側の話　1416
内側の爆弾　1426
いくつもの点　1435
交わる点　1441
研究所襲撃（表）　前編　1444
研究所襲撃（表）　中編　1453
研究所襲撃（表）　後編　1463
研究所襲撃（裏）　前編　1473
研究所襲撃（裏）　後編　1483
御坂との話し合い　1493
やるべきこと　1502
ＶＳ　一方通行　前編　1512
ＶＳ　一方通行　後編　1521
1530

まだまだ中間点 ―― 1539
遅すぎた救い ―― 1548
敵の本丸へ ―― 1557
ベストマッチ２０１７ ―― 1567
裏の決着 ―― 1578
本当の後処理、７月の終わりへ ―― 1587
激動の８月へ ―― 1597
ヤミとティアーユ　前編 ―― 1607
ヤミとティアーユ　後編 ―― 1616
小さい娘達の襲撃　前編（クロ） ―― 1626
小さい娘達の襲撃　中編（ティナ） ―― 1639
小さい娘達の襲撃　後編（コッコロ） ―― 1649
要求されるオシオキ①（狂三、理子） ―― 1658
要求されるオシオキ②（狂三、理子） ―― 1668
要求されるオシオキ③（狂三、理子） ―― 1678
要求されるオシオキ④（狂三、理子、桜） ―― 1688
要求されるオシオキ⑤（桜、雪菜） ―― 1697
激動の８月　編
秘密の会議　前編 ―― 1707
秘密の会議　後編 ―― 1716
翔が教会へ ―― 1725
夜月　翔　ＶＳ　ベート・ローガ ―― 1734
８月の依頼 ―― 1744
インターミドル　～開幕～ ―― 1755
インターミドル　～注目選手達～ ―― 1766

プチ同窓会 ―――――――

インターミドル　アインハルトＶＳエレミア②　――――
インターミドル　アインハルトＶＳエレミア③　――――
インターミドル　アインハルトＶＳエレミア④　――――
インターミドル　反省　――――
インターミドル　綺凛ＶＳヴィクトーリア　――――
インターミドル　お食事会　――――
幕間　デビルークの妹達の外出　――――
みんなでプールに①　――――
みんなでプールに②　――――
みんなでプールに③　――――
みんなでプールに④　――――
大物たちの会議　最終日　――――
スフィンクス追跡　――――
欲望の開花　――――
ＶＳ　アナザーオーズ　――――
タカとトラとバッタ２０１０　――――
怪獣大決戦　前編　――――
怪獣大決戦　中編　――――
怪獣大決戦　後編　――――
最強チーム結成　――――
ＶＳパトラ＆金一　前編　――――
ＶＳパトラ＆金一　中編　――――
ＶＳパトラ＆金一　後編　――――
教授　――――
Ｗは誰？／サイクロン・ジョーカー２００９　――――
2280226922582248223822262215220521952185217521652155214421312121211121002090208120712061204920412035

緋弾覚醒 …… 2
カメンライド２００９ …… 23
幕間　桜の帰省 …… 56
８月の終わり　～各国の反応～ …… 62
８月の終わり　～蒔かれる種～ …… 33
後処理（８月） …… 52
依頼完了報告 …… 32
六課入隊　編
お見舞い …… 23
メアの初体験（メア） …… 43
リフレッシュ　前編 …… 32
リフレッシュ　中編　（アスナ、アリア） …… 39
リフレッシュ　後編（ジャンヌ、アスナ） …… 23
理子の目論見通り（アリア、アスナ） …… 79
新学期の朝（理子） …… 24
六課入隊 …… 31
久しぶりの顔合わせ …… 42
ララの転校と六課初訓練 …… 24
実力調査 …… 32
平和な六課 …… 43
まだまだ平和 …… 24
婚約（仮）編
綺凛のトラブル　前編 …… 52
綺凛のトラブル　中編 …… 72
綺凛のトラブル　後編　（綺凛） …… 87
…… 24
…… 46
…… 52
…… 24
…… 32
…… 43
…… 24
…… 31
…… 42
…… 24
…… 32
…… 43
…… 24
…… 52
…… 72
…… 87
…… 25
…… 27
…… 25
…… 19
…… 25
…… 08

メアと妄想で（メア）……538
綺凛の危機……492
アクア・ネックレス①……525
アクア・ネックレス②……569
アクア・ネックレス③……579
変わる関係性　前編……589
変わる関係性　後編……599
婚約（候補）報告……609
禁書目録　編
禁書目録輸送ミーティング……619
翔の本性　前編……626
翔の本性　後編……639
翔の本性　事後（狂三）……650
狂三と不思議な鏡　前編（狂三）……662
狂三と不思議な鏡　中編（狂三、オルタ）……673
狂三と不思議な鏡　後編（狂三）……684
禁書目録輸送当日……694
輸送機襲撃……705
禁書目録輸送事後（ラム）……715
島の異変……726
平和な午後……736
吸血鬼襲撃事件の捜査①……746
吸血鬼襲撃事件の捜査②……756
吸血鬼襲撃事件の捜査③……767
吸血鬼襲撃事件の捜査④……776

吸血鬼襲撃事件の捜査⑤ ―― 786
蛭子影胤戦、事後 ―― 796
キーストーンゲート突入① ―― 806
キーストーンゲート突入② ―― 816
キーストーンゲート突入③ ―― 826
キーストーンゲート突入④ ―― 836
ハザードは止まらない① ―― 847
ハザードは止まらない② ―― 857
ハザードは止まらない③ ―― 867
首輪破壊 ―― 877
キーストーンゲート襲撃事件事後処理　前編 ―― 887
キーストーンゲート襲撃事件事後処理　後編 ―― 897
アナザーゴースト編
方針転換 ―― 908
夜月翔のハーレムな謹慎①（理子、メア） ―― 917
夜月翔のハーレムな謹慎②（メア） ―― 929
夜月翔のハーレムな謹慎③（コッコロ、ティナ、クロ） ―― 937
夜月翔のハーレムな謹慎④（クロ、メア） ―― 950
夜月翔のハーレムな謹慎⑤ ―― 961
夜月翔のハーレムな謹慎⑥（桜） ―― 971
夜月翔のハーレムな謹慎⑦ ―― 982
綺凛とユウキの異変 ―― 992
幽霊との遭遇 ―― 1003
夜月翔のハーレムな謹慎⑧（雪菜） ―― 1012
それぞれの就寝（アインハルト） ―― 1022

新しい世界　編
チュートリアル

「ん？　なんだ、このアプリ？」
俺、『夜月　翔』はスマホをいじっていると、見たこともない画面に飛ばされた。
こういうことはまれに良くある。画面の下の方にある広告を誤って触ってしまい、強制的にそのページに飛ばされるのはみんな経験したことがあるだろう。
いつもならすぐに消して元のページに移動するのだが、今日はなんとなく流し読みしながらスクロールしてみた。
「あ、やっぱり、エロゲか」
描かれた過激なシーンの画像が、その『ドリームワールド』と銘打たれたページの正体を現していた。この手のサイトの大半を占めるエロゲの登録画面だったのだ。
しかし俺は、そこに描かれているキャラクターに眉を寄せた。
それらはすべて、それなりに有名なラノベやアニメのキャラクターだったからだ。
「すげーな。権利とか大丈夫なのか？」
気になった俺は、今度はちゃんとその文面に目を通すことにした。
それをまとめると、

・主人公は何でも屋の店主
・そこで依頼を解決することによってポイントを稼ぎ、ガチャを回して女の子をゲット。
・その女の子と協力して更なる依頼をこなしていく。
・依頼の途中に女の子の好感度を上げれば、サービスシーンがある。

というものだった。
何ともありきたりな設定だ。しかし、それを補っても有り余るほど

豪華なキャラクターが登場する。
「やってみっかな……いや、ないな」
一瞬、欲望に身を任せてゲームスタートを押そうとしたが、正気を取り戻して指を離す。
こんなものを始めて、もし危ないサイトだったらどうすんだ。
しかし、俺は気が付いていなかった。すでにわずかに指が画面に触れていたことに。そして、すぐに手を放したことで押したことになってしまったことに。
俺はとてつもない眠気に襲われて意識を手放した。

目覚めるとリビングの床の上で倒れていた。しかも見覚えがないリビングだ。俺の家よりもはるかに広いんだけど。
頭痛がする頭を押さえながら立ち上がると、テレビがひとりでについた。
《ドリームワールドへようこそ、夜月　翔様。これからこの世界のチュートリアルを始めさせていただきます》
「は？　ドリームワールド？　チュートリアル!?」
訳が分からない。まさかゲームの中に入ったとでもいうのだろうか。
いや、それよりも、
「夢……か？」
《その通り、ここは夢の世界。男の欲望を無限に叶えることが出来る夢の世界でございます》
俺の声が聞こえたかのようにテレビは返す。もしかすると人工知能が埋め込まれているのかもしれない。あのテレビは、どっかの会社が開発した喋るロボットを発展させた物であろうか。

《私はドリームワールドチュートリアル専用ＡＩです。問題がなければチュートリアルを始めさせていただきます》
「ああ、分かった」
　混乱していたが、じいちゃんが鍛えてくれたおかげである程度落ち着くことが出来た。
　今はこの声に従っておくか。何をするにも情報が足りないしな。
《翔様、あなたはこれからこの何でも屋の店主になっていただきます。ここには様々な依頼が舞い込んでくるようになっているので、その依頼を解決してください。この依頼は拒否が可能です。依頼の行動の結果自分たちがどのような立場になるのかを考えて慎重に行動することをお勧めします。しかし、この世界を最大限楽しむためには依頼には積極的にかかわることをお勧めします》
　フムフム、これは直前まで読んでたゲームとほとんど同じ内容だな。まさか、本当にゲームの世界に来ちまったのか？
《依頼を解決するとＧ（ガールズポイント）Ｐを入手できます。Ｇ（ガールズポイント）Ｐを１００ポイント使用すれば『ガチャ』を回して女の子を入手することが出来ます。どんな規模の依頼でも、最低１回ガチャを回すだけのポイントを入手することが出来ます》
　どんな依頼でも、最低１回回せるだけは貰えるのか……なんかやさしく聞こえるけど、依頼が全部難しいものだったら厳しいんだよな。
《女の子は例外でない時は、原作で１番最初に登場した時の姿で、１番最初に主人公に向けていた感情をあなたに向けてきます》
　そこで気になった単語が出て来たた。
「例外って？」
《例えば、ライトノベルなどの場合、１巻の１番最初に主人公の幼少期が描写される場合があります。その場合には、その時登場したヒロインは例外的に、『１番最初』とは数えないという事です》
　なるほど。だいたい分かった。
《もちろん、リアルに好感度を上げれば女の子とセックスすることも可能です。男を見せてください》
　何をバカな。チョロインが増えてきた昨今だが、それでも主人公は

死にかけるなどしてヒロインを落としていくのが常だ。俺にそんな度胸はない。せいぜい一緒に買い物するくらいだろう。それでも十分嬉しい。
《そして、あなた自身にも能力をつけることが可能となります》
「ん？」
サイトの紹介にはない要素だな。しかも、うれしい要素だ。
《武器・能力ガチャは1ポイントで1回、回すことが出来ます》
1ポイントで一回か。で、取得方法は？
《ポイントの取得条件は、女の子によって引き起こされるあなたの射精です。1回の射精で1ポイントです。フェラ、手コキ、セックス、どれでも構いませんが、自慰ではだめなので注意してください》
あ、はい、そうですか。俺もそのゲームやってますそろそろ１０連ガチャでは☆４サーヴァント確定にして下さいお願いしますそうじゃなくて!!
なんだよその条件!! そんなの無理だろ!?
《それとポイントの取得条件については、あなたの口から女の子に喋ることはできないようになっているので。キャラによっては責任感のせいでやりたくもない行為をやらされる可能性があるので。合意はＯＫですが、ムリヤリはダメですよ？》
いや、だから無理だって!!
《ガチャは後ろに設置しておきました。ご確認ください》
顔をひきつらせながら振り向くと、壁際に2台のマシーンがある。あれか。
《次にこの建物ですが、1階は入手したマシーンの格納庫、2階は何でも屋の事務所、ここ3階はリビング、4階からは居住スペースになっています。5階以降は女の子の居住スペースで、1つの階に部屋は4つ、女の子が増えるたびに階は増設されていきます。女の子が増えると、その子専用の部屋ができ、召喚された女の子はそこに現れるようになっています》
「いくら何でも、そんな建物おかしいんじゃ……」

《それについては、関係者以外違和感を持たないようになっているのでご安心を》

あ、そうですか。もういいです。

《チュートリアルは以上となります。チュートリアル終了記念として、翔様には、女の子ガチャと武器・能力ガチャ1回分のポイントを差し上げます。それでは、良い夢を》

その言葉を最後にテレビの電源は落ちた。

落ち着こう。

なんでログアウトの方法を言わなかったのか。そんなのは簡単、ログアウトできないから。

チュートリアルでログアウトの方法を言わなかったというのはつまり、そう言う事なのだ。確認してみても、それらしいものはなかった。

まあ、じいちゃんなら理解してくれるだろう。いつもいつも、男にはそいつにふさわしい戦場に行かなければならない時が来る、って言ってたし。それが今ってことで。

持ち前の適当さで素早く頭を切り替えた俺は、とりあえずガチャを回そうと後ろに置いてあるマシーンに向かうのだった。

緊急ミッション　その1

人生は選択の連続という言葉をよく聞く。
なるほど、確かにそうだろう。人間は日々何かを選択することで生活している。
その時必要になるのは、それまで積み上げてきた努力であったり、支えてくれる人たちだ。そして、それでも足りない時に最後に味方してくれるのは『運』だ。
『運も実力の内』と言われるほど、運というものは重要な要素だ。どんなに努力しても『運悪く』本番に風邪をひいてしまうかもしれない。
人の力ではどうしても完全に制御することが出来ない物。それが運だ。
このドリームワールドに飛ばされたのは、果たして幸運なのか？
そんなものはその人の感じ方次第。リアルが充実していれば不運だろうし、アニメの世界にあこがれていたのならば幸運だっただろう。
俺としてはアニメ・特撮共に、それなりに好きなため結構嬉しい。
あ、どうでもいいか。
はい。そろそろ、意味の無いことをつらつら並べるのはやめます。
目の前には二台のマシーン。武器・能力ガチャと女の子ガチャだ。
運、そう、運次第で、この世界での俺の運命が決まる。
武器・能力ガチャはこれからの俺の行動に大きく影響を及ぼす。女の子ガチャは出てくる女の子によっては俺に命の危険が訪れる。
だってさ、ヒロインによっては男嫌いだったり、女の子の方が好きだったり、果てには主人公を抹殺しようとする娘だっているじゃん？
出来れば幼馴染ポジ、主人公には好意的だった娘が欲しいです。
武器・能力は脇役のでもいいからまともに身を守れるやつで。
まあ、危険な任務やるなんて言われてないけどね。武器・能力がもらえる時点で荒事が起こるって確定しているようなものだけど。
「引くか」
覚悟を決めてマシーンの前に立つ。マシーンにはタッチパネルがあり、そこで現在のポイントを確認したり、ガチャを引いたりするよ

うだ。
とりあえず、武器・能力の方から。もし危ない女の子が出てきても対応できるように。
「こい……ッ!!」
タッチパネルの『ガチャを引く』を押した。
ガチャマシーンから機械的な駆動音が聞こえる。しばらくすると、下のコピー機の様になっていた部分がゆっくりとスライドしてくる。ここから何か出てくるのか？
その予想は正しく、１０秒もしないでとある物体が出現した。
「これは……」
その物体とは、

「拳銃、だと……ッ!!」
まさかの何の変哲もない拳銃だった。
タッチパネルには何やら文字が表示されている。なになに？

ベレッタＭ９２Ｆ（ベレッタ・キンジモデル）
緋弾のアリアの主人公、遠山　キンジが使用している拳銃。同作品のキャラクター、『平賀　文』によって違法改造されフルオート、三点バーストが可能となっている一品。
マガジンは無限に支給される。

あ、そうなんですか。説明文はここに表示されるんですか。
「銃、かぁ……確かに使いやすいけどさ。触ったことないしな。刀の方がまだよかったかも」
使い方は分かるけどね。ちょっと人には言えない手段で知ったんだ。内緒だよ！　みんな！
「うん？」
なんか、もう一つ出て来たけど。最近発売された腕時計型携帯みたいだな。
そう思っていると、タッチパネルに新たな説明文が表示される。

通算ガチャ１回記念
超高性能腕時計型携帯。
通信、ネット、写真はもちろん、これを使えば遠くからでも武器・能力ガチャを引くことが出来ます。
また、家にある、ガチャで入手した道具を手元に転送することも可能です。

記念品か。あるよね、スマホゲームでもこういうの。しかも便利だし。
「はい、次」
俺は時計を腕に巻いて、今度は女の子ガチャの方に目を向ける。
武器・能力ガチャで出て来たものが慣れない銃だったため、ひたすらにやさしいキャラが出てくるのを祈るばかりだ。
『ガチャを引く』をタッチ、表示されたのは、

『姫柊　雪菜』をゲットしました。
５階１号室に入室しました。

とだけ表示された。
女の子の場合は詳しい説明はないってことか。
で、女の子は姫柊ちゃんか。大当たりじゃない？　良識もあるし、強いし、少しポンコツだし、可愛いし。
問題は俺に向けてくる感情。原作では主人公を監視するって目的だったから、主人公に向けて来てた感情は仕事対象かな？　取引先の相手みたいな感じで、好きでもないし嫌いでもないけど、仲良くする相手くらいかな。
何はともあれ、挨拶はしておかないと。
俺は上の階につながっているだろう階段に目を向ける。すると、その階段を下りてくる足音が聞こえた。
降りてきたのはもちろん、たった今召喚したばかりの姫柊　雪菜だった。
「……」
「……」
階段で鉢合わせ、互いに無言になる。
「……とりあえず、座る？」
「そ、そうですね」
俺たちは適当に座り、向かい合う。なんだこの無言。親がいなくなった後のお見合いかよ。知らんけど。
でも、こんなキャラだっけか？　もっと、こう、堂々としてるようなイメージがあったんだけど。そんなに恥ずかしがり屋だったか？
「夜月　翔だ。これからよろしく」
「え!?　あ、姫柊　雪菜です。よろしくお願いします。えっと……」
「好きに呼んでくれ。こだわりはないから」
「分かりました。それでは夜月先輩と」
「俺が年上だってよくわかったな」
俺チビだしな。高校１年だけど１６０㎝ギリギリしかないし。顔も子供っぽいって言われるし。

「この世界についての知識は、召喚と同時にある程度頭に入ってくるみたいで。その時に夜月先輩の事も」
「あー、はいはい」
　つまりはｆａｔｅのサーヴァントみたいなもんか。
「じゃあ、何をするかも？」
「はい。ここで何でも屋をするんですよね？　頑張りましょう」
「そうだね」
　段々イメージの姫柊ちゃんになってきた感じがする。やっぱり緊張してたってことか。
「あ、そうそう、明日から学校もあるみたいですよ」
「マジか？　すごいなこの世界は。ってか、チュートリアルじゃ教えてくんなかったぞ」
　あくまでも、この世界のシステムを教えるだけがチュートリアルの目的だったってことか？
「そうなんですか？　じゃあ、先輩が知らないこともたくさんありそうですね。少し説明を……その前に、何か飲み物取ってきますね」
「ありがとう。お願いするよ」
　そう言って姫柊ちゃんはキッチンに消えていく。そして走って戻ってきた。
「先輩！　大変です！」
「どうした？」
　虫でも出たのかな？　と呑気に考える。
「違います！　冷蔵庫の中に、何もないんですよ！」
「へ？」
　姫柊ちゃんに引っ張られていくと、なるほど確かにからっぽだな。なにか、買ってこないとだな、お金あったっけ？
「はい、先輩の部屋に通帳があると思いますけど」
　姫柊ちゃんの言葉通り、俺の部屋の机には通帳があった。預金残高は……
「４０万か」
「なんでも、ここに住んでいる人ひとりにつき２０万円、毎月支給され

るそうです」
　現実的な数字で夢が壊されたよ！　もっと使いきれないくらいもらえてもいいんじゃない!?
「まあ、あるだけましか……買い物行くか」
「あ、私も行きますよ」
「え、２人で？」
「よろしく」
　こうして俺たちは買い物に行くことになったんだけど、姫柊ちゃんの姿に違和感を感じた。
　なんだろう、何かが足りないような気がするんだよね。
　俺は姫柊ちゃんをじっと見る。
　かわいらしい顔にさらさらの髪、夏服とミニスカートから伸びた手足は白く、そして、しなやかな強さを持っているように思われた。
　ちなみに姫柊ちゃんの服装は、原作で彼女が通っている彩海学園中等部の制服だ。
「先輩？　どこを見てるんですか？」
　姫柊ちゃんが、俺が色々なところをじろじろ見ていることに気が付いたみたいだ。しかし、ここで焦るのは禁物だ。幸いにも、感じ取っていた違和感を知ることが出来た。そこを指摘すれば、今のはなかったことになるだろう。
「姫柊ちゃん、雪霞狼は？」
　そう、雪霞狼だ。
　俺と会った時からずっと、姫柊ちゃんの代名詞ともいえる武器である雪霞狼を持っていなかったんだ。
　原作では縮めてケースに入れて持ち運びしていた。それはもう、どこにだって持って行く、という勢いで、手放すことはなかったはずだ。
　もしかして女の子の武器も、武器・能力ガチャで引かないといけないのか？
「あ、い、いえ、それは……その……買い物くらいなら持って行かなくてもいいかな、なんて……」
　ん？　なんかおかしいぞ？　あの真面目な姫柊ちゃんが吐くセリ

フとは思えないんだけど。
「それにほら！　たくさん買うかもしれませんし！　邪魔になるかもしれないじゃないですか！」
まあ、そういうことにしておくか。
俺はそれ以上の言及を避け、1階へと続いている階段を降り始めるのだった。

俺たちはとりあえずお金を下すために銀行にやってきた。ナビもできるこの腕時計超便利。
それよりも暑い。姫柊ちゃんの説明では明後日に学校の始業式（1学期の）があるらしいので、4月のはずなんだけど、普通に汗が出るくらい暑いぞ。
何かおかしいと思って腕時計のマップ機能とネットを使って調べてみると、なんとびっくり、ここは太平洋に浮かぶ人工島だったのだ。
最先端科学やら魔法やらを研究しているうえに、人間以外の種族も住んでいる特殊な島で、俺は学園都市と絃神島が合わさったものだと理解した。
そして、こんな島で起こる事件に関する依頼なら、きっと猫さがし程度にはならないだろう、という事も。
懐の拳銃が豆鉄砲に見えてしまいナイーブになっていると、何時の間にか銀行に到着した。
銀行は至って普通だ。ＡＴＭには2人の人が並んでいる。姫柊

ちゃんには座っててもらい、俺がＡＴＭに並ぶ。
そして銃声が鳴り響いた。
いや、俺じゃないよ！　いくらなんでもそんなにバカじゃねぇ！
撃ったのは他の誰かだから！　勘違いしないでよね!!　はいはい、気持ち悪い気持ち悪い。
だいたい、銀行で拳銃ブッ放したら、銀行強盗に間違われるかもしれないだろ。そう……銀行強盗に……
「このケースに金を詰めろ」
覆面をしたヤツらが客、銀行員に銃を突き付けていた。
いきなり、銀行強盗ですか。
俺がうなだれて下を向いていると、腕時計型携帯にメールが届いていることに気が付いた。
それのタイトルは『緊急ミッション』だった。
まさか、これがミッションなんですか？

緊急ミッション　その２　（雪菜）

「オラ！　さっさとこっちにこい！　撃ち殺されてぇのか！」

銀行員と客である俺たちは、壁際の一カ所に集められた。すでにシャッターは閉められており、外の様子は分からない。こんな時間にシャッターを下ろしている銀行は明らかに不自然なので、もしかすると警察的な組織が来てるかも知れないけど。

俺達の周りには３人の覆面がいて、それぞれ銃を向けてきている。ふざけんな。

そして、今手を引かれて２人の銀行員が連れて行かれた。多分お金を出させるためだろう。

数は……全員で５人か。流石に拳銃一つじゃ制圧できないかな。全員銃で武装してるし、防弾・防刃繊維でできた服を着てるだろうし。

そもそもここでは、デフォルトで服に防弾・防刃繊維が使われてるんだと。今さっき知ったけど。

だったら撃たれても大丈夫ではないかと思うかもしれないけど、撃たれると骨がおられるくらいの衝撃が来るらしい。もう防弾・防刃繊維関係ないじゃん。頭を撃たれても終わりだしな。

それに、銃よりも危険な能力を持つ奴だってうろうろしてるんだから、防弾・防刃繊維なんてただの布と変わりないんだよね。あった方がましだけど。

そんなわけで下手に抵抗する人も現れず、銀行内にはお金を取り出す音だけが響いている。

正直俺もおとなしくしておきたいんだけど、さっき届いたメールが気がかりなんだよね。

なんですか、緊急ミッションというのは？　チュートリアルにはありませんでしたが？

緊急ミッションと銘打たれたそれには、一言『銀行強盗を制圧せよ』としか書かれていなかった。

確かに、依頼が誰かに頼まれるものだけだなんて言われてないさ。スマホのゲームにだって定期的にイベントがあるし、多分そんな感じ

の奴だろう。
でも、強制じゃない。
いや、無理だろ？　今の装備でこの状況はどう考えても。
それにいいじゃん、盗られるのはお金だけだし。人が死ぬわけじゃない。
だからみんな、おとなしくしてようね。無理に刃向かう必要はないんだよ？
ホントに……ッ!!　無理に逆らう必要はないから……ッ!!
だから――
「放してくださいッ！　先輩!!」
――落ち着いてください姫柊ちゃん。
出来るだけ抑えた声に、ありったけの意志を載せて俺の手を振り払おうとする姫柊ちゃん。
この子、まじめだし正義感も強いのはいいんだけど、丸腰で1人では危険すぎる。
せめて俺がもう少しまともに戦えれば良かったんだけど、あいにく銃にはほとんど触ったことはない。
姫柊ちゃんは、銀行強盗が現れた瞬間に制圧に乗り出して人質とられて為なすべなくやられたんだよね。
そのおかげで床で1人伸びてるけど、その代わり姫柊ちゃんに対する警戒が厳しくなった。次に妙なことをしようとしたら、容赦なく射殺コースだ。
「先輩！　このまま何もしないでいていいんですか!?」
「さっきダメだっただろ。ここの3人を倒せても、奥にいる2人はどうしようもない。また人質とられるぞ」
「でも……ッ!!」
「おい！　静かにしろ!!」
覆面の一人に怒鳴られて姫柊ちゃんは慌てて口を閉じる。
姫柊ちゃんは今まで入れていた力を抜いて、幾分か落ち着いた声になった。
「じゃあ、どうするんですか？　何か作戦はあるんですか？」

「あるわけないだろ。そんなもん」
「え？　無いんですか!?」
「むしろ、どうしてあると思ったんだ……？」
「いえ、なんというか……慣れてるような感じがして」
　俺の頭が冷える。
「慣れてる？」
「はい。先輩の顔には余裕があるように見えるんです。違いますか？」
　違わねえよ。クソ、剣巫の観察眼はバカにできないな。
「違くは……ない。そうだな、結構慣れてるよ。でもだからこそ、俺が動いても解決できないってことは分かる。だから、姫柊ちゃんもじっとしててくれ。死んでほしくないんだ」
「先輩……」
　そんな顔しないでくれよ、なんか悪いことしてるみたいじゃないか。そう思った俺は、とっさに言葉をつなげてしまった。
「まあ、本当に低い可能性はあるけど」
「え？」
「え？」
「可能性、あるんですか？」
「……俺、そんなこと言ったかな？」
「いいましたよ？」
「言ってｎ」
「いいました」
　俺のバカ。死ね。何故いつもいつも余計なことを言ってしまうんだ。ばあちゃんにも、再三注意されてたじゃん！　そういう所は、とうさんとじいちゃんそっくりだねえ、って。
　いや、あるんだよ。どうにかできるかもしれない可能性が。完全に運頼みだけど。
　そして、それを口にすれば絶対に姫柊ちゃんに軽蔑される。出会って一日で嫌われるのは嫌だなぁ。
　でも、誤魔化せる感じじゃない。

俺は息を吐いて覚悟を決める。
「可能性はある。でもそれには姫柊ちゃんの協力が必要なんだ」
「私にできることなら」
言ったな？　その覚悟はどれだけ固いんだ？　これからの俺の一言を聞いても、同じセリフが言えるか？
「俺を射精させてほしい」
最低のセリフですね分かります。
濁さないではっきり言ったほうがいと思ってド直球に言ったんだけど、これはこれでクズの発言だな。むしろ新感覚。銀行強盗中に出会って1日も経ってない女子中学生に射精をさせてくれと迫る男。ただの変態だ。
や、でも、最後の可能性は新しく能力を手に入れるしかないんだよ!!　分かってくれ！　プライドなんてとっくに捨ててるんだよ、俺は!!
「す、すみません。よく聞き取れなかったみたいです。もう一度言って下さ――」
「俺を射精させてほしい」
口を開けて固まる姫柊ちゃん。
「へ、変態!!」
「おい!!　いい加減にしろ!!」
「すみません！　黙ります、黙りますから!!」
俺は急いで銃口を向けてきた覆面に両手を挙げて無抵抗をアピールする。まったく姫柊ちゃんはこんな状況でなんて大声を出すんだ。
「こんな時に大声を出すなんて、なんて常識知らずなんだ、姫柊ちゃんは」
「先輩のせいですよね!?」
ひどい擦り付けだ。
「これはどうしても必要なことなんだよ」
「なっ……しゃ……それとこれと何の関係があるんですか!?」
今、射精って言おうとしてひっこめたな。
「……俺、射精するとパワーアップするんだよね」

「変態ですね」
　そんな平坦な声で言わないでくれよ。うっかり死にたくなる。今持ってる銃でこめかみを撃ちぬくだけで死ねるんだから、そんな暴言は控えてほしい。
「でも、分かりました。それしか方法がないなら」
「え？」
　なんですと？
「こ、今回だけです！　今回だけですから……それに、好都合ですしね」
「ん？　なんか言った？」
「いえ、なんでも」
　聞こえたけどね。都合がいいとはいったいどういう事だ？
　はっ!!　まさか、姫柊ちゃん……ッ!!
「変、態？」
「先輩に言われたくないんですけど」
　ごもっともです。
「それで、まさかここでやるんですか！」
「みられるのはちょっと……やっぱり姫柊ちゃんって変――」
「じゃあ、どうするんですか？」
　完全に無視された。
「トイレに行きたい、とか？」
「それ上手くいきますか？」
「だから可能性は低いって行っただろ？　やるだけやってみるしかない」
　俺はゆっくり立ち上がる。
　もちろん3つの銃口は全て俺に向けられる。周りの人も何事かと思ってるんだろう。
「すみません、トイレに行きたいんですけど」
「トイレ？　おい、どうする？」
「いいんじゃないのか、トイレくらい、しっかり見張ってれば」
「まあ、漏らされても厄介だしな。じゃあ、俺が行く。少しでも変なこ

としたら撃つからな」
「分かってますよ」
よし！　行けるぞ。
さ、次は姫柊ちゃんの番だ。
「あ、あの……私も」
「なに？　お前もか、おい」
「分かったよ」
「気をつけろ。油断してるとやられるぞ」
こうして俺たちは後ろから銃を向けられつつも、トイレに向かうことが出来た。
男子トイレに入るとすぐに行動を開始した。
素早く足を踏みつけ、怯んでいる所で銃を払い落とし、顎にキツイ頭突きの一撃をお見舞いしてやった。
うめき声をあげている覆面にダメ押しの一発。これで完全に気を失ったようだ。
「先輩！　大丈夫ですか!?」
覆面の銃を拾って懐に入れていると、姫柊ちゃんが駆け込んできた。
「これは……先輩が？」
「それ以外の誰がやったんだよ」
「いえ、てっきり、私が2人とも倒すんだと思ってたので」
「どうでもいいけど、さっさとはじめよう、時間もかけられないし」
流石に長すぎると不審に思って身に来るかもしれない。
「は、はぃ」
真っ赤な顔で消えそうな返事をする姫柊ちゃん。何かに目覚めそう……いや、健全な男子高校生がこれに興奮しないわけがない。俺は正しいんだ。
「せ、せめて個室で……」
「あ、ああ、そうだな」
俺たちはそろって、洋式の方の個室に入る。
「えっと、それで私は、どうすれば……」

あ、こっちで指定してもいいのね。それじゃあ……
「フェラ、かな」
「フェラ？」
「うん。簡単に言えば、俺のを姫柊ちゃんが舐めるんだ」
「な、舐め……ッ!!」
「ダメか？」
「い、いえ！　もう後には引けませんから！」
おおぅ、こんな健気な子を、俺は汚してしまうというのか。
たまりませんね。気持ち悪りいな、俺。
俺はズボンとパンツを一気に下ろす。我ながら余裕の無い態度だ。情けなくなる。
俺のはすでに反り返っている。勘違いしないでほしい、この行為は銀行強盗をどうにかするためであって、やましい気持ちしかないなんてことはないんだ。本当だよ？
すいません嘘ですホントはすごく期待してます。
「じゃあ、よろしく」
「はい……行きます……っ」
女の子に俺の息子とみられるのはもちろん初めてなのだから、女の子に処理してもらうのも初めて。声が震えないようにするのが大変だ。
姫柊ちゃんはしゃがんで膝立ちになり、握る。
「くっ!!」
「え？　あ、ごめんなさい！　その……痛かったですか？」
「大丈夫だから。そのまま咥えてくれ。歯は立てないように気を付けて」
「は、はい、頑張ります」
あ、焦った。
ただ握られた……いや、ただ撫でられただけで声が出ちまった。
姫柊ちゃんはその細い指に力を入れたり抜いたりして刺激してくる。
や、咥えてくれって言ったんだけど!?　この子、本当はやり方知っ

てるんじゃないの!?
「これが、男の、人の……熱いですね。それに、波打って……」
口に出すんじゃない!! こっちまで恥ずかしくなるでしょうが!!
本人は心の中の感想だと思ってるかもしれないけど、バッチリ聞こえてるからな!
あ、あれ? なんか姫柊ちゃんの表情変わってない? 顔が赤いのはそのままだけど、なんというか、熱に浮かされてるとき見たいというか……まさかこれが、女の顔なのか?
「ゴク……ッ」
姫柊ちゃんがつばを飲み込む姿にさえ、俺の肉棒は反応してしまっている。このままじゃまずい。
どのくらい時間が立っているかはわからないけど、早く終わらせないと。
「ひ、姫柊ちゃん、早く」
「え? 何言って……ッ!! ご、ごめんなさい! 私、何やって……ッ」
姫柊ちゃんは俺で言葉に我に返ったらしい。つまり今のは全部、女の本能ですか。おそろしいです。
姫柊ちゃんは伸ばした舌を俺の亀頭に近づけてくる。だからそういうのやめなさいって!! おっかなびっくりになるのは分かるけど、傍から見れば卑猥すぎるんだよ!
こころの中で絶叫していると、きれいなピンク色の舌がとうとう俺の亀頭に触れた。
「ッ!!」
今度は何とか声を出すのを我慢した。姫柊ちゃんはそんな俺にかまうことなく舌を動かす。最初は控えめだったその動きはどんどん大胆に、そしていやらしくなっていく。
「ん……あむ……ん……れろ……ちゅ……ん……」
「くっ、あっ」
姫柊ちゃんはぴちゃぴちゃと音を立てて夢中で亀頭を嘗め回す。
口の中に入っているのは亀頭の半分ほどだというのに、あっと言う

間に高まってきた射精の予感に焦りを覚える。俺、そんなに早漏じゃないッ!!
かつて感じたことのない快感に思わず腰を引いてしまうが、なんと姫柊ちゃんは俺の腰に両腕を回してロックされてしまう。
逃げることが出来なくなった俺は、今にも吐き出しそうなものを必死に我慢した。
そう、我慢していた。早く済まそうなんて言っていた筈の俺が、ぶちまけるのを我慢していたのだ。
矛盾した考えだったが、今はそんなこと関係なかった。
俺と、多分姫柊ちゃんもこのこと以外考えられなくなっていた。少しでも長く続けていたい。そう思っていた。
しかし、終わりは唐突に訪れる。
「あ、ちょ！　ホントに、そこは……っ」
「ほほれすか（ここですか）？」
姫柊ちゃんは鈴口をグリグリし始める。それによって、あっさりと限界を迎えた。
「う、あぁぁぁ！」
「う！　うぐ……ん」
痙攣を繰り返し、口中に子種を吐きだしていく。長い射精だった。
「はぁ、はぁ」
俺は力なく萎えたものを口から引き抜く。
「じゃ、じゃあ、俺が出したのは吐き出して、そしたら口をゆすいで」
「え!?　吐き出す物だったんですか!?」
「……まさか、飲みこんじゃったの？」
「は、はい。ダメ、でした？」
「そんなことはないけど……苦くなかった？」
「少し、ですけど。でも別に、そこまでは」
「そ、そうなんですか。なら大丈夫、かな？」
「はぁ……」
首をかしげている姫柊ちゃんをほっておいてズボンを上げる。
今日、学んだことがある。

女の子は、火がつくとあんな風になっちゃうってことだ。

2人目の女の子

俺はズボンのベルトを締め、すっかりと元通りの姿になった。姫柊ちゃんは自分の唾液で口の周りがベタベタになっている。それは、先ほどの行為を思い出させるなまめかしい痕だった。

気が付くと俺は、その口元に見入ってしまっていた。

「それで、ちゃんとパワーアップできましたか？」

「うん？　あーそうね、出来た出来た。というか、これからする」

ボーっとしていたせいで前半は生返事になってしまい、後半はボソッと呟く。

「え？」

「大丈夫、ちゃんとできたから。心配しないで」

「そうですか？　じゃあ、口、ゆすいできます」

そう言って個室を出て行く姫柊ちゃん。その姿を見送って俺は腕時計型携帯を操作して武器・能力ガチャの画面に移動。『ガチャを引く』を連打する。

迷うとか、祈るとか、そんなことをしている時間も惜しかった。

腕時計型携帯の画面が激しく点滅する。今頃は家にえるガチャマシーンが稼働して新しい武器、もしくは能力を作り出していることだろう。

チカチカする光が収まり、説明文が現れた。

遠山　キンジの銃技

その名の通り、緋弾のアリアの主人公、遠山　キンジが使用する銃技が使えるようになる。

拳銃に限らず、銃の類を持っていると自動で発動する。

使用できるのは銃弾撃ち（ビリヤード）、連鎖撃ち（キャノン）、不可視の銃弾（インヴィジビレ）、鏡撃ち（ミラー）、跳弾射撃（エル）、砲弾撃ち（パトリオット）の6つ。

（今作られた錠剤を呑むことで、能力が体に定着して使用できるようになります）

またキンジのか。これでどうにか出来るかなぁ。銃との相性は抜群だけど。
考えながら、転送ボタンを人差し指でトントンとたたく。そうして画面をタップしていると錠剤が現れた。これだな。
俺はそれを飲み込んだ。不思議な感覚だ。喉に入る前に消えたような気がする。特に頭が痛くなったりすることはない。
体の変化が感じられないと不安になるな。ホントに大丈夫か？
銃弾を銃弾で跳ね返すとかフィクションだろ？　出来る気がしないんだけど。
「ま、やるしかないか」
俺はベレッタＭ９２Ｆを取り出し、安全装置を解除する。ここでやらなかったら、何のために姫柊ちゃんに恥をかかせたんだってことになるからな。
そうして個室を出ると、姫柊ちゃんが仁王立ちしてた。って、あれ？
「なんで雪霞狼持ってるの？」
姫柊ちゃんの手には、家に置いてきたはずの雪霞狼が握られていた。
雪霞狼は姫柊ちゃんの代名詞ともいえる槍だ。神格振動波駆動術式という魔力無効化術式を組み込まれた七式突撃降魔機槍（シュネーヴァルツァー）の１つだ。
これは現在では失われてしまった技術で作られた金属錬成で作られているため、世界に3本しかない貴重なものだ。
原作では第４真祖の監視のために貸し出された。吸血鬼の最大の武器である眷獣が魔力の塊であったために絶大な効果を発揮したが、いくつもの要素が入り混じったこのカオスな世界では、どこまで通用するかわからない。強いことには変わりないけどな。
その槍があるのは心強い。相手の武器は拳銃だけど。
「実は雪霞狼は、家にあっても自由に取り寄せることが出来るんです」
はい、ウソー。だったら家を出る時に言ってるだろ。なんでそんなウソつくんだ？　もしかして、家を出る時の言葉が嘘？　もしもの

時、すぐさま俺を串刺しにできるように、取り寄せることが出来るのは黙ってたのか？
「どうかしました？」
「いや、早く行こうか」
努めて平静を装う。
考えてみれば、初めて会って、しかもこれから一緒に暮らす男の事は警戒して当然だよな。なにも不自然なことはない。だから悲しくなんて……ない。
俺たちは角から顔を出して様子をうかがう。
「起きてますね」
「そうだな」
見ると、姫柊ちゃんに倒されて気絶していた覆面が起きている。もちろんその手には銃が握られている。少しふらふらしているのはダメージが抜けきっていないからだろうか。
「行きます！」
「あ」
姫柊ちゃんはそう言って飛び出していった。俺も慌ててそれに続く。
「お前ら！　ガッ!!」
あ、これ俺必要ないですね。
いきなり現れた姫柊ちゃんにあっさりと地面に沈められる覆面2人。防弾・防刃繊維の服も、あの速度の槍の前には無力だ。
もちろん殺してはいない。持ち手の部分で殴打している。
なんかあっさりと片付いたな。
そう思って顔を動かすと、拳銃を構えている覆面が目に入った。
ッチ！　お金を取りに行った覆面が残ってたのを忘れてたか！
姫柊ちゃんのちょうど死角になっている。まったく避けるそぶりを見せない。今から声を出しても、弾丸が撃ちぬく方が早いだろう。
どうにか出来るのは俺しかいない。
当然、走って盾になる時間はない。
俺は銃を構える。

そしてほぼ同時に発砲音が鳴り、ほんの少し遅れてキンッという音が聞こえた。
音で何が起きたのかだいたい把握したのだろう、覆面があっけにとられているのが分かる。俺もそうだけど。
す、すげえ。や、気持ち悪いぞ、これ。
今俺が使ったのは銃弾撃ち（ビリヤード）という、銃弾を銃弾で撃ってその軌道を変える技だ。
俺に限らず、人間の目では銃弾を見ることなんてできない。それが、この技を使おうと思った瞬間、視界のすべてがスローモーションみたいになって、手が勝手に動いて引き金を引いたんだぜ。
自分の体が自分じゃないみたいだったぞ。
「え？　せ、先輩？」
「後ろだ！」
銃を構えたまま叫ぶ。
俺の大声に姫柊ちゃんはハッと後ろを向いたが、覆面も我を取り戻したようで、連れて行っていた銀行員を盾にしていた。
「お、お前ら！　武器を捨てろ！　さもないとこいつをぶっ殺すぞ!!」
よくあるセリフを吐きながら、銃を銀行員のこめかみに押し付ける覆面。
こうなってしまえば、姫柊ちゃんにはどうすることも出来ない。向けていた雪霞狼の先を下げ、地面に置く。
これではさっきと同じだ。人質を取られた瞬間、何もできなくなる。しかし、俺は前とは違う。
「おい！　そっちの男も早く……な、何をやってるんだ!!　さっさと銃を捨てろ!!」
俺は明後日の方向に銃を向けていた。
覆面には不気味に見えるだろう。俺は不安でいっぱいだけど。
でも、銃弾撃ち（ビリヤード）が成功した以上、これだって成功するはずだ。
引き金を引いて放たれた銃弾は、
「ガッ!!」
覆面の右肩を背後から襲った。

跳弾射撃（エル）を利用した攻撃だ。俺は、跳弾がちょうど覆面の肩を撃ちぬくように撃ったのだ。
我ながら正気じゃねえ。よくもまあ上手くいったものだよと自分を褒めたくなる。いや、褒めることにする。よくやったぞ、俺。
覆面は防弾・防刃繊維の服の上からでも十二分な衝撃が伝わったらしく、その場にうずくまって肩を押さえている。
これで終わりだな。
そう思っていると、姫柊ちゃんの目が冷たいことに気が付いた。
やめてくれよ、そんな目で見ないで。俺だっておかしいと思ってんだから。や、おかしいのは、キンジだ。銃技だけで十分人外。それが主人公クオリティ。これに体術が加わるとどうなってしまうのか。考えるだけで恐ろしい。
こうして、銀行強盗事件は一応の収束を見せたのだった。
この事件で俺が得たのは、キンジの銃技と姫柊ちゃんの冷たい視線と女の子1人の召喚権。なんか釈然としないんだよなぁ。

時間は過ぎて、夕食時。
俺は出来上がった料理を皿に盛りつけていた。
「じゃあ運んでくれ。姫柊ちゃん、クロ」
「はい」
「は～い」

姫柊ちゃんとクロは料理が盛られた大皿をテーブルに運んでいく。
……お分かりだろうか？　一人増えていますね。
はい、２人目はクロでした。
クロ――クロエ・フォン・アインツベルン――は『Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ』の登場人物だ。
見た目はイリヤそのものだが、エミヤのように肌は褐色で髪の色は銀色。それもそのはず、クロの体内にはアーチャーのクラスカードがあるのだ。
正確にはアーチャーのクラスカードを核として魔力によって存在している。そのため、定期的に魔力を補う必要がある。
原作では、分離元であるイリヤが最も効率がいいとのことで、度々ジャンルを間違えたのではないかというくらい激しいキスをして魔力を補充している。
「で、結局、魔力の補充問題はどうなってんの？」
俺は箸でおかずをつつきながらクロに問う。
「んー？　多分お兄ちゃんが考えてる通りだよ。だからよろしくね、お兄ちゃん」
「ま、しゃーないな」
「すみません。何の話を？」
話しについて行けてなかった姫柊ちゃんに説明する。
「そ、そんなのダメです!!」
顔を真っ赤にして立ち上がった。テーブルを掴むのをやめてくれませんか？　ちゃぶ台じゃないんだから、ひっくり返そうとするんじゃありません。
「ダメって言われても、必要なことなんだからしょうがないでしょ。それとも、おねえちゃんが代わりにしてくれるの？」
「そ、それは……先輩は、なんとも思わないんですか!?」
「医療行為の一種だと思えば、まったく気にしない」
俺はちゃんと気持ちの切り替えは出来るから。人工呼吸で興奮する奴はライフセーバー失格だろ？　それと同じだ。
え？　銀行のトイレのこと？　知らない子ですね。つか忘れろ。

さもないと、四方八方から銃弾叩き込むぞ。今ならそんなこともできるぜ。言ってて悲しくなるな。
「お兄ちゃんも同意してるんだからいいでしょ」
「くぅ……そもそも、そのお兄ちゃんってなんですか!? 血なんか繋がって無いでしょう！」
「呼び方なんて私の好きでいいじゃない！ そんなことにまで、いちゃもんつける気!? あなただって年下なんだから、呼びたければお兄ちゃんって呼べばいいじゃない！」
「そ、そんなこと言ってません！ 妹を名乗るあなたと毎日毎日キスしていたら、先輩がますます変態になってしまうじゃないですか！」
　え？
「……どういうこと？」
　クロも本気で意味が分からないという顔をしている。俺もだけど。
「だって、先輩は射精するとパワーアップするんですよ！」
　えーーーーーーーーーーーー!!! それまだ信じてたんですか!? いや、間違ってないんだけど！ 実際人外の射撃スキル見せちゃったし。
「は？ それって、どういう……なるほど、そう言う事なんだ。お兄ちゃん！」
「な、なんだ？」
　クロの顔が危ない色をおびてるぞ。嫌な予感。
「今日からは、私が毎日処理してあげるからね!!」
　毎日処理してくれる……だと!? それは最高ですね。犯罪のにおいしかしないけど。
「先輩！ 断ってください！ 犯罪ですよ！」
「バレなきゃ犯罪じゃない」
「通報します」
「ごめんなさい、俺が悪かったです」
　姫柊ちゃん、目が本気だ。
「という訳で、クロ、そう言うことは控えて」
「大丈夫だよ。寝てる間にするから」

「先輩、部屋には鍵、掛けてくださいね」
「え？　鍵なんてついてないけど？」
「「え？」」
「え？」
女子部屋にはついてるの？　差別なの？　女性への配慮が大きすぎませんか？
クロが笑ってる。絶対来るぞ、俺の部屋に。嬉しいのは顔には出さない。姫柊ちゃんに殺されてしまう。
そういえば、Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤの主人公はイリヤだよな？　でも、これって士郎への感情だよな。例外の一つか？
どっちにせよ、クロに振り回されることになるのは間違いなさそうだ。
いまだに言い争っている２人を尻目に、箸を進める俺だった。

朝の不意打ち　（クロ）

「知らない天井だぁ!??!!??」

お決まりのセリフを言おうとしたところで、頬に手が添えられて口をふさがれる。目の前にはクロの顔。こいつやっぱり侵入してきたな。

侵入してきたと言えば、クロの舌も俺の口の中に侵入してきた。や、何が『と言えば』か分かんないけど。

柔らかい、しかし小さい舌が俺の口内を蹂躙する。それと同時に何かが俺から抜き取られていく感覚がする。これが魔力か？

その年とは思えない舌遣いは、寝起きの俺を完全に覚醒させるには十分すぎる衝撃だった。

少し余裕が出来た俺は、周囲を観察してみることにした。は？　何でそんなことするんだ？　キスの事をもっと詳しく描写しろ？　現実逃避だよバカ野郎。

魔力補充には同意したけど、寝こみを襲われるとは思わなかったんだよ。流石に添い寝くらいかなと油断してたんだ。

という訳で、現実逃避を開始する。

まずは右にある窓。光があまり漏れていないところを見ると結構朝早いな。クロの奴、俺が起きた瞬間を狙ってキスしてきたけど一体いつから待機してたんだ？

次は左にある部屋のドア。ここが開いた時が俺が死ぬ時だ。雪霞狼でズタズタにされてな。

そして目の前にはクロの顔のアップ。健康的に焼けた肌は年相応のみずみずしさを持っている。舌遣いとのギャップに俺の息子と心臓の鼓動が跳ね上がる。

「ッ!!」

クロのぷりっとした唇にふさがれた俺の口から、不自然な息が漏れた。ズボンとパンツに包まれている俺のモノに快楽の電流が走ったからだ。

目を動かしてみると、俺とクロを包んだ布団が動いている。

気になった俺は布団をはぎ取る。
するとそこには、キャミソールにパンツという姿のクロが俺の上に乗り、怪しく腰を動かすという光景が広がっていた。
その腰の動きは明らかに俺の分身を狙った動きだ。
ここの暑い気候に合わせて寝巻を選んだことが仇になってしまったか、または幸運だったか、2枚の布ごしでも十分な刺激を俺に伝えていた。
「……ッ!! ッ!!」
クロの女の部分が俺の男の部分をこすり上げる。俺の肉棒が硬くなればなるほど、クロの恥裂の柔らかさが分かる。
「プハ! ん、おはよ、お兄ちゃん」
「……ッ、はぁ、はぁ。おはよ、うっ」
長らくあわされていた唇が離される。少しだけ覗くピンク色の舌は、俺とクロの唾液が混じり合ったもので出来た銀の糸を引いている。
ベトベトになった口元は銀行のトイレでの姫柊ちゃんを思い出させる。
「はぁ、な、なあ、はぁ、クロ」
「ん、何? そんなに、ん、はぁはぁ言って、ん」
キスが終わっても、クロは俺の上から降りず、腰の動きも止まらない。
「そろそろっ、俺の上からっ、くぅ、降りない、か?」
「えー? どうして? 私、重い?」
「そこまで重くはないけど、さ。暑いかな?」
2人がくっついていればそれだけ暑くなる。そう言う意図を込めて行ったはずだったが、クロには、そうは伝わらなかったらしい。いや、あえて違う方向で解釈したのだろうか。
「熱い? 体が? そうだね……お兄ちゃん」
「え、なんかニュアンスが……ク、クロ!?」
クロは怪しく微笑むと、体の向きを変えた。顔を俺の股間に、お尻を俺の顔5センチの場所に来るように、つまり、シックスナインの体

勢になった。
「お、おいクロ！　おまえ……ッ!!」
「わぁ……これがお兄ちゃんの……」
　クロのお尻で見えないが、下半身が外気に触れた。クロが俺の息子を露出させたんだ。
「れろ、ん、れろれろ、ちゅ、はむ」
　比べるのが失礼なことだとは重々承知している。でも、クロのフェラは姫柊ちゃんの物とは全く違った。
　向こうは本能に従っていただけで、それに関する技術が何もなかった状態だったため、厳密に言えばフェアではないのかもしれない。
　クロは、竿全体に巻きつかせるように舌を這わせ、裏スジにキスをし、亀頭を嘗め回した。
　肉棒のすべてを刺激するような動きだ。容赦のないその責めは、あっという間に射精の予感を感じさせる。時間の問題だった。
「ク、ロ……ッ、ホ、ホントに……ッ」
「ホントに？　どうしたの、お兄ちゃん？　お兄ちゃんのおちんぽビクビクしちゃってるよ？　ねえ、お兄ちゃん、ホントに、何なの？」
　喋っている間も、クロは手を止めることはない。絶妙な力加減でしごきあげてくる。
　いよいよ余裕がなくなった俺は、情けない声で爆発前の最後の声を出す。
「で射精るッ、からッ！」
「いいよ。だ射精して。私に頂戴……？」
　そう言ってクロは、限界まで反り返り固い棒となった俺の分身を、小さい口で包み込む。
　限界が、訪れた。
「あ、うっ、あ……はぁ、はぁ、はぁ」
「ごちそうさま、お兄ちゃん」
「ごちそうさまって、お前な」
　当然の様に飲み干したクロは俺に跨ったまま、首だけをこっちに向けてくる。その顔は年齢相応の物に戻っていて、一連の行為が終わっ

たことが分かった。
そう、思っていた。
「じゃあ、次は私の番だね？」
「え」
「え、じゃないよお兄ちゃん。私が気持ちよくしたんだから、今度は私を気持ちよくして、ね？」
今まで忘れていた。クロのお尻が目の前にあることを。小振りなお尻は誘うようにフリフリと振られる。ってか、さっきから小さいとか、小振りとか使いすぎだな。実際そうだから仕方ないけど。
「いいでしょ？　私の体、小さいけど、ちゃんと女の子の体なんだよ？
お兄ちゃんの舐めてどうなってるか、確認したくない？」
「それは……」
確認したい。
そりゃあもちろん、確認してみたい。
俺の腕はゆるゆると動き、クロのお尻に触れた。俺だって健全な男子高校生。触っていいと言われれば、我慢できなくなってしまう。
しかし、いくらなんでもこんなに小さい子相手では対抗する感情も生まれる。
そんな俺の迷いにより何度も何度も手を秘部に近づけては離してを繰り返していると、クロが身をくねらせた。
「もう……お兄ちゃんは……っ、焦らしてるの……？」
「うん？」
そういわれて手に伝わる感触に気が付いた。ショーツに包まれたお尻ととクロのふとももを、さらに足の付け根までを撫でまわしていたことに。
「いいんだよ？　お兄ちゃんの好きにして。雪菜には秘密だから、ね？」
その言葉に覚悟が決まった。
くちゅり。
中心部を中指で押し込むと、そんな音がした。ただ水に濡れただけではこんな粘着質な音はしない。もっともっと粘り気のある液体と、

張りのある肌が擦りあわされた時に聞こえる音だ。
「ん……っ」
そこは柔らかく、その気になればどこまでも押し込めそうだ。
「んく……っ、ふっ、あっ、んんん……っ」
指の腹を押し込むと、俺の指とクロの秘部を隔てている薄布の湿り気が増すのがしっかりと感じられる。
「女の子って、小さくても濡れるんだな」
「ん……ぁ、どう、だろうね……っ。私、普通のっ、女の子じゃないから……っ」
快感から逃れようとしているのか、無意識に腰が持ち上がり始めたので、がっちりとホールドする。押し込むだけではなく上下にこすってやるとまた違った反応を返してくれた。
「あ、それっ、擦れてる……っ」
ショーツに指を引っ掛けて、横にずらす。クロのあそこは、ぴったりと閉じていてもしっかりと濡れていることが分かる。
当然、女の子の秘部をこんなにまじまじと見るのは初めてだ。
指を使って少し広げると、見つけた。ひゅくひゅくと不安そうにしているところを。その入り口をなぞり、ゆっくりと人差し指を挿入した。
「ふぅぅぅぅっぅ……っ!!」
「きついな……」
人差し指だけで余裕がない。丁度最初の関節まで入っているけど、温かい粘液にまみれた肉は挟んで離さない。
「あ、あ、ちょ、これヤバ……っ。お兄ちゃんっ、どこまで、入ってるの……っ!?」
「人差し指の第一関節までだけど？」
「これ、でっ、うあぁぁあ!?」
しゃべっている最中に少し指を曲げてみる。周りからにじみ出るように蜜があふれ、しっかり
と反応していることを俺の指に伝えてくれる。
「まって、これ、こんな、こんなに……っ!?」

待ってといいながらもクロは俺から離れようとしない。もっとも、離れられないのかもしれないけど。
女の子が自分の手で悶えていると思うと最初の戸惑いはあっさりと消え去り、俺は激しくなりすぎないように指を折り曲げた。
パソコンのキーを押すくらいの小さい動き、でもクロの小さい膣はその動きだけでどうしようもない状態になってしまっていた。
きつい締め付けで拘束したいのか、愛液を使ってもっとくわえ込もうとしているのかわからなくなっている。
「う!?」
調子に乗って指を動かしていると、股間に衝撃が走った。クロがすっかり復活した肉棒を咥えこんでいたのだ。
「ふぅぅぅ……っ、ふぅぅぅぅ……っ」
「うっ、くっ!」
一度出して敏感になっている俺は、クロの反撃に耐えられない。くわえられ、圧迫され、めちゃくちゃに舐められる。
俺もクロも余裕がない。俺の肉棒はパンパンとなり、暴発寸前。クロの中は痙攣し始めている。
俺たちは示し合わせたように互いにとどめを刺し、果てた。
こうして朝の濃厚な時間が過ぎていくのだった。

朝から搾り取られてしまった俺だが、不思議と疲れてはいなかった。隠しステータスに絶倫でも追加されたのではないかと疑いたくなる。

姫柊ちゃんにもばれなかったしね。ばれたら死んでるか、うっかりうっかり。
あ、そうそう、2ポイントたまったからガチャを引いてみたんだ。
その結果を報告しておこうか。

固有時制御
衛宮切嗣が使用する魔術。
本来儀式が大掛かりである時間制御の魔術を、固有結界の体内展開を時間操作に応用し、自分の体内の時間経過速度のみを操作することで、瞬時に戦闘に使用できるほどにしたもの。
ただし、解除した後に世界からの修正力が働くため、体に大きな負担がかかる。

完全記憶能力
どんな些細なことでも一瞬で覚えて忘れない能力。

この2つだった。
固有時制御は素直にうれしい。今持っている能力との相性もいいしね。完全記憶能力も、これでテストは満点だ。数学が絡むもの以外は。
これで、そこそこ戦えるようになってきただろ。
意外と爽やかな気分で済ませた朝食の後、俺たちは通学路を3人並んで進んでいた。
俺の目的地は絃神島中央武偵学校高等部だ。
様々な作品の要素が混じり合ったこの島は、主に3つのブロックに分けられている。
1つは最先端の科学を扱っている科学ブロック。

１つは魔法や魔術、教会など、オカルトじみたことを扱っている魔法ブロック。
１つはそれらに属さないで独自の体系を作り出している特殊なブロック。ここには主に人間以外の種族が属している。例えば吸血鬼なんかが有名だ。
もちろん中には互いの垣根を越えて研究をしている機関もあるが、だいたいはいがみ合っている。主にいがみ合っているのは、科学ブロックと魔法ブロックというのは『とある系』の名残だろう。
そして、絃神島中央武偵学校高等部はその名の通り、武偵を養成するために作られた高校だ。
武偵とは緋弾のアリアの要素で、正式名称は武装探偵。読んで字のごとく、武装した探偵だ。凶悪化する犯罪に対抗するために作られたもので、警察の様に犯罪者を取り締まる権利を持つが、基本はお金で動くという側面を持っているため『何でも屋』とも言われている。
そう、何でも屋だ。つまり俺たちは、この島で武偵の活動をするという事だ。
つまりここ絃神島は、強力な武偵を育てるための養成機関であると同時に、先端科学や魔法の研究機関、さらには人間以外の種族も住むという、もはや詰め込みすぎて何が何だかわからない空間になっている。
一応、武偵は国家資格だが、この島にいて武偵の高校に通っている限りは、疑似免許が発行される。
もちろん、ここに通っている子供全てが武偵になるわけではない。中には研究者になったりする者もいれば、実力主義の武偵の世界で才能の差によって挫折し、犯罪行為に走る者もいる。
ここは武偵の島。当然の様に警察など存在していない。島で起きた犯罪は全てそこに住む学生武偵に解決させている。
効果的な実践訓練ができると言われているが、放任主義もここまで来ると笑えない。要は、島で起きた事件は全部自分たちで解決しろ、いい訓練になるだろ？　と言われているのだ。
お互い武偵になるために訓練を受けた者同士、島の外の犯罪者なん

かよりよほど手ごわい。ケガは当然のこと、死人が出ることも多い。
なのでここに来るにはかなりの枚数の誓約書にサインしないといけないらしいけど、どうでもいいな、そんなこと。
既に島の内部にいるわけだし。
まあ、他にも、この島の運営にお金を出している会社に聞き覚えがあったり、技術者の中に聞き覚えのある人がいたりしたんだけど、それらを語っているといくら時間があっても足りなくなるので、この場では控えておく。
結局俺が言いたいのは、この島は本当にアニメをごちゃまぜにした世界だという事だ。
俺たちの住む不思議ビルは絃神島中央武偵学校高等部のすぐ近くにある。
何かしらの交通機関を使わなくても十数分で着く位置だ。
姫柊ちゃんとクロは、それぞれここの中等部、初等部に入学となる。
「それじゃあ、また後で」
「はい」
「うん！」
そう言って、俺は姫柊ちゃんとクロと別れる。
校舎も自分が知っているような造形ではなく、近未来的なデザインなところが俺の心をくすぐるな。
靴をはき替え自分の教室に向かい、中に入る。
教室でもなんか知っているメンツが多いように感じられるのは、気のせいじゃねえな。
もっとも、特に絡んでくることはないが、できればそっちの方がありがたい。
ただでさえこの環境に適応しきってないんだ。これ以上は俺がもたない。
今日は始業式だけだったようで、もう帰宅出来る。
先生が超ミニマムだったけど、気にしないで帰りましょうか。
俺は別れた2人と合流するために、足早に教室を後にするのだった。

初めての依頼　（クロ）

俺は家に帰ってお昼を食べたのち、この島の事について調べていた。

この島が大まかに3つのエリア、科学ブロック、魔法ブロック、特殊ブロックに分かれていると言っても一枚岩ではない。さらにその中で枝分かれしている。

その中でのパワーバランスが、さまざまな作品の要素が複雑に絡み合うことで、非常に繊細な天秤が釣り合っている。

更には武偵にも大きなグループがあり、そことの付き合い方も学んでいく必要がある。

基本的には他人の依頼は横取り厳禁がマナーなのだが、巨大グループの影響力を盾に横暴を通す者もいるため、どこにも所属していないフリーである俺たちは、なるべく関らないのが吉、というのが調べた結果だ。

そのうち、ここの生活に慣れてきたらどこかのグループに入ってもいいが、今のところそんな予定はないので、その時の選択肢の幅を狭めないためにも、今は静かにしておくことにしよう。

「でさあ、クロ？」

「どうしたの？　お兄ちゃん？」

「どいてくんない？　調べづらいんだけど」

胡坐を書いた俺の膝の上には、クロが座っていた。姫柊ちゃんは今買い物に出てしまったため2人きりとなっている。

そこ、搾り取られるとでも思っているのか？

あいにく、俺は公私をしっかりと分けられる男だ。今後にかかわる大事な情報を集めている時にクロに手を出したりしない。

向こうから手を出してきたときは……まあ、それはその時だ。

幸い、クロも今はおとなしいしな。

「えー、いいでしょ、今は口うるさい雪菜だっていないんだし」

「口うるさくて悪かったですね」

後ろから聞こえた第3者の声に俺とクロはそろって固まる。

振り向くとそこには今さっき買い物に行ったはずの姫柊ちゃんが立っていた。
「あれ？　買い物に言ったんだよね……？」
「はい。でも、財布を忘れたので取りに戻ってきたんです。２人きりにしておくのも不安だったので。案の定、でしたけど」
少し勘違いしているが、あの体勢は色々勘違いをしてもおかしくないよな。
相当殺気立っている。今すぐここで戦争が始まってもおかしくないレベル。ここは俺の部屋なので、やる時は外でしていただきたい。
半壊した部屋が寝て起きたら修復されてた、なんて、漫画やアニメの世界だけだ。今はその世界にいるっけ？　だったら大丈夫か？
雪霞狼を出すかに思われたが、無言で俺たちに近づきクロを両手で抱え上げる。そして、ポーンとベッドの上に投げ捨てた。
「わぷ！　な、何すんのよ！　やる気!?」
クロはケンカを売られたと思ったのか、干将・莫耶を投影して姫柊ちゃんに向ける。しかし、姫柊ちゃんは取り合わず、俺の手を引いて立たせた。
「先輩、ちょっと」
そのまま手を引かれて外に連れて行かれる俺。
ドアをくぐる直前、クロは呆然とした顔で俺たちを見ていた。

「で、何？」
「……何？」
「なんですか、姫柊ちゃん？」
怖いです、姫柊ちゃん。
仏頂面だった姫柊ちゃんは頭に手を当ててため息をついた。
「決まってます。クロちゃんの事ですよ」
「クロちゃんって芸人の？」

「……そんな芸人いましたっけ？」
ネタが通じねぇ。やめて、怒ったりスルーしたりするならまだしも、まじめにネタについて考えるのはやめて。
考えることに夢中になって、俺を連れて来た理由忘れてるんじゃねえか？
「それで、クロが何？」
このまま話をそらしてもよかったけど、後が怖いしな。しっかりお説教させることにしよう。
多分クロとの接し方についてだろうし。
「そうでしたね……先輩！　クロさんには気を付けてください！」
クロちゃんじゃなくてクロさんにしたな。どうでもいいか。
「先輩も分かるとは思いますけど、クロさんはその……すごく無防備と言いますか……開放的と言いますか……従順といいますか……とにかく、クロさんと必要以上に接触するのは避けてください！」
「あーわかるわー」
「先輩はどうしようもない変態ですけれど、小学生に手を出すような人ではないと信じてますからねっ!!」
「大丈夫大丈夫」
「真面目に聞いてください！」
聞いてるって。信じてくれよ。
手は出さいないさ、手を出されるけどな。すでにやられた後だとはとても言えない。
「その……どうしても我慢できなくなったら、私に、言ってください。なんとか……します……から」
は？
「今なんて？」
「2回も言わせないでくださいよっ！」
だって、つまり、あれだろ？
「俺の奴隷になってくれるってことだろ？」
「なっ、なんでそうなるんですかっ！」
「違うの？」

「違いますよ!!」
　じゃあ、なんだってんだ。
「……昨日の夜少し調べたんです……その、男の人の、その、アレについて」
「はあ、それで？」
　この時点で姫柊ちゃんは耳まで真っ赤になっている。
「それで……男の人は定期的に出さないと、苦しくなって見境なく女の人を襲うようになってしまう、と」
　大分極端な意見だが、俺は無言で聞き続ける。だって恥ずかしがってる姫柊ちゃんがかわいいからね。はいはい、もう変態でいいよ。
「そうならないために男の人は……自分で、するんですよね？　でも、あんなに四六時中クロさんとくっついてたら、先輩も我慢できないと思うんです」
　ま、まあ？　姫柊ちゃんの中では俺は射精でパワーアップする変態（嘘ではない）ってことになってるし？　多少俺の評価が低くても大丈夫だし？
「だ、だから、そういう時は、私が……」
「いや、でも……」
　クロは姫柊ちゃんの目を盗んで俺のを搾り取ってくるから問題ないと思う、と言おうとしたところで、姫柊ちゃんは遮るように手を出してセリフをストップさせてくる。
　感謝しないとだな。このセリフは口に出したが最後、自分の命も差し出すことになりかねない。
「大丈夫です。やり方はこれからしっかりと勉強していきますから!!」
　なんて発言だ。
　もちろん、無知ゆえの発言なんだろうけど。高校卒業程度の学力は身に付けているんじゃなかったっけ？
　やっぱり微妙にポンコツだと再確認していると、チャイムが鳴った。
　このチャイムは、事務所部分の2階の入り口に備え付けられている

物だ。
これが鳴ったという事はつまり、
「依頼だな」
俺たちの初依頼、一体どうなることやら。

「人形、ですか」
俺の目の前には1人の女性が座っている。その隣には、すすり泣いている1人の女の子。歳は小学1年生くらいだろうか。学校指定の黄色い帽子をかぶっている。
「はい、ここに移ってくる時に、祖母から頂いた手作りの人形なんですけど。この子のお気に入りで……それが無くなってしまったんです」
当たり前だが、大手に属しておらず、大した実績もない俺たちのところにそんなに大きな仕事が来るわけがない。
俺はそれを最初から予想していたが、クロは早くもやる気を失っている。まさかの、人探しじゃなくてお人形探しだからな。気持ちが分からんでもないけど、せめてお客の目の前では、露骨な態度はよしてくれ。
多分この人たちは、島の研究者の親子だな。
この島に来る研究者は、よほどの理由がない限り家族ごとここに移り住むことが義務付けられている。
最先端の科学や魔法の技術は、どの国ものどから手が出るほど欲しい代物だ。
それを手に入れるのに最も効果的なのは、内部の研究者にスパイをさせることだ。
家族を人質にでもすれば簡単にスパイを作り上げることが出来る。
それを防ぐための措置である。

初期段階では祖父母も対象になっていたが、それでは島の人口が増えすぎてしまうという理由で、現在は廃止されている。
「何時頃無くしたかわかりますか？」
「朝行くときには持っていたんです。帰ってきてカバンを開けたら無くなっていて……なくなるから置いていきなさいって言ったんですけどねぇ」
つまり、登下校中に無くした可能性が高いってことだな。
最悪、盗まれたってこともあるけど、手作り人形にそこまでの価値があるとは……いや、いたずらで隠されたってこともあり得るな。
それを伝えると、お母さんは「そうですね」と頷く。
「とりあえず、通学路を探してみますか」
俺は軽く立ち上がり、姫柊ちゃんはまじめに気合を入れ、クロは超やる気が無さそうだった。
このパーティ大丈夫か？

お母さん方には一度帰ってもらった。携帯の番号も交換したし、もしもの時はすぐに連絡を取ることが出来る。
教えてもらった通学路を見ながら、手分けして探すことにした。
「とりあえず歩くか」
そう思ってしばらく歩いていると、公園が見えてきた。元の世界でも見慣れたブランコや滑り台があるありきたりな公園だ。こういう所は変わらないもんだな。

遊んでいる子供に目を向けると、あることに気が付いた。
「校章が同じだな」
さっき女の子がかぶっていた帽子についていた校章と同じものが、遊んでいる子全員の帽子についていた。
歳も同じくらいだな。
「もしかして……」
俺はカバンが積み重ねられているベンチの後ろの茂みを調べる。
「あ。あったじゃん」
あっさり見つけてしまった。
あの子はこの公園に寄り道して、カバンを置いた拍子に隙間から零れ落ちた。で、そのまま帰ってしまい、カバンを開けたら大騒ぎ。
とまあ、こんな所だろう。
とにもかくにも、これで依頼完了だな。
連絡を入れようと腕時計型携帯を操作しようとすると、後ろから衝撃があった。小さい物体だったので、前を見ないで走っていた子がぶつかったのかと思ったが、そうではなかった。
ぶつかった子が、俺の服を握ってきたからだ。
「お兄……ちゃん」
「ク、クロか。違う方探してくれって言っただろ……」
声に少し怒気を込めるが、クロの様子がおかしいことに気が付いた。俺を掴む力が弱々しい。少し息も切れている。
「クロ、どうした？」
「えへへ、分かっちゃった？　魔力がね、切れそうなんだ」
「何？」
魔力が切れそうで力が入んないってことか？　俺にぶつかったのは力を全部使い果たして倒れ込んだってことか？
朝に充填したと思っていたんだけど、こんなに消費が早いのか。
「すぐに補給する。トイレでいいか？」
「うん……」
もう自分で立っていることもできないクロをお姫様抱っこしてトイレに駆け込む。もちろん周りの目を確認するのは忘れない。幼女

を男子トイレに連れ込むとか、通報されたらひとたまりもないしな。
公園の公衆トイレは汚いという印象があるかもしれないが、流石最先端科学を扱う島、どのような清掃システムを使っているのか隅々までピカピカになっている。
個室に入って、ドアを閉める。
そして、あごを上げ、目を閉じてすっかり準備万端になっている唇に自分のそれを重ねる。
前とは違う、俺からのキスだ。
舌を出してクロの唇をつつくとクロはすんなりと受け入れた。
「……ん。ちゅう、れろ、れぉ、ちゅ、あぅ、ちゅぅる」
俺はクロの口内を蹂躙する。舌と舌をからめたり、吸い付いたりする。俺はクロの舌をめちゃくちゃに犯し、代償に魔力を吸われる。
クロがしがみつく強さが強くなる。魔力が戻ってきているのだろう。
両手両足を使って体を俺にロックしてますます体をくっつけてくる。それだけでなく体を震わせている。
しばらくして、生々しい痕跡を残して唇が離された。
「お兄ちゃん、ありがと!!」
すっかり元気を取り戻したらしいクロは、力いっぱい俺に抱き着いてくる。
「それにしても、お兄ちゃん積極的だったね。興奮してくれた？」
「あのな、クロ」
俺の話を聞かないクロは、ズボンの股間部分に手を添えてくる。
女の顔になりかけていたクロだったが、すぐに疑問の顔へと変わった。
「あ、あれ？　お兄ちゃん、全然おっきくなってないよ？」
「当たり前だろ。人命救助で興奮するアホがいてたまるか」
何度も言うが、俺は公私をきちんと分けられる男だ。気持ちの切り替えはしっかりと出来る。
人命救助だったら、どんな情熱的なキスでも興奮することはない。
「それよりも、なんで俺についてきたんだ？」

「それは魔力が切れそうだったから……」
「ほう、魔力がなくなりそうなのは、全く分からないのか？　家を出てからここに来るまで、そんなに時間は立ってなかったと思うけど？」
「えっと、それは……」
もう言い訳できる材料はない。
正直に謝れば、ちょっとお仕置きするだけで許してやろう。
「ご、ごめんなさい。私が悪かったです」
「そうか、えらいぞ、しっかり謝ったな」
「うん、ごめんなさい」
俺はクロの頭をなでる。しょぼんとしているクロだったが段々と笑顔になってきた。
「許して、くれる？」
「ああ、ちょっとお仕置きするけどね」
「え？」
クロが俺の言葉に反応して顔を上げた瞬間に、クロのスカートの中に指を滑り込ませる。
パンツの中に手を入れ、ぴっちりと閉じた割れ目をこする。
「えっ、あっ、ちょ、ちょっとお兄ちゃん、いきなりっ、そんなっ」
腰を引くクロのお尻をわしづかみにして逃がさない。
ちょっと擦っただけで、恥裂からネバネバした粘液が垂れてきた。
「キスだけで興奮したのか？」
「ふっ、ふっ、だってぇぇぇ、お兄ちゃんの、キス、すごかったん、だもん、うぅぅぅ」
半分出来上がっていたクロは俺に触られたことで、雌の顔になっていた。女ではなく雌だ。ただ、快楽に溺れているだけの獣。でも、これはおしおきだ。普通に気持ち良くするだけのつもりはない。
「ふっ、ふっ、ひっぃぃ、そ、そこはっ、敏感だからっ、もっと優しっ、あ！　ひぐぅ！」
「ダメだ。これはおしおきなんだぞ」
俺が狙ったのは、少しだけ顔をのぞかせているお豆だ。クロの恥ずかしいものを塗りたくったそれを親指と人差し指で器用に挟んでし

ごきあげる。
「いいじゃないか。クロだって、朝、俺のをこうしてくれただろ？」
声が隠し切れなくなっているクロ。
でも忘れてないか？　ここは俺達しかいない家の中じゃないんだぞ？
その時、バタバタという足音が聞こえてきた。公園で遊んでいた子供が入ってきたのだ。
それを聞いたクロは目を見開き、手で口を覆った。
俺はそれを待っていたかのように、未成熟な果実を押し開いて中指を挿入した。外は未成熟でも中は熟れきっている。俺の指を中に中にと飲みこもうとしている。
それに導かれるままに指は進み、半分ほど入ったところで少し折り曲げ、ヌメヌメのヒダを抉ってやった。
すると面白いようにクロの足は震える。今のクロは俺の胸に顔を押し付け、右手で口をふさぎ、左手は俺の背中に回し、生まれたての小鹿のような足でやっと体を支えている状態だ。
何とも言えない征服感を味わっていると、クロは必死の声で懇願してくる。
「お兄ちゃ……っ！　声っ、ッ！　声、聞こえちゃうからぁぁ、ッ！　やめてっ、やめてよぉ！」
もちろん、やめない。
むしろ出し入れの速度を速める。
スコップで土をかきだすように指という名のスコップにかきだされた愛液はクロの下着を汚していく。
痙攣し、指を締め付ける力を強くしていく膣。これは登り詰めようとする前兆だろう。
数秒経つと、何かざらざらとしたところを通過した。その瞬間、クロの体の痙攣も最高潮となる。
「……ッ!!　……ッ!!　……ッ!!!??」
内股になった足は自分の体重を支えきれない。必然的にクロを支えるのは絶頂中のクロの中にある俺の指だけになる。

今まで半分までにセーブしていたものがすべて飲みこまれることで、クロはさらに大きく痙攣した。
何とか声を出すことは耐えることが出来たクロだったが、その様子は酷いものだった。
口は俺とのキスで汚れ、半開きになった口からは激しく息が出入りしている。もはやこの音だけでも外から聞けば異常があったと思われそうだ。
下腹部では大洪水。履いていたパンツはとっくに吸水限界を超えており、ぴっちりと張り付いて形をくっきりと浮かび上がらせている。
しかし、スカートには被害はない。俺が気を付けたからだ。
「お兄、ちゃん、鬼畜すぎるよぉ……」
まあ、なんだ。
……少し、やりすぎたかな？

依頼達成、そして3人目

やってしまった。
俺は少し前に姫柊ちゃんと話しているときに思いました。
クロに手を出すことはない、出されることはあっても、と。
俺の眼下には、焦点の合わない目で虚空を眺めているクロ。全身を痙攣させているのは俺の手で絶頂に導かれてしまったからだ。
俺には俺の言い分がある。
クロはあからさまに、姫柊ちゃんがいない時を狙って俺を射精させようとしていた。おそらく、姫柊ちゃんが家で俺を連れて行った時に、姫柊ちゃんの監視の目がこれから厳しくなることを予想していたのだろう。
姫柊ちゃんも魔力補給のキスくらいなら、懇切丁寧に説明して説得すれば何とかなるだろう。でも、それ以上の行為は許すわけがない。
なので、出来る時にしてしまおうという心理に達したのは自然な流れだ。クロのなかではな。普通はそういう行為を控えようと思うだろうけど。
でも、それはそれ、これはこれだ。
今は依頼をこなしている最中であって、一度それを許すと際限がなくなる恐れがあった。
くわえて、クロが普通の注意を聞くとは思えなかった。
やるなら徹底的に、今後こんなことをしようとは思わないように。
こんな理由ですね、はい。
ダメ？　やっぱりか。じゃあ、もう姫柊ちゃんにバレないようにするっていう方向で行くしかないですね。
と言うか、このことをネタにクロに迫られたら、それこそクロの言いなりになっちゃうんじゃ？
その時はその時考えるしかないな。俺だって一回やったんだ、もしもの時は逆に反撃してやろう。
そもそもこれはおしおきだし？　お尻ぺんぺんの延長みたいなもんだから。何もおかしなところはないな。自己正当化終了。

……クロをおこすか。
俺はクロをトイレの便座に座らせる。
「お兄ちゃん……」
「ん？」
「やらないの？　最後まで……？」
この子はまだ言うか。
「やらない。歩けるんだったら帰るぞ」
「じゃあ、もうちょっとだけ待ってて」
「ああ」
俺は壁に寄りかかる。クロは便座に座り、無防備に開いていた足を閉じて顔をしかめた。
「うわぁ、パンツびしょびしょだよ。早く取り替えたい」
クロは閉じた筈の足を開いてパンツに触り始めた。もちろん濡れ具合を確かめているだけなんだろうけど、傍から見ると、顔を赤くして自分の性器を弄っているように見える。
「お兄ちゃんって、割とSだったんだね。外にいた子にばれちゃったらどうするつもりだったの？　本当に声出ちゃいそうだったんだよ？」
悪戯っぽく言うクロ。
何を言うか。お前だって俺にやられるのを望んでただろ。
「そう言うクロは、割とMだったんだな。みんなにバレそうなのにそんなに溢れさせてたんだから」
俺も負けじと言い返す。
するとクロは顔を真っ赤にした。パンツを両手で隠してぼそぼそと言う。
「そ、それはっ……お兄ちゃんが……してくれたから」
「え？」
「だって、朝、何もしてくれなかったから。私、雪菜に比べたら全然子供だし……お兄ちゃん、私の体に興味なんじゃないかと思ってたから……お兄ちゃんから触ってくれて、すごく、うれしくて、その……」
あ、あれ？　なんだか様子がおかしいんだけど。これフリじゃない

よね？　もしそうなら女性不信になりそうなレベルだよ。
「あ、いや、その、あれはおしおきだったから」
「それでも嬉しかったのっ!!」
「そうですか、はい」
　それならそれでいいです。
　クロはそう言って立ち上がった。そして、おもむろにパンツを脱ぎだした。
　こいつは……もう一度叱ってやらねばなるまいか。
「クロ……」
「え？　あ、違うよ？　パンツ気持ち悪かったから。これだったら穿かない方がましだよ」
「家までノーパンで帰るつもりかよ」
「ふふ、興奮しちゃう？」
「興奮するのはおまえだろ」
　クロはトイレットペーパーを使って、自分の足にまで垂れていた愛液を拭き取る。それをトイレに流し、準備万端というように俺の方を向いた。
「お兄ちゃん、帰ろ！」
　俺は短く返事をして、入った時の様に周りの目に気をつけてその公園を後にした。

その後、姫柊ちゃんと合流した。クロと一緒にいたことについては何も言わなかったのは自分より前に合流したと解釈してくれたからだろう。
姫柊ちゃんは人形を渡しに行くついでに行きそびれていた買い物をしてくるらしく、俺とクロは先に帰ることになった。
いつもだったら買い物を手伝っていたのだが、今はクロがノーパン。しかもスカートだ。流石に家に帰った方がいいだろう。
俺にもクロにも露出性癖はないからな。この世界に来てたった2日で家の外で射精した俺が言うと、説得力が無さ過ぎて泣けてくる。
そんなわけで俺は今家の中、女の子ガチャの目の前にいる。
姫柊ちゃんが人形を渡せば依頼完了、ガチャを引くことが出来る。それを待っているのだ。
姫柊ちゃんは買い物の前に渡しに行くって言ってたし、そろそろじゃないかな？
ちなみにいうと、クロは今シャワーを浴びている。体に付いたもろもろを洗い流すためだ。
さあ、今度は誰が来るんだろうか。
調べたところでは、とある系や緋弾のアリアのキャラの一部はこの島に既に存在していた。つまり、ヒロインのすべてがガチャによって召喚されるのではないようなのだ。
「お」
腕時計型携帯が振動する。ポイントが加算されたのだ。
俺はすぐにタッチパネルを操作する。

『結城　明日奈』をゲットしました。
5階3号室に入室しました。

おお！　アスナさんか！
……ん？　待てよ、この場合のアスナは、どっちが一番最初になる

んだ？
無印が最初っていうなら、主人公であるキリトへの好感度メーターは振り切ってるだろうけど、プログレッシブが最初なら他人同然の扱いになるのか？
同じ屋根の下で暮らすんなら、好感度は高い方がいいなぁ。
そんなことを考えていると、階段を下りてくる音が聞こえる。
「こんにちは、翔君」
満面の笑みを浮かべたアスナさんが姿を見せた。
この様子を見る限り、無印の方だな。まあ、プログレッシブは色々本編と比べると矛盾があるって作者も言ってたらしいから無印の方なんだろう。
「初めまして、アスナさん」
俺も軽く笑う。アスナさんはラノベのメインヒロインの中でもかなりの常識人だ。キリトが他の女の子といちゃいちゃしていても笑って許す度量があるし。めったに暴力は振るわない。
そこ、めったに暴力は振るわないのは、出番が少ないからだとか言っちゃいけません。ＤＥＢＡＮ村の人に失礼でしょう。
「あれ？　お兄ちゃん、その人は？」
そこにシャワーを浴び終わったクロが現れる。
髪を拭いていたタオルを首にかけて、アスナさんをじろじろと観察するクロ。初対面の人をこれだけ無遠慮に眺めることが出来るクロもクロだが、不快な様子を全く見せないアスナも大人だなぁ。
実際、俺よりも年上だよな。この家の最年長はアスナさんになったな。
「はじめまして、クロちゃん。結城　アスナです」
「……ああ、そう言う事ね。初めまして、アスナ。クロエ・フォン・アインツベルンよ。よろしくね」
こうして、俺たちに新しい仲間が増えたのだった。

その日の夜は、アスナの歓迎パーティを催すことになった。
アスナはそんなことしなくても大丈夫だと言っていたが、そこは気分の問題だ。
俺はキッチンで腕を組んでいた。歓迎パーティをすると言っても、何もそこまで特殊なことをするわけではない。
せいぜい、いただきますの代わりに乾杯をするくらいだろう。でも、歓迎会と銘打っているので、料理には少しくらい力を入れたいと思っている。
ちなみに、家の料理は基本的に俺が作ることになっている。と、言うか、俺以外作ることのできる人がいない。
俺の料理の腕はばあちゃん仕込み。ばあちゃんは和食、フレンチ、中華、イタリアンあらゆるジャンルの料理を俺に授けてくれた。
じいちゃんは俺が調理することにあまりいい顔をしなかったが、いつもばあちゃんの一睨みで静かになっていた。俺の家で一番力があるのは、ばあちゃんだった。
おかげで、料理は俺の趣味と言えるものになっていた。それなりのこだわりもできたため、下手なことをされないように、姫柊ちゃんとクロにはなるべくキッチンに入らないように言ってあった。
昨日までは、だが。
今日はアスナさんがいる。
アスナさんはデスゲームになったＳＡＯにて、戦闘には全く関係ない料理スキルを趣味で完全習得した猛者だ。
しかも、その腕は現実世界でも変わらない。
最初は歓迎する人に手伝わせるわけにはいかないと断ったのだが、どうしてもと押し切られてしまった。
さらにその時、残りの２人が料理を勉強したいと言ってきたのだ。
十分に時間に余裕があったためか、アスナさんはそれを承諾。まったりと調理しながら、２人のレクチャーもすることになった。
「まあ、たまにはいいか」

俺とアスナさんはそれぞれ姫柊ちゃんとクロを教えている。
「え？　何か言いました、先輩？」
「いや、なんでも……ほら、目を離すな」
「あ、ごめんなさい」
包丁を握っているのに目を俺の方に向ける姫柊ちゃんに注意する。
そうだな、平和でいいんだ。
願わくば、こんな平和が続きますように――
「ところで先輩、さっき洗面所に行ったんですけれど」
なんだよ、いい感じに終わろうとしてたのに。いいじゃん、今回はこれで終わりで。切りもいいしさ。
「クロさん、シャワー浴びたんですね」
「浴びたんだな」
クロの話は俺にとって地雷原にも等しいものだ。少し間違えば俺の犯した罪が露見する。
アスナさんがいるこの状況は、昨日よりも事態が悪化したと言っても過言ではない。
「変なことしてませんよね？」
「……してませんよ」
俺たちの間の会話の種はそれ以外ないんですかね。
「なんでそう思った」
「えっと……それは……」
ちらちらとクロ、アスナさんの方を気にしつつ、
「男の人がするときって、えっと、おかず？　が必要なんですよね？」
……あー。
「女の子が着たあとの服のにおいは、いいおかずになる、と書いてあったのですが……」
とりあえず、俺がいつもヤることしか考えてないみたいな言動はやめてほしい。俺、そこまで汚れてますか？
「そう言う人も、まあ、確かにいるかもしれないけど」
「先輩は違うんですか？」
「一概に違うとも言い切れない、かな」

「せ、先輩……っ」
だから目を離すんじゃないよ。そしてそんな目で見ないでください。
「誤解するな。匂いが好きっていうのは、あれだ、動物で言うフェロモンみたいなもんだ。男は女を引き寄せるにおい、女は男を引き寄せるにおいを出す。生物的に生殖活動は重要なんだから、それに反応するのは当然だろ」
「確かにそう言われれば……で、でも、生々しいですね」
そんなもんなんだ、あきらめろ。
あ、だから、目を――
「痛っ！」
だから言ったのに。いや、俺のせいだな。
俺と話していたせいで、姫柊ちゃんは指を包丁で切ってしまった。
「見せてみろ」
「だ、大丈夫ですよ。自分で出来まっ!!　せ、先輩!!」
「ん？」
何を騒いでるんだ？　ただ切った指をくわえただけだろう。ばあちゃんにはよくやられたぞ。
俺は姫柊ちゃんの指をくわえたまま、バンドエイドを手探りで取り出す。料理をやっていると、たまに切ってしまうことがある。念のために常備しているのだ。
口を放して、バンドエイドを巻く。はい、終わり。
「どうした？」
「いえ……」
バンドエイドが貼られた指にそっと触れたまま動かない姫柊ちゃん。ま、指先のケガって痛いしね。
とりあえず包丁は俺が代わり、姫柊ちゃんには別の事をしてもらうことにした。
そして、この時、近くにいる2人が俺の事を見ていたことには気が付かなかったんだよね。

「それじゃあ、アスナちゃんの入室を祝して、乾杯!!」
「「「乾杯!!」」」
完成した料理を４人で囲む。昨日は３人だったのにもう４人になった。この調子で増えていけば、テーブルの大きさが合わなくなるんじゃないか？
しばらくすると学校の話になった。
自分たちのクラス、担任ときて、今度は選択授業の話になった。
この島の武偵学校では中等部になると、選択授業として超能力開発や、魔法などの超常的な力を学ぶ機会がもらえる。
授業を取っていない場合は、自主訓練や依頼を受けたりすることもできる。
ちなみに初等部では、全体的に学習して下地を作るらしい。
本来はここで自分に向いている方向性をある程度決めるのだが、あいにく、俺にはそんな機会は与えられていない。
「まあ、適当に回ってみようと思ってるよ」
「そうなんですか。私は巫女系統に興味があるのでそっちにしてみようと思ってます」
まあ、姫柊ちゃんは剣巫だしな。
「じゃあ私は、翔君と一緒に見て回ろうかな。いい？」
「もちろん」
これで明日は、アスナと学校デートだ。違うか。

アスナさんと一緒

目が覚めた。
あ、今日はクロがいないな。や、期待してたわけじゃないよ。
でも、なんというか、意外だな。昨日のおしおきが効いたのか？
いや、あの様子を見ると、そんなことはないと思けど。
……こんなことを考えるなんて、たった2日でこの世界に染まりすぎじゃないか、俺？
俺は布団から出て時計を見た。ふむ、6時か。
朝ご飯を作るとしようか。あ、もしかしたらアスナさんも手伝ってくれるかもしれないな。そうだったらありがたい。色々な意味で。
そんなことを考えながら、顔を洗ってキッチンに向かった。
階段を下りていると、下から音が聞こえる。その音はすぐに調理の音だという事が分かった。
おっと、もう起きて作ってたのか。早いな。
確かにキッチンには先客がいた。2人も。
「おはよう、クロ、アスナさん」
「おはよう、翔君」
「……おはよう、お兄ちゃん」
何故クロがいるんだ？　昨日の料理教室で料理に目覚めたとか？
すまないが想像できない。
よく見れば何だか元気がないみたいだし。マジで何があった。
アスナさんに叩き起こされて無理やり手伝わされてるとか？
とりあえず、聞いてみたほうが早いな。
「なんでクロが手伝ってるんだ？　料理、好きになったのか？」
「……好きで手伝ってるわけじゃ、ないけど……ちょっと色々あって」
色々？
「クロちゃん、私が朝起きたら翔君の部屋に行こうとしてたんだもん。ちょっとお説教しちゃいました。罰として、今日は朝ご飯の準備手伝ってもらってるの」
あーはいはい。クロがいなかったのはアスナさんに捕まってたか

らだったんだ。
　これですべて納得できました。
「……だって、私には魔力補充もあるのよ！　少しくらい大目に見てくれてもいいじゃない！」
「ダーメ。そういうことは、まだクロちゃんには早いです」
「く……っ！　でも、私たちの為にも必要なことじゃない、そうでしょ？」
「……それについては今後話し合いましょ。しっかり決まるまで当分は禁止です」
「そんなぁ～」
　なんか2人とも、俺の知らないことについて話してないか？　話の流れ的に、俺とHなことをすることがみんなのためになるらしいけど。
　それはそうと、クロにはそう言う事を抜きにしてもキスしないといけない理由がある。
「魔力補充はどうするんだ？」
「出来れば私の目の前でしてほしいけど」
「それは嫌だ」
　流石の俺も、他人の目の前でキスする勇気はない。どんな恥辱プレイだ。しかも相手は俺の事をお兄ちゃんと呼ぶ小学生。事情を知っていても110されることになるかもしれない。少なくとも、俺だったらそうする。
「そうだよね……私か雪菜ちゃんとする？」
　俺に濃厚レズキスを見せつけるつもりか。言っとくが、クロの魔力補充キスは半端じゃないぜ。経験者は語る、だ。
　終わった後の2人の顔が見ものだなぁ……ぐへへ。すいません。おかしくなってました。
「試しに今してみたら？」
　ここで少し悪戯心が目覚めた。
「え、翔君の目の前で？　それは……」
「人に自分の目の前でやれっていった奴の発言じゃないぞ、それ」

「うう、確かにそうだよね。うん。クロちゃん、来て」
「えっと、ホントにいいの？」
それはアスナさんに言ったのか？　それとも俺？　もしくは両方？
賢いクロだったら、俺の意図が読み取れてると思うからなぁ。どうなるんだろ。煽った自分で言うのもなんだけど。
「うん。私が禁止したんだし、責任は取らないとね……っ！」
「じゃあ、するよ」
「うん……」
クロが怪しく微笑んで顔を近づけていく。対するアスナさんはがちがちに緊張して目をきつく閉じている。
今更だけど、俺このまま見てていいのかな？　いや、本当に、俺が煽ったんだけどね！
そんなことを考えていると、クロが少し視線をずらし、俺を見てきた。まるで、しっかり見てて、と言われてるみたいだ。
俺は息を吐いてなるべく自然体で視界に2人を収めた。さあ、バッチ来い。
クロの身長に合わせてしゃがんでいるアスナさん。徐々に距離が近くなるクロの顔。俺はそれを横から見る形だ。
「ちゅ……」
「ん……」
始まりはとても静かだった。ただ唇を合わせるだけのソフトなキス。クロめ、流石に手加減したのか。流石に、俺にやったレベルのものだと朝ご飯づくりに支障が出るしな。
……まてよ。クロが手加減する理由、あるか？
「ん……ちゅう、ちゅるっ!!」
「あ、待っ！……ちゅっ!!」
ああ、侵略が始まったんだな。
油断していたらしいアスナさんは慌てて顔を引こうとしてるけど、クロが手を回してるせいで逃げることが出来ないみたいだ。
それにしても、

「エロいなぁ……」
俺は特にレズが好きって訳じゃないんだけど、この光景は……うん、すごい。
必死に身をよじって逃げようとするアスナさんと喰らい突いて離さないクロ。２人の口はその激しさによってあふれた唾液が光っており、その量がどんどん増えている。
耳まで真っ赤に染めたアスナさんは、とうとうクロに床に押し倒されるようになってしまった。
それでも足りないというようにクロは唇を押し付ける……と思ったが、意外なことに口を離した。
「はぁ、はぁ……こ、これで、終わり？」
どこか安心の色を含む、すっかりふやけた声だ。ただのキスでここまで乱れるものなんだな。
お腹にクロが座っているせいか、アスナさんは起き上がらない。流石に力が入らない、なんてことはないよね？
でも、太ももをモジモジとこすり合わせてる。いやらしい所を触られたわけじゃないのに、あの最奥は準備を始めてしまっているのかもしれない。
「終わり？　まだまだだよ。もっと頂戴……？　いいでしょ？　お兄ちゃんも興奮してくれてるよ？」
「え!?　あ、しょ、翔君！　見なっ、ちゅう！　んあ！　ちゅ！」
何かを言いかけたアスナさんの口がまた塞がれる。
クロは自分の体重全てを使ってアスナさんを抑え込み、柔らかい唇、ピンク色の舌、熱を帯びた口内をいじめ倒す。
アスナさんの抵抗が目に見えて弱くなっていく。多分魔力が吸われているのが原因の一つだろう。ほかの原因は……見ればわかるな。
しばらくして、銀の線を引いてキスは終わった。
しっとりとした唇をなぞりながらクロを物足りないと言った顔をしている。
「ん、やっぱり足りないかなぁ」
「はぁ、こんなに、やっても、はぁ、足りない、の？」

「一言に魔力補充って言っても、効率には個人差があるの。お兄ちゃんとアスナを比べると、１０倍くらいお兄ちゃんの方がいいかな」
「そう、なんだ……」
それだけ呟くと、アスナさんは息を整えることに集中したらしい。しばらくすると、荒かった呼吸が元に戻る。
「……翔君、魔力補充はお願いね？」
「俺がやるの？　アスナさんの目の前で？」
「私の目の前じゃなくてもいいから……流石にあれは強烈すぎるし……」
血盟騎士団の副団長もクロの濃厚口づけには勝てなかったか。
という訳で、魔力補充は今まで通り俺がすることになりました。
変なことしないようにと、さんざん釘は刺されたけどな。

時間は過ぎて、現在１２時半。学校での普通授業が終了の時刻を迎えた。
これから生徒の多くは昼食を取り、各々、自分の選択した授業へ散って行くだろう。
もちろんそれは俺も例外でない。
ただし俺の場合は、学期の始まりに設けられている１週間の選択期

間を利用して、いろいろな部署を見て回るつもりだ。昨日の約束通り、アスナと一緒に。
実は昼食もアスナがお弁当を作って一緒に食べる予定だったんだけど、朝のアレのせいでそれどころじゃなくなっちゃったんだよね。
俺が作ってもよかったんだけど、2日しか経ってないのに人口がどんどん増えるせいで、冷蔵庫にある食材がどんどん減っていくから、弁当に入れるものが無くなったんだ。だからそれも断念した。
こんなことだったら、俺も昨日買い物に行っておけばよかったな。女の子召喚するってことは分かってたんだからさ。
今度からは気を付けると誓って惣菜パンを口に押し込む。
姫柊ちゃんもあんなにギリギリで買ってこなくてもいいのにさ。買ってきたのは本当に1食分だけだった。あの子には買い置きっていう概念が存在してないのか。まあ、知らなかったんだろうね。徐々に教えていこう。
武偵は速く食べるようにと言われているらしい。
理由は、食事の最中は敵が襲ってきても対処できないからだとか。
それを守っているのか、俺が食べ終わる時には教室にはほとんど生徒が残っていなかった。
俺、食べるの遅いけど、これで大丈夫なんですかね？　先生に叱られません？
俺は急いでゴミをゴミ箱にシュートし、アスナさんの教室に向かった。
……一緒に回る約束したのに、待ち合わせしてなかったんだよ。
この学校は1つの階に1つの学年が収まっている。
アスナさんは16歳で召喚されたので、高校2年生、俺は1年生なので一つ上の階になる。
一つ上の階に来ただけで、空気が違う。
1年という期間は短いようで大きく人を変えるらしい。
すれ違う先輩方は、『らしい』雰囲気が1年生よりもずっと強い。というか、ほとんどの生徒がまだ教室にいるぞ？　1年生の教室なんてもう静まり返っているのに。

そんな疑問を心の隅に押しやって、目的の教室に歩を進める。
俺の事を見る先輩の目が怖い。俺が何かすれば、すぐに鉛玉か刃物か魔法や超能力が飛んできそう。
見慣れない俺に警戒するのは分かるけど、そんなに見ないでもいいじゃないですか。
段々早歩きになったためか、すぐにアスナさんの教室に到着した。
中でアスナさんは数人の女子とおしゃべりしている。が、俺を見つけると、すぐにしゃべっていた子達に何かを言って俺の方に駆け寄ってきた。
「ごめんね、翔君。待ち合わせ場所全然決めてなくて。みんな移動してから連絡しようと思ってたんだけど」
「や、大丈夫だよ？　怖かったけど」
「怖かった？　どうして？」
いや、まあ、アスナさんには縁のない話なんで。
簡単に言えば、どの世界でも可愛いは正義。可愛ければ、だいたいのことは許されるってことかな。
「大したことじゃないです。じゃ、行きますか？」
「いいけど、早くない？　みんな全然移動してないけど……」
「あーでも、1年生はほとんど移動してるよ？」
「え？　そうなの？　なんでだろう？」
少し考えると、あることに行きついた。
武偵では年齢による上下が厳しい。これは捜査などで指示を出すときに、スムーズに進めるために必要だからだ。
つまり1年生は、授業の準備を上級生の分までするから速く移動してるんじゃないのか？
今は選択期間だけど、ほとんどの生徒は自分の専攻が決まってるわけだし、先輩よりも後に行ったら、なにされるかわかんないもんな。
それを伝えると、アスナさんも納得してくれた。
とりあえずこのままいても仕方ないので、俺達は適当なところに向うことにした。
教室を離れる時、アスナさんとおしゃべりしてた数人の女子が、俺

とアスナさんを見てきゃっきゃと言っていたのが目に入った。
大方、俺とアスナさんの関係について邪推してるんだろうな。仕方ないけど。
わざわざ下級生が先輩の教室まで迎えに来て親しそうに話してたら、誰だってそう思うさ。違うけどな。
目的地は、そうだな……手堅く強襲科（アサルト）にでもしておくか。

強襲科（アサルト）。
『明日無き学科』とも言われる武偵の花形であり、同時に最も危険な学科である。
原作では拳銃・刀剣その他の武器を用いた近接戦による強襲逮捕を習得する学科だが、この世界では超能力、魔法も戦闘に取り入れられているため、危険度は段違いだ。
訓練中に死亡者が出るというのだからそのクレージーさは、すぐに理解できる。
そんな場所に俺たちは足を踏み入れた。
中では既に訓練が始まっている。始まってそんなに時間が経っていないはずなのに、もう伸びてるやつがいるんですけど。まだ午後は長いぞ。
主任の先生は蘭豹。
ポニーテールの大柄な女性で、生徒に向かって死ね死ね連呼している。あなたは本当に先生ですか？
来ないほうが良かったんじゃないかなぁ。
早くも帰りたくなってきた俺だったが、蘭豹先生に見つかってし

まった。
「お前ら遅かったな!!　罰として今立ってる全員と組みしろや！　死ぬまでな！」
えっと、死ぬまでっていうのは無力化を過激にした言い方ですよね？
「お前ら、その2人を殺したら休憩、死んだら今のをもう1セット!!」
死んだら訓練できないと思うんですが。
というか、ボロボロのみんなが血走った目になってる。完全に俺たちを殺(や)る気だ。
俺は仕方なく銃を抜く。
アスナさんの方はいつの間にか、訓練用に刃が潰されたレイピアを借りていた。
「殺(や)れやッ!!」
蘭豹先生が手に持っていた銃を撃つ。その凄まじい銃声が、戦闘開始の合図になった。
数は……5人か。それぞれが銃を向けて引き金を引いている。狙いは防弾征服に守られた肩や足。武偵は殺しはご法度だからな。
日々の訓練の成果か、銃弾は程よくばらけている。普通なら防御も回避もできない。
でも、俺は普通じゃない。
ガキガキガキン!!
全ての銃弾を銃弾撃ち(ビリヤード)で迎撃、あっけにとられているうちに次の能力を発動する。
「固有時制御2倍速(タイムアルターダブルアクセル)」
2倍速になりグリップを使って2人を一気に気絶させる。
アスナさんの方はっと、うわぁ、なんだあれ。剣速が目で追えない。
ああ、どんどん倒されてく。見てるとかわいそうになってくるな。
戦闘時間、10秒。一瞬で終わった。
それと分かったことがある。アスナさんの身体能力はVRMMOのものが適応されるんだ。
俺たちが一息ついていると、蘭豹先生がニヤニヤしながら近寄って

くる。嫌な笑い方だ。
「やるなぁ自分ら。どうや、これからここで」
「遠慮します!!」
俺はアスナさんの手を引いて、逃げるように強襲科(アサルト)を後にした。

翔の悩み

「怪物、ですか？」

俺は今、特殊エリアの比較的浅い所に存在しているとある施設に来ている。

目の前にいるカボチャ頭の幽霊は今回の依頼主、ジャック・オー・ランタンさんだ。

彼は『問題児たちが異世界から来るそうですよ？』に登場するキャラクター。

見た目はハロウィンでよく見かけるアレに手足をくっつけただけの様に見えるが、その正体は、生と死の境界に存在する幽鬼の大悪魔。

万人が知る子供好きであり、子供を愛し、またそれ以上に子供に愛される心優しい悪魔である。

『ウィル・オ・ウィスプ』という特殊エリアでもかなり大きな組織の参謀に位置する超大物だ。

この世界に来て1週間たったこの日、俺たちはジャックさんに依頼があると呼び出された。

依頼内容は、ウィル・オ・ウィスプが経営している保育所の園児の周りで、ここ最近になって謎の怪物がたびたび目撃されるようになったため、その原因の究明、さらに解決だ。

この間の人形探し以来まともな依頼が全くなかったため、俺達はこの話に飛びついたのだ。

大手のグループは子供しか目撃者がいない上に報奨金も微妙だという事で、あまりまともに取り合わなかったらしい。

俺たちに回ってきたのは、この前の人形の持ち主の女の子がここ出身で、たまたま話題に上がったからしい。

なんにせよ、ありがたい話だった。

この1週間、全く変わり映えのない毎日だったからな。

というのもアスナさんが召喚されて、家の中の風紀の取り締まりが超強化された。

まず、クロが俺の部屋に侵入してくることが無くなった。入る時は

必ずノックするようになったんだ。
聞いてみるとアスナさんにそうしろと言われたとか。あのクロを、口頭による注意だけで従わせるとは……流石アスナさん。
魔力補充はクロと2人きりですることになったが、それもアスナさんの監視がついている。ドアの向こう側に待機していて、1分過ぎたら強制的にドアを開けるのだ。
かくして最近は、極めて健全な生活を送っていた。むしろこれが普通なんだろうけど、1回あれを味わうとまたしたくなるのは、しょうがないことなんだろう。
それにしても怪物か。仮面ライダーの要素もあるんだろうなぁ。やっぱり、一番可能性が高いのは怪人だな。
問題は、なんで子供たちの前にばかり現れるのか。
「ちなみに、怪物を見たって子に会うことは？」
「それは子供たちの状態を見なければわかりませんよ？　まあ、あまり怖がってはいない様子でしたが……」
「へぇ……そうなんですか」
子供だしね。先端科学で作られた着ぐるみなんて、質感がホントにしっかりしてるらしいし、それだと思ったのか？
でも、それだと何回も何回も出現する理由に説明がつかないし。
それもこれも、怪物を捕まえればわかることか。
「そう言えば、ジャックさんは自分で解決しようとは思わなかったんですか？」
「いえ、私の場合、犯人を見つけると、自分を押さえられなくなりそうですから」
その声色に、俺は息をのんだ。
ウィル・オ・ウィスプではある一つの共通の考えがある。
幼子に対して悪事を働くものを許さない、というものだ。
もし、怪物が子供たちを傷つけている所をジャックさんが目撃すれば、このカボチャの紳士は大悪魔の力を以て、その怪物を惨殺するだろう。
そうなればウィル・オ・ウィスプに迷惑がかかるだけでなく、彼を

慕っている子供たちにも迷惑がかかる可能性が高い。
「……そうですか。全力で解決します」
「はい。期待していますよ」
俺たちは立ち上がって、部屋の外に向かう。
一応俺がリーダーになっているため、依頼主との話し合いは俺がすることになっている。ほかのみんなには外で待っていてもらっていたのだ。
俺はみんなに依頼の内容を説明する。
みんな揃ったところで、子供たちの寝室に向かうことになった。
ここは一応保育所となっているが、ウィル・オ・ウィスプは置き去りと呼ばれる捨て子の事も積極的に受け入れている。
その子達専用の寮があるらしく、今はそこに向かっている。
何でも、怪物が見られた現場には、今から行く部屋の子が最低1人はいたらしい。その子たちは全員　置き去りの子供たちなんだとか。
これも一つの手がかりになるかもな。
ジャックさんは、俺たちを残して部屋の中に入っていく。
しばらく待っていると、出てきて、話しても大丈夫だと言われた。
許可をもらった俺たちは部屋の中に入る。そこには5人の男の子がいた。歳はだいたい10歳くらいだろう。
その子たちの証言によると。
「ライオンみたいだった」
「空を飛んでた」
「蛇みたいだった」
「デッカイ口があった」
「火を吐いてきた」
などなど、かなりばらつきがある。
これ以上は期待できないと踏んだ俺たちは、お礼を言って部屋を出て作戦会議を始めた。
ジャックさんはすでに仕事に戻っている。あの人はあの人で鍛冶屋をやってるしな。ジャックさんが作る物はとても値が張る（値が張るは意味的にふさわしくない気が）高級品。とても月給20万のおれ

たちが手を出せる代物じゃない。
「でだ、どうする？」
俺はみんなに問いかける。
「みんな、全然バラバラなこと言ってるしね」
「そうですよね……どういう事なんでしょう」
「もしかしたら、怪物って1体だけじゃないのかもしれないわね」
アスナさん、姫柊ちゃん、クロの順で意見を言う。頼みの綱だった5人の男の子の証言もあまりあてになりそうにないため、捜査はかなり難航しそうだ。
「とりあえず、今日は周辺のパトロールだな。あの子達は今日は部屋にいるように言われてるらしいから怪物が出るとは限らないけど」
「もういっそのこと、おとり捜査したほうが良かったんじゃないの？」
「もう、クロちゃんそんなこと言っちゃダメだよ」
言いあうクロとアスナ。この1週間ですっかり仲良くなったみたいだな。
そんなことを思いながら、俺たちはパトロールに向かったのだった。

よくよく考えれば、俺、武器らしい武器ってベレッタしか持ってないや。これ、怪物に効くんだろうか。
風紀取り締まり強化のせいで、武器・能力が全く増えて無いし。
このままじゃいかんよなぁ。かといって、アスナさんの目も怖いし。
どうしたもんか。
「あ、先輩？」

「ん？　あ、姫柊ちゃん」
「どうしたんですか？　ここ、先輩の担当からは外れてますよ？」
どうやら、考え事をしていたせいで、事前に決めておいたパトロール担当エリアから外れてしまったらしい。
ホントにダメだな。何やってんだ、俺。
「そうだったな。すぐ戻るよ」
「あ、ちょ、えっと……少し、しゃべりませんか？」
元来た道を戻ろうとすると、姫柊ちゃんがためらいがちにに肩を掴んできた。
「いいけど。珍しいな、仕事の最中なのに」
珍しい、という単語を使うほど一緒にいたわけではないけど。
「はい……偶には、こういうのも、いいと思ったんです」
「そうか。じゃあ、少し休憩するか。少し待ってろ」
俺は適当な自販機で飲み物を買い、姫柊ちゃんに手渡した。
俺たちは少し歩き、見つけた公園のベンチに腰掛ける。
ペットボトルのキャップを開けてその中身を喉に流し込む。
「「ウェ……」」
やっぱり不味かったか、小豆サイダー。この島では学園都市みたいに試験商品が数多く販売されている。
チャレンジャーな俺はいつも違う味を買ってるんだけど、今日ははずれだったか。
「2人でゆっくり話すのって、もしかしたら初めてかもしれませんね」
「そうかもな」
と言って、俺は記憶をあさる。姫柊ちゃんは一番最初に召喚した女の子だ。でも、その日のうちにクロを召喚して、さらに次の日にはアスナさんを召喚した。
クロはあの通り俺にべったりだから、確かに2人きりでゆっくり話すのはこれが初めてかもな。
「先輩、悩んでませんか？」
唐突だな。
「悩みの無い人間なんて、そうはいないさ」

「そうですね。じゃあ、言い方を変えます。私たちの事で何か悩んでませんか？」
「……」
沈黙は肯定。
大正解だ。1週間という時間で俺はこの世界に慣れ、周りを見る余裕が出て来た。それによって、様々な悩みというものが出て来た。
その最たるものが、召喚した女の子に対する接し方だった。
「やっぱり、そうなんですね。ごめんなさい。私たち、何か先輩の癇に障ることをしてしまいましたか？」
「してない。俺が勝手に気にしてるだけだ。俺の心の持ちようだから」
俺は、彼女たちが向けてくる好意について悩んでいた。
最初は浮かれていた。様々な作品のヒロインと一緒に生活して、さらには好意まで向けてくれるというこの状況に。
でも、だんだん冷静になって考えると、それは本来、俺じゃなくてそれぞれの作品の主人公に向けていたものだ。
その考えに至った瞬間、彼女たちの気持ちを素直に受け取っていいのか疑問に思うようになってしまった。
クロもアスナさんも、俺が望めば受け入れてくれるだろう。
なぜなら、主人公にそういう気持ちを向けていたのだから。
「そう、なんですか。クロさんもアスナさんもすごく気にしてましたから。昨日の会議では日替わりで添い寝位はいいんじゃないか、ってことになったくらいなんですよ？」
「おいおい、それは素晴らしい提案だな。ぜひともお願いしていい？」
俺は笑いながら返す。
つまり俺がよそよそしいのは、女の子と触れ合う機会が減ったからだと思ってるんですかそうですか。
実は、まったくその逆だとは夢にも思うまい。
気になった俺は、それとなく原作主人公について聞いてみたりしたこともあった。その時の反応を見るに、原作主人公についての記憶は全く無いようだった。

つまり、なんといえばいいか、召喚される女の子は、某戦艦が擬人化しているゲームに出てくる女の子に近い状態みたいだ。
あのゲームでは最初からプレイヤーに好意を寄せてくれる者もいれば、逆に淡白な反応をする者もいる。
それと同じだ。
初期の感情の程度が、分かりやすく言って原作主人公に向けるものと同じという事。
それが分かっても、一歩ひいてしまう。
こればっかりはしょうがない。
だから、
「ま、そんなに深刻になるな。大丈夫だから」
みんなには心配かけるけど、どうにもできないさ。

結局パトロールでの収穫はゼロ。そんな日が3日ほど続いたある日、ジャックさんから凶報が届いた。
あの置き去りの子供たちのクラスメイトが、怪物に襲われて大怪我をしたというのだ。
俺たちは急いでジャックさんのところに向かった。
実際にけが人が出たからな、あちらこちらに武偵の姿が見える。
「ジャックさん！」
「おお、翔さん。来てくれましたか」
ジャックさんは、置き去りの子供たちの寮の上をふわふわと飛んでいた。おそらく見張りの為だろう。俺を見つけて降りてくる。

「どうなってますか？」
「今回、あの５人は現場にはいなかったようです。怪我した子ですが、かなりひどいみたいで……」
「そう、ですか。すみません。防げなくて」
「いえ、いえ。これを防ぐのは未来予知の能力でもない限りは不可能ですよ？　気にする必要はありません。今回の事で大手の武偵も動いてくれるらしいですし、事件はすぐに解決するでしょう」
ヤホホ、と笑うジャックさん。
最近の俺、いいとこなしだな。何やっても空回りの気がする。
「……俺達も捜査に加わりますね」
「はい、お気を付けて」
俺たちは１人１人でばらけて、大手の武偵の邪魔にならないように見回りを開始した。
主な通りには必ず武偵がいた。なので、俺が見回るのは細い路地になる。
それを見つけたのは本当に偶然だった。
「あの子達、なんで……？」
俺の視線の先には、あの　置き去り（チャイルドエラー）の５人の男の子の背中があった。
どうやってジャックさんの監視をすり抜けたかは知らないが、今出歩くのは危険すぎる。
大方、いつもとは違う雰囲気を感じ取って、面白半分に探検でもしようとしてるんだろう。
すぐに声を掛けようとした俺は、その迷いのない足取りに疑問を覚えた。まるで目的地が決まっているかのようだ。
そして、その疑問は正しかった。
数分も入り組んだ路地を歩くと、普通に歩いたのではまず見つからないような廃屋にたどり着いた。
男の子たちは、そこに入っていく。
俺は慎重に距離を詰めて、割れた窓から中をのぞき見た。
中には子供達しかいないな……ッ!!　あ、あれは!?

俺の目は驚愕に見開かれた。
男の子の1人が取り出したもの、それは。
ガイアメモリだった。

迷いを晴らす剣巫

男の子５人は、慣れた様子で埃まみれのソファーに腰かけている。やっぱり、ここにはよく来ているんだ。

それだけなら良かった。仲間内だけの秘密の隠れ家、とってもわくわくする。

問題は、彼らのポケットから、ガイアメモリが出て来たことだ。

「連絡しとくか」

俺は腕時計型携帯を操作して、俺の位置情報を３人の端末に一斉送信する。

恥ずかしいけど、拳銃と体の加速しかできない今の俺じゃ、ドーパントには勝てないからな。

今は情報収集に徹しないと。

俺は男の子たちの会話に耳を澄ませた。

「やったな！」

「ああ！　あいつ、泣きながらションベン漏らしてたぜ！」

「散々俺たちをバカにした報いだろ。それよりも、次だ」

「で、でもさ、武偵もたくさん来てるし、ばれたらヤバいんじゃ……」

「なんだよ、ビビってんのか？　このメモリがあれば武偵なんかには負けねえよ」

会話を聞く限り、この子たちが犯人で間違いないか。

それに次ってことは、まだ襲うつもりなんだな。

「だよな、この……」

《ＣＨＩＭＥＲＡ》

男の子の１人がメモリを手に取って首元に刺した。

その瞬間、男の子の体は様々な動物の部位をかき集めたような怪物に変化した。

なるほどね、キメラドーパントか。

顔はライオンをモチーフにしていて、しっぽは蛇。大きな翼もある上に腕は右が鋭い爪、左側は顎の様になっている。

あの証言は全部本当だったんだ。複数体いる訳じゃなくて、キメラ

として一つにまとまってたんだ。
火を吐く能力もありそうだな。
俺が一人で納得してると、キメラドーパントは俺の方を向いてきた。
「そこに誰かいるな。出てこいよ」
ッ！　気づかれた!?
そうか、ドーパントになって感覚が一気に鋭くなったからか。
今気が付いたけど、使われる前にメモリを撃って壊せばよかった。
ホントに、らしくないよ、俺。そんな簡単なことを見逃すなんて。
ばれてしまったものはしょうがない。俺は素直に姿を見せる。
「あれ？　この前の武偵のお兄さんじゃん！」
「あーあ、ばれちゃった。どうすんだ？」
俺に見つかってもたして慌てた様子がない。むしろへらへらとしてドーパントの体を見せつけるようにしている。
「どう、お兄さん？　かっこいいと思わない？」
「思わない」
「えー？　そうかなぁ……空だって飛べるし、火も吐けるんだぜ？」
「だって、その力でクラスメイトを怪我させたんだろ？」
無駄話をして話を長引かせようとしたが、俺の一言で5人の目つきが変わる。
「あんな奴、クラスメイトじゃない」
「お兄さんもあいつらの味方するわけ？」
やっちまった。なんて軽率な一言を言っちまったんだ。
もう時間を稼ぐとか無理だぞ。
俺は言葉を続けながら、逃げる体勢を整え始める。
「ただの殴り合いならともかく、その力でやったら君たちが悪い」
「あっそ、じゃあ、お兄さんにも痛い目見てもらうよ」
キメラドーパントは予備動作なしで火を吐いてきた。
何とかタイムアルターを使って回避、外に出る。
悠々と出てくるキメラドーパント。
俺は試しに3発ほど打ち込んでみる、が、勿論効かない。

「あはははは!!　どうしたのお兄さん!!　そんなんじゃ痛くもかゆくもないよ!!」
そんなことは分かってるよ。
キメラドーパントの腕は、重機並みのパワーがある。当たればその部分が引きちぎられるだろう。
幸いだったのは、相手がまだ小学生で、がむしゃらに腕を振り回していただけだったという事。そうじゃなければ、俺はとっくの昔に肉塊になっている。
何とか攻撃をかわし続けていた俺だったが、それでも逃げる隙を見つけられない。
やがて、体全体に痛みが走り、膝から力が抜けてしまう。
タイムアルターの使い過ぎだ。
「しまっ!!」
ボディービルダーの腕ほどもある蛇が、俺の胴体に叩きつけられた。
肺の中の空気がすべて吐き出され咳き込む。
「じゃあね、お兄さん」
火を吐くつもりか。
何とかよけようとするが動けない。
ライオンの口が開かれ、そこから火の粉が漏れる。
だが、煌々と燃える火は、俺を襲う事はなかった。
キメラドーパントの横から飛んできた何かが、キメラドーパントの顔面に直撃したからだ。
それを合図にして、姫柊ちゃんとアスナさんがそれぞれの獲物でドーパントを切り裂いた。
少し遅れて、クロも出てくる。
さっきの攻撃はクロの弓矢か。
「お兄ちゃん、大丈夫?」
「大丈夫だ。助かったよ、ありがとう」
「良かった……じゃあ、ちょっと待っててね。あいつ、すり下ろしてミンチにするから」

弓を消して干将・莫邪を投影するクロの目は完全に据わっている。
こ、怖い。ドーパントよりも。
一方のドーパントは、攻撃が当たったところをさえてうずくまっていた。
「痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!　お前ら……ひっ」
憤怒の声はクロを見ただけで霧散した。
所詮は小学生。クロの放つ本気の殺気におびえ、震えている。すでに腰も抜けているだろう。
クロは無言で近づく。
「や、やめ……ッ!!　やめて!　助けてよお!!」
「やめて?　助けて?　お兄ちゃんを傷つけておいて、今更何言ってるの?」
うずくまるキメラドーパントの顔の近くに干将を突き立てるクロ。
「殺しはご法度だから少しは手加減するけど、あんまり期待しないでね」
キメラドーパントは動かなくなってしまった。そして、メモリが排出され、元の男の子の姿に戻った。
「「え?」」
これは予想外だったらしく、クロも含めて素っ頓狂な声を出す。
「え?　翔君、これって……?」
「これが真相だ。今回の事件の」
俺はやっと痛みが引いてきた体を起こし、まだ中に4人いるだろう廃屋を見るのだった。

「全て話してくれました」
５人の男の子に事情を聴いたジャックさんが部屋に入ってくる。この部屋は、俺が依頼の内容を聞いた部屋だ。
ジャックさんが聞いた話はこうだ。
あの５人は少し前までは普通の学校生活を送っていた。友達もいたし、成績もそれなりによかったらしい。
だがある時、どういう訳か５人が置き去り（チャイルドエラー）であるという噂が教室に広まったらしい。
そこまでくれば、後はどういうことになるかは容易に予想がつく。親がいないというネタはからかいの種に。そしてどんどんエスカレートしていじめに発展していった。
そんなある日、見たこともない男性から、メモリをもらったらしい。
「その男の事は？」
「残念ながら、覚えていないそうです」
「そうですか……すいません、続けてください」
その日から、秘密の隠れ家、つまりあの廃屋でメモリを使って遊ぶようになった。
超人的な力を与えてくれるメモリにその５人は夢中になった。たまにやりすぎて他の人に見つかったこともあり、それが今回の怪物騒ぎにつながったようだ。
怪物が現れた場所に５人がいたのは、メモリを使って遊ぶ時はいつも一緒だったから。
そんなある日、一人が提案したらしい。
この力を使って、いじめていたヤツらに復讐しないか、と。
後は今回の事件の通り、クラスメイトに重傷を負わせ、次の計画を立てようとしたところで俺たちに捕まったという事だ。
全ての話を終えて、俺とジャックさんは互いに無言になる。
何分そうしていただろうか、ジャックさんが口を開いた。いつものどこか楽しげな声色ではなく、深い悲しみにくれた声色だ。
「……ともあれ、これで依頼は終了です。報酬はどちらに？」
「あ、じゃあ、この口座に」

「分かりました。今回は、ありがとうございました」
こうして、後味悪く、事件は幕を閉じたのだった。
少なくとも、表面上は。

次の日、俺はベッドに寝転んで考え事をしていた。
あの5人は、全員違う学校へ転校、さらに保護観察処分になった。
これはかなり軽い処分ではないかと思うかもしれないが、武偵には血の気が多い人物が多く、子供のころに刃傷沙汰をおこしている物は何人もいる。
さらに武偵には一発撃たれたら一発撃ち返すという風習があるため、流血沙汰なんて珍しくもなんともない。
極め付けに、この島に来るときの契約書に生死の保証が出来ない、という文言があるため、外の両親が裁判で訴えることもできないのだ。
よって、この事件はすぐに忘れられていくことになるだろう。
ガイアメモリが関わってなければ。
どこのどいつがガイアメモリを渡したのかは知らないが、ガイアメモリは麻薬のようなもので、一度使うと狂暴になったり、ドーパントの力に飲みこまれたりといった具合に、中毒症状が出る。
あの年の子にガイアメモリを渡すような奴が、まともな倫理観を持っているとは思えない。
また渡そうと近づいてくるにきまっている。
俺ができるのは、

「ガイアメモリを渡そうとする現場で取り押さえることだな」
この情報を大手の武偵グループに渡したい気持ちはやまやまだったが、こんなことを知っている理由を説明することが出来ない。
今日の夜にでもみんなに相談しよう。
そう決めたタイミングを見計らったように、ドアがノックされる。
入ってきたのは姫柊ちゃんだ。
「どうした？」
「先輩に、少し話があるんです。クロさんとアスナさんは買い物に行ってるのでご安心を」
何を安心すればいいのかわからないけど、了解、安心する。
「単刀直入に言います。先輩の悩みは私達との関係についてではないですか？」
驚いた。勘がいいってレベルじゃねえぞ。
「そうだな、確かにそうだよ」
素直に認める。とぼけたら話が進まなそうだしな。
俺はこの世界に来て、ラノベのキャラクターといちゃいちゃできると思って舞い上がってた。
姫柊ちゃんはどうか知らないけど、クロなんか毎朝俺の布団にもぐりこんでくるし、アスナさんも気が付くと距離が近いことが何度もあった。
本当に夢の世界、ドリームワールドだと思った。
そうして過ごしているうちに、本当にこの生活が続くのかとふと疑問に思った。
言うまでもなく、世間一般的にハーレム、重婚なんて認められていない。
ヒロインの好意をこのまま受け取っていていいのか、すこし時間が経って冷静になるとそんな考えが浮かび始めた。
手を出しておいて何を、という人もいるかもしれないけど、いつまでも惰性で関係を続けていく方が問題だ。
俺がしていたのはあくまで一時の妄想。でもここは現実で、今後もずっと続いていくのだとすれば大きな問題がある。

ハーレムとしてみんなを愛していくとしても本当に平等に全員を愛していけるのか、誰か1人を本当に好きになってしまうことはないのか。
人の気持ちが変わるのは当然の事だ。
いくら全員を幸せにすると誓ってもこと好意において、それを絶対に突き通せる保証なんてない。そうだったらこの世に浮気なんて起こらない。
他人の人生はそんなに簡単に背負えるものじゃない。
「みんなの好意を素直に受け取れない」
「それは、私たちが創作物の存在だからですか？」
「え？」
姫柊ちゃんの言葉に、俺は固まる。
「姫柊ちゃん、それは……」
「召喚される女の子はみんな分かってますよ。自分が創作物上のキャラクターだってことは」
そ、そうだったのか？　てっきり、まっさらな状態で。俺への感情と知識だけを持って生まれてくるもんなんだと思ってた。
「そこでは私たちは私たちなりの人生……っていうと少しおかしいかな？　ともかく、それぞれ友達がいたり、親がいたり、もしかしたら恋人がいたりしてたんですよね？　それなのに、自分に好意を向けてくるから戸惑っているんじゃないですか？」
「……そう、だな」
「じゃあ、そんなこと気にしなくていいです」
その言葉に、俺は普段からは考えられない大声を出した。
「そんなの無理だ!!　その気持ちは本来、俺じゃない――」
「先輩が言う人なんて、私たち知りませんよ？　今、私たちが好きなのは先輩なんです」
まっすぐ俺を見て宣言してくる姫柊ちゃん。
「いや、だから……」
「私は先輩の事が好きです。ここに来てから、好きになりました。これでもダメなんですか？」

あ、れ？
「姫柊ちゃんが、俺を、好き？」
「はい」
姫柊ちゃんは主人公とのファーストコンタクト時、主人公に恋愛感情は抱いてなかった。
そんな彼女が俺のことを好きっていうのはつまり、
「だから少しずつでいいです。クロさんとアスナさんの気持ちも受け入れてあげてください。目をそらさないであげてください。何もしてないのに最初から勝機がないなんてかわいそうですよ」
「や、それはおかしい。俺の事が好きなんだったら。ほかの子を煽るのは……」
「いいんですよ、私は。２人も了承してくれました」
ハーレム公認宣言じゃねえか！　魅力的過ぎます！
「わ、分かった。じゃあ３人を大事にしてもうほかの子は――」
「それもダメです」
ナンデヤ。おかしいじゃん！
「先輩に呼ばれるのを待ってる子はたくさんいるんですよ？　その子たちの気持ちはどうなるんですか？」
「その子がハーレム容認するかは分かんないだろ!?」
下手したら血を見ることになる。
「そこは大丈夫です。なんたって、先輩の事が好きな同志ですから!!」
何て根拠のない自信。ポンコツ姫柊ちゃんなんだよなあ。
「そ・れ・で、分かりましたか？」
ズイズイ迫ってくる姫柊ちゃん。ち、近いんですが。こういうの気にしないはずなのに、好きだなんていわれると途端に恥ずかしくなるのは不思議。
「わ、分かった！　これからは俺に向けられる好意にはしっかり責任を持つ！　これでいいか?!」
「はい！」
満面の笑みで俺のすぐ隣に座ってくる姫柊ちゃん。ベッドのスプリングが音を出す。

「……まだ何か？」
「分かりませんか？」
「好きな人だから一緒にいる？」
「惜しいですね」
惜しいのかよ。
恥ずい。二重の意味で。
ああ、もう、肩乗せるのやめなさいって。
「先輩、したく、ありませんか？」
「な、何を？」
「Ｈなことです」
まさかのセリフ。こいつ偽物か？
くだらないことを考えて、俺の肩に乗っている頭を見ようと首を動かす。
そして俺の頭は真っ白になった。
姫柊ちゃんは肩に乗せたまま目を閉じて、俺の方を向いていたのだ。
これはもう、求められてるとしか……
「姫……雪菜」
「……はい」
目を閉じたまま、雪菜は小さく答える。俺の視線は、小さい唇にくぎ付けだ。
「いくぞ」
俺はゆっくりと唇を――

アスナとクロは、買い物を終えて家路についていた。
２人の両手にはいっぱいのレジ袋が握られている。
「やっぱりお兄ちゃん、最近私たちのこと避けてない？」
「うん、そう思う」
「アスナが色々禁止にしちゃうからよ」
「うーん……そうかなあ」
「きっとそうよ。年頃の男の子だもん。ヤらせてくれない女なんか、女じゃないのよ」
「もうっ！　クロちゃんはすぐにそんなこと言って！」
レジ袋を振り回しながら、楽しそうに告げるクロ。アスナはいかにも保護者と言ったていでクロを注意するが、この手の話題でクロに敵う訳がない。
「そんなこと言って、毎晩お兄ちゃんのこと考えてるんでしょ？　自分のあそこにお兄ちゃんの固いアレを入れたら――」
「そそそ、そんなこと全然考えてないからっ!!」
動揺しすぎのアスナ。クロはアスナに聞こえないように、わかりやすいわねと呟く。
本当の理由は、２人ともわかっているのだ。
そして、今それをどうにか出来るのは、雪菜しかいない。そう確信したからこそ、翔と雪菜を２人きりにした。
「あーあ、今頃雪菜とお兄ちゃんは……はぁぁぁぁ……」
「そうだね、２人で話してるんだろうね」
クロはつまらなそうな顔をする。今の流れでいやらしいことを想像したアスナをからかおうとしていたのに、的が外れたからだ。
そんな２人の視界の端に、とある人物が映る。
１人は怪物事件でドーパントになっていた男の子。
もう１人はスーツを着た大人だ。
アスナとクロは無言で頷きあい、尾行を始めた。
２人はすいすいと進み、人気のない路地にたどり着く。

スーツの大人は懐からあるものを取り出す。
それに2人は息をのんだ。ガイアメモリだったのだ。
「動かないで!!」
2人はすぐさま武装する。
「そのメモリを捨てて」
アスナの警告に応えることはない。ただ無言で立っている。
「アンタ、まだそんなもの使う気なの?」
「やらなきゃいけないことが残ってる……邪魔するなよ」
クロの威圧に怯むことなく、男の子はぶつぶつという。
「呆れた。まだだれかを傷つけたいわけ?」
「ああ、特に君には仕返ししたいと思ってたんだ」
《ＣＨＩＭＥＲＡ》
男の子はコネクターにメモリを突き刺した。
それによってドーパントに変化するのだが、1日前とは全く違っていた。
2足歩行ではなく4足歩行の巨体。どんどん膨れるその体は、狭い裏路地だったため両側のビルの壁を破壊している。
更にたくさんの動物を取り込んだ体は、物語から飛び出したキメラそのものだった。
「すばらしい……!　この年齢の子供でここまで成長するとは!　やはり、コネクタの成長には強い感情が必須という訳だな……む?」
完全に暴走状態になったキメラドーパントは、めちゃくちゃに暴れ始める。
「ガアアア

（魔力、持たないかも……）
それでもやるしかない。
クロとアスナは、キメラドーパントに飛びかかった。

真新しい雪を踏むように　（雪菜）

俺はゆっくりと唇を――――重ねた。
互いのそれを重ね合わせるだけの軽いキスだ。クロとの魔力補充ではさんざん舌をからめあっている俺のキスとは思えない。
キスと同時に雪菜の体を包み込むように抱きしめる。雪菜も同じように手を回し、俺たちは今できる限界まで互いの体温を確かめ合う。
それから数秒、俺たちはキスを終える。しかししっかりとくっついたままなので、雪菜の顔と俺の顔は5センチも離れていない。
雪菜は俺の胸に顔をうずめ、
「……好きです、先輩」
死ねるよ、これ。可愛すぎます。
顎をかすめる雪菜の髪からはシャンプーのいいにおいがする。しかもサラサラ。
俺の髪、同じシャンプーで洗ってるよね？　こんなにサラサラになんないよ？
いいにおいもしないよ？
女体の神秘に感激していると、雪菜が俺のズボンのベルトをいじっていることに気が付いた。さっそくしてくれるんだろう。
やってもらうのは嫌じゃない。つか、やってほしいけど、どうせなら今日は、
「あー、待ってくれ、雪菜」
「え？　どうしました？」
「今日は俺からやるよ」
今日は俺が責めに回りたい。
って、あれ？　なんでそんなに不思議そうな顔してるのかな？
「えっと、どういう意味ですか？」
「いや、そのままの意味だけど？」
「私、その……女の子なんですよ？」
「知ってるけど……」

この子を男なんて言うヤツは俺が殺す。まずいな。何がまずいかわからないけど、とりあえず雪菜にベタベタやん、俺。
つか、雲行きが怪しくなってきたぞ。
「あはははは、そうですよね。じゃあ先輩がするなんて無理じゃないですか」
「……え？　なんで？」
何だろう、このやり取りは。心の中で盛り上がってたムードが一気に吹き飛んだような気がするんだけど。
「な、なんでって……私、女の子だから……その、おちんちん、ないですよ？」
「はあ!?」
ちょっと何言ってるのかわかりませんね。
俺の評価はそんなに低いんですか？　男に興味がある変態なんで思われてるんですか？　もしそうなら、そんな男に好きだなんていう雪菜も相当だけど。
「いや、違うから!!　俺にソッチの趣味はない!!　俺が言ったのは、雪菜が俺を気持ちよくしてくれるみたいに、俺も雪菜を気持ちよくするって意味!!」
「ど、どうやってですか？」
「そりゃあ……俺が気持ちよくなるところと同じところを弄って？」
「あ、いえ、だから私には――――」
「そんなことは知ってるよ!!　これギャグじゃないよね!?」
ある可能性に気が付いた。
「雪菜、お前って、自分でしたことある？」
「したこと？」
首をかしげる雪菜。はっきり言うしかないか。
「だから、自分で自分のアソコとか胸を弄ったことはあるか？　ってこと」
「え、ありません、けど……？」
わーお、マジか。オナニーの経験ゼロか。
考えてみれば、雪菜の性知識は学校で習う程度しかない。しかも性

格は超真面目。アダルトサイトなんて見ないだろう。
この状態で召喚され、頭に入れた性知識が、俺がクロを襲わないための男を悦ばせるものだけだったとしたら。
「こうなるのか」
「どうしました？」
雪菜ちゃんは白いキャンパスのようなものだ。や、ペニスの扱い方を学んでいる時点で違うか。言い方を変えよう。
自分の体についてほとんど知らない状態なんだ。どこを触れば気持ちいいか、そもそも気持ちいいという感覚すらも知らない。
よく官能表現で女の子のことを自分の色に染め上げる、という表現がされるが、雪菜の場合はそれがもっと深い。
真っ白な新雪を初めての快楽という足で踏み荒らすんだ。俺が。
そう思うと体がゾクゾクと震える。
「雪菜」
「は、はい」
「これから、俺が今言ったことの意味を説明する。雪菜の体を使って、な」
「私の体を使って……？　いやらしいことを、するんですか？」
「ああ。だから俺の言うことに従ってほしい。もちろん無理にとは言わないけど」
「大丈夫です。先輩になら、何をされても平気ですから」
だからそんなこと言われたら死ぬって。悶え死ぬよ。男が言われたいセリフｔｏｐ１０に入ってるだろ。
「じゃあ、まず、キスしよう」
思いっきり、深いヤツを。
「分かりました」
雪菜は目を閉じる。雪菜は知らない。キスは唇と唇を合わせるだけではないという事を。
まずはそれを教えてやろう。それは毎日訓練してるしな。
最初と同じようにやさしく重ねる。
雪菜が俺の体に腕を回してくるが、俺は片方を雪菜の頭、片方を腰

に回す。もうこれで逃げられない。
俺はいきなり舌を口内に挿入する。リラックスしていたらしくまったく拒まれることはなかったが、雪菜の舌をつついた途端反応ががらりと変わった。
「〜〜〜〜〜〜っ!!」
何とか俺と離れようと暴れる雪菜。しかし、まわした腕に力を入れることでそれを許さない。
「ちゅうううううう!」
「んぅ! んぐうううう……っ!」
彼女の舌に吸い付いて吸い上げてやると抵抗はどんどん弱々しいものへと変化していく。
雪菜もやられてばかりではない。見よう見まね、拙いながらも舌を絡ませてた。
「ちゅ、れろぉ……ちゅぅ……」
「れろ、んぅ……ん、れろぉ……」
最初は戸惑っていたその顔は早くも楽しんでいる物へ、背中の雪菜の手に導かれるまま、互いに向かい合っていた姿勢から雪菜を下にして押し倒すような格好になる。
ポンコツ顔は雌の顔に。腰をくねらせモゾモゾ動いている姿はなんとも言えない。
この刺激に慣れたな。じゃあ次だ。
俺は自分が上にいることを生かしたことをすることにした。
口の中でためておいた大量の唾液を流し込む。
大分慣れてきていた様子だった雪菜は、再び震え始める。唾液を押し戻そうにも位置的にそれは不可能、口の中に溜まる一方だ。
さらに言えば、唾液を流し込みながらも舌で犯すのをやめないため、ぴちゃぴちゃと卑猥な音がどんどん大きくなる。
見開いた眼は涙目で俺を見つめている。声は出せないが、心の中ではやめてほしいと思ってるのかもしれない。
ごくっ、と雪菜の喉が動いた。
口の容量の限界を迎えた雪菜に残された道はこれしかない。

俺と雪菜の唾液が混じり合ったもの、それを少しずつ飲み干していく。俺のストックはもう切れたため量が増えることはないが、雪菜は飲みこめるだけすべて飲みこんでしまった。
ここでようやく俺は口を離す。
「はぁ、はぁ、とりあえず、こんなもんだな」
「はぁ、はぁ、ふぅぅ、ひぃ、これ、なんです、か？」
「キスだ。大人の」
「大人の、キス……？」
「そう。どうだった」
言ってて、意地の悪い質問だと思った。
「わかんない、です。こんなの初めてで、でも、舌をからめるとボーっとして、吸われるとビリビリして……」
答えてくれないと思ったけどしっかり答えてくれたな。熱に当てられて思考能力が低下してるのかな？
「雪菜、次はここに座ってくれ」
「え……？」
俺はベッドの真ん中に足で輪を作るように座り、その中心を指さした。
「……わかりました。そこでまた、私の知らないことをするんですよね……？」
だから……っ！　そう言うこと言うなよ……っ!!
可愛すぎんだろうが。
防弾制服は短いスカートなので、座る時にも注意が必要。だってパンツが見られちゃうから。
という事を今知った。雪菜のパンツ、薄いピンクか。了解。
……何が？
相変わらず独り言がひどい。そして何の躊躇もなく寄りかかってくる雪菜もおかしい。や、俺もためらいなく腰に腕回してるし、そもそもうれしいけどな。
ふむ、何しようか。
早くしないと、2人も帰ってくるだろうし。帰ってきたら困……る

のか？　むしろ混ぜろって言われたら拒否権ないじゃん。何そのパラダイス。
頭の中は大混乱。何となく雪菜の頭を撫でてみる。
なでなで。
「はう……」
心地よさそうにして……油断してると大変なことになるぞ。
「あ、今度は胸ですぅぅぅ!!　待……っ！　なんでそんなとこ舐めて……!?　ひぁっ、あっ、せん、ぱっぃぃぃ！」
胸に触ると見せかけて、白い首に吸い付いてみた。最初は一カ所を重点的に舐め吸って、赤い痕をつける。その次に根元から舌の先でなぞるようにしてやると甘い声を漏らす。
「ごめん、おいしそうだったんでつい」
「お、おいしそう？　私の首が、ですか？　そんな訳――――」
「いや、おいしいよ？　こうやって……」
首への攻めを再開する。
「だか、らぁ！　そん、な、ところっ！　おいしくなんて、ない、ですぅっ！」
すっかりいじめられたことで真っ赤になった首筋。これは俺が舐めただけじゃなくて、雪菜の興奮のせいでもあると思うんだ。
「もう、真面目にやってくださいよ先輩」
「はいはい、分かったよ」
正直、エッチなことしてるのに真面目にっていうのは矛盾してると思うけど。
「じゃあ、お望み通りするけど、その前に服脱いだ方がいいかな。皺になるかもしれないし」
「あ、はい、分かりました」
上を脱いで上半身裸になる雪菜。ちなみに薄いピンク。下とお揃いですね。
正直、脱がせてみたかったけど、脱いでくれって言っちゃったからなぁ。次に期待しますか。
思えば、女の子の胸を見るのは初めてだな。そんなに見る機会があ

るもんでもないけどさ。フェラさせておいて見たことはなかったそれが、今、自分の自由にできる位置にある。
俺、雪菜に顔見られてなくて良かった。絶対気持ち悪い顔してる自信がある。
ぶっちゃけ、キス以外に関してはこっちも素人だからな。慎重にいかねば。
俺は、ちょうど手のひらサイズの柔肉を包み込んだ。
や、柔らかい……!!
こんなにやわらかいんだ、女の子の胸って。
感触を確かめるように5本の指に力を込めると、お椀型のそれに指が沈み込んでいく。楽しくなって繰り返し繰り返しもみほぐしていく。
って、なんか雪菜がやけに静かなんだけど？
手を止めずに雪菜の方に意識を向けてみる。
「ふぅぅぅ……ふぅぅぅぅ……うっ……ふぅっ……」
息が荒くなってる。
「どうした？　息、荒いぞ」
「なんでもっ、ないです……っ！　大丈、夫、ですからっ」
「そうか」
必死に声を押し殺してる雪菜がたまりません！
体もだんだん汗ばんできている。窓を閉めきってるせいか、雌の臭いが濃くなってきたな。俺もどうにかなっちゃいそうだ。
よし、手に込める力を強めてみよう。具体的には、これまでの乳房の形が変わらない程度から、牛の乳しぼりをするくらいに。うん、例えが全く分かんない。
「くぅぅぅ！　ひゃぁぁ!!　あ、せんぱ、い……！　これダメ、ダメです！」
「ダメ？　何が？」
「分かりませ、んっ！　けど、ダメなんです……っ！」
しっとりと汗にまみれている上質の絹のような肌。熱を持ち、スイッチが入っていることが分かる。

荒々しく胸を揉みしだきながら感じてくれていることに安堵する。
というか、少し感じすぎじゃないですか？　胸もまれただけでこんなに感じるもんなのか？
「先輩っ、待ってっ、ストップして、くださいぃ……！」
無視して人差し指と親指で両胸の中央にある突起をくにゅっと摘まむ。
「ひあああぁぁぁぁ！」
面白いように跳ねる。声を我慢することもできないで首を振り、必死に快楽を逃がそうとしている。
あまりにも暴れるものだから、片手を胸から放し腰に回して固定する。物足りなくなってしまわないように、２本の指でこねくり回すのも忘れない。
くすぐるように、撫でるように、弱くねじるように、小指の爪ほどもないピンク色の果実を弄るだけで、雪菜は普段のまじめな顔をだらしなく緩める。
それがたまらなく愛おしい。
「雪菜、気持ちいい？」
「わかんないっ！　わかんないです！　ひぅ！　こんなっ、くひっ！　こんなの……っ！」
「じゃあ、わかるまでやんないとな」
「……っ！　気持ちいいです！　気持ちいいですからっ!!　一回やめっ！　あっ！　てくださいっ！」
「気持ちいいのか？　それじゃあ、もっとやってあげるよ」
食べごろの果実だった乳首は、熟れすぎてしまったかのように固く、コリコリになった。それを弱くつかみ引っ張る。
「そ、んなぁぁっ！　ひっぱらないでぇ……！」
腕に合わせて雪菜の胸が動いていく。だけど、これは俺が望む展開じゃない。
腕に力を入れて、強制的に元の場所に戻した。その勢いに指の力が負けて、乳首から離れる。
「くふぅ!!　……はぁ、はぁ、はぁ」

刺激がなくなって、息を整え始める雪菜。
どのくらい時間が立ったんだろう。
２人はまだ帰ってきていないのか。
もしかして、ドアの向こうで聞き耳を立ててるんじゃないのか。
一瞬頭をよぎったものは、無防備に晒されている雪菜のパンツが目に入った時にはすべて忘れていた。
あの最奥、女性の一番大事な部分、そこがまだ残っていた。
俺は、無意識のうちにその場所に手を伸ばしていた。

初めて（雪菜）

俺が雪菜のパンツに触れようとした瞬間、手が柔らかいものに挟まれた。言うまでもなく雪菜の太ももだ。

途轍もなく柔らかいという訳ではない。程よく引き締まっていてとてもけしからんですね。そのうちここでしてもらうのも悪くないかもそうじゃなくて。

「どうした？」

「そ、そこはダメです。汚いですから……」

「変なこと言うな。俺のだって汚いものじゃないか？」

「それは……」

「雪菜はそれを手で持って、しかも口をつけてくれるんだぞ？　だったらこれでおあいこだと思わないか？」

「確かにそうかもしれませんけど……で、でもそんなこと気にしなくてもいいです！　私はやりたくてやってるんですから！」

や、だからセリフがやばいって。やっぱりこの子は俺を殺しに来てるんだな。

しかもセリフの最後に力を入れたからなのか、手の圧迫感が高まったぞ。

「大丈夫だ。俺もやりたくてやってるから！」

「え!?　あっ、やっ、ひゃぁぁぁぁぁ！」

俺は両足を絡めることで雪菜を強制的に開脚させ、パンツの上から秘部をなぞった。ピンク色のシンプルなパンツはすでにしっとりと濡れている。

甘い声を出し、待ってくださいと連呼している雪菜を無視して指を動かし続ける。

「ダメ、ダメ、です……っ！　そこはホントにっ、ピリピリしてっ！おかしい、んです。私、おかしくなって……っ！」

乳首を引っ張った時とは反対に腰を引いていく。けれども、ベットの上で俺が後ろにいる状態ではそんなのは意味がない。

「先輩……っ！　わたしもうっ、何も、考えられない、ですっ……！

ひぁっ！　くぅっ！
お腹の奥が、熱くなってっ……」
雪菜は、下半身が動かせない代わりに、上半身をそらしてくる。でもそのせいで、パンツ
が引っ張られて張り付くことでシミが広がっていることに気が付いてない。
目を閉じて体を固くし小刻みに震えているその姿を見て、これ以上すると本当に達してし
まうと判断した俺は、いったん指による刺激を止める。
「はっ、はっ、はっ……！」
完全に俺に体重を預けて短く鋭い呼吸を繰り返す雪菜。俺は雪菜を上に、仰向けで横にな
った。
足にも力が入ってないみたいだし、こっちももういいかな。
俺も雪菜を抱いて脱力する。リラックスしている状態にもかかわらず、雪菜の痴態と今ま
で俺がしていた行為のお蔭で俺の分身はギンギンの状態だ。
ちょうど雪菜のお尻に挟まれている。服のお蔭でほとんど刺激はないのが残念でならない。
「……おかしい、です。怖かったのに、その、今はもどかしくて……お腹の奥が、熱いです」
そんな恥ずかしいこと言ったら正気に戻った時大変だぞ？　いわば寸止めされた状態で辛
いのは分かるけどさ。やったの俺だし。
慎重に、慎重にしないとだめだ。
え？　今まで慎重にやってたのかって？
当たり前だろ。だから、クロの時みたいに問答無用でイカせたりしなかったんだ。
無理にやって恐怖を与えちゃダメ。あくまで互いに気持ち良くならないと。

「先輩、止めましたよね？　あと少しだったところで」
「うん。ダメダメ言ってたから」
「今度は最後までしてください。もう、ダメじゃないですから」
「怖くないか？」
　最後の問いになる。決定的な一線を越えるための最後の確認。
「怖いですよ。でも、先輩にされるなら、いいです」
　雪菜も俺が何をしようとしているのか、自分が何をされるのかわかっているのだろう。そ
れを怖いと言いながらも受け入れてくれた。
　でも、1つ納得できないことがある。
「先輩はやめない？　なんか距離感じるな」
「そうですね……でも、こっちに慣れてしまったのでなかなか直せないと思いますよ？」
「時間かけてくれて構わないよ。徐々に慣れてくれれば」
「はいっ！　翔君！」
　雌の顔を少女の物に戻した雪菜は俺にキスをしてくる。
　俺が大人のキスを教え込んだ時とは逆の体勢。仕返しとばかりに舌を入れて俺を犯そうと
してくる。
　それでも俺にまだ分がある。
　俺の舌に絡みつこうとしていた雪菜の舌を逆に舌を使ってしごきあげた。初めはざらざら
とした感触だったが、溢れ出してくる粘ついた唾液によってどんどんいやらしく、卑猥な
触感になっていく。
　ぴちゃぴちゃと俺たちは一心不乱に貪る。口の粘液でつながっていどこからが自分かわか
らなくなる。自分の感覚全部が口内に集中しているように感じるのにひどく曖昧なものし
か伝わってこない。
　時間さえも忘れて続けられたキスは、静かに終わりを迎えた。

いつの間にか抱き合った状態で横になっている。
抱きかかえて、ベッドに寝かせてパンツを脱がせる。抵抗がないどころか、パンツに手を掛ける
と少しお尻を上げてくれた。
脱がせたパンツは滴り落ちそうなほどに雪菜の淫液を吸っていて、このサイズの布きれとは思え
ない重さを持っている。パンツ越しにしていた時はここまで濡れて無かったはずだから、
キスだけでこんなに濡らしてくれたのか？
その様子を想像してゴクリとつばを飲み込む俺。
考え出したらきりがない。雑念を振り払いパンツを……どこに置きましょうか？　床に
置いたら床がやばい状態になりそうだし。普通にベッドでいいか。
男子にとってはこれ以上ないお宝だと思うけど俺は興味が、なくはないけど、それよりも
興味をそそられるのは、このパンツを作った根源である雪菜の泉。それだけだ。
閉じられていた足を開いてＭ字開脚の状態にする。さながら見たことがない秘境を目指し
て進む探検家の様だ。
すべてをさらけ出した状態になった雪菜。期待と不安に染まった顔。手に納まるサイズの胸
シミ一つなく汗ばんで淫臭を漂わせているお腹に、それにアクセントをくわえているおへ
そ。そして蕩けきった一番大切なところ。
全身で男を誘っている。
「はずかしい、です。私、全部、見られて……っ」
「綺麗だ。それとＨだな」
「後半、要らないですよ。女の子に言うことじゃないです」
「Ｈなことしてるんだからいいだろ。今の雪菜を男が見たら１０人中１０人がそう言うぞ」

「先輩以外にみられるなんて、いやです」
その言葉に俺は気まずくなる。軽口もほどほどにしないと俺の価値を下げることにな
るか。
「ごめん」
「いいですよ、許します……優しくしてくれたら、ですけど」
「善処するよ。と言っても」
「ひゃっ！」
淫唇に触れないようにそっと縁をなぞる。あふれ出した物は俺の指をコーティングしてて
らてらと光る。
「こんなに濡れてたら大丈夫だと思うけど」
「これ、なんですか？　おしっこじゃ……」
「ない。これは女の子が気持ちよくなると出る液なんだ。雪菜は気持ちよくなってたんだよ」
「気持ちよく……」
心当たりがあるのだろう、少し目をそらす雪菜。でもすぐに俺をまっすぐに見て頷いてくる。
「いくぞ、雪菜」
「はい……っ！」
とりあえず少しでも滑りを良くしようと思い、淫裂にまったくなえる様子がない肉棒をこすりつける。
「はぁぁぁっ、ひゃぁぁっ、ふぅぅぅっ……っ」
見ると雪菜は両手でシーツを握りしめている。原因は快楽か恐怖か。
「先輩っ、焦らさないでっ、下さい……っ！　早く、挿れて……私、もう……っ」
「……分かった。じゃ、挿れるぞ……っ」
腰のスライドをやめ、狙いを定めて突きだした。
肉棒の先の方しか触れていないが分かる。ここから先は別の世界だと。

それを理解したうえで、押し込んだ。
「ああふぅっ、くぅぅぅっ」
柔らかい肉とアツアツの粘液に歓迎される。このまますべて入ってしまうのではないか、とも思ったが、すぐにきつくなる。
出来るだけゆっくりを心掛けるがかなり厳しい。上の口はきつく閉じて声を押し殺している雪菜だったが、下の口は無数のヒダがこれでもかと肉棒を締め付け、奥へ奥へといざなってくる。
「雪菜、大丈夫か？」
「は、いっ。だ、大丈夫、です……っ。だから、もっと……っ！」
それを聞いて、どんどん中に入れていく。
突然、膣内が広くなったような気がした。でも、締め付けは変わってるようには思えないから気のせいか？
瞬間、雪菜はひときわ大きな声を上げて弓なりに体をそらせた。
「んぐっ、あああああああああああっ!!!」
貫いた。
今の反応を見ればわかる。証拠として、結合部からは赤いものが一筋、垂れている。
「い、痛いっ、です……っ。先輩っ、ちょっと、ストップしてっ、ください……っ！」
「分かった」
止まっていても中はうごめいて俺のを搾り取ろうとしてくるから、出来るだけ早く動き出したいけどここは我慢。
したいけどここは我慢。
痛みに震える雪菜。それを見かねて、そっとキスする。激しくない、相手を落ち着かせるためのものだ。
ためのものだ。
しばらくして、雪菜は顔を離した。
「もう、大丈夫です。動いても、いいですよ」
強張っている顔を必死に笑顔にしてそう言ってくれる。
それに対する答えなんて一つしか無い。
「ゆっくり、するから。痛かったら言ってくれ」

言葉通り、ゆっくりと肉棒を動かしていく。遊んでしまっていた両手で雪菜の胸の頂点を
挟み、こね回す。
「あ、んぁぁっ、ひゃぁぁぁ」
「痛くないか？」
「なんかっ、だんだ、んっ、ピリピリして、きましたっ」
コツン、と先っぽが何かに当たった。最奥に到達したのだ。
根元まで淫肉に包まれる俺の肉棒。負けじとコンコンと奥をノックする。
「分かるか、雪菜？　俺がお前の一番奥に触ってるぞ？」
「は、いっ！　これ、本当にスゴっ、くてっ、私……っ！」
「私、なんだ？」
「あっあっあ……っ！」
肉棒を引き抜いていく。ヌルヌルの肉ひだ1枚1枚がカリにひっかかり、そのたびに雪菜は体を震わせる。
「なあ」
「ひぐぅっ！」
いっきに突き刺す。
ぶちゅん！　と音がしてベッドを愛液が汚した。
「どうなんだ？」
もっと早く動かしてみる。
抉られたヒダは不規則に痙攣し、雪菜が感じていることを伝えてくれる。
「気持ちいいか？」
連続で3回、さらに速度を速める。
「気持ちいいですっ！　こんなのっ！　知らなっ！　～～～～～～～っ！」
気持ちいいという言葉を聞いた瞬間、俺は我慢をやめた。
ひたすらに獣のように腰を打ちつける。
「ひんっ！　はっ、ひうっ！　ひゃぅぅっ！　あうっ！　はぁぁぁっ!!」

引き抜く時はいかないでくれと縋りついてくる秘肉を無理やり引きはがし、押し込む時は心地いい抵抗をしてくる壁をこじ開ける。
「私の中っ、あひっ！　先輩っ、にっ、削られっ！」
どこを擦っても感じているように見えていたが、どうにも反応がいい所と少し鈍い所がある。ピストンする中で観察し、少しずつ反応がいい場所を理解していく。完全記憶能力はとても便利ですね。
そして、一気に責めだす。
ちんぽの角度を変えて重点的にグリグリとしてやる。
「っ!!　そこっ！　ダっ!!　な、なんでっ！　こんなの、知らなっ！　そ、そこは止めっ!!」
「はいよ」
雪菜に言われたので普通のピストン運動に戻す。ただし、普通なのは外見だけ。反応がいい場所、つまり雪菜の性感帯を、完全記憶能力を頼りに犯しつくす。
「くぅぅっぅ!?　なん……っ！　さっきのと違っ！」
膣は歓喜の涙を流し、必死になって肉棒に絡みつく。カリはそんな肉壁をまとめて削ぎ落とすように抉り取り、押しつぶしていく。
どんどん俺の快感も蓄積されていく。限界が近くなってきた。
「あ、来るっ！　なんか、来ますっ！　お腹が熱くなってっ！　頭が真っ白にっ！」
「それがイクってことだっ!!　俺も射精すぞっ！」
「イ、▪ク？　～～～～～っ！　イ、イキますっ！　私、イっちゃいますっ！　先輩っ！
射精してっ、私の中にっ！」
渾身の力で腰を打ちつけると、限界が訪れた。
先にイッたらしい雪菜の淫穴は収縮を繰り返し、俺から白濁した液を絞り、飲みこんでいく。
「お腹、熱い……　射精されて……私、先輩の物になれた……」
恍惚の表情で、雪菜はそうつぶやいたのだった。

手に入れた矛盾の力

溜めこんでいたものをすべて吐き出すような長い射精を終えて、俺は力を無くしたモノを雪菜から引き抜いた。

「ふぅ……」

「はぁ、ひぅ、はぁぅ……」

雪菜はまだ絶頂の余韻があるようで、体を震わせている。いまだM字に開脚している足、その付け根には白濁したものがこびりついていた。多分中から出て来たのだろう。

……静まりたまえ、俺の分身よ。

出し尽くしたと思ってたんだけどな……まだ足りないと申すか。

や、僕は悪くないんだ。そう、雪菜ちゃんがエロすぎるのが悪い。

こんなことしてる場合じゃないな、一刻も早く後処理をしないと。2人が帰ってくるかもしれない。動くのめんどくさいけど掃除しないと。

気合を入れてベッドから降りる。ズボンを穿く……前に少し洗ったほうがいいか。ベトベトだし。

「うん？」

机で充電していた腕時計型携帯に通知が来ている。えっと、あれは……

「メールか。あ、アスナさん？　なんだろ……」

何買えばいいのかわかんないとか？　でも、アスナさんも一緒だしそんなことはないと思うんだけど。

俺はメールを開く。

【この前の男の子がまたドーパントになりました。急いで来て下さい】

「おいおい、マジか……」

俺の予想がこんなに早く当たっちまったのか？　というか、来て下さいって言われても、俺が行ったところで足手まといにしかならないような気がするんだけど。

場所は携帯のＧＰＳでわかるから調べてみるか。

ふむ、クロとアスナさんがいるのは変に人気がない所じゃないのか。ここで戦っているなら騒ぎを聞きつけた他の武偵が駆けつけてくる可能性が高い。
でも、相手はドーパント。拳銃は効かないし、ヘタな能力も効果が薄いだろう。勝率はかなり低い。
そんなところに俺が行って役に立つには、
「これしかないか」
能力・武器ガチャの画面に移動する。
大きく深呼吸、覚悟を決めて画面をタッチする。
すると、ガチャ画面からメールボックスへと飛ばされた。なんでや。
その後2回試してみるが結果は同じ、毎回メールボックスへと移動してしまう。
何故だろうと首をひねっていると、あることに気が付いた。
「あ、もう一通来てるじゃん」
アスナさんのメールの下に、差出人がないメールがあったのだ。
とりあえず、開いてみる。
【童貞卒業おめでとうございます】
うるせえよ余計なお世話だ。一体誰が送ってきたんだこんなの。俺をバカにしてるとしか思えない。
【童貞卒業を記念して、プレミアムガチャを開放します。ガチャ画面へ移動してください】
プレミアムガチャだと？
ガチャ画面に移動すると、通常のガチャの選択肢が3つに増えていた。その中にプレミアムガチャの文字がある。
【プレミアムガチャでは強力な能力が出やすくなっています。このガチャを回すには1回につき1ポイントのプレミアムポイントが必要となります。女の子の膣内への初射精で1ポイント入手となります】
……つまりあれか。俺は雪菜に　射精（だ）したから1ポイント持っていて、今度クロとかアスナに　射精（だ）したらポイントがもらえるってことか？

まさかのここにきての隠し要素。かなりありがたい。
さっそくガチャを回してみる。
現れたのは、

ガシャットギアデュアル
仮面ライダーパラドクスに変身するためのアイテム。
これを使うことで『パズルゲーマーレベル５０』『ファイターゲーマーレベル５０』に変身することが可能となっている。
ただし、装着者への負担が大きく、疲労しているときは変身することはできないようになっている。

はいはい、チートチート。
ってかマジか!? 運がいいにもほどがあるだろ!?
でもこれで、俺も戦えるようになった。急いで行こう。
「雪菜、この前の男の子が、またドーパントになったらしい。行けそうか？」
「はぁ、はぁ……え？ ドーパントですか!? はい！ すぐに行きま……」
……どうした、雪菜。セリフの途中で固まってんぞ。
「あ、あの、先輩……足に力が入らないです……っ！」
「はぁ？」
「立てそうに、ないです」
何とも言えない空気になる。非常にコメントしづらいぞ。それってつまるところ、
「気持ちよすぎて腰が抜けたってこと？」
「……っ！」
おー雪菜の顔が真っ赤になった。
「せ、先輩が悪いんですからね!! あんなに激しくするから……っ!!
優しくして下さいって言ったじゃないですか!!」

「いや、だって……」
「……？　ひぅっ!!　な、や、先輩っ！　ぬ、抜いて……っ！　あぅっっ！」
俺は自然な動作で雪菜の秘部に指を滑り込ませた。
俺の物の形を覚えさせられたソコは、すぐにでも2回戦に行ける状態だった。ぐずぐずにとろけ、俺の指を待っていたとばかりに締め付けてくる。
「ここがもっともっと、って急かしてくるんだもん。下の口は上の口ほどものを言うって言葉もあるしね」
「そんな言葉っ！　ない、ですぅっ……」
イったばかりで敏感になっているせいか、雪菜は早くも体を弓なりに反らせ痙攣し始める。
「んんんぁっぁぁぁぁっ!!　ま、また来っ!?　あ、え、なんで……？」
雪菜は茫然とした様子で、俺の指を見ている。俺の目には抜けてしまった指を求めて少しだけ開いている淫穴が映っている。
あと少しで達することが出来たのにその寸前で止められ、もどかしそうにあと一押しの快楽を求めて虚空にある何かに恥丘をこすり付けている様子は、すぐにでもぶち込みたくなる衝動を与えてくれる。
「そうだよな。こんなことしてる場合じゃない。行ってくるから、雪菜は動けるようになったら後片付お願い出来る？」
「あ、そ、その……分かりました」
どういうつもりか知らないけど、雪菜、お前すごく情けない顔してるぞ？　もっとしてくれって顔に書いてある。
俺としてはぜひともそうしたいところだけど、本当にこんなことしてる場合じゃない。
や、ホント、マジヤバい。なんで俺はこんなことに時間使ってるんだ。
「行ってくる」
俺は最低限の後処理を済ませて外に出た。
ガシャットギアデュアルを取り出し、ダイヤルをスライムのような

ものが下になるように回す。
《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ》
《Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
すると、待機音声が鳴り始める。これで準備は整った。俺は深呼吸し、起動ボタンを押した。
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｇｌｏｒｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ！》
俺は仮面ライダーパラドクス・パズルゲーマーレベル５０に変身した。
変身した俺は自分の体を見回し一言。
「うん。かっこいい」
俺はその場で少しジャンプしたり腕を回したりして調子を確かめる。
「うん、問題なさそう」
そうと分かれば、
《高速化》
俺は風のようなスピードで現場に向かうのだった。

「アスナ!!」
クロは投影したレイピアをアスナに投げ渡した。魔力が枯渇気味の中、出来れば自分の事に集中したかったクロだったが、あいにくアスナはＳＡＯの中での超人的な身体能力しか持っていない。

自身の魔力を削ってでも、アスナの能力を最大限に生かす必要があった。
アスナはそれを受け取り抜刀。普段の様子からは考えられない速度の剣劇が繰り出される。
見事に足にヒットする。あまり深くないｏｒ決して浅くはない傷が出来上がるが、驚くことにその傷はものの数秒で完治した。
傷から様々な動物のパーツが生えてきて、傷口をふさいだのだ。
「ッ!! アスナ、下がって!!」
「クロちゃん!?」
半端な攻撃は無意味。そう悟ったクロは、弓矢を投影していた。
矢を使い捨ての爆弾にする壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）は正直悪手というしかないが、この状況ではそうも言ってられない。
アスナが脱出したのを確認したクロは、魔力を充填した矢を放った。
威力としては魔力が足りず、周りの建物の事も気にしたため抑え気味だったが、命中したのは顔の部分。生物の急所に当たれば、再生能力も働きづらいのではないかと考えた結果だった。
クロは肩で息ｏｒ肩呼吸をしている。魔力があまり込められていなかった弓はとっくに壊れてしまい、次の投影もできそうにない。なんとかアスナの持っているレイピアに魔力を送り消滅しないようにする。
今は自分よりもアスナの方が戦力になると考えたからだ。
クロたちの力は実は翔を射精させることで上昇する。
翔が女の子に射精させてもらうことで武器・能力ガチャを引けるのと同様なのだ。
あの銀行強盗の時、雪菜の手にいきなり雪霞狼が現れたのはそう言う理屈だ。
クロの場合は、自身に貯蔵できる魔力量が上昇するようになっている。
今の段階では、日常生活では1日ちょっとはもつ魔力も、戦闘になればそうはいかない。

クロとしてはこのシステムは一石二鳥だった。アスナの極めて良識的な意見によってそう言った行為は禁止されていたが、今夜からは1日交替で翔と一緒に寝ることになっている。
少しずつ増やそうと思っていた矢先にこれだ。
翔ならば事情を説明すれば協力しそうなものだが、これも翔と同じでこのことを翔に伝えることは出来なくなっている。
「大丈夫ですか!?」
何人かの武偵が駆け寄ってくる。
手には拳銃や刀剣のほか、杖や近未来的なデザインの武器、はてはに火の玉を掌に漂わせたものもいた。
「気を付けてください。まだ終わってませんから」
アスナは油断せずにレイピアを構える。
段々と、土埃が晴れてくる。いっそう警戒を強めるアスナ達。
「痛いなぁ」
キメラドーパントは深くえぐれた顔からその姿に会わない声を漏らす。まぎれもなくあの男の子の声だ。
ただし、痛みにおびえている様子はない。むしろ楽しんでいるようだ。
「クソ女ガアアア

「っ！　通らない……っ！」
　急速に劣化が進んでいる得物では、もはや傷をつけることすらできなかった。
　なるべくやわらかいであろう部位を狙っても帰ってくるのは鈍い感触だけ。とうとうレイピアが折れてしまい、全身に触手の様に獣の手足が巻き付く。
「ア、スナ……」
　クロもすでに捕まっていた。
「やっと捕まえた。どう殺そうかなぁ……ねぇ、どういうふうに死にたい？　ねえ、ねえったら……答えろよ」
「ひぎぃっ！　あっ、あ……っ！」
　クロの締め付けが強くなり体がきしむ。クロの顔が苦痛にゆがむのを見て、男の子は楽しそうに笑う。
「アハハハハハハ!!　そうだ！　このままシンプルに絞め殺すっていうのはどう!?　ほらほらぁ!!」
　どんどん弱々しくなっていくクロの声。
　見かねたアスナは、
「やめなさい!!」
「はぁ？　なんだよ、今いいとこなんだから邪魔すんなよ。おねーさんを殺すのはこいつの後なんだから」
　アスナの声にも耳を貸さない。
　このままではクロが死ぬのも時間の問題だった。
　空から降ってきた人物がキメラドーパントの胴体に規格外な威力の拳を叩き込まなければ、だが。
　その人物はもちろん。
「翔、君……！」
　翔だった。これほど都合よく、さらにかっこいい登場の仕方があるだろうか。
「ゴメン2人共遅くなった。超ゴメン。終わったら死んでお詫びするから……ッ!!」
　いきなり自殺宣言をしている点を除けば。

「だ、大丈夫だよ!?　そんなに落ち込まなくても……そもそも翔君拳銃しか持ってなかったから、来たってそんなに状況変わらなかったかもしれないし……」
「呼んどいてヒドイな！　事実だけど。そうだ……俺は役立たずなんだぁ……！」
「そんなことないよ!?　翔君のご飯は美味しいし!!」
「知ってる。俺のご飯がおいしいのは知ってる。俺が言ってるのはそう言う事じゃなくて……」
「2人とも、今は、戦闘中だから」
クロの声で、現実に引き戻される2人。
目の前には律儀に待っていてくれたキメラドーパントがいる。
「あ、思い出した。その声、あの時のおにーさんか」
「……2人に切腹で詫びるのはこいつを倒したあとだな」
「おにーさんに俺が倒せるわけないでしょ!!」
拡声器を通したような声を上げ、とびかかってくる。
翔は慌てず、周囲に散らばったエナジーアイテムを集め、パズルした。
《マッスル化》・《マッスル化》
触ることなく動かされたピースの中から2つが選択され、翔に吸い込まれた。
翔は象よりも大きいキメラドーパントの巨体を、拳の一撃で吹き飛ばしたのだ。
「「……え？」」
もちろんアスナとクロも、ありえない光景に目を疑う。空から降ってきたことからも新しい能力を手に入れたとは思っていたが、ここまでのものとは思わなかったからだ。
「じゃ、終わらせようか」
明らかに前とはレベルの違う翔は、静かに告げるのだった。

一つの区切り

気分はブルー。最低だ。自己嫌悪で死ねるレベル。
俺が雪菜とギッコンバッタンやってた時に、クロとアスナは絶体絶命。
……笑えない。
「お兄ちゃん、大丈夫？」
「死にたい……」
本来は俺の方が心配するはずなのに、あろうことか息も絶え絶えなクロに心配されてしまった。
「戻ってくるけど大丈夫!?」
「あー……うん、まあ、多分」
アスナの指指す方向には、道路に止まる車を蹴散らし、アスファルトを陥没させながら猛烈な勢いで突進してくるキメラドーパント。
「よっと」
もう一度周辺にあるエナジーアイテムを集めパズルを起動、マッスル化を使用しようとする。
マッスル化、つまり攻撃エンハンスは力こぶを作っている人が描かれたエナジーアイテムだ。それを探して……
「……おっとぉ……？」
何故だろう、マッスル化のエナジーアイテムがないんだけど。
他の効果をもたらすエナジーアイテムはあるのにマッスル化だけがないことに首をひねっていると、すでに避けられない距離になっていた。
「うわっ!!!」
「お兄ちゃん!?」
「翔君!?」
トラックが衝突したらこんな感じになるんじゃないだろうか。
ビルの壁に体が叩きつけられ、こんなどうでもいいことを考えていた。
いや、痛いよ。仮面ライダーになってても普通に痛い。勘弁してほ

しい。なんでマッスル化がないんですか？　不良品ですか？
もしかして、いくらパズルゲーマーでも、同じ種類のエナジーアイテムの連続使用には限界があったとか？
……そういうこと？
そうですか、そうですか、分かりました。だったら他のアイテムを使うしかない。
《挑発》
挑発のエナジーアイテムによって、俺に意識を向けることには成功する。あのままだと、力尽きた2人が巻き添えになる可能性があったからな。
《巨大化》
巨大化を使い腕だけを大きくする。そして手のひらを使ってドーパントを押しつぶしてしまう。さらに起き上がってこようとしたところで巨大化したままの手で裏拳を叩き込む。
マッスル化を使っていないにもかかわらず。壁を何枚もぶち抜いて飛ばされていった。
「ホント、痛いなぁ……！」
再生するたびに歪になっていくキメラドーパント。今となっては足が何本あるのかわからなくなってしまい、ところどころ膨れている。
「もう傷はないけど？」
「それでも痛いんだよ」
「これ以上痛い目見たくないんだったら、降参したら？」
「はぁ？　それじゃあこっちの気が収まらないんだよ！　グチャグチャにしてやる!!」
その声とともに、全方位から鋭利な爪と自在に伸びる獣の顎が殺到してくる。強靭な顎には肉を引きちぎるための牙が生えそろっている。直撃すればパラドクスといえども変身解除に追い込まれるだろう。
それは俺を襲い――
《液状化》

――すり抜けた。
皆さんは、仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸを知っているだろうか？
この仮面ライダーは、しばしばライダー最強議論に名を挙げるほどの力を持つ。その大きな要因はＲＸの形態の一つ、バイオライダーにある。
様々な反則級の能力を持つバイオライダー。その中で最も特徴的だと言えるのはゲル化だ。劇中では体をゲル状にして、小さい隙間を通ったり、物理攻撃を無効化したり、とにかく無茶苦茶な無双っぷりを見せつけた。
液状化のエナジーアイテムの効果はそのまま体の液体化だ。
つまり。
「簡易版、バイオライダーだ」
体を水に変化させた俺には、物理的な攻撃は効かない。叩こうが潰そうが、液体になって元に戻るだけだ。
残念ながら俺もこの状態だと物に触れることが出来ないけどね。攻撃には移れない。
攻撃につかれてばてたところをメモリブレイクするという算段だ。
「こ、の……ッ!!!!」
キメラドーパントのメインの顔から灼熱の炎が放たれた。
それまですべての攻撃が全く効果がなく油断していた俺は、突然訪れた体を焼かれる感覚にたまらず退避する。
「痛い……なんでだ？」
もしかして水だから熱には弱いってことか？　流石に完璧に無敵って訳じゃないのか。
まあいい。目的は達成したみたいだしな。
キメラドーパントは明らかに疲弊している。半開きになった口からは、荒い息が吐き出されている。こうしてみると、かなりグロいな。
「は、ははっ！　そうか！　火か！　火に弱いんだな!!　だったら今から焼き尽くして――――」
「いや、終わりだよ」
《高速化》《高速化》《高速化》

《キメワザ！　ＰＥＲＦＥＣＴ　Ｃｒｉｔｉｃａｌ　Ｃｏｍｂｏ！》
高速化×３。床を踏み抜いて加速。蹴りと拳の乱打を浴びせる。
一発一発の威力は高くはないが、倒れるまで打ち込むだけだ。
傍から見れば、ドーパントが一人で打ちのめされているかのように見えるだろう。
「オラァァァ!!」
最後に一撃、気合をのせて頭を打ち抜く。
《Ａｌｌ　Ｃｌｅａｒ》
後に残ったのは男の子と砕かれたメモリだけだった。

「本当に申し訳ございませんでした」
俺は家に帰って土下座していた。
あの後、２人と合流して変身を解いた。
２人によると、さらに集まって来ていた武偵の皆様に指示を出して、手分けして避難誘導を行っていたらしい。
俺としては、仮面ライダーの力はまだ秘匿しておきたかった。
武偵が他の武偵の装備について根掘り葉掘り聞こうとするのはマナー違反だ。そして、調べられてもガシャットの出所が分かるはずがない。
でも、もしも逃げられない状況になり説明しなければいけなくなったのなら、厄介なことになる。
とはいえ、起きてしまったことは仕方がない。臨機応変に対応していくことにしよう。

今、早急に対応しなければならないのはこっちだ。
「雪菜とエッチなことをしていました。反省してます」
「す、素直に言うんだ……」
「隠しても意味ないからな……」
素直に謝って少しでも怒りを鎮めていただきたく思います。
「えっと、もう土下座やめてもいいよ、お兄ちゃん」
「こんな昼間から発情するサルの顔はみたくないと思って……このまま地面に埋まりたい」
今ならできるだろ、物理的に。
「やめてね、絶対に」
「ハイ」
俺はおずおずと顔を上げる。
「それに、どっちかっていうと、誘惑したのは雪菜の方じゃない？」
「そうだよね、話を聞くとそんなように聞こえるんだけど」
話しの矛先は部屋の隅に立っていた雪菜へ。気をつけをして顔を伏せていた雪菜はあからさまに目をそらしていた。
「えっと……その……」
「真面目そうな雪菜がお兄ちゃんを誘惑して、本番までヤっちゃうなんて流石に意外かも」
「うーん、それは確かにそうかもね。せいぜいキスくらいだと思ってたんだけど」
ああ、どんどん雪菜が縮こまっていく。
実際、俺も予想外だったしな。
「で、どうだったの？」
「え？」
「だーかーらー、お兄ちゃんのどうだったの？」
待て。何を聞いてるんだ、クロは。
「雪菜のアソコ、お兄ちゃんの形になったんでしょ？　どんな感じだったのかなぁ？」
「え、あ、あの、その……すごかった、です」
クロ、マジでやめてください。雪菜も答えないでください。恥ずか

しさで死んでしまいます。
アスナさんも、ここは止めるべき場面でしょう？　聞き耳を立てている場合ではありませんよ？　あなたは常識人だと信じてますからね？
「ふーん……そうなんだ。じゃあ、つぎは私だね、お兄ちゃん！」
「「はぁ!?」」
「だってお兄ちゃん、1回しか出してないんでしょ？　最近全然してなかったみたいだし、もう1回くらい余裕だよね！」
や、まあ、やろうと思えばやれるけどさ。
まさかの提案に俺は顔を引きつらせ、いい感じにかわそうとする。アスナさんと雪菜も、もちろん反対みたいだ。
「それに！　クロちゃんはまだ小学生なんだから！　そういうことをするのは早いからね！」
アスナさんは指を立ててお説教モードに突入し始めた。サキュバスみたいなクロに効果があるとはみじんも思えないな。なんなら、今日の夜、寝室に忍び込んでくるまであるかも。
「ほら、雪菜ちゃんも何か言ってあげて！」
アスナさんは、動けない俺を土下座から元の姿勢に戻してくれていた雪菜にはなしの矛先を向けた。
何か、ねぇ……経験から来る『何か』ですかな？
「え、っと、私ですか？」
案の定、雪菜は困り顔になってしまった。
仕方ないので助け舟を出すことにした。
正直、あんまりしない方がいいと思う。体、小さいし。あ、変な意味にとるなよ。小学生の体は、まだ本番に耐えれる体にはなってないってことだ。
せめて中学生になってるんだったら考えたんだけど。流石に、ね。
と、わざとらしいほどの正論をはいてみる。
すると、とにかく全力で駄々をこねてきた。
俺の腕をつかんでぶんぶん振り回し、肩を掴んでゆすってくる。
「そんな!!　あんまりだよ!!　私ならどうなってもいいから!!」

「ダメだ。ウェ。俺はクロが心配なんだよ。ウェ」
「心配しないで!! 私、頑張るから……っ!!」
「クロ……オェ。ゴメン」
どんどん気持ちが悪くなってくる。そして肩が痛い。どんだけ強く握ってんだ、クロは。肩が外れるんだけど。
「なんか、会話だけ聞いてるといい話をしてるみたいに聞こえるね」
「そうですね……」
そこ、露骨にため息をつくのはやめてほしい。
しばらく駄々をこねていたクロだったけど、突然俺の耳に口を寄せてきた。
「ふーん、お兄ちゃん、そういうこと言っちゃうんだ。本当は全然そんなこと思ってないくせに……」
こそばゆい感覚に身をすくめると、そこには妖しく微笑んだクロの顔があった。雪菜とアスナさんには見えていないみたいだ。この顔で見つめあっているのを見られたら大慌てで引きはがしてきそうだな。
その時間は数秒で終わりを迎えた。クロはゆっくりを離れると、これまたわざとらしく納得し、いじけている風を装う。
「もー、お兄ちゃんも強情なんだから。とりあえず今は、そういうことにしておいてあげる」
「そうだね。そのほうがいいね。良かった、翔君がロリコンじゃなくて」
「安心しました。先輩、そこまで変態じゃなかったんですね」
「傷つくなぁ……」
この2人は俺のことをどう思っているのだろうか。確かに、クロが原因で出したことは多いけど、というか、この世界での射精のほとんどはクロのせいだけど。あれ？　否定できないんじゃないか？
や、それを言うんだったら、
「浮気公認してるみんなの方がおかしくない？」
さっき3人は俺に、女の子の気持ちにはきちんと責任を取れと言ってきたのだ。それに対する俺の返答がどうであれ、自分たちは受け入

れると。
　つまり、きちんとした合意の上でなら、浮気ＯＫという訳だ。
「それは仕方ないですよ」
「そうだよね」
「そうだね」
　本当に意味が分かりませんが？　クロはともかく、雪菜とアスナさんは誠実な付き合いを望んでると思ったんだけど。
「だって、これからも女の子を召喚するんだったら、お兄ちゃん、自動でハーレム作るってことだよ？」
「召喚しないって選択肢は……？」
「先輩は召喚したくないんですか？」
「出来るならしたい」
　クズだな、俺。関係を持った女の子に対して他の女の子を呼びたいとか。でも仕方がない。色んなキャラに会いたいと思うのは仕方のないことなんだ。
「じゃあいいよ。翔君のしたいようにして？」
「いや、でも……それ最低なことなんじゃ？」
「「うん」」
「ごめんなさい。知ってます」
　全員真顔で頷いてきた。
「でもしょうがないと思いますよ？　早いか遅いかの違いだと思います」
「絶対お兄ちゃんハーレム作るもんね」
「だったら、早めに広い心を持っておかないとだよね」
「さっきから3人がヒドイんだけど？」
　ハーレムなんて作れるわけないだろうが。舐めてんのか？　違うか？　違うな。
「という訳で、召喚しよっ!!　お兄ちゃん!!」
「え」
　クロが俺をガチャマシーンの前まで引っ張る。
　思いっきりしかめっ面をすると、3人は頷いてくる。

「分かりましたよ。回します」

『時崎　狂三』をゲットしました。
5階4号室に入室しました。

うわぁ……これ、大丈夫でしょうか？　いやな予感しかしないんだけど。
色々なことが回りだした俺たちの奇妙な生活。ここからが本当のスタートだ。
俺は体に走る痛みに耐えながら、そう思うのだった。

時間で遊ぼう　（アスナ）

「時崎　狂三と言いますわ。皆さん、どうか仲良くしてくださいまし」
「うん！　よろしくね、狂三ちゃん！」
「よろしくお願いします」
「よろしく～」
４人は笑顔であいさつを交わしている。
俺もするべきなんだろうけどなぁ……怖いですね、時崎さんは。
時崎　狂三はデート・ア・ライブのキャラクターで、厳密には人間ではなく、精霊と呼ばれる存在だ。
この世界ではどうか知らないけど、人間を軽く超える力を持っている。
しかも、原作主人公に落ちていない。作者曰く、一番最初に考えた精霊で物語を動かす重要なキャラクターらしくそうやすやすとは動かせないのかもしれないが、主人公に好意らしい好意を抱いている描写が無いに等しい。
や、無いことはないんだけど、それはどっちかっていうと本当にからかって楽しんでるだけって感じなんだよな。
一番の問題は、原作では目的のためとはいえ、既に途轍もない数の人を殺しているという事だ。
原作主人公にも目的達成のための道具って認識しかない可能性もあるし。
パラドクスでも対抗できるかは微妙。というか、たぶん無理。ヘタに刺激は出来ないな。
「……よろしく、時崎さん」
「あら、あら、いけませんわ。時崎さんだなんてそんな他人行儀な呼び方では。どうぞ、狂三と呼んでくださいまし」
「……はい。狂三さん」
名前を呼ばれてにっこり笑う狂三さん。こうしてみると全然害意があるようには見えないけどなぁ。
「それで、狂三はお兄ちゃんのことどう思ってるの？」

「お兄ちゃん……？　ああ、翔さんのことですの？　ええ、とても興味がありますわ。今すぐ食べてしまいたいくらいには」
それは、食べる（性的）と、食べる（物理）どっちなんですかねえ。恐怖しかないんですが。
女性陣は雪菜とアスナさんは顔を赤くして、クロは目を輝かせてる。なんか同志を見つけたって顔だな。
ってか、気づけよ、クロ。お前ならわかるだろ？　狂三さんのなんかヤバそうな雰囲気が。
「じゃあ、今日は狂三ちゃんの歓迎パーティーだね!!」
「いや、そんな材料は……あ、もしかして」
アスナさんとクロで買い物に行ったのは、このためだったってことか？今考えれば、あの買い物の量は少し多すぎるような気もしてきたぞ。
「ふふ、そう言う事。じゃあ、お願いね翔君」
「分かった」
そして流れるように俺が料理を作ることに。や、好きだからいいんですけどね。失礼かもしれないけど、狂三さんと離れられて安心だし。
あの３人が襲われた時は……まあ、どうにかするか。一応、ガシャットを持っておこう。
俺はキッチンで食材を確認しながらそう思うのだった。

「何事もなかったな」
あの後、食事は大いに盛り上がった。
４人娘はワイワイしている中、俺はガシャットが手放せなかったけど。
あの場面だけ見ると、狂三さんは普通の女の子に見えた。まあ、まだ油断はしないけどな。安心しきったところを食われたらシャレにならない。
４人は今裸の付き合いをしてるはずだ。
家の風呂、どんな構造になってるのか知らないけど、大きさが自在なんだよな。入る手前で大きさを設定すればその大きさになってるし。
オーバーテクノロジーですね。この建物自体普通じゃないから今更か。
一回俺も超大きな設定にして入ったことあるけど空しくなってそれ以降そんなことしてない。
今頃４人で洗いっこしてるのか……覗いちゃう？
いや、あの風呂、入り口は１つしかない。開ければ絶対にばれる。
そこまでして覗くものなあ。あの中の３人なら、頼んだら一緒に入ってくれるまでありそうだし。
改めて考えると、俺はなんて贅沢な立場になったんだ。
事実上３人の子に告白されて、浮気公認ハーレム上等。
なんだこのプレイボーイ。あ、俺ですね。
やばい。変なテンションになってる。
ま、今は俺の事はどうでもいいか。明日からの新生活、というか学校、頑張っていこう。
決意も新たに部屋の電気を消そうとする。
そこに、コンコン、とドアをノックする音。
「はい？」
「わたくしですわ」
やっべ、そう来たか。

まさかのお部屋訪問。逃げ道はない。
手が早すぎだよ、狂三さん。召喚されたその日に仕掛けてくるなんて。
俺はガシャットを背中に隠してドアを開けた。
「こんばんは、翔さん」
「こんばんは。どうした？」
無難な会話から始める。俺の緊張が分かったのか狂三さんはくすくすと笑う。
「そこまで緊張なさらなくてもよいではありませんか。わたくしただ、楽しくお話ししに来ただけですの。だから、その手に持ってるものをしまっては下さいませんこと？」
ガシャットの事、分かってたのか。
指摘されてしまって仕方がない。俺は机に置く。
「それで？」
「もう、翔さんはせっかちですのね。本当はもっと楽しくお話ししたかったのですが……ええ、分かりました。それでは本題に入らせていただきます。翔さんは、わたくしの天使はご存知ですか？」
「まあ、な」
デート・ア・ライブの精霊は例外なく、霊力で編まれた鎧である『霊装』と最強の武器である『天使』を持っている。
天使はどれも強力。さらにその中でも、狂三さんの天使は特に強い力を持っている。
狂三さんの天使は刻々帝（ザフキエル）。時間を司る天使だ。
色々な作品で時間操作が強いのは当たり前（その分、敵の能力でやられ役になることも多いが）となっていることの例にもれず、彼女もデート・ア・ライブの中ではかなりの強キャラだ。
しかしその代償に、
「刻々帝（ザフキエル）を使うためには、わたくしの寿命が必要ですわ」
刻々帝（ザフキエル）はそのエネルギーとして、使用者である狂三さんの寿命を消費する。
「俺の時間をもらおう、って訳か？」

何の策もなしに狂三さんが寿命を消費し続ければ、あっという間に死んでしまう。
その対策として、他人の寿命をもらうという方法が挙げられる。寿命を奪われた人はそのぶん……
「まさか！　翔さんからめいいっぱいに吸い挙げても所詮1人分。すぐに無くなってしまいますわ」
なんか失礼。
「だったら、継続的に時間をいただける方法を取った方が、いいと思いませんこと？」
「継続的に？」
「ええ、翔さんの精で」
「……はあ？」
いっきに話がアホっぽくなったぞ。
「どういう事だ？」
「わたくしが人からしか時間をいただくことが出来ないのはご存知ですか？」
「初耳かも」
考えてみれば、人以外からも貰えるなら、アマゾンあたりの木からもらってるか。木は人間よりもはるかに寿命あるし。
「そうですの。ではそこからですわね。わたくしが人からしか時間をいただくことが出来ないんですの。そのせいで、見知らぬ誰かから時間をいただく必要があって、最悪の精霊なんて呼ばれてしまっていたんですの」
「あ、そうだったのか？」
「ひどいですわ。まさか翔さん、私が好き好んで人様に手をかけていたとお思いですの？　こう見えても私、年ごろの乙女ですのよ？」
「精霊って、なった瞬間から歳とらないんじゃないの？」
「翔さん？」
「ごめんなさい」
はいはい、俺が悪かったですよ。
でもこの話が本当なら、人に被害をくわえない時間の集め方が見つ

かれば今後の狂三さんに大きくかかわってくる。
「そこで必要なのは翔さんの精という訳ですわ」
「うん、意味わかんない」
やっぱり俺をバカにしてるだけじゃないの!?
「精というのは、この世で最も人間に近いものと言っても過言ではありませんわ」
精子や卵子は人間の素。そう言う意味ではサルやゴリラよりも人間に近いというのには納得できる。
ここで俺は狂三さんの言いたいことが分かってきた。
「まさか、精子の寿命を貰おうってことか……？」
「そのまさかですわ」
正気かこの子。なんか召喚される子、高い割合で頭の螺子吹っ飛んでるんじゃないかと思います。
「なんで俺のを？」
「まあ、翔さんはわたくしに、どこの馬の骨とも知れない男の相手をさせるつもりですの？」
「俺だって、どこの馬の骨とも知れない男だと思うけど」
あなた、俺と会って数時間ですよね？
「わたくしでは、ダメ、ですの？」
「論点がすり替わってますよ？」
全く乗り気にならない俺に業を煮やしたのか、狂三さんはため息をつく。
悪いけど、そのラノベテンプレは通じないさ。混乱のほうが勝ってるからな。普通に迫られるよりも難しい状況なんだけど。
「……しょうがないですわ。少し外でいただいてまいりますわ」
「分かった、さあおいで。さあ！」
背中を向けた狂三さんを必死で引き止める。誰かの寿命をもらいに行くと言われるとこっちの選択肢はなくなる。
「ふふふ。まったく、翔さんも素直ではないんですのね」
あなたが脅したせいです。
狂三さんはくすくす笑いながらズボンを下ろしてくる。パンツに

手をかけ少し下げた時、またしてもドアがノックされた。
「翔君？　私だけど……入っていい？」
「あ、や、ちょっと今はムグゥ」
ノックの主はアスナさんだった。慌ててダメだと言おうとした瞬間、俺の口がふさがれる。塞いだのは狂三さんではない。黒い影から伸びた青白い手だ。
さらに伸びてきた手によって俺はベッドに座る形で拘束される。
何とか拘束から逃れようとするも、腕はびくともしない。そうしているうちに狂三さんがドアを開けてしまう。
「あ、翔く……!!　狂三ちゃん!?　ど、どうして……あ、ご、ごめんね！　お邪魔しちゃって……っ！」
「いえいえ、そんなことありませんわ。どうせだったら、アスナさんもいかがでしょうか？」
な、何を言っちゃってるんだ!?
「え、ええ!?　でも、そんな……」
「恥ずかしがることはないではありませんの。アスナさんもそのつもりでここにいらっしゃったんでしょう？」
「……っ!!　うぅ……」
あ、そう言えば、アスナさん……Yシャツ？　な、なんかほかに身につけてるようには見えないんだけど、まさかあれって世にいう裸Yシャツじゃないの!?
「さあ、早く中に」
「あ、ま、待って！　ホントに私！」
「強情ですのね。まるで翔さんみたいですわ」
や、普通だから。その反応が普通だから。
「これは、素直になっていただくしかありませんわね。刻々帝（ザフキエル）」
狂三さんの背後に巨大な時計が出現する。これが刻々帝（ザフキエル）だ。長針と短針はそれぞれ銃になっている。狂三さんはそのうち短針のほうの銃を手に取る。
「え、な、何、するの？」
自分に向けられた銃口に後ずさり――――しようとしてできない

ことに気がつくアスナさん。
アスナさんは俺と同じように青白い腕によって拘束されていたのだ。
「心配いりませんわ。ただ、素直になっていただくだけですから……七の弾(ザイン)」
時計の『七』から、黒いものが銃に吸い込まれていく。
そして、引き金を引いた。
銃声が鳴り響く。
アスナさんはきつく目をつぶった状態で――――――止まっていた。
これが、時計の数字によってさまざまな能力を発揮する刻々帝(ザフキエル)の能力の一つ。七の弾(ザイン)の力だ。
その能力は、撃ちぬいた対象の時間を止めること。外傷はない。
「えっと、狂三さん、ホントになにする気？」
「この弾で撃たれると、見ての通り撃たれたものの時間が止まりますわ……でェ、もォ」
狂三さんはアスナさんのYシャツに手をかけ、ボタンを一つずつ外していく。
「このように、外部から影響を及ぼすことは出来ますの」
「当然の様に服を脱がせながら言われても……」
話してる間も、狂三さんの手は止まらない。やがて、完全に脱がしてしまう。
「ここで重要なのは、感覚は蓄積されるという事ですわ」
今度はピンクのフリルがあしらわれたブラに手をかける。
「止まった時間の中で与えられた感覚は全て、時間が動き出した時にまとめて味わうことになるのですわ。つまり、こうすると……」
アスナの双丘に指を埋めていく狂三さん。アスナさんの胸はどんどん形を変えていき、ひと時も同じ形をしていない。
やがて、双丘の頂に存在している物に達した。
「おや？　アスナさん、もう、少し硬くなっているではありませんの。やっぱり、体は正直、という事ですわね」

アスナのが硬くなってきていたという事は、最初から少し興奮した状態だったという訳だ。
まあ、はい、そう言う事ですね。
「ん、そろそろですわ」
変化はすぐに訪れた。
「……、……、……っ!!???　ひゃっぁぁぁぁっ!!!!」
アスナさんは自分の両胸を抱き、その場にへたり込んでしまった。
「このように、弱い刺激でも蓄積されればこの通り、という訳ですわ。どうですか、アスナさん？」
「くる、み、ちゃん……っ。私、私……!!」
「まだ足りないんですの？　仕方ありませんわね」
「ッ!?　そ、そんなこと――――――」
再び時間を止められるアスナさん。
「さ、どうぞ？」
「どうぞ、じゃないんですけど。時間、無駄遣いすんなよ」
「問題ありませんわ。あとでたっぷり補充させてもらいますから」
「おい」
「そんなことより、アスナさんを満足させることが先決だとは思いません？」
「思いま……す」
なんだかんだ言いながらも、この状況、楽しんでますよ。
ぶつぶつ言いながらも、俺はアスナさんを抱きかかえベッドに寝かせる。
その横に座った俺は、すっかり自己主張が激しくなったピンクの突起を指で撫でまわす。指の腹でつまんだり、押しつぶしたり、これでもかというほど遊び倒す。
「……、……、……っ!!!!　ダ……っ!!　やっ!!　イっ……!!」
乳首をねじるように力をくわえる。快楽が一気に襲ってきたことで体がついて行っていない状態だったアスナは、全身から玉のような汗をかく。
「ひあぁっ、あぁあぁぁあぁあぁっ!?」

限界が訪れ、腰を浮かせて嬌声を上げる。腰がヒクつき、荒い呼吸を繰り返す。顔を隠す腕の奥ではどんな表情をしているのだろう。
「こんな……っ、こんなの、おかしいよぉ……。私、こんなに早くイくなんて。こんなに、Hじゃ、ないのに……っ」
「いや、アスナはHだよ？」
「え？」
「アスナがどう思ってるかは関係ないよ。だって……」
俺はアスナさんに覆いかぶさる。首元に顔を寄せ、わざと聞こえるように鼻を鳴らす。
シャンプーと汗の匂いが混じり合い、極上の雌の匂いが出来上がっている。男を誘うための匂いだ。
「こんなにHな匂いを出して」
人差し指で秘部をなぞる。秘部はすでにトロトロだったらしい。その証拠に、なぞっただけで、べったりと愛液が付着した。
「こんなにHな液も出てるんだよ」
「言わ、ないで……っ！　私、私っ……！」
少しずつ顔の距離が狭まっていき――
「あー……一応ここにはわたくしもいますよ？」
――狂三さんの声で離れる。
なんとなくムードが壊れてしまった。俺にはまだ、複数プレイは早いです。そして、他の女の子の前でHする度胸もありません。
「まったく、御二方はお熱いのですね。妬いてしまいましたわ」
嘘つけ。
「翔さん、今わたくしの言葉が嘘だと思いませんでしたか？」
「思った」
「は、はっきり言うんですのね……はぁ、分かりましたわ。今日はここの住人の先輩のアスナさんにお譲りするとします」
「え？」
「今晩はお二人で、お楽しみくださいまし」
妖しく微笑んだ狂三は部屋を出て行ってしまった。俺たちは互いに微妙な顔をしていた。

夜は少しずつ深まっていく。

2人目と初めて（アスナ）

1.

アスナさんとはそういった接触はあまりなかった。彼女自身の性格からか、男女の付き合いに関しての順序を大切にしていた。それが当たり前なんだけど。

でも普通のラノベなんかよりもよほど常識外れのこの世界。そんな常識が通じないときもある。

作品ごとのヒロインの性格付け。はっきり言ってしまえば、性的行為に対する認識の差。ヒロインによってはすぐにでも主人公とセックスしたいと思う娘もいれば、そういったことに免疫がない娘、拒否反応がでる娘、いろいろな種類、程度がある。

年齢制限的な問題で、不自然な邪魔が入ったり、主人公が純情すぎたりして本番に至れないのが常だが、この世界にそんなものはない。

むしろ、メリットのせいで奨励すらされている状況だ。

今後も召喚していくなら、ほぼ確実に主人公に好意を抱いている娘が召喚されるだろう。そしてもし、その娘が奥手で俺が他の娘とすでに関係を持っていると知ったら、多分諦めてしまうのだろう。

それはダメだ。

俺が召喚してこの世界に生まれた限り、それはダメだ。

俺も覚悟を決める必要がある。この世界で生きていくために必要な覚悟を。

そう、『みんなを幸せにする』という覚悟を。

どんな性格の娘が来ても、幸せになれるように努力して、誰も見捨てたりしない。

それこそがこの世界に来た俺の役割だ。

つまり、何が言いたいかというと、経験がある俺がリードするべきだということだ。

や、俺も経験豊富ってわけではないんですけどね。アスナさんよりは少なくても経験があるってことで。

2人でベットに座っているため、どちらかが少し動くたびにスプリ

ングの音が静かな部屋に響く。ガチガチに緊張しているアスナさんは、その音に過剰に反応し、ちらちらと俺に視線を送ってくる。
こんなの見たら、自分から動くしかないって思うさ。誰だってそうするよ。俺ももちろんそうする。というか沈黙と興奮でもう我慢できません。
でもがっつくのはＮＧだ。あくまでゆっくりと。狂三に脱がされた服も元通りになってるんだし、あくまで一から開始しないとだ。
「アスナさん」
一言だけ言って少しずつ顔を近づけていく。それで何をするのか悟ったのか、アスナさんも目を閉じて顔を近づけてくる。
唇をそっと合わせた。唇だけで触れ合っている。
キスとしては一番初めの、触れ合うだけの軽いものだ。数秒経って離した後にもアスナさんの唇のみずみずしさが残っているような気がする。
今度はアスナさんのほうからしてきた。
同じく触れ合うだけのキス。それでも初めてするのはとても緊張する。思えば俺のファーストキスってクロのディープキスだったなぁ……っと、やめよう、今はアスナさんといるんだ。
よくある、『今、他の女のこと考えたでしょ』がリアルに発生するかと思ったが、そんなことはなかった。片目を開いた俺の目には穏やかな顔でキスに集中するアスナさんが見えた。
きつく閉じられていた瞼はゆったりと余裕を見せている。
だんだん距離も縮まってきた。
ゆっくり、ゆっくり、触れ合っていく。
やがてそれはゼロになり、俺たちは何も言わずに互いの背中に手を回していた。
一緒にベットに倒れこんだ。
「えへへ、しちゃったね」
「かわいい」
「え!?」
「かわいい」

「く、繰り返さなくていいからね！」
そんなのアスナさんがかわいいのが悪い。これはキリト君がベタ惚れになるのも無理ありませんわ。
俺の言葉に顔を赤くするアスナさんに鼻の下を伸ばしていると、
「……翔君、いいよ？　翔君の好きにして、ね？」
「……じゃ、そうさせてもらおうかな」
俺はアスナさんの服に手をかけた。まずは上。
肌を覆い隠していた布切れがなくなると、真っ白なお腹、柔らかそうな二つの果実が俺の目の前に現れた。呼吸に合わせて動く再来路の頂点に目が釘付けになっていると、アスナさんが手で覆い隠してしまった。
「ね、ねぇ、翔君。好きにしていいって言ったけど、やっぱり、電気消さない？　恥ずかしい……っ」
「え、ああ、うん。分かった」
俺は完全な暗闇にならない程度に部屋の照明を落とす。
それでも少し見づらくなっただけで、アスナさんが期待したほどの効果はなかったみたいだ。胸と下腹部を手で隠したままもじもじしている。
アスナさんは、裸ワイシャツ状態だったため、上には何もつけておらず、下もかなりきわどいデザインの下着だ。
ほとんど全裸に近い状態で男の前にいるためか、白い肌に差した赤みが更に増しているように見える。手で隠していると思い込んでいる胸も、確かに重要なところは隠れているのだが、手で押しつぶしている形になってしまっているため、余計に谷間が強調されている。
思わず唇を合わせた。それだけにとどまらず、舌も挿入していた。
「んんっ、んぐっ、あっ、あぅぅっ、んちゅるっ、ちゅぅっぅ……っ」
突然のキス、しかも舌まで入れられたからか、アスナさんは目を白黒させ身をよじっていたが、次第に慣れてきたのか俺に蹂躙されるがままになってきた。
舌の表面を舌でなぞる。すると、粘度の高い唾液が絡みついてくる。いやらしい音は次第に大きくなり、口から洩れた唾液がシーツに

シミを作った。
「んぅ?! んぁ！ ちゅぅぅ……！」
舌を吸い取ると、またしても面白い程に敏感に反応する。味を感じるための器官が全く別物になってしまったかのようだ。
「も、もう。いきなり激しすぎるよ……っ！」
「ごめん、好きにしていいって言われたから。ペース落とす？」
アスナさんは視線をさまよわせ、胸を隠していた腕の力を徐々に抜いた。押しつぶされていた胸は重力に逆らい上を向いている。
「じゃあ……どうぞ？」
その言葉に俺は思わず喉を鳴らした。
「あふっ、あぁぁぁ……っ、んっ、くふぅっ、ふあぁっ……」
アスナさんって、やっぱり着やせするタイプだったらしい。
俺は後ろに回って、これ以上ないくらいに魅力的な双丘に手のひらを這わせる。両掌から少しこぼれるくらいの大きさ。その柔肉を揉み解していく。
アスナさんはゆったりと俺に体を預けリラックスしている状態だ。いや、リラックスというには少し語弊があるかもしれない。時々体をこわばらせ、顔は赤くなり、吐息も荒いから。
俺のものもとっくに限界まで張り詰めていて苦しい。処理を頼みたいという欲求はあるが、アスナさんは初めてだし我慢だ。それに、いつまで揉んでても飽きそうにないんだよね。おそろしい。
「ね、ねぇ、翔君。いつまで、その、胸、揉んでるの？」
「……できることならいつまでもかなぁ」
「……変態」
ヤル気満々で夜這いに来るほうが変態じゃあないんですかねぇ……！
俺は胸の突起に目をやる。それなりの時間胸をもんでいたこともあってか、既にこれ以上無いのではと思うくらいに硬く立っていた。色は鮮やかなピンク色をしている。
優しく、腫れ物にさわるように揉んでいたところから、２つの突起を強く摘み上げる。グミのような感触のそれは、指に押しつぶされ形

を変えた。もちろん音なんて出ないが、つまみ上げた感触が俺に、にちっ、っという効果音を届ける。
「ひあああぁぁあああっ!?」
アスナさんの反応はすさまじかった。女性の体というのはこんな小さい突起だけでこうも乱れるのか。親指と人差し指で転がすだけで背中が大きく反り返り、他の部屋に聞こえてしまうのではないかと思うくらいの嬌声を上げる。
いやいやと頭を振るアスナさんを無視し、擦り上げ、しごき上げる。
「いぎっ、あがっ、やっ、伸びちゃう、私のそこ、伸びちゃう……っ、いきなっ、いきなり、激し、すぎる……っ、ちょ、ちょっと待っ……ひぁぁぁぁぁ！」
全身を激しく痙攣させ、まだ弄っていない秘部から透明な液体があふれだし、アスナさんは激しく絶頂した。
余韻に浸っているからか、息を整えるためなのか、しばらくアスナさんは無言になっていた。
「翔君……強引なんだね。無理やり、されるなんて思ってなかったよ」
「夜這いに来た人に変態扱いされたからなぁ」
少し意地悪なことを言っていみる。
「そ、それは……っ。だって、ずっと揉んでいたいなんて……そんなの……っ！」
「ま、確かにそうだ」
そういってどちらともなく笑い始めた。
ひとしきり笑った後、俺は温度と湿度が、周りとは全く違うところに目を向けた。アスナさんを横目で見ると、これからされることを理解しているのか顔をさらに赤くしている。しかし、目はそらさない。
指一本触れていないはずなのに、すでに溶けかけている秘部だ。
指の腹に粘液をなじませるようにスジを上下する。時折、こりっ、とするものに触れ、そのときは一際大きく震えるのが分かる。
その場所の熱が移ってきたのか、俺の指のスピードがだんだん速度を上げていく。
「あ、あっ、ひんっ、あ～～っ、あっ、あっ！　ひぅっ！　んにぃぃ……

あぇっ、かはっ、ふあぁぁぁっ！」
シーツを握りしめ声を押し殺すアスナさん。もうさんざん痴態を見られたはずなんだけど、本能的に声を我慢しようとし、しかし我慢できていない姿は、嗜虐心をそそられる。
「大丈夫!!イって良いよ。沢山、ね」
「……っ!?!?」
一気に指の第二関節まで挿入する。あっさりと飲み込んでくれたことに驚きつつざらついた天井を擦り上げる。
「やっ、やっ、今だめぇぇっっ……っそんな、に、早くしないで……っ！」
真っ赤な顔に怯えの色を浮かべて懇願するアスナさんはとてもきれいで、愛おしかった。
「イクんだ、イクんだ。声、聞かせてくれ……っ！」
アスナさんの身体がさらに大きく痙攣した。
「あっ、ほんとに、もう……っ！　……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
果ててぐったりしたアスナさん。でも、これからのことを考えると、1回だけじゃ足りないよな。俺は無言で手を伸ばした。

2.

「も、もぉいいぃ……っ、もういいからぁぁっ……っ」
あれなら何回イかせたんだろうか。腰には全く力が入っていない様子のアスナは消え入るような声でそう訴えかけてきた。
全く力が入っていない手で何とか俺の手を止めようとしてくる。
俺はそろそろいいかと思い、指を動かすのをやめる。
秘部に挿入していた指を引き抜く指と糸が引かれ、とめどなく愛液

が流れ出してくる。下の口はなくなってしまったものを惜しむかのようにフルフルと震え、収縮していた。
「大丈夫？」
「だいじょぶ、じゃない……っ、うごけないよぉ……」
「そうじゃなくて、いや、それもあるけど、　いれても、大丈夫そう？」
「……え？　……あ」
　コク、と頷いた。
　俺は頷き返し場所を移動した。
「アスナ、行くぞ」
　ゆっくりと亀頭を秘裂に挿入する。
「あぐぅぅぅ……っ」
　ふやける位にとろとろにしておいたつもりだったが、それでも痛みをすべて消すことはできないみたいだ。亀頭が入り口を押し広げ中に入ろうとするが、肉襞はそれを拒むよう強張り、きゅうきゅうと締め付けてくる。
「うっ、あぁぁっ……」
　しかし、痛いくらいに締め付けてきてもそこは男を迎えるための場所。火照りきり、愛液でぬるぬるになっているため、絶妙な加減で、俺の雄を迎えてくれていた。
　油断しているとすぐに出してしまいそうになる。
　歯を食いしばって、ゆっくり、ゆっくりと腰を進める。無数のヒダが竿と亀頭に絡みついてチンポの表面をぞりぞりと擦り上げてくる。
　と、先端にプツという感触がした。
「あっ、あっ、翔君、い、痛い……っ」
「そうか……じゃあ、一旦止めるぞ」
「うん……ごめん」
「気にすんな」
　そう言って、一度挿入を止める。多分、破ったのだろう。
　この状態でも十二分に俺は気持ちいい。いつまで耐えていられるのか心配だけど、痛い思いはさせられないからな。
　気がまぎれればと思い、俺は胸に手を伸ばした。突起を挟み込み、

もてあそぶ。
「あっ、ひっぁ、ひんっ、あふぅっ、あんっ、あぅ、ああっ、ひぁんっ、あっ、あぁぁ……っ」
散々こねくり回したけれど、やっぱり飽きが来ない。
しばらくしていると、だいぶリラックスした様子になってきた。
「翔君……大丈夫かも」
アスナさんも少し余裕が出てきたようでそんなことを言ってくる。
「わかった、進めるよ。痛かったらいつでも言って」
「うん……ありがと」
これはただの感覚だけど、ただの締め付けから、絞るような動きになりつつあるような気がする。これなら無理しなければ平気だな。
慎重に、慎重に腰を進め、とうとう、
「あっ、あっ、あっ、ぅあぁぁぁぁぁぁ……っ！」
一番奥まで入った。奥の壁を擦ると同時にアスナさんは長い艶声を上げた。や、この声には苦しさと苦痛も交じってるな。
はぁはぁと息切れするアスナさんの頬に手を添える。
「アスナさん、一番奥まで入ったよ」
「うん、うんっ！　翔君っ！　翔君っ！」
俺とアスナさんは抱き合って口づけした。何度も何度も。つながったまま。その間も、膣は気持ち良さそうにきゅうきゅうと締め付けてきて先走り汁が滲む。
「翔君……良いよ」
「……わかった」
アスナさんの言葉に答えて腰を掴む。
奥まで入ってるから、まずは引き抜きにかかる。もちろんゆっくりと。
「苦しい？」
「すこしっ、でも、ちょっと、いいかも……っ！」
「だんだん良くなってくるはずだから」
あれを安心させようとしてくれているのか、笑いかけてくれる。リードすると張り切っていた手前少し情けなくなってしまう。

そんな気持ちを振り払い、俺は反応を確信しながらゆっくり腰を出し入れするのだった。

3.

「んあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　しょ、翔君、そんな激しくされたら……あっ、ひぎぃっ、うぁっ、もうおかひくなっちゃうから……あっ、あっ、あっ、ひあぁぁっぅ……っ！」

アスナさんの膣が完全にほぐれ、本気を出し始めた。いつもからは想像できないくらい雌の快感におぼれているアスナさんは口ではやめてといっても、腰が動いてしまっている。

正に体は正直ということだ。

アスナの全身が痙攣して、膣から大量の愛液が噴き出す。本気のピストンを開始して3度目だ。そして痙攣している最中も腰ふりをやめない。むしろもっと早くなっている。

初めてだからとゆっくりしていた俺はもう我慢の限界だった。

「やっ、まっ、また、イっ、うぐぅぅぅ、うっ、ダメだってえぇぇぇぇ……んあぁぁぁぁぁぁぁっ！」

イっている最中にも快感は蓄積されているせいか絶頂までの周期がどんどん短くなっている。

むさぼるように快楽を享受している俺もそろそろ限界だ。

「アスナさん、俺、そろそろ……っ！」

「出す……の……？　きて、翔くん……きて、いっぱい出して、私のこと、翔君のものにして……」

それが引き金になり、身体の内側からマグマの如き奔流が押し寄せてきた。

「うっ、あっ！　イ、イク、出る、出る、出る……っ！」

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
最後の絶頂からは痙攣しっぱなしだった膣にゆだねるようにして、俺のペニスが震えを繰り返し、大量の精液が膣と子宮に注がれた。
体の中にあるものすべてを出し切ったような、心地のいい疲労感を覚え、アスナさんの上に覆いかぶさったのだった。

武偵殺し　編
通学路にて

寝坊した。
全部昨晩の行為が悪い。
昨日あの後、アスナさんがダウンしてしまったが、体中色々な液体で汚れていたため、アスナさんの回復を待ってシャワーに連れて行ったり、同じく汚れてしまったシーツを取り替えたりと、最終的に寝たのがかなり遅くなってしまった。
さらに言えば、今朝は散々だった。
疲れ果ててそのまま布団に入った俺達２人。朝ご飯を作るはずの俺とアスナさんが一緒にダウンしたからいつまで経っても朝ご飯が出てこない。
不審に思ったクロは俺の部屋の様子を見に来る。するとそこには１つのベッドにぎゅうぎゅうになって眠っている俺達。
あろうことかクロは、俺たちを起こすのではなく一緒に布団に入ってきた。
中々クロが戻ってこないものだから、今度は雪菜が様子を見に来た。
そこで、抱き合って眠る俺たちを発見する雪菜。
激しく動揺した雪菜は雪霞狼で俺をぶん殴って起こしてきた。
以上、狂三さんの刻々帝ザフキエル、一〇の弾ユッドの能力である『撃ち抜いた対象の過去の記憶を伝える』で俺が知ったこの朝の一連の出来事だ。
や、マジ狂三さんチート。なんだよその能力。武偵の中でも読心能力者サイコメトラーが優遇されてる理由がよくわかった。
ぶっちゃけ、時間を無意味に消費してほしくなかったんだけど、シャレでは済まない威力の殴打を受けた理由を知りたいと思ってしまったんだ。仕方ないね。
そもそも、その時間は俺が出すことになるんだから別にいいんじゃ

ね？
「翔君！　終わった!?」
「ん？　ああ、終わった」
考えている間にも手を止めなかった俺。手元のフライパンではベーコンは焼いている。程よく焼けたそれを、野菜が盛られた皿の上に移す。
時間もないし、今日の朝は手早くトーストとサラダ、ベーコンと簡単な品目になっている。
「食べたらすぐに出発してね！」
アスナが言うと、みんなすぐに手と口を動かし始める。
俺、食べるの遅いし最後になるぞ？
「じゃあ、翔君、先行くからね。鍵、お願いね」
ほら見ろ。やっぱり最後だ。
鍵は各個人の部屋に1つずつあるから心配しなくしていいけど、女の子召喚するたびに合鍵が増えていくのはなかなかに不安がある。
食器を流し台に押し込んで……いや、さっと洗っていくか。
5分後、ようやく家を出た。遅刻ギリギリだな。

「あの自転車に爆弾が仕掛けてあるなぁ」

あ、唐突でわかりません？
家を出て数分、目の前を爆走する自転車が通り過ぎて行った。それだけだったら遅刻前にはどこにでもある普通の風景に見える。
その隣には銃を着けたセグウェイが走行していなければ。
この状況はあれだな、緋弾のアリアの一番最初のイベントに似てるな。というかそのままだな。
原作１巻、武偵殺しが主人公『遠山　キンジ』に仕掛けた状況と全く同じ。自転車に乗っている生徒はキンジじゃないけど。
「ま、いいか」
俺はガシャットギアデュアルを取り出しながら、とりあえずそれらを思考の外に叩きだす。
あれをどうにかする方が先だ。
《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ》
《Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
「変身」
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｇｌｏｒｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ！》
「よっと」
《高速化》
俺は高速化のエナジーアイテムで加速、自転車に肉迫する。
目の前には俺を邪魔するおもちゃがある。
「な、なんだお前!?　こっちに来ちゃ駄目だ！」
少年が俺に気が付いたのか、声を張り上げている。
その理由は単純。セグウェイに固定してある銃口が俺に向かっているからだ。
でも、問題ない。
放たれた銃弾を全てベレッタによる銃弾撃ちビリヤード　で迎撃。弾いた弾が男子生徒に当たらないような絶妙な角度で撃ちこんである。
その勢いでセグウェイの銃座も全て撃ちぬいてしまう。

これでセグウェイは全滅。俺、チートですね。
さて、次は爆弾解除をしたいところだ。
「どんな爆弾なんですか？」
爆走する自転車の横を猛スピードで駆ける仮面ライダーパラドクス。中々にシュールだ。
「プラスチック爆弾!!　この量だと車だって吹き飛ばせる!!」
「時限式ですか？」
「いや、減速すると爆発する仕掛けになってるらしい！　さっきのセグウェイが合成音声でそう言ってた!!」
「ふむ」
さて、どうする？
パーフェクトパズルの能力はエリア内の物質の操作。もしかすると爆弾の処理なんかもできてしまうんじゃないだろうか……どうなんだろう。できるのか？
ちょっと試してみるか。えっと、どうすればいいんだ？
すると、
「おい！　何やってグェ!!!」
少年が俺の方を見る、つまり横を向いた瞬間、空からパラシュートを使って落ちてきたピンク色の髪のツインテールの女の子が少年にぶつかり、少年はその勢いで自転車から投げ出される。
自転車は少し進むがバランスを失い横転。速度が落ちたことで爆弾が爆発する。
登校時間ぎりぎりで人がいなかったのが幸いだったな。この道が武偵高の生徒以外はほとんど通らない道でよかった。
それと、自転車が道路の真ん中に行ってくれたのも幸いだった。建物に突っ込んだら大変なことになってたかもしれないしな。道路には申し訳ないけど。
「た、助かった……」
少年は倒れた自転車を見ながら安堵の息をついている。
「2人とも、怪我はないか？」
「ああ。ありがとう、助かった。えっと……」

「……あなた何者？」
少年はお礼を言って、ピンクツインテールはお礼を言わないで俺をじろじろ見てくる。
「何者？　通りすがりの仮面ライダーだ」
世界の破壊者じゃないからな。間違えないように。
「仮面ライダー？　武偵なの？」
「まあね」
「ふうん……それよりも、終わったんだし、顔を見せるのが礼儀じゃないの？」
確かに、やましいことがないなら顔を見せるのが筋だな。本当に戦闘が終わっていれば、だけど。
「いや、まだ終わってないぞ？」
「え!?」
いつの間にかセグウェイ15台に囲まれてた。周囲の警戒を怠るなんて武偵失格だな。俺達3人とも。
「まだいたの!?」
女の子はスカートの中から銃を二丁取り出し、銃口をセグウェイに向ける。二丁拳銃、しかもコルト・ガバメントか。あんな小さい体でそんなことしたら、肩ぶっ壊れるぞ。
「あれなんだ？　知ってるのか？」
「武偵殺しのオモチャよ！　って、あんたもさっさと抜きなさい!!」
いまだに呆けてる少年に詰め寄って喝を飛ばす女の子。
「は、はい!!」
男子生徒は銃を抜く。
俺もベレッタを右手に持つ。遮蔽物がない道路の真ん中。俺は銃弾撃ちビリヤード　での防御に徹したほうがいいだろう。
仮面ライダーになっている状態で銃を構えるのは格好悪いけど、飛び道具がないから仕方がない。
緊張した顔の男子生徒とピンクツインテールの女の子。マシンガン15丁に囲まれていればそう言う顔にもなるだろう。
15機のセグウェイは一斉に射撃を開始する。

しかし、俺たちに達する弾は存在しなかった。
俺が銃弾撃ちビリヤード　、さらに連鎖撃ち　キャノンを使っているからだ。
連鎖撃ち　キャノン。これは、一度弾いた弾でまた別の弾を弾く技だ。
銃弾を銃弾で銃弾撃ちビリヤード　した場合、弾丸は消滅するわけではない。それを生かして、連鎖的に銃弾撃ちビリヤード　をする技だ。
もっとも、マシンガン15丁に対してはさすがに心もとない。いざというときは2人の盾になるつもりでいよう。
と思っていたが、ピンクツインテールの子が凄まじかった。
まるで俺が防御することが分かっていたかのように、自分は攻撃に集中していた。白と黒、2丁のガバメントから放たれる弾丸は外れることなく、効率よく、セグウェイを破壊していく。
時間にして10秒にも満たない。それだけの時間で銃声は止んだ。
「終わったわね」
「そうだな」
ピンクツインテールの子は、銃をくるくると回してスカートの中のホルスターに収めている。
「本当に、本当に！　ありがとうございました！」
爆弾自転車に乗っていた男子生徒は何度もお礼を言ってくれる。
「気にする事じゃないさ、な？」
「ええ、武偵憲章第1条、仲間を信じ、仲間を助けよ。それに従って行動しただけよ。後の処理は私がしておくわ」
なんか、いい子だな。この子。ちっこいけど。
ピンクツインテールの子の言葉に無言で一礼した男子生徒は学校に向かっていった。
や、簡単に後処理は受け持つとか言ったけどさ。
「あの人、この爆弾事件の重要な証人だろ？　ここにいてもらわなくて大丈夫なのか？」
「はぁ？　何言ってんのよ。爆破騒ぎなんて日常茶飯事でしょ？　犯

人はもうわかってるし、あとは業者に連絡して道路を何とかするだけよ」
忘れてた。ここでの事件は基本、そこに住んでる学生武偵が何とかするんだったな。
そして、超能力、魔法が当たり前のここでは、そんなことで驚くなんて甘いってことか。あの男子生徒も、パラドクスの姿に驚いてたのは最初だけですぐに状況説明してくれたし。
それにしても、
「犯人、分かってるんだ」
「ええ。犯人は武偵殺しよ。間違いないわ」
「武偵殺し、ね」
やっぱりな。それ以外答えが返ってきたら激しく取り乱していたところだ。目の前にいる人物が誰か理解したら、そうとしか考えられなくなってたからな。
「疑ってるの？　前に逮捕された人は誤認逮捕なのよ。その人は無実。本当の武偵殺しに罪をなすりつけられたの」
俺の声色が気に食わなかったのか、ピンクツインテールは少し怒ったような顔になる。
「いや、疑ってないぞ。じゃ、俺も行くから」
「待ちなさい」
え？　なんでしょうか。そんなに強く俺の手を握らなくても……っ。
「名前」
「え？」
「あんたの名前よ。仮面ライダーってそのパワードスーツの名前でしょ？　あんた本人の名前よ」
名前、名前ね。別に知られて困る物でもないし教えてもいいか。武偵は信用が命だし。偽名で顔も分からないやつを信じるのは無理があるしな。
人の輪は、大きくて困ることもないし。
関わること、確定してるようなもんだし。

「……なによ、もしかして、私が名乗らないから教えてくれないの？」
別にそんなことはないんだけど。
勘違いをしたらしいこの子は腕を組みながら名乗ってくる。
「神崎・Ｈ・アリアよ。よろしく」
知ってます。
「夜月　翔だ。よろしく、アリアちゃん」
黙っているのも悪いと思い名乗っておく。
すると、アリアちゃんの顔がどんどん真っ赤になっていく。
もしかして俺に一目ぼれ!?　や、顔も見えないのにどこに惚れる要素があるんだよ。
ってかこれって、怒ってるんじゃね？
「アリア、『ちゃん』？　……少し聞きたいけど、あんた、私の事何歳だと思ってるの？」
「え？　あ、いや……」
「まさかとは思うけど、小学生だなんて思ってないわよね？」
まさかとは思うけど、高校生として見られてるとは思ってないですよね!?
初見でその体型で高校生と思えっていうのは無理があるぞ？
まいったな、ついついちゃん付けで呼んじゃったよ。
「あたしは」
黙っているのを肯定の意と取ったのか、アリアの腕がスカートに、その中のホルスターに伸びていく。
「高二だっ!!!!」
「おっと」
パラドクスになっているお蔭で銃弾は効かないとはいえ、反射的に回避行動をとってしまう。
そして、これまた反射的に、その場から逃げ出す。
「このっ！　待ちなさい!!」
か、仮面ライダーの身体能力についてきてるぅぅぅぅぅ!!????
俺が逃げ切るころには、朝のＨＲどころか１時限目も終わってしまっていたのだった。

パーティー

俺は、教室の自分の席に着いて腕時計型携帯を弄っていた。
今朝のドタバタのせいで引きそびれてしまった武器ガチャを引くためだ。あの夜は1回でアスナさんがダウンしてしまったから1ポイント、一回分だ。

スタンドの矢

『ジョジョの奇妙な冒険』に登場するアイテム。
この矢に傷つけられたものには『スタンド能力』が発現する。
ただし、発現したスタンドが制御できる保証はなく、制御できなかった場合は死に至ることがある。
またこの矢は、スタンドが制御できる出来ないに関わらず4人までにしか使えない。4人に使った時点で、これはただの矢になる。

ほほう……またまた、これは難しいアイテムが。
スタンドとは『ジョジョの奇妙な冒険』に登場する、超能力に像を与え、目に見える形で表現したものだ。
作者がインフレを意図的に避けたせいか、あたり一面をまとめて消し去ったりする程の力を持ったスタンドは少ないが、自分のスタンドのルールに取り込んでしまえば一方的に相手に攻撃出来たりと、特殊な方面に強いのが特徴といえる。
問題はスタンドをコントロールするだけの意思がないと逆に死んでしまうかもしれないってことなんだけど……今博打をするほど困ってるわけじゃないわけじゃないし、こいつはしばらく封印しておくことにしようか。
それに、もう一つ考えないといけないことがある。

「翔君大丈夫？　顔色悪かったけど？」
「そう言うあかりさんはずいぶんとご機嫌だね」
声をかけてきたのは間宮　あかり。緋弾のアリアＡＡの主人公だ。アリアに負けず劣らずのちっこい体。その表情は俺の心配する言葉とは裏腹にゆるみきっている。
俺はＡＡのほうはあんまり関心がなかったから、初めてこの子を見た時もあんまり意識しなかったんだけど、名前を聞くまで本当にただのクラスメートとしか思ってなかった。
いくら何でも、顔と名前を見れば、あれ？　って思うはずなんだけどそんなこと全然なかったんだよな。
でも、そんなことは言ってられない。
今朝、チャリジャックでアリアに出会った。結局、怒り狂ったアリアに追い掛け回されただけだったけど、思えばそれは原作１巻のキンジも同じだ。
もしかして、何かしらの影響を受けて俺が事件の方向に誘導されてるんじゃ……なんてな、考えすぎ考えすぎ……でもないかもしれないけど、今はいい。
問題はほぼ確実に起こるであろう『緋弾のアリア』第１巻の事件をどう対処するか。
犯人はわかってるけど、証拠も何もない状態で指摘しても意味がない。しかも、さまざまに混ざり合っている要素のせいで、全く想定外の事態が起こるかもしれない。
ならばこちらも、原作に惑わされずに情報を集め、対処するだけだ。
そう思ったところで、あかりさんとの会話に集中する。
「えへへへ、分かる？　実はね、アリア先輩と戦姉妹（アミカ）になれたんだ!!」
「あー、そうなんだ」
「反応薄くない!?」
戦姉妹（アミカ）というのは武偵の師弟関係のようなものだ。
「ッチ、またアリア……今朝からずっとこの調子なんです。あかりさん」
お前、今舌打ちしただろ？

この子は佐々木　志乃。黒髪ロングの大和撫子で、十分すぎるほどかわいい女の子だ。
なんだけど、あかりさんの事が好きすぎで半分ストーカーのようになってしまっている危険な子だ。
「信じらんないよな。こいつ、アリア先輩相手にエンブレム成功させたんだぜ」
ポニーテールで勝気そうな火野　ライカが椅子を寄せてくる。
この３人とは比較的仲良くしている。仲良くしていると言っても男子と女子、そこまでではないが
「エンブレム、成功させた？」
「うん」
「あかりさんが？」
「うん」
信じらんない。仮面ライダーの身体能力に張り合ってくるアリア相手にエンブレム成功させるなんて。
エンブレムは３０分以内に戦姉妹（アミカ）になる上級生から武偵高の校章を奪うというものだ。そんな簡単にできるもんじゃないぞ。
「すごいんだよ、アリア先輩。今朝も爆弾事件（ボム・ケース）を解決したんだって!!
しかも、私が縫ったパラグライダー使って!!　すごいなぁ、アリア先輩……」
ああ、それ、俺もいたよ。
志乃さんの目がどんどん濁っていくんだけど、大丈夫？
「そ、それはすごいですね。ところで私、今日リーフパイを買ってきたので――――」
「あ、アリア先輩からだ。ごめんね、ちょっと行ってくる!!」
紙袋を差し出す志乃さんに一言言って、あかりさんは教室を出て行ってしまった。
「なあ、ライカ」
「なんだ、翔？」
「なんか、まずくない？」
「まずいな。あの志乃はマジヤバいぞ」

小声であかりさんと繰り返す志乃さんから、微妙に距離を取る俺達だった。
そして、これといった収穫はなかった。がっくり。

そして放課後。
「なんで尾行してくるんだろ、あかりさん」
しかも超下手だし。頭隠して尻隠さずだぞ。
いや、分かるけどね。
アリアに言われたんだろ。
アリアの事だ、名前を教えたんだから俺の事を調べるのなんて簡単のはず。で、調べた結果、俺が自分の戦姉妹（アミカ）であるあかりさんのクラスメートであることが分かって調査の命令を下したってところか。
まったく、俺が危険人物だったらどうすんだよ。あのパワードスーツがあれば、あかりさんなんて一捻りだってわかるだろ？
そもそも、あの後コンタクトをとろうと思って怒りが収まった頃を見計らって探し回ったのに発見できなかったし。
ホント、何考えてるかわからん。
そろそろ、まいておこうかな。買い物しないといけないし。
俺は右へ左へ曲がり角を数回曲がる。
スーパーにつく頃には、あかりさんは後ろからいなくなってしまっ

た。
や、だから、尾行ガバガバ過ぎるって。
こんなんでいいのか、あかりさん。
スーパーの自動ドアをくぐりながら、あかりさんの将来が心配になってしまう俺。俺の将来も大変だけどな。
さ、今日の晩御飯は何にしようか。

「クロ、友達は出来た？」
「お兄ちゃん、質問がじじくさいよ……？」
「うるさいな」
あの後、あかりさんに見つかることなく、また、アリアに待ち伏せされることもなく家に到着した。
「あらあら、クロさんは愛されてますのね。うらやましいですわ」
「でも、本当には愛してもらってないんだよね」
「愛してを強調するんじゃない」
みんなで皿をつつきながら談笑する。
「そう言う狂三さんはどうなんだ？　クラスのみんなとなじめそうなのか？」
「はい。アスナさんと同じクラスになったので、いろいろ助けてもらっていますわ」
アスナさんの方はそっぽを向いている。昨日の事、根に思ってんのか？　言っとくけど、最後の方はあなたも乗り気だったからね？
「話を戻すけど、結局クロはどうなんだ？」
「それは……まあ……何人かは……できた、けど」
「そうかそうか」

それを聞けてとっても安心だ。
「先輩、その顔は少し気持ち悪いです」
雪菜、君は俺のこと好きじゃないの？　俺、傷ついちゃうよ？
「それで、どんな子なの？」
アスナは興味津々といった様子だ。
「えっと、３人なんだけど、格闘技やってて、今日は練習についてった、というか連れてかれたんだけど」
ふんふん。クロに友達が出来て良かったよかった。
照れながらもその友達の事について話すクロを微笑ましく思いながら箸を進める。
「名前は、高町　ヴィヴィオ、リオ・ウェズリーそれに、コロナ・ティミルなんだけど……ほら、この子達」
俺たちはクロが差し出してきた携帯の画面を見た。そこには照れるクロの隣に３人の同年代の少女、そして俺達よりも年上だろう女性の姿が映っていた。
おっとぉ……？
俺の手がぴたりととまる。この写真を見た瞬間、この３人の名前が聞き捨てならないものに変化したぞ？
リリなのＶｉＶｉｄの主要人物じゃねーか。そっちはそっちで違う原作キャラとあってんのかよ。
俺はもう大混乱だぞ。
俺の方はアリアに目をつけられてて、クロの方はリリなのＶｉＶｉｄの主要人物と友達か、ハハハ……。
乾いた笑みを浮かべていると、家のチャイムが鳴る。
こんな時間に誰……まさか。
俺は急いで玄関を開ける。
そこには、
「遅いわよ、翔」
腕を組んだアリアがいた。
「……調べたのか」
「もちろんよ。仮面ライダー……いえ、夜月　翔。あかりの尾行は

フェイクよ」
　なるほど。あんなバレバレの尾行をさせたのは俺を油断させるためだったのか。俺の注意はあかりさんに向いてるから、アリアは楽に尾行できる。あかりさんが危なくなってもすぐに助けに行けるしな。
　甘かったのは俺の方だったか。
「翔君、誰？」
　奥からアスナさんが出てくる。
「あれ？　アリアちゃん？　どうしてここに？」
「ア、・アスナ？　あんたこそどうして……ま、まさか……っ」
　アリアは俺に向かって鋭い視線を向けてくる。
「そ、それも含めて、中で、な？」
　俺はアリアを招き入れた。
「翔、あんた私のパートナーになりなさい！」
　で、リビングに入っての一言目がこれだ。
「いきなりすぎないか？」
　やめて、みんな。そんなに睨まないで。狂三、口に手を当てて笑ってんじゃねーよ。
「今朝の戦いを見て、こいつだって思ったのよ。翔にはあたしのパーティーに入ってほしいの。他のみんなもあたしのパーティーに入ってもらうわ」
「「えぇッ!?」」
「あらあら」
　強引だなあ。押しかけ営業マン並みだよ。　あ、はい、分かりずらいですね。
「安心して。私のパーティーに入ってくれるならそれなりの報酬は出すわ!!」
　武偵を動かすには金が必要。基本を良くわかってますね。
「私はパスよ。わざわざリスクを負いたくはないわ」
　クロはそう言い放つ。
「そう、ですね。これ以上ライバルが増えても困りますし……」
　雪菜も反対の様だ。つか、ライバル？

あ、そうか。浮気は公認したけど、わざわざライバルが増えるようなことはゴメンだってことか？　じゃあなんで召喚は推奨してるんですか？

つまり2人の中では、俺がアリアを惚れさせると思ってるのかよ。そんなにうまくいくわけないだろ。仕事仲間に惚れる人なんてそう相違ないだろ。あ、でも職場結婚ってよくありますね。

「アリアさん。なんで私達と組みたいんですの？」

狂三さんが問いかける。

「武偵だったら自分で――――」

「これから仲間に、背中を預け合うんですわよ。わたくしたちを信用しては下さりませんの？　わたくしたちはともかく翔さんは、あなたがこの人だ、と思った人ではありませんこと？」

アリアはうつむいてしまう。

どうやら迷っているようだ。

ここはアリアが覚悟を決めるまで待ってることに……ん？

狂三さんが俺の裾を引っ張ってきている。

「翔さん、あとはよろしくお願いいたします」

「狂三さん、もしかして刻々帝（ザフキエル）の一〇（ユッド）の弾を？」

「ええ。アリアさん、翔さんの事を調べていたみたいですから。わたくしも少し調べておきましたの」

一〇（ユッド）の弾の能力は撃ち抜いた対象の過去の記憶を伝えるというもの。狂三さんの力なら、アリアの事情を知るのは簡単だったようだ。

それにしても、

「狂三さんが俺のこと心配してくれるなんてね」

「あら、わたくし、翔さんのことは大好きですわよ。食べてしまいたいくらいに」

なんか俺、狂三さんのこと誤解してたみたいだな。ここまでやってくれたんだ、俺もがんばろう。

「アリア、君が俺を調べたみたいに俺も君を調べた。アリアの事情は知ってる」

「ッ!?」

クロと雪菜、アスナさんは俺を見る。顔を上げたアリアは涙目になってる。
「お母さんを助けるためだろ？」
「「!?」」
事情を知らない３人は驚愕する。
「みんな」
アリアを背にして言う。
「アリアの母さんは今、懲役８６４年で刑務所にいる。その全部が冤罪だ」
「「え!?」」
「そんな……っ」
アスナは信じられないと言った風に手を口に当てる。それが普通の反応だ。
「俺はアリアを助けたいと思ってる。力を貸してほしい」
俺は頭を下げる。
原作が始まった時から決めている。事情を知っていれば誰だって助けたいと思うだろう。あわよくば、今回は犯人になってしまう娘も。
これはそのための第一歩だ。何が起こるかわからない。みんなの助力が不可欠。
３人はしばらく沈黙する。
正直、雪菜とクロにはきつい話かもしれない。
雪菜は親の顔を知らない設定だし、クロも母親によってなかった存在にされた。２人とも、親によい感情を持っていないのだ。
それにアスナも(マザーズロザリオ以前なら)、母親とは仲が悪いことになっている。
もしかしたら断られるかもしれない。
でもそんな心配は杞憂だった。
「いいよ、翔君」
「ま、お兄ちゃんに言われたらしょうがないよね」
「そうですよね。しょうがないです」

3人とも、やれやれと言った顔だ。
やめてくれよ、ちょっと泣きそうになっちゃうだろ。
「ありがとう、3人とも」
これで準備は整った。
「アリア、俺達も協力する。お母さんを助けよう」
「ありがとぅ……っ！　しょう……っ、みんな……っ！」
カメリア色の瞳からボロボロと涙をこぼし、泣きじゃくるアリア。
そんなアリアをなでながら、
「じゃ、ご飯食べるか」
温かいご飯が並んでいる机にアリアを招待するのだった。
この世界にいる人はみんな幸せにする。それが、俺がこの夢の世界にいる対価だ。
俺がそう決めた。
そう、決めた。

「ところで翔」
「なんだ？」
アリアは笑顔だ。泣いてた痕は、少し腫れた目しかない。女神のような笑顔。そこにある種の嫌な予感を感じる。
ももまんが食べたいと言われたが、それを即席で用意するのは無理がある。もしかしたらそのことについて、何か言われるのかもしれない。
「アスナの事は何て読んでるの？」

「アスナさん」
「狂三のことは？」
「狂三さん」
　何を言ってるんだ、この子は。
「私の事は？」
「アリア」
「……アリア？」
「アリア」
　え、な、何？　怖いんだけど。
「私、２人と同い年なんだけど？」
「……あ」
「なんで私には『さん』がないのかしら？」
　それか……っ!!　なんていえばいいんでしょうか。ここは正直に、小さくて子供っぽいからいつの間にかそう呼んでた、って言った方がいいか？
　そうだな、正直に言ったほうがいいだろう。
「そ、それは、小さ――――」
「風穴」
　こんな感じで俺たちは、アリアとパーティーを組むことになったのだった。

つかの間の休息

アリアとパーティーを組んだ翌日。アスナ、アリア、狂三の3人は強襲科（アサルト）の廊下を歩いていた。
「2人ともいい動きだったじゃない。ランクはいくつなの？」
「私も狂三ちゃんもAだよ」
「狂三の力も強力だし」
「いえいえ。わたくしの刻々帝（ザフキエル）は代償が必要で、あまり多用は出来ないんですの」
実は同じクラスだったこともあり、すっかり仲良くなった3人。硝煙の匂いが絶えない強襲科（アサルト）において、この3人の周りだけ別世界のようになっている。
「代償？　なによそれ。パーティーリーダーとして知っておく必要があるわね」
「アリアさんには少し早いかもしれませんわね。どう思われますか、アスナさん？」
「な、なんで私に振ってくるの!?」
言うまでもなく刻々帝（ザフキエル）の代償とは自身の寿命の事である。アスナは違う事を思い出して顔を赤くしているが。
そんなアスナを見て、不思議そうに首をかしげているアリア。
「3人とも。やっほー」
そんな3人に近づいてくる女子がいた。
金髪をツーサイドアップに結った、ゆるい天然パーマの女子だ。アリアと同じくらい小柄なその体は、フリルだらけの改造制服によって飾られている。
この子の名前は峰　理子。アスナ達のクラスメイトだ。
「おや、理子さんではありませんの」
「ホントだ、どうしたの？　確か理子ちゃんって探偵科（インケスタ）じゃなかったっけ？」
「仕事だよ、し・ご・と。あーあ、ヤになっちゃうよね～。早く家に帰ってゲームの続きしなきゃいけないのにさ～」

こんななりの理子だが、実力は高い。情報収集能力に長け、ランクはAだ。人は見かけによらないという言葉を体現したような人物である。

いちいち言葉に合わせて大げさな身振り手振りをくわえる理子だが、不思議とうっとおしいと言ったような感情は起こらない。このあたりがクラスの人気者になる所以なのだろうか。

「あ、そう言えば」

理子はスカートのポケットから派手にデコられた携帯を取り出した。

その画面を操作して、3人に見せる。

「この人達、誰だか知ってる？」

そこには、キメラドーパントとチャリジャックのパラドクスの戦闘が映っていた。

3人は言葉に詰まった。

翔からは、できるだけ仮面ライダーの事は秘密にしてほしいと言われていたからだ。アリアには協力するという目的があったため、早々に正体をばらしたが、言いふらしたいというわけではないからだ。

「現れたのは2日前と昨日なんだけど……2人はこの人に会ってるよね？」

アスナとアリアを交互に見ながら理子は言う。

続けて映された写真にはバッチリアスナとアリアが映ってしまっている。

「知らないわ」

「私も全然知らないよ。どうして？」

それでも映っているだけだ。知らないと言えばどうにでもなる。

「なんかね、この人を自分のチームに入れたいって人が私に依頼してきたんだ。少し調べたんだけど凄いんだよこの人。多分どこかの研究所から逃げ出したんだと思うんだけど、すごく大きな怪物を倒しちゃったり。銃弾を銃弾で跳ね返したり。でも、知らないならしょうがないね」

理子は携帯を閉まってうすく笑う。その笑い方は冷たく鋭いもの

だ。とても理子の雰囲気からは想像できない。
アスナとアリアは追及を免れたことでほっとしている。が、狂三だけはその違和感を感じ取っていた。
「あ、もうこんな時間だ。早く行かなきゃ！　じゃ～ね～」
理子は用事は済んだとばかりにその場を去って行ったのだった。
完全に姿が見えなくなったところで3人はふぅ、と息を吐いた。
「危なかったね」
「そうね。ああいう情報って埋もれるものはすぐに埋もれるけど、興味を持たれると一気に広まるから。ま、武偵殺しを捕まえれば、いやでも有名になるでしょうけどね」
2人はすっかり気を抜いているが、狂三だけは違った。
「……そうですわね。少し、気を付けるように翔さんに伝えておくべきでしょう」
そうつぶやくと狂三もその疑問を胸にしまい込んだのだった。
こうして3人は各々この出来事を頭の隅に片づけた。
今日は用事があるから。

えー、現在女子会中。雪菜（そう呼ぶことになった）、アスナ（したんだし、さん付けはやめてほしいといわれた）、狂三（召喚初日にこう呼ぶことになった）、アリア（結局こう呼ぶことになった）が楽しく談笑している。
クロの方は、今日は小学校の友達との用事があるとの事だった。
よって俺は1人、会話に混ざれずにいた。テーブルが同じなせいですごく居心地が悪い。正直帰りたくなってきた。
俺たちは特に捜査もせず、とあるカフェでお茶をしている。捜査をしようにも、武偵殺しの足取りは全然つかめてないしな。
アリアの話によると、武偵殺しは爆弾を好んで使用する傾向にある

らしい。その際、遠隔操作で爆発させているためか特徴的な電波を出すのだとか。
それを頼りに事件現場に行き事態を収拾するらしいのだが、完全に後手に回っているうえにその場に武偵殺しはいない。さらには、欠片の証拠も残さないらしい。
ここまでされると完全にお手上げ状態。掌の上で踊っているという言葉がこれほど似合う状況はないだろう。
原作の犯人ならわかっているが、証拠が残っていないため逮捕は不可能。
俺たちにできるのは爆弾の被害をできるだけなくし、武偵殺しのわずかなミスを期待することだけだ。
したがって、事件があるまでは基本的にフリーになっている。
というわけで、親睦会タイムとなっているわけなんだ。
話題を提供しているのはほとんどアスナさんなんだけどな。アスナさんのコミュ力が半端ない。
狂三はどうしてそんなに話についていけてるんですか？　一番長くいるはずの雪菜よりも自然に会話に混ざっているのは、どういうことなんですか？　あなた、召喚されて2日も経ってないですよね？
そしてアリアは……うん。原作通りならまともに友達いないんだよなぁ。受け答えがぎこちなさすぎてみているこっちが不安になってくる。自分が話してないときに助けを求めるような悲愴な視線を向けてくるし。
やめてくれよ。俺もそんな早口呪文みたいな会話に混ざる技術はないんだよ。
「そ、そういえば！　あんたたちってみんな一緒に住んでるの!?」
そんな状態に焦ったのか、アリアは上ずった声でそんなことを言い出した。
アリアとしては無難な質問のつもりだったのかもしれないが、俺たちに対しては冷や汗を流させるレベルの質問だ。
「ええ。翔さんからパーティーに誘ってくださって。あの家は翔さんのお父さんの持ち物なんですのよ？」

そんな嘘をさらりとついていく狂三。
後で狂三に聞いたことによると、本当に名義上は俺の父親があの建物を所有していることになっていた。この世界に俺の父親はいないはず（俺の知る限りは）なのだが、そういう手続きをされていた。
これをこの短期間に調べていたとは……刻々帝（ザフキエル）を使ったな。そもそも、建物の所有者とかよく調べる気になったもんだ。
色々と違うことを見せつけられた気分。
「へぇ～、で、パーティー組んで一緒に住んでるってこと？」
「そういうことですわ。それはもう……情熱的な口説き文句でしたのよ？」
これは本当に嘘。
「え、は？　く、口説いたって……アスナと雪菜はともかく、あのクロって娘まで!?　翔！　あんた、女ならだれでもいいわけ!?」
正直、かわいければ。
「わたくしは直接見たわけではありませんが……ほかのお二人も、さぞ熱い交わりだったのでしょうね」
その言葉に顔を赤くする雪菜とアスナ。意味を完全には理解しなくても、直感で反応し、銃を抜くアリア。
散々煽った狂三はすでに退避している。
平和な喫茶店に銃声が鳴り響くのだった。

俺達５人は家に帰宅していた。
少し、そう、少しだけお店を騒がせてしまったが、大したトラブルもなく一日が終わろうとしていた。
「今日の夕飯は何にしようか……」
俺は今日の夕飯について思考する。
「翔、料理できるの？」
「うん。家のことはアスナと分担してやってるから」
昨日買い物したし、今日はスーパーによる必要はないな。そのまま帰るとするか。
その時、アリアが急に立ち止まった。
「どうかしましたか？」
雪菜がアリアに声をかける。
「ここって何？」
「ゲームセンターだろ、そんなことも知らないのか？」
「帰国子女なんだからしょうがないじゃない」
そんな会話をする二人にアスナが提案する。
「まだ時間もあるし入ってみない？」
「そうだな」
俺たちはゲームセンターの中に入った。中に入ると、思わず耳をふさぎたくなるくらいに大きなゲームセンター特有の音に襲われた。
それに対してアリアは、
「うるさい場所ね」
至極まっとうな評価を下した。俺もそう思う。
アリアで忘れがちだが、雪菜もこういった場所を訪れるのは初めてだ。よって、今回は２人に合わせることになった。
プレイはしないで歩き回り、２人が興味を引かれたものから説明していく。
「ねぇ、何これ」
アリアは近くにあった機械を指さす。
「ＵＦＯキャッチャーだな」
「ＵＦＯキャッチ？　なんか変な名前ね」

「これのどこにＵＦＯがあるんですか？」
雪菜もじろじろとＵＦＯキャッチャーを観察している。
と、雪菜とアリアは箱の中にあるぬいぐるみを見る。そしてその視線がそれに釘付けになった。
アリアは箱の窓に張り付く勢いで、雪菜はチラチラと横目で見てる。どっちも欲しいアピールが激しいな。口に出したら否定するかもしれないけど。
「翔さん。ここは男らしく、俺がとってやるよ、と言う場面では？」
「残念だけど、俺はそこまでＵＦＯキャッチャー得意じゃないんだ。調子に乗って取ってやるなって言った暁には、女の子のほうに、もう大丈夫だから、って言われる未来が予知できる」
俺の腕前は口の近くにあるやつを何とか落とせる程度。難しいよ、これ。
「やるだけやってあげたら？」
「そこまで言うなら……」
俺は１００円玉を取り出す。
２人にはどいてもらい操作パネルの前に立つ。
それを投入するとゲームスタート。軽快な音声とともにアームが動き出した。
そこまで気負うことなく、ボタンを操作していく。
なるべく取りやすそうな……あれにしておくか。
アームが下りていき、ぬいぐるみの耳をとらえた。
「お」
順調に持ち上がっていき――――ん!?　ぬいぐるみの足にもう一つのぬいぐるみのチェーンが絡まってるぞ!?
２匹の重さがかかっているアームは不安定に揺れながら、出口に向かう。
そして――――

本当に帰り道。雪菜、アスナ、狂三、アリアの手にはそれぞれぬいぐるみが握られていた。
なんとアームが開いて落ちるとき、積み重なっていたぬいぐるみを2匹巻き込んだのだ。
これで合計4匹手に入れることができた。
人生の中のＵＦＯキャッチャーの運をすべて使い果たした感じがするよ。
「翔さん」
少し先を歩いていた女子組から、少し速度を落として狂三が近寄ってきた。
なにもされてなくても体がぴく、と動いてしまうのが本当に申し訳ない。
「このぬいぐるみ、クロさんに差し上げてください。今日は一緒に行けなかったお詫び、ということにして」
「うん？　いいのか？」
俺の問いに狂三はうっすら笑って、指を絡めつつ手を握ってきた。
「はい。翔さんにいつまでも警戒はされていたくはありませんもの。これはポイント稼ぎの一つとでも思ってくださいまし」
セリフはそっけないが、手は離さない。
「そっか、ありがとう」
「ふふ、いえいえ、お気になさらず」
俺たちは結局、みんなに見つかるまで手を握っていたのだった。

バスジャック

アリアとパーティーを組んで４日が過ぎた。武偵殺しには全く動きがなく、俺たちは相変わらず暇な日々を過ごしていた。

シリアスなイベントも、Ｈなイベントも起こることなく、正に日常といえるような日々だ。元の世界と比べて非現実的なのはアリアが照れ隠しに銃をぶっ放す程度。それにも慣れつつある自分がいる。

アスナと交わった後は誰ともＨなことはしていない。なんていうか……お互いに恥ずかしがって何も言えなくなってる状態だ。

俺もしたくないかと言われればノーなんだけど、なんて誘えばいいのかわからない。２回とも向こうから来てくれたからなぁ。

こんな感じで割と穏やかに日々を過ごしていたわけなんだけど、古今東西、事件というのは突然起こるものらしい。

ま、つまりそういうこと。事件の始まりは突然だった、ってね。

その日はこの世界に来て初めての雨が降った。しかも大雨。地面に落ちた雨粒がはね、ズボンの裾をどんどん濡らす。

みんなはそれぞれ早く行く用事があるらしく、俺は１人だ。

傘をさして歩いていると携帯電話がなった。

「もしもし？」

《翔。今どこ？》

電話の相手はアリアだった。

時刻は８時１０分。いうまでもなく、学校に行けば学年が違うとはいえすぐに会うことができる。それなのにわざわざ電話を使って連絡してくるなんて、よほどのことがあったのだろうか。

「強襲科（アサルト）の建物の近くだけど？」

俺はすぐに場所を確認してアリアに伝える。

『ちょうどいいわ。武装して女子寮の屋上に来て。今すぐに』
「……何があった？」
俺の問いにアリアは簡単に答える。
『事件よ。武偵殺しが現れたわ』
「ッ!?」
とうとう来た。
『武偵殺しがバスジャックを起こしたの。みんなにも連絡したから翔も来て』
「わかった。すぐ向か――えなさそう」
いつの間にかゾンビのような奴らに囲まれていた。気が付かなかったのも無理はない。こいつらは現れたのではなく、出現したのだ。俺以外の誰かが作り出したゲームエリア内に。
俺を取り囲んだのはゾンビのような装いのバグスターウイルス。
つまり、ゾンビゲーマーレベルXが作り出したバグスターウイルスだ。
「……先に行ってくれ。後から追いかける」
《ど、どうしたの？　何があったの？》
「悪い、武偵殺しのオモチャに囲まれたんだ」
武偵殺しはこの世界ではゲンムになれる。もしくはその力を持っている奴が力を貸しているんだ。
「こっちを片付けたらすぐそっちに向かうから。そっちはそっちで、バスジャックを解決してくれ」
《でも……!?》
「……武偵憲章1条は？」
《……仲間を信じ、仲間を助けよ？》
「そういうことだ」
声が重なった。
「これが終わったら、すぐに助けに行くから」
『それはこっちの台詞よ』
「そう？　じゃあ、また後で」
電話を切り、ガシャットギアデュアルを取り出す。

《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ》
《Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｇｌｏｒｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ！》
「ちゃっちゃと片付けようか」
　不死身のゾンビ。どこに本体がいるのかはわからないが、こんな雑魚だけをよこしても意味がないことを教えてやろう。
　指を鳴らす。
　すると、すべてのバグスターウイルスが消え去った。
　ま、こんなもんだ。レベル５０を舐めないでいただきたい。
　……で、ゲンム本体は？

　雪菜、クロ、アスナ、アリアは女子寮の屋上に集合していた。着陸していたヘリコプターに乗り込み、アリアが事件の説明をする。
「えっ!?」
　そして、翔が襲われていることを聞く。
「多分、翔のパワードスーツが計画に邪魔だったのね。現場に行けないように、時間稼ぎしてるのよ」
「で、でも、私たちはそのこと誰にもしゃべってないし……」
「調べる気があれば簡単に調べられるのよ。この島、道沿いにたくさん監視カメラあるんだから。武偵ならすぐよ。武偵殺しができないわけがない」
　誰にもしゃべらなければ隠し通せるほど、武偵は甘くないということだ。
「……犯人は車内にいるんですの？」

「たぶんそれは無いわ。バスには爆弾が仕掛けられてるから」
狙われたのは通学バス。中にはたくさんの子供が乗っている。
「もう武偵殺しの好きにはさせないわ」
アリアの言葉にみんなが頷いた。
「作戦を言うわ。あたしと雪菜、アスナがバスに乗り込み人質の救助と爆弾の解除。クロと狂三はヘリから援護して頂戴」
「あらあら、わたくし、ここにいたままでは、あまりお役に立てないかもしれませんわ」
「今回はいいわ。あんたの力はもう少し使うところを考えるから」
実は狂三は自身の精霊の力を１００％出せるわけではない。この世界の力を受けたのか、空を飛ぶことができず、原作でいうところの限定霊装しか使用することができない。
さらには刻々帝（ザフキエル）は彼女自身の寿命を消費する。
アリアはこのことあらかじめ聞いていたため、特に目立った遠距離攻撃の手段を持たない（刻々帝（ザフキエル）の銃弾の威力は通常の拳銃と同じくらいになっている）狂三をヘリに残すことにした。
残りは単純に近距離攻撃の雪菜とアスナ、遠距離もこなすことができるクロ、とこの一週間で得た情報をもとに最適な陣形を組んだ。
雪菜は雪霞狼、アスナも装備科（アムド）に注文したレイピアをもって気合十分だ。
しばらくヘリに揺られていると、ヘリの操縦者がバスを見つけた。
「見えました！　あれです！」
その言葉に従うと、町中にもかかわらず、猛スピードを出すバスが目に飛び込んできた。
「私たちが一番乗りね」
この事件は発生と同時に情報が公開され、動ける武偵はすぐに準備を開始していた。が、その前から網を張っていたアリアが一歩早かった。
通行止めになっているため、バスはスムーズに道を走っている。通行人ももちろんいないため、多少無茶な運転をしても大丈夫だ。
雪菜とアスナ、アリアは強襲用のパラシュートを使ってバスの屋根

に降り立った。
「二人は中に行って。私は車の外側に爆弾がないか調べてみるわ」
「こんなにスピードを出してるんですよ!?」
走行中に車の外側を調べると言い出したアリアをたまらず制止する雪菜。しかしアリアは何でもないように言い返した。
「仕方ないわ。この人数を外に運ぶわけにはいかないもの。場合によってはすぐに解体しないと大変なことになるかもしれないわ」
「それは……！　そう、ですけど……っ」
まだ納得してない雪菜にアリアは、
「ああもう！　武偵憲章１条！」
「……仲間を信じ、仲間を助けよ、です」
「そういうことよ。わかった？」
「……はい」
その答えを聞くとアリアはすぐに調べに行った。
「……それじゃあ、私たちも行こうか」
「アスナさんは平気なんですか？」
「……こういうことをやってると、どんなに準備しても、どんなに作戦を立てても、危険をゼロにはできないから。ここにいるみんなのことと、私たちができることを考えて、一番いい作戦を決めたら、あとはみんなを信じるんだよ。信じなきゃいけないの」
それはアスナの体に刻まれている血盟騎士団副団長として出た言葉だった。
「私たちは私たちで、精一杯がんばろ？」
「……はい！」
その言葉にようやく雪菜が顔を上げた。
２人は素早く窓から中を覗き込み、犯人がいないことを確認、開けてもらった窓から、車内へ入った。
するとすぐに女の子が携帯電話を差し出してきた。
「どうしたの？」
「あ、あの……っ、私の携帯が、気が付いたら私のじゃなくなってて……っ！」

《速度　ヲ　落とす　ト　爆発　シヤガリマス》
すり替えられた携帯電話から機械染みた声が聞こえる。
アスナは連絡用のインカムに手を当てる。
「アリアちゃんの言った通りだよ。バスの爆弾は遠隔操作されてるみたい。そっちはどう？」
《こっちも見つけたわ！　爆弾よ！》
「どこ!?」
《バスの下よ！　この量……武偵殺しは電車でも吹っ飛ばすつもりかしらね!!》
その意味を理解し顔を白くさせるアスナ。
《今から潜り込んで解体を――》
「みんな伏せて!!!」
雪菜が叫んだ次の瞬間、大通りにつながる道から、6台のゼグウェイが飛び出してきた。もちろん無人で台座には機関銃が取り付けられている。
それらが一斉に火を噴いた。
壁面は特殊な構造になっているため弾丸はめり込むだけだったが、バスの防弾ガラスが無数の銃弾ですべて粉々になる。
銃撃がやむ。ヘリの中にいるクロが狙撃したのだ。
雪菜の指示のおかげで直接当たった子供はいなかったが、ガラスの破片が降り注いだことで、車内はパニックになる。
雪菜とアスナは何とかみんなを落ち着かせようとする。が、バスが妙な動きをしていた。まるで酔っぱらっているかのように蛇行しているのだ。
運転手を見ると負傷していた。運転手は雪菜の指示通り伏せることができなかったのだ。右腕に当たったようで脂汗を流していた。
「私が代わります！」
「うん、お願い。アリアちゃん、そっちは大丈夫？　……アリアちゃん？」
アスナが問いかけるが、インカムからは何も帰ってこない。
まさか、と思ったアスナはバスの窓から体を出し、屋根に上がった。

そこには、ちょうど屋根に上ったアリアがいた。
「アリアちゃん！　大丈夫⁉」
「アスナ⁉　どうして来たの⁉」
「インカムから返事がなかったからだよ！　大丈夫なの⁉」
「ええ。銃撃で車が揺れたときに頭ぶつけてね。その衝撃でとれたのよ。それより外は危ないわ。爆弾の場所は分かったけど、あんな妨害があったんじゃ解体なんてできない。中で待機して――――後ろ！　早く伏せて！」
「え？」
アスナの後ろ、新たにセグウェイが４台脇道から現れた。そして銃座の銃はアスナを狙っていた。
ガガガガガガガッ!!!
４つの銃が同時に放たれたことによる音がアスナとアリアを襲う。いくらアスナといえども、銃弾を切り払うことはできない。どっかの黒の剣士のようにはいかないのだ。
それでも超人的な反射速度でレイピアを抜きかけているのは流石だが、間に合わない。
アリアが急いでアスナを押し倒そうと駆け寄る。
「え」
目の前に何かが降り立った。
それが盾となって銃弾をはじいた。
そのおかげで、２人は無傷だ。
「ごめん。遅くなった」
軽い様子で手を挙げる。
「翔！」
２人の目の前には、パラドクスに変身した翔が立っていた。

何とか間に合った。
あの後、ゲンムの本体が襲ってくるのではないかと思い2〜3分無駄に警戒してしまった。それでも何もなかったため、いくらなんでもおかしいと思った俺は、すぐにアリアに指定された場所に向かった。
でもその時は、すでに出発した後。仕方なく走ってここまで来たというわけだ。
「翔、あんた――――」
「あれ、壊してくる」
《伸縮化》
俺はエナジーアイテムを取得してバスを飛び下りる。腕を某ゴム人間のように伸ばし、
「固有時制御・二倍速(タイムアルター・ダブルアクセル)!」
加速した。
高速化のエナジーアイテムを使わなかったのは、ここまでで使ってきたためだ。
伸ばした腕を振り回して、銃を支えている骨組みをへし折る。こうしてしまえば、こいつは無力だ。
火花を散らしながら着地しつつ、そんなことを思う。
と、セグウェイが起爆した。
「うわぁぁぁぁぁ!!??」
油断しきっていた俺は視界が一気に真っ赤になったことに驚く、ダメージはないけど。
ば、爆弾ですか。そうですね、忘れてました。爆弾は武偵殺しの十八番でしたね。
「ええ……」
やかましい音が聞こえてきたと思ったら、頭上にヘリが近づいていた。しかも見る限り無人の。翼にはミサイルが装填されているよう

にも見える。多銃身機関銃も回転数を上げている。
どう見ても味方じゃない。
さっきから俺に対する殺意が高すぎる気がするんですが気のせいですか？
《鋼鉄化》
「くぅ……っ！」
防御力を上げるが、ミサイルを完全には無力化できない。何とか耐えきり、
《ジャンプ強化》
《マッスル化》
ヘリが飛ぶ空中までジャンプ。フロントガラスを破り内部に手を入れ、操縦席の計器ごと、ヘリの前側を引きちぎった。
コントロールを失ったヘリは道路に墜落していく。周りの建物も道路も、結構壊されてるんだけど、これ俺に請求来たりしないんだよな。
どうでもいいことを考えながら、俺はバスに向かって走り出した。

一方、バスの上ではアリアの大立ち回りが始まっていた。
追加で現れるセグウェイの車輪を現れたそばから打ち抜き、攻撃を許さない。それでも強引に銃を撃とうとする場合は、空からのクロの狙撃ですべて破壊される。
「あのクロって娘、いったい何者なの？　あの年でこの技術って……」
「……そういえば、私も詳しくは知らないかも……あ！」
攻撃の最中、こんな雑談をする余裕すらある。と、こちらにも、翔

が倒したのと同じヘリが現れた。
銃弾では厳しいと瞬時に判断したアスナは、レイピアを抜き飛び上がった。まさに閃光のような一突きで、ヘリを落としてしまう。
「……あんたも大概よね」
着地したアスナにアリアは顔を引きつらせる。
《あーちょっと？　二人とも聞こえるかしら？　今からそのバス、大きな橋の上を通るから、私が狙撃して爆弾を海に落とすからね》
「「え？」」
突然のインカムからの通信。しかも、内容を理解できない。狙撃して爆弾を海に落とすというのは一体どういうことか。
「ちょ、ちょっと⁉　それってどういうこと⁉」
質問している間にも、バスは橋に差し掛かる。
《え？　どういうことって――こういうことよ!!》
神業だった。
クロの射た矢は銃弾を超えるスピードをたたき出し、爆弾を固定している金属だけを破壊した。
支えがなくなった爆弾は当然地面に落下する。
その落下した爆弾をいつの間にやってきていたのか、パラドクスが橋の外に全力で投げ捨てた。
センサーが感知し爆弾が爆発するが、そこは誰もいない空中。爆弾による死傷者はゼロだ。
《ふぅー、さすがお兄ちゃん。タイミングばっちり》
こうして事件は終わりを告げた。

アリアのお母さん　（アリア）

電車に揺られ、俺たちはアリアのお母さんが収容されている刑務所へ向かっていた。

今日もクロは小学校の友達との約束があってここにはいない。こうして聞くと学校の友達ができて本当に良かった。

ま、あいつ猫かぶるの上手いし素の状態で接しているのかはわからな――――くはないな。これだけ頻繁に遊んでるってことは。面倒だったら適当に理由をつけて断ってるか。

狂三も何かしら調べることがあるらしい。彼女は彼女でこの事件について調べているらしい。

それよりもアリアだ。どうにも落ち着かない様子で、しきりに自分の姿を電車の窓を利用して確認している。

聞いてみると、ここの所、武偵殺しの調査のせいで会いに行けていなかったらしい。服装ももちろん制服ではなく白いワンピース姿。おでこもばっちり出している。

このソワソワしている感じが新鮮だ。

「先輩、わかってると思いますけど、さすがに神崎さんのお母さんには……」

「そんなに信用ないのか……」

雪菜の言葉が大きく心をえぐる。まさか人妻にまで手を出すと思われているとは。いくら何でもそこまで節操なしではない（２人の女の子と関係を持っている男の戯言）。

ちなみにいうと、アリアには俺たちの関係は話していない。いっても意味がないと思うし、アリア自体、恋愛なんてくだらない、興味ないってタイプの奴だしな。

休日だということもあってか、電車は中々に混んでいる。満員電車ほどではないにしても隣の人とぶつかりそうなくらいだ。

乗った時からこんな感じだったから俺たちは扉の近くで一塊になっている。みんなと他の人との間に立って壁の役割になることも忘れない。痴漢にでもあったら大変だからな。このメンバーだった

ら普通に撃退しそうだけど。
目的地まであと3駅といったところ、俺たち側の扉が開く。そこからたくさんの人がなだれ込んできた。
あれよあれよと人の流れに流されてしまい、いつの間にか、俺はみんなとはぐれてしまっていた。
「うわぁ……これはこれは……」
さっきまであった余裕が完全になくなり、人と人が圧迫されあっている状態になってしまった。
この超満員状態。通勤ラッシュの時間帯でもない、休日に出くわすとはツイてないね。
こうなってしまってはしょうがない、切り替えて目的の駅で降りることができるかを考えよう。そう結論付けて体から力を抜くと、俺の腕が突然引っ張られる。かなり小さく、細い腕だ。それこそ小学生くらいの。
「アリア？」
俺を引っ張ったのはアリアだった。
ぎゅうぎゅうに詰まっている人をかき分けて移動する俺に、周りの人が迷惑そうな目を向けてくる。不思議とアリアにはその目がない。小さいからだろうか。小さいからわずかな隙間に入っていけるのだろうか。
再び電車が揺れる。
カーブした作用で俺たちは同じ方向に揺られる。
「あ……っ！」
俺の手が挟まっていた。ここで過ごしているうちに少し日焼けして黒くなりつつある俺の腕が、アリアの白いワンピースの布地に。
布地と壁にではなく、布地と布地に。それが包んでいるのはふともともとふともも、さらに秘部だ。つまるところ、俺の手がアリアのアソコに押し込まれていたのだ。
ふにっ、と、柔らかさが手に伝わる。
「バッ、バカ！　ど、どこ触って……っ!?　ひぅ……っ！　や……っ」
電車の揺れで緩急をつけるように。何度も何度も形を変える。

どのタイミングで来るかわからない揺れは、俺にその気がなくても不規則な愛撫のようなものになってしまっていた。
「そ、それ、ダメだって……！　て、てぇ、ぬきなさいぃ……っ」
手を抜こうにもアリアがすごい力で太ももを合わせているため俺の手は空間のある方向へしか動かすことができない。
最低2枚の布に隔てられているはずの秘肉、しかし、この世界に来ての経験が、手を押し込んだ時のあそこの感触をしっかりと感じ取っていた。
少し離れた瞬間に腕を抜こうとすれば、
「ふっきゅっ……!?」
タイミングよくまた押し込まれ、それだけでなく、腕を抜こうとしたために押し込むだけでなく擦り上げる形になりアリアの吐息が聞こえる始末だ。
いつの間にか離れろと言っていたアリアは俺の胸に顔を押し付けて、声が漏れないように必死になっていた。
「ゆ、許さな、いから……っ、電車降りたら、覚悟、しなさい……っ！」
耳まで真っ赤にした顔で睨みあげてくるアリア。とっくにズボンを押し上げていた俺の息子がその表情に反応してしまう。
《次は○○駅。次は○○駅》
ようやく目的の駅だ。少し肩の力を抜く。そのため、止まるときのブレーキに対応できなかった。
柔らかい盾に隠されていた、秘部の中で一番硬いところ。度重なる刺激で無防備にも顔をのぞかせていたソコを最後の最後に思いっきり押し込んでしまった。
「ふっきゅうううううううっ……!?」

扉が開き、俺たちは解放された。たくさんの人が押し込まれていたせいか少しかいた汗が、外の風に冷やされる。
意を決してアリアに声をかける。怒ってるのはわかるけど、だった

らなおさら早く謝らければ。放置すれば放置するほど、爆発の威力が大きくなりかねない。そもそもあれは俺が悪いわけだし。

「ア、アリアさん？　ちょ、ちょっと？　どこ行くんだ？」

俺の言葉を無視してスタスタと歩いて行ってしまうアリア。そんなに怒っているということだろうか。アリアだったら電車から出た瞬間、発砲するくらいのことはやってくるもんだと思ってたのに。

これは、どうするのが正解なんだろう。このまま謝り続けるのか、それとも一度黙る――

パチーーーーーーーーン!!!!!

銃声じゃないぞ。見事な平手打ちが俺の頬をとらえた音だ。

平手打ちって、下手すると鼓膜が破れる可能性があるらしいけど大丈夫だよね？　俺の体、空中で一回転して耳がキーンって言ってるんだけど？

平手打ちのあまりの威力に目を白黒させていると、顔を真っ赤にしたアリアが振り返った。

「トイレよ！　バカ!!」

言い放って早足で行ってしまった。

そのあと、アリアに追い掛け回されたのは言うまでもない。

ほっぺに（手のひらの大きさの関係で）小さな紅葉を作った俺は駅から歩くこと十数分、目的の場所に到着した。

この島にはこういった施設はいくつかある。海のど真ん中にあるここはむしろ、大陸よりも逃げにくくなっているからだ。

さらに噂では、この島にはさらに上位の犯罪者を収容している施設

があるらしい。
足取りに迷いがないアリアの後ろに続いて歩みを進めていく。受付の人も、アリアを見慣れているみたいだな。それだけここに来ているってことか。
通された部屋はドラマでよく見るようなところだった。
アクリル板が部屋の中央を真っ二つに分けていて、向こう側には簡素な扉がある。絵に描いたみたいな面会室だな。
しばらく待っていると、一人の女性が現れた。
この女性が『神崎　かなえ』。アリアの母親であると同時に、懲役８６４年の冤罪を着せられている人物。
アリアと、俺たちが助けようとしている人だ。
母親というより、年の離れたお姉さんの感じだ。ラノベの法則に従ってるな。明らかに実年齢と見た目があってない人。特に誰かのお母さんってパターンが多い。
そして実際見ると、この人が懲役８６４年分の犯罪を犯しているとは思えない。
連れてきた看守は後ろに控え、かなえさんは置いてあった椅子に座った。こちらのほうもアリアが席に座る。
今日は定期的に行っている定期報告と合わせて俺たちのことを紹介するらしい。
アリアはわかりやすく俺たちのことを紹介した。
「まぁ……この方たちがアリアのお友達なのね」
「ち、違――わないけど……っ！　その、なんていうか……っ」
「初めまして。アリアの友達をやっています。夜月　翔です」
「ちょっと!?」
さあ乗れ、みんな乗るんだ。このビックウェーブに！　言葉にしなくてもこの意思は通じるはずだ！
「同じく、姫柊　雪菜です。アリアさんにはとてもよくしてもらっています」
「同じく、結城　アスナです。アリアちゃんとは今度お買い物に行こうっていってます」

「み、みんな、もういいから……っ」
「ふふふ、みなさん、初めまして。アリアの母で『神崎　かなえ』と申します。娘がお世話になってるみたいですね」
「あはは。イヤ、ホントに」
　最近は俺たちの家に住み着いてしまっている。女の子ガチャを回してないのに女の子が増えてしまった気分だ。
　当然のように家事その他を丸投げしてくるし。キンジは大変だと思いました。
「んんっ！」
　アリアは咳払いを使い、場の空気を切り替えた。
「ママ。面会の時間が少ないから手短に話すね。みんなとは武偵殺しの３件目、４件目の事件を一緒に解決したの。３件目は自転車に爆弾、４件目はバスだったわ」
　アリアは早口で言っていく。かなえさんの表情が固くなる。
「奴の活動は急激に活発になってきているのよ。もうすぐ尻尾を出すはずだわ……違うわね、尻尾をつかんで見せるわ。だからあたし、狙い通りまずは武偵殺しを捕まえる」
　アリアは席を立ち上がる。
「奴の件だけでも無実を証明すればママの懲役８６４年が一気に７４２年まで減刑されるわ」
　それでもまだ７５０年近くあるのかよ。
　そして１２０年分もどんな罪を重ねたんだ。いったいどんなことやらかしてるんだ、武偵殺し。
「最高裁までの間に、他も全部なんとかするから。ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を全員ここにぶち込んでやるわ」
　激しい怒りを持った目だ。いつもの癇癪のものとはまるで違う。
　思わずこっちまで緊張してしまいそうになったが、さすが母親というべきなのか、かなえさんは落ち着いた様子だ。
　目を閉じてアリアの言葉を飲み込んだかなえさんは、ゆっくりと目を開けてこんなことを言いだした。
「アリア。気持ちは嬉しいけどイ・ウーに挑むのは早いわ。それより

もパートナーは見つかったの？」
「そ、それは……」
かなえさんの話題の切り替え方、武偵殺しのことはほとんど頭にないな。アリアもアリアで、さっきまであんなに意気込んでたのにみるみる小さくなっていく。パートナーについての話題はそのくらいアリアにとっては鬼門だってことだな。
パートナー。アリアの一族は、代々自分の能力をよりよく引き出してくれるパートナーを見つけ、ともに行動することになっている。
ところがアリアは、この性格ゆえにそういった相手を見つけることができず、一族の中でも肩身の狭い思い、もっと言ってしまえば見下されてしまっているのだ。
っと、あれ？　なんでアリアは俺達のことを見てるんですか？
「……いるわ、ここに。みんなは十分に強いの。ほかの連中と違って、私のことも避けないでくれる。この中の誰かがパートナーになってくれれば……っ！」
「アリア」
「ッ!!」
かなえさんの一言で、アリアの口が閉じられる。
「パートナーはそうやって決めるものではないの」
厳しい一言だった。
その言葉を受けたアリアはうつむき、かなえさんも何も言わなくなってしまった。当然、俺達も口は挟まない。というか、挟めない。
面会室が無言になる。
何分間そうしていたんだろうか。腕時計を見た看守が立ち上がって、かなえさんの腕を引っ張った。
「神崎。時間だ」
「やめろッ！ママに乱暴するな！」
アリアはアクリル板をたたいて抗議するがまったく応じることはない。そんな看守は俺と目が合い、
「ひッ!?」
……なんで？　ひどくおびえた表情で後ずさった。人の顔見てそ

の反応はないよ。
看守はかなえさんを急いで放す。俺の顔見ただけでそこまでするのかよ。
「え、と、ありがとうございます、翔さん。でも、そういうことはあまりしないほうがいいですよ？」
「……はい？」
最後の最後に謎な言葉を残したかなえさんは、一礼して部屋を出た。
「……俺、何かしてたか？」
「いえ、特に何もしていなかったと思いますが……」
隣にいた雪菜に聞いてみるが雪菜も同じく首をかしげていた。もしかして、俗にいう殺気的なものを出していたのかと思ったけど違うのか？　そうだとしたら、雪菜とかアスナがわかんないわけないし……。
「まあなんにせよ、翔君のおかげでアリアちゃんのお母さんは乱暴されなかったってことだよね！」
アスナは何とか、場の雰囲気を明るくしようとしている。そういうことに、なるのか？
かなえさんが出て行ってまたテンションが低くなってしまったアリア。
「アリア、今日は帰ろう」
「……ん」
すっかり力の抜けた様子で椅子から立ち上がった。
そのあと俺たちは何とかアリアを元気づけようとしたが無駄だった。気まずくなった俺たちは帰ることにした。今日は俺達の家には帰らず、自分がもともと住んでいたところに帰るらしい。
結局その日、別れて姿が見えなくなるまで、アリアが元気を取り戻すことはなかった。

空の決戦　～蜂蜜の誘惑編～

俺は今、とある場所に来ていた。必要以上にフリフリな衣装を着た女の子に案内され、店内を歩く。行先はこの店の個室だ。

ここには俺の意思で来たわけではない。呼び出されたのだ。

わざわざ高い個室を指定したのも、いろいろと人に聞かれては困る話があるからだろう。こう言った店の個室は、密会するのに便利だからな。監視カメラも緩いところが多いらしいし、その辺も計算に入れているんだろう。

いい加減白状すると、俺を呼び出したのは『峰　理子』だ。理子は原作では武偵殺し。つまり今回の犯人、のはずだ。変なイレギュラーがない限りは。

そんな娘の呼び出し。

どこで知ったのか俺の端末にメールがあった。少し聞きたいことがあるから来てほしいと短く。場所まで指定されてた。

非常に悩んだのだが、俺はこの世界で理子に全くと言っていいほど接点がなかったため、この話を受けることにした。

そもそも、理子は俺のことを調べつくしてるだろうしな。お互いに、文字の上では相手を知り尽くしている状態になっている。

証拠がないために会ってすぐ逮捕はできないが、もしかしたら、俺を消すために呼び出したのかもしれなかったからだ。そうすれば現行犯逮捕ができる。

一つ懸念があるとすればゾンビゲーマーだが、レベルが未知数（エックス）になっていなければ、パラドクスで十分に対応できるはずだ。

連れてこられた扉の前で、ガシャットと拳銃の確認をする。

深呼吸してゆっくりと扉を開けた。

ほんの少し爆弾の警戒もしていたが、扉を開けた瞬間爆発することはなく、本人が部屋の中にいるのを確認したことで、爆弾への警戒を緩める。

俺が入ってきたにもかかわらず、数人掛けのソファーに横になってゲームをしている。

金髪をツーサイドアップに結った、ゆるい天然パーマ。この店の店員ほどではないにしろ制服にはフリルがあしらわれており、短いスカートで足をパタパタしているため、下着がばっちりと見えてしまっている。
部屋には甘ったるい匂いが充満している。見ると匂いの発生源は、加湿器のように水蒸気を発生させているものだった。あれに何かしらを混ぜているのだろう。
テーブルには食べかけのケーキやお菓子が所狭しと並んでいた。
「峰さん？」
俺は少し早くなってきた心臓を抑えながら声をかける。
「え？　あ、来てたんだ！　ゴメンね～、集中してたから気が付かなかったよ～」
ゲームの電源を切ってソファーに座りなおす理子さん。そして自分のすぐ横をポンポンとたたく。ここに座れと言っているんだな。
俺はもちろん対面に座った。あんな近くに行ったら、小さいナイフで簡単にのどを掻っ切られてお陀仏だ。
「あれ～？　そっちに座っちゃうんだ。せっかくいろいろサービスしようと思ったのに」
「や、別に気を使わなくても大丈――――」
「じゃあ、私がそっちに行っちゃお！」
驚くほど軽い身のこなしで、テーブルを飛び越え、俺に飛び込んできた。
完全に不意を突かれる形になった俺は、とっさに銃に手を伸ばし、
「うっ！」
理子とソファーにサンドされる形になった。
しかし、別に攻撃されたわけではない。体はどこも痛くない。それどころか、理子の身長にしては大きなものがこれでもかと押し付けられて、下半身に血液が集まってしまう。
「くふっ！　かわいい反応」
身動き取れずにいると、クスリと笑った理子は俺の横に収まった。スプーンを手に取り、近くにあったケーキを柔らかく救い上げる。

「はいっ、あーん♪」
　そういって俺の口元にケーキを寄せてくる。
「いや、いいって――――」
「彼女さんがいるから遠慮してるの？」
　薬が入っている可能性がある食事には手を付けない。そんな初歩的なことを理由に断ろうとしたところで、またしても理子に遮られた。
「……調べたんだな」
「もっちー。『夜月　翔』君。今は４人の女の子……今は５人かな、と同棲してるでしょ？　若い男女が一つ屋根の下で暮らしてたら、そりゃあ、恋の一つや二つ、三つや四つして当然だよね!!　しかも、男は翔君だけだし。とんだハーレムの王ですなぁ～このこの」
　そういって、理子は俺を小突いてくる。
　まったく冗談になってないのが冗談みたいだ。
「で？　で？　翔君としては誰が一番好みなのかなぁ？」
　理子はハイテンションで、俺たちの個人情報をべらべらしゃべってくる。俺たちが異世界から来た人間だということは口に出さなかったが、もしもの時の切り札に取っておいているのかもしれない。
　それにしてもグイグイくるな。
　お酒、お金、女には気を付けないといけないって授業で習ったけど、俺ぐらいの年頃の男子がこんな美少女に迫られて平静を保っていられるわけない。
　俺だって、この娘が武偵殺しの犯人だとわかっていなかったら、やばかったよ。
「それよりも、用件ってなんだ？」
「もうっ！　せっかちなんだなぁ、翔君は。早い男の子は嫌われちゃうぞ！」
　今度こそ話を進めようとするが、ゆるりと躱されてしまう。しかも下ネタで。
「えっとね、今日、翔君に来てもらったのは、理子のことを売り込んでおこうと思ったからなんだよ」

「売り込む？」
「そう。理子は探偵科（インケスタ）だからね。しかもランクはAだし。お買い得だと思うよ？」
「なんで俺に？」
　わかりきっている質問をする。
「もちろん、翔君が持ってる仮面ライダーに興味があるからだよ」
　だろうな。今日の目的は仮面ライダーについての情報を聞き出すことだったのね。
「あんなタイプの装備なんて見たことなかったからね。この前のバスジャックの時もいたでしょ？　報告書、読んだよ。ほかの人に手を出される前に理子が唾つけてとこっかなーなんて」
　ぬけぬけと言ってくれる。
　だったら俺もきっぱりと言ってやろう。
「残念だけど今は間に合ってるから。それと、この武装についても言えることは何もないぞ」
　そっぽを向いてやる。もちろん意識は全く緩めない。もし理子が攻撃しようものなら、不可視の銃弾（インヴィジビレ）で反撃するつもりだ。
　しかし、反撃できなかった。
　あまりにも無防備に、意識を張り巡らせていた俺の気が、一瞬緩んだ時に、押し倒してきたからだ。
　本日二度目。理子とソファーでのサンド状態。
　俺は男としてはちびだがそれ以上にちっこい理子は俺の上に乗っかり、体を密着させてきた。
　少しずつ、下から理子の温かさが制服越しに伝わってくる。
　胸元が少し開けられている理子の制服からはちっこい体には不釣り合いなほどの大きな胸が谷間を作っているのが見える。
　男の性として思わず目が奪われてしまい、慌てて目線を違う方向に向ける。と、理子の顔しか見えなかった。
　そのくらい近くに理子の顔があった。
　近いだけじゃなく、緩いパーマがかかった髪の毛が外の空間を隔てている。手もいつの間にか顔にやさしく添えられている。それほど

力が入っているわけではないため少し暴れれば抜け出せそうだが、そうはさせてくれないだろう。
「ねえ、どうしたら話してくれるの？」
「や、だから、話さないって――――」
「……ん」
「……っ」
鼻先をなめられた。
それだけで、すっかりがちがちになってしまう。
理子の髪の毛からバニラのような甘ったるいにおいがして、それが部屋の甘いにおいとまじりあいくらくらしてくる。
すっかり下腹部に血液が集まり、苦しさを訴えてくる。そんなことを知ってか、理子は意味深に腰を動かしてくる。
初めのころのおバカキャラはすでに影も形もない。まさに２つの顔を持つ女だ。
「ねえ、どうしたら、話して、くれるの？」
軽い吐息でもはっきりと感じられる距離で、見つめあいながら妖しく問われる。
そういって、少しずつ顔が近づけられていく。唇が触れ――――
そんな時。
ポケットに入っているものが音を鳴らした。
その音に反応してし越し身を固くした理子。そのすきに理子の拘束を何とか脱出し、電話に出た。
《あ、翔君？　私だけど》
《アスナ？　どうかしたのか？》
《うん。アリアちゃんなんだけど、今日の夕方の飛行機で少し実家に戻ることになったんだって》
な、なんだって!?
《帰ってくるのはいつになるかわからない、ってメールで来たんだけど……翔君？》
《ゴメン、かけなおす》
そういって俺は通話を終了する。

「悪い、用事ができた。今日のところはこれで帰ることにする」
携帯の音に救われた。
あのままだったら……その、うん。
一瞬、このまま理子のことを見張ってることも考えたけど、もしものことがあるしやっぱり空港にいるはずのアリアと合流したほうがいいな。
空港に行くとするか。
……すべて終わった後に思い返せば、俺は何で、この時みんなに応援を頼まなかったんだろうか。焦ってたんだろうか。ま、後になって後悔することになるけど。

空港に着いた。が、ここで問題が発生した。
アリアが乗っている飛行機に乗ることができないのだ。
チケットは完売しているし、滑走路に飛び出すこともできない。警備員に止められてしまったからだ。
武偵証をみせてアリアが乗っている飛行機だけでも飛ばないようにしてもらおうとも思ったが、それも無理だった。なんでも上に確認を取らないといけないとかなんとか。
通常の便なら捜査のために欠便にしてもらう（もちろん間違いだった場合の費用は払わなければならない）ことはできるがアリアのは、いろいろとお偉方の圧力がかかったものでこれが通じないとか。
パラドクスで強行突破しようものなら、この空港のすべてを敵に回

すことになる。そんなのを相手にしていたら、飛行機は飛び立ってしまいタイムオーバーだ。
悩みぬいた末に、すでに検査の終わった荷物とともにベルトコンベアーでこっそりと進むことにした。
その為に人のいないところで変身し、縮小化のエナジーアイテムを使った。
２重、３重の検知器があったが、難なく躱し、広いところに出た。貨物置場のようだ。
しかしその場所は、どう見ても普通の状態ではなかった。
異様に気温が低く、ところどころに氷も張っている。そして空港職員が誰一人として見当たらない。
不審に思った俺は伸縮化を解き、あたりを見回す。と、どこからともなくナイフが飛来した。
パラドクスにこの程度の刃物は通用しない。左胸にあたったが痛みはなかった。そこが凍り付いたことを除けば。
「ふむ。やはりこの程度では意味がないようだな」
そこにはありえない人物がいた。もっと後に、少なくとも、今回登場するはずのない人物。
「貴様が夜月　翔か」
「……そういうお前は　魔剣（デュランダル）　か」
西洋風の甲冑に身を包み、手には西洋剣。銀髪を結い上げ、体の周りにはダイアモンドダストが舞っている。
「よく調べているな、と言いたいところだが、その名前で呼ぶのはやめてもらおうか」
不機嫌そうに目を細め、
「私はジャンヌ・ダルク――ジャンヌ・ダルク３０世だ」
魔剣（デュランダル）改めジャンヌは、サファイア色の瞳を細めて誇らしげに言う。
「お前が出てくるなんて予想外だったよ。ここで都合よく待ち伏せしてることもな」
「貴様が馬鹿正直に滑走路に向かう男なら、私も楽ができた。いくら私でもこの空港の警備を相手取るのは面倒だからな。正面突破がで

きない場合どの位置を使うかを考えたまでだ」
そういってジャンヌは俺に剣を向けてくる。初めから臨戦態勢。話し合いの余地も時間もない。
「武偵殺しに頼まれたか？」
「ああ。まともに戦うには奴には荷が重いらしいから、な！」
ジャンヌは一気に間合いを詰め、切りかかってきた。切り口は滑らかで、明らかに剣の大きさよりも大きい。おまけに氷が張っている。
ただの剣ではない。食らったらパラドクスでもダメージを受けるな。
どうパズルを――
「……いや、違うな」
今使うべきなのはパーフェクトパズルではない。
俺はダイヤルを１８０度回転させる。そうすることで、ガシャットギアデュアルのもう一つのゲームがスタートする。
《ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＦＩＧＨＴＥＲ》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｒｏｕｎｄ　１　Ｒｏｃｋ　＆　Ｆｉｒｅ！》
「変身！」
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｈｉｔ！　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＦＩＧＨＴＥＲ！》
いつもとは違うパラドクスに変身する。
肩にあったパーツを手に持ち、顔はいつもと反転している。青が基調だったボディは燃え上がるような赤になっていた。
仮面ライダーパラドクス・ファイターゲーマー　レベル５０だ。
「武偵殺しの前哨戦だ」
俺は燃える拳を構えながらそう宣言した。

空の決戦　～2つの激闘編～

アリアはファーストクラスのフカフカの座席に座り、キャビンアテンダントが持ってきた飲み物に口をつける。その表情は憂鬱そうだ。

離陸まであと少し。ロンドンの武偵局からの突然の帰国命令におかしいとは思いつつも従う以外の選択肢はない。

それ以上に、みんなと合わせる顔がない。

（私はみんなのことを、そんな目で見てたりなんて……）

こんな性格だったせいで、今まで付き合ってきた人たちは仕事の関係のみ。そんな中、初めて自分のことを受け入れてくれたみんな。自分はそれに甘えていたんだろうか、焦っていたんだろうか。

パートナーは単純な仕事上の相棒ではないことぐらいわかっていた。でも、それが何なのかわからない。

初めてできた友達といえる人たち。そんな人たちにどう思われているのか、考えるだけでも恐ろしかった。

かなえと面会してから、そのことばかりが頭の中を回って考えがまとまらない。

今は一度ここを離れて考えをまとめたい。

寝不足だったこともあって、だんだん瞼が重くなっていく。

少しだけ眠ろう。そう考えたアリアは、睡魔に身を委ねていった。

「まったく。お前はもう少し思慮深いと思っていたんだがな」

「……」

俺は何も言えない。

「まさかとは思うが、私が氷を使うから炎で対抗しよう、とでも思った

んじゃないだろうな」
俺は何も言い返せない。
ここで一つ質問しよう。
部屋の中で火が出た場合どうなるだろうか。
ジリリリリリリ!!!
答えは火災報知器が鳴る、だ。
けたましい音が鳴り響く。たぶん空港の管制室は今頃大騒ぎになっているだろう。すぐにここの様子を見に人がやってくるはずだ。
火遊びはいけません。そんな子供に言い聞かせる文言が俺の頭の中を埋め尽くしていた。何も考えないで拳から放射した炎が燃え移り、あっという間に火事になってしまった。
テレビでは都合よく外に出ているが、実際に室内で使ってしまうとこうなってしまうのだ。
先制攻撃だ！　と、調子に乗って攻撃しなければよかった。後悔している。これでこっそりここまで来たのが無駄になってしまった。
すぐにジャンヌを倒してしまわないと、警備員に2人まとめて取り押さえられてしまう。
最悪、罪を擦り付けられてジャンヌには逃げられるまである。や、この火事の原因は俺だけどさ。
炎の拳と氷の剣がぶつかり合う。火花を散らし、弾かれる。
今戦っているこの娘について、簡単におさらいしておこう。彼女はジャンヌ・ダルク30世。『緋弾のアリア』に登場するキャラクターの一人で、氷の魔術と剣術を主に使用する魔女だ。
一応策をめぐらせる智将として登場したんだけど……そこは他作品の例に漏れず、だんだんとポンコツぶりが発揮されるようになってしまっている。悲しい宿命だ。
それを考慮して考えると、ジャンヌは原作よりも強くなってるな。剣が振るわれるだけで周囲が凍り付くし、身体能力も軽装とはいえ鎧を着た少女のものとは思えない。
身体能力を上げる魔法か魔術、もしくはその手の科学薬品を服用しているかだ。

氷の魔術も使いすぎると割とすぐに燃料切れになると思ったんだけど、まったく気にしないで使ってくる。
でも、攻撃に少し焦りが見える。
策士、つまり綿密に考えて行動する者は、予想外の事態に弱い。ジャンヌもその例に漏れない。
壁を蹴り、天井を蹴り、３次元的に動き回るジャンヌだが、
「ふんッ!!」
「ッ!!」
俺はそれについていく。
そのたびに火花が散る。ジャンヌには悪いが、一撃のパワーは圧倒的に俺が勝っている。ノックアウトファイターの打撃を受けても全く刃こぼれしない剣はすごいが、俺の打撃を捌くので彼女は精いっぱいだ。
「は！」
時々飛ばしてくる氷の破片も、
「よっと」
腕を軽く振るだけで、簡単に溶けてなくなる。
火災報知機が鳴ったのは計算外だったが、氷に炎を使うのは間違った選択ではなかった。むしろ、火災報知機が鳴ってくれたおかげでジャンヌを焦らせ、攻撃を単調にできたのかもしれない。
「貴様、私をなめているのか？」
「何？」
「さっきから、私ではなく剣ばかりを狙っているだろう。女は殴れない、とでも言うつもりか？」
や、単純にパラドクスのパワーで人に攻撃したら殺しかねないからなんだけど。武偵法でも殺人は禁じられてるし。
メインアームがなくなれば、手加減した攻撃も当てやすくなるしな。今は隙がなさ過ぎてそれができない。
「私を甘く見るなよ」
ジャンヌの雰囲気が変わる。何かを仕掛けてくるつもりだ。室温がどんどん下がっていく。俺の周り以外は、水もないのに薄い氷が張

るほどだ。
俺もガシャットを操作する。
「オルレアンの氷花!!」
《キメワザ！　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　Ｃｒｉｔｉｃａｌ　Ｓｍａｓｈ！》
ジャンヌは地面に剣を突き刺す。そこから、鋭利で巨大な氷片がこれでもかと生まれ、俺に迫ってくる。
部屋を覆いつくすほどのそれはまるで雪崩のようだ。
対する俺は燃えるこぶしで迎え撃つ。この距離では拳自体は当たらないが、降りぬいた拳から放射された火炎放射のような炎は届く。
炎は氷の波を飲み込んだだけではなく、ジャンヌにまで及んだ。直撃すれば骨も残らないかもしれないが、ジャンヌの技でだいぶ威力が弱まっていた。さらに、鎧自体に何かしらの魔術がかかっているのか、目立った外傷はなかった。
氷点下まで下がっていた室温が一気にサウナを超える。
壁をもぶち抜いて吹き飛ばされたジャンヌは、完全に気絶していた。
《ＫＯ！》
俺の勝利だ。

「な、なに!?」
アリアは何かを破裂させたような音に飛び起きる。

これはよく聞きなれた音だった。寝起きの頭でもすぐにわかり、また、一気に覚醒を促す音だ。
つまり、銃声。
急いで廊下に出てみると、数名の男が倒れていた。この機はそれなりの身分の人物を載せるもので、ファーストクラスはちょっとした個室になっている。
その個室にいるのはもちろんそれなりの重鎮であり、ボディーガードも警護に当たっている。
そんな彼らをいともたやすく無効化した。ただものではない。
「みんな部屋に戻ってドアを閉めて！　絶対に外に出ないで！」
ドアから少しだけ顔を出して様子をうかがっていた老人たちを一喝し、自分はスカートの中に手を入れ太ももものホルスターから拳銃を抜く。
銃を見た男たちは慌てて指示に従っていく。
機内アナウンスから、意味の分からない音が流れ始める。しかし、アリアにはその意味が理解できた。
「和文モールスね」
《オイデ　オイデ　イ・ウー　ハ　テンゴク　ダヨ　オイデ　オイデ　ワタシ　ハ　イッカイノ　バー　ニ　イルヨ　ワタシ　ハ　ブテイゴロシ　ダヨ》
「上等よ」
『イ・ウー』はかなえに冤罪を着せた組織。武偵殺しもそこに所属している。まさか自分のほうから来てくれるなんて思いもよらなかった。
「風穴あけてやるわ」

ドアを開けて、バーに突入した。
武偵高校の制服を着た女性がカウンター席に座っていた。手にはウィスキーが入っているだろうグラスを持ってはいるが、その背格好は成人とは思えない。
アリアと同じくらいの身長に緩いパーマがかかった金髪の少女だ。
「今回も綺麗に引っ掛かってくれやがりましたねぇ」
その顔、声に覚えがあった。
「あんた、峰　理子ね」
「Ｂｏｎ　Ｓｏｉｒ。こんばんは」
自分と同じクラスの騒がしい生徒。前に一度、翔の仮面ライダーについて聞いてきたことを思い出す。
「あんたが武偵殺しだったのね！」
アリアは銃を突きつけるが、理子は楽しそうに笑って椅子を降りる。
「この日を待っていたよ、オルメス」
「え!?」
オルメス。この名前を知っている人物はこの島にはいない。データ上でも簡単に調べられないように厳重にプロテクトがかけられている。
「あんた、一体何者なの？」
アリア質問に理子はさらに笑みを深めて答える。
「理子・峰・リュパン４世。それが理子の本当の名前」
「リュパン!?」
アルセーヌ・リュパンとはフランスの大怪盗の名前だ。そして、アリアの祖先とは因縁がある男でもある。
「でも家の人間はみんな理子を【理子】とは呼んでくれなかった。お母さまがつけてくれたこのかわいい名前を」
理子は壊れたように続ける。
「４世、４世、４世様ぁ、ってね。どいつもこいつも……使用人まで理子をそう呼んでたんだよ。ひっどいよねぇ～」
「そ、それがどうしたっていうのよ。４世の何が悪いっていうのよ

……」
　理子は歩くのをやめて立ち止まる。
「悪いに決まってんだろ!!　あたしは数字か!?　あたしはただのＤＮＡかよ!?」
「ッ!?」
　突然豹変した理子はわめき散らす。その様子はこちらを油断させるためのものではない。心の底からの叫び声だ。
「あたしは理子だ!!　数字じゃない!!　どいつもこいつもよォ!!
……曾お爺さまを越えなければ、あたしは一生あたしじゃない。一生、『リュパンの曾孫』として扱われる!!」
　理子の銃を握る手が強くなる。
「だからイ・ウーに入って力を得た！　この力であたしはもぎ取るんだ！　あたしを!!」
　理子の目には強い殺意があった。アリアを殺すことに何のためらいもない。
「１００年前、曾お爺さま同士の対決は引き分けだった。つまり、オルメス４世を倒せばあたしは曾お爺さまを越えたことを証明できる」
　戦いの火蓋が、
「今日がお前の命日だ、オルメス!!」
　切って落とされた。
「ッ!?」
　２人は同時に前に出る。体格差はほとんどない。
「アリア、二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ?」
「ッ！」
　理子はスカートの中から二丁目の拳銃を取り出す。
　アリアと理子の腕が絡み合う。互いの銃口の先には獲物の姿はなく、放たれた弾は床に火花を散らした。
　防弾製の服が広く広まったこの世界、拳銃はただ遠くから撃つだけの武器ではなくなった。近接格闘術と組み合わせて使う、近接用の武器なのだ。その技能は『ガン＝カタ』と呼ばれる。
　ほぼほぼゼロ距離で放たれ続ける４丁の拳銃。装弾数すべてを打

ち尽くしても決定打にはならない。高度なガン＝カタの末、２人は膠着状態に陥る。
　苦しいのはアリア。腕は互角だが、アリアの持ち銃のガバメントは装弾数が劣るからだ。
「くふふ、やっぱり夜月　翔につばつけといたのは正解だったみたいだな」
「え？　な、何でここで翔の名前が出てくるのよ!?」
「あいつとパートナーを組まれたら厄介だなって思ったからな。ここには来れないようにしておいただけだ。下手に排除しようとすると、どんな反撃を食らうかわかったもんじゃないからな」
　理子が翔を殺そうとしなかった理由はそこにある。自分が武偵殺しだと知られていない（理子はそう思っている）なら、下手に刺激するよりは自分の色香で骨抜きにしてしまおうという訳だ。
　しかしアリアは、その中の一つの単語に反応した。
「……あいつは、あいつらは、パートナーじゃないわ」
「えー？　でもでもぉ、チャリジャックからずっと仲良かったじゃん。てっきりパートナー決めたんだと思ったんだけど。くふっ、もしかしてフラれたの？」
「そんなんじゃない!!」
　ふざけた口調のあおりに耐え切れず均衡を破るアリア。
　怒りで注意力が落ちたところに銃弾を撃ち込まれる。
「うッ!!」
　足が止まったところを思いきり蹴り飛ばされてしまう。
「あはははははははッ!!」
　理子は気が狂ったように笑う。狙いは頭だ。
「このッ!!」
　アリアは打ち尽くした銃を投げ捨て、
「なめんじゃ――」
　背中から小太刀を抜いた
「――ないわよ!!」
「なッ!?」

理子は驚愕する。
アリアは理子を一瞬にして床に押さえつけたのだ。
「そこまでよ!!」
首にはハサミのように小太刀がクロスしている。少しでも首を動かせば大変なことになるだろう。
「あはっ、アリアは甘いなぁ」
しかし理子は、そんなことお構いなしに笑う。
「な、何よ!」
追い詰められているはずの理子が笑いだし、アリアは警戒を強める。
「こういうことよ」
突然後ろから声がかけられた瞬間、首に何かを刺された。どんどん体の力が抜けていき、倒れこんでしまう。
「あんたは……!」
そこにいたのはイ・ウーのメンバー、夾竹桃だった。手には空になった注射器がある。あれで何らかの薬品を注入されたのだ。
「ど、どうして……!?」
夾竹桃はアリアの戦妹アミカである間宮　あかりが捜査している人物。
「まったく、勝ちを確信したからって油断するからそうなるのよ」
「ごめんね～、キョーちゃん。助かった～」
「これが終わったら、間宮の秘毒を手に入れるのを手伝ってもらうわよ」
「わかってるって」
アリアは自分の甘さを嘆いた。相手が一人だと決めつけていたことを。
「くふふふ、これで理子の勝ちだね」
「あんたは、自分のほうが強いって、証明したいんじゃないの？　それなのに仲間と2人がかりなんて……っ！」
「えー？　強い味方をそろえるのも実力のうちだよ？　実際、私のお父様にも何人か仲間がいたみたいだし。そっちのほうこそ、パート

ナーはどうしたのかなぁ」
理子を挑発したつもりが逆になってしまった。理子は右手に持った銃をアリアに押し付ける。
「さよならだね、アリア」
今度こそ絶体絶命。体を動かすことができなくては避けることも反撃することもできない。
（こんなところで死ぬわけにはいかないのよ……っ！）
歯を食いしばっても体の反応は鈍い。頭の命令が全く伝わっていない。
（誰か……っ！）
弾丸は。

《高速化》

外れた。
パラドクスパズルゲーマーになった翔がアリアを抱きかかえて回避したからだ。
「し、翔……？」
「待たせた、アリア」

ぎりぎり間に合ったな。
あの後、駆けつけてきた警備員に武偵証を見せ、ジャンヌを預けた。そして、こうなってしまっては仕方がないと、警備員を振り切り《液状化》のエナジーアイテムで何とか機内へ侵入したという訳だ。
隙間を探すのと、どんどんスピードを上げる飛行機に振り落とされないようにしていて余計に時間がかかってしまった。
でも、間に合った。間に合ったのだ。
ジャンヌに続いて夾竹桃がいることには驚いたが、パラドクスなら大丈夫ろう。ジャンヌとの戦闘で学んだように攻撃するときは周りのことも考えて。
ここは飛行機の中だ。小技を使ってどうにかする。
「――――!?」
体に異変が起こった。
力が入りづらくなっている。
「な、何？」
「あ、そっか。薬、効いてきたんだね？」
薬、だと？
「理子と会った部屋って、あま～い匂いがしてたでしょ？　それにちょっと混ぜておいたんだよね～。ジャンヌと戦ってる時にでも効き始めればいいって思ってたんだけど、まさかこのタイミングなんてね」
理子は苦しい顔から一転する。
「理子、油断するのはやめなさい。体内に入ったのはごく少量。そんなに時間はないわよ」
「わかってるって」
「ッチ!!」
《透明化》
俺は撤退を選択。透明になってその場から逃げ出した。

無人の客室にたどり着いた時には、這って歩くことしかできなくなっていた。
「うっ!!」
同時に痛みで変身が解除される。ガシャットギアデュアルの副作用のせいだ。
「ちょ、ちょっと、大丈夫なの？」
俺と同じく体に力が入らない様子のアリア。助けに来たはずが２人ともやられてしまった。
まずいな、本当にまずい。何より、このことを知っているのが俺だけというのがマジでまずい。なんで連絡しないで来ちゃったんだ。
「それよりもアリアの毒だ。体調に変化は？」
「力が入らないだけよ。特に変化はないわ。殺すつもりなら、即死の毒を使ってるだろうし。たぶん理子が直接殺すためだと思う。あいつ、そのことにこだわってたから」
「なるほどね」
理子の目的は、アリアを倒して自由になることだったな。
正直、それについては手助けしたいが、今回は別だ。
「あいつらは捕まえる」
「もちろんよ」
でもそのためにはどうすればいい？　２人そろって満足に動けない。味方の増援も期待できない。俺たちは相手を殺さず無力化したいのに相手は殺す気で向かってくる。
不利な条件しかない。
それでも、やるしかない。
理子がここを見つけるまで時間はないだろう。
それまでに、２人を倒す、覚悟を決めなければ――
「あ、れ？」
「し、翔!?」
俺の喉を何かが貫いていた。
左手首に巻いた腕時計型端末から飛び出た何かだ。

それは、『矢』だった。

空の決戦　～スタンド編～

「バッドエンドの時間ですよ～」
理子と夾竹桃が扉を開けて部屋の中へ入ってくる。
俺とアリアは扉から離れたところに一塊になっていた。そもそも薬のせいでまともに動けないんだけどな。
俺のほうは夾竹桃が言った通り少量だったためか、何とか立てる程度には回復している。それでも2本足で立つのも苦労するが。
それでも、俺には自分が負けるというヴィジョンが見えなかった。相手を殺して終わらせるという終わらせ方は、法的にも心理的にも選べない。
殺しに来ている相手を、半身不随の状態で、生かして行動不能にする。
「一時はどうなるかと思ったけど、これで終わりだな。オルメス、夜月翔」
「理子……っ！　……ねえ、あんた、大丈夫なの？　喉、貫通してたのよ？」
アリアは犬歯を見せて理子を威嚇しながら、俺を心配するという器用なことをやってくれる。
「大丈夫だ。傷口はもうないだろ？」
「……なんでふさがったのよ。おかしいんじゃないの？　あんたの体」
ひどいことを言っているが、俺の心は穏やかだ。だってさっきまでは涙目で心配してくれてたからね。全然悲しくない。
俺は腕を動かし――
「動かないで」
夾竹桃が何かをした。俺の腕はそれ以上動かなくなる。
よく見ると、極細の糸が巻き付いている。
「ＴＮＫ（ツインテッドナノケブラー）ワイヤーか」
「そうよ。防弾制服にも使われている特殊合成繊維。人の力じゃ、それを引きちぎるのは不可能よ」

確かに動かせない。体にも巻き付いているせいで俺は空間に固定されてしまっている状態だ。
「じゃあね、２人とも」
理子は引き金を引いた。
理子は勝利を確信していた。あれほど油断するなと言っていた夾竹桃も。
そしてアリアも何かを叫んでいる。
この状況から逆転できると思える奴はいない。
だからこそ見逃してしまったんだろう。

俺の爪が『回転』していることを。

キンッ!!!

銃弾がはじかれて、逸らされた。
俺が2番目に手に入れた能力の一つ、銃弾撃ち（ビリヤード）だ。
しかし、俺は今拳銃を握っていない。なら、弾丸はどこから出したのか。
「な、なんだ……？」
「……え？」
「何が……？」
目の前で起こったことが理解できないのか、3人は同じような反応をする。
確信していた勝利が手に入らず、覚悟していた敗北が訪れないなら、それも仕方がない。
夾竹桃の拘束は普通の人なら打つ手なしになる。だが俺は違う。指先さえ自由に動かせれば十分だ。
俺は、『爪』を飛ばしたから。
スタンド使いではない3人には見えないし、わからないんだろう。
俺にはしっかりとわかる。俺の背後に今手に入れたスタンドの像（ヴィジョン）がいることが。
何度撃っても理子の銃弾は同じように跳ね返される。
回転している爪で銃弾を不用意に切断してしまわないよう、爪の平らな部分を充てるように。
それを繰り返せば、理子は何が起こっているのか理解する。
「まさかお前……ッ、爪を飛ばしているのかッ!!」
「ああ、そうだ。だがこれはもう『爪』を超えた『牙』だ　。こいつの名前は『牙（タスク）』！」

スタンド　牙（タスク）
『ジョジョの奇妙な冒険』の第7部『スティール・ボール・ラン』主人公、ジョニィ・ジョースターのスタンド。
本体の爪を回転させ、物を切り裂いたり、弾丸のように射出したりすることができるようになる。
射出した際の射程は１０メートルほど。
スタンドの像（ヴィジョン）は豚の妖精のような姿をしている。

俺の新しい力。俺を選んでくれたスタンドは牙（タスク）だった。
そう宣言すると、自分に当たらないようにワイヤーの拘束を爪で切り裂く。自由になった俺は両手を2人に向ける。
「これで形勢逆転だな。動くなよ、理子、夾竹桃。俺は今、１０の銃口をお前らに向けている」
「あ、ありえない……そんな能力を隠してたなんて……っ！」
理子は後ずさる。知らなくても無理はない。この力は、今手に入れたからな。それにこの力があっても、単体では打ち合いをすることはできない。爪の切断力が高すぎて人体には直接当てられないから、キンジの銃技があればこそだ。
「2人ともおとなしく捕まれ。怪我したくなかったらな」
「ははは、翔君は優しいねぇ……それが命取りになるけど、ね」
理子のスカートの中から、黒塗りの缶のようなものが、カツンと音を立て床へと落ちた。瞬間、その缶がすさまじい光を発する。
フラッシュグレネードか!!
目をつぶされたせいで動けなくなってしまう。牙（タスク）も撃てない。飛行機の壁に切れ込みを作りたくないからな。
「じゃ～ね～」
理子と夾竹桃はその隙に逃げ出したようだ。真っ白になっていた視界が元に戻って時には2人の姿はそこになかった。
体の力は……十分元に戻ってる!!

「アリア！　待ってろ！」
「え!?　ちょっと!?」
俺は立ち上がって2人を追いかけた。

理子と夾竹桃がいたのはアリアを助けたバーのような場所だった。
夾竹桃は何かリュックを背負っている。あれは多分パラシュート。
爆弾で壁に穴をあけてそこから飛び降りるつもりなんだ。
理子のほうは何も背負ってないが、確かあの改造制服はパラシュートにもなったはず。
俺は2人に向けて拳銃を構える。ここでは威力の高すぎる牙（タスク）よりは拳銃のほうがいいと思ったからだ。
俺の姿をとらえた理子の顔は、苦虫をかんだように歪んでいた。
「ホントになんなんだよ、お前は……ッ!!」
理子は憎しみのこもった声だ。
「お前のせいで、計画全部めちゃくちゃだよ」
「武偵殺しなんてするほうが悪いだろ」
「……お行儀よくしてたら、理子は一生自由なんて得られないんだよ……ッ!!」
絞り出すような声だ。
『お行儀よくしてたら、理子は一生自由なんて得られない』か。そうだな。だって理子は……
「ブラド、か……」
「え？」
思わず口から出てしまった言葉に2人が反応する。
「なぜその名前を知っているのかしら？　思い付きで口にできるものではないと思うけど？」
「……俺も、ただ受け身でいたわけじゃないってことだ」

夾竹桃の問いに目をそらす。
ブラド。
こいつも緋弾のアリアの登場人物であり、不死身の吸血鬼。そして、とある理由で理子を幼少期から監禁してきたヤツだ。
このまま過ごしていくのなら、必ず戦うことになる強敵だ。正直、この世界の影響でどうなっているのかがまるで想像できない。
各作品の吸血鬼の要素が混じりあって、間違いなく強くなっているってことだけはわかるけど。
理子はブラドから自由になるためにある約束をした。すなわち、アリアを倒して初代アルセーヌ・リュパンを超えたと証明すること。
だからこそ、理子はあんなにも必死になっていたのだ。
「だったらわかるだろ。わたしは諦めない。絶対にアリアを殺す。捕まって刑務所にぶち込まれても、絶対にあきらめない!!」
「ブラドを倒すって考えはないのか？」
「は？」
俺の言った事に２人は目を丸くする。
「アリアのお母さんの冤罪を晴らすにはイ・ウーのブラドと戦うことは避けられない。俺は貢物を送って頭を下げるつもりはない。あいつが力尽きて倒れている横で、きっちり勝利のＶサインをするつもりだ」
「あ、あなたは、自分が何を言っているのかわかっているの？　単純な強さだけじゃない。この島で大きな権力を持っている存在に牙をむくってことなのよ!?」
「俺は一度『やる』って言ったんだ。二度、同じ事を言わせないでくれよ」
顔を合わせてから一番の大声を上げる夾竹桃。そんな彼女にまっすぐ言い返す。
スタンドの語源は『困難に立ち向かう（Ｓｔａｎｄ　ｕｐ　ｔｏ）』。その力が目覚めたからには、俺も覚悟を決める必要がある。
前の覚悟はこの世界で出会った人を幸せにするという漠然としたもの。今度の覚悟は襲い来る敵と戦う覚悟だ。

「それで、どうする？」
「……どうするって？」
「お利口にしていても自由になれないってのは別にいい。でもなぁ、手を出す相手が違ってるんじゃあないのか？　ブラドの言うとおりにアリアを殺したとして、それはブラドに監禁されているのと何が違う？　結局、ブラドに踊らされてるだけなんだよ」
　言ってしまうと、ブラドは理子がアリアに勝ったとしても、自由にする気なんてこれっぽっちもない。ブラドにとって、下等生物の人間との約束なんて守るに値しないのだ。
「ブラドは俺が倒す。その結果、理子は自由になれるだろう。でも、それだけじゃあ、ただの『与えられた自由』だ。そうならないために、理子の意思が聞きたい。立ち向かう意思を」
「り、理子は……い……いやだよ……もう、いやだよ……！」
　目から大粒の涙を流し、その場にへたり込む。
「……自由に、なりたいよ……！」
　理子も、心のどこかでは気が付いていたんだろう。でも、目の前に吊るされているものが絶望だったとしても、縋るしかなかったんだ。
「あら、私はまだ捕まるつもりはないのだけれど？」
「空気、読んでくれません？」
「冗談よ。はぁ……あなたがここに来たってことはジャンヌも捕まってしまったんでしょうし、私一人であなたの相手が務まるとは思えないもの。おとなしくするわ」
　夾竹桃は泣きじゃくる理子を支えながら、バーのカウンター席に腰かけた。
　じゃねーや。アリアの回収に行かないと。
　……この２人、もう逃げないよな？　や、あれだけ偉そうなこと言った手前、逃げられるとスゲーダサいんだけど。
「おや、おや、どうやらわたくしの出番はなくなってしまったようですわね」
　突然の第三者の声。
　影の中から染み出すように現れたのは、

「狂三!?　なんでここに!?」
　俺はここに来ることを誰にも伝えていなかった。もちろん狂三にも。
「わたくしはわたくしで、今回のことについていろいろ調べていたんですのよ。特に理子さんのことを中心に。まあ、勘で調べ始めた上に、調べても特に気になる情報は出てきませんでしたけど」
「多分、ブラドが情報操作してるんだ。あいつこの島ではかなり力があるから、そういうことを隠蔽するのも簡単だろ」
「だったらなんで、夜月　翔は知っていたのかしら……？」
　3人の視線が俺に突き刺さる。原作知識です、とはとても言えない。もう言ってしまったほうがいいんだろうか。
「そ、それで、狂三はこの飛行機に乗り込んだわけだ」
「露骨に話をそらさせましたが……そうですわ。完全に密航で、帰ってくる方法もないのでわたくしは分身体ですけれど」
「……刻々帝（ザフキエル）かぁ」
「ふふふ、そろそろ補給、お願いいたしますわ」
　刻々帝（ザフキエル）の八の弾（ヘット）の能力『自身の過去の再現体を出現させる』の力を使ったんだな。
　それにしても補給、補給か。考えておかなければ……。
「んじゃ、アリア回収してくるから」
　それから俺たちは眠らされていた操縦士をたたき起こし、離陸したはずの空港に逆戻りした。
　こうして事件は終わりを告げ――――

「「何か言うことはありますか？」」
「いえ、特にありません」
――――――ませんでした。
ほうれんそう（報告・連絡・相談）を怠った罰として床に正座している。
ジョジョ風に終わらせたかった。最後はラノベのテンプレになるんですね。
激怒しているのは雪菜とアスナ。事件説明やなんやらでその日は帰れなかったから、この反応は当然だけどさ。家に帰るまで電話の一本も入れなかった俺も大概だ。
クロは怒っているというより、あきれている。
「お兄ちゃんもすごいよねぇ。一つの事件で女の子3人もひっかけてくるなんてさ」
「俺も予想外だったよ」
ジャンヌと夾竹桃がいたことが。
あのあと3人ともかなえさんの裁判で証言してくれることを約束してくれた。一気に3人も証人が増えたこともあって、アリアはしばらくそっちの方面で忙しくなるらしい。
クロのおかげでみんながくすくす笑い始める。俺が女の子をひっかけているって発言には誰も突っ込まないけどな。
そんな中、一人暗かったアリアが顔を上げた。
「あ、あの……翔。助けに来てくれたのはうれしかったけど、その……パートナーのことで翔と、みんなに謝らないと、いけなくて……」
ああ、かなえさんのことね。この話はその場にいなかった娘とも共有してある。
その時出た答えは一緒だった。
「や、パートナーでもそうじゃなくても助けるって決めてるから。気にしなくていい」
「そうですよ」

「そーそー」
「うん、そうだね」
「深く考える必要はありませんわ」
「ぁ……うん、ありがと……」
　アリアは深呼吸。
「それより！　あんたは独断専行しすぎ!!　今後は最低でもツーマンセル、チームで行動するようにしなさい!!」
「あ、はい」
　アリアの剣幕に圧倒されつつも首を縦に振る。テンションの乱高下が激しいですよ？　疲れませんか？
「そのほうが、いざという時も安心ですものね」
「狂三、やめなさい」
　いざってなんだ、いざって。
「それに、あれだよ。パートナーになってほしいってんなら、全然いいからさ」
「え、ほ、ホント!?」
「ああ。もちろん」
「じゃ、じゃあ！　パートナーとしても！」
「よろしくな」
　こうして話がまとまりかけたところで、
「そういえば、理子さんと2人きりで個室で何をしていたんですの？」
　なぜか狂三がさらに爆弾を投下してくる。つーか知ってたのかよ。理子の事を追いかけてたんでしたっけ？
「……個室？」
「……2人きり？」
「あ、あんた……っ!!」
　おおっとぉ！　雪菜とアスナの目のハイライトが消えたぁ!!　アリアは何を想像したんだ？　顔が真っ赤ですが。
　そのあとの展開はみんな簡単に想像つくだろう。
　こうして、本当に事件は幕を閉じたのだった。

お風呂での秘め事　（狂三）

「ふぃ～」

雪菜、アスナのお小言が終わり、俺は風呂に入っていた。原作1巻分のイベントを無事乗り切ったという達成感を湯船の中で四肢を伸ばすことで味わう。

なんか、成し遂げたぜ！　って気分になるなぁ。こんなのがこれからも続くんだろうか。ラノベ主人公はよくもまあ生き残ってるもんだよ。

そういえば、完全に忘れてたし、そもそもみんなに言うの忘れてたんだけど、結局ゲンムってどうなったんだろうか。

最終決戦には影も形もなかったわけなんだけど。俺が戦った理子、ジャンヌ、夾竹桃じゃなかったみたいなんだよな。

やっぱり、イレギュラーなのか。これからも目の前に現れるんだろうか。

ま、それはその時に考えるしかない。現状、誰が変身しているのかもわからないんだし。

それよりも、こっちも問題だな。

「牙（タスク）」

スタンドを呼び出し、右手の爪を回転させてみる。その回転に水が巻き込まれ、渦を作り始めた。

このスタンドの大まかな説明はすでに済んでいるが、まだ説明していないことがあった。このスタンド牙（タスク）は爪を回転させて飛ばすという単純なスタンドだ。しかしこいつは、劇中で何度も進化しているスタンドでもある。

主人公補正、と言ってしまえばそれまでだが、ピンチになった主人公にこたえるように、最終的にはジョジョシリーズの中でも屈指の強さを持つことになる。

そのトリガーは2つあり、1つは精神的な成長。こっちのほうは難しいとはいえまだ何とかなる部類だ。

問題はもう一つ。黄金長方形を理解することだ。

黄金長方形は黄金長方形から最大の正方形を除くと、残った長方形がまた黄金長方形の比率になり、そこからまた最大の正方形を除くと、永遠に相似な図形ができていく長方形（ｂｙ　Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）のことだ。

理解できないって人は数学的に美しい四角形って考えてくれればＯＫなんだけど……ぶっちゃけそんなもん見ようが俺は特に何も感じないわけで。

スタンドが発現してからちょっと検索して眺めてみたんだけど、ただの四角形としか思えなかった。

回転の技術についてを理解する前にスタンドが発現してしまったせいなんだろうか。

もしくは、精神的に追い詰められているときじゃないといけない、とか。

詳しい理由はわからないが、とにかく今はスタンドの進化は望めそうにない。当分はこのまま戦っていくことになりそうだ。

「今日は早く寝よう……」

なんにしても今日は疲れた。

学校にも行かないで後処理をしてあんまり寝てないんだ。アリアはこれからまたかなえさんの弁護士さんに会いに行くとか。あの子の体力は底なしだよ。

「ん？」

脱衣所に……誰かいる？　そして明らかに服を脱いでいる……!?

と、とうとう来たのか！　お風呂イベが！　ラノベではよくある、主人公がヒロインの入っているお風呂に突撃してしまう、ってやつだ。

実はこんな世界に来たというのにその手のイベントに遭遇したことはなかったんだよな。不可抗力系イベントに遭遇したこと自体が少ないんだけど。

えー、俺はどうすればいいんだ？　どっしり待ち構えていればいいのか？　それともここから脱出？　いや、ここの出入り口は一つであとは窓があるだけ、気が付かれないように出るなら窓からだけど、裸

で出る勇気はないな。
や、別に逃げる必要はないな。ドンと来いだ。
俺が覚悟を決めると同時に、お風呂の扉が開いた。
そこに立っていたのは。
「あ、あら、翔さん。入っていらしたんですのね」
「狂三か」
狂三だった。
いつもはまとめてある髪が解かれストレートの状態になっているので、今はアスナさんよりも少し長いくらいだ。
当然何も身に着けていない。アニメなんかのように、濃いめの湯気が要所要所を隠しているということもない。そもそも、あんなのは換気扇が動いていないか、壊れていなければありえないだろう。
「俺が入ってるって気が付かなかったのか？」
「はい。電気はついていましたけれど物音ひとつ聞こえなかったもので……男性の翔さんはもう上がったのだとばかり……」
確かに、少し考え事をしてたからな。いつもより長風呂になってしまっていたかもしれない。
「翔さんの部屋に向かう前に身を清めておこうかと思ったんですけれど……部屋に向かう手間が省けてしまいましたね、翔さん？」
「部屋に？」
「あら、翔さんはお忘れですの？　そろそろ、補給をお願いしたいのですけれど？」
「あー、うん。覚えてるよ」
召喚されてから、いろいろなところで陰ながらサポートしてきたであろう狂三。刻々帝（ザフキエル）の連用による寿命の消費は、かなりのものになっているだろう。
「それでは、ここでいただいてもよろしいですの？」
「狂三がいいなら」
「それでは少し待って……あ」
狂三は何かに気が付いたように手を打つ。
「洗いっこ、いたしましょうか？」

「俺はもう洗い終わってるけど……」
「そう言わずに。さあ……」
狂三は俺の手を引っ張り、プラスチックの椅子に座らせる。俺が洗われるんですね。
「もっとリラックスしてくださいな。今回の事件、戦ったのはほとんど翔さん。さぞ、お疲れでしょう？」
狂三は石鹸を泡立て始める。
「それに、いくら洗ったといっても、自分の背中までは隅々まで洗えませんわよねぇ……？」
狂三は俺の背中に自分の胸を押し付ける。おっぱいを使って俺の背中を洗ってきたのだ。狂三の力加減によって形を変えているのが背中越しにも伝わってくる。しっかり泡立てられた泡が滑りをよくしているため、少し硬い部分も引っかかることなく滑らかに動いている。
狂三の奴、なんてテンプレなシチュエーションを……！　もちろん最高です。
男的にはやってもらいたいことはたくさんあるけど、いざお願いしようと思うとなかなか口が動いてくれないんだよ。
「……んっ、……んっ……？　結構難しい……」
狂三的にはこれでも結構苦戦してるみたいなんだけど、俺的には天国にいる心地だ。手が前に回され、後ろから抱きしめられているこの状況。体勢的に洗える範囲なんてごくわずかだけど、体を洗うとかそんなこともうどうでもいいよ。
その証拠に。
「あっ、翔さん、勃ってますわね……」
「そりゃぁ、ねぇ」
これに反応しないなんてただの不能だ。
狂三の細い指が俺のモノに触れる。パンパンに張った亀頭はそれだけで大きく跳ね、鈴口からは先走りが漏れる。
撫でるような手つきの細い指は、だんだんと手のひらで亀頭自体を包むように、カリにわざと指をひっかけて先ばかりを集中的にしごい

てくる。
たくさんの長い舌にもてあそばれている感覚だ。泡によって滑りがよくなっていることもあり、真っ赤に腫れていた亀頭は細やかな指によって洗われているように思える。
そんな弱いところばかりを攻められれば、我慢できるわけがない。あっけなく絶頂してしまう。
「く、狂三……っ！　んっ、がっ、あぁっ……っ！」
白濁液が飛び散り、狂三の手が汚れる。
「きひ、まずは一回、ですわね」
まずは。その言葉に、出したばかりの俺の息子はわかりやすく反応するのだった。

「じゃあ、今度は俺の番だな」
「そうですわね。お手柔らかにお願いいたします……もっとも」
狂三は、俺の体の一部分に目を向ける。
「その様子では、無事に終わりそうにはありませんけれども」
一回出したはずの俺の下半身は、素直に元気になっている。女の子に背中から抱きつかれて洗われて興奮しない男はいないし、女の子の体を洗うのに興奮しない男もいない。これはしょうがない。
「で、どこ洗えばいいんだ？」
「翔さんにお任せしますわ。優しく洗ってくださいまし」
そうか……お任せか。
「髪の毛は自分で洗ってくれない？」
長い髪の毛の洗い方ってわからないし。傷めたりしてしまっては申し訳ない。髪は女性の命って言うし。
狂三はそれに賛同し、先に髪の毛を洗ってしまう。
泡を洗い落とし、準備は完了。少し前まではふわっとしていた髪は

しっとりと濡れ、背中や胸に張り付いている。
スポンジを泡立てて俺のほうも準備万端。
さてさて、とりあえず背中から行こうかな。
傷一つない背中をスポンジでこすっていく。真っ白なそこは全く洗う必要がないのではないかと思える。
「……ん、……っ」
なんだかんだ言って狂三も緊張しているのか、体を固くして俺が少し力を入れるたびに身を固くする。
意外と小さい背中は、割とすぐに洗い終わってしまった。意識してゆっくりしていたつもりだったんだけどな。
「……前もか？」
「はい。お願いしますわ」
手を持ち上げ、その腕を洗っていく。手のひらを洗おうとすると狂三の指が俺をとらえようとしてしなやかに動く。
それをかわして根元までやってくると脇のくぼみを通り過ぎ、わき腹にたどり着いた。見事なウェストも優しく洗っていく。
「はうっ……くっ……あっ……」
他人に脇腹を触れられると妙にこそばゆい感じがする。狂三もそうなのか、俺のスポンジがわき腹をこするたびに甘い声を出し始める。
漏らす声はどんどん甘くなり、右手は自らの口を塞ぐのに使っていた。
……体洗ってるだけでこの反応はやばい。や、普通はこの年になって他人に洗ってもらうなんてないんですけどね。
脇腹も洗い終わってきたので本格的に前を洗い始める。
スポンジをそのままおなかにシフト。やわらかいながらもしっかりと引き締まっているおなかを丁寧にこすり始める。中心にあるおへそも、強くなり過ぎないように。
筋肉の筋に沿うように何度も何度も。表情は視えないが、耳は真っ赤になっている。
「ふぅ、ぁっ、あ、そんなに、念入りに、洗わ、なくても……っ！」

秘部のぎりぎりまで泡だらけにして、だんだん上に登っていく。
柔らかさが変わった。
俺の手が狂三のふくらみに触れたのだ。
お腹と同じ素材でできているとは思えない。お腹の張りのある感触とは打って変わって、押せば押した分だけ沈み、跳ね返してくる。
スポンジ越しに狂三の胸のふくらみをいじめ始める。刺激によって体が弓なりになればなるほど、俺の手に胸を押し付けることになる。
ざらついたスポンジが、飛び出たものをこすりあげる感触がする。しっかりととがっているこれがスポンジの目にこすられると狂三の体はわかりやすく反応する。
スポンジの目は細かい。やすりにこすられるような刺激を与えられた狂三は涙を流しながら嬌声を上げる。
「あぁぁ……っ!? あっ、かはっ、やっ、やぁっ、そ、それぇ……っ！」
留守になっていた反対の手でもう片方の突起もしごいてやると、声にならない悲鳴を上げ大きく痙攣した。
「……っ！ ……っ！」
大きく果ててしまった狂三はぐったりとした。まだ洗う部分は体の丸々半分、下半身が残っているが、この調子なら回復するまで少し待ってしたほうがよさそうだ。
と、思って、腕の中で波が収まっていない狂三の頭をなでていると、
「……っ！」
「うわ!!」
狂三が突然、俺のことを押し倒してきた。俺の上に重なるからいけない。俺の背中はお風呂のタイルで冷たいのに、正面はとても熱く、とても柔らかい狂三が乗っている。
彼女の柔らかさを文字通り全身で、全力で味わった俺は、これ以上大きくならないと思っていたペニスにさらに血液を送り込む。反り返ったそれは狂三のお尻に当たって跳ねた。
「まったく、翔さんは。そんなに我慢強いなんて思っていませんでしたわ」

「はい？」
「本当は、我慢できなくなった翔さんがわたくしを無理やり、という筋書きでしたのに。翔さんのここはこんなに硬くなっているのに、肝心の翔さんが我慢強いんですもの。わたくしのほうが我慢できなくなってしまったんですのよ」
　くちゅ、と俺のものと狂三のものが触れ合う。水とは違う液体で濡れているそこは唇で俺のペニスを甘噛みするように包み込んでくる。
「それどころか翔さん、わたくしの事、焦らしていたでしょう？」
「や、そんなつもりは無――――」
「そんなこと言って、翔さんの魂胆はわかっているんですのよ。限界まで焦らしてわたくしの口から恥ずかしいことを言わせるつもりだったん――」
「おめー、そんなこと微塵も思ってないだろ」
　顔を見ればわかる。見れば、な。
「きひ、さすが翔さんですわ。翔さん、アスナさんと雪菜さんのことは優しくリードしたみたいでしたので、たまには自分の好きなように女の子を蹂躙したい、なんて思ったりするのではないかと思いましたけど……わたくしのほうが我慢できなくなって……」
「ああ、狂三の好きにしていいぞ」
　狂三は俺の言葉に小さくうなずくと、体を起こした。そして限界まで反り返っている俺のものをそっと握る。しかし、上下にするわけではない。
「ん……っと、ん……」
　自分の下腹部に慎重に狙いを合わせる。俺のほうは限界だってこともあり、軽く握られて、粘膜同士がこすりあうだけでも、すぐにでも射精（だ）してしまいそうだ。
　思わず腰を突き上げてしまいそうになるが、歯を食いしばって我慢する。
「ん……っ」
　くぷっと音を立てて、あっさりと赤く膨れ上がった亀頭が狂三の中へと侵入する。半分だけ入ったところで、狂三の腰が止まる。

「くふぅっ……、あっ、うっ……はぁ、はぁ」
いきなり全部挿れてしまわないのは、痛みがあるからなのか、それともほかの何かのせいなのか。熱い粘液が亀頭の上半分を包み込み、粘膜は俺のものを奥へ奥へと飲み込んでしまおうと蠢いている。俺のほうはマジで限界が近いので早くしてほしい。
「く、狂三……っ」
俺は思わず、狂三のお尻を掴んで力を込めてしまう。
呼吸を整えることに必死になっていた狂三は、俺の不意の力に対応できない。俺のペニスが秘肉をかき分け、狂三の奥へと進んでいく。
「あぁぁぁっ⁉ あっ、しょ、翔さん……っ。そんなに突然……っ！」
口をぱくぱくさせながら、必死で首を振る。
俺の肉棒が進んだせいか、狂三の足の力はすっかりと抜けてしまっている。俺がわしづかみにしているお尻がなければ今すぐにでも根本まで入ってしまいそうだ。
寝そべっている状態、手だけで支えるのは無理がある。
「あっ、うっ、くはぁっ、ほんっ、とっ、ダメっ、ダメぇぇぇ……っ！」
図らずしも、じっくりと腔内をそぎ落としながら挿入してしまっている。奥に行けば行くほど温度が上がっていくように感じ、ヒダの抵抗も激しくなってくる。もちろん、それだけで人一人分の体重を支えられるわけもなく。増大する快感をじっくり、ゆっくり味わいつつ終わりを目指している状態だ。
手が疲労のせいでしびれてきた。もうほとんどすべて入ってしまっている。
今度は俺が気を抜いてしまった。
もうほとんど入ってしまっていた。それでも、2センチは残っていた。ごちゅん、と2センチ分の加速がついた亀頭が子宮を押しつぶした。
「あ、あぁっ、あっ、あっ、あっ、あぁ……っ」
「うあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
まず狂三が絶頂し、締め付けが急激に強くなる。俺も子宮口に亀頭がキスした刺激で熱いものが竿を登ってくるのがわかり、続く締め付

けで搾り取られるように狂三の中にぶちまけた。
「狂三、大丈夫か？」
狂三は小さく、こくこくと頷きながら、結合部から何度も温かい液を漏らしたのだった。

ジャンヌとのひと時

大型ショッピングモールの一角、服は服でもなかなかマニアックな服を扱っているお店。俺は今、そのお店の近くにいた。

あ、マニアックって言っても、いかがわしいもんじゃないぞ。や、中にはいかがわしいものに使う人もいるかもしれないけど。

すこし装飾多めな、ヒラヒラがいっぱいついた服を売っているお店だ。これを着て街を出歩いたら間違いなく人に注目されるってレベルの。

こんな服を着る趣味は俺にはないし、俺の家にいる娘も……狂三以外、自主的には着ないだろう。

見ているのは、この前、空港で戦ったジャンヌ・ダルク３０世だ。

そもそも今日は、俺の家に住んでいるみんなでこのショッピングモールに来た。荷物持ちでも何でもするつもりだったんだけど、女の子には女の子の付き合いがあるとか。早々に追い出されてしまった。

暇を持て余してぶらついていたところ、店の入り口で中に入ろうとしてはためらい、を繰り返しているこいつを見つけたという訳だ。

「よう、ジャンヌ」

「うわあああああああぁぁぁぁ!!!!!」

悲鳴とともに首元に手刀が飛んでくる。何かしらの反撃が来ることは予測していたため、ダメージなく受け止めることができた。

「お、お前は……っ!!」

「一週間ぶりだな。司法取引、もう終わったのか？」

よほど驚いたのか、顔を真っ赤にして呼吸が荒くなっている。それでも手刀の構えは解かないあたり、俺に対する警戒心の高さがうかがえる。

「……なぜここにいる」

「普通に買い物だよ。そっちこそ、店に入らなくていいのか？　５分くらい様子を――」

「――貴様、見ていたのか……っ!!」

俺の腹部に固いものが押し付けられる感触。短い刃物かな。物騒

だね。
肩から下げているケースの中にはデュランダルが収められているんだと思うけど、これが飛び出さなくてよかったね。
それにしてもこの体勢は周りから見るとどうなんでしょうねぇ。
さっきの大声でかなり注目を集めたところで、この密着だ。ラノベ主人公なら間違いなくしどろもどろになる距離だ。羞恥心でわかっていないのか、軽く胸も押し当てられてるし。
俺たち2人とも、手を回したりしているわけではないが、傍から見れば立派なカップルに見えるんじゃないだろうか。
俺は経験（意味深）豊富だから大丈夫だけど。心拍数が少し早くなって下半身に血液が集まり始めるくらいで。
「ああ、ばっちり」
「死ねッ!!」
ジャンヌの大振りを、完全記憶能力で覚えたアリアの体術で流す。
「さ、そんなことより店に入るんだろ？」
「お、おい!!　押すな！」
肩をつかんで店の入り口から中に押し込んでいく。
店員さんも俺たちが騒いでいたせいか、すぐに俺たちを発見し、適当な服をもってジャンヌを試着室に連れて行ってしまった。
理解のある人で助かった。
しばらくすると、試着室から出てきた店員さん。俺にサムズアップをして去っていく。俺もサムズアップを返し、試着室のカーテンが開くのを待った。
が、開かない。
ま、まあそりゃ、俺に見せる義務はないけどさ。こんな面白そうなこと、見過ごしてられないさ。
「ジャンヌ！　着替えたかー？　カーテン、開けてもいいかー？」
「まっ、待て!!　ダメだ!!　……くぅ……これはどう着ればいいんだ……っ！」
あれま、着方がわかんなかったのか？　服着るのにそんな複雑な手順がいるもんなのかね。俺、女子じゃないからわかんない。

「よ、よし。すぅー、はー。あ、開けるぞ……っ！」
試着室から出てきたジャンヌはそれほど飾り付けられていない、動きやすそうなメイド服だった。メイド服に動きやすいとかあるのかと言われれば微妙か？　だったら、見せる用ではなく、働く用といえばいいかな。
「ど、どうだ？」
「いいと思います。とても。可愛いです」
ジャンヌに魅力がないなんて言わないが、服の力はやはり偉大だ。銀髪の凛とした美少女が羞恥に顔を染め、ロングスカートの裾を握りしめている。しかもこれを見ているのは俺だけ。
控えめに言って最高では？
「や、やめてくれ。こんな服、私には似合わない。こういうのは理子のような、小柄で愛くるしい娘が着てこそだろう」
そういってそっぽを向くジャンヌだけど、顔がにやけているのが抑えられてませんよ。
「私はこの長身だからな……フッ」
試着室の鏡に向かって髪をフサァ。チョー気に入ってるじゃねえか。
身長については俺と同じくらいですからね。ほんと勘弁してほしい……身長もっとほしいな。
しばらく、一人の世界に浸らせたところで一言。
「で、その服買うの？」
「……ま、まあ、一着だけだからな。うん。一着だけ」
あかん。課金は一回だけの思考にはまっている。絶対に一回じゃ止まれないパターンだ。
「壁をくりぬいて脱出しようかとも思ったが、今日はいい日だな」
「そんなに恥ずかしかったなら、見せないって選択もできたよな？」
「……あ」
「え？」
「い、いや、男が着替えを待っていたら見せるのが礼儀だと……」
「真面目か」

変なところで融通効かないな、こいつは。
「すまない。今日のことは誰にも――」
「じゃあ、黙ってる代わりに聞きたいことがある。ちょっと付き合ってくれ」

俺とジャンヌは一息つくためにファミレスに入った。お昼のピークが過ぎた店内には2，3組の客しかおらず、多少長居しても大丈夫そうだ。
俺たちは席に座り、ドリンクバーを頼んだ。話を始める前に、飲み物を取ってこようと立ち上がる。
「ジャンヌ、飲み物取ってこよう」
「ん？　ああ、この店は自分でとってくるものなのか」
ジャンヌを引き連れドリンクバーのところまで歩いていく。コップを取って……烏龍茶にしておくかな。
「夜月、これはなんだ？」
「ドリンクバーだ。好きな物を好きなだけ飲める」
「好きなだけ……では、１００リットル飲んでもいいのか？」
「……飲めるならな」
「そんなに飲めるわけがないだろう。やはり馬鹿なのか？」
「お前さぁ……」
俺が微妙な顔をするのも気にせず、ジャンヌは俺と同じように烏龍茶を選択した。
「それで、話とは何だ？」
「ブラドのことだ」
俺は席に戻ると無駄話をせずにすぐ本題に入る。
「奴の事か……」
「理子には聞きづらいし、夾竹桃とは連絡が取れないからな」

実は理子、光の速さで司法取引を終え、うちに住み着いているのだ。おかげで毎日アリアとの銃撃戦が起こりそうになりひやひやしている。

いずれ戦うことになるブラド。倒すと豪語したが、原作知識はあるとはいえ強敵には変わりない。この世界の影響による強化もありうる。

情報は集めておくに越したことはないだろう。

「そうか話には聞いていたが、無謀な奴だ……話してもいいが、私から教えられる情報は限られるぞ」

「情報を漏らした報復があるかもしれないからか？」

「そうだ。イ・ウーは私闘を禁じていない。相手が相手だからな。内容によっては私が狙われる」

「お前ほどの戦闘力があってもか？」

「私をあっさり倒した奴が皮肉を言うな。それに、私の戦闘能力はイ・ウーのなかでは最も低いんだ」

俺の言葉にジャンヌは不機嫌になってしまう。それについては申し訳ないと思うが、俺はまた一つ情報を手に入れることができた。

ジャンヌの戦闘能力がイ・ウーの中では最低、というのは原作と変わらないんだな。あれ？　つまりジャンヌって夾竹桃より弱いってことになるのか？　相性が悪いとか？

ジャンヌの戦闘能力は決して低いわけではない。それこそ、超能力的には中の上くらいの力はあるだろう。

俺が仮面ライダーに変身したりして暴れまわっているから忘れそうになるが、この世界、能力だけで戦える奴は少数派なのだ。

「まずイ・ウーのことから説明しようか。イ・ウーとは、天賦の才を神より授かった者たちが集い、技術を伝え合い、どこまでもいずれは神の領域にまで強くなることを目的としている。組織としての目的は無く、個々人が自由に動く」

要はお互いの長所を伝え合って強くなっていこうって集団ってわけだ。考えは素晴らしい。法を犯さなければな。

「そしてブラドだが……奴と私の一族は仇敵だ。３代前の双子のジャ

ンヌ・ダルクが初代アルセーヌ・リュパンと組んで戦い、引き分けている」
「ブラドの先祖とか？」
「何を言っている？　奴は吸血鬼だぞ。本人に決まっているだろう」
おっと、いけない。ブラドは世界的に名前が通った吸血鬼。緋弾のアリアではそうじゃなかったから間違えちゃったよ。
一旦、緋弾のアリアの原作知識を追い出し、この世界で仕入れた情報を頭の中に広げる。
「冗談だ、冗談。俺が聞きたいのは魔臓の位置、奴の眷獣のことだ」
魔臓とは、吸血鬼の再生能力、および十字架や、ニンニクなどの弱点を無効化している臓器のことだ。体内に４つあり、これをすべて同時に損傷させると、これらの力が失われ、吸血鬼を大幅に弱体化させることができる。
眷獣は、宿主の寿命を代償に実体化する獣の姿をした魔力の塊で、様々な力を持った吸血鬼のメインアームだ。強大な戦闘力を持つ反面、召喚の代償である命の消耗が激しく常人の寿命では一瞬で尽きてしまうため、不老不死の吸血鬼にしか扱えないとされている。つまり、魔臓を破壊できれば眷獣も使えなくなるという訳だ。
「だろうな。吸血鬼と戦うなら――――まあ、そんなバカはそうそう現れないが――――それは知っておかなければいけないことだな」
さっきからバカバカ言い過ぎじゃないですか？　俺に自分の趣味を知られたこと根に持ってるだろ。
「魔臓の位置は両肩と右の脇腹、あと一つはわからない」
魔臓の厄介なところは吸血鬼によって位置が違うところ。幸いこの世界の、国連に存在が確認されている吸血鬼には魔臓の位置に模様が刻印されているが、事前に知っているのといないのとでは、やっぱり違う。
あと一つも、原作通りなら舌にあるはずだ。
「眷獣については全くわからない。イ・ウーではその話はしていなかったからな」
「そっか……」

これは予想以上の激戦になりそうだぞ。
今の戦力じゃ、返り討ちは免れない。あーあ、ゲーマードライバーほしい、牙(タスク)を進化させたい。
とりあえず、狂三のおかげで手に入れることができたこの2つの新戦力をどうするかだな。

超宇宙聖剣(スペースカリバー)

宇宙の超技術により再現された、とあるXさんが持つ剣のレプリカ。振るとブォンブォン音が鳴る。レプリカといってもその切れ味はすさまじく、たいていのものなら簡単に両断できる。また、刀身からのエネルギー放出により、ビームを撃ったり、空を飛んだりもできる。

サイコフレームの設計図

サイコフレームの設計図。この時代ではオーバーテクノロジーなため、有効利用できる人物は限られている。

超宇宙聖剣(スペースカリバー)は……あれだ。まんま約束された勝利の剣(エクスカリバー)だ。使いやすい良い武器だ。俺は剣なんて使ったことないけど。
サイコフレームの設計図についてはどうやって使ったらいいのかわからない。そんじょそこらの科学者じゃ太刀打ちできない代物。設計図だけをもらっても、どうすればいいのか。
……あ、そうだ。
「なあ、ジャンヌ。俺に剣の使い方教えてくれない？」
「剣だと？　別にいいが……タダでとは言わないだろうな」
「もちろん。練習の前でも後でも、ファッションショーの観客になる

から」
「そんなことはしなくていいッ!!　ほんとにしゃべるなよ!!　絶対だぞ!!」
　はは、やだなぁ。フリじゃないならそんなに連呼しないでほしいよ。
「先輩、何やってるんですか？」
　横から聞こえてきた突然の声。俺の表情が凍り付く。
「ゆ、雪菜……？」
　そこには今日ここに来たメンバー、雪菜、クロ、アスナ、狂三、アリア、理子が立っていた。
　全員かなり微妙な表情をしている。大半は目をぴくぴくさせ、喜怒哀楽でいうと『怒』の感情が前面に押し出されている。
「まあ待て。これはそもそもみんなが俺を一人にしていたからであって、そもそもみんなはいろいろと認めてい――」
「こんにちは、ジャンヌ・ダルクさん？　理子ちゃんから話は聞いてるよ」
「あ、ああ。こちらこそよろしく。私のことはジャンヌでいい、ぞ……」
　俺の言葉を無視してアスナがジャンヌにこやかにあいさつした。ジャンヌはそれに返しつつ、滑らかな動きで席を立った。俺の巻き添えを食わないようにするためだろう。それはありがたい。俺のせいでジャンヌに被害が及ぶのは避けたいからな。
　今や俺は孤立無援。誰の援護も期待できない。ファミレスのウェイトレスさんも固唾を飲んで、少し楽しそうに俺たちを見ている。
「じゃあ、みんな、行こっか」
「え？」
　アスナさんの声で、みんな背を向けて歩いて行ってしまう。
「ちょ、ちょっと待って！」
　う、うむ。これは俺が悪いな。ハーレムが認められているとはそういう問題じゃあなくて、これは俺が悪い。
　２人分のドリンクバー代を払いながら、今度は気を付けようと心に

誓うのだった。

雪菜の憂鬱　（雪菜）

「家がこんなに爛れた空間になるなんて想定外でした」

雪菜はため息をつく。雪菜がこの世界に召喚されてからまだ一か月ほどしか経ってない。初めは男の人と一つ屋根の下で過ごすということに緊張していたが、その日のうちに一人増え、三日と立たないうちにもう一人……と、ラノベ主人公と比較しても翔と張り合えるのは上条さんくらいになってきている。

武偵殺しの事件が終息して一週間ほど。平和な日々が流れていた。ちょっと黒服のお兄さんが家に来て話していったり、お金を置いて行ったり、光の速さで司法取引を終わらせた理子が住み着いたりしただけで。

黒服のお兄さんはあれだ、武偵殺し事件の詳細を口止めしに来た人たちだ。それはもう、たんまりと置いて行った。翔たちは下手にそのことをしゃべれなくなったが、もとよりしゃべる気はないので全く問題はない。

問題は増えてきた人口だった。

（先輩も押しが強いのか弱いのか、強引なのか受け身なのかわからない人ですし……あんなに女性を侍らせてデレデレして……っ！）

雪菜は下駄箱から上靴を取り出しつつ、今日ここに来るまでの一連のことを思い出す。

朝起こしに行けばクロが一緒に寝ていて、朝ご飯は理子が食べさせようとする。通学路では狂三と理子、クロが代わる代わる腕を組む。さらには顔を赤くしたアリアが発砲するおまけつきだ。

この時、翔は翔で周りの嫉妬の視線に耐えていたため、彼は彼なりに大変だったりするのだがそんなこと雪菜には関係ない。

積極的な女の子とそうではない女の子。いくら翔が頑張っても、人数が増えればどうしようもない。彼の体は一つなのだ。

一番最初に体を重ねた雪菜だったが、正直少し焦っていた。周りの娘が積極的過ぎる、と。

そこで見ると、アスナはどうなるのだ、と思う人もいるかもしれな

いが、彼女は彼女でさりげなく甘える、という術をすでにマスターしている。
そんな、それぞれ別のパワーを持ったほかの娘たちに押され、ここ最近は翔と話す機会も少なくなっている。
ほかの娘といちゃいちゃいしていると、自分も行きたいと思うのだが、それが喉から先に出てくることがない。
さらに雪菜を悩ませている問題がもう一つ。学校の靴箱の中から出てきた。
それを見て雪菜はため息をついた。このため息も、何回目かを数えるのもバカらしくなってしまっていた。

「いやー、また貰っちゃうなんてねー、ラブレター」
「い、言わないでくださいよ、さやかさん」
給食を食べ終わった昼休み、雪菜たちは屋上でお喋りをしていた。6人の大所帯だ。
盛り上がっている話の中心になっているのは、雪菜が今日もらった手紙だった。
新学期が始まって数週間。男子生徒は自分の武偵としての技能をフルに生かした。具体的には女子更衣室の盗撮というしょうもないことなのだが、やる気を出したときの人間とは恐ろしいもので、警戒しているはずの女子ですら見逃してしまうことがある。
学校の男子は裏ルートでその写真を取引している。教師はほぼ黙認状態。隠しカメラを見つける訓練に都合がいいとか。
それでいいのか、教師。明らかな犯罪だぞ。と思うかもしれないが、もし教師に見つかった場合は取調室（という名の拷問室）に連れていかれる。
しかも、チクった生徒は教師から特別な報酬がもらえるのだ。

非常に若者らしい問題が、スケールアップして繰り広げられているわけだ。
そして先週、雪菜の写真を持った生徒が捕縛された。
写真自体は厳重に破棄されたが、写真に写っていた顔だけは漏れてしまった。誰がどんな写真を持っているのかわからなかったはずが、このせいでこの島の武偵学校中に雪菜の名前が知られることになってしまった。
その容姿に惹かれた男子が、連日手紙を送ってくるようになってしまったということだ。
いくら武偵といっても、そこは健康な年頃の女の子。この手の話で盛り上がらないわけがない。
「でもさー、雪菜さんのカレシもひどい人だよねー。こんなかわいい雪菜さんをほっておいて浮気してるんでしょ？　いや、無いわー」
「う、浮気というか……本人も悪気があってしているわけではないというか……」
「え、っと。悪気がなくても浮気はいけないことだと思うんですけど……」
眼鏡におさげの少女、ほむらは小さい声でつぶやいた。
ほむらは実は超高性能な時間停止の魔法を使えるのだが、本人の性格のこともあり、今一成果が伴っていない。
「そうそう。そーゆーいい加減な奴には一発ガツンと言ってやればいいんだって。つーか、そんな男捨てちまいなよ。いまの雪菜だったら、男なんて選び放題じゃん」
「佐倉さん、口に入れたまましゃべらないの」
細長いお菓子を歯で挟んで揺らしながら話しているのは杏子、注意したのはマミだ。
この中でも特に付き合いが長いこの２人は傍から見ると、似ていない姉妹のようだ。
「あはは、みんな、会ったことない人のことそんなに言うのはかわいそうだよ」
「いや、まどか、話聞いただけでもわかるじゃん。ろくでもない男だ

よ。なんで雪菜さんがそんなにかばってるのか私にはわかんないなぁ」
この2人も付き合いが長い。学年が上がるとすぐにマミと出会い、こうしてこのメンバーに入った。
もうわかったとは思うが、雪菜のほかのメンバーは、鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子の5人だ。
翔が見れば、『まどマギのメンバーじゃねーか！』と言っているところである。
まどか、ほむら、さやか、杏子の4人は雪菜、マミの一つ下だが、マミからの紹介で今ではすっかり休み時間に一緒にいるグループになっている。学年が違ってもこれだけ仲がいいのは珍しいことだ。
「も、もうこの話はやめにしませんか!?　ほかのことについて話しましょうよ！　ね?」
雪菜は必死で話題を変えようと頑張るが、一人の力で五人に打ち勝つのは不可能だった。
そのあとも、彼氏とのノロケを聞かせろ、せめて写真を見せろ、などといった攻撃に必死に耐えるのだった。

家に帰っても特にやることがない雪菜は自分の部屋にいた。リビングにいても面白くないものしか目に入ってこないからだ。
ベッドにぼんやり横になっていると、いつの間にか眠ってしまったのか、気が付くと窓の外はすっかりと暗くなっていた。
時計を見ればそろそろ夕飯の時間だったため、部屋を出て下に向かう。
「あ、雪菜」
「え？　せ、先輩!?」
「いや、そんなに驚かなくても……」

階段を下りた先で、翔とばったり顔を合わせた。
あまりも出来過ぎた出来事に軽いパニックになっている雪菜に対し、翔はいたって普通に話を始める。
「あ、そうそう、雪菜の盗撮写真持ってた奴の名前がわかったから、少しシメたから。またなんかされたら言ってくれ」
「シ、シメて……？」
翔のセリフに目を丸くする雪菜。なんだかんだ言って、彼は自分から暴力的な手段に出るとは思っていなかったからだろうか。
「つっても、少しだけだぞ？　聖剣で少し脅したくらいだし」
「セイケン？　……聖剣？　先輩そんなものどこで――――誰かとしたんですか？」
「あ、うん。まぁ……」
「なんで黙ってたんですか？」
「お、お前は誰とHしたかをいちいち報告せよと申すのか……!?」
「あ……っ!!」
思わず雪菜は、自分との情事をみんなの前で報告されたことを想像してしまい、顔を赤くする。
確かにこんなこと耐えられない。耐えられないが。
「それと、これとはっ!!　別問題なんですっ!!」
それはそれ、これはこれだ。
自分が持て余している気持ちとそれは、別問題だった。自分に黙って誰かと性行為しているというのが、たまらなく嫌だった。
いきなり涙目になって大声を出された翔は、ひとまず部屋に雪菜を連れていく。雪菜を退避させることができそうな場所がほかに見当たらなかったのだ。
そして抱きしめた。
「あ……っ」
突然のことだったが、強く、しかし痛くないくらいに力が籠められることで、自然と力が抜け、雪菜も背中に腕を回した。
「最近話せてなかったからな。ごめん」
「なんでこういう時は察しがいいんですか……っ」

「鈍くてもわかるだろ」
翔は子供をあやすように背中をさする。
何度も言うが、翔に落ち度はなかった。増える女の子の人数、手に入れた能力の訓練、情報収集。様々なことに時間を割かなければいけない翔は、誰かと2人きりでどこかに行ったりすることがいまだない。
必然的に、家で、積極的な女の子の相手をすることが多くなってしまうのだ。
翔は雪菜の頭を髪越しに撫でながら、胸に顔をうずめている雪菜を引き離し、唇を重ねた。ゆっくりと舌を伸ばし、少し開いている唇をさらに押し開いて口内に侵入する。
「ん……っ、ふぅっ！　ちゅぅ……っ！」
舌はいろいろなところを舐めた。歯茎をなぞり、舌をなぞる。それに抵抗するように舌が絡み合う。
「ぷはっ！　せ、先輩！　だめです……っ！」
「え？」
雪菜は口を話して顔をそむけた。しかし腕は背中に回されているため、しっかりと密着したままだが。
顔はすっかり上気して、声も1トーン高くなっている。キスのせいで酸素を欲しているのか、口は半開きになっている。
「そ、その……っ、もうすぐご飯ですし、キスまでならともかく、いえキスも、もうまずいんですけれど、とにかくこれ以上したらちょっ……っ!!」
翔はスカートの上からお尻のお肉をわしづかみにした。
それだけで早口だった雪菜の口から出てくるのは短い息継ぎの音だけになる。
「え、と、その、私はしばらく大丈夫なので。むしろ、私を思ってるなら後で、ゆっくり――」
翔は手をゆっくり動かし始める。布2枚隔てた尻肉がゆっくりと形を変える。ひとしきりその感触を楽しむと、スカートをまくり上げ、ショーツの中に手を侵入させた。

「あ……っ、ま、だめ……っ！　声が……っ！」
キスだけでかいた汗によってスカートの中の湿度は別物になっている。腰骨をなぞり、前の割れ目に到達した。
「くひぃんっ！」
軽く触れただけで指にべっとり粘液が付着する。指を折り曲げ、入り口を浅くこするだけで、どんどん奥からあふれてくる。
翔は納得した。
「確かに、ダメだな」
トロトロすぎて。
雪菜はキスだけで下の口から垂れそうになっていたことに気が付いていたのだ。
中指を、今度は蜜を垂れ流しにしている穴に少しづつ突き刺していく。一度翔のものを飲み込んだはずのそこは、久しぶりの侵入者を待ち詫びていたように蠢く。
丁寧に感触を思い出すような動きをする指に雪菜は声を漏らさないようにするのがやっとだ。
「うあぁぁぁ……せんぱい……っ、まってぇぇ……っ！」
根元まで飲み込まれていた中指を一度抜き、今度は小さく顔を出すものに添える。
「――あっ……！」
雪菜の全身がかたかたと震え始める。軽く触れられただけで、一瞬腰の力が抜けた。ここは本当にまずい場所だと本能で理解したのだ。
だが、彼女に心の準備をさせてやる義理などなく。
「時間がないからな。誰かが来たらまずいし」
「だったら……っ！　ま、待って！　待ってくださ――――」
翔は秘芯を指先で圧迫しにかかる。
「――んんっ！」
「……あ、や、だっ……！　だめ、そこ……そこはっ……！」
軽く押し込んでみせる。
「……ああっ……待って、これ以上……そこ、そこはぁっ……！　ん……っ!!??!!」

翔は絶頂のタイミングで、口をふさいだ。おかげで恥ずかしい声を上げるのは避けることができたが、下はそうもいかない。絶頂した瞬間にあふれた愛液が床に小さな水たまりを作り、強烈なメスの匂いを匂わせている。

「……行くぞ」

それにあてられた雪菜は翔の言葉にただぼんやりと頷いてしまった。

翔が寄りかかる雪菜の腰を支え、ゆっくりと腰を突き立てる。

アソコに宛てがわれた翔のペニスが秘肉をかき分けて、入った。

「ひぐぅ……っ！」

本当に少しずつ進み、エラで一度止まる。そこからは力任せに。

「くひぃぃぃぃぃっ!?」

ごちゅん!!

奥の壁を思いきりたたかれたことによって雪菜ははしたない声を上げる。みんなが起きているだとか、誰かに見られるとか、そんなことは頭から吹き飛んでいた。吹き飛ばされてしまった。

「ひぁぁぁぁぁっ！　あぐっ、ふぐぅぅっ、あつ、熱い、太いぃ……っ！」

限界まで勃起した肉槍は雪菜の孔内を満たし、ざらついた壁は、それを歓迎する。雪菜を意図せず焦らしていた状態になっていた体は雄との交わりに悦び、それは背骨を通り、雪菜の頭を焦がす。

指ではない、本物の翔のモノを咥えこんだ秘部は肉棒を満遍なくきゅうきゅうと締め付けていて、雄汁を一滴残さず搾り取ってやろうとしている。

「ひぃあぁぁぁ……っ!?　あっ、ふっ、はぁっ！」

奥底まで到達していたものをさらにぐりぐりと動かす。翔の狙いは子宮。少し離しては押し込む。

「ひぅぅぅぅ……っ」

少しでも引けばカリが引っ掛かり雪菜の頭で火花がはじけ、押し込めば悦んで少し開いた子宮をサンドバックにされる。翔のちんぽの根元も掻き出された愛液でべとべとになってしまっている。

雪菜の下着はとっくにダメになっているが、快感に身を震わせている雪菜にはそんなことを気にしている余裕はない。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ」
翔の動きが速くなる。ラストスパートに入ったのだ。
子宮を連続で押しつぶされる感覚に雪菜の体はすっかり降参していた。きゅうきゅう絡みつく壁は出すものを残さず搾り取ろうと締め付ける。
「雪菜……っ！」
翔のペニスから、大量の白濁液が注がれた。
「あぁぁぁ

聖天子護衛　編

護衛任務

お偉いさんに呼び出された。

俺とクロは豪華に飾り付けられた部屋の中にいる。そのお偉いさんの仕事場だ。

区画ごとに建物の様式ががらりと変わることもあるこの島だが、こうして実際に見ると、一つの島にたくさんの国が詰め込まれているように見える。

事実、たくさんの国の人が住んでいて、さらにその中で派閥があったりするため、あながち間違いじゃなかったりするのだが。

どういうご都合主義なのか、言葉はしっかり通じるんだけどな。それでも語学系の授業はある。悲しい。

クロはみんなの中からくじで選ばれ、俺と一緒に任務にあたることになった。今後は、依頼では必ず1人と一緒に行動することになったのだ。

「ごきげんよう、夜月さん」

扉が開き、女性が入って来る。この女性が今回の依頼主、『聖天子様』だ。

スーツではなく白いドレスのようなものを着ている。髪や肌の色も手伝ってとてもはかなげな印象を受けるが、俺をまっすぐ見る目には隙がな……くもない。

簡単な挨拶を済ませ、席に着く。

聖天子様は『ブラック・ブレット』のキャラクターだ。そっちのほうでは東京エリアの統治者をしているが、この世界では、この島の議会において、日本の代表を務めている。

理想主義者なところもあり、各国での協力体制を築き上げようとしていることで有名だ。何かしらを腹に抱える奴らや、現実というものを知っている武偵からは、食いものにされたり、鼻で笑われるような理想だが、一般受けはとてつもなく良い。

「今回お二人には、私の護衛をしてもらいたいのです」
若くして代表を務めているといっても、実権を握っているのは『天童　菊之丞』というおじいさん。彼女は、悪くいってしまえばお飾りだ。まだ成人もしていない可憐な少女が、理想を掲げているというところに価値があるのだろう。
「明後日、副代表の斉武氏と非公式の会談が行われます。その時の護衛をお願いしたいのです」
「確か、斉武はイケイケの武闘派だった。やっぱり、天童　菊之丞がこの島を離れている時を狙って？」
「はい。そうだと思います」
日本本島での会議のため、天童　菊之丞は島にいない。いかに小娘といっても代表。邪魔な奴がいないうちに取り込んで置こうって腹だろう。
「護衛、必要ですか？」
「斉武氏なら、あるいは」
斉武は聖天子様とは真逆の、イケイケの武闘派として有名だ。日本の武偵法では禁止されている殺人の禁止を撤廃させようとしているし、本人も腕が立ち、暗殺に来た刺客を返り討ちにしたり、といった具合だ。
護衛が必要な理由はそれだろう。もしかしたら、何かが起こるかもしれない、と。
次に分からないのは、
「なぜ俺を護衛に指名したんですか？」
ほぼほぼ無名な俺を選んだ理由だ。
「前日の飛行機ジャックの記録を見て、ですね」
「む……」
飛行機ジャック。つまり武偵殺しの事件の事だろう。俺達には口止めのお兄さんが来たんだけど……ま、この島でもトップクラスの権限を持っているんだから、そのくらいは知ることはできるか。
「あなたのセリフに心を打たれたから、というのはダメでしょうか？」
クロは俺を見てくる。そんなに見ないでくれ、あの時はスタンドが

発現したせいでハイになっていただけなんだよ。歌でも一曲披露したくなるくらいにな。
「お兄ちゃん、何言ったの？」
「とても魅力的なセリフでしたよ。武偵の方からあんな言葉が聞けるなんて思っていませんでした」
「本当にやめてほしいんですが」
微笑を浮かべる聖天子様と疑惑の目を向けてくるクロ。２人の視線に耐え切れなくなった俺は先に進めてくれとジェスチャーする。
「それに、何もあなたたちだけで護衛してもらう訳ではありませんよ」
聖天子様は後ろに顔を向け、並んでいる人たちに声をかける。
「挨拶を」
「失礼します」
その中の男が一人、一歩前に出る。
外套のようなものを羽織り、腰には刀と拳銃が収められている。
「彼らは私の護衛を担当している方たちです。こちらが隊長の保脇さんです」
専属の護衛官たちか。
聖天子の紹介で俺の前に出て来たのはメガネをかけている男性。神経質そうな顔をしている。
一瞬、俺を値踏みするような目を向けてきたがすぐに、消え失せた。
「ご紹介にあずかりました『保脇　卓人』です。階級は三尉。護衛隊長をやらせていただいております。もしもの時はよろしくお願いします」
「……どうも。夜月　翔です。今回はよろしくお願いします」
俺は立ち上がり、机を挟んでお互いに礼をする。
「それでは詳しい日程を……」
視界の端に保脇を入れつつ、俺は秘書の説明に耳を傾けるのだった。

「なーんか、やな感じだったね。あの保脇って人」
護衛任務についての説明も終わり、俺とクロは部屋を出て廊下を歩いている。部屋を出てから最初の一言がこれだ。
「さすがクロだな。その通りだよ」
「え？」
保脇　卓人。こいつもブラック・ブレットのキャラなんだけど……いわゆる『完全な敵キャラ』なのだ。
ラノベにかかわらず、敵だったキャラクターがいつの間にか味方……そうでなくても、協力体制が築かれているといったことは少なくない。
しかしこいつは違う。
最初から最後まで主人公の敵として描かれている。
「この世界でも、それが変わらない可能性は高い」
「えぇ……あいつって、敵のスパイなの？」
「や、どっちかって言うと、歪んだラヴ、だなぁ」
「な、なに？　その発音……？」
ちょっと巻き舌にしたらこの反応だよ。
「それは置いておいて。保脇は聖天子様を狙ってるんだよ。分かるだろ？」
「あー、身分違いの恋ってやつ？」
「それならまだ良かったんだけどな」
聖天子様と結婚して権力を握ろうって考えだからな。平安時代の藤原氏みたいなもんだ。ちょっと違うか？
「んー、ナルホド。それ、言っちゃえればいいんだけどね」
「ま、証拠がないからな」
武偵殺しの時と同じだ。犯人が分かっていても、未遂どころか犯行を起こそうともしていなければ、告発することはできない。
そんなこと下手に発言しようものなら、俺たちのほうが危なくなる。
俺たちにできるのは、事件が起こるまで待ち、起きた事件を完璧に

無事解決することだ。
「それじゃあ、クロ。先に行っててくれ」
「アスナさんたちから、お兄ちゃんを一人にするなって言われてるんですけど」
「初耳だな……っ!!」
　俺の監視体制が厳しくなっている。
「でも、今回は一人のほうがいい。奴の本性を知らないと思わせておいたほうが、後々都合がいいかもしれないからな」
　それでなくてもクロは子供だし、保脇も無意識に警戒を緩めるかもしれない。
「……わかった。先行ってるからね、お兄ちゃん！」
「おい！　待てって！」
　わざと大きな声を出して走っていくクロ。俺もわざと引き留めるふりをする。
　後ろから足音が響いた。
「止まれ、夜月　翔」
　保脇　卓人とその取り巻き2人の合計3人だ。
「何か？　なんて言わないぞ」
「フンッ、なら私の言いたいこともわかるな。護衛任務を辞退しろ。天童閣下は私に聖天子様を任せてくださった。彼女に貴様はふさわしくない」
　お、おおぅ。こんなセリフを生で聞くことになってしまうとは……
　会談当日、俺とクロが聖天子様と同じ車に乗り、会談中も後ろで控えることになった。それは聖天子様の希望らしい。
　その説明の時のこいつの顔はマジでやばかった。視線で人を殺せたら、ってレベル。あの場に人がいなかったら剣を抜いていただろう。
「それは直接本人に――」
　柱の角が銃弾に削られる。流石、ＶＩＰの専属護衛官だけある。Ｓランク相当の抜き撃ちだな。
「喚くな……まったく、聖天子様は一体何を考えていらっしゃるのか

……こんな無名の武偵をおそばに置かれるなんて……っ!!」
取り巻き2人、なんか言えよ!! お前らの親分マジでおかしいだろ! それに対してコメントはないんか!
「……そもそも、お前が俺を気に入らないのは、それだけが理由じゃないだろ」
俺の言葉に、保脇はにやりと笑う。
「聖天子様はお美しく成長され、今年で16歳になられた」
「実際見るとそうは見えないよなぁ」
「貴様もそろそろ、世継ぎが必要だと思わんかね?」
「国じゃないんだぞ?」
「黙れ」
あーあ、終わった。こいつが原作通りで何も変わってないってことがわかっちゃったよ。
もう、いいか。
「ま、あんたに従う義理はないんで」
「貴様!」
背を向けて歩き出した俺に保脇と取り巻き2人は発砲するが、

「は?」
銃弾はすべて明後日の方向へと飛んで行った。
「牙(タスク)。お前じゃあ俺に勝てねぇよ」
「貴様、能力者か……ッ!!」
俺と保脇はにらみ合うが、発砲音を聞きつけたのか、警備員が走ってくる音が聞こえる。
「……殺してやる。殺してやるぞ!! 夜月 翔!!」
なかなかに豪快な捨て台詞を吐いて逃げていった。俺はその場で硝煙反応を調べられ、すぐに解放された。
このこと、クロに言っておかないとだな。

「……」
まあ、そうね。この事件ってことは、こういうことだと思ってましたよ。
クロは施設に入った時の通路にはすでにおらず、受付のお姉さんに聞けばもう建物は出たと。そこから携帯に連絡しても返事がなかったため、少し焦っちゃったけど……無事発見できた。
施設の目の前にある公園の噴水。そこにクロはいた。ただし1人ではない。プラチナブロンドの髪を持つパジャマ姿の同年代の女の子と一緒にいたのだ。
さらに言えば、その周りを3人の男に囲まれていた。
保脇の部下ではない。そこら辺のチンピラみたいだな。クロはそいつらから、もう1人の娘を庇ってる形だ。
早く行ってどうにかしよう。
「その辺にしとけよ」
「はぁ？」
「なんだよ兄ちゃん。カンケーない奴は引っ込んでろよなぁ!!」
「なんだ、そんなにケンカしたいのか？」
俺は武偵高の学生証を見せる。たったそれだけで、チンピラの顔が引きつり、逃げ腰になる。
「う……っ！　お、おい！　行くぞ！」
「あ、ああ」
男たちはみんな仲良く逃げて行った。これにビビるってことはあいつらただの不良か。
「大丈夫か、クロ、と……」
俺は倒れこんでいた娘の手を引いて立ち上がらせる。目は半開きになっていてすごく眠たそうだ。
そんな、半分夢を見ているんじゃないかと思わせる目で俺をじっと見てくる。
「正義のヒーロー……生まれて初めて見ました」

「そっか」
「あれ？　私は？」
「……？　もう一人いたんですか？」
　クロには気が付いてすらいなかったのか。
「……もう暗いから家に帰れば？　お兄ちゃん、行こ」
　あまりの扱いにクロは相当不機嫌そうだ。
「ここ、どこですか？」
「迷子なの!?」
　クロは、綺麗にこけてしまった。

　自販機でジュースを買って帰ってくると、クロがコミュニケーションをとろうと頑張っていた。
「もう一度聞くわ。家、分かる？」
「いいえ？」
「お父さんとお母さんは？」
「さぁ？」
「なんでパジャマなの？」
「なんででしょう？」
「喧嘩売ってるのね？」
　クロがキレる寸前なんですが。
「ダメっぽいか？」
「うん。何を聞いても全然。どうしよう。分かったのは名前だけだよ」
「ティナ……です。ティナ・スプラウト」
　……やっぱりティナだったか。
「ほれ」
　俺は買って来たジュースをティナに渡す。

ティナは唯一の持ち物だったプラスチック製のボトルから錠剤を取り出して噛み砕いた。ボトルにはカフェインとプリントされている。

薬を飲むように口の中にジュースを流し込んだ。心なしか、目が開いたような気がする。

「私、夜型なので、こうしていないと昼は起きていられないんです」

「夜型？　その年で？」

不可解なワードにクロが眉を寄せる。

「あなたの名前は？」

「俺か？　俺は夜月　翔だ」

「翔さん、ですか？」

「ああ」

「お兄ちゃん、手が速いよ」

なんでや。

クロのほうを向いた後、ティナを見ると、目を瞑っていた。

「寝るなって」

「う……」

ティナはまたカフェインの錠剤を口の中に入れる。ポリポリと錠剤が砕ける音が聞こえてくる。

「よし、ここまで来るのに何をしていたか覚えているか？」

「今日はアパートで目が覚めて、歯を磨いて、シャワーを浴びて、服を着替えて颯爽と外に出たところまでは」

「や、嘘だよな」

俺はため息をつき。

「しょうがない。名前で住所を検索して――」

「実は自分の家、わかったりします」

「ちょ、何よそれ!?」

俺が最終手段に訴えようとしたところ、別人のようにティナが反応した。

その時、俺の携帯端末のタイマーが鳴った。

「そのアラーム」

「スーパーの特売が始まるな」
今日の買い物当番は俺たち。依頼説明の帰りにスーパーに寄って帰ることになっていた。間に合わなければ、当然大変なことになる。
沈黙が訪れる。
「……それでは、もう夜になるので」
「お兄ちゃん！　早くいかないと!!」
俺たちは、互いに別の方向に歩きだしたのだった。

襲撃

高級ホテル最上階。信じられないことに、そのフロア丸々一つぶち抜かれ巨大な部屋になっていた。４面の壁のうち1面は全面ガラス張り。狙撃してくださいと言っているようなものだが、聞いてみると超硬質ガラスをさらに魔術で補強しているのだとか。

そんな規格外の部屋の中央に置かれた2脚の椅子。そこに聖天子様と向かい合うように大柄な男が立っていた。

高そうなスーツをビシッと着こなし、片眼鏡をかけている。この男が『斉武　宗玄』だ。

「……隣の者は護衛でしょうか？」

「はい。そうです」

「ふむ……貴様は『夜月　翔』だな」

俺そんなに有名人かな。いきなり名前あてられたんだけど。

「手が速いですな、聖天子様。こんなに早く自分の陣営に引き込んでしまわれるとは」

「……おっしゃっている意味が分かりませんが？」

「将来有望な人材には早めに粉をかけておく。基本でしょうに」

「私はそのような意図で護衛の依頼をしたわけではありません」

あ、なるほど。斉武も武偵殺しの事件資料を読んでたんだな。

あたりまえだけど、強襲科（アサルト）の武偵は警察官よりも殉職率が高い。どんなに優秀な人間も、どんどん消費されていってしまうのだ。

そのため、人材の確保は常に必須。優秀な人材はいくらでもいるって訳か。斉武の場合、優秀な兵隊かもしれないけど。

「ほうほう。そうでしたか。では、私が何と言っても構いませんな？

夜月　翔、俺の元に来い」

「は？」

俺が納得していると、ヘッドハンティングされてしまった。

「お前は俺と同じ、犯罪者を許すタイプではない。そちら側にいては、そのうち身を滅ぼすことになるだろう」

「言っている意味が分かりませんが……？」

この爺さん、わざと混乱するようなことを言ってるんじゃないだろうな。さっきの聖天子様の時然り。聖天子様があんなこと……思ってる訳、無いよね？
「クックック、そうか、自覚はないか。まあいい。それでは聖天子様、始めましょうか」
「……はい」
なんかにやけている斉武と暗い顔の聖天子様。対極な2人の会談は、終始斉武のペースで進んでいったのだった。

「……まあ、気にしなくていいんじゃないですかね」
「……はい」
あたりは真っ暗で、おまけに雨まで降っている。俺、クロ、聖天子様を載せたリムジンは、前後を2台ずつの護衛車に挟まれ、聖天子様の邸宅へと走っていた。保脇は一番前の車に乗っている。
日が沈んだせいもあって街灯しか車を照らす光はない。クロはそんな窓の外に目を向けたままこっちを見ないでいる。
会談は無事……とはいかないものの終わりを告げた。『天童　菊之丞』が帰ってくる前にもう一度会う約束を強引に作られたくらいで。
「ま、あのおじさん。自分がしゃべりたいことだけしゃべってる感じだったし。次の機会を作ったのも、繰り返して自分の考えを刷り込ませようってんじゃない？」
窓の外を見たままのクロも分かりづらいフォローをする。
会議の内容は、テレビのニュースでやっているような内容から、それこそ一部の重要人物しか知らないであろうことまで。俺たち、また嫌なことに首を突っ込んでしまったのかもしれない。
その中でも特に耳に残ったのは、

「全世界を衛星で監視、犯罪が起きた瞬間に超望遠レンズと精密レーザーで犯人を焼き殺すシステム……」
『キャプテン・アメリカ　ウィンターソルジャー』に出てきた『インサイト計画』のようなものだ。
「なかなかやばいこと考える人ですね」
　実現できるかはさておき、本気で言っているのがマジでイッてる。そんな奴に、『お前は俺と同じ側だ』って言われた俺もやばいけどな。
「いえ、その……私が言いたいのは……」
「俺たちを引き入れるとかなんとかって話ですか？」
「……はい」
　そっちを気にしてたのか。会談中も心ここにあらずだったし、それなりに気にしてるとは思ってたけど。
「私にはそんなつもりはありません。ただ単に、あなたたちのことを信用できると思ったから、こうして護衛を依頼したんです」
「……もうちょい、利口に立ち回ってもいいんじゃないですかね。別に俺にだって選ぶ権利はあるわけですし。多少腹に何か抱えるのは普通でしょう？」
　俺は秘密が多すぎるけどな。人には言えないことが多すぎて困ってしまう。
「理想と現実は、バランスをうまくとらないと大変ですよ？」
「……ありがとうございます。護衛のほうは引き続きしていただいてもよろしいですか？」
「もちろんですゴハッ！」
　クロにお腹をけられた。ごはんを食べた後だったらリバースしていたところだ。
「来たよ！　お兄ちゃん！」
　でもそれは、よくある嫉妬から来たものではない。敵の襲来を告げるものだ。

「さっき会ったあの子、敵だ」
「はぁ!?」
買い物も無事終わり帰路についていた俺は、横を歩いているクロにそんなことを言った。
案の定、クロはなかなかオーバーなリアクションをしてくれる。
「……今回の事件、知ってるのね、お兄ちゃん」
クロは本当に理解が速くて助かる。クロは俺の言葉からこれが何かしらの作品の原作イベントだと理解したんだ。
「あの子は聖天子様を暗殺しようとしているスナイパー。だからクロを連れてきたんだよ」
今回の依頼を受けるにあたって、みんなには誰か1人と一緒に行けと言われたとき、俺は迷わずクロを指名した。
理由は単純で、スナイパーに対抗するにはスナイパーが一番だからだ。
どちらかというと近接系に能力と武器が寄っている俺では、かなり厳しいと判断したのだ。
「何時どこで狙ってくるの?」
「会談の移動中が一番怪しいけど、どこから狙ってくるかまではわからない」
だが、どのような方法で狙われているのかがわかれば、いくらでもやりようはある。
そして、狙撃に対してはクロが無類の力を発揮する。いかにティナだろうと、宝具の矢を連発するクロをそうやすやすと突破できるとは思えないしな。
魔力の問題は、新しく手に入れたアレのおかげでどうにかなりそうだし。
「分かったわ。任せて、お兄ちゃん!」

俺はすぐさま聖天子様を押し倒して窓から頭が見えないようにする。が、数秒経っても窓ガラスから銃弾が飛び込んでくることはない。

まさか、クロのミス――？

「な、なによ、これ……ッ!!」

クロの焦った声。いつも余裕があるクロには珍しい、聞くことが少ない声だ。

そして、ガラスのブチ割れる音が車内に響き渡った。ただし側面のではない。割れたのは、フロントガラスだ。

小さな人影が、フロントガラスから侵入してきたのだ。

「うわぁぁぁぁぁ!!!!」

降り注いだガラスによって体を切り裂かれた運転手が、悲鳴を上げる。手で傷口を覆ってしまったため、ハンドル操作が疎かになる。

スリップしかける車。遠心力で体が引っ張られるが、強引に超宇宙聖剣（スペースカリバー）を取り出し、振るった。

青白い光に包まれる刀身は、要人用に頑丈に作られているリムジンに縦に切り込みを入れる。

が、すでに人影はそこにはいなかった。

回転し始めていた車が、さらに損傷したことによって、めちゃくちゃな動きになり、一瞬左右の感覚が分からなくなる。

電柱に当たったことで停止するが、命があったことをのんきに喜んでいる場合ではない。攻撃はまだまだ続いているのだ。

「大丈夫か!?　聖天子!!」

「ん……っ、翔、さん……？」

よし、意識はある。衝撃で混乱してるだけだな。

ほっとしたのもつかの間、はるかかなたのビルのてっぺんが一瞬に光った。

マズルフラッ――ッ!!

「投影開始(トレース・オン)!!」
俺の目の前に、石を直接削り出したような大剣が４本突き刺さる。
俺の身長よりも大きいそれは、俺たちの体を光った方向から完全に遮断していた。
銃弾が当たり、剣でひび割れたアスファルトに追加のダメージが入る。この衝撃、戦車用の弾でも使ってんのかよ!!
「牙(タスク)ッ!!!!」
後ろから迫る２人の敵。
服の影を利用した、見えない攻撃を使って迎撃する。キンジの銃技を利用して致命傷にはならない、しかし、行動は制限できるところを狙った攻撃だ。
これを避けられる訳がない。
実際、爪弾は命中した。
その後ろから、３人目の敵が現れたが。
「なにぃッ!!」
「どいて!! お兄ちゃん!!」
クロの射た矢が、３人目の敵に命中する。いつもの戦闘服に加え、頭にシンプルなバンダナを巻いている。
このバンダナが、俺が新しく手に入れた道具だ。

無限バンダナ
メタルギアシリーズに登場するアイテム。
装備することで手持ちの飛び道具の弾数を無限にすることができる。

先日手に入れた道具だ。実験の結果、クロが矢として投影した時に限って魔力の消費がゼロになったため(アーチャーが弓を使う戦法を主にするのはどうかと思ったが)今回はクロに持たせて狙撃対策にした。

その結果が今の状況だが。
「変身！」
《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ》
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｇｌｏｒｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ！》
俺はパラドクスに変身。倒れた３人の後ろの暗がりから近づいてくる３人の人影に警戒する。
が、これはクロの距離だ。３本の矢を同時に放ち、命中させるという離れ業をやってのける。
それにひるんだのか、追撃はなく、辺りは雨の音だけになった。
「……お兄ちゃん、どうなってるの？」
「こっちが聞きたいよ」
腰を抜かしてへたり込んでしまっている聖天子様をおんぶして無事だった護衛車両に連れていく。
顔を真っ赤にした保脇の怒鳴り声は、たった今起こった暗殺未遂に考えを巡らせる俺の耳には全く入ってこなかったのだった。

とあるビルの屋上。一人の少女が立っていた。
足元には、少女の身長の倍以上の大きさのアンチマテリアルライフルが横たわっている。近くには、その銃に装填するであろう大きな弾丸の薬莢が転がっていた。
少女は一度深呼吸して、小さく唱える。
「夢幻召喚（インストール）、解除」
少女の服装が、青いドレスへと変化する。手には１枚のカードが握られていた。
携帯を取り出し、唯一登録されている番号に電話を掛けた。

「すみませんマスター、失敗です。護衛に阻まれました。不利と判断したため、一時撤退して待機しています」
《……何？　不意打ちのお前の攻撃を防ぐことができる護衛が付いていたというのか？　何者だそいつは。情報はなかったが……》
「2人いました。一人は男性。途中からおかしなパワードスーツを身に着けました。もう一人は私と同じくらいの女の子。暗かったのと、それぞれ顔を仮面とバンダナで隠していたため視認できませんでした」
《……いいだろう。その2人に対しては私が調べておこう。ご苦労だった。ティナ・スプラウト》
「……はい」
　電話を切ると、少女――ティナはいずこへと消えていった。

「くそくそくそ！　目障りな男め！　あの無能が護衛しているから聖天子様は狙われるんだ！　いや、もしかして、あいつが情報を流しているんじゃないのか？　そうに違いない。　あいつが護衛に着いた途端狙われたんだ。それ以外に考えられない!!」
　安脇は自室で神経質そうに爪を噛む。親指の爪が歪に形を変えていく。
「このままでは聖天子様の命が……何としても奴を排除しなければ、しかし、聖天子様が直々に指名した男だ、将来はともかく、今の私は聖天子様に意見などできない……あの金に汚い生意気な小僧を消すには……」
　暗殺。
　保脇はニタリと顔を歪ませる。
「そうだ、目には目を歯には歯を、暗殺には暗殺を。あいつが聖天子様暗殺に加担しているんだ。その手があったじゃあないかッ!!」

武偵は殺しはご法度となっているが国によってはそうでないところもある。あくまで少数派ではあるが殺しを専門とするものも存在するのだ。そうでなくてもこの島の闇は深い。少し探せば非合法な研究結果をお披露目したい研究者は山ほどいる。

（待っていて下さい、聖天子様。私があなたをお救いします）

優秀な保脇にはそれなりのツテがある。そこから足がつかないように慎重に事を進める。うまくいけば暗殺の阻止だけでなく犯人の逮捕、用済みになれば翔に差し向けた暗殺者にも一緒に手錠をかけてしまえば良い。

さらにこの事件で自分の能力の高さが証明されれば聖天子様との距離が一気に縮まり、あわよくば……

醜いプランが頭の中に構築されていく。

「クククッ」

これからいずれ訪れる未来を想像し、顔がにやけてしまう。

抑えきれない笑いを押し殺していた保脇は、

背後から『矢』に射抜かれた。

狙われた翔

「ああ、よろしく頼む」
《分かった。調べておこう》
なんだかんだ有能なジャンヌとの電話を終了する。
あの襲撃からしばらくたち、2回目の会談が2日後に迫っていた。もちろん犯人が捕まることはなく、聖天子様は自宅から一歩も出られない状況らしい。
幸いと言っていいのか、天童　菊之丞は予定を切り上げて早めに帰ってくるらしい。だから何か変わるのかといわれると厳しいけど。
結局あれは、ティナによるものではなかったのか。あの後現場を調べたが、俺が倒したはずのヤツどころか血液すら残っていなかった。雨だったせいかな？　そのせいで、読心能力者もお手上げ状態。
第1回目会談のデブリーフィング（反省会のようなもの）と第2回目会談のミーティングでは『暗殺者を手引きしているのは夜月　翔だ』会が開かれた。
言わなくてもわかるとは思うが、保脇だ。
あいつもうやばい。何がやばいって、理論を無視して俺を犯人にしようとしてくるところ。ほかの護衛の人みんな引いてたもん。
それに加えて……なんというか、妙に自信たっぷりというか……なんとなく『嫌な』感じがするんだよなぁ。
俺から話しかけると絶対大変なことになるから観察しかしてないけど。
そもそも、俺はほかの人からもあんまり快く思われてないからね。保脇ほどじゃないにしろ、エリートの人たちにとってはぽっと出の俺が気に食わないのは仕方ないとは思うが。
そんな共通の敵を持ってる人たちからすら距離を取られる保脇。マジ哀れ。普通そこは協力する場面でしょうが。
そんな人たちのことは置いておいて、暗殺未遂のことだ。
ジャンヌに依頼したのは彼女が情報科（インフォルマ）であり、イ・ウーだったころのネットワークを生かして裏のことについても調べられるからだ。

早くて、明日には調べてきてくれるらしい。ほんと助かる。会談には間に合うからな。
「よし、行くか」
俺は目的地に向かって歩き出した。

「ほれ」
「ありがとうございます」
買って来たたこ焼きを、ベンチに座ったティナに渡す。相変わらず眠そうだな。
俺は隣に座り、たこ焼きにソースとマヨネーズをかけてやる。
ティナの格好はパジャマでは無く、オレンジ色のフード付き黄色いパーカーに黒いミニスカートだった。
ちなみに2人きり。別に単独行動しているわけじゃない。クロとの待ち合わせだ。
まだ初等科のクロは、依頼を受けるのは非推奨。授業を優先しないといけないらしい。聖天子様になるべく早く来てほしいと言われてしまった俺は、午後の自由履修（高等部になると、通常授業は午前で終わり、午後はそれぞれ自分に必要なスキルを磨いたり、依頼を受けたりする）を利用して、一足先に、聖天子様の住んでいる豪邸の真ん前の噴水のある公園に来た。
来たのはいいのだが、そこで何とティナと偶然ばったり出会ってしまったのだ。
俺は少し迷ったのち、少しティナに付き合うことにした。理子の時と同じで文字の上では知っていても実際は違っている、なんてこともあるしな。
それに少し下種な話になるけど、話せばあの不可解な能力についてわかることがあるかもしれないし。

しかし、ティナは今日もブレない。
いつものように、たこ焼きにカフェインの錠剤をこれでもかとかける。とても不味そうですね。
そしてたこ焼きを長めの爪楊枝で刺し、口へと運ぶ。だが、
「あう……っ！」
開けた口には入ることはなく、地面にべちゃりと落ちた。
「あーあ。ほら、貸して貸して」
俺はティナが持っていた爪楊枝を持つと、たこ焼きに刺した。しっかり中のタコに刺さったことを確認すると、ティナの口に放り込む。
丸々一つ口に入れたため、ほっぺが膨らんでいる。それを必死に咀嚼する姿は……なんか、いいね。心が洗われるよ。
「翔ひゃん、もっとくらひゃい」
まだ口に残っているのにねだってくる。
「はいはい。食え食え」
「ぱくっ、はむはむ」
そして2個目、3個目と、お前ご飯ちゃんと食ってんの？　と言いたくなる程で即飲み込んでいく。
「ほら、ソースがついてるぞ」
時に、ティッシュで口の周りについたソースを拭き取ってあげたりしながら。穏やかな時間が流れていく。
これ、クロが来たら大変なことになるな。ま、それはその時考えるとしましょうかね。
「今日はありがとうございます。私に付き合ってくださって」
「んー、俺も時間が空いてたからなー」
ちょっと嘘です。
「私、翔さんのこと好きです」
「突然の告白だなぁ」
「恋愛的な意味ではありませんよ？　私子供で、そういうことまだわかりませんから。でも……」
脈絡がない『好き』はまだまだ心臓に悪くて困る。多少のボディタッチくらいならもう息をするようにできるんだけどな。はいはい、

クズだね、俺。
これは子供特有のストレートな感情表現だから。勘違いしないから。
「こんなにやさしくしてもらったの、久しぶりです。私、両親が死んでからあまり楽しくない気分ですから」
「……」
ティナは暗い表情、小さい声で、言う。
携帯電話が鳴りだす。その時、ティナの表情が強張った。俺のものではなく、ティナのものが鳴ったんだ。
「出ていいぞ」
「いえ、私はこれで帰ります」
ティナは立ち上がり、俺に背を向けて走り出すが、
「また会ってくれますか？」
不安そうな表情で振り返った。
「おう。また来い」
連絡先は交換してあるしな。
笑顔でそう答えると、ティナは安心した顔になり、走っていった。
……次会うときは戦うことになりそうだけどな。
『痛い』……ねぇ……」
俺は流れる雲を見上げて、そう呟いた。
「たこ焼き残っちゃったんだけど、食べるか？」
ティナと入れ替わるように俺の前に現れた金色の少女。実際はなかなかに過激なデザインな、金具以外は黒一色の服を着ている。が、それが霞むくらいの綺麗な長い金髪だ。
「いえ、私はたい焼き派なので」
その少女は見ず知らずのはずの俺に、まるで世間話のように返しながら、巨大な棘付き鉄球で俺が座っていたベンチを木っ端みじんに破壊した。
「あなたに恨みはありませんが、ここで死んでもらいます」
こいつ――――ッ!!
一瞬で俺に肉薄した少女は、刃物に変えた手を横なぎに振るってく

る。静止状態の車でアクセルを底まで踏んでもこのスピードは出ないだろう。
（固有時制御（タイムアルターダブルアクセル）２倍速ッ!!）
倒れこみつつ後ろに跳ねる。２倍速でやっと躱せた。
攻撃を予測してあらかじめ用意しておかなければ、死んでいた。
「変身!!」
《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ》
《Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ?》
《Ｄｕａｌ　ｕｐ!》
《Ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｇｌｏｒｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ!　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＰＵＺＺＬＥ!》
さらに転がりつつパラドクスに変身する。
噴水周りにいた人たちはようやく異常に気が付いて逃げていく。まばらにいた人の声はどんどん小さくなっていく。
周りの人がいなくなってくれるのは個人的に好都合。全力でやるとしよう。
「お前、金色の闇だな。誰に依頼された」
ダメ元で聞いてみる。
特徴的な服装と能力。こんなやつ、一目でわかる。
この娘は『金色の闇』。『Ｔｏｌｏｖｅる』に登場するキャラクターで、全身をナノマシンによって自在に変化させることができる変身（トランス）を持つ、殺し屋だ。
暗殺者から警護していたつもりが、いつの間にか殺し屋を差し向けられていた件について。しかも、マジで強い奴。
「知っていましたか。ですが、聞いても無意味ですよ」
「ここで死ぬからか?」
《高速化》
さっきとは違う。しっかりとスピードについていける。
切りかかってきたヤミの手を、冷静に受け流す。ヤミの顔は驚きに染まっていた。ここまで完璧に対応されるとは思っていなかったのだろう。

俺はヤミに向かって拳を放つが、さすがに当たってくれない。
戦場は地上から空中へ。ヤミは背中から翼を出し、俺はゲームエリアであることを生かして足場を作る。
《伸縮化》
ゴムゴムパンチも華麗なロールで躱され、逆に巨大な鉄球に押しつぶされる始末。
「なるほど、依頼主の言っていた通りですね。いたいけな少女に暴行を振るうのが好きな変態だと」
「おいマテ」
依頼主ぶっ飛ばす。
「極め付けには、年上年下異性同性かまわずに手を出す色欲魔だと」
「それは違――――……違う……？　違う!!　同性には手を出さない!!」
最初否定できないなと思い、すぐにその中にある不穏なワードに反応する。
依頼主マジぶっ飛ばすからな！
《ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＦＩＧＨＴＥＲ！》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｒｏｕｎｄ　１　Ｒｏｃｋ　＆　Ｆｉｒｅ！》
「大変身!!」
《Ｄｕａｌ　ｕｐ！》
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｈｉｔ！　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＦＩＧＨＴＥＲ！》
「無駄です」
髪の毛が蠢いた。一房一房が鋭利な刃物のようになり、あたりに降り注ぐ。
近づくことすらできない猛攻。俺の姿が変わったことに警戒したのか、距離を取られたまま、まともに動くことすら出来ない。
「はあああああぁぁぁぁ!!!」
俺は手のアーマーを合わせ、炎のオーラを出した。バリアのような役割をして、攻撃の手が緩む。

ふぅ……しょうがないな。この手だけは使いたくなかったんだが……四の五の言っていられるほど、余裕がない。
俺は息を吸い込む。外から見ても息を吸っているとわかるくらいオーバーに。そんな俺を見て、ヤミは足を止めた。警戒しているのか？
依頼主からどんな情報を受け取っているかは知らないが、それだけで判断しないということだろう。
だが無意味。お前はこれを気にせず俺を叩き切るか、耳をふさぐかをしなければならなかった。それをしなかった時点で俺の勝ちだ。
吸った息を、一気に、一発逆転の気持ちを込め、解き放つッ!!
「今日のお前のパンツの色は白だなッ!!」
「なっ!!!」
ヤミは短いスカートを抑える。両手がふさがり、鋭利な刃物だった髪の毛はふにゃりと歪む。
そんな短いので飛び回っていたら見えるのは当たり前だろうが。見られたくないなら、スカートなんてはくんじゃないぜ!!
「もらったあああああああああああああああ!!!!」
――固有時制御（タイムアルタースクエアアクセル）４倍速!!!
「ぶち抜けえええええええええええ!!!」
パズルができない今、他の能力を使って加速する。
俺の変態発言と不意の加速にヤミは反応することができない。とっさに固めた防御をやすやすと突破して、突き刺さる。
そのまま炎の拳が大爆発を起こした。
爆発の熱と余波でフェンスが歪み、植木が消し飛ばされた。ヤミの方は、噴水を突き抜け、反対側まで吹き飛ばした。
「ふぅ……」
俺は腕を回しながら一息つく。
瓦礫の中から人影が飛び出し、去っていった。
ヤミだな。何とか撃退したか。最悪の勝ち方だったけど。ってか、あれで気絶しないんですか。
俺は変身を解除する。

緑がきれいだった公園は、見る影もなく破壊されている。花壇に植えられていた花は踏み荒らされ、噴水も水道管が破れたらしく水が止まってしまっている。
本当に、申し訳ないと思ってます。
戦闘の爪痕にげんなりしていると、俺は地面に倒れた。
「……あ、れ？」
腹部に違和感を感じ、触れてみる。
ヌルっとした温かい感触がする。
それは俺の血だった。
霞む目で最後に見えたのは、血濡れのナイフを握った髑髏の仮面だった。

「高い金を払ったのに、失敗するとはな。金色の闇」
「……」
とある裏路地。そこに保脇はいた。暗がりでわかりずらいが、ぼろぼろの服を着たヤミもいる。翔との戦闘のダメージが抜けきってないのだ。
ヤミは翔を殺すために保脇が雇った暗殺者だ。
新しく力を得た保脇だったが、暗殺者を殺すのと、一緒に戦っている（もちろん保脇はそう思っていない）武偵を殺すのとでは、当たり前だが意味が全く違う。
前者に比べて後者の罪が重くなるのは目に見えている。
冷静になった保脇はもしもばれたときのことを考え、翔を殺す役はヤミに任せたのだ。そして、今聖天子を狙っている暗殺者を抹殺する役も。
「次は必ず仕留めます。私はこれで――」
「待て。夜月　翔はもういい。奴は通り魔に腹を刺されて重体だ。ど

このどいつにやられたのかは知らんが、マヌケな奴だよ」
翔はあの後、すぐに駆け付けたクロによって病院に運ばれた。そのことは連絡を受けてすでに知っている。人目をはばからず笑ってしまったため、周りからは白い目で見られていたが、今の保脇はそんな些細なことを気にするほど心の狭い人間ではない。
「次の依頼をする。明後日の聖天子様の会談、襲撃する者がいた場合、そいつを殺せ。人数は気にするな。その分金は払う」
「……わかりました。ですが、お金はいりません。今回失敗したので」
「フンッ、好きにしろ……どうせそんなもの、意味はなくなるからな」
闇に消えた声にそうつぶやく保脇。
保脇はことが終わり次第、ヤミのことも消すつもりだった。
ヤミもプロの暗殺者だが、どこからか自分がしたことが漏れないようにするためだ。ヤミも暗殺者の一味に見えるだろう。死体が一つ増えたところで、何の違和感もない。
『力』に目覚めていない頃はそんなことは不可能だったが、今は違う。今ならどこにいても聖天子のそばにいられる。
「まったく、そんな風に机に突っ伏して……跡になってしまいますよ、聖天子様」
保脇は幽霊のような足取りで、夜道を歩くのだった。

家に帰ったティナはすぐにシャワーを浴びた。
返り血が付着するなんてヘマはしていない。それでも、洗い落としたかった。
「ごめんなさい……！」
何度擦っても、人を刺す感触が生々しく残っている。
目からは涙がとめどなく流れ、瞼を閉じれば、ティナの刺した傷口からどんどん血を流す翔の光景が映る。

《最近聖天子の護衛についた武偵について調べが付いた》
《名前は夜月　翔とクロエ・フォン・アインツベルン》
その名前が出たとき、ティナは一瞬心臓が止まってしまったかと思った。
《……ほう、その反応、何か心当たりがあるのか？》
《偶然知り合いに……？　好都合だ。油断させて近づき、殺せ。相手もまさかお前のような小娘が暗殺者だとは思わないだろう》
《私の期待を裏切らないでくれ、ティナ・スプラウト》
翔と別れて出た電話。楽しかった気分は一瞬でなくなってしまった。
いつの間にか知らない女性と戦い始めていた翔。翔がパラドクスに変身したところで、ティナの目からは涙があふれてきた。
動悸が激しい心臓を無理やり抑えるようにカードを使った。
戦闘が翔の勝利で終わり、一息ついていたところを後ろから――
「ごめんなさい……翔さん……っ！」
マスターの命令は絶対。逆らえば帰る場所がなくなるだけではない。命がなくなる。
人を傷つけたのはこれが初めてではない。人形のように、マスターに言われたことを淡々とこなしていた。それでも、痛かった。
携帯の着信音が鳴る。
「っ!?」
ティナは震える手で画面に触れ、ゆっくりと電話に出る。
「……はいマスター」
《しくじったな、ティナ・スプラウト。先ほど搬送された病院を調べた。腹部の傷は深いが致命傷ではない。一命をとりとめた、とな。なぜ、首や心臓を狙わなかった》
「あ、え、その……っ！」
《夜月　翔に絆されたのか？》
「……っ」
《……まあそれは後だ。会談の次の計画書が流れてきた。クロエ・フォン・アインツベルンはともかく、夜月　翔が出てくることはない

だろう。これが最後だ。絶対にしくじるな》
ティナはこれで自分の人生は終わったと悟った。この任務が終了次第、自分はマスターによって消される、と。
逃げ出したとしても、世間知らずのティナでは生きていくことなどできないし、追っ手に見つかるのだって時間の問題だ。
人殺しの道具が、余計な感情を抱いてはいけない。機械的に引き金を引き、相手を冷たくしなければならない。
それができなくなったとき……
「ごめんなさい……翔さん……っ！」
ごめんなさい、ごめんなさい、一晩中泣きながらその言葉を繰り返すのだった。

入り乱れる戦場

「翔さん、大丈夫でしょうか……」
「命に別状はないらしいとは連絡を受けましたが……」
　坊主の護衛が気遣うように慰める。しかし、そんな慰めの言葉は全く意味がない。
「やはり私が護衛を頼んでしまったから……」
「い、いえ、そんなことは――――」
「そんなこと言うのやめてくれる？」
　相当ピリピリしているクロ。すでに戦闘服に無限バンダナを巻いている。少し変な表現になるが、暗殺者を待っているのだ。翔を病院送りにした暗殺者を。
「絶対にそいつを病院送りにしてやるわ」
　いつものふざけた様子は鳴りを潜め、年に似合わない殺気を振り撒いている。エリートのはずの護衛がビビるくらいと言えばその凄さがわかるだろう。
「ク、クロエさん？　気持ちはわかりますが、少し落ち着いて……」
「あなたも、集中してないと後ろから刺されても知らないわよ」
「……もうヤダ、中間管理職」
　坊主の男は死んだような目になる。
　ほかの護衛は見かけたら道を譲るレベルの最近の保脇への事務報告、斉武との会談と暗殺者に狙われたことでグロッキー状態の聖天子様のケア(保脇は聖天子様が拒否した)で、ぼろぼろの心に追加が入った。
　テンションが真逆に振り切っている2人の女子に挟まれる。この仕事が終わったら休暇を取ろうと、心に誓った護衛官だった。
「そ、それにしても遅いですね！　斉武さん！」
　それでもまじめなこの男、場の雰囲気を和らげようと口を開く。
「暗殺でもされたんじゃない？」
「そうですね……約束の時間からもうすぐ1時間たつのにまだ連絡が？」

「あ、はい。まだ特に。こちらからも連絡はしているのですが繋がらなくて……」
「……それ、普通にまずいんじゃないの？　ま、あんなおじさん、どうでもいいけど」
坊主護衛官はそれには同意です、と心の中で思う。この男も、聖天子が斉武に取り込まれるのはいいと思っていない。
突然、クロが叫んだ。
「坊主！　聖天子を守りなさい!!」

ティナは向かい側のビルのフロアから、狙撃銃のスコープを覗いていた。
スコープには3人の人物が写っている。スコープ越しにもだらだらと汗をかいているのがわかる坊主の男。暗殺対象の聖天子。そしてクロだ。
狙撃銃の狙いは完璧。後は引き金を引くだけで聖天子の頭はバラバラになる。しかし、引けない。引き金を引く指に力が入らない。
運動しているわけでもないのに動悸が激しくなり、息も細かくなっていく。ただ伏せて狙撃銃を構えているだけ。マスターの命令通り引き金を引いて銃口の先にある頭を吹っ飛ばす。
つまり、聖天子を――
（――殺す……？）
スコープの十字は聖天子の頭にぴったりとついているが、視線の先にはクロがいた。彼女は今何を思っているのだろうか。似ていなかったが、お兄ちゃんと呼んでいた人が怪我をして。
どんどん狭くなっていく視界の中、見えた。
そのクロが、まばたきをし終えたときには弓を構えているのが。
「ッ!!!!!」

反射的に飛び上がる。
それはもはや、弓の次元ではなかった。拳銃を上回る速度、威力を持ったそれは、床に置いていた狙撃銃をかすめただけで半壊させ、上のフロアまで届くくらい天井を削り取る。
無限バンダナのおかげで限界まで魔力を込めた矢だ。魔力の消費を気にしないで放ったそれは、
――――壊れた幻想（ブリークンファンタズム）
起爆した。
魔力が込められた宝具を壊して中に詰まっている魔力を暴発させる技。無限バンダナを巻いたクロは誰よりもこれを使いこなせる。
「夢幻召喚（インストール）ッ!!」
たった一度の攻撃で崩れ始めたビルのフロアを脱出しながら、体に染みついた動きでクラスカードを使う。
ティナの服装が変化する。青いドレスはグレーを基調とした服装に代わり、頭には髑髏の仮面がのせられる。
クラスカードとは『Ｆａｔｅ／ｋａｌｅｉｄ　ｌｉｎｅｒ　プリズマ☆イリヤ』のキーアイテム。英霊という過去の偉人の力が宿ったカードで、使用することでその人の逸話や武器が具現化した『宝具』を使用することができるようになる。
ティナが所持するカードに宿っているのは、百貌のハサン。宝具は『妄想幻像（ザバーニーヤ）』だ。
本来は、多重人格だった百貌のハサンの人格１つ１つを個体として分離、行動させることができるという宝具。
クラスカードとして使えば、本人の意思を持ったコピーを作り出すものになる。
初めてティナがマスターにもらった装備だ。狙撃銃よりも付き合いが長い。
「投影開始（トレース・オン）!!」
クロは聖天子がいる部屋の窓を突き破り、空に身を投げ出した。空中に剣を投影して、それを足場にする。質は最低限に。踏み出した足を支えて、離れるまで

それは、さながら空を走っているようだ。
（しっかり避けるのが見えた！　今日は何人で襲ってきてるのかはわからないけど、こっちを狙える位置に狙撃手がいるのはマズイわ。まずはそいつから潰す！）
　ものの数秒でティナの狙撃地点に到着する。
「やっぱり、あんただったのね」
「あ、あの……っ」
　投影した干将・莫耶を突きつけられ、まだ距離があるというのに身動きが取れなくなってしまう。
「……なんで泣いてんのよ。そんなのおかしいじゃない。泣きたいのはこっちなのよ」
「……っ!!」
　その言葉にティナは、再度自分が取り返しのつかないことをしてしまったと悟る。もう家族のいない、マスターに従っていなければ生きていくこともできない自分と翔とでは、悲しんでくれる人の有無が決定的に違っている。
　そこに更なる乱入者が現れる。
「見つけました……片方はクロエ・フォン・アインツベルンですね。ですがもう一人は……護衛官の中にはいませんでした。あなたが暗殺者（ターゲット）ですね」
「え、え……？」
「は？　な、何言って……そもそもあんた誰よ！」
　クロとティナの動きが止まる。
　昼間に暗殺を決行するという大胆不敵なことをしたヤミだが、最低限、周囲の路上カメラはハックしていた。
　映像は残らず、めちゃくちゃになった公園は、腹を刺した犯人と翔の戦闘の結果だと結論付けられていた。
　つまりクロは、変身（トランス）、ヤミの実力について全く知らない。
　すっかり戦意を喪失しているティナにヤミの右手が迫る。手刀の形になっていた手のひらは形を変え、刃物になる。
　しかし、ティナの首をはねることはなかった。クロが受け止めたか

らだ。
　ティナはそれに驚愕する。
「ど、どうして……私は翔さんを……っ」
「……知ってるわよ。でもそんな顔してるのに攻撃したら、私の方が悪者になるじゃない」
　涙を流しているティナを見て、クロの中にあった怒りの炎が、少し収まった。問答無用で病院送りにしてやろう、から、話を聞いてから病院送りにしてやろう、くらいには。
「依頼だったとか、誰かに命令されて仕方なかったとか、弱みを握られてるとか、そんなのどうでもいい。あんたがお兄ちゃんを刺したことに変わりはないから」
　クロの言葉に目を伏せるティナ。
「死に逃げなんて許さないわ！」
「ッ!!」
　クロの言葉で、体に少し力が入る。
（死ぬならせめて、翔さんに謝ってから……っ！）
　押し戻されたヤミが距離を取る。
「……わかりました。それでは、あなたにも死んでもらいます」
　常識の外にいる3人の戦いが始まった。ヤミとクロは、壁や天井、果ては翼を出したり、剣を足場にしたりして、剣戟を重ねる。
　しかし、接近戦は、ヤミのほうが有利だ。
　いくら武器を作り出したとしても腕は2本、足を加えても4本しかない。どっかの海賊は口にくわえたりするが、クロは女の子、そんなことはしない。
　対するヤミは全身武器。特に、自在に動く髪の毛が厄介だ。
　手足だけの戦闘力も侮れるものではないのに、視界の外から現れた鉄球にまで対処するのは至難の業だ。
　クロは莫耶の刀身を真ん中から砕かれる。新しい莫耶を投影しようとするが、髪の毛で作られた手で掴まれ、動きを止められてしまう。
　自由な2本の手が振り下ろされる――――直前でヤミが回避する。
　ティナは妄想幻像（ザバーニーヤ）の分身と気配遮断によって、攻撃を回避しつつ、

隠しておいた予備の狙撃銃で狙い撃ったのだ。
「山を抜き、水を割り」
干将・莫耶を3組投影。そのうち2組を投擲する。
「なお墜ちることなきその両翼」
合計4本の干将・莫耶は壁に刺さることなく跳ね返り、着実にヤミへの包囲を狭めていく。
「鶴翼三連!!」
互いに引き合う性質を持つ干将・莫耶を三対投影し、投擲と斬撃を重ね当てる不可避の剣技。
そこに、
「妄想幻像(ザバーニーヤ)!!」
5人の分身体が襲い掛かる。
不可避の技、そのさらに針の先よりも小さい穴すらふさぐように、短刀を構えたティナの宝具が襲い掛かる。
常人なら、いや、達人でも3，4回は死んでしまうこのコンビネーション技。
「無駄です」
しかし相手は、それをやすやすと超えてくる。
闇夜に光っていた髪の毛が、全方向からの攻撃に対応してきた。飛んでくる干将・莫耶の軌道を変え、ティナの分身体を貫き、直接切りかかってきたクロと切り結ぶ。
「ッ!!!! まったく、勘弁してほしいわね!!」
ティナの投げナイフも、視線を向けることなく髪の毛で跳ね返し、本人は、クロを追撃する。
攻撃にも防御にも使える万能能力、変身(トランス)。その猛攻に、突破口を見つけられないクロ。近接戦闘では無限バンダナも効果を発揮しない。魔力が尽きる前、動きが少しでも鈍くなってしまえば、その瞬間敗北が決定する。
「これならっ」
「なにをっ!!」
気配遮断でひそかに近寄っていたティナの妄想幻像(ザバーニーヤ)3人が、ヤミに

しがみついて動きを止める。
「偽・偽・螺旋剣(カラドボルグ)Ⅲ!!」
その隙に距離を取り、ねじれたドリルのような矢を放つクロ。
ティナに撃った初弾とは比べ物にならない威力。ビルの壁を反対側までぶち抜く。ずいぶん風通しがよくなったビル。ここまで荒らされて上のフロアの重みに耐えることができるのは設計のおかげだ。
「どうですか?」
「多分当たってないわ。それよりも、あの分身ごと撃ったけど大丈夫なの?」
「あ、はい。私の魔力を分割して動かしているので。個体ごとに意識はありますが、魔力の塊なので痛みはありません」
妄想幻像(ザバーニーヤ)分身はＮＡＲＵＴＯの影分身のようなものという訳だ。
「あっそ。でも、やり過ぎには注意しないと。魔力、あっという間になくなるんじゃないの?」
「そうですね……あと5人やられると、戦えなくなりそうです」
「そうですか」
「ッ!!!!」
壁に空いた大穴の横に、ほとんど無傷の闇が立っていた。
「ほんと、何なのよ、あの女……っ!」
「翔さんは、あの人を撃退していました」
「お兄ちゃんが……? え、ちょっと待って。お兄ちゃんがあの女の人と戦った? いつ?」
「……私が刺す、直前です……翔さんの能力からあの人の弱点がわかったりしませんか?」
「え、そ、そんなこと言ったって……」
クロは余裕の表れなのかゆっくりと歩くヤミを見ながら、頭を働かせる。
しかし、特に有効そうな攻撃方法は思いつかない。
(まさかお兄ちゃん、誰かとHなことしたんじゃ……)
だとしたら、自分も知らない新しい能力だということになる。
流石のクロも、パンツ宣言してフリーズしているところに不意打ち

したとは思わないだろう。
そんなヤミの体を

超高圧電流が貫いた。
「ひっ、がぁ……っ、な、ない、を……っ!?」
常人なら間違いなく死んでいるが、ヤミは意識すら飛んでいなかった。しかし、それだけだ。体には全く力が入らず、身動き一つとれない。
変身（トランス）を発動させているナノマシンは、機械ゆえに高圧電流に弱い。壊れはしないものの、機能が著しく制限される。
ぼろぼろになって倒れてしまったヤミに呆然と立ち尽くすクロとティナ。
何かの作戦かと、動かないでじっとしている2人。そんな2人に、靴音が聞こえてきた。
保脇　卓人だ。
無様に瓦礫と埃まみれの床に転がるヤミに、汚物を見るような視線を向ける。
「使えない、本当に使えないなぁ！　金色の闇ぃ！　武偵1人、ガキ2人もまともに殺せないのかぁ？　社会のクズがよぉぉぉオオオ！」

狂ったようにではなく、本当に狂っている。狂人そのものの叫び声をあげる保脇。
「そんなゴミはさっさと掃除しないとだよなぁ！　この私のスタンド、『レッド・ホット・チリ・ペッパー』でなぁッ!!!!」
保脇はその場の全員に高らかに告げるのだった。

「ク、クロさん!!」
「聖天子様！　今は言われた通りにしましょう!!」
飛び出していったクロ。割られた窓ガラスに駆け寄ろうとする聖天子を坊主護衛官が必死に止める。
１回目の襲撃で狙撃が行われたことは頭に入っている。不用意に窓のそばに行くのは危険。自分が盾になって窓のないところに行くのが最善だ。
「そうですよ、聖天子様。ここにいては危険です。さあ、こちらへ」
「ッ!!」
後ろに音もなくたっていた、保脇。
「保脇、さん……？」
表情は普通なのに、『普通』ではない。聖天子は自分の後ろにいるはずの暗殺者よりも、目の前にいる、よく知っているはずの男に体が震えていることに気が付いた。
そんな聖天子を知ってか知らずか、笑顔で手を差し出していた保脇だったが、突然真顔になった。
「それはそうと、てめぇ、何気安く聖天子様に触れてやがるんだァ？　あァ？」
「え？　突然何ギャアアア

「や、保脇さん!?　な、何をしているんですか!!」
「何を、とは？」
「……え？」
「いやあ、不思議なこともありますねぇ。私は特に『何もしていない』んですが、こんな『不幸な事故』が起こってしまうなんて」
『何もしていない』、『不幸な事故』、それが嘘だとはいくら平和主義の聖天子もすぐにわかった。
しかし、保脇にこの手の能力がなかったのも確かだ。
（まさかこの人、保脇さんに変装した暗殺者!?）
保脇がスタンド能力を手に入れたことを知らない聖天子はその可能性に行き当たり、保脇から距離を取り始める。
「聖天子様？　まったく、困った人だ。なぜ私から距離を取るのですか？」
保脇はゆっくりと歩を進める。
と、その時、向かい側のビルから、何かが飛んできた。
偽・偽・螺旋剣（カラドボルグ）Ⅲだ。
無表情になった保脇。
「すみません、聖天子様。私も、向かい側のビルの様子を見てきたいと思います。他の護衛官をつけるので少しお待ちを」
保脇が部屋を去ったことでほっと息をつく聖天子。
自分の肩を抱いてソファーの影に腰を下ろすのと、ガラス張りの壁を破って誰かが侵入してくるのは、ほとんど同時だった。
「キャ――――――……え!?　あ、あなたは!!」
とっさに悲鳴を上げようとして開けた口は、侵入してきた人物を見てふさがらなくなってしまったのだった。

後味の悪い結末

スタンド。その言葉を聞いたクロは冷や汗を流した。翔が持っている能力はみんなに教えられている。その中にあったスタンドという単語。

能力に法則がなく、相手のルールに縛られれば妨害は不可能。そして『スタンドはスタンド使いにしか見えない』というルール。

（最悪ね……）

「クロさん、あの人、護衛官ですよね？　味方なんじゃ……？」

「違うわ。絶対に」

それだけは断言できると少ない言葉の中に含ませたクロ。そして、ティナもすぐに察してナイフを構えた。

「それにしても、クロエ・フォン・アインツベルン。君も残念だったなぁ。その年で暗殺者に殺されてしまうなんてなぁ」

おどけるように手を広げる保脇。

「それに、まさか暗殺者がこんなガキだったとはなぁ」

ティナのことも全く警戒していない様子だ。

「夜月　翔の前に、お前らをあの世に送ってやる」

「クロさん!!」

ティナに突き飛ばされるクロ。倒れながら目に映ったのは、目の前でズタボロになっていくティナだった。

「ちょ、ちょっと！　大丈夫!?」

「大丈夫ですよ」

「っ!!!」

クロはまったく無傷のティナに抱えられていた。

「今のは分身ですよ。慌てないでください」

「ほんとに脅かさないでよ……！」

小声でしゃべる２人。机が遮蔽物になって保脇からは視えていない。保脇からは。

「まったくだな、こざかしい小娘だ」

２人には聞こえない声。レッド・ホット・チリ・ペッパーだ。

電撃がティナの体を貫いた。激痛とともに筋肉が不規則に痙攣する。クラスカードが排出され、夢幻召喚（インストール）が解除される。
殺すつもりの攻撃。カードを使っていなければ死んでいた。
「ッ!!」
スタンドが見えないクロでも、いや、見えないからこそ、スタンド攻撃がされたことは理解できた。
理解できてもどうすることもできない。次の瞬間、目の前のティナと同じ目にあう。
クロの矢で破壊された壁から、光り輝く剣を持った翔が飛び込んでこなければ。

「キャ――――――……え!?　あ、あなたは!!」
「どうも、聖天子様……っ！」
窓を超宇宙聖剣（スペースカリバー）で切り裂いて、部屋の中に転がり込む。
颯爽と窓をぶち破った俺、マジフール。周りに護衛の人がいなくてよかったよ。
「ど、どこから入ってきているんですか!?」
「いや、時間がなかったもんでッ!!」
俺は鋭い痛みにうずくまる。
「ど、どうしましたか?」
「お、お腹の傷に響く……っ！」
「治ってないのに来たんですか!?」
1日、2日で治るほど浅い傷じゃなかったんだよ。聖天子様が腕のいい治癒能力者を雇ってくれなかったら、今もベッドに横になっていただろう。
パラドクスでエナジーアイテムの『回復』を使えればよかったんだけど、あれはゲームエリアで負った傷にしか効果がないみたいなんだ

よね。あの時はちょうど変身を解除してたから効果がなかったんだよ。
「いくらなんでも窓から入ってくるなんて……翔さんが暗殺者と間違われてしまいますよ!?」
「そ、そうなんですけど……斉武は来てないですよね？」
「……？　どうしてそれを？」
もちろん調べたからだ。ジャンヌに頼んだからな。

こっそり病院を抜け出して電話での調査報告を受けていた。
「結論から言って、暗殺の犯人はティナ・スプラウト1人だった」
「……確かなのか？」
「ああ。私が調べた限りではな」
しかしそれだと、聖天子様を襲った集団に説明がつかない。
「クラスカード、というものがある」
「ク、クラスカード!?」
ジャンヌの口から出てきた言葉に仰天するが、同時にそう考えればいろいろと納得できる部分がある。
百貌のハサンの宝具、妄想幻像（ザバーニーヤ）。あれを使っていたと思えば、ティナ1人でも倒したそばから敵が現れるという状況を作り出せる。
問題は、
「そんなものが普通に取引されてるのか……？」
「貴様の言う普通がどういうものかは知らないがな。法外な値段だが、手に入れることは可能だ。知名度もそれなりに高い」
この世界マジでカオス。どこのどいつだよ、そんなもんを作ってるのは！　まさかとは思うが、エインズワース家じゃねーだろうな。
「世に出始めたのは大体10年前だがな。誰が考案したかまではわからない。魔術協会も血眼になって制作者を探している」

……１０年前。なんか嫌な数字のような気がするけど気のせいってことで。
「それにしても、よくもまあ、ティナ・スプラウトとばったり出くわすなんて偶然を引き起こすものだ。こいつについても調べたが、中々業が深い少女だぞ」
ティナは捨て子。それを利用して小さいころから徹底的に戦闘技術が叩き込まれ、暗殺者として育て上げられた。クラスカード抜きでも、大型の狙撃銃を扱えるくらいには。
「なるほどねぇ……」
少し違っているが、ほぼほぼ原作と同じだな。
「私の言ったことをそんなに簡単に信用してもいいのか？」
「なんだよ。不吉なこと言うなよ」
こっちはこっちで、いっぱいいっぱいなのに。
「さあ、どうだろうな？　少なくとも私は、私をこんな目に合わせたお前にいい感情は抱いていないがな」
「……ジャンヌ・ダルクの誇りを信用することにする」
そういって俺は電話を切ったのだった。

と、まあ、こんな感じだ。
さらに、病院で目が覚めみんながお見舞いに来ていた時、狂三と理子にお願いしておいた。ヤミを雇ったのがだれなのかと、保脇の動向を監視するように。
結果は大当たり。ヤミを雇ったのは保脇だった。そのほかに、実に好ましくない事実、でも早めに知っておけてよかったことも知れた。
残念ながら、ティナを雇ったやつまではわからなかったみたいだけど。まあ、十中八九斉武だろう。その証拠に、今日の会談、まったく来る様子がないと報告を受けている。完全に仕留める気だ。

平和主義の聖天子様を暗殺して、それをネタに自分の勢力を広げるつもりかもな。
問題は保脇。奴の好ましくなかった方の情報だ。
「あいつがスタンド使いになってるなんてな……」
理子から報告を受けたときにはそれはもう驚いたもんだ。
俺の予想ではスタンド能力が発現したのは最近。俺が依頼を受けた後の可能性が高い。最初会いに行って脅されたとき、本気で殺すつもりならそこで使ってただろうからな。
いったいどういう経緯でスタンド能力が発現したのか、矢を持っている奴がいるのか、それについては今はどうでもいい。後で考えれば済むことだ。
一番重要なのは、どんなスタンドなのかということ。
スタンドバトルは先に仕掛けた方が圧倒的に有利。相手に気が付かれないように自分のスタンドの発動条件を満たすことができれば、相手が気が付いた時には勝負が決まっていることすらある。
「そういえばクロは？」
「向こう側のビルに。少し前に飛び出していきましたよ？」
「保脇は？」
「……あの人も向こうに行くと言っていました」
そう言って聖天子様は、割られたガラスを指さした。２人そろってドアからの出入りができなくてすいませんね。
あっちか……ジャンプは無理そうだな。ここに来た時みたいに超宇宙聖剣（スペースカリバー）のエネルギー放出をブースター代わりにするか。
剣を構えたとき、
「おいおいおい、死にぞこないのお前が、わざわざ死にに来たのかなぁ？」
後ろから保脇の声が聞こえてきた。
そんなわけがない。あいつは今あっちのビルにいるはずなんだ。もしかして、スタンドが遠隔型――――ッ!!
「レ、レッド・ホット・チリ・ペッパーッ!!!」
金色のボディにくちばしのような口、直立した爬虫類のようなソイ

ツが腕を組んで後ろに立っていた。
遠隔型のスタンドという訳ではなかった。まさかこいつがやつのスタンドだったとはッ!!
「ん？　お前、見えているのか？　なるほどねぇ。お前もスタンド使いだった、ってわけか」
無視して超宇宙聖剣（スペースカリバー）を振る。
「ノロい！　ノロいねぇ!!」
が、レッド・ホット・チリ・ペッパーには当たらない。近接パワー型にも匹敵するスピードには、たとえ固有時制御（タイムアルター）を使っても追いつけるわけがない。
聖天子様は何もないところに剣を振り始めた俺に目を丸くしている。
レッド・ホット・チリ・ペッパーの蹴りが俺の脇腹にめり込んだ。丁寧に傷口を狙ってくる。おかげで開きかけだった傷口は完全に開く。
「翔さん!?　ま、まさか、誰かから攻撃を……っ!?」
「こんなごみ相手に腹を立ててたかと思うと、自分が情けなるなぁ」
全く対照的な声を聴きつつ、カーペットの上に転がる。服にジワリと血がにじんでいく感触がする。額に嫌な汗がにじんできた。
「さぁてと、このままけり転がして……いや、先に向こうを片付けた方がいいか。ヒヒッ、てめぇの妹も一緒にあの世に送ってやるぜ」
「ッ!!」
その言葉とともに、レッド・ホット・チリ・ペッパーは照明の中に消えていった。電気の通り道を使っての移動だろう。
「させるかよ……ッ！」
「ちょ……っ!!」
聖天子様が何か言いたそうにしていたが、時間がない。すぐさまビルに飛翔する。
目的のビルを間違うことはあり得ない。壁に穴が開いているし、何より保脇のスタンド、レッド・ホット・チリ・ペッパーが照明が落ちたオフィスを照らしている。
いきなり飛び込んできた俺に中にいた人物は全員目を丸くしてい

る。
「固有時制御2倍速（タイムアルターダブルアクセル）、カリバー!!」
ビルの上層部を縦に両断する勢いで抜刀する。
が、
「チィィィ!!!」
剣が振られるより早く、レッド・ホット・チリ・ペッパーに蹴り飛ばされてしまう。
「焦らせるじゃあないか、夜月　翔ッ!!　そんな武器を隠し持っていたとはなぁ!!」
俺はすかさず次の一手を打つ。
「牙（タスク）ッ!!!」
牙（タスク）を呼び出すと、保脇が笑い出した。
「おいおいなんだぁ？　その貧弱そうなスタンド？　そんなスタンドで、この俺に勝てるとでも思ってるのかなぁ？　ボロ雑巾みたいにしてやるよ！　夜月　翔!!」
「……」
俺は牙（タスク）と拳銃を明後日の方向に同時に連射した。
「貴様はアホウなのかぁアア？　拳銃なんかで、レッド・ホット・チリ・ペッパーが倒せるわけガァ!!」
保脇は、いろいろな方向から飛んできた爪弾と銃弾に袋叩きにされる。銃弾撃ち（ビリヤード）と跳弾射撃（エル）の合わせ技。銃弾と爪弾をわざと当てて、予想外のところから攻撃してやった。
「スタンドの倒し方ってのはスタンドを直接攻撃することだけじゃあないんだよ。本体を倒すってのもあるってこと、知らなかったのか？」
無防備になっているところにバットで思い切り殴られたような衝撃を受ければ、防弾性の服を着ていたとしても、相当の衝撃が伝わる。
さらに、足には爪弾をかすらせている。これで立ち上がることもできないはずだ。
レッド・ホット・チリ・ペッパーの速度を上回るのは無理だったからな。慢心してる今なら虚を突いて本体への奇襲が一番効果的だ。

「こ、このクソがアアアアアアアア!!　レッド・ホット・チリ・ペッパーッ!!　ブチのめせぇぇぇぇ!!!」
一瞬でさっきとは逆に床に這いつくばった保脇は喚き散らす。
俺は肩を撃ち抜いた。
本体のダメージに応じて、スタンドもダメージを負っていく。
「これ以上暴れるんじゃない。両手足に銃弾ぶち込まれないとわかんないのか？」
「ふざけるな！　私がッ!!　この私が貴様のようなゴミに負けるわけが……ッ!!」
「いや、貴様はもう終わりだ。保脇　卓人」
保脇の頭から、
ＤＩＳＣが取り出された。
「ッ!!!」
「は？　あ、え？」
それと同時に、保脇のスタンド、レッド・ホット・チリ・ペッパーが消え去った。俺は瞬時にバックステップ。アルファベットが書かれた包帯をしているような手から、距離を取る。
おいおい、嘘だよね？　嘘だと言ってよ。
闇の中、いつの間にか立っていたソイツ。ゾンビゲーマーレベルＸ[10]。
「お前が生み出したスタンド、確かに回収させてもらった」

「お、お前えええええっっ!!!!　レッド・ホット・チリ・ペッパー！　レッド・ホット・チリ・ペッパー！　どうしたんだ！　なんで出ないんだよオオオオオ!!!!」

出るわけがない。ゾンビゲーマーの横にいるスタンド、そいつの能力で、保脇のスタンドは『取り出されてしまった』から。

「……貴様のような男に、このスタンドは勿体ない」

「な、何言ってるんだ!!　お前が俺にくれたんじゃないか!!　この力をお前の好きなように使えって!!」

俺のことは眼中にないようだ。床をはいずり、必死に縋りついている。

ＤＩＳＣにしたレッド・ホット・チリ・ペッパーをもてあそびつつ、ゾンビゲーマーはエコーが掛ったような声で冷酷に答える。

「やれ、ホワイトスネイク」

「ひっ！　や、やめっ――――――」

何のためらいもなく、ゾンビゲーマーはホワイトスネイクに保脇を殺害させた。腹をぶち抜いた拳は真っ赤に染まっている。

涙と鼻水に汚れた顔は、貫かれたときのまま、必死の形相で固まってしまっている。

死体になった保脇をそこらへんに放り投げ、４つの目は俺をとらえた。次の獲物を見定めているかのようだ。

「……貴様もスタンド使い。天然か……いや、それとも俺の同族か……？」

「何だと？」

同族だと？　訳が分からな――――――くもないよな。俺だけだなんて、そんな決まりはないわけだし。特に驚くようなことでもない。

「……まあいい。お前のスタンドも回収させてもらおうか……」

「ッ!!」

俺は超宇宙聖剣（スペースカリバー）を拾い構え、牙（タスク）で爪を回転させる。体の芯から、じくじくといった痛みが押し寄せてくる今、パラドクスへの変身は危険だ。負担に耐えられない恐れがある。

戦力差は絶望的。ゾンビゲーマーとホワイトスネイクが２人そ

ろって敵になって目の前にいると思うとこんな気持ちになるのか。
どことなく牙(タスク)の顔も情けなくなっているように見える。
「お兄ちゃん、避けて!!」
背後から、何かが飛んできた。クロが射た矢だ。スタンドには当たらない（そもそも見えていない）が、ゾンビゲーマーは別だ。
爆炎が晴れると、ぼろぼろになったゾンビゲーマーが倒れていた。
「邪魔が入ってしまったか……」
ビデオの逆回しのように起き上がってくるゾンビゲーマー。その軽い動きからは、ダメージが感じられない。
感じられないのではなく、実際にダメージはない。ゾンビゲーマーのアビリティの一つ、『不死身』の力のおかげだ。
「……お前のスタンドを奪うのは、別の機会にしておくとしようか」
そう言って、ゾンビゲーマーは闇に姿を消していった。
保脇は死に、新たな敵が現れてしまった今回の事件。
なんとも後味が悪い結末となったのだった。

「う……？」
「お、気が付いたか？」
「……翔さん？」
隣で寝ていたティナは目を覚ました。目に入るものがほとんど真っ白な病院のベッド。こっそり抜け出していたおかげで、何事もなかったかのように次の日を迎えられた。
「みんなにはそこまでの怪我はなかったから、今日の検査が終わったら退院できるぞ。俺とヤミはもう少しかかりそうだけど」
反対側のベッドにはヤミも寝ている。レッド・ホット・チリ・ペッパーに感電させられたダメージは大きかった。ま、どういう偶然か、ドクターはあの人だしそんなに焦ることはないかもしれないけど。

俺はただの事務報告だったつもりなんだけど、ティナが目を伏せてしまう。ちょいと迂闊だったか。
「ティナ、何を聞きたい？」
「……私は、どうなるのですか？」
「それからか」
俺は腕を組んだ。
「やっぱり罪は重い。要人の暗殺だからな。厳しい取り調べもあるだろうし、場合によっては超法規的な機関に殺されるかも、って話だ」
「……はい」
「だから交渉してどうにかした」
「……はい……はい？」
「ん？　何だ？」
「待ってください。おかしいな所がありませんでしたか？」
「今回ティナの顔を見て生きている奴は少ないからな。聖天子様にティナの事情を話したら、自分がどうにかしますって言ってくれたんだ」
聖天子様には本当に感謝。もっとも、保脇の不祥事のおかげでもあるのが少しむかつくが。保脇事件の後処理に合わせてうまく隠してくれるのだとか。
いいぞ、聖天子様。少し腹黒くなったね！　……分かってます。申し訳ないことしたなぁ。
「どうにかって、そんな……」
「それで衣食住だけど俺が保証人になることになってるからな」
「は、ぁ、ぇ……？」
口を開けたままになってしまうティナ。
みんなにはまだ言ってないけど、多分大丈夫だろ。みんなティナを見捨てるほど薄情じゃないし、そもそも俺の家、どんどん人口が増えていってるし。
「お腹のことも気にしないでいい。そんなことでいちいち恨みなんて持ってたら、身が持たないからな」
畳みかけるように言ってしまう。ティナの意見なんて微塵も聞か

ないで今後のことを決めてしまったが、こうでもしないとティナが何をされるのかわからない。
「もう大丈夫だ。ティナ、もう『痛い』思いなんてさせないから」
「翔、さん……っ！　ありがとう、ございます……っ！」
ティナは布団に顔をうずめて泣き出したのだった。

「いい話ねぇ」
「どうやって聞いてたんですか？　御門先生」
ティナが泣き疲れて眠ってしまい寝息を立て始めたころ。スライド式のドアが開けられ、一人の白衣の女性が入ってくる。
いくらなんでも、起きたばかりのティナが寝るのには相当時間がかかっているわけで、それまでずっとドアの前でスタンバってたんだと思うと……。
普通病院で白衣の人を見かけたなら、その人はお医者さんだと思うだろう。しかしこの女性、素直に医者だと認めさせるつもりがないようだ。わざわざ胸元を強調するような着こなしをされては、休みたくても休めない。
この人もＴｏｌｏｖｅるのキャラクターで、フルネームは『御門涼子』。この島でも５本の指に入る名医だ。
何を隠そうこの人が、聖天子様に紹介された優秀なお医者さんなんだけど、なんでこんなにけしからん人を派遣してきたんだろうか。聖天子様も大概いい加減なところがある。
「それで、実際どんな感じですか、ヤミのほうは」
「ヤミ？　あー、金色の闇、だから？」
御門先生はおかしそうに笑う。
「ごめんなさいね。私この娘の事を少し知ってるから。そんな風に呼んでくれる人が出来たんだと思うと嬉しくなっちゃって」

「自分が勝手に呼んでるだけですけどね。本人には了解とってませんし」
「ぜひそう呼んであげて。本人も喜ぶ――――かどうかはわからないけど。呼び続ければそのうちね」
それって、嫌がってれば俺にヘイトがたまるだけなんですけどね。
本題に入るわ、と御門先生が空気を入れ替える。
「この島、『不慮の事故』が多くて……暗殺者なんてのもごまんといるのよねぇ」
不慮の事故の後に暗殺者って単語を持ってきているあたりお察しだよ。
「暗殺者の仕事って、成功は表には出ないんだけど、失敗はすぐに知れ渡っちゃうから……もうこの世界には戻れないでしょうね」
それはそうだ。信用第一。一度失敗して捕まったことがある暗殺者なんて誰も使いたいとは思わないだろう。
「だから、あなたの家においてあげてくれない？　もう暗殺者から足を洗って普通に学校に通った方がいいと思うの」
「アッハッハ、訳が分かりませんね。冗談はよしこちゃんですよ？」
「……あなた、なかなか古いわね……」
どうやら冗談ではないらしい。
俺の家の住人は、もう1人増えることになりそうだ。

退院して

「……」
「……」
うん、気まずいね。
「二人とも経過は順調ね、明日にでも退院……もう、２人とも、結局ずっとそうだったわね」
俺は何とか解決したいと思ってましたよ、御門先生。
横のベッドに寝ているヤミを見ながら心の中でつぶやいた。
ティナが退院して２日。俺たちは２人きりでずっと同じ病室にいた。いただけだけど。
会話は一切なし。ヤミはひたすら本を読み、話しかけても目を合わせてくれない。そのうち一人でしゃべっているのが虚しくなって俺も話しかけなくなってしまった。
毎日誰かしらお見舞いに来るみんなにも無反応。
「これから一緒に暮らすことになってるのに、そんなんで大丈夫なの？」
「そうですね。最後にヤミの声を聴いたのは……」
え、っと、確か……この病院ではもちろん、保脇と戦った時も聞いてないから……
「パンツの時……？」
ガン!!!
ヤミのベッドの横についている手すりが歪んだ。
「Ｄｒ．ミカド、こんな男と一緒に暮らせというんですか？　冗談なら本当にやめてほしいです」
「……ちなみに聞くと、パンツの時って何のこと？」
「夜月　翔。言ったら殺しますよ」
「だそうなので」
この病院で初めての会話で殺しますよ、は中々に乱世。ヤミの変身能力（トランス）も回復してきているらしいので、本当に殺されかねない。
「ふーん。ま、想像はつくけどね。そっかそっか。でも健全な男の子

なら普通じゃないかしら？　まったく興味を示さないほうがまずいと思うわよ？」
「夜月　翔は年上年下異性同性かまわずに手を出す色欲魔ですから」
「あ！　それ！　いい機会だから言っておくけどな、俺は同性は好きじゃないからな！」
　結局反論する機会がなくてそのままになっていた誤解。早めに解いておかなければ。
「では異性は？」
「そういえばお見舞いに来るの、全部女の子だったわね」
　２人はそれぞれ違った表情で俺を見てくる。ヤミはジトッとした目で、御門先生は明らかに面白がっている目で。あれは俺が言葉に詰まると思っている目だな。しかし、俺はそんなに甘くない。
「もちろん、かわいい女の子は大好きです。男だったら誰だって、いくつになってもそうです」
「ぷっ、アハハッハ！　もー、すがすがしいわね！　ヤミちゃん、彼いい子よ。変にムッツリじゃなくて、本音も言ってくれて」
「えっちぃ人は嫌いですし、そもそも、誰かと一緒にいるのが好きじゃありません」
　ヤミはますます嫌悪感が強くなったみたいだ。ここからどうすれば好感度が上がるんでしょうか。リトさんマジパネェよ。あんなにラッキースケベかましておいて。
「そんなこと言ってももう遅いわよ。だってもう顔写真付きで武偵のデータバンクに登録しちゃったからね～」
「何時の間に……」
「仕事が速いなぁ……」
　武偵のデータバンク。登録されてしまうと、武偵三倍の法則（武偵が犯した罪は通常の３倍になるという決まり）が適応されるようになる。さらに、顔写真があると読心能力者（サイコメトラー）の能力の精度が抜群に向上する。
　つまり、いろいろな意味で逃げづらくなったのだ。
　これだと、元のように暗殺者家業に戻るのは厳しいし、それ以外に

食べる手段がなかったヤミは提供された条件を飲むしかなくなってしまった。
俺の家に住んで武偵高に通う、という条件を。
「だから……だから、いまからでもやり直してね」
「……余計なお世話です、Ｄｒ．ミカド。私が今までしてきたこと、そんなに簡単に無くせるなんて思ってません」
「まあ、武偵は血の気が多い奴がたくさんいるし……」
「一番の問題は、あなたの家に住むことですよ？」
ですよね。
うーむ……原作でも心を開いてくれたのは奇跡のレベルだったからなぁ。長い目で付き合っていくしかないってことか。
そっぽを向くヤミを見ながら、そう思うのだった。

現在針の筵状態。周りの話されてもいる人にはじろじろと見られ、ひそひそと話されている。正確には、見られているのは俺ではなくヤミだけど。
そう、原因は俺の隣、というには少し離れて歩いているヤミだ。真昼からあの黒い戦闘服を着ていたら、いくらいろいろなことに慣れているこの島の人でも何事かと思ってしまう。
あれから何事もなく退院できた俺たちは、ショッピングモールに向かっていた。目的はヤミの服。
実はヤミ、私服を持っていないのだ。あるのはあの戦闘服だけ。ヤミ本人、それまで必要だと思ってなかったみたいだけど、これからはそうはいかない。家には制服が届くとはいえ、せめて部屋着くらいは買っておいた方がいいだろう。ま、俺が女子の服の選び方が全く分からないってこともあるけど。
あ、無いといえば、ヤミはブラも持ってないんだってさ。まったく

余談だけどな!!　つまりあの大胆なデザインの戦闘服を着ているときも、上は着けてないってことなんだよ。や、本当に余談なんだけど。
　ちなみにいうと、俺の家の格納庫（一階部分）にはヤミが居住兼移動用として使っていた空中艇がある。すっからかんで寂しかったから丁度良かった。
　もちろん会話はなく、そもそも距離が離れているため一緒に来ているかもわからない状態で目的地のお店に到着する。少なくとも年頃の女の子が休日に買い物に行くようなお店じゃないけど。
　ヤミのほうをちらりと見ると、特に表情を変えている様子はない。ま、ヤミが表情を変えたのなんて、パンツのことを指摘した時くらいだし。
「……いま、変なことを考えませんでしたか」
「多分ヤミの想像通りのことを考えてたと思う」
　無表情で他人に興味がなさそうなのに、他人の表情はしっかりと見ている。そこはそういう世界に生きていたからだろうか。
「はぁ……本当にえっちぃ人ですね」
「でも、突然ズッコケてスカートに突っ込んだりしないから。安心していいぞ」
「あたりまえです。そんなことをすれば殺します」
　え？　原作では殺せてないけど？
「また失礼なことを考えてますね」
「ほんと表情読むの上手いよな」
「……今のはカマをかけたんですが……何を考えていたんですか？」
「う、ん……なんか、俺の知っている限り、ヤミちゃんの戦績があんまりよくないなぁ、と思って」
　俺に撃退されて、保脇には戦闘不能にされて、いいところがないような気がする。
「本当に失礼ですね。言っておきますが、電気は私と極端に相性が悪いんです。あなたとの時は……」
　顔を赤くして睨み上げてくるヤミ。
「負けそうだったし、弱点を突くのはセーフってことで」

女の子の弱点を突いたクズは俺だ。
店の前で話しているのも迷惑なのでそろそろ中へ。
「んじゃあ、適当に選んじゃって」
「……はい」
ま、そこまでこったものを買う訳じゃない。部屋着と寝間着を数着そろえれば今日はいいとしようよ。
そんな心持ちでいると、ヤミはすぐに戻ってきた。
手には上下セットのジャージが3組あった。
「それでいいのか？」
「……着ればどうでもいいですから」
そういってヤミは店の外へ向かっていった。お会計はもちろん俺だ。
ほんと、前途多難だな。なんだかんだそれなりに話ができるジャンヌとは全く違うよ。

少しでも仲良くなるために、一緒に昼食をとることにした。
ショッピングモールで一番大きなフードエリアだ。麺類、丼もの、一人用の鍋、デザートなどなど、基本的な料理の中でここで食べられないものはないといっていい。
「私はたい焼きで」
「えぇ……それ主食ぅ？」
「悪いんですか？」
「その食生活でその体だったら何も問題ないと思うけど」
「かっ、からだ……っ！　あなたは……っ！」
自分の体を抱きしめるようにして警戒をあらわにするヤミ。なんでこうなってしまうんでしょうか。
次は気を付けよう、次は気を付けようと心の中で意味のない反復を

する。そして注文しようと、
『お客様にご連絡いたします。誠に申し訳ございませんが、店内でトラブルが発生したため、誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』
そんな店内放送が流れてきた。
「ん、なんかあったみたいだな」
「そうですね」
俺たちは目で合図をしてその場を離れていった。

『お客様にご連絡いたします。誠に申し訳ございませんが、店内でトラブルが発生したため、誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』
もう何度目かわからない店内放送が鳴り響いた。
最初の放送でパニックにならなかったのは幸いだったが、たくさんの人がゆっくりとはいえ出入り口に殺到したため、数人の怪我人が出てしまっている。
そもそも、なぜ避難をしているか。それは最近起きている連続虚空爆破事件（グラビトン）のせいだ。すごくざっくり言ってしまうと爆弾テロに分類されるものだ。爆弾が仕掛けられた可能性がある、という報告を受けて人をはけさせているのだ。
そんな人がどんどん少なくなっている店内を出入り口とは反対方向に走っている女の子が一人。
偶然ここに遊びに来ていて、携帯の通知を見て走り回っている武偵の女の子。
その娘の名前は『初春　飾利』。頭に過剰とも思える花飾りをのっけている。
特別な能力を持つわけでも運動も得意でもない、どちらかというと

後方支援で力を発揮する彼女だが、こうして走り回っているのは理由があった。
店内放送が流れる少し前まで一緒にいた迷子の女の子を探しているのだ。
「御坂さん！」
「上の階見てきたけど、やっぱりいないわ！」
ここでもう一人の少女が合流する。
『御坂　美琴』。この島でも3本の指に入るほど強力な電撃使いだ。
「もしかして、もう外に行ったんでしょうか？」
「分からないわ。でも、もしも中にいたら大変なことになるかもしれないから。もう少し探しましょう！」
「はい!!」
そう言葉を交わして再び別れようとしたとき、
「あ！　お姉ちゃーん！」
その女の子が初春に駆け寄ってきた。その手に、いなくなるまでは持っていなかった人形を持って。
「よかったです」
「そうね」
2人とも、見つけることができた安心感ですっかり気を緩めてしまった。一瞬とはいえ、どうしてみんなが避難しているのかを忘れてしまうほどに。
「眼鏡をかけたお兄ちゃんがね、この人形をじゃっじめんとのお姉ちゃんに渡して欲しいって！」
「え、私に？」
初春がその人形を受け取ろうと手を伸ばし――
「ヤミ！　人形を放り投げろ!!」
まったく別方向から聞こえた声、目にも止まらないスピードで現れた人影。初春がそれを認識した時には、人形は宙を舞っていた。
人形の形は空気に圧縮されたように歪んでいた。
御坂は瞬時にあの人形が拙いものだと理解する。
（超電磁砲（レールガン）で人形を吹き飛ばす!!）

美琴がポケットの中のコインを取り出す。しかし、焦ってしまったのか、握り損ね、落としてしまう。
（しまっ！　間にあわない……っ!!）
御坂の視界がとてもゆっくりになる。
人形はどんどん形を歪め――――横から迫ってきた莫大な光の束に焼かれた。
「は？」
視線を移すと、そこには光る剣を持った一人の男がいた。
「うん、威力の調整が利くようになってきたな……」
男は自身が作り出した破壊痕を見て満足そうにうなずく。
これが夜月　翔と御坂　美琴の出会いだった。

まさか、ちょっと行ったショッピングモールで原作イベントに突入するとは。大丈夫？　俺、退院してまだ1日経ってないんだけど？
それもあるけど、
「なんだかんだで、ヤミ乗り気じゃない？」
口ではいやいや言っていても、意外と素直に武偵的行動をとってくれるんだな。俺の指示にも従ってくれるし。
「状況には早く慣れる必要がありますから。あれくらいなら」
なんだかんだで実力は高いってことなんだよな。
そんなことを考えながら、久しぶりの我が家に入る。
「「「「「「おかえりなさい!!」」」」」」
家の玄関を開けたら皆にお出迎えされた。
考えてみれば、家を数日開けたのは初めてだったっけ。
「今日は翔君とヤミちゃんの退院祝いと……」
「ティナさん、ヤミさん、そしてもう一人の歓迎会ですわ」

案内されるまま入っていくと、テーブルには所狭しと料理が並んでいた。
俺も驚いているが、ヤミはもっと驚いているだろう。何せ家に来てから突然のこの騒ぎなんだから。
ま、そんなに大それたことじゃないけど。今日は楽しくみんなでご飯を食べようってだけなんだし。
あ、でもその前に。
俺は久々にガチャマシーンに向き合った。そしてボタンを押す。

『春日部　耀』をゲットしました。

新しい住人に来てもらわないとだよな。みんな待ってるみたいだし。

幼い2人（クロ、ティナ）

「……」

「……」

おっと、前回と同じような入りですまんな。それでもこの状況を見てしまえば仕方がないことだと思う。

俺たちはすっかり空になってしまった大皿に絶句していた。

「ごちそうさまでした。げぷ」

新しく住人になった『春日部　耀』。彼女のお腹に料理の大半が収まってしまった。

あれは見ていて壮観だった。大食いキャラを舐めていたのかもしれない。適当な自己紹介を済ませて食事に取り掛かったとたん、一時も手と口を休めることなく耀は料理を食べ始めた。

ただ噛んで飲み込むのが速いだけなのに、何かしらの能力を使っているのかと錯覚してしまった。

ここで、耀のことを紹介しておこうと思う。

『春日部　耀』は『問題児たちが異世界からくるそうですよ?』に登場するキャラクターだ。

物静かで若干表情に乏しいがそれは表の顔。作中で『フリーダム春日部』の異名をとるくらいの自由、天然系のキャラだ。

しかし問題はそこではない。本当に問題なのは、耀が『大食いキャラ』だということだ。

少年漫画では多くの場合主人公が、ラノベでは小柄な女の子が該当しやすいこの属性。幸いというべきか、俺が今まで出会った女の子の中にはそのレベルに達している娘がいなかった。

実際目撃すると、お腹の中にブラックホールがあるんじゃないかと思ってしまう。俺は男子にしては小食だったから最低限は口にできたけど、みんなは大丈夫か？　女の子だし大丈夫か？

「よ～し、よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし」

「にゃ～」

俺は膝の上に乗せた三毛猫をひたすら愛でる。

この三毛猫は耀が召喚されたときに一緒に現れた猫だ。つまり耀の連れ猫。
「せ、先輩？　そんなに撫でたら嫌がるんじゃ……」
「ううん、違うよ雪菜。むしろ喜んでるよ」
膝の上で落ちないようにコロコロ転がる三毛猫。全力で脱力しているのか、俺にモフられるがままになっている。
「すごいね、翔は。三毛猫がそんなになつくなんて」
「ああ、耀は話分かるんだもんな」
「うん。おいで、三毛猫」
俺の膝に乗っていた三毛猫が、耀の声に反応して場所を変える。ただ音に反応したのではなく、本当に声に反応したのだ。
これは、耀が首から下げている木彫りのペンダントの力だ。ペンダントには素人目にはただの幾何学模様、しかし見る人が見れば腰を抜かす模様が彫り込んである。名前は生命の目録（ゲノム・ツリー）。
原作では恩恵（ギフト）と呼ばれるものの一つで、これのおかげで耀は動物と会話することができる。
しかもそれだけではなく、例えば猫の俊敏性、犬の嗅覚などなど、動物の持つ身体的特徴も自在に扱うことができる。
余談になってしまうが、生命の目録（ゲノム・ツリー）のバックアップのおかげで、耀は普段から人間離れした身体能力を発揮できるが、実は生命の目録（ゲノム・ツリー）が無ければ、何日も、それこそまともに学校にいけないくらい病院で過ごすくらい体が弱い。
どんなことがあっても、生命の目録（ゲノム・ツリー）へのいたずらは禁止だ。
「――って、感じだ、狂三」
「ど、どうしてそこでわたくしに話を振るんですの!?」
だって狂三、猫大好きじゃん。
それこそ、普段のミステリアスな雰囲気が吹き飛んで知り合いに会おうものなら全力で口封じしてそのあとベッドで悶えるくらいには。
さっきからチラチラと俺の膝に視線を送ってたの分かってるからな？
「狂三も触る？」

「そ、そうですね……少しだけ」
隠しきれていない喜びの表情を浮かべる狂三。猫と戯れ始めた狂三を放っておいて、お皿の片づけに入る。
それにしてもよく食べたもんだ。肉の一切れ、野菜のひとかけらも残ってないぞ。
「耀ちゃんってよく食べるんだね。次からはもっと作った方がいいかな？」
「あいつのお腹に底があれがいいけどな」
大食いキャラは物理法則を無視する傾向がある。
女の子にそんなこと言っちゃダメでしょ、とアスナに注意されつつも、皿洗いを始めていく。
「それにしても、また女を雇ったのね、翔は」
「……」
「何よ、その目は」
「なんか、いつの間にか台所に立ってるなと思って」
嫌味なことを言ってくるアリア。とても驚いたことに、皿洗いに参加している。
「なによ、なんか文句あるわけ？」
「これからはみんな交代で家事をすることにしたの。これから人も増えるだろうから、ね？」
なんかアスナさんも嫌味なんですけど。
召喚された女の子は召喚された瞬間に『この世界にいたこと』にされるので、耀が出てきてもアリアや理子には特に変な反応をすることはなかった。
２人には、耀は俺が新しく雇った武偵だという認識になっているらしい。
「女の子が増えるのは許してくれるはずじゃ……」
「私はそんなこと言った覚えはないわ」
「でも、いくらなんでもあれは、ねぇ……」
２人の視線はティナに向いている。
「……一応聞いておきたいんだけど、何もしてないよね、翔君」

「流石にそれはないだろ……子供なんだしさ。事情は聞いてるんじゃないの？」
　ティナは俺とヤミより一足早く退院した。これからお世話になる人たちにはしっかりと自分の事情を話す、って言っていたんだけど。
「それは聞いたよ。でも、なんでそんな娘が翔君の周りに集まってきちゃうのかな……」
　知りません。世界のせいにでもしてください。
「ティナのことはいいのよ。私だってあの子を追い出すほど薄情じゃないわ。問題はヤミと耀よ！」
　アリアは実に不機嫌そうだ。
「ティナはともかく、ヤミは自分の意思であんたを狙ってきたんでしょ？　それが失敗して殺されるのはそいつの自業自得じゃない」
　アリアが言っていることは決して間違いじゃない。間違いじゃないけど、実はヤミにものっぴきならない事情ってもんがあるわけで、それを知っている身としては放っておくわけにはいかないわけで。
「耀って娘もそうよ。私には何にも言わないでパーティーに入れたりなんかして。パーティーに入りたいならまずそれなりの段階があるでしょ！」
　耀については何も言い訳できない（そもそも俺もコントロールできないから）よ。でも、パーティーに入るための段階とは……？　あなたはいきなり家に押しかけてきていましたけど。
　なんてことを口にするほど俺はバカではない。アリアの真意はそういうことじゃないからな。多分これは、
「自分じゃなくて、理子を頼ったからだろうなぁ……」
「……ッ!!」
「あ」
　保脇の調査もろもろ、狂三と理子だけにしか頼まなかったのがいけなかったんだろう。でもそればっかりはしょうがない。だって２人のほうが情報収集能力は圧倒的に優れてるんだもん。
　自分が全然頼られなかったことへの不満が積もり積もって――――
あれ？

アリアが真っ赤になって震えている。こ、これはやばいんじゃ……
「バカ!!」
そこからはもうめちゃくちゃだった。発砲音に驚いた三毛猫が暴れまわり、興奮したアリアをみんなで抑える羽目に。
すべて俺の不用意な発言のせいなんだけどね。なんで余計なこと口に出しちゃうのかな？

後片付けを終えて就寝の時間。明日は学校だ。退院したてとか、そんなことは全然関係ない。そもそも入院期間も欠席扱いになってる。
病院の消灯時間のこともあって実はもう結構眠たい。その代り早起きだったので寝坊することはないと思うけど。
「ふぅ……う？」
久しぶりに自分のベッドに飛び込んだ。ふわふわのマットレスの感触がすると思ったが、なにやら違う。なんか固いものがある。
まさか。
俺は布団をめくってみる。
「こんばんは、お兄ちゃん」
「お、お邪魔してます、お兄さん」
クロとティナがいた。ティナはいつしか見たパジャマ姿だったが、クロはパンツとキャミソールのみ。
「今日はもう、寝てもいいかい？」
俺はそのままベッドに倒れこんでしまう。
「ええっ!?」
俺の態度があまりにそっけないためか、２人が大げさに驚いていた。
「ど、どういうことですか、クロさん！　話が違うじゃないですか！」
「変ね……ティナの話だとずっとヤミと一緒の病室だって……溜まっ

てるはずなのに」
中々にデンジャラスな話をしている。クロはともかくティナはその手の知識はないと思ってたんだけど。
クロに吹き込まれたのか？　いったいどんな卑猥な言葉を吹き込まれたっていうんだ！
いまにも閉じそうだった瞼に少しだけ力が入る。
「何で、って聞くのはおかしいか」
目的なんて分かりきっていることだ。
「明日も学校あるんだし、良い子は寝る時間だろ」
「そうね。じゃ、おやすみなさい」
「お兄さん、おやすみなさい」
あれ？　なんでこんなにあっさりしてるんだ？　まるで祭りの屋台の金魚すくいの網みたいなもろい意志だ。
「いいわ、こっちにも考えがある」
「作戦変更、ですね」
何だか知らないけど、ラッキーだ。２人には悪いけどもう眠らせてもらう。純情ラノベ主人公じゃない俺は一緒に寝るくらいで慌てたりしないさ。
両手を両側から抱き枕みたいにされても、そこからさらに近寄ってこられても、少ししか動揺したりしないぞ。
２人ともチームワークばっちりだな。病院にいたときはそこまで仲良くはなさそうだったのに女子はやたら仲良くなるのが速いんだよな。
そもそも半分夢を見ているような状態だ。心臓が速くなって瞼が閉じきるのが少し遅くなっているだけ。この天国は後数分で夢の国に変わるだろう。
「お兄さん」
いつの間にか耳元まで顔を寄せていたティナが囁いてくる。
「助けて下さって、ありがとうございます」
「んー」
耳元で何か言っているが、あまりの眠気に返答が適当になってしま

う。
「この家の人はみんなあったかい人たちです。私、ここに来れてよかった、です」
　ティナの吐息が耳にかかる。が、どんどん体の感覚がなくなっていく俺には特にこれといった効果が出ない。
「私、お兄さんに恩返ししたいんです」
「どーぞ、ご自由に……」
「……っ！　で、では……」
「っ!!」
　俺の耳に、暖かくて柔らかいものが侵入してきた。とても小さいが、熱い粘液にコーティングされたものが、俺の耳を舐めまわしていた。
「んふぅっ……んちゅるっ……くちゅっ、ちゅりゅ、くちゅるっ……」
　頭ががっちりと拘束され、仰向けで天井を見たまま、首を動かすこともできなくなっている。寝ぼけていて気が付かなかった。
　なくなりかけていた意識は完全に覚醒し、耳からは卑猥な音とすぐそばの脳みそを溶かすようなゾクゾクとした感覚がとめどなくあふれている。
「はしめへ、へぅけど、ふまく、れきへまふか？」
　俺の耳を舐めまわしながら、そんなことを聞いてくる。脳みそを直接犯されているかのような耳舐めは、正直初めてのものだとはとても思えない。
「ちゅむっ、ちゅうっ……ちゅっ、んちゅっ……」
　少しざらついた舌が耳の形に添うように動き、時に少し差し込まれる。
　どう考えてもティナが持っていた知識の中にあるはずがないことだ。とすれば、
「おいクロ！　お前は……っ!!」
「もう遅いわよ、お兄ちゃん。しっかり言質はとったもん」
　カチッ
《私、お兄さんに恩返ししたいんです》

《どーぞ、ご自由に……》
しかも録音済みだった。
まさか味方にこんなことをされるとは思いもよらなかった。
「もういい加減に待ってるのはやめにしたいの。いいでしょ、お兄ちゃん？」
「や、そうならそうと言ってくれれば……なにもティナを巻き込まなくてもさ」
「遅かれ早かれ、きっとこうなってたじゃない。だったら、悩ませる前に解決しておいた方がいいと思って」
俺の腕に抱きついていたクロは俺のお腹に跨っていた。
布団はもう床に投げ捨てられている。
「お兄ちゃんの、もうこんなに硬くなってる」
「う、くぅ……っ！」
寝間着を押し上げているモノを自分のアソコで押しつぶしてくるクロ。その刺激に声が漏れてしまう。
クロはおもむろに立ち上がり、
「投影開始（トレース・オン）」
「ちょ……っ！」
俺のズボンとパンツが切り裂かれてしまう。限界まで反り返った俺の一物が、布切れの拘束から解放され空気に触れる。
ぴくぴくと痙攣しているモノが現れただけで、部屋の匂いが濃くなった気がする。
服だけを切り裂くという無駄な神業を披露してくれたクロは、自分のパンツにも手をかけた。
パンツは足を滑ってあっという間に取り払われてしまう。クロの下の口が俺のものと触れ合った。
耳を舐めていたティナも舐めるのをやめて食い入るように見ている。
「じゃあ、行くね、お兄ちゃん」
クロがゆっくりと腰を下ろし始めた。いや、ゆっくりとしか下ろせないんだ。小さいクロの下の入り口は、俺のモノを必死に飲み込もう

としている。
「うっ、き、い、たい……っ、いたい、よぉ…っ」
亀頭が入っただけで血が出始めている。戦闘でのケガとこれは全くの別物らしい。と他の娘に聞いた。相当痛いはずなのにクロはどんどん腰を沈めていく。
年齢的に小学生の2人の手前、男としてのプライドもあって声を必死に我慢しているが相当ヤバい。
締め付けが尋常ではない。痛いくらいではなく、もう痛いと言ってしまってもいいくらいだ。
限界まで拡張された腔内が、想定以上のサイズのモノの侵入に潤滑液の量を増やす。しかし、そもそも限界まで俺の肉棒が押し広げている。あふれた愛液が外へ外へと書き出されていく。
とうとう奥に到達した。
「あ……っ、あ……っ!!　入っ……!!」
クロは目を見開いて、お腹を痙攣させている。外側からは見えないが、膣もさっきから痙攣しっぱなしだ。
「だい、じょうぶか、クロ？　……クロ？」
「これ、すごい……っ！　ずっと、ずっと、イッちゃってる……っ！」
その表情に痛みなんて微塵も無い。舌を突き出し、よだれが一筋たれている。圧倒的な快感に、まともな思考ができてない。
クロはゆっくり腰を持ち上げ、一気に下した。きつい道をあえて無理やりこじ開ける。入口付近のザラザラしたところを乱暴にこすり、絡みついてくるヒダを引きはがす。
入れるときの何倍もの量の愛液が結合部を汚していく。
跨っていたクロは、俺の方に倒れてくる。それでも腰の動きは止まらない。すっかり俺の形になってもう戻らないかもしれない。無理やり開発している。クロは自分で、俺のモノになっていく。小さな秘部が俺専用のものだと宣言するように。
「あっ、もう、もう……っ！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「うっ！　あああああぁぁぁぁぁ!!」
強烈すぎる締め付けに耐えることができず、クロの中に溜め込んだ

ものを吐き出していく。
すべて出し終わった後、クロは力なく横たわった。ペニスが抜けた穴からは白いものがあふれている。
そんな中、ふとティナのことを見てみた。クロから抜けたペニスをじっと眺めている。正確には、クロの小さい子宮には収まりきらなかった、精液を。
「ん……ぺろ」
それを舐めとった。
「苦い、ですね。あ」
少し萎えかけていたはずなのにすっかり力を取り戻してしまった。
ティナは意を決したように顔を寄せ、
「すんすん」
匂いを嗅ぎ始め、
「はむっ」
咥えた。
「お、おい！　ティナ!?」
「んっ、れろっ、ちゅりゅっ、んむっ、あうぅっ、ふむんっ、あむっ、あむっ……」
拙い舌遣いだが、逝ったばかりの俺には刺激が強すぎる。
必死になって舐める姿に、どんどん精液が送られていく。
小さいのに、クロに教えられた知識だけだっていうのに、しっかりと女ってことだろうか。ブレーキのない車が坂道を下っていくように、どんどん俺の弱い部分が責められていく。
真っ赤に腫れた亀頭は、もう限界だと訴えている。そう感じてしまったときはもう遅い。
「ちょ……っ！　もう……っ！」
痙攣を繰り返し、口中に子種を吐きだしていく。
「やっぱり苦いですね、これ」
そう言いつつ、あっさり飲んでしまう。
俺が唖然としていると、息も絶え絶えだったクロが少し体勢を変えた。

「はぁ、はぁ……ティナはどうするの？」
どうする、とはティナもしてしまうのかということだろう。
「え!?　あ、その、これ以上は、今日はちょっと……っ、クロさんを見てたら、こ、怖くなってしまって……」
「クロ、感じ過ぎだってさ」
「気持ち良かったんだもん。しょうがないじゃない」
「で、でも！　いつかは、その……」
真っ赤になってうつむいてしまう。
そんな愛らしいティナに心の中で笑いながら、３人川の字になって平和に眠りについたのだった。

覇王と疾風迅雷　編

決闘の申し込み

「なんで私が学校に行かなければいけないんですか……」
この期に及んでまだ文句を言っているヤミ。いい加減に覚悟を決めてほしい。
クロとティナに待ち伏せされた翌日。本当に平和に、爽やかに寝て起きることができた。比較的に早い時間、力の抜ける運動をする、という好条件で眠りについたためか、ぐっすり眠れたにもかかわらず、早起きすることができた。
誰にも見られること無く後片付けできたよ。
そして昨日から言っていた通り学校に行く。ヤミと耀、ティナも一緒にな。ヤミは俺、耀は雪菜、ティナはクロの同じ学年、同じクラスに転入することになっている。
耀は召喚された時点で転入が決まるけど、他の２人はいろいろな人が手を回した結果の転入だ。
「そもそも高等教育なんて済んでいますよ」
「ばっちり制服着てんだからもうぐちぐちいうのやめろよ……」
「自分の意思で着たわけじゃありませんよ……」
「アスナと理子か……」
あの２人のパワーには目を見張るものがあるからな。戦闘じゃなくて、そっちの方面の。
「あの２人には、なんというか、逆らえないパワーのようなものが働いているように思うんです」
「抵抗しなかったんだ」
「えっちいだけじゃなくて、本当に失礼ですね、あなたは。私は別に戦うのが好きなわけじゃありませんから。よほどのことがない限りは相手を傷つけたりしませんよ」
「……ふーん」
「あなたには別ですが」

ほんと、パンツのことがいつまでも尾を引きずってるな。覆水盆に返らず的な奴なんだろう。いつか笑い話にしてしまいたいです。
それでは、行ってきます、我が家よ。
まったく好感度が回復していないことを確認した俺はかなりの大所帯で学校に向かい始めたのだった。

いくら暴力沙汰が日常的に発生している武偵高でも、転校生というものには学生らしく反応する。
具体的には「今日、転校生が来るんだって」とか、「男子かな、女子かな」とか。教室に来てからは好きな食べ物を聞いたり、彼氏彼女のことを聞いたり。
違うことといえば、転校生の情報が教室に入る前から写真付きで広まっていることかな。
ヤミを職員室に送り届けてから教室に入った瞬間、写真を突きつけられてどういう関係だって聞かれたときは、こいつら自分の能力を全力で使ってるなって感心したよ。
そんな具合なもんだから、当然暖かく迎え入れられたヤミ。ま、不愛想なのは相変わらずだけど。
転入初日でも手加減されることはない。バンバン指されるが難なく答えていく。どうやら高等教育が済んでいるというのは伊達ではないようだ。しかも、テスト期間だけ覚える的な一瞬の詰込みじゃなくてしっかり頭に入っている。
携帯にメールが来ていた。クロからだ。
《友達がどうしてもお兄ちゃん達に会いたいって言うの。時間があったら今日の放課後〇〇〇に来てくれない？》
ふむ。友達っていうのはあれだよな。名前だけ出てたＶｉｖｉｄのメンバーだよな。逃げられないもんだと理解してるし、断る理由は

特に思い浮かばないな。ティナの様子も気になるし。
俺は了解の返信をして画面を閉じた。
「ヤミ、学校はどうだ」
「特にこれといって感想はありません」
「ちなみに今日の放課後、クロの友達に会いに行くんだけど――」
「興味ありません」
即答するな。しょうがないけど。
「そもそも、なんで私の名前が『ヤミ』で登録されているんですか？」
「登録したの俺じゃないし」
「Ｄｒ．ミカド……っ」
御門先生、ほんとお茶目なんだから。
そもそも、偽名登録バッチ来いのこのシステムにも問題あるんだけど。正確なのかいい加減なのかはっきりしてほしいですね。
「俺と一緒に来ないのはわかったけど、放課後は何してるんだ？」
「あなたに関係ありますか？」
「一応、ヤミが何かしでかすと、俺がなんか言われる可能性がある」
「はぁ……今日は図書室で本を読んでます」
本好きなのは変わってないんだな。予鈴で席に戻りつつ、ヤミの横顔を見た。つまらなさそうな、寂しそうな、そんな顔。
俺は俺で動いた方がいいかもしれないな。

クロはうんざりした様子で、白黒の双剣を構えていた。
目の前には動きやすい服装をしたクロよりも少し年上の少女が立っている。隙の無い構えは無手。つまり、格闘技の構えだ。
睨みつける目は左右で色が違う。それは獲物を狙う獣のような目だった。
なんでこんなことになっているかにはもちろん理由がある。

クロは学校で3人の娘と仲良くなった。ヴィヴィオ、リオ、コロナの3人とだ。この3人はノーヴェ・ナカジマという女性のコーチ（本人は否定しているが）の元、ストライクアーツという格闘技をしている。

そのためクロもその練習に参加するようになっていた。

クロの方も、魔力の節約のために刀剣や弓以外でも戦えるようにしたいと思っていたため、これには積極的だった。無限バンダナを翔に借りているので矢の方の心配はなくなったが。

この場所、正確には少し離れた屋外カフェに、クロやヴィヴィオ達に会わせたい人がいると言われて呼び出されたのも、てっきり格闘技の先生に会うものだと思っていた。

ヴィヴィオ、リオ、コロナの3人に、今日から学校に行くことになったティナを加えた4人で一緒に向かった待ち合わせ場所には、コーチであるノーヴェの他にノーヴェの姉妹を名乗る娘もいっぱいいたため、テーブル3つを使った超大所帯になってしまった。

そんなクロたちの前に現れたのがこの少女、アインハルト・ストラトスだ。

話を進めるうちに拳で語ろうという話になり、近くにあった屋外訓練スペースに来たという訳だ。

ヴィヴィオとアインハルトのスパーリングは、アインハルトがあっさり勝利するという結末になった。

クロの目から見ても、ヴィヴィオは決して弱くない。同年代から見ても突出していると言ってもいいくらいだ。

それをあっさり下したアインハルトは、ヴィヴィオの再戦の申し込みをこまったような顔で承諾した後、今度はクロに勝負を申し込んできたのだ。

アインハルトは鬼気迫る様子だったが、クロは応じるつもりはなかった。どんな理由であれ、魔力の無駄遣いは自分の命に関るからだ。

しかしそこで、集団の怖い所が働いてしまった。

リオ、コロナはもちろんの事、ノーヴェやその妹たち（ノーヴェ曰

く勝手についてきた）がすっかり乗り気になってしまっていたのだ。
しょぼくれていたヴィヴィオも興味津々になってしまったため、引くに引けなくなってしまったのだ。
投影を使わなければいいか、なんて思っていたのもつかの間で、ヴィヴィオ達がペラペラとクロの投影の事についておしゃべりしてしまった。
こうなってしまえば全力で素早く片付けるしかない。
もしもの為に、しっかりと翔には連絡済だ。実は翔が到着する前に移動してしまっている。翔も、行くとは返信したが何時になるとは書いていなかったため、先についていた雪菜と耀に屋外カフェで待ってもらってクロたちは体を動かせるところに移動してきた。
「いきます」
アインハルトが光に包まれる。光が晴れるとしっかりとした大人の姿になったアインハルトが立っていた。
これは変身魔法と呼ばれるもので、自らの肉体すら変化させる極めて高度な魔法だ。
これはアインハルトの本気モードの証。
「……変身魔法、か。少し勉強しとこうかな……」
クロの中にあるアイディアが浮かんだが、審判役のノーヴェの言葉で現実に引き戻される。
「んじゃあ行くぞ。レディ……ゴー!!!」
模擬戦が始まった。
独特の歩法で瞬時に自分の間合いに入ったアインハルトは、拳を繰り出す。
それを干将で受け止め、回転させた莫邪で反撃するも、避けられてしまう。
白と黒の残像を残し、1秒間に何回も殺到する剣。それを全て危なげなく捌いていくアインハルト。
とても子供の物とは思えない戦いだ。そのレベルの高さに、外野は目を丸くしている。
もっとも、外野の事は今の2人の頭の中にはない。あるのは目の前

の敵を倒すイメージだけだ。
　つばぜり合いになったところで、クロが問う。
「そういえば、一つ聞きたいんだけど」
「なんですか？」
「なんで私に勝負を申し込んだの？」
「決まってます。あなたが強いからです」
　即答するアインハルト。
「見ただけでわかるんだ」
「はい。少なくとも、今まで私が闘ってきた人の中では一番」
「あっそ!!」
　このままでは埒があかないと悟ったクロは、会話を打ち切り距離を取ろうする。しかしアインハルトは、このまま攻めるつもりでいる。
　クロが後ろに下がるスピードと同じ速度で前進することで、距離を取らせない。
（もらったッ!!）
　一瞬の隙を見つけるアインハルト。彼女の拳の速度なら、クロが防御する前にクリーンヒットを与えることが出来る。
「甘いわ」
　クロとアインハルトの間に、大剣が突き刺さる。それが盾となるばかりではなく虚をつくことによって、アインハルトの勢いが弱まる。
　アインハルトは大剣のせいでその向こう側にいるクロが見えなくなってしまう。急いで大剣の向こう側に回り込むが、そこにクロの姿はない。その代わり、３本の剣が地面に突き刺さっている。
「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」
　一斉に起爆する剣。地面には小さなクレーターができる。クロも、自分の行動の分の魔力を計算に入れたため、そこまで威力が高くないのだ。
　それでも、至近距離で喰らえば相当のダメージになる。
　しかも、剣が爆発するなんて普通は考えない。よって防御をすることもなかったアインハルトは、爆炎に飲まれてしまう。
　こうして勝敗が決したのだった。

「なんでお前は無意味な戦いを引き受けるんだ……？」
クロのメールで指定された場所に来ると、雪菜と耀がお茶をしていた。テーブルには山のようにお皿が積まれ、今なお、空のお皿が回転寿司のように増えていっていた。これがケーキのお皿だと思うと気が遠くなりそうだ。
俺を見つけるなり残っていたケーキを口に押し込んだ耀には店員さんも少し引いてた。
２人と合流してクロたちが向かった場所に行くと、今まさに戦いを終えたクロとリリカルなのはの原作キャラ達がいた。
話を聞くに、アインハルトが勝負を申し込んでクロと戦ったらしいんだけど。
「だってしょうがないじゃない。みんながやれって言うんだもん」
「だからってさ……もしものことが」
「まあまあ、先輩。もういいじゃないですか」
雪菜になだめられお小言をやめる。
「や、うん、悪いな。まさかこいつ、こんなに魔力量が少ないなんて思ってなかったからさ」
「あ、いえ、気にしないでください」
頭をかきながら申し訳なさそうに言ってくるノーヴェさん。
この世界の魔法使いは魔力を使いすぎると途轍もない疲労感に襲われるらしいのだ。クロの症状も、それだと思っているのだろう。
「それにしても、お前らホントに兄妹か？　悪いけど全然似てないな」
「アハハッハ。よく言われますよ」
あなたの姉妹も相当ですけどね。
口には出さないけど。

「実は血がつながってないのよね」
「やっぱりな」
「そうなんですよ」
「でも、血よりも深いところで繋がったから……」
「やめなさい」
　洒落にならん。幸い相手は意味が分かってないみたいだけど、理解されたらどうするつもりなんだよ。
　血よりも深い所ってなんだよ。あれしか思い浮かばねえよ。
　これ以上この話を広げられる前にさっさと退散したいけど、そうもいかなそうだなぁ。時間あるなら来てほしいって言われたから来たのに、用事があるから失礼しますはおかしいもんな。
「それじゃあ、もう一回カフェに戻って……ん？　アインハルト？」
「え？」
　碧銀の髪をツインテールにしている女の子。俺のことをまっすぐに見ているその目は左右で色が違う。オッドアイってヤツだ。
　なんでこんなに見られてるんでしょうか。初対面のはずなんですけど。
「あ、あの――――」
　アインハルトが口を開いた時、周囲が静まり返るような破裂音が鳴った。しかし、爆弾が爆発したとか、そんなことではない。
　竹刀袋を持った女の子が、体格のいい男性に平手打ちされた。それだけだ。
「それはお前が考えることではないと言った筈だぞ、綺凛」
　少し離れた場所で行われているそれは当然周囲の人の注目を浴びる。
「ったく。こんな場所でよくやるぜ」
　ノーヴェさんがやれやれといったように首を振る。
「ノーヴェさんはあの手の奴には何とも思わない感じですか？」
　俺は話題を変える意味を持って話しかける。
「ん？　まあな。あたしのとこでも普通にあるからな。言葉だけでわかれば苦労しないってことだ。指導する奴は時には心を鬼にしな

きゃいけないこともある」
　体罰上等なのは結構だし俺も同じ考えだ。でもあれは……
「で、ですが伯父様」
「口答えを許したつもりもない」
　もう一度、男性が腕を振り上げる。綺凛は次の瞬間頬に訪れる鋭い痛みに耐えるために目をきつく閉じた。
　男性の腕が振り下ろされる。しかし、平手が綺凛を襲うことは無かった。男性の腕をつかんで止めていた人物がいたからだ。
「え……？」
「……」
　綺凛が恐る恐る目を開くと、そこには無言で男の腕を掴む耀の姿があった。
　いつの間に……仕事が速いよ。それって本来、俺がやるべきものだよね。ボケッとし過ぎてたか。
「……何だ、貴様は」
　男性は敵意のこもった視線で耀を睨む。厳つい顔に睨まれても特に表情を変えることはない。代わりに小さい声で返した。
「それ以上の暴力はよくない」
　周囲の人々が口を閉じて見守っているため、小さい声でも遠くまで聞こえてくる。男性はその言葉を嘲笑う。
「ふん、笑わせるなよ小娘が。金のために銃を手に取るお前等が、どの口でそんな綺麗事をほざく？　そもそも今のはただの躾だ。こちらの事情も知らない部外者がしゃしゃり出てくるな」
　耀の着ている制服で武偵と判断したためか、武偵にとって痛いところを突いてくる。
「それは違う。あなたの顔はしつけをしようって顔じゃなかった。自分の憎しみをぶつけている顔」
　生命の目録（ゲノム・ツリー）で動物の観察能力を使ったな。動物っていうのは、人間が思っている以上に人間の表情を見ているらしいからな。
　男性の顔が不快そうに歪んだ。
「貴様、目上の人間に対して失礼な物言いだな。貴様の親は貴様に碌

な教育をしてなかったと見える」
　耀の顔が一瞬固まるが、すぐに無表情に戻る。
「目の前にいる奴以外を貶めるのは、人として最低だと思いますが？」
「翔？」
　耀をかばうように前に出て、言い争いに参加する。
「貴様、その小娘のツレか？　確かに今のは私の失言だったが、こちらの躾に口を出してきたのはそっちだ。今すぐ立ち去れば許してやろう」
　男性は顎で失せろと伝えてくる。
（翔、行かないよね？）
（当たり前だろ）
　小声で聞いてくる耀に迷いなく答えた。
「言葉を返すようですが、そうは思いません。あなたの暴力はただの暴力。相手を傷つけるためだけのモノでした。その娘も何かを学び取っている様子はありませんし、むしろあなたに恐怖している。恐怖による支配はもっとも単純で崩れやすいものです。歴史を見てもうまくいったことはありません。その子の事を思っているなら、考えを改めた方がいいと思いますが？」
「……学生の分際で生意気な。貴様、名前は？」
「夜月　翔です」
　男性は端末を取り出し操作し始めた。俺の名前から情報を引き出すつもりだろう。しかし無駄だ。なぜなら俺の表向きの情報は……
「Ｆランクの雑魚か」
　まったくのデタラメだからだ。
「っち、こんな雑魚に……ん？」
　何かに気が付いたように口をゆがめる。
「いいだろ。小僧、貴様が物申したいというなら、言ってみろ」
「ええ？」
　何だ、何を発見したっていうんだ？
「聞いてやると言っているのだ。言ってみるがいい」
　聞いてやるって言ってるんだし、言ってやるか。

「もう二度とこの娘に暴力を振るわないで下さい」
「あぁ、構わんさ……貴様が決闘に勝ったらの話だがな！」
ああ、うん。こうなるのは分かってたよ。

進化の兆し

何度も言っているが武偵は血の気が多い。血税をもらって人様のために働いている公務員とは違って、将来の商売敵になるのだから仕方がない部分もあるが。

お互いに承諾した私闘で怪我した場合は、法律でも保護されないときている。

そんなこともあって、武偵にはいくつかの決闘の方法がある。絶対にこの方法にしなければいけないというルールはないが、相手も自分も必要以上のケガをしないように何れかのルールに則るのは暗黙の了解になっている。

再起不能まで叩きのめせなんて言われたら、わざと負けないといけなかった俺としてはとてもラッキー。

「でもないな……」

今回のルールは相手の胸に着けた校章を先に破壊した方が勝ちというルール。校章は左胸のポケットにある為、防弾・防刃性の制服を着ていても下手を打つと命にかかわる。私闘は黙認されているが、やるならお互いに覚悟を持てという意味だろう。

そして、このルールの一番の問題は、

「パラドクスになれない……」

当然、服が完全に隠れる仮面ライダーへの変身はＮＧ。や、努力はしたんだよ。でも校章ってピンで留められてるからパラドクスの装甲に刺さらないし。ルール変えてくれって頼むのも嫌だったから。

今使える手札で勝つしかない。

ああ、そう言えば、武器・能力ガチャの報告してなかったっけ。

タイムベルト

時間旅行できるようになるベルト。ただし、自由な時間設定以前に、使うタイミングも指定できない。端末に送られた緊急任務でごくまれにこのベルトが自動で作動する。元の時代に戻るときも緊急任

務終了後、ちょうど1週間後に元の時代に戻るように強制作動する仕様になっている。

黒影（ダークシャドウ）

『僕のヒーローアカデミア』に登場する『個性』と飛ばれる特殊能力の一つ。『常闇　踏陰』の個性。

鳥の影のような怪物を使役することができるようになる。この影自体に自我がある。

影自体がかなり遠くまで伸びるので、攻撃と防御両方に幅広く使うことができる。

弱点は、周囲が暗いほど凶暴かつ強力になるが制御しづらくなり、逆に周囲が明るいと能力値は下がってしまうが、制御しやすくなること。

この2つだった。

タイムベルトは、そのうち過去か未来に行って何かするフラグにしか見えない。しかも、タイミングが全くつかめないってのも質が悪い。

黒影（ダークシャドウ）は大当たりといっていい。明るい場所だと弱くなるが、それでも十分すぎるほど強力な能力だ。

これを加えた今の俺なら綺凛相手でもワンチャンあるかな。あると思いたい。

あ、でもまだ綺凛と戦うと決まってるわけじゃ――

「――いいな。そして、お前の相手はこれだ」

「……はぁ」

分かっていたこととはいえ、何のためらいもなく綺凛の肩に手を置く男性。この人は綺凛の伯父の刀藤　鋼一郎だ。

外野もひそひそと話す気配が伝わってくる。俺は耀の首根っこを押さえて飛び掛からないようにしている。耀は正義感とかそういう

もので動く娘じゃあないけど、これはそれ以前の問題だ。
「安心しろ。貴様が負けたところで、こちらは何も要求しない」
「そういう問題じゃあないと思いますけどね……別にいいですけど」
分かっていて言ってるんだな。原作を知って展開をある程度知っていても、結構クるもんがある。
「伯父様！　私は……っ！」
「黙れ！　お前は私の言うとおりに動けばいい!!」
綺凛の抗議を一蹴した鋼一郎。周囲がこんなに冷えてるのによくやりますね。
「で、ですけど！」
なお食い下がろうとする綺凛。そんな綺凛を目の力で黙らせる。睨まれただけで、メドゥーサに石に変えられたみたいに動けなくなってしまっている。
「綺凛。私に逆らうつもりか？」
「……いえ、そんなことは……」
綺凛はクマに睨まれたウサギのように体を縮こまらせる。
「ならいい。この男、あの聖天子様の護衛任務を受け、しかも襲ってきた暗殺犯を撃退した実績がある。実力はランク以上だ。今のうちに倒しておけば、後々役に立つことがあるだろう」
ああ、その暗殺犯、そこにいますよ。愉快愉快。
聖天子様のこと調べれば出てくるんだな。武偵殺しのことは隠蔽されてるのに。聖天子様だから、別に隠す必要がないって思ってるのかもしれないけど。
耀と鋼一郎は俺たち2人から距離を取った。残されたのは暗い顔で俯く綺凛と俺だけだ。
周りにはすっかりと野次馬が集まっていた。見世物じゃあないんですがね。見たいって気持ちはわかるけど。
「……ごめんなさいです」
綺凛は囁いた。
「私……刀藤　綺凛は、夜月　翔先輩に決闘を申し込みます」
「俺はてっきり、君の叔父さんと決闘すると思ってたんだけどな」

心にも思ってない無駄話を始める。
「私だって先輩と闘いたくなんてありません。でも、仕方ないんです。私には叶えたい望みがあります。そのためには伯父様の言うとおりにするしか……っ！」
「言う通りが悪いなんて言っちゃいない。今の待遇が見過ごせなかったんだよ」
どんどん頭が冷えていく。
「お願いします、先輩。ここで先輩が引いてくれればそれで収まります。だから、お願いします」
「そうしたら、君はどうなるんだ？」
降って湧いたように遭遇したこのイベント。何の心構えもなく、ただＶｉｖｉｄのメンバーとの顔合わせになると思っていた。
「私は……私のことは別にいいんです。どうにもならないことですから」
「なら、引けないな」
覚悟が決まってきた。
「そうですか……夜月先輩は優しいのですね」
「そう思うか？」
顔を上げた綺凛の顔にもう迷いはなかった。数秒前までの気弱な雰囲気は見る影もない。
「では、仕方ありません。私も負ける訳にはいかないのです」
腰の鞘から刀が抜かれ、構えられる。戦いたくないと言っていたのは嘘のように構えに隙ってもんがない。俺を切り伏せると、全身が叫んでいた。
俺も超宇宙聖剣（スペースカリバー）を抜いた。手の中でバトンのように回すと、光の帯ができる。片手で構え、もう片方の手の爪を牙（タスク）で回転させ始める。
鋼一郎の声で、決闘の火ぶたが切って落とされた。すぐさま黒影（ダークシャドウ）を体に纏う。こうすることで、よくある身体能力強化魔法のイメージに近い効果を得られる。
（行くぞ、黒影（ダークシャドウ））
（アア、任セナ）

さあかかって――――

「参ります」

俺は決闘中に対戦相手から目を離すようなマヌケではありません。あ、これは、いつのまにか綺凛の姿が消えて、胸元に白刃が迫っていたことに対する言い訳です。

「っ!?」

どうにか躱し、後ろに下がって距離を取ろうとするが、そんな暇を与えないとばかりに追撃が迫る。これってさっきのクロとアインハルトの戦いと同じじゃない？

尋常じゃない剣速だ。無防備になった瞬間に次の攻撃の動作に入っている。無駄な動きも遊びの攻撃も全くない。

「夜月先輩、お強いんですね。驚きました」

「こっちもだよ。まさか、ここまでなんてな……」

（余裕コイテル場合カ！　紙一重ダッタゾ!!）

っち、お前ビビりか、黒影（ダークシャドウ）。紙一重になるなんてやる前からわかることだろ。

綺凛は有名剣術、刀藤流宗家の娘。原作でも剣技のみでは5本の指に入るくらいの実力者だった。

「やっぱり、勝てなさそう……」

剣ではね。

今回の勝負はチャンバラではない。左胸の校章を破壊した方が勝ちなのだ。俺の本命は牙（タスク）と拳銃を使った変態銃撃だ。あんなの初見で対応できるわけがない。

奇策と奇襲は一発で決めないといけない。トリックが割れてしまうと、次からの成功率が著しく下がる。

少しかき回しておこう。

「ッ!!」

完全記憶能力。これは別に知識だけを記憶するのではない。俺が経験したものを完全に記憶するのだ。

学校での実習に加えて日々のアリアとの格闘、アスナや、雪菜の体の動かし方も記憶している。

そして今、
「まさか……『連鶴』、ですか？」
「これの事か？」
踏み込み、綺凛とまったく同じ動きで切りかかる。
難なく躱されてしまうが、その顔は驚愕に染まっていた。
見せてもらった技しかできないけどな。
『連鶴』とは、『鶴を折るが如し』と称される刀藤流の奥義の名だ。四十九の繋ぎ手の型を組み合わせ、完全なる連続攻撃とする。一瞬たりとも途切れずに正確な斬撃を相手に浴びせ続けるのだ。
刀藤流でも使える人物は限られ、さらに綺凛と張り合えるレベルの連鶴を使えるものは門下生には存在しない。
「先輩は一体……」
存在しないはずの俺を見て明らかに動揺している。離れたところに立っている鋼一郎も目を見開いている。
ま、こんなの張りぼてだ。黒影（ダークシャドウ）のバックアップを受けて、体を完全記憶能力で記憶したとおりに動かしているだけ。この決闘中に綺凛が使った繋ぎ手しか使えない。
そんな奇策の手品がいつまでも達人に通じるわけがない。最初は拮抗しているように見えていたが、時間が経つにつれて俺の攻撃が誘導され始めた。俺が綺凛の攻撃しやすい位置に来るように。
手遅れにならないうちに、俺は超宇宙聖剣（スペースカリバー）を手放す。剣戟が続くと思っていた綺凛は少し体勢が崩れる。俺はベレッタと爪が回転した腕を構える。
弾速が違う銃弾と爪弾。銃弾撃ち（ビリヤード）で弾かれた銃弾は、下からすくい上げるように綺凛の校章を狙う――ことはできなかった。
なんと綺凛は超人的な反射神経で、ベレッタから発射された銃弾を、爪弾に当たる前に跳ね返していた。お前は石川五右衛門か。
そこから連鶴に入る。俺の手には剣がない
「防げ!!　黒影（ダークシャドウ）!!」
「任セナ!!」
俺のバックアップに徹してもらっていた黒影（ダークシャドウ）が初めて攻勢に入

る。何もない空中に鳥の形の影が現れた。
「せぁ!!」
謎の物体にも臆することなく切りかかる綺凛だが、黒影（ダークシャドウ）を切り裂くことはできない。それを理解した綺凛は滑るように黒影（ダークシャドウ）の背後、つまり俺と黒影（ダークシャドウ）の間に入ってきた。
防御のための黒影（ダークシャドウ）も躱された。銃弾撃ち（ビリヤード）のための爪弾は、そもそもまっすぐ飛んでも校章に当たらない。さらに、綺凛も予知していたように体を少しだけ横にずらした。
周りの人たちはこれで勝負が決まってしまうと思っている。今の俺の体勢から綺凛の刀をかわすことは不可能だと。
しかし、俺は全く別のことを考えていた。

爪が、

指を軸に回転していた。
（ＡＣＴ２!?）
そう思ったときには発射した爪弾が綺凛の服をかすめていた。
すこし、ほんの少しだけ、それこそ繊維を１，２本削り取ったくらい。虫眼鏡でも使わなければわからないくらいの被弾。
そこに『回転』のエネルギーは食いついてきた。
「なっ!!」
綺凛は自分の服に起きている異変に気が付いた。
左わき腹に発生した当たった覚えのない服の損傷が、次第に移動し

始めたのだ。爪弾が外れても、回転のエネルギーは死んでない。服にわずかに残った回転エネルギーが、効果を発揮しているのだ。
見たこともない事態に思考が追いつかなかったのか、回転の穴は左胸のポケットを校章ごと吹き飛ばして消えた。
俺は急いでスタンドの像（ヴィジョン）を確認する。
「チュミィィィィン……？」
「ＡＣＴ１のままか……」
俺には周囲の歓声は全く聞こえていなかった。ほんの一瞬だけ変化した自分のスタンドのことで頭がいっぱいだった。

「って、ことがあったんだよ」
「へぇ～、そうだったんだ」
あの決闘から数日。学校が休みのこの日、久しぶりに、かなり久しぶりに家でのんびりしていた。あの日、現場にいなかったアスナへの報告を終えた。
あの決闘の後の鋼一郎の顔は傑作だった。顔が真っ赤っか。俺が話しかけても無視して立ち去ってしまった。綺凛は綺凛で、慌てて一礼して去っていった。
「それでその子も暴力を振るわれなくなったんだね」
「どうだろうなぁ」
同じソファーに座りつつ、アスナが入れてくれたお茶に口をつける。
負けるなんて微塵も思ってなかったからあんな条件出したんだろうし、契約書を作ったわけでもないんだからなぁ。守ってなくても知る手段がない。
あの後どうなっているかなんてほとんどわからない。雪菜と耀は学年が違うし。今度様子を見に行ってくるか……

「それよりいちゃいちゃしよーよー、せっかく2人きりなんだしさー」
「ずいぶん直球だね!?」
考えることが多すぎる。時には何も考えないで甘えてみたいときもある。
「あっ、もう、翔君は……よしよし」
勝手に膝枕をしてしまったが、アスナは嫌がらずに頭をなでてくれる。
頭の後ろにある幸せな感触を楽しめて、目の前にはアスナの慈愛に満ちた笑顔と、衣服を押し上げる二つの双丘。
あー、癒される。お昼を食べたからか少し眠くもなってきた。聞こえてくる時計の秒針の音が、子守歌代わりになってるな。よし、今日は少し昼寝でもして、
ピンポーン!!
「……」
「……」
クソが。
「ちょっと殺してくる」
「やめてね?」
俺はアスナから離れて玄関に向かう。
この最悪のタイミングでチャイムを鳴らす馬鹿野郎は一体どこのどいつだ? 新聞の勧誘だったら、傘のフルスイングをケツに叩き込んでやるぜ。
「どこのどちら様ですかぁ!!! ……あれ?」
「こ、こんにちは!!」
そこには緊張した面持ちのアインハルトがいた。だけではない。
「あ、あの、こんにちは……っ!!」
「綺凛ちゃんも?」
俺から会いに行く手間が省けてよかったというべきなのか? それとも、別の?
この訪問にはいったいどんな意味があるというのだろうか。そして、神様は俺を休めてくれないんだろうか。

2人の戦う理由

出されたお茶を目の前にしてカチンコチンに緊張してる2人。
綺凛はともかく、アインハルトは別に緊張するようなキャラでもない……ことはないか。普段見せている顔がクールなだけで実は天然だったりするんだよ。
「もきゅもきゅ」
「それで、今日はどうしたの？　2人揃って来るなんて」
このままでは一向に話が進まないと見越したアスナは、年長者として柔らかい声で問いかける。初めて会うこの2人にこの対応力はさすがの一言だ。
隣にはちょうど食後の散歩から帰ってきた耀が、お茶請けの饅頭を頬張っていた。もう俺達が食べる分がなくなりつつある。
「い、いえ。刀藤さんとは偶然会っただけで、一緒に来たという訳では……」
え、じゃあ、2人はそれぞれ別の理由があって家に来たのか。そういえばこの間も、何か話そうとしてたっけ。綺凛との決闘でうやむやになったけど。
「えと、その、私の話は大したことじゃないので、その、ストラトスさんから、どうぞ……？」
「私の話も、ほかの人から見ればくだらない話なので。刀藤さんからどうぞ？」
「いえいえ、ストラトスさんから……」
「刀藤さんから」
「……」
「……」
こっち見んな。
最初に話したくない、話しづらいのはよくわかったけど、こっちに助けを求めてくるんじゃない。
「じゃあ、綺凛から言ってみようか」
「えっ!?」

「言ってみようか」
「は、はい！　そ、それじゃあ」
助けを求められてしまえばしょうがない。強引にでも話を進めてしまわなければ。
綺凛は俺たちは正面から見て、頭を下げた。
「夜月先輩、春日部先輩、この間はありがとうございました！」
「うん。あれから暴力は？」
「大丈夫です。手を振り上げても我慢してくれていますから」
「それは良かった」
ははは、よっぽど効いたんだな。それにしても意外とプライドがあるんだな、綺凛の伯父さん。
手を上げることを我慢してるって言葉に『良かった』で済ませるところとか、綺凛と俺の感覚はマヒしてるかもしれないけど。
「……で？」
「え？」
「や、それだけ？」
「はい、そうですけど……」
「真面目だね、綺凛は。そんなに気にしなくてもいいのに」
「そんなことありません！　お２人は見ず知らずの私を伯父様から庇ってくれた上に私のことを気遣って下さいました！　本当に嬉しかったんです！」
耀、フォローするのはいいけどさ。
「お前はもう少し真面目になれ。俺の分まで饅頭食ってんじゃねーか！」
「ゴメン、つい。包み紙に少し残ってるからいいでしょ？」
こんな欠片で許してくれはないと思う。
「んで、アインハルトのほうは？」
ため息つきながら、黙って聞いていたアインハルトに話を振る。
実は綺凛に先に話してもらったのは、綺凛の場合、決闘の事後報告だろうと予想がつくのに対して、アインハルトが話す内容が全く予想できなかったからだ。や、全くってのは嘘だな。手合わせしてくれと

かそんな感じかもしれない。
「私のこと、本当に覚えていませんか？」
「……どこかで会ってたりするっけ？」
だとしたら周りが見えてないどころの話じゃない。こんなに目立つ娘を見落としてたなんて。
「はい。一月ちょっと前の銀行強盗で」
「あー、あれか？」
俺がこの世界に来て初めての緊急クエストの時の、あの銀行強盗のこと言ってるのか？　それはしょうがない。なんたって初めての事件だったし。
「それと、横の女性の方も、バスジャックの時にお会いしてますよね？」
「やっぱり！　なんか見たことある子だなぁって思ってたんだよ」
バスジャックは武偵殺しのかな。あの時もパラドクスでフィーバーしててバスにはあんまり近寄ってなかったしな、しょうがない。アスナの方は覚えてたみたいだけど。
「それで、その時のお礼を言いに来た感じか？」
「はい、それもありますが……突然家まで押しかけて失礼なのは承知していますが、私と拳を交えてはいただけないでしょうか！」
突然の発言に固まる俺とアスナと綺凛。でも、頭の中にある疑問は俺と2人とでは違っているだろう。2人は決闘という言葉に。
「俺と戦いたいから、わざわざ家まで来たのか!?」
俺はどんだけバトルジャンキーなんだということに。
「い、いえ！　本当は刀藤さんと先輩が決闘した日に申し込もうと思っていたんです！　それが……」
「はぅぅ、す、すみません！　私のせいで！」
「そ、そんな！　頭を上げてください、刀藤さん！」
立ち上がって腰を９０度に頭を下げる綺凛におろおろするアインハルト。こういう相手に慣れてないんだろう。慣れてる方がおかしいか。
「それで、どうして翔君と戦いたくなっちゃったのかな？」

「翔は何の理由もなく戦う人じゃないよ」
アスナと耀がその場を収める。アスナはともかく、耀は俺の何を知っているのか少し疑問だよ。
「……そうですね。まず私のことを、少しお話ししましょう」
アインハルトのフルネームは『ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルド』。古代ベルカ時代の戦乱期、覇王と呼ばれたイングヴァルト王の末裔だ。
この世界、ラノベや漫画で昔にあった出来事は、無理のない範囲で元いた世界の歴史に混ぜられてる。
今回の古代ベルカ時代はその類のものだ。詳しい話は歴史の授業になってしまうから省くけど。
「私はただ覇王イングヴァルトの末裔という訳ではありません。先祖返りとして、身体的特徴として瞳の色、そして……記憶を受け継いでいます」
アインハルトは自分の左右で違う色の目の縁をなぞり、自分のことを語りだした。

「よいしょっと……あとは……あれかな？」
「うん、そうだね」
ヴィヴィオ、コロナ、リオは本棚の高いところにある本に目を向けた。ヴィヴィオは図書館内にある梯子を持ってくる。
アインハルトとのスパーリングであっさり負けてしまい、さらにアインハルトの辛辣な言葉で落ち込んでいたヴィヴィオだったが、今は再戦に向けて再び闘志を燃やしていた。
試合は来週末。それまでに猛特訓してアインハルトに自分の、本気の気持ちをぶつけるつもりだ。
とは言っても、この本棚がたくさん並んでいる場所、つまり図書館

で格闘技の練習をするつもりではない。
今日はアインハルトの事、より正確にはアインハルトと自分のご先祖様について改めて調べに来たのだ。
「気を付けなよ、ヴィヴィオ！」
「うん！」
リオに元気よく返し、梯子に登って本を取る。取ったところまでは良かった。
「あ……っ！」
本に意識を向けながら降りようとしたために、足を滑らせてしまった。
梯子はそれほど高さがないといっても、頭から落ちてしまえば大怪我することになる。
ヴィヴィオはとっさに目をつぶるが、床にしては柔らかいものに落ちた感触がした。目を開けると1人の少女がいた。その少女の光を反射する金髪が巨大な手になり、ヴィヴィオが床に叩きつけられるのを防いでいたのだ。
少女――ヤミは特に表情を変えない。
「大丈夫ですか？」
「え……あ、はい！　ありがとうございます！」
「……」
変身（トランス）で大きな手に変化させていた髪を元に戻し、何も言わずに立ち去ってしまった。
「ヴィヴィオ！　大丈夫!?」
「びっくりしたよ～」
「アハハ、失敗しちゃった……」
「もう、次からは気を付けなよ！」
起こってしまえば大事故も、起きなければ笑い話。
読書スペースのテーブルに座って本を開いた。
【古代ベルカ諸王国時代。それは天地統一を目指した戦乱の時代。『聖王女』オリヴィエや『覇王』イングヴァルトもそんな時代を生きた王である。この2人の王の関係は、現代の歴史研究においてもいまだ

明確になっていない】
（『聖王女』オリヴィエ……私の元になった人）
　実はヴィヴィオはお母さんのお腹から生まれた子供ではない。『聖王女』オリヴィエのＤＮＡから作られたクローンなのだ。そんな偉人のクローンが作られるのにはそれなりの理由があるのだが、ここでは割愛する。
（そして、『覇王』イングヴァルトがアインハルトさんのご先祖様かぁ……）
　ヴィヴィオは、ノーヴェに隠していて悪かったと謝られながら教えてもらったことを、頭で整理していく。
（ノーヴェの話だと、イングヴァルト王とオリヴィエ王女は仲良しで……でも戦争のせいでオリヴィエ王女が亡くなって、それをイングヴァルト王が後悔してる。アインハルトさんはイングヴァルト王の記憶を持ってるから……）
「……私の事、あんまり好きじゃないのかな」
「え？　何か言った、ヴィヴィオ？」
「何にも言ってないよ」
（それでも、全力でぶつかればきっと!!）
　ヴィヴィオは暗くなりそうだった気持ちを消し去り、本をめくるのだった。

　覇王イングヴァルトが体験した悲惨な戦争。その記憶を持って生まれてきたアインハルトの中では、古代ベルカ戦争は未だに終わっていない。ベルカのどの王よりも、覇王と彼が作り出した覇王流（カイザーアーツ）が強いことを証明する。
　守るべきものを守れない悲しみを繰り返さない強さを手に入れる。そんな漠然とした目標を掲げ、名のある実力者達に次々と野試合を

吹っかけていた。
「そして、ノーヴェさんにも勝負を申し込みました。結果は相打ち、でもありませんね。ノーヴェさんの最後の攻撃でふらふらになってしまった私は、その後に倒れてしまい……気が付いたらノーヴェさんのお姉さんの家で寝ていました」
　この時アインハルトが捕まってしまったのは、ノーヴェさんは攻撃と同時に発信機をくっつけていたからだ。こう言ってしまってはアレだけど、ノーヴェさんのほうが何枚も上手だった訳だ。Ｖｉｖｉｄ原作では単純な殴り合いではほとんど互角だけど。
「それで翔君とも、か」
「はい。ノーヴェさんとの約束なので、もう野良で試合を申し込むようなことはするつもりはありませんから」
「それで、どうしてそんなに緊張してるの？」
「だっ、男性の住んでいる家にお邪魔するんですよ!?　少しくらいは……」
　……まぁ、筋は通ってるかぁ？　アインハルトの俺への用事は２回助けられたことの御礼と、試合の申し込み。わざわざ家に来たのはノーヴェと、喧嘩屋まがいのことはもうしないと約束したから。もじもじしていたのは、男の住んでいる家を訪問したから。
　でも、まだ何かありそうなんだよなぁ。
「それで、どうでしょうか」
「ん？　ああ、してもいいよ。ヴィヴィオちゃんとの試合が終わったらな」
「……はい」
　ヴィヴィオの名前を出すと露骨に顔の表情を消そうとしているのがわかる。きっと、表には出せないいろいろな感情があるんだろう。
「あの……一つ質問してもいいですか？」
「ん？　どうぞ」
　これで２人の用事が終わり、もう帰るだけかと思っていたところで、綺凛がおずおずといった様子で問いかけてくる。
「夜月先輩って、どんな訓練をしているのですか？」

「夜のプロ――いえ何でもありません」
アスナに睨まれて慌てて取り繕う。でも残念ながら嘘じゃないんだよなぁ。俺の一番効率いい特訓方法は、夜のプロレスごっこだよ。
「えーっと、ねぇ……」
特にこれといって特別なことはしていなかったりするんだよな。学校での基本的な体捌きの訓練と、ガチャの武器・能力だけでここまで乗り切ってきたし。
「走り込みとかやってますよね？　どこを走ってるんですか？」
どうやらアインハルトも興味があるようで、俺のことをチラチラ見てくる。
「それより、先輩って剣(術)を使うんですね！　どこで『連鶴』を習ったんですか？　もしかして刀藤流の門下生に知り合いがいるんですか!?」
人が変わったように饒舌になる綺凛だったが、周りの目が集中していることに気が付き顔を赤くして縮こまる。
「す、すみません。私……っ」
「剣術、好きなんだな」
「は、はい！」
赤くなっていた顔をいっぱいに輝かせ答えるが、すぐに寂しそうな顔になる。
「私は剣以外、何も出来ませんから」
「そんなこと……」
「いいんです。本当のことですから。私は頭も良くないですし、ドジで間抜けで臆病で、家事だって満足に出来ません。でも、そんな私でも剣を握っている時だけは誰かの役に立てるんです。だから楽しいし大好きです」
確かな意思を感じる言葉だった。しかしその言葉に、正しいと信じている意思は無かった。
「それに私には叶えたい、叶えなくちゃいけない願いがあります」
「ちなみにそれは？」
「父を助ける事です」

綺凛の父親は今、刑務所にいる。綺凛が小さいときに通り魔に襲われ、返り討ちにして殺してしまったのだ。正当防衛が働いてもおかしくなかったが、剣術の大家である刀藤家の人間だということが裏目に出てしまった。

結果、今なお刑務所暮らしをしている。

そうそう人には話さないであろう話題だ。その場の空気か、俺が間髪入れずに自然に先を促したからか、はたまた俺たちのことをそのくらいは信用してくれているのか。

「そのためにあの人の言う事を聞いてるって訳か？」

「伯父様はとても有能な方です。剣以外無能な私と違って、お金も人脈も持っています。私が伯父様の言いつけを守っていれば、お父さんの罪をなくすこともできると言ってくれました。私一人では絶対できなかったことです。伯父様には感謝しています」

「出世に利用されても？」

綺凛のためを思っての行動なら、あんな風にきつく当たったりはしない。あれは伯父と姪の関係というよりは――

「私は自分の願いを叶えるための道を示してもらう。伯父様はその過程で相応の利益を得る。だから、これは対等な取引なんです」

「……あんなのは取引なんて言わないと思うけどな」

諦めきった声色で喋りきり、顔を伏せてしまう綺凛。

２人ともそんなに大したことない話って言ってたのに、自分の背負込んでるものぶちまけるのは勘弁していただいてよろしいですかね。いっぺんにやってこられると、こちらにも限界がありますよ？

重い沈黙を破ったのはやっぱりアスナだった。

「そういえば翔君、訓練相手がいないなーって言ってたよね？」

「え？」

朝。まだそんなに気温が上がっていない時間帯。今までより1時間早く起きた俺はトレーニングウェアを着て玄関扉に手をかけた。
まだ寝てる娘もいるから静かに動く。アスナに見送られ、俺ともう1人は歩道を歩きだす。
もうわかってるとは思うが、アスナがこれの発案者だ。わざとらしく『誰か翔君の練習相手になってくれる人はいないかなぁ～』なんて言ったんだよ。後は分かるだろ？
綺凛が速攻で食いついて、そのあとアインハルトも、って具合に早朝訓練が企画された。これで俺の睡眠時間が削られることになる。
「耀もついてくるんだな」
「うん。○○公園でしょ？　友達が早起きだから私も会いに行く」
「友達って人間じゃ……？」
「ないよ。昨日会った鳥」
散歩で早速友達を増やしてたんだな。
「ん？　どうしたの？」
「や……耀は、ここではうまくやっていけそうかなって思ってさ」
「大丈夫だよ。みんないい人だから」
俺たちは他愛無い話をしながら、待ち合わせしている○○公園に向かった。そこにはすでに先客がいた。
「おはよう、アインハルト」
「おはようございます、夜月さん、春日部さん」
アインハルトは軽く頭を下げてくる。結構早く来て体を動かしていたのか、うっすら汗をかいている。
「私は友達に会ってくるね」
「ほいよ、行ってらっしゃい」
耀は茂みの中に消えていく。
「……」
「……」
「今日からよろしく」
「はい、よろしくお願いします」
話題がなくてつらいよ。

「ごめんなさい！　遅れてしまって！」
そこからしばらく待っていると、綺凛が息を切らせながら走ってきた。ついでに耀も、草むらから飛び出してきた。お前はポケモンか。野生の耀が飛び出してきたのか。
「翔！　離れて！」
俺は綺凛とアインハルトを抱えて後ろに飛んだ。黒影（ダークシャドウ）をバネの様に使い、一気に１０メートルも。
耀が飛び出してきた草むらの方を見ると、
「え、何、あれ？」
地面についている足は２本。退化したような前足を幽霊のように垂らし、それなりに長い尻尾、鋭い歯が並んでいる爬虫類系の顔。
一言で言うと、小型の恐竜みたいな生き物だ。そいつが３匹並んでいた。
「おいおいおい、友達ってのは鳥じゃあなかったのか？　ここはジュラシックパークじゃあないんだぜ？」
「分かんない。少なくともあの子は、昨日までは鳥だったよ」
「昨日まで鳥？　そいつはどういう？」
そこで、ある可能性が頭をよぎった。昨日までは鳥だった、そいつが恐竜に変わっている。つまり生物が恐竜に変わっている。
「スケアリー・モンスターズ……ッ!?」
敵を理解した途端、全方向から嫌な気配を感じた。見事に恐竜に囲まれてしまっている。
「ホント休ませてくれないな。また覚悟を決めないといけないのか」
「チュミイイイイイイン!!」
俺に答えるように、牙（タスク）がうなり声を上げた。

（この目）

アインハルトは翔に抱えられたままという恥ずかしい格好なのを完全に忘れていた。
（今まで戦ってきたどんな人とも違う）
強くなりたい。そう思い強者との戦いに身を置いてきたアインハルトだったが、ここ最近『何かが違う』ような気がしていた。自分はそこで足踏みしているだけで、前に進んでいないような感覚だ。
そんな時、アインハルトは翔に出会った。正確には片方が一方的に知り合ったのだが。
力の強さではない何か。言葉では言い表せないような何かを、翔の中に感じた。
（この人なら私を『次』に……ッ!!）

敬意を払え

「スケアリーモンスターズか」
　俺たちは絶滅したはずの生物――恐竜に囲まれていた。どこかの研究所が化石のＤＮＡを使って再生させた、なんて甘いことを考えたくもなるがそうもいかない。
「あのなかの一体が、耀の友達なのか？」
「うん。そのはずなんだけど……今日あったらすぐにここから離れてって言ってきて。でもおかしいよね。そんなこと……」
　恐竜に変えられても、意識は変わらないってことだ。おそらく、スケアリーモンスターズの本体が、昨日耀が帰った後、俺たちがここに来るまでにこの公園に住んでいる動物を恐竜に変えたんだろう。
　何が目的かはわからないが、心当たりが多くて困るな。俺たち、耀以外の３人は。
「あ、あの……」
「ん？　どうした、綺凛？」
「そ、そろそろ、降ろしていただけると……っ！」
「あ、そうだな」
　と言いつつも、俺はしゃがんで２人を地面に降ろすが、腰に回した腕は緩めない。
「……えっと？」
「翔、こんな時にもセクハラ？」
「違いますぅ。動かないほうがいいんですぅ」
　スケアリーモンスターズで恐竜化した生物は動くものしか認識できないため、じっとしていればどうにかなる。もしも俺たちをしっかり狙ってきたら、本体が俺たちを目視している可能性が高い。
「大丈夫、みたいですね……」
「そうだな」
　恐竜は俺たちをしっかり囲んでいたのが嘘のように、てんでバラバラに動き出した。明らかに俺たちのことが見えていない。
「どうするの？　このままじっとしてる？」

「それも嫌だなぁ」
スケアリーモンスターズの嫌らしいところは、恐竜に傷つけられた生物もまた恐竜になるというところである。それは人間も例外ではない。
「まだ早朝だからいいけど、このまま何もしないで粘ってても人が襲われるぞ」
日が昇れば、この公園に遊びに来る人も出てくるだろう。恐竜たちがそれを見逃すわけがない。
「そうなる前に倒さないといけない」
俺はガシャットギアデュアルを取り出す。変身していれば、少なくともあの痛そうな牙で傷つけられることはなくなるだろうしな。
「……耀、いいか？」
「……うん、いいよ」
事情を説明して耀に許可を求める。動物の声が聞こえる耀。そうでなくても、あの中には耀の友達がいる。動物が殺されて心が痛むのは当たり前だが、耀はその比ではない。
「困るな、夜月　翔。それはとても困る」
気配はなかった。気が付くとそこに立っていた。人ではないが俺にとって見たくなかったヤツだ。
「ホワイトスネイクッ!!」
「久しぶりだな、夜月　翔」
不気味なオーラを纏ったスタンド、ホワイトスネイクが立っていた。
どうしてこのタイミングでこいつが出てくるのかは全くわからない。が、予想できることはいくつかある。
一つは、スケアリーモンスターズを誰かに発現させたのはこいつらかもしれないということ。
一つは、スケアリーモンスターズの本体と手を組んでいる可能性があるということ。
一つは、このまま全員でじっとしていることはできそうもないということ。

「牙(タスク)!!」
作戦を変更。恐竜にならともかく、ホワイトスネイクにはパラドクスでは立ち向かえない。先手必勝とばかりに爪弾を連射する。
「グギャアアアアアア!!!」
俺が動いたことで、恐竜の狙いが俺になる。
「ごめんね……」
綺凛の素早い斬撃で恐竜の首が落ちる。アインハルトと耀も、それぞれケガをしないように応戦し始めた。
「ふむ、いい位置だ。そこでいいだろう」
ホワイトスネイクはＤＩＳＣを何枚か取り出し、恐竜に投げ入れた。
その時だ。ビシリ、俺たちが立っていたところを中心に、地面に亀裂が広がっていった。
「なにッ!!」
次の瞬間、俺たちが立っていた地面が崩れ、巨大な穴が開いた。地面の破片は自然に壊れたにしては形が整いすぎている。おそらく、何かしらの仕掛けを恐竜を使って作動させたのだろう。
俺たちは暗い穴の中に落ちていくのだった。

「どこだここ？　アインハルト、お前分かるか？」
俺は唯一目に入るところにいるアインハルトに声をかけた。落ちるときに恐竜が一緒に落ちてきた。そのせいであとの２人と離れ離れになってしまった。
「多分、ここはバラストエリアだと思います」
「バラストエリア？」
「ここはメガフロートですから。バランスを取るための重りとして水

を使ってるんです」
「そうか。それじゃあ、点検のための出入り口があるはずだよな？」
薄暗く、果てしなく広がっている空間に目を向ける。
パチャと水をかいた音がした。
「ッ!!」
俺たちは警戒して身構える。
「夜月先輩！　大丈夫ですか!?」
水の中から伸びている柱の影から、綺凛が泳いできた。水の中の手足の動きを見るに、どこもケガしていないようだ。結構高いところから落ちたし、心配してたんだけどな。
「ん、そっちも平気そうだな。とりあえず、水から上がれる場所を探そう」
「はいっ」
「そうですね」
ずぶぬれになってスケスケの服も乾かさないといけないしね。目に飛び込んできたもんはしょうがない。
水が溜まっているここは小型のボートで移動するようだ。すぐ近くに中継基地のような簡易的な船着き場と小屋があった。
２人にはここで待ってもらって俺だけで探しに行くか。あんまり目を離したくはないけど、一緒に行っても戦力にならない可能性が大きいし、泳いでいくと余計な体力が……あれ？　そういえば、綺凛泳げなかったような――
「ッ!!　アインハルト！　綺凛から離れろ!!」
「え!?」
全く理解できない、といった表情で立ち尽くしているアインハルト。俺の言葉に、もう演技の必要はなくなったとばかりに綺凛の表情が、普段なら絶対にしない、冷たい鉄仮面になっていく。
「このスタンド、なかなか役に立つな」
ホワイトスネイクは自分の頭からＤＩＳＣを取り出して呟いた。

ホワイトスネイク

『ジョジョの奇妙な冒険』の第６部、『ストーンオーシャン』に登場するスタンド。原作の本体は『エンリコ・プッチ』で、この小説での本体はデンジャラスゾンビの変身者。

スタンドの像（ヴィジョン）は、ミイラ男のように包帯を全身に巻いた男。包帯には塩基配列のアルファベットが書かれている。

近距離パワー型と殴り合いができるのに、かなり遠くまで行くことができ、おまけにスタンド自体に意思があり、本体が命令しなくても的確に攻撃できるという反則じみたスタンド。

スタンドとしての能力は『ＤＩＳＣ』を作り出すこと。触れた相手の記憶や能力をＤＩＳＣにして取り出してしまったり、好きな命令を書いたＤＩＳＣを相手に挿入してその通りに動かしたりという具合だ。もちろん取り出された記憶や能力は、本人からは無くなってしまう。スタンドのＤＩＳＣを差し込めば、適才がある場合そのスタンドを使うことができるようになる。（ちなみに原作では他人そっくりに姿を変えたことがあるが、この小説では、変装できるスタンドのＤＩＳＣを使用していたということにします。あまりにも、能力がかけ離れているので）

「ウショオオアアアアッ!!!!!」

迫りくるホワイトスネイクのラッシュに、俺はとっさにアインハルトをかばって前に出る。そして、これまたとっさに利き手の右手で体をかばった。

しかし、そんな脆い盾はほとんど意味がない。そもそも、

「触ったぞッ!!　貴様のスタンドと記憶のＤＩＳＣッ!!　これでワタシのモノだッ!!」

触られてしまった時点で、ホワイトスネイクの能力は発動する。

スタンドのＤＩＳＣが奪われればスタンドが使えなくなり、記憶のＤＩＳＣが奪われれば、赤ん坊のような状態になってしまう。

もちろんそんなことは分かっている。でも、これしか方法がない。

俺が言うのは気が引けるけどな。ここは言わせてもらうぜ。
「やれやれだぜ。てめぇは俺には触れてねぇよ」
「な、にを……ッ!! き、貴様ッ!!」
俺の左腕には超宇宙聖剣(スペースカリバー)が握られていた。その刀身にはべっとりと赤いものが付着している。
俺の血だ。俺が、『自分の右手のひじから先を切り落とした時に付いた』。
ホワイトスネイクに触れられてはならない。そんなことは戦う前から分かりきっていたことだ。こんな至近距離に、しかもご丁寧にアインハルトを狙うことで逃げ道をふさがれてしまっていては、俺がとりうる行動はあいつに決められてしまっていたようなものだった。
そんな状態から逆転するには、奴の想像を超える必要がある。
どんなプロでも目標を達成すれば一瞬、ほんの一瞬は心に『油断』ができる。
ホワイトスネイクにとっての目標は俺に触れ、スタンドのＤＩＳＣを奪うこと。俺に触れた時点で半分の目標を達成してしまった。
ホワイトスネイクのラッシュが緩む。ラッシュが命中する直前に切り離した俺の右手に当たっただけでは、能力は発動しない。
「俺のスタンドはまだ俺のモノだぜ」
さらにこの土壇場に、分かったことがあった。
黄金長方形の形に回転させる。自然界に存在するある特定の辺の比を持つ長方形を見つけだし、スタンド能力に応用すること。
牙(タスク)を授かった時から、こいつを使う前提として無意識に頭の片隅の存在していた回転の極意。今まで、ただ何となく使ってきたこのスタンドだったが、ようやく理解できた。
フラッシュバックした過去の記憶にある、黄金比率の長方形を目に焼き付け、慎重に、しかし素早く、指先に回転エネルギーがたまっていく。
俺のスタンド像(ヴィジョン)が、機械じみたものへと変化した。

牙(タスク)ＡＣＴ２

牙(タスク)が進化した能力。翔が黄金長方形の回転を完全に理解したことで牙(タスク)が進化した能力。爪は指を軸にしてドリルのような回転をするようになり、威力が大幅に上昇した。

回転のエネルギーは着弾後もすぐには消滅せず、目標を自動的に追尾するようになった。

ＡＣＴ１と比べたときのデメリットは、飛ばした爪の再生が遅くなり、両手（両足）の爪を打ち尽くすと弾切れ状態になってしまうようになったところ。そして回転のエネルギーが上昇したせいで、銃弾撃(ビリヤード)ちなどの弾丸に充てて軌道を変える技との併用ができなくなったこと。

ハーブを飲むと爪の再生が速くなる。

「敬意を払えッ!!　ホワイトスネイクッ!!　ＡＣＴ２の爪弾だッ!!」

左手の５本の指から爪弾が発射された。キンジの銃技補正は牙(タスク)にも適応され、俺の狙い通りの場所に吸い込まれていく。

ＡＣＴ２の爪弾は、黄金長方形のスケールを見ながら正しい黄金長方形の回転をさせなければ撃てない。しかし俺の場合、完全記憶能力がある。完全記憶能力はどんな些細なことでも、一度見れば忘れない特異体質だ。道端に生えている草木、犬や猫のこともはっきりと頭に思い描くことができる。このおかげで、俺はどこでもＡＣＴ２を撃つことができる。

「グ、アアアア

肘から先が無くなってしまった俺の右手。一応切り飛ばした部分はそこに落ちてるけど、これくっつきますかね。上条さんは生えてくるけど、あいにく俺には幻想殺しは無いんだぜ。

「夜月先輩!! な、なんてことを……っ！」

顔を真っ青にしたアインハルトが駆け寄ってくる。

アインハルトにしてみれば、何もないところで一人ではしゃいで腕をぶった切ったヤバい人だ。痛すぎる。

「アインハルト、俺のこと、嫌いにならないでね……っ」

「突然どうしたんですか!?」

きっとアインハルトは、これが終わったら俺の前には姿を現さなくなるんだろう。俺だったらそうするもん。

スタンドバトルは、スタンドが見えないと中々滑稽な絵面になるんだよ。

「大丈夫ですよ、何かと戦っていたんですよね？」

「いいんだよ、そんな慰めは」

「刀藤さんから……言葉では言いにくいんですが、何か嫌なものがあるように感じたんです。お恥ずかしいですが、気が付くのに遅れてしまって……後ろを簡単にとられてしまいました」

「え？ どういうこと？」

「少し、調査不足だな、夜月 翔」

「ッ!!」

そこには、『無傷』のホワイトスネイクが立っていた。

「な、なんだと……ッ!!」

「ッ！ そこに何かいますね！」

アインハルトが大人モードになり構えるが、その向きは微妙におかしい。

「この世界のスタンドは一定以上の達人になら、かすかに気配を感じ取ることができる。ただし――」

「はあぁぁぁ!!」

アインハルトが拳を繰り出した。が、ホワイトスネイクの体を通り抜け、ダメージが入ったようには見えない。

「見ることはできないし、ダメージも与えられないがな」
この世界の修正ってわけか。スタンドは強烈な意思の力。殺気とか闘志を読み取れる人なら確かに少しくらい探知できてもおかしくはないか。それでも、元の仕様と大差ないけどな。
「ふむ。その女、アインハルト・ストラトスか。その年で私を感じ取れるほどの力を持っているとは……あの男が欲しがるわけだ」
「あの男、だと？　スケアリーモンスターズの本体か!?」
「ああ。ブラド、という吸血鬼だ。ＤＮＡオタクの変態でな。今回も、その娘と刀藤　綺凛のＤＮＡを採集したいらしくてな」
「なるほど、繋がったぜ。それにしてもよくしゃべってくれるな。冥土の土産のつもりか？」
「その通りだが？　お前もうすうす感づいているだろう？」
確かに、無駄話で稼ぐことができた時間のおかげでわかった。ホワイトスネイクが無傷だった秘密が。
スタンドへのダメージは本体へのダメージになり、本体へのダメージはスタンドへ反映される。だったら、
「本体が不死身だから、スタンドにもダメージが入らないってことか……ッ!!」
デンジャラスゾンビ。そいつの能力だ。制限も何もない不死身の能力。ダメージを受けても無効化される反則の塊。
事実上の撃破不可能。
「この土壇場でＡＣＴ２に進化するとはな。自らの腕を切った事といい、こちらの予想を超えてくるヤツだ、お前は。全く、本体と別々に行動して痛い目を見てしまうとは、情けないな」
一度は死んでいたはずのホワイトスネイクだが、その口調は余裕たっぷりだ。それもそのはず、あいつは不死身だ。
たとえＡＣＴ２の爪弾を使っても倒しきることは不可能だ。
万事休す。その言葉がぴったりの状況だ。
「ん？　何？」
突如、ホワイトスネイクが俺たち以外の誰かと会話を始めた。
「なに？　今すぐ戻れだと？　……分かった。あの吸血鬼が反乱した

のか。すぐに戻ろう……さて、事情が変わってしまった。早急にッ!!」
ＡＣＴ２でぶち抜いた。
「早急に、何だ？　俺たちを始末して本体のところに帰るつもりか？　だったらこっちもできるだけ長く抵抗させてもらうぜ」
「貴様……仕方ない、あの男の機嫌を損ねるのも面倒だからな。指示に従ってやろう」
そう言ってホワイトスネイクは姿を消して、俺も意識が遠のき始めるのだった。

寒くなったら

翔が流血で気を失ってからのアインハルトの行動は早かった。
「とにかく早く血を止めないと！　あの小屋の中に何か……っ！」
点検の時に使う休憩所、その中はいくつかの保存食や飲料水、仮眠室に加え、アインハルトの目当ての物のちょっとした医療セットが備え付けられていた。
焦って震える手で救急セットを広げていく。真面目なアインハルトは学校で習ったことをしっかりと実践できていた。初めての実践にしては、ケガの度合いがひどかったが。
激しい運動をしているわけでもないのに汗がどんどん出てくる。ともすれば、下手なランニングよりも息が荒くなる。
しかし、アインハルトはやりきった。圧迫と止血剤で出血はそれなりに止まってきた。ここで出来る処置としては限界まで頑張ったといえるだろう。
翔を仮眠室に寝かせると、アインハルトも隣に横になって力を抜いた。実は楽しみで前日に眠れなかったアインハルトの瞼は、少し重くなってくる。
瞼が閉じ着る寸前、外から聞こえてきた悲鳴に飛び起きる。
「今の声は刀藤さん？」
その声に嫌でも警戒心が強まる。大人モードになり、神経を研ぎ澄ませつつ小屋の外に出る。
そこには声の主の綺凛と耀がいた。どちらもずぶ濡れになっていて地面に水滴が落ちている。翔の腕から吹き出した血がべっとりと付着している地面と、切断面がむき出しになっている腕を見て、綺凛が尻もちをついてしまっている。
その隣では、耀が回収していなかった超宇宙聖剣（スペースカリバー）を拾い上げていた。普段は天然であまり感情を荒げることのない耀も、その光景には眉を寄せている。
「ス、ストラトスさん！　こ、これって……っ！」
「アインハルト、何があったの？　翔はどこ？」

どう見ても本人だ。顔も、声も、体形も。
しかし、
「そこで止まってください」
たかがそれだけでは、この2人が『本物』である保証にはならない。
「……アインハルト？」
「ど、どうしたんですか？」
見分けるのは非常に困難だったとはいえ、ホワイトスネイクに簡単に騙されてしまったアインハルトとしては、そう簡単に2人を翔に近づけるわけにはいかない。
あの状態の翔にとどめを刺さなかった時点で、もう見えない敵は撤退してしまっているのかもしれないが、万が一ということがある。
（でもどうすれば……）
目の前に立つ2人を本物かどうか見分ける方法。ずっと格闘技にしか目を向けていなかったアインハルトにはわからない。
（いや、違う。『見分ける』なんて生ぬるいことを言ってちゃダメだ）
翔の覚悟を見た。見えない敵を倒してアインハルトを守るためとはいえ、躊躇わずに自分の腕を切り落とした覚悟を。
（今度は私が『守る』番だ）
「春日部さん、刀藤さん、あなたたちは今までどこにいましたか？」
「えと、穴に落ちるときからずっと春日部先輩と一緒にいましたけど……私、泳げなくて……」
「うん。翔の匂いを追ってここまで来たけど、特に誰にも追いかけられてないよ？」
「そうですか……刀藤さん、失礼します。刀を構えてください」
「――え？」
相手の了解も得ずに綺凛に殴り掛かるアインハルト。綺凛は驚きこそしたものの、比較的冷静に捌いていく。
しばらく拳と刀がぶつかり合ったが、アインハルトが先に構えを解いた。
「ありがとうございます」
（この剣筋は間違いなく、夜月先輩との決闘の時のものと同じ……見

よう見まねでできるものではないですね）
「春日部先輩、私たちが昨日先輩方の家を訪問した時、先輩が食べていたものは何ですか？」
「え？　〇〇屋のお饅頭だよ？」
（これも当たっていますね）
　自分に出来る方法で確認して、この２人を『本物』だとアインハルトは信じることにした。
「失礼なことをして申し訳ありませんでした。実は――――」

――――――

すぐに無線機を使って連絡を取る。係員からは３０分もすれば到着すると返答があった。
これで本当にやれることはすべてやった。３人とも自分から話を振るタイプではないため
特に会話もなく、でも何となく落ち着かない３人は、どこかに座ることもなく微妙な距離を開けて座っていた。
そんな時、
「くしゅん！」
綺凛がクシャミをした。
タオルで拭くといったこともしていないため、服はビショビショだ。そのせいで体が冷えてしまったのだろう。
「このままじゃ風邪ひいちゃうかもしれないから、シャワーでも浴びておかない？」
「はい」
「そうですね」
耀の言葉に誘われて、３人はシャワールームへと向かった。
タオルなどの洗面道具はしっかりと備え付けられている。さらに幸いなことに、水があるところで作業することを考慮してか、フリーサイズのジャージも何着かあった。
それぞれ、すっかり水を吸って重くなった脱いだ服は乾燥機に入れ、一つ一つが軽い個室になっているシャワールームに入った。起きて数時間しか経っていない筈のなのに、体はドッと疲れている。
そんな体に、熱いシャワーが注がれる。体が温まることで、その疲れも少し取れた気がしてくる。
（大きい……）
アインハルトの目に飛び込んできた２つの大きな『モノ』。自分のとは比べるまでもない。その持ち主の綺凛はアインハルトの視線に気が付くと首をかしげる。
「あの……どうかしましたか？」
「い、いえ！　なんでもありません……」
慌てて目をそらして、目に焼き付いた光景を抹消しようとするアイ

ンハルト。無意識のうちに首をぶんぶんと振っているため、余計に綺凛に不審がられている。
（そうです。人の身体的特徴をじろじろ見るなんて失礼極まりないです！　刀藤さんだって、きっと刀を振るうのに邪魔だと思っているはず――――）
「服の上からでもわかってたけど、綺凛って、胸大きいよね」
「え？　あ、あの、春日部先輩。そんなにじろじろ見られると……というかその手の動きは……？」
（ちょっとオオオオオ!!）
　ようやく網膜に焼き付いた双丘が消え去りそうになっていたというのに、無情な一言でその努力が無に帰ってしまう。
「あ、あの、春日部先輩？　刀藤さんも嫌がってますし、その辺にしておいた方が……」
「アインハルトは不公平だと思わないの？」
「え？」
「綺凛とアインハルトは同い年。私に至っては年上なんだよ？　アレ、おかしいと思わない？」
「あ、アレ……ごくりっ」
　耀に促されるままに、視線が綺凛の胸元に引き寄せられる。２人の視線が集まっているのが恥ずかしいのか、タオルを巻いているにもかかわらずその上から腕で隠している。そのせいで例のアレが押しつぶされ非常に大変なことになっている。
「い、いえ！　大きすぎると肩が凝ったり、動くと痛いなんて話も――――」
「あ、そっか。アインハルトって大人モードになれば、ボン・キュッ・ボンな体型になるもんね」
「あ、あれはそんな目的のためになっているわけではありませんからね!!　あの姿になればリーチも長くなりますし、覇王流の技を使うのも――――」
「それじゃあ綺凛、少し分けてもらいます」
「え？　あっ!?」

全く人の話を聞かない耀は、オヤジのような手つきで綺凛に迫る。そのまま胸に手を伸ばすが、
「むっ」
タオルを片手で抑えている綺凛にあっさりと防がれてしまう。何度やっても結果は同じ。動きを読んでいるかのような足さばきで、華麗に躱していく。
「むー、ガードが堅い」
「春日部先輩！　怒りますよ!!」
その言葉に、しょうがないと耀は手の動きを止めた。
（こんな人と先輩は一緒に暮らしているんですね……）
アインハルトは苦労が絶えないだろう翔に、心の中で合掌するのだった。

再び手持無沙汰になってしまい、翔が寝ているところの近くに腰を下ろす。仮眠室と思った部屋は畳になっていて、部屋の隅には長机や布団が積まれている。公的な施設に畳は珍しいが、いろいろな目的に使えることが評価されたのかもしれない。
シャワーを浴びてそれなりに時間が経った筈だが、まだ人は来ない。
青白い顔で寝息を立てている翔。思わず手を握った綺凛は驚いた。
「冷たい……」
血を大量に無くしたからか、翔の体温はみるみる下がっていた。シャワーで温まったせいか、余計に自分との温度の差が不安を掻き立てる。
「このままじゃ少しまずいかもね……」
「そうですね、それではすぐに暖房を――」

「何言ってるの、アインハルト。違うでしょ」
「え？」
　静止の声に困惑するアインハルト。体が冷えているから部屋を暖めようとすることに何か間違いがあるというのだろうか、と。まさか部屋の中で火を焚くわけではあるまい。
　なんとなく嫌な予感がしてくるアインハルト。
　指をぴんと立てた耀は、迷いなく告げた。
「もちろん、『人肌で』温めるんだよ」
「……え？」
「……はい？」
　あまりにも突飛な意見にアインハルトも綺凛も固まってしまう。
「雪山で遭難したら、服を脱いで、抱き合って温め合うんだよ？」
「にゃに言ってるんですか!?」
「ここは雪山ではないですよね!?」
　真っ赤になって反論する２人。
「２人とも、わがまま言わないで。翔が死んじゃったらどうするの？」
「うっ」
「そ、それは……」
　痛いところを突いてくる耀。しかし腕を切断したことによる大量出血が、体を温めた程度で何とかなるわけがない。これは耀の口八丁だ。
「そ、そうですね。夜月先輩には御恩もありますし。抱き付いて温めるくらい……っ！」
「刀藤さん!?　春日部先輩に流されてしまってはダメですよ！　よく考えてみてください！」
「……そんなに騒がないでほしい」
「あ、翔。起きてた？」
「ええっ!?」
　うっすらと目を開けている翔。
「すごいね。普通なら次に起きたら病院の天井のはずなのに。ゾンビみたいだね」

「ゾンビは敵だけでいいよ……マジであれ、どうしよう」
「え？　何か言った？」
「何でもない」
　血が少なくなってぼんやりとする頭でなんとなく考える。さっきのホワイススネイクとの戦闘を。
　血が少なくなっているせいか、感じる痛みがぼやけている感覚がするが、それでもティナに刺されたときよりも痛い。
「……目、覚まさなければよかった。体が動かないし、泣きたいくらい痛い」
「泣きたいなら、私たちのうちの誰かの胸を貸してあげるよ？」
（貸せる胸があるのは1人だけですが？）
　普段なら口に出していた迂闊な発言。今回は口に出さないで済んだ。もし出していたら新しい戦争が起こっていたかもしれない。
「それで、誰がいいの？」
「話続いてたのか。無理しないでいいから」
　翔の感覚は、尋常ではないはずの痛みすらぼやけている。いつもならやってくれるならぜひ、と冗談交じりに言っていたかもしれないが、それすら出来ない。当たり前と言ったら当たり前だが。
「そ、それでは、失礼しますっ!!」
「ああ、うん。うん？」
　てっきり誰も来ないと思い込んでいた翔は、腕がある方に抱き着いてくる綺凛に目を白黒させる。
　自分の体温が低いせいなのか、異様にあったかい、柔らかいものに腕が挟まれる。それだけではなく、足まで絡めてくる。程よく筋肉が付いた太ももが手のひらをキュウキュウと圧迫する。
「ど、どうでしょうか？」
「とてもいいです」
（なんで、こんなに詳細までわかるんでしょうか……？）
　感覚がぼやけているというのは何だったのか。綺凛の息遣いまでわかってきた翔は自分の節操のなさに焦りを感じ始める。
「ま、まあ、刀藤さんがやると言うのでしたら……私も、助けられまし

たし」
　アインハルトは右側に。怪我をしているため、抱き着くというよりは少し腕に触れる程度。添い寝のような状態だ。羞恥心との兼ね合いも考えれば、この距離はアインハルトにとっても限界の距離だった。
「私のために、すみません。ありがとうございます」
「気にしなくていい……腕がくっついてくれれば」
　いまさらながらに、腕を切り落としたことを悔やみ始める翔。もしもくっつかなかったら義手にでもしてサイコガンをくっつけようなどと計画する。
「それじゃあ私はこっちから……」
「お前、上からかよ……」
「そんなに重くないでしょ？」
「重くはないけど……」
　翔の両側の２人はどこか違う世界にでもトリップしているのか、耀の動きに何も反応を示さない。
　耀はゆっくりと翔の体に覆いかぶさっていく。いつもいつもではあるが両手に花どころの話ではない。３人の女の子にこんなことをされるのは、世の男性から見ればうらやましいことこの上ない。
「あれ？」
「どうした」
「なんだか固いものが……」
　男は死に際になると子孫を残そうとするらしい。
「もう、翔は本当にＨなんだね。私のこともそんな目で見てたの？　周りにいる女の子は全員ターゲット？」
「や、正直あんまり耀のことはそういう目で見たことは……」
「……怪我してなかったら張り倒してたよ。押し倒してたよ」
「会って数日で何期待してるんだよ……押し倒すってなんだよ」
「もしかして、冗談だと思ってる？　だったら、ここで少し進めておく？」
「え」

耀の顔が迫ってくる。左右と上をがっちりと固められている俺は抵抗できずに――――

「誰かいますか!!　大丈夫ですか!!」

救助隊の人が来てくれてすんでのところで事なきを得た。何が事なきを得たのかはわからないが。

――――――

危険な2人

「おかしいわね。私の記憶によれば、あなたが退院してまだ1週間経ってなかったはずなんだけど？」
「自分も、こんなに早くこのベッドに寝ることになるとは思ってませんでしたよ」
ものすごく微妙な顔をしている御門先生に自虐も混ぜて返す。
命燃え尽きることなく無事病院に搬送された俺は、ついこの間までお世話になっていたベッドに横になっていた。とは言ってもケガは一つだけ。
俺は自分の右手に目を向ける。
「これ、くっつくんですか？」
右手全体をすっぽりと覆うような機械が、起きてからずっと装着されている。電源ランプも付きっぱなしになっているから、稼働し続けているんだろう。
「ええ。人工細胞で体組織を修復してるから。切断面もかなり綺麗だったし、少しあとが残るくらいでほとんど元通りになると思うわ。全治2週間ね」
科学の力ってすげー。
「ただし、目が飛び出るくらいのお金がかかるけど……聖天子様が立て替えてくれたわ」
マジで聖天子様には頭が上がらない。あの護衛任務以降会えてなくて電話だけだけど、後ろに大物がいるっていうのはすごく頼もしいな。
それにしても、
「腕を切り落としても元通りになるなんて、ここの医療はすごいですね」
拍子抜けするくらいに簡単にくっ付きそうでびっくりだ。
そんな俺の呑気な発言に、御門先生は呆れたような顔をする。
「なに言ってるの？　言ったでしょ、切断面がきれいだったって。剣で斬られたみたいだけど、そのあとで瓦礫にでも傷口が潰されてたら

それで終わりだったわよ。次は気をつけなさいね」
「……」
俺は真顔になる。
「そもそも、この人工細胞は開発中のものよ。私の友達の科学者に細胞についての専門家がいてね。無理を言って貰ってきたのよ。当然市場には出回ってないわ。安全性については……まあ、あの娘がそんなに危険なものを作るわけないから大丈夫だとは思うけど……」
ま、まあ？　上条さんもアウレオルスに腕ぶった切られてもくっ付いてたし？　そのくらいは大丈夫かな、なんて甘く考えてたんだけど、結構ギリギリだったみたいだ。
上条さんのは、きれいに切断され過ぎていて、応急処置だけやってくっ付けておいたら次の日には繋がってたんだっけか？
いや、ちょっと待て。
「市場に出回ってないのに、すごいお金取るんですか？」
「ま、機材代とその他諸々ね。それとあなたたちが壊した公園の穴の修復代。あの穴、バラストエリアまで届いてたでしょ？」
それやったの俺らじゃないんですけど。
残念ながら証拠がない。施設等の修理費はこの島のあちこちにあるカメラの映像によって請求先が決まるんだけど、あいにくあの時の俺たちの相手はスタンド。カメラには映らない。
いくら不自然でも、暫定的に俺たちに責任が回ってきてしまう。
これは何が何でもブラドをとっ捕まえなければ。そんな借りを作ってしまうなんて、次に聖天子様に会っても、地面しか見れないレベルだよ。
「とにかく、安静にしてなさい。この前みたいに病院を抜け出すなんてことはしないように。いいわね！」
「はい。分かりました」
「よろしい。それに、お見舞いに来る娘だっているんでしょ？　病院を抜け出したことがばれたら大変なことになるわよねぇ……？」
「脅すのやめてくださいよ」
聖天子様護衛の時に病院を抜け出したことはみんなには話してな

い。御門先生にお願いして言わないでもらっている……というよりは、俺への弱みとしてワザと、という意味が強いかもしれない。
流石御門先生。抜け目がない。俺は俺で黙ってるんだけどな。俺の中ではもう過去のこととはいえ、知られたらどんなことが起こるのか……考えただけでも恐ろしい。
「分かったら、おとなしくしてなさいね」
「分かりましたって」
念を押して御門先生は病室から出ていった。
俺はひと眠りしようかと目をつぶる。装置につながれた腕のせいで満足に寝がえりが打てなかったせいか、体が少し痛くなっている。
コンコン
御門先生がいなくなったのを見計らったように、ドアがノックされる。
「はい？」
誰だ？　みんな今日は学校。お見舞いに来るのは授業が終わってからだって言ってたんだけど。まだそんな時間じゃない。
もしかすると、敵の襲撃かもしれない。俺がこの病院に搬送されたことは、少し調べればすぐにわかってしまうだろう。
デンジャラスゾンビとホワイトスネイクがそれを見逃すとは思えない。あくまで、あいつらが俺のことを率先して倒そうと思っているならだけど。
病室の扉が開く。
病室に2人の女性が入ってきた。俺と同じくらいか、少し年上。しかし、明らかに他の女性とは違った空気を纏っている。もう少し踏み込んでいえば、初対面にもかかわらず、俺はその2人の顔を知っている。どちらも、この年齢の少女としては成熟しきった体をしている。
更識　楯無とクローディア・エンフィールドの2人だ。
ラノベあるあるの一つ、生徒会がやたら権力を持っている。それを体現したような2人だ。この世界ではどうか知らないけど。
「……どちら様ですか？」
もちろん初手は知らないふり。少しぶっきらぼうにして2人の反

応をうかがってみる。
　そんな俺の態度に、全く嫌な顔しないで自己紹介してくれる。
「クローディア・エンフィールドと申します。以後、お見知りおきを」
「更識　楯無よ。よろしくね、夜月　翔君」
　更識さんが広げた扇子には『更識　楯無』と達筆な字で書いてある。
　これで他人の空似という可能性はなくなった訳なんだけど。
「それで、今日は一体どんな御用でしょうか？　エンフィールドさん、更識さん」
　分かってくれるとは思うけど、原作でもアレな2人が、わざわざ肩を並べて俺に会いに来るというのがもう笑えない。確実に目をつけられている。何かよからぬ感じで。
「ふふふ、私と夜月くんは同い年ですから、エンフィールドさんなんて他人行儀な呼び方じゃなくても結構ですよ？」
「ああ、そうですか……」
「ちなみに私は一つ上だから、楯無お姉さんって呼んでね？」
「よろしくお願いします、楯無さん」
　もー、つれないなー、と一人ではしゃいでいる楯無さん。この人のペースに飲まれたらおしまいになりそうだ。ここは極力クロ―ディアの方を見ることにしよう。
「私のことも、どうぞ名前で呼んでください」
「じゃあそうさせてもらいます、クロ―ディアさん」
「クローディア、です」
「クロ―ディア……さん」
「ク・ロ・オ・ディ・ア」
　生物的な本能のせいか、なかなか呼び捨てになることができない。不毛な争いが起こる前に、この呼び方に慣れる努力をしよう。
「やーい、怖がられてやんのー」
「あら、それは楯無さんも同じではありませんか？」
　漫画なら火花がバチバチなっていそうな場面だけど、この2人の間にはそういうものは見えない。闘気を受け流す的な何かを感じる。
「ま、まあ？　俺のことは好きに呼んでくれて構わないけど。クロー

ディアも、その敬語も止めてくれると嬉しいんだけど」
「こればかりは習慣ですので、そう簡単には変えられません。すみません」
「習慣なんだ」
「はい。私はとても腹黒いので、せめて外面や人当たりは良くしておかないといけなかったので」
「自己申告するくらい？」
「それはもう……私のお腹と言えば、暗黒物質を焦げ付くまで煮込んでそれをブラックホールに放り込んで黒蜜や黒酢、しょう油を滅茶苦茶にかけたくらいには真っ黒ですから」
　凄く真っ黒ですね。
「なんなら、ご覧になりますか？」
「いえ、間に合ってます」
　このまま話の主導権を握られ続けるのはまずいので丁重にお断りする。本音を言うと少し見たかった。
「クロ―ディア、そろそろ」
「そうですね。それでは、本題に」
　クロ―ディアは抱えていたノートパソコンの電源を入れた。
「半年ほど前から、裏にこんな人物が現れたんです。この映像は、その人物と局員が戦闘になった時、デバイスに保存されていたものを修復したものです」
　クロ―ディアはディスプレイを見せてくる。局員というのは『管理局』という公務員版の武偵の組織の人たちのことだ。
「これは……」
　画面に映っていたのは、修復のせいで画質が悪いが間違いなくデンジャラスゾンビだとわかる。
　画面外にも局員がいるらしく、光弾が雨のように降り注いでいるが、デンジャラスゾンビは全く歩みを止めない。時々、太い光線に当たって倒れるが、逆再生のような動きで何事もなかったかのように立ち上がる。
　やがて生々しい音と共に、赤いものがまき散らされ、映像が途切れ

た。
　デンジャラスゾンビめ、だいぶ大々的に行動してるんじゃないか。
「この他にもあらゆる攻撃を試したけど、効果はゼロ……だと思うわ。ほとんど皆殺しになってて情報が少なすぎるからはっきりとしてないけど」
　不死身のゾンビを倒そうと思ったらそうなるだろうな。しかもヤツにはホワイトスネイクもあるし。
「で、こいつが現れたと同時期から、今まで見たことのない異能が現れ始めた。時期も考えると、こいつが広めていると思って間違いないでしょうね」
「見たことのない異能？」
　この世界には大別して３つの種類の異能の力がある。
　１つ目は『魔術』。錬金術をしたり、調合して不思議な効果のある薬を作ったり。まさに魔術のイメージにぴったりなものが該当している。『Ｆａｔｅ系』や『とある系』の魔術がこれに分類されている。また、『Ｆａｔｅ系』や『とある系』でわかるかもしれないが、あまり一般の人が習う機会はない。
　２つ目は『魔法』。『リリカルなのは系』や『アスタリスク系』の能力が属するカテゴリだ。イメージは『科学的な魔法』。プログラムを入力したデバイスを使って、ビームサーベルのような剣を作ったり、ビームを撃ったり。当然、火を出したりもできる。『ＩＳ』もここに属する。
　３つ目は『超能力』。『とある系』とその他諸々が該当する。魔法と違うのは魔法を使うための魔力は生まれた時から存在するのに対して、超能力は開発を行わないと使う事が出来ないというところ。
　歴史の古さで言えば魔術〉魔法〉超能力、といった感じだ。
　その他にも、このいずれにも該当しないレアなスキルを持っている人もいる。
　そして今回、さらに新しい分類の能力体系が出来上がりつつあると言っている訳だ
「どんな能力なんですか？」

「スタンド」
その一言で、俺の体は警戒態勢に入る。ＡＣＴ２を背後に出現させ、自由な左手を布団の中で構える。とっさの防御に、いつでも黒影（ダークシャドウ）を出せるようにしておく。
「ふーん。やっぱり、あの子たちが言ってた事は嘘じゃなかったんだ」
「……え？」
「君、スタンド持ってるでしょ？」
な、何で知ってるんだ。スタンドはスタンド使いにしか見れない……あ。
「スタンドは見えなくても『いる』ことはわかるのよ。知らなかった？」
迂闊にもほどがある。ホワイトスネイクの件がすっかりと頭から抜け落ちていた。
「実はこいつの部下……かどうかはわからないんだけど、とある男を確保してね。この特殊な異能力を持っている男よ。そいつがスタンドって呼んでたから、便宜上、私たちもスタンドって呼ぶことにしたの」
「翔の今の立場は、残念ながら重要参考人になってしまいました。どのような処置になるかは追って通達されますので」
あの子たちっていうのは耀、綺凛、アインハルトの３人の事だろうな。俺が気を失ってる時の状況説明で耀が話した、ってところだろう。
そして事情聴取でも真面目な２人はそっくりそのまま話してしまい、偶然この２人の耳に入ってしまったと。そういうことだな。
「もちろん、翔は法を犯してはいないので逮捕することは出来ません。あくまでちょっと監視が付く、程度に考えてください」
監視が付くって言葉の前に『ちょっと』が付いたから、なんだって言うんですかね。
「自白したくなったらすぐに連絡してね。今ここで話してもいいよ？」
楯無さんに至ってはもう脅しと変わんないよ。

そんなに言うんだったら、
「あの――――」
俺はデンジャラスゾンビとブラドの事を洗いざらいぶちまけてやった。
「ふーん、吸血鬼のブラド公と、ねぇ……」
出てきた名前が予想以上に大きかったせいか、楯無さんは扇子を口元に当てて考え込んでいる。
「……楯無さん。翔は病人なので。今日はもうこのくらいにしておきましょう」
「へ？　あ、ちょ、ちょっと!?」
そんな楯無さんの思考を邪魔するように、クロ―ディアが腕をつかんで引っ張り出す。クロ―ディアが相当力を入れているのか、それとも楯無さんが力を入れていないのか、どんどん扉まで引きずられていき、
「それでは翔、ごきげんよう」
クロ―ディアが楯無さんを引っ張っていく形で病室を出ていった。
なかなか大変な事になってきたとはいえ、大きな組織が後ろについたと思えば少しはデンジャラスゾンビに対抗出来るかもしれないな。
問題はその組織に、そもそも信用されてないって事だけど。
「拙いなぁ」
そう呟かずにはいられない俺だった。

「どういうつもりなの、クローディア」
「ふふ、何を言っているのかわかりませんね」
２人きりになった楯無とクローディア。さっきの友好的な雰囲気は霧のように消え去り、お互いの腹の内を探るような目つきになって

いる。
「とぼけないで頂戴。あなたが彼の名前を聞いた時、目つきが変わってたじゃない。仕事まで無理やり終わらせて様子を見に来るなんて、普通じゃないわ。ま、そのおかげで夜月　翔がスタンド使いだってわかったんだけど」
「一目惚れ、ではいけませんか？」
　楯無はクロ―ディアがまともに答える気がないと理解して、すっぱりと別の話題に移る。
「もういいわ。私の方から報告だけど、やっと上に今回の件の特別措置を認めさせることが出来たわ。来月には準備が整うそうよ」
「数年前に起きた『あの事件』で活躍したメンバーを集めた特別部署、機動六課ですね」
「そうよ、今回は特務六課だけどね。私たちも配属になりそうよ」
「それでは――――」
「そのことは――――」
　堂々と歩きながら、通りすがりの人には理解できない、理解すれば口封じがされるかもしれない、そんな会話の応酬をする楯無とクローディア。
　２人の少女の謀略の網は、どんどん広がっていくのだった。

お見舞い　雪菜、耀、綺凛の場合

「失礼します、先輩」
「こんにちは、翔」
　病室に雪菜と耀が入ってきた。楯無さんとクローディアがいなくなってひと眠りしたら丁度、学校の授業が終了する時間になっていて、この2人が一番乗りだ。
　お見舞いの品の定番、フルーツの盛り合わせを棚に置き、花を花瓶に挿した。
「具合はどうですか、先輩」
「どこも痛いところはないし、体調はばっちり。寝てるだけだからすごい退屈だよ」
　この右手を覆う機械、腕の位置がずれないように固定する役割と、痛み止めを定期的に投与する機能、そして、例の人工細胞での修復も併せて行ってくれている。
　体中の細胞は日々細胞分裂で新しいものになっていくらしい。それを人間が感覚で感知する事が出来ないのと同じで、くすぐったかったりする事はない。痛み止めのおかげで怪我の痛みもないから本当にただ寝ているだけだ。
「この機械、電源がバッテリー式じゃないから歩き回れないんだよね」
「……その腕は、敵スタンドとの戦いで？」
「まあな」
「アインハルトから聞いただけで私にも見えないからよくわかんないんだけど、そもそもどうして自分の腕を切ったりしたの？」
　耀が至極もっともな質問をしてきたため、ホワイトスネイクの能力について詳しく教える。
「――――って感じだ。だから、一番被害を軽くするにはこの方法しかなかったんだよ。いつ襲ってくるかわかんないから、2人とも注意してくれよ。目に見えなくても、居る事は分かるらしいから」
「はい」
「分かった……それはそうと、翔は何か困った事はない？」

「困った事？」
　何も脈絡もない話題の転換をしてくる耀。
「うん。私、体が弱くて病院暮らしが長かったけど大変だったから。翔も何か困った事がないかなぁ、って」
　ああ、そういえば耀は、生命の目録（ゲノム・ツリー）を手に入れるまでは体が弱かったんだっけ。
「困ってること、困ってる事かぁ……そうだなぁ……」
「もしあったら言ってね。なんでもしてあげるから……雪菜が」
「私ですか!?」
　あ、そういう感じですか。
「ね、雪菜も翔がこんな事になって大変だと思うでしょ？」
「そ、それはそうですけど……」
　なんかこれ、前にも見たことあるぞ。まじめな娘がやたら正論ぽい事を言う耀に丸め込まれていくの。
「何かしてあげたいと思うでしょ？」
「で、出来る範囲でなら……って、それを言うなら耀さんだって――」
「私は冷えた翔の体を裸で温めたから」
「……先輩？」
「捏造は良くない」
　裸で抱き合った記憶はありません。
「はぁ……耀さんも、もうからかうのはやめてください。先輩の傷に響きますから……まあ、何かしてほしい事があるなら言っていただければ。常識的なもので、ですよ！」
「お世話するなら、場所的にナース服が欲しいかな？」
「要りません」
「おおっと、こんなところに都合よくナース服がッ!!」
「あるわけ無――何であるんですか!?」
「なんでだろうね」
　多分、御門先生です。あの人、楽しみ過ぎでは？　ベッドの下にコスプレ衣装が仕込まれているのはやり過ぎでは？

「そこは恰好から入らないといけないと思わない？」
「思いません！　そもそも、そういう仕事は看護師がやってくれるものでしょう!?」
「やってくれると翔もうれしいよね？」
「最近、血生臭いことが多かったせいで、潤いが欲しいです（無理しなくてもいいよ）」
「先輩!!」
　おっと、本音と建前が反対に。
「翔もこう言ってるわけだしさ、ね？」
　完全に楽しんでいるのがわかる。まじめな娘を食い物にするなんて許せない。そんな奴は最低だよ!!
「だいだい、どこで着替えればいいんですか？」
「ここでいいんじゃない？」
「あはは、うまい冗談ですね」
　アカン、雪菜が壊れてきてる。
「ほら！　ぐずぐずしないで！　ハリー！　ハリー！」
「あっ、ま、待ってください！」
「いまさら恥ずかしがらなくてもいいでしょ！　もう翔には裸見られてるんだから！」
「それとこれとは……っ！」
　ガン見しちゃってるけどいいかな。丈夫な防弾繊維じゃなかったら生地が傷んでしまうくらい引っ張っている。暴れる雪菜から何とか服を取り上げようとする耀だったが、雪菜がしゃがんでしまった事によって手が出せなくなってしまう。
「ここで着替えるのは無しです！　これ以上は本当に怒りますよ耀さん！」
「ちぇー」
　引き際もわきまえている耀。本当にやるな。
「それで、結局先輩は、何かしてほしい事はあるんですか？」
　そう言われても、ここは聖天子様が用意しただけあって快適そのものだし。あ、でも、強いて言うなら、

「トイレとか？」
「刺しますよ」
　冗談が過ぎましたね、ごめんなさい。
「あんまり長居するのもあれですから、してほしい事がないなら、私たち帰りますよ？」
「……もしかすると添い寝すればケガの直りが速くなるかも」
「それじゃあ、今日はもう帰りますね」
　完全にスルーされた。
　鞄を持った雪菜は近寄ってきて、
「雪菜？」
「早く良くなってくださいね、先輩……ん」
　二人の唇がそっと重なった。
「んっ……」
　あの雪菜が自分からしてきた事に驚いたが、目の前にある雪菜の顔にドキドキしてしまう。睫毛長っ、肌白くてシミ一つ無い。
　向こうからしてきたんだし、という気持ちで雪菜の唇を舌先でつついた瞬間、目を見開いて唇を離した。
「こここここんなところで何しようとしてるんですか!!　そ、そこまでしようとは思ってませんからね!!　病院で、人前で、なんて……っ」
「そっちからしてきたんじゃん」
「なんだかんだで、雪菜も大胆だよね」
「言わないでください……っ！」
　雪菜は顔を隠して先に出て行ってしまった。
「翔」
　耀が俺に耳打ちしてくる。
「あの公園で見たスタンドの、えっと、スケアリーモンスターズだっけ？　そいつの本体が分かったら私にも教えてね。許せないから」
　動物の言葉がわかる耀はスケアリーモンスターズの影響を受けた動物たちに一体何を感じたのか。あえて聞き出すようなことはしないが、その言葉と表情がすべてを物語っていた。

「お、お邪魔いたします。夜月先輩」
今度は綺凛がやってきた。緊張した面持ちで視線が定まってない。肩にはもはやトレードマークになっている竹刀袋がある。あの中にはいつもの真剣が入っているのだろう。
「傷はどうですか？」
「痛みはないよ。そっちこそ、ケガはなかったのか？」
「はい。私の方も全く平気でした」
「風邪とかも？」
「はい！　大丈夫です！」
綺凛は元気よく答えた。この調子なら確かに大丈夫だろう。
「あの、夜月先輩。早朝特訓のことなのですが」
「ああ、一回目で大変なことになっちゃったな」
みんな忘れていたかもしれないが、今回の事件は早朝特訓の記念すべき1回目に起こった。なんとも幸先の悪いスタートだ。俺はこのまま無かった事になるんじゃないかと思ってたんだけど。
「今後もお願いしてよろしいでしょうか？」
「大丈夫か？　今回のこと、だいぶ家の人にきつく言われたんじゃ……」
「は、はい！　あ、ち、違います！　あ、違わなくもないんですけど、その……確かに伯父様にはいろいろ言われました。でも、全然大丈夫です！」
「そう？　だったらこっちも続けて大丈夫だけど」
連鶴のコピーができるし。ちょっと早起きがつらいくらいで、いいことずくめだ。綺凛の方も伯父さんの言いつけを無視したらしかったし、心配してたんだけど。

と、綺凛が顔を赤くしてそっぽを向いていることに気が付いた。目だけで俺をチラチラ見て、顔を正面にしても今度は目が泳ぐ。
これは何か恥ずかしいこと、言いにくいことを言おうとしてるんだな。
「あ、あの……失礼を承知でお尋ねするのですが……っ」
「ん」
「先輩は、その……慣れて、いらっしゃるのですか？」
「慣れてる？　何に？」
「じ、実は、病院に入ってくるときに耀さんと一緒にいる女の人を見て……あの人確か私と決闘した時にいた人ですよね？」
あー、そうか。耀と雪菜と入れ違いになったのか。ま、普通に俺のお見舞いに来たってわかるだろうな。
「お家にも違う女性がいましたし……わ、私なんかが気にすることではないのはわかってるんですが……っ！」
相当恥ずかしいのだろう、顔を真っ赤にしている。
「あ、朝の練習は続けたいと思ってはいるんですが、冷静になって考えてみると、私なんて恥ずかしいことを……っ!!」
俺に思い切り抱き着いていた時の事か。あの時は耀にそそのかされていたからなぁ。
「でも夜月先輩はそんなに気にしてないみたいで、女性と、一緒に寝たり……キス、したりするのに慣れているのかと、思ったんですが……それに、アレも……」
アレ？
綺凛の指さした方にあるのは……脱ぎ捨てられたナース服。
「……」
「……」
なんで片付けて帰らなかった。
「看護師さんが忘れていったんだよ」
「そ、そうなんですか？」
「そうだよ。気にしないで」
「あ、あはは、ご、ごめんなさい。先輩のプライベートに許可なく踏み

込んでしまって」
致命的な誤解をしたままのような気がする。
そんなに悲しそうな声を出さないで欲しい。全部耀が悪いのに。
これはもう正直に話すしかないだろうか。
そう思って口を開こうとすると、綺凛は俺の事をしっかり見ていた。何か決意したような目だ。
「でも、私、決めました。先輩、私――――」
突然、ドアを壊そうとしているのではないかと思うほどのノックが始まった。物理的にドアが揺れている。叩かれている位置から言って、大の大人、それも、相当体格がいい人が叩いているみたいだけど。
「綺凛！　ここにいるのはわかっているぞ！　さっさと出て来い！　綺凛！」
ええええええええええ!!!!　綺凛の伯父さんの声が聞こえるんだけど!?　な、何が起こってるんですかァァァァーーー!?
「伯父様……!?　どうして……」
「ほ、保護者同伴で来たのか？　どうりで家の人も許してくれる訳だなぁ……」
「違いますよ!?　ここには一人で来たはずなんです！」
え、じゃあ、綺凛の後をつけてきたのか？
「どうする？」
このまま騒いでいてくれれば、ほどなくして警備の人が来て連れていかれるだろうけど。
「……中に入れてください。お願いします」
「（えぇ……あの人とまた顔合わせんのか）分かったよ」
俺は心の言葉をしまい込み、しぶしぶドアのロックを解除する。そうそう、このドアってロックが付いてたんだよ。病院関係者のカードキーか、中のボタンがないと開けられない厳重な奴。楯無さんとクローディアがあまりにも簡単に入ってきたから、雪菜たちが来るまで存在ごと忘れてたんだけど。
中に入ってきた鋼一郎は汗だくで息を切らしていた。オートに設定されている部屋のクーラーが、少し強くなったみたいだ。理由は言

わなくてもわかってくれると思う。
「綺凛！　この疫病神のところには金輪際行くなと言っておいたはずだ!!」
「失礼極まりないなぁ」
まさかの疫病神扱い。気持ちはわからんでもない。誰だってコナン君にゲスト出演して殺されたいとは思わないし。
俺と一緒にいれば高確率で事件に巻き込まれるからな。
「この男が関わる事件にろくなものはない！　リスクに対してメリットが少なすぎるのだ!!　だからお前はグズなんだ！　関わっていい人間とそうではない人間の区別もつかん!!　2度は言わん、帰るぞ綺凛!!」
言ってる事が分かり過ぎて辛い。黒い服を着たおじさんが口止めに来るくらいの事件（武偵殺し）とか、本当に暗殺者が来ちゃった聖天子様護衛とか。
俺がいるところに面倒な事件あり、だ。サザエさん時空の名探偵もびっくりだな。
鋼一郎は綺凛の腕を掴もうと手を伸ばすが、綺凛はスルリと身を躱した。
「ごめんなさいです、伯父様」
その短い言葉にどれだけの覚悟が込められているのか。これまで気弱だったものとは全く違うモノだったが、汗だくの鋼一郎には感じ取ることが出来なかったようだ。
「口答えするな!!　お前は何も考えず、ただ私の言う事だけを聞いていれば良い!!」
いくら室内だからと言っても、大きな声を出し過ぎだ。
「とりあえず、ここ病院なんで。もう少し落ち着いてしゃべってもらえませんかね」
「こ、この疫病神が……っ!!　貴様に会ってから不幸続きだ!!　これ以上でしゃばるな!!」
ああ、そうですか。
怒鳴ってからは、俺のことはもう眼中にないようだ。綺凛を見下ろ

し、口を歪ませる。あれは絶対の自信の顔だ。この言葉を口から出せば、綺凛を意のままに操ることが出来ると思っている。
「い、いいのか、綺凛!?　お前の父親を牢屋から助けることが出来なくなっても!!
　誠二郎を助け出すには私の力が不可欠だ!!　私に従えないというなら……」
「それはしょうがない事ですね」
　……へ？
「き、貴様……今、何と言った？」
「き、綺凛？」
　あまりにもきっぱりとした物言いに、俺も鋼一郎も目が点になる。
「お父さんが人を殺してしまったのは紛れもない事実なんです。伯父さまに言われて会いに行っていませんけど、その事を反省して、悔やんでいるんだと思います」
　会いに行けば、当然綺凛の様子がおかしい事に気が付くだろうし、そこで何かしら言われて心変わりでもされたら困るもんな。伯父さんの判断は素晴らしいよ。反吐が出る。
「私が卑怯な事をしてお父さんを助けても、お父さんは喜ばない、今まではそれでもいいと思っていました。でも――――」
「ふざけるな！　いまさら何を言う！」
　綺凛の決意は固い。どんな大声にも、もうひるむことはない。
「伯父様、先輩のこのケガを見てください。人を一人助けるために腕を一本犠牲にしたんです」
「そ、それがどうした」
「今の私じゃダメなんだってことを！　先輩が行動で示してくれたんです！　私に向けての行動じゃなかったとしても、それを心で理解出来たんです！」
　聞いた事がなかったんだろう。綺凛の叫びに鋼一郎は唖然としている。
「だから、これからは自分で考えて、進んで行きます。突然ごめんなさい、伯父様」

まだ何か言いたそうにしている鋼一郎だが、口をパクパクさせるだけで、言葉が出てこない。
やがて肩を落とすと、ゆっくりと背を向けた。雛が巣立ってしまい、もう戻ってこないという事を理解したんだ。
部屋から出ていこうとする鋼一郎に綺凛が後ろから声をかけた。
「お、伯父様！」
鋼一郎は振り返らず、足だけを止める。
「私、伯父様には凄く感謝しています！　それは本当です！　だから、その……今までありがとうございました!!」
綺凛は深く頭を下げた。しばらくその場に立ち尽くしていた鋼一郎だったが、小さく『そうか』と呟いて今度こそ部屋を出て行った。そして綺凛は、ドアが閉まるとやっと頭を上げる。
その顔はどこか晴れ晴れとしているように見える。
「良かったのか、綺凛」
「はい。これでスッキリしました」
「自分で言うのもアレだけど、俺のコレ買いかぶり過ぎじゃない？」
「そんなことないですよ。私の中では人生で一番の出来事でした」
人生で一番とはなかなかに重い。お父さんが捕まった事を抜いちゃったのか。
と、また綺凛がもじもじしている。
いくら自分で考えて進むと決めても、根本的な性格の恥ずかしがり屋ってのは簡単になくなるわけじゃないか。
ここは年上らしく声をかけることにしよう。
「どうした、綺凛？」
「あの、その……夜月先輩にお願いがあるのですが……いいですか？」
「そりゃあ、言うだけならタダだから」
「夜月先輩のことを、お名前でお呼びしてもいいでしょうか？」
なんだ、そんなことか。
「これからよろしくな、綺凛」
これから綺凛の物語が――
「……え？」

不意打ちで唇と唇が一瞬触れ合う。1秒にも満たないキスだ。いくらなんでも、なんでもでもでも過ぎて頭での理解が追いつかない。

「ふふふ、私頑張りますからね！　翔先輩！」

お見舞い　狂三の場合（狂三）

夜。病院の消灯時間は早い。２１時にはもう廊下は最低限の電気しかついていない。

昼寝をした上にいつもよりもはるかに早い時間なので眠くはならないかとも思ったが、夕飯のおかげで胃に血液が回ったのか、瞼はどんどん重くなっていく。

ま、入院はこの前したばっかりだし、気長にケガが治るのを待つとしますかね。前回よりも期間は長いし、隣に人がいないって違いはあるけど。

俺は睡魔に身を委ねるのだった――――――――

――――さん、起きてくださいまし。翔さん？」

誰かに揺さぶられて、いるのか？　少しだけ開いた目に映る景色がゆらゆら揺れている。その端に、一人の人物を捉えた。

「狂三、来たのか」

「はい」

そこには、片眼が前髪で隠れた少女、狂三がいた。いつの間に来ていたんだろうか。電気が消えて結構早く意識が途切れたからな。

「来てくれたのはうれしいけど、面会時間に来ればよかったのに。何も人が寝てるところを起こさなくたってさ」

「ふふ、まさかこんなに早く眠ってしまわれているとは思ってませんでしたので。本当は、暇をしている翔さんのお話し相手になって差し上げようとしたんですけど……しっかりと堪能させていただきましたわ」

寝顔かな？　別にいいけど。

「寝顔だけ見て帰ろうとも思ったんですが、せっかくお見舞いに来ましたから。少しだけお話して帰ろうかと」
「なるほど」
そーか、そーか。それじゃあ、一つ質問しようかな。
「俺の上に乗ってるのは何で？」
ここまでこんなに普通に会話してきたわけなんだけど、全然普通の状態じゃない。狂三は仰向けに寝ている俺の上にうつぶせに寝て、その上に布団をかぶせている。
しかもパジャマだからか、狂三の柔らかさと体温を薄布一枚越しに感じている。
暗さに慣れてきた目には狂三の顔が映りこむ。はかなげに作られた微笑に、しっとりと濡れた唇。
そんなものを至近距離で見せつけられれば、
「翔さん、固くなってきてますよ？　私の体に反応してるんですの？」
「そう、だな」
俺の愚息がパジャマを押し上げ、狂三の下腹部をぐりぐりとしている。
「巡回で部屋の中は見られるんですの？」
「や、そこまで見られたことはなかったと思うけど」
前回入院した時は大丈夫だった。廊下を偶に警備員が歩いてくるくらいで病室までは覗かなかった。
「それでは、静かにすれば良い、ということですわね」
「そうだな」
とっくに俺も狂三もその気だった。こんなことして何もしないなんて失礼だし、何もないとは狂三も思ってないだろう。
「んんっ、んちゅるっ、はぁっ、んむっ、はんっ、んっ、んっ……っ！」
穏やかだったのは最初の一瞬。狂三は俺の舌の侵入を拒まない。お互いの唾液をたっぷりと送り込み、舌を濃密に絡めあう。口の隙間からこぼれるのは一切気にしないで、それこそ獣のように一心不乱に狂三を貪った。
「ぷはっ！　いきなり激しいんですのね。もしかして、溜まってたん

ですの？」
「……ま、お預け食らってたようなもんだからな」
今日だけで不意打ちのキスが２回。しかも、違う女の子からだ。こういう行為には慣れた、と言っても、それは慌てないようになったという事。ラノベ主人公じゃない俺は、キスなんかされればあっという間に下腹部を固くする。もちろん発散することなんか出来ないので、自然に収まるのを待つしかなかったのだ。
「何があったのかは深くは聞かないことにしておきますけれど……そうですね、今日はたっぷりと、わたくしの体を堪能してください、翔さん」
直接見えているのは顔だけなのに、その一つ一つの動作が、俺の理性を壊そうしてくる。
布団の中の狂三のお尻を撫で上げる。狂三のパジャマはショートパンツみたいだ。むき出しの太ももに手を這わせ、内股から手を内部に侵入させる。
「あっ!?　く、くすぐったい、あっ、んんっ、ふっ、んむぅっ、はふっ、んあぁっ……っ」
内股をなぞりつつ手を進めると、その奥にある薄布に到達する。この向こうには、狂三の一番恥ずかしい部分がある。まずはゆっくりと指でなぞって――
「……あれ？」
俺の指の先には、すでに湿って、少し押しただけで水が染み出してきそうになっている、ぐじゅぐじゅになっている布切れがあった。
「もうこんなに濡れてるのか、狂三」
「そ、それっ！　はぁっ！　ゆ、ゆびぃいいっ……！」
張り付いてしまっているモノをはがして、既に開き始めている縦筋をなぞり始めた。じゅくじゅくと熱く湿った牝肉は、触られるのを待っていたかのように震え、奥から熱い粘液を溢す。
「まさか、キスでここまでは濡れないよな。それとも、こんなに濡れやすい体質なのか、狂三？」
「そっ、それは……っ！　ひっ、あっ」

意地悪な質問をしてみる。もちろんその間も、手を止めることはない。ふやけかけているところを執拗にこすり、空いている手で尻肉をわしづかみにする。
「なあ、狂三。答えてくれないのか？」
「だっ、だからそれは……っ！　ふぅぅっっ、それっ、そこっ……きもち――ひぎっ……！」
顔を出し始めているクリトリスを摘まむと引きつったような声を出した。
だらしない顔をして俺の話を聞いてないみたいだったから、少し現実に戻ってもらおう。すっかり安心した様子で俺に預けられていた体は、小さな肉芽一つで強張り、動かなくなる。
摘まむといってもそれほど力を入れているわけではない。何しろ強く摘まむと痛いだろうし、粘液で滑りやすくなっている。少し体を前に動かすだけで簡単に逃れることが出来る。
しかし、恐ろしく従順になっている狂三はそんなことはしなかった。
「しょ、翔さん？　質問にはお答えしますから、その、そこを離して……っ！　下着に、擦れ……っ！」
少し残っていた皮を？いて布地に押し付けた。俺自身は動かしていないが、摘ままれる快楽で体が震えるだけで、もしかすると、呼吸で肺が膨らむだけで、布の繊維が一番敏感なところを苛め抜いているかもしれない。
「翔さんが寝ている間、自分でいじってました！　でも、目の前にあなたがいるのに、一人でしているのが、その……っ！　んはぁぁぁぁぁっ!?」
早口でまくし立てるように恥ずかしいことを告白してくる狂三。あまりにも男冥利に尽きることを言われてしまって、無意識に指に力が入ってしまった。
「うわぁ……」
イク瞬間、いやらしく開いて、この中に入る、入れるべきものを求め、媚びる狂三の秘肉。本人ですら見ることが出来ないものを、俺の

人差し指は全て感じていた。
俺はぐったりと痙攣している体を抱きしめるのだった。

狂三は布団を？いで俺のズボンを脱がしていた。快感の波もとりあえず収まったようでその動きはスムーズだ。
俺の息子が外気に触れた。狂三のメスの匂いを嗅ぎ続けていたせいか、クーラーが利いている冷たい空気に触れても、全く衰える気配はない。鈴口からあふれた先走り汁でべとべとになっている。別の生き物のように飢えている状態だ。
狂三も、下に身に着けていたものをすべて取り払って、俺をまたいで膝立ちになり、お互いの性器を合わせる。怪我の関係上、この体勢じゃないとできないからな。
「それでは、いきますわ……っ！」
にゅくっとの薄紅色の淫花が開く。そこに溜まった淫蜜が俺の亀頭を汚し、押し退けるように、ゆっくりゆっくりペニスが狂三の膣内に埋まっていく。
「うぁぁ……っ」
狂三の膣は完全に出来上がっていた。むせ返るような雌の香りを溢れさせる極上の肉壷に成り果てていた。ただ男の精を搾り取り、自分もその快楽に沈むための淫器だ。グニュグニュと膣肉が蠢きペニスを揉みしだき、愛液にふやけた肉襞がクチュクチュ絡み付く。
「あっ、かはっ、やっ、これ、もっ、またっ、イっ、イクっ、イっ……っ！　かはっ、はっ、はっ、はっ、うあぁぁぁっ！　一度止まって……っ！」
止まっても何も、ペニスがこつんと奥の大事なところを押したんだ。そこから動いていない。根元までペニスを咥え込んだ狂三は、細

かく収縮して愛液を垂れ流しにする膣から送られる快楽に、目を見開いて腰を震わせている。
「はっ！　はっ！　はっ！」
狂三はずっとイッてるんじゃないだろうか。そう思わずにはいられないくらいに身体を火照らせ、痙攣し続けている。上半身を俺の方に倒し、腰だけを一心不乱に振るその姿。クリトリスを摘まれた時の比ではない。顔が多すぎる快楽にぐちゃりと歪み、舌を突き出している。
俺の方もたまったものではない。雄の肉棒を迎え入れたソコは歓喜に打ち震え、ヒダの一つ一つが全力で絡みついてくる。奥の壁を押しつぶすたびに痙攣する蜜壺。そんなところにいる俺のペニスが無事な訳がない。
境界があいまいになっている俺たちの体の中で、どんどん精液が送られていくのがわかる。
それを狂三も感じ取ったのか、腰の動きが一瞬止まり、
「わたくしの中で、射精して、ください、まし……っ!!」
「っ!!」
一気にスピードが上がった。我慢する必要はない。ギリギリのところで押しとどめられているものは快楽に任せてぶちまける。
限界が訪れた。
「うっ！　あああぁぁぁぁぁっぁぁっ!!」
「うぁぁぁぁぁっ!?」
俺の肉棒が痙攣し、大量の白濁液を吐き出した。
「あ、うっ、あ……はぁ、はぁ、はぁ」
「はぁ、はぁ、ひぅ、あっ……っ！」
２人とも何も言わずに乱れた呼吸を整えようとする。
しかしここで、予想外の事が起きた。
コツ、コツ――――
「!!」
足音が聞こえてきた。夜の見回りに来た警備の人だろう。
心臓の鼓動が跳ね上がった。大丈夫か？　本当に病室に入って来

ないか？　や、大丈夫のはずだ……！
「……っ!!」
　萎えかけていた俺のペニスが、急に締まりを強くした狂三に叱咤される。まだ終わるのは許さないと言われているようだ。
「お、おいっ、狂、三……？」
「ひぅ、あっ、や……っ、翔さん……っ、今大きくしない、でぇ……っ!!」
　違うから。そっちが締め付けてきたから俺のは大きくなったんだぞ。
　不毛な争いだ。始まりは狂三でも今は互いが互いの体を高めあっている。このままでは、ただ挿れているだけでも達してしまうかもしれない。
　そもそも、狂三のとろけ顔を見たら、愚息が大きくなる事は避けられなかっただろうが。
　すっかり元以上の固さを取り戻したものが、狂三の最奥を押しつぶす。射精（だ）したばかりの敏感な亀頭が奥に突き刺さり、目の前がチカチカするくらいの快感が走る。
「んんっ、ふぅっ！　あっ、はぁぁ……んはぁぁぁ……っ、こ、こし、うごかさないで、くだっ、ひぐっ！」
　やめてくれという言葉とは反対に狂三の膣は蠢いて、絡みついてくる。この刺激に俺の腰は勝手に動いてしまうが、理性でそれと押し留めようともしているため、一番奥をぎこちなくかき回している状態だ。
　狂三が俺の服を咥え、必死で声を上げるのを我慢している。普段のクールな表情は、快楽に流されまいとうっすら涙まで浮かべている。
「……っ、……っ！　も、もう、むりぃぃぃっ……！」
「頑張ってくれ、狂三……っ！」
　息をひそめてやり過ごす。そんなことが、今は歯を食いしばらないとできない。奥壁を掘削機で掘り進めるように突き続ける俺の肉棒。
　一度抜いてしまえばその快感からは逃れられるかもしれないが、ギリギリのこの状態で、動くなんて選択肢を取ろうものなら、狂三はカ

リに膣内を削られ、俺は抜かないでくれと泣きせがむこのヒダに一気に果てさせられてしまうだろう。
――――コツ、コツ、コツ……
足音がだんだん遠ざかり、ついにお互いの心臓の音と、吐息の熱、つながっている部分の刺激しか、感じなくなった。
安心して、気を抜いた。
我慢する必要が無くなった俺たちの体は溜め込んだモノを発散するように、絶頂まで駆け上がる。
「またっ、出る、出る、出る……っ！」
「きて、きてください……っ！　あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
俺は2回目とは思えない量の白いマグマを、吐き出すのだった。

「こんなになって……これは帰ってからもう一回お風呂に入らないといけませんわね。んっ、ふぅ……っ、あっ」
狂三がいろいろな液体でベトベトになってしまった部分をタオルでふき取る、のは良いんだけど、タオルを動かすたびにそんな声を出すのはやめていただきたい。俺のモノがまた反応したらどうするんだ。
替えの下着を履いて、黒のゴスロリ服を着ていく狂三。用意良すぎませんか？　もしかしなくても、最初からこのつもりだっただろ……俺に乗っかってオナニーしてた時点でそうだよな。
目の前で生着替えを披露してくれた事は素直にうれしいけど。あのゴスロリ衣装、ああやって着るのか。
服を着たら行為で乱れてしまった髪を結い直す。その時に普段は髪に隠れた金色の、時計のような目が――――
「……なぁ」
俺はある重大な事に気が付いてしまった。とても看過できない、重

要な事だ。
「なんでしょうか？」
「狂三ってさ、『物の時間を戻す弾丸』持ってたよな？　あれ、俺に使えないのか？」
刻々帝（ザフキエル）の弾丸の一つ、四の弾（ダレット）。原作では、斬られた自分の腕を、時間を巻き戻して修復したりしてた気がするんだけど……
「ええ、使えますわよ」
「いや、使えますわよって……じゃあ、お願いします」
俺は右手を指さす。これで退屈な病院暮らしからおさらばだぜ。
「実はわたくしたち、依頼を受けてるんですの」
「聞いてないんだけど……」
先にお見舞いに来てた雪菜、耀が全く、全然、話題にも出さないというのはどういうことだろうか。
もしかして俺、ハブられてますか？
「そうですわね。翔さんにはあえて秘密にしてました。偶には、わたくし達の気持ちも味わってくださいまし」
そう言われてしまうと、俺も黙るしかなくなってしまう。
「ごめんなさい、翔さん。でも、今回はしっかりと休んでいてくださいね」
そう言って、狂三は窓から外に体を躍らせたのだった。

お見舞い　ヤミ、ちびっ子集団の場合

「どうも」
「ヤ、ヤミ？　来てくれたのか」
　なんと驚くことに、ヤミがお見舞いに来てくれた。ほとんど音を立てることなく部屋に入ってくる。服装はやっと見慣れてきた制服。
　ベッドの近くに来ても、椅子に座すことなく、窓の外を見ている。
「貴方のことは嫌いですが、ケガ人を見て笑う趣味は私にはありませんから」
「そうなのか」
　それでも、お見舞いに来てくれるとは思わなかった。心の隔たりは時間が解決してくれたんだろうか。や、嫌いですがって言われてるしそれはないか。
「これを」
　何とも言えない空気の中、ヤミは紙袋を差し出してくる。袋のロゴを見る限りこれは、
「本、か？」
「入院中はやることがありませんからね。私からの差し入れです。気が向いたときにでもどうぞ。片腕でも読めるでしょう」
「ありがとう」
「気にしないでください。これがあれば私がここに来た証明になりますから」
　ん？　証明？
「結城　アスナや姫柊　雪菜達は今依頼を受けていますから。時間の空いた時に代わる代わる来るそうです。昨日は２人ほど来ていたと思いますが、聞いていないんですか？」
「ああ。俺は何も聞いてない」
　本当は狂三から聞いてるけど。っていうか、狂三は本当は昨日来る予定じゃなかったのかよ。もうヤる気満々だったんだな。
　でも、俺にしゃべらないのは俺を休ませるためだと言ってたはずなんだけど、ヤミにはそれが伝わってないのか？

今、家ではどんな様子何だろう。ヤミとティナが家に来てすぐにまた入院しちゃったからなぁ。入院する前に見た限りでは、ティナの方は問題なかったように見えてたんだけど、ヤミはもうご飯を食べるときしか姿を見せなかったからな。その状態が今も続いているんだろうか。

だとしてもこれは好都合。

「どんな依頼なんだ？」

みんなには申し訳ないが、内容だけでも把握しておきたい。

「公式の依頼です。これ以上は言えません」

「公式の依頼、か」

武偵は基本お金で動く。金さえ払えばどんなことでも、たとえ少し荒っぽいことでも依頼することが出来る。

しかし、逆に言えばリスクが大きすぎて割に合わない仕事は断ることが出来てしまうし、そもそも報酬が出ない仕事は引き受けることはない。

そういう事態に対応するために国連は、武偵制度と併用して市民の血税で運営される、世界規模の警察の上位組織を作り上げた。それが管理局だ。

管理局は武偵が敬遠するような仕事を引き受けたり、武偵のサポートを行ったりする。さらに時には、管理局自体が武偵の協力を依頼してくることがあり、それが武偵の中では『公式の依頼』と呼ばれているのだ。

この島にも当然管理局の支部は設置されているから、そこの依頼か。

守秘義務もあるだろうし、それが分かっただけでも良しとしようかな。変な奴の依頼じゃないって分かっただけでも大収穫だ。

「そうか、そうか。ヤミも受けてるんだな」

「はい。意外でしたか？」

「みんなとはうまくやれてるのかな、と思ってな？」

「嫌味ですか？」

顔には出さないが不機嫌になってしまった。反省しよう。

そりゃあ一人で来たし(狂三は目的があったわけで)、わざわざ来た証明なんておいていこうとする辺りでもうお察しだよな。
「あなたたちも不運ですね。こんな爆弾を抱え込む羽目になってしまって」
そういって、ヤミは立ち上がった。
人を殺すことを生業とする暗殺者は当然恨みを買う。そんな奴とつながりを持てば、いつ何時狙われる立場になるかわかったもんじゃない。
聖天子様が頑張ってくれたおかげで今はここにいることが出来るが、本来は刑務所行きだ。
「話は終わりました。それではお大事――――」
「お兄ちゃーーーーーーん!! 元気にしてる!?」
扉が大きな音を立てて開かれた。
そして飛び込んできた小さい影と、ヤミが激突――――することはなく、ヤミはするりと身をかわした。が、そのまま全開になった扉をくぐることは出来ない。扉の向こうの廊下に立っている子供のせいで、先に進めないのだ。
もうわかったと思うが、飛び込んできたのはクロ。そして一緒に来たのはその友達のヴィヴィオ達だ。
なぜかは知らないが、ヴィヴィオを見てヤミが固まっている。
「あっ! あなたはあの時の!? 先日はありがとうございました!」
「え、あ、そ、その……」
顔を合わせるなりいきなり深いお辞儀をするヴィヴィオちゃんにヤミはあたふたし始める。
……まったく状況がつかめないんだけど、どういうこと?

「ほーん、つまり、ヤミがヴィヴィオを助けたと」

俺は聞いた話を端的にまとめてしまう。中々奇妙なところでつながりがあるものだ。
「流石に簡単に言い表し過ぎです、夜月　翔……っ！」
俺に悪態をつくヤミの口調も、どこか勢いがない。と、言うのも、
「そうなんですよ！　もうダメだーって時にさっと現れて助けてくれたんです！」
「それでそれで！　それが終わったらすぐにいなくなっちゃったし！」
「まさにヒーローって感じでした！」
「どこの人なんだろうって話していたんですけれど、まさか――――」
助けられた時のことを興奮気味に口にするヴィヴィオ達。子供特有のパワーにあのヤミが押されている。
さっさと帰ろうとしていたのを押しとどめたり、ヤミの鉄仮面をいともたやすく剥がしてしまったり、その力は侮れない。
「――――まさか、クロちゃんのお兄さんの恋人だったなんてっ!!」
本当に侮れない。
や、確かにわざわざ病院までお見舞いに来る関係だ。それなりに親しい関係であることを想像するのは難しくないし、間違ってもいない。世間的に見れば、俺たちは同棲しているわけだし。
「……冗談はやめてください。私とこの男とは何の関係もありません」
そんな下手すぎる返答をするヤミ。何の関係もない人のお見舞いなんて来る奴いないだろーが。案の定、言葉の隙を突かれてさらに追い込まれていく。
ヤミも、子供の相手には慣れていないのか、うまく言葉を紡げないでいる。さっさと会話を打ち切って帰ってしまえばいいのに。俺と恋人扱いされるのがそんなに嫌だという事だろうか。
でもまあ、ノーヴェさんもいるし。あの人ならうまい具合にストッパーになってくれるだろう。
俺はその間に、聞いておくべきことが２つあるし。
「クロ、ティナ、２人は依頼、どうしてるんだ？」

「……誰が依頼のことを――ヤミね？　まったく……」
「クロさん……」
　雰囲気が変わり、目つきが鋭くなる。俺の言葉をすぐに理解してくれたな。俺に甘えてくるときとはまるで人が変わってしまったかに見える。二つの人格を持っているかのようだ。
　ティナの方は不安げな目でクロを見る。ヤミの名前を出したとたんに不機嫌になったからだろう。
「私達も受けてるわ。捜査の時はいつも2人以上で行動するようにしてるから――」
「――魔力は大丈夫なのか」
「ん、お兄ちゃんとHなことしてから貯めておける魔力量がすごく増えたの。普通に生活するだけなら、補給なしで一週間は持つよ。戦闘になってもあのバンダナがあるからよほどのことがない限り大丈夫だと思う」
「無限バンダナか。あれはもうクロにあげるよ」
　アレは明らかに俺よりも使いこなせる上に、大きなデメリットを打ち消すことが出来るクロが持っていた方がいいだろう。
　それだけで、クロの戦闘の安定性が格段に向上する。
　それじゃあ、もう一つの方。
「ヤミの様子はどうだ？」
「ヤミ？　……そう、だね……」
　あからさまに目を逸らすクロ。これではもう答えを言っているようなものだ。
「……正直言って、私、ヤミの事嫌いよ」
「へぇ……」
　クロの口から『嫌い』なんて言葉が出てくるとは。そっぽを向いてしまったクロの代わりにティナが話し始める
「ヤミさんは家に来てからずっと同じです。いつの間にか学校に行ってて、いつの間にか帰ってくる。ご飯に呼んでも一緒に食べることは少ないですし、家の中でもほとんどしゃべりません。アスナさんと狂三さんは頑張ってるみたいですけど……」

「……ま、ヤミは来たくて俺の家に来たわけじゃないから……ティナもそうか」
「わ、私はっ、翔さんの家に来れて、うれしかったですけれど……っ！」
ティナはそんなうれしいことを言ってくれる。
ヤミの場合、他人を嫌っているんじゃなくて、無関心なんだよな。ヤミの無関心はひたすら一人の世界を作って、他人を寄せ付けないわけじゃない。他人の人格には興味がないけど、行動には細心の注意を払っているって感じのドライなヤツだ。
殺し屋をやっていたせいで形作られた考え方なんだろう。
頭のいいクロは理解しているだろうけど、あえてヤミをフォローしておく。
それにしても、俺をケガさせたティナじゃなくてヤミのほうが好感度低いんだよな。態度次第でここまで違うもんか。
「クロさんとティナさんは依頼を受けているんですね。翔さん、お怪我の具合はどうですか？」
そこに、ヤミへの質問攻めに参加していないアインハルトが入ってきた。俺のケガにも必要以上に責任を感じてるわけじゃないみたいだ。俺としてもその方がありがたい。
「全然平気だ。アインハルトも、風邪ひかなかったみたいで良かったよ。ヴィヴィオちゃんとの試合はどうなったんだ？」
今回の事件、俺以外には特にケガはなかった。事情聴取が終わり次第、学校に行ったレベルだ。せいぜいずぶ濡れになったくらい。唯一気にしていたのは、事件のせいで試合で力が出せないことくらい。
思えば、ホワイトスネイクの狙いがアインハルトと綺凛、２人のＤＮＡだった。つまり、俺に会っていなければ、なすすべがなかったわけだ。スタンドに対抗出来る俺が近くにいたのはかなりの幸運だった。それでも、襲われたという事実には変わりないけど。
「ヴィヴィオさんとの試合は……そうですね、一応私が勝ちました。でも、ほとんど相打ちのような状態で……それ以上に教えられることが多くありました。すべて翔さんのおかげです。ありがとうございました」

「そりゃあ良かった。どういたしまして」
　ここで、俺は何もしてない、なんてつまらないことは言わない。本人が教えられたことがあったと言っているんだから、それでいいだろう。
「ヴィヴィオちゃん達とはうまくいきそうか？」
「はい。近代格闘技と私の流派とではあまり共通するところはありませんが、普通の友達としてうまくお付き合いさせていただきたいと思っています」
　こっちも良い結果になってくれて、良かった良かった。
「それで、ですね、早朝練習の事なんですが……」
「ん？　ああ、綺凛が昨日来たんだけど、練習は続けることになったぞ。来たかったら綺凛に連絡しておく」
「は、はいっ！　ぜひお願いします！」
　何が言いたいのかを一瞬で察することが出来た。少し食い気味にアインハルトが返事をしてくる。
「でも、俺たちも覇王流のことは何にも知らないから、試合くらいしか集団で練習する利点はないぞ？　それでもいいのか？」
「それは……確かにそうなんですけれど……」
「翔さん、分かってて言ってますよね？　そういうのは、やめた方がいいと思いますよ？」
　少しからかったら、何とティナに注意されてしまった。
「ほらお前ら！　ここ病院だぞ。騒ぎたいなら帰るぞ！」
　ここでノーヴェさんのストップが入った。ヤミへの質問を見過ごせなくなったみたいだ。
　なんかヴィヴィオちゃん達には、ほとんどお見舞いされた感じがしないな。考えてみればヴィヴィオとは、それこそしゃべったことないレベルの繋がりでしかないし。それはもう、繋がりがないと同義では？　友達（クロ）のお兄ちゃんってくらいかな。
　それはそれとして、
「あ、ノーヴェさん。ちょっと残ってくれませんか？　少しお話が。あ、みんなには先に外に行ってて欲しい」

次にノーヴェさんに会ったら言おうと思っていたことがあったんだった。忘れるところだったぜ。
「ええ!?　ノーヴェさんに秘密のお話!?」
「そそそそれって……っ！」
「もしかして、もしかすると……っ！」
そう言って、ちびっ子がキャッキャと騒ぎ出した。
なんか、みんな小さいのにませてるなぁ。別にそんなことをするつもりは全くないんだけど。それ以上に大切なお話だ。
「ん？　ああ、いいぜ。ほら、バカなこと言ってないで外に行ってろって」
ノーヴェさんも流石大人の女性で、特に焦ることなくちびっ子を外に追い出してくれた。
出ていくクロにさりげなく目配せをしておく。察しがいいクロでもこれだけで気が付くのは少し難しいとは思うけど。
部屋が静かになる。扉の前で聞き耳を立てているわけでもないようだ。
「んで？　話って何なんだ？　まさか本当に告白ってんじゃないだろ？」
「はい。その手の話じゃありません。クロの事です」
「クロがどうかしたのか？」
俺はクロの体質について説明する。ノーヴェさんは終始静かに聞いてくれた。
「――――って感じです。もっと詳しい事情は自分の口からは言えませんけど」
「なるほどな……分かった。あたしが見てる時はフォローするようにする。普通に生活する分にはそんなに問題ないんだよな？」
「それについては大丈夫です。なのでストライクアーツは続けても問題ありませんから」
「そうか。ま、言いたくなったら、あたしに言う前にちびっこどもに説明すんだろ。あいつ、年の割にしっかりしてるしな」
「そうですね。そこについてはしっかりと信用してます」

俺の言葉にニッと笑ったノーヴェさんは、背を向けた。
「あんまり待たせるのも悪いし、帰るわ。それじゃあな」
そう言って、ノーヴェさんは病室を後にするのだった。

お見舞い　理子、アスナ、アリアの場合

「やっほー！　お見舞いに来たよー！」
騒がしく入って来たのは理子だ。この調子でここまで来たんだろうか。
「おーす。依頼の合間か？」
「うん、そうなんだ。少ししたらアリアとアスナも来るよ。３人でこれから見回りに行かないといけないんだぁ……」
見回りねぇ……要人警護の類じゃないってことなのか？　や、そうとも限らないか。
「んもー大変だよ。毎日毎日戦って戦ってさぁ……ホント、調子に乗った奴ほどうっとうしいモンは無いよな」
表と裏のキャラが混じるくらいには大変な依頼だってことか。それにしてもこいつ、割と口軽いぞ。これならもっと聞き出せるかもしれない。
「あ、今理子の事バカにしたでしょ？　全部わかってるんだからね！」
ともすれば、こんな感じに鋭いことを言ってきたりする。顔を見ればカマをかけているのか確信をもって言っているのかわかる俺にとって、理子やクロのようなタイプは中々に厄介な相手だ。
ま、俺も大概だけど。
目の前でテンションの落差が激しく、１人で熱弁をふるっている理子を見ながら、そんなことを考えた。
「――それでね……あれ？　くんくん、くんくん」
理子が鼻を鳴らし始める。いったい何なんだろうか。おもむろに立ち上がり、何かを探し始める。
辺りをうろうろしていた理子だったが、しばらくして来客がコートを掛ける簡易的なクローゼットのようなものに目を付けた。
あぁ、確かその中には……
「おおっと！　こんなものが入ってたよ！」
ハンガーに掛った真っ白な服、ナース服を俺の前に引っ張り出した。

「なんでそれがあるって分かったんだ？」
まさかとは思うけど、事前に調べておかないと分かるはずがないことだし。俺が寝ている間に侵入してきていたのか？　でも、寝てる時に侵入して何も起こってないのは不自然だ。理子なら、何らかのイタズラを仕込んでいそうなものなんだけど。
「いやぁ、なんかこの部屋に入ってから匂いがすると思ってたんだよね」
「ナース服の匂いって……？」
聞いた事がない匂いだ。俺には感じ取ることが出来ないな。
「……それで、どうしてクローゼットにこんなものがあるの？　誰からの差し入れ？」
「そんなもんを差し入れする奴なんていないだろ」
「えー、じゃあ持ち込み？」
「もっと意味わかんない」
ナース服の差し入れも、持ち込みも、新しい文化を築けるレベルだ。
「あっ!!」
理子は「そうかわかった閃いた」といった顔で、手を打つ。
「せっかく入院するからだれかとナースプレイをしようと思ったんでしょ!?　でしょ？　当たりでしょ？」
「……そんにゃことしないから」
「……へぇ」
噛んじゃった。ナース服を使った訳じゃないけど、もう1度シてしまっている身としては、否定することも苦しい。
「もうっ、しょうがないなぁ！　そんなに言うんならナース服で看病してあげますっ！」
「や、何も言ってないんだけど……」
俺の話を全く聞いていない理子は、いきなり自分のフリルがあしらわれた改造制服をまくり上げた。もうウキウキだ。本人が着たいだけじゃないの？
脱ぐときに服に引っかかったのか、金色の下着に包まれていた2つの山が大きく揺れた。さんざん経験したというのに、反射的に目を逸

らしてしまう。少し小さいものを着けているのか、もっちりした２つの塊に少し食い込んでいたのが目に焼き付いている。
続いてスカートが脱ぎ捨てられる。残念ながら、この位置だと右手の装置のせいでうまく隠れてしまっている。そんなことよりも、あっという間に下着姿になってしまった件について。制服は特にたたまれることなく、脱ぎ散らかされている。
目の前で最高の光景が繰り広げられていた訳だが、ここで終わりではない。
理子が白衣を手に取り、身に纏い始めた。
「ん、っしょ……ん、ん？　ちょっときつい……」
前のボタンをつけるのに手間取っている。理由は言わずもがな。ようやく身に着けることが出来ても、前を止めているボタンが悲鳴を上げている。ふとした拍子に弾け飛んでしまいそうだ。
最後にキャップをかぶって完成。純白の服に金色の髪と主張が激しいところがアクセントになっている。こんなナースがいると、治るケガも治らないだろう。
「それじゃあ失礼しまーす……」
そろそろと布団に入って俺の左側に寄り添ってくる。
「これ看病？」
「んー、心の看病。荒んだ心が癒されていくでしょ？」
……その荒んだ心がどっちのものか、ってことには触れないでおこう。
片手が使えないため抱き寄せることは出来ないが、力を抜いて理子を受け入れる。
「ねえ、翔君」
「なんだ？」
「名前、呼んで」
「理子」
「ん……」
あの日飛行機で勢いに乗ってブラドと戦うと宣言した理子だったが、時間が経って冷静になると、恐怖が襲ってきたのだろう。それく

らい、幼少期にブラドに植え付けられたトラウマは大きいんだ。
理子に決心させた者として、不安に駆られる理子を支える義務がある。
理子の体が少しずつ移動してくる。それでいて、俺と密着する面積は増えていく。理子の柔らかさを感じ取るごとに、下半身に血液が集まっていくのが分かる。
無言で見つめあった俺たちは、ゆっくりと唇を重ねた。見た目に反した肉厚の理子の唇が触れた途端、バニラのようないい匂いとともに、2つの柔肉が俺と理子の間のクッションになった。
押しつぶされた双丘が元に戻ろうとする反発力は、心地よい刺激となって俺のモノをさらに硬くする。
「んふぅっ……んちゅるっ……くちゅっ、ちゅっりゅぅ、くちゅるっ……っ」
いつの間にか唇を合わせるだけだったキスが、濃密なものへと変化していた。口内に侵入した理子の舌は歯茎をなぞり、俺の舌に絡まってくる。
俺はこっそりと腰を動かしてみた。薄布に阻まれた状態とはいえ、互いの性器がこすれあう快感は、背中にゾクゾクとした刺激をもたらす。
息が苦しくなって口を離した。お互いの唾液がアーチを作り、粘ついた吐息が、顔と顔、その狭い距離の湿度を急激に上昇させる。
理子は潤んだ目で手を下に動かし、ズボンの上からでもはっきりとわかる肉棒に手を這わせてくる。
「ズボンの上からでもわかるよ。翔君のペニスが脈打ってるのが。すごく硬いんだね。しかも、太くて、熱くて、これで何人の女の子を鳴かせてきたの？」
「……っ」
理子の一言一言が、俺の理性を剥がしに来る。
「このまま、やっちゃう？　病院で、しかも昼間だけど。私とHなこと、しちゃう？」
そんな蠱惑的なセリフに半分首肯しかけたところで、

「翔、お見舞いに来て――――」
「具合はどう？　翔く――――」
「……」
――アスナとアリアが来た。
２人の視線は不自然に膨らんだ布団へ。そして俺の上に乗って密着している理子に向けられる。
「死ね」
直球過ぎて一周回ってしまったようだ。瞳孔が開いた目でスカートに手を伸ばすアリア。目的はそこに収められている拳銃だ。ここが病院だという事を忘れてしまっているらしい。
アスナも笑っているけど笑っていない。アリアが銃を抜くのを全く止めていない時点でその怒りの度合いが分かってしまう。あの良識あるアスナが、俺が仲間に向けられる銃口を全く気にする様子がない。
「黒影（ダークシャドウ）！」
病院で発砲されてはたまらない。黒い鳥の怪人が、アリアを抑え込め――てない!?
（ナ、何ナンダ！　コノ嬢チャンノパワー！）
（頑張って抑え込んでくれ！　じゃないと俺が死ぬ！）
結局アリアは、持っている武器をすべて取り上げられて体を抑え込まれるまで、止まることはなかった
引っぺがされるとき理子に小さい声で、
「……本番は退院してから、だね」
と言われて下腹部の勃起が痛いくらいになって、放置されてしまったんですけれど。

「アリアちゃん、病院で銃はダメだよ？」
「ええ、そうね。私も冷静じゃなかったわ。安易に銃を抜いたことは悪いと思ってる」
『は』を強調して言うアリア。俺と理子の顔を見ないようにしている。元凶の俺が悪いってことですか、その通りですね。誰だってお見舞い相手があんなことしてたら取り乱すよ。
「理子ちゃんも、ここは病院だからね？　そういうことは良くないんじゃないかなぁ……？」
「はーい、次からは気を付けまーす」
　全く反省の色が見られないんだけど。
「それで、どうしてこんな所にこんな服があるのか、説明してくれるよね……？」
「アスナ、スマイル。スマイル忘れてるよ」
　これはホワイトスネイクに襲われたとき以上の恐怖だ。
「怪我した状態で搬送された俺は無実だってこと、分かってくれてる？」
「でも実際、モノがここにあるわよ」
　アリアは理子が着ているナース服を指さした。証拠はここにある、という顔だ。
「それに、この病室にこんなもの置いて行っても何にもメリットはないもんね」
　こうして冤罪は生まれていくんだな。俺は少しだけ賢くなったような気がした。つまるところ逃げ道が塞がれて来ただけだけど。
　ってかさ、結局このナース服、御門先生が置いていったものだったよ。この前顔を見せに来てくれた時に確認した。完全に俺をからかうためにやった事らしいから、疑いを晴らすのには協力してくれないだろうけど。むしろこの状況を楽しみそう。
　俺が何も言えなくなってしまっていると、理子が明るい調子で空気を変えてくれる。
「まあまあ！　そんなことどうでもいいんじゃない？　せっかくだし２人も着てみようよ!!」

「……私はそんな服に興味ないわよ」
アリアは冷たく切り捨てるが、理子がそれを見逃す訳がない。
「あ、そっかそっか。アリアにはこの服大きすぎたもんね！　いやぁ、ゴメンねぇ」
「あんたと私、そんなに身長変わんないでしょ!!」
身長は、な。
「くふっ、そうだねぇ……それはそれは平たんな、起伏の無い格好になりそうだけどねぇ……特に前が」
「殺すわ」
アリアと理子が取っ組み合いのケンカを始めた。
理子の言いたいことはわかる。理子はその小柄な体に似合わない、立派なものをお持ちだ。それはさっきナース服を着ていた時に分かっている。誰のサイズを想定して作られていたかはわからないけど、理子には若干大きいみたいだった。唯一、限界まで布地を押し上げていた部分を除いては。
一方、アリアはもうそのまま小学生と言っても通用する体型だ。原作では寄せて上げるブラを使っていたけど、無情な現実には抗えない。服次第でワンチャンあるかな？　このナース服は無理だけど。
「そもそも理子！　あんたコレ！」
「ん？　どーしたの？」
床に脱ぎ散らかされた理子の制服を指さして、アリアは真っ赤になっている。
「ま、まままさか！　ここで着替えたんじゃないでしょうね!?　翔がいるここで！」
「ん？　そーだけど？　なんで？」
何でもないように答える理子に、これ以上無いくらい顔を赤くするアリア。
「な、何でじゃないでしょ！　お、おお男の前でそんな……そんな……」
羞恥心からか最後の方はすごく小さくなってしまう。そんなアリアを理子はまたもや煽りにかかった。

「いやぁ～、アリアは初心だねぇ、子供だねぇ。大人の女性は男の人の前で裸になるのは、なんとも思わないんだよ？」
　それは無い。
「大人の女性ならむしろ、自分の体で誘惑するくらいやって見せないとね！　自分の体で、ね」
「そんなにケンカしたいのね……ッ!!」
　終盤明らかにアリアを小バカにしていた態度に、ついにキレた。病室内で全力バリツはやめていただきたい。全部終わった時、この部屋は竜巻が通ったような状態になっていることだろう。それを見て看護師さんに嫌な顔されるのは俺じゃん。
　でも、頭に血が上ったアリアと戦闘狂の理子を止めることは無理だろうな。少し発散させないと、黒影（ダークシャドウ）でも力負けするよ。
　達観した面持ちになっていると、アスナが寄ってきた。彼女の怒りはだいぶ収まったみたいだ。
「元気そうでよかったよ、翔君」
「あの2人も元気そうだよな。あぁ、花瓶が割れた……」
　床に落ちて砕け散った花瓶。中に入っていた水が床を濡らす。花瓶が割れても動じない俺とアスナはこの世界に慣れてきているな。
「理子ちゃんとHなことしたんだね」
「ん、そうだな。でも言っておくと――」
「分かってるよ。理子ちゃんからシたんだよね？　あのナース服も、理子ちゃんが持ってきたんでしょ？」
　あ、ちょっと違いますね。そのままうまい具合に勘違いしていて下さい。ここは理子の趣味があっち方面だったことが幸いした。
「理子は理子で、色々事情があるからな」
「理子ちゃんとの約束もあるもんね」
「ブラドのことだな」
　アスナはコクリと頷いた。理子の事情はみんなで共有している。そうしないと、アリアが同居を許可してくれなさそうだったからな。
「実は今回のこと、ブラドに関係してるんだ」
「……え？　どういう事なの？」

俺は今回の事件について事細かに説明する。するとアスナの顔はどんどん険しくなる。
「じゃあ、綺凛ちゃんとアインハルトちゃんと一緒にいたのは本当に運がよかったんだ……」
「ああ。もう証拠を見つけるとか、そんな悠長なことを言ってられる状況じゃないかもしれないな。最悪殴り込んで出たとこ勝負を仕掛ける必要があるかも」
俺は冗談のつもりで言ったが、アスナはそうは受け取らなかったみたいだ。
「もしそうなるとしても、絶対に私たちも一緒に行くからね」
「お、おう。もちろん」
……考えておくよ。
煽りに煽る理子を止めに入るアスナを見ながら、新しく追加された能力を確認して、そう思った。

レベルアッパー　編
思わぬ再会

「どう？　違和感は無いかしら？」
「はい、大丈夫です」
俺は久々に外の空気に触れた右手の調子を、握っては開いて、握っては開いてを繰り返して確かめる。
麻酔のせいでずっと右腕の感覚がなかったが、入院生活も9日目に入り、めでたく麻酔の投与が終わり、右腕が装置から取り外された。
人工細胞の体組織修復は完了。後は数日経過を見て退院になっている。
一度俺の体を離れていたとは思えないくらい元通りになってくれたな、右手。痕も残ってないし。
「機械を使って検査した限りでは、もう完全に治ってるけどね。認可されてないものを使ったわけだし、万全には万全を期して、ね。あと少し入院しててもらうわ。今日からは好きに動いても大丈夫だから。でも、面倒ごとは起こさないでね。最近忙しいんだから」
そう言って、御門先生は台車に乗せられた機械を押しながら、病室を去っていった。
むしろ、好きに動かして普段通りに動かせるかをしっかり確認しておいた方がいいな。
腕に時計を巻いて、久々にお散歩タイム。意気揚々と病室を飛び出しあちこち探索し始める。前の入院の時も少しは見て回ったりしたんだけどね。なんにしても今は少し動きたい気分だ。
病院だし、そんなに面白い造りをしているわけじゃないけど、これからもここにはお世話になるだろう。構造を頭に叩き込んでおくのもいいでしょ。
あれから毎日、日替わりでみんながお見舞いに来てくれる。でも、肝心の依頼については全く話してくれない。今回は本当に干渉することがなさそうだ。みんなだけでうまくやってしまうんだろう。ち

なみにいうと、俺が事件解決にかかわらなかった場合、つまり、女の子だけで依頼をこなした場合、ガチャポイントは増えないらしい。
ま、たまにはそういうのもいいだろう。のんびりと待つことにしよう。そうだ、売店に行って何か飲み物を買おうかな。
と、おおらかに構えていた俺だったが、思わぬ再会があった。
「あ」
「あ、あんたっ!!」
「へ？　どうしたんですの、お姉さま？」
売店の入り口、今まさに扉を開けて外に出ようとする2人組。『御坂　美琴』と『白井　黒子』がそこにいた。

俺が売店で午後の紅茶を買って院内の指定された場所に向かう。そこには厳しい顔をした2人の少女が座っていた。言うまでもなく御坂と白井の2人だ。
ばったり顔を合わせたとき、ここに来るように言われたのだ。特にやましいことがなかった俺は快諾した。ここは病院で、一応俺は入院している身。ここでテンプレの決闘イベにはならないだろ。
（――と思ったんだけど……）
2人の顔が予想の3倍怖くなっている。御坂の方はわかるけど、白井の方まで怖くなっているのは謎だ。白井とは顔を合わせるのは初めてだったので軽く自己紹介をしておく。それに合わせて、俺が今入院していることも伝えておく。
「それで、俺に用があるのか？」
「ええまあ。一週間ほど前に起きた連続虚空爆破（グラビトン）事件のことは？」
「ああ、あれか。覚えてるぞ」
色々あって忘れそうになっていたけれど、俺が前に退院した日にど

さくさに紛れて解決したっけ。や、解決自体はしてないな。俺は爆弾になってた人形を処理しただけだ。
　話し始めると釣り上げられていた白井の目が落ち着きを取り戻し、口調も平坦なものになる。
「その時、友人を助けていただいたようなので、お礼を」
「ああ、どういたしまして」
　白井の素直なお礼に、俺も素直に返す。無意味な謙遜は嫌いだからな。白井の言う友人というのはおそらく、頭にたくさんの花飾りをしている初春の事だろう。
「ちなみに、今日はどうして病院に？　見たところケガをしたわけじゃないみたいだけど。誰かのお見舞いか？　さすがにそのお礼をしに来たわけじゃないんだろ？」
　ここはすかさず探りを入れてみる。情報は、仕入れることが出来るときに仕入れていた方がいいからな。それに、病院なんて普段は来ることがないところに顔を出しているんだ。何か起こっているのは間違いない。
「はい。ですが……いえ、これは話しておいた方がいいかもしれませんね。連続虚空爆破（グラビトン）事件にも関係していることですし」
　ん？　連続虚空爆破（グラビトン）事件はあれで犯人も捕まってるはずなんだけど……まさか、
「連続虚空爆破（グラビトン）事件の犯人、介旅初矢が意識不明になったんですの」
「……マジか」
「はい。しかも原因は不明。現在はその分野の専門家に詳しく検査をしてもらっているところです」
　介旅初矢が意識不明になる、つまりは幻想御手（レベルアッパー）の副作用が出始めたってことだ。
　連続虚空爆破（グラビトン）事件は幻想御手（レベルアッパー）事件のほんの一部にすぎない。大事の前の小事とも言う。とにかく、本命の前には小さい出来事なのだ。しかもこの世界の影響で、何が起こるかは皆目見当つかない。
　……ここは少し踏み込んでおくべきか。みんな、ゴメン。
「もしかして、幻想御手（レベルアッパー）が関係してるのか？」

「っ!!　どこでそれを？」
「知り合いが調べててな。少しばかり情報をもらったりしてるんだ」
一気に真剣な顔になった白井は、少し顔を寄せてくる。この世界、『調べている』、『情報をもらっている』のワードパワーが高い。こう言っておけば、よほどのことがない限りは相手は何も言えなくなってしまう。
「優秀なお知り合いをお持ちで。幻想御手（レベルアッパー）なんて、よくある都市伝説レベルのホラ話ですのに……ですが、少なくとも、公式から依頼が発生する程度には、今回のブツは信憑性が高いものですわ」
最近起こっている能力事件の犯人は、記録と比べても、『成長』という言葉では説明がつかないくらいの能力差があるらしい。そして、ネット上に氾濫しているネタの中で、一気に有名になった幻想御手（レベルアッパー）。
これらを結び付けて捜査する生徒を選出したらしい。その中に御坂と白井も加わっているのだとか。
「俺も加わるわけには……」
「ダメに決まってるでしょ。もうクエストの締め切りは切られてるんだから」
「……お姉さまが言っても、正直説得力がありませんが……そもそも、あなたは入院している身でしょうに。無理です」
ですよね。
『御坂　美琴』と『白井　黒子』は共に『とある魔術の禁書目録』に登場するキャラクターだ。二人とも強力な超能力を持っている。
特に御坂の方は、発電能力者（エレクトロマスター）としてはその分野では最高のレベル５の力を持っている。１０億ボルトの電撃を放射したり、電撃の応用で磁力を操ったり、情報を抜き取ったり。挙句の果てには、金属弾を音速の数倍で発射する超電磁砲（レールガン）まで。
素直に、まともに戦ったら勝てないと思える人物の一人だ。
「自分の腕にどんだけ自信があるかは知らないけど、怪我してんのに無理やり出張ってくる必要は無いわよ」
怪我はもう治ってるんだけどね。
棘のある言い方だけど、それだけの力を御坂は持っている。能力だ

けで、すでにＳランク評価をもらってもおかしくない。
そうそう、能力と言えば、遅くなったけど俺が新しく手に入れた能力を紹介しておく。

騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せず
Ｆａｔｅ系作品に登場するサーヴァント、ランスロットの所有する宝具。
丸腰で戦う羽目になった時、拾った楡の木の枝だけで勝利したというエピソードが具現化した宝具。手にした物を、たとえそれがただの鉄柱だったとしても、自身の宝具として扱えるようになる宝具。

デンドロビウム
機動戦士ガンダム００８３　ＳＴＡＲＤＵＳＴ　ＭＥＭＯＲＹに登場する兵器。
ガンダム試作３号機『ステイメン』がアームドベース・オーキスに乗り込んだもの。アームドベース・オーキスには、戦艦一隻を一撃で轟沈させることが出来るメガ・ビーム砲、遠距離のビーム攻撃を封殺するＩＦジェネレーター、武器コンテナには多数の重火器、ミサイルが積んであり、クローアームに搭載されたビームサーベルで多少の近接攻撃も出来る。形が分からない人は、検索すればすぐに出てくるので一度見てみてほしい。カッコいいので。ステイメンはデンドロビウムのコアユニットになっていて、パワードスーツのように着込むことでアームドベース・オーキスを操縦する。
サイズ、その他諸々は調整されていて多少は扱いやすくなっている。ビーム砲や武器コンテナだけを呼び出すことも可能。弾薬は無限に供給されるが、ユニットが破損すると自動修復はされないので注意が必要。
ちなみに、デンドロビウムはお花の名前らしい。物騒なお花もあるものである。

この２つだ。騎士は徒手にて死せずは戦い方の幅を広げる意味で大活躍してくれそうだ。
問題はデンドロビウム。入院している関係上まだ呼び出したことはないが、使うときは注意しないと。適当に撃つとカリバー以上に周りに甚大な被害が出る可能性がある。要練習だな……練習する場所の心当たりはないけど。
「ま、そうだなぁ。天下の超電磁砲、『御坂　美琴』がいれば、俺なんて必要ないよなぁ」
俺の言い方に白井がムッとした顔になる。超電磁砲を強調した言い方が気に入らなかったんだろう。
と、俺を見ている御坂の目が、嫌な感じになっているのに気が付く。それは別に俺の言葉に不機嫌になったわけじゃない。まるでこの話題になるのを待っていたかとでも言いたげな、獲物に噛みついたぞ、みたいな……。
「そうよねぇ……ショッピングモールではずいぶんド派手にかましてたみたいだけど、ねぇ」
「え」
「そういえば……連続虚空爆破事件の時の破壊痕、アレはお姉さまの超電磁砲では……」
「ええ、恥ずかしいけど、焦ってコイン落としたのよ、あたし」
「全力だよ、全力。あの攻撃には自信があったからな」
「全力？　爆弾が爆発するまでの一瞬に、全力の一撃をとっさに当てたってこと？　その割には、近くに来た時に息も切らしてなかったみたいだったけど？」
「それについては言えないな。企業秘密だから」
こいつ、これが目的だったのかよ。
御坂は高レベルな能力を持っているが、その反動なのか、原作初期には自分よりも強い相手が気に食わないという旨の発言をしている。これは完全に目をつけられてしまったみたいだ。

俺がふてぶてしい態度で御坂の顔を正面から見ていると、あきらめたのか緊張を解いた。俺も内心ほっとしていると、今度は携帯をポケットから取り出す。まったく諦めてないみたいだ。
「ふーん……ま、いいわ。携帯の番号交換しておこ。これから連絡取れないと不便になることあるかもしれないし」
「んなッ!!」
唐突な提案に思い切り顔をしかめる俺。白井は顎が外れるんじゃないかと心配になるくらい、口を開けている。
「おおおおお姉さま？　い、いきなり何をおっしゃっているんですの……？　そ、そんな、殿方とッ！　携帯の番号を交換だなんてッ！
黒子は……っ！　黒子は……っ！」
「はいはい。いちいちそんな反応しないの。あんたもちゃっちゃと携帯出しなさいよ、嫌そうな顔すんじゃないわよ」
挙動不審になってカタカタ震えだす白井に対してドライに対応していく御坂。白井の扱いには相当慣れているようだ。
カエルのストラップがくっついた携帯を軽快に操作していく御坂。無言で突き出されている携帯と御坂を見て、俺はしぶしぶ携帯を取り出す。番号の交換は、数十秒で終わった。
交換作業の最中、白井は椅子の角に頭を打ち付け続けていたんだけど、手当てが必要なケガはするなよ。
「君達、まだいたのかね」
白衣を着た、汗だくの女性が丁度良く声をかけてきた。青白く濃い隈を持つその顔は、お世辞にも健康だとは言えない。白衣から医者だという事はわかるが、まず本人が健康的な生活を送ってほしいと思われるレベルだ。
しかしこれは一般的な反応だ。俺の頭には全く別のことがあった。
（木山　春生……ッ!!）
この幻想御手（レベルアッパー）事件の元凶。原作では、という注意書きが入るが、それでも一番怪しい人物だ。そんな人物が目の前に現れたんだ、意識を切り替えるのは当然だ。
そんな俺の考えはつゆ知らず、白井は話を進めていく。

「はい。ちょっと木山先生に聞きたいことがありまして」
「構わないよ。彼の診断結果は既に院長に伝えてきたから、しばらくは余裕があるからな。そちらの彼も一緒かい？　さっきはいなかったみたいだが……」
「あ、いえ。彼は部外者、で……え？」
いつの間にか木山先生が着ていたシャツが半脱ぎになっていた。誰かにやられたという訳ではない。本人が「暑いな」と言ってどんどん衣服をパージしようとしているのだ。
あまりにも衝撃的な事態に固まっていると、あっという間に上半身が大人な黒のブラのみの状態になる。
いち早く平静を取り戻した白井が木山に食って掛かる。
「なぜ、こんな所でストリップしてますの!?」
「なぜって……そんなの暑いからに決まっているじゃないか……」
「殿方の目がありますの!!」
「下着を付けていても駄目なのか……？」
「ダメに決まっているでしょう!!」
御坂は前髪から電撃を漏らしながら、
「とりあえずあんたは、猥褻の現行犯かしら？」
「それは向こうだと思うんだけど……？」
俺に迫ってくるのだった。

翔が御坂から逃げ延び、白井が木山に服を着させ、さらに暑いという理由で木山が脱ぎださないように近くのファミレスに入ると、ようやく落ち着いて話ができる環境が整った。
「ふむ、落ち着いたようだし、そろそろ話し始めてもいいかな？　結局人数は増えたようだが」

「さっきの殿方とは違って、この２人は関係者ですの」
「そうなのか。それでは、何から話そうか――――」
木山がぽつぽつと話し始める。そんな木山とテーブルを共にしているのは４人の少女だ。２人は御坂と白井。
そして後の２人は、アスナと狂三だった。

勇気の決断

木山に一通り介旅の容態を聞いたところで、アスナが口を開いた。
「専門家として木山先生に聞きたいことがあるんです。『幻想御手（レベルアッパー）』ってご存知ですか？」
「幻想御手（レベルアッパー）……？　それは、どういったシステムなんだ？　形状は？　どうやって使う？」
「私達も、まだそこが掴めないんです。具体的なシステムが分からないから、対策もとれない状況で……」
「君達は、それが昏睡した学生達に関係しているのではないかと考えているのか？」
「はい。今、私達の仲間が調査を進めていますが、こちらが独自にピックアップした、幻想御手（レベルアッパー）を使用したと思われる最近の犯罪者の約８０％が、昏睡状態になっています。そして、この数はどんどん増えているんです。中には死亡してしまった人もいて……」
この数値は、この手の作業に強い初春が調べたもので、信用できるデータだ。
「……死亡……それで、なんでこんな話を私に？」
「……私たちの勝手な予想なんですが、幻想御手（レベルアッパー）が能力を『無理矢理』レベルアップさせようものなら、脳に絶大な負担がかかるのではないかと。逆に言えば、脳に何らかの細工を施して、高レベルの能力を使える脳に『強引に改造』しているんじゃないかと思うんです」
近年考案された超能力は、薬物を使ったり、脳に電気を流したり、体を改造することが第一歩になっている。そこからの変化は個人差と才能があるが、天然の能力者でもない限り、始まりはそこなのだ。
「なので、もし幻想御手（レベルアッパー）の実物を手に入れたら、先生に色々と調べてもらえないかと思って」
「それはむしろ、こちらから頼みたいところだ。一人の大脳生理学者として興味をそそられるな」
好意的な反応が得られたことに安堵する一同。
「……ところで、さっきから気になっていたんだが」

そう言って、木山は窓の外を指さした。
「あの子たちは知り合いかね？」
そこでは『佐天　涙子』が窓にへばりつき、『初春　飾利』がその後ろで苦笑していた。

初春と佐天はアスナ達と同じテーブルに座った。流石に人数が多くなり狭くなってしまうが、テーブルをもう一つ使うには少々少ない。中途半端な数だ。
「へぇ～、脳の学者さんなんですかぁ～……あっ！　もしかして、白井さんの脳に何か問題があったんですか!?」
「落ち着いてね、初春さん。今回は、幻想御手（レベルアッパー）の件で意見を聞いてたんだ。」
「結城先輩？　今回はってどういう意味ですの？　そこを詳しく……ちょ、なぜ皆さん目を逸らすのですか!?」
「ま、黒子の頭の中が残念なのは置いておいて「お姉さままで!?」幻想御手（レベルアッパー）についての話を続けましょうか」
黒子の扱いがあんまりだが、これがいつも通りかつ、日常的に、しかもハイテンションに同性の御坂に過剰なスキンシップを取っていれば反論できない。愛情表現も度が過ぎればこうなってしまうのだ。
席について早々、大きなパフェを頼み休むことなく頬張っていた佐天だったが、幻想御手（レベルアッパー）という単語に反応して、大慌てで口の中のものを飲み込んだ。
「幻想御手（レベルアッパー）ですかっ!?　それなら今「さて。私達が考えることは、どうやって幻想御手（レベルアッパー）の所有者を保護するかだね」……え？」
アスナの言葉に、ジーパンのポケットに突っ込んだ佐天の手がピタリと止まる。
「あ、え？　ど、どうしてですか？」

「幻想御手（レベルアッパー）の詳細な情報を得るためっていうのもあるが……ここまで数字で出てきたら、幻想御手（レベルアッパー）に何かしらの副作用があるのは、間違いないの」
「だから、出来る限り使用前に回収したい、という訳ですわ」
「それに、使用者が容易に犯罪に走る傾向もみられますしね。武道が心を鍛えることも大切だと耳にタコができるくらいに言っているのが、今ではよく理解できますわ」
　黒子は心底軽蔑するといった様子で首を振る。自分の努力なしに力を手に入れたとしても、それを扱う心が追いつかないという事だ。その理論で考えると、翔もそれらと同類になってしまうが。
「……」
「……」
　アスナと狂三は長いまばたきでその考えを払拭する。
　佐天は、先程までの笑顔を固まらせ、ゆっくりとポケットに入れていた手を、握っていたものが外に出ないようにそっと元の位置に戻す。
「どうかしたの、佐天さん？」
「い、いえ、なんでもないです！　なんでもないですから!!」
　そんな不自然な動作を御坂に見られ焦った佐天は、テーブルに置かれた飲み物を、木山の太腿に盛大に零してしまう。ストッキングでは吸収しきれない分が、座席や床に水たまりを作る。
「ん？」
「あっ！　ご、ごめんなさい!!」
「いや、気にしなくていい」
　そう言って木山は立ち上がり、迷わずストッキングを脱ぎだす。あわててハンカチを取り出していた佐天もそれにはびっくり仰天だ。普段から初春がしっかりパンツを履いているか確認するためにスカートをまくり上げている彼女でも衝撃は大きかったらしい。
「だから！　人前で脱いではいけませんとあれほど……ッ！　どうしてあなたはッ!!」
　風紀にうるさい（自分は除外して）白井の説教はしばらく続いた。

「……なるほど、これを今度翔さんの前で……」
「絶対にやめてね、狂三ちゃん」
こんなことを口にしている娘もいたとか。

「いやだ……手放したくない……」
佐天は会議がお開きになるとすぐに、みんなから離れた。誰にも気が付かれないように、こっそりと。
佐天のポケットには音楽プレーヤーが入っている。先ほど取り出すのを躊躇したのはこれだ。音楽プレーヤーに入っているのは、ただの楽曲ではない。会話の中で散々話題にしていた――
「……でも、まだ試したわけじゃないし。だ、第一、本物と決まったわけでもないし……」
そう自分に言い聞かせて、親友達に明かさなかったことを正当化する。
「やっと、手に入れられたんだもん……」
長い間望み続けた末に手に入れることが出来た、最後の希望。そう易々と手放せる代物ではなかった。
「佐天さん！」
佐天が振り返ると御坂が走ってきた。音楽プレーヤーを見えないようにポケットに突っ込む。
「御坂さん……どうしました？」
「だって急にいなくなるんだもん。……どうかしたの？　何かあった？」
「あ、あはは、何もありませんよ！　そんな、報告するようなことは、何にも……」
ぎこちなく、声だけでも明るくしようと努める佐天。御坂は何かあったのだと確信するが、どのような言葉をかけていこうか迷ってし

まう。その間にも、佐天の口からはスラスラと言葉が紡がれた。
「だって、アタシだけ事件とか、関係ないじゃないですか。みんなと違って、特にできる事とかありませんし。今回の依頼だって、初春とか、御坂さんとか、白井さんが受けるから受けただけで、やっぱり役に立ってませんし」
（……それどころか、足引っ張ってますし）
ポケットから手を出し、両手を広げて、普段の自分を必死に演じる。しかし、作り笑いでだませるほど、御坂は甘い相手ではない。
ポケットからお守りが落ちた。
「あ」
御坂が拾って手渡す。
「それ、いつも鞄に付けてるやつよね？」
「……はい。ここに来る前、母に持たされました。弾除けになればって……お守りなんて、科学的根拠ゼロなのに」
「優しいお母さんじゃない」
御坂は微笑みながら言う。佐天は背中を向けた。
「でも、その期待が重い時もあるんですよ……私、向いてないのかもしれませんね、武偵」
「そんなこと無いわよ。私たち、まだまだ中学生なんだから。これからゆっくり考えればいいじゃない」
しかし、中学生の身でレベル5に到達している御坂の言葉は、佐天の心に響くことはなく、かろうじて佐天が返せたのは苦笑だけだった。

ファミレスで話し合った翌日、佐天は、一人であてもなく街を彷徨っていた。その手には、例の音楽プレイヤー。もちろん曲を聴いて

いるわけではなく、その中に入っているものをどうするのかを考えているのだ。
「幻想御手（レベルアッパー）……あたしみたいなのでも能力者になれるかもしれない、夢のようなアイテム、か……」
悩むことはない。携帯電話の電話帳、そこに登録されている初春辺りの番号にかけてこのことを打ち明けてしまえばそれでいい。それが普通の行動だ。しかし、そんな簡単なことが、中々出来ずにいた。
一晩悩み、それでも答えが出ず、こうして歩き回っている。
「得体のしれないものはやっぱり怖いし……よくない、よね……」
最後の最後、佐天の良心が少しだけ天秤を傾けてくれた。
「話が違うじゃないか！　譲ってくれるんじゃなかったのか!!」
どこからか、男の必至な声が響いた。佐天は辺りを見回すが、そんな大声を出した男は見当たらない。聞こえてきた方向に歩を進める。すると工事をするためか諸々の道具が置かれたビルの裏側にたどり着いた。裏側と言っても日は差し込み明るい、不思議な空間になっている。
「残念だったねぇ。ついさっき値上がりしちゃってさぁ」
「そういう事。こいつが欲しけりゃ、もう１０万もってきてよ」
見るからに不良という姿の男数人が、地面に無様に転がっている男を囲んでいた。
「だ、だったら金を返してくがっぁ!!」
髪を悪趣味に染めていた男に縋りつくが、蹴り飛ばされてしまう。それを皮切りに、蹴りの雨が降り注いだ。男のうめき声はどんどん小さくなっていく。
「馬鹿かお前！　ごちゃごちゃ言ってねぇで金持って来いって言ってんだよ！」
笑い声と暴力がどんどん大きくなっていく。その中の一人、髪を金髪に染めた男が冷めた口調で言った。
「おい、お前ら、レベルがどれだけ上がったのか、そいつ使って試してみろよ」
「はっ！おいマジかよ、お前終わったなぁ～」

「死んじまうんじゃねえか!?　ハハッ!!」
「ヒィ！　や、やめてくれ！　お、お金なら持ってくるから!!」
まだ中学1年生の佐天にはきつい光景だ。もうお金のことは関係なく、弱い者をいたぶるだけになっている。
ああいう輩はここにはたくさんいる。この島では中学に入ると武偵としての授業が始まる。もちろん上の学年、先生から見ればヌル過ぎる内容だ。しかし、武偵を夢見ていた少年少女達の何人かは、キツ過ぎる部活動をやめてしまうように、ここで心をへし折られる。
さらにそれを乗り越えても自分の才能の無さ、他人との才能の差、人には向き不向きがあり、ここでも振るいにかけられる。
そうして零れ落ちた者達が、ああいった存在になる。半端に覚えた暴力であるため、それなりの武偵はものともしないが、殴る蹴る以外の方向に進んだ生徒にはこれで十分だ。今のように囲んで痛めつければいい。
（と、とりあえず、誰かに連絡……っ！）
佐天は助けを呼ぼうと考える。非力な彼女としては一番の選択肢だ。
「あっ、そん、な……充電切れ……!?」
幻想御手（レベルアッパー）の取り扱いについて悩んでいたせいで、昨晩は充電するのを忘れてしまっていた。
佐天はもう一度だけ、理不尽に振るわれる暴力を目に移し、背を向けた。
音を立てないように、来た道を歩いていく。
「だってしょうがないじゃん。私が向かったって、何か、出来るわけでもないし……」
そう自分に言い聞かせ、意図的に歩みを早くする。一刻も早くここから立ち去ってしまいたい。頭はそれでいっぱいだ。
「相手は男４人で、あんないかにもな格好してるんだし……っ。あたしみたいな女の子が出ていったら、何されるか、分かんない、し……」
口に出す言い訳とは逆に、踏み出す足は遅くなっていく。
「絡まれてるのは、何の義理もない、会ったことすらない、赤の他人な

んだから……」
佐天の足が完全に止まった。

「や、やめなさいよ。……その人……怪我してるし……すぐに、知り合いの武偵が来るんだからッ！」
佐天は勇気を振り絞って立ち上がった。自分が思っている半分の声も出せていなくても、足が震えても、怖くて不良たちのことを見れなくても。佐天は一歩を踏み出した。
不良集団の一人、能力を使ってみろといった男が、突然の珍客とセリフにニタリと笑い、佐天の顔の真横の壁を蹴りつけた。
「ひっ！」
「おい、今なんつった？」
いたぶる為ではない、何の手加減もない一撃に、思わず頭を抱えしゃがみこむ。蹴られた部分の壁が、大きく陥没してしまっている。何の構えもしていない人に当たれば骨折は避けられない威力だ。
「いいかぁ？よ～く覚えとけ、お嬢ちゃん」
蹲った佐天の髪を掴み、無理やり顔を上げさせる。近くで見る男の顔は、薬でもやっているのか、ところどころ歯が抜けてしまってひどく醜い。
「何の力もねぇガキが、ゴチャゴチャ指図する権利はねぇんだよ！」
「ッ！」
かき集めた勇気が、粉々になった。佐天の目の前が真っ暗になり、周囲の音が遠ざかっていく感覚に苛まれる。
そんな時でも、後ろからの声はやけにはっきりと聞こえた。
「あなたたちみたいな人たちに、佐天さんの勇気を笑う権利は無いわ」
「貰い物の力を自分の力と勘違いしているあなた方が、わたくしの友

達を笑うことなど断じて許しません」
シャン、と鞘からレイピアが引き抜かれる。
『白井　黒子』と『結城　アスナ』が、そこにいた。

再燃する劣等感

先に動いたのは黒子だった。アスナと並んで立っていたはずが、まばたきの後にはそこから消失している。空間移動（テレポート）を使ったのだ。

蹲って頭を抱えていた佐天と、地面に倒れていた男子学生のもとに移動。２人を順番にアスナの後ろに転移させた。

第一の仕事を終え、ひとまず安心する黒子。空間移動（テレポート）についてこれる人物は少ないが、特に妨害されなかったことは幸運だった。おかげで２人を人質にされることはなくなった。

「佐天さん、大丈夫だった？」

「は、はい。ありがとうございます結城さん。白井さんも、ありがとうございます」

「お気になさらず、佐天さん。それで、結城さん」

「うん。多分、あの金髪の人がリーダーだね。ほかの人たちとは全然違うよ」

自分の剣士としての勘があの男に対して警報を鳴らしている、そうアスナは言っているのだ。

黒子とアスナ。この２人は幻想御手（レベルアッパー）事件を捜査することになってから、よく一緒に行動している。

黒子の方は、実力で言えば圧倒的に御坂の方が上だが、本人が気ままに動くというどうしようもない理由があり超電磁砲組の実質的なリーダーに収まっているし、アスナの方も狂三が神出鬼没で、その他のメンバーが前に出て話し合いをする性格ではない事もあって、黒子と接する機会も多かった。

「分かりました。では、わたくしがあの男の相手を」

「気をつけてね。確実に幻想御手（レベルアッパー）使用者だから。危なくなりそうだったら連絡してね」

「結城さんも」

そう言い残した黒子は金髪の男の前に空間移動（テレポート）で移動。少し触れてまた消える。廃ビルの中を決闘の場所に選んだのだ。

「くそッ！　あのガキ、空間移動（テレポート）持ちなのかよッ！」

事態についていけていなかった男たちだが、ここでようやく状況を飲み込めたようだ。
そんな男たちに、アスナは一歩踏み出す。
「あなたたちの相手は私よ」
アスナからの闘気に男たちは後退る。
「佐天さん」
「は、はい!?」
「動けるかな？　動けたら、そこの男の人をもう少し後ろに下げてほしいんだけれど」
男の人、というのは、リンチされていた男のことだ。無抵抗のまま蹴られていた男は一人で動くのも厳しそうだ。
「は、はい！　わかりました！」
「佐天さん、ありがとう」
「……いいえ、気にしないでください」
アスナが優しい顔を見せたのはそれが最後だった。男たちと見合ったときには剣士の顔になっている。
その年齢とは思えない、まるで長年本当の命の取り合いをしてきたようなアスナの本物の殺気。それでいて、歩くスピードはゆったりとしている。
「ぐはぁ！」
そして、ゆったりとした動作とは対照的な、神速の刺突。殺害を禁止してあるために、アスナの希望でレイピアの先は潰してあるが、十分すぎるほどの威力が出た。
指一本動かせなかった不良たちは、白目をむいて倒れる仲間に現実に引き戻された。
慌てて自慢の能力を発動させようとするが遅すぎた。アスナは流れるように2人目を仕留める。
一人になってしまった不良だったが、開花した能力が磁力操作だったのかアスナのレイピアを無理やり奪った。
「ハッ！　どうだ！　これでおまゴフッ!!」
しかし、武器が無くなったとしても、アスナに勝てるわけがなかっ

たのだが。
そんなことは、鼻先に拳を叩き込まれた男には、遅い忠告だった。
佐天があっけにとられるほど、あっさり終わってしまうのだった。

場所は変わり、時間も巻き戻る。黒子と金髪が無人のビルの中で向かい合っていた。
２人の手には武器の類は見られない。黒子はアスナと違って鞄を持ったまま、余裕の表情でツインテールをいじっている。金髪の方も特に構えることはない。それどころか脱力してゆったりと構えていた。
「ハハッ！　面白い能力だなぁ、オイ！　空間移動（テレポート）ってヤツか！　まさか体験できる日が来るとは思わなかったぜ！」
「別に、わたくしはあなたを楽しませるつもりでこんな所に連れ込んだわけではありませんの。暴行傷害の現行犯であなたを拘束しま――」
「――俺たちゃよぉ、幻想御手（レベルアッパー）を手に入れる前は、お前達みたいな奴らにビクビクしてたんだよなぁ……」
黒子の事務的セリフを遮り、金髪の男はクツクツと笑う。今のこの状況を楽しんでいると言わんばかりの顔で、楽しそうに。
「だからよぉ、でっけぇ力が手に入ったら、お前らをグチャグチャにしてやりてぇって思ってたんだぜ!!」
金髪は両手を広げて黒子に襲い掛かる。小柄な黒子の体は、男の巨体が体重をかけるだけでつぶれてしまいそうなくらい、２人には体格の差がある。
それでも、黒子の顔に焦りの色はなかった。
いつも通り、なんの代わり映えもなく、相手の後ろに空間移動（テレポート）して、

後頭部に鞄のフルスイングを叩き込めばそれで終わりだ。
しかし、目の前に金髪の男はいなかった。
「……え？」
この距離で空間移動（テレポート）をミスするわけがない。間違いなく男の後ろを取るように空間移動（テレポート）した。
そんな思考でいっぱいになっていたが、日ごろの訓練のおかげか、背後からの敵意にとっさの盾が間に合った。
「おっと、防がれちまったか……」
鞄越しで威力が大きく減らされていたとはいえ、この男の蹴りは壁をへこませることが出来る。思った以上の蹴りと、下手をすれば自分がアレを食らっていたという事実に黒子は冷や汗を流す。
（なら飛び道具で！　この金属矢を右肩に直接転移する！）
黒子の空間移動（テレポート）は、触れたものを本人のスペックが許す重さ、距離の範囲内に自由に転移させるというものだ。転移した物体はそこにあるものを押しのけて転移されるので、極論、紙が一枚あればダイヤモンドでも切断できることになる。この特性を利用しての攻撃だ。
黒子は自身のスカートの中、普通の武偵なら拳銃のホルスターが巻かれているそこには、特注の金属矢が、これまた特注の革ベルトに収められていた。矢の先端はそれほど尖っているわけではないが、空間移動（テレポート）で飛ばすことを前提にしているため、大した問題にはならない。
しかし、その金属矢は金髪の体付近の空間に現れ、虚しく床に落ちてしまう。
（私が外したッ!?　この距離で演算を間違えるはずが……ッ!?）
巡らせていた思考は、金髪の蹴りによって中断された。腰のひねりを加えた重い蹴り。
空間移動（テレポート）は火を出したりする能力とは違って、扱いがとても繊細だ。しっかり待ち構えているならともかく、別のことに思考を巡らせていた黒子は空間移動（テレポート）で逃げる選択を使えなかった。
しかし、金髪の攻撃も何の変哲もない蹴り。同じようにカバンを盾にすれば十分防げる。そんな黒子の考えは、脇腹に突き刺さった蹴り

が肺の空気をすべて吐き出させ、ミシッとアバラ骨が嫌な音を立てたことで崩れてしまった。
「けほっ、けほっ!!　ぁ、ぅっ……っ！」
埃がうっすら積もっている床を転がる黒子。体中から嫌な汗が一気に噴き出してくる。
黒子の鞄に当たる瞬間、足がありえない方向に曲がったのだ。
「な、にが……っ！」
「今のはいい感触だったなぁ。相当効いたんじゃねぇか？　ハハッ!!」
苦しむ黒子などお構いなしに金髪は近づいていく。黒子は痛みを堪え、残しておいた矢を投げた。空間移動（テレポート）を使わずに、物理的にだ。
回転しながら金髪に飛んで行った矢は、途中で軌道を大きく変える。何の力も加えていないというのに、進行方向が変わったのだ。
「なんだぁ～？　もう能力も使えねぇくらいにへばっちまったのかよぉ？　まだこっちは遊びたりねぇぞ、おらぁ！」
ヘラヘラしながら近づいていく金髪に対して――黒子は背を向けて逃走を開始した。階段を見つけ、上へと昇っていく。
「次は鬼ごっこか？　いいぜ、付き合ってやる。ただし……この廃ビルの外に出たら、外にいる奴らをブチ殺す！」
金髪は何本か歯が抜けた口で凄惨な笑みを浮かべるのだった。

そして最上階。とうとう黒子は窓際まで追い詰められてしまった。
途中で何度か見つかるも空間移動（テレポート）で逃げ延びていたが、この音がよく響くビルでは一時しのぎにしかならなかった。ダメージを追っている黒子がいつまでも逃げられるわけがない。
「そろそろ鬼ごっこにも飽きてきたなぁ。いい加減、終わらせようか」

金髪がポケットからナイフを取り出し、黒子との距離を詰める。
「んでよぉ、結局、俺の能力は分かったのか？」
「……自分の周囲の光を捻じ曲げ、対象の認識を誤らせる能力」
「へぇ～気づいてたのか」
「あなたによく似た能力の人を知っていますの」
黒子が昔扱った事件の犯人の中には、認識を阻害するという能力があった。それをヒントにして推理したのだ。
金髪の能力は、光を捻じ曲げることで、実際とは異なる景色を見せるというもの。だから、空間移動（テレポート）の演算式に狂いが生じ、蹴りの軌道が急に曲がって見えたのだ。
「誤った位置で光の像を結ばせる――だから、投げたものがあり得ない軌道を描いたように錯覚させられた……」
「偏光能力（トリックアート）っていうんだけどなぁ……けどよぉ、分かったからってお前に何ができるんだぁ？」
「確かに……あなたに当てることはできませんが」
白井は手を伸ばし、適当な大きさの窓ガラスをビルの柱に転移させた。転移した窓ガラスは建物の重みで割れ、柱に斜めの切れ込みが入る。
「はぁ？　何がしてぇんだよ、お前は？」
「わたくしの能力は、移動する物体が移動先の物体を押しのけるように転移しますの。紙切れ一枚あればダイヤモンドも切断することが出来ますのよ。これが最後通告です。武器を捨てて投降しなさい。抵抗すると、安全は保障しかねますわよ」
そう、『紙切れ一枚あればダイヤモンドも切断することが出来る』、この特性を生かしたとっておきの作戦。黒子としても使いたくない最後の手段。それを金髪は笑って無視した。
「投降？　笑わせんじゃねぇ！　どんなに凄え能力だろうと、当たんなけりゃ意味ねぇだろうがッ！」
「そうですの。できればやりたくなかったのですが……いいでしょう。あなたのその小賢しい目くらましごと――叩き潰してさしあげますわ！」

白井が駆け出す。金髪の男は警戒したが、やり始めたのは窓ガラスをどこかに転移させるというもの。行動の意図が読めない金髪に、作戦を完遂した黒子は爽やかな、そしてどこか皮肉めいた笑みを向けた。
「ビルを支える柱が『全て』切断されたらどうなるか、お分かりですわよね？」
金髪の表情が固まった。
「おまッ、ま、まさか……ビルごと……ッ!?」
もう遅かった。
取り壊し予定のビルは、その予定よりも早く崩れ去るのだった。

「うわぁ……」
アスナは崩壊していくビルを呆然と見ていた。
黒子よりも早く制圧を完了していたアスナだったが、ビルの中には入らなかった。拘束した不良から目を離して逃げられてはマヌケだし、ビルの中に入った金髪が黒子を無視して外に出てくるかもしれないからだ。
それでも少し遅すぎると思って突入しようかとも思ってはいたのだが、
「ビルが崩れるなんて……」
アスナが中に入っていたら大変な事になっていたかもしれない。黒子はドヤ顔でビルを潰したがこう考えるとちっとも笑えない。
ついでに言えば解体方法が方法なので、アスナには誰が原因でビルがつぶれたのかがわからない。
傍らにいた佐天も顔を青くしている。
そんな二人の前に、金髪の首根っこを掴んだ黒子が空間移動（テレポート）してき

た。金髪は瓦礫に押しつぶされそうになったことで腰を抜かしてしまったようで、お父さんに睨まれた子供のように小さくなってしまっている。
「少々やり過ぎた感も否めませんが……まぁ、取り壊す予定のようでしたから良しとしましょうか」
「いや、やり過ぎだからね？」
「え」
一仕事終えて一息つこうとしていた黒子は、アスナが笑っていないのを見て後ずさる。そんなに長い付き合いではなくても、この笑顔の意味するものが何なのかは分かる。
「はぁ……ま、そのことについては後にしようか。まずは幻想御手（レベルアッパー）について聞かないとね」
「そ、そうですわね！　さすが結城先輩！　どんな時でも目的を見失わないその姿勢は常日頃から学んでおきたいと思って――――」
「仕事、しようか？」
「はい」
2人はへたり込んでいる金髪を威圧するように見下ろした。
「幻想御手（レベルアッパー）について知ってることを話してくれる？」
「素直になった方が身のためだと思いますが？　私はともかく隣のお方が何をするかわかったもんじゃありませんよ？」
「ひ、ひぃ！」
金髪にしてみれば黒子は、自分一人のために建物一つ潰した奴なわけで。横の笑顔のアスナも完全に恐怖の対象なわけで。金髪に選択肢は無いわけだ。
ポケットから取り出されたものに2人は眉を寄せた。
「音楽プレーヤー？」
「ふざけてますの？」
「ひっ、ち、違う！　れ、幻想御手（レベルアッパー）は、『曲』なんだよ！」
予想外の供述に2人は眉を寄せる。必死な顔には嘘は見られない。ようやくつかんだ手掛かりから情報を少しでも引き出そうとする2人。

そんな2人は、またしても佐天が居なくなってしまったことに気が付けなかった。

2人の無事を確認した佐天は、またしても気が付かれないようにその場を離れていた。アスナは武器一つで男3人を倒してしまい、黒子はどんな風に能力を使ったのかは知らないが、ビルを一つ潰してしまった。

自分には到底できないことをやって、涼しい顔をしていた。

一度抑えつけたはずの気持ちが再燃し始める。

「涙子〜！」

その時、向こうから佐天を呼ぶ声がする。それは彼女の学校の友達だった。それも、『そういう』授業についていけていない、佐天と同じ側の。

「アケミ。むーちゃんとマコチンも」

4人の少女は歩調を合わせて歩き始める。

「一人で何してたの？　買い物？」

「……まぁ、そんなとこかな。アケミたちは？」

「図書館で勉強だよ。ほら、今度テストあるじゃん？　実技はダメでも勉強くらい頑張らないとね」

「……あは、そうだね……」

すると、アケミが立ち止まり

「あ、でも聞いた？　幻想御手（レベルアッパー）ってのの」

「……っ！」

佐天の体が固まる。

「え？　何、それ？」

「あ、私知ってる！　能力が上がるってやつでしょう？」

「そうそう。噂じゃあ、今それ高値で取引されてるらしいの」
「え～、お金ないよ～」
視界が歪み、頭がくらくらしてくる。それでも、体と唇はひとりでに動く。
「あ、あのさ！」
佐天は、
「あたし今、それ持ってるんだけどっ！」
震える手で音楽プレーヤーを差し出した。

後は任せた

なんか最近、病院が騒がしいように思える。や、そこまで入院したことがあるわけではないし、そもそもこの病院のことをそこまで知っている訳ではないと言えばそうなのだが、それでも、違和感を感じることはある。

「――で、そこの所どうなんですかね、御門先生？」

「余計なことは気にしないでいいの。繁盛期みたいなものだと思えばいいんじゃないかしら？　花粉の季節にみんながマスクをするみたいなものよ」

ケガ、病気、病院に繁盛期があるというのは新説だな。そして例えが意味不明。

「そんなこと言っても、実際俺の部屋の両隣は埋まりましたよね。ほとんど同時に」

俺も伊達に寝っ転がっているわけではない。廊下から聞こえてくる声だって重要な情報になるし、出歩くこともできるようになって活動範囲が広がったことも、俺の勘を補強してくれている。

「ただの偶然よ。いいからおとなしくしてなさい。ね？」

「……ちなみに、両隣に入ってきた人たちはどんな症状なんですか？」

「それは人のプライバシーにかかわることよ。私の口からは言えないわ」

「それじゃあ、仲良くなって直接聞くことにします」

「いいからおとなしくしてなさい。退院まであと少しなんだから。っと」

都合よくかかってきた電話に出ることで、それ以上の追及が出来なくなってしまう。

そんな言い方すると、何かあるって認めてるようなもんなんだけど。でも御門先生のことだから、ブラフの可能性も捨てきれないか。

ま、予想はついてるけどな。

いくらなんでも、病室に入ったっきりで、物音ひとつしないのは尋常ではない。それこそ、昏睡状態にでもならない限りは。

早い話、幻想御手（レベルアッパー）の昏睡患者がいるんじゃあないかと疑っているわけだけど。
セキュリティ面でかなり頑丈に作られているこの病院、患者の個人情報なんてそう楽々と知ることは出来ない。顔見知りの御門先生に聞くっていう最終手段に打って出たけど、当てが外れたな。
幻想御手（レベルアッパー）事件がどこまで進んでいるのかはわからないけど、もしもの時に備えてアリアにはアレを使うように言っておいたし、何とかしてくれるでしょ。あのメンバーなんだから。
「――はい、はい、わかりました、すぐに行きます。それじゃあ、急患が入ったから、もう行くわね。おとなしくしてなさいよ」
電話を切った御門先生は、少し険しい様子で部屋を出ていくのだった。たしか、今日のお見舞いは耀とクロだっけか。鋭い2人だし、余計な行動は慎んで寝転んでようかな。

アケミは両手をぐっと前に突きだして力を込めた。すると、一般人から見れば驚くことに、手のひらの先にいた少女の体が徐々に宙に浮き始めた。
「す、凄い！　凄いよ、涙子！　私、紙コップを持ち上げるのがやっとだったのに！」
佐天はアケミの興奮した笑顔に、苦笑いしながら手を振り返した。手に入れて数十分の能力を使っているときに意識を逸らしてしまえば、能力が途切れてしまうのは必然だ。
アケミのサイコキネシスで浮かんでいた少女は、お尻から落下してしまう。
怒った少女に復讐の延髄切りをされているアケミから目を逸らした佐天は、手のひらに小さな葉っぱを乗せ、風を起こした。

風の強さはつむじ風程度。両掌を合わせて起こした小さな風は、緑の葉をゆったりと回転させる。
佐天はその光景に、心のそこから何かが湧き上がってくる感情を抑えきれず、顔が緩んでしまう。
（白井さんや御坂さんに比べたらささやかな力……ここではありふれた力……だけどっ！）
佐天はぐっと両手を握り、空を仰いだ。
（でも、それでも、あたしの力……あたしの、あたしだけのっ！）
本当に些細な、戦闘どころか、日常生活でもまともに役に立たないような、そんな小さい異能。
それでも佐天は、涙が出るくらい、嬉しかった。

「凄い凄いっ!!　見て見て！　こんな重いものまでここまで上げられるよ！」
「おー！　私だって負けないんだから!!」
この数時間、おもちゃを貰った子供のように能力を使っていた少女たちは、自身の能力をかなり使いこなし始めてきた。
そんなみんなを、佐天は木陰のベンチに座りぼんやりと眺めていた。
（やっぱり初春には教えた方が……怒られるよね、やっぱり）
自分が能力を手に入れた興奮が冷めたことで、これからのことを考え始める余裕ができ始めたのだ。
佐天達は、今回の事件に関わっていると思われている幻想御手（レベルアッパー）を探し、詳しい仕組みを解析しようとしている。
この音楽が幻想御手（レベルアッパー）であることが確定した今、事件の解決に手が掛かっている状態と言っても過言ではない。
（でも、仕組みが分かったら……）

きっと、今手に入れることが出来た能力は、その手から消えてなくなってしまうだろう。正規の方法で使えなかった能力を、音楽を聴くだけで使えるようにするなんて普通じゃない。きっと深刻な副作用がある。

頭に浮かんだ副作用という言葉で、冷たいものが背中に走ったような気がした。流れで巻き込んでしまった友達にもしものことがあったら――

「涙子ちゃん、どうしたの？」

「……マコチン。そっちこそどうしたの？　休憩？」

「そんな感じ。能力使うのって、意外に疲れるんだね」

しばらくお互い無言で隣り合って座る。

マコチンが口を開いた。

「私ね、アケミとむーちゃんが大好きなんだ」

「え？」

「もちろん涙子ちゃんもだよ？」

突然の独白に、佐天は鈍い頭を動かし、何も言わずに耳を傾けた。

「私はね、正直、夏が明けたら普通科に移動しようかなぁって思ってたんだ。勢いでここに来ちゃったけど、殴る蹴るもそれ以外も、私に向いてなかったんだ。魔法も超能力もからっきしだったし」

「……」

「でも、心配もあったんだよ。普通科に行ったら、みんなと気まずくなっちゃうのかなぁって。みんな、大切な友達だし、普通科に移ったら同じような友達なんて作れないと思うから。でももし、幻想御手（レベルアッパー）で能力が使えるようになったら、私、もう少し頑張ってみるね」

「……そう、だね」

その笑顔から、佐天は目を逸らすことしかできない。

重いものが地面に叩きつけられたような音が響く。落ちたのは、先程まで能力で空に浮いていたベンチ。

アケミが意識を失い倒れていた。

「ダウンロード、完了しました」
「でもまさか、幻想御手（レベルアッパー）が曲だったんですね」
「にわかには信じがたい話だけどね」
　金髪をしかるべき大人に預けた後、黒子とアスナは大急ぎで拠点に帰った。拠点には初春とティナ、理子が待機しており、この報告を聞いた初春と理子は即座にネットの海から、必要な情報を引っ張り出し始めた。そして一息つく頃――ものの３０分で――原曲のダウンロードを終わらせていた。
　黒子はティナに応急手当てをしてもらっていた。応急手当でどうにかなるケガではないのだが、黒子がどうしても幻想御手（レベルアッパー）の報告を聞きたいと駄々をこねたため、あとで必ず病院に行くと約束してここにいた。
「あ、そうだ、木山先生に連絡しないと」
　アスナは思いついたように電話をかけ始める。ものとしてはかなり信憑性が高いものを手に入れることが出来た。ここで専門家の意見を聞いておくことも悪くないと思ったのだ。
《……もしもし、結城君かい？》
「はい。実は――」
《――よし、こちらも曲の入手に成功したよ》
「それで先生……音楽ソフトで能力を上げるなんてことが本当に可能なんでしょうか？」
《ん、現時点では難しいねと思うけれどね。そもそも――》
「――はい、はい。そうですね、分かりました。ありがとうございます。それでは、何かわかれば連絡をお願いします」
「どうでしたか？」
「えっとね、木山先生は五感全てに働きかけるならともかく、聴覚だけの音楽ソフトで能力を引き上げるのは難しいだろうって、もちろん調

べてくれるみたいなんだけどね」
「んー、状況は芳しくないってことかなぁ」
理子はストローを刺したイチゴ牛級を飲みながら、みんなの心の声を代弁する。
「お疲れ様です……あれ？」
「あらあら、どうしたんですの？　皆さんそんなに暗い顔をして？」
ここで、一緒に外回りをしていた雪菜と狂三が帰って来た。開けられた扉から外の暑い空気が流れ込み、すぐに遮断される。
「お帰り、狂三ちゃん、雪菜ちゃん。何かあった？」
今日は初春と理子が一緒になって割り出した『幻想御手（レベルアッパー）』の取引が行われそうな場所』へ、分担して調査に向かっていた。アスナと黒子もそうだし、狂三と雪菜もそうだ。
何かしらの手掛かりが掴めたかという期待したアスナの問いだったが、それは残念ながら裏切られることになる。
「はい！　皆さんに報告したいことがあるんです！」
「ええ。実は、かなり有力な情報を入手したんですの」
「ッ!!　ほ、本当に!?」
「はい。なんでも幻想御手（レベルアッパー）は音楽だとか――――あれ？」
自分たちに集まっていた視線が一気に落胆の色に染まっていくのに気が付いて、雪菜の口から出る声が小さくなっていく。
狂三も訝しんだが、すぐに理解する。
「もしかすると、もしかしなくても、もう皆さん知って……？」
「うん、もう、ね……」
アスナはこれまでのことを説明した。
「そうですの……ですが、これでこの音楽ソフトが幻想御手（レベルアッパー）だという可能性が上がったといえるのでは？」
「まあ、それでも専門家の先生が難しいと言っている以上は五分五分でしょうけれど……それはそうと」
黒子は狂三に目を向ける。
「その服装はどうにかなりませんの？　クーラーが付いているのに、見ているこっちまで暑くなってきますわ」

黒子は狂三を指さして非難の声を上げた。時間帯は日中。一番お日様が高い時間から少し過ぎたころ、つまり、気温は一日の中で一番高くなっている。
「あら、この服はわたくしの勝負服ですのに……」
そんな日に真っ黒なゴスロリ服は、ちょっとした視覚兵器だろう。着ている本人はなぜか汗一つ掻いていない。自分の力を使って体温を調節しているのだ。しかし、一緒にいる人にとってはたまったものではない。
「周りのことも考えてくださいまし。時と場合によって服装や行動を――なぜそこでわたくしを見るんですの、皆さん？」
言うまでもなく、お前が言うな、である。
「曲自体に五感に働きかける効果があったとしたら、どうかしら？」
入口から聞こえてきた声に、メンバーの視線が集まる。
「神崎さんにお姉さま!?」
「それは一体どういう……？」
部屋にいるもののほとんどが？マークを浮かべる中、理子だけが鋭い顔で口の端を釣り上げていた。
「へぇ、共感覚性か。よくもまあ思いついたねぇ、アリア？」
「ま、共感覚性って言葉を出したのは美琴だけどね。私は音楽で複数の感覚を刺激できればいいって言っただけだから」
「あ、あの……説明してもらってもいい？共感覚性って？」
「ん、共感覚性っていうのは、簡単に言えば『一つの刺激で複数の感覚を得ること』よ」
「風鈴の音を聞いて音を感じるだけでなく気温も涼しく感じたり、赤系の色も見たら色を感じるだけでなく温かみも感じたり、それこそ狂三の黒い服を見て暑く感じたりね。それを応用して『音楽という一つの刺激で五感全ての感覚を得る』ことが出来れば、条件を満たすことになるんじゃあないかしら」
アリアの探偵としての直感と、美琴の知識の総合でたどり着いた結論だ。
「ちょ、ちょっと待って！　電話してみるから」

アスナは携帯を手に取り履歴の一番上の番号にかけ始めた。簡単な挨拶を済ませ、本題を告げる。
「なるほど、共感覚性か。その可能性はあるな。見落としていたよ」
「じゃあ、可能性はあるんですね！」
「ああ、十分検証してみる価値がある。それなら『樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）』の使用許可も下りるだろう」
「ッ!! 樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）……あの世界一のスーパーコンピュータ……ッ!!」
『樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）』。それは世界最高のスーパーコンピュータの名前だ。科学技術の粋を集めて作られたこれは、日常では天気予報を的中率１００％にするというなじみ深いところから、重要な実験結果をあらかじめ予測したり、と多岐にわたって活躍している。
初春が興味を持たない訳がなかった。
「あ、あの！ 私も連れて行ってはもらえないでしょうか！ 一度でいいから、樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）を操作するところを見てみたくて！」
「ふむ、君はその年でトップクラスの情報処理能力を持っている逸材だと聞いている。分かった。さすがに触らせるわけにはいかないが、見てる分には構わないだろう。うちの研究所の住所を教える。今から来たまえ。待っているよ」
「本当ですか！ ありがとうございます！」
初春は幻想御手（レベルアッパー）音楽のとっかかりが見えたこと半分、樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）の操作が見れること半分で、拠点を飛び出していくのだった。

少し先が揺らいで見えるくらいの熱気に汗を流しながら、初春は最寄りのバス停に走っていた。ここからバスを乗り継いでいけば３０

分ほどで木山の研究所にたどり着くことが出来る。
その時、初春の端末が着メロを鳴らした。
「っ！　佐天さん！」
ファミレスで別れてから電話にもメールにも無反応だった佐天からの連絡だ。初春はその場で立ち止まり、電話を耳に当てる。
「佐天さん!?　心配したんですよ、全然連絡してこないで!!　今、どこで何をしているんですか!?」
《……》
「佐天さん？　聞こえてますか、佐天さん？　……もしかして、泣いてますか？」
周りを歩く人の喧騒のせいでそれなりに大きな声でしゃべらないとはっきり聞こえないが、携帯を耳に押し付けると鼻をすするような音が聞こえてくる。
「佐天さん？　何があ――――」
《アケミが倒れちゃったよ……っ》
「……え？」
《幻想御手（レベルアッパー）を使ったら倒れちゃうなんて……あたし、全然知らなくて……っ！　こんなつもり……あたし……こんなつもりじゃ、なくて……っ》
「佐天さん、落ち着いて、ゆっくり話してください！　アケミさんがどうしたんですか!?」
《私達、幻想御手（レベルアッパー）を手に入れて……所有者を……捕まえるって……でも、捨てられなかった……何か使っちゃいけない理由があるのも……ちゃんと知ってたのに》
佐天は心にため込んでいたものを吐き出していく。初春は初春で、いつもと違いすぎる佐天の様子に、軽いパニックを起こしていた。
《私が、悪いんだよ……一人で使う勇気が、出なくて……アケミを、みんなを道連れにした……っ！》
「佐天さん！　今、どこにいるんですか!?」
何とか出した初春の声を無視して、佐天は続ける。
《ねぇ初春、あたしも倒れちゃうのかな？　ハハ、当たり前だよね。他

人を巻き込んだ張本人が、自分だけ助かろうなんて、許されないよね》
「佐天さん！」
《……倒れちゃったら、もう二度と起きれないのかな？……あたし、何の力もない自分が嫌で……でも、どうしても、憧れは捨てられなくて……っ！》
佐天は逃げるように帰って来た自分の家で涙を流していた。友達を巻き込んだ自分を責め、初春達に何も相談しなかった自分を責め、何の力もない自分を責めていた。
《……ねぇ、初春》
「なんですか、佐天さん!?」
いつの間にか、初春の目的地が変わっていた。明確な場所は決まっていないが、とにかく佐天がいるところへ。それだけを頭に浮かべていた。
初春も心半ばに聞いていて返事がぞんざいになりかけているが、
《……私って、欠陥品なのかな？》
「そんなわけありません!!」
この一言には叫ばずにはいられなかった。お腹の底から、精一杯、佐天の言葉を否定する。
周囲の人の目も気にならないくらいに、初春も顔を真っ赤にしていた。真っ赤にして、いつの間にか初春の方が大粒の涙を流していた。
「もし眠っちゃったとしても、佐天さんもアケミさんもみんな、みんな私が起こしてあげます！　ドンと任せてください！　佐天さんはきっと、『あと五分だけ～』とか言っちゃいますから！」
《……アハハ、こりゃあ、うかうか寝てられないね》
「当たり前ですよ。佐天さんは欠陥品なんかじゃありません。能力なんか使えなくたって、力なんかなくったって、佐天さんは佐天さんです……そんな悲しいこと、言わないで下さい……っ！」
《……ありがとう、初春。あとは、よろしくね》
ドン、と、佐天が耳に当てていた携帯電話が床に落ちる音が、初春の耳に響いた。

「はぁ……はぁ……」
木山に断りを入れて少し待っていてもらい、初春は佐天の家に向かった。佐天は特に場所を言っていたわけではないが、ここにいると初春は確信していた。
鍵のかかっていない扉を開ける。
「佐天さん!!」
佐天はベッドの淵に腰かけて初春と電話をしていたのだろう。今はぐったりと、横たわっている。携帯はカーペットの上に転がっていた。
佐天涙子は昏睡状態に陥った。

真犯人は

「そうですの……佐天さんも幻想御手（レベルアッパー）を……」
初春が木山の研究所に向かった後、黒子は黒子で御坂と一緒に怪我の治療のために病院に来ていた。
黒子が治療を受けている間に初春から諸々の連絡が入り、現在に至っている。
「……それで、初春は？」
「救急車に佐天さんを乗せたらすぐに木山先生のところに行くって言ってたわ。初春さんも相当参ってたわ」
初春さんも。その言葉が意味するのは、他にも参っている人物がいるという事だ。
「私さ……少し前に佐天さんからお守りの話を聞かせてもらったんだ」
「お守りというと、佐天さんがいつも持ち歩いている？」
「そう。お母さんからもらったんだって。今、思えば……あの時ちょっと彼女の様子はおかしかったのに……きっと色々話したかったはずだったのにね。あーあ、何で気が付かなかったのかなぁ……」
「お姉さま……」
御坂は最初から超能力最高ランクの力を持っていたわけではない。むしろ発現当初は、最低のレベル1だった。血の滲むような努力があったからこそ、この場所まで上り詰めたのだ。
周りとの力の差にいちいち落ち込む暇があったら、それを自分の力にできるような少女だった。
レベル5になってからはそれなりの立場になってしまったせいか、周りからは少し距離を置かれ、また御坂自身も有名税の類を嫌がったこともあり、半ば一匹狼になっていた。
今回の事件も、黒子がいなければこうして集団で受けることはなかっただろう。
そして、自身の経験から、何かと言い訳して自分を高めないような人種は、心の底から嫌悪している。御坂は佐天のことをそんな風に見

たことはないと思っている。しかし心の底では、どうだっただろうか。そんな考えに嵌ってしまっている。
（あの時の佐天さんの話を聞いて、『だったらもっと努力すればいいんじゃない』って思わなかったって断言できる……？　もしかして、いつものことだと、いつも私の周りにいる奴らと同じだと思って適当に流してたんじゃないの……？）
「……ホント、無責任なこと言ったんだよ、私」
「お姉さま……」
ひたすら上へ上へと昇って来た御坂。佐天だけではなく、多くの人が望むもの、『努力すれば実を結ぶ才能』を持っていた彼女には、決して佐天の気持ちを完全に理解することは出来ないだろう。
それ故に起きてしまったすれ違い。
御坂の悲痛な声に、黒子も目を伏せる。
「だからさ、黒子」
「は、はい？」
てっきり落ち込んでいるのだと思っていた黒子は、その予想に反した声色の御坂に面食らう。
「しっかり佐天さんには謝るわ。この事件をきっちり終わらせたらね」
「え、ああ、そ、そうですわね」
御坂の目には闘志の炎がメラメラと燃えていた。そして遅まきながらも黒子は理解する。自分が尊敬してやまない『御坂　美琴』という人物は、その程度で折れるような人ではないという事を。
「流石お姉さまですわ。どこまでもついていきます」
「ん、ありがと、黒子……よしっ！　それじゃあ初春さんの連絡を待って、また捜査を始めないとね。あんたはしっかり体治しなさいよ」
勢いよく立ち上がる御坂だったが、後ろからの声に引き留められる。
「お取込み中済まないんだけど、いいかな？」
「え？」
そこには白衣を着た人物が立っていた。その顔はどことなくあの

生物に似ている。そう、まるで御坂が好きなとあるキャラクターにも

「リ、リアルゲコ太、だと……っ！」
　そこには、カエル顔の医者が立っていた。
「ちょっと時間をもらえるかい？」
　カエル顔の医者に促されるままに部屋に入った。中では複数のグラフを映したディスプレイが青白い光を放っている。
　黒子も聞きたいという事で車椅子に乗ってついてきている。
「これがどうかしたんですの？」
「これは幻想御手（レベルアッパー）使用者の脳波パターンなんだけどね？　脳波は指紋なんかと同様に各人異なり、同じなんてありえない。でも、幻想御手（レベルアッパー）使用者には、共通パターンが見てとれるんだ」
　そう言われてみると確かにグラフが重なっているところがあるのが分かる。カエル医師が言っていることは分かるのだが、
「確かに、そうだけど……」
「これが何か事件と関係ありますの？」
「つまりだね、これは『他人の脳波パターンで無理矢理動かされている』ようなものなんだ。そうなると、人体に多大なる影響が出るだろうね」
「なるほど……それが、幻想御手（レベルアッパー）使用者の昏睡状態の原因……ッ！」
「……僕は医者だ。患者に必要なものは何だって手に入れてみせる」
　カエル顔の医者はとある女性の顔を画面に映し出した。
「これが、被害者の脳波に共通する脳波パターンを持つ人物だ」

「そうか、この間の彼女まで……」
　初春は木山の勤める研究所に到着していた。泣きはらした顔で飛び込んだため受付の人には驚かれたが。

木山の部屋のソファーに座り、事の経緯を説明している。
「私のせいなんです……」
「あまり自分を責めるものじゃないよ。一度落ち着こう。コーヒーでも淹れようか」
「そんな悠長なことを！」
木山は焦る初春を優しく宥める。
「その友達が目覚めたとき、君まで倒れていたら元も子もないだろう……大丈夫。最後はきっとうまくいくさ」
初春の体から力が抜けたことを確認した木山は、自身の宣言通りコーヒーを入れに奥の方に備え付けられている簡易的なコンロに向かった。
部屋に一人取り残された初春はなんとなく周囲を見渡す。
その時、机の引き出しから一枚のプリントがはみ出していることに気づいた。いけないことだと思いつつも、立ち上がり、そのプリントに手を伸ばした。

「そ、そんな……」
黒子と御坂が表示された人物に言葉を失う。
「ん？　どうしたんだい？　もしかして知り合いなのかい？」
カエル顔の医者の声も耳に入らない。よりによってこのタイミングでわかってしまうのか。もう少し前だったらよかったものを。
「初春さんが危ない!!」
「そう言えばさぁ」

「え？　どうかしたの？　理子ちゃん」
「今気が付いたんだけど、どうして木山先生、電話で共感覚性の事言わなかったんだろうねぇ。脳の専門家なのに。自分の得意分野なのに。思いつかなかったのかなぁ。理子だったら好きなゲームについて軽く2、3時間は喋れるんだけどなぁ」
「り、理子？　それってもしかして……」

「これも……あ、こっちも……共感覚性についての論文……？　どういうこと？　木山先生は――――」
「いけないな――――」
背後から聞こえたねっとりとした声に、初春はゆっくりと振り返った。
「――他人の研究成果を勝手に盗み見ては」
――犯人は、木山　春生。

走る車の中。しかも両手を縛られた状態で、初春は講義を受けていた。運転手と講義の先生はもちろん木山　春生だ。
「まず、幻想御手（レベルアッパー）というのは複数の脳波を同一化することで脳のネットワークを構築し、高度な演算を可能にするためのもの。――つまり、能力の向上はただの副産物……。同じ脳波のネットワークに取り込まれることで、一時的に能力の幅と演算能力が上がっているだけに過ぎない。ただの一過性のものだ」
能力の上昇にはさほど価値はない。木山の言葉をそう受け取った

初春は激昂した。
「ふ、ふざけないでください!!　じゃあ、なんですか!?　あなたはたくさんの人達をぬか喜びさせる為に、こんな大それたことをしたんですか!!　確かに、歪んだ欲望と邪な目的で幻想御手（レベルアッパー）を利用した人もいました……でも!　一縷の望みをかけて!!　最後の希望として、幻想御手（レベルアッパー）に夢を見た人達もいたんです!!　あなたは!!　そんな人達を絶望させるために、こんなことをしたっていうんですか!!!」
　親友の心からの本音を聞いた今回の事件。こんな形で聞きたくはなかった。親友がどれだけ悩んで、どれだけの思いを託して幻想御手（レベルアッパー）を使ったのか。
　それを考えると、初春には平静を保つことが出来なかった。
「落ち着きたまえ。言ったろう、レベルの向上はただの副産物だと。私の目的はもっと別にある」
「……え？」
「他人の能力に興味はない。私の目的はもっと大きなものなんだ」
「……どういうことですか？」
「とても大事な実験のシミュレーションを行う為に、何度か樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）の使用許可を申請しているのだが、全て却下されてしまってね。代わりの演算装置が必要になったんだ」
「……それで、能力者でネットワークを作ろうと？」
「ああ。一万人ほど集まったから、十分に機能するだろう」
「ッ!!」
　全く感情が読めない木山の声に初春の思考が凍り付く。
　一万人。その数が意味しているのは、幻想御手（レベルアッパー）によって昏睡状態に陥った人たちの総数だ。その中には当然、ほんの一時間前に意識を失った佐天も含まれている。
「そう睨むな。今言ったように、私はあるシミュレーションをしたいだけ。それが終われば全員を解放するよ」
「信用できません。こんな大事件を引き起こした犯罪者を、そう簡単に信じられると思いますか？」
「思わないな。だったら、これを君に預けておこう」

そう言って木山は白衣のポケットから一枚のメモリーカードを渡す。
「……これは？」
「幻想御手（レベルアッパー）をアンインストールする治療用プログラムだ」
「えッ!?」
「もちろん後遺症は残らない。全て元通りになる。誰も犠牲にはならない」
「……何の臨床試験も行われていないものを安全だと言われても、何の説得力も感じません。そもそも現時点で、幻想御手（レベルアッパー）の使用者に死者が出ています」
「耳が痛いな。しかし、情報処理能力に長ける君になら分かるだろう。ウイルスというのは、拡散性と同じくらい、あるいはそれ以上に除去性も良くなければ意味がない。そうだろう？」
「コンピュータ・ウイルスと幻想御手（レベルアッパー）を一緒にしないでください！」
その時、カーナビのディスプレイに何か文字列が表示された。
「……思ったより早かったな。君との交信が途切れてから動き出したにしては早すぎる。君の友人が優秀だったのか、別のグループなのか……どちらにせよ、間一髪だったというところか。私の研究室のＰＣを所定の手続きを踏まずに起動させると、データが全て消去されるようにプログラムしてある。部屋に残していた書類は共感覚性についてのものだけだ。これで幻想御手（レベルアッパー）使用者を起こせる可能性は、君の持つそれだけという事だ」
「ッ!!」
木山が冗談を言っているように見えなかった初春。メモリーカードを持った手のひらに嫌な汗をかいていく。何かの拍子に無くしてしまったら、落として踏んづけてしまったら、佐天だけでなく、約一万人の幻想御手（レベルアッパー）使用者が昏睡状態から――少なくとも他の技術者が幻想御手（レベルアッパー）の仕組みを解明するまで――回復しないことになる。
顔を青くしている初春を見かねたのか木山は声をかけてくる。それは木山の普段の様子、今犯している罪からは想像出来ないくらい優しいトーンだった。

「大切にしたまえ」
「っ!!　は、ぃ……っ」
　車は高速道路に入った。目的地は決まっているのか、木山のハンドルには迷いがない。しかしそれでもブレーキを踏まなければいけなくなってしまった。
　前方が、多数の車と武装した集団によって封鎖されているのだ。
「……管理局員か。上からの命令があったときだけは動きが早い連中だな」
『木山春生だな。幻想御手（レベルアッパー）散布の被疑者として拘束する。おとなしくお縄につくじゃん！』
「どうするんです？　どうやら年貢の納め時のようですよ」
　装備に身を固めた集団。着の身着のままに飛び出してきた木山に歯が立つような相手ではない。
「……先程も言った通り、幻想御手（レベルアッパー）は人間の脳を利用した演算機器として作った」
　木山はドアを開けて車の外に出た。
「だが同時に、使用者に面白い副産物を与えてくれてね」
　ドアを閉めて車の前に立った。素直に降りてきた木山を見て、投降すると思っていた局員は銃を構え直す。
　木山は向けられる無数の銃口を流し見て言った。
「面白いものをみせてやろう」
　真っ赤に染まった目で。

「なんですか、これ……」
　現場に着いた御坂と雪菜が目にした光景は、ボロボロになった管理局員、外装が大きく歪んだ車両群、そして、気怠そうに立つ木山だっ

た。
「管理局が全滅したの？」
まさか、そんなわけがない。曲がりなりにもプロの集団を研究者の木山が全くの無傷で制圧できるわけがない。
しかし、現実に目に映るのはその結果だ。
異様な事態に御坂と雪菜の警戒心が跳ね上がる。
と、少し離れたところに止まっているスポーツカーに、見覚えのある花飾りが見えた。
「あ！　御坂さん、あれ！」
「っ！　初春さん!!」
２人ははその車に駆け寄る。初春は気絶しているようだった。
「初春さん!!　しっかりして!!」
「安心したまえ。彼女は戦闘の余波で気を失っているだけだ」
木山がこちらに向き直る。明らかに事情を知っているはずの２人に対して余裕の態度をとる木山。
「私のネットワークにはレベル５は含まれていないが、さすがの君も私のような相手と戦ったことはあるまい」
戦闘態勢に入る２人の耳に、黒子からの通信が入った。
『気をつけてください、お姉さま!!　木山春生は能力者、それも複数の能力を使うことが出来る『多重能力者（デュアルスキル）』ですわ!!』
「はぁ!?　何を言ってるのよ、黒子！　個人が複数の能力を使用するなんて理論上不可能なはずでしょう!?」
超能力は一人に一つ。その個人の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）によってその性質が決まる科学の超能力は、表面上は似ていても、それぞれ固有のものとなる。
「違うな。私のこれは実現不可能とされるそれとは方式が違う」
木山の手から竜巻が発生する。時間を置くごとにどんどん大きくなり、
「言うならば、『多才能力者（マルチスキル）』だ」
２人に向かって発射される。
「ッ！　雪霞狼!!」

「ふむ。神格振動波駆動術式か。残念ながら魔力無効化術式は意味がないな」
雪菜はとっさに展開した雪霞狼を振りかぶるが、風圧はあっさりと2人の体を持ち上げる。三半規管がめちゃくちゃにかき回されながらもなんとか着地した2人に、間髪入れず今度は無数の火炎弾が襲い掛かった。
雪菜は木山の言葉がブラフの可能性を考えていたが、それはあっさりと否定されてしまった。マジックアイテムを使っているわけではないのだ。
のんびりとした口調とは裏腹に、攻撃の手は緩めない。
「ッ!!」
御坂は電撃を放射し火炎弾を相殺する。
「本当に複数の能力を使ってますね……」
「ええ、本当に勘弁してほしいわ。ティナはまだ狙撃ポイントに入れないの？」
『はい。もう少し待ってください』
インカムからティナの声が聞こえてくる。多少雑音が入ってくるのは移動している証拠だろう。
眩暈が収まった2人は木山と向き合った。明確な敵として。
「倒す!!」
「行きます!!」
最後の決戦の火ぶたが切って落とされた。

決戦

「ん、ダメっぽいね。データ、完全に飛んじゃってるよ。復元も無理っぽいかなぁ……」
理子はマウスを動かし、ファイルをクリックするが、その中にデータは一つも残っていなかった。
木山が犯人である可能性が高いと判断したアスナたちは、アスナ、理子、狂三というメンバーで、木山の研究所に来ていた。
しかしすでに木山は初春とドライブに出かけた後。受付の人に無理を言って木山の研究室に入ったが、これと言って収穫はなかった。もしかすると、連絡が取れなくなってしまった初春が部屋のどこかに監禁されているのではないか、とも思っていたが、その心配はなかったようだ。
「やっぱり、木山先生に連れていかれたんだろうね」
「そうですわね。管理局には先生の車のナンバーを知らせたことですし、じき捕まることでしょう。残った皆さんも連絡が入り次第向かうそうですし。わたくしたちは、もう少し捜索を……あら？」
狂三は何かを見つけたようだ。視線の先にあるのは、何枚かの紙が上の方で束ねられたもの、初春が見つけた共感覚性の論文だ。
これを見られたからと言って幻想御手（レベルアッパー）にダメージがあるわけではない。そう確信しているからこそ、放置していったものだ。
「この論文……やっぱり木山先生が犯人だってことだよね」
「証拠は揃ったって感じだよね。ま、誘拐してる時点で確定なんだけどねぇ」
「……それでは、もう少し探るとしましょうか」
狂三は背後に大きな時計を出現させた。その時計の短針を取り外す。
「刻々帝（ザフキエル）、一〇（ユッ）の弾（ド）」
使うのは一〇（ユッ）の弾（ド）。撃ち抜いた対象の過去の記憶を伝える弾丸。
こめかみに銃口を当て、迷いなく引き金を引く狂三。
「っ!! これは……そういうことだったんですの……」

超重力で足場が崩れる。
陸橋になっていたため、美琴と雪菜は空中に放り出された。
御坂は電気で磁力を操り、橋の足の部分に引っ付き、ゆっくりと下に降りた。雪菜は霊視による未来視でどの順番に瓦礫が落ちるかを予知。それを順番に踏むことで、着地する。
雪菜の着地を見計らったように、木山が電撃を放射する。
「このッ!!」
美琴が発射した電撃で事なきを得る。
「す、すみません！　足を引っ張って……ッ!!」
「気にしなくていいわよ。あっちがメチャクチャなんだからッ!!」
悠々と近づいてくる木山を恨めしそうに睨む御坂。
「ふむ、中々しぶといな」
木山は右手を振るった。念動力でも発動させていたのか、近くにあったポリバケツが宙を舞った。空中で口が下を向けば、中に入っているごみが重力で下に落ちるのは避けられない。
中から出てくるのは、ところどころ形が歪んだ色とりどりの空き缶だ。
「ッ!!　爆発します!!」
「えッ!!」
霊視の結果を叫ぶ雪菜。
空中にぶちまけられる大量の空き缶。そして雪菜の言った爆発というワード。それは繋がり、ある結論が導き出される。
（グラビトン――――!!）
「こ、の――――ッ!!」
とっさに崩れた高速道路の残骸を磁力でかき集め、即席のシェル

ターを作る。直後に大きな衝撃がシェルターを揺らした。
（御坂　美琴……流石、レベル5といったところか。とっさの出力が桁違いだ。いくら複数の能力を使えるといっても、あれほどの能力を正面から相手取るのは不可能。彼女が殺す気で能力を使えないのは、私にとって幸運だな。そして姫柊　雪菜の霊視。アレも細かいところをよくカバーする。槍だけが彼女の武器ではないという事か）
　しかし、自らの勝利は揺らがない。確固たる意志を持ち行動している自分が負けるわけがない。木山はそう確信していた。
「君たち」
　そうは言っても、木山とて、この2人を進んで傷つけたいわけではない。
「上で寝ている娘には言ってあるが、私は自分の目的を遂げ次第、昏睡状態に陥っている人々を解放するつもりだ。どうかそれまで待っていてはくれないだろうか」
「ふざけんじゃないわよ!!」
「ふざけないでください!!」
　木山の言葉に、シェルターを解除して2人が吠える。
「無関係の人を巻き込んで、そんなことが通る訳がありません!!」
「あんたの目的が何であれ、あんたはここで止めるわ!!」
「……ならしょうがない。君達にはここで退場してもらう事にしよう」
　木山は次に使う能力を選択し始める。
『お待たせしました。砲撃支援、武偵弾、閃光弾（フラッシュ）、撃ちます。着弾2秒後です』
　インカムからティナの声が響いてくる。
　武偵弾。それは高い技術によって作られた特殊な弾丸のことだ。見た目は普通の弾丸でも、ただの鉛の塊という訳ではない。一発一発に特殊機能がある。
閃光弾（フラッシュ）が炸裂した。
「うわあああぁぁぁぁっぁぁぁぁ!!」
　まるで目の前に突然太陽が出来たようだった。目をつぶされた木

山は目を抑えて蹲った。もしも木山が戦闘のプロならば、1万通りの能力を効果的に使い、銃弾に対する防御は完璧にしていただろう。目の前で戦っている2人の身に注力していた木山は、網膜を焼き尽くす光を全く想定していなかった。

しかし、事前にタイミングを知っている上に、霊視を持っている雪菜は光が収まるのとまったく同時に目を開け、木山に駆け出した。

目を抑えつつも全方位に向かって適当に能力を乱射する木山に近寄るのは自殺行為だといってもいい。

飛来する火炎弾、コンクリート、氷塊を撃墜するのは美琴の電撃だ。少しでもコントロールを間違えば雪菜に当たり、一気に形勢が逆転する。そんな危ない橋を平然と渡る。渡ることが出来る。

蹲る木山のアゴに、雪霞狼の柄が炸裂した。

「私が教師に？　何かの冗談ですか？」

子供は嫌いだ。ずっとそう思っていた。

「面倒なことになってしまった。だが、実験を成功させるまでの辛抱だ」

騒がしいし、言うことを聞かないし、無駄に元気だし、

「「「「よろしくおねがいしまーす！」」」」

「やーい、ひっかかった、ひっかかったー」

「せんせー、モテないだろ。おれが付き合ってやろうかー、ひひひ」

イタズラするし、無遠慮だし、礼儀を知らないし、

「私、ここの人に育ててもらってるから。ここの人たちの役に立てるようになりたいな」

「大丈夫だよ。怖くない。先生のこと、信じてるから」

だから、子供は……

「なぜあんなことになったのですか!?」
「さあて、どうしてだろうねぇ。未知の研究には、予測できないことも多くあるという事だろうねぇ」
「そんな嘘をッ!! あの実験内容で、あのような事故が起こるはずがないでしょう!! それこそ意図的にでも……ッ!!」
「ふむ、君はもっと優秀な人間だと思っていたんだがね」
「ど、どういう意味ですか?」
「ここのお荷物である『置き去り(チャイルドエラー)』を科学の発展に貢献させてやったんだ。感謝こそされ、恨まれる筋合いなどないと思うがね、私は」
「な、何を言って……ま、待ってください!! 話はまだ――」
「さあて、みんな。この実験はつつがなく終了した。ここでの事は、他言無用だよ」

(……そうだ。私は、こんなッ、こんなところで、終わるわけには……ッ!!)
時間がゆっくりになってしまった世界。地面に倒れるまでのわずかな時間。感情ばかりが先走って、体が動いてくれない。
木山が気が付いた時には、目には青空が映っていた。雪菜の正確な一撃は、顎から脳を揺さぶり、立ち上がることを困難にさせていた。
「終わりましたね」
「そうね。ティナ、ナイスサポートよ」
『ありがとうございます』
後は拘束してしまうだけ。そう思って木山の方を見る2人。

「そんな……っ」
「まだ立つの……!?」
　木山が何とかして立ち上がろうともがいていた。
「く、ぅぅっ、こん、な……っ、こんなところで……っ」
「無理しないでください。今のあなたは立ち上がれるような状態ではないはずです」
「そうよ！　もうアンタに勝ち目はないわよ！」
「だから……なんだッ！　なんだと言うんだッ!!　言ったはずだ！……私は、目的を遂げるまでッ！　立ち止まるわけにはいかないんだ!!!」
　焦点が合っていない目で、それでも睨みつける。地べたに転がり、考えることもまともにできないはずの木山。そんな彼女が執念だけで立ち上がろうとする姿に、雪菜も御坂も恐怖を感じていた。
　そんな木山に答えたのは新たに現れた人影だった。
「それは昏睡状態になってしまった子供たちのためですか？」
　アスナと狂三だ。この2人と理子も合わせた3人は、木山の研究所から駆けつけてきたのである。
「き、君たち……なぜ、それを……？」
「わたくしの能力ですわ。わたくし、物を通して他人の記憶を読み取ることが出来るんですの」
　狂三は一〇（ユッド）の弾（ド）によってすべてを知った。木山がこんなにも必死になって、無関係の人間の脳を使ってまで、演算装置を求めたのか。
「どういうことなの、時崎さん」
「そんなに難しいことではありませんわ、美琴さん。昔に起きた研究中の事故で目が覚めなくなってしまった子供たち、その子供たちを助けることが木山先生の目的、という事ですのよ」
「……まったく、本人ではなく物に能力を使うだけでそこまで鮮明に読み取ることが出来るとは……君の能力を見くびっていたようだ」
「正確には事故ではなく、子供たちのあなたへの信頼を利用した、人為的な物のようですけれども」
「……」

狂三の否定の余地がない指摘に何も言えなくなる木山。そんな2人に割って入るのは、今まで戦っていた雪菜と美琴だ。
「ちょ、ちょっと待ってください！　人為的なものってつまり、その子供たちで人体実験したってことじゃ……ッ!!　だったら、あなたがこんな事しなくても、もっと然るべきところに報告して――――」
「もちろん報告したさ!!　しかし、相手にしてもらえなかった。上からの圧力でね」
「上からの圧力って……じゃあ何？　その実験は、子供たちを実験動物みたいに扱ったその実験は、上に公認されてるって言いたいわけ!?
　そんなことある訳……ッ！」
「残念ながら事実だ。ここではそんな実験が、日常的に行われている。公的な機関も黙認し、まっとうな人間がそれに気が付くことはないし、もし気が付いてもすぐにこの世から消される。それが現実だ」
　木山の冷酷な言葉に、何も言えなくなる。
「私の目的は、子供たちの目を覚まさせることだけだ。誰かを告発しようとか、個々の闇を暴こうなんて思っているわけじゃない。そんなことをすれば、たちまち殺し屋を差し向けられてしまう。上の連中は私が幻想御手（レベルアッパー）をばら撒いた犯人だという事はとっくに知っている。今頃事の顛末をモニターの前で見ていることだろう。もしくは新しい実験の構想でも練っているのか……御坂　美琴、君だってその類に片足を突っ込んでいる。君の知らないところで、ね」
「な、何言ってるのよ。私がそんなことに協力している訳……っ」
「いや、それは違う。君は、場合によっては私よりも深いところに――――ッ!!　うあぁぁぁ

で見るようなあるものに似ている。小さいながらも手足があり、それでいて頭が大きい。まるで未発達の胎児の様だ。
「なんなのよ、これ？」
アスナと狂三でさえ全くの予想外の出来事に動けないでいると、ゆったりと浮かんでいた胎児が、勢いよく目を開けた。
「ａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!!!!」
叫び声とともに膨張を開始した胎児は、生やした触手を滅茶苦茶に振り回し始める。それは暴れていると言うよりも、苦しんでいると言った方がしっくりくる光景だ。
目の前の怪物についてわからないことだらけだが、やらなければいけないことは分かっていた。
「調子に乗るなッ!!」
相手が人間でないのなら、手加減する必要はない。全力の電撃をぶつける美琴。２本の触手がチリになり、胎児の表面が焼け、破裂した。が、しかし、すぐに元通りになってしまう。
（案外脆い？　でも血が出ないしあの回復速度……生物じゃないの……？）
回復ついでに触手の数を増やす胎児。回復できても痛いのか、そもそも痛いという感覚があるのかは定かではないが、その大きな目が、美琴を真っ先にとらえた。明らかに、狙いを定めた。
美琴も好戦的な目で前髪から火花を散らす。
「いいわ、やるってんならとことん相手になってやるわよ！」
「狂三ちゃんと雪菜ちゃんは木山先生を安全な場所に！　私と美琴ちゃんは前に出るから!!」
「はい！」
アスナの指示に従い、二手に分かれて行動を始めるのだった。

「とりあえず、ここまでくれば」
「そうですわね」
狂三と雪菜は、柱の側に気を失った木山を寝かせた。
離れた所では胎児とアスナ、美琴が戦っている。時折銃声も聞こえることから、意識を取り戻した管理局員も応戦していた。それにはティナも含まれている。
「どうしましょうか……？」
「向かった方がよろしいかと。あの怪物相手に一般の銃器が通用するとは思えませんわ」
「う……ぁ……？」
「あ！　目が覚めたんですね！」
「大丈夫ですの？　あ、まだ起きない方が……」
木山は自分に向けてかけられる声を無視し、地面を揺らす衝撃と、耳障りな叫び声の原因を探し始め――見つけた。
「……は……はは……アハハハハハハ!!!　凄い、凄いな。学会で発表すれば表彰ものだぞ……」
壊れたように笑いながら、柱に寄り掛かる木山。ほんの数分の間に、酷くやつれてしまった。その体や声には力が無くなってしまっている。壁を背にしてずるずると腰を下ろした。
「もはやネットワークは私の手を離れた……おしまいのようだな……」
木山は懐に手を入れ、あるものを掴む。その手には、簡単な凶器――拳銃が握られていた。
「何をする気ですの？」
自分のこめかみに向けようとして、腕が動かないことに気が付く木山。狂三がいち早く察して、分身体で押さえつけたのだ。
「君たちこそ何をしている。こんなところで油を売っていてもいいのか？　先程も言った通り、あれはもう私の制御下を離れているんだぞ。私を拘束しても意味は無い」

「だからと言って、自殺しようとしている人を見過ごせるわけがありません。木山先生、あの怪物について、何か知っていることがあるんじゃありませんか？」
「……」
　死人のような木山の表情は、髪に隠れて２人には見えない。それでもまっすぐに向けられる視線に、ため息をついて口を開き始めた。
「虚数学区を知ってるか？」
　その言葉に、２人は首を横に振る。
「虚数学区とは、ＡＩＭ拡散力場の集合体だ。アレもおそらく原理は同じ。ＡＩＭ拡散力場でできた怪物、そうだな、『幻想猛獣（ＡＩＭバースト）』とでも呼んでおこうか。あれは幻想御手（レベルアッパー）のネットワークによって束ねられた一万人のＡＩＭ拡散力場が触媒になって産まれて、そしてそれらを取り込んで成長しようとしているのだろう……おそらくネットワークの核だった私の感情の暴走に影響しているのかもしれんな」
「……」
　専門的な単語も並べられても理解できないし、今重要なのはそこではない。
「それで、どうやったら止まるんですか!?」
「……あれはネットワークが作り出した怪物だ。だから、ネットワークそのものを破壊すれば、もしかしたら……」
　その言葉を言った後に、木山は自嘲するように笑った。
「もっとも、今の私がそんなことを言った所で、信じてもらえるとは思わないが」
「いいえ、信じます」
　狂三は間髪入れずに言った。
「な、なんだと……!?」
「一部とはいえ、あなたの記憶を読み取りましたから。あなたがどれだけの執念を燃やして子供たちを助けようとしていたのかは、少しは理解したつもりですわ」
　子供たちのことについて話に出されてしまうと何も言えなくなってしまう。

「それで、そのネットワークを破壊するにはどうしたら？」
「私の車で気絶している花飾りの少女に、ネットワークをアンインストールするワクチンプログラムを持たせている。だが、あれ一つしかないから、無くなっていると手の打ちようがない」
「――――だ、そうですわ、理子さん」
『オッケー。すぐに準備するねー』
　無線で事態を把握していた理子も、動き始める。
「ありがとうございます、木山先生。狂三さん、行きましょう！」
「はい、雪菜さん……木山先生」
　雪菜が少し離れたのを確認した狂三は、木山に語りかける。
「子供たちの回復を願うのはとても立派で、素晴らしいことだと思いますわ。でも、今自分がとっている行動が、その子供たちに胸を張れるかも、考えてくださいまし」
　そう言って、狂三も木山の元を離れていった。
　その場に残された木山は、座り込んだままだったが、ゆっくりと立ち上がった。
「まったく、長い間汚いものを見てきたせいで、あのお人よしの娘達がまぶしくてしょうがない」
　友人のために当たり前のように怒ることができ、泣くことが出来、悪いこと、理不尽なことに怒りを向けることが出来る。そんな純粋な心が酷くまぶしく見える。
「そうだな。このままじゃ、あの子達に胸を張っておはようとは言えないな」
　木山は、もう一度、立ち上がった。

まさかの援軍

（……ん……あれ？）

ぼんやりとした視界、どこか遠くから聞こえる音が、だんだん近くに寄ってくるような奇妙な感覚。これには初春は覚えがあった。体を動かすのが苦手な初春が、体術の授業で強制的に意識を落とされたときに似ている。違いは，意識を落とされるときはだんだんと音が遠くなるような感覚になるという事。

「――え？　昏睡患者が苦しみ始めた？　翔がそれを怪しんでる？　あー、でもこんだけ遠ざけておいて、今更手伝ってくれなんて言えないでしょ。それ言っちゃったら、この先二度と一緒に戦えなくなるよ。うん、うん、分かった。そっちは任せるね」

ぼやけている視界に、緩いパーマが掛かった金髪とバニラのような甘い香りが滑り込んでくる。

「は？　おいアリア、お前何やってる訳？　向かってる？　飛んで？　なんでもいいからさっさと来い。お前が来ても戦力になるかはわかんねぇけどな。妙な怪物が出てきて――」

荒々しい口調で言い争っている。

「アスナか？　アリアがあと少しで到着する。なんか翔から預かった武器を持ってくるとかなんとか言ってた。もう少し持ちこたえてくれ。っと、それじゃあ、こっちを……飾利ちゃ～ん、朝ですよぉ～、起きないとイタズラしちゃうぞ～」

今度は一転して甘い声を出してくる。

「む……よーし、スカートめくっちゃおうかなぁ。どれどれ、今日の飾利ちゃんのパンツは――」

（スカートを、めくる？　ぱんつ……パンツ!?）

「ちょっ、何やってるんですか！　峰先輩!!」

「あ、起きた」

スカート内に籠っていた熱気がめくられたことで外に逃げる。と同時に、初春の意識も完全に覚醒した。

「ごめんごめん。一刻を争う事態でさ」

「一刻を争う……？　あッ！　木山先生はどうなったんですか!?　あれからどうなって――え？　な、何ですか、あれ……？」
　初春の目に、生まれてから見たこともないような、この世のものとは思えない醜悪なモノが映った。それは度重なる攻撃で膨張を繰り返し、胎児の様な見た目が大きく変貌した幻想猛獣（AIMバースト）だ。
「私もよくわかってないんだけどね。どうにもあれがラスボスっぽいよ。飾利ちゃん、木山先生から何か貰ってるよね？　幻想御手（レベルアッパー）をどうにかできる何かを」
「あ、は、はい。これです」
　初春はポケットからメモリーカードを取り出す。
「ん、それを今すぐ使うよ。あの怪物について詳しい説明をしている時間はないけれど、とにかく幻想御手（レベルアッパー）を無力化できれば倒せるかもしれないから」
「は、はい！　わかりました！」
「管理局の人にはもう話は通してあるから、あの通信車両の機材を使わせてもらえるから」
　理子の示した先には、木山との戦闘の余波をかろうじて逃れた車があった。
　意識を取り戻した管理局員も、銃を使って幻想猛獣（AIMバースト）に応戦している。しかし特に効果は見られない。もともとの目的が木山の確保だったためか、特殊な装備はそれほど持ってきてはいないため、これでも精一杯だ。
　そして、闇雲に暴れまわる幻想猛獣（AIMバースト）は鬱陶しい羽虫を手で払うように、触手を振り回す――前に、前に出て戦っているアスナや御坂がその触手を破壊するという手順で何とか足止めしていた。
　無限回復する幻想猛獣（AIMバースト）を相手に終わりのない戦いを挑むのは無謀すぎる。この勝負は初春が受け取ったメモリーカードで幻想猛獣（AIMバースト）を弱体化できるかにかかっている。
　詳しくは説明されなくてもそのことをぼんやりと理解した初春は唾を飲み込んでいた。
「君たち、こっちだ!!」

通信車両の近くで手を振る局員。２人は急いで向かおうとする。
「危ない！　避けろ！」
捌ききれなかった触手がアスファルトに打ち付けられ、端から端まで一直線に罅が入る。
一度押され始めると悪いサイクルに陥ってしまう。触手の衝撃波、木山の多才能力者（マルチスキル）をそのまま使った火炎弾や電撃、氷塊。いくらアスナや御坂が強くても、その体力は無限ではない。
最悪のタイミングで傾く戦況。
迫りくるそれが――――遠方からのエネルギー砲によってかき消された。ティナも武偵弾を使って援護してくれるが、これは明らかにティナの援護ではない。
巨大な物体が空を飛んでいた。
「……は？」
全体的に白いボディに、大きなコンテナ、ブースター、そしてひときわ目を引く長い砲身。それでいて、本当のサイズと比べるとずいぶんと縮んだ機動兵器。
移動要塞とも言えるデンドロビウムを引っ提げて、アリアが戦線に加わった。
『待たせたわね、みんな！』
「ア、・アリア!?」
移動要塞とも言えるデンドロビウムを引っ提げて、アリアが戦線に加わった。インカムから得意気なアリアの声が響いてくる。
「そ、それが翔から貰った……？」
『そうよ。あとは任せなさい！』
この世界に合わせて調整された結果、本来は２０メートル近くあるＭＳや、それをはるかに超えるＭＡは人が着こんで使うパワードスーツのようなものになっていた。感覚としては『ＭＳ少女』だ。
翔がこの事実を知った時、丁度アリアがお見舞いに来ていたため、試しにアリアにデンドロビウムを使ってみないかと進めていた。すると、有り余るセンスを持ったアリアは数日の訓練でデンドロビウムの操縦をマスターしてしまったのだ。

もはや風穴を開けるどころの武器ではないが、この状況ではこれ以上ない援軍だ。規格外すぎる。
「飾利ちゃん、急ごう」
「は、はい！　そうですね」
２人は局員に案内され通信車両の中に入る。その中に設置されているデバイスにメモリーカードを挿入し、画面を操作する初春。難しい顔をしていたが、１０秒ほどで表情が変わる。
「……あれ？　これって……」
「どうかしたの？」
「これって、そんなに難しいプログラムって訳じゃないみたいです。これ、音楽ですよ」
「音楽？」
周りにいる管理局員が不思議そうな声を上げるが、理子は納得いったように頷いた。
「……そもそもの話を言えば、幻想御手（レベルアッパー）が音楽だった訳だから、それに対抗するのも音楽って訳だね。それで、大丈夫そう？」
「はい。このスペックなら……昏睡状態になった人たちが搬送された病院と、一応町中のスピーカーからも流れるようにハッキングして……」
「ハ、ハッキング!?　君は一体何を――――」
「はいはい、邪魔しないで上げてねぇ～。飾利ちゃん、後はよろしくね」
「はい!!　任せて下さい！」
画面から目を離すことなくキーボードを叩き続ける初春の邪魔にならないように、理子は余計なことをしようとしていた管理局員と共に外に出たのだった。

アリアが搭乗したデンドロビウムが幻想猛獣（AIMバースト）に突撃する。莫大な推進力と多少の被弾を覚悟した突進は、暴走していた幻想猛獣（AIMバースト）を地面から少し離すほどの衝撃を与えた。

さらに大型ビームサーベルを振り回し、表面を削げ落とした。

「ａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!!!!」

すぐに再生を開始してしまうとはいえ、デンドロビウムの参戦は物理的にも心理的にも戦況に大きな影響を与える。

「しばらくは持ちこたえるわ！　最後のために力を残しておきなさい!!」

空中で旋回したデンドロビウムの武器コンテナから大量のミサイルが放たれる。

耳障りな叫び声とともに、電撃が網のように放射されミサイルが全弾撃墜された。

幻想猛獣（AIMバースト）のヘイトは完全にアリアに向き、橋の上で負傷している管理局員はこの隙にと退避を始める。尋常の外にいる怪物と、巨大な超兵器のぶつかり合いに生身で飛び込むほど無謀な人間はそうはいない。

幻想猛獣（AIMバースト）は、一万人分の能力者によるネットワークの産物。多重能力者（デュアルスキル）としてネットワークを利用していた木山のように、多種多様な能力を手当たり次第に放ってくる。

人が近くを飛ぶ虫を手で払いのけようとするように、大雑把な狙いで、戦略のかけらもなく。

形が人間とはかけ離れている上に、セオリーを全く無視した行動をとる幻想猛獣（AIMバースト）を相手取るのはこの場にいる手練れの少女たちも手を焼いていた。

何せ、人間に対する対処の方法が全くと言っていいほど通用しない。

アスナと雪菜がかろうじてついていけていたという程度か。

「この……っ！」

天才児のアリアでも自分よりはるかに大きい機体を無傷とはいかない。大きければ的になる。

飛行には支障が出ているわけではないが、徐々に装甲に傷が目立ち始める。ヘイトを切らさない程度に攻撃を加え、攻撃を避け続ける。
異変は唐突に起きた。
偶然掠った爆発で破裂した触手。ところが、これまでとは違う点が一つ。その触手が再生しない。
つまり。
「来た！　遅いわよ、理子!!」
《この仕事したのは私じゃなくて飾利ちゃんだけどね》
アリアはフンッと鼻を鳴らしながら、武装を起動させる。大きく突き出た砲身が熱を持ち、唸り声をあげる。
余計な被害を出さないためにも、幻想猛獣（AIMバースト）の真上に位置取る。
「消し飛びなさい!!!」
引き金が引かれると同時に、すさまじい光の束が一直線に幻想猛獣（AIMバースト）に降り注いだ。莫大な熱とエネルギーは地面を蒸発させる勢いだ。たとえ武偵であってもそうそうお目にかかれない超兵器必殺の一撃に、全員が息を飲んだ。
しかし、
「Ａａａ

デンドロビウムのアリアが戦線を支えてくれている中、アスナたちは少し下がり体力の回復に努めていた。
目の前では大怪獣バトルと表現したくなる弾幕の張り合いが行われていた。剣で相手を切り裂くとかそういうことが馬鹿らしくなってしまうような火力だ。
最初は優勢だったデンドロビウムが徐々に押され始めていた。
「厄介ね」
「うん。いくら攻撃しても再生するなんて反則だよ」
美琴のボヤキにアスナが反応する。
「私も雪霞狼が効かないとあまり力になれなくて……それより狂三さん。少し下がり過ぎじゃないですか？」
「無茶を言わないでくださいまし。わたくし、特殊能力に全振りしてしまっていて攻撃が豆鉄砲なんですのよ。それこそ、ティナさんレベルのものでないと大した援護にはなりませんわ。わたくしとしては、武器一つでばっさばっさと斬り飛ばすお二人の方が――――」
「はいはい！　とにかく今は、最後の攻撃に向けて体力を少しでも回復させておかないと！」
アスナは手を叩いてその場を諌める。
しばらく静かに観戦していたのだが、
《来た！　遅いわよ、理子!!》
《この仕事したのは私じゃなくて飾利ちゃんだけどね》
耳に着けているインカムから仲のいい声が聞こえてきた。
「ん、みんな、行こうか」
「そうですね……あ」
「うわぁ……」
「まぁ……」
通信から初春と理子はうまくやったと判断し、戦線に戻ろうとみん

なに声をかけたアスナ。直後に幻想猛獣（AIMバースト）がメガ粒子砲ビームに焼かれた。
地面すら赤くなるその規格外の威力。
「えぇ……おいしいところ持ってかれたかもね」
「でもこれで事件が終わったら佐天さんも――」
Ａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ――――――――!!!
今までと変わらない、否、今までで一番大きな叫び声で自分の健在を知らしめる幻想猛獣（AIMバースト）。その声は、歓喜の色に染まった管理局員を絶望に落とすには十分だった。
「あれでもダメなんですか……っ!?」
「そのようですわね。これはいよいよ厳しく――」
「アレはＡＩＭ拡散力場の塊だ。普通の常識は通用しない」
いつの間にか、足を引きずった木山が近くまで来ていた。
「ちょ、アンタいつの間に――」
「体表をいくら削ろうとも、本質には影響しない」
「あの！　そんなことよりも体は――」
「力場の塊を自立させるコアのようなものがあるはずだ。こちらから見たところ、ネットワーク自体は破壊されているようだから、コアさえ破壊出来れば――」
「おやおや、人の話を聞かないところは相変わらずの様ですわね」
マイペース木山に翻弄されながらも、情報を貰う４人。
全てを話し終えた木山は静かに問うた。簡単な問いを。
「……私の言葉をそんな簡単に信じていいのか。この事件を引き起こした私の言葉を」
本当に簡単な問いだった。いとも容易に、一言で答えられるくらいの。
――もちろんです。
本当の最終決戦が始まろうとしていた。

事件の終焉

他人に与えられた力を使う事はそんなにいけないことなのか。
幻想御手（レベルアッパー）を使って力を得ることはいけないことなのか。ズルいことなのか。罪悪感を覚えなければいけないのか。
少なくとも俺は。

ずたずたにされた幻想猛獣（AIMバースト）は、穴が開いて空気が抜けていく風船のようにその中身を漏らし始めていた。
『努力は積み重ねてきた……けど、幾千幾万の努力が、たった一つの能力に捻じ伏せられる！　それが現実なんだ！』
『本物の超能力、魔術、魔法。それは馬鹿馬鹿しいまでに無茶苦茶で、悪い冗談としか思えない出鱈目な力。必死に的に向かって拳銃を構えているのが、必死に勉強するのが馬鹿らしくなった……あれを見たら、誰だってそう思う！　自分がちっぽけな存在だってことが……ッ！』
それは、幻想御手（レベルアッパー）に一縷の望みを託し、今は病院のベッドで苦しんでいる少年少女の心の叫びだ。
その中には当然。
『……私って、欠陥品なのかな？』
よく聞いていた声もある。
木山からの情報はそこまで難しいものではなかった。幻想猛獣（AIMバースト）には核と呼べるものがあり、それを破壊しないと消滅には至らないという事。デンドロビウムの砲撃は、無防備なところに当てることが出来

ればそのまま消滅に持っていくことが出来るが、発射を感知されて防御能力を発動されると、あと一歩届かないこと。
　それを踏まえて、今度は全員で連携して攻撃する。
「それじゃあ、手順通りに」
「「「了解！」」」
『はい』
『分かったわ』
　インカムの向こうにいる2人も了承する。
　やることはすでに決まっている。各々が武器に手をかける姿を見ていた木山は予想外の一言を告げられる。
「それじゃあ、木山先生は下がってて下さい。巻き込まれますから」
「え……い、いや、私にはアレを産み出した責任がある。このままでは、あの子達に会わせる顔が――」
　傍らで見守っている気でいた木山は、一瞬マヌケな声を出すが何とか持ち直す。
「あ、いえ、ですから、私たちの攻撃に巻き込まれないように下がっていてくださいって意味なんですけれども……」
　雪菜が申し訳なさそうに、苦笑いで言う。
「な……」
「先生を巻き込んでケガでもさせたら眠ってる子供たちに怒られちゃいますからね」
「!!」
　アスナの言葉に目を見張った。
「だから。あなたがすべきことは、ここで体を張ることじゃなくて。――罪を償って、前を向いて、生きることよ」
　最後に御坂は木山に、まっすぐ見据えてそう告げた。
幻想猛獣（AIMバースト）はそんな事情はお構いなしに触手を伸ばしてきた。
「行くよ！　雪菜ちゃん！」
「はい！」
　2人は武器を構え、人間離れした脚力を以って飛び出した。
　迫りくる触手を一振りで薙ぎ払う。勢いを落とすことなく駆け回

り、次々と切り裂いていく。それでも、最後の抵抗を見せる幻想猛獣（AIMバースト）は数えきれないほどの能力を外敵に向ける。
「このくらいのサポートは致しますわ……一の弾（アレフ）」
２人の体が消えた――――否、そうではない。狂三の刻々帝（ザフキエル）の弾丸の能力の一つ、撃ち抜いた対象の時間を加速させる一の弾（アレフ）の恩恵だ。
空振りに終わった攻撃が消滅していく。
『チャージ完了よ！　ティナ、撃って！』
『砲撃支援、武偵弾、焼夷弾（ナパーム）、撃ちます。着弾３秒後です』
はるか彼方から放たれたティナの秘密兵器。手のひらに乗る銃弾には過ぎた威力。幻想猛獣（AIMバースト）に着弾した瞬間に大爆発を起こす。
「ａａａａａａａａ――――――――」
巨体が揺らぎ、大地を揺らす。
「それでは、あとはお任せしますわ御坂さん」
「ええ！」
狂三は木山を抱え、その場から脱出する。
『下がりなさい！』
それと同時に、アリア搭乗のデンドロビウムが再び真上に。
『発射ァ!!!!』
メガ・ビーム砲による砲撃が幻想猛獣（AIMバースト）を包み込んだ。一射目と比べて事前にダメージを負っていたためか、損傷がひどくなっている。
「ゴメンね。気付いてあげられなくて……でもさ、超能力を使うならパーソナルリアリティを他人に任せちゃダメ。だって自分だけの現実なんだから。あなたの、あなただけの能力なのよ。あなたの強い意志は、あなたの『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』は、あなただけの特別な力になる。なっているはずよ」
ついに、そのコアが剥き出しになる。
御坂の右手がコインを弾いた。
デンドロビウムの主砲とは別の、もう一つの超兵器と呼べる大砲の銃口が幻想猛獣（AIMバースト）に向けられる。
「だからさっさと帰んなさい。みんな心配してるわよ」
オレンジ色の閃光が、コアに向かって一直線に伸びた。音速の３倍

にまで加速されたコインの軌跡だ。
美琴の超電磁砲（レールガン）が、コアを撃ち抜いた。
「ａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ――――――……」
コアを破壊された幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は体を保持することが出来なくなり、霧散し始めた。辺りに破壊をまき散らした怪物はやがてその姿を完全に消した。
御坂は体を伸ばし、
「うーん！　終わったぁ～！」
スッキリした、晴れ晴れとした顔でそういった。もちろんこの後佐天との対面や、事件の後処理など色々とあるが、とりあえず『終わった』と表現したくなるのは仕方のないことだろう。
（御坂美琴、ここでは数少ないレベル５の超能力者。電気を放射するだけではなく、応用して磁力を操ることも可能。そして今のが彼女の代名詞の超電磁砲（レールガン））
今まで集めてきた情報を頭の中で反芻する狂三。
（このレベルの能力を持っていると大変でしょうに。夏場の街灯に群がる虫のように、色々な厄介ごとを引き付けてしまいそうですわね）
その時、御坂が唐突にふらついた。
「おっと、大丈夫ですの？」
狂三は、倒れこむ御坂を受け止めた。
「おっと、大丈夫ですの？」
「は？　ア、アンタ、木山先生を連れて離れたんじゃ――」
「フフフ、分身の術、ですわ」
「まったく、あんたの底は知れないわね」
狂三の能力の異常さはとっくの昔に理解している御坂。マナーのこともあり深く言及することはない。
限界まで研ぎ澄ませ、尖らせた一撃を放ったことですっかりバッテリー切れになっている御坂はおとなしく狂三の肩を借りるのだった。

「もうすぐ管理局が来るようですが……どうしましょうか？」
「どう、とは？　ネットワークが破壊された今、私は一介の科学者に過ぎない。逃げることなど出来はしないさ。そしてするつもりもない」
木山は薄く笑いながら続ける。
「〝この場〟は、収めよう。だが、諦めるつもりはない。もう一度……何度でも、やり直す。刑務所の中だろうと、世界の果てだろうと、私の頭脳は常に、私だけのものだ」
サイレンの音が聞こえてくる。少し遅い増援が到着するのだろう。
「手段を選ぶつもりはない。気に入らないのなら――――」
「その時は、また誰かが立ちふさがることになるでしょうね。わたくしたちになるかはわかりませんけれども」
言っていて、まるで自分が正義の味方にでもなったように感じておかしく思う狂三。
「そうか。それは、とても素晴らしいことだな」
狂三の言葉に何を感じたのか、そんな捨て台詞を残し、木山は連行されていった。

少し前まで鬼のように忙しかったこの病院は、慌ただしいものの、落ち着きを取り戻し始めていた。
目を覚まし簡単な検査を終えた佐天は、その屋上に来ていた。
日は傾き、空は赤く染まっている。
結局佐天が昏睡状態だった時間は半日もなかったし、能力を使うこ

とが出来た時間はもっと短かった。終わってしまえばそれは、
「ホント、夢みたいだったなぁ……」
赤く染まった雲を眺めながらぽつりとつぶやいた。
開いた手のひらからはそよ風一つ起こることはない。幻想御手（レベルアッパー）を使う前の、何の特別な力もない元の体に戻ったのだ。自分のあるべき姿に。
今日一日、いろいろなことがあり過ぎて自分の中で処理しきれないでいた。自分の無力さを思い知り、能力を手に入れたことを歓喜し、友達を巻き込み、さらに裏切ったことに涙を流した。
「……うわぁ、考えてみれば私、初春に超恥ずかしいこと言っちゃったじゃん……」
いまさらながら過去の言動を思い出して赤くなる佐天。
そのせいで、屋上のドアが音を立てて開くのにも過剰に反応してしまう。
入って来たのは、病院着を着た、佐天と比べて少し年上の男子だ。
「――君は」
「こんにちは、あなたも使ったんですか？」
何を、とは言わない。検査は続々と終了している。手持無沙汰になった人がここにきても別におかしくはない。
「あー、や、そうかな。うん、そうだ」
男子学生も佐天の言葉ですべてを察した。少し歯切れが悪いものの、素直に認めた。
「やっと解放されてな。病室から出たときには、もう全部終わってたよ」
「そうなんですか。私もそうなんです。実はこれ、私の友達のおかげなんですよ」
同年代の友達がこんな大事件解決に貢献したことを誇らしげに、少しの嫉妬も込めて言う。
まだまだ、心の中から嫉妬を無くすことは出来そうもない。しかしそれでも、
「もう、そういう力が欲しいとは思わない？」

「いやいや、そんなことないですよ。手に入るなら喜びますって……まあ、でも――」
佐天は男子生徒に背を向けた。
「――今は、今の自分にできることを、考えてみようと思います」

――――――

なのか。ズルいことなのか。罪悪感を覚えなければいけないのか。
少なくとも俺は。
そう思わない。

久しぶりの我が家　（アスナ）

久しぶりの自分のベッドで目が覚めた。
幻想御手（レベルアッパー）事件も終わりを告げ、俺も晴れて退院することが出来た。俺は関わっていないため人づてに聞いただけだが、事件解決にはやっぱり超電磁砲（レールガン）組の存在が大きかったらしい。
なんかその中で、知っている女の子の名前も出てきたんだけど、みんなは特に何も言わないし、解決したことだしという事で俺も深く言及してはいない。
重要なのは、また一つ大きな事件を乗り越えたという事だ。俺は関与していないけど。
俺はベッドから抜け出して体を伸ばした。
退院して早々だが、今日から学校だ。入院休みを特別扱いしてくれるほど優しいところではないし、これから先また入院することになってしまえば、出席が足りなくなるかもしれない。行けるときにはしっかり登校しないと。
「出席日数のことを気にしないといけなくなるなんてなぁ……」
元の世界の学生にはあまり縁の無い話だろう。普通の武偵学生でも多い方ではない。
不幸中の幸いか、病院のリズムに慣れていた俺の体は、目覚まし無しで前よりも早い時間に起きれるようになっていた。
現在６時を少し回ったところだ。
二度寝してもいいんだけど、ここは久々にみんなに朝ご飯をごちそうするとしようかな。昨日の退院祝いのお礼も兼ねて。
そう決めた俺は、部屋を出てキッチンへと向かった。

そうは言っても、朝だ。そんなに凝ったものを作るのはあれだし、ゆっくり食べる時間もない。急に思い立ったせいで、冷蔵庫の中の材料も微妙なことになっている。昨日の退院祝いの料理に使っちゃったんだろう。

「結局普通になる……」

そんなに条件出されてしまっては、いかに俺と言えども降参するしかない。おとなしく普通に作り出す。

「味噌汁だけでいいや」

盛り下がってしまった気持ちを元に戻すのは難しい。昨日のおかずはたくさん残ってるし、これを温めて食べることにしよう。頑張るのは今晩で。

豆腐を切っていると、アスナが起きてきた。

「あ、おはよう、翔君」

「おはよう、アスナ」

アスナはまな板の上に視線を移した。

「昨日の残りたくさんあるし、味噌汁だけでいいかなって」

「ん、そうだね。捨てちゃうのは勿体ないし」

そう言いつつ、アスナも準備を手伝ってくれた。複雑なことは特にないので2人で作ればすぐに終わってしまう。

一通り作り終わっても、まだまだみんなが起きる時間にはなっていなかった。2人で作業したため、時間が余ってしまったのだ。

アスナは準備よく沸かしていたお湯でコーヒーを淹れ、リビングで一服することにした。

ソファーに並んで座り、しばらく何も言わずにコップに口を付けていた。

「腕、もう大丈夫なんだよね」

「ん？　ああ、もう全然。ほら、触ってみるか？」

俺は腕を回して傷跡すら残っていないことをアピールする。

アスナは無言で俺の腕を細い指でなぞってくる。少しくすぐったいが、言った手前手を引っ込めることはできない。

なぞっていた指は、だんだん押したり少しつねったりもしてくる。

しばらくそうして満足したのか手を放した。
「……よかった。しっかり治ったんだ」
「ああ、もう大丈夫だ。完全に元通り」
アスナは手を引っ込める。
「もうこんなことしないでね」
「俺だって、したくてしてるわけじゃないからな」
必要に迫られたときだけだ。でも、多少無茶しても大丈夫っぽいことが分かったし、色々できそうだよな。
そもそも、ホワイトスネイクには俺から仕掛けたわけじゃない。あそこでＤＩＳＣを取り出されていた場合、もっと大変な事になっていた。これからは本格的にデンジャラスゾンビ戦を意識して行動しないとだな。今度は病院送りじゃ済まないかもしれないし。
「そうだな。うん。病院送りじゃすまないかもしれないし。やることやっておくか」
「やること？　何それ？　……その手つきは？」
アスナは若干引いている。
「え、やだなー、分かってるはずなのにそんなこと言っちゃうなんてー、今やることなんて一つしかないでしょ？」
「もしかしなくてもＨなことだよね？」
その通りです。
狂三の夜這いで入院中も増えた能力だったんだけど、これだけじゃ心もとないんだよ。決して、久しぶりの２人きりって状況にムラムラしたわけじゃない。
俺ってシリアス寄りの人間じゃないでしょ？　ほんとはこんな感じなんだよ。初期のころを思い出して、ね？
俺はアスナの了承を得ず、とりあえず抱きしめてソファーに倒れこむ。俺が下でアスナが上という状態だ。逆、押し倒しました状態。言ってて意味わかんない。
「だ、ダメだよ翔君。みんな、そろそろ起きてくる時間なんだしっ」
「大丈夫だって。みんな身内なんだし。俺が複数の女の子と関係持ってるってのはとっくに広まってることだろ？」

そして、ハーレムを認めたのはそっちだ。
「正義は我にありみたいな顔しない！　私たちが認めたのは、その、私たちの事情を知っても相手が認めたなら大目に見るってことであって、相手が嫌がってることはダメだからっ」
その話を総合すると。
「アスナは俺とHしたくないってことか……初めての時、イってもやめなかったの怒ってるの？」
「したいしたくないじゃなくて、場所が問題なの！」
場所が問題？　ここは自宅のリビングで2人きり。何か問題になることがあるんだろうか。
「個人の部屋ならともかく、もうみんな起きてくるかもしれないから――」
「ん」
「――――っ」
悩ましい吐息を漏らして、俺達の唇がゆっくりと重なった。形の良い乳房がさらに押しつぶされて、俺たちの距離が縮まる。
赤道の近くにあるこの島は、長袖が必要になるほど寒くなることはない。2人の人間が密着していれば、それなりに汗をかく。
うっすらと汗をかいた手をアスナの背と頭に回し、力を籠める。吸水性と通気性に優れた寝間着は同時にアスナの体温を伝えてくる。
俺の行動がよほど衝撃的だったのか、アスナは目を閉じることなく、むしろ見開いている。弱弱しい抵抗は優しく抱きしめるだけで無意味になってしまう。
俺の方は、アスナと密着していた時点ですでにテントを張っていたモノが限界まで張り詰め、すでに痛いくらいになってしまっている。布越しにアスナにぐりぐりとしているとアスナは逃げようと体を浮かせようとする。もちろん逃がさない。
「……ぷはっ」
唇を離した時、まるで何時間もそうしていたかのような感覚に囚われた。
「翔君、その……」

「ん？」
「お腹に、ね？　その、固いのが当たってるんだけど……っ」
女の子と密着してキスしてるのに硬くならない男子とか不能でしょ？　違うの？　そんな『先っちょだけ、先っちょだけだから』みたいなきれいなフリをするとは。
「場所変えればしてくれるのか？」
「ばか。いつもみんなに言ってる私がこんな朝から出来る訳ないでしょ。キスだけ。キスだけだからね……もう、アリアちゃんが最初に起きたらどうしよう……」
「んー……？　あー、アリアはそこまで寝起き良くないし大丈夫だろ？」
何もない時はいつも誰かに起こされていたはず。
「そんなことないよ。家のことをローテーションにしたから。起きる時はそれなりに早く起きるようになったんだよ」
「え」
そうだったのか。
背中にまた違った汗が。冷や汗かな？
「後ろから刺されるのを気にしてたら、こんなことしてない」
「声震えてるよ」
うるさいよ。
「ん……」
再びアスナと唇を重ねる。アスナの唇はまだぴったり閉じられたままで、俺の舌の侵入を許さない。
アスナの唇の隙間を、舌先で丁寧になぞっていく。
「んん……っ、ふぅっ、んぁ、んっ、ふぅっ、んふぅぅ……っ」
プルンとした唇がだんだんと湿っていき、柔らかくなっていくようだ。本人はどうかわからないが、だんだんと隙間が出来ていく。
「んむぅぅぅっ!?」
一気に舌をねじ込んだ。同時に抱きしめていた力を強くして逃げられないようにしてしまう。
「んむぅっ、んふぅっ、くちゅり、ちゅりゅ、ちゅりゅりゅ……んむ

ふぅぅ……っ！」
幸せそうに眼を閉じていた瞼が開かれ、目を白黒させている。上半身を拘束されてしまっているアスナは足をばたつかせて暴れる。
キスだけでこんなに反応してくれることがうれしくなり、口腔内での舌の動きにも力が入る。
「ちゅ、ちゅく、ちゅくちゅく……ちゅぴっ、ぴちゃぴちゃ、んひぅぅ……っ！」
ねっとりと絡めようと伸ばされる俺の舌。アスナもせめて舌を凌辱されるのは避けようというのか、必死に逃げようとする。しかし逃げたら逃げたで、逃げることが出来ない歯茎を線に沿ってなぞる。それを阻止しようと近寄ってきた舌を罠にかけるように吸い上げる。
俺が圧倒的に有利な状況。執拗に幾度となく口内を掻き回すと、アスナの体から力が抜けてしまい、心地よい柔らかさと重さを感じるようになった。
さんざん吸い尽くした舌を開放して唇を離す。口は半開きになり、離れていく俺の舌を追いかけるように、舌がチロリと出されている。アスナの甘い匂いに交じって雌の淫らな匂いがしてくるような気がする。
アスナはもう半泣きになっている。子供のように瞳に涙をためているのに、口の周りは成熟した大人の色に染まっている。
「ひっ、ぁっ、あへぁっ、ひっ、ひっく、ひぅぅぅ……っ。お、おわった……？」
「1回はな」
穏やかな口調で言ったつもりだったのだが、アスナにとってはそんなこと関係なかったらしい。ひどくおびえた表情になってしまう。
「……ほんろに、これいひょうはだめ、なの。いつもみんなに」
ぐずぐずになっているのにまだ口で抵抗してくる。
「まえしたときのおもいだして、キスだけで、こんなに……っ。わたしの体、おかしくなってる」
そういえば、前した時ダメって言ってもやめないでイかせ続けたっけ。俺が軽いトラウマになっちゃってるってことか？　女性の絶頂

は男性のものとは比べ物にならないっていうし、初体験であれはきつかったのかもしれない。
「じゃあ俺が悪いな。ゴメン」
「ホントに、そうだよ。私の体、おかしくなっちゃったじゃない……っ」
ぽすぽすと胸を叩いてくるアスナ。俺はそんなアスナの頭を子供をあやすように撫でる。
しばらくすると、落ち着いたのか、口から出る言葉もしっかりとし始めた。
「ん、もう大丈夫だよ」
「そか」
そう言ってアスナは体を起こした。キスだけって話だし、流れ的に終わりだってことはなんとなくわかった。そろそろ本当に時間になって来たし。
「……なあ」
「な、何かな？」
「どいてくんない？」
ご丁寧に俺の肉棒を押しつぶすように座っているから二重の意味で苦しいんだけど。俺は俺で、アスナほどではないにしろキスで興奮してカウパー液が滲んでいるわけだし。終わりなら終わりで沈めないといけないんだけど。
「お尻でぐりぐりするの、やめてくんない？」
「……やっ――――くらいなら」
はい？
「やっぱり、1回くらいなら、その、しても、いいよ……？　わっ！脱ぎ始めるのが速い!?」
準備は手早く迅速に。体を無理やり起こしてズボンを下ろす。
アスナも下着を脱いだ。外気に曝された秘肉から粘度の高い液体が光っているのが見えた。本当にキスだけで準備万端になってるみたいだな。
アスナはソファーに腰掛け、股を開いた。下半身には何も身に着け

ていないためすべて見えてしまっている。そんな淫靡な光景に背中がブルりと震えた。
「いいよ、翔君」
アスナに誘われるがままに、ペニスをあてがう。一度俺のモノに貫かれたそこは主人の帰りを喜ぶように口を少しだけ大きく開いた。それでも、俺の息子の太さには足りない。

亀頭が埋まりエラで止まった。
俺はアスナに確認するように目を向けた。アスナもこくりと頷き返してくれる。
俺は腰を動かした。
「うっ、ぁっ！」
「んんんんあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
徐々に入れていくつもりだったというのに、一気に奥まで貫いてしまった。子宮口と鈴口がキスし、子宮を圧迫する。
浮き上がった太い血管を流れる血液の流れを手助けするようにアスナの呼吸に合わせて膣が収縮を繰り返す。限界まで硬くなっていたはずなのに、もう一段回大きく硬くなったように思える。
「やば……っ」
どれだけ待ちわびていたのか。ペニスが奥をノックした瞬間に一斉に絡みついてきたヒダによって、精巣が確かに強く脈動した。あと少しで出してしまうところだった。
「そんなっ、ひっ、奥までいきなり……っ！」
アスナも抗議の声を上げているが、それはこっちのセリフだ。
慣らす意味で奥の壁をこつこつと叩く。硬く柔らかいもの同士がぶつかる感触に目から火花が出そうなくらいの快感が走るが、俺の息子をいじめるのはそれだけではない。周りにびっしりと控えているヒダも吸い付いてくる。動かすたびに引きはがしては、また別のヒダが吸い付いてくる。
アスナは頑張って声を抑えようとしてくれるが抑えきれていない。
「あぁっ！　んっく、ひっく、んひぃっ！　うっく、だ、だめ、もう、

おかしくなって……っ、これ、もうっ、うぁぁっ……！　同じとこばっかり……っ！　ぐりぐりしない、でぇっ」
　別にそんなつもりはなくても、アスナにとっては同じところを延々と責められている感覚に陥ってしまっているようだ。
「ひあぁぁあぁぁっ！」
　一際大きな喘ぎ声を上げて、アスナの全身が痙攣し、腰がくくっと浮かび上がる。股間から出た温かな液体がソファーにシミを作った。俺の肉棒もぎちゅぎちゅと締め付けられ、心地良い快感が頭を貫く。
　強張っていた四肢を投げ出し、アスナは絶頂の余韻に浸っている。浸っているところ悪いのだが、俺はまだほとんど動いていない。
「アスナ、動くぞ」
「ひっ、ひぁ、はぇ……？　う、ごく？　何言って――――」
　しっかり腰を掴み、抜ける直前まで腰を引き――――子宮をへこませるくらいの勢いで、奥に叩き込んだ。
「ひぐぅぅぅぅっ!!」
　ぶちゅぅ、といやらしい音が、まだ静かなリビングに響き渡る。物音ひとつしない家の中。聞こえてくるのは俺たち2人の荒い息遣いだけというこの時間。どんな配慮か防音性能が高いこの家でも上まで響いてしまうのではないかと思ってしまう。
　反り返ったペニスが天井のザラザラとしたところをヤスリにかける。敏感な粘膜がこすれあい、互いをコーティングしている淫液をそぎ落としていく。
　絶頂できつく締まるのを無視して、獣のように腰を動かす。ヌメる肉を掻き分け、こじ開けるピストンは、下半身が溶けているのではないかと錯覚するくらいの快楽を伝えてくれる。
　体の底から、押さえつけていたものがどんどん上ってくる。今度は抑える必要はない。
「アスナっ、出る、出る、出すぞっ！」
「出して、出して、翔君――――ああぁぁぁぁっぁぁぁっ!!!!」
　イき続けているアスナの体を力いっぱい抱きしめながら、俺も下半身を痙攣させた。白いマグマが迸り、満たしていった。

「……熱いの、いっぱい」
アスナは顔を腕で覆いながら、精液を膣壁に叩きつけられた快感に体を震わせていた。
俺は吐き出した余韻に浸りながら、精液と愛液がこびりついたものを引き抜いた。
久しぶりの俺の日常は、とても日常とは思えない出来事とともに始まったのだった。

ちなみに、運よく見つからずに済みました。

朝の訓練

「キ、キツい……ッ！」
「ふぅ、ふぅ、退院したてですし、そんなに無理しないほうがいいかもしれないですね。今日はこのくらいにしておきましょうか、翔先輩」
「はぁ、はぁ、翔さんでも、トレーニングしなければ体力は落ちてしまうんですね。私でよければいつでも付き合いますから」
早朝。２人の若い天才、綺凛とアインハルトとのトレーニングに付き合っていた。思えば長い入院生活はこのトレーニングの初回から始まった。長い時間を経て、ようやくここへと戻ってきた感じだ。
しかし、その内容は惨憺たる結果となってしまった。２人のペースに全くついていけず、先輩としては非常に情けない姿を晒してしまった。
もちろんこれには理由がある。退院したてで体力が落ちたという事もあるけど、この２人の場合、魔力やなんやらで体力を底上げしてる。筋肉のように限界まで使って休む、を繰り返すと魔力というものはどんどん伸びる。必然的に積極的にトレーニングに取り入れることになる。
練習メニューを聞いた時に真顔になってしまった。そんなものに俺が追いつけるわけがない。才能がある２人の訓練は、生身でごまかせる学校のものとは違った。俺のためにレベルを落としてしまうというのも申し訳ないので、そのまました訳なんだけれども、このざまだ。
俺も能力として魔力を使うものを持っているんだけれども、この手のものが全くできない。いったいどういう仕組みになっているんだろうか。
それはそれとして。
メニューが一通り終わり、タオルで汗を拭いたり飲み物を飲んだり、完全に終わりの空気になっている中、こんな話題を振ってみる。
「で、アインハルトはなんで綺凛の胸元を凝視してたんだ？」
「ぎょ、凝視!?」

「え……ア、アインハルトさん……？」
「え、あ、ち、違いますからね、綺凛さん！　翔さんも変なこと言わないでください！」
　変なのは君の方なんだけど。ランニングでチラチラ見てたけど。後ろからは丸見えでしたよ？
　アインハルトも年頃の少女ってことだろう。良きかな良きかな。あ、違うぞ。この年代の子供らしく自分と他人の違いに繊細になっていることがいいことだって言ったんだぞ。覇王流一筋だったアインハルトがそういうことに目を向けてるのが、良いことだって言ったんだぞ。
「い、いえ、いいんです。学校でもしょっちゅうですから」
「学校でもしょっちゅう？」
　アインハルトが聞き返した。俺にはなんとなくわかってしまった。
「はい。私、最近まで伯父さんと一緒にいることが多くて、お友達とかいなかったんですけれど……体育の時の着替え、とか、クラスの女の子が私のこと見てるんです」
「胸を、ですか……？」
「……はい。それだけじゃなくて、体育で走ってる時とかも結構視線が。まさか、アインハルトさんもだなんて思ってもみませんでしたけれど」
「すみません、綺凛さん……っ！　どうかいやらしい私を許してください……っ！」
「い、いえ、そんな！　むしろ私の方こそ、すみません！」
　綺凛は一体何に謝っているんだろうか。アインハルトの視線を集めてしまった胸の大きさについてだろうか。
　体育の時間もってことはやっぱり男子の視線も集めてるんだろうなぁ。男子と女子で分かれるほどやさしい仕組みになってないから。
　思春期になりたての男子中学生にはさぞ刺激が強いことだろう。
　俺？　俺はさっきも言ったけど2人のペースについていくのが難しかったからずっと背中を追いかけてたよ。だから背中しか目に入ってない。お分かり？

「それにしても、アインハルトさんも、その、気になりますか？」
「それは、その……すこしは……。決して、大きいのがうらやましいとか、そういう事ではありませんがっ！」
「ま、胸の大きさは、一概に大は小を兼ねるとは言えないからな」
顔を真っ赤にして必死に否定するアインハルトを見ながら俺はぽつりとつぶやいた。
持つものは持たざる者の苦しみを知らず、持たざる者も持つ者の苦しみを知らない。世界とは何て複雑に作られているのだろうか。
そんな2人のやり取りをほほえましく思いながら見ていたが、ここは年長者らしく言わなければいけないことがある。
忙しい平日の朝、早朝訓練のメニューを一通りこなした俺達に残された時間はそう無い。
俺は2人に声をかけ腕時計を示し、それとなく今の時間を伝える。
「こんな時間だし、もう解散したほうがいいんじゃないか？」
「そうですね。そうしましょう」
「はい。それじゃあ、お疲れさまでした」
俺たち3人とも家は別々の方向。送っていくと流石に時間が足りなくなるので公園の入り口でそれぞれの方向に分かれる。
2人の背中を見送り数歩。立ち止まる。
「っと、やっぱトイレしておくか」
家まで我慢してしまおうかとも思ったけれど気が変わった。道中何があるかわからない、という事をもう学習したわけだから、スッキリしてから帰ることにしよう。
俺は公園に備え付けられている公衆トイレに足を向けたのだった。

何事もなく用を足しトイレの外に出る。

すると、目の前に意外な人物が現れた。
「せ、先輩」
「ん？　え、ええ？　綺凛？　どうした？　忘れ物か？」
さっき別れたばかりの綺凛だ。緊張した面持ちでそこに立っている。
まさかとは思うが、新手の敵じゃないだろうな。事件の爪痕はすっかりなくなってしまったとはいえ、ここはこの前の公園で時間帯も同じだ。
変装能力を持った敵が攻撃を仕掛けてきたとしても不思議ではない。不思議ではないのだが……体をがちがちに緊張させて、顔を真っ赤にするところまでこんなにリアルに表現するのは、本人以外には難しいだろう。
「あの、少しお話が合って……いいですか？」
「ん、いいけど。どうした？」
「私不器用で鈍くさくて、剣術しか自慢できることがなくて。剣がうまくても男の人へのアピールになりませんよね？」
「う、うーん……」
確かによほどの剣術マニアならともかく、剣術で男性にアピールは難しい。
「もしかして、先輩、もう誰かとお付き合いを……？」
「や、お付き合い、というか、なんというか……」
それより深い関係と言いますか。君が聞いたら卒倒しそうな関係と言いますか。
と、ふと思う。俺とみんなって、世間一般的にはどんな関係になるんだろう。複数人いるけど恋人？　……他人にはかなり説明し辛い関係であることは確かだな。
「って、焦りすぎだぞ、色々と。綺凛が俺を、ん、まぁ、好き、なのはわかってるけど。昨日の今日で、みたいなのはさ」
病院でのキスは不意打ちとして最強の威力を持っていただろう。小説で言えばラストで挿絵付きで載ってそうなくらいだ。疑う余地もなく、鈍感主人公でも気が付くレベルのアピールといえる。

しかし、女の子と直接顔を合わせてわずか1週間でセックスしているような男が何を言っているのか。昨日の今日でHなことしてる俺。
「あっ……ごめんなさい……でも、学年が違うとなかなかお会いする機会もありませんし、翔先輩の周りにはきれいな女の人がたくさんいますし……」
綺凛が直接会ったのは雪菜とアスナだけだった気がするけど……病院かどこかで顔を合わせたんだろうか。
「そ、それならっ、私と戦妹(アミカ)になってくれませんか……っ！」
「戦妹(アミカ)、か……」
戦妹(アミカ)というのは武偵間の師弟制度のことだ。アリアにも戦妹(アミカ)の間宮あかりがいる。
なるだけなら大した問題じゃないんだけど、俺の強さの大部分が特殊すぎることもあって教えられることがなさそうだし。むしろ、剣術を教えてもらうまでありそう。
一緒にいたいって理由だと上の人に何を言われるかわかんないしなぁ。俺も先生方を敵に回したくはない。
それに、男女間のペアの場合(特に先輩が男子生徒の場合)、先輩という立場を利用していかがわしいことをするヤツもいるってことで、報告と監視が厳しくなっている。
しかし綺凛の行動力を見るに、断っても別の手法で攻めてきそう。こんなにアグレッシブな娘だとは思わなかった。不意打ちキスの時から考えておくべきだったか。
「……っ」
俺が考え込んでいると、綺凛が小さく息を飲んでいるような音が聞こえた。そして気が付くと、すぐ目の前に立っていた。本当に目の前。動きやすそうなトレーニングウェアを大きく押し上げている2つの双丘が、俺の目の前5センチのところで上下に揺れている。
「き、綺凛？」
「……翔先輩」
もじもじ、もじもじ。今日の早朝練習、はきはきとアインハルトとしゃべっていたのが嘘のように、視線をさまよわせる。手も落ち着か

ず、一人で絡めたり、服を握ったり。
　しかし覚悟が決まったのか。顔を上げる。
「私の、わたしの……胸、触りたくないですか？」
「……今なんて？」
　あまりの衝撃発言に、思考がフリーズしてしまった。
「で、ですからっ、先輩も男の子ですし、女の子の胸、とか、触りたいって思ってるんじゃないかなぁ、って思って……っ。私のだったら、先輩の好きなようにしても……っ！」
「いやいやいやいやいやいやいやいやいや！　だから早いって！　どうしたんだよ突然！」
　さっきは敵には見えないといったが、もしかすると敵だったかもしれない。俺のことを色仕掛けで落とそうとしている敵の……や、無いな。やり方が回りくどすぎる。
　そんな冗談は置いておいても、綺凛がらしくないことを言っているのは確かだ。
「調べたんです！」
「調べた!?」
　何を？
「男の人は、女の人の、は、ハダカを見たり、胸を触ったりしたいんですよね……？」
　否定はできませんが。
「私と戦妹（アミカ）になれば、私に何でもしていいんですよ？　先輩がやりたいことなら、なんでも……っ」
　どこかの小説の一説を丸々持ってきたことを言う綺凛。セリフはとても魅力的なのだが、言っている当人がガチガチすぎて、こちらの力が抜けてしまう。
　おかげで冷静になれた。ひとまず時間のこともあるし、戦妹（アミカ）のことは一時保留しにしておこう。
「え……」
「え？」
「エッチなことから始まる恋があってもいいと思います……っ！」

「それダメな奴だから」
いったい、本当に、どんなこと調べたんだ。
「お、おと、男の人と女の、人が裸になって……っ。ぴしゅうううっっっ」
「いや、いいって！　事細かに説明しなくても！」
茹でたタコのようになってしまった綺凛を介抱し、今後身体で釣ろうなんて考えてはいけないときつく言って帰した。
抑圧からの解放。今まで伯父さんに押さえつけられていた自分がすごく表に出てきたんだろう。伯父さんの監視下では、ネットに触れる機会すらなさそうだったし。
自分で調べるようになれば、あとはもう『テレビとは違って規制がほとんどないネットの世界』＋『興味のある事柄』のコンボで超吸収スポンジのように知識を蓄えていたんだろう。
少女漫画も、モノによっては少年漫画のお色気シーンよりはるかに過激だって聞いたこともあるし、女の子がHなことに興味を持たないなんてあるわけないんだし。
俺がきっかけになっても、俺が悪いわけではないのであーる。まる。

「ごめんなさい、アインハルトさん。先に行っててもらってもいいですか？」
「え？　どうかしたんですか？」
翔と別れてすぐ、綺凛が立ち止まった。
「え、っと……大したことじゃないんですけれど……ちょっとトイレに行っておこうかなって」
「トイレ、ですか？　それなら公園にありましたね。待ってます」

「い、いえ！　大丈夫ですよ！　アインハルトさんも忙しいでしょうし」
アインハルトの提案を首をブンブン振って否定する。その必死さに多少の違和感を覚えるアインハルトだったが、そこに何か邪悪なものを感じ取ることはなかった。
「（お腹の調子が悪いんでしょうか……）そうですか？　それでは、先に」
「はい！　また学校で！」
そう言って、綺凛は元来た道を走って公園に向かっていった。アインハルトはトイレを我慢しているのにあんなに走っても大丈夫なのかと心配しつつも、別れて歩き出した。歩き出したのだが、
「やはり気になりますね……」
妙な胸騒ぎを感じたアインハルトは来た道を戻る。たいした時間もかからず、公園に到着した。島全体が起き始めるこの時間帯が、早朝の散歩や自主トレする人が少なくなる。日が昇っている時間では、一番人が少ない時間と言える。
アインハルトはそんな公園を迷わず突っ切り、トイレの前まで来た。
「ん？」
綺凛の話し声が聞こえてきた。
このトイレは構造上、男女の入り口が反対になっている。アインハルトは綺凛を追ってきていたため、もちろん女子トイレの入り口にいる。そして声が聞こえてきたのは、
（向こう側？　男子トイレの入り口に？）
頭の中の疑念がどんどん大きくなっていく。
こっそりと、足音を立てないように声の方向に歩を進めていく。
壁の角から様子を伺った。
（綺凛さんと、翔さん？）
２人の姿を見て肩の力を抜きかけ――――その直後の綺凛の発言に噴き出すのをこらえることになった。
「私の、わたしの……胸、触りたくないですか？」

（えええええええええええええ!?）
あまりの衝撃に立ちくらみがする。アインハルトの代わりに翔が叫ぶ。
一度隠れ、混乱した頭を整理しようとする。
アインハルトは視線を下に移した。服を着ているとあるかどうかもわからない自分の胸。なんだがすごく、負けた気分になるアインハルト。
アインハルトがこっそりのぞき見していることなど知る由もない2人の会話はどんどん進んで行く。
（あ、あんなに近くに……っ！　しかも見つめあって……っ！）
格闘技一筋だったアインハルトでもキスぐらいは知っている。以前テレビで見たドラマのワンシーン。それにそっくりの構図に、見ているだけのアインハルトの心臓が速くなってくる。
自分の知り合いの、ついさっきまで一緒に話していた人たちの逢瀬を盗み見しているという状況に、息も荒くなってきた。
「私と戦妹（アミカ）になれば、私に何でもしていいんですよ？　先輩がやりたいことなら、なんでも……っ」
（それはいけません！　いけませんよ綺凛さん！　翔さんも、変なことを考えていたりしませんよね!?　……あっ、こっちに来る！）
アインハルトは急いで女子トイレへと駆け込んだ。そこでやっと一息つく。
「はぁ……私はなんてことを……盗み見してしまうなんて……」
熱に浮かされたような、夢から覚めたばかりのようなふわふわとした気持ちで、トイレの天井を眺める。
「っ!!」
一瞬で現実に引き戻されたアインハルトは履いていたジャージと下着を少しだけ降ろした。あそこと下着の間に、突然液体が現れたのだ。
（な、なに？　汗……じゃないよね？　少しねばねばしてる？）
自分が今まで分泌したことのない液体に戸惑うが、このことは今日見た光景に流されすぐに忘れてしまうことになるのだった。

鑑賞会の裏側で　（理子）

「いらっしゃーい！」

玄関を開けると近所迷惑になりそうなくらい大きな声で理子が歓迎してくれた。ここは俺の家ではなく、とあるマンションの一室だ。それもファミリー用でかなりの広さを誇る。

理子は今、俺の家に住んでいる。しかしその前、つまり武偵殺しとして活動していたころはこのマンションを活動拠点としていたらしい。ジャンヌや夾竹桃も一緒に。今はこの2人で利用しているのだとか。

犯罪組織の3人がルームシェアをしているというのも結構迂闊なんじゃないかとも思うが、俺たちに捕まるまで全く疑われてなかったんだよね。どこかの誰かが手を回してたんだろうか。

そんな場所に俺は今日招待された。

「なっ、なぜここにいるんだ、夜月！」

リビングから顔を出すジャンヌ。理子は俺の来訪を伝えていなかったらしい。いろいろと状況が読めてきた。

「り、理子！　どういう事なんだ！」

「そんなの、翔君にも見てもらうために決まってるでしょ？　ジャンヌのメイド服姿を、ね」

顔を赤くするジャンヌの手には、動きやすさと可愛らしさを合わせた服が握られている。フリフリがあしらわれていて、どう見ても普段着、もしくは普通の外出には使わないであろうデザインだ。サイズを見るに間違いなくジャンヌが着るものだ。

以前偶然にも目にしてしまったことであるが、ジャンヌは可愛い服に興味を持っている。

周囲にはクールな先輩というイメージが付き、本人も自分には似合わないと敬遠してしまっているが、家で隠れて着るくらいにはドップリ浸かってしまっている。というのは理子の話。どうやら俺と一緒に1着だけと言って買ったモノが、案の定やめられなくなってしまったらしい。

そんなジャンヌを見かねた理子は自らの伝手を使い、フリフリ衣装を着て接客をするお店にバイトの申し込みをしてしまったのである。ジャンヌには内緒で。

何も言わずに申し込んだこととはいえ、ジャンヌ自身も前々から興味があった事もあって乗り気になっていた。

今日がそのバイトの初日なのだが、直前になって行きたくないと駄々をこね始めたらしい。

それで、お店の制服を着た姿を理子に見せて激励してもらうことになったらしいのだが、

「だからと言って、この男にまで見せる必要はないだろう！」

「えー、でもさぁ、お店に行ったら男の人の接客もしないといけないんだよ？　そんな時に恥ずかしがってたらダメだと思わない？　せっかく掴んだチャンスなんだよ！」

せっかく掴んだチャンスってバイトだよな？　これってさ。しかも君が強引にチャンスを掴ませたんだけど？

「ほらほら、どうするの？　どんどん時間が過ぎていくよ？　バイト休むの？」

「そうしたいのは山々だがな……ッ！　しかし、初日から休んで店に迷惑をかけるわけには……くっ！」

まじめ過ぎるのも考え物だとつくづく思う。ジャンヌはひとしきり悩み、やがて肩を落とした。

「はぁ……分かった。着替えてくるから少し待っていろ」

そう言って、ジャンヌは自分の部屋に入っていく。

着替えが終わるまでリビングでゆっくりしようとする俺だったが、理子がそんなことを許してくれるはずがなかった。

「どうした、理子」

不意に俺の手を掴む理子。

「これ、なんだかわかる？」

ポケットからピンク色で卵型の機械と同色の小さいリモコンを取り出した。どこか見たことがあるような感じがする。というか見たことがある。パソコンの画面越しだけど。

「ローター……？　え、なんで今？」
俺自身、理子にお呼ばれなんてそういうことを期待していたゲフンゲフン予想はしていたけれど。これからジャンヌのウェイトレス姿の鑑賞会をするって時に出てくるとは思わなかった。
「またまたぁ。翔君だって色々期待してたんでしょ？　家にいるみんなとはあんまり出来ない事とか興味ないかなぁって思ってさ」
「や、それについては否定しないけど、ジャンヌもいるし」
俺は部屋の中でごそごそしているジャンヌに視線を移す。もちろん扉越しに。
バレても大丈夫な人とダメな人がいる。クロとか狂三ならこっそりしてても少しムッとするかもしれないけど許してくれるだろう。アスナと雪菜はカンカンに怒るけど謝れば許してくれるだろう。でもジャンヌの場合は。
「次に会う時からゴミを見る目になるだろ」
ちょっとそれは勘弁。
「ちなみにどんなことしようと思ってるんだ？」
「んー？　翔君もネットで見たことない？　女の子のアソコにHな道具入れて何かさせるってやつ」
まあ、予想の範囲内だな。
「この手のヤツってどこかのお店に行かせるのが多いよね。ジャンヌのバイトから思いつきました！」
「最悪だよ！」
この娘、友達を何だと思ってるんだ。
「大丈夫だよ！　バレなければいいんだからさ！」
「えぇ……」
もう理子はやる気満々といった具合だ。
でも、このタイプのプレイってローターのリモコン持ってる男の方に主導権がある訳だし。起動させないって選択肢もあるんだよね。そう考えると心が楽になって来た。
理子はスカートの中に手を突っ込み始めた。その手にはローターが握られている。

「あ」
「ん？」
理子が動きを止める。
「翔君が入れてくれる？」
「やめておく。我慢が効かなくなったら困るからな」
「くふっ、それもそうだね」
ふわりと笑い、スカートの中でごそごそと手が動かされる。ほんの数秒で作業が完了したらしい。すごく手慣れてる感じがする。
そしてリモコンのメモリを俺に見せるように持ち――――メモリ最大になるまでスイッチを動かした。
「んっ！」
「お、おい！」
いきなり最大にするとはいったい何考えてるんだ。
「このローター高級品でね？　ほら、最大にしても全然音聞こえないでしょ？」
「……そう言われれば」
確かに何も聞こえない。この音の大きさなら、大きな反応さえしなければ早々バレることはないだろう。
「これなら、遠慮しなくても大丈夫だよね？」
「はいはい、分かったから。ほら」
とりあえずリモコンを渡すように右手を差し出した。なんか最大にしてても平気そうだし、ずっと一番パワーを低くしておこう。で、最後に操作するの忘れたって言ってごまかすとしよう。
そんな計画を立て、リモコンを受け取ろうとした。
「着替え終わったぞ。扉の前で何をそんなに話している」
ジャンヌが扉を開け、出てきた。
理子は何食わぬ顔でリモコンを隠していた。流石、有名怪盗の血を引いているだけあって鮮やかな技だ。でもこれで、俺がリモコンを受け取るチャンスが大きく減ってしまったことになる。
「くふっ」
「……」

理子が笑ってるんだけど。
何か悪いことを考えついたという顔だ。悪い予感しかしない。
「んー何でもないよー。ほらほら！　時間もないんだし早くリビングに行こ！」
「そうか？　はぁ、この男相手に練習するのか……」
笑顔でジャンヌに応対しつつ、
「よっと」
扉が閉まりきる直前、リモコンをジャンヌの部屋の中に投げ入れてしまった。
「……は？　え？」
な、何してんの、理子さん？　ロータ―のパワー、最大のままだったよね!?
そのままパタンと扉が閉まってしまう。俺は反射的にリモコンを取ってこようとドアに手をかける。
「おい、何をしている夜月。私の部屋に何か用なのか？」
「え、あ、や、そういうわけじゃ……」
当然、ジャンヌがそれを許してくれるわけがない。
「もー翔君は。時間ないんだからそういうことは後回しにしてくれないと！」
理子、お前は後で仕置きしてやるぞ……っ！
結局俺は言い訳を見つけることが出来ず、リビングへ連行されていった。

「うん。いいな」
「いいよねぇ……んっ」
「そ、そうだろうか？　お前たちがそう言っても、それはお前たちがお

かしいからなんじゃないのか？」
　こいつさらっと毒吐いてくるな。でも、ジャンヌに対する評価は変わらない。一通りのあいさつ、立ち振る舞いを見せてもらったが、どこにもおかしなところはなかった。相当練習したんだろう。
　着ている服装は、俺が想像できる一般的なメイド服だった。そこまで装飾がされているわけではないし、露出がある訳ではない。スカートもロングだし。ジャンヌが気にするような過度なものは何一つない、本当にシンプルなものだ。
　気にしている身長だってそこまで考えないだろ。そりゃあ、ムキムキでボディビルダーみたいな女性だったら好みが分かれるかも知れないけど。ジャンヌ相手にそんなこと気にする人なんてそうそういる訳ない。
　しかし、時折横でピクピクする理子の事もどうにかしてほしい。リモコンが手元にない今、理子の下腹部で暴れている機械を止めることは不可能だ。取り出そうにもジャンヌの目の前で下着に手を入れるわけにはいかないし。
　机の影で落ち着きなく俺の袖を握って開いてを繰り返すその姿は、俺をイケナイ気持ちにさせてくる。
「割と手堅いお店なんだな。理子のことだからもっと派手なところ選んだんだと思ってたよ」
「ふっふっふ。理子だってそのくらい弁えてますからね～。このくらいがちょうどいいと思ったんだよ」
　意識を逸らすためにも適当な話を振る。
「なんだと!?　これよりも過激なものを着るかもしれなかったのか!?」
「スカートがロングだし、かなりセーブされてるだろ」
「場所によっては肩を出したりするからねぇ……ひぐっ！」
「っ!?」
　突然理子が変な声を上げた。
「ど、どうしたんだ、理子？　そんな変な――――」
「何でもない！　なんでもないから気にしないで！」

あの理子が焦っている。もしかしなくても今のは出てしまった声だ。
（おい、理子）
（ごめんごめん。いまちょっといいとこに当たって、ね？）
いいとこって、おまっ……！
（それにしてもこんなにすごいなんてね）
（は？）
（このプレイ、こんなに効くなんてなぁ。そんなにMじゃないと思ってたんだけど）
（や、何言って――）
（しかも今ので一気に濡れてきたかも……あは、ちょっとまずそう）
いやいやいやいや、まずそうじゃねーですよ!?
（トイレ行けよ！　早くしないと――）
（も、もう無理。足ガクガクになっちゃってる）
「おい、何を話して――」
「とにかく！　すごく似合ってることには変わりないから！　俺たちが保証する」
「ふん、何人もの女とまぐわうような男の言葉があてになるか」
「まぐわう言うな」
事実だけれども。今もすごくマズいけれど！
しかし幸いジャンヌは恥ずかしさからか顔を横に背け俺たちの方を見ようとしていない。これなら俺たちがこんなことしているとは、よほどのことが無い限り気が付かないだろう。
「ふぅぅぅ……っ、あ……っ！　ひぅ、ひあぁ……っ！」
よほどの、ことが……
「……ふっ！　……ふぅっ……んんっ……っ！」
無い限りは……
「んんっ、ぁ……んあっ……ふぅっ……んっ……これ、もう……っ！」
これ、小声だけどジャンヌに聞こえてないんだよな!?　顔色一つ変えてないし大丈夫なんだよね!?

最初は余裕そうに深く腰掛けていた理子も、今は椅子からわずかに腰が浮き、声を出さないための大きな呼吸でお腹が上下している。
内股になった太ももがこすりあわされている。
そしてとうとうその時が来た。
「っ……うぅう、ぅんんうぅ……っ！」
途中から握っていた俺の手に加えられていた力が一気に強くなった。大声こそ上げていないが、体中が強張っているその姿は女性が絶頂を迎えている姿だ。
声を出せないせいで受けている快楽をすべて味わってしまっているのか、ずいぶんと長い……や、そうじゃない。ローターがずっと動いてるせいで快感が永遠と与えられてるのか。
「理子？　本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫だから！　ジャンヌもそろそろ行く時間じゃないのか!?」
何とかジャンヌには気づかれずに済みましたとさ。よかったよかった。

「それでは、行ってくる」
「はいよ、行ってらっしゃい」
ジャンヌは割と上機嫌に出て行った。なんだかんだ言っても、褒められるのはうれしかったんだろう。慣れてきたら様子を見に行ってもいいかもしれない。
で、こっちの娘は。
「はー、ドキドキした」
ドキドキしたのはこっちだと言ってやりたい。
ジャンヌが出て行ってすぐに壁に寄り掛かり、そのままずるずると座り込んでしまった理子を見る。

スカートから伸びる健康的な2本の足。その最奥にある布地はぐちゅぐちゅになっていることだろう。さらにその薄布の先には……

今までのことに対する小さい怒りと、これからのことに対する大きな期待の目を、俺は理子にむけるのだった。

蜂蜜の甘さ（理子）

扉に鍵をかけた。何か忘れたとか言ってジャンヌが帰ってきたりしたら大変だからな。もちろんジャンヌだってここのカギは持ってるだろうけど、鍵が閉まっているのといないのとでは時間のロスが違う。

視線を移動させる。

「ふぎゅ……っ、あっ、うぁっ!?　うっく、ひっ、あくぅっ、うんん……っ！」

ジャンヌがいなくなったおかげで思う存分に声を出し、乱れることが出来るようになった理子。フローリングの床に寝ころびローターの刺激に腰を揺らしている姿に、俺のズボンもテントを張っている。

「理子、大丈夫か？」

「ん、んんっ！　だい、じぃっ！　んくぅっ！　あっ、あぁぁっ！　あぁぁぁっ！」

これは大丈夫じゃないな。膣内に入ってるローター取ってあげないとまともに会話も出来なさそうだ。

俺は失礼してしゃがみこみ、理子のスカートをめくり上げた。理子の乱れ方から予想はついていたことだったが、金色の派手なパンツはその給水限界を超えるくらいに濡れぼそっていた。それだけではなく、スカートの裏地にも、部分部分にシミがある。

ローターを入れてから何回イッたんだ、理子は。

しばらくの間スカートの中の淫靡な光景に目を奪われていた俺だったが、パンツを脱がそうと手をかけた。

理子の腰が浮いている時を狙い、一気に。

愛液で汚れた薄布は、べちゃと音を立てた。

理子のおまんこは、俺の前戯が必要ないくらいぐずぐずになっていた。明るいから全部見えてしまっている。腰の動きとは全く違うタイミングで呼吸をするように開閉を繰り返す入り口。そこからとめどなくあふれる液体は、理子の体をいやらしく染め上げている。

今すぐにでも貫いてしまいたい衝動を抑えながら、2本の指を挿入

した。
「んあぁぁぁっ!?」
理子の体が大きく弓なりに反り返った。腰を引いて逃げようとする体を抑え込み、中へ中へと進めていく。
第2関節まで入れたところで何か震えるものに指先が届いた。
中に入っている電気機器類のせいか、はたまた理子に温められたのか、無機質なプラスチックの物体はほんのり暖かくなっている。
今なお最大出力で震えている上に、膣は肉棒と勘違いして全力で締め付けてくる。とても動かし辛いが、何とかローターと、それに纏わりついていた愛液を外に掻き出すことに成功する。
「んっ、んん……っうぁぁぁっ!? あっ……あふぁぁっ！ …あぁぁぁぁ……っ!!」
角度的に、天井に生えそろっていたザラザラとした部分を余すところなく擦り上げてしまったのはご愛敬だ。
やっとの思いで、膣内で暴れまわっていた機械を取り除くことが出来た。理子は精根使い果たしたようにぐったりとしてる。
床で耳障りな音を出しているローターは、普通にリモコンを使って止める。ジャンヌの部屋に無断で入ることになったけど、特に何もしないでリモコン拾っただけだしいいよね？いいってことにしようか。
「あはは、もうホントにすごいよ。ドキドキしたなぁ」
「こっちはヒヤヒヤしたよ」
「自分でする時と違って自分じゃやめられないのがね、ほんと、すごかったよ」
「報告しなくていいから」
多少はぐったりしている様子の理子。下半身をすべてさらけ出しているみっともない格好だが、収縮を繰り返す秘部が視界に入るだけで俺の股間のものが反応する。
……そういえば、お仕置きするんだっけ。
ノリで考えたことだったから何も考えてなかったんだけど、この全く反省していない理子を懲らしめるためにも少し考えた方がいいんじゃないか？

「あっ、やっ！　ちょっ！　あっ……っ！」
狙いは咥えるモノを欲しがっている肉壺ではなく、その上でちょこんと顔を出している小さい突起だ。すっかり膨らんでいるそれを押し潰す。
「んんんんんんんんん……っ!!」
とっさに口をふさいだ理子だったが、その隙間から声が漏れる。上の口とは反対に、大きく口を開いた下の口は新しい蜜をどんどん作り出す。押し潰される度に腰を震わせる。
ぬろりと、人差し指が開いていた縦線をさらに割った。ピンク色の中身を、指がザラザラと舐める。眉を歪めてぷるぷると震えた。膣口の入り口を引っ掻いた爪はすっかり愛液でコーティングされる。これ以上ないほど膨らんだクリトリスが指の腹にしごかれる。
「うぅぅ……うぅぅぅ……うはぁぁっ！　だめ、だめ、だめ、イっちゃう、イっちゃうよぉっ、翔くん、許して、理子、結構限界……ひぃんっ！」
じゅくっとした感触と共に膣に指を挿入した。肉圧を押しのけ、一気に奥まで。びっくりして腰を浮かせた理子に逆らわず、すぐに指は抜け、つぷぷっとまた入っていく。
きゅうきゅう締め付けてくるひだを振り払いつつ、天井に生えそろっているざらざらした所を擦る。
「あぅぅ……うっ！　はぁ、はぁ……っ、あっ！　はぁ！　あぅ、んっ！」
口を押さえている手を空いている手でどける。両手で覆っていたが、いとも簡単にそれほど力を籠めずともどかせることが出来た。そこに唇を重ねる。
「んんんっ!!　んむっ、あむっ、んちゅるっ、ちゅるっ、じゅるっ、んんっ、んっ、んっ、はむっ、じゅるる」
重ねた唇からバニラのような匂いがする。
いきなりのキスに目を白黒させていた理子だったがすぐに受け入れ、何と理子の方から舌を出してきた。最初はソフトに（現在進行形で膣内をかき回しているが）するつもりだった俺はまさかの後手に回

ることになった。
獣がようやく仕留めた獲物に喰らいつくような激しさだ。理子は俺の口内に舌をねじ込み、すぐさま歯列の裏や口蓋、口の内膜中をその柔らかい舌で蹂躙し、息つく間も無く続けざまに俺の舌に吸い付き、いやらしくじゅるじゅると水音を立てた。
「あむっ、じゅるっ、じゅるるるる……っ、ひっぃ！」
上では先手を取られたが、下ではそうはいかない。二本目の指を挿入する。
にゅぷぷっと指が理子の中に入る。2本の指はバタ足をするように、泳ぐように動き回り、中の其処彼処を撫で回す。くちゅっ、くちゅっと、指の腹に膣内を撫でられ、理子は我知らず喘ぎ声を漏らしていた。
落ち着きなく揺れていた理子の腰が浮き始めた。
「ぷはっ、し、翔君、慣れて、るっ……これ、絶対、慣れてっ、う……っ！」
理子はぎゅーっと股を閉じるも、指は勝手気儘に苛める。
「あ、あが……っ、えぐ、も、もう、もうだめ、イ、イク、イク……っ」
理子の身体が、大きく震えた次の瞬間。
「あがっ、ひっぅ、ふぁあああああ！」
全身を激しく痙攣させて、淫液を噴き出した。
「あがっ、あ、あえっ、かはっ、あおおお……あおおお……っ」
粘液で汚れた指を引き抜くと、栓が抜けたように中から絶え間なく白い本気汁が流れ出してくる。理子は断続的に痙攣したまま、虚ろな目で俺を見つめた。
「……イ、イカされちゃったぁ。男の人にされると全然違う……」
くたっと腰から崩れ落ちた理子は、ぽーっとした顔で、目の前にある俺の顔を見つめる。
さて、いい加減焦らされ過ぎて股間が痛くなってきた。ギンギンになった俺のペニスの先から先走り汁がにじんでいるのはもうずっと前から感じている。
つまり、あれだ。

もう我慢の限界ってやつだ。
「理子、部屋に行くか」
ここ、家の玄関先だった。いつまでもここでしているわけにはいかないだろう。最後までするにはせめて理子の部屋までは移動しなければ。
「えー……動きたくない、身体ダルいよ～。連れてって～」
「はいはい」
こうなったのは俺の責任だしな。俺は理子を抱きかかえようとして、
「あ、ちょっと待って」
「なんだよ」
止められた。
「どうせだったら入れたまま連れてってよ」
「入れたまま……？」
一瞬何を言っているのかわからなかったがすぐに理解する。要は駅弁で抱っこして連れて行ってほしいって意味ね。
「いいけど、やったことないぞ？」
ズボンのチャックを下ろす。チャックを下ろす音を聞いたのか、理子が下半身に目を向けてくる。
「うぁ、え、あっ、お、おっきぃ……」
「……そこまでデカいか？」
サイズとしては日本人の平均的なものだと思うんだけど。
「や、その、ね？　ネットとかの黒人のよりは小さいけど、画面越しとは違うというか……いざ自分のに入ると思うと……っ」
そっか、そっか。
「じゃあもう少しほぐしておくか」
言って、理子の肉襞を再び2本指でかき回す。
「うあああああっ!?　しょ、翔君、も、や、指でくちゅくちゅってしらいれえ……っ！　やぁ……もう、くちゅくちゅ、くちゅくちゅやらあっ……」
そこにはもういつもの理子の姿はなかった。人をからかったり、時

には過激なことを言って耐性のない娘を赤面させたり、そんな姿は微塵もなかった。柔らかくふやけ、いやらしく匂う肉壺を好き勝手にされているだけのメスがいる。
正直、アソコの準備はもうとっくに出来ているように見える。むしろ、激しすぎて体力を使い果たしてないか不安にあるくらいだ。
ほどほどにして指を引き抜く。俺は俺で、もう我慢の限界をとっくに通り越している。
「理子、いくぞ」
とろとろにされた理子は、ペニスが大きいとか、そんなことは忘れてしまったようだ。こくりと小さく頷くと、ぐぶっとペニスが小さな膣にめり込んだ。
「う、うん……くっ」
「……っ」
ぷちぷちと何かが千切れていく感触がする。が、理子は特に痛がっている様子はない。ここら辺は個人差があるんだろうか。特に静止の声もかからないのでゆっくりと腰を突き出していく。
理子は半分くたくたになっているが、膣内はそうではない。ようやく待ち望んでいたものが訪れたのだ。ぎゅっと理子の膣が締まり、うにうにとペニスにしゃぶりついてくる。
ようやく奥にあたり、一息つく。気を抜くとすぐにでも射精してしまいそうだ。
「うっ、あっ、あっ、あっ、あぁぁ……っっ！」
「大丈夫か、理子？」
「だい、じょうぶ……っ！　だけど、これ……っ。いいとこばっか……っ！」
理子の膣から、血と古い愛液だけでなく、新しい愛液が溢れ始めた。
理子が痛がらないように注意しながら、ずりっと、複雑に入りくねった膣天井をそぎ落とす。なるべくゆっくりと。
「何人、なの……っ!?　何人これで鳴かせて……っ！　奥も、気持ち、いい！　はあっ、ひぐ、あが、はあっ。」
「そこまで多くないって」

ずるっとペニスを引き抜いた。
「ひあっ!?　あっ、ううう！　ひっ！　いん！」
大きく開いたカリが、ねたねたとペニスに絡み付いていた膣肉をガリッとこそげ落とした。
硬直した膣肉をこじ開けるように、ずぶりっとペニスが押し込まれ、逆立った膣肉がペニスによって平らに押し潰される。
「やっ！　なにこっ！　ああっ！　ちょっ！　やっ、おかひっ、おかひくなる、やらっ、あおおお、あああああ……っ」
ぬちっ、ぬちっ、ぬちっと膣が卑猥な音を奏で始めた。理子の乳房が、悦ぶようにたゆんたゆんと規則正しく揺れ始める。膣襞の一つ一つをうぞうぞと蠢かせる理子に負けないように、肉粒天井にずりずりとペニスを擦り付ける。
「そ、そこっ、だっ、めっ！　あっ！　あっ！　あっ！　あっ！」
だんだんとストロークのスピードが上がってくる。
理子は声とは裏腹に俺の首に噛り付いた。ぷにゅっと身体の割に大きな乳房を潰す事も厭わず、子供のようにぎゅーっとしがみ付く。
「だめ！　だめぇ！　あっ！だめ！　だっ、ああ！　まっ、待って！　待ってぇ！　だめえ！　だっ、あああああああああっ!!」
理子の背が反り返った。両手両足を使ってぎちぎちと締め付けてくる。
「ひっ！　ひっ！　ひぃ！　そこだめ、だめなのにぃ！　ひっ！　ひぁ！　あが、　あっ！　あっ！」
ダメと言われても、ここは手マンの時から見つけていた理子の弱点だ。責めない手はない。ずりっ、ずりっとそこを擦り続ける。そのたびに膣が悦び、粘っこく締まるのが分かる。
「やだぁ！　たっ、またっ！　イっ！　イっちゃうう！　あああああああうっ!!」
あっという間に、理子は2度目の絶頂をした。理子は呆然と天井を見ている。
「なっ、なっ、なん、ないこれぇ……っ。ちょっと、頭、チカチカ、するよぉ……っ」

俺がペニスを引き抜こうと動くと、理子は緊張で身を硬くする。しかしそのままペニスが抜けると、ほっと脱力した。
「し、しょうく……マジ、きちく……」
……駅弁になる前に少し慣らすだけのつもりがもうノックアウト状態なんですけど。
くったりと身体を投げ出し、空気を吸って胸を上下させる理子は、いろいろな液体で汚れていた。体中から汗をかき、衣服を少し重くしている。涙とよだれが3つの線を作っている。
とにかく、これ以上になる前に――――これ以上なんてあるのかはわからないけど――――理子の部屋に行くとしよう。
「理子、今から部屋に行くからな。抱っこするぞ」
「ふあっ、あぁぁ……」
そう言って、一度引き抜いたものをもう一度挿入する。
ここでの俺の失敗は、なぜかペニスを挿入したまま、つまり当初言われた通り、駅弁の状態で移動しようとしたことだ。
「あ……っ」
ぐにっと奥の壁にペニスがぶつかり形を歪ませる感触がした。と、同時に、床に滴る液体の量が目に見えて増えた。理子はカタカタ震えながら、喉を震わせる。
「ちょっ、なっ、なっ？　なっ、にっ……今、のっ……？」
初めての体位だからか、俺の方もなかなかキツい。快適にするにはもう少し効率のいい姿勢を見つけた方がいいな。
「しょ、くっ……ちょっ、そっ、マジ、だめ……っ」
「理子？」
ここでようやく、理子の様子がおかしいことに気が付き、立ち止まった。
「くひぃっ!!」
いくら理子が小柄で俺が支えているとしても、さんざんイジメ抜かれ、とろとろになっても煮込まれて、準備が完了したものを、さらに2回もイかせてしまえば子作りをしに子宮が下りてくるのは当然だった。

しかもそこに全体重をかけてしまえば、
「だ、だっ、だっ、めぇ……おねが……そっ、そ、れっ……マジ……」
「あ……くう……お、おい……っ!? そっちこそ……っ！」
ぶぬっ！ とペニスが子宮にめり込む。孕む準備が出来てしまえばあとは子種をもらうだけ。きわめて基本的な流れで、俺のペニスは今までで最高の歓待を受けていた。
理子を抱えて歩くなんてとてもできる状態ではない。細かい繊毛にしごかれる快楽に体を丸くする。それが結果的にペニスをより押し付けることになっている。
「はぁーっ！ はぁーっ！ はぁーっ！ はぁぅう!! はひぃ……っ!!」
ガクガクと頭を揺らして空気を喘ぐ理子は、更に突かれて哀しげな悲鳴をあげた。どれだけ力を入れているのか、背中が理子の爪に引っかかれてひりひりする。
「ああ～～～～～!!ああ～～～!!あうぅあ～～～っ!!」
最後の最後に今までで一番強烈な締め付けを与えられ、白い欲望が今にも吐き出されようとしている。
「理子……っ」
震える声で理子を呼んで、壁に押し付け、お尻を掴む。
ごぶっ、どぶっ、びゅるる……っ。
「あああああああああぁぁぁっぁあっぁあ……っ!!!!」
理子は今までで一番大きく喘ぎ――全身から力を抜いた。
「あが、ひぐ、翔君、ホントに、キチク――」
理子はスースーと寝息を立て始めた。
「……結局ここでやっちゃったな……」
ちょっと現実逃避したくなった。

行為が終わり、俺たち2人はシャワーを浴びてソファーでくつろいでいた。理子が本当に限界そうだったため、シャワーでは特に何もなかった。
お互いに会話はなく、ゆったりと体の力を抜いている。
俺の端末が軽快な音を鳴らした。メールが届いたようだ。
「ん、いいよ」
理子の許可を得てメールを開く。今日は理子の家に行くことは伝えていたはずだから……帰りが遅くなるのかは言ってなかったな。いろいろ配慮してメールにしてくれたのかもな。そんな軽い気持ちで送られてきたメールに目を落とす。
「ん……？」
件名は無い。これは……なんだ？　何かとても嫌な予感がする。これは招待状、なのか？　文面を読む限りそう見える。生まれてこの方、正式なパーティーに呼ばれたことはないからはっきりとは言えないけど、こういうものは普通、紙の手紙にするものなんじゃないのか？　ま、差出人がこいつだったら、俺たちにそんな礼儀を尽くさなくてもおかしくはないが。
「理子」
俺は若干の心苦しさを感じつつ、目を閉じていた理子にメールを見せる。すると、理子の顔がどんどん青くなっていく。
「どうする？」
「行くよ」
しかし、それでも、理子は即答した。
「これで終わらせる。あいつに怯えるのはもうたくさんだ」
震える唇でそう言ってくれた。
俺も覚悟を決めないといけないらしいな。

ブラド決戦　編
無意味な話し合い

「お待ちしていました。夜月翔様、峰理子様。どうぞこちらへ」
「……」
「……」
　車から降りた俺と理子は、特に何も答えずに案内に従う。そんな礼儀のなっていない俺たちに対して全く表情を変えない青年は、大きな屋敷へと続く道を歩き始めた。月夜に照らされて、口元がきらりと光を反射した。
　車に乗ってからずっと青い顔をしている理子の手を握って青年の背中を追う。
　理子が着ているのは普段とまったく変わらない防弾制服だが、その至る所にたくさんの武器が仕込まれているだろう。場所が場所だからな。
　今夜は、ブラドからの招待日当日だ。
　ここはすでに敵地。しかし俺はそれほど警戒していなかった。
　俺たちは今日、ブラドの招待を受けてこの屋敷に来た。なんでも俺と理子、2人と話したいことがあるらしく、晩餐会を開いてくれるそうだ。ここまで回りくどいことをしたんだ、迎えの車の中でも何もなかったし、道中で襲うなんて姑息な真似をすることはないだろうと俺は予想する。でもそれは正々堂々俺たちと向かい合おうって訳でもない。
　俺は俺で新しく手に入れることが出来た武器のことを考える。これからの戦闘は必至だ。相手の戦力が測れていないのがすごく気がかりだけど、これで対抗していくしかない。
　幸いと言っていいのか、当然のようにブラドの屋敷は広大な土地にある。周りにあるのはこれまた名のある人たちのお屋敷なのだが、そこまで気を使わなくともこの広さなら全力で戦って大丈夫だろう。
「こちらの席でお待ちください。ただいま当主をお呼びします」

通された部屋には見たことのないくらい大きなテーブルがあった。椅子は3つ。俺たちが座るべき椅子は言われなくてもわかった。1つだけ装飾が違うからだ。
俺達は静かに座って待った。
10分ほど経ち、とうとうそいつは現れた。
「ようこそ我が屋敷へ。夜月翔君、と……おかえりなさい。リュパン4世」
ブラドだ。

テーブルには所狭しと料理が並べられていた。料理は肉料理が中心のようだ。ブラドが着席すると同時にメイドと思われる女性たちが運んできた。
「さぁ、遠慮せずに食べてください。お酒は……そうですね、未成年ですが武偵なら軽いものの一杯も飲めないとお話にならないでしょう」
直接言葉にしないが、裏に込められたブラドの意思を確実に組んで実行していくメイドさん達。4人が部屋の中を動き回り、食器を置いているはずなのに全く物音がしないのはさすがプロなんだろう。
配膳が終わり、2人を残して部屋の外へ出て行った。
目の前にあるおいしそうな料理の匂いに、口の中の涎と胃袋が、身体が欲しがっていることを伝えてくれる。でも、さすがの俺も緊張で食べ物が喉を通らない。理子も同じだろう。
そんな俺達とは真逆に、おいしそうに料理を食べ始めるブラド。
「吸血鬼という種族にとって、人間にとっての夜は朝のようなもので。この食事も私にとっては朝食なんですよ」
知らんわ、そんなこと。
「人工血液も悪くは無いんですよ。いえ、最初は私もこんなもの飲め

るかと思っていたんですがね。食わず嫌いはいけませんね。さっぱりとしていて寝起きの一杯にはちょうどいいんですよ」
その真っ赤な飲み物、ワインじゃなくて血だったのか。トマトジュース感覚なんだな。
ちなみに人工血液ってのは、ここの吸血鬼に配布されているものだ。なんでも、これを飲んでいれば吸血衝動を抑えられるとか。
「ブラド。俺たちは別に、お前と楽しく食事をするためにここに来たわけじゃないぞ」
「ほう、それではどうして招待状に従ってここに来たのでしょうか？」
とぼけたことを言ってくる。
「そんなこと、聞かなくても理解してるんだろ。茶番をするくらい時間が余っているのか？暇人さんなのか？」
「長い時間を生きていると、娯楽を求めて暇を持て余すことが増えるのは確かですね。もっとも、最近は少々愉快なことが多いのですが」
まだまだ茶化すつもりらしい。
「ブ、ブラド……っ！　今日、は……っ、お前を逮捕しに来たんだ……っ！」
裏理子の口調だがその声は震えている。怖いのを我慢して必死に絞り出したセリフだ。
「はぁ……４世」
「っ!!」
たったそれだけで、理子はその身を固くする。
「まだわかっていないんですか？　あなたが何かを言う権利なんて存在してないんですよ。劣等遺伝子しか受け継ぐことのできなかった自分を恥じ、もう少し謙虚に立ち回ればよかったものを」
ぽろぽろと涙を流し始める理子。俺はその手を握る。
「しかしすり寄る相手を見る目はあったようですね。こんな大物を釣り上げるとは。母親同様、男に媚を売るのはうまいようで」
「お、お母様の悪口は……っ！」
「おい、やめろよブラド。故人を悪く言うのは根性無しのすることだ」
そんな俺を見て、ブラドは顎に手を添える。

「体に釣られましたか、夜月翔？　確かに４世は人間の中では非常に魅力的なものでしょうね。その点だけを見れば母親譲り、完全な劣等遺伝子と言えないのかもしれませんが……そんなものよりももっと貴重な、受け継ぐべきものがあったはずなんですがね。残念ですよ」
　ブラドは極度のＤＮＡ至上主義者だ。ＤＮＡこそ、その存在のすべてだと本気で思っている。そして理子は優秀な怪盗の娘なのにも関わらず、その才能が全く遺伝していなかった。ブラドから見れば最悪のケースなのだ。
　それでも、優秀な家系であることには変わらない。次代を生ませるために幼いころから監禁されて育ってきた。
　そんな理子が解放の条件として提示されたのが、アリアの打倒だ。結果としては失敗してしまったのだが、ブラドが約束を守るつもりがあったかどうかは、ここまでの会話を聞いていれば簡単にわかるだろう。
「それに逮捕、ときましたか。確かに、人間に対してニコニコとしている奴らと違ってあいつらの法を守るつもりなんてありませんからね。表に出されれば面倒になるものもゼロではありませんよ。表に出されれば、ですがね」
　ナプキンで口元を拭くブラド。
「ですが出来れば平和的に解決したいものです。知っていますか？　人間というのは案外我々吸血鬼よりも血の気が多いのですよ？」
「悪いけど、お前が今までの行為を悔い改めて理子に頭を下げたとしても、罪が消えてなくなる訳じゃない。お前の犯した罪が、全く別の人に擦り付けられてるんだよ。平和的に解決したいなら、これから然るべき場所に自白しに行くことになるぞ」
「あぁ、ホームズ４世ですか。母親に私の罪が擦り付けられているようで。それは災難ですね。短い寿命しか持っていないというのは」
　こいつ、事実上の終身刑を寿命が短いせいだと言いやがった。本当に人間をゴミだと思ってるんだな。
「勘違いしないでほしいのですが、私は別にすべての人間に対してこんな態度をとっている訳ではありませんよ。君に対してはそれなり

の礼節と敬意をもって接しているつもりですが」
　お前が敬意を持っているのは、俺の中にある有能かもしれないＤＮＡに対してだろうに。
「ええ。あなたのその天からの才能に敬意を表して、紳士的に平和的に話し合いをして互いにとって有益な関係を結ぼうと思っているのです。どうでしょうか、私の要望を聞いてもらえるのならそれ相応の見返りの用意がありますよ？」
「話にならないな」
「そうですか」
　茶番はもういいよ。これでようやく、完全に完璧に無駄だった時間が終わった。
　ブラドとの会話を打ち切り、
「そういえば」
　腕時計型携帯から武器を、
「あなたの知り合い２人もここにきているようですね」
　俺の動きが止まった。
「……」
「隠さなくても結構ですよ。私のスタンド能力について。うっかりホワイトスネイクが漏らしてしまったようですが……あなたならよく知っているでしょう」
「スケアリーモンスターズ、か」
　生物を恐竜化させるスタンド。前回は取り囲まれただけで戦闘には至らなかったが、能力についてはみんなと共有してある。
「この屋敷にはたくさんの恐竜が放たれています。さしずめ監視カメラのようなものですね。その恐竜たちが得た情報はすべてこの私が知ることになる」
　潜入しているのは狂三とハサンのカードを夢幻召喚（インストール）したティナだ。そう簡単に見つかるとは思えない。
　この２人にはどさくさに紛れてブラドの罪の証拠集めをしてもらっている。きな臭いうわさがあるとしても、表向きには原作と違って大物吸血鬼の一人として名前が知れ渡っているからな。暴れるだ

け暴れてもこっちが悪者にされかねない。
影に入る能力と気配遮断を待つ2人なら、かなり自由に屋敷内を移動できると思って任せたんだけど。
「放たれている恐竜にはとても小さいものもいましてね。アリのように小さいんですよ。もしかすると、知らず知らずのうちにうっかり踏み潰してしまっているかもしれませんね。普段屋敷にいる者のことは避けて歩くようにしているのですが……」
「ッ!!」
そういうことか。
スケアリーモンスターズの五感による監視と、小さい恐竜が踏みつぶされたときの監視、2重体勢になっているのか。ほとんどの奴は前者で見つかり、そうでない者も床のトラップスイッチを踏むように知らず知らずのうちに侵入を伝えている。踏み潰された恐竜の死はブラドに伝わるからだ。
「悪いことは言いません。今ならまだ間に合いますよ。スケアリーモンスターズは最低限の知性も持たない下等動物ですが、最強の攻撃生物であることに変わりはありません。お友達がケガする前に降参した方がいいと思いますよ」
ここまで来て引けるわけがない。そして、こちらにも隠し玉がある。
「アリア、撃て」
《了解！　ぶっぱなすわ！》
「なに？」
耳に着けている小型インカムに向かって指示を飛ばす。
直後、大きな揺れが屋敷を襲った。
「なんだ!?　……ッ！　これはッ！」
ブラドも何が起こっているか理解したらしい。
上空に待機していたアリアのデンドロビウムが、ミサイルの雨を降らせたのだ。
「ふ、ふふ、ふふふ。思い切ったことをしてくれますね。明日の朝にはこの話題で持ちきりになるでしょうね」

「こそこそと逃げ隠れするのも、嘘でもお前の提案に乗るのもお断りだからな。これで俺は後に引けない。追い込まれた人間は強いぞ」
「自分で追い込んでおいてよく言いますね。ますます気に入りましたよ。これで中身（DNA）も良ければ言うこと無しです」
どっかのカードゲームの吸血鬼は、自分で自分のライフを削って復讐するからな。言葉は難しい。
と、インカムに通信が入った。
《駄目ね。防御用の結界あるみたい。もうブラドにケンカは売ったわけ？》
「ああ。今のでカンカンに怒ってるぞ」
《少し話させて》
「いいぞ」
俺はインカムの設定を切り替えてブラドに向ける。
《あー、あー、聞こえてる？　聞こえてるわね？　ブラド、今までの会話は全部聞かせてもらったわ！　よくも人間をバカにして、私のママを侮辱してくれたわね！　今までの悪事をすべて暴いて、風穴開けて刑務所にぶち込んでやる！　覚悟しなさい！》
「……いいでしょう。そこまで言うなら私が直接相手になりましょうか。この吸血鬼ブラドに対する不敬の報い、その身に刻み付けてあげましょうか……ッ!!」
「行かせると思うか？」
ブラドの目の前に立ちはだかる。理子も銃を抜いた。
「……ふぅ」
ブラドはため息をついて指を鳴らした。部屋の扉が開いて金髪の女の子が入ってくる。この場面でブラドが呼ぶ人物だ。俺たちにとって敵であることに違いはない。
「それではレティシアさん。ここは頼みましたよ」
「……ああ」
「……なんだって？」
レティシア？　その名前、聞いた事がある気が……あ、思い出した！

レティシア・ドラクレア。『問題児たちが異世界からくるそうですよ』に登場するキャラクターだ。作品最強の吸血姫で、『箱庭の騎士』と呼ばれるほどの高潔な女性のはずだ。間違ってもブラドの考えに賛同することはないはず……

「恨みはないが、ここで死んでもらおう」

現実は待ってくれない。向こうはすっかりとやる気みたいだ。

とりあえず倒してからだ。考えるのは動きながらでもいい。

新しい戦力の一つ、さっそく使わせてもらうか。

俺はベルトを腰に巻いた。

ゲーマドライバー

『仮面ライダーエグゼイド』に登場する変身ベルト。このベルトとガシャットと呼ばれるアイテムを用いる事でエグゼイド系列の仮面ライダーに変身することが出来る。

なお、このベルトは最初に装着した人間にしか使えない。

《Ｄｕａｌ　ガッシャット！》

《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》

「ＭＡＸ大変身！」

《ガッチャーン！　マザルｕｐ！》

《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ！》

俺の体が青いパーフェクトパズルと赤いノックアウトファイター、２つのボディが混ざり合ったものに変化する。ゲーマドライバーを手に入れることでようやく変身可能になった『パーフェクトノックアウトゲーマーレベル９９』だ。

「ほう……やはり似ていますね、彼に」

「彼だと？」

「知っているはずですよ、デンジャラスゾンビです。まあ、似ていると いっても姿形だけで、性格は正反対ですが」
ブラドは、俺にとって衝撃的なセリフを吐いた。
「あなた、元はこの世界の住人ではないでしょう？」
「な、何を言ってるんだ！　ブラド！」
理子が詰め寄ろうとするが、黒い影のような刃が道を塞いでしまう。
「すぐに戻ります。レティシアさん、お願いしますよ」
疑問を片付けるのは後。今は目の前のことに集中することにしよう。

雪霞狼の神格振動波駆動術式で侵入者を拒む結界を無力化して侵入した雪菜、クロ、アスナ、耀は、ブラドの部下の吸血鬼に対して大立ち回りをしていた。
対吸血鬼用の呪いが付与された宝具をクロが投影したことで、吸血鬼の回復能力も恐れることなく戦えている。
本当はこの４人は陽動で、アリアと一緒に場を混乱させている最中に逮捕に必要な証拠を集めるはずだったが、少し予定が変わってしまった。
そこに1人の男が現れた。
「オラ、邪魔だ。どけよ」
青年吸血鬼を蹴り飛ばし、歩み寄ってくる。
「夜中に花火が撃ちあがったと思ったら、今度は庭でダンスパーティーか、あぁ？　そこのお前、どういうことだよ。俺はよぉ、眠ってんのを無理やり起こされるのが大嫌いなんだよ、知ってんだろ？」
「し、侵入者です！　そいつらが、そいつらが悪いんだ！」

怯えた表情で必死に弁解する青年吸血鬼。
「おいおいおいおい。一緒になって騒いでたのはお前も一緒だろ。俺を無理やり起こしたのはお前でもあるんじゃないか？」
「そ、そん――――うぎゃあああああああぁぁぁっぁ」
「とりあえず、魔臓の機能は預かっておくぜ。その傷で死んでなかったら返してやるよ」
ＤＩＳＣを抜き取られた青年は生まれて初めて味わう痛みに叫び声を上げる。
「で、お前らか。なんでこういうことしちゃうのかなぁ。気持ちよくなって気持ちよく寝てたのによぉ」
《ＤＥＮＧＥＲＯＵＳ　ＺＯＭＢＩＥ》
「変身」
《ガッシャット！　バグルｕｐ！》
《Ｄｅｎｇｅｒ　ｄｅｎｇｅｒ　Ｄｅａｔｈ　ｔｈｅ　ｃｒｉｓｉｓ　ＤＥＮＧＥＲＯＵＳ　ＺＯＭＢＩＥ！》
「こりゃあ、身体で払ってもらうしかねぇよな」

レティシアの事情

「どうやら、わたくし達の侵入はバレバレだったようですわね」
「そうですね。早く証拠を見つけないと……」
　狂三とティナは、書斎らしき所で証拠になるものを必死に探していた。２人とも分身まで使っているが膨大な量のため一向に終わりが見えない。
「しかも、確実にあるという保証がないというもの痛いですわ……」
　時間をかけて無駄骨というのは一番笑えない。そもそもの話、ブラドが犯罪に手を染めている証拠を家の中に残している確率はとても低い。普通ならすぐに処分してしまうだろう。
「……？　ティナさん？　何をしているんですの？」
　本棚にある本を中身を調べるでもなく押したり引いたり、意味不明な行動をしている。
「こういうところには隠し部屋があったりするんですよ、狂三さん。そういうのはたいてい、こんな感じの本がスイッチになってるんです」
「……」
　それはテレビの見すぎだと狂三が注意しようとしたとき、カチッといい音がした。その音がキーとなり、大きな本棚が勝手に動き始める。１０秒も経つと、そこには下方向に伸びる階段が現れた。
「え？」
「ありましたよ！」
「そんなバカな、と言いたい気分ですわ……」
　それでも見つけてしまったものはしょうがない。じめじめとした石造りの階段を下る。
「だいぶ深いですね……」
「しかも複雑ですわ」
　一番下まで降りた先に待っていたのはアリの巣のように入り組んだ複雑な通路だった。２人は目に見える通路に分身体を飛ばして一気に調べることにする。

「あんな仕掛けで隠すくらい重要な場所だとすれば……」
「何かある確率はとても高いですね」
やがて2人（本体）はある場所にたどり着いた。薄暗かった通路とはうって変わり、まるで太陽に照らされているように明るい場所だ。しかしその部屋は、暖かいイメージとはかけ離れた用途で使われているとしか思えない場所だった。
一言で言えば、そこは独房だった。
部屋に入った瞬間から、2人は数えきれないほどの視線にさらされていた。誰も彼もが部屋を満たす暖かい光を避けるように日陰に身を寄せ合っている。視線は鋭いが弱々しかった。
「狂三さん、あの人たちって……」
「ええ、おそらくは……」
2人は、暖かく清潔な部屋と牢屋に入れられた人たちというミスマッチな光景に、ひそひそと話す。そして、自分たちの考えが一致していることを確認した。
「上で何が起きている」
陰に潜む一人が口を開く。
「……その前に一つ質問を――」
「分かった。そういうことか」
「「え？」」
狂三が答えようとすると遮って勝手に納得してしまう。
「君たちはブラドの手下じゃないな。人間だというところからおかしいとは思っていたが。ブラドが人間を部下にするはずがない。道具か、奴隷の様に扱いはしてもな。いったい何をしにこんなところに入って来た？　上が騒がしいのは君たちが原因なんだろう？」
「……はい。ブラドの悪事を暴くために」
「愚かな。我らの主ですら敵わなかったというのに」
肩を落として俯く影。
「『我らの主』とは誰なんですか？」
ティナの質問に陰に潜む人物が答えた。
「我らの主、それは『龍の騎士』とも呼ばれる吸血鬼、レティシア・ド

ラクレア様だ」

《高速化》

俺は襲い掛かる黒い影の槍を難なくかわす。レティシアの足元の影。俺や理子のものと比べても明らかに濃い影だ。それは鞭のようにしなりつつ、壁に決して浅くない傷をつける。

理子はスカートの中からナイフを取り出して応戦していた。

ブラドとの戦いの要はクロが作った様々な宝具だ。吸血鬼の再生能力を阻害するものはもちろん、魔術による攻撃の威力を減衰させるものなど、ブラドから見れば焼け石に水程度かもしれないが、俺たちの戦力を徹底的に補強している。

俺はすぐに違和感に気が付いた。理子も気が付いたみたいだ。

なんというか……攻撃が中途半端じゃないか？

黒い影に俺たちを殺そうという勢いが感じられない。とりあえず相手のいる場所に攻撃をしているだけのように見える。一見、威力が高いから恐ろしい攻撃に見えなくもないが、中身は鈍らだ。

これは、ブラドに無理やりやらされている可能性がすごく高いな。

この世界に住んでいる原作キャラの人たちは、多少の立場の変更はあるにしても元の性格が変わらないことはもう散々見てきた。そう考えるとレティシアがブラドに協力するというのはあり得ない。

（洗脳、弱み……色々あるけど適当にそこら辺を使われてるんだろうな）

戦闘が始まってからずっと同じ場所に立っているだけ、攻撃はすべて影の刃任せのレティシアを見ながら思考する。

これだったら。

「翔。あの吸血鬼、ブラドの部下って訳じゃないぞ。全然忠誠を誓っ

てない。無理やりやらさせてるんだ」
「ああ。出来るだけケガも消耗も避けたい。効率よく無力化して味方にしようかッ！」
「ＯＫ！　合わせる！」
　理子は対魔力ナイフを髪と合わせて４本抜いた。ブラドを目の前にしていないためか、理子の動きはとても軽い。アリアと張り合えるくらいのアル＝カタ技術を持つ理子なら、今のレティシアの直線的な攻撃を捌くくらい造作もない。
《ガシャコンパラブレイガン》
《１０連打!!》
《巨大化》・《マッスル化》・《マッスル化》
「騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずッ!!」
　握りしめた柄から赤い血管のようなものが伸び、ガシャコンパラブレイガンが宝具になる。
　燃え盛る斧の熱気に顔を焼かれるのを嫌ったのか、レティシアは影を集めて盾にした。そんなんじゃこの攻撃を防ぐには物足りないぞ。
「はあああああああああぁぁぁっぁ!!」
　盾ごと押し潰した。１度の斬撃が１０連撃となり、盾を貫通した。衝撃を殺しきれなかったレティシアは壁に激突し、壁には大きな斬撃の跡が刻まれる。熱波がテーブルクロスや観葉植物を焼き尽くした。
　強化に強化を重ねたとはいえ、すさまじい火力に唖然とする。
「あ、危なかったよ……」
「ご、ごめん。まさかここまで威力が出るとは思わなくて……」
「無事だったからいいけどね。それよりも、あれ」
「ん」
　指さす方にはボロボロになったレティシアがいる。いくらかダメージは通ったと思うけど、もう回復が終わっているみたいだ。
　俺と理子は慎重に近づく。
「う……あ……っ」
「それで言い訳つくだろ。もう起き上がってこないでくれよ」
「まだやるなら、銀の弾丸を撃ち込むことになるけど？」

「……そう、か、ではお言葉に甘えさせてもらおうか」
起き上がろうとしていた体から力を抜くレティシア。その体は痙攣を繰り返していた。
「外で戦ってる仲間を助けに行かないといけないんだ。何も話せることがないなら俺たちはもう行くけど？」
「いや、お前たちはブラドの罪の証拠を集めているんだったな。この屋敷の地下に私の一族の吸血鬼が捕らえられている。大量監禁だ。もしもブラドに勝利することが出来たらそれを証拠の一つとして使ってほしい」
「待て。吸血鬼が吸血鬼を監禁？　お前たち、一体ブラドに何をしたんだ？」
裏理子がもっともな疑問を上げる。
「そうだな……時間が無いんだったな。手短に話そう」

「レティシア様はブラドが非道な行いをしているという噂を聞いて、直接聞き出しにこの屋敷に来た。同じ吸血鬼として、そんな行為は許しておけない、とな。それも一度や二度ではない。争いは望まない性格ゆえに実力行使することはなかったが、毎回のようにはぐらかされていた」
レティシアの部下の吸血鬼はこれまでの経緯を語りだした。
「そんなある日だ。丁度レティシア様が外出している時間、ブラドがやって来た。当然無下には扱えず応接室に通したが……いつの間にか、この場所にいた」
「……え？　いつの間にか？　ブラドに何かされたんですか？」
「ブラドのスタンド能力に何かされたのでは？」
ティナと狂三は意味が分からずに聞き返すが、吸血鬼は首を振るば

かりだ。
「分からない。何をされたのかさっぱりだ。とにかく気が付くとこの場所で寝ていたのだ。この部屋の光源は魔法で作られた人工太陽なんだ。この光に照らされると吸血鬼は思うように動くことが出来なくなる。陰に潜んでいれば檻を壊すことは出来るが、部屋の外まで行くのは難しい」
　人工太陽とは地下で野菜を栽培するとき、なるべく地上と同じ条件にする目的で開発されたものだ。吸血鬼の自由を奪うレベルの太陽を作れる人物は限られるが、ブラドは自身の財力でごり押していた。
　この世界の吸血鬼は太陽の光を浴びても灰になったりはしない。力がうまく入らなくなってしまうだけだ。感覚としてはＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの悪魔の身の能力者が、海に入った時のようなものだ。
「我々を人質に取られたレティシア様はブラドに従うしかなくなった。今も、望まぬ戦いに駆り出されているだろう」
　悲痛な声で言った。

「……そういえばホワイトスネイクが言ってたな。あの吸血鬼が反乱したとかなんとか。それはあなたなんですか？」
　完全記憶能力で記憶を辿る。確かにホワイトスネイクは吸血鬼が反乱したと言っていた。
「……そうだな。確かに一度奴に歯向かって寝首を掻こうとしたことはある。龍の騎士の名が聞いて呆れるがな。特に拘束されていたわけでもない万全の状態に近かったが……歯が立たなかったよ」
　何だって？　歯が立たなかった？　そのレベルで強いのかよブラドは。
「ブラド一人なら歯が立たない、とまではいかなかったが。問題はも

う一人だ。もう一人いたんだ。悪魔のような強さを持った男が。ともすれば、ブラド以上の力を持っているかもしれない」
「俺とよく似た？」
「ああそうだ。言動や考え方は小物のそれだがとにかく強い。吸血鬼のような不死身の能力に加えて、見えない何かを使役している。おそらくは相手の能力を奪う事も出来るのだろう」
デンジャラスゾンビとホワイトスネイクの特徴だ。間違いないな。
「その男の名前は、『新谷　航平』。ブラドだけではない。この男にも気を付けろ」
新谷航平……聞いた事ないな。特別珍しいって名前でもないし。
「……ちょっと待ってくれ。ここにいるのか？　その新谷って奴が!?」
「わからない。ふらふらとどこかに行ったりしている。毎日ここにいるという訳ではない。だが用心した方がいい」
《高速化》
「理子、先に行ってるッ!!」
「あ、ちょ――――!!」
俺は理子の返事を聞く前に走り出した。

「おや、起きていたんですか航平さん」
「起こされたんだよ。ったくよぉ、祭りがあるならあるって最初から言ってくれよな。分かってりゃぁ俺だって準備して待ってたのによぉ」
「それは失礼しました。私としても多少の抵抗は覚悟していたのですが、まさかここまで顧みずに攻撃してくるとは思わなかったもので」
ブラドが庭に到着した時には既に戦闘は終了していた。部下の吸

血鬼は遠巻きにこちらを見ている。
　デンジャラスゾンビの周りには雪菜、クロ、アスナ、耀が倒れていた。それぞれの武器は手から離れ、投影武器は粉々になってしまっていた。
「この命知らずのアマは一体誰なんだよブラド。心当たりねぇのか？」
「あなたの後輩が呼び足した娘でしょうね。そうでない者も混じっているかも知れませんが」
「俺の後輩!?　おいおいマジかよ！　なんで早く言わねぇんだよ！　呑気に寝てる場合じゃねーじゃんかよ！」
「数日前にしっかり報告していましたよ……これだから下等動物は」
　最後の一言は小さく呟くブラド。人間を対等に見ることはない。興味があるのは航平の持つ特殊な能力、道具、境遇だけだ。
「そ・れ・よ・り・も」
　デンジャラスゾンビはしゃがみ、倒れていたアスナの髪の毛を掴んで無理やり起こす。
「後輩君も運がいいねぇ。こんな上玉を引き当てるなんてなぁ、1、2……4人ね。ストライクゾーンに入るのはギリ2人だな。ガキには興味ねぇから」
「はな、して……っ！」
　アスナは弱々しく抵抗するが全く効果がない。
「まあそう焦んなよ。嫌がる女ってのはどストライクなんだ。我慢出来なくなっちまう。後輩君をぶっ殺したらたっぷりと可愛がってやるからよ。ん、待てよ……半殺しにして目の前でヤるってのもいいかもしれねぇな。ははっ！　我ながら名案だな！　なぁ、どっちがいい？　俺、ストライクゾーンはノーマルでもプレイに関しては幅広いんだぜ？」
　一人盛り上がるデンジャラスゾンビを冷めた目で見ていたブラドだったが、完璧な作り笑いを張り付け話しかけた。
「妄想にふけるのは結構ですが、屋敷内にあなたの後輩と4世。私の悪事の証拠を見つけると張り切っている侵入者が2名います。いろ

いろ考えるのはそのあとにしてはどうでしょうか？」
「ん、ああそうだな。ごちそうの前に軽い運動でもしておくか。そんで？　後輩君は何してるんだ？」
「今はレティシアさんと戦っていますよ」
「おーおー、あんたもエグイことさせるねぇ」
　演義くさい仕草でおどけるデンジャラスゾンビ。ブラドの鉄仮面は？がれない。
「時間稼ぎ程度にしか思っていませんよ。薬漬けにされたあの体では勝つことは出来ないでしょうから」
　聞こえてきた単語に、雪菜はかすれた声を出す。
「薬、漬け……？」
「ええ。レティシアさんはあろうことか人間を守る、などと媚を売る、吸血鬼としての誇りを欠片も持ち合わせていない種族の恥でしてね。いい加減鬱陶しかったので一族まとめて人質にして隷属させていたんですが……」
「まさかまさか、裏切るなんてなぁ。ま、大したことなかったけどな、竜の騎士なんて呼ばれてても」
「私としても最後の温情をかけていたつもりだったのですがね。向こうがその気なら仕方がありません」
　知っていますか、とブラドは続ける。
「吸血鬼は魔臓があるのでケガについてはそれほど重大には考えていません。すぐに治りますからね。それは体を破壊する毒に対しても同じです。しかし、何事にも例外というものがあります。直接体組織を破壊しないような薬に対しては、あなた方人間と変わらないんですよ」
「つまり媚薬だな。これは俺が提案したんだけどよ」
　突然割って入られたことに嫌な顔をするブラドだったが、口には出さない。
「……有用だったから採用したまでです。反乱から1カ月、昼夜問わず、念入りに改造しましたよ。これ以上飼い犬に噛みつかれても面倒ですからね。終わったのはつい先日。シャワーすらまともに浴びる

ことが出来ない状態だったようです。服を着ただけで悶えていましたね。しかし、今では表面上はまともに見えるんですから、あの人のことを少し考え直さなくてはいけないかもしれないですね」
　あまりの仕打ちに顔を真っ青にする雪菜とアスナ。
「そ、そんな……っ。同じ吸血鬼なのに……っ」
「あのような恥さらしを同じとは……温厚な私でも許しがたい言葉ですね」
「つーか、ホント後輩君はお優しいんだねぇ。愛のあるセックスしかしませんとか言っちゃう奴な訳？」
　こらえきれないというように腹を抱えて笑い出す。
「さっきから翔君の事後輩って、いったい何のことなの!?」
「はぁ？　何言ってんだこいつ。ふつーに分かんだろ。ここまでヒント出せばよ」
　アスナだってバカではない。そんなことはとっくに分かっていた。
「俺も、この世界の住人じゃねぇんだよ」

ブラドとの決戦　～決意と覚悟編～

「行っちゃった……」
「そう、だな」
　翔の姿が見えなくなってしまった。弾丸よりも速いスピードで外に向かっていったのだ。最短ルートで向かうために余計な壁に穴をあけて。
「君も行くのか？」
「あ、と、私は……」
　理子はレティシアの質問に言葉を詰まらせた。翔が向かった先には間違いなくブラドがいる。それを思うと足が重くなり、視界が狭くなってくる。頭の中は幼いころにブラドに受けた仕打ちの数々だ。
　そんな理子の様子を見て、レティシアは色々と悟った。
「そうか、君もブラドの被害者なんだな……」
「……ああ、そういえば、あんたもブラドに薬づけにされたんだっけか。見た感じそうは見えないけど……」
　言葉もはっきりとしているし、身体が不自然に反応しているという事もない。少なくとも外から見た限りでは健康体に見える。
「魔力の大部分を、それを抑えるために使っているからな。それでも服がこすれるだけでつらい」
　レティシアは恥ずかしそうに言った。
「それなのに折れてないんだな。すごいよ、あんた」
　理子が経験したのは世間一般でイメージできる暴力や仕打ちだ。それでも、目の前にブラドがいるだけで震えが止まらなくなる。それをはるかに超える仕打ちを受けているレティシアだが、ブラドに対する闘志は全く衰えていない。
「君と私を比べるのは、いささか重ねた年月に違いがあり過ぎるだろう。それに、同じ吸血鬼として、ブラドの行いが許せないという気持ちは全く衰えていないからな。この程度で曲げるほど柔な覚悟ではないよ」
「覚悟……」

数か月前、飛行機の中で涙ながらに吐き出した言葉を思い出す。
「自由になりたい……」
単純だが、とてつもなく遠い願いだった。
「与えられた自由じゃなくて、本当の自由を……ッ!!」
ブラドに立ち向かうと決めた決意。理子の決意はそんなに柔ではない。翔だけに任せるわけにはいかない。相手が強いとかそんなことはどうでもいい。
「私も戦う」
理子の覚悟は決まった。

「ここの世界の住人じゃ……」
「ない……」
今までの言動、それ以上に翔のパラドクスに酷似しているデンジャラスゾンビ。容易に想像できた言葉だったが、目の前にいる男と翔の違いに顔をしかめる。
「そういうことだ。お前らを呼び出した奴がいるだろ？　そいつと同じ世界の出身なんだよ、俺は。こんな最高の世界に来れたんだ、もっともっと好き勝手に生きればいいのになぁ。知ってるか？　ここの謳い文句は男の欲望を無限にかなえる夢の世界（ドリームワールド）、だぜ？　神様も許してんだよ。俺にはその権利がある、ってな」
ケラケラとおかしそうに笑う。
「そ、そんなわけない！　そんな、なんでもしていい権利なんてッ！」
「そうです！　そんなこと許されるわけがありません！」
たまらず雪菜とアスナは食い掛る。
そんな2人の怒りを受けても特に気にする様子はなく続ける。
「いい女といくらでもヤれて、しかもヤればヤるほど俺は強くなれる。

その女もいくらでも補充される。そのための依頼も、セックスとはまた違ったいいストレス発散になるしな」
　そもそもデンジャラスゾンビは誰かを殺す依頼しか受けない。不死の能力を持つデンジャラスゾンビにとって、戦いは一方的な虐殺になる。蟲をつぶすように一方的に嬲り殺すも良し、あるいはホワイストスネイクで相手の能力や身体能力を奪って嬲るか。
　どちらにせよ、一方的に踏み潰すことに変わりはない。恐怖と暴力によるストレス発散。自分の部屋の中にあるものに当たるのではなく、生身の人間に対して行うのだから質が悪い。
「まさに神に選ばれた人間って訳だよ、俺は！　気に入らねぇなら、こんな俺を選んだいい加減な神様を恨むんだな！」
　上機嫌で倒れ伏しているアスナたち女の子４人の真ん中に歩いていく。
　何を言っても無意味だった。考えが全く理解できない。こんな人間が翔と同じ立場だという事、もしも翔がこんな考えを持っていたら、今頃自分たちはどうなってしまっていたのだろうかという事。
　と、ここであることが思い浮かんだ。
「……女の子は、どうしたの？」
「は？」
「私達みたいにここに召喚された女の子は、どこにいるの!?」
　デンジャラスゾンビの口ぶりでは、これまでにたくさんの女の子を召喚しているのは明らかだ。そして、その女の子たちがまともな生活を送れているとは思えない。
「どこ、ねぇ……そりゃまあ色々と？　家にいる奴もいればもう死んじまった奴もいる。色々だ」
「死んだ……」
「ああ。この世界に来た女には俺が直々に俺のルールを説明するんだけどよぉ……たまーに口で言ってもわかんねぇ奴がいる訳。そういう女には体に教え込むか、ダメなら『矢』を使ってスタンドが発現するかのチキンレースだな。その過程で、根性ねぇ奴は死ぬんだよ」
　こいつを使ってな、とデンジャラスゾンビはスタンドの矢を取り出

して軽く振った。
　デンジャラスゾンビは語っていないが、召喚された女の子はホワイトスネイクによって厳しく管理されていた。初めて顔を合わせたときに異能の能力をＤＩＳＣにされ抵抗を封じられ、さらにさまざまな命令をＤＩＳＣによって強制される。
「その子たちをなんだと思ってるんですか!!」
「ボタン一つで出てくるような女が俺と対等な訳ねぇだろうが。黙って俺に従ってればいいんだよ。俺がこの世界に生み出してやったんだからな」
「そんな……」
　アスナと雪菜は絶句し、口を閉ざしてしまう。
「お前らも、俺への口のきき方は今のうちに気を付けておいた方がいいと思うぜ？　多少生意気なのは許すつもりだが、それにも限度ってもんがあるからなぁ。くく、はははは！」
「……」
　上機嫌で語るデンジャラスゾンビの言葉を聞き流していたブラドは、明後日の方向に目を向けた。
　直後、
「ははっははははゴハッ!!!!」
　デンジャラスゾンビの姿が掻き消えた。植木をへし折り、立っていた吸血鬼を巻き込み、遥か彼方まで飛ばされていく。手に持っていたスタンドの矢は折れてそこに転がっている。
「ほう……」
「翔君……!!」
「先輩……」
　そこには、燃える拳を振りぬいた体勢でパーフェクトノックアウトが立っていた。ブラドはそのスピードと威力に感心したように、アスナと雪菜は翔が駆けつけてくれたことに安心して声を出す。
「ブラド」
「素晴らしいですね。その力、想像以上ですよ。怒り狂う彼が戻ってくる前に、降参してくれないでしょうか？　できれば彼に暴れられる

のはとても面倒なのでね。しかもその力があるあなたならそれなりに戦いになるでしょうし……こちらとしても、後片付けに頭を悩ませたくは無いのですが」
「しつこいぞ」
「……本当に本当に本当に残念です。彼よりは話が通じると思っていたのですがね」
　確かに、俺の見込みが甘かったのは事実だ。雪菜やアスナが頑張ってくれたおかげで部下の吸血鬼は少なくなっているが全滅ではない。大ボスが、ブラドだけではなくデンジャラスゾンビもいた。
　しかし、だ。
「武偵憲章第1条」
「ん、なんですか？」
「仲間を信じ、仲間を助けよ。別に俺は一人で戦ってるわけじゃない」
　突如、屋敷からたくさんの人――――吸血鬼が――――あふれだしてきた。ブラドの部下に攻撃している姿を見る限り、援軍という訳ではないらしい。その中に見知った顔がいくつかある。狂三にティナ、理子と……肩を貸してもらっているレティシアさんだ。
「なに……ッ!?　これがあなたの自信ですか？　中に入っていた仲間と連絡を取っていたんですか？　レティシアさんの部下がこの屋敷にいることを事前に掴んでいたんですか!?」
「もちろん連絡は取っていたさ。でも、レティシアさんのことは完全に想定外だ。お前を倒すという困難に打ち勝つには多少の運は必要なんだよ」
「そしてここからは、実力であんたをぶっ倒してやるわ」
「その通り」
　こっそりと反撃の機会をうかがい体力を回復させた耀と、デンドロビウムを近くに着陸させ、ステイメンのスーツだけになったアリアが合流する。
　ブラドの後ろからは狂三、ティナ、そして理子だ。
「4世、あなたは――――」
「黙れ。――――……フゥ。私は理子・峰・リュパン4世だ。2度とその

呼び方をするんじゃないッ!!」
「ッチ」
ブラドが初めて心の底から不快そうな舌打ちをする。食事の時あんなにびくびくしていた理子が短時間で見違えるくらいに覚悟を決めていた。ブラドだけではなく、俺たちも驚いていた。
アスナ、雪菜、クロはダメージがひどいらしく立ち上がることが出来ないみたいだ。これから激しい戦闘が始まるのは必至。翔が3人を安全な場所に移動させようとすると、遠くから呪詛のこもった声が響いてきた。
「ゴミ野郎がああァァァ!!!　舐めた真似してんじゃねぇぞォォォッォ!!!」
デンジャラスゾンビの怒りの咆哮がここまで聞こえてくる。
「翔」
「ああ。あいつの相手は俺にしか務まらない。俺がやる。こっちは任せるぞ」
「ええ!」
「大船に乗ったつもりでいて」
猛スピードで駆けていく翔をブラドは邪魔しない。
中庭はもはや乱戦状態。しかも吸血鬼が吸血鬼と戦っているため、アリアたちには誰が味方で、誰が敵なのか判別できない。必然的にブラドの相手をすることになる。
「私を任せられるとは……あなた達、外れを引きましたね。下等な人間の小娘が、まさか私と勝負になると思っているんですか?」
それが始まりの合図になった。投げナイフや銃弾がブラドに殺到する。
「ふ」
見ると体全体が少し大きくなり、袖口からは爬虫類を思わせる鱗が見えた。手足の爪は鋭く伸び、背中からは尻尾が映えている。
異形の姿になったブラドが、無数の銃弾をすべてつかみ取り、ナイフを指でつまんで受け止めている。
「スタンド能力……!!」

「ええ。私のスタンドはスケアリー・モンスターズ。彼のホワイトスネイクとは違って人にも見える代物です」
　それを聞いて、全員動きを最小限にする。
「ええ、そうでしょうね。夜月翔にこのスタンドのことは聞いているでしょう。なら、そうするのは当然です」
　スケアリー・モンスターズの恐竜は動かないものを視認することは出来ない。『動かない』ことは単純だが有効な選択だ。
「ですが、どうしますか？　このまま我慢比べをしてみますか？　そんな時間は無いと思いますが」
　遠くで戦っているレティシアの吸血鬼から悲鳴が上がり始めた。屋敷から出てきた恐竜たちが戦線に加わり始めたからだ。少しでも傷を負わせられれば即座にブラドの手下の恐竜へと変化する。それは吸血鬼であっても例外ではないらしい。しかもその恐竜は吸血鬼の特性を受け継いでいるのか、再生能力がすさまじい。
　圧倒的に優勢だった数が、逆に不利に働いていた。
「もう一度言いますが、どうしますか？　このまま我慢比べをしてみますか？」
「……」
　着々と味方が減っていく中、しびれを切らしたアリアが突貫した。バックパックのサーベルホルダーから2本のビームサーベルを引き抜く。
「遅すぎますよ」
「ッ!!　ブラドッ!!」
　サーベルはブラドの肌を焼くことはなく、アリアは腕を掴まれ拘束されてしまう。必死で蹴りを入れて逃げ出そうとするがびくともしない。
「丁度良いですね。これが終わったら、あなたのＤＮＡも頂いておきましょうか。いえ、それを言ったらここにいる全員、価値あるＤＮＡを持っている可能性が高いですね。彼に壊されてしまう前に私の作業も終わらせてしまわなければ……」
「ふざけるなッ!!」

「アリアさんを離してください!!」
「わたくし達!!」
ティナと狂三がアリアを助けるために分身体を向かわせる。が、いつの間にか辺りに鮮血がまき散らされ、分身は消え去っていた。
「あまり暴れないでください。私も、勢い余ってあなたたちを殺したくはありません」
２人のアクションを攻撃と思っていない。圧倒的な力の差がそこにはあった。
そんな２人に変わって前に出たのは耀だ。
（今度は生身の本体……力加減が難しいですね）
細心の注意を払った攻撃は――――虚しく空を切った。
その速度にブラドは眉をひそめた。
（このスケアリー・モンスターズに見劣りしない反応速度……？いったいどんな手品を使って……）
答えは耀が首から下げている生命の目録（ゲノム・ツリー）だ。動物の特徴をサンプリングし、所有者に力を与える能力はスケアリー・モンスターズにも有効。そしてサンプリングは前の公園での戦闘でとっくに終わらせてある。
「公園の動物たちにしたこと、許さない」
「そうですか」
数か月前の公園で、動物達を都合の良い道具として扱ったことに対する怒りをあらわにする耀だったが、ブラドは全く興味を示さない。
試しに人の体を紙きれのように切断できる手刀を繰り出すも、スルリと避けられる。その気持ちの悪い感覚に不快な気持ちになるブラド。
「はあっ!!」
一瞬気持ちの緩んだところに、耀の鋭い蹴りが入った。
「……多少速くても、攻撃に重さが足りていなければ意味がありませんね」
「ッ!!」
インパクトの瞬間に掴まれた足が嫌な音を出す。

「蠅のように飛び回られるのも鬱陶しいのでね。この足は貰っておきましょうか」
「「させない!!」」
片手が自由になったアリアがサーベルを使ってブラドの腕を切り裂いた。理子の方も、法化銀弾（吸血鬼にダメージのある弾丸）を足に撃ち込む。
「次から次へと、本当に鬱陶しいですね……」
傷はすぐに塞がってしまう。多少イラついていても根本的なダメージにはならない。やはり、吸血鬼の再生を司る魔臓を壊さなければいけない。スケアリー・モンスターズの反応速度をかいくぐって。やるしかない。
「ですが結果は変わりません。このスケアリー・モンスターズはすべてを支配できるスタンド能力です。あなた方に勝ち目はない」
「それは違うぞ、ブラド」
理子は否定した。懐からあるものを取り出す。
「なんだと？　ッ!!　４世、まさか貴様ッ!!」
ブラドは理子が手にしているモノを見て目を剥く。
理子は、手に持った『矢』で自分を貫いた。

ブラドとの決戦　～スタンド編～

「カハッ!!」
　自分の胸を矢で貫いた理子は血を吐きながら蹲った。傷内からの出血はそれほど多くは無い。貫いた矢が傷口をふさいでいるのだ。
　しかし理子は、今まで感じたことのない熱を感じていた。まるで自分の魂が形をもって体の外に出て行くような感覚。新しいパワーを得る感覚だ。
　気が付くと痛みは消え、傷口は塞がっていた。形を持った熱が自らの血肉になって行くのが分かる。感じていた眩暈もだんだんと収まって来た。
　周りにいる者にも、スタンドを見ることが出来ない者にも理解できた。今からスタンドが生まれると。
　それを黙って見逃すブラドではない。
　草むらから飛び出した小さい恐竜が理子に向かって飛び掛かる。
「はっ!!」
　アリアが素早くカバーに入る。２本のサーベルが尾を引き、恐竜を切り捨てる。恐竜の動体視力を用いても避けることのできない天才的な剣捌きだ。
「理子!!　のんびりしてないでさっさと立ちなさい!!」
「うる、さいぞ……っ！」
　頭を振って歪む視界を戻そうと奮闘する理子。
　それを見たブラドは直接手を下そうとするが、
「あなたの相手は私!!」
「またあなたですか。スピードに反応できても、身体がそれに追いつかなければッ!!」
　耀がブラドの足止めをする。同じ恐竜の動体視力を使っている２人の戦いは千日手状態だ。相手の攻撃を避けつつ攻撃をする、というまともな動きではいつまでたっても終わらない。時間の無いブラドはその均衡を無理やりに壊しにかかる。
　自慢の回復力を盾に攻撃を受け止める。

（なに!?）
受け止めた蹴りの意外な重さに少しだけ驚くブラド。まともに受けてもほとんど何も感じないくらいだった蹴りは、受け止めた腕に確かな衝撃を与えるまでの威力を有していた。
耀はインパクトの瞬間に自身の体重を、生命の目録（ゲノム・ツリー）に保管された動物の中で一番重い動物のものに変化させていた。そうして攻撃力を上げているのだ。
（この娘、この短期間に成長しているのか）
まだまだブラドの脅威にはなりえないが、即座に対応してくるその柔軟性は評価した。
しかし、
「もう少し成長してから私の前に来るべきでしたね」
評価はできるが脅威にはならない。
音を置き去りにした手刀が耀に迫る。迫りくる鋭利な爪を眺めているだけで何もすることが出来ない。
鮮血が舞った。耀の華奢な体からではない。しかし、耀の服にはべっとりと赤いものが付着している。
「……？」
「……あ」
ブラドも奇妙な感覚に襲われていた。確実に命中する距離、速度だったのにもかかわらず、当たっていない。
それもそのはずだ。ブラドの指が無くなっていたのだから。
コンマ数瞬思考が真っ白になってしまったブラドだが、即座に距離を取って理子を睨みつけた。理子の背後に、人型の何かが見える。言うまでもない。理子のスタンドだ。
空中にはこの場にそぐわないものが浮かんでいた。幼稚園や小学校に通っている子供が遊ぶようなものだ。透明の球体が浮かんでいる。
（アレは……シャボン玉？）
まさかこんな夜中にシャボン玉で遊んでいる子供がいて、偶々風に流されてきた……とは考えにくい。どう考えてもスタンド能力だ。

試しに機雷のように浮かんでいるシャボン玉に小さい恐竜をぶつけてみる。シャボン玉は弾け、恐竜は大きく抉れる。生命活動が停止しているのははっきりしている。空中に浮いた透明な球体が引き起こした出来事であることもはっきりしていた。

完全に元に戻った手を開閉させながらブラドは目を細めた。

「なるほど、爆発するんですね。そのシャボン玉。爆発させるシャボン玉を飛ばすことがあなたのスタンドの能力という訳ですか、４世」

「……」

理子は黙っている。

「しかも爆発は、肉体の強度をある程度無視することが出来る……私の前では全く意味をなさないスタンドですが……少し見直しましたよ４世。無事にスタンドを発現させることが出来たようですね。有用な血が無駄にならなくて、私もほっとしていますよ。スタンドはあとで彼に回収してもらえばいいですからね」

「なんですって？」

「あたりまえでしょう。確かにスタンド能力はとても強力です。しっかり回収して有効に使わなければなりません。しかし、私の眷獣には及びませんよ。あなた達ごときに使ってよい代物ではありませんが。いえ、その前に私のスタンドにも及びません」

ブラドは余裕たっぷりに言う。自分にはまだまだ奥の手があるという自信があふれている。万に一つも負けは無いという顔をしている。

「いや、十分だ。さっきの傷で十分。十分、私たちの勝ちに近づいた」

「なんですって？」

ブラドは意味が分からなかった。傷は完璧に治っている。理子のスタンド能力についても、間違った考えをしているとは思えない。そして、その上で問題ないと判断した。恐竜の超感覚を使えばシャボン玉を見失うことはない。何が十分だというのか。どうして勝ちに近づいたと言えるのか。

「シアーハートアタック」

「……そのスタンドの名前ですか？」

「いや、違う。横に立ってるこいつの名前は『キラークイーン』だ」

キラークイーン（８部）
ジョジョの奇妙な冒険第８部（ジョジョリオン）に登場するスタンド。猫耳のある人型の形をしている。能力は爆発するシャボン玉を飛ばすこと。４部で考えると、終盤のストレイキャットと合体した時のような状態。

「ならシアーハートアタックとは……」
「はぁ……まったく、話が違うぞ、翔。スタンドは一つにつき能力は一つだけじゃなかったのか？　まさか私が例外を引き当てるなんて思わなかったよ」
「さっきから何の話をしているのですか、４世」
一向に話を先に進めようとしない理子に、ブラドも苛立ってきた。しかし、不用心に踏み込むようなまねはしない。ブラド自身、スタンドの力はよくわかっているからだ。そしてスケアリー・モンスターズの直感が、理子の言葉がハッタリではないと告げている。
「いくら用心しても無駄だよブラド。お前はもう終わってるんだ」
「いい加減に――――ッ!!!!!」
ブラドは急に声が出せなくなった。しかしそれは口を手でふさがれたり、不意打ちをとっさに避けようとしたからではない。
「――――ッ!!　ガハッ!!　ゴホッ!!」
すさまじい勢いで腹の中から血液が逆流してきたからだ。それどころか服の下も生暖かい液体に濡れていく。
ブラドは無様に倒れこんだ。緑の芝生があっという間に真っ赤に染められていく。いったい誰に、どんな攻撃を食らったのか。考える前に新しい疑問が出来る。
「な、なぜ身体が回復しない!!」
いつの間にか、吸血鬼の回復の源である魔臓がすべて機能を停止し

ている。その事実に顔が真っ青になる。
「魔臓。吸血鬼の回復の源。確かにとんでもないけれど、言ってしまえばただの臓器だ。心臓から血液を送られて動いていることには変わりない」
理子はゆっくりと近づいていく。
「さっきお前がケガしたときに、シアーハートアタック――――小さい爆弾――――を大量に血管の中に送り込んでおいた。あとは無防備な血管の中を通ったシアーハートアタックが、体中で……ボン！　だ。どこに魔臓があっても関係ない。恐竜の反射神経も、体の中までは働かなかったみたいだな」

シアーハートアタック（８部）
キラークイーンに備わっているもう一つのスタンドと言える存在。４部のものと比べると格段に精密なコントロールが可能。血管内の血栓を、血管を傷つけることなく爆破したり、船を木端微塵にしたりと威力の上限下限も大きくなっている。

「ば、かな……ッ!!」
「それにしても、魔臓の一つが舌にあったなんてな。そんなに回る口で、よく今までバレなかったもんだよ」
スタンドを維持できなくなったのか、暴れまわっていた恐竜がどんどん元の姿に戻っていく。ブラドの部下の吸血鬼も負けを悟り、投降する者、逃げ去る者など様々だ。
「人間を舐め過ぎなのよ、あんたは。最初からスタンド能力だけじゃなくて眷獣を使っていれば、こんなにあっさりとは負けなかったのにね」
自分たちの勝利を疑っていなかったアリアも武器を収めて近寄ってくる。
吸血鬼の生命力で何とか生きているとはいえ、血を流し過ぎたブラ

ドにはもう眷獣を召喚するだけの体力は残されていなかった。
勝敗は喫した。
「それと、最後に言いたいことがある」
理子は倒れ伏すブラドに告げた。
「二度と、４世と呼ぶんじゃない」

ブラドとの決戦　～外道の戦い方編～

《１０連鎖!!》
　俺は起き上がったゲンムに向かって光弾の雨を降らせる。再生が行われていても関係ない。
「テメエ――――ッ!!」
　ゲンムの叫び声は、着弾の轟音によってかき消されていく。引き金を引き続け軽くパラブレイガンを振ると、冗談のような数の弾丸が発射された。
「見え見えなんだよ！」
　俺は後ろから迫ってくるホワイトスネイクをかわすように高速化のエナジーアイテムを取得する。
　攻撃がやんでようやく一息つこうとしていたゲンムに向かって、
《分身》
　六連撃の炎の拳が炸裂した。家屋を押しつぶし、爆発。木でできていた建物に燃え移る。
「ガハッ!!　クソガァァァァ!!　どうなってやがる!!」
　さっきからずっとこの調子だ。
「ここに招待してくれて助かったよ。邪魔を気にしないで思いっきり戦えるからな。ブラドの方は少し気がかりだけど」
　俺は伝統的な武家屋敷のような場所にいる。ゲンムの取り出した球体の装置でここに連れてこられた。なんでも、自分が好きな異世界を１０キロ四方の広さで作り出せるのだとか。
　余計な邪魔が入らないこの場所で気が済むまでいたぶってやる、なんて言っていたのだが、蓋を開けてみればご覧のありさまだ。勝負になっていない。
　せっかくの不死身能力も、パラドクスに搭載された『ダメージを直接叩き込める機能』があれば全く問題にならない。そもそも実際に戦ってみると、不死身であることしか怖いところがなかった。
『とある』の一方通行ではないが、無敵、不死身能力に驕ってその他の訓練をサボって来たとしか思えなかった。この程度の奴に今まで頭

を悩ませてきたのだと思うと、何とも言えない気分になる。
　不死や、無敵系の能力者は自身のケガや被弾について無頓着になりやすい。不死なのだから当然と言えば当然なのだが、こいつに関しては然るべき準備をしないで不死能力を手にしてしまったせいかそれが顕著だ。
　スタンドの扱いにしてもそうだ。せっかくの強力なスタンドも後ろからの不意打ちばかり。近くに侍らせていた方がまだ攻めづらいのに相手からＤＩＳＣを取り出すことしか考えていない。今はゲンムが操作しているのだろうか。ホワイトスネイクの意思に任せた方がよい動きをしそうだ。
　総じていうと全然ダメ。ゲームで言えば、強い武器やムーブに頼っているような印象を受ける。理解され、対策されてしまうと手も足も出なくなるタイプだ。
　と、偉そうなことを言っているが、これは俺の方も運が良かったからこそ起こっている現象だ。
　パラドクスの力がなければデンジャラスゾンビの防御は突破出来なかったし、スタンドを持っていなければホワイトスネイクに対応することは出来なかった。
　もしもどちらか一つでも欠けていれば簡単に負けていたな。
　大方、ゾンビの不死身で敵の攻撃をすべて受け止め、ホワイトスネイクの不意打ちでＤＩＳＣを抜き取り無力化、何もできなくなったところを嬲り殺す……という戦法を取っていたのだろう。能力のポテンシャルを鑑みれば、十分に強敵を倒せる強さだ。それに頼ってしまう気持ちもわからなくない。
　馬鹿正直にスタンドはスタンドで……なんて考えることはなかったな。まともに運用できない奴に対してなら。
　俺は仮面の下で溜息を吐く。
　なんだか、弱い者いじめでかわいそうになってきたぞ。
「そろそろ、降参しないか？　俺も同郷の人を殴り続けるのは心苦しいんだよ」
　一方的に相手を攻撃するというのは気持ちのいいものではない。

こいつは保脇を殺したり、アインハルトと綺凛を襲ったりしているが、前者は保脇が碌でもなかったこと、後者は実害が俺の腕だけ（自分で斬った）と、攻撃のモチベーションとしては少し物足りない。アスナたちにケガさせたことも、戦いの場ではお互いさまって気持ちがあるしな。

投降してくれるならそれほどいいことはない。

「クク、クククッ、ククククク!!」

コワっ。何笑い始めてんだよ、こいつ。

「やっぱり、後輩君は優しいなぁ。女どもが甘っちょろくなるわけだぜ」

「ん？」

「殺し合いの途中にもう勝利を確信してるのか？　そういう所はムカつくぜ、あのクソ野郎を見てるみたいでなぁ!!!!」

あのクソ野郎？

「この世界は俺を中心に回ってんだ。俺の思い通りにならないことがあっちゃいけねぇんだよ!!　俺は神に選ばれたんだッ!!」

「ひどい勘違いだよ、それは」

本当にひどい勘違いだ。

確かに俺たちは特殊な人間だ。才能とか血筋よりもはるかに貴重な能力と出自をしているといえる。この世界についてもまだまだはっきりとしたことはわからない。俺たちがここに連れてこられた意図も。

でも、そんな訳が――――ッ!!

俺はとっさにその場を離れる。

四方八方から攻撃が飛んできていた。

「あたっ!!」

攻撃を躱すためにジャンプしたところを、遠くから狙撃される。いったい何人いるんだ!?

見たことがある顔もいくつかあるように思える。十数人の女の子に取り囲まれていた。まだまだ隠れていると思う。

「おいおいおい。とんだハーレムじゃないか」

「驚いたかよ。全員俺の女だ。まだまだいるけどな。ここは元々ヤリ部屋として使ってたんだよ。お前も男なら分かるだろ？　出かけた先で突然ヤリたくなることとか。そんな時のために、何人か見繕って入れといてんだよ」
　それはまた、俺を軽く超えてるな。
「で、この人たちとは無理やりしたってことか」
「ああ、悪いか」
　性犯罪なんだから悪いに決まってんだろ。
　女の子たちは小奇麗に整えてはいるものの、生気を感じない目で俺を見てくる。今までのこいつの言動と彼女たちの態度を見れば、こいつがどういう人物なのか簡単に推測できる。
　いや、そもそもブラドについている時点で、世の中で言う所の『善人』でないことは分かってた。
「この世界は俺の望みをかなえる世界。俺の思い通りにならないモノは、いらない。テメェら!!　前に教えたな!!　こいつは俺と同じ人間だ。こいつを殺せばいいことがあるかもしれねぇぜ、ククク……」
　武器が一斉に向けられる。これはだいぶ入念に教え込まれてるな。
「今までさんざんお前をボコボコにしてたんだけど。それでも恐怖による支配ってのは解けないわけ？　むしろみんなにとっては、こいつから解放される千載一遇のチャンスだと思うよ？」
　後半は周りの女の子に向かって言う。しかし、効果は思ったよりも薄い。
「無駄みたいだなぁ、後輩君。こいつらは俺に従うらしいぜぇ」
　彼女たちから見れば、俺はさんざん自分たちを虐げてきた男の同類なんだよな。そりゃあいい目で見られないのはしょうがない。風評被害だ。
「ホント、ここの女は扱いやすくていいよなぁ。顔も体も良くて、バカ正直で。言われたことは簡単に信じるし、人質をとれば何でも言うことを聞く。能力なんざいらねぇ」
「ちなみに、残りの女性はどこにいるんだ？」
「俺の家に決まってんだろうが。てめぇだって貰ってんだろ。あそこ

だっつーの」
「そうか」
　それが聞ければ十分だ。このあとやることも決まった。こいつをぶちのめしてそこにいる人たちも開放する。
「それよりどうするんだ、後輩君よぉ。まさか俺の言いなりになってる哀れな女を攻撃したりしないよなぁ。お優しい後輩君は、『この戦いの途中で気絶した奴には後でキツいお仕置きが待ってる』って知ったら攻撃しないでくれるよなぁ」
「最悪だな、お前」
　ゲンムの言葉に、無表情だった女の子たちの体が強張るのが分かる。今まで淡々としていた俺が心底軽蔑したという声を出したことがうれしかったのか、ゲンムは上機嫌になる。
「キヒッ、まあそう言うなって。お前の女は、これからは俺が可愛がってやるからよぉ……やれ」
《高速化》・《高速化》
　攻撃が届く前にゲンムに肉薄する。
《5連打!!》
「騎士は徒手にて死せずッ!!」
　唸りを上げる強力な一撃が、
「ほらよ」
「きゃっ!!」
「ッ!!」
　ゲンムが近くにいた女の子を盾にした。
　このまま切断するわけにはいかない。何とか体をひねって攻撃を明後日の方向に逸らす。が、そのせいで不自然な体勢になってしまう。
「ホワイトスネ――――」
「黒影!!」
　間一髪。
「冷静さを取り戻してるな……ッ!!」
　黒影に引っ張ってもらい、ホワイトスネイクの腕を回避する。単純

とはいえ効果的なカウンターだ。
俺はどんどんゲンムから引き離されていく。
女の子の壁が邪魔過ぎる。地獄に垂らされた蜘蛛の糸に縋るように俺に攻撃してくる。俺を倒せばもしかしたら自由になるかもしれないからだ。
アイツは奥で足を組んで座っているのが見えた。配下に戦わせている様は、まるで王様だ。
「ほらほら頑張れよー、ククク。寛大な俺様は両方とも応援してるぜー、ヒヒ」
もう戦っているという意識は無いのだろう、変身まで解いてしまっている。見世物を見ているという感覚なんだ。
時折、ホワイトスネイクも攻撃してくる。女の子たちはともかくとして、こいつの攻撃はマジでやばい。食らったら終わりまである。
とても苦しいこの状況、しかし問題は一つしかない。
それは、
「あいつが作る女の子の盾をどうやって突破するか……」
これに尽きる。
ぶっちゃけ、俺を追ってきている女の子は気絶させてしまっても問題は無い。なぜなら、
「俺が勝てば、お仕置きとか関係ないもんな」
俺がみんなを開放すればいいだけの話だから。
しかし下手に踏み込むのは良くない。あいつも考えたのか、2人の女の子は手元に残している。もしもの時は盾にするつもりだろう。そしてホワイススネイクのカウンターを食らえば終わりだ。
軽くジャンプして振るわれた刀を避けながら思考する。飛んでくる銃弾は武器でガード。戦って分かるけど、パラドクスならこの娘たちに負けることはないな。
ホワイススネイクだけに気を付けていれば――
「……は？」
問題発生。
「なんだよ、アレ……ッ!!」

とてつもない大きさの何かが見えた。戦闘機や戦車のように合理的な形をしているわけではない。しかし一目で強力な兵器だとわかる。それでいてどこか芸術作品のようにも思える。戦艦や空母どころではない。強いていうなら、要塞だ。
「ま、ゲームにはタイムリミットは必要だよなぁ。そういう訳で、こいつの初運転もかねて俺も参戦するぜ。せいぜい死なないように頑張れや」

ウラヌスシステム
『そらのおとしもの』アニメ版に登場する大型兵器。戦術戦略用エンジェロイド・イカロスの切り札。多数の武装と自在に動くアームを有しており、高速で空を飛ぶことも可能。

放たれたミサイルは俺は狙っているという訳ではなく、適当にばら撒かれたという感じだ。
瞬く間に辺りが火の海になる。アリを踏み潰すような感覚で行われる行為にしては、質が悪すぎる。
俺へ攻撃していた女の子たちも、巻き込まれないように必死に逃げていた。しかし、攻撃の規模が大きすぎる。
「拙いなッ!!」
逃げ遅れた娘を抱えて逃げる。それが一人、二人と増えていく。炎は逃げ場をふさぎ、空からは尽きることなくミサイルが降り注いでいる。
「離れてろ……なんて言えないなッ!!」
逃げてもらうよりも守った方がいい。パラブレイガンをガンモードにしてさらに『分身』を取得。3つに分かれた銃身から弾丸を連射していく。銃弾撃ち(ビリヤード)でミサイルを打ち落としていく。
もはや安全な場所などどこにもない。
「ククク、ハハハ、ハッハハハハ!!!　死ね死ね死ねぇぇぇ!!　みんな死ん

じまえええ!!」
破壊の化身となったアイツは、気持ちの悪い笑い声を垂れ流しながら世界を蹂躙していく。
「ナントカ全員回収デキタゼ！　トンデモネェナ、コイツハ!!!」
「ご苦労さん!!」
黒影（ダークシャドウ）の最高のアシスト。しかし状況は、じり貧になる一方だ。
ちらりと後ろを見ると、13人の女の子がいた。膝を抱えて震えている娘もいれば、もしものことを考えて立ち上がって構えている娘、泣いている子を励ましている娘など様々だ。
「あいつ……ッ!!」
予想を超える外道だったことに、奥歯をかみしめる。召喚した女の子をレイプするくらいは覚悟していたが、笑いながら殺せるような奴だったとは。
そして、このよそ見はいけなかった。
「馬鹿野郎!!　前ダ!!」
「あ、危な――ッ!!」
「ッ!!　うわッ!!」
黒影（ダークシャドウ）と女の子の忠告も虚しく、俺はアームに捕らえられる。ものすごい力だ。もがいてもびくともしない。
「ハッ！　いい格好だなぁ!!」
恐ろしい速さでブン投げられる。吐き気がするくらいデタラメに回転する。
《鋼鉄化》
飛来したミサイルに撃ち落とされた。防御したのにもかかわらず、変身が解けてしまう。
「う、ぁ……」
意識がもうろうとする。
何やってるんだ、俺は。相手にあまりに手ごたえがないからって油断して、自分の不利な状況に持ち込まれて。それでも問題を一つクリアすればいいなんて余裕かまして、挙句のはてに無様に転がってる。相手を舐めてたのは俺じゃねぇか!!

自分で自分が情けなくなり、同時に怒りがわいてくる。
もう油断はしない。情けもかけない。
俺は呼び出す。最後の隠し玉を。
まばゆい光と共に、大きな衝撃が町を揺らした。鈍い銀色が太陽光を跳ね返す。怪獣王の遺伝子を受け継いだ超兵器が世界を震わせた。
――――――――――――GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!

ブラドとの決戦　～決着編～

――――――――――――ＧＡＡＡ

下にいる娘に被害が出たら大変なことになる。
まだまだ遊んでいるうちに決めさせてもらう。
胸の砲門にエネルギーが蓄えられていく。
３式絶対零度砲（アブソリュート・ゼロ）、発射――――!!!
機龍の胸から極光が迸った。機龍の最終兵器。―２７３．１５℃の光線は対象を瞬時に凍結させ、分子レベルで破壊する。ウラヌスシステムはその餌食になった。機体の３分の１が凍り付き、崩れ始める。
「……は？　な、なんだよ。なんなんだよこのポンコツ!!　一発で壊れんのかよぉ!!　使えねぇガラクタがよぉぉぉぉぉ!!」
そして、もう一度極光が世界を照らす。
今度は３式絶対零度砲（アブソリュート・ゼロ）ではない。
「最大出力」
俺はエネルギーを使い果たした機龍から飛び出し、宙に身を躍らせていた。
その手には（ユニヴァース版）星の聖剣が握られている。
「げ、げいげ、迎撃を――――」
無理矢理に動かそうとしているのだろう。ウラヌスシステムは死ぬ間際の肉食獣のようなうめき声をあげる。
アームが迫ってくる。あのアームに摘まされれば、生身の俺は虫のように潰されることになる。
「超宇宙聖剣（スペースカリバー）!!」
振りかぶった聖剣はアームをやすやすと切り裂いた。ミサイルは飛んでこない。あいつはもう目と鼻の先。そしてその道を阻んでいたウラヌスシステムはもう使い物にならない。
「このままブチのめすッ!!」
「ッ!!　ホワイトスネイクッ!!　時間を稼げェェェェッ!!」
もはや、ヤケクソだ。狂ったように叫び、いまさらながらバグルドライバーを取り出している。
不死身能力は俺に効かないとわかっていても縋ってしまうのは仕方のないことだ。しかし、みすみす変身させるつもりはない。

「牙(タスク)ッ!!」
爪が回転を始める。狙いを定めて発射。
「ウショオオアアアアッ!!!!」
ホワイトスネイクはラッシュで爪弾を弾き飛ばすが――
「その程度で、ＡＣＴ２の回転は死んだりしない」
着弾しても、弾痕に回転のエネルギーは残っている。エネルギーは尽きていない。本当に尽きてしまうまで、目標に向かって攻撃を続けるんだッ！
「グギャアアアアアアアアッアアアアアア!!!!」
足に食い込んだ回転エネルギーが、膝を破壊する。溢れ出る血液をせき止めるように傷口を抑えている。なりふり構っていられなかったからか、変身のための道具はどこかに放り投げてしまっていた。
「ようやくお話しできる距離に来れたよ」
「テ、テメェ……ッ」
顔を突き合わせるのはこれが初めてだ。今まではお互いに変身してたしな。久しぶりに会えた同郷の人間。しかし、これ以上顔を見ているつもりはなかった。
スタンドを維持することもできないのか、ホワイトスネイクは消えていく。
「ま、待てよ、よせっ！　話せばわかるさ、なっ。そうだ、女！　お前、好みの女言ってみろよ。俺の手持ちから好きなのを」
俺は一歩近づく。
「おい、おいっ！　待てよ。落ち着け。止まれって!!　お前の言う通りにする。もう攻撃したりしない！」
「じゃあ降参するか？　やっぱり、同郷の人を殴るのは心苦しい――」
「バカがよオオオオオオ!!　……あ、れ……？」
後ろから殴りかかろうとしていたホワイトスネイクの腹に、爪弾が突き刺さっていた。ダメージに連動して腹に傷ができていく。
「――――なんて気持ちはもうなくなったよ。さっきな。不意打ちをしてくることも簡単に予測出来た。泣き叫ぼうが拳を叩き込まな

いと気が済まなくなった」
力なく、今度こそ本当に消え去るホワイトスネイクを背に、最後の一歩を踏み出した。
「ひっ！　うわぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「捕まえろ!!　黒影（ダークシャドウ）!!」
「悪イナ。逃ガサネェゼ」
「ク、クソッ!!　離しやが――――ッ!!!」
俺の拳が顔面に突き刺さった。
「これは今回情けなかった俺への怒りだ。悪いな。八つ当たりして」
「あ、が……」
いやな感触が俺の手に伝わり、生暖かい液体が付着する。
「でもこれからは」
ゆっくりと振り上げ、
「お前が食い物にしてきた人たちの分だ!!」
再度、拳がめり込む。
「これも」
殴る。
「これも」
殴る。
「これもこれもこれもこれもこれもこれもこれもこれもこれもこれも」
殴る殴る殴る

「それじゃあ、お大事に」
「うん、ありがとうね」
そう言って、俺は病室を出た。今回の戦いでケガをしたアスナ達が入院したのだ。怖い人たちからの事情聴取も終わったことだし、とりあえずブラド関連でやらなきゃいけないことは終わったかな。
すべてが終わった後、俺は異世界の外に出た。中にいた女の子と、血だらけになった男を連れて。男のほうは完全に気を失ってて楽だったんだけど、女の子のほうが大変だった。俺が近づくと逃げたりする娘までいた。あいつに色々やられたせいなのはわかってても、結構心に刺さったな。
御門先生の話では、それぞれ程度の差はあれど男性恐怖症になってるから、しばらくはそっち方面の治療があるとか。
そして、外に出た時にはすでにブラドとの戦闘は終わってた。ブラド自体、虫の息だったし、戦闘行為と呼べることはもう起こっていなかった。
ブラドとゲンム(新谷航平)、その他ブラドの部下多数はレティシアさんの告発によって捕まった。今は最高クラスの警備の中で取り調べされているはずだ。もう世間にも公表されているから、スタンド能力を使っても逃げることはできない。
ブラドを倒したことで、俺たちの周りも多少なりとも変化し始めた。
一言でいえば、名前が売れ始めたのだ。
ハイジャック(武偵殺し)、聖天使様暗殺未遂事件(ティナとヤミ)といった事件も解決してきたが、今回の相手は世界に名を轟かしていた吸血鬼の貴族。話の規模が違う。
たとえ、ブラドが油断していたからこその勝利だったとしても、外野には関係ない。重要なのは倒したという事実なんだ。本当に有名になったよ……理子達は。
そう、ブラドを倒したのは俺ではない。俺が倒したのは世間的には全くの無名人。表立ってちやほやされることはなさそうだった。

別にちやほやされたかったというわけじゃない。今の状況はすごく嫌だ。
「大変そうねぇ、翔君？」
「楯無さん……いえ、自分が忙しいって訳じゃないんですけどね」
柱の陰にでも隠れてたのか？　いつの間に後ろに来てたんだ。
扇で口元を隠した女性――――更識　楯無。ブラドは確かに大物だった。表では。しかし、裏の注目度で言ったら俺が倒したデンジャラスゾンビのほうが大きかった。スタンドという未知の能力を広め、仮面ライダーの変身アイテムという未確認の技術を使っていたのだから当然だ。
おかげで、理子達は一般武偵に追いかけられ、俺はこの人に粘着される日々を送っていた。
前に会った時とは明らかに違う視線。俺を測っている、監視している眼だ。
「今日はクローディアと一緒じゃないんですね」
「あら、一緒のほうがよかった？　も、し、か、し、て、会いたかったのかなぁ～？」
「それはもちろん」
適当に返す。
俺の思考を読んでいるのか、それ以上余計な茶化しは入れない。黙って後ろをついてくる。
俺は自販機から飲み物を買おうと、
「あ」
楯無さんが俺を追い抜いてお金を入れてしまう。そしてそのままボタンを押して購入。ガランと音を立てて落ちてきた缶コーヒーを俺に差し出してくる。
「お姉さんからのプレゼントよ。いつも飲んでるやつでしょ、それ」
「……ありがたくいただきます」
「もー、そんなに警戒しなくていいってば。楽しくおしゃべりしましょ？　ほら、そこに座って」
缶コーヒーを受け取ってしまった手前、断りづらくなってしまっ

た。
　あきらめて座る。
　プルタブを開け、一気に半分ほど飲み干す。
「それで、何の話をしましょうか」
「そうねぇ……最近捕まったあの人のこと、なんてどうかしら？」
「いいですね、自分も興味ありますよ。何かしゃべりましたか？」
「なーんにも。変わらず言い続けてるわ。『俺は神に選ばれてこの世界に来た』ってね」
「……」
　俺の戸籍やその他はこの世界に来た時に違和感ないように作られている。それは召喚された女の子についても同じだ。いくら聞かれようが、知らないといえば知らないし、そこから粗を探すことはできない。
「『俺のことをブチのめした奴もそうだ。絶対に殺してやる』だそうよ」
「ずいぶん錯乱してるんですね」
「そうかなぁ……私にはどうもそうは思えないんだよねぇ……」
　目の前で大胆にも足を組む楯無さん。
「どうしてですか？　今ある資料は男の妄言をすべて否定してるんでしょう？」
「でも、ウソ発見器も読心能力者も彼の発言が本当だと言ってるのよ。この場合どっちを信じればいいのかしら」
「催眠でも使えば、心からウソの発言をすることもできるんじゃないですか？」
　俺は学んだ。異世界から来たことがばれると不味いことになりかねないと。未知の能力と技術を性行為だけで無限に取り寄せられると知られた暁には、どんなことが起こってしまうのか。想像できない。
　たとえ原作にいるキャラクターであろうとも、本当に信頼出来なければ明かすことは出来ない。
「とにかく、俺はそいつが言ってることは何一つ本当だとは思いませ

んよ。そこから先をどう考えるのかは先輩の自由ですけれど」
「……そうね。私も疲れてるのかな、こんなことまじめに考えちゃうなんて。ありがとう、話せてよかったわ」
「はい、こちらこそ」
俺はその場を立ち去ろうとする。
「あ、そうだ。言い忘れたことがあるの」
「え？」
「あいつが住んでた家、見つかったわ」
「っ！」
その言葉に反応しそうになる体を抑える。
「へぇ、そうなんですか。もう捜査を？」
「いいえ、まだ。明後日になる予定よ。何分、特務六課は人手不足なのよねぇ。その分、質はいいのだけれど」
特務六課か、何となくどういう組織構成か見えるな。
「興味あるかしら？」
「ええ、両方に」
ここは是が非でも家宅捜査には参加しておきたい。
「だったら、参加してみる？」
「いいんですか？」
「もちろんよ。そのくらい融通してあげる。それに、実際に戦った人の意見も欲しいかもしれないしね」
思い出したように言ったけど、これが目的だったな。こっちには渡りに船だったけど。
「詳しい時間と場所は後でメールするわね」
「よろしくお願いします」
そういって、俺たちは本当に別れたのだった。

「あっと」
家に到着すると携帯にメールが入った。楯無さんからかな。
「んん？」
違うっぽいぞ。えーなになに。メールのタイトルは、
「緊急ミッション……」
え、嘘だよね。今回休憩ないの？
げんなりした気分になる。強制ではないにしろ、見てしまった以上は無視できないのが人情。
メールを開いて詳しい内容を確認しようとしたところ、さらなるアクションが起きた。
「うわ」
長らく埃をかぶっていたアイテム、『タイムベルト』が勝手に取り出されて腰に巻き付いたのだ。つまりこれって、過去か未来に行くってことで――――
俺は声を上げる暇もなく、この時代から消失した。

Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　編

開戦の夜

最悪だ。最悪の状況になってしまった。

光に包まれていた視界は一転、ひどい悪臭とわずかな光しかない部屋に飛ばされていた。床は石でできており、闇の奥には蠢く何かが見える。それも１匹や２匹ではない。大量の虫に囲まれている。

「気持ちワル……」

人によっては卒倒するだろうな。

同時に頭の中に流れ込んでくる数々の情報。

「ああ、本当に最悪だよ……」

サーヴァント、マスター――――――聖杯戦争。

どんなカラクリかは知らないが、俺はサーヴァントになっているみたいだ。どうしてわかるのかと聞かれても、それは感覚的なものだとしか言えない。もしかすると、俺がドリームワールドに来た時のパワーが働いて超常的な現象が起きているのかもしれない。

ともかく、俺は今は普通の人間ではなくサーヴァントである。つまりはマスターがいるはずだ。

そして、見たところ場所は蟲蔵。間桐家に呼ばれたようだ。その中でマスターになりそうな人物を頭に思い浮かべていく。

「最悪、だよ……」

もう一度つぶやいた。

俺は一歩踏み出した。すると蟲は散っていく。目の前に倒れているこの女の子が俺のマスターだ。その体には何一つ身に着けておらず、それどころか蟲の粘液で汚れきっている。小さな体で虚ろな目を宙に向ける姿は、よくできた人形のようだ。

間桐桜。この子が俺のマスターのようだ。

惚けてはいられない。ここは一種の黒幕の家。ぐずぐずして身動き取れない状態にはなりたくない。
俺は桜ちゃんの前に跪く。
「武器は取り出せるみたいだな」
過去に来たが家にある武器を転送できる。武器や能力は俺がサーヴァントになっているからか、宝具になっている。
「牙(タスク)」
スタンドを呼び出して地面を削る。ほどなくして、球体に削り終わった。
それに回転を加えて桜ちゃんの体に当てる。牙(タスク)が発現した時から少しずつ練習してきたが、ここで役に立ちそうだ。
回転によるちょっとした身体検査。結果はひどいものだ。体中が蟲に侵されている。が、しかし……
「心臓に異常はないな……」
回転で検査する限りだが、臓硯の本体の虫は桜ちゃんの中には存在していないみたいだ。まだまだ調教は始まったばかり。自分の命を預けておくのは不安だったのだろうか。
これは好都合。
「よし、超宇宙聖剣(スペースカリバー)!!」
聖剣を一振り。
今までさらされたことのない光に、蟲蔵の蟲は目をつぶされ――
次の瞬間には消滅した。
異常を感知したアサシンが向かった時には、間桐邸は見る影もなくなってしまっていた。

三式機龍で脱出した俺たちは、ある程度離れたところにある森の中に着地していた。
「不味ったな……」
時間を優先してしまったせいで、桜ちゃんが裸だってことに気を配れてなかった。裸の女の子を抱えているのは非常にまずい。
ここまで急ぎ足できたが、どこか落ち着ける場所で作戦を考えたい。
まずここは言うまでもなくＦａｔｅ／Ｚｅｒｏの世界。や、過去に戻ったのだから、このような事件があったということだろう。そして舞台はいつもの島ではない。
マスターが桜ちゃんである以上、俺は原作にないイレギュラーだ。それも、今までとはまた違った、特殊なイレギュラー。マスターとサーヴァントである以上、聖杯戦争に巻き込まれるのは必至。桜ちゃんの意思で俺を召喚したというわけでもなさそうだ。
「今回の目的は……」
桜ちゃんを無事に生き残らせることと、聖杯完成の阻止。できれば聖杯の解体。ま、聖杯の解体については完全に専門外だから、他の人に任せることになるけど。
「たしかサーヴァント5体以上の魔力が集まると聖杯はスタンバイするんだよな……」
平和的解決が出来そうにない奴もこの戦争には参加している。そのことを踏まえて協力関係を築くべきなのは誰かを考えると……
「セイバー、ライダー、バーサーカー」
役者が変わっていなければ、この3つの陣営になる。
ランサーとアーチャー陣営は、マスターが純粋魔術師のせいで、協力の可能性は俺が煩悩を捨てて悟りを開くレベルで少ない。

快楽殺人鬼のキャスター陣営も論外。
アサシンはアーチャー陣営とグルだし、マスターが愉悦。無理だ。
「厳しいな……」
ライダー陣営はどうにかなりそうな気もする。バーサーカー陣営もだ。
ただここにセイバー陣営が入ってくると話が違ってくる。ぶっちゃけ、バーサーカーとセイバーが同じ空間にいるのは不可能だ。
しかも、俺が倒されるわけにはいかない。
絶望的な状況でも、前を向かなければ。お先真っ暗だけど、前を向かなければ。
考えをまとめたところで、少女が目を覚ました。
「……ぁ、あなたは……？」
「サーヴァント、えー……クラスは未定。君の味方だよ」
出来るだけ優しく接しているつもりだが、桜ちゃんの緊張は解けない。無理もない。
「……ここは、どこ？」
「どこかの森の中。桜ちゃんがいた家はなくなっちゃった。住んでる人もどうなったかわからない」
「……ぁ、え……？」
俺の言葉の意味を呑み込めていないのか、口をパクパクさせたまま何も言わない。
「ちょっと失礼」
牙（タスク）の力を使って石球を回転させる。桜ちゃんの体の中の蟲はすべて死んでいた。臓硯め、消し去った蟲の中に本体がいたみたいだな。これであの爺さんに襲われる心配はないわけだ。
「く、くふ、く、く、くすぐ、ったい……っ」
「おっと。ごめんね……服もさっさと揃えないとだな……」
「え？　あ、あぁぁぁぁぁ……っ!!」
目を逸らしながら呟く俺の言葉に、ようやく自分が裸だということに気が付いたのか、大事な部分を隠す桜ちゃん。心配しなくても月明かりでちょっとしか見えてない。それでもアウト？　ですよね。

「っと。さて、桜ちゃん。これからについて話をしたい……あ」
俺は当たり前のようにこれからの戦略を説明しようと思ってしまったが、桜ちゃんにはトンと理解できない可能性を思い出した。
面倒な、どう話せばいいんだ。結構複雑な上に俺も完全には把握してないぞ。
「一緒にいる……」
「え？」
「あなたと一緒にいる。言う事聞くから。一人にしないで」
「わかった」
そう言ってくれるのはありがたい。歪でも、今はそれに頼るとしよう。
今回の問題は、まだある。魔力だ。自身はあくまでサーヴァント、魔力で構成されており、能力や武器の使用、つまり宝具の真名開放には大量の魔力を持っていかれる。
ちなみに、さっきの聖剣開放で全体魔力の約４０％を失った。全力ではないはずなのにこの数値。むやみに戦えば良いというものではない。
住処も必要だ。今はとりあえず機龍のハッチを開けて操縦席に座ってもらってるけど、これからのことを考えると雨風を防ぐことができる場所は必要だ。
それに加えて今回の目標。
「ままならないな……」
「？」
俺のつぶやきに首をかしげる桜ちゃん。
ピーッ！　ピーッ！
「む」
「わっ！　あ、どこもいじってないよ！」
「大丈夫だ。壊れたわけじゃない」
俺はニヤリとした。
この世界仕様に色々な改造が加えられている機龍。その高性能レーダーが、２つの超高密度魔力を捉えた。場所は港の近く。もしか

しなくても、サーヴァントの戦闘が始まったんだ。
探す手間が省けた。
これは行かなければ。
「よし、変身」
《Ｄｕａｌ　ガッシャット！》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
《ガッチャーン！　マザル　ｕｐ！》
《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ！》
「え、ええ!?」
「ちょっと行ってくる。桜ちゃんはここで待ってて」
俺の言葉に、顔を真っ青にした。
「い、イヤだよっ！　私も行く！」
涙さえ浮かべて抗議してくるが、こればっかりは俺も折れるわけにはいかない。というか、令呪を使われたら困る。
「すぐに戻ってくるから。どうしても寂しくなったら、心の中で『戻ってきて』って強く考えるんだ。わかった？」
「わからない」
わかってくれよ。俺の言うこと聞くって言ったじゃん！
こんなところで口論して、せっかくのチャンスを逃すなんて冗談じゃないぞ！
「桜ちゃん」
「何？」
「ごめん」
俺は機龍のハッチを閉めた。
「ホントにごめんなさい」
中からドンドンと叩く音が……聞こえないな。そんなにやわじゃないか、機龍の装甲は。
機龍を待機状態に移行。何かあった場合、すぐに俺の方向に飛んでくるようにセット。いざというときは令呪ワープ。

全速力で現場に向かった。

「どれどれ」

ギリギリ気づかれない範囲から戦闘を眺める。多分ライダーも見ているのだろう。戦っているのはセイバーとランサー。顔は俺の記憶と同じ。変更はない。そのことに少し安堵する。

今回の戦闘には協力体制を築きたいサーヴァントがすべて参戦するはず。即、協力体制を築くことはできないかもしれないが、できるだけ暴れて相手の脳に俺の存在を刻んでおきたい。

「それはそれとして」

ランサーとセイバーの戦闘を眺める。俺はどのくらい戦えるのだろうか。パーフェクトノックアウトなら対応できるか……

そうそう、変身するだけで、魔力が持っていかれるようになっていたのは本当に勘弁してほしかった。おかげで今は変身解除して無駄な消費を抑える羽目に。

そうしていると、ランサーが宝具を発動しセイバーに手傷を負わせた。

必滅の黄薔薇（ゲイボウ）。治療不可の呪いをかける槍だ。ライダーに変身していれば直接傷をつけられることはないため、そこまで心配することはないか……？　いやいや!!　そんな慢心はいけない。

戦いも終盤。２人のサーヴァントはにらみ合い、そして、

「ＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ!!!」

空からの乱入者に止められることになった。

「双方、武器を収めよ！王の御前である！」

緊張してきた。俺の思い描くプラン実行まであと少し。
「余の名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争の場においてはライダーのクラスを得て現界した！」
堂々と名乗る征服王イスカンダル。それは古き時代のサムライのようだ。しかし聖杯戦争ではありえない行為。他のサーヴァントとマスターはみんな唖然としている。
そんな空気を物ともしていないイスカンダル。そんな大物に勇敢にもツッコミを入れる男がいた。
「何を考えてやがりますかこの馬鹿ぁぁあああっ!!」
イスカンダルのマスター、ウェイバー・ベルベットである。
「うぐっ!!」
しかし、デコピンで黙らされた。イスカンダルは続ける。
「貴様らとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先にまず問うておくことがある。お主ら各々が聖杯に何を期するかは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるかどうか」
「どういう意味だ、ライダー」
「何が言いたい…？」
騎士の決闘を邪魔され不機嫌なセイバーとランサーは、ライダーを睨みながら問いかける。
「なぁに、簡単な話だ。我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？
さすれば余は貴様らを友として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存でおる」
「笑止」
「断る」
斬り捨てごめん。そう言いたくなるくらい清々しい断り方だった。
もう話し合いは終わった。あとはもう戦うだけ。原作ではそうだった。
「その話、詳しく聞かせていただきたい。征服王」
俺がその流れを変える。

変わらない大本

「その話、詳しく聞かせていただきたい。征服王」
　突然姿を現した俺に、場の一同は警戒を露にする。しかしイスカンダルだけが意味ありげな表情で髭を撫でている。驚くべきことに、向けてくる視線に敵意が含まれていない。
「おお、そうか!!　ほれ見ろ、マスター。話の分かるサーヴァントもいるではないか！」
「バカ言うなよっ！　何かの作戦に決まってる！　ノコノコついてったら罠にはめられるぞ！」
　ウェイバーの至極当然な判断にイスカンダルはため息を漏らす。
「まったく……どーにも小さいなぁ、マスターは」
「ほっとけ!!」
　戦闘の空気がどんどん緩んでいく。主に2人の漫才のせいで。
「夜月翔」
「なに？」
「信用できないならとりあえず自己紹介を、と思ってね。サーヴァントとしてのクラスは決まってない。なんでも本来いないはずのサーヴァントらしい。クラスが定まってないんだ」
「イレギュラーサーヴァント!?」
　セイバーの後ろにいる女性が驚く。あの人ともそのうち話さなければいけないだろう。ここをライフルのスコープ越しに覗いているだろう男とも。
「お前たちは……お前たちはっ！　揃いも揃ってバカなのか!?　アホなのか!?　なんで真名ばらしてんだよ!!」
「ほう！　良いぞ！　余もみみちっく名前を隠さなければならないこの戦争のルールには嫌気がさしていたところだ」
　正反対のマスターとサーヴァントだな。
　感心してくれるのはありがたいが、俺は別に真名をばらしても問題ない。そもそもが正式な英霊じゃないからな。未来に戻って名前が広がっていたとしても、同姓同名ですと言って白を通せば良い。時間

旅行の技術もまだ確立してないし。
「それで、どうだろうか。仲間にしてもらえるのだろうか」
「当たり前だ。まさか、イレギュラーサーヴァントを仲間に引き入れることができるとは、余も思わんかったわい。して、貴様のマスターはどこにいる？」
「申し訳ないがここには来ていない。マスターは戦闘向きじゃないからな」
とんとん拍子で話が進んでくれて、内心ほっとする。とりあえずの目標を達成することができた。俺はライダーの隣に並び立つ。
と、ここでイスカンダルは、すっかり空気になってしまっていたセイバーとランサーに声をかけた。
「そして、お主らだが。一人余の軍門に下ったところを見て考えは変わらんか？　余はどのような人材でも幅広く受け入れるつもりでいるが……」
「調子にのるなよライダー」
セイバーが睨む。
「待遇は応相談だが？」
「くどい!!」
ランサーも加わり完全否定。
「うむむ……そうかぁ……勿体ないなぁ。残念だなぁ」
心底残念そうに肩を落とすライダー。俺のような奴のほうが異常なんだよな。
「ああ、そういえば……」
機龍の中に閉じ込めてきちゃった桜ちゃん、どうやってフォローしようか。こんな序盤でマスターとの関係をぶち壊したくないし。どうやったら許してくれるんだろうか。土下座かな。この世界に来てしたことはなかったんだけど、とうとう解禁するのかな。
遠い目をしていると、同じく遠い目をしていたウェイバーと目が合った。
「……」
「……」

何か通じ合うものがあった。２人でこれから苦労していこうな。
彼の悩みの中には俺が原因のものもありそうだけど。
「私は王の１人だ。王は何者の下にも付かぬ者」
「我が槍を捧げるものはマスター以外にありえない」
ここにライダーの交渉は完全に決裂した。
「まぁ、１人だけでも色よい返事が聞けたのだ、重畳だ。試してみて良かったではないか」
「信用できないぞ……」
まさか本当に引っかかるサーヴァントがいるとは思わなかったのか、未だに信じきれずにこちらを睨んでいる。そんなに心配しなくても敵対することはないから。少なくとも俺からは。
「そんなに警戒するなって。ほら、あとでジャパニーズ銭湯にでも行って親睦を深めようぜ」
「えぇ……イヤだよ」
本気で嫌そうな顔をされる。
そこに、
『そうか、よりにもよって貴様か』
音源が特定できない声が辺りに響き渡る。
『一体何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思ってみれば、まさか私に成り代わり聖杯戦争に参加していようとはな。裏切られた気分だよ、ウェイバー・ベルベット』
「う、ぁ……うぅ……」
その声に、ウェイバーは震え上がっていた。俺も声の主が誰かはわかっている。ここにも変更はないみたいだ。
ランサー陣営は正直スペアプランにしておきたいという気持ちがある。ライダー、セイバー、バーサーカー陣営と協力することが目標だが、うまくいく可能性は結構低い。そう考えた時、次点でどうにか手を組めそうなのはランサー陣営だ。すでにウェイバーと協力体制になっているこの状態では、セイバーとバーサーカーを一緒にするくらい難しいとしても。
出来れば派手な敵対行動は避けておきたい。

『残念だ。実に残念だな……』
考えている間もランサーのマスターからの口撃は続いている。ここは人のものを盗んだウェイバーにも悪いところがあったということで……済まそうかとも思っていたが、流石に聞いている俺もイライラしてきた。
しかしここは我慢。言い返すのはライダーに任せる。
俺はセイバーとその奥に控えている女性を見る。事の成り行きを見守っているこの2人。今回の場を逃せば、次に接触できるのは相当後になってしまう。
こっちはこっちで、俺に対して敵意以外の何かしらの興味を持ってもらいたい。向こうから話し合いに来たくなるようなモノを。しかし残念なことに、俺にはその手段が1つしかない。おそらく敵意すれすれの感情を抱くことになるだろう。
「おい！　他にもまだ見ておる奴がいるだろうが！　闇にまぎれて覗き見をしておる連中が！」
ライダーが叫ぶ。
「ど、どういうことよライダー？」
「なに、この戦いにひかれた者が、今いる余達だけなわけなかろう？」
「こんなに派手に、真っ向から戦ったんだ。もっと観客がいてもおかしくない」
事実、姿を現していないものは何人もいる。
「そういうことだ、英霊ともあろう豪傑達とそのマスターが！　よもやコソコソと覗き見などと！　この場で真っ向から戦ったセイバーとランサーを見習うがいい、英霊の名が聞いて呆れるとは思わないか？」
ライダーの熱弁は続く。
「聖杯に招かれし英霊は、今！　ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮辱を免れぬものと知れ！」
そして、この状況を眺めていたサーヴァントにこの言葉は挑発と映る。

「我を差し置いて『王』を称する不埒者が、一夜に二匹も沸くとはな」
現れた。全身を金色の甲冑に包んだ男だ。腕を組みこちらを見下ろすその表情は、不愉快そうに歪められている。
正体を知っている俺からすれば冷や汗ものだ。クラスはアーチャー。今の戦力でまともにぶつかれば軽く踏みつぶされるだろう。
「ほぅ、それならば名乗るがよい、貴様も王たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」
「我に問いを投げるか？　雑種風情が、王たるこの我に向けて？　万死に値するぞ」
不機嫌そうに眉を顰める。
「しかし、知らんものは知らんものでなぁ……」
「我が拝謁の栄に浴して尚この面貌を知らぬと申すなら、こんな無知蒙昧は生かしておく価値すらない」
知っていて当然、知らぬなら死ね。そんな無茶な理論。横暴ここに究まりという言い草だが、ライダーは臆することなくアーチャーを観察している。
その不敬に対し、実力の鱗片を見せつけてくる。
空間がゆがみ、そこから無数の武器が顔を覗かせる。一つ一つが必殺の威力を持つ宝具。本来は手に持って使うはずの武器。その切先が俺たちに向けられている。
発射まで秒読みといったところ。
――――殺せ――――
どこからかそんな怨念が聞こえてきたような気がした。
そしてそれに応えるように黒い影が召喚される。顔まですべて隠した甲冑を着た人型のサーヴァントだ。
「■　■　■　■　■　■　■　■　!!」
「バーサーカー!?」
ここにきて更なる乱入者。ここまで混沌とした戦場に駒を放り投げてくるなんて、普通ではない。
ひとしきり叫び終わったバーサーカーは、見下ろしているアーチャーを視界に収めた。そんなバーサーカーを害虫でも見るような

目で一瞥するアーチャー。自分のことを知らないと言われた時とはまた別の怒気を含ませている。
「誰の許しを得て我を見ている。狂犬風情が」
俺たちを狙っていた武器がその向きを変える。バーサーカーの方向へ。そして、発射。
「うわぁ!!」
ウェイバーが悲鳴を上げる。
常人の目には何が起きたのか理解できないくらいのスピード。俺もサーヴァントになっていなければ、チンプンカンプンだっただろう。
土埃が収まると、そこには無傷のバーサーカーが立っている。
「ど、どうして何ともないんだ……？」
「なんだ、坊主は分からなかったのか？」
武器は2発飛ばされた。バーサーカーは超速で飛来したその内の1つをつかみ取り、もう一方を跳ね返したのだ。
自らの宝物を掴まれたことに激しい怒りを感じたアーチャーは、標的を完全にバーサーカーに移した。先ほどの何倍もの数の武器が射出される。
が、結果は同じ。
キャッチボールでもするみたいに簡単に受け止められ、トスバッティングでもするみたいに簡単に打ち払われる。
それどころか、奪われた武器で反撃される始末だ。
「この痴れ者が……ッ!! 天に仰ぎ見るべきこの我を同じ大地に立たせるかッ!! 塵も残さんぞ、狂犬ッ!!」
すさまじいさっきに呼応するように、今夜一番の数の武器が顔を出す。
「お、おぃ、ライダー？ ここにいたら、僕達もまずいんじゃ……？」
「むぅ」
アーチャーの殺気に震えるウェイバーがイスカンダルに撤退を進言する。アーチャーが少しやる気になれば、この辺り一帯更地にするくらいわけない。それを理解しているイスカンダルも珍しく撤退の

意思の意見に賛同しかける。
ギルガメッシュが突如止まった。
「時臣、貴様……」
原作のように令呪を使われているのだろう。それに対して抵抗するところも同じだ。
「雑種ども、次までに有象無象を間引いておけ。我と戦うのは真の英霊だけでよい」
そんな捨て台詞を吐きつつ、金色の粒子になりながらギルガメッシュは霊体化し、この場から退場した。
爆弾が一つ撤去されたような気分だ。俺も内心汗かきまくりだった。戦ったら勝てないとはっきり分かった。慢心しているとかそんなこと関係なしに、奴は別格だと。
場に再び緊張した空気が流れ始める。アーチャーがいなくなったとしても、そのマスターがこの場を監視しているのは変わらないだろう。できるだけ手の内をさらさず、しかもセイバー、バーサーカー陣営とコンタクトを取りたい。
欲張りな考えを巡らせていると、次なる変化が起きた。
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!」
叫びだし、セイバーに向かって突進するバーサーカー。狂化して理性を失っているクラスに相応しいイノシシのような突撃戦法だ。
鉄骨を振りセイバーを押し潰そうと襲い掛かる。
「っ!!」
咄嗟に防御するセイバーだがおかしい。バーサーカーが持つものはただの鉄骨。宝具と遣り合えば砕けるのが道理だ。
「そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、なんであれヤツの宝具になるわけか」
イスカンダルも騎士(ナイト・オブ・オーナー)は徒手にて死せずの仕組みを理解したらしい。やはり厄介な宝具だ。相手の宝具であろうとも奪うことができるそのパワー。圧倒的な武技を合わせれば、相手の宝具であろうとも奪う

ことができるそのポテンシャル。俺には真似できない。
セイバーとバーサーカーの攻防は、セイバーの防戦一方。左手を庇いながら戦っているからだ。必滅(ゲイ・ボウ)の黄薔薇の傷が効いているのだろう。
再びセイバーに鉄骨が振り下ろされる。それに割り込んだ。
「■■■■■■■――――――」
「な、なんだと……？」
バーサーカーの鉄柱を受け止めた俺の獲物、超宇宙聖剣(スペースカリバー)を見て、両者共に固まってしまった。
特にバーサーカーはバクを起こした機械のように、機能不全になってしまっている。
力が緩んだところを見計らって魔力を流しこんだ。類まれなる達人、どんな状況でも劣化することのない武術を持つバーサーカーだが、すでに力を開放し、触れるものを焼き斬る光の剣になっている超宇宙聖剣(スペースカリバー)相手では分が悪い。
そこでとっさに迎撃ではなく回避を選んだバーサーカーは、右手が大きく切り裂かれ、力なくぶらぶらさせている。俺が想定した通りの傷だ。
倒してしまうわけにはいかないが、手加減できるくらいの実力差があるわけではない。不意打ちと泣き所を突いてようやくこの程度だ。
バーサーカーに肉薄しつつ、バーサーカーにしか聞こえないように言葉を出す。
「俺は桜ちゃんと一緒にいる」
バーサーカーが停止した。令呪が使われたんだろう。制御できないはずのバーサーカーを完全に抑え込んでいる。マスターがどれほどの想いで命じたのか。
「明後日の２０時、この場所で待ってる」
俺の言葉を聞き終わると、バーサーカーは消えていった。
「お主、何をした？」
「なに、ちょっとばかしマスターに伝言を、ね」
「……まだまだ隠し事があるようだな。後で詳しく聞かせてもらうと

しようか。さてと」
人数も減り、残っているのは最初期のメンバーだけだ。
「主……」
ランサーが問いかける。
『まあいいだろう。ここは退散するとしよう。なかなかに面白いものも見れた。せいぜい、生き残れるように努力することだ』
ケイネスの言葉を最後にランサーは消えていった。
残ったのはセイバー陣営。
「貴様、その剣は」
待っていたとばかりにセイバーが詰め寄ろうとするが、
「帰りましょうセイバー」
「っ！　アイリスフィール！」
「ごめんなさい、セイバー。でも、今はこらえて。ね？」
「……はい。わかりました」
セイバーは剣を収めた。
「なんだ、やり合うというなら止めはせんぞ？　新しい友の実力を知る良い機会だ」
「気持ちはうれしいが、今の私はマスターの剣だ。マスターの意思には従う」
「まじめな奴だなぁ、お前さんは」
それが普通なんだよ、とウェイバー。
「この場は引くというだけだ。次に会えば斬り捨てる」
「そうかそうか。それでは、その時を楽しみに待つとしよう」
セイバー陣営も去り、本当に戦闘が終了した。
「ふぅ……」
俺も緊張の糸が切れ、大きく息を吐きだす。ひとまず、最初の介入は成功したな。大本は変わらず、俺の存在をアピールできた。
「なんだよ、お前。大分疲れてるじゃないか」
「まあな。やっぱり緊張するよ」
「サーヴァントなのにか？」
今が特殊なだけで、本来俺は人間だよ。口には出さずに肩を竦め

る。
「これからのことについて話したい。マスターの所へ案内する、乗せていってくれ」
「よかろう。振り落とされるなよ?」
ライダーの戦車に乗り俺達もその場を後にした。

信用

「おい！　なんだよこれ!!」
「ほほぅ……こいつはすごいもんだ。お前さんの宝具か？」
　銀色の巨体を見上げて素っ頓狂な声を出す2人。
　ライダーの戦車で空を飛ぶこと十数分。俺たちは、桜ちゃんを入れたメカゴジラのある場所まで戻ってきた。特に周囲に異常はない。や、アサシンが監視しているかもしれないけど、俺には感知出来ない。警戒しておこう。
「そうだ。俺の宝具の1つ……一応乗り物だし、ライダーになら操縦出来るかもしれないぞ」
「お前ホントに何者だよ……」
　ウェイバーはぶつぶつと何か言っている。が、俺のことを考えて知ろうとしても無駄なことだぞ。理論を無視して手に入れたからな。
　イスカンダルはというと、物珍しそうに表面をペタペタと触り、よじ登ろうとしていた。イスカンダルの巨体が銀色の恐竜に張り付いている絵はとてもシュール。しばらく好きにさせておくとしよう。
　問題は、
「ふぅ」
「なんだよ、今度は憂鬱そうな声を出して」
「ん、マスターが、な」
「ああ、そういえば、お前のマスターはどこにいるんだ？　姿が見えないけど」
「この中だ」
「中？」
「腹の中がコクピットになっててな。安全のためにここに避難してもらってた」
「ふーん。じゃあさっさと開ければいいだろ」
「そうだな」
　長々と引き延ばしても時間の無駄だ。勢いのままにハッチを開けた。

「桜ちゃん？」
「すぅ……すぅ……」
寝ていた。
おそらく泣き疲れたんだろう。顔には泣いた跡が残っていた。
「この娘が俺のマスターだ」
振り返り、ウェイバーに桜ちゃんを紹介――――
「おい、何離れてんだよ」
「寄るな変態！」
「はぁ!?」
俺が一歩踏み出すと、とんでもないことをのたまってきた。
「そんな小さい女の子を裸で閉じ込めて何をしようとしてたんだっ!!」
「え……あ！」
状況理解。マスターを紹介すると言って出てきたのは小学生くらいの裸の女の子。誰だって勘違いする。例えるなら、友達に送るはずだった下ネタ満載のメールを、間違って親に送っちゃうみたいだ。意味わかんないな。
とにかく、この誤解は本当にまずい。一刻も早く正しい理解をしてもらわねばッ！
「落ち着け。誤解だ。言ったとおり、この娘はマスターで――――」
「マスターを！　裸で！　そんなところに閉じ込めてたのか!?」
「だから違うって！　人の話を聞け！　確かに合意はとれてなかったから『閉じ込めてた』って表現は正しいかもしれないけど……じゃなくてッ！　ほら令呪だ、令呪！　令呪があるだろ!?」
言い合いをしていると、桜ちゃんが身じろぎした。ゆっくりと目が開いていく。起こしちゃったか。
「ん……ぁ」
「ただいま、桜ちゃん」
しかし、これはこれでちょうどいい。これでもっと確実な証拠が、
「そいつに無理やり閉じ込められたのか？」
「うん」

だめだこれ。
「お前なんかと組めるかぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁ!!!」

「この娘が俺のマスターだ」
ようやく誤解を解き、改めて紹介する。
「なるほどのぅ、イレギュラーサーヴァントのマスターもまたイレギュラーという訳か」
「……」
イスカンダルとウェイバーはそれぞれ考え込んでいる。
「この娘は魔術に関して碌な知識はない。戦力としては数えられない。それでもいいか？」
「あー……それはいいが。なんだ、お前さん、マスターとは仲が悪いのか？」
「さもこっちの仲は良い、みたいに言うなよ！」
意識が覚醒してからというもの、ずっとむすっとした顔で俺を睨みつけてくる桜ちゃん。裸ではかわいそうだと、ライダーがくれたボロ布にくるまっている。体を間桐の魔術に馴染ませる過程で受けた仕打ちは、桜ちゃんの心を固く閉ざしてしまっていたが、思ったよりも回復が早いように思う。色々と俺に悪いところがあったのは否定できないけど、謝って許してくれるかな。
ほっといてくれ、とは言えないな。マスターとの不和はいざって時に響きやすい。
「桜ちゃん」
「……なに？」

怒ってらっしゃる。少しだけ生気が戻った顔が明らかに不機嫌だと伝えてくる。
「一人ぼっちにしたことは謝るから、な？　そろそろ機嫌を直してくれると嬉しいかなぁって。思ったり」
「本当に悪かったって思ってる？」
「思ってる」
「本当に？」
「本当に」
おお、これはいけそう？
「じゃあ責任取って。誠意を見せて」
「難しいことを言うな」
ドラマの見すぎだよ。いったい何をすれば許してくれるんだ。
「ぐ、具体的には何をすれば？」
「自分で考えて」
俺は立ち上がり、ライダーたちのもとへと帰る。
「無理だった」
「いや諦めるなよ！」
「そっとしておいたほうがいい。時間が解決してくれるさ」
「お前最悪だぞ……」
知ってるからそれ以上言うな。令呪が使われなかっただけでもマシだろ。
「で、これからのことなんだけど」
しかし実は、一つ閃いてしまったことがある。
「もっと綿密な話をしたいと思う」
この2人との信頼を深めつつ、桜ちゃんの機嫌を直す方法。
「そのための場所なんだけど――」
それは、
「――銭湯なんてどうだろうか」

銭湯。古き良き日本の文化の一つであり、外国人にじわじわと人気のスポットでもある。何よりも、風呂と言ったら『裸の付き合い』という言葉が連想される。もう、風呂＝『裸の付き合い』にしても良いレベル。腹を割って話すのにこれ以上の舞台はない。

桜ちゃんは色々なもので汚れた体を洗えるし、何より女子はお風呂が好き！　ついでに、風呂に入っている間に桜ちゃんが着る服なんかも買って来れれば最高！

このパーフェクトな提案、まったく隙のない計画。自分でも惚れ惚れする。言い過ぎた。

ともかく、この提案に則り俺たちは街に繰り出していた。なんだかんだ言って楽しみなのか、桜ちゃんの足取りは軽いように見える。どうせ移動するなら機龍を動かしたいというライダーの要望は、残念ながら全力で却下した。

時間も時間。夜道を歩く人も少なく、問題なく銭湯に到着した。ボロ布を巻いているだけの桜ちゃんは言うに及ばず、イスカンダルも見られたら相当面倒くさい。

入場券を買って中に入る時も、店員さんにじろじろ見られたけど、余計な面倒事を引き起こしたくないのか、何も言わないでくれた。

脱衣所にも人はない。絶妙な時間帯のおかげだろう。

「すげぇ体」

「まったくだよ……」

俺とウェイバーはイスカンダルのパンパンに膨れた筋肉につぶやきを漏らした。ヒグマでも絞め殺せそうなくらいに太い腕は圧巻の一言だ。

「ん？　なんだ、２人とも、余の肉体美に見惚れていたのか？　……マスター、貴様はもう少し肉をつけたほうが良いな」

「うるさい」
そんなやり取りをする2人を置いておいて、俺は桜ちゃんに向き直る。
そう。銭湯なら、小さい女の子は男湯に入れるのだ。もちろん桜ちゃん一人を女湯に押し込むわけにはいかない。一緒に入る。
「桜ちゃん」
「……ん」
素直に身に纏っていたボロ布を取り去った。
中から出てくるのは幼い肢体だ。未発達という言葉を使うのも憚られるくらい、幼い。
散々蟲に侵されぬいた体だが、外側は綺麗なものだった。二つ返事で自分の身を守っていた防壁を脱ぎ去るどころか、俺に見られているというのに、胸にある桜色の蕾も、足の付け根にある縦線も隠そうとはしない。
あの爺さんにどのような仕打ちをされてきたのか。それを知らしめられる気分だ。何も言わない俺に首を傾げてくる。
この子が10年後にはあんなになるのか……
「おい変態」
「おい！　次は許さないぞ、ウェイバー」
まじまじと見ていた身としては言い返すのは厳しいけど！
しつこく弄ってくるウェイバーを軽く睨み、桜ちゃんの手を引く。脱衣所と浴場を隔てる扉を開けた。
「湯船に浸かる前に体を洗ってくれよ」
「わかっておる」
「はいはい」
イスカンダルとウェイバーがそれぞれ返事を返す。
「桜ちゃんは自分で――――」
「洗って」
「……仰せのままに」
椅子に座ってもらい、俺はその後ろに膝立ちになる。
何かムフフなイベントがあると期待していたら申し訳ないが、ただ

体を洗っただけだ。ただ無言で。
だから鏡越しに泣いていたのは、見なかったことにするべきだろう。

湯船に浸かった。
一日の疲れがお湯に溶けていくみたいだ。
しかし、すぐに我慢できなくなってしまったものがいた。
「な、なぁ、もう出ないか？」
顔を赤くしだしたウェイバーである。
「なんだ、もう限界なのか？」
情けないと首を振るイスカンダル。
「のぼせるといけないし、先に上がってたらどうだ？」
「ああ、そうさせてもらうよ……」
ウェイバーが湯船から足を上げようとしたとき、イスカンダルと思い付いたというように言った。
「よし、マスター。マスターはこの娘の服を買ってきてやれ」
「はぁ!?　僕が!?　一人で!?　マスターを一人にするとか何考えてんだよ！　襲われたらどうするんだ！」
「心配するな。いざというときは令呪がある。ドンと構えておけ……それに、今夜仕掛けようと思う輩はそうおるまい」
初めてのまともな戦闘。半数以上のサーヴァントに加え、イレギュラーサーヴァントまで現れた。今夜は、今後の戦略の構築と、消費した魔力の回復に努めるはずだ。この段階から焦って戦う者は少ないだろう。
「なんだよ、それ。なんでそんなことが……」

「王としての勘だ。わかったら行ってこい。ほれ」
「……っ!!　あー、もう!!　わかったよ!!　ったく、どっちがサーヴァントなんだよっ!!」
　文句を言いつつも、ウェイバーは風呂場から出ていった。
　まだここには桜ちゃんがいるけど、いいだろう。
「それで、翔、何か言っておきたいことはあるか？」
　それまでの柔らかい雰囲気が嘘のように張り詰めた。征服王としてのイスカンダルがそこにいる。
「俺は未来から来たサーヴァントだ。今回の聖杯戦争、その顛末を知っている」
「……ほう」
　俺は話すことにした。それこそが信頼を得るための第一歩だと思ったからだ。その結果、敵対することになってしまったとしても、あと腐れ無く戦うためにも。
「結論から言うと、この聖杯戦争は正しく機能しない。第３次聖杯戦争で聖杯が汚染されてしまったからだ。願いが恣意的に捻じ曲げられ、悪意を伴った方向へ解釈されるようになっている。このまま戦って勝ったとしても、あなたが今抱いている願望は、歪んだ形で叶うことになる。しかも、記録ではこの聖杯戦争の終盤、この町が火の海になったとある。俺はそれを止めたい」
「そのために、わざわざ未来からイレギュラーとなってここに来たと？」
「意図を持って来たわけじゃない。ここに来たのは本当に想定外だ。でも、未来に帰るには聖杯戦争を終わらせるしかない。それはわかる。記録にあった事故を起こさずに帰るには、聖杯が完成しないように解体してしまうしかない。俺だけの力じゃ無理だ」
　これはすべて、銭湯に来るまでに実際に調べたことだ。聖杯戦争のことはしっかりと調査ファイルが残っていた。そしてそこには俺の存在はなかった。俺はこれから歴史を変えることになる。
　俺の介入がどんな結果を引き起こすかは定かではないが、決めたことだ。

俺は視線を桜ちゃんに移す。
「それにこの娘は、マスターになるはずじゃなかった娘だ。怪我無く終わらせたい。そのためにも――――」
「そのために、この征服王イスカンダルの力を利用したい、と？」
「……そうだ」
低い声に、自然を俺の口は閉じる。
「残念だが、お前さんの言葉が本当である証拠がない」
「それは……」
確かにそうだ。
嘘をついて土壇場で聖杯をかすめ取ろうとしていると思われても仕方がない。嘘の情報を渡して罠にはめるつもりだと思われても。
「たとえその話が本当だったとしても、お前さんの力を借りるということは、相手の情報を苦せず得ることになるだろう？　それはつまらん。自身の足と力で征服するからこそ価値がある。それは友であっても同じことだ。余は同じことを求める」
「……」
俺はお湯の中で手を握った。イスカンダルは勝つために冷静に計算し、時には手段を選ばない。しかし同時に、征服王としての矜持も持ち合わせていた。
つまり、組めない。
その単語が頭の中を支配する。一度仲間になれると思ったからか、その落胆は大きい。
「だがまあ、貴様が余の友であることは変わらない」
「……は？」
一瞬何を言っているかわからず、言葉の意味を理解しても、どのような意図を持っているのかわからなかった。
「王はそうやすやすと一度言った言葉を曲げたりはせん。貴様は余の友である。共に行動する中で、貴様という男を見定めてやるとしよう。余は征服王。国や土地だけではなく、人をも征服する。貴様一人征服するなど、たやすいわい」
「つまりは組んでくれる？」

「そういうことだ。そのうえで自由に動くがよい。しかし、この首、そう軽くはないぞ？　心してかかることだ。余はあくまでも、この戦争の覇者を目指す心づもりでいるからな。それと……助言には気をつけることだ」
完全に信用することは出来ないけど、俺の思惑を飲み込んだうえで仲間にするってことか。罠を張るつもりだったらそれ相応の覚悟をしろと。そして未来知識も口に出さないように気をつけろと。
緊張が一気にほぐれた。一時はどうなることかと思ったけど。
半信半疑でも、一緒に戦えるようになってよかった。どちらにせよ倒さなければいけない敵は何人もいる。戦う気満々でも『その時』までは大丈夫だろう。
「で、お前さんさっきのでっかい奴だが――――」
「ああ、あれは――――」
思いのほか盛り上がってしまった。外ではウェイバーが待ちぼうけを食らっていたのだが、それはまた別の話だ。

交渉へ　（桜）

風呂から上がり、一通りウェイバーに文句を言われた後、俺たちはウェイバーの拠点である家に向かった。原作でもあるマッケンジーさんの家だ。

ウェイバーは、元々自分を息子だと思うように催眠をかけている。そこにさらに上書きして、俺たちが長期滞在しても違和感がないようにしてくれた。もっとも、その効果がいつまで続くのかはわからないけど。簡単に自己紹介を済ませ、２階へ引っ込む。

家についた段階で、もうそれなりの時間だったため一眠りした。ウェイバーはベッドで、イスカンダルは床で大の字に。大男のイスカンダルにそれをやられると、俺と桜ちゃんの寝るスペースがなくなってしまう。

そこで優しいおじいさんとおばあさんが、別に寝るところを作ってくれた。

魔力供給さえあれば、サーヴァントに睡眠はいらない。しかし俺は特殊な境遇、イスカンダルは睡眠も楽しみたいといってすぐに眠りについた。

「……ッ！　……ふっ、くぅっ！　……ハッ、はぁっ！」

曲がりなりにもサーヴァントになって感覚が強化されているのだろうか。普段では絶対に起きないような小さい声に反応した。

「……？」

薄目で、同じ布団に寝ている桜ちゃんを見た。寂しいから一緒に寝

てほしいと言われ、承諾したのだが、寝る前と変わったところは発見できない。
「うぅぅ……うぅん……っ、はぁぁ……っ」
（桜ちゃん？）
顔は見えない。俺の胸に後頭部を預けるようにしているからだ。体も布団の中であるため俺に見えているのは本当に頭頂部の髪の毛くらい。
しかし見えなくてもわかる。乱れた呼吸。俺に密着している腰が時折悩ましげに揺れ、右肩が、布団の中で右手を激しく動かしていることを伝えてくる。
疑いようも、言い訳のしようもない。桜ちゃんが自分を慰めている。
「はっ、はっ、はっ、はっ……！」
桜ちゃんの吐息がどんどん切羽詰まったものへとなっていく。後頭部がぐりぐりと胸に押し付けられる。それだけではなく、布団の中の見えない位置にある部位までもが、体の内で生まれている熱を逃がそうとしている。しかし、腕の速さは加速し、大きく、大胆になっていく。
「はっ、はぁっ！　んんんっ！　ッ!!　みゃぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
桜ちゃんは、背を丸めて戦慄いた。自分がやっていることがイケナイことであるのは理解しているのか、袖をくわえて大きな声を出すことは避けている。それでも俺には、熱い吐息に合わせるように痙攣する幼い体のすべてが、分かってしまっていた。
「はーっ、はーっ、はーっ、んっ」
乱れた呼吸を整えているのか、はたまた余韻に浸っているのか、あんなにも艶めかしく脈動していた体はすっかりと脱力している。
流石の俺も、この光景にはどっきりしていた。風呂に入ったりするときに裸を見る、なんて時には特に何ともないのだが、俺の間近で――というか密着しながら――自慰されると生物学的男の本能が刺激されてしまう。こんなに小さい娘でも。

俺の男の部分が固くなってきてしまった。あわよくば、このまま疲れて寝てしまわないだろうか。そう考えつつ、俺は少しずつ腰を引いてズボンを押し上げつつある肉棒を避難させる。
「ぁ、やぁ……っ」
そんなはかない願い、叶う道理はなかった。桜ちゃんの右手が再び動き出したのだ。
「おさまん、ないっ。なんでっ……なんでなのっ……っ」
その激しさは数刻前に絶頂を迎えた時、その最後の一押しと遜色ない。布団をかぶっていなければ言い逃れできないイヤらしい音が、夜の闇に響いていただろう。
激しさを増す一方だった手淫だが、俺と目があって停止した。なんてことはない。歯を食いしばって体を反らした時に、目が合ってしまったのだ。
桜ちゃんは目を見開き、みるみる頬を青くしていく。ギュッと唇を引き締めて、顔に怯えの色を浮かべ始めた。
「ぁ、その……違うのっ。今までずっと、おじいさまの言いつけで、こういうこと、されてきて、蟲に……っ」
布団を跳ね上げ、立ち上がり、必死に言い訳してくる。しかし、自分の右手にべっとりとまとわりついている透明な液体を見て、その声は小さくなっていく。
「アソコが、切なくなって、だから、いつもされてたみたいに、ナカ、ずぼずぼされたらおさまるかなって……っ」
「もういいって！」
そんな詳細な説明は求めてない。
「別に何かあるってわけじゃないから。でも、その……」
どうしようか。立ち上がった足はプルプルと震えている。呼吸はまた荒くなり始め、足の付け根に近い部分を抑えて唇をもにょもにょさせていた。おなかが痛いわけではない。そこよりも下、女性の部分だ。
どうするべきか悩んでいると、幽霊のような足取りで、桜ちゃんが近寄ってきていた。

狙いは言うに及ばず、俺の下半身だ。強く主張している息子に顔を寄せてくる。
「すん、すん……」
犬のように、犬がそこにあるものが食べられるものかを判断するように、鼻を鳴らす。そしてそれは比喩ではない。
そんな予感から、俺は少しずつ逃げの姿勢に入ろうと――
「ちょっと？」
ズボンをがっしりと掴まれてしまう。
「からだ、が求めてるの……っ！　ここにあるのを。熱くておかしくなる、からぁ、これいじょう、は……お願いします、お願いします……っ！」
「……わかったよ」
外気にさらされるペニス。期待に打ち震えるそれはぴくぴくと震え、そそり立っている。桜はそれをうっとりと眺める――なんてことはしなかった。
「うぐっ」
腫れた亀頭に大きな口を開けてむしゃぶりついた。風邪を引いた人のような粘っこい唾液が、真っ赤な薄皮と、ベージュ色の舌の滑りをよくする。ぷくっ、と滲んでいた先走りと混ざったがいったいどんな味になったんだろうか。
「ふぁふぅぅっ、んっ、れりゅうっ、んむっ」
竿を握り、一心不乱に亀頭を舐め続ける。その心地よい刺激に、俺も力を抜いて快楽の海に身を任せ始めた。
「んろっ!!　じゅるっ!!　んっ!!」
鈴口を行ったり来たり。先端の部分をひたすらに責めてくる。
自分の疼きを静めたい一心で、ひたすらにしてくるが、その必死さに技術が伴ってない。射精の予感は少しずつ高まってきているものの、まだ少し時間がかかりそうだ。
しかし、噴火のための快楽は着実に蓄積されていた。睾丸にあるマグマがその温度を上げていく。
そして、とうとうその時が来た。

「桜ちゃん、そろそろ」
「んちゅ、れろ、れろ、ん、んっ！」
くわえたまま首を縦に振る。
俺は耐えず、流れに身を任せた。上ってくる感覚、それが先端から弾ける映像を幻視し――
「うっ、あ……っ」
「っ!!! ゴホ、ケホっ!!」
口の中に出された異物を、手の中に吐き出してしまう。数瞬迷い、
「……ん、く」
口に入れ飲み込んだ。
「大丈夫そう？」
「ふぅ、ふぅ……大丈夫そう。ありがとう、翔お兄ちゃん」
それは良かった。即効性があって何よりだ。
「それと、このことは、ね。誰にも言わないで……？」
「当たり前だよ！」
ほんとうにウェイバーに変態扱いされる。汚名が本当になる！

朝が来た。
何事もなかったかのように食卓に着いた。桜ちゃんともいつも通り。何の問題もない。何より、向こうがなんともないようにふるまってくれたおかげで、まったく怪しまれてない。
朝食後、ウェイバーの部屋に集まった。この人数でいるには少しば

かり狭いが贅沢は言っていられない。ウェイバーの魔術道具を少し横にどけて座る。
「で？」
　座るや否や、ウェイバーが仏頂面で問うてくる。
「これからについて、何か考えはあるんだよな？」
「んん？」
「や……特には。強いて言うならバーサーカーのマスターとの交渉があるくらいで……」
「それだよ！　それ！　どう考えてもでっかい考えだろ!?」
　昨夜のショッキングな出来事のせいで、イマイチテンションが上がらない。
　ちらりとイスカンダルを見る。間桐雁夜の素性は調べればわかるからイスカンダルもそんなに怒らないだろう。他のマスターのほとんどは把握している情報だし。イスカンダルが嫌がるのは、知りえないはずのサーヴァントの弱点を教えたり、これから起きる出来事をあらかじめ知らされることだ。
　それじゃあ少し説明しておくか。
「そうだな、少し説明しておくと……バーサーカーのマスターの名前は間桐雁夜っていうんだ」
「間桐……確かこの子の名前も」
「そ、間桐桜」
「同じ家の人間だから、協力できるってことか？」
　そうではない。そうではないけど、ここは口を開かないほうがいいかもな。
「まあそんなもんだ」
「なるほど……」
　少なくとも、ウェイバーを納得させるには十分な理由だったみたいだ。間桐家の事情を知りさえしなければ、魔術師の世界でも家族の情はある程度認められるらしい。
　イスカンダルも特に何も言ってはこない。
「ま、交渉については任せてくれ。成功の確率は高い。そっちには、桜

ちゃんの護衛をお願いしたい」
「お前はお前で、ずいぶんと不用心だな。マスターを預けるなんてさ」
「信用してるんだよ」
俺は軽く笑ってやった。
過ごす時間が長くなればだんだんと気を許してしまうものだ。あんなに警戒していたウェイバーは少し顔を緩めて、逸らした。ちょっとチョロい。
ともかく、交渉は今日ではなく明日の夜。魔力回復のことも考えて余裕を持たせた。第2ステップ成功のためにも、ゆっくりと休むことにしよう。
と言っても、ずっと家の中にいるわけにはいかない。
桜ちゃんは頼れる人がもういない。間桐家にはもちろんのこと、遠坂家にも。そして、誰かの庇護がなければ桜ちゃんに未来はない。この聖杯戦争が終われば俺は未来へと強制送還される。一番良いのは一緒に帰ることだけど、正直それは厳しいだろう。
ただ生き残らせるだけじゃダメだ。しっかりと未来に生きていけるようにしなければ。
時間は少なく、やることは多い。体を休めていても、頭を動かすことはできる。ゆっくりとしつつ、きびきび考えることにしよう。

そして、とうとう交渉の時間がやってきた。目玉が飛び出るようなアクシデントもあったがむしろ良かったのでは？
フードを被った男がいる、間桐雁夜だ。不自然に片方に偏った重

心。こちらを睨みつける顔も土気色で生気が感じられない。怨念か執念か。この男を支えているのはそれだけだ。
「お待たせ」
「お前！　桜ちゃんはどこにいる!!」
　すでにバーサーカーが傍らに控えている。戦闘準備は万端だ。間違っても戦いに発展するのだけは阻止したい。
「落ち着け。桜ちゃんは無事だ。俺のマスターだからな」
「……なん、だと……？　ど、どういうことだ!?」
　雁夜は焦っているのか冷静さを失っているのか錯乱気味だ。
「俺が桜ちゃんにサーヴァントとして呼ばれたんだ」
「あ、え？」
「理由はわからない。事実として俺が呼ばれ、桜ちゃんがマスターになった。俺はイレギュラーとして呼ばれた8番目のサーヴァントだ」
「そんな……桜ちゃんがマスターになるなんて……あの蟲爺ッ!!」
　勘違いに怒りを燃やしているが、今は勝手に話を進めさせてもらう。
「もう間桐の家は潰した」
「なに？」
　虚を突かれたように唖然とする。
「召喚されたときに気持ちの悪い虫に囲まれてたからな。消し飛ばしたよ」
「あれはお前がやったのか……あいつは死んだのか？」
「分からない。雑に吹き飛ばしてすぐに離れたからな」
　そして交渉に入る。できるとほぼ確信しているが。
「間桐雁夜、提案がある」
「なんだ」
「今、俺はライダーのもとに下っている。俺も桜ちゃんがこの聖杯戦争で命を落とすことは望んでいない。そのためにも力を貸してほしい」
「俺にもライダーの仲間になれと言いたいのか？」
　雁夜の顔には隠し切れない嫌悪の色がある。おおよその魔術師と

いう生き物を嫌っている男だ。ライダーと一緒に戦う、つまり魔術師と肩を並べて戦うことが嫌なんだろう。
「ライダーのマスターは人として信用できる。俺はそう判断した。お前の思っているような魔術師じゃない」
「……」
自分にとって美味しすぎる話。安全のために桜ちゃんは連れてこなかったが、連れてきていればもっと簡単に信用を勝ち得ていただろう。錯乱気味の雁夜でも、少し考える程度の思考は残っているみたいだ。
静かに結論を待つ。ここまで考え込んでいるということは、信用されなくても即戦闘にはならないだろう。だったら後日桜ちゃんもつれてまた会いに行けばいい。
静かに結論を待っていると、
「む」
大きな魔力を感じ取った。こちらに一直線に近づいてくる。
「こいつは……」
大きな存在感を隠そうとしない、しかも隠れることなく進んでくる。アサシンとかキャスターじゃないな。こいつは2人が俺たちを狙う理由がない。ライダーとアーチャーも考えにくい。残るはランサーとセイバー。
拙いな。ここでその2人のどちらかと戦うのは。
雁夜もその存在に気付いたらしい。険しい顔をしている。
「雁夜、逃げてくれ」
「な、何？」
「ここは逃げろと言ったんだ。お前は底なし沼にハマりながら戦っているようなものだ。不用意に戦えばどんどん体が沈んでいく。お前に死なれるのは困る」
「だが、2人がかりなら一瞬で――――」
「行けッ!!」
ランサーの宝具はバーサーカーにとって天敵といえる。相対するのは非常にリスキー。

セイバー相手ではただでさえ制御できない狂犬が、さらに手に負えない状態になる。しかもこの速度、十中八九決着がつくまで戦う羽目になる。ここであまりセイバーに精神的ダメージを負ってほしくない。

雁夜がどこまで相手を絞り込めているかはわからないが、とにかく戦ってほしくない。

万一マスターに出くわしても、バーサーカーがいれば対応できるだろう。

雁夜は息を飲み、背を向けて走り出した。

そのわずか十数秒後、俺の目の前に一台の車が止まった。俺の目線から見るに、レトロな高級クラッシックカー。日本の地方都市で乗り回すには少々過ぎたもの。

そこから2人の人影が下りてくる。

セイバーとそのマスター。2人分の視線が俺に突き刺さっていた。

これをチャンスと見るか。

「待ち構えているとは、よい度胸だイレギュラー」

それともピンチと見るか。

「貴様には聞きたいことがある」

ある意味聖杯の汚染に一番敏感な陣営といえる。

「この尋常の勝負、受けてもらうぞ」

俺がしたいのは戦闘ではなく話し合い。どうやってそこに持っていけばいいのか。俺は冷えた頭で考え始めた。やっぱり、騎士道云々を利用するのが一番いいか。

俺は武器を取り出す前に口を開いた。

交渉の結果

衛宮切嗣は、アインツベルン家によって招かれた聖杯戦争必勝の駒である。

過去の聖杯戦争、その全てでアインツベルンは大敗を喫していた。そこで、『魔術師殺し』として多くの戦場を戦ってきた戦歴を買われた切嗣が用意されるに至った。

それだけではない。サーヴァントには7つのクラスのうち最強の『セイバー』。完璧な状態の約束された勝利の剣（エクスカリバー）の鞘を使って召喚した、『騎士王』アルトリア・ペンドラゴン。

アインツベルン家の準備は、万全に万全を重ねた隙のないものだ。

しかしここで、誤算、というべきか、2つの計算違いが起こることになる。

切嗣は幼いころから傭兵として戦場を転々としてきた。よく多くの人を助けるために、少数を切り捨てる、という歪んだ、しかし確固たる信念をもって。

少数を切り捨て、多数を救うためならば、切嗣には手心も容赦もない。どんな悪辣な策であろうとも、冷酷にやってのける覚悟がある。罠を張る、毒を盛る、人質を取る、そんなことは朝飯前だ。

魔術師でありながら、魔術をただの道具として――銃器や爆弾と同じように――扱う。異端中の異端。

この戦い方を、特に手段を選ばないという点を、騎士王が認めるわけがない。

せっかく用意した必勝が、致命的に噛み合わないのだ。

その絶望的な相性を理解していた切嗣は、サーヴァントとマスターの完全別行動という異例の策を弄すことになった。

セイバーとともに行動し、他のサーヴァントとの正面切って戦闘する役目を妻のアイリスフィール・フォン・アインツベルンに任せ、自分は背後から背中を刺すことに集中する。それが、切嗣の考えた最良の策だ。

そしてもう1つ、切嗣が弱くなったことだ。

アインツベルン家に迎えられたのは、聖杯戦争が始まる9年前になる。9年間戦場から離れていたことによる実力的な衰えはもちろんだが、それ以上に切嗣を苦しめるものがある。

よく多くの人を助けるために、少数を切り捨てる。その正義を貫くには、9年間の間に培った妻、アイリと娘、イリヤへの愛情は大きな足枷となってしまっていた。容赦なく切り捨てるために、大切な存在を作らないできた切嗣にとって、精神を締め付ける荒縄同然だった。

聖杯戦争が進めば、どう頑張ってもアイリは失われる。もしも自分が負ければ、アインツベルンのお城に残してきたイリヤは一人ぼっちになる。

大切な存在がいることによる、負けられないというプレッシャーに苦しみ。勝つことによる失ってしまう未来に苦しんでいた。昔の冷酷な機械に戻り切れないでいた。このままでは勝ち抜くどころか生き残ることも危うい。今にも崩れてしまいそうになっていた。

切嗣を支えているのは、幼い頃から夢見、人には出来る訳がないと諦めてしまった大望。終わらない戦いの連鎖を終わらせる、という聖杯にかける願いだ。

ライフルスコープ越しに見る先ではセイバーの剣劇を紙一重でかわし続けるイレギュラーの姿がある。しかし、問題はそこではない。問題はアイリに持たせた収音器具から聞こえてくる声。今の切嗣を根底から揺るがしかねない言葉だ。

「……なんだと……？」

――聖杯に願ったところで、その願いは叶わない。

「貴様ッ!!　そのような世迷言をまだ続けるかッ!!」
激高したセイバーの不可視の剣が、俺の目の前数センチを通過する。や、正確な距離はわからない。何せ不可視の剣だ。俺は自分の超宇宙聖剣（スペースカリバー）をとりあえずの間合いと想定し、回避しているに過ぎない。
目の前にいる騎士。戦士には、女性も男性も関係ないのだと改めて理解する。こちらに向けられる闘気、殺気は見えない糸となり、俺を拘束しようとする。
相手のプレッシャーに押しつぶされてはいけない。かすってもいけない攻撃だ。
俺は初めに、武器を出さず、言葉で語りかけようとした。セイバーも、武器を持たない、しかも話がしたいという俺に、いきなり切りかかってくるような真似はしなかった。
が、未来から来た、聖杯が汚染されていて機能しない、願いは叶わない、という話をするともう駄目だった。
セイバーにしてはずいぶん短気な行動だが、俺に切りかかってきたのだ。
「機龍!!」
空間に亀裂が入る。頭だけを出した機龍が９９式２連装メーサー砲を吐き出す。それは光の壁を作り、それ以上の追撃を許さない。
「また奇怪な宝具を……ッ」
セイバーは俺に切っ先を向ける。
「私はブリテンの王、アルトリア・ペンドラゴン。答えろ、貴様は何者だ。どうして私の剣の間合いを知っている。円卓に貴様のような男はいなかったはずだ」
「……」
「それだけではない。貴様が持っているその剣。それはいったい何だ」
手に持っている、黄金の聖剣に瓜二つの剣を見る。
「何度も言っている。英霊の座は時間の概念を超越したところにある。だったら、この時間から見て未来の英霊が呼ばれても不思議はな

いはずだ」
　実際には能力を詰め込んだ一般人だけど。そんなことは口が裂けても言えない。
「今回の召喚も俺の意思ではない。でも、ここにいる限りは、この聖杯戦争の悲惨な結果を変えたいと思っている」
「悲惨な結果、ですって……？」
「ああ。結論から言うと、この聖杯戦争は正しく機能しない。第３次聖杯戦争で反英霊によって聖杯が汚染されてしまったからだ。願いが恣意的に捻じ曲げられ、悪意を伴った方向へ解釈されるようになっている。このまま戦って勝ったとしても、あなたが今抱いている願望は、歪んだ形で叶うことになる。しかも、記録ではこの聖杯戦争の終盤、この町が火の海になったとある。俺はそれを止めたい」
　ライダーにしゃべったことと同じ説明をする。
　セイバーとアイリは無言になり近寄る。
「どう思う、セイバー？」
「何とも言えません。表情と口調を見れば、嘘を言っているようには見えませんが……言っていることが、めちゃくちゃです」
「でも仮に本当だとしたら？」
「戦う目的が変わります。聖杯を求めるのではなく、その災厄を阻止することに」
　考え込んでいる２人に、さらなる爆弾を落とす。
「証拠もある」
「証拠？　あなたが未来から来たことの？」
「や、そうじゃあない。聖杯が汚染されている証拠だ。円蔵山の中に大きな空洞がある。その最深部にため込まれている魔力、それを見れば俺の言葉が真実だってことがわかってもらえるはずだ」
　円蔵山の大空洞『龍洞』は土地のマナを吸い上げて蓄積、聖杯戦争の儀式を行うための巨大な魔力炉だ。魔術の心得がある人なら一目でその異常に気付けるだろうし、証拠としては申し分ない。
　詐欺師はふわふわと分かりにくい言葉で人の判断を狂わせる。しかし、こうしてすぐに確認できる上に、一発で証拠になってしまうも

のを提示できればこっちのものだ。
「確認してくれ。今すぐにでも。この場にいない本当のマスターにそう伝えて、な」
「あなた、そんなことまで……」
「これは、もしかして未来から来た証拠になるか？」
完全に場の空気をもらった俺はおどけて言う。戦闘の空気は完全に無くなっていた。セイバーもこちらを警戒するだけで、剣を振り上げる様子はない。
やったぜ。どうにか成功しそうだな。
切嗣による確認作業が行われているのだろう。俺たちの間に微妙な距離感と空気が漂う。
しばらく経ち、
「わっ！　あ、あ、えと、どうすれば？」
鳴り出した携帯にあたふたするアイリさん。相手はおそらくあの人だ。セイバーも困った顔をしている。近代道具は２人とも不得手のようだ。俺は手を差し出し、携帯電話を受け取る。
「もしもし、あっと……」
「……イレギュラーのサーヴァントか。確かに、蓄積された魔力が良くないものに侵され、変質していることを確認した」
なんて名乗ろうかと思案していると、かまわず会話を進めてくれる。
酷く疲れた声をしている。切嗣さんの気持ちも考えると、うかつに喜ぶことはできないな。
「これでは正しく聖杯が機能することはない。他の話の真偽はともかく、その一点では信用しよう」
淡々としているが、その声には何の厚みもなかった。魂が抜けてふわふわのスポンジのような質感だ。
「そうですか。それで、これからのことについて話がしたいのですが。主に俺の行動方針について」
「……聞こう。今迎えの車を出す。乗ってくれ。場所を変えたい」
迂闊すぎる。俺は素直にそう思った。もちろん騙して何かをする

気持ちは全くないが……魔術師殺しの異名を持つ衛宮切嗣が枯れてしまっている。まともな判断能力がある切嗣さんなら、正体不明のサーヴァントの話を聞こうなどと二つ返事でする訳がない。

やはり願いが叶わないという事実がこたえているのだろう。しかし、本当に申し訳ないが、俺にとっては好都合。話し合いの機会を向こうから設けてくれるわけだからな。

切嗣さんの助手――久宇舞弥さん――の運転する車に乗り、港を後にする。セイバーとアイリさんは自分が乗ってきた車だ。後部座席には多数の銃器や食料、水が積まれているため、助手席に乗り込む。

走る車に乗ると眠くなってしまう体質の俺は、必死に眠気と戦う。街の明かりが遠ざかり、車が山道に入り始めたところで、行き先がどこかを理解した。

（行先はアインツベルンの城か……）

じゃあ、この山道、もう少しかかるな。眠らないといいけど。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

間桐雁夜は乱れた息を必死に整えていた。服が汚れることもお構いなしに地べたに腰を下ろす。聖杯戦争に参加するために受け入れた蟲。サーヴァントを維持するには必須のそれらが、雁夜の体を蝕んだ結果だ。

体のほとんどを食い荒らされ、もって数日の命。聖杯戦争の間だけでも燃えていればよいというような、か細い命の火。

気力だけで動いている男だが、その表情にはほんの少し安堵があっ

た。
「イレギュラーサーヴァントは桜ちゃんの味方だった。ライダーも。それなら、勝てるかもしれない」
翔の目的が聖杯の完成阻止だと知らない雁夜はホッとしたように呟く。目的を知っていたとしても、すでに桜が臓硯の手から離れている以上、翔の撃破目標の中に遠坂のサーヴァントがいる以上、協力体制を築くことに変わりはないが。
この時点で翔の目的の大枠は達成されたことになる。英雄王という難敵が残っているとはいえ、同じくらい難しいサーヴァント同盟を完成させることに成功しているのである。
しかし、
「カカカッ。ずいぶんと苦しそうではないか、雁夜よ」
「ぞ、臓硯!? 生きていたのか!?」
「親に向かって、ひどいことを言うではないか」
世界はそううまく回ってくれない。
闇に浮かび上がる不気味な輝きをともす2つの瞳。間桐の家を束ねる怪人『間桐臓硯』だ。翔の一撃で家は半壊してしまったが、しぶとく生き残っていた。
「何の用だ。いや、そんなことよりも、桜ちゃんの解放の準備をしておけよ。お前は知っているだろうが、あの子はもう間桐家には戻らない。聖杯を掴む算段はついたんだからな！」
「……ふん、イレギュラーサーヴァントめ、余計なことをしおってッ!!」
初めから臓硯は話をするつもりがない。今宵臓硯が雁夜の目の前に姿を現した理由はたった一つ。
ボトリ
「……あ？」
何かが落ちる音。そこまで硬い物ではない、むしろそれなりの重量を持ちながらも柔らかい物だ。
地面に転がっていたのは、令呪が刻まれた雁夜の腕だった。
「――――――ッ!!」

激痛に叫び声を上げようとして、出来ないことに気が付く。
「愚か者めが。ワシの蟲を受け入れるというのは、つまりワシの傀儡になるということじゃ」
冷たくなってしまった雁夜には、言っても無駄なことだが。
臓硯は亡骸になった愚息には目もくれず、その腕――――正確には令呪――――に視線を移した。
「手早く済ませるかのぅ」
その言葉通り、大した時間をかけずに雁夜の令呪を自分の手に移植してしまった。
「バーサーカー」
「■■■■■――――」
ついさっきまで雁夜に従って居たサーヴァントは完全に臓硯に掌握された。
「あの小僧、言うに事欠いて、聖杯戦争を終わらせるだと？　そのようなこと、このワシが許すとでも思っているのか」
バーサーカーが霊体となり、臓硯の体も形が崩れ始める。
「聖杯の汚染？　元の形とは違う？　そんなことは関係ない。聖杯を完成させる。どんな手段を用いてもなァ、カカ」
翔の間違いは、臓硯の完全な死亡を確認しなかったこと。
翔の準備不足は、突然の襲撃ではぐれてしまった雁夜との連絡手段を用意していなかったこと。
翔が知らないのは、バーサーカーのマスターが雁夜から臓硯になったこと。
簡単に仲間にできると思っていたバーサーカー陣営。説得が難しいと思っていたセイバー陣営。それが全くの反対になってしまったことに、翔はこれから先、苦しめられることになる。

新しい力

「……なるほど、理解はできた……少し考えさせてほしい」
「もちろんです」
そう言って、切嗣さんは部屋を後にした。アイリさんはそわそわしている。追いかけるべきか、一人で考えさせるべきか悩んでいるのだろう。その決断はすぐだった。
「ごめんなさい。私も少し……」
「はい、どうぞ」
止める理由はない。俺は今回誠意をもって真実を話した。相手もそれに納得している。これで無理なら俺にはどうしようもかなったということだ。ベストを尽くして力を出し切った定期試験のような穏やかな気持ちだ。
今この部屋にいるのは3人。
一人は20人くらいの人が一堂に晩餐を楽しめるくらいに大きなテーブルに一人で座っている俺。
先ほどまで俺の対面に座っていた切嗣さんとアイリさんの後ろに控えていたセイバー。今も変わらずそこに立っている。
最後の1人は、この部屋の扉の前で、ともすればセイバーよりも微動だにせず直立を保っている女性、久宇舞弥。
2人とも自分からしゃべるようなタイプではないと思っていたため、セイバーから話しかけられた時は驚いた。
「すみません。少しよろしいでしょうか？」
「……ん、あ、何？」
やることがなくて少し閉じかけていた瞼を、無理矢理開ける。
「あなたが持っていた聖剣について、結局何も聞いていないのですが……」
そういえばそうだったな。
「はい、どうぞ」
「あっ」
俺は超宇宙聖剣（スペースカリバー）を取り出して机に置く。

「触ってみて、確かめてくれ」
「それでは失礼して……これは」
「全然似ても似つかないだろ？」
「そうですね……もし私と縁があれば何か感じるものがあるかとも思いましたが……姿形が似ているだけで全くの別物……」
　興味深そうに手に取っているセイバー。
「騎士王の聖剣のレプリカ。未来の人が作ったつまらないものだよ。あんまり気持ちのいい物じゃないと思う」
「そうですね、私としても、この剣がむやみやたらに他人の手に渡るのは好ましくありません」
「……」
　どこかの世界線では剣どころか、自分が大量増殖していると知ったらどんな反応をするのだろうか。
「何か言いたいことが？」
「いえ何も？」

「切嗣？」
「アイリ……」
　アイリは月明かりに照らされたテラスでタバコを吹かしている切嗣を見つけると、静かにその隣に並んだ。アイリはタバコの臭いが嫌いだということを知っている切嗣は、すぐに火を消して放り捨てた。
　夜の冷たい空気を、切嗣の静かな声が断ち切った。
「イレギュラーの言っていることは筋が通っている。聖杯が僕たちの望みをかなえられないのなら、そんなものに用はない。むしろアレ

は、放っておいてはいけない類の呪いだよ。あんなものの完成に手を貸そうとしていたと思うとゾッとする」
　アイリは慎重に言葉を選ぶ。
「つまり天の杯（ヘブンズフィール）は……アインツベルン家の悲願は……」
「少なくとも、千年前の人が思い描いたものは手に入らないだろうね」
　アイリにとって、自分の家の悲願よりも切嗣の願いのほうが重要だった。これで、セイバー陣営のマスターが聖杯戦争に望んだモノが手に入らないことが確定した。
「イレギュラーのプラン、やり方が回りくどいように思えるが、今の僕たちにとってはメリットしかない。君の意識が聖杯に溶けるギリギリの数までサーヴァントを減らし、残ったサーヴァントは戦わない。そうして時間を稼いでいるうちに聖杯を解体してしまう。君が死ぬこともなければ、あの呪いが解き放たれることもない。敵対するマスターの排除……最小の犠牲で事を収められる」
「どうしたの、切嗣」
　アイリは、その口調の中に隠しきれない疑念があるように思えた。そのプランが最良であることは切嗣自身も理解している。いったい何が切嗣の心に引っかかっているのかと考え、単純な答えに行き着く。
「彼のことが、信用できない？」
「いや、そうじゃない。言っていることは本当だろう。『わかりやすい』からな。表情と口調に表れやすいみたいだ」
　しかし外れていた。だとしたら、何が引っ掛かっているというのか。
「イレギュラーは、世界的に見ても珍しい人種だ。血統とか国籍じゃなくて、『見知らぬ誰かのために無償で身を粉にできる』というところが珍しい。だがそれだけなら、僕も特に考えることはない。珍しくても、確かにいるからね」
　そしてそんな命は、真っ先に切嗣の剪定の対象になった。
「問題は、そんなお人好しが、自分のプランに何の躊躇もなく切り捨てる命を作っているところだ」

「それは……事件のデータを見て、その陣営とは絶対に協力出来ないと思っただけなんじゃ……？」
　アイリの疑問にあっさりと首を横に振る切嗣。
「その手のお人好しは、人の命を切り捨てるなんて発想は無い物なのさ。あったとしても、相応の罪悪感を抱くはずだ」
「彼には、無かったの？」
「ああ。僕の見た限りではね。彼は、見捨てる命に対して何の感情も抱いていない」
　アイリも、切嗣が何を言いたいのか少しずつわかってきた。
「……でも、善人ではあるんでしょう？」
「間違いなくね。僕たちの事情を理解して力になりたいと言ってくれたことも、自分のマスターが無事に聖杯戦争を乗り切れるようにしたいと言ったことも、すべて本音だ。ちぐはぐなんだよ。部分部分で噛み合ってない。こんな奴は初めてだ」
　自分の目的のためなら、どんなことでもできる外道のような面がある善人。それが切嗣が翔に下した評価だ。
　言いたいことを言い切り、遠い目になる。
「どうするの？」
「受けるさ。これからの困難に比べたら、この程度の爆弾は使いこなせないとだ。それに、善人であることには変わりないんだ。それが僕たちのことは助けたいと言っている。だったら、心配することは少ないよ」
　厳しい言葉を並べていた切嗣だったが、結局の結論は変わらない。これから胃痛がひどくなりそうだと、今からアイリはげんなりとする。
　と、その時、お城の結界に反応があった
「ッ!!」
「どうした、アイリ」
「侵入者ね。遠見の水晶球を用意するわ」
　長い夜は、まだまだ終わりそうにない。

「――――いたわね」
「ああ、キャスターか」
漆黒のローブを引きずってうっそうと茂る林をゆっくりと歩を進める。
大きな水晶玉を持って戻ってきた切嗣さんとアイリさんは、敷地に侵入者がいると言って準備を始めた。
アイリさんが水晶球に映した映像には、キャスターのサーヴァントであるジル・ド・レェ伯が映し出されている。その様相は下手なホラーよりも刺激が強い。暗いところが好きじゃない俺は、何も知らずに出会ったら腰を抜かしてしまいそうだ。
そんなジル・ド・レェは一人で来たわけではない。それはしかし、マスターと一緒に来たという訳でもない。
「この子供たちは一体何なの？」
およそ１０人、一番大きくても小学生くらいの子供を連れていた。ふらふらとした足取りには意思が感じられない。ジル・ド・レェの術の影響下であることは確かだ。
「人質かしら」
「だとしても行かなくては。敵は誘いをかけています。あの子供たちを助けるためにも、私が」
アイリもできることならそうして欲しい。しかし、今のセイバーはランサーとの戦闘での呪いの傷がある。全力で戦うことができない。
『わが麗しの聖処女にお目通り願いたい』
悩んでいるうちに、水晶に映っていたジル・ド・レェがこちらの千里眼をあっさりと看破して語り掛けてきた。そしてご丁寧に、時間が

過ぎても反応がない場合のデモンストレーションもしてくれる。
術が解け正気に戻った子供たち。幼い目には、握りつぶされた人間の頭部はどう映るだろうか。とっさに「やめて!!」と叫んだアイリさんは口を覆っているが。
「セイバー、キャスターを倒して」
「はい」
「ジル・ド・レェの専門は悪魔召喚です。セイバーの魔力抵抗も大して役には立たない。俺も行きます」
「お願いします」
セイバーはすでにそこにはいなかった。主の許しを得たその瞬間、風となって戦場へ向かったのだ。俺はそんなに早く動けない。
「っと」
行く前に言っておかなければいけないことがある。
「この後ランサーも襲撃してきます」
「ランサーも!?」
「はい。この城にはそのマスターが。気を付けてください。それと……言峰綺礼も来ます」
「何だと!?」
切嗣さんがことさら大きく反応する。それもそうだろう、一番会いたくなかった男だろうから。最悪、戦わずにここを放棄することも視野に入れる必要がある。
「そうか……できるなら、ここでランサーのマスターも仕留めておきたかったが……よし、僕達は撤退の方向で準備を進めることにする。後で合流しよう」
「分かりました」
こうしている間にも襲撃者はその距離を縮めている。時間はそんなに残されてはいない。俺は窓から飛び降りた。向かう先はセイバーの魔力があるところだ。
もう戦闘を始めているのか莫大な魔力が、見えない波動になり空間を揺らしている。それに乗せられ伝わってくる憤怒。セイバーのものだろう。非道な行いをしたジル・ド・レェに向けたものだ。

「早いな。来るのが早いよ」
　そこにいるのは2本の槍を持ったサーヴァント、ランサーだった。来るのは知っていたし警戒もしていた。でも、間で戦っているセイバーを素通りして来るとは。この迷い無い進軍、初めから俺を目標にしていたとしか思えない。ランサー陣営にはそんなにちょっかいをかけていなかったと思ったのだが、いつの間にこんなに目をつけられてしまったのだろうか。
「見つけたぞ、イレギュラー」
　ディルムッドがこちらに目を向ける。
「あぁ、悪いがさっさと倒させてもらう。セイバーが心配なんでね」
「心配するな。セイバーへの助力はこのディルムッド・オディナが受け持とう。貴様は、我が主への手柄となってもらう」
「御免被るよ」
　相手は槍兵。俺よりも明らかに速い相手だ。近距離戦を仕掛けるのは無謀だろう。
「ふっ！」
　機龍を呼び出す。まばゆい光線がランサーを襲うが、
「こんなものでッ！」
　槍の一振りによって一掃される。
「まだまだ」
　避けられても関係ない。とにかく撃ち続けることが重要だ。そして牙（タスク）による爪弾攻撃を追加する。
「この程度で！」
　次々と発射される光線とスタンド攻撃を、槍2本で器用に捌きながらこちらに接近してくる。
　しかし俺がしたいのは時間稼ぎではない。すでに戦闘が始まってしまったこの状況。パラドクスに変身しようとすれば攻撃が薄くなり、変身の前に腕が切り落とされるだろう。
　使える物が少ない。せっかく手に入れた能力もあるが、今の俺では十全に使いこなすことは難しい。俺の技量の問題ではなく、他の問題で。

固有時制御(タイムアルター)で体内の時間を加速、牙(タスク)で撃ち尽くした爪のリロードを早める。しかし、
「ッ!?」
「そこだっ!!」
弾幕が薄くなったのを見て勝機と思ったのか、大きく踏み込んで必滅の槍の一閃を繰り出してくる。
必滅の黄薔薇が脇腹を掠める。
「ちぃ……」
「受けたな……我が必滅の黄薔薇を」
「はっ、そんなわけないだろう」
「アア、ソウダゼ」
「む」
服の下ぎりぎりに展開していた黒影(ダークシャドウ)の鎧。こいつのおかげで無傷で済んだ。
「魔力の流れを断ち切る槍も、不治の呪いを与える槍も、効果は恐ろしいがそれ以上はない。ランサーの槍さばきは恐ろしいが、ただ防ぐくらいなら俺にも出来る」
そう効かないのだ。黒影(ダークシャドウ)の高い物理防御、そして魔力や超能力ではない、『個性』という能力体系。この世界にはない力を使えることが俺の長所だ。
「しかし、俺が有利だということに変わりはないだろう?」
ランサーの構えには宝具を破られた緊張がない。その通りだ。ディルムッドの加速についていけない以上、俺には万に一つも勝ちの目がない。
「しょうがない……」
このままではじりじり削られるのは目に見えている。時間も食ってしまった。セイバーを助けに行かなければならない以上、これ以上手を焼くわけにはいかない。
「……どういうつもりだ?」
「なに、こっちも本気でいくってことだ」
爪を回転させる。その回転を体の中へ拡張。俺の中に新しく根付

いた金と黒の魔力へと、回転のパワーを伝えていく。
「固有時制御（タイムアルター）……」
俺に使える数少ない魔術である固有時制御（タイムアルター）。その魔力を加速、停滞といった時間指定をせず、自らの手のひらへ魔力の塊として作り出す。
それを見てディルムッドの口元に笑みが浮かべられる。大方、本気で行くという俺の言葉と、見たことのない魔力の使い方を見て戦士としての心が滾っているのだろう。
「来い、受けてたとう！」
「固定、掌握。闇の魔法（マギア・エレベア）――――」

「……」
「……」
「……遅いな、あいつ」
日が変わる前には戻ると言っていた翔。それが1時を過ぎても帰ってこない。だんだんと心配になってくる。もちろん、マスターとの交渉だ。そう簡単にホイホイと仲間になるわけないとウェイバーは思っていたが、いざ戻ってこないとどうしようもない不安に襲われる。
（いやいや！　何考えてんだ僕は！　あいつがいなくなったって、元々の戦力に戻るだけじゃないか！　サーヴァントなんて、聖杯戦争が終わればいなくなる影みたいなもんだ。そんなのに余計な感情なんて！）

「坊主、なーに、ひたすらに首を振っておる。そんなに気になるのか、ん？」
「バッ、違う！　そんなんじゃない！　お前だって、暇そうに起きてるじゃないか！」
　何をするでもなく起きているウェイバーをからかう。
「サーヴァントである余には睡眠は必要ないのでな」
　イスカンダルは読んでいた本を閉じ、だらしなく横になっていた態勢から立ち上がる。それだけで空間が圧迫され、部屋が狭くなったように思える。英霊としての闘気か、それともはちきれんばかりの筋肉か。どちらにせよ、ウェイバーにとって気持ちの良いものではない。
「なんだよ、急に立ち上がったりして」
「そんなに気になるというなら、いっそのこと応援に向かってやろうと思ってな」
「どうやって？　そもそも、来るなって言われてるだろ」
「しかしマスターの意向とあっては、奴も断ることはできまいて」
「つまり……」
　視線は眠そうにしながらも翔の帰りを待つ桜へ。サーヴァントである翔が全権を握っているように見えても、しょせんはサーヴァント。マスターを無視できるわけがない。
「でもあいつ、現界に魔力を使わないせいで、マスターでもどこにいるかわからないんだろ？　どうするんだよ」
「ならば、戦っているときに見つければよい」
　イスカンダルは、今夜の交渉が平穏無事に終わるとは思っていなかった。初戦闘であれだけ周囲に唾をつけ、しかも本人が特異な存在。ちょっかいを出されないわけがない。
「……どうなんだよ」
「ん、何か体から抜けてる感じは、してる」
「方向はわかるか？　抜けた魔力が向かってる方向は」
「なんとなくは」
　イスカンダルがすらりと剣を抜いた。このひと振りでイスカンダルの持つ奇跡の１つ『神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）』を召喚できる。雷鳴とともに空を

駆けるこの宝具なら、たちどころに現場に向かえるだろう。
「ここでは出すなよ」
ウェイバーの一言でこっそりと家を抜け出すことになるのだった。

闇の魔法

「固定、掌握。闇の魔法(マギア・エレベア)――――」

握りつぶした魔力が体を満たしていく。その魔力を回転させ、さらに循環させる。

「術式兵装・『一刻回廊』」

闇の魔法(マギア・エレベア)

『魔法先生ネギま!』に登場する技法の1つ。同作品のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが編み出した。

『闇き夜の型』という黒いオーラを纏った状態を基礎とする。基礎状態でも、元の倍の力が出せる。　応用として、放たれる直前の魔法を『固定』して『掌握』し、それに応じた特性を得ることが出来る。

ただし、使用するためには適性がなければ話にならず、　心の中に闇がなければ習得することすらできない。習得したとしても、使いすぎると浸食され、人外の化物になってしまう。

超宇宙聖剣(スペースカリバー)を取り出して切りかかる。ランサーはその速さに目を?いている。

完全記憶能力から引っ張り出したあらゆる剣技を総動員。速さで追いついても、今度は技術の差がある。それを必死で埋める。

林の間を駆け抜け、打ち合う。俺たちが通った後には、深い踏み込みの跡と常人には決して付けられないような傷が残る。

聖剣は暗い林の中であってもその輝きを失わない。近くに本物がある今はクズ星のようなものであっても、その光は星の輝きそのものだ。6等星だけど。

「やるなッ！　だがッ！」
「ッ！」
まだ余力を残していたのか、ランサーが加速する。1本の聖剣は2本の魔槍を完全に止めるには至らない。打ち漏らした黄薔薇の魔槍が俺の脳天めがけて突き刺さる――――
――――三倍速（トリプルアクセル）、三重停滞（トリプルスタグネイト）
すんでのところで回避に成功する。
しかし、今の攻防で大きなヒントを与えてしまった。英霊には十分すぎるだろう。事実、この力のカラクリを見抜いてきたのか、ランサーの眉が不快そうに歪む。
手首の様子を確認するように何度も回し、次いで槍を回転させる。
「なるほど、それが貴様の奥の手というわけか、イレギュラー」
「そういうことだ、ランサー」
「単なる基礎能力の向上、などではなかったという訳だな。今の急加速に加えて、俺の槍が不自然に遅くなったあの現象。面妖な術だけかと思えば、その聖剣はかの騎士王のものに似ている。流石はイレギュラーといったところか。得体のしれないヤツだ」
固有時制御（タイムアルター）の術式兵装、その付加効果は、時間流の操作。加速停滞はもちろんのこと、時間をかけて集中すれば、ごくごく限られた空間の時間を止めることも可能だ。
今は体にかけた倍速の割合を増やし、槍先の空間の時間を停滞させた。
しかし、黒影（ダークシャドウ）のような個性とは違い、闇の魔法（マギア・エレベア）は完全に破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）の対象だ。だから、破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）を優先的に剣で弾いた。
そして、
「喋っててくれて助かったよ」
「ッ！」
時間停止。
1回分のまばたきよりも少ない時間しか止めていることは出来ないけど、この距離ならそれで十分だ。

出来れば倒すことなく終わらせたいとか、そんなことを考える余裕はない。ランサーと友好関係を築くことと、今キャスターと戦っているセイバーを助けること。どちらを優先するべきかなんて簡単にわかる。

一瞬よりも早く、ランサーの目の前へ。時間が動き出したときには、ランサーの薄皮一枚のところまで剣劇が迫っていた。絶対に避けられないはずの一撃。しかしランサーはそれに対応して見せた。

「まったく、よく避けるよ」

「くぅっ……やってくれたな……ッ!!」

突如現れた攻撃にも関わらず、体を反らし、槍を使い、致命的な傷だけは何とか回避していた。それでも大ダメージだ。引き締まった胸板を横断するように血が滲んでいる。しかし、さすがは英霊。足を止めずに俺との間合いを測っている。こうなると時間停止を当てるのは難しい。

戦況はひっくり返ったと言ってもいい。

服では吸収しきれなかった血が、地面にポツポツと落ちている。

このまま押し切るか。もしくは見逃すと言って恩を着せる？　2つのパターンを検討し始めたところで――――新たな闖入者の気配を感じ取った。

「イスカンダル……」

どんどんこっちに近づいてきている。何の偽装もしていないためか、莫大な魔力の塊がそのまま移動しているのが手に取るようにわかってしまう。到着まで残り数分といったところだろう。

しかも、どうやら桜ちゃんまで来ているみたいだ。イスカンダルが出陣するときはウェイバーもセットになっている。この森に、今の味方ほぼ全員が集結することになるのか。言峰綺礼という爆弾がいるこの森に。

「ランサー、ここは見逃す」

「なんだと？　この好機をみすみす捨てるというのか？」

「お前はセイバーとの決着を望んでいるんだろう？　だったら、素直に首を縦に振るべきだと思うが？」

「(心にもないことを……)何を考えているかはわからないが、ありがたく見逃してもらうとしよう」
俺はすぐさまセイバーのもとへ走った。ランサーは木陰で少し休むらしく、腰を下ろしている。あの分ならまともな戦闘は難しいな。
最悪な事態になる前に、すべて終わらせる。倍速を重ねながら、俺の内にある闇の魔法(マギア・エレベア)を感じながら、そう思うのだった。

「この森にアイツがいるのか」
「ん、そうだと思う」
「あー、こりゃ、至ることでやり合ってるな……ん?」
イスカンダルの目があるモノを捉える。それは人ではない。建造物だ。
「どうしたんだ?」
「ありゃ城か! なんともつまんないところに建てたもんだなぁ」
イスカンダルが見つけたのはアインツベルン城だった。森に囲まれ、周りには何もないというのはイスカンダルにとっては耐えられない環境だろう。もし住むなら、だが。今回の目的は違う。
「よし、あそこに行くとしよう!」
「え!? でもあそこには……」
「まあ、ドンパチは無いが……征服王ともあろうものが、城を目の前にして征服以外に目を向けると思うか?」
「……思わない。ま、逆に言えばそんなに危険じゃないってことだし……いいかな。お前もいいか?」
「……いいよ」

なんだかんだ桜の意見も聞くウェイバー。根は素直だ。
「よし、ハイヤー!!」
手綱に合わせ、神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）が急降下を始める。一歩踏み出すだけで雷鳴が轟き、アイリによって編まれていた防御結界が粉砕されていく。隠密とはかけ離れた豪快な進軍だ。
戦車が通った後はもちろん更地になる。自然保護団体が見たら激怒しそうな光景だ。
そんな戦略宝具を操るイスカンダルは実に楽しそうに、桜も少しだけ笑みを浮かべ、ウェイバーだけが必死に捕まり涙目になっている。
城門を蹴り破ると、一人の男と鉢合わせした。その男の整えられた身なりは、十分に貴族の空気を纏っていたが、この城のそれとはまた別種のものだ。傍らには銀色の物体が鎮座している。金属を思わせる色であるにもかかわらず、どこか柔らかそうな質感もある。
ウェイバーは知らなかった。この礼装――月霊髄液（ヴォールメン・ハイドグラム）――が、自身の恩師の持つ最強の礼装だということを。
「む？　貴様は、ライダー？　ウェイバー・ベルベット……」
「あ、ぁ、ぅ」
ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。ランサーのマスターがそこには立っていた。
「予想出来ていたことではある。イレギュラーがいるということは、ライダーがいたとしてもおかしいことではない。しかし……」
ケイネスはウェイバーに侮蔑の視線を向ける。
「貴様のような未熟者が戦場に足を運ぼうなどとは。あの夜に懲りたものだと思っていたのだがね」
「ぼ、くだって、きたくて、きてるわけじゃ……」
強烈な怒気にしどろもどろになるウェイバー。
「流石、他人の聖遺物をかすめ取る盗人なだけはある。度し難い愚か者だ。セイバーのマスターへの誅伐の予定だったが、気が変わったぞ。貴様から葬ってやろう」
「ランサーのマスターよ。あの夜、余も言ったはずだぞ。余のマスターにふさわしいのは、余とともに戦場をかける勇者であると。い

や、しかし、余も貴様への評価を改めねばなるまい。まさか、サーヴァントを侍らせず、敵の城へ攻め込む気概があったとは。しかし、今の貴様は格好の的だぞ？」
　いかにケイネスといえども、サーヴァントであるイスカンダルへの勝利は難しい。ケイネスもそれを理解し、赤い文様が刻まれている手を掲げた。
「令呪を持って命ずる。ランサーよ、今すぐここへ馳せ参じよ!!」
　一画の令呪が光り輝く。その消失と同時に、圧倒的存在感を持つ男が、ケイネスの傍らに合わられた。ランサーのサーヴァント、デルムッド・オディナだ。
　これで五分、いや、魔術師としての腕を鑑みれば自らのほうが有利。余裕の顔だったケイネスだが、ランサーの動きが目に見えて悪いことに眉を寄せる。
「ランサー、何があった」
「……申し訳ありません。イレギュラーとの戦闘で手傷を負ってしまい」
　ランサーの傷を見て、少し嫌そうな顔をするが寸前で余裕を取り戻す。
「まあいい。得体のしれないサーヴァントを滅することができたと思えば安いものだ」
「……」
「……ランサー、貴様……」
「……申し訳ありません」
　簡単に我慢の限界を超えてしまった。
「貴様ッ！　貴様ッ！　取り逃がしたというのか！　それ程の傷を受けただけではなく！　勝利を捧げるという言葉、あれは虚言かッ!!」
「いえ！　決してそのようなことは！」
　敵の目の前だというのに言い争いを始める。
「あいつ、ランサー相手に引き分けたのか……」
「いや、ランサーの口調から察するに、手痛い不意打ちを食らったのだろう。ふふ、心が躍るわい」

「いや、なんでだよ」
もちろん、イスカンダルにも図り切れていなかった翔の実力が、予想以上に高かったからだ。今は味方とはいえ、味方と争ってはいけないという理由はない。
それはそれとして、今は目の前のランサー陣営に目を向けるべきだろう。
言い争っているうちに逃げてしまうという選択もあったが、よほどのことがない限り、イスカンダルが正面の敵に背を向けることはない。
「良いな、ランサー。これが最後のチャンスだと思え。目の前のライダー、見事と打ち取って見せよ」
「はっ！」
治癒の魔術によりある程度回復したランサーは、静かに闘志を燃やす。
「さて坊主、気合入れねばならんぞ」
「あ、ああ！」
ライダーの鬨の声に、桜は戦車の中で小さく身をかがめた。自らの手にある、令呪を見ながら。

触手プレイかな？
繰り広げられている光景はそうとしか思えなかった。金髪の女騎士が気持ちの悪い怪生物のヌメヌメしたものに手足を拘束されて――
――ここらへんでやめておこう。
でも、実際目の前で起きているのはそういうモノだ。流石に鎧が剥

がされたり、服がビリビリになってたりはしないけど。
キャスターの宝具、『螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）』により呼び出された異世界の怪物。蠢くという表現がこれほどに似合う生物を、俺は他に知らない。
一体一体は大した強さではないが、殺しても殺してもその血肉を触媒に無限に召喚され続けるため、片腕が使えないセイバーは満足に戦うことができず、物量に負けてしまった。
一刀で何匹殺せようとも、片腕をその倍の数で押さえつけられれば為す術もない。
そこに、
「じゃあな」
極光が暗い森を染め上げた。
問答無用。見敵必殺。不意打ち上等。騎士道の欠片もない攻撃が、ジル・ド・レェに襲い掛かった。
ジル・ド・レェには配慮が足りなかった。セイバーばかりに目が行って、他の敵はこれっぽっちも警戒していなかった。セイバーが積み上げた海魔の死体の嫌な臭いとダダ洩れの魔力があれば、十分に目標を絞れる。
後は攻撃を感知されて避けられないように、ジル・ド・レェの索敵圏外から、最速で最大の攻撃を叩き込むだけだ。
攻撃は大成功。攻撃の動作に入ると流石に避けようとしていたが、一番の魔力源である螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）を消し去ることは出来た。
ランサーと違い、こいつには一切の迷いを捨てて攻撃出来る。俺のプラン云々を差し引いても、許すことは出来ない。
「セイバー大丈夫か？」
「はい、助かりました。今のはその剣で？」
「ん、そうだな。モノホンを持ってる身としては、弱すぎて見るに堪えなかっただろ？」
「いえ、そのようなことは……」
キャスターはすでにその場からいなくなっていた。狂人でも引き際は弁えていたのだろう。海魔も消え去り、周囲にはおびただしい量

の血が、大きな血だまりを作っていた。
「それにしても、ずいぶんと来るのが遅かったですね？」
「なんだよ。騎士王ともあろうお人が、そんなこと気にしてるのか？」
「いえ、道中でランサーと接敵したことはわかっていますよ。どこか負傷してしまったのかと思いまして」
「大丈夫。セイバーほど深刻じゃないさ」
　俺は不治の呪いを受けたセイバーをからかうように言う。
「まったく、人が心配をしているというのに……」
　よし、とりあえず、大きなところは終わったかな。後はランサーのマスターと、なんか来ちゃったライダー達――――までよ。
　魔力反応的に、今のライダー達はお城のあたりにいるよな。それ、ケイネスと鉢合わせしない？
「急いでお城に戻るか……」
「ライダーですか？　ここにきているようですが」
「来ないでくれって言っといたんだけどなぁ……まぁ、あの人も王様だし、ランサーのマスターもいるし。俺は一回戻ってみる。セイバーはどうする？」
「私は切嗣たちと合流します。何かあるといけないので」
　俺たちは二手に分かれた。ベッドに横になるのは、もう少し後になりそうだ。

動き出す戦い

「Ｌａａａａａッ!!」

「クッ！」

狭い城内を動き回るには、ライダーの戦車は大きすぎた。行儀よく道なりに進むライダーではない。壁をぶち抜き、粉々になった壁に追い打ちをかけるように神牛の蹄が大理石の床を踏みつけた。纏う雷光は、触れただけで外敵を消し炭にするだろう。

小型の台風が暴れているかのような猛攻に、ランサーは全く間合いに踏み込めない。ケイネスの治癒があったとはいえ、完全には傷が塞がっていないランサーには、勝つためのヴィジョンが見えないでいた。

そんなランサーを見かねてケイネスも援護しようとするが、サーヴァント同士の戦いに割って入れる訳もない。戦車に乗っているウェイバーに攻撃出来ず、マスターの差は全くと言っていいほど意味を成さないでいた。強いて言えば魔力量の差があるが、それだけでは覆せない。

いくら破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）の槍先が雷を打ち消せたとしても、機動力を生かし動き回るライダーには、うまく攻撃を当てられない。

しかし、

「まだだッ!!」

この身は騎士としてマスターであるケイネスに捧げている。諦めや勝てないという絶望で、膝を折るわけにはいかない。この世界に仮初の姿を手に入れた時から胸に秘めた誓いを燃やし、雄叫びと共に強く踏み出した。

いかに２本の魔槍を持つランサーであっても、神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）に正面から立ち向かうことは出来ない。

しかし、あえて。あえて正面からの攻撃をランサーは選択した。狙いは戦車を引いている２頭の神牛。その間を抜けて、ライダーの胸板へと突き刺さる一撃。

ライダーもランサーの狙いを理解したうえで受けて立つ。わざわ

ざ一度足を止め、ニヤリと笑った。それにつられ、ランサーの口も自然とほころんだ。

それ以上交わす言葉はいらない。ケイネスの顔がゆがむほどの魔力が、イスカンダルと神威（ゴルディアス・ホイール）の車輪に蓄えられていく。

ランサーも腰を落とし、慎重に間合いを測る。一歩も間違えなかったとしても致命傷は避けられない。頭に『撤退』の２文字がないケイネスがマスターでは、これがこの聖杯戦争最後の攻防になるだろう。

「彼方にこそ栄（ト・フィロ・ティ）えありッ（モ）!!　遥かなる蹂躙制覇（ヴィア・エクスプグナティオ）!!」

「抉れ――――破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）!!」

車輪で爆発でも起きたのか、一気に初速からトップスピードまで加速したイスカンダルは、ヒトが認知できる速度を超え、ランサーに迫る。

攻撃が人の限界を超えたのはランサーも同じだ。紅い残像を残し、神威（ゴルディアス・ホイール）の車輪の雷を振り払う魔槍。

英霊の目にはすべての動作が走馬灯のように、スローモーションになっていたが、事の成り行きを見守っていたマスターにとっては次の瞬間、ランサーは神威（ゴルディアス・ホイール）の車輪に轢き潰された。

神威（ゴルディアス・ホイール）の車輪は壁を壊しつつ減速し、動きを止める。見るも無残な姿になったランサーは、偶然にもケイネスの目の前に転がっていた。

「主よ……申し訳ありません」

その言葉を残し、ランサーは現世から消失した。

「な、ぁ……？」

目の前で魔力の残滓となり光と消えたランサーに、今起こった事態を飲み込めないケイネスが呆然とした声を出す。

決着がついた。ライダーの勝利だ。

ライダーは戦車を降り、すっかり戦意を喪失しているケイネスのもとへ歩く。右手には鈍く光る野太い剣が握られている。

「ランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。あなたが誇りある魔術師ならば、どうか私の話を聞いてもらいたい」

そこに現れたのはイレギュラーのサーヴァント。夜月翔だった。

間に合わなかったみたいだな。
お城の下層はこれでもかと破壊されていた。人間とサーヴァントの戦いならここまではならない。確実にサーヴァント同士の戦いがあった。そして今立っているのはイスカンダルただ一人。ケイネスがいるのにランサーの姿がない。
もう少し早く来ていれば、ランサーを含めて交渉ができたかもしれなかった。
しかし、ケイネスがいるだけでもいいとしよう。
「話、だと？」
「ああ、そうだ。この聖杯戦争の裏の話、ぜひ聞いてもらいたい」
「お、おい！　お前無事だったのか!?　今までどこにいたんだよ！」
ウェイバーが戦車から身を乗り出し、落ちた。
「今までセイバーと一緒にキャスターと戦ってたんだよ。怪我は特にない」
「キャスター!?　どんな奴だったんだ!?　倒せたのか!?」
質問攻めにしてくるウェイバー。色々聞きたいことがあるのは分かる。分かるのだが、それよりも言っておきたいことが口から出てしまう。
「そんなことよりも、何で来たんだよ。待っててくれって言ったよな？」
「何でって……気になったから……」
「気になったから、で来たのかよ。俺のマスターも連れて。危険なところに。マスター相手の交渉だぞ。戦闘になる確率が高いことくら

いお前だってわかるだろ？」
「悪かったよ！　そんなに言わなくてもいいだろ！　大体、最初に行こうって言ったのはライダーなんだよ！」
「もしものことがあるって言ってるんだよ。結果論で行動して、取り返しのつかないことになってからじゃ――――」
　俺の足に弱々しい衝撃。
「やめて」
「坊主もやめんか。みっともない」
　ウェイバーをげんこつで黙らせる。首根っこを掴み、戦車に放り投げた。頭から落ちていったけど、変に捻ったりしてないよな？
「ライダー、困るぞ。そんなわがまま言われると」
「勘違いをするなよ坊主。余たちはあくまでも同盟相手であって、上下があるというわけではない。何もかもが思い通りになるわけでは無いぞ？」
「ライダー！　ッ！」
　体の奥からゾッと何かが溢れてきそうになり、慌てて感情を静める。
「……わかった。このことは後で話そう。今はケイネスの……無理そうだな」
　敗退のショックからまだ抜け出せていないようだ。この分では、まともな話し合いになるとは思えない。
「セイバーのマスターに連絡する」
　俺はそう言い残し、外に向かった。番号を交換しておいてよかった。受け取った番号に電話をかけようとして――――小さい人影がついてきていることに気が付いた。
「桜ちゃん？」
「今日の翔お兄ちゃん、変だよ」
「そうだなぁ……」
　マスターに心配をかけてしまうとは。落ち着いてみると、ちょっと高ぶってたかもしれない。
「気にしなくても大丈夫だよ。ちょっとイライラしただけだから」

「本当に？」
「本当に」
問題ないさ。

―――――――

けても文句を言えない愚行だ。例えば、目の前のサーヴァントが口を滑らせたらどうなることか。
（どういうことだ？）
　だというのに、綺礼の心は驚くほど静かだった。自分でも意外に思う。ギルガメッシュは変わらない表情からそれを読み取っていた。しかし口には出さない。
「まあ座れ。我が注ぐ酒だ。飲めぬとは言わせんぞ」
「もう一つグラスを用意しているとは、用意がいいなアーチャー」
　見透かされているような瞳と、ぺらぺらと紡ぎだされる悪魔のささやきに似た声は邪魔だが、珍しく無理矢理にでも酔いたい気分になっていた綺礼は、おとなしくグラスを手に取った。
「それで？」
「何がだ」
「酒の肴になる話をしろと言っているのだ、綺礼よ。さしあたっては今日の顛末をな」
「これといって何もない。セイバーの根城にキャスターと同じタイミングで忍び込んだが、城はすでにもぬけの殻。遠目からサーヴァントの戦闘を眺めたくらいだ」
「なるほど。確かにつまらんな」
　一気に飲み干す。
「イレギュラーサーヴァントの戦いならよく観察することができたが」
「興味はないな」
　にべもなく切り捨てる。
「ならば貴様は私の口からどのような言葉が聞きたい」
「見聞きしたもの、それに対して貴様がどう感じたのかだ」
「期待には沿えなかったようだな」
「貴様も、ずいぶんと期待外れだったようだがな。くれてやった『矢』も使ってないだろう」
「己が魂の形を具現化させる矢、か」
「ああ。貴様の魂が求める愉悦、それを使えばわかるやもしれんぞ」

アーチャーの宝具『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』から取り出され、賜れた簡素な矢。アーチャーの言葉通りなら、使わない手はない。
（いったい私は何を恐れて――――恐れて？　私がこれを使わないのは、このサーヴァントの言葉を信じていないからだ）
「その無礼は許してやろう。もうしばらくはこの退屈な遊戯に付き合ってやるさ」
綺礼の心情を完全に見透かしたアーチャーは愉しそうに嗤うのだった。

薄暗く、多少夜目が効いた程度では何も見えない暗闇。月の光や星の光が全く射さない下水道の奥の奥。大きく開けた地下貯水槽。そこを根城にしているのはキャスター陣営だ。
そんな暗闇に紛れて、雨生龍之介は一心不乱に芸術創作をしていた。さらってきた幼子を慎重に、丁寧に、己の理想に近づけていく。ありったけの情熱を込め、感性の赴くままに。
不要な部分をすべて削ぎ落とし、完成した。
「うん。こんなもんかな。っと、旦那、お帰り～」
「……」
頼りになる大先生であり、尊敬できる先駆者。キャスター・ジル・ド・レェの帰還に無邪気に笑って近寄る。
自分の作った工作を親に自慢するように、できたばかりの新しい楽器を指さす。
「見てくれよ旦那！　人間オルガンは失敗しちゃったんだけどさ、今

度はちょっと作り方を変えてみたんだ！　オルガンの時は……って、どうしたの、旦那？」
「申し訳ありません、龍之介」
「え、何が？　そういえば迎えに行った、えっと、ジャンヌ・ダルク？　はどうしたの？　もしかしてそのまま殺しちゃったの？」
　長いローブが、床に作られた大きな血だまりを大きな魚のようにかき分け進む。龍之介が喜々として自慢した楽器に触れる。
「まさか、気付けのために多少の痛みを我慢してはもらいましたが、我が光をそうやすやすと殺す訳がないではありませんか」
　試しに鳴らした楽器から、空間を引き裂くような悲鳴が奏でられる。龍之介は、その出来栄えにこっそりとガッツポーズをとる。
「あと少しというところで、あの匹夫めがァ……ッ！」
　キャスターの怒りに呼応するように、悲鳴の音量もどんどん上がっていく。怒りのせいで込める力がどんどん強くなっているのだ。柔らかい人肉、その内臓にサーヴァントの本気の力が加えられれば、
「あ、ちょ！　ストップストップ！　壊れちゃうよ旦那！」
　慌てて止めに入る龍之介。素直に従い手を放す。
「つまり……恋敵が現れた、感じ？」
「なんと恐れ多い！　そして失礼に当たりますよ龍之介！　この私が聖処女に下賤な感情を抱くことはありません！　そして、あのような盗人に心奪われるなどッ!!」
　両肩を掴み前後に揺する。眼球が今にも頭蓋骨から飛び出しそうになっている。
「じゃ、なんなのさ」
「物事はもっと簡単なのですよ。ただ単に、聖処女を連れてくる邪魔をされただけです」
「あ、そうなの」
　やっと納得がいったと龍之介は手を打つ。
「で、どうするのこれから。諦める訳じゃないんでしょ？」
「もちろんです！　しかし……螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）を破壊されてしまった今、手づまりなのは確かでしょう」

「螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）……あ！　あの人の皮でできた本!?　壊れちゃったの？　もうあのウネウネ出せないの!?」
「残念ながら」
そんなぁ、と本当に落胆したといった具合に龍之介は肩を落とす。
しかし、そんな龍之介の声はキャスターに届いてはいなかった。
「このままでは終わらせんぞ。聖処女は必ずや我が手に――――」
そして、
「あの匹夫はこの手で抹殺してくれるッ!!」

ゆっくりと次の戦場へ

畳の良い匂いがする。思えば、最後に畳の部屋に入ったのはこの世界に来る前だったな。ちょっと埃っぽいのが残念だけど、それでも伝統的な日本家屋だ。

俺たちはたった今、新しい拠点となるこの家の点検を終わらせたところだ。大きな敷地の隅には特徴的な土蔵がある。間違いなくアレだ。Ｆａｔｅの聖地的なアレ。

感動しつつも仕事に抜かりはない。窓を全開放してしっかりと換気する。

「あ、こっち終わりましたよ」

「こちらもです」

セイバーと合流する。

切嗣さんは戦場になったアインツベルンの城をあっさり放棄、拠点をここに移すことに決めた。

最近名義を買い取ったばかりでロクに家具も無いため、まずは掃除からとなったのだ。

ケイネスへの説得はもう終わっている。何としても気分を盛り上げなくてはいけなかったから、ガンガンおべっかを使った。最終的には「そのような歪んだ儀式、正しい結果が得られなくて当然だな！この私が負けたなどという間違った結果は！　この場は私が立てるべき武功は、単なる勝利ではないということだ！」なんて言い出してた。でも、聖杯の解体には乗り気なのでよかったと思う。

ちなみにいうと、勢いに任せて喋っていた結果、ケイネスが俺たちサーヴァント連合のリーダーということになってしまった。どうしてこうなった。切嗣さんは「扱いやすい奴だ」なんて言ってた。

今は切嗣さんと一緒に、大聖杯の下見に行っている。舞弥さんはケイネスの許嫁のソラウさんを迎えに廃工場に。

ケイネスたちがもともと今回の聖杯戦争の拠点として住んでいたホテルのスイートは、何者かに爆弾で吹っ飛ばされてしまった。やったのは切嗣さんなんだけど、言わないほうがいいよね。知らないほう

がいいこともある。主に俺たちの仲のためにも。
唯一の気がかりはバーサーカー陣営の行方だ。あの後、結局合流出来なかった。そのうち会えると思うことにしよう。近々会えそうなイベントもあるわけだからな。
「まずはキャスターですか」
「協会からの指令もきたし、そうなるだろうね」
今朝方、聖杯戦争の運営を行っている教会から、各陣営のマスターへ呼び出しがあった。切嗣さん、ウェイバーはもちろんのこと、ケイネスも使い魔を送った。
要件はキャスターについて。原作通り討伐指令が出たのだ。討伐報酬は令呪一画。直接・間接問わず、キャスター討伐に関わったサーヴァントのマスターに与えられるらしい。
昨晩倒せておければ良かったんだけど、宝具がない今、あいつの戦闘力はたかが知れている。今はウェイバーが居場所を調査している。ライダーの足を生かした広範囲捜査だ。明日には結果が出る。奇襲で一気に倒してしまいたい。
つまりは、今日は暇な日だ。色々なことがあった夜も明け、近頃奇怪な事件が起こる街にも、日が昇り、朝がやってくる。使ってしまった魔力を補充し、明日の決戦に備えなければならない。
「アイリスフィール。家の見回りが終了しました」
「お疲れさま、セイバー。それと翔君」
自販機で買ったお茶を飲んでいたアイリさんと桜ちゃんが、部屋に入った俺たちを見る。が、その姿は、休んでいるという割には荷物を下ろしていない。コートも脱いでないし。
「それじゃあ、行きましょうか」
何処に？

そんな訳で俺たちは、息抜きも兼ねて街に繰り出した。家に足りない諸々を買い足すためだ。
今でも切嗣さんは『セイバーと別行動作戦』を継続している。そのため、この買い物には切嗣さんどころか、舞弥さんも付いてきていない。もっとも、まともな戦闘なら、サーヴァント以上の護衛はいない。
セイバーが運転する車にはアイリさんの他に、俺と桜ちゃんが乗っている。というか女性率が高い。俺以外全員女性だ。
「とりあえずは食べ物よね……」
「そうですね。家具なんかは後回しでも大丈夫ですから」
意見を交わしながら車は走る。
桜ちゃんは昨晩の夜更かしが祟ったのか、穏やかな寝息を立てていた。
「ま、いっぱい食べる人もいるからなぁ……」
「イレギュラー、なぜそこで私を見る」
いやいや、なんでじゃないでしょ。世間ではすっかり腹ペコ王って呼ばれてるの知らないの？　知らないよね。
今日も今日とて黒いスーツを一部の隙もなく着こなしているセイバーは、不思議そうに俺を見てくる。聖剣を引き抜き成長が止まった小柄な体が着るには、少々背伸びが過ぎるような気もするが、凛とした表情がそんな疑念をねじ伏せている。
セイバーとアイリさんのコンビは、さながら現代の姫と騎士だ。この『らしい』2人の裏で狡猾な暗殺者が動いているとは絶対に気づけないだろう。本当に恐ろしい戦略だ。
今では味方になってくれて本当に良かった。
十数分で目的地に到着した。朝早いこともあり、駐車場には車はほとんど止まっていない。スカスカの駐車場にこのクラシックカーは、明らかに目立ってしまっている。俗なスーパーの駐車場にあるには、明らかに異質なものだ。お姫様と男装騎士はまったく気にする様子はない。

開店時間一番乗りに大型スーパーに入る。
そして、その食生活に愕然とした。
「ちょっと待ってください」
「なにかしら？」
迷うことなく買い物かごをカップ麺で満たしたアイリさん。よく考えれば、こうなることは簡単にわかっていたのに。
「栄養、偏るよ」
桜ちゃんも言葉少なく物申す。
「でもこれ、すごく美味しいらしいのよ？　お城にいたころから興味があったの！　切嗣が話してくれてね」
「ええ、お湯さえあれば3分で完成する非常食。兵糧としても非常に優秀なものだと」
「少しならともかく、全部それで済ませるのはダメです」
不満を受け止めつつ、山盛りだったカップ麺を、人数を考え１０個だけ残して棚に返した。今日は俺が作ることになるな。
エスカレーターを使い2階に登った。服を買うためだ。
実はウェイバーがチキったんだよね。桜ちゃんの服を買ってきてくれたのはいいんだけど、下着は買ってこなかったんだよ。問い詰めたら、「なんで僕がそこまでしなくちゃいけないんだよッ!!」と逆に怒鳴られてしまった。イミワカンナイデスネ。
つまり、桜ちゃんはずっと……
「それじゃ、よろしくお願いします」
「はい。任されました。行きましょうか、桜ちゃん」
「……ん」
ここは子持ちのお母さん、アイリさんの出番だ。もう全部任せる。お願いします。お城から出たことのなかったアイリさんでも、このくらいはできるらしい。任せてくれと言われて、すごく助かった。
「貴方たちも、少しゆっくりしててね」
そう言って、2人はお店に入っていった。さて、これでこの場にはセイバーしかいなくなったわけだけど。
「……」

この場でも全く警戒を緩めない。きょろきょろとあたりを見回しているわけではないが、目で得ている以上に、五感から情報を得ているだろう。
「なあ、セイバー。ちょっと休んだほうがいいんじゃないか。マスターにも言われただろう？」
「イレギュラー、それは油断が過ぎるぞ。確かに人目は多いが、襲われないという保証があるわけではない。それに、この程度に体力を使っていると思うのか？」
逆に言い負かされてしまった。そんなこと言われてしまうと俺だけ休むことができない。気まずくて。日本人のつらいところだ。
じゃあ、何か食べ物買ってくるか。謎な状態になっている俺は普通にお腹が減る。一晩何も食べてないし、パフォーマンスを上げるためにも何か入れておくとしよう。セイバーとの会話の種になるかもしれないし。
俺はセイバーに断りを入れ、お店を探す。
「たこ焼きでいっか……」
あまり待たせるもの悪いので、目についたお店を手早く選び、購入する。
「お待たせ」
「いえ、問題ありません」
表情を変えることなく立っているセイバーを横目に、たこ焼きを食べる準備をする。ソースをかけて、マヨネーズをかけて、っと。
「……良かったら一つ」
「いえ、結構――――」
「まあそう言わずに」
「ムグッ!!」
出来立て熱々のたこ焼きをセイバーの口の中にシュート。
「おいしい？」
「あふっ！　あふっ！」
セイバーは口を押えて、何か言おうと必死になっている。が、小さいお口で大きなたこ焼きを丸々一個食べてしまえば、ましてそれが

熱々なら、こうなってしまうのは仕方がない。もちろん狙った。
口に入ったものを出すという選択は、いくら何でも選べない。セイバーは熱さと格闘しつつも何とか咀嚼した。そのタイミングを見計らって、もう一度問いかける。
「おいしかった？」
「味なんてわかりませんでしたよ！」
鋭いツッコミが返ってきた。ならばと俺は、
「じゃあ、もう一個どうぞ」
「……」
竹串に刺したたこ焼きをセイバーの前に突き出した。セイバーは何とも言えない表情になっていたが、
「ふぅ……それでは」
俺が引き下がらないと理解したセイバーは、諦めて口を開けてくる。何気に「あーん」してるんだけど、俺たち2人とも気にすることはない。
「はむ……これは……」
今度はしっかりと身構えていたからか、一つ丸ごと口の中に入れられても、大げさに熱がる様子はない。しっかりと味わっている。
それを横目に俺も食べ始めた。セイバーで少し遊んだおかげで程よく冷めたたこ焼きを、口の中に放り込む。熱々でとろけるようなタコ焼きに、ソース、マヨネーズ、かつお節が絶妙なハーモニーを……
「もう一つ食べる？」
「……よろしいのですか？」
そんなに物欲しそうな顔でチラチラ見られたら、抵抗なんて出来る訳ないです。俺は努めて表情を変えないようしながら、同じようにたこ焼きを差し出した。
「はい、あーん」
チョットした遊び心でそんなことを言ってみるが、セイバーは目立った反応を返さない。
体に悪い食べ物、飲み物は総じておいしい。別にたこ焼きが体に悪い食べ物だなんて言うつもりはない。俺が言いたいのは、いとも簡単

に、この騎士王さんは食べ物につられてしまったということだ。
そこからは、もう何も言わずにたこ焼きを差し出していた。もちろん全部上げるつもりはない。倍のペースで食べ進められたたこ焼きは、あっという間になくなってしまった。残りは最後の一個。
「……」
「……」
無言のやり取りがあった。これは埒が明かない。
「別にいいぞ」
「そ、そうですか？」
明らかに弾んだ声。良いと言われているのに一度聞き返すのは日本人のようだ。まじめな性格がここに表れているのだろう。
「はい、最後」
「あー……あっ」
何の抵抗もなく俺のを受け入れようとしていたセイバーの表情が固まった。けど、原因はわかっていた。サーヴァントである俺にはマスターがどこにいるのか分かるのだから。
俺の後ろに買い物を済ませたアイリさんと桜ちゃんが立っているだろうということは、振り向かずともわかった。
「あらあら、２人で何を食べているのかしら？」
「たこ焼き食べてる……というか、食べさせ合ってる？」
「食べさせてもらってはいないから」
俺の目には何の嫌味もなくニコニコしているように見えるアイリさん。しかし、しばらく一緒に生活しているセイバーには、また違った視線に映るのかもしれない。
反対に我がマスターはとてもご機嫌斜めになっているのがありありと伝わってくる。理由は言わなくてもわかる。
そんな２人の手には、買い物で買ったと思われる袋が握られている。
「買い物終わったんですか？」
「ええ。もうすっかり。自分でお店に来て買い物したことなかったから、緊張しちゃった。でも、ばっちりよ。何の問題もありませんでし

た」
　そうですか。それは良かったです。
「それでね、せっかくだし、下着だけじゃなくて服も買っちゃおうかなって思ったのだけれど……。このままだと目立つでしょう？」
　確かに、今までは居住空間が人里離れた城の中ということで、多少浮世離れした服装でも許されていた感はある。活動拠点が住宅街に移された今、そういった周囲へ溶け込む努力というものが必要になる……？
「そんなこと言って、本当はただ買い物したいだけでしょう？」
「あら、ばれちゃったかしら。でも、いいと思わない？」
「もちろんですよ」
　今日はとことん時間のある日だ。そのくらいの息抜きをしても罰は当たらないだろう。
　とりあえずは、
「桜ちゃん、行こうか。好きな服買ってあげるから」
　とりあえず、この娘の機嫌を直すところから始めないとだな。

聖杯問答へ

「……それは？」

巨大な樽を抱えているライダーに問いかけた。ライダーは、ニカッと笑い酒に決まっていると言い、縁側に置いた。そんなの見ればわかるっての。酒の匂いしてるんだから。

「キャスターはどうだったんだ？」

「うむ。小僧の錬金術がことのほか優秀でな。いともあっさりと連中の隠れ家を見つけることができたわい……口に出すのも忌々しい場所ではあったがな」

「……絶対、あそこが奴の工房だった。ウップ……ッ！」

何を思い出したのか、青い顔をして口を押えるウェイバー。俺はどんな所かを知っているが、行けと言われれば絶対に拒否するだろう。

「お疲れ様」

素直にそう言っておく。見つければ先走ってしまうと予想していたものの、出来ればみんなで万全を期していきたかった気持ちもあるけど。

「で？」

「で？」

ウェイバーが青い顔に皺を寄せて腕組みをする。どうやら俺に言いたいことがあるようだ。俺もウェイバーに合わせて首をかしげてみる。

「その大量の服はなんだよ」

「桜ちゃんのだ」

山積みになった子供用の服に囲まれている俺。服は、とりあえず俺と桜ちゃんに割り当てられた部屋に置いてある。ライダーが外につながる障子を全開にしてるから、寒い風がどんどん入ってくる。そろそろ閉めてほしい。

「尊い犠牲だった」

「何がだよ！」

俺の財布が、だよ。俺がこの時間軸にいる間は同じ服を見ないだろ

う、ってくらいは買ったからなぁ。俺が。
「しかし、五体満足なら問題あるまい？」
「まあね」
　これで機嫌が直ってくれるなら大歓迎だ。
　そんなことよりも、だ。俺の買い物よりもライダーの買い物だ。
「セイバーと飲む気なのか？」
「ほう！　よくわかっているではないか！　見ろ坊主！　余の考え、何も余だけのものというわけではないということが、これで証明されたということだ」
「だからって、あの真面目そうなセイバーがお前の提案を飲むとは思えないね！」
　ここに帰って来る前までにどんな会話をしたのかはわからないが、相当言い合ったみたいだな。
　聖杯問答ね。セイバーが鬱になるし、仲間内がギクシャクしちゃいそうだから、出来れば遠慮してほしい。
「イレギュラー、そろそろ夕飯の支度をするべきではありませんか……っと、ライダー、帰っていたのか。戦果は？」
「キャスターの根城は潰した、というところだ。外道にふさわしい醜悪な場所だったわい」
「……そうですか」
　セイバーもキャスターとは戦っている。子供を次々に海魔の生け贄にするあの攻撃は、記憶に新しいだろう。セイバーも一刻も早く、倒してしまいたいと思っているはずだ。予定と違いライダー単独での行動になってしまったが、セイバーであっても同じように行動しただろう。
「それでだな。こいつなんだが」
　ライダーは大きな樽をたたく。
「それは、お酒ですか？」
「そうだ。もともとわれらは敵同士、戦うためにこの世界に現界していた。そうだな？」
「はい。しかし、今は違う」

短く、効率的な返答だが、最低限しか語らないソレは、とても胃がキリキリと締め付けられるようなものだ。
セイバーはライダーの勧誘を断った。だけではない。初回の戦闘ではそれ以上の印象をセイバーに植え付けたライダー。ここまで『仕事』という形でごまかされていたものの、この2人の間はお世辞にも良いとは言えない。協力関係という細い糸があるかどうかも疑わしい。
ウェイバーも遅まきに気付いたのか、もともと気分がすぐれなかった顔が今にもリバースしそうなものになる。
「貴様も世に対しては色々と言いたいことがあるとは思う。そこでどうだ。ここは一つ、武ではなく言の葉をもって、互いの王としての『格』を競うというのは？」
「なるほど……」
「セイバー、嫌なら断ってもいいんだぞ。いや、むしろ断れ！」
俺もそうして欲しい。セイバーが高確率で凹む。今後のチームワークに影響が出てもらっては困るんだよ。
そんな願いも空しく、セイバーは凛とした表情でライダーを見つめ返す。
「ライダーのマスター。私を見くびらないでもらいたい。王を名乗るものとして、この剣以上に負けられない戦いだ」
どうあがいても開催は決定だな。ま、セイバーのフォローはこっちですることにしようか……あっ!!
「ダメだよ！　そんなことしちゃダメだって！」
思わず口に出していた。しかし、ここは断固として言わなければ。
「突然どうしたのですか？」
「ライダー、もしかしなくてももう一人誘ったよね!?　金色の鎧を着た英霊……」
「おお、あの金ピカか。それはもちろん。奴もあの場にいた『王』であることには間違いあるまい？　この酒を買うとき、町の市場で偶然目にしてのぅ。ついでに誘っておいた。何か問題が？」
問題だらけだろ!?　わざわざここに拠点を移したのに敵に、しかも

よりにもよってアサシンの来る可能性の高い聖杯問答をするなんて。こっちには桜ちゃんもいるんだぞ!?
「余がそれほど間抜けに見えるか？」
「……え？」
「場所はセイバーの前の根城に、と言っておいたわい。自らの陣の場所をそうやすやすと教える将がいるものか」
「あ、そうなの……」
　安心して力が抜けてしまった。でもこれで、会場も原作と同じになったわけだ。世界の修正力の影響かな？　このカオスな世界でそんなものがどれだけ働くのかは知らないけど。
「もちろん貴様も参加するのだぞ」
「マジですか」

「そういう訳で、行くことになりました」
「……勝手にしてくれ。僕はアイリさえ守ってくれれば何か言うつもりはない」
　意外なことに、切嗣さんからは簡単にＯＫが出た。地下大空洞から戻ってきた切嗣さんたち。ケイネスさんだけを置いてまたどこかへ行くらしい。
「なんだい、その顔は」
「簡単にＯＫするんだなと思いまして。敵のサーヴァントに会うのに」
「英霊サマの考えは一ミリも僕には理解できないからね。人の倫理の通じない相手に何か言っても無駄だと思っているだけさ」

「確かに、今戦ってる相手とお酒飲むなんて、正気の沙汰じゃあないですもんね……行きたくない」
俺は深々とため息をつく。
「とにかく報告をしてくれればいい。僕はキャスターについてもう少し調べてみることにする」
「分かりました」
「……まったく。せっかく見つけた工房を、よりにもよって本人不在の時に破壊してしまうとはね。これでは見つけた意味がない」
意味は分かる。自分たちの隠れ家が荒らされていれば、敵にその場所がばれたとわかってしまう。そうなったらすぐにでも別の場所に身を隠すだろう。そうなってしまえば見つけた意味はない。それはわかる。しかし、
「キャスターの工房を見てそんな感想が出てきたら、それもまともな『人の考え』じゃないよ」
俺は去っていく切嗣さんの後ろ姿にそう呟いた。
「それでケイネスさんは行くんです？」
「もちろんだとも！　一人だけ奥に籠り、待つというのはアーチボルト家当主のすることではないからねぇ！」
最初の戦闘でランサーに戦わせて様子見してましたよね？　余計なことは言わないけど。多分、ソラウさんに何か言われたんだろう。
「そうそう、見てきたんですよね？　どうだったんですか？」
「ふむ。やはり非常に危険なものであることは間違いないだろうな。しかも極めて厄介なものだ。流石、数百年の魔術師の悲願が積もっただけはある」
まじめに考えてる顔はフツーにイケメンだよなぁ。
「準備を整えたのち、すぐさま作業に取り掛かったとして……」
「ケイネス、何をしているの？　もう出発するわよ」
声の主にケイネスさんはあからさまに動揺する。この人こそケイネスさんの婚約者『ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ』さんだ。ケイネスさんとはまた違った、周囲の者の侵入を拒むような張り詰めた空気を纏っている。さしずめ女王のようだ。

「お、おう……ソラウよ。分かっている。今向かう」
「そ。あまり待たせないでね」
　ソラウさんは時計塔の降霊科学部長の地位を歴任するソフィアリ家の息女。ケイネスさんは九代続いた由緒正しい魔術師の家系・アーチボルト家の正式後継者。絵にかいたような殿上人同士のカップルだ。
　残念なのはこれが恋愛結婚ではなく、政略結婚であること。ソラウさんには一切の恋愛感情がないことだな。ケイネスさんは一目ぼれらしいけど。
　一つ余計なお世話として考えるなら、ランサーの魔貌の魅了が今残ってるかってことだ。残ってたとしてもあんまり問題ないし、ランサーがいない今、そのうち解けるものだ。
「コホン、ところでだ」
「はい？」
「貴様は未来から来たサーヴァントだと言っていたな？」
「はい、そうですけど」
「将来我々は、その、どうなっているのかな？」
　死んじゃってるんですとは言えない。
「……未来の出来事については、タイムパラドックスとかパンドラボックスとかのせいで、あまり口に出せないことになってて」
「はっはっは。何を言うか。いまさらそんなことを気にしていても仕方あるまい？　すでに散々口を出した後ではないか」
　確かに。この言い訳は苦しかった。
「何もどのような分野で研究を行ったのか、などという専門的なことを聞きたいわけではない。貴様のような魔術師ではない小僧に、理解できているとは思えないからね。しかし、私とソラウの間がどうなったのかくらいは、君にもわかるだろう？　むしろ、君くらいの年代の男女には最高の話題ではないかね？　なにしろ時計塔きっての――」
「ケイネス、早く」
「わ、分かっている！」

この2人、これからどうなるんでしょう。俺もそこまで面倒見る気はない。未来に戻ったらどうなったのか調べてみよう。そう心に誓ったのだった。

場所は移りアインツベルンの城の中庭。持ってきた弁当が広げられ、成人とサーヴァントにはお酒が、未成年にはジュースが配られた。弁当のおかずは作られてからそれほど時間が立っていないため、まだほんのりと温かい。

聖杯問答だと気を張っていたけど、蓋を開けてみれば夜のピクニックのようなものになっていた。原作よりも参加者が多い。とりあえずの形とは言え味方になってくれたことが大きい。アイリさんもノリノリだ。

「私の住んでいたところ、雪ばっかりでこんなことできなかったから……うん、あのライダーとあなたには感謝しないといけないわね」

「それはどういたしまして。ハイ、桜ちゃん。オレンジジュースでいいよね？」

「うん。ありがとう」

俺たちはみんなで円になって座っているが、それでも話す相手のブロックというものが存在していた。セイバーとライダーの2人がメインで（俺もそのうちここに呼ばれることになる）ケイネスさんとソラウさんがゆっくり語らい、残りはワイワイ雑談だ。

「どうした、ウェイバー。そんなにゲッソリして」

「食欲無いんだ……」

お前ずっと元気ないな。

「何だ、昼間のキャスターの工房のせいか？」

「そっちじゃない、無いけど……ウップ、思い出しちゃったじゃないか」
　じゃあ何だっていうんだ？
「ここに移動するとき、ずっと先生の隣だったんだよ。胃に穴が空きそうだった」
「それはご愁傷様だ」
　ウェイバー、ケイネスさんから聖遺物盗んでたからな。そりゃ居心地悪いよ。ちょっと優しくしてあげるとしよう。
「それでは、始めるとするか」
　グラスを持ったイスカンダルが音頭を取る。暖房器具の類はないが、アイリさんが張った結界によってちょうどよい温度になっている。
「アーチャーはまたなくとも良いのですか？」
「来るときは来るだろうさ。あの金ピカはそういうやつだ」
　それは間違いない。
「む」
「あ」
「噂をすれば来たな」
「始まるベストタイミングでしたね」
　雲を裂き、徐々に降下してくる黄金の船。アーチャーの宝具だ。そこから降りてくる人影が――――２つ。
「なに……？」
　嫌な予感がしてきた。コップを両手で持ち、ちびちびとジュースを飲んでいた桜ちゃんを後ろに庇う。
　宝具か魔術を使っているのか、重力に引かれるよりは明らかに遅いスピードで降下してくる。やがて、その顔がはっきりとしてきた。
「最悪だ……」
「お父、さん……っ」
　ギルガメッシュとともに現れたのはそのマスター、遠坂時臣だった。

聖杯問答

「本日はお招きいただき、恐悦至極の思いでございます。征服王よ」
　呼んでないよな、ライダー？　呼んだのはギルガメッシュだけだよな？　そうだよな？　それなのに、ギルガメッシュだけでも手に余るのに、まさか時臣まで出てくるなんて。
　このタイミングでサーヴァント3騎の前に姿を現すってのはどういう狙いがあるんだろうか。原作ではまだ共謀した綺礼のアサシンに情報収集させている段階のはずだ。
　しかしそうは言っても、原作とは全く違う事態になっていることは確か。一番特殊な俺の存在はもちろんのこと、ランサーの早期退場。複数サーヴァントによる同盟。工房の奥に引っ込んでるだけじゃだめだと思ったのかな。
「なんだ金ピカ。マスターも連れてきたのか。貴様のような男でも、案外マスターとはうまくやっているというわけか？」
「盛るな、雑種。貴様の尺度で我を考えるな」
　ギルガメッシュは断りなく腰を下ろした。その場にいるだけですべてを支配するような王気（オーラ）を放っている。セイバーは目に見えて緊張の度合いが増したように思う。敵のサーヴァントとマスターが近くにいるのだから当然と言えるが。
「まあ良いさ！　マスターともども歓迎するとしよう！　ほれ、駆け付け一杯！」
　色々間違った知識により、酒が汲まれた柄杓をライダーが渡す。が、ギルガメッシュは鼻をかすかに動かしただけで、それを突っ返した。
「この程度の安酒が、我の喉を通ると思ったのか？」
「ここの市場で見つけた酒の中では、こいつは最高級の一品なのだがなぁ……」
　そんなやり取りを始めていた。あれは今は放っておいても大丈夫だな。問題はこっちだ。
「久しぶりだね、桜。元気にしていたかい？」

「……っ！」
　一通りのあいさつを済ませた時臣が、優しそうな笑みを浮かべて隣に座ってきた。その振る舞いは優雅の一言。地べたに敷いたシートに座るという動作の中にも、洗礼された作法がある。
　しかし、彼には知らないことが多すぎた。いくら教養を身に着けても得られない知識。例えば、養子に出した娘がどのような仕打ちを受けていたか。
「どうしたんだい桜？　久しぶりにお父さんに会って緊張しているのかな？」
　俺の後ろに隠れて何も言わない桜ちゃんに、なおも話しかけ続ける時臣。アイリさんもウェイバーも、状況についていけていない。
「えっと、遠坂さん？　この娘はその……マトウの娘、なんですよね？　お父さんってどういう……？」
「人の家庭事情について、あまり詮索するのは褒められたこととではないよ、ベルベット君」
「桜はもともと遠坂桜――この人の娘だったんだ」
　代わりに俺が答えてやる。時臣はある程度予測していたのか、俺がしゃべり始めても特に驚いた様子はない。
「この人には娘がもう一人いるんだ。その娘も桜も、魔術師としてとても高い才能を持っていた。ウェイバーとは違ってな」
「一言余計だよ！　それで？」
　軽い冗談を挟み桜ちゃんの様子を見る。これはやばいな。見ただけで不安定になってるのがわかる。あくまで簡潔な事実だけを言わなければ。
「どっちも優秀だけど、家を継げるのは片方だけ。普通に才能があるだけならまだしも、この2人は名家の加護がないと、まともな生活も送れないくらいなんだよ」
「まともな生活を送れないって……どういうことだよ」
「だから……研究のためにほかの魔術師にさらわれるかもしれないってことだよ」
「マジか……」

魔術師のウェイバーでも、人を使って魔術の研究をするというのは衝撃のようだ。これでもマイルドに言ったんだけどね。
「それで――――」
「――――そうならないために、私は桜を間桐の家に養子に出すことにした。今では落ちぶれているが、過去には遠坂と並んで御三家と言われていた名家だったからね。臓硯氏の提案はとてもありがたかった」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　マトウの家も聖杯戦争には参加してるんだろ!?　じゃあ次回の戦争では、娘２人が戦うことになるかもしれないってことじゃないか！」
「それはなんと良いことだろう、勝った方が聖杯を手にするのだ。どちらにしろ、遠坂の血を汲むものが聖杯を手にし、根源へと至る。負けた者も、その礎になれるというなら本望だろう」
あっさりと答える。俺はじっとその光景を眺めていた。事の成り行きを見守るだけ。魔術師の本懐に対して言うことは特には無い。予想していたから、コントロールできている。
でも桜ちゃんの目にはそうは映らない。大好きなお父さんが、自分たち姉妹をそんな風に考えていたという事実がある。
自分が地獄に落とされた理由を知る。桜はどう思っているだろう？　怒っているのか、悲しんでいるのか。自分が見た地獄に釣り合うものだったのか。それがわかるのは桜だけだ。
遠坂の家を離れるのは、桜ちゃんにとっては地獄に続く道だった。そんなこと、当時は知る由もなかっただろう。この男は、なんだかんだ彼なりの形で家族を愛している。桜を養子に出したことだって、散々悩んだ末に決断したことだったはずだ。
それに魔術は秘匿するものだ。間桐の家の教育方法を時臣が知らなかったとしても無理はない。理由はともかく、間桐の家という選択を責めることは出来ない。
「君が桜のサーヴァントか。調べたのかな？」
「敵のことだからな。ある程度は」
「よく調べてあるよ。これから味方になる者として、とても心強い」
……ん？　味方だと？

「どういうことですか、ミスタ遠坂。あなたも私たちの行動に理解を示したということかしら？」
　アイリさんが問いかける。鋭い目つきは、彼女の戦う意思のサインだ。娘のために聖杯戦争に臨んでいる彼女にとって、時臣はすでに許せない存在になっている。それを正面から受け止め、なおも余裕たっぷりの時臣。
「あなた方と同盟を結ぼう、というわけではない。あくまで桜を、遠坂の家に迎え入れるということです」
　ビクッと桜が反応する。時臣は俺を見る。
「君の攻撃で――――何があったのか詳しくはわかっていないが――――間桐の家は事実上潰えてしまった。これではもう桜が間桐の家にいる必要はなくなった。存在していないのだからね」
「それで？」
「次に桜を預ける家を決めるのは聖杯戦争の後になるだろう。私と共に戦い、聖杯を掴むのだ」
　それを聞いて桜が初めて父親の顔を見上げた。とても無表情な顔だった、蟲蔵から助け出した時のような顔だ。
「遠坂の元に戻って来い、間桐は潰えた。もうそちらにいる必要はない」
　交渉などではなく命令だ。マスターを引き入れ駒とするための。桜は未だ無言で見上げている。俺の服を握り締めるように掴む。
「遠坂家の為だ。そのサーヴァントも役に立つだろう。これで聖杯に手が掛かったようなものだ」
　時臣が嗤う。その目は桜を見ていない。道具としか見ていない。なぜなら魔術師なのだから。自身を道具と認識して魔術を行使する存在。根源へと至るためならば、いかなる手段も許容する存在。
「この娘は、桜ちゃんは――――」
　アイリさんがたまらず声を上げる。俺はとっさにやめてくれと言いそうになり、手で制される。
「桜ちゃんは間桐家で、大変な思いをしてきました」
「……というと？」

アイリさんには桜ちゃんと接するにあたって、事情を話してしまっている。それを時臣に説明し始めたのだ。そんなことをしても無駄だというのに。
「そうだったのか……」
すべてを聞いた時臣は神妙な面持ちで考え込む。
「すまなかった、桜。次の家はもっと慎重に選ぶことにするよ。それに私は腕の良い術師を知っている。体はすべて元通りになるからね」
「……っ」
何も気にしていないと時臣は言う。それはどんなにひどいことをされていても変わらず愛しているとも、自分なら解決できるともとれる。
息を飲んだのは誰だったのか。そういうことを言ってほしかったのではない。そうして欲しかったのではない。
一人の歪な生き物が何か術をかけているのか。そう錯覚してしまうくらい、嫌な空間になっていた。
「おい、翔!! こっちに来い!」
そこから救ってくれたのは、征服王の声だった。
「わ、分かった! 今行く! 桜ちゃん、行こ」
手を引っ張って英霊3人のところへ行く。始まる前まではこっちに行きたくないと思っていたのに、今ではこっちに呼ばれてよかったと思っている。何があるかわかんないな。
「お待たせ」
「ん、なんだマスターも連れてきたのか?」
「あっちの空気が悪かったからな」
こっちのほうがましだと思えるくらいには。
「そのようだな」
「え?」
「禍々しい魔力が貴様からあふれていたぞ」
「あー……」
それは少し心当たりがある。ちょいと危なかったか。
「今では引っ込んだがな! ほら、飲め!」

「飲まないよ！」
未成年だからな！　出されても飲めないっつーの。
「待て、征服王。私の話がまだ終わっていない！」
セイバーが手にした黄金の杯を握りつぶさん勢いで食って掛かる。しかしセイバーに向けられるライダーの目は、物わかりの悪い子供を見るものになっている。
「終わりだセイバー。そのような痛々しい願望を聞かされていれば、せっかくの酒がマズくなるわい」
「我は構わんぞ、セイバー。存分に続けよ。我をここまで笑わせた奴は久しぶりだからな。苦悩に苦しむ表情といい……退屈な現界だったが、お前という極上の女を見つけることが出来たのは幸運だった」
とうとう杯を地面にたたきつけ、不可視の剣を抜くセイバー。視線はライダーではなくギルガメッシュ。この侮辱には耐えられなかったようだ。
セイバーが本気で怒っている。正直こっちに来てしまったことを後悔していた。どっちも地獄だ。
「アーチャー、今の言葉を撤回してもらおうか。さもなければ――」
「まあ座れよセイバー。せっかく新しい雑種が加わったのだ。我を前に『王』を名乗らぬ分、貴様らよりも分をわきまえているぞ？」
纏った風が頬を撫でても全く動じないギルガメッシュ。セイバーとは思えないくらい乱暴にその場に座った。それと見届けたライダーが問うてくる。
「貴様はもし聖杯を手に入れることが出来たなら、何に使う？」
「……？　いやだから聖杯は――ああ、そういう例え話ね」
話の流れから察する。
「まず、俺がまだ生きている人間だってことを言っておきたい。２０年も生きていない子供だ。俺の話なんてつまらないものになるんじゃあないか？」
「いやいや、万能の願望器にかける願いがわかれば、おのずとそいつがどんな奴かもわかるというものだ。特に貴様はどんな書物にも載っていない。得体のしれない男だ。どのような器かを図るには、ちょう

どよい問いだ。つまらなくとも構わんさ。そんなもん、余のマスターで十分慣れたからな」
ライダーも酷いな。
そこまで言うならしっかりと考えなければなるまい。なんでも願いが叶うとしたら、か……案外難しいもんだ。いくつか願いは思いつくけど、別に聖杯使ってまでのものではないように思える。
その時、俺の腕の中にいる小さな温かさが目に入った。今までつらい思いをしてきたこの娘が、せめて。
「なんでも願いが叶うとしたら、桜ちゃんがこの先幸せになれますように、とでも願うよ」
「なるほどな。理由は聞かんでもわかるな」
「悪かったね、面白くない答えで。こればっかりはまだまだ検討中でね」
「いや、貴様のことがよくわかる答えだ」
ライダーは納得したように頷き。セイバーもさっきまでの毒気を抜かれたような、しかし複雑そうな顔をしていた。唯一ギルガメッシュだけが面白くなさそうな顔をしてるけど。
「……ありがとう」
「どういたしまして」
桜ちゃんの頭を撫でる。
――――周囲に異様な気配がした。
セイバーはすかさず立ち上がり、周囲を見回した。
「これは……ッ」
月明かりが作り出す薄い影を濃くするように、黒いローブに身を包む人影が現れた。その隙間からは、特徴的な髑髏の面が見える。
「来たな、アサシン」
時臣には変わった様子はない。まったく大した役者だ。これはすべてアイツの指示だというのに。もしかすると時臣が来たことでアサシンの襲撃はなくなるのかとも思っていたが、そんなことはなかった。
しかし、襲撃が原作通りなら、対処も原作通りだった。

ライダーが展開した王（アイオニオン・ヘタイロイ）の軍勢の前に、いともあっさり全滅した。
固有結界を見て一同驚いていたが、一番いやな顔をしていたのは時臣だった。彼はギルガメッシュの王（ゲート・オブ・バビロン）の財宝に匹敵する宝具なんてないと思い込んでいたのだ。
ライダーの圧倒的な宝具は、魔術師だけではなくサーヴァントにも大きな影響を与えた。
「よし、今日はこれでお開きとしようか。邪魔も入ってしまったことだしのぅ」
「ライダー、やはり貴様は目障りだ。この手で殺すといったこと、ゆめ忘れるなよ」
「望むところだ、英雄王」
物騒な約束をしたギルガメッシュは背を向ける。
「時臣、帰るぞ」
「はっ。桜、行くよ」
おいおい、それはないんじゃあないか。時臣の中では、もう桜は自分が引き入れていることになってるのか？　せっかくなかったことに出来ると思ってたのにほじくり返して。
魔術師のずれた価値観で、桜ちゃんが苦しんでることに気が付けていないのか？
「……嫌、です」
「何だって？」
絞り出すような小さい声で、しかし確かに実の父親に反抗する。
「翔お兄ちゃん、お父さんをどっかにやって！」
「ッ!!」
桜の小さい右手が光り、俺の体が俺の意思に反して動き出す。
時臣に向かって拳を繰り出し――――血しぶきが弾けた

敗北

「桜……？」

「あ、え……？」

目の前にいる時臣の顔が困惑に歪んでいた。自分の娘の言葉を理解できなかったのだろう。後ろからも、困惑した桜ちゃんの声が聞こえてくる。

実際、時臣の愛は本物だ。魔術師としては、だが。その愛は、少なくとも桜ちゃんのような子供には到底理解できるものではない。

今まで想像を絶するような地獄を見てきた桜ちゃんはとても不安定な状態だ。それを聞かされてなお、自分の戦力としてみる父親。最後の瞬間までそれは変わることはなかった。桜ちゃんが感情を乱すのは火を見るよりも明らかだった。

「イレギュラー！」

後ろからセイバーの声が聞こえてくる。こうしている間も俺の体は、目の前にいる貴族の顔面をぶん殴ろうと動き出そうとしている。しかしそのたびに激痛が走る。

俺の腕は1本の剣によって貫かれ、地面に縫い止められていた。闇の魔法（マギア・エレベア）によって強化されている俺の体を簡単に貫通している。

この攻撃をしたのは言うまでもなく目の前にいるサーヴァント。つまらなさそうに腕組みをしているギルガメッシュだ。

「桜……何か暗示をかけられているのか？」

こんなことになっても、時臣はズレたことを言っている。

「落ち着け、イレギュラー！」

「そんなことはわかってる！」

しかし体が言う事を聞いてくれない。ひたすらに頭の中で目の前の男への攻撃信号が点滅している。後ろに下がるという選択ができない。

反撃を。

「――――ッ！」

騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずの魔力が、俺の腕に突き刺さっている剣を侵食

し――――

「ふん」

即死しなかったのは奇跡と言っても良い。雷鳴よりも早く、丹念に手入れされていた花壇が踏み荒らされる。至近距離で放たれた宝槍は俺の脇腹の肉をえぐり、空気を震わせた。

「我の宝物に気安く触れようとするな、雑種」

違った。圧倒的に違った。宝の価値の分からないハエを手で払いのけるように、今の行動は攻撃ですらない。目の前の存在は、俺とは次元の違う怪物だということがはっきりと分かった。

槍がかすめた衝撃で、俺の体は肉袋のようになってしまっていた。剣が刺さっていた腕は、後ろに飛ばされた勢いできれいに真っ二つ。わき腹からは内臓がこぼれているかもしれない。

立っていたはずなのに、土煙が張れると空が見えた。そしてそれすら霞んで見える。

王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）。過去未来、人類が生み出すすべての宝の原点を収めた蔵。その力の、ほんの一部という事すらはばかられるくらいの欠片。それを見せつけられた。

「よくもまあ、こんなのに土郎は勝ったな」

主人公補正万歳。掠れた声は、そんな音を出していた。

「危ないところだったわい」

ライダー達は戦車に乗り込み、空中へ脱出していた。ウェイバーとアイリはライダーが盾になり、ケイネスも魔術で余波から身を守っていたためケガをした者はいない。地上にはセイバーだけが残っている。

聖剣を構え、油断なく、黄金の甲冑を着込んだ英雄王を睨むセイバー。先ほどの問答で受けたダメージは微塵も感じさせない精悍な姿だ。

対するギルガメッシュは何も変わることはなかった。セイバーが向けているのが星が鍛えた最強の聖剣であるというのに、まったく警戒することがない。

傍から見れば隙だらけ。しかし背中に負傷している翔がいれば、攻撃に移るのは難しい。

そんな様子を上空の戦車の上から見ているライダー達。バーサーカーのインパクトで忘れてしまっていたギルガメッシュの火力のせいで、まともに動けないでいた。

「痛っ」

桜は令呪から焼けつくような痛みが走り、顔をしかめる。見ると、ついさっき一画使ったばかりの令呪が消えかけていた。それはつまり、翔の命が消えかかっているということになる。

「おいっ！　おいお前！　このままだと、あいつ死んじゃうぞっ!!」

「あ、え……っ」

ウェイバーもそれを見て焦りだす。そんなウェイバーの剣幕に、桜はただ圧倒されている。自分が放ったたった一言でこんなことになるなんて思ってなかったのだ。そもそも令呪を使おうと思って使ったわけではないので、どうすればいいのかもわからない。

「ええい、何をしているのだ、ライダー！　早く撤退の準備を始めろ！」

「いや撤退の準備ってお前さん……流石に見捨ててはおけんだろう？」

血まみれになって転がる翔を見る。すると奇妙なことが起こった。翔の体が持ち上がったのである。戦車の乗組員全員が、ぎょっとする。

「こんなこともあろうかと私の礼装月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）を忍ばせておいたッ！　あのサーヴァントを跳ね上げるぞッ！」

ぎょっとする乗組員。
((そんなことしたら――――狙い撃ちにされるぞ!?))
全員の心の声がそろった。
しかし時すでに遅し。トランポリンのような弾力を持った水銀は、翔を空高く、高い高いする。
あまりにも間抜けな魔術に、時臣も目を丸くする。
「拾えライダー!」
「よっと!」
2頭の神牛を巧みに操ったライダーは太い両手で巧みにキャッチ。スピードを殺さず全速力で離脱を始める。
「セイバー貴様は殿だ! そのサーヴァントをぉぉぉ――――……」
やまびこのように声が聞こえなくなった。
逃げ去るライダー達を見て、ギルガメッシュは背を向けた。ここまでしておいて、まさかこのまま逃げ帰ることを良しとするのか。そう考えた時臣は食って掛かる。
「王よ! 何故!?」
「勘違いするなよ時臣。俺が戦うのは最後に残った一騎、もしくは単騎のライダーのみ。今のはマスターである貴様への火の粉を払ったまでだ」
「しかし、奴らは同盟を結んでいます。このままでは戦局は動かず、聖杯戦争の決着が……」
「それがどうした。そのような些事のために、この我に動けと? 進言にしては口が過ぎるぞ」
「ッ! ……申し訳ありません」
ギルガメッシュの纏う空気から、これ以上は関係をこじらせるだけだと判断する時臣。桜のサーヴァントとはいえ、正体不明のイレギュラー。味方にならず、瀕死まで追い込んだのなら倒してしまいたかったと内心歯噛みする。
時臣はあきらめ、空に表れた黄金の船に向かって飛び立つ。
完全に戦意をなくし、背を向けるアーチャー。去り際に口を開く。
「我は『貴様の王道』高く評価しているぞ、セイバー」

「何だと?」
『貴様の王道』というのは聖杯問答でセイバーが答えたものに違いない。しかしその場では下品に笑い転げていた。
「さっきとは言っていることが違うぞ、アーチャー」
「怒るなよ、セイバー。貴様が語る王道には微塵も間違いはない。それゆえ生じる苦悩と葛藤は、実に俺好みだ」
セイバーの奥底で、忘れていた怒りがふつふつと蘇ってくる。
「せいぜい励むのだな騎士王を名乗る小娘。事によっては、さらなる寵愛を受けることが出来るかもしれぬぞ?」
そう言い残し、霊体化によって霧と消える。
無作法なまでに輝いていた黄金がいなくなった後に残ったのは、大きな破壊の痕だけだった。

アーチャーからの追撃も他の追手もなく家に帰ることが出来た一行だったが、休むことは出来ないでいた。ズタズタにされた翔が土蔵の魔法陣の真ん中に横たえられていた。出血は無理やり止めているが、血が大量に流れ出たことには変わりない。
「今すぐ結界を張ります!」
アイリはすぐに傷の治癒効果のある結界を張る。一般人には気が付かれない程度に、しかし少しでも心得がある者にはすぐにわかるくらいの力で。
翔の話でバーサーカーが味方になっていると聞いているため、アサシンを倒した今となっては、敵はアーチャーのみ。そのアーチャーもセイバーが足止めしている。妨害はない。
泣き疲れて眠ってしまった桜のことをソラウに任せ、アイリは翔の治療に全力を注いでいた。

ケイネスも家の周りを警戒し、探知用の結界を張っていた。
「ライダー！　僕達も何か……っ！」
「ん、あー……そうさな。いや、参ったことに英雄王がふるまった酒、これが以外に効いてきてな」
「はぁ？　酔っぱらったってことか!?」
「そういうことだ。すまんが、一足先に休ませてもらうぞ」
「ちょ！　オイ!!」
それだけ言い残すと、霊体化して見えなくなってしまう。身勝手すぎる行動に憤りを覚えるが、すぐに違和感を感じる。
（あいつ自分から霊体化したの初めてじゃないか？　何でこんな時に……）
イスカンダルはとにかく実体化していているのが好きな男だ。霊体化したのは、それこそ現代に溶け込める服を買いに行った時くらい。いつもいつも魔力の節約のために霊体化しろと言っているウェイバーだったが、それを守ったわけではないというのは簡単にわかる。それに、仲間が傷を負っているのに自分だけ休むなんて考えられない。
足を止めて考えそうになるが、すぐに頭を振って考えを追い出す。今はとにかく動くことが大切だと思ったからだ。懸命に手を尽くすアイリに近寄る。
「あの、何か手伝えることは？」
「血を拭きたいからお湯を沸かしてもらえるかしら？」
「わかりました！」
ウェイバーは急いで台所に向かう。
入れ替わりで結界の構築を終わらせたケイネスが帰ってくる。
「アインツベルン、サーヴァントの様子は――」
何かが庭に着弾した。
「アイリスフィール、彼の容体は!?」
それはセイバーだ。サーヴァントと言えど生身だ。その機動力は空を駆けるライダーの戦車に劣る。よほど勢いをつけてきたのか、着地した部分が小さなクレーターになってしまっていた。

ケイネスは隕石が落ちたような衝撃に尻餅をついてしまっている。すぐに立ち上がって埃を払うと、
「貴様、この短期間でアーチャーを撃破したのか？」
「いえ、アーチャーとは戦闘にはなりませんでした。アーチャー自身、戦うつもりがなかったようです」
２人の時に言われたこと、聖杯問答での事を持ち前の真面目さでねじ伏せ、冷静に何があったかを説明する。
そんなケイネスへと報告するセイバーを見るアイリの頭には、あるアイディアが浮かんでいた。
（このまま治療を続けても、彼を全回復するには時間がかかりすぎる。流れた血の量を見ても体力が続かないかもしれない。それなら……）
自分の身に宿る最上級の奇跡。切嗣から説明を受けたその力を使えば、翔を救うことは容易い。
なら、迷う必要はない。
「アーチボルトさん、少し席を外しても？」
「何をする気だ、アインツベルン」
「夫に連絡を」
アイリは自分の胸に手を当てた。
「切り札を使います」

敗戦処理

夢を見ていた。見たことのない場所だ。場所を特定できるような建物もない。ただ、無数の死体が転がっている。甲冑を槍に貫かれ息絶えている者。剣で切り裂かれている者。矢で射抜かれている者。

……いくらなんでも趣味が悪い。こんなはっきりとした悪夢。今にも血の匂いがしそうだ。

そんな中、返り血に顔を汚しつつも、剣を支えに生きている騎士がいた。小高い丘の上、そして地面に倒れている兵士の数のせいで、まるで死体の山の頂上にいるようだ。

それを見て納得した。ここはアルトリアの夢なのだと。

騎士道が花と散った時代、聖剣を手にブリテンにつかの間の平和と最後の繁栄をもたらした騎士王。

正しさの具現であるアルトリアに、すべての騎士は憧れ、民衆は希望を持っただろう。その姿――――15歳の少女が自身の人生を捨てて示す姿に。

国は凶作が続き、軍隊を維持することすらままならない。アルトリアがとった行動は、円卓の騎士たちとの間に決定的な溝を作ることになった。軍を維持するために、円卓の騎士たちが生まれ育った村を犠牲にしたのだ。

――――王は人の心がわからない。

そう言い残し去っていく円卓の騎士。孤独の中にありつつもブリテンを侵略する異民族たちを撃退するが、滅びへの運命は変えられなかった。

モードレットの叛逆がとどめになった。アルトリアはカムランの丘でモードレッドを討ち滅ぼすも、自らも傷を負い膝を折った。

まさにその場面だ。なんでわざわざこんな場面の夢を見るのかはわからない。ただ、何かに影響を受けているのは間違いないだろう。ただの偶然で片づけるほど、俺も間抜けではない。

しかし、ふわふわとした幽霊のような俺では、それ以上は何もできなかった。アルトリアの苦しげな表情だけが目に焼き付いて――――

目が覚めたと思ったら、また夢を見ているのかもしれないんだけどどういう状況なんですかコレ!?

覚醒した体はこれ以上なく万全。それに言うことはない。

問題は、いつの間にかギルガメッシュにやられた傷がなくなって、横にはセイバーが寝てることだよ！　おまけに俺はセイバーのこと抱き寄せてるし！

サーヴァントは眠らないなんて設定はどこに行ったとばかりに、穏やかな寝息を立てているセイバー。俺昨日ベッドに入った記憶ないけど、それってケガで気絶したからだよね？　セイバーとムフフなことをしたわけじゃないよね？　しっかり服も着てるし。手はしっかり握ってるけど。

ただ近い。ものすごく近い。俺がセイバーを抱き寄せているのだから当たり前だけど。や、決してわざとじゃないんだよ。流石の俺も、寝ている間に抱き枕にしてたら止められないし。状況を把握して息子が元気になり始めるのだって不可抗力だ。

それにしても、騎士にあるまじき無防備な姿だ。こんなに顔が近くにあるなんて。俺がその気になれば、簡単に唇が奪えるぞ。いいのか？　ダメだな。

無駄な考えを放棄して、体を動かし始める。セイバーを起こさないように体を放そうとする。しかしそれは、俺が行うには少々レベルが高かったようだ。

柔らかなベッドとセイバーのほのかな温かさに挟まれた腕をゆっくりと引き抜きにかかる。敏感な（意味深ではない）セイバーはすぐ

にまつ毛を震わせる。布があるとはいえ、ウエストの引き締まったところをくすぐれば、誰でも目を覚ますか。
「ん……」
セイバーがうっすらと目を開けた。丁度俺の証拠隠滅作業も終わる。これでもう、ただ横に寝ているだけだ……それでもヤバくない？
「おはようございます。傷は大丈夫ですか」
「もう治ってるけど……どうしてこうなってるのか、説明してほしい」
まったく気にする様子のないセイバーにこれ幸いと状況説明を求める俺。
「簡単な話です。私の宝具、全て遠き理想郷（アヴァロン）を使ったんです」
「――ああ、そうか」
全てに納得がいった。アルトリアの夢を見た理由も、ギルガメッシュにやられた傷が癒えている理由も。
全て遠き理想郷（アヴァロン）。アルトリアが持つもう一つの宝具であり、その性能からか、本編ではあまり使われることのない宝具。持ち主の老化を抑え、呪いを跳ね返し、傷を癒す魔法の鞘。
これを使えば俺の治療なんて簡単だろう。そして、この時につなげたパスの影響でマスターとサーヴァントのように夢を共有したと。
「私も昨日知りましたが、アイリスフィールの体の中に保管されていたんです。それをあなたに移し替え、私とパスを繋ぎました」
「それで添い寝を？」
「なるべく近くにいたほうが、効果が高くなりますから。このような形に。ご迷惑でしたでしょう？」
「な、なんで？」
むしろこっちがご迷惑でしたか？　と聞くほうだろう。男と添い寝することになったんだから。
「私のように剣を振るうような女と床を共にしても、喜ぶ男性はいないでしょう。体も、アイリスフィールのように女性的ではありませんから。不快に思われたのではないかと」
「まさか」
俺は鼻で笑い飛ばす。

「いいかセイバー。俺の故郷の国、日本は『ＨＥＮＴＡＩの国』と言われている。俺は呼んでる」
「はい？」
　目を丸くするのを無視して続ける。
「小さい女の子に興奮する奴もいれば獣耳に興奮する奴もいる。『男の娘』なんて新次元を切り開いた奴もいれば、男のはずの戦国武将をみんな女にしちゃったり、それを海外まで広めちゃったり。戦艦とか馬が擬人化されたり、もうめちゃくちゃだよ」
「そ、それは……その国はまともな国なのですか？」
「や、まともじゃないって」
　でもそれがいい。
「だからセイバーなんて、魅力が無いどころか、魅力の無いところが無いくらいだ」
　もしもセイバーが俺の学校に転校してきたなら、即日ファンクラブができるまでである。男女関係なく人気の的になるだろう。
　俺の熱弁に嫌に真剣な顔のセイバー。
「つまりそれは――――」
「うん？」
「あなたも自分のマスターをそういう目で見ることがあるということですか……？」
「なんでだよ！」
　思わず大声で突っ込んでしまう。
「なぜって……あなたは召喚されてからずっとマスターと一緒に寝ているのでしょう？」
　それは間違いない。そして1回、俺原因では、まして向こうのせいとかでもないけど……1回前科が……
「冗談ですよ」
「えっ！　ぁ、そうなの」
　心臓に悪い冗談言うな。本気で焦った。
「良い国なのですね。人々がそんなにたくさんの考えを、自由に持てるというのは。統治者が素晴らしいのでしょう」

考えるのは自由でも、言葉にしたり実行に移すと大変なことになるけどね。当たり前だけど。
「俺も政治云々の話は無視して言ってるからな……自由なのは認めるけど。あ、ブリテンと比べるのは良くないぞ。時代も人の考えも違うんだから」
俺はとっさにフォローを入れておく。いつの間にか『国』という、一種のタブーの話になっていた。
「気にしていませんよ。相変わらずですねあなたは」
「相変わらず？」
言っている意味が分からず眉を寄せる。
「私たちサーヴァントとは違い、望まずに聖杯戦争に巻き込まれていながら、常に周りを見て行動することが出来る。一時の現身のサーヴァントに対しても、それは変わらない」
「わざわざケンカする必要はないからな」
「その行動力と判断力は敬意を持たれるべきものですよ」
真面目なセイバーに面と向かって言われてしまうと、こっちも照れてしまう。
「――それで、いつまで続けるおつもりですか？」

「いたなら声をかけてくれても……」
「サーヴァントなら、私の存在は認知できているものと思っていました」
ごもっともです。
前を歩く背筋を伸ばした女性――舞弥さんは抑揚のない声で言う。まさかずっと聞かれていたとは、一生の恥。

そして、それに気が付いていたなら、あんなこと言うんじゃないよセイバー！　一方的に俺が辱められたじゃないか。
色々と言いたいことはあるが、今はそれよりも大事なことがある。
「アイリさん……」
舞弥さんの背中について行くと、あまり良くない顔色のアイリさんが寝ていた。そばにいる切嗣さんはしっかりと武装している。しかし、銃を持つ手とは逆の手で、アイリさんの手を握っていた。
サーヴァントの代わりに一晩中寝ずの見張りをしていたらしい切嗣さんだが、その顔にはそれほど疲れの色はない。傭兵時代には一徹くらい普通だったのか、それとも出会った時から疲れ切っていたのか。
「あら、翔君。元気になったのね。良かったわ……」
「はい。今回は、本当にありがとうございました」
アイリさんの体内には聖杯がある。サーヴァントが倒されその魂が溜まっていくと、外殻に当たるアイリさんの体や人格が消滅していく。全て遠き理想郷（アヴァロン）によって抑えられていた症状が現れてしまったのだ。
「イレギュラー。すぐに全て遠き理想郷（アヴァロン）をアイリに移し替える」
「もちろんです」
待ちきれないとばかりに切嗣さんが言う。反発する理由がない俺はもちろん頷いた。
全て遠き理想郷（アヴァロン）をアイリさんに移し替えると、いくらか体調は良くなったみたいだ。頬に赤みが差し、布団から自力で起き上がれるくらいには。
「奥様、あまり無理をなさらず」
「あまり無理はしないでください、アイリスフィール」
「ありがとう、舞弥さん。セイバーも」
女性陣に背を向け、俺と切嗣さんは部屋の外に出た。
「回復は出来たようだな、イレギュラー」
「ええ。もうすっかり。流石聖剣の鞘、って感じですよ」
俺は体を動かして元気なことをアピールする。

「細かいことはライダーのマスターに聴いた。アーチャーにやられたらしいな。マスターに令呪を使われて」
「桜ちゃんも、意図して使ったわけじゃないから。そんなに責めないでほしい」
「悪気が無ければ何でも許されるというわけではないさ。君は何とも思わないのか。我が儘な子供のせいで死にかけても」
　大分イライラしてるな。
「全て遠き理想郷（アヴァロン）を使う決断をしたのはアイリさんでしょう？　桜ちゃんの心を慮ったんですよ。あなたにも娘がいるんだ。分かるんじゃないですか？」
「……」
　切嗣さんは数秒沈黙した。
「アーチャーにはどうやって勝てばいい？」
　強引すぎる話題の変更だが、何も言わずに続けることにする。
「奴の宝具、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）はどう考えても異常だ。何か勝つための策はあるのか？」
　サーヴァントの情報についてはもう共有してある。
「一応策っぽいのはあります。バーサーカーですよ」
「他人の宝具を自分のものにできる宝具か。あの夜の戦闘のように、アーチャーの宝具を奪いつつ戦うという訳か」
「はい。今のところ、それが一番勝率が高いです。ほかの人はバーサーカーの援護に回ります」
「だがそれは、奴が剣や槍だけを使うという前提がなければいけない。話によるとアーチャーは他の武器も持っているんじゃないのか」
「もう一つ、あいつはいつも油断してます。それこそ認めてない相手には、自分の死ぬ間際にまで。そこを突きます」
　それしかない。なんだかんだ言われていても、ギルガメッシュの力はとてつもないことが分かった。
「……了解した。バーサーカーのマスターとはもう交渉してるんだったな。連絡は出来ているのか？」
「それが今は音信不通で」

「ならこっちでも調べておく」
そこまで話し終わったとき、舞弥さんが部屋から出てきた。大きな荷物を持っているところを見ると、帰り支度が終わったみたいだ。
２人は言葉を交わすことなく、その場を去っていった。これ以上ここに長居する気はないってことだろう。アイリさんのことが心配のはずなのに。
「……2人の時間は、全部無事に終わればいくらでも作れる」
切嗣さんとアイリさん、それとイリヤちゃんの安心して過ごせる時間。それを作るために俺はここにいる。
「最後はうちのマスターだな」
近くにいることはわかっている。切嗣さんと話している間、ずっと隠れて様子をうかがっていたことも。障子にばっちりと影が映ってたからな。
「桜ちゃん、そこにいるんでしょ？」
そう声をかけると、何拍かためらわれるような息遣いが伝わってくる。開いた障子の奥には緊張した様子の桜ちゃんが立っていた。
「……元気になったの？」
「なったよ。もうバッチリ」
「そう、なんだ……良かった」
俺は桜ちゃんからの言葉を待つ。親に叱られる子供のように、何か言いだそうとして口を開いては、きつく閉ざすを繰り返している。
やがて少しずつ口に出し始めた。
「あの時戦ったのって、私のせい、なんだよね」
「ん、そうだね」
正直に言う。ウェイバーやケイネスがもう話しているだろう。そうじゃなくても、マスターなら感覚でわかるだろうし。
「……ごめん、なさい」
親に叱られる子供のよう、と言ったが、まさしく桜ちゃんは親に怒られている心境なんだ。自分の不用意な発言で死ぬ寸前になった俺が、怒っていると思っている。
もちろん俺は気にしてない。死ぬほど痛かったけど、全然気にして

ない。でも仮に、ここで「俺は気にしてないよ！」なんて言っても、状況は全く改善しないよな。だったら、
「怒ってますか……？」
「そうだなぁ……」
　何も言わない俺を伏目でチラチラと見ながら聞いてくる。
「じゃあ、罪滅ぼししてもらおうかな」
「罪滅ぼし？」
「そう。ご飯作る手伝いしたり、この家の掃除をしたり。そうしてくれれば許すから」
「え、で、でも、そんなことで……」
「やってくれない？」
「っ！　や、やります！」
「じゃ、おなか減ったし、ごはん食べに行こうか」
「はいっ」
　俺たちは手を繋いで歩き出す。まじめな娘には簡単な罰を与えてやればいい。そうすればただ許すというよりは格段に良い。と思ってやったけど、うまくいってくれてよかった。
　一安心といったところだ。
　でも、安心してばかりはいられない。聖杯問答を終え、ランサーがいない今、残る敵サーヴァントはキャスターとアーチャーのみ。そして宝具を破壊されたキャスターは大した障害にはならないため、実質的にはアーチャーとの最終決戦が近いと言える。
　俺たちはアイツに勝てるのか？
　そんな不安が、俺の中に渦巻いていた。

お風呂でご奉仕？　前編　（桜）

「お兄さん、どうぞ」
「ありがとう、桜ちゃん」
　空になった俺のお茶碗に、きらきらと輝くご飯がよそわれる。それを笑顔、と言うにはまだ足りない、微笑くらいで渡してくれる桜ちゃん。お礼を言って受け取る。
　今日俺たちが囲んでいる食卓は、すべて俺が作ったものだ。
　お腹がすいたと台所に向かった俺たちの前に現れたのは、壮絶な光景だった。流しにはめいいっぱいに食事の跡があったのだ。冷めたスープの残るカップ麺や、梅干しだけ残されたコンビニ弁当の抜け殻が。
　俺が目覚めたのは午後の3時過ぎ。夜食や昼ご飯を考えれば、1人大体2食分くらいは食べたことになると思う。これはヒドイ。一人暮らしで自炊が面倒になった男の部屋みたいだ。
　散乱したカップ麺やコンビニ弁当の殻をゴミ袋に叩き込んだ俺は、急いで晩御飯の準備に取り掛かった。幸い、全て遠き理想郷（アヴァロン）の最強の治癒効果のおかげで体調は万全。そして一般的な晩御飯の時間まで、時間は有り余っている。
　近くのスーパーで材料を買い足した俺は、こうして栄養バランスバッチリのご飯を作り上げることが出来たというわけだ。
『俺に無茶な令呪を使った罰』として、買い物から料理まで、桜ちゃんは積極的に手伝ってくれた。
　落ち込んでいるときに何もやることがないと、人間はどんどん気分が落ち込んでしまう。大切なのは少しでも動くこと。こうしてみていると、それだけで少し明るくなったような気がする。
「ウェイバーはなんだかダルそうだな」
「ああ……今日は一日中、ライダーに魔力補充してたからな……もうクタクタだよ」
「一日中魔力補充？　まさか……ッ！」
　俺は分かっててからかう。

×
「一日中ライダーと××を……!?」
「んなわけあるか!!!」×
　元気よく返してくれる。
「しかも外でなんて――――」
「してない!!」
「坊主。そこまで言うのなら、余も一肌脱がなければ――――」
「もうやめろこの馬鹿サーヴァント共！」
　本気で怒りだしそうだったため、この辺で終わっておくとしよう。
「イレギュラー、食事の席でなんて下品なことを」
　お堅いセイバーからもお叱りを受けてしまう。ケイネスも口には出さないがあまりいい感情は抱いてないみたいだ。いくら何でも、って奴か。イスカンダルのノリも好きだけど、ここは多数派の人たちの意見に従っておこう。
「今日外に行ってたのは、昨日消費したライダーの魔力を回復させるためだよ。召喚した霊脈なら効率がいいと思ってずっとそこにいたんだ」
「この坊主が、余計な気をまわしよってからに」
「うるさい！　お前だって僕に気を使ってたじゃないか！」
　サーヴァントと仲がよろしいようで。とてもよかったよ。
　アイリさんが笑い、セイバーもやれやれといった具合に箸を口に運ぶ。和気あいあいとした食卓は、これだけで価値のあるものだ。
　と、横にいる桜ちゃんが、
「お兄さん、×××って何ですか？」
「ぶッ!!」　×
「ちょッ！」
　とんでもないことを聞いてきた。俺は口に入れていたご飯を危うく噴き出すところだったし、ライダーを言い争っていたウェイバーも高速でこっちを向いた。
　セイバーは俺たちを咎めた。しかし、今日の桜ちゃんの前では迂闊としか言えない。
「見なさい。あなたたちがそんなことを言っているから、この子にま

で悪い影響が及んでいるでしょう」
「悪いことなんですか？」
「あ、いえ、そういう訳では……」
バカめ。余計なことを口走るから、矛先がそっちに向いたぞ。その真面目な顔、存分にうろたえさせるがいい！
「食事中にしゃべるのはあまり良くないということですよ。少しならともかく、限度があります。言葉の意味については……言った本人に聞くのが一番でしょう」
キラーパスを返してきた。再び俺を見る無垢な瞳が、自覚なしに殺意を放っている。
「えと、それは……さ、桜ちゃんにはまだ早いんじゃないなかぁ。お酒とか、タバコみたいなものなんだ」
「そう、なんですか……？」
「うん、そう。もっと大人になったらね」
ウェイバーが良く切り抜けたとばかりに親指を立ててくる。俺もそれに答えた。
「じゃあ、魔力を効率良く？　あげるにはどうすればいいんですか？」
「え、な、なんで？」
やけに積極的な桜ちゃん。人が変わったみたいだ。その真剣な目にはとても嘘をつけない。
「どうだろうなぁ……俺は魔術師じゃないし。それは本職のマスターに聞いたほうがいいと思うな（悪いねウェイバー）」
「おいっ！　お前！（ふざけんな！）」
何もかも遅すぎるウェイバー。君にこの悪魔のバトンを渡すとしよう。
「ウェイバーさん、アイリさん、どうすればいいんですか？」
アイリさんに誤爆してしまった。悪気はなかったから許してほしい。
「うーん。そもそも今日は、どうしてそんなことを聞きたいの？」
「お兄さんの役に立ちたいんです。私のせいで怪我しちゃったから……」

「罪滅ぼししたいってことかしら？」
流石子持ちのアイリさん。優しい声でいとも簡単に理由を聞きだした。
「でも翔君は、桜ちゃんが戦うことは望んでないと思うわ。ね、翔君？」
「そうだな。別に一緒に戦って欲しいわけじゃないよ。俺は桜ちゃんが幸せに暮らせればいいんだから」
「お兄さん……わかりました。もっと別のことで頑張ります」
アイリさんの言葉に桜ちゃんも納得してくれたみたいだ。
「翔君も、そういうことは自分で言ってもらわないとね？」
「ア、ハイ。次から、気を付けます」
もうふざけるなよ、と念押しされてしまった。怖い。

「ふぅ～……今日は何もしてないはずなのに疲れたなぁ」
場面は飛んで風呂の中。後片付けはしてくれるとのことなので、俺は遠慮なく一番風呂を楽しんでいる。でもそもそも、風呂に入る習慣がある人って何人いるんだ？
「でもよくよく考えると、最後に入ったほうが女性陣の色々なものが溶け出している可能性があったり……気持ち悪ッ！」
自分の思考に吐き気がしてしまった。何も考えずにぼーっと頭を回転させていたせいか、変な方向に飛んでしまったよ。
「そもそもそんなこと言ったら、イスカンダルとかケイネスのあれやこれやも溶け出してることに……オエッ」
チョット胃酸が戻ってきてしまった。口の中にツンとした特有の

風味が広がった。男子高校生の無駄に逞しい想像力がダメな方向に働いたな。特にイスカンダルの筋骨隆々とした姿がリアル。一度銭湯で見たのが大きかった。色々大きかった。
「体洗って上がろうかな――――ん？　脱衣所に誰かいるのか？」
小さい影が見える。この大きさから推測すれば、
「お兄さん、お背中流しますっ」
「桜ちゃん……」
予想通り、風呂の扉を開けて入ってきたのは桜ちゃんだった。予想出来ていればそこまで驚くことはない。これにセイバーが付いていれば、近所迷惑なくらいにびっくりした声を上げる自信があった。そんなことはなかったけどな。
まだまだ小さいせいか、タオルは巻いていない。手で隠してもいない。そのため、小さい体がすべて見えてしまっている。俺たちと生活するようになってずいぶんと血色がよくなった肌の中に小さい２つの蕾があるのも。その下にあるおへそも。さらに下にある、１本も毛が生えていない、ぴったりと閉じたところも。
桜ちゃん、あの時の夜は自分のアソコをずっと弄ってたんだよな。恐る恐るじゃなく、それこそ、媚薬を注入されたみたいに一心不乱に。
（呼んだ？）
（呼んでないぞ、我が愚息よ）
ピクリと持ち上がりそうになったが、しっかりと諌める。向かい合っているこの状態で大きくしたら桜ちゃんになんて思われるか。
「お兄さん？　もう体洗っちゃいましたか？　まだなら私が……」
「や、大丈夫だよ、桜ちゃん。自分で洗えるからね。もっと別のことを頑張ってほしいなぁ……」
アイリさんに言われたようにやんわりと断ろうとする。正直これがクロとかだったら別に断ってないんだけど。その手の知識が少ないであろう桜ちゃんなら心配は少ないと思うけど、間違いがあるといけないし。
「でもアイリさんに聞いたら、『じゃあ背中流したりするのがいいんじゃないか』って……」

「アイリさーん!?」
なんでそんなこと言っちゃうんですかー。
や、違うぞ。この年頃の子供が親の背中を流そうというのは、いたって普通のことなんだよ。小さい頃なら男の子ならママと、女の子はパパと一緒にお風呂に入ることはよくあるんだから。
悪いのは、それを邪な方向に考えてしまう思春期男子だ。
「じゃあ、お願いしようかな」
ならば、こちらも親の気持ちで迎え入れようじゃないか。フラグじゃないぞ。
「はいっ！　任せてください！」
暗かった顔が一気に明るくなる。
俺は透明な椅子に腰かけた。大事なところにはタオルをかけ、しっかりとガードしておく。桜ちゃんは手で泡立てて洗う準備をしている。
「じゃあ、洗いますね……」
「あ、手で洗うのね」
「え？　いけませんでしたか？」
「いいよ、いいよ。好きに洗っちゃって」
スポンジかなんか使うのかと思ってた。女の子は使ってる印象があっただけ。俺は特にこだわりないからいいんだけど。
「んっしょ……」
「っ」
初めての感触に一瞬体に力が入った。小さい2つの手のひらが、俺の背中を……なんといえばいいのか。こすると言うには石鹸のせいで滑りが良いし、なぞると言うには力が入ってるし。正しく未知の感触だ。
前に一回、狂三のこと洗ってあげたことがあるけど、そういう気があったとしたら確かにヤバいですね。この段階でギンギンになる未来しか見えない。
後ろからおっぱいを押し付けられて、俺の背中が固くなった突起にこすられでもしたらすぐに振り向いて押し倒すまである。もしも俺

の理性がそれに耐えられれば、今度は前に。かけられていたタオルをめくると、すっかり固くなった俺のモノが……
（呼んだ？）
（呼んでないから）
なんてことを考えているんだ。さっき邪なことは考えないって言ったばっかりなのに。でもこんなことを想像するっていうのはリラックスしてる証拠だからいいでしょ。とんでもない掌返しだな。
「ひょぁ!!」
わき腹を撫でられ、変な声を出してしまった。背中越しに桜ちゃんの声が聞こえる。
「くすぐったかったですか？」
「あ、ああ。ちょっとね」
いきなり触られたらそりゃびっくりする。男のあんな声、需要ないだろうに。それから俺はなるべく声を出さないように我慢することにした。
「んしょ、んしょ」
「っ」
これって女の人が気持ちいいの我慢してるみたいじゃん。ますます需要ないよ。でも桜ちゃんには全くそういうつもりはない。変に反応するのは避けねば。
「じゃあ、もっと上のほう洗いますね」
「はいよ」
俺が変な声を出したからか、次に洗うところをしっかりと報告してくれる。やっと終わった。そう安堵したのもつかの間だった。
「あ、れ……ちょっと届かない……？」
「ちょ、ちょっと、桜ちゃん!?」
桜ちゃんの次なる目標は俺の首回りだった。届かないと言いつつドンドン近づいてきた結果、背中とお腹がぴったりと密着することになってしまった。それはもう余すところなく。桜ちゃんの手で十分に泡立った石鹸が、ヌルヌルと柔肌を凶器に変える。その中にあっても、明らかに違う感触がある。

「さ、桜ちゃん？　ちょっと離れたほうが……」
「大丈夫です。届きますから」
そういうことを言っているんじゃない。
手を動かすたびに体を左右に揺らすのは本当に卑怯だ。ちょっとコリコリとしたものが右に左に背中を刺激するたびに、ゾクゾクという刺激が走る。
その結果、
（呼んだな）
（口調変わってるじゃん）
まったく勝てなかったよ。
白いタオルがしっかりとテントを張ってしまった。でも、それでもリカバーは可能だ。
「終わりましたよ」
「あ、ああ。ありがとう、桜ちゃん。これで終わ――」
「じゃあ、次は前を洗いますね」
「それはまずい！」
何の躊躇もない桜ちゃん。これは本当にまずいんだよ！
「な、何でですか？　私、何か悪いことを？」
「そういう訳じゃないんだけど、その……」
勃起してるから前にこられるのはまずいとは言えないし、理解してもらえるとも思えない。
「じゃあ、洗います」
ああ、無知って怖い！
さっと前に回り――真っ先に目に飛び込んでくるのは当然不自然に盛り上がったタオル。
「？」
不思議そうに眉を寄せてタオルをめくろうと――
「ストップ。そこはいいから」
「でもそこ、おち……んんっ！　おしっこするところですよね？」
ノーコメント。ノーコメントだぞ俺は。言い直したこととか、顔を赤くしてるところとか！

「だったらしっかり洗ってきれいにしないと。お父さんに教えられましたよ」
時臣に教えられたのか。自分からその名前を出すなんて、割と平気なのね。
「お父さんとお風呂に入ったりしたの？」
「はい。よく体も洗ってもらって」
「お父さんに？」
「はい。お姉ちゃんと一緒に。洗ってあげたりもしたことあります」
「へ、へぇ～……」
ほーん。時臣、ほーん。
「だから任せてください。しっかり綺麗にしますから」
「あ、ちょ」
衝撃的な事実に一瞬放心したのがマズかった。最後の防壁が取り払われた。

お風呂でご奉仕？　後編　（桜）

「あ、え……？」
「……」
　タオルが取り払われて出て来たのは、赤く腫れあがった亀頭を天井に向けている俺のペニスだった。限界まで反り返っている竿には血管が浮き出でいる。時折テレビで紹介されている深海魚よりグロテスクだ。
　あんなにやる気満々だった桜ちゃんが完全に固まっちゃっている。
「さ、桜ちゃん？」
「っ！　あ、ごめんなさい！　ちょっと驚いちゃっただけなんです。すぐに洗いますね！」
　俺の言葉が催促だと思ったのか、慌てた様子で泡を立て始めた。赤い顔で。そういう訳じゃないんですよ！　そういうことを言いたいわけじゃないんだ！
「その、お父さんのとちょっと違かったから……大きさ、とか」
　そりゃ平時と戦闘形態は違う。時臣が桜ちゃんに戦闘期待を見せていたらこっちが引くよ。そこまで時臣に幻滅したくない。俺の中では『うっかり優雅魔術師お父さん』でいてほしい。属性多すぎるかな？
　なんてことを思っている間にも、桜ちゃんは俺のそそり立つ肉棒に手を近づけていた。前を洗うという話だったはずなのに、視線がただ一点に向けられているのがとても気になる。
「だったら無理しなくても……」
「いいえ！　大丈夫ですから！」
　そもそも、桜ちゃんには一度見られてるよな。あ、でも、あの時は蟲の影響もあったし、何より暗かった。熱に浮かされてたみたいなところもあったし、よく覚えてないのかもしれない。
「それじゃあ、洗いますね……」
　もう何を言っても無駄だと悟った俺は、せめて何事もないようにと身構えた。いくら討論しても変わらないなら、もう相手が満足するま

でやってもらうことにしたのだ。
「っ」
「ひぅ」
小さく、石鹸の泡でヌルヌルになった手で触れられた。それだけでピクリと反応する。ドクンドクンと脈打つものにおびえたように手を引っ込める桜ちゃん。でも、すぐに離れた手は近づいてくる。
握るのではなく、手のひらで包み込むように触れられた。
「すごい……固くて、熱い……」
撫でるように側面を刺激される。微弱とはいえ快楽の電流が流れ始める。浮き上がった血管を爪で弾かれ、腰が少し震えた。
「心臓みたいにドクンドクンって……男の人はみんなそうなんですか？」
「ん？　あー……その人によるんじゃないかなぁ」
「でもお父さんと全然違うし……もしかして、病気だったり……」
「しないから！　そうだなぁ……そう、体調だよ！　男の人は体調がいいとこんな感じになるのサ」
何を言っているんだろうか、俺は。全然わかんないよぉ。
「体調、ですか……？」
「そうそう！　元気だとこんな感じになるんだよ！　多分、時お……お父さんはその時疲れてたんじゃないかな!?」
「そういえば……そうだったかも」
何とか回避できたみたいだ。
「俺はもう、ケガが治ってご飯も食べたから！　元気いっぱいなんだよ！」
「そうだったんですね。良かったです。元気になって」
なんかとんでもないこと言ってしまった気がするけど……ま、成長すればそのうちわかるでしょう。その時までには忘れてるかもしれないしね。
「それじゃあ、洗いますね！」
「あ、ウン」
勢いを取り戻した桜ちゃんは、おっかなびっくりだった手つきをど

んどん大胆にしていった。
肉棒はくちゅくちゅと、泡立った石鹸によって卑猥な音を出し始めた。両手で、何の手加減もなしにリズミカルに、根元から出っ張って手が止まるカリ首までしごかれている。
カリ裏の皮が薄い部分をたたかれるたびに、目の前に火花が散ったのではないかと思うくらいの刺激が背骨から脳に送られる。
それをやっているのがまだ小学生にもなっていないような女の子という事実が、背徳感となり、さらなるスパイスになる。
カウパー粘液がポンプで押し出されるようにくぷぷと溢れてくる。まだ射精していないのが奇跡のようだ。俺の意思もバカにしたものじゃないな。亀頭は真っ赤にはれ上がり、陰嚢は中に入っているものを吐き出したいとうずうずしていた。
「ふぅっ、ふぅっ……っ！」
腹筋に力が入る。せわしなく手を握ったり開いたり、快感を外へ逃がそうと必死になっていた。
そう遠くない未来に決壊するのは目に見えていた。このまま刺激され続ければ。
そう思っていたのだが、唐突に桜ちゃんが手を止めた。
「ここはもういいかな。次は……」
亀頭全体を揉みしだくように洗ってきた。桜ちゃんはまじめだった。とても念入りに、射精直前で張りつめている亀頭を洗ってくれた。
「ぁ、っ、っ……！」
カリがお気に入りなのか、竿との段差に指を合わせ、丹念に汚れを落としてくれた。空いた手で先ほどしていたように、今度は亀頭を短いストロークでしごき始めた。
とめどなくあふれ出るカウパーのおかげかどんどん滑りが良くなる。
まさかここからアクセルがかかるとは思わなかった。そんなことをされてしまえば、我慢なんてできる訳がない。
「射精（で）っ……！」

しっかりと煮込まれた白濁が、体の根元から尿道を登ってくる感覚がしっかりと感じ取れた。
――ぐびゅるる、どびゅるるるる……っ、ごぶっ、どぶどぶっ、びゅるるる……
「わっ！」
「あっ、ご、ごめん！」
顔の目の前で射精してしまい、桜ちゃんの顔を汚してしまう。粘度のある白は、同じ白のはずの泡とは全く違う色に見えた。
俺は慌てて洗い流そうと洗面器にお湯を汲もうとする。
「あうぅぅ、これ……？」
横では、桜ちゃんが顔についたものを手ですくっていた。しかも、あろうことか口の中に――
「桜ちゃん、顔洗って。ほら、早く」
有無を言わせず顔を洗わせた。
「やっぱりあとは自分で洗うから。桜ちゃんは湯船に浸かってて、ね？」
「は、はい。分かりました」
予想していたこととはいえ、見事にダメだった。ここ最近溜まったものをすべて吐き出すみたいに吐き出しちゃった。
「お兄さん。もう上がりますか？　良かったら一緒に……」
「ん、わかったよ」
手早く前を洗った俺は、再度お湯に浸かった。少し冷えてしまった体に、熱いお湯が心地よい。
肩までつかると桜ちゃんが寄りかかってきた。
「あったかいです」
「しっかり温まれよ」
「はいっ」
すっかりリラックスしたように俺に体を預けている。俺も力を抜いて天井を見た。
そこからしばらく、２人とも口を開かなかった。
――っ、――――っ、――――っ！

何やら廊下を誰かが走り回っているような音が聞こえてくる。
「ん？　なんか外が騒がしい――――」
「イレギュラー！」
「うわぁぁぁぁぁ!!!!」
浴室の扉がいきなり開かれた。そこに立っていたのはセイバーだ。
「な、なんだよ！　いきなり入ってくるなよな!!」
もしも『アウト』な光景が繰り広げられていたらどうするつもりだったんだ！　俺は知らんぞ！
「緊急事態です！　早く上がってください！」
セイバーが珍しく焦っていた。
……なに？　緊急事態だと？

俺と桜ちゃんは風呂から上がり、言われるがままにＴＶを見た。『生中継』というテロップがあり、空からヘリで撮影しているのか激しく画面が揺れていた。わざわざ映している場所は、ここからそう遠くない駅の近くだということは、『生中継』の下にある文字で知ることが出来る。
《お判りになるでしょうか！　この奇妙な現象を！　本来なら人々でにぎわう駅。その近くで原因不明の事件が起こっています!!》
原因不明。そう言いたくなるのは良くわかる。カメラの先に見える人たちは必死に逃げまどっていたのだ。しかし通り魔がいる訳ではないし、狂った殺人鬼が暴れているわけでもない。映像には、善良な市民しかいない。みんな、とにかくがむしゃらに走っている。
「これ、放送しちゃダメだろ……ッ！」

一人、また一人と、見えない何かに食われるように体が削られ息絶えていく。ヘリの音にかき消されていても、悲鳴が聞こえてきそうな光景だった。
「こいつは……サーヴァントの仕業か？」
イスカンダルはあくまでも冷静に。
「どうでしょうか。少なくとも、私のセイバーは何もしていません」
「そりゃあ、こっちだってそうですよ」
「余も、同じく」
しかし、だったら。
「誰の仕業なんだ？」
俺の知っている第四次聖杯戦争にはこんな出来事はない。だったら、この作品にはない何者かの介入。そう考えるのが自然だ。
そして、見ればわかる。倒さなければならない相手だと。
「ほう。未来から来た貴様でも、知り得ないことがあったというわけだな。これは面白くなってきたわい。果たして相手は何者か、わくわくするわい」
「面白がるなよ、ライダー！」
「おいおい。未知の強敵と相まみえることこそ、人生の醍醐味ではないか」
「いや、ライダー。イレギュラーの言う通りだ。人命が失われている以上、面白いなどという言葉を口に出すべきではない」
「余とて、この振る舞いを許しておくほど豪気ではないぞ？　すぐさま出陣し、下手人には王の罰を与えてやらねばなるまいて」
セイバーにも注意され、あっさりと降参してしまう。
「準備が整い次第、出陣とする」
テレビの画面にヒビが入った。現場で撮っているカメラのレンズに入ったヒビだろう。４割ほどが映らなくなり、今度は地面を映しながら真っ逆さまになる。
「……」
次の瞬間には『しばらくお待ち下さい』と映し出された。
「なるべく早く、な」

市街地戦

戦車に乗ってひと飛びに、というわけにはいかなかった。
まずイスカンダルがウェイバーを連れていく事は確定事項。そしてアイリさんだが、切嗣さんの意向で屋敷に一人で残すことは出来ない。かといってセイバーも黙っているわけがないので2人とも行くことに。そうなると今度は桜ちゃんが一人になってしまうため、俺が連れていく事に。
そこまで乗るとライダーの戦車も流石に定員オーバー。乗せて行くだけならともかくとして、戦いながら守るのは保証できないと言われてしまった。そこで、仕方なく分かれていく事になった。
アイリさんたちは車に乗って陸路で、俺たちは機龍に乗ってライダーと一緒に空から向かうことにした。切嗣さんたちとも現地で集合することになっている。
そうして現場に近づくにつれ、俺の目に衝撃的なものが飛び込んできた。
「なんだよ……あれ……」
人を食って成長を続ける、不定形の物体。粘土のようにぐにゃぐにゃしているように見える。広場からドンドンと広がり、その被害を拡大させていくナニカがある。
俺も見ただけでは何が起こっているのかわからなかった。いったいどんな攻撃なんだ!?
「何が起こってるんだ……?」
「ふぅむ……」
戦車を操るライダーとウェイバーが一緒になって考え込んでいる。
「分からない。でも、不用意にアイツに近づくのはやめたほうがいいと思う。一回何かで小突いてみて……」
「おい!」
俺が機龍の武装を起動させ攻撃の準備を始めると、ウェイバーから静止の声がかかる。
「どうしたんだ!?」

「アイツってなんだ!?　お前には何か見えるのかよ！」
何だって？　ウェイバーの声に耳を傾ける。
「おい！　聞いてるのかよ！　何が見えるってんだよ！」
「何がって、アイツだよ！　目の前に見えるだろ！」
「何処にいるんだよ！　大きさは!?　ライダー、見えるか？」
「余の目には何も映っとらん。が、嫌な気配は感じるな」
「何言ってんだよ……ッ！」
雑音がひどく大声で言い合うが、会話になっていないように思う。
何処にも何も、こんなに大きな、現代社会にそぐわないものが目の前にあるんだぞ。これ以外の何だってんだよ。
「桜ちゃん、何も見えない？」
「うん。見えないよ？」
「マジかよ……」
俺だけにしか見えてないとでもいうのか？　ウェイバーどころかライダーにも見えてない目の前の怪物。俺だけに見えている。待てよ、まさかそいつは……
「スタンド、なのか……？」
そう考えるのが自然だ。事実、あいつからは魔力の反応がない。
しかし、これほどのサイズのスタンドを俺は知らない。どうしてこの場にスタンドがいるのかなんて些細な事。最悪なのは対処法がわからない新種のスタンドであった場合だ。
俺の牙（タスク）で再起不能にできるのか？　いくら回転のパワーでも、小さな爪で殺しきれるサイズのスタンドとは思えない。
そこで、セイバーからキャッチが入った。
『イレギュラー、そろそろ駅に到着する。状況はどうなっている？』
「来るな！　近づかないほうがいい！」
とっさに叫んだ。人間はもちろんのこと、サーヴァントにもスタンドは見えないみたいだ。下手にここにきて攻撃されても困る。
『了解した。離れた場所に待機する』
セイバーは直感で理解したのか、素直に従ってくれる。場所は互いに発信機をつけているので簡単にわかる。危なくなったらまた避難

してもらうことにしよう。
「おい！　もっとわかるように説明しろよ！」
「目の前に俺にしか見えない怪物がいる！　大きさはかなりでっかい！　捕まると喰われるぞ！　ちょっと離れててくれ！」
俺がそう言うと、ライダーは手綱を引いて高度を上げた。
よし、やってみるか。
俺は爪に回転をかけ始める。俺の右手に寄り添うようにスタンドの像（ヴィジョン）が浮かび上がった。
「ＡＣＴ２……くらえッ!!」
反動も音もなく、爪弾が発射された。肉に吸い込まれるようにめり込んでいく。あの手ごたえ、あの質感、ブニブニして絶対に触りたくないな。回転は肉の内部で暴れている。破壊出来ないわけではない。けど……
「回転が死んだな……」
爪弾の回転が終わってしまう。
目の前の化け物は平然とその体躯を蠢かせている。まるでこたえていない。南極の氷山にライターの火を近づけたみたいだ。氷を少しくらい溶かすことが出来ても、それはひとかけら分だけだ。その程度では微塵も効果が出ない。
「拙いな」
目の前の化け物が俺――正確には俺と桜ちゃんが乗っている機龍に向けて攻撃を始めた。
「桜ちゃん、行ってくる！」
「頑張って！」
俺はハッチを開けて外に飛び出した。巨大な機龍では相手スタンドの攻撃に対応できないと考えたからだ。爪弾で迫りくる汚肉をバラバラにしつつ、ビルの屋上めがけて降下する。
「ッ!!」
しかし一番大きな本体から切り離されても、俺への追尾は止まらない。むしろ、
「スピードが上がっているッ！　あのスタンド、ダメージを受けない

のかッ!?」
スタンド使いの俺を危険視したのか、それとも単純に近くにいるからなのか、執拗に狙われる。しかも速い。闇の魔法（マギア・エレベア）で強化されているはずの俺が全く振り切れない。
みんなから引き離すことは出来ているのは良いことだが、これは予想外だ。
「固有時制御２倍速（タイムアルターダブルアクセル）ッ！」
倍速をかけても、それに追いすがるように肉片は速度を上げる。
最悪本体のほうを再起不能にしないと収拾がつけられないな。でもどこにいるかも、だれが本体なのかもわからない。
「でも探すしかないな……」
こんな時に頼りになるのはあの人しかいない。俺は急いで通信を繋いだ。相手は、
「切嗣さんですか!?」
『どうした。状況はどうなっている』
息を整えることもできない。完全に撒いたと思っても、ビルの陰からいつの間にか回り込まれている。ビルの壁をぶち破って中に転がり込み、勢いを殺さずに走り出す。
今から切嗣さんにお願いすることは、
「この近辺を捜索して――――他のマスターを発見次第、殺害してください」
『……』
電話の向こう、あの切嗣さんが言葉を選んでいる。
「今回の事態、生き残っているほかのマスターが原因の可能性があります。原因の大本は俺とライダーで押さえます。その間に何とか――――」
『キャスターのマスターと、言峰綺礼が目標か。バーサーカーのマスターは外してもいいんだな？』
「雁屋は見かけたら俺の連絡先を教えておいてほしいです。１分後から捜索を開始してください、今近づくと危ないですから」
『了解した』

短く言うと、切嗣さんは電話を切った。
このスタンドのパワー、絶対に本体は近くにいるはずだ。スタンドは本体から遠くなればそれだけパワーが落ちるものだ。近くにいなければ……そうじゃなければ説明がつかない。
切嗣さんが捜索を始めるのは1分後。次は、
「ライダー、聞こえるか!?」
『おお！　無事であったか！』
『お前、今どこにいるんだよ！』
上空で待機しているはずのライダー達だ。この2人には負担を強いることになる。何せこれから固有結界――――王（アイオニオン・ヘタイロイ）の軍勢を使ってもらわなければならないのだから。
「そこから見て、今どうなってる!?」
『お前が飛び降りてから……そうだな、一直線にビルが壊されてるって言えばいいかな……何かでっかい怪物が通ったみたいにって言えばいいのかな……』
「十分だ！　その一番先端にみんなには見えない怪物がいるッ！　そいつを固有結界の中に閉じ込めてくれ！』
『閉じ込める、だと?』
そうすれば、周囲の安全を確保しつつ切嗣さんが本体の捜索を行える。最高の場合は、近くにいた本体も一緒に固有結界に引きずり込んで倒してしまうことだ。何の遮蔽物もない王（アイオニオン・ヘタイロイ）の軍勢なら、どこにいるかはすぐにわかるだろう。
『良いだろう。坊主、お前さんは連絡用にここに残れ。あっちのでっかいのに乗っておけ』
『あ、ああ。わかった』
ライダーは連絡用なんて言っているが、本当は今回の敵が危ないとわかっているからだろう。
「そっちにはセイバーに向かってもらう。セイバーの足ならすぐだ」
『よし、5秒後に王（アイオニオン・ヘタイロイ）の軍勢を展開するぞ。準備は良いか!?』
「いつでも!!」
なるべく時間を稼いで、切嗣さんの捜索時間を稼ぐ！

『集え我が同胞――――』
ライダーの力強い声がインカムから聞こえてくる。ちょうど俺は窓を破って外に出た。次の瞬間には一面の砂漠が広がっている。着地のために身構える。
だからだろう。横から迫る黒い影に気が付かなかったのは。

「■■■■■■■■■■■■■――――!!」
「ガアアアアアアアアアアアアアア!!!!」
強烈な蹴りが俺の横っ腹に直撃する。進む方向を無理やり変えられ、横のビルの窓に吸い込まれた。背中にデスクの角が当たった感触がしたが、ほとんど痛みは感じなかった。そのくらいの体になっているはずの俺の体が……達磨落としのように胴体だけ吹っ飛ばされなくてよかった。
でも、蹴り飛ばしてきた相手は全然良くない。意味が分からない。なんでアイツが攻撃してくるのか。
黒い靄を纏い、闇に溶け込むその姿。目を凝らそうとしてもなぜかぼやけてしまい、細部まではわからない。両手には何も持っていない。しかし、その手にしたものはどんなものでも最凶の武器になる。
「バーサーカー……!」
味方になったはずの雁屋のサーヴァントがなぜ俺に攻撃してくるのか。
「雁屋、どういうつもりだ！　誰に何を吹き込まれた！」
返答はない。目の前の黒甲冑のサーヴァントは俺を見ているだけ

だ。
バーサーカーとの距離は約１５メートル。サーヴァントにとっては距離でも何でもない。いつどのタイミングで攻撃されるかわからない。
『ザー……、ザー……』
通信機のライダーのチャンネルからはノイズしか聞こえない。最悪なことに、ライダーは一人で王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）の中に入ってしまったようだ。なんとも絶妙なタイミングで攻撃されたものである。
でもスタンドの転送には成功したようだ。切嗣さんも、本体の捜索を開始しているだろう。
「フン、ようやく一人になりおったな。イレギュラーのサーヴァントよ」
「間桐臓硯……生きてたのか」
部屋中のあちらこちらから、気持ちの悪い音と共に蟲が這い出てくる。その虫はバーサーカーの近くに集まったかと思うと、一斉に机や部屋の角に消えていく。
そこにはしわくちゃの老人が立っていた。
なるほど、違うな。雁屋とは全く違う。同じ間桐の家の人間でも、ここまで差が出るものなのか。
「桜ちゃんから聞いてるよ。最悪のクソヤローだってな。よくもまあ、あんな小さい娘に、ひどいことが出来るもんだ」
「それは仕方がなかったからのう。間桐の魔術に適応するには、あの方法しか――ないとは言い切れんが、手っ取り早いほうが良いだろう？」
「でも、その努力は無駄になるな。今回で聖杯戦争は終わりなんだから」
「カカッ、若造が。言いよるわ」
臓硯の体が崩れ始める。
「バーサーカー、すりつぶせ」
「■■■■■■■■■■■■■■■――!!」
無慈悲な宣告とともに、黒い凶犬が襲い掛かってきた。襲うという

表現はもう正しくないかもしれない。ひたすらに俺を噛み千切ろうと、その牙を突き立てようとしてくる。
相変わらず武器は持っていないが、このバーサーカーなら貫手で俺の喉仏をえぐり取るくらいの芸当は簡単にやって見せるだろう。
もちろんやられるつもりはない。
現代の知識が与えられるサーヴァントでも、これは予想外だろう。視界が狭まり、周囲がスローに見え始める。腹に押し付けた散弾銃（ショット・キャノン）の引き金を引き絞った。ゆっくりだった視界と感覚。マズルフラッシュと共に腕に伝わる反動。それとほとんど同時に、喉元あと数センチまで迫っていたバーサーカーの腕が、逆方向に進み始めた。
体感時間が元に戻った。
さっきとは丁度逆になった。バーサーカーはゼロ距離からの散弾でデスクをなぎ倒して壁にたたきつけられたのだ。

ＡＲＸ―７　アーバレスト
フルメタルパニックに登場する『アーム・スレイブ』と呼ばれる人型兵器。原作では乗り込んで操縦するが、今作ではパワードスーツとして生身に着る形で登場する。『ラムダ・ドライバ』はもちろん搭載され、原作で使った武器はすべて使える。ただし、うまく使えるかは別問題なので練習が必要である。

鮮やかな白のボディが、アーバレストが兵器であることを忘れさせようとする。が、その手に持つ、物々しい散弾銃（ショット・キャノン）――――ＯＴＯメララ『ボクサー』５７ｍｍ散弾砲――――の銃口からは硝煙の匂いが漂っている。
「ッ!!」

起き上がる気配を感じた俺は、その前に引き金を引いた。
弾丸をひたすらにばらまく。放たれた鉛片は、スチール製のデスクを障子紙を指で穴開けるよりも簡単に貫通する。
明日ここの社員さんがどれだけ苦労するかを考えると涙が出てきそうだが、そもそもこんな事件があったら仕事どころじゃないから大丈夫だろう、と無責任な考えに落ち着く。
さて、そんな中、削れてはいても破壊しきれていないデスクが一つある。バーサーカーが、騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずで宝具化して盾に使っているのだ。
こちらも負けていない。キンジの銃技を合わせて超速リロード。弾頭をＯＯ―ＨＥＳＨに変更する。
着弾。弾頭は潰れ、爆発した。　ＯＯ―ＨＥＳＨは粘着榴弾だ。この世界で言えば一種の武偵弾になる。
「よし」
念のためもう3発ほどぶち込み、ビルの外に飛んだ。あのまま戦ってたら、あのビル崩れちゃうからな。あのフロアはもう使えないけど。
大通りを挟んだ隣のビルの壁面にへばりついていると、上から声が聞こえた。
「イレギュラー、大丈夫ですか!?」
「お兄さん！」
「おい、翔！」
何故がみんなが近くに来ていた。
「な、何でこっちに？」
「爆発があったからです。様子を見ていたらあなたが飛び出してきて」
そりゃそうか。このタイミングで爆発なんてあったら、気になって見に来るよな。
「って、セイバー、ダメだ！　すぐに離れてくれ！　相手はバーサーカーなんだ！」
「バーサーカー？　なぜですか。あなたの話では味方になったと……

いえ、そんなことはどうでもいい。あのバーサーカーは私に並々ならぬ執着があるらしいが、私の体力も万全だ。あなたばかりを前線に立たせることは出来ない。ここは私が」

直感さん仕事して！　あんなに有能だった直感さん！　真面目なのはいいことだけど！

こうなればヤケだ。多少変な目で見られてもかまわない。

「セイバー！　俺は君を大事に考えてる。君に色々な意味で傷ついてほしくないんだッ！　だからここは俺の言う事を聞いて――――」

「あなたは突然何を――――」

もう遅かった。

「Ａａａａａ――――ｕｒｒｒｒｒッ!!」

撃ち込まれる楔

肉薄するバーサーカー。俺の攻撃は全く効いていないように見える。もしくは効いていても、肉体のダメージを無視して動かしているのか。

素手には違いないが、相手を殺すには十分だ。そして俺の後ろには機龍に乗っているウェイバーと桜ちゃん。避けるという選択肢はない。

「ハッ!!!」

セイバーの一閃が走った。

聖剣によって大気が切り裂かれ、その不可視の剣先はバーサーカーの喉元へと吸い込まれていく。

空中で無理やり体を捻ったバーサーカーは――

「白刃取り……ッ」

すんでの所でその刃を止めていた。さらに、

「■■■■■■■■■■――――!!」

掴んだ剣を起点にして、セイバーを階下に叩きつけた。

しかしセイバーも負けてはいない。俺達には見えなかったが、下のフロアで聖剣を振るったのだろう。切込みが入り、ビルが傾いた。

他のビルに飛び移るバーサーカーを追って、セイバーも飛び出していった。

「めちゃくちゃだろ!!」

一瞬にして起こった攻防に思わずそう叫ぶ。

ターゲットは完全にセイバーになっている。これは拙い状況だ。流れでバーサーカーと戦うことになってしまっていたが、元々は仲間を想定して計画を立てていた。セイバーとバーサーカーが互いに潰し合うのは最悪の状況と言える。

しかしこうなってしまっては仕方がない。雁屋の安否など気になることはあるが、この場を乗り切らないことには気にしただけで終わってしまう。

「ウェイバー！　とりあえず離れろ！　あのバーサーカーは危険だッ

!!」
「ああ、そうさせてもらうよッ！　あんなのまともな人間が戦えるやつじゃないからなッ！」
　マスターの安全は最優先事項だ。機龍に乗っていればそうそうケガはしないと思うが、サーヴァント相手だと心もとない。
「お待ちを」
　何処からともなく、一人の武装した兵士が現れた。この装備を見る限り……
「ライダーの兵士か？」
「はい。王の命により、固有結界内部の状況を伝えに参りました」
「どうなってるんだ!?　ライダーは無事なのか!?」
　ウェイバーが機龍のスピーカーで声を張り上げている。俺も気になっていたことだ。いくら王の軍勢でも、スタンド相手では厳しいのではないだろうか。
「内部には確かに見えない怪物がいるようです。しかし、我々の攻撃は全く効果が表れず……消耗する一方となっています。このままでは、結界を維持できる時間はあと5分ほどかと」
「了解した。時間が近づいたら、ウェイバーに伝えに来てほしい」
「分かりました。それでは失礼します」
　そう言って兵士は消えていった。
　出来れば俺も固有結界に入ってライダーの援護をしたいが、バーサーカーと戦っているセイバーのことも心配だ。それに、臓硯の襲撃にも気をつけなければいけない。俺があと2人欲しいくらいだ。
「聞いた通りだウェイバー。報告を受けたら、俺に連絡をくれ！」
「任せろ！　お前はアイツを倒しに行くのか？」
「……倒したくはないけどな」
　でもこうなってしまってはやるしかない。臓硯の手に落ちたバーサーカーは、どうしようもない。
「そうはさせんさ、イレギュラーのサーヴァント」
「臓硯……ッ!!」
　飛び立とうとした俺に、しゃがれた声が聞こえてきた。小さい体躯

は両足と杖の3点で支えられ、窪んだ瞳からは何も感じることができない。
今のバーサーカーのマスター、間桐臓硯だ。
やられた。ここに来られてしまっては、俺はもう動くことが出来ない。ともすればバーサーカー以上に厄介な相手だ。
「はやる気持ちもわからんでもないさ。バーサーカーとセイバーの関係を知っていれば、な」
「……」
こいつ、全部知ったうえで……
「英霊は見た目で判断するものではないといえ……クク、あの凛とした少女が壊れていく様は、また格別というものだ」
「そうかよ!」
腰だめに構えていた散弾銃(ショット・キャノン)をぶっぱなした。夜の闇が一瞬晴れ、転落防止のフェンスが獣に噛み切られたように千切れ飛ぶ。その間にあった臓硯の体も当然のように粉微塵になった。空になった薬莢が地面に落ちるころには、人の形をしたものはなくなっていた。
魔術的防御は何もしていなかったのか、あっけなく地面に転がる体のパーツ。しかしそれらはすぐさま蟲に還り、再び臓硯の体を作り出した。
「フム、これ以上ワシのかわいい虫を殺すのはやめてほしいのだがな……ただでさえ、蟲蔵を消されているのだぞ?」
「なるほどね。つまりあんたの蟲を全部焼き払えば、あんたの本体を倒せるんだな」
「……、未来から来たというのも、存外厄介なものだな」
臓硯の顔が初めて歪んだ。
遠くから破壊音が聞こえてくる。セイバーとバーサーカーの戦闘はまだ続いているのだろう。あの2人の事情を知る臓硯なら、あの事実を積極的に武器として使ってくるはずだ。いつバーサーカーが真名を明かしてしまうか分からない。臓硯には、自分の掌で踊っていると思っていてもらわないと、今までの行動が全部パーになりかねない。

「ところで、その鉄の塊はおぬしの宝具か？」
「は？」
「中にはライダーのマスターと――桜がいるようだが」
２発目を撃った。
「人の話は最後まで――――」
３発目。
「ちょ――――」
４発目。
「ええい、待たんか！」
５発目。
「お前から聞く話なんて何もない！　どう考えてもロクな話じゃないだろうからな！」
散弾銃（ショットガン）を乱射して臓硯に何かさせる隙を与えない。制圧射撃だ。
「――――来い、バーサーカー」
突如として、後ろにうすら寒い魔力を感じた。
《うわッ!!》
《キャッ!!》
同時に悲鳴と、機械が無理やり動こうとする不快な音が聞こえた。
後ろを振り向くと、機龍の白銀の体とは正反対の漆黒の鎧を着たバーサーカーが、機龍の背中に乗っていた。
今の今まで、セイバーと戦っていたはずだが、
「ッ！　令呪か!?」
気が付いてももう遅い。すでに機龍には取りつかれてしまっている。
掴まれたところから魔力を注ぎ込まれている。外敵を排除しようと機龍が暴れるが、その抵抗も騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずの前には風前の灯火だ。次第におとなしくなっていく。
このままでは強力な武装を奪われる危険はもちろん、マスター２人を人質に取られるという最悪の状況になる。
「逆転してしまったな、イレギュラー」
得意げに煽ってくる。確かにまずい状況だ。バーサーカーによっ

てマスターは人質に。臓硯が聖杯戦争に参加してしまっている今、桜のことを特別にとらえようとするかもわからない。や、どうなっても良いから、人質として使っているのだ。
　セイバーも近くにはいないし、近くに来たとしても最悪の爆弾がある。手札の数は向こうが上回っている。しかし、こちらの手札はまだ尽きてはいない。
「逆転？　違うぞ、臓硯。状況が変わっただけだ」
「笑わせるなイレギュラー。それとも強がりか？　貴様にはもう何もできんさ！　マスターを人質に取られたサーヴァントなぞ、ただの木偶の坊に過ぎんッ！　特に貴様のような愚かなお人好しはなァ！」
「勝利宣言には早いと言っているんだ。まだ1手……もう1手だけ俺には打てる手があるッ！」
　機龍の背にいるバーサーカー。俺との間にはウェイバーと桜ちゃんが乗っている機龍がある。直線に攻撃は出来ない。かといって、後ろに回り込むにはスピードが足りない。ならどうすればよいか。
　俺はしっかりとイメージする。この逆転の1手は必ず成功させて見せるッ。
　拳を振りかぶって、
「いっけぇぇっぇぇ!!!」
　突き出した。
　しかし俺はまだ手を伸ばすことは出来ない。そして、俺の手の長さと機龍との距離は悲しいほど開いてしまっている。産毛の1本も届いていない。しかし届いた。
「何だとッ!?」
　あまりのありえない事態に、臓硯も目を見開いている。間にある機龍には傷一つつけることなく、バーサーカーのみが見えない力によって吹き飛ばされた。システム作動によって溜まった熱が、肩と背中の放熱板から排出された。
「ハァァァァァッ!!!」
「■■■

カーも、これには対応できない。斬りつけられ、ビル下に落下していく。
『ラムダ・ドライバ』。正式名称は『虚弦斥力場生成システム』。俺が着ているアーバレストに搭載されているシステムで、作中では危険なブラックテクノロジーと言われている。斥力とは物体同士を遠ざける力のことだ。相手にぶつければ攻撃に、武器や弾丸に使えば威力が上がり、盾のように使えば防御に使える。非常に使い勝手の良いシステムだが、その強度及びパワーは、使用者の精神によって変化するという不安定な面もある。
　その力を使ってバーサーカーに遠距離から打撃を加えた。
「ウェイバー、離れろ！」
《ああ！　わかってるッ!!》
騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずの支配を逃れた機龍が空高く舞い上がっていく。これでもう簡単には手出しできない。
「イレギュラー、無事か？」
「ああ。問題ない。そっちは？」
「私も大丈夫だ」
　いくら臓硯でも、２体のサーヴァントに睨まれるのは怖いらしい。じりじりと隅に追いやられていく。や、違うな。バーサーカーがビルの壁面を登ってきた。こいつの近くに行きたかったのか。
「忌々しい奴め……まだ隠していた力があったのか」
「セイバー、耳を貸す必要は無い。さっさと倒すぞ」
「はい。この男が話に聞いた桜の親なら、慈悲をかける必要はありませんね」
　セイバーも賛成してくれた。
「良いだろう。貴様が手札を切ったのなら、このワシも、一つジョーカーを使うとしようかのぅ」
「なんだと？」
　セイバーは眉を顰めるが、俺には何のことかわかる。やらせるか!!
「バーサーカー、宝具の開帳を許す。存分に暴れよ」
「ッチ!!」

もう一度、ラムダ・ドライバのパンチを――

「出ないッ――」

今度は不発。不安定なシステムに頼ってしまった。

バーサーカーを覆っていた黒い靄が晴れていく。目を凝らしてもぼんやりとしか見えなかった甲冑がはっきりと見え始めた。甲冑の色は同じく黒だが、靄よりも鮮やかで、引き込まれるような美しさがある。胴体には大きな亀裂があり、セイバーにつけられた傷から血が滴っている。

手には一振りの剣が握られた。その剣を見て、セイバーは絶望の表情を見せた。

「無毀なる湖光（アロンダイト）……っ。まさか、あなたは――」

兜が真ん中から割れ、地面に落ちる。顔が見えた。

「A――urrrrッ!!」

「サー・ランスロット……っ」

俺を無視したバーサーカーは一直線にセイバーに襲い掛かってきた。

「臓硯ッ!!」

見た時にはすでに臓硯の姿はなかった。バーサーカーという最大の爆弾を残して、どこかに逃げてしまったようだ。

セイバーとバーサーカーはそっちで戦闘を始めていた。や、これは戦闘ではない。一方的にセイバーが攻撃されているのだ。馬乗りにされ、ひたすら殴られている。剣による致命的な攻撃だけは防いでいるが、それ以外はなされるがままに。セイバーとしてのクラスが無ければ、見るも無残なことになっていただろう。

「闇の魔法（マギア・エレベア）。ラムダ・ドライバ――」

脚に力を入れ、

「パンチ!!!」

バーサーカーはビルの壁に穴をあけ、貫通。地面に突き刺さった。

今度は発動した？　いや、してないのか？　クソっ、分かりずらいな。

――Aurrrrッ!!

地の底から怨念が聞こえてくるみたいだ。
その時、空間が歪んだ。イスカンダルの固有結界が解除されたのだ。空を駆ける戦車に乗るイスカンダルが、雷鳴と共に近づいてきた。
「ライダー！」
「まったく。言っていたことと違うではないか翔よ。お前さんも一緒に入るという話ではなかったのか？」
「伝令兵から何も言われてないのか？」
ライダーは豪快に笑った。
「冗談だ。こちらもいろいろと大変だったようだからな。そ奴を見ればわかる……何があったかは聞かんがな」
「……後で情報は共有するぞ」
セイバーを見てイスカンダルは言った。バーサーカーは撤退したみたいだな。いくら何でもサーヴァント3騎。そして今日の戦闘でかなり負傷しているはず。ここで使い捨てるつもりがないなら、撤退させるべき場面だ……十分すぎるほど大きな楔を打ち込んでくれたしな。
一息ついたところで電話がかかってきた。相手は……切嗣さんだ。
《僕だ。キャスターのマスターの排除に成功した》
「キャスターの？」
《ああ。手に令呪を確認した。そばにいたキャスターの消滅も確認した。そっちはどうなった？》
キャスターのマスターがスタンドを？　どうなっているんだ？
考えたいことは山ほどあるが、今は帰って情報を共有することが大切だな。
「こっちも戦闘は終了しました。色々と損害は出ましたけれど、みんな生きてます。合流しますか？」
《いや、僕達の方はこのまま帰ることにする。教会に使い魔を出してキャスター討伐の報酬も受け取らなければいけないからね》
「分かりました。詳しくはメールでまとめて送ります」
《ああ》

電話を切って力を抜く。本当に今回はどうなるかと思った。どうにかなったが損害は多くなってしまった。
「セイバーの本当のマスターからか？」
同じく疲れた顔をしたウェイバーが機龍から降りてくる。
「ああ。最初の目的は達成できた。あの見えない怪物はどうにかできたよ。詳しいことは帰ってからにしよう。もうクタクタだよ」
その後俺たちは合流して帰路についた。

悪人たちのやり取り

夜の駅前、一人の青年が歩いていた。仕事帰りの会社員と制服姿の学生が多い中を、慣れた様子で歩いている。

「はぁ……」

キャスターのマスター、雨竜龍之介は大きなため息をついた。傍から見れば好青年の龍之介の物憂げな顔は、道行く女性の目を引き付ける。

平時なら、少し気に入った女性とは刺激的な夜を過ごそうか、なんて考えるが、今はそんな考えは微塵も浮かんでこない。女性にとってはとてもラッキーだ。死神が、その鎌を放り投げているのだから。

「そう気を落とさないでください、龍之介」

「でもさぁ、旦那ぁ～。やっぱりショックだよ、俺。あんなのってないよ」

霊体化し、不可視の状態になっているキャスターの励ましもそこまで効果がない。

1時間ほど前に、次の素材を仕入れ、意気揚々とねぐらに帰ったこの2人。しかしそんな2人を待っていたのは、完膚なきまでに破壊された作品の数々だった。

そこで少し言い合いになり、神の在り方についてジル・ド・レェが一つの天啓を得たのだが、それはまた別の話だ。

しばらくして冷静になったジル・ド・レェは即座にこの場を離れることを決定した。ジル・ド・レェは狂ってしまう前は軍人。居場所が割れてしまった以上は、そこに留まるのは危険だと判断したのだ。特に工房を持つ必要がない特殊なキャスターの利点が出たといえる。

「これからどうしようか、旦那」

「そうですねぇ……」

ジル・ド・レェもかなり追い詰められていた。サーヴァントである以上、そこら辺のチンピラに負けることはあり得ない。しかし、攻防の要だった宝具『螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）』を失ってしまったせいで、狙われれば最後だ。抵抗できずに殺されるだろう。

今日の『仕入れ』も，セイバーをとらえられずに落ち込んでいたジル・ド・レェを元気づけるために龍之介が企画したものだったが、ジル・ド・レェは見ているだけだった。
その点でも、敵に見つかるわけにはいかない。
（あの黒髪のイレギュラーサーヴァント……ッ!!　必ずッ！　必ずやこの手で縊り殺して見せましょうッ!!）
実体のない体で歯ぎしりする。セイバーを捕らえるのを失敗するばかりか、宝具を失った原因はすべて奴にある。そう思うことで、復讐の炎を燃やしていた。しかし、実際に行動に移すのは非常に難しい。
（今はとにかくどこかに身を隠さなければ……）
派手に誘拐を繰り返したことによって警察の目も厳しくなっている。四方八方が敵だらけのこの状況。龍之介は、今自分が置かれている立場をほとんど理解していない。唯一は警察に追われているということだが、大きな問題としてみていない。
「――龍之介、止まってください」
「旦那？」
不味いものを感じ取ったジル・ド・レェはそう進言する。龍之介は素直に従い、不思議そうに何もいない背後の虚空を見る。
「あなたですか。我々に敵意を向けていたのは」
日常の空間が、そこだけ切り取られ別のものになってしまったかのような錯覚に陥る。それだけ、目の前にいる男が出している空気は別物だった。
「あ、それ、俺の手の奴と似てる……」
右手の甲にある紅い紋様――令呪だ。ジル・ド・レェは一気に戦闘モードに切り替わる。周りに気を配るがサーヴァントの気配は一切ない。
ならば単身できたのか。様々な可能性を頭に浮かべるジル・ド・レェ。
「私は言峰綺礼。アサシンのマスターだ」
「あ、っと、コトミネさん？　俺は雨竜龍之介です。いや、あんたすご

いね！　気配ってやつが全然無いんだもん！　もう、気が付いたら目の前にいたって感じ!?　なんか武術とかやってたりすんの？　カラテとか？」
「雨竜龍之介……それでは君が、キャスターのマスターということで間違いないな？」
「キャスターのマスター……そっすね。はい。旦那がそんなこと言ってました。よくわかってないんですけど」
「そうか」
　短く答えた綺礼の手が目にもとまらぬ速さで閃いた。荒事に慣れているはずの龍之介が全く対応できない速度だ。街の殺人鬼の手に負える速度を超えている。
「うわ!!」
「ッ!!　龍之介!!」
　周りの目など気にしていられないとばかりに、霊体化を解いて駆け寄るジル・ド・レェ。突如として現れた、大柄で今にも飛び出しそうな眼球を持つ男。周囲を歩く人たちは関わり合いたくないとばかりに顔を背け、立ち去って行く。
「……」
　そんな人だかりに紛れ、綺礼もいつの間にか姿を消していた。
「大丈夫ですか、龍之介？」
「いてて……うん、平気だよ、旦那。ちょっと切られただけ」
　龍之介の手の平には、横一線に鋭利なもので引き裂かれた跡が刻まれていた。少し血が滲んでいるが、命に別状があるほどではない。
「……ん。毒も塗られて無いなぁ……」
　傷口を舐め、唾を吐き出した。これで判断できるらしい。特に異常がないと判断した龍之介は、軽い動作で立ち上がった。この程度のケガにいちいち慌てるほど、ぬるい生活はしていない。
「なんだったんだろうなぁ、今の。あんなにスゲー人なのに、やることこんなにショボいなんて……」
「そう、ですね」
　マスターとサーヴァントの間には決定的な考えの違いがあった。

（一体どういうことでしょうか？　間違いなく奴はサーヴァントのマスター。それがあれほど堂々と姿を見せるとは……もしや何かの罠？）

ジル・ド・レェがその謎を解き明かすことは出来ない。少なくとも、聖杯戦争の常識で考えているうちは。

「貴様も存外慎重な男だな、綺礼」

今夜も待機の命を破り外へ繰り出していた綺礼は、ビルの屋上にいた。もうすっかり聞き慣れてしまった声に鼻を鳴らした。

宵闇の中にいてもなお輝くオーラを纏っている男、英霊ギルガメッシュ。人外の化生がすぐ後ろにいるが、綺礼は眼下の龍之介だけを見ていた。その右手には龍之介を切り裂いた凶器――スタンドの矢が握られている。

「貴様のようなモノがよこした宝具だ。そのようなものを不用意に使うなどありえんよ」

「ほう？　だが、試しに他人に使ってみよう、とは思ったのか？」

「何だと……？」

言われてから綺礼は気が付いた。普段の自分ならば――いかに過去の英霊と言えど――この程度の甘言に誑かされたりしただろうか。

一瞬考えるがすぐに首を振った。

そうではない。これまでも様々なものに挑戦し、身に着け、捨ててきた。そのどれもが自分を満たしてはくれなかったからだ。今回もその一つに過ぎない。ただ、相手が相手だけに、慎重になっているのだ。

（勘違いで納得していればいい）
ギルガメッシュは綺礼に何を期待しているのか。綺礼自身も理解はしていない。しかし、決して思い通りになっているわけではない。この聖杯戦争限りの、命とも呼べない影法師に流されているわけではない。
気が付くとざわついていた心が落ち着いていた。
ギルガメッシュはいつの間にか横に並び、綺礼と同じ方向に目線を向けていた。
「なるほど、キャスターのマスターを選んだのか」
「確か、キャスターには討伐指令が出ていたはずだ。倒してしまわなくともよいのか？」
「たわけ。そんなことをしてしまっては、せっかくの貴様の実験が台無しではないか。それに、我が戦うのは聖杯の欲にまみれた最後の一騎のみ。あの程度の雑種に向けられるほど、我の宝物は安くはないぞ」
今回進んで戦うつもりはないということらしい。本来のマスターに言われれば別かもしれないが。
「それに……ふむ。見たところアイツには素質があるようだぞ。喜べ、綺礼。すぐに面白いものが見れるだろう」
さも面白そうに笑うギルガメッシュ。対峙する存在すべてが等しく雑種である彼が、龍之介がどんな人間か記憶しているとは思えない。大方、無作為に暴れまわる怪物に変化させる宝具なのだろう。そうあたりをつけた綺礼は口を開いた。
「ほう、やはりこれは、人間を怪物に変える宝具なのか？」
「人間を怪物に変えるだと？　クッ、クハハハハ！　貴様は何を言っている？　言ったはずだぞ。この矢は人間に力を与える宝具だとな。それも、その人間の本質を写し取った力を、だ。我の目は節穴ではない。あいつからは面白い子供が生まれるだろう」
もしもギルガメッシュの言うように龍之介から力が発現して、何かはわからないが、何かが起こってしまったら。
それは絶対にロクでもないことだ。こんな人の多い場所で起きて

はいけない類の。
しかし綺礼は、自分の責任を考えるよりも前に、自分がギルガメッシュに見初められた意味を考えた。
(ギルガメッシュの目が節穴ではないのだとしたら……)
綺礼が再び思考の沼にハマりかけた時、
「だがな、綺礼。それを見るには貴様自身にも準備が必要だぞ」
「なん――――」
そこから先は続かなかった。
素早く矢を奪い取ったギルガメッシュが、矢で喉を貫いていたからだ。
「グッ、ガハッ!!」
すさまじい熱を喉の中心に感じた綺礼は、とっさに傷口を抑える。そこにはすでに凶器たる矢は存在していなかった。ギルガメッシュは綺礼の血に汚れた矢を、金の刺繍が施された布で拭う。布は空中に溶けるように消えていく。矢も同様だ。
綺礼はそんなことを気にしている暇はなかった。体の奥底から何かが生まれる予感、何かが這い出てくるような気配がある。どんな過酷な鍛錬でも感じたことのない苦痛だ。
痛みと熱が消えると、なぜか傷口も消えていた。そのことに困惑する綺礼をよそに、ギルガメッシュは面白そうに嗤った。
「喜べ、綺礼。貴様の道は決まったぞ」
その言葉の意味を、綺礼はすぐに知ることになった。眼下の交差点から悲鳴が上がったのだ。魔術で強化された視力で確認する。真っ先に探したのはもちろん。
「キャスターのマスター……」
「そうだ。お前が蒔いた種が芽を出したぞ」
キャスターのマスターの周りに肉の塊が浮いていた。その肉が周りの人に覆いかぶさったかと思うと、その人の上半身は跡形もなくなった。残った下半身は力なく倒れ、中身が飛び出す。
「これは……」
「また醜いものが出たな。さて、この後どうなることか」

「あれはなんだ、アーチャー」
「スタンドさ。その者の魂の形。貴様が呼び起こした、決して偽ることのできない真の姿だ」
　被害はどんどん広がっていく。逃げ惑う人々を食らい、肉の化け物はどんどん成長しているようだ。大きさが増し、捕食のスピードが上がっている。
「良いのか綺礼」
「何がだ？」
「何がだ、だと？　ククッ、決まっているだろう。貴様は聖職者であろう？　ならばあの惨状を見て、行動を起こさなければならないだろう？」
　綺礼はハッとする。なぜ今の今までその考えに至らなかったのか。のんびりと観察していたのか。
「私にはどうにかできると？」
「無論だ。スタンドはスタンドにしか攻撃出来ない。むしろ貴様にしかこの事態を収拾できないだろう。手っ取り早いのは、本体を殺してしまうことだがな」
「……そうか」
　そこまでの情報を与えられても、綺礼は足を動かすことが出来ない。重い腰を上げることが出来ない。
　そこに、さらなる人物が現れる。
「何やら面白いことをしておるではないか、若造」
「間桐、臓硯……」
　何処からともなく、怪人の名前がふさわしい老人が現れた。事前調査で顔を頭に叩き込んでいた綺礼には、すぐに名前が分かった。
「間桐家の当主が、この私に何の用だ？」
「ン？　それは、ホレ」
　見せられた手にはくっきりと令呪が浮かんでいた。多少の驚きを抑えつつ、綺礼は淡々と続ける。
「間桐家のマスターは間桐雁屋だったはずでは？」
「あの愚息なら、もはやこの世にはおらんさ。この令呪はワシが受け

継いだものだ」
「もう一度問う。何の用だ？」
「簡単な話だ。わしと組め、言峰綺礼。聖杯は貴様にくれてやる」
綺礼は鼻を鳴らした。
「何をバカな。私はすでにマスターではない。組んだところでメリットはない」
「それこそバカな話であろう。心配せずともすぐに聖杯は貴様をマスターとして選ぶ。それに――――」
臓硯はギルガメッシュを見る。
「貴様と気の合うサーヴァントも見つかるだろうからのぅ……」
ギルガメッシュは何も言わない。王たる自分が口を利くほどの存在ではないと思っているのか、肯定の沈黙か。
「私は――――グッ!!」
本日二度目の体の底からくる痛みに襲われる綺礼。しかし今度のものは以前にも経験したことのある痛みだ。遠坂家と共謀任務に就くきっかけになった痛みに酷似している。
「まさか――――」
綺礼は信じられないといった風に自身の手を見る。そこにはくっきりと令呪が浮かび上がっていた。
「聖杯も良いタイミングを選ぶものだ」
臓硯はいたずらが成功した子供のようにニヤニヤしている。
「わたし、は……」
「まァ、今すぐ答えを出す必要は無い。今夜の余興を見て、改めて決めるがよいさ」
そう言い残し、臓硯は蟲とともに消えていった。

亀裂

「正直勝算がありません」
「「「ええぇ……」」」
　俺の正直な告白にみんな困ったように顔を引きつらせる。色々なことがあった夜も開け、今後のことについての会議を始めたところで、最初に俺が放った一言だ。いくらなんでもインパクトがありすぎたみたいだな。うっかり。
　しかしそう言うしかないほど、俺の最初期の目標と作戦がズタボロになってしまっていたのだ。今回ばかりは、切嗣さんにも同席してもらっている。
「勝算がないって……お前、いったいどういう事なんだよ……？」
「いい質問だ、ウェイバー君。現実を突きつけてあげよう。これが俺の考えていた作戦だ」
　俺は買ってきたホワイトボードに図を描き始めた。というか、すでにあらかた書き込まれている。マスターとサーヴァントの基本的な情報と各方面への関係図だ。ライダーに気を使って余計なことは書いていない。
「お前そんなものいつの間に……」
「何を言うか坊主。敵を知ることは戦において最も重要なことだぞ？」
「分かってるよそんなことは！　僕が言いたいのはそういう事じゃないって！」
「ウェイバー？　そろそろ話し始めるからおとなしくしてな」
「あ～～～～～もう!!!!!」
　ものすごく納得のいかない様子のウェイバー。しかし俺は強引に説明を始めることにする。新たに書き込まれたところにペンを向けた。
「昨晩、切嗣さんがキャスターのマスターを仕留めたことで残るサーヴァントは、セイバー、ライダー、アーチャー、バーサーカーになりました」

倒されたサーヴァントは赤いペンでわかりやすくバツが書かれている。
「この中でセイバーとライダーは同盟関係にあります。俺のプランでは、ここにバーサーカーを仲間に加えてアーチャーを倒す予定でした」
「でも、バーサーカーは敵だったじゃないか。お前、話をつけに行ったんじゃなかったのかよ！」
「マスターが変わってたんだよ」
俺はリモコンを操作し、プロジェクターを起動させる。
「またお金をかけて……」
映し出されたのは、昨晩、機龍が撮った映像だ。そこには蟲蔵の主である間桐臓硯の姿が、令呪と共にくっきりと映っていた。
「俺が交渉した時には確かにマスターが間桐雁屋だった。でも昨日は違っていた」
「つまり……？」
「臓硯が雁屋を殺害したんだろう。そして令呪を奪った」
切嗣さんが答えを言う。
「その通りだと思います」
俺はバーサーカーの新たなマスターとして、間桐臓硯の名前を書き入れた。
「理由は？　最初は息子に任せるはずだったのに突然出てくるなんて……」
「いくらでも考えられますよ。なんてったって、俺自体があの爺さんには恨まれてる。間桐の工房を消し飛ばしただけじゃなくて、次の間桐に必要な桜ちゃんを誘拐したんですからね。もしくはもっとシンプルに、聖杯の解体を妨害するためか」
少なくともわかっていることは、平和的な交渉は不可能ということだ。あの爺さんは本気で動いている。人の道を踏み外した怪人には何を言っても無駄だ。
「アーチャーと手を組んでたら最悪だよな……」
そこは心配しなくてもいいと思うけどな。もし組んでいても、アー

チャーが誰かと共闘するわけないし、そもそも戦いに乱入しようものなら、初戦でバーサーカーのほうがアーチャーの怒りを買っているから、的が増えるだけだ。最悪なのはマスターが2人で襲ってくること。そっちのほうが勘弁してほしい。
「で、それが何で勝算がない、なんて話になるんだよ。サーヴァントの数は全然こっちが上じゃないか」
「フン、ベルベット君。君程度が我が教室の生徒だと思うと、恥ずかしくて私の経歴に傷がついてしまいそうだよ。大方、イレギュラーはアーチャーの宝具対策にバーサーカーの力が必要だと思っていたのだろう？」
「アーチャーの宝具……あの剣を飛ばしてくる奴のことか？　お前が串刺しにされた」
　嫌なことを思い出させてくれるな。
「そうそう。で、それに合わせて思い出すことがあるだろう？」
「えー……」
　ウェイバーは考え始めた。俺の串刺しがそんなに心に残ったのか。確かに残るな。でも重要なのはそこじゃない。
「初戦の夜……」
　アイリさんがポツリと口を開き始めた。
「バーサーカーが飛んできた剣を使ってたわ！」
「その通りです。バーサーカーは手にしたものを自分のものにできる宝具を持っています。俺も似たことが出来ますが、練度が段違いです」
「なるほどな！　それで対抗しようとしたってことか！」
「そういう事。アーチャーの火力にまともに付き合ったら勝てないからな。相性のいい宝具を持っているバーサーカーがいればなんとかなる計算だったんだけど……」
「ダメになったわけか……」
「……」
　いくら英雄王でもサーヴァント3騎相手にバーサーカーの相手は厳しいはずだ。慢心しているところに綿密な作戦をぶつければ行け

ると思っていたのに……ッ。
　しかもそれに加えて、
「セイバーも、な」
「それは……その通りね。相手のバーサーカーにひどくやられたみたいだから……」
　アイリさんが心配しているがその心配は的外れだ。ライダーもわかっているようで目を伏せている。あの時セイバーがどのような状況だったのかはその目で見ていたライダーは、まともに戦った結果だとは思わないだろう。何せ、ほぼ無抵抗で殴られてたわけだからな。
　今セイバーは布団で横になっている。霊体化できないセイバーは普通の人のように休息しなければならないからだ。舞弥さんに一緒に寝ないのですか？　なんて言われたときは心底驚いた。こんなジョーク言う人だったんだなって。
　寝てる間にしといたほうがいいな。
「……そろそろやっとこうか？　アーチャーとバーサーカーの真名公開」
「なっ!!　わかってたのか、お前!!」
「そりゃあ、未来から来たわけだし」
「言ってたら色々と……作戦とか立てようがあっただろ!?」
　君のサーヴァントに口止めされてたんだよ。言いたくても言えなかったんだ。でも、もうその心配はなくなった。セイバーはバーサーカーの顔を見てその真名を口にした。そもそもの話、
「ライダー、アーチャーの真名もうわかってるんだろ？」
「心当たりがあるというだけだ。余よりも態度がデカい王など、そうはおらんからなぁ。それに、あの時飲んだ酒は人の手によるものではない。そんなもんを持っている奴なぞ、あやつしかおるまいて」
「だ、誰なんだよ！」
「古代メソポタミア、ウルクの王、ギルガメッシュだ。そう考えれば、あの無数の宝剣にも説明がつく。奴が生前集めた宝物すべてが――
――いや、集めたという事実そのものが宝具として昇華しているのだろうな。いやはや、征服王としては喉から手が出るほど略奪したいも

のだがなぁ……」
「……正解かどうかは言わないぞ。確定したわけじゃないからな」
「その反応が何よりの答えなわけだが……今回は大目に見るとしよう」
　不機嫌になるかとも思ったが、ライダーはただ笑うだけだ。自分の推理が当たって喜ぶ少年のようだ。
　問題のバーサーカーは、
「バーサーカーの真名はランスロット。円卓の騎士の一員。湖の騎士・ランスロットだ」
「そんな、それで……」
　アイリさんが口元を抑える。セイバーと共に過ごす時間が多かった彼女にはそれだけですべてを察することが出来たのだろう。ほかの面々も、ビックネームの経歴については熟知しているようで、ウェイバーも喉に食べ物が詰まったように苦しそうな顔をしている。あのケイネスさんも、目をつぶって何も言わない。全員がセイバーの心情を慮っている。
「それで、セイバーはまだ戦えるのか？」
「切嗣？」
　一人だけを除いて。
「傷自体は命にかかわるものじゃないので。ただ――――」
「今重要なのはアーチャーおよびバーサーカーを倒し、聖杯を解体することだ。セイバーの事情はそこに関係するものじゃない。昔自分がやったことで、悩んでいる時間はないはずだ。戦力も足りていないんだろう？」
「切嗣！　ダメよ！　そんなこと言ったら……っ」
　そもそも、どちらも倒した場合は聖杯がスタンバイする。下手に倒すこともできないのだ。アイリさんが止めようとするが、切嗣さんの口は閉じない。
「大丈夫だよアイリ。英雄って生き物は人のために血を流すのが好きな生き物なんだ。自分のものも、他人のものも。殺戮を誉れだ何だと謳っている人種だ。しっかりとその役目を果たしてもらわないとね」

「切嗣、あなた……翔君、あなたも何か言って！」
「……切嗣さん。セイバーも人間です。殺戮やなんやらはともかく、人間関係でショックを受けることもありますよ。戦力については……正直その通りなんですけど、あのセイバーを戦わせてもポテンシャルを発揮できるかと言われると微妙で……」
　いくらなんでもこの流れはまずいと思った俺は、無難に諌めようとする。しかし遅かったようだ。ケイネスさんは立ち上がり吐き捨てた。
「フン、自らのサーヴァントもロクに慮れないようなマスターではな。アインツベルンも落ちたものだ。こんな薄汚い魔術使いをマスターにしていたとはな」
「いい身分だな。すでにサーヴァントを失ったマスターというのは。こんな別の生き物の世話を高みの見物出来るんだからな。うらやましい限りだ」
「生き物？　だから貴様はダメなのだ。サーヴァントなぞ、しょせん本物の英霊の影法師に過ぎん。ただの使い魔だ。この瞬間しか存在しない。だが、適切な使い方というものが存在している。それすら理解できず勝利を焦るとは、卑しさがにじみ出ているぞ？」
　……いや、あなたも結構やらかしますけどね？　揉める原因になるので言いませんが。
「問題はない」
　そこに割り込んでくるのは、
「ライダー？」
「あの金ピカとは余が決着をつける手はずになっているのでな。余計な横やりは無しにしてもらおうか。これは王の決定であるッ！！」
「ダメだ！！」
　それに反応したのは俺だ。その戦いの結果を知っている身としては、そんなことを許すわけにはいかない。
「ライダー、あなたはアーチャーには――――」
「――――勝てない、か？　なるほどな、貴様の知っている歴史ではそうなっているのだな？」

「ッ!!」
　迂闊だった。
「そんな歴史は覆さなければなるまい？　この征服王が負けると言われた程度で引っ込むほどおとなしい性格ではないことくらい、とっくの昔に理解できているだろう？　むしろ――――」
　ニカッと笑った。
「――――燃えるタイプだ」
　そりゃ理解できてるし、知ってたさ。だから――――
「だからそうならないために、いろいろと手をまわしてたんじゃないか!!」
　なのに、
「翔。貴様にとってはここは過去の世界で、記録にある事件の１つなのかもしれん。だがな、余たちは今この瞬間を生きているのだ。すべてが貴様の思い通りに進むわけではない」
「違うんだよ。思い通りにしようとしたわけじゃないんだ。俺は少しでも良い結末にしようと思って……」
　このままだと同じだ。死ぬ人数が少し減っただけで結局はほとんど同じ結末を迎えることになる。そんなこと許容できるわけがない。
「……仕方あるまい。翔、表に出ろ」
「え？　……あッ！　戦わないぞ！」
　ライダーの考えそうなことだ。戦って勝者の言う事を聞く。とても単純でわかりやすく、ライダー好みだ。
「互いに意見を曲げられぬというなら、もはやこれで決めるしかあるまい？　何が不満なのだ？」
「そんなことしても意味無いんだよ！　いたずらに魔力を消費するだけだ！」
「翔。それが思い通りにしようとしているという事だ」
「何だって……？」
　そんなわけがない。どう考えてもライダーが言っていることのほうが理論的におかしい。みんなのことを考えれば口約束なんて守っている場合じゃない。負けるって結果がわかっているのにわざわざ

挑むなんて馬鹿のすることだ。
「確かに貴様は正しいことをしているように見える。貴様の行いを見て、悪人だという者は皆無と言っていいだろう。だがな、それはただ、貴様の望む結末へ向けて他人を動かしているにすぎん」
「人は誰だって、その人が望む結末になるように努力してるんじゃないのか。俺だって――――」
「違う。貴様はその行動のすべてを『他人のため』だと言っている。他人のためと言っているにもかかわらず、他人を助けたいという当然の動機がない」
　頭の中にノイズが走る。
「あるのは自分の中にある『幸せなイメージ』に近づこうという意思だけだ。厄介なのは、その意思が強靭で、万人が認める幸せだということだ。誰もその歪みを指摘できん」
　そんなに遠くない昔、確かに俺は小さな、小さなことを――――
「だが、歪みは歪みだ。いずれ耐えきれなくなり、致命的な結果を生むだろう」
「ライダーさん」
　アイリさんの凛とした声が、俺を現実に引き戻した。
「……一度時間を置きましょう。みんな頭を冷やして、それから……それからにしましょう。色々と」
　アイリさんの一言で各々は部屋へと解散して行く。俺も桜ちゃんを連れて部屋を出た。
　すっかり深夜の時間帯、外から聞こえてくる音は何もない。聞こえるのは俺たちの足音だけだ。部屋に向かう途中、桜ちゃんがぽつりとつぶやいた。
「……私のことは、助けてくれる？」
「もちろんだ」
　正面から迷わず答えることが出来た。
「……ありがとう」
　桜ちゃんは安心したように笑った。
　大きな屋敷と言っても、それほど部屋まで距離があるわけではな

い。そして、それぞれの部屋が離れているわけでもない。俺たちにあてがわれた部屋は、ちょうどセイバーの寝ている部屋の近くだった。
襖を開きかけた俺は、ふと思いついた。
「セイバーの様子を見ておこうかな」
「そうだね。お兄ちゃんもセイバーさんにお世話になったみたいだし」
一度開けた襖を閉じようとして――何かに突っかかった。ふわふわとしたものだ。人型だが特徴的な耳がついている。これミ○キーじゃん。ミッ○ーのぬいぐるみじゃないか。少し汚れているけど見間違えるはずはない。
「なんだこれ」
「あれ？　これって……」
桜ちゃんが手を伸ばすので渡してみる。しばらくモフモフ。そしてタグを見るとやっぱりと声を漏らした。
「これ、私のだよ。家族でディズ○ーランド行った時にお姉ちゃんと買ってもらったの」
「ああ、なるほど。そう言う事ね。桜ちゃんのだったのか――」
おかしいだろ。なんでそんなものがここに――ッ!!　これはヤバいぞ!!
「先手を打たれたッ!!　ここはもう敵の射程範囲だッ!!!」

急襲

衛宮切嗣は、車の中で煙草をふかしていた。アイリのために一度はやめた煙草だったが、この聖杯戦争中は別だ。昔の冷たい機械のような自分に戻すための1つの儀式のようなもの。肺に煙を入れると体全体が冷たく冷えていく。

もちろんアイリのことを考え、家の中で吸うようなまねはしない。屋敷のそばに止めた移動用の車で吸う配慮があった。アイリの護衛には、今は役に立たないセイバーの代わりに舞弥がついている。

「……」

虚空の見つめる切嗣は、先ほどの会議での内容を省みていた。

(僕としたことが、いつになくつまらない言い争いをしてしまったな。とにかく、アーチャーを倒す手段を考えなければ……)

車の中の灰皿で短くなった煙草の火を消し、新しい煙草をくわえる。

「ん?」

足で何か蹴飛ばした感触がした切嗣。そこまで大きなものではないが、何となく気になる。一度車を降り、ライトをつけて何があったのかを確認しようとする。

「これは……薬莢か?」

特段おかしいものではない。自分が使う銃の薬莢が転がっていた。ただそれだけのことだ。しかし、だというのに、妙な胸騒ぎがした。

ガシッ!!!

「ッ!!」

突然足首を誰かにつかまれた。ものすごい力だ。絶対に逃がさないという意思を感じるほどの。しかしおかしなことがある。

(地面に立っている僕の足首をつかむだと!?)

そんな真似、能力を使わなければ、地面にはいつくばっていなければできるわけがない。そして足首をつかんでいる手は、車の下から伸びている。車と地面のわずかな隙間に人がいるのだ。

しかし、大きな疑問が浮かび上がる。

（わざわざ能力を使って何がしたいんだこいつは。敵なら、この不意打ちで僕に致命傷を与えることもできた筈……そこまで衰えたとは思いたくないが、近所の悪ガキのいたずらに気が付けなかったのか？）

一瞬驚いた切嗣だったが、すぐに冷静さを取り戻して事態に対処しようとする。

「今すぐその手を離せ。さもなければ――」

「ケリィ」

「――……は、な、に……？」

今度こそ、衛宮切嗣の動きが止まった。鼓膜を震わせる声は確かに聞いたことのあるものだ。幼い日に聴いた、淡い記憶の中にある少女のものと全く同じだった。もう絶対に聴くことのできない声だった。

「なん、で……」

「どうして私たちの島に来たの？　どうして私の目の前に現れたの？　あなた達が来なければ、ずっと平和に暮らせてたはずだったのに――!!」

車体の下から這い出るように少女の体が姿を現す。地面で皮膚がめくれたのか、顔が半分血濡れになっている。その顔が、過去にこの少女を殺めた時のものと重なる。

「シャーレイ……っ!!　幻覚か！　誰の差し金なんだ！」

いつにない大声を出し、まとわりついていた不安を吹き飛ばす。愛銃までは距離があると判断し、ナイフを構えた。

「ダメだろ。そんなふうに腰が引けてたら。そんな構え、教えたことはないよ」

「あ、あ――」

２人目の女性の声だ。するりと切嗣の首に手が回される。いつの間にか後ろを取られていたのだ。この女性の声にも聞き覚えがある。足が震え、耳元で囁かれるたびに脂汗が滴る。

「私を殺したくせに、自分だけ幸せになろうとしたの？　奥さんに娘まで作って」

「ナタリア……っ!!」

切嗣の師であり、とある事件で切嗣が切り捨てる少数になった女性だ。
もはや切嗣に戦う気力は残されていなかった。自分が今まで捨ててきたものが一気にのしかかってくる。そんなものに勝てるわけがない。
「切嗣」
とどめだ。
「と、父さん……っ」
「私を殺したのか。お前のことは愛していたのに」
衛宮切嗣の心は完全に折れてしまった。

「桜ちゃん！　その人形を棄てろ――――!!」
「え？」
警告は遅かった。手にしていたぬいぐるみは形を失い、桜ちゃんに覆いかぶさる。桜ちゃんは薄い繭に包まれてしまった。繭越しに見える表情は、そこまで苦しそうではない。
「桜ちゃん、大丈夫？」
「わかんない……体が重いの。痛いわけじゃないんだけど……」
「体が重い？　いったいなんだ……どういう攻撃なんだ？」
魔術警報が鳴ってないってことは、たぶんスタンドの攻撃だ。牙（タスク）でどうにかなるのか？
とここで、近くにもう1人いることを思い出した。傷を癒すやめに部屋で寝ていたセイバーだ。騎士王の直感なら、相手に襲われればす

ぐに目を覚ますはず。それがないってことは――

「セイバー、大丈夫か!?」

俺は迷わず部屋の中に入った。そこは何の変哲もない部屋――そんな訳がなかった。

部屋の中には押し込まれるように人がいた。今まであふれていなかったのが不思議なくらいだ。部屋の中央に布団を敷いていたはずだが布団どころか、寝ているセイバーの姿すらなかった。

部屋に詰まっていた人たちはケガをしている人もいれば、ガリガリにやせ細った人もいる。中には甲冑を着ている者もいた。全く統一性がない。

「セイバー、何処だ！　何処にいるんだッ!!」

姿が見えなくとも、このおびただしい人はセイバーを狙っているということは直感的に理解できた。このままではマズイ。この部屋にこんなに異常なことになっているということは、セイバーはこの近くにいるはずだ。

今の状態のセイバーではこの事態に対応できるかわからない。一刻も早く合流しなければならない。普段ならもっと冷静に対応できるはずが、俺も前回の戦闘で受けた衝撃が残っているのだろう。どうすればよいのか考えがまとまらない。

しかしここで桜ちゃんが呟いた。

「お兄ちゃん……この人達、みんな同じ方向に向いてるような気がしない？　まるで向日葵が太陽のほうを向くみたい……」

「それだ！　それは最高の『気づき』だッ!!」

こいつらがセイバーを狙っているのなら、今もセイバーに向かって、セイバーを狙って移動しようとしているのは間違いない。だったら、その先にセイバーがいる！

そして部屋にいる亡者、そのすべてが部屋の隅の同じ方向に目を向けているッ！

「そこかッ！　そこにいるんだな、セイバーッ！　牙（タスク）ッ!!」

俺は迷わずに亡者に向けて爪弾を発射した。この人たちの着ている服を見る限り、周辺にいる一般人が操られているという可能性は限

りなく低いと考えたからだ。甲冑を着ている人がそこら辺を歩いているわけがないからな。
　両手の爪弾を撃ち尽くし、道を作る。予想した通り、その先には小さく蹲ったセイバーがいた。とても勇猛果敢な騎士王には見えない。特撮で言えば、襲われていたところをヒーローに助けられる役だ。
　俺は桜ちゃんを背負い、ロードローラーが通った後のように通りやすくなった道を、セイバーまで駆け寄る。ただの少女のようにおびえ、涙を流すセイバー。その口からはいったい誰に向けてなのか、ひたすらに謝罪の言葉が述べられていた。
「セイバー、しっかりしろ！」
「ひっ！　ぁ、イレギュ――――」
「移動する！　捕まれ！」
　言いつつ強引に抱きかかえる。驚くほど無抵抗だ。するりと背中に手が回される。胸にうずめられ、嗚咽の声だけが聞こえてくる。
「王よ……」
「我が王よ……なぜ……」
「何だと……ッ!?」
　我が王だと？　こいつら、円卓の騎士も交じってるのかよ！
　すでに来た道は閉ざされている。俺は闇の魔法（マギア・エレベア）を発動させ、壁をぶち破った。２人を抱えたまま、隣の部屋に転がり込んだ。
　だが、
「こっちにもいるのか……」
　そう簡単に逃がすつもりはないらしい。しかも結果的に挟まれる形になってしまった。こうなったらノックアウトファイターで亡者ごと吹き飛ばすしかないか？
「やめておいたほうがいい、イレギュラー」
　一人の男が現れた。よく見る風貌と比べると、１０年前ということもありだいぶ若いという印象を受ける。だがその目はすでに自分の決意と欲望に従順になるという確固たる意志を持っていた。
「言峰綺礼か」
「その通りだ。招かれざるサーヴァントよ」

ここにきてこいつのご登場かよ。
「お前、まさかスタンド使いなのか？」
「……なるほど。その言葉を知っているということは、貴様もそうだということか。ふっ、どこまで行っても想定外のサーヴァントだということか」
「ああ、いろいろ知ってるぜ。何せ未来から来たサーヴァントだからな。お前は、そうだな……自分の師匠を殺してアーチャーと契約したりしてるだろ？」
今、戦況的に有利なのは間違いなく綺礼。この様子を見れば、屋敷全体にあいつのスタンドの効果があると見たほうがいい。色々あったせいでスタンドのことを説明できていなかったため、他のみんなは自分のことで精いっぱいのはず。応援は期待できないだろう。
ここは会話で少しでもイニシアチブをとらなければ。
「っ！　本当に厄介なサーヴァントのようだな。それとも、未來予知の宝具でも持っているのか？」
綺礼の警戒レベルが明らかに上がった。しかしこの男、サーヴァントを目の前にしているというのに、警戒のレベルが低すぎるんじゃないのか？　今のでやっと普通になったのか？
近くにギルガメッシュがいるようには見えない。あいつほどの英霊なら、霊体化していてもわかるだろうに。
確かに綺礼は強いかもしれないが、サーヴァントが多数いる敵地に乗り込めるかといわれると疑問だ。何か保険をかけているのか？
「スタンド……私がこの力を得たのはほんの少し前だ。だが、この力は通常の戦闘では考えられない、特異な法則によって成り立っていることは理解できた。それに則るとしよう」
――人ハ何カヲ捨テテ前ヘ進ム
――ソレトモ拾ッテ帰ルカ？
「公平に。私の信じる神に誓って告げる。私のスタンドの名前は『シビル・ウォー』。イレギュラーのサーヴァントよ、このスタンドから逃れたければ清潔な水を用意することだ」
「シビル・ウォーだと!?　そういうことか！」

ようやくすべての現象に合点がいった。
シビル・ウォーの能力は標的が過去に捨てたモノ（人、物問わず）を実態のある幻影として召喚することだ。召喚するものはいわばその人にとっての罪の象徴。あくまで本人の認識によって召喚されるものなので、不可抗力だったとしても罪の意識があればどんなものでも召喚されることになる。
つまりトラウマをえぐることに特化したスタンドなのだ。一般人には効きにくいが、聖杯戦争のように心に傷を持った人が多くいる場所では凶悪なスタンドになる。
しかも、それだけではない。このスタンドの真の怖さは、その先にある。そのせいで、本体を倒すという選択ができない。これがあったから余裕だったのか。
しかし、今はこの怨霊の攻撃を何とかして躱さなければならない。射程外に出るまで永遠に襲い掛かってくる。逃げようにも綺礼はそれを許さないだろう。
「どういう能力かはわかっているようだな、イレギュラー。ならばどうする」
「お前こそ、どうしたいんだよ。これじゃあお互いに何もできないぞ。なにせ、シビル・ウォーの効果はお前にも適応されるんだからな」
「心配する必要はない。そもそもこれは試運転だ。戦果が出なかったとしても、問題はない。だが君たち全員の心を折り、再起不能にしてしまえば、あとは我々の好きなようにできるだろう。アーチャーにライダーとセイバーは殺さないよう言われているがな」
ライダーとは決着のため、セイバーは花嫁にするためか。
と、ここで綺礼の表情が違う意味で歪んだ。それは嫌悪や喜びではない。困惑だ。
「なぜ貴様にはシビル・ウォーの効果が出ていない……？　そういうスタンド能力なのか？」
「違う。俺も公平に告白すると、スタンド能力は爪を弾丸のように飛ばすだけだ。そんな効果はない」
簡単なことだ。

「俺はそこまで大層な『罪の意識』ってやつを持ったことがないってだけだろ」
一瞬の沈黙。
「……何だと？　そんなはずはない。サーヴァントになるような人間が、その程度の人生を歩んでいるわけがないッ！」
そんな風に決めつけられても困る。
「実際そうなんだからしょうがないだろ。確かにちょっとやらかしたことはあったかもしれないけど……それに対して罪の意識があるかっていうと、全くない」
それに俺は普通の英霊とは違い生きている人間だ。たまたまこんな世界に迷い込んだ元一般人。そこらへんも計算が狂った要因だろう。
じゃ、そろそろいいだろう。やっちゃってくれ。そこにいるのはわかってるぜ、ウェイバー。
「くらえぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!」
「え、うわぁぁぁぁぁ!!」
何を思ったのか、わざわざ姿を現してウェイバーが何らかの魔術を使ったらしい。とてつもない光はまるでスタングレネードのようだ。大声を出し、威力もパッとしない。あまりにもお粗末な奇襲だ。俺の目は死んだけど。
次の瞬間、目の前を何かが通り過ぎ、綺礼の体を吹き飛ばした……音が聞こえた。たぶんケイネスさんの決戦礼装、月霊髄液（ヴォールメン・ハイドグラム）だ。液体金属の体当たりは、平均的なサーヴァントの一撃に届いていたんだろう。あれはすごく重いし。
「ッチ!!」
綺礼の舌打ちが聞こえてきた。ここまで動けるとは予想していなかったのだろう。スタンドを使い始めて時間が経っていないことが災いしたな。どのくらいの威力か理解できていなかったんだ。
「まったく。いざというときに頼れるのは、おのれの魔道ということか」
決め台詞とともに現れるケイネスさん。顔にシビル・ウォーの影響

でビニールみたいなのが張り付いていなければ完ぺきだった。
「大丈夫か、翔!? お前のガキとセイバーも!」
お前のガキっていうのやめろよウェイバー。なんか誤解を生む表現だろうが。そしてお前もビニールくっつけてるな。
「そっちこそ、大丈夫だったのか?」
「大変だったよ。小さいころ母さんに怒られたときのこと思い出してさ……ブルッ」
「そのくらいで済んでよかったな。ケイネスさんともばっちり連携してたし」
「……あれは、あんな場面だったらしょうがないだろ。緊急事態だったんだ!」
その成長に免じて、俺の目を潰したことは許してやろう。
「下手人は逃げ帰ったようだな。ふん、決闘の礼儀を知らない奴め」
綺礼の方は引き際を理解できていたらしい。
心身ともに疲れ切った。とりあえず、今はゆっくりと休みたいもんだよ……とは言ってられない。アーチャーが綺礼のサーヴァントになったということは終盤だ。おそらく次の戦いが決戦になる。
戦う為には俺たちは本当の意味で団結する必要があるな。

決起

建物の被害が少なかったのは幸いだった。しかし、ゆっくりと休むというわけにもいかない。先ほどの襲撃で、こちらの潜伏場所がここだと相手にばれていることが分かってしまったのだ。呑気にグースカ寝ているわけにはいかない。

選択肢は２つ。

「――――どこか違うところに隠れるか、打って出るか」

ずいぶんと変わってしまった会議の場で俺は言った。全員に覇気がない。特に、いつも驚き役になり場を盛り上げてくれていたウェイバー。敵に襲撃されたという事実が、かなりの衝撃を与えたようだ。おまけに彼のサーヴァントは俺と言い争ったからか、俺に見切りをつけたのかこの場にはいなかった。ウェイバーに聞いたところでは、シビル・ウォーのダメージはそれほどなかったらしい。

「当然隠れるべきだろう」

ケイネスさんが、当然だというように意見する。

「セイバー陣営が事実上の壊滅状態。イレギュラーはライダーとの不和。このような状況で反撃など出来る訳がない」

「でも、じゃあ、隠れるってどうやって、どこに……？」

「教会があるだろう？　令呪を破棄すると宣言して庇護を願い出れば、トオサカと癒着があっても問題はないはずだ」

ケイネスさんは冷静に状況を判断し、そう判断したらしい。だが、そうはさせない。

「忘れたんですかケイネスさん。聖杯が完成したら、大変なことになるんですよ。聖杯に溜まった呪いがこの町を焼き払うことになる」

「むっ」

「それで時計塔に帰ってどう言うつもりですか？　魔術による大災害をあらかじめ予知していたにもかかわらず、おめおめ逃げ帰ってきた、とでも言うつもりですか？」

「くっ」

「競争相手から見れば、格好の餌ですよねっ！　逃げ帰るのはあり得

ないなぁ!!」
　畳みかける。とても苦しそうな顔をするケイネスさん。だが、これで彼に『逃げる』という選択肢はなくなっただろう。
「……ふぅ、ならばどうするつもりだ。何か策はあるのかイレギュラー」
「そうだよ！　先生が言ってたことも事実なわけだし」
　やることは単純だ。
「チームワークだ。団結して戦う。それしか勝つ手段はない」
　２人とも何も言っているんだと言いたそうな顔をしている。当たり前だ。それが出来なくなって今困っているのだから。だがしかし、これしかない。
「勝つには団結するしかないんだッ!!」
「っ！」
「お、おい、どうしたんだよ……」
　驚く２人だが、
「何かを諦めた勝利はいらない！　ここにいる誰かが欠けた勝利はいらない！　無関係の人がたくさん死ぬ勝利もいらない！　諦めた勝利は敗者の勝利だッ！　俺たちは勝者の勝利を掴むッ！」
　だから、と続ける。
「俺に力を貸してほしい」
「お前……」
　俺は精一杯頭を下げた。２人の反応はない。勢いですべて吐き出したような感覚だ。返答を待っていると、別の足音がした。襖の開く音がして、誰かが入ってくる気配がした。
「ラ、ライダー――――」
「それが貴様の本音（願い）か」
　この人には見抜かれていたんだ。聖杯問答で俺が願いとして言ったこと。桜ちゃんがこの先幸せになれますようにって言うのは、俺の願いの一部でしかなかった。まぎれもない本心でも、もっと大本の部分は隠してしまっていた。
「ああ。俺の願いは『望んだ結末で物語を終わらせること』だ。なにも

かも、俺の望んだとおりに終わってもらわないと困る」
二兎は誰でも追いたくなってしまうだろう。しかし大半の人は現実と折り合いをつけ、片方を諦める。俺にはそれが許せなかった。ただ誰かを助けたいというだけではなく、その人の運命を変えたい。世界の運命を俺の考え通りに変えたい。
「何とも欲張りな男だ。何もかも自らの手に収めなければ気が済まないという事か？」
「ああ。この物語の運命は、俺が変える」
何も偽らない。お行儀良くない、他人から見ればお子様だと思われてしまうような考えだ。その考えを宿した目で、ライダーを正面から見る。
ライダーは普段は軽いその口を、重々しく開いた。
「誰より鮮烈なその生き方。それはまさしく王の器だ。そういうものに、人は魅せられ惹かれていく。今後は隠すなよ」
ライダーは俺にその大きな手を差し出してきた。
「このイスカンダル、貴様と対等な同盟を結びたい」
「もちろん。喜んで」
しっかりと握り返した。
俺たちはより強固な繋がりを得たのだった。と、他にも仲直りしてもらわないといけない人たちがいたな。
「ウェイバー、お前も仲直りしておけよ」
「は!?　だ、誰とだよ！」
そんなこと言って、分かってるくせに。俺に言われた時、チラッて横にいる人見ただろ？　その人とに決まってるじゃないか。
「ランサーのマスター。貴様も教えを説く側なのだろう？　しっかりと向き合わんか」
「おいッ！　やめ、やめろ、ライダー！」
抵抗するケイネスさんだったが、ライダーの力に勝てる訳がなかった。あっという間に向き合う形になる。
「……」
「……」

「……あの」
「なんだ」
　ようやくウェイバーが口を開いた。手が汗で湿っているのか、しきりにズボンで拭いている。そのあとも、手を握っては開いてを繰り返している。
「……聖遺物のこと、ごめんなさい。申し訳ありませんでした」
　対するケイネスの答えは、
「許すわけがないだろう」
「ッ!!」
　そりゃそうだ。どう考えても、ウェイバーのそれは軽率すぎる行動だ。終わった時のことなんてまるで考えていない。もしかしてばれないと思っていたのだろうか。ケイネスが生き残った場合のウェイバーがどうなるか分からない。だから、なるべく早めに謝ってしまったほうがいい。
「……だが」
　ん？
「んんっ。だがな、その……先ほどは助かった。私からも、私からも……だな……礼を言っておこう」
「いや、それは……目の前だったから、偶々だったというか……」
　俺とライダーは顔を見合わせてニンマリとした。なんだかんだうまくいきそうだな、この２人。
「残りは任せてもいいのか？」
「ライダー、そういうことできるのか？」
「無理だな!!　ガッハハハハ!!」
　豪快に笑う。俺もつられて笑いが漏れるが、これからのことを考えると身が引き締まる思いだ。
「適材適所だ。俺がどうにかする。ライダーは魔力をためておいてくれ。アーチャーは――」
　ライダーの一番の運命を変える。
「――あなたに倒してもらわないといけないんだからな」

「切嗣……しっかり」
アイリは布団に横たわる切嗣を悲痛な面持ちで見ていた。もちろんスタンドによる攻撃はもう終わっている。今は普通に寝ているだけだ。しかし、苦しむ姿は間違いなく悪夢を見ているとわかる。
子供のように震える切嗣。涙さえ流している。アインツベルンの城に住んでいた数年間では一度も見せなかった顔だ。聖杯戦争が始まって今まで見たことのない顔をいくつも見ることになった。それが良かったか、それとも悪かったかはわからないが。
近くでは舞弥が切嗣が書いた汗をぬぐっている。
「マダム、少しお休みになっては？」
「いえ、大丈夫よ、舞弥さん。みんな頑張っているのに私だけ休むことは出来ないわ」
「そうですか。分かりました」
それきり、話すことがなくなってしまう――――なんてことはなかった。
「あなたは、何を見たの？」
「は？」
「翔君の話じゃ、さっきの攻撃ではその人が昔に捨てたものが出てくるって……あなたは、何を見たの？」
「特に、これと言ったものはありませんでした。私も、ずいぶんとつまらない人生を送ってきたようです。特に思い出深いものがありませんでした」
舞弥は幼年兵として戦っていたところを切嗣に拾われこれまでずっと戦ってきた。人の死に慣れすぎてしまったのか、本当に機械のように人を殺していたのか。数えきれない人数を殺しているはずな

のにその類が出てこなかった。
物についても同様だ。
「そう、なの」
アイリは頷くだけで何か言うことはなかった。今回の場合は自分の話を聞いてほしいのだろう。そう判断した舞弥はそっと耳を傾ける。
「私はイリヤだったわ」
「……」
「捨てたなんて考えたことなかったのにね。あの子の声で言ったのよ。お父さんとお母さんは私なんてどうでもいいのって。そんなことないのに、私たちはあの子を愛してるのに……っ」
アイリは平気そうな顔をしていてもダメージを受けているのだ。自分以上に深く傷ついている切嗣に、必死に見せまいと踏ん張っている。目からこぼれる涙も許さないと、溢れる前に拭った。
「マダム……申し訳ありません。力になれず」
聞き役に徹するつもりだった舞弥は思わず、自分でも無意識に口に出していた。
「っ……ここは？」
「「切嗣!?」」
切嗣が目を覚ました。顔は青白く、唇はカサカサだ。汗のかきすぎで、脱水になってしまいそうだ。そのくらい悪夢に悩まされていたのだ。
「……夢を見ていたんだ」
その凄惨な夢の内容を語り始める。
「世界中を飛び回ってアイリとイリヤと舞弥で――――戦場を巡っていた」
「戦場を？」
「僕のやり方でどうにか頑張った。頑張ったんだよ。結果はいつも通り。少数を殺して大勢の人を救った。でも、アイリとイリヤが……っ」
「……死んでしまったの？」

「初めは応援してくれていたんだ。『つらいでしょうけど頑張って』って。でも、だんだんと、死体を積み上げていく僕を避けるようになって、いつの間にかいなくなっていた。探しに行きたくても、すぐに新しい戦場が目の前に現れる。気が付いたら何もなくなっていた」
殺戮の果てにたどり着くのは無情の孤独だった。初恋の少女を殺し、父親を殺し、師を殺し、死体の山を築き、そんな男に幸福は訪れない。
「僕みたいな人殺しは、幸せになったらいけない人種なんだ。人並みの幸せを求めるなんて……っ」
「いいに決まってるだろ」
「翔君!?」
「イレギュラー……？」
突然現れた翔に一同驚く。
「え、と、い、いつから？」
「すべて話は聞きました」
「あ、最初からいたのね」
「一回吐き出してもらったほうがいいと思いましたから。とりあえずアイリさん、娘さんに電話してもらえますか？」
「え、で、電話？」
いつにもまして行動のすべてが唐突な翔に目を白黒させるが、拒否することが出来ない。
アイリには電話は使えないので遠距離通信の魔術による会話だ。
《もしもしお母さん？　どうしたの？》
「あ、イリヤ？　その、特別用事があったわけじゃないのよ。ただ……声が聞きたくなって」
《えー？　何言ってるのお母さん。変なのー》
「ふふ、そうね。私、何言ってるのかしら……っ」
涙がこぼれていた。あれほど押さえつけていたはずなのに。しかも、娘の前で。母として、嗚咽の声を聴かれるわけにはいかない。
《あ、そうだ！　ねぇママ、そばにキリツグいない？　私、お話ししたいな～》

「えっ！　あ、いるには、いるけど……」
　自分以上に弱っている切嗣をみてためらってしまう。
「あ」
　見かねた翔が、通信礼装をひったくって切嗣の目の前に差し出した。震える手でそれを受け取る切嗣。
「イリヤ、僕だ」
《あ！　キリツグ！　もうっ、出るの遅いんだから～》
「ごめんよ、イリヤ……そっちは1人で寂しくないかい？」
《いーっだ！　寂しいに決まってるでしょ！　キリツグのバカ》
「もうすぐ仕事が終わるから。そうしたら、迎えに行くよ」
《本当!?　私新しい遊び思いついたの！　ねえキリツグ早く帰ってきて？　あと何日くらいかかるの？　ねえねえ》
「もうすぐだよ。終わったら、迎えに行くから」
《……本当に？　約束してくれる？》
「もちろん。約束だ」
　通信が終わった。
「約束しましたね」
「……」
「全部終わったら迎えに行くって、約束しましたね」
「……守れるかはわからない」
　なんとも弱気なことを言う切嗣に、堪え切れなくなった翔は家中に響く声で叫んでいた。
「ふざけるなッ!!」
「ッ!!」
　馬乗りになり、襟をつかむ。
「守れるか分からないじゃあない！　それはもう諦めているんだッ！
　自分で無理だって決めつけて、たった一人の娘を見捨てようとしているんだッ!!」
「……君のプランはもう崩れた。どっちにしろ、もう勝てないだろう。今諦めるか後かの違いだ」
「ッ!!」

翔は拳を振り上げた。サーヴァントの膂力を叩きつけられれば人間である切嗣などひとたまりもない。しかし、それを理解しているはずの切嗣は空虚な瞳で眺めているだけだ。

拳を優しく胸に着地させる。

「昔のことが辛いのはわかる。や、俺がわかる程度のことじゃないんだろう。でも、やる努力が違うんだよ。昔を考えて怯えるんじゃなくて、今いる奥さんと娘さんを守ることが、今のあなたの『努力』なんだよ！　ダメだった時の愚痴は、墓穴の中で言えばいいじゃないか。今やることじゃないだろう……っ！」

「……」

「遠いところで、あなたを信じている人がいる。信頼に答えようとするのは辛いかもしれない、怖いかもしれない。誰かを守ろうとするのは難しいし、やったことがないかもしれない。でも、それだけなんですか？　立ち向かう勇気は沸いてこないんですか？」

「それは……」

翔は立ち上がった。

「お願いします。一緒に戦ってください。切嗣さんが言った通り、俺のプランは崩れました。全員の力が必要なんです」

襖をあけた。

「ライダーがアーチャーに使者を送りました。決戦は今夜です」

翔が部屋から去っても、まだ切嗣は動けないでいた。

「アイリ、僕は……」

「お前、あんなにデカい声出す奴だったんだな」
切嗣さんの部屋から帰ってくると、ウェイバーに出くわした。
「いろいろと抑えてたやつが出てきたんだ。こっちが素だよ」
「昔なんかあったのか？」
「大したことじゃない。部活で同じように周りに言ったら熱くなりすぎてあっという間にいじめのターゲットだ。悪しきジャパニーズ文化だよ。出る杭は打たれるってやつ。だからずっと抑えてたんだけどな」
「ライダーにはお見通しだったわけか」
まったくその通り。正確には裏の真意を見抜かれていたって感じだ。
「そういう事。それから俺はなるべく余計なことは言わないようにして、効率だけでどうにかしようとしたわけだけど……やっぱ人を動かすのは効率じゃなくて気持ちだったかな」
「お前……」
まあその仮面も、ここにきて大分剥がれてたところがあったけど。
「お前さ、１０年後の未来から来たんだよな？」
「ん？　そうだけど。それがどうかしたのか？」
「や、出来たら１０年後にも会えたらなんて、さ」
ここはからかっておくか。
「何だしょうがないなぁ～。まあ、そんなに言うなら？　友達の少ないウェイバー君のために会いに行ってあげることを考え無くないよ～？」
「うるさい！　お前だって、いじめられてたんだから友達いないだろうが！」
おっと、カウンターを撃ってくるなんて、意外に成長したじゃないか。
軽く笑ってその場を後にする。
最後の相手がまだ残っているからだ。
俺は向かった。強情な騎士王が眠っている部屋へ。

騎士王の説得

「セイバー、入るぞ？」
「どうぞ」
　思ったよりも普通の、穏やかな返事が返ってきたことに驚きつつも襖を開けた。違和感を覚えつつも部屋に入る。セイバーは部屋の中央にある布団に横になっていた。服装は良く見たスーツではなく、この前の買い物で買ったかわいらしい白いパジャマだ。アイリさんが着替えさせたらしい。
　セイバーは優しい微笑すら浮かべている。
　嫌な予感がどんどん大きくなっていく。
「体調は大丈夫か？」
「はい、ご迷惑をおかけしました」
　大丈夫な訳ないんだけど……絶対に無理してるだろ。
「なあ、セイバー、無理しなくていいんだぞ？　敵の攻撃の恐ろしさは知ってるし、それがセイバーにとってつらいことだって言う事も。だからさ――」
「だから、どうすればいいんですか？」
　セイバーから反応があった。一度決壊してしまえば、もう止められない。脆い堤防は感情の波を抑えられるほど頑丈ではない。
「私はもうあの剣を握れません。振るえません。もう自分の考えが、自分自身が信じられないんです」
　聖杯問答で自分の王道を否定され、かつての栄光の円卓の騎士はバーサーカーの狂気に歪み、シビル・ウォーには、守ってきたはずの救ってきたはずの人たちにズタズタにされた。
　自分の行いを全否定されたも同然だ。
「私が……っ！　私なんかが……っ」
　してきたことすべてが間違いなら。それによって一つの国を終焉へと導いたのなら。自然と一つの結末にたどり着く。
「王になるべきではなかった……っ」
「そんなわけがない」

だが、俺は間髪入れずに反論した。当たり前のようにセイバーが噛みついてくる。布団から起き上がり、唾を飛ばす勢いだ。
「そんなわけがない……？　適当なことを言わないでください！　私の愚かな理想のせいで大勢の人が死んだんだ！　他の人が王になっていれば、私より、私よりももっとうまく……っ。ライダーの言う通りでした。私に、あの聖剣の輝きは重過ぎた……っ」
ついにセイバーの涙腺が決壊する。一筋の涙が、布団に落ちる。
でもなセイバー、それは見当違いだぞ。
「待て待て。俺は理想云々について何か言ったつもりはないぞ」
「……？　どういう、ことですか？」
勘違いも甚だしい。話を1人で進めすぎだ。俺が言ったことはもっと根本的なところにある。
「セイバーが王になったこと。それは間違いなんかじゃないって言ったんだ」
「……？」
セイバーは何を言っているのかわからないといった様子だ。
「王様になる。意味わからないと思わないか？」
「は、はぁ……？」
「聖剣を抜いて王様になって国を治めてくれ、なんてさ普通は出来ないんだぜ？　話がリアルじゃないし、全部理解したうえで引き抜こうなんて、絶対にできない。たとえその国をよくしたいって考えてても できないんだ」
「……それは」
「勇気なんだよ。それは勇気って感情なんだ。誰でも持っているけど、表に出すのが難しい。マーリンはそれを見抜いていたからこそ、アルトリアを王にしようとしたんだと俺は思う」
「勇気、勇気……」
セイバーは噛みしめるように何度も呟く。
「理想だって別にいいじゃないか。ライダー達とは生きてる時代も、国の状況も違ったんだぞ？　それで同じこと考えてたらそっちのほうがマズいだろ」

「それは、そうかもしれないですね……」
セイバーは今気が付いたとばかりに目を反らした。どう考えてもその場の空気で流されてたな。王様同士の意地の張り合いだったってこともあるんだろうけどさ。
そもそも、同じ王様でも花丸優等生のセイバーと破天荒ライダーでは比較にならないところが多い。ちょっと真面目過ぎるところもあるが。
でも、
「良かったのはそこまでだ。セイバー、騎士のみんなとちゃんと話し合ったのか？」
「え、それは……」
「まさか、自分がそういえばみんな頷くからって、それに甘えてたのか？」
「……はい」
「それはダメだ」
「……はい」
素直に頷くセイバー。とてつもなく従順になっている。心が弱っているところを上げて落として慰める。高等テクニックだね。ククク、計算通りだ――嘘です。狙ったわけじゃありません。
「それでは、どうすれば良かったのですか？」
「甘えればいい」
「は、ぁ、ぇ？　あ、甘える？　それはあなたがダメだと……」
素っ頓狂な声を上げる。何か壮大な勘違いをしているな……違うか、そんな簡単なことも思いつかないくらい、彼女は一人で背負い込んでいたのか。まったく、ハーレムオリ主でもいいから、当時の彼女の世界に行って支えてやれよ。
「違うぞ。相談しなくてもいいってわけじゃないからな」
「でも、それではどういう？」
「簡単だろ。相談すればいいんだよ」
「相談、ですか？」
「ああ。辛さを誰かに分ければいい。素直に表現すればいい。そうす

れば、助けてくれる人はたくさんいたはずだ。間違いを正そうとした人はきっといたはずなんだ。そうしなかったのは、ウン、最悪だな」
「うぅ……」
さっきからセイバーの表情がとても豊かだ。騎士王だったころはクールで凛々しい感じだった。それこそ男装しても似合うと思う程度には。でも今男装したら8割の人が似合わないって答えるだろうな。表情に入っていた力が取れたみたいだ。
かわいい。ギャップ萌え最高。
「かわいい」
「っ」
おっと声に。
「あなたは、簡単にそういうことを言う……前もそうだ」
「そうだっけ？」
ああ、そういえば、この前の戦いでテンパって適当なことまくしたてたことがあったな。内容までは覚えていない――――訳がない。完全記憶能力があるからな。ああ、告白まがいのこと言ったな。
「まさか忘れてしまったのですか？　あの時は何の脈絡もなくに私のことが大切だとか、傷ついてほしくないだとか……誰にでもそのようなことを言っていると、いつか痛い目を見ますからね」
「あんまりふらふらするのはダメってことだな」
俺は心の中の目を全力で逸らしながら答える。もう反らしすぎて白目になってるレベル。この世界のだれよりも言ってはいけないセリフだ。
「当たり前です。円卓の騎士にも、女性と分かれば声をかける騎士がいましたが。まったく、そこさえなければ素晴らしい騎士だったというのに……」
「アハハ……」
思い当たる人がいる。というかそもそも、円卓にまともな人は何人いるんだろうか。
このままセイバーとお話しするのも楽しいが、そうしている時間はない。少しでも休んで魔力を回復させなければ。最終決戦が控えて

いるんだから。
「すこしは楽になった？」
「はい。この戦いが終わったら、円卓の騎士1人1人としっかりと話をしたいと思います」
　それはまた時間のかかることを。ほとんどの円卓の騎士は英霊の座にいるだろうけど、会いに行けるようなもんじゃないし。記憶も……ああ、アルトリアは特別なんだっけか。それでも、そのうち一緒に召喚されるまで待たなきゃいけない。気が遠くなりそうだ。
「それでも、私は待ちますよ。私は時の果てまで人理を守る英霊です。いつの日か、その機会に巡り会えるでしょう」
　とりあえずはこれで大丈夫かな。どうなることかと思ったけど、どうやら最高のコンディションで決戦に臨めそうだ。
「それじゃあ、俺は一回休むから。セイバーも……」
「イレギュラー」
　呼び止められた。
「今回の戦い、勝算はあるんですか？」
「何度も言ってることだけど、厳しいのは間違いない。個々の実力だと敗北は確定する。チームプレーと気合でどうにかしないといけない。犠牲者も覚悟しないといけない」
「本当に？」
　本当に？　とは……？
「本当に、こちらの戦力を上げる手段はないんですか？　何かあるのでは？　私たちに隠している何かが」
「あー……」
　戦力を上げる方法ね。あるにはある。けどなぁ。相手が……いないこともないんだよな、これが。もちろん桜ちゃんじゃなくて目の前にいる――
「いやいやいや。そんな失礼なこと」
　俺は（一部不本意な形があったとはいえ）行為の結果新しい力が手に入るという形にこだわる。決して力のために行為に及ぶことはない。そこは譲れない一線ってやつだ。じゃないと、アイツと同じに

なってしまう。
「失礼？　何が失礼だというんですか？」
「えーと」
　なまじ『何かある』と思わせたのがいけなかったらしい。セイバーの言及は終わりそうにない。逃がしてはくれないな。
「実は、性行為をすると新しい力が手に入るんだ」
「……」
「……」
「……はぁ？」
　長い沈黙の末、訳が分からないといったように首をかしげるセイバー。
「女性とHなことをすると、新しい力が手に入るんだ」
「いえそれはわかりました。はい。わかりましたが……なぜ？」
「や、なぜと言われても……そういう体質だからとしか」
「どんな体質ですか!?」
　俺もそう思う。
「いえ、しかし。冷静に考えればこれは都合がいいのでは……私が女だったことが初めて役に立つのでは？」
　何かぶつぶつと言っているが、これで話は終わりのようだ。
「そういうわけで、セイバーは気にする必要はないから。体調を整えておいてくれ」
「待ってください」
「まだ何か？」
「私がしましょう」
　なんですと？
「パードゥン？」
「問題ありません。これでも、男女の行為に対しては多少の覚えがあります……初めてですが」
　質問に答える代わりに、とても魅力的なゲフンゲフンどうでもよい情報を明かしてくれる。そして残念な俺の息子は、少し期待してしまったのかぴくぴくと血液が集まってきてしまった。

「あのなセイバー。俺はこんな体質だから、行為をするときの動機には結構気を付けるようにしててだな？　戦力アップのために考えてるならやめてほしい」
「イレギュラー、あまり私を馬鹿にしないでください」
　セイバーは起き上がり、きれいな正座をした。
「正座綺麗ですね」
「話を逸らさない」
「はい」
　俺も自然と正座になる。
「私は王です。それはわかりますね？」
「それはもちろん」
「ならなぜその意味が分からないのですか？　鋭いあなたなら、すぐにわかるでしょう」
「……タイミング的に戦力アップだと思うのは仕方ないのです。貴族は下民に着替えを見られてもなんともないっていうし」
　ゼロの使い魔的なアレだ。年頃の男でも、使い魔に着替えを見られてもどうってことないってやつ。
「何を馬鹿なことを言っているのですか。あなたの目の前で着替えなどできるわけがない。じろじろ見られるのは、無理です。あまり、女性として自慢できる身体ではありませんし……」
　自分で言って何かに気が付いたように目を逸らした。セイバー曰く鋭い俺はこの先何を言うか簡単にわかってしまう。
「セイバーの体に不満なんてないからな」
「私の体に不満があって嫌だというのなら……え」
　俺はセイバーをやさしく抱いた。セイバーも俺の背に手をまわしてくれる。その力は徐々に強くなる。
　抱き合ったまま、2人して布団に倒れこんだ。お金に物を言わせて買った高級布団が、乱暴な着地も優しく受け止めてくれる。
「……セイバーの匂いだ」
「っ、ば、ばか。そういうことはしなくてもいいんですっ」
　そんなこと言ったって、匂いがするのはどうしようもない。セイ

バーの羞恥に染まる顔が見れないのは少し残念だが、もう少しこのいいにおいを堪能することに――――
「うわっ！」
「やめなさいと言っているでしょうっ！」
　馬乗りにされてしまった。力の限り抱きしめて押さえつけていたはずが、あっさりとひっくり返された。セイバーの膂力には敵わない。
「おとなしくしていてください。私が、やりますから」
「っ」
　すでにパンパンに張り詰めた俺の息子が、ズボンの中ではねた。幸いおなかに座っているセイバーには気づかれていないとは思うけど。だんだん汗で蒸れてきた。気持ち悪くなって体が動いてしまう。
「どうかしましたか？」
「セイバーのお尻の感触を楽しんでる」
「ひゃぅ!!」
　セイバーは俺の上から飛びのいた。両手でお尻を守るように身構えている。
「全くあなたは。油断も隙もありませんね」
「そんな大層なことじゃないと思うけど」
　と、ここで、
「だいたい――――あ」
　とうとうセイバーの視線が、ズボンのふくらみをとらえた。その意味が分からないほどセイバーは子供ではない。そこが今『どういう』状態なのかを理解したのか、俺の顔とソコを見比べ始めた。
「こういう時は――――」
「ん？」
「こういう時は、やはり順序を守ったほうがいいのでしょうか……っ？　でも、あなたのあそこ、あんなに……」
「そうしないと、セイバーが痛いぞ」
「痛みならいくらでも耐えられます！」
　そうじゃなくて。

「俺がそれを許せない。しっかり準備しないと」
「あ、あぅ」
「で、ではっ！」
セイバーの声が裏返りそうだ。
「その準備をっ、手伝って、もらえますか？」
「喜んで」
俺たちは一度落ち着き、布団の上に座りなおした。セイバーは俺に背を預け、体をがちがちに固くしている。
俺は手を伸ばして無抵抗のセイバーのパジャマのボタンを一つ一つ外し始めた。ボタンは全部で４つある。
まずは１つ目。一番下だ。セイバーも緊張した面持ちで俺の手を見ている。『今からする』と言われて他人に脱がされているのだ。初めての女の子なら緊張して当然だ。１つ目はするりと外れた。
２つ目。ボタンが取れかかると、セイバーの腕がぴくぴくしている。落ち着かないようだ。俺の手を押さえつけたいという意思を押しとどめているのだろう。
３つ目。場所的に胸のちょうど真ん中あたりだ。今まで凝視していたセイバーがとうとう顔を逸らした。目も固く閉じられている。顔の赤さは耳にも伝播している。手を数センチ横にずらせば、セイバーの双丘に触れられるこの状況。何とかこらえた。
４つ目。これが最後だ。
「セイバー、これが最後だぞ」
「は、ぃ。言わなくてもいいので……っ。早く終わらせてくださいっ」
「ん」
急かされた俺は、最後の留め具を指一つで外した。セイバーを守っていた薄布がその役目を果たせなくなっていた。
俺の目の前では、桜色の蕾が不安げに震えていた。

騎士王との　前編（アルトリア・ペンドラゴン）

「そ、そんなに見ないでください……っ」
「これからもっと見られることになるよ」
「わ、わかってます。ですが、そんなに見なくても……」
何か言いたそうなセイバーだが、それでも俺に体を預けてくれる。受け入れる気持ちはすでに出来上がっているのだ。
「じゃ、触るぞ……」
「は、はい……」
胸へ手を伸ばす。まだパジャマは着ているが、そのほとんどははだけており、胸の突起が呼吸に合わせて今にも見えそうな状態になっている。ちらちらと、全体が見えないことが余計俺の気持ちを盛り上げる。
横から包み込むように触れた。パジャマは前が開き、胸はそれぞれ半分が隠れているため、まだ布の上から触れている状態だ。布の上から、人差し指が突起を突いた。
それだけで、彼女がんんっと悩ましげな声を漏らす。がっつきたくなる気持ちを必死で抑えながら、人差し指と薬指、親指と小指の順番で指を付け、ゆっくりと揉みしだいていく。
本人は小さいと気にしているが、程よい大きさのそれは筋肉があるせいか大きさ以上の弾力を掌に伝えてくれる。
「ひんっ、あぅぅっ……」
セイバーもくすぐったそうに身をよじっている。良かった、痛くはないみたいだ。
「セイバー、どう？」
「わかり、ません……っ。ひんっ、くすぐったい感じはしますが……っ、ぁ」
特に不快感は抱いていないらしい。俺の与える刺激にも慣れてきたみたいだし、ここは――
指を進め、硬くなり始めている２つの突起を摘まんでみた。
すると、

「ひあぁぁあああぁっちあああぁぁぁっ!?」
「おっと!」
セイバーが大きく暴れた。首を激しく降り、胸を触る俺の手をどかそうと弱々しい抵抗を見せてくる。
俺はその間も責める手を緩めない。人差し指と中指はずいぶんと摘まみやすくなった桜色の蕾を離さない。セイバーの抵抗を利用して爪でひっかいてやると、抵抗を止めて俺の服をぎゅっと握るのがたまらない。
「そこ……っ、かりかり、待ってくださいっ! 一回、ひぐ、放してぇ……っ!」
「どうして? ここ、いいんじゃないの? ほら、こう、ぐりってすると……」
「んんっ、ひぐっ! んんっ、んんんっ……んあぅっ!」
少し強めに押しつぶしてみる。何とか声を出すまいと頑張っているようだが、頑張りは報われていない。
「指でぐりぐり、ひぅ、あっ、だめだめだめ……っ。やらっ、いっ、イっ、イっ……〜〜〜っ……!」
呂律が回らなくなってきたのか、舌ったらずの甘ったるい声を上げる。何度も何度も繰り返し背筋を弓なりに仰け反らせる。
「あ〜……っ、あ〜……っ、あ〜……っ」
焦点の合わない目でぼーっと虚空を見つめ、口から涎を垂らしながら、一定の間隔で痙攣している。体はうっすらと汗をかいていた。
全身をだらしなく放り出し、脱力している様子はだれが見ても達したとわかる。お堅いセイバーのことだから、多分性的絶頂は人生初だろう。
「セイバー、大丈夫か?」
「っ」
不意を突かれ、セイバーと向かい合って布団に横になる形になった。先ほどの絶頂が抜けきっていないのか、顔が赤い。
「順序がおかしいです」
「はい?」

「脱がせるだけという話では、ひんっ！　話を聞いてください！」
　無意識で胸に手が伸びてしまった。ちょっと乳首に指がかすめただけなのにこんなに反応してくれるなんて。
「Ｈするのに脱がせるだけなんてありえないでしょ？」
「それはっ、そうかもしれませんが……」
「じゃあセイバーは何からしたいの？」
「え、へっ!?　な、何から!?」
　素っ頓狂な声を出すセイバー。まさか自分が聞かれることになるなんて思っていなかったのだろう。
「言ってくれないとわかんないなー。察しが悪い男だからなー」
「まったく！　まったくですよ！　察しが悪い上に、意地が悪い人ですねっ！」
　セイバーは怒りつつ俺の胸をポコポコ叩いてくる。しっかり手加減してくれているあたり、じゃれついているだけだ。
「……キ、――ですか……っ」
「なんだって？　聞こえなかった」
　これは本当に。
「ですからっ！　キ、キスが始めではないでしょうか、はい。順番を考えれば」
　早口でそんなことを言ってきた。
「アルトリア」
「なっ、なんで名前をっ」
「これからするのに、セイバー、とか、イレギュラーなんて呼ぶつもり？　それこそ、『順番』が違うんじゃないの？
「う、た、確かに……っ。あなたの言う通りですね」
　俺のもっともな意見にしばらく考え込むアルトリア。ようやく決心を決めたようだ。目を泳がせつつも、顔を赤くしつつも、俺の方を見た。
「しょ、翔……っ。これでいいです、か？　いいですよね？　次はありませんからねっ！　んっ!?」
　俺は唇を重ねた。少し重ねるだけ。時間で言ったら1秒程度だ。

唇を離したら今度はアルトリアの方からしてきた。あれだけでは足りないと言いたそうに、必死で吸いついてくる。
「んっ、ん、んんっ!? ぁ、ふぅ……っ！」
舌で柔らかい唇を突いてやる。すると一瞬体をこわばらせるが、すぐに脱力して少し口を開いてくれる。迷わず舌を挿入した。
とんでもない熱を持っている口腔。中にある体液すべてが媚毒になって迷い込んだものを麻痺させようとしているみたいだ。唾液まみれの舌が絡み合う。それと同時にお互い抱き合う。
外でも中でも、この瞬間は誰よりも近くでアルトリアを感じている。絶対に放すまいと両手に力を込める。
アルトリアも、両足を使って俺の足に巻き付く。俺の足は太ももに挟まれるだけではない。湿り気を帯びているアソコもぐにゅぐにゅと押し付けられている。しかも、本人にそんな気はないかもしれないが、俺が舌に吸い付くリズムに従って腰を動かすため、俺の足を使った卑猥なダンスを踊っているかのようだ。
「……んちゅっ、ちゅぴ、ちゅる、ちゅぷぷ、じゅるじゅる……んはぁっ」
互いの目の色が変わっていた。俺はもちろんのこと、アルトリアも。抱きしめ合いながらの濃厚な口付けで、すっかりスイッチが入ってきたのだ。舌を絡め、互いの唇をついばみ、熱い唾液と湿り気のある吐息を交換する度に、あの委員長のようなアルトリアは溶かされ、うっとりとした表情になっていく。俺の肉棒もぎちぎちに勃っていて、おへそにぐいぐいと押し付けられていた。
「……ちゅっ、ちゅ、じゅるじゅる……んんっ!?」
俺はアルトリアの下腹部に手を伸ばした。パジャマの中にするりと侵入させ、しっとりと湿った下着を横にずらした。
ふっくらと肉厚のある大陰唇にそっと密着し、その縁に沿ってゆっくりと上下する。くすぐったいような、むず痒いような堪えがたい感覚がセイバーを犯していく。ジワジワと少女のお腹の奥に蓄積していく。
「あ、ぁぁっ……んあぁ……っ」

上から下へ、下から上へ、ひたすら優しく、ゆっくり、ゆっくりと。爪をたてて甘く引っ掻くようにしてやる。
「ひっ、やぁっ――！　い、あぁ……っ！」
陰唇の割れ目を甘く引っ掻かれ、少女の腰がピクッと揺れる。割れ目を這う指先にはしっかりと粘つく液体が纏わりついている。それが奥からドンドン溢れ出してくる。俺の指1本に、騎士王がいいように弄ばれている。
「アルトリア、どんどん溢れてくるよ」
「あふれ、て……っ!?」
「女の子が気持ちよくなったときに出すエッチな汁が。ほら、こうすると……」
「くあぁぁっ！」
ふやけて柔らかくなった媚肉を断続的に爪でひっかきつつ、その指を少しだけ余計に押し込んだ。じゅぶっ、と音がして掌にいやらしい液体がかかる。
「ゆびっ、ゆび、がっ……あふぁっ！」
「指？　指がどうしたの？」
言いつつも手の動きを緩めることはない。ひゅくひゅくと脈動を繰り返す入り口に狙いを定め、膣口から掻き出すように刺激を与える。
「くぅんっ!?」
少し上にあったクリトリスも、すっかり粘液まみれになっている。充血したそれはまるで自分から触ってほしいと言っているかのように顔を覗かせていた。
だから懲らしめるように押しつぶしてみた。するとアルトリアの体が、面白いように跳ねる。入口の収縮も早くなってきた。
「こ、らぁ……っ。くぅ、ひぐっ、人の、体で遊ばないでぇ……っ！　あふっ、ぁ、っ！　あぁぁっ、だ、やら、やらよ……っ！　また……っ！　見ないで見ないでっ、ぁ、イっ――――!!」
限界まで反り返ったアルトリアは2度目の絶頂を迎えた。入口をさまよっていた指に痙攣が伝わり、奥から女の子の蜜が溢れてくる。

下着はとっくにその役割を果たしていない。絞れそうなくらいびしょびしょになってしまっている。
「は～……っ、は～……っ、は～……っ」
　息も絶え絶えにぐったりと、時折体が別の生き物のように痙攣しているその様子は、初めて『色』を教え込まれた少女そのものだ。どんな時も凛として敵にも刃にもひるまない騎士王は、一人の男の指に屈して女にされてしまっている。
「も、もう大丈夫です。始めてください。もう充分ですから」
「うーん……や、でも一応」
「や、な、何を!?　やめっ――あっあっ、あぁっ！　はい、るっ!?　ぬぷってえぇっ！くあぁっはあぁっ！」
　初めてだし、もう少しほぐしておいたほうが良いだろう。
　蜜があふれた小さい穴はすんなりと俺の指を飲み込んでくれた。粘液を潤滑剤にして、絶頂の余韻が残る狭い膣内をこじ開けていく。ようやく獲物が来たとばかりにひだひだが絡みついてくるが、強引に引きはがしていく。
「第一関節まで入ったよ」
「ひっ、ぁ、だい、いち……？」
　一瞬呆けて、意味を理解したとたん真っ赤に染まっている顔の色が少し変わった。
「もっと入れるから」
「ぬ、いて……っ、ぬいて、ください……っ！　や、あ、あっ！　ふぁぁぁぁぁっ！　無理、むり、これいじょ、はいら、なっあ、ああっ、あああああっ！」
　静止の声を聞くつもりはなかった。力を籠め、さらに奥を目指して指を進めていく。
「本番ではもっと太いのが奥まで入るんだから。頑張らないと」
「そん、なっ、はひっ、も、だ、め、なんで、すっ……ぬいて、おねが……あそこから、びりびりって……あたま、おかしく、なりそ……っ！」
　そうは言いつつも、俺の指は暖かい底なし沼に飲み込まれていくよ

うにどんどん咀嚼されていく。この様子を見ると、もうこれ以上の準備なんていらないと思えてしまうが、念には念を入れておこう。
指が一ミリ進むごとに、アルトリアの上の口からはしたない嬌声が。下の口からはとめどなく愛液がこぷこぷと湧き出してくる。
永遠に続くかと思われた指の行進にも終わりが来た。俺の人差し指が根元まですっぽりと飲み込まれてしまったのである。まだまだ奥には到達していないが、指の長さではこれが限界だ。
「アルトリア、指、全部入ったよ」
「はひっ、ふぅっ、ぜん、ぶ？」
「ああ。よく頑張った」
「ありがとう、ひぐっ、ございます、ぁっ」
「じゃあ今から抜いていくから」
「はいっ……え？」
きゅうきゅうくわえこんでいる膣ひだを今度は逆に引きはがしにかかる。俺の指が根元から少しずつ顔を出し始めた。
「あうっ、ひだひだが、うあああっ、ずるずるって……めくれちゃうぅぅ……ひうぅぅぅっ！」
指で広げられていた膣穴は獲物を逃した無念に震え、それに叱咤されたのかドンドン締まりがきつくなっていく。それに負けずに爪がかろうじて中に入っている状態まで引き抜き、何も言わずに再び挿入した。
「あ、ああっ、あっ、あっ、あっあああああっ!?」
じゅっ、ずじゅっと、夜の冷たい空気に粘着質な水音がこだまする。指が襞を絡め取りながら奥へと埋まり、埋まったかと思うと今度は巻き込んだ襞を引きずりながら戻ってくる。徐々に速く、激しく、少女の頭を焼き切っていく。
じゅっじゅっ、じゅぽっじゅぼ、じゅぼっ、じゅぼぼぼぼぼっ!!
「おおおおっっほっっお……ッ!?」
速度の増加は留まるところを知らない。藁にも縋る思いなのか、布団を握りしめ歯を食いしばっているが、その顔はよだれと鼻水に汚れ、食いしばっている歯も、ちょっと指を曲げて深めに抉ってやるだ

けでだらしなく舌を出して乱れる。
「ひいいいっ、やめ、やめええっ……っ！　おおっほおおぉぉっ!?」
　恥骨の裏側、ざらざらとしたところを見つけた。見つけてしまった。ぐに、ぐに、と軽く押し込んでみると、明らかに指に違った反応が返ってくる。アルトリアも理解したのだろう。カタカタと震えて必死に首を横に振っている。
「――――ッ!!!!」
　重く指がのしかかる。がくがくと腰を振りたくるアルトリア。突然、びゅうっと濁った汁が膣から噴き出てパジャマをびしょびしょに濡らした。それだけでは収まらず、シーツにまでシミが広がった。
　Gスポット、膣の中の一番の弱点を的確に踏み潰す。そんな刺激にこの娘が耐えられるはずがない。
「うあっ――あぁああっとまりゃないぃぃっ!!　あああぁぁあああああうぅうう、あぐぅうっ!?　ありゃまのなか、とんれいくっ、わたしひぃいいっ！　ひきゅっ、ぐうぅっ止みゃ、止まっりぇぇっ――んおおああアアァァッ!!!!!!」
　背骨がきしむほど反り返り、アルトリアはこの日一番の絶頂を迎えた。
「あ……う、ぅ……ぁ……」
　全身を小刻みに震わせ、目は虚ろに開かれたまま。膣からは生暖かい液体が流れ続けている。あの騎士王をここまで乱れさせたという事実に、ズボンの中で限界まで反り返ったペニスが震えるのを確かに感じるのだった。

騎士王との　後編（アルトリア・ペンドラゴン）

ぐったりと、精根使い果たしてしまったように体を投げ出すアルトリア。メスの匂いは部屋中に充満し、そこにいるだけでクラクラしてくる。

布団は、おもらししたようにびちょびちょになっていた。この惨状を引き起こしたのはアルトリアの肉壺から出たものだ。清廉潔白だった騎士王が、初めて受けた性的快楽に屈服しきった証だ。

俺はもう待ちきれなかった。ここまでよく我慢していたとも思う。ズボンを下ろしイチモツを取り出す。目の前の獲物を捕らえたのか、先走りがくぷと溢れてきた。

「アルトリア、下、脱がせるよ」

「は、いい……」

続いてアルトリアだ。特に抵抗はないはずなのに、水分を多分に含んでいるからか肌に張り付き脱がせるのに一苦労する。

ようやくズボンを脱がせると今度は、決して人に見せてはいけないところを守る最後の薄布が姿を現した。しかし、もう守れていない。ぴったりと張り付きアソコの形がくっきりと分かってしまっていたからだ。赤く腫れていやらしく下着を咀嚼する口を見て、俺は生唾を飲み込んだ。

「脱がせるよ」

ぬちゃと音が鳴った。張り付いていた下着を少しずつ下に下げていく。粘り気のある液が透明な橋を架け、力尽きて切れていく。空気に触れた秘肉はおしゃぶりを取り上げられた赤ちゃんのように涎を垂らし、咥えるものを求めている。

赤く充血した俺のモノを、セイバーの小さな入り口にあてがった。ぐしょぐしょに熟れ切ったソコは、今か今かと待ち望んでいるように小さく収縮を繰り返している。あまりの熱さに、俺の腰が震えた。

「ん、ふぅ……っ。っ、ぁ……っ」

それはアルトリアも同じらしい。腰を動かしている。もどかしそうな腰遣いで、ちょっとだけ亀頭を飲み込んではいやらしい粘液をま

ぶしてくる。まるで下の口で甘噛みしているみたいだ。
「アルトリア、腰動いてる」
「そんな、こと、ひあああぁっ!!」
滑りが良くなったペニスが縦筋を擦りあげ、顔を出したクリトリスとキスをする。
「あ、あなたがそんなにするから……っ！　もういい、です……っ！　早く始めてっ、ひいぐぅ、ひぁっ、ソコ、グリグリだめですからぁ……っ！」
そこまでせがまれてしまっては、いや、俺の方ももう我慢の限界だ。肉棒の位置を改めて調整し、アルトリアを正面から見る。
「行くぞ、アルトリアっ」
「はいっ、来てください、翔……っ！」
肉棒を掴んで固定しながらゆっくりと体重をかけていく。すると、亀頭がゆっくりとアルトリアの中に呑み込まれていく。熱い感触に亀頭が包み込まれて、衝撃が走った。ずっと育てられていたそこは、ようやくの喚起に震えていた。
「ひぐぅっ……！」
アルトリアが苦悶とも喘ぎともつかない声を出す。
「大丈夫？」
「んっ……はい、大丈夫です……も、もっと、奥まで、お願いします……っ」
「……ん。わかった」
ゆっくりと、慎重に、体重をかけていく。アルトリアはゆっくりと息を吐きながら俺のモノを受け入れていく。さわさわと絡みつくヒダや切なそうに震えるつぶつぶを超える。
初めての女の子特有の締め付けを何とか超えていく。この締め付けには、俺もわずかに気を抜いただけであっけなく出してしまいそうになる。じっくり準備されたこともあって、男根の侵入にアルトリアの膣は歓喜の声を上げ続けている。
やがて亀頭に何か引っかかるものを感じた。俺はそこで腰の動きを一度止める。

「アルトリア、本当に――」
「何度も言わせないでください。あなたなら、あなたになら、いいんです」
切羽詰まった、苦しそうな声でそう言った。ならばもう迷わない。俺は更に体重をかけた。
「んんん……っ！」
アルトリアの呻き声が耳朶を打つ。侵入者を拒もうとする圧力と、メスの本能で奥へ奥へと飲み込もうとする肉ヒダが俺のペニスをいじめてくる。それに負けずにぐぐっと俺の肉棒を押し込んで行く。
「あっ？」
ある一点を通過した瞬間、膣全体が震える感触が確かにあった。今まであった拒む圧力が消え去り、全力で蜜を溢れさせ、ヒダが吸い付き、媚び始める。
しかしアルトリアの方はそうもいかないらしい。俺を抱きしめる腕の力が急激に強くなる。
「うぅぅっ……うぅぅ……っ！」
涙目で体をこわばらせている。身体も強張っている。一人の少女が純潔を散らしたのだ。俺の念入りな準備によって、体の中と外の反応が全く逆になってしまっている。どうにかしてあげたくて、再び唇を合わせた。
「んむぅっ、ひっ、ひっ、んっく、ちゅ、ちゅぱ、んんん……っ」
俺と必死で舌を交わらせる。痛みを紛らわそうとしているのだろう。しばらく続けると少しは表情が和らいだ。余裕が出てきたと判断した俺は、フルフルと震える乳首に指を這わせ、優しくこねくり回す。すると、少しずつ体の緊張が抜けてきたようだ。
「んむぅっ……？　んっ、ふっ、ふぅっ、んん……っ」
悩まし気に身体をくねらせる。熱い歓待を受けていた俺の肉棒を、今度は自分の意思で更なる奥に誘おうとするかのように吸い付き、締め付けてくる。
誘われるがまま、別の生き物のようにうねる膣ヒダをかき分けていく。胸の突起を指で弾くと、それに合わせてキュッと閉まるのがたま

らない。叱りつけるように肉棒を強めに押し込むとすぐに白旗を上げて精を求めて蠢く。
「あっ、やぁっ、なんか、すごっ、さっきと、ぜんぜん、ちがう……っ」
俺の肩を掴み、戸惑ったように首を振る。もうほとんど痛みは感じていないようだ。
「それは良かった……もっと、良くなってくれ」
一気に最奥まで肉棒をねじ込んだ。メス殺しのカリが天井に食い込み、そこに生え揃うつぶつぶをすべてすりおろした。ぷにぷにの子宮口に亀頭がキスする。煮込まれ続け、あとはもう受け入れるだけになっていた子宮口は、俺の亀頭をぱっくりと咥えて吸い付いてきた。
と、
「はおっ、おおほおお……っ！」
口から舌を突き出し、声にならない絶叫を上げるアルトリア。全身が痙攣し、股間から温かな液体が噴き出した。それと同時に肉棒がぎちゅぎちゅと締め付けられ、心地良い快感が頭を貫く。
「アルトリア……イったな？」
「あ～っ、あ～っ、あっ、あっ、あぁっ、ひっ、ひっ、ひっ……」
確認したが、まともな返事は無い。しかしこの反応で十分に理解できた。子宮への強烈な一撃で、僅か一突きで絶頂へと導かれてしまったのだ。腰をぐりぐりと押し込んで突いてやると身体が危険なほどに跳ねる。
ずるずるとゆっくり引き抜いていく。ヒダがめくれ、粘液が逆流して潮と一緒に噴き出る。おなかの中を丸ごと引きずり出しているようだ。
「ぶちゅぶちゅってへぇっ、おにゃか、ずりゅずりゅっ……くにゃああっ、きもひいいっ……ひっ、いいっ」
アルトリアはトロ顔でイキ続けていた。女の子の一番大事なところを蹂躙されて、悦んでいる。
「……続けるぞ」
亀頭だけが膣内に残ったところでそう宣言して、子宮が半分潰れるくらいまで腰を打ち付ける。その瞬間、アルトリアは目を見開いて絶

叫した。
「あああぁっあぁっ!?　ひぐぅっ、んむうぅぅウウゥゥっ!?」
子供を作るための大切なところをサンドバックにされ、アルトリアはただただイった。濁った液はとめどなく溢れ、アルトリアの熱い体に降り注ぎ、冷ましていく。上気した顔は涙と涎に汚れていた。騎士とは思えないほど淫らだが、それ以上に綺麗だった。
俺はアルトリアの腰を掴み、全力のピストンを開始した。
ばちゅっ、どちゅっ、ぼちゅっ、じゅぱっ、ぱぢゅっ……っ！
下品な音が、部屋に響いていた。俺は獣のように腰を振り、必死に快楽をむさぼっていた。極上の名器であるアルトリアのおまんこを味わいつくそうと、俺のいいところを自分勝手に、相手のことなんか考えることなく。
ミミズのように入り組んだ肉をカリでかき分け、子宮がぺたんこになるまで押しつぶす。乱暴に扱われているはずなのに、ぷるぷると歓喜に震える子袋は、全力で孕もうととっくの昔に俺の言いなりだ。
引き抜くときは白く濁った本気汁も一緒に掻き出し、入り口付近にあるGスポットの研磨液になっていた。ここを通り過ぎるとき膣は思い出したようにキュッと閉まり、俺のものを受け入れる前の綺麗な形に戻る。そこから一気に奥まで貫くと、濁った液がびゅっと噴き出す。
「あぁっ！　んっく、ひっく、んひぃっ！　と、とりょけっ、とりょけりゅるうぅぅぅぅっ!!　あひょこ、おかひく、おかひゅくなるうぅぅぅぅっ!!!　くはぁっ、ふあうぅっ……んやぁあぁぁっ!!　んあぁあぁっ!!」
アルトリアはもはやただのマゾ雌になり果てていた。太い肉棒にぐちゃぐちゃにかき回されたことで、真面目な顔の底に埋もれていた才能が開花してしまったのだ。どこをどのようについてもむせび泣き、嬉し泣きして相手を受け入れるしかできないただの雌。
初めての快楽があまりにも暴力的だったからだ。
「アルトリア……っ、俺、そろそろ……っ、出そうだ……っ」
腰を打ち付けながら言うと、アルトリアはこくこくと頷いた。

「っ!!　だ、だひゅて！　ほにゃぁ……で、出りゅにゃら、おくに……きもひ、よひゅぎぃ……にゃ、にゃひかぁ、でひぅ……っ！」
俺の言葉にアルトリアの声に歓喜が混じる。おまんこもざわざわとおののき、ラストスパートをかけてきた。それにより俺も一気に高められた。
「アルトリア……っ！」
打ち付ける速度は最大限に上げる。打ち付ける深さもだ。汗だくになりながら、限界まで反り返った息子を、感覚がおかしくなり始めた腰で。それでも。
「ふにゃあぁあぁっ？　とまんにゃいいっ、きもちいいの、とまんにゃいにょおぉっ!!　くひゅうぅうぅうっ!!」
汗ばんだ身体を密着させ、唇と合わせて中に舌を挿入する。体液を交わらせ、匂いを絡み合わせる。
「うっ、く……もう、出る……っ！」
「あっ、あああっ、イ、イっちゃう、イっちゃう、イク、イクイクイクうぅうぅうっ――っ!!!!」
ごちゅうっ!!　と亀頭が子宮口にめり込んだ。それと同時に、押さえつけていた欲望が堰を切ったように吐き出された。
あまりの快感に、目の前に火花が散った。白くねばついた欲望の塊が、アルトリアの子宮に叩きつけられる。射精が始まると、膣がそれに反応してあらん限り搾り取ろうと収縮して、根こそぎ吸い出してくる。
ごぶぶっ、ごぶっ、ぶりゅりゅっ、どぶっ、どぶっ、どぶっ。
肉棒が波打ち、とてつもない満足感と幸福感に浸りながらも、唾液の交換は終わらない。
やがて射精が終わり、萎えかけた肉棒を秘裂から引き抜いた。すると白濁液がごぶっと溢れ出す。素直な息子はその光景を見ただけで力を取り戻してしまった。
でも一回の射精でこれだけ出したのって久しぶりだな。射精後のぼんやりとする思考でそんなことを考えていると、下腹部に刺激が走った。

「っ！　ア、アルトリア……っ？」
　あれだけイき狂っていたアルトリアが、再び反り返った俺の肉棒に、その細い手を這わせていたのだ。
「ちょっ、こ、こら、お前何を……うおぉっ……っ！」
　射精によって敏感になっているペニスに細かい快感が走る。アルトリアは顔を真っ赤にして、ちらちらと俺の肉棒に視線を向けている。凝視したいのを我慢しているようだ。もしかして、今まで自分の中で暴れまわっていたモノに興味があるのだろうか。
「翔、その……もっと、出来ますか？」
「は、や、お前、さっきあれだけイって……」
「いえ！　大丈夫です！　今度は私が上に……っ」
　や、そういう問題じゃなくてですね。戦いにまで影響があったら困るって話なんだけど。
　何も言わないのを肯定と捉えたらしいアルトリアが俺の肉棒の真上に立ち、ゆっくりと腰を下ろしてくる。
　……うん、まあ良いか。大丈夫でしょ。本人が言ってるし。
「あぉ……んんんん……っ！」
　俺の腹に手を添えて、恐る恐る腰を下ろしてくる。赤みを帯びたヒダに肉棒がくむくむと食べられていく。ところどころに、先ほどの跡が残っている。あのアルトリアが自分からあさましい行為にふけっていく様に、思わず息を呑む。亀頭をすべて飲み込むと、美しいラインを描いていたお尻がフルフルと震えていた。
「さ……さっきと角度が違って、これ、すごっ……すごいです……っ」
「さっきはあんなにイき狂ってたもんな」
「っ！　ち、違います！　そんな、そんなことは……っ！」
　さっきの様子と見たら、１００人中１００人がイったと答えると思うが。それでも否定するのかこの娘は。いいでしょう。だったら、
「そっか。じゃあアルトリアは俺がイっていいって言うまで我慢できるの？」
「……え」
「もちろんできるよね？」

「ぁ、その……」
亀頭を飲み込んだだけで愛液が滝のように流れているこの状態で、そんなことが出来る訳がない。喋っている最中でさえも、ふるふると震えながら、亀頭を咥え込んだまま愛おしそうに腰を前後左右に振っているのだ。もう快感に逆らえなくなっている。
しかしここで『できない』と言う選択肢は、アルトリアにはない。自分から『したい』と言った手前、やっぱりやめるということもできないだろう。
「……わかり、ました……っ」
歯を食いしばって、絞り出すように答えた。一度奥をノックされてしまえば、だらしなく歪むというのに。
とはいえ、俺の方にも余裕があるわけではない。先端だけがきちゅきちゅと締め付けられ、射精したばかりの肉棒が歓喜で震えている。相当気合を入れないと、俺のほうが先に果ててしまいそうだ。
「ふぅっ、くふぅぅ……」
頬を朱に染めてゆっくりと肉棒を飲み込んでいく。じっくりと味わっている姿を見ていると、我慢が出来なくなり思わず腰を突き上げたくなる。だが、それをしてしまっては俺の負けだ。欲望を抑え、じっとしている。
更に腰を沈ませていく。あれだけ入念に教え込んだはずの雌穴だったが、変わらない締め付けで俺の息子を歓迎してくれる。むしろ味を占めたように収縮し、俺から精を搾り取ろうとしてくるくらいだ。
みしみし、と肉をそぎ落としながら熱い棒がアルトリアを串刺しにしていく。とここで、快楽で力が抜けてしまったのか、2センチほど一気に掘削してしまった。肉粒が強引に引きはがされ、膣内の痙攣が危険な段階になる。よくこれで一気に達してしまわなかったとほめてあげたいくらいだ。
「も、げんか、い……っ、です……っ」
半分も入っていないというのに、もうギブアップの白旗を上げてきた。しかしそれは俺のペニスにもしっかり伝わってきていた。

断続的に膣内が痙攣し、限界と言いつつも腰を振って快楽を追いかけている。腰もがくがくと震え、口元の涎を気にする様子もない。高潔さなどどこにもない、イく事しか考えていない女の動きだ。
「……ぁ」
限界が来たのだろう。ふっ、とアルトリアの足から力が抜けた。膣圧も重力の重さまでは支えきれない。
「――――あ……っ！」
どちゅんっ、といやらしい音を立てて、肉棒の先端が子宮の入り口を抉じ開けた。その瞬間、一気に締め付けが強くなり、俺の股間が生暖かい液体に濡れる。
「あっ、あっ、あっ、あぁっ……」
何度も何度も子宮をつぶされてイったアルトリアに、耐えることなどできなかった。唇を慄かせ、全身が壊れてしまったように不自然に痙攣する。
あまりにも卑猥な光景にもう我慢が出来なくなった俺は、アルトリアの引き締まったお尻を鷲掴みにした。ぐいと持ち上げると、腰の突き出しに合わせて一気に引き下ろした。
ごっちゅっっ！　という激しい音と共に、
「ほおおおおぉぉぉっぉ!?」
アルトリアが目をむいて悲鳴に似た喘ぎ声を上げる。糸が切れた操り人形のように、俺に倒れこんでくる。それに構わず、お尻を持ち合げ、再びねじ込んだ。その度にアルトリアの身体は跳ね上がる。
体をすっかりと屈服しきって、子種をねだってくる。さっきあれだけ出したというのに、おなかの奥の口をパクパクさせて。今ぶちまければ、サーヴァントでなければ確実に子供が出来てしまっているだろう。
その期待に応えるために、腰と手の動きを速める。
ずぱんっ、ぐじゅぽっ、じゅぱんっ、ぞりゅ、じゅるる、ばちゅんっ、じゅぐぐっ。
「ほぎゅ、あぁぁっ！　あっ、かはっ、あぇっ、い、いき、出来なっ……！　こわ、こわれりゅうぅぅっ!!」

抵抗する力も無いのかただ喘ぐ。しかし本能がそうするのか、腰をグネグネをいいところにこすりつけようとする姿はあさましく、いやらしい。俺にとめどない興奮を与えてくれる。
膣内はもう早くだしてくれとせがんで、縋りついてくる。薄情な肉棒は、頭を下げる肉ヒダを1つずつ丁寧に足蹴にしていく。
「また出すぞ。良いなアルトリア。奥に出すぞ」
俺も限界が近付いてきたので呼びかける。
「ひきゅ、ひきゅ、ずっと、ひってるからっ、らひてぇ……っ、もっ、むりりゃからぁっ、あやく、らひてぇっ……」
アルトリアは何度も頷く。
俺の肉棒に限界が訪れた。
「イくぞ……っ！」
白濁液を噴射するその瞬間、しばらく弄っていなかった2つの突起を摘まんで引っ張る。
「ほきゅぅぅっぅぅっぅぅ!!!!」
今日最高の締め付けを見せた膣内を一気に貫き、アルトリアの子宮に、大量の白濁液を噴き出した。その量は、先ほどの射精がなかったかのように多く、濃い。
「おにゃか、あついいぃぃ……っ、おくがたぷたぷって……っ」
色に狂っていたアルトリアだったが、その顔は確かに幸せそうだった。

最後の休息

寝不足だった。空はすっかり明るくなっているというのに、あくびが止まらない。

セイバーを説得しに行ったのが結構な夜中だったというのに、そのあと行為までしてしまったのだからしょうがない。決戦の予定日は今夜だから、お昼寝でもすることにしよう。

すべての行為を終えた俺とセイバーは、大慌てでその場の後処理をすることになった。様々な液体で汚れてしまった布団を物理的に処分し(それしか方法がなかった)、足腰に力が入らなくなってしまったセイバーをお風呂場まで連れて行きシャワーを浴びさせた。

同じく汚れたパジャマは洗濯機に突っ込んだ。そこまで済ませた結果、空がすでに明るくなってしまっていた。

ともあれこれで元通り、処分してしまった布団さえ買い直せば。

「おはよう」

「おはようございます」

俺とセイバーは2人で一緒に居間に入り、あいさつする。

違和感を感じた。

なんでみんなこんなによそよそしいんだ？　唯一違うのはケイネスさんだ。あの人もこの異様な雰囲気に困惑している。そして、何でそんなにウェイバーは眠たそうなんだ？

「おいおい、ウェイバー。どうしたんだ、そんなに眠そうに」

セイバーはセイバーで、アイリさん達のほうに向かった。俺はウェイバーのほうに行ってみる。

やっと開いているというくらいに細められた瞼の奥の目は、俺を非難しているように見える。はて、何かしてしまったか。

「お前、さぁ……」

「なんだよ」

ものすごく何か言いたそうだが、それ以上言葉にしてくれない。苦虫を１０匹ほど噛み潰したような顔をしている。少し老けたかな、ウェイバー君。首をかしげていると、ライダーがすり寄って肩を組ん

できた。
「翔、貴様……なかなかのやり手ではないか。ん？　まさか、あのお堅い騎士王すら落としてしまうとはなぁ」
「……え!?」
　ライダーとは思えない小声でそんなことを言ってきた。そこまで言われれば分かる。分かってしまう。
「昨日の、聞こえてたのか？」
「もうバッチリと。ったく、いったい何しに行ったんだよ……」
「なーんもわかっとらんのう、坊主は。男が夜、女の部屋に行くというのはそういう事だろう？　成功するかは男の度量次第だがな」
「で、２人は眠れなかったと」
「まさか。余はその程度何とも思わんわい。だがな……」
「眠れるわけないだろ！　あんなのずっと聞いてて平然としてられるほうがおかしいだろうが！」
「それでせがませれてな。夜の街に繰り出していたというわけだ」
　そのせいでウェイバーが眠そうなのか。そいつは申し訳ないことをした。しかし、まったく対策してなかったのを忘れてたな。俺の家は基本的に防音完備だから。
「で、どんな言葉を囁いた？　包み隠さず白状せい」
「それは本当に勘弁してください」
　流石の俺も、自分の情事をべらべらと他人に話すほど大物ではない。
「しかも、お前らだけじゃなかったんだよ……」
「は？」
　俺達だけじゃない？　って、まさか！
「アイリさん達か？」
「……ああ」
　……わあ。爛れた空間になっていましたね昨夜は。そして無意識に選択肢から外していたケイネスさん、申し訳ない。
　いや、まあ、うん。昨日の流れから言えば、そうなってもおかしくないよね。決戦前にする人は珍しくないよね！　ね！

そう言えば、あの場には舞弥さんもいたよな？　席を外してたんだろうか。それとも３Ｐ……おっとこれ以上はいけないな。
「別に、他人が、その、そういうことしててもどうでもいいっ。本当だぞ！　どうでもいいけど、周りの人のことも考えろよな」
「ホントにすまん」
これぱっかりはウェイバーの言う通りだ。
「なあに、気にするな翔。坊主がまだまだガキだというだけだ。夜なんて――――」
「バ、バカ!!　その話はするなよ！」
何やら夜に楽しいことがあったらしい。これは攻守交替して――――
「お兄ちゃん」
その一言に背筋が凍った。
「さ、桜ちゃん」
振り返ると、そこには俺のマスターである桜ちゃんが立っていた。しかもすさまじく不機嫌なオーラを出している。何も言わなくてもわかる。これはアカン奴だ。触れ方を間違えば、即座に爆発する危険がある。
「お兄ちゃん、昨日何処にいたの？」
「ど、何処って……？」
「何で昨日一緒に寝てくれなかったの？　いなかったよね？　布団に帰ってこなかったよね？」
確かにその日はもう遅く、襲撃もないだろうと考えたため、桜ちゃんには先に眠ってもらっていた。会議が終わったら一緒に寝るとも言っていた。
ウェイバーに視線で助けを求めるが当然のようにスルーされる。
もはや場を支配しているのはこの小さい女の子だ。圧倒的な存在感によって他人の口答えを許さない。
「か、会議が長引いちゃって――――」
「嘘」
とっさに口から出てしまった嘘は、ぴしゃりと切り捨てられる。

「私見に来たもん。遅いなぁ、って思って見に来たもん。でもいなかった。なんでそんな嘘ついたの？」
こ、怖い……っ！
「セイバーさんの所にいたんだよね？」
「さ、桜、私が引き留めてしまったんです。申し訳ありません。そのような約束があったとは全く知らず」
名前を出されたセイバーはこれ以上広がらないようにしようと思ったのか、助け船を出してくれた。しかし、今の桜にはそれは逆効果だった。
「お兄ちゃんに弄られて、あんなに大きな声出して、そんな人だったの？　セイバーさん」
桜ちゃんのストレートな言い方に、セイバーは顔を真っ赤にして口をパクパクさせている。あの時の声が屋敷中に聞こえていたことを知っているのかはわからないが、これは違った意味でセイバーの精神に深刻なダメージが入りそうだ。
なまじ蟲のせいで年の割にその手の知識を持っている桜ちゃんは強い。
「アソコにお兄ちゃんのおち○ちん入れて――――」
「翔、助けてください……っ」
結局、俺が土下座して、一緒にお昼寝する約束をして許してもらった。

朝のひと悶着が終わった後、俺は切嗣さんに呼び出されていた。対面に座る切嗣さんは腕を組み、何かを考えこんでいる。
座った後もしばらく黙ったままで、一向に話が始まらない。
「それで、お話というのは？」
「アーチャーの今のマスター、言峰綺礼についてだ」

「……」
切嗣さんにとって、とてもデリケートな話題を出してきた。というのも、
「本当に、切嗣さんに任せてもいいんですか？」
朝食を食べながらの会議で、切嗣さんは自ら綺礼の相手を申し出たのだ。俺はいくら戦うことが出来る状態になれたといっても、シビルウォーの相手はきついのではないかと思ったのだが。
「スタンドか。確かに、あんなものを持ち出されては、僕に勝ち目はないだろう」
「なら……」
「……君は他人にスタンド能力を発現させることが出来るらしいな」
「まさか――――」
「僕に、スタンド能力を発現させてほしい」
とんでもないことを言ってきた。
「言っておきますけど、誰にでも発現するわけじゃないですよ？　発現しなかった場合は死ぬこともある。それでも――――」
「それでもだ。僕にも意地がある。いつまでも逃げ続けて、イリヤを迎えに行くことは出来ない」
俺をまっすぐ見てきた。そこまで言われてしまうと、これ以上何か口をはさむのは無粋だ。
俺は『矢』を取り出しそれを畳に置く。久しぶりに見たが、相変わらず見えないパワーを纏っているように見える。
「この矢に貫かれれば、スタンドが発現します。気持ちの整理がついたら、使って下さい」
「……ああ。分かった」
それだけ言って俺は部屋を後にした。使う使わないは切嗣さんの自由。その覚悟を見たからには手助けしないわけにはいかない。
よし、次は……桜ちゃんとのお昼寝か。俺もそろそろ限界だったし、決戦までゆっくりするとしようかな。

「で、何でセイバーさんがいるの？」
「な、何でかなぁ……？」
布団に入るとなぜか狙ったようにセイバーが訪れ、自然な流れで布団に入ってた。桜ちゃんの視線がとても痛い。穴が開くレベル。
「何か問題が？」
「ふんっ！　問題があるのはセイバーさんじゃないの？」
俺を真ん中に言い合う２人。２人それぞれ俺の腕を抱いている状態だ。それぞれが自分のものだと主張するように体を擦り付けてくるのでたまったものではない。
でもこの場で間違いを起こすわけにはいかない。もう眠気も限界だし――――

目が覚めた。２人はまだ眠っている。寝る前にあれだけ騒いでいたのが嘘みたいだ。２人とも、憑き物が落ちたみたいな穏やかな顔で寝息を立てている。
「喉乾いたな……あ」
窓の外に嫌なものを見てしまった。
「『蟲』の知らせってか？　ったく」
俺は２人を起こさないようにこっそりと布団を抜け出した。

蟲に導かれるまま、この場所にやってきた。俺が消し飛ばした間桐邸跡だ。ここまでくれば分かる。あいつがいることが。
アーチャーと同じくらいの障害。桜ちゃんにとっては倒さなけれ

ばならない存在。
「おい！　どこにいるんだっ！　臓硯！」
「そう喚くな、イレギュラー。近所迷惑になってしまうではないか」
蟲が集まり、臓硯が現れる。当然バーサーカーも一緒だ。
「何の用だよ。俺たちはこれからアーチャーと戦う予定なんだ。手短に済ませてくれよ」
俺は心にもないことを言う。
「ほほう。そうかそうか。それはすまないことをしてしまった。貴様はその戦いには参加できそうにないな」
バーサーカーが1歩前に出る。それだけで十分だった。俺はゲーマドライバーを取り出し、腰に巻き付ける。
俺は電話をかけた。出たのはウェイバーだ。
「今からバーサーカーと戦闘に入る。時間までに戻らなかったら先に行っててくれ。作戦に変更はない」
《は？　ちょ、何言ってんだ――》
こっちが出した果たし状をすっぽかすなんてありえない。ここで逃走を選んでも予想できないタイミングで横やりを入れられるかもしれない。戦力的にも因縁的にも俺が戦うことが最善解だ。
「お前は死ぬ。今日、ここでな」
「つまらない冗談だ、臓硯」

セイバーとライダーは決闘の場所に赴いていた。結局翔は時間になっても帰らず、やむを得ず二人でここに来ることになってしまった。
ライダーは自慢の戦車に、セイバーは鎧を着込み、聖剣を地面に突

き立てている。
　時間丁度に、ヤツが現れた。
　闇夜にあってもなお輝きを失わない金色の甲冑。むしろ日が出ているときよりもその輝きが映えているようにも感じる。しかしそれを着るサーヴァントはそれ以上の存在感を持つ。
「来たか……」
「アーチャー……っ」
　何度も見せつけられた実力の断片は、あのライダーをも緊張させるには十分だった。２人は同時に息を吐き緊張をほぐす。
　ライダーは戦車から降り、前に歩き出した。セイバーは横目で見つつも、何も言わずに見送る。アーチャーも同様だ。
「やはり、最後に我の前に立つのは貴様だったか」
「はは！　当然だ。いかに古今東西の英霊と言えど、この征服王に勝るものは、そうおるまい？」
「勘違いするなよ、雑種。貴様は我の決定に従っただけのこと。それ以上でもそれ以下でもない」
　軽い挨拶を交わす２人。アーチャーは血色の目を細め、ライダーは豪快に笑った。
「で、だ。話は変わるが……アーチャー、あの時の酒はまだ残っているな？」
「なに？」
　アーチャーは一瞬眉を寄せるが、瞬時に理解した。聖杯問答の時に飲み交わした神代の宝酒だ。
「流石は簒奪の王を名乗るだけはある。ヒトの持ち物には目ざといな」
　アーチャーは苦笑してあの時使っていた酒器一式を取り出し、酒を注いだ。無言で杯を打ち合わせた。まるで決闘の前に騎士が剣を合わせるようだ。
「まさか、セイバーが貴様の軍門に下るとはな」
「あぁ……それなぁ。優秀な交渉人を朋にすることが出来たのでな。ああ！　そうそう！戦っている最中に１人増えるやもしれんが……」

「良い。雑種の1匹や2匹、我の前では数にならんからな」
どさくさに紛れて、翔の途中参戦を取り付けるライダー。抜け目のない男である。
「フン。何処まで行っても貴様と我は正反対のようだな。むやみやたらに他人を朋と呼ぶその軽薄さ。我にとっての盟友はただ1人であり、それ以外には必要ない」
「孤高なる王道か……ならば余は、その王道に敬意をもって挑むとしよう」
「存分に己を示せよ征服王。貴様は我が審判を下すにたる賊だ」
そこまでなら良かった。続く言葉に、ライダーは仰天することになる。
「我が貴様を下した後に、あの女を――――セイバーを貰おうか」
意外過ぎる一言にライダーはきょとんとする。
「どうしたアーチャー。まさか、セイバーに惚れたのか？」
「強く、美しい。実に我好みの女だ。このようなくだらん闘争に呼ばれたことは不本意だったが、セイバーに出会えたことは幸運だったぞ」
そのセリフに、ライダーは吹き出しそうになるのを我慢するので精いっぱいだった。セイバーが既に他の男のお手付きだと知ったら、どんなことになるだろうかと想像してしまったのだ。
「どうした、ライダー」
「いや、何でも、ないっ。よかろう、もとより勝者の言うことは絶対。逆らうことなど出来はしない」
何とか体裁と保ちつつ返答する。アーチャーは疑わしそうな眼をしていたが、特に何か言うことなく背を向け、元の場所に帰っていった。
「いったい何を話していたのですか？」
「いや、なに、たわいもないことだ……あの金ピカめ、貴様に惚れているらしいぞ？」
「は？　アーチャーが、ですか？」
そんなこと考えもしなかったセイバー。そもそも、決戦を前にして

何を話しているのだという気持ちになる。
「まあすでに貴様には翔がいるからなぁ。あんな金ピカにはなびかんだろうとは――」
「あああああ――――!! それ以上は言わないでください！」
まるで初恋を母親にからかわれたように取り乱すセイバー。
「そんなことはっ！ 今はっ！ どうでもっ！ いいですからっ！」
「わかったわかった。翔が心配なのはわかるが、そう取り乱すな」
「～～～～～～～～～～っ!!」
口をぷるぷるさせて固まってしまうセイバー。これ以上からかうと聖剣を持ち出されると直感したライダーは、適当に切り上げる。
セイバーも、すぐに落ち着き元の平静を取り戻す。
「行くぞ、セイバー」
「はい」
ライダーは剣を掲げた。
「集えよ我が同胞！ 今宵、我らは最強の伝説に勇姿を印す！」
魔力の奔流が迸る。周囲が塗りつぶられていく。視界が晴れた時には、すでにどこまでも広がる大平原へと世界が変貌していた。
途方もない数の軍勢が後ろに控え、地を震わせるほどの喝采が、どこまでも青い空に溶けていく。士気はこれ以上ないほどに高い。
先頭に立つライダーが神牛に鞭を打った。
「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ!!」
最強の軍勢が進軍を開始した。

穢れた奇跡の決戦　臓硯編

《Ｄｕａｌ　ガッシャット！》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
「ＭＡＸ大変身」
《ガッチャーン！　マザル　ｕｐ！》
《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ！》
　俺はパーフェクトノックアウトに変身する。さらに、
《ステージセレクト！》
　エグゼイド系のライダーには装備されているステージセレクト能力を使って場所を移す。数秒もすると、そこは人気のない町工場へと変わっていた。
「む、これは……」
「余計な被害が出ると困るからな」
　ガシャコンパラブレイガンを取り出す。ここなら全力で戦える。腰を落として俺も戦闘態勢をとる。
「全力で戦える、か。いったいどの程度戦えるものかのぅ……バーサーカー、やれ」
「■■■■■■■■――――――――!!!!!」
　ライダーに変身してなお霞むほどのスピードで突貫してきた。闇のオーラを置き去りにして、その剛腕が唸りを上げる。対する俺は高速化のエナジーアイテムと固有時制御を併用して迎え撃つ。
　いつの間に拾っていたのか、その手には鉄柱が握られている。強引に捩じ切ったのか、鉄の棒の先は歪に鋭利な形状をしている。魔力が行きわたったそれは、単純な力で振り下ろされたとしても十分すぎる威力を持っている。
　俺たちの武器の風圧に、機械に溜まっていた埃が吹き飛んだ。
　滑るように獲物を持ち替えるバーサーカー。刺突の構えをとる。瞬きの後には貫かれているだろう。

嗤って前に出た。
「■■■■――――」
持ち替えた分、俺の拳のほうが早い。
灼熱の拳を繰り出した。
《分身》
吹き飛ぶ先に待ち受けるもう1人の俺。
「オラァッ!!!」
渾身のアッパーで上空に打ち上げる。
「波ァァァァァッ!!!」
元の俺が圧縮した火炎を放出する。バーサーカーは声もなく焼き尽くされた。それでもまだ力尽きていないのはさすが円卓の騎士だ。しかし鎧は熱によってところどころ赤くなり、這いつくばることしかできていない。
「な、なんだと……っ!?」
臓硯は目の前で起こったことが理解出来なかった。一体イレギュラーサーヴァントに何が起こったのか、バーサーカーをこうも圧倒できる実力などなかったと思っているのだろう。
「貴様何を……ッ!!」
「言うと思うか?」
その秘密はライダーへの変身と闇の魔法（マギア・エレベア）の併用。基礎能力を上昇させた上で仮面ライダーに変身した。しかし、それだけではない。俺の体には今までにないくらいのパワーが満ち溢れている。
それは理由があるものではない。あえて言うのならば、
「今日の俺は、絶好調ってことだッ!!」
《１０連鎖！》
光弾をばらまく。不規則な軌道を描く弾丸は爆撃のように臓硯がいた場所を更地にした。だが、そこには臓硯の姿はない。
復活したバーサーカーが抱えて逃げ出していたのだ。しかしバーサーカー自体は虫の息。人一人抱えて移動するだけでもやっとといった感じだ。
だというのに、臓硯の余裕は変わらない。

「なるほどな、舐めてかかると痛い目を見るというわけだな。ではワシも、1つ秘策を見せてやるとしようか」
臓硯の令呪が妖しく光る。同時に、バーサーカーからも悲鳴のような軋み声が上がった。いや、これはバーサーカーの声ではない。バーサーカーの霊基が悲鳴を上げているのだ。
明らかに異常だ。あの令呪は普通ではない使い方をされたんだ。
「臓硯ッ!! 何をしたッ!!」
俺の叫びに対して帰ってきたのは1言。
「言うと思うか？」
兜が割れ、右手に無毀なる湖光（アロンダイト）が現れる。俺は驚いた。兜の奥のその顔が、妄執と怒りに塗れたものではないことに。それどころか、精悍な凛々しい顔立ちの青年のものになっていることに。
「――――ッ」
スピードは先ほどを軽々と超えていた。一瞬で俺に肉薄し、剣を振りかぶっている。これだけなら最初の再現だ。
だが、持つ獲物が鉄パイプと無毀なる湖光（アロンダイト）では次元が違う。おまけにもう一方の手には短機関銃が握られていた。
銃口は明後日を向いているというのに、すでに引き金は限界まで引き絞られている。
騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）に侵食されている短機関銃は、コンクリートをやすやすと抉り取る魔弾を吐き出す暴れ馬だ。それを無毀なる湖光（アロンダイト）と一緒に使いこなす。
「こいつッ!!」
受け止めた剣が重い。重すぎる。両手で支えてやっと受け止められるくらいだ。言うまでもなく、弾丸は防げない。
「ガアアアアアアアッアア!!」
下から襲ってくる鉛の鞭に火花が散った。よろけたところに追加の弾丸が降り注ぐ。倒れる衝撃を利用して滑るように移動した俺は、鋼鉄化のエナジーアイテムを引き寄せる。
「――――」
しかしそこまで甘くないようだ。

伸ばしていた手を無毀なる湖光（アロンダイト）で払われ空振り。そのまま蹴りを入れられ彼方まで吹き飛ばされる。
態勢を整えたところに殺到するのは対物ライフルの武偵弾。着弾した瞬間大爆発を起こした。
「黒影（ダークシャドウ）」
物理攻撃の効果が薄い黒影（ダークシャドウ）で体を包み身を守る。
「オイオイ、ドウナッテンダヨ」
「分からない」
令呪のブースト？　でもそれだけじゃ説明つかない。特徴的なのはバーサーカー本体の表情の変化。どうしてあんなに穏やかに……普通になったんだ？　まるでバーサーカーじゃなくなったみたいな……ッ！　まさかッ！　でも、そんなこと可能なのか？
「バーサーカーのクラスを変更したのか……っ!?」
恐るべき結論に到達する。
「察しが良いな、イレギュラー」
そこまで大きな声を出したつもりはなかったけど……蟲の力を使ったんだろうか、臓硯が嫌な笑みを浮かべている。
「間桐の家はサーヴァント召喚の仕組みを作り上げた。ワシにかかれば、バーサーカーの呪いを残しつつも別なクラスに移し替えることも可能というわけだ」
「言うつもりはなかったんじゃないのか？　ずいぶんとおしゃべりだな。英霊になんてことしやがる」
「カカ、英霊など、死人の影法師に過ぎんさ。現世で消滅しようとも、座に戻り再び戦場に駆り出される哀れな操り人形だ」
皮肉を返しつつも、臓硯の言葉の意味を理解しようとする。
つまりはバーサーカーの狂化に加えて、他のクラスのスキルも持っているってことか。あの様子を見るとセイバー……ああ、最悪だ。
もっと最悪なのは――――
「でもそれは、ここにいられる時間を無為に短くしているんじゃないのか？」
「もちろん、霊基をズタズタにしてしまうからの。しばらくすると

サーヴァント自体の現界を保てなくなるが……貴様を殺すには、十分すぎる時間があるなァ。バーサーカー、焼き尽くせ」
時間稼ぎもここまでのようだ。
青く、眩い光が目を焼く。バーサーカー、否、すでにこの呼び方は正しくない――ランスロットが持っている剣が、騎士王の聖剣に負けないくらいの魔力を放っていた。
まず――――ッ!!
「無毀なる湖光（アロンダイト）――――ッ!!!」
極光の斬撃が放たれた。視界全てが光りに包まれる。このままでは回避は出来ない。小細工をする時間もなければ、それが通じる攻撃でもない。
ごめん。お前を使うのは最後になるな。
「機龍、頼む」
涙を呑んで俺の目の前に機龍を召喚する。俺の盾になるように。激突した光の波が、機龍の装甲を溶かしていく。自動迎撃機能も働いているが雀の涙程度の効果もない。
でも犠牲は無駄にしない。
機龍を盾にして、ギリギリかすめるだけで済んだ。それでも無様に転がり、変身が解除されてしまう。
「う……ぁ」
「ハハハッ！　生意気な小僧が地べたを転がる姿は、いつ見てもスカッとするわい。バーサーカー、そのまま殺せッ！」
超級の宝具を放ったというのに全く衰えを見せないランスロット。油断なく剣と銃を構え、距離を詰めてくる。
ああ、強いよランスロット。バーサーカー状態ではできなかった宝具の真名解放。ダブルクラスと無毀なる湖光（アロンダイト）でブーストされたステータス。どこを取っても俺を上回ってる。
でも、俺もここで負けるわけにはいかない。俺も、とっておきってヤツを見せつけてやらないといけないみたいだな。
「……どうした、バーサーカー。さっさと息の根を止めるんだ」
一向に動かないランスロットに焦れたのか、臓硯が追加の指示を出

す。それでも、ランスロットは俺にとどめを刺すことは出来ない。
それは当たり前だ。
なぜなら、俺はそこにいないのだから。
「俺も秘策を見せてやるよ」
「な――――ッ!! ガアアアアッ!!」
牙（タスク）の爪弾で臓硯の体をぶち抜く。こっそりと回転の穴を移動させてここまで来て。
「牙（タスク）、ＡＣＴ３だ」

牙（タスク）ＡＣＴ３
言峰綺礼の襲撃を経て覚悟を決めたことによって、ＡＣＴ２からさらなる進化を遂げた新しい牙（タスク）。
自分自身を撃つことによって、回転の穴に体を巻き込んで移動することが出来るようになった。その穴は好きな場所に移動させることが出来、好きなタイミングで外に出ることが出来る。また、体の一部だけを巻き込むことも可能。
この穴に本体以外が入ろうとすると、それは破壊される。

「チュミィィィィン!!」
ＡＣＴ２よりもより機械的になったスタンドヴィジョンが唸り声を上げる。回転エネルギーは臓硯の体を蹂躙し、体を構成していた蟲は死骸となって細切れになり、足元に転がっていく。
臓硯の体は無茶な延命で常に腐りかけのズタボロ。完全な不意打ちはこたえるだろう。
「グッ、ァ、バー、サー」
「■■■■■――――ッ!!」
言うよりも早く、哀れな従僕は主の危機に馳せ参じていた。
無毀なる湖光（アロンダイト）を振り下ろすが、俺はすでに回転の穴の中。

騎士(ナイト・オブ・オーナー)は徒手にて死せずで強化された魔弾も、回転パワーは侵入を許さない。
だが、このまま引きこもっているわけにはいかない。
回転の持続時間はおよそ十秒。だがそれだけあれば、呪文1つの詠唱くらいはできる。

ネギ・スプリングフィールドの魔法（ｖｏｌ．１）
『魔法先生ネギま!』の主人公、ネギ・スプリングフィールドが日本に来る前に覚えていた魔法9つ（魔法の射手、風花・武装解除、風精召喚、眠りの霧、風花・風塵乱舞、雷の暴風、白き雷、雷の投擲、ヨルダの御手）が使えるようになる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」
俺の紡ぐ始動のキー。それは立派な魔法使い(マギステル・マギ)を目指す少年が使うものと全く同じだ。
「来たれ雷精(ウェニアント・スピリートゥス)風(アエリアーレス・フルグリエンテース)の精(クム・フルグラティオーネ)！　雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐(アウストリーナ)！」
纏うは雷と風。誰にも負けない速さを。
「雷(ヨウイス・テンペスタース)の暴(フルグリエンス)風ッ!!」
無防備な詠唱も、回転の穴の中なら問題ない。
「固定(スタグネット)・掌握(コンプレクシオー)」
取り込んだ魔力が体中に充填される。
「術式兵装(アルマティオーネ)、疾風(アギリタース)迅雷(フルミニス)ッ!!」
バーサーカーの左手が宙に舞った。俺の手には超宇宙聖剣(スペースカリバー)。回転の穴から飛び出す、そのすれ違いざまに切り裂いたのだ。
頂点まで届いた肘から先と回転の穴に向けられていた機関銃は、体感時間が限界まで引き延ばされている俺の目には、とてもゆっくりと落ちてきているように見える。

「■■■■――――」

直前まで乱射されていた機関銃は、体から離れても弾をまき散らし続けている。しかし、俺の体に当たることはない。体に当たる直前に体を取り巻く暴風によって軌道を捻じ曲げられているのだ。

雷と暴風の力を纏った俺は、とうとうバーサーカーの反応速度を超えることに成功した。いや、それはおこがましいか。不意打ちでもあったし、臓硯の無茶な指令のせいで霊基がどんどんボロボロになって力が出せていないんだ。

せめて少しでも早く座に返してあげることが、俺にできる精いっぱいだ。

「ッ!!」

臓硯の体から蟲が噴き出した。風にすりつぶされ俺の体に届くことはないが、一度飛び上がって距離をとる。

すると再び鉛の嵐が俺を襲った。しかし無意味だ。

風にいなされた弾丸はあちらこちらで光の花を咲かせる。空中で一回転しつつ、俺の口は滑らかに呪文を紡ぐ。

「影の地(ロコース・ウンブラエ・レーグナンス)、統ぶる者(イン・マヌム・メアム・デット)、スカサハの我が手に授けん、三十の棘(ヤクルム・ダエモニウム)を持つ、愛しき槍(クム・スピーニス・トリーギンタ)を――――」

着地した。

「――――雷の投擲(ヤクラーティオー・フルゴーリス)ッ!!」

雷でできた巨大な槍を、

「掌握(コンプレクシオー)」

左手に取り込んで保持する。

見ると切り離したはずのランスロットの腕がくっついていた。目を凝らすと、傷口から蟲が湧いている。臓硯が何らかの治癒を施したのだろう。

かまうか。

「固有時制御2倍速(タイムアルターダブルアクセル)」

さっきの2倍のスピードで加速した。正面からの突撃。互いに突撃することも考えれば、ぶつかり合うまでに1秒もかからない。そのわずかな時間を、さらに超宇宙聖剣(スペースカリバー)でねじ伏せる。

ランスロットの無毀なる湖光（アロンダイト）にも、刀身から漏れ出すほどの魔力が収束している。
これが最後だ。
全てがスローモーションの中、お互いの剣が相手の首に吸い込まれていき――――

――ランスロットの無毀なる湖光（アロンダイト）は空を切る。
足元に打ち込んだＡＣＴ３に吸い込まれるようにして地面に潜り込んで回避した。全体重を乗せた一撃が全くの空振りに終わったランスロットは、これ以上ないくらいにバランスを崩している。
ロケットのように飛び出した俺は左手を鎧にねじ込んだ。
「左腕開放（デクストラー・エーミッタム）ッ!!」
地面から空に向かって、常識ではありえないことだが、その方向に向かって稲妻が逆った。封印していた雷（ヤクラーティオー・フルゴーリス）の投擲は鎧と、その下にある鋼の肉体を貫いてランスロットを串刺しにしていた。対魔力のおかげかまだ息がある。
今度は右腕から極星の光が溢れ出した。
「超宇宙（スペース）――――」
光りに焼かれる直前。
「――――聖剣（カリバー）ッ!!!!」
ランスロットの目に涙が浮かんでいた気がした。
星の斬撃は雷（ヤクラーティオー・フルゴーリス）の投擲をやすやすと切り裂き、空に向かって光

の柱を作り出した。必勝の攻撃は、寸分たがわず俺に勝利をもたらしてくれた。
すでに現世からの退去が始まっているランスロット、その横を通り過ぎる。
その先にいるのは、守る者のいなくなった臓硯。
「イレギュラー……ッ!! 貴様ァァァァ!!」
もはや吠えることしかできない怪人。体はどんどん腐り落ち、それを止めることは出来ないようだ。それもそうだ。俺は臓硯の蟲蔵を跡形もなく消し飛ばしているのだから。新しい体の補充もできない。臓硯も追い詰められていたのだ。
「終わりだな、臓硯」
「ふざけるなッ! ワシがッ! ワシがどれだけの時間をッ! 手をッ! 尽くしてきたと思っているッ!」
俺は手を向けて一言。
「それで人を不幸にしてたらお終いだよ」
――術式開放。(ペルフェクトウス・プラスマティオーニス)
「雷の暴風(ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス)」
俺の放った最後の一撃は、臓硯を跡形もなく消し飛ばすのだった。

穢れた奇跡の決戦　綺礼編

闇夜を、ゆっくりと大柄な男が歩いている。着慣れた法衣をはためかせ、人々が寝静まった住宅街を目的の場所に向かっている。
やがて、立派な門構えの家にたどり着いた。
手を組むことになった臓硯の情報を反芻する。
(聖杯の器はアインツベルンの女……彼女さえ確保してしまえばあとはどうでもいい。いや、むしろマスターを殺してしまえばアーチャーの機嫌を損ねる結果になってしまうかもしれない)
「シビル・ウォー」
男――――言峰綺礼は自らのスタンドを呼び出す。その者が持つ罪の意識を具現化し、相手を押しつぶす。効果範囲は屋敷全体。中にいる人間に最上の悪夢を見せる。
(セイバーとライダーがアーチャーと戦闘になったのは確認している。イレギュラーは間桐が釣ったらしいが……相手はイレギュラー。ランスロットをもってしても結果はわからないだろう)
綺礼は権限を使って重火器を用意し、臓硯に渡していた。その時には臓硯の体はすでに限界だということに気が付いていた。サーヴァントを後どれだけ維持できるのか、そもそもあとどのくらい命が持つのか。
(私には関係のないことだがな)
臓硯が倒されようと倒されまいと、イレギュラーが目の前に立ちふさがろうと。最強のサーヴァントと最高のスタンド能力を手に入れた綺礼の前に、敵はない。そう確信している。
後は約束された勝利へと歩を進めるだけだ。
敷地に1歩踏み入れた。
「む……」
同時に結界が張られた。入ってきたものを逃がさず、なおかつ中で起きた異常を外に伝えないようにするための結界だ。あまりにもわかりやすい結界に思わず笑みがこぼれた。
「そうか、ここで決着をつけたいというわけだな。愚かにも私のシビ

ル・ウォーの効果範囲内でッ!!」
シビル・ウォーの中で綺礼が負けることは絶対にない。動かすことが出来ない事実だ。対面に現れた男に少し早い勝利宣言をする。
「ああ。そうだとも。私はアーチボルト家9代目当主、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。命と誇りをとして、いざ尋常に立ち会うがよいッ!!」
傍らには自身の最強の礼装『月霊髄液(ヴォールメン・ハイドラグラム)』。きっちりと礼服を着こなし、髪形もバッチリと決まっている。
表情も凛々しく、自信と決意に満ち溢れている。完璧な美男子だ。
「……」
その後ろに立つ切嗣が、ペットボトルの水をかけていなければ。
せっかくセットした髪はどんどん崩れ、服は水浸しになっていく。
「……」
流石の綺礼も絶句した。いったい何をしているのだと。
しかし、すぐに異変に気が付いた。
「何故だ……シビル・ウォーが発動していないのか……?」
2人に対して罪が襲い掛かっていないのだ。心の奥底にある罪の意識がそう簡単に消える訳がない。魔術を使って記憶を一時的に封じ込めても、スタンド能力なら問題なく発動する。
「違うな。アーチャーのマスター。自身の力だというのに、その辺りは勉強不足だったという事か?」
ケイネスはくつくつと笑う。水が滴っていなければ完璧だ。や、むしろ水も滴るいい男なのかもしれない。
「貴様の言う罪とやらは、『清らかな水』で洗い流すことが出来るッ!
そんな弱点も把握せずに挑もうなど笑止千万というものだ」
「(イレギュラーからの情報が無ければ、僕達2人ともやられていたがな)」
心の声を口にも顔にも出さず、切嗣は頭から水をかぶる。
いくら戦える状態になったとはいえ、過去のトラウマを乗り越えたかと言われればそれは話が違う。定期的に罪を洗い流さなければ、またあの状態に逆戻りだ。

「……そうか、イレギュラーのサーヴァントか。まったく、予想以上に厄介な存在だったようだな。まるで私のことを邪魔するためだけに生まれてきたような奴だ」
あながち間違いではないことを言いつつも、綺礼の余裕はなくならない。
「だがそれでも、君たちの勝利は絶対にない」
シビル・ウォーの効果範囲の中で絶対にしてはいけないことがある。それは殺人だ。相手にケガをさせるまでならまだ大丈夫だが、殺人は禁忌だ。
相手を殺してしまうと、相手の罪が自分に降りかかってくる。その上、相手は死ぬことなく、たった今自分が犯した『相手を殺した』という罪に守られ、不死身になってしまうのだ。
このルールには本体である綺礼も囚われるが、武術の達人で人の壊し方を理解している綺礼にとって、相手を殺さずに無力化する手段はいくらでもあった。
最悪、アイリを確保して逃げてしまえばいいのだ。
「君たちは圧倒的に不利な状況にある」
「その程度のハンデ、貴様相手にはちょうどいい」
それが始まりの合図だった。
綺礼がケイネスに向かって突貫する。だがクレイモア地雷に軽々と反応できる月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）には速度は関係ない。
綺礼の視界は一瞬で鈍色に染まる。防御形態になった月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）。やはりその速度は圧倒的だ。問題は強度。
「ふッ!!」
拳がめり込んでいく。液体金属は包み込むように綺礼を迎え入れ――捕らえた。
驚愕に目を?く綺礼だったが、ケイネスの追撃は止まらない。
「アチョーー!!」
ケイネスの雄叫びと拳が同時に放たれた。水銀の枷から無理やり手を引き抜いた綺礼によって躱されるが、すぐさま別の構えをとっている。これは見様見真似の動きではない。

「現代魔術師というのはただ真理への研究をしていればよいというわけではないのだよ。私は嗜み程度だがね。こういったこともできなくては」
肘から先の服がなくなってしまったが、手の動き自体には何も問題はない。まだまだぬるい拘束だったようだ。
そう考えつつも、反対の手で黒鍵を取り出した。
切嗣が構えるキャリコＭ９５０が火を噴いた。無数の弾丸が綺礼に襲い掛かる。天才的な黒鍵捌きで弾丸を跳ね返す。無事を確認した手でも黒鍵を構えれば、それだけで突破不可能な鉄壁の防御だ。
（いくら銃弾を撃たれようが問題はない。気を付けるべきは……ッ！）
「Ｓｃａｌｐ！」
重金属の水銀が高圧で撃ち出され、人体を殺傷するには十分すぎるほどのレベルに達する。チタン鋼からダイヤモンドまで切断できないものがないこの斬撃。いくら何でも黒鍵で防ぐことは出来ない。
少々単調な攻撃だが、切嗣のいやらしい弾丸による援護。それに加えて、
「ちぃ!!」
踏みしめる脚が、地面とは違った感触を捕らえる。足元から何かが飛び出してきた。
体をひねって間一髪で避ける。
（針か？　薬物を使って行動不能にしようというのか）
待ち構える切嗣が何も用意していないわけがない。今この家にはトラップが張り巡らされているのだ。
（罠の方向に誘導されているのか）
ならば、と。
「ッ!!」
踏み込んだ足が、地面を割った。今の踏み込みで、綺礼の足の骨にはヒビが入っていた。強化魔術すら追いつかないほどの渾身の攻撃。
（殺しはしない。脊椎を破壊し半身を不随にするッ!!）
狙いはケイネス。月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）の防御力を計算に入れ、それごと

貫く。令呪によって更なるブーストをかける。視界の端にいる切嗣はキャリコの狙いを定めようとしているが、そんなものは間に合わない。

次の瞬間、

――――――――――――――――――――――――起源弾が綺礼の頭蓋に突き刺さっていた。

「……は、ぁ……？」

脳漿を飛び散らせながら倒れこんだ綺礼が口にできたのは、そんな間抜けな、意味のない言葉だけだった。

まったくの意識の外、完全な不意打ちだろうと武術の達人である綺礼なら手で払うくらいならできる。この威力の弾丸を受けてしまえば片手が使い物にならなくなってしまうが。

今回はそれすらできなかった。

何も知ることなく、綺礼の意識は永遠の闇の中に引きずり込まれていった。

――――――――――――――――――――――――

「や、やった……ッ!?」
「アア！　命中ダ！　ヨクヤッタゾ、チンチクリン!!」
「撃ッタ瞬間、目ツブッテタゾ！」
　自分の手の近くに浮かんでいる小さい相棒が声を張り上げる。
『やった』と言われても全く実感がわかない。意識がふわふわして夢の中にいるみたいだ。緊張で体がうまく動かない。喉はカラカラだ。最低限指先だけでも動けばいいと思っていても、わずかなパーツすら自分の思い通りに動いてくれない。
　気が付いた時には肩が外れそうなくらいの反動と、鼓膜が破れてしまったのではないかと思うほどの破裂音が聞こえてきていた。
　狙撃手ウェイバーは耳鳴りのする耳を抑えながら、手に持った無骨な銃――切嗣に渡されたトンプソン・コンテンダー――、そして切嗣に託されたスタンドであるセックス・ピストルズに目を落とした。

セックス・ピストルズ
　ジョジョの奇妙な冒険第５部に登場する『クイード・ミスタ』のスタンド。
　弾丸にとり憑くことによって、その軌道をある程度自由に操作することが出来る。彼らが操った弾丸はスタンドにもダメージを与えることが出来る。
　ミスタのピストルズにはＮｏ．４がいないが、切嗣が特に『４』という数字に対して思っていることがないため、Ｎｏ．４は存在している。

『ええっ！　僕がこれ撃つの!?』
『ああ。イレギュラーの話と僕のスタンドを見た時、この作戦が一番効果的だ。舞弥にはもしもの時、僕達の妻を安全な場所まで送り届ける役目がある。』
『陽動で気を引き、必殺必中の弾丸を食らわせる……姑息な手だが、魔術の競い合いではないのならやむなしと言ったところか』
『辞退してくれてもかまわない。君はこういう荒事には慣れていないだろう』
『その場合は陽動が減ることになるのか……そもそも、そんなに簡単に当てることが出来るものなのか？』
『心配スルナ！　ドンナニ下手クソデモ、俺タチガシッカリ当テテヤルサ！』
『ああ～っ、もうっ!!　やるよ！　僕だけ逃げるわけにはいかないだろ!!』
　思い出してため息をついた。せっかく手に入れたスタンド能力を自分で使わないというのが切嗣らしい戦略だ。
　切嗣の作戦はすべてうまくいった。月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）と切嗣の援護によって焦れた綺礼が大きな攻撃を仕掛けたところに、ピストルズの支援を受けた起源弾を叩き込む。
　シビル・ウォーの効果範囲外からの殺害ならば、スタンドの効果は発生しないのだ。
「引き受けなければよかったかもしれない……」
「ブッパナシテオイテ何言ッテンダヨ！」
　何となく意地で受けてしまった大役。大変だとか、緊張するとか、そんなせこい理由ではなく。自分の放った弾丸が、人1人の命を奪ったという事実が、徐々に感じられてきたからだ。
　勝ったはずなのに気分が悪くなってしまっている。
　こんなつらい思い、出来るならしないほうが良かった――

「いや、違う」
否定する。
「違うだろ。僕はこういうことをしていたんだ。自分で好き勝手に飛び込んで、つらかったからそれから逃げるなんて、カッコ悪いことだ」
とりあえずは、
「うっぷ……早く下りないと」
銃声で目を覚ましたらしい住人達に気が付かれないように屋敷に戻り、エチケット袋を貰う事から始めよう。ウェイバーはそう思うのだった。

穢れた奇跡の決戦　ギルガメッシュ編

「進軍せよッ!!!」
　王の声が響き渡る。どんなに大きな声を出したとしても、この巨大すぎる軍勢の隅々までその声が届くことはあり得ない。だが1つの生き物のように統一された動きを見せる王(アイオニオン・ヘタイロイ)の軍勢はすべてを飲み込み、略奪する波となって金色の英雄に向かって進撃する。
「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａｉｅ!!」
　対するアーチャーは腕を組んだままだ。しかし攻撃をしないというわけではない。アーチャーの背後が黄金に輝き、数えきれないほどの宝具の切先が顔を見せる。
　光の雨が軍勢に降り注いだ。その光一つ一つが値打ちも付けられないほどの宝物だ。この世界で何よりも豪華な死の雨。その中を突き進む。
　一騎当千の勇者が何人も存在する王(アイオニオン・ヘタイロイ)の軍勢。だがその中でも、ひときわ早くアーチャーに斬りかかる者がいた。
　ライダーの戦車を抜き去る脚力。降り注ぐ宝物に匹敵するほどの聖剣を携えた、
「アーチャーッ!!」
「フッ！　セイバー！　このような不毛の大地にあってなお、貴様は美しいな」
　セイバーの剣圧は、砂漠の大地に大きな爪痕を残すが、アーチャーは軽く回避する。王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)の砲門はセイバーを取り囲むように設置され、下手に動けなくなってしまう。
　セイバーは約束された勝利の剣(エクスカリバー)を正眼に構え、油断なくアーチャーを睨む。
「あの犬畜生と貴様が生前縁があったことには驚いたが、おかげで面白いものが見れたぞ。バーサーカーのマスターには褒美を取らせなければいけないやもしれんな。あそこまで心を震わせる見世物は久しぶりだった」
「……」

アーチャーはバーサーカーに嬲られ、過去の後悔に歪められたセイバーの顔を思い出して笑った。
「我はな、セイバー。貴様のそういった顔が何よりも美しいと思っているのだぞ？」
「その不快な口を今すぐに閉じろ、アーチャー。油断すれば、次の瞬間には貴様の首を刎ねる」
「強がるなよ、セイバー。そういうところが好みだと言っているんだ。だが、いいぞ、ますます気に入った。やはり我の伴侶にふさわしい女はセイバーを置いてほかにない」
「ライダーに話は聞いたが意味が分からない。気でもふれたのか」
あまりにも場違いなセリフに思わず質問を返してしまう。
「疑問に思う必要も理解する必要もない。これは王の決定だ。貴様はただ、首を縦に振るだけでよい」
「断る――――」
セイバーの声は着弾の轟音によってかき消された。足を狙った宝剣は、セイバーの聖剣によって正確に跳ね返された。
「あまりの嬉しさに口がうまく動かないか？　良いぞ。何度でも言い直せ」
威嚇するだけだった黄金の砲門が、明確な意思を持ってセイバーに向けられる。２人の距離は決して遠くない。セイバーの足ならば無いも同然だ。しかしどう頑張ってもアーチャーには届くことはない。セイバーには直感でわかった。
それでもセイバーは笑った。
「貴様こそ、何か忘れているのではないか？　貴様の相手は私だけではないということをッ！」
「むっ」
２人のいるところに、大量の武器が降り注いだ。王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）の兵士たちが降り注いだ宝の山をアーチャーに向かって投げ返したのだ。
流石のアーチャーも、ピクリと眉を動かした。撃ち込んだ宝の分だけ、返ってくる攻撃も多くなり、強くなる。
少し横に飛んだ程度では到底避けきることは出来ない量だ。それ

はセイバーも同じだったが、彼女はまるで見えているかのように最小限の動作で躱していく。
アーチャーはいくつもの盾を取り出して展開する。盾はそれ自体が意思を持ったように動き、飛来する武器を自動で防ぎ始めた。
「略奪の王の臣下は、やはり同じ穴のムジナという訳か。王の宝物に気安く触れてくれる」
アーチャーは軽く右腕を上げた。すると、先ほどまでとは比べ物にならないくらいのサイズの歪みが出来上がった。
「あ、れは……ッ!?」
軍勢の誰かが呟いた。
「焼き払え。万海灼き払う暁の水平」
溶岩塊じみた峰と火の刀身で形作られた巨剣が顔を覗かせる。肌を焼く熱気に、これまでの攻撃とは違うことを1人残らず覚悟する。次のアクションは容易に想像できた。
太陽がそのまま落ちてきたような熱波が襲い掛かってきた。
『水平線』の概念を持つ神造兵装。『空の青と海の青が溶け混じり合う領域』が暁の方向性を持って現出し、すべてを溶かし焼き払う。
別名は『斬海剣』。
砂の大地が2分される。とんでもない熱量によって砂は融解し、彼方にまで熱のラインが引かれる。歴戦の英傑も神造兵装の前では為す術がない。直接下敷きになった者は跡形も無くなり、そうでなくても手が無くなっている者、足が無くなっている者、半身が無くなっている者までいる。
「――――ッ!!　――――ッ!!」
2撃目が来る。
その威力を一度目の当たりにした兵士たちは浮足立つ。いくら歴戦の勇者と言えど、神の御業を向けられたとあっては、弱腰になるのも仕方がないと言える。
その攻撃に対してできることなど存在しない。神の一撃に抗うことなどできない。
同じ神造兵器でなければ。

水平線に対抗するように輝きを増すのは――――地上の星。
星の聖剣の封印を解き、風の鞘から抜き放った騎士王は迫りくる万海灼き払う暁の水平を正面に捕らえる。
セイバーのとっておき。最強の武装の一撃を惜しみなく披露する。
「約束された――――」
その輝きが、頂点に達した。
「――――勝利の剣ッ!!」
２つが激突する。
ジェット噴射の風圧を直接受けるよりも強い衝撃が世界を揺らした。無理矢理別世界を構築する王の軍勢は、ぶつかり合う魔力の余波だけで不安定になりそうだ。
軍配が上がったのは、セイバーの聖剣だった。
永遠に続くかと思われていた拮抗状態は唐突に終わりを迎える。黄金の斬撃は万海灼き払う暁の水平を半ばからへし折り、空に消える。
真っ二つになった万海灼き払う暁の水平は金色に分解され王の財宝に格納された。
兵士の士気が再び高まった。反撃の時が来たと、鬨の声を上げる。
そんな有象無象を、アーチャーはつまらなさそうに一瞥し――――右手を上げた。

――――再び巨大な剣が顔を見せた。
たかが１つ跳ね返したところで、英雄王の宝物を攻略できるわけがない。星の聖剣を振るっても、単純な力比べで勝てるほど甘くはないのだ。

手札は無限。武器も無限。どんな相手にも対応できる。まさに最強のサーヴァント。乗り越えるなど、倒すなど不可能だ。
「さあ、どうするセイバー。もう一度、貴様の聖剣を使ってみるか？」
「……っ！」
そんなことできる訳がない。あのレベルの宝具を連発するには令呪の助けが必須だ。現界するための魔力をすべて使えば話は別だが、そんなことをすれば今後の戦線が維持できない。しかし何か手を打たなければ、取り返しのつかないダメージを負うことになる。
俯くセイバーに、アーチャーは残酷に告げる。
「千山斬り拓く翠の地平、雑種共に絶望を教えてやれ」
振り下ろされる巨剣の名前（真名）を呼んだ。
万海灼き払う暁の水平が『水平線』の概念を持つ神造兵装ならば、千山斬り拓く翠の地平は『地平線』の概念を持つ神造兵装だ。
雄大な山々を切り裂くための刀身が人に向けば、それは切り裂くのではなく押しつぶす超質量兵器になる。
さしものライダーも苦い顔をする。とんでもない相手だということは理解していたが、これほどの攻撃は想像できていなかったのだ。自らの軍勢を、埃を吹き散らすように軽くふき飛ばす程だとは。だが、顔をしかめた理由はそれだけではない。セイバーが持っているものを見たからでもある。
「ライダー！　使います！」
（あ奴、もう使うつもりか？　しかし、このタイミングを逃せば結界の維持が難しくなるか……）
ライダーは頭の中で計算する。そしてすぐに声を張り上げた。
「セイバー、ブチかませ!!」
「応ともッ!!」
今度はアーチャーが困惑する番だった。
約束された勝利の剣はどう考えてもセイバーとライダーの切り札だったはず。それを超える何かがあるというのか。
アーチャーは最強のサーヴァント。倒すことは不可能だ。だがそこに、1人の夜月翔が加われば話は別になる。

セイバーは手に持っている物体を掲げた。手のひらよりも少し大きいサイズ、握るところには1つのボタンがついている。本来はそれ単体で使う物ではない。ほかのアイテムと組み合わせて使うはずの物だ。

セイバーはボタンを押した。

《ＭｉｇｈｔｙＢｒｏｔｈｅｒｓ　ＸＸ！》

マイティブラザーズＸＸガシャット

仮面ライダーエグゼイドに登場する変身アイテム。使用することでダブルアクションゲーマーレベルＸに、さらにレベルアップすることでレベルＸＸに変身することが出来る。

翔に託されたアイテム。それはベルトが無ければ使うことは出来ないはずだ。だが、ライダーはニヤニヤと状況を見ているだけだ。アーチャーが驚く姿を想像しているのかもしれない。

セイバーはガシャットを、自分に向けて差した。

その瞬間、セイバーは光に包まれた。

「魔法が出てくれたのは本当にありがたい。これで大分強くなれた

ぞ」
　最後の会議、翔は安心したように言った。色々とぼかして能力追加の仕組みを説明した翔は、最終決戦の戦力を確認していた。
　アーチャーの力はまだまだ未知数。少しは知っているはずの翔でも、何が飛んでくるのか予想するのはかぐや姫の無理難題と同等以上だ。
「アーチャーにも勝てるのか？」
「それとこれとは話が違う」
「ダメじゃないか！」
「そうカリカリするなよ。相手が相手なんだ。確実な勝利なんて約束できない。負けるつもりはないとしか言えないな」
　最善は尽くすと翔は言う。それはこの場の誰もが思うことだ。
「でもさ、もう１つ手に入れたんだろ？　そっちは使えないのか？　あんまり強くなかったのか？」
「そういう訳じゃないんだけど……」
　ウェイバーに言われ、手に入れたもう１つの力――――マイティブラザーズＸＸガシャット――――を取り出す。
「使えないわけじゃないけど、爆発的に強くなれる訳じゃないんだよ」
《マイティブラザーズ・ＸＸ!!》
　言いつつ翔はガシャットを起動させる。
「こいつを使うと、２人に分裂できるんだ。人数が欲しいならいいんだけど、強さ的にはこっちのほうがはるかに強いんだよ」
　デュアルガシャットを取り出して並べる――――ことは出来なかった。突如浮かび上がったＸＸガシャットがセイバーの体に吸い込まれていき――――
「「「は……？」」」
　セイバーを除く全員が素っ頓狂な声を上げた。
《俺がお前で　お前が俺で！　Ｗｅ　ａｒｅ！　マイティ！　マイティ！　ブラザーズ！　ＸＸ（ダブルエックス）!!》
「……っ、な、何が……？」
「い、いや……何がって、ねえ……？」

「セイバー、その、横に……」
セイバーの問いに、翔とウェイバーは目を反らしつつ答える。２人が指さす先は、セイバー――――の横だ。
そこには信じられないことが起きていた。
シミ一つない、白い、白すぎる肌。それだけではない。上質の絹のような髪の毛も色素が抜け落ちてしまったようだ。しかし、それはひ弱そうだというイメージにはならない。冷たい威圧感と冷徹な瞳が今の自分の状況を理解しようとせわしなく動いている。
つまり。

《俺がお前で　お前が俺で！　Ｗｅ　ａｒｅ！　マイティ！　マイティ！　ブラザーズ！　Ｘ（ダブルエックス）Ｘ!!》
光が晴れる。その光に千山斬り拓く（イガリ）翠の地平（マ）に振り下ろされる。翡翠をそのまま削り出したような巨剣は受け止められていた。地面スレスレで受け止められていた。
「なん、だと？　セイバー、貴様どういうことだ……？」
アーチャーは聖剣を用いて千山斬り拓く（イガリ）翠の地平（マ）を受け止めた２人のセイバーに驚愕の目を向ける。
片方は今までも見た、見知った姿のセイバーだ。もう片方は今まで見たことのないセイバーだ。しかしまったくの初見ではない。その姿形は片割れにそっくりだ。双子と言われても納得できてしまう。色素が薄いということ以上に、纏う雰囲気が２人を決定的に分けてい

た。
「私はセイバー・オルタナティブ。もう1人のセイバーだ」
重戦車のごときパワーで、2人のセイバーは千山斬り拓く翠の地平を跳ね返す。それは砂の大地に巨大な墓標の様に突き刺さった。
黒くなった聖剣をアーチャーに向けた。
(分裂する宝具？　そんなものを持っていたのか？　いや、あの雑種か)
アーチャーも負けていない。素早く正解にたどり着く。
(分裂という言葉は正しくないな。新しく増えたあのセイバーは紛れもない1騎のサーヴァント)
宝具となったマイティブラザーズのガシャットは、本来の2人に分かれるという機能をセイバーの霊基自体に作用させた。セイバーの霊基を元に可能性がある姿を現世に顕現させた。
いうなれば、英霊自体を触媒にしてその英霊の別側面を呼び出すことに成功したのだ。その時の魔力は、当然聖杯のものが使われる。
「良いぞ。少し予想外だったがどちらも我好みだ。人数が増えようとも我の愛は変わらん。両方まとめて我の伴侶としてやろう」
「笑わせるな、アーチャー」
「我々の伴侶はもう決まっている」
青セイバーも同じように聖剣を向けた。オルタに続いて口上を述べようとして、ある単語に引っかかった。
「そうです。伴侶は……伴侶!?」
「何を驚いている。私の純潔と身体を許した男以外に、私にふさわしい伴侶がいるのか？」
「それは確かにそうですが……わざわざ宣言する必要は無いでしょう！　いえ、それを言うならあなたは行為自体をしていない！」
「ほう……それは私に対する挑戦と受け取ってもいいな？　全て片付けたら、覚えとけよ青い方」
「青い方!?」
自分自身だからか他の人には見せられない低レベルなケンカを始めるセイバー達。

「な　ん　だ　と？」
今までのお遊びとは違う、圧倒的な怒気が戦場を満たす。
「我のセイバーを……我の女をッ、どこぞの馬の骨が穢したというのか……ッ!!」
セイバーの相手が誰かは聞かずともわかった。聖杯問答でつまらない願いを口にしたあのイレギュラーサーヴァント。そいつしかいない。
固有結界の世界線を超えて何かが侵入してきた。
夜月　翔だ。
風と雷を伴ってセイバーとアーチャーの間に降り立つ。
「これで最後だな。英雄王」
「ちょうどいい……ッ！　ちょうど我も貴様を殺したいと思ったところだッ!!」
さあ、本当の最終決戦が始まる。

希望の聖杯を未来に託して

「これで最後だな、英雄王」

この砂の大地に降り立つのは2度目になる。目の前にいるのは最大の敵であるアーチャー――――英雄王ギルガメッシュ。俺を見るなり憤怒の表情になっているが、何か悪いことをしてしまったのかな？

話に割り込んだのかな？

だが、これからこいつを倒せばそれ以上の怒りを抱かせることになる。ちょっとくらい怒らせたとしても、そんなものは些細な違いでしかない。

「死ね、雑種」

対話も何もあったものではなかった。何の手加減もなく、すべての方向から宝具が降り注いだ。これを受けるのは2度目だ。前回は全く歯が立たなかったこの攻撃も、今ならば何の問題もなく対応することが出来る。

ゴキブリ1匹逃がさないとでも言いたそうな弾幕だ。

しかし、

「牙（タスク）、ＡＣＴ３」

回転の穴の中に入ってしまえば、たとえ宝具であろうとも俺には傷一つつけられない。それがこのスタンドの法則だ。

「そして回転のパワーは移動できる」

俺のスタンドについて何も知らないギルガメッシュは、俺がいたところを無意味に攻撃し続けている。その隙に俺はセイバー達の所へ避難した。

回転の穴から飛び出した俺は、セイバー達と合流する。まだ見せていなかったからか、2人は軽く驚いている。

能力のことを説明している暇はない。それよりも言っておかなければならないことがある。

「非常にまずい」

「はい？」

「何がだ、翔」

俺を覗き込んでくる２人のセイバー。この２人が並ぶなんて言う事態はそうそう起こらない。目に焼き付けるのはもちろんのこと、運命的な動きをしたマイティブラザーズＸＸに感謝を忘れない。
しかし、ふざけていられるのはここまでだ。笑っていられる状況ではない。
「魔力が底をつきそうだ」
「……何ですって？」
俺の言ったことが信じられないのか、セイバーが顔を引きつらせている。
「バーサーカーは倒せた。でも、倒すまでにかなり魔力を使っちゃって……」
「ランスロット卿を倒すとは、さすが私の伴侶だ。そして円卓の騎士として、ランスロット卿は恥のない戦いをしたらしい」
何やら納得してくれているみたいだけど、せっかく来たのに役に立たない可能性が大なのだ。オルタの言ったとおり、ランスロットを相手取るには魔力の出し惜しみは出来なかった。
「心配するな、翔」
セイバーの一閃が、飛来する宝具を跳ね返した。アーチャーが俺が移動したことに気が付いたらしい。俺だけを狙った正確な攻撃だったが、強力な直観を持つオルタには余裕に跳ね返せたようだ。
「我々２人が揃っている」
「その通りです。あなたにすべてを任せる訳にはいきません」
「余の軍勢も忘れてもらっては困るな」
ライダーも横に並ぶ。
「征服王、貴様……」
「おっと、その怒りを余に向けるのは筋違いではないのか？　ん？　にしても、半神の英雄王もヒトの反応をするではないか」
え、何が？
ライダーはにやにやと俺とセイバー達、アーチャーを見ている。セイバーは若干頬を染めて顔を反らし、オルタは鼻を鳴らしている。そして一番の問題のアーチャーは俺を睨んでいる。めっちゃ睨んでい

る。視線で人を殺せるならもう死んでいるレベル。
1人だけ、ライダーだけはこの状況を非常に楽しんでいる。
「ほれ、翔、言ってやれ。セイバーは貴様の何なのだ？」
「あっ！　そういう事か……っ！」
このおやじ！　アーチャーとの決着をつけるっていうかっこいい目的はどうなったんだよっ！　息子娘の恋愛を楽しんでいるお父さんか！　嫌われるタイプだからな！
「他の雑種など今はどうでもよいッ！　今は貴様を八つ裂きにすること以外は考えられん……ッ」
俺の背中に嫌な汗が伝う。こんなところで英雄王の本気は見たくないぞ。
「心配するでない翔。貴様には余がついておるではないか」
「こんなに怒らせたのはアンタでしょうが……なんでこの状況で煽るんだ……」
あまりにも堂々としているその姿を見ていると、もはや怒る気力もない。
「しばらく時間を稼ごう。作戦の最終確認をしろ。最後は任せるぞ、翔」
「ああ。止め用の魔力は何とかひねり出して見せる」
オルタの姿が消え失せる。振り上げた黒い聖剣は、上下から飛び出した槍によってすれすれで止められていた。
「どけッ！　セイバーッ!!　貴様を誑かした淫獣を八つ裂きにしてくれるわッ!!」
「くだらないことを言うな、金ピカ。あいつは貴様よりも良い男だし、貴様よりも私にふさわしい男だ」
そんなことを言うとアーチャーがますます怒るからやめてほしい。
「やはり、勝負を決めるカギは騎士王の聖剣であろう。余の軍勢では、悔しいがあの男の足元に到達することすら難しい」
「やっぱりそうなるか……」
「ですが、ただ撃っただけでは早々当たらないでしょう。どうしても溜めが必要になる」

「ああ。今から準備に入る。合図があったら撃ってくれ」
俺は駆けだした。この作戦、というか、アーチャーが暴れだしたらどんなものでもめちゃくちゃにされてしまう。そして、激怒している今は、それが現実になる可能性がかなり高い。
そうなる前に、俺が決めてしまう必要がある。
「そこにいるな、害虫ッ!!!」
２人のセイバー、ライダーの戦車、兵士の攻撃をすべてかいくぐり、俺に向かって宝具を飛ばしてきた。魔力の節約のために術式兵装どころか、闇の魔法（マギア・エレベア）も解除してしまっている。
ＡＣＴ３に隠れても、回転の穴に無限に隠れていられるわけではない。次の穴に飛び込む隙には、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）の速度に対応できない。
何人もの兵士たちが巻き込まれ、鮮血を散らして倒れていく。いや、自分から当たりに行っているのだ。身を挺して俺のことも守ってくれている。
唇をかみしめ、１分１秒でも早く、この作業を完了する。そのことだけを考えて、足と手を動かす。
飛び出した俺に鎖が絡みついてきた。
天の鎖（エルキドゥ）。
アーチャー唯一の盟友は自在に動き、間に立っていた兵士を器用に摘まみ上げる。俺も足を取られ、絡みつかれる。どこまでも伸びる鎖はあっという間に完全に俺の動きを止める。
でも、俺の作業も丁度終わった。
「撃ってくれッ、セイバー!!」
「で、ですがこの角度ではあなたに――――」
「良いから撃てッ!!!　セイバーッ!!」
俺の叫び声に、２人のセイバーの腕に力が入る。その目に戸惑いの色はもうない。間にいた兵士は急いで退避した。セイバーとアーチャーの間にいるのは俺だけだ。
「約束された勝利の剣（エクスカリバー）ッ!!」
「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）ッ!!」
地上の星である約束された勝利の剣（エクスカリバー）。そして、すべてを飲み込む漆

黒の約束された勝利の剣。聖剣の頂点に立つ最強の斬撃が２発も俺に向かって放たれた。

アーチャーはギョッとした顔になる。俺が間にいる限り撃たれることはないと高をくくっていたのだろう。回避は間に合わないと思ったのか、がむしゃらに盾を取り出している。アーチャーの取り出した盾ならば、ダメージを与えられても、本人だけは約束された勝利の剣からであっても防ぎきるのだろう。

アーチャーの視界がふさがった瞬間に――仕込んであった魔法陣を起動させた。

回転の穴に隠れながら、ライダーの兵士の時間稼ぎに助けられながら、描ききったこの巨大な魔法陣。

「術式解凍――――」

その魔方陣は、

「――ネギ流闇の魔法ッ！　敵弾吸収陣ッ!!」

ありえないことが起こった。

約束された勝利の剣と約束された勝利の剣の斬撃が、俺の手の中に吸い込まれていくのだ。

「掌握!!!」

取り込んだ星の斬撃が分解され、体中に充填される。

『大陰道』。魔力、気力、オーラ、どんなエネルギーだろうと自分のものにできる闇の魔法の究極闘法。『金星の黒』とも言われる闇の魔法は星の聖剣の斬撃だろうと容赦なく飲み込む。

さらに２発の約束された勝利の剣は、俺を拘束していた天の鎖を焼き払った。

自由の身となった俺は、ＡＣＴ３の力を使い、盾の隙間を縫って内部に入り込む。飛び出した俺に、アーチャーは驚愕していた。もはや俺たちの間を阻むものは何もない。一番信頼していた天の鎖は消滅してしまっている。

「術式開放」

体に満ちていた魔力を再構築、右手に収束させる。俺の右手は循環する魔力によって黄金に光り輝く。

「約束された(エクス)――――――」
「良いだろう――――」
コンマ数秒の間、俺とギルガメッシュには永遠に感じられるその瞬間。言葉を紡ぐには短すぎる時間だったが、俺には確かに聞こえた。
「――――今だけは貴様に預けてやる、イレギュラーッ!!!」
「――――勝利の剣(カリバー)ッ!!」
黄金の光に包まれたギルガメッシュの体は、跡形もなく消滅するのだった。

固有結界は解除され、俺たちは現実に戻った。
「っ、と」
それと同時に、自分の運命を悟った。ま、これだけ大立ち回り周りをしていれば上等だろう。目的はすべて達成した。俺の中では一件落着だ。
腕時計型携帯を確認すると、メールが届いている。中身は確認するまでもない。
いの一番に駆け寄ってきたのはオルタだ。
「翔、貴様……」
「ありがとう、助かったよ。オルタの時間稼ぎが無かったらあの攻撃はなかった」
「……フン、当然だ。貴様こそ、初めてにしては見事な一刀だったぞ。だが今度があったらしっかりと指導してやろう」
次に来たのはライダーだ。固有結界の維持で大量の魔力を消費しているはずなのに、その足取りはしっかりとしている。

「ライダーも。色々あったけど、これで同盟は終わりだな」
「うむ、ならば朋友として迎えよう！」
「はは……敵わないな」
　思わず苦笑いする。思えば、ずっとこの人には見られていたように感じる。と、思い出した。しっかりと頼んでおかないとな。
「そうだ、後は任せてもいいかな」
「もちろんだ、後のことは任せておけ」
「安心できたよ。世界で一番な」
　この人がいるなら、何もかも大丈夫だろう。
「セイバー」
「あなたに会えてよかったです。言う言葉はそれだけでいい。あなたに別れを告げたいと思っている人は、私以外にもいますから」
　近くに車が止まった。あの車は確か、切嗣さんたちの移動用の……
「お兄ちゃん！」
「ぁ、桜ちゃん」
　扉が勢いよく開けられ、現れたのは桜ちゃんだった。続いてウェイバー、ケイネスさん、切嗣さんが。
　そして俺のことを見て呆然とする。俺の体は、足元からゆっくりと、ゆっくりと光の粒子になって消えてきている。
「来ちゃだめだって言ったじゃないか。危険な目にあったらどうするんだ？」
「ごめんなさい。でも、でもっ！　嫌な予感がしたからっ！」
　その予感は的中したわけだ。こっちに来ていなければ、会うことなくこの時代から退場していたと思うし。
「見ての通り、魔力を使いすぎてね。死ぬわけじゃないから安心してくれ」
　それでもあと3分もかからずに消えるだろう。色々とやり残したこともあったんだけどな。お城にいるイリヤちゃんの救出、桜ちゃんのその後の生活、ウェイバーとケイネスの時計塔での今後。考え出せばきりがない。
「投げ出すことになりそうだ」

「バカ、やろ……っ！　だったら何勝手に消えようとしてんだよ……っ」
「おおい、やめろよ。男の涙なんて。気持ち悪いだろ！　死ぬわけじゃないっつーの」
「うるさい！　何で僕がお前のために泣くんだよっ！」
　だって泣いてるだろ。
「１０年後だよ」
「……え？」
「１０年後、学園都市から俺は来たんだ。そこを過ぎれば俺は今回のことを知ってるはずだから」
　既に腰辺りまで光と消えている。
「お兄ちゃん……」
　悲しそうに涙を堪えている桜ちゃん。申し訳なく思ってしまう。これが終われば少し遊びにでも行こうと思っていたのに。
「ごめんね桜ちゃん、これでさよならだ」
「うん、今までありがとう」
「どういたしまして」
　嫌にあっさりしていて拍子抜けする。絶対もっと泣かれると思ってたからな。うぬぼれではないと思いたいけど。
　でも、もうどうにもならない。体は透け、向こう側が見えるほどになってしまっている。
「バイバイ、桜ちゃん」
「ううん、違うよ？」
　桜が否定する。
「絶対追いついてみせるんだから!!　だからまたね！　また会おうね！」
　それは、今までに見たこともない最高の桜の笑顔だった。
「はは、それは楽しみだ」
　その言葉を最後に俺は、この時代から、消えた。

「行ってしまいましたか……」
「そう気落ちするな、セイバー。奴は間違いなく英霊の座に呼ばれるだろう。その時まで待つがよいさ」
　ライダーはセイバーを茶化すが、セイバーは穏やかな笑みでそれを受け流す。
「ええ。私が世界と契約して待った時間に比べれば、その程度どうということもないでしょう」
「甘いな、青いの」
「その『青いの』って言うのやめてもらえませんか？　非常に不愉快です」
「私ならそんな回りくどい方法はとらない。『この世界で』１０年待ち、会いに行くぞ」
「は、はぁ!?　そんなことできる訳がないでしょう!?」
　それでも自分自身との言い争いになればこうなってしまうのだが。
「ウェイバーお兄ちゃん」
「ん？　なんだよ」
　桜がウェイバーに話しかけている。涙を拭いたウェイバーはしゃがみこんだ。
「私に魔術を教えてほしいの！」
「ぼ、僕に!?」
「うん！　お兄ちゃんが教わるならウェイバーさんがいいって！　腕はからきしだけど、教えるのだけは天下一品になるからって」
「あ、あの野郎……っ！」
　向こう側では、切嗣とケイネスが話をしている。
「ああ。僕とセイバーは、これから娘の待っている城に行く」
「ふむ。私はあの聖杯の解体方法について考えることにしよう。あの

家屋は使っても？」
「かまわない」
それぞれの未来に向けて、彼ら彼女らは歩き始めるのだった。

現代への帰還

「はっ！　ここは……」

気が付くと見慣れた場所に立っていた。ここは久々の、本当に久々の我が家だ。タイムベルトで過去に飛ばされる前の姿のまま、携帯の画面に表示される時刻は、メールを見たときから5分ほどたっている。

あの濃い数日がこっちではたった数分なのか。こうしてみると、本当にあったことなのか、夢じゃなかったのか不安になってくるな。

俺はとりあえず落ち着こうと、靴を脱いで静かな家の中に入る。

ブラドとの戦いで、雪菜、クロ、アスナ、アリア、耀は入院してしまっている。だから家にいるのは理子、ティナ、狂三……ヤミはいるのかいないのかわからないけど。

今日の料理当番は理子と狂三だったはず。

あの2人、何もしてないだろうな。今日はお目付け役がいないから、何をやってもいいなんて思ってるんじゃないだろうな。

不安だ。でも楽しみかもしれない。

とりあえずは癒しが欲しい。殺伐とした世界にいすぎたせいで、体が癒しを求めている。

キッチンから話し声が聞こえてくる。仲良くやっているな。

「ただいま」

「おかえりなさいませ、翔さん」

「おかえり～」

「おかえりなさい、お兄さん」

俺の予想通り、みんな仲良く夕飯の準備にいそしんでいた。

理子はイメージに合ったフリフリ付きの胸の部分がハートになったエプロンをつけている。刃物を扱うのに慣れているためか、意外にも包丁捌きは上手い。狂三は黒のシンプルなものを。鍋の中をお玉でゆっくりとかき混ぜている。ティナはまだ料理を覚えていないため、食器の準備をしていた。

「……え？」

そんな優しい光景よりも、目が引きつけられる存在があった。狂三と理子の間で炒め物をしているもう1人の少女。軽快にフライパンを振るその姿は、とても料理慣れしていることがわかる。
「桜、ちゃん……？」
見間違えるはずがない。でも、ここにいるはずがない。そう認識した瞬間、俺は駆けよっていた。そうせずにはいられなかったのだ。
「え？　翔く――――」
「桜ちゃん！　桜ちゃんなんだよな！　どうしてここにいるんだ!?　や、その前に……あの後どうなったんだ!?」
俺の剣幕に驚いていた桜ちゃんだったが、次第にその目に涙が溜まっていく。
「あ、っと……」
俺としたことが、驚きのあまり我を失ってしまっていた。冷静に考えれば、俺が残した言葉を頼りに俺を探して、この家にたどり着いたのだとわかりそうなのに。
そんな愚かな俺が出来るのは、すすり泣く桜ちゃんを抱きしめて頭を撫でるくらいだ。
「やっと、やっと再会できた……っ」
「ちょっと待たせちゃったな」
俺を力の限り抱きしめる桜ちゃん。それに応えるように、俺も腕に込める力を強め――――
「で、どういうことか説明はありますの？」
あ、そうですよね。

「「「「いただきます」」」」

あのまま料理を放置して説明というわけにはいかず、俺も手伝って急いで料理の準備をした。こうしてテーブルに並んだ料理はどれもこれもおいしそうだ。
しかし、みんなの興味はすでに料理にはなかった。
「それで、どういうことですの？」
「いきなり抱き合うなんて、どう考えても普通じゃないですよね？」
「今までそんなそぶり無かったのにねぇ～。桜ちゃんからは好き好きオーラは出てたけど」
「そ、そんなオーラ出していましたか？」
分かっていたことだが、桜ちゃんはもうずいぶんこの場所に慣れてるな。相当昔に俺のことを探し出したんだろう。
「それはもう。洗濯当番の時に翔さんの下着をもって立ち尽くしていたではありませんの」
「絶対あの時クンカクンカしてたでしょ？　理子はちゃんとわかってるんだからね」
「いつもチラチラお兄さんのほうを見ていましたし……クンカクンカ？」
ティナ、君にはまだ早いよ。
「そんなことしていません！　変な誤解を与える言い方はやめてください！　その、ちらちら見ていたのは、本当ですけれど……」
「というか、クンカクンカって、そんなことする奴が現実にいるわけないだろ？」
俺は2人の冗談を笑い飛ばす。え、何で2人とも顔を反らすのかな？
「あ～、そう思ってた方が幸せかもね……」
「女性の世界は、殿方が考えているよりも闇が深いのですわ……」
「いやいや、そんな、冗談だよな？」
そうだよ、きっとそうに決まってる。
「「……」」
今度は何も言ってくれなかった。しかも、桜ちゃんまで顔を反らしている。君らは俺と同じくらい、報告しなくちゃいけないことがある

んじゃないのか？
「話を戻しましょう、皆さん」
「そ、そうだよな！　俺も色々聞きたいことがあるし！」
「このことについては、あとで勉強しておきます」
「勉強はやめろ！」
　純情なティナが穢れてしまう！　や、前クロに誘われて俺のイチモツに色々してたんだっけか。やだ、もう俺ティナを穢してる！
「とにかく、話を戻すからな！　実は――――」
　俺は聖杯戦争のことについて説明した。その戦いのこと、桜ちゃんのこと、その行動の結果歴史を変えた可能性があることも。
「実際歴史は変わっている。俺が過去に行く前には桜ちゃんは俺の家にいなかったからな」
「翔さんがそんな嘘をつく意味はありませんし、本当のことなんでしょう」
「昨日までは普通に『桜』って言ってたのが、急に『桜ちゃん』だからねぇ。てっきりそういうプレイでもしたのかと」
　お前はすぐに下ネタに繋げるな。お目付け役がいないからって自由すぎるぞ。
「俺も桜ちゃんは違和感あるし、これからは桜にする。いいか？」
「はい。もちろんですよ」
「ふーん。それで翔君は何人の女の子を落としてきたの？」
「お前話聞いてないだろ。そんな生易しい戦いじゃなかったんだぞ？」
「でも翔君はきっちり桜ちゃんのことは落としてるしぃ～。そんなこと言われても信用できないんだよねぇ～。しかも、当時桜ちゃんは５歳でしょ？　幼女キラーだ！　幼女キラーだよ！」
「お前、ここ以外で言ったらただじゃおかないぞ……っ！」
　マジで社会的に死ぬ。
「何人もの女性と付き合っているというのは大丈夫なんですか？」
　ティナの言う通りだ。感覚がおかしくなっているのかもしれない。
「そんなエロゲ主人公な翔君のことを、もっと知りたいんだよ～。ね

え、教えてよ～」
「即座に否定しなかったということは、最低1人いることはもう確定していますわ。怒りませんから教えてくださいまし」
「そもそもそんなことに怒ってたら、あなたと一緒にいれませんわ」
ま、まあそうですよね。もう了承はもらっていますもんね！
「その、1人……や、2人？」
「はっきりしませんね」
だってセイバーはともかく、オルタの方は初対面から俺のこと伴侶とか言ってくるんだもん。
「セイバーさんですよね。王様なのにコロッと落とされた」
「え、ま、間違いは言ってないけど、それは……」
「そうですよね？　何も間違ってないですよね？　落ち込んでいるところを慰めたらコロッと落ちたのは」
く、黒い……っ！　ずいぶんと強かに育ったみたいですね。言い方に棘がありすぎる。特にセイバーに対してアレな感情があるのかもしれない。
「そ、それで？　2人かもしれないというのは、どういうことなのですの？」
「あ、ああ。最後の決戦で俺のアイテムを使って2人に分裂したんだよ」
あの狂三ですらちょっと引いてるぞ。俺はなるべく平静を装って返す。
「アイテム？　へぇ……そうなんだぁ」
「2人に分裂する？　私のクラスカードのようなモノなんでしょうか」
理子はもう全部分かったという顔をしている。そういえば、俺の能力のアレコレについて、桜は知っているのだろうか。長く俺と一緒にいたのなら、察していてもおかしくないけど。
「とりあえず、これで俺の話は終わりだよ。今度は俺が聞きたい。桜はあの後どうしたんだ？」
「はい。あの後はウェイバーさんたちと時計塔に行ったんです。体の

治療をしながら魔術のお勉強をして」
　本当にウェイバーに魔術を習ってたのか。あれ冗談のつもりで言ったんだけど……
「私の魔術回路すごく珍しかったらしくて、すごく苦労したんですよ。でも今では、管理局のスゴイ部署にスカウトされるくらいには上手くなったんですよ」
「スゴイ部署？」
「はい！　特務六課って言う部署なんですけれどもご存知ですか？　課のメンバーはみんな一流で、有名な人ばかりなんですけれども」
　特務六課ぁ!?　そこに繋がりが出来ちゃったのか!?
「そ、それで、そのスカウト受けたのか？」
「もちろんです！　高等部に上がる時にスカウトを受けて。設立の場所がちょうど学園都市だったので」
「何か、俺と会うためにそのスカウト受けたって聞こえるんだけど……」
「そうですよ？　翔君が言った１０年後にちょうど設立される部隊でしたから、運命かなって思えて。ウェイバーさんも狙って、この時期にここの時計塔支部に移動してきましたから」
「あいつもここにいるの!?」
「今ではエルメロイⅡ世と名乗っていますけれどね」
　つまりはケイネスさんとはうまくいってるわけだ。エルメロイの名前を貰えているなら、ちょっとやそこらの繋がりじゃないな。
　そのうち、会いに行こう。待てよ、あいつ偉くなったってことはアポとか必要なのか？　なんか複雑だ。同級生が自分よりも立派に働いている姿を見るような、そんな気持ちになる。
「聖杯もしっかりと解体しましたよ。サーヴァントの皆さんは座に帰ってしまいましたけれど」
　それも良かった。結局聖杯についてはノータッチだったからな。専門家に任せることが出来たのが大きかった。
「ごめんなさい。お話したいことがたくさんあって……話がうまくまとまらないですね。でもこれも言っておかないと……」

そう言って、桜はデバイスを操作する。そして俺に画面を見せてきた。そこには1枚の写真が写っていた。数人の人物が映っている。家族の集合写真のようだ。

和装に身を包んだアインツベルン一家だ。多分アイリさんの希望でこっちになったんだろう。

「これ切嗣さんたちだよな？」

「正式な式は上げていなかったらしくて。アイリさん、きれいですよね」

色々片付いたからな。新しい生活の始まりにこういう祝い事をするのはいいことだと思う。思うけどさ……どうにも納得できないことがある。

「なんか、子供が増えているんですけれど……」

イリヤのほかに1人いる。見たことのない子供が。

「はい。見ればわかると思いますれけど、男の子で舞弥さんとのお子さんですよ。私も、時計塔にいたころは1年に何度か会っていました」

あの人たち子供も作ったのかよ……違う女性と1人ずつ。俺のこと言えませんよ、切嗣さん。

「切嗣さんと舞弥さんは武偵に転向して頑張ってます。翔君のことはもう言ってあるので、準備が終わったらこっちに来ると思いますよ？」

「わざわざそんなこと言わなくても……」

「みんな会いたがっているんですよ」

俺はいつの間にそんなに大人気になったんだ。

でも、みんなうまくやっててよかったよ。

「でも私、ここに来てびっくりしたんですよ？　だって翔君、いっつも女の人に囲まれているんですよ？　もう慣れましたけどっ」

過去の俺は、いったいどんな顔で桜を迎え入れたんだろうか。現地住民の女の子がいきなり好感度１００％で迫ってきたと考えると、腰を抜かしてもおかしくないな。

「でも、今日からは私も頑張りますから。覚悟してくださいね、翔君

？」
「お手柔らかにお願いします」
俺は苦笑いする。色々な不安が消え去り、一気に力が抜けてしまった。
そんな俺を叱りつけるように、腕につけているデバイスが震えた。
「ん？」
「あっ、食事中ごめんなさいっ！」
メールだ。嫌な予感がするぞ。タイミングよく桜にも電話がかかってくるし。
しかし開かないわけにはいかない。意を決して差出人を確認する。
差出人は……
「楯無さんか」
「女の人ですか？」
「気にしない気にしない。えー、何々……」
「お疲れ様です！　あ、はい……はい……はい、大丈夫です！　はい、わかりました。明後日の１３時、〇〇〇ですね？　はい、失礼します」
明後日の１３時か、じゃあ桜と一緒に行くことになるのかな。
「アイツの家に」

変化する日常　編

お早い再会

「それで翔さん、新しい女の子は呼び出しませんの？」
食事も終わりくつろいでいると、狂三が俺に耳打ちしてきた。他の3人は今夜ご飯の後片付けをしてくれている。や、違うぞ。よく見ると狂三も片づけしてる！　こいつ能力を使ってるな。
「緊急任務とブラドで2人は呼べるのではありませんの？」
「お見通しってわけね」
確かにその通りだ。情報交換も済んだし、一息も付けた。そろそろもういいタイミングだろう。
言われるがままにガチャを回してみた。

『アルトリア・ペンドラゴン』をゲットしました。
『アルトリア・ペンドラゴン（オルタ）』をゲットしました。

俺の運命力最強すぎて笑えない。
こうも簡単に引き当ててしまうとは、過去に行って何か一層俺の力が強くなったように思える。単純な力ではなくもっと根源的な力が。
遠い目をしていると、ドタドタと慌ただしく階段を下りてくる2つの足音が聞こえてきた。これはどう考えてもヤバい奴ですね。
後片付けをしていた娘も、音を聞いて不思議がっているじゃないか。王様とは思えないぞ、この歩き方は。遊び盛りの子供みたいだ。
「「翔!!」」
2人のアルトリアは、我先にとリビングに転がり込んできた。召喚された部屋からそんなに距離はないはずなのに、2人そろって息を切らしていた
召喚されて全速力でここまで来たのが、召喚された喜びを表してい

る。あのオルタまでもが喜びで顔が緩んでいるんだ。その理由を俺に都合よく考えると、とてもうれしいんだよなぁ。
「いたひ。いたひよ、くりゅみ」
「顔がだらしなく緩んでしまっていたので。そんな顔をしてしまっては女の子に嫌われますわよ」
　狂三に笑顔で顔をつねられる。そんなにアレだったのか。
「セ、セイバーさん？　どうして……いえ、どうやってここに!?」
「新しい女性が……」
「うわぁぁぁ!!　双子っ娘!!　一粒で二度おいしい！」
　それは違うだろ、理子。一粒で二度おいしいのは多重人格とかそういうヤツのことを言うんだろう。
　いや、そんなことを言っている場合じゃない。
「……ッ」
　すると何の前触れもなく、右手の甲に鋭い痛みが走った。見ると赤い紋章が浮かび上がってきていた。
「翔君？　これはいったいどういう事なんですか？　どうしてセイバーさんがここにいるんですか？」
「知らない女の子がいつの間にか家の中に!?　翔君ヤリ手すぎるよぉーーー!!」
「あらあら、これはどういうことでございましょうか？　あの方々の反応、どう見ても初対面とは思えませんわ」
「これが不倫というものですね。そしてこれが修羅場。ＴＶで見ましたが……勉強になります」
「翔……っ、お久しぶりです……っ！」
「まったく、ずいぶんと長い時間私を待たせたものだ」
　混沌とする場。傍らにいたはずの狂三の分身はいなくなっている。キッチンにいる女性４人とリビングにいる女性２人が、俺を取り囲むバリケードになっている。逃げることは許されず、１つ１つ対処するにはみんなのパワーが強すぎる。
　誰も彼もが俺に話しかけてくるぅぅぅ!!　俺は聖徳太子じゃないんだからもっと順番にしゃべってくれぇぇぇ!!　芸人じゃないんだ

からツッコミは1人ずつしかできないんだぁぁぁ!!

〜30分後〜

「落ち着いてよかった……」

もうヘトヘトだよ。過去に行ってレベルアップしたのはやっぱり戦闘能力だけだったみたいだ。女性の扱いはまだまだ勉強しないといけないな。

みんなの自己紹介を済ませてしまえば、今度は説明の始まりだ。

「それで、どうしてセイバーさんがここにいるんですか？　翔君は心当たりがあるんですか？」

「そんなの、外で歩いていたところを手籠めにしてきたに決まっているだろ」

理子、声真似やめろ！　お前本当に似てるんだからな！　ティナとか信じちゃってるじゃないか！

「ふん！」

「い、った〜〜ぃぃ!!」

とりあえず理子にげんこつを落とす。派手に痛がっているが、直前に体を動かして衝撃を逃がしたのはわかってるからな。

「これを見てくれ」

俺は右手を掲げる。そこには赤い刺青のような文様が描かれていた。それはただのおしゃれではない。強い魔力を帯びているのだ。

「これ、令呪ですか……ま、まさかまた聖杯戦争が!?」

桜は真っ先に反応する。桜にとって浅からぬ因縁があるからな。でも、今回は大丈夫のはずだ。だってこれは、セイバー達を召喚した時に都合よく出来たものだからな。

「それはどうだろうな……聖杯はしっかりと解体したんだろ？」

「もちろんです！　冬木の聖杯はもうこの世に存在していません！」

「他に聖杯はあるのか？」

「切嗣さんと舞弥さんが世界中に目を光らせていますから、見つかったらすぐに判るはずです」

「じゃあ、今は見つかってないってことだろ？　それなら大丈夫だよ」

「でも……それだと、どうして突然サーヴァントが召喚されたのか説

明がつかないじゃないですか。触媒もありませんし」
　桜の疑問はもっともだ。
「そんなものは私たちの愛の力に決まっているだろう」
「――――ハァ？」
「私の強い愛が、奴と座を繋げたんだ。触媒なんて必要ない」
　何処から調達してきたのか現代風の衣装（新宿での衣装）を身にまとうオルタは尊大に足を組んで言う。態度だけを見れば、ギルガメッシュ並みだ。というか、どうしてこんなに現代に染まっているのだろうか。
　アルトリアのほうは、原作でも見るあの服装なんだけど。
「あいも変わらず、翔君の迷惑を考えない人ですね？　愛の力？　それが本当だったとしても間違っていたとしても、翔君にとって迷惑だっていうことは変わりませんよ？」
「フン、あの時の小娘が言うようになったじゃないか。いや、昔もそうだったか？　前は小さすぎて目にも留めていなかったか」
「ずいぶんとメルヘンになりましたね、オルタさん。思い込みが激しい女は重くて嫌われますから。気を付けたほうがいいですよ」
　――――ピキ
　アカン！　この２人仲悪すぎる！　俺が帰ってから何があったんだ。
「翔、申し訳ない。あなたが帰ってから私たちが座に帰るまで、事あるごとにあの２人はケンカをしてしまうんです」
「翔さんのことで、ですの？」
「はい。その、２人とも翔のことになると身を引かないんです……気持ちはわかりますけど……」
　理子がにやにやしながら脇を突っついてくる。もう全部把握したと言いたそうな顔だ。またげんこつを食らわせようと拳を振り上げるが――――するりと理子が腕に抱き着いてきた。制服を押し上げる豊かな双丘で、俺の二の腕が挟まれる。
「……ぁ」
「もー、いくら人が多くなっても私のこともしっかり、ね？　どんなこ

とでもしていいから」
「分かったから。今はやめておけって。爆弾が控えてるんだから。隣にも――――」
今度は反対の手に抱き着かれた。
「アルトリア」
「おお！　しっかりと名前を呼ぶのはポイント高いよ！」
うるさい理子。今はそっちよりも、腕に抱きついてきたこの娘だよ。
「い、いけませんか？」
「そうじゃないんだけど……」
腕に込められる力が強くなり、顔もほころぶ。かわいい。
ぽふ。ティナが俺の膝の上に座り、寄りかかってきた。
「ティナ」
「良いですよね？」
「もちろんです」
「ありがとうございます。ふわぁ～……ねむねむ」
ティナはすぐにうとうとし始める。おなかに食べ物が入って眠くなってしまったらしい。もともと夜型だったしな。
「きひ。思ったとおり、にぎやかになりましたね。これで入院している人たちが戻ってきたらどうなってしまうんでしょうね？」
「ツッコミ役が増えて俺が楽になると思いたい」
「どうでしょうね。入院している方々は、意外にむっつりさんが多いですから」
「それは言えてるなー……」
狂三の声が、すごく近くで聞こえてくる。耳がくすぐったい。だんだんと意識がぼんやりとしてきた。頭を撫でられると心地よく、体から力が抜けてしまいそうだ。
温かく柔らかい、最高のクッションに包まれているとため込まれた疲労がドッと出てきた。
もう瞼をあけていられない。桜とオルタの言い争う声も遠くなり

「ふわぁ～～あ……」
「先輩眠そうですね？」
「昨日は遅かったんですか？」
　次の日、俺は本当に久しぶりに朝の訓練に参加していた。昨日はいつの間にか眠ってしまっていた。目が覚めるとソファーを使ってみんなで寝ていた。みんな俺を掴むなり抱き着くなりしていて折り重なって寝ていた。女の子の布団で寝るなんて、俺はどれだけ果報者なんだろうか。そんな美味しい思いをできるのは、この世で兵藤一誠と俺とあと数人くらいだろう。
　そりゃ、ギルガメッシュと戦ってまともに休まないでいたからね。あんな極上の環境にさらされればこうなるよ。
「疲れが溜まってたんだよ」
「では少し軽めのメニューにしたほうがいいのではないでしょうか？」
「そうですね……疲れが残っているときに無理をするとケガをすることがありますし」
　それはもっともな意見だ。スポーツなんかでも、疲れて集中力がないとケガのもとになるからな。
　２人に気を使わせるくらいなら、今日の朝練休んだほうが良かったかもな。今日は土曜日で学校もない。若者の俺は、丸１日休めば明日の捜査にも全力で臨めるだろう。
「じゃあ俺はもう切り上げるから。２人は続けてくれて」
「はい」

「わかりました！」
俺は走る速度をだんだん緩めていく。やがて歩く速度まで落ちる。2人は全くペースを落とさず走り去っていった。
「若いっていいな」
俺も十分若いけど、年下を見るとどうしても言いたくなる。
まあ、俺の大冒険はインディ・ジョーンズとタメを張れるくらいにはものすごいと思うけどね。聖杯戦争なんて、1回経験すれば一生のネタになるよ。

「お疲れさん」
俺は走り終えた2人に水とタオルを渡してやる。先に言っておくと、タオルは俺のものだ。2人のバッグを漁ったりはしていない。水も俺のおごりな！　そしてこのタオルは家に帰ったらそのまま洗濯機へシュートだ。変なことに使ったりしない。
「ありがとうございます!!」
きついメニューを終えたばかりだというのに2人とも元気いっぱいだ。頬を伝う汗がまぶしい。
タオルや着替えの入った荷物は公園のベンチの上に置いてある。人が少ないこともあって防犯対策はしていないが、人がいないこの時間ならば問題はないだろう。そんな甘いことを考えていたのだが……
「よくよく考えれば、絶対危ないよな」
「盗まれるかもしれないってことですか？」
「ああ」
可愛い女の子と私物――というわけではなくても、落ちている

バッグというだけで持っていかれる可能性がある。
「誰かまとめて荷物を持ってくれる人がいれば――」
家の誰かに頼むか？　や、わざわざ早起きしてもらって荷物の番をしてもらうのは申し訳ない。そして、あとで何を要求されるのかわからない。
「――あ」
いるじゃないか。都合よくチビッ子たちのコーチをしている人が。
「あの人に相談してみるのもいいかもしれないな」
「あの人？」
「ノーヴェさんだよ。ほら――」
「――ヴィヴィオさんたちのコーチの方ですね。確かに、あそこに参加させていただくのも悪くはないかもしれないですね」
「な？　今度会ったら少し話しておくよ。それまでは朝練はしないほうがいいな」
「えっ」
「物が盗まれるよりはいいだろ。ああ、じゃあ俺が荷物を見ることにするよ。それなら許可できる」
そう言うと2人はホッとした顔になる。
「じゃ、今日は終わりにしようか」
「ぁ、待ってください！」
「え？」
綺凛が待ったをかけた。アインハルトは驚いている。しかし、それは不意を突かれたというよりも、本当にそうするのかと言いたそうな顔だ。
「き、綺凛さん？　本当に言うんですか？　やはりやめておいたほうが……」
「いえ！　言うだけ言います！」
綺凛は覚悟を決めた顔をしている。
「あの、先輩！　お疲れだとは思いますが、今日時間がありましたら買い物に付き合ってはいただけないでしょうか！」
買い物のお誘いだった。

「いいよ」
「「本当ですか!?」」
それ自体は全然かまわない。買い物もできないくらい疲れ果てているわけじゃないからな。かまわないんだけど……
「他にも人が来るけど、それでもいいなら」
「「え？」」
実は予定がブッキングしているのだ。

日常的な買い物

「しっかりとエスコートしてもらおうか、翔」
「オルタさん？　翔君に迷惑をかけるのはやめてくださいね？」
「み、見たことのない人が２人も……っ」
「すみません。身内が騒がしくて」
「いえ、そんなことは」
　いや、十分にうるさいです。女性が５人もいればそりゃそうなるよねっ！　周りの人が注目するのは仕方ないのよね。こんな美少女が５人も並んで歩いてたらさ。そしてその真ん中を歩いている俺にも当然視線が突き刺さるよね！
　歴史改編の影響で、桜のことは２人とも（アインハルトと綺凛）知っていることになっていた。
　今回は元々、アルトリアの２人にこの島を案内する予定でいた。そこに買い物の申し込みがあったわけなんだけど、アルトリアたちは快く承諾してくれた。
　いつものショッピングモールに来ている。ここに来ればある程度揃うからな。衣食住、アクティビティ、ホビー、なんでもございだ。
「で、アインハルトたちの買い物って何なんだ？」
「トレーニングウェアを買おうと思いまして……」
　ああ、サイズね……冗談だよ。サイズがきつくなったから買い替えるなんて、女性に対してそんな失礼なことを考える訳ないじゃないか。
「そういえば今日、苦しそうに抑えてましたもんね……」
　アインハルトがやさぐれている。格闘一筋だった君も、今では全然隠すつもりなくなったな。毎朝綺凛の隣で走っていれば、気になってしまうものなのかもしれないな。
「アインハルトちゃんも、まだまだこれからなんだから。おいしいもの食べて、よく寝ればいいと思うよ？」
「そ、そうでしょうか……っ!?」
　すかさず桜のフォローが入る。あのサイズの桜に真面目に言われ

たら信用できるよな。
「で、できれば、その……コツと言いますか、秘訣のようなものを教えていただけると……っ」
「え、えーと、うーん……ぱっとは思いつかないかなぁ……あ！　でもウチに来て同じものを食べれば――――」
「魔境に招待するんじゃないよ」
　家にいるのは常識人ばっかりって訳じゃないんだから。アインハルトが健全な女の子以上の悩みを抱き始めたらどうするつもりなんだ。主に理子のせいで。
「それでは、最初は服を見るのですか？」
「そうだな。先に済ませておいたほうがいいだろ」
　アルトリアの問いを肯定する。油断してると、何か事件に巻き込まれるかもしれないんだからな。
「じゃあ行きましょうか」
「お、おう、おう？」
「オットセイみたいになってますよ、翔君？」
　自然に両手がふさがったからだよ。桜とアルトリアが自然に手をつないできた。
「「……む」」
「フン」
　んん……なんかこの感じ、
「聖杯戦争を思い出すな……」
　過去の時間で１週間そこらだったとはいえずっと一緒にいた２人が隣にいると、現代に戻ってきた実感が薄れてしまいそうだ。
「そうですね」
「聖杯戦争を」
「思い出しますねぇ……っ！」
　何でそこで火花が散ってるんだ。オルタじゃないほうのアルトリアとは仲がいいんじゃないのか。
「グェ!!　オ、オルタやめ――――」
「歩くのが遅いぞ。時間は有限だ。キリキリ歩け」

襟が締め付けられ、カエルが潰されたような声を出してしまった。そのままずるずると引きずられていくのだった。

スポーツ用品専門店に到着した俺たちは、各自好きなものを見ていた。特に俺は欲しいものがないのでみんなの後ろをついて回っている状態だ。

意外なことに、アルトリアたちも興味をもって熱心に見ている。これからこの世界で過ごすにあたって色々と欲しいものがあるし、欲しいものはなるべく買うことにしようと思う。そもそも、そのために今日は買い物に行く予定だったからな。

「ここまで種類があるものなのだな。戦場に出るには不向きだろうが……」

「珍しいのか？　座に帰る前にこういうお店に行ったりしなかったのか？」

少し離れたところの商品を見に行っていたオルタが戻ってきた。

「それはそうだろう。私はサーヴァントだ。そうやすやすと出歩けるわけがない」

「それにしては……」

どうして、召喚されてすぐにあんなキメキメの服を揃えてたんだろうね。アルトリアはアスナから服を借りたのに、オルタの方は自前だったし。

「何か言ったか？」

「いや、何も」

危ない危ない。また口を滑らせるところだった。

「大方、この服のことを言っているんだろう？　外を出歩けなかっただけで、時間は持て余していたからな。ＴＶやネットを参考にしただ

けだ」
「ま、そうだよな」
　１０年前でも便利な世の中だったからな。
「だったら、いろんな種類があるのは知ってたんじゃないのか？」
「馬鹿め。この私が服なんぞにそんなに時間をかけるような女に見えるのか？　こんなものは直感だ」
　そんなことを言ってもしっかり着ているあたり、気に入ってるんだろうな。しかも似合っている。クールなオルタにしっかりと似合っている。
「服装に気を付けないなんて、女性としてあり得ませんよオルタさん？」
「そうですよ！　アインハルトさんも、気にするようにしないと！　この後見に行きましょうね！」
「いえ、ですが着る機会が……」
　３人が寄ってきた。特に桜の棘が鋭い。アインハルトと綺凛も和気あいあいと話している。次にどこに行くか、もう決めてしまっているのかもしれない。
「桜も買うんだな」
「はい！　この際私も、新調しようと思ったんです。引っ越しのごたごたで最近はおろそかになっていたので」
「桜さんには色々とアドバイスをいただいたんですよ！」
　アドバイス？　似合っているとかそういうやつ？
「良いんですよ、綺凛さん。私も苦労しましたから。あんまり無理をすると、将来に影響が出てしまいます」
「でも、最近のは本当にすごいですよね。着心地が毎年進化していますよ」
「綺凛さんも、このメーカーの最新モデルを使っているんですね」
　２人で盛り上がっている。
「その、２人が話しているのは……」
「ここ関係、だろ？」
　俺は自分の胸をトントンと指さす。

「はい……胸部のサポーターです。私には必要のないモノ、です……」
　わざわざ自分で傷つきに行かなくてもいいのに。肩を落として暗い顔をしている。
「ま、まあ、どうしても使いたいなら大人バージョンになって使えば……」
「そこまでして使うのは惨めですよ……」
「それもそうだな」
　目的と手段がまるっきり反対になっているな。
「で、アルトリアは？」
　ここに姿が見えない。もしかしてはぐれてしまったのか。おいしそうな匂いにつられてどこかに行ってしまったのか。
「そんなわけないじゃないですか」
「今試着してるんですよ、先輩。行ってみましょうよ」
　確かに気になった俺は、お店の中に設置されている試着室に向かった。３つある試着室は、右と正面のカーテンが閉まっていた。
「アルトリアさん！　どんな感じですか？」
「桜ですか？」
　真ん中の試着室から声が返ってきた。
「どうでしょう……着てはみましたが、何分この手のものを着るのは初めてで……」
「開けてしまってもいいですか？」
「はい。できれば感想を聞きたい」
　そう言いつつ、カーテンは向こう側から明けられた。
「あ、ちょ、ど、どうして翔がここにいるんですか!?」
「どうしてって、このお店には一緒に来ただろ」
「桜！　どうして言ってくれなかったんですか！」
「え、さすがにスポーツウェアですし……」
「～～～～っ!!」
　アルトリアは神速でカーテンを閉めてしまった。さ、流石に恥じらいすぎでは？　俺と桜はどうしようかと顔を見合わせる。
「こんなの、私のイメージに合わないでしょう!?　王として、少女のよ

うにはしゃぎまわるなど……ッ!!」
何かぶつぶつ言っている。いや、イメージって。ウキウキで俺と手をつないだり、笑ったり正しく少女のそれだったんですけど。周りの男は絶対に『爆発しろあのリア充!!』って思われていたと思う。
アルトリアとしてはあまり気に入らなかったのか。俺としてはどっちも可愛いからいいんですけどね。騎士王としての凛々しいアルトリアも。それを言うのは野暮ってことですか？
（哀れな女だ、青いの）
（いまさら頑張る必要ないと思いますよ、王様）
（王……？）
（あの人が王？　そういえば、昔調べた歴史書に……）
俺たち全員、それぞれに言いたいことがあるみたいだ。でも、ここで粘っていたとしても事態が良い方向に変わるとは思えない。
「俺、外に出てるから。落ち着いたら連れてきて」
「分かりました……」
本人が落ち着いてくれるのを待つしかないよ。俺はゆっくりとその場を後にするのだった。

「いやいや、買ったな」
「散財してしまいました……」
「私も、服にこれだけお金をかけたのは初めてです」
買い物を済ませた俺たちは、一休みしようとファミレスの中に入っていた。席には大量の紙袋が置いてある。その数は大小合わせて6つもあった。中にはお化粧道具も入っている。俺の感覚ではまだまだ必要ないと思えるんだけど、女性の事情はよく分からない。

「そんなことないですよ！　肌はお手入れが大切なんです！　油断しているとすぐに乾燥したり、シミが出来ちゃったりするんですからね！　お手入れを始めるのは早い方が絶対にいいんです！」
桜に力説されてしまった。なるほど、まだ大丈夫の思考は危険なんだな。
「ぱくぱく。それで、ぱくぱく、カロリーのことも計算するなんて、ぱくぱく、大変だな」
「先輩、見せつけながら食べるのはヒドイですよう……」
綺凛が恨めしそうに俺を見てくる。でも仕方がない。俺はしっかりと聞いたんだから。注文する時にいらないって言ったのはそっちだよ。
ウルトラジャンボミックスミラクルフルーツパフェ、名前に恥じない超特大サイズだ。机に座った俺の顔が完全に隠れるくらいと言えば、その規格外のサイズが伝わるだろう。
カロリーなんて気にする必要のないアルトリア２人にも食べてもらっているが、少し調子に乗りすぎたかもしれない。量が多すぎる。もうみんなに手伝ってほしい、むしろあげちゃいたい。
「アインハルトはあんまり興味なさそうだな」
「はい。この手のものは食べたことがないので。食事はトレーニングアプリが提示するものを食べて、間食もあまりしませんし」
この娘は本当に覇王流にすべてを捧げてきたんだな。
「俺、そろそろお腹いっぱいだから、手伝ってくれるとありがたいんだけど」
「では、そちらに２人に……」
「ほら、口あけて」
「「「なっ!!」」」
俺は長いスプーンをアインハルトに向けた。どういう意味かなんて決まっている。ラブラブバカップルがするあの伝説の行為――――あーん、だ。俺とアインハルトはカップルでも何でもないけど。
アインハルトも興味がないわけじゃないんだろうけどね。こうでもしないと絶対に食べようとしないだろ。ちょっとした荒療治だよ。

周りは……アレだよ、アレ。なんかもうアレだよ。
「い、いえ、私は――――」
「あーんっ☆」
「言い方が少し腹立たしい気が……っ！」
いいえ。それは気のせいではありませんよ。
「つべこべ言うなって。一口だけでもいいから」
もうパワハラ一直線だ。
「分かりました……それでは」
アインハルトも観念したらしい。顔を赤くしつつも口を開けた。でも目まで閉じる必要は無いよ。や、開けてたら開けてたでアレかもしれないけど。そして今になって周りの女性陣の視線が痛くなってきた。
「よっと」
「はむっ……」
チキンの俺は早く終わらせてしまおうと、無心でスプーンを口の中に突っ込んだ。パフェスプーン独特の形の先端が、アインハルトの唇の圧力を伝えてくる。ゆっくりと引き抜くとスプーンについたクリームだけを口に残し、銀色が見えてきた。
「美味しかった？」
「……はい。美味しいです」
「それは良かった」
口調はそっけないけど、口元が緩んでいる。喜んでくれたようでこちらもうれしい。するとこちらも顔を赤くした綺凛が、アインハルトに何やら耳打ちをし始めた。
「ア、▪アインハルトさんっ！　今の、先輩と、か、間接キスですよっ!!」
「っ!!　え、あ、その、そんなつもりは……っ！」
「先輩も全然平気そうですし、やっぱり慣れているんですね」
「どうなんでしょうか。私のように意識していなかっただけでは？」
「意識しないと恥ずかしくないものなんですか？」
「い、いえ！　そういうわけでは……」

ぼそぼそと言っているため、何も聞き取れない。いくらなんでも身を乗り出して聞くことは出来ないから、ここは知らないふりをして押し通そう。

今はそれよりも、

「「翔（君）？」」

「もちろん皆様にもやらせていただきます」

当然こうなるよね。

裏・日常的な買い物

あああああ！　やってしまいましたやってしまいました！　私としたことが、翔になんてふがいない姿を見せてしまったのでしょうか……っ。

私――――アルトリア・ペンドラゴンは、試着室の中でうずくまった。熱くなった顔を両手で押さえ、今起きたことを反芻している。

騎士王と呼ばれた私が、ただの少女のように服を着てはしゃいでいる姿なんて、翔の思い描く私ではないはず。もっと背中を預けることが出来るような、そんな頼もしい存在のはずです。

それを、こんな形でっ。

「～～～～っ!!」

小さい個室の中でなければ、転がりまわっていたかもしれません。

顔を覆っている手をどけると、そこには信じられないくらい情けない顔をした私がいた。顔を熟れたリンゴよりも赤くして……気持ちを落ち着けるのに一体どれくらいかかるのでしょうか。

「アルトリアさん？　翔君なら外に行きましたよ？　そろそろ落ち着きましたか？」

「桜ですか？　本当ですか？　本当にいませんか？」

「はい。お約束します」

恐る恐るカーテンを開けると――――確かにそこには翔の姿はありませんでした。私は大きく息を吐き力を抜きます。そのおかげで大分落ち着けたような気がします。そんな私に注がれる複数の視線。

「な、何か？」

「服、どうですか？」

「え？」

一瞬言っている意味が分かりませんでしたが、すぐに理解します。そういえば私はこの服を試着するためにここにいたんですね……あまりに衝撃的な出来事のせいで、頭が真っ白になってしまっていました。

「い、いえ！　少し試してみようと思っただけですから！　すぐに着

替えます！」
「すごく似合ってますよ！　ちょっと後ろの方も見せてもらってもいいですか？」
「え、あ、はぃ」
　綺凛に押された私は、言われるがままに後ろを見せる。
「わぁ！　いいですよアルトリアさん！　やっぱりこの後、洋服も見るべきですよ！」
「髪型も変えるともっといいかもしれないですね……」
「確かにそうですね……少し考えてみましょうか」
「あの！　私は特にこの服が欲しいわけでは！」
　思わず声を張り上げてしまう。や、まったくほしくないかと言われれば、そんなことはないというか、ちょっとは欲しいと思うというか！
　しかし、サーヴァントであるこの身には、日常で困らない程度の服さえあれば十分で――――
「くだらないことを考えるな。青いの」
「オルタ？」
「そう言って逃げ回っていても一向にかまわんがな。翔は私がもらうだけの話だ」
「だから何の話を――――」
「自分に自信がない女ほど見ていて見苦しいものはないな。自分の半身ともなれば、もはや見るに堪えないぞ」
　その言葉にカチンときた。
　私が逃げ回っている。それは図星だった。よりにもよってオルタに言われてしまうとは。私は翔に背中を預かってほしい。しかし、翔にも背中を預けてほしい。そんな存在になりたい。私だって、オルタや桜と同じく、いや、それ以上に翔を愛している。そうでなければここにはいない。
「買います」
「え」
「桜、会計を！」

「でもそれはスポーツウェアで……翔君に見せるなら、もっとかわいい服のほうが」
私の言葉に、オルタは満足そうに頷いている。
……勢いで言ってしまいましたが、翔に見せるのはいったいいつになるのでしょうか……

まったく、困った半身だ。ため息を吐きつつ、私――――アルトリア・ペンドラゴンは一足先に店の外に出る。私たちは2人ともアルトリアだが、先に現界したあいつをアルトリア、私のことはオルタと呼ぶことで区別している。
私はあの聖杯戦争中にとてつもなく特殊な形で召喚された。その影響か、あの聖杯戦争でのアルトリア（セイバー）の記憶がすべて焼き付いている。
この男に、奴がどんな気持ちを持っているかも。
その記憶に魅せられた私までもが、こうなってしまっているのだ。そんな強烈な気持ちを持っている。
「早いな。みんなはどんな感じ？」
とぼけた顔で、翔が立っていた。端末を弄り時間を潰していたらしい。コイツは、周りにいる女のことを考えていないようで考えている。分かりにくいようで、その在り方はまっすぐな奴だ。
「ようやく駄々っ子が決心したらしい」
「触れないほうがいいだろうなぁ……」
余計な気をまわす奴め。そこが良いところでもあるが悪いところでもある。もっと女性を引っ張っていこうという気持ちを持てばいいものを。

戦いの中で、相手に自分の誇りをぶつける時のような勇ましさをいつも持てば、さらに良い男になるだろう。
「ああ。そうしろ。あいつにはその方がいい」
だが、今回ばかりはこいつの判断に賛成だ。手を貸してばかりでは、成長することは出来ないからな。特にあの女のような頑固な奴は。
自分の気持ちを理解しているくせに、表への出し方を全く知らない。それも無理はないと同情してしまうが。あいつと私、アルトリア・ペンドラゴンが置かれていた立場を考えれば。誰かに頼るなど、考えることなど出来なかった――――
「――――待てよ？」
「何が？」
「いや、何でもない。気にするな」
ふう。思わず声が出てしまった。だが、そのくらい衝撃的な気づきだった。アルトリア・ペンドラゴンが置かれていた立場、民衆の期待を一身に背負ったそれは、性格や、性質が多少変化していても変わらないはず。
あの女に当てはまることは、私にも当てはまる……？
「いやいやいや」
「何が？」
翔が私を見てくるが、思考の海を泳ぐ私には反応する余裕がない。
それにしても、一瞬とはいえバカなことを考えてしまった。この私が、生娘のように……そういえば、私の中にあるその記憶は、あの女の経験なのか。
実際の私にはそんな経験は……
「この私が、後れを取っている……？」
「だから何に？」
そんなバカなことがあるのか？　ここまで言っている私が、一番大事なところで後れを取っているだと？　そんなこと認められるわけがない。
そもそも、昨晩の時点で済ませておくべきだったんだ。それを何

だ、あんな複数の女を侍らせて、何もせずに眠るだと？　百歩譲って女が何人もいるのは良い。どうせ私が一番だ。だが、その私にすら何もないというのはいったいどういう事なんだ？

そう思うと、だんだん言葉に出来ない感情が膨らんでくる。

「今夜、覚えておけよ」

「え」

何が何でも、今夜一歩進む。そう決心し、頭の中でプランを練るのだった。

もう、お兄ちゃん――――翔君は――――本当にどうしようもない女たらしですね。私――――間桐桜は、横を歩く彼の横顔を見た。本当だったら、2人でゆっくりと買い物のはずだったのに、聖杯戦争の記憶が蘇ったのなら、いろいろと話したいこともあったのに。

セイバーさんたちの日用品の買い物、それ自体はまだいいです。でも、アインハルトさん

と綺凛さんまで来るなんて全然想像してませんでした。

おかげでこんな大所帯。男の人は翔君1人。とんだハーレムですねっ。この島で再会した時から、翔君の周りには女性が多かったですけれど。いまさらこの程度で文句は言いませんけどっ。

セイバーさんは言うまでもなく、翔君のことが好きです。それはオルタさんも同じ。そして、綺凛さんもそうなんでしょうね。翔君の一挙手一動作一声に敏感に反応してます。アインハルトさんは……まだだと思いますけれど、いつどこでそうなってしまうか。油断できませんね。

翔君、私のこと興味ないんでしょうか。聖杯戦争を経験したなら、

もっとあのメンバーがどうなったのか知りたいと思ってもいいと思うんですけれど。
なんて気持ちは、もうあまりない。
翔君はそういう人だから。誰かが困っていたら助けてしまう人だから。この島に来てからずっとその姿を見ていたら嫌でもわかってしまう。
助けた人たちを大切に思っているけど、誰か1人を特別に思っているわけじゃない。誰かの気持ちに応えているだけ。
でも、だからこそやる気が出る。
気持ちに応えさせるだけじゃなくて、夢中にさせて見せる。でも、恋心とは別に、恩返しをしたいという気持ちもある。
私の人生は、翔君に与えて貰ったんだから。翔君がいなかったら、あの地獄の中で壊れていくだけだった。その分を、一生を与えて貰ったなら、一生をかけて返さなくちゃいけません。
でも、この気持ちは絶対にそんな義務感だけじゃない。そう断言できます。
1人の女として翔君に尽くしたいという気持ちも確かにあるんです。
強力なライバルはたくさんいます。みんないい人たちで、大切なお友達です。でも、やっぱり、1番は譲れません。
私はずっと待っていました。聖杯戦争の記憶が戻る事を。この島で初めて会ったときは少し傷つきましたけれど、しっかりと理解してここまで待ちました。
「翔君、あのお店で少し休みませんか？」
ここからは、私も本気を出しますよ？　翔君。

やっぱり先輩、私の知らないことがたくさんあるんだな。熱くなった顔を冷たい飲み物で覚ます私――刀藤綺凛――は、アルトリアさんたちにあーんをしている翔先輩を眺めている。

アインハルトさんにも自然にあーんしてたし、桜さんたちにも。そ、それに、私にも。アインハルトさんにするときは、少し強引だったけどあんまり恥ずかしがってるようには見えなかったし。そもそも、そんなに他人にあーんしたりしないよね、普通は。

そもそも論で言うなら、あの双子？　のアルトリアさん達とも一緒に住んでたなんて全然知らなかったもんね。先輩が私に報告する義務なんてないけど、他にも女性との関係があると思うと、ちょっともやもやしちゃう。

それに、先輩強くなってる。

どんな修羅場を潜り抜けたかなんて全然わからない。少なくとも私には、この短期間でここまで強くなる方法なんて全然見当がつかない。

今私が戦っても、絶対勝てないと思う。そのくらいの差が出来ちゃってる。あの時の決闘ではそんなことなかったのに。

「綺凛、いる？」

「ぁ、はい！　むぐっ」

ボーっとしていると、先輩にスプーンを突っ込まれた。口を動かすと、クリームの甘さとフルーツの酸味が口の中に広がる。

「おいしい？」

「えへへ。おいしいです」

「翔君。今度は私ですよ」

「はいはい」

桜さんにスプーンを向ける先輩。

私には知らないことが多いけど、それでも先輩は先輩だと思う。どれだけ強くなっても、優しいところは全然変わってない。

でも、このままだとただの先輩と後輩のままだよね。う～、どうすればいいんだろう。一緒に住んでる人と比べたらやっぱり不利だよ

！

もういっそのこと、先輩の家に押し掛ける――なんてできるわけないよ！　家の人が許してくれないし、何より先輩と一緒の家に住むなんて。

でも、もっと先輩と一緒にいたい。どうすれば――

「あ」

あった。

前に少しだけ話が出て、それっきりになっていたことだ。

「せ、先輩！　すこし、お話良いですか？」

「お、おい！　スプーン吸いすぎだ……っ！　もう何も残ってないだろ……っ！　あ、なんだ綺凛」

「……後にしたほうがいいですか？」

なんかもうスゴイ体勢になっている。アルトリアさん、甘いもの好きなんだね。

「全然気にしないで。このままで問題ないから」

「そうですか……？」

全然そうは見えないけど、先輩が大丈夫っていうならそうなんだよね。

「実は、今日はこのことをお話ししようと思っていたんです。この前の戦妹（アミカ）のことなんですけれど……」

「あー……あれね」

「グッ！　ゲホッゲホッ！」

チョット見栄をはった前置きをして話始めると、アインハルトさんがせき込んだ。ストローを咥えていたから飲み物が変なところに入っちゃったのかな？

「アインハルト？」

「い、いえ。なんでもありませんよ。綺凛さん先輩の戦妹（アミカ）になるんですか？」

「や、前にちょっと話してただけだ。話が進んでるわけじゃないから」

「あ、ああ、そうなんですね。すみません、てっきり――」

「てっきり？」

「っ！　なんでもありません！　なんでもありませんよ！」
アインハルトさんが珍しく慌ててる。どうしてだろう？　でも、理由は言ってくれない。気にしないでほしいって言われたし、話を進めようかな。
「それで、先輩はどうお考えですか？」
「ごめん……忙しくて考えてる暇がなかった。ま、俺としては断る理由がないから」
「でしたら！」
「ん。今度正式な書類を提出しに行くか」
「はい！　ありがとうございます！」
えへ、やりました！　これからもよろしくお願いします、先輩。

翔先輩、ホントはどういう人なんだろう。私――――アインハルト・ストラトス――――は次々とあーんをしていく先輩を横目に見ながらストローを銜えた。
最初の印象は実力者。それだけだった。その頃は私の方でも反省するところがあると思うくらいヤンチャしてたから、それ以外の感情はなかった。今は少し違って、尊敬できる先輩、だと思う。
今朝会ったら、信じられないくらいの強者の存在感を持っていた。数日前とは明らかに違う。いったいどんな訓練をしたのか。
そして、そんなに強くなっているのに、いつの間に知らない女性２人と知り合って買い物に行くような仲になったのか。
ダメですよ、みだらに女性と関係を持つのはっ。学校でも教わりました。男性は特に気を付けないといけないって。先輩はもしかしたらその意識が足りていないのかもしれないです。

ここは私が、無礼であっても指摘しないといけないのかもしれないです。先輩に何かあってからでは遅いですから。
「実は、今日はこのことをお話ししようと思っていたんです。この前の戦妹（アミカ）のことなんですけれど……」
「あー……あれね」
戦妹（アミカ）？　そういえば、少し前の朝練で――――
「グッ！　ゲホッゲホッ！」
『あの事』を思い出して飲み物を喉に詰まらせてしまいました。
「アインハルト？」
「い、いえ。なんでもありませんよ。綺凛さん先輩の戦妹（アミカ）になるんですか？」
少し前の朝練、私は盗み見てしまったことがあります。綺凛さんが先輩に、その、自分の胸を触らないかと迫っているところを。
あの時は何もありませんでした、よね？　私は結局隠れていて、外に出た時には2人はもういませんでしたし。もしかすると、私が知らないところで2人は……
「や、前にちょっと話してただけだ。話が進んでるわけじゃないから」
先輩と綺凛さんはきょとんとした顔をしている。本当に何もない、のでしょうか……？
「あ、ああ、そうなんですね。すみません、てっきり――――」
「てっきり？」
「っ！　なんでもありません！　なんでもありませんよ！」
冷静に考えれば、あの綺凛さんが人のいるところでそんな話をするわけがありませんよね。私の早とちりです。絶対にそうです！
はぁ。最近、雑念が多いのは私の方なのかもしれないですね……

突然の宣告

それは突然だった。

何がかと言われれば、物語の終わりだ。それが突然、向こうの方からやってきた。小説の第1章を読んでいたら、いつの間にかエピローグのページまで飛ばされてしまったかのような。

何を言っているのか分からないと思う。

俺も最初はわからなかった。

でも事実としてそいつは俺達の目の前に現れ、圧倒的な力を見せつけてきた。

そいつの存在は、嫌でも俺に『終わり』を意識させたのだった。

俺にとっては先にある終わり。そいつにとってはすでに訪れた終わりだった。

量産された紙袋をみんなで分担して持つ。いくらなんでも俺1人で持てる量を超えたのだ。パフェを食べ終わった後にも、結局色々と買い物をしてしまった。お腹一杯になってしまった俺は、タピオカをちびちびと飲みつつみんなの後ろについて回った。

あんなに恥ずかしがっていたアルトリアは、どんな心境の変化があったのか自分から服を見たいなんて言い出してとても驚いた。

思わず何着か買ってあげたのはしょうがないですね。当然オルタにも買ってあげた。アルトリアはまだまだ自分の好みが決まっていないらしく、みんなの着せ替え人形になってた。オルタはその逆で、自分で選んだものを何着か試着して、すぐに買っていた。

そういうところで性格の違いが出たな。
「あんなに買って大丈夫だったんですか、先輩？」
「大丈夫じゃないかもしれない」
「翔、あなたのタピオカミルクティがほとんど減っていないようですが？」
「欲しいならあげるよ」
なんだかんだ財布の中身はすっからかん。買ってほしいとねだられてしまうと拒否できなかった。女の人には必要だと言われてしまうと従うしかなくなってしまう。
そろそろ帰ろうかと言っていた時、そいつは現れた。
「どうしたんでしょうか。何か騒がしいですけど……」
最初に気が付いたのは桜だった。言われると俺やアルトリアも気が付く。このショッピングモールは、真ん中が吹き抜けになっていて、まるで野球のスタジアムのような構造になっている。通路から下を覗けば、１階まで見下ろすことができる。
俺たちが今いるのは3階。騒ぎが起こっているのは1階のようだ。
１階の通路には所々に木や噴水が設置されている。その近くには決まってベンチが設置されていて、休憩のスペースになっている。騒ぎの元凶はそこに現れたらしい。
なんだアイツは。
黒のボディを主体に全身に金色の装飾が施された、謎の人物。その腰には――
「ベルト……？　仮面ライダーなのか、アイツ？」
あんな仮面ライダーは見たことがない。この世界にはもちろん俺の知っている仮面ライダーはいない。俺はちょうどビルドがジーニアスフォームに変身したあたりでこの世界に来たから、もしかするとその後の仮面ライダーなのかもしれない。
ということは平成２０作品目のライダーか？　ずいぶんと派手派手というか、最終フォームだろ、あれ。
どちらにせよ、こんなところで変身する理由なんてないはずだ。特に何かするわけでもなく辺りの様子を観察しているだけに見えるが

……得体が知れない。
段々と武偵も集まってきている。現場はどんどん物々しい雰囲気になってきた。
「翔、どうしますか？」
すっかりとモードを切り替えたアルトリアが俺に問うてくる。
「行ったほうがいいだろうな」
あの黒多めのデザイン、ダークライダーの可能性もある。だからと言って悪い奴だと決めつけるのは変かもしれないが、俺達が行くことに越したことはない。
「よっ」
俺は手すりを飛び越えた。下までは２０メートルくらい。今の俺ならケガをする理由はない。こんなこと平気で出来るようになってしまうとは。この世界に侵されてるな。
俺はそのライダーと集まってきていた武偵の間に入るように着地した。空から降ってきた俺に周りは目を？いていたが、目の前のライダーは微動だにしない。俺が来ることを知っていたみたいだ。
「もっと早く動け、夜月　翔」
来ることを知ってるどころか、名前も知られているみたいだ。
「何処のどいつだよ、アンタ。そのベルト、いったいどうやって手に入れたんだ？」
「お前もよく知っている方法だ。決まっているだろ？」
「……お前も同郷かよ。はぁ、ゾンビ野郎を倒したら、ずいぶんと人気者になっちまったな」
ガチャで手に入れたってことね。こうも立て続けに来るなんてな。できれば戦いたくなんてないんだけど。どこかつかみどころがないこの口調。じいちゃんを思い出すな。
「アイツと一緒にするなよ。お前も嫌だろ？」
「ははっ、確かにな」
そう言って少し笑う。って、こいつ、ゾンビのことを知ってるのか。マジで何者なんだ？
「もしかして、俺のことを陰で見て『まだまだだな……』とか言っ

ちゃってたのか……？」
「ばーか。そんなわけないだろ。ある意味、それは正しいけどな」
そんな序盤の隠しキャラクターみたいなストーカーがいたと思うとゾッとするけど、そういう訳ではないのね。
「時間もないし、早めにネタ晴らしをするぞ」
「ちょっと待て、推理する」
「時間がないって言ってんだろ！　ギャグを言ってられるほど余裕がないんだよ」
えー、雑談してたのは何処のどいつだよー。

「俺は今から3年後のお前だ」
「……はぁ」
いや、ま、そうですか。ちょっとだけど予想はついていましたけどね。
「もちろん、ただ遊びに来たわけじゃない3年後、この世界……宇宙にとてつもない危機が訪れる」
「具体的にはどんな？」
「それは■■■■■■■――っち、これは言えないのか。事件の具体的な内容は言えないんだったな……ヒントも言えないのか……」
「おい、1人で納得するなよ。というか、信用してほしいなら変身を解け。未来の俺だっていうなら顔見ればわかるだろ」
しかも3年後なんて、そんなに違いがないだろうし。待てよ？　3年後、顔を見せられない……？
「それは無理だ。これも色々と制約があってだな――」
「――まさか、調子に乗った大学生デビューで大失敗したとかって

話か……？」
　自慢の黒髪をキンキラに染めて暗闇でも光るようになっちゃったとか？　あ、耳にピアスかな？　シルバーアクセがじゃらじゃら？
「そんなわけあるか！　そんなことのためにドラゴンボールを使えるか！」
「ドラゴンボールを使ったのか!?　ここに来るために!?」
　そこに驚きだよ！　そんなものもガチャから出てくるのか。
「だったら、ドラゴンボールでどうにかしろよ。なんでも願いが叶うだろ？　願いはいくつかなえられるんだ？」
「1つだけだよ。でも、ドラゴンボールで叶えられる願いの限界を超えてるらしくてな。どうしようもないんだ」
　いつの間にかコントになってきた。いつの間にか周りを取り囲んでいた武偵達がいなくなっている。この会話を聞いてずっと警戒していろって方が無理な話だな。
「実感がわかないって顔をしているな」
「そりゃ、なぁ。正直そのくらいのことが起こってもおかしくないとは思うけど、わざわざ言いに来るっていうのは――――」
「未来では世界規模で敗北したんだ」
　――――。
「俺の敗北じゃない。お前もわかるだろ？　この世界はたくさんの要素が混じり合ってる。たくさんの正義の味方がいるし、お前の行動で悪人が善人になったり、仲たがいした人たちが仲直りするときもある」
　それはこの前、Ｚｅｒｏの時に分かっている。あの行動の結果、歴史が変わったことも確認できている。
　そうか、この男は……
「歴史を変えようとしているんだな」
　他ならぬ、自分の行動を変えることで。
「理解が早くて助かるよ。俺の場合、この事実を知るだけで歴史を変えることが出来るからな。知識は行動に影響を及ぼす」
「だろうね」

「ま、お前が強くなっても勝てるとは思えないけどな」
「はぁ？」
一体何言ってるんだコイツは、もうめちゃくちゃだよ。
「だって俺が勝てなかったんだぜ？　今から少し頑張ったとしても勝てるわけないって。こう言ってはなんだけど、イベントもかなりうまくやった方だと思うし」
コイツは何でそんなに煽ってくるですかね。
「お、すげー面白い顔になってんぞ」
「誰のせいだと思ってるんですかね？」
2人そろって「あっはははは」と笑う。コイツ、ブン殴ってやろうか？
「ま、しょうがないんだよ。人間って生き物は、目の前のテストには集中できても、3年後の大学受験にはなかなか本気になれないだろ？後悔してからじゃ遅いのにな……」
「もしもーし。俺と会話してますかー？」
シリアスなセリフだが、1人ごとである。言ってることには共感するけど。数年後に何だか知らないけど世界が滅亡しますって言われて、死に物狂いになれる人がいれば、その人は何かの信者だろう。
「じゃ、少し試してやろうか」
「何をだよ」
「そんなの決まってるだろ？」

――――お前がどのくらい弱いかってことをさ。
俺は一気に飛びずさった。とんでもないプレッシャーに、背中から滝のような冷や汗をかく。目の前にいる奴が、ついさっきまで談笑していた相手とは思えなくなってきた。圧倒的な絶対者と対峙している気分だ。

「ここで始めるつもりか？　周りにこんな人がいるのに？」
「冗談だよ。ちょっと脅かしただけだ。でも、少しはわかってくれたか？」
「……」
　俺は何も答えることが出来ない。
「もう時間がないみたいだ。今ドラゴンレーダーを作ってる。またドラゴンボールを集めたら会いに来るかもしれない。や、それより前に能力をもっと使いこなせるようになれば、ドラゴンボールに頼らなくてもここに来れるようになるだろう。とにかく、意識していろ！　絶対に起こることだと思え！　甘い希望は捨てるんだ！」
　絶対者だと思っている相手の必死の叫び。周りの注目が再び集まり始める。
　未来の俺の体が少しずつ透け始める。
　やがてその場には誰もいなくなった。
「翔、無事ですか!?」
　離れていた場所で待機していたアルトリアやオルタが駆け寄ってきた。
　しかしあまりに突然ことで、俺の思考は全くまとまらなかった。

「つまり、未来の翔君が『未来が大変なことになったー』って言いに来たってことなの？」
「未来のお兄ちゃんは、時間も越えられるのね……」
「もう先輩が何をできるようになっても、驚かないと思います……」
　綺凛とアインハルトを家まで送り届けた俺たちは、さっそく今日

あったことについて会議をしていた。今は入院しているアスナ、雪菜、クロ、アリア、耀もビデオ通話で参加している。
「ホント、どういう仕組みなのかしらね。あんたの能力、魔法でも魔術でも超能力でもない。レアスキルにしても特殊すぎるわよ」
まだ能力の仕組みや、この世界に来た経緯などの事情を説明していない人が何人かいるが、今回の会議ではそう重要なことではない。
「結局、大切なのは未来の翔さんの言ったことが本当かという事ですわ」
狂三は少しおもしろくなさそうな顔をしている……？　や、何かを考えているのか？
「いえ、ただ――――時を操る精霊であるわたくしがいるにもかかわらず、別の手段で時を超えたというのが気になって……」
「確かにおかしいよねぇ～。もしかして浮気ばっかりしてる翔君に愛想尽かしちゃったとか？」
「そんなことはあり得ないと思いますが……一番可能性が高いのは、と言っても小さい可能性ですが――――わたくしが死んでしまうという事ですわ」
「「「……」」」
正直ありえない話ではなかった。未来の俺が言うくらいの強い敵ならば、あるいは。
「でも、何もヒントがないというのは厳しいわね。いくら私でも推理できないわ」
大きな問題はそれだ。いくら忠告されても、根本の解決方法がわからない。俺たちが多少強くなっても防ぐことは出来ないだろう。
「とりあえず、今出来ることは自分のスキルアップ。過去の文献を漁って、伝説級の災厄をリストアップ。その調査ってところか」
具体性は何もない、想像の域を出ない中身のない会議は、そんな結論を出してお開きになるのだった。

「ふぅ……」
寝る準備を全て済ませた俺は、ベッドに寝転んだ。穏やかに終わると思った1日だったが、全く想像の外から新しい不安要素が生まれてしまった。
「3年、3年か……」
みんなはまだ現実味がなかったのかもしれないが、俺には直感的に理解できていた。あいつが言ったことはすべて事実だということが。直接話した俺にはわかっていた。
この世界のタイムリミット。
アイツの口ぶりから、戦いにすらなっていなかったのかもしれない。あのレベルでそうなのだとすれば、多少強くなってもどうにもならないだろう。
「だからどうしたってんだ」
それをどうにかするのが、俺たちの仕事だ。もしかすると、俺たちはその運命を回避するためにこの世界に来たのかもしれないのだから。
「とりあえずは、明日のお仕事を乗り越えないとだなぁ」
明日は家宅捜索。おそらく精神をがりがり削られること間違いなしだ。あのクズの本拠地、まさに魔境に足を踏み入れることになるんだからな。
よし、もう寝よ――――
コンコンコン。
目を閉じようとしたところで、扉がノックされた。
「桜？」
「よかった。翔君、まだ寝ていなかったんですね」
扉を開けた先にいたのは、パジャマに身を包んだ桜だった。

「さく――――」
「んっ」
何も言わず、両手を背中に回してきた。胸に顔を押し付け、ぐりぐりとマーキングするようにこすりつける。
「ずっとこうしたかったんです……」
「……」
「でも、翔君は私のこと知らないっていうし、私も、そういう運命なのかなって思って……っ」
桜に押され、俺はベッドまで後退する。そのまま倒れこむようにベッドに押し倒された。
「もう我慢できないんです」
顔を上げた。
「女の子から言うのははしたないって思うかもしれないですけど」
桜は上目遣いで俺に言った。
「私を抱いてください」

桜色の劣情　（間桐桜）

「ぷはぁ……っ、はっ……」

俺たちの唇の間に透明の橋が架かる。静かな部屋に響いていた粘着質な音がなくなり、心臓の音だけがやけに大きく聞こえてくる。

桜に押し倒されてキスをされた。

唇を啄むようなバードキスではなく、いきなり舌を絡ませる激しいものだ。ねっとりとした唾液が絡まり、桜から一方的に流し込まれる。しかし俺も負けてばかりはいられない。舌先で突き、舌の腹を擦り合わせる。俺の胸には桜の大きな双丘が押し付けられ、形を変える。柔らかな感触に俺の下腹部に血液が送り込まれる。にちゃにちゃと卑猥な音を立てながら、俺達は粘膜を擦り付け合う快楽に酔ってしまっていた。

虚ろだった桜の目は快感が抜けるにしたがって焦点があってきた。熱に浮かされた目には俺しか映っていない。瞳に移る俺が見えるくらいの距離で、俺たちは見つめ合っていた。

「……ごめんなさい、翔君。こんな……こんなこと」

「さく――――むっ!!」

俺が何か言う前に、桜が口をふさいできた。

「んっ、んちゅるっ、れろっ、じゅるるっ、はむっ、あむっ、れるっ、んむっ、ちゅるるっ、んんっ……んんんっ……」

「～～～～……っ！　～～～～……っ！」

さっきのキスを軽々と超えていた。

桜の舌による蹂躙があまりにも激しくて、声にならない悲鳴を断続的に上げてしまう。それほどまでに桜の口づけは情熱的だった。首に絡めた腕が巧みに俺の顔の角度を変え、様々な角度から俺の口内を舐め、歯列を舐り、舌を咥え込んで啜る。

桜は腰を悩ましくくねらせて絶え間なく俺のモノを刺激してくる。

「でも、もう、やっと再会できて、気持ちが溢れちゃって……本当はこんなことするつもりはなかったんです。もっとゆっくり、していこうと思ってたのに……っ」

「桜……」
俺は連続した記憶だからあまり気にならないのかもしれないけど、桜にとってはそうではないんだ。
聖杯戦争から１０年、その長さは俺達が生きた時間から考えれば倍以上になる。しかもこの島に来て再会出来たと思えば、その時の記憶がない。それでも俺のそばにいてずっと待っていたんだ。気持ちが抑えきれなくなってもおかしくない。
俺もいきなりセックスなんて考えてなかったけど、桜の過去と(知っているか分からないけど)俺の性活について知っているなら、無理もない、かな。
「大丈夫だよ、桜。俺がそんなことで嫌いになるわけないって」
「ですよね？　アハハ、あんなに一杯の女の子とイチャイチャしてるんですもん」
これは色々とバレているのでは？
この家に住んでいる女の子なら、俺のことについて知っていてもおかしくはない。内々に対してはどんとこいの俺だったが、外にバレるのに対しては大変ビビりだ。
「さ、桜？」
「私が初めての女の子じゃないですもんね」
完全にバレてる！
「分かりますよ。一緒に住んでるんですもん。女の子同士の会話にまでは翔君は入ってこれないですもんね」
やっぱりこの瞬間は冷や汗が流れるものだ。受け入れてもらえるのか心配になる。
「ち、ちなみにいつから？」
「再会してからすぐですよ？　お話すればすぐに分かりますもん。みーんな翔君のことが好きなんです。翔君も男の子ですから、可愛い女の子に好意を寄せられればそうなっちゃいますよね？」
桜は体を起こし、自らの服に手をかけた。１０年前の姿からは想像もできない、すっかりと少女の体へと成長した体が、徐々に俺の目の前にさらされていく。

「でも正直、少し安心したんです」
上の下着は身につけられていなかった。押し付けられていた胸の感触からわかっていたことだったが、目の前に滑らかな肢体が見せつけられると圧倒されてしまう。張りのあるおっぱいがツンと上を向き、すでに固くなっている。しっとりと汗に濡れ、鍛えられたしなやかな筋肉が艶めかしい輝きを放っている。
「……っ」
思わず生唾を飲み込んでしまう。俺の息子はすっかりと存在を主張するようにズボンを押し上げ、桜の柔らかなお尻をぐりぐりと突いている。
それを感じ取ったのか、桜はズボンから俺のペニスを取り出した。大きくカリが張り、先からはカウパーがにじみ出ている。誰かに扱われるのを必死に待っている別の生き物だ。
桜がさわさわと触ると、何とも言えない刺激が、俺の脳内をかき回してくる。
「もしも翔君が誰か好きな女の子1人にしか気持ちが向かない一途な人だったら、って。それでも私の気持ちが変わることはありませんけど、『そういうことは』難しいですもんね」
バサッ、と無造作に服が投げ捨てられる。
唯一の衣服である白の三角布もしっとりと濡れ、張り付いてしまっている。しかも腰の横で紐を結ぶタイプのものだ。その結び目すら、何の躊躇もなく解いた。透明な糸を引く布切れもなくなり、正真正銘、生まれたままの姿になる桜。
「私みたいに汚れた女、相手にしてくれる人なんてそうそういませんから。翔君が潔癖な人だったら、絶対に受け入れてくれないと思って――」
汚れた、か。確かに、桜は昔、間桐の蟲蔵で凄惨な調教を受けていた。あまりにも幼い桜の心には、あの時の出来事が焼き付けられ、生涯消えることのない傷になってしまっているだろう。
いつの間にか、桜の目には涙が溜まっていた。
「――私、処女じゃないんですよ？　それも男の人じゃない……蟲

に初めてを奪われてる女なんです。それでも、受け入れてくれますか……？」
お互いのアソコはすでに準備万端。特に桜の体は感情を受け止めきれる限界を超えてしまっているらしい。
亀頭と入り口がキスをする。お互いの性器はお互いの熱で火傷しそうになる。亀頭をあまがみされたことで腰が浮き上がりそうになるが、何とかこらえる。桜も一瞬力が抜けたようだったが、何とかこらえていた。
後は桜が腰を下ろせば、俺たちは繋がることになる。
躊躇せずに裸になったなんてとんでもない。桜はこの上ない覚悟をもって俺の前にこうしているんだ。１０年間待った感情、再会してから俺の記憶が戻るまでの感情、他の女の子としている時の感情、そもそも汚れた自分を受け入れてくれないかもしれないという感情。
全てが合わさり、今こうしてここにいるんだ。
そんな女の子に対する答えなんて１つしかない。
「もちろんだよ。おいで、桜」
「――――」
▪
全ての力が抜けてしまったように、桜が倒れこんできた。そんな桜を抱き留め、もう離さないとばかりに力強く抱擁する。
肉棒が勢いよく桜を串刺しにし、１０年間も焦らされた子宮に強烈な一撃をお見舞いする。
「～～～～～っっっ!!!」
直後、全身を狂ったように痙攣させ、桜はトロトロとおびただしい量の愛液を溢れさせる。
「桜？　たった一突きで、そんなに気持ちよかったか？」
「はっ、はっ、はっ！　は、ひぃっ……は、あぁ、うあぁ……っ」
ようやく絶頂の余韻が抜けてきたのか、桜が虚ろな目を俺に向けてくる。だがまだまだ我を失っているというわけではないようだ。
「だい、じょうぶです……っ。いきなりでびっくり、しただけでぇっ!!」

大丈夫と言われた俺は、桜の腰をがっちりと掴み逃げられないようにする。上下から圧力をかけ、桜の一番大切なところに、万力のような力をかけていく。力強い一撃ではなく、徐々に押しつぶしていくように。

奥の入り口はそこだけ少し感触が違う。そこに狙いを定める。

込める力が強くなっていくと、何か言おうとしていた桜が何も言わずに顔を伏せてしまった。握りしめられる拳には大分力が入っているのか、色が変わってしまっている。

だが俺はそんなものを見なくても、竿を包む肉ヒダが痙攣し、縋りつくさまを感じれば、この上ない気持ちになる。

「たった一突きでイったってことは、ここにされるのがいいの？」

「そう、れす……っ！　そこ、ひょこがいちばん、ぐりぐりが、ぐりぐりがぁ」

絞り出すような桜の声。半開きになった口からピンク色の舌と半透明の涎が零れ落ちた。

「私が、動きますから、ね？　一回やめてくださ、いっ！　あ、まってまってまって……っ！　ま、また、イ、っ～～～～～！」

奥をぐりぐりとしているだけで、２回目の絶頂をしてしまう。

流石に少しペースが速すぎると思った俺は、一度手を止める。桜の様子をうかがってみると、

「だから、待ってって、言ったのに……っ、こんなに早く２回も……」

「疲れたか？」

「大丈夫ですよ。少しだけですから。今度は私にやらせてください」

「ああ、任せるよ」

桜は腰に手を置き、体を持ち上げる。亀頭が見えるギリギリまで抜くと、勢い良く腰を落とす。リズミカルにピストンを始めた。

「はっ、はっ、はっ」

「いい感じだぞ……っ、桜」

大きな乳房が桜の動きに合わせて上下に揺れる。こうも動かれてしまうとその頂点の蕾にいたずらすることが出来ない。しょうがないのでそれは次の機会に取っておくことにしよう。

「翔君、分かりますか……？　私の中、翔君の形になってるんですよ？　お、おちんちんがぞりぞりって、私のおまんこじゅぷじゅぷしてるんです。私、もう2回もイかされちゃってるんですからねっ!?」
「さ、桜っ。そんな言葉どこで……っ」
いきなり桜から飛び出た下品な言葉に、俺は目を見開く。
「会ってからずっと！　再会してからずっとこうしたいって思ってたんです！　ちょっとくらいHなこと調べててもしょうがないじゃないですか……っ！」
八つ当たり気味に言われる。
腰のスピードがどんどんと速くなってくる。桜の感情のせいだろう。中の動きも、俺から搾り取ろうと激しくなってくる。
桜も自分のポイントはわかっているのか、時には同じところに押し付け、重点的に喜劇している。その中でも一番いいのはやはり一番奥のようだ。子宮を押しつぶす感触と、桜の体が一瞬ふわっと浮くときが一緒だ。
ぐっぷぐっぷと根元までとろとろの肉に包まれ、奉仕され、俺の射精感も高まってきた。
「出すぞ、桜……っ！　もう、出そうだ……っ！」
「は、い……っ！　なかに、ぜんぶなかにください、しょうくん……っ！」
俺は今まで自由にさせていた桜の腰をいきなり掴む。そして今夜一番の力で、肉棒を子宮に押し込んだ。その瞬間、限界まで張り詰めた風船が割れてしまうように、俺の欲望が桜の中に向かって破裂した。
びゅる、びゅくるるるるるるるっ！　どぴゅ、ぶぴゅるるるるるるるる……！
奥の奥に向かって、白いマグマが吐き出されていく。
「う……ぁ……っ」
「～～～～～～っ!!」
俺たちは抱き合いながら、絶頂を味わった。女性の中に射精するという何物にも代えがたい征服感と快感を。

３０秒もするとお互いに何も言わず、キスしていた。最初のような激しいものではなく、優しいキスだ。唇の柔らかさを確認するような。２人ともそれ以上は求めない。
「翔君、ありがとうございます。こんな私を受け入れてくれて」
「あのな桜。俺が桜を見捨てる訳がないだろ？」
「もちろん信じていましたよ？　聖杯戦争で助けてもらってから、ずっとそう思っていました。でも、不安にはなるんですよ？」
「大丈夫だ。絶対に見捨てない。何があってもだ」
俺が言うと桜もにっこりとほほ笑んだ。
「私も、翔君のことを守り続けます！　何があっても信じますし、どんなことでもしますからね！」
そ、それはちょっと重いかも……や！　ありがたいんだけどね！
「それに、フフフ」
「ん？」
「これで私も、『翔君の女』の仲間入りですねっ！」
「ぶっ！」
「お話には聞いていますけれど、実際どうなっているのか、ぜひとも翔君の口から聞いていきたいですね？　……あっ」
あまりにもコメントしにくい提案に目を反らすと、いまだ固く滾っている俺のペニスが少し震えた。
「それじゃあ、これを静めたら、詳しくお話を聞かせてくださいね、翔君？」
そう言って桜はゆっくりと腰を持ち上げ――――
「……おい、何をしているんだ。腹黒女に変態マスター」
「えっ」
「え――ひぃぃぃぃぃっ!?」
その声の主は、立っているだけでも竦みあがるような存在感を放つ黒い騎士王。アルトリア・オルタその人だった。
桜はすでに腰を動かしてしまったため、俺が吐き出した白濁液が掻き出され、桜の入り口から漏れ出る。勢いよくピストンされたとき『イイ』ところを擦ってしまったらしく、桜は嬌声を上げた後、無言で

プルプルと震えている。こんな時だというのに、快感を我慢しようとする姿にぐっと来てしまう俺がいる。

何とも言えない空気が、俺たちの間に流れるのだった。

黒い騎士王の劣情　（セイバー・オルタ）

「もう一度聞こう。何をしていたんだ？」
そう言えば、ドア、閉めていませんでしたね。そういうことをするんだったら最低限度の準備というものがあるでしょうに。まったくお茶目なことをしてしまったもんだ。
そのせいでこんなことになってるんだけどね……っ！
眼前で繰り広げられる女同士の戦い（俺が原因）を遠い目で見る。オルタの目線に込められた、尋常ならざる威圧感に思わず目を逸らし、それに臆することなく睨み返す桜に目を伏せる。
だが、桜は簡素なパジャマ、オルタは黒のレースが編み込まれた下着しか身に着けていない。そのせいで威圧感が和らいでいるのはすごく助かる。
「オルタさん。人の部屋に勝手に入ってきて、言うことがそれなんですか？」
「貴様こそ、私のマスターに何をしていた？　回答次第ではサーヴァントとしてしかるべき手段を取るが？」
桜も俺の許可なく部屋に入ってきた気がする。ま、まぁ、見られて困るものがあったわけじゃないからいいんだけどね。オルタの時はとっても困ることをしていたわけだけど。
「そんなこと、どうしてオルタさんに言わないといけないんですか？」
「素直に性行為をしていたと言えばいいものを。自分のしたことに自信が持てないのか？　私に勝てないからと言って速さで出し抜こうとは、姑息な手段を使う女だ。大方、昔のことを引き合いに出して都合よく事を進めたんだろう？」
「言ってくれますね……っ！　恥じらいがあると言ってもらえませんか？　私から言わせてもらえば、オルタさんは下品です。淑女なら恥じらいをもって当然ですからね」
「げひ……っ！　貴様……っ！　言うに事を欠いて下品だと!?」
２人の言い合いはどんどんエスカレートしていく。ドアは閉めているし部屋は防音だ。めったなことではこのことが外に漏れだすこ

とはないだろう。
この２人には関係がこじれない程度に吐き出してもらおうとも考えていたけれど、すでに薄氷の上で受け身の練習をしているみたいだ。放置できるような状況じゃない。
「で、俺はそろそろ服を着てもいいでしょうか？」
「ダメです！」
「ダメに決まっているだろう！」
俺、まだズボン履いてないんですよ。息子もすっかり萎れちゃって……
「……ふぅ。ともかく、すぐに出ていけ腹黒。貴様はもう済ませたんだろう？」
「あはは、何を言っているのかわかりませんね？　お断りします」
再び火花を散らす。どうしたものか。どうすればこの２人は仲良くなってくれるのだろうか。無理かなぁ。諦めるの早いな。
でも、今回は心情的には（早い者勝ちというわけではないのだが）桜を味方したい。だから今夜はオルタには諦めてほしいのだが……
「なるほどな。マスターもこの女の味方をするというのだな？」
そんな俺の心を読み取ったのか、オルタは一気に不機嫌になる。先ほどまで感情をあらわにしていた目は冷え切り、据わっている。俺も何も言い返せずその言葉を肯定してしまう。
「っ」
「わっ!!」
あまりにも大胆で、何の反応もできなかった。
あっという間に、新雪のように白い肢体が、ライトの下に惜しげも無く晒された。一見不健康と思えてしまうくらいの肌だが、女性の柔らかさはしっかりと伝わってくる。
下着は魔力によって編まれていたものだったらしい。俺をベッドに押し倒す頃には、その慎ましやかな胸も、絶対に人には見せていけない場所も、惜しげもなく露にしてしまっていた。
オルタは俺にもたれかかるようにして、大胆にもぎりぎりまで顔を近づける。

「……私とも交われ、マスター」
「っ！」
近くで見て分かった。ふて腐れた唇は、短い言葉を紡いだ後にはきゅっと閉じ、不安そうに震えている。あんなに鋭かった瞳も、自信がないのか高圧的な態度とは真逆に逸らされている。
「な……うあっ！」
「んふ……はぁっ、れろおっ……」
するりと移動したオルタが、半勃ちになっていた亀頭の先端を躊躇なく咥え込んだ。柔らかな唇に難く反り返った肉棒が飲み込まれていく。じゅぽっ、んぶじゅりゅぅぅ……っ、と下品な音が響き渡る。
窄めた頬の中では舌が別の生き物のように這い回り、暖かい唾液と混ざり合って巨大な肉棒を余す事なく舐めまわした。
「んっ、じゅるっ　んむっ、じゅろっ……んんっ!?　ぷはっ！　貴様、何をする？」
一心不乱に俺の肉棒を犯していたオルタだったが、俺の限界寸前で強引に肉棒を吐き出してしまう。ねばついた唾液と俺の先走りが混じった糸が、薄いライトを反射する。
吐き出す原因は俺のでも、オルタでもない。第三者の介入のせいだ。
「何のつもりだ、桜？」
「それはこっちのセリフですよね、オルタさん？」
肉棒が溶けたかと錯覚するかのような、快楽が突然無くなってしまい、俺のペニスは無様に続きを求めてミミズのような血管が脈打った。
オルタは背後から何かに羽交い締めにされていた。オルタは心底憎いと言わんばかりの表情で下手人を睨む。
「私はただ、私のマスターがどこぞの女に穢されていたのでな。それ以上穢れないように、そして、これまでの穢れを落とすためにしたまでのことだ。マスターも大変だな。明日もあるというのにこんな女の相手をしなければならないとは」

「……はぁ？　今ここで跡形もなく消してしまってもいいんですよ？
っていうか！　夜遅くに翔君の部屋に来たのはオルタさんも同じじゃないですか！」
言いつつも、桜は拘束を解いた。オルタは再び魔力を使って扇情的な黒い下着を身に着ける。こうやって堂々としている姿を見ると、下着だということを忘れてしまいそうだ。
「夜遅くに何やら不穏な気配を感じたものでな」
そう言って何処からともなく携帯端末を取り出したオルタ。服は魔力で編まれていたはずだから、ポケットも何も持っていなかったはずなんだけど。いったいどこから出したんだ。
そんな疑問を問う暇もなく。軽快に操作された端末の画面を向けられる。桜もさすがに気になったのか、２人で画面をのぞき込む。
そこには――
「とんでもない場面に出くわしてしまったというわけだ」
「――――」
そこには、激しく混じり合う俺と桜の姿が映し出されていたのだ。
「ちょ、と――――！」
「な、なん――――！」
俺たちが絶句しているときも、画面の中の男女は動きを止めない。それどころかどんどんヒートアップしていく。
「こんな場面に出くわしてしまっては、私も割り込まざるを得まい？」
そりゃそうや。人がヤってるところを見かけてとりあえず撮影するなんて、現代の若者もびっくりだが。
つか、何やってるんだじゃねーだろ！　結構前からずっと見てたってことじゃねーか！　しかもカメラのレンズと一緒に！　構えて撮ってたってことじゃねーか！
心の中でヤケクソに叫ぶ。あのドヤ顔、全然ドヤ顔になってないからな。
「なるほど、そういう手段を使ってくるんですね？」
「何か言ったか？」
「いえいえ。そこまで言うのなら今日の所はお部屋に戻りますね」

「――――む」
「え」
　何でこんなにあっさり桜が引き下がるんだろうか。別に撮られていたからって、引き下がらないといけない理由にはならないはずなんだけど。恥ずかしいのは別にして。
　桜はパジャマを着て俺たちに向き直る。先ほどまで激しく交わっていた肢体が薄い布に包まれた。だが、ちらりと覗く素肌はシミ一つない。
「痛っ」
「ふん……」
　誰に何をされたのかはご想像にお任せする。
「それでは、おやすみなさい翔君、オルタさん。明日もありますから、ほどほどにしてくださいね？」
「あ、ああ。そうする」
「……」
　あっさりと、何の未練も残さず桜は笑顔でお辞儀をして部屋を去っていった。オルタも眉をひそめているが、もちろん引き留めるような真似はしない。質問すらしない。
「……まあ良い……邪魔者はいなくなったなマスター」
　再び下着が魔力の光と消える。
　ベッドに座っていた俺の足の間に、跪いた。何の確認も取らずにそこに座り、さらには触ってくるということは、そういう事なんだろう。
「ちっ、無駄話をしていたせいで、大分時間が経ってしまったな。貴様のペニスもすっかり萎えてしまっているではないか」
　その原因の一端は、ドヤ顔撮影していた君にも問題はあるんだけどね。
「それでは始めるとするか。はむっ」
　通常サイズの愚息がオルタの口に簡単に食べられてしまう。明らかに湿度の違うねっとりとした空気に包まれ、どんどん下腹部に血液が送り込まれていくのがわかる。徐々に固く反り返ろうとする肉棒に合わせるように、オルタの舌技は変化していく。むくむくと大きく

なるモノをキャンディーのように味わい、咀嚼されていく。
大きくなるにつれ、どんどん感覚が鋭敏になっていく。ぷにぷにの唇の圧力を感じ、張りが出てきたカリ首をお掃除するように動かされる舌を感じるようになる。
「んちゅっ、くちゅっ……けぷっ、んろぉぅ……ちゅっ、ちゅるぅっ……」
舌を使ってペニスの成長を促すように、裏筋をねっとりと誘導される。かと思えば頬をすぼませ、口マンコをすべて使ってしゃぶりついてくる。
まったく息継ぎなしで行われているにもかかわらず、オルタの表情に変化はない。ただ俺をまっすぐに見てくる。
その搾精運動に、俺の先端からは先走りがあふれる。それを持っていたと言わんばかりになめとられ、そのまま鈴口を舌の先で刺激されてしまえば、もう耐えられない。
下半身の感覚がなくなり始め、俺の命令を聞かなくなり始める。普通に座ることすらできなくなり、俺は布団に寝転んだ。ペニスの奥底の温度がどんどん上がり、白いマグマがぐつぐつと沸騰し始めていることがわかる。
「じゅるるるぉおっ、れるぉぉぅ、じゅぞぉっ、れろ、ぶちゅうっ、じゅぽぉぉぉぉっ！」
「オ、オルタ……っ、ちょっと激しすぎ……っ」
「んぇ……じゅるっ、はふぅ、んむっ、じゅぞぉっ、んなっ、おいこら……」
ペニスが痙攣し始めたことを感じたのか、オルタはじっとりと湿ったと息とともに、俺のモノを解放してくれた。その媚息だけで、果ててしまいそうになる。それだけぎりぎりの所だった。
それが良かったのか悪かったのか。白濁液の代わりにカウパーが滲む。
「れろっ」
「う、っ！」
舌でなめとられても射精さなかったのは奇跡に近いと思う。

「バカ者が。こんなに簡単に射精そうとするんじゃない」
「……お前が上手すぎるんだよ。いったいどこでそんなの習ったんだ？」
「アイリスフィールからだ。お前が未来に帰った後にな」
　アイリさんあんなエグイのか……切嗣さん大丈夫なんだろうか？
「そんなことはどうでも良い。予想以上に効果があったのは驚いたが」
　フェラが終わっても全く萎える様子がないモノを見て満足そうにオルタは言う。
「だが、口に出すのは許さん。貴様、青い方には中に出したな？」
「ま、まあ」
「あの腹黒にも、そうだろう？」
「そうだな」
「私だけが口か？　そんなわけがないだろう？」
「おっしゃる通りです」
　俺がそう言うと、オルタは俺の隣に寝転んできた。
「ん」
「ん……っ」
　軽く口づけする。
「は、はやく、しろ……待たせるな、この」
　その背徳的な快感がぞくぞくっ、と背筋を駆け上がるのを感じた。口調と表情が一致していないのだ。一見すればいつも通りの高圧的な発言だが、その裏には、早くして、これ以上は待てない、という雌の懇願の色が隠しきれていない。
「オルタ、四つん這いになってくれ」
「あ、ああ……」
　その証拠に俺に言われるがままになっている。あの暴君としての側面の騎士王が。
「こんな姿、円卓の騎士とかブリテンの民に見られたら、なんて言われるだろうな」
「ぼっ、何を突然……！」

かくいう俺もそろそろ限界だ。アイリさん直伝のフェラはすさまじかったが、必要以上に昂らせてしまった。
簡単に言えば、攻守交代だ。
「こんなに無防備になって、俺が敵だったらどうするつもりなんだ？」
「ひっ、ぁ、お、いいぃっ、焦らすなぁぁぁっ」
オルタのアソコは、もう準備万端だ。もう膣内に収まらないくらい、俺のモノを受け入れようと、口を開いている。
俺は腰を突き出した。
「〜〜〜〜〜っ、が、ぁっ!!」
じゅぷっ！　と、程よい抵抗と共に、カリ首までペニスが飲み込まれる。
「とめ、りゅなぁぁっ、もぅ、焦らさないでぇぇ……っ」
「そっか」
「〜〜〜〜〜〜ッッッ!?」
にゅっぷぅぅっ　と肉棒が挿し込まれれ、オルタは声にならない悲鳴を上げて仰け反った。断続的に息を吐き出し、何とか快楽を逃がそうとしている。
「ぁ、頭が……っ、ショート、するぅ……っ」
快楽の発生源は膣、そしてその奥にある子宮だ。たった十数センチの肉棒を受け入れただけ。それだけの筈なのに、全身をくまなく快楽という名の劇薬で支配されてしまっている。
「んぎっ、んあっ、あぁぁっ、はひっ、おおぉぉ……っ」
しかしそこはさすが黒の騎士王か。快楽に震える体を無理やりねじ伏せ、体面だけでも繕おうとしている。
だが、そんな抵抗は無意味だ。アルトリアは俺の指1本でどうしようもなくなってしまう体だ。亀頭に密着している子宮口を少し抉じ開けてしまえば、
「ほおおおぉぉぉ……っ！　ひぎっ、あぁぁッ　な、なかなかぁっ、やりゅ、うぅっ、なぁぁっ」
「俺は全く弄ってないのに、何でこんなに準備万端になってるんだろうな」

「う、うるひゃ、ひっ！　おぉっ、あ、ひゅぐっ、はぁ、はぁッ」
　そこにさらに、オルタに追い打ちをかける人物が現れる。
「ごめんなさい、先輩。ちょっと忘れ物しちゃいました～」
「は？」
「っ！　な、れ、きしゃまあぁっぁ！」
　なんとも白々しい態度で、桜が部屋に入ってきた。串刺しにされているオルタは、叫ぼうとして無様な声になってしまう。
「お、おい、桜お前……っ！」
「あはは。忘れ物を取りに来たらとんでもない場面に遭遇しちゃいましたね～」
　だから白々しい！
　花のような笑顔の桜だが、どうしても毒があるように見えてしまう。それもオルタにしか効果のない奴。
「あ、先輩。続けてくださって大丈夫ですよ？」
「え、うん」
「待――あ〝あぁぁぁぁぁぁッ!?」
　オルタの蕩けた思考が、凄まじい快楽によって叩き起こされる。それほど激しな前後運動ではないが、オルタにはそれで充分らしい。それどころか、桜が来て締まりが強くなったように感じる。
「んお〝おっ、あっ、お〝おぉおんっ……っ！　だ、めへぇっ！　めのまえっ、みりゃれえっ！」
「ぁ……」
　快楽に染まりきった表情を惜しげも無く晒すオルタに、桜は言葉にならない声を漏らした。絶対分かってて帰ってきたんだろうけど、ここまでとは思わなかったんだな。
　しかし、息を呑んで桜はオルタの耳元まで近づいた。
「分かってくれましたかオルタさん？　人に見られることが、どんなことなのか」
「んい〝いいっ！　ぞりって、にゃか、ぞりってぇぇぇっ！　ひっ、ち、くびぃいっ！　いっひょは、やめてぇぇっ！」
　腰で回していた手を移動させて蕾を摘み取ると、噴き出した潮で

シーツが汚れた。
騎士王の威厳なんて微塵も感じない顔を晒すオルタ。狂ってしまうのではないかと思えるくらいよがっているが、容赦なくピストンを再開する。
一回目でオルタの両手から力が抜ける。
二回目でオルタの一番大切なところが完全屈服し、口を開く。
三回目で亀頭が子袋が貫く。
その衝撃に、失神寸前だったオルタが無理矢理叩き起こされた。
「んあぁっ!? ……あ、ぁぁ……あ……」
「……翔君、ちょっと体を起こしてもらえますか?」
「え、ああ」
言われるがままに体を起こす。
桜の指が、そっと尻穴の淵に触れた。
「ん、んひぃッ!? な、何を!?」
その大袈裟な反応を見て、俺は首をかしげる。これは不快というよりも、焦っているという感じだ。
「き、きしゃまっ、なんでそこんおおぉぉっ……!」
窄んだアナルを穿って人差し指が腸内に侵入した。オルタは更に大きなアヘ声を上げてしまう。第1関節まで入ってしまえばこっちのものだと言わんばかりに、桜は一気に根元まで指を進めた。
「おぉほおぉぉぉぉっ!!」
「えっと」
くにくに、こりこり、と尻穴の中で桜の指が動いているのを感じる。しばらくすると、すぐさまオルタのアナルの弱点を探り当ててしまったようだ。小声で「あったあった」と言っている。
「ひっ、そこっ、しりいぃはっ、やめ、やめりょおっ、おほぉぉぉぉっ!」
最早肉棒関係なく喘がされてしまっている。桜は楽しむように右指を自在に動かし、ただでさえ敏感な尻の穴を更に、ケツマンコに変えていく。
「おい桜、いったいどういうことだよ」

「昔オルタさんは、アイリさんにこういうことを教わってたんです。そのとき、コッチも結構良かったみたいなんですよね」
「ん――お゛ぉぉぉぉッ???」
トドメとばかりに、一際敏感な位置を引っ掻かれ、オルタはいとも簡単にアナル絶頂をキめた。
オルタの股からはツンとする黄色の液体が垂れ流しになり、愛液と混ざってクラッとする匂いが部屋に漂い始めた。ぴゅっ、ぴゅるっ、噴き出る潮も併せて、シーツをクリーニングに出せないくらいに汚す。
それにしても、アイリさんの大人の授業、豪が深すぎるだろ。
「はぁ、あぁぁぁっ……こ、このぉっ……っぁ!? ひぐぅっ、お゛ぉぅっ」
しかし、桜の指1本に負けたとあっては、俺のプライドが傷つく。その深い絶頂を味わう余裕を与えず、挿入されたままになっていたチンポを再び抽送させる。
「わぁ……でも、こんなになっちゃうんですね、あのオルタさんでも……」
桜が後ろで何か言っているが、気にせず大きく反り返ったハンマーで掘削を続ける。そもそもこんなにしたのはお前だ。受け入れようもない快楽が全身を駆け巡っているらしく、すでに限界を迎えているオルタを叩きのめす。
すでに全身の力は抜け、投げ出されている。さっき一瞬だけ触った小ぶりな双丘はピストンに合わせてぷるんと揺れている。
思わず桜色の乳首に指を這わせ、二本の指で摘んで扱き始める。その瞬間、オルタから2種類の嬌声が漏れ始める。子宮を押しつぶすペニスの一撃による獣のような声、乳首を扱かれることによる溶かされているかのような声だ。
そして、俺にも限界が訪れた。もともとはオルタのフェラによって高められていたんだ。この奥の部屋にありったけ吐き出してやる……ッ。
「はっ、あっ、あぁっ……んぎいっ！ もむりぃぃ……っ、あ゛ああ

あっ」
「射精(だ)すぞ、オルタ……っ！」
「っひいいいいいっ　はぁっ、だしぇっ　しょこっ、おくぅぅっ、にぃ！」
――――どぷっ、ごぷぷぷっ、びゅくっ、びゅるるるっ!!
「お〝お〝おぉぉぉぉ〜〜〜〜〜っっ!!!」
限界まで抱き合い、密着し、押し込んだ肉棒から、俺の子種が吐き出された。その快楽に叩き伏せられたのか、オルタは意識を失った。

家宅捜査　前編

「うーん、まだ昨日のモノが残っているように感じます……」
「おい、こんな人が多いところでその話をするんじゃない」
　俺たちは特務六課の受付にいた。そんな公務員盛りだくさんの場所でそんな卑猥なお話をしたくない。
「あんなにすごいんですね、夜の翔君は……腰が抜けるなんて本当にあるんですね。オルタさんのことバカにできません」
「これからは仲良くしてくれよ。つか、昨日はやりすぎだよ」
「それはそうと……翔君、お尻も興味ありますか？」
「そんなこと言ってない！」
　露骨に話を逸らされてしまう。そんなこと言わないで仲良くしてほしいと思う。いちいち火花を散らされるとこっちの心臓が持たない。まあ、向こうもその気がないわけじゃないんだろうけど。あるよな？
　そんなこと言ってると、1人の女性が俺たちに近づいてきた。
　その顔は俺もよく知る、しかし一度もあったことのない人だ。
「今日はよろしくお願いします、テスタロッサ執務官」
「はい。よろしくお願いします」
「お願いします」
　フェイト・T・ハラオウン。『魔法少女リリカルなのは』に登場するキャラクターだ。原作とはあまり大きな差異はなく、この世界でも管理局の執務官として活躍している。
　とうとうこの日がやってきた。俺と桜は集合場所である特務六課の建物にいた。そこから今回の捜査を任されている六課の職員と、アイツの家に向かうのだ。
　最近新設されたらしい特務六課だったが、建物自体は新品というわけではないらしい。どこか使い込まれた形跡がある。費用削減のための涙ぐましい努力がうかがえる。
　今日俺たちが同伴する職員とは目の前にいる美女、ハラオウンさんだ。彼女をリーダーとする捜査官5名ほどが一緒に現場に向かうこ

とになっている。あいつの女性関係はすでに調べられているのか、捜査官には女性しかいない。だからか、フェイトさん以外の捜査官に向けられる視線には異物を見るようなものが混じっている。
「更識さんからお話は聞いています。あの吸血鬼ブラドを倒してしまったとか」
まあ、うちのパーティがね。俺はゾンビしか相手してないよ。
「そして対処が出来ていなかった新谷航平も捕まえて……スタンド能力も持っているとか。とても心強いです」
「全力を尽くします」
事務的な挨拶を終え、俺たちは車両に乗り込んだ。
「俺、あんまり歓迎されてないみたいだな」
「そ、そんなことないと思いますよ？　ただ任務の前で少しピリピリしているだけだと」
俺たちは一番後ろにまとめて座った。視線から俺が歓迎されていないことはすぐにわかった。ま、外部権力で無理やり入ってきた人が歓迎されないなんて世の常だしな。多少の居心地の悪さなんて気にするだけ無駄だろう。
「それにしても、特務六課って思ったよりもしっかりとした部隊なんだな」
「そうですね。機動六課の功績が評価されての新部隊設立ですから」
「ま、表向きだろうけどね」
機動六課もテスタロッサさんと同じく『魔法少女リリカルなのは』に登場する組織だ。原作では、1つの部隊が保有できる戦力に決まりがある中、主人公格を無理やり全員入れるためにわざわざ能力制限をしてまで作った部隊だ。
表向きは『ロストロギア』と呼ばれる危険な代物の回収。裏向きは不穏な予言に対抗するために。
そんな背景があるのだ。この世界だって疑わずにはいられない。
「私の他にも、何人か学生がスカウトされているんですよ？」
わー、なんか俺の知ってるキャラクターがいるフラグが立った気がするぞー。

「桜は会ったことあるのか」
「はい！　それはもちろん！　あ、ダメですよ翔君」
「少なくとも、桜が考えているようなことは考えてないから」
「もう！　翔君は私を何だと思ってるんですか!?」
この娘、間桐から解放されてもこんな風に育っちゃうんだなぁ。
そんな他愛のない会話を車の中でしていた。
目的地までは３０分。凶悪犯の根城とは思えない、街中の一角の建物だ。

「ここか……」
「そうですね、本当にこんな普通のところに住んでいたんですね」
桜もしみじみと言った様子で言う。
ゾンビが吐いた情報の住所に行くと、そこには俺の住んでいる家によく似た建物が立っていた。１階部分が格納庫になり、上に続く階段がある。
「犯罪者はどこに潜んでいるのかわからないということです。皆さん、準備はいいですか？」
テスタロッサさんは表情を変えず、突入の準備をしている。しかし、目には抑えきれない怒りが燃え盛っている。冷静の中にも罪を許さないという強い意志をひしひしと感じる。
それは他の捜査官も同じのようだ。取り出す武器を握る手には力が入っている。
「それでは、行きましょう」

合図と共にカギを破壊し、突入した。
「お待ちしておりました。お客様」
中も特別変わったところはなかった。俺たちが住んでいる家と、この世界に数え切れなくあるであろう玄関と何も違うところはない。ゴミ袋が散乱しているとか、妙な臭いがあるということはない。それどころか、フローリングや棚、そこに置かれている小物にすら埃がない。人を招くために入念に掃除をした後のようになっている。
しかしその中に全く合わない、異質な人物が目の前に立っている。以前理子に招かれたお店にいた娘とは、着こなし具合が違う。年季の入ったメイド服を着たプロの２人だ。
その２人は深々と下げていた頭を上げた。その顔を見て、おそらく俺だけがさらなる衝撃に襲われた。
レ、レムとラム……だと!?
双子であるため非常に似た顔立ちをしている少女２人は、感情の読めない無表情で俺たちを見ている。この家にいるということはアイツの関係者のはずだが、俺たちに対して何かしようとは思っていないようだ。
この２人は『Ｒｅ：ゼロから始める異世界生活』に登場するキャラクターだ。その世界でも２人揃ってお屋敷のメイドとして働いている。この２人は双子であり、姉がラム、妹がレムだ。
この２人も召喚されていたのか。そうじゃない可能性は低いだろう。
突入の緊張感を予想の外から崩されたことによって、俺も含めて固まってしまっている。最初に調子を取り戻したのはテスタロッサさんだった。
「管理局特務六課所属、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。抵抗しないでください。この捜査は正式な指令を受けて行われています。抵抗された場合には実力行使をさせていただきます」
強い口調でそう告げる。常人なら腰を抜かして首を縦に振るしかできないだろうが、目の前のメイド２人は顔色一つ変えない。
それどころか、

「どうぞ、こちらに」
「私たちの主がお待ちよ」
家の奥へと案内してくれるようだ。
「翔君、どういう事でしょうか……？」
「さあ……」
被害者、というにはあまりにも飄々としている。あの男から解放されたという安堵がない。ただ事務的に自分の仕事をこなしているような。しかも、私たちの主？　いったい誰のことを言っているんだ？
アイツはもう捕まっていることを知らないのか？
「ここで立っていても仕方がありません。十分に注意して進みましょう」
俺たちを待つレムとラム、その背中を追いかけ、俺たちは中へと歩を進めるのだった。
そうは言っても、それほど大きな家ではない。しかも、俺たちが住んでいる家と同じ作りだ。どこに向かっているのかはすぐにわかった。いつもみんなでくつろいでいる場所、リビングルームだ。
「「こちらでお待ちです」」
思ったとおり、リビングへと案内された。俺たちは捜査に来たはずだったのだが、いつの間にかその目的から大きくそれてしまったかのような錯覚を覚え始めていた。
「広いな……」
そこは俺達の家の何倍もの広さがあった。女の子が召喚されていくたびに広がっていくこの家だ。リビングにもその機能があったとしてもおかしくはない。それはつまり、それだけの数の女の子をあの男が召喚したという事なのだが。
この部屋もきれいに掃除してあった。そして何より使われている跡がある。この家に住んでいる娘は、日常的にこの場所を利用しているのだろうか。それにしては、家に入ってから気配がない。
そんなリビングで1人、本を読む女性がいた。ハードカバーの表紙には、英単語が並んでいる。細い金属フレームの眼鏡の奥の瞳が、俺たちの来訪など意に介さずに活字を追っている。体の線は細いが、華

奢な印象は受けない。質素なスーツに身を包んでいるが、特になんてない動作をしているだけなのに、一般人にない凄みを感じる。
「管理局特務六課所属、フェイト・T・ハラオウンです。抵抗しないでください。この捜査は正式な指令を受けて行われています。抵抗された場合には実力行使をさせていただきます」
　先ほどと全く同じセリフを、フェイトさんは目の前にいる人物に投げかける。俺達や局員は、すでに身構えている。目の前にいる人物は絶対に敵である。全員の勘が一致したんだ。
「捜査にご協力いただけますか？　でしたら――――」
「もう潮時みたいだね。この場所も」
　女性は本を閉じて顔を上げた。その顔には見覚えがない。だが、他の人はそうではないようだ。フェイトさんが息をのんでいる。
「あなたは……っ、第1級犯罪者『ライ』……っ！」
　この世界の犯罪者なのか。コイツはあの男の仲間なのか？　何でこんなにリラックスしているんだ。そのくらい自分の実力に自信があるのか。それとも、何か罠が仕掛けられているのか。
「あら、私のことを知っているのね。あまりうれしくはないわ。もっと静かに楽しんでいたいの。私の人生を」
「動かないでください。あなたに対してはすでに逮捕状が出ています」
　フェイトさんの顔が一気に臨戦態勢になる。それほどまでに手ごわい相手という事なのだろうか。
　横で同じように顔を険しくしている桜に問いかける。
「はい。元は武偵の、今は殺し屋です」
「だれもかれも、私のことを知るようになったんだね。これだから嫌なんだよ」
「ここ2年は全く活動の記録がなく、死んだのではないかと言われていたんですけれど……」
　武偵は武偵法により殺人は禁止されている――――というのはどこの国にも当てはまるものではない。中にはいるのだ。殺しを専門にする武偵が。

そういう武偵は、得てして殺し屋に転落しやすい。この女性もそういう人なんだろう。
「彼女の場合はやりすぎたんです。２つの組織がお互い彼女に依頼して、両方とも壊滅するなんてこともありました。反社会勢力だろうとお構いなしに依頼を受けるその姿勢が、今の彼女の状況を作っているんです」
「夜月さん。それは後回しに」
今はお勉強の時間ではない。そうフェイトさんに叱られる。
闇の魔法（マギア・エレベア）を発動させ睨みつける。
「スタンド能力。私はそれを目的にこの島に来た。もっとも、この名前を知ったのはここに来てからだったけれど」
そんな俺たちを意に返さず、ライは独白する。
「あなたが言ったように、私は2年間ずっと静かに過ごしてきた。私も反省しているわ。もう少し考えて行動するべきだったって。無意味に目立ってしまうなんて、私も抑えが――――」
牙（タスク）をぶち込んだ。周りは俺の行動に少し引いてしまっている。なぜだ。
「さっきのテスタロッサ執務官の言葉、聞いてなかったのか。そういうおしゃべりをする時間は今じゃないってな」
このおしゃべりが時間稼ぎという可能性は大いにあり得る。しかも、ライがスタンド能力を持っていた場合、その未知の能力で痛手を負うこともあり得るのだ。
狙ったのは両手。今の俺が外すわけがない。
目の前にはうずくまるライの姿が――――
「血気盛んだね、坊や」
耳元から聞こえた声に、反射的に背後を攻撃した。アリアからコピーしたノールックエルボーはリビングの壁をぶち破る。
しかしそこには敵の姿がない。また外れたのか……っ！
「あなたの思っている通り、私はスタンド使いだよ」
少し離れた椅子に座るライ。その身体や服には傷一つついていない。

「人生に行き詰まりを感じていた私にとって、スタンド能力はすべてを変えてくれた。私はここにいてここにいない。どこにも存在しない存在。そうなった。」
　おそらくはもうスタンドの影響下。このメンバーは超一流だ。他の能力にむざむざやられるほど弱くはない。不味いぞ。先手を打たれた。
「ここは私の城だった。静かな私だけの世界だった。でも……こうなったらしょうがないよね」
「名前も顔を見られて、逃げられるとでも思ってるんですか？」
「私を捕まえるなんて、出来る訳がない」
　その時、ライの後ろにスタンドが現れた。

「っ！　俺は一体……ここはどこだ？　いや、確か……」
　今日はあのゾンビの家に捜査をしに行って……中に突入した。それから、どうしたんだっけ？
「思い出せないな……」
　おかしい。記憶障害とか上条さんかよ。何か重要なことまで忘れていないだろうな。
　って、ここはよく見れば俺の家の女の子の部屋じゃないか。なんでそのベッドで寝てるんだ？　おかしいだろ。
　しかも何でかペンも持ってるし。っと、キャップが取れちまってる。ペン先を握ったせいでインクが手にべったりだ。
　ん、や、何か書いてあるのか。いったい誰がどうやって……そんな

隙を作ってたのか俺は。おかしいぞ。
『おかしい』がゲシュタルト崩壊しそうになってるぞ。これで3回目だ。
「……」
……俺はどうして女の子の部屋のベッドで寝ているんだ？

家宅捜査　後編

「どうして俺は女の子の部屋で寝てるんだっけ？」
　自分の部屋ならまたしも、女の子のベッドを我が物顔で使うような記憶はないぞ。起きてから数時間しかたってないのに……家に帰った記憶もないのに。
　待て、俺はゾンビの家に捜査に行ったその記憶はあるんだ。で、家に入って、レムとラムがいた。その後……後に……
「記憶がはっきりとしないな」
「お気を確かに、お客様」
　俺の耳に、聞き覚えのある声が思考をかき分けて入って来る。
「レム……？」
　部屋の隅、気配を消していたのか今の今までいたことに気が付かなかった。彼女によく似合うメイド服、いつもならテンションが上がっていたかもしれないが今は困惑の気持ちしかない。
　いよいよ意味が分からない。どうして、あいつの家にいた筈のレムに見守られて眠っていたんだ？
　とここで、俺の左手に何か書かれていることに気が付いた。何かに追い立てられて走り書きしたような、いつもの俺の字に比べるとみるに堪えない、氷が解けてしまったような文字だ。
　だがそこに書いてある文字は、俺に事態を把握させるのに十分すぎるものだった。
「っ!!」
【ジェイル・ハウス・ロック】
　ジェイル・ハウス・ロック――――スタンド攻撃されているんだッ！
　ジェイル・ハウス・ロック。その能力は『物事を３つまでしか覚えられなくする』というもの。今までの知識、思い出には影響がなく、新しく覚える物事にのみ作用する。そして、スタンド能力にかけられる前後の記憶があいまいになる。たとえ本体を見ていたとしても、記憶には残らない。
「この文字はいつでも視界に入れておこう」

もしも何かの拍子に忘れてしまっても、目に入る位置にあればある程度はカバーできるはずだ。仕組みの分かっている俺ならば。問題は、この状態で本体を倒さなければならないという所だが……

その前に、この場所から離れよう。ジェイル・ハウス・ロックの効果範囲から離れることが出来れば、この不自由な状態からも抜け出せるはずだ。

『ここがいったいどこかはわからない』が、とにもかくにも思い切り離れれば行けるはずだ。ジェイル・ハウス・ロックにはこの島全体をカバーするだけの力はないんだからな。

俺は体に力を込めた。闇の魔法で体を強化、余計な情報を頭に入れないために体当たりで壁をぶち抜いて飛び上がる。

まさに飛び上がろうとしたその瞬間、

「お待ちください、お客様」

聞こえてきた声に集中力が霧散する。

「レ、レム……!?」

極力外界の情報を入れないことがあだになってしまっていたのか、すぐ横に来ているというのに気が付けなかった。レムもあの男に召喚された女の子なのだろうか。それとも、もともと世界にいる……？

「あ」

「お手を失礼します」

レムは濡れたタオルを使って、俺の左手を拭いていた。ちょうど人肌の温度に調節されているのか、タオルと肌の温度の違いに驚くことはなかった。

つか、俺……『何で飛び上がろうとしてたんだ？』。なんでこんなにレムに世話を焼かれているんだっけ？

「先ほどお貸ししたペンですが、もうよろしいですか？」

「え？　あ、ああ……？」

ペンなんて握ってたのか。でもなんでだっけ？

言われるがままにペンを返す。

俺、ここで何をやってたんだっけ？

第１級犯罪者『ライ』は静かに荷物をまとめていた。彼女にあてがわれた――――かつてはこの家に召喚された少女のものであった部屋で。

小さめの防弾キャリーバッグに几帳面に詰められた荷物はごくごく一般的で、何も不自然なところはなかった。空港の厳しいセキュリティも楽々と突破出来てしまうものしか入っていない。

彼女の私物なんて言うのはそんなものだ。別に目立ちたいわけではないから特別なブランド品や化粧品はいらない。無意味に自分を目立たせるアクセサリーもだ。目標を殺す獲物も、自分の拳さえあれば十分だ。

「あとは、これかな」

持ち運びができるＣＤラック。その中身はびっしりと入ったホワイトスネイクの『ＤＩＳＣ』だ。それと、この家に置いてあった特殊な道具をいくつか。これはしっかりと回収して来いと言われている。

「目立つから持ちたくないのに」

明らかな異物。ライはそんなものと一緒の空間にいることすら嫌だった。ホワイトスネイクが作り出したＤＩＳＣをこの場所にため込んでいた。まるでコレクションするように。

コレクションと言っても、ゾンビがＤＩＳＣを見に来るときなんてほとんどなかった。ブラドと取引するようになってからスタンドＤＩＳＣをいくつか取りに来たことがあったが、一方的にため込んだと

言っていい状態だ。
スタンドだけではなく、相手から奪った身体機能の一部や、魔力などもある。それらを合わせて場、大きめのボストンバッグ２つ分の量がある。そんなものを持っていては、どうしても周りの視線を集めてしまうだろう。
「最悪」
自分の荷物も持たないといけないと考えると、顔をしかめてしまうのは仕方ないことだと言える。
だが、これをもっていかなければならない理由が彼女にはあった。
ため息をこぼしつつ、ボストンバッグの長い紐を両肩にかける。ズシッとした重量が肩にのしかかり、思わず落としてしまいそうになる。
「……」
後はキャリーケースを引いて出るだけでよい。
「１人くらい、殺そうかな……」
だが、ふと立ち止まってそんなことを言い出した。まるで自動販売機で飲み物を吟味するように、人差し指を唇に当てる。
「やっぱり、やめておこう。スタンド使いもいるみたいだし」
まだまだ抑えられないほどじゃない。危険を冒してまで殺そうとしなくてもよいだろう。その口調は軽い。食後のデザートを我慢するかしないか、その程度の重みだ。
「あ、あの……」
「……？　どうしたの？」
そこにはライの身の回りの世話をしていた少女がいた。ライは名前は憶えていなかったが、顔は憶えていた。他人との接触を好まないライにとって、一番顔を見た少女であり、ゾンビがこの家にあまり寄り付かなくなってから召喚された、彼の暴力を受けていない数少ない少女の１人だ。
そんな少女が、遠慮がちに聞いてきた。
「お出かけ、ですか？」
「あ」

ライは何かに気が付いたように、ボストンバッグを下ろした。
「はい、これ」
そこからＤＩＳＣの束を取り出して少女に渡した。少女は突然のことに目を白黒させている。
「もう帰ってこないから。さようなら」
その言葉に驚いて顔を上げた時には、すでにライの姿はどこにもなかった。

結論から言うと、俺は何もできなかった。
気が付いて廊下に出た時には本体はいなくなっていた。それは桜もフェイトさんも同じだ。
捜査に来たはずがいつの間にか、アイツの家にある女の子の部屋で眠らされていた。傷一つつけられず、放置されて逃走された。
建物に入ってからデバイスで撮影されていた映像にも、敵の映像は映っていなかった。リビングでの喋り声は収音されているにもかかわらずだ。音声データから、敵の正体が第１級犯罪者『ライ』だということが分かった。
話によると、能力は光の屈折を利用して姿を消すことが出来る透明人間――――それを利用した暗殺を生業にした犯罪者らしい。
廊下には、今この建物にいる少女たちの意思を縛るためのＤＩＳＣが束になって置かれていたようだ。ＤＩＳＣが縛っているのは、特定の人物への敵意と、建物から外に出ようとする意志だ。中には敵意が抜かれていない娘もいたが、まあ、それも楽しむための余興なのだろ

う。
　相手に攻撃をする意思がなかったとはいえ、俺たちは全員手も足も出なかった。しかも、人質を解放してくれるおまけつきだ。俺はもちろん、桜もハラオウンさんも他の局員も同じだ。気が付いた時には全員ベッドで寝ていた。建物の中をくまなく調べまわっても、何の痕跡も出てこなかった。
　戦うことはなかったが、何をされたのかわからなかったため、次に戦うことになってもまともに戦えないだろう。戦いやすい暗殺者なんていないとは思うが。
「翔君？　どこに行くんですか？」
　正気に戻ったテスタロッサさん達が上階を調べている間、俺はあえて下の階を調べることにした。具体的にはあのゾンビにあてがわれた部屋だ。
「ここが俺たちが住んでいるところと同じ作りなら……」
　俺たち異世界人の部屋の場所は同じのはず。そして、俺の部屋には異世界から召喚された武器や道具が収められている可能性がとても高い。
　扉を開けると埃っぽい空気に肺がやられた。カーテンは閉め切られ、埃がうっすらと積もっている。だが、部屋に常備されている机は意外にも汚れていない。あいつが片づけを……するわけないよな。誰かにやらせていたんだろう。
「ここで見つけたものはテスタロッサさんに言う前に俺に言ってほしい」
「分かりました、翔君」
　召喚した武器のテクノロジーが無意味に広がるのは避けたい。それに起因した新しい争いが起こる可能性がある。だからほかの誰かよりも先に、どんなものがあるのかを確認しておきたかったんだけど……
「桜、さ」
「何ですか？」
「一応今俺が言ったことって、上司命令に完全に違反してるんだけど」

「でも翔君、悪い人じゃないですか。悪用されないなら問題ないですよ？」
そりゃそうだけどね。
桜からの重い信頼を感じつつ、物色をはじめ――――すぐに終わってしまった。
「何もなかった……」
「ですね……」
アイツの私物というものがほとんど存在しなかった。本棚は空で武器庫も空。あいつの年齢なんて知ったことではないが、学校や受けた依頼に関する資料もゼロ。本当に住んでいたのか疑いたくなるレベルだ。
それにしても妙だよな。あいつの口ぶりだとすげーヤリまくってるって感じだったのに、まったくないなんて。そんなことあるか？実際スタンドの矢とかゾンビゲーマーはあったわけだし。
「まさか、どっか別の場所に置いてあるのか？」
「何か探し物があるんですか？」
「や、ちょっとな……」
「私に言えないことですか？」
はっとして顔を上げる。しゃがみ込むようにして俺をのぞき込む桜の顔が目に入ってきた。少し目じりが下がっている。
「そういう訳じゃ……」
桜は俺を信頼してくれているし、好意も寄せてくれている。だったら、それに応えることが人として当然のことだ。
「いいんですよ、翔君。嫌なことは無理して言わなくても。翔君には翔君の事情がありますもんね？」
「いや、言っておこうと思う。頓珍漢なことかもしれないけど、俺とコイツはこの世界の人間じゃないんだ」
俺は「コイツ」の部分で、指を使ってこの部屋の主のことを指し示す。すると当然のように桜に疑問の表情が浮かんだ。
「この世界の人じゃないっていうのは、並行世界という意味ですか？」
「違う、と思う。どちらかというと異世界だと思う」

流石に並行世界だというには、この世界と元の世界とでは違いすぎている。はるか昔の枝分かれしたとしても、ここまでの変化はあり得ないだろう。
「そもそも翔君は、どうしてこの世界に来たんですか？　この人を追って来たんですか？」
「こいつのことはこの世界に来て初めて知った。理由は、特にない。偶然、何故かはわからない」
思い出してみれば、突然だった。いつも通りスマホでネットサーフィンをしていたら、普段なら目も向けないような広告に興味がわいて……
「気が付いたら、ここにいたんだ」
「この人と同郷だと思ったのはなぜですか？」
「こいつが俺の知っている、この世界にはない能力や道具を持っていたからだ。スタンドもだよ」
スタンドという言葉に、桜が息をのむ。流石優等生。スタンドのことも知っているんだな。今この島で渦の中心になりつつあるスタンドのことを。
「スタンドは翔君の世界の能力だったんですか？」
「俺の世界の、っていうか……俺の世界の漫画の話なんだよね」
「はぁ……？」
桜は意味が分からないといったように首をかしげている。
「それについては後で詳しく聞くとして……それだけなんですか？もっと重要なことがあったりはしないんですか？」
「……」
あるにはある。セックスすると能力が増えるということだ。一番センシティブなところだ。でも、これを説明しないと、ここに来た理由を説明しきれない。
「スタンドが元は漫画の話だってことにつながるんだけどな……俺と、たぶんこいつも……女性と性行為すると新しい能力が手に入るんだよ。漫画とかアニメにある、現実には存在しない能力を」
「……ふんふん？」

当然の様に意味を理解していない桜。俺は表現に注意しつつ、事情の説明を試みる。だがその前に、桜が目を反らしつつ口を開いた。
「つ、つまり、昨日の私との、でも……？」
「そうなる。正確には俺が射精(だ)した数……」
「……」
「……」
「す、すみません。ちょっと理解が追い付かなくて……」
「突然のことで混乱するとは思うけど、むしろ忘れてくれても良いから」
言ってしまったことを取り戻すことは出来ない。いや、この世界なら記憶を消去すればいけるんだろうか。
もはや俺たちは調査どころの空気ではなくなってしまっている。一度落ち着かなければ。話してしまったのは迂闊だっただろうか。
結局俺たちは、撤収するまでずっと気まずいままだった。

「重い……」
玉の汗をかき、足取りは重い。両肩を圧迫する重量に彼女の体力はどんどん削られていた。
「こんな重いなら置いてくればよかったかも……」
その場合は取引が出来なくなるが、正直言ってその対価は自分でも簡単に手に入れることが出来る。ただ、他人が用意することと自分が用意することの労力の差を考えれば、ＤＩＳＣを渡すだけというのはとても楽だ。
そう思った結果がこれなわけだが。

「よし、捨てよう」
決断は早かった。不要な筋トレ器具になっていたボストンバッグを下ろした。中に入っているのはＤＩＳＣだけではなく、ゾンビが集めていた武器や道具もあった。知る人に渡せばとてつもない金額になるものだったが、お金には執着がないようだ。
物理的に軽くなった足取りで、あてもなく踏み出した。
「お、おい！　アレ……」
「人が浮いてるぞ……」
「こんなところで能力を使うのって、取り締まりの対象なんじゃないのか？」
その時、突如周りがどよめいた。優秀な武偵はその変化に素早く対応し、目を細める。
「ちょっとちょっと！　置いていってもらっちゃ困るよ！」
「篠ノ之束……」
ウサミミに胸元が大きく開いたエプロンドレスという、どこかのお店から出てきたようなファッションをした女性が、空から舞い降りてきたのだ。
降り立った中心から人が引いていく。周りの人間の目を気にしない束の行動に、ライはため息をつく。
「目立つからそういうことはしないで」
「だってぇ～、久しぶりに会えると思ったらいてもたってもいられなかったんだもーん」
ライは無言でボストンバッグを差し出した。するとバッグは誰も触れていないにもかかわらずひとりでに浮き上がり、束の手に収まった。
「じゃ行こーかー」
「はいはい」
――――――私たちの名探偵のところに。

新しい繋がり

あの後、指紋や読心能力者用の物品の確保を済ませた俺たちは、特務六課の隊舎に戻ってきた。結局あいつの拠点にいたのは召喚された女の子だけだった。中にいたスタンド使いの女には逃亡されたし、俺は俺であいつの部屋から何も発掘できなかった。

残っていたのは女の子の自由を制限するＤＩＳＣだけだった。それを回収出来ただけでも良かったとしたい。

中にいた女の子はレムとラム（なんとセットですでに召喚されていたらしい）を含めて１０人ほどだった。テスタロッサさんもここまでいるとは予想していなかったのか、急きょ車を手配することになった。

建物から出て車に乗り込んでいく女の子たちを見たら、これからどこに連れていかれるのだろうかという不安でいっぱいという表情だった。

中には知っている作品の女の子もいた。明らかに非戦闘員の女の子もいた。俺はまだ召喚していなかったが、この世界観に全くあっていない女の子も召喚されてくるんだな。

数人が俺たちに睨みを利かせていたのは、あいつに召喚されてからの経験がそうしているのだろう。

そうして帰ってきた俺達だったが、特にやることがなくなってしまっていた。

俺はここの所属ではなく、外部の協力者。特に何か手助けが出来たかといわれると微妙なラインだが、そういうことになっている。あいつの家の場所を知れたことが大きな収穫と思うことにしよう。

さて、俺は部外者だが、桜の方はそうではない。

桜は推薦される形で特務六課に配属された超エリートさんだ。休日なんてなんのその。隊舎に帰ってきてもやる仕事はいくらでもある。

そんな桜は、

「うぅ……まだ理解が及びません」

「ま、まあ、そんなに考えなくても大丈夫だから」
結果、悩み続けることとなってしまった。もうごめん。ほんとごめん。なんかもうごめんなさい。
原因は言うまでもなく、俺のカミングアウト。それがかれこれ1時間半は桜に混乱を与えているのだから、俺の罪は大きい。
俺は心の中で謝り続けている。もう無駄なことを言ったと反省しかありません。でも、ごまかし続けるのは心苦しかった。
「いえ、分かる部分もあるんですよ？　レアスキル持ちの方の中には特殊な条件が必要な方がいらっしゃるのは間違いないので……でも、これはさすがに……」
「ばかばかしい条件で申し訳ない」
「い、いえ！　そんなこと思ってませんから！」
思ってるだろ。俺も思うわ。
「……ちょっと待ってください、昨日の私たちとの、アレもカウントされるんですよね？」
「もちろん。さっき言っただろ？」
「そのほかの能力も、つまりはそういうことなんですよね？」
「そうなるな」
「つまり先輩がしたかどうか、それで判断できるってことですよね？」
この子怖い。何でそういうことに気が付いてしまうんだ。
「というよりも、能力の数を数えれば、今までした回数を計算することもできますね……」
やめましょうね？　桜さん、やめてくださいね？
「さ、桜はこの後仕事はないのか？　ほら、皆さん忙しそうにしてるぞ？」
隊舎の食堂でうだうだしていた俺達だが、周りに人は全く座っていない。昼休憩はとっくに終わっているので当然だ。ここまで来るときにチラッと見た事務室では皆さん真剣な表情でパソコンに向かってたし、一緒にあいつの家に行ったメンバーも、報告書や保護した女の子に関しての手続きがあるとか言っていた。
つまりは、みんな仕事している中で暇しているという、日本人的に

とても心苦しい時間になってしまっているんだけど。でも、ここで帰るのはそれはそれで、って感じがするし。やだ、俺なんて社畜なんでしょう。定時で帰れない新入社員かよ。
「大丈夫だよ2人とも。今日はお疲れ様」
　テスタロッサさんが、トレーを両手で持ちつつこちらに近づいてきた。現在時刻は午後5時。少し遅めの昼食か、それとも早めの夕食か。トレーの上に載ってるメニューを見れば、シーフードサラダとサンドウィッチ。そこまでの量がないので昼食だろうか。
「座っても？」
「はい、もちろん」
　フェイトさんは席に座り、箸を持つ……前に俺達を見てきた。
「今日はごめんなさい。私の不注意のせいで、あなたたちを危険な目に合わせてしまって」
　謝ってきた。基本的に武偵は自分の身は一般人以上に自分で守るものだ。身の丈に合わないことをすると簡単に死んでしまう世界で、そんなことを言っていてはキリがない。
　しかし気持ちはわかる。管理局は野蛮な武偵よりも組織を重んじる文化がある。一緒に働く相手が商売敵の武偵とは根本的に違う。そしてテスタロッサさんなら、あの状況に責任を感じてもおかしくはない。
「今回は一歩間違えば、ううん、何も出来ないで眠らされるなんて、一回死んだと同じだから。もっと慎重に行動するべきだったね」
「今回は、俺も相手のスタンド能力をなめていたところがありますから」
　闇の魔法を手に入れてかなり調子に乗っていた。スタンドはそういった戦闘力を関係なしに術中にはめることができる。その程度のことは予想するべきだった。
　……あいつのスタンド能力、一応絞れてはいるんだけど、俺がそれについてベラベラ話すのは無理だしな。何で知ってるんだ！　ってなるし。
「テスタロッサ執務官、すこし素直すぎることがありますよね？」

「ま、間桐さん!?　そんなことはないと思うけれど……！」
「そうですか？　先輩聞いてくださいよ。この前、危険薬物密輸業者――」
「わー！　わー！　それはっ！　機密事項だからねっ！　外部の人にしゃべっちゃダメだから！」
　いったい何があったというんだ。
「最終的には証拠品を――」
「だからダメだって！」
　だから何があったんだ。
「ま、まあ。お仕事としては知りませんけど、変にひねくれているよりは全然いいと思いますよ？」
「そうですよね？　部下にも慕われる要因になってますから」
「……それって、おもちゃにされてるだけなんじゃないのかな……？」
　強いは強いけど、指揮官としては、ね？　原作のことを考えるとちょいと微妙な気持ちになってしまう。こんな若いのに人の管理をするんだから大変だとは思う。
　目の前で落ち込んでちびちびとサラダを食べ始める姿は、とても可愛らしい。年上であることを忘れてしまいそうだ。
　や、綺麗なんだよ。服の上からも簡単に分かるくらいスタイルがいいし。見る人によってはあざといと思われてしまうかもしれないくらいの仕草もＧＯＯＤだ。
「痛っ!!」
「え！　ど、どうしたの？」
「……いえ、何でもないですよ？」
　さ、桜め……！　思いっきり踏んできたな……！
「そ、そう？」
「はい。それよりも、保護した女の子はどうなりましたか？」
　桜は強引に話を変える。しかも仕事の話だ。こうされてしまっては俺もまじめになるしかない。
「今は病院に搬入されてるよ。特に外傷はなかったけど一応ね。その後は前に保護した女の子たちと同じ施設に移されることになってい

る」
「外傷がない？」
「うん。健康状態も悪くないから、入院する人はゼロだって聞いたよ」
うーん、それは意外だ。あいつのことだから、もっとひどいことをされていてもおかしくないと思ってたんだけど。ま、それはいいことだし素直に喜ぼう。
「これからどうなるんですか？」
「それは今回の事件が終わってからってこと？　それだったら、本人の希望かな。調べてみたらみんな置き去りだったから、苦しい生活になるかもしれないけど、サポート出来るところはするつもりだから」
「そうなんですか……」
アイツが身勝手をした代償はとてつもなく大きい。召喚されたといっても、しっかりとした命を持った女の子なんだ。絶対に許されることじゃない。
「……」
「……」
話題を変えたつもりが、別の意味で気まずくなってしまった。
沈黙に耐え切れなくなった俺は、時計をチラリ。お、これは……！
「そろそろ帰ります」
時間は午後５時半。すっかり定時になった。俺は定時で帰ります。
「あ、家まで車で送っていくよ。私も今日は定時で帰るから」
「ありがとうございます。よろしくお願いします」
フェイトさんも定時上がりするようだ。ヴィヴィオが家にいるだろうし、そこらへんは調整されているんだろう。
トレーを片付け、着替えを待つこと１０分。ロビーで待っていた俺たちの所に、テスタロッサさんともう１人、女性がやってきた。見覚えのある女性だ。
あ、あれは……ッ！
ＮＡＮＯＨＡ!?　ＮＡＮＯＨＡ　ＴＡＫＡＭＡＴＩ!?
俺はぎょっとする。体が震え、動悸が激しくなる。背中に気持ちの悪い汗がびっしりと――――なんてことはない。ここにこの人がいる

ことは想定の範囲内だ。
　すでに私服に着替えて、後は帰るだけという服装。柔らかい雰囲気のなかには確かに強い意志が見てとれる。腰まで届く栗色のサイドテールを揺らして、テスタロッサさんと同じくらいの年代の女性が近寄って来る。
「ごめんね2人とも！　待った？　ちょうどなのはと会っちゃって」
「いえいえ、そんなことないですよ」
「お疲れ様です、高町教官。高町教官も定時なんですか？」
「うん。そうだよ。ちょっと準備しないといけないものがあるからね。時間が取れるのは今日だけだから」
　テスタロッサさんと親しげに話すこの女性こそ、『魔法少女リリカルなのは』の主人公、『高町　なのは』である。巷では原作での活躍のせいで、『魔砲少女』や連邦軍の新兵器のように『白い悪魔』などといった不名誉なあだ名をつけられてしまっている。
　実際はそんなことない素敵な女性、のはずだ。そんなに変わっているわけがないからね。
　横にいる桜が頭を下げる。教官ってことは、やっぱりこの世界でもそういう職についてるって訳か。そしてこの六課で働いている。
「それで、間桐さん。そっちの子が今日一緒に行った子？」
「はい」
「夜月　翔です。あまりお力にはなれませんでしたけれど」
「それはみんな一緒ですよ。テスタロッサ執務官でもそうだったんですから」
　俺も一歩前に出てあいさつする。
　サーヴァントとやり合っていい気になっていたと思う。今回の敗北は忘れないようにしないと。この世界にいるのは原作がある人たちだけじゃないんだからな。いつも相手のことが分かっているとは限らない。
「フェイトちゃんでもダメだったの？」
「ん……というよりもみんなかな。詳しくは報告書を読んでね」
「そうだね、移動時間に読むよ」

柔らかい雰囲気が一瞬にして仕事人の顔になる。せっかく仕事が終わったのに、変な話を振ってしまったな。ここは強引にでも話題を変えよう。
「そういえば、何が準備なんですか？」
「え？　ああ、私たち、知り合いの人が経営しているペンションに行ってお泊りするんだよ」
「ついでに、トレーニングもね」
ああ、なるほどね。だから準備とか言ってたのか。そんなイベントもあったな。
「私たちの娘の友達にも声をかけてるから、結構大所帯なんだよ」
その後も、他愛のない雑談をしつつ、テスタロッサさんの車で家まで送ってもらったのだった。

翌日、ブラドにケガを負わされたアスナ達が入院している病院に行くと、
「え、友達に旅行に誘われてた？」
「うん。1週間後の定期試験終わりの休日を使ってね。旅行っていってもトレーニングもかねてなんだけど……」
「別にいいぞ……ああ……俺もついていかないと魔力が」
「うん三泊四日だから足りなくなると思う」
じゃあ、俺も行ったほうがいいのか。小学生だし、相手も親が同伴しているだろ。旅費はこっちが出すようにすればなんとか行けるはず。1週間前とはいえシーズンじゃない今ならホテルも取れる、よな

？　ま、カプセルホテルに泊まるようにすればどうにでもなるか……
「ああ、いや、それがね？　問題はそっちじゃないの。お兄ちゃんの週末の時間は空いてるのかってことなの」
「……うん？　どういうことだ？　もちろん空いてるし、諸々もどうにかするけど」
「じゃあ大丈夫ですね」
「うん。良かったねクロちゃん」
　なんかアスナと雪菜も納得してるんだけど。
「今回の旅行先が、相手の親御さんのお友達が経営しているところなんだって。だから旅費とかは全部気にしなくてもいいんだって」
「その辺りはもう伝えてあるんです。先輩には事後承諾になってしまう形になってしまいましたけど」
「でも空いててよかったー。お兄ちゃんのことだからすぐ知らない女の人とデートの約束するか、何かに巻き込まれるから」
　正直それは否定できないけど。え、ってか何？　十数人いるけど大丈夫な訳？　そんな大きいホテルを個人経営してて、しかもトレーニングできるような設備もあるの？
「……ちなみにその友達って誰だ？」
「え？　ヴィヴィオよ？　お兄ちゃんもあったことあるでしょ？　金髪でオッドアイの」
　そう言う事でしたか……
　どうやら、まだまだなのはさん達との縁は途切れないらしい。

オフトレーニング　編
オフトレーニング旅行　～出発～

「ただいま！　お兄ちゃん！」
「お帰り、クロ。もう準備は終わってるんだよな？」
「もちろん！」
　少し息を切らしたクロが、家に飛び込んできた。息を切らしているだけではなく、額に汗も少し掻いているみたいだ。よほど急いで帰ってきたらしい。
　とうとう旅行当日。ここ数日は武偵学校すべて（小学校、中学校、高校）で定期試験が行われていた。中学高校だけではなく小学校でも定期試験があるらしい。体力、武偵的な学力、一般教養の学力を４日間にかけてテストする。
　一般教養の学力だけ、２日間かけて行われることになっている。その代わり学校には半日しか行かなくてもよい。それを利用して、学校終わりすぐに出発するのだ。
　ちなみにテストだが、俺はもう完全記憶能力頼りで前日に詰め込んだ。そのおかげで筆記で赤点を取ることはないはずだ。体力検査は……特筆することはない。この世界に来たころに比べると能力も増え、本気でやればすぐにＡ以上のランクを捕れると思う。
　というか、忙しすぎたせいで勉強する時間がない！　成績だけじゃなくて、出席日数も気を付けないといけないなんて、俺戦いすぎでは？
「翔、割と勉強もできるのね。前日に張ったヤマが当たったの？　それとも効率が良いのかしら」
「裏技裏技。今はもうこいつがないとやってられないよ……」
　そう言って俺はエナジードリンクに口をつける。口の中一杯にケミカルな微炭酸の液体が広がる。
　目の前のアリアはいつもの防弾制服に身を包み、不思議そうに言ってくる。実際、裏技だし、ここに来る前の俺だったら、今回の旅行は

補習で断念していたはずだ。
　でも遅くまで起きていたせいで、乗り物の中では爆睡確定だな。夜は毎晩ごちそうらしいから、それまでに復活しなければ。がんばれ化学物質。
「それよりも、今回渡したアレの調子はどうなんだ？」
　実は、この前の情事で当たった２つのうちの１つをアリアに渡していたのだ。優れた技術を持つにもかかわらず、特に魔法も超能力も使えないアリアに少しでも足しになればとの思いだったのだが……
「もう結構馴染んだわ。昨日はリハビリも兼ねて、密輸業者に強襲（アサルト）してきたから」
　リハビリで犯罪を検挙するな。現場に戻るの速すぎるだろ。旅行の前日じゃないか。もっとあっさりとしたもので体を慣らしてくれよ。また怪我したらどうするんだ。
「心配性ね。むしろ心配するのは相手の方だと思うけど？」
「もう風穴ってセリフは使えないもんな」
「そうね、場合によっては消し飛ばすことになるものね……粉々にするわっていうのはどう？」
「物騒すぎるから…」
　渡してしまったのは失敗だっただろうか。でも俺には適性がないみたいだったし、他に使えそうな理子にも適正はなかったからな。それ以上にアリアの適性が高かったのもある。
「大丈夫ですかお兄さん。良かったら私のカフェイン食べますか？」
「ありがとう、ティナ。キツかったら貰うことにするよ」
　ティナは小さなプラスチックボトルを差し出してくる。最近はもうティナがこいつを食べることはなくなったな。夜型だった生活が矯正された結果だ。
　学校にも慣れて実はヴィヴィオたちとも仲良くしているらしい。つまり今回はティナにも声を掛けられていたことになる。
　ボトルを受け取るとクロが哀れんだ目を向けてきた。
「お兄ちゃんが薬漬けになってる……」
「薬言うな」

「でも、ここで作られてるビタミン剤とかエナジードリンクって、何入ってるかわかんないよね」
「いやいや！　どう考えてもこいつは外からの輸入だろ！」
　翼を授けるアレだよ。レッ〇ブルだよ。
「先輩、もう出ますか？」
「ああ、そっちの準備も終わった？」
　雪奈が青い大きなボストンバッグと雪霞狼の入ったギターケースを持ってリビングに降りてくる。
　ブラドにケガさせられたアスナや雪奈たちも無事退院し、今回の旅行についていけることになった。旅行には俺の家に住んでいる人は全員参加。でもヤミはお察しといったところで。
　全員集合したら行く予定だから、俺達も遅れないようにしないといけない。
「はい。私はもう出発できますよ。今アスナさんと狂三さんと桜さんが、移動中に摘まむおにぎりを作っているので。それが終われば準備完了ですね」
「あー、マジか、手伝ってなかった」
　やらせてしまうとは申し訳ない。俺たちの分だけではなく今回一緒に行く高町家の分も作っているだろうから、すごい量になっているはずだ。しかも、
「それはすごくありがたい」
「そうですね。翔の国には腹が減っては、という言葉がありますから」
「常に戦えるように状態を整えておく、大切なことだな」
「それわかる」
「何もわかってないだろ、この腹ペコ三人娘」
　耀、セイバー、オルタの3人はとある共通点からとても仲良くなった。いうまでもなく『食』だ。おかげで家計は火の車。向こうにはとんでもなく食べる娘が3人いると伝えなければならなかった。
「でも腹八分目にしておかないと、夜はごちそうらしいから」
「確か焼肉でしたね。少々雑なような気もしますが、昔と今では違いますからね。マッシュされたポテトに比べれば……いや、比べ物にな

らないでしょう」
「ただ焼いただけの肉が至高。ジャンクフードは最高だ」
この3人、もう食べ物のことしか考えてない。失礼を働かなければいいが。
と、玄関の扉が開き、1人の女の子が入ってきた。金髪の緩いパーマをふわふわとなびかせた女の子。理子だ。今日はいつもの防弾制服ではなく、涼しげな淡いピンクのワンピース。正直イメージと違ったため少し面食らってしまう。
「翔君、もう下に車来てるよー」
「はいよー。じゃあみんな、順番に乗っててくれ。俺はおにぎり組を手伝っていくから」
全員集合しての今回のオフトレーニングは、とりあえずこんな感じに始まることになったのだった。

「今日はよろしくお願いします」
「あはは……まさかこんなことになるなんてねぇ」
流石の高町さんも、ヴィヴィオの友達の保護者が俺だったとは知らなかったのだろう、少しぎこちない笑顔を浮かべている。
特に何も起こることなく高町家に到着した俺たちは、荷物を一度高町家に運び入れていた。他にも来ていない人がいるらしく、その人を待っているのだ。
流石管理局のエースオブエースの高給取り……かは原作とはいろいろ違うこの世界ではわからないが、高町さんとテスタロッサさん

と、その娘のヴィヴィオちゃんの3人で住むにしてはとても大きな一軒家だ。しっかりと駐車場とお庭がある。駐車場にはこの前六課から送ってもらった時に乗った車がある。お二人の年齢を考えると十分すぎるほど社会で成功しているだろう。

その広さの家であっても、俺たちの人数が桁違いなため、少し狭く感じてしまう。

みんな作ってきたおにぎりをつまみながらおしゃべりして待っている。

できればその待ち人に早めに来てほしいものだ。おそらくアインハルトだと思う。もし他に来る人がいれば、それがこの世界での変化であり、今後重要になって来るであろう大切な差異だ。

「高町さんの娘さんにはいつもクロがお世話になっています」

「いえいえこちらこそ……聞いてるかわからないけど、うちの娘、複雑な事情があるから」

「それはこちらも同じですよ。でも、仲良くできる友だちができた良かったです」

ヴィヴィオちゃんやその友達と楽しそうにおしゃべりをするクロを見ながら言う。クロがあんなに心を許すきっかけがいったい何だったのかとても気になるところだが、こればっかりは俺も見ていないため、推測することしかできない。

でも、無理矢理聞き出すのも親バカみたいで恥ずかしい。みんなしっかりしてるし、悪い子はいないはずだ。変なことはないと信じよう。

そんなことをしていると、

「すみません、遅れました」

と聞きなれたアインハルトの声が玄関から聞こえた。

「え！　この声ってもしかして!?」

ヴィヴィオちゃんはすぐにわかったらしく、玄関に駆け出した。

「これで全員ですか？」

「うん。その予定だよ。もしかすると知らない人もいるかもしれないけれど、仲良くしてあげてね」

「はい……？」
その言葉の意味が分からずに首を傾げる。アインハルトが俺と知り合いってことを高町さんは知らないんだろうか。
「皆さん、遅れてしまい申し訳ありません。アインハルト・ストラトス参りました」
現れたのは碧銀のツインテール、特徴的なオッドアイの少女。俺もよく知るアインハルト・ストラトスが、ヴィヴィオに手を引かれてそこに立っていた。学校が終わってからすぐに来たのか、制服と鞄はそのまま、着替えが入っていると思われるバッグを肩にかけている。
そしてもう1人。
「お、お待たせしました！」
堂々としたアインハルトとは違い、おどおどとした気弱そうな少女。アインハルトものとはまた違った、刀のような輝きの銀髪をツーサイドアップにした少女、刀藤　綺凛だ。アインハルトと同じく、制服とバック、それに加えて刀が入っているらしい細長い袋だ。
ま、まあね。そこまでは俺の予想の内だ。アインハルトから綺凛に何かコンタクトがあっても全然驚くことじゃない。話では結構ヴィヴィオとも交流があったみたいだしな。
しかし、最後の1人が俺の度肝を抜いた。
「すみません、説得に時間がかかってしまい……」
「……！」
アインハルトと綺凛が制服なのに対し、その少女は全身黒づくめだ。しかもそれは普通の服ではない。胸元が十字に切り取られたバトルドレスである。そのバトルドレスの漆黒に対して長い金髪がとても美しい。
――『ヤミ』がそこに立っていた。
「えぇ……」
「あれ？　もしかしてみんなお知り合いだったの？」
高町さん、あなた、これ狙ってやってるんじゃないですよね？　いくらなんでもこんな偶然ありえないでしょ？　いったいどこから繋がったんだ？

ヤミのあの表情を見る限り、アイツも狙ってやっているわけじゃないみたいだし。そもそも、そんなことをするタイプではない。
「夜月君？」
「あ、はい、そうですね……敵のスタンド攻撃を受けているわけでなければ俺の知り合いです」
「私としてはその可能性の方がありがたいですが」
「もしかして2人はお互いが苦手だったりする？」
「苦手ではなく嫌いです」
即答すんな。例えそうだったとしても！
家に来て早々、ヤミは心底疲れたといった声を出す。そりゃ、家庭内別居レベルでお互いに干渉してなかったからね。それがいきなり一緒に旅行とか、無理に復縁を目指している夫婦みたいになってるぞ。
見ていると大分アインハルト、綺凛と仲がいいように見える。
「いったいどこでそんな繋がりが出来たんだ……」
「世間が狭いのはわかっているつもりでしたが……」
俺とヤミはお互いにため息をつく。ここまできれいに鉢合わせるとはね。
「まさか、ヤミさんまで来てくれるなんて思いませんでした！」
「この女性も翔さんのお知り合いだったとは思いませんでした」
「ホントです……女性の知り合いばっかりですね……」
喜びを全身で表すヴィヴィオとは対照的な表情になるアインハルトと綺凛。そんな非難するような顔をされても……それこそこっちが色々と言いたいことがあるんだよ。
「……で、ヤミはいつの間に仲良くなってたんだ？」
「べ、別に仲良くなったわけでは……」
「えっ、そんな……そんなこと、ないですよね？」
「え、あ、その……」
ヴィヴィオの悲しそうな顔に、たじたじになるとは。そもそも旅行に一緒に行こうなんて、普通だったら断るだろ、お前さんは。それを説得されたとはいえここにいるってことは、ねぇ？

「何を考えているんですか？　殺しますよ？」
「お前は強襲科（アサルト）か」
「そうですが何か？」
　クソッ、そういうことを言ってるんじゃないのに！　俺のボケに真面目に返すんじゃない！
「はぁ……それで、実際何処で会ったんだ？」
「……高町ヴィヴィオには図書館で初めて会ったんです。少し危ないところを助けたらこの通りです」
　この通りですって言いつつ、それで馴染んでるんだから、それはそれでうれしかったんだよな。流石主人公。ヤミの心の壁をこんなに簡単に溶かしてしまうとは。
　そこからはもう流れるようにヴィヴィオの紹介でアインハルト、綺凛に出会ったというわけだ。だったらクロが知ってるんじゃないのかと思っちゃうけど、アイツ黙ってたな。
　そんなことを言っている間に、出発の時間になった。
「それじゃあ、みんな！　全員そろったことだしそろそろ出発しようか！」
「「「「「はーーーい!!」」」」」
「……」
　高町さんの声に元気よく返事をするちびっこと、この世界に来てから初めての旅行に喜びを隠しきれていない女の子たち。
　今回の旅行、事件は起こらずとも騒ぎが起こるのは間違いないだろう。さてさて、どうなることやら。
　こうして、俺たちの旅行が始まったのだった。

オフトレーニング旅行　～到着～

俺たちはみんなで車に乗り、出発した。流石に1台には乗れないので、荷物も含め3台に分乗して、だ。ドライバーは高町さん、テスタロッサさん、そして理子だ。

空港でさらに高町さんたちの同僚である『スバル・ナカジマ』さんと『ティアナ・ランスター』さんと合流することになっている。

この2人とも『リリカルなのは』の登場人物だ。今は特務六課で高町さん達と一緒に働いている。というか、これだけの人数が一気にいなくなってしまって、特務六課は機能不全になっていないのだろうか。みんなトップを張れるような人たちばかりなんだけど。もしかすると、他に誰かすごい人が六課に入るのかもしれない。

言っていなかったが、今回のオフトレーニングの舞台はこの島ではない。そのため、空港まで車で行き、そこから飛行機に乗ることになっている。着いた先でバスに乗り数十分で到着することになっている。移動時間は合計で3時間程度だ。

原作では別次元の無人世界という設定だったが、この世界ではこの島の近くのリゾート群島ということになっている。

実はこの島々、元の世界には存在しない島らしい。

少し調べておかしいと思って、世界地図を見てみたが、元の世界とはところどころ違うところがあった。そりゃ建造物にこの世界のモノ（現実世界にはない武偵の建物等）があるんだから当然だが、まさか島まで追加されているとは思わなかった。

ま、そんな地理設定はともかく、今回は旅行を楽しむんだ。この島に来てからずっと事件続きだったが、ようやくゆっくり満喫できるターンがやってきたのだ。

今回ばかりは、何の事件も起こらないだろう。起こってもメンバーがメンバーだ。全員集合、オールスター、最高戦力と言ってもいい。こんなメンバーが揃っているところに何かを仕掛けてくる奴なんていないだろうからな。

……よし、逆フラグはこんなもんでいいだろ。これだけわざとらし

く言いまくったんだ。
イカン。『何も事件が起こらない』って普通の考えが出来なくなってきてる。職業病かな？
出発したのはお昼過ぎだったため、到着するのはおおよそ４時くらいになるだろう。予定では行ったらすぐにバーベキューが始まりその日は終わり。次の日は次の日で、各々に予定がたてられている。３日目はビッグなイベントがあるから少し頑張らないとな。
「翔君、どうしたの？　なんか変だよ？」
「そうか？」
隣で運転している理子が横目でこちらを見てきた。
「ちょっと不吉な予感がしてな、それを振り払った」
「アハハ、やめてよー、翔君が行く所では事件が起こるんだからー、フラグになったらどうするのー」
「俺は名探偵コ○ン君か」
そんな死神になった覚えはねーよ。真実はいつも一つ。俺は悪くない。むしろ超がんばってる。
「自分で言ったらお終いだと思うよ？」
「さいですか」
と、そうだ。
「理子さ、スタンドが発現したんだろ？　それから調子はどうだ？」
「んー？　至って普通だよ。今でも自由に使えるし、体調に変化はないから」
「そっか。何かあったら言えよ」
過去に行って長かったから言えなかったが、ようやくブラドを倒して自由になれたんだ。ここで躓いてはいられない。
「くふ、そんなに気にしなくても、何かあったら絶対に頼るから。心配しなくてもいいよ……逃がさないしね」
「聞こえるように言うんじゃないよ」
そんな他愛のない会話をしつつも、車は着々と目的地まで近づいていくのだった。

飛行機を降りて車に乗ると、意外にも近い場所にその施設はあった。
飛行機から見た景色には、島の外側に空港があり、その周辺に高級ホテルや、食べ物のお店、現地の住人の家があった。川や小さい湖もあり、島の真ん中に行くほど開拓が進んでいない印象を受けたが、それは当たっていたらしい。
今日から数日は俺たちの貸し切りだからか、かなり空いているバスが通る道は木々のトンネルを縫うように進み、しばらくしたころには町の喧騒は全く聞こえなくなっていた。
バスが止まったのは小さい盆地のように山に囲まれた、しかし背の高い木が生えていない特殊な空間だった。その入り口でバスは止まる。
どうやらここからは歩きらしい。地面の舗装もなくなり、整備されてはいるが自然のままを意識しただろう、獣道と人工道の間くらいの道になった。
川が近くにあるのか水音もする。
高町さん達は前に来たことがあるらしく、まっすぐと歩いていく。俺もそれについていくと、すぐに丘の上にある一軒のペンションにたどり着くことが出来た。
「こんにちは～、メガーヌさんいますか～？」
「はーい！　今行きまーす！」
中に入り高町さんが一声上げると、すぐに奥の方から声が返ってきた。その声は女性……というよりも女の子と言ったほうが良いくらい幼いものだ。パタパタと音が聞こえ、声の主が姿を現した。
「みんな、いらっしゃ～い！　お母さんは裏でバーベキューの準備をしててちょっと手が離せないって言っているから、先にこっちで手続

しちゃいますね」
紫の長髪の先を少しなびかせつつ出てきた少女は、慣れている手つきで端末を操作する。
「こんにちは、今日からお世話になります。夜月　翔です」
今回の宿泊先はホテルというよりペンションだ。薄々感づいていたが、ここのペンション、めちゃくちゃ高級なところなんじゃないのか!?　これだけ広い土地にこの大きさって……確かにペンションとしては大きい方なのかもしれないけど、それだって５０人も泊まれないよな？
「こちらこそよろしくね～、私はルーテシア・アルピーノです。ここの住人で、ヴィヴィオの友達、１４歳だから」
このペンションのオーナーの娘さん、そして俺も顔だけは知っている女性、原作キャラの『ルーテシア・アルピーノ』が出迎えしてくれた。
彼女も『魔法少女リリカルなのは』の登場人物だ。第３期の『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』から登場している。第３期ではラスボスに人質を取られ、なおかつ洗脳された状態だったため敵対関係だったが、事件解決後は諸々の更生プログラムを受けたのち、保護観察状態になった。
原作とは境遇が違うこともあるこの世界だが、その事件はしっかりと起こっていたようだ。しかも、ネットで調べれば簡単に出てくるレベルの大きな事件として。実際に聞くまではわからないが、この世界のルーテシアの境遇はそんなに変わらないだろう。
「あれ？　エリオとキャロはまだ来てませんでしたか？」
「ああ、あの２人なら、夜用の薪を……」
「――フェイトさん！」
ルーテシアの言葉を遮るように、１人の青年の声が聞こえた。そこには一組の男女が立っていた。しかもその傍らには小さいドラゴンもどきが浮かんでいる。ずいぶんと身長差があるカップルだ。男の身長が高いのか、女性の身長が低いのか。
「エリオ！　キャロ！」
「２人とも元気だった？」

「うわ！　また身長が伸びてんじゃねーかよエリオ！」
「私も伸びてますからね！　……１．５㎝」
どうやらどちらも正解だったようだ。
この２人も高町さん達の知り合いらしい。と言っても、例に漏れず俺も顔だけは知っている状態の方たちだ。
男の子のほうは『エリオ・モンディアル』、女の子の方は『キャロ・ル・ルシエ』だ。ルーテシアと同じく、リリカルなのは第３期の『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』からの登場人物だ。２人ともテスタロッサさんの被保護者。と言っても実の子供ではない。どちらものっぴきならない事情でそういう立場になったのだ。
原作では主人公サイドのメインキャラクターとして活躍した。したんだけど……そういえば、この世界ではどんな形になってるんだ？
「管理局は一応公務職……そんな小さい子を雇えるっけ……？」
全く調べてなかった。後で聞いてみるとしよう。
「みんな、紹介するね。２人とも私の家族で……」
「エリオ・モンディアルです！」
「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」
「１人ちびっ子がいるけど、みんな同い年だから」
「ちょっと!?　私だって伸びてるんだからね！」
ルーテシアの茶々で一気に騒がしくなる。それと同時に３人の力関係もわかってきた。
その時、ザッ、と後ろに何か着地した音が聞こえた。
「ッ!!」
アインハルトと綺凛が反応して振り向くと、そこには２本足である虫、外殻は黒と紫で首に巻いた布も相まって忍者のような印象も受ける。よく見ればかっこいいデザインなのだが、初見でいきなり現れると……
アインハルトが構え、綺凛も刀を取り出そうと――
「あ！　待って待って！　ストップー！」
ルーテシアの静止の声で、アインハルトと綺凛が飛び出さずに済んだ。

「だ、大丈夫なんですよ、アインハルトさん、綺凛さん！」
「あの子は……」
「この子は私の召喚獣で大切な家族。ガリューっていうの」
紹介された召喚獣のガリューは礼儀正しく一礼する。
「し、失礼しました……っ」
「私とっさに……っ」
「あはは、みんなびっくりしますよねー。私もそうでしたよ」
そう、ルーテシアは召喚魔法を使うのだ。それも、虫の姿をしたものを使うことが多い。見る人によってはそれだけでダメージになりそうなものだ。
「先輩はどうして全然反応しなかったんですか？」
「あー、うん」
知ってたから。
「……敵意、無かったからね」
「そ、そういえば……」
「確かに、見た目だけでとっさに判断してました……流石翔さんです」
やめて！　そんな異世界転生みたいなノリにならないで！　あ、俺も異世界転移してるじゃん。じゃあ平気か。
「ごめんなさいね～、顔を出せなくって。あらら、スゴイ大所帯になったわね～」
「お世話になります」
ルーテシアをそのまま大きくしたような女性、この方がここのオーナーであり、ルーテシアの母親であるメガーヌ・アルピーノだ。
「みんなもうお腹は空いたかしら？　だったらすぐに火をつけちゃうんだけど」
「バーベキューしたいです！」
「私も私もー！」
ヴィヴィオちゃんとその友達であるリオはバーベキューの1言で一気に沸き立つ。そりゃテンション上がるよなぁ。だってバーベキューだぜ？
「翔君、その手」

「おっとっと」
アスナに言われて気が付いた。いつの間にかガッツポーズを取っていた。
「ふふ、それじゃあ部屋に荷物を置いたら裏に集合しましょうか。いつもの場所で準備しているからね。部屋はどこを使っても大丈夫になっているからね」
「はい、わかりました。よーしみんな！　部屋割りきめよっか！」
「「「」はーい!!!」」」

「で？」
「どうしよっか？」
部屋割りで悩むことになった。
今回ここに来たのは、俺、雪菜、クロ、アスナ、狂三、アリア、理子、ティナ、ヤミ、耀、桜、セイバー、セイバーオルタ、アインハルト、綺凛、高町さん、テスタロッサさん、ヴィヴィオちゃん、その友達のリオちゃん、コロナちゃん、スバルさん、ティアナさん、エリオ、キャロ、ヴィヴィオちゃんたちの師匠のノーヴェさんだ。え、なに、ひーふー……合計２５人!?　数え間違ってないよな!?
とりあえず、子供たち（俺も未成年だが）は全員同じ部屋にすることになった。
なのはさんやフェイトさんも同じ部屋になり、スバルさんとティアナさん、スバルさんの姉妹であるノーヴェさんが同じ部屋に。その辺りは簡単に決まったんだけど……

「いやいや、さすがにダメでしょ」
「そうだよ。引率者として、男の子と女の子が一緒の部屋で寝るなんて絶対に許可できないからね」
「フン、なぜ貴様の指図を受けなければならない？」
オルタ、ステイ。やめなさいって。高町さんにたてつくのは。君が駄々こねてるせいで話が進まないじゃないか。あの理子ですら、おとなしく従ってるんだぞ？　……この場ではという一言が付くけど。
もしも俺が1人部屋になったりしたら一体どんなことになるのか……
「エリオ、同じ部屋でもいい？」
「はい！　もちろんです！」
「俺もいいですよ」
そんなことはあり得ませんがね。この大所帯、男性はなんと俺たち2人だけだ。そこをまとめない理由がない。
みんなもそれはわかっていたらしく、ニコニコとしている。いったいその顔の奥でどんなことを考えているのだろうか。
「……そうか」
そしてオルタも何かを悟ったのか、急におとなしくなった。いったい何を悟ったというのだろうか。
(((((チャンスは自分で作るもの……無理矢理にでも)))))
何を考えているんだろうか。本当に怖くなってしまうよ。よよよ。少なくともここの人とか、事情を知らない人に迷惑をかけないようなことだとありがたい。
「それじゃ、下に行こうか」
高町さんは何も感じなかったのか、ごく自然に俺たちを下のバーベキュー会場へと誘導するのだった。

オフトレーニング旅行　～ＢＱ～

「おー、うまいもんだなー」
「武偵の授業でサバイバルの訓練がありましたから」
「あー、あの授業ね。何回もやんないといけないめんどくさいヤツ。1回やれば覚えられるってのに」
「それアリアちゃんだけだと思うよ？」
俺もそう思う。俺は完全記憶能力があったから別だけど、なかったから無理だよ。
椅子に座って偉そうに足を組んでいるアリアは空港で買った、冷えてもおいしい！　という謳い文句のももまんをほおばっている。なんでこの娘はＢＢＱの前にそんなものを腹に入れてるんでしょうね？
ちなみに俺たちはＢＢＱの準備のお手伝いをしている。タダで泊めてくれているんだからそれくらいやるのは当然のことだ。もちろんその手のスキルがある人だけだけどね。
しかし人数が多いとはいえ、ＢＢＱなら食材の調理はほとんどない。料理スキルを持っている人が総動員で行わなければならないほどの作業ではない。子供達にはそれまで周りで遊んでもらっている。
「こんなに来るからどのくらい準備してればいいのかわからなかったけど、女の子がこんなに多いなんて思わなかったわ～」
「いや、ほんとに申し訳ないです。全然遠慮がなくって……」
「いえいえ。大所帯には慣れているからね～。多少増えたとしても問題ないわよ。もともとがこのくらいの人数が泊まれるところだもの」
隣のバーベキューコンロに火をつけたメガーヌさんとはすっかりと打ち解けることが出来た。
設置されたコンロの数は全部で5つ。これで全部に火をつけたことになる。すでに網も載せられ、準備万端だ。
「メガーヌさん、焼き肉のタレはこっちに置いておきますね」
「ありがとう、アスナちゃん」
アスナが持ってきたのは、市販のものではない。焼肉屋さんにある

ような容器に入っている。
「これは自家製のタレなのよ。これもここの売りの1つなのよ」
「へぇ～！　そうなんですか！」
　売りにするくらいのモノと言われると、どうしても楽しみになってしまう。
「いい匂いがしてきた」
「まだ焼いてないんだけど」
「そこにあるお肉、いいやつだよ」
「お前の嗅覚が怖いよ」
　生肉の匂いに反応する耀に少し引いてしまう。
「耀って生肉も食べれたりするわけ？」
「いけないことはないよ。消化器官を肉食獣の奴にすれば、おなかも壊さないし。翔も食べてみる？」
「俺がやったら、旅行の間ずっと寝込んでることになりそう」
　いくら何でも生肉を食べる趣味はない。お腹が壊れるくらい食べようっていう意気込みならあるけどね。
「だよねー。私も焼いたほうがおいしいと思うし」
「もう少し待ってろよ。絶対につまみ食いしたりするな」
「あれだけあるんだし、少しくらい良いと思わない？」
「あれだけあっても簡単に無くなりそうなのが怖いんだよ」
　何人かめちゃくちゃ食べる奴を知ってるからな。
「誰のことだろうねー」
　しらじらしいセリフを吐きつつも、とりあえずつまみ食いをすることはあきらめてくれたらしい。
　でも、なんだかんだ言いつつ耀も今回の旅行を楽しんでいるみたいだ。
　周囲は少し暗くなってきた。
　楽しい時間はすぐそこまで迫っていた。

「それじゃあみんな、グラスは持った？　うん、かんぱ～い！」
「「「「かんぱ～～い!!」」」」
　キンキンに冷えた飲み物を喉に流し込んだ。この一杯のために生きてるって感じですな。オヤジ臭いか。でも酒を飲めるようになったら絶対言ってみたいセリフだ。
　しっかりと温まった網には所狭しと食材が並んでいた。もちろん一番多いのはお肉だ。定番のカルビからタン、ロースから、油の弾ける音が聞こえている。
　しかし、しっかりとした大人がこの場にはいる。お肉だけ食べることを許してはくれない。キャベツやトウモロコシ、ピーマンなんかもしっかりとその存在を主張していた。
　大人たちの注意が入れば、子供たちもバランスよく食べてくれるだろう。そうでなくてもみんないい子なんだし。
「むっ！　そこは私の領地だろう！」
「領地は常に侵略の危険がある。それは歴史が証明している」
「貴様……よりにもよって私にその言葉を使うか……っ」
　子供、達なら……良い子なら……。
「やり合うなら相手になる……この金網の上で」
「良いだろう」
　いい大人、片方は問題児で片方は黒い方の国の王様。何でそんなに人々のお手本にならないことをしてしまうんでしょうかね！
　一瞬オルタから魔力が漏れ出すが、一気に引っ込む。何やら俺たちのうかがい知れないところで通じ合ったらしい。
「ルール無用でやるのか？」
「それだと面白くない。お皿にキープできる食べ物は1つだけ。食べ

終わらないと次を取れない」
「良いだろう。私を甘く見たことを後悔するがよい」
「そっちこそ、私を甘く見ないで」
　何やら開始早々バトルが始まりそうな予感だ。
「耀さん、オルタさん、少しはしたないと思いますよ？」
　と、今度は別の方向からの圧がかかる。『？』に殺気すら込められているな。笑顔で怒っている分、余計に怖い。そしてそれに、
「そうだよ、２人とも。もっとお行儀よく食べなきゃ……ね？」
　アスナも加われば、俺だったら震え上がっている。あれ、こんなに暖かいのに鳥肌が立ってきたぞ……？　２人ともすっかりと俺たちのオカンになっている。
「翔君？　翔君も見てないで何か言ってよ」
「ああ、うん、そうね。２人とも、たくさんあるんだし、ゆっくり食べていこうぜ。肉は逃げたりしないんだしさ」
「甘いよ、翔。たくさんあるってことは無限にあるってことじゃない。ここで負けるわけにはいかないの……ッ」
　良いセリフ風に言っても駄目だから。お行儀が悪いのは変わらないから。や、まあマナーというか、モラル的なことを考えると、俺（複数の女の子と関係を持っている、内１人は小学生）が何か言える立場にはないんだけど。
「というか、アルトリアは参加しないんだな」
「食事はしっかりと味わわなければ。作ってくれた方への礼儀ですからね。これは少々ジャンクなものではありますが、たまにはいいですね」
　アルトリアは意外にも上品に食べ進めていた。ま、食への考え方が違うからな。
「そうそう、ご飯を食べたら、温泉があるからね。みんなで入れるくらいの露天風呂があるから、ゆっくりとしてね」
「そんなに大きな露天風呂があるんですか!?」
「でも、前来たときはそんなに大きくなかったよね……？」
「そもそも、お風呂も温泉ではなかったような……」

２０数人が入れるくらいの露天風呂となると、なかなかの規模だ。そんなもんをそう簡単に？
「温泉は掘ったら出てきたわ」
「んなアホな」
俺は脱力してツッコムがルーテシアの舌の回転は止まらない。
「ふふふ……みんなが来るって話だったからね！　私が気合を入れて改造したんだよ！」
ルーテシアが誇らしげに胸を張る。ヴィヴィオちゃんたちは口々に褒め称えている。実際にすごいことだ。おそらく召喚獣の力を借りたんだろうけど、その年でそこまでのモノを作ってしまえるとは。ルーテシアの腕の高さがうかがえる。
しかし、ルーテシアのターンはまだ終わりではなかった。
「まだまだ！　今回力を入れたのはそれだけじゃないよ！　このオフトレーニング企画も今年で３回目……ずっと持ち込みの簡単な道具しかなかったことを私は不満に思っていたの……」
「あ、そうだったんだ」
おそらくトレーニングのメニューを考えているだろうなのはさんが、小声で漏らす。
「そうなんです！　だから私――――」
一瞬溜めて、
「――――レイヤー建造物で訓練用の街を丸ごと作っちゃったんです！」
「規模が違う！」
それもうただの改造ちゃうやろ。改造の前に『魔』を入れないとだろ。魔改造だろ。
「結界で拡張した空間に、これまた魔力で編んだ建物だから、プログラム次第でありとあらゆる災害現場や建物を再現可能！　さらには自然を利用したアスレチックフィールドで、単純なフィジカルトレーニングもカバー！」
「それ、俺たちが帰った後も使えるのか？」
オリン○ックが終わった後の競技場みたいにならない？

「ついでに宿泊ロッジも外装、内装共にパワーアップさせたわ！」
「むしろそれが本命だろ！」
　あなた何で本業を忘れちゃってるんですかね！　むしろそれが一番大切でしょ！
「ふんふん、なるほど……確かにその設備があれば明日の訓練の内容ももう少し凝ったものにできそうかも……」
　こっちはこっちで、高町さんの教導魂に火が付いてるし。食事を止めてデバイスを広げているなのはさんはすっかりと仕事モードになっている。
「そういえば、先輩は明日は訓練に参加されるんですか？」
「あー、そういえば考えてなかったな」
　雪菜に言われ、俺は首をかしげる。あくまで特務六課に所属している人がトレーニングをするため、俺が参加する必要は無い。正直言うと休む気満々で来たからなぁ。トレーニングはしなくてもいいんだけど。
「雪菜は参加するのか？」
「はい、ご迷惑でなければ……」
「もちろん大歓迎だよ！　人数が多い方がやれることも増えるからね！」
「えー！　お兄ちゃんは私たちと一緒に遊ぶんだよね！　ね！」
「そうですよ！　お兄さんと遊ぶことも楽しみにしてたんですから！」
「いろいろとお話聞きたいです！」
「クロってば、学校じゃお兄ちゃんの話ばっかりしてるんですよ！」
　クロがすかさず俺の手を握ってぶんぶんしてきた。そしてクロが俺のことをどんなふうにしゃべっているのか、ヴィヴィオちゃん達も元気いっぱいに受け入れてくれている。
　俺は小声で尋ねる。
「おいクロ、みんなになんて言ってるんだよ」
「え？　今まで解決してきた事件のことだよ？　聖天子様の暗殺を防いだり、ブラド逮捕にかかわってるって事とか」

おかしい。興味をもたれることしか話されていない。まあでも、そう言う事ならね。俺としてはお話しすることはやぶさかではないと言いますか。
「翔さん、私も一緒に遊びたい、です」
俺の服の袖を握り、控えめに自己主張したティナが止めになった。
「よし！　明日はみんなで遊ぼう！」
「「「「やったーーー!!!」」」」
あのティナに！　こんな風に頼まれたら誰でもこうなっちゃうよな！　俺が悪いんじゃないんだよ。ティナが可愛すぎるのが悪いんだ！
「先輩がそっちに行くなら私もそうしようかな……」
「私もヴィヴィオさんに誘われているので」
綺凛とアインハルトも心が揺れ動いているようだ。
「へぇ～……」
「はっ！」
周りからの冷たい視線が！
「ア、・アリアさん……？」
「何かしら、翔？」
「怒ってらっしゃいますか？」
「あら、そう見えるのかしら？」
むしろそうとしか見えないよ。なんでその緋色のツインテールはゆらゆらと揺れているんですか？　あなたそんな超能力使えましたっけ？
そしてその背後に控える、雪菜、アスナ、桜、理子、狂三。
「最低です、先輩」
「ロリコン」
「許せないです」
「むしろ、ロリ巨乳とか、需要合ったりする？　それともアリアみたいなペッタンコがいい？」
「理子、アンタケンカ売ってんの？」
「あらあら、わたくし達と一緒に汗を流すという選択肢を、翔さんは放

棄してしまわれるというのですか？　悲しいですわ、胸が張り裂けてしまいそうですわ……」
一部面白がっている奴がいるな。っていうか、みんな訓練に参加するつもりなのか？　別に強制参加ではないんだけど……
「翔？　余計なことは考えない」
「はい」
「とりあえず、正座しようか？」
「わかりました」
俺はおとなしく座った。
冷たい視線にさらされた結果、午前は子供たちと遊び、午後は訓練に参加する運びになったのだった。

「何と言いますか、すごいですね向こうは」
「にゃはは、そうだよね、あれが若さなのかなー」
正座させられ、何人もの女の子に囲まれている翔を見て、ティアナはそんな言葉を漏らした。
「みんな分かりやすくて……うぅ、こうなるなら、私も少しくらいは経験しておくべきだったなぁ……はぁ、出会いが欲しいです」
「そんなこと言ったら私もおんなじだよ～。そんなこと考えてる暇なんて全然ないんだから」
「2人とも、まだまだ若いのに何言ってるの？」
メガーヌはくすくすと笑いながら、新しくお肉を網の上に置いた。関係の無いところで繰り広げられている大食い対決のためだ。その2人は全く変わらないペースで食べ続けている。
なのはもティアナも、ずっと仕事に時間を割いてきたため、多くの

少年少女が経験するような『青春』というものを経験しないでいた。そのおかげでなのはは管理局の『エース・オブ・エース』、ティアナは難関である管理局執務官の試験に合格するという快挙を成し遂げていた。犠牲にしたものは大きかったが。
「仕事もいいけど、そっちもおろそかにすると後悔しちゃうわよ？　女の輝ける期間は短いんだから」
「その仕事が問題なんですよ！　忙しくてそれどころじゃなくて……周りにいい人もいませんし……」
「私も仕事は色々調整はしているんですけれど、ヴィヴィオのこともありますし……それに、お付き合いしてもしも結婚ってなった時は、フェイトちゃんと一緒に暮らせなくなっちゃいますからね」
　ティアナは意気消沈、なのはもあいまいに笑う。
「何話してるの、ティア？」
　声の主はスバルだ。昔から女性とは思えないくらいの大食漢である彼女は、今日のバーベキューでも張り切って食べまくっていた。数年前なら耀やオルタのように競うように食らいついていたかもしれないが、今日はそこまではしたないことはしていなかった。それでも両手に持った皿には山盛りだったが。
「あんたはいいわねぇ、色気より食い気で」
「ちょっと！　そんなことないよ！」
「え、誰かいい人でもいるってこと……!?」
「や、そう言う事じゃないけど」
「なーんだ」
　まさか抜け駆けの伏兵の裏切りがあったのかと疑ったティアナだったが、そんなことはなかったらしい。伊達に親友をしているわけではないのだ。
　そして親友と言えば、
「フェイトちゃんはどんな感じ？　誰かいい人いたりする」
「私よりも忙しいフェイトさんがいたらびっくりですよ」
「えー、ティアそんなに彼氏欲しいのー？　私わかんないな」
「……あんただって、お父さんに孫の顔見せたいとか思わないわけ？」

相変わらず肉を食べ続けるスバル。だが、それより前に呼ばれたフェイトが反応しない。見てみると、箸がほとんど汚れていない。飲み物も最初の一口しか口にしていないようだ。
「フェイトちゃん？」
「え、ぁ！　な、なに、なのは」
「ちょっと疲れてる？　ぼーっとしてた？」
「あー、だったら今日は早めに寝たほうがいいかもしれないですね。明日のトレーニングもありますし」
なのはとティアナが心配するが、フェイトは慌てて首を横に振った。
「全然大丈夫だよ！　それで、何のお話してたの？」
「……そう？　だったらいいけど。それでね――」
そんなお話もありつつ、夜は更けていく。

オフトレーニング旅行　～温泉　男湯編～

たらふく肉をお腹に詰め込んだ後に待っているのは、最高の自然の中にある温泉、もとい露天風呂である。

ルーテシアがノリノリで改造しつくしたらしい温泉は、温泉大国である日本にあるものに負けていない素晴らしいものだった。資料で勉強したのか、それとも実際に行って取材したのかはわからないが、見事な『和』の空間が作られている。

ただひとつ言うことがあるとすれば、

「人数と広さがあってないよなー……」

「そうですよね……」

俺はエリオと並んで温泉に入っていた。湯加減は最高だ。しかも場所によって温度が微妙に違うらしく、好みによって調節できるみたいだ。奥には滝湯なんかも設置されている。設備は完全だ。

でも広すぎる。人数のわりにスペースがあると、独占状態というよりも若干のむなしさが出てくる。

とにかく2人で入るには広すぎるんだよなぁ……

はいそこ、どうせ温泉ならだれか女の子が突入してくるんだろ、とか思ってるんだろ。わかってるわかってる。そう思うのはわかるよ。

でもあえて言わせてもらおう。その考えは甘いと。

そもそも、今回の旅行は俺だけではなくてエリオがいる。男が2人いるのだ。部屋割りもそうだが、そりゃ基本ペアで行動するよな。そこに女の子が突撃してくると思うか？　答えはノーだ。

そして、怖い怖いお目付け役もいるからな。アスナや桜がそうだが、あの2人は責めるときは責める女の子だ。一番大きいのはなのはさんとメガーヌさんだ。大人2人の監視の目があれば、そうそう間違いは起こらない。

少なくとも今回はね。

そんなわけで今はエリオと2人きりだ。きわめて健全である。

「翔さんは、武偵なんですよね？」

「ん、ああ、まあね」

「今までどんな事件を解決してきたんですか？」
　それはね、人には言えない事件だよ。
　興味津々と言った様子で目を輝かせているエリオには悪いが、言えない秘密がいっぱいあって何を説明すればよいのかわからなかった。
「あっ、すみません……色々と言えないこともありますよね……」
「ま、まあね！」
　察してくれたのか、エリオは一度落ち着いた。少し恥ずかしそうにする姿は、一部のお姉さんに本当に人気が出そうだ。そこに俺は含まれてないぞ。
　でもここは良い機会だな。何か変化があるのか聞いてみるか。
「何でそんなに気になるんだ？　エリオも武偵を目指しているのか？」
「いえ、僕の場合はどちらかというと管理局ですね。今まで育ててくれたフェイトさんに恩返しがしたくて」
　エリオは、エリオだけではなくキャロもフェイトの実子ではない。やむを得ない事情でフェイトに引き取られた訳アリの子だ。自分に手を差し伸べてくれた人に恩返ししたいというのは当然と言ってもいい。
　フェイトはそういう子供を積極的に保護している。里親を探したり、時には自分で育てたり。そこにはどんな考えがあるのか、予想できる所はある。それについては今度にするけど。
「それは立派なことだよ。でも、テスタロッサさんはもっと平和に生きてほしいって考えてるかもよ？」
「アハハ……正直反対されてました。でも最後には応援してくれるようになったんです！　それからは時間がある時に魔法についても色々と教えてくれるようになって」
「ふーん、じゃあ腕には自信があるんだ？」
「いえいえ！　現役の方に比べればまだまだですよ！」
「ちなみに師匠はテスタロッサさんだけ？」
「その他にも高町さん、今日は来てませんけれどシグナムさんとヴィータさんにも少し」

「……」
メンツがエグくて笑える。
後半の２人には俺も会ったことはないが存在は知っている。２人とも相当の実力者だ。講師としては黄金の布陣と言っていいだろう。そしてその天才に育てられても全然心がすれていないことを考えると、エリオも天才だ。しかもエリオは今１４歳。
末恐ろしいとはこいつのためにある言葉なんじゃないのか？
「今は六課の隊舎に住んでます。前回の六課には参加できなかったので、今回こそはって思って――――」
「ちょい待ち、前回の六課には参加できなかった？」
流石に気になることがあったため、聞いてしまった。
「はい、年齢的に難しかったので。あっ、そうですよ、六課の設立って今回が初めてじゃないんです。特務六課は『ＪＳ事件』を解決した機動六課が集められてできた組織で……」
そりゃ知ってる。『ＪＳ事件』（事件の首謀者のジェイル・スカリエッティの頭文字を取ってできた名称）云々の大枠はな。俺が聞きたいのは、
「前は参加してなかったのか？」
「そうなんですよ。流石に１０歳じゃ無理でした」
当たり前だと言いたいところだけど、俺の疑問のためにもう少ししゃべってもらうことにする。
「じゃあ部隊の構成はどうなってたんだ？　え、っと、高町さんとテスタロッサさんでそれぞれチームを組んでたんじゃないのか？」
慎重に言葉を選んで問いかける。
「ごめんなさい。僕もそこまで詳しいことまではわからなくて……でもそれぞれチームを持っていたのは間違いないと思いますよ？　スバルさんとティアナさんに聞けばもっとわかると思いますけど……」
「ありがとう。後で聞いてみるわ」
どんな変化があるのか知っておくのは大切なことだしな。たとえそれが過ぎ去った過去のことであっても。
「わ―！　いい湯加減！」

「お」
「隣も入ったみたいですね」
しきりに遮られた向こう側、女湯という花園から、何人もの女性の声が聞こえてきた。人数と着替えの関係で、俺たち男よりも温泉に来るのが遅くなっていたらしい。
俺たち以外が女性の今回の旅行、温泉は広いはずなんだけど、おしゃべりの声が結構はっきりと聞こえてくる。
ルーテシアはプライバシー的なモノには気を配らなかったんだろうか。防音の結界を張ればいいのに。
「いや、ルーテシアならわざとって事もあり得ますよ」
「やりそうだな、あの子なら」
ほんの少し接するだけでも、ルーテシアの性格は理解できた。あの子は結構人をからかうし、遊び心がある奴だ。
「普段は聞けない女の子の秘密の会話が聞けるチャンスってことだ」
「しゅ、趣味悪いですよ、翔さん」
「ここでビビることはないんだよ！　ルーテシアが作ったってことはあいつも想定してるんだから」
「ただ抜けてるだけかもしれないじゃないですか！　ダメですって、聞き耳たてちゃ！」
「まじめな奴め。こんな修学旅行のような時間に優等生ぶるなんてお前は性欲が枯れているのか!?　俺なんて満たされて溢れてしまっているのにそこに過剰に注ぐような奴だぞ!?」
「結局それじゃないですか！」
「でも、お前だって気になるだろ？　キャロが何言ってるのか。それに、聞こえるんだから仕方がないじゃないか」
「ななな何でここでキャロの名前が出てくるんですか！　関係ないじゃないですか！」
「っていうか、こんなに騒いだら向こうに聞こえてるんじゃないか？」
「僕の話聞いてますか!?」
がっとエリオの口を塞ぎ、無理やり黙らせる。
「気が付いてないみたいですね……」

「おしゃべりに夢中だから気が付かないんじゃないですか？」
「そうかな――――おーーーい!!!　聞こえるかーーーー!!!」
　試しに大声を出してみる。だが返答はない。
「このレベルで聞こえないなんてことあるか？」
「うーん……」
　エリオも首をひねっている。
「どうしましょうか。早めに上がりますか？」
「嫌だ嫌だ！　俺は一万数えるまでお風呂から出ないぞ！」
「のぼせますよ、それ」
「むしろ気づかせてお互い声のボリュームに気を付けるようにすればいいだろ」
「まともな意見でよかったです」
「お前、俺が年上なのに遠慮ないのな。おーーーい!!!」
「でも安心しました。覗いたりしないんだなーって思って……決して！　覗きたかったわけではありませんが！」
　思春期エリオ君の渾身の否定はともかく、俺は覗きをしようなんてこれっぽっちも考えていない。なぜなら、
「覗いたら殺されるだろ」
「あぁ……」
　察したな。そういうことだ。
「でもぶっちゃけ覗きたい」
「素直だ……」
「は？　エリオがだぞ？　キャロだったら覗きたいやろ？」
「いえっ、ですから……ッ」
　完全にパワハラだが、この業界に働き方改革はない。そしてこの男（エリオ）とても分かりやすい。そりゃね、諸々境遇が複雑で同年代の子供がずっと同じところで育ってれば、そういう感情にもなるよね。
「それじゃあ、少し早いけど、旅行のメイン、始めちゃおっか？」
「メイン？　ルールー、何のことー？」
　そうしている間も、向こうからは声が聞こえてくる。
「流石におかしいよな？」

「はい？」
「今の声、いくらなんでもはっきり聞こえすぎじゃないか？」
「そういえば……」
　全然大きな声ではなかった。普通のトーンにしてははっきりと聞こえすぎている。今の声が聞こえるなら、俺の声にとっくに反応しているはずだ。
　まさかとの思いもありつつ、湯船から立ち上がる。こんなところに敵が出るとは想像しにくいが、もしものことがある。
　そしてその時、俺たちの前に現れたのは――――大きさ１０センチほどのカブトムシだった。しかし色は紫を主体とし、目は赤い。もっと驚くことは、細い足を使ってディスプレイを持っているということだ。いくら軽量になっているとはいえ、大きさによらず力持ちらしい。
　ディスプレイには当然何かしらの文字が書かれているものだ。
「この子、ルーテシアの召喚獣ですよ」
「あ、そうなの？」
　敵ではないとわかり、牙（タスク）の構えを解く。しかしなんだってこいつがこんなものを？
「え、っとなになに……『ルーテシア・アルピーノプレゼンツ！　ドキドキ！　秘密の花園へのご招待！』……だそうです」
　何だか知らないが、始まってしまったらしい。エリオは読み進めていく。
「えー……『これより、女の子の赤裸々なお話を男湯の皆様にプレゼント！　夜月さん、エリオ、目の前にあるディスプレイに、女の子に聞きたい質問を打ち込んでください！　わたくしルーテシア・アルピーノがその要望に見事応えて見せましょう！』」
　何だってこんな大掛かりなことを……ばれたら何をされるのかわかったもんじゃないぞ？　君の周りにいるのはそれなりの実力者なんだからね？　俺は責任取らないよ？
「翔さん。ダメですよ」
「何もやってないだろ？」

「『まだ』何もやってないんですよね？　ディスプレイを手に取っている時点で言い逃れできないですからね？」
　せっかく用意してくれたんだぞ？　俺たちを歓迎するためにここまでしてくれたんだ。それを邪険にしてしまっては人としてどうかと思う。
「でもバレたら、話を聞いていた僕達もお仕置きされますよね？」
「……計画変更だ。おとなしく風呂を出るとしようか」
「それは英断ですね！　そうしましょう！」
　俺とエリオは余計なとばっちを食らわないためにも、さっさと温泉から上がるのだった。
　飯食って風呂入って寝る。それ以上に最高な過ごし方があるだろうか。
　しかもここ、風呂上がりのコーヒー牛乳まで完備してるんだぜ。もう至福。至福の時間だよ。
　マッサージチェアに体をもみほぐされながら、夢見ごちになっていると、女の子の集団が休憩室に入ってきた。
「翔君」
「お、みんな、上がった、のか……あ、あれ？」
　そんなに怒ってどうしたんでしょうか？
「戦闘のどさくさでヤミちゃんのパンツを見て、大声で叫んだって本当？」
「な、何で？」
　アスナさん？　な、何でそんなに昔の話を？
「ヤミさんから聞いたんです」
「否定しないってことは、事実な訳？」
　雪菜とアリアに詰め寄られる。
「とりあえず、正座しましょうか」
「……はい」
　こってり絞られることになってしまったのだった。
　おいエリオ、そんなご愁傷様ですみたいな顔しても無駄だからな。明日のトレーニング、覚えておけよ。

明日があるからとみんなが寝静まった深夜１２時。俺はまた温泉に向かっていた。寝れなくなってもうひとっ風呂浴びに来た、訳ではない。俺も何もなければ素直に寝てたと思う。
でも、女の子に呼び出されたらどうしようもない。
傍らに並ぶ女の子――――理子は、貸し出されている薄い浴衣に身を包んでいる。俺は左手で理子と恋人繋ぎしている。その手を理子は両手で包み込むように持ち、体を密着させていた。
俺の左手がおっぱいに挟まれるくらい密着されると歩いているだけでもドキドキしてしまう。この柔らかさ、上をつけていないのは確実だ。
「ま、最初に呼び出すのはどっちかじゃないかと思ってたよ」
「どっちかって？」
「理子か狂三のどっちか」
「えへへ、当たってたね、それ」
理子がこちらを向いた。緩いウェーブを描く金髪が、ふわりと広がる。
「えっち、こんなところで期待してたんだ」
「えっちなのはそっちだろ。誘ったのはそっちなんだから」
「ノリノリだったのはそっちだもーん」
そんな意味のない擦り付け合いをしていると、温泉にたどり着いた。
「どっちに入る？」

理子が指さすのは隣り合った2つの扉。それを隠すように垂れている『男湯』、『女湯』の文字だ。別々に入るなんてそんなことをするわけがない。
「男湯のほうがいいだろ。俺以外にはエリオしかいないんだし。こんな夜遅くに入ろうなんて思わないだろ」
「じゃあもしもエリオ君が入ってきたら、私が裸見られちゃうんだね」
「別に女湯にでもいいけど、入ってて大人が入ってきたら色々終わるよ、俺が」
「その時は、犯罪者でおそろいだね」
「そんなおそろいは嫌だよ……」
武偵ルールで罪が3倍になるんだから。
俺たちは男湯ののれんをくぐった。
「へー、構造は女湯と変わらないんだね」
理子は物珍しそうに、きょろきょろと中を見回した。だがそんな無邪気な理子はすぐにいなくなった。
「理子?」
立ち止まった理子の背中に呼びかける。するとくるりと振り返った。俺を正面から見るのと、浴衣の帯が床に落ちるのは同時だった。
「翔君」
浴衣がはだける。肩からずり落ち、わずかにその双丘に支えられている。理子は上どころか下も付けていなかった。隠す様子もなく妖艶にほほ笑んだ。
「まずはいっしょに入ってゆっくりしよっか?」
1日目の夜はまだ終わらない。

オフトレーニング旅行　～温泉　女湯編～

時間は入浴まで巻き戻る。男湯ではエリオと翔がいそいそと退散してしまう少し前。女湯には一糸まとわぬ女性が続々と入ってきていた。２人しかいない男湯とは違い、その広さというスペックを完全に発揮している。

湯船に入る前、体を洗うのすらもどかしいとばかりに、いつもよりも少々雑になる。

「わーい！　一番乗りー！」

「リオ待ってー！」

そして子供たちが元気よく湯船に飛び込んだ。子供たちの仲でも一番の元気っ子であるリオが一番先頭だ。それを追ってヴィヴィオが飛び込む。

「こらヴィヴィオ！　そんなことしちゃダメでしょ！」

そんなはしたない行動を、ティアナが諌める。なのはとフェイトは片づけの手伝いをしているため一緒には入っていない。なので、この中ではティアナとスバル、ノーヴェが一番の年長者だ。

「まあまあ、今くらい許してやれよ」

「そんなわけにはいかないでしょ、ノーヴェ。同い年でもコロナとクロとは大違いなんだから」

比較的落ち着いている２人を見てため息を漏らす。

「アハハ……でも、そこがあの２人のいいところでもありますし」

「私だってわくわくはしてるけど、あそこまで子供みたいにはしゃいだりしないわよ」

それに比べて落ち着いた様子のコロナとクロ。なんだかんだ、これであのグループはこれでバランスが取れているのだ。

「わー！　いい湯加減！」

ティアナの注意に元気に返した２人は、湯船に足をつけた。その温かさに一瞬ブルリと震え、一気に肩までつかった。

次いで続々と温泉に浸かっていく。みんな反応は同じようなものだ。体を伸ばして、伸び切ったら脱力する。家にあるお風呂とは違い

存分に手足を伸ばすことのできる最高の温泉に、女性がときめかないわけがない。
「はぁ……生き返るぅ……」
　その中でもスバルのくつろぎ方は目に毒だった。仕事で鍛えられたしなやかな肢体を反らし、お湯にぷかぷかと浮かぶ２つの大きなカタマリが数人の殺気を集める。
「みんな湯加減はどう？」
「「「「最高でーす!!!」」」」
「場所によって温度が違うから、あと向こうには滝湯があったりするからね」
　少し後に入ってきたルーテシアがみんなに問い、百点満点、三ツ星の返答をする。
　その反応に満足そうに頷き、次いでニヤリと笑った。
「それじゃあ少し早いけど、旅行のメイン、始めちゃおっか？」
　ルーテシアがアクションを起こした。この時間のメインディッシュとして入念な準備をしてきた。
「メイン？　ルールー、何のことー？」
「確かに、温泉が旅行のメインって言ってもいいかもしれないけど……」
「ノンノン！　違いますよアスナさん！　そして察しが悪いですよ！　旅行のメインなんて古今東西１つしかありません！　ズバリ、恋バナでしょう！」
「あー……」
　アスナがなるほどと言った様子で顔を引きつらせる。自分たちの事情を考えた時、自分から話を振るのは少し難しいと考えたからだ。しかし、年頃の女の子として、そして周りの多くがライバルであるという立場上、話さないわけにはいかない。
　恋という戦いにおいて情報は大切なのだ。
　極めて冷静を装いながら、湯船に浸かる。
（ふふふ、術式は問題なく発動中。さあさあ！　どんな反応するのかな！）

全ての犯人はこの娘、ルーテシアだった。
この露天風呂にはいくつかの魔法がかけられている。
1つは翔も考えていた防音の魔法。音を完全に遮断する高性能なものだ。問題は男湯から女湯への音しか遮断されないという事。つまり女湯の声は駄々洩れなのだ。
そしてもう1つは収音の魔法。これは離れた場所にいる相手の声を拾うためのものだ。この魔法のおかげで、普通の話声だろうと、余すところなく男湯に届けることが出来る。
今頃、男湯ではルーテシアの召喚獣がネタ晴らししているころだろう。温泉から上がった後、エリオはさぞ面白い反応をしてくれるのだろうという考えからの行動だったが、それ以上の獲物が控えている。
（まさか追加のお客さんがこんなに面白い人だとは！）
まさかの男女比率だった。エリオのことも大概だと思っていたルーテシアだったが、まさかそれを超える人がいたとは！　しかも、一途なエリオとは違いリアルハーレムだ。年頃の女の子として、興味を持たない筈がない。
まずは王道から攻めてみる。
「それでキャロ、エリオとは何か進展はあったの？」
「わ、私ですか？　言え特には……そもそもエリオ君とそんな話しませんし……」
「キャロからアプローチすることはないの？」
「したことはないですね……」
どうやらまだまだエリオの道のりは遠いようだ。これ以上言っても何か面白い反応は得られそうにない。ルーテシアは次に目を向けた。
「ヴィヴィオ達は誰かいい人いたりしないの？」
「えー！　そんなのいないよー」
「そうだよー。今はみんなで格闘技してるのが楽しいし！」
「クラスの子が話しているのは聞きますけどね……」
ヴィヴィオ、リオ、コロナの順番に答える。3人とも小学生。まだまだそういったことには疎いのだろう。ませている子供は入口に入

るくらいか。
「ちなみに、アインハルトさんは？」
「いえ、私もそういったことはあまり……ずっと覇王流の鍛錬がありましたし」
「そっかー……」
　ルーテシアは思ったような答えが得られず少し肩を落とす。
「でもでも！　クロちゃんは違うんだよ！」
「ほほう！　つまり気になっている男の子がいると！」
　待っていましたと言わんばかりにルーテシアは飛びつく。
「気になっているじゃないわ！　好きな人よ！」
「その人とは!?」
「お兄ちゃんに決まってるじゃない！」
（（（（デスヨネー））））
　みんなの心の声が一つになる。
「でも兄弟なんじゃないの？」
　ティアナは当然の疑問を浮かべる。
「血は繋がってないし、養子になっているわけでもないから。法的な繋がりは何もないのよ。だから問題ないわ」
「でも夜月君が手を出したらいろいろと問題になるよ？」
「関係ないの。お互いに愛さえあれば」
　完全に暴走特急になっている。翔もさすがに法を犯すつもりはないのだが。
「ま、ライバルも多いけどね」
　その言葉に顔を伏せる者、あいまいな笑みを浮かべる者、ニコニコと挑発的な笑みを浮かべる者と様々だ。
　ライバルが多いというのはＢＢＱでの様子を見ていれば分かっていた。これはこれは愉しくなってきたとルーテシアはノリノリになるが、そこに水を差す女の子がいた。いつもの小さい角のようなヘアピンを外し、ピンク色の髪がお湯に濡れないようにしている女の子――アリアだ。
「はぁ……みんな揃いも揃って。恋愛なんてくだらないのに」

アリアは大きなため息を吐いた。
「あれ、神崎さんはそういう気持ちはないんですか？」
「当たり前でしょ！　この世界にそんな感情を持ち込んだら危険が増えるだけよ。アイツはただのパートナー！　それ以上でもそれ以下でもないわ！」
「「「「パートナー!?」」」」
この時、アリアは家訓的な意味での『パートナー』の考えで言った。つまりはホームズとワトソンのように共に事件を解決する関係だ。決して恋愛的な意味は含まれていない。しかし、何も知らない人が聞けば言っていることが矛盾しまくりになっているだろう。好きではないが、パートナーであるなんて意味不明だ。
アリアにそんな気がなくとも、誤解を生んでしまう
「パ、パートナーって、どういうこと何ですか？　もしかして、子供の恋愛なんてくだらない、私たちはすでに相手を人生のパートナーとして愛している、と？」
「は――――ははははははぁぁぁ!?　そそそそんなわけないじゃない！　何言ってんのよこのガキは!!」
本当にそんな気が全くないのかと言われれば、それは本人すらもわからないことだった。少なくとも、顔を真っ赤にしてまくしたてるその姿から想像されるのは1つだったが。
誰もそこには指摘を入れない。するとすればもっと別の方向からだ。
「もー、ルールルーかわいそーだよ？　アリアを見れば、そんな年じゃないなんてことすぐにわかるでしょ？」
「え？　あ、で、でも……あれ？」
理子にそう言われてルーテシアは納得しかけて――――首をかしげる。ＢＢＱでは確かに武偵高校の制服を着ていた。しかし、目の前にいるアリアの背格好、発達具合は正直自分と比べても幼すぎるという印象が……
「私、アンタと同い年でしょうが……ッ！」
「あれー？　そうだっけ？　でもこうしてみると、本当にペッタンコ

なんだねぇ。寄せるものが無かったら、寄せてあげるブラなんて使っても意味ない――――」
「殺すわ！」
　取っ組み合い、全裸のキャットファイトが始まった。
　そんな２人を放っておいて、ルーテシア話を進める。
「ちなみに、この中で一番その翔さんと付き合いが古いのって誰なんですか？」
「あ、それは私ですよ」
「もちろん私ですよ」
「「「うん？」」」
　雪菜と桜が同時に名乗りを上げる。
「えっと、桜さん、私ですよね？　この島に来てからずっと私が一緒にいたわけですし」
「この島に来てからは、そうかもしれないですね？　でも私、５歳のころに命を救われていますから。それからだと考えると、もう１０年間ずっと……ということになりますよね？」
「う、っく……」
　桜の言い分に、雪菜の勢いが弱まる。なお、一番早く召喚されたのは雪菜だったが、次に召喚されたクロとは数時間の違いしかなかったりする。なので、クロからしてみれば、
（桜はともかく、こんなことでムキになるのね。雪菜も案外そういうプライドがあったってことかしら）
　と思ってしまうのだった。
　雪菜にとっても翔にとっても、お互いがお互い初めての人なので、特別な人というのは間違いではないのだが。
「愛情を長さで捉えているようではまだまだお子様だろう」
　ここに割って入るのはオルタだ。他人よりも色素の薄い肌がほんの少しだけ色づいている。
「その程度の些事でいちいち競うなど、程度が知れるぞ？」
「そういうオルタこそ、競い合っているのですが……」
　ぼそりとセイバーが言う。どうやらこの２人、抜けているところが

少しづつ違うらしい。オルタが姉なところがあれば、セイバーが姉なところもある。
言い争う姿を見たルーテシアは、ふと気になったことを尋ねた。
「ちなみに、誰も告白とかしてないんですか？」
ルーテシアの何気ない一言に、今までの言い争いが嘘のように静まり返る。
告白。もちろん罪の告白ではなく愛の告白だ。これにはどう答えたものか。翔はすでに少女たちの気持ちを知っている。それどころか体を重ねているのだ。しかしそれは他人には言えない特殊な事情があってのこと。
（（（（ここは素直にしてないって言う方が……））））
「何を言っている。私が一番であることには変わりないが、他の者も――――お、おい！　何をする！」
オルタが下手なことを言おうとした途端、全員で取り押さえにかかる。突然の無礼にオルタもそれ以上続けられなくなる。
「時間が関係していることで、わたくしが出遅れてしまうとは思いませんでしたわ」
「狂三ちゃんがそんなこと言うなんて珍しいね？」
何かと余裕のあるアスナと狂三の２人は少し離れた場所から、事の成り行きを見守っていた。
「あらあら、わたくしにだって、そういうプライドはありますわ。アスナさんは違いまして？」
「そりゃあ、そうなんだけど……」
余裕の持ち方にもずいぶん違いがあるようだ。
「夜月翔がそんなに良い男性とは思えませんが」
「は？　何でよ」
その言葉に、辺りは再び静まり返ることになった。
今度は違う方面からの声だ。ヴィヴィオに引っ張られる形でみんなで入ることになったヤミである。アリアとは違った冷めた目で、会話を聞き流している。
その言い方に、クロはケンカ腰になる。意外にも、オルタは何も言

わない。
「何か気に入らないことがあるわけ？」
「あるに決まっているでしょう……あろうことかあの男は、戦闘中に私の下着を覗いてきたんです」
「「「「……は？」」」」
　あまりにも斜め上のカミングアウトに、全員の思考が真っ白になる。
「戦闘中にあんな屈辱を受けたのは初めてです。しかもその隙をついて攻撃してくるなんて……ッ！」
　そんな昔のことをいつまでも、と思うかもしれないが、女性にとってその記憶は強烈だったというわけだ。
　これはフォローできないと女性陣も苦笑いする。そしてお仕置き決定だ。
「あんなえっちぃ男のどこがいいのか私にはわかりません」
　翔の名誉のために言うが、見ようと思ってみたわけではない。短いスカートで飛び回るヤミにも一定の責任はあるはずである。そして、闇の世界で暗殺者として名を馳せてきたヤミがパンツ程度で動揺するほうが悪いのだ。
「そ、そんなことないですよ！」
　ここで気丈にも否定の言葉を上げるのは綺凛だった。立ち上がり、胸の前で両手を握りしめている。普段なら絶対に口を出したりしない。相手が多少知っている仲で、なおかつ翔のことでもなければ。
　全員の視線が綺凛に集中する。興奮しているのか、その視線にひるむことはない。もっとも、
「翔さんに胸を触っていいって言っても！　触られなかったんですから！」
「「「「えええええっ!!!!」」」」
　そのセリフは言わないほうが良かったのかもしれないが。
「き、綺凛ちゃん？　いつそんなこと言ったのかな……？」
　こんなところにも伏兵がいた。や、いたのは綺凛の反応から丸わかりだったが、まさかそんな手段に打って出る性格だとはみんな思って

いなかったのだ。
アスナも慎重になる。
ちなみに、綺凛のセリフを聞いても、『まさか翔は男の方が……？』とならないのは、当然のことだと言い添えておく。そして、その話を聞いて、女性陣にある種の安心感が芽生えた。複数の女性と関係を持っている翔だが、そういった線引きはしっかりとされているのだと。
「え、あれ？　わ、私、いったい何を……なんてことを……あわ、わわわ、ぷしゅぅ」
真っ赤になった綺凛が、しぼんでいく風船のようにお湯に沈んでいく。
「わー！　綺凛ちゃんがのぼせたよー！」
「早く引き上げて！　溺れちゃうよ！」
周りにいた女の子たちが騒ぎ出した。
「なんて言うか……あの子、本当にすごいわね……」
「ねー、でもさ、結局付き合えるのは1人だけなんだし、これから大変なんだろうね」
恋する乙女のパワーに押されて途中から全く話に混ざれていなかったティアナと、そもそもあまり興味がないスバルはそんな感想を漏らすのだった。

オフトレーニング旅行　～温泉での～　（理子、雪奈）

「はー、きもちー、何度入ってもいいなぁ、んっ」
「そうだなぁ」
　理子は俺の隣で体を伸ばした。当然その身には何も身に着けていない。俺と理子は、並んで温泉に浸かっていた。俺は理子の内股の感触を手のひら全体を使って楽しんでいた。
　時折行き過ぎてしまい、その根元の柔らかい物の形を変えてしまうが、理子は特に抵抗せずにされるがままになっている。俺の肩に頭を乗せ、つないだ手はしっかりと指が絡まり合っている。
　しかし、言動の軽さとは反対にその顔は真っ赤に染まっていた。それは温泉に入っているから、だけではないだろう。
　事実、俺の息子もすでにお湯の中で立派に反り返っている。とは言っても、一緒にお風呂に入るなんてことになれば、こうなることは自然の摂理。なにも慌てる必要は無い。
「ふふ」
「何だよ」
「翔君、緊張してる？」
「いまさらそんな……」
「顔すごく赤いよ？」
「……」
　赤くなっていたのは理子だけではなかったらしい。余裕しゃくしゃくだったつもりが、恥ずかしい。
「な～に考えてるのかなぁ？」
　理子の手が俺の足の付け根に伸びた。細い指が撫でる感覚がこそばゆい。
「翔君、入ったらすぐに触ってきて。何期待してるのかな～？」
　だんだんと指の動きが怪しくなってきた。肉の柱の根元をなぞり、硬さを確かめているみたいだ。
　人差し指が血管をなぞりつつ、腫れあがった側面を上へと目指す。敏感なカリ首のくぼみの皺１つ１つを丁寧になぞり、やがて亀頭に達

した。決して激しくはないが、丁寧な刺激に俺の腰が動く。そのわずかな反応にうれしそうな顔をする理子。
「ねぇ、本当に人来ないかな？」
「だからたぶん大丈夫だって。男湯だし、こんな時間にエリオは入ってこないだろ」
「うん、そうだよね……んっ」
「んっ」
自然と唇を重ねた。それと同時に俺たちは向き合う。右手を理子の頭の後ろに回して引き寄せ、左手を水にぷかぷかと浮いていたおっぱいに這わせる。ツンとした突起には触れずに、まずはその柔らかさを堪能する。
理子も負けじと俺のモノを扱き始めた。限界まで膨張していたと思っていたが、まだまだ限界ではなかったようだ。より固く、より強く反り返っていく。
「こんなにして、のぼせたらどうするんだ？」
「ココ、こんなに大きくしてる人の言葉じゃないよ？」
まだまだ余裕のようだ。
「んむぅぅ……ちゅっ、はふぅぁっ、ひゃぅぅっ、んふぅぅ……ちゅっ、ちゅくっ、ちゅるるる……」
今度は強めに頭を固定する。強めと言っても、理子が本気を出せばすぐに脱出できる。１つのポーズのようなものだが、理子の体は固くなっていた。
二人の唾液が混ざり合い、吐息に濡れる。強引に舌を引きずり出し、性器のごとく丹念に舐る。抵抗する理子を無視して、奥に奥に侵入して、蹂躙する。俺の肺に入った理子の吐息はバニラのように甘い香りがした。
理子の手淫がだんだんと拙くなっていく。
「あぁっ！　うっ、くぅ……っ！」
「やっぱり、乳首の方がもまれるよりもいいのか？」
「どっち、もっ、いいぃ、けど……っ？　あっ、んぅ、ひゅぐっ！」
そう言う割には、グミのような突起をはじくだけで声が震えてい

る。最初は閉じていた足もだんだんと広がり、正面から見れば足の付け根にとても卑猥なものが見れるだろう。
だが残念ながら俺は横に座っている。触って確認するしかない。
「んぅぅっ!! あ……っ、い、今あそこはぁ……っ！」
キスを中断して止めに入ろうとしてくるが、無理矢理ふさぐ。上下両方とも。
「うぁぁぁ……っ、指入ってるぅ……っ！」
綺麗な縦筋がほんの少しだけ口を開いていた。そこからはにじみ出るようにお湯とは違う液体が漏れていた。中指はすんなりと飲み込まれていく。俺のチンポで開通されたそこは、俺の指をキュウキュウと締め付けてくる。
少しずつ慣らすように指を動かしていく。
「そういえば、どのあたりだっけ……」
「は、ぇ？ な、何が……」
今まで、うまく快楽を受け取ってきた理子だったが、その『場所』に指がたどり着いた瞬間、表情が凍った。理子の弱点である肉粒天井を俺の指が捕らえたのだ。
ヒダに守られていたそこは、俺の指の進行を止めることは出来ない。理子がどんなに頑張っても、俺の指の動きを止めることは出来ない。
何度か往復するだけで、肉粒はふるふると震えだした。
「そこ……！ そんな……何度もぉ……っ」
指に伝わる肉壺の反応も全く違ったものになってきた。一度シたことで多少は慣れていたのか、味わうように咀嚼されていたが、どんどん奥へ奥へと飲み込むような動きになってきた。
「理子も……」
耐えるのは諦めたのか、再び理子の手が俺の息子に伸びてきた。その手は亀頭を包み込むように触れてくる。手を放してしまうのが嫌なのか、引っ掛かりを求めているのか、カリ首に合わせて指を這わせるのだからたまらない。
「おまっ、先っぽばっかやめろって……！」

俺の腰にもゾクゾクとした感覚が走り始めた。温泉の中でなければ、先走りでぐちょぐちょになってしまっているだろう。
このままだと本当にのぼせてしまいそうだ。ゆっくりとお湯に浸かっていた時間はどこに行ったのか、お互い発情した獣のように短い呼吸を繰り返している。
「こ、このままっ、最後までっ、イっちゃうの……っ!?」
「流石に、お湯には出せないだろ……っ！」
「う、うんっ、そうっ、だよねっ！」
そんなことを言いつつも、お互いの手は止まらない。理子の腰は震え、絶頂を迎える前の雌そのものになっている。俺もどんどん射精感が高まってきた。
ガラッ！
「ッ!!」
扉が開いた音で、俺たちは我に返った。いくらHに没頭していても、そのくらいの危機察知能力は残っていた。
しかし我に返ったと言っても、すぐさま行動できるコンディションではない。俺たちは2人とも爆発寸前だった。背骨にはピリピリとした痺れが残っている。温泉に入ってきた人物がここに来るまでに退避できるほどの余裕はない。
「キ、キラークイーン……っ！」
ここで動いたのは理子だった。虚空に現れた猫を想起させるスタンドは俺たちを掴み投げ飛ばした。幸いこの温泉はルーテシアのこだわりによってかなり作りこまれている。本物そっくりの、と言うより本物の岩が配置されていたりするのだ。
その1つにうまく身を隠すことが出来た。
「た、助かった理子」
「ほ、ホントに人が来るなんてね……」
2人して息を整える。どんなに鍛えても、こればっかりはしょうがない。
「で、誰が来たんだろうね？」
「や、エリオだろ？　ここ男湯だぞ？」

むしろエリオ以外が来てもらっては困る。
俺たちは岩に身を隠しながら息を潜める。
ふと横を見ると理子がいた。当たり前だけど。隠れられるサイズの岩と言っても、人が2人も隠れるには少々狭い。必然的に体を寄せ合うことになる。
ついさっきまでお互いを求めあっていたのだからそれで挙動不審になることはない。でも、ピンク色がツンとした2つの双丘があると反応してしまうわけで。
「誰も来ないよ……？」
「お、おぉ、そうだな」
俺はさっと目を反らし、入り口の様子をうかがった。
確かに扉が開かれる音がして少し経つというのに誰も入ってこない――――いや、誰か来たな。
「先輩、理子さん、いるのはわかっているんですよ！」
まさかの声が聞こえてきた。
「あ、アハハ……翔君顔真っ青ー……」
「そのセリフ、お前にそのまま返すぞ……」
しかし、この相手をだますことは出来ないだろう。俺たちはおとなしく出て行った。
そこに立っていたのは、寝間着の浴衣に身を包んだ雪菜だった。腕を組み、不機嫌そうに半眼で俺たちを見てくる。
「どうぞお湯に浸かって下さい。裸では寒いですからね。何をしていたのかは……聞くまでもないですよね？」
そそり立った俺の下腹部、熟れて透明な粘液が滴っている理子の下腹部を冷ややかな目で見る雪菜。
俺たちは大事なところを両手で隠しつつ温泉に浸かった。
「ちなみに、どうして雪菜はここに？」
「トイレに起きたら理子さんがいなくて、トイレにもいませんでした。少し探したら……」
「ここにいたって訳だ」
「はい」

今度は理子が質問する。
「なんですぐに入ってこなかったの？」
「最初に開けたのはガリューさんです。ルーテシアさんの召喚獣の。お風呂の清掃に来たらしいですけど、私が間一髪で間に合ったんですよ」
ガリューが気を使って後に回してくれたってことか。雪菜よりもガリューの方がどれほどよかったことか。
「翔君、アスナさんに知られたら大変なことになるね……」
「さっき叱られたばっかりなのにな……」
「ちなみに、私にいいアイディアがあるんだけど、乗る？」
「やっちゃってくれ……」
「ふふっ、りょうか～い♪」
もうどうとでもなれと、理子にＧＯサインを出す。
「キラークイーン」
本日２度目のキラークイーンが姿を現す。しかしそれは雪菜には見えていない。この世界では、達人ならば何となくの気配を感じ取ることは出来るという話だったが、説教で興奮している雪菜は全く気が付いていないようだ。
「――ですから、こういうところでは、きゃっ！」
「なんて手際や……」
キラークイーンが雪菜の浴衣の帯を奪い去った。それも、帯を解いてではなく途中から切断してしまったため、奪い返しても再び結ぶことは不可能だ。
「ちょ、ぁ、え？」
雪菜も異常事態に気が付いたようだ。帯がなくなってしまえば、布を体に巻いているだけの浴衣は簡単にはだけてしまう。右手で胸元、左手で足の付け根近くを押さえる。
両手を使ってしまえば、それ以上の抵抗は出来ない。
後ろに回り込んだキラークイーンは背中から浴衣を真っ二つに引き裂いてしまう。
「きゃあああああああ!!」

絶叫と共にその場にしゃがみこんでしまう。理子じゃなかったら完全に犯罪だぞ、この絵面。そして実に楽しそうだな、理子さんや。
「翔君、ニヤけてるよ」
おっと俺もだったか。
顔を真っ赤にして恨めしそうに睨まれてしまう。やっていることは完全に犯罪だからな。しかし俺は悪いことはしていない。やったのは全部理子だから。
「理子さん……っ！」
「ふっふっふ。ダメだよ、雪奈ちゃ～ん。こんな野獣の前にそんな無防備な格好で出てきちゃ」
スタンドを自在に使いこなす理子。スタンドに抵抗できない雪奈。これからどうなるのか、簡単にわかってしまう。
「り、理子さん……っ、スタンドを止めて……っ！」
「や～だよ～」
雪奈はスタンドに引きずられ、温泉の中に引きずり込まれる。そのまま四肢を押さえつけられた。スタンドは呼吸しないだろうけど、温泉の中にいるキラークイーンがシュールだ。
「ちゅ」
「んんっ!?　んちゅっ、ぁ、ちゅぱっ」
お湯の中でもがく雪奈に、理子は突然唇を重ねた。雪奈は当然暴れるが、だんだんと抵抗が少なくなっていく。それどころか、どんどん積極的になってきている？
「ぷはぁ……ふふ、だいぶ出来上がったみたいだね～」
「おい理子、何やったんだよ」
「え？　ちょっとね、持って来てた媚薬を飲ませてみたんだよ」
「……は？」
「夾ちゃんに貰っておいたのがこんなところで役に立つなんて思わなかったよ～」
理子の仲間の夾竹桃。彼女は毒使いだ。お願いすれば媚薬程度すぐに用意してくれるとは思うけれど、この場に持って来ていたってことは……うん、そうなんだろうね。

「即効性の強力な奴。筋弛緩剤と一緒になってるから、もう全然力が入らないと思うよ。その分、効果の時間は短いんだけどね」
理子の言葉通り、雪奈の体を押さえつけていたキラークイーンは、どちらかというと、体が沈まないようにする方向にシフトしていた。
「か、ぁっ、せ、せんぱ、い……っ」
濡れた目で俺を見てくる雪奈。柔らかな弾力の先端はキス一回とは思えないほどに硬くなっている。お湯から顔を出している秘部からは、温泉ではない透明な液体が零れ落ち、そこに栓をしてほしいと、少し口を開いていた。
そしてそんな雪奈を見た俺の息子も、準備万端になっていた。理子の滑らかな指がなでるたびにびくびくと震える。
「翔君にはいらないみたいだね。ほら、雪奈ちゃんも待ってるよ」
その言葉に、幽霊のような足取りで雪菜に近づき、
「ぁ、せ、先輩、待っ――――ひぐうううううううううっ!!」
一気に刺し貫いた。
無理やり熟成させられた秘肉は、戸惑うように俺の肉棒を受け入れた。体はしっかりと受け入れる準備ができているはずなのに、気持ちはまだまだできていなかったのか。
しかし、俺のペニスを包み込む無数のヒダの動きは、ただ搾り取ることしか考えていない。行き止まりで俺の先端がとらえたゴムのような弾力は、雪菜の子宮口であることは間違いない。
「あ、雪菜ちゃん大丈夫？　もしかして、一回でトんじゃったの？」
「は、かっ、ぁ」
力が入らないはずの体に、力が入っている。無理やりすぎる快楽が、体を壊してしまったのだろうか。
呼吸もまともできて痛いようだ。見開かれた目からは、ぽろぽろと涙が零れている。
「あ……ぁ……っ、ぁ……あ……っ、っ、んむう……っ」
「り、理子、大丈夫なのか、これ」
「大丈夫、大丈夫。心配いらないって」
少し腰を揺らして淫らな汁を掻き出してみる。するとあっさりと

痙攣が頂点を超えた。
「わた、し、おかし……っ、おかしくなって……っ」
雪菜は、もういっぱいいっぱいになってしまっているみたいだ。手足に力が入っていないのに、体は痙攣を繰り返している。
「おい本当か？」
「本当だって！　試しに少ししてみてよ」
「……わかった」
ゆっくり、ゆっくりと抽送する。ぎゅうぎゅうと俺の肉棒に泣きついてくるヒダを無理やり引きはがすたびに、体が危険なほどに痙攣する。
雪菜がもったのはたったの1分だった。反応がなくなったと思ったら、気を失っていた。
「……」
「……」
これ、本当に大丈夫だったのか？
「夾ちゃんは毒性はないって言ってたから……」
もうそれを信用するしかないか。そして、結局は雪菜をめちゃくちゃにしただけだった。それもえぐい方向で。
ここまで来たら、余命（お説教で死ぬまで）を楽しむしかないな。
「翔君、私にも、ちょうだい？」
「ああ、もちろん」
ここまでずっとお預けされていた理子にも、まだまだいけるとばかりに反り返った俺のペニスをねじ込んだ。雪菜の時と同じように、一気に奥までだ。
「か、はっ――――」
理子の体に力が入らなくなった。奥までねじ込んだまま、2人して温泉にへたり込む。
「こ、これ、ほんとすご……っ」
「理子、もしかして、お前も使ったのか？」
「お、おちんちん、揺らさないで……っ、そ、そうだよ。解毒剤と一緒にね。ゆ、雪菜には悪いことしたかも……っ、くはあああぁぁぁっ

!!」
理子が悲鳴を上げた。俺のペニスが、ドチュドチュと辺りに淫らな汁を撒き散らしながら襞を抉り子宮口を叩いていた。
「んっ、おっ、おっ、ぁっ、ひっ、あ、あ――あああ――!!?!??!」
ゴツゴツとパンパンに張り詰めた肉棒による抽送は、襞を余すことなくめくり押しつぶす。そこら中に起立している肉粒一つ一つを通過するたびに、理子の体は跳ね上がる。この肉粒1つ1つが、クリトリスのようになっているんだろう。
「理子はこういうことがしたかったんだよな?」
「あ、あたまっ、バカになる……っ、ば、か、ぁっ……っ!」
俺も、何度も何度もお預けを食らってきて、もう我慢の限界だった。相手のことを考えない獣のようなピストンを理子に叩き込んでいく。
「――――――――う、ぁっ」
「ふぁ、あ――か――っ――っ、――――――っ、っ、っ、っ――」
ずっと押しとどめられていた白濁としたものを、理子の奥に吐き出し、脱力するのだった。

後に分かった話だったが、今回理子が使った媚薬、本当は10倍に薄めて使うものだったらしい。それも、直接飲むものではなく、アルコールスプレーのように吹きかけるもの。その原液を飲んでしまえばそうなるよな。
皆も、薬の用法用量は守って使うようにしようね。

オフトレーニング旅行　～川遊び①～

一夜明けた。あの後片付けをした俺だったが、自分たちの部屋に戻ることはできなかった。

と言うのも、あの後理子も気を失ってしまったのだ。俺の力なら2人を運ぶくらいわけないんだけど、見つからずに元の場所に寝かせることができるのかと言われれば、話は別になる。

特に実力者がそろっているこのロッジでそれは無理ゲーだ。実際、部屋に入って気付かれそうになったときは、生きた心地がしなかった。

そのため、やむなくロビーにあるソファーに2人を寝かせることにしたのだ。理子と雪菜はお互いにお互いの肩を枕にして、支えあって寝ている。女の子2人が目の前で寝ているその姿はとても眼福。

行為が終わったらすぐに寝てしまったため、服を着せたのも俺だ。寝ている人の着替えがあんなに難しいとはね。いろいろと触り放題だったけど、浴衣じゃなかったら、俺は投げ出していたかもしれない。

ちなみにキラークイーンによって浴衣を引き裂かれてしまった雪菜には、代わりの浴衣を俺の部屋から持ってきた。

そして、もう1つ、俺の心をびくつかせていることがある。雪菜だ。お薬を盛って(これは理子がやったことだが)気絶させるなんて、起きた時に何を言われるのか。結局気絶させたのは俺の息子だしな。きっと俺にもお薬を使っていたに違いない。

「ん……」

雪菜が目を覚ました。

「あ、あれ？　理子さん？　え、先輩もどうして……」

横で一緒に寝ていた理子、俺を見て目を白黒させている。なんだか様子がおかしいぞ？

「ふぁ～あ。おはよ～、あれ、翔君？　私いつの間に眠っちゃったんだっけ？」

続いて理子も目を覚ました。

「2人とも、昨日の夜のことは、覚えてないのか？」

「昨日ですか？　そうですね……」
「昨日は私とラブラブしてたじゃん……あれ？」
「そうです！　理子さんが布団にいなかったから、温泉に探しに行って……あれ？」
２人そろって首をひねった。
「温泉に入って、その後……どうしましたっけ？」
「そもそも雪菜ちゃん温泉に来てたんだっけ？」
さらに後から聞いた話だったが、あの媚薬には吹き付けた前後から意識を混濁させ、薬が切れた後には、その時の記憶が思い出しにくくなる作用もあったらしい。
それもう犯罪に使うためのものとしか思えなかった。少なくとも、恋人がイチャラブするために使うもんじゃない。そんなアブノーマルなプレイをしている人そんなにいないか？
そんな訳で、特にお咎めもなく乗り切ることができたのだった。

特に追及はなく、雪菜からも軽い注意だけで終わった。
朝ご飯を食べ、自由時間がやってきた。高町さんとテスタロッサさん率いる特務六課組は訓練に向かった。
俺はというと、
「っあー……気持ちのいいところだなぁ……」
水着に着替えた俺は、女性陣の着替えを待たずに1人で河原に足を運んでいた。予定通り、子供たちに交じって川遊びに来ていた。
ここの川は自然のモノらしい。島の中央にある大きな山の中腹から流れているものだ。この施設の中央を分断する形で海まで流れている。
川の長さとしてはとても短い方だとは思うが、目の前の流れを見る

と、流れる水にはそこまでの勢いはない。何かしらの手段で、安全が確保されているのだろう。
今回、午前中の川遊びに参加するのは俺、ヴィヴィオちゃん、リオちゃん、コロナちゃん、クロ、ティナ、アインハルト、綺凛、ルーテシア、ヤミ、あとは保護者枠としてノーヴェさんだ。
まさかヤミがこっちに参加するとは……と思ったけど、そもそもヤミはあの人たちに交じってトレーニングなんてする娘じゃないし、ヴィヴィオたちがこっちに来るならそりゃこっちに来るよな。
このロッジにはちょっとした図書室みたいなものもあって、そっちに行きたそうな雰囲気もあったけどね。それがヴィヴィオに言われてこっちに来るんだから、相当絆されているんだろうな。良いことや。
他のみんなは全員トレーニング行きだ。少しくらい遊んでもいいんじゃないかとも思うんだけど、みんな曰く、俺に置いて行かれたくないだそうだ。俺に与えられた能力が卑猥なドーピングだからな。色々と焦るところがあるんだろう。
そんなことを考えつつも、すこし汗ばんできた。これはもう先に泳いでようかな？
我慢の限界寸前で、女の子たちが着替えを終えて出てきてくれた。
「お兄さん！　お待たせしましたー!!」
子供たちの中でも一番の元気っ子、リオが一番に駆けてきた。続いてヴィヴィオ、コロナ、ティナの順だ。少し遅れてクロとルーテシアが、一番最後がノーヴェさんとヤミ、アインハルト、綺凛だった。
俺を通り過ぎて、最後組以外は川に飛び込んでいく。その元気な姿を見ると、まだまだ若いというのに歳を感じてしまう。
ちびっ子たちはみんな、その子供らしい未発達な体を水着に包んでいた。
ヴィヴィオちゃんは年齢に似合わないビキニタイプ。少し大胆だが、その柄と胸元の大きなリボンがかわいらしさを添えている。
コロナちゃんは正直一番危険だと思う。何を間違えてしまったのか、学校指定のスクール水着を身に着けている。へんたいふしんしゃ

さんに連れていかれないようにしっかりと俺が見張らなければ。
リオちゃんはワンピースタイプだ。ビキニタイプよりもこちらの方が泳ぎ回るのに適しているのだろう。普段と変わらない元気だ。
ティナもワンピースタイプ。ほかの子に比べると少し細い印象を受けるが、それ以上に白い肌で子供で言う元気よりも、はかなげな印象を受ける。もっとも、少し眠たげな瞼で台無しになってしまうのだが。
ルーテシアは他の娘とはちょっと事情が違った。上記の４人が未発達なボディだとすれば、ルーテシアは発展途上のボディだ。到着していた時にキャロをバカにしていたが、その言葉は本当のようだ。一部の変態にはこれが一番いいと言われてしまいそうな危険な香りがする。
クロは、ほとんどヒモみたいな過激な水着――――というわけではなかった。や、その年が身に着けるにしてはだいぶ挑戦しているデザインだけどね。周りに合わせているんだろう。
総評、みんな可愛いね。
「あまりジロジロ見ないでください。殺しますよ」
「水着は見られるためにあるんだろ。パンツ見られてあんなに怒ってたのに水着なんて着てくるから」
「ほう、アスナたちのお仕置きが足りなかったと見えます」
「残念ながら、見せてきてるのはそっちだからな」
冷たい目を向けてくるヤミに、肩をすくめて返す。
ヤミの水着はイメージカラーにあった黒いビキニだ。ここに来るまでは上着を羽織っていたが、俺の横を通り過ぎる際に脱ぎ捨てた。両手で数えきれないくらいには女性の裸を見てきたが、きれいなものはきれいだと思う。
暗殺者として生きてきたにしては、傷がないきれいな肌だ。それだけヤミの実力が高かったという事だろう。負け星が多い印象でも。
「やっぱり殺しておきましょうか？」
「ごめんなさい」
ここで血を見せるべきじゃない。小さい子も見てるよ。

しかしそんな中で、まだ2人ほど上半身をパーカーに身を包んだ女の子がいた。アインハルトと綺凛だ。友達に無理やりスカートを短くされてしまったかのように、パーカーの裾を両手で下へ下へと伸ばしている。

俯いて顔を赤くしている。

「お兄さーん、アインハルトさーん、綺凛さーん!! 早く来てくださいよー!!」

川に飛び込んだヴィヴィオが手を振って大声を出している。

「ほれ、呼んでんぞ」

ノーヴェさんも笑いながら背中を叩いて早く行くように促している。

「いえ、でも……」

「あぅぅ……」

そむけた顔を真っ赤にして、俺の方をチラチラと見てくる。

「何だよ、翔に見られんのが恥ずかしいのか?」

「……もしそうなら、先に行ってるぞ?」

ノーヴェさんも水着を着ているが、まったく恥ずかしがるような様子はない。ビキニに包まれた肢体をこれでもかと見せつけてきている。

女性にはそれぞれの感覚がある。特に年頃の女の子だ。男に見られるのが恥ずかしいという感覚はあって当然だろう。

この世界に来て経験(意味深)を積んだ俺は水着を見ただけでドキドキすることはない。遊んでいれば多少は恥ずかしさも薄れるだろうし、そうした方がいいだろう。

「い、いえ! 実は今日、翔さんに泳ぎ方を教えていただきたいと思ってっ! 私、先輩の戦妹(アミカ)ですから!」

や、戦妹(アミカ)はそんなことを教えるためにあるもんじゃないぞ……?

あれはあくまで武偵としてのスキルを教えるもんなんだよ?

別に戦妹(アミカ)とか、そんな理由が無くても全然手伝うんだが。本人が理由があったほうが頼りやすいって言うんなら何も言わないけど。

綺凛は着ていたパーカーを脱ぎ――――俺は言葉を失った。

綺凛の水着はヴィヴィオちゃんやヤミと同じ薄い水色のビキニタイプだ。パーカーに隠されていた引き締まったお腹がまぶしいし、すらりと伸びる脚も不安そうに内股になっている。
しかしそれ以上に目を引くものがある。みんなならもうわかるだろう。
「おっふ」
早熟し過ぎているその2つの大きな双丘である。頭1つ以上大きいノーヴェさんと比べて遜色ない大きさを誇っている。パーカーの上からもわかっていたが、実際に目にすると想像以上で固まってしまう。
皆に注目されていたため、水をかけあっていたヴィヴィオたちからも声が上がる。
「わー！　綺凛さんすごいですね！　私のママたちと同じくらいかも」
「ホントに!?　私もあのくらい大きくなるのかなぁ？　でもママはそうでもないし……」
「ど、どうだろうね？　そういうのは遺伝しちゃうのかなぁ？」
純粋な憧れの目線と感想であろうとも、まじまじと見られていることに変わりはない。綺凛の顔はますます赤くなる。このまま倒れてしまうのではないかと不安になるくらいに。
「くっ……やはり大きいほうが……っ！」
横では完全に妬みのこもった小声が漏れていた。視線は完全に胸部のふくらみを捉えている。君、もう全然隠さなくなったよね。
しかしそれでも、綺凛は顔を上げ、俺を見た。アインハルトの言葉は……や、緊張で耳に入ってないだけだな、ありゃ。その証拠に歩く時、右手と右足が同時に前に出ている。
「ははーん。ぷくく」
ノーヴェさんは何かに気が付いたように、ニヤニヤし始めた。確かにこの反応を見て、ただ恥ずかしがっているだけとは思えないだろう。何か大きな別の感情があると思ってしまっても不思議はない。
「いいいい行きましょう、先輩！　まずは顔を水につけるところから

ですっ！」
「そこからなのか!?」
　水に顔を付けるのが怖いとか、君は小学生か!?
　と、ここでノーヴェさんから一言入った。
「その前に、せっかくだから水着の感想とかもらったらどうだ？」
「は」
「えっ!?」
「ちょっ！」
　綺凛はおろおろとして、俺とノーヴェさんを交互に見始めた。ノーヴェさんを見るときは何でそんなことを言ったのかと咎めるような視線だったが、俺を見るのは何かを期待するような目だ。
「綺凛」
「は、はいっ！」
「水着、似合ってるぞ。かわいいと思う」
　沢山の女の子と暮らしていても、褒め慣れているわけじゃないからな。これで許してほしい。
「っ！　あ、ありがとうございますっ！」
　それでも綺凛は喜んでくれた。
「しょ、翔さん！　もういいですよね！　ほら、早くいきましょう！」
　我慢ならないというアインハルトに手を引かれる。いつの間にかパーカーを脱ぎ捨てられている。オッドアイが拗ねるように細められ、手を引く力はかなり強い。少しでも綺凛から引きはがそうとしているみたいだ。
　しかし、これだけは言っておかなければ。
「アインハルトも。似合ってるからな」
「ッ！　あ、ありがとう、ございましゅ……」
　噛んでる。噛んでるよアインハルト。握っていた手はへにゃへにゃと離され、もう片方の手でにぎにぎ。
「お兄さん」
「ティ、ティナ？」
　いったいつの間にここまで来てたんだ？

「私の水着、どうですか？」
その場でくるりと一回転した。俺の返答を待つように首をコテンと傾げる。はい、かわいい。
「よーしよし。もちろん可愛いぞティナ」
「結婚したくなりましたか？」
「それはちょっと早いなー」
「それじゃあチュッチュしたくなりましたか？」
「そういうことを言うのはやめようね！」
周りの環境に影響されちゃったのかな!? こんな人のいるところでそんなこと言うなんて！
「お兄さん！ 私のはどうですか？」
「私も私も！ どうどう？」
ヴィヴィオちゃんとリオちゃんもこちらに駆け寄ってきた。コロナちゃんはそんな2人を見て苦笑いし、ヤミからは冷ややかな目を向けられる。
他の娘がいなくて、本当に良かったと思う。
「ロリコンですね」
「ヤミも可愛いからな」
「殺します」
褒めたのに殺しますはヤバいな。そして実際に実行しようとするのがやばい。
「くくく、コイツ、面白れー」
いつかノーヴェさんにぎゃふんと言わせてやろうと決意した瞬間だった。

オフトレーニング旅行　～川遊び②～

子供たちみんなからの『水着褒めて攻め』を何とか耐えきった。むしろ天国だった。もうロリコンになりそうなくらい、一生分小さい女の子と触れ合った気がする。

そんな子供たちは今、川を縦横無尽に泳ぎ回っていた。対岸まで普通に泳ぐだけに留まらず、岩場から飛び込み、水中バレーをして、水の抵抗を物ともせず格闘技の型をきめている。

その泳ぎたるや、アインハルトやクロでさえもついていくのがやっとといった具合だ。意外だったのはティナもついていけていることだな。ヤミはすいすいとマイペースだ。それでもついていっているのは凄い。

なんでもノーヴェさんは、ストライクアーツ（格闘技）の訓練の合間にプールにも連れて行っているらしい。そうすると、全身の筋肉を柔らかく鍛えることが出来るのだとか。

俺はと言うと、

「ほら！　バタ足弱くなってるぞ」

「は、わぷっ、はいっ！」

綺凛の腕を引いて泳ぎの指導をしていた。顔を水につけるのはさすがに出来ていたので、今度はバタ足だ。ほどほどの深さで、流れも速くないこの川は泳ぎの練習には最適だ。水もきれいだしな。

しばらくして、少し休憩しようと岸に上がってきた。

「すみません、蹴伸びの姿勢が上手く出来なくて」

「これから練習するしかないよ」

そりゃそんな大きな浮袋を２つも抱えてればね。目の前でぷかぷかとされたら、目の毒にしかならないよ。

本音を口にすることはない。

「ハァ、ハァ」

アインハルトも息を切らして上がってきた。ちびっ子集団はまだまだ元気みたいだな。

「どうよ。チビ共の泳ぎは？」

「元気いっぱいと言いますか、元気すぎると言いますか……」
「ははは、ついていくのがやっとか？」
「体力には自信があったんですが……」
「翔も参加してみるか？」
「あんたずっと楽しんでただろ」
　ノーヴェさんが近くに寄ってくる。この短い間に仇敵と言っていい関係になった（一方的に思っているだけ）が、彼女は何も知らずに俺の間合いに踏み込んでくる。
「おっと、そんなに殺気を出すなよ。悪かったって！　身内にはそんな話題全くないから少し面白くってな。ついやっちまった」
「こっちはつい殺っちまいそうですよ」
「やめてくれよ。あたしじゃお前には勝てないだろ」
　パタパタと腕を振って躱される。
「俺だって、あの元気には敵いませんよ」
　俺は元気っ子達に目を向けた。クロだけではなく、ティナも馴染めていて良かったと思う。
「水の中で瞬発力を出すには、普段はあんまり使わない筋肉が必要だからな。それを踏まえて、せっかくだしいいもん見せてやるよ」
　そう言い、いまだ泳ぎ回っているヴィヴィオたちに声をかけた。
「おーい！　ちょっと『水斬り』やって見せてくれよ！」
「『水斬り』、ですか？　わかりましたー！」
　アインハルトも綺凛も聞いたことがないのか、きょとんとしている。
「なーに、ちょっとしたお遊びだよ。おまけで打撃のチェックも出来るんだけどな」
　そう答えると、ヴィヴィオ、リオ、コロナ、クロ、ティナは水中で腰を落とした。
「やあっ！」
　コロナちゃんが拳を繰り出すと、その拳圧で川の水がはね上げられ、水柱が上がった。
　次いで、リオちゃん、クロ、ティナの順に、最後はヴィヴィオちゃ

んだ。ルーテシアは不参加。
「行きますっ！」
ヴィヴィオちゃんは他の４人よりも、格段に大きな水柱を作り上げた。
「どうだ？　お前らもやってみるか？」
「アインハルトなんか、格闘技が強いんでしょう？　やってみたら？」
「はい。すこし、やってみます」
「私はちょっと……剣があればいいんですけれど」
ノーヴェとルーテシアに誘われ、アインハルトが水の中に入っていく。
「剣かぁ……木の枝とかじゃダメ？」
「や、さすがにそれは……」
「あ、それならいけますよ」
「いけるのか⁉」
マジかよ！　刀藤流すげーな！
「はい。修行の中に竹刀で岩を切り倒すっていうものがあるんです」
「そんなこと出来んのか……」
「はい、じゃあコレね」
綺凛はその辺りに落ちていた手ごろな木の枝を持って川に入ってく。俺が慄いていると、２つの方向から視線が注がれていることに気が付いた。
「何か？」
「何か？　そんなの決まってるだろ？　お前はやらないのかって話だ」
ノーヴェさんが当然だろうと言ってくる。川にいる娘達も俺の方を見ている。全員そろってやるものだと思っているらしい。
「しょうがない。やってみますよ」
俺は立ち上がって川に入る。
俺の格闘技はアリアの見様見真似だ。格闘技とはちょっと目的が違うから、そこまでいい感じにはならないと思う。基本は犯人の押さえつけだからね。アリアさんは殴りつけることが多いけど。

まず挑戦するのはアインハルトだ。覇王流の使い手の記録はいかに。
「はあっ！」
一番の記録を残していたヴィヴィオと同じくらいの水柱を打ち上げた。しかし、あまり拳圧が前に飛んでいないのか、すぐに水柱がなくなってしまう。
次は綺凛だ。刀藤流の若き天才剣士の実力はいかに。
「はっ！」
振った木の棒は途中からへし折れてしまっていた。そのせいか、水柱がほとんど立たない。いつもの獲物と同じ意識で振るった結果だろう。
「綺凛はまぁ、しゃーないとしてだ。アインハルトの方は初速が早すぎるな。最初は脱力して……途中から速度を出す。こうだッ！」
ノーヴェさんが川に入り、お手本と言わんばかりに蹴りで水を切り裂いた。川底が見えるほどの水柱が上がる。
そのお手本にアインハルトは熱心に頷いていた。何か掴み取ったのかな。
「さて、ここで真打登場だな」
だから、何でそんなに期待させるような言い回しになる。
「お兄さんもやるんですね！」
「私たちよりもうまくできるかなぁ？」
「初めてだし、どうだろうね……？」
「お兄ちゃんは色々と規格外だからね」
「はい。きっとすごいです」
子供たちは思い思いの感想を述べている。そこまで期待されると、半端な結果は残せないな。本気でやってみよう。
とりあえずは闇の魔法（マギア・エレベア）で、『暗き夜の型』状態にはなってないとな。実はこれがないと、一般人程度の力しか出ないんだよね。多分ヴィヴィオにも負ける。弱すぎだろ俺。
「ふぅ……」
ゾワッ

「「「ッ!!」」」
周りの空気が変わった。
黒いオーラを纏った俺は構え、
「ハッ!!」
拳を放った。
水柱は上がらなかった。
その代わりに対岸の小石が吹き飛んだが川の形が変わってしまった。言い訳をすると、水斬りは失敗だ。闇の魔法（マギア・エレベア）で溢れ出る魔力を無意識に放ってしまったという話だ。
「「「「……」」」」
全員が無言になる。
「ま、まあね！　パワーがあっても当たらなかったら意味がないから！」
とりあえずフォローしておく。自分で。でもみんな固まったままだ。ようやく稼働したのはノーヴェさんだ。
「（あの黒いオーラ、ヤベー感じがしたが大丈夫なのか？）魔力を弾丸にして飛ばしたって訳か。大した威力だが、水斬り自体は全然だな」
「は、初めてでしたからね！　練習しないとですね、これは！」
取り繕ってくれた。急いで乗っかる。
「すごいですお兄さん！　私たちにも出来ますか、それ!?」
「私たちは水斬り教えるから、それ教えてー！」
「あ、あの、出来れば私にも……」
「よーしよーし。いいぞー」
ヴィヴィオたちに囲まれる。ああ、ダメだよこんなの。お仕置きを気にしないで小さい女の子と戯れることが出来るなんて。俺も適当にやったからもう一回できるかはわからないけどね！　頑張って教えるよ！
「これは報告ですね」
「羽目を外しすぎた夫を叱るのは嫁の役目だものね」
「そうですね、私たちの役目です」
「それだけはご勘弁を！」

しかし俺に自由はないようだ。こんなの報告されたらお尻ぺんぺんで尻が千切れてしまう。そして、いつの間にか俺はクロとティナの夫になっていたみたいだ。
俺は君たちが普通に水斬り出来ていることにびっくりだよ。
「ティナとか意味分かってないで言ってるだろ」
「そんなことないわ、一杯ちゅっちゅする人のことを夫と妻の関係って教えてるもの」
「教えられました。妻です」
その言い方だと、この2人といつもキスしてるみたいに聞こえるんだけど！　クロとは確かに魔力補給をしてるけど！　ティナとはまだしてないよね！　誤解する人が出てきちゃ――――
「先輩……」
「翔さん、本当ですか……？」
――――出てきちゃったじゃん！
アインハルトと綺凛が引いてしまっている。
「ええい！　そんなことよりも水斬りだ！　水斬りするぞ！」
「そうですね。お手本を見せましょう。こうです」
「は？」
俺の体に向かい一直線に伸びる白刃。それを肘と膝で挟み込んで受け止める。その刃が通った後には綺麗な水柱が立っていた。
「すみません。すっぽ抜けました」
「殺す気か！」
「まさかそんな」
「や、きれいなもんだな。初めてでそれなのか？」
「アンタも感心してる場合じゃないだろ!?」
凶行の犯人はヤミだ。唯一の大人であるノーヴェさんは、顎に手を当てて頷いているだけだ。
「わざとではないので許してください」
「澄ました顔で嘘を吐くな」
変身（トランス）させていたのは髪の毛だった。髪の毛がすっぽ抜けるとか聞いたことない。髪が抜けたらハゲが量産されてしまうだろ。

「お兄さん、ヤミさんと仲が良いんですね！」
「殺し合うほど仲が良い、って言葉もあるからね」
　ルーテシア君、そんな物騒な言葉は聞いたことがないよ。
「そのくらいじゃないと、旅行先で女の人と混浴なんて出来ないよね？」
「いや、何を――――」
　冷たい水に入っているはずなのに、背中に流れる汗の量は尋常ではない。
「昨日、しかも2人とだなんてすごいよね」
「ッ！」
　殺気だと!?
　振り向かなくてもわかる。後ろにいる数名の女の子達から放たれているということが。
「ル、ルーテシア？　君はいったい何を？」
「お風呂掃除当番のガリューからは、報告されてるからね？」
　ど、どこまで報告されているんですかね!?　ま、まさか、行為までしているところまで報告されているとしたら、この上ない弱みを握られていることになる。
　こ、ここは慎重に扱わなければ。
「プライバシーもあるから、何をしてたかまでは知らないけどね♪　どんなことしてたのかなぁ？」
「さ、さぁねぇ？」
　小さい娘はキャーキャー言いだした。
　ほ、本当なのか？　でも確かに、あんなえぐい行為をしていたのを知っていたとすれば、こんなに平然として俺の前には来れないよな。
　なんだかんだ言っても、ルーテシアは少女だ。耐性があるとは思えない。ここは少し反撃して様子を見てみるか。
「そんなに気になるんだったら、今日の夜、温泉に来てみるか？」
「へ？」
「同じことをしてやろうかって話だよ」
「ふ、ふぅ～ん？　そういうこと言うんだ？」

ルーテシアは少し詰まりつつも腰に手を当ててこちらを見てきた。態度とは裏腹にその顔はほんのり染まっている。
「はいはい！　そこまでそこまで！　翔もあんまりやりすぎると、叱られるぞ」
叱られるのを恐れていて、強襲科にいられるかよ。でもここは自重することにしよう。決して、怒る面子に恐怖したわけじゃないからな。
「絶対混浴以上のことしてたでしょ」
「……はい」
後ろからのクロの言葉が、首筋にナイフのように突きつけられた気分だった。
「ふーん、そう」
クロは一瞬考えた後、俺の腕を引っ張った。
「こっちに来て」
「ちょ、おい！　何処に行くんだよ！」
「ちょっとお話があるの！」
そう叫ぶクロに森の中に連れていかれるのだった。

「おい、どこまで行くんだよ！」
すっかり川が見えなくなるくらい奥まで連れて来られてしまったところで、やっと放してくれた。
「魔力補給」
「はい？」
「今すぐして。ここで」
「ここ――――むぐっ」
飛びつかれ、唇を重ねられる。前準備のなど一切ない。いきなり舌が口内に侵入してくる。応戦する俺の舌と、ねっとりとした唾液を交

換し合った。
胸に押し付けられる水着は、普通の衣服とは違う感触だ。お互い水着であるため、ほとんど裸同然で抱き合っている。
「ちゅう、れろ、れぉ、ちゅ、あう、ちゅうる」
宣言通り、魔力が抜かれる感覚はある。しかし、それは微々たる量だ。すぐに魔力以外のものを貪る動きに変わっていった。
やがて唇が離れ、透明の橋が途切れた。
抱き着いていたクロが離れ、口を開いた。
「さっきの見たことない能力だった」
「さっきの……ああ」
闇の魔法（マギア・エレベア）のことだろう。確かに、これは過去の世界で身に着けてから、みんなの前で披露したことは無かった。
この合宿に参加している人で知っているのは桜とフェイトさんだけだ。
「ヤな感じしたけど、危ない能力じゃないの？」
「うーん……」
そう言えばそうだったという気しかしない。使いたての時は少し危なかったけど、スタンドがＡＣＴ３に進化してからというもの、全く苦も無く使っている。
「今のところは問題ない、かな。心配してくれてありがとな」
「うん……それで、誰とシて手に入れた能力なの？」
「それはプライバシーがあるから」
まさか、１０年前の桜になめられた結果手に入れたとは言えない。小学生相手に、君よりも年下の娘としましたなんてな。
その時、草が揺れた。
だ、誰か来るのか？
「お二人とも、何をしているんですか？」
ティナだった。他の人に見られていたら、大変なことになっていた。や、素直なティナに見られたっていうのも結構やばいんじゃないのか。でも、何をしているんですかとか言ってるし――
「どうしてみんなに隠れてちゅっちゅしてたですか？」

これはダメだ。
「はっ！　これが逢引き、抜け駆け」
「なんか合ってるところがあって否定しにくい！」
「魔力補給よ。みんなの前だと出来ないでしょ？」
突っ込む俺に対して、クロはいたって冷静だ。ティナはクロが育てていると言っても過言ではない（どう考えても過言）から、扱いには慣れているんだろう。
「どうしてもっていうなら、お兄ちゃんに何してもいいから」
「分かりました」
「勝手に分からないでくれ」
「お兄さん、しゃがんで下さい」
「……はいはい」
拒否権がないようなので素直に従う。たぶん抱っこしてくれとかそんなことだろう。そのまま戻るのは……大丈夫だろうか。
「んっ」
右のほっぺたに柔らかい感触。正面ではなく少し右に見えるティナの顔が近い。すごく近い。
「お、おい！　ティナ……っ！」
「どうしましたか？」
今しがた俺のほっぺにキスしたとは思えないくらい平然としている。
「クロさんとしてましたよね？」
「問題ないよ」
そのまま手を広げるティナを抱き上げ、飛びついてきたクロを背負って立ち上がる。
「ロリっ娘２人と続きがしたいなら、ここでもいいよ？」
「おい」
「ふふ、さすがに冗談！」
心臓に悪い冗談を言うのはやめてほしい。心の底からそう思うのだった。

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦①～

「ヴィヴィオー、タオル置いておくねー」
「ありがと！」
　リオから渡されたタオルで、体についた水滴を拭き取っていくヴィヴィオ。まだまだ起伏に乏しい、しかしスポーツ少女特有のしなやかな体は、川遊びの疲労をまるで感じさせない。
　時刻はそろそろお昼になる。翔たちは、食事を作っていたメガーヌに呼ばれ、川遊びを中断してロッジに戻っていた。川遊びで冷えた体を温めるために、温泉に設置されているシャワーを浴びていたのだ。
　ノーヴェやヤミがいるとはいえ、いたいけな少女たちが下着姿できゃぴきゃぴしている姿は、見る人が見れば卒倒してしまうかもしれない。そのくらい危険な光景が広がっていた。翔でも危ないかもしれない。
「やっぱりすごかったね、クロのお兄ちゃん！」
「そうだよね。あんな短時間で水斬りできるようになっちゃうなんて。私は1週間かかったのに」
「そりゃそうよ！　なんたって、わたしのお兄ちゃんなんだからね！」
　クロは誇らしげに胸を張った。翔と魔力補給してから、少し上機嫌になっている。
「違いますよ。私たちのお兄さんです」
　対抗するようにティナが言う。こちらもキスしてから上機嫌になっている。
「高町ヴィヴィオ、先に行ってます」
「あ、はい！　わかりました！」
　もくもくと着替えをしていたヤミはそう言い残して、脱衣所を後にした。その後ろ姿を見ていたヴィヴィオは、頬に指を添えて首を傾げた。
「うーん……ヤミさん、楽しんでくれてるかな？」
「どうだろうね？」
「ヤミさん、クールな人で、笑ってるところ見たことないもんね」

「でも、翔さんと仲が悪いとは思っていませんでした」
ヴィヴィオたちは仲良くなりつつあると言っても、まだまだすべての心の壁を完全に壊せるほどではないのだ。
「先輩、何か怒らせるようなことしたんでしょうか……」
「ですが、翔さんがそんなことして、いつまでもそのままにしておくでしょうか？」
綺凛とアインハルトは首をひねっている。
事情を知っているクロとティナは、苦い顔で目を逸らしていた。ヤミは聖天子の暗殺未遂の犯人、一度は翔と殺しあった仲だ。もっとも、ヤミが嫌っているのはその時の『勝ち方』なのだが。
「どうせだったら2人を仲直りさせたいよね」
「そうだよね！　せっかくの旅行なんだし、仲が悪いままじゃつまらないもんね！」
子供らしい単純な考えだ。人と人とのいざこざの厄介さをあまり知らないからこその、真っすぐな意見である。
いくらほだされているヤミといえども、正攻法で何でも言うことを聞くほどチョロくはない。
しかし、そこに人が加われば話は変わって来る。具体的には今まで訓練をしていた人たちが加われば。
「あっ！　ママ！」
「ヴィヴィオ！　みんなはもうお風呂入ったの？」
今回の教官である高町なのはを先頭に、トレーニング組が脱衣所になだれ込んでくる。
午前中の基礎トレーニング（走り込みや柔軟などの体作り中心のメニュー）を済ませたこちらのグループも、お昼ご飯前に一度汗を流そうとここに足を運んだのだ。
「うん！　もうみんな上がったよ！」
「夜月君はもう外で準備してたから、ヴィヴィオたちも手伝ってあげてね。お料理はもう出来てるから」
「「「はーい！」」」
元気な返事を返す子供たち。と、ここで、ヴィヴィオが気が付いた

ように言う。
「お姉さんたちに、少しご相談があるんですけれど、いいですか？」
「もちろんいいよ。何かなヴィヴィオちゃん」
　アスナが笑顔で応じる。
「翔さんとヤミさんを仲直りさせるにはどうすればいいでしょうかっ!?」
「「「あ～……」」」
　皆が言葉に詰まる。１日目の入浴で聞いた話によると、だいぶ根に持っていることがわかっている。翔の家でも、あまりなじめていない部分がある。逆にどうやって仲良くなったのかを、ヴィヴィオに聞きたい気分だ。
「そうですわね、そろそろヤミさんにも心を開いてもらわないと、皆さんもそう思いませんか？」
「え、あ、まあ、そうは思いますけど……」
　自信満々に言う狂三に対して、雪菜は言外に『具体的にはどうやって？』と告げている。
「それはもちろん、いかなる手段を使っても、ですわ。わたくしとしたことが皆さんと過ごすうちに、考え方がずいぶんとお利口になってしまっていたようですわ」
　何人かが、君はいったい今まで何をしていたんだと言いたげな顔をする。
　そして何人かは、これは何か始まったなという顔をする。
「時崎さん、何か考えがあるんですね！」
「はい――――翔さんとヤミさんを仲良くさせたい。気持ちを同じくする同志として、わたくしも協力させていただきますわ」
「ありがとうございます！」
　狂三とヴィヴィオががっちりと握手を交わす。すかさずアスナは狂三に確認を取る。
「狂三ちゃん？　わかってるとは思うけれど」
「はい。相手は子供。『そういう』作戦は取りませんわ」
「それなら、いいけれど……」

アスナはヤミの態度と、狂三が先頭に立って何かをするというリスクを比べ、折れた。
「話は聞いた」
「耀さん、あなた何処から……？」
「私の面白そうなことを嗅ぎつける能力を甘く見ないでほしい」
「みんなで頑張りましょう！」
「……本当に大丈夫でしょうか？」
「……わかんない」
やる気満々の耀も加わり、作戦が開始されたのだった。

「何か企んでるだろ」
「何を言っているのかわからない」
風呂から上がってきた耀を見て、開口一番に断言する。
「バレバレなんだぞ。先に上がってきてた子供達の中にいるからな」
俺達の方をちらちら見てくすくす笑ってるんだ。絶対何かあったはずだ。そう俺『達』の方を見て、だ。ヤミと交互に見られているんだよ。
ほとんど勘だけど、この世界に来て鍛えられた俺の勘はバカにできないぞ。
「強引な推理だね。らしくないよ。自信過剰なのはいつものことだけど」
「あっそ、了解了解。そこまで言うなら、そういうことにしようか」
何を言っても白状することは無いんだろうな。何をされても俺は動じないし、何ならその前に看破してやろう。
「ほら、みんな座って。ご飯出来たんだから、いただきますしよ！」
「「「はーい!!」」」
子供たちは元気に返事をする。

昼は外にあるテーブルで食べることになっている。長い机にはお昼ご飯の焼うどんが大皿に山盛りになっている。椅子は丸太を縦切りにしてそのまま横たえたような、長いものだ。
座る場所は特に決まっているわけではないが、昨日や今日の朝では年代ごとに固まることが多かった。多かったんだけど……
「はいはい。詰めて詰めて」
「はいはい」
「ごめんなさい、ヤミさん！　もう少し横にずれて下さい！」
「……わかりました」
横から耀に押され、どんどん席の真ん中へ。隣の人と肩が触れるほど近くになってしまった。
「……」
「……」
言った通り、片方の隣は耀だ。どんどん俺を押してきた、何か企んでいる問題児。そしてもう片方の隣は、ヤミだった。
ヴィヴィオに押されてここまで流されてしまったようだ。俺と同じように――
ッ！　なるほど、そういうことかッ！　もうすべてを察してしまった。
偶然こうなるとは考えにくい。ヴィヴィオが協力しているのは、ヤミ越しに見えたあの顔でわかる。つまり俺とヤミの仲をどうにかしよう、みたいな話になったんだろう。
そして耀が悪ノリしたと。そういうわけだ。
「……あまりくっつかないでください」
「悪い悪い」
ヤミも察したようだ。居心地が悪そうに身じろぎしている。
「高町ヴィヴィオ、あなたは余計なことを……」
「まあまあ！　翔さんとケンカしてるなら仲直りしましょうよ！　ね！」
真っすぐすぎる言い方に少しめまいがしそうだ。最近アインハルトと仲良くなったという例があったからか、積極的だ。

「仲良くするか？」
「お断りします」
作戦は全く効果がなかったのだった。

「いやー、本当に助かるわ。こんなにたくさん来てくれるなんてねー」
「今日のお買い物は荷物持ちがいるからねー」
「おいルーテシア、俺しか見てないのはなんでだ。追加された人材は俺だけじゃないだろ？」
「え？」
え、じゃねーだろ。真顔で首を傾げるんじゃないよ。
俺達は今、夜ご飯の買い物をするために、車を使って街まで買い物に出かけている。本当だったら、午後の訓練に参加する予定だったんだけど、高町さんに『×』を出されてしまった。
なんでも、午後の訓練は午前の訓練をベースにやりたいからとかなんとか。今朝聞いたときはいいって言われたのに。どういうことなんだろうか……なんて考えるまでもない。高町さんもグルだってことだろうな、この作戦の。
付いてきているメンバーを見ればわかる。
メガーヌさん運転のワンボックスカーに乗っているのは、俺、メガーヌさん、ルーテシア、ヤミ、ヴィヴィオちゃん、テスタロッサさん、耀だ。
なるべく一緒に行動させて、仲良くさせようという魂胆なのだろう。
周りのほとんどが仕掛け人と言ってもよいこの状況。ヤミはヤミで警戒している。
なぜかテスタロッサさんもこっちに付いてきている。訓練しなく

ても良いのだろうか。
「高町ヴィヴィオ、あなたの考えはわかりました。しかし、もうやめてください」
「え、でも……」
ヴィヴィオが目尻を下げると、ヤミはバツが悪くなったのか目をそらし気味に
「別に夜月翔のことを信用してないわけではありません」
「え、そうなんですか？」
「悪人だとは思っていないというだけです。そもそも、相手が悪人だろうと善人だろうと、私は特に興味がありませんから」
ヤミはヴィヴィオたちに、自分のことをどのように話しているのだろうか。暗殺者だったことは話しているのだろうか。
「ふーん、じゃあどうして翔を嫌ってるの？」
「女性に対して淫らだからです」
「はい、やめようか」
ここにいるのは関係者じゃない方がほとんどだ。一緒に住んでいるヤミには俺たちの間柄は筒抜けだろうし、下手なことを言われたら困る。
「いやいやいや、ここはすっきり出し切ってもらわないと」
「耀、お前……っ、わかってるだろ……！」
こ、の、問題児めぇぇぇっぇ!!　俺を破滅させるつもりか！
「全然わからない。さあさあ、続きをどうぞ」
「それ以上でもそれ以下でもないです。戦闘に関しては信用しています。それ以上何が必要ですか？」
「好感度？」
「春日部耀、冗談でもつまらないですよ」
もうここまでくると、仲良くなるのは不可能なんじゃないの？　そう思えてしまう。
みんな忘れているかもしれないけど、こっちはつい数か月前まで一般人だぞ。暗殺者として生きてきたヤミ相手だと、余計にそう思ってしまう。

「へぇ～、やっぱり翔君はモテるのね～」
「はい。モテモテです」
勘違いするなよ。これは耀のセリフだ。
「そうよねー、昨日のＢＢＱでも話してたのよ？　あの子モテモテねって。でも女の子には誠実な態度を取ってあげてね？」
誠実とは俺から最もかけ離れた言葉だ。
「誠実にね」
「おめーうるさいぞ」
後ろから茶化してくる耀にデコピン。ヒラリと躱される。
「じゃあ、どうやってヴィヴィオちゃんは仲良くなったんだ？」
話を変える意味で、今まで触れてこなかったところに触れてみる。
「そうですね……そう言われると難しいです……きっかけは間違いなく、覗きの犯人を捕まえた時ですね！」
「……かもしれませんね」
ヤミも言葉短く同意を示した。
覗き事件とは、ノーヴェさんが連れて行っていたプールで起こった事件らしい。そこはお風呂やサウナも完備されている場所らしく、ヤミもそこは頻繁に利用していたようだ。
「つまり一緒に事件を解決すればいいってこと？」
「そう簡単にはいかないだろ。おい、やめろよ問題児」
そうしているうちに、俺達の乗った車は街に到着するのだった。

大きな駐車場に翔たちが乗った車が入ってきた。このリゾート地で一番大きなデパートの駐車場はそれに見合ったサイズを持っている。
意外と空いている駐車スペースに止め、翔たちは順番に車から降り

ていく。
　そんな翔達を観察する目があった。ミラー越しにいる人影は3人。そのうち2人の目には深い憎しみの色が見える。
　そんな目線に気が付くことなく、幸せそうな家族そのものといった様子の一行。家族というには男女比の偏りがひどいものであるが。
　それを見た2つの影は歯ぎしりと恨み言を漏らす。
「やっと見つけたよぉ、金色の闇……っ！」
「金色の死神め……あの日の借りを返してやる……ッ！」
　金色の闇はヤミのこと、金色の死神はフェイトのことだ。どちらも、裏の世界で恐れられている2人の異名である。
　ヤミに恨みがあるのは、女性だ。女性にしては上背があり、体にも細かい傷がいくつもある。そんな褐色の張りのある肌を、惜しげも無く晒すような煽情的なデザインの服に身を包んでいる。
　フェイトに恨みがあるのは男性だ。その男性は対照的に、最前線で戦う兵士のように全身に装備を身に着けていた。片目はつぶれているのか眼帯を付けている。歴戦の兵士だ。
「どっちも金色つながりで恨みを持ってるんだね～」
　そんな2人とは対照的に、軽い感想を持つ女性が1人。黒いフードを被った小柄な影があった。フードの首元には穴が開いている。そこから、長い赤毛の三つ編みが尻尾のように揺れていた。
　服装はもう1人の女性のように過激だった。黒を基調とした戦闘服。どことなくヤミと似た雰囲気を感じるが、彼女とは違い、おへそを出し、下はホットパンツだ。
「当たり前だろ！　あいつのせいで私がどんな目にあったか……っ」
「仲間全員をあいつに奪われたんだ！」
　明らかに場違いなテンションで話しかけてしまったせいか、食いつかれてしまう。
「フン……まあいい。それじゃあ、手筈通りにやるよ」
「ああ。俺の獲物には手を出すなよ？」
「あんたこそ、忘れるんじゃないよ。復讐出来るのは私の能力のおかげってことをね」

言い争う2人を見て、赤毛の少女は首を傾げた。
（復讐出来るのって、マスターが今回の旅行の情報を掴んだからじゃないの？）
（ふっ、細かいことは気にするな。好きにやらせればいいさ。お前もうまくやれ）
（はーい）
血走った眼をした2人を視界から外し、赤毛の少女は歩き出した。

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦②～

買い物はつつがなく進んだ。目立ったトラブルが起こることもなく、いつも買い物をしているという巨大なスーパーで、数日分の食材を買い物かごの中に放り込んでいく。
人はなかなか多い。食材だけではなく、様々なものが売っている。そのため、島民だけではなく、旅行客も数多く見える。
俺はカートを押す係。これも巨大だ。２段構造になっていて、それぞれに２つずつかごを乗せられる仕様になっている。
その４つ分のかご一杯になりつつある。３０人近い集団が食べる食材を買おうってんだから、そのくらいになるか。
「まだ買いますか？」
「そうねぇ……これだとまだ足りないのかもしれないわね～、訓練終わりのナカジマさんはたくさん食べるから」
それは昨日のご飯でわかっていたことだった。あの細い体のどこにそんなに入っていくのかと言いたくなるくらいの健啖家だった。それを言ったら、身内のアルトリア達や耀も相当だけどな。
「じゃあ、追加で持ってきますね」
「お願いするわ～。ここで待ってるからね」
「あ、私も行くよ夜月君」
テスタロッサさんが後ろからついてきた。
「あ、それじゃあ私、おトイレに行きますね」
「私も行っておくわ」
ヴィヴィオとルーテシアはこの隙に済ませておくつもりらしい。ま、そこまで時間はかからないだろ。すぐに戻ってくることにしよう。
歩きながら、俺はフェイトさんに気になったことについて話してみる。
「どうしてこっちに来たんですか？　トレーニングには不参加でもよかったんですか？」
「うん……なのはに今日は集中してないって言われちゃって」

「何か心当たりは？」
こういう変化に素早く対応する。大切なことだ。
「ある、のかなぁ。心当たりがあるとすれば、この前の家宅捜査かなぁ……」
この前のと言うと、あれか、あのクズの家の捜査のことか。そんなに気にすることが……って、そりゃ指名手配の犯人（ライ）を取り逃して、部隊員を危険に晒したとなれば、落ち込みもするか。
その上、成果はほとんどなし。これで落ち込まなかったら、メンタルが鋼過ぎる。
「うん。あはは、こんなことでいちいち落ち込んでいたら、執務官なんてやってられないのにね」
「まあ、そういうもんですよね」
戦場に出ていれば、ヒヤッとする場面なんていくらでもあるだろうし、空振りなんて毎回のことだろう。むしろ俺のように、毎回ボスにぶち当たるほうがどうかしている。
でも、常人には対処不能な『スタンド使い』との最前線を戦っている人にかかるストレスは、とても大きいだろう。
「でも、スタンド使いに会った時は俺がどうにかしますよ。俺もスタンド使いですからね。この前は役に立ちませんでしたけれど」
「ありがとう。その時は頼りにするね」
そう言うフェイトさんの表情は少し柔らかくなったような気がする。
俺も暇ではない（嫌味ではなく、抱えるタスクは多いから）ので、限界はあるが。スタンドは俺たち異世界人が持ち込んだものだ。俺達がカタを付けるべきだろう。
話しているうちに、スーパーの入り口にたどり着いた。俺達の目的は一番大きなカートだ。そこに限界まで買い物かごを積み込み、持って行くこと。
「あ、フェイトさん。かご取ってもらっても……フェイトさん？」
さっきまで並んで歩いていたはずのフェイトさんが、忽然と姿を消していた。

「は？　え？」
辺りを見回しても、フェイトさんは影も形もない。あの目立つ金髪は少し隠れたくらいで隠せるものじゃないんだけど。
明らかな異常事態。俺の理解はとても速かった。
敵襲だ。
「呪われてるだろ、俺」
「素敵。すごい判断力だね」
フェイトさんと入れ替わるように現れた女の子がいた。声も、どこか聞いたことがある声の妖精さんだ。
「さっきの金髪の人なら大丈夫だよ。怪我とかもしてないから。少なくとも今はね」
「何が目的だ」
心当たりはありすぎる。今回のメンバーでも、2、3個はすぐに思いついた。
「ゆっくり説明すると思う？」
「ブチのめされる前に喋ったほうが、身のためだぞ」
『回転』を加えた爪で狙い定める。牙（タスク）が俺の背後で唸り、戦意を顕わにする。
「あは、結構血の気が多いんだね。それにいい殺気――――素敵！」
獣のように目を光らせる敵対者は、舌なめずりして俺に飛びかかってきた。

「遅いわね」
「ですね」
「……」

待ちぼうけを食らっているメガーヌ、耀、ヤミの3人は暇を持て余していた。しかし、下手に動いてしまっては翔やフェイトと合流できなくなってしまうかもしれない。
小さい紫色のテントウムシが飛んできた。
「あら、この子はルーテシアの？」
ルーテシアの召喚獣が飛来してきた。見覚えがあるのか、メガーヌの指先に止まる。必死で鳴いている。耀が目つきを鋭くする。
「何かあったらしい。行かないと」
生命の目録（ゲノム・ツリー）の能力で動物と会話できる耀は、いつものぽけー、とした顔を一瞬で険しくする。それはなんの冗談でもない。
あのフリーダムな耀を、ここまで真剣にさせるという事態だということだ。
「ヴィヴィオちゃんとルーテシアに？」
「2人に何かあったと？」
「うん、こっち」
走り出す耀に、メガーヌとヤミは続く。虫はメガーヌから耀の指に移っていた。他の人にはわからないが、2人の間では情報のやり取りが盛んにおこなわれていた。
虫が案内した先はトイレだった。確かにヴィヴィオたちは、トイレに行くと言って場を離れていた。それがここなのだろうか。
「ちょっと待って」
進みだそうとするヤミを引き留める。
「この先、トイレで2人は消えたって、この子が言ってる」
「消えた？　襲われた、攫われたではなく、消えたと言っているんですか？」
「どういうことかしら？」
「わからない。今はルーテシアとのリンクは切れてるって言ってるから」
「召喚獣とのリンクも保てないような場所に、2人は隔離されているというわけですか？」
「そんな場所、簡単に用意できるようなものじゃないはずなんだけれ

ど……」
　トイレの入り口でまじめな顔をして悩む3人を見て、通る人は少し避けて通るようになってしまっている。
「話していても、仕方ありません。実際に見れば術の痕跡が残っているかもしれないです」
「気を付けて進もう」
　ヤミは腕を刃物に変身（トランス）させる。平和なところに刃物が飛び出れば、騒ぎになる一歩手前だ。
　周りなど気にしないヤミと耀を、作り笑顔を浮かべたメガーヌが隠しつつ、3人はトイレに突撃した。
　その中には、
「特に変なところは……」
「ない？」
　扉はすべて空いている。ちょうど誰もいないときに入ったらしい。もしもいたら、騒ぎになっていただろう。
　変な模様、汚れの類は全くない。落ちているものもなく、魔術的な触媒の手がかりも期待できそうもない。
「……」
　ヤミは油断なく構え、少しずつ前に進んでいく。
「やっぱり攫われた？」
「2人とも、そのあたりのチンピラには負けないと思うのだけど……」
「なら、実力者がいたということでしょう」
　ヤミは軽く返すが、裏の世界を生き抜いていた彼女の頭の中では、様々な手段が思い浮かんでいた。自分よりも実力のあるものを倒す方法は、意外とたくさんあるのだ。
　しかしその場合は、それ相応の準備というものが必要になって来る。相手を絞って調べなければ、準備をすることは無い。つまり、意図的に狙われなければ。
「誰かに狙われる理由があったりしますか？」
「それは……でも……」
「あるの？」

２人とも、理由がないとは言えなかった。特にヴィヴィオには大きな理由がある。それが原因で大きな事件が起きたほどだ。事件から数年たち、様々な工作で普通に暮らせるようになっているが、原因としては十分に考えられた。
しかし、メガーヌの口からそれ以上の説明はなかった。ヴィヴィオに許可を得ずにしゃべるのは失礼だと考えたのだ。
ヤミと耀は無理に聞き出そうとはしない。２人とも、おしゃべりが得意なほうではなかったし、自分たちにもしゃべりたくないことの１つや２つある。
何か理由があることがわかれば十分だった。
「これ以上は何も見つかりませんね」
「そうみたいだね、翔に連絡してみる」
耀は自分の端末を取り出そうとして――――気が付いた。トイレの鏡に人が写っている。しかも自分の後ろ、真後ろにだ。
「ッ!!」
耀は勢いよく振り向く。
動物の感覚を持つ耀がここまで接近されていることに気が付かない。絶対に異常なことだった。
「耀さん？　どうかしたの？」
「いや、鏡に人が写って……」
再び鏡を見ると、やはり女性が写っている。しかも距離が近づいている。混みあっているスクランブル交差点のように肩と肩がぶつかる寸前といった感じだ。
「だって……！」
しかし、隣には人はいない。鏡にはしっかりと写っているというのに。
「はっ！」
ヤミは迷いなく鏡をたたき割っていた。バラバラになった鏡が、辺り一面に散らばる。あまりにも迅速で過激な行動に他の２人は目を丸くする。
「そういう能力者の可能性があります。気を付けてください。春日部

耀、体に異変はありませんか」
「う、うん。大丈夫だけど……」
耀は床に散らばった鏡の破片を持ち上げる。何の変哲もない鏡だ。何か細工を施されているということもない。
《鏡を割ったところで無駄だよッ!! 全員揃って、私の世界に引きずり込んでやるッ!!》
次の瞬間、吸い込まれるように、２人はその場から姿を消した。
「……あら？」
「３人とも、無事ですか？」
ヤミとメガーヌは気が付くと、元のトイレにいた。しかしどこかおかしい。体が重い。何か術を掛けられてしまったのか
「ハァッ、ハァッ……！ ゴホッゲホッ……！」
返事がなかった耀は、ぐったりと横たわっていた。
「耀ちゃん!? 大丈夫!?」
「う、うん。急に苦しくなって……ゴホッ」
「すみませんが、春日部耀をお願いします。私たちは明らかに誰かの攻撃を受けている。外に出ましょう」
「え、ええ。わかったわ！」
メガーヌは耀を背負う。力の抜けた人ひとりを背負いながら動くのはキツイが、こう見えても、管理局の局員。行動には迷いがない。
一番戦闘力の高いヤミを先頭に、狭いトイレから外に出る。
「あれ？」
「出口、そっちだった……？」
出口から外に出ようと足を踏み出した先は、出口とは反対だった。ヤミも自分がなぜそんなことをしたのか疑問に思い、間の抜けた声を出す。改めて外に向かって踏み出した。
外には人っ子一人いなかった。
少し歩くと、あることに気が付いた。
「ヤミちゃん、気が付いた？」
「はい。文字がすべて『反転』しています」
品物に付けられるすべての文字が、鏡に映したように反転していた

のだ。いたずらだとすれば、どれだけの労力がかかっているのだろうか。
「いたずらなわけがありません」
「そうね……耀ちゃん、大丈夫？」
「う、ぅん、大丈夫……」
　しかし、その声には力がない。
「人払いの結界が張られているのかしら」
「こんなに人の多い場所で使えば、すぐに人に気が付かれるでしょう」
　人をよせつけない人払いの結界と言っても、練度の高い人が見れば違和感を覚えることが多い。本来はたくさん人がいるはずの場所に使えば、その違和感は大きくなる。
「アッハッハッ！　それはどうだろうねぇ！」
　高笑いとともに現れたのは大柄の女性だった。手に持ったを鞭を叩きつけると、床のタイルにヒビが入る。
「久しぶりだねぇ、金色の闇……ッ!!」
「暴虐のアゼンダ……！」
　駐車場で観察していた奴らの1人、特にヤミに対して憎悪を燃やしていた女性が立っていた。
「お知り合い？」
「はい。レベル3の念動力と、高速のムチの使い手。昔少しトラブルがありました。ですが、変身（トランス）能力の敵ではありません」
「少しトラブルだぁ……？　ふざけるんじゃないよ！　あんたに負けて依頼に失敗したせいで、あたしが築き上げてきた名前はズタボロだッ！　この屈辱、そっくりあんたに返してやらないと気が済まないんだよッ！」
　ヤミはアゼンダと無駄なやり取りを行おうとはしなかった。裏の世界では殺った殺られたなど日常茶飯事だ。ヤミ自身、自分が恨まれることをしてきたということも理解していた。
「――変身（トランス）……？　変身（トランス）っ！　……これは」
「アッハッハッ！　どうしたんだい!?　お得意の変身（トランス）はッ！　久しぶりに見せてくれるんじゃないのかい!?」

一向に変化しない自分の体。今まで手足のように使えてきたはずの能力が使えなくなっている。しかし、ヤミは慌てない。
「変身(トランス)が使えないのなら、徒手格闘で殲滅するまでです」
ヤミは一直線にアゼンダへ飛びかかった。変身(トランス)能力は使えなくても、ヤミの身体能力は十分に高い。変身(トランス)のサポートが無くとも、Ａランクの武偵程度なら、制圧できる。
「はっ、そう来るだろうと思ったさ！」
アゼンダが指を動かすと、横から迫る影があった。
「ッ!!　た、高町ヴィヴィオ……っ！」
割り込んできたヴィヴィオに怯み、ヤミの拳が緩んでしまう。その隙を見逃すアゼンダではない。
「なに止まってんだよッ!!　ほらァ!!」
鋭い鞭がヤミを捉えた。
「ヤミちゃん！」
「そっちの女ァ！　動くんじゃあないッ!!」
今日のヤミはいつもの戦闘服ではない。女性陣が選んだ白いワンピースだ。実はこれも『ギャップ萌えで仲良くなろう作戦』の一環だった。
もちろんヤミがそんな服を持っているわけがない。持ち主はアスナだ。
防弾、防刃性能のない、ただおしゃれをするためにアスナが貸した服。その生地が無残にも引き裂かれる。ミミズ腫れを通り越し、青い痣ができてしまっている。
アゼンダの一喝で、駆け寄ろうとしたメガーヌの動きは止まる。それは声以上にさらに現れた1人の少女を見たからだ。
「ルーテシア!?」
「私の念動力はレベル3。でもね、意識のないやつを操り人形にするくらいは、簡単にできるんだよねぇ」
ヴィヴィオもルーテシアも、虚ろな目をしている。アゼンダを背に、守るように立っている。アゼンダの言う通り、操られているようだ。

「さあ、始めようじゃないか。金色の闇の凌辱ショーをさぁ！」

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦③～

「ルーテシアッ！　そんなこと止めなさい！」
「だから動くなって言ってんだろうがババア！　こいつは脅しじゃねーぞッ！」
　ルーテシアは持っているナイフを自らの首筋に添えた。薄皮が切れ、少量だが血が流れ始める。アゼンダが一声かければ、赤い液体をまき散らしてしまうだろう。
「ッ！　わ、わかったわ。言う通りにする。言うとおりにするから……っ」
「てめぇは何もしなければそれでいい。ただ、次動いたときにはそこのガキがどうなるか、わかるよなぁ？」
　メガーヌは苦々しい表情で頷いた。拳を握り締め、体を震わせている。本当なら、今すぐにでも飛び出したいのだ。
　しかし、背中に感じる耀の重みがギリギリのところで体を押しとどめていた。
　遠くでは銃撃の音が聞こえてくる。
「っち、アイツ、無駄弾撃ちすぎて、負けんじゃねーぞ。あたしは責任取らないからな」
　そう吐き捨てるアゼンダに襲い掛かる影があった。
「おっと、危ない危ない」
　隙をついて殴り掛かったヤミだったが、間に入ったヴィヴィオに簡単に受け止められてしまった。
「おいおい、言ったよな。金色の闇の凌辱ショーの始まりだって。テメェはもう食材なんだよ。私に調理される肉袋なんだ。わかるか？」
「……承諾した覚えはありません」
「違うんだよな。そうじゃないんだよ、金色の闇。この世界に来て、最初にこの小娘をブン殴れなかった時点で。もうテメェは承諾してるんだよ」
　ヴィヴィオの膝蹴りが、ヤミの内臓を圧迫した。大切な臓器が嫌な悲鳴を上げる。

操られている状態でも、身体能力を魔力でサポートすることはできる。ヴィヴィオはストライクアーツとしての、スポーツとしての格闘技は好きでも、何の意味もない暴力を振るうことは絶対にない。
「――か、はっ」
今までになく無防備に、攻撃を受ける態勢になっていなかったヤミ。蹴りの衝撃でつま先が地面から離れる。
着地した両足には力が入っていない。お腹を押さえその場に四つん這いになった。悲鳴すら上げることができず、ひたすらに空気を取り込む。
そんなヤミの傍らに、アゼンダはしゃがみこんだ。
「助けは来ないよ。お前と仲良くしてるあの男も、今頃は別の奴に襲われてるからね」
「仲良く、なんて……してません……っ」▪
「へぇ？　そうかいそうかい。そいつはアテが外れたね。まぁ、万に一つも、自力でここにたどり着けるわけがないけどね」
やけに自信たっぷりに言う。
「ここは私が作った世界。私のスタンド、『マン・イン・ザ・ミラー』の作り出した鏡の中の世界さ！」
「スタンド……!?」
レット・ホット・チリ・ペッパーとの苦い戦闘の記憶が蘇ってくる。高圧電撃によって、一時的に変身(トランス)能力が封じられ窮地に立たされた。
しかしあの時とは違い、電撃は浴びていない。
「言っているだろう？　ここは私の世界だ。出るものも入るものも、私が決めることが出来る。変身(トランス)能力なんて、そんな危ないものがあったら、思うようにお前を痛ぶれないじゃあないか。私が、気持ちよく復讐出来ないじゃあないか」
いったいどういうことかと首を捻るばかりのメガーヌ。アゼンダは理解が足りないと首を振る。
「私が何のためにお前達をここに引き摺り込んだと思う？　お前達と一緒に『闘えるモノ』を引き摺り込んじゃあ、私が危険になっちまうだろう？」

「闘えるモノ？……ッ!?　ま、まさか!?」
やっと自分の置かれてる現状を把握したのか、メガーヌは顔を真っ青にした。
メガーヌが少し息苦しいと感じたのは、普段から少しとはいえ、魔力のサポートによって体をサポートしてたから。
耀がいきなり体調を崩したのは、生命の目録（ゲノム・ツリー）との繋がりが途切れてしまったから。生命の目録（ゲノム・ツリー）がなければ、耀はまともな生活を送るのが困難なくらい体が弱いのだ。
ヤミが変身（トランス）を使えないのは、マン・イン・ザ・ミラーが世界への入室を拒んだからだ。
「ここには、私が許可した力以外は入る事は出来ない……お前達の『本体』だけを入る事を許可した……他の特別な力は一切許可していないのさ……安全で無敵に振る舞える『鏡の中』……それが私のスタンド――」
スタンドのヴィジョンが現れ、ヤミの顔面を蹴りぬいた。
「あぐっ！」
「――『マン・イン・ザ・ミラー』だッ!!」
地面に転がるヤミ。真っ白だったワンピースは、すっかり汚れ、破れてしまっている。そればかりか、下半身が危険なところまでめくれてしまっているが、ヤミには気にする余裕はない。
「前に戦った時は、もっと冷たい機械みたいなやつだった。それが何だい――」
アゼンダはヴィヴィオの顔を舐めるように触る。顔を近づけ、豊満な肉体にふさわしい肉厚な舌が、ヴィヴィをに触れそうになる。
「こんな小娘に絆されちまって、こんなに無様な姿になってる。ハハッ！　笑いが止まらないってのはこのことかね！」
それを見たヤミは、握りしめた拳を地面に叩きつけつつ、震える足で立ち上がった。ダメージは大きいようで、まだお腹を押さえている。
まだ抵抗する意思があるヤミを見て、この世界の主であるアゼンダは嗜虐的な笑みを浮かべた。

一思いに楽にしてやろうなんて気持ちは微塵もなかった。時間の許す限り、思いつく方法の限り、徹底的に壊してやろう。
「ただ殺すだけじゃ満足できない――――見せてもらおうか、金色の闇の泣きっ面をねぇ……！」
応戦するヤミの動きは、ずいぶんと重くなってしまっていた。

フェイトは銃口から逃れるために、商品棚に身を隠していた。突然放り込まれた、左右反転した世界。戸惑いはあったが、銃を持った巨漢の男に襲われれば、ゆっくり考えている暇はない。
フェイトは男の顔に見覚えがあった。六課結成前に捕まえた犯罪者グループの1人。単純に利益でつながった集団ではなく、家族1つが丸々犯罪者グループになっているのだ。
残念ながら、1人捕まえ損ねてしまったが、一番厄介だった母親を捕まえ、現場を引き継いだ。
襲われる理由は復讐だろうということはすぐに分かった。そして、やり残した仕事を終わらせる良い機会だということも。
しかし、
（全く魔力を感じない……私の体、どうしちゃったの？）
反撃しようにも、向こうは完全防備。対するフェイトは、相棒のデバイスであるバルディッシュが手元になく、一番の力であった魔法を使えない。
（デバイスがなくても魔法は使えるはずなのに、こんなことって……）
なぜ襲われているのか、一緒にいた翔は無事なのか、そういう思考は、目の前に転がってきた手榴弾で強制的に終わりを迎える。
「ッ!!」

いつもならバリアジャケットとプロテクションで防いでいるが、今は生身だ。転がるように回避する。しかし、動きやすいとは言えないデニムパンツだったため避けきることが出来ず、破片が足に突き刺さった。
（大丈夫、深くないッ！）
多少の痛みは感じるが、動けないほどではない。
煙が晴れてくると、走って近づいてくる足音が聞こえる。大量の装備を持っているため、静かに襲い掛かろうというつもりは全くないのだ。
（だったら、何か他の物を武器に……っ！）
周りには様々なものがある。商品棚に陳列している物を投げつけるだけでも、目くらまし程度にはなるだろう。
（どうして!?　なんで動かないの!?）
押しても引っ張っても、最後までチョコたっぷりなお菓子の箱はびくともしない。
それもそのはずだ。『マン・イン・ザ・ミラー』の中にある物体は、本体であるアゼンダかマン・イン・ザ・ミラーのスタンドヴィジョンしか動かすことしかできない。
そしてアゼンダは、鏡の中に引きずり込むときに、入る対象を決めることができる。
『マン・イン・ザ・ミラー』の中には、本体であるアゼンダが許可したものしか持ち込む事が出来ない。それは物理的なものだけではない。フェイトの魔力、デバイスの機能、戦うための武器がことごとく封じられていた。
ただしそれは、男が持っている武器についても同じだ。これらはすべてアゼンダが許可したものだが、すべてを使い切ってしまえば、仲間である男も丸腰になる。
男もそれはわかっている。ゆえに、アゼンダのように遊ぶようなことは無い。
魔力が使えなければ、男とフェイトの条件はフラット。そこにスタンドの仕組みをあらかじめ知っているという強みが合わされば、男に

負けはない。
「無駄な抵抗はやめたほうが自分のためだぞ、金色の死神」
「くっ……！」
油断なく銃を突き付けてくる男。装填されている弾丸は、1秒とかからずフェイトに無数の穴をあけるだろう。
肉食獣に睨まれたように動けなくなるフェイト。
「すごいものだな、スタンドというのは。あの金色の死神が目の前に這いつくばる日が来るとは……ようやくだ。ようやく家族の仇を取ることができる」
「（スタンド……こんなところでも）やはり、家族の敵討ちが目的ですか！」
武器は何もなくとも、スタンドという言葉に不安になりそうだった心を押さえつけ、気丈に男をにらみつけるフェイト。
「こんなことをしても無駄です！　私を人質に取ったとしても、捕まっているあなたの家族を釈放することなんて……」
「勘違いするな。釈放のために力を尽くすのはお前たちの方だ」
「え？」
男の言っていることをフェイトは理解できない。
「従えないというならしょうがない。お前は、俺と同じように家族を失うことになる」
「ッ！　あ、あなたは……っ！」
「調べはついている。この旅行に、この場にお前の娘がいることはな。そして、あの女は貴様の娘もこの世界に捕らえる」
「ヴィヴィオは関係ない！　何かするなら私だけにして！」
「先に仕掛けたのは貴様だ。俺から家族を奪ったのは。ならば、同じ目にあってもらわなければ対等とは言えない」
勝手すぎる言い分だ。そもそも、男の一家が犯罪者でなければ捕まえられることは無かったのだ。
だが、価値観の違う相手に常識を解いても仕方がない。
交渉の余地はない。
武器のない状態でも、どうにかしないといけない。

フェイトの視界に閃光が走った。次いで感じるのは生暖かい、ぬるっとした液体。それが、右肩から流れてくる。
「――――っ!!」
男は何のためらいもなく引き金を引いていた。
「殺しはしない。ここは確かにあの女の無敵の空間だが、どういうところからボロが出るかわからないからな」
「う、ぐぅぅっ」
右肩の銃創を抑える。唇を噛み、悲鳴が漏れないようにする。額には脂汗が浮かび、視界がにじんでくる。それでも、視線だけは外さない。
「抵抗されては面倒だからな。四肢は使い物にならなくしておくとしよう。場合によってはこの後すぐに、エース・オブ・エースともやり合うかもしれない」
「なのは……っ!」
この場にいない幼馴染の顔が頭に浮かぶ。
しかし、彼女がここにいたとしても、状況は変わらなかっただろう。フェイトと同じく魔力を主戦力としている彼女では。
次いで思い浮かんだのは、つい先ほどまで一緒にいた男の子だ。スタンドが出たら自分に任せろと言った男の子。
「次はここだ」
右足に向けられた銃口が、火を噴いた。

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦④～

「はぁ、こうしてみると感慨深いもんだね。復讐を誓ってここまで来るのは長かったっていうのに、終わりはこんなにもあっけないものだなんてね」
「げほっ……ぁ、っ……っ！」
　ヤミはほとんど抵抗することが出来なかった。形だけは戦いになっていたが、実際はプロレスのようにシナリオが決まったお遊びだ。
　変身（トランス）能力が封じられ、ヴィヴィオを人質以上に悪質に使うアゼンダ。メガーヌもルーテシアを人質に取られ、耀はヤミと同じく生命の目録（ゲノム・ツリー）を封じられたせいで、行動不能。
　アゼンダの言う通り、この世界の支配権は完全に握られていた。
　着ていた服はすでにボロ布になってしまっている。これを着て外を出歩くことは出来ないだろう。
　体の至る所に擦過傷と、鞭で打たれ、めくれあがった生々しい傷が刻まれている。内臓を狙ったヴィヴィオの打撃も、目には見えないが、深刻なダメージを与えていた。
「それで、どうだったんだい？　表の世界での暮らしっていうのは」
「……」
　ベンチに立ったヴィヴィオに後ろから羽交い絞めにされ、力なく項垂れていたヤミはその言葉に返すだけの余力は残されていなかった。
「ガキのオトモダチができて、学校に行って、男と一緒に暮らして、ずいぶん楽しかったみたいだなぁ？」
　そのいくつかには反論の言葉をぶつけたいヤミだったが、言ったところでアゼンダを喜ばせるだけだ。
「それで、本当のところはどうなんだよ」
「……」
「さっきは違うって言ってたけどよぉ。男と一緒に暮らしてて、何もないっていうのは。どうなんだ、それ。芸能人が女とホテルに行って何もしてないって言うのと同じくらい、説得力ないと思わねぇか？」

そんなことを言われても、本当に何も無いものは無いのだ。
女性だからか、そういう方面での屈辱も与えたいと思っているのか。
一向に反応のないヤミを面白くなさそうに、眺めるアゼンダの手が動いた。
無残に破かれてしまったヤミの服、その胸元だ。手のひらに収まるサイズのおっぱいを無遠慮に弄ぶ。
甘い刺激などない。嫌悪感で鳥肌が立ってくる。
「っ」
「あの年の坊やなら、お前の体でも十分におっ勃つだろうしなあ」
何も言えないでいるヤミに変わり、口を挟む者がいた。
「貴方にはわからないよ、おばさん」
「……なんだと小娘」
「貴方には、わからないって言ったの、おばさん」
「よ、耀ちゃん！　止めなさい！」
息も絶え絶え、顔も真っ青な耀が顔をあげて、皮肉めいた表情を作る。顔のパーツはぎこちなく、無理して作られたものであることはすぐに分かってしまう。
しかし、この世界の絶対支配者であるアゼンダにとっては、耐えがたいものだった。
「ヤミのこと、妬む気持ちはわかるけど、あなたには絶対、足りないものが、ある、から」
「へぇ？　それは何だい」
「若さ」
アゼンダの瞳孔が開く。静かな怒りという言葉が、ここまで似合う人はいない。
「別に、動くなとは言われてるけど、しゃべるなとは、言われてない……っ。悲鳴とか、『やめて』とか、言ってほしかったなら、期待に沿えなかったみたい、だけど……っ」
「殺す」
アゼンダの袖から、ナイフが飛び出す。あまり使われていないの

か、既製品のままこぎれいな光を放っている。小さく、最低限の機能しか持っていない刃物だ。最低限、人の命を奪う機能だけは持っている。
（ヤミ、まだ余力は残してるよね。ヴィヴィオも離れてる。今ならいけるはずだよ）
（全く無茶なことを言ってくれますね。ですが、やるしか……）
アゼンダはしょせんレベル3。ヤミが躊躇していなければ、制圧することは容易かった。アゼンダに余裕があったように見えても、実際には精密な能力操作をしていた。
耀に気を取られ、しかも頭に血が上っている状態なら、とっさの操作ではヤミを止めることはできないだろう。
しかし唯一にして、最後の逆転のチャンスだ。文字通り、命を懸けて作りだした最後のチャンス。
アゼンダはゆっくりと2人に歩いていく。
「どうやら、お前は先に死にたいらしいねぇ。残念ながら、お前の命なんざなくなってもいいんだよ？」
アゼンダは本気だ。
ヤミは体に力を入れ始める。ヴィヴィオの拘束は硬いが、力を入れ始めているというのに、特に警戒する様子はない。一度振りほどけば、棒立ちになるのは間違いない。
（行きますッ!!）
「言っておくが！」
アゼンダの声で、動きかけていたヤミの体が固まる。
「もしも私に攻撃しようとしたらその瞬間、ガキどもは自殺するようにしてある。背中から襲い掛かろうなんて考えないことだな」
「ッ！」
アゼンダも裏で殺し屋をしていた女だ。その程度の準備は当然していた。暗殺者にとって、不意打ちなんて想定してしかるべきものだ。いつも自分がしているのだから。
「何だい、その顔は。図星を突かれて固まっちまったのかい？」
顔を歪めて笑うアゼンダに、耀は何も言い返せない。

軽く振ったナイフが、光をきらりと反射した。

赤毛の襲撃者の凶刃は、何のためらいもなく俺の急所を狙ってくる。

ＡＣＴ３の爪弾を後ろに放つ。着弾と同時に体が吸い込まれ、回転の穴に避難する。

とりあえず、この場で戦い続けるのはマズイッ！　やる気満々で対峙したのはいいが、こんなに人がいる場所で戦ったら、周りの人を巻き込まない自信がない。

「そんなこともできるんだ！」

無邪気な子供のような声が、穴の外から聞こえてくる。

子供がアリの巣に指を突っ込んで遊ぶように、穴の中に何かを入れようとしている。しかし無駄だ。回転の穴の中にはどんなものだろうと侵入することはできないッ！

「わっ、髪の毛が巻き込まれちゃった！　これは聞いてなかったなぁ」

そうしているうちに、俺の準備が完了する。

「固定（スタグネット）・掌握（コンプレクシオー）」

取り込んだ魔力が体中に充填される。

「術式兵装（アルマティオーネ）、疾風迅雷（アギリタース・フルミニス）ッ!!」

風と雷の術式兵装。サーヴァントにだろうと追従できる俺の戦闘形態だ。

穴から飛び出した俺は少女と向かい合う。

「私でもわかるよ。その力、相当危ないよね。その力も知らないよ」

「教えた覚えはないからな」

そんなセリフを吐く少女の顔は狂気的な笑みに染まっていた。今が楽しくてしょうがないというように。
彼女の長い三つ編みおさげが、重力に逆らって動く。髪の毛が変形し、巨大なバスターライフルになった。体の一部を変形させる能力。その現象には、見覚えがあった。
「変身(トランス)能力……」
銃口から光が溢れる。発射されるのは鉛玉ではなく、エネルギー弾だ。一発で、鉛玉以上の範囲を焼き払うことができる。
「これだから……ッ!!」
周りのことを考えないヤツは困るッ！
俺の後ろには、ようやく事態を把握し始めたお客さんが集まってきてしまっている。せめて逃げてくれれば良いのに……っ！
しかし射線に入ってしまっている以上、守るしかない。
「ハァッ！」
「パンチで相殺!?　すごいね！」
午前中に練習した水斬りの踏み込みを応用した打撃だ。全身を使い、さらに魔力を飛ばす。『飛ぶ斬撃』ならぬ『飛ぶ拳』ってところだな。まだ連射はできないが。
俺達の攻撃はお互いに相殺して、空気が震えた。入り口のガラスにヒビが入る。
ようやく事態を飲み込み始めた他のお客さんが、我先にと逃げ始めた。慌てる大人の波に飲み込まれたせいで、お年寄りや子供の中には転んでしまっている人もいる。出来ればもっと早くに逃げてほしかったところだ。
また周りを巻き込んだ攻撃をしてもらっても困る。俺は近接格闘に持ち込む。
目の前の少女の攻撃は苛烈だった。武器を使っているわけでもないのに、俺と張り合っている。
身体を武器に変化させないのは俺に合わせているのだろうか。お互いの拳、足蹴りが掠り、肌が切れる。拮抗しているように見えて、俺は完全記憶能力でどんどん学習している。

それに、今、術式兵装で装填している魔法を開放すれば、即座に大魔法を叩きつけることも可能だ。
そして使っていない武器もある。まだまだ底を見せるつもりはない。
そしてそれは少女も同じだろう。楽しんではいるが全力ではない。
このままではただ長引くだけ、プライベートならまだ良いが、仲間がピンチかもしれないこの状況。俺は均衡を破り捨てる。
「黒影（ダークシャドウ）ッ！」
俺の陰から飛び出した黒い鳥が、少女の攻撃を受け止める。
俺が能力を使ったことが合図だったのか、少女のおさげが大きく動いた。先は鋭利な刃物になっている。
体を横にずらすことでよける。
目の前には先ほどおさげを変身させたのと同じタイプの、銃身を切り詰めたタイプのライフルが突き出されていた。
ＡＣＴ３の回転に潜ることで回避する。
「魔法の射手（サギタ・マギカ）ッ!!」
穴から空中に向けて飛び出した俺は、魔法の矢を番える。これは『魔法先生ネギま！』の魔法学校で唯一教わる基礎的な攻撃魔法。
雷、風、炎、氷、光、闇などの精霊を使役し、破壊や拘束などの効果を持つ魔力の矢を放つというものだ。
今回使うのは捕縛を目的とした『風』属性の矢だ。殺傷力はほとんどないため、全力で当てにいく。
しかし、相手から見れば、魔法を使おうとしているのは変わりない。当然反撃が来る。
今度はおさげが巨大な手に変形する。転がっていたカートを恐ろしい速度でブン投げてきた。
目標を外した魔法の射手は霧散してしまう。
殺傷力のない風属性の矢では、飛んでくるカートを止めることはできない。
再び魔法の射手を発動。今度は純粋な破壊の力を持つ光属性の矢だ。周りに浮かぶ計七つの光球。拳とともに前に打ち出した。

「桜華崩拳ッ！」
水斬りバージョンだ。
魔法の射手の威力は、だいたいその人の全力パンチと同程度。矢を束ねて打つことで倍以上の打撃力になる。
カートは真ん中からひしゃげ、バラバラになってしまった。
距離が離れたことで、お互いに間合いを図る。
が、ここで、少女から殺気が消えてしまった。
「なるほどね。このくらいでいいかな」
「なに？　逃げるのか」
「本当はもっと戦っていたいんだけどね。他にもやることがあるから、お姉ちゃんがどうなっているのかも見ておきたいし。そろそろ行くね？」
「みすみす見逃すわけないだろ。お前の仲間の能力についても、しゃべってもらわないといけないんだからな」
当然逃がすつもりはない。
「だったら、私にかまってる暇なんてないと思うよ？　私たち、別に何か作戦を立ててるわけじゃないから。他の人が何やってるのかなんて知らないもん」
「なんだと？」
でも、それはそれで納得できる。この娘が俺の予想している通りなら、そんな『仲間』なんて作ろうとは思わないだろう。
「だから、ちょっとだけヒント出そうかな……鏡、だよ」
「鏡……」
「その顔、ナニか思い当たるものがあるみたいだね」
鏡といえば、考えられるスタンドはある。そして予想が当たっていた場合、相当危険な状態になっている上に、俺からは手が出せない。しかし安易にスタンドだと考えるのは危険か……？
「おい！　あっ！」
もっと情報を聞き出そうと少女に声をかけようとして――――すでにいなくなっていることに気が付いた。
しまった。あの子がいなくなってるっ!!　戦いの最中に目を逸ら

すなんて、間抜けなことをしてしまった。
「とりあえず、連絡を……」
ロッジにいる雪菜たちと連絡を取った。みんな驚いた様子で、すぐにこっちに来ると言っている。お店の人にも話し、中にいる人たちには避難してもらうことになった。
「でも、待っている時間はない」
皆は現在進行形で襲われているんだ。それに申し訳ないが、人が何人集まったところで、この敵には対処出来ない可能性がある。
いったいどうすればいいか。
原作でも倒せたのが奇跡みたいなやつだ。
悩みこんでいると、1人の人物が姿を現した。
「お困りかな、我が魔王」
「今日は、よくフードの奴に会うな」
俺が皮肉ったからか、男はフードを取る。
顔は整っているが、どうしても胡散臭さが抜けない青年だ。この状況で悠然と現れたこいつが、一般人ではないことはすぐに分かった。
「誰だよ、あんた」
「私の名はウォズ。未来の君が送り込んだ、忠実なるしもべだ」
「み、未來の俺は、とうとう男色に目覚めたのか……ッ！」
そんな、女の子に囲まれすぎて、とうとうそっちまで……？　あまりにも衝撃的な事実に状況も忘れて軽く絶望してしまう。
「そんなことはどうでも良い」
「いや、良くはないんだけど」
「重要かもしれないが、今はそれ以上にやらなければならないことがあるはずだ」
「っ！　お前が、どうにか出来るってことか？」
「ふむ……」
ウォズと名乗った男は、持っていた分厚い本を開いた。
「それは？」
「未来の君が書いた、未来を変えるための計画書だ」
「わざわざそんな包装したのか……」

立派なハードカバー、表紙には歯車と時計がちりばめられているデザインだ。
ウォズの目が上下に動く。本に記された記述を確認しているのだろう。やがて顔を上げ、本を勢い良く閉じた。
「残念ながら、私が直接手助け出来ることは無いようだ。この事件を解決するのはあくまで君の仕事。元々、今回はこれを渡しに来たのだから」
ウォズは跪き、どこからか小さく赤い、金の刺繍が入ったクッションを取り出していた。その上に乗っているのは、ベルトのバックルだった。色こそ違うが、その形には見覚えがある。前に未来から来た俺が変身していた仮面ライダー、そいつのベルトだ。
「お前、本当に……」
「ウォッチはすでに、あなたは持っているはずだ。手に入れているはずだ」
懐から取り出す。懐中時計にしては厚みがあり、２０１８と書かれている。昨日の行為の結果手に入れた物だったが、使い方はわからなかった。だが、底知れない力を感じる。これがそうなんだろう。
「私を信じるのか、どうか。今ここで決めていただきたい」
「このライダーになれば、この状況を打開できるのか？」
「貴方はすべてを手にする。すべてを取り戻すために戦っている。あなたはこの力で――――魔王になる」
質問の答えにはなっていなかった。しかし、俺は迷いなくベルトを手に取っていた。疑う必要はない。
バックルを腰に当てると、ベルトとして装着される。
ウォッチの絵柄を合わせると、複眼が『ライダー』という、奇抜なデザインの絵が完成した。
《ＺＩ―Ｏ！》
ウォッチをベルトにセットする。
背後に巨大な時計が現れる。ジオウ、時王、か。このライダーのこと、俺は知らない。俺が元の世界にいたときは、ＴＶではビルドがやっていた。

その次の仮面ライダーは平成仮面ライダー２０周年記念作品。元号が変わることも決まっていたから、平成に始まる最後のライダーということになる。
それがどういう意味なのか、回したバックルが１回転するまで、ずっと考えていた。
「変身」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
「祝え!!　全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ！　まさに生誕の瞬間であるッ!!」

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦⑤～

感極まったウォズの祝詞が人のいない室内に響き渡った。
「仮面ライダー、ジオウ……」
聞いたことのない名前と姿だった。未来の俺の変身していたライダーを少し簡素にした姿といったところだろうか。おそらくこれが初期形態なのだ。
名前についても色々と推察できる。ジオウ、つまり『時』間の『王』だ。
「そしてこれも、私からの贈り物だ」
ウォズからさらに手渡される。俺が持っていた『ウォッチ』と同じ形状のものだ。同じように回転させると、今度は見たことのある絵柄――仮面ライダー龍騎の顔――にそろう。
《ＲＹＵＫＩ》
これを見てわからないほど、俺の察しは悪くない。すべての情報を総合して考えると、このライダーはディケイドのように他の仮面ライダーへと変身できる力があるんだろう。
仮面ライダー龍騎は、ミラーワールドと呼ばれる鏡の中にある世界で戦うライダーだ。
あの少女が残した『鏡』というキーワード。この力を使えば、今回の事件を解決できるはずだ。
俺は今はめていたジオウのウォッチを外して――
「ん？　いや、そうではない。反対側の空いているほうに取り付けるのだ」
「あ、そうでしたか」
ウォズの言う通り、反対側に装填する。待機音が鳴り始め、一回転。
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＡＤＶＥＮＴ　ＲＹＵＫＩ！》
「おぅ」
目の前に現れたのは、ツギハギの装甲だった。それが龍騎の各部分をモチーフにしていることはわかった。これを装着するんだろうけ

ど、どうすれば……
指先で触った瞬間、アーマーはそこかしこに飛び散った。俺の体に吸い寄せられるように、体の各部に装着されていく。
近くにあった鏡を見ると、俺の姿は大きく変わっていた。『アーマータイム』の名の通り、龍騎を模した装甲をさらに上に装着する形で変化するライダーのようだ。複眼部分には『リュウキ』と書かれている。
「ふむ。今回の私の出番はこれで終わりのようだ。それでは、また会おう、我が魔王」
「は？　ちょ……っと」
ウォズは言いたいことだけ言って、姿を消した。聞きたいことは山ほどあったが、今はそれ以上にやらなければならないことがあった。
「っし、行くか」
鏡の世界にな。
鏡に触れると、体が吸い込まれ、吐き出された。そこは何の変哲もない世界……ではない。目に入る文字や物体が反転したミラーワールドだ。
鏡を使った能力、ここまでおぜん立てされれば、敵の能力の正体は『マン・イン・ザ・ミラー』だという予想はすぐに立てられる。
そしてその予想が正しかった場合、みんなの命が危ない。多少の強敵のほうがまだ安心できる。
ミラーワールドは危険な場所だ。人間を捕食するモンスターがいたり、そもそも生身で長い時間ミラーワールドにいると消滅してしまう。しかし一番の問題は、ミラーワールドと、マン・イン・ザ・ミラーの鏡の世界が共通しているのかということだ。
せっかく鏡の世界に入ることが出来たとしても、それが別の世界では意味がない。
だが、それもすぐに杞憂に終わった。
見付けたのだ。見たことのない男に銃口を向けられる、テスタロッサさんの姿が。肩からは血が流れ、抵抗する様子はない。いや、出来ないのだ。

今の彼女はおそらく魔法を使えない一般人に等しい。
向けられた銃口はいつ火を噴いてもおかしくない。や、もうすでに引き金が引かれているッ！　視界がスローモーションになるが……
クソッ！　流石に間に合わない――――！
《ジカンギレード！　ジュウ！》
何かを読み取ったのか、ベルトから武器が飛び出してくる。武器自体にでかでかと『ジュウ』という文字が刻まれている。
ゆっくりになった世界で、俺の手は滑らかに動いていた。
ガキュンッ!!
「ッ!?」
久々の銃弾撃ち（ビリヤード）だ。しかも、超速の早撃ちで。
銃弾は見事に逸らされ、銃が破壊される。
男の行動は早かった。俺のことを一瞥すると、すぐさま逃亡を開始した。
「クソッ!!　話が違うぞ！　この世界は絶対に安全なんじゃないのか!?」
とっ捕まえてやりたいのはやまやまだったが、この場に負傷したテスタロッサさんを残していくわけにはいかない。
「フェイトさん！　大丈夫ですか!?」
「え、ぁ、き、君、もしかして、夜月君!?」
「はい。助けに来ました」
俺は一瞬ためらったが、警戒を解くためにも変身を解除した。俺の顔を見ると、体から緊張を解いた。
「良かった……っ、違う！　ヴィヴィオが！」
「ヴィヴィオちゃんも、ここにいるんですか!?」
「わからないけど、あの男が言うにはもう捕まえてあるって……」
横に寝かせる。話を聞きつつも処置を開始する。治癒系の能力は持っていないので、学校で習った応急処置だ。
外に送り届けるべきだろうか……いや、あの男を逃がしてしまった以上、いつ襲われるのかわからない。一緒に来てもらうべきだろう。
「少し我慢しててください、フェイトさん。高町さんたちが来たら、す

ぐに病院に送りますから。黒影（ダークシャドウ）、抱えてくれ」
「ホイヨ」
「わっ！　あ、ありがとう」
「乗り心地は期待しないでください」
「オイ！　丁重ニ運ブカラナ！」
「こんな能力もあるんだね……」
　俺達はこの世界の捜査を開始した。今回はいろいろと時間をかけすぎた。相手が始めから効率よく殺すつもりでいたのなら、犠牲者が出ていてもおかしくない状況だ。
　ヴィヴィオちゃんが捕まっているとすると、最悪ケガではすまないかもしれない。
「そういえば、呼び方変わったね？」
「あ、申し訳ないです……」
　基本的にテスタロッサではなくフェイトで頭にインプットされていたため、焦ってそっちが出てしまっていた。大人の人を『さん』付けをしているとはいえ名前で呼ぶなんて、あまりあることではない。
「別にいいよ？　そっちのほうが呼びやすいんでしょ？」
「じゃあ、そうする、かもしれないです」
「どっちなの？」
　おかしそうに笑うフェイトさん。こんな非日常の世界だが、その程度のことは出来るようになったらしい。
　とりあえず向かったのはメガーヌさんや耀と別れた場所。誰もいないし何もない。そこからはがむしゃらに探していると、空気を切り裂く音が聞こえてきた。
「「ッ!?」」
　ここまで響いてくる、乾いた鞭の音だ。
「行ってきます！　黒影（ダークシャドウ）、任せたぞ！」
「気を付けて！」
　俺は、爪弾の移動能力を使って、上の階に移動した。
「いたな……」
　メガーヌさん、ルーテシア、ヴィヴィオちゃん、耀、ヤミ。それに

加えて見慣れない褐色の美女が1人。見た目からおそらく『Ｔｏｌｏｖｅる　ダークネス』のキャラクター、暴虐のアゼンタだろう。こいつが今回の敵だったのか。
ヴィヴィオちゃんとルーテシアは虚ろな目をしている。アゼンダの能力で操られているのだろう。
ルーテシアの首元にはナイフが添えられ、ヴィヴィオはボロボロになったヤミを抱えている。ヤミはケガとはだけた衣類という、２つの意味で直視していられない格好になっている。
メガーヌさんと耀は少し離れた場所にいる。遠目からもわかるくらい耀の顔色が悪い。
アゼンダはそんな２人の前にいた。絶対的優位者の顔だった。睨みを利かせるようだが、それが虚勢であることはすぐに分かった。メガーヌさんは必死に耀をかばっている。
「こうも毎回タイミングがいいなんてなッ！」
しかし、そういうのは大歓迎だ！
「やめろッ！」
「ッ！　翔……!?」
「夜月　翔……どうしてここに……」
「テメェは金色の死神と一緒にいた……あの女、どういうつもりだァ……？」
大声を出すことで、全員の気を引いた。
「一つの賭けだったけど、今日はツいてるみたいだな。いや、旅行先で襲われたと考えれば、運はトントンになったってところか？」
「……ふん、悪運なのは変わりないけどね。連れの女を見つけられて舞い上がってるところ悪いけど、何一つ状況は変わってないんだよッ！」
「マン・イン・ザ・ミラーか」
「……ッ！　よ、よく知ってるじゃないか。あの女が固執してた意味が、少しだけ分かった気がするよ。でもね、それを知っているなら、ここに入ってきた時点で負けてるっていうことも理解出来るんじゃないのかい？」

体の中にある異能力――『スタンド』、『個性』、『闇の魔法』、その他の武器が使えなくなっている。
「魔力だけじゃあない！　超能力、魔術、もちろん銃も刃物も！　部屋の隅々まで掃除するみたいにな！　掃除し忘れている部分なんてない！　今のお前はただの一般人になっているんだよぉ！」
この世界にある魔法、魔術、超能力、それらに含まれないレアスキルは当然のこと、アゼンダ自身も持つ新種の能力であるスタンドまでもが見事に除外されている。
通信機器やデバイスも同じく、だ。
「と、思っているのかもしれないが」
俺はスタンドでこの世界に来たわけではない。龍騎の力を使って侵入してきたのだ。能力は何一つ制限されていない。
「そんなことは、お前がよくわかってるんじゃないのか？　俺はお前にここに引きずり込まれたわけじゃないってことは」
「ッ!!　そんなわけがない！　この世界は私の世界なんだッ!!　私が絶対のルールで――王様なんだよ。わかっているのかい!?」
《Ｄｕａｌ　ガッシャット！》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｗｈａｔ，ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ?》
「ＭＡＸ大変身」
《ガッチャーン！　マザル　ｕｐ！》
《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ！》
武器などいらない。みんなをここまで痛めつけていた奴は自分の手で殴り飛ばさなければ気が済まない。
暴虐のアゼンタは念動力と鞭の使い手ッ！　状況を見る限り、それは全く変わっていないッ！
「う、動くなッ！　ガキを殺す――」
《鋼鉄化》
言われる前に、ヴィヴィオとルーテシアに鋼鉄化のエナジーシステムを放り込む。効果があるうちは、普通のナイフ程度は通らない。

「これで決まりだッ!!」
《ウラワザ！》
《ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＣＲＩＴＩＣＡＬＳＭＡＳＨ！》
「でっ、出ていきやがれぇエェェ！　マン・イン・ザ・ミラーッ！　こいつをここから追い出すんだァァァァッ!!」
スズメの涙ほどの効果もない念動力の拘束を引きちぎり、アゼンダに迫る。
アゼンダは最後の抵抗を見せる。しかし最も効果のある抵抗だった。この世界から追い出されれば、二度とみんなを救出するチャンスは訪れないだろう。
掃除機に吸い込まれるように、床に落ちているピカピカに磨かれたナイフに、体が吸い込まれていく。スタンドに引き込まれていなくても、追い出すことは出来るらしい。
こればっかりは、気合でどうにか出来るものではない。
《伸縮》
さらにエナジーアイテムを使用。
炎をまとった拳が、ゴムのように伸びた。鋭角に螺旋を描きながら曲がる俺の拳は――――アゼンダの頬をぶち抜いた。壁にたたきつけられるアゼンダは完全に白目をむき、気を失っていた。
それと同時に、世界にも変化が訪れる。
気が付いた時には、全員揃って元の世界に戻っていた。
周りには人がいない。
アゼンダが気を失ったことで、ヴィヴィオたちを操っていた能力が解けたようだ。そのまま気を失った。
「ありがとう、翔。助かった」
「体調は元に戻ったみたいだな」
数秒前まで人に背負われてぐったりとしていた耀だったが、すでに自らの足で立てるほどに回復していたらしい。
「ううん、まだかな」
「まだ？　何処か怪我したのか？」
「うん。もうフラフラだから。おんぶしてみんなのところまで連れて

行って？」
「メガーヌさーん」
ケロッとした顔でよく言うな、お前は。
「ごめんね？　私にはルーテシアがいるから」
「ルーテシアは俺が運ぶので」
「あはは、冗談がきついわよ？」
変身を解いてヤミのもとへ向かう。
「ほら、羽織っておけって」
「……はい」
俺はその辺から適当に持ってきた上着をヤミに渡した。ヤミの着ていた服はズタボロだったからな。
流石のヤミもいつもの憎まれ口は叩かない。素直に受け取ってくれる。お礼の言葉はないけど。その代わり気を失ったヴィヴィオを抱いて、唇をかみしめている。今回のことについて、何か思うことがあるんだろう。
ここで何か言っても、逆効果になるだけだろう。
こうして、襲撃は終わりを迎えたのだった。

オフトレーニング旅行　～仲直り作戦⑥～

現実世界に吐き出された男は、人のいなくなったお店から脱出していた。目立つ装備はすべて捨て、最低限の装備だけを持って。

鏡の世界から強制的に吐き出されたということは、アゼンダに何かあったのか、それとももう用済みだと判断され捨てられたのか。

どちらにせよ、この場に留まっているのは危険すぎる。

「アゼンダはもちろん、あの女とも連絡が取れない……クソッ！」

逆探知の危険を考え、端末も捨てる。今回の計画のために使っていたものだ。惜しくはない。

アゼンダと男が島に来れたのは、赤毛の少女の手引きがあったからだ。フェイトによって壊滅した犯罪者グループの生き残りには、指名手配をかいくぐって装備を整える余力などなかった。

「とにかく、この場から離れなければ。援軍を呼ばれれば逃げ切れない」

アゼンダのスタンド能力さえあれば、その援軍すらも全員無力化出来ていた。だが、無いものねだりしていてもしょうがない。今回の作戦は失敗だったと諦め、次の機会をうかがうしかない。

問題は、すっかり人払いされてしまったこの場所から、どう逃げ出すのかということだ。虎の尾を踏んでしまった男が、逃げきれるのかということだ。

着実に狭まっていく包囲網。翔が連絡してそこまで時間は立っていないはずだが、よほど優秀な人間がいるらしい。男には心当たりがあった。

とうとうその時が来た。

「管理局の高町なのはです。少しお話、よろしいでしょうか？」

白を基調としたＢＪ（バリアジャケット）に身を包み、手には科学による魔法の杖、レイジングハートを持つ、犯罪者の恐怖の象徴、高町なのはが空から降りてきた。

男は震えそうになる声を押さえつけ、出まかせで乗り切ろうとする。

「ッ!!（し、白い悪魔だと!?　よりにもよってこいつに見付かるなんて……ッ!!）い、いや、避難勧告も出ている。ここで立ち話というのは少々危険なのでは？」
「問題はありません……画像照合、終わりました。あなたを拘束します」
「クッ――――なっ!!」
なのはには最初から話し合う気などなかったのだ。
桃色の輪っかが、男の体を拘束していた。すっかり簀巻きにされ、身動き一つとれなくなってしまった。
拘束用の『バインド』の魔法、魔力を使った手錠だ。込める魔力によって性能が変化する。なのはの魔力で編まれたバインドで拘束されてしまえば、逃げ出すのは不可能だ。
しかも、この量は普通に拘束する時に比べても明らかに多い。どれだけ気合が入っているのか分かるというものだ。
絶対に逃がさないという鉄の意志が。
男は身動きが取れない以上に、なのはの意思に圧倒され、逃げるという選択肢を取れなかった。
「こちら高町なのは。目標の人物を捕えました。これより連行します」
男は引き渡されるまで、全く抵抗することは無かったのだった。

俺が戦った少女と、フェイトさんを襲っていた男を取り逃してしまったとはいえ、俺が関われることは終わりのようだ。
訓練を切り上げて駆けつけてくれた高町さん達が、あの後すぐにそ

の場を引き継いでくれた。俺は気絶したアゼンダを送り届け、事情聴取に応じる形になった。
特にアゼンダは拘束してもスタンド能力で逃げてしまうため、鏡のない部屋に閉じ込める必要がある。そのあたりの説明も必要だ。
それにしても、今回は3人中2人を取り逃してしまうとは。何たる失態……でもないな。こんな街中で襲われて死者が0人だったんだ。戦っているんだから、多少のケガで落ち込んではいられない。
ま、ウォズを名乗るあいつがいなかったら、死んでいた人がいたのは間違いない。それによる二次破壊も。すごい微妙な気持ちだ。次に会ったら話さないといけないことがたくさんだな。
怪我人はヤミとテスタロッサさん――――もといフェイトさんの2人だ。
フェイトさんは肩を撃たれていたため、すぐに病院に行ってもらわなければ。フェイトさんのことを見た高町さんの顔は……まあ、敵に回したくはないとだけ言っておきましょうか。
そしてもう1人の怪我人のヤミだけど、彼女も病院行きだ。でも、フェイトさんとは違い、そこまで深い傷はなかった。外から見ると痛々しいけど。
戦っていた俺たちは、そろって救急車に乗って移動した。ちなみにアゼンダも。俺の攻撃で顔を火傷したからな。
みんな揃って治療を受けている間、俺は聴取を済ませた。
途中、男の方が捕まったと連絡が入ったが、結局俺が戦った少女が捕まることは無かった。あのメンバーでも捕まえることが出来ないとはね。
洗脳されていた2人には特に傷はなかった。アゼンダが気を失ったことで、能力も途切れたんだろう。
「1日が終わるねー」
「そうだなー」
せっかくの旅行の午後を丸々消費してしまった。あいつらマジ許さない。
今は病院のソファーに座って、耀と一緒にぼかーっとしている。

「全く、とんだ目に遭っちゃったわね」
「そうですね……ヤミさん、大丈夫かな……」
首に傷が残らないようにテープを張っているルーテシアは、すでにケロッとしている。図太い根性してるよ。母親のメガーヌさんは、すでに帰って夕飯の準備だ。買い物どころではなくなってしまったため、残っている材料で何とかすると言っていた。
対するヴィヴィオは見るからに気分が下がっている。もうサゲサゲだ。
操られていたんだからしょうがないが、ヤミをぼこぼこにしたんだ。それも、試合じゃなくてただの暴力で。気分も落ち込むというものだ。
処置が終わったヤミが、角から顔を出した。
あの白いワンピースはすでにボロ布になっていたため、お店から適当に買ってきた紺のジャージを着ている。
「もう少し良いの無かったの？」
「贅沢言ってるんじゃないよ」
まさか、そういうのに無頓着な耀にも微妙な顔をされるとは。でも、ヤミにもこだわりはないだろ。将来的にはわからないけど今は。
ヤミは俺達、正確にはヴィヴィオを見て、こちらに走り寄ってきた。座っていたヴィヴィオも立ち上がる。
「ヤ、ヤミさん！　お身体は……うわあ！　ヤミさん!?　ど、どうしたんですか!?」
そのまま、ヴィヴィオの背に両手を回して力を込めた。
「良かった……！　あなたが無事で。本当に良かったです……！」
「……はい。ごめんなさい。私のせいで、ケガさせちゃって」
「違います。私のせいなんです。今回あなたが狙われたのは。全部私のせいで……っ」
涙こそ流していないが、その声は震えている。しばらくするとヤミは体を離す。
「夜月　翔。ドクター・ミカドには申し訳ないと言っておいてください」

「出ていくつもりなのか？」
「え!?　そ、そんな!?」
　今度はヴィヴィオが涙目になる。出ていくという言葉だけですべてを悟ったらしい。聡い娘だ。
「今回のことでよくわかりました。やはり私は、こんなところにいるべきではありません。周りに迷惑が掛かります」
「そんな！　全然迷惑なんて思ってないですからっ！　夜月さんも止めてくださいっ！」
「どうしてもって言うなら、止めないけど」
「ちょ！　翔さん!?　どうして……っ」
「……」
　どうしてもこうしてもない。
「俺だって、いつまでも守ってやることは出来ないからな」
「守る？　あなたが、私を？」
　わざと少し挑発する。
「今日の戦いを、それ以外の言葉でどうやって表現すればいいのか、俺にはわからないな」
　その言葉にヤミは悔しそうな顔をする。言ってる俺も俺だけどな。さっきも言った通り、今回みんなが助かったのはウォズのおかげなんだから。でも、使えるものは有効に使ってやるさ。
「ヤミが昔のあれこれで狙われるのはわかった。で、今回怪我人も出たよ。でも良かった」
「良い……っ!?　そんな馬鹿な！　怪我人が出たんですよ！」
「怪我が良いわけじゃない！　誰も死ななくて良かったって言ったんだ」
「ッ!!」
　叫んだ俺に全員が怯む。
「出ていくのは勝手だ。でも、今回逃げた奴がヴィヴィオの情報を流したら、お前を狙う奴が利用するかもしれない。いてもいなくても、狙われるのは変わりないんだよ。ここにいてもいなくても、変わらないんだ」

「それ、は……」
　こんな簡単なこともわからなかったんだな。今まで、ずっと一人だったから。
「1人って楽だよな。何をしても全部自分のせいで済む。でも、もう無理なんだよ。昔みたいな一人に戻るのは。周りと関わったんだから。不自由な関係を持ったんだ」
　不自由かもしれないが、心地よい関係を築いていたんだ。一度築いてしまえば、そう簡単に捨てられるものではない。ヤミのような娘であればなおさらだ。
「じゃあ、どうすれば」
「守ればいいだろうが」
「人を守るということですか？」
　最終的にはそうなってほしいとは思うけど。
「違う」
　今は否定しておく。
「ヴィヴィオを守るんだよ。お前はヴィヴィオを守るだけでいいんだ。わけわからない他人を守れって言ったって、ヤル気でないだろ」
　そんなこと出来るのはもっとお人よしなヤツだ。ヤミは違う。
「周りは気にしなくていい。それは俺が「俺たちが」……俺たちがカバーする」
　耀が俺の間違ったところを訂正してくる。
「小難しいことは考える必要はない。本人の我が儘が、一番の正解だ」
「我が儘が……」
　ヤミはヴィヴィオに向き直った。
「高町ヴィヴィオ、ごめんなさい。これからも迷惑をかけることになるかもしれません。ですが私は、この関係を投げ出したりしません。だから、その、これからも……」
「はい！　仲良くしてくださいね！」
　ヴィヴィオは目尻に浮かんだ涙を拭い、今度はヴィヴィオから抱き着いた。
「悪い男だね、翔は」

「うるさいぞ」
「そうやって女の子を落としてるんだもんね」
「はいはい」
ルーテシアと耀、いたずらっ子が2人揃うと相手をする俺も大変だが、もうその程度では慌てないのである。
「む、つまらないなー」
「ま、ヤミさんに言った通り、私たちのことは守ってくれたもんね？」
「もうボロボロだった私を助けてくれたよねー？」
「まあ……」
スタンドがなければ、今回の戦いはどれだけ楽だったか。結局のところ、俺達異邦人がこの世界に迷惑をかけているんだもんな。
「やらなきゃいけないって気持ちになるさ。誰だって」
結果論じゃない。次こそはしっかり守ってみせる。

アゼンダは、反射するものがない特別な部屋に閉じ込められていた。そのせいで、マン・イン・ザ・ミラーを使って鏡の世界に逃げることも出来ない。これは翔のアドバイスのおかげだった。
「いったい何が……」
何やら外が騒がしい。
やがて、騒ぎの大元が姿を現した。
「ッチ、クソが。あんたかい」
「こんにちは、暴虐のアゼンタ」
扉の上部にある小さな窓から見えたのは、赤毛の少女だった。
「まさか、あんたが助けに来るとはね。それとも始末しに来たのかい？」

「そんな顔しないでよー。どっちかって言うと助けに来たんだよ？」
わざわざ、暗殺に失敗した暗殺者を救出するなんて、そんなリスクのあることを行うわけがない。そもそもアゼンダと少女は仲間ではないのだ。お互いに利用しあう、ビジネスパートナー。
「けっ、そうかいそうかい。あの男も助けるのかい？」
「ううん、あっちの方は助けろとは言われてないかなー。それに、あなたを助けに来たっていうのも、正確じゃないんだよね。どちらかというと、あなたの能力を回収しておきたいと思って」
「なんだと？」
扉がブチ壊される。バトルスーツ姿の少女が一歩踏み出してくる。いつもと違うのは、手に見慣れない装置が付けられている点だ。
「じゃ、返してもらうね」
「ま、待って――――」
アゼンダの意思は聞いていなかった。
丸腰のアゼンダに抵抗は出来なかった。頭に刺さっていたＤＩＳＣを抜き取られ、気を失う。
（メア、そろそろ脱出しろ。時間をかけすぎだぞ。港に向かえ。篠ノ之博士が待っているぞ）
（はーい、マスター）
メアと呼ばれた少女は元来た道を戻るようなことはせず、変形させた腕から撃ち出したバスターライフルで道をこじ開ける。
外はすっかり暗くなっている。
（それにしても、どうしちゃったんだろうね、お姉ちゃん。変身能力が使えないからって、こんな奴に負けちゃうなんて）
（予想以上に高町ヴィヴィオへ気を許しているのだろう。日々の生活も影響しているのかもしれないが）
（試しに高町ヴィヴィオを殺してみる？　そうすれば、元に戻ってくれるかも）
（その場合、金色の闇と我々の対立は避けられなくなるだろうな）
（そっかぁ……じゃあやめたほうがいいかもね）
複数人の足跡が、どんどん部屋に近づいてくる。

「また会おうね。お姉ちゃん」
夜に身を躍らせ、闇に溶けていくのだった。

また別の場所、ビルの上から眼下の雑踏を見下ろす男がいた。翔にジクウドライバーを渡した男――ウォズだ。
「かくして、夜月　翔は予定よりも早く仮面ライダージオウの力を手にした。そのおかげで助かった命があり、回避された悲劇があった」
ウォズの持つ本には今回の事件の顛末が書かれていた。フェイトが助かり、ヴィヴィオとルーテシアの洗脳が説かれ、ヤミが自分の在り方について考えるようになり、翔が敵を打倒した。
それとは真逆のことが書かれている。分厚い本に記されているのはこの世界の出来事ではなかった。
「これからの悲劇すらも打ち砕けるのか……ただ、一つ言える事は――彼の歩むべき覇道には、多くの困難が待ち受けているということだ」
楽しそうに言うウォズの体は、徐々に透けてその場からいなくなった。

オフトレーニング旅行　～帰宅～

「あー、くたくた」
膨れたお腹をさすりながら、ソファーでくつろぐ。
ホテルアルピーノに戻った俺たちは、メガーヌさんが作ってくれた食事を済ませた。
事件のせいでまともに食材を仕入れることが出来なかったが、冷蔵庫の中のものを総動員して、パスタパーティを開催したのだ。
ヤミは以前よりは積極的に会話に参加しているように思う。さっきのお話で、少しとはいえ考え方が変化したんだ。
それは俺に対してじゃなくて、ヴィヴィオに対してなんだけどね。良かったと思うよ、本当に。うん。
そんな楽しい食事だったが、メンバーは少し減っていた。▪
まず、怪我をしたフェイトさん。拳銃に撃たれていたからね。次に犯人逮捕と諸々の処理をするために、現地の警察を手伝っている高町さんとランスターさんだ。そこに加わる形で、桜もここにはいない。
スバルさんはここに残っている。事務作業は得意じゃないから、行くと逆に足を引っ張ってしまうのだとか。体を動かすことなら得意なんだけどねーとは本人の談だ。
今は食器の片付けも終わり、適当にＴＶを流し見している。
いつもは元気な子供たちも、怪我をした人が出てしまったとあれば、静かにもなるだろう。
しかしそれ以上に残念なのは。
「やっぱり、明日帰るのね」
「はい。残念ですけれど、こんな事件があって純粋に楽しむことなんてできないですから」
「子供たちも、こんな状態で遊ばせたら、怪我をしかねないですからね」
スバルさんとアスナは残念そうに言う。
落ち込んでいる子供たち。明日予定していた陸戦試合も、心ここにあらずの子供たちを参加させるのは危険だ。そして、子供たちをのけ

者にしてまで行うものではない。
「う～、やだよー!!」
「どうしてもダメなんですか？」
「ダメです。みんなにケガさせるわけにはいかないんだから」
口をとがらせるヴィヴィオとリオをアスナが諌める。こうしてみると本当にお母さんみたいだな。若妻アスナだね。これは気持ち悪いな、俺。
あまり調子が変わっていないのは、理子と狂三、そしてアリアだ。3人とも、そのくらいのケガは想定内といった様子だ。
「陸戦試合は今回しかできないわけじゃないですからね。また次の機会を待ちますよ」
「あら？　それじゃあ来年も来てくれるのかしら？」
「流石に来年は自腹で来ますから」
「ふふ、楽しみにしてるわね」
メガーヌさんはニコニコと笑っている。
試合を楽しみにしていたのは小さい子供たちだけではない。中くらいの子供たち、アインハルトと綺凛である。この2人も、年少組に負けず劣らず試合を楽しみにしていた。
「残念です……」
「はい……」
そんな2人の様子を見たルーテシアはデバイスを操作した。
「もう、しょうがないなー」
空中に映し出されたディスプレイにはどこかのサイトのページが表示されていた。
「これ、何ですか？」
「本当は、明日の試合が終わってから見せるつもりだったんだけどね」
画面を操作すると、サイトと同じくシンプルなロゴで、しかし大きなフォントが表示された。
「インターミドル……」
「……チャンピオンシップ？」
ちびっ子たちも何事かと集まってきた。

「正式名称はディメンション・スポーツ・アクティビティ・アソシエイション。頭文字をとってＤＳＡＡよ」
「つまり、公式試合……大きな大会ってことだ。今６月だから……ちょうど２か月後の８月に学園島で行われることになっている」
「これに出場して見ないか、ということですか？」
「そういうこと」
　ノーヴェさんも説明に加わる。
　ルーテシアはウインクして画面を操作していく。画面をスクロールしていくと募集要項が映し出されていく。
「実は私も、スバルさんのお母さんも出場したことがあるのよ。懐かしいわ～戦いに燃やした青春の時代」
　昔のことを思い出しているのか頬に手を当てている。
「特定の国が開催しているわけじゃないから、エントリーすればだれでも参加できるの。その分、厳しい予選を勝ち上がらないといけないんだけどね」
「世界各国で中継される大会だもの。本戦に出場できるだけでもすごいことよ」
　それは、いったいどれだけ狭い門なんだろうか。
「ＤＳＡＡは魔法戦技の大会だから、魔法が使える人しか参加できないけれど、優勝すれば、１０代の中では１０本の指に入る実力者っていうことが認められることになるわけ」
　アインハルトと綺凛、とりわけアインハルトの顔に隠し切れない興奮の色が浮かんでいる。
　それは声色にも表れているのだが、本人は隠せていると思っているらしい。
「これをどうして私たちに？」
「ノーヴェさんに言われて、ね？　アインハルトと綺凛も、昔は色々あって伸び伸びできなかったんでしょ？　アインハルトにいたってはやんちゃしてたみたいだし、こういう健全な大会にも出てみたらって」
「それは前の話ですよ！　今は違いますからっ！」

いったい、いつの段階から、ルーテシアとノーヴェさんは計画していたんだろうか。
「ホントか～？　ああ、今は他の事にお熱なんだっけ？」
「はい？　他の事ですか？」
「……こりゃ先は長そうだな、翔」
「この人とは、ここで決着をつけるべきか……！」
どうしてこんなところで、そのお話を蒸し返してくるんだっ！
アインハルトはもう完全に置いてけぼりだ。話の流れに、自分が中心にいるとは思っていないのか。
後ろにいる女の子たちは『はいはい。そういうパターンね』って、もう納得したような顔をしている。実際に、恐らく、高い確率で、その予想は間違っていない。
ニヤニヤとするノーヴェさんにシャドーボクシングをしている俺は完全に放置され、ルーテシアは話を進めている。
「ヴィヴィオたちは公式の試合には出たことないんだもんね？」
「そいつらにはまだはえーだろ？　いくら何でもさ」
そしてノーヴェさんすらバッサリと話題を切り替えてくる。
「そんなことないです！」
「大会に出るために特訓しますから！」
「お願いします、師匠！」
「お、おいっ！　だから師匠はやめろって！　別に師匠ってわけじゃねえんだからさ。ただ、ちょっと面倒を見てるだけで……」
ぶつぶつと言い訳がましいセリフを吐いている。認めてしまえば楽になるだろうに。
「ちなみに、今年は私も出場するわよ！」
「「えー!?」」
ルーテシアの出場はもう確定しているようだ。
しきりに『いいなぁー』を連呼する子供たちに、ノーヴェさんの顔が段々と面白くなってきた。これはもう一押しで行けるのでは。
「綺凛さんとアインハルトさんはどうするんですか!?」
「私も、出場してみたいです」

「はい。今の自分がどこまで行けるのか、試してみたいと思います」
「……そっか」
　しかし、それで簡単にまとまる程度ならば苦労はしない。この状況に満足できていない娘が3人もいる。
「ノーヴェさん！　3人も参加するんですよ！　私たちも参加したいです！」
「私たち、全員そろってチームナカジマですもんね！」
「おい！　勝手にチームを結成するんじゃない！」
　そう簡単に許してくれるほど、ちびっ子たちは甘くはない。むしろ、仲間が増えたことで勢いを増している。
　流石に見かねたのか、メガーヌさんが話に入って来る。
「でも参加者にはそれぞれセコンドが必要よ？」
「そいつは暇な姉さんにでも頼むさ」
「じゃあヴィヴィオちゃんたちの分も、一緒に頼めばいいんじゃないの？」
「うーん……」
　ここまで言われても渋っているノーヴェさん。いったい何が引っかかっているのだろうか。
「ヴィヴィオたちはさ、まだまだ格闘技を楽しんでる段階じゃんか。勝敗を気にするのはもう少し後でもいいじゃないかって思ってんだよ。それに、大会に出てボコボコに負けて、ヤル気がなくなるなんて姿は見たくねーんだ」
「どうかしらね。ヴィヴィオちゃんたち、そういうことで変わっちゃうような娘だと思う？」
「そりゃあ……思わねぇけどさ……」
「じゃあいいじゃない。みんなならきっと大丈夫よ。だって、こんなに良い師匠が付いてるんだもの」
「は、はい？」
　ぽかんとした顔を一気に真っ赤にした。
「い、いや、だから……っ！　～～～っ、わかったよ！　お前ら全員私が面倒見てやるよ！　でも、やるからには全力でやるからな！　大会

まで徹底的に鍛えて、いっそ優勝しちまえ！」
「「やったあ～～～!!　ありがとうございます!!」」
　照れ屋なお師匠様が認めたことで、３人はハイタッチしている。
「あ、そういえば、忘れちゃいけないことだけれど。参加条件はまだあってね……ＣＬＡＳＳ３以上のデバイスの使用。みんな持ってる？」
「ぁ、わ、わたし」
　一人、おずおずと手を挙げたのは、
「わたし、持ってません」
　アインハルトだった。せっかくの空気に水を差すのが申し訳なかったのか、縮こまっている。
「覇王流にうまく合う物がなくて、今まで最低限のものしか使ってこなくて」
「たしかに、古代ベルカ式のデバイスで性能高いのはレアだからね……でもご安心！　私の交友関係を舐めてもらっちゃあ困るよ！　詳しい人がいるから頼んでみるわ！」
「あ、ありがとうございます！」
　これですべての問題がクリアされたな。大会に出るのは、綺凛、アインハルト、ルーテシア、ヴィヴィオ、コロナ、リオの６人になった。クロは体質上、こういった大会に参加するべきではないし、ティナも特に興味がない。
「なに他人事のように言ってんの、翔。アンタはアンタでその時期は忙しいはずよ？」
「は、何で？」
　アリアが腕を組んで近づいてくる。
　俺は別にそんな時期の予定を立てた覚えはないんだけど。や、何か事件が発生する可能性は非常に高いと言いますか、おそらくそうなっていると思うと言いますか。その場面が容易に想像できるのは悲しいけど。
「８月は、学園島にたくさんの観光客が来て、沢山のイベントがあるの」

「ふん？」
「ＤＳＡＡは未成年の大会だけど、その年齢制限と武器制限がなくなった、２人一組のチーム戦、『鳳凰星武祭（フェニクス）』、超能力者が競い合う『大覇星祭』、その他たくさんの学術的、科学的な発表会、新製品のお披露目……ひと月の間にイベントが目白押しなの」
　なんでわざわざまとめてしまったんだい？　４年に一度とかにすればよかったものを。
「色々利権が絡んでくるらしいわね。お偉いさんが大会の優勝者に声をかけたり、優秀な研究者の引き抜きをしたり。文句言ってもしょうがないわ。で、その期間は人の出入りが多くなるでしょ？　しかも、世界各国の会社の役人、政府関係者も集まるなんて、そうあることじゃないわ。管理局だけだと手が回らないのよ。テロ、軽犯罪、警備、護衛、人探し、迷子、スリ、交通整理。武偵への依頼はいくらでも出てくるのよ。島にいればね」
　地獄のような一月だな。俺達に夏休みは存在しないのか。
「島の周りにおっきな客船がたくさん停まって、そこをホテル代わりにするくらいには人が来るイベントだからねー。単位が足りない生徒はここで何とか挽回しようとするらしいよー」
　これは理子の声だ。
　単位が足りないか……そうなってしまいそうなのが悲しいな。正直今の段階で、いったい何日学校に行っているのかってレベルだ。
　待てよ。
「島にいれば？　アリアはその時期は島にはいないのか？」
「ええ。地中海の別荘にいる予定よ？　炎天下の中、働くか家に引きこもってないとまともに生きてられない島になんていられないでしょ？」
　引き込まってないと生きられないって、そのくらいすごい人口密度なのかよ。それにしても流石は貴族様だ。サマーバケーションは避暑地で過ごすってことだな。
「私はさすがにずっとではないけどね。２週間くらいは旅行に行ってるよ？　夏は、戦争があるから……ビックサイトでね」

コ○ケか。脱水には気をつけろよ。
「翔も別荘に来る？」
「いや、アインハルトたちの試合があるから。綺凛の戦妹（アミカ）でもあるし。そのあたりは確認するよ」
実際には、絶対何か起こるだろうから島に残っていたいってだけだ。地中海は遠すぎる。日本本土もな。
それにしても8月か。また一つの目的地が出来た気分だぜ。
残念というか、その後の入浴、就寝まで、特に何か起こることは無かった。いくら何でも、事件の後だということで、今夜はみんな自重したんだろう。
こうして、俺達の旅行最後の夜は更けていくのだった。

そのあとは幸い、特に事件が起こることは無かった。次の日起きると、高町さんとランスターさんが帰ってきており、朝食を食べた後はすぐに帰ることになったのだ。
空港に向かう途中で、病院にいたフェイトさんと合流する。撃たれた方の腕を吊っていたが、それ以外には問題はなさそうだった。
早めに帰ることになった俺達だったが、その際、今回の事件の犯人2人を護送することになった。特にアゼンダはスタンド能力を持っていたということで、俺たちの島でさらに厳重な取り調べが行われるためだ。
まさか俺達と一緒の飛行機に乗ることになるとは思わなかったが、何かあったとき対処にあたるメンバーで、これ以上の布陣はないため、しょうがない。万が一にも逃げられるわけにはいかないのだ。
俺達にとっては休日を返上する形になってしまったがしょうがな

い。
特に暴れられることもなく、俺たちは島の土を踏むことができた。
「ごめんね、みんな。旅行、早めに切り上げることになっちゃって」
「この埋め合わせは絶対にするから。陸戦試合もその時にね」
六課の人たちは、２人を最新式の装甲輸送車に乗せる。この車を迎えによこしたと聞いたときは、丸腰の人間２人にここまで必要なのかと思ってしまった。貴重なスタンド使いの犯罪者だからかな。
「あ、夜月君」
去り際に、フェイトさんに呼び止められた。
「なのはに聴いたんだけどね。捕まってたアゼンダの部屋が壊されたらしいの」
「壊されたのにアゼンダは逃げていなかったんですか？」
何ともおかしな話だ。
「誰かとすり替わっているとか、そういうこともないみたい。少なくとも、私たちが調べられる範囲で調べて、だけど」
新手のスタンド使いの可能性もあるってことね。
「だから一応伝えておくね。何かわかったら、また連絡するから」
「はい、ありがとうございます」
吊っていた手と反対側を振って、フェイトさんは車に乗っていった。
「……まあ、そうね、雪菜さんや」
「なんですか、先輩」
「特に何かあったというわけじゃあないからね」
「何も言ってませんけど」
俺はその圧力に負けて、帰り道、事件であったことを洗いざらいしゃべり、誤解を解くのだった。

８月に向けて　編
訪れる転校生

結局、家でゆっくりしていることが、一番体を休めることに繋がった。旅行に行っているはずだった残りの日数、家でゴロゴロして過ごしたのだ。
そして、久しぶりの登校日になった。全員が制服に着替え、次々に学校に出発する。
クロとティナはヴィヴィオちゃん達との待ち合わせの場所に向かい、中等部ということで意外に仲が良い雪菜と耀は、嫌々な耀の腕を引っ張り家を出た。一番多い高等部組は俺、アスナ、狂三、アリア、理子、桜。そして、
「行きましょう」
「おう」
防弾制服に身を包んだヤミだった。学校に行くのは嫌々、しかも、行く時は絶対に1人で家を出ていたヤミだったが、今日はみんなで行くことになった。
旅行は散々な結果に終わったけど、こうした変化があったのは、良かったのかもしれない。前に比べれば、絶対に良くなっている。
「じゃ、行ってくる」
「はい、気を付けて」
「何かあったらすぐに呼べ」
あ、ちなみに、セイバー2人組はお家でお留守番です。サーヴァントを学校に編入させるの
は無理でした。
「最近、扱いが雑じゃないか？」
「同感です」

俺達が学校に到着したのは、始業時間ギリギリだった。席について一息つくと、時間丁度に先生はやってきた。
しかし、やってきた先生は、教室にいる誰よりも小柄な女の子だった。
「さっさと席に着け、馬鹿ども」
とても教師とは思えない高圧的な言葉とともに教室に入ってきたのは、俺たちの担任である『南宮　那月』だ。
自称する年齢は２６歳だが、背格好はギリギリ中学生に届くかどうかというもの。その童顔をこれまた教師とは思えないほどフリルとレースをあしらった黒のワンピースが飾っている。見ていてこっちが暑くなってしまいそうだ。本人は汗一つかいていないというのだから、卑怯である。
陰で『那月ちゃん』という愛称で呼ばれては、出席簿の角をお見舞いする一種の名物教師だが、現場では『空隙の魔女』と恐れられる一面も持っている。
もっとも、ヤクザ一歩手前の武偵を育てるための学校だ。廊下で普通に銃をぶっぱなす先生もいれば、能力を使わない素手で大型バスを横転させる怪力の持ち主もいる。
あまりにも言うことを聞かない生徒には、この先生方によるありがたい体罰が待っている。
生徒の行動は迅速だった。統率の取れた軍隊のように席に座り、無駄話する生徒は一人もいない。
「よし。まず初めに、今日から貴様らのクラスメートになる転校生を紹介する」
満足そうに頷いた那月ちゃんは、事務的に告げた。
この学校、実はとても転校生が多い。この学校に来る人も、去る人も多いのだ。実際ここに来てから2ヶ月ほどしか経っていないが、俺

のクラスだけですでに3人ほど入れ替わっている。
場所的に俺の家に召喚された女の子は全員入学するが、それ以外にも転校したり、退学したり、転校してきたりする生徒は何人かいる。
そしてその転校(特にいなくなる方)理由を知る人はあまりいない。どっか遠くの依頼を受けに行くとか、武偵を引退したとか、はたまたヤバい事件に首を突っ込んで死んでしまったとか。
危ないことをしているからね。その辺りはしょうがないことだろう。
「転校生、入ってこい」
それにしても、どういう子なんだろうか。事前リサーチ部が全く騒がないなんて珍しいこともあったな。
扉を開けて入ってきた人物に、俺は驚愕することになった。
「黒咲メアです。よろしくお願いします」
赤毛のショートヘア……かと思えば、長い三つ編みに編み込まれていることがわかる。どこから調達してきたのか、防弾制服をしっかり着て、笑顔を浮かべている女の子だ。
黒咲メア――メアがそこに立っていた。
「嘘だろ!?」
俺は思わず立ち上がっていた。
あいつと戦ってから、数日しか経ってないんだぞ？　や、違うな。ヤミのことを調べたうえでのあの計画の実行だとすれば、もっと前々から準備されていた可能性は高い。
しかし、だからと言っても、わざわざこんなに早く仕掛けてくるとは。確かに俺と戦った時はフードで顔を隠していた。とはいえ、俺と普通に会話している。無防備すぎるだろう。
目的はヤミだろうか。メアがいるということは、もう1人にも気を付けないと。
「どうした夜月」
「どうしたって――」
那月ちゃんの鋭い視線で我に返る。
クラス全員の視線が俺に向いていた。あのヤミですら、怪訝な表情

を浮かべている。
「――どうしたんでしょうね」
「馬鹿か貴様は。さっさと座れ」
「はい」
言われた通り、俺は席に座り直した。めちゃめちゃ恥ずかしいわ！
「黒崎、適当に座れ」
「はい。適当に座ります」
適当すぎるだろ。
メアはちょうど空いていた席、廊下側の前から3番目の席に座った。俺ともヤミともほどほどに離れた席だ。授業を受けるならば、毒にも薬にもならない距離。戦うとすればすでに間合いだ。
「それでは、ホームルームを始める」
那月ちゃんの声は、右から左へと通り過ぎていく。普段ならとてつもない愚行だと絶対にしないことだが、この時ばかりはしょうがない。
俺の視線はメアに釘付けになっていた。
持っていた鞄を机のわきにあるフックにかけ、那月ちゃんの方を見ている。こうしてみると普通に学校に来たように見えるけど……
「油断は出来ないな」
久しぶりの学校生活に早くも暗雲が立ち込めてしまった。これはお昼の時間に集合して情報を共有しないといけないな。や、みんなの周りで何か変わったことがないかも聞いておいた方がいいか？
「――……君？」
それにしても、今回も証拠がないせいで歯がゆい思いをすることになるとは。
「――……月君？」
しかし、この学校で事を起こすつもりなら、あの鬼教師の目を突破しないといけない。あまりにもリスキーだろう。ならば、警戒するべきは学校の外。
「夜月君！」
「っ！　な、何――」

目の前にメアがいた。
目線が低い。顎を机に乗せて首を傾げているからだ。吸い込まれそうな瞳の引力から逃れるようにのけぞる。いつの間にかホームルームは終了し、他の生徒は教室移動を始めていた。
「夜月君は行かないの？」
「い、いや。行くよ。もちろん」
メアに注意されることになるとは思わなかった。俺は急いで筆記用具と教科書を取り出す。
「ねえ、さっきはどうしたの？」
「見たことのあるヤツに似てただけだ。人違いだから気にしないでくれ」
「それ、勘違いじゃないかもしれないよ？」
いきなりの自白に、俺の意識が切り替わる。しばらくにらみ合っていた俺達だったが、やがてメアは我慢できなくなったとばかりに笑い出した。
「な～んて。冗談だよ」
「は？」
「ふふ、変なの。先に行ってるね？」
そう言うと、メアは教室から出て行ってしまった。変なのはお前だと言いたい。
いまいち警戒するべきなのか、それとも大丈夫なのか判断しにくい奴だ。しないわけにはいなかないんだけどな。
とにかく、お昼にはみんなに言っておいたほうがいいな。

「メア、対象との不用意な接触は避けろ」

「はーい。ごめんなさい」
先に行くと言って教室を出たメアだったが、屋上へ続く階段の踊り場、陰になって見えないようになっている場所にいた。
壁に寄りかかり、自分の軽率な行動を全く悪びれない。
メアの話し相手は人ではなかった。黒い靄のようなものから、少女の声が聞こえてくる。メアはさも当然のようにその靄と話している。
「メア、我々の目的を忘れたのか？」
「まっさかー。忘れるわけないよ」
空洞のように、ぽっかりと空いた穴が光を飲み込んでしまうような暗い目をしたメア。
「ヤミお姉ちゃんを元に戻す。そうでしょ？」
「ああ。その通りだ。そのために、あの男に従っているんだ。あの男からの頼みは義理立て程度には聞いてやれ。敵に回すのは面倒だ」
「うーん……面倒だなぁ」
メアたちの目的は、ヤミを元に戻すこと。暗殺者として活躍していたころのキリングマシーンのようなヤミに戻すことだ。
そしてその先にある禁断の変身（トランス）を発現させることだ。
しかし、ここまで来る過程で少し力を借りた男からの依頼もある。すなわちそれは、夜月翔の監視、さらにその力の調査だ。
「変な人だよね。邪魔なんだったら殺しちゃえばいいのに」
「実際、私たちには邪魔になった場合は殺しても良いと言っているからな。何を考えているのかわからん男だ。しかし、好きにやれと言っているんだ。遠慮せずにやらせてもらうさ」
この2人の後ろについている男は翔を気にしてはいるが、積極的に排除しようともしていない。味方になるかどうかを図っているかのようだ。
「ともかく、これ以上、無意味に夜月　翔を挑発するのはやめろ。都合のよい立場が手に入ったのだ。無くすのは惜しい」
「うん。マスターがそう言うならそうする。あ！　もう行くね！」
チャイムを聞いたメアは、最後まで軽い様子でその場を後にするのだった。

「あ、翔君！　こっちこっち！」
午前中の授業を適当にこなし、お昼になった。
初等部と中等部は建物が違うために集まることは出来なかったが、一つ上の学年のアスナ、アリア、理子、狂三、桜は食堂に集合した。
そこにヤミと俺を加えた7人でテーブル席に座った。
みんなそれぞれ個性が出るものを注文していた。野菜中心のメニュー、がっつり肉が中心のメニュー、食事ではなく、始めからデザートを食べている娘もいる。
俺は無難にカツカレー。いつもよりも集中する事柄があったせいか、お腹が空いてしまったのだ。
早速だが、本題に入る。
「メールに書いた通り、また面倒なことになった」
「こんなに早く向こうからくるなんて思わないよ」
すでにメールには書いたことだが、改めて口にする。
「今日、転校してきた黒咲メアは、ついこの間の襲撃に関与している可能性が非常に高い。あの時、俺と戦った女の子、それは間違いないと思う」
「タイミングから見て間違いはありませんわね。わたくし達のテリトリーに自ら入って来るとは、無謀もいいところですわ」
狂三の笑顔、どっちが悪役かわからないな。
「でも、犯罪に協力していた証拠はない」
「え？　でも、あの時襲われたんでしょ？」
襲われはしたけど、あの時捕まえたアゼンダ達と関係していたかと

言われると、限りなくクロに近いとはいえ、明確な証拠がない。
「それどころか、鏡っていうヒントまでもらってるし」
「それは証拠になりませんか？　適当に言ったにしては、アゼンダのスタンド能力をピンポイントに当てすぎていると思いますけれど、っと」
　仕事モードになった桜は、少し話が変わりますが、と前を置きして言う。
「翔君。今朝フェイトさんから、アゼンダの取り調べをするっていう連絡があったんですけれど、参加しますか？　フェイトさんからも良ければってメールが来ているんですけれど」
「ん、あー……どうしようかな」
　今ヤミから目を離してもよいのだろうか。と、俺から離されない視線がいくつもあることに気が付いた。
「翔君、テスタロッサ執務官から随分と信頼されてますね？」
「別に、こんな報告義務じゃないのに、よく報告されてるね？」
「それについては説明した通りなんだけど……」
　不利な話題は早々に切り上げ、話を進める。
「ちなみにヤミ、午後の予定は？」
「午後一番にビデオ講義があって、そのあとは強襲科（アサルト）で実技のテストがあります」
　テスト？　そんなのあったっけ？　そもそも、テストが終わりの休みを使ってあの旅行に行ってたはずだったんだけど……
「……受けていなかったんです。だから、追試になってしまって」
　そう言うことね。
「わたくし達、午後には予定がありませんので、良ければヤミさんと一緒にいましょうか？」
「貴重な機会だもん。取り調べに参加したほうがいいよ」
「ん。じゃあそうさせてもらおうかな」
　午後は桜についていくことにする。
「メア……黒咲メア……翔、ちょっといいか」
　理子には何か心当たりがあるみたいだ。口調が『裏』のものに変わ

り、目つきも鋭くなっている。
「赤毛のメア……私がイ・ウーから出た時とほとんど入れ替わりになって、参加してきた娘だったはずだ。入れ替わりになったから話したことなんてないし、どんな能力なのかわからないけどな」
「つまり、イ・ウーの手先ってことなのね？」
イ・ウーという単語を聞いて、アリアが犬歯をむき出しにする。
「そうかもしれないねぇ。でも、あいつを捕まえても、アリアのお母さんの冤罪は解けないと思うよ？　あの娘が入ってきたときにはもうあの状態だったわけだし」
「だったら、あいつを捕まえてそこから芋づる式に捕まえるだけよ」
そんなにうまくいけばいいが。
「そもそも、イ・ウーという組織の目的とは一体何ですか？　それが分かれば、ある程度対策が取れると思いますが」
大昔の偉大な軍師も言っているように相手のことを知らなければ、戦いようがない。ヤミの疑問は当然のものだ。
「組織全体の目的はない。各々が自分の目的に向かって、自己を研鑽する超人の集まり。それがイ・ウーだよ。だから、予測することなんてできない。たまに上の人から命令されることはあるけどね。従うかどうかは自由だし」
「そ、そんなに緩い組織だったの？」
「うん。私も完全に自分の目的のために動いてたでしょ？　そんなもんなんだよ」
超人が集まって互いに研鑽するというのは結構な話だが、その過程で迷惑を被る人がいることは確かだ。
「その活動で冤罪を着せられたのが、私のママって事ね」
アリアは憎々しげにつぶやくが、理子には軽く流されてしまう。
「そーそー。だから、目的云々なら本人に聞いた方が早いんじゃないかな？　ヤミちゃんの方こそ、何か心当たりはないの？」
「残念ながら、記憶にありませんね――――変身（トランス）能力を持った人なんて、一度見聞きすれば忘れないでしょう」
この間の戦闘で得られた情報についてはすでに共有されている。

それに。
俺はアスナと目配せする。
召喚された女の子にはヤミとメアの関係性と、メアの背後にいるマスターのこともメールで説明してある。
「高町ヴィヴィオではなく私の方に来る分には問題ありません。降りかかる火の粉は払うまでです」
「イ・ウーが絡んでるなら、私の獲物でもあるわ」
「しばらくは、みんなで固まってたほうがいいよ」
「……はい。わかりました」
前だったら拒否していただろうことだが、ヤミは素直に頷いた。この分なら、任せても大丈夫だな。
午後のことはみんなに任せ、俺は桜とともに学校を出たのだった。

転校生の目的

ヤミは真面目に授業を受けていた。

ノートを広げ、ペンを持ち、必要なことをメモしていく。受けている授業は『要人護衛学Ⅱ』。ヤミの目的に沿った授業だ。

場所は視聴覚室。大学の講義室のように席が段になって配置されている。特に座席が指定されているわけではないので、生徒は互いに間隔をあけて座っているが、その顔は皆真剣だ。

照明は落とされ、黒板付近に設置された巨大なスクリーンに映像が映し出されている。映像では具体的なケースや場面が紹介されている。

今まで襲撃する側だったヤミにとって、その知識はどれも新鮮だった。

今回は一般的な銃火器への対処方法しか紹介されていないが、次回以降で能力者の対処法についても学べる。

目標のためにも、しっかりと集中して授業を受けたいヤミだったが、どうしても気になってしまうものがあった。

「……」

昼食が終わり、いったんアスナたちと別れてから、ずっと付きまとっている気配があったのだ。

しかし、何かを仕掛けてくる気配はない。殺気どころか敵意すらない。復讐のためにこちらを観察しているというわけでもないらしい。本当にただ『見ている』だけだ。

（いったい何が目的なんですか……？）

考えてもわからない。

結局、時間いっぱいに考えてもわからないままだった。

「あ、ヤミちゃん！」
「……」
　授業が終わり、ヤミはアスナ、狂三と合流した。アリアと理子は裁判関係の別件だ。時間が微妙に合わなかったため、一緒になるのはヤミのテスト終わりになる。
「ずっと見られています」
「それは例の？」
「何かされたんですの？」
「特に何も。ただ見てくるだけです」
　向こうが手を出してこないうちは、下手なことは出来ない。生徒同士の殴り合いはしょっちゅうだと言っても、教師の前でやれば止められるのだ。道徳ではなくうるさいという理由で。
「時間がありません。行きましょう」
　あいも変わらず視線は追いかけてくるが、時間に遅れるわけにはいかない。
　武偵高の教師など、そのほとんどが、教師にふさわしくない粗暴な性格だ。特に強襲科（アサルト）の教師は。少しの遅れも許されない。
「確か、残りの２人はこの後合流でしたね。何かするならその時です」
　ヤミの発言に頷いた２人は、おとなしくヤミについていくのだった。
　強襲科（アサルト）棟までは歩いて１０分ほどかかった。通常教室からは、それなりに離れた場所にあるのだ。
　理由はもちろん、
「オラァ!!!!　死ぬまで殺（ヤ）れやァ!!」
　ガキュンガキュン!!
　常日頃から銃弾が飛び交っているからだ。
「ここ、いつ来てもこうだよね……」
「皆さん、元気なことで」
　飛び交う怒声と銃撃。打ち合わされる刃物と拳。強襲科（アサルト）の日常風

景が広がっていた。
　一番楽しそうに声を張り上げていたのは主任の蘭豹。ヤミを視界に捉えると、号令を出し、乱闘を止めさせた。
「ん？　夜月の女も一緒か。あいつはどうした？」
「今日は別の用事があったので……」
「あん？　別の用事……管理局がらみの用事か？」
「そうですわ」
　狂三が肯定すると、蘭豹は憎々しげに拳を壁にたたきつけた。壁が少しへこむ。
「ちっ！　あいつは管理局の狗に成り下がったからなぁ！　今度来たら、徹底的に痛めつけないとな！」
　ちなみに、血の気が多い一部の武偵（強襲科（アサルト）に多い）は、管理局を目の敵にしている。管理局がお上品で気に入らないからだ。半分ヤクザと言われるのはこういうところからくるのだが、気に入らないものはどうしようもないらしい。
「あはは……」
「ご愁傷さまです」
「他人事と思ってんなよヤミ。私らに再テストなんて面倒なことをさせる奴にはなぁ、２倍キツイもん受けてもらうからな。覚悟しとけや」
「ああ、だから……」
　アスナは合点がいったと頷いた。周りの生徒が妙に浮かない表情をしているのだ。さっきまで訓練していた生徒は全員再テストの受験者だった。皆同じように、これからどんな地獄が始まるのかを考えて震えていた。
「問題ありません。鈍った体を叩きなおすには丁度いいでしょう」
　ヤミは、そんな脅しに顔色一つ変えずに、訓練スペースへと入っていくのだった。

結論から言うと、ヤミは全く大丈夫だった。最後には死屍累々と言ったありさまだったが、ヤミは多少息を切らすだけで、最後まで立っていた。

今はシャワーを浴びて、誰よりも早く強襲科(アサルト)棟を出たところだ。

ヤミは、しばらく歩き回っていた。後ろにこっそりとつけている影があることを確認すると、一気に速度を上げる。

それだけではない。

校舎の壁を蹴り、一瞬で屋上のフェンスを乗り越える。軽やかに着地したヤミ。スカートでこんなことをしているから、色々と見えてしまうのだが、そこに突っ込むのは野暮というものだ。

「出てきたらどうですか、黒咲メア」

「……」

屋上まで飛んだヤミは、自分を見ていた視線もしっかりとついて来ているのを確認し、そう告げた。

「ずっと付きまとわれるのは迷惑です。いい加減にして下さい」

「流石ヤミお姉ちゃん。気が付いてたんだね」

メアはあっさりと姿を現した。ヤミの超人的な動きに付き合うだけの能力を備えている。彼女も十分に超人だ。

手を後ろに組み、赤毛の三つ編みを揺らしている。ヤミが凄んで見せるが、メアは全く動じない。並みの武偵なら腰を抜かすほどの殺気だというのに。

ヤミはつま先で自分の影を叩いた。ここに潜んでいる人物にまだ出てこなくてもよいと伝える。

他の場所にも、何人か潜んでいる。ピンク色のツインテールが少し見え隠れしている。が、すぐに引っ込んだ。一緒にいる人物が、何とか抑え込んだんだろう。メアの真後ろだったため、彼女の視界には入っていない。

「貴方の目的は何ですか？」
「目的だなんて、そんな寂しいこと言わないでよ――――お姉ちゃん」
「……変身（トランス）能力を持っているからと言って、私とあなたは別に姉妹というわけではないでしょう」
メアが変身（トランス）能力を持っていることはすでに、翔に知らされている。
「あー、夜月君に聞いたんだ」
メアのおさげが不自然に蠢いた。鞭のように、尻尾のように。丸い髪留めから先、おさげが変形する。鋭い爪を持つ手がヤミに向けられた。
「夜月君に何を言われたの？」
「何を？」
「ヤミお姉ちゃん、急に今日からヤル気出したよね？」
それは間違いではなかった。
この前の事件があり、翔の説得（挑発）のおかげで、翔の家にとどまり、ヴィヴィオたちとの関係を続けようと決めた。あれがなければ、間違いなく以前の生活に戻っていただろう。
「私たちの予想では、もうこの学校には来ないんじゃないかなーって思ってたんだけどね？　準備が無駄にならなくてよかったけど」
「それで？　結局、目的は何なんですか」
メアは最初の質問には答えていない。だが、そう簡単に答えが得られるとは思っていなかった。あくまで会話を続けるための問いかけに過ぎない。
しかし、意外にもメアは簡単に口を開いた。
「この学校に来たのはね。ヤミお姉ちゃんのことを知るためなの」
「私を知る……？」
「そうなの。ヤミお姉ちゃん、私たちは『何』なのか、忘れちゃってるんじゃない？」
メアは一歩前に踏み出した。
「私たちは兵器。変身（トランス）兵器なんだよ？　人を殺すための道具なのに、人間のお友達なんか作って、どうしちゃったの？」
メアは本当に分からないと言いたげな顔をする。

「うん。わかるよ。兵器は負けたら壊れるはずなのに、夜月　翔に負けたのに生きてるから、おかしくなっちゃったんだよね？　だから人間の友達を作って、人間のまねごとをしてるんだよね？」
「勝手なことを……っ！」
　そうではないと否定するがまるで効果はなかった。
「だから、ヤミお姉ちゃんが学んだこと、知ったことを私も知って、最後に全部壊してあげる。そうすれば、ヤミお姉ちゃんも元に戻ってくれるよね？」
　メアは歌うように告げる。
「ヤミお姉ちゃんを本当の姿に戻すの。家族なら当然だよね――――素敵！」
「……」
　ヤミはメアの言ったことを咀嚼し、一言。
「もういいですね」
「え？」
「もういいですと言ったんです」
「全く、合図がわかりずらいですわよ！」
　ヤミの陰に潜んでいた狂三が飛び出してきた。
　それを合図に、隠れていた女の子たちが姿を現す。
　屋上への扉を開けてアスナが、校舎の壁面に張り付いていたアリアと理子も。各々すでに戦闘態勢になっている。各々の武器を構え、メアを四方から取り囲む。
「ごめんねぇ？　でも転校してきた娘に、ここのルールを教えるのは武偵の文化だからぁ、くふっ」
　理子は楽しそうに笑う。
「きひ、ええ、ええ、わたくしたちのやり方、教えて差し上げないといけないですわね」
　狂三も自らの天使――――時間を操る最強の武装、刻々帝（ザフキエル）を顕現させ、短銃と長銃を取り出した。
「黒咲メア、イ・ウーについて知っている事を、洗いざらい吐いてもらうわよッ!!」

アリアは二丁拳銃を突き付ける。
「ああ……夜月翔の女たちだね。やっぱり、ヤミお姉ちゃんに張り付いてたんだ」
ヤミは順番に指さしていく。
「峰理子・リュパン４世。神崎・ホームズ・アリア。結城アスナ。時崎狂三……間桐桜と肝心の夜月翔はいないんだね。どこかで様子見してるのかな？」
イ・ウーに所属しているだけあって、名前と容姿については頭に入っていた。能力についても同様だ。
「みんな揃って、どうしたの？」
「戯言を言わないで。ヤミちゃんとの会話は全部聞いてたのよ」
「……それで？　それで、どうしたいの？　私は自分の考えを話しただけだよ？　まだ何もしてないのに？　戦うの？」
そう言われるとアスナも困る。無抵抗な人を痛めつける趣味はない。
「そんなの関係ないわ。イ・ウーに所属しているってだけで、超法規的な逮捕権が行使できるのよ」
今後はアリアが吠える。
実を言うと、いくら暴力が横行している武偵高でも、先輩が複数人で下級生をいじめるというのは格好が悪かった。逆なら何も言われないのだが。
「そう？　そんなに言うならやるよ？『敵意を向けてきた相手には容赦するな』。それがマスターの教えだからね」
空気が泡立つ。
「何人死ぬのかな。ここには無関係な人もたくさんいるけど……」
「……」
（アリア、ここでやりあうのはマズイ。教師の目もあるし、立場から見たら私たちが悪者になるぞ）
理子に諭され、引き金から人差し指を放す。
「うん。その方がいいよね。お互いに――――」
直後、メアのいた場所を銀の刃が一閃する。

「これは警告です」
　それはヤミの変身(トランス)攻撃だ。
「黒崎メア、あなたが何を考えているのかわかりませんが、手を出す人には気を付けてください。高町ヴィヴィオに何かあれば、私はあなたを殺します」
「すっごい良い目……っ！　素敵っ！」
　殺気が心地よいと武者震いするメア。だが、当のメアには戦う気がないようだ。髪の毛にかけてあった変身(トランス)が解かれる。
「でも、私には戦う気はないよ。すごくおもしろそうだけど、この学校にいられなくなるのは困るからね」
　屋上の扉をふさいでいるアスナの方に歩いていく。
「あ、そうそう、イ・ウーについてだっけ？　私、特に知ってることとかないんだよね。イ・ウーに入ったのだって、お姉ちゃんに近づくためだし。一応夜月翔を監視しろっては言われてるけど、こっちはついで。本命はお姉ちゃんだから」
　アスナは獲物の先端をメアに突きつける。
「ちょっと待って。どうして翔君が狙われないといけないの!?」
「さあ？　それ以上は私は知らないよ」
　切っ先をものともせず、メアは歩みを進める。
「それじゃあお姉ちゃん。私たちと一緒に来たくなったら、いつでも言ってね？　待ってるから」
　そう言い残し、メアは屋上を去っていったのだった。

少女たちの特訓　（アインハルト）

「よし、お前ら、集まったな！」
「「はい！　よろしくお願いします！」」
翔がアゼンダの取り調べに向かっている最中、ヤミが授業を受けている最中。小・中学生組は、大会に向けたトレーニングを始めようとしていた。
ヴィヴィオ達はいつもトレーニングに使っている公園に集合していた。周りには同じようにトレーニングをしている人がたくさんいる。この公園はどちらかというと、そういった目的に使われることが多い場所だった。
欠席者はゼロ。ヴィヴィオ、コロナ、リオ、クロ、ティナ、アインハルト、綺凛の7人とノーヴェだ。それに加えて、ノーヴェの姉妹が2人ほど助っ人に来ていた。
みんな、制服から動きやすい服装に着替えている。やる気は十分だ。
2か月後の大会に出場することが決まったため、今日から、それに向けた特訓が開始される。
「まず言うと、お前たちはみんなそれぞれ戦い方が違いすぎる。一緒に訓練しても、特技を伸ばすのは難しいとアタシは判断した。だから、基礎トレ以外――個人的なレッスンは個別に、先生は姉さんたちに任せることにした。2人のことは知ってるよな？」
そう言って、ノーヴェが紹介したのは2人の女性だった。
コロナのコーチは中性的な外見のオットー。リオのコーチは栗色のストレートヘアが特徴的な大人な女性、ディードだ。ヴィヴィオのことはノーヴェが担当する。
「じゃあ、みんながどのくらい強くなったかっていうのは、大会までのお楽しみってことですね⁉」
「そういうことだ。ガッツリトレーニングして、驚かしてやれよ」
「私とティナは大会に参加しないから、サポートに回るわ」
「頑張ります……」

ノーヴェは地面に置いていた箱から、白いリストバンドを子供たちの人数分配った。
「それでだ、っと。ほい。トレーニングの前に、まずはこいつをつけてくれ」
子供たちは首を傾げながらも言うとおりにする。すると、効果はすぐに表れた。
「か、体が重いです……っ！」
「魔法もうまく使えません……」
「筋力制限ではなく、魔力制限ですから」
「慣れてきたら、少しずつ負荷を負荷を増やしていきますよ」
ノーヴェの姉2人が説明する。
「お前らの年なら、魔力は使えば使っただけ伸びる！　2ヶ月もみっちり練習すりゃあ、見違えるくらいになるだろうさ。基本、寝るとき以外は外すなよ。とりあえず、ウォーミングアップ代わりに少し走ってこい」
「「は～い……」」
帰ってきた子供たちは、みな盛大に息を切らしていた。ノーヴェは最初はこんなもんかと頷き、柔軟、訓練メニューの説明をして解散した。リオとコロナは各々のトレーニングをするために離れていく。
ヴィヴィオはノーヴェが担当するため、その場に残っていた。
「んでだ。アインハルトと綺凛なんだが……」
ノーヴェは残った2人に向き直る。
「正直2人の流派は特殊っつーか。アタシよりも、自分たちの方が詳しいだろ？　2人とも基本は出来てるし、後は伸ばしていくだけなんだけどさ……」
それは確かにそうだ。綺凛は刀堂流、アインハルトは覇王流だが、どちらもおいそれと手を出せるような代物ではなかった。
「魔法戦ならともかく、刀――――それも真剣は専門外でさ……だったら、家の方で訓練したほうがいいんじゃないかって思ってさ。アインハルトの方も、今の覇王流の型をアタシが崩すのは違うって思ってるんだよ」

２人とも完成されているがゆえに、ノーヴェもうかつに手が出せないでいた。
「だからその代わり、練習試合をしこたま取ってきてやる。ある程度まで行ったら、実践が一番の成長材料だからな」
「「ありがとうございます!!」」
ちなみに、クロとティナはこの２人について回ることになっていた。
「あ、そのことなんですが、今週末にデバイスが出来上がるらしいので……」
「八神家は仕事がはえーのな。了解、そこには入れないでおくよ」
アインハルトのデバイスの完成予定日も決まっていた。ちなみに綺凛は、なんだかんだ刀堂流の娘であるため、それなりに良い物をすでに持っていた。
そう言うとすっかり回復したヴィヴィオを連れて、ノーヴェはその場を離れて行った。
「さてと、今日は特にやることは指定されてないんだけど、どうする？」
「せっかくです。交代で１本、どうですか？」
異論を挟む者はいなかった。順番を決めて、武器を構える。
離れた場所では、ヴィヴィオ、コロナ、リオもそれぞれ特訓を始めていた。
少女たちは、それぞれ汗を流すのだった。

「ふぅーっ……」
アインハルトは自室のベッドに横になっていた。シャワーはすでに浴び終わり、上下ともにラフなＴシャツとパンツになっている。
「っ、痛っ……」

身体を動かすと、至るところに鈍痛が走る。昼間の模擬戦、結局はノーヴェが止めに入るまでずっとやっていたのだ。怪我はないが、張り切りすぎたせいで全身が筋肉痛になっている。
（クロさん、やっぱり強かった。ティナさんも予想以上に……）
クロとは前に1度、ティナとは戦ったことは無かったが、今日のトレーニングで、その凄さを改めて教え込まれた気分になっていた。
（2人とも、私よりも年下なのに、ずっと戦い方を知っている）
クロはその身に宿っているクラスカードの英霊の記憶が。ティナは翔と出会うまでにこなしてきた任務の数々が。2人に年齢以上の実力を与えていたのだ。
何をすればよいのかわからず、路上のケンカばかりしていたアインハルトよりも、相手の倒し方を知っていた。
（でも、前みたいな差は感じない）
前にクロと戦った時のような、一方的な差は感じなかった。
（きっと、ヴィヴィオさんたちに出会ったから、ですね）
事実、みんなと練習するようになって、自分の腕がめきめきと上昇しているのが分かっていた。
自室にこもり、大量のトレーニング機器と格闘していたころに比べると、なんと成長の早いことか。
きっかけはノーヴェに路上試合を申し込んだことだった。今でも面倒を見てくれる、大恩のある人物だ。そして、それと同じくらい考えるのは。
「綺凛さんは翔さんの戦妹（アミカ）になったんですよね」
アインハルトは何か志があって武偵を目指しているわけではない。己の目的を考えた時、武偵になっていた方が色々と便利だと思っていたのだ。
武偵の免許とは、いわば傭兵のライセンスだ。
戦場で覇王流の強さを証明したいと思っていたアインハルトとしては、管理局のような公的な機関に所属するよりもずっと動きやすく、便利な立ち位置と言えた。
しかし今では、そう思い込んでいた道がぼやけてしまったように感

じていた。
今の生活が楽しいと感じれば感じるほど、自身を今まで動かしていた『覇王イングヴァルト』の記憶を思い出してしまう。
「私がやりたいことを、考えないと」
そのくらい前向きに考えられるくらいには、アインハルトの心は変わり、そして決まっていた。
しかし、その考えにまだ自信を持つことは出来ない。
「翔さんなら、何と言うんでしょうか……」
ふと口から出た名前。
アインハルトは、実は翔について知っていることは少ない。それは、関わった事件が機密になってしまったり、過去で戦ったりしているからだ。
それと同じく、戦う理由もわからないでいた。
あそこまで強力な意志の力を持つ人は、そうそういることは少ない。それは、アインハルトの心を変える大きな一因になった人だ。
今の関係を言い表すなら、なんだろうか。妹（クロ）の友達？　それともトレーニング仲間？　どちらも吹けば飛ぶような関係だ。
「こんなことなら、私も戦妹（アミカ）になっていれば……」
呟いて、はっとなる。無意識に口から出た言葉にアインハルトは赤面した。
（そんな、今の言い方じゃまるで……翔さんとの関係が欲しいから戦妹（アミカ）になりたいって言ってるみたいです……っ）
不純な考えを断ち切るように、頭を振り、天井を眺める。
綺凛は公言こそしていないものの、その意図があることは明白だ。そして翔も、そのことについては理解している。
アインハルトが思い出すのは、やはり公園で見た光景だ。
他人の情事――――正確にはその一歩手前、さらに正確にはその後何も起こってはいなかった――――を簡単に忘れられるほど、アインハルトは大人ではなかった。
頭の中に思い描いたあの時の情景が、動き出した。
「ん……ぁ……っ」

薪をくべすぎた火のように、体の熱は熱くなり続ける。
翔と綺凛の顔が段々と近づき、やがて重なる。綺凛はうれしそうに笑って、翔に体を預けた。誘惑された通り、翔は服の上から大きなふくらみを鷲掴みにしていた。
綺凛は自分の武器が効いた事がうれしいのか、それとも恥ずかしいのか、はたまた別の感情か、体をくねらせる。
アインハルトは物陰に隠れてみていることしか出来ない。
気が付いた時には、綺凛とアインハルトは入れ替わっていた。
綺凛と比べれば圧倒的に少ないボリュームだが、翔は変わらずに愛でてくれる。薄いTシャツ越しにもわかるほど自己主張し始めた突起を丁寧に、丁寧に。
いつの間にかシャツはめくり上げられ、右手が胸元へと延びていた。もう片方の手はお腹に。その奥でじんじんと熱を持ち始めたところをあやすように撫でている。
ほんのりと感じられるふくらみの頂点にある、小さな突起。ここが硬くなることを知ったのはつい最近だった。しびれるような感覚があることも知った。
それがどういう時に起こるのかも、知ってしまったのだ。本能的に『いけないこと』だと思いながらも、その手を止めることは出来ない。
想像した翔の手つきが再現される。
「だめ、またこんな、翔さんと、綺凛との、んっ、いっ、2人とも、こんなこと、してないのに……っ」
お腹にあった手が、誘惑に負けるようにズボンの中に伸びていた。その下にある三角布が隠しているところは、しっとりと湿り気を帯び始めていた。
まだ数回しか経験のないアインハルトでも、この粘液の意味は理解出来た。その時は、トイレでのことを思い出して赤面したものだ。
今のアインハルトは、意味よりもその先のものに目を向けていた。
鍛え抜かれた腹筋が、不規則に痙攣し始める。足に力が入り、お腹の奥底からふわふわという浮遊感が生まれ、全身に広がっていく。
まぎれもなく、女性が達するときの体の反応だ。

「ふぅーっ、ふぅーっ、ふぅー……っ！」
歯を食いしばり、目をつぶる。ここまでくればもう止まれない。
あふれ出る粘液を指先に塗りたくり、ワレメにある硬い部分を一心不乱に擦り続ける。
（あ、あっ！　クル、もうクル、クルクルクルクルクルクル――――!!）
ピピピピピ――――
「っ!?」
端末のCALL（電話）が鳴り出した。ベッドに無造作に放り投げられていたものをつかみ取り画面を見る。
相手は――――チームナカジマのグループ通話だ。
何か悪いことをしてしまったという罪悪感が、なぜかこみあげてきたアインハルトは、じっとしていられずベッドから立ち上がってそれに応じた。
目の前に半透明の画面と、見知った顔が5つ映し出された。努めて平静に口を開く。
《こんばんは。皆さん》
映った顔の中に、先ほどまで想像していた顔もあり、罪悪感がはっきりとしたものになる。
《お疲れ様です！　今日のトレーニングはどうでしたか!?　――――あれ？　アインハルトさん、立ってます？》
《え、ぁ、っと……ちょ、ちょっと落ち着かなくなってしまって》
《もしかして、トレーニングしようとしてるんじゃないですか!?》
《少しだけ、はい、トレーニング、しようかと》
《だめですよ、アインハルトさん！　体はしっかりと休めるようにって、ノーヴェ師匠に言われてるんですから！》
《そ、そうですよねっ！　はいっ、今日はもう、やめておきます》
ヴィヴィオは人差し指を立てて怒り出す。何とかごまかせたと、アインハルトはベッドに腰を下ろした。
「……っ」
腰を下ろしたことで、内股に熱を持った粘液が滲むのを感じた。お腹の奥がじくじくと脈打っているのが分かる。考えてしまっては止

められない。
　頂まで登りきる寸前だった体は、最後の一押しを要求してくる。薄い、まだまだ発展途上の乳房にある２つの頂点。その２つを、いや、１つでも指で摘まんでこねくり回せば。あるいは、下腹部、濡れそぼったワレメから顔を出そうとしている豆を少し撫でれば。
　しかし、アインハルトの理性が、あと一歩のところでその手を押しとどめていた。
《そんなこと言ってー、本当はヴィヴィオも隠れてトレーニングしてるんじゃないの？》
《私も、今日はくたくただよー！》
《そうだよね……このリストバンド、本当にキツイよ》
《それ、ずっとつけっぱなしなの？　洗濯とかしないわけ？》
《そうですよね……ノーヴェさんに少し聞いてみたほうがいいですよね》
《ずっと同じものをつけっぱなしは汚いです》
　交わされる会話にも、相槌をうつことしか出来ない。
（早く、終わって……っ）
　アインハルトの頭は、もうそのことしか考えられなかった。ジンジンとぼやける頭は普段の聡明な思考を取り戻すことは出来ない。
　１秒たりとも我慢できないアインハルトは、最低な手段を使ってしまう。
「ご、ごめんなさい。私、疲れたのでもう休みますね……っ！」
《そうですか？　わかりました！　おやすみなさい！》
　何とか声を絞り出して、通話を切る。
　もちろん寝るわけがない。
「さい、てい……っ。私、最低だ……っ」
　口ではそう言っても、手は止まらない。
「はっ…はっ、はふっ、っ…っ――～～～っ！っ！……ひぃ、っ、っ……」
　通話を切るなり迷うことなく敏感な場所に伸ばされた両手は、むしろさっきよりも激しく快楽を貪っていた。

ピンと1センチほどにしこった胸の肉芽は、少女の初心な手つきでも着実に開発されつつあった。にちっ、と潰してしまえば、もう足ががくがくと言う、

クリトリスを摘まんでいじるなんて、普段なら痛くて出来ないのに、今晩は頭が真っ白になるくらいイイ。

時間をおいて少し冷めてしまっていたはずの体は、再び頂まで上り詰め、

「あぁああっ!!! あひぁ〝ぁあ〝あ〝っっ……――――〜〜〜ッ〝!!!」

焦らされた体は、より深い絶頂感をアインハルトに叩き込んだ。

アゼンダの取り調べ

俺と桜は一緒に、フェイトさんに指定された場所に到着した。今回は六課の隊舎ではなく、特別留置場だ。アゼンダが収容されているからな。

「翔君はここに来るのは初めてですか？」

「や、前に1回だけ来たことある」

実はここ、アリアのお母さんが収容されている場所でもある。

「翔君、まさかとは思いますけれど、前科があるわけじゃ……」

「お前バカにしてんだろ！」

確かに女の子関係で罪に問われそうなことをしているけれど！

「ここに来るなんてよっぽどやばいことをした奴だけだ」

アリアのお母さんでわかるかもしれないが、この留置所は島でもかなり警備が厳しいものになっている。そんなところに、アゼンダは収容されているのだ。

アゼンダは、実はというとそこまですごい罪を犯したわけではない。過去のことはわからないが、あの事件で犯した罪はヤミに対する暴行と、少女2人に対する洗脳。殺意はあったので殺人未遂にはなるが、本来はここに来るほどの罪ではない。

ではなぜこの留置場にいるのか。それはスタンド使いだからだ。万に一つも逃げられるわけにはいかない。とにかくスタンドに関する情報が欲しい管理局の心情を表していると言えた。

「あっ！　お疲れー、よ・る・つ・き・く・ん」

「……なんであんたがここにいるんだ」

「ひどいなー、そんな言われ方されると、お姉さん、傷ついちゃうっ！」

下手な泣きマネまでし始めたこの女性は、もちろんフェイトさんではない。『ようこそ』という文字の書かれた扇子で口元を隠した、俺よりも少し年上の女性だ。

「お久しぶりです、更識さん」

更識楯無がそこに立っていた。隣にはフェイトさんも立っている。見たところ、傷は完全に癒えたようだ。動きにもぎこちなさは無い。

「もーつまんないなー。久しぶりに会ったっていうのにー」
フェイトさんばかり見ていたせいか、楯無さんはぶーぶーと文句を言い始めた。確かに、会うのは2週間ぶりだ。
もう忘れそうだけど、過去の聖杯戦争に参加する直前まで、俺は楯無さんに粘着されていた。いつの間にかそこにいて、適当なことを言ってどこかに行ってしまう。
悪質極まりない行為だったが、ここ最近はぴたりとそんなことは無くなっていた。まさかこんなところで再会するとは思わなかったけどな。
「翔君？　この女の人とも知り合いなんですか？」
「そうだけど、特に何もないからね。この人とは」
「うぅ、そんなこと言わなくてもいいじゃない？」
「実際あなたと俺にそんな個人的な関係なんてないでしょうが」
話が進まないので、ここは黙っていたフェイトさんに話を持って行く。
「フェイトさん、早く行きましょう」
「うーん、確かに翔君、女の子のお友達多いよね」
「こっちまで!?」
フェイトさんまで混ざって来るとは予想外だ。
「そうよねぇ。パーティを組んでいるのは女の子ばっかりだし、やっぱりあの子たちの中の誰かと付き合ってたりするのかな？」
「そっかぁ。やっぱりそうだよね」
「テスタロッサ執務官は、見たことあるんですか？　夜月君のハーレム」
ほとんど全員と付き合っていますけどね。ハーレム言うのはやめてもらえませんかね！　ほら、警備員さんが俺を見て目を細めてますから！
「それよりも！　どうして楯無さんがここに？」
「あれ？　知らなかったの？　特務六課の設立をサポートした後援者の1つ。それが更識家なのよ。そして当主である私は、今回の一連の事件について、特別な権限が与えられてるの」

「今回の事件？」
ヤミとアゼンダの事件に？
「そう、スタンドの件よ」
「そっちか」
「今回の報告書はもう読ませてもらったわ。上もようやく重い腰を上げる気になったみたいね。管理局でも指折りの実力者のフェイト・T・ハラオウンと、裏世界で名の知れた暗殺者だった金色の闇。この2人が簡単に無力化されるような能力が出回っているんですもの」
楯無さんはヤミについてもしっかりご存じのようだ。
「でもおかげで、今以上に簡単に動けるようになると思うわ。夜月君も協力してくれるわよね？」
「それはもちろん」
出来ることがあるのなら、積極的に行動するつもりでいる。
「それはよかったわ」
「それじゃあとりあえずは、今日一番の目的を消化するとしましょうか」
俺達は、アゼンダの取調室へと向かうのだった。

そこはまさにＴＶで見た取調室だった。
息が詰まりそうなくらい狭い部屋の真ん中に簡素な机が置かれ、部屋の隅にもう1つ置かれている。
しかし、何かを反射しそうなものはすべて取り除かれている。マン・イン・ザ・ミラー対策だ。
隅の机には書記の男性が、真ん中にはアゼンダとフェイトさんが座っていた。楯無さんは立ったまま、扇子で首元を叩いている。

今まさに、取り調べが始まろうとしていた。
「それでは、始めます」
メインに話すのはフェイトさんだ。書記は黙って筆を動かし始め、楯無さんはニコニコとしたままだ。
それにしても、今回襲われたフェイトさんが取り調べるとは。珍しいこともあるもんだ。普通他の人が調べるものなんじゃないのか？
そのくらいスタンドのことは機密になっているって事だろうか。
「はっ！　始めますったってね、知ってることなんざ、もう全部しゃべっちまったよ」
開始早々、アゼンダはそう吐き捨てる。
「経歴は我々が調べたことと差がない。今回の依頼主の素性は知らず、ただ金色の闇を紹介してもらっただけ……これだけですか？」
「本当に？　後で調べて何かわかったら怖いわよ？　スタンドの事とか、いろいろと知ってるんじゃない？」
「ああそうさ！　今回の件であんたらが知りたいことは全部話したよ。スタンドも、今回の事の為にあいつに渡されただけだッ！　最も、あの日の夜に取られちまったけどね。それ以上――――アタシの薄っぺらい人生について語ってほしいなら、もっと上等な部屋を用意しなって言ってんだよ」
「ずいぶん強気ですね」
「もう失う物なんて何もないからね。金色の闇のせいでまともに仕事も無くて、復讐にも失敗したんだ。外に出たところで、野垂れ死ぬのがオチさ」
罪を償ってまっとうに働こうって意思はないのかよ。
「司法取引すれば、管理局員として取り立ててもらえるかもよ？」
「私に、世のため人のために働けって？　はっ、冗談よしなよ」
「その気はないということですか？」
「願い下げだね！」
アゼンダがだいぶ苛立っている。狭い部屋に閉じ込められればこうもなるか。
「んー、でもなー、スタンドって、そんなに簡単につけたり外したり出

来るものなのかな？　私たちの調べだと、スタンドは特殊な矢がないと発現しないはずなんだけど？」
「知らないよ、そんなことは！　アタシは頭にＤＩＳＣを刺されたんだ！　何度も言わせるんじゃないよ！」
　この問答は何度も繰り返されたのだろう。アゼンダは机に拳を叩きつけた。
「そこまで素直に話されると、逆に騙そうとしてるんじゃないのかって思うのよねぇ」
「しつこいね！　そんなに疑うのなら、自白剤でも能力で頭の中を覗くでも、好きにすればいいじゃないか！」
　犯罪者と言えど、精神系能力者での取り調べは、かなりの書類審査を通さなければいけない。人の心に踏み入るというのは、それだけ扱いが難しく、忌避される行為だ。
　そして、薬物を使った捜査も同様だ。
「そう？　だったらこっちも話が速いわ」
　しかし、更識楯無は軽い調子で腕を叩いた。
　それに合わせるように、通路の奥から1人の人物が歩いてきた。制服に身を包む、小柄な女の子だ。その小柄な体躯には似合わないほど、制服を押し上げる双丘。桜に足を踏まれる。
　そのお山を2つに分断するように斜め掛けにされる小さいバッグ。大変目によろしくない。桜に腕をつねられる。
　ボリュームのある金髪の前髪から覗く瞳には、特徴的な十字模様が浮かんでいる。
『食蜂　操祈』が何の前触れもなくそこに現れた。
「は、ぇ……？」
「……っ」
　いくら俺でも面食らってしまう。食蜂は何かを察したのか、俺を無理やり視界から外し、扉を開けた。取調室に続く扉だ。
「ご紹介しま～す。こちら、食蜂　操祈。心理掌握（メンタルアウト）。知ってるでしょ？」
「は、はは、とんだ大物がお出ましだ……っ」

「はい、それじゃあ食蜂さん、よろしくね～……どうしたの？　そわそわしちゃって」
「べぇつにぃ～？　お仕事はしっかりとするから心配しないでほしいんだゾ？」
バッグから取り出したのは、デコられたスマホ――――ではなく、どこにでもあるようなＴＶのリモコンだ。
まるで銃を突きつけるようにアゼンダに向けられる。白い手袋に包まれた指が、ボタンを押した。次の瞬間、アゼンダの目には食蜂と同じような模様が浮かんでいた。
「それじゃあ、『質問には素直に答えてね？』」
「はい」
突然従順になったアゼンダは、口調も穏やかにしゃべりだすのだった。
もっとも、新しい情報は得られなかったのだが。

「はー、ダメだったわねー」
「そうだね。彼女本当に正直にしゃべってたみたいだね」
取り調べを終えた俺たちは、休憩室で一服していた。
六課の隊舎にあるものがどれだけ上等だったのかわかる設備だ。自販機が３つと、安物４人掛けのテーブルが３つ。部屋の隅にはアクセントのつもりか、背の高い観葉植物があった。
俺、桜、フェイトさん、楯無さんで１つのテーブルを囲み、食蜂は肘をついて携帯をいじっている。
「じゃあつまり、アゼンダはもうスタンド使いじゃないって事で良いのでしょうか？」

「決めつけるのは難しいと思うわ。外から記憶を上書きされている、っていう可能性だってあるのよ」
「うん。もうしばらくはここで様子を見ないとね」
　ＤＩＳＣについても、すでに情報共有されていた。というか、デンジャラスゾンビからの聴取で判っていたらしい。
　そこで割り込む声があった。
「私の支配力よりも強力な能力を使える能力者、ないし魔法使いなんて、そうそういるものじゃあないわよぉ？」
　電源を落としたスマホをテーブルに置いた食蜂がこっちを向いていった。
「あの女、アゼンダって言ったかしら？　頭の中ざっとさらっても、特に違和感はないし、改ざんされた後も無かった……これ以上は時間の無駄だと思うわぁ」
　食蜂操祈。『とある』シリーズの登場人物で。超能力者としては最高位、レベル５の能力を持っている。精神系能力としては最強の心理掌握（メンタルアウト）を扱う少女だ。
心理掌握（メンタルアウト）は、記憶の読心・人格の洗脳・念話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植など精神に関する事ならなんでも出来る十徳ナイフのような能力だ。
　そんな能力を持つ彼女が言うなら、間違いないのかもしれない。
　しかし、これほどまでに強力な能力者を、楯無さんは動かせるというのだろうか。これが権力という物だろうか。
「まさか、彼女の機嫌を損ねたら、私の方が大変な目に遭っちゃうもの」
「更識さんにはぁ、色々と言いたいことはあるけどぉ、私の意志でこの仕事をしているのよぉ」
「自分の意志で……？」
　そんなことをする性格だったとは思えないんだけど。
「ブラド関連の捜査にもだいぶ協力してもらっているの」
「それはもう熱心にね」
「はぁ……？」

ますますに謎だ。
「スタンド関連の仕事……？」
「察しが良いね」
しかし理由が全く分からない。しかし、ちらちらとこっちを見て、俺の反応をうかがっていることはわかる。むむむ。
「まさかとは思うけど、俺関連で何か理由があったりするのか？」
「……」
食蜂は何も言わない。代わりに反応したのは楯無さんだ。
「あら？　何か心当たりがあるのかしら？　そんなフラグを立てたような心当たりが？」
「そんな心当たりは全くないんですが……っ！」
桜にキリキリと足を踏まれる感覚。
しかし俺の場合、過去に戻って事件を解決するという行為まですることがある。今、心当たりがないというのは全く意味がないのだ。
「……そう、まだなのね」
そのつぶやきを聞いて俺は思う。多分、今回もそういうことなんだろうなぁ、と。

「夜月さぁん」
話し合いも終わりもう帰ろうとした俺は、入り口付近で食蜂に呼び止められた。通路の曲がり角で手招きしている。
「ちょっと、こっちに来てもらえるかしらぁ」
「……どうして？」
「いいから。つべこべ言わずに。私の誘いを断ろうなんて、無礼力が

高すぎるんじゃないかしらぁ」
「はいはい、行くよ……」
　ため息をつきつつも、言われた通りにする。しかし、警戒を緩めることは出来ない。なんせ相手はあの心理掌握（メンタルアウト）。仮に敵だった場合、強大な敵になるだろう。
　もっとも、今回、不意を突こうとしなかったから、警戒度は少し下がっているんだけどな。もしくは、すでに術中か。
「それで、何の用なんだ？」
「その前にい、確認させてほしいことがあるんだけれどぉ。本当に何も覚えていないのかしら？」
「……覚えてない。俺の体感では、これが初対面のはずだ」
「そう。流石にアレを忘れることなんて出来ないだろうしぃ？　本当なのねぇ……」
　少し寂しそうな顔をするが、すぐに元に戻る。
「昔、と言っても1年前なんだけれどぉ、私、あなたに頼みごとをされているのよぉ」
　1年前ね。これで過去に会っていたことが確定になった。俺がこの世界に来て、まだ2ヶ月ほどしか経っていない。
「もし今後、新谷航平という男に能力を使う機会があったら、次に自分と会った時そのことを伝えてほしいって」
「新谷航平……デンジャラスゾンビか」
　思い出すことも忌々しいゾンビのことだったが、アイツの残した影響は大きい。どのような活動をしてきたのかを知ることで、対策出来ることもあるかもしれない。
「それで、その『機会』ってのはあったのか？」
「……一応、頼まれごとだものねぇ。義理力もあるし、新谷航平の事件の取り調べには参加しておいたわぁ。まったく、忙しいレベル5を私的にこき使うなんて、ありえないんだゾ」
「そんなに忙しいのに、義理は果たしてくれたんだな」
「は？　ぁ、や、それは……～～～～っ！　とにかく！」
　リモコンが俺に向けられる。

「どうするの!?　見るの!?　見ないの!?　……言っておいてなんだけど、気持ちのいいものじゃなかったわぁ。だから、おすすめはしない。それでも見たいのかしら？」
「それは理解してるよ」
しかし、目を背けることは出来ない。
「見せてくれ」
「……後悔しないでねぇ？」
食蜂がボタンを押すと同時に、俺の頭に大量の情報が流れ込んできた。

新谷航平の記録　起

《ドリームワールドへようこそ、新谷　航平様。これからこの世界のチュートリアルを始めさせていただきます》
「はぁ？　ドリームワールド？」
男、新谷航平は、気が付くと見たことのない部屋に立っていた。十分な家具、食器、雑貨がそろっており、生活の跡がまったくないことを除けば人が住んでいておかしくない部屋だった。
「どこだよ、ここ……？」
航平はとっさにスマーフォンを取り出そうとするが、直前まで握っていたはずのスマートは影も形もない。手のひらどころか、ポケットの中にもだ。
落とした衝撃で画面が粉々になっていたためそこまで惜しいと思うことはないが、目的の物が見つからないためイライラする。
「ッチ！　クソがよ……」
《ここは夢の世界。男の欲望を無限に叶えることが出来る夢の世界でございます。私はドリームワールドチュートリアル専用ＡＩです。問題がなければチュートリアルを始めさせていただきます》
苛立つ航平を無視してＡＩは音声を垂れ流していく。頭に来ている状態でそんな機械的な音声を永遠と流されてしまえば、
ガシャン!!!
こうなってしまうだろう。
音が聞こえてきていたテレビを足で壊してしまう。不可思議な技術が使われていたとしても強度はそれほどなかったようだ。まったく遠慮のない体重を乗せた一撃は、いともたやすくテレビを真っ二つにする。
《それ、で、は、良い夢、を……――――》
その言葉を最後にテレビは何も言わなくなった。部屋から一切の音が消える。
もう一度大きく舌打ちした航平は、玄関を探した。
外に出て歩き回る。しかし見知った風景は全くない。スマホも

持っていないため、何かを調べることもできない。もちろん誰かに話を聞くなんて考えは微塵も思い浮かばない。
夕方、日が暮れる時刻に家に戻って来た。自分の家ではないが、そこ以外に行く場所は思い浮かばなかった。誰も頼れる人がおらず、どこにいるのかもわからない。イライラしていた心が落ち着いた後に襲ってきたのは、孤独感と不安感だった。
地元でいくら大きな顔をしていても、それはしょせんお山の大将でしかなかった。見知らぬ土地に一人放り投げられれば、薄いメッキは簡単にはがれてしまう。
家の中には誰もいない。
リビングに入ると、出て行くときには気に留めなかった機械に目が行った。翔もお世話になっているガチャマシーンだ。テレビの説明を聞いていなかった航平だが、でかでかと『ガチャする』と書いてあるボタンがあれば、触りたくなる。

『■■　■■』をゲットしました。
5階1号室に入室しました。

「なんだこれ」
上の階から足音が近づいてくる。階段を下りてきたのは航平が今まで見たことのないような可愛らしい女の子だった。
「だ、誰だよお前」
「私？　私は■■　■■！　あなたのお名前は？」
「……新谷　航平だ」
低く答える航平は、今何が起きたのか理解していた。
(『ガチャする』を押したらあの女が出てきた。つまりはあの機械で女を出せるのか……もう一台あるが……)
武器・能力ガチャの『ガチャする』を押す。

デンジャラスゾンビガシャット
仮面ライダーエグゼイドに登場するアイテムの一つ。バグルドライバーと組み合わせることによって、仮面ライダーゲンムゾンビゲーマーレベルXに変身することが出来る。

「今度は訳分かんねぇ道具かよ。しかも仮面ライダーねぇ。ガキの頃は見てたが……」
ちなみに、航平の年齢は１８歳。成人していたわけではないが、１０数年前の記憶ともなれば、十分に『子供』の時の記憶だ。
「んで？　お前は何なんだ？　ここはテメェの家なのか？」
だとすれば流石にマズイ、と思えるだけの思考は航平にはあった。自分でも訳が分からないが、家の中に無断で上がりこんだのは間違いない。
しかし、■■と名乗った少女は、きょとんとした様子で首を傾げていた。
「なに言ってるの？　ここは私たちの家でしょ！」
少女は、航平がＴＶを壊したせいで聞けなかったこの世界のことについての説明をした。航平は面倒なことだと思って聞き流しつつだったが、概要は理解できた。
「つまりは、どういうことだ？」
だが、理解できたのは概要だけだ。
「つまりっ！」
少女は演説するように腰に手を当てた。
「貴方はこれから、世のため人のために働かないといけないんです！」
「世のため人のためだぁ……？」
これ以上自分に似合わない言葉ないと顔を歪めた。
「そうだよ！　武偵高にも入学が決まってるからね！　明日から！」
「やだね」
学校という単語を聞いただけで全身に鳥肌が立つ。出席日数ギリ

ギリ、行ったとしてもケンカして途中で帰る。そのレベルの学校に行っていたのだ。学校という存在に良いイメージはない。
航平は椅子に腰を下ろした。
「なんで！」
「何でもだ」
頬杖をついてそっぽを向く。
スマホもなく、ＴＶも壊してしまった。時計の針の音だけが響いていた。針は6時半を少し過ぎたところだ。
「腹減ったな……」
「何か作ろうか？」
すかさず■■は聞いた。
「お前、料理できんのかよ」
「うん。少しならね！」
■■は冷蔵庫を確認するが、何も入っていない。
「買ってくるね！」
「早くしろよ……」
３０分ほどで帰ってきた■■は、慣れた様子で調理を開始した。
「ご飯炊くには時間がなかったから、おかずだけになっちゃうけど、それでもいい？」
「食えるなら何でも良い」
誰かが料理しているキッチンの近くで座っているなんて、ここ数年なかったことだ。匂いにつられて、虫が電灯に引き寄せられるように、ふらふらと匂いの大元に吸い寄せられている。
楽しそうに料理をする■■。航平の視線が、■■に注がれる。
「どうしたの？」
「別に」
短い答えに納得したのか、■■は調理に戻った。
（こいつ、鬱陶しいが、いい女だな……）
出るところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んでいる。どこのものかわからない制服に身を包んでいるが、短いスカートから伸びる足は、シミ一つなく引き締まっている。学校で見た女子とは、『パー

ティ』で見た女とは比べ物にならないほど、整っている。
セミロングの髪色は茶髪だったが、無理やり染めたような違和感はない。周りにいた女とは素材が違うのではないかと思うような髪の毛だ。一に体、二に顔の航平が、髪の毛に気を取られるのだから、その程度が分かるというものだ。
「……お前、いつまでここにいるつもりなんだ？」
「え？　あはは。やだなー、私だってここに住んでるんだよ？　あ！　もしかして、緊張してるー？　エッチなこととか考えてるんでしょ！　やらしーなー。なー」
「へぇ……」
つまりは、そういうことなんだろう。
航平は勝手に納得した。冷蔵を開けるが、目的の物はない。
「酒は買ってこなかったのかよ」
「買ってないよ!?　未成年だもん！　航平君もそうでしょ？」
「……ま、そうだな」
意識したことは無かった航平は、初めての注意をされる。ウーロン茶を飲みながら、調理が出来上がるのを待った。
その後１０分ほどで料理は完成した。出来上がった夕食を平らげた航平は、ソファーに横になっていた。
「風呂、ね」
今は■■が風呂に入っていた。
「っち、ダセェな。童貞かよ、俺は……」
そのシャワーの音を聞いているだけで、心音が高鳴っていく。他の女を抱いたときは、これほどまでに高鳴っていなかった。
間違いなく■■は航平が抱いた中で最高の女だった。降ってわいたような状況だったが、楽しまなければ損だ。
「上がったよー」
■■に呼ばれて、航平は立ち上がった。
「とりあえず、風呂入るか」

２人は就寝の挨拶をして、それぞれのベッドに横になっていた。■■は明日から始まる学校生活に不安と期待で心を躍らせていた。
「航平君、ちょっと不愛想だけど、明日からはもっと仲良くなれるようにしたいなぁ」
少女は、暴力とは無縁な世界から来た住人だった。知識として頭に送り込まれた武偵という存在。そこでうまくやっていけるのか、正直言うと不安に思っていたのだ。しかし、持ち前の明るさで『何とかなる！』と思うことで、乗り越えようとしていた。
そんな不安を見せることなく、振る舞っていた。事実、航平はそんな彼女を微塵も考えていなかった。もっと別のことを考えていたのだ。
「……？　航平君？」
床を誰かが歩いている音が聞こえてきた。この家にいるのは航平と少女だけだ。それ以外には考えられない。
部屋の扉が開けられた。
「ど、どうしたの？」
■■は体を起こし、守るように布団を抱いた。
扉が開いても、廊下の電気がついていないため、部屋の光量は変わらない。
「ダ、ダメでしょ！　女の子の部屋にノックもせずにはいってきちゃ！　女の子には色々と準備っていうものがあるんだから！」
ベッドでゴロゴロしたせいで乱れた髪を最低限整える。
「……おいおい、この期に及んで何言ってんだよ」
くつくつと笑って一歩前に出る。
様子がおかしい、今まで見たこともない人の反応だ。■■は不安になって駆け寄った。
「航平君？　どうしたの？　何かあった？」
「……はっ」

白々しい。本当にこの少女は白々しい。おかしくなって、航平は思わず顔が綻ばせてしまった。航平が知っている女という生き物は、こんな状況ならば、何も言わずにその肢体を見せつけてくるものではないのか。

鼻で笑って■■を突き飛ばした。後ろにあるベッドに倒れこむ。

男に押し倒されたというのに、■■はきょとんとした様子で、目をぱちぱちしていた。しっかりとパジャマを着て、今の衝撃で少しだけめくれている。

布1枚しかないからか、制服よりも体の凹凸がより鮮明に分かった。

「……っ」

航平の下腹部では、この場ではどんなものよりも凶悪な凶器が脈うっていた。

無垢な少女に、暴漢が覆いかぶさった。

「あ、え？　な、何？」

「いまさら何言ってんだよ。ここまで来て、何もねーとかありえねぇだろ？」

爛漫な■■の笑顔がぎこちなくなる。

その夜、航平は少女の初めてを踏みにじった。

「■です。よろしくお願いします」

この家の新しい住人は、黒髪ロングの凛々しい少女だった。礼儀正しくお辞儀をする彼女の全身に、男は無遠慮な視線を這わせる。

例によって、どこの物とも知れない制服に身を包み、まじめなはずの少女は短いスカートから、肉付きの良い素足を伸ばし、ニーソック

スとスカートの絶対領域を作っていた。
「……あまり、じろじろと見ないでください」
「はいはい……新しい奴も増えたことだし、飯にするぞ」
航平は座って端末をいじり始めた。
航平に付き従っていた■■は、何も言わずにエプロンを着る。厨房に立つと小さな声で聞いた。
「……うん。何がいい？」
「何でもいい」
「手伝いますね」
キッチンに2人の少女が並んで一緒に料理を作る。状況だけ見ればうらやましいことこの上なかった。
「……仲、悪いんですか？」
「え？」
航平に聞こえないように問いかける。
「貴方を見てそう思いました。何かヒドいことをされているのではないですか？」
「大丈夫だよ。何もないの」
「そう、ですか……」
向けられた笑顔を見て何も気が付かないほど、鈍感ではなかった。
（あの男、注意しないといけないですね）
調理する手を止めることなく、■は考えるのだった。
料理が出来上がり、みんなで食べる。本当なら楽しいはずの行為だが、テーブルは重い空気に包まれていた。
唐突に航平は口を開く。
「明日は依頼があるからな。■、お前ついてこい」
「私がですか？」
「文句があるのか？」
「いえ……」
むしろ好都合だった。目の前にいる危険人物（仮）の監視と、実力まで見せてくれるというのだ。うまく立ち回れば、一方的に情報を得ることすら可能だ。

「どのような依頼ですか？」
「無能を言い訳に人様に迷惑をかける奴らをブチのめす。つまりは――ゴミ掃除だな。お前の実力を見せてもらおうか」
「そういうことなら」
　言い方が多少きついとはいえ、犯罪ではないことはわかった。
（口と態度が悪いだけで、そこまで悪い人ではない？）
■の推し量る目があるとは知らず、航平は続ける。
「おい、■■。お前はケンカじゃ役に立たねぇんだ。飯の用意くらいはしとけよ」
「うん。暴力は苦手だから。ね、帰ってきたら……」
「そん時は、な……？」
　男の粘着質な笑顔を見て、一瞬で背中に鳥肌が立った。そしてそれに同調するように、この短い時間で一番の笑顔を浮かべる■■も、異質な存在なのかと思ってしまう。
「……」
■は何も言うことなく、食事を続けるのだった。

「足引っ張んじゃねーぞ。テメェのケツはテメェで拭け」
「……はい」
　翌日、２人は武装集団の潜伏場所に足を運んでいた。
　中に人がいることはすでに確認している。あとは突入して、中にいる奴らを無力化すればよいだけだ。
　航平はバックルを腰に付けた。
《ＤＥＮＧＥＲＯＵＳ　ＺＯＭＢＩＥ》
「変身……！」
《ガッシャット！　バグルｕｐ！》
《Ｄｅｎｇｅｒ　ｄｅｎｇｅｒ　Ｄｅａｔｈ　ｔｈｅ　ｃｒｉｓｉｓ

ＤＥＮＧＥＲＯＵＳ　ＺＯＭＢＩＥ！》
何も聞かされていなかった■は驚き、後ろに飛んだ。
航平の足元から、吸い込んだだけで体が腐りそうな黒い霧が発生する。
目の前に現れたパネルをぶち抜き、『仮面ライダーゲンム・ゾンビゲーマーレベルＸ』に変身を完了した。
「はっ」
強化された脚力で、鍵のかけられていた扉を蹴り破った。
こっそり戦おうなどという気持ちは一切ない。不死身の力を持っている人間にそんなものは必要ないのだ。
当然、中にいた人たちは何事かと騒ぎになる。銃器を持ち出し、無数の銃口がデンジャラスゾンビに向けられた。
「ちょ――――！」
「ははっ――――！」
銃弾の雨にさらされては敵わないと、■は身を隠す。だがデンジャラスゾンビは両手を広げて、銃弾を歓迎するように笑う。
鉛の雨が殺到した。中には爆発物を取り出した者までいる。マガジンが空になるまで打ち尽くされ、爆炎が晴れると、デンジャラスゾンビは大の字で倒れていた。
「な……」
一瞬の出来事に、■も開いた口が塞がらない。
「よし、女の連れがいたな。始末するぞ」
「（あんなに自信がありそうだったのに、自分の実力も理解できなかったというの!?）っち、こんなことになるなんて――――っ」
デンジャラスゾンビを観察するどころの話ではなくなってしまった。今は自分の命が危険にさらされている。
しかしここで、驚くべきことが起こった。
ビデオの逆再生のように、ゾンビの体が起き上がった。
「――――ぁあ～……ずいぶんぶち込んでくれたなぁ」
へらへらと、何事もないように歩き出す。その異様な光景に相手の集団もたじろぐ。

「テメェら、全殺しだ」
そこからは一方的な戦いだった。逃げようとしたものも、ゲームエリア内に召喚されたゾンビバクスターに捕まることになる。
「我々は虐げられた無能力者のために――――」
「テメェの言い分なんぞ知るかよボケが」
デンジャラスゾンビは容赦なく、男の顔を踏み抜いた。何度も何度も。顔の原型が分からなくなるまで。
翔がこの世界に来る1年前の出来事である。

新谷航平の記録　承

「新谷さん、やりすぎです！」
「はあ？　誰も死んでないんだからいいだろうが！　向こうは銃をぶっぱなしてんだぞ!?　せーとー防衛だっつーの！」
「だからと言って、こんな……」
　血の海になっているアジト。あちこちから人の呻き声が聞こえてくる。死なないように手加減したわけじゃない。適当になぶったらこうなっているというだけだ。
　本当に全員死んでいないのは只の奇跡だ。
　サンドバックにできる相手がいなくなり、航平は変身を解いて座っていた。
　ケンカ殺法もいいところだったが、それ以上に今の戦いは異常だった。
（しかし、その力は本物……！）
　いくら攻撃を食らっても立ち上がり、執拗に相手をいたぶるその力。おまけに兵隊（バクスター）も召喚することができる。
（この男は危険すぎる……！）
　そして、楽しみつつ人をいたぶるその精神。もしも自分たちに向けられれば、何もできずに屈することになる。
「何してんだ。さっさと引き渡して帰んぞ」
（しかし、いったいどうすれば……！）
　何も思いつかないまま、帰路に就くのだった。

「おかえりなさい。航平君、■ちゃん」
　言われたように料理を作っていた■■は、エプロン姿で出迎えた。
「メシは出来てんのか？」

「もうちょっとだよ！」
「じゃあ先に風呂入るわ」
そう言うと、航平は着替えを取りに自分の部屋に引っ込んでいった。
扉が完全に締まるのを確認すると、■は口を開いた。
「貴方は彼と長いんですか？　どう思っていますか」
「……もう何も考えてないよ」
「ッ！　ここにいれば私たちは不幸になります！　ここにいては――」
「でも」
肩を掴んで必死に呼びかける。しかし■■はかぶりを振った。
「私は自分の意志でここにいるの。ここ以外じゃ生きていけないもん……■ちゃんも着替えて、もう少しかかりそうだから、お風呂にも入っちゃったほうがいいよ」
平坦な言葉を並べ、■■はキッチンへと引っ込んでいったのだった。

言われた通り、■は入浴を済ませた。
正直言うと、男の性格や■■の言動から色々と想像できることはあったため、無防備にお風呂に入るのは抵抗があったが、今日一日で出来事がありすぎた。そのせいで疲労は限界だった。また、任務のせいで汚れていたこともあって我慢することができなかった。
昨日一晩で、全く何もなかったため少し油断していたということもある。
幸い、何も起こることなく入浴を済ませることができたが、問題があったのはその後、リビングに行った時だった。
「――っ、――っ、――っ！」

「う、ん？　いったい何が――――っ」
　真っ白になった思考が一瞬で整う。考えていた最悪の可能性が的中したのだ。
「■■さん！　だい、じょうぶ――――」
　当たってほしくない予想ほど当たるものだ。おそらくは■がお風呂から上がるのを待っていたのだろう。手が付けられない夕食が並んでいる。
　しかしそのテーブルに座っている人はいない。
　ＴＶを見るためのソファー。そこで裸の男女が抱き合っていた。男はソファーでくつろいでいる。両手を背もたれにかけ、まるで風呂にでも入っているかのようだ。
　必死に腰を動かしているのは女の子の方だった。顔を惚けさせ、男の首に手を回している。
「何、を」
　言葉がそれ以上出てこなかった。
　■は言葉を失う。■■は■が入ってきたことがわかっているはずなのに、動きを止めない。
　航平は後ろに気配を感じ、首だけを動かす。
「ああ。上がったのか。ちょっと待ってろ、すぐに出しちまう」
　男が腰を揺らすと、またがっている少女の動きが止まる。完全に腰が抜けてしまい、力が入らなくなってしまったのだ。
「何をしているんですか、あなたは!!」
「はぁ？　何って見れば――――ああ、お前も分かんない感じなのね。セックスだよ。性行為。ほんとに分かんねぇのか？」
「っ……！」
　誰が誰と付き合っていようが、行為をしていようが■には関係ない。しかしだからと言って、こんな風に共同スペースでするものではないはずだ。
「■■さん！　あなたもどうして！」
「ばーか。こいつが頼んできたんだよ。もう待ちきれないってな」
「そんな――――」

そんな馬鹿なという声は、沸騰した頭のせいで口から出る前に霧散してしまった。
ここに召喚されてから1週間で、何も知らなかった無垢な少女は、夜の街の女性も裸足で逃げだすような『好き者』にされてしまった。
元々経験がなかったということもあったが、それに対して刻まれたものが大きすぎたのだ。
涙と鼻水で汚れた顔は、同じ女性とは思えない。吐き気すら催すほどだ。。
口を押えた■は背を向けた。こんな異常な空間に、これ以上いたくはなかったのだ。
「もういいです。今日の夕飯はいりません。1人にしてください……っ！」
「おいおい、飯は食わなくてもいいのかよ」
「結構です！　もう休みます！」
大声で言うと、逃げるようにその場を後にして、部屋にこもった。

「おかしい、絶対におかしい。■■さんも、どうして……何か弱みを握られているのでしょうか……？」
考えがまとまらないでいた。他人の情事、いや、あれはもはや獣のそれと同じだ。子供を作るための儀式でも、愛を確かめ合う神聖なものでもない。
ただ己の肉欲を満たすためだけの穢れた行為だった。
ドアをノックする音が聞こえた。
「っ！　だ、誰ですか!?」
「私だよ、■ちゃん。晩御飯、食べてなかったから。お腹減ってるんじゃないかと思って」
扉を少しだけ開いて様子を確認すると、確かに外にいるのは1人

だった。■■の手には今日の夕飯が乗せられたお盆がある。温め直したのか湯気も立っている。
散々動いた後にご飯を抜いたため、空腹は限界だった。おいしそうな匂いに負け、入室を許可する。
備え付けられた机に座り、ご飯を口に運ぶ。
「何か言いたいことがあるんですか？」
「……うん」
運び込んでも部屋を出ず、思いつめた顔をしている■■に問いかける。ぎこちなく頷く表情は何かに怯えているようだ。
「ごめんね、■さん。驚かせちゃって」
「はい……あの時のことは」
「うん。私の意志だよ。えへへ。人に見られるのってやっぱり恥ずかしいんだね」
隠していた秘密がばれてしまったと言いたげに、顔を赤らめる。
「■■さんは、あなたはあの人のこと、好きなんですか？」
「え？　全然？　あってからそんなに経ってないんだもん。友達って感じかなぁ？」
「（私としては友達も遠慮したいですが）だったらどうして、その、彼と、しているのですか？」
「え？　気持ちいいからだけど。どうして？」
「……」
「本当はね。新しい女の子を呼ぶの、あたし反対だったんだ。私の番が減っちゃうんじゃないかって思ってて。航平君、もうしてくれないじゃないかと思って」
「……私には、その気はありませんよ」
どんな目に合わせられれば、ここまで盲目になれるのか。『そういう人もいる』という考え方でも許容できそうもない。
「私は今夜の内にここを出るつもりです」
「どうしても？」
「はい」
この２人の価値観を理解できないし、染まりたいとも思えない。

だったらもう関係を断ち切るしかない。幸い、召喚された女の子は男に絶対服従、というわけではないのだ。
「貴方とはもっと早くに出会いたかったです」
「じゃあ、やっぱりしょうがないね」
「え――――っ」
■は体に力が入らなくなっていることに気が付いた。
「ああ、しょうがねえなぁ」
「新谷　航平……っ！」
待ち構えていたかのように、航平が部屋の中に入ってきた。口ではしょうがないと言いつつ、その表情はニヤニヤと、この状況を楽しんでいるとしか思えない。
己の意志では動かない体はしかし恐怖で震えていた。いくら睨みつけても、それは航平を楽しませるスパイスにしかならない。
「ごめんね、■さん。私も正直最初は嫌だったけど、慣れればすごくよくなるから」
動けない原因はただ1つ。今口にした料理以外はない。■■は航平の命令で動いていたのだ。
「口封じをするつもりですか……!?」
「はぁ？　何言ってんだよお前。お前は俺の所有物だろうがよ。俺がこの世界に生み出してやったんだ。俺を喜ばすために存在してる奴が、逃げるなんて許されるわけねぇだろ？」
相も変わらず会話の通じない男だ。
「そもそも、だとしてもだ。お前みたいないい女、みすみす逃す手はねぇよ。どうせまだ処女なんだろ？　こいつもそうだったんぜ？　今じゃチンポ見たら腰ふるビッチになっちまったけどな」
「もう、航平君がこうしたのに……」
「ひひっ、そうだったなぁ」
少女はもう抵抗できない。男の悪意に飲まれるだけだ。

「う、ん……」
ボーっとする頭がだんだんはっきりとしてくる。肌に伝わる感覚がいつもとは違うことに違和感を覚えて確認する。
すると、自分がなにも身に着けていないとわかった
「い、っ……」
股間から鈍痛が走る。昨晩の記憶が徐々によみがえってくる。女性にとっては一生のトラウマだ。気丈なはずの彼女の両目からは涙があふれてきた。
隣には同じくなにも身に着けていない■■が横になっていた。体中に白いものがこびりついている。それどころか、ひどい悪臭までする。行為をしてそのままになっていることがよく分かった。
しかし、その表情は■とは対照的に穏やかだった。
「こんなところにいられない――」
ここにいては、あの男に何をされるのかわからない。いや、もうされてしまった後だが、まだ逃げ出せる。
たった一晩犯された程度では、■の心は折れなかった。航平の悪行を憎む気持ちは変わらない。
シャワー浴びる時間すら惜しい。手早く服を着る。行為の最中に破かれてしまい無駄に扇情的な格好になってしまっているが、かまってはいられない。
今すぐに警察に駆け込み、今あったことを洗いざらいぶちまけてやる。これ以上犠牲者を出してはいけない。
だが、運はどこまでも彼女に味方しなかった。
玄関へ行くには、どうしてもリビングを通らなければならない。そのリビングにいたのだ。シャワーを浴びて、一息ついた航平が。
「――っ」
「おう、起きたのか」

航平の顔を見たことで、昨日のことをより鮮明に思い出してしまった。
「ほら、見ろよ。多分こいつが一番の当たりだ」
航平は手に持った物を軽く振ってテーブルに放った。
■はこの世界のシステムについてはすでに理解していた。
昨日の行為の結果生み出されたものがこれだというのかと■は思ったが、合意でなければ意味がないため、■■の行為の結果だ。
「んで、そんな格好して、どうしたんだ？」
「っ、それ、は……」
良い言い訳が思い浮かばない。
（いや、思いついた）
しかしそれは自分のプライドをぶち壊すくらい屈辱的なものだ。しかし確実に油断させることができる。
「見てわからないの、航平？」
全力で婀娜っぽい仕草をする。■は自分の中にあるいやらしい女性をイメージし、演じる。腰をくねらせ、破れた服から肌を露出させる。
無理やり作った笑顔は引きつっている。だが、男は揺れる胸に夢中で気が付かない。
「おいおいなんだよ。たった一晩で堕ちちまったのか？　しょうがねえ奴だな……ほら、来いよ」
その猫なで声に、鳥肌が立つ。しかし、強靭な意思で演技はやめない。
目の端にちらりと光るものが映る。
テーブルに置いてあった凶器を手に掴んで後ろに隠した。航平が一番の当たりだと言っていたモノだ。
航平との距離はもう無い。しかしニヤニヤと航平は笑ったままだ。あくまで■自身にやらせたいらしい。
歯を食いしばりつつも、応えるふりをする。
そして決心がついた。
「航平」

「なんだ？」
穏便にやり過ごす必要はない。むしろ騒ぎを起こして、警察に踏み込んでもらったほうが良い。■も無罪とはいかないかもしれないが、この男を刑務所にぶち込めるなら、
（この先、召喚される女の子全員を救えるのなら……！）
右手に持った物に力を込め、振り上げた――――！
「なっ！　お、おい！　やめ――――」
完全に不意を突かれた航平は慌てて自分の顔を守ろうとするが、もう遅い。
「うわあああああああぁぁぁっ!!!!」
無様に転がった航平は、何もできずに喉をぶち抜かれた。
「てめ、ぇ……クソ、クソがぁ!!　クソクソクソクソ!!　何しやがんだよォ！　クソッ！　痛てぇ、痛てぇよぉ……！」
傷口を抑え、泣き叫ぶ。今まで殴られた経験はあっても、刃物がのどを貫通する痛みは経験したことがない。
「はぁ、はぁ、はぁ、警察に……！」
■の目論見は成功した。あとは近くの交番でも管理局にでも行けば完璧だ。

今突き刺したのが『スタンドの矢』ではなかったらの話だが。
扉に向かっていた足が、力を失った。受け身を取ることもできず、床に転がる。
「は、ぇ……？」
間抜けな声が出てしまう。そのくらいに、意味が分からなかった。昨日薬で体の自由を奪われたのとはわけが違う。まるで本当になくなってしまったかのように、足そのものを『奪われた』かのような錯覚に陥ってしまう。

「っ!!」
■は後ろにおぞましい邪気を感じて振り返った。倒れていたはずの航平が立ち上がっている。真っ青になっていたはずの顔には生気が宿り、むしろ前よりも力に満ち溢れていた。
凄まじい形相で■を睨んでいた。
「やってくれたなぁ、クソアマがぁ……!」
■からは見えていなかったが、ホワイトスネイクは1枚のＤＩＳＣを持っていた。■の足の機能を奪ったＤＩＳＣをだ。
『ホワイトスネイク』……俺はついてるよなぁ。こんな最強の能力を手に入れちまうなんてよぉ。テメェみたいな生意気な女を教育するにはうってつけの能力だッ!!」
足の機能を奪われた■は何とか、這ってでもその場を離れようとしていた。作戦は失敗、無駄な努力だとしても、少しでも離れようと。
その後■の姿を見た人はいない。ただし、ホワイトスネイクの実践に『使われた』のだけは確かだろう。
新谷航平はこれから1年間、学園島を騒がせることになる。

新谷航平の記録　転

「おう！　帰ったぞ！」
航平は自分の楽園に帰宅した。
「「おかえりなさいませ……！」」
主人の帰還に応じるのは、色とりどりの女性たちだ。口調は丁寧で表情も笑顔だが、その意志までは操られていなかった。これっぽっちも航平を敬ってはいない。
それもそのはずだった。極端に短いスカートは、その下の下着を隠しきれておらず、胸元も煽情的に開いている。ちょっとした趣味で航平が着せたものだったが、この場にいる誰も、自分の意志でこの服を着たわけではなかったのだから。
しかしどんなに不満を持っても、航平に反撃することは出来ない。すべては彼の持つスタンド、『ホワイトスネイク』のせいだった。
ＤＩＳＣにして能力を奪い取ることで、どんな女の子であろうとも無力化してしまう。ＤＩＳＣを使って様々な屈辱を与えられ、心を折られてしまう娘もたくさんいた。
召喚した女の子に殺されかけたのがよほど応えたのか、召喚され、目の前に来た瞬間にホワイトスネイクでとある意志を抜き出していた。『新谷航平に対する害意』だ。
物理的なものだけではなく、何か計画すること、何か不利になることすべてが封じられていた。
スタンドを手に入れてから４か月。達成した依頼は１５を超えた。つまりはそれだけ、犠牲になった女の子がいたのだ。そして今夜、また１人犠牲者が加わる。
「飯を食い終わったら女を出すからな。今夜はそいつとする。▲▲！
お前、手伝え」
「は、はぁ!?　どうしてアタシがそんなことしなくちゃ……！」
この数か月で、航平は効果的な女性の『しつけ方』をマスターしていた。元の性格を壊さない程度に屈服させ、誰が主かを分からせる腕は確かに上がっている。

この少女はかなり上手に『できた』。航平の自信の一作だ。
元のツンツンとした性格は無くならず、体は完全に降伏している。されている最中でも憎まれ口を叩いては、それ以上の回数泣かされることになるのだ。それが楽しくて、2日に1回は▲▲に相手をさせている。
今だって逆らってはいるが、数日前に気絶するまで犯されてたのだ。それでも心は堕ちていない。もっとも、最終的には逆らえないのだが。
「お前の気持ちなんて知るかよ。今夜、俺の部屋に来い。ククッ」
「ッ！　ほんっと、最ッ低……！」
強めに迫ると内股になって震える。航平の嗜虐心がむくむくと大きくなるがグッとこらえる。ここで始めることもできるが、今は空腹の方が勝っているからだ。
「（お楽しみは今夜だもんなぁ。初物相手か、始めからビッチなのか……ククッ）」
しかし、毎日のように行為に及んでいる航平だったが、それに対して能力はあまり増えてはいなかった。
それは当然のことだ。合意になるくらいの仲でないとポイントは増えない。どうして、出会った瞬間に自分たちの自由を奪ってくる男に好意を抱けるだろうか。
召喚した時点ですでに好感度が高い女の子も、好感度が下がらないわけではない。言動やそぶりを見て、変化していくのだ。
等価交換とでもいうべきか、航平は安心と引き換えに能力を得る機会を少なくしてしまっているのだ。
ポイントが増えないわけではない。この状況に絶望し、男のものになることを受け入れてしまった女の子は何人かいる。
しかし、航平にとって能力を増やすことはさして重要ではなかった。単に自分の言う通りに動く、最高の女たちに自身の性欲を発散したいだけなのだ。
中途半端な能力なんてもういらないのだ。なぜなら、すでに神に等しい能力を手に入れているから。ゾンビの不死身能力、相手の能力を

奪い、与え、命令を強制できるホワイトスネイク、能力を生み出せるスタンドの矢。
男が勘違いしてしまうのも無理はない。
スタンドの矢は翔がもっているものと同じく3回使えば只の矢に戻るもののはずだった。しかしここで、幸運にも新しいアイテムでその制約を解除することができた。
あまりにも有名な秘密道具『バイバイン』だ。小瓶に入った液体をかけたものが5分ごとに倍になっていくというぱっと聞いただけでは危険なのかわからない道具だ。
何も考えずに「便利じゃねーか」と、ぶっかけた航平。おかげで今は地球に住んでいる人全員に矢を使ってもなくならないくらいの数になっている。
その時同時に入手していた、いくらでもモノが入る『アイテムボックス』がなければ、世界が滅んでいた可能性がある。こっそりと世界の危機だったのだ。
何はともあれ、すべて男の思惑通りに進んでいた。
「そろそろガキどもにも仕込みを始めるかぁ」
「……それはいくら何でも」
女性を性行為の相手としか思っていない航平は、出来そうもない小さい年齢（そもそもロリコンではないので小さい娘では『その気』に慣れない）は、まとめて女の子に面倒を見させていた。
小さい子供たちを守ることは、この世界に召喚されていた女の子達の唯一やるべきことだった。
自分たちに飽きて無垢な子供たちに手を出さないように、一致団結している。
一番口のうまい女性がいいように言いくるめる。一番に気いられている女性もその蠱惑的な体を押し付け、誘惑して意識を逸らそうとしている。
「はっ、今日の女はガキじゃねぇといいが」
すっかり気を良くした男は笑いながら歩いていく。
その後ろにつくのは、虎視眈々とあるはずのない勝ち目を探す女性

の視線だ。
ここは男の中で完結した帝国。誰にも犯せない聖域だ。
しかしその天下は長くは続かなかった。とんでもない奴に目をつけられたからだ。

「――――――ハァ、ハァ、ハァ……ッ！　クソがァァァァ!!!」
デンジャラスゾンビは手に持った小型のナイフ型光剣で、目の前で呑気にパイプを揺らしている男に切りかかった。幾度となく繰り返された光景だ。
不死身の力を利用した、自分へのダメージを完全に無視した攻撃。相手にダメージを与えることしか考えていない動き方だ。毎回そんな特攻まがいのことをされれば、よほどの達人でもしのぎ続けるのは難しい。撤退を考えるのが普通だ。
「ふむ」
しかし相手はただの達人ではなかった。闘牛を難なくかわす闘牛士のように、身体を少し横にずらすだけで攻撃を回避する。足をかけて転ばせることも忘れない。
「これで君の転んだ回数は４９回になるが……まだ続けるのかい？」
デンジャラスゾンビは背後からホワイトスネイクで襲った。
しかし、
「ッ!!　なんでスタンドの攻撃も当たんねぇんだよ!!」
見えないはずの攻撃を避けられる。ここまできれいに避けられ続けると、デンジャラスゾンビの中でとある可能性が高くなる。
「いや、残念ながら私はスタンド使いではないよ」
「ッ!!」

それを口に出す前に涼しい顔で否定される。これも何度も繰り返されたことだ。まるで未来を予知しているかのように、次に言うことを当てられるのは。
「初歩的なことだよ。君は自分が考えているよりもずっと有名人なんだ。当然色々と情報が出回っている。それを使って私なりに推理した結果だよ」
「推理、だと……ッ!?」
「ああ。君は見ることのできない人型の何かを使役しているという事は分かっている。カメラの映像、負傷した人たちの傷の形。自分の力を過信しているからだろうね。探そうと思えば色々と弱点が見つかってくるよ」
スタンドのラッシュを予知していたかのように、最初の拳が繰り出されるより前に回避する。
「君が操作しているのか、それともそれ自体に意思があるのかはまだはっきりとわからないが、ある程度どこにいるのかが分かれば避けるのは難しくないんだよ。君ともう一人、透明人間を相手にしていると思えばいいのだからね」
デンジャラスゾンビはシャーロックが言っている言葉の意味を理解できなかった。今まで無敗を誇ってきた自分の力が全く通じない。それどころか、いいようにあしらわれている。
しかしまだ不死身の能力がある――――
「ガハッ!!」
すれ違いざまの攻撃。今までは足をかけられるだけだったのが、拳に変わっていた。そしてそれは、確実なダメージとなってデンジャラスゾンビを襲った。
「ふむ。流石は篠ノ之博士だ。完璧な仕事をする」
「なに、が……ッ!!」
「君の不死身の能力も無敵という訳ではない、という事だよ」
男の手には何やら籠手の様な物が装着されていた。
「これは私の協力者が作ったものでね。詳しい原理は探偵である私の口から説明することは出来ないが、これを使えば君の能力を無効化し

てダメージを与えられるんだよ」
　最後の砦が無くなってしまった。
　自分は目の前の男には勝てない。そう確信する。
「しかし、博士も感心していたよ。今まで自分の中にはなかった発想を与えてくれたといっていた。開発者は、自分と同じくらいの天才だとね。正直、篠ノ之博士があれほど手放しに人をほめたところを見たことがなくて驚いているよ。ああ、逃げようとせず、私の話を聞いてくれ」
　思考を推理されたデンジャラスゾンビは静かに従う。
「問題は、君がどこでこれを手に入れたのかだ」
「……」
「色々と調べたが、全くわからなかった。告白するのは恥ずかしいけどね。生まれや境遇に特筆することはないし、武偵としての腕も可もなく不可もない。不自然なところと言えば、ここ半年で急激に名前が売れ出した――――主に悪い方向で――――くらいだが……それも君がその力を手に入れてからだった。実力を買われて新兵器のテスターになった線は薄い。失礼な言い方になるが、君が開発したという可能性もないだろう。そもそも、博士が絶賛するほどの技術が、今まで私の情報網に全く引っかからずにいたというのは考えにくい」
「……」
「結局私がたどり着いたのはとても荒唐無稽な結論だったよ――――君はこの世界の住人ではなく、どこか他の世界から来た人間だとね」
「だったら何だってんだ……ッ!!」
　男の言ったことは穴だらけでボロボロだった。しかしデンジャラスゾンビの反応が、その戯言を真実だと肯定する。
「(偶には勘に頼るのも良いな)それなら、今ここで殺してしまうのは勿体ないと思ってね。どうだろうか、私の下につくというのは」
「てめぇの下だと……ッ!?」
「おや、嫌だったかい？　君は潔く死ぬようなタイプではないと思っていたのだがね」
　男の言っていることは当たっている。デンジャラスゾンビは何と

してもこの場を切り抜け、男に復讐しようと決めている。
その為なら、少しの屈辱を飲み込むくらい、
「俺は――――」

「教授。彼の身柄、私が預かってもよろしいでしょうか」
「そう言いだすと思っていたよ、ブラド。君に任せよう」
全く笑っていない美青年2人が笑い合う。
航平は去り際に呟いた。
「必ずブチ殺してやるからな。俺は、絶対に強くなる……！」
「はは、ああ、楽しみに待っているよ」
ありったけの怨念を込めても、男は涼しい顔で受け流していた。

「ほらよ」
デンジャラスゾンビは血まみれになっている男を雑に投げ捨てた。
相手は苦い顔をしている美男子だ。
「さっさと回収しろよな」
「（この男が人間か……人間は我々と化け物やなんだと言うが、同族の

ほうがよっぽどおぞましいだろうに）……わかりました」
「鈍間は返事も遅いってことか？」
「……」
　言い返したい言葉は山ほどあるが、デンジャラスゾンビの特異性と凶暴性は嫌というほどわかっている。ブラドの部下は、言いつけられた採血を始めるのだった。

「ふむ、彼はうまくやっているようですね」
「それは……どうでしょうか？　確かに任務はこなしていますが、人格に大きな問題があるかと……」
　その言葉に、ブラドはおかしそうに笑う。
「その程度大した問題ではないでしょう。あそこまで単純な人間、他にはいません。機嫌を損ねないようにしていれば噛みついてくることは無いはずですが？」
　反抗期の子供のように周りに当たり散らす航平の機嫌を損ねないのは、ありたいていに言えば無理だと言いたかった。人間にへりくだるのがそもそも屈辱なのだ。
　その粗暴な態度は積もりに積もり、ブラドの部下の不満は日に日に高まっていた。『気にしない』にも限界はあるのだ。
「そう言わないでください。彼は重要な研究対象なんですから」
　性行為によって能力や道具を生産し取り寄せる。明らかに異常な男。そもそもの出身はこの世界ではない異世界だという。何から何まで研究のし甲斐のある男だ。
　優秀な遺伝子を集めているブラドにとって、逃す手はなかった。今まで見たことのないかえの利かない素材だ。

ブラドも航平の蛮行には思うところが無いわけではないが、それ以上に研究に興味をそそられていた。
「遺伝子自体に特殊な所は無し。性行為中に何かエネルギーを感知したということも無い。種も仕掛けもない手品を見せられている気分ですよ。いったいどんな仕組みなんでしょうねぇ」
航平は自分の能力についてすでに説明していた。元来の雑さが手伝って、『セックスすれば能力を貰える』程度の説明だったが。好感度云々は元々航平が気にするものではなく、人間の好き嫌いなど、ブラドに理解できるものではない。
それでなくとも、いくら調べても航平の能力についてわかることは無かった。最新機器を使っても、能力を使っても、無から有を創造しているようにしか見えなかった。
「いずれは、あなたのすべてを私が貰いますよ。新谷航平……！」
彼への研究は終わることなく続いていく。
翔がこの世界に来る半年前の出来事である。

新谷航平の記録　結

「これはどうも、航平さん」
「あぁ？　あんたか、ブラド。ずいぶんと疲れてるみてぇだな」
「ええ、すこし」
　この頃になると、航平と会話するのはブラドだけになっていた。触れない神に崇りなし、部下たちは必要がなければ絶対に、近くに寄ることすらしなくなっていた。
　元より仲良くしたいと思っていなかった航平は、その変化には気が付いていなかった。
　ただ唯一、ブラドとはそれなりに会話が成立していた。少し形が違うとはいえ、同じように自分を周りの上位種だと思っているからだろうか。
　ブラドは人間を見下し、航平は自分を神に選ばれた人間だと思っているため、パズルの絵柄がピタリとそろうことは無いのだが。
「最近何度も来てるあいつ、誰なんだ？」
　窓の下には、部下に見送られている客人がいた。見た目は人形のような少女だったが、航平にもわかるくらい、強者の雰囲気を漂わせている。
「レティシア＝ドラクレア。私と同じ吸血鬼ですよ。人間で言えば正義感が強い人でしてね。最近、追及がどんどんきつくなってきましたよ」
「ほーん。そいつは大変だな」
　そして実際に人外の種だった。
　航平はさして重要と思っていないらしいが、もしもブラドが告発され、捜査された場合、ここ最近の悪行に関わっている航平は間違いなく逮捕される。
　ブラドはイ・ウーではナンバー3の地位を得ていると言っても、まとまりのない組織のナンバー3だ。不要になれば簡単に切られるだろう。
　ブラドはブラドで、誰かに泣きつくなんてありえないが。

「そろそろ、カタを付けておいたほうが良いのかもしれませんね」
「なんだ、ブチ殺すのか？」
「……いえ、さすがの私も、同胞をすぐに殺そうなどとは思っていませんよ。私のスタンドの試運転も兼ねて、少し脅かしてみましょうか」
ブラドはどうしようもなくなる前に、行動を起こすことを決意した。それからの行動は早かった。
あっという間に会談の約束を取り付けた。
２人で屋敷に来たブラドに、付き添いに吸血鬼ではなく人間を連れているブラドに、いやに丁寧に話すブラドにレティシアの警戒心は高かったが、それはすべて無意味だった。
『スケアリー・モンスターズ』によって、屋敷に住んでいた住人すべてがブラドの支配下になったころには、レティシアも両手をあげていた。
ホワイトスネイクによって能力を奪われ、人質まで取られた。一族郎党、抵抗できずに囚人になってしまったのだ。

「は？　武偵殺しの手伝いをしろ？」
「はい。監視も含めてですね。４世が何をしているのか、その周りにいるはずの神崎・Ｈ・アリアの動向もわかれば、なお良しですね」
ブラドも、航平にそんな器用なことをできるとは思っていない。適当に場をかき回してくれればいい程度の考えだ。
そのくらいの実力は備えていると信頼していた。仮に捕まったとしても、大した痛手にはならない情報しか持っていない。捕まったとしても、ブラドの権力ならすぐに釈放させることができる。
「武偵殺し……ああ！　あのチビ巨乳ね！」

「……まあ、身体的特徴で覚えるのであればそれでもかまいませんが」
人をパーツに分けて覚える手法は、探偵科でも教えている。航平の場合は少し極端だが。
「そういえばよぉ、なんだっけか。ホームズ４世？　に勝ったら自由にするとか言ってたよな？」
「よく覚えていましたね」
この男に三大欲求意外に考えることがあったのかと、素直に感心する。
「結局、本当に自由にするわけ？　あんないい女を？」
「まさか。なぜ私がそんな約束を守らなければならないのですか？　冗談にしてもおもしろくないですよ？　どちらにせよ私のところに帰ってきてもらいます」
「くくっ、ヒデェやつだな、あんたも」
「あなたほどではないと思いますが」
流石のブラドも自分はそこまでではないと思っているらしい。周りから見れば大差はない。
「だったら、そん時は俺にくれよ」
「それは……ふむ……」
ギラギラと欲望に目を輝かせる航平は楽しそうに言う。
ブラドは即答できなかった。
理子を手元に置いておきたい理由は、実はＤＮＡだけではない。理子に流れている血が、めったにない『型』であり、奇跡的に自分の血液と合致していたのだ。下手に扱われて殺されてしまっては元も子もない。
しかしそれと同時に、航平の子供には、航平の能力を引き継がれるのかという実験も行いたいと思っていた。
航平が召喚した女の子には、ブラドの悪行は知れ渡っている。航平と笑顔で手を組む奴にロクな奴はいない。それが女の子たちの共通認識であり、正解だった。
同じく嫌われているなら、ブラドに従順になるように教育されている理子の方が何かと都合がよい。

「そうですね……考えておきますよ」
最終的にはこう答えたブラドだったが、理子は司法取引でブラドの手を離れてしまったため、この話は流れることになった。
ブラドがどうするつもりだったのかは最後までわからなかったが、理子にとって幸運だったのは言うまでもないことだった。

「おいおい、ありゃどういうことだ？」
結果として、理子は戻ってこなかった。しかし、それ以上の収穫があった。デンジャラスゾンビに酷似した人物がいたからだ。
思わぬ闖入者は、予想外の規格外だった。
彼の活躍によって、理子だけではなく一緒に行動していたはずの夾竹桃やジャンヌまで捕まってしまった。
「私に聞かれても困りますね。航平さんは本当に心当たりがないのですか？」
「ねぇな。お前が止めなかったらブチのめしてたところだ」
「……うかつな行動を避けていただけて良かったですよ」
航平の頭にはオンとオフしかない。それはそれで扱いやすいのだが、自分の手を離れると不安定すぎてダメだ。
特に今回は、もし仮に航平の同類だとすれば、相応の準備が必要になることは明白だった。
調べるにしても、慎重にしてもらわなければ。
「っち、そんなまどろっこしいことしなきゃいけねぇのかよ……」
「そう言わず、対処はお任せしますから」
手始めに、翔がかかわった事件に少しだけちょっかいをかけることにした。
スタンドの矢で貫いたとしても、スタンドを発現できるかはおみく

じのようなものだ。スタンドに強い弱いの概念は存在しないと言っても、用途に合ったスタンドが発現するのかは運だった。
吉が出るか、凶が出るか。だが、航平の才能なのか、航平はほぼ百発百中で資質のある人物を嗅ぎ分けることができる男だった。
結果、レット・ホット・チリ・ペッパーという強力なスタンドを、聖天使様の護衛の男――保脇に――植えつけることができた。
予定外とすれば、デンジャラスゾンビが欲を出してスタンドを回収したせいで、早々に姿をさらしてしまったことだ。
「何をやっているんですか……！」
「こんないい能力、無くしちまうには惜しいだろ？　一応臭え演技までしたんだ。バレちゃいねぇよ」
バレるバレないのことを言っているのではない。
時には切り捨てる判断も重要なのだ。すべてを無傷で理想通りにこなす技量など、デンジャラスゾンビにはないというのに。
せっかく正体不明の敵でいることができたのに、能力について知っていた場合、スタンドや不死身のゾンビシステムの穴を知っていた場合、一気に追い込まれる可能性が出てきた。
ブラドはしょうがないと、仕掛けることを決意した。
相手――夜月　翔を見る限り、航平とは違いかなりうまくやっているようだ。武偵殺しに続けて、聖天子の暗殺事件、どちらもうまく収めていた。学校での様子を観察しても目立ちすぎている点は無い。
善人面が演技なら大したものだが、そうでなくても厄介だ。ワルの方が仲間として引き入れやすかったものを。
偵察として小さい恐竜を送り込み、情報収集。その情報から、早朝訓練があることを突き止め、そこに罠を張った。
デンジャラスゾンビには行かせず、ホワイトスネイクだけが行くように指示を出す。ブラドはホワイトスネイクが自立行動できるスタンドで良かったと、心の底から思っていた。
「次々と貴重な人材と知り合うとは、航平さんの言う通り、神に選ばれているという表現も、あながち間違いではないのかもしれないですね」

一緒に訓練する相手が、名家のお嬢様だと知ったときは笑ってしまった。ついでにその娘たちからも、ＤＮＡをいただければ完璧だ。欲は出さないが。

翔はあっさりと罠にかかった。

後は追い詰めるだけだというところで――――問題が起きた。監禁していたはずのレティシアが脱走したのだ。

まるでホワイトスネイクがいないこの時を待っていたかのように、部下もまとめて不意を突いてきた。

ブラドの屋敷は大混乱。あと一歩のところでホワイトスネイクを帰還させることになってしまった。

なんだかんだ言って、ブラドは身内や同族には甘い男だった。人権を無視するような発言も、そもそもブラドにとっての『人』は吸血鬼だからだ。

レティシアを捕まえるという決断も、最後の手段だった。人が人を監禁できるという時点で、少し壊れているのはわかるだろう。

「困ったことになりましたね……」

「じゃあよぉ、いっそのこと意識を丸ごと奪っちまうか？　そうすりゃ動けねえぜ？」

「フム……それはまあ、手段の１つではありますね」

だがしかし、学園島に広く顔が知れているレティシアだ。レティシアとブラドの名前が知れているのと同じくらい、２人の不和も知られている。

長い時間世間に顔を出さなければ、そのうち不自然に思われる。意識を奪うなんて言う消極的な手段で乗り切ろうとしても、何か隙をついてくるかもしれない。

今回だって、抵抗の意志はすでに奪っていたのだ。それでも、反撃されたのだ。

もっと絶対的な戒めがなければ。相手の心をまとめて折り、ねじ伏せるような楔があれば。

それを思いついたのは航平だった。

部屋にいたブラドの執事がくしゃみをしたところから、話が広が

る。
「っち、風邪かよ。吸血鬼って言っても、風邪ひくんだな」
「ええ。そういうモノはあまり人と変わらないもので」
「ふーん、それじゃあ、薬とかも飲むわけ？」
「そうですね。結局摂取している栄養素は同じですから。都合よく薬の成分を排除するような作りはしていません」
「んじゃあ媚薬とかも効くんだな」
「またそんな話を……」
　こんな時にまで、とことん下品な男だと内心軽蔑するが、ケンカをしても何にもならない。
　しかし、続く航平の発言には少し引っかかるものがあった。
「や、ほら、あいつらのリーダーって女なわけじゃん？　だったらしこたま媚薬を使って快楽堕ちさせちまえば、俺たちの味方になるんじゃねぇのかって思ってな」
「フム……」
　下種には下種なりのアプローチがあるのだと、この時ばかりは少し感心した。そんなアイディアにまじめに頭を使うことになるとは。
　快楽堕ち、は望めないにしても、堕落したレティシアの姿で士気を下げることくらいはできるだろう。ブラドも人間を痛めつけたことはあっても、そういった目で見たことは無かった。
「少し試してみるのも悪くはないですね」

「ん〝お〝っ、お〝お〝お〝お〝お〝っ」
　ウゾウゾと蠢く肉の壁に拘束されている少女――――レティシアが獣のような、声をあげる。この生物はとある実験によって生まれた、

魔力を吸い取る能力を持った合成生物だ。
膨大な魔力を持つ吸血鬼にとって微々たる効果しかないが、最後の一滴まで吸い取ることで指一本ほどの抵抗も許さない。
「きひっ、やー、楽しんでくれてるみたいだなぁ。良かった良かった」
「……」
腕には細い針が刺さり、体に悪そうな紫色の液体がどんどん注入されている。全身の感度を上昇させ、常に発情状態にさせる危険な薬品だ。
下腹部、子宮のお腹には怪しくピンク色に輝く模様――――淫紋が、限界以上の快楽を受け入れ、しかし気絶や失神を許さない。
目元と耳元を覆うヘッドマウント式のバイザーが、視覚と聴覚を奪っている。気持ちの悪い幾何学的な模様が蠢き続け、頭の中に直接投影されているかのように、まぶたを閉じても強引に送り込まれてくる。
鼓膜を揺らす音は高音と低音との混じり合った一貫性のない不協和音。
超能力開発の過程で生み出された洗脳装置だ。脳みその構造を強制的に変化させる悪魔の産物。脳内物質のバランスを崩し、常にいやらしいことしか考えられない廃人を作るための機械だ。
そんなものに繋がれて1週間。
レティシアが壊れていないのが不思議なくらいだった。
この調教の様子は、常に部下に映像として発信されていた。２４時間、1日中、昼夜関係なく。眠ろうと思っても、大音量で流れてくる喘ぎ声に邪魔をされる。
己の主人が段々と乱れ、壊れていく様子を見て、1人また1人と抵抗を止めていった。
しかし恐るべきことに、すべての工程が終了した後でも、レティシアは人格を保っていた。
こびりついた粘液を洗い流すためにシャワーにぶち込まれ、余計に股間を汚す結果になっても、その眼の光は失われていなかった。
強力な魔力で感覚をねじ伏せ、毅然にふるまっていたのだ。

抵抗しようにも、服がこすれるだけで股を濡らす体になってしまい、次に歯向かったら、部下に同じことをされるといわれてしまえば、抵抗の芽は摘まれてしまったも同然だったが。

レティシアの教育もひと段落して数日経ち、今は夜だった。
「ふう……楽しみですね」
ブラドは帰ってきたメールを見てにやにやと笑っている。吸血鬼でも文明の利器であるパソコンは使うらしい。それも、特注品というわけではなく、そのあたりの電気屋さんで売っているような既製品だ。この島の物は外のものと比べても2世代ほど進んでいるが。
帰ってきたメールは夜月　翔からの返信だった。当然のように入手した翔のアドレスに送った招待状への返事が届いたのだ。
結果は『謹んでお受けする』というもの。パーティの招待状のような体は取ってあるが、実際は決闘のようなものだ。
翔を見つけられたのは本当に幸運だった。まさかあの無能の遺伝しか持っていないリュパン４世がこんな大物を釣り上げてしまうとは。
航平と同じように、もともとこの島にいた筈なのに、突然実力が爆発するように伸びた男。航平の矢、ＤＩＳＣによってしか発現しないスタンド能力を持っている。デンジャラスゾンビに似たパワードスーツ――『仮面ライダー』への変身。
すべての証拠はそろっていた。
間違いない。夜月　翔は、新谷　航平と同じ能力を持っている。
何としても手に入れなければ。
「二つの能力があれば、比較実験もできますからねぇ」

問題はその強さだ。向こうは間違いなくブラドを敵と定めて襲い掛かって来る。航平の力を知っているブラドとしては、いささか、ほんの少しとはいえ不安があった。

「そうですね。一応、航平さんにも伝えておくとしましょうか」

翔がこの世界に来て、２ヶ月経った後の出来事である。

騎士王と閃光と　前編　（アルトリア、アスナ）

「――――っ！」

急激に意識が浮上してきた。

面倒な部分は端折って、関係ない部分はそぎ落として、重要な部分だけを圧縮した情報の濁流。溺れそうになりながらも、何とか這い上がることが出来た。

場所は留置所の通路。目の前には名門、常盤台中学の夏服が距離ゼロセンチメートルのところに見えていた。というか密着している。右も左も布地だ。

どうでも良い話だが、この島は常夏の地域に存在しているため、夏服以外を拝むことは出来ない。

それはともかく。

「……ちょっとぉ？　正気力は保てているのかしらぁ？」

「それは今ぶち込まれた記憶のせいか？　それとも、食蜂のおっぱいのせいでか？」

「そんなの、私に決まっているでしょぉ？」

そんなに怒っていないようで安心した。

見事な弾力のおかげで、俺はふらついても倒れることがなかったのだ。目の前にちょうどいい（というには少しばかり豊満が過ぎるが）突っかかりがあって助かった。

「ふんっ」

全然痛くはなかったが、ビンタされた。

「貴方が何を考えているのかはお見通しなのよぉ？」

この娘以上に、『お見通し』という言葉が似合う娘はいないだろう。心理掌握（メンタルアウト）の実力は、たった今、嫌というほど思い知らされた。

「これはお前、どういうことなんだ？」

俺が見たものは、おぞましいものだった。

悪の組織が何か悪だくみをするとか、殺人鬼が人を惨殺するとか、そういった非現実的なものではない。何気ない人の欲望を、はみ出さず、湾曲させずに、極限まで煮詰めたものを見せられた。

すでに脳細胞とくっついて離れそうにない。
見せられたものがあまりにも多かった。中の時間から察するに1年ほど。しかし、何人もの視点が入り交じり、胸焼けでどうにかなってしまいそうだった。
「今見せたのは、新谷航平の記憶――――をベースにして、彼が監禁していた女の子、ブラドとその一族の記憶を切り貼りしたノンフィクション映像よぉ」
「入れすぎだよ、調味料を」
元の素材である新谷航平の分だけでもお腹いっぱいなのだ。フルコース料理にフルコース料理を隠し味にされた気分だ。全く隠せていない。
悪い意味でも良い意味でも、主役を引き立たせることには成功していたけどな。
「ありがとう、参考になった」
「それは良かったわぁ」
そのおかげでわかったこともあったのは事実だった。
「なんでこんなに重要な記憶のストックがあったんだ？」
「そんなの、この事件についてあの人に協力しているからに決まっているでしょぉ？」
あの人というのは楯無さんの事だろう。
それにしても、過去に戻った俺は、こんなえぐい記憶を読み取らせたのか。どうかしてたんじゃないのか？
「済まないな、不用意に変なこと頼んで。」
「別に良いけどぉ、あなた、結構どうかしてるわよぉ？」
「いい意味じゃないよな？」
どうかしらと、食蜂は笑った。
「でも、貴方なら、うまくやってくれるって知っているもの……また会いましょう、夜月さん」
そう言い残し、食蜂は一足先にその場を去っていくのだった。

その日の夜は、みんな揃って報告会になった。
何もない1日だったのは中等部の雪菜と耀だけだったらしい。クロとティナの方は予定していた特訓がつつがなく始まり、メアの件は凡そ予想通りになった。
少し予想外だったのは、イ・ウーが俺のことをマークしているという話だったが、新谷航平の記憶を見た今となってはその予想も想像できるというものだ。
いずれにせよ、難しい問題ではない。
あいつらとぶつかるのは確定している事なのだから。
「翔君、大丈夫？　顔色悪いけど……」
「大丈夫かどうかは、見ての通りだ」
「つまり大丈夫じゃないってことだね？」
食欲もないし、何なら早めに横になりたい。
歪んだ考えを持つ相手にも、勇気と覚悟を持って挑める俺だったが、アイツの考えだけはどうしても受け入れることが出来なかった。
なまじ境遇が似ているからか、立ち向かう前に排除しようという気持ちになってしまう。
あいつと戦う前にこの事実を知っていたら、殺していたかもしれない。実際にそういうわけではないのだけど、鏡に映った自分を見たような気分になって。
「もう寝ることにする」
こういう時は寝てしまうに限る。

寝る前に熱い風呂に浸かると、かなり気分は良くなっていた。この分なら、明日の朝には元通りになっているだろう。
が、しかし、
「寝れないな……」
疲れてないわけじゃないんだけど、目をつぶっても眠りにつけなかった。ぐるぐると余計なことを考えてしまっている。
ドアをノックされた。応じると、控えめにドアが開き2人の女性が顔を見せた。なんとも意外な組み合わせ。アスナとセイバーだった。
2人ともお風呂に入ったのか、先ほど見た格好ではなかった。アスナは何度も見ている薄いピンクのネグリジェ姿。どう頑張っても見えないが、目を凝らせば中が見えそうだという期待が持てる、そのくらいの絶妙な、着ているほうが恥ずかしくなりそうなパジャマだ。
雪菜が何も言わないことを考えると、ネグリジェというのはこれが普通なのだろうけど。
問題はセイバーだ。
「どうしたんだ、その服」
昨日までは雪菜のパジャマを借りていたはずなんだけど、どういうわけか、実用的な、今から走りに行くのかい？　と聞きたくなるような、とにかくそんな格好をしていた。
見覚えがないわけじゃない。手首と足首まで覆うタイプの、特殊繊維を使った伸縮性ばっちりの青と黒を基調にしたスポーツウェアだ。
この前の買い物で買っていたものだってことくらいは知っている。
「ど、どうでしょうか……」
「感想を言うなら、この場にはそぐわないんじゃないのってくらいしか……」
どうして今披露しようと思ったのかが謎だ。時機を探るじゃないけど、適切なタイミングを考えてもらったほうが良かったのではないかと思うんだけど。
「そしてどうしてアスナが付いてきてるんだ？」

「不安だからついてきてって言われて」
にゃるほど。わからん。
「そ、その格好で寝るわけだな……？」
「はい。何か問題が？」
寝にくくないんだろうか。
戦場では鎧姿で寝ていたから平気ってことなんだろうか。
「それじゃあ、私も失礼して」
自然にアスナも布団に潜り込んでくる。ちょっと窮屈だけど、両手に花だ。これ以上のぜいたくはない。
「翔君、元気ないよね。大丈夫？」
「少し機会があってな。今日の取り調べで、新谷航平の記録を見たんだ」
「新谷航平……その人って翔君と同じ」
「どういうことですか？」
この場で唯一会ったことのないセイバーに説明する。当然憤慨する。
「そのような人物がいるとは……」
「ま、ブラドからイ・ウーに情報が渡ったんだろうな。そりゃ気になるよな。アイツと同じ人間がまた現れたんだ」
「でも、でもっ！　翔君とその人は違うでしょ？」
そりゃそうだ。俺だって、自分があそこまで堕ちるなんて思ってない。ただ、気分が悪くなっただけだ。
「私は幸せだよ？　ここに来て、みんなと暮らせて」
アスナが柔らかな笑顔で俺のことを抱きしめてくれる。俺は抵抗することなく、されるがままになる。
わざとやっているのか、頭をなでるのはいいんだけど、そのままおっぱいに誘導するのはどうなんですかね。
「わ、私だってそうです！」
セイバーも張り合うように背中に引っ付いてきた。ベッドにはふさわしくない素材のウェアが、布団をこする音がしたと思えば、後ろからも手が回されていた。

「貴方には大恩がある。私の心を救ってもらった。しょ、しょれに……一人の女性にしてもらいましたし……」
もにょもにょと、小声でセイバーが言う。
『女にしてもらった』なんて、まじまじと、改めて言われると胸を掻き毟りたくなってしまう。俗な言い方をすると恥ずかしくなってしまう。
どこか価値観がズレているのはしょうがないことなんだろうけどね……！
「それにしても……アスナ、これがあなたの手腕というわけですね？」
「ふふふ、さてさて、どうなのかな～？」
余裕を見せるアスナに対抗するためなのか、アルトリアの腕にぐっと力が入った。
や、ね。アレだよ。もう、おっぱいにサンドされてるとか、いちいち報告する必要ないと思うけど。みんなの想像通りになっていると思うけど。それでも報告させてもらう。
まずは目の前にあるアスナのモノ。衣服は生地が薄く、支えるための下着も身に着けていない。
抱きしめられているから、両頬は柔らかく圧迫され、鼻先と唇は谷間の奥底、ハリのある肌に密着し、くらくらしそうな匂いに包まれている。心臓の音も聞こえてくる。ずいぶんと早い、心臓の音が。
後ろからはセイバーだ。アスナほどのボリュームがないとはいえ、眠るための柔らかな衣装ではなく、全身のラインが浮き出るような衣服を着ている。
そのため、少しでも身じろぎすると、確かな弾力に背中が押される。心臓に悪い。しかも、潰れた乳房がどのような形になっているのかもわかるのは、どういうことか。
そして、あんなにひどい記憶を見せられたというのに、どうして俺の半身はこんなにも正直なのか。
「ふぅー……っ」
後ろの吐息が、熱を持った物に変わった。
段々とお腹の位置にあった手が下がっていく。何処へなんて聞く

までもない。パンパンに張り詰めたズボンを上から撫でるように、形を確かめるように滑る。
「お、おい、セイバー……っ」
「……違うでしょう？」
「は、はい？」
こんな状況で始めるつもりなのか。目の前にはこの家の裏の主、結城アスナパイセンがいるんだぞ!?
そんな俺の心の叫びなど何のその、セイバーは拗ねた口調で言う。
「こういう場では、その……名前、で呼ぶと、そう言っていたのは貴方ではないですか」
「……いやいや」
確かにそんなことを言った覚えもあるんだけど、今はそんなことを言う場面ではない！
案の定、前から不機嫌そうな声が聞こえてきた
「セ、セイバーさん？　ちょっとがっつきすぎじゃないのかなー？　翔君、今日は疲れてるみたいだし、あんまり無理強いするのは良くないと思うなー？」
「先に仕掛けてきたのはあなたでしょう？　それに心配されなくても、翔に負担はかけませんから」
俺の頭をなでていた手はいつの間にか消滅していた。布団の中に潜り、セイ――――アルトリアの腕と格闘を始めた。
でも、がっついているのはアスナも同じだろう。同じ布団に入ってきた時点で言い逃れは出来ない。
アスナに開放され、あおむけになった俺の下腹部は、しっかりと布団を押し上げている。その付近ではもぞもぞと何かが必死に主導権を取ろうとしては、激突を繰り返していた。
流石は『閃光』のアスナ。騎士王に対しても全く引かず立ち向かい、互角の勝負を繰り広げている。
アスナは埒が明かないと思ったのか、
「っ！」
「んっ……くちゅ、れろっ、んんっんむ、んちゅる……」

いきなり唇を奪ってきた。
すぐ後ろで「あぁ……っ！」という悲鳴が聞こえてきた気もするが、そんなものはすぐに脳みその外に飛ばされた。
優しさなど微塵もない。はじめから口を少し開き、先走った舌が覗いていたのだ。
舌を絡ませると同時に、足を使って俺のことを自分に密着させてきた。布越しとはいえ、2人の性器が擦れ合い、俺たちはそろって体をくねらせる。
「ちゅ、ちゅるっ、ずぞっ、んっ、ちゅるっ、れろ、ちゅぱ……ぷはぁ……」
お互いの口を犯していた舌技が終わった。唇が離れ、舌が離れる。ねっとりした唾液のアーチが、細くなってシーツに落ちた。
代わりに腰の動きが激しくなる。自慰をするかのように、腰をくねらせるその情景は、アスナの中のスイッチが入っているのだと理解させられる。
段々とネグリジェがめくれ上がり、ズボンに張ってあるテントの頂点が、三角布を捉えた。それも擦るのではなく、グリグリと押し付けるような動作だ。
「ん、ぎゅっ、ぁ、んっ、これっ、これ、いいかも……！」
湿り気のある布の感触と、その奥にある熟れた肉が歪む感触が伝わり、俺の下着に先走り汁が滲む。
すっかり上気したアスナは悩ましげな吐息を何度も何度も繰り返す。
俺はアスナを抱きしめ、腰を突き出す。あくまでアスナに合わせて。それ以上は、まだこれからだ。
「翔君……っ、そ、それ、いい。いいよぉ」
「気持ちいいか、アスナ」
「う、うん。その、気持ちいい、かも。頭ふわふわする。腰、止まんない……っ」
最後の最後で、かも、と言ってしまったのは少し残念だったが、言い方があいまいなだけで、しっかりと感じてくれている。

ゆるい、ぬるま湯に浸かっているような快感に、俺達2人は酔いしれる。体を焼き尽くすような暑さはないが、ずっと浸かっていたいと思わせるような、心地よい温もりだ。
布団の中を覗き込むと、めくれ上がったネグリジェから、お腹が露出してた。少し我慢出来なくなった。腕をするりと衣服の中に潜り込ませる。
「あ、ちょ、ちょっと待って……っ！」
「先っぽは触らないから」
「そういう問題じゃ、あっ、や、やだっ……あ、うぅん？　あんっ、あ、ふぅぅぅっ」
後ろから何やら声が聞こえてくるが、俺の意識はこちらに集中していた。
宣言通り、俺はツンと立っているところには触れず、全体をマッサージするように揉みほぐした。
服に引っかかる感じで、硬くなっていることはわかった。ここに触れてしまえば、一気に温度が上がってしまうだろう。
そうならないように、柔らかさを堪能し、気分を高めていく。
「ね、翔君。そろそろ……」
「ん？　何だ？」
「だから、ね。ほら……疲れてるかもしれないから、今日は私がするから、ね？」
もちろんわかっているが、わざと意地悪してみる。
「何をするんだ？　言ってくれよ」
「え!?　そ、それは……」
流石に迷いなく、とはいかないようで、ちょっと非難するような、どうしてそんなことを言わせるのかという表情で睨まれる。
だが、その躊躇は一瞬だった。
一度息を吸い込み、吐き出した。
「私が上になって。翔君のおちんちんに、いっぱい、いっぱいご奉仕させてください」
真っ赤に、しかし母親のように穏やかな顔で、アスナはそう言った

のだった。

騎士王と閃光と　後編　（アルトリア、アスナ）

「私が上になって。翔君のおちんちんに、いっぱい、いっぱいご奉仕させてください」

そう言ったアスナは、ネグリジェと同じ、薄いピンクの下着を脱ぎ捨てた。裾が長いため、何もしていないと違いが分からないが、ご丁寧にアスナは自分でまくり上げてくれる。

キスだけでそんなに濡れてしまったのか。そう言いたくなるくらい、そこはもうほぐれていた。

本日二度目。「あぁ……っ！」という悲鳴が聞こえてくる。

アルトリアのいるところからは何も見えないだろうが、衣服をたくし上げ、上にまたがっているとすれば、もうその後のことは予想が付いてしまうだろう。

「くっ、あ、ぬ、脱ぎづらい……！　これも策略だったのですか！　結城アスナ！」

焦ったアルトリアはベッドから跳ね起きて、自分もそこに加わろうとするがうまくいかない。

下着を脱ぎ捨てるだけで良かったアスナとは違い、スポーツウェアのアルトリアはあまり着たことのない衣服に四苦八苦しているのだ。

その間に俺は、ペニスを露出させられていた。寝ころんだままズボンに手をかけたアスナに逆らわず、腰を上げて。

待ちかねたように、俺の息子が跳ねる。パンパンに張り詰めてピクピク脈うっている。先走りでねちょねちょになった先端が、早く相手を貫きたいと疼いていた。

それは、亀頭のすぐ上にあるアスナのおまんこも同様だった。だらしなく、目の前の肉棒に対して涎を垂らしている。

「もうこんなになってる……」

「アスナこそ」

「ふふ、じゃあ、もう、大丈夫だよね？」

アスナが、指先で割れ物を扱うように触れる。腰を下ろしつつ、位置を整える。

アスナは微笑み、腰を落とした。柔らかくほぐれた肉壺に、にゅるっと飲み込まれていく。
「うううっ、くうっ、うわぁぁぁぁぁ!!」
アスナの肉ビラと、俺の股間の距離がゼロになる。直前まで見えていたはずのペニスは、アスナの膣内(なか)に完全に飲み込まれていた。
ただ締め付けてくるだけではなく、包み込むような柔らかさも兼ね備えている。俺の亀頭の先には、こりっ、とした感触がある。ピッタリと奥まで届いているようだ。
この状態でもかなりキているのか、アスナは拳を握り締め開いてを繰り返して、呼吸を整えている。
上げた顔はすっかりと赤くなり、普段のような慈しむ表情ではなく、1人の女の顔。今咥えこんでいるオスの象徴を絶対に放さないという、メスの本能からの、根源的な求愛の表情だった。
やがて落ち着いたのか、体を起こして力を入れた。
「じゃ、動くね？　……んっ、ふっ、はっ、はっ、はっ……！」
最初は肉棒で膣内(なか)をかき混ぜるように、徐々に滑らかに、動きが大きくなっていく。
肌と肌がぶつかり合い、小気味いい音が響き始める。抜けるたびに、律義に元の挿入前の新品の発情マンコに戻るが、熟れた肉を割り裂いて、いともたやすく奥のお口を叩く。
アスナのさじ加減で動かされているとはいえ、俺のペニスもただやられているわけではない。血管が浮き出るほどに勃起したペニスは、この女性を征服しようとその硬さを増し、カリ首が、膣内(なか)を削ぎ取る。
だが、俺が主導権を握れないというのは何となく落ち着かない。
腰の上で跳ねるアスナの腰を掴む。必要な筋肉と女性らしい柔らかな媚肉の、素晴らしいお腹だ。掴んだ指に、沈みこむような、胸とはまた違った感触が伝わって来る。
アスナのピストンのリズムに合わせ、そのリズムをずらすように、一気に奥まで打ち込んだ。
杭を打ち込むように、突然の全力ピストンへの変化に、アスナの体が慄く。口を半開きにして、そこから涎をこぼしながらも、俺を非難

するような目を向けてくる。
「ひぎゅ！　あ、ぁぁ……っ……ダ、ダメだよ……っ！　今日は私が、最後までするんだから……っ」
「や、でも……」
「でもじゃ、なくてっ」
　さっきの一撃の衝撃が抜けきっていない肉壺を鞭打って、アスナは運動を再開する。
　肩ひもが外れ、形のいいボリュームのあるおっぱいが顕わになる。リズミカルなピストンに合わせて、上下に揺れる。
「翔君、落ち込んでるみたいだからっ。私が最後までするからっ！」
　こうも挑発されてしまうと悪戯したくなるが、これ以上何かすると本当に怒られてしまいそうだ。
　その時はその時で組み伏せるのも悪くないけど、今日はアスナに任せることにしよう。このまま、下手なことは何もせず、アスナの奉仕に身を任せることにしよう。
　アスナから意識を外したことで、この部屋にもう1人、人がいたことを思い出した。
「ぁ、んと……えと……」
　ようやく服を脱ぎ終わったらしいアルトリアは、すでに行為を始めてしまった俺達を見て、所在なさげにきょろきょろとしている。
　いたたまれなくなった俺は、手招きする。
「アルトリア、こっち」
「ぁ、は、はい！　……どこに行けば？」
「俺の顔の上に乗ってくれ。跨ぐように」
「の、乗る？　乗る？　跨ぐようにって……ええ!?」
　何を要求されたのか、意味を理解するのに少しかかったが、顔をリンゴよりも赤くする。
「ダメか？」
「～～～っ！　わ、わかり、ました……！」
　顔を赤くしつつも、言われた通りに俺の顔の上に乗る。アルトリアはそこまで肉付きが良いほうではない。もちろん痩せているわけで

はなく引き締まっているのだ。
完全に体重を預けるのはさすがに抵抗があるのか、程よい重量が俺にかかる。同時にアルトリアの女性の部分と俺はキスすることになった。
俺達の情事を見て、少なからず興奮したのか、少しだが湿っているように思う。
「うううぅ〜……お、重くありませんか？」
「ああ、大丈夫だ」
「それで、ここからどうすればよいのでしょうか？」
「そのまま。何もしなくていいよ」
「は、はあ？　で、ですが、この格好……あまりしていたくはないのですが……」
「……もう、翔君は。今は私がしてるでしょ？　そうやって他の女の子としようとするんだから。しかも、顔の上に乗せるなんて……」
ぐりぐりと奥まで挿入した状態で腰を振られる。肉棒すべてが包まれた状態で無数のヒダによるマッサージを受けている。
じゃあどうして2人一緒に来たんですかね？
それはアスナもわかっているようで、少しお小言はあったものの、それ以上はなかった。
俺は自由になっている両手を、アルトリアの秘部に添えた。そして少しだけ力を入れ、広げてみる。
「あ、やぁ……っ！」
アスナの弾む息遣いとは別に、アルトリアの声が聞こえてくるが、あいにく今の俺にはどちらの顔も見えない。
ピタリと閉じていた肉ビラが少し広がり、ピンク色の中身が見えた。しっとりと濡れ始め、男根を受け入れるための肉穴からは、飢えた肉食獣のように涎が垂れていた。
俺はそこに口をつける。
舌を伸ばし、透明な粘液を舐めあげ、まだ一度しか俺のモノを受け入れたことがない女性の穴を舌でつつく。舌の先が不安そうに震える穴に侵入する。

「ずぞっ、ずぞぞぞっ！」
「ひゃう！　やっ、そんなとこ舐め……!?　」
嫌がっている割には、垂らす涎の量がどんどん増えている。俺の顔が、俺の唾液以外の液体で汚れるくらいだ。
快感から逃れようとしているのか、目の前にあるオマンコが左右に揺れる。
「アルトリア、動くなって」
「ですが、うくぅっ、あっ、不思議な感じがして……っ！」
「気持ちいいのか？」
「っ、あ、はい……おそらくは」
認めたからだろうか。頭と体の考えが一致したからだろうか。呼吸するように膣穴がすぼまり、愛液の塊が俺に垂れてきた。
と、俺は見つけた。
今口をつけていたところとは別、少し離れた場所にあるもう一つの穴を。前の穴とは違い、皺が集まったようなセピア色の不浄の穴だ。
そちらを舌先で突いてみる。
「っひ！　しょ、翔！　そちらは違っ！」
唾液で滑りやすかったそこに、指を添えると――にゅぬっと、いともあっさりと第一関節が飲み込まれてしまった。
「ほきゅっ！　あ、ちょ、そこは、本当に汚いところで……！」
「オルタの方は、アイリさんに大分開発されてたみたいだけど？」
「オ、オルタと私は別です！」
「サーヴァントって代謝の必要ないから大丈夫でしょ」
指を引き抜こうとすると、括約筋の繊維一本一本が締め付けてくる。お尻の中身が裏返ってしまうのではないかと言うほど、尻穴が盛りあがっている。そして明らかに愛液の量が増えている。
「アルトリア。オルタとは別人だってことはわかった。で、アルトリアはこっち弄ったことはあるの？」
質問するまでもないことだ。初めてで、尻穴がこんなにすんなり受け入れる訳がない。
「あり、ますっ。オルタに言われて、少しだけ……っ！　でも、こんな

に良くは……っ」
抜きかけた人差し指を再び押し込み、中の壁をひっかいてやると、リズミカルに尻穴が締まった。
「お尻で、なんて、そんな、でも、そろそろきちゃう。きちゃいそう……っ！」
「はっ、はっ、はっ、はっ、そろそろ、イっちゃいそう……っ！」
かく言う俺の方も、そろそろ限界になりつつあった。睾丸から粘ついたものを出したい、出したい、出したい、と懇願され俺の意思とは関係なく、どんどん昇ってくる。
ペニスが震えだす。それはアスナにも伝わったようだ。最後のスパートとばかりに、大きなストロークで締め付けてくる。
「きて。翔君……っ！　きてきてきて――――ッ！」
「あ、ぁ、っ、わたし、わたしも……っ！　イッ――――！」
「くっ、ぁ……っ！　射精る……っ！」
そうして俺達は。３人そろって、体を痙攣させた。
限界まで張り詰めたペニスの先端から、白く粘ついたモノが勢いよく放たれる。
粘度のある白い液体を、まるでポンプのようにどんどん吸い上げていくアスナの肉壺。
俺のペニスの膨張が限界になったまさにその時、アスナの肉壺もきゅっとすぼみ、不規則に痙攣していた。
俺が射精す直前にアスナはすでに頂点まで達していたのだ。
直前までオマンコを満たしていたはずの肉棒は、大きなストロークの最中。限界まで引き抜かれ、亀頭の先っぽを甘噛みしていた程度しか挿入っていなかった。
結局は『精』を貫えない惨めな孤独絶頂かと体が悲しんだのは、しかしほんの一瞬だった。
締まったマンコをぶぢゅうっ！　と貫き、ゴヂュッ！と子宮を殴打する。迎え受ける肉棒も精液もなく、ただ口を開いていただけの子宮口が、あまりの衝撃に体とは別に痙攣し、さらに待ち望んでいたものまで注ぎ込まれる。

そんな、完全な不意打ちにアスナの意識は木っ端みじんに吹き飛ばされていた。
全身の硬直の後は、すべての力を使い果たしてしまったかのように、電池が切れた、魂の抜けたお人形のように俺の体の上に倒れこんだ。
投げ出された手が。指先がぴくぴくと痙攣し、ちょろちょろと生暖かい液体が流れているのが分かった。
アルトリアはアルトリアで、俺の顔にしゃがみこみ、体を震わせていた。俺の顔に、断続的に透明な粘液が噴き出してくる。
かくかくと足を震わせながらも倒れこまないのは流石といったところだろう。
俺の数センチ先で、濡れる前から、少しずつ濡れ始め開き始めた肉ビラを、セピア色の尻穴を舌につつかれ愛液を増やす悪徳を、一度は俺のペニスを受け入れた膣穴が窄まり痙攣する様を、アルトリアの痙攣に合わせて不浄の穴が収縮する様子を、感じた時に分泌される恥ずかしい液体で、自分の意志と関係なく他人を汚すのを。
少女がイクまでのオマンコの動きのすべてを見られていなければ、流石と言えたのかもしれない。
倒れこむような、意識を失うようなことは無かったアルトリアだったが、痙攣が収まって来ると、流石に俺の顔の前からはいなくなった。
横に倒れこむように寝ころび、乱れた呼吸を落ち着けている。
アスナは何も言わない。
汗によってもう洗濯に出すしかないくらい汚れたネグリジェが肌に張り付き、今度は本当に透けていた。部屋に入って来る時から透けそうなくらい薄いネグリジェだとは思っていたけど。まさかとは思うが、行為の最中にかく汗でだんだんと透けるような服じゃないだろうな。もしそうなら作った人は天才だ。
「アスナ、大丈夫か？」
「あ、うぅ……？」
虚ろな目からはまともな返事が返ってこない。
もうとっくに射精が終わっているのに、下のお口はそれでも吸いつ

いてくるが、アスナの意志というわけではないようだ。
俺はアスナの背に手を回し、一度正常位の態勢になり、ペニスを引き抜いた。一度射精したはずだったが、まだまだ萎えることなく硬く反り返っている。こんなに元気だなんて、我ながら節操がないと思う。
「しょ、翔……その、次は、私も……」
おずおずと、顔を赤くして目をそらし、でも未だ反り返るペニスから目を離せずにいるアルトリア。
「……や、流石にこの格好で放っておいたら風邪ひいちゃうよ」
アルトリアは、不満そうな顔をしたが、理屈のわからない女の子ではない。最後には承諾してくれた。
俺達は、汗だくになり朦朧とした状態のアスナをお風呂に連れていくのだった。

俺とアルトリアは2人協力して、アスナの体を洗っていた。
お風呂のお湯は湯船にふたをしておいたおかげでまだ暖かかったが、俺たちは湯船につかることなく、シャワーを使っていた。
今は一度シャワーを止め、石鹸を使って、アスナの体を洗っていた。女の子には女の子の、体を洗う時の必要な手順というものがあったのかもしれないが、それを男の俺と、そういったものを排除して生きてきたアルトリアに期待してもらっては困る。
そもそも、たくさん並んでいるボディーソープ、そのどれを使えばよいのかわからないのだ。各々違うものを使っているのだ。今は適当に俺のを使っている。
「全く、1人で抜け駆けして……」
「まあまあ、そう言うなって」

当然だが俺たちは2人とも裸だ。俺達も、先ほどの行為で少なからず汗をかいたし、一緒にシャワーを浴びても何も不都合はない。
この後すぐに汗をかくことになるんだし、シャワーにいることに不都合はないのだ。
それよりもだ。寝る時にまで髪を結んでいる女の子というのはおそらく少数派だろう。当然目の前の女の子も、普段は結んでいるのに今は解いている。
「たまにはさ、たまにでいいから髪下ろして生活してみない？」
俺としては普通に、何気なく言ったつもりだったのだが。
「……そうなっているのを見ると、少し微妙な気分になりますね」
『そうなっている』というのは、一度射精したにもかかわらず反り返っている俺の息子だ。
「まったく……そんなに、したいのですか？」
「や、どちらか問うと、したいのはアルトリアの方だろ？」
叩かれた。
「そういうことを言うのは、野暮と言うものでしょう？」
「そうだな」
「ここでなら、汚れてもすぐに洗い流せますし。アスナだけに注いで私には無しと言うのは、無いでしょう？」
色々と言ってくるが、要は早くセックスしたいのだ。ここまでしておいて、もしかして自分には何もないのではないのかと不安になっているのだ。
「アルトリア、壁に手をついて」
「はい……」
アルトリアは壁は壁でも鏡のかかっている方の壁に手を付けた。
洗い終わったアスナには申し訳ないが、少し横になっていてもらう。
俺はアルトリアの腰を掴む。反り返る息子をまだまだ熱を持ったアルトリアの秘部に添えた。火傷しそうな熱に、亀頭が焼かれる。
「は、はやく、挿れて……」
お互いの粘膜がこすれ合う。竿を持って、位置を調整。少し腰を突

き出すと、亀頭が三分の一ほどめり込んだ。さっき舌で舐めとった部分を押し広げている。
「んっ」
ぶるりと震えたのはどっちだったのか。腰を一気に突き出した。
「んんっ、んくっ、うぁぁっ……！」
緊張してた肉壺をかき分けて、奥までたどり着いた。そこの入り口にあいさつ代わりのノックをすると、それだけで内股になり、足の力が怪しくなる。これはすぐに立っていられなくなるかもだ。
鏡には掴まるところは無いしな。俺は腰ではなく体全体を支えるように抱き直した。
「ひ、さしぶりに、翔と繋がれた……！」
「ずっと待ってたのか？　言ってくれればよかったのに」
１０分前までアスナの中に入っていた俺のペニスは、オマンコの構造の違いを文字通り感じていた。
アスナのが包み込むような柔らかさがあったのに対して、アルトリアのはまだまだうぶな子供の様だ。
「あぁっ、あっ、ひあぁっ……お、お腹、熱い……」
幸せそうに呟くアルトリア。鏡越しに見えるその顔はふにゃりと緩み、本当に幸せそうな表情をしている。
「んあぁぁぁぁ……っ！」
一気に抜いて一気に押し込むと、アルトリアは顔を俯かせる。鏡についていた手が握りしめられている。
大分落ち着いたとはいえ、すでに一発出している。俺にも余裕があるわけではない。
汗でヌルヌルしてきた肌に掌を滑らせ、俺の手がアルトリアの双丘を包み込んだ。決して大きいとは言えないサイズ。手のひらですっぽりと包めてしまう大きさだ。
その頂点はとっくの昔に起立してこりこりになっており、とても摘まみやすい。
手のひら全体を使って転がすように刺激すると、それは俺のペニスにも返ってきた。胸の先端がマッサージされるのに合わせて、締め付

けられる。
「おおぉぉぉぉ……っ！　両方はぁぁ……っ！」
何度も連続で抽送を繰り返すと、長い喘ぎ声が浴室に響いた。結合部からは止めどなく淫液が溢れでて、ばちゅんっ、ばちゅんっといやらしい音を立てている。中は締め付けられているはずなのに、全く抵抗がない。
汗の匂いが狭い空間に籠って、意識が遠のきそうになる程卑猥な空間が構成されていた。
「はっ、ひぁっ、へひっ、ひき、ひゅき、れす、しょう……しょう……っ！」
いよいよアルトリアの足が危なくなってきた。左足に力が入っていない。次は右足か。それとも腰が砕けてしまうのが先か。
残念なのは鏡に映るはずだったアルトリアの顔が見えないことだ。足に力が入らないのだ。上半身の力なんて、とっくに入らなくなっている。
「んふぁぁ……っ！」
肉棒が抜ける寸前まで腰を引くと、アルトリアが幸せそうに鳴いた。
「ほおおぉぉぉぉっ！」
奥の入り口を壊さんばかりに腰を突き出すと、女性の尊厳なんて捨てたような咆哮を上げる。
「もう止めない。最後までするぞ」
「っ。は、いい……っ」
こきゅ、と喉を鳴らし、震える答えを聞いた瞬間、動き出した。
ずちゅ、ぐちゅっ、ずりゅりゅっ、と淫猥な音を立てながら腰を打ち付ける。情け容赦のない全力のピストンだ。
とうとうアルトリアの全身から力が抜けた。しかし意識ははっきりとしているようだ。
「かひゅ、ひっぐ、あぎゅ、はっ、おおぉぉぉっ……！」
もはや甘い声ではない。２人そろって獣になり、ひたすらに性行為に溺れていく。

俺の足に生温かい液体が伝う。今までになかったものだ。少しツンとする匂い。そんな液体がとめどなく流れ続けている。止めることが出来ていない。
「も、もう、イク、ぞっ……出すぞ……アルトリア……っ」
「き、きて、きて、ください……翔……っ」
身体の奥底からせり上がってくるマグマの奔流に身悶えする。俺も下半身の感覚がなくなり、それでも最後のスパートを決める。
ペニスが膨れ、いよいよ射精の瞬間が近付いてきたと思った瞬間、全力で亀頭を子宮にめり込ませる。
「ひぁっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」
「う、ぐ……っ！」
全身が持っていかれるのではないかと言う快感とともに、白濁した液体がアルトリアの子宮にぶちまけられた。
膣口からはごぴゅびゅごっという卑猥な音とともに白濁液が溢れ出していた。
ペニスを引き抜くころには、アルトリアは気を失っていた。

繋がるココロ　（メア）

「ふわ～あ……」

俺は大あくびをかました。カラッと晴れた空に俺の口から吐き出された二酸化炭素が溶けていく。

今日は比較的涼しい、というと大げさだが、じっとしていれば汗が出ない程度の気温だった。

時刻は昼過ぎ、午前中の授業を乗り越え、お昼を食べたその後だ。みんなそろって今日は用事があるらしく、珍しいことに俺は1人きりで静かに過ごしている。解放されている屋上は、しかし人がいない。

ヤミは特別用事があったわけではないが、だからと言って2人きりで過ごすほど仲が深まったわけではない。どうせだったら、もう少し仲良くしたいという気持ちはあるんだけど、素直に言って仲良くできないのはよくわかっている。

午後の予定はない。や、正確には授業があるんだけど、それは大学のように単位制で、何度か出席しなくても問題はない。

こうして大学に行かない大学生が増えていくんだろうと漠然と考える。

ああ、そうそう、昨日の結果について報告しておこうか。

幻想殺し（イマジンブレイカー）

『とある魔術の禁書目録』の主人公である上条当麻が持つ能力。右手首から先で触れた異能の力を無効化する事が出来る。無効化出来る範囲、規模、時間については様々な条件がある。ただし、幻想殺し（イマジンブレイカー）を使っている間は、自身もあらゆる異能力が使えなくなる。

ジクウドライバー

『仮面ライダージオウ』に変身するためのベルト。『ライダーウォッチ』を使うことで仮面ライダーに変身することができる。

この通り、かなり大物な能力を手に入れることが出来た。
ジクウドライバーはあのウォズと名乗る男からすでにもらっているので2本目になるが、幻想殺し(イマジンブレイカー)については話が別だ。
ついに来るところが来たなという気分になる。俺の場合は通常の能力との使い分けが出来る分、なお強力な能力だ。
それはさておき、眠い。とても眠かった。
昨日一日でも怒涛の日々だった。1日が1ヶ月に感じるくらいには長い1日だった。航平の記憶時間では1年ほどあったわけなんだけどな。
いったい、いつなんどき、肉体労働をすることになるのかわからない。この暑さの中、日向で微睡むのは自殺行為ではあったが、欲求には逆らえなかった。

翔が目を閉じてすぐに、屋上のドアを開けた人物がいた。少し周囲をきょろきょろと見るが、隠れているのではなく上にいるのだと気が付いた。
軽く飛ぶと、その隣に着地した。遅れて重力に従って特徴的な赤いおさげが揺れた。
「夜月くん、寝てるの?」
メアは屋上で寝ている翔の顔を覗き込んでいた。メアにこんなに無防備な姿を晒しているのに、翔は全く目覚める様子がない。昨日観察した様子を見ても、メアのことを警戒していたのはよく分かったのに。
「ふーん……でも、ちょうどいいかも」

メアは舌舐めずりする。
（夜月くんと繋がれば、どういう人なのかわかるもんね）
メアと翔の距離は徐々に近づき、そして――――繋がった。

――

「――っ！　――っ！　――っ！」
何かが俺の股間で跳ねている。柔らかい何かが、一定のリズムで単調な動きだったが、それによって生じる電撃にも似た感覚で、俺の足が震える。
ぼんやりした頭でもわかる。そそり立った俺の息子が、締め付けられ、絞られ、いじめていた。
ペニスの先が何かに口づけし、触れた唇がいかないでくれと吸い付いてくる。
「っは、っは、っは……！」
俺の胸に手を当て、慣れた腰使いで膣内（なか）をくねらせる。しかし、その動きとは対照的に、少女の膣内（なか）は肉棒に慄き、震えている。まるで初めてここまで侵入を許した――――初物の少女のような反応だ。
特徴的な赤毛はそのままおさげにされ、口からは絶えず恥ずかしい声が漏れている。隠せないのか、隠したほうが良い声なのか知らないのか。
「メ、メア……!?」
俺の肉棒を必死になって味わっていたのはメアだった。その体には何も着ていない――――訳ではない。見覚えのある布切れを身に纏っていた。
あれを見たのは……そう、アスナが昨日着ていた薄いピンク色のネグリジェだ。メアとアスナではサイズが違うはずだが、ぴったり合うようなサイズのものを。

正直言って、メアのイメージには合わないものだった。肩ひもは外れ、おっぱいが丸出しになっていた。俺には記憶がないが、その双丘の先端にもしっかりと愛撫の跡があった。
そのステップはすでに済んでいるのか、俺の記憶には全く何もないのだが、現実として、今俺はメアに馬乗りにされ、肉棒を使って快楽を貪られていた。
「っは、っは、っは……ぁ、あれ？　翔君、やっと目が覚めたんだぁ、ひぎゅっ!!」
俺と会話するためか、動きを止めた。その際腰を落ち着けるためか、さっきのピントン運動の時よりも深く、おなかを突き刺した。
子宮を少し押しつぶす感触がペニスを通して伝わった。
明らかに余裕のないメアが、それでも優位を示そうとしているのか、俺に顔を近づけてくる。
「お、おはよう、翔君。気分はどう、かなっ？」
相手が相手だが天国だ。
大粒の汗が俺の頬に落ちてくる。超人的な体力を持つメアが、汗だくになるまで腰を振っていたんだ。
少し嗜虐心が出てくるが、ここは真面目に取り組むとしよう。
「何のつもりだよ、これは」
「……精神侵入（サイコダイブ）って言ってね。翔君の一番強い記憶にアクセスして繋がってるの。昨日の夜、こんなことしてたんだね」
なるほど、確かに。ここは俺の部屋だ。そしてこれは昨日した行為のワンシーンにあった情景だ。
「翔君の頭の中を覗いて、ヤミお姉ちゃんが普段何してるのか、翔君がどんな人で、お姉ちゃんにどう接してるのか知りたかったんだけど……っ」
説明しつつも、張り詰めたカリ首が粒天井に突き刺さり、悦んでいる。
「一番強い記憶から潜ったらここに来て、こうなってて……っ」
なんか俺が本当に変態みたいじゃないか。
や、でも、一男子高校生として、即物的に昨日の情景が心に残って

いても何らおかしくないと思うんだよ、うん。
「先輩、こんなケダモノだったんだね……っ！　2人の女の子と、同時にシちゃってるなんて……！　なんか、色々と予想外だよ……！」
俺も、まさか刃を交えるより先に性器を交えることになるとは思わなかったよ！
メアは目的を忘れたように、俺に体を預け、腕を回してきた。こうしてみると、本当に普通の女の子だ。俺も答えるようにメアの背に腕を回していた。
ヌルリと腕が滑った。それはメア1人だけのものではない。そこでようやく、俺も汗びっしょりになっていることに気が付いた。それに負けないように腕に力を込めた。
「あ、っ……」
メアが声を漏らした。
警戒するべき人物のはずだが、今はただの恋人のように抱き合って、お互いの心音を確認していた。この空間はすごいものだ、現実ではないとわかっているのに夢だとわからない。
この空間の絶対的な主導権を握っているからこその余裕なのか。調べに来たわりには息を整えるだけで何もしてこようとしない。
呼吸に合わせてきゅ、と締まるが、何人もの女性を泣かせてきた（比喩や自慢ではなく単なる事実と実績としての記述）俺の肉棒はまだまだ元気だ。
しかしいい機会だ。ここで、少し説得を試みてみる。
「メア、ヤミ云々のことは忘れて、普通に暮らさないか？」
「それは出来ないよ。ヤミお姉ちゃんのことは、絶対に譲れないもん」
「お前の意志か？」
「マスターがそうしろって言ったから」
ここで自分の意思はないのか、と言うことは出来るが大した意味はないだろう。この娘はまだ、自分の意志を持って行動するステップまで歩を進めていない。
「でも、すごいね、セックスって。すごく、すごい。こんな、お腹がズンズンされるの、こんなに気持ちいいんだね。私、癖になっちゃうか

も」
　そんなことどうでもいいと言いたげに、お尻を振る。みちみちと締め付けられている肉棒が、根元から振り回された。口を開きかけている子宮口に亀頭の先端がキスし、少し吸い付いてきた。
「翔君の記憶、どんどん流れ込んでくるよ。あはっ、こんなにたくさんの女の子とシちゃってるんだね？　えっちぃんだぁ～」
　誰との記憶を読み取っているのか、小刻みに腰を上下されている。ぬちゅ、ぬちゅという粘着質な音が、どんどん大きくなる。俺の先走りとメアの愛液が混じりあい、布団を濡らしていく。もう余計なことは答えたくないという意思表示なのか、上下運動以外にメアは意識を向けていない。
「ね、実は私、まだイったことないんだ、んっ」
「自分でもしてるのか？」
「色々と勉強してるからね。でも何が良いのか全然わかんなかったの」
　そう言う割には、今、全力で行為に及んでいる。
「いくら乳首をいじっても、どれだけおまんこをかき回しても、どんなにクリトリスをつまんでも、何も感じなかったんだけどね……っ！」
　上下運動に飽きたのか、今度はぐりぐりと、肉膣全体を使って搾り取ろうとしてくる。吐き出されると息まで、ジトっと重いような気さえする。
「でもこれ、ダメになるよぉ。ポカポカして、満たされる感じがするの。なんなんだろう、コレっ。素敵なんだけど、素敵なんだけどっ！　ねぇ、何なのかなぁ!?」
　俺は一応答えを返したが、そんなの気にしていないとばかりに、今度は限界まで抜いて、差してをゆっくり、ゆっくりと時間をかけて行い始めた。
　初物の、いや、初物ですらない未開封の肉壺を、ペニスを咥えるためだけのお口を、ゆっくりとかき分けていく。
　もはや何かも分からない液体によって被覆され、てらてらと光る竿が、少しずつ飲み込まれていった。見ているだけでぴくぴくと息子が

反応し、道半ばの肉天井を不規則に削ぎ取る。
「ね、これっ、でも、ヤミお姉ちゃんとはしてないんだね？　もったいないなぁ、お姉ちゃんは」
高ぶりは留まることを知らず、しかし頂点まではあっという間だった。
「あ、あっ、なんか来そうかも……っ」
膣内が痙攣し始める。頂点までもう少し、もう少し。
だが、登りきることは無かった。

「っ！」
メアはとっさにその場から飛び退いた。と思ったが、頭に固いものが叩きつけられる。頭を抑えつつ、少し涙を浮かべて下手人の顔を確認する。
「全く、学校で盛るなガキめ」
そこにいたのは翔やヤミの担任教師、南宮那月だった。今は教師としてではなく、空隙の魔女として、そこに立っていた。
気配も何もなく登場したその手腕、間違いなくお得意の空間転移の魔法を使ったのだ。
廊下の通路で不自然な動きをするメアを見た那月は、ここまで転移(と)んできたのだ。そこで女子生徒が寝ている男子生徒に覆いかぶさっていれば、止めるのは仕方のないことだろう。
校内の風紀を守るための行動だったが、邪魔をされたメアにとっては関係ない。
「……最低」

せっかくいいところだったのに。せっかくあと少しで、あと少しでイけるところまで行けたのに。ジンジンとお腹に響く叫びが、どんどん怒りに変わっていく。
一瞬本気で那月を殺そうかと考えるメア。切り殺すか、撃ち殺すか、殴り殺すか、それとも。
「良い殺気だが、私に勝てると思うなよ、学生」
「……っ」
那月に気勢を殺がれたわけではない。自分の役割を思い出し、踏みとどまったのだ。
「黒咲メアだな。お前は確か情報処理技術の授業を取っていたはずだ。さっさと行け。面倒な騒ぎを起こしてくれるな。わかったな……返事は？」
「……わかりました」
メアはしぶしぶといった様子でその場を後にする。
「さてと」
那月は次の仕事にとりかかった。
「――さっさと起きないか、色ボケ男」
いまだのん気な顔で寝ている翔を叩き起こすことだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……っ」
あの場ではあふれ出る殺気によって何とか平静を保っていたが、階段を降りた時にはすでに限界だった。
スカートの下の布地はすっかりと変色し、いまだ満足を経験していない体が、叱りつけるように、抗いがたい欲求をメアに押し付けてきていた。

どうしてあそこで終わったのか。頭も体もそのことしか考えられなくなっていた。
（サイアク、サイアク、サイアク……っ！　あいつホント、サイアク……っ）
奥歯を噛みしめて、心の中で呪詛を吐き続ける。メアの普段『作っている』キャラを知っているものが見れば、驚くこと間違いなしだろう。
獲物を求める野獣がさまようような足取りで、ふらふらと歩を進めている。
今の欲求と同じくらいに頭を占めているのは、せっかくイイトコロで邪魔をしてきた南宮　那月だ。
（澄ました顔してっ。今じゃなかったら絶対殺してるのに……っ）
同じことを反芻しながら辿り着いたのは、
（資料準備室……）
鍵がかかっていたが、変身（トランス）能力を持つメアにとっては障害にもならない。電子ロックだった場合は切り裂くことになったが、アナログだったのが幸いした。指先を鍵に変化させ、きれいに扉を開ける。
「はぁ～……」
ようやく安心して開放できる。息を長く吐くと同時に制服が解けるように消えていく。代わりに現れるのは、黒いバトルドレスだ。第2世代変身（トランス）能力は、自分だけではなく衣服にまでその影響を及ぼせる。
衣服を脱ぐ時間も惜しいのか、ショートパンツを強引に破り捨てた。
床に座ると、M字になるように足を開いて、足の付け根にある肉ビラを惜しげも無く晒す。
「こんな感じだっけ……」
メアは長いおさげを持ち上げ、先端を変身（トランス）させ、あるものを形作る。
お腹に残る感覚を頼りに、浮き出た血管も、張り出したエラも、その反り返りも、驚くほど精巧に再現していく。
完成したものは、色は赤いが、間違いなくペニスを模した性具――

―ディルドだった。
変身(トランス)で作り出した偽物だというのに、それを見ただけでさっきの行為を思い出してしまう。
「はぁーっ、はぁーっ、はぁーっ、はぁーっ……！」
呼吸が乱れる。
開いている口に添えると、肩がぶるりと震える。だから、慣らすことなく、一息に貫いた。
「ん、っ、ぁ、あああああぁぁぁぁぁっ!!」
奥に届いた瞬間、夢の中で何度も味わった内臓を打ち付けられる感覚に、ふわふわとした浮遊感が体を駆け抜ける。
「ん、く、ぅ……」
集中力が途切れたせいで変身(トランス)が解けかける。中折れでもしたかのように力を失うディルドだったが、散り散りになっていた意識をかき集めて何とか形を保つ。
何度繰り返しても、一突きされるだけで意識が吹き飛ぶせいでうまくいかない。夢の中でのように何度も連続して連続して、自分を壊すような、暴力のような快感を求める。
強く早くすれば、奥を突いた瞬間意識がどこかへ飛んでいき。
ゆっくりにすれば、ナカに入っているものが途中で力を失い、求めていたものが霧散する。
だが、時間をかけようとも、快感は蓄積していく。
「ん、ちがっ、こうじゃない、のに……っ、イ、い、イ……っ、あああああぁぁぁぁぁっ！」
全身が痙攣し、噴き出すように愛液が飛び散った。
(足りない……何も足りない、足りてないよぉ……)
メアが欲しかったのは、こんな中途半端なものではない。
さらに、下手に翔の記憶を読み取ってしまったため、翔との行為では感じていたはずの、心が埋まるような感覚も得られない。
初めて達したはずのメアだったが、それは何も満たされないものだった。

アインハルトのデバイス①

さてさて。忙しいお仕事も、何もない平和な日常というものも、過ぎるのは早いものだ。久しぶりの学校となった1週間も平穏無事に終了した。

授業を受け、勉学に励み、運動をして、トレーニングした。自分がまるで全く普通な学生であるのかと錯覚するくらいには平穏な1週間だった。もっとも、銃器刃物のトレーニングは普通とはかけ離れたものだったが。

何かあったことと言えば、那月ちゃんには身に覚えのないことで怒られてしまったことだろうか。なんで俺が不純異性交遊なんてしなくちゃいけないんだろうか。俺はただ昼寝をしていただけだというのに。怒るのなら、授業のサボりのことで怒ってほしいものだ。

そしてメアだけど、意外にもクラスに馴染めていた。

友人もでき始め、楽しい学校生活を送っているようだ。

宣言通り、ヤミのことを観察している。一挙手一投足とまではいかずとも、常に視界の端には捉えている。

そして俺とも、なんだかんだ言って仲良くしていた。敵意や害意は全く感じない。むしろ仲良くしたいのかと言いたくなるほど、馴れ馴れしく絡んでくるほどだ。

そのせいで余計な勘繰りをされることになってしまった。俺の女遊びぶりが学校に広まるのも時間の問題だろう。すでに複数人の女性と毎日一緒に登校しているんだ。今更だ。

どこかに行くのも女性と一緒。関わる事件にも女性がつきもの。そして、今日一緒にいる人も、女性なんだからな。

今日は、完成したアインハルトのデバイスを取りに、特務六課の部隊長『八神　はやて』の自宅まで来た。アスナも一緒だ。例によって、俺を1人にしないようにという取り決めだ。

よってメンバーは、俺、アインハルト、アスナ。そして、付き添いとしてノーヴェさんの姉妹である『チンク・ナカジマ』さんの4人だ。

チンクさんはノーヴェさんの姉妹だが、これでもかというほど似て

いない。ノーヴェさんがハキハキとした、女性にしては身長の高い快活な女性であるのに対して、チンクさんはちっこく、お人形さんのようなロングの銀髪にアイパッチという、物静かな女性だ。
ここに来るのにチンクさんの車に乗せてもらったが、その身長でどうやって運転するのだという無礼な考えもあったくらいだ。車は自動運転だった。
八神さんの自宅があるのは学園島でも1等地。海辺に建てられた一軒家だ。近くに砂浜もある。常夏のこの島だが、人工島であるがゆえにビーチというのはとても貴重なものだ。その近くの家となれば、いったいどれほどの値段になるのか。
この島に来て、海を見たのは初めてだ。
「どうせだったら、水着持ってくればよかったかもな」
「ねー。私たち、戦ってばっかりだから、たまには息抜きしたいよね。旅行とか？」
「そうだな。色々片付いたら行きたいな」
「……色々片付くのっていつなんだろう？」
「旅行行っても、行った先で事件に巻き込まれそうだな」
「確かに」
チンクさんがチャイムを鳴らして応答を待っている間、玄関付近で適当な会話をしている。でも、微妙に居心地が悪い。その理由もわかっていた。
「アインハルト、どうした？」
「いえ、何でもありません」
「そうか？」
この娘、今日はずっとこんな調子なのだ。今日ずっと、待ち合わせの公園から、車に乗ってここに来るまでずっとだ。勘違いしないでほしいが、俺が何かしたわけじゃない。
始めのうちは、今日八神さんに初めて会うため緊張しているのかとも思っていた。だが、この娘はどう見ても俺を避けている様子がある。
心当たりがなくて困ってしまう。かと言って、馬鹿正直に理由を聞

いてみるのも逆効果になりそうだ。
ここはそっとしておくことにしよう。
心に決めたところで、インターフォンから返答があった。チンクさんを先頭に俺たちは家の中に入っていく。
出迎えてくれたのは、ピンク色のポニーテールの長身の女性だ。切れ長の目に、伸びた背筋。一言で言うなら『かっこいい女性』。どうしてこういう女性は、悉く俺の身長を超えているのだろうか。服装は髪と同じ色のジャージだが、部屋着というわけではない。今から運動でもしに行こうという出で立ちだ。
俺はこの人の名前を知っていた。
「よく来たな、チンク」
「シグナムか、久しぶりだな。元気にしていたか？」
『魔法少女リリカルなのはA，s』の登場人物。烈火の将とも呼ばれているヴォルケンリッター。シグナムだ。
「彼らが？」
「そうだ。デバイスを受け取るのはこっちの」
「アインハルト・ストラトスです」
「話は聞いている。インターミドルに出場するらしいな」
「はい」
アインハルトは真っすぐにシグナムを見て返事をする。
「それなら、君は私のライバルということになるな」
ライバル？　や、流石にシグナムが出場するということはあるまい。弱い者いじめになってしまうし、年齢的に出場資格も持っていない。
「正確には私の道場の生徒達だがな。強いぞ」
「これから訓練なのか？」
「ああ。良かったら、帰りに少し参加していくと良い。デバイスの慣らしにもなるだろう」
「機会があれば、ぜひ」
「楽しみにしている」
クールに流したシグナムさんは靴を履いた。

「それと、君が夜月翔か。と、確か君は結城アスナだったな」
「初めまして」
「初めまして。桜ちゃんに聞いたんですか？」
　名前を知られていたことは驚くことではない。捜査に協力して、一緒に旅行にも行っているんだ。名前知られている程度、驚くほうが馬鹿というものだ。
「いや、そういうわけではないが……うむ、一つアドバイスをしておく」
　アインハルトに向けたものとは別の色を持った目を向けてくる。
「主が言うことは、あまり真に受けるな。ほどほどにまじめに、半分は流す程度に聞いておけばいい。今日は張り切っているからな」
「はぁ……？」
　理解の難しいアドバイスを乗せたセリフを吐いて、シグナムさんは外に出ていった。
「ど、どういう意味だろう？」
「つまり気をつけろって意味だろ」
「え、な、何に？」
「だから、八神さんに」
　言ってる意味が分からないとばかりに頭を振るアスナ。
「悪いようにはされないさ、多分ね」
　取って食われるなんてことにはならないよ。そんなに不安そうな顔をしなくても大丈夫さ。今日の目的はアインハルトのデバイスを受け取ることなんだからな。
　チンクさんの後に続いて、リビングに入っていく。その足には迷いがない。
「よう来たなぁ、みんな。ささ、適当に座ってな。リイン、アギト～お茶出すの手伝って？」
「はいです！」
　似非味のある関西弁を使う女性と、彼女の子供にしては大きすぎる、そして似てなさすぎる銀髪の少女、赤髪の少女がそこにいた。
　てきぱきと紅茶とクッキーがテーブルに並べられる。俺達は全員

そろってソファーに並んで座る。その対面には上記の女性３人が座った。
　この人が、
「それじゃあ、まずは自己紹介からしとこか？　ウチは『八神　はやて』。管理局勤務。今は特務六課の部隊長をしてます」
「そして！　はやてちゃんのユニゾンデバイス、リインフォースⅡです！」
「同じく、アギトだ！」
　八神さん。きれいな人なんだけど、どこかタヌキを思わせる顔なんだよな。や、それは勝手なイメージで幻覚が見えているだけかもしれないな。
『八神はやて』も『魔法少女リリカルなのは』の登場人物だ。正確には２期からの登場人物だけど、詳しいシナリオの紹介は避けておく。
　同作の主人公で、俺とも面識のあるなのはさん。最近よくしてもらっているフェイトさん。その２人と並び称される『リリカルなのはシリーズ』の顔ともいえる人だ。
　夜天の書と呼ばれる高度な魔導書の主であり、さっき見たシグナムさんを含めたヴォルケンリッターと呼ばれる騎士を４人も個人戦力として保有している。
　なのはさんとフェイトさんも年齢に対してだいぶ出世しているが、部隊長にもなると、だいぶなどという言葉では不十分だ。異常なペースとも言える。
　そのせいで作中ではタヌキだなんだと言われ、俺に余計な先入観を与えてしまったわけなんだけど。
「今日は待っとったよ」
「は、はいっ。お忙しいのにお願いしてしまい……」
　頭を下げるアインハルトに、八神さんは笑って手を振る。
「やめてぇな、そういうの」
「とっても楽しいデバイス作りだったですよー」
「作ったのはお二人で？」
「ユニットベースはリインが組んで――――」

「――はやてちゃんがＡＩシステムの仕上げと調整をやってくれたですよ」
アギト、リインが繋ぐ。
「で、外装はアギトの手作り」
つまりこの一家は、１週間でデバイスを組み上げてしまうというのか。なんて人たちだ。
「や、そんなん褒めんといてーな」
言い方に少し腹が立つが、すごいことはすごい。
「ちなみに、モチーフにはこだわってる。ルールーとかヴィヴィオに歴史について聞いてな。色々調べたんだぜ！」
人の目につく外装担当のアギトは、かなりの凝り性のようだ。突然入った、仕事とも言えない仕事にここまで本気になってくれるとは。
「そうそう、最終的にな。ほら、初代覇王様、クラウス陛下は豹を飼ってたって話を見つけてな」
俺も歴史についてはあらかた頭に叩き込んだ。完全記憶能力は本当に便利だ。それにしても、豹ね。確かにそんな記述があったな。
「あ、はい」
流石ご先祖様のお話とあって、いつもよりも少し饒舌にアインハルトが頷く。
「雪原豹は優秀な兵士でしたから。クラウス達も大切にしていました」
「そんなわけで、その雪原豹をモチーフにしてみたんだ！」
「動物の形で、動くってこと？」
「え、で、ですが、あまり大きいと連れて歩くのが大変では？」
目の前に、小学生と同じくらいの背格好のリインとアギトと言う例があるものの、それが豹となると話が違うというより、言語が違う。
「その辺りはしっかりと考えて作ったから、ノープロブレムだ！」
「あんまり待たせてもアレやし……そろそろお披露目といこか。これや」
八神さんは白い箱を机の上に置いた。この中にアインハルトのデバイスが入っているのだろう。

「開けてみ？」
「はい」
　新しいおもちゃを貰った子供のように、アインハルトは一切の躊躇もなく箱を手に取り、開いた。
　そこには確かにデバイスが入っていた。
「……え？」
「……猫」
「ま、これは予想通り」
　しかし周りにとっては予想を大きく外されたものだったらしい。
　それもそうだろう。
　箱の中では、丸まった猫が寝息を立てて眠っていたのだから。
　猫だ。黄色に黒縞の。デフォルメされた顔に、胴体と顔に対して大分短い四足。ぬいぐるみだ。ヴィヴィオちゃんも持っているデバイスと似たり寄ったりだ。
　それにしても猫だ。これは絶対に。
「これは豹と言うよりも、猫なのでは？」
　思ったことを口に出すのはアインハルトだ。
「ま、ぬいぐるみ外装はちょっとしたお茶目なんやけどな。中身はしっかりしてるから安心してな？」
　箱の中のぬいぐるみがもぞもぞと動いた。
　初めて見るものを親だと思ったのか、それとも登録が済んでいないのにアインハルトがマスターだとわかっていたのか
　まん丸の目でアインハルトを見て、にゃあ、と鳴いた。
「かわいい……」
　隣でアスナがぼそりと呟いた。
「触れたげて、アインハルト」
　言われたアインハルトは、そっと抱き上げる。
「こんな可愛らしい子を、私が頂いてもよろしいんでしょうか？」
「もちろん！」
「アインハルトさんのために生み出した子ですからね！　大切にしてあげてください！」

「あ、マスター認証がまだやから……良かったら名前つけたげてな」
「はい」
「認証は庭でやりましょう」
俺たちはみんな揃って外に出た。
若くして部隊長を任せられているだけあって、持っている敷地の面積も尋常ではない。今は１０人ほどの少年少女が、その敷地の中で汗を流していた。
シグナムさんが師匠をしているトレーニング道場の門下生たちだろう。みんな楽しそうにトレーニングにいそしんでいた。
強襲科（アサルト）とはえらい違いだな。なんで年齢を重ねると、人はこんなにも醜くなってしまうのか。
家から出てきた俺たちに向けられる視線がいくつかあった。これからやることを考えれば、この視線はもっと増えるだろう。
しかし、デバイスとはいえ名付けか。なかなか決まるもんじゃないよな。ぱっと決めろって言われても。俺はつい考えこんでしまう質だ。
でも、アインハルトが悩んだのは１０秒ほどだった。
「個体名称登録」
アインハルトの足元に、古代ベルカ時代の魔法陣が現れる。
「あなたの名前は『アスティオン』。愛称（マスコットネーム）は、『ティオ』です」
その言葉に、なんと驚くべきことに、猫――――アスティオン――――の表情が笑顔になった。そんなところまでこだわっているのか。
「アスティオン、セットアップ」
その言葉とともに光に包まれ、晴れる頃には変身魔法で大人になったアインハルトがそこに立っていた。
身長も体のいたるところも成長した姿になる。今後どれだけ成長すればここまでになるのか想像もつかない。魔法は偉大だなぁ。
「あれ？　アインハルトちゃん、髪形少し変わった？」
「あ、そういえば」
変わっている。そういうのに興味がないから具体的な表現が難しいけど、なんかこう、左側のツインテールの根元でぐるぐると髪が編

み込まれている。
「アスティオンが調整してくれたんですよ！　そっちの方がいいよって」
「さてさて、ほんなら、ここから少し調整しよか？　どうせなら、動かしながらの方が早く済むし……シグナムー！」
　遠くで子供たち相手に指導していたシグナムさんを近くに呼ぶ。
「何か御用でしょうか？」
「そっちの子、何人か貸してくれへん？　この娘のデバイスの微調整したいと思って」
「なるほど、少々お待ちを。ぴったりの２人を連れてきましょう」
　そう言って、シグナムさんが連れてきた２人は、
「さっきも言った、インターミドルに出場するウチの生徒だ。覇王の実力を少し見せてやってほしい」
「ミ、ミウラ・リナルディです。よろしくお願いします！」
「紺野ユウキです。よろしくお願いします！」
　こんな２人だった。

アインハルトのデバイス②

なんとこの家、テラス的なものまで備え付けられていた。アインハルトがデバイスを調整している間、俺とアスナはそこに座って休憩していた。

アインハルトはデバイスの調整も兼ねて、八神家道場のトレーニングに参加していた。

あえて足場の悪い砂浜でトレーニングして、踏み込みの技術を上げているのだとか。

「みんなすごいねぇ。あんなに小さいのに」

「なー」

子供たちは１０人ほどいるが、その中でも飛び抜けてスゴイ子供が２人いた。

そしてその２人とも、俺の知っている娘だった。

１人は『ミウラ・リナルディ』。『魔法少女リリカルなのはｖｉｖｉｄ』の登場人物で、一人称が『僕』の僕っ子だ。初対面の人には人見知りするのか、シグナムさんやもう１人の娘の後ろに隠れていたが、その実力は本物だ。

聞いた話によると師匠であるシグナムさん、同じヴォルケンリッターであるヴィータさんと練習試合できるほどだという。

実際遠目から見た彼女の踏み込み速度、蹴りの威力は素晴らしいものだった。

この娘がいるのは全然良い。予定通りだったまである。問題はもう１人の娘だ。

１人は『紺野　ユウキ』。この娘がいるのが本当に問題だ。ＳＡＯを知っている人なら知らない人がいない程の有名キャラクター。なのだが本編小説ではとある事情で退場してしまっている。

その辺りの事情がどうなっているのか本当に気になるところだ。今の俺ではその事情を解決できない。この島の医療なら解決できるのか、今度調べてみることにしよう。

それにしても、どこかにつながるようなキャラクターではないので

完全に油断していた。まさかここで登場して来るとは。
その強さは説明不要と言っていいほど圧倒的なものだった。あのアインハルトですらまともなヒットを一度も出せないでいるのだ。
圧倒的なスピードと天性としか表現できない勘のようなものが、極細の片手剣に乗せられ放たれるのだ。
「でも、アスナも出来るもんな。あのくらいは」
「あはは、どうだろうね？」
「……ま、出来ないと言わない時点でそれはわかってしまうわけで」
マジか、あのレベルなのかよ。
「でも年下の女の子と同じくらいって言うと、少しプライドが傷ついちゃうよね」
「十分だろ、あれぐらい出来れば。剣術だけがアスナじゃないし」
「……そうだね」
そんなことを言っていると、
「あーあ、元気いいなぁ。若い娘っていうのは。少しくらい分けてほしいくらいやわ～」
デバイスの調整がひと段落した八神さんがこちらに歩いてきた。
「八神さんも十分若いでしょう？」
「なーに？　それ。ウチの年齢聞いとんの？」
そんなつもりないわい。
年齢だったら知ってる。２３、４だろ。だから若いって言ったんだよ。
「でもすごいですよね。その年齢で管理局の部隊長を任せられているなんて」
アスナは完全に余所行きの態度で接している。原作でも、お正月は親戚集まって着物で過ごすという家柄だと言われている。この程度はお手の物なのだろう。
「あはは、そうでもないんよ？　私は本当に、周りに恵まれてるからなぁ。友達にも、うちの騎士にも、空に還った『あの娘』にも」
「……そうなんですね」
何でもないように口から出ていたが、聞き逃すほどアスナも緊張し

てはいなかったようだ。深く切り込むことはせず、肯定を返す。
「それで、や」
八神さんも今のは口が滑ったと思ったのか、少々強引に話を変えてきた。特に俺も言及することなく受け入れる。
「そのうち、次に会う時があったら言っといてほしいって、フェイトちゃんには言っとったことなんやけどな」
それがここに来た理由だと、今回のお話の本題だと言いたげに、八神さんが俺たちのほうを向いて、腕を組むようにひじを抱えた。
さらりと、言った。
「自分ら、特務六課に興味あらへん？」
「はい？」
自分らというのは、俺とアスナということだろうか。複数形で、しかもこの場には八神さん以外には俺とアスナしかいないとあれば、疑問を挟む余地はないのだが。
疑問というなら、なぜ俺達を勧誘するのかという点だ。
「疑問に答えるとな、私には権限があるんや」
「権限、ですか？」
アスナも困惑している。
「そ、権限。普段はいろいろと面倒なテストがあるんよ。筆記だったり、実技だったり。そもそも訓練校に入らないと管理局には入れないんや。警察学校みたいなもんやな。なんやけど。ウチは、今だけ、六課限定で、そういうことをすっ飛ばして人を雇える権利を持ってるんや」
それはすごい権利だ。もちろん上から降りる予算でやりくりしないといけないだろうから、無制限にとはいかないのかもしれないけど。楯無さんの後ろ盾があるからか？
でも今の言葉は、俺たちの疑問には全く答えていない。
どうして、そこまでの強力な権限を使ってまで、俺達を特務六課に勧誘しようというのか。その疑問には答えていない。
「それは俺がスタンド使いだからですか？」
一番に思いつくのは、俺がスタンド使いだからという理由だ。六課

はスタンドの事件について深く関わっている。スタンド使いの戦力が必要だと思っているのだろうか。
「んー、ま、それもあるんやけどね」
八神さんは顎に手を添え、5秒ほど唸った。
「必要としとるんよ。六課で一緒に働いてくれる人材を。それも、即戦力になりそうで、信頼できる人材を」
「どうして、戦力を必要としているんですか？」
アスナの問いだ。
今でも、十分すぎるメンバーが揃っているはずだ。それ以上の戦力を必要とする最も単純な理由は。
「何か、大きな戦いがあるんですか？」
「うーん、そうやなぁ……ま、どうせ早いか遅いかの違いだけやろうし……そうや。近々、遅くとも3年以内に」
3年。3年だと？
その数値に、俺は、おそらくアスナも、聞き覚えがあった。
「それは――」
俺の声は掠れていた。
それは、未来の俺が現在の俺に告げた、終わりまでのタイムリミットではなかったか。
「――それは、何か、根拠があって……？」
「そうじゃなかったら、六課は設立出来てへんよ？　何、どうしたん？
私のお話、そない怖かった？」
納得がいった。八神さんに、六課にこれほどまでに人と力が集結している理由が。楯無さんやクローディアが後ろについている理由も。
すべて、終わりに向けた準備だったのだ。
「何が起こるのかは分かっているんですか？」
「それはまだや……なんて言うと、胡散臭く聞こえるかもしれへんけどな。でも、『何か』が起こることはわかっとるんや。私達はそれに備えてる」
俺もアスナも、動揺が隠せなかった。
「スタンドの事件はその前兆やないかと思っとる。どうしようもない

事件が起こる前段階の。難しい事件なのは間違いないんやけどな」
話は続く。
「実はあの旅行、オフトレーニングの旅行は、君たちの人格面でのテストの意味もあったんよ？　堅苦しい面接なんてすると、どうしても仮面をかぶってしまいそうやからな。でも、オフの旅行ならそうもいかない。私の部隊、みんな家族みたいな、しっかりとした繋がりのある集団やからな。その辺りはどうしても外せんのよ。みーんな合格。でも流石に、あんなにたくさん女の子を連れてきた時は驚いたけどなぁ」
道理であの人数でも一緒に行けた訳だ。試験官は、多分なのはさんだったんだろう。フェイトさんには務まりそうになかったし。
「そうそう！　フェイトちゃんが夜月君のことすごく気に入ってててな。もう驚いたんよ！　ウチはてっきり、なのはちゃんとデキてるもんやと」
それは思わないでもない。一緒に住んでるしな。
「翔君？　何度も聞くけど、本当に……？」
「何もないから、な？」
一度フェイトさんとはしっかりと話し合わないといけないかもしれないな。や、それはそれで、ドツボにはまりそうな予感がするんだけど……でも、このままにしておくのはいろいろとマズイか。
「何なん？　２人とも、やっぱり付き合っとんの？　それとも、あの時旅行に来てた誰かと？　ん？　悪いようにはしないから正直に白状してみい？」
「や、それは、ね？　プライベートじゃないですか」
あまり深くまで切り込まれると、ぼろが出るかもしれない。
「まあまあ、減るもんやないし。こない綺麗な彼女なら、誰に見せても自慢出来るやん」
それはアスナもわかっているようで、否定も肯定もせず、曖昧に濁している。
「そんなに気になりますか？」
「そりゃー気になるよ？　私の周り、そういう色恋とは全然縁のない

人たちばかりで。つまんないんやもん。その点、若者はいいわぁ。女性が輝いていられる時間が短いって、この年になって思うんよ」
だから、あなたはまだ若いって。
同じ年代の人と比べて、多少くたびれているかもしれないけどね。
「――――話を戻すと。と言っても、そこまで話すことはもうないんやけどな？　あの旅行、本当なら、陸戦試合で戦闘力のテストもしておきたかったんや。あんな事になってしもたし」
あんな事、とはアゼンダ達の襲撃の事だろう。あれがなかったら、次の日には陸戦試合をしている予定だった。全く違うスキルを持った人とチームを組んでの団体戦だ。さぞ実戦で役に立つことだろう。
「一体、いつから考えていたんですか？」
余所行きから戦場での顔に、アスナの表情は変化していた。
「ほとんど全部、偶然の積み重ね。それを都合よく私が利用しただけなんよ。私、チャンスは逃さない質でな」
その言葉は本当だろう。降って沸いた機会をうまく利用したんだ。
タヌキめ。
「考えといてくれると嬉しいわ」
「考えるまでもありませんよ」
考える理由も、断る理由もない。
「受けるに決まっています」
「そうなん？　ここにいない娘に相談とかしなくてもええん？　確か１０人くらいおったはずやけど？」
「私たちの意見も同じです。みんなもそう言います」
俺の代わりにアスナが答える。
「……そっか。おおきに。ありがとうなぁ」
八神さんは、柔らかくお礼を言った。その微笑みは、とても綺麗だと思った。
「と言っても、形式上極限まで簡略化したとはいえ、筆記と実技の試験は避けては通れないのはわかる？」
「はい」
「筆記は無理にしても、実技なら。今ここにシグナムがいてはること

やし」
「え」
　それはつまり、ここでシグナムさんと戦えと？
「冗談や。実は近々、潰れてしもた陸戦試合を六課のシュミレーターを使ってやろうと思っとるんよ。あの時の旅行のメンバーでな？
それに混ざって欲しいんよ」
「そ、それは、いいんでしょうか……？　一応公的な機関の備品を私的に使うっていうのは……」
　突然茶目っ気を出し始めた八神さんに、アスナは態度を崩さずに突っ込みを入れる。
　良い訳がない。言い訳なんてする余地もなく、ダメなことだ。
「だからこそ、や。みんなの試験って体にすれば、問題はあらへんのよ。そこにちょっと、お子さんが混じってしまうかもしれへんけどな？」
「えぇ……」
　身内で固まっている六課だからこそ出来る荒業だな。こういう人なんだ、この人は。
「詳しい日程は2週間前までにはお知らせするから、これからどうぞ、よろしくな」
「はい。よろしくお願いします。八神さん」
　俺は、特務六課に入隊することに決めたのだった。

話し合いの結果

「いらっしゃいませー!! 空いてるお席へどうぞ～」
ウエイトレスさんの言葉に従い、俺達3人は店に入って案内された席に腰掛ける。
ここはカフェだが、ただのカフェではない。
「じゃあ……俺はとりあえずコーヒーでも……」
「私はここからここまで」
「太る」
メニューのケーキすべてを指差している耀に、俺は残酷に告げる。
「そんなことはない。私は成長期だし」
「糖分は血肉にはならないんだよなぁ……」
ま、耀は肉もモリモリ食べてるんだけど。最近、食費が跳ね上がって頭が痛い。
「でも、脂肪は蓄えないといけない場所があるから……そろそろ大きくなり始めないと、マズい気がするし……」
耀は自分の胸に手を当ててつぶやく。確かに耀の胸は小さい。というか、無い。散々小さい小さいと理子にからかわれているアリアよりもさらに小さい。アリアが緋弾の影響で、12歳から成長が遅くなっていることを考えると……うん。ごめんなさいと言いたくなってしまう。
「頑張ってくれ」
としか言えません。
「頑張る。1年……いや、半年後にはナイスバディになってるから」
「そうですか……」
まあ夢を見るのは自由だ。可能性がないわけじゃないんだしな。あんなに食べているのに体形に変化が現れないのは、一種の病気なんじゃないのかとも思えてしまう。
で、だ。もう1人、ウエイトレスを呼び止めて注文している耀の隣にいる、見ていて心配になりそうなくらいソワソワしている女の子に目を向ける。

「あのさ、そんなに気になるならさっさと行ってきていいぞ？」
「そ、そうですの？　そ、それでは……」
そう言って、黒いゴスロリ姿の狂三はそさくさと席を立つ。
向かう場所はもちろんわかっている。
俺たちが座るテーブル席から少し離れたところに、靴を抜いで入るガラスで囲まれた空間がある。その中にはクッションやたくさんの動物が遊ぶような遊具、何よりこの場所の主役というべき存在がいた。
猫だ。
週末、土日の土曜日はアインハルトのデバイスを取りに八神家に行った。そして日曜日である今日は、狂三たっての希望により、猫カフェに来たのだ。最近の週末はいつも、大会に出るみんなのトレーニングに付き合っている。そのため久々の休日だ。
耀のほうも、興味があると言ってついてきた。
後姿からもわかるほど興奮した様子の狂三は、さっそく猫と戯れ始めた。猫を抱きしめてゴロゴロと転がっている。やめなさいって、そんなこと。店員さんも生暖かい目で見てるぞ。ほら、俺や耀に写真を撮られてる。後で大変だぞ。
コーヒーにミルクと砂糖を入れ、かき混ぜながらぼんやりとそんなことを考える。まことに穏やかなり。
「そういえば、翔は向こうにはいかないの？」
注文したケーキを半分ほど平らげてしまった耀がそんなことを聞いてくる。１０皿くらいあったはずなんだけど……？
「どっちでもいいんだけどな。耀は行くのか？」
「モグッ、うん、食べ終わったから私も行こうかな」
食べ、終わった？　俺と話し始めたときは確かにまだ５皿残っていたはずなんだけど？
君、食べるの早すぎない？
しかしケロリとした顔をしているんだから問題ないんだろう。
「じゃ、俺も行こうかな……昨日は色々と疲れたし」
「お疲れ様」

珍しく何の嫌味もないお疲れさまだ。
「それにしても、昨日はみんな大荒れだったね」
「ま、あんなに意見が合わないのは初めてだったな。俺もうかつだったと思うよ」
昨日は六課――――管理局――――への入局をみんなに報告したわけなんだけど、それがもう荒れに荒れた。
荷物を持って、猫ブースに足を踏み入れた。
「ゴロゴロー、ふふ、ここがいいんでちゅかー？」
耀が撮影を開始した。もちろん俺も。これを動画におさめないなんてありえない。
普段なら絶対に見せないだろう姿だ。なんて迂闊なことをしてしまっているんだろうねぇ、狂三さん？　ここには俺だけじゃなくて問題児の耀もいるんだぜ？
みんなのグループラインに動画を乗せた耀は、自分もしゃがんで猫を呼び始めた。
「でも、耀が入るなんて予想外だったよ。そういう組織とか嫌なもんだと思ってたよ」
「入局したら手帳貰えるでしょ？　ほら、所属を証明する」
「そりゃ、な」
「それを使って権力を振りかざしたい」
「そんな目的なのか⁉」
あんまりな目的に叫んでしまい、周りの猫を遠ざけてしまう。
「翔さん……」
「翔……」
「悪かったよ。るーるるる……」
悪いことをしたのは分かっている。俺は無心で猫を集めつつ、昨日の会議について思い返すのだった。

「……翔？　もう1回言ってもらえるかしら？」
アリアに問われ同じセリフを繰り返した。この時点で、アリアが爆発寸前であることは分かっていたため、出来るだけ心の準備をして。
「特務六課に入隊することにした」
「はぁぁぁぁ～～～～……」
意外にも爆発はしなかった。代わりに長い長い溜息をついた。
「そうなんですか!?　じゃあ翔君も同僚になるかもしれないんですね！」
桜はアリアとは違って素直に喜んでくれている。桜はもう六課に所属してるからな。や、特待生枠だって話があったし、もしかすると桜も八神さんの計らいなのかもしれない。
「で、それってアンタだけなのかしら？」
「一応みんなだよ？　あのね、特務六課って例の『3年後』の事件に対抗するために設立されたんだって。だからあそこにいれば、そういう事件に積極的にかかわっていけるって思ってね？」
一緒に来ていたアスナがフォローしてくれる。
「ああ、うん、それは分かってるわ。でも……はぁ、いろいろと面倒なのよねぇ……」
「そもそも、その八神さん、というのは信用できる方なんですの？」
「それはまあ、出来るよ」
「んん？　根拠があるのかなぁ？　翔君にしては、少しふわふわしすぎじゃないのかなぁ？」
信じられるのは、作品に出てくるキャラクターとしての『八神　はやて』を知っているからだ。もちろんいうこの世界の住人には説明しづらいことだ。俺が召喚した女の子は察してくれたみたいだけど。
でも、俺の信用だけでは納得しきれないこともあるんだろう。理子は少し否定的だ。
「まず私から言わせてもらうけど、立場的にそう簡単に決められないわね」
まず話始めるのはアリアだ。

「私の家はホームズ家、イギリスでは一応貴族ってことになってるし、私は長女。何でもかんでも自由に決められる立場にはないわ」
「落ちぶれ始めてるけどね？　今はむしろ助手のワトソン家のほうが裕福だし」
銃弾が理子に放たれる。いつものことだ。
「で、理子だけど、理子もあんまり管理局には入りたくないなぁ。翔君を信用できないわけじゃないけど、性格的にね。長続きしなさそうだし」
確かに、理子は組織に入るよりも自由な立場である武偵でいたほうが良いことが多いだろう。
「私もパスです。私の目的にそんなに重要ではなさそうなので」
そして、ヴィヴィオを守ることが第一目標のヤミも辞退した。職務のせいでヴィヴィオと一緒にいれないことが多くなるかもしれないからな。
「それに、3年後に向けて無理やり設立された部隊ってことは、いろいろ無理して作られたんでしょ？　その辺りのくだらないごたごたに巻き込まれたら、無為に時間を消費することになりかねないわよ？」
「ああ……確かになぁ」
アリアの言葉に、納得させられてしまう。
人類とて一枚岩ではない。特に優秀な人材を片っ端から集めるのは反感を買うだろうし、部隊長は出世頭の若造だ。方々からのヘイトを集めているのは想像に難くない。
知っている人が運営していると言っても、それが絶対ではないのだ。
うーむ、そう言われると確かに焦っていたのかもしれないな。でも、おいしい立場であることには変わりないんだよなぁ……
「翔、おいしい蜜だけを吸う方法を考えてる？」
「そうそう。言い方悪いけどな」
何か手段はないかと考えるが、そんなうまい裏技が簡単に浮かんでくるわけがない。二手に分かれるじゃないけど、自由な立場で動ける人を作っておくことも重要なんじゃないのか？

「とりあえず、私はお兄ちゃんに任せるわ」
「はい。私もそうします」
「私はもともと参加することにしてたから」
「頑張ります」
「私は参加するよ」
「マスターの判断に任せる」
「はい。私たちはあなたの剣です。好きにお使いください」
クロ、雪菜、アスナ、ティナ、耀、セイバー達、俺が召喚した女の子の大半は所属しても良いと言ってくれた。
ただ1人、
「わたくしは、今回は遠慮させていただきますわ」
狂三だけが参加しないことになった。
「じゃあこういたしましょう。翔さんたちは六課に入ってそっちの方面から調べて下さいまし。わたくし達は皆さんの手が届かない、込み入ったところを調査いたしますわ。幸い、わたくしも理子さんも、そういうことは得意ですから」
「ねー。むしろそっちの方が、私たちは役に立つと思うよ?」
確かにこの2人なら、そのスキルに長けてるな。そうしてもらうか。
こうして俺たちは、六課に参加する組とそうでない組に分かれることになった。

「よーしよしよしよしよし……で、そうなったって八神さんに連絡したんだよ。昨日の夜にさ」
猫のあごの下を撫でる。撫でられた猫は目を細め、その場に崩れ落

ちるように横になった。
　俺たちは3人そろって猫と戯れていた。流石にガチの会話ができる耀には敵わないが、俺の周りにも、しっかりと猫が集まってきている。
「相変わらずすごいテクニックですのね……それで、どうなったんですの？」
「どうもこうもないよ。別に問題ないって。ただし、小学生以下の採用は流石に難しいし、中学生は候補生って形になるんだってさ。でも、入らない人も模擬戦には参加しても良いって。この前の旅行が途中で終わったお詫びに」
「……まあそのくらいなら。別に相手も敵というわけではありませんし。いつ敵になるか分からないですけれど」
「気を付けるよ」
「そうしてくださいまし。翔さんの先輩の件もありますし、向こうも戦力以外の『何か』を翔さんに求めているのかもしれませんわ」
「……そうだよな」
　相手が知っているキャラクターだとしても、みんなの過去をある程度分かっているとしても、それは知っているだけだ。
　実際に話すことで印象なんていくらでも変わるし、知った顔で話すと不快感を与えてしまうかもしれない。
「もちろん、わたくしも外から色々とサポートは致しますわ。そのために今回は入局しないことにしたんですもの。内側はアスナさんにお任せいたしますわ」
　狂三が猫を抱いてこちらに向き直った。黒のゴスロリ衣装とデブ猫がなんとも微妙なコントラストを醸し出している。
「頼りにしてるよ、狂三」
「はい、翔さん♪」
「仲良くしてるところ悪いけど」
「なんかすごいところ見ちゃってるのカナ？」
　2人の声が俺たちを正気に戻した。って、2人？
「ちょっ！　メ、メア!?」

「あ、あなた、どうしてここに……っ!?」
　特徴的なおさげはいつも通り。違うのは制服が私服になっている点だ。メアにファッションのセンスがあるとは少し意外だけど、なかなかにキマっている。服装の説明をすると……って、どうでもいいんだよ、そんなことは！
「な、何でここに？」
　耀もどうしてここに連れてきたんだ！
「だって私、実際に見たことなかったから。どんな人なのかなー、って」
「別に？　ちょっと外から翔君たちが見えてね。せっかくだしちょっと声をかけてみたんだけど、迷惑だったみたいだね」
　２人ともあっけらかんと答えてくる。
　この２人、どこか似た空気を感じるぞ。その場をひっかきまわすって性格が。
「……少なくとも、一緒にお話しできるほど、仲良くはありませんね」
　狂三はニコニコとはしているが、抱いていた猫を下ろして、せかっく集めた猫が逃げ出すほどの空気を纏い始めた。
「あはは、ここでやり合ったらかわいそうだよ……何人死んじゃうか分かんないもんね。猫ちゃんもいるし。戦っても、お互い得るものは何もないよ？」
「……」
　メアには本当に戦闘の意思はないみたいだ。でも戦闘の意思が無くても害意がないとは限らない。
「本当に何もするつもりはないって。少なくとも今はね。今は観察してるから。お姉ちゃんの周りを」
「おいメア！　お前なんか変なこと企んでないよな！」
「あはは、企んでないわけないでしょ？　だって、ヤミお姉ちゃんには元に戻ってもらわないといけないんだもん。翔君がお姉ちゃんを変えたから、私は元に戻さないといけないんだよ？」
　いたって普通の顔で、考えを曲げるつもりはないと言われてしまう。ヤミを変えた大部分の理由は、どちらかというとヴィヴィオだと

思うんだけど。でも、ヴィヴィオにちょっかいを出されるよりは何倍もマシだ。
「だから、気を付けてね。油断してるとヤミお姉ちゃんを取っちゃうから」
そう言い残して、メアはお店を後にした。

悪夢の中の『デス１３』①　（ヤミ）

「ここは……？」
　艶のある長い金髪。挑発的な黒い戦闘服を着る少女は、ぼんやりと意識を浮上させた。定まらない思考を必死にまとめようとする。暗殺者になってからこんなにも無防備な姿をさらしたのは、それこそ数えるほどしかない。
　少女――――ヤミは、今自分が座っていることを認識した。上等なクッションがあるわけではない。簡素なプラスチックの椅子に座っている。
　しかも高さがあった。地面までの距離は、５０メートルはある。巨大な観覧車のゴンドラに１つに、彼女は座っていた。
「なぜ、こんなところに……？」
　ヤミは首を傾げた。
　おおよそ自分が来るとは思えない場所、しかも爆睡しているなんてありえない。
　ありえない。
　絶対にありえない。
　つまり、
「誰かの攻撃を受けている」
　それしか考えられない。
　立ち上がり、辺りを見回す。質感は本物だ。空気の匂いから観覧車が回転する振動まで。もしもこれが催眠系の能力ならば、相当高いレベルの能力者ということになる。
「フヒ、ッヒヒヒヒ！　さすがはヤミちゃんだねぇ。鋭いよっ！　肉食獣の爪なんかよりもずっと鋭いよっ！」
「何処にいるんですか。姿を見せてください」
　突然聞こえてきた声にも動じずに、全身の神経を研ぎ澄ませる。
（まったく気配を感じないわけじゃない……すぐそこにいるのに何もいない？）
「ん？　ん～……ああ！　そっか、そっか！　ヤミちゃんはスタンド

使いじゃあないから、僕のスタンドは見えないんだね！」
「スタンド使い……」
ヤミは翔の説明を思い出し、顔をこわばらせる。スタンドはスタンドでなければ攻撃出来ない。そしてヤミには、保脇のスタンドに手ひどくやられたことがある。
苦手意識を持つには十分な相手だ。
（とにかく本体を見つけなければいけませんね。でも今はどんな罠が仕掛けられているのかわからない。もっと広い場所に出ないと）
幸い、拘束されているわけではない。変身（トランス）も使える。ヤミを金色の闇だと知っての行動なら間抜けの一言だ。
「変身（トランス）――――」
いつもの通り手を変形させる。数センチの鉄板をも切り裂くヤミの愛刀だ。ゴンドラの扉など、何ら問題なく切り裂ける。はずだった。
「つッ、うううううう……っ!!」
扉には傷1つつかなかった。
手は刀ではなくハンマーになっていた。打ち所が悪かったのか、手はしびれてしまっている。
「変身（トランス）の不発……？」
「違うよヤミちゃん。たとえ不発だったとしても、ヤミちゃんなら今の攻撃で扉を破壊しているはずだもんね？」
そう言われればそうだ。しかしそのことが、ますますヤミを混乱させた。
「簡単な話なんだよ。とっても簡単なんだ。ここは僕の世界。僕の思い通りになる世界。ヤミちゃんは、僕の可愛い可愛いお人形なんだよ」
「ふざけたことをッ！」
とっさに髪を変身（トランス）させて気配の方向を攻撃する――――ことが出来ない。
「なっ！　これは……っ！」
髪の毛を拳に変えて相手に叩き込むはずだった。しかし向かった

先は、ヤミの体のほうだった。
自らの髪の毛に拘束されるヤミ。四肢を張りつけにされ、完全に動きを止められてしまう。複雑に絡まった髪の毛一本一本が、鋼鉄のワイヤーのような強度だった。
「だから言ったじゃないか、ヤミちゃん。君は僕のお人形なんだよ？
どんな抵抗も無駄なんだから」
体の自由が奪われていないとはいえ、自身の髪の毛に拘束されてしまい、動かせるのは指先と視線くらいになった。
小さいゴンドラの中で足がつかないように空中に固定されたヤミだが、どこにいるかもわからない声の主を睨みつける。だがそれも、犯人にこの状況を楽しませるスパイスにしかならない。
「それにしても、こうして明るいところで見ると、えっちな恰好なんだねヤミちゃんは。フヒッ。下着にはあんまりこだわりがないのかな？　図分とシンプルなものをつけてるんだねぇ？」
ヤミの背中にゾワゾワと嫌な震えが走る。
（下にだれかいる!?）
見えない何かにスカートの中をのぞき込まれている。何も見えないが確かに下賤な視線を感じていた。
「とんだ変態ですね。人のスカートの中を覗き込んで喜ぶなんて」
「そうかもしれないね。でもしょうがないんだ。僕はヤミちゃんを一目見た時から忘れられないんだから。君を――――僕だけの人形にしたいってね。人形のことは隅々まで知っておかなければいけないだろ？」
「なに――――んっ！　――――っはぁぁ、んんぅ、ふぅ、ひっ、や、ニュルニュル……ッ！」
いつも着ているはずの黒い戦闘服、それに包まれたヤミの体が何かに這いずられていた。
乳房がぐねぐねと揉みしだかれ形を変えている。外からは何もされていないように見える。
しかしその実、戦闘服の中には無数の触手とヒダが、その粘液をぬりたくっているのだ。

「ヤミちゃん、本当にニュルニュルしたものが苦手なんだね。あいつの情報通りだ。そんなにえっちな顔になって……っ、写真が取れないのが残念だよぉ！」
「んはぁぁぁ……っ、はぅっ！　ふぅぅ、んっ!!」
何とか声を出すのをこらえようとするヤミだったが、代わりに腰が仰け反った。
すっかりと自己主張を始めた胸の頂点に触手が一斉に群がったからだ。その小さな突起に触手は吸い付き、コリコリと転がし始めた。外見にも、女性の指ほどのミミズが２つのふくらみ、その頂点に群がっているような、生理的な嫌悪感を感じる絵面になっている。
トロリと口の端から涎をこぼし、全身を引き攣らせる。痙攣すらもできないくらいに体を押さえつけられ、快楽を逃がすことが出来ない。
「あふっ、ふっ、んぁぁぁ……、はぅんっ!!」
「エッチな声を我慢してるんだね。こんなにビンビンにしてるのに、いまさら我慢なんて意味ないんじゃないのかな」
「はっ、はっ、はっ……、ひぎゅ、ふぅっ、んんっ……ぁ、ぁ、ぁ！」
ヤミの声が切羽詰まってきた。ビリビリと体中に快感電流が走り、一気に弛緩して体を明け渡しそうになるのを、必死に理性でつなぎとめる。
（く……は……ぜ、たい……たえ……る……たえ……るぅぅ……！こん、な……こんなもの、にぃ……っ）
苦手なニュルニュル触手による攻めは、理性の壁をあっさりと押し流し、頂点まで体を高ぶらせていく。
その様子に気をよくしたのか、声はますます饒舌になる。
「もしかしてイッちゃうの？　もしかして、顔もわからない、名前も知らない、それどころか、人でもないものにちょっと体をいじられただけで、それでピクピクしちゃうのかな？　ヤミちゃんは、そんなにエッチな娘だったのかな？　私は全然そういう娘でも大丈夫だよ？」
「わたし、はっ！　えっちぃ娘じゃ、ありません……！」
反論している最中も、こりこり、こりこりとしごかれ続ける乳首は、

じんじんとした刺激をヤミに与え続けている。
そんなふうに、快楽を受け取るために触ったことなどないヤミがここまで耐えているのは、ひとえにヤミの精神力が成せることだ。
挑発を受けた相手が返すのは、より辛い、拷問のような時間だ。
「ふーん、そうなんだぁ？　じゃあ、こっちの方も触っちゃおうかなぁ？」
「っ！」
スカートの奥、少し湿り気を帯びてきた下着が。ただの布切れのはずのそれが、かすかに、しかし確実に動いた。
次はそこに行くという宣言だ。
とうとう来るところに来た。ヤミは少しでも抵抗しようと、口を堅く結ぶ。
「ヤミちゃんはまだしたことないよね？　でも知ってるかな？　ま、裏世界にいて全く知らないなんてことあるわけないよね」
「……するなら、勝手にすればいいです」
「ふふ、経験ないのに、そんな強気なこと言っても大丈夫？　もしかして、ここは現実じゃないからされても大丈夫、なんて思ってるのかな？　だったら甘いよ？」
ヤミの下着が勝手に動きだした。その内側に、バトルスーツと同じような触手が大量に表れたのだ。寝起きの生物が体を揺らすように、生まれたばかりの動物が足を震わせながら立つように、ふやけ始めた肉ビラをゆるゆると舐められる。
その感覚が、全身が泡立つような不快感となってヤミを襲った。
「ここで起きたことは全部現実世界に反映されるんだよ？　もしヤミちゃんが初めてだったら、もしも初めてだったら、この世界でされちゃったら、現実でも初めてが奪われちゃうことになるんだよ？」
「……」
さわさわと、耐えがたい嫌悪感がヤミの下着の内側を這いまわる。周辺のお肉を柔らかくして、貫く準備をしているのだ。
声の主は少し指先に力を込めただけで、少女の純潔を守っている薄皮が貫かれてしまうことになる。

「……それが、なんだっていうんですか」
「――――はぁ。なんか違うなー」

――――――

「ッ!!」
「――――ワッシャーーー!!!」
飛び出した刃が天井に突き刺さった。俺が聖杯戦争を潜り抜けていなかったら死んでいた。
いったい何があったのか。自分の体を抱くようにして臨戦態勢になっているヤミだったが、部屋への侵入者が俺であることを確認すると変身(トランス)を解いた。
「申し訳ありません。つい、やってしまいました」
「つい、じゃねーだろ！　殺す気か！」
「そもそも、私の部屋に勝手に入るあなたが悪いんでしょう」
「それはそうかもしれないけど。寝坊するほうも悪いと思うぞ」
「私が寝坊……？」
困惑した様子で時計を見るヤミ。俺の言ったことが間違いではないことを確認すると、ますます首をかしげる。
「あなた、昨日の食事に何か薬でも入れましたか？」
「疑いがひどすぎる!!　仲間に薬を盛って一体何の得があるんだよ!!」
起きることが出来ない女性を夜にこっそり、とか？　そんなことやったら捕まるよ。捕まればいいほうだよ。普通に殺されかねないよ。
「何人もの女性と関係のあるあなたの言う事ではありませんね」
「ごもっとも」
もう目を逸らすしかない。
「本当に何でもないのか？」
「はい。何か、はい、そうですね……嫌な夢を見た、だけですから」
煮え切らない、要領を得ない、ヤミにしてははっきりとしない返事だ。
「とにかく、もう目は覚めましたから」
「嫌な夢、ね……はいはい、出ていくよ。さっさと下に来いよ」
俺はそう言って扉を閉めた。

旅行から帰ってきて2週間が経とうとしてた。
まさか2週間も何もないままで過ごせることになるとは。もちろん細かいアレコレはあったが、この世界で生活していて銃弾の1発や2発で事件だ何だと騒いでいたら、永遠にゆっくりできない。
あれから八神さんからの連絡はない。結局、管理局組と武偵組、そうでない組に分かれることになったとはいえ、俺が管理局に入ることは許可が下りた。
つまり今朝、ヤミに殺されかけたことを除けば、すこぶる順調に過ごせていたということだ。
つまり平和だった。
今は休み時間。男友達と他愛もないおしゃべりをしていると、女子の会話が耳に入って来る。
聞き耳を立てているのだ。そのグループにはメアがいるからな。
「んでんで？　黒咲さんは今気になる男子とかいないの？」
「気になる男子？　そうだなぁ……今一番気になるのは、夜月君かなぁ？」
俺の名前が出た瞬間に足をめちゃめちゃに踏まれた。犯人はもちろん話していた男友達にだ。テメェらも聞き耳立ててんのかい。
メアもメアだ。適当に答えてんだろ。興味っていうか、監視対処になってるから答えた的な。
「えー？　でも夜月は、ねぇ？」
「ねー？　あいつかなり遊んでるってウワサだよ？　先輩にも後輩にも、戦妹（アミカ）の娘にも手を出してるとか……」
「やめといたほうがいいって！　そりゃ全然経験ないよりはいいかもだけどさ。だからってあいつは無いよ！」

「そうそう！　夜月なんてありえないって！　むしろ男なんて無理だよ！　女の子は女の子同士……フヒ、ヤミちゃん……」
「そんなに気になることかな？　そういうのって、生物としては本能的な欲求でしょ？　私はあんまり気にならないなぁ」
「えー!?　マジで!?　……あ、ちょっとアンタは離れてね」
……いったい何を話してるんだよ。全く。ずいぶんな言われようだけど、それは甘んじて受け入れよう。事実だしな。
「まあでも、経験って大事だよね？」
「わかる。いいお店知ってたり、あっちのテクもヤバかったりね。同年代とか、ガキ過ぎてないわー」
「あっちのテク……みんなは経験あるの？」
メアがとんでもないことを言い始めた。そんなこと言うから、教室中の男が聞き耳を立て始めたじゃないか！
いくら男勝りな女子が多い武偵高でも、そんな話題を大っぴらに話す女子はいない。
「は？　や、いやいや！　ここで話すようなことじゃないっしょ！」
「そうそう！　黒咲さん大胆すぎだって！」
「そっか。そうだね！　……もう少し勉強しないとな」
区切りのいいところで、チャイムが鳴る。次の授業は化学。お昼までひと踏ん張りだ。
授業中には何も起こらない。これといった事件が起こることもなく、学校が終わり、そして――――夜になった。

悪夢の中の『デス１３』②

「っ！」
ヤミの目が覚めた。
今度はコーヒーカップに1人で乗っていたようだ。ぼんやりとした意識が一気に覚醒する。
くすんだセピア色の遊園地。忘れもしない。今までなぜ忘れていたのか。ここは昨晩も訪れた。
「マズい……！」
何の対策もできずに、またここに来てしまった。このままでは昨晩の繰り返し――――いや、もっとひどい目にあわされるかもしれない。
起きている間はここでの出来事を覚えていることは出来ない。相談しようにも、することが出来ない。
だが、今回はこんなにひらけたところで目を覚ました。前回の様にはいかないはずだ。
この世界が本当に昨日の声の主の思い通りに動く世界だとすれば、戦闘にすらならないのだが。
事実、昨日は変身能力（トランス）の制御を奪われ、服の中に触手が蠢いた。
その時の感覚に身震いしていると、1人の女の子が姿を現した。
「っ！　姫柊雪菜……？」
「あっ！　ヤミさん!?　どうしてここに？　ここがどこか分かりますか？」
見慣れた制服に身を包む雪菜は、ようやく見つけた知った顔であるヤミのもとに駆け寄ってきた。
しかし、
「止まってください！」
「ッ!!　あの、何か？」
言われた通り止まる雪菜。
「そこから動かないでください」
「はい？　わ、分かりましたけど……」
この世界のでたらめさを知っているヤミ。考えているのは、

（この姫柊雪菜、怪しい）
精巧な偽物が出てきても驚くに値しない。
「ヤミさん、何があったんですの？」
「まったく、どういう事よ、これは」
雪菜の真贋を確かめようと周りをぐるぐると回っていると、狂三とクロも現れた。
「あれ？　みんないるの？」
「どうやら、ここはただの夢の中という訳ではないようですね」
アスナと桜も、いつもの制服姿で現れた。ここまでそろっては、全員を本物か見分けることは出来ない。ヤミは諦めてとりあえず全員が本物だと思うことにした。
（疑っても見分けがつきそうにないですし、本物だったら固まっていた方が良いですからね）
もっとも、固まっていたところでこの夢の中の世界で戦えるのかわからないが。
「それで」
ヤミ以外の５人は、この世界について何も知らないようだ。アスナが先頭に立って場を仕切る。
「この世界は何なの？　みんなこの世界に来る前のことは憶えてる？」
「全くですわ。昨日の夜に眠って、気が付いたらこの場所に立っていましたの」
その言葉にヤミ以外の女の子は口々に『知らない』と言う。ここはヤミが説明するしかない。たとえ分かっていることがほとんどないとしても。
「私は昨日、この世界に来ました」
「本当!?」
「はい。結論から言うとここは夢の中の世界です。何者かの能力によって作り出された世界で、この世界の支配権はすべて敵が持っている――」
「――アララ、皆さんお揃いで。こんにちは。ん？　いや、今は夜だ

しこんばんはが正しいのかな？」
ヤミのセリフにかぶせるように、とぼけた声が聞こえてきた。
全員、相当の実力者だというのに、そこにいることに気が付くことが出来なかった。
一言で言うとピエロの顔をした死神だ。体全てを覆い隠すようにマントをかぶっていて、手には大きな鎌を持っている。あの大きさになると、実際に武器として使うには少々邪魔になりそうなサイズだ。ピエロ顔のせいで、持っている鎌もおもちゃのように見えてくる。
だが、明らかに異常な存在だ。
全員が戦闘態勢になる。
「ってあれ？　何であの男は入ってないんだろ……？」
ピエロはぼそりと呟くが、女の子たちには聞こえていない。
「ま、いっか。私の世界に、ちょっかいかけられるわけないんだし……」
「何をぶつぶつと言っているんですか！」
「そうよそうよ！　いったいどういうつもりなのよ！　せっかくお兄ちゃんと添い寝してたのに！」
「「はい？」」
「え？」
「クロちゃん、それについては後でね？」
「え？　ちょっと？」
「皆さん、気を付けてください。おそらく私たちはアイツにはまともに攻撃できません。逃げることも難しいかもしれないです」
「どうして話が進んでるの？　私があとでお説教されるかもしれないんですけど？」
騒ぎ立てるクロを無視して、ヤミは相手について知っていることを話す。
「なら――――先手必勝ですわッ!!!」
狂三を自身の影から短銃を取り出し、ピエロに銃口を向けた。
「無駄です。この世界で攻撃が出来る訳が――――」
昨日の経験を思い出しヤミが告げるが、その忠告に反して引き金を

引くと同時に炸裂音が響いた。
「ッ!? どうして――――」
この世界の主（仮）であるピエロに対しての攻撃だ。それもわかりやすい銃による射撃。変身（トランス）による攻撃にまで対応した敵が、あの程度を見逃すわけがない。
ヤミが攻撃の結果を確認しようとピエロに注目するが、何も変化は無かった。
「こ、これは……？」
「く、狂三ちゃん、それって……？」
アスナの声で、全員が狂三の持つ短銃に視線を向ける。短銃を持った狂三が一番驚いているようだ。
それもそのはず。いつもは霊力で編まれた弾丸を吐き出していた銃口。だが今その銃口からは、まるで陳腐なマジックのように色とりどりのお花が飛び出していたのだ。
「いやいや、スタンドの僕に銃弾は効かないから何もする必要は無いんだけどね？ でもせっかくだからパフォーマンスの意味も込めて少しキレイにしてみたんだ！ どう？ 気に入ってくれた？」
「このように、この世界をもとの世界のルールで動いていると思わないでください。未知の物品の創造だけではなく、自分たちの能力にまで干渉され、操られてしまいます」
「昨日はヤミちゃん大変だったもんねぇ。ここは夢の世界だから記録には残ってないけど、絶対に忘れられない経験だったでしょ？」
「～～～っ!!」
ピエロの言葉に、顔を赤くするヤミ。この場で昨日のことをぶちまけられた場合、自分の説明を無視して突撃していただろう。
その程度にはヤミも乙女だった。乙女じゃなければエッチな話題にあんなに敏感に反応したりしない。
そして今の光景と説明で、みんな動くに動けなくなってしまった。
「あなた、スタンドなんですよね？ じゃあこの世界に本体もいるんじゃ……」
「さあ、どうだろうねぇ？ いるかもしれないし、いないかもしれな

い。存在するかもしれないし、存在しないかもしれない。探したいのなら好きに探しても良いよ？　でもその時は、僕は鬼ごっこの鬼になって探す邪魔をするけどね？」
「それは厳しいですね……攻撃が効かないどころか能力も使えないんじゃ……」
　桜も苦々しい顔をしている。
「はーっ、それにしてもみんな本当にかわいいなぁ。こんな美少女に囲まれて、夜月翔許すまじ……っ！」
　ぶつぶつと言っていたピエロだったが、直後急速に世界が崩れ始め

「っ!!」
　壁にクモの様に張り付いていた人影が、俺の『魔法の射手』をよけてビルの壁面を蹴る。恐るべきことにそのまま壁を蹴り、屋上まで逃げた。
「逃がすかよ！」
　だが俺とて、その程度の芸当はこなせる。
　同じように壁を蹴り、鉄筋コンクリートの壁を駆け上る。
　全力ダッシュというわけではない。この逃亡はただのポーズだ。
　俺の予想通り、フードを被った下手人が屋上で俺が来るのを待っていた。見間違えるはずはない。見たことのある戦闘服に、月明かりでも映える赤毛の三つ編みおさげ。
　黒咲メアだ。
「奇遇だな。何してるんだ、メア？」
「まずは挨拶しようよ、夜月君……ん、とね、何してたかって質問に答

えるとね。えー、っと、お散歩かな？」
　真面目に答える気がないということがありありと伝わってくる。
第一に、
「人の家に張り付いておいて、お散歩はないだろ？」
「あ、あそこ夜月君の家なんだ」
　知らなかったよ、と笑うメア。このままでは茶化されるだけだと判断した俺は、本題を切り出した。
　今まで触れていなかったが、メアは手ぶらではない。何か背負っている。あんな大きな荷物――――人１人――――を背負ってお散歩なんて絶対におかしい。
「何が目的だったんだ？　や、こういう質問には意味がないな。目的はヤミなんだからな。だから俺が知りたいのはそんなことじゃない。知りたいのは、何をしていたのかってことだ。しかも人１人背負って。そいつはいったい誰なんだ？」
「あはは、質問が多いよ夜月君……何を、か」
「ああ。ヤミに何かしてたよな？　今朝、明らかに様子がおかしかったぞ」
　悪夢にうなされていたというには目に毒だったあの寝姿。何も異常がないと言い切れるほど、俺の警戒心は甘くない。
　打ち解けてきたとはいえ、まだ家の中で弱みを見せたことのなかったヤミが、まさか俺に、よりにもよって寝坊して部屋に入れてしまうなんて。ありえない。
「ヤミには手を出さないんじゃなかったのか？　それとも、用事があったのは俺か？」
「お姉ちゃんに手を出さないとか、別にそんなこと言った覚えはないよ？　『家族』だし、少しは『じゃれあいたい』とは思ってるけど……それに翔君のことも、特に何かしようなんて思ってないよ。何かしようなんて、思ってないから」
　だったら何をしに来たというのだろうか。わざわざ敵地に。全員が集合している危険地帯に。こんな夜更けに。
　気になるのはメアの背にいる『誰か』だ。意識はあるようだが、顔

を伏せているためいまいちはっきりしない。体格だけ見れば子供か女性だが。俺の知っている人物なのだろうか。それとも新しい敵なのか。

だが、この場から離れたいという空気は伝わってくる。肩を叩いてメアを急かしている。

「もういいかな？　もう夜遅いし、私帰って寝ようかと思ってるんだけど？」

もはや引き留めるには戦い始めるしかない。でもここで始めるのは……何もできない。引き留める理由はあるのに、権利はない。

「それとも今夜、これから、私に付き合ってくれるの？」

「……そりゃ無理だな」

「そっか。おやすみ、夜月君」

交渉は決裂した。

メアの影は、どんどん小さくなり、やがて見えなくなった。

それ以降、ヤミに妙なことが起こることは無かった。いつも通り規則正しく、いつものクールな表情を少なくとも俺の目の前で崩すことは無くなった。

「あーあ……」

シャワーを浴び終わったメアは自室で1人、電気もつけずに、窓の外を眺めていた。

首にタオルをひっかけ、衣服は下の下着しか身に着けていない。首からかけるタオルによって、胸の頂点が隠れているとはいえ、無防備な姿であることに変わりはない。

借りている部屋が他の建物よりも高い位置になければ、誰かに見ら

れていたかもしれない。
部屋も殺風景なものだ。というより、家具が一切存在していない。借りたばかりの部屋をそのまま使用しているのか、無駄な物は何もなかった。
唯一あるものと言えば、ボストンバッグに詰められた数着の着替え、脱ぎ捨てられた制服、レジ袋パンパンに入れられた大量のお菓子だ。
片づけるという概念がないのか、数少ない生活用品も乱雑に広がっている。
メアは1人だが、正確に言えば、1人ではなかった。
部屋の隅。電気のついていない部屋でも高い立地と月明かりのおかげで、ぼんやりと部屋の様子は知ることができる。だがそれでも、光の差し込まない部屋の隅はある。
その隅に。
「どういうつもりだ、メア。何の目的があってあんなことをしたのだ」
1人の少女がいた。靄のような、黒い霧のような少女が。
「夜月翔にも感づかれていたぞ。今回のアプローチは迂闊すぎる。多少手を出すならともかく、スタンドを使ってちょっかいを出すのは危険だと知っていたはずだ」
「大丈夫だよ、マスター。女の子たちは、起きた時には何があったのかなんて忘れてるから」
「……」
軽い調子で返す。
「それに目的っていうなら、ヤミお姉ちゃんの交友関係を知るっていう大事な目的があったんだよ」
「何か進展はあったのか？」
「それを言われると、ね？」
「つまり空振りだったというわけだな？」
「今回はそんな感じかな。でも、ヤミお姉ちゃんがみんなとうまくやってるっていうのはわかったよ」
うまくと言っても、積極的に情報共有しようとしていたというだけ

なのだが、メアにとってはそれでも十分『うまくやっている』部類に入るものだった。
「……ふん。そんなごまかしの関係など、わかろうが分かるまいがどうでも良いことだ。最後には消えてなくなるさ。お前も、その関係をうまく使ったじゃないか。いや、うまくいったかどうかは少し疑問だがな」
「うん、まあねー。ガッコウには色々な人がいるから助かっちゃった」
デス１３の本体はメアの友人の１人だった。男女ではなく女子同士の混じり合いに興奮するタイプの娘の欲求と、メアのちょっとした興味が合致したのだ。
その娘は最近、転校してきたヤミにお熱だった。それと同時に、ヤミを含むたくさんの女の子と一緒に生活しているという噂（事実）のある翔に、ある種の嫉妬に近い感情を抱いていた。
交渉の結果、ちょっかいを出そうということになったのだ。驚くべきことに、新しいスタンドである『デス１３』が発現するというおまけつきだ。
実はあの世界、精神侵入（サイコダイブ）で覗き見ることが出来た。射程距離の短いデス１３を確実に当てるために、メアは壁に張り付く役と護衛役になった。
実際、メアが見たかったものとは少し違ったわけだが。
（女の子が好きっていう人もいるし、まだよくわからないな。何がいいんだろ。でも、あの時は良かったんだよね。うん）
マスターのいないときに、こっそりともう一度シてみたが、やはり『あの時』ほどの多幸感は得られなかった。
てっきり自分でするからだと思い、一度は諦め、しかし興味を捨てきることができずに今回の行動に手を出した。メア以外の女の子は、されたときどういう反応をするのだろうという実験だった。結果はこの通りだ。
せっかくうかつな行為をしたというのに、何も得ることは無かった。２人とも今回のことに懲りて、もうこんなことはやめることにした。

だとすれば、もう要因は1つしかない。夜月翔だ。
今回は翔も夢の中に引き込む予定だったが、あらかじめ警戒していた翔は、そもそも寝ていなかった。
(でも、夜月君に仕掛けるのはキケン、なんだもんなぁ。マスターも言ってるし、こんな関係ないことで、これ以上危険を冒すなんて出来ないもんねー)
いい加減体が冷えてきたため、Tシャツを羽織りながら頭を巡らせる。
今は曲がりなりにも敵同士だ。そんな相手に頼みに行くというのは、いくらメアでも躊躇する。
(ヤミお姉ちゃんには関係ない、関係ないことだけど、興味あるんだよねー……うーん、本当に関係ないの？　でも、あの反応……絶対シたことないよねー……)
もしかすると、これは役に立つ考えではないのか。メアの頭にひらめきがあった。
(もしも夜月君を味方にできれば。ヤミお姉ちゃんもえっちなことにメロメロにしちゃえば、目的を達成できるかな？　ついでに私も楽しいし。でも、兵器に『ご褒美』なんて必要ないかな？　そもそも、元に戻ってるって言えないか)
「うーん、うまくいかないなぁ……」
「何がだ？」
まとまらない思考に、メアは苦しむのだった。

2人の少女との初めて①

この島は、思った以上に広いものだ。

そう思うのはこれで何度目だろうか。実際の面積もあるだろうが、空間を拡張する魔法や、高層ビルを建てる技術、海底に建物を建設する技術もあるのだ。

平面だけを見ていてはこの島のすべては見えない。

しかしだからと言って、和洋折衷、人魔混合、科学と魔法と魔術が入り混じるこの島だと言っても、この建物はヤバい。わざわざこんな立派な石階段、門構え、瓦屋根の日本家屋を作り出してしまうなんて。

どれだけお金があったらこんな家が作れるのだろうか。

俺達――俺とアインハルト、それに綺凛――は、見事な日本家屋の道場にいた。

ノーヴェさんの紹介で今日2人が練習試合の相手とするのは、この道場の師範代『ミカヤ・シェベル』さんだ。この場にふさわしい和装――この場合は道着と言ったほうが正しいのだろう――で、柄のないシンプルな白鞘に収められた大太刀を持っている。

剣の道を行く、凛とした女性。そのイメージがぴったりとハマる人だ。

ミカヤさんの使う天童流は、綺凛の使う刀藤流と同じくらいの規模の剣術流派だ。刀藤流が精密な連続斬撃が売りならば、天童流は一撃必殺の抜刀術を売りにしている。

格闘型にとっての難敵、斬撃武器の対策として選ばれたのがミカヤさんだったというわけだ。

「練習相手にご指名いただいて、光栄に思うよ」

正座をしている2人の前に、ミカヤさんが立つ。

「ただし私も出場選手だ。大会までの貴重な時間を無駄には出来ない。あまり手加減はしてあげられないよ。集中していなければ、ケガをする」

「構いません」

「望むところです」

アインハルトだけではなく綺凛も堂々と返す。
もちろんアインハルトは常日頃から、クロや綺凛と言った剣の達人たちと戦い、経験を積んでいる。しかし今回の相手であるミカヤさんは剣の達人でも、抜刀居合の達人だ。いつもとはまた違った経験を得ることが出来る。
ノーヴェさんはそう判断したようだ。さらに言えば、ミカヤさんの最高戦績は本戦3位入賞。順調に勝ち進めば、間違いなく対戦することになる相手だ。
「ナカジマちゃんから聞いた話では、君は格闘型（ストライカー）で、なおかつバリバリの接近戦型（インファイター）。そしてそちらは、なんとあの刀堂流本家のお嬢さん」
アインハルト、綺凛を順番に見る。
「私としては、接近戦型（インファイター）対策がメインなんだ。君のような接近戦型（インファイター）相手に何もさせずに切り落とす鍛錬をしたいと思っていた。ああ、でも、もちろん刀堂流の技にも興味はあるよ。刀堂綺凛。その名前はよく聞いている。君相手に純粋に剣の腕を試せるというのは、とても楽しみだ」
流派的に対抗意識はあるのか、珍しく綺凛からも闘志が漲っているように思う。
問題はアインハルトだ。八神さんの家にデバイスを取りに行った時と同じように、心ここにあらずと言った様子。
あの時は俺だけを避けていたのに、今は綺凛のことも避けているように見える。
この前はそっとしておくという選択をしたが、1週間も引っ張っているとなると多少強引にも理由を聞きださなくてはならないかもしれない。
今回の週末練習試合は、土日この道場に泊りがけで行うことになっている。食事や寝床なんかも準備してもらっている。もう至れり尽くせりだ。
ノーヴェさんには2人のことをよろしくと言われているが、俺が特にすることはない。俺は試合に出ないので、やるとしたら雑用くらいだ。その雑用も、家のお手伝いさんがほとんどやってしまうため、本

当に見ているだけだ。
「でも、これはさすがに予想外だったなぁ」
「何がですか？」
「いえいえ、何でもないですよ」
　同じように俺の横に正座するのは、この道場のもう1人の師範代にして本家の1人娘、『天童　木更』さんだった。
『ブラックブレット』の登場人物である天童さん。姫カットのストレートヘア。武偵高のではないセーラー服を着ている。
　この人、原作では『天童式抜刀術』と言う剣術を使う。
　や、まあね、そう来るかと思ったよ。細かいことまで気が付いた人がいたかはわからないけど、カミヤさんが使う剣術の名前は『天瞳流抜刀術』だ。確かに『天童』と『天瞳』、どっちも読み方が『てんどう』だからね。
　この世界ではこの2つの存在は統合されているみたいだ。じゃないとややこしくなるからって言う事もあるんだろう。
　ユウキの件然り、最近、悉く予想外の人に会うと思う。意図せずに事件に関わるフラグを立てているような、歩きながら地雷をばらまいているような。
　ま、地雷を踏みぬこうが突っ走るしかないのだけど。
「あなたは出場しないんですか？　インターミドルでなくても、鳳凰星武祭（フェニクス）とか。いいところまで行くと思うんですけれど」
「特に予定はないですね」
　事件に対応出来るように、フリーになって置かないといけないし。賞金は少し惜しい気がするけど。
「そういう天童さんは？　大会には出ないんですか？　そもそも、武偵ですらないですよね？」
　そんなことを言ったら、ミカヤさんも武偵ではない。俺が聞きたいのは、原作でもあった『要素』の1つが、この世界でもあるのかと言うことだ。
「ええ。私は、ちょっと体が悪くて。師範代ですけれど、あまり長くは刀を振っていられないんです」

天童さんは能力を使わず１０メートル離れた先にあるものを切断できる。いわゆる飛ぶ斬撃をはじめとして、新しい『型』の開発も出来る才能の持ち主だ。
しかし、腎臓に持病を抱えていて長時間の戦闘は出来ないという設定が原作にあった。
その設定はこの世界でも生きているらしい。
確認が出来た俺は「なるほど」と、話題を変える。
「俺は競技者っていう感じじゃないですからね。技を極めるとか、試合をするとかにはあまり興味が無くて」
「結局は目的を達成する手段だと？」
「深い話をするつもりはないですけど、そんなところです。現金な性格なので」
「……いえ、私には咎める権利はありませんよ。私も同じようなものですから」
「……」
そしてもう一つ大きな設定があるんだけど、これはそう簡単に聞けるもんじゃないし、ここでは何も言えないな。
俺たちがおしゃべりしていると、立ち合いが始まっていた。
まず初めはミカヤさんと綺凛の様だ。
激しく剣が打ち合わされる。
やー、でもこうしてみると、素人目にも全然違うってわかるな。
綺凛の剣はさんざん見てきたが、抜刀術を見るのは初めてだ。確かに早い。あの綺凛が受けるので精一杯とは。ミカヤさんの実力はとんでもないな。
よーく、見ておくことにしよう。俺の目は写輪眼、もとい完全記憶能力の目だ。見たまんま完コピしてやるぜ。
あまりにも凝視していたからか、横に座っている天童さんがくすくすと笑い始めた。
「なんだかんだ言って、熱心に見てますね」
「や、まあ、綺凛は自分の戦妹（アミカ）ですから」
実際にはこっそり技を盗もうとしていたんだけど。

「あの2人は良く鍛えられていますね。あの年の私と比べても互角くらいですよ」
そこで互角と言ってしまうのか。
「同じくらいになったら、追い抜かされてると思いますよ？」
今度はアインハルトの番になった。ミカヤさんも綺凛もまだまだ余裕を残している。どうやら、準備運動代わりの軽い手合わせだったみたいだ。
綺凛の代わりにアインハルトが前に出る。その肩には猫のぬいぐるみ――――八神さんに作ってもらったデバイス、アスティオン――――が乗っていた。
手合わせが始まる。
平気な顔をしてあの速度の刀を素手で受け止めるのは流石としか言いようがない。一歩間違ったら、腕がなくなってるぞ。
だが、
「あの子、どうしたんですか？」
天童さんも違和感に気が付いたようだ。
「勘違いだったら申し訳ないと思いますが……あの子、ストラトスさん。あんまり集中出来ていないように思うんですけれど……？」
「天童さんもそう思いますか？」
感情が表に出にくいアインハルトだけど、行動にまで出ないわけじゃない。
体の動きが硬すぎる。ミカヤさんの速度に反応出来ていない、のではなく体が思うように動いてくれていないという印象を受ける。
戦いに集中出来ていない。何か別のことに気を取られている。
初見のはずの天童さんも気が付くのだから相当だ。
そしてとうとう、
「天童流抜刀居合、水月ッ!!」
「ッ!!」
ミカヤさんの繰り出した神速の一撃によって壁に叩きつけられ、気を失ってしまったのだった。
幸い5分ほどで目を覚ましたが、その後も謎の緊張が解けることは

なく、その日の訓練は身になるような状態ではなかった。

《んで、どうだったよ。２人の様子は》
「ふむ、腕は悪くないが、気になることはあったな」
　その夜。ミカヤとノーヴェは電話をしていた。この２人は友人だ。友人だからこそ、今回の練習試合を組むことが出来た。
　しかし、コーチを買って出ている者として、投げっぱなしというわけにはいかない。こうして、その日あったことを報告してもらっているのだ。
　和室に半透明のディスプレイが浮いている様子は部屋の景観には合っていなかったが、本人たちは特に気にする様子もなく会話を続ける。
《気になることぉ？　ああ、２人とも翔に惚れてるって話か？》
「うん？　や、そうではなく、君がよこした接近戦型（インファイター）の娘の調子が悪いという話だが」
《アインハルトが？》
　２人の話が食い違う。
「ああ。今日一日、ずっと心ここにあらずだ。鍛錬にも身が入っていない。あの調子で試合に出ると怪我をするぞ？」
《うーん？　学校でなんかあったのか？　さすがにそこまでは面倒見きれないからな》
「そもそも、あの２人が夜月君に惚れている？　断言出来るのか？」
《出来んだろ。見てれば丸分かりだよ》
「そうか……？」
《つーか、その程度じゃねーよアイツのタラシぶりは。実際見たら腹

がよじれるぜ》
「あいにく、この年齢までそういったものとは無縁な人生を送ってきたからね。見たところで楽しめるかどうか」
　翔の女遊びぶりに話が逸れてしまったが、本題はそちらではない。
「しかし、ならば、だ。問題の原因は中心の男性である夜月君だということになるのではないか？」
《それもないと思うぜ？　……このくらいで拗れるようなら、アイツもう刺されてるよ》
「……そうなのか？」
　そう言われると流石に興味が出てくる。
「話が進まない。色恋はともかくとして、どうすればよい？　このままでは、貴重な休日をお互い棒に振るとこになるぞ？」
《それはもう、色恋をどうにかするしかねぇだろ》
「……無理だと思うが、無謀だとは思うが、一応、私が何をすればよいのか聞いておこうか」
　ミカヤもせっかくの週末練習の時間を有効に使えないのは痛い。多少不得手なことでも、協力しようという姿勢を見せた。
《そんなに難しくはないさ。相手は中学生だぜ。惚れてる相手もわかってて、今日は一晩お前の家にお泊りだ。ちょっと焚きつけてやれば勝手に事が進むさ》
「本当か？」
　ミカヤは首を傾げる。ちょっと焚きつける、という行動自体が未経験だがキューピット役になれと言われるよりはマシだ。焚きつけるほうが難易度が低いだろう。うん。おそらくは。
　ノーヴェも経験がないため、２人を焚きつけてそのまま翔がどうにかしてくれるだろうという丸投げスタイルだ。
「はぁ、まあ、木更もこういうことには疎いからな。やってみるさ」
《おうよ！　報告よろしくな！》
「君、少し楽しんでいるな？」
　通話を終了したミカヤは重い腰を上げるのだった。

「はぁ……」
湯船に浸かりながら、アインハルトはため息をついた。
ホテルアルピーノと比べれば少し劣るかもしれないが、とても広々とした浴室だった。建物に合わせてあるのか、浴槽は大きな檜風呂だ。
道場を運営するだけなら、簡単なシャワーがあればよいが、木更はここに住んでいる。ミカヤもよく泊まるためお風呂は必須の設備だった。
そんなお風呂に、アインハルトと綺凛が2人で入っていた。
「あの……私何かアインハルトさんの気に障るようなことしましたか？」
明らかに翔と自分を避けているアインハルトに、綺凛はおずおずと声をかけた。
「はい？　い、いえ！　そういうわけでは……」
「でも、アインハルトさん調子が悪そうです……悩み事があるのなら相談して下さい。人に相談すれば、少しは楽になるかもしれませんから」
「そう、ですね……最近色々と雑念が多いんです。少し前までは平気だったんですけれど、今は色々と、その、鍛錬の時にも落ち着かなくなってしまって」
「うーん……」
綺凛も鈍いわけではない。アインハルトが翔のことを考えているのはすぐに分かった。実際翔に対しての態度がぎこちなかった。
しかし、それならば説明がつかないことがある。綺凛のことも避けているというのはどうしてだろうか。

「やあ、２人とも、湯加減はどうかな？」
浴室の扉が開く音がして、ミカヤが入ってきた。恰好は言うまでもなく裸にタオル。とある目的があってわざと２人の入浴時間に突撃したのだ。
「あ、ちょうどよいです！」
「はい。とても立派なお風呂で」
「はは。うん。それは良かった」
ミカヤは体を洗い、湯船に身を沈めた。綺凛以上のグラマラスなボディが、お湯の中で気持ちが良さそうに伸びる。
「ふうぅ～……」
大きな浴槽は、３人で入ってもまだ余裕がある。
ふと、アインハルトが申し訳なさそうに口を開いた。
「あの、今日は申し訳ありませんでした。全然集中出来てなくて、ご迷惑をかけてしまって……」
さて、どうやって恋愛の話に持っていこうか、普通に話題にしても良いのか、それともさりげなく『好きな人いるのかい？』なんて聞いたほうが良いのか。いつもの表情の裏でそんなことを考えていたミカヤにとって、アインハルトから話を振ってくれたのは、本当にありがたいことだった。
「ん、ああ。そういうこともあるだろう。うん。だが、そのままでは大会に支障があるぞ？」
「はい、そうですよね……」
「何かいい方法知っていますか？　物事に集中出来るような良い方法を」
「それはもうシンプルに。原因を取り除くのが一番だろう」
ここだと言わんばかりにミカヤは口を開く。
「今日の様子を観察するに――――君たち、夜月君に何か思うことがあるんじゃないかい？」
「っ!!」
（……まさかノーヴェが言っていたことが本当だったとは）
ミカヤでもわかるほど、２人の顔が真っ赤に染まっていた。挙動不

審になり、パタパタと手で顔を扇いでいる。
「あははー、そんなにわかりやすかったですか？」
「わ、私は別に……っ！」
本当は全く気が付いてはいなかったが、大会前の練習に集中していただけだ。普段なら気が付いていたはず。
ミカヤは自分にそう言い聞かせる。
「う、うむ。だから、だね。その悩みの種というものを伐採するのが一番だと思うんだ」
もはや話している言語すら怪しくなっているが、それっぽいことを続ける。
「つまり、想いを告げてしまえばいいんだよ」
出てきたのは直球勝負のど真ん中だった。
友達と好きな人の話になって、『えー！　じゃあ告っちゃいないよー！』というノリそのままだ。
ノーヴェも焚きつけろとは言ったが、ここまで直球に突き落とせとは言っていなかった。しかし、このミカヤ・シェベル。恋の駆け引きなどまどろっこしいものとは無縁だった。
「そ、それは……難しいですよぅ」
「しかし、そういう気持ちに決着をつけてしまわなければ、集中するのは難しいだろう？」
「それは、確かにそうかもしれませんが……」
いつの間にか綺凛だけではなくアインハルトもしっかりと会話に参加していた。
「あの、失礼でなければお聞きしたいのですが、ミカヤさんにも、そういう経験があるんですか」
「え!?　あー、いや、まあ、そんなものかな……」
「そうなんですか!?　意外です……」
ここで年長者のミカヤは見栄を張った。生まれてこの方、誰かと恋人関係どころか、男性に好意を持ったことすらない。
しかし、吐いた唾は？み込めない。
「そうだな。やはりその時も、告白することでスッキリしたな。結果

としてはフラれてしまったが、その悔しさを練習にぶつけることが出来た……うん、そんなところだ」
「で、でもっ、フラれるのは嫌ですよっ！」
「あー……うん。そうだね。大切なのは気持ちをスッキリさせることだよ。フラれたら私の様にバネにすればよいし、受け入れられたときは……そうだな……受け入れられたとしても、君たちはそれで鍛錬や試合を疎かにするような娘ではないだろう？」
「それは、どうなんでしょうか……初めてのことで私でもこの気持ちが良く分からなくて……」
「気持ちをスッキリ……スッキリ、ですか……うん、そうですよね」
（うん？　何か間違ったか？　予想していたものとは少し違うか？）
何を間違ったのかといえば、色々と間違えていた。
焚きつけることには成功していたが、その相手を盛大に間違えている。
恋愛相談などしたことがなかった綺凛は、それはもう簡単に決心してしまった。元が流されやすい性格だということもあったかもしれない。
お風呂での恋愛相談は、その日の夜の流れを決めることになった。

2人の少女との初めて②（綺凛）

俺は割り当てられた部屋、畳に敷かれた布団の上に寝ころんでいた。

道場からは少し離れた、所謂『離れ』と言われる場所だ。

風呂にはもう入り、後は寝るだけなんだけど、このまま寝ることは出来ないだろう。

「これは、今夜の内にも話したほうがいいな」

今日の模擬戦、アインハルトの行動に身が入っていなかった。いなさすぎた。ミカヤさんに申し訳ないくらいに、ボロボロだった。

アインハルトと綺凛は同じ部屋で寝ることになっている。

俺と入れ替わるようにお風呂に入っていったから、タイミングを見計らって部屋に行ってアインハルトを少し連れ出すことにしよう。

しかし、アインハルトの悩みは何だろうか。単純に考えるなら、俺と綺凛がらみか。この世界の混沌具合なら、何か面倒な事件に巻き込まれているって可能性も捨てきれない。

そんなことをぼんやりと考えていると、障子の向こうに人の気配。

「……誰だ？」

「……私です、先輩」

声の人物に少し驚いたが、追い返す理由はない。招き入れる。

障子が控えめに開き、1人の女の子が入ってきた。

泊まることが前提だったため、流石にパジャマまで借りたということは無いだろう。だがこの道場に合わせているのか、それとも実家も道場だからか、白い浴衣のパジャマを着ている。

刀堂綺凛がそこに立っていた。

「綺凛？　どうしたんだ、こんな時間に」

「す、すこし！　お話がありまして！　あ、あの、こんな夜遅くに申し訳ないと思ったのですが！」

「や、それは全然かまわないんだけど。どうぞどうぞ」

そう、全然かまわないんだけど、こんな時間に来るから少しドキッとしてしまった。家の誰かだったらそのまま『むにゃむにゃ』になっ

ていたところだ。
綺凛を部屋に入れ、布団の上に座る。
座って――――特に何も起きない。
布団の上に女の子座りした綺凛は、しきりに障子の方を気にしている。居心地が悪いと思っているのか、誰か来ないのかと心配しているのか。俺とは目を合わせようとしない。
「……」
「……」
俺もできるだけ何でもないように装い、くつろいでいた。横目で見た綺凛の顔は耳まで赤く染まっている。
部屋に人が２人いるのに会話が発生せずに、１０分が経過した。
綺凛にも色々と準備があったのかもしれないが、完全にきっかけをなくしてしまっている。ここはきっかけを与えないと。
「綺凛？　何か話があるのか？」
「え!?　あ、はい！　そうです！　そうなんです、けど……ごめんなさい、決めてきた、はずだったんですけれど……」
「話しにくいことか？」
綺凛は無言で頷く。だが、再び静寂が訪れることはなかった。
「すぅ～、はぁ～……先輩！　先輩にはお付き合いされている方はいらっしゃいますか!?　いなければ私とお付き合いしていただけないでしょうか!?」
一息に言い切った。
「……」
さて。やれやれ。
どう言おうか。真剣に告白してくれた綺凛に嘘をつくつもりはない。かと言って事実をありのままに伝えるのか……？
そうするしかないな。
ごまかしたくはないからな。
「結論から言うとだな、綺凛。アスナは知ってるよな？」
「はい？　はい、それはもちろん知ってますけど……」
「雪菜も知ってるよな？」

「はい」
「狂三も？」
「もちろん知っていますよ！　さっきからどうしたんですか先輩？」
　結論から言うと言ったのに、グダグダと状況の説明になっている。
これじゃダメだ。
「俺は一緒に住んでる女の子、ほとんど全員と付き合ってる」
「え――――えええええええええええっ!!!??」
　そりゃそういう反応になりますよね。！
「え、いや、ええ!?　全員と付き合ってるって、え!?」
「ほとんどを抜かさないでくれ。大事なところだから」
　や、『ほとんど』があっても、複数人と付き合ってるってことなんだから。一般常識的にはダメだろ。俺の感覚もバグってる。
　しばらくすると、綺凛は落ち着いて話が出来る状態になった。
「すみません、取り乱してしまって……」
「や、その反応が普通だからな。気にしなくていいよ」
　この世界の人で俺の女性事情を知っているのは、アルトリア達と桜と理子だ。この４人は常人とはかけ離れた思考をしているから、これを告白した時の参考にならなかったんだよね。
「でだ、綺凛の知っている、俺と一緒に住んでる女の子、ほとんど全員と付き合ってるんだ。それは理解出来たか？」
「は、はい。難しいけれど、なんとか」
　付き合っている娘の名前はすでに伝えてある。
「そ、それで、私の告白はどうなるんでしょうか!?」
　ムードも減ったくれもなくなったからか、『告白』という単語をするりと口に出すな。こんなハーレム築いてるクソ野郎にそのまま告白の話をするとは。
「だって、先輩と皆さんの様子を見てたら、誰だってそうじゃないのかなぁって思いますよ。むしろ、皆さんと仲良くしていた理由が分かってスッキリしたくらいですもん」
　最近は外部の人の目に触れる機会が増えてきたから、そう言う事に気を付けないといけないな。特に特務六課の人たちなんか、これから

接する機会が増えるだろうし。
「あっ！　話が逸れてますよ！　私の告白はどうなったんですか！」
「お、おう。今日はずいぶんと押しが強いな」
「口に出しちゃったらスッキリしたんです！　もう何も怖くありません！」
　それは有名すぎる死亡フラグだ。
「綺凛は俺と付き合うのは平気なのか？　俺、もう複数人の女の子と付き合ってるんだけど」
「全然気にならないなんてことはありませんけれど、でも、皆さんのことを見ていたら、先輩が1人1人のこと大切にしてくれてるってこと分かりますから！」
　綺凛と俺は向かい合う。
「それじゃあ、改めて。刀堂綺凛さん、俺と付き合って下さい」
「はいっ！　喜んで！」
　こうして俺と綺凛は付き合うことになった、のだが……。
「……」
「……」
　再び無言になる。先ほどの沈黙とは違い、綺凛は俺と正面から向かい合ったままだ。潤んだ垂れ目がせわしなく動き回り、口が開いては閉じる。
「綺凛？　今度はどうしたんだ？」
「つ、付き合った時って、何すれば良いんでしょうか……っ！　あ、握手？　それともお辞儀かな……？」
　ああ、そう言う事ね。だったら簡単な問いだ。
「綺凛」
「……っ、ぁ」
　中腰の姿勢で、俺は包み込むように綺凛を抱きしめた。
　昼間、あんなに激しく剣劇をぶつけあっていたとは思えないほど、その体は少女のモノだった。
　その中でも一番少女を主張してくるのは、やはりその豊満なおっぱいだ。パジャマ越しに伝わる柔らかさが下半身に悪い。胸の厚みの

せいで、抱きしめ合っているのにお互いのお腹は全く触れ合わない。
ほどなくして背中に腕がまわされ、力が込められた。
より強く俺たちは密着する。
ぐりぐりと胸にこすりつけられていた顔が上げられる。物欲しそうな顔だ。その唇に吸い寄せられるように、俺たちは唇を重ねた。
綺凛に勢いがあったのか、押し倒されるようにして布団に倒れこむ。
「ん、ちゅ……」
触れる程度のキスだ。唇の柔らかさが分かるか分からないかという程度の。初めて付き合った恋人同士がするにふさわしい、初々しいキスだ。
「先輩。せんぱ～い。ふふ」
唇を離した綺凛は、俺の上に乗ったまま、胸に顔を押し付けてぐりぐり。嬉しさが口から洩れているのか、しきりに先輩と呟いている。
「先輩。私、前に聞きましたよね。私の胸、触ってみたくありませんかって」
「そういえば、そんなこともあったな……」
あの時は驚いたものだ。本当に。綺凛の性格からしてそんなこと言うとは思えなかったからな。
「あの時は断られちゃいましたけれど……い、今は、どうですか？」
「い、今?!」
その言葉の意味を理解した下半身がピクリと反応する。
今ですら、お腹に押し付けられている双丘に、下半身が反応するのを必死に抑えていたのだ。すべてが初めての綺凛に対して、最初からそういう態度は見せないほうが良いと思ったからだ。
でもピュアだと思っていた綺凛も女の子だ。や、ピュアなのは変わりないと思うけど、前の質問もあったし、意外にそういうことに興味津々なのかもしれない。
「綺凛はエッチなことがしたいのか？」
「ふえっ!?」
跳ねるように体を起こす。もちろん顔は真っ赤っかだ。今の言葉

を否定するように激しく手を振っている。
「え、い、いえ！　そういう訳では……っ！　無い、と言いますか、無いわけでも無い、といいますか……っ！　すみません！　忘れてください！　っ!!」
　体勢が逆になった。腰の上に座っていた綺凛を抱きかかえ、一瞬で体の位置を逆にする。綺凛は突然の出来事に目を白黒させ、体を縮こまらせている。俺は体の上に乗るのではなく、弱々しく横になっている綺凛に覆いかぶさるように四つん這いになっている。
「ぁ、ぁの……」
　消え入るようなか細い声で、何を予感したのか胸元の着物の裾を握りしめている。
「こんな時間に部屋に来て、さっきの質問。もしかして綺凛、何か期待してたのか？」
「あ、ぁ……、……は、ぃ」
　綺凛はよく観察しなければわからないくらいの微細な動きで頷く。
「何を期待してたんだ？」
「な、何を!?」
「ああ。何を期待してたんだ？　何をされたいんだ？」
　逃がさないとばかりに目を合わせる。
「エ、エッチなこと、です」
「エッチなことって？　何？」
「な、何って、そんなこと……」
　分かってるじゃないか、言わせないでほしいと言いたげな顔をされるが、あえて無視する。
「うぅ～～～っ！　エッチなことはエッチなことですよぉ……っ。先輩、意地悪です……っ」
「別に意地悪なんてしてないぞ」
　嘘です。意地悪してます。
「先輩、アスナさんとか雪菜さんとかとエッチなことしてるんじゃないですか？　皆さんにしてるみたいな、普通のエッチなことです……っ」

そろそろ限界の様なので、ここで折れることにした。
「普通にね。分かった」
「はい、普通にお願いします……」
何やら安心しているけど、まだ始まってすらいないんだぞ？　今までの問答は俺がわざと長引かせたんだけど、それにしたって安心するのは早すぎるんじゃないか？
「それじゃあ、まずは胸に触るぞ」
「あ、はい。ぁ、そうですよね……うぅ……」
「恥ずかしいならやめておこうか？」
「いえ！　こ、ここまで来てそんなこと……っ！　で、でも、服の上からでも良いですか？」
「もちろん」
服の上からでもはっきりわかる、年齢に似合わない圧倒的なボリュームなのだ。
俺はそのふくらみに手を添え、軽く指を動かしてみる。手のひらでマッサージするように撫でれば、服の下にある双丘のボリュームが想像されて俺の期待が膨らむ。
「はぁぁぁん……うぅぅぅ……っ」
綺凛の声はまだまだ快楽を受け取っているとは言えない。顔も赤いがそれは恥ずかしさからくるものだろう。
「綺凛、どんな感じだ？」
「はぁ、んっ、わかんないです……っ。人に触られたのなんて、初めてで……っ」
「いつもはどんな感じなんだ？」
「いつもですか？　いつもは、って、いつもはこんなことしてないですよっ！」
それでもだんだんと、服の上からでもわかる変化が起き始めた。
手のひらの中心に、柔らかさとは違った感触が現れ始める。沈み込むような柔らかさとは別の芯のあるような突起だ。それがどんどん自己主張し始めている。
「うぅぅぅ……っ、それ、こりこりされると……っ、なにこれ……っ」

「ここを重点的にされるのがいいのか？」
「いいかは分からないです……っ！　でも変な感じで、はぅ！」
服の上から突起を摘まむ。服の上からだろうと関係ない。服を押し上げて小さいテントを作ってしまうくらいに固くなっているんだ、2本の指で扱くなんて簡単だ。
「な、なに、これぇ……っ！　体、勝手にビクッ、ってなる……っ」
綺凛は目を固くつぶり、口も閉ざしている。
わざと服の生地で乳首をこするように胸元を開いた。薄い生地にくっきりと形がわかるくらいに押し付け、繊維をのこぎりのように突き立てて一気に切り裂く。
そのせいで綺凛は俺が脱がそうとしているのに、何も言うことは出来ない。
胸元が開いた衝撃で、そのわずかな衝撃だけで大きな双丘は揺れる。実際に見た綺凛のおっぱいは圧巻の一言だった。この年齢でここまで育つなんて、どれだけ良いものを食べているんだろうか。
ツンと重力に逆らって起立する桜色の頂点は、服の上からの愛撫ですっかり充血してしまっている。
「あ、や、見えちゃってる……っ！　恥ずかあっ、あぁぁぁっ！　ひぅ、ふぎゅっ、うぅぅぅ……っ」
何か言われる前に、硬くなった乳首を摘まんで黙らせる。素晴らしいボリュームのおっぱいにも指を沈める。
極上の感触を楽しむ。指が沈み込むのに押し返そうという反発があり、指を離すと元の美しい形に戻る。
綺凛は服の袖を噛んで声を出さないように必死にこらえている。口で呼吸しないせいで鼻息が荒い。
顔に皺が出来るほど目を強くつぶり、その目じりには涙すら浮かんでいる。
いくら胸をもまれる弱い刺激でも、ずっと続けられてしまえばやがて頂点に達してしまうことになる。
「ふぅーっ、ふぅーっ、ふぅーっ、うぅ。うぅぅぅぅぅ〜〜〜〜〜〜っ!!」

限界が訪れた。大声こそ出さなかったが、内股を震わせて体をこわばらせるその動作は、まぎれもなく女性がイッたときの反応だ。
「すごっ、すごいぃ……っ。頭の中、弾けて、ピカっとして……っ。イッちゃった。私、イッちゃったんだ……」
息も絶え絶え、露出した胸元を隠そうともせずに、綺凛は脱力したまま横になっている。
それにしても、イクとかそういう単語は知ってるんだな。
「し、調べたりはしました。恋人同士になって何をするかってことは」
確かに、マンガなんかでも良く題材にされることだしな。恋人は何をすれば恋人らしいのかってこと。
個人的には恋人って言うのは当人たちの心の持ちようで。恋人は何やっても恋人なんだよ。だからカップルが街中を歩いているだけで『リア充爆発しろ』って呪いをかけられる（特に男子の方に）んだから。
でもカップルがすることで、他の物とはまた別種のことはある。
それがつまり、『こういう行為』なわけだけど。
このタイミングで言うのだから、調べたのはそっちのことなんだろう。訓練で一緒にいることはよくあったし、この部屋に来てからやけに誘ってきていた。
「それで、興味がわいたんだ」
「はい……あ！　でも違いますからね！　エッチなことがしたいから先輩に告白したわけじゃありませんから！　調べ始めたのは、その、先輩を意識するようになってからで……っ！」
とてもうれしいことを言ってくれる。
「それで続きは、どうしますか」
「続き？」
綺凛は起き上がって問うてきた。
続き。恋人が行う行為はこれで終わりではない。女性の方が達したからといって終了になるわけではないのだ。
もっと言ってしまえば、今していることは前段階の準備段階。ここで終わるなんて。

「私、先輩と最後まで……」
はだけていた着物のパジャマ。その帯を解く。
袖を通して、体に巻き付け、帯を結んで着るのが着物だ。お腹で固定していた帯がなくなるだけで途端に脆くなってしまう。
俺の息子も、そんな綺凛の言葉に期待を膨らませるのだった。

2人の少女との初めて③　（綺凛）

「ふぁぁ……これが……」

綺凛が俺の下半身に存在している肉棒を見て、感嘆の声を上げる。血液がこれでもかと集まり、見事なまでに反り返っている俺の相棒が少女の視線に晒されていた。

綺凛の言う『続き』を行うためには、俺も下半身の衣服は邪魔だ。彼女もそれを望んでいる。

服を脱ぐ俺を綺凛は止めなかったし、何なら目を反らしつつもチラチラと見ていたし、完全に脱いだ後になればもう目が吸い寄せられていた。

こきゅと息を呑む声が聞こえてくる。

これで何をするのか、自分は何をされるのか、綺凛はすでに分かっているようだ。

帯の解いてあった綺凛の浴衣型のパジャマには、すでに防御力はなかった。体を少し動かすだけで、少しだけ体に引っかかっていた布が音もなく布団の上に脱ぎ捨てられた。

服はすんなり脱いだ。だが恥ずかしかったのか、両手を使って両胸の先っぽと下腹部を隠している。

そんな細腕で刀を振るっているのかと言いたくなる両手。

右手で上を隠している。見えないように意識しているのか、そのふくらみは若干押しつぶされ、形を変えていた。

左手はぴったりと合わされた太ももの、どうしても空いてしまう付け根の空間に押し込まれている。手を差し入れるときに顔の赤みが増したような気がした。あの左手で、いつもとは様子が違う何かに触れてしまったのだろう。

おかげで大事な部分は見えていない。だが、全裸の女の子が必死に体を隠そうとしている姿というのは、むやみに裸になっているよりも卑猥だ。

その光景を作り出しているのがまさか綺凛だと思うと、俺は感動のあまり何も言えなくなってしまう。

しばらくの間、その感動を噛みしめて心に刻み付けることにした。
綺凛は綺凛で、服を脱いだはいいものの恥ずかしがってばかりでその先に進もうとしない。体を最小限隠し、女の子座りの姿勢で俺をチラチラと見てくるだけだ。さっきと同じように、俺からの指示を待っているのだろう。
「先輩、お願いします……っ」
先にこらえられなくなったのは綺凛だった。
布団の上にうつ伏せになり、お尻を上げる。足を揃えているため――いや、揃えていなくても新品の割れ目は美しい直線を描いていたことだろう。
割れ目は少し湿ってはいるものの口を開けてはおらず、まだまだ準備万端とは言えない。初めてするのなら、もっとほぐして整えなければならない。
そしてその少し上には、周りとは少し色の違う、皺が集まったような窄みがある。中心に行くほど色が濃くなる不浄の穴だ。
綺凛の呼吸に合わせて収縮するその様子は、何とも抗いがたい魅力を備えている。
流石に初めての相手でこちらを使おうとは思わなかったが、こうも2つの女穴を見せつけられると、女性のすべてを支配したような錯覚を覚える。
綺凛は、顔は見られたくないのか枕を抱え込んでいる。そのせいで表情は全く分からないが、耳が真っ赤になっていることだけはわかった。
「ひゃうっ!?」
人差し指で綺凛の一本線をなぞった。
「あ、あのっ、そこっ！」
「どうした？」
なぞっただけだ。痛いなんてことはなかったと思うが。
「いえっ、急に触られてびっくりしただけです……っ」
「そっか」
喋りつつも、触る手は止めない。

程よくほぐれてきたところで、中指を挿入する。いきなり全部入れると危ないから、まずは第一関節までだ。
それでも体の中に異物が入ってきていることには違いない。異物を追い返そうと、膣穴が俺の指を締め付けて外に押し出そうと収縮している。
綺凛の体も、俺が指先を動かすのに合わせて揺れる。
「はい、って……っ！　これ、先輩の、ですか……っ!?」
「違うぞ。俺の指だ。まだ第一関節だけどね」
「第一……っ、はぅぅ……っ！」
穴を拡張するように、かすかに折り曲げながら指を進めていく。少女の、本人すら触ったことの無い秘密の場所に、俺の指がどんどん侵入していく。
指を折り曲げると、お腹側にあるざらついた肉粒に触れる。米粒よりも小さいその肉粒を指先で弾くと綺凛の体が大げさに跳ねた。
しかし、本人にとっては決して大げさな反応ではないらしい。体の揺れが激しくなり、指への締め付けも一気に強くなる。
さらに、ばれないと思っているのか、腰を動かしてその場所から俺の指を遠ざけようとしているのだ。
あえてそこは攻め立てず、奥へ奥へと指を進めていく。この後のことも考え、少しずつ綺凛の反応をうかがいながら。
中指が完全に飲み込まれた。
全く隙間がないくらいぎちぎちに締め付けられている。綺凛の中は、おそらく初めて異物を飲み込んだのだろう。反応は喜んでいるというよりも戸惑っているという感じだ。濡れてはいるものの、ただ反射的に締め付けているだけだ。
「や、ぁ……！　ゆびっ、ゆびがっ、ゆびが……っ！」
「痛いか？」
「ちょっとだけ、痛い、です……っ」
「ゆっくりにするぞ」
「はい、ありがとうございます……っ」
指を少しずつ引き抜く。締め付けてきていた肉が少しずつ引きは

がされ、返しのように反り立ったヒダが新たに絡みついてくる。
非常にゆっくりと引き抜いているからか、俺の指がなくなった後、膣が窄んでいく様子も指先で感じ取ることが出来る。
綺凛に覆いかぶさり、おマンコを弄っているのとは別の手で、布団に押しつぶされていたおっぱいに手を添える。
布団とおっぱいの間に手を差し込む。多少押しつぶされていてもこのボリュームである。ふわふわと形を変える余裕がある。あっさりと掌の中心に固いものを捉えることが出来た。
「あ、あのっ、先輩!?」
「下はまだ良くなさそうだから、こっちもすることにするね」
喋っている間も、下の口を刺し貫いている中指の動きは止まらない。手のひらにある突起を転がすとそれに合わせて反応がある。
「あふっ、うぅ、おっぱい、こりこりされてる……っ、あそこに指入れられながら……っ」
一度イった乳首を触りながら指を使った挿送を再開する。今は胸の方がイイらしく、息遣いもだんだんと色も混じったものになっていく。少なくとも、苦痛は感じていないようだ。
段々とほぐれてきた。指をぐりぐりと回転させてもスムーズにできるし、綺凛も苦しがっている様子はない。締め付けはあるが、強張りは解けてきたようだ。この太さのモノはもう馴染んだな。
卑猥に掲げられるお尻には赤みが差し始め、口の呼吸に合わせて不浄の穴も呼吸しているかのように、まるでこちらにも何かしてほしいとアピールしているようにも見える。
「あっ、うううっ、んっ、ぁぁっ、そこ、いいです……っ。ぴりってきます……っ、気持ちいい……」
見えるが、今はそっちを相手することはない。
膣だけではなく体全体で俺の指を堪能し始めた。俺が指を抜こうとすると、その動きに合わせて綺凛も腰を引く。
小柄な俺の、１０センチもない中指だ。唯の単調な抜き差しでは、慣れてしまえば物足りなくもなるだろう。回を追うごとに腰を動かし、自分の肉壺も様々なところに当たるように工夫し始めた。

幼いながらも、自分の中にある性感帯を探し始めたのだ。
なら、それに応えなければ。愛液に濡れた指を折り曲げる。行為の準備が整いつつある肉壁は、先ほどよりも柔らかく包み込んでくれている。
折り曲げた指が、最初に指を挿入するときに見つけておいた肉粒を捉らえる。
「ひっ！」
明らかな弱点。クリトリスの次に敏感な神経の集まりであり、恥骨の裏にある肉天井。Gスポットを俺の指は捉える。
指を折り曲げると目に見えて綺凛の足が震え始めた。折り曲げて、肉粒をこするのに合わせて、全身を小刻みに震わせている。
胸を触っていた手を綺凛に掴まれる。綺凛は布団に押し付けていた顔を少しだけ動かした。うるんだ眼が片方見えるくらいで、顔は真っ赤になっている。
「そこだめっ、です……っ。だめなの、そこばっかりぐりぐりされると……っ！」
「気持ちよくはない？」
「そうじゃ……っ！　そうじゃ、ないんっ、ですけれど……っ！　でも違うんですっ、全然、違くて……っ」
喋っている最中でも指の動きは止まらない。止めるつもりはない。
指を締め付けるまんこ肉の動きは不規則になり始める。とうとう綺凛は意味のある言葉を紡ぐことすら困難になった。
お尻を突き上げていることすら出来なくなり始める。下腹部の痙攣はやがて全身に伝播する。全身を小刻みに振るわせるその姿は、間違いなく女性が絶頂に達するときに出てしまう反応だ。
「綺凛、腰が前に出てるぞ」
「だっ、てぇ……っ！」
ほほえましくも貪欲に快楽を求めていた綺凛だったが、遊びの無い性感帯への集中攻撃に逃げ腰になっていた。
「くひぃいいいっ！　も、だめ……っ！　ああ、あ、あっ、きひゃう、またくるっ。イグッ……イッひゃうぅ――――あ、ぇ？」

じゅぽぉ、と吸い付いてくる肉穴から指を引き抜いた。
俺の指を飲み込んでいた肉壺は、指が抜けるとすぐに何事もなかったかのように、元の1本筋に戻る。
「ど、どうして……」
「俺も我慢できなくなったんだ」
あと一押しで絶頂していたんだろう。綺凛が困惑したような、今まで向けられたことの無い非難の目を向けられる。
そして俺の返答が何の意味もないものだということにも気が付いている。ワザと寸前でやめられたこともわかっているのだろう。
「だって、それなら……あと少し、だったのに……」
と言いつつも綺凛の目は俺のペニスへ流れた。続いて俺の指へと。いったい何を比べているんだろうか。その2つを見比べて痙攣の収まったお尻をもとの位置に戻した。
「分かりました。お願い、します……っ」
許しを得た俺は後ろに回り、ぴったりと閉じてしまった肉ビラを開いた。その中に溜まっていたのか、粘性の高い液体が布団にゆっくりと垂れる。
「綺凛、いくぞ……っ」
「はい……っ、んっ」
俺は準備が整った秘部に自らのイチモツを添える。
お尻を掴み、これから肉棒を収める肉壺の入り口に亀頭を口づけする。これが本当に綺凛の体の一部なのかと言いたくなるほどグロテスクないやらしさと熱が、口を開く。
シミ一つない肌の中に現れた綺麗なピンク色。俺のペニスが侵入するには小さすぎる穴から、透明で粘性のある液体が零れている。入口から先は少ししか見えないが、まだ誰のモノも咥えたことの無いヒダが、待っているのが分かる。
これから征服する女性を見た俺のペニスに血液が集まり、血管が脈動するのがわかる。
穢れを知らない肉穴を広げるように、少しずつ俺の亀頭が挿入されていく。

あれだけ小さかったヴァギナの入り口が、真っ赤に腫れた亀頭によって広がっていく。
「うぅ、ううぅ……っ！　あぁ……っ！」
腰を1ミリ進めるだけでも、未知の感覚を味わっているだろう綺凛。枕に顔を押し付けて、必死になって声を我慢しているだろうことがわかる。
「綺凛？」
「だい、じょうぶ、です……っ！　進めてください……っ！」
その言葉に従った。
亀頭が完全に埋まる直前、エラが一番張り出している、俺のペニスの中でも一番太い部位に差し掛かった時。
これまでも飲み込もうとする動きと、異物を外に出そうとする力があった。だが今感じたのはそれとは別の、『壁』にぶつかったような感覚だ。
一気に腰を突き出した。
「うう――――ああぁぁぁぁぁぁっ!!!」
ぷちぷちという肉がはがれる感触が2，3度したかと思うと、膣内が少し広くなった。
結合部から愛液とは違う赤い液体が流れ始める。
綺凛の体はこわばり、姿勢を維持するのがやっとといった状態だ。
布団をしっかりと握りしめ、必死に痛みに耐えているのだろう。押し殺したような悲鳴が口から洩れていた。
……いや。
「――――――っ、ぁ、ぁぁ……っ！」
これは痛みだけではない。
「綺凛、大丈夫か？」
「違う、んです。そんな訳、無いのに……っ、そんなこと、あるわけ……っ」
痛みと緊張に強張るはずの体が、歓喜と快楽に染まっているのだ。
処女膜を破られて綺凛は絶頂してしまっていた。
口でいくら否定していても体は正直だ。指だけでは届かない最奥。

Gスポットだけで刺激に飢えていた奥の奥が、俺のペニスに媚び媚びになっている。
試しに少し奥を小突いてやると、すぐに甘い声を出し始める。
「あっ、うぅ、あぁ……っ！」
「痛くはないみたいだな」
「痛い、です。痛いはずなのに、でも、でもっ。こんなの、こんなのって……っ、私、イッちゃ――――」
あと一押しで絶頂するまで追い込まれていた体。処女を喪失する痛みと、ペニスで奥まで貫かれる快楽。この2つが相殺されることなく、快楽が上回ったようだ。
「一突きでイったのか」
「――――っ！　そ、そんなことありません……もう痛くはないので、先輩の好きにして頂いても……」
自分が何を口走っていたのかを理解したのだろう。とっさに否定してくる綺凛。
「そうか？　でも血は出てるぞ？　無理してないか？」
「してませ、んっ!?」
こつこつと奥を叩く。反応を見る限り、確かに嘘はついてないみたいだ。だったら俺も遠慮する必要は無い。正直俺も我慢の限界だったのだ。
「あそこ、がっ、めくれるぅぅっ、ほおおお……っ！」
ゆっくりと、奥まで挿入されていたペニスを引き抜く。バックなため、アナル側の肉壁を反り返った肉棒が圧迫する。その衝撃は直腸にも及んでいるのか、菊門もせわしなく活動している。
残念ながらこの体勢では、綺凛の好きな恥骨の裏はあまり刺激してやれない。でも、十分良い刺激を与えることが出来ているようだ。
限界まで引き抜いたら、今度は貫く。たった1突きで征服された綺凛の肉穴はペニスを可愛らしく迎え入れる。
先ほど引き剥がしたひだひだを捻じ伏せて、奥まで到着する。ここまでで1ストロークだ。
「ふぅぅぅ……っ！」

綺凛は大きく息を吐いた。
「どうだ、綺凛」
「すごく、いいです……っ、気持ちいい……っ。お腹の奥、温かくなるみたいで……」
「もっと早くてもいいか？」
「早く……？　はい、大丈夫だと思います」
お許しをいただけたことだし、今度はもっとリズミカルに腰を振り始める。
じっくりと壁を舐めるように動かしていた時とは違い、一番奥をノックする動きだ。カリ首が乱雑に生えそろっている襞をめくりあげ、叱りつけ、征服する。
「あうっ、ひだひだが、うあああっ、ずるずるって……めくれちゃうぅぅ……ひうぅぅぅっ！」
奥にあるコリコリした場所を目がけて、女の子の体をサンドバックにする。コリコリした場所を刺激し始めると膣全体がわななき、恥ずかしい液体の量が増え始める。
「っ、ふぅ、どっちが良かった？」
「あ、へ、ぇ？　ど、っち？　わ、わかんないです……っ、どっちも良くて、決められない……っ、先輩の好きに続けてくださいよぉ……っ」
しばらく続けたところで、一度動きを止める。正確には、体を震わせ始めた綺凛を察して止まったのだが。
またもや途中で止められた綺凛は、もう俺の支えがないと姿勢を維持できないくらいに疲弊してしまっていた。
「好きに動いていいのか？」
「はいっ、それで、先輩が気持ちよければ、私も気持ちいいですから、気持ちよくなりますから……っ！」
ごちゅうっ！
「か――――はっ」
健気なセリフを粉微塵にする力強い肉槍が、降りてきていた子宮口にめり込んだ。お腹の下あたりへの衝撃が肺まで達したようだ。
亀頭が触れる子宮口が、いきなりの突撃に驚いてしまっている。雄

の肉棒を迎え入れるための器官が役割を放棄してしまっている。
それはいけない。
腰を引いてすぐさま2発目を叩き込む。
ごきゅうっ！
「え――――は、ぁ、っ……!?」
この一発は気付けになったようだ。ようやく何をされたのか理解した綺凛の子供袋は急いでその口を開け俺のペニスを歓迎し始めた。
綺凛はどこを見ているのか、体を反らしていた。この位置からは視線がどこを向いているのかはわからないが、意味のある物は映していないだろう。
うつ伏せになっていた綺凛は両手を使って体を起こした。四つん這いの姿勢で、俺の方を向く。汗によって髪の毛が額に張り付き、口の周りは涎で汚れている。
とても人様に見せられる顔じゃない。
「あ、あの、ちょっと待っ――――！」
ごちゅっ！　ばじゅん！　ばちゅ！　ごきゅっ！　ぎゅちゅうっ！
布団についていた綺凛の手を持ち一心不乱に腰を振る。2，3回目には綺凛の体からは完全に力が抜けていた。
綺凛の体が揺れ、胸にある大きなふくらみも運動に合わせて大きな重量を感じさせる揺れ方をする。
「おかしっ、あたまばかになる……っ、先輩の本気おちんちん、しゅごすぎるぅぅぅ……っ!!」
このピストン運動をやめてしまえば姿勢を保つことも難しい。スピードがあるからこそバランスをとっていられる自転車のように、俺は果てるまでこの挿送を止めるつもりはない。
俺のペニスが、締め付けに負けずに大きく脈動する。粘っこい白粘液が外に出ていきたいと暴れまわっている。俺の手を離れた子種がどんどん肉の管を登ってくる。
「綺凛、そろそろ、出すぞっ！」
「はい、はいっ、私ももう、またっ、また、イッ――――！」

ごぷっごぷっ、どくんっ、びゅるるっ、びゅぐぅっ。
少女にのしかかり、全体重を込めて、奥の口を抉じ開ける。
ペニスが脈動し、少女の小袋の中を真っ白に染め上げた。子宮を焼き尽くす白いマグマだ。綺凛も今日一番深い絶頂に落ちて、いや、上っていく。
俺たちは2人して痙攣し、甘美な快楽に酔いしれるのだった。

2人の少女との初めて④　（アインハルト）

アインハルトは夜遅く、月が見える縁側の廊下を1人で歩いていた。足の向かう先はもちろん翔の部屋――なのだが、時々立ち止まり何かを考えこんでいた。

「私は何をしているのでしょうか……」

ミカヤに色々と言われた。彼女の言っていることはもっともだと思うし、自分が迷惑をかけていることも理解していた。

気持ちをスッキリさせるためには告白すればよい、なんて簡単に言われたが、

「こんなこと、どう言えばいいんですか……っ！」

夜な夜な翔と綺凛の情事を想像して1人で慰めていたなど、そんなことを告白できるわけがなかった。

言いたくなかった。何も言わずに翔との関係を続けていたかった。でも周りも自分もそれを許さない。周りは様子がおかしいアインハルトを心配し、自分は不義理なことをしている自分自身を許せない。

本当に告白したかったのは、そんな最低なことではなかったはずなのだ。この胸に芽生えていた素直な気持ちは、

「私は、翔さんのことが……好き」

アインハルトも心の中ではずっと前から気が付いていた。

そうでなければ、自らが心血を注いでいた覇王流をおろそかにしてまで、こんな行為に耽るわけがない。

暗い気持ちを押さえながらも、何とか翔が寝泊まりしていた部屋にたどり着いた。

そこでアインハルトが目にしたのは、

「ひゅぎゅ！　あっ、ひあっ、そ、そこ……！　もっと……っ！　もっとして下さい……！」

「……！」

激しく乱れる男女のカップル。少女は枕に顔を押し付け、それでも艶のある声が漏れている。男性は少女の腰を掴み、カチコチに反り返った肉棒を中腰で少女に突き刺していた。

それも一定のスピードではない。少女の反応を楽しむように、いや少女が肉棒によって鳴かされているのか。
てかてかと粘液に濡れて、全体が見えない肉棒にその空間のすべてが支配されている。
障子の隙間から覗く少女には刺激の強すぎる光景が、そこには広がっていた。
声が漏れないように口を手で塞ぎ、それでも2人の情事から目が離せないでいた。
アインハルトはまたもや2人の情事を覗いてしまう結果になってしまった。
「綺凛さん……」
お風呂から上がった後、綺凛は散歩に行くと言って部屋から出ていった。全てはミカヤがお風呂で言った単純はアドバイスのせいだったが、純真な少女たちにとっては、十分に周りのことを考えられなくなるものだった。
この場で翔に迫ろうと決意した綺凛も、少し考えれば予想できたアインハルトも。
頭のどこかで理解しつつも翔の部屋まで来てしまったアインハルトだが、現実を突きつけられて、それから先の行動をとることができずにいた。
ただ言えるのは、
「んっ、ぁ」
アインハルトにとって、数か月ぶりにもたらされた新しい『オカズ』だったということだ。
今オカズにしている、綺凛が翔に迫っている光景――それも、実際の行為は想像で補っている――とは比べ物にならないくらい生々しい光景だ。
知り合いの女の子が形の良い引き締まったお尻を突き出し、憧れの先輩が獣のように腰を振っている。
アインハルトの目と耳に、一生消えない爪痕になって焼き付いていた。今呼吸を忘れていなければ、その鼻にもいやらしい匂いが染みつ

いていたことだろう。
アインハルトは翔に対する恋心をようやく自覚した段階だった。普通なら、他の女の子との情事を見ればその思いは冷めてしまう物だろう。
しかし、毎日のように2人が絡み合う場面を想像していたアインハルトには、そんな感情は一切浮かばなかった。
浮かんだ感情はただ1つ。
「うらやましい……」
まじめで、そういうこととは無縁で、感情に気が付いたばかりだったアインハルトは、友人が先に結ばれていたこの状況に、自分の気持ちを押しとどめようという気持ちになっていた。
ただうらやましいと、そこにいたかったと思いつつも、自分は身を引こうと考え始めていた。
「しょうがないですよね……」
目の前で幸せそうな表情でキスをする綺凛を見て、それ以上ここに留まっていることが出来なかった。
2人に気が付かれないうちにその場を離れた。寄り道はせずあてがわれた部屋に戻り布団をかぶる。
精神が少し落ち着いたことで、心臓が限界まで鼓動し、呼吸が乱れていることがわかった。そのせいで、布団をかぶって目を閉じても全く眠くならない。
眠くならないのは心臓の鼓動以上に、呼吸の乱れよりも確実に、下腹部のワレメから漏れ始めた粘液のせいだ。
その後10分ほど経って、綺凛と翔が2人してその部屋に入ってきた。アインハルトを呼ぶ声が聞こえるが、今この2人としゃべる気になれなかったアインハルトは、狸寝入りでやり過ごそうとする。
翔と綺凛は返事がないことでアインハルトはもう寝ていると判断した。
「アインハルトさん、もう寝ちゃったんですね」
「そうみたいだな。話すのは明日にするか」
「はい。それじゃあ、んっ、おやすみなさいっ、先輩っ」

声色だけでも笑顔だとわかる綺凛の気配を背中に感じるアインハルト。
パジャマと布団の絹擦れの音がした。綺凛が布団に入った音だ。初めての行為で疲れてしまったのだろう。そのあと少しすると規則的な寝息が聞こえ始めた。
しかし、
（眠れない……）
アインハルトには眠気は訪れなかった。
原因はわかっている。対処の方法も。
（でも……）
こんなところでその『対処』をするのは躊躇われた。自分の家ではなく、しかも隣には寝ているとはいえ綺凛がいる。
アインハルトは体勢を変え、綺凛のほうを向く。綺凛は仰向けになって寝息をたてていた。見ただけでぐっすり眠っているのかは判断できない。
綺凛ほどの腕になれば、寝ている部屋で怪しいことが起これば目が覚めてしまうかもしれないし、日中の訓練のせいで疲れ果てて起きないかもしれない。
それを確認したアインハルトは再び綺凛に背を向ける体勢になる。
もぞもぞと布団の中の手足が動く。
「どう、しよう」
どうしようと迷っている時点で、思考は言い訳を求めているだけだということに彼女は気が付かない。最後の理性を突き崩す言い訳が。
すでに湿って色が変わり始めたパンツは、細かい言い訳など求めていない。すでに涎を垂らし始めている秘部は、もっと別のモノを求めて疼いていた。
「すぐにしちゃえばいいよね。声も抑えれば……」
そう言いつつ、アインハルトの細い腕が服の中へと入っていく。
あいさつ代わりと言うように、自らの控えめな乳房を包み込む。
一緒に訓練する中で綺凛と比較して落ち込むこともあったが、最近毎日のように刺激したおかげで、すぐに先端を固くしてしまういやら

しい部分になっていた。
包み込んだ掌の中心に、硬くなった乳首が触れた。
「ひっ――――ぐ、ぅぅぅ……っ！」
あまりの刺激に嬌声を上げそうになったが、ぎりぎりの所で歯を食いしばって堪える。
「なに、これ……こんなにビリって……っ」
翔と綺凛の情事を想像するまでもなく、体の高ぶりはすでにどんな些細な刺激も快楽に変えてしまう。
危険な行為だとわかっているアインハルトだったが、興味には逆らえなかった。
「だめ、あんまりするとバレちゃうのに……っ、ダメなのに……っ」
小指の爪ほどに膨張した先っぽを親指と人差し指で摘まみ、少しずづ、少しずづ圧力を加えていく。
グミのようなほどよい弾力のある勃起乳首。その中にある快楽神経をこすり合わせる。少し痛いくらいに乱暴にされると、もう駄目だ。
頭に靄がかかり、今自分がしっかりと横になっているのかすら、分からなくなる。いつもの感覚、目の前がちかちかと点滅し始め、体が不自然にこわばるあの感覚。
「乳首、コリッ、って……っ、気持ちいい……っ、ひうっ、うぁっ、ふきゅ……っ！」
すっかり刺激を求めて濡れている下の口を触る必要は無かった。
このままここを弄り続けていれば、いとも簡単に頂点まで達することが出来る。アインハルトもこのまま止まるつもりはない。
「うそ、もう……!?　もうっ、もう来ちゃ……イ――――っ!!!」
自らの意思とは関係なく、少女の体が痙攣する。お腹の中の熱が一気に弾け、一瞬意識が真っ白に塗りつぶされる。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
荒い息を繰り返すアインハルト。声を出さずにイクことが出来た。おかげで綺凛は目を覚ましていない。
こういう行為には体力を使う。溜まっていた欲求を無事吐き出し、

今日はもう眠るだけ――――ではなかった。
「胸だけで、おっぱいだけでイッちゃった……初めてだけど、よかったけど……」
今日はあまりまともに訓練できなかったアインハルトには体力が有り余っていた。三角布はしっとりと張り付いて、このまま終わることを許してはくれない。
「やっぱりこっちでもスッキリしたほうが……」
まどろっこしくなったアインハルトは、布団の中でズボンを下ろした。腰を浮かして、誰にも見られていないからか、全くためらいもなく。
下ろし始める直前、腰に食い込んでいた2種類の布――――ズボンとパンツ――――を確認する。指先で触れた時に一緒に下ろしてしまおうかと一瞬悩んだが、ズボンだけに留めた。
未成熟なワレメを包み隠していた布地は、しっとりと濡れて張り付いてしまっている。
「こ、こんなにびちょびちょになってるなんて……んっ、ひゅぐぅっ！」
指を曲げて引っ掻いただけで、電流のような刺激が体を駆け抜けた。体が勝手にこわばり、固く結んでいたはずの口がだらしなく開く。
「しゅごいぃ、頭びりっとした……ちょっと引っ掻いただけなのに……っ」
喉をこきゅ、と鳴らして、今度こそ声を出さないようにと口をしっかりと閉じる。
普段身に着けている時とは全く違う手触りの薄布を、刺激が強くなりすぎないように、声を出してしまわないように、しかししっかりと快感を得られるように小刻みに指を動かす。
「ふぐっ、ああっ、ひっ、ぁ、ぴぎゅっ、んあぁっ……！」
布越しに、しっかりと熟れた媚肉を擦り続ける。すると、本人の意思とは関係なくどろりとした粘液がどんどんあふれてくる。
どんなに頑張っても、自分の体を全然コントロールできない。

「もっと、もっと……っ」
歯を食いしばり、隙間からトロリと唾液の透明な橋が布団に落ちる。
もう周りのことなど気にしている余裕はない。人の家でしているという罪悪感も、隣に友人がいるというスリルも、スパイスにすらなっていなかった。
ただ貪欲に、自らの体をいじめて、頂点まで上り詰めることしか少女の頭にはなかった。
元々限界近くまで水を吸っていたパンツの吸水能力は、そろそろ限界になりつつあった。
「これ、シーツ汚しちゃう……」
アインハルトの手には湿り切った布切れの感触が伝わっている。じくじくと刺激を求める下の口を守る、忌々しい布切れだ。
もっともっと激しくひっかきたいのに、あまり激しくすると音も出るかもしれないし、下着から染み出た愛液がシーツを汚してしまうかもしれない。
アインハルトのまじめな部分が、何とか最後の一線で踏みとどまっていた。
「ひあああああぁぁあっ!?」
すっかり機能を失ったパンツ越しに飛び出た肉豆を指が跳ねると、それだけでアインハルトは軽く達してしまった。
しかし、あまりに大きな声だったからか、
「うう、ん……?」
「……!?」
隣で寝ている綺凛の寝顔が少しこわばった。
アインハルトは金縛りにあったように体の動きを止める。しかし、もう一度スイッチをつけられた体はそうはいかない。
追加の愛液が生産され、とうとう水分を吸収しきれなくなったパンツから、太ももを伝いシーツにシミを作った。
「早く、イっちゃわないと……っ」
パンツを横にずらし、アインハルトの指が自らの秘部に触れた。一

度達した少女の秘部はすっかりと煮込まれてとろとろになっていた。
ふやけた肉に指先が触れ、体がブルリと震える。
「こんな、こんなに熱くなってる……」
人差し指と親指を使って少しだけ口を広げてみると、その奥からとめどなく溢れてくる。流石のアインハルトもここに何かを入れたことはなかったが、入り口を指の腹で撫でるだけで、情けなく腰を振ってしまう。
指のグラインドと、何も挿入していない新品肉壺の腰振りが、アインハルトをどんどん高めていく。
「はっ、はっ、はっ、腰、動く……っ、勝手に動いちゃう……っ。体のびりびりっ、全然止まんない……っ」
未成熟な秘部は、どんどん愛液でびしょびしょになっていく。指どころか掌全てに飛び散る。
布団が無ければ、卑猥で粘着質な音が部屋中に響いていたことだろう。
もはや隣に綺凛が寝ているかなんてどうでも良かった。気づかれないようにするという意識はとっくに消えてなくなっていた。
動きがどんどん大胆になっていく。滑りが良くなっていく事を良いことに、指の動く範囲が広がっていく。
狙いはやはり一番自己主張しているアインハルトの『お気に入り』だ。
思い出せばそこを弄るためにパンツをずらしていたというのに。刺激が強すぎてそのことをすっかりと忘れてしまっていた。
「――――ひっ！　あっ、～～～～～っ、ひぎゅっ！」
今までにないくらい固くなっている肉豆、クリトリスに指が滑っていき――悲鳴を上げかけた。
明らかに周りとは違う感触。充血した神経の集まりを、あまりに強い快楽で震えている指がなぞっていく。
ゆっくりと、真綿で締め付けるように滑らかに滑っていく。行って返って、行って返って。そこまで早く動かしているわけではないというのに体が勝手に丸まり、お腹が不自然に脈動する。

今ですら頭が焼ききれそうなくらいの快感を得ているというのに、すでに一度達しているというのに、アインハルトの卑猥な運動は留まることを知らない。
（おかっ、おかしいっ、おかしいです……っ！　いつもなら1回イけば満足できるのに、おっぱいでもアソコでもっ、2回もしたことなんてないのに……っ！）
実際おかしくなっているのだろう。
アインハルトの顔を見れば、それは一目瞭然だ。開かれた口は声を抑えるのではなく、興奮した犬のように短く呼吸を繰り返し、ピンク色の舌が覗いている。
2つの手は下の口に向かう。
片方の手で割れ目を広げる。一番弄りたいクリトリスを弄りやすいように、肉を広げる。肉と肉の間のわずかな隙間にすらも透明の糸が引く。
もう片方の手は当然クリトリスを刺激する。ツンと充血した頂点をなぞるだけで数分と持たない快楽を享受していたアインハルトだったが、それ以上を求めた。爪で引っ掻いては、声を出しそうになり、危険だとわかっていても、行為をやめることが出来ない。
「～～～っ、ぅぅぅっ！　ぅぅっ!?　ふぅーっ、ふぅーっ……～～～っ！　うくっ……！」
クリトリスを弄っていた指の爪が、肉豆を覆っていた薄皮に引っかかった。粘液にまみれた指はさらに快楽を求めた。勢いを止めることなく、指を動かす。
その結果、薄皮から敏感な肉神経が飛び出すことになった。
「ひぐっ!?」
アインハルトの呼吸が一瞬止まる。
一度解放されたクリトリスは、一層その存在を主張する。戒めから解き放たれたクリトリスは一層固くなる。
「あぁ……っ、な、ぃ、これぇ……っ！」
最近ずっと、毎日のようにオナニーしていたアインハルトだったが、クリトリスの皮を?いたことは一度もなかった。?けることも知

らなかった。
むき出しになった快楽神経の集まりは、摘まんだだけで意識が吹き飛んでしまいそうなくらい危ないものだった。
乱暴にすれば痛みしか感じない部位だが、今のアインハルトが痛みを感じる訳がない。
「――――っ!!??」
それどころかあっさり達してしまった。
肉ビラを割り割いていた手に、お腹の奥から漏れ出した愛液が吹きかかる。間違いなく、今までで一番深い絶頂だ。
「ここ、こんな……こんなに……っ、知らないよ、こんなこと知らないよ……っ」
絶頂によって朦朧とした意識のまま皮むけクリトリスをにぎにぎする。霧がかかった意識にすさまじい雷が落とされ、一瞬で体がこわばる。
どんどん未知の扉を開けていくアインハルト。すでに2回イッているというのに、皮むきクリトリスを弄りたくてたまらなくなってしまっている。
ここを弄ればどれだけ気持ちよくなれるのだろうか。それだけを考えていた。まじめな考えなど、破綻した理論でねじ伏せられる。
「だめ、だめ、あんまりすると綺凛さんが起きて……っ、あと1回……うん、あと1回、クリでイったら終わりにするから……っ」
だめ、だめ、言い訳を重ねつつも股間の肉豆をこする手は止まらない。
あと1回。そんな回数で終わるわけがない。
「――――っ、――――っ、――――っ」
少女の『性』への欲求は留まることを知らない。最終的に少女が求める『コト』は、たった1つだった。

「――さん、――うさん、翔さん」
誰かに呼ばれている。枕元に誰かが座っている。
うっすらと目を開けると、誰かが俺を見下ろしているのが分かった。頭の輪郭がぼんやりと分かる。だが寝起きで、しかも部屋が暗いせいで誰か判別できない。
というか、こんな夜遅くに訪ねてくるなんて、人物は大分絞られるわけだが。
意識が覚醒してくる。霞んでいた視界も鮮明になり、訪問者の顔もしっかり確認できるようになる。
「アインハルト？」
「はい。こんな夜遅くにすみません……」
パジャマに身を包んだアインハルトがそこにいた。
思いつめた表情の中に、普段の彼女には無いものが混じっている。この世界に来てからの俺には色々と縁があるものだ。
恋する少女を超えて、性を欲する女の色だ。
「そうだな。どうしたんだ。何か相談事か？」
ただ事ではないとわかった俺は体を起こして――
「っ！」
「わっ！」
アインハルトに抱きつかれた。
「アインハルト？」
背中をさする。ぎゅっと手をまわされ俺も動揺する。綺凛もそうだったけど、いきなりこんなに大胆になるなんて、何があったんだ。
「私、見たんです」
耳元でしゃべられて少しくすぐったいが、そのままの姿勢で聞く。
「翔さん、綺凛さんとお付き合いするようになったんですか？」
「ん、あぁ……そうだな」
その前に説明しないといけない事情があるけど、今は黙って聞くこ

とにする。
「見ました。私、２回も見たんです」
「２回も見た？」
一体どういうことだ？　２回も見たって。正直心当たりがないんだけど……
「最初に見たのは朝練の時です。翔さんも覚えてますよね？　綺凛さんが翔さんに迫った時がありましたよね？」
「あれ覗かれてたのか……」
衝撃の真実だったが、俺としては見られて困るようなことをした覚えはない。若干綺凛の言動が怪しかったけど、そこは大人として毅然とした態度で断ったからな。
「そして２回目は今日です」
「ん？」
今日？
「今日、さっき、綺凛さんとえっちなことをしているところ、私見ました」
それはアウトだ。
人の家に、しかも大会の特訓に来ているのにセックスに励むとか、言い訳無用のスリーアウトだよ！
俺の心臓、バクバクしてきた。
……で？　そんな俺のところにアインハルトはどうして来たんだろうか。事情を知らないアインハルトにとって、俺はもう他の女性と関係を持っている男性な訳だけど。
「もっと早く、言っておけばよかったです」
「な、何を？」
「翔さんのことが好きだって」
「……」
声に涙が混じり始めている。
アインハルトの告白を聞いた俺の心臓が、落ち着きを取り戻していく。
「でももう遅いから。綺凛さん、私と違ってずっと頑張ってて、頑張っ

てたの私知ってるから」
「……」
「最低だって言われてもいいです。今回1回だけ。ううん。何回でも、好きな時に、都合の良い女の子になりますから。それで全部忘れますから」
抱きついていたアインハルトの顔が目の前に。そして――
「私とえっちなことしてください」
――唇を塞がれた。

2人の少女との初めて⑤（アインハルト）

いきなり重ねられた唇が離される。
暗闇でもわかるオッドアイは充血して、涙が溜まっていた。
まさか人の家（道場）に来て女の子2人に迫られるなんて思わなかった。とても光栄なことなんだけど、いろいろと情報も無いままで考えていることもあるだろう。まずはそこを訂正しないと。
「アインハルト、あのな――――」
「ごめんなさい、翔さんには綺凛さんがいるのに……っ、でも、もう我慢できなくて……っ」
ダメだ。感極まってるせいで人の話をまともに聞いてない。自分の中だけで完結してしまっている。
「お願いです……っ、私なんて、綺凛さんに比べて胸も小さいし、てんで女の子らしくないかもしれないですけど……っ、でも、言わないと……っ、諦めきれないんです」
「いや、だからな――――」
これはもう、まともに説得しようとしても無駄だ。何とか落ち着かせないと。
「アインハルト！」
「っ！」
大きな声を出してアインハルトの自己ループの思考に空白を作る。下手するとだれか起きてしまうかもしれないけど、こればっかりは仕方がない。
驚いてこっちを見ている内に畳みかける。
「アインハルト、いろいろと説明しないといけないことがある。聞いてくれるか？」
「は、はい……！」
俺は綺凛にしたものと同じ説明をする。たくさんの女性と付き合っているというお話だ。
「そういう訳で、綺凛はこれを受け入れてくれたんだ。それで付き合うことになった」

「え、っと、それは……」
案の定、アインハルトは混乱していた。
真面目なアインハルトのことだ。結論が出れば、複数の女の子と付き合っている男性なんてものを許容は出来ないだろう。
これで関係が切れるかもしれない。もそもそ万人に受け入れられる価値観ではないのだから、来るべき時が来たのだろう。でも勘違いしたまま関係を持ってしまうよりは断然良いはずだ。
しかしアインハルトから出た答えは、俺の予想していたものとは全く違っていた。
「たくさんの女性とお付き合い……それはつまり、私にもチャンスがあるという事ですか？」
「うん!?　や、まあ、そういうことだけど。意味は分かって言ってるのか？」
「もちろんです」
そこまで即答されるとは思わなかった。
「こんなにどうしようもなくなっているんです。翔さんと一緒にいると、他のことに全然集中できなくて」
それは分かっている。今日の訓練は本当に酷かった。そんな、格闘技に集中できないくらい俺のことを？
目の前に座るアインハルトは、布団の上に正座している。まっすぐ俺を見ていたが、俺と目が合うとはっとしたように目を反らした。
「ですが、その、私が良くても翔さんが嫌なら……」
「そういう訳じゃない」
「本当ですかっ!?」
「それはもちろん。嫌なんてことはないよ」
アインハルトは食いついてくる。
「私全然、まだまだ子供だし、女の子っぽいことも全然知りませんけど……」
「別にそんなことで嫌がったりはしない。アインハルトにはアインハルトの魅力があるから」
「おっぱいもぺったんこで、綺凛さんみたいじゃないですけど、いろい

ろと足りてないですっ、翔さんを満足させることが出来るかどうか……」
満足？　なんだか今夜のアインハルト、妙にヤる気のある発言が目立つんだけど。夜這いに来るくらいだから、その意思はあったのかもしれないな。
「アインハルト？　別に付き合ったらすぐにエッチなことをしないといけないってわけじゃないんだぞ？　綺凛とのを見て焦ってるのかもしれないけど、アインハルトはアインハルトのペースで――――」
「ちっ、違います！　焦っているわけではないんです！　全部、私の意思で……っ」
「そ、そうなのか？」
あまりの剣幕に若干押されてしまう。芯がある女の子だけど、あまり他人に自分の意見を押し付けることがないからな。こういった姿は少し新鮮だ。
「まあ、それは分かった」
「じゃあ……！」
アインハルトは少し遠慮がちに聞いてきた。
「えっちなことしてくれますか？」
「……分かったよ。しようか」
俺が了承すると、あからさまにアインハルトがホッとした表情になる。
ここまで望まれているのなら、俺も断る理由はない。
俺はズボンを下ろした。
まだまだ若い俺だ。今日はもう一回出したとはいえ、夜に布団の上で女の子と2人きりという状況に、まったく反応しないほど枯れてはいない。
むくむくと成長途中の俺の息子が顔を見せる。
「これで、綺凛さんとえっちなことしてたんですね……」
ひとしきり観察すると、
「私も脱ぎますね」
そう言うと、アインハルトは全くの躊躇を感じさせない動きですべ

ての衣服を脱いでしまった。
まず初めに下を脱いだが、パンツとズボンを分けて脱ぐなんてまどろっこしい真似はしない。たった一回で、下半身を守っていた衣服はすべてなくなってしまう。
上の裾が無ければ、実にあっさりと自らの秘する場所が見えていた。その防壁も１０秒後には消え失せた。
「アインハルト、お前……」
服を脱いだアインハルトの体は、すでに準備万端だった。体全体には赤みが差し、年相応の小ぶりなおっぱいの頂点は、十分に自己主張している。下の口はもっと大変だ。もちろん俺は指一本触れていない。だがそこはすでに洪水と言っていいほど愛液が漏れ出している。
全く想定していなかった光景を見て、綺凛相手に一度しているとは思えないほど、すぐさま臨戦態勢になる。
「こ、これは、ですね。翔さんと綺凛さんのを見て……色々と我慢できなくなってしまって……」
な、なるほど？
確かに、知り合い２人のセックスシーンを見たとなれば、そのくらいの反応はするもの……なのだろうか？
それって、結構ちぐはぐなんじゃないだろうか。
男子中学生、高校生なら、そりゃネタにするかもしれないけど。俺含め、下半身の反応が何よりも大切な人種だからな。
でも、今それを言っているのはアインハルトだ。あのアインハルト。恋愛も何も経験ない女の子なら、普通もっと嫌悪感を抱くんじゃないのか。『女の子も男子と同じくらい性に興味がある』って言葉では片づけられないようにも思うんだけど。
「翔さん？　どうかしましたか？」
「いや、ちょっと予想とは違う反応があったから」
でも、そんな違和感は誤差の範囲だ。怯えられたりするよりは何倍もいい。
「翔さん、お願いします……」
アインハルトは柱に手をついてお尻をこちらに向けた。二次性徴

が始まったばかりの、子供臭さが残るきゅっと締まったお尻だ。
それがだらだらと涎を垂らしているのだからどうしようもないアンバランスな魅力を持っている。
もう準備万端。まさに今が出来上がりだと言わんばかりの具合だ。
でも、
「や、少しは慣らしておかないと。いくらなんでもさ」
「い、いえっ！　大丈夫です！　……もう自分で散々、散々してきましたし……」
「何だって？」
「何でもないです！　とにかく大丈夫です！　痛かったら言いますから！」
「……分かった。でも、痛かったらすぐに言えよ？」
「はい……っ」
近づいて、やはり緊張はしているのか、少し硬くなっている尻をぱっくり広げる。
その奥は、成長途中でも、初めてでも柔らかいモノだった。蜜壺が男を誘うように、分泌した液を穴から垂れ流している。一切触っていないというのにどうしてここまで濡れてしまっているのか、俺には全く分からなかった。

だが体は正直だ。バキバキに勃起した肉棒を当てた。ちゅぽちゅぽと吸い付くように肉壺が収縮する。そんなに飢えているのか、この穴は。
「それじゃ、入れるからな」
「はいっ、……んんぁぁっ、はいって、きたぁ……っ」
「っ、ぁ」
めちめちと肉壁を俺のペニスが掘削していく。体の様子は決して見掛け倒しではなかった。ぬめぬめでとろとろの肉襞が、俺のペニスに我先にと吸い付いてくる。
ともすれば先ほどセックスした綺凛よりも『仕上がっている』。本当に初めてなのか疑わしくなるくらい、ぐずぐずにほぐれていた。

大した突っかかりもないまま、ペニスは奥へと到達した。
「あぐっ、いいんん……っ！」
尻肉が腰に当たる。最奥まで挿入しても体のサイズの問題で、根元が少しだけ入りきっていなかった。
柱に縋りつくように立つアインハルトは、息は荒いがまだ余裕がある。
「大丈夫か、アインハルト？」
「は、はいいいっ。すご、い、です……っ！　おちんちん、お腹にあるの、分かります……っ」
「痛くはないのか？」
「は、いいっ！　大丈夫、です……っ！」
「……そっか」
本当みたいだな。
綺凛の時みたいに準備して相殺したものとは違って、初めての挿入で、本当に快楽しか得ていないみたいだ。
これはもしかして、もしかして、だ。
「なあ、アインハルト」
「何ですか？」
「自分で自分のを弄ったことってあるのか？」
ぎちっ、俺のペニスを押しつぶさんばかりの圧力が肉壁から伝わる。
「っ、な、なにを……そんなことしてないです。したことありません」
「ふーん、そうなんだ」
明らかに息を呑んだ。下の口も反応した。ビンゴだ。
「じゃあアインハルトは変態だな」
「は、ぇ……？」
「まったく触らなかったら、普通こんな風にアソコが濡れたり乳首が硬くなったりしないんだよ」
ぱちゅんぱちゅん。
だれてしまわないようにゆるゆると腰を振る。肉ヒダが吸い付き、俺のペニスから精を搾り取ろうと求めている。体だけではなく、口か

らも甘い吐息が漏れていた。
　歴戦の戦士というには少し足りない。ずっと焦らされてようやく初陣の機会を貰った新兵という表現がしっくりくる。間違っても何の訓練も受けていないとは言えないな。
　これで弄ったことが全くないのなら、この子の体はどう考えても異常だ。
「ひ、ぁあ、あの、私……！」
「別に怒ってるわけじゃないぞ？　ただちょっと、興味があって聞いただけだから」
　まず間違いなく、ここに来る前に自慰してきたんだろう。口ぶりからするに、今夜だけということもないはずだ。あの真面目アインハルトが、何を想像したのか夜な夜な自分で自分を慰めていた。そう考えると、興奮する。
「それで、実際どんなことを考えてしてたんだ？　えっちなサイトを調べたのか？　それとも何も見ずに？」
「……何かを見ながらではありません。その……想像して、です」
　もう観念したのか、俺の質問に素直に答えてくれる。
「えっちなことを？　じゃあ色々と知ってたんだ」
「っ！　ち、違います！　うぅっ、そうじゃないんです……っ！」
　壁に体を押し付けて、奥をぐりぐりと刺激する。アインハルトのかかとはすでに地面についていない。亀頭が奥に突き刺さり、その刺激を少しでも軽減しようとつま先立ちになっているのだ。
　俺も欲望のままに腰を振りたい気持ちでいっぱいだが、今はこの会話を楽しんでいたい。
「えっちなサイトじゃなくて……綺凛さんと翔さんを、想像して……」
「俺と綺凛？」
「前に公園のトイレでしてたこと、想像してました」
　卑猥な告白をすると、肉壺が締まる。今まで秘密にしていた秘め事を告白しているのだ。この変態の少女が何も感じないわけがない。
「でもあの時、別にいやらしいことはしてなかったぞ？　アインハルトにはそう見えたのか？」

「……自分でその先を想像してました。あの日初めて濡れちゃって……」
とくとくと自分の性の目覚めについて語る少女。もちろんペニスは突き刺さったまま、時々恥ずかしさ以外の原因で言葉を詰まらせる。
言葉に合わせて、淫語、というには少し幼い恥ずかしいことを口にするときは、決まって下の口がきゅっと反応する。
「どんな想像してたんだ？」
「キスして、胸を触られ――――ひゃうっ!?　しょ、翔さん!?」
「いいから。続けて」
俺は後ろからアインハルトのまだまだ平坦な、膨らみかけのおっぱいを、包み込むように鷲掴みにしていた。
アインハルトも何をされるのか理解したのだろう。こきゅ、と唾を飲み込んだ。湿った声が、俺をラジコンとして操作する。
「まずはそんな感じに、おっぱいを揉まれるんです」
言われる通りに手を動かす。まだまだ柔らかい双丘には程遠いが、しっかりとあるふくらみを丁寧に。
人にもまれれば大きくなるという迷信が本当なら、俺が育ててやると言わんばかりに隅々まで心を込めて。
しかし指示に無い先っぽには、絶対に触らない。それでも反応ははっきりとしている膣全体がうねりだし、息子を包み込む粘液の層が一気に熱くなる。痙攣も不規則になる。軽くイッているのかもしれない。
わずかな腰の動きだけで、愛液が畳の上にぽたぽたと落ちていく。
「……すご、いいいっ。ずっとイッちゃってる……っ！　あたまバカになりそう……っ」
「次は？」
「そしたらっ、その、そこの、先っぽが硬くなってくるので、そこをします……っ」
「乳首をくりくりすればいいのか？」
「～～～～っ!!　そうですっ、乳首をして下さい……っ！」

硬くなってくるって、この部屋に来た時点でもう硬くなってたよ。
そんな雰囲気をぶち壊すようなセリフは言わず、かわりにアインハルトに鳴いてもらった。
硬く自己主張している乳首を、２本指で摘まむ。
「イ――――」
イッた。いともあっさりと。絶頂で身を震わせるアインハルトの股間から、大量の液体が噴き出した。ただでさえ狭い女の穴が乱暴に締め付けてくる。
摘まんだ乳首を指で転がすと、体が２回目の絶頂の準備をし始めた。
「ま、まらっ、まらイぐっ！　おっ、おっぁぁぁ！　とまんな、とまんりゃいれすっ、イぐのっ、ぁぁっ、とまならいっぅぅっ！　んんんんぁぁっ！」
首筋に吸い付いた。
「ひゃうぅ!?　や、ひょれ！　ひょれだめれすっ！　わたし、そんなのやってって言ってないっ！だから……っ、だめ、もう、イっちゃ……っ、んっ！　ちゅぷ、れろ、ちゅぱ、ちゅうぅ……っ」
あまり大きな声だったため、指を咥えさせ黙らせる。
「次は？　どうすればいい？」
「――ちゅぱ……っ、そのままっ、そこ、くりくりして……っ、いただければっ！」
「普段のアインハルトはこれでイってるのか」
「～～～っ、そうっ、そうれすっ！　もうずっとっ！　乳首コリコリされてるだけでずっとイって――っ！　か、ぁ……？」
ぶちゅんぶちゅん。ごちゅっ！
後ろから抱きしめるように腰を振っていたら、突然アインハルトの足から力が抜けた。ペニスだけで支える形になり、根元まで突き刺さった。子宮口を抉じ開け、亀頭がコリコリとしたものに挟まれる。
アインハルトが倒れないようにとっさに手にも力が入った。今、散々扱いていた乳首をさらに強く捻りあげる。
肉壺はもう痙攣しっぱなしだ。ぽたぽたと畳の上に２人の体液が

したたり落ちる。
俺も不意打ちの一撃で一気に射精感が高まってきた。自分のペニスが肉壺の拘束を振り切って痙攣する。亀頭の感覚が一瞬鈍くなり、次の瞬間に訪れる快感を予感した。
今だ絶頂から降りてくることが出来ずに全身を硬直させているアインハルト。そんな少女のお尻に、少しでも多くの快感を得ようと情けなく腰を振る。
「アインハルト、出すぞっ、中に出すからなっ！」
「――――っ、――――っ、――――っ！」
ごぷっ、どくっ、びゅくくっ、びゅく、ごぷぷっ。
限界はあっけなく訪れた。
睾丸に残っていたありったけの子種を吐き出した。３０秒近くの射精を経て、俺たちは２人そろってその場にへたり込むのだった。

「ハッ、ハァッ！」
「フ――――ハァッ！」
翌日、昨日と同じように道場の隅で正座をしている。目の前ではミカヤさんとアインハルトが組み手をしていた。昨日とは比べ物にならなくらい良い動きで、ミカヤさんと張り合っている。
神速の居合を腕で受け止め、そのまま拳を繰り出している。当たってはいないが、拳圧だけで道着が破れた。
これはまずいと思ったのかミカヤさんは一度距離をとる。アインハルトも追撃するつもりはないようだ。
「驚いたよ。昨日とはまるで別人だ」

「申し訳ありませんでした。昨日とは違うところを見せたいと思います」
「……ふむ、その様子だと、悩みは無くなったというわけだね」
「……はい」
「ふふ、その様子だとうまくいったみたいだね」
何やら睨み合いながらしゃべっている。
「あの娘、持ち直したみたいでよかったです」
横に座る木更さんが話しかけてきた。
「そうですね。この分なら大丈夫ですね」
「その言い方、昨日の夜何かしたんですね」
「や、まぁ……アドバイス的なものを」
アドバイス（肉体言語）だったわけなんだけど。よく見ればアインハルトの目の下にうっすらと隈がある。でも色々と注がれたのが原因か、２人ともお肌がつやつやしているからイーブンだ。
ミカヤさんも木更さんも気が付いた様子はない。昨日の行為にも、２人がつやつやしていることも。気づかれていたら、釘差すくらいやってくるだろうしな。
その後も特に変わったことがあったわけは無く、交代交代で模擬戦をして、夕方には道場を後にした。こうして実りある週末練習を終えることが出来たのだった。

帰りのバスの中。翔は一足先に降りて、今は綺凛とアインハルトの２人が一番後ろの席に並んで座っているだけで、他に乗客はいない。
先に口を開いたのはアインハルトだ。今回のことのけじめとして、友達の告白を知っているのに関係を迫ったことのけじめとして、自分

からも言わないといけないと思っていた。
　たとえ翔が、既に昨日の夜のことについて2人に説明していたとしても。
「綺凛さん、私、翔さんとお付き合いすることになりました」
「私もです。私も先輩とお付き合いすることになりました」
「……怒らないんですか？」
「怒りませんよ」
　綺凛は苦笑いしている。
「そのくらいで怒っていたら、先輩となんて付き合えないじゃないですか」
「それは……そうかもしれないですね」
　2人とも、翔の女性事情については聞かされた。予想していた部分はもちろんあった。彼女が2人くらいいてもおかしくはないくらい、翔の周りには女性が多かったから。
「そんなこと言ったら、私だって彼女さんがいるのを知って、それでもアタックしたんですもん。私が先になったのは、タイミングのせいですよ」
「ありがとうございます……」
　それに、と綺凛が続ける。
「アインハルトさんが翔さんのこと好きだなんて、ずっと前から分かってたことですよ？」
「うぇ!?」
　予想外のセリフに、アインハルトの喉から変な声が出る。
「だから私も悩んでたんです。でも、止められなくて。だから、謝るならむしろ私の方なんですよ？」
「そ、そんなに前からだったんですか？」
「はい……？　もしかしてアインハルトさん、自分の気持ちに気が付いたの最近なんですか!?」
「昨日、です……」
「えー!?」
　これには綺凛も驚いた。近頃様子がおかしかったのは、自分の気持

ちを自覚したからではないのかと思っていたからだ。
　アインハルトは、今まで自分がみんなの目にどのように映っていたのかを想像して、顔を覆ってしまう。隠した顔はもちろん真っ赤っかだ。
「あー、やっぱり許せなくなってきました。色々話してくれないと許せそうにないです！」
「そ、そんなぁ……」
「ふふっ、先輩のイジワルがうつっちゃいましたね♪」
　少女２人の楽しそうな会話は、目的地に着くまでずっと続くのだった。

陸戦試合　編

陸戦試合①

陸戦試合当日になった。

7月も中盤。期末テストも終了し、あとは夏休みを待つだけになった今日この頃。表向きは俺たちの六課入隊試験、裏向きにはオフトレーニングで無くなってしまった陸戦試合だ。うん？　表と裏が反対かな？　まあ、どちらでもよいか。どっちも本命ということで。

大会まで残り2週間を切っている。子供たちには、今までの特訓の成果発表の場にもなっているらしい。

八神さんは全体を見たいと試合には参加しない。ヴォルケンリッターも同様だ。八神道場の2人も、どうしても予定が合わず今回は不参加。

ただ意外な人物として、

「お、ルーテシア。来てたのか」

「あれ、翔君。おひさ～」

準備を済ませ、特務六課の所有する仮想訓練施設に行くと、そこにはルーテシアがいた。

この娘も大会に参加するもんな。2週間前から現地入りするとはちょっと早すぎると思うけど。

「ちょうどいいから、観光もしとこうと思ってね。ほら、大会が始まると、身動きとれなくなっちゃうじゃない？」

「……まだ経験したことはないけど、そんなにすごいんだな、この島の8月って言うのは」

「そういうこと。翔君も覚悟しといたほうがいいわよ？」

覚悟って面倒な事件が起こる覚悟？

「それよりもどう？　今日の試合、緊張してる？」

「まさか。命の取り合いじゃないんだ。負けたっていい試合にそんなに緊張してどうする」

普段ならもう少し負けず嫌いだが、こと戦いになれば話は別だ。経

験を積むことに集中して、勝てたら儲けもの程度の考えで挑もう。何度も言うが、死ぬわけじゃないんだし。
あまり気負わず、自然体で臨めば試験にも合格できるはずだ。あの時の八神さんの口調からして、このテストはほとんど形式的なものなんだろうし。
「むむむ……なーんか気に入らないなーそういうの。真剣にやってるこっちがバカみたいじゃない？」
真剣にはやるよ。本気で（命を取るつもりでやらない）ってだけで。
「何だよ。じゃあ何か賞品でも出してくれるのか？」
「モチベーションが上がるなら罰ゲームでもいいかもね……」
この娘はこの手の話が本当に好きだな。でも、ちょっとした余興があると面白いのは間違いない。
「そうだなぁ……あ、チーム分けはもう見た？」
「見た見た」
昨日の夜のうちに高町さんから送られてきていた。

Ａチーム
なのは、エリオ、ルーテシア、ヴィヴィオ、スバル、リオ、アリア、ヤミ、クロ、綺凛、桜、耀
Ｂチーム
ティアナ、フェイト、ノーヴェ、アインハルト、キャロ、コロナ、翔、雪菜、アスナ、狂三、理子、ティナ

セイバー達が入っていないのは、俺のサーヴァントだからだ。つまりは俺の個人戦力として使える。ちなみにいうと、俺のマスターとしての腕はセイバー達が現界出来るギリギリラインだ。女の子として召喚したからその辺はしょうがないだろう。
「私たち別チームでしょ？」
「そうだったな。チームの勝敗で決めるのか？」
「正解♪」
確かに人数の関係上、一騎打ちの場面はそうそうないだろう。そも

そも一騎打ちなら俺に有利すぎる。でも相手チーム全員を薙ぎ倒せるほど俺は強くない。どうしても勝敗はチームの総合力と、作戦にかかってくる。コイツめ、考えたな。
　しかし俺も一度乗り気の姿勢を見せた手前、いまさら引き下がることは出来ない。
「賭けるのは？」
「そうだね……」
　ルーテシアは、ニヤリと笑った。
「負けたチームに属している方が、みんなの前で好きな人を言うってことにしようか？」
「え――――」
　――――えええええええええええええ!!!!
　全員の前で好きな人って、俺の場合誰を答えても、どう答えても角が立つ奴じゃねーか！
　っと、危ない危ない。顔に出るかと思ったぜ。そもそも、『好きな人』なんていくらでも解釈できるな。うっかり恋愛で好きな人を応えるものだと思っちまった。たまには悪知恵も働かせないとね。
「もちろん恋愛的な意味でね♪」
「アッハイ」
　抜け目がない奴だ。
「もちろん受けてくれるよね？」
「……ああ、いいぜ？　勝てばいいんだからな」
　受けて立ってやろう。このくらいの方が緊張感が出るってもんだ。
「ふふ、そう簡単に勝てるかなぁ？　こっちにはなのはさんがいるからね？」
「くっ……」
　話に聞く砲撃能力。あんなのを連射してくると考えると、下手なサーヴァントよりも強いだろう。エース・オブ・エースの名は伊達ではないということだ。
　だが、
「問題ない。俺が倒す」

「ほほー、言ったね～。楽しみにしてるよ」
メンバー的に作戦を立てれば行けるはずだ。相手はエースであっても神様じゃないんだ。全員に無双できる訳じゃない。
ん、待てよ。
「俺はともかく、お前も言うんだよな？」
「そりゃもちろんね」
「お前に好きな奴なんているのか？」
この聞き方はめちゃくちゃ失礼。
「あのね……ここで言ったら勝負にならないでしょ？　でもごまかしたりしないから安心して」
こうしてちょっとした賭け事が行われることとなった。

翔がルーテシアと賭け事をしている丁度その時、六課の更衣室では翔と一緒に来た女の子たちが着替えて準備をしていた。
ただ着替えているだけならそこは花園だったのかもしれないが、壁やロッカーに細剣（レイピア）、小太刀、雪霞狼が立てかけられているのでどうしても殺伐した空気が流れていた。
服装も、アスナは防弾制服だけではなく急所を守るように防具を身に着け、理子はどこにそんなに仕込むのかと言いたくなるくらいの武器を並べていた。
アリアは自慢の双剣双銃を背中の鞘と太ももものホルスターに収納していた。
耀も気合が入っているらしく、靴を取り換えている。音と衝撃を吸収する素材で作られた特注品だ。
ヤミは単純に衣装チェンジ。防弾制服から、見慣れたバトルドレスへとお着替えだ。

雪菜は雪霞狼を持つだけで準備完了だ。
特に準備をしていないのは狂三、クロ、ティナだった。彼女達はすべて自分の能力ですべて賄っている。衣装替えも変身するように一瞬だ。
結局、アリアとヤミは管理局入りを辞退した。クロとティナも、年齢的な制限が入り管理局に入ることは出来なかった。なので、今回は本当にお遊びだ。
つまり、そこまで戦闘狂ではないクロとティナには、そこまでヤル気を出す理由はなかった。
「なーんか、ヤル気でないのよねぇ……なんで模擬戦なんかするんだろ？」
「そうですか？」
「そうなのよ！　終わっても何にも得られるものがないんじゃ、やってられないわ！　ただ疲れるだけじゃない！　ご褒美が欲しいわ。いや、むしろご褒美が与えられるべきよ！」
クロは駄々をこねる子供の様に手足を振り回した。
「お兄さんに何かお願いしてみますか？　今日の晩御飯とか」
「そうね……頑張ったご褒美とかでどこかに連れて行ってもらおうかしら……？」
「あ、プールとか行きたいよね！　８月は忙しいって言うし、今の時期に」
アスナの言葉にクロは首をかしげる。
「え、何言ってるの？　お兄ちゃんと私の２人きりでに決まってるじゃない。いやよ、そんな大人数で行くなんて。私にかまってもらえなくなっちゃうし、何より私のご褒美なのよ？」
その言葉に、何人かの女の子がいやいやと首を振る。いやいや、君は何を言っているのかと。
「それは、ねぇ？」
「そ、そうですよね！　クロさん１人だと先輩がかえって疲れちゃうかもしれませんし！」
「雪菜、アンタは私を何だと思ってるの？　何をすると思っているの

かしら？」
　クロのツッコミに反応する人はいない。すでにここはクロにとっての敵地になっていた。
「それに、ご褒美と言う言葉にも納得できませんわ。常日頃から家事を頑張っているわたくしにも、ご褒美はあってしかるべきではありませんの？」
「理子いいお店知ってるからぁ。一緒に行きたいな～」
「ちょっと狂三と理子まで！　やめてってば！　そうやって足の引っ張り合いするのは！」
「そもそも、お兄さんがご褒美をくれる前提でお話が進んでいるのはなぜでしょうか……？」
　ティナは当然の疑問を口にするが、ヒートアップした女の子たちに、その言葉は届かない。
　もっとも、翔ならばどこかに出かけようと言われれば喜んで行くし、ご褒美が欲しいと言われれば喜んでご褒美をあげるが。
「皆さん準備は――何をしているんですか？」
　管理局の制服に身を包んだ桜が扉を開けて入ってきた。更衣室に満ちる不穏な空気を感じ取ったのだ。
「間桐さん」
「ティナちゃん、いったい何が？」
　試合ではなく、すでにここで一戦始まろうかと言う空気に桜が真顔になる。ティナが事情を説明すると、桜はため息をついた。
「はぁ、何を言い出すのかと思えば……だったらそれこそ、うってつけのイベントが目の前にあるじゃないですか。誰が一番かを決めるイベントが」
　うってつけのイベントと言うのはもちろん。
「この模擬戦で『一番最後まで生き残っていた人』が、そのご褒美権を獲得するというのはどうでしょう？　あ、もちろん勝ったチームの最後まで生き残っていた人ですからね？　そうじゃないと、味方に闇討ちする人が出てきちゃうかもしれませんから。ま、それはそれで、さすがに試験に不合格になるでしょうから、管理局の仕事では一緒にい

られなくなりますね。目先の利益を取るのならどうぞ」
「ですから、どうしてご褒美がもらえる前提なのか……」
ティナは言いかけて口を噤む。自分は狙撃手。ポジション的に、うまく立ち回れば最後まで残っている可能性が高いポジションだ。
「最後まで残った人が複数人いた場合はどうしますの？」
「その時はその人たち全員で、ですよ」
「あのね、アンタたち、そんなことして……」
アリアが口をはさむ。
「だったら別に参加しなくてもいいんだよ？」
「……別にそうは言ってないでしょ。結果的に勝つことになるだけだからっ」
理子の提案を蹴っ飛ばすアリア。そっぽを向いた唇は尖っていた。
こうして女の子たちの間でも、ちょっとした賭け事が行われることになった。

みんなが揃った。外では六課の職員の皆さんが、休憩がてら観戦しているらしい。
それにしても人数が多い。しっかり作戦を立てないと大乱戦になりそうだ。
そしてなぜか女の子たちが殺気立っている。同じチーム同士でもけん制し合いかなりピリピリしている。
「みんな揃ったね！　じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんから！」
「え！　あ、あたしですか!?」
突如高町さんに指名されたノーヴェさんは、恥ずかしそうに前髪を

弄る。
「えー、メールで説明した通り、今回は2チームに分かれてのフィールドマッチです。ライフポイントは公式のライフカウンターで管理します。ライフが0になったら行動不能……全員のライフが0になったらそのチームは負けになります」
『リリカルなのは』の魔法には便利な『非殺傷設定』と言うものがある。これは攻撃によるダメージを魔力によるショックに変換することで、相手にケガを負わせずにダメージを与えるというものだ。
この非殺傷設定は、たびたびこの世界のキャラクターに対して『覚悟がない』だとか『人を傷つけることができない』だとかのネタの種になっている。
それは置いておくとして、ライフカウンターはそのショックを数値化してカウント出来る便利なものだ。
高級なものだと、被弾した部位と攻撃に反応して、痛みと身体障害（骨折・打撲などの痛み）を疑似的に再現できるものもあるらしい。
そして、今回の俺たちの攻撃も非殺傷設定になるらしい。原理はわかりません。おそらく神（作者）の一手です。
場所はルーテシアが作ったレイヤー建造の都市マップだ。結界の中なので、攻撃が外に漏れることはない。よっぽどのことが無ければな。
ノーヴェさんの説明も終わり、2チームはマップの両端に分かれた。マップの広さはおおよそ五キロメートル四方だ。この程度の距離ならば射線が通ればどこからでも狙撃される恐れがある。開始から気が抜けない。
全員が戦闘服を身にまとい、準備万端。始まりの合図を今か今かと待っている。試合開始まで残り1分。
俺が所属するBチームは、リーダーのティアナさんによって最終確認がされていた。
「今回は人数が多いから、１ｏｎ１になっても横からの奇襲に気を付けて。人によっては1対2になる人も出るかもしれないけど、その時は無理する必要は無いから。やられないことに集中してね」

空中に投影されたディスプレイに今回不参加の八神さんが映し出される。後ろにはなぜか銅鑼が置いてある。
《それじゃあみんな元気に――――試合開始やっ!!!》
ガリューによって鳴らされた銅鑼の合図で、戦場にいくつもの道が張り巡らされた。

「ウイングロードッ!!」
「エアライナーッ!!」
試合開始とともにノーヴェとスバルの魔法が発動する。魔力によって作られた青い道が、戦場にくまなく張り巡らされた。空中に足場を設置する魔法だ。これを使えば、空を飛ぶ技能のない戦士も、宙に浮いて戦うことが出来る。
翔達は一斉にその道へ踏み出した。
初めに小細工は必要ない。お互いに真っ向からのぶつかり合いだ。
「翔さん、私はヴィヴィオさんとッ!!」
「了解した！　俺は――――ッ!!」
目の前から砲撃が迫ってきていたことに気が付き、横に飛んだ。相手も狙っているわけではない。ただのけん制だ。翔たちの相手にはあの『エース・オブ・エース』がいる。中、遠距離の射砲撃は彼女が最も得意とする距離。かすっただけでもライフが持って行かれる。
そして、相手は1人ではない。
「あんたの相手は私たちよ」
ピンクのツインテールを風に揺らし、二丁の拳銃を構える――――アリアだ。その手に持つ二丁拳銃はみんなが見慣れている（家でも

しょっちゅうブッパなしているので）物とは違った。
「おいおい、俺に2人がかりか？　Ｓランクの武偵が？」
「あんたの実力はよくわかってるわ。ランクなんてあてにならないもの。油断するわけないじゃない」
「その通りです。今までの借り、ここで返します」
　俺の前に立ちふさがったのは、アリアとヤミだった。アリアは空中に設置された半透明の道に仁王立ちして俺を見下ろし、ヤミは背中からはやした白い翼で空中を舞っている。
「もー、こういう時でも翔君はモテモテなんだからー」
「理子……！」
　いつものふざけた様子で、理子が俺の後ろにふわりと着地した。そのまま体を摺り寄せてくるせいで、防弾制服を押し上げるたわわな果実がふにゃりと歪む。
　アリアはそんな理子をぎろりと睨んだ。
「4月の飛行機の中のことを思い出すな」
「その時と比べるなら、大分状況が違うけどね」
　武偵殺しの事件も懐かしいものだ。あれもだいぶ原作からかけ離れた事件だった。
「ごめんねぇ、アリア。アリアのパートナー、理子が盗っちゃった♪」
「……言ってくれるじゃないの、理子……っ！　翔！　あんたもデレデレしない！」
「してねぇよ！」
　なんで今日のアリアはそんなに攻撃的なんだ。や、いつものことか？
　犬歯をむき出しにして、銃を握る力が強くなるアリア。引っ張られるように、『裏』の笑みを浮かべる理子。
「私とも遊べよ、オルメス」
「吠え面かかせてやるわ、理子ッ！」
　2人のボルテージは最高潮。
　俺は超宇宙聖剣（スペースカリバー）を取り出して構える。
「なら私は、5月のあの事件の借りを返すことにしましょうか」

「パンツのことか」
「あなたが言わなければ、思い出していませんでしたよ……っ！」
俺とヤミは、初めて会った時が初めて戦った時だ。あの時は俺が不意を突く形で撃退に成功した。
さて、今回はどうだろうか。少なくとも、こんなに人の目がある中で『あの手段』を使うつもりはない。
戦場のほとんど中央。視線を奥にずらせば高町さんが見える。その奥には賭けの相手であるルーテシアも。
各々が戦場へ散っていき、最初の相手と相対し始める。
陸戦試合が始まった。

陸戦試合②

「さてさて、始まったなぁ～」
「そうですね」
「八神部隊長ならその内引き入れるとは思っていましたけど、こんなに早いとは思いませんでしたよ」
「誉め言葉として受け取っとくわ」
訓練場の、今は模擬戦闘の闘技場になっている結界の外。内部の様子をあちこちに設置されたカメラを使って観戦できる一番の特等席には、３人の女性がいた。
１人はこの特務六課の部隊長であり、翔たちをこの部隊に誘った張本人である『八神　はやて』。
１人は、六課の後援者の１人であり、翔に対して強い警戒心を持っている『更識　楯無』。
１人は、楯無とは反対に翔に対して妙に信頼を置いている『クローディア・エンフィールド』。
悪の幹部勢ぞろいと言ったところだ。もちろん所属しているのは正義の機関で、志はまっとうだが。
「それにしても、まさか部外者の子供たちまで今回参加するとは思いませんでしたよ。流石に私的利用が過ぎるんじゃありませんか、部隊長」
「まあまあ、そう言わんといてな楯無。特例に特例を重ねとるんやし。いまさらこの程度、やろ？」
「ですが、余計な弱みを作っていることには変わりありませんね。今後はこう言ったことは控えるべきかと」
特別な権限を持たされた人が疎まれるというのは、どの世界であっても同じことだ。
しかもそれが権力者の支援によるものだとしたら、戦う相手は敵だけではなく味方も対象になる。
そう言った意味で、六課はその条件をすべて満たしていると言えた。

「はいはい、以後気を付けますよーっと」
「そう言ってるあなたこそ、夜月翔にはずいぶんと肩入れしてるじゃない」
楯無は、今度はクローディアに口を出す。
「そうでしょうか？　実力、人格共に問題ないと思っただけですよ？」
「その割には、身辺調査をほとんどしてないわ。新谷航平の供述にだって不自然な点はあるし、２人には共通する点がある」
普通の人ならば世界の修正力で違和感を持ってもすぐに忘れてしまう。だが、楯無は違った。理論的に証拠を集めることで、それに抵抗していた。
そして、この場にいるのはそんな彼女に匹敵するほどの能力を持った女性たちだ。
「そうやね。『ある時期から突然名前が売れ始める』ってところが特に引っかかるなぁ」
ある時期とはもちろん、翔たちがこの世界に来た時だ。記録上は問題なく修正されるが、違和感だけは残ってしまう。
「言うて夜月君はなんも悪いことしてへんし？　捕まえるのは無理やろ？」
さらりと言うはやてに、楯無は続ける。
「手元において、観察しておこうってことかしら？」
「そこまで露骨な物や無いけど……でも、みすみす手放す手も無いやろ？　味方ならバンザイ、敵ならその時はって感じや」
「まったくお二人は。夜月さんの周りの人を見れば、そんな悪い人じゃないってことくらいすぐわかると思いますけれど……」
クローディアの言うことはもっともだったが、理論で動き、未来の人命を左右する話をしている場面だ。その意見は流されることになった。
こういうことを言うから、クローディアは翔に肩入れしていると言われるのだが、本人が気にしている様子はない。
「ま、今はそない難しい話は忘れて、この模擬戦を楽しむことにしよか？」

３人は仕事の会話を打ち切り、モニターへ目を向けた。画面では、各々が自分たちのポジションへ散り、今まさに戦闘が始まろうとする場面だった。

チームを支えるセンターガード。人間でいえば背骨、扇子で言えば要に当たる部分に位置するポジションにいるのは、Ａチーム『高町なのは』、Ｂチーム『ティアナ・ランスター』だ。

中距離支援を主とする彼女たちは、魔力を充填しつつ思考していた。

「終盤、なのはさんに大きいのを撃たれたら一気に全滅するかもしれない。勝負を分ける一撃は――――」

「ティアナの鉄鋼狙撃弾は、私のよりも早くて重い。むやみやたらに砲撃（撃っ）と、カウンターが飛んでくるかもしれない。勝負を分ける一撃は――――」

お互いに相手の強みを想定し作戦を立てるが、行きついた結論は同じだった。

「――――数の均衡が崩れた時ッ!!」

今回唯一のスナイパーであるティナは、誰とも相対せずにビルの屋

上に伏せていた。フィールドの隅、その中でも一番背の高いビルだ。
ここからならフィールドのほとんどを射程に収めることが出来る。
「ティアナさん、ポジショニング終わりました」
《そこからなのはさんは見える？》
「はい。見えます」
白いバリアジャケットを身につけた女性をスコープ越しに見る。
《無暗に撃たないでね。ここぞっていう時に指示するわ》
「了解です」
スナイパーは位置がばれてしまうと途端に弱くなってしまう。この狭いフィールドで有効な狙撃ポイントは限られているため、無暗に射撃するわけにはいかない。
ティアナの言ったように、的確な一撃でなければいけないのだ。
「お兄さんとのデート権を勝ち取るのは私です」
自分の身長よりも大きいスナイパーライフルを構え、宣言した。

チームを支える縁の下の力持ち、フルバックはAチーム『ルーテシア・アルピーノ』、Bチーム『キャロ・ル・ルシエ』。
直接前に出ることは少ないが、野球のキャッチャーのようにチーム全体を見渡せる位置にいる。重要度もキャッチャーのそれと同じかそれ以上だ。
「さてさて、どっちがうまくチームを支えられるかなぁ？」
「負けないんだから！」
意気込む2人。
ルーテシアは実に楽しそうに試合に臨んでいた。
「私にとっては、勝敗は他の人以上に重要だものねぇ？　じゃ、ギャン

ブルスタートよ、夜月君♪」

悠々と空を飛びつつも、相手を見据えるのはＢチーム『フェイト・Ｔ・ハラオウン』だ。機動力を生かして攻撃と防御両方をこなすガードウィングのポジションについている。
そしてＡチーム『エリオ・モンディアル』も同じポジションについている。
奇しくも息子と義母の戦いになった。
「エリオとの１対１なんて久しぶりだなぁ。油断してたら落とされちゃうかも」
「行くよストラーダ！　今日こそはフェイトさんを打ち落とす！」
気合も十分に、両者は激突する。

「「おおおおおおおっ!!!」」
拳と蹴りがぶつかり合い、火花が散る。
こちらではすでに戦いが始まっていた。常に前線に立って戦うフロントアタッカーの２人だ。Ａチーム『スバル・ナカジマ』、Ｂチーム『ノーヴェ・ナカジマ』だ。
フェイトとエリオが親子なら、こちらは姉妹対決といったところ

だ。
２人の装備も似通っている。２人とも足にはローラースケートのように車輪のついた靴を履き、空中にある道を高速で滑っている。
スバルは右手に、ノーヴェは両足にドリルの様に回転するパーツを装着しており、そこから生まれる螺旋のエネルギーが、打撃の威力を底上げしている。
「流石にやるねぇ、ノーヴェ……ッ！」
「当たりめえよ！　こちとらいつもチビ共の練習に付き合ってんだ！」
この鍔迫り合いはノーヴェが押し切る。
「仕事ではともかく格闘技では――」
「でも私もお姉ちゃんだし――」
「――負けられない!!」
金属のぶつかる音が、フィールドに響き渡った。その音は、２人の打撃の重さを物語っているのだった。

魔力弾が雨あられと降り注ぐ。単純な魔力弾だけではなく、炎と雷の属性が付与されたものもある。
複数の魔法を同時に使う所にあふれる才能を感じる。
しかし、その弾幕は相手の槍によって、すべて打ち払われていた。
槍をふるうのは雪菜だ。魔力を無効化させる特殊な術式が編み込まれた愛槍『雪霞狼』は、的確に攻撃を無力化していた。
「コロナちゃん！　準備はどうですか!?」
「もう少しです！　もう少しで……っ！」
「春日部さん！　モタモタしてるとコロナの魔法が完成しますッ！」

「それはそれで見てみたいかも」
Ａチーム『リオ・ウェズリー』と『春日部　耀』Ｂチーム『コロナ・ティミル』と『姫柊　雪菜』だ。
コロナの魔法の性質上、多少の準備が必要になる。完成すれば強力な戦力になるが、それを知っている相手チームが黙ってみているわけはない。
そのために雪菜が護衛としてついていたのだ。
「創主コロナと魔導器ブランセルの名のもとに！」
端末（クリスタル）を核に魔力を込めて練った物質を、望む形に自由に組み上げる。それがコロナのゴーレム創成（クリエイト）だ。
「叩いて砕け『ゴライアス』ッ!!」
その掛け声とともに、１５メートルサイズの巨人が現れた。
道路、周囲の建物に仕込んだ端末（クリスタル）が反応し、体を練り上げる。ゴーレムの体はコンクリートの塊だ。人が殴られればどうなるかなど、簡単にわかる。
だが術式が完成しても、耀もリオも全く臆さない。むしろ笑みすら浮かべている。
「行くよコロナッ！　双龍円舞ッ!!」
リオの背後に炎と雷の竜が現れる。
「正々堂々、闇討ちする」
「普通に正々堂々行きましょう！」
コロナはゴーレム『ゴライアス』の肩に乗る。
「それじゃあ行きましょう、コロナちゃんッ！」
「はい！　攻撃には巻き込まれないようにしてくださいね！」

「最近、わたくしの影が薄くなっているような気がしますの」

「そうですか？」
「そうですわ」
Ａチーム『間桐　桜』と向かい合うのは、Ｂチーム『時崎　狂三』だ。
狂三は闇色の光を編んだような特別なドレス、霊装に身を包んで腕を組んでいた。
桜も管理局の制服ではない。彼女の魔力を編んで作った、バリアジャケットとも違う特別な衣服だ。
知っている人なら、弓道着とＢＢの服を足して２で割ったような服と言えば通じるかもしれない。もしくはＦＧＯの礼装『イマジナリ・アラウンド』で着ている服装か。
基本は弓道着だが、肩から先は黒を基調として赤いラインが走っている。肩から肘まではダボっとしているが、肘から体にフィットするように作られており、そのまま人差し指と中指を覆っていた。その黒いパーツは大きな襟になっていた。
「てっきり狂三さんは色々と裏でこそこそと、いちゃいちゃとしているのかと思ってました。猫カフェにだって行ってたじゃないですか」
「行くには行きましたが……猫に夢中になってしまって……」
「ああー……」
こっそり、狂三が猫と戯れている時の画像と動画を共有された時の暴れっぷりを思い出して、桜は苦笑いする。
「……今回は本気で行きますわ――刻々帝（ザフキエル）ッ！」
狂三の背後に巨大な時計が出現する。長針と短針がそれぞれ銃として狂三の手に収まる。だが、今回はそれだけではない。
「ッ!?　これは……っ!?」
狂三を中心に黒い何かが広がり始める。それを踏む桜の体には未知のプレッシャーがかかる。
「なるほど……っ。この影はあなたの領域というわけですね……っ」
「その通りですわ」
『時喰みの城』。狂三が天使のほかに所有しているもう一つの能力。自らの影を広げて張り巡らせることで、その影を踏んでいる人間の時間を吸い上げることが出来る。刻々帝（ザフキエル）を使うときに『時間』を消費す

る狂三にとっては無くてはならない能力だ。
「安心して下さい、桜さん。寿命を吸い取って殺してしまおうなんて考えはありませんので。あくまで、わたくし達の戦いの補助、少し苦しい足枷程度のもとの思って下さいまし」
狂三は凄惨な表情を浮かべる。自らの狩場に誘い込み、ここからは一方的に攻撃するだけ。狂三は冗談なく、本当に相手チームを全滅させるつもりだ。
「でも」
そこで狂三も異変に気が付く。
「私を舐めないでくださいよ、狂三さん？」
いつの間にか、桜の体が『時喰みの城』の影響から解放されていた。それどころか『時喰みの城』が逆に侵食されている。
「影を使うというのは、何もあなただけの、狂三さんだけの専売特許じゃないんですよ？　私の得意分野でもあるんですから」
流石に完全に場の支配権を奪われるようなことは無いが、完全に拮抗している。
「（精霊であるわたくしの力と正面から戦えるなんて、少しプライドが傷ついてしまいますわ）規格外も良いところですわね」
「ふふ、忘れているかもしれないですけれど、私は六課の推薦でこの島に来ることになったんですよ？」
桜は何でもないように言うが、尋常ではない。類まれな才能を存分に伸ばすことが出来た桜は、六課実働部隊のエースとして抜擢されていたのだ。
「やっぱり、最大の障害はあなたの様ですわ」
「私も、狂三さんのことをそう思ってますよ？」
狂三は自分と相手に銃を構え、桜は影の刃を狂三に差し向けた。

戦場にいるほかのメンツに比べて、この2人が持つ獲物は普通だった。強力な異能を使うわけでも、巨大なゴーレムを召喚するわけでも、身の丈以上の武器を持っている訳でも無い。
その腰にあるのはそれぞれ1本の刀と細剣（レイピア）だけだ。
Aチーム『刀堂　綺凛』とBチーム『結城　アスナ』が相対していた。
2人はそろって鞘から武器を引き抜いた。武器の種類は違うが、同じ鈍色の輝きが光りを反射する。
「アスナさん、お手合わせお願いします」
「うん。よろしくね、綺凛ちゃん」
じりじりと間合いを測るその姿は、極めて普通の剣術だ。しかし次の瞬間に交わされる剣劇は、常人の目で追うことは出来ない超速のもの。
空気を切り裂き、空間に風穴を開ける両者の武器がつばぜり合いでようやく常人にも見えるようになる。
「つかぬ事お聞きしますが……っ」
「なにかな……っ」
「アスナさんも先輩とお付き合いしているんですかっ？」
「……アスナさん『も』？　ほ、他にも誰かに聞いたってことかなぁ？」
誰々『も』といういい方には2つの解釈の方法がある。この場にいない誰かを指している場合。もう1つは問いかけをした本人を含む場合だ。
一応とぼけた答えを返したが、アスナも察しが悪いわけじゃない。
「私、先輩とお付き合いすることになったんです！」
「そうだよねぇ！」
力を込めて一気に距離をとる。
（それはもう、綺凛ちゃんが翔君のこと好きだったのはわかってたけどね！　でも、いつの間に、だったのかなぁ？　最近はずっと一緒にいたし、週末だって訓練に付き合って……まさかその時？）

勝負には勝たないといけない、年上のプライドとか、綺凛よりも早く彼女になった立場とか、今回の試合での賭けとか。
それはそうと。
（終わったら翔君に詳しいことを聞かないとだね？）

「ヴィヴィオさん、それにクロさんも……」
「アインハルトさん！　お手合わせ、お願いします！」
「ごめんね？　２人きりにさせてあげられなくて」
アインハルトと相対しているのは、ヴィヴィオとクロだった。２人を前にしても、アインハルトの表情に変化は無い。
「問題ありません」
アインハルトは静かに構える。彼女にあるのは祖先から受け継いだ覇王流だけだ。対するクロは干将・莫邪を投影し、ヴィヴィオは掌に魔力球を出現させた。
（分かってるわね、ヴィヴィオ）
（もちろん！）
クロとヴィヴィオは目配せして頷き合う。
（格闘技じゃまだまだアインハルトさんに敵わないけど……魔法戦だったら負けない！）
（いくらアインハルトでも、何でもアリで私たち２人を捌ききれるかしらッ!!）
まず初めに動いたのはヴィヴィオだ。ほかの２人は動かない。
アインハルトは人数差を見て、相手の攻撃を捌く戦術をとることにしたのだ。しかしクロは違う。何かを待ち構えるような、作戦を立てている者の動きだ。

だからといって、アインハルトの動き方は変わらない。目の前の敵を1人1人屠るだけだ。
ヴィヴィオとアインハルトの距離はもうない。フェイントを交えた独特なステップは練習の成果だ。
アインハルトですら、瞬きの一瞬で見失ってしまうほどだ。
「一閃必中ッ！」
ヴィヴィオは上を取っていた。
保持していた魔力を開放する。その波動を感じたアインハルトは急いで回避を選択する。
「ディバインバスター!!!」
ヴィヴィオの魔力光と同じ虹色の魔力の奔流が、アインアルトに向かって放たれた。母親の使う魔法と同じ魔法。ヴィヴィオなりにアレンジしたこの魔法は、威力ではなくスピードに重きを置いていた。
（高速砲――!!）
バリアジャケットに掠め、わずかだがライフが削られる。
「（掠っただけでも上出来ッ!! ここからドンドン責める!!）クロちゃん！」
「任せて!!」
着地を狙って2本の刀剣が飛来する。それはもちろん白と黒2振りの夫婦剣。黒の持っていた干将・莫邪だ。
「この攻撃ッ!!」
何をされるのか、アインハルトは過去の記憶から素早く判断するが、しかし、頭でわかっていても防ぐ手立てがない。
刀に対する防御なら、ミカヤや綺凛と戦う中で十分学ぶことが出来た。しかしそれに続く攻撃に対応出来ない。
腕で受け止めた剣を構成する骨格が、一瞬で別のモノへと変わる。武器そのものに蓄えられた魔力を暴発させ、周囲に被害をもたらすもの――すなわち爆弾へと。
「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」
起爆した。
剣の破片が飛び散ることはない。宝具を構成する魔力を爆弾に変

化させるこの技法は、純粋に爆破による衝撃で相手にダメージを与えるのだ。
「ッ!!!」
以前公園でやられたことの再現だ。意識が飛ぶようなことは無いが、ライフをごっそりと持っていかれる。
すかさず、浮いた体に追撃が入る。
「はあああああッ!!」
ヴィヴィオの綺麗な上段蹴りだ。しかし、これもうまく防ぐ。
一連の連携が終わると、これだけでアインハルトのバリアジャケットがボロボロになってしまっていた。しかし、サポートに特化されたデバイスであるティオによって、そのダメージが0になるまで回復する。
「えー!? 何よそれ、反則じゃない!」
「まさかあそこまで回復するなんて思いませんでした……」
「でも作戦は十分に効いてるわ」
「だね! このまま押していこう!」
打ち合わせをしていたのか、2人の連携には迷いがない。クロが少し本気を出した結果だ。今回の試合、クロにとって賭けているモノが大きい。そのくらいの労力は厭わない。
そうとは知らないアインハルトは回復し、軽くなった体で再び構えをとる。しかし、その構えは以前のモノとは少し違っていた。
(なるほど。この作戦を作ったのはおそらくクロさん……素直なヴィヴィオさんの魔法をうまく生かしている。ですが、覇王流に生半可な射砲撃は通用しません)
「アインハルトさんが構えた? この距離から!?」
「ミドルレンジがあるかもしれないわ! 無暗に突撃しないで、様子を見つつ攻撃して!」
「はい! ソニックシューターッ!」
「……覇王流、『旋衝波』」
少女たちの戦いはまだ始まったばかりだ。

陸戦試合③

「行きます！　ソニックシューターッ！」
「……覇王流、『旋衝波』」
　ヴィヴィオの周りに虹色の光球が現れる。魔力で形作られた弾丸だ。それに対して構えるのはアインハルト。彼女の周りには目に見えるものは何もない。
　だが、
（アインハルトはハッタリで構えを取るような娘じゃないわ。必ず何か反撃が来るッ！）
　クロはアインハルトのことを甘くは見ていなかった。２人だからと言って、油断はしていない。目の前のアインハルトからは、静かな闘志がみなぎっている。
　２週間ほど前まで感じていた雑念が根こそぎ集中力に変換されたような、前に公園であしらった時とはまるで別人だ。
　幸い、組んでいるのは『目』の良いヴィヴィオだ。カウンターを得意とするヴィヴィオだが、特訓のおかげで、その強みはさらに引き延ばされているのをクロは知っていた。
　アインハルトがカウンターを構えていたとしても、ヴィヴィオなら最低限の被弾で留めることが出来る。
　しかし、クロの判断は誤りだった。
「な――――に……？」
　あろうことかアインハルトは、前方から迫るヴィヴィオ、その周りの逃げ道を塞ぐように追従していたヴィヴィオよりも少し速い魔力弾を掴み始めたのだ。
　正確に言うと、がっちり掌でキャッチしているわけではない。滑らせるように滑らかに、魔力弾の威力が炸裂しないように勢いを殺したのだ。
「ッ!!（ちょっ！　弾の形を全然崩さないで!?）」
　流石のヴィヴィオも、その光景は理解を超えていたらしい。
　はたから見れば魔力弾を掴んで受け止めている。当たり前だが、た

だ単に弾いて防ぐよりもはるかに難しい芸当だ。そんなことをわざわざ行ったということは、そこからさらに繋がる行動があるということだ。
その行動を、思考が空白になったヴィヴィオに差し込む。
自ら距離を詰めていたというのに、ヴィヴィオの思考は完全に空白になっていた。
そんなヴィヴィオに対して持っていた魔力弾を、
「覇王流、『旋衝波』ッ!!」
投げつけた。
全く威力が衰えていないそれは直撃し、炸裂する。
完璧に迎撃される形になったヴィヴィオはライフを大きく削られて墜落。あと何か一つダメージを負うと脱落してしまうほどまで追い込まれてしまった。
このまま追撃されれば一気に苦しくなると判断したクロは、魔力消費を承知の上でアインハルトの背後に転移する。その両手には干将・莫邪が握られている。
左右から襲い掛かる神速の斬撃は、まるでギロチンがはさみになって襲い掛かっているかのようだ
しかしそれを予測していたかのように、二刀を受け止める。流れは完全にアインハルトの手にあった。
「初めて見る技じゃない……ッ！　あんなことも出来たのね……ッ！」
「覇王流に生半可な射砲撃は通じませんから」
莫邪の刀身を使って反撃の拳を防ぐが、その衝撃で刀身にヒビが入る。
「ずいぶんと腕を上げたみたいね！　正直、この前までのあなたは見てられなかったけど！　今日は見違えるくらい調子がいいわね。何かあったのかしらッ？」
クロもアインハルトの気持ちについては気が付いていた。気が付く悩みというのはそのくらいで、そのうち自分が橋渡しになってどうにかしようと考えていたのだ。

いつの間にか解決していたので、翔がどうにかしたのだということも予想がついていたが、詳しくはまだ聞いていなかった。
（ま、あのアインハルトが自分から告白とかしないだろうし、適当に優しくされたとかそんな感じなんだろうけれど――）
「私も翔さんと、その……結ばれましたから」
「……は？　……なぁぁぁんですってえええっ!?」
言葉の意味を理解したクロは、絶叫しつつ切りかかる。
２人の拳が、刀剣が空中でぶつかり合う。
「結ばれたって、何をッ！　何処までッ！　かしらッ！」
「そ、そんな……クロさんにはまだ早いと思います……っ。もう少し大きくなってから……」
「全部理解したわよコンチクショーッ!!」
一体全体、自分の目も節穴だったものだ。クロは素晴らしい表情で刀を振り回す。まさかアインハルトがそんなにアグレッシブな女の子だったとは。余裕をかましている場合ではなかったのだ。
「とりあえず詳しい話を聞かせなさーい!!」
一方、墜落したヴィヴィオ。空中での会話は聞こえていない。大の字になって道路に亀裂を作っていたが、その顔は被弾の痛みよりも初めて見る技に対する歓喜に満ちていた。
（凄い――――凄い凄い凄い!!　アインハルトさん、あんな技も持ってたんだ！）
立ち上がって体に力を込める。寝ているなんて勿体ない。一刻も早くあの戦闘に混ざらなければ……
《はいはーい。やる気を出したところ悪いけれど、ヴィヴィオは一回後退ね》
「えーっ!?　そんなぁ……」
一番後方にいるルーテシアから通信が入る。しかしその指示はヴィヴィオが望むものではなかった。
駄々をこねるように腕を胸の前でぶんぶんと振りまわす。
《文句言わないの！　こんな序盤にアタッカーが撃墜されたら、作戦が総崩れするでしょ！　しっかり回復して終盤に出れるようにする

から！》
「うううう、はーい……」
　このまま攻撃し続けていても、アインハルトとのダメージレースに勝つことは難しい。幸い、他のポジションは拮抗している。アインハルトが突破してきても最強の守り人がいる。
《クロも！　攻撃を受けないように後ろに下がって！　しばらく狙撃に徹してもらうから！》
「ッチ！　しょうがないわね……！　アインハルト、覚えてなさい！」
「絶対！　今度は1対1ですからね！」
　そう言い残し、2人は逃げ去っていく。距離を放されれば、アインハルトの攻撃手段は極端に限られる。有効打を打つためには接近しなければいけないが、
《無理に追わなくてもいいわ、アインハルト》
　今度はアインハルトの方に、ティアナからの通信が入る。
「私も下がりますか？」
　2人に競り勝ったが、細かく積み重ねたダメージは少なくない。回復のために魔力も消費した。ここは自分も一度下がって回復するべきかとティアナに問う。
《……そうね、このまま攻めちゃっていいわ。夜月君を無理やり突破させるから。2人で――――なのはさんに突撃して》
「（なのはさん――――ヴィヴィオさんのお母様、管理局のエースオブエース……ッ！）はい、わかりました！」
　指示を受けたアインハルトは、2人が逃げたのとは別の方向に向かって大きく飛んだのだった。

アリアとヤミと向かい合う俺と理子。最初に動いたのはアリアだった。
「変態は消えなさいッ!!」
いったい誰に向けられた言葉なのか。少なくとも銃弾は俺に向かってきている。
物騒なセリフと共に、アリアの持つ銃が弾丸を吐き出した。しかしそこには良く知るマズルフラッシュも硝煙の匂いも無い。派手にぶっ飛んだ、拳銃からは想像もできない轟音だ。
吐き出された弾丸も、いつもの鉛球ではない。ランチェスター大聖堂の銀十字を錫溶かして作った法儀式済１３ｍｍ爆裂徹鋼弾。そして、純銀製マケドニウム加工弾殻の法儀式済み水銀弾頭だ。人外の怪物すら跡形もなく消し飛ばす銀の雨となって襲い掛かってくる。

二丁拳銃（４５４カスールカスタムオートマチック＆対化物戦闘用１３ｍｍ拳銃『ジャッカル』）
『ＨＥＬＬＳＩＮＧ』の主人公『アーカード』が使用する二丁拳銃。吸血鬼であるアーカードの使用を前提にしているため、常人には到底扱えない代物。一応装弾数は決まっているが、気が向いた時にリロードすればたとえ百万発撃っても弾切れしないコスモガン。

コイツを引き当てた時、アリアに渡すかどうか本当に悩んだ。二丁拳銃と言えばアリアだ。理子も二丁使えるが、どちらかと言えば爆弾魔のイメージが強い。アリア以上にこの武器を使いこなせる人はいない。
そう考えたのは良いが、武器の規格が吸血鬼用のこの二丁拳銃は、人に扱えるかはなはだ疑問だった。一発撃っただけで肩がブチ壊れる代物だったのだ。
だがアリアのパワーは、あの暴れ馬を簡単に手懐けてしまった。説明文には『常人には到底扱えない代物』って書いてあったんだけど、ア

リアは常人じゃないから全然問題なかったらしい。
そんな銃弾が、俺に向かって雨あられと降り注いできた。
防御は難しい。ならば避けるまで。
「牙(タスク)ッ！」
いかに攻撃力が優れていても、回転の穴の中にまで入り込むことは出来ない。
「ッチ！　こざかしい能力ね！」
だが、回転の穴はそこまですばやく移動出来るわけではない。ずっと籠っていたいが、そうもいかない。タイミングが合えば、出てきたところを狙い撃ちで墜とされかねない。
そして、アリアならそれが出来る。
「くふっ」
もちろん、そこに邪魔が入らなければの話だ。
理子の新しい力、『キラークイーン』。この場では俺にしか見えない猫にも似た理子の化身は、その指先からこの場には不釣り合いなものをアリアへと向けて飛ばした。
ふわり。ふわり。風に乗ったソレ――――しゃぼん玉――――は俺のことを待っていたアリアへと吸い込まれるように――――
「ナメんじゃないわよ、理子」
全く理子の方向を見ずに、アリアは撃ち落とした。発射された弾丸は、シャボン玉の薄い膜に突き刺さった瞬間、空中で弾けて銀の花火になる。
「お前こそナメんなよ、オルメス」
理子のスカートからは2つの小型ロケット弾が顔を覗かせていた。
だが、アリアの態度は変わらない。同じように撃ち落としにかかるが、ロケット弾を撃ち落としつつ俺にずっと集中力を保っているのは無理だ。
その隙に穴から飛び出し、素早く建物の後ろへと避難する。
見ると、理子がヤミの攻撃を受けていた。あの神速の斬撃をスタンドを使って受け流しているが、旗色は悪いようだ。今そこに、俺を取り逃がしたアリアも加わろうとしている。

「ッチ！　ごめんねぇ、ヤミちゃん。こんなに早くに落とされるわけにいかないからさ……っ」
「逃がしませんよ」
　スタンドの特性を生かしつつ責める理子だが、イマイチ責めきれない。
「見えないだけでそこにいる。今のように狙われる場所を絞ってしまえば、避けることもできます」
「スタンドも過信は禁物って訳ね……」
　ヤミも決して深追いしようとはしない。あくまでじっくりと責めることを選択しているようだ。
　アリアも合流し、挟まれる形になる。
「今は2対2なんだから、片方だけに集中してちゃいけないでしょ？」
　そのセリフはそっくりそのまま、アリアに返してやることにしよう。
　俺も、先日の行為で新たな力を手に入れている。

　魔物の子の本（金色のガッシュ、ガッシュ・ベル）
『金色のガッシュ』に登場する魔物とそのパートナーが持つ、呪文が書かれた本。この本はガッシュ・ベルと高嶺清磨のペアが持っていた本。この本を手に持って呪文を唱えることで、呪文を発動させることが出来る。現在解放されているのは第3の呪文まで。きっかけを経ることで、より上位の呪文を開放できる。
　魔力とは違う『心の力』をエネルギーとしているが、発動した呪文はこの世界では魔法に属する能力になる。

　絶倫
　枯れることの無い最強の男根。どんなにしても一生枯れることはない。

手に入れた能力、下のヤツは……まあ、今は役に立たないものとして、この魔物の子の本は別だ。
シンプルな外装の大きな赤い本。中に書かれているのはどんな天才でも解読出来ない未知の言語だ。いや、そもそもページのほとんどには文字が書かれてすらいない。
こんなに分厚いのに、書いてあるのはわずか数ページだ。
書かれているのは呪文。その数は3つ。
狙いを定めて、右掌を向け、叫んだ。
「第一の呪文、ザケルッ!!」
右手から、電撃が放射された。
本来はガッシュの口から発射されるはずだが、ここでは俺の魔法として扱うことが出来る。ガッシュのように意識を失うこともない。イメージとしてはゼオンが使う形に近い。
威力自体はそこまでではない。だが電撃は銃弾で弾くことは出来ない。絶縁体でもなければ、どうしても体にダメージが残ってしまう。
「ッ!!」
理子すら巻き込みかねない攻撃にアリアと理子は驚いて距離を取る。理子からのみ見える位置から撃っていたため、理子に当たることはない。
仕切り直しが行われ、戦闘が始まる時とほとんど同じ構図でにらみ合う。
そんな激戦の真っただ中、俺に通信が入った。
《夜月君、聞こえる?》
声の主はティアナだ。
「はいッ！　何ですかッ！」
《今からティナに援護させるわ。何とかその2人を突破してアインハルトと合流して！》
「なのはさんのところに行けばッ？」
《その通りよ！》
「何とかします！」

相手チームの要は間違いなくなのはさんだ。
特訓で実力をつけたアインハルトと、サーヴァントとも戦えるようになった俺。いくらエースオブエースでも2人がかりでかかれば、何とか倒せるはずだ！
「逃がすと思うのかしらッ！」
俺の立ち回りが変わったことを目ざとく察したアリアの攻撃が激しくなる。攻めっ気しかない強襲だが、アリアのポテンシャルとアーカードの拳銃から放たれる弾丸は、ピンクの悪魔の突進を捌く余裕を与えてくれない。
「ならばッ！　牙（タスク）ッ！」
牙（タスク）ＡＣＴ３の回転の中に逃げ込み、そのままビルの壁面を移動する。
「逃がす、かァァァァァッ！」
凄まじい勢いで連射された弾丸は、回転が着弾し、今俺が移動しているビルの壁面に命中する。
建物の建材を塵も残さず消し去り、回転エネルギーの進むべき先のビルが消滅してしまう。
「うっそだろ?!」
回転の穴から放り出される。
いくらなんでも、こんな大火力が出せるのか!?　この短期間でここまで使いこなせるのかよ！
攻撃のために動きを止めたアリアには理子が組み付き、スタンド攻撃をしている。だが、逃げに徹したアリアを捕まえるのは容易では無い。
その才能に感心するが、それよりもこちらだ。
ピンクの悪魔を退けたかと思えば、今度は金髪の暗殺者だ。
すでに足元には魔法の道は存在しない。だが、自在に空を飛ぶ術を持つヤミは、右手を刃物に変身（トランス）させて、すでに間合いに入っていた。
「固有時制御（タイムアルターダブルアクセル）２倍速ッ！」
衣服が切り裂かれる感触がする。
２倍速に加速して微妙に間合いから脱出することで、一番の斬撃を回避する。

だが俺とヤミの距離はまだまだ近い。一歩踏み出せば拳が届く距離だ。
ヤミは背中から生やした白い翼で飛んでいるため、『一歩踏み出す』という表現は正しくはないだろう。そもそも、ヤミは全力で両手を武器として振り回していたとしても、変身(トランス)は腕自体を増やすことが出来る。
ちらりと確認するとフリーになっていた金髪が収束し、巨大な鉄球になる。
あんなものを叩きつけられては、行動不能になるまでライフを削られてしまう。それにしても、いくらケガをしない不思議空間にいると言っても、その鉄球殺意が高すぎるような気がするんだけど……？
ヤミの目も据わっているし。
ヤミに向き直る暇はない。ここは物理攻撃に耐性がある黒影(ダークシャドウ)を

「私に背中を見せるとは――――ッ!!」
ヤミの翼が狙撃で撃ち抜かれる。貫通した狙撃弾は、近くのビルの壁に着弾する。翔の背中を狙った結果、逆に背中を撃たれる結果になってしまった。
なったのだが、弾痕を見た俺はぞっとする。人の頭に当たったら首から上が綺麗になくなるくらいの威力だ。防弾性の素材を貫通する目的で作られた貫通弾(アーマーピアス)か。
狙撃手、おそらくティナだとは思うが、味方が近くにいるところに撃ち込むには少々過剰な威力だ。
何でそんなに気合が入ってるんだよ！
「やられました……ッ！」
撃墜はされなかったものの、大きなダメージになる。俺も追いかけてももう追いつけない距離まで逃げることが出来た。
しかし、
「ティナね。場所はわかったわ」
天才アリアは、1発の狙撃だけで相手の大まかな位置を割り出していた。厄介なスナイパーは早めに排除しておきたい存在だが、

「でも、２人ともここから動けないよねぇ？」
２人の前には理子が立ちはだかる。
「理子！　ここは任せた！」
「くふっ、オッケー、翔君」
「即効で潰してやるわ」
「やってみろよ、オルメス」
俺は抜けたが、戦闘は続行される事になった。

《なのはさん、全体的に押されてます！》
「うん、ちょっとこの辺で反撃しておかないとね」
なのはとルーテシアが通信で作戦会議していた。
《なのはさんに負担が集中しちゃうんですけれど……》
「全然！　気にしないで。むしろそのほうがありがたいから」
ヴィヴィオの友達であり、古武術である覇王流を使うアインハルトの実力は知っておきたいと思っていたところだ。
さらに、翔のことは言わずもがなだ。部隊長であり、この試合には参加せずに観戦しているはやてには、翔の実力は出来るだけ引き出してほしいと言われている。
向こうから向かってきてくれるなら、これ以上都合の良いことは無い。
《お願いします。２人にキツーイ一発を食らわせてやってください！》
「うん、任せて！　……Ａチーム各位！　まもなくアインハルトちゃん、夜月君とエンゲージ！　支援砲撃が止まります！」
《了解！》

なのはは、迫ってくる2人の若者に対して、自らのデバイス――
レイジングハートを構えるのだった。

陸戦試合④

「術式兵装（アルマティオーネ）、疾風迅雷（アギリタース・フルミニス）ッ!!」
「ヴィヴィオさんのお母様、２人がかりで卑怯かもしれませんが、一槍お願いします！」
「うん！　私で良ければ喜んで！」
　出し惜しみはしない。
　俺はランスロットとも渡り合った術式兵装を纏い、アインハルトはやる気満々だ。しかし、空を飛ぶなのはさんの態度には全く焦りがない。
「アクセルシューター、弾幕集中！」
　桜色の光球が不規則な挙動と変則的なスピードで迫ってくる。
　弾幕の隙間を縫って接近しようにも、今の俺のスピードをもってしても撃ち落とされるだろう。そのくらいの技量はある。
「アインハルト、こっちだ！」
「はいッ！」
　アインハルトを引きよせ、呪文を唱える。
　手に持つ赤い本が光りを放つ。
「ラシルドッ！」
　地面から大きな盾が出現する。２人で隠れても十分に余裕がある、電気でできた盾だ。盾に当たったアクセルシューターは、当たった時と全く同じ軌道で跳ね返っていく。
「よっと」
　それを見たなのはさんは、盾を破壊するのではなく避けるように操作し始める。そのタイミングで俺とアインハルトは盾から飛び出した。
　盾を避けるために大きな軌道を描いていた誘導弾を置き去りにして、なのはさんに迫る。このやり方だと通り過ぎて行った弾丸で挟み撃ちされる恐れがある。
　案の定、旋回した弾丸が再び俺たちを追尾し始めるが、
「ラシルドッ!!　行け、アインハルトッ!!」

「はいッ！」
後ろに電撃の盾を生成し、後ろからの攻撃を防ぐ。
なのはさんは最初の弾丸の操作を放棄したのか、後ろからの攻撃は明後日の方向に飛んでいく。代わりに精製した弾丸は、十分に射程内になったアインハルト1人に向けられていた。
だが、アインハルトも負けてはいない。迫る誘導弾を両手を使っていなし、掴んで、お互いにぶつけることで速度を落とさずに突き進む。
「だったら、これはどう？」
なのはさんが持っているのはトリガーを引く拳銃ではない。魔法の杖だ。魔法を同時に1つしか使えない、なんてことはない。
誘導弾ではダメージを与えることは出来なかった。だったら他の弾丸を装填するまでだ。銃口のような杖先に魔力が集まる。
「砲撃だぞ……！」
なのはさんの代名詞ともいえる魔力砲だ。それが見えているにもかかわらず、アインハルトは突貫する。
タイミングはギリギリ、あと3秒あれば撃たれる前に拳が届く――――ッ!!
「フォトンスマッシャー……ファイアッ!!」
俺の手は間に合わない。アインハルトに迫る砲撃。それに対して、
「ハァッ!!」
すさまじい轟音と共に砲撃が掻き消された。アインハルト渾身の右ストレートが砲撃を跳ね返したのだ。
「あらら、パンチで相殺……？」
なのはさんの呟く声は、たった今攻撃を防がれたとは思えないほど冷静な、あるいはとぼけたようなものだった。
風を切り裂く剛拳がなのはさんに迫る。
「ハァッ！」
「……っ」
レイジングハートの柄で拳を受け止めるなのはさん。その衝撃で柄がしなり、衝撃を受け止める。予想外の威力だったのか、なのはさんの顔が初めて引き締まる。

「ハッ、ハァッ！　ヤァッ!!」
だが流石のなのはさん。アインハルトの猛撃を難なく交わしている。中距離主体の人と言ってもそれしかできないわけではないのだ。
今度は杖を槍のように扱い防御の姿勢を取っている。
俺もボーっとしているわけにはいかない。この距離からだろうと、援護の手段はある。
「魔法の射手（サギタ・マギカ）ッ！」
なのはさんに飛来する7本の光の矢。俺の魔力ではけん制程度の威力にしかならないが、魔法と同時にネギの技術も付与されたのか、そのコントロールは正確だ。
「よっ、と」
なのはさんが相殺しようとアクセルシューターを飛ばしてくるが、そう来るのは読んでいた。
「連鎖撃（キャノン）ちだ」
アクセルシューターと魔法の射手（サギタ・マギカ）は正面衝突してお互いに消滅する、のではなく、お互いに軌道を変えて逸れた。
俺の弾丸だけが生き残り、なのはさんを襲う。
「ッ!?」
初めてなのはさんにダメージが入った。微々たるものだろうが、バリアジャケットに埃をつけることに成功した。
そこを好機とアインハルトの攻撃が激しさを増す。だがなのはさんの防御に隙は無い。被弾のダメージも感じないスピードだ。
「ッ！」
なのはさんと一瞬目が合った。次の瞬間、今までの倍の数のアクセルシューターが現れた。そのすべてが俺に向かって襲い掛かってきた。
すさまじいマルチタスクだ。すべての魔法のキレが、これまでとは別次元。今度は魔法の射手（サギタ・マギカ）とキンジの銃技を組み合わせても防ぎきれない。俺の射撃スピードがそもそも足りてないのだ。ラシルドもすり抜けて俺を狙ってくるだろう。
仕方なく距離を取るが、相手は誘導弾。どこまでも追いかけてく

る。
「翔さん！」
「よそ見なんて余裕だね」
「ッ!?」
アインハルトの拳はプロテクションシールドに受け止められていた――――だけではなく、その薄いピンクの壁から生成された、同色の鎖に絡めとられていた。
アインハルトの右腕が完全に空中に固定されている。
そして、そんな隙をみすみす見逃してくれるほど、相手は甘くない。
「ディバイン――――」
魔力が練り上げられていく。次の瞬間には彼女の代名詞にもなっている砲撃がアインハルトを飲み込むことだろう。
防御しようと焦っているアインハルトだったが、そこから急いで逃げたとしても、なのはさんの銃口はそんなに甘くないだろう。吸い寄せられるように命中するのは目に見えている。
誘導弾で距離を離されていた俺では、あの攻撃を直接カットすることは出来ない。即座に出せる火力では、なのはさんの硬い防御を突破することは出来ないだろう。
何たる失態。せっかく2人で攻めていたというのに、いつの間にか引き離され1対1の状況に持ち込まれていた。
たかが誘導弾であしらわれていたのは俺だ。捕まっているアインハルトを見捨てることは出来ない。
「雷（ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）の暴風ッ！」
身体に纏っていた雷（ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）の暴風を開放する。なのはさんに一直線に迫る雷。その雷を取り巻くように暴風が渦巻いている。
威力だけ見れば、なのはさんの砲撃にも引けを取らないはずだ。これならなのはさんも無視できない攻撃のはず。
疾風迅雷（アギリタース・フルミニス）を解除したことで、基礎スペックがガクッと落ちた。誘導弾が命中するが、俺の視線は今の捨て身の攻撃の結果だけに注がれていた。
「おっとっと」

「っちぃ！」
距離がありすぎた。
派手な攻撃は一瞬でなのはさんに発見され、華麗な宙返りで回避される。
魔力の収束を抑えられたのかと言われればそうではなく、アインハルトの逃げる時間を稼ぐことが出来た訳でもない。
砲口が向けられたアインハルトだったが、拘束された当初のように暴れなくなっていた。
発射までもう時間がない。
「――バスターッ!!」
アインハルトに迫る砲撃。威力は必殺。防御は出来ない。受け身の行動でどうにか出来る技ではない。
それは彼女も理解している。
体の回転で腕を拘束していた魔法の鎖を残らず粉々にする。それだけにとどまらず、自由になった右手はそのまま砲撃を迎え撃つ。
「――ッ!?」
なのはさんも驚愕に目を見開く。
アインハルトの放った右掌打は、なのはさんの砲撃を完全に相殺、どころかその威力を上回っていた。
バリアジャケットが破れ、空中で姿勢を崩す。なのはさんにとっても予想外の反撃だったらしい。
なにより、拳を放ったはずのアインハルトもこの結果に驚いたのか、掌底を振りぬいた格好で静止してしまっている。
再びなのはさんのデバイスに光が灯った。
思考の空白が短かったのは、やはり歴戦のエースオブエースだ。
「ストライクスターズ――！」
撃たれるより前に、再び疾風迅雷（アギリタース・フルミニス）を纏った俺が２人の間に割り込む。
このままアインハルトを抱えて逃げることは出来るが、撃ち落とされるのは目に見えている。だったら、
「頼むぞ、幻想殺し（イマジンブレイカー）……ッ!!」

まさかお前も、初陣がなのはさんの砲撃とは思わなかっただろう。俺もだ。だけど、幻想殺しの名前に恥じない、派手な場面だろう。幻想殺しをオンにすると、纏っていた疾風迅雷が砲撃よりも先に打ち消された。

完全に生身。すでに砲撃は発射され、視界は光に染まっている。

「いっけえええええ――――！」

右手に激突する。すさまじい圧力と共に、右手首がへし折れそうなほどの痛みが襲い掛かってくる。

右手が弾かれてしまわないように、左手で支える。

触っただけでは打ち消しきれない。そのくらい強力な攻撃なんだ。永遠にも近い一瞬。終わりはすぐに訪れた。

その感覚は分かった。アニメで聞いたような効果音はなかったが、俺の脳内にパキンッ、という何かを壊した感覚があった。一気に痛みと圧力がなくなり、砲撃が跡形も無くなる。

アインハルトが跳ね返した時とは違い、辺りに衝撃すら起こらない。まるで何もなかったかのように、この世界から完全に消えてしまった。

流石のなのはさんの顔にも、動揺が見て取れる。

「（なに、今の？　砲撃を相殺、じゃなくて、打ち消された？　術式そのものを壊されたみたい。今までこんなことなかった。いったいどんな能力を……）」

「ありがとうございます、翔さん」

「間に合ってよかったよ。下手したら撃墜されてたぞ」

２人がかりで互角とはね。今の一瞬の攻防のなのはさんは間違いなく本気モードだったな。訓練で、相手のことを分析しながら成長させる戦いから、相手のことを撃ち落とす戦いになっていた。

今はその中間だ。砲撃を準備しつつも、下手に前に出てこない。まるで天から降りてきた天使のように、スカートをはためかせ、空に浮かんでいる……何であれで中が見えないんだ？

「今の砲撃、私だけだったら間違いなく飲み込まれていました。あれが本物の砲撃……」

「俺の右手も結構マズいかもな」
何とか打ち消すことが出来たが、2回目をやれと言われたら自信がない。
幻想殺しでも消しきれない。こんなものを連発していれば、そりゃ魔王って呼ばれるわな。
そしてその魔王はまだまだ元気だ。少し警戒させることは出来てるけど、ダメージは全然――
「痛いっ!?」
「はい!?」
なのはさんの頭部に弾丸が命中する。急所には自動で発動するプロテクションがあったらしく、ダメージはほとんどないみたいだけど、撃ったのはいったい誰だ!?
《お兄さん、アインハルトさん》
通信機から聞こえてくる声は、
「ティナか!?」
今のはティナの狙撃だったのか！
《はい。ティアナさんからの連絡で、作戦の準備が整ったそうです。援護するので一度撤退を。召喚魔法で後方に飛ばします》
「了解だ！」
「翔さん！」
足元に魔方陣が現れる。この色は俺たちのチームのフルバック、キャロのものだ。次の瞬間、俺たちの目の前にそのキャロが立っていた。いや、俺たちがキャロのいるところまで移動したのだ。
「お疲れ2人とも。すぐに治すから、戦線復帰よろしくね」
「は、はい！」
俺はもちろんだが、アインハルトも初めてだったらしい、コクコクと頷いている。
「今のが召喚魔法か。便利なもんだな」
削られたライフが回復していくのを見ながら呟く。戦場から帰還できたため、一気に緊張が解かれる。でも、これで少し休憩が出来るな。

そう思ったのもつかの間、アインハルトに肩をゆすられる。
「しょ、翔さん……」
「ん？　何だ？」
「アレを見てください！」
「アレ？　アレって……は？」
指で示された方向を見ると、岩を寄せ集めたような巨大なゴーレム、そしてそれに対抗するように真っ黒いナニカ。その２体が殴り合っていた。
何あれ。

「よし、翔君たちがなのはさんを引きつけてくれたおかげで準備は万端。これがＢチーム勝利の篝火ッ！」
ティアナの周りにはオレンジ色の光球がいくつも浮かんでいた。なのはとの違いは、アクセルシューターよりも充填された魔力だ。
なのはの援護が途切れている時間に、ティアナはこの攻撃を準備していた。誰にも邪魔されず、時間をかけて、入念に仕込みをすることが出来たのだ。
「クロスファイヤ・フルバーストッ!!」
全ての戦場へ向けて弾丸が降り注いだ。狙いも正確に、正確にＡチームのメンバーだけを打ち抜いていく。
拮抗していた戦いが一気に傾いていく。ダメージを受けたところにさらに追撃を受け、ダメージを重ねる者。隙を突かれて戦線を突破されてしまう者。
その中でも一直線に敵陣に向かっていくのはノーヴェだ。スバルとの戦いをすっぱりと放棄し、一直線にルーテシアが構える陣地へ切り込もうとする。

「ノーヴェ！　私との１ｏｎ１放り出してどこ行くのさー！」
「後衛攻めに決まってんだろうが！　今なら治療中のヴィヴィオとクロをまとめてブン殴れるんだからな！　追いつけるもんなら追いついてみやがれーッ！」
「ちょっとー！」
　悲しいことにスピードは圧倒的にノーヴェの方が上だ。見る見るうちに離されていく距離。スバルはすぐさまルーテシアに通信を入れる。
「ごめーん！　ノーヴェに突破されちゃった！」
《ありゃ、そうなの？　うーん、どうしようかなー》
《ルールー！　私たちいけるよ！》
《十分回復してるわ》
　ヴィヴィオとクロは気合たっぷりだ。２人ともそれぞれ違った理由で、アインハルトとの再決戦を望んでいる。
《そうだね。アインハルトも夜月君も治療中だし、ここを逃すともう逆転は出来ないかな。よし、やっちゃおうか！》
　ルーテシアは通信回線を全員に繋ぎ直す。
《Ａチームの皆さん！　予定とは少し違ってしまいましたが、作戦を開始します！》
《わかりました。では――――行きます！》
　その声に一番に反応したのは桜だった。
　数瞬後には、戦場の真ん中に巨大な影の巨人が出現していた。
《Ａチームはまだまだここからだよ、夜月君》
　Ａチームの逆転の一手が切られた。

陸戦試合⑤

時間は戦闘が開始されてすぐまで巻き戻る。
巨大な岩石の塊とは思えない俊敏な動きで、ゴーレムが拳を振り回す。痛みを感じないゴーレムは、迫っていた炎の竜を容易く貫通し、アスファルトに亀裂を入れた。
そこに立っていたはずのリオは、空へ舞っていた。今度は後ろに控えている、雷で形作られた竜をけしかけた。
「姫柊さん、お願いします！」
「はいっ！」
雪菜が手に持った雪霞狼を一振りすると、神格振動波駆動術式が槍先へ浮かび上がり、竜の体を散らす。
「ゴライアスッ！」
攻撃手段を使い切り空中で動く手段を持たないリオに向かって、ゴライアスの関節が唸りを上げた。腰に当たる部分が無理矢理に回転し、直径5メートルもある腕がリオに叩きつけられた。少女の体は砲弾のようにビルに叩きつけられる。
この戦場でなければ、人の原形を留めるのが難しい威力。この戦場でもライフがゼロになってもおかしくはない攻撃だ。
勢いを殺しきれずに回転をしていたゴライアス。その上に乗っていたゴーレムの創造主であるコロナと雪菜は、そろって目をまわしていた。
「うぅ……この攻撃は乗っているときにはやらないほうが良いのでは……？」
「た、確かにそうですね……っ」
ゴライアスの肩の上で口を押える2人。何とか戻ってきた平衡感覚を頼りに、今の攻撃の結果を見る。
土煙が晴れたそこには、リオが二本の足でしっかりと立っていた。BJは多少破れているが、まだまだ戦闘を続ける意思がある。ライフも、半分も減っていない。
「あれを受けて倒れないんですね」

「リオ、防御もうまいんです」
炎と雷、2種類の魔力変換資質に加えて、格闘技の才能。総合的な才能を見れば、なのはやフェイトにも匹敵するかもしれない。
多彩な魔法に格闘技。大会に出るための特訓でさらに磨きがかかっている。容易に倒せるような相手ではない。
「ッ!!」
霊視によって未来を見た雪菜は、無理矢理体を後ろに反らした。次の瞬間、強烈な踵落としが雪菜の立っていた場所に叩きつけられた。生命の目録(ゲノム・ツリー)によって鷲獅子(グリフォン)の力を使い、空を飛んでいた耀だ。2人がリオに注目して、思考から耀が消えた瞬間に仕掛けた、重量のある動物の力を借りた渾身の攻撃だ。
コンクリートを固めて作られたはずのゴライアスの肩が大きく抉れる。
「おしい」
「よ、うっぷ、耀さん……っ」
風に乗る耀に対して槍を構える。だが間合いの取り方が甘い。槍のリーチなら十分に届く範囲だ。
攻撃されっぱなしでは勝つことが出来ない。一番機動力のある耀がせっかく手の届く範囲に来てくれたのだ。
「やぁっ!」
繰り出される神速の槍。しかし、
「あ、当たらない……っ!?」
「甘い甘い」
スケアリー・モンスターズの反応速度を使う耀は、簡単にあしらう。だが、いつもの雪菜の槍捌きなら十分にとらえることが出来ていた。いくら反応できていても、この距離では体が動かないからだ。
目を回しているこの状況。しかも、
「ふふふ、焦ってるね雪菜。賭けがそんなに気になってる?」
「ッ! そ、そんなわけないじゃないですかーっ!」
「ひ、姫柊さん!」
耀の一言で、雪菜の槍捌きが余計に乱れる。顔はもちろん真っ赤

だ。もはやスケアリー・モンスターズの動体視力を使わなくても十分に避けられる。
反対側の肩にいるコロナもあわあわと、どうしようかとうろたえている。賭けの内容を知らないことも大きいだろう。どうしてここまで雪菜が乱れているのか、まるでわかっていない。
耀にも攻撃の意思がないのが幸いだ。それよりも雪菜を煽ることに集中している。
「わかるわかる。わかるよ。最近は主張の激しい女の子が増えてるもんね。こんなことが無かったら、翔をデートに誘うなんて出来ないもんね？」
「絶対面白がってますよね！　自分は勝っても負けてもいいからってそうやって！」
「え？　そんなことないよ？」
「……はい？」
その一言で雪菜の槍がぴたりと止まる。
「私が一人勝ちすれば、みんなが殺気立って翔が苦労する。私はそれが見たいから」
「最悪の理由……っ」
場に混乱をもたらしたい。実に問題児らしい理由だ。
そうやって問題児に振り回されていると、今度はリオのことを忘れてしまっていた。
隙を伺っていたリオが動き出した。
「（あんなに早いゴーレム操作は並じゃない。きっとたくさん練習したんだろうな……）雷神装ッ！」
リオが全身に雷を纏う。速度を重視した身体能力強化だ。
「轟雷砲ッ！」
強烈な蹴りがゴライアスの右足を打ち抜く。コロナは耀と交戦する雪菜に気を取られて操作が疎かになっていた。
「わわっ！」
一度体勢を崩されてしまえば、転ばないようにするのが精いっぱいで攻撃に移ることが出来ない。

転ばないように地面についた腕を掴み、
「よい……ッ!!」
腰を入れて、
「しょおーーーッッ!!」
投げ飛ばした。
「「ええーーーーッ!?」」
お返しと言わんばかりにビルに叩きつける。だが叩きつけられたのは小柄な少女ではなく、巨大なゴライアスだ。ゴライアスの重さで建物が押しつぶされる。
リオはVサインを突き付ける。
「でも、特訓したのはコロナだけじゃないんだからね！」
あまりにも豪快な攻撃に、開いた口が塞がらない2人。
「ふむふむ。あの子、スゴイ力持ちなんだね」
「耀さん、味方だからってなんて呑気な……」
「耀さん！　ゴライアスが起きてこないうちに一気に畳みかけましょう！」
「まずい……っ、ゴライアス、起きてっ！」
4人の戦局が傾きかける。特にコロナはゴーレムを主軸にしている。リオに近づかれればひとたまりもない。
迫りくるリオと耀相手に、槍を構える雪菜。そんな戦場に2人の少女が乱入してきた。黒い影を従える桜色の少女と、時間を支配する時の女王だ。

またもや時間が巻き戻り、試合が始まってすぐ。狂三と桜の戦場だ。

「わたくし達ッ！」
「きひひっ」
「遊んで差し上げますわ」
「ですが、手加減は致しませんわよ？」
「楽しませてくださいね？」
　影から出てきた分身の狂三。刻々帝（ザフキエル）の弾丸の１つ、八（ヘット）の弾の能力だ。ごくごくわずかな時間しか分け与えられていない、天使を使う事すら出来ない、この戦いのこの一瞬しか存在しない分身だ。
　しかしそれが３０人以上同時に襲ってくれば、常人はひとたまりもない。
　しかもフィールドは狂三の時喰みの城。黒く塗りつぶされた地面から無尽蔵に分身が湧いてくる。
　対する桜も負けてはいない。足元から延びる平坦な、桜色の鞭。時喰みの城の影響下にあっても桜の動きが鈍らないのは、足元に広がるまた別種の影のおかげだ。
　桜の魔術属性は『架空元素・虚数』。間桐の教育で崩れていた魔術回路の調子は完全に回復し、さらに１０年間しっかりと戦うための魔術の鍛錬をした桜は、狂三の猛攻を全く寄せ付けない。
　鞭のように見えても鉄筋コンクリートを切り裂ける程度の切れ味はある。さらに多少の攻撃なら無効化できる天使の霊装が削られている。
「まったく、その魔術。敵に回すとこれほど恐ろしいものとは思いませんでしたわ。わたくしが相手になって正解でしたわね」
「そうですね。わたしも、今回厄介なのは、翔君よりも絶対に狂三ちゃんだって思ってましたから。私と１ｏｎ１してくれるならありがたいですよ。ここで足止めが出来るんですから」
「あらあら。こんなに分身がいるのに、本物がしっかりこの場にいると思っているんですの？」
「狂三さんが私を過小評価しているとは思いたくないですね。私だって六課の『特待生』なんですから」
「……きひっ」

２人の戦いは苛烈を極める。銃弾と影の刃が飛び交い、踊るように破壊をまき散らしていく。
場所も移動し、ひと時も同じ場所に留まっていない。そのせいでほかの戦場に衝突してしまう。
そこにいたのは倒れたゴライアスだ。一つの攻防が終わり、ここから戦況が傾くかどうかの微妙な瞬間。
「く、狂三さん!?」
「あら、雪菜さん。少しお邪魔いたしますわ」
一息つく間もなく、空からティアナが放った魔力弾が雨あられと降り注いだ。
「「「ッ!?」」」
しっかりと相手のチームだけを狙い放たれたそれらは、到底すべて避けきれるものではない。
防御に徹するか、回避を試みるか。前者を選んだのは桜とリオ、後者を選んだのは耀だった。
どちらにせよ被弾は免れない。一気に流れが変わる。ゴライアスが起き上がり、圧倒的な威圧感を放っている。
そんな戦いの最中、ルーテシアから通信が入った。
《Ａチームの皆さん！　予定とは少し違ってしまいましたが、作戦を開始します！》
作戦。Ａチーム逆転の要は桜の魔術だ。
「わかりました。では――行きます！」
影の兵隊が桜に集まる。集まり、集まり、桜を中心に広がっていた影も吸い込まれていく。育ち切り、一つになった影の兵隊は、もはや巨人というべき様相になった。
そのサイズは巨大だったゴライアスより、更に一回り大きい。巨体に見合うような咆哮を上げることなくそこにそびえ立つ様は、不気味な恐怖を辺りにまき散らしていた。
それを従える少女は、指を振って巨人を敵陣へと導く。
「それじゃあ、一番後ろまでプチッと潰しちゃいましょうか？」
巨体に見合ったゆっくりとした動きで進軍を始める影の巨人。

《コロナ、聞こえる!?》
「ティアナさん!?」
《ホントはここからじりじりとアドバンテージを取ってくはずだったけど予定が変わったわ！　フィールドに現れた黒いでっかい奴は見える!?》
「目の前にいます！」
《だったら話が早いわ！　コロナのゴーレムで何とかそいつを足止めして！》
　ティアナはこの攻撃に覚えがあった。桜が翔たちと同じように実技試験をした時、似た攻撃を見たことがある。魔力を分解して飲み込む桜の虚数魔術だ。
　その時見たものよりもはるかに巨大だ。良い予感は微塵も感じない。
《（あんなの持ち出してくるなんて反則よ！）私が隙をついてデカい奴を一発決めるから！　その近くにいる人も協力してあげて！　そんな大規模な魔術、長い時間保てるわけないから！　限界まで魔力を使わせれば、桜はそこでリタイアよ！》
「分かりました、やってみます！」
　コロナは手持ちの端末（クリスタル）――――ゴライアスの核――――をありったけばら撒き、魔力を絞り出す。
「お願い、頑張って！　ゴライアスッ!!」
　ゴライアスの体がどんどん肉付けされていく。影の巨人に対抗するように、コンクリートで出来た腕がどんどん太くなる。単純に質量が増えているため、威圧感が影の巨人とは段違いだ。
「ふふふ、すごいですね。でも、私の方が強いですよ？」
　２体の巨人が睨み合い、拳が交差した。
「ッ!!」
　息を呑んだのはコロナだ。
　魔力をそぎ落とし、虚数へと分解する桜の影は、魔力によってパーツを繋ぎとめているがゴライヤスにとって致命傷だ。拳を構成していたパーツがボロボロと崩れていく。

まともにはやり合えない。この一瞬でそれが分かってしまった。
「こういう場合は――――」
「術者本体を狙うのが鉄則だよね？」
巨大にしてしまった代償か、桜を守っていた影は無くなってしまっている。無防備な状態だ。
襲い掛かるのはこれまで桜と戦っていた狂三と、どこから出てきたのか爆弾を携えた理子だ。
「私を振り切れると思ってるのかしらッ!!　理子ぉぉぉぉっ!!」
銃弾のカーテンを作り出しつつ着地するのは、ピンクのツインテールを振り回すアリアだ。戦況の変化を見て脱兎のごとく逃げ出した理子を追ってきたのだ。
狂三を止めるのは同じく飛翔してきたヤミだ。
攻撃を止められたことで、一瞬の空白が生まれる。その隙を桜は見逃さない。
影の巨人は図体が大きくても細かい攻撃が出来なくなったわけではない。その胴体から無数の刃を伸ばした。鋭角に曲がるカミソリのような刃がBチームに襲い掛かる。
射程も恐ろしく、後ろにあったビルがレゴブロックを崩したようにバラバラになってしまった。
「っ!?」
コロナ、雪菜、狂三、理子、４人ともティアナのクロスファイヤで稼いだはずのアドバンテージを一気にひっくり返されるほどのダメージを負ってしまう。
「これは……少々マズいかもしれませんわね」
狂三の顔も苦いものに変わる。狂三だけは幸いなことに、分身体が盾になったことで大ダメージは避けることが出来た。代わりに今地上にいた分身は全滅だ。
相対する相手は最強のアタッカーになった桜を筆頭に、リオ、アリア、ヤミ、耀。全員が健在だ。数で負けている上に、火力でも負けている。
そんな戦場を眼下に捕らえらえることが出来るビルの屋上には、狙

撃ポイントを移したティナが立っていた。
（ここからなら狙えますね）
スコープの先に見るのはもちろん桜だ。今からでも桜を撃墜することが出来れば、戦況を押し戻すことが出来るかもしれない。
「――――偽・偽・螺旋剣（カラドボルグⅢ）」
「――――っ」
引き金を引く直前、ティナのいた場所に捻じれ狂った矢が突き刺さった。避けることも反応することもできなかったティナは、そのままライフ全損――――敗退する。
「狙撃手が自分だけだなんて思わない事ね、ティナ」・
撃ったのはもちろんクロだ。ビルから飛び降り、桜たちに合流する。
「上から狙ってたスナイパーは倒したわ。ライフ全損。もう起き上がってこないでしょうね」
人数が増え、さらに絶望的な状況になる。
残ったBチームの面々は助けに行こうとするが、試合開始から戦っていた相手が邪魔をして思うように動けない。
「クッソ！　どけって姉さん！」
「やーだよっ！　ここを通りたければ、お姉ちゃんを倒していきなさい！」
ノーヴェはスバルに足止めされ。
「エリオ、本当に強くなったね……！」
「行かせませんよ、フェイトさん！」
フェイトはエリオを突破できず。
「まだまだ付き合ってもらいますよ、アスナさん……！」
「この状況じゃなかったら、喜んで付き合うんだけどね……！」
アスナは綺凛を切り伏せることが出来ない。
後方からこの状況を見ていたBチーム、翔、アインハルト、キャロは飛び出しそうになる身を押さえつけていた。その理由はティアナからの指令だ。
《無理に飛び込まないで！　みんなはそう簡単にやられたりしないか

ら！　それよりも、翔君にやってもらいたいことがあるの！》
「な、何ですか？」
《出来ないなら出来ないって言ってほしい。さっきなのはさんの砲撃を防いだ技。あれは何？　遠目からだったけど、相殺したとか、まともに防いだって感じじゃなかった。魔法そのものを打ち消したって感じだった》
「その通りです！　右手で触れた異能の力を打ち消すことが出来ます」
《それを使って、あの黒い奴は打ち消せる？》
「……！　おそらくは」
《あの場にはお互いのチームの約半数ずつが集まってる。そこにデカい奴をお見舞いして戦局をひっくり返したいんだけど、黒い奴がいると思った効果が出ないかもしれないの》
「発射直前に打ち消せばいいんですね！　タイミングはそちらに任せます！」
　早すぎては、せっかく集まっている敵がまた散ってしまうかもしれない。かと言って出し渋れば味方が全滅、そのまま押し込まれる。
「あれれ？　みんなは助けに行かないのかなー？」
　余裕たっぷりに現れるのはＡチームのルーテシアだ。それもそのはず、彼女と一緒に現れたのは、高町なのはと高町ヴィヴィオ。高町親子だったからだ。
「こ、これは本格的にまずいのでは？　作戦まで生き残れるのか？」
「わ、私もそう思います……」
　戦いはクライマックスに近づいていく。

陸戦試合⑥

「アインハルトさん！　さっきのリベンジです！　よろしくお願いします！」
「……はい。翔さんすみませんが」
「行ってきてくれ、俺は……」
「うん。私も邪魔しないよ。ヴィヴィオ、行ってきて」
「うん！　行ってきます！」
　アインハルトとヴィヴィオちゃんが離れていく。
《翔君、２分後に撃つから。お願いね》
「責任が重すぎるな……」
　目の前のエースオブエースを突破して、あの戦場までたどり着かなくてはならない。
「じゃあ、最後だね。夜月君」
「何とかするしかないな」
　ルーテシアの挑発的な笑みを浮かべる。
　最後の戦いが始まろうとしていた。

「ヤァッ！」
「ハァッ！」
　２人の少女の拳が交錯する。リングがあるわけでない、むき出しのアスファルトの上。ヴィヴィオの後ろでまとめられた金髪と、アインハルトの銀髪がお互いを追いかけるように乱舞する。
　攻めているのはアインハルトだったが、苦い顔をしているのもアインハルトだった。

本格的に手合わせしたのは片手で数えられる程度だったというのに、その時見せたアインハルトの攻め方を、ほとんど学習してしまっている。
ヴィヴィオがどれだけアインハルトを意識して訓練してきたのかがわかる。
（それに、この成長速度……っ）
いつぞやのように、『軽くあしらう』ことが出来るレベルではなかった。明確な目標と充実したコーチによるトレーニングの結果、実戦を積んだはずのアインハルトに迫る実力を身に着け始めていた。
少し前までとある事情でトレーニングに集中できなかったアインハルトとは、『伸び』が段違いだ。
２人ともベストコンディションならば、まだアインハルトに軍配が上がっていたのかもしれない。だが、アインハルトは、なのはと戦ってろくに回復もできていない状態だ。ライフは減っていなくても、スタミナは減っている。
「そこっ!!」
「ッ!?」
狙い撃つように早くて精密なパンチが、ライフを一方的に削る。２人とも、子供のリーチというハンデを無くすために変身魔法を使っているため、体格の差はほとんどない。
しかし、当たる拳は片方のモノだけだ。
「特訓したんですね、ヴィヴィオさん。ヒットが取れません……！」
「えへへ、ありがとうございます！　私の武器は相手の攻撃を見切るこの『目』ですから！　今回の大会は、そこを中心に鍛えました！」
（それだけじゃないですよ。それ以上に、相手の攻撃を恐れずに前に出て打ち込める勇気があります）
アインハルトの一撃は重たい。ちょっとしたミスで一気に押し込まれる可能性があるのだ。だがヴィヴィオは、むしろ自分からアインハルトの間合いに入る。もっと打ってこいと攻撃を誘うように。
（それらが重なって出来上がるこの戦闘形態（ファイトスタイル）……カウンターヒッター！）

このままではジリ貧になるだけだと悟ったアインハルトは、ならばと被弾を覚悟で相打ち狙いの技を放つ。
多少目が良い程度では避けることの出来ない。空を断つ一撃を。
「覇王―――断空拳ッッ!!」
（ッ！　来た！　ここだッ！）
ヴィヴィオが大きく踏み込む。
大技とは急に放てるものではない。必ず一瞬の溜めが入るものだ。そして技を出し始めた瞬間から、大きな隙が出来る。
その隙を、今のヴィヴィオは見逃さない。
「一閃必中―――アクセルスマッシュッ!!」
強烈なアッパーカットが、大技の直後で隙だらけだったアインハルトを打ち抜く。
（まともに入っ―――）
拳に伝わる感触に、ヴィヴィオは会心の一撃という言葉を思い浮かべ、顔を緩ませる。
間違いなく顎を捕らえた一撃。人体の急所の１つだ。脳みそが揺らされてしまえば、どんな達人でも立っていることは出来ない。
アインハルトの体の力が一気に抜ける。勝利を確信したヴィヴィオの体からも緊張が解ける。解けてしまう。
「ッ!?」
気が付いた時には、ヴィヴィオの側頭部に重い蹴りが叩き込まれていたのだ。
お互いの攻撃によって２人の体が宙に浮かび上がり、重力に従って地面に倒れこんだ。まるで時間が止まったように、今まで激しく拳を交差させていたとは思えないほどに、２人は動かない。
光に包まれ、ＢＪから私服のジャージに。それと同時に戦うために大人の姿に変化していた体も元に戻った。
２人のライフは全損。完全に気を失っていた。
勝負は相打ちという結果に終わったのだった。

「ＭＡＸ大変身！」
《Ｄｕａｌ　ガッシャット！》
《Ｔｈｅ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｆｉｓｔ　Ｗｈａｔ’ｓ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ？》
《ガッチャーン！　マザル　ｕｐ！》
《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！　ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ！》
　俺はパーフェクトノックアウトに変身する。
「夜月君、あんまり無理に攻めないでね。何とか突破することを考えて」
「無理しないと、突破することも出来なさそうですよ」
「最悪、私のことは助けなくてもいいからね」
　向かい合うのは俺とキャロ、なのはさんとルーテシアだ。
「さぁて、夜月君。ドキドキしてきたんじゃない？　絶体絶命だもんねぇ？」
「いやいや、俺たちのチームは、ここからがしぶといからな」
　その言葉を合図に戦闘が始まる。
　後ろから撃たれては敵わない。俺はなのはさんを攻撃する。それをルーテシアは止めない。俺たち２人の間に入ってきても意味がないとわかっているんだ。彼女は彼女で、キャロが何もできないように足止めをするつもりらしい。
「今度は１対１だね、夜月君」
「そうみたいですね。ちなみに、今のところ俺の評価はどんな感じですか？　六課に入れそうですか？」
「あはは、まだわからないよ。最終的な判断をするのは私じゃなくて部隊長だから。もしかすると、ここの勝負で決まるかもしれないよ

？」
「じゃあ気合入れないとですね」
言葉を交わしている時もお互い攻撃の手は緩めない。
なのはさん相手の撃ち合いで勝てる訳がないので、俺は何とか近づこうとし、時折隙を見て中央の戦場に向かおうとする。
しかしどの行為も、自在に動く誘導弾のせいでうまくいかない。その場に縫い付けるように、大きく動こうとすると弾丸に通せんぼされる。
織に閉じ込められた俺に向けられるのは、なのはさんの杖先だ。
「ディバイン――バスター!!」
迫りくる砲撃。
《マッスル化》
《7連打！》
「う――おおおっりゃあぁぁ！」
パラブレイガンを全力で振りかぶり迎え撃つ。
切り裂くというよりも、大きな刃の部分で撃ち返すという表現が正しい。
《5連鎖！》
さらに光弾をばらまき、逃げ道を塞いでいたアクセルシューターを撃墜した。
《高速化》
全ての攻撃を捌いたところで、加速してなのはさんに肉迫する。
ここまで近づいてしまえば大きな攻撃は出来まい。後の障害は魔力障壁だけだ。
炎の拳が盾を粉々にする。後ろにもう1枚あり、俺の拳は止まった。
「ッ!!」
桃色の盾から出た鎖に、俺の腕が絡めとられている。
これはアインハルトが引っ掛かっていた奴だ。ここから来る攻撃も予測できる。動けない相手に必殺の砲撃――だが、パーフェクトノックアウトを舐めてもらっては困る。

《分身》
エナジーアイテムを引き寄せて取得する。
その瞬間、俺の隣にもう1人のパーフェクトノックアウトが出現した。当然、鎖で拘束はされていない。
わき目も振らず、なのはさんに突貫した。
「ッ!?」
砲撃の準備をしていたなのはさんも、これには驚いて準備を中断する。
武器が無くなってしまったが、パーフェクトノックアウトにはまだ燃える拳がある。
拳とレイジングハートが激しい火花を散らす。
分身の俺は突貫する前に自身のパラブレイガンを、俺を拘束している鎖に向かって投げつけていた。ノールックとは思えないほど正確に、鎖を切り裂く。
自由の身となった俺は、後ろから援護を開始する。
もう一方では、キャロとルーテシアが魔法戦をしている。飛び交う魔力弾は派手さこそないが十分な攻撃力を兼ね備えている。
「アルケミックチェーン!」
キャロの足元の魔法陣から、無数の鎖が飛び出す。鎖の見た目通り、絡みついて相手を拘束する魔法だ。狙いはルーテシアだが、鎖のコントロールが甘い。
「ふふふ、そんな攻撃当たらないよー♪」
「……いいんだよ、当たらなくても。これは、撃墜のための布石だから――!!」
「後ろ――!」
なのはさんが声を上げるがもう遅い。
ルーテシアを狙っていた――ように見えていた鎖は、実は俺に向かっていたのだ。
俺がその鎖を掴むと、何かに巻き取られるように腕が引っ張られた。向かう先はもちろんルーテシアだ。
なのはさんは分身を相手にしているため、こちらには何も出来な

い。
「え、ちょ――――！」
《ウラワザ！》
《ＰＥＲＦＥＣＴ　ＫＮＯＣＫ　ＯＵＴ　ＣＲＩＴＩＣＡＬ　ＢＯＭＢＥＲ！》
防御なんて関係ない。ルーテシアのライフを根こそぎ奪い取るッ!!
「くらえ――――!!」
パラドクス必殺のライダーキックがルーテシアに炸裂した。
「よしッ！」
「勝利のＶ！」
俺はサムズアップ、キャロはＶサインを互いに交わす。
「わっ！」
キャルの体に、ピンク色のリングが巻き付いた。
分身の効力が切れたのか、それとも撃ち落としたのか。ＢＪにところどころ焦げ跡を作ったなのはさんが、そこにはいた。
「夜月君、行って！」
「おう！」
「行かせないッ！」
キャロを助けている時間はもうない。ティアナさんが指定した時間までに任務を達成しなければ、今の勝利は水の泡になるのだ。
だがなのはさんは、当然阻止しようとする。
ビルの影に隠れた俺は時間を確認する。残り３０秒。生き残るだけなら何とかなるかもしれないが、ここからなのはさんを突破して向こうの戦場に行くのは難しいかもしれない。
小さい頃からフェイトさんと一緒にいたからなのか、『高速化』のエナジーアイテムを使っていても問題なく攻撃を当ててくる。
俺の十八番になりつつあるＡＣＴ３の回転の中に隠れたとしても、ずっと隠れていられない上に、回転の移動速度がそれほどでもない。狙い撃ちにされるだけだ。
時間が無い。

射砲撃が強すぎて、なのはさんに近寄ることが出来ない。逃げることもできない。八方ふさがりだ。
なのはさんは俺を足止めしておけば良い。中央の戦場に俺たちのチームの逆転は無いだろうし、『逆転の1手』も桜がいる限り、致命的な一手になり得ない。
勝つにはやはり、俺が幻想殺しで桜をどうにかするしかない。
「だとしてもどうやって……ん？」
足元がアスファルトとは違う感触を踏み砕いた。足を退けると粉々になったガラスだった。今回のフィールドは廃ビルが多数ある。ともすれば、割れたガラスがある程度全く不思議ではない。
「ッ！　これだッ!!」
俺はベルトを腰に当てた。
《ＺＩ―Ｏ！》
《ＲＹＵＫＩ》
「変身！」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＡＤＶＥＮＴ　ＲＹＵＫＩ！》
仮面ライダージオウ、龍騎アーマーに変身した俺は、そこら中にある鏡の破片の中で一番大きなものを見繕う。それに向かって水泳の飛び込みのように、両手を揃えて飛び込んだ。
俺がその世界に吸い込まれるのと、なのはさんがビルの裏まで飛んでくるのはほとんど同時だった。
俺のつま先が現実世界から消えるのがあと1秒遅ければ、この行動に意味はなかった。
「いない……？」
だがなのはさんは見ていなかった。そうなれば、俺が突然消えたように見える。一番疑わしいのは、今まで散々見せてきたＡＣＴ３だ。
どこかに潜んで機会を窺っている。そう考える。
そうなれば、今度はこちらがなのはさんを足止めする番だ。索敵の魔法を使って辺りを調べ始めるなのはさんは、俺を逃がさないよう

に、不意の攻撃を受けないように意識を集中する。
その姿を横目に、俺は走り出した。
鏡の向こうにある世界、ミラーワールドを目的の方角に向かって。
邪魔者はいない。この世界に干渉できる能力を持った人は、この戦場にはいない。
最短距離で戦場まで駆ける。
完全記憶能力でおおよその道、地形、建物は頭に入っている。おおよその当たりをつけ、適当な出口を探す。後はタイミングだが、時間の余裕はない。すぐにミラーワールドから飛び出した。
「え!? 翔く――――」
突然現れた俺に、巨人を操っていた桜は仰天しているが――――あいにくと目標は桜ではない。桜を倒しても目的は達成できるが、より正確なのはこっちだ。
変身を解除しつつ、右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）を宿す。
目標は目の前。視界全てを覆うほど大きい、吸い込まれそうな黒い物体だ。
「――、――――!」
桜が何かを叫んでいるが、もう遅い。
「いっけぇぇぇぇぇっ!!」
幻想殺し（イマジンブレイカー）を宿した右手が巨人に触れ、跡形も無くバラバラになった。
そのわずか2秒後。
「は――――」
俺の視界は光に包まれたのだった。

（戦闘を開始してから十分に時間が経った。戦場の魔力散布は十分に

されている）
　見晴らしの良いビルの屋上からティアナは飛び降りる。ビルの陰に隠れ、今の戦場の中心を思い描く。
　周囲の瓦礫をどんどん取り込み、巨大化していくコロナのゴーレム。そして、桜が作り出した影の巨人。フィールドの中心でぶつかり合うスケールの違う攻撃に、みんなが釘付けになっている。
「（あそこの戦いで、戦力の均衡は崩れた。もう今から仕切り直しなんて出来ない。ここからはもう乱戦、この機会を逃せば戦術的な勝利は無くなる。仕掛けるなら――今ッ！）Ｂチームのみんな、ここが正念場よ。そのままフィールドの中心で戦線を維持して」
　ティアナは戦っているだろう仲間へ作戦を告げる。
　しかし戦いつつも、周囲に目を光らせていた人物がいた。エース・オブ・エース、高町なのはだ。
「（翔君だけじゃない、ティアナがいつの間にか姿を消してる――どこかで一撃を狙ってるんだ。それならこっちだって）Ａチーム各員！　作戦通達！」
　試合開始と同じように、２人の思考は一致していた。
「「収束砲（ブレイカー）で一網打尽にします！（するから！）」」
収束砲（ブレイカー）。あたりに散らばった魔力を再度収束させ、強力な魔法を使う手法だ。その性質上、戦闘開始からある程度時間が経たなければ威力が出ない。
　戦いによって魔力散布は十分にされた。戦略攻撃をするなら、人が集まっている今を除いてほかにない。
「Ｂチーム生存者一同！　なのはさんを中心に広域砲を撃ち込みます！　コロナはその場で最後まで敵を引き付けて！　残りの人は合図で脱出をッ！」
「分割多弾砲（マルチレイド）で敵残存戦力を殲滅、ティアナの収束砲（ブレイカー）を相殺しますッ！」
　最後の指示を飛ばすティアナとなのは。発射までもう猶予がない。
「ブラスター1、モード『マルチレイド』。スターライト――!!」
「シフト『ファントムストライク』。スターライト――!!」

空気中に滞留していた目に見えない魔力の粒子を、２人が奪い合い、根こそぎ自分のモノにする。吸い付くし、弾けそうなくらいに膨らまされた魔力が――――解き放たれた。

「――――ブレイカーッッ!!!!」

戦場が光りに包まれる。フィールドの中心で激突した２つの収束砲（ブレイカー）は核ミサイルが正面衝突したような大爆発を起こす。外に被害が出ないように張られていたはずの結界が悲鳴を上げ、指で突けば弾けそうだ。

爆心地にあった建物はチリも残らず、その周辺にあった建物も爆風で倒壊していく。その爆発はみんなが予測していたものよりも、はるかに大きいものだった。

選手のほとんどが、２つのブレイカーに巻き込まれてしまったのだった。

陸戦試合終了、そして新しい事件

「うわぁ……」

観戦室で観戦していた楯無は思わず声を漏らしていた。目の前のモニターに映し出されているのは、2つの収束砲がぶつかり合った結果だ。

度を越えた光をカットするフィルターが画面にかかる。そのくらいの爆発が起こってしまった。六課自慢の陸戦シュミレーターの中央が更地になった。

「まるで終末の映像ね。これがすぐ外で行われてると思うとゾッとするわ」

中心にいたゴライアスは、材料がそもそも威力に耐え切れなくなり跡形も無く消し飛んだ。壁になっていた影の巨人は、幻想殺し（イマジンブレイカー）によってゴライヤスよりも早く消滅している。

「それはまあ、収束砲同士がぶつかり合ってしまえば、ねぇ」

「ははは、いやー、私もあれだけは食らいたくないなぁー。いくら非殺傷設定でも死んでしまうわー」

それを実際に受けた部隊員がいるのだが、八神部隊長は呑気なものだ。

「さてさてみんなは……あ、っと、あー、やっぱりかー」

撃ち合ったティアナとなのははお互いに相打ち。中央で戦っていたメンバーはもれなく直撃を食らい全滅。

幻想殺し（イマジンブレイカー）モードになっていた翔も、前後から撃たれれば右手一本では防ぎきれない。周りで1対1をしていたメンバーも、それまでに細かくライフを削り合っていたため、余波でライフ全損。

「はいはい、じゃあ訓練場に担架持ってってなー、ほとんどみんな気ぃ失ってるみたいやし」

全員のライフが0になっている。つまりこの試合は――――引き分けに終わることになった。

「ん、っ、ぁ……」
目を覚ました。簡素なベッドに寝ていたようだ。周りにはいくつかベッドがあるが、誰も寝ていない。寝てはいないが、ベッドの横に座っている女性がいた。
「あ、目を覚ましたか、翔」
「クローディア……？」
「あら、『さん』付けはなさらないんですね。うれしいです♪」
かなり久しぶりに見るその顔には、感情の読めない笑顔が張りつけられていた。
「お体にどこか異常はありませんか？　受けたのは魔力ショックのダメージだけで、検査にも異常はありませんでしたけど、万が一ということもありますので」
「特にないぞ。快調だ」
痛みも無ければ、気怠さもない。非殺傷設定バンザイだ。
「あの収束砲に巻き込まれた時はホントに死んだと思ったけどな」
「あれは外から見てても壮絶でしたね。部隊長なんて、自分は絶対に食らいたくないって言ってましたから」
「そりゃそうだろ……」
視界が全部光に包まれて、いつもは暗闇に落ちていくはずの意識が、光に溶けてくんだもん。昇天してるんだと勘違いするよ。
それは魔王って勘違いされてもしょうがない。トラウマになるもん。
「ここは？」
「六課の医務室です。訓練場が近くに併設してある関係で、簡単な治療ならこちらで行えるようになっているんですよ。もっとも、皆さん擦り傷程度しかケガはしていませんけどね」

それは良かった。でも、あの砲撃がトラウマになってるヤツって、絶対他にいるだろうなぁ。もしかするとみんな揃って死屍累々となっているかもしれない。
「他の皆さんはもう目を覚まして食堂にいますよ。一人で立てそうですか？」
「ああ。大丈夫だ」
「では行きましょうか。1試合終えて疲れたでしょうし、甘いものでも食べましょう。試験の結果はもう少しで発表されると思うので」
即日発表とは、どれだけこの試験が特別な物、言ってしまえば形式的な物かって言うことが改めて分かった。
クローディアに連れられるままに食堂へと足を向ける。
「その内、この施設を案内しないといけないですね」
「無事試験に合格出来たらな。俺よりも桜が目立ってただろ」
なんか、全部桜に持っていかれたような気がする。あ奴め、あそこまで強くなってたのか。流石オンリーワンの才能を持っているだけはある。
「間桐さんも翔と同じ特待生ですからね。まさか時計塔からの志願者なんて来ると思っていなかったので、当時はとても驚きました」
時計塔にいるのは、まさに『魔術師』と言った人たちばかりだ。いや、少し違うか。権力争いに従事する時計塔の魔術師は、『根源』を目指す本来の魔術師とは全然違う。
桜の魔術の使い方は、魔術師ではなく『魔術使い』のそれだ。魔術を研究のためではなく、ただの道具として使っている。
多分、聖杯戦争が終わってからずっと、俺と一緒に戦うために魔術を鍛えてきたんだろう。戦うために鍛えたのだ。研究のために魔術を使っている連中とは、こと戦いにおいてはレベルが違うということだ。
時計塔で修業をしていたという事だったが、周りの魔術師からの目は厳しいものだっただろう。魔術使いは基本的に魔術師に軽蔑の視線に晒されることになるからだ。
「ですが翔も、桜さんに負けてないと思いますよ」

「ま……能力の希少性って面では負けてないだろうな」
俺の能力も順調に増えているとはいえ、まだまだだ。サーヴァントと戦ったからって調子に乗っている場合じゃないな。もっと精進しなければ。
「大丈夫ですよ。翔はまだまだ強くなれます」
「それはどうも」
強くなれる（意味深）。
イカンな。どうしてもそっちの方向に思考が流れてしまう。困ったら能力のごり押しで戦ってきたからな。完全記憶能力頼りのコピーじゃなくて、自分でも鍛錬しないと。
そんなことを話していると、食堂に到着した。ここには前、桜と一緒に来たな。特に変化は無い。特に特徴のないテーブルと椅子の並ぶ普通の食堂だ。
そんな椅子に、みんなが座っていた。
「なあ、みんな、本当にケガしてないんだよな？」
「はい。包帯を巻いている人もいませんよ。さっき言った通り、みなさんかすり傷です」
「じゃあ、この惨状はなんなんだ……」
食堂では、確かにみんな死屍累々としていた。クローディアの言う通り、みんなのケガはそれほどでもないのは分かる。
でもそれ以上に、空気が淀んでいる。
「まさか、敵のスタンド攻撃か……!?」
「流石にそれは飛躍しすぎですよ？」
みんなをネガティブにするスタンド……心当たりが無いな。まさか、原作には登場しないスタンド……！　あ、はい。ふざけるのはやめにします。
「クローディア、理由は分かったりするか？」
「さぁ……皆さん起きてすぐに試合の勝敗を聞いて、それからあの調子になりましたから。詳しいことは何も聞いてないんです。私はあなたが起きるまでずっとそばにいましたから」
「あ、そうですか」

「はい。ずっと寝顔を堪能してました♪」
「……」
「とっても可愛い寝顔でしたよ？」
「分かったから！　もういいから！」
　腹黒い笑顔でからかってくるクローディアを遮る。可愛い寝顔って、絶対に収束砲でうなされてたと思うんだけど。
「それにしても勝敗か……」
　みんなそんなにこの勝負に真剣だったのか？　そんなに力を入れる試合だった……だったんだろう。だからこういうことになってるんだろうし。
「って、そうだ！　試合の勝敗ってどうなったんだ!?」
「ふふふ、翔は皆さんと違って、あまり勝敗にはこだわってないんですね」
「あ、や……」
　全く関係ないわけじゃないんだけど、今の今まで忘れてただけで。ルーテシアとの賭け事のことなんて、途中から完全に忘れて試合に熱中していたな。試合前にかっこつけたのが台無しだ。
「試合はドローです」
「ドロー!?」
　ってことは引き分けか。
「最後の収束砲で両者ともに全滅しましたから。後でその時の映像を見ますか？」
「絶対に遠慮する」
　どうして好き好んでトラウマを呼び覚ますような映像を見ないといけないんだ。
　しかしそうなると、ルーテシアとの賭けはどうなるんだ。最悪なのは『どっちも罰ゲームねー』パターンなんだけど。
　うやむやにしたい気持ちもあるけど、いつか面倒な時に掘り返されても面倒だ。ここはハッキリとさせておくことにしよう。
　適当に飲み物取ってきますねー、と離れていった隙に俺はルーテシアを探す。

「えーと、ルーテシアは……いたいた」
　他のみんなと比べると、様子は普通だ。
「おいっす。お疲れ」
「あ～、お疲れ」
　俺はルーテシアと同じテーブルに座る。
「まさか、試合がドローになるなんてねぇ」
「そういうこともあるだろ。こっちのチームは危なかったし、俺としてはありがたいけどな。賭けはどうするんだ？」
「ドローだし、無効でいいよ。ちぇー、あとちょっとだったんだけどなー。夜月君の嬉し恥ずかし恋愛事情」
　口をとがらせてぶーぶーと文句を言う。だが、文句を言う割にはあっさりと引き下がってくれた。
「あ、起きたんやね、夜月君」
「八神さん」
　話していると、八神さんが姿を現した。今日はもちろん六課の制服だ。前に見た私服の時とはまた印象が変わる。そこまで年齢は離れていないはずなのに、着ている制服が妙に似合っている。
　食堂に入った八神さんは周りを見回して、小声で聞いてきた。
「あー……みんな、どうしたん？　そない落ち込むことあった？」
「俺にもさっぱり」
「またまた、あの子たちが落ち込む原因なんて、君以外に考えられへんやろ？　なんか約束でもしてたんとちゃう？　『活躍した娘とデートする』みたいな」
　そういうことをしてたのはルーテシアだよ。結局流れることになったけど。
「本当に知らないですって」
「ふーん、まあええわ。部隊長にそういう態度取るって言うなら。これからたっぷりと時間はあるわけやからな」
　ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべている。子供の初恋に口を出す親か。そんな年齢じゃないし、経験もそんなにないだろ！
「みんなあの調子やし、とりあえず夜月君に言うわ。今回の試験、合格

や。はいこれ」
　実にあっさりと告げてきた。テーブルには資料の束がどっさりと置かれる。
「色々な記入資料と、教科書や。管理局に入局することになる以上、形だけでも座学は必要やからな。本入局は夜月君、結城さん。候補生は姫柊さん、春日部さん。合っとる？」
「はい。わざわざ部隊長自ら、どうもありがとうございます」
　少し大げさなしぐさでお礼を言うと、八神さんも同じように返してくれる。
「そうやで。君はこれから私のことを部隊長って呼ばなあかん」
「それはもちろん」
「組織は上の命令が絶対や。それは分かる？」
「この部隊は無茶しそうですけど、分かります」
「つまり、上司である私の命令は絶対っちゅう訳や！」
「……うん？」
　話が不穏になってきた。
「だから私に聞かれたときは、包み隠さず答えることや！　誰と何処にデートに行ったのか、誰に告白されたのか、誰と付き合うことになったのか！　全て！　包み隠さずや！」
「それはおかしい」
「はやてさ～ん。私にも教えてほしいですぅ～」
「くっくっく、ええよぉ～、ルーテシア～」
「いやいやいや。俺のプライベート！」
　悪い顔をした悪魔が2人生まれていた。
「君らは花の高校生。青春したい気持ちが抑えられんかもしれんやん？　時には失恋、三角関係、修羅場……色々と面白――もとい、人間関係で悩むことがある。でも、部隊としてはそれは困るんよ。だから定期的に報告してもらって、大人として適切なアドバイスをしようかと」
「部隊長、そんなに経験豊富なんですか？」
　分かってて聞いてみる。

「……や、経験は、多少、それなりに？　……あんまり？」
「……メンタルケアは俺の知っている六課の隊員にも当てはまるのでは？」
「いや、みんなそういう話が無くてつまんないんやもん」
結局はそっちになるんかい。
「みんな仕事一筋なところありますよね～」
俺よりも皆さんを知っている2人が腕を組んで頷いている。
「皆さん何の話をしているんですか？」
そこに、両手に飲み物のボトルを持ったクローディアが加わったのだからもう大変だ。
話の流れを説明されたクローディアは顔を輝かせて大賛成し始めた。
「それは私もとても興味がありますよ。ぜひぜひ、カウンセラーの役割は私にお任せください」
「いやいや、それじゃあ楽しみが半減――もとい、適切な対処が出来ないかもしれん。ここは部隊長である私が」
騒ぎが大きくなれば、落ち込んでいた女の子たちも聞きつけるようになっていく。
「大変だね、夜月君」
「お前もさっきまで混ざってただろ。忘れてないからな」
ルーテシアにデコピンを食らわせ、事の行く末を見守るのだった。

俺は夕陽を身に受けながら歩いていた。
疲れただろうということで、みんなには先に帰ってもらっている。
買い物当番の俺はというと、夕食の食材を買うためにスーパーに寄り

道だ。
　レジ袋を両手に持っている。模擬戦終わりの体にはなかなかに応えるな。しかし、特売を見逃すことは出来なかった。おかげで橋を渡った向こう側のスーパーに寄ることになってしまったが。
「大丈夫、お兄ちゃん？」
「ああ、問題ないぞ」
　同じく料理当番のクロは全くいつも通りだ。いくら大人びていても、子供らしい元気を兼ね備えているらしい。
「それにしても、そっちでも賭け事してたなんてな」
「ちょっとしたお遊びだったんだけどね。思いのほかみんなヤル気出して、その結果にがっかりってところ」
　クロに事情を聴いた俺は謎が解けてスッキリしていた。
　どうやら、俺とのデート権をめぐって裏で勝負していたらしい。しかし結果は全員敗北。せっかくの機会を逃したから、あんなに落ち込んでいたというわけだ。
「言ってくれたら断らないのに」
「だから！　そう言ったらみんなついて来ちゃうでしょ！　そうならないように勝負で人数を絞りたかったの！」
「ああ、そういうね」
「そうじゃないと、お兄ちゃんと遊ぶ時間が減っちゃうじゃない？」
　それは否定できないな。
「賭け云々はともかくとして、無事に部隊に入れて良かったね。くれぐれも、無理に女性に手を出したりしないようにね……フェイトさんとかもう危なそうだし。旅行で何かしたんでしょ？」
「それは普通に誤解だ！　向こうは曲がりなりにも大人なんだから」
「どーだかね……（どう考えてもあの人、男性経験なさそうだし、キツカケがあればコロッて堕ちちゃうかもしれないよね。あーもう！　どこに行っても安心出来ないじゃない！）……人妻にまで手を出すなんて、ちょっと見境無さすぎなんじゃない？」
「や、だから自分からは出さないって。そもそもヴィヴィオは実の娘じゃないだろ」

クロに深々とため息をつかれる。そりゃそうだ。自分からは手を出さないっていうのは、逆に言えば向こうから出されたときは拒まないってことだからな。
でも、そんなの今さらだ。いったい何人の女性と関係を持っていると思ってるんだ？　……絶対に口には出せないな。
「これ、六課がお兄ちゃんの愛の巣になるのって時間の問題なんじゃないの……？」
「……」
何も言い返せなかった。何度も言うけど、自分からそっち方面のアクションを起こす気はない。でも危ない事件には積極的に関わっていく予定だ。その結果、（主に人間関係で）どうなるかは保証できないな。
「しょうがないけどさ、許可しちゃったのは私達だし。お兄ちゃんのことは信頼してるからさ」
「それは裏切らないようにするよ」
それは絶対だ。みんなのことを裏切るような真似は絶対に出来ない。
軽く笑って歩を進める。ようやく橋が見えてきた。ここを越えれば家まではあと半分。まだ半分あるのか。
レジ袋を握り直して力を入れる。今日の料理当番は俺ではない。家にたどり着いてしまえば、任務完了だ。そこまで何とか踏ん張って

「……は？」
――――握ったはずの手から、いつの間にかレジ袋が滑り落ちていた。
橋のちょうど真ん中、２人の女の子が言い争っていた。今日は休日だというのに制服に身を包む２人の少女だ。
２人とも同じ制服というだけではなく、髪形や背格好まで完全に同じだった。茶髪を肩の所で切り揃えている。顔までは確認できないが、この分なら、おそらく顔も見分けがつかないほど似ている……いや、同じなのだろう。

唯一違うのは2人のうちの片方だけが、頭に何やらゴーグルのようなものを引っ掻けているところだ。アクセサリーにしては飾りっ気がない、ファッションに無頓着な俺ですら制服と合わせるのには躊躇するようなデザインのものを。
「……いや、嘘だろ？」
「お兄ちゃん？　あの2人がどうか……あ、あれって美琴じゃないの？　おーい！」
「は？　おま……っ」
まるで知り合いを見つけたかのように声を上げるクロ。だが、それは間違いなく知り合いを見つけたから出した声だ。
少し前にあった幻想御手（レベルアッパー）事件。みんなが俺抜きで解決したあの事件だ。
残念ながら俺は蚊帳の外だったが、状況から見て幻想御手（レベルアッパー）事件だったのは間違いない。そこで知り合ったのか。
クロの声に、少女の1人が振り返った。その顔は一目で疲れているとわかる。
「ん、ああ、久しぶりねクロ。って、アンタ!?　どうして一緒にいるのよ」
「お兄ちゃん？」
「入院してた時、たまたま、な？　またまた、だけど。こういうことは」
「……よくわかんないけど、久しぶりね、クロ。それからあんたも」
覇気がないな。やっぱり疲れているのか。や、それもそうだろう。
「この方たちはお姉さまの知人ですか。と、ミサカは疲れ果てた様子のお姉さまに問いかけます」
「誰のせいで疲れたと思ってんのよ！　誰の！」
「あなた、妹なんていたのね。しかも同じ常盤台中学に」
「え？　ええ、まあね……」
「……」
御坂の返事がぎこちない。俺は黙って御坂妹を見ている。姉と瓜二つ。言い訳はできない。これはどう見ても――妹達（シスターズ）だ。
「あの、ミサカに何か。と、ミサカは男性のぶしつけな視線に身の危険

を感じます」
「……は？」
あまりに凝視しすぎたからだろう。両手で体を抱くようにした御坂妹が、俺から一歩距離を取る。
「アンタ、人の妹に……」
「……お兄ちゃん、信頼してるよ？」
「何もないって！　ほら、あたまに乗っけてるの何かなーって」
俺は誰もが当然疑問に思うことを口にして、話題を反らす。
「これですか。これは軍用の暗視ゴーグルです。と、ミサカは所持品を自慢げに披露します」
「そっかー……」
「こんな街中でするもんなの？」
クロは疑問を、俺は生返事を返しつつ、この場で何をするべきかを考える。
御坂を見る。コイツは知っているのだろうか。知っていたらこの態度は無いか。御坂妹の事情を知っていれば、人に見られた時点でもっと焦るはずだ。いつものはつらつとした受け答えはないが、そこまで深刻な表情をしているわけではない。
「あのさ――――」
「あ！　あー……、それじゃあ私達、これから用事があるから！　……ほら、アンタも行くわよ！」
御坂は会話を打ち切るように大声を上げて、瓜二つの妹の腕を掴んだ。されるがままの御坂妹。俺たちが来た方に去っていく。
このまま会話を続けるのは危ないと判断したんだろう。
「なんだったの、アレ」
「……」
大きなしこりを残し、俺たちは別れたのだった。

妹達　編
情報提供

「くそ……っ」
悪態を吐きつつ、ＰＣの電源を落とす。多少検索した程度で出てくれば苦労はしないが、１週間調べ続けて何も成果がないと流石に滅入ってしまう。
暗視ゴーグルを頭に引っ掛けた御坂美琴――――通称御坂妹――――を夕暮れに目撃してから、俺は昼夜関係なく情報を集めようと奔走していた。
あの娘がいるということは、あの口にすることすらおぞましい実験が開始されているのかもしれない。だったらそんな実験は止めなければならない。
だが、そう簡単に情報を得られれば苦労はしない。
俺には高度な情報収集スキルは無い。それこそ、この世界に来る前の俺と大した差はないだろう。出来ることと言えば、グー〇ル先生にお尋ねするくらいだ。
狂三、理子、ジャンヌにも調べてもらってはいるが、なかなか状況は芳しくない。
これまでは事件の方から俺に近づいてくれていたが、今回は俺が追う番だ。これが本来の姿だと言われればそうなのだが、思うように進まなくてやきもきする。
原作では当麻が本当に吸い込まれるように御坂妹に出会い、本来あり得ない実験後の事故処理の場面に出くわすという流れるコンボを決めていた。
俺もそのくらい事件をスムーズに進めたいものだ。
「どうするべきか……」
いっそのこと、御坂に突撃するという最終手段を取りたくなってきた。いる場所は分かっているんだ。出来ないことはない。向こうが素直にしゃべるのかは別だが。

これも原作との比較になるが、俺と御坂の仲にはかなりの差がある。『とある』の原作ではこの事件になるまでに、当麻と美琴はケンカ友達としてじゃれ合う関係だった。
決して仲が良いとは言えないが、美琴が当麻のことを一種の安全地帯として考える程度には心を許していた。学生寮の同室で相棒の『白井　黒子』よりも、心の拠り所としていた。
「ま、それを言うと語弊があるか」
当麻と黒子、どっちをより信頼していたかなんて議題にしてもしょうがないことだ。２人に向ける気持ちが同じな訳が無いんだから。
話題は逸れたが、じゃあ俺がその当麻の立ち位置にいるかということだ。それには『ノー』としか言えない。
繋がりが薄すぎる。
顔を合わせたのは片手で数えられる程度。よくあるようなケンカイベントも、結局経験しなかった。
そんな相手がいきなり現れて妹達（シスターズ）の実験について尋ねる？　怪しすぎて笑えてくる。
懇切丁寧に説明すればどうにかなるのかもしれないが、実験を止めるために心をすり減らしている御坂が冷静に聞いてくれるかどうか。
だから最後の手段だ。
だから、それまでに色々と策を練って行動を起こさないといけない。いけないんだけど……
「現状、何も出来てないんだよなぁ」
話は冒頭に戻るわけだ。
正直、手詰まりになっている。原作を読んでいると暗部けっこうガバガバだねって思うことがあるけど、現実はそんなボロを出すような甘いものではないということだ。
そしていつも通り何の成果も得られないまま、夕食の時間になった。
食事当番のアスナに呼ばれて、みんなが待っているリビングへ行く。
実はこの事件の捜査は、人数を絞って行っている。具体的には理

子、狂三、ジャンヌだ。理由としては、そもそも人を増やした程度でどうにかなるものではないという事。事件の内容がエグすぎるから、耐性のある人だけで解決したいということが挙げられる。
目の前にいるアスナも、事件のことを知らない娘の1人だ。
いつもの通り、表面上何も無いように振る舞う。平穏な日々が流れているのだと錯覚するような、平穏な時間を演出する。
しかし俺の内心は、焦りの感情で満たされつつあるのだった。

そんな現状を変えたのは、俺に届いた1通のメールだった。
いったいどこで俺のアドレスを知ったのか、六課の連絡用のデバイスではなく、俺個人の端末に送られてきたメールだ。
簡素な文体に用件だけ書かれたメール。直筆なら間違いなく殴り書きだ。

×
「今夜0時、××○○○○—△△△△　□□号室に一人で来てください
あなたの知りたいことを教えます。
クローディア・エンフィールド」

夜の逢引きにしてはそっけないこのメールを受け取った時、思わず名前の欄を二度見してしまった。まさか、そっちの方からアプローチがあるなんて思わなかったよ。
しかしこれは渡りに船だ。こっそりと家を抜け出す。
指定された住所は、この島の高級マンションが立ち並ぶ地区だった。
マンションには到着したが、当然オートロック式の扉だ。こちらか

らインターフォンを鳴らして、中から開けてもらわないと中に入ることが出来ない。
部屋番号を入力する。
「クローディア？　夜月だけど」
「はい♪　お待ちしてましたよ。しっかり5分前。時間を守る男性は素敵ですよ」
「や、クローディアは上の階だし、部屋につくまでに5分経ちそうだけどな」
「ふふ、あまり早く来られても、女性には準備というものがありますからね。丁度に来ていただける方がありがたいですよ」
「さいですか……」
クローディアに口で勝つことは出来なさそうだな。おとなしく認めて、ロックを外してもらう。
エレベーターに乗り上階へ。
いったいどういう技術を使っているのか、完璧に無音だ。この時間では俺以外に乗り降りする人はいない。
「……」
こう静かだと考えてしまう。今夜クローディアが俺に与える情報というものを。
ここで妹達（シスターズ）の実験以外の案件が出てきたら笑ってしまう。他の選択肢は外してしまってよいはずだ。
どうして俺がそのことを調べていることを知っているのか、とか、そんなこと気にしてもしょうがない。クローディアに加えて、八神部隊長、楯無さんにそんな疑問を持つ方がおバカだ。
敵意は無い、はずだ。せっかくの六課の新戦力。わざわざ自分の部屋に呼んで危害を加えるなんて。クローディアが世界の破滅でも願っていない限りは大丈夫なはず。
だとすれば善意で情報をくれるのか。それとも何か打算があるのか。彼女のメリットは？
いくつか考えが無いわけでも無い。
つらつらと考えていると目的の階に到着する。

エレベーターから降りても無音だ。どの部屋からも音がしない。こんな良いマンションで他に人がいないわけないし、よほど防音に気を使っているんだな。
クローディアがワンフロア全部持ってる可能性もあるか。
ま、今はどうでも良いことだ。
部屋番号の指定があるんだ。ここまで来て時間に遅れる訳にはいかない。
時間に合わせてあるのか、目の刺激にならないくらいに落とされた照明。上質な絨毯のようにふかふかの廊下を歩いて行くと、特に迷うことなく扉の前に到着する。
インターフォンを鳴らす。
さてさて、蛇が出るか、鬼が出るか。
「いらっしゃい、翔。お待ちしてましたよ♪」
「っ、クローディア」
出てきたのは、バスローブ姿の美女だった。
今まさにお風呂から上がったと言われても違和感がない、爽やかな香りが漂ってくる。
クローディアの周りだけ温度と湿度が高いように感じるのは、今、その格好になることが正しいタイミングなのだと、本当にお風呂上りなのだと俺に伝えてくる。
つまりは完全にお風呂上りなのだ。
俺の訪問に合わせて、お風呂に入ったのかシャワーを浴びたのかは知らないけど、とにかく体を洗って、身を清めて、準備万端にしていたということだ。
というか、入り口で言ってた『女性の準備』云々はこのことか！
この攻撃が一番効果的になるタイミングを狙ってたって訳なのか。
満面の笑みを浮かべるクローディアだったが、俺の視線はどうしても若干下方向の谷間へと吸い込まれてしまう。
バスローブは手足の裾が長くそこまで露出が多い恰好ではない。しかし胸元だけが、本来なら真っ先に隠されているべき部分が俺を挑発してくる。や、これはサイズの問題で収まりきっていないのだろう

か。
　こんなイケナイ格好で客人を迎えるのが、クローディアの作法なのだろうか。
「くす、どうしました、翔？　どうぞ中へ」
「あ、ああ、うん、そうします」
　この時間だしあんまり心配はないかもしれないけど、誰かに見られたら大変だ。
　今の一瞬で、一気にクローディアに持っていかれた。
　聡いクローディアだ。俺の動揺も狙ってのモノだったはず。
　俺は進められるがままにベッドルームにある、小さな、２人分のティーカップを置くのにちょうどよいサイズの丸いテーブルを挟んで、クローディアと向かい合う形で座る。
　窓の近くだ。高いビルの最上階にあるこの部屋からなら、それはそれは良い夜景が見えただろう。もう少し時間が早ければ。
　日付が変わりそうなこの時間では、それも十分には楽しめないというものだ。
　室内は薄暗い。寝る直前の最後のひと時を楽しむための灯りだ。
「女性の部屋は初めてではないですよね？　そんなに緊張しないでください」
「あー……どうだろうな。実はあんまり入ったことないかも」
　どちらかというと向こうから俺の部屋に来てホニャララが多いからな。
「あら！　そうなんですか？　私はてっきり、あの中の女性の誰かとお付き合いしているものだと。それとも、まだ部屋には行かないようなプラトニックな関係なんですか？」
「そ、そんなに気になるのか？」
「私はこれでも女の子ですからね。同僚の恋愛には多少興味がありますよ」
　予想外にグイグイ来られて困惑していると、軽く流されてしまう。と思いきや。
「ちょ、っと……！」

身を乗り出してくるクローディア。右手を包み込むように握られる。
圧倒的な質量をもつ谷間が、ぐいっ、と寄ってくる。もちろん目線はクローディアの顔になるように意識してだ。間違っても気付かれてはならない。
そんな俺の苦労はもしかするとクローディアの計算だったのか。まったく気にしない様子のクローディアは笑顔でとんでもないことを言ってくる。
「じゃあ……私と付き合ってみますか？」
「はい!?」
「もちろん冗談です♪」
なんて心臓に悪い冗談だ。
「ごめんなさい。ちょっとからかっちゃいました。でも別に嫌じゃないですよ、あなたとなら。本当に付き合ってみますか？」
「また冗談を……」
「ふふふ、さてさて、どうでしょうね？」
全く変わらない笑顔で言われても、冗談としか受け取れないよ。
息を抜くのはここまでだ。ここからはまじめな話になる。
「さて、今日あなたを呼んだのは他でもありません」
クローディアはざっと10枚ほどの資料の束を俺に渡してくる。
「翔が今知りたいことは、それに記されているはずです」
「……」
俺は無言で資料を受け取り、読み進めた。
読み終わると資料をテーブルに置き、深々とため息をついた。全く予想通り。表面上の違いは全くなかった。
絶対能力者進化（レベル6シフト）計画。
これこそが、今回俺が追っていた事件であり、実験の名前だ。
たった1人の超能力者（レベル5）を神の域（レベル6）にする。そのために数え切れないほどの『妹達（シスターズ）』が犠牲になる。そんなクソみたいな実験だ。
「はぁ……」
「……初めは驚きました。どうしてあなたがこのことについて調べて

いるのかわからなかったんです」
「たまたま妹達（シスターズ）にあったんだ。本人と一緒にいる時にな。流石に似すぎてておかしかったから。双子ならちょっと調べれば出てくるはずだし」
　もっともなことを言う。それでクローディアも納得しくれたらしい。
「それで、どうしますか」
「どうしますか……？」
　当然行動するに決まっている。それ以外の選択肢があるのか？
　まさか俺の返答次第では、ってやつか。この場合は下手に首を突っ込もうとしたら、痛い目を見るパターンか。
「えっと、何か勘違いしていませんか？」
「え？」
　しかし、クローディアの反応は思ったものとは違った。
　全く敵意を感じない。
「この事件、解決に動く時は私も協力します。自分には無理だと思った時には、今日のことは忘れてください」
「うん……？」
　本当に思っていたものと違うぞ？　なんだって？　協力してくれる？
「忘れましたか？　私もそうですけど、あなたはもう管理局員なんですよ？　私達はこういう事件の捜査を行うことが出来るんです」
　この学園島はどの国家の領土、領海にも属さない公海上に浮かんでいる。つまりは、どこの国の法律も適用されないのだ。
　とはいっても、無法地帯というわけではない。国を飛び越えて公的な権限を行使できる機関がある。それが管理局だ。
　管理局は各国が相談して決めた管理局の法律を、全世界地域を問わずに行使できる権限を持っている。
　クローンとはいえ人を殺すなんて、十分に逮捕の対象だ。
　武偵とは違い、大きな後ろ盾がバックにありサポートしてくれるというのだ。

「六課でもこの実験について掴み始めています。テスタロッサ執務官と、ランスター執務官が捜査を開始しています」
「俺もそこに加われと？」
「いいえ。ご自由にしてください。他の人がいては『やりずらい』手段を取る場合もあるでしょう？」
「……」
クローディアは六課の捜査の中でこの情報を入手したんだろうか。もしかしたら別の手段で入手したんじゃないだろうか。
クローディアは知ってるんじゃないのか。この事件が単純な捜査や逮捕で解決するようなモノじゃないってことを。
この実験の首謀者は誰で、参加しているのがいったい何者なのかということを。
しかし、せっかく見えた光明だ。ここで断るわけにはいかない。
「もちろん。この事件は俺が解決する」

2人の名前

「現在、六課では欠陥電気（レディオノイズ）の捜査をしています」
「ふむふむ」
――あなたならそう言うと思っていました。
このまま事件に関わるのか。その問いへの返答に、クローディアは笑顔でそう返してきた。
ここから先はまだ六課にも共有していないことなので、絶対に他人に話してはいけないことだと言われた。
「もちろん、あなたの友人にもですよ？　明確に知って捜査するのとそうではないのとでは、向こうの出方も違いますから」
時計の針は真上を指して重なる。
俺の返答を予測していたとの言葉通り、クローディアの説明は淀みなく続いていく。
「そもそも妹達（シスターズ）とは、レベル5、超電磁砲（レールガン）、『御坂　美琴』の軍用クローンとして設計され、生産されました」
紙の資料ではなく、空間に映し出されるディスプレイの画像が動き、説明を補足していく。
「御坂美琴が研究者に自身のＤＮＡマップを提供したのは、時期的に考えれば幼少のころですね。とある病気の治療の助けになる――そう思って提供したものが悪用されてしまったというわけです」
「そうか……」
その辺りに変わりはないんだな。
「先ほども言ったように、妹達（シスターズ）はレベル5を軍用クローンとして利用するために計画されたものでしたが、どういう訳か、同じＤＮＡで生まれたはずのクローンは、レベル5に成長することはありませんでした」
「妙な話だよな」
同じ遺伝子を使って、同じ教育を施しても同じ結果にならないのだ。超能力の成長に他の何かが関係しているということの裏付けになるんだろうか。なんにせよ、今は関係ない。

「妹達(シスターズ)はせいぜいがレベル2止まり。計画は目的から考えると完全に失敗。彼女たちは欠陥電気(レディオノイズ)と呼ばれ、計画自体が闇に葬られる――――はずでした」
　しかしそうはならなかった。
「ここで別の計画が持ち上がります。絶対能力者進化(レベル6シフト)計画です」
　絶対にしてはならなかった、禁断の計画だ。
「超能力は使うことによって成長の速度が速まる、という研究結果に基づいて立案されたこの計画は、つまるところ戦闘で能力を使い、レベルアップを果たすというものでした」
　リアルでゲームのように経験値を稼ごうというわけだ。
「この方法でレベル6に到達しうるのは、現在存在しているレベル5の内ただ1人。学園島最強の超能力者――――一方通行(アクセラレータ)です」
「――――」
　とうとうこの名前が出た。
　まだ会ったこともない相手の名前を聞いただけで、俺の体に力が入る。
「しかし、ここでまた問題が起きました」
　出来ればこのまま問題で潰れてほしかったものだ。
「世界最高のスーパーコンピューター、樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者の計算によると、レベル5である超電磁砲(レールガン)を128回殺害することで一方通行(アクセラレータ)はレベル6に進化するらしいです」
　樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者とはこの島のはるか上空、宇宙に浮かんでいるスーパーコンピューターだ。コイツのおかげでこの島周辺の天気は、『天気予報』ではなく『天気予言』になっている。
　計算で天候を100%の確率で的中させているのだ。
　そしてこの樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者。当然実験の計算にも使われている。計算結果は今のところ百発百中。つまり計算結果はそのまま実験結果になるわけだ。
　だが優秀な科学者ってヤツは、実際に目で見るまでは結果を信じられないみたいだ。そんなバカげたお話は、机上だけに留めておいてほしかったものだよ。

計算をそのまま現実に。樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者が指定した戦場で戦うことによって、成長の方向性を操作。最終的にレベル６に到達するらしい。
「とは言え、レベル５である超電磁砲（レールガン）を１２８人も用意するなんて出来る訳がありません。さっきクローンでも失敗したって言いましたよね？」
「そんなに用意出来てたら、今ごろ世界は超能力者で溢れかえってるな」
１２８人殺害ってとこでもうトチ狂ってるとしか言えない計画だ。
レベル５をそこまで量産出来ていれば苦労はしない。今現在レベル５に分類されるのはたったの７人だけ。そうやすやすと生まれるものではないのだ。
計画は失敗だ。失敗に終わるはずだった。
だがそうはならなかった。欠陥電気（レディオノイズ）が偶々、タイミング悪く目をつけられてしまったからだ。
「超電磁砲（レールガン）の代わりに２万人の妹達（シスターズ）を殺害することで、同様の結果が得られることが分かったんです」
レベル５の超電磁砲（レールガン）で１２８人。
それ以下のレベルしかない欠陥電気（レディオノイズ）は２万人。
ここまで来ると数字の暴力だ。
下手な災害の被害者並みの数字。現実味が無くて想像することが出来ない。
これが戦争による死傷者ならまだ理解出来る。だが、１人の人間が殺す数字ではない。
「ふぅ……」
「飲み物、冷めてしまいましたね。淹れ直します」
クローディアが席を立つ。
大枠の説明を聞き終わり、俺達は一息ついた。
分かっていた内容だけだったが、これの解決のために動くとなると途方もない気分になる。
「それでどうしますか。何か良い考えがありますか？」

ティーカップにお茶を入れたクローディアが、再び対面に座る。
事件についての情報共有は終わった。次はその解決策だ。次は、なんて気楽に言っているが、ここが一番の難関と言っていい。
「一番良いのは一方通行(アクセラレータ)本人の意思で、実験から辞退してもらうことだよな」
「一番良いのはそれですけれど、残念ながら居場所もわかりませんし」
「その辺りは調べてないのか？」
「いえ、住民票に登録されている部屋には行ってみました。しかしそこには誰も。部屋の中は荒れ放題でとても人が住めるような状態ではありませんでしたし、1週間経っても一方通行(アクセラレータ)本人は帰っては来ませんでした」
本人は？　じゃあ他の誰かは来たってことなのか。
「最強の超能力者というのがどの程度なのか、自分の腕試しに来たという方々が2、3組。ですが彼らも、普通に調べて分かる以上のことは何も知りませんでした」
腕試しって……有名人は大変なんだな。しかも1週間で2，3組。路上での待ち伏せもあると考えれば、ほとんど毎日かもしれないぞ。
それじゃあいくら最強の一方通行(アクセラレータ)でも、うっとうしくなって姿をくらませたくもなる。
「じゃあ実験に乗り込んで、一方通行(アクセラレータ)を倒すのはどうだ？」
原作で上条当麻がやったように、計算を狂わせることで実験を中止させる案だ。
「倒して、どうするんですか？」
「や、だから、一方通行(アクセラレータ)が負ければ計算に狂いが生じるだろ？」
俺の言葉にクローディアは首を横に振る。
「少し狂いを生じさせたからと言って、再計算されれば意味がありませんよ」
「あ……」
そうだった。原作では破壊されてしまった樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者だが、この世界では全くの無傷。これではこの作戦は意味がない。
「それに、相手の隠蔽力が高すぎて、私の調査ではこれ以上詳しいこと

はわからないんです。実験に割り込もうにも、肝心の実験がどこで行われているのかが分かりませんよ。実験のスケジュールはおそらく最重要機密ですから」
「そうか……じゃあ次点で、後ろ盾のレベル6を作りたがっているクソ野郎共を全滅させるってのはどうだ？　それだったら資料にあったよな？」
「それも……あまり現実的とは言えないですね。科学者の皆さんは、『前人未踏のレベル6』がよほど魅力的みたいですから。資料に書かれているモノもごく一部なんです。調査できないのではなく、載せきれなかったという意味で」
　いくら潰しても、ゴキブリのように湧いてくるってことか。
「ちなみに研究所を潰すという方法は、御坂さんが今しているんですよ。本人もそれ以外に方法が無いと結論付けたんでしょう」
　御坂の能力では一方通行（アクセラレータ）には絶対に勝てない。だから、もう取れる手段がこれしかないのだ。
　管理局の権限で、実験の現場を取り押さえるって方法もあるんだけど。
「そもそも2万人の人を殺す実験が、まったく人の目に触れられていないというのは不自然です。どこからか圧力がかかっているのでしょう。それが組織なのか、国なのかはわかりませんけれど」
　公的な組織でも解決が難しいという訳だ。
「じゃあせめて、御坂とは協力したいな」
「それが、最近は学校にも顔を出していないようです。夜中あれだけ活動していますからね。昼は休んでいるんでしょう」
「ちなみにどこにいるかは……？」
「彼女ほどの電撃使い（エレクトロマスター）になると、電子機器の記録を改ざんするくらい簡単ですからね……」
「……ああ、もう……っ！」
　つまりはわからないってことかよ！　そりゃ痕跡が残らないようにするのは大切かもしれないけどさ！　それじゃあ、どうしようもないじゃないか！

「はぁ……とりあえず、俺も研究所を潰して回ることにするよ。クローディアはどんどん情報を集めてほしい。そのうち御坂と会うかもしれないから、そこで改めて協力関係を築くことにする」
「現状ではそれしかありませんね。スケジュールはこの後メールで送ります」
とりあえずの方針が決まる。
時間も遅いし、もう帰った方が良いだろう。明日は夏休み前最後の登校日だ。
「それで、翔？」
「何だ？」
「今回協力する条件と言いますか、ご褒美のようなものが欲しいのですけれど」
「ご褒美……？」
今回の事件、管理局の捜査という建前はあるけれど、実際に俺に命令が下されているわけではない。あくまでもクローディアが、六課に渡すはずの情報をわざわざ俺に先に教えてくれているのだ。
ご褒美の１つや２つをねだられれば、首を横に振ることは出来ない。もう情報を貰っちゃってるしな。
「俺にできることなら……」
「ありがとうございます。それじゃあ、少し立ってもらえませんか？」
「ん、ああ……」
俺は椅子から立ち上がり、その横に立つ。
「それでは……」
クローディアは、おもむろに抱きついてきた。
柔らかな双丘が俺の胸板で潰れる。いくら柔らかくてもペッタンコになるまで潰れる訳がない。むしろ余計にその弾力がわかってしまう。
俺が反射的に身を引こうとすると、逃がさないとばかりに背中に回された腕に力が込められた。
「ク、クローディア……？」
「ふふふ、何ですか？　これは私に対するご褒美ですから。翔は抵抗

しちゃだめですよ？」
「分かったけど……っ」
しかしじっとしているのもつらいものだ。
何故って、この体勢は非常にまずいからだ。
こんなに密着されて、俺の愚息が反応しないわけがない。少しずつズボンの下に血液が集まり始める。
柔道の試合で組み合っているかのように、抱き合っている俺たちの足がせわしなく動く。主に俺が逃げようとして、クローディアの足が絡みついて来ようとする。
「こら、暴れないでください」
「や、だから……っ」
俺があまりに逃げようとするからだろう。背中に回していたうちの片方が腰に添えられ、より強く密着させられる。
クローディアがどういう意図でこんなことをしてくるのかわからない。もしかしたらこの娘も、過去に行った俺の行動で何かあったのかもしれない。
だからと言って、何も知らない俺がそれを受け取るわけには……！
「もう、どうしてそんなに暴れて――あれ？」
気づかれた――!!
すっかり固くなった俺のモノをズボンの上から撫でられる。
「ふふ、そう言う事ですか。どうしますか？　こっちもスッキリしていきますか？」
「それはいいから！」
ギリギリのところで立ち止まることが出来たのだった。

「残念です。そこまで拒否しなくても良いじゃないですか」
「こういうことは、な？　俺たちこういう関係じゃないんだし」
　我に返った俺は、据え膳を放り投げて帰宅しようとしていた。
「続きがしたくなったら、いつでもいらして下さい。私は何時でも良いですよ？」
「や、それはちょっと……」
　流されかけてしまったが、目的が定かではないクローディアにこれ以上弱みを握られるわけにはいかなかった。
　そうは思いつつも、先ほどまで引き寄せられていた胸元に、どうしても視線が吸い寄せられてしまうわけだが。
「そうですよね。イケナイですよね、こんな事。皆さんに対しての裏切りですもんね？」
「……っ」
「でも、そういう刺激も、良くはありませんか？」
「帰る、から」
　何とか欲望を振り切り、ドアノブに手をかける。
「あ、そうです」
「ん？」
　今まさに思い出したとクローディアは手を打つ。
「一応この実験の立案者の名前も教えておきますね。動向は全く掴めていないので、役には立たないかもしれませんが」
「そうだな。聞いといて損はないな」
　えー、確か……原作では計画の立案者は『木原　幻生』だったっけ。確かにアイツを見つけるのは骨が折れそうだ。
　それに、いまさらアイツをどうにかしたところで、動き出した計画を止めることは出来ないだろう。
「木原　幻生。かなりのご老体です。彼はレベル６理論――――神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くものの提唱者でもありますね」
「うん」
　まあそうだろうな。そんなところに変更があるわけないか。
「それともう１人」

「はい？」
何？　もう1人？
「こちらは欠陥電気（レディオノイズ）に関わっていた生物学者です。名前は――」
その名前に、俺は息を呑むことになる。
「――ティアーユ・ルナティークです」
ヤミと関わりの深い人物だったからだ。

くっついて離れない　前編

「よし、お前ら。誰も死なずに２学期に顔を見せろ。これでホームルームを終了とする」

那月先生の少々物騒な話が終わると、教室は一気に騒がしくなった。なんてったってこれから約４０日間は、学生が待ち望んでいた夏休みだ。これで騒ぐなと言う方が無理だろう。

若干何名かは成績が足りずに補習になってしまっているが、それは本人の自業自得。もちろん俺は問題無い。

今の俺は、補習なんかに気を取られている場合じゃないんだからな。

リュックを背負いながら、同じように荷物をまとめている少女に目を向けた。周りが騒いでもどこ吹く風。彼女の周りだけ静かな空気を纏っている。

ヤミだ。

ヤミを見ていると、どうしてもクローディアが最後に言ったことを思い出してしまう。まさかあの人が関わっているなんて、万に一つの可能性もない、と思いたい。それもこれも、俺が実験に介入していけばわかることだ。

でも、クローディアの仕事の手際を見ていると、俺に言った情報に、誤りは無いのではないのかと思えてしまう。

実は今日の夜から実験の研究所にカチコミを行う予定になっている。実行部隊は俺１人だが、準備はすべてクローディアがしてくれた。

実験場、妹達の生産工場、その他実験データを保管しているデータセンター等、重要度やランダム性を考慮した襲撃スケジュールを作ってくれた。

無暗に重要な施設から狙うのではなく間にクッションを入れることで、警戒をまばらにする狙いがあるのだとか。

もちろんそれが１００％正しいのかと言われれば難しいが、そのくらい親身になって手伝ってくれているのだ。

だとするとティアーユのことも……そう考えてしまうのはしょうがないことだ。
一応今日、御門先生に会いに行って色々と聞いてみる予定だ。
あの人なら何か知ってる可能性があるからな。
「夜月翔」
「ん、ああ、なんだ」
考えていると、いつの間にかヤミが目の前に来ていた。
「何だとはこちらのセリフです。いったい何の用ですか？」
「え？」
「とぼけるつもりですか？　ここ数日、事あるごとに私のことをジロジロと見てきたでしょう。気づかないとでも思っていたんですか？」
「視線には敏感なようで……」
自分でも心当たりがあったため、返す言葉に力が無い。
「そうだよねー。私の席からでもバッチリ見えてたよ。夜月君が授業聞かないでお姉……ヤミちゃんのことを見てるの」
後ろから忍び寄っていたのはメアだ。すっかりクラスにも馴染んで、最近ではことあるごとに俺とヤミにちょっかいをかけている。
「黒崎メア……」
「ん？　どうしたのヤミちゃん。そんなに睨んで。私、何か気に障るようなことしたかなぁ？　私達、同じクラスのオトモダチじゃない？」
「……何でもないと言うなら、別に構いません。変なことを考えているのなら、血に染まるだけですから」
「そんなこと考えてねーよ！」
ヤミはメアの言葉を無視して歩き出した。
「で？　実際のところどうなの？」
「秘密だ」
この娘にティアーユのことを知られても面倒だ。妹達の事件に関わる理由が無いから、ここは引っ込んでもらうことにしよう。
軽くあしらうと、メアもそれ以上深く追求してくると子は無かった。

ヤミを追いかけて教室を出る。
「黒崎メアに何か言われましたか？」
「まあ、ちょびっとな」
「問題が無かったのならいいです。それで、結局何があったんですか？　私に関係あることなんでしょう？」
「……」
やっぱり言った方が良いんだろうか。ヤミの経歴について、詳しいことは知らない。でも、ティアーユとの関係のことを考えれば、少なからずショックを受けることになるだろう。
伝えて、ヤミはどうするんだろうか。
知らないところで、知っている人がおぞましい実験に手を染めていることを知ったら。
「ヤミ、実はさ……」
「わわわっ、どいてくださーい!!」
「は？」
「え？」
俺たちは誰かに後ろから追突された。
ホームルームの時間にそんなに差があるわけがない。俺たちと同じように教室から出た生徒でいっぱいの廊下。そこを全力疾走していたんだ。
その生徒が抱えていた、何やら見慣れない機械がそこら中にばらまかれる。
ぶつかられた俺とヤミだったが、転んだりはしなかった。代わりにぶつかってきた生徒――小柄な女子生徒が尻餅をついていた。
本当に、まったく知らない娘だ。少なくとも、俺の知っている作品にこんな娘はいなかった。
「大丈夫ですか？」
「いたた……は、はい……ごめんなさい、急いでて……」
「拾いますよ」
「はぁ……」
ため息をついたヤミだったが、俺と一緒に床に散らばったものを拾

い集めてくれる。
「あーあ、割れてるよ。片づけ面倒だな、これは」
ビンが割れてしまったようで、中身の液体が廊下を濡らしている。
これは先生に怒られるぞ。
何事かと眺めていた生徒も、事故以上のことが起こらないとわかると興味を失って離れていく。
代わりに大騒ぎしたのは、ぶつかってきた女子生徒の方だった。
「あああああ!! 気を付けてください! 不用意に触ると……!」
「はい?」
そんな忠告に首をかしげたその瞬間、すさまじい勢いで俺の右手が引っ張られた。

この島に来た当初は、この島は武偵を育成する場所だと考えていた。
それは当たっているようで間違っていた。
確かにこの島には武偵養成の学校が、小中高、さらには大学までそろっている。
しかしそれとは別に、超能力開発を主とした学校（例を挙げると御坂の常盤台中学）、魔法教育を主とした学校、一般学校など、いくつもの種類の学校がある。
ただし魔術を教える学校は無い。その性質から言って当然なんだけど。島に魔術師がいないわけじゃないんだけど。本場の時計塔に比べるとその差は歴然だ。
つまりこの島にいる人間は全員が武偵、というわけではなかったのだ。

科学と魔法と魔術が交差した、原作よりも巨大な学園島というわけだ。
各勢力は各々の基準で、超能力、魔法をランク付けしている。武偵ランクだったり、超能力者のレベルだったりな。
ここまでいろいろと喋ったが、そういった環境に揉まれているおかげか、ここの島の武偵は外からの評価が非常に高いのだ。
全員が武偵ではないと言っても、武偵である者のほとんどは超偵（超能力や魔術などを使える武偵の総称）で、科学的に最先端の技術に真っ先に触れることが出来るのだ。
大陸よりも進んだ技術を持つこの島の武装を、学生の時から使い込んでいるとなれば、評価が高くなるのも頷ける。
装備科の中には研究機関にスカウトされるくらいの逸材もいるのだとか。
先ほどぶつかってきた女子生徒も、そういう研究機関にスカウトされている優秀な学生だったようだ。
しかし天は二物を与えなかったようで、研究以外は人並み以下だという。おかげでスポンサー契約まであるのに、不得意教科で夏休みは補習三昧。研究所の仕事のスケジュールが一気に崩れてしまい、慌てていたのだとか。
問題は彼女が抱えていたものだ。
鞄にしまう時間すら惜しんで両手で抱えて教室を飛び出したはいいが、ぶつかったせいで廊下に散乱することになってしまった彼女の研究成果たち。
その中でも液体状のそれは、振りかけた人の肌に反応して、対象から強力な磁力を発生させるものらしい。しかも、その表面僅か1センチというごく狭い範囲に。
金属製の壁なら、スパイ〇ーマンのように上ることが出来るようになる1品だ。
で、今回は俺とヤミの手にかかってしまい、
「つまり、こうなってしまったと」
「そう言う事だ。全然取れない」

「本当に申し訳ありません!!」
女子生徒は何度も何度も頭を下げてくる。
場所は現在保健室。能力を使って身体能力を上げても、うんともすんとも言わなかった。手のひらが離れる前に、肩が脱臼してしまいそうだったよ。
アスナや狂三、アリア、理子にも来てもらって事情を説明した。
急いできてくれたんだろう。ここに到着した時、４人とも息を切らしていた。ドアを開けて俺達を見た視線が、どんどん冷えていくのには俺も肝を冷やしたものだ。
特にアリアなんて、発砲５秒前だった。
「突然手を握り合うほど仲を深めたのかと思いましたけれど、そういう訳ではなかったんですのね」
「まさか、見せつけるために私たちを呼んだのかと思ったもんねぇ～」
「そんなわけないだろ……そうだったら、性格悪すぎるわ」
狂三と理子は面白そうにニヤニヤしていた。事情を聴くともっとニヤニヤしだした。
「もっと早く事情を説明しなさいよ。どうやっても取れないわけ？」
「はい……手が強力な磁石のようになっていまして……無理に引っ張ると、手のひらの皮だけ剥がれてしまうかも……」
体がきゅっと縮こまる。恐ろしいことを想像してしまった。
「仕方ありません。斬りますか？」
「やめてくれ！」
「そうですよ！　半日もすれば効力が無くなると思うので……っ！」
俺と女子生徒は何とかヤミを思いとどまらせる。すでに指を刃物に変形させていたヤミだったが、俺たちの説得をあっさりと聞いてくれた。
これって、分かりずらいヤミなりのジョークなのか？
「とにかく！　今日は２人とも家でゆっくりしててね？　身の回りのことは私たちがサポートするから！」
「それまでこの男とくっついて過ごせと？　……はぁ、不愉快ですがしょうがないですね」

とっくに出ていた結論だったが、改めて納得してくれたようだ。
こうして、半日ほどのヤミとの共同生活が始まったのだった。

「それで、たい焼きか」
「何か問題がありますか？」
家でおとなしくしていろと言われた俺たちだったが、いい機会だと行動をヤミに任せてみることにした。
旅行から帰ってからというもの、目に見えてヴィヴィオたちの特訓を見守り――もとい、手伝う事が多くなっていたのはわかっていたので、実際にどのようなことをしているのか見てみようと考えたのだ。
この状態では、今夜から予定していた妹達実験の研究所への攻撃は出来ないし、御門先生に情報収集にも行けない。
だったら、この機会にヤミと親しくなっちゃおうじゃない！　という短絡的な考えだ。旅行の時のヴィヴィオちゃん達の作戦と何ら変わりない。
「でもな……」
ここはヴィヴィオちゃん達が良く利用している運動公園だ。夏休みに入るタイミングはこの島すべての学校で統一されているため、カップルの姿はちらほら見える。
でも、ずっと手を繋いでいるようなカップルは俺たち以外には見当たらなかった。俺たちを見た他のカップルが、お互いに顔を反らしながらためらいがちに手を握るところを見ると、すごいムズムズしてしまう。
「やっぱり恥ずかしいな。手をつないだまま歩くってのは」

「私は非常に不快です」
聞いたか？　初々しいカップル。これが俺たちの実態だよ。
「でも――――……」
「ん？」
続く言葉があった。
「こうしていると……少しだけ、幼い頃を思い出します」
「子供の頃の？　親との思い出か？」
「……っ、あなたに話すようなことではありません。気にしないでください」
「そうですか……」
色々と聞いておきたい気持ちはあったんだけど、それはまだ難しいみたいだ。
「……ティアーユ博士のこともあるしな」
「何か言いましたか？」
「何も？」
そう言うと、ヤミはそれ以上追及してくることはなかった。
しばらく無言で歩いていると、ノーヴェさんとその妹達が立っていた。他の娘たちの姿はない。
「おっす、ヤミ。今日は翔も一緒なのか――――……あ？」
軽快な挨拶が、繋がれた俺たちの手を見た瞬間に止まる。
「おいおい。おいおいおい。おいおいおいおい！　へぇー……！　ふぅーん？　そう言う事ねぇ？」
「違いますからね？」
「何も言ってねえだろ」
「考えてること全部違うってことですよ」
ニヤニヤとこちらを見てくるノーヴェさん。
「まさかあんなにいる中からヤミを選ぶなんてなぁ。いつものコイツの態度も、バレないようにするためってことか」
「だからっ！　違いますから！」
「そう言いつつも、手を握ったままなんだもんな」
このままでは埒が明かないと思った俺は、有無を言わさず事情を説

明した。
「なんだ。つまらないな。ま、お前の場合は、誰か1人に決めても色々と面倒そうだけどな。大会前にやらかしてくれないで良かったよ……確実に調子を崩しそうな奴がいるしな」
しばらく待っていると、みんなが帰ってきた。どうやら、公園をランニングしていたらしい。
大会まで1週間。この時期になると、もう激しい訓練はしない。体力を落とさない程度に、ケガをしない程度に体を動かすのだ。
「あっ！　ヤミさん！　それに夜月さんも！」
先頭を走っていたヴィヴィオが疲れを感じさせない動きで、駆け寄ってきた。
「お疲れ様です。高町ヴィヴィオ。いつもの差し入れです」
「ありがとうございます」
ヤミはさっき買ったたい焼きの紙袋を手渡した。
「やったあ!!　ありがとうございます！」
いつものってことは、毎日こうしてるんだな。
「なあヴィヴィオ。何か気が付かないか？」
「え？　何がですか？」
ヴィヴィオちゃんは首を傾げている。たい焼きに気を取られているのか、すぐ目の前で俺たちが手を繋いでいる事に気が付かない。
代わりに気が付いたのは元気一杯のリオだった。
「あーっ！　手繋いでる！」
「あっ、ホントだ！」
一気に色めき立つヴィヴィオ、コロナ、リオ。
しかしそんな中でも、ただはしゃぐだけでは終わらない娘がいた。
「先輩……」
「むぅ……」
「ヤミ……やられたわね……」
面白くなさそうな顔をしている3人の女の子。綺凛、アインハルト、クロの3人だ。3人が3人とも、サンサンとした、晴れ晴れとした笑顔を浮かべているわけもなく。

「夜月翔。早く説明を……」
「わかってるよ！」
　ややこしいことになる前に説明を済ませてしまう。
「なーんだ。てっきり仲良しになったのかと」
　ヴィヴィオちゃんの期待には応えてあげられなかったみたいだ。
「あのねヴィヴィオ。高校生にもなると、仲良くなったからってそう簡単に手なんてつながないのよ。むしろ手を繋ぐなんて、もう最終段階と言っても過言じゃないんだから」
「えー……？　そうなの？」
「まだまだお子様ね、ヴィヴィオは。その内、どういうことか分かる時が来るわ」
　クロが上から目線で講釈を垂れているが、年齢に反して言っていることは間違ってないんだよな。
「むしろ人目もばかからず手を繋いでるなんて、世間ではバカップルと言われて爆発することになるわよ」
「爆発するの!?　攻撃されるってことなの!?」
　それは間違い……とは言い切れないのが、この島の恐ろしいところ。
「大丈夫よ。主に攻撃されるのは男の方だから。だからお兄ちゃんも気を付けてね？」
「そうだな」
　事情を説明しようと、視線が痛いことには変わりない。クロもニコニコしているが、内心ではどう思っているのか。
「爆発する時は1人でお願いします。巻き込まないでくださいね」
「爆発する前提はやめてくれよ」
　手を繋いでいるヤミの態度は、依然冷たいままだった。

くっついて離れない　中編

そしてようやく夕食の時間になった。
ここまで本当に大変だった。
一番ヤバかったのは、どうしても避けては通れない生理現象、トイレの時だった。俺とヤミが1回ずつしたが、あんなに心が休まらないトイレは生まれて初めてだったよ。
こんな時に敵に襲われでもしたら危なかったけど、幸運にもそんなことは無かった。ヴィヴィオちゃんたちの特訓が終わりまっすぐ家に帰れば、あっという間に夕食の時間になった。
俺は利き手が使えないため食べるのに苦労したが、ヤミは変身（トランス）を駆使してうまく食べていた。
そんな夕食を食べ終わってしばらくすると、ヤミはとんでもないことを言い出した。
みんなでＴＶを見たり、談笑したり、食休みの時間だ。
「アスナ、皆さんが入らないのなら、先にお風呂をいただいてしまってもよいでしょうか」
家にお風呂は1つしかない。この家の人数だと、みんなで順番を決めて入らないと、最後の人は夜中になっているなんてことになってしまう。あまり長風呂をするのもよろしくない。
もちろん厳密に規則があるわけではないが、いつも誰かしら入り始めると、間を空けないように入るのが、我が家のルールになっていた。
そして今日はヤミが一番に手を挙げたというわけだ。
それは良い。
あろうことか俺とくっついて離れないヤミが、言い出したのが問題なだけだ。
「え、は……？　翔君と入るってこと……？」
「この際、やむを得ません」
「えぇ……？　今日1日くらいは我慢しても……」
アスナは困り顔で窘める。
「私は1日に一度はシャワーを浴びると決めています。このままでは

寝るときも夜月翔と一緒ですから。女性ならわかるでしょう？　それに夜月翔も少し汗臭いです」
ものすごい剣幕でまくしたてられてしまった。
なんでも、衛生とは一番に気を付けなければならないものなのだとか。平和な生活に慣れていると、不衛生で病気になるなんてあまり想像できないかもしれない。しかし、いつも身を清められて、いつも清潔なベッドで就寝出来る環境は貴重なのだとか。
ヤミの話ではな。
そう言う訳で、ヤミは本当によほどの理由がなければ、1日に1回、必ずお風呂に入るようにしているらしい。
今日の事態はその『よほどの理由』にはならないようだ。
「マジで入るのか？　わかりにくい冗談じゃなくて？」
「もちろん目隠しはしてもらいます」
多分、命を狙われて警戒し続けないといけない、みたいな状況じゃないとこの意志は曲がらないんだろう。
「まあ、わかったけど……」
けど、どうしようか。
「ばっ、バカ言うんじゃないわよ！　そんなのいいわけないでしょ！」
こんなところで口走ってしまったばっかりに、全員の耳に入ってしまったのだ。当然反対する人物……というか、大きく反応する人物がいた。
犬歯をむき出しにして、スカートのホルスターに手を伸ばす寸前。神崎・H・アリアだ。
「男女がそんな……っ、だんじょっ、だんじょ、が……っ、ダメに決まってるでしょ！　私は許さないわよ！」
なんともまっとうな意見を述べてくれる。
とは言っても、ヤミがそう簡単に折れるわけがない。
「しかしこれは緊急ですから。このようなことは、今度2度とありません。今回だけ、見逃していただきたいです。大丈夫です。この男が何かしてきたら――――斬ります」
「ま、そうだろうね……」

いったいナニを斬られるんでしょうかね。
「それは、ヤミだったら心配してないけど……っ、でもっ、うぅぅぅ～……っ！」
その場で地団太を踏むアリア。床が抜けないように、手加減してもらいたい。
ここまでのアリアの発言は、なにもアリアだけの意見というわけではないようだ。この家にいる女性ほとんどと関係を持ってしまっている俺だが、他人の行為にはあまり干渉しないという暗黙の了解のようなものがある。
表立って誘うような行為は控えられている。
お風呂に忍び込むならまだしも、みんながいる前で誘う娘はいなかった。
しかし、1日歩き回った後にお風呂にも入らず、男性と一緒にいるのは、同じ女性としていい気持ちがしないというのはよく理解出来ているのだろう。
共感と反対の気持ちがぶつかり合って、なんとも言えない空気になっていた。
「……監視役」
「……なによ、雪菜」
雪菜がぽつりとつぶやいた言葉に、アリアの眉がピクリと動く。
「お風呂に入る時に、誰かが監視役になれば良いんじゃないですか？」
「……なるほどね。そうすれば、翔だって下手なことはしないでしょうから」
「2人とも、片手がふさがっているんだし、お風呂に入る手伝いをするのも良いよね！」
雪菜の提案に、アリア、アスナが賛同していく。
2人きりにしてしまうことに抵抗があるのなら、だれか1人が見張っていればよいという判断だ。
「でもそれってつまり、誰かが2人と一緒にお風呂に入るってことになるよね？　誰が入るの？」
耀の一言にまたもや全員が固まる。

ただ監視するだけなら良いが、入浴の手伝いもするとなればやっぱり一緒に入ることになる。
これもまた微妙な役だ。
「言い出しっぺの法則でアリアじゃないのかな？」
「バッ、バカじゃないの!? 入るわけないでしょ！」
「え～？ じゃあ理子が一緒に入ってもいいのかなぁ？」
「い い わ け な い で し ょ ！」
真っ先に理子がアリアをおちょくる。
「言い出しっぺって言うなら、監視役のことを言い出したのは雪菜じゃない！」
「っ!? わ、私ですか？」
「もしくはアスナね。クロとか狂三は翔に甘すぎるし、桜も微妙。王様2人とティナは人のお世話ができる感じじゃないし、耀は場をかき乱すことしか考えないわ。その2人のうちの誰かしか許さないわ！」
「あれ？ アリア、理子は？」
「あんたは論外よ」
それはまあ、無難な人選だろう。
「嫌かもしれないけれど、お願いしたいわ。私たちのパーティから犯罪者は出したくないの」
「いえ、その……嫌というか……」
ちらちらと俺達を見る雪菜。
「もし一緒に入るのが嫌なら、見ているだけでも良いから。お願いできない？」
「いえ、分かりました……私が、一緒に入ります」

「先輩？　見えていませんよね？」
「ああ、見えてないぞ」
「嘘をついていたら、後がひどいですよ？」
「見えていません！　サー！」
お風呂場にいるのは俺、ヤミ、雪菜の３人だ。あれからすぐに、俺達は脱衣所に来ていた。
すでに目隠しされ、視覚の情報は遮断されていた。ちなみにこの目隠しをしたのは理子だ。あいつの技術なのか、本当に何も見えない。
「服は切るのか？」
「はい。あとで縫い合わせればよいでしょう」
俺のズボンやヤミのスカートは関係ないが、手を繋いでいるため、どうしても上の服を脱ぐことが出来ない。
ヤミが変身（トランス）で髪の毛を裁ちバサミに変化させ、切ることで衣服を脱いでいく。
外界から取り入れられる情報が制限されると、他の感覚器官が鋭敏になるというのは本当の話のようだ。
ヤミも雪菜も自分からたくさん話す性格ではない。静かな脱衣所に絹擦れの音だけが響く。
「んっ」
おそらく雪菜が上の服を脱いだ。
洗濯かごにシャツが落ちる音も聞こえてきた。服の中に閉じ込められていた雪菜のメスの匂いが部屋に開放された。
「っ」
「どうしましたか、先輩」
「や、なんでもない」
俺はすでに裸――に、腰にタオルを巻くことで局部を隠している。そして女の子達は完全に裸だ。お風呂に入るから当然だが。
つまりは、すぐそばに立っている女の子はみんな裸で立っているわけで。裸で近くにいるんだよ。
少しくらい前かがみになってしまってもしょうがないと思うんだ。
何でこんなコトになってるんだ。

２人には悟られないまま、浴室に移動することが出来た。
シャワーの音が聞こえ始める。お風呂に入る前だ。一通り体を洗わなければいけない。女の子達が一緒に洗っているのだろう。
斜め下、俺の腕が引っ張られる方向から声も聞こえてくる。
「あ、ヤミさん、私が背中を流しますね」
「ありがとうございます。姫柊雪菜」
「いえいえ、気にしないでください」
そんな楽しそうな声を聴いている俺は、下腹部に血液が集まらないようにするので精一杯だ。
「っ、ぁ、少しくすぐったいです。もう少し力を入れても構いません」
「あ、ごめんなさい！　こんな感じでどうでしょうか……」
素数だな。素数を数えて落ち着くとしようか。や、それとも円周率のほうがいいだろうか。
それにしても、視界が塞がれているのが残念でならない。こんな焦らしプレーのようなことをするハメになるとは。下手なことをすれば俺の息子の命が無いから身動き取れないんだけど。
「――ぱい？　せ――い？　先輩？」
「っ！　あ、なんだ、雪菜」
素数と円周率を数えつつ考え事をしていたから、雪菜に呼ばれてもすぐに反応することが出来なかった。
「先輩はどうしますか？　良ければ、私がお背中を」
「あ、ああ。そうね。お願いしようかな？」
雪菜に手を引いてもらって、椅子に座った。
何も見えないが、後ろに人が立った気配がする。そしてすぐに、背中が擦られ始める。
「んっ、しょ。んっ、しょ……このくらいで大丈夫ですか、先輩？」
「ああ。いい感じだぞ……」
「ふふ、良かったです。このまま続けますね」
「っ、ああ。お願いする」
耳元で囁かれて思わず身震いした。雪菜は雪菜で全くそんな気は無いと思うけど、今の瞬間に、背中にひと肌が近寄った感覚があった。

暖かい物体が近寄って来て、触れ合う寸前に離れていった。
あ、ヤバ。
何も見えず、雪菜に体を洗ってもらっているこの状況。いくら無心になっても、無心になろうと別のことを考えるほど、頭の中に浮かび上がるのは裸体の雪菜が俺の背中を洗う映像だ。
「後は自分でも大丈夫ですか？」
「だ、大丈夫だ。自分でやれるから」
「早く洗ってしまって下さい。体が冷えてしまいます」
男が体を洗っている場面なんて、誰得でもないだろう。手早く済ませてしまう。背中はともかくとして、目が塞がれていても、片手でも、自分の体くらい自分で洗える。
と言うか、今雪菜に目の前に来られるわけにはいかない。
もうすっかり固くなってしまった俺の息子を、2人きりの時ならまだしも、ヤミがいる前で見せつける訳にはいかない。
俺がお風呂に入らなければ、手が離れないヤミも湯船に浸かれない。
ヤミと雪菜が後ろを向いている間に手早く体を洗った。そして、3人そろって湯船につかる。
ウチのお風呂は、外の設定によって大きさを変えられる不思議なお風呂だ。3人で入っても大丈夫なくらいな大きさなので、ぎゅうぎゅうになるということは無い。
俺とヤミは腕を伸ばし、その間に雪菜が入る。雪菜は背を向けて入っている。目隠しをしているとはいえ、俺の方を正面から見て入るのは恥ずかしかったんだろう。
間に入るのは、ヤミの体を隠す役割も含まれている。
俺も腰に巻いていたタオルは取っているので、雪菜がいなければ、俺のイチモツが2人の目に晒されることになってしまう。雪菜の役割は重要なのだ。
しかし、どんなにお風呂が広くても、どんなに腕を伸ばしても、離れられる距離には限界がある。
不意に誰かの腕が俺の突起物に触れる。

「あっ」
場所と声から考えて、この手は雪菜のものだ。
ナニかに触れた腕が、すぐに引っ込められる。しかし、あまりに早く腕をひっこめたからだろう。そのまま俺の方に寄りかかってきた。すっかり反り返った俺の息子の先端が、雪菜の背中に押し付けられる。
「ひゃうっ!?」
背中を逸らして、飛び跳ねるように元の体勢に戻った。
「どうかしましたか？」
「い、いえっ!? 何でもありませんよ!?」
ヤミもいぶかしんで声をかけている。何でもないという割に、雪菜の声は裏返っている。
「せ、先輩!?」
「な、なんだ？」
雪菜が超小声で、詰問してくる。
「どうして大きくなっているんですかっ!? こ、こんなところで！」
「や、こういう状況だからとしか……」
「こ、こういう……？ っ！ ま、まさか、見えて……!?」
それはとてつもない不名誉だ。見えているのを黙っているなんて、そんなのは単なる覗きと同じだ。
正面から見るのと、こっそり覗くのとでは全く違うのだ。
「違う違う！」
「2人で何を話しているんですか？」
「っ!?」
いくら小声でもこの距離だ。内容までは聞き取れなくても、こそこそ話をしているのはわかってしまうのだろう。
「ぅ、っ」
一度は離れた筈の雪菜の背中が、もう一度俺のイチモツに触れた。多分、突然呼ばれたせいで、反射的に俺のモノを隠そうとしたんだろう。
目隠しされている俺にはそれを予想するしか出来ないんだけど。

「な、何でもありませんよ？」
「そうは見えませんが」
　俺もそうは聞こえない。本当に雪菜はこういうことをごまかすのが下手だ。俺も人のことは言えないんだけど。
「まあいいです。こんな状況ですから。多少気が動転してもおかしくありませんね」
「そ、そうですよね！　せ、先輩と一緒にお風呂に入るなんて……！」
「私はともかく、あなた達はそういうことをしているのではありませんか？」
「えっ!?　し、したことありませんよ！　そんなことっ！」
「……」
　俺はノーコメントだ。
　ヤミは別に鈍感なわけじゃないし、知識が無いわけでもない。公言しているわけではないが、こんなにベタベタしている健康的な十代の若者の間に、何もないとは考えにくいだろう。
　裏の世界を生きてきたということは、もっとエグイものを見たことだってあるんだろうからな。
「そうなんですか。別に気にしませんよ、あなた達がそういう関係でも。こうしてお風呂に一緒に入らせてしまうのは、申し訳ないと思っていますが」
「い、いえっ！　そんな全然！　先輩は本当に見境が無くて。ですから。全然気にしなくていいんです！」
　ヤミから何かを察した空気が漂ってくる。
「……夜月翔も、気を付けたほうが良いです。昔の依頼にもありましたが、男女の仲は、こじれる時はとことん拗れますから」
「肝に銘じておくよ」
　こうして入浴の時間が終わり、とうとう1日の終わり――――就寝の時間がやってきた。

くっついて離れない　後編

「よし、これなら文句ないだろ」
綺麗に敷かれた布団を見て、不満ありげな顔をしつつも頷いてくれるヤミ。
いくらなんでも一緒のベッドで寝るのは嫌だと言われた。それはまあ、女の子なら普通のことだ。俺の周りが少し世間の常識とは違うだけで。かと言って、どちらかの部屋のベッドで寝るのも、あまり好ましくない。
最終的に、リビングにあるテーブルとソファーをどかして布団を敷くことになった。
効果はおよそ半日という話だった。となると授業終わりの時間も考えて夜中から明け方にこの手は離れる計算になる。
明日から夏休みなので別に夜更かしをしても問題無いんだけど、俺は明日の夜から研究所を襲撃するという楽しい用事が待っている。
日中はみんなにあちこちに引っ張られることになるので、明日に備えて休んでおかないといけない。
すでに1日延期しているんだ。遊びじゃない以上、真剣に取り組まなくてはならない。
というわけで今日はこのまま、ヤミと手をつないだまま床に就くことになった。
すでにリビングには人がいなくなった。後は布団を敷くのを手伝ってくれた雪菜だけだ。
「よし、っと。それじゃあ先輩、おやすみなさい。くれぐれもヤミさんに変なことはしないでくださいね？　……と言っても」
雪菜は視線を横にずらす。その先にいるのはもちろん、俺と並ぶように立っているヤミだ。
「ヤミさんなら、『そういう』心配はいりませんよね。ゆっくり休んで下さい」
「はい。おやすみなさい」
雪菜はそう言うと、あっさりと自分の部屋に向かっていった。ずい

ぶんと信用されているみたいだな、ヤミは。俺への信用もあったと思いたい。
「俺たちも寝るか」
「そうですね」
特に何かするわけでも無く、俺たちは横になったのだった。
なったのだが。
「眠れないんですか？」
ヤミに声をかけられた。
頑張って寝ようと、何度も何度も体勢を変えていたからだろう。気になってしまったようだ。目をつぶってしばらく経っていたから、もう寝たんだとばっかり思ってた。
「そっちこそ、眠ってないじゃないか」
素直に仰向けになり天井を見上げる。
あまりこの部屋の天井を眺めたことが無かったな。数カ月住んでいるのに知らない天上だ。
「あなたの隣で、安心して眠れるとでも？」
「それもそうだ」
「……それは冗談として。殺し屋になってから、本当に心の底から落ち着いて眠ったことはありません。目を閉じても体を休めるだけで、深い睡眠はとらないようにしています」
安心して眠れないってのが冗談ってことで良いんですかね？　そんなことを言えば、せっかく穏やかなヤミを、ぶち壊してしまうことになるか。
「この家に来てからでもか？」
「アゼンダの一件があったでしょう。色々なところで恨みを買っていますから。いつどこで誰に襲われるか分からないんです。今この瞬間に襲われる可能性もありますから」
いつ襲われるか分からない。そんな精神をすり減らすような生活をずっと続けてきたのか。
なんともないような顔で言うが、この世界でもかなり厳しい生活をしているんじゃないだろうか。

「前さ」
「はい？」
俺は口を開かずには入れなかった。
「ヴィヴィオちゃんのことで色々と言っただろ？　ほら、ヤミがいなくても襲われる云々。無責任だったな。いつ襲われるのかわからない怖さってヤツ。俺、全然知らないのに偉そうなこと言って」
この口ぶり。これまでのヤミの人生で、襲われたことはたくさんあったんだろう。
ホテルで寝ているところに爆弾を放り込まれれば、周りにだって被害が及ぶ。それがヤミだけを狙ったものだったとしても。
そんな生活の恐怖や厳しさというものを、一番理解していたのはヤミなのだ。俺は何も知らずにそれを利用したのだ。
「……っ、ぁ、いえ……考えてみれば、あなたの指摘はもっともでした」
俺の右手に加わる力が少しだけ強くなる。
「私がいなくなっても、高町ヴィヴィオに危害が及ぶ可能性は十分にある。人質は悪人の常套手段ですから」
それについては間違ったことは言っていないと思っている。人の恨みというのは恐ろしいものだ。
すべてを失ったと言ったアゼンダのエネルギーはすさまじいものだった。相手を陥れるためなら、なんだってするだろう。小さい女の子に危害を加えるくらい、ためらいなく実行出来る。
「……だから、あの時止めてくれたのは……感謝してます」
「そっか」
「……っ、……忘れてください。心にも無いことを言いました」
心にも無いは流石に言いすぎだろ。俺は心の中でツッコミを入れる。
それっきり、お互い無言になる。
「……」
「……」
だが、ヤミと一緒に寝るプレッシャーは無くなったように思う。体が一気に楽になった気分だ。これなら静かにしていれば眠ることが

出来るだろう。
「ん……、っ」
逡巡しているかのように、握られた手にせわしなく力が込められている。
「ティアーユ・ルナティーク博士……」
「……え!?」
その言葉に俺の心臓はドキリと跳ねた。
思いがけないセリフに、ヤミの方をチラリとみると、同じタイミングでこちらを向いたヤミと目が合う。今日初めて正面から顔を見た。
「今日あなたと手を繋いでいて、彼女のことを思い出しました」
一体どんな心変わりがあったんだろうか。俺にそのことを話してくれるなんて。俺は口を開かずに耳を傾けるだけだ。
「……少しだけ、昔話をしましょうか」

「ティアーユ博士……その人がヤミの生みの親って訳か」
「はい。生物学上の母親というわけではありませんが。私は彼女の遺伝子をベースに科学の力で生み出された、人工の生命体ですから」
ヤミの変身（トランス）能力は異能の力ではなく、いや、異能の力が全く関わっていないのかと言われると確信は出来ないが、とにかく体内のナノマシンの作用だ。
それは後天的ではなく、生まれる前から備え付けられることが計画されていた。
「彼女は１０代にして、生物工学の分野ですでに並ぶ者のいない天才科学者でした。その腕を見込まれて、とある研究機関に所属していました。そして……今となっては、理由は分かりません。彼女がどう

思っていたのか分からない。ですが、結果的に私を生み出した」
確かに、人工的に生命を作り出す研究だ。倫理的に考えて中々難しいものだ。
しかもそれに、変身（トランス）というものをくっつけてまでとなると、嫌な想像をしてもおかしくはないだろう。
「ですがそれは、今となっては、です。何も知らなかった私にとって、彼女は私の光そのものでした」
色々なことをしてもらったらしい。色々なことを教えてもらったらしい。
暇なときは絵本を読んでもらったこともあった。外出しての実験の時は、空いた時間に一緒にお花を摘んだこともあった。
その接し方は、どう考えても研究対象に対するものではない。まるで本当の親子のように。実験という非日常の中でも普通に、人として育てようとしていたのが分かる。
もしかすると、その時の自分の姿をヴィヴィオに重ねているのかもしれない。
「それで、ティアーユ博士は今何してるんだ？」
「分かりません。生きているのかさえも」
でも、そんなティアーユ博士は少数派、もしくは孤独だったのだろう。周りの研究者にとって、実験対象の価値を無くすような教育をするティアーユ博士は、それはそれは邪魔だったに違いない。
研究者として優秀だったからある程度許されていたのかもしれないが、ある日その限界が訪れた。
「私を最強の変身（トランス）兵器として売り出したかった研究所のスポンサーは、ティアーユ博士を追い出すことにしました。その手段が、少々荒っぽくなってしまったのかもしれません」
つまりは、ただ追い出されるだけではなくて、殺されたかもしれないってことだ。そりゃまあ、裏の組織ならそういう手段を取ることだってあるだろう。
しかし予想出来ていても、憤りを感じるのは抑えられない。
「胸糞悪い話だな」

「落ち着いてください。その憤りをぶつける相手は、もうどこにもいませんよ」
　何処にもいないってのはつまり、
「ほどなくして、研究機関とそのスポンサーは管理局と武偵の合同部隊で物理的にも社会的にも、完全に破壊されました。今はもう存在しません」
　それは良かった。妹達の実験と繋がってくるんじゃないのかと思ってひやひやしてたよ。
「すべて過去の話ですから……すみません、つまらない話をして」
「や……ティアーユ博士が研究所を離れなかったら、ヤミも今とは違った生き方が出来てたかもしれないのにな」
「……もしもの話をしても仕方がありません。結果として私はこういう生き方になった。それだけです」
　そう、だな。俺は一度歴史を変えているが、自由に過去に行けるわけじゃない。もしもその機会が訪れれば、全力で戦うだけだ。
「それよりも、あなたのことです」
　話題を変えるように、ヤミは言った。自分が話したんだから今度はそっちが話せと、暗がりでも光る赤い瞳が言ってくる。
「他の人がいる前では言いませんでしたが、何を隠しているんですか？」
「結局はその話になるわけか……」
　どうあっても俺を逃がしてはくれないらしい。
「私はともかく、姫柊雪菜や結城アスナには心配をかけないようにしてください。前科があるんでしょう？」
「ヤミとティナの事件の時にな」
　あの時はめちゃめちゃ怒られた。
「おかしな人ですね、あなたは。あの時自分の命を狙っていた殺し屋と、こうして布団で寝て平気だなんて」
「しかも手を繋いでな」
「他人のために命をかけられる。言葉で聞くと安っぽいですが、間違いなくこの家の女の子たちはそれに救われて――――」

「……ほーん」
「っ、わ、私は例外ですが……っ」
言い繕うヤミに、思わず顔がニヤけてしまう。
こきゅ。
「痛っ!?」
手にすさまじい圧力が加えられた。
「調子に乗らないで下さい」
「はい……」
「分かればいいです（……でも、もっとおかしいのは私だ。この男に、どうしてこんなに安らぎを感じる？）」
流石に懲りた。話題も反らせたし、ここはおとなしく眠ることにしよう。
「（みんな、翔とそういう触れ合いを望んでいる。私もそのぬくもりを全身で感じることが出来たら。ここにとどまっている理由もわかるかな、ティア……）」
何か言いたそうに俺を見ているヤミ。話は終わったと思ったんだけど。
「どうした？」
「いえ、何でもありません……（喉まで出かかった……『抱きしめてほしい』と……どうかしてる……）」
黙ってしまったヤミを見ていると、右手を押さえつけていた磁力がもうほとんどないことに気が付いた。
「あれ？」
するりと、俺の右手がヤミから離れた。
「お、おおーっ!?　なんだ、ずいぶん早かったな！　良かった良かった！　これで自由の身だ！」
試作品だって言ってたしな。想定よりも効果時間が少なかったんだろう。
「……私と離れるのが、そんなにうれしいですか？」
「逆にそっちは嫌じゃなかったのかよ。まあこんなことは、これっきりにしたい――――」

頭に凄まじい衝撃が――――

――――――

ためらいがちに手を伸ばし、袖を掴んだ。
「おやすみなさい……」
そのまま目を閉じ、しばらくすると、寝息が聞こえてきた。

「雪菜、何処に行こうとしているのかしら」
「っ、クロさん……!?」
抜き足差し足で廊下を歩いていた雪菜は、背後からかけられた声に、危うく叫びそうになってしまった。
「お兄ちゃんとヤミのこと、信用したんじゃなかったのかしら？」
「い、いえ、ちょっとトイレに行こうとしただけで……」
「通り過ぎてるじゃない」
「本当は台所に飲み物を……」
「雪菜？」
「……はい」
おとなしく認める雪菜。
「ひょっとして、クロさんも気になって覗きに行こうと思ってるんじゃないですか？」
クロの性格なら十分にあり得る話だ。期待を込めて言うが、帰ってきた返事は、
「残念ながら違うわ。別に今日あそこに入っていこうなんて思ってないわよ」
「そんな！　あなたは本当にクロさんですか!?」
「失礼な物言いね！」
ここが防音のしっかりしている特殊建造物でなかったら、周りが起きてくるような音量で言い合う。

「こういう状況じゃなかったら、そんなまともにしゃべったりできないでしょ。特にヤミが」
「それは……」
「色々と状況も変わってきてるんだし、ヤミもこれ以上1人で行動させられないじゃない。メアって娘のことだってあるんだし」
「はい……でもその結果、ヤミさんまでライバルになったら……」
「それはその時よ。それはまた別問題(まあ、アインハルトに綺凛もって状況で、これ以上ペースを上げられても困るんだけど……そもそも、ヤミに出ていくつもりがあるんだったら、とっくの昔に出て行ってるわよ。そうしないってのはつまり、ここがある程度居心地の良い場所だってことなんだから……あーもう!)」
「や、でも、ヤミさんですよ?　一度助けられてますけど、それだけで、その、好きに、なったりはしませんよね……?」
「劇的なイベントがあったわけじゃないのに、恋愛感情の無かったあなたが、1週間でメロメロに落とされてるでしょーが!」
「うっ……」
わが身のことを思い出し、絶望の表情になる雪菜。
「別にそっちの方で遠慮する必要は無いのよ。っていうか、雪菜は遠慮しすぎ。もっとグイグイ行きなさいよ。ちょっとだったら、私も協力するから。だから、今夜はやめましょう?」
「はい……ありがとうございます」
「話は聞かせてもらった」
「絶対聞いてないでしょ。私は邪魔するなって言ったのよ?」
いつの間にか登場した耀。目を爛々と輝かせる問題児は絶対にちょっかいをかけると意気込んでいた。
彼ら3人の攻防は、夜明けまで続くことになったのだった。

島の裏側の話

「ねむ……」

俺はあくびをしつつも、目的地に到着していた。

夏休み初日の今日は予想通りみんなに振り回されて終わった。7月下旬に始まる夏休みだが、8月は諸々のイベントのせいで、この島ではまともに休むことが出来ない。

旅行に行けば話は別なんだろうけど、俺たちには出かける予定がない。よって、休みは実質10日間ほどしかないのだ。

そんな休みを全力で満喫しようと思ったら、1日目からフルスロットルで飛ばしていくしかない。

おかげでちょっとくたびれているが、俺の本命のイベントはまだまだここからだ。

「どうも、御門先生」

「どうしたの、突然聞きたいことがあるなんて」

今回の目的は、当直で病院に残っていた御門先生だ。

昨日は色々あったせいで会いに来ることは出来なかったが、そのおかげで決心がついた。

今回の事件、どういう結果に終わるかはわからないが、終わるまでは絶対にヤミには話さない。

「ティアーユ・ルナティーク博士について、聞きたいことがあります」

「っ、ティアについて……？　どうしてかしら？」

御門先生にとっても予想外の名前だったのだろう。

「メアのことは知ってますよね。黒崎メア。この前……と言っても、もう2か月近く前になりますけど、うちの学校に転校してきた娘です」

「それはもちろん覚えているわ。あなたから連絡貰ったんだもの」

「だったら、いろいろと知っておく必要があるでしょう？　ただでさえ8月は色々とごたごたしそうなんですから。集められる情報は集めておきたいんです」

これも俺の偽らざる本心だ。ここでの情報によっては、8月になる

前に大勝負に出る必要があるかもしれない。
この理由なら少し話しにくいことでも話してくれるだろう。
だというのに。
「本当に？」
「はい？」
御門先生は聞き返してきた。
「本当に、それだけが理由なの？」
「はい……や、それ以外に無い訳じゃないんですけど……」
「言いなさい。言ってくれたら、こっちも相応の事を返すわ」
「……わかりました」
すべて話した。クローディアにしゃべってはいけないと言われていたことまですべて。昨日の夜ヤミと話したことも。
「そんなことが……」
「他言無用ってことでお願いします。と言っても、俺も他言無用だって言われたこと、今喋っちゃったんですけど」
人のことを言えない俺だが、御門先生なら大丈夫だろう。
「私以外には話さないようにしなさい。いえ、それよりも、あなた達そんな危ない事件に関わっているの？」
「ええ、まあ。俺1人ですけれどね」
「つまり、他の娘にも秘密にしているってことね……あなたがどういう考えで行動しているのかはわからないけれど、その事件はまともじゃないわ」
「そりゃそうでしょう」
クローンとはいえ、2万人の人を殺そうという異常な実験だ。単純な殺人事件をまともというつもりはないが、2万人ともなると、常軌を逸していると言える
「はぁ……わかってないわね。あなたが関わっているのは、単純な事件じゃないのよ。この島の、黒い部分を相手にすることになるの。余計なことを……はぁ、言っても無駄か。でも、これっきりにしなさい。あんまり深入りしても、決して幸せにはなれないわ。単なる正義感で相手にするには、行き着いた科学者の相手は苦しいものよ」

「分かりました。肝に銘じておきます」
確約は出来ないけど。その時の場合によるとしか言えない。
「ま、忠告はここまでにするとして、私も言った事は守るわ」
御門先生は足を組み替える。
「えー、まずね、ティアがその実験に関わっているって言ってたわね」
「はい」
一番大切なところだ。御門先生は実際の実験について知っているわけじゃないから、自分の印象の話になる。
「正直、可能性は結構あるわね」
「え？　そうなんですか？」
てっきり、『参加しているなんてありえない』とか言われると思ってたんだけど。
「あの娘、いい娘なんだけどね。昔から研究にしか興味がないというか……世間知らずでだまされやすいというか……自分から、ってことは無いにしても、いいように納得させられて参加させられるっていう可能性は、十分にあると思うの。実際、ヤミちゃんの事で前科があるわけだしね」
「うーん……」
騙されている可能性か……それはありそうだな。
「はぁ、それにしても、ヤミちゃんに続いてそんな実験に巻き込まれるなんてねぇ。実は私とティアは大学の同級生なんだけど、あの女ったら、卒業してすぐにヤミちゃんを作ってた研究機関にスカウトされちゃったのよ？　キナ臭いところだったからやめなさいって言ったのにね」
「じゃあヤミの事も、兵器として作ってたわけじゃないんですね」
「そんな危険な考えはティアには無いわよ。ヤミちゃん、そのあたりは何も言ってなかったの？」
「ま、そうだと思ってましたけどね。一応確認しただけですよ。一応」
だとすれば安心だが、それだとすると余計にクローディアの言葉が気になる。どうして首謀者として名前が出てしまっているんだ？
「ちなみに今は連絡出来ますか？」

「そうね、聞いたほうが確実ね」
「や、聞いてもそうそう答えてくれるかは分かりませんけど」
「ティアの隠し事は、隠し事じゃないから。すぐにわかるもの」
「そ、そうですか」
　電話をかけてもらうが、２０コール以上たっても、応答がない。
「出ないわね」
「番号は合ってます？」
「少し前に……そうそう、あなたが前に腕を斬られちゃったことがあったでしょう？　その時の治療に使った人工細胞を作ったのがティアなのよ。それを送ってもらう時に連絡したときには繋がったはずなんだけど」
　聞くと、ティアーユ先生はこの島にいるわけではないらしい。各地を転々としながら研究を続けているのだとか。
　俺がホワイトスネイクに襲われた時は偶然にも島にいたらしいが、そのあとすぐに島を出てしまったらしい。
「それじゃあ、地球の裏側にいるんじゃないですか？　時差の関係で真夜中なのかも」
「それもあるわね。ティアが実験に関わっていなければって前置きはつくけれど。ま、メールは飛ばしておくわね……や、この際いい機会だし……」
　ぶつぶつと独り言を始める御門先生。
「ねぇ、夜月君。あなた、ヤミちゃんとティアの仲を取り持つ気はある？」
「２人が仲良くするに越したことは無いですからね。再会出来ればもちろん協力しますよ」
「そうよねぇ？　そう言ってくれると思ってたわ」
　これは、ティアーユ博士をこの島に呼ぶつもりだな。あわよくば定住させてしまうつもりなのだろう。
「そういうこと♪　その時はよろしくね。間違っても、こんな事件で死んじゃだめよ？」
「それもこれも、ティアーユ博士が実験に関わっていなければって前

置きが付きますけれどね」
　これでもう話は終わりだ。時間も迫っているし、もう次の仕事場に向かわなければ。
「あ、そうだ。最後に一つ。ここ。ここなんですけれど、何かなってませんか？」
「んー？　あら、たんこぶになってるわね。どこかにぶつけた？」
「いえ、さっぱり。なんだろうな……」
　今朝起きてからずっと痛いんだけど。寝てる間にたんこぶができるのか……？
「普通そのくらいの衝撃があったら、どんなに疲れて寝てても起きるでしょ」
「そうですよね」
　首を傾げながらも、御門先生のところを後にする。次の仕事の場所へ向かうのだった。

《翔、準備は良いですか》
「ああ。いつでも行ける」
　もはや真夜中と言っても差し支えのない時間。御門先生と話した後に向かったのは、この島の工業ブロックだった。この島の最先端の化学製品を作るための工場が立ち並ぶこの区画は、こんな夜中であっても稼働し、明かりがついている。
　その中の1つに俺は攻撃を仕掛けるのだ。
　耳に付けた通信機からはクローディアの声が聞こえる。今回はオペレーターとバックアップとして俺をサポートしてくれる。
　俺の纏っているアーマーが小さい音を立てて駆動する。

月明かりで鈍く光るグレーとダークブルーの装甲。手には『ＯＴＯメララ【ボクサー】５７ｍｍ散弾砲』が握られている。
俺もあまり正体がばれるのはよろしくない。
スタンドの牙（タスク）や闇の魔法（マギア・エレベア）の術式（アルマティオーネ）兵装など、俺がよく使っている能力は特徴があり、すぐに誰の仕業かわかってしまうだろう。
そう考えた俺は、過去で手に入れたからというものの、あまり使われていなかった『アーバレスト』を今回の能力に選んだ。
これならば顔も隠れるし、能力から正体がばれることもない。
「３、２、１――０。作戦を開始してください」
「突入するッ!!」
人間の限界を超えた初速で、一気に加速する。
この研究所は妹達の生産工場だ。表向きは治療用の人工細胞の研究所。多くの職員は裏の事情を知らず、裏の事情とは無関係の人たちだ。
俺の完全記憶能力なら、悪人の名前と顔が全てわかっていれば、そいつらだけを埋めてやることも出来る。だが、流石に１人１人までは調べられなかった。
誰が善人か悪人かが分からない。
だったら、誰１人殺さず、クローンの生産施設だけを破壊する。
設備を壊されるだけでも大きな損害だろう。関係ない職員からすれば最悪だ。俺がしていることは完全な正義の行いというわけではない。
だが、やると決めたからにはとことんまでやってやる。
「侵入者だ！」
「止まれ！」
「情報と違うぞ！」
「駆動鎧だと!?」
正面から突っ込むと、待ち構えていたように警備員が現れた。全員が同じプロテクターとアサルトライフルを持っているところを見ると、能力者はいないようだ。数は５人。
《想定よりも多いですね。突破出来ますか？》

「当然だ！」
「止まれと言っている！」
「管理局には連絡しているぞ！　今投降すれば、まだ……」
俺は速度を落とさずに、『ボクサー』を持っているのとは逆の手で拡張マガジンを取り付けた『ベレッタ・キンジモデル』を構える。
「――――撃てッ!!」
武器を構えたところで投降の意志が無いと判断したのだろう。相手の銃口が火を噴いた。闇夜を火薬で熱された鉄片が切り裂く。そのすべてが俺に向かって殺到している。
だが、それが俺に届くことは無い。
「ッ!!」
『ラムダ・ドライバ』が発動する。
空間が陽炎のように揺らめき、不可視の力場が形成された。
引力とは反対、斥力の力場は銃弾の衝撃を小石以下にまで抑え込む。
今度はこちらの番だ。
フルオートで撃ち尽くされた弾丸は、カタログスペック以上の威力を発揮した。あのプロテクターは、ハンドガン程度の弾丸では凹みすら出来ない。出来ないはずのことが出来てしまう。
この場には視認できる人はいないが、銃弾はすべてラムダ・ドライバによって、威力が底上げされている。
跳弾すら利用して四方八方から襲い掛かる銃弾は、一切の抵抗を許さない。俺に攻撃するどころではない。
怯んだところを抑え込み、気絶させる。
「いたぞ！　あそこだ！」
奥からどんどん湧いてくる警備員。
「まだ来るのか」
《いくらなんでも多すぎますね。御坂さんの攻撃に警戒しているんでしょうか》
なら、電撃対策が施されたプロテクターなのだろう。だとしたら、
「なら相手が違うな。俺の対策にはなっていない。クローディア、目

的の場所まで案内してくれ」
《分かりました》
「撃てッ、撃てぇぇぇッ！」
避けるまでもない。まっすぐに走り抜ける。
銃弾だけではない。振られるナイフも、繰り出される拳も、俺の前には等しく無力だ。
ただまっすぐ走るだけでも、俺の体自体がエネルギーを纏った凶器そのものだ。
警備員たちは、なすすべなく薙ぎ倒されていく。
《そこです。目標はその扉の向こうにあります》
「了解」
ここに来るまでに出会った警備員は全員無力化、逃げる職員には手を出していない。すでに施設はちゃぶ台をひっくり返されたような大騒ぎだ。
絶え間なくサイレンが鳴り響き、遠くでは人が逃げ惑う声が聞こえてくる。
管理局に通報されたのであれば、ぐずぐずはしていられない。クローディアの話では、俺の知っている人が捜査しているらしいからな。鉢合わせたら大変だ。
銀行の特殊合金の金庫でもなければ、俺の拳を止めることなど出来る訳がない。
ぶち破った金属製の扉が、壁に突き刺さっていた。
部屋の中央には、人工生命が入っていたと言われれば納得出来てしまうポットがある。
「それじゃあ、始めるぞ」
俺は銃を構え、引き金を引いた。

「……はい。はい。分かりました。後日、改めてお話を伺うと思います。後はよろしくお願いします」
「分かりました！」
現場の引継ぎを終えたフェイトとティアナは、車に乗りこの場を離れていた。
工場が見えなくなり、赤信号で止まった辺りで、ティアナが切り出した。
「どう思いますか。今回は」
「うん。多分、昨日までの襲撃者とはまた別人だよ。攻撃の手口が違いすぎるもん」
ハンドルを握ったまま、フェイトは返す。その顔はヴィヴィオのお母さんではなく、凶悪犯罪者を追いかける執務官のものだ。
通報を受けて駆け付けた管理局員というのは、フェイトとティアナ――特務六課のメンバーだった。
六課設立の本当の理由は例の『3年後』に備えるためだが、表向きの理由というものも必要だ。
管理局の学園島支部、さらにその先の先頭に立って捜査を行う。それが特務六課の役割だ。科学と魔法が交差するこの島に対応するために、強い戦力と権限が与えられている。そう言う事になっている。
そんな六課だが、ここ最近では、工場やデータセンターへの連続襲撃事件の捜査をしていた。
「ですよね。痕跡と職員の証言を見る限り、犯人は高レベルの電撃使いの予想だった」
「でも、今日は銃が使われていた」
とても同一人物とは思えない。
「しかも、その銃の威力がでたらめですよね。あの壁を撃ち抜くなんて、反動が大きすぎて、まともな人間には扱えませんよ。駆動鎧を着ていたという証言がありますけど、能力も併用しているかもしれないですね」

「まだ確証は出来ないよ。仮に2人だとして、その2人は仲間なのかどうか。それに襲撃されている研究所、怪しいところがいくつもある」
六課は六課で、少しずつ真相に近づきつつあった。
研究所が狙われる理由、研究所の共通点を探していった時、とある共通点に辿り着いたのだ。そこから推測を重ねていった結果、御坂美琴の軍用クローンの実験に辿り着いたのだ。
これまでの襲撃者は電撃使いということで、クローンの元になった御坂美琴が一番の候補者として挙がってるのだが、今は連絡が取れないでいた。
そうして捜査が止まっているところで、今回の謎の襲撃者が現れたのだ。
「明日から、同じような研究をしている研究所をピックアップして捜査していこう。新しく現れた襲撃者についても、もしかしたら御坂美琴の知り合いかもしれないから、周りの人も調べてみないと」
「はい！　わかりました！　まずは御坂美琴ですね」
2人を乗せた車は、六課に向かって走っていくのだった。

内側の爆弾

「ふぅー……」
「お疲れですね、部隊長」
「ん、まあなぁ。まだまだ若いと思っても、体はだんだんと年をとっていく。少し無理するとすぐわかる、ってところやな。あーあ、若いってええなぁ」
　はやてと楯無は、部隊長室で新しく六課の仲間になる少年少女、特に翔についての資料をまとめていた。
　ちなみに翔たちは、忙しくなる8月を避けて、9月からの採用になっている。
「それなら、少しでも負担が軽くなるように、私も頑張らないといけませんね？」
「や、楯無、アンタが私と同じくらい働いてるの知っとるんやけど」
「やはり若さですかね？」
　うらやましい、うらやましいとぼやきつつも、手元の報告書に目を落として読み進めるはやて。
「見たことのないパワードスーツの『仮面ライダー』……を2種類。見たことのない魔法の『術式兵装』。異能の力を無効化する『幻想殺し』。さらにはスタンド能力……」
「私的には、もう決まりだと思います。間違いなく、新谷航平と何か繋がりがあります」
　いくら才能があったとしても、これほどまでに特異な能力、技術が1人に集結しているというのは、少し考えにくいものがあった。それについては、はやても同意見だ。
「繋がりがある、イコール仲間ってわけでもないやろ？　」
「未知の能力を使って人格をコントロールしている可能性も捨てきれません。それこそ、心理掌握（メンタルアウト）の様な能力も持っているのかも」
「そんなこと言ったらなんでも有りやん？」
「あらゆる可能性を考慮するべきだということです。特に彼に対しては。つつけば何が飛んでくるか分かりませんから」

結局はこれからの働きぶりを見るしかないという結論に落ち着くしかなかった。
「内側にこんな爆弾を抱えても平気ですか？　部隊長の場合、『外』とのストレスの方が大きいのでは？」
「そーなんよー。やっぱり、これ以上誰かを引き抜くことは出来なさそうで……」
「やはり、スカウトしかないですか……」
「それも併せて、諸々検討中。なのはちゃんに、良い子がいたら声をかけといてって言ってあるから。後は夏のインターミドルとか、鳳凰星武祭（フェニクス）で声をかけようとか」
なるべく元の、『機動六課』メンバーを集めて再設立した特務六課だったが、全員がこの部隊へ再加入したわけではない。
合計で3分の1程度。今の実質的な実戦スタッフは、はやての持つ固有戦力のヴォルケンリッター、フェイトとティアナ、そしてスバルだけだ。
なのはは教導隊との掛け持ちだ。なのは自身は六課に絞りたいと思っているが、優秀な人材をそう簡単に引き抜けるほど、各々の現場に余裕はない。ギリギリで回しているのは、何処も一緒なのだ。
それでも、今は訓練校にいるエリオとキャロの教導過程が終了すれば、六課専属になる予定だ。それでもはやてはかなり無理をした方だ。
翔たちが部隊に加われば、かなり楽になるのは間違いない
「色々と特例を貰えた分、敵も増えたなぁ。出来ればみんなで仲良くしたいんやけど」
「それが出来れば」
「苦労はしない、な？」
「差し当っては、今の事件ですね」
「上へのご機嫌取りで、押し付けられた案件やったけど、意外なところで意外なものにつながりそうな予感がするんよ」
フェイトの報告は2人で聞いた。他の場所に比べて大規模化しやすいここの犯罪の中でも、とびっきりに厄介な案件を持つことになっ

たらしい。
２人にはその確信があった。
「軍用クローン、ね」
「まさかこの隔離された島で、そんなものを作っているなんて、ずいぶんと大胆ですよね。しかもレベル５のクローンだなんて」
「レベル５だからこそ、科学者とその買い手はこぞって飛びつくんだと思うよ。まったく、この御坂　美琴って娘はどこにいるのやら」
研究所を襲撃している犯人は、間違いなく御坂　美琴だ。国際法的にもクローンの製造、特に軍用クローンの製造は禁止されている。相手は間違いなく悪事を冒している。
かと言って、悪人には何をしても良いという訳ではない。
きちんとした手順を踏まなければ、その周りに迷惑をかけることになるのだ。
「自分で解決しようとしているんでしょう。仮にも彼女はレベル５ですから。同じ立場だったら私だってそうします。自分のクローンには、自分でカタをつけたいと思うのは自然では？」
「その前に、大人に相談してほしかったわ。ま、当分はフェイトちゃん達に任せるということで……フェイトちゃん、暴走しないといいけど」
フェイトの過去を考えると、人並み以上に、事件解決に躍起になりそうだと考えてしまう。
やる気を出すのは良いが、空回りだけはしないでほしいと切に願うはやてだった。
と、ここで、扉がノックされた。
「蛇倉です」
「どうぞー」
扉を開けて入ってきたのは六課の制服を着た男性だった。手には端末が握られている。
男性の名前は『蛇倉　正太』。数少ない特務六課から入った隊員だ。３０を過ぎたばかりの好青年で、六課の事務作業を一手に引き受ける、なくてはならない人材だ。

１８０ほどの身長と、事務員にしておくにはもったいない立派な体格の持ち主だ。
「新しく採用された隊員について、頼まれていたものの手続きが終わりましたので、確認をお願いします」
「はいはい～」
蛇倉はもちろんはやてよりも年上だが、特に文句を言うことなく命令を聞いてくれる。蛇倉は、はやてに敬意をもって接しているのだ。
資料を見ていると、もう１度扉がノックされた。
現れたのはメイド服を着た少女だ。他の人が全員制服を着ているので、１人だけ場違いなコスプレをしているようだ。
だが少女本人はいたって真面目。メイド服も伊達や酔狂で着ているわけではないのだ。
双子のメイドの片割れ、お姉さまのラムだ。
「失礼します。お部屋の掃除に参りました」
「ん、よろしく～」
「はい。お任せください」
お任せくださいと言っているが、その働きぶりはあまり真面目という訳ではない。
デンジャラスゾンビの家にいた女の子は、様々な治療を施された。ほとんどの娘が身体的な傷よりも心の傷の方が深刻だったため、社会復帰にはまだまだ時間がかかる。
もちろん特務六課は、ただ助けて終わりという訳ではない。その後のことにも、出来るだけ力になれるように努力するつもりだ。
丁寧に対応しているからこそ、仕事が増えてしまうのだが、文句を言う隊員は１人もいなかった。
そしてそんな悲惨な目にあった少女たちの１人、いや、２人であるレムとラムは、本人たちの希望で、そのまま六課の清掃員兼雑用係として働くことになった。
２人は他の娘と比べて、デンジャラスゾンビとの接触が少なかった。そのおかげで、すぐに元の生活に戻ることが出来たのだ。
六課に保護された時にメイド服を着ていたのが効いたのだろう、部

隊長であるはやては2人の申し出を快く承諾した。
「あ～、眼福や～」
「同感です」
「話が分かる男やな」
サムズアップを交わすはやてと蛇倉にため息をつく楯無。年齢の差を超えてうまくやれているのは、こういう所にあるのかもしれない。
「ほい、これ」
「ありがとうございます」
「私もこれで失礼します」
各々の仕事が終わり、部屋は再びはやてと楯無だけになる。
「やっぱり、色々とレムちゃんの方がうまいかなぁ」
「そうですね……」
四角い部屋を丸く掃除したラムと、はやての認印を貰った蛇倉が部屋を出て行った後、はやてと楯無はそう呟くのだった。

ラムは給湯室で事務職員へ持っていくお茶の準備をしていた。部隊の主要なメンバーが日本人だからか、ここでお茶と言えば緑茶だった。
人数分の湯飲みに加え、お茶請けであるおせんべいをお盆の上にのせていると、唐突に後ろから声をかけられた。
「そのお茶、俺たちの所にだろ？　持っていこうか？」
「……蛇倉」
「おいおい。いくらなんでも呼び捨てはまずいだろ」
背後から気配もなく現れた蛇倉。入り口をふさぐように立ってい

る。まるでここを通さないと言うかのように。
「結構よ。これはラムの仕事だから」
「ふーん。そうかい」
蛇倉は初めからそんな問答に興味はなかったようだ。不愛想を通り越して冷酷とも受け取れる口調でも、浮かべた笑みには微塵の揺らぎも見えない。
手早く準備を済ませたラムはお盆を持った。
「お茶が冷めるわ。どいてもらえないかしら」
「そう急ぐなよ。俺はちょっと冷ました方がうまいと思うぜ？」
ラムは深いため息をついて一度お盆を下ろした。腕を組み、おおよそ使用人とは思えない不遜な態度で話の続きを促す。
「別にそんな難しい話をするつもりはないんだけどな？　ちょっとした世間話をしたいと思ってるだけだよ」
「……私は、あなたがここにいるのが驚きよ。しかも何？　蛇倉なんて安直な偽名を使って」
「ま、信用ないか、俺は」
「当たり前よ。だってあなた――――イ・ウーのスパイじゃない」
「まあな」
いともあっさりと認める蛇倉。他の部隊員がいれば腰を抜かしているだろう。蛇倉はそんなヘマはしないが。
「ずっと見ていたけれど、あなたにしてはまじめに働いているわね」
「ああ、だからあんなに俺を見てたのか。熱烈なラブコールかと思ったよ」
「……次にそんな冗談を言ったら、これを顔面に投げつけるわ」
「やめろやめろ！」
湯飲みをもって脅すラムに、蛇倉は大げさなリアクションを取る。
「目的、目的ねぇ……正義の心に目覚めたってのはどうだ？」
「最初に会った頃から思ってたけど、やっぱり食えない男ね……そんなこと微塵も思ってないでしょうに」
「そんなことはないって。あの教授がくれた身分だけあって、偽装は完璧だ。ここの優秀なスタッフがだれも疑わないくらいにはな。晴

れて将来安泰、高給取りの管理局員だ」
俗な欲望だ。だが、言葉には続きがあった。
「ま、世界の平和には全く興味が無いけどな。暇つぶしに、ちょっと教授の言う事を聞いてるだけ。ここにいれば刺激的な事件には事欠かないからなぁ」
「あなたらしいと言えばあなたらしいわね。そういう所、分かりやすく野蛮で。教授もよくもまぁ、あなたみたいな男に任務を任せるものね」
各々が自分勝手に目的を持つ『イ・ウー』で、他人の命令を聞いて何かをする人間というのはとても珍しい。
蛇倉のようなヤツに命令しなければいけないというのが、人材不足を物語っていた。
「別に、俺の役目は特に重要じゃないんだろ。六課の情報を流せって言われてるだけだが、いくら怠けても、いつ裏切っても教授には痛くも痒くも無いんだろうさ……それで？」
「何よ」
「おいおい。俺だけにしゃべらせて、自分からは何も無しか？」
今度はお前の番だと、顎でしゃくっている。
「貴方からしゃべりかけてきたんでしょう？」
「俺は驚いたけどな。お前と妹がココで働くことになるなんて。少しばかり焦っちまったよ」
蛇倉はかまわず話をつづけた。
ラムとは面識があった蛇倉だったが、まさか六課に保護されてそのまま同僚になってしまうとは思わなかったのだ。
「……都合が良かったのよ。この世界のことを私達は知らなすぎる。私はこんな体だし、無償で保護してくれるお人よしっていうのは。ここが無くなるのは困るわ」
「さっきも言った通り、この部隊をぶっ潰そうなんて考えはないから安心しな」
「それは良かったわ」
「ん？」

「――あなたの目的がここを潰すことだって言うなら、ラムも色々と考えないといけないところだったから」
ラムの目つきが一段階鋭くなる。
「おいおい。あんまり俺の心を揺さぶらないでくれよ。何をしてくれるってんだ？」
「はっきり言ってちょうだい。場合によっては、あなたのことを部隊長に報告するわ」
「何もしない。少なくとも今はな。それに、俺たちが争っても得する奴はいないと思うぜ？お前も、せっかく見つけた都合の良い場所を、俺とのいさかいで無くしたいのか？」
「……」
強気に出ていたラムだったが、睨みつけるだけで口を開かない。開けないのだ。プライドの高い彼女は、それを態度に出すことは無い。
この世界に召喚された女の子であるラムにとって、六課のようなお人よしの庇護下にあるというのは、都合が良いことこの上ないのだ。
そしてその六課が、不安定な綱渡りをしていることを、ラムは知っていた。
だから、派手なことをして弱みを作るわけにはいかない。
「ああ、それとなんだけどな。俺だけじゃなくて教授も、特務六課を潰すつもりは全然ないみたいだぜ。むしろ無くなったら困るって感じだな」
「……そう」
後ろから、他の事務員の声がした。
「あ、蛇倉さん。ちょっといいですか？」
「おう！　待ってろ、すぐに行く！　……それじゃあな。これからもお互い、なるべく無干渉で行こうか」
「長話だったわね。せっかくの飲み物が冷めてしまったわ」
「悪かったって。謝るよ」
軽く手を上げて、その場を後にする蛇倉。
そんな背中に向かって、ラムは独り言を投げかける。
「あなたが言った事、１つだけ共感出来るわ。私も世界の平和なんて

ものに興味はない。私たちが……いいえ、レムだけでも、平和に暮らしてほしいだけ。自分たちのことしか考えていないのは同じよ」
蛇倉は聞こえていたのか、いなかったのか、特に反応することなく管理局員のロールプレイに戻っていった。
「姉さま？　どうしました？」
準備に時間がかかりすぎたためだろう。蛇倉と入れ替わりで、ラムの妹であるレムが様子を見にやってきた。
レムもラムと同じメイド服を着ている。双子であるため瓜二つ。見分けるポイントは髪の毛の色ととある部分のボリュームだ。
「なんでもないわ。すこし、物思いにふけっていたの。お茶を淹れ直すわ」
「あ、レムも手伝いますっ！」
２人そろって準備したお茶は、それはそれは大好評だったという。
給仕を済ませたラムの視線は、笑顔でお茶をすする蛇倉に向けられたままだった。

いくつもの点

「よっと。お邪魔します、クローディア」

もうすっかり慣れた手つきで、クローディアのマンションの部屋の鍵を開ける。

今回の行動をするにあたって、クローディアには合鍵を渡されたのだ。実験の話を外でするのは、少々危険だ。どこかのお店では、周りの誰が聞き耳を立てているのかわからない。

だったら、一番安心できるのは自分たちの家だということで、作戦会議や状況確認はクローディアの部屋で行うようになっていた。

俺の家がダメな理由は言うまでもないので割愛する。

そんな訳で、ここ1週間、この部屋には毎日のように足を運んでいた。今日も予定されていたすべての研究所を破壊し、明日の確認のために立ち寄ったのだ。

時刻はもう夜中の2時。毎日こんなに遅い時間まで付き合ってくれるクローディアには、感謝しかない。

「……ん、クローディア？」

返事がない。

いつもなら俺が扉を開ければ返事が返ってくるんだけど。どこかに出かけているんだろうか……こんな時間に？

「まさか、な……」

俺は意識を切り替えて進んでいく。

研究所を襲撃しだしてから今日で8日になる。破壊した施設はすでに両手両足を使っても数えきれない数だ。8日もあれば、俺が誰かを特定して暗部の誰かが襲いに来てもおかしくはない。

協力者であるクローディアも十分に狙われるレベルになっているだろう。

普通に扉を開けて声を出してしまったので、部屋に誰かがいた時には気づかれてしまっているだろうが、それでも恐る恐る足を進めていく。

一番広い部屋。いつも話し合いをしているリビング的な部屋に出

る。
そこでは――――クローディアが机に突っ伏して寝ていた。
怪我をしている様子はないし、単純に眠っているだけみたいだ。横になっていないからか、あんまり夢見が良さそうではないな。少々寝苦しそうにしている。
机の上には資料の束と、開かれたままの端末、それとクローディアのデバイス（魔法を使うための物）が置かれている。
珍しいデバイスだ。厚さ５センチ程度、手のひらに乗るサイズのひし形に、目のような装飾が施されているもの、それが２つある。同じ形状で色違い。２つで１つになっているんだな。
やっぱりこの時間だ。眠たくなるのはしょうがない。でも、明日の確認もある。疲れているところ申し訳ないが、少しだけ頑張ってもらわないと。
「ごめん、クローディア。ちょっと起きてくれ」
少しためらいつつも、肩を揺らした。それに布団で寝なければ、風邪をひいてしまうかもしれないし、寝違えてしまえばつらいだろう。
肩をゆするとすぐに反応があった。眠りはそこまで深くないみたいだ。
「う、ぁ、ん……っ？」
まつ毛がかすかに揺れ、
「――――」
「ッ!?」
次の瞬間、俺はとっさに身を引いていた。
俺の動きについて来れなかった前髪が、少しだけ短くなる。
俺が足を後ろに下げた時には、すでにクローディアの二の太刀が迫っていた。
「ちょ、ちょっと……！」
斬られる前に、ＡＣＴ３の爪弾の回転の中に避難する。
距離をとって仕切り直そうかと思ったが、そう甘くなかった。
「うわ、ぁっ!?」
回転から出るタイミングが完璧に合っていた。位置をずらし、タイ

ミングをずらしたはずなのに。あと少しで胴から首が離れているところだった。
クローディアには殺気というものが全く感じられない。だが、狙いは的確かつ躊躇が無い。それどころか、俺の動きを先読みしたかのように、刃を繰り出してくる。
ひし形のデバイスは起動状態となり、柄と刀身が現れている。先ほどから俺を狙っているのは、この双剣だ。
刀身は半透明の魔力ブレード。２つの軌跡が、俺を追い詰めていく。
「ちぃ……！」
反撃をしないまま逃げに徹していたが、とうとう壁まで追いつめられてしまった。もう反撃するしかないか……！
「クローディアッ!!」
「っ!?　あ、しょ、翔……!?　ぁ！　ご、ごめんなさい！　私、なんてことを……！」
間一髪で、動きが止まった。
振り上げられた２刀が何かに縛り付けられたように空中で止まり、クローディアの指から力が抜けると同時に重力に従って地面に落ちた。
ようやく正気に戻ったのか、目に生気が宿る。表情の抜け落ちていた顔に赤みが差し、状況を理解すると同時に青くなった。
「とりあえず、武器を下げて。落ち着いて話を聞かせてくれ」
これは、まだまだ寝る時間にはならないみたいだ。
確信を持ってそう言えた。

いつものようにテーブルにつく俺達。目の前には淹れたばかりのティーカップが並べられている。
ここまで準備を整えれば、いつもなら快活にしゃべりだすクローディアだったが、この日は流石に違った。思案顔で俯いている。
わざわざこうして向かい合って座ったのだ。ましてはクローディア。自分の中で色々とまとめてから話始めてくれるんだろう。下手に急かさずに待った方が良い。
「ふぅ……」
その考えは正しかったようだ。
上げられた顔は真剣そのものだ。本題に入る前のからかうような表情は無い。
「先ほどは申し訳ありませんでした」
「ああ。しっかり説明をしてくれるんだろ？」
「もちろんです」
本人の意思ではなかったようなので、襲われたことは気にしていないが、理由だけははっきりとさせておきたい。本人には心当たりがあるみたいだしな。
「私の持つデバイス――――『パン＝ドラ』は、純星煌式武装（オーガルクス）の１つです」
純星煌式武装（オーガルクス）とは『学戦都市アスタリスク』に登場するアイテムの１つだ。
アスタリスクのキャラクターたちが使う武器は、煌式武装（ルークス）と呼ばれている。架空の鉱石である『マナダイト』を核として動く武器だ。
光線を出したり、剣を作り出したり、作品の超常的な現象を引き起こす重要なアイテム。
その中でも、純度が高いマナダイトである『ウルム＝マナダイト』を使用しているのが純星煌式武装（オーガルクス）だ。
純星煌式武装（オーガルクス）は武器自体が意思のようなモノを持ち、武器自体が使い手を選ぶ。しかも、モノによっては使い手に代償を求めてくる。
だが１つ１つが特殊かつ強力な能力を有している、まさに主要メンバー御用達の武器なのだ。
そんな純星煌式武装（オーガルクス）だが、この世界では少々事情が異なっている。

まずマナダイトという素材が存在しない。なので、ウルム＝マナダイトも存在しない。純星煌式武装（オーガルクス）も魔法デバイスの一種だ。

また、明確に開発者がいる。それは『インフィニット・ストラトス』の登場人物、『篠ノ之　束』だ。

正直言って篠ノ之　束は、存在していてほしくなかったと言いたいレベルの人物。なるべく相手にしたくない人物筆頭と言っても良い。その気持ちは、一方通行（アクセラレータ）に対するものよりも大きいかもしれない。

この学園島の技術者ですら作ることの出来ない品々を作り出し、無責任に世に放つはた迷惑な『天才』。や、『天災』といったほうが正しいだろうか。

そんな『天災』の作品である純星煌式武装（オーガルクス）。何がすごいのかと言われれば、本人に全く適性が無くとも、純星煌式武装（オーガルクス）にさえ気に入られてしまえば特殊な能力を得ることが出来る点だろう。

既存のパワーバランスを壊してしまうレベルの大発明だ。

1年ほど作られ続けた純星煌式武装（オーガルクス）だったが、ある時を境にピタリと新作が発表されなくなった。

篠ノ之　束がしているのはどこまで行っても趣味。どんなに目の飛び出るような研究であっても、飽きてしまえばそれでポイ、だ。

そのため、数に限りがある。モノによっては、かなり中途半端なモノもある。

もっと研究を続けていれば、使い手を選ぶというデメリットが無くなり、誰もが純星煌式武装（オーガルクス）によって好きに特殊スキルを持つことの出来る時代になっていたのかもしれない。

溢れる才能を思うがままに振りかざしているのだから、世界は次の篠ノ之　束の行動に、希望よりも不安を抱いている。

各国はそんな篠ノ之　束の作品を確保するのに躍起になっている。解析することで、さらに発展させようとしているのだ。うまくいった例は全くないが。

話が長くなってしまったが、そんな貴重な純星煌式武装（オーガルクス）をクローディアは所持しているという訳だ。

わざわざその話をするということは、純星煌式武装（オーガルクス）が内容に関係あ

るんだろう。
　次なる質問は少々予想外のモノだった。
「翔、あなた死んだ経験はおありですか？」
「や、流石に……」
　別にこの世界に来る時に死んだわけじゃないしな。
　俺の反応が期待通りだったのか、クローディアはクスクス笑いつつ話をつづけた。
「私はすでに１２００回以上死んでいます」
「ふむ？　ゾンビにしては健康そうに見えるな」
「まさか、本当に死んでいるわけではないんですよ。私の純星煌式武装（オーガルクス）――『パン＝ドラ』の能力は未来視です。使い手に求める代償は、自分の死を味わう事」
　未来視。未来予知って奴か。
　そしてその代償が――――自分の死を、味わう。
「私は眠るたびに、いつか来る死の瞬間を味わい続けているんですよ」
　つまり、眠るときに見る夢はすべて悪夢だという事か。
「この子のいやらしいところは、一度として同じ死に様を見せてこないところです。病死、事故死、凍死、焼死、圧死、自殺、誰かに与えられる死。可能性は無限にある、って本当によくできた言葉ですよね。考え付くあらゆる死に方を、私は経験してきました。それがどれも、まったく違うものです。同じような死に方はあっても、同じ場面はありません。一番ヒドイものですと……いえ、やめておきます」
　わざわざ口に出して、嫌な空気にする必要は無い。この場で必要な情報はもっと別のことだ。
「未来視という破格の能力を与えてくれるにもかかわらず、使いこなせる人、使いたいという人がいなかったのはこのためです」
「そりゃ、毎晩自分が死ぬところを見せつけられてたら、おかしくなっちまうよな」
　リゼロのスバル君もびっくりだ。
「常人なら、手にして3日も持たないそうですから」
「クローディアは平気なのか？」

「意外と慣れてしまうものですよ？」
「……スバルは何度死んでも慣れないけどね」
「すばる……？　どちら様ですか？」
「や、同じような特殊能力を持ってる、小説のキャラクターだから」
　似てないか？　まあ、スバルの『死に戻り』も実質的な未来視みたいなもんだし。自分の死を味あわないといけないところとかは同じだな。現実で死ぬか、夢の中で死ぬかの違いはあるけど。
「あら、残念です。もし実際にいるのなら、良いお友達になれそうなんですけれど」
「クローディアとは少しタイプが違いすぎるような気もするけど、な」
　っていうか、スバルはこの世界にはいないんだよな。まあ一般人だし、この島にはいないのかな。
「こういうデメリットはありますが、夢の中ではかなり自由に動き回ることが出来るんです。どうせ最後には死んでしまいますから。少し危険な捜査をして、無理やり情報を集める……そうして集めた情報を翔にお渡ししていたんです」
「そう、だったのか……」
　しかしランダムな夢で、よくもまあ今回の事件の情報をピンポイントに集められるもんだな。
「言ったでしょう？　パン＝ドラ（この子）は性格が悪いんです。意図的に夢を見せてくることもあるんですよ。私はここ数週間ずっと、この実験の捜査の結果、相手組織の反撃で死ぬ夢を見てきました。でも一番重要な、実験日時についての情報を仕入れることは、どんなに頑張っても出来ないんです。楽しんでいるんでしょうね。私たちが苦労している姿を見て」
「最悪だ……」
　しかし、パン＝ドラが無ければ、そもそも情報を集めることすら出来ないのだ。1人だけで情報収集から実行までできている御坂美琴は、やはり別格なのだ。
「そして夢を見ているとき、外部からの接触で、一種の夢遊病のような症状になることがあります。死ぬ寸前、必死で抵抗している体の動き

が、表に現れてしまうんです。なのでなるべく1人で寝るように心掛けているんですけれど……」
今回は俺が入ってしまったというわけか。
「本当に、申し訳ありませんでした」
「や、そういうことならしょうがない。こっちこそ、無理に起こそうとして済まなかった」
クローディアはパン＝ドラを受け入れ、俺はパンドラの力を必要としている。今はそれで良い。今は。
この話はここで終わり。ここからは仕事の話になった。
「残りの研究所、私が夢で仕入れることのできた情報では、残り2つです。しかし、今回はどちらに御坂さんが来るのか分かりません。確率的に、確実に御坂さんと鉢合わせすることになります」
「とうとうか……」
超電磁砲。レールガンの御坂美琴か。第3位の超能力者。敵対することになれば、甘く考えれば、簡単にやられてしまう相手だ。
「勝負は明日。明日の結果次第で、何か状況が動くことになります」
「ああ。明日は気合入れるよ」
そこから、俺達は細かい作戦会議に移ったのだった。

薄暗い研究所、5人の研究者が作業をしている。その様子は慌ただしい。ここは『妹達』実験の中枢。連日飛び込んでくる報告は、関連研究所が次々と襲われているというものだ。
実験自体は順調に進んでいるが、各方々からの悲鳴で大混乱になっているのだ。
そんな火事場に、白衣を着た2人の人物が入ってきた。

１人は美しい女性だ。流れるような金髪に、白衣の上からもわかる凹凸のある体。埃臭い部屋の中でＰＣに向かうよりも、流行の服を着てカメラを向けられるほうが似合うだろう。
　もう１人はそれとは対照的な老人だ。腰が曲がり始め、髪も薄くなり始めている。年齢的にはもう定年を迎えてもおかしくはない。だが不気味に渦を巻く眼球が、ただものではないことを知らせている。
「皆さん、進捗はどうですか？」
「木原博士、ルナティーク博士……！」
「そんなに慌てなくても、御坂美琴のことは気にしなくても大丈夫ですよ」
「ですが御坂美琴に加えて、正体が掴めないインベーダー。さらには管理局まで嗅ぎつけ始めていますが……」
　若い研究者が言いにくそうに発現する。
「ええ。ですが問題ありません。いくら研究所を潰されようとも、痛くも痒くもない。彼らが行っていたのはしょせん雑務ですから」
「ワシらの頭脳さえ無事なら問題はない。だが、フム、そうじゃな。管理局はワシが何とかすることにしようかねぇ」
　圧力をかけて捜査を遅らせる。いつまでも妨害することは出来ないが、インベーダーを抹殺するくらいの時間は稼げる。あとは適当な相手を犯人にしてしまえば、それで終わりだ。
「御坂美琴に対しては、適当な部隊を配置しましょう。相手は第３位の超能力者……でしたら、やはり『アイテム』をぶつけるのが良いですね」
「ああ、第４位では必勝とはいかんが、近頃反抗期の第２位よりも確実に仕事をこなしてくれるだろうからねぇ。だが、表立って御坂美琴が狙われたとあれば、都合が悪いこともわかってるよね？」
「そうなってしまえば隠蔽にも無理が生じますからね。もちろん、抜かりなく」
　そう言う女性の手には、赤と青２色の、時計型の『何か』が握られていた。

交わる点

場所は路肩に停められた黒いバンの中。４人の中高生の少女達が、その狭い車内で同じディスプレイを眺めていた。

眺めているといっても、別に映画鑑賞をしているわけではない。映し出されているのは、破壊された、何の用途に使うのかも常人にはわからない機械類だ。

「２人組のインベーダーねぇ？」

４人の中でも一番年上の、ギリギリ少女と呼べる年齢の女性が、通信越しの自らの上司にいぶかしげに問いかける。

《そ。片方は電撃使い。通信回線を使ったテロと、電気的な設備に記録が全く残っていないこと、それと魔力反応が無いところから、そう推測されてるらしいの……っていうか、この電撃使いの方……依頼主はどうも犯人を特定してるっぽいのよねぇ》

『ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ』と表示されたディスプレイからは、若い女性の声が聞こえている。もちろん、本当に女性であるかなど分からない。裏稼業を行う身。通信越しの声質ほど頼りないものはない。

《もう片方は少し遅れて現れたの。使う武器は重火器なんだけど、残っていた弾丸と威力が釣り合わないらしいわ。何かしらの能力を持っている可能性が高いわね》

「電撃使いの方。目星がついているのなら、どうしてこちらから超襲撃しないのでしょう？　不意を突いた方が超楽勝だと思うのですが」

《さあ？　手出しは向こうが施設に侵入してきた時のみ。素性は詮索しないってのが、依頼主のオーダーよ》

「はぁ？　何それ。結局意味わかんないんだけどっ！」

至極まっとうな質問をした、中学生程度の年齢の小柄な少女２人だったが、『依頼主の意向』という一言で黙らされてしまう。

《何よ！　私に文句言ったってしょうがないでしょう!?　それに、この手の依頼の相手にはいろいろと事情ってものがあるのよ！　文句言ってないで仕事しろ！》

突如ヒステリーを起こしたように叫びだす声。一番生意気な年頃

の女子を相手にしているのだ。それに加えて依頼主との交渉もある。ストレスは溜まってしまうだろう。
「はーい。わかりましたよー」
「やることは、待ち伏せして敵やっつけるだけか……」
４人の中では真ん中の年齢。髪型は肩で切りそろえられた黒髪。眠そうな瞼。いまいちパッとしない地味な少女は、簡単な仕事で拍子抜けしたと言わんばかりに、今聞いた内容をざっくりとまとめた。
「面倒なのは、２か所狙われる可能性があるってことなのよねぇ」
《そう。もちろん、どちらかだけを守るっていう手抜きは許されないからね！》
「場所が２つで、相手も２人。普通に考えて、同時襲撃される可能性が超高いですよね」
今のところその２人のインベーダーが協力してどこかを襲ったという記録は無いが、この２人が全くの別グループだと考える方が難しい。
セオリー通りなら、二手に分かれるのだが、
「はーい！　片方は私一人で行くー！」
元気よく手を上げるのは、先ほどまっとうな質問をした女の子の１人。ベレー帽をかぶった少女だ。
「どういう風の吹き回しですか？　超不満そうだったのに」
「それとこれとは話が別！　結局、１人で倒せば、撃墜ボーナス独り占めでしょ？」
「はぁ……」
彼女『らしい』発言に、２人の少女がため息をつく。
「わかったわ。でもターゲットが現れたら、連絡は必ず入れること」
最終的にその意見が通されることになった。単独行動を任せられる程度には、少女の実力は理解されているのだ。
「先走るんじゃないわよ。私達『アイテム』の名前に泥塗ってもらっちゃ困るんだからね」
「んっ、もちろん！」
ベレー帽の少女は、ウインクで返答するのだった。

「それはどういうことでしょうか？　この事件の捜査は、我々特務六課に一任するという話ではありませんでしたか？」
「予定が変わったんです。ご理解ください、八神部隊長。あなた方が現在捜査している件は、我々が引き継ぐことになりました」
部隊長室では、はやてともう1人の女性が言い争いをしていた。
はやての横には楯無、クローディア、蛇倉が立っている。だが立場上、ここで口をはさむことは無い。
はやては一方的に告げられた言葉に対して、両手をテーブルに叩きつけ、立ち上がって抗議する。
それを受け止める妙齢の女性は、なんともないというように、事務的に処理をしている。顔には笑みを浮かべ、年下の遠慮のない物言いにも態度を荒げない。
テーブルに叩きつけられた音に対して、妙齢の女性――――テレスティーナ・木原・ライフラインの横に控えている管理局員が反応するが、手を挙げてそれを諌める。
「予定が変わった？」
「はい。当初は人手が足りず、ここに回していた事件でしたが、抱えていた大きな案件が片付きまして。この事件にも人員を割り振れるようになったんです」
「大きな案件……私には心当たりがありませんが……なら、その捜査部隊に六課も参加します。この事件、人手は多いほうがいい。そのはずです」
ここまで調べた案件を他に持って行かれることに納得できない。ここまで強引に話が進むことに違和感を覚えるはやては、何とか食い

下がる。
　だが、テレスティーナは首を横に振る。
「いえ、違う部隊の合同捜査は、かえって部隊員同士の軋轢のもとになるので。特にこの特務六課は、方々からあまり良い目で見られていないようですしねぇ。命令に従って、今回は我々に任せていただきたいです」
「……ッ！」
　捜査の主権を持って行かれるだけではなく、もう捜査することも出来ない。命令のないままで捜査をすれば、不当捜査になってしまう。
「しかし、軍用クローンです！　かかわっている人物も、実験の規模も尋常ではありません！　単なる一事件とみなすのは危険です。多少のリスクがあっても、私たちが合同で捜査したほうが――」
「八神部隊長」
　それでもまだ続けようとするはやての言葉を遮る。
「これはすでに決定したことです。正式な令状もあります。これ以上は時間の無駄かと」
「……ッ」
　確かに、手元にある書類一式は上層部から送られてきたもので間違いない。完璧なモノだ。はやてが多少駄々をこねた程度で覆るものではない。いや、覆るかもしれない。全てが終わった、その後で、だろうが。
「これから六課は通常業務に移行。本来の業務である特殊テロ、特殊犯罪の対策を」
「……今回の事件は、その特殊犯罪には当てはまらないと？」
「それを判断するのは、あなた方ではありません」
　いかに特権を与えられている部隊であっても、上の本気の命令には逆らうことが出来ないということだ。
「それでは。事件の捜査書類と資料は、今日中にこちらに送って下さい」
　にっこりと笑顔を見せたテレスティーナは、部下とともに部屋を退出していった。

扉が閉まると同時に、張り詰めていた空気が緩む。
一様に、残った人たちの顔は暗い。
「部隊長、どうしましょうか？」
蛇倉ははやてに声をかける。
「どうもこうもあらへん。お上の言うことは絶対。組織で働く以上は、そういうこともあるっちゅうことや」
割り切ったようなセリフを吐くはやてだったが、その心情は簡単に推しはかることが出来た。
というか、テレスティーナがいる前では引き締まっていた唇が、への字になっている。分かりやすく納得していないという表情だ。
だが、納得していないのはほかの3人も同じだった。
「この強引なやり方。どうにも引っかかるわね。どう思う、クローディア」
「そうですね。しかも、わざわざここに来たのが、研究者として有名なテレスティーナ・木原・ライフラインということも気になります」
「テレスティーナ・木原・ライフライン……ああ！　あの木原一族か」
蛇倉は手を叩く。
『木原一族』とは『とある魔術の禁書目録』に登場する科学者集団だ。『木原』は科学に対しての副産物の一種で、『純粋な科学の一分野を悪用しようと思う時に、その一分野に現れる実行者』のことだ。木原というだけで科学を愛し、科学に愛され、いずれは科学を悪に染めてしまうという超ド級の変態の集まりだ。
もちろん管理局の研究者として働いているこの世界の木原は、原作とは違い（原作でもそうではあるが）大っぴらに悪事に手を染めているわけではない。
木原がどういう集団かについては、あくまでも噂として、まことしやかに囁かれているだけだ。
そんな研究者であるはずのテレスティーナが来たというのは、確かにおかしいところではあった。
だが、楯無の疑念は、他のところに向いていた。
「……」

「何ですか？　楯無さん。そんなにじっと見て」
「いえ別に？　いつも通りクローディアは勤勉だなって思っただけよ。木原一族のことはともかく、1人1人の名前と顔なんて、私だって覚えてないもの。よく覚えてたわね」
「偶然ですよ。今回の事件のことがあって、個人的に調べ物をしていただけですから。その時に偶然」
「あっそ」
　クローディアはニコニコと楯無の視線を受け流す。
「ともかく！　これ以上の捜査は出来へんってことや。言われた通り、今までの業務に戻るように。スタンドの件と新谷航平の件、やることはいくらでもあるんやからな！　蛇倉さん。悪いけど向こうに送る資料の準備、お願いしてもええ？」
「はい。もちろんです」
　そう言って、さっそく準備をするために部屋を退出した。
「……ま、つまりだ。今フリーな六課は、建前さえあれば無理やりにでも首を突っ込んでいけるわけだ。もともとの目的がそうなんだからな……獲物を横からかっさらわれるってのは、俺の趣味じゃあないんだよねぇ……」
　蛇倉のつぶやきを聞いたものは1人もいなかったのだった。

　そしてその夜。とある研究所近くのビル。その隣のビルの屋上に御坂美琴は立っていた。
「ここを含めて、あと2か所。実験がどんなペースで行われているのかは知りたくもないけど」

電気系では最強の超能力者である美琴の前では、電子的なセキュリティは意味をなさない。いくら魔法や超能力がある世界でも、データの保存に役立つのはやはり電子機器。それで実験を管理している限り、調べられないことは無いのだ。
そこで調べた情報によると、実験に協力している施設は残り2つ。ここまでしてきた破壊活動は確実に効果が出ている。
ここ1週間で、急激にペースが上がったおかげということもある。誰かは分からないが、美琴と同じように実験に加担する研究所を襲撃する人物が現れたのは、美琴にとってありがたい話だった。
「どういう目的で実験を邪魔してるのかは知らないけど、使えるモノはなんだって使ってやるわ」
もう1人の襲撃者は的確に実験に関係ある設備を狙って攻撃している。研究所は残り2つ。今までは奇跡的に同じ場所を狙うことはなかった。だが確率的に、今夜は間違いなく鉢合わせるだろう。
味方かどうかわからない以上、敵対することも視野に入れていかなければならない。
「どっちだろうと関係ない。今晩中に、全部終わらせる……ッ！」
前髪から火花を散らした美琴は、ビルから身を躍らせるのだった。

「はぁ……」
アイテムのメンバー、フレンダ＝セイヴェルンは憂鬱そうなため息をついた。
その胸に大きなぬいぐるみを抱きしめてごろごろと転がっている。場所はもちろん襲撃される可能性がある研究所の中だ。
ここは彼女の自宅ではない。寝転ぶような環境ではないが、何処か

らそんなに持ち込んだのか、大量のぬいぐるみが敷き詰められている。そのぬいぐるみを絨毯代わりにして、くつろいでいるのだ。
「ギャラにつられてＯＫしちゃったけどさぁ、来るかどうか分からないやつを待つのって、退屈なのよねぇ……」
しかも欲を出したせいで一人きりだ。話し相手もいない。まだまだ幼いフレンダだが、抱いているぬいぐるみに話しかけるのは卒業していた。
代わりに不細工なウサギのぬいぐるみの顔を弄ぶ。
「２人いるから２か所同時に襲われるって考えも、結局、浅はかな願望だし」
これまでは効率を重要視して行動していたのかもしれない。標的の研究施設が残り２つともなれば、２人が一緒に行動したほうが、結果的に効率は上がるというものだ。
むしろ２人で行動したほうが、緊急の事態に対応出来る。
「もしも２人そろって、向こうに行っちゃったら、待つだけ待って、なーんにも無し……」
待ちぼうけを食らっただけで、一晩を無駄にするだけ。誰も来なくとも料金は発生するが、花の乙女の一晩を、こんな埃っぽい部屋で過ごさせることと釣り合うかと言われれば、その金額は微妙だ。
その時、
「ッ!?」
研究所の各所に設置しておいたセンサーが反応を示した。研究職員ではない。つまり。
「ウソ――――キタキタキターーー!!!」
しかも反応は２か所から。インベーダーは２人とも、この研究所に来ることを選んだのだ。２人倒せば撃墜ボーナスも２倍。懐に入るボーナスも２倍だ。
「結局、日ごろの行いな訳よ！」
飛び起きたフレンダは、さっそく反応があった場所に向かって走るのだった。

「お疲れ様です。蛇倉さん」
「おう、お疲れ。お前らもほどほどにして帰れよ」
テレスティーナに言われて相手方に送る資料を作成した蛇倉は、残業を済ませてすべての本日の業務をすべて終了させた。
この部隊、人数に仕事量が合っていないため、多少の残業で文句を言ってはいられない。高い志を持つ部隊員は文句を言う事は無いが、国際労働法的には改善は急務だ。部隊長が倒れないうちにどうにかしなければならない。
そんな過酷な業務を終えた蛇倉。これからは『お楽しみ』の時間だ。
「さて。行こうかね。夜勤の連中には申し訳ないが、もう少し働いてもらうとしようか」
そしてこの男も。『教授』に教えられた研究所へ向かって、動き出すのだった。

研究所襲撃（表）　前編

《気を付けてくださいね。翔の入ったところとは別の入り口から、侵入者がいたようです》
「御坂が来たって事か」
《確定ではありませんが、可能性は高いですね》
　俺は現在、目標の施設に無事侵入し、ルートを確認していたところだ。今回ははっきりとした工業というわけではなく、工場とビルが合体したような建物だ。一番下には様々な機械が並べられた簡易的な工場、その上にデータを管理する施設がある形だ。
　目的地はここの一番上。別にそれは問題ない。
　だが、施設は不気味なほどに静まり返っている。ガードマンどころか、警報１つならない。外から見たときには、上の階が明るかった。上には人がいるってことなんだろうけど、だったらこの無防備さは何なんだ？
　御坂の対策でそっちに全員が出払っているのか？　でもここまですっからかんになるっていうのは……
「っ!?」
《どうしましたか？》
　俺が息をのんだのが伝わったのか、それとも今の轟音がマイク越しに伝わったのか。
「御坂が来てる……こっちでも確認した……ッ」
　爆発、轟音。断続的に続いている。特に爆発が鳴りやまない。この施設が耐え切れなくなるんじゃないのかと思うくらいだ。
《どうしますか？》
「音の方向は分かる。向こうに上の階に続く階段があるんだ」
　流石の俺も、高層ビルの壁を登りきる自信はない。
「行くしかないだろ」
　俺は戦闘への参加を決意した。

一方、こちらは御坂美琴。自前の端末と能力を使い、目的のものがある場所を割り出していた。
「ここの最上階か。何事も無ければいいけど……」
協力機関が残り少ないのは、御坂だけではなく相手――今回の実験の首謀者も重々承知しているはず。そして、いままでの防衛設備では全く無意味であることもわかっているはずだ。
「そうは問屋が卸さないわよね……！」
だとすれば。今までとは違う、新しい防衛策を講じていてもおかしくはない。
それでも進むしかない。
美琴は物陰から一気に走り出した。
開けた場所に出た瞬間、
「ッ!?」
天井が切り裂かれた。
建物の天井が、あみだくじのように走った火によってバラバラになり、美琴の頭上めがけて降り注いできた。
「そりゃそうよね……ずいぶんとレベルが上がった気もするけど、っと」
対する美琴の顔に焦りはない。
降り注ぐ瓦礫が、まるで彼女だけを避けているかのように、不自然な空間を作る。その中心に立つ美琴には、埃しか当たっていない。
その様子を物陰から見ていたフレンダは驚愕していた。
（一つも当たらない？　磁力で落下物の軌道をずらしたの？　ふーん、電気系の能力者って情報は確かみたいね）
彼女の右手にあるのは、修正テープだ。一般的なモノよりも少々大きいが、形はそのまま。それを壁に押し当てて、白いラインを引いて

いく。
修正テープのように見えたこれは、この島で作られた小型の導火線を引く道具だ。
（よし、っと。本来はドアや壁なんかを焼き切るための道具なんだけど……）
続いて取り出したのは、アイスピックのような形状の器具。だが針の部分が少し曲がっている。小型の発火装置だ。
「ほい」
それを白いテープに押し付けた。すると、先ほど天井を分解した赤い光が、かなりの速度で白いテープを伝っていく。
その先にいるのはもちろん美琴だ。
地面を高速で這いずり回るその姿は、炎の蛇を思わせる。
「ッ！」
とっさに身を浮かせ、回避する。炎自体はそれほど大きなものではない。軽く飛び上がれば、回避は余裕だ。
だがそれは、彼女を狙ったものではなかった。
（あれ、は？　あれは……ッ!!）
炎の行き先を目で追っていた美琴は、この場にそぐわない不自然なものを目にする。
（にんぎょ――――）
地面を走る炎は人形を真っ二つに焼き切り――――直後に爆発した。
「うッ!!」
高熱が肌を撫でる。磁力と電撃を操れても、迫りくる熱風は防ぐことが出来ないのだ。
「爆弾!?」
慌てて辺りを見ると、そこかしこに同じような人形がゴロゴロと転がっていた。
「どうしてこういう連中は……！」
そして後ろから迫る５つの炎。デモンストレーションは今ので済ませたとばかりに、美琴に迫ってくる。
「ぬいぐるみの中に爆弾を入れたがるのかしらッ!!」

前髪から火花が散った。
「このッ！」
鉄製の部品が組み込まれた壁の破片を操作し、地面を走る導火線の炎の上に叩きつける。炎は瓦礫に阻まれて爆弾まで届くことは無かった。
じっとしていてはいい的だ。御坂は瓦礫の操作をそのままに走り出した。
電撃は相手を射抜く矢にはなっても、爆風から身を守る楯にはならない。だったら、盾を持ち歩くまでだ。幸い、磁力で操るため重量は関係ない。
「あらかじめ部屋に仕込んだ導火線で発火させてるのか……」
走りながらも冷静に現状を分析する美琴。天井や陰に走る白い模様。壁だけでなくドアにもある。
ふと、横目で盾にしている瓦礫の状態を確認して、目を見開いた。
「（瓦礫に爆弾が挟まって――――）このッ!!」
反射的に瓦礫を遠くまで吹き飛ばした。壁に突き刺さったところで起爆する。
「っう……！」
爆弾によってのけがはなかったが、衝撃で尻餅をついてしまう。
「動きが読まれてる……？　アタシが電撃使いだってことも、とっくにばれてるってことか……！」
その通りだった。
そして獲物を誘い込んだ狩人が、攻撃の手を止めることはない。
尻餅をついたままの美琴に迫る２つの炎。
（やば――――）
周りを見て盾になりそうなものを探すが、もう間に合わない。
動かせそうなものが無いのなら、自分が動けばよい。何でもよいからと奥にあるものに磁力の手を伸ばす。そして繋がった瞬間に、全力で引っ張った。
「い、った……！」
爆発は回避することが出来たが、自分と磁力のケーブルを結び付け

た鉄製の壁に、壁が少しへこむくらいの勢いで、思い切り体が叩きつけられてしまう。
「磁力を最大にしての緊急脱出、これだからあんまり使いたくなかったんだけど……っ！　それより相手はどこに……」
レベル５の御坂美琴がいまだに反撃に転じることが出来ない。
先ほどの場所からだいぶ離れたが、ここの床にも白いテープは張り巡らされている。もちろん人形もだ。
だが、張るタイプとは言え導火線だ。とすれば、
「これを辿れば……！」
敵にたどり着くことが出来る。
床に気を取られていたせいで、上への警戒がおろそかになっていた。
気の抜けるような、ロケット花火が点火したような音。
美琴に迫ってくるのは２発のロケット弾だ。
（もう１回、緊急脱出を……！）
だが火花とロケット弾の速度では、後者が段違いに速い。美琴の思考も遅かった。
「ッ!?」
その瞬間、美琴とロケット弾の間に割り込む影があった。１秒の間も無く、ロケット弾は着弾した。
（さてさて、まともに当たったように見えたケド――――）
爆炎が無くなると、座り込んだ美琴の前に、無骨な駆動鎧が立っていた。
（うげぇ、もう１人が合流したって訳ぇ？　こんないいタイミングで……絶対殺れたと思ったのにぃ）
物陰からその様子を見ていたフレンダは、舌を出しつつ、しかめっ面になった。
（しかも直撃で全くの無傷って、どういう絡繰りがあるんだか）
考えつつも奥へ、新しい仕掛けを作りに行く。
一方、美琴と駆動鎧――――翔は。
「大丈夫か、御坂!?」

「は……？　ア、アンタ、どうして……!?」
助けに入った翔を見て、一瞬何が起きたのかわからなかった美琴だったが、流石レベル5の優等生、すぐに答えを出す。
「なるほどね……あんたがもう1人の襲撃者だったわけか」
「詳しい話は後にしよう。目的は一緒だ」
「……わかったわ。後でキチンと説明しなさいよ」
翔と美琴がそろえば、多少のトラップなど、物の数ではなかった。
そうして進むと、やがて上と続く階段が見えた。そこには1人先客がいた。階段の上。長い髪、ベレー帽の少女が、一瞬こちらを振り返り、にやりと笑った。
「あいつか……！」
「ああ……！」
この時翔は、今回の相手が誰なのかを完全に理解していた。
敵を見つけたなら攻撃するものだ。美琴はすぐに雷撃を放つが。
「っち！　鉄骨が邪魔か！」
電撃が鉄骨に吸われるせいで、相手まで届かないことに歯噛みする美琴。もっと威力を上げればそんなのは関係ないが、美琴は別に人を殺したいわけではない。
（後々ちょっかいを出されても面倒だし、先に片づける！）
少しでも情報を引き出すためには、気を失う程度よりもさらに低出力の電撃を食らわせる必要がある。喋ることが出来ても、満足に動けなくなる程度の威力のモノをだ。
「ちょ！　おい待てって！」
キンジの銃技ならば、ここからでも撃ち抜けるかとも思ったが、残念ながら相手との距離が離れすぎている。拳銃は意外と遠くまで狙える武器ではないのだ。技術でもカバーしきれないものがある。
仕方なく走る美琴を追いかけ始める翔。
その様子を上から見ているのはフレンダだ。
「まったく、派手にやってくれちゃって。いつものリモコン式なら、あの時やれてた気もするけど、このレベルの電撃使い相手じゃ、逆に支配されてたカモ。結局、『これ』が正解かぁ」

フレンダが言った瞬間、階下で爆発音が響いた。
通路に張った糸を切ると爆発するという古典的なトラップだ。導火線の火という前兆もなく、電波も出ていないので探知も出来ない。これなら倒せる、はずだったのだが。
（ウソ!?　陶器爆弾を一蹴!?）
物陰に隠してあった爆弾は、単純な爆風だけではなく中に仕込んだ陶器の破片をバラ撒くタイプのものだ。念動力で防いでいると思っている（フレンダはそう思っている）翔と違って、美琴は盾を持っていなかった。十分に効果があると思っていたのだが。
（今まで相手にしてきた能力者とはレベルが違うかも……っ！）
始めて冷や汗を流し、フレンダは階段を上っていく。
「逃がすか！」
必勝を考え、立ち止まっていたフレンダとの距離はもうない。
「直接か間接かは知らないけど、実験に加担する奴は――――許さない！」
美琴が会談の真ん中まで登ったときには、フレンダはすでに一番上にいた。そのまま逃げるのではなく、振り返って自らの体を抱いた。
「ああ！　まずいわ！　捕まったら八つ裂きにされちゃうかも！」
素人でも『誘っている』とわかるくらい、見え見えの挑発を行うフレンダ。
だが、お互いを遮るものは何もない。美琴は前髪から火花を散らし

「くす……なぁぁぁんちゃって！」
それより先に、フレンダの仕掛けが発動した。
階段全体に、赤い炎の蛇が這いずり回る。
天井と同じように、バラバラに分解される階段。
「あ……」
突然の浮遊感に襲われる美琴。
ここの高さは１０メートル程度。美琴に襲い掛かるのは位置エネルギーに加えて、降り注ぐ多数の鉄片だ。
「よし！　結構ギリまで惹きつけたから、結構な高さだった訳よ！

これならいくら高位の能力者、で、も――」
「はッ――――」
この展開を予知していたかの様に、翔の体は動いていた。
一瞬身を屈める。すると体の周囲がラムダ・ドライバの発動により、陽炎のようにゆらめく。
瞬きの瞬間に翔は美琴を抱きかかえていた。見えない空中を蹴り、そのまま階段の上へ。だが、巨大な鉄片が迫っている。
「ハァッ！」
殴られた部分が大きく凹み、軌道が無理矢理変えられる。もはや何の障害も無い。
難なく着地した２人にフレンダは、
「何それズルすぎ……！　逃げないと――――」
思わずそう漏らした。
「逃がすかっての！」
「ふぎぃ!?」
雷速の槍を、生身の人間が躱せる訳がない。
絶妙な力加減で放たれた美琴の雷撃は、フレンダの体を完全に捉えた。
まさにカエルが潰れたような声を出して、地面に沈むフレンダ。走り出そうとしていたため、お尻を突き出してうつ伏せという何とも無様な格好だ。
「アンタね。別に助けなくてもよかったわよ。あの階段、鉄で出来てたから、私の能力があれば落ちなかったんだから」
「そんなの分からないだろ。結果的に無傷なんだからいいじゃないか」
「ま、一応お礼を言っておくわ。そもそも――――」
言い争いしている間に逃げられないものかと、もがくフレンダ。
「――――ともかく。アンタには色々と聞きたいことはあるわ。本当に色々と！　でも、まずはこっちよね」
「ああ。そうだな」
美琴と翔はそろって顔を向ける。

電撃によって、いまだに手足の先をピクピクとさせているフレンダは、自分がいかに分の悪い勝負をしていたのか、今更ながらに理解した。

しかし、理解してももう遅い。

フレンダの戦闘スタイルは、爆薬を使った良くも悪くもド派手なものだ。一応対人格闘術を学んではいるが、この2人に対しても武器としては心もとない、というよりも役に立たないだろう。

（ううっ～……どうしようどうしよう！　ひょっとしなくても私、大ピンチな訳!?）

内心では焦りまくっているフレンダだったが、顔には出せない。電撃のせいで、引きつった笑み程度にしか動かすことが出来ないのだ。

「こうしてしっかりと妨害されたのは初めてだからね。どう見ても堅気の人間じゃないわよね、あんた。アタシよりも年下っぽいのに、能力者と戦いなれてる」

「おまけに武器の爆弾も。あんな量、そうそう用意できるもんじゃないだろ（や、まあ、フレンダなんだから、当然っちゃ当然なんだけど。となると、どこからアイテムが出てきてもおかしくないな）」

翔は目の前のフレンダよりも、周りにいるであろう敵に意識を割き始めた。フレンダへの尋問は、美琴に任せることにしたのだ。

「あんたにはいろいろと聞きたいことがあるわ。計画について知ってること、洗いざらいしゃべりなさい。主導してるメンツは？　あんたを雇ったのは？」

（や、そういう情報は知らないし……っ！）

何とか体を起こして美琴と対面するフレンダだが、まだまだ体が自由に動く段階ではない。

「そもそも、アンタ1人なの？　ほかに仲間がいるんじゃない？」

（はっ！　仲間を売るなんて、そんなこと出来る訳が――）

視界が真っ白になるほどの閃光が、2人の間で迸った。いくら出力を押さえたとしても、その一撃は落雷と称して問題ない。精密なコントロールで、フレンダの足元が抉られていた。

「喋らないってんなら――」

（違う違う！　痺れてるせいでまともにしゃべれないんだって!!）
（気の毒に……）
コロっと心の態度を変えるフレンダ。
フレンダの心を読めるわけではないが、翔はフレンダを慮って合掌していた。
「「ッ!?」」

一瞬で壁が赤熱化。融解する。そこからビームとしか形容できないモノが俺たちに向かって迫ってきた。
翔達のいた場所、正確には美琴のいた場所が撃ち抜かれた。ビームの勢いは衰えず、そのまま反対側の壁に着弾する。ビームが止まると、綺麗な穴が開いていた。
「あらら？　あんまり静かだったから、てっきりやられちゃったと思ったけれど」
最初に開けられた穴から、女性の声が聞こえてくる。
何も持っていない、服も何ら特別なものではない。だが、いまだ高熱で赤くなっている大穴を、何のためらいも無く跨ぐその姿は、どう見ても一般人ではない。
「むぎにょー！」
「来たか……」
フレンダは歓喜の声を上げ、翔は唇を噛む。
「危機一髪だったみたいねぇ――――フレンダ？」

研究所襲撃（表）　中編

「あんまり静かだったから、てっきりやられちゃったと思ったけど」
この場にはそぐわないヒールブーツを鳴らしながら、俺達へと近寄ってくる女性――麦野　沈利。
同じレベル５の御坂の顔を知っているのかは知らないが、その歩みに迷いはない。絶対的な自信に満ち溢れている。
フレンダはこの援軍に涙ぐんでいる。
フレンダのすぐ横まで歩いた麦野は、やれやれといった具合にしゃべりだした。
「全く、私らが到着するまでは足止めに徹してろって言ってたのに」
「っぁ……」
「深追いした挙句、返り討ちにあって捕まっちゃうなんて……撃破ボーナスに目がくらんだからって、何やってんだか」
フレンダから滝のような汗が流れる。裏でどんなやり時があったのかは分からないが、ぐうの音も出ないほどの正論なんだろう。
麦野のインパクトがすさまじかったからか、それとも麦野に比べて格好が地味だったからか、これまで一言もしゃべらずに後ろをついてきた少女が、今更ながらに視界に入る。
そのまま街を歩ける格好である麦野とは対照的に、ピンクのＴシャツにジャージという年頃の少女が人目にさらすには少々ラフすぎる格好。顔は整っているが眠たげな印象、というよりも半分閉じたような瞼で、色々と台無しになってしまっている少女だ。
「大丈夫だよフレンダ。私はそんなフレンダを応援してる」
「（『そんな』って何、そんなって……）
彼女の名前は、滝壺　理后。麦野の立派な仲間だ。
彼女たち――麦野　沈利、滝壺　理后、フレンダ＝セイヴェルン、そしてここにはいない絹旗　最愛の４人――は、『とあるシリーズ』に登場する暗部組織の１つである『アイテム』のメンバーだ。
暗部組織とは、後ろ暗い任務を行う集団のことで、様々な事情（人質や、他に行き場所が無い、自ら望んでなど）で集められた人たちの

事で、まあ言ってしまえば、良いことをする奴らではない。
この世界ではどうなっているのかまだわかっていなかったが、この様子を見る限り、その辺りは原作と大差ないようだ。
だが、御坂にそんなことは関係ない。
明らかに増援で、あの強力な能力。御坂も薄々気が付いているのかもしれない。目の前の女が自分(レベル5)に匹敵する相手だと。
そんな美琴の攻撃は初手から苛烈だった。
磁力を使って手近な鉄片を投げつける。文字で書いてしまえばそれだけだが、ちょっとした交通事故並みの暴力を初手でお見舞いした。
「おっと」
対する麦野は軽い調子で、右手を前に出した。
麦野に衝突したかに見えた鉄片は、崩れるようにバラバラになる。
「で、あんたらが噂のインベーダーで合ってるわよね？」
「御坂、後退しよう。正面から撃ち合うのはマズイ……！」
「そうね、あの女の能力、普通じゃないわ……！」
だが、相談する暇なんて与えてもらえるわけがない。
「あ、あはははは、あはははは――――！　ここまで来て逃げる相談か!!」
壁をぶち抜いたときと同じ光が麦野の胸の前で収束し――――俺達2人に向かって放たれた。
「ッ!!」
ギリギリのところで回避する俺達。
御坂は同じように鉄片を投げつける。俺も援護として銃弾を放つがまるで効果無し。光線と同じ光が薄く、丸く、麦野を守る盾のようになることで、そこにあたった鉄片は残らず消滅する。
「ふーん、パワーは結構あるみたいね。でも無駄よ。いい加減理解しなさいな。そっちのあんたも。拳銃なんて無意味だから」
「っ、コイツ……！」
「まぁ、そうだろうな……！」
俺達は2人そろって歯噛みする。

「滝壺」
そう言って麦野は後ろにいる滝壺に何かを投げ渡す。小さいプラスチックのケースのようだ。
「使っておきなさい」
「んっ」
受け取った滝壺は小さく頷いた。
「このっ!!」
「アンタらはこっちだっての！」
麦野を即座に無力化するのは難しいふんだ俺は、滝壺に銃口を向けた。直接当てるのではなく、手に持ったケースを撃ち落とす。みすみす使われるわけにはいかない。
だが、それを許す麦野ではない。埃を手で払うように、発射されたままのビームを、そのままビームサーベルのように横なぎに振るってきた。
建物を輪切りにするような、俺達を殺すためならここがどうなっても良いのかと錯覚するような攻撃だ。
「うわッ!!」
無意識に展開しているラムダ・ドライバが悲鳴を上げる。が、強度を上げることで何とか持ち直した。
「へぇ!? あんたもおもしろい能力持ってるんじゃない！ そっちの女は蜘蛛みたいだしさぁ!!」
磁力を使って壁に張り付く美琴には絶えず光線を放っている。光線の出処は麦野の体を守るように周囲を漂う小さい光球だ。
反撃の電撃も効果が無い。
電撃は光球に触れた瞬間、無理やり軌道を曲げられ、明後日の方向に着弾する。
「（電撃を強制的にっ、曲げてるっ!!） 同じ系統の能力者か……！」
御坂は麦野の能力に近づきつつあるみたいだ。
しかし、遠距離戦では分が悪い。かといってこの攻撃。近寄ることも難しいだろう。
避けつつ考えていると、視界の端に棒立ちでじっと俺を見てくる滝

壺の姿が目に映った。
眠たそうだった瞼は、眼球が取れてしまうのではないかと思うほど見開かれている。
「ッ！　もう体晶を使ったのか……！　下がるぞ！」
「わかったわ！」
御坂も滝壺のただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、俺の意見に賛同してくれる。
俺は背中に背負っていた特殊弾頭を装填できる銃を手に取り、引き金を引く。視認できるくらいの弾速で放たれた直径３センチの円柱は、地面に落ち、煙を吐き出し始めた。それはもの数秒で辺りに充満する。
「ッ！　煙幕か……うっとおしい……！」
麦野の声を背中に受けつつも、撤退を開始する。俺達はなんとか距離を取ることに成功したのだった。

「逃げたか……滝壺」
「大丈夫。ターゲットのＡＩＭ拡散力場は記憶した。でも男の方は超能力者じゃなかったから追跡できない」
「ふーん、でも魔法や魔術って感じもしかなかったけど……じゃあ女の方だけでもいいわ。教えなさい」
滝壺の黒目はせわしなく動き、焦点があっているようには思えない。しかし彼女にはもっと別のものが見えていた。
「１０時の方向、距離は凡そ３０ｍ」
「はいよ」
浮いていた３つの光球が集まり――――射出された。

もちろんビルの外壁は耐えきれず、大穴が開けられる。
「（うへぇ～……相変わらず派手な能力）どう？　やった？」
フレンダはすっかり見慣れた麦野の能力に内心恐れつつ、攻撃の結果を聞いた。
「いや……あの壁に当たったような感触……駆動鎧の方ね。これはラッキー。２人とも一緒にいるみたいね。さてさて、いつまで逃げれるのかなぁ」
麦野は第２射を開始した。

「ちょ、下ろしてよ！」
「いいから乗っておけ！　俺の方が速い！　それに能力を使いすぎただろうが！」
「ッ、あ、あたしは大丈夫だから！　下ろしなさいって！」
言い返す御坂の抵抗は弱々しい。確実に消耗しているのだ。
そもそも何の能力も付与されていない女の子の細腕で、アーバレストを着こんでいる俺の腕を動かすことなんて出来るわけがない。
「あのレベルの敵を３人も相手にしてたら、いくら時間があっても足りないな！」
「特に後から現れたあの女。あいつはヤバいわ。あの規模の能力――超能力なら違いなくレベル５よ！」
話していると、横の壁がいきなり爆ぜた。
ラムダ・ドライバの防護フィールドがぐにゃりと歪む光景を幻視する。だが、歪んだだけで、光線の方が逸れていった。
「ちょッ！」
突然の横からの衝撃で、俺達は転倒する。間違いなく先ほどまで

戦っていた麦野のビームだ。
「ど、どうして？　こんなに正確に位置が……うわっ」
　呟いている御坂を背負い直して走り出した。すると２秒前までいた場所にビームが着弾する。
「やっぱり位置がバレてる……探知系の能力者がいるわ！」
「ああ！　さっきの奴らの中にいるぞ！　レベル４の能力者が！」
「は？　あんた知ってるの？」
　この状況では仕方がない。御坂に情報を共有する。
「ああ、名前は滝壺　理后。能力の名前は能力追跡（ＡＩＭストーカー）。ＡＩＭ拡散力場は知ってるか？」
「ええ。超能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールドよね？」
「そうだ。滝壺　理后は相手のＡＩＭ拡散力場を記憶して、その位置情報を検索することが出来る」
「じゃあそういつの検索範囲外に出ないと……！」
「ちなみに太陽系の外に出ても補足されるらしい」
「はぁ!?」
　一度記憶されてしまえば、一生逃げられないのだ。
　俺は超能力の開発を受けていないので、今回探知されているのは御坂だけのはず。能力に変更が無ければな。
　ちなみに言うと滝壺はこの能力を使う時、『体晶』という物質を使って意図的に能力を暴走させている。もちろん体への負担はデカい。
「そしてさっきまで俺達が戦っていたのは、第４位の超能力者、麦野沈利だ。能力の名前は原子崩し（メルトダウナー）。どんな能力かは……ええと……とりあえず全身からビームを出す能力って覚えてけ！」
「説明が適当すぎるでしょ！　というか、私と同じレベル５なら、どんな能力かくらいは知ってるわよ！」
「ええ……」
原子崩し（メルトダウナー）。正式名は『粒機波形高速砲』。
　本来『粒子』又は『波形』のどちらかの性質を状況に応じて示す電子だが、麦野はその二つの中間である『曖昧なまま』の状態に固定し

強制的に操ることが出来る。
『曖昧なまま固定された電子』は『粒子』にも『波形』にもなれないため、物体に衝突すると『留まる』性質を持つようになる。
この『留まる』性質により擬似的な『壁』となった『曖昧なまま固定された電子』を強制的に動かし、高速で叩きつけることで絶大な破壊力を生み出すのだ。見た目はビームになる。
こんなこと、とっさに説明出来るかッ！
「来るッ!!」
「っちぃ！」
根っこの部分では御坂と同系統の電撃使い。なのでお互いに干渉しあうことが出来るのだ。相手の攻撃を受け流したり、攻撃を事前に察知したりな。
防御に神経を使わなくてもいいからか、光線の威力はさっきよりも高い。ラムダ・ドライバで防ぐのもギリギリだ。
御坂の警告と着弾はほとんど同時。今度は転ばないように踏ん張るが、どうしても足は止まってしまう。
さらに何やら聞こえてくる音。
あの地面を走る炎は――――フレンダの導火線か！
「この――――ッ!!」
敵は麦野と滝壺だけじゃない。ここはそもそも、フレンダのトラップが張り巡らされているんだ。
ありったけの意志を込めて出力を上げる。
爆炎が目の前で逸れる。炎だけではなく熱すらもこちらには来ない。
「結構絶体絶命だな……！」
この遠距離からの正確な射撃。例え能力を全開放しても反撃できるのか怪しい。
「御坂、このままだと不味い！　ここは一度施設から脱出して体勢を立て直した方が――――」
「ふざけないでッ!!」
俺の提案は激しい一喝によって一蹴される。

「逃げるなら1人で逃げて！　私は……私はッ！　ここまで来て逃げる訳にはいかないの！」
「そんなこと出来る訳ないだろ……！」
ここで2人で争っている場合ではない。
御坂を下ろしてしまえば、超能力者ではない俺は能力追跡（AIMストーカー）から逃れることが出来る。だが、御坂は1人でも戦い続けるだろう。原作では逃げ切れたが、絶対逃げ切れる保証はない。
「……っ」
結局俺は、当初の目的地を目指すことにしたのだった。

「ッ!?」
攻撃を続けて10分余り。たった今撃った原子崩し（メルトダウナー）の奇妙な感触に麦野の表情が変わる。
「今のは……私の原子崩し（メルトダウナー）に干渉した……？」
「麦野？　何があったの、って滝壺!?　あんた大丈夫な訳!?」
「っ、ぁ……ハア、ハア、ハア……！」
滝壺は大きく息を切らし、膝から崩れ落ちた。全身に汗をかき、明らかに異常だと言える。
「よし。滝壺、フレンダ。あんたは先に戻ってなさい。後は私がやるわ」
「っ、だ、大丈夫！　私はまだやれるから……！」
ぽたぽたと滴るほどの汗をかいた顔で麦野を見る滝壺だったが、とてもやさしい顔で諭される。
「滝壺の負担もそうだけど、フレンダもアイツらからのダメージがあるでしょ？　無理してるけど動きが悪いわ。滝壺に限界が来た場合、

敵の反撃を察知できない。私1人であなたたち2人を守るのは難しいわ」
「……ごめんね、足引っ張って」
どんなに武装しても埋まらないレベル5との差に、フレンダは思わず謝罪する。
「別に責めてやしないわよ。むしろよくやってくれたわ。2人のおかげで相手は虫の息だしね。絹旗にも連絡するから、休んでなさい」
そう言って、麦野は自ら電話をかけようと端末を手に取る。すると、戦っている間にメッセージが来ていたことに気が付いた。
「……向こうの研究所に正体不明の怪物が出て、絹旗と連絡が取れない？　しかも下部組織も動けないって……はぁ……面倒なことになってるわねぇ」
そういいつつも、一応絹旗の番号にかけてみる。
《もしもし、麦野ですか？》
「あー良かった。繋がったわね。そっちはどう？」
《たった今、侵入者と思われる女を超拘束したところです》
「ご苦労様、と言いたいところなんだけど、そいつ運ばなくてもいいわ。依頼のインベーダー2人はこっちに来たから」
《良いんですか？　同じ一味かもしれないですよ？》
「あんたがそこまで仕事熱心なら運んでもいいけど。今は車回せないらしいわよ？　そこで変な怪物が暴れまわってるんでしょ？　合流ポイントまでアンタが担いでいく事になるわよ」
《あー……》
絹旗の能力なら、人を1人運ぶくらいなんともないが、それでも面倒なものは面倒なのだ。
《分かりました。超撤退することにします》
「了解。滝壺とフレンダと合流して。私も、サクッと殺して合流するわ」
2人と別れた麦野は、原子崩し（メルトダウナー）の光を頼りに、暗い通路を進んでいく。
「まあ、邪魔な奴もいるけど、こんな機会そうそうないもんねぇ？」

麦野の原子崩し（メルトダウナー）に干渉する。執拗に攻撃を繰り返して消耗しているだろうに。それだけのスペックを持つ超能力者は1人しかいない。

第3位と第4位。数字によって明確に上下を決められた同じ系統の能力者。

「第3位――――常盤台の超電磁砲（レールガン）……ッ!!」

犬歯をむき出しにして、麦野は笑った。

研究所襲撃（表）　後編

研究所の外へ出る頃には、滝壺は自分の足で歩くことすら難しくなっていた。フレンダは自分よりも体格の良い滝壺に肩を貸しつつ、何とか合流ポイントまで到着した。

そこでは3人の男たちが車を用意して待っていた。滝壺の様子で察したのか、すぐに上着を持ってくる。

「お疲れ様です」

「撤収するわ！　麦野は後で合流！　先に絹旗と落ち合いましょう！」

迅速に車は発進した。

後ろのブリーフィングルームも兼ねている席に2人は座る。

2人とも疲れ切り、全力で体重をシートに預けた。

「ふあぁぁー、疲れたぁー……早く帰ってシャワー浴びたーい」

「……フレンダ」

少々オーバーに疲れを表現するフレンダに、滝壺は少しだけ顔色の良くなった顔を向ける。

「フレンダだけだったら、別に帰る必要なかったのに……」

「いいの、いいの。後は麦野に任せておけば大丈夫でしょ。結局、滝壺がいたから一方的に追い込めたんだしねー」

先ほどまでは爆弾で援護もしていたが、全力の麦野の前では、逆に邪魔になる可能性の方が高い。

「それより、そんな無茶な力の使い方して大丈夫？　見てるこっちが心配になるんだけど」

この状態になるのはこれが初めてではない。自分で立てなくなるくらいまで使うのは珍しいが、能力を使った後はいつも調子が悪そうにしているのをフレンダは覚えている。

「ん、大丈夫だよ。私の居場所、ここだけだから。頑張らないといけないし」

「うぅ、ん……そっかぁ……」

ここにしか居場所が無い。

暗部にいる理由は人それぞれだが、滝壺の性格とこのセリフから考えれば、生活の諸々を暗部に依存しているのは想像に難くない。
かわいそう、だとは思わない。汚れ仕事を選択したのは滝壺自身だからだ。滝壺の能力なら、それこそ管理局にでも行けば良いだろう。
そうしないのは、単に順番が早かったからだ。管理局に見つかるよりも、暗部に見つかる方が速かったから。
自分の居場所を守ろうという気持ちがあっても、自分から居場所を創ろうという気持ちにはならない。
そしてそもそも、自ら暗部に留まるフレンダが何かを言える立場ではない。
「いつか他にも、滝壺の居場所が出来るといいね」
「……どうだろうね？　わかんないや」
「やっぱり、男じゃない？」
「男？」
「そう！　男よ！　結局、女っていう生き物は、恋をすると別人になる訳よ！　だから恋をするといいわ！」
「そういうものなの？」
滝壺にはとんと縁のない話だ。
暗部にいれば出会いはゼロ。周りにいる人間は、基本的に暗部に落ちたどうしようもない奴らばかりだ。
「まあ、彼氏ができたからってすっぱりと辞められるようなところじゃないけど。結局、そういう理由があったほうが絶対良いって訳よ！」
「そういうフレンダには、相手がいるの？」
「うっ……や！　友達がいないってわけじゃないんだけどね？　結局、こっちの仕事の方が優先になるって訳よ……暗部だと出会いもないし……」
「……大丈夫だよ。私は、そんなフレンダを応援してる」
「どうして元気づけてるはずの私が、逆に励まされてる訳?!」
そんな、年頃の乙女のような話に花を咲かせていると、
「あっ、ああああああああああああああああ――――!!!!!」

「っ!? ど、どうしたの……？」
表情がころころ変わるフレンダ。ついさっきまで軽く笑っていたというのに、今は顔を青くしている。
「ぁぁ、ああ……爆弾」
「え？」
「爆弾、回収してなかったぁ……！」
そんな悲痛なセリフに、滝壺は首を傾げるだけだった。

目的地に行くには、この部屋を通らなければならない。どういう用途で使うのか、コンクリートむき出しの広い部屋だ。天井は１０メートルと高く、部屋の中央には太い柱がある。
遮蔽物はそれだけだ。もっとも、これから戦う相手を考えれば遮蔽物なんてなんの意味もないだろうが。
麦野はそこで待っていた。
１人で壁に寄りかかり、目をつぶっている。周りを見ても、フレンダと滝壺の姿はない。どこかに潜んでいるのか、他の場所を守っているのか、それとも一足先に脱出したのか。
確か原作では先に研究所を出た筈だが、ここではどうなっているのだろうか。途中から攻撃が止まったことを考えると、能力使用の限界になったとみるべきか。
どちらにせよ、ここまで近づいたら滝壺は役に立たない。でも、フレンダはトラップの使い手だ。何が仕掛けられているのかわからない。
目の前の脅威を突破しなければならない事実に変わりはない。
「ずいぶんな重役出勤ぶりねぇ、第三位……はぁ？」

麦野の挨拶の勢いが、いきなり悪くなる。理由は絶対に、俺達が両手いっぱいに持っているものだろう。
それはぬいぐるみだ。すべて同じデザイン。茶色い髪の毛を肩で切りそろえられ、赤いリボンが飾られている。目はボタン。口は雑に糸だけで表現され、服装はメイドさんってところだ。
この人形の元の持ち主はフレンダだ。
俺達は逃げ回りながら施設中に張り巡らされた導火線を辿り、この人形を回収して回った。最初の内は、これ以上爆発しないようにという考えだったが、そのうちこれを武器として活用しようという考えに至ったのだ。
俺達の後に、宙に浮いたぬいぐるみが大量に部屋に入ってくる。
採集した金属片を仕込み、御坂の能力で操れるようにした一品だ。
麦野の頬がひくひくと動いている。これが一体誰の置き土産なのか理解したんだろう。
「他の奴らはどうしたんだ？」
俺は確認も兼ねて麦野に問う。これが戦闘前の最後の会話になるだろうと予想しながら。
「帰したわ。そっちの女とはサシで勝負したいのよ、超電磁砲（レールガン）」
「やっぱり、私のことは知ってたのね、原子崩し（メルトダウナー）」
「別にアンタのファンって訳じゃないんだけどね。目の敵にされる理由、1つや2つくらいは思い当たるんじゃない？」
「……」
思い当たるんだろう。御坂は何も答えず、代わりに人形を投げつけた。
「ッ!!」
いつもの御坂に比べると、ごく微弱な電撃が人形を打ち抜いた。
爆弾使いフレンダの人形だ。中に仕掛けられている爆弾も一級品。
それが麦野の目の前で爆発した。
「ふーん」
爆炎の向こうから聞こえてくる声に焦りはない。
「消耗している分、フレンダの爆弾でカバーしようってか？　でもそ

れって、もう自力じゃ私を倒せないって白状してるようなもんだよねぇ」
麦野は原子崩しを盾のように展開して、爆風から身を守っていた。
「御坂、見ての通りだ」
「なるほどね。真っ正面からじゃ、意味ないってことか……！」
「作戦通りに、何とか隙を作って一発で決めよう。ちまちま攻撃すると、無駄に怒らせることになる」
「……信用するけど、本当に行ける？」
「何とかするって」
麦野の能力は非常に強力だ。攻撃性能で言えば順位の差をひっくり返して御坂を上回るかもしれない。だがその分、繊細なコントロールが必要になり、防御面では弱いという弱点を抱えている。
麦野の狙いはあくまで御坂。俺は添え物程度の認識だろう。
そこを突いた作戦だ。
御坂が多数の人形を従えて一歩前に出る。
「アンタの能力、いちいち狙いをつけて撃たないといけないみたいね」
強力な分扱いが難しい。適当に使えば、自らが怪我をする。
「この数を、相手にできるのかしら？」
ぬいぐるみが一斉に襲い掛かった。
御坂の指摘は当たっている。それを俺は知っていた。
だが、それ以上に麦野は自分の能力を知っている。
「はっ――――」
麦野はポケットから取り出した黒い板を軽く投げる。縦２０センチ、横１０センチ程度の長方形。板チョコのように規則正しい直線と斜めの模様が入ったソレに、原子崩しを照射した。
次の瞬間、板に当たった原子崩しが板をバラバラにする。原子崩しが当たった結果だといえばそうだが、それは単に破壊したわけではない。
バラバラになった板それぞれが、鏡のように原子崩しを乱反射する。
１本だった原子崩しの光線は、幾条もの光となって、飛んでいたぬ

いぐるみを撃墜した。
「拡散支援半導体（シリコンバーン）。弱点を対策してないと思った？」
麦野の手には5枚の拡散支援半導体（シリコンバーン）が握られていた。
いくら人形を差し向けても、厚い弾幕を突破することは出来ない。
空を飛んでいたぬいぐるみは、いつの間にかなくなっていた。
「……おいおい」
麦野はため息をつき、人差し指を向けてくる。
「脇役はすっこんでろよ」
真っ正面から突進した俺は、原子崩し（メルトダウナー）と衝突した。
「ハッ、バカが!!　その妙なバリアごとブチ抜いてやんよォ!!」
「ッ!!」
前方からの圧力が一気に増した。
虫メガネで太陽の光を集めるように、何本もの原子崩し（メルトダウナー）が一点に集まり、ラムダ・ドライバの斥力を突破しようとしてくる。
それでも、前に進む。一歩、一歩、前へ。
そして、とうとうその距離になった。
俺は右手を前に突き出し、ラムダ・ドライバを停止させる。視界は変わらず光しか見えないが、右手に凄まじい圧力を感じる。
そしてその直後、
幻想殺し（イマジンブレイカー）が原子崩し（メルトダウナー）を打ち消した。
『アーバレスト』はあくまで『アーム・スレイブ』という兵器。異能の力を使っているわけではないため、使おうと思えば幻想殺し（イマジンブレイカー）は使うことが出来た。

特徴のある能力だし、最後まで使用はためらわれていたけど、こうなってしまっては仕方がない。
「なん、だ――――」
「やれッ!!　御坂!!」
「おお――――っりゃあああぁぁ!!」
俺の背に隠れていたぬいぐるみが、猛スピードで麦野へ突撃した。
自慢の原子崩し（メルトダウナー）を打ち消された衝撃で、麦野はまともな行動をとることが出来ない。
ゴスッ!!
見事眉間にぬいぐるみは命中した。しっかりと金属を仕込んだぬいぐるみだ。御坂の磁力操作で、ぬいぐるみは空飛ぶ鈍器に変貌する。
白目をむいて麦野は気絶した。
起き上がる気配はない。
「「ふぅ……」」
俺と御坂は2人して息をつく。
「とりあえず、倒したな」
「そうみたいね」
今のうちにと、俺達は先へ進む。
麦野に話を聞きたい気持ちはあったが、今はそちらが優先だ。次に戦ったら、同じ手は通用しなくなる。もう邪魔されるわけにはいかない。
麦野を突破した俺達には、もう敵はいなかった。
やすやすと目的の場所にたどり着く。沢山のモニターが並んだ部屋、最近ではよく見た光景だ。
銃を向けようとして御坂に制される。
「私がやるわ」
電撃が放射され、すべてのモニターの電気が消える。これだけで、すべての機器が使えなくなったらしい。
これで一番の仕事は終わりだ。
「これからどうする？」

「戻って原子崩しから情報を聞き出しましょう。本当は早めに次の研究所に行きたいけどね」
――コツ。
「ッ!!」
後ろで足音が聞こえた。
その瞬間、何度も見たあの緑色の光線が、俺と御坂の間を斬り裂いた。
転がるようにして机の後ろに隠れる。
入り口にはちらりと麦野が見えた。
「アイツ、もう起き上がって来たのか……!」
頭からは血を流しているが、能力には消耗が見えない。
狭い部屋があっという間に光線に埋め尽くされる。大して狙いをつけていないのかもしれないが、それがかえって近寄りにくくしている。
この状態じゃ、話を聞くどころじゃないな。
「こっち!」
原子崩しではない光が、壁を打ち抜いた。それは御坂の伝家の宝刀。超電磁砲の光だ。
逃亡用の大穴が作られる。
「逃がす――っ!? クソが!! うっとおしいんだよテメェ!!」
弾を撃ち尽くす勢いで散弾銃を撃ちまくる。
悉くが原子崩しの壁に阻まれて麦野まで届かないが、それでも足止めくらいにはなる。
俺に気を取られているうちに、御坂が脱出する。続いて俺だ。ラムダ・ドライバの防壁が削られる感触を感じつつ、穴に転がり込んだ。
ここはビルの最上階。御坂はすでに隣のビルに飛び移っていた。
お土産のスモークグレネードを発射し、俺は大空に身を躍らせた。最後の原子崩しが命中するが、その勢いをそのまま逃亡に使わせてもらう。
隣のビルに到着する。
律儀に待っていてくれた御坂と、この場から離れた。

「――――っ!!　――――っ!!!」
麦野は穴のふちに立って、いまだに原子崩し（メルトダウナー）を乱射している。
だが、これだけ距離が離れてしまえば、まず命中することはない。
ギリギリのところで、俺達は逃げ出すことが出来たのだった。

フレンダは気が気ではなかった。
絹旗にかかってきた電話。その結果次第で自らの生死が決まるといってもよい。
「はい……はい……わかりました。それではまた後程」
絹旗は電話を切った。相手は1人で残っていた麦野だ。
滝壺は規則正しい寝息を立てている。体調はすっかり元通りになっていた。
アイテムのメンバーは適当な駐車場に車を止め、麦野からの連絡を待っていたのだ。
「麦野、インベーダーに逃げられてしまったようです。まさか麦野が仕留めきれないとは思いませんでした」
「へ、へぇ～？　そうなんだぁ～？」
絹旗は麦野との連絡結果を簡単に報告する。
仕留めきれなかったという報告に、フレンダの冷や汗の量はどっと増える。戦闘中、強力な能力者と丸腰で相対したときのような緊張感だ。そしてその例えは、あながち間違いではない。
レベル5の麦野が仕留めきれなかった。そこには理由があるはずだ。予定外のイレギュラーが絶対にあるはずなのだ。
「ち、ちなみに、麦野は何か言ってなかった？　ほら、爆弾が、うんぬん、とか？」

「いえ？　そういうことは言っていませんでしたが」
フレンダはホッと胸を撫で下ろし――――
「フレンダは、お　し　お　き　か　く　て　い　ね……だそうです」
「ゴフッ……」
吐血して倒れた。

研究所襲撃（裏）　前編

「本当か！」
「はい。２人とも、向こうの研究所に現れたとのことです」
「良かった……！　こっちも、移送を急がせてくれ。３人目の襲撃者が現れないとも限らないからな」
　心の底からほっとしたという口調で、白衣の中年男性たちは胸を撫で下ろしていた。
　ここは残り２つになっていた研究機関、翔と美琴に襲撃されていない方だ。
「あ、すみません！」
「ん、なんだ？」
　若い研究員が、声をかけてきた。
「お客様が、その、ずいぶんと若い女性なんですけれど」
「ああ！　はいはい。すぐに行くよ」
　待合室まで急ぐ中年研究員。そこにいるのは確かに若い白衣姿の女性、少女と言っても良い年齢だ。
「いやー、お待たせしてすみません。初めまして、えー、あなたが……」
「御社の学習装置（テスタメント）の監修をしました、布束　砥信です」
「こんな若いお嬢さんだとは、いえ、だからなんだというわけではないんですけどね？」
　思った通りの感想を告げようとして、慌てて失言だと言葉を打ち切る研究員。近頃はこの程度の言葉でセクハラだといわれるのだからやりにくい。
　今では、若い職員との会話には注意を払わなければならないくらいだ。
　それに、年齢に関係なく布束の仕事は完ぺきだった。この年齢で仕事をしているというのは、それだけ才能がある証だ。仕事の世界で年齢が関係のないことぐらい、研究員には分かっていた。
「すみません。特にお願いすることがあるわけではないんですが、なにぶんここまで大掛かりな移送は初めてのものでして」

意識を切り替え、会話を始める。
「なので、関わられていた布束さんに万が一のためにいてもらおうかと」
「了解しました」
「ありがとうございます！　……それでは、何かあればお願いすると思うので、それまで待機しておいてください」
「はい」
そう言って、研究員は部屋の外に出た。
布束は扉から目を離し、出された紅茶に向けるのだった。

「ありゃあ、カタギの車じゃあねえな」
蛇倉は隣を通り過ぎて行った黒塗りのバンを見て呟く。証拠があるわけではない。しかし、勘でそう断言することが出来た。
車が来た方向にあるのは、蛇倉の目的地――『教授』によってもたらされた情報にあった研究施設の駐車場だ。
「暗部連中のボディーガードか。こんな早い時間に店じまいか？　それとも別の用事ができたのか……御坂　美琴と夜月　翔はもう１つの方に行ったって事か？」
当然、『教授』には今回の事件が見えていた。美琴と翔が関わっていることもすべてお見通しだった。そして、２人とも暗部に協力を仰ぐわけがないことも、情報としてもたらされていた。
「まあ、向こうの工場に出たからって、暗部連中全員が向こうに行くとは考えにくい。何人かは残ってるだろうな……時間丁度だな。お嬢ちゃん」
「……はい、これ」

突然知覚出来るようになった小柄な女性。周りに隠れるところがあるわけではない。蛇倉にすら気配を悟られることなく、女性はそこに立っていた。
能力の組み合わせによって完全な隠密行動が可能な透明人間。翔とフェイトから逃げおおせた犯罪者。ライだ。
彼女の手には小さなジュラルミンケースが握られている。
短く言い、それを蛇倉に向かって突き出している。今回のライの用事はこのケースを蛇倉に届けることだった。
「くくっ、ああ、ありがとよ」
今回、行動を起こすにあたって、蛇倉は教授にとあるものをおねだりしていた。一目見た時から、その力を目の当たりにした時から心奪われていたモノだ。魂が惹かれたといっても過言ではないアイテム。それを教授は快く与えてくれたのだ。
ケースを開ける。そこにあるのは『ダークリング』。そして、ダークリングによって力が引き出されるカード達だ。

ダークリング
『ウルトラマンオーブ』に登場するアイテム。曰く『宇宙で最も邪悪な心を持つ者のもとを巡り、持ち主の能力を増幅させる』と言われる闇のアイテムである。ウルトラマンシリーズに登場する怪獣のカードを使うことで、怪獣を召喚し、使役することが出来る。さらにもう1つ、隠された能力が……

これらは翔と同じ異世界からの来訪者、新谷　航平が残したアイテムだ。翔達が航平の家を捜査した時、ライが持ち去ったアイテムの1つ。
「って、もういねぇのか。足の速い女だ」
少し目を逸らしたときには、ライはすでにいなくなっている。実は近くにいるのかもしれないし、本当に遠くに行ったのかもしれない。

だが仕事を済ませたライは、あらゆることに関して無関心だ。蛇倉が何を言っていようが、何をしでかそうが、姿を見せることは無い。
「さて、一騒ぎ起こすとしようか！」
持ち主の心に反応するように、リングが妖しい赤色に発光する。
「ゼットンよッ！」
《Ｚ―ＴＯＮ》
リングにカードを読み込ませると、カードは粒子となり、全く別のものを形作っていく。
「さあ、行ってこい！」
「ピポポポポポ――――！」
本物と比べていくらかサイズダウンしているとはいえ、生物とは思えない無機質な体躯は見るものを恐怖させる。
ウルトラマンシリーズ最強とも名高い、宇宙恐竜『ゼットン』だ。
あいさつ代わりに、ゼットンの代名詞ともいえる一兆度の火球、『メテオ火球』が放たれ、施設の一角を丸ごと吹き飛ばす。
今の一撃で何人死んだのだろうか。蛇倉は笑い、ゼットンは進撃を開始する。
「うまく倒してくれよ。特務六課」
そう言って、蛇倉はその場を後にするのだった。

「ッ！　何、今の揺れ……まさかこっちにも襲撃者が……？」
非常用の梯子を使って地下に降りていた布束は、急な揺れに体を一瞬硬くした。そして次の瞬間に鳴り始めるけたましい音。緊急事態を告げるサイレンの音だ。
「都合がいいわね……これで調整中の妹達の移送も、もっと遅くなっ

てくれる」
布束は襲撃者の内、1人について心当たりがあった。そもそも、『彼女』が実験を知るきっかけになった原因は布束にあったのだ。
もう1人については見当もつかないが、研究所を襲撃して1人の死者も出していないところを見ると、どういう性格なのかわかるというものだ。
襲撃者について、布束は特別不安には考えていなかった。
「襲撃者と急な移送のおかげで、内部のセキュリティが疎かになっている……アレを実行するなら、今しかない」
そう呟き、ペンライト片手に暗い通路を進んでいく。
急な呼び出しでこの研究所へと来た布束だった。この企みはお世辞にも綿密な計画とは言えない。
だが、少し前――――布束が美琴に計画の事実を告げた時に交わした言葉を思い出していた。
『計画の関連施設は２０や３０じゃないわよ。１人でする気？』
『アタシを誰だと思ってるの。自分で蒔いた種だもの――――自分の手でカタを付けるわ』
確かにＤＮＡマップを提供したのは御坂美琴だ。妹達から始まる一連の実験の肝になっている。
「なら、私もそうね」
妹達製作にかかわっていた布束にも当てはまるセリフだった。
「自分のことは、自分で行動してカタをつける」
しばらくして、目的の場所にたどり着いた布束。研究所の奥深く、機密が漏れないようにと作られた他とは少し違う頑丈なコントロールルームだ。
端末を操作し、アクセスするのは妹達が入っている生体ポッドだ。
「御坂美琴たちの研究所襲撃がうまくいったとしても、おそらく実験は中止にはならない。レベル６という名の闇は、そのくらい深く、暗い」
布束はポケットから記憶媒体を取り出し、読み込ませる。
「今までの研究で収集してきた人間の感情データ。これをシスターズ

の脳にインストールする……この程度のプログラムで真の感情が芽生えるわけがない、でも、疑似的な反応くらいは得られるだろう」
画面に小さいウィンドウが表示され、インストールまでの時間が表示される。
「こんなことで実験にダメージを与えることが出来るかはわからない。でも、彼女たちに絶望的な死のレール以外の道を示せるのなら――」
膨大な量のデータをインストールするには少し時間がかかる。布束は自らの都合のよい賭けを、ぼんやりと頭に浮かべた。
「死を当然のことと考えている今の妹達の中に、その運命を嘆く者が現れるかもしれない」
かつての自分がそうだったように、妹達に実験動物以上の感情を持つ研究者が現れるのかもしれない。
そして、これ以上戦いたくない、死にたくないという声が、誰かの心を動かすのかもしれない。
「……バカげている。都合のいい考えだ。でもあの時私が感じた感情は……」
初めて妹達を研究室の外に連れ出した時、彼女たちに抱いてしまったのだ。研究者としてあるまじき、『情』というものを。
「ガッ――――ッ、ぁ……!?」
夢のような妄想から、脳みそが揺さぶられる感覚によって、無理やり現実に引き戻される。
頭をコンソールに押さえつけられ、左腕が捻りあげられている。
それを行っているのは、布束よりもさらに年下の少女だ。オレンジの半そでパーカーに短パンという動きやすい服装に、パーカーのフードをかぶっている。
「関係者である可能性も考慮して上に確認を取りましたが、データ類の移送が完了するまではここへの立ち入りは超禁止とのことでした」
「ぁ、ぁ……っ！」
力が込められ、こういった荒事に慣れていない布束の体から抵抗の力が消える。

もしもの襲撃の可能性を考え、こちらの研究所に残っていたアイテムのメンバーの1人、絹旗　最愛だ。
「2人いるのなら、3人目がいても超不思議ではありません。こっちに残っておいて超正解でしたね」
もう片方の研究所に翔と美琴が現れたとはいえ、全員がそちらへ向かう必要はない。レベル5の麦野がいれば、殺せない相手の方が少ないのだ。念のために絹旗が残ってみれば――この通りだ。
「麦野の読みが超的中したようですね。ええ。まあ本当に来るとは思っていませんでしたが。上の騒ぎ、これもあなたの仕業ですか？や、そうじゃないと辻褄が超合わないんですよね。管理局も出動しています。おかげで私たちもずいぶんと動きにくくなりましたよ」
「っ……！」
布束には何が起きているのかはわからないが、こそこそとこんなところに来ていた布束に疑いがかかるのは、当然の流れだった。
「別に施設がいくら破壊されようとも、依頼には超関係ないのでどうでもいいんですが」
依頼はあくまでインベーダーの排除。研究員はいくらでも補充できると思っている『上』からすると、美琴と翔を排除するのが最優先なのだ。
部屋の入り口から、２０代前半の男が２人ほど入ってくる。絹旗の同僚――ではなく、部下だ。
「それじゃあ、ちゃっちゃと運んで下さい」
「わかりました」
部下には部下らしい仕事を任せる絹旗。
「っ！」
拘束のために手錠をかけられそうになった一瞬、絹旗の手が離れる一瞬を狙って、布束が動いた。
それは荒事に慣れていない彼女にしては、最高の結果を生み出す。
拘束しようと近寄っていた男の顎に掌底を決め、ベルトに差し込まれていた拳銃を奪取する。
銃口は絹旗に向けられた。

その距離は2メートルも無い。いくら下手でも1発なら当てられる距離だ。しかし絹旗は、そんな銃口をくだらなさそうに見ている。
もう1人の男は拳銃を抜いているが、構えるだけで撃とうとはしていない。
「最後の抵抗ですか。いいですよ。一発撃つまで超待ってあげます」
「……っ」
ポケットに手を入れたまま棒立ちする絹旗。どうやら本当に動くつもりはないらしい。
ならばと狙いをつける布束。しかし彼女は気が付けない。この極限状態ならしょうがないのかもしれないが。
わざわざ撃たせてくれるというのは、その程度の武器なら何とも思ってないということだ。
一瞬迷い、思い引き金を――――引く。
小さい部屋に銃声が反響する。
「な、に……？」
弾丸は絹旗の左肩に当たる直前で、硬い壁に正面からぶち当たったかのように潰れていた。やがて床に落ち、小さな音を立てる。
「この期に及んで急所を外してくれる心遣いはありがたいですが、あいにくと私の窒素装甲（オフェンスアーマー）は、拳銃程度じゃ貫けませんので」
待つ時間は終わりだ。鳩尾に一撃いれ、一瞬で意識を刈り取る。
「それじゃあ今度こそ運んじゃってください……どっちを持ちます？」
「も、もちろんこっちを」
「ですよね……っと」
絹旗は布束を、男は昏倒した男をそれぞれ抱えようとして――――
電話が鳴る。
「もしもし、麦野ですか？」
《あー良かった。繋がったわね。そっちはどう？》
「たった今、侵入者と思われる女を超拘束したところです」
《ご苦労様、と言いたいところなんだけど、そいつ運ばなくてもいいわ。依頼のインベーダー2人はこっちに来たから》

「良いんですか？　同じ一味かもしれないですよ？」
《あんたがそこまで仕事熱心なら運んでもいいけど。今は車回せないらしいわよ？　そこで変な怪物が暴れまわってるんでしょ？　合流ポイントまでアンタが担いでいく事になるけど》
「あー……」
　それもそうだ。下部組織のドライバーがこの戦場になっている場所、しかも管理局がうろついている場所に来れる訳がない。
「分かりました。撤退することにします」
《了解。滝壺とフレンダと合流して。私も、サクッと殺して合流するわ》
　電話を切って、布束を下ろす絹旗。流石に昏倒した男を置いて行くような薄情な真似はしない。運ぶのは元気な男だが。
　目を覚ます様子の無い布束に背を向け、歩き出す。
（まあ、私が超連れて行かなかったとしても、あの怪物に殺されるのがオチでしょうからね。むしろ、暗部に沈んでいくよりも幸せかもしれないです）
　そんな同情ともいえる感想を浮かべつつ、絹旗はこっそりと施設を後にするのだった。

　絹旗が施設から抜け出したその前後の時間。空を飛びその施設に向かう２人の影があった。研究所からの通報と現地の管理局の要請でお呼びがかかった特務六課の隊員。フェイトとシグナムだ。
「まったく、研究所の捜査が持っていかれたと思ったら、また研究所が襲われるなんてね」

「しかし、今回は別件だろう。少なくとも、生物兵器を使って無差別に破壊するというのは、今までの犯人の手口からはかけ離れている」
目的地は火事でぼんやりと明るくなっている。
「あそこだね！」
目的地が見えて逸ったのか、フェイトのスピードが上がる。
「テスタロッサ！　力が入りすぎだぞ！」
目視できれば到着はすぐだ。１分もかからずに今回の目標が目に飛び込んでくる。
「エンゲージ！　行くよ、シグナム！」
「油断はするなよ、テスタロッサ！」
２人は暴れる怪獣――ゼットンとの戦闘に突入した。

研究所襲撃（裏）　後編

ゼットンが歩いた後には破壊の跡しか残らない。大きさは本家と比べるとかなり小さい5メートル程度だが、堅牢な研究所の外壁もゼットンの攻撃の前には無力だった。

「あのタイプの生物、見たことはあるか、テスタロッサ」

「初めて見るタイプだよ。この辺りにあの手の研究所があったなんて……」

「なんにせよ、危険な生物であることには変わりない。早急な無力化――最悪の場合、殺害も許可されている」

地上から攻撃をしている管理局員がいる。それだけにとどまらず、隊員たちを輸送してきたヘリからも攻撃が行われていた。しかし、銃や魔法が直撃しているが、ゼットンは全く怯む気配がない。

豆粒のような弾丸をいくら撃っても埒があかないと思ったのだろう。ヘリがロケット弾を発射する。

「ピポポポ――――！」

激しい爆炎とともに、ゼットンの動きが一瞬だけ止まる。

「今だ！　撃てぇ――――！」

そこにすかさず、魔導士5人による砲撃が発射される。なのはの砲撃と比べてしまうと、1人1人の攻撃は弱い。だが、タイミングを合わせればなのはに匹敵するくらいの攻撃になる。

「ピポポポ――――！」

しかし、ゼットンとは相性が悪かった。光線のエネルギーが全て吸収され、ゼットンブレイカー――――光線技として跳ね返された。

地上で応戦していた管理局員は、悲鳴を上げながら吹き飛ばされていく。

光線はそのまま、攻撃の起点となったヘリに向けられた。ヘリの本体には当たらなかったが、プロペラが溶断される。バランスを崩したヘリは回転しながら墜落していく。

「う、うわあああああぁぁぁぁ――――!!!」

パイロットは、通常の飛行ではありえない角度になっているヘリの

操縦桿を握り締め、絶叫していた。
どの角度から墜落しようと、怪我をするのは間違いない。あるいは墜落の瞬間に燃料が引火するか。ゼットンに踏みつぶされるか焼き殺されるか。
しかしどう考えても、未来に待つのは『死』の運命だけだ。
地面が見え始めたところで、操縦桿から手を離し顔を覆った。
ザンッ!!!
機体に一瞬衝撃があったかと思うと、すさまじい勢いで操縦席から引っ張り出される。
パイロットはフェイトに抱えられて外に脱出していた。一瞬の出来事に目を丸くしている。
フェイトは、バルディッシュを死神の鎌のような形態、『ハーケンセイバー』に変形させ、発生させた魔力刃で、ヘリの胴体と機首が分離するように切断、パイロットを救出したのだ。
「特務六課のフェイト・T・ハラオウンです。応援に来ました！」
「あ、え……？」
「テスタロッサ！　奴の動きを止めるぞ！」
救助活動を待ってくれる怪獣ではない。フェイトの腕が塞がっているのなら、シグナムが先行して攻撃するだけだ。
そして夜天の書の守護騎士。烈火の将とも呼ばれる近接戦のスペシャリストであるシグナムがそうそう後れを取るわけがない。
「はあああああ――――！」
シグナムは自らのデバイスであり愛刀『レヴァンティン』で斬りかかる。
狙いは火球が発射されていた腕だ。渾身の力を込めた一撃はシグナムの魔力が限界まで通された一撃だ。空を飛び、下半身の動きを刀に乗せられないハンデをものともしない。
それをゼットンは自身の腕で受け切った。
シグナムは最低でも腕は両断するつもりだったが、腕の骨を断つことすら出来なかった。分厚い筋肉に刀の衝撃が吸収され、丈夫な骨に完全に受け止められる。

「(こいつ、硬い！)」
満足のいく結果を得られなかったシグナムは、顔をしかめる。
しかし、ゼットンにとっては初めての骨のある攻撃だ。シグナムを明確に敵対者として認識し、腕を振りかぶった。
「ッ!!」
「シグナム！」
技術の伴っていない、単純な腕力による攻撃だ。タイミングさえ見極めれば、受け流すことは容易い。しかし、予想以上の衝撃があった。
「気をつけろ！　お前の防御では一撃で落とされかねん！」
「わかった！　フォトンランサー！」
ならばとフェイトが用意するのは雷の矢だ。なのはの使うアクセルシューターとは違い誘導性は無いが、代わりに真っ直ぐと、弾速が早いのが特徴の魔法になっている。
「ファイヤッ!!」
フェイトの号令で、一斉に発射される。弾丸はすべて命中するが、ゼットンは少し揺れるだけで平然としている。
「物理も魔法も、生半可な能力は効かないね」
「ああ。私がまともに斬っても、かまわず反撃するほどのタフネスだ」
ゼットンの狙いは完全に2人になっている。その間に他の管理局員は撤退することで2人の戦闘の邪魔にならないようにしていた。
手伝うよりも邪魔にならないでいたほうが、2人にとってはありがたい。そのくらいの実力差があり、ゼットンに対抗できるのはこの場では2人しかいなかった。
「仕方がない。時間をかけては怪我人が増えるだけだ。次の一撃で決める」
「うん、任せても？」
「問題ない。援護は任せるぞ」
そう言うと、シグナムは空中であるにもかかわらず、まるでそこに地面があるかのように腰を落とす。
シグナムのデバイスは剣と鞘で1つだ。わざわざ片手をふさいでまで鞘を持っているのには大きな理由がある。

剣を鞘に納めると、ガシャンッ！　と音がして、鞘から薬莢が排出される。
カートリッジシステムと呼ばれる、一部のデバイスに搭載されている機能だ。魔力が圧縮されたシリンダーを炸裂させることで、瞬間的に出力を引き上げる。空になったシリンダーは排出されるため、一見すると薬莢のように見えるという訳だ。
そして瞬間的に出力を上げるということは、大技の準備――シグナムは宣言通り、次の一振りで決めるつもりなのだ。
フェイトはその攻撃を成功させるために動き始める。ゼットンの周りを飛び回り、魔力弾でかく乱するのだ。
先ほどは平然としていたゼットンだが、それでも煩わしいようだ。
ゼットンの周りに透明なアクリル板の様な物体が現れた。全方位バリヤーである『ゼットンシャッター』だ。それに阻まれるせいでフェイトの魔力弾はゼットンに当たらない。
しかしゼットンの注意を引くことは出来た。反撃のメテオ火球を華麗に避け、シグナムに対して後ろを向かせることに成功したのだ。
「背中から斬るのは卑怯かもしれないが、相手が猛獣ならば――ッ!!」
一気に加速する。
「紫電――一閃ッ!!」
抜刀された刀身は炎を纏っていた。
研ぎ澄まされた斬撃は、滑らかに滑り、空中に炎の軌跡を作り出した。
「ピポポ、ポポ――!!」
断末魔を残し、ゼットンは爆発したのだった。

ゼットンが消滅すると、あたりは一気に静かになった。
破壊の後は凄まじい。インベーダーがほかの研究所に行って良かったといっていた研究員たちも、その時の晴れやかな表情は出来なくなっていた。
救急車が到着し、怪我人が運ばれていく。緊急出動した六課だけではなく、通常の管理局員も到着し始めた。
（そろそろ引き継ぎかな）
流れだけを見れば、つい昨日までの工場襲撃事件と全く同じだった。だが今回の事件を見る限り、フェイトはどう頑張っても同一犯の仕業とは思えなかった。
「今回の事件に便乗して、どこかの研究機関が生物兵器の実験をした？　それとも事故で逃げ出したか……」
少なくとも、巨大生物を使って無差別に破壊するようなまねはしないだろうという、確信にも似た何かがあった。
そんなことを考えつつ、施設の破壊跡を空から眺めていた。そんな時。
「あれ……？」
視界の端に、白いものが見えた。瓦礫に紛れて、汚れた白衣が見えている。ここは研究所だ。白衣自体は珍しいものではない。
だがその白衣は、ちょうど作られた空間にあった。頑丈な部屋だったのか、それとも破壊の魔の手がそこまで及ばなかったのかはわからないが、部屋1つ分が、割ときれいな形で残っていた。
「大丈夫ですか!?」
フェイトが慌てて着地する。
白衣は脱ぎ擦れられたものではなかった。1人の少女がしっかりと着ていた。
「外傷は……無い。とにかく早く救急車に……！」
フェイトは少女を抱えて飛び立とうとする。

「ん、あ……？」
　と、少女が瞼を震わせた。
「もう大丈夫ですよ。どこか痛むところはありますか？」
「い、いえ、大丈夫、自分で立てるわ」
「私は管理局です。じっとしていてください。これから救急隊に運びます」
「管理局……？」
　自分で立てるという割には、フェイトの言葉への反応が薄い。フェイトは体を宙に浮かべた。少女の負担にならないように、いつもに比べればはるかに速度を落として飛行する。
「これは……何が起こったの？」
　ゼットンによる破壊の跡を上空から見下ろした布束は、フェイトに問う。
「正体不明の生命体が暴れまわったんです。あなたが働いていた工場は機能不能、幸い今のところ死者は確認されていませんが……」
「……あなた、本当に管理局員なの？」
「はい？　そ、そうですけど？」
「表向きの所属は？」
「表向き？　表向きと言いますか……私は特務六課所属の、フェイト・T・ハラオウンです」
　いまいち会話が成り立っていないと感じたフェイトは、とりあえず身分証を提示する。すると、少女はそれを食い入るように覗き始めた。
（この反応、ここまで素直にしゃべるってことは、暗部の息のかかった連中じゃない。それに特務六課にフェイト・T・ハラオウン……『ゆりかご』を堕としたチームと、プロジェクトFの成果……こんなことがあるの？　実力と実績のある部隊に捜査させるなんて。わざわざこんな危険を冒すなんて。暗部の連中は、こんな危ない橋を渡っているっていうの？　いえ、でもこれは――――）
「あの、納得していただけましたか？」
「ええ。私の名前は布束　砥信。ここの研究所の人間じゃないわ」

「そうなんですか？」
　自分のペースで話し始める布束だったが、フェイトは何も言うことなく相槌する。布束も、ようやく見え始めた光明に焦っていたのだ。
「このままこっそりと、私をあなた達の部隊に連れて行ってほしい」
「え、病院に行ったほうが……」
「怪我なんて無いわ。それに、医療設備ならそちらにもあるでしょう？」
「それはそうですが……」
　当たり前だが、布束の提案はそう簡単に承諾出来るものではない。そんなフェイトに対して、ダメ押しの一言を放つ。
「私はこの島で行われている恐ろしい実験について知っているの。管理局内部にも内通者、協力者がいる。信頼できる人物じゃないと話せない」
「……それはあなたの身も危ないということですか？」
「そうよ」
　フェイトには心当たりがあった。管理局の内通者、協力者。突然捜査権限を持って行かれてしまった事件について。
　いつの間にかフェイトは、空中で足を止めていた。
「それはもしかして、御坂美琴の軍用クローンに関係することですか？」
「っ、だったら話が早いわ。それよりももっと深い情報を、私は持っている」
「……分かりました。あなたを私たちの隊舎に連れていきます《シグナム、ちょっといい？》」
　シグナムに念話を飛ばすフェイト。
「いえ、ですから《どうした、テスタロッサ》」
「《ごめん、取り込み中だった？　重要なことだから、すぐに話したいんだけど》」
「《いや、本部の連中が到着してな。今日、主はやてのところに来た、テレスティーナ・木原・ライフラインという女だ》」
　そう、下で救助活動の指揮をとっていたシグナムは、到着していた

木原と向かい合っていたのだ。
「シグナム二尉？　いい加減聞き分けて下さい。捜査の権限は私達にあります」
「何故だ？　話では、貴様らに与えられているのは、一連の研究所襲撃事件の捜査に関する権限だったはずだ。貴様達にはこの事件も同一犯、あるいは同一グループの仕業に見えるのか？」
「それを決めるのはあなたではなく、我々です。我々がそう判断した。それで十分なんですよ」
　斬りつけるような視線で見降ろされる木原だが、余裕の笑みは無くならない。
「《シグナム！　いろいろ言いたいことがあるかもしれないけど、今日は抑えて！　それ以上に有用そうな情報が手に入るかもしれないの！》」
「《……わかった》ふぅ……了解した。この場は任せる」
「はい。ご理解いただけたようで、何よりです」
　飛んでここまで来たフェイトとシグナムは、帰りも空だ。だが、それはそれで都合が良かった。
　木原に背を向けて飛んだシグナムは、しばらくしてフェイトと合流した。もちろん初めに問うのは、
「その抱えている少女は？」
「情報提供者の布束さん。この事件の突破口になるかもしれないの」
「ふむ……詳しくは六課に戻ってからだな」
　２人は急いで、六課へ向かって帰還するのだった。

「ッチ！　いちいち突っかかりやがって。真面目な局員なら、命令も

まじめに聞いてろってんだよ」
それまでの口調はどこに行ったのか、シグナムのことを口汚く罵った木原は研究所のとある場所に向かって足を進める。
研究所で一番頑丈に作られている、生体ポッドのある部屋だ。そこに入っているのは一糸まとわぬ姿の御坂美琴――――のクローン。妹達だ。
「オイ、人払いは済んでるか？」
「はい。救急隊、一般の管理局員、すべて」
「よし、運べ」
ポッドごと移送する。大きな輸送車３台を使った大掛かりなものだ。
木原が力仕事をすることは無い。あくまで彼女は現場監督。力仕事は部下に任せるものだ。しかし部下もプロだ。テキパキと作業を済ませていく。
木原は先ほどのシグナムの言葉を思い出していた。
『貴様達には、この事件も同一犯、あるいはグループの仕業に見えるのか？』、ねぇ？　んなの、思ってる訳ねえだろうが。クソが、いったいどこのどいつの仕業だってんだよ。この期に及んでちょっかいをかけてくるクソのクソがよぉ」
そんなイラついている木原を、物陰から覗く影があった。
「まさか、ここまで収穫があるとはなぁ。あいつらも、何か掴んだみたいだしな。あの木原とかいうババァの弱みも……ま、持ってて困るもんじゃねぇもんな。さて、これでどう転んでいくのかね」
そう言い残し、影は姿を消したのだった。

御坂との話し合い

命からがら、俺たちは麦野から逃げきることが出来た。
滝壺がいたのなら攻撃は続いていたはずなので、彼女の体も限界だったんだろう。
だが、もう1つの研究所に行く気力は俺達にはなかった。ボロボロの御坂も体力の限界で満足に動けなくなっていた。脱出してすぐに『充電切れ』になってしまった。
流石に置いていくわけにはいかなかったので、今御坂が潜伏しているホテルの場所を教えてもらい、そこに連れて行くことにした。もちろんクローディアへの連絡は済ませてある。
戦闘に時間をかけすぎたため、すでに日付が変わってしまっている。
こんな時間に、女の子を背負ってホテルのカウンターに行けば通報されかねない。
幸い、カウンターはＡＩによる無人カウンターだった。
俺は御坂に指定された階に向かう。エレベーターの中では、お互いに無言だった。そもそも疲れていて、喋るのすら億劫だ。
「ここよ」
「ん、了解」
当然カードキーをかざして開くタイプのオートロックドア。御坂はカードキーを取り出して――
「よっと」
「おわっ！」
御坂が伸ばした手から、一瞬だけ電撃が発射される。するとカチッ、とドアの鍵が開く音が聞こえた。
能力を使ってロックを解除したんだろう。
「お前、普通に開けろよ」
「こっちの方が早いんだからいいでしょ……」
それ以上言葉を交わすことなく俺たちは部屋の中に入る。
部屋は標準的なビジネスホテルの部屋だった。６畳ほどの部屋に、

しっかりとベッドメイクされたベッド、テレビにデスクと椅子。お風呂とトイレが備え付けられている。
御坂の大きな荷物は見当たらない。御坂がいつも着ている制服が、無造作に脱ぎ捨てられているだけだ。
俺はベッドの上に御坂を下ろした。
「とりあえず、お疲れ様」
「ありがと。はぁ、今日の内に終わらせるつもりだったんだけどね。結局、もう1つの方には行けなかった……」
「しょうがないだろ、お前と同じレベル5がいたんだから」
「……ええ。まさか第4位があんな計画に加担しているなんて思ってなかったわ」
向こうは殺す気でこちらは不殺という、ある意味手加減をしている。大怪我も無く帰ってこれたのなら上出来だろう。
「ごめん。疲れた。寝るわ。色々話すのは明日にして。寝てる間に何かしたら、ぶっ飛ばす、から……」
本当に限界だったのだろう。そのまま眠ってしまった。
「ふう……」
ボロボロの服のまま、規則正しい寝息を立てる御坂を見下ろす。確かに、今日はお互い疲れ切ってるし、帰って寝ることにするか。俺が動いていることも知ってもらえたから、何らかのアプローチがあるだろう。
「俺もちょっと休んでいくかな……」
椅子に座り、背もたれに体を預ける。首まで預けると目を閉じて今日の戦闘を振り返った。
そうしているうちに――――
「う、ん……」
重い頭を振って起きる……のではなく、椅子に座っているのだと理

解した。
「あれ……やっば……！」
もしかして、そのまま寝ちゃったのか。つまりは無断外泊。帰ったら色々と追及されることになるぞ！　や、帰らなくてもそれは同じだ！
そうなるともう逃げられない。実験についてみんなに話さなくてはならなくなり、十中八九みんな揃って解決に動くことになる。ここまで密かに進めていたことが知れたら……
「何起きてすぐに顔青くしてんの、アンタ」
すっかり綺麗になった御坂が、後ろから声をかけてきた。ボロボロの格好から石鹸の匂いがする清潔な格好になっている。
首からタオルをかけているので、本当に浴びたばかりなのだろう。
「とりあえず、シャワー使いなさいよ。話はそれからでいいから」
「そうさせてもらうよ」
もうここまでくれば腹をくくるしかない。切り替えてやっていくことにしよう。
「ああ。そうそう」
「なんだ？」
「昨日は何もしなかったみたいだし、信用はしてるけど……変な気を起こしたら、黒焦げになるから」
「へいへい」
昨日あんなに疲れてたのに、もうケロリとしてやがる。言われなくても何もするつもりは無い。
そう言えば、俺ヤバいよな。みんなには内緒、や、一部の娘には言ってあるな。もしかしてその方がマズいかもしれないがそれは置いておいて……危険な事件解決に動き、無断外泊して女子中学生と一夜を過ごしたとか、普通にこれから死ぬかもしれん。
シャワーで頭をスッキリさせつつ、これからの運命について考える。
浴び合わると、コンビニの袋におにぎりや惣菜パンが詰め込まれ、デスクの上に置かれていた。

俺がシャワーに入っている間に、御坂が買ってきたようだ。
「朝ご飯。先に選んでもいいわよ。昨日は助けてもらったから、そのお礼に」
「常盤台のお嬢様のお礼なら、もう少し豪華でもいい気がするけどな」
「うるさいわね、嫌なら食べなくてもいいのよ？」
「いただきます！」
昨日は散々動き回って、すでにお腹はペコペコだ。特に好き嫌いが無い俺は、適当におにぎりを摘まむ。
食べながら、おしゃべりは始まった。
俺は今自分が話せることをすべて話した。実験阻止のために動いていること、管理局のこと、その他諸々を。
「なるほどね……まったく。バカね、アンタは」
「はい？」
「バカよ、バカ。それも相当のね。気になって調べたってのはわかるけど、しっかり実験について知ってわざわざ動くなんて、お人好しを通り越してただのバカじゃない」
それもそうだ。
こんな厄介事、正義感で首を突っ込むものじゃない。
「バカかどうかはともかくとして、心配はしたぞ。いくら調べても何処にいるかわかんないんだから」
「別に心配されるほどヤワじゃないわよ。第４位なんて出てこなければ、十分に１人でやれてたんだから」
何処まで行っても、今回の第４位は規格外だったという訳だ。そりゃあ、第３位の超能力者を苦戦させるような相手が、そういる訳もないか。
「それで、これからどうするわけ？」
「うん？」
それはどういう事だろうか。とりあえず、あと１つの研究所を壊さないといけないと思うんだけど。
「これ見て」
御坂はこっちに端末を投げてきた。

「ん、なになに……って、これって……!?」
端末に映し出されていたのはネットニュースの記事だった。俺たちの最近の活動、研究所襲撃も載っている有名なサイト。御坂が見せてきた記事には、俺たちが襲うはずだった最後の1つの研究所、それがもうすでに、この世には存在していないと書かれていた。
出所不明の怪物が暴れまわり、研究所は倒壊。移送準備の真っ最中だったが、研究機材はもちろんのこと、資料の半分も紛失することになったらしい。
怪物自体は管理局の部隊が撃退。現在までで同種の怪物が暴れたという報告は無い。
「管理局のアンタには何の情報も回ってきて無いの？」
「や、俺は管理局って言っても、まだ採用が決まっただけで、具体的に働いてるわけじゃないからな……」
そんな情報が入ってくるわけでは、ちょっと待てよ。
俺は端末を取り出す。
「来てるな」
頼もしいクローディアから、連絡が来ていた。どうやら六課に実験についての情報提供者が現れたらしい。
「何だって？」
「俺が所属する予定の部隊が、実験についての情報を手に入れたらしい」
「ふーん……ま、管理局じゃ難しいわね。こんな狂った実験、正面からやり合ってもしょうがないから」
「そうだなぁ……」
でもあの面々なら、多少強引にでも解決に持っていくかもしれない。
しかし、一筋縄ではいかないのは確かだ。時間はかかるだろう。向こうからの妨害、権力で押さえつけられれば、どうしようもなくなる。
そして、時間がかかればかかるほど、犠牲になる妹達の数も増えていくのだ。
そんなの待ってられない。

「ほら、見て」
「ん？」
御坂が画面を操作すると、ネットニュースが切り替えられた。映し出されたのはこの島の地図だ。もちろん地図のいたるところに建物の名前が書かれているが、その数が少ない。書かれている建物の名前も、これは。
「研究に協力している研究所、追加されたみたいよ」
「マジかよ……」
クローディアが調べた場所、残り２つだって喜んでたのに……
ピックアップされている名前は、ざっと見て２０はある。
こちらはこちらで、煙に巻かれている気分だ。俺たちのやり方で実験を止めるには、この島の研究施設すべてを壊さないといけないんじゃないか？
「それしか無いならやってやるわ」
「それ以外の方法があれば良いんだけどな」
「それがあったら、そっちにしてるわよ。私だって、こんな時間のかかる方法なんて取りたくない」
「……」
時間をかけるだけかけて、結局は何の役にも立たない。そんな方法のように思えるけどな。今俺たちがやっていることは。
永遠にトカゲの尻尾斬り。いくらでもいる代わりの研究者が、妹たちの命を対価としたデータを積み上げていく。
一発で勝負のつく方法、そんなものがあれば――
「あ」
「何？　どうしたの？」
「なあ御坂、お前ってさ、実験の情報を持ってるんだよな？」
「当たり前でしょ？　最高位の電撃使い（エレクトロマスター）の私に、電気的なロックは意味無いから」
そうだろう。クローディアとは違った方向の強力な情報収集能力だ。
だったら、

「実験のスケジュール。次の実験がいつどこで行われるのか、分かるか？」
「分かるけど、それが――――アンタ、まさか……！」
実験のスケジュール。それさえわかれば、取れる手段が１つ増えることになる。
「直接乗り込んで実験を止めるんだ」
「……無理よ、そんなの」
御坂とは思えないほど、小さな声だ。
「そもそもアンタ、一方通行（アクセラレータ）の能力を知ってるの？」
「運動量・熱量・電気量・魔力ｅｔｃ……自分に触れたありとあらゆる『向き（ベクトル）』を操作する、だろ？」
「なんだ、知ってるんじゃない。それなのに分からないの？　アイツと戦うってことが、自殺しに行くようなモノだって」
向き（ベクトル）操作のどこが強いんだと思う人もいるかもしれない。
この能力、酸素や重力など、必要最低限のモノ以外は、普段は反射に設定されている。するとどうなるか。単純に、殴ったら、そのパワーがそのまま自分に帰ってくるという訳だ。拳だけではなく銃弾も。
普段生活しているときも能力は発動しているので、不意打ちも不可能。
御坂の代名詞、コインを音速の３倍で飛ばす超電磁砲（レールガン）も、撃てば撃っただけ自分に帰ってくる。
恐ろしいのは、この世界ではしっかりと技術として根付いている『魔法』に対しても能力が発動するところだ。
何か魔術で直接呪う方法は効くかもしれないが、そういった方法は本人の髪の毛とか、体の一部を入手する必要があることが多く難しい。そういった能力は持っていないし、体の一部を手に入れるのも不可能だ。
そしてこの能力は防御だけでなく、攻撃にも使える。
些細なエネルギーを一点に集中させて莫大な攻撃力、移動力を生み出す。そもそも人相手になら、直接触れて生体電気や血流を逆流させ

れば、それで終わりだ。
　攻撃はすべて自分に帰ってくる。そもそも、触られたらお終い。戦いにすらならない絶対的な能力だ。
　御坂がどんなに手を尽くしても、逆立ちしたって勝てっこない。だからこそ、こんな回りくどい方法をとっていた。
　だが、俺は違う。
　一番の切り札を切る。
「俺の右手には、どんな異能力も無効化する、幻想殺し（イマジンブレイカー）が宿っているんだ」
「……幻想殺し（イマジンブレイカー）？　第４位の能力を消したのはその能力って訳？」
「そうだ。この力なら、一方通行（アクセラレータ）の反射を無視して攻撃出来る」
　これ以上ない抜け道だ。
「そんな都合のいい能力、何かデメリットがあるんじゃないの？」
「そりゃあ、あるけど」
　言うまでも無く、他の能力を使えなくなるって言う事だ。
　一応アーバレストを装備することは出来るから、完全な生身じゃないけど。ああ、ラムダ・ドライバは斥力を発生させる関係上、向こうに悪用されかねないな。
「つまりはほとんど生身で、拳１つで、アイツに挑むってこと？　無理に決まってるじゃない」
「勝負に必勝は約束できないだろ」
「でも、必敗するのはわかるわ。樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）でも、私の敗北は決定している。１８５手で敗北するっていう演算結果がね」
　それでも、俺の意思は無くならない。
「悪いことは言わないわ。やめなさい。もうこの件から手を引いて。向こうは本気よ。狂ってる。妨害に第４位まで出てくるなんて思ってなかったわ。これからはいったいどんな妨害があるか分からない」
　それは御坂の言う通りだ。第４位より上があるとは考えにくいが、今度は周りの人たちが襲われるかもしれない。
「これ以上、私の蒔いた種で人が死ぬのは見たくないの。アンタが良い人だってことは分かったから――」

「御坂。頼む」
「……っ、ぁ……！」
絞り出された答えは。
「……出て行って」
それを言われてしまえば、終わりだった。
「もう、関わらないで。実験にも……私にも」
話し合いはそこで終わりだった。

日が沈み始めた。
御坂の止まっていたホテルを後にした俺は、あてもなく街をさまよっていた。
「どうするか……」
だがこうなってしまっては、仕方がない。御坂の教えたくないという気持ちも理解できる。
でもこのままでは、あまり効果のない研究所襲撃を続けないといけない。
クローディアの『パン＝ドラ』の性格の悪さというのは、こういう所に出ているのかもしれない。都合よく引き継ぎ先の研究所の情報は集められるのに、スケジュールの情報は集められない。
こうなったら、常盤台の学生寮に忍び込んで情報が無いのか探るしかないか。確か原作では、御坂のベッドの下に資料があったはずだ。
少々強引な手段でも、今とは違う一手を打たないといけない場面になったのかもしれない。

と思ったが、御坂の部屋がどこにあるのかわからない。寮の場所は分かっても、部屋番号までは分からない。
「クソ……っ!!」
右手を血が出てしまうくらい強く握った。
そのとき、視界の隅に捕らえた。コンビニの近くにいる御坂を。
「あれは……っ」
しかし、額にゴーグルが着けている。
「御坂!」
思わず声をかけていた。
「ミサカのことでしょうか、とミサカは確認をとります。あなたは……」
「やー、待たせてごめんね? ちょっと時間がかかっちゃって」
割り込むようにコンビニの自動ドアが開いた。そこから1人の少女が出てくる。
聞いたことのある声だ。
視界の端に、赤いおさげがゆれ、それを追っていくと見慣れた防弾制服が目に入る。
「あれ、翔君。どうしたの?」
メアだった。

やるべきこと

「どう？　おいしい？」
「はい。この手の甘味を口にする機会は少ないですが、おいしい、と感じます。とミサカは舌を動かしつつ応えます」
「そっか、そっか。良かった～」
　こうして２人してアイスを頬張っている姿は、一見するとただの友達だ。制服こそ違うが、違う学校の友達、もしかすると小学校は一緒だったのかもしれない。
　学校もない夏休み、騒がしくなるであろう８月前に夏の思い出を作っている。
　周りからはそう見えていることだろう。
　俺からはそう見えない。
「どういう、事だ」
「ん、ちょっと気になっちゃって」
　メアはアイスを食べつつ言った。
「調べたんだよね、実験について」
　ちょっと調べたくらいでここまでたどり着いてしまうのか。全くうらやましい。やはり俺達とは情報網が違うようだ。
「私だけじゃなくて『教授』の力も借りたけどねー」
　ちびちびと食べる御坂妹とは違い、メアは一気にアイスを食べ切った。
「この娘の検体番号（シリアルナンバー）は１００３１号」
　どういう偶然か、その番号は原作で上条さんが助ける妹達、その１つ前の番号だった。おそらく上条さんが事件を知るきっかけになった、裏路地で無残に殺されてしまった妹達。
　目の前で生きている。
「……っ」
　薄暗く、車のほとんどがライトをつけて走っている。あと十分もすれば太陽は完全に沈み、夜になるだろう。
　場面が刻々と整ってきている。

「それで、やっぱり気になっちゃって」
「じゃあやっぱり……！」
「うん。次の実験で使われるのが、この娘。１００３１号ちゃん。もうあと３０分もしないうちに実験が始まるんだよ」
　３０分。それは目の前にいる妹達の寿命に等しい。
「実験についてしゃべってしまっても良いのですか？　とミサカはあなたの不用心を咎めます」
「あはは、大丈夫だよ。翔君は関係者だから、ね？」
「……ああ。まあな」
　実験の関係者、と思われるのはあまりいい気分ではないが、無用な疑いを向けられる必要もない。
「あなたは自分のクローンが現れたらどう思いますか、とミサカは尋ねます」
「は？」
　御坂妹が突然、質問をしてくる。
「質問の意味が分かりませんでしたか。前回あなたとお会いしたとき、お姉さまと親しげにお話していました。覚えていますか？　とミサカはあなたの記憶能力の確認から始めます」
　親しく？　あれ、そんな親しそうに話した記憶がないが。
「あの後、実験のためにお姉さまと別れました。そして次に会った時に言われたんです」
　抑揚のない声で、すらすらと音読するように言う。
「もう二度と、ミサカのことを見たくないと」
「……」
　俺は下を向き、黙った。
「いくつかの書物で見ました。クローンを扱う作品の登場人物は、その多くがクローンに対して好意的ではありません。理解を示すのはごく一部。法律でも禁止されているのは人を不快にさせるからしょうか？　とミサカはあなたの意見を求めます」
「それは……！　俺は……俺はまあ、自分のクローンが現れたら驚くとは思うけど、不快に思ったりはしない。御坂だってそのはずだ」

「そうでしょうか……」
もっとわかったようなことを言いたい。
御坂だって、別に不快に思ってそんなことを言ったわけじゃない。絶対に。御坂はそんなことを考えるような奴じゃないって。
そうじゃなければ、わざわざ危険を冒して実験を止めようとする訳がないんだ。
「ですが、ミサカに与えられた自由時間は少ないです。あれからお姉さまに会うことなく、あの言葉の意味を聞けずにいます、それが――」
「心残りなのか？」
「心、残り……そうかもしれません」
一瞬、少しだけ声のトーンが下がったような気がした。しかし、すぐに元に戻る。
「そろそろ時間ですね。これで失礼します、メアさん、翔さん」
「……っ」
「もし次にお会いすることがあっても、そのミサカはこのミサカではありません。ですが記憶は共有しているので、自己紹介する必要はありませんよ。とミサカは最後の別れを口にします」
思わず口にしていた。
「最後なんかじゃない」
「……？」
「はい……？」
御坂妹とメアはそろって首を傾げていた。
「また会うぞ。実験を終わらせてからな」
「おっしゃる意味が分かりません。実験が終わったときにはすでに、すべてのミサカは『処理』されているはずです。とミサカは間違いを指摘します」
「間違ってない。すぐにわかるさ」
俺の言葉を御坂妹は最後まで理解しなかったが、メアは理解したみたいだ。
段々と小さくなる御坂妹の背中を見ていると、声をかけられた。

「どうして？」
「何……？」
「どうして助けようとするの？」
　メアは俺の意志を正しく理解してくれたらしい。
「別に助けを求められているわけじゃないんだよ？　ううん、むしろあの娘たちの邪魔をしてる。何もわかってないんだよ、翔君は。勝手にかわいそうだって思って、勘違いしてる」
「……」
　俺は黙って話を聞く。
「あの娘はね。実験動物っていうのを正しく理解している。わかっていながら自分たちの事を平然と『実験動物』って言うんだよ。翔君から見たらおかしいことなのかもしれないけど、私たちの中ではこれが普通なの」
　ラノベやアニメで御坂が言っていたセリフだ。だが、メアの考えによって内容が少し変えられている。
「ニンゲンって、よく悩むんでしょ？　自分がどうして生まれてきたのか、とか、何をするべきなんだ、とか。でも私たちは違うの。私やヤミお姉ちゃんだったら兵器。あの娘だったら実験。どうやって生きるべきなのか、死ぬべきなのか、あらかじめ決まってるの。作られた瞬間から、生きる目的が決まってるだよ。それはとっても素晴らしいことでしょ？　翔君はそれを取り上げようとしてるんだよ？」
　確かにな。何をすればよいのか決まっているってのは、楽でいいだろう。生まれた瞬間から天啓を受けているようなものだ。
　だが、
「そんなのはクソくらえだ」
「は……？」
　クソだ。そんなものは。
「あいつらがモルモットとして死ぬことを望んでいる？　そんな訳ねぇだろうが！　そんな訳、無いんだよ」
　実験に必要な最低限度の知識を学習装置で脳みそに刻まれた妹達に、そんな望みなんてものは無い。

１万回殺され、あと１万回殺されるとわかっていながら、泣き言一つ言わずに実験に参加する御坂妹は、確かにモルモットなんだろう。とても人間とは思えない。
だが、それでも。
「自分の姉との会話をずっと心に留めておくくらいには、あいつらは人間なんだろ……！」
確かにあいつは言った。姉と話すことが出来ないのが心残りだと。
「メア。どんなに都合の良いようにデザインしたって、人はロボットにはなれない。感情が無いふりをしたって、感じる心を止めることは出来ないんだ。人間じゃないって言うなら、そういう心を平気な顔で踏みにじることが出来るようなヤツらだ」
相手のことを思いやる気持ちがあるのなら、人間でもＡＩでも人外でも――クローンでも、それは尊重するべき、尊敬するべき『個』だ。
「ヤミやメアだってそうだ。ヤミを見ればわかるだろう。ヤミがヴィヴィオに心を開いて、ここにいようと思ったのは――」
「違うッ!!　私は……ッ！　マスターに言われてここにいるだけ！　ヤミお姉ちゃんだって、勘違いしてるだけなんだ！　私達は……！」
大声で言い争っているため、周りの視線が痛くなってきた。だが、それももう終わりだ。
この場で言い争いをして得るものは、もう何もない。
「サヨナラ、翔君。翔君が死んだあと、ヤミお姉ちゃんのことは好きにするから」
「安心しろ。俺は死なねぇよ」
そう言い残し、俺は歩き始めた。
御坂妹の後を追って。

「これが、私が知っているすべてよ」
「「……」」
布束の説明に、一同は重苦しい空気になった。
緊急の会議だと今回集められた特務六課のメンバーは、はやて、楯無、クローディア、なのは、フェイト、ティアナ、シグナム、蛇倉の8人だ。
たった今、布束が実験の説明を終えたところだ。
いずれも相当の修羅場を潜り抜けてきた強者だが、この事件の衝撃は、過去のどんな事件よりも大きいものだった。
「これで色々と合点が言ったなあ」
「そうだね。こんなに強引に捜査権を持っていかれたのも、きっとこのせいだったんだ」
はやての言葉にフェイトは同調する。
「おそらく、テレスティーナ・木原・ライフラインは黒でしょう。何も知らずに内通者に使われていると言うよりも、内通者の身内の可能性の方が高い」
「そうですね。六課だけじゃなくて、現場にも来たって話ですし」
「知っている人が多いほど、悪だくみは外に漏れちゃうからね。知っている人数は少なくしたほうがいいもん」
その時ドアがノックされ、レムとラムが入ってきた。手に持つお盆には、湯飲みが置かれている。
「「皆さん、お茶をお持ちしました」」
「ん、ありがとうな」
2人は一礼して、テーブルに湯飲みを並べていく。
「とりあえず、彼女は保護という形で六課にいてもらうのが良いと思います。いったいどこに内通者、直接的に言えば、裏切り者が潜んでいるのかわかりませんから」
（どの口が言うんだか）

蛇倉の提案に、ラムは心の中で鼻を鳴らした。
「そやな。布束さん、それでもええ？」
「はい。ありがたいです」
「布束さんはそれでよいとして、実験を知ってしまった私たちは、今度どのように動きますか？」
楯無は、扇子で肩を叩きつつ問う。
「もちろん、私たちは実験の阻止に向けて動く」
「よろしいんですか？　相手は内通者ですが、命令はれっきとした上からのものですよ？」
迷い無く言い切ったはやてに、クローディアは苦言を呈する。美琴と接触できたことを翔からの連絡で知っていたクローディアとしては、もう少し時間が欲しかった。
だが、そんなことを知らないはやてから見れば、布束からの情報は反撃の糸口だ。
「向こうが持って行ったのは、あくまで『研究所襲撃について』の捜査権。あくまでうちらの捜査は『絶対能力者進化（レベル6シフト）』についてやからな」
「名目上は別の捜査。もちろん屁理屈だし、向こうが妨害してきたらどうしようもないけど、それ以上の速さで動いちゃえばいい。こっちには実験の関係者の布束さんがいるからね」
「もちろん。私も協力させてもらいます」
なのはの視線に、布束は頷いた。
こうして六課は、事件解決のために動き出すことになったのだった。

「さて、ここですのね」

「そうみたいだね」
狂三と理子はとある研究所の前に来ていた。
翔がいないとわかった時の女の子たちの反応は、大方翔の予想通りだった。
今朝起きてみると布団に翔がいない。連絡もない。なら、探しに行くしかない。
単純な論法で、翔の捜索が決定した。だが、少しとは言え今の事件の事情を知っている2人には、何となく理由が見えていた。
つまりは事件に関わった誰か（確実に女の子）と一緒にいるのだろう、と。
そうとは知らない女の子たちは、翔がスタンド使いの襲撃にでも遭って、1人捕らえられてしまったのではないか、と考えている。
それはもう必死で、翔の無事を祈って街を走り回っているわけだ。
色々な意味で、翔の未来は詰んでいた。
「まあ、カモフラージュにはなったのかな？」
「ですわね。こうして2人でこんなところに来ても、おかしいとは思われないんですもの」
そんな中、2人には知らない人物から連絡があった。
その待ち合わせ場所に指定されたのが、この研究所だったというわけだ。
2人は警戒しつつ忍び込んだが、研究所はもぬけの殻だった。警備員もいなければ、電気的な設備も何一つ動いていない。
そうして三十分程、捜索を続けた。
ようやく人を見つけた。別に最上階の一室という訳ではない。施設の片隅の部屋だ。たくさんある部屋で、そこだけ明かりがついている。
2人は迷うことなく踏み込んだ。
「わたくし達を呼んだのはあなたですの？」
狂三と理子は銃を構える。
「そうよ。別に警戒しなくても、この施設には私しかいないわ」
このペーパーレスの時代に、膨大な量の紙の資料が床に散らばって

いる。うっすらと埃が積もり始めているものもあるところを見ると、この作業をし始めて1，2週間は経っているのがわかる。
小さなビルのオフィス程度の大きさの部屋。中央に陣取られたテーブルには、1人の女性が座っていた。
何度も洗濯をしているのだろう、色の抜けた紺色のTシャツとジーンズ。その上にこれまたよれよれの、買ってから1度もアイロンをかけたことが無いと主張している白衣を着ている。
「本当は超電磁砲（レールガン）の方にも連絡を取りたかったんだけどね。向こう相手に、手打ちのキーボードじゃ、追跡しきれないから」
女性は手に持った資料を適当に床に放り投げた。
「初めまして。私は芳川　桔梗。実験の邪魔をしているあなたたちに、少しお願いしたいことがあるの」
女性――――芳川　桔梗は、化粧っ気のない顔に笑みを浮かべるのだった。

ＶＳ　一方通行　前編

始まりはどこだったのか。いったいどこで間違ってしまったのか。
全ての元凶は、美琴が幼いときに提供してしまった自分のＤＮＡマップだろう。
筋ジストロフィーとは、筋肉を思うように動かせなくなる難しい病気だ。
もし仮に生体電気を操る力を解析できれば、そう言った病気で苦しむ人たちを助けることが出来るかもしれない。
そんな話を幼い子供にして、動かない体を必死に動かそうとする人の姿を見せれば、答えを誘導することなど容易い。
もちろん、それが誘導だったのかはわからない。幼い子供にも分かりやすいように伝えていただけかもしれない。
こうして、美琴のＤＮＡマップは正式に登録されることになった。
このことを覚えてはいるが、思い返すことは無い過去の話になった
最近、とあるウワサが美琴の耳に入るようになった。
曰く、御坂　美琴のクローンが軍事目的に生産されているのだとか。
美琴がＤＮＡマップを提供した話はそれなりに有名だった。
様々な事情であまり人様に紹介できない他のレベル５とは違い、美琴はよく超能力者の理想モデルとしての広告塔にされていた。
レベル１から時間をかけてレベル５に成長したというお話は、多くの超能力者に希望を与えている。
そう言う話には、美談はつきものだ。難病のためにＤＮＡマップを提供した話はそれにぴったりだったというわけだ。
そしてそれと同じくらい、面倒な噂が出てくる。そんなものいちいちに気にしていられないし、美琴もまともに相手にしていなかった。
だが今回は、根も葉もないウワサではなかったのだ。
美琴が気になって調べた時には、すでに生産ラインは確立され、後はボタンを押せば無尽蔵に作り出される状態になっていた。
しかも、軍用につくられたはずの妹達は、兵器として生きることす

ら敵わず、モルモットとして殺されるだけの存在になっていた。
（そうよ、まだ終わった訳じゃない）
美琴は電撃の槍を飛ばし、装置を壊していく。電撃が散り数人の研究員が巻き添えになった。
（諦めちゃダメだ）
腕を振ると、腕の軌道に従って電撃が飛ぶ。
（ぜんぶ潰してしまえばいい）
データの欠片も残らないように壊す。
（今あるもの、これから引き継ぐものも全部……！）
警備員など障害ではない。手加減するのが面倒なだけだ。
（機材も、資金も）
そもそも、どうして研究員を生かす必要がある。こんな狂った実験に加担してるような奴らを生かしておくから、いつまでも実験を引継ぎされるんじゃないのか。
（欲も野心も底を割って跡形も無くなるまでッ!!）
この島が悪いのなら、この島ごと。
「全部ッ!! 壊すッ!!」
全力の超電磁砲が、コンソールを粉みじんに吹き飛ばす。
「はぁ……はぁ……！」
肩で息をする美琴。
（そうすればいつか！）
――いつか？
ひび割れたモニターに映った美琴が、ひどい顔をした美琴が、美琴を見ていた。
――そんな都合のいい日が訪れるとして、その時までにあと何人の『妹達』が死ぬの？
美琴は歯を噛み締める。
「うるさいッ!!」
感情に反応して電撃が飛ぶ。四方八方に飛び散り、床や壁を抉りとった。
――関係ないバカも巻き込んで、それもこれも全部、不用意にＤ

ＮＡマップを提供したから。
「うるさいって言ってんのよ！　ならどうすればいいってのよ!?」
美琴は叫ぶ。
「計画を！　今すぐに！　中止に追い込む！」
――妹達だけじゃない、関係のない人まで死ぬことになる。私と知り合ったから。
「どんな方法があるっていうのよッ!!」
――そんな都合の良い方法、あるわけないでしょ。
頭からあふれて止まらない考えを無理やり電撃でねじ伏せた美琴は、肩で息をする。
ふと、目にあるものが映った。
それは小さなモニターだ。かろうじて破壊からは免れ、稼働している残り少ない機材の１つ。
モニターには【ＬＩＶＥ】という文字がある。
「らい、ぶ……」
つまりは生放送。撮影されたものではない。記録映像ではない。今まさに行われていることだ。一体何の？
「ウソ、でしょ……」
映像を見た美琴は呆然と呟いた。
前に一度だけ見たことがある。線の細い白髪の男。最強の超能力者、一方通行（アクセラレータ）だ。
その一方通行の目の前には、良く見慣れた常盤台中学の制服を着た、美琴と全く同じ顔の少女、妹達（シスターズ）が立っている。
そしてもう１人。
「なんでアンタがそこにいるのよ……」
武器を持たず、駆動鎧も着ていない。画面越しに見る限りはまるっきり丸腰の男が立っていた。
夜月　翔が立っていた。

「おい乱造品、答えろよ。この場合、『実験』ってエのはどうなっちまうンだ？」
「どうして――――」
白髪の男――一方通行（アクセラレータ）が気だるげに振り向いた。
そいつを挟んで向こう側にいる御坂妹には、俺が今まで見た中で一番の表情が作られていた。驚きの表情だ。
場所はビルとビルの間。細い、路地とすら呼べない、人が通行することを目的としていない空間だ。いかにもと言いたい。
ビルの勝手口とエアコンの室外機、ゴミ箱しか目に入らない。当然、俺達３人以外、人はいない。
今まさに実験を始めようというところだったのだろう。御坂妹の手には、少女には似合わないサブマシンガンが握られている。
あと数瞬声をかけるのが遅ければ銃弾が発射され、反射された銃弾に御坂妹が撃ち抜かれていただろう。
「これが最後じゃない。すぐにわかるって言っただろ」
「――なに、を……理解できません。早く立ち去ってください。あなたはこの実験とは何の関係もない――――」
俺達のやり取りを壁に寄りかかって聞いていた一方通行（アクセラレータ）は、頭をかいた。
「……、ンで？　その話はいつになったらまとまンだ？　俺はいつまでここに寄りかかってたらいいンですかー」
一方通行（アクセラレータ）が割り込んできた。
「ッチ！　おい！　どうすんだよこの状況！　どっかで見てやがンだろうが！　模造品の知り合いが実験場に入り込んできて、訳分っかんエことになってンぞ！　お引き取り願えないときはアレですか？
秘密を知った一般人は、ってお決まりの展開かァ？」
一方通行（アクセラレータ）は虚空に向かって叫ぶ。相手はこの場にはいない実験の研

究員達だ。
「心配するなよ、一方通行。実験はもう終わりだ。俺がお前をブン殴ってな」
「……はァ？　へェー？　そいつァ、スゲーなァ。ご苦労さん――――ンで？」
一方通行はこちらを向いた。少し俺に興味を持ってもらえたな。
「もう少しわかりやすく説明してくれてねェかな？　実験が終わりだとか、俺でブン殴るだとか。ここまで意味不明なことを言う奴は珍しいぜ？　オマエ、目の前にいる奴が何者か理解してるンだろうなァ？　7人しかいないレベル5の、その中でも第1位って呼ばれて俺に？　何を勘違いして――――」
「そんな下らねェことはどうでもいいんだよ。俺は、テメェをぶん殴って実験を止めるって言ったんだッ!!」
「――――へェ？　オマエ、面白ぇな」
全部理解したうえで自分に挑んでくるのか。そんなアホは久しぶりだと一方通行は笑う。
「こんなモルモットに情が湧いちまって、突っ込まなくてもいいことに首突っ込ンじ待った訳か？　どんな隠し玉があるのかは知らねェが、勝てるって勘違いしちまった訳だ」
「や、めて。やめてください、一方通行。彼のことはミサカがどうにかします。少し待って――――」
「うるせェよ」
一方通行が手を払うと、少女1人を吹き飛ばすほどの突風が起こった。
「御坂！」
壁に叩きつけられた御坂妹が立ち上がることは無い。まさかあの一瞬で……！
「ギャアギャア騒ぐンじゃねェよ。あの程度じゃヤツらは死なねェからよォ」
一方通行ニヤニヤと笑っている。
「俺なりの配慮、って奴だ。やりあってる最中にちゃちゃ入れられた

ら困るだろ？　そしたら勢い余って殺しちまうかもしれねェ。実験以外のシナリオで死なれたら、計算が狂っちまうかもしれねェからな」
「そりゃありがたい配慮だよ……」
俺は顔を引きつらせつつ、拳を握る。
すでに幻想殺し（イマジンブレイカー）モードになっている。幻想殺し（イマジンブレイカー）以外のあらゆる能力は機能を停止し、アーバレストも着ていない今、俺は完全に無防備だ。
幻想殺し（イマジンブレイカー）も自分の筋力以上の威力は出ない。
でも、
「（まともにブン殴れば、一撃でいける――――）」
原作で上条さんが放っていた拳は、戦いながら、一方通行（アクセラレータ）に触られないように細心の注意を払ったものだった。
それでも倒せた。
一方通行（アクセラレータ）は強すぎる能力故に、戦い方をまるで知らないのだ。相手の攻撃をすべて跳ね返し、自らは相手にちょっと触れただけで倒せてしまう。
それでまともな『戦い方』を学ぶ機会が訪れるはずがない。
唯一心配だったのは、この世界の影響（主に武偵）で、一方通行（アクセラレータ）も体を動かせるんじゃないか、ってことだったけど。
「（あの身体つき……大丈夫みたいだな）」
骨と皮ばかりとは言わないが、それでもひ弱な印象を受ける体だ。俺だってムキムキのマッチョってわけじゃない。でも一方通行（アクセラレータ）の腕は、俺よりも二回りほど細い。
武偵学校の先生にしごかれてあの体型はない。大丈夫そうだ。
や、まあ、世の中にはあれよりちっこい体で仮面ライダーと張り合うアリアがいるからな……
ま、そんな例外はいいとして。今はそんなこと考えてる場合ではない。
今はこの拳をあいつの顔面に突き刺すことだけを考えるんだ。
距離は１０メートル。

「――ッ!!」
走り出す。わき目をふらず、わずかな距離を全力で詰める。
対する一方通行（アクセラレータ）は。
「……、はァ」
たん、と。
靴先で地面のコンクリートを叩いた。
「ご――アアアァァァッ!!?」
一方通行（アクセラレータ）の足元で手榴弾の爆発が起こったのかと錯覚した。
削られた無数のコンクリートは防弾制服を貫通し、散弾銃のように俺の体に突き刺さった。
身体がふわりと浮かび、いつの間にか元居た場所に転がっていた。
「つーかよォ」
一方通行（アクセラレータ）は戦っているとは思えない。ズボンのポケットに手を入れ、無防備に俺に歩いてくる。
「能力も魔法も使う様子がねェ。完全に丸腰で俺に殴りかかってくるったァどういう冗談だ？　こっちも暇じゃねェンだよ」
たった一撃受けただけで、もう足が震え始めている。
「大事な実験の真っ最中な訳。わかるか？　ここまでどンだけの時間がかかったのか。ぷちぷち、ぷちぷち。雑魚を時間どおりに潰して回って、ようやく半分だ。テメェが割り込ンだせいで、樹形図の計算者（ツリーダイヤグラム）の演算が狂っちまったらどうしてくれンだよ。実験失敗、ハイ、オワリ。ンなことになったら、どうするンだよ、アァ？」
でも、あれだけ無防備に近寄ってくれるなら――
「別にテメェのおめでたい頭で何を考えてても、俺は微塵も興味がねェ。他人のお人形遊びを止める理由はねェからな。ただ、俺の時間をゴミ箱に捨てちまう可能性があるってンなら――こうするしかねェよなァ！」
一方通行（アクセラレータ）は横にあったゴミ箱を蹴飛ばす。
サッカー選手がボールを蹴るよりも正確に俺に向かって飛んできた。
「ンだよ。しっかり能力使えンじゃねーか」

「……っ」
俺は闇の魔法(マギア・エレベア)で体を強化し、脱出していた。
合成樹脂で作られていたゴミ箱は、コンクリートの壁にぶつかって粉々になる。
「(考えが甘かった……っ)」
能力が無いと見せかければ少しくらいは油断してくれると思った。でもただでさえオーバーパワーの一方通行(アクセラレータ)にとって、油断なんてあってないようなものなんだ。
遊びの攻撃でさえ、生身の体には致命傷になる。
「どうしてだ……」
「あン？」
「どうして、妹達を殺すんだ。どうして実験に加担しているんだ。お前が一言『嫌だ』って言えば、全部解決するじゃねぇか！」
これだけははっきりとさせておきたかった。
「……ま、テメェごとき三下のおめでた野郎にはわかンねェかもしれねェけどな」
一方通行(アクセラレータ)は手を広げる。
「俺は絶対的な力が欲しいンだ。誰も挑むことが許されない存在になァ」
「最強よりも上、ってことか」
「最強なンてのは、どこまで行っても最強なンだよ。第一位もそうだ。結局、他人と比べられてるから、そんなつまンねェ呼び方されちまう。他と比べて最も強いから最強。第2位、第3位よりも優れてるから第1位。くっだらねェ」
これは紛れもない一方通行(アクセラレータ)の本音だろう。こんなちょっとした問いかけでここまで喋ってくれるとは思わなかった。
そういうことを言える相手がいなかったからだろうか。
「その他大勢と一緒にいるってことは、そいつらと嫌でも競わねェといけねェだろうが。うっとォしくてたまらねェンだよ」
一方通行(アクセラレータ)はあくまで最強だ。無敵ではなく最強。結局、一方通行(アクセラレータ)の最強は『ちょっとケンカを売ってみよう』と思われる程度の称号。

「俺が突っかかったみたいにな」
「テメェじゃあまともな相手になりゃしねェだろーが。お前、一体どこに勝機を見出したんだァ？」
一方通行（アクセラレータ）にとって俺は、いつも挑んでくるチンピラの1人だってことだ。
「なら試してみるか」
「あァ？」
「最初に言っただろ。今からお前をブン殴る。俺がその他大勢なのか試してみろよ。もしかすると、今日、最強じゃなくなるかもしれないぞ」
「……ま、言ってもわかンねェバカは、痛い目見ないとだよなァ……いいぜ、やってみろよ」
下らなそうに言い、棒立ちになる。
千載一遇、降って沸いたようなチャンスだ。
「（この一発で決めれば――！）」
反撃をしてこない、俺の拳を一方的に当てられるのなら――！
幻想殺（イマジンブレイカー）しを起動すると、闇の魔法（マギア・エレベア）が打ち消される。
一方通行（アクセラレータ）からは、今から攻撃するというのに能力を解除したように見えるだろう。眉を寄せている。
だがそんなのは関係ない。俺は助走をつけ、全力の右拳を一方通行（アクセラレータ）の顔面に突き刺した――！
右手に、相手の顔が変形する、グシャリ、という鈍い感覚が伝わった。

ＶＳ　一方通行（アクセラレータ）　後編

一方通行（アクセラレータ）は大の字になって汚い地面に倒れている。両鼻から鼻血を出して、元が白いから、腫れた頬がよく目立つ。

「（やった、か……？）」

今の俺に出せる最高の拳だった。俺の挑発に乗ってまともに受けてくれたこともあって、能力をすべて切っているとは思えない、素晴らしい手ごたえだった。

だが、そう簡単にはいかない。

「ア、は？　い、たい。はは、何だよそりゃあ？」

一方通行（アクセラレータ）は倒れている体をゆらゆらと起こす。

意識を刈り取るまでにはいかなかったみたいだ。地面に倒れる衝撃まで体に与えられていれば。反射のせいで、俺の右手以外のダメージが全く入らないからだ。

これでおしまいにできなかった代償は大きい。俺の右手が反射を貫けることを知られてしまった。

「何をしやがったあああああァァァァ!!!」

さっきとは一転した血走った眼を向けてきたかと思った瞬間、駄々っ子のように腕を振り回した。

俺はこの先起きることを予測して能力を切り替えた。

一方通行（アクセラレータ）の腕がコンクリートの壁を撫でた。積もった雪を手ですくうように削り取られる。

人の頭よりも一回り大きいコンクリート片、それが。

「ガァァァァァァァァァァァァ――――!!」

砲弾の速度で俺に向かって撃ち出された。

まともな力で全力投球したのなら肩の方が壊れる質量だが、ベクトル操作を使ったんだろう。狙いは正確に俺の頭だ。

「牙（タスク）ッ！」

爪弾がコンクリート片に命中する。

「な……ッ!?」

回転の中に一瞬身を隠し、回転を移動。もう一度外に出る。出た時

にはすでに一方通行（アクセラレータ）目の前だ。
三歩で届く距離――――!!
「アアアアアアッ!!!」
一方通行（アクセラレータ）も咆哮と共に右手を突き出してくる。
だがその動きは幼く、稚拙だ。拳は握られていない。パーの形になり、指先だけでも俺に触れようとしているのが分かる。
だが、
「ご……ア……!!」
ベクトル操作を行っていない、素の身体能力なら俺が負けることは無い。
２度目の拳が顔面に突き刺さる。幻想殺し（イマジンブレイカー）が反射を貫く。
一方通行（アクセラレータ）はその場でうずくまる。鼻血は勢いを増し、抑えた指の間からポタポタと地面に落ちている。
「ク、ソ、がァァッァァァ!!!」
手で振れれば俺を爆散させることが出来る。その考えがあるからだろう。鬼ごっこのように俺に手を伸ばしてくる。
「調子にのってンじゃねエぞ、三下アアアアアア!!」
柔道や相撲のように相手に組み付き、投げ飛ばす洗練された動作ではない。子供がじゃれつくような単純な動きだ。
しかし、振り回すだけでもそれは脅威だ。右手以外では触ることが出来ない俺は、攻撃と防御の両方を右手だけで行わなければならない。
一度でも他の部位に触れられればアウト。
だが、
「なんだよそりゃァ！　ちょこまか、ちょこまか動き回りやがって！」
「こちとら、いつもアリアの相手をしてるんだぞッ!!」
アリアのちっこい体が繰り出す天才的な格闘技に比べれば、全然、何もかもが足りていない。
近づけば悉く顔面に拳をお見舞いされる。ようやくそれを理解したのか、一方通行（アクセラレータ）は大きく後ろに飛んで、俺から距離を取った。
俺もむやみに追撃を仕掛けるようなまねはしない。

「『後ろに下がる』なんて、初めてじゃないのか、一方通行（アクセラレータ）」
「……黙れよ。三下がァ……！」
血走った眼で俺を睨みつけてくる一方通行（アクセラレータ）。口の中が切れたらしい。赤が混じったつばを吐き捨てた。
「面白れェ右手じゃねェか。俺の能力を破ったヤツは初めてだぜ」
「面白い手品だろ？」
「アァ……だがその手品も、右手以外じゃ出来ねェみたいだな」
「……」
あんなにぼこぼこに殴られてたのに、しっかりと分析されているみたいだ。
「手品よりも一発芸って呼ンだ方がいいのかもなァ？　しかも、反射を突破している間は、テメェは魔法を使えねェ。使われてたら、とっくの昔にやられちまってる」
闇の魔法（マギア・エレベア）と牙（タスク）を見せてしまったことが裏目に出てしまった。
一方通行（アクセラレータ）の言う通り、身体能力を強化して殴れるのなら、とっくに終わらせることが出来ていた。
「種が割れちまえばつまらねェなァ。俺を殴るには、テメェは無防備になるしかねェって訳だ」
「……」
俺は無言で幻想殺し（イマジンブレイカー）をオフにする。
どんな攻撃が飛んでくるのかわからないが、生身だと即死するかもしれない。
だがそれは同時に、受けに回ることを意味する。どんな攻撃も出来なければ、右手も含めて、触れられただけで死ぬ状態で、受けに回るのだ。
だがここで強引に攻撃すれば、俺は生身であると宣言しているに等しい。拳が届かない範囲に逃げられ、壊滅的な攻撃を浴びせられるだろう。
まずい。考えている時間が無い。
一方通行（アクセラレータ）はすでに攻撃しようとしている。
「この一手でお前は退場だァ」

「ッ!?」
一方通行（アクセラレータ）の右手が地面に叩きつけられた。右手を中心に地盤が一気に陥没する。続いて裏路地を作っていたビルの壁に一斉に亀裂が入った。
一方通行（アクセラレータ）は能力を使って高く飛ぶ。
「マジか……！」
その意味はすぐに理解できた。
揺れがどんどん強くなる。その中心は一方通行（アクセラレータ）が作った亀裂だ。コンクリートが割れただけではない。もっと深くまで衝撃が伝わっているんだ。
地面が無くなり、ぽっかりと大穴が作られる。底が見えない。アインハルトや綺凛と一緒に落っこちたことのあるバラストエリアまで続いているんだろうか。
連鎖するように、周りのビルの倒壊が始まる。
ここはビルに囲まれた細い路地だ。そんなところで、地盤そのものをぶち壊せばどうなるか。
コンクリートの雨が降ってくる。耳には建物が崩壊する音しか入ってこない。
このエリアをまとめて破壊しかねない破壊だ。俺だけなら何とかなるけど……
「御坂……ッ!!」
一方通行（アクセラレータ）に吹き飛ばされたまま、気を失っている御坂妹が危ない。よほどダメージが大きかったのか、人工島のブロックが丸ごと崩壊しかねない衝撃があっても、意識を取り戻す様子はない。
「クソッ!!」
このままでは間違いなく死んでしまう。
急いで救助に向かう。
もはやいつ足元が抜けてもおかしくない。御坂妹を背負い、ふと、今俺が何をしているのかを思い出した、
「――ッ!!」
空を見上げると同時に、白い隕石が落ちてきた。

空に飛びあがっていた一方通行（アクセラレータ）が、猛烈な勢いで落下してきたのだ。一方通行（アクセラレータ）の薄い色素が残像になって、本当に白い隕石になっている様だ。

しかも足が下になっている。まるでライダーキックだ。あの勢いだと、拳で迎撃することも出来ない。破れかぶれで拳を突き出しても、向こうは片足がつぶれるだけだが、こちらは粉々だ。

当然背負っている御坂妹ごと。

「くたばれェェェェェ！　三下ァァァァァ!!!」

その攻撃によって、島の一角に大穴が開くことになった。

「（お願い、無事でいて……っ!!）」

美琴はすっかり日の落ちた空を飛びながら、それだけを考えていた。

ビルとビルの屋上、そこに能力を使って磁力のケーブルを繋ぎ、一直線にあの裏路地へ急いでいたのだ。

研究所のモニターに映っていたモノの意味はすぐに理解することが出来た。一方通行と妹達。紛れもない実験のさなかに割り込むように映りこんでいた翔。

数時間前の会話の内容を思い出せば、翔が何をするつもりなのかなど簡単に想像出来る。

「なんで、なんであんたが知ってるのよ……っ」

どんな運命があったのか、美琴が最後まで教えなかった情報を掴んでしまった。そうとしか思えなかった。

「（お願いだから無事で――――）ッ!?」

突然、町のど真ん中が黒くなった。日が沈み街灯やビルの照明があ

る中、そこだけ絵の具で黒く塗りつぶしたかのように、電気が消えてしまったのだ。
「なに、この音……!?」
続いて聞こえるのは、地鳴りのような音だ。
「あの場所、まさか……っ」
明らかな異常事態だ。これを人為的に引き起こそうとすれば、それこそレベル5級の能力者が腕を振るわなければならない。
全ての情報が、1つ1つ丁寧に積み重ねられる。
「……は?」
美琴が着地したときには、裏路地は消滅していた。正確には、ぽっかりと大穴が作られていたのだ。大型トラックでも簡単に飲み込んでしまうほどの大穴だ。周りには瓦礫の山が作られている。
電気が消えたのは、このせいだとすぐにわかる。たった今作られたものだということも。
場所を間違えてしまったのか、何かの工事の最中かと美琴は現実逃避を始めるが、その淵に座る白髪の少年を目にする。
「――は、ァ……笑った笑った。死ぬかと思うぐらい笑っちまったぞ、クソったれが」
「ァ、一方通行(アクセラレータ)…!」
「あァ?」
一方通行は美琴の存在に気が付く。
「よォ、また会ったなァ、オリジナル」
美琴に向けられた顔は痛々しいものだった。顔中血だらけで、頬は腫れている。だがそれでも、その表情は晴れやかだった。
「アイツ、は……」
「あァ?」
「アイツは何処よ!!」
「アイツだァ……? ああ……」
一方通行は穴の底を指さす。
「まァ、実験のことを知ってるンだったら、お前の知り合いでもおかしくはねェよなァ。気をつけろよな、アイツのせいで実験がめちゃく

ちゃになるところだったぜ」
「だから……っ！」
「まァ、貴重な体験はしたけどなァ。あンな奴は初めてだったぜェ？
なンせ俺の能力を破りやがったンだからなァ」
「ッ……！」
美琴は幻想殺しのことを思い出す。
「本当に、本当にアイツは、拳一つで……」
「おいおい、知ってたンだったら止めてやれば良かったじゃねェか。お前だって、いくら何でも無謀だってわかってただろうが。まァ、死んじまった今となっちゃ遅ェけどなァ」
「死ん、だ……」
「ああ……そういや、お前のクローンも一緒に潰しちまったな……どうでもいいか」
「そん、な……」
美琴は全身の力が抜け、そこに座り込んでしまった。
――ほら、やっぱり死んだ。私のせいで、関係ない人が。
「（私のせいで、私の、せい、で……妹達だけじゃない、関係ない人まで、犠牲に……）」
一方通行は舌打ちした。
「おいおい、勘弁してくれねェか。そいつは何の真似だよ、三下」
「……」
美琴はコインが乗せられた右手を一方通行に突き出していた。
「そいつが俺に効かないって事はよォ、最初に会った時にわかったことじゃねェのか？」
「……うるさい」
超電磁砲が効かない。
美琴と一方通行が初めて会った場所、それはすなわち実験の会場で、妹達の惨殺現場だった。
怒りに任せて放った超電磁砲だったが――放った瞬間に後ろの鉄柱に風穴が空いていた。
あの時の感覚は今でも身震いする。

妹達を殺し、実験はもう終わりだというところで乱入した美琴。予定外の事態に一方通行が小首をかしげたのだ。そのおかげで、正確に跳ね返すはずの『反射』が少しだけズレたのだ。風圧で倒れ、少しすりむくくらいで済んだ。

だが、二度目はない。

超電磁砲（レールガン）を発射すればその瞬間、人の知覚を超えた速度で美琴の体はバラバラになる。

樹形図の計算者（ツリーダイヤグラム）の計算結果、『１８５手で美琴が敗北する』ではなく、この１手で。

しかしどんなに決意を固めようと、どんなに必殺の攻撃を向けようとも、一方通行にとっては有象無象の１人でしかない。

やれるものならやってみろと言わんばかりに、そっぽを向く。

今、一方通行の心を満たしているのは、初めての勝負に勝ったという充足感だけだ。

だがその時。

「ふう……」

「ッ!?」

瓦礫をかき分けて、黒い影のようなものが立ち上がった。同じ色の翼を広げ、２人の人を守っていた。

少年と少女だ。少女は気を失っているが怪我はなく、少年はボロボロだがしっかりと立っている。

「ありがとよ、黒影（ダークシャドウ）」

お礼を言われた影は、少年の足元に消えていく。

一方通行が立った今勝利したと思っていた相手――――夜月　翔がそこには立っていた。

黒影（ダークシャドウ）の防御が何とか間に合ってくれた。一応、防御呪文である『ラシルド』も使っていたとはいえ、あいつの物理攻撃遮断が無かったら耐えられなかっただろう。
俺が盾になったから、御坂妹に怪我は無いとは思うけど、一刻も早く病院に運ばないといけない。
そのためには、いい加減この戦いに決着をつけないとだな。
「（あ、ありえねェ。俺が何人の妹達をぶっ殺したと思ってやがるッ！　どうすれば人が死ぬかなンて嫌というほど分かってるッ！　今の攻撃で死なねェはずが……！）」
一方通行との距離は１０メートルも無い。向こうは腰が引けている。指先が震え、せわしなく呼吸を繰り返している。
「ハ、ハハ。いいネェ、オマエ」
それでも、引く意志は無いようだ。
「最っ高にッ！　面白ェぞ!!」
砲弾のような速度で俺に突進してくる一方通行に、俺の口が少しだけ緩む。
やっぱり戦い方を知らないな。せっかく自分に有利な距離があったのに、勢いに任せて近寄ってくるなんて。まっすぐと俺の懐に、俺の間合いに飛び込んできてくれる。
左右から迫る一方通行の腕。かがんで避けると、引きつった表情の一方通行と目が合った。今更ながらに、己の失策を悟ったんだろう。
握った拳を空に突き出すように振り上げた。それは正確にアゴに突き刺さる。
今度こそ、一方通行が起き上がることは無かった。

まだまだ中間点

「「……ッ!!」」

研究員たちはざわめいていた。

モニターに映る荒い映像には、たった今決した勝負の勝敗が映し出されていた。

一方通行の攻撃によって辺りのカメラが全滅したため、急いで飛ばしたドローンによってやっと見ることのできた現場だった。

今回の実験の核になっていた一方通行は、倒れたまま起き上がる様子はない。

これは認めるしかなかった。

一方通行は負けたのだ。あの少年に。

「っ！　樹形図の計算者（ツリーダイヤグラム）に再演算を申請しろ！　今回の件を踏まえて計画を再調整する！」

我に返った研究員が指示を飛ばす。

申請はすぐに受理され、再演算の結果は３０分ほどで帰ってきた。

《第１００３１次実験で起きたイレギュラーによる一方通行の敗北により、一方通行の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）に致命的かつ不可逆的な変化が発生。よって、同実験によって一方通行がレベル６に到達する可能性は０％》

帰ってきたのは無慈悲な通達だった。

あっさりと、短い文章で、実験の終わりが告げられた。

翔や美琴たちを苦しめた樹形図（ツリーダイヤグラム）の計算者の計算結果が、今度は研究員達に向けられることになった。

１人の例外もなく崩れ落ちる――――いや、そうではない人物がいた。

落胆した様子のない幻生にティアーユは声をかける。

「ふむ……」

「木原さん……？」

幻生はいつもの調子でしゃべり始めた。

「いや、失敗したものはしょうがないさ。うん。実験だからね。科学

の発展に多少の犠牲はつきものであるのと同様に、実験に失敗はつきものなんだ」
「は、はぁ……？」
その通りだが、この状況で言われるとどうしても違和感を覚えてしまう。
「（……違和感？　そう違和感よ。どうして私はここに、どうしてこんな実験に参加を……）」
疑問ははっきりとしているのに、思考が靄のように定まってくれない。何度も経験したことのある症状だ。掴み取ることのできない靄を追いかけているうちに、思考は消え去ってしまうのだ。
「ルナティーク君、君に渡した『アレ』は今も持っているよね？」
「はい」
「見せてくれないかい？」
「わかりました」
幻生の声で、いつもの通り疑問が霧散して消えた。
そして言われるがまま、胸元のポケットから赤と青、時計型の『何か』を取り出すティアーユ。
「どれどれ、このウォッチの本当の使い方を教えようか」
《ＢＵＩＬＤ》
「え――――」
幻生は『何か』を――――アナザーウォッチを起動して、ティアーユに埋め込んだ。
「これはこれで研究のし甲斐のあるモノだったんだけどね？　残念だが今回は、こういった形で使わせてもらうとしようかな」
「あ、ああ、あああ――――――」
ティアーユの姿がみるみる変わっていく。
赤と青２色が良く目立つ。２色の複眼からはウサギの耳のようなブレードと、戦車の砲身のようなアンテナが伸びている。
『本物』には無い『歯』はより生物的な恐怖を与えてくる。
「これは力の結晶なんだよ。『仮面ライダー』という英雄の力だ。この世界のものではない、全く未知の力を与えてくれる」

もうそこにはティアーユ・ルナティークは存在していなかった。そこにいるのは異形の怪物だ。
「木原博士!?　いったい何を!?」
「あー、そう。彼は何と言っていたかな。その姿のことを」
異変に気付いた研究員が何か言うが、幻生は気ままに頭をひねる。
「最近、実験に関係ないことはめっきり覚えられなくなってしまってねぇ……んー、何だったか……、……、……ああ！　そうだ思い出した！」
もはや部屋の中は、一方通行が負けてしまったことなど、実験が失敗したことなど意識の外に放り出されてしまった。
あるのは異形の怪物への警戒心だけだ。
「アナザーライダー。アナザービルドだったかな？　ルナティーク君、今日から君が――――『仮面ライダービルド』だよ。君達。これからのことは、『コレ』の指示に従ってね？　それじゃあ――――」
「きっ、木原博士――――!!」
全く計画にないことを言い、背を向ける幻生。
「静かにしてください」
アナザービルドは元の、ティアーユの姿に戻る。それにホッとする研究者たちだったが、明らかに様子が変わってしまった。
「実験は、これからプランBに移行します。指示に従って下さい」
「（うんうん。もう暗示は必要ないみたいだね？）」
暗い廊下を1人で歩く幻生は、
「それじゃあ、『後』は任せたよ、ルナティーク君」
その言葉を残し、姿を消した。

俺と一方通行の戦闘が終わってすぐに、管理局が駆け付けてきた。そしてその場にいた全員、病院に搬送されることになった。
突風で壁に叩きつけられた御坂妹。俺にぼこぼこに殴られて気を失った一方通行。一方通行からの攻撃を受けた俺。怪我が無いのは御坂姉だけだった。
そして、御坂姉もその場にいた重要参考人として、一緒に来ることになった。特に拒むことは無かったため、それ自体はすんなり完了した。
1つ気になったことと言えば、駆けつけてきた局員に六課の人がいなかったことか。
や、そりゃあ、すべての事件に六課が来るなんてことは無いだろう。俺の知り合いだけで世界が回っているわけじゃないんだから、確率としてはそっちの方が高いのは重々承知しているんだけどね。
そうして俺たちは病院に搬送された。
治療を受けて、意識のあった俺達は取り調べを受けることになる。
俺はベッドの上で、御坂は別の部屋で。
当然最初に聞かれるのは名前だ。
御坂はレベル5の中でも超有名な超電磁砲（レールガン）。ちょっと調べればすぐにわかることだ。
常盤台中学は厳しいからなぁ。門限破りをしてるのがバレた時点でヤバそうなのに、余罪がどんどん出てくるんだもん。夏休みは、さぞ不自由な思いをすることになるだろう。
目の前にいない御坂に、少しだけ同情する。
無名な俺は、そんなに失うものは無い。
「夜月　翔……まだ正式配属はされていないようですが、特務六課所属になっていますね。今回は捜査ではありませんよね？」
「あ、はい」
忘れてた。俺ももう管理局員じゃん。じゃあ取り調べとかされなくても良いのでは？

「暴行の現場を目撃したので対応しました。武偵免許もあるので問題無いかと」
「なるほど、わかりました。あなたの上司にはこちらから連絡しておきますので、報告書もそちらにお願いします。武偵として処理する場合は、建物の修理費があなたにも行ってしまうので」
「わかりま――――」
　ああ、まあね。公務で行動したのなら、報告書は必要だよな。
　あんなバラストエリアまで貫通した島の修理費なんて、いくらかかるかわかんないし。前回は聖天子様に立て替えてもらったけど、自分て払うなんて想像出来ない。
　だったら、報告書の手間くらい、全く惜しくは――――
「――――連絡したんですか？」
「え？　はい。しましたよ」
「そうですか……仕事、早いですね」
「はぁ？　恐縮です」
　連絡されたってことは、色々と知られてしまったってことだよな。俺が戦って、街をぶっ壊して、病院送りになったってことを。
　しかも報告書とは。今回のことを事細かに報告しないといけないだろう。
　第1位の超能力者と、あんな派手な戦闘をする理由……？　ははっ、ごまかせるわけない。
　これは覚悟を決めるしかないな。クローディアに迷惑がかからないようにしないと。
　それから2時間が経過した。覚悟を決めたと言いつつも、往生際悪く言い訳を考え続けていたが、全く何も思い浮かばない。
　タイムリミット。とうとう六課から人が来た。それはまさかの、
「部隊長が直々に来るとは思いませんでしたよ……」
「どーう？　元気してるー？」
　ニコニコと笑いながら部屋に入ってきたのは俺の上司であり六課の部隊長、八神　はやてだった。
「あはは、まー、私も暇なんよ。指揮官がそんな前線に行くわけにはい

かないらしくて」
「小さいころは、そんなの関係ないって突っ込んでいきそうですよね」
「いやいや、魔導師としては後方支援型だから。突っ込むのはフェイトちゃんで」
戦場には行ってたって事じゃないか。
八神さんが席に座る。気まずい雰囲気になる前に切り出した。
「えー、それで、ですね。今回の事ですが」
「うん。私達もびっくりや。まさか君がここまで先にいたなんてなぁ」
先にいた？
「クローディアから、あらかたの話は聞いた。夜月君も六課のことを聞いとるんやろ？　順を追って説明すると……」
六課が欠陥電気のことを調べていたのは俺も知っていた。だがその段階で、捜査権を無理やり持って行かれてしまったらしい。
このまま引き下がるしかないかと思われたが、昨日俺が襲った研究所とは別の方に怪獣が現れた。
スクランブル出動が掛かり、フェイトさんとシグナムさんがこれを撃退する。すると偶然にも、絶対能力者進化計画について知っている情報提供者が現れたと。
それで実験について知った六課は、解決に向けて動き出すことになったのだが、
「まさかその日の内に、実験の中核のはずの一方通行が身内に倒されるなんて思いもしなかったわ」
「やっべぇ……」
それは、やっべぇよ。
映像を見せてもらったけど、研究所を襲ってる怪獣、あれゼットンだろ!!　あんまりウルトラマンに詳しくない俺でも知ってる、超メジャーな怪獣じゃないか!!
六課ではどこかの生物兵器が逃げ出したってことになってるみたいだけど、絶対誰かが召喚しただろ。
嫌な予感がするぞ……

「ま、結果的には妹達の犠牲は少なくて済んだし、クローディアともども、この件は不問ということで」
　そっちも流石に隠し通せないよなぁ。
「でも、これは御坂　美琴にも言えることやけど、今度からはしっかりと大人に相談すること。それだけは守ってほしい。私達は仲間なんやから」
「……はい」
「今回は管理局にも裏切者がいたから、あんまり力になれなかったのかもしれないけど、それでも一言欲しい」
「……はい」
「それに君のことを心配してる女の子はたくさんいるんよ。その娘たちにも秘密にして、それがどんなにヒドいことか、わかってる？」
「はい。それはもちろん――――」
　あれ？
「みんなに秘密にしてるって、クローディアに聞いたんですか？」
「うん？　いやいや、本人から聞いたんよ」
「は？」
「うん。あー、複数やから、本人達って言うのが正しいんかな」
　それはつまり。
「みんな、今は六課にいるってことですか!?」
「そや。ちょーっと、お手伝いしてもらっとるよ」
　先送りにしていた問題が、まさかこんなところで降りかかってくるとは。
「お手伝いとは？」
「一方通行を倒したって言っても、実験をしようとしていた研究者が捕まったわけやない。協力者の情報を頼りに、一番重要な、中枢になっていた場所に行くんや。逮捕のために。まあ、後処理って感じかな。一番美味しいところは君に持っていかれたからなぁ」
「じゃあ俺も――――」
「許可を出すと思う？」
「……思いません」

「女の子達にも言われとるんよ。絶対に無茶をさせるなって。病院でじっとしてるようにって」
重症ではないけど、一方通行から受けたダメージはしっかりと残っている。
まあね。あの実力者たちだったら俺の助けなんていらないだろう。一番の障害だった一方通行を倒したところで、今回の俺の仕事は終わったようなものだ。
後はこのベッドの上で、事件解決の報告を待つだけ。
そして、みんなのお叱りを受けるのを待つだけ。
「はぁ……気が重い」
「ま、そんなことで悩めるのは、モテ男の特権やからな」
そんなことを話しているとメールが届いた。
「あ、これはお叱りのメールとちゃう？」
「怖いこと言わないでくださいよ……みんなには俺がここにいることは知らせてるんですか？」
「モチのロン。一番気にしてたのはそこやったから」
だったら本当にお叱りのメールかもしれないな。
「確認しても？」
「ええよ？」
俺は端末を開いてメールを確認する。
「……」
「んー？　みんなはなんて？」
俺は無言で端末を閉じる。
「八神部隊長」
「なに？」
「みんなは実験の後処理をしてる、って言ってましたけど、それは本当ですか？」
「どういう意味？　私が君にウソをついたって言いたいの？」
いや、嘘はついてないだろう。
「いえ、そうじゃあないです。ただ……使う言葉を間違っているんじゃないかと思って」

「……」
「本当は、まだ『後処理』の段階じゃないのでは？」
もちろん根拠がある。
メールはみんなからのものではなかった。
差出人の名前は無い。『緊急ミッション』発令の告知だった。
その内容は――――『妹達の暴走を止めろ』。この内容の緊急ミッションが発令されたのに、後処理をしていると言われても納得出来ない。
「妹達になんかありましたか？」
「はぁ、ホントに君は勘が良いというかなんというか」
八神さんは観念したと話し始めた。
「協力者は『２人』いるんよ」
「２人」
１人は布束　砥信。妹達の学習装置を監修した科学者で、フェイトさんとシグナムさんが保護した人だ。
「そしてもう１人。君の知り合いの女の子達が連れてきてくれた協力者がいるんよ」
「みんなが？」
そんな接点があったっていうのか？
「布束さんの方の情報は、正直君が活躍してくれたおかげで問題なくなった。それは本当に良かったって思ってる」
「じゃあ今は、その２人目の協力者の情報に対応してるんですか？
……もったいぶらずに教えてくださいよ」
「協力者の名前は、芳川　桔梗」
八神さんはそれでも、もったいつけて言う。だがそれは、
「このままだとこの島は――――世界中の国から狙われることになるかもしれないんや」
それに見合った、最悪なものだった。

遅すぎた救い

一方通行は夢を見ていた。
この能力はいつか世界そのものを敵に回し、本当に全てを滅ぼしてしまうかもしれない。
そう思ったのは小さいとき、怖くなって振るった腕が、相手をバラバラに引き裂いた時だった。
まだまだ最強の超能力者ではなかった時。突っかかってきた同級生が悲鳴を上げ、止めに入った教師が吹き飛び、出動した管理局員が千切れ飛んだ。
彼はただ怖がっていただけだった。
振り上げられる拳が怖くて、がむしゃらに腕を振るっていただけだった。
だが、最新機器の残骸や彼に傷つけられた人が積み重なっていくと、彼も気が付いた。危険なのは自分の方だと。
このまま自分に向けられる脅威を跳ね返し続けていれば、そのうち世界そのものを破壊しかねないのではないかと。
そうならないために、他人に何をされても動じない人間になることを選択した。軽く撫でただけで人が死ぬのなら、何をされても感情が動かない氷のような人間になれば良い。
決定的に間違えた選択をしたまま、少年は成長した。
そんな一方通行にすり寄る研究者がいた。
「だが、最強の先へと進化すれば何かが変わるかもしれないよ？」
その言葉は、錆び付いた心の隙間に染み込んできた。
「その為には計画に従い実験の遂行を」
チカラが争いを生むなら、戦う気も起きなくなる程の絶対的な存在になればいい。
今考えれば、本当に。
「何やってンだ、俺……」

「ァ……っ」
一方通行の意識が覚醒する。徐々に感覚がはっきりしていく。
鼻先を起点にしてじくじくという痛みを感じていた。顔をしかめると逆に痛みは強くなる。
「クソ……」
遅れていつも自分が寝ている、ボロボロの部屋ではないと気が付いた。真っ白な布団に標準的なマットレス。病院のベッドだ。
頬に鬱陶しいものが張り付いている。
手を動かして確認すると、それは傷口を抑えているガーゼだった。
「あァ、そういやァ……負けたンだっけか」
気を失って病院に運び込まれる。これを負けと言わずに何と言えばいいのか。
生まれて初めて、戦闘での敗北を喫した一方通行だったが、不思議と心は穏やかだった。自分を殴り飛ばしたあの男へ報復する。そんな考えは全く起きなかった。
虚無感、というの場一番正しいのかもしれない。『最強』という肩書のために入れていた力が一気に抜けて、しぼんでしまったかのようだ。
その時、病室の扉を開けて1人の女性が入ってきた。
「あら、起きたみたいね。一方通行」
「テメェは……芳川　桔梗だったか」
白衣を着ているが、医者にしてはその白衣は薄汚れている。色の抜けたジーンズによれよれのTシャツと、清潔という言葉とはかけ離れた格好をしていた。
「流石ね。言葉を交わしたことは、1度か2度しかなかったと思ったけど」

「研究員を止めて、医者にでも転職したのかァ？」
「残念、ハズレ。聴診器の1つもぶら下げていない医者はいないわよ」
「見舞いを頼ンだ覚えはねェぞ。紛らわしく白衣まで着てよォ。俺が病院に担ぎ込まれて、焦ってそのまま来ちまったのかァ？」
　芳川は椅子に座りながら肩をすくめる。
「それもハズレ。あなたがここに運び込まれたのは単なる偶然よ。ここにいたのは実験の大筋とは別の用事があったから」
「あァ？」
　大筋とは別、ということは。
「そう。大筋とは別だけれど、別の意味で実験に大きな関わりがある要因。そのことでここに来たの。より正確には、待機しているのよ」
　特に一方通行は聞き返さなかったが、芳川は続ける。
「最終信号（ラストオーダー）、という個体の捜索よ」
「最終信号（ラストオーダー）……？」
　飲食店以外では聞かない言葉だ。
「そう。検体番号２０００１。開発コード最終信号（ラストオーダー）が現在行方不明になっているの」
「……ちょっと待て。２０００１だと？　実験は2万人ジャストで終わりじゃなかったのかよ」
「あら、興味が出てきた？」
「おちょくるンなら、余計な音も『反射』してやろォかァ？」
　話しかけてきたから疑問を返しただけ。それ以上の興味が無い一方通行。
「ごめんなさい。質問に答えると、最終信号（ラストオーダー）は実験には必要のない個体なの。言ってしまえば安全装置のようなものね」
　2万人もの人造能力者を使って行う実験。妹達は従順に従っていたが、もし反旗を翻されれば一大事だ。
　2万人もの能力者を、非力な研究員だけで取り押さえるのはまず不可能。
　さらに、一般人に知られれば隠ぺいは困難。実験も終わりになるかもしれない。

そのために用意されたのが最終信号（ラストオーダー）という訳だ。
「ミサカネットワークという言葉を知っているかしら」
一方通行には聞き覚えがあった。
妹達の間でつながっている脳波リンクのようなものだ。ネットワークそのものが巨大な意思を持っていて、各妹達を操る術もあるとかなんとか。
「最終信号（ラストオーダー）はその逆で、ミサカネットワークに干渉できるの。脳に特殊な電気信号を流すことによってね。場合によってはすべての『ミサカ』に停止信号を送ることも出来る」
最高の安全装置という訳だ。
「それ故に、最終信号（ラストオーダー）は自由であってはならない。居場所を知っていたのは私を含めてごく数人。最終信号（ラストオーダー）自体は研究員でも押さえつけられるように、精神と肉体は幼いままになっている」
「人型のリモコンたァ、エグいもンを作るぜ」
最終信号（ラストオーダー）は言ってしまえば、妹達のリモコンだ。
知識のある人間が使えば、妹達を自由に操作出来る非常に危険なリモコンなのだ。
「それで、そいつがいなくなったと」
「そうね、大問題だわ」
「いつ分かったンだ？」
「だいたい１０日前ね」
「ンだと!?」
１０日間も見つけられず、生死の確認も取れていないというのは、いささか悠長な対応だ。
「仕方がなかったのよ。この実験は黙認されているとはいえ、知られれば国際法違反の犯罪。管理局や武偵に泣きつくことも出来ない。残った私たちは、そういうことについては素人だもの」
さらに言えば、そのころから翔の研究所襲撃も始まり、御坂の分と合わせて後処理の量が2倍になったことも大きかった。
「本当に、今頃どこにいるんだか」
その顔には、隠しきれない心配の色が見える。機密の漏洩ではな

く、ただ純粋に妹達を案じる顔だ。
芳川は甘い女だった。
自分たちの実験で使うはずの妹達に、遺伝子レベルで同じ顔の妹達に、わざわざ名前を付けて区別しようとしていたことがあった。
妹達をかわいそうに思うのなら、実験から手を引けばよい。無駄と知っても抗議活動をすればよい。
しかしそういうことはしないのだ。
何処まで行っても、優しいのではなく甘い女。それが芳川　桔梗だった。
「もう死ンでんだろ。精神と肉体は幼いままってことは、いつものヤツらよりもガキって事だろォが。そんな奴が、誰の手も借りずに生きていられるわけがねェ」
この島も治安が良いわけではない。
警察機関として管理局はいるが、同じくらい能力者の犯罪がある。
「ああ、いえ、生きてはいると思うのよね」
「根拠があるのか？」
「実は今、最終信号（ラストオーダー）の頭の中にはウィルスが入ってるのよ」
「……おい」
いきなり出てきた不穏な単語に、思わず素でツッコむ一方通行。
「どうしても見つからなくて、樹形図の計算者（ツリーダイヤグラム）に人格データを入力してみたの。行動パターンで居場所を割り出そうと思ってね。そしたらビックリ。入力したときに見たこともないコードを見つけてね。ちょっと解析しただけでも、マズイものだって分かったわ」
「ウィルス起動から１０分後、ミサカネットワークを介してすべての妹達に感染。予測できる症状は、人間に対する無差別な攻撃ってところね。そうなるともう最後、あなたと戦うためにあらゆる戦闘方法を教え込まれた１万人の能力者が、人を殺して回ることになるわ」
「……、……、ちょっと待て。今起きるって事か？　そいつが？」
「それは分からないわ。でも、今すぐに起きてもおかしくはないの」
通常時の島であっても、それは大事件だ。

しかし、今は8月だ。様々な大会で選手が集まり、大会を見るために島の外からも人が集まる。さらには各国の要人が集まり、島のことについて話し合う会議も開かれる予定になっている。
そんなところで妹達が暴走することになれば、
「人造能力者、それも1万人が暴走する。一研究の失態じゃすまないわね。多数の民間人が犠牲になる。要人が犠牲になれば、戦争の火種にもなりうる。この島の存続にかかわるレベルの大失態になるわ。過激な国からは軍艦やミサイルを向けられるかもしれない」
いずれにせよ多くの人命が失われることになる。
「ンで？　そいつはいったい誰が原因なんだ？　産業スパイにでもやられたか、それとも戦争を望む兵器会社の陰謀かァ？」
「さあ、そこまでは。私は探偵じゃないもの。でも手口の鮮やかさ……特に最終信号（ラストオーダー）へのウィルスコードを見る限り、内部犯の可能性が高いわね」
ここで芳川はいったん話を切り、
「それで、一番最初の質問に戻るけど」
「何だったか……」
「私がどうしてこの病院にいるのかって話よ」
「あァ、それか」
一方通行は話のインパクトですっかりと忘れてしまっていた。
「この病院にいるのは、最終信号（ラストオーダー）の再調整のためよ。ここ以上に設備の揃っている病院は、この島にはそうそうないからね」
「見つかるアテがあるってのか？」
「今は色々あって管理局に探してもらってるわ。色々なめぐりあわせのおかげね」
芳川はこの状況を打破するために、協力者を見つけることにした。
選ばれたのは、クローディアと協力する前、独力で調べようとしていた翔だ。
「ネット上のセキュリティはかなりおざなりだったから。アドレスを調べてメールを送ったのよ。実験についてわざわざ調べてるくらいだから、協力してくれるんじゃないかと思ってね」

それが今日。つまり、翔が居なくなって大騒ぎしていた女の子たちのところに届くことになった。
そこから女の子達に情報が共有されることになったのである。
女の子達は、あまりの規模の大きさに六課に連絡を取ることにしたのだ。その時は、既に夕方。翔が一方通行と戦う少し前だった。
「そこから事情を説明して、実験に関わった残りの研究者の逮捕と、最終信号（ラストオーダー）の捜索が並行して進められることになったの。最終信号（ラストオーダー）の件の犯人が内部にいるなら、逮捕して聞き出したほうが早いものね」
それで芳川の話は終わりだった。
「待ってるって言ってたなァ。俺としゃべってる暇があるわけだ。随分と余裕じゃねェか」
「今はワクチンプログラムの精査中よ。ＰＣで判断して、ダメな箇所をもう1度修正する。これが5回目ね」
「まァ、せいぜい苦労するンだな。全部お前らの管理の悪さが責任だ」
「そうならないように、私たちは努力しているのだけどね」
最終信号（ラストオーダー）を見つけられたとしても、ワクチンが完成しなければ、一生暴走の危険が付きまとうことになる。
本当にどうしようもないと判断された場合は、『処分』するしかない。
たった1人を犠牲にすることで、世界を守るのだ。
「もちろん、君にも出来ることはあるわ」
「……はァ？」
ここでようやく、どうしてここまで芳川が丁寧に説明してくれたのかが分かった。
「おいおい、誰にモノ言ってンのか分かってンのかオマエ。オマエの目の前にいるのは、ついさっきまでその妹達をぶっ殺してた張本人だぜ？　いくら人がいても足りねェって言ってもよォ、頼る相手ぐれェは選ぶべきだぜ」
「私たちが実験に誘わなければ、あなたが妹達を殺すことは無かった、と言わせてもらうわ。それ以外の方法を、私たちが提示できていれば」

「テメェが人を殺した理由を他人に擦り付けるなンざァ、三下のやることだ。同意書にサインしたのは俺なんだからなァ」
「ああ、そうそう。言うの忘れてたわ。実験、凍結されたわよ」
「……」
芳川が見せたメールには、確かにその旨が記載されていた。
「どうやらあなたが負けたことで、計算に修整出来ない不具合が出たらしいわね」
「……そうかよォ」
まさか、こんなあっさりと実験が中止になるとは。前人未踏を目指した実験が、まさか自分の敗北1回で潰れてしまうとは思っていなかった。
だが一方通行は、何となくそんな予感はしていた。
ならばこれから自分はどうなるのか。一方通行は漠然とそんなことを思う。管理局がかかわっているとなると、クローンとは言え殺人を犯している一方通行だ。
クローンの人権や法律についてはあいまいな部分が多いため、最終的な判断には時間が掛かるはずだ。ここから長い生活が始まるのだろうか。胸を張れることではないが、言い逃れをするつもりもなかった。
「出来損ないのクローンを潰さなくてよくなって清々する？　レベル6になれなくて残念？　自分の時間を無駄にされてイライラしてる？　実験に参加して、後悔してる？」
「……そこそこ面白れェ話だったぜ。話が終わったらとっとと出ていけよ」
「ええ。そうさせてもらうわ。それじゃあ、よろしくね」
芳川が部屋から出ていくと、一方通行は小さく舌打ちした。
「……クソったれが」
本当に嫌な気分だ。実験の中止をすんなり受け入れられたというのに。今はそんな些細な事などどうでも良くなっている。
星の数ほど人を殺した相手に、芳川はいったい何を頼んでいたのか。

今更そんな選択肢を提示され、どうしろと言うのだろうか。
今更見知らぬ誰かのために、この何かを壊すことにしか使えないチカラを使えと言うのか。
「蔑めよ。俺はこの期に及ンで、救いが欲しいみてェだぜ」
頬に張られたガーゼをはがしつつ、そう言うのだった。

３０分後、芳川が病室に戻ってきた。
「貴方に勝った男の子、病院を抜け出したらしいわよ。まさか、八神はやての隙をついて抜け出すなんてね。私がメールを送った相手と同一人物だったなんて思わなかったけど――――一方通行？」
返事がない。
不審に思って覗き込むと、ベッドは空になっていた。
病院着はベッドの上に脱ぎ捨てられていた。窓は開け放たれ、夜風が入ってきている。
「そう」
芳川は安心したような、慈しむような、優しい――――のではなく、
「お願いね、一方通行」
『甘い』表情を浮かべた。

敵の本丸へ

「ここだね」
「そうですね」
フェイトとアスナはとある研究所に到着した。駐車場に車を止め、正面から研究所に入っていく。
布束や芳川からの情報の中では小さめの研究所だ。この後に２つほど、２人の担当の研究所がある。
研究者の残党逮捕と最終信号（ラストオーダー）の捜索、その２つを六課と女の子達は分担して行うことになった。
研究員の逮捕には管理局の捜査という大義名分が欲しいため、フェイト、ティアナ、シグナムにそれぞれ、アスナ、雪菜、オルタ、セイバーが割り振られた。
狂三、理子、アリア、耀、桜は最終信号（ラストオーダー）の捜索だ。
六課の隊舎に残ったのはクローディアと楯無、はやてだ。その中のはやてが、翔の連絡を聞いて病院に来た形になっている。
クローディアが来なかった理由は、押して図るべしだ。
クロやティナはもう遅い時間だということで、高町家へ行くことになった。その際、ヤミも同伴している。
協力者の情報がいつまで有効か分からない。行動は素早く迅速に行わなければならない。
フェイトは六課の制服、アスナは防弾制服に、まだ抜いていないとはいえ腰に細剣を下げている。実力行使も辞さない構えだ。
時間は日付変更まであとわずか。受付の明かりは消え、人もいない。だが、上の階の窓にはしっかりと電気の光が見えた。
自動ドアではなく、その脇にある夜間、休日用の呼び出し窓口に行く。
「管理局、特務六課所属、フェイト・Ｔ・ハラオウンです」
《ご用件をお伺いします》
自動応答ＡＩに状況を説明すると、しばらく待つようにという答えが返ってきた。

「これで相手がどう出るかですね」
「そうだね。何かあった時は、こっちから指示を出すから」
実際２人はここに来るまでに２つの研究所へ行っている。片方はすんなりと片づけることが出来たが、もう片方では妹達を人質に取られ、抵抗された。
妹達の事を実験動物としか思っていない研究者も、管理局はそうは思わないことを知っているのだ。
しかし、ただの研究員が人質を取ったところで、この２人のスピードから逃げられるわけがない。
研究員は人質を取った瞬間に、気絶させられることになった。
だが今回もあんなことになってはたまらない。
「早く終わらせないと、ですね」
「そうだね。でも夜月君が見つかってホッとはしてるでしょ？」
「それはもちろん！　……そうなんですけれど」
翔が一方通行と戦い、病院に運ばれたと女の子達が聞いたのは今から３時間以上前になる。その報告を聞いたとき、みんな生きた心地がしなかった。
それは芳川に聞いていた一方通行の能力の威力のこともあった。翔は強いように見せかけて意外とギリギリの勝負が多いということも、不安の材料になっていた。
いっそのこと、すべてを超越したような力を持っていれば安心できた。
今回の実験の内容は想像を絶するものだった。
その戦いに巻き込まれないようにという配慮があったのは分かったが、それでも１人で戦いの場に赴いたのにはモヤモヤとした気分になる。
「これが終わったら、お説教しないとですね……」
確かに大変な実験だが、それで尻込みするような自分達ではないと、自分たちはそんなに弱くないと、一言言ってやらなければ気が済まないアスナ達だった。
「あはは、ま、まあ、しっかり言うのは大切だと思うよ？」

「え、フェイトさんからは言ってくれないんですか!?」
「うーん……正直そういうのは、なのはで慣れちゃったから。あんまり強く言えないかもしれないんだけど……」
「高町さん、昔はずいぶんと無茶してたんですね……」
『慣れた』と言うからには、それはもう相当のレベルと回数だったのだろう。昔のフェイトやその周りの人に深く同情するアスナだった。
　そんなことを話しているとＡＩからの返答があった。
《申し訳ありませんが、今日はお引き取り下さい。後日、正式な令状をお持ち下さい》
　ここまでは、
「どこも同じだね」
「そうですね」
　それはそうだ。一体どこに、違法研究をしている研究所に管理局を入れるヤツがいるというのだろうか。
　これは前２つの研究所でも全く同じだった。
「じゃあ、行こうか」
「はい！」
　フェイトは一瞬でＢＪを纏う。その手には戦斧と化したバルディッシュが握られている。
　アスナは音を立てて細剣を抜いていた。
「突入します」
　フェイトが魔力弾で扉を破った。同時にけたましいサイレンがなり響き始める。しかし警備員が出てくることは無い。
「バルディッシュ」
《人の反応は８つ。全てこのビルの上階からです。距離から考えて、全員が同じ部屋にいるようです》
「妹達は居ないんですか？」
《申し訳ありません。そこまでは》
「とにかく、そこしかないなら行くしかないね」
《ただ――》
　早速行動を開始しようとした２人だったが、バルディッシュの報告

には続きがあった。
《その近くで未知のエネルギーを感知しました。》
「未知のエネルギー……？」
《今まで観測したことのないエネルギーです》
「（未知のエネルギー……）とりあえず、注意して進まないといけないってことですよね」
「うん。そうなるね」
アスナは未知のエネルギーという言葉に心当たりがあった。まさかとは思うが、そんなことがあり得るのだろうか。
しかし、具体的な内容が分からなければ、気を付けて進む以上の案が出てくるわけがない。
口に出した通り気を付けて進むが、これと言って罠が仕掛けられているわけでも、攻撃が飛んでくるわけでもなかった。
バルディッシュの指示に従い進むと、特に妨害もなく目的地に到着してしまった。

唯一電気のついた部屋。７つのＰＣが稼働し、７人がキーボードを叩いている。フェイト達が部屋に入ると、その管理局員の制服を見た１人が手を止める。
「手を止めずに。時間がありませんよ」
唯一ＰＣを操作していない女性の声で、研究員はビクつきながらも作業に戻る。女性は背を向けたまま、２人に対応し始めた。
「すみません。こちらは今、作業中でして。ご用件はお聞きできない可能性が高いです」
「特務六課です。対テロ特殊権限により、あなた達を逮捕、拘束します」
「……なるほど」
「「……！」」
今度は全員がその手を止めた。だがそれは逮捕を恐れているのではなく、どこか救いを求めるような表情だ。むしろこの場に来てくれたことを歓迎しているかのようだ。

「……ご用件はそれだけですか？　ではお聞き出来ないですね。今はこの作業に集中しなければならないので」
「そもそも、何の作業をしているんですか？」
　アスナの問いに、女性は簡潔に答える。
「実験データの消去です」
　つまりは証拠隠滅だ。ここまで堂々と言われるとは思わなかった2人は、少々面食らってしまう。
「これが残っていては、都合が悪いですからね……そう、です。都合が悪い……でも、私は……？」
　魔力弾が床に着弾する。
「今すぐ作業を中止して、こちらの指示に従って下さい。次は威嚇ではありません」
　部屋に、ＰＣの稼働音だけが聞こえる。女性とフェイトの言い合いの行き着く先が、この場の行く末を決めるからだ。
「何度も言いますが、要求は受け入れられません。これは重要な仕事なので」
「……わかりました。強制連行します」
　フェイトが拘束のために行動しようとすると、座っていた研究員の1人がバネに跳ね上げられたように立ち上がり、
「わ、私は……ッ！」
　椅子を蹴飛ばして走り出した。
「私は抵抗しない！　知っていることもすべて話そう！　だからこいつから！　この化け物から助けてくれ!!」
　転びながらもフェイトに縋りつく。
「え、えっと……」
　予想外の反応にしどろもどろになる。
「（怪物……未知のエネルギーのこともある。もしかして、この人が……）」
　怪物という言葉に、アスナは女性への警戒を高める。
「困りますよ、木村教授。そんなことをされては」
　アスナの警戒を知ってか知らずか、女性は逃げ出そうともがく研究

員に話しかける。
「うるさいッ!! こんなことをするなんて聞いていないぞ！ 私はあくまで絶対能力者進化計画のために、この実験に参加したんだ！ 犯罪の片棒を担ぐつもりはない！」
「1万人の妹達を実験で殺しておいて、今更そんなことを言いますか？」
「何を言っている！ あいつらは実験用のモルモットだっ!! 生身の人間と一緒にするなっ！」
結局は、助けを求めた研究員も他の研究者と同類だった。どこかズレている感覚を持っているのだ。
「これが犯罪と言うなら、必要な犯罪なんだ！ 科学の発展には犠牲がつきもの。そうだろう!?」
都合のいい言い訳に、2人の間にわずかに芽生えていた同情の心は完全になくなった。
「《実験には参加していても、犯罪、つまり最終信号（ラストオーダー）を使っての妹達の暴走は、本来の予定には無いってことだね》」
「《でもこの人たちは末端で、知らなかっただけかもしれませんよ》」
アスナとフェイトは念話で通信する。
ちなみにアスナは魔法を使えないため、念話を受信出来る特殊な通信機を耳につけている。
「……とにかく拘束します。他に指示に従っていただける方はいますか？」
「困りますね。そういう勝手な行動は」
女性は立ち上り、初めてフェイトとアスナを正面から見た。その顔を見て、2人は驚愕する。
アスナは、
「（ヤミちゃんに、そっくり……！）」
この世界の金髪の女性は、全員そっくりさんにならなければいけないのかと思うほど、その顔は似ていた。
フェイトを初めて見た時にもそう思ったが、この女性は別格だ。親子だと言われても納得してしまう。

「あ、あなたは……！」
「フェイトさん？」
「ティアーユ・ルナティーク博士!?」
「……私を知っているんですか……？」
フェイトが知っているのは当たり前だった。
自らの境遇を考えれば、調べていないのが不自然なことだ。
「そう、ですか。よく知っていますね、私のような女のことを……」
「当たり前です！　私は、ずっとあなたに真意を聞きたかった。あんな、変身兵器の作製に参加してしまった真意を！　母の作った技術で、どうしてそんなことをしてしまったのか！」
「フェイトさん……」
「それは……」
いつものイメージとは全く違う、まくしたてる様子にアスナは口を挟めない。ティアーユの鉄仮面が、少しだけ歪む。
研究員たちがひそひそと話している。
「おい、管理局のフェイト・T・ハラオウンといえば、さ……」
「ああ。噂ではあの『プロジェクトF』の成功例だって……」
「新時代のクローン技術を確立させた天才、プレシア・テスタロッサが残した遺産か……」
研究者や特務六課の面々は知っていることである。
フェイトはとある人物のクローンなのだ。
フェイトの母親であるプレシア・テスタロッサはすでに他界してるが、生前は有名な魔道工学の研究者だった。
プレシアにはアリシアという、立場上フェイトの姉となる娘がいた。
そんなアリシアを、新型エネルギー炉の稼働実験で失ってしまう。これは不運な事故ではなく、安全をはじめから度外視した危険なものだった。
何度も忠告したプレシアの意見を無視する形で、実験が強行された結果だったのである。
プレシアは娘を失っただけではなく、会社から全責任を押し付けら

れ、違法研究者のレッテルすら張られる結末になった。
その後『プロジェクトF』に参加して人造生命の開発と記憶転写の技術を学び、アリシアのクローン、フェイトを生み出すことになった。
奇しくも、ティアーユとプレシアは似たような経緯で、クローンを生み出していた。片や自分の、片や娘のクローンを。
そしてそのクローンに、我が子同然の愛情を注いでいたことも同じだった。
違法研究者として扱われていたプレシアに出来る仕事がそれしかなかったとはいえ、国際法違反の研究だ。やがて資金は底をつき、実験は自然消滅することになった。
違法研究の証拠になりうるアリシアだったが、処分を拒んだプレシアは引き取り、育てることを決意する。
最終的には様々なすれ違いから別れが訪れることになってしまったが、それを経た今でもフェイトが母親と慕う女性だ。
自らの境遇も合わせれば、人造生命体絡みの事件に力が入るのは仕方のないことだった。
プレシアは『プロジェクトF』の一件で、その界隈に大きな影響を与えた。実験が消滅したことで技術が世界各地に広まったのだ。技術に罪はないということで、学校の教材にすら取り扱われているほどに。
妹達の基本製造方法も、プレシアの理論に基づいていた。皮肉な話である。
ティアーユは先ほどとは違う小さな声で、謝罪を口にしていた。
「それは……ごめんなさい。本当に……本当は、そんなことをするつもりじゃ、なくて……あの娘には、幸せになってほしくて……」
「だったらどうして！　こんな実験に参加してしまったんですか！　どうして過ちを重ねて――――ッ!!」
交わされる単語から、アスナはおおよその事情を察した。
「ティアーユ博士。実は今、私はヤミちゃんと――――あなたが創った変身兵器の娘と一緒に暮らしています」
「え――――」

ティアーユの表情が変わった。目尻に涙さえ浮かべ、口は何かを言おうと開閉している。しかしそこからは何の音も出てこない。
「貴方が昔の事を少しでも悔いているのなら、自首してもらえませんか」
うつむき、肩を震わせるティアーユ。
「これ以上――――」
「え？」
ティアーユの口調が変わる。
「――――これ以上、あなた方と話すことはありません。指示には従えない。それだけです」
「……え？」
表情は元の鉄仮面に。目尻に浮かんでいた涙は、目尻にたまるだけで、流れ落ちることは無い。
「木村博士。私からも最後の忠告です。『今すぐ作業に戻りなさい』。『最後』というのは脅しではありませんよ」
「ひっ――――」
豹変。ティアーユの変化は、そう表現するにふさわしい。
すっかり腰を抜かした木村をフェイトとアスナは後ろに庇う。
庇われたまま動こうとしない。何か言うこともない。それが返答だった。
「残念ですね」
「う、がああああああぁぁぁぁぁ――――!!」
急激に苦しみだす木村。
慌ててアスナが駆け寄り様子を確認するが、目立った外傷はない。その体が、徐々に変化していることを除けば。
「科学の発展には犠牲がつきもの、というのがあなたの意見でしたね」
「ティアーユ博士、やめてください！」
フェイトの呼びかけを無視して、ティアーユは続ける。
「なら今度は、あなたが犠牲になる番ですよ」
未知の物質『ネビュラガス』を多量に注入された木村は、その姿を大きく変える。怪物――――『スマッシュ』へと姿を変えた。

「そん、な……」
まともな人間ではありえないパワーで暴れ始めるスマッシュ。助けを求めていたはずのフェイト達にまで襲い掛かってきた。
そしてティアーユも姿を変える。
《ＢＵＩＬＤ》
手に持ったウォッチを取り込む。アナザービルドに変化した。
「皆さんは引き続き作業を。彼のようになりたくなければ」
異形の存在と化したティアーユの言葉に逆らう者は、もうその場にはいなかった。

ベストマッチ２０１７

アナザービルドがその腰にあるハンドルを回す。すると、ベルトから粒子が放出され、木村が変身したスマッシュに取り込まれていく。
《パンダ》
《ロケット》
《――――ベストマッチ》
スマッシュの形が変わる。
右半身がパンダを模した形態に、左半身がロケットを模した形になる。
スマッシュが２人に猛スピードで体当たりしてきた。
「ッ!?」
ロケットエンジンで加速したスマッシュ。パンダの腕力が２人に襲い掛かる。
「――――ふ……！」
細剣の絶妙なコントロールでその腕を回避するアスナ。ベクトルをずらされたスマッシュは、ロケットの勢いのまま、建物の外まで吹っ飛んでいく。
「アスナ、こっちに！」
「はい！」
アスナはフェイトにつかまり、スマッシュを追う。
ビルの下に落下したスマッシュは元の姿に戻っていた。
「サンダースマッシャー!!」
フェイトは電撃を飛ばして動きを止める。
「――――!!」
フェイトから離れたアスナの細剣が、空中で光を放つ。
「はぁぁぁぁっ!!」
彼女の得意とするスピードを生かしたソードスキル、『リニアー』だ。砲撃が止んだ直後のスマッシュに、光の針になった細剣が突き刺さる。
だが、渾身の攻撃が終われば、体には一瞬の空白ができる。

その硬直を埋めるように、フェイトのハーケンセイバーが割り込んだ。
２人の連撃によって一気に勝負の流れが決まる。
「（よし、体勢が崩れた、『スター・スプラッシュ』で――――！）」
刺突８連撃の大技を繰り出そうと、『溜め』のモーションに入った。
「アスナちゃん、危ない!!!」
「ッ!?」
ソニックムーブを発動させたフェイトが、アスナを抱えてその場を離れる。
凄まじい轟音と共に、砲弾のように何かが着弾した。
それは上から飛び降り着てきたアナザービルドだ。スマッシュ援護のつもりだったのか、青い戦車のパワーを使った、戦車砲の威力の蹴りだ。
だが、それは逆にスマッシュにダメージを負わせる結果になった。
あの威力の攻撃を、近接戦をしていたフェイト達とスマッシュのど真ん中にブチ込んだのだ。援護というよりも、まとめてぶっ飛ばす攻撃と言ったほうが正しいだろう。
だが、アナザービルドはこの結果を想定していなかったのか、虫の息になっているスマッシュを見てオロオロしている。
能力は凄まじくても、明らかに戦い慣れていない。敵を前にして余計なことをしているのは、素人の動きだ。自信満々に登場はしたが、２人の脅威にはならない。
「フェイトさん！」
「うんッ！」
武器を構えて迫る２人に、慌てた様子でベルトのハンドルを回す。
《忍者》
《コミック》
《――――ベストマッチ》
倒れたスマッシュに無理やり成分が注入される。形が変わり、いくらか細身の体型になる。だがそれは苦し紛れで、効果的な攻撃は何一つ出来ない。

「はぁぁぁぁッ!!」
細剣と戦斧がアナザービルドを切り裂いた。
「――――!!」
それは致命的な攻撃となる。膝から崩れ落ち、爆散した。
夜が一瞬だけ明るくなる。爆発の熱風を頬で感じながら、２人はそこに倒れているだろうアナザービルドのことを考えた。
「ふぅ……」
「やりましたよね……」
「……うん。そうだね」
スマッシュはまだ人には戻らないが、動く気配もない。こっちは病院に連れて行かなければならない。
フェイトはティアーユと詳しく話せなかったのが残念でならなかった。明らかにおかしかった様子を考えると、絶対に事情がある。
それもこれも、これからの取り調べで明らかにしていくしかない。
爆発が晴れるとそこに――――――アナザービルドの姿はなかった。
「――――え？」
「どうして……？」
２人の顔が青くなる。１つの可能性に行き着いたからだ。
「も、もしかして、今の爆発で……！」
都合よく『倒した』と思っていたが、あんな爆発をしたということは、体自体が粉々になっていてもおかしくはない。
視線を少しだけ上に向けると――――――何事もなかったかのように歩いてくるアナザービルドの姿があった。
「避けられた!?」
「手ごたえがあった！　たぶん再生能力があるよ！」
訳の分からないままに、２人は武器を構え直す。
アナザービルドはベルトのハンドルに手をかけ、回す。
《タカ》
《ガトリング》
《――――ベストマッチ》

空に飛びあがったスマッシュには翼が生えていた。ロケットのように暴走するミサイルではなく、羽ばたく翼でその場に留まっている。
さらに腕が変形し、いくつもの銃身が円形に配置された銃身、ガトリング砲が形成される。
空から弾丸が降り注いだ。
２人はフェイトの作ったプロテクションで身を守っている。バリアを突破されるほどの威力はないが、それでも身動きは取れない。
変幻自在の攻撃に加え、理由の分からない復活能力。流石の２人も苦しい状況だった。
「どうしようか」
「攻撃がずっと続くとは思えません。ここは耐えて、反撃の機会を――」
その時、
「ザケルッ!!」
雷撃が空から降り注いだ。
電撃に焼かれてスマッシュが墜落するのと、病院にいるはずの翔が空から降ってくるのは、ほぼ同時だった。

この研究所に来たのは本当に偶然だった。
八神さんから話を聞き、まだ事件が終わっていなかったことを知った。こっそりと抜け出すことには成功したものの、あいにくとどこに行けば良いのか分からなかった。
そんな俺を救ってくれたのは、クローディアからのメールだった。
メールには、はやてさんに聞いた以上の情報が書かれていた。何処

に目標の研究所があるのか、だれがどこの研究所に行ったのかなどなど。
本当に、この事件ではクローディアにお世話になりっぱなしだ。しっかりとしたお礼を考えないといけないな。
お礼については後で考えるとして、だ。
メールには、美琴に見せられたものと同じ研究所の名前が並んでいた。だがそれだけでは、どこが重要なのか全く分からない。
分からないなら手当たり次第に回るしかない。の、だが。
どういう訳か、ここに引き寄せられた。漠然とした予感が、ここを最初に行く場所にしたのだ。
そして、その予感は当たることになった。
目の前にいる赤と青の怪物。その脇には倒れたスマッシュ。あれはどう見てもこの世界のものではない。まさか俺やゾンビ以外に、この世界に存在しているというのだろうか。俺達と同じ異邦人が。
そして、悪事に手を染めるような人格なのだろうか。
だがそれは、今考えることではない。
「翔君っ!?」
「2人とも、下がってろ！」
今考えるべきは、目の前のコイツを倒すことだ。
俺はベルトを取り出し、装着する。
《ＺＩ―Ｏ！》
「変身!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
俺は仮面ライダージオウに変身して、２人の間に割り込んだ。
あの見た目はどう考えても仮面ライダービルドをモチーフにしている。こんな怪人が出てくるのはどう考えても映画か、もしくは周年記念作品。
だとすれば、このジオウの攻撃が一番効果的なはずだ。同じ作品のライダーなんだからな。
ジカンギレードで、何度も斬りつける。こうして肉弾戦をしていれば分かるが、この怪人ビルド、接近戦はあまり強くない。

ほとんど一方的に攻撃を食らわせる。
これなら、このままいけるか？
ジオウライドウォッチのボタンを押し、走り出す。すると、怪人ビルドの周りを取り囲むように『キック』という文字が現れた。
時計の針が進むように、時計回りにその文字が重なっていく。
ベルトを1回転させた。
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
「これで――」
『キック』の文字が足裏に重なり、発光する。顔の『ライダー』の文字も発光しているため、相手から見れば『ライダーキック』と見えていることだろう。
「――決まりだ!!」
見事命中し、大爆発を起こした。
終わった、かな。
「2人とも、大丈夫か？」
俺は2人に駆け寄る。安心したような、何か言いたそうな、複雑な表情をしていたが、次の瞬間には驚きの表情に変わっていた。
「あ！」
「やっぱり……！」
「え？　何――」
振り向くと、何事もないように怪人ビルドはそこに立っている。
「無傷……!?」
あれだけの手ごたえがあったのにか？　でも、見たところ再生能力があるという訳じゃない。そんな単純なモノじゃないぞ。何か、概念的な守りの力が働いている。
「――ッ！」
倒れていたスマッシュに何かを注入した。するとスマッシュがその姿を変える。
《キー》
《ドラゴン》
《――ベストマッチ》

「「ッ!?」」
俺達の体に鎖が何重にも巻き付く。それは光る錠前で固定され、全く振りほどけない。もがいているところに青い炎が着弾、爆発を起こした。
《ハリネズミ》
《消防車》
《――――ベストマッチ》
追撃がやむことは無い。
逃げることは許さないとばかりに、炎と棘がまき散らされる。
この攻撃、まさに仮面ライダービルドのベストマッチそのものだ。
しかし、無邪気に実験を楽しむように、様々な成分をスマッシュに注入している姿は、愛と平和のヒーローとはかけ離れたものだ。
俺達と戦っているというよりも、ビルドの力に振り回されているという印象を受ける。
しかし、立て続けに成分を注入されているスマッシュはたまったものではないらしい。
解剖されたカエルの筋肉が電極に反応するように、成分を注入された瞬間にしか反応を示さない。
それ以外では、地面に倒れたまま動かない。
様々な成分を注入され、その反応を観察される。今のスマッシュは形容するにふさわしい言葉は――――そう、モルモットだ。
こんな奴がビルドの姿をしているとは、皮肉が効いてるぜ。クソッたれが……!
その時、怪人ビルドが苦しみ始めた。
ベルトを中心として放たれた光は、そのまま俺の手の中に納まる。
「これは……!」
赤と青、2色のライドウォッチだ。
どういう原理かはさっぱりわからないが、俺の手にビルドライドウォッチが収まっていた。
「ビルドの……! これを使えばッ!!」
目の前にはビルドを模した怪人。そして俺の手にはビルドのライ

ドウォッチ。これだけ条件がそろっていれば、いける。いけるはずだ。
「その通りだ、我が魔王」
いきなり後ろから声を掛けられる。
そこには分厚い本を持った謎の男、ウォズが立っていた。前に、ジクウドライバーを渡してきたときには忽然と姿を消してしまった奴だ。
一体どこからやってきたのかは全く分からないが、以前と全く変わらない様子でそこに立っていた。
「お前……」
「分かりきっているが、聞いておこう」
ウォズは、質問を聞かない。俺の意志だけを聞いてくる。
「目の前にいる相手はアナザーライダー。アナザービルドだ。歪められた歴史、歪められた力によってこの世界に顕現する怪物」
目の前の敵の正体を教えてくれる。
「そして、我が魔王。あなたがその手に持つものこそが、仮面ライダービルドの本当の力を宿した、ビルドの歴史の結晶だ」
力だけではなく、そのライダーの歴史すら、このウォッチには詰まっているということか。だからこそ、こうしてスマッシュを生み出すことが出来るのか。
「アナザーライダーを倒すには、そのライダーの力を使うしかない」
それは俺の想像通りだ。だから、今ここにあるビルドウォッチを使って倒そうとしているのだ。
「だが、ウォッチを使うということは、単に力を使うという意味ではない。力を受け継ぐという意味だ」
「受け継ぐ……？」
「歴史を受け継ぎ、君自身が仮面ライダービルドになる。そういう意味だ」
それはまた大層な話だ。
力を単に力として使うのではなく、歴史も含めて自分のものにするって事か。

「ライダーの力を集めることの意味。その重大さが、我が魔王ならば理解出来るだろう。それでも、この力を使って戦うことを選択するのか？」
全てを聞いたが、確かに答えは分かりきっていることだった。
「当たり前だ」
《ＢＵＩＬＤ》
俺の答えに、満足そうに唇の端を持ち上げたウォズは、一歩下がる。恭しく頭を下げる姿はまるで、王を敬う家臣の様だ。
やることは龍騎の時と同じだ。ベルトにセットし、回転させるッ!!
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＢＥＳＴ　ＭＡＴＣＨ！　ＢＵＩＬＤ！》
龍騎アーマーの時と同じだった。
目の前に出てきたツギハギの装甲。それは目の前にいる偽ビルドと同じ赤と青の２色だ。色とその配置だけ見ればオリジナルに近いが、肩に突き出したパーツがある。フルボトルを模した形だ。それだけで、全く違う印象を受ける。
違いはそれだけではない、右手にドリル型の武器がすでに装着されている。あれはビルドの専用武器だった『ドリルクラッシャー』に似ている。
そのアーマーが俺に装着された。
最後に、仮面の『ライダー』の文字が『ビルド』に変わる。俺にビルドの力が受け継がれる。
「祝えッ!!」
「「っ!?」」
何か能力を使っているのかと錯覚してしまいそうになるが、これは間違いなくウォズの肉声だ。
「全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ、ビルドアーマー。たった今、仮面ライダービルドの力を継承した瞬間であるッ!!」
「「……」」
「では我が魔王。キメの一言を」

「あ、ああ、わかった……？」
いきなり現れて『祝え！』とか意味不明、俺達がここで戦っていることをどうして知ってるのか、色々言いたい気持ちはあるが、今は目の前の怪人を倒すのが先決だ。
そして、この場で言うべき『キメの一言』って奴も。とっくに理解している。
「勝利の法則は――――決まったッ!!」
右手に装着されたドリルクラッシャークラッシャー（誤字ではなく、『クラッシャー』が2回続くのが正式な名前）が、回転する。
《ゴリラ》
《ダイヤモンド》
《――――ベストマッチ》
ダイヤモンドの結晶が盾となって立ちはだかる。回転するドリルとぶつかり火花が散る。跳ね返されそうになる右手を抑える。
だが、力の大部分が俺に移動したからか、鉄壁のはずのダイヤモンドの盾にヒビが入り始める。
「――――!?」
盾を貫いた攻撃が、アナザービルドに命中した。
さっきジカンギレードで攻撃したときの何倍もダメージを与えた感触がする。
「これで決める……！」
ベルトを操作した。
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＢＵＩＬＤ　ＶＯＲＴＥＸ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
白いグラフが相手を拘束した。
「な、なに、これ……」
空中にはどこからともなく現れた数式が、まるで魚が泳ぐように漂っていた。そんな不可思議な光景に、みんな揃って頭を捻っている。
しかし重要なのはそこではない。
相手が拘束されているのはグラフの端。俺はジャンプして端まで

続く線に乗る。傍目には滑り台を滑っているかのような光景だ。
しかしこの線は、物理的に相手に衝撃を与えるために、最適な角度で伸びているのだ。
「う、おおおっりゃああぁぁぁあッ!!!!」
確かな手ごたえを感じた。続いて起こる大爆発。
怪人は完全に姿を消した。復活する様子もない。
代わりに残ったのは、金髪の、服の上からでも分かる、分かりすぎてしまうほど分かる、グラマラスな体型の女性だ。
あの女性は、
「ティアーユ、先生……」
ヤミを創り、母親代わりになっていた女性。この事件の始まりからずっと聞いていた名前だったが、まさかこんな形で会うことになるとは思わなかった。
そのそばには、粉々に砕け散ったビルドウォッチが、今まさに光の粒子になって消えていくところだった。
回収は不可能だな。せっかくの手がかりだっていうのに。でも、この世界の人たちに、変に解析されるよりはましなのか。
そんなことを考えつつ変身を解除していると、フェイトさんが近づいてきた。その手には対能力者用の手錠が握られている。
「夜月君、その人を逮捕します」
「……はい」
色々と言いたいことはあったが、この状況では受け入れるしかない。
フェイトさんがティアーユ先生に手錠をかけ、ひとまず、この場所での戦闘は終わりを告げたのだった。

裏の決着

「クソ、クソクソクソッ!! マシンパワーが足りないだろうが……っ。これで間に合うのかよ……っ！」

天井　亜雄は、自分の車の運転席でせわしなく貧乏ゆすりをしていた。膝の上にはノートパソコンが置かれている。限界まで稼働し、ズボンの上からでも熱くなっているのが分かった。

助手席には1人の子供が乗っていた。御坂美琴をそのまま5歳くらいにした女の子だ。呼吸は浅く、汗の量も凄まじい。

調子が悪いのは一目でわかる。

「頼む、最終信号（ラストオーダー）。ウイルスが起動するまでもってくれ……！」

天井が祈るように声を絞り出す。

この少女こそ、2万人の妹達が形作る『ミサカネットワーク』に指令を送ることのできる個体、最終信号（ラストオーダー）だ。

体の至る所に電極が貼り付けられ、存命ギリギリのバイタルをＰＣに映し出している。

頭には学習装置（テスタメント）がかぶせられ、妹達を暴走させるためのプログラムが注入されていた。

天井は元々、量産型能力者計画の責任者だった。しかし、超電磁砲（レールガン）の完全再現を目指して作ったつもりが、蓋を開けてみれば性能は遠く及ばないお粗末なものだった。

計画は頓挫し、研究所は閉鎖。多額の借金が残るだけだった。

落ちるところまで堕ちるはずだった天井を救ったのは絶対能力者進化計画だ。この実験が成功しなければ、借金はそのまま。死ぬよりもつらい目に遭う可能性すらある。

そして今日、絶対能力者進化計画すらも失敗に終わってしまった。

もはや何をしても終わってしまう運命だったが、それでも、怪物化したティアーユの命令には逆らえなかった。

ティアーユの指令は簡単だった。

最終信号（ラストオーダー）にとあるプログラムを入力する。ただそれだけだ。

「それがこんなに……っ」

今にもこと切れてしまいそうな最終信号（ラストオーダー）。このままでは指令を達成出来ない。
元々最終信号（ラストオーダー）は調整段階の個体だった。
それを無理やり培養器から出して、酷使させているのだ。
天井も、もっと良い環境で仕事をしたがったが、管理局と武偵の目が厳しすぎる。関連施設に行けば、すぐに捕まってしまうだろう。
結果、市街地から離れた場所の、車の中で震えているという訳だ。
「ッ!? あ、ああ……」
天井の目は人影を捉えた。
「あああああああ――――――!」
逃げなければ。その一心で、アクセルを踏んだ。急速に回転したタイヤが地面を掴み、車は一気に加速した。
愚かにも、目の前に現れた一方通行に向かって。
「……」
3秒後、車と一方通行は正面からぶつかり合った。
車体がひしゃげる音ではなく、コンクリートが砕ける音がした。
衝突のベクトルをすべて下に。車のタイヤはすべてパンクする。
ポケットに手を入れた一方通行が、何事もなかったかのように、運転席のドアに手をかける。
空けるのではなく、引きはがした。鉄くずになったドアを適当に放り投げる。
「よォ」
「ひっ――――」
肩を掴まれた天井は情けない声を出し、次の瞬間には車外に放り出されていた。コンクリートの上をゴロゴロと転がり、気絶する。
「首は捻挫したかもしンねェなァ。まァ死ぬよりはいいだろ」
一方通行は助手席にいる少女を確認し、電話をかける。
電話の主は、出るなり、
《一方通行？　あなた、今何処に――――》
「芳川か？　最終信号（ラストオーダー）ってガキを保護したぜ」
《……本当？》

電話の主、芳川　桔梗の声が一気に冷める。
「あァ。実験の研究員の、あー、天井だったか？　そいつと一緒にな。天井はそこらヘンで寝っ転がってる。場所は――」
一方通行は状況を説明していく。
《わかったわ。とりあえず、すぐに管理局が向かうように手配するから》
「早めにしたほうがいいぜ……このガキ、体に電極やら何やらが付いてるが、はがしちまってもいいのか？」
《ちょっと見せて》
一方通行はビデオ通話モードにして、最終信号（ラストオーダー）を移す。
《どっちでも問題無いわ。ただの妹達の身体検査キットだから。それを使ってＰＣに情報を移しているの》
「そうか」
とは言え、もしもがあってはよろしくない。下手に触らないように心掛ける。
《それにしても、あなたが動いてくれるなんて思わなかったわ》
「うるせェよ。あンなこと言って、その理屈は通らねェだろうが」
《それでも、予想外だったということよ》
「ミ、サカ」
「あァ？」
目をつぶったまま、最終信号（ラストオーダー）が何かしゃべりだした。
うわごとのような単語だったそれは、
「み、さカ……みさか、ミサカは――ミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはミサカはｍｆｉｖｏｓｉｖｎｓｐｒサｂｎｓか――――！」
突然、意味不明な事を叫びだした最終信号（ラストオーダー）に、一方通行は焦る。
「おい芳川！　これはどォなってやがるっ!!　どういう症状だ！」
《落ち着いて！　なんて言ってるか、私にも聞かせなさい！》
車内にもはや人の言葉ではない叫び声だけが響く。
《そんな……》
「分かったのか？」

《ウイルスコードよ、それ。もう起動状態に入ってる》
「ッ!?」
ＰＣには赤い警告ウィンドウが何重にも表示されている。最終信号（ラストオーダー）の体は不自然に痙攣し、危険な状態だとわかる。
だが、一方通行がしてあげられることは無い。
《いえ、まだ手はあるわ》
「なンだと……？」
《そのウイルスはまだ配信されていない。妹達が逆らえない命令に変換するまで残り１０分ある。ウイルスが配信されなければ、妹達が暴走することは無い》
「おい……」
《それしか、方法は無いわ》
「おいッ!!」
《処分しなさい。その子を殺すことで、世界を守るのよ》
一方通行は歯を食いしばった。
「俺は、なンのためにここに来たんだ？」
《その行動を起こしたことに意味があるわ。でも今回は……》
「クソったれが……！」
《恨むなら私を恨んで。あなたをそこに向かわせた私を》
どんなに強大な力を持っていても、核が直撃しても生き残るような能力を持っていても、話したことのない少女１人救うことが出来ない。
強大な能力も、思いつく使い方はモノの壊し方だけだ。
人に使うなんて、それこそ血液や生体電気を逆流させて殺すくらいしか――――
「おい、芳川」
《なに？》
「脳内の電気信号さえ操作出来れば、学習装置が無くてもこいつの頭ン中をいじくれるんだよな？」
《まあ、理論的にはそうなるけど……まさかあなた、あなた自身が学習装置の代わりになるって言いたいの!?　さすがに無理よ。操作って

言っても、それは電子顕微鏡クラスの精密な操作よ。とても人間に行える作業じゃないわ》
「出来ねェことはねェだろうが。実験中、何度も生体電気を操って殺してンだ」
《万が一、学習装置の代わりが出来るとしても、必要のない部分を壊してしまえば意味が無いの。ワクチンプログラムだって用意されてない！　ウイルスの除去とワクチンの生成、あなたにはこの短時間で出来るの!?》
『初めて』行う作業にしては、難易度が高すぎる。
もし失敗すれば、何人が犠牲になるかわからない。翔や美琴がやっとの思いで救った妹達が、暴走し、人を傷つけ、最後には殺される結果になってしまうかもしれない。
だが、救われる妹達には最終信号（ラストオーダー）も入っているのではないか。
「当たり前だ」
《……っ》
「データをよこせ、芳川」
芳川は甘かった。
１０秒ほどで、ウイルス感染前の最終信号（ラストオーダー）のデータが送られてきた。
これを今の最終信号（ラストオーダー）のデータと比較、違うところを片っ端から修正していけばいい。
２つのデータを暗記し、比較、修正箇所をピックアップする。
全ての作業を3分以内に終了させた。
貴重な5秒を使って震える掌を見つる。
「ははっ、なめンじゃねェぞ。俺を誰だと思ってやがる……っ」
そっと最終信号（ラストオーダー）の額に置いた。
反射を切った掌に伝わるのは、重い風邪をひいたときのような人の体温だ。
「上等だ。愉快に素敵にビビらせてやるよ……っ」
ベクトルを操作する。
修正箇所はおおよそ３５万。極限の集中は一方通行の脳を限界ま

で稼働させる。
ＰＣの警告文が消え始める。一方通行の能力が、悪性プログラムを消した結果だ。
「（そういやァ）」
恐ろしいことに、一方通行はこの作業に慣れ始めていた。少しだけ余裕のできた頭にふと疑問が浮かぶ。
「（どうして俺は、こんなガキのために必死になってンだ？）」
今まで１万回壊してきた出来損ないの人形。多少サイズが違うだけで、目の前の少女もその人形の一つのはずだ。
汗水垂らして救ったとして、目が覚めた瞬間に指をさされ、罵声を浴びせられるかもしれないのに。
「（ハッ、罵声を浴びせるなんて、コイツらにそんな器用なマネ出来る訳ねェよなァ）」
警告文はどんどんなくなり、作業終了まで残り３０秒。
「（まァ、いいか。そんなことは後で考えれば――）」
がさ。
「ッ!?」
不自然な物音が後ろから聞こえた。
「邪魔を、するな……！」
気絶していたはずの天井だった。その手には拳銃が握られている。
初めて、その鉛玉を吐き出す武器に脅威を覚える一方通行。
最終信号（ラストオーダー）の脳に全力で能力を使っている今、一方通行を無敵たらしめていた『反射』は使えない。
あと少し、あと数秒で能力を取り戻せる。
だが天井がその数秒を待ってくれるわけがない。
天井自身、一方通行が何をしているのか理解していない。だが、大事な最終信号（ラストオーダー）に一方通行が触れているという事実だけで、引き金を引く理由になる。
冷静に考えれば意味のない行為でも、冷静ではない天井には――
―
「じゃ、ま、を……するなぁぁぁぁぁ!!!!!」

銃声が鳴り響いた。
一方通行の首が無理やり動かされ、嫌な音が聞こえた。
弾丸は眉間に命中していた。
「(ったくよォ、甘すぎンだろうが)」
すでになくなりつつある感覚を味わいつつ、一方通行は思う。
「(今更、誰かを救えばやり直せるンじゃねェか、なンて)」
今の状況を一番理解していない天井は、拳銃の反動で尻もちをついていた。
「……ぁ、やった？　なんだ？　何が起きた？　ハハ、どうして私は生きているんだ……？」
頭から血が流れている。あれは死んだ。どう見ても死んでいる。なぜ反射が効かなかったのかはわからないが、頭に銃弾を受けて生きていられるわけがない。
自分にそう言い聞かせ、一番の脅威を取り除くことが出来たと胸を撫で下ろした。だが、次の瞬間、
「不正なコード改ざんを確認。通常記述に従い再覚醒します――――」
最終信号（ラストオーダー）の声を理解するのに一瞬の時間が必要だった。
「なに？　なに、が？　なんだよそれは……何が起きて……こいつか、コイツか……コイツがやったのか……？」
そうとしか思えない。
それだけは正しい判断をした。
「は、はは、ははは――――う、がぁぁぁぁっぁぁぁ!!!!」
天井は絶叫と共に銃口を向けた。何のためらいもなく引き金が引かれた。

「そのあたりで止めておきな」
下からの衝撃で銃が跳ね上げられた。銃弾は空に向かって消えていく。
「お、おまえは――――！」
いつの間にそこに立っていたのか、胸に赤い三日月が刻まれた怪人だ。
「ふ――――」
怪人は何もしゃべることなく、天井を完全に気絶させた。
「さてと……」
怪人は車の中を確認する。
最終信号（ラストオーダー）はすっかり元通り。ＰＣの警告文は完全に消え去っていた。
問題は頭から血を流した一方通行だが、
「悪運は強いみたいだな」
ギリギリで処置を完了していた一方通行は、頭蓋骨を割られる程度で弾丸を反射していた。重症には変わりないが、即死するような事態は避けることが出来たのだ。
今すぐに病院に連れて行けば助かる。そして、芳川が手配した管理局員も到着しているのだ。
「あんまり拗らせるなよ。俺みたいになっちまうぜ」
そう言うと、刀を握り直した。
「それで？　いつまでそこで覗いてるつもりだ？」
「……流石、気づいていたとはね。ジャグラス・ジャグラー」
木陰から顔を出したのは、ついさっき、ジオウを祝ったウォズだ。
「こそこそするなよ。俺とお話しようぜ。それとも、管理局の取調室の方がお好みか？」
「いや、あいにくだが、私は私で忙しい。ここに来たのも確認のためだ」
「確認……？」
「ああ。歴史を変えた結果。事が予定通りに進んでいるのかの確認だよ。確認は取れた」

ウォズは手に持った大きな本をめくりつつ言う。
「気に入らねぇな、その態度。自分のことを上だと思っている、その態度はッ！」
「私は偉大なる救世の魔王の配下だ。配下ですらない、操り人形の君程度では、その差はしょうがないのだよ」
「なんだと……ッ！」
ジャグラスは斬撃を飛ばすが、ウォズのマフラーが回転してはじき返す。そしてそのまま、どこかへ飛び去ってしまった。
「操り人形、ね……」
ウォズの言葉を反芻し、１つの結論に思い当たる。
「すべて教授、アンタの差し金だってことか……？」
ジャグラスとメアに実験の情報を与えたのは『教授』だ。
翔は行動を起こしていただろうが、このタイミングで一方通行と対決することが出来たのはメアが妹達と一緒にいたからだ。
一方通行を倒すことが出来たとして、その後の妹達暴走を止めるには六課の助けが必要だった。
六課がこの事件に関われたのは、ジャグラスがゼットンをけしかけたから。その始末に六課が駆り出されたからだ。
そのすべてを計算に入れてジャグラスとメアに情報を与えたのだとすれば？　あの『教授』なら、その程度のことは出来てしまうのかもしれない。
知らず知らずのうちに、盤上のコマの一つとして扱われていたのかもしれない。
「あり得るから困るぜ。こいつは確かに無様だな」
教授のことを甘く見ていたのはジャグラスだった。
しかし、この結論に到達できるのはイ・ウーの内情を知っている人間だけだ。だがウォズという男、イ・ウーで見たことが無い。
となると、
「あの男、いったい何者だ？」
今それを考えても仕方がない。今は任務をこなす方が先だ。
思考をリセットし、連絡を取り始めるのだった。

本当の後処理、7月の終わりへ

緊急クエストは終わった。というか、いつの間にか終わっていた。

現在時刻は夜中の3時を回ったところ。場所はいつもの病院だ。

偽ビルドを倒した後、アスナとフェイトさんに小言を言われ、逮捕者を回収する人たちと一緒に病院に戻ることになった。その車の中で、クエストを達成したことを知った。

違法研究者は全員逮捕。最終信号（ラストオーダー）の方は、なんと一方通行が動いてくれたらしい。

流石は第1位の超能力者。どんな思考回路を持っているのかはわからないが、この短時間で正解にたどり着いて見せた。

最終信号（ラストオーダー）のウィルスは起動直前で消去され、妹達が暴走することは無かった。そのおかげで、いつの間にか達成したことになっていたわけだ。

それと引き換えにして、一方通行が重傷を負ってしまった。タイミングよく六課の職員がたどり着いたおかげで一命はとりとめたらしいが。

原作の最終信号（ラストオーダー）の事件が、形を少し変えて起こるとは思わなかった。

そのせいで、一方通行がケガをするという結末は変えることが出来なかったな。体が1つしか無いのが恨めしい。

そして一方通行のケガというのが、原作通り脳みそにダメージが残るというものだった。

特に言語機能と計算能力に影響が出るという話だ。

特に計算能力への影響が痛い。ベクトル操作には計算能力が必要不可欠だからだ。一方通行は事実上の再起不能。

なのだが、

「まあでも、あの先生ならそのうちどうにかすると思うわよ。あの人、冥途帰しって（ヘブンキャンセラー）呼ばれてるくらいだから」

というのは御門先生の話だ。

あのカエル顔のお医者さんもこの病院にいるってのが分かってし

まった。
この病院の医療体制が万全すぎて、安心感しかない。
その後の一方通行への対応も、大方原作と同じになりそうだ。ミサカネットワークを使って脳の機能を補う。その予定らしい。
原作とは違い、最終信号（ラストオーダー）と一方通行の面識が無いのが引っかかるけど、それはこれから解決していくしかないな。
次にティアーユ先生。
ビルドに似た怪物から元に戻ったティアーユ先生には、特に外傷はなかった。
調べた結果、かなり簡単な暗示がかけられていた。極端に行動を制限するタイプではなく、自分の行動に疑いを持ちにくくなるというものだ。
暗示というのは素直な人ほどかかりやすい。御門先生から聞いていたティアーユ先生の性格を考えれば、その効果は絶大だっただろう。
妹達の証言で、ティアーユ先生は妹達の生産のために木原　幻生に使われていたということがわかった。
ただでさえ失敗作だった妹達。モルモットとして利用するためには薬品を使って急速に成長させる必要があった。調整にはその分野に長けた、腕の良い科学者が必要だったのだ。
ティアーユ先生の名前はヤミの一件で知られていた。御門先生に会うために時々島に訪れている。
そこを狙われたという訳だ。
暗示が簡単だったこともあり、解除も容易かった。今は同じ病院のベッドで横になっている。
暗示をかけられた場合の犯罪行為はかなり判断が難しい。
『暗示にかかっていたから』という言い訳が、本当に正しいのか調べないといけないからだ。
能力や機械による精神分析、専門の先生による口頭での分析。
それらを総合して判断するのだが――――六課の皆さんのお話では、多少監視は付くが、罪に問われたり、刑務所に入るようなことは無い

とのことだ。
暗示を解除する時に一緒に能力で分析してしまったが、結果はオールグリーン。むしろ暗示を解除した能力者のほうが、こんなに暗示にかかりやすい人がいるのかとびっくりしていた。
おかげで実験の記憶は全くと言ってよいほど残っていない。
今はベッドで寝ているが、ヤミとのことも考えないといけないな。
問題は、１万人近い妹達だ。
彼女たちはクローン、しかも様々な薬品を使って強制的に成長を促したものだ。そのため、ただでさえ寿命の短い体細胞クローンが、さらに短命になっている。
このままでは実験で死ななくても、彼女たちに未来はない。
それを回避するには、乱れた体内バランスの治療が必要だ。
いくら何でも島の医療機関だけで治療は行えない。各国に協力を仰ぐ必要がある。今は８月の会議のためにこの島に各国の要人が集まっている。この規模の事件を隠し通せるわけがないし、協力を取り付けるならその時以外にはない。
確実なのは、まず間違いなく会議の議題として挙げられることになり、この島の現状を糾弾されることだ。
「と、ミサカは事件のあらましを説明します」
「とりあえず、終わったって所か？」
先ほども言ったが現在は夜中の３時。こんな遅い時間にどうして起きているのかというと、御坂妹が訪れたからだ。
俺が一方通行と戦った場所にいた妹達、１００３１号だ。
あの場では御坂姉に次いで軽傷だったため、こうして夜中に訪れたという訳だ。
「明日からは、検査で忙しくなるようですから。と、ミサカは明日からのスケジュールに辟易します」
「いいじゃないか。明日を気にすることが出来て」
「……はい」
本当なら、目の前の御坂妹はあの場で殺されるはずだった。明日なんてものは、来ないはずだったのだ。

余命が数分だったのに、いきなりすべてが未知になれば、誰だって戸惑うだろう。それが、学習装置の知識が主な妹達ならなおさらだ。
「実験、中止になったんだろ？」
ミサカネットワークで通知が来たそうだ。実験は完全凍結。二度と再開されることは無い。
「ですが、皆さんの世界に戻るには、もう少し時間が掛かりそうです」
「そりゃしょうがないさ」
治療は避けられないからな。
「どうして一方通行と戦ったんですか？」
それがここに来た本題だろう。
言葉に、いつもよりも力がこもっている。
「最後までわかりませんでした。なぜあなたは、替えの利かないあなたは、ミサカという単価１８万円のクローンのために命を懸けたのですか？」
簡単な質問だった。
「１８万円のクローンとか、価値があるとか、そんなのは関係ない。妹達が理不尽に殺されるのが我慢できなかったんだ」
「妹達を助けるために、あんな無謀なことをしたんですね。と、ミサカはあなたの考えなしっぷりを糾弾します」
ミサカネットワークで何か情報を集めたのか、たったそれだけでミサカ妹は納得してくれたみたいだ。
「ああ、でも」
ふと、思ったことがあった。
確かに俺は、実験で死んでしまう妹達を１人でも少なくするために戦っていた。それに間違いはない。
だが、
「あの場で俺が一方通行に立ち向かったのは、間違いなくお前がいたからだよ」
「ミサカが？」
「姿形が同じでも、名前が同じでも、ＤＮＡが同じでも、あの瞬間、俺としゃべったお前はやっぱり特別だった。そんな奴が殺されるって

思ったら、色々考える余裕なんてなかったよ」
「……はい」
それでは、と言って御坂妹は立ち上がった。あまり病室を開けていては、都合が悪いんだろう。
「一方通行を退けてしまうあなたには必要のないものかもしれませんが」
去り際に。
「何かあれば言って下さい。1万人のミサカがあなたの助けになります」
それだけ言い残し、御坂妹は去って行った。
御坂妹が帰った後、俺はもう泥のように寝た。緊張が途切れて、一気に疲れが出たんだろう。次に起きた時には、お日様が空高く上っていた。
それにしても、だ。
何だかんだ言って事件は解決へと向かっている。今は本当に後処理をしている段階だ。
だが俺の中では、全く疑問が解決していない。
俺と御坂が麦野と戦っている時に現れたっていうゼットトン。ティアーユ先生が所持していたビルドのライドウォッチ。
いずれもこの世界にはない技術のはずだ。
ゼットトンは、偶然にも同じ見た目で能力を持った生物がいたのかもしれないが、ライドウォッチは言い逃れ出来ない。
何者かが、俺やデンジャラスゾンビと同じく異世界から来た人物が、事件に干渉したとしか思えない。
そう考えると、
「一番怪しいのはあの『ウォズ』ってヤツだと思うんだよな」
何せあいつはジクウドライバーとジオウ、龍騎のライドウォッチを俺に渡したっていう前科がある。や、まあ、前科って言うとかわいそうか。あの手助けのおかげで、俺はアゼンダを撃退する事が出来たんだし。
だが、だったら。

「あいつが他のライドウォッチを持っていてもおかしくはないよな？」
　ヤツの目的が謎すぎる。
「うんうん。そうだよね」
「確かに、理論的に考えると、それが一番辻褄が合いますね」
「そうだよな。次に会った時は、あいつは敵かもしれない。だから――」
　言葉を続けようとした俺だが、
「でもそんなことはどうでもいいよね？」
「や、どうでもいいなんて――――」
「先輩？」
「――――……はい」
　雪菜とアスナの『圧』に、それ以外の言葉が出てこない。目覚めた時にはすでにベッドを取り囲まれていた。
　これは逃げられない。
「病院でじっとしてるように。八神部隊長からしっかり言われたよね？」
「はい、間違いなく」
「私達だけじゃなくて、部隊長にまで言われたのに、じっとしていられなかったんですか？」
「それは、皆さんが心配で……」
「へぇ……？」
「そうですか……」
　こ、怖すぎる。
「そもそも、どうして1人で事件の捜査をしてしまったんですか？」
「あ、や、狂三と理子には言ってたんだけど……」
　言ってて分かった。これは言っちゃダメなことだ。
　慌てて軌道修正する。
「み、皆さんにお知らせするには、少しショッキングすぎる内容だと思いまして……」
「ふぅ……」

「はぁ……」
　え、な、何？　何が起こるの？
「これはしっかりお話したほうがいいね」
「そうですね。先輩は何も分かっていないみたいですから」
「い、いや。俺、一応ケガ人だし……？　遠慮したいなー、なんて……」
「都合の良いときだけ、病人になるのはやめてくださいね、先輩？」
　その後めちゃくちゃ怒られました。
　それから数時間後。２人にこってり絞られた後に病室に来たのは、
「あー……お医者さん呼んでこようか？」
「ここ、病院ですよ、八神さん……」
　忙しいだろうに、わざわざここに来てくれた八神さんだ。
「ま、ここには、妹達だけじゃなくて最終信号（ラストオーダー）もいるからね。ちょくちょく様子は見に来ないと。もちろん、夜月君の様子もなぁ」
　そしたらこんなにボロボロだったという訳だ。
「見回りに来た先生に何か言われない？」
「や、それが……」
　この入院回数と、お見舞いの女の子の多さが院内で話題になり、どうやら俺は有名人になってしまったらしい。
　たびたび病院を抜け出していることも知られてしまった。
　おかげで、お医者さんにケガをスルーされるっていうレアな状況になっている。
「うん？　流石の僕も、バカにつける薬は持っていないね？」
　とまで言われてしまう始末だ。
「ま、そこらへんは全部自業自得やな」
　それは言われるまでもなく分かっていることだ。だが、今回の行動に後悔はない。
「それは結構。私からは最終報告や。自分から動いてたみたいやし、事の顛末は聞いておきたいやろ？」
「もちろんです」
　原作とは大きく違う状況になった今回の事件。何か大きな差異があったのか気になる。

「結果的に言うと、絶対能力者進化計画は立件できそうにない」
「えっ!?　それはどういう……？」
　しっかり研究者は捕まえた筈なのに……
「大きなところで、実験データが全て消されてしまっていたことや」
　どうやら、操られていたティアーユ先生の指示によってデータ消去されてしまっていたらしい。
　今はもう欠片も残っていないのだとか。
「その代わり、妹達の軍事利用計画のデータは丸々残ってた。黒幕はこれをスケープゴートにするつもりらしい」
「ふむふむ」
「残ったデータによると、生産された妹達は『約一万人』。話では『2万人』だったはずなんやけどね？」
　数を調整して証拠隠滅か……
「でも研究員の証言があるじゃないですか。読心能力者とかでどうにかならないんですか？」
「ん、そうしたかったのは山々だったんやけど……タイムリミットが来てしもうて」
　タイムリミット。
　上層部からの圧力が、六課の動きを止めるまでのタイムリミットだ。
「テレスティーナ・木原・ライフラインっちゅう女がな？　スーツ着こんで六課に来るんよ。そして、『あなた方が逮捕した研究員、全員を引き渡してもらいます』……ふざけんなっちゅうの!!」
「うげぇ……」
　八神さんの声マネもさることながら、そんな名前をここで聞くことになるとはな。まだまだ終わりじゃないってのが嫌でも意識させられるな。
「じゃあ、一方通行は？」
　この世界では管理局という警察組織が介入した。逮捕者も出ている。クローンといえど、1万人の人を殺害した一方通行も、罪に問われることになるんじゃないかと思ってたんだけど。

「その『人を殺す実験』自体が無かったことにされたからなぁ……罪に問われることは無いと思う。ま、今は本人が大変な状態やし。この島は彼に救われたしなぁ」
「……それもそうですね」
一方通行がいなければ、妹達の暴走は止められず、今頃は大惨事になっていただろう。
聞いた話によると、俺に負けたことで計算狂いが生じ、実験は失敗に終わったそうだ。明確に失敗となったことで、後顧の憂いを断つことが出来た。
「一方通行のことは憎い？」
「はい？」
予想外の言葉が飛んできた。
「君は妹達を救うために一方通行と戦ったんやろ？　何の関係もないのに、命を懸けた。一方通行はそれまでにたくさんの妹達を殺しとる。そんな相手、憎んでいてもおかしくはない」
「それは……」
そんな気持ちはなかった。一方通行には彼なりの事情があり、俺はそれを（多少原作とは違うかもしれないが）知っている。
「別に、誰かを恨んではいませんよ。俺はただ、実験を止めたかった。それだけですから」
「……そっか」
それを聞ければ十分だと言わんばかりに、八神さんは立ち上がった。
「それじゃあ、お大事に。８月は忙しくなるよ」
「了解です、部隊長」
手を振って病室を出て、
「ムフフ」
「は？」
何であんな変な笑い方を？
「やー、まー、な？　それはもう、達者でな～」
それはもう楽しそうに去っていった。

去り際にバチバチという何かが弾けるような音がしたが――――その理由はすぐに分かった。
「おいっす」
「御坂か」
見慣れた制服姿の御坂が、手に何やら持って顔を出したからだ。

激動の８月へ

御坂（姉の方）がお見舞いに来てくれるとはね。八神さんが笑った理由がよく分かったよ。

随分と顔色が良くなったように思う。やっぱり実験の最中は食べ物が喉を通らないくらい追い詰められていたんだな。

「ほい、これ、お見舞いのクッキーね」

「サンクス。ま、俺も明日退院だけどな」

「あの第一位と戦ってその程度のケガで済んだんだから、一生分の運を使ったんじゃないの？」

「そいつは困るな」

これからもギリギリの勝負があるだろうに。こんなところで使い果たすのは困るぞ。

「学校は大丈夫なのか？」

常盤台は厳しい学校だ。レベル５を手放すなんてことは無いだろうから退学はないだろう。でも、事件が噂になっているかもしれない。

取り調べ云々で行けていないのかもしれないが、一応聞いてみる。

「あー、それね。実験のデータが消されてたのは知ってる？」

「ああ」

「そのおかげで、色々と都合よくなってるわね。ルームメイトの話では、私が自分の軍用クローン計画を阻止したって形になってるらしいわ。一方通行の話は影も形も無し。今のところ、評価は半々って所ね。縦横無尽の活躍をするレベル５と、裏で危ない計画に加担しているレベル５……今までと全く変わんないわ」

そのあたりには影響なかったのか。

や、裏で誰かが調整したのか……？

どうにもこの動き、レベル５を守るように事実が歪められているような気がする。

「なんかさ」

御坂は椅子に座って足を組み、膝に肘をつきながら言う。

「アンタとの話題が無いのよね。実験の事じゃない、平和的な話題」
雑談なんてしたことなかったしな。
「そんなアンタが一方通行を倒して、実験を中止に追い込んだってのが、全然現実として受け入れられないのよね」
「嬉しくはないのか？」
「わかんない」
実験を止めることには成功した。殺されるはずだった妹達を救うことは出来た。しかし、1万人の妹達が死んでしまったことには変わりないのだ。
救えなかった命があまりに多い。
その事実がある限り、手放しに喜べるものではないんだろう。一生をかけても、償いきれない罪なのかもしれない。
「そうそう。妹達とはもう話したか？　この病院にいるはずだけど」
「……まだよ。そんな簡単にはいかないわ」
それもそうだ。気持ちはわかる。
「昨日の夜、ここに来たぞ」
「……何言ってた？」
「なんで自分たちを助けたのか質問されたよ。だから、難しい理由なんてねぇ！　助けたいから助けたんじゃ！　って言っといた」
「ありがと、私の手間が省けたわ」
「自分でも言えって。やっとゆっくり話せるんだから」
顔を合わせにくいのはわかるけど、いつまでもこのままってのはいけないな。
「それでもさ、お前がＤＮＡマップを提供しなければ、そもそも生まれてくることすら出来なかったんだからさ」
生きて死ぬことも、生まれてこなければ出来ないことだ。
「私のせいで、数えきれないくらいたくさんの妹達が死んじゃったのに？」
「ああ。あの実験は良くないものだったけど、妹達が生まれてこれたことだけは、良かったんだよ。あいつらも、それには感謝してるはずだ」

俺の言葉に、御坂は息を飲んだ。
「一回話してみろよ、妹達と。お前に言われたこと、ずっと気にしてるみたいだぞ」
「……うん、そうする」
先生に諭された子供のように、素直な返事を返す御坂。これは相当にレアなのではないだろうか。ここまでしおらしい御坂というのは。
それを自分でも理解したのか、勢いよく立ち上がる。椅子の足と床が擦れて、大きな音をたてた。
耳が若干赤くなっている。
「じゃ、じゃあ！　そろそろ帰るわ。お大事に」
扉を開ける直前、こちらに顔を向けることなく言う。
「今回のことは感謝してるから。何かあったら連絡しなさい。力になるから」
「次に会う時も、そのしおらしいモードでいてくれよ」
「うっさい!!」
流石に病院で電撃は遠慮してくれたみたいだ。
それだけ言い残し、彼女は去って行った。

翔の部屋から出たはやては、シグナムが運転する車に乗っていた。六課に帰る予定なのだ。
はやての目の前には通信ディスプレイがあった。画面に出ているのは楯無だ。
「ってな訳で、夜月君への説明は終わったよ～」
《彼は何と？》
「特定の個人が憎いってことは無いって。実験を止めたかった、それ

だけって」
《彼に実験を止めるメリットはありませんからね……》
「特に誰かからの依頼っていう情報もない。こっそり協力してたクローディアも、本当に善意で協力してたみたいやな」
《まったく、六課よりも個人的な付き合いを優先されると困るんですけどね》
　一息ついて、はやては自分が出した結論を告げる。
「いい加減、信じてみるのも悪くないと思う」
《今回の1件だけで、ですか？》
「今回の1件もそうやけど、今までの資料も見て、や。これだけ人のために戦ってる子を、これ以上疑い続ける必要はないと思うよ？」
《……なら私は、疑い続けるポジションにいることにします。どちらか片方に寄るというのは、危ないと思うので》
「ん、そうしてくれるとありがたいかな」
　はやての性格的にも、善人だと思っている相手をこれ以上疑い続けるのは厳しかった。
「そっちはどうなん？　準備は進んでる？」
《それはもう。今回の事件はすでに知られてしまいましたからね。各国からの問い合わせが多数。当日の警備は骨が折れそうですよ》
　楯無は六課の仕事の他に、もうじき行われる各国要人が集まっての会議で、管理局の警備担当も担っていた。
「ま、テロやなんやらは、毎年の事やろ？　それでも特に被害が出てないってことは、皆さん相当の腕だってことやね」
《それはもう、各国の威信をかけたスペシャルチームですからね……ああ、そうそう、部隊長、当日は事件についての証言のために会議に呼ばれていますよね？》
「そやね。公になれば不祥事どころの騒ぎやないし、今回の出来事で、管理局の信用問題にもなりそうやから。今から気が重いわ～」
　8月の予定を確認しつつ、車は走り続けた。

ここは特務六課の事務室。フェイトはＰＣの目の前で難しい顔をしていた。キーボードの上の手は、その先を打ち出すのをためらうように動いている。
「どう、しよう……」
今は報告書を書いているところだ。事務員は事件の後処理を。逮捕に向かった実働部隊は、その時の報告書を挙げないといけない。
特にフェイトはアナザービルドがいたせいで、他の人よりもたくさんの報告書を書かなければならない。
今、ちょうどその部分を書いていたところだ。
アナザービルド――そして翔についてだ。
フェイトはティアーユがウォッチを使って怪物になるところを、目の前で目撃していた。そして翔も、全く同じウォッチを使って変身していたのだ。
それどころか、アナザービルドから何かエネルギーを分け与えられて、新しい姿に変身していた。
どうしても関係を否定できない。
だが、翔を信じていたい気持ちもあった。
「書いた方がいいよね……でも楯無さんとか、あんまり翔を良く思ってないみたいだし……これであの２人の仲が拗れたらどうしよう。でも翔がいなかったら、怪物が倒せなかったのも事実だし……むしろそれで、関係を否定できないんだけど……」
思考がどうしてもまとまらない。迷いがふりきれないせいで、その部分だけが未完成だ。
「フェイトちゃん？」
「っ!?　な、何、はやて？」
「うわぁ！　っと、そこまで驚かんでも」

過剰に反応したフェイトに、はやてが逆に驚かせられてしまう。
「ちょ、ちょっと集中してたから。何か用事？」
「ん、そろそろ報告書はできたかなーって。様子を見に来たんや」
「ぁ、ごめんね。もう少しでできるから」
「や、別に急かしてるわけやないから。書くことも多いやろ？」
結局アナザービルドの情報はティアーユから集めることは出来なかった。
実験中の時間で残っている記憶が無いのだ。専門家の話ではティアーユは、ずっと夢を見ているような状態だったと言われている。
ウォッチの事だけでなく木原　幻生のことも、何も残っていなかった。
結局のところ、直接戦った人の意見が一番重要だ。
「(うん……うんっ。大丈夫。翔は良い子だもん。悪いことはしてないよね。信じるからね)」
わずかな疑念を振り払ってしまえば、後は早かった。
フェイトは手早く報告書を完成させ、はやてに提出するのだった。

「って、ことだ。報告終わり」
《フム、六課は無事、妹達の暴走を未然に防ぐことが出来たんだね。それは良かった》
蛇倉は通路の陰で、自分の上司へと連絡していた。
いや、上司という表現は少し違うのかもしれない。別に忠誠を誓っているわけでも、何か命令を受けているわけでもない。
今回、蛇倉やメアに実験の情報を渡した人物、『教授』である。
「なあ、教授。今回の事件、アンタはどこまで見えていたんだ？」

《全て、とは言えないな。少々予想外のことも起きた。問題は特務六課が事件へ介入できるかどうかだったよ》
「……つまりは、俺はうまく使われたって訳か」
　ウォズの言っていた、『駒にされている』という言葉は、間違いではなかったということだ。
《気を悪くしないでほしいな。報酬はダークリングということで、許してはもらえないかな？》
　それを言われてしまうと流石の蛇倉も何も言えない。ずっと欲しかった物を貰っておきながら、腹を立てるほど子供ではなかった。
「フン……じゃあな。また、何かあれば報告する」
《ああ。少し待ってくれ》
　通信を切ろうとした蛇倉だったが、引き留められた。
《8月だが、こちらで少し動きがありそうでね。仕事を頼みたい》
「……内容によるな」
《結構だ》
　仕事の内容を聞いた蛇倉は、顔をしかめた。
「おいおい、そりゃどういうこった？　あの自称ファラオの嬢ちゃんの手助けをしろって？」
《何か理解できない部分があったかな？》
「アンタがそんなことを頼む理由が分からねぇな。あいつはイ・ウーの中でもとびきりの問題児だったはずだ。ぶっ飛んだ考えと、それに見合ったパワー。何をするにも、俺の手助けなんていらねぇと思うが？」
　強いて言えば、そのぶっ飛んだ感性のせいで世間の常識からズレているところがあることだが、教授がわざわざ仕事としているのだ。そんなことではあるまい。
　だが、
「面と向かって協力なんざ出来ねぇだろ。向こうの性格を考えても」
　あのプライドの高さを考えると、いくら教授の指令でも、蛇倉の助けなんて受け入れないだろう。
「それに細かいところはいつも一緒にいる女……男？　がやるんだろ

？　それこそ俺の出番はないと思うが」
《念のために用意をしておきたくてね。カナ君とも連絡を取る必要はない。あくまで陰で、彼女たちのやることを手助けしてもらいたい》
　具体性を伴わないふわふわとした依頼だ。
「あいつらは一体、何をしようとしてるんだ？」
《どうやらパトラ君は、私を倒してイ・ウーのトップに君臨したいらしい》
「……はぁ？」
　ますます意味が分からなくなった。
　教授が手助けをするように言った相手――――パトラは、教授を倒そうと考えている。イ・ウートップの座を奪い取ろうと考えている。
「自分を脅かす奴らを手助けしろって事か？」
《そういうことになるね》
「……」
《正直言って、私にも推理しきれないイレギュラーが今の島には多すぎる。不測の事態には対応してくれる人物が必要だ》
「それを言うなら依頼は、『私の護衛をしてくれ』じゃねぇと、辻褄が合わねぇんだよな……」
　自分は、相当重要なポジションを任されようとしているのではないか。蛇倉は静かに今の状況を考える。
　だが、相手は蛇倉の何倍も賢い相手だ。何処まで行こうと釈迦の掌の上。依頼を引き受けようと、断ってしまおうと、教授の策は揺るがないのだろう。
　この段階で依頼があったこと、依頼を引き受けることが蛇倉にとって有益なことに繋がるのかもしれない。
　そしてこの考えも、教授に推理されているのかもしれない。
　そのことを考慮して、蛇倉は結論を出した。
「依頼は受けるが、あんたの駒になるつもりはねぇ。適当なところで裏切るからな」
《ああ。もちろんそれも、『推理済み』だよ》
　蛇倉と教授の通信は終わった。

丁度良く声がかかる。
「蛇倉さん、ちょっとええ？」
「はい。何ですか、部隊長」
蛇倉は六課の通常業務に戻っていくのだった。

「まさか、本当に勝っちゃうなんて……」
メアは自分の部屋で寝転び、天井を眺めていた。
「メア」
「マスター……」
今までどこに行っていたのか、メアの同居人が姿を現す。
「惑わされるな、メア」
「――――うん」
たった一言で、メアの頭が冷える。
「夜月　翔に何を言われても」
「そうだね。そうだよね。私達は兵器。ニンゲンの翔君が、私達の事を完全に理解できるわけない」
「金色の闇を元に戻すことも、本来ならば容易いことだ」
「うん。だって間違っているのは向こう。向こうの考えがおかしいんだから」
妹達だってすぐにわかる。
作られた命が、作られた目的を失うということが、どういうことなのか。
途方もない不安に襲われる。今までの存在理由が消滅するのだ。
それは絶対に避けられない。
「それが『正しい』訳が無い」

メアは、誰よりも自分にその言葉を言い聞かせるのだった。

「かくして、事件は終わりを迎えた」
事件から2日が経った夜。妹達の実験の後処理を六課が終え、次なる事件に備えていた頃。
二つの場所に姿を現し、しかし終始傍観に徹していた男、ウォズは海岸沿いのビルの屋上に立っていた。
そこから見えるのは海だ。普段なら、暗い穴のような海面が広がっているはずだが、この時期は違った。
港には大型の客船が停まり、外から来た人たちが宿泊している。その光によって、煌々と光っていた。
「この本によれば、この世界に来て最初の8月。ここは大きな転機になったと記述されている」
8月に起きること、出会う人物、その結果。それらを経て、翔は次の段階に進むことになる。そのように記載されている。
「だが、そのためには」
ウォズは懐からあるアイテムを取り出す。それは時計のような形のモノ。しかし翔が持っているものとは全く違うものだった。
それに視線を向けつつ、
「この私も、表舞台に出る必要があるな」
そう呟くのだった。

ヤミとティアーユ　前編

妹達の事件が終わっても、俺達の前にはまだ1つ大きな山がある。ティアーユ先生とヤミについてだ。
ヤミは子供たちと一緒にいたため、捜査には参加していなかった。だが、捜査に協力したということで、情報共有はしっかりと行われている。
「どうしましょうね？」
「どうしましょうねぇ～……」
御門先生と一緒に首をひねっていた。
退院の日。ちょっと病院にお泊りする形になった俺は、慣れた手つきで荷物をまとめていた。
「とりあえずティアの家はこっちで考えるわね」
「御門先生の事ですから、ティアーユ先生も俺の家に、って言うのかと思ってましたよ」
「全く考えなかったわけじゃないけどね。でも流石に荒療治過ぎると思ったのよ」
確かにな。こちらから何かしないとあの2人に変化をもたらすことは出来ないだろう。でも、ただ近くにいるだけじゃ、何も変わらないことも容易に予想出来る。
お互いに顔を合わせにくいだろうしな。ティアーユ先生はヤミを研究機関に置き去りにしたってことで、ヤミは暗殺者として人を殺してきたということで、どちらにも引け目がある。
一緒の空間にいて、永遠と居心地の悪い空気になっていては、かえって拗れてしまいそうだ。
「結局、大切なのは時間よ。人の仲っていうのは、お互いに時間をかけて修復していくしかない。特にこの2人は、特殊な別れ方をしちゃったわけだしね」
「そうですね、っと」
俺は荷物をもって立ち上がる。
「はい、それじゃあ完治おめでとう」

「かすり傷でしたけど。今度は1月くらいはお世話にならないようにしたいですね」
「……そこは二度とって言ったほうがいいわよ？」
そこまで自分に自信が無いからな。目標は、忙しいらしい8月を乗り切ることだ。
病室を出て、御門先生と2人で歩く。
「許可も出てるし、ティアと会っていく？」
「あ、そうしますね」
入り口に向かう予定だったが、進路を変更する。
1日寝ている間にティアーユ先生の検査は完全に終わっていた。これによって、操られていたことが証明され、晴れて監視から解放された。
罪に問われることもなく、今後は事件の捜査協力をしていく形になる。形の上では、だが。
キナ臭い連中が事件を持って行ったため、今後事件について言及があるのかは怪しいもんだ。
「今は住む場所が無いから、私の自腹で病室に泊めてる状態ね。私物が全くないから。ホテルにも泊まれないし」
「そりゃ大変だ」
仕事探しは急務だな。や、私物が全く無いってことは、身分も証明できないんじゃ？　その方面だと俺は全く力になれないぞ。
「それはこっちで何とかするわよ。大人の女を舐めないことね」
「大人の『女』って入れる必要あります？」
そう言われると、なんだかいけない想像をしてしまいそうだ。
話していると病室についた。
扉を開けると、
「うううう、うううううううっ、うわぁぁぁっ……!!」
「え、あぁ……！　ど、どうしよう……！」
ベッドに寝た金髪美女が泣きじゃくり、横に座っている金髪美女がオロオロしていた。
「……」

「……」
俺と御門先生は無言で顔を見合わせる。
「どこに行くんですか……！」
「いえ、ね？　私は今勤務時間だし、あんまりサボっているのも、良くないかなぁ、って思ってね？」
面倒な空気を感じ取ったのか、少しずつ後ろに下がり始めていた御門先生の腕を掴み、引き留める。
「いやいや、患者のメンタルケアも医者の仕事でしょうが……っ」
そもそも、ベッドで泣きじゃくってる金髪美女はティアーユ先生。御門先生、アンタの友人でしょうが！
「残念ながら、私の専門じゃないから」
入り口での攻防が続く。
「え、あ!!　翔!!　こっちに来て！　何とかして！」
オロオロしていた金髪美女、フェイトさんが俺を見つけて手招きする。下手すると、こっちも泣いてしまいそうだ。
「ほら、行ってあげなさい」
「あっ！　ちょっと！」
するりと俺の手から逃れた御門先生は、手を振りながら去って行ってしまう。でも、ここで追いかけようものなら……
あ、後で覚えておいてもらおう……！
俺は観念して病室に入っていく。
「何があったんですか、フェイトさん」
「う、うん！　実はね――」
今日は制服ではなく私服のフェイトさんに事情を説明してもらった。
どうやら、この世界のクローン関係の技術は色々なところで繋がっているらしい。というか、大元はプレシアらしい。
そりゃあ気になって、個人的に話を聞きに来るよな。
研究所で、アナザービルドになって戦う前に少し喋ったらしいが、洗脳のせいでまともな受け答えにはならなかったのだとか。
改めてお話しているうちに、

「わだしば……！　わたじあなんで事を……！　あの娘のことじぇ、あんなにはんぜいしたのに～！」
こうなってしまったのだとか。
うむむ、これはなんて声をかけるべきか。泣くほど後悔するってのはわかるからな。気にするなとはとても言えない。
これは、俺も力になれそうにないぞ。
頭をひねっていると、フェイトさんは遠慮がちに、
「えっと……翔は私のこと、その、あのことは、知ってたんだ」
「ええ、まあ」
原作知識だけではなく、過去の事件資料にもしっかりと目を通してある。そのあたりの流れや事情は、おおよそ変わりなかった。
説明する流れで、フェイトさんはその事件にも触れてきた。あまりにも普通に話すから、俺もスルーしてたよ。
本人にとっては口を滑らせた感じなのか。
「俺は今回、妹達のために戦いました」
「うん……」
「つまり、そういうことです」
「うん。そうだよね……ありがとう」
クローンやなんだということは気にしていないと、そう告げる。
「やっぱり、翔は翔だね」
「はい？　はぁ……？」
フェイトさんは安心したように微笑んでくれた。ちょっと最後の言葉の意味は分からなかったけど。
でも、今安心させないといけないのはフェイトさんではなくティアーユ先生だ。
「初めまして、ティアーユ先生。自分は夜月　翔です」
「ぐずっ、夜月、君？　うん、初めまして……」
こう見えてもこの人は天才生物学者。
俺の腕をくっつけるための人工細胞を開発したのもこの人なのだ。そのことについて、まずはお礼を言っておかなければ。
あれが無かったら、今頃は『隻腕の翔』になっていた。

「あの細胞の……じゃ、じゃあ、君が今あの娘と一緒に住んでる男の子？」
「はい。そうなりますね」
静かに肯定する。
「……私もね、あの娘に会いたい。またあの娘と一緒に過ごしていきたい。ずっとそう思ってた。御門にも色々と説明されたわ」
まともな別れ方ではなかったのだ。そう思うのは当然だ。
「でも、ここまで来ても、いざとなると足がすくんで……だって、私が置き去りにしたせいであの娘は……」
どんな恨み言を言われるのかわからないからな。どんな事情だったにせよ、信じていた人間が、母親代わりだった人間が自分を置いていなくなったんだ。
今のヤミなら、あの時に何があったのか完全に理解してるだろうけど……いや、本当に何があったのかは、本人にしかわからないのか。
これは、いきなり会わせるのは危険かもしれないな。
「うーん……ん？」
端末を確認すると、御門先生からメールが来ていた。あの人、やっぱり忙しくないんじゃないか？
確認すると、
《落ち着いたら、ティアと一緒に服を買いに行ってくれない？
とりあえず、どこにでも着ていけるスーツと部屋着ね。
いくらかは一緒に送っておくから。
足りなかったら後で請求してね》
というメッセージが、電子通貨と共に送られてきていた。
「とりあえず、買い物にでも行きましょうか？」
ずっと塞ぎ込んでいても仕方がない。気分転換がてら、ちょっと洋服を見に行くとしようか。

そんな訳で、買い物と言えばいつもここ、俺達はいつもの大型ショッピングモールに来た。
メンバーは俺と、ティアーユ先生と、そしてまさかのフェイトさんだ。フェイトさんとティアーユ先生が並んで歩き、その後ろを俺がついていっている形だ。
ティアーユ先生は御門先生の私服。これはワザとなのか、わざわざ体のラインが出やすいサマーセーターだ。
それがもうサイズがぴったり。や、これだけ体のラインが出ていてぴったりか、ってのは分かんないけど。特に違和感はなさそうだからフィットはしてるんだろう。
ダイナマイトボディの御門先生の服を着こなすティアーユ先生がすごいのか、それともティアーユ先生が着ることのできる服を持っている御門先生がすごいのか。
アレを見ていると、そんなどうでも良いことを考えてしまう。
そして珍しく制服ではないフェイトさん。
並んで歩くその姿はまるで姉妹だ。実際には１０歳以上年が離れているから、姉妹として見られるのはギリギリと言ったところ。ホント、アニメキャラの見た目は年齢詐欺だ。
でも、一番詐欺だと言いたいのはその胸部のボリュームだ。
フェイトさんだって決して小さいわけではない。むしろ大きいはずなんだけど、２人で並ぶと姉妹間の胸囲格差があるように感じられてしまう。
感覚がおかしくなっちゃうよ。
俺の思考もどんどんおかしくなっていくよ。
ここで一度、頭を別の方向へ持って行こう。
「……うーん、わかるもんだな」
ずーっと似てる似てるとは思ってきたが、普通に見分けがつくな、フェイトさんとティアーユ先生。

顔の特徴云々ではなく、雰囲気でしっかりと見分けがつくな。
や、別に体の一部分の特徴で見分けているわけでは断じてないんだよ。うん。
まずい、本当におかしくなってるぞ。
「翔？　どうかしたの？　随分と静かだけど」
「夜月君？」
「いえ！　なんでもありませんよ！」
心配されてしまった。
よし、今度こそ、話を別の方向に飛ばそう。
いや、それにしてもフェイトさんは本当に頼りになるな。
御門先生からのメール。要約すれば、これからのために服を買ってきてというものだったんだけど、部屋着はともかくスーツなんて知らんのだ。学生の俺は。
そもそもスーツを売っているお店に入ることも無いんだから。どれだけ縁遠いことか。
そこで社会人のフェイトさんがいてくれてよかった。
お店へと迷いなく足を進めていく。店員さんへの対応も完璧だ。
気が付いたときには俺とフェイトさんは試着室の前、ティアーユ先生は中で体のサイズを測っているところだった。
俺、なんもしてない。
「これ、俺が居る意味ありますか？」
「あるある！　あるからね！　落ち込まないで！」
落ち込んでないやい。
でも、お店に来ると本当にやることは無い。採寸から用途に合ったスーツの選択、裾上げなど全部向こうの仕事だ。
ティアーユ先生のサイズになると、選択肢が少ないし、服選びにしては案外時間のかからないものだ。
それなのに俺が付き添いを頼まれたのは、護衛も兼ねているんだろう。
ティアーユ先生は罪に問われないとはいえ、実験に参加していた。万が一の証拠隠滅のために暗部連中に、命を狙われるかもしれない。

「試着されますか？」
「はい、一応着てみます」
あっという間に試着だ。
カーテンの向こうで衣擦れの音が聞こえてくる。
「スーツなんて、どれも同じなのかと思ってましたよ」
街を歩くスーツの人たちは全員同じ服に見えていたが、こうして近くで見ると微妙に色が違ったり、ラインが入っていたりしていた。
「私もあんまり着ないんだけどね。普段は管理局の制服だし。管理局の面接ではスーツだったから、その時に着たくらいかな」
そんなことを話していると、
「あっ！　や、待っ――――」
「はい？」
中から焦った声が聞こえてきたと思った瞬間、カーテンが大きくたわみ、ぶちぶちと接続部が千切れた。
ああ、そういうことね。スカートを穿こうとしたときに、バランスを崩したわけか。そういえば、ティアーユ先生はドジっ娘だったな。
倒れかかってくるティアーユ先生の恰好を見て、そう判断して――

―

「いたた……」
「おっ、お客様!?」
「ルナティーク博士!?」
店員さんとフェイトさんも目を見開いて驚愕している。
「ご、ごめんなさい！　カーテン、ダメにしちゃって――――きゃあああ!!　ご、ごめんなさいっ、夜月君！」
「いえ、大丈夫ですよ」
上にのしかかるティアーユ先生は上下ともに下着しか身に着けていない。や、足に黒い布切れ、たぶんスカートが引っ掛かっている。衣服の役目は果たしてないな。
これも御門先生の私物なのか、精緻なレースが編み込まれた黒い下着だ。上下セットの。
なかなか大胆な、着るとき躊躇したんじゃないのかってくらいの際

どさだ。スケスケだよ。御門先生、絶対わざと渡してんだよな。
俺は、そんなティアーユ先生を抱き留めていた。俺の方に倒れてきたからな。もちろん避けることは出来たけど、それだとケガするし、仕方がなかったんだよ。
仕方なく、バランスを取るために後ろに手を回して、抱き合ってる形になってるけど！
信じられない質量の双丘が俺の胸板でつぶれてるけど！
お互いの顔の距離が5センチしかありませんけど！
「翔！　とりあえず離れようか！」
「分かりました！」
フェイトさんの手がすごい力で肩に食い込む。
「わぁ……すごいデザインの着けてますね……」
「えっ、あっ！　ち、違うの！　御門が今日はこれしか持ってないって言うから!!　だから仕方なく！」
店員さん！　職務を忘れないで！　ティアーユ先生に見とれてる場合じゃないから！　気持ちは分かりますけどね！
「翔！　見ちゃダメでしょ！」
「ご、ごめんなさい！　変なもの見せちゃって……！」
自らの体を抱いて隠そうとしているのかもしれないけど、下はともかく上のボリュームを腕だけで隠しきれるわけがない。
むしろ潰れているせいで柔らかさが強調されて、
「翔！　だから見ちゃダメ！」
「分かってます！」
「と、隣の試着室に……！」
ようやく我を取り戻した店員さんだったが、残念ながら隣のカーテンは閉まっている。
「……とりあえず、カーテンを体に巻いてれば良いんじゃないです？」
俺は目を反らしつつ、地面に落ちていたカーテンを手渡すのだった。

ヤミとティアーユ　後編

服を買った俺達は、カフェで休憩していた。
結局あの後、隣の試着室が空くまで、ティアーユ先生はカーテンの無くなった試着室の中に、フェイトさんが通せんぼすることで身を隠していた。
俺はお店の外で待機していた。
外にいる間も、やれ物を落としたとか、やれ頭をぶつけたとか、服の試着とは思えないほど、お店の中は騒がしかった。
御門先生の言う通り、研究者としては優秀でも、それ以外に抜けている部分があるというか、もはやドジっ娘と言ってもいいくらい、他の部分がボロボロなのだ。
これでも本人はまじめに頑張っているので、温かく見守るしかない。頑張れ、フェイトさん。
しばらくすると、
「さっきは本当にごめんなさいっ。わたし、いっつもこうで……」
「あはは、いえ、別に大丈夫ですよ？　はい、本当に……」
何度も何度も頭を下げながらお店を出てきたティアーユ先生。フェイトさんは心なしかやつれているようにすら見える。
一体あの中で何が行われたんだろうか。とても気になるところだが、フェイトさんは何も語ってくれない。
荷物は郵送で御門先生の家に送ったようで、２人の荷物は増えていない。
大分くたびれた俺達は、主にフェイトさんの希望によって、カフェで休憩することになった。
話をしていると、どうしてもヤミの話題になっていく。ヴィヴィオちゃんの親として、なのはさんもフェイトさんもヤミの事情については俺が教えている。
「そっ、それで、あの娘は家ではどんな感じなの？」
ティアーユ先生は食い気味に聞いてくる。
ずっと消息がつかめなかったんだ。今どんな性格になっているの

か気になるのは当然だろう。
「そうですね……クールな感じですね。物静かで」
「そうなの？　昔は本当によく笑う娘だったのよ。本当に小さな子供みたいで、可愛かったの」
　それは確かにずいぶんと変わったな。今のヤミが微笑はともかく大笑いしているところなんて想像つかないぞ。
「趣味とか分かる？」
「趣味……読書でしょうか……」
　原作ではそうだったな。学校でも良く図書室に行ってるし、普段も図書館にいることが多い。
　でも、実際に本を読んでるところは見たことないな。
「じゃあ、好きなジャンルとかはわからないかな？」
「はい、申し訳ないです……」
　たぶん、特定のジャンルに絞ってないと思うけど、不確かなことは言えない。
「それじゃあ好きな食べ物は？」
「それはたい焼きですね」
　間違いない。これは絶対に間違いないぞ。
「タイヤキ……日本のおやつよね？　そっかそっか、タイヤキか……じゃあ、普通のご飯で好きなのは何？」
「え……えっと……」
　好きなご飯か。
「……なんでしょうね？」
「ええ……？」
　ヤミが特に料理にこだわってるところなんて見たことが無い。好き嫌いをしている様子は無し。リクエストはもちろん、味付けにも口を出したことはなかった。
　昔の経験から、おそらく食べることが出来て、栄養が取れればなんでも良いと考えているんだろう。
　こう考えると、
「俺、本当に一緒に住んでるのか……？」

ヤミのことを知らな過ぎてびっくりする。向こうもあえて隠しているような節もあるとはいえ、改めて問われると何も答えられないぞ。
「そ、それじゃあ、学校ではどう？　その……友達とかできてる？」
「そ、そうですね！　うーん、と……」
ティアーユ先生が気を使って話題を変えてくれた。
学校では残念ながら、友達と言える仲の人を見たことは無い。
でも、
「ヴィヴィオちゃん――フェイトさんの娘さんと、とても仲良くしてますよ」
「まあ！　テスタロッサさん、そんなに若いのにご結婚されてたんですか？」
「い、いえ！　血の繋がった娘という訳ではなくて、ですね」
フェイトさんとティアーユ先生が話し始める。
ヴィヴィオちゃんは家でも良くヤミのことを話しているようで、どんどんエピソードが出てくる。
「そしたらヤミさんが――」
「そんなことがあったのねっ！　それからどうしたの？」
ティアーユ先生は、それを楽しそうに聞いている。
これ、どうせだったら本人に聞けばいいんじゃないか？　ちょっと連絡してみるか。
端末を操作すると、すぐに出てくれた。
「……あ、もしもし、ノーヴェさんですか？」

俺が呼んでおいて何だったけど、本当に良かったんだろうか。

大会も近いのに、練習中のヴィヴィオちゃんを呼びつけてしまっても。まあ、向こうが普通に快諾してくれたからよかったんだと思うけど。
「おいっす、翔、テスタロッサさん」
「こんにちはー！」
３０分もすると、ノーヴェさんとヴィヴィオちゃんは到着した。
俺たちを見つけると、ヴィヴィオちゃんは走ってこっちまで近寄ってきた。
「そちらの方が」
「ティアーユ・ルナティークです。あの娘の、そうですね……少し、説明しにくい関係なんですけれど……」
「言いにくいことでしたら、ムリに言っていただかなくても大丈夫ですよ！　とにかく、ヤミさんのお知り合いなんですよね！　私、高町ヴィヴィオです！」
ヴィヴィオちゃんは持ち前の明るさで、さっそくティアーユ先生と話し始めた。コミュニケーション能力が高すぎて、どっちが大人か分からんな。
俺はとりあえずノーヴェさんと。
「すいません、急に呼び出してしまって。こっちが行っても良かったんですけれど」
「んにゃ。いいんだ……実を言うとありがたかったんだよ」
それはどういう事だろうか。
ノーヴェさんは俺に耳打ちしてくる。
「大会も近くなってるからな。体への負担が少ない訓練だったり、訓練の時間を短くしたいと思ってたんだが、知っての通り、ヴィヴィオのやる気が凄まじくてな。自分から訓練を中断してくれる口実を貰えてありがたいんだよ」
「なるほど」
追い込みの時期だとしても、もうそろそろ体を休める時期でもある。いくら大人びていても、ヴィヴィオちゃん達はまだまだ加減を知らない子供ってわけだ。

ヤミの昔の知り合いがいるってことを話したら、すぐに行くって即決したらしい。
「で？　あの人とはどこで知り合ったんだ？」
「この前の事件のことは？」
「詳しくは知らねぇよ。アタシは六課じゃねーし。めちゃくちゃヤバい実験だって事、お前が活躍したってことくらいだな」
姉のスバルさんが所属してるって言っても、守秘義務はあるからな。
それにしても俺が活躍した、か……結果的に見れば、最終信号（ラストオーダー）以外は全部俺が解決したようなもんだからな。
「だがまあ、分かった。事件の関係者ってことだろ？　ま、その辺りはテスタロッサさんもいるし問題ねぇな」
ついてなくても、あの様子なら大丈夫だと思うんだけどね。保護者としては、知らない大人と2人きりってのは不安があったんだろう。
「そういえば今日は、ヤミはいなかったんですね」
中々珍しいことがあったもんだ。
ヴィヴィオちゃんがクッションになることで、2人の再会がうまくいってくれるんじゃないかって期待もあったんだけど。
「そんなことはないぞ。ついさっきまで、お前たちを見つける直前まで一緒にいたんだ。でも――――は？　おい、翔、何処に行った？」
少し離れたところから、ノーヴェさんの声が聞こえてくる。
まさに目にも止まらぬ速さで、俺は黒い影に誘拐されていた。
まあ、黒い影ってのはヤミだったんだけど。
「それで？　なにがしたいんだよ、ヤミは」
「……あなたには色々と言いたいことがありますよ、夜月　翔」
不機嫌そうな眼をしたヤミ。これは様子だけではなくて、実際に不機嫌なんだな。
だが、その心当たりはある。
「悪かったって。ティアーユ先生が事件に関わってた事、黙ってて」
「……」
ティアーユ先生との関係のことを喋ってきたのはヤミだったけど、

むしろ聞かせてくれたからこそ、報告が必要だったのかもしれない。
「それはあまり気にしていません。私だけじゃなく他の娘にまで秘密にしていた理由は、理解できますから。個人の意見としては、手を出すには危険すぎる事件だったと思っていますが」
まさかヤミにまで注意されてしまうとは思わなかった。
しかしそれでは、言いたいこととは何だろうか。
「問題はそこではなく」
「ふむ？」
「どうして高町　ヴィヴィオを呼んだんですか」
それこそすぐにわかるだろう。
「どうせあなたのことです。高町　ヴィヴィオに私とティアの間を取り持たせようと考えているんでしょう？」
「ご名答。何か問題があるか？」
「あの娘に知られると、その……色々と言われることになるでしょう？」
ヴィヴィオちゃんのことだ。ティアーユ先生と話して事情を理解すれば、間違いなく力になろうとする。
というか、俺が聞いていないだけでもうすでにそういう話になっているかもしれない。
いくらヤミが避けたとしても、ヴィヴィオちゃんからは逃げられない。ヤル気になったヴィヴィオちゃんには母親譲りの不屈の心（しつこさ）があるだろうし、何よりヤミが、ヴィヴィオちゃんとの付き合いをやめることを望んでいない。
これまで通りでいたいなら、早急にティアーユ先生との仲をどうにかするしかないわけだ。
しかも相手はあのティアーユ先生。どこかのラブコメのように、口裏だけ合わせて乗り切る、なんて器用な真似は絶対にできない。
「だからヴィヴィオちゃんに連絡した」
「あなたって人は……！」
俺が無理矢理すると拗れることでも、ヴィヴィオちゃんがすれば問題ない。遠慮なくその溢れる若者のパワーを使わせてもらうことに

したのだ。
「と言うかヤミはさ、ティアーユ先生と仲良くしたくはないのか？」
「……それは」
せっかく再会出来たのに、目の前にいるというのに、こうして壁を作っているなんてもったいないとしか思えない。
それが、望まぬ別れ方をした親代わりの人間だとすれば、なおさらだ。
「仲が良かったのは昔の話です。ティアの中にいる私は、昔の私。あの頃とは何もかもが違います」
どうせ会ったとしても、変わりすぎているヤミにお互い不快な思いをするだけ。表情からはそう読み取れる。
でも、それは別に会いたくないって言ってるわけじゃないんだよな。
それこそ変わってしまった自分を見せることの不安だ。世間的に言えば、ヤミの変化は決して望ましい方向じゃないし。
つまるところ、がっかりされるのが嫌なんだろう。人殺しにためらいが無くなってしまった自分にがっかりされるのが怖いんだ。
「うーむ……」
こうなってしまっては、自分から会いに行くことは無いだろう。つまりこれは、主人公の荒療治しかないってわけだ。
「じゃあ、ヴィヴィオちゃんにお任せするしかないな」
「あなたのそういう所がっ、本当にっ……！」
ヤミの怒気を感じつつ、みんなの所に戻ろうと考え、
「あっ！　良かった夜月君！」
後ろから声が聞こえてきた。
「急にいなくなったからみんな心配して――――」
声の主――――ティアーユ先生はヤミを見て息を呑んだ。かすれた声で、名前を口にする。
「――――……イヴ？」
「っ、ティア……」
無理矢理な形だが、２人は再会を果たしたのだった。

「ひ、久しぶり……！　元気そうでよかったわ、イヴ……」
「今の私は『金色の闇』です。周りにはヤミちゃんと呼ばれていますが」
目線どころか正面すら向かないヤミ。完全に背を向けている。かなり刺々しい態度だ。
「そ、そうなのね！　うん。ごめんなさい……」
ティアーユ先生が震えている。
俺達にはこれが普通のヤミだ。でもティアーユ先生は違う。
情報で知っていても、実際に変わってしまったヤミを見たんだ。怖いという感情が浮かんでしまっているのかもしれない。
「……」
「……」
2人の間に気まずい空気が流れる。
「……やっぱり、怒ってるわよね。私があなたを置いて逃げた事」
余計な雑談をする余裕がなくなったんだろう。すぐに本題に入る。
「あの時、組織から抹殺されそうになって、あなたを連れて逃げようと思った。でも、そんなこと組織にはお見通しで、私1人じゃ何もできなかった……」
戦闘能力皆無どころか、ドジっ子属性まで併せ持っているティアーユ先生では、闇の組織から逃げることが出来ただけで奇跡だろう。
そうして素性を隠して各地を転々としている時に、組織が壊滅したことを知ったらしい。
でも、ヤミの消息は掴めなかった。
「金色の闇の噂を知ったのは、その数年後」

話を聞いただけで、ヤミだと確信したらしい。それもそうだ、これだけ特徴的な能力、そうそうあるものではない。
「でも、信じたくなかった……！」
理論ではそう結論が出ても、感情では否定したかった。
「明るくて優しかったあなたが、どれだけ絶望すればそんな生き方に辿り着くのか……！」
話しているうちに感極まったのか、ぼろぼろと泣き出す。
「ごめんね……っ、ごめん、なさい……！　助けて、あげられ、なくて……！」
嗚咽から言葉がうまく続けられなくなる。
「どうでもいいんです、そんな事」
ヤミが静かに応えた。
「貴方に謝られても私のしてきたことは無くならない。金色の闇として殺し屋をしてきた自分を否定するつもりはありません」
それがヤミの答えだった。
生きるためとはいえ自らの手を血に染めたことを後悔していない、ティアーユ先生が気にする必要は無い。不器用なヤミなりの優しさだろう。
そのまま歩き出そうとするヤミだったが、ティアーユ先生が呼び止める。
「あっ！　ま、待って――――」
「今私が思うことはたった1つだけ」
――――貴方が生きててよかった。
「それだけだよ、ティア」
「っ」
その時ヤミがどんな表情をしていたのか、それを知る術はない。
しかし、今まで聞いた声の中で、いちばん優しい声色だったのは間違いなかった。
雰囲気ぶち壊しのことを言えば、俺の位置からは耳が真っ赤になっているのが見えたんだけどね。
今回はお互い、言いたいことが言えたんだろう。

ヤミはそれ以上何も言わずに立ち去り、ティアーユ先生も目尻に涙を溜めてはいたが、少しだけ肩の荷がなくなったような、晴れ晴れとした表情をしていた。

小さい娘達の襲撃　前編　（クロ）

ヤミとティアーユ先生が再会出来たその夜。
ティアーユ先生を病院まで送り届け、フェイトさんとも別れた俺は、自らの自宅へと帰宅していた。
1週間も空けていなかったのに、ずいぶんと久しぶりだという印象を受ける。
「ただいまー」
だからこそ忘れていたんだろう。
「「「「ウエルカム」」」」
「……はい？」
一緒に住んでいる女の子たちのことを。
何故かはわからないが、玄関で腕を組んで仁王立ちしているアリア、アルトリア、オルタ、クロ、桜。
「あの、何か……？」
何故かは知らないけど、とっても怒っていらっしゃるようだ。皆様は。
「理由がわからないかしら」
「我々を置いて、戦場に赴いた。数日前の記憶も忘れたのか？」
真ん中にいるアリアとオルタの表情に、今すぐ玄関を上げて逃げ出したくなる。
「い、いや、それに関しては病院で」
雪菜とアスナにこってりと叱られたはずだ。これ以上ないほどに。
「そうね、2人に聞いたわ」
「だが、それだけで『はいそうですか』と頷くような私達だと思うか？」
「マジか……」
俺はもう一度叱られることになった。

お説教は俺の部屋で行われた。
体の水分がすべて無くなるくらいまできゅうきゅうと絞られた俺に待っていたのは、アスナが作っていた夕飯だった。
みんなも言いたいことを言ったらすっきりしたのか、部屋から出た瞬間からいつものみんなに戻っていた。
「皆さん、翔さんのしたことも、完全に間違いじゃなかったと思っているからですわ」
「もしもこれで勝手に女遊びしたとかだったら、本当に後ろから刺されてたかもねー」
そんなことを言っているのは狂三と理子だ。
ずいぶんと呑気な態度だが、
「君たちは何も言われなかったのかね」
「わたくし達、色々と知ってたことを皆さんに言ってませんから」
「みんなの連帯感を高めるためにね！　翔君には尊い犠牲になってもらいました！」
「そうですか」
まあ、この2人は俺が無理矢理巻き込んだんだしな。クローディアから情報を貰うようになってからは、何もしてもらってないし。
ムリに怒られる必要は無い。この2人のことだから、うまく立ち回って、みんなの俺への怒りを鎮めてくれたんだろうし。
……そんな2人ですら、食事ではジトっとした目を向けてきていた。
「「……」」
その原因は、俺の隣で甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる1人の女の子だ。
年齢はクロやティナと同じくらい。銀髪に赤い瞳。すこし尖った耳はエルフの特徴だ。この世界に召喚されたときの服装、エルフの民族衣装なのか、緑と白を基調にし、肩を出した衣装を着ている。
「おや、主様。口元が汚れてまいすよ。わたくしが拭いて差し上げま

すね」
「い、いや、いいって、コッコロ」
ティッシュをもって小さい手をやんわりと受け止める。
まさかこの年齢になって、食事の世話をされるとは思わなかった。
「おや、主様のお皿が既に空っぽに……アスナ様、申し訳ありませんが、そちらのサラダをよそっていただけませんか。主様、先ほどからお肉料理ばかり食べているので」
「う、うん。確かにお肉ばっかり食べてたもんね……」
アスナは顔を引きつらせながら、言われた通りにサラダをよそう。
「ありがとうございます。主様、食事はバランス良く。色々なものを食べましょうね」
「う、うん。そうします」
この女の子の名前は『コッコロ』。『プリンセスコネクト！　Ｒｅ：Ｄｉｖｅ』に登場するキャラクターで、今回の緊急クエストで得たポイントを使って召喚された女の子だ。
長寿が多く、二次元作品でも特に見た目と年齢の乖離が大きいエルフの中では、珍しくその２つが一致する１１歳の少女。
作品の中では、記憶喪失になった主人公を導く役割を託宣によって授かった、ガイド役の少女だ。
誰に対しても礼儀正しく接し、主様である主人公に奉仕することを至上の喜びに感じる、良い娘だけど、ちょっと変わっている女の子だ。
や、ちょっと変わっている女の子なんて周りに溢れてるからな。こんなの普通よ。
そう、たとえ召喚されたその日から、周りのみんなが引くほど甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるような女の子でも、もう俺にとっては異常でも何でもないんだよ。
良い娘なのは間違いないんだからな。
周りのみんなもその辺りは理解してる。まだ、ほんの数時間前にこの世界に来たばかりなんだし……
「先輩……」
「変態……」

「ロリコン……」
みんな、その辺りは理解してくれてるんだよね？
俺は自分から望んでこんなことをさせているわけじゃないからね？　何なら、少し拒否もしてるからね!?
みんなのつぶやきに、エルフの森育ちのコッコロは首を傾げるだけだ。
「通報したほうがいいですか？」
「翔は本当に引きがいい。からかいがいがある。これからの日々に胸が躍るね」
そんな呟きまで聞こえてきた。
本当に大丈夫だよね？
これからの生活、本当に大丈夫だよね？

「ふー……」
自室のベッドの上で、大きく息をつく。
こんなに居心地の悪い晩御飯は初めてだったな。
でもコッコロはいい娘だし、適応能力もある。すぐにここに慣れてくれるだろう。そうすれば、今日みたいな過剰なお世話はしなくなる……と、良いけどなぁ。
今日はもう寝るだけ、ではなくて。
「お兄ちゃん、入るよ」
「ん、どうぞー」
ドアがノックされ、向こうからクロの声が聞こえてきた。
1日に2回の魔力補充の時間だ。朝起きてと夜寝る前に行うようにしているいつもの日課だ。

もちろん口と口での魔力補給だが、それ以上を行うことは無い。
それがアスナに信用されたため、何か言われることはなくなった。
今となっては日常の風景だ。
「おーう、じゃあ今日も……ッ!?」
だが今日は、少しだけ様子が違っていた。
いつも着ているはずのパジャマを身に着けていない。下はグレーのパンツ、上はキャミソール一枚だけだ。
しかもキャミソールの丈が短い。年齢的に平坦な胸元を隠す程度、何処にもつながっていない、お腹の痛覚共有の魔力印が丸見えになっていた。
さらに、
「こんばんわ、お兄さん」
「なんでティナまで……と言うかクロ、お前その格好は……」
「別にいいでしょ。変なところ見えてるわけじゃないんだから」
そうだけど。
や、パンツ姿ってのは変じゃないのか？
「これ、なんだかわかる？」
「デバイス？　持ってたのか？」
クロのしている腕輪。それは最低限の機能を備えた魔法デバイスのようだ。
「そ。模擬戦するのにあったほうが便利だからって、ノーヴェが貸してくれたの」
クロはちびっ子組の特訓に付き合っている。その時か。
しかし、どうしてわざわざ持ってきたのか。
「それはね……よっと」
「おいおい！」
軽い調子で脱ぎだすクロ。俺が咎めるよりも早く、2枚の布切れが床に落ちた。
今度こそ一糸まとわぬ姿になるクロ。照明はしっかりと明るいため、なだらかな胸元に咲く2つの蕾も、下腹部のピタリと閉じた1本の筋も、俺の前に惜しげもなく晒された。

「お兄ちゃん、目、逸らさないで」
無茶を言うな。
いくらお子様体形だと言っても、そうそう直視できるもんじゃない。こちらにも心の準備というものがあるんだ。
それにしても、ティナは何の反応もしないな。
「まあ、いいけど。それじゃあ次よ。よく見ててね」
「や、だから見れないって……え？」
クロの腕輪が何らかの魔法を発動させる。
するとクロの体が変化し始める。体全体が膨らみ始めたのだ。膨らむと言うよりも伸びてる？　体全体がサイズアップしていくぞ!?
「お前、それって……」
「大人モード、って言うには少し成長が足りてないかな？　どうお兄ちゃん？」
変身魔法、だと……っ。
小学生の時の面影を残しつつ、反抗期の生意気な雰囲気を漂わせている。
もしかして、ヴィヴィオちゃん達に教えてもらったのか？　たしかあのメンバー、ヴィヴィオちゃん、リオちゃん、アインハルトが変身魔法で大人モードになるはずだ。
中学生程度の見た目にふさわしいサイズの双丘から目を反らしつつ問うと、クロは肯定した。
「燃費のいい魔法なのよね、ヴィヴィオたちが使ってるやつは。私の場合は手足のリーチを伸ばすよりも剣を作ったほうがいいから、実戦では使わないと思うけど」
「や、なんで、それを、今、披露したんだ」
実戦では。その言葉とその格好、ようやく意味を理解出来てきた。
クロは俺の途切れ途切れの口調にクスリと笑いながら、歩いてくる。
「もう、分かってるくせに」
ヴィヴィオ達の面倒を見ているときの表情とは違う、妖しい目に捕らえられ、俺は動けない。

一番背徳的な時期の体を見せつけながら。どんどん距離は短くなる。
「ちゅっ、ちゅう、れぇろ……」
「んっ、く……！」
そのせいで、唇が重ねられても反応が遅れてしまった。
「んっ、んふぅっ、ちゅっ、ちゅぴっ、ふむぅっ、ちゅぷっ、ふぅっ、んっく……」
何度も唇を交わらせ、舌を絡め合う。吸い出される魔力はいつもよりもはるかに多い。愛情を交換し、魔力を受け渡す感覚が、俺の緊張を溶かしていく。
「ちゅぱっ――――この魔法の練習で、いつもよりもたくさん魔力を使ったの」
そんなことは、何の言い訳にもならない。この行為をするための、ただの口実だ。
「だから、いつもよりもたくさん、ちょうだい？」
クロは俺の下腹部に手を添えながら、言うのだった。

「ふふっ、お兄ちゃんったら、もう準備万端じゃない」
俺の息子はすっかり固くなり、ズボンを押し上げている。だが、準備ができているというなら、クロだってそうだ。
「お兄ちゃん、の指、太くてゴツゴツしてて……ぁん、きもちぃっ……」
すでに濡れ始めている股間の割れ目に指を這わせる。体に合わせて成長しているとはいえ、もう少しほぐしておきたい。
「んっ、ぁ……！」
中指を膣口からゆっくり挿入していった。
時々折り曲げつつ、少女の肉壺を堪能するように。くちゃくちゃと

粘着質な音とクロの甘い息遣いが部屋に響いた。
　俺の息子をさする手はそのままに、片手をついて俺に寄りかかってきた。
「どうだ、クロ。痛くはないか？」
「んんっ、ぁ、大丈夫……っ、魔法の体、だけどっ、しっかり、感じ、て、ぁっ……！」
　二本の指、人差し指が抵抗なく入る。それでも余裕がある。これなら挿入しても問題なさそうだ。
「広げられる……っ、手前のソコ、イイ、かも……この体、いつもより、かんじやすい、……っ、もう、イッちゃいそう、かも……」
「じゃあ、一回しとくか」
「え――――？」
　俺は指を高速で抽送運動させた。
　――――ちゅこちゅこ、ごちゅごちゅぐちゅごちゅごちゅ!!
「んんぁっんんぅっ!!??　んぁっ、だめだめっ、おにい、ちゃ……！　ホント、もう……ぁあああぁあああっ!!!」
　俺に抱きついて、クロは体を震わせる。腰を卑猥に前後させ、指に心地よい痙攣が伝わった。挿入している指の掌までぽたぽたと熱い液体が降り注いできた。
「大丈夫か？」
「ひゃ、い、今、動かさないでっ……んっ」
　唇を重ねる。
「ちゅぷ、べろんっ、れろぉ、ちゅちゅぱ、んんぅ、ぇろ、ちゅぱっぬちゃ、んちゅっ」
　体の痙攣が収まると同時に唇を離した。
「変身魔法は？」
「それはダイジョブよ。魔法はデバイスで管理してるから。魔力が続いてる限りは絶対に解けないの」
　つまり、どんなに激しくしても大丈夫ってことか。
「じゃあ、そろそろ……」
「もう、現役ＪＳに我慢できないなんて、お兄ちゃんは変態ね」

「……別に無理にっては言わないけど？」
「あー！　ウソウソ!!　冗談だから！」
そんなのは分かってる。こっちだって冗談だ。
クロは俺のズボンに手をかけた。俺は逆らわずに腰を上げる。すぐに俺の息子は外に顔を出した。
硬く反り返りつつもびくびくと震えるそれをクロは優しく掴み、秘部に添える。
だらだらと流れ続けるクロの蜜液と俺の先走りが混じり合い、ペニスが卑猥にコーティングされていく。
「ひうっ！」
「う、っ……」
亀頭の先端が飲み込まれ、大きく跳ねた。
「それじゃあ、するね？」
「ああ」
ぬちゅっ、ズブブッ……。
心地よい抵抗感を感じつつ、ペニスがクロの体内に埋まっていく。
「ぁああん、きもちいい……お兄ちゃんの、おおきくて、熱いのが……んんぁあっ！」
体が大きくなったため、痛いほどの締め付けがあるわけではない。クロのナカもみずみずしく締め付けてくれる。
この魔法によって、体の意識も変わるのだろうか。子供サイズの時は快感と言うよりもペニスに違和感を持っているという感覚だった。本来開くべきではないモノが無理やり開かれている感覚だ。
だが今回は違う。膣壁自らの意思でペニスの形に変わり、肉棒に合わせて脈動していた。お互い痛みを感じない絶妙なフィット感が心地よい。
「んはぁっぁ、ぁん」
腰を揺らし、奥の奥をこするように運動する。激しい動きではないが、それでもピリピリとした快感が蓄積していく。
「アソコにぴったり……っ、奥にしっかり届いてるのに、苦しくない……っ。お兄ちゃん。お兄ちゃんは気持ちいい……？」

「ああ、すごくいいぞ」
「んぅ、ぅぁん、よか、ったぁ……んはぁ、本当は、もうちょっと、おっぱいもあればよかったんだけど……んっ」
　同じ魔法を使っても、なぜが全く同じ成長をすることは無いのだとか。身長や体の一部分の変化はどうしても起きてしまう。
　アインハルトやヴィヴィオちゃんの場合は、それはもうたわわに実る。だがクロの場合は『膨らみかけ』という表現がぴったりだ。
「別に小さくても、今のクロはエロいから」
「……それ、あんまり誉め言葉じゃないよ？」
　生意気なことを言うクロ。
　でも自分で腰を動かしていたおかげでどこが好みでどこが弱いのかを把握出来た。ぴったりサイズなおかげで、少し揺らせばそれだけで快感になるのだ。
　俺は弱点部位を雁首で擦るように腰をグラインドした。
「あぁん、うごいちゃ、らめぇっ、わたしがっ、わたしが動くの……んんぁっ、ンンっ……！　んんっ!?　ちゅっ、ぁんっ、ちゅぅん……れろっろっ」
　俺が唇を重ねると喘ぎながら唇を重ね返してくる。観念したのか腕が後ろに回され、クロも自分で腰を揺らし始めた。
「ひん！　あぅ！　ひぐっ、んんっ、あンっ、あっん、はぅっ」
　奥のコリコリとした部分がちゅぱちゅぱと男汁を求めて吸い付いてくる。キスの雨を降らせるように、何度も、何度も押し付ける。
「んっぁああっ……ぅぅぅっぅぅぅぅうんんんっ!!!」
　柔肉が急激に締め付けてきた。逸物を一番奥へ突き上げるとビクンと震え、今度は吸い付いてきたまま離れようとしない。最後まで、残らず飲み込んでしまおうという雌の動きだ。
　クロがひときわ激しい喘ぎと痙攣を起こす。体がこわばり、俺の服を引きちぎらんばかりの力で握られる。
　だが、まだ俺は出していない。
「俺ももう、出っ……くッ」
「えっ……？」

射精の直前でお預けにされてしまってはたまらない。座っていた俺は、いまだ細かい痙攣を続けるクロを持ち上げベッドに倒れこんだ。
「ふぁ!? ぁあああっん!!! だめだめだめっ、らめぇえっ……イッたばかり、イッたかりゃぁ……ンンぁあああッッンンンっ!!!」
俺の快感だけを優先した、めちゃくちゃなピストンセックスだ。絶対に種付けしてやると言わんばかりの押しつぶすような動き。
おかげで収まりかけていた射精欲がどんどん高まっていく。
それに連動するように、クロの体の痙攣がどんどん強くなっていく。
「イく、ぅ――――っ!!!」
クロの体の痙攣を抱きしめることで無理やり押さえつけ、ペニスを奥までねじ込む。
クロの最奥で、俺のペニスが爆発した。俺たちの体が一緒に痙攣し、1つになったような感覚に陥る。自分では制御できない肉棒が、手加減なしでクロの子宮に子種を流しこんでいく。
「お腹、熱っ、ぃ、力はいんな……」
ちょろちょろと、熱い液体が、俺たちの接合部を濡らした。
痙攣が収まるまで待ち、俺はペニスを引き抜いた。
俺の形に大きく開けられていた口が、元の形に戻っていく。
「すごっ、こんなに出したのに、まだ全然硬い……」
クロのナカから引き抜かれた俺の息子は、まだまだ固く反り返っていた。
クロの体が光り、元の大きさまで戻った。
するとナカのサイズが小さくなったことが影響したのか、少しだけ開いた割れ目から俺のモノが溢れ出してくる。
「う、ん……ちょっとだるいかも。お兄ちゃん、どうするの?」
「どうするって……」
「お兄ちゃんのおちんちん、まだまだやる気満々みたいだけど?」
多分、いつか手に入れた『絶倫』のせいだろう。出す前に比べても全く衰えることなく反り返っている。

気分も、まったく変わらない。俗にいう『賢者タイム』にはなっていない。
だからって、ちょっとだるいと言っている娘にこれ以上お願いするわけにはいかない。
ちょっと休憩していれば、治まってくれるだろう。
「良かったわ。まだまだ出来そうってことよね？」
「はい？」
「ここは、ティナに譲るわ」
「はいっ。お兄さん、よろしくお願いしますっ」
「完全に忘れてたよ……」
今の行為、全部ティナに見られてたってことか。
「そのくらい私に夢中になってくれたってこと？　だったらうれしいわ」
夢中にというか野獣になってたな。普段とは違う姿というものが、こんなにも心に来るものだったとは。
「だったら、この魔法を覚えた甲斐があったわ」
「……確かに効果抜群だったよ」
ぐうの音も出ないほど、俺の完敗だ。
や、それにしても、だ。
「ティナに譲る？　どういうことだ？」
「お兄ちゃん、どうしてわざわざティナに見せたと思ってるのよ」
「まさかとは思うけど、そのためなのか？」
そのためとはつまり、『そのため』だ。
「当たり前でしょ。私達だって、いい加減にしてほしいのよ。私はいいけど、ティナは特にね。1回もしてないんだから」
「や、そもそもティナは意味を理解してるのか？」
別にこの先には時間はある。
少なくとも俺は投げ出すつもりなんてないんだ。しっかりと意味を理解してからでも、遅くはないはず。
「お兄さん」
「馬鹿にしないでよ、お兄ちゃん。私だって、無理矢理なんてまっぴら

ゴメン。しっかりと考えて答えを出してるの」
そう言う事なら、
「ティナ、良いのか？」
「はい、もちろんです」
ティナはそう言うと、クロを見習って、服を脱ぎだすのだった。

小さい娘達の襲撃　中編　（ティナ）

「アスナ様には止められてしまいましたが……」
　コッコロは薄暗い廊下を歩いていた。その足は翔の部屋に向いている。
「やはり、おはようからおやすみまで、ゆりかごから棺桶までお導きするのが従者の役目。主様が安眠なされているか確認しなければ、わたくし眠ることが出来ません」
　原作では『アメス様』の信託によって主人公のガイド役になったが、この世界に来たのはアメス様の意思ではない。だがこの世界に召喚された時に、行動原理として刻み込まれていた。
　すなわち、主様のお世話をするという行動原理だ。
　すぐに目的地にたどり着く。
　翔が寝ている場合を考慮して、静かにドアノブをひねり。
「おや？　この声は……？」
　ドアの向こうから人の荒い息遣いが聞こえてくる。
　それに紛れて、コッコロの聞いたことの無い種類の声が聞こえてくる。切羽詰まったような、苦しそうな、それでいて甘い声が。
「いったい中で何をしているのでしょうか？」
　普通に扉を開けず、こっそりと中を覗き込むコッコロ。無意識の内に隠れるように覗き込んでいた。
「あれはクロ様……？　あ、主様っ、お二人で、裸で、いったい何をされて……」
　ベッドの上。裸のクロの上にのしかかり、口づけを交わしている翔。コッコロにわかる行為はそれだけだ。
　口づけの意味は知っているが、翔が上にのしかかって腰を振っている意味は分からない。
　口づけの吐息に交じってクロから苦しそうな、何かを訴えるような、声が漏れている意味は分からない。
「……え？」
　次の瞬間、コッコロは目を見張った。

翔がクロから離れると、硬く反り返った肉棒が見えたからだ。
「あれ、もしかして主様の……？」
まだまだ小さいコッコロだが、男女の体のつくりの違いについては分かる。だがそれでも、
「あんなに大きい……」
夕食の時、ズボンの下にはあんなに大きなブツがついていたのかと、自分でも理解できない気持ちになる。
コッコロが覗いていることを知らず、行為は続いていく。

「ん、ふぅ、んっ、ちゅっ……もっと、もっといっぱいチュッチュして下さい……」
ティナに求められるまま、ベッドの上で唇を交わらせる。
素直になっていなかったのはどちらだったのか。お互い裸で抱き合う俺たちは、お互いの体温を全身で感じつつ、舌先にはそれ以上の熱を感じていた。
「ちゅっ、ん、ちゅぅぅ……ぢゅる、ず、んじゅ、ずずっ……ぷ、ぁっ。どうですか、お兄さん。私とのちゅっちゅ、気持ちいいですか？　わたし、うまく出来てますか？」
「ああ、うまく出来てたぞ。初めてとは思えないくらいだ」
まさかとは思うが、その辺りもクロのコーチがあったんだろうか。や、行為の最中にほかの女性のことを考えるのは失礼か。
「えへへ、お兄さん、もっとして下さい……」
「ああ」
俺たちは再び唇を重ねる。
ぴちぴちと跳ねるティナの小さい舌を、捕食し、蹂躙していく。

俺は右手をそっと彼女の胸元、小さくも、硬くなりつつあるそこに這わせた。その敏感な突起に触れた瞬間、驚いたように身をくねらせた。
「んんっ……！　お兄さんっ……、そこ、くすぐったっ……んんぁっ、はっ、なに、これぇ……ぽわぽわして、びりびり……ん、んむっ……」
暗殺者として生きてきたティナの体は、綺麗だが起伏が無い。成長が遅れているのかもしれない。
クロはかろうじて『ある』膨らみが、まったくない。その分、すべすべの肌の中にある硬い部分が際立っている。
「あっ、んあぁ……！　……そこぉ、ん、くぅ、ふぅぅ……そんなに、されるとっ、んん、びりびり、どんどんっ、つよ、くっ……やぁっ、ぁんっ、ふぁぁ……」
小さくてもしっかりと感じてくれているんだろう。次第にキスをする余裕も無くなってきたティナ。自由な足をバタバタとさせ、何とか快楽を逃がそうとしている。
突起を摘まむように刺激し、指の腹で転がす。そうするといよいよ余裕がなくなってきた。
「お兄さ……っ！　目の前、ちかちかして、ふわふわしてますっ、おっきいのが、おっきいのが来ます……っ!!」
「それでいいんだよ。そのままその波に身を任せて」
未知の感覚に暴れる体を押さえつけ、指の動きをさらに激しくする。一気にスパートをかけると――
「んっ、んんんんっ……!!」
ティナの体が弓なりに反った。
大きな痙攣が2回、そのあと小刻みな痙攣が続く。息も荒く、口の端からは唾液が線を引いた。
不安そうにさまよっている手を握り、落ち着くまで待つ。
「大丈夫か、ティナ？」
「は、い……すごく疲れましたけど、でも、良かった、です」
微笑んでいる。
「これが恋人同士の営み。イケナイ行為」

「お、おう？」
「つまりは私とお兄さんは恋人という事ですね？」
「うーん……？」
「ヴィヴィオさん達に言っても、問題ありませんよね？」
「ティ、ティナさん？　やめていただけますか？」
「冗談です」
　心の底から安心した。
「もう大丈夫です……しないんですか」
「ティナ」
「続き、しないんですか。もしかして、こんな中途半端で終わりなんですか？」
　ゆるゆると、体勢を変えるティナ。
「わたしのアソコ、びしょびしょ、ですから。クロさんにしたみたいに、して下さい」
「……まったく、何処でそんなこと覚えたんだか」
　あろうことか、ティナは足をM字に開き、その間にある幼いスジを左右に開いて誘惑してきたのだ。
　正面から直視すると、改めてその小ささがわかる。初めてクロを貫いた時に感じた狭さ、キツいのは当然だった。
　未成熟なソコは行為で十分に濡れ、欲しがるように涎を垂らしていた。
「うわー……幼女のアソコをガン見したまま何も言わないって……お兄ちゃんめちゃくちゃ鬼畜……しかも、おちんちんビンビンだし……」
　今まで口を挟まずにいたクロが呆れている。
「本当です。変態です」
「うぐっ……」
　確かにそうだ。
　気を取り直して、
「ティナ、良いんだな？」
「はいっ、私、お兄さんの女になりたいです」

言い方は、たぶん誰かに教わったんだろうけど、ここまで言われて何もしないわけがない。
俺はティナの蜜壺にペニスをあてがった。つい先ほど1人の少女を貫いていたペニスだったが、新しい雌穴を前に一層固く反り返る。
「ティナ。今から入れるけど、痛かったらすぐに言うんだぞ」
「大丈夫です。少しくらい痛くても、我慢出来ます」
「……絶対に、我慢しないで言うんだぞ」
「んっ、んぅぅ、んぁぁぁぁっ……！」
腰に力を籠める。
大きく傘を広げていた亀頭がミチミチと膣を掘削していく。小さい穴を拡張し、ペニスを挿送するためのトンネルを作り出していく。
しかしその道はあまりに狭い。強引に抉じ開けられたティナの雌穴の膜は、ペニスで貫かれる前に、穴が広がったことによって裂けてしまう。
ティナは両目を固くつぶっている。
力任せにしても駄目だと思い、一度結合部の様子を見た。大きく広がったティナのロリマンからはつーっと血が流れ落ちている。
「大丈夫か、ティナ」
「はい……っ、痛い、ですけど。でも、うれしいです……っ、やっと、お兄さんと1つに成れて……！」
全身を痛みに強張らせながらも、ティナはそう言って微笑んだ。
「少しずつ慣らしてくぞ」
「は、いっ……わかりました……！」
すぐに最奥に辿り着いた息子を、引き抜き、押し込み、引き抜き、押し込む。ほんの僅かなストロークから始めた。
「ひぅぅ、はっ、あぁっ！　……お兄さんのおっきい……中で動いてるの、しっかり分かりますっち、ひぅっ！　あぁっ」
奥の奥まで濡れ始めたら徐々にリズミカルに。緊張していた膣内をほぐすように、しかし未発達なお子様子宮に、早すぎる教育を施していく。
「やっ、そこっ……！」

「ん？」
　ティナがたまらず静止の声を上げる
「そ、そこ、とんとんってされると……！　ふわってします……！　んにゃ、あっ、ぁ、ぁ、ぁ、あぁ……!!　お兄さんのおちんちん、わたしの深いところを、こつこつって、叩いて……！」
　それが呼び水となり、一気に潤い始める。
　吐息に甘いものが混じり始め、きついながらも不格好ながらも俺の肉棒を包む肉粒が蠢き始めた。
「すごい、です……！　乳首でんっ、ぴくぴくした時よりも、すごいです……！　こんなにエッチな気持になるんですね……！　皆さん、したくなっちゃうのも、仕方ないです……！」
　俺も聖人君子ではない。現にティナ相手に、こんな小さな子供相手にペニスを固くし、あまつさえ行為に及んでいるのだ。
　ティナ相手でも、男の征服欲と言うのはどうしても抑えられない。何者の侵入をも許さなかった少女の膣を自分専用の穴へと作り替えていく。その事実がどうしようもない熱となって、俺の体を動かす。
「ぁ、ぁっ、ん、こん、なっ、感覚、初めて……もっろ、いっぱい……いっぱい動いてください、お兄さん……っ！」
「ああ……！」
　今やペニスの動きにティナへの心遣いは無い。必死に腰を打ち付け、抽挿を繰り返す。
　ごちゅ！　ごちゅ！　と、無理矢理抉じ開けることによって、卑猥な音が聞こえる。掻き出された愛液が、どんどんシーツに吸い込まれていく。
「ひぅ、あぁっ、はっ、んぁぁ……っ！　お兄、さ、ぁっ……！　もう、限界かも、です……これ以上はっ……！」
　一度絶頂したことでその感覚を覚えたのか、限界と言ってすぐにティナの膣内が小刻みに震え出した。
　少女の幼い膣内がきゅうきゅうとペニスを締め付ける。やはり小さいサイズとあって締まりもキツく、俺もそろそろ限界になってきた。

「いっ、いっひゃう、また、またぴくぴくしますっ……！　おちんちんでずんずんされて、……ぁっ、はっ、ん、んんっ、あんっ、ぁぁんん……っ」
射精感はあと少し、もう本の一押しの所まで来ている。だがここで、ティナより先に果ててしまうわけにはいかない。
「く、ううんっ、お、お兄さん……！　ちゅっちゅして、ちゅっちゅして下さい……！」
「っ……！」
言われるがままに、ティナと唇を重ねる。お互いを貪り合うようなキスではなく、愛を確かめ合うような穏やかなキスだ。
しかし下腹部では、今にも暴発しそうな、最後のスパートに差し掛かっていた。
全力で腰を打ち付け、少しでも早くティナを果てさせようとする。ティナに優しい言葉をかける余裕などなく、獣のように。
「んんっ!?　んんんんんっ!!!!」
ティナの震えが最高潮になった瞬間――子宮口に亀頭を押し付け、一番深いところで爆発させた。
――びゅぐるぅ、びゅる、びゅるるう！　びくぅ、びゅぶっ!!!
本日2度目のそれは、少女の子供袋に入りきらないほど、長く続いたのだった。

ティナは初めての行為で疲れてしまったのか、そのまま眠りについてしまった。
しかしそれでも、

「嘘でしょ？　まだ全然萎えてないじゃない……」
引き抜かれた俺の息子は全く力を失っていない。
能力のせいだな。俺がやめようと思わなければずっとこのままなんだろう。なんて恐ろしい能力だ。ここしばらく致していなかったせいか、全然気分が収まらない。
「……そうだ」
またもや、クロが悪いことを思いついたという顔をしている。
「扉で覗いているヒト、もうそろそろ入ってきてもいいんじゃない？」
扉自体が焦ったように見えた。
少しだけ空いた扉、その向こうにいる娘の気持ちが伝わったんだろう。覗き行為に背徳感ではなく罪悪感のみを感じているのだ。
それだけ真面目な女の子ということだ。
そうでなければ、
「あ、あの……このような夜遅くに、申し訳ありません……」
こうして扉を開けて頭を下げてきたりはしない。
そこにいたのはコッコロだった。目を伏せて本当に申し訳なさそうな表情をしている。
「わたくし、主様がしっかりとお休みになっているのか心配で……」
「……お兄ちゃん、どれだけ子ども扱いされてるのよ。もう介護よ、介護」
「言うな」
とりあえず、下腹部を露出しているこの状態はいただけない。俺は服を着ようと――
「クロさん？」
どうして服を着るのを邪魔して来るんでしょうか？
俺を無視して、コッコロに語り掛ける
「全然気にする必要は無いわよ、コッコロ。見てたなら逆に都合が良かったわ」
「おい、何を言うつもりだ……！」
「大丈夫よ、あとでしっかりと教育しておくから」
お前の教育はアテにならんぞ。

だがクロはウインクして続ける。
「覗き見するつもりは無かったのですが……」
「うんうん、良い心がけよ。ティナもせっかくの初めてだったから……今のはね、男の人、お兄ちゃんには必要な行為なのよ」
「主様に？　それはどういうことなのでしょうか？　わたくしに何か出来ることはございますか？」
俺に必要という単語を聞いた瞬間、コッコロの目つきが変わった。口調も硬くなり、従者としてのモードに切り替わったんだろう。
クロがどんどん悪い顔になっていくよ。
「お兄ちゃんのアソコを見て、パンパンになってるでしょ？」
「確かに、やはり、普段はあのようにはなっていないのですね」
２人の幼女にマジマジと見られる。そろそろ服を着たくなってきた。
「当たり前よ。いっつもあんなんじゃ、生活に支障が出るもの。ね？　お兄ちゃん？」
「そうですね……」
俺は力なく応える。クロの性教育は続いていく。
「ああなっちゃうと男の人はとっても苦しいわ。んー……そうね、悪い白い液体がね、あそこに溜まっちゃうのよ。だから私たちがそれを出してあげなきゃいけないの」
「なるほど。治療、のようなモノでございますね」
「そう言う事よ。決してやましいことじゃないの」
やましいとこじゃないって口にする奴、大体やましいことをしている説。
そしてそんなクロにすっかりと騙されてしまったコッコロ。それに何も言わない俺。
「治療でしたら、わたくしも力になれるかと」
「うんうん、そうよね。それじゃあ――――」
「はい。それでは、精霊よ――――！」
光があふれる。コッコロの体を取り巻くように、薄緑の精霊が現れ、俺のイチモツに。

「ちょ！　な、何やってるの!?」
「はい。治療、という話でしたらわたくしの精霊が一番の適任かと。主様、もうしばらく辛抱してくださいまし。すぐに楽になりますので」
「いやいや、そうじゃないのよ。そうじゃないのよねぇ……！」
首を傾げるコッコロ。
俺のイチモツの周りを飛ぶ精霊さんも、困惑している様子だ。お気持ちは理解出来ます。
「そういう、能力に頼るよりもね？　もっといい方法があるのよ」
「ですがわたくし、マッサージの経験はございません。せいぜい、肩もみ程度しか……」
「良いのよ！　誰だって初めてはあるんだもの！　私が手取り足取り教えてあげるわ！」
段々とクロの調子が戻ってきたみたいだな。
まだ今日の夜は終わらないみたいだ。

小さい娘達の襲撃　後編　（コッコロ）

クロはコッコロの背中を押して、俺の息子の前に移動した。
「ほら、コッコロ、お兄ちゃんのお兄ちゃんよ。あいさつしたほうがいいんじゃない？」
「おい、クロ」
「え、えっと……どのような挨拶をすればよろしいのでしょうか？」
「コッコロも。真に受けなくて良いから」
初めての行為に粗相がないようにと考えているのか、コッコロは完全にクロの言いなりだ。
「お兄ちゃんのソレを両手で持って」
「は、はい」
たどたどしい手つきで俺のイチモツを掴むコッコロ。直前の行為の跡、ティナの蜜と俺の白濁液がブレンドされ、粘着質な音を立てる。潤滑油としては十分だ。
「っ、ぁ」
音だけでコッコロはひるんでしまう。
「お、おい、クロ。これは無理矢理なんじゃないのか？」
「そんなことないわよ。どう見ても向こうの好感度は振り切ってるんだから。このタイミングを逃したら何時になるか分からないでしょ！　……ただでさえお兄ちゃんの周りには女の子が多いんだから。しかも最近はますます女の子の知り合いが増えてきたみたいだし……」
小声でクロとやり取りする。途中でさらに声が小さくなり、俺にも聴き取れなくなってしまう。
そうしているうちに、コッコロが覚悟を決めてしまったらしい。
「……いえ、これが主様のためになるのでしたら。このコッコロ、務めを果たさせていただきますっ」
「そうそう、いい娘よ、コッコロ」
「クロは悪い娘だな……」
俺のつぶやきにクロはニヤリと笑うが、緊張しているコッコロには

角度的に見えていなかった。
「クロ様、この後は……？」
「そうね……それじゃあ」
クロの指示を真面目に効くコッコロ。少し戸惑っていたようだが、何度も相槌を打ち、呑み込んでいく。小さい子供が知るには過ぎた知識を、どんどん。
「分かりました。ではそれで……」
コッコロの小さな顔が俺の先端に近づいていく。ピンク色の舌が突き出され――――
「んちゅっ、ぇおっ、ぇうっ、んっ、ちゅぅ……れるぅ、んむっ、っあ、んんっ……れろっ、ぇろっ、んぅっ、ぴちゃ、ちゅぷっ、ちゅるっ、んぁっ……」
「っ……!!」
一気に咥えこんだ。
最初にあった戸惑いや迷いはどこに行ってしまったのか。お世話モードになったコッコロを止めることは誰に出来ないという事なのだろうか。
一心不乱に舌を這わせる。
それが凄まじい快感を伝えてくる。クロもそこまで詳細に教えたわけではない。少しずつ、段階を踏んで教えていこうと考えていたのだ。
それがまさかここまでとは。
「う、うん！　いいわよ。いい調子ね、コッコロ……！」
「そうれすか？」
チンポを加えこんだままクロに答えるコッコロ。
一番奥、苦しいだろうに、喉に当たる寸前まで呑み込み、口をすぼめて少しずつ吐き出していく。
「主様、どうでしょうか……？　わたくし、うまく出来ていますでしょうか？」
「あ、ああ。初めてとは思えないくらい、すごく、上手だよ」
心からの感想を言う。実際、あと１０秒も続けられていれば、果て

てしまっていた。
「本当ですか？　ではこのまま続けさせていただきますね……はむ、んんっ、れろっ、れるぅ、んちゅぅぅ……はぁ、はぁっ……ちゅ、ぇおっ、ちゅるるっ、ぺろっ、ん、んちゅぅ、ぺろっ、んぁ……」
「ぅ、ぁ……！」
これが淫らな行為だと知らないコッコロは、それはもう熱心に続ける。
時々俺の様子を窺いつつ、俺が漏らす吐息を頼りにしているのか、どんどん上手くなっていく。
小さい舌全体を使って、裏筋をねっとりと舐め上げ、先走りが漏れている先端をチロチロとくすぐる。
「ぁむっ、じゅる、じゅぶ、ずずずっ……ぢゅる、ぢゅぷっ、ずじゅ、ちゅぅぅぅ……!!」
頭が前後に動かされ、その口元から唾液が飛び散る。誰も見たことが無いであろうコッコロの喉奥に、俺の息子がこすれる。
「じゅる、じゅちゅぅぅぅ……!!　おひゃ……？」
無我夢中でフェラチオを続けるコッコロだが、何かに気が付いて動きを止めた。
「主様？　主様のおち――――……コソが、びくびくされていますが……痛かったでしょうか？　わたくし、何か間違ってしまったでしょうか……？」
コッコロは不安そうな目を向けてくる。しかしそれは無用な心配だ。
快感が蓄積したせいで、俺の息子に限界が近づいているだけなのだ。ここでやめられると逆に辛くなってしまう。
「だ、大丈夫だから、続けてくれ……！」
「そうですか？　はむ、じゅるじゅる、じゅぱ、ずぞぞ……っ！」
再度、コッコロの舌が絡みつく。アイスキャンディーを舐めとるように、限界まで真っ赤に腫れた亀頭を隅々まで。
ともすれば一気に喉の奥まで呑み込み、全体で愛撫される。
「（す、すごいわね……この娘。あのバブみといい、この口淫といい、ホ

ントは歳ごまかしてんじゃないの？）」
　クロはその様子を、腕を組みながら見ていた。
「（さすがのお兄ちゃんでも３回戦目。対するコッコロは初めて。このままだとマズいかな。何がマズいかは分かんないけど、マズいわよね）……よし」
　俺の目の端が、クロの掌が光るところを捕らえた。
　何をしてるんだ、そう言う余裕すら、今の俺にはない。
「はい、チクッと」
「んんっ……？　クロ様、何を？」
「ん～、大丈夫よ、気にしないで。続けて続けて」
　ニコニコとクロは笑顔だ。
　再開される。
　２度も中断させられた俺の息子はもう限界だ。睾丸から送られる白い粘液は、今にも暴れだしてしまいそうなほどだ。爆発数秒前だ。
　とうとう緩急のつけ方まで覚え始めたコッコロが全力で頭を前後させる。
　そして――――
「射精るっ……！」
　――――びゅるるう、びゅぐぐ！　ぶぐぶゆぅぅっ!!
「んん!?」
　コッコロの喉奥に、俺の欲望が吐き出された。
　粘ついたものに突然気道を塞がれてびっくりしたのだろう、コッコロが頭を引いてチンポを吐き出した。
「けほっ、けほっ。こ、これは……主様のおちんちんから、白いものが……？」
　さっきは躊躇していたというのに、今度はためらいなく淫語を口にするコッコロ。
　口の端についたもの、鈴口に浮かんできたものを見てコッコロが呟く。
「それはね。お兄ちゃんが気持ちよくなると出てくるの」
「そうなのですか？　わたくし、うまく出来たという事ですか？　そ

れは良か、った……あれ……？」
　コッコロの体から力が抜ける。絨毯の上に座り込み、片方の手はお腹に、もう片方の手は自分の足と足の間、その付け根に差し込まれている。
　これは。
「おい、クロ。お前何をした」
「ふふっ、これよ」
　クロが俺に見せてきたのは、何の変哲もなさそうな包丁だった。でも、これは……
「宝具じゃねーか……」
「そ。後ろから刺す包丁っていう名前なんだけどね」
　何だろうか。その名前、背筋に寒気が。
「痴情の縺れが原因で生まれた宝具、この世のあらゆるこじらせた女性の怨念が詰まった包丁よ。単純に意中の男を刺してもいいし、切った人に睡眠薬、媚薬効果を与えることも出来るの」
　そして説明が怖すぎる。
　普通に刺すならまだしも、眠らせて、媚薬を飲ませて何をするつもりなんでしょうねぇ？　その先にあるのは1つしかないと思うんだけど。
　それにしてもエミヤ……君は一体どんな状況でこの宝具をコピーしたんだい？
「効果は多彩だけど、宝具としては最低ランク。でも、修羅場、エッチなことをする場面では効果が倍増するの」
「それをコッコロに使ったのか」
「そうよ」
　なんてことを。
「えっちなことを全然知らない女の子でも強制発情。もう一種の呪いだからね」
「あ、主様……！」
　息がすっかり荒くなり、エルフ特有の長い耳は真っ赤に染まっている。うるんだ瞳に湿った吐息が俺の息子を刺激した。

「わたくし、わたくしのアソコが、おかしいです。お腹の奥が熱くて、何かがあふれてきます……！」
　呪われてしまったコッコロは未知の感覚を何とか言葉にしようとしている。だが、意味を知っている俺たちにとっては、興奮を煽る材料にしかならない。
「今は一種の催眠状態になってるから。目的を遂げるまでその呪いは解けないわよ」
「なんてものを……！」
　発情しているときの目的なんて1つしかない。
「大丈夫よコッコロ。そのドキドキに身を任せて」
「くろ、様……っ、ですがわたくし、どうにかなってしまいそうで……！」
　切なげな眼をしたコッコロを、優しく抱き留めるクロ。抱き留められた体がふるふると震えている。
「すぐに良くなるわよ。今はお口でマッサージしたわよね？　女の子には、下にもお口がついてるの。そこでもう1回マッサージすれば、すぐに良くなるわよ」
「下のお口……？　わたくしの体に、そのようなものついては……あっ」
　クロの早業神業が、コッコロのズボンのゴムのみを斬る。支えるものが無くなったズボンが地面に落ちる。
　ぐじゅぐじゅに濡れた下着がここからでもわかった。経験のないコッコロが多少ペニスを舐めた程度であそこまで濡れる訳がない。どう考えても呪いの効果だ。
　その秘部に、クロは指を這わせた。
「しっかりついてるじゃない。下のお口が。こんなに涎を垂らしてるわよ」
「そ、そんなこと、わたくし、そんなはしたなくは、ひう!?」
　パンツをずらし、まだ1本の線でしかない蜜壺をなぞる。
「いいのよ、はしたなくなって。その方がお兄ちゃんも喜ぶから」
「主様、も……？」

俺の名前はコッコロにとって何よりも強い力を持つ。それを理解したクロに利用されてしまう。
ちらりと俺を見るコッコロ。クロはコッコロの耳を口に含み、甘噛みしている。
「ひっ、ぁぁ……っ」
「もう1回マッサージしましょう？　今度はこっちのお口で。お兄ちゃんの白いものを、こっちに出してもらいましょう？」
「ぁ、ぇ……」
「やり方は分かってるでしょ？　さっき部屋をのぞき見してたんだから」
「は、はい……主様のためになるなら」
「――コッコロのためにもなるけどね」
クロに誘われるがまま、ベッドに移動するコッコロ。
体を横にして、足を開く。
「はい、どうぞお兄ちゃん。早くコッコロを楽にしてあげて？」
「お前な……」
「え……？　主様が？　マッサージするのはわたくしではないのですか……？」
この期に及んでまだこの行為をマッサージだと思っているコッコロは、熱に浮かされたような瞳をクロに向ける。
「うんうん。そうね……お兄ちゃん」
「……分かった」
コッコロを早く楽にしてあげないといけない。
俺は自らの息子を、膣口に添える。
「ぁ、ぁぁ……！」
いやらしい形だ。ロリスジだと思っていたが、すでに開花している。それ自体が生き物のように蠢き、入口をひくひくと震わせていた。
幼いクリトリスも小さく勃起し、おそらく初めて外界に触れていた。
俺は生唾を飲み込んだ。

クロのように最初から意味を知っている娘ではない。ティナのように、クロによってある程度教育された娘ではない。
コッコロのような、本当に何も知らない女の子を征服することに、興奮してしまっている。
「やっべ、俺って変態だな……」
「今更？」
「再確認したんだよ」
苦笑しつつ、腰を突き出した。
「ん、ぁっ、ぁ、あぅんんっ、んんんっ、あああぁぁぁっ……！」
甲高い悲鳴。腰を前に突き出した途端、コッコロの口から嬌声が叫ばれた。宝具の呪いというのは本当にすごいものだ。
何の愛撫もしていないはずなのに、サイズが全く合っていないはずなのに、しっかりとした快楽を享受しているようだ。
ロリマンの具合もいい。この年齢ではありえないほどのうねりと媚び具合だ。呪いで何としても既成事実を作るという効果が働いているのか、必死になって俺のペニスから精を搾り取ろうとしてくる。
コツンと奥に到達すると、コッコロの体が弓なりに反られた。
「ぁ、はっ、んぁっ、あっ……！　あるじ、さま、ちょっと待って、少し止まって、下さいまし……！　わたくし、あたまがびりびり、して……！　んっ、はぁ……っ！」
だが、コッコロの体は呪いについていけていないようだ。
「大丈夫よ、コッコロ。これはお互いが気持ちよくなるマッサージなんだから」
「お互いが……？　ひぅ!?」
こつこつと、奥を何度か叩く。
「おなかがぞくぞく、してっ、ああっ、あたまの、びりびりが、止まりません……っ！」
肉棒は膣の入口を簡単に突き破り、少女の洞穴を乱暴に掘削する。幼く閉じ切っていた膣道が、呪いによって強制的に潤わされた膣道が俺の形になる。
何度ペニスを抽挿しても、新鮮な膣圧が伝わってくる。

そのうち、遅れてコリッとした感触が現れた。コッコロの最奥にある赤ちゃんを作るための小部屋だ。
「やっ、そこっ、だめ、だめでございます……！　ひゃうっ　あっ、ぁ、はっ、んぁっ……すごくっ、深いところまで、届いて……んっ、くうっ……!!」
ダメという割には、しっかりと子宮口で快感を感じているようだ。もともと小さい膣道だ。ノックするだけにとどまらず、大切な子供袋を何度も変形させる。
コッコロの足ががくがくと震える。
「あ、主様、おかしいです……っ、あたまのふわふわがどんどん強くなって、ずっと戻ってこれない、です……！」
「大丈夫だ。そのままそれに流されて。それが一番気持ちよくなる、イクってことだ」
「いく……？　あっ、ひぁ、びぎゅ!?　い、イキそうです、わたくし、どこかへ飛んでイってしまいそうで……！」
膣道の痙攣は限界に近い。俺はどんどん、ペニスの出し入れをリズミカルに、速くしていく。これが最後のスパートだと、コッコロの子宮に叩き込んでいく。
もう限界寸前、最後の力を振り絞り、亀頭を子宮口にめり込ませる。
――ごぶっ、ごぶっ、ぶりゅりゅっ、どぶっ、どぶっ、どぶっ！
「んくぅ、んんぁぁぁぁっっ――――!?　あぁ、あっ、はぁっ……主様の、おちんちんから、出て……っ」
自分が何を注がれているのかわかっていないようで、ただ絶頂の快楽に身を震わせているコッコロ。
俺の精子で呪いが浄化されていくのか、締め付ける膣道がどんどん硬くなっていく。
余韻も抜けきった頃、コッコロから息子を引き抜いた。４発も出した息子は今度こそ完全に沈黙しているのだった。

要求されるオシオキ①（狂三、理子）

「お仕置き？」
俺の部屋に来た理子と狂三が、唐突にそんなことを言ってきた。
「ええ、そうですわ」
「私たち、翔君に秘密にしてって言われたこと、みんなにしゃべっちゃったからね～」
「そのせいで、翔さんが皆さんに叱られてしまったわけですし」
確かに叱られた。それはもう、思い出すのも辛いくらい。
でもそれは緊急事態だったからな。島の危機だった訳だし、そもそもみんなに秘密にする判断をしたのは俺なんだし。
「つべこべうるさいですわ」
「そーそー！　翔君は黙って理子達にお仕置きすればいいんだよっ！」
言ってることは分からないが、言いなりになるしかなかった。
２人も、元々そのつもりで来たらしいからな。

「おやおや、準備はお任せしましたけれど、こんなにたくさんあるんですのね」
「えっへっへ、まあねー。理子も大人の女性になるために色々と勉強してるんだよー」
「……おい」
俺の机に並べられていくのは、理子のカバンから取り出された様々な器具。毒々しいピンク色に、どこかで見たような反り返りを持つ棒状の器具。リモコンとセットになった小さな卵型の器具。などなど

だ。
それらを興味深そうに眺めている狂三。
ああ、そうそう、お仕置きの方向が完全にそっちだって分かってることだし、この前、小さい娘たちとした犯罪行為の結果について報告しておこう。

空閑遊真の黒トリガー
『ワールドトリガー』の主人公、『空閑遊真』の持つ黒トリガー。
特定の武装が備わっていない代わりに、『印』と呼ばれる能力で、戦闘の補助を行う。
また、他のトリガーの機能をコピーし、コピー元以上の性能を持った新しい能力の『印』を作成出来る能力を持つ。
この世界では魔法デバイス扱いとなり、コピーするトリガー機能は魔法になる。
能力補助のために『レプリカ』という補助デバイスもついている。

オートバジン
仮面ライダーファイズの専用マシン。
専用コードを入力することで、人型の戦闘形態『バトルモード』へ変形し、ガトリング砲をぶっぱなす。ただしフレンドリーファイヤにはご注意。

騎乗C
騎乗の才能。現代の乗り物なら、直感で乗りこなすことが可能になる。

適切サイズな息子
女の子とする時、その娘に対して一番適した大きさと形になる。これで小さい娘とする時も安心！

まあ色々と言いたいことはある。
とりあえず、空閑遊真の黒トリガーは強い。とてつもなく強い。
実は今まで魔法デバイスを持っていなかった俺にとって、この世界に合わせて変化した黒トリガーはとても都合が良かった。
シッカリしたものを買おうとすれば、スマホの最新機種並みの値段がすることになる。陸戦試合で使ったヤツは、借り物だったしね。
これで魔法系の能力は非殺傷設定に出来るようになった。
今日は何もなければ、レプリカ先生と試運転をしようかと思ってたんだけど。それはまたの機会になるようだ。
騎乗スキルも腐ることの無い良い能力だ。一緒に手に入れたオートバジンに乗る時に役立つことだろう。
それはいいんだけど、ね。最後の1つが。
「(もうヤるための能力でしかないんだよなぁ)」
なんだよ、適切なサイズの息子って！　そりゃあ確かに、ティナもコッコロも苦しそうだったけどさ！　なんというか、そのために生み出された能力じゃないか！
剛直といい、そういう方面の能力も徐々に揃いつつあるのかもしれない。
……と言ったものの、これも腐るような能力ではない。むしろ余計な心配をしなくてもよくなると思えば……
いやいや！　別にそんな小さい子供たちと積極的にしようなんて思ってるわけじゃなくて、あっ、違います心の中のおまわりさん――
―
「それで？　何をしようってんだ。こんなに持ち込んで」
お巡りさんが思考を無理やり打ち切る。
「あー、翔君、これが何だか知ってるんだー」
「いやらしいですわね」
「2人も知ってるじゃん……」
俺を無視して、2人は話を続けていく。
「今日はこれを使いまーす！」

理子が取り出したのは毒々しい色の液体が入った小瓶。机の上に並べられた機器と合わせて、部屋が毒々しい色のオンパレードだ。
「これ、前に温泉で使った媚薬なんだよね」
「ああ、あれか」
「あの時は原液で使ったから大変なことになっちゃったけど」
「おい！」
いまさらっととんでもないことが聞こえたぞ！
「でも今回は用法容量を守って使うから大丈夫！　とにかく私たちはこれを飲みます」
「それからわたくし達は、これを穿いて立ちます」
これまた卑猥な、パンツとディルドが一体化したブツを狂三が掲げる。黒いエナメル質で、あそこを覆う部分以外は完全に紐だ。
説明を聞く。どうやらディルドには電源が付いていて、スイッチを入れると振動、回転、伸縮するらしい。
「先に立っていられなくなった方が負け。勝ったほうだけが翔君とえっちなこと出来るってルールで！」
「……はぁ」
確かあの媚薬、筋弛緩剤も入ってるんだよな。１回でもイったら間違いなく、そうでなくても大きい快楽を受ければ立っていられないだろう。
でも、それは、さ？　そんなルール決める必要あるのか？　普通に器具を取り入れたプレイをすれば……
「いいから」
結局はそういうことがしたいだけか。
２人がいいと言うなら、まあ、いいのかな？　……俺が我慢出来るか分かんないけど。

準備を終えた俺たちは、さっそくコトに取り掛かっていた。
「それじゃあ、同時にね？」
「もちろん。不正はナシですわ」
だが下着姿になった2人を目の前に、ベッドに座った俺にすることは無い。あえて言うなら我慢することだ。
2人のイメージに合った、黒と金の精緻なデザインの下着姿。それが包み込む、2人の肉付きの良い体。
それを目の前にして、理性を保っているのが一番大変だ。
俺の苦労など知る由もない2人は、息を揃えて、コップに入った液体を飲み干した。
……俺だったら、絶対に飲めないな。あんな蛍光ピンクの液体。
体への変化はすぐに、しかしあの時の雪菜のように劇的には表れなかった。
「ふ……っ、んっ」
「はふっ、……っ、ぁ」
2人の肌に段々と赤みが差し、息遣いが荒くなってきたのだ。
「なる、ほど。これが媚薬というものですのね……」
「あははー、やっぱスゴイなぁ、夾ちゃんの薬は。心臓のバクバク、止まんないよ……んっ」
会話しつつ、自分のお腹とかおっぱいに手を這わせるの、本当に目の毒だからやめていただきたいんですけれど。
「理子さん、それじゃあ、そろそろ」
「ん、そうだね」
そろそろ、下の口に疑似肉棒を咥えさせなければ、ゲームが始まらない。それは分かっているし、言葉の意味も分かる。でも2人の様子を見ていると、それ以外の意味、具体的には我慢が出来なくなってきたという意味にも聞こえてしまう。
2人は腰にある紐に手をかける。抵抗なく脱ぎ捨てられた。
「うわー……もう結構濡れちゃってるね……」

「触ってないのに、こんなに……」
だから、そうやって自分のモノの具合を確かめるのはやめてくれって！
次に手に取るのはあのパーツが着けられた卑猥な下着だ。
するりと、特に抵抗なく上へと昇っていく。だが、最後まで順調に行くわけではない。太ももの中ほどで一旦停止する。
出っ張っている部分を、自分のナカに挿入しなければならないからだ。
「んっ、ぁ……」
「中々……っ、ぁ！」
「だからさ……」
もう言うのも疲れたよ。こんなの見せられてどうしろって言うんだよ。
いくら媚薬を使っていても、一気に刺し貫く、というのは難しいのか、まずは先端で解きほぐすように入り口を刺激している。
どんどん漏れ出している粘液が、くちくちと卑猥な音を立てている。あれで滑りを良くしてるのか。
それでも、なかなか最後まで？み込めないみた、い、だ……？
「……」
何故か、狂三が、こちらを、見ている。
見ているだけではない。俺の方に歩いてくるぞ!?　内股に液体が垂れているのが分かり、目を奪われていると、
「翔さん……」
「く、狂三？　うぉ!?」
押し倒され、唇を奪われた。
「ちゅう、れろ、れぉ、ちゅ、あぅ、ちゅぅる、じゅるっ、ちゅぱっ」
狂三の舌が俺の唇を割り裂き、口内へ侵入してきた。俺の舌が無理やりからめとられ、巻き込まれる。
素晴らしい感覚に流されそうになるが、このキスには目的があったようだ。
狂三の手が、下腹部でごそごそと動く。

「ふぎゅっ!?　うううぅん……!」
滑らかだった舌の動きが、一瞬停止する。
不自然な息遣いと熱を持った吐息が流れ込んでくる。俺の服には狂三の股間からしたたり落ちた、挿入されたせいで溢れ出してきた愛液が卑猥なシミを作り出していた。
「んんんっ!!　ちゅうぅ、ちゅぱぁ……ぁぁ、これで、全部入りましたね」
見ると、確かにディルドは根元まで呑み込まれていた。
ベッドに膝立ちになり、ズレている紐をわざわざ俺の目の前で柔肉に食い込ませた。ぱちん、という音がして、ごく小さい面積の黒い布地が、そこから生えた合成樹脂が、何食わぬ顔で狂三のナカを貫いている。挑発してんのか。
「今はこんな偽物ですけれど……」
自分のお腹をなぞり、次いでズボンを押し上げている俺の肉棒をなぞる。
「あと少ししたら、ここに溜まったものをわたくしのナカに出していただきますわ」
うっすらと汗をかいた額に張り付く前髪。細められた目は、発情しているとは思えないほど、ミステリアスな空気を纏っていた。
その後ろでは、
「いやー、えっっろいモノを見させていただきました。ゴチです!」
理子が手を合わせていた。あの下着はすっかりと飲み込まれ、装着されている。
理子はそっちでもイけるらしい。
「あらあら、いけない人ですわね。わたくしと翔さんの情事を見て、興奮してしまわれるなんて」
「んん〜?　でもちょっと反則臭かったよねぇ?　負けた人はえっちできないのに、フライングでキスしちゃうなんてさぁ?」
「別にわたくしが勝ってしまえば問題ないのでしょう?」
「そう簡単にいくかなぁ?　たしかに狂三ちゃんは強いけど、ベッドの上じゃあヨワヨワかもしれないしぃ?」

「きひっ、ええ、ええ！　その言葉、そっくりそのままお返しいたしますわぁ……！」
それはもう、２人とも闘志を前面に出している。
でも半裸でそんなに言い争っても、あんまり怖くないよ。
そして部屋の真ん中に立ち、ゲームが始まる。
リモコンを渡されたのは俺だ。これ、一応お仕置きって事だからな。強さも変えられるって話だ。これで楽しんでね、と理子は言っていた。
部屋の真ん中、適度に距離を置いて２人は立つ。
「それじゃあ、いいよー」
「はい、いつでも」
「ん、了解」
リモコンは理子と狂三、２つある。おまけに挿入されているディルドの多機能さゆえにか、ボタンやつまみが非常に多い。もうちょっとしたラジコンだ。
「（とりあえず、最初っから全開ってのは芸がないよな）」
パワーは最低。機能は自動ピストンだけ。
スイッチを入れた。
「んんっ!?　くひっ、ひぁ……っ、んんっ！」
「ひゃんっ！　ンっ、んぅぅあぁっ……っ！」
ほぼ同時に体を少しだけ『く』の字に折り曲げ、足の指をもじもじとさせ始めた。別に動作確認をしたわけじゃなかったけど、問題なく動いてるみたいだな。
２人は逃げ場のない快楽を逃がそうとしているのか、徐々に落ち着きが無くなってきている。視線も落ち着きない。
パワー最低ではそこまでの刺激は得られないはずだが、今の２人にはそれで充分らしい。媚薬の力ってすげー。
だが、媚薬が効いているのは２人だけではなかった。
「（あー、やっば……）」
狂三と口づけを交わした俺にも、しっかりと効果が出ていた。
口のなかに残っていたものが摂取されたのか、それとも体温で気化

したものを吸い込んでしまったのかは知らないが。俺は薬が効きやすい体質なのかもな。
あれだけ互いの唾液を交換し合ったんだ。しょうがないのかもしれないが。
意識がだんだん朦朧としてきた。飲んだことは無いが、酒で酔っぱらうとこんな感じになるんだろうか。
だったら、酒に酔った男女が夜の街に消えていく理由も理解出来た気がする。
ぼやけていく思考の中、俺の息子だけが元気よく、いつもよりも元気がいいんじゃないかと思うくらい、硬く反り返っていたのだ。
理子の持ってきた薬。夾竹桃のものだと言っていたが、やはり彼女の腕はすさまじいようだ。なんだかんだ、一番危険なのは薬物なんだな。
しかも目の前の2人は、体が求めてやまない快楽を思う存分、我慢しているとはいえ、がっつりと享受している。
俺が座ってムラムラしているのに、下の口が咥えたエグイ偽肉棒からは、絶えず粘液がしたたり落ちている。
快楽を逃がそうとしているのか、腰を振っているがしっかりとパンツで固定され、しかも下の口もがっちりと咥え込んでいる。
それでいて声を我慢しようと艶めかしい吐息が漏れているのだ。
生殺しという言葉がこれ以上に合う場面はそうそうないだろう。
頭と下腹部の熱に浮かされた俺は、段々と意識が朦朧としてきて――……

「くふっ、どうしたの狂三ちゃん？　可愛い声出ちゃってるけど？」

「理子さんこそ、ずいぶんとお腹に力が入っているようですわ。辛いのなら、休んでしまわれてはどうですか？」
　お互いがお互いを挑発し合うが、
「……」
「翔君？　ぁう……っ」
「どうか、んっ、されましたか？」
　２人の声を無視して向かうのは机だ。いくつもの淫具が武器のように並べられたあの机である。
「お仕置きなのに、お前らだけ楽しんでるなんておかしいだろ？」
　机の上に並べられたたくさんの凶器（オモチャ）。それを手に取りつつ、２人に迫る。
　確かに、これは２人が思い描いていたシナリオ通りだった。
　わざわざこんなに器具を持ってきたのも、我慢する２人に、健康な男子高校生の翔の方が抑えきれなくなるだろうという予想があったからだ。
　その時に使ってもらおうと思っていたのだが。
「な、なんか、思ってたのと少し違うような……？」
「今の翔さんは、その……目が少し怖いですわ……」
　薬で理性を無くした翔が、２人に襲い掛かるのだった。

要求されるオシオキ②（狂三、理子）

「暑くなってきたな」
そう言って、服を脱いでしまう翔。それも1枚も残らずだ。
この島の生活で鍛えられた体と、バキバキに勃起した肉棒が、2人に見せつけられる。
「え、ええ。確かにポカポカしますけれど……」
「それって多分媚薬のせいだし……もしかして、翔君も媚薬を？」
「あり得ますわ。わたくしがキスをした時に、口に残っていたものが入ってしまったのかも……」
「ええー？　そんなチョットであんなに効くかなぁ……？」
2人は身を寄せ合い、翔の様子について話し合う。明らかに普段とは様子が違う。確かにセックスの時にはSっ気を見せることが多い翔だが……
「そう考えると、割といつも通りなのかな？」
「かもしれませんわ。それに、これはこれでわたくしたちが望んでいたではありませんか？」
「それもそうだねー」
「何こそこそ話してんだ、2人とも」
口をそろえて何でもないと言う。
だが、2人は今の翔を甘く見ていた。
「そっか？　ま、じゃあ早速なんだけど……」
翔は手に持っていたものを突き出した。
鎖と輪っかがセットになった道具――手錠だ。
「2人には、これを付けるから」
「はい？」
「あはは、いやー……そう来たかぁ」
翔は有無を言わさず、2人の手それぞれに手錠をかける。後ろで繋がれたため、それだけでかなり動きにくくなってしまう。
両手というのはバランスを取るためにも使うため、快楽を我慢し、立っているのが余計大変になってしまった。

「理子にはこれだな」
続いて翔が取り出したのは、ピンク色の細長い道具だ。男根を模した道具、それは女性の秘部に入れて快楽を得るものだ。しかし今、前の穴は塞がっている。
「理子、こっちにお尻向けて」
「え。え？　ほ、ホントに？」
翔は無言でリモコンを操作する。今までゆっくりと動いていたバイブが一気に速度を増す。伸縮に回転機能を加えて、理子の肉壁を抉り始めた。
「ひんっ！　ひがっ、あぁっ、うひゅっ、うぅぅぅっ……！　わ、分かったから！　一回待って！　……うぅ……はい」
おとなしくお尻を向けてきた理子に、翔は。
「え、ぁ？　え、ちょ、ちょっと、んっ、ぁ……」
前以外はほとんどTバック、紐状の下着をずらし、尻肉をかき分け、不浄の穴に添えるのは自らの肉棒だ。
翔は翔で、媚薬の効果が出ている。
パンパンに腫れた亀頭の先からは先走りが滲み、先端の滑りを良くしている。
このまま腰を突き出せば、括約筋の抵抗を突破しナカに侵入する――

――

「冗談だよ」
だがその程度の理性はあったようで、すぐに肉棒を引っ込める。
その様子をはらはらとした様子で見守っていた狂三も、胸をなでおろした。
「お前のお尻、当てられただけで喜んでたぞ」
肉棒の先端、敏感な部分は確かに感じ取っていた。
漏れ出した先走りが触れ、キスした瞬間、ケツ穴がまるで膣穴のように口を開け、ペニスを飲み込もうとしたことを。
外部からの侵入を拒むはずのケツ穴は、浅ましくもペニスを求めて口を開きかけていたのだ。
「セックスできるなら、こっちでも構わないってことか？」

「ち、違っ……！　それは媚薬のせいで……！」
理子は赤くなって否定する。
色々と勉強している理子でも、下の後ろの口を実際に使うのは初めてだ。
「（絶対に薬のせい！　じゃなかったらおかしいから！　絶対におかしい！）」
「そっか。でもまあ、自分から迎えに来るようなえっちなお尻だ。コイツを入れるのは、全然問題なさそうだな」
「ひぅ……！」
翔はアナルバイブを添える。この島特別製の、潤滑油が無くとも痛みを感じず、するりと入っていく特殊素材で出来たバイブだ。
肉棒とは全く違う、冷たい感覚にも体は敏感に反応する。
「やっ、あぁ……なにこれ、ぇ、ダメっ――んっ、あ、あぁぁあああっ」
初めは先端だけ、少し膨らんだ部分だけを挿入し、様子を見る。そこを起点にぐりぐりと動かすと、理子はくすぐったそうに身をよじる。
外から入ることを想定して作られている膣穴とは違い、尻穴は排泄のために作られている。普段とは逆の動きだ。だが、抵抗はあっても拒否はされていない。
折を見て最後まで。にゅるるるるるぅっ!!　と抵抗なく最後まで呑み込まれてしまった。
「う、うくぅぅぅぅ……っ！」
両手の自由を奪われ、下の前の口には動き続けるバイブ、後ろにはたった今挿入されたアナルバイブ。さらに媚薬で体が火照っていては、満足に身をよじることも出来ない。
まるでリモコンのように、バイブを前に後ろに操作すると、理子の体も同じように動く。
「も、もうっ！　あんまり理子の体で遊ばないでよねっ！」
「はは、悪かったって」
怒る理子だが、いまいちその声には勢いがない。
「（うう、媚薬のせいだよね？　でももしかして、理子、ソッチの才能

もあったってことなのかなぁ？）」
未知の感覚の中に、確かに甘い電撃にも似た感覚が紛れていたのだ。
これで理子の準備は整った。
次は、
「狂三にはこれを使おうか」
「そ、それは……」
黒いビーズが数珠のように繋がっている。アナルビーズである。
それを見た狂三は冷や汗をかく。
実際に目の前に突き出されると、かなりのサイズだ。
「（本当にこれが、わたくしのお尻に入るんですの……？）」
だが、この状況で逃げ切れるとは思えない。
「はぁ……優しくしてくださいまし」
ため息をついてお尻を向ける。
狂三の尻肉をかき分け、下着の紐を退けると、綺麗な窄みがあった。
そこにビーズの先端を押し付け、
「ひうっ！　冷たひんっ!?」
一気に押し込んだ。
いくつもあるビーズのうちまずは1つだけ。一番小さいビーズが飲み込まれた。今はビーズとビーズの間にある細い部分で休憩している形になっている。
「ずいぶんと可愛い声が出たな、狂三」
「あ、当り前ですわ！　急にそんな、お尻あぎゅっ!?」
「ほら、出てきてるぞ」
外からの異物を排泄しようとする当然の動きを、翔は指一本で押しとどめる。半分ほど出かかっていた球体を、もう一度押し込んだ。
人差し指に触れる皺が、ひくひくと落ち着きなく痙攣していた。窄みの奥に、ビーズの冷たい感触を感じる。隙を見せれば、すぐに出てきてしまいそうだ。
狂三も出したいと思っているわけではない。年頃の乙女が、お尻から物をひねり出すのを見られたい訳がないのだ。だが我慢していて

も、生理的な欲求には逆らえない。
「これはさっさと入れたほうがいいか。どんどん出てきちゃうもんな」
「っ!?　や、待っ――――!!」
　別に話をするために声をかけたわけじゃない翔は、気にせず次のビーズを埋め込んだ。
「何個入るかな、っと」
「あっ！　ひんっ、ほぐっ、いっぱい、入って……！」
　ぬぼっ、ぬぼっ、と下品な音と共に、ビーズが見る見るうちに無くなっていく。やがて１０個ほど繋がっていたビーズは、引き抜く時に指を引っ掻けるリングを残して、すべて埋まってしまった。
　最後の方には、ひきつけを起こしたように、狂三の足は痙攣していたが、それでも膝をつくことはなかった。
「お腹、苦しい……！」
「ま、中に入ってるモノの大きさは、狂三の方が大きいしな」
　全て詰め込まれたお尻は今にも決壊しそうだが、それをお尻に力を入れて何とか耐えている。
　力を入れているせい（おかげ）でもともと綺麗なヒップはさらにきゅっと引き締まっていた。
「うんうん。これで勝手には出てこないな」
「ひゃんっ!?　しょ、翔さん！　あまり刺激しないでください……！
　……で、出ちゃいそう、で……」
　リングを引っ張って具合を確かめる翔だが、狂三に懇願され、意外にもあっさりと引き下がる。
「これで準備が終わったんだけど」
　準備だけで、２人の息は絶え絶えになっていた。
「今日は２人がゲームを持ってきたわけだし、俺もゲームをしようか」
　その言葉に嫌な予感しかしない。今の翔の提案だ。絶対にロクな物じゃない。
「俺も我慢の限界なんだ。すぐに２人のゲームを終わらせたい。そこで……」

翔は言いつつ携帯のタイマーをセットした。
「今から1分間、理子のお尻を責める。この――――」
理子のお尻にずっぽりとハマって抜けないアナルバイブを掴み、少しだけかき混ぜてやる。
それだけで、
「ほぉっ?! ぉ、ほぉぉ……っ、あぎっ！ ごっ……ぉ、待っ、イっちゃ――――」
理子の膝が限界を迎える直前で、翔は手を離した。ギリギリのタイミングだったが、理子はゲームオーバーになっていない。
「やっぱ……」
そして理子はそんな扱いに興奮していた。媚薬のせいもあるが、恋人のように優しくセックスするよりも、強引に、逃れようのない快楽を無理やり叩き込まれる方が、より興奮出来ると解ってしまってきた。
「理子、聞いてるのか？」
翔に言われて、いつものようにオーバーな動作で否定しようと思い、手が繋がれていると思い出す理子。代わりに口だけで答える。
「あはは～、ごめんねぇ？ 翔君が急に責めるから、理子びっくりしちゃって」
「そんな調子で、1分間持つのか？」
「あはは……え？ 1分間？」
「なんだ、話を聞いてなかったのか？」
翔はもう一度説明を始めた。
「これから理子をコイツで1分間責める」
今度は動かすようなことはせず、手を添えるだけだ。
「いっ、ぷん……」
1分。たった60秒。その数字に、理子は生唾を飲み込む。
わずか十数秒ケツ穴をほじられただけで、汚い嬌声を上げ、足をガクつかせてしまったのだ。1分も絶頂を我慢出来るわけがない。
しかし同時に、体の中心がその快楽を求めるように、きゅんと切なく疼いた。

「それで1分経ったら、わたくしに交代という事ですか？」
狂三の考えは当然のものだった。時間を決め、交代制にするのではないか。しかし翔は否定する。
「いや、1分経ったら終わりだ」
「え……？　それはどういうことですの？」
「狂三にはこれが入ってるだろ？」
「ひぅっ!?　翔さん、ダメですわ！　それは本当に、わたくし……！」
反射的に括約筋に力を籠め、ビーズを外に出さないように、排泄行為で感じてしまわないように身構える。
「1分間理子が耐えたら、狂三のお尻に入ってるこれを、一気に引き抜くからな」
「……え？　一気、に……」
「あの様子だと、それはマズいんじゃないか？」
「それ、は……」
狂三の心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。その時の様子が容易に想像できた。
「ま、それで狂三が耐えたら、もう1回入れて、次は理子のターンだけどな」
「そんなの……！」
確かに終わりだ。次のターンなんて回ってこない。
ビーズ1つ入れるだけでも、未知の快楽に腰砕け寸前だったのだ。今狂三の中には10個のビーズが埋まっている。それを一気に引き抜かれたら。
「理子はずいぶんと気持ち良くなってたみたいだし、狂三もお尻でイっちゃうかもな」
「そ、そんなわけありませんわ！　わたくしが、このわたくしが、そんなところで……！」
「そっか。楽しみにしてるぞ」
狂三は祈るしかなかった。
どうか――
「（理子さん、先に負けてください――！）」

自らが無様にケツ穴アクメをキメないために、心の中で祈りを捧げるのだった。
「ルール……というか、俺がこれからやることは理解してくれたか？
あと1分もすれば、勝敗がわかるぞ」
「あははー……負けないよ」
「こちらこそ」
最初とは違う、シリアスな表情になった2人。
「じゃあ、始めようか」
理子のお尻に生えているバイブを掴み、翔はタイマーをスタートさせた。

一方その頃、リビングには雪菜と桜が一緒にいた。
雪菜が桜にコーヒーを淹れ、一口、口に含んだところだ。
「ふぅー……」
「お疲れみたいですね。桜さん」
「始末書が意外と大変で……管理局に入ったみんなもそのうちやると思いますけど……」
まだ正式配属ではない翔達とは違い、桜には膨大な量の始末書と報告書があった。
ほとんど徹夜明けの状態だったのだ。
「ベッドで寝たほうがいいんじゃないですか？」
「ううん……でも、そろそろ準備もしないといけないから……」
実は桜は、今年の8月は冬木市に帰る予定なのだ。
今はだれも住んでいない遠坂邸。桜は幼少期に住んだ思い出も殆ど無い家だが、自分の生家であることには間違いない

聖杯戦争で桜の父である遠坂　時臣は死亡し、そのことが原因で心が壊れてしまった妻の遠坂　葵もすでに病死している。
一家で生き残ったのは姉である遠坂　凛ただ1人だ。
原作とは違い後見人になるはずだった言峰綺礼も死亡してしまったため、土地を教会に任せ、原作より早く時計塔へ行くことになった。
話すと長くなるため割愛するが、その時なんやかんやあり、ウェイバー達と共に時計塔に来ていた桜と再会したのだ。
それから長期の休みになると、2人そろって冬木の家に帰り、掃除やお墓参り、そして何より土地の様子を見るようになったのだ。
今年は桜が学園島に来たことで一緒に帰ることは無いが、予定に変更があるわけではない。
あと数日で、一カ月ほど島からいなくなるのだ。
そのための準備なのだから、それはもう時間がかかる。
「はぁ。でもこれから1ヶ月、翔君とは会えないのかぁ」
もちろん姉に会えるのは楽しみだが、翔と何かをするというのはそれとはまた別の楽しみがある。
「それなら、先輩にお願いしてみたらどうですか？　あの事もありますし、今なら絶対に断れないと思いますよ？」
『あの事』とは、当然実験についてをみんなに隠していたことだ。
そんなものが無くても、翔がみんなのお願いを断ることは無いのだが。
「それもそうだけど……でも今日はなぁ……どうせだったらもっと元気な時がいいなぁ……」
わざわざ疲れた顔で遊びに誘いたくはない。複雑でも何でもないオトメゴコロだ。
「それよりも、雪菜ちゃんはどうなの？」
「はい？」
「なんか、みんなに遠慮してない？」
「別に、何も遠慮なんか――――」
していない、とは言い切れない。
ブラドとの戦いを経て、翔の周りには人が増えた。

桜が。特務六課が。
そして雪菜が知らない事件もどんどん増えてきた。
「チャンスは生かさないと。今みたいに何もない暇な時なんて、そんなに無いんだよ？」
「それは分かってますけど……」
「雪菜ちゃんこそ、翔君を誘ったほうがいいんじゃない？」
「っ、や、私は、そういうのはっ」
なんだかんだ言っているが、結局は恥ずかしいだけなのだ。赤くなっている雪菜に桜はそう判断した。
「よし！　今日は雪菜ちゃんに翔君を譲るね」
「え!?　ちょ、っと!?　桜さん!?」
影に捕まり、抵抗できずに運ばれていく。２人は階段をのぼり、翔の部屋を目指す。
そして聞こえてきた。
翔の部屋の中から、あの声が。

要求されるオシオキ③（狂三、理子）

「それじゃあ、始めるぞ」
翔の声に、２人の少女は身を固くした。前の口の中で震えているぬるい動きとは全く違う、無慈悲な攻撃が来る。
《００：５９》
タイマーが動き出した。
時間は翔にとっては短く、理子にとっては長い。さっそく上下に動かし始めた。
「んあッ、ぉんあうぅっっ!?　え、なッ……やだ、これッ……んっ、あっ!」
すでに喜び始めている尻穴は、程よい弾力を翔に返してくれる。
「ほら、前に行くなって、よっ」
「ひ、ぐぅぅぅ……っ!!　もう……っ、ひぅ、い、ぐ……っ!!」
後ろから抱きしめるように理子を包み込む。もっとも、右手に持ったバイブは理子のお尻を激しく突き上げ、吸い付く肉を引き剥がし、もう一度挿入する。
もう片方の手は理子のおっぱいを鷲掴みにし、時折乳首をはじく。
「しょ、翔さん？　それは、もう、理子さん、立っていられないんじゃありませんの？」
その様子を見た狂三はたまらず指摘する。
下着では吸収しきれないほどの愛液が滴り、上を向いた口からは熱い吐息とともに、舌が突き出されている。腕にはだらんと力が入っておらず、何より完全に翔に体重を預けてしまっているように見える。
どう見ても勝負あり。時間を確認すれば、まだ１０秒も経ってない。
「そうか？　まあそうかもしれないな」
「いえ、だったら――――」
もうこの勝負は終わり。狂三もお尻に入ったものを抜かなければいけないが、勝負には勝ったのだ。
そう思ったが、

「でも、本当にそれでいいのか、理子」
「あ、え……？」
息も絶え絶えな理子に、翔は言う。
「本当にもう立てないのか俺にはわからないんだよ。もちろん、あと３０秒経ったら、狂三の方をしないといけないからこの手は離すけど……」
話している間も理子のお尻は弄ばれる。ぬぽっぬぽっ、かりっかりっとお尻が引っ掛かれ、きゅうんと肛門が締まり、咥えているモノの形を覚えるようにぴっちりと押さえつける。
「その時立ってたら、狂三も文句言わないよな？　１分間責められ続けても立ってたんだから」
「……っ!!」
「それは、まぁ……」
《００：２３》
残り３０秒も無いとはいえ、それはこの状態の理子への責めがまだ続くことを意味していた。
それは理子にもまだチャンスがあるということだが、
「（あの状態から責められ続けて、立つまで回復出来るわけがない――）」
必勝を確信した狂三だったが、
「誰がもうダメって……？　全然、行けるから……！」
あきらかにやせ我慢とはいえ、滝のような汗を流しているとはいえ、理子は笑って見せた。
預けていた体を起こし、しっかりと自分の足で立って見せる。だが、その足は今にも折れてしまいそうなほど頼りない。
「別にギブアップしてもいいんだぞ？」
翔はずぬずぬとバイブを押し込み、すぐにピョコンと飛び出るそれをまた押し込む。理子はイキそうになりながら、首を横に振った。
その健気な態度に、翔は見た目は優しく、実際には有無を言わさずバイブを掌で押し込んだ。
パァン!!　と尻肉が平手打ちされる。その勢いで、ぢゅごん！　と

バイブがアナルの奥にめり込んだ瞬間、一瞬白眼を剥いた。
「ーーーッ?!　～～～～～～～～ッ!!」
S字結腸にまでめり込んだバイブが、容赦無くヴイイイ！と震え続ける。下の口からぷしゃっと潮を吹き出した。
「大丈夫か？」
歯を噛み締めて絶頂を表に出すまいと悶絶する理子に、翔は全てを理解しながら心配気に問い掛ける。
「……う、ン……だい、じょう、ぶ……ッ！」
理子はゆっくり顔を持ちあげ、上気した顔でカクリと人形のように頷いた。翔は微笑み、前に挿入っているバイブの振動を強くした。
「ッ！……ッ……ッ……ッ!!」
「ほら、こっちは自分で挿れたんだろ？」
理子はもう会話なんて出来る状態ではない。食いしばった歯はカチカチと音を鳴らし、蠱惑的な太ももは内側が大洪水だ。目の前では常に火花が散り、自分が真っすぐ立っているのかすら分かっていない。
しかしそれでも、理子は倒れない。
《００：００》
ピピピピ――
タイマーが鳴った。
「1分。狂三、行くぞ」
無慈悲に告げた翔は、最後の一撃を理子のアナルにぶち込んだ。
「か、は――」
それが最後の一押しになった。
何とか我慢しようと踏ん張っても、理子もアナルの刺激がここまで蓄積するのは初めてのことだ。そもそも、媚薬で溶かされた思考では、我慢など出来る訳がない。
一瞬ふわりとした浮遊感に襲われた理子は、目の前が真っ白になる。それは排泄器官からの強すぎる快楽だと気が付いた時には、脳髄まで焼かれていた。
翔はそんな理子を背中に、狂三のアナルに生えているリングに指を

通す。
「しょ、翔さん！　理子さんが、ほら！　もうイって――――！」
「勝負は立っていられなくなるまで。そう決めたのは２人だよな？」
１分経ち、翔の目標は完全に狂三に移っていた。
翔は腰が引けている狂三を抱き寄せる。
「お尻の力は抜いたほうがいいんじゃないか？　そんなに力を入れてると、もっと感じるかもしれないぞ」
「そんなこと言われましても……っ！」
この状況で力を抜くなんて出来る訳がない。
少しでも抵抗しようと、セピア色の皺が深くなるが――
「よっ」
にゅぁぽぽぽぽおぽぽぽぽぽぽぽぽっ？？？！！！

いやらしいという言葉しか浮かんでこない、そんな光景だ。
「でもこれじゃあ、２人のオシオキはどうなるんだ？」
２人は同時にノックアウト。ビデオ判定でもしなければ違いが分からないほどの差しかなかった。
ルール的に考えるなら、２人とも立っていられなかったってことで、負けに近い引き分け。罰として、翔とのセックスは無し――
「でもそれって、俺だけが損してるもんなぁ」
確かに翔もこの状況を楽しんではいたが、媚薬で盛り上がった性欲は全く解消されていない。
悩んでいると、ドアが控えめにノックされた。
「誰だ？」
「私です、先輩」
扉の向こうから聞こえてきた声は、雪菜のものだった。
「どうかしたのか？」
「どうかしたのか、じゃないですよ、翔君」
「桜もいたのか」
２人とも、何やら呆れているような声色だ。
言いにくそうに口に出した。
「その……色々、聞こえてきます……」
「この家、いくら防音がしっかりしてると言っても、そんなに大きな声を出されると、ですね……」
「ああ、そっか」
今の瞬間、理子と狂三は絶叫に近い声を上げていた。防音がしっかりしていると言っても、そこまで大きな声を上げては、部屋の外にまで伝わるのは当たり前だ。
アリアは何か用事があると出かけて行ったし、耀はふらっといなくなっている。ヤミはいつもの通り、ヴィヴィオちゃんの所へ。子供組はコッコロをみんなに紹介するとヤミについていった。
一番の鬼であるアスナは買い物だ。アルトリア達も一緒だったな。
つまり、今家にいるのはこの場にいる翔達５人だけ……
「先輩？　聞いてますか、先輩！」

「ん、ああ。聞いてなかった。考え事してて……」
「まったく……とにかく、その、するのは、かまいませんから。もう少し声を押さえて下さいねっ」
　雪菜の注意。普段の翔ならば気まずく思い、行為をやめていたかもしれない。しかし今は違う。薬で理性を失っているのだ。
「何でだ？」
「なんで、って……」
「入って来いよ。一緒にすればいいじゃないか」
「は――はあぁぁぁぁ!?　なななにを言ってるんですか!!　先輩は本当に！　本当にいやらしい人ですねっ！」
　扉の向こうで、真っ赤になって否定する雪菜。
「大体！　そんな複数人でなんて――ちょっ!?　何開けようとしてるんですか!?　先輩何も着てない!?　閉めて！　閉めてください！」
　雪菜の絶叫もなんのその、自らの恰好も気にせず、雪菜たちを部屋に招き入れようとしている。
「……」
「さ、桜さんっ！　見てないで手伝って下さい！　今日の先輩、なんだかおかしいです！」
　雪菜に言われると、手を添えた。扉を押さえつけている雪菜の手に。しかしそれは扉を押さえる手伝いをしようというものではなく。
「あっ、待っ――」
　逆に扉を開けようという動きだ。
　扉の向こうには、当然翔が立っている。服を着ず、女性を貫くのを今か今かと待ち望んでいるペニスが2人に向けられた。
　雪菜はとっさに目を反らし、桜は顔を赤くしつつも一歩前に出る。
「雪菜ちゃん。私、さっきも言ったよね？　チャンスは生かさないといけないって」
「で、でも……っ！　こんなのって……！」
「そっか……」
　そう言い残し、部屋の中に入っていく桜。
「失礼します……わぁ！　すごいことになってますね……」

それっきり扉が開くことも、お呼びがかかることもなかった。
「何なんですか、もう……っ！」
自分で拒否してしまった手前、今さら部屋に入っていく事など、雪菜には出来ない。その場にいても何もすることが無い。
再び漏れ始めた嬌声から逃げるように、おとなしく自分の部屋に戻っていくのだった。
そして、一緒に部屋に入った翔と桜。その部屋の中に広がる惨状に、鼻につく匂いに、桜は興味津々と言った様子だ。
もちろん一番の興味の対象は、液体まみれで床に転がっている狂三と理子、そのそばに転がるいやらしいおもちゃだ。
「あー……お尻の開発始めちゃったんですか？」
「ん？　いや、そうじゃないんだけどな。コレ全部理子が持ってきたんだよ。これ見よがしに使ってくれって感じだったからな」
「んー？　そうなんですか？」
桜は目ざとく翔の様子のおかしさに気付く。
「（こっそり……）」
翔に触れ、解析する。
「（ううん？　これ、薬？　成分は……あー、そういう）」
警戒心が無くなっている翔は、桜の解析を簡単に許す。その結果、おおよその推理が構築された。まず間違いのない推理が。
「お二人とも、自業自得だったわけですね……」
「ん？　なんだって？」
「何でもありませんよ？」
笑顔で言いつつ、状況の説明を求める。翔はここまでの経緯を説明した。
「本当に自業自得だったんですね」
「まあ、２人が望んだことだしな」
「（多分お二人ともこれは想定外だったと思いますけど……）それで、これからどうするんですか？」
「そうだな……」
翔としてはこのまま終わりというのはもったいないと感じている。

桜も参加してくれるとはいえ、だからと言って理子と狂三をほっぽり出したいという訳ではないのだ。
体力的にも限界が近い2人が先のほうがいいだろう。
「せっかく参加してくれる桜には悪いけどさ」
「いえいえ、それはいいんですけど」
となると問題はどちらが最初かということだ。
1分間、イキ狂いながらも耐えた理子。たったの一撃で、無様なアナル落雷に貫かれた狂三。
どちらが頑張ったかなんて考えるまでもない。でもこうなると、
「これはもうご褒美だよな？」
最初の趣旨はどこかへ飛んで行ってしまった。
「うーん……じゃあ私、先輩が他の人としてる間、準備してますね」
「準備？」
「はい。私もこういうの興味があって」
桜はいまだ使われていなかった器具に手を伸ばした。
「私の準備と、あと、狂三さんの準備を」
「へ、え……？」
桜の足元に転がっている狂三は間の抜けた声を上げる。まさか自分に声がかかるとは思っていなかったのだ。
桜はしゃがみこむ。
「狂三さん、意外とだらしないみたいですから。もう少ししっかりしてもらわないと。ふふっ」
桜の影から出てきた触手が、狂三の体を持ち上げる。
「私たちのことは気にしないで、先輩は先輩で楽しんでくださいね」
「や、そっちにも興味あるから見ながらするよ」
「っ、あー……はい、そうですね。そうなりますよね」
ノリノリだった桜の顔がさっと赤く染まる。徹夜明けのテンションで思わせぶりなことを言ったが、冷静になると恥ずかしかった。
なぜなら、行為の『準備』をするということはそう言う事だからだ。
しかし、言ってしまった以上後には引けない。
桜は1枚、また1枚と服を脱ぎ捨てていき――下着だけになって

しまった。上下セットの淡い桜色の下着だ。あまり飾りがあるわけではない。色も過激ではない。まさに普段用という下着だ。
だがそれがむしろ、翔の興奮を誘う。
「綺麗だぞ、桜」
「っ、あ、ありがとうございます……っ」
今の翔の興味は5歳児のように移り変わる。
気恥ずかしさのあまり無心で服を脱いでいた桜は、すべて脱ぎ終わった後で、すべてを翔に見られていたことに気が付いた。
体を両手で隠し、くねらせる。
「(大丈夫かな、今日の下着……体は、シャワー浴びたばっかりだし、綺麗だと思うけど。どうせだったらしっかり準備しておけば……!あー、もう!　いつチャンスができるか分からないんだから、こういう所もっとしっかりしなきゃいけないのにっ!)」
このままずっと見られていては自分も雪菜と同じように逃亡しかねないと思った桜は、
「翔君?　ほら、理子さんも待ってますし、ね?　私の方ばっかり見てないで……!」
「ん?　ああ、そうだな」
桜に誘導され、翔も理子の手錠を外した。流石にこのまま行為に及ぶつもりは無かったのだ。
お尻を突き出したままの体勢だった理子を横にする。
「理子、大丈夫かー?」
「ん、んんー……」
絶頂の余韻は抜けたようで、翔をはっきりと視認する。
「もう勝負とかゲームとかどうでもいいから、セックスするかー?できそうかー?」
「しゅ、しゅる……する、よー、できるよー……」
ゆるゆると俺に手を伸ばしてくる理子。
「よし、じゃあ……」
「んんー?　ほひっ!?」
アナルに突き刺さったままだったバイブを一気に引き抜いた。実

際にはそれほど早いという訳ではない。抜けるから抜いたという程度の力加減だ。
しかしそれは、度重なる出し入れのせいで真っ赤に腫れていたアナルにとっては、たまらない刺激になる。
「もう……ほんっとに、今日はヤバいなぁ……」
理子は立ち上がり、ドアに向かって手をついた。
「じゃあ、行くぞ」
「それじゃあ、行きましょうか」
俺と桜、両方の準備が完了し、始まった。

要求されるオシオキ④（狂三、理子、桜）

「それじゃあ狂三さん？　始めましょうか」
「んーっ！　んんーっ!!」
その手にいやらしいおもちゃを持った桜は笑顔で告げる。足元から伸びた影が、狂三の体をからめとり、弄りやすい姿勢にした。
両足を大きく開き、M字に開く。腕は頭の後ろで組まれている。
女性の魅力とも弱点ともいえる柔らかな膨らみ、その頂点でぷっくりと腫れているさくらんぼ。今なお玩具を咥えこんでいる前の穴に、アナルビーズによってめくり上げられた後ろの穴。
女性がとらされる恰好では、一番屈辱的だ。
当然狂三は抗議の声を上げるが、影に口をふさがれ、もごもごという音しか聞こえない。その前に、ケツ穴絶頂の余韻で菊門をヒクヒクさせていては、すべてが形無しだ。
よりにもよって、その部分が突き出されている。
何処をどうするのか。すべて桜の思うがままだ。
「戦闘では引き分けでしたけど、こっちではどうでしょうね、狂三さん？」
「こ、こんな状況で、なんて……！　アンフェアもいいところですわ……っ！」
口の拘束を解かれた狂三がとっさに抗議の声を上げる。
桜は手に持った玩具のスイッチを入れた。『弱』とはいえ、音を立てて振動するソレは、この場では凶器同然だ。
「むぐ?!　ふぐっ!?」
「そうですか？　じゃあそんなこと関係なく、一緒に気持ちよくなっちゃいましょうね？」
再び口をふさがれる狂三。同時に影の触手が前の穴に入っていた邪魔な玩具を引き抜かれ、腰がひきつる。
いまだに下半身に痺れが残る狂三。上から下に、桜は指でなぞる。顔を出し始めた肉芽に。薄皮から、敏感な本体へ流れるとトロリと愛液の量が増える。

ふやけた肉壺は、指が相手でもお構いなく飲み込もうとする。
そしてひりひりと（狂三にとっては）嫌な感覚を伝えてくるケツ穴だ。桜は意地悪く穴の中心に指を添え、力を入れてみる。
「ふふっ、どうです狂三さん？　わぁ、すごいえっちな感触……もしかしてお尻でするの、初めてじゃないんですか？」
「ふぐーっ！　ふごっ、んぐぅっ!!」
乱暴に引き抜かれたせいで少し盛りあがっている菊門。爪先だけ差し込んでみると、柔らかく、それでいて心地よい感触が返ってくる。
桜は面白がって入り口を引っ掻くが、狂三の方はたまったものではない。あの黒い騎士王のケツ穴を笑顔でほじり、悶絶させる指だ。
「（～～～っ!!　媚薬のせいっ、媚薬のせいでっ！　お尻がっ、体が言うこと、聞かない……っ!!）」
心の中で必死に媚薬の所為と言い訳する狂三だったが、てっぺんに上り詰める直前で事なきを得る。桜が性技を止めたのだ。
代わりに近づいてくるモノ。こけしのような形のマッサージ器具。
直前で止められた不快感ではなく、不浄の穴でイかなくて良かったという安堵が大きい狂三。
「大丈夫ですよ、狂三さん。しっかりと、気持ちよくしてあげますからね」
「……っ」
振動する玩具が、狂三と桜、お互いの秘部で挟みこまれた。
「はぅ、ん、ぁ……んんっ、んぁ」
「ンぐ――!!　んんんっーーー!!!　ふぐっ、んんーーー!!」
２人の反応は全く違った。
桜は甘い吐息を漏らしながら体をしならせる。桜色の下着がいまだ花開いていない秘部の形を映し出す。開花を促すようにぐりぐりと押し付け、より強い快感を得ようとしていた。
狂三はむき出しの秘部におもちゃが触れた瞬間、限界まで体を反らせる。どんなに頑張っても刺激を得る面積を少なくすることは出来ない。空中に固定された体はその場を動かすことは出来ない。
先ほどまで刺激されていなかった、充血した肉芽が容赦なく押しつ

ぶされ、振動が伝わる。その結果は見ての通りだ。
「あはは……桜、えっぐー……」
「こっちも、するぞ」
「んっ……」
そんな桜たちを横目に、翔達も『する体勢』になっていた。
理子が扉に手をつき、お尻を突き出す。
ぐずぐずにほぐれたソコは、少しでも力を入れれば、容易に侵入出来てしまうだろう。ナニか硬いものをあてがい、ほんの少しでも力を入れれば。
一息呼吸を整え、腰に力を入れる。その瞬間、
コンコン――
「「っ!?」」
ドアがノックされ、全員が息を呑む。
「翔？　いるの？」
「ふっ――ぐぅぅぅぅ……っ!?!!?」
アリアの声だった。用事があって外に出ていたが、もう戻ってきたようだ。
呼ばれた翔と言えば、声と同時にバックから理子のナカにチンポをねじ込んでいた。さらに、さんざん焦らされた翔の肉棒が爆発した。
奥にぴったりと密着した亀頭から吐き出された白濁液が、理子の飢えた子宮を満たした。ようやくもたらされた恵みは、容赦なく快楽電流で理子を焼く。
理子は訳もわからず目を白黒させ、とにかく声を出すまいと口元を押さえていた。
「(イって……っ、イってるぅぅぅぅっ……！　そこにアリアいるのに、イくの止まんな……！)」
薬がしっかりと周り、もう体に力が入らない。それでも膣だけはようやくもたらされたチンポ快楽に酔いしれている。
「ああ。いるぞ」
「っ!?　翔さ――むぐ!?」
まさか受け答えするつもりなのかと、抗議の声を上げようとしてい

た狂三の口が、桜の影で塞がれる。
「ふふ、大丈夫ですよ、狂三さん。翔君に任せましょう」
「(翔さん！　本当に、アリアさんはマズ――――)　ふぎゅうううっ!!
　うううっ！　うううっ!!」
　むき出しの肉芽に電マを当てられ、自分のことで精一杯になってしまう。
　一瞬で上り詰め、体がぎしぎしとしなる――――ことは出来ない。桜の影の拘束はそこまで甘くはない。
　無理矢理体を固定させられ、指を動かすくらいしか、快楽を逃す道は無い。
　口を塞がれていなければ、大絶叫していたところだ。
「ちょっと話があるんだけど、今いいかしら」
「や、今は筋トレしてるから。上は裸なんだ」
「ふう、ん？　そうなの？　じゃあここからでいいわ」
　狂三が何もできず、理子にはそんな余裕は最初からない。
「――――……」
「――――……」
　翔とアリアがしゃべり始める。
　それと同時に腰を振り始めた。一度の射精では全く萎えなくなった翔のチンポが、理子の肉粒天井を抉り、掻き出し始めた。理子の体が、ピストンに合わせて揺れる。
「(んっ、んぁあう、はぁンっ、ぁに、これぇ、理子、このままだと……ふぁあ!?)」
　今でも十分すぎるほどの快楽を得ている。
　理子の子供袋は、最初の精液ですでに満タン近くになり、最適な大きさに調整されたチンポは理子のいいところをくまなく抉る。
　軽いピストンをすれば亀頭が子宮口に軽くキスし、勢いをつければめり込む。翔の肉棒は、緩急をつけることで自在に快楽を与える悪魔の物体になっていた。
　膣穴ではこれ以上の快楽を得ることは無い。
「(あひゃま、蕩け――――!?　そ、そこっ、うそ、待っ――――)」

軽くイき続ける状態に慣れ始める、という恐ろしい状態になりつつある理子は、まったく違う感触に目を見開く。
翔の2本の親指が、理子のふやけきったケツ穴を押し広げた。
「おごぉぉぉぉっ……!!」
広げられたケツ穴とは逆に、肉棒はきゅうきゅうと締め付けられる。
この短期間ですっかりと快楽器官に変貌したケツ穴は、入り口を引っ掻かれただけで簡単に快楽を享受してしまう。
「へぇ、そうなのか」
「そ。だから一応報告。多分滞在先は向こうが用意するから――」
「(そんぁ、ぐりぐり……っ、これいじょ、ホントに……っ、イってるのに、降りてこれない……っ)」
平和な会話が行われているとは思えない。理子の表情はそのくらい必死だった。
今すぐ大声を上げて乱れたい。でも扉の向こうを考えると、そんなことは死んでも出来ない。理性と快楽がギリギリのせめぎ合いをしていた。
「――、ずいぶんと気に入ったみたいだな。明日から大変じゃないか？　トイレのたびに濡れる体になっちゃうんじゃないか？」
「……っ、話す方に、しゅう、ちゅっ!?　してぇぇ……っ」
「――、翔？　聞いてる？」
「ああ、聞いてるぞ」
親指がケツ穴を掻きむしる事に、膣は反応を返してくる。
そんな理子に触発されてか、翔の腰の動きがどんどん早く、深くなる。
「(――ぁ)」
完全に堕ちた子宮が、口を広げたのが理子にもわかった。
「(――だめ、だめだめだめだめ!!　絶対……絶対！　声ガマン出来ない！それだけは、ホントにダメなのに……！　私の体、悦んじゃダメなのに……！)」
考えた程度でどうにかなる段階をとっくに通り越していた。

「理子、イきそうなのか？　アソコの感触が変わったぞ？」
理子のタイミングに合わせようと、翔がスパートを始める。
「ちがっ……！　さっきからずっとっ、ずっとイってるのに……！
その上からっ……！」
「安心していいぞ。もうアリアとの話は終わったからな」
「え？　終わっ――――ひ……っ！」
ブルリと理子の体が震えた。
気を抜いてしまったせいで、せき止めていたダムがあふれてしまう。ギリギリのところで抑え込んでいた快楽濁流が、理性を押し流す。
それと同時に、翔も限界に達した。
――――ごぶっ、びゅるるるっ、びゅぐっ、びゅぐるぅ！
「イクイクイクイクイっ!!　うぐぅうううっ！　イクーーーッ!!!」
倒れた理子の秘部からは中に入りきらなかった精液が、とめどなく溢れだすのだった。
翔は気を失った理子をベッドに運んだ。
「桜、そっちはどうだ？　わぁお……」
翔が見ると、２人の少女が抱き合いつつ、体を震わせている場面だった。２人そろって絶頂している。
だが、その反応は全く違っていた。桜は目をつぶり、足をカクつかせつつも、快楽を堪能している。拘束されている狂三から噴き出した潮が、桜のお腹を濡らす。
その光景を見て、翔の息子は一気に硬さを取り戻す。
「はふぅぅぅ……ぁ、翔君……？」
「ぁ、ぁ……んぅ？」
「……」
空中に貼り付けになっている狂三。無言でその前に立った翔は、何も言わずに刺し貫いた。
「――――ひぃぁぁぁぁ……っ!!」
ぴったりと磔にされるように、狂三の全ての感覚がチンポへと集約

される。ようやく、ケツ穴ではなく雌穴を塞いでくれるブツに恵まれた女体は悦び、締め付けようとして――――逆に膨張した肉棒に押さえつけられる。
「ひ、い、ぁ……？」
最適なサイズになる肉棒の効果だ。今の狂三に対して最高の快楽を得られる。
その異変に気が付く狂三だが、何度もイき、意識を飛ばしかけた今の状態では、体を焼くような快楽を追加されるだけだ。何も言えない。
「今日はごめんな狂三。ちょっと調子に乗りすぎたよ」
「ぁ、あひ……」
優しく抱き留められ、何とか意識を取り戻す狂三。しかし、下腹部には凶悪すぎる肉棒が突き刺さっている。
大きすぎるのではなく、しっかりと食い込む。節々にある弱点に食い込むような感覚は、肉棒そのものが凸凹しているような感覚すらある。
「おかし……っ！　ぜったい、こんな……！　翔さん、あなた何を……!?」
「薬のせいだよ」
「くす、り……？　そう、ですの？　こんなに、前よりもスゴイのは、くすりのせいですの……？」
翔自身も、朦朧とする意識で自分の肉棒が与えている影響のことなど意識出来ていない。
ゆるゆると腰を振りつつ、狂三の肉壺を深く抉るだけだ。
最高の快楽を与えてくる肉棒に最高の接待を施す肉壺、お互いがお互いの首を絞める。
「うぐっ、もう、もう射精る……っ!!」
いくら絶倫能力を持っていても、回数を重ねればどんどんチンポは敏感になり、射精への感覚は短くなっていく。
しかしそれは、度重なる絶頂で同じように限界が早くなっていた狂三にとって、丁度良いものだった。

「しょ、翔さん、ナカで膨らんで……っ、もう、もう射精そうなんですの……っ？　わたくし、も、もうげんか――――」
――――ごびゅ、びゅぶぶっ、ぶびゅうっ、びゅるるるっ、ぼびゅうぅぅっ!!
「――――あああぁぁぁぁっあぁぁ!!!??」
間隔が短くなろうと、射精すモノは量も濃さも変わらない。子宮のすべてを白く染め上げる勢いで、反り返った尿道を白く粘ついたものが駆け上る。
体温と精液、そこまで温度差があるわけではない。それでもしっかりと感じる熱。自らの子供袋を満たされる快楽に、狂三は焼かれていた。
翔のペニスが引き抜かれると、狂三を縛り付けていた桜の拘束が徐々に解けていく。精根使い果たし気を失ってしまった狂三を、ゆっくりと床に下ろした。
これで狂三の番は終わりだ。この部屋で、力尽きていない少女はあと1人。翔は誰一人として、逃すつもりは無い。少女も、自分だけ何もないなんて考えているわけがない。
「翔君。次は私にも、お願いします……！」
扉に片手をつき、お尻を突き出してくる桜。もう片方の手で、すっかり潤った秘部を自ら広げる。
肉付きの良いお尻。その真ん中あるセピア色の窄みまでを惜しげもなく晒した、おねだりのポーズだ。
「ああ……！」
生唾を飲み込んだ翔は、今日すでに2人の少女を貫いた肉棒を、肉厚の、ぷりぷりの唇に添える。
亀頭の半分ほどを飲み込ませ、腰を掴む。柔らかくもしなやかな弾力を返してくる心地よさに、思わず手をにぎにぎしてしまう翔。
「翔君？　ダメですよ、そんなことしちゃあ。最近気にしてるんですから」
「ごめんごめん」
軽く謝りつつ、今度こそ挿入のための力を入れる。

入り口を引っ掻くように何度かグラインドした後、腰を突き出した。
しっかりとした抵抗を感じつつも、何処までも柔らかい肉壺に、ちんこを溶かしかねない溶鉱炉に埋没していく。
「ふうぅぅー……っ！」
「う、あぁぁぁ……！」
「良いぞ桜……っ、奥までしっかり届いてるな……っ」
「はいぃぃ……っ」
肉棒はぴったりと膣内にフィットする。
竿がすべて呑み込まれ、子宮口にギリギリ口をつける程度。ここから腰を振れば、良い具合に膣全体を刺激できる。最高の状態だ。
「（ぁ、あれ……？　なんか前より、すごく、イイトコに当たってる？）」
まだ動いてもいないのに、ぷつぷつと汗が出る。
張り出したエラが、的確に肉粒天井を捕らえ、わずかな膣の脈動だけでそれが続けばイってしまいそうなほどの快楽を得ている。
「桜、いくぞ……！」
「あ、は、はいっ。分かりましたっ」
それがまさか能力によるものだとは夢にも思わない桜。自分もこの空気に酔っているのか。そんなことを思いつつ、翔の言葉に答えるのだった。

要求されるオシオキ⑤（桜、雪菜）

「はぁ、はぁ、はぁ……！」
「うぐっ、はぁ、やぁ！　ぁ……っ!!」
　股間に白い粘液を付着させている女の子2人が寝ている横で、交わっている男女。狂三と一緒に盛り上げ、すっかり準備万端になった自らの肉壺を差し出した桜と、迷うことなくそれを貫いた翔。
　桜が感じていた違和感は、現実の快楽となって桜をイジめていた。
　ぐずぐずになっていたとはいえ、あんなにも簡単に狂三を果てさせた肉棒が、何度も何度も子宮をノックする。
　口を抉じ開けてめり込むほど暴力的ではなく、それでいて衝撃を受け止めた子宮がぐにゃりと形を変える。
「こん、なっ、奥まで……！」
「一回やめたほうがいいか？」
「ちがいますっ、ずっと、もっと、下さい……！」
「ああ……そうする…っ！」
　滑りがあるのに圧迫感のある抽挿。脈動する血管をマッサージするように包み込む桜の肉筒。その肉筒のざらざらとした部分を深く、優しく抉るカリ首。
　2人が最適な快楽を受けとる。
「んっ、はっ……！　あっ」
「やっば……腰が痺れて溶けそう……！」
「んっ、あっ……ぅ、あ、ちょ、っと……！　あんまりそこ、ぐりぐりしないで、くださっ……！」
　後ろから抱きあうように密着し、互いの結合部からは、ぐぷっ、ぐぷっという卑猥な音が聞こえてくる。
　それだけ、2人の性器が吸い付くように密着しているのだ。空気の入る隙間の無いくらい、少しでも力が抜けてしまうと、ピストンすらままならないくらいに。
　どんなに桜が体をよじっても、チンポは逃がさない。翔が腰を動かしているのか、それともペニス自体か。そして桜自身も、そのペニス

を逃がさないと咥えこみ、呑み込んでいく。
「あっ、もっ、イキ、そうですっ……！」
「まだ我慢してくれ……！」
「へっ？　やっ、あ!?」
片足を持ち上げられ、また違った角度で突かれる。
不安定な体勢でも、しっかりと姿勢を保っている桜。背中側を大きく抉っていた肉棒が、側面を舐めるように擦り始めた。
今までにない体勢だが、そんなことは関係ない。
「こしっ、腰止めないで下さ――ひぐっ!?　そのまま、そのままイかせて――!!」
違う体勢の、違う刺激。違う締め付けに、翔のピストンも速度を上げていく。
亀頭が膨れ始め、敏感な粘膜がさらに敏感になる。加速度的に2人の快楽が蓄積され――すぐに溢れた。
「うっ！　ぐ、うぅ……！」
「うぁぁぁっ――!!」
1回目と変わらない濃さの白濁液が、桜の子宮に吐き出された。
「はぁ、はぁ、はぁ……！」
「はぁー……ふぅ……」
少しキツイ体勢になっていた桜も、3連戦した翔の息も上がっていた。
「なん、で。3回目なのに、こんなに……！」
「さあ、な」
翔はベッドに座り、桜はベッドの上に膝を曲げて丸まって、息を整える。
程よく整ってきた頃。
「翔君」
「ん？　なん――、うぉっ!?　うぅ、ぁっ……！」
「んっ、れろ、きゅちゅ、んあっ……」
力を無くしかけていた肉棒を桜が口に含み、生暖かい舌が包み込む。桜のお掃除フェラだ。チンポについていた余計な汚れをすべて

舌でなめとり、綺麗にしていく。
マンコ穴とは違った感触に、思わず腰が引ける翔。血を吸った妖刀のように、浮き出している血管に一層多くの血液が送り込まれる。
ようやく解放された時には、汚れはすっかりなくなり、準備万端。少なくともあと1度はしなければ収まりがつかないほど、硬く反り返っていた。
「お、おい桜。もう1回か？」
半分自分の欲望のために問いかける翔。
「ううん、違うよ。私じゃなくて」
桜は扉を見る。
「待ってる人がいるから、ね？　翔君」
「……ああ、分かった」
誰のことを言っているのか一瞬で理解する翔。薬があっても、その辺りの判断能力は健在なのだ。
みんなに背中を押されても、どうしても素直になれない女の子。その娘がまだ残っている。
「ごめん、行ってくる」
「ん、ちゃんと、優しくしてあげて下さいよ？」
「もちろんだ」
翔を見送った桜は、周りを見た。
「さて、と」
ありとあらゆる体液で汚れ、エッチな臭いのしみついてしまった部屋だ。そこに、絶世の美少女2人が転がっている。見るも無残な、しかし本人は幸せそうな顔で。
「ここも、どうにかしなきゃ、だね」
自分の処理を済ませた桜は、気合を入れて掃除を始めるのだった。

「はぁ……はぁ……イ、く……ぅっ!!」
ベッドの上にいた雪菜の体がびくびくと跳ね、弓なりに反る。
股間を弄っていた指に生暖かい液体が吹きかけられ、いまだに挿入したままになっている指が膣壁のうねりを伝えてきた。
それでも声が漏れないように、シャツの袖を咥えている。
雪菜は何度目かも分からない絶頂に身を委ねていた。
絶頂の棚から降りてくると、股間から指を引き抜き、愛液に濡れた2本指を眺めた。
「(指に、グネグネって伝わって……っ、先輩のおちんちんが挿入っているときも、こんな風に動いてるのかな……これじゃあ、私がイってるの先輩に伝わっちゃうよね)」
雪菜は他の面々とは違い、自ら翔の部屋に行くことは無い。自分から誘う事も無ければ、家以外でコトをしようとも思わない。それどころか、自らを慰める行為もしない。
しかし最後に翔とシてから数カ月。翔の体と、反り返ったペニス。理子と狂三の絶叫に近いイき声。そして翔の部屋の扉が開いた時に嗅いだ、すべてが凝縮された淫靡な匂い。
いくら真面目な少女でも、欲求が溜まってしまえばどうしようもなかった。
あれだけの嬌声を上げるほど激しくしている、そう想像してしまうともう駄目だった。股間から糸を引き始め、気が付いた時にはあさましい行為にふけっていた。
だが何度しても、
「っ、ぁ……」
何度絶頂しても、体は許してくれない。
「(欲しい……もっと、もっと、奥まで……っ!　先輩、のが……!)」
満たされないと知りつつも、指を動かすのをやめられない。
「先輩、先輩、先輩……っ」
だからこそ気が付けなかった。

「雪菜」
部屋の扉が開いた音に。翔が部屋に入ってきた事に。
「ひぅっ!?」
跳ね起きるように体を起こし、急いで体を毛布で隠した。
そして翔の恰好を見て、顔を真っ赤にする。
「せ、せんぱっ！　どうしてここに!?　しかもその恰好！」
翔はやはり裸だった。つい先ほどまで腰を振っていたからなのか、汗をかいている。まだまだ固く反り返っているチンポは桜の唾液でてらてらと光を反射していた。
「っ、ぁ……」
自分の求めてやまない翔の肉体の一部が、自らにつきつけられている。
体が本能的に求める。
下腹部がカッ、と熱くなり、思わず手を伸ばしそうになる。
翔はその手を掴み、どかした。
「ぁ……！」
直接体に触れているわけでも無いのに、翔の肉棒の脈動を感じていた。直前までの行為もあり、下には何も身に着けていない雪菜。
ぐずぐずに熟れきった秘部が見られているという事実に、普段なら絶対に浮かばない感情、興奮を覚えてしまう。
見えない何かに押され、足が開いていく。自ら雄を望む姿勢に。
興奮し盛りあがった恥骨を見せつけるように、M字に開いた。
「あ、ああ……!!」
翔は何も言わずにチンポを入り口に添えた。雪菜はその熱だけでも軽く達してしまう。
だがそれだけだ。そこから先は自分でやれと言わんばかりに動かない。
「あ、あの、先輩？」
「……」
「うう、うううっ」
雪菜は待ちきれず、自ら腰を振って誘う。ぬちぬちと粘着質な音が

響き、亀頭の先端を飲み込まれている翔にも相応の快楽が襲い掛かる。
先に我慢できなくなったのは雪菜の方だった。
「先輩、お願いです……お願いですから……！」
「……」
「私に好きなだけ、いやらしいことしていいですから……！」
「……」
「先輩のおちんちん、早く私のナカに――――」
ぞにゅうううう!!!
「ひっぐぅぅぅぅぅ!!!」
肉棒に刺し貫かれ、子宮口をノックされ、子宮の弾力が雄の性欲を受け止める。数カ月ぶりの刺激に、雪菜の体中が歓喜した。
ぴったりと膣にフィットするペニスは、久しぶりのご主人様のお帰りに歓喜する肉壺に、熱烈な歓迎を受けていた。
、熱烈な歓迎を受けていた。
無数の肉襞が絡みつき、もう逃がさないとばかりに抱きついてくるのだ。
この段階で、雪菜は前後不覚になるほどイキ狂っていた。
いくら絶倫の力があったとしても、限界ギリギリの絶頂を何度もしていては体力の限界になる。
翔もこれが最後だと腰を打ち付ける。
ぱちゅん、ぱちゅん、ぱちゅん――――
優しく抱き合いながら、規則正しい破裂音が部屋に響き渡る。
「んんんっ、ちゅぱ、ぬちゅ、んぐっ、んぁ、ひぐっ」
ごぽごぽと音を立てて溢れる愛液。
おまんこの入口の浅いところから深いところまで、ゆっくりと奥へ突き入れられて、引き抜かれるペニス。
ぱんぱんに膨れあがった亀頭でがりがりと膣襞を削り、逆立った肉粒が残らず悲鳴を上げた。
何も特別なことをしているわけではない。奥から浅いところまで丁寧に丁寧に、セックスしているだけだ。

それがお互いにとってたまらない。雪菜は言うまでも無く久しぶりの肉棒に、翔は今までのお薬セックスとは違う、朦朧とした中でも、しっかりとした愛情を感じる幸せな行為だ。

最後の最後で、最高の快感を得ていた。

早くもお互いの体に変化が現れ始める。

雪菜は全身を細かく痙攣させ、翔ともっと密着しようと、その背中に腕と足を回す。その足の拘束を無理やり引き剥がし、杭を打ち付けるようにピストンする翔。

お互いに何度も果て、限界が速まっているのだ。

雪菜の子宮はぱっくりと口を開け、子種が注がれる瞬間を今か今かと待ち望んでいる。

亀頭が膨らみ、より深く膣穴が拡張される。

「先輩、もう、でそうですかっ」

「ああっ、もう、もうそろそろ……！　う、ぁ――――!!」

「う、あああぁぁぁぁぁっ――――!?」

ごびゅ、びゅぶぶっ、びゅるるっ!!

1つになり、ぬくもりを伝えあい、体を震わせる。声も出せなくなるほどの快感に酔いしれる。

凄まじい勢いで発射される精液。それだというのに、雪菜の肉壺はもっと奥まで呑み込みたい、飲み干したいと奥へ奥へと引き入れようとしてくる。

翔も負けじと、根元まで呑み込まれた息子をぐりぐりと奥に押し込む。

数秒の射精が永遠のものに感じた2人はお互い力尽き、抱き合うように眠りにつくのだった。

だが当然、ここまで大々的にコトをいたしてしまっては、他の住人に隠し通すのは不可能だった。
奇跡的にアリアには知られなかったとはいえ、買い物から帰ってきたアスナやアルトリア達には知られてしまった。見られてしまった。
具体的には、様々な体液で汚れてしまった理子と狂三を、シャワーで洗う桜を。
一瞬の沈黙の後、３人は瞬時に俺の部屋に向かったらしい。
そこで見たのは部屋中にまき散らされたいやらしい体液だ。机の上には、これまた淫液でコーティングされた大人の玩具。アスナとアルトリアは顔を赤くして、オルタは憤怒の表情。
ここまで揃えば、何をしていたのかすぐに分かってしまう。
いつの間にか雪菜の部屋で、雪菜と抱き合って眠っていた俺は叩き起こされた。俺は俺で何が起こったのかわからなかったが、状況を見てすべてを理解した。
「(そういえばあの薬。記憶を消す効果もあったよなー……)」
一体俺はどんなことをしてしまったんだ。完全記憶能力を持ってからというもの、物忘れが無くなった俺。思い出せなくて困るなんて、かなり久しぶりだ。
「もうっ、翔君は……っ、小さい娘もいるんだから、あんまり大々的にするのはどうかと思うよっ」
その小さい娘達ともこっそりしていたことがバレれば、どうなってしまうんだろうか。もしかしてこの怒りが収まる？　みんながしてるならしょうがないねっ、的な？
「(……無いな。絶対無い)」
俺は心の中で首を振る。
「あの道具、やはりそうですよね？　アイリスフィールが持っていた――」
「……言うな、青いの」
なんか聞こえてくるが、そこはスルーする。あの方々も、人生を謳歌してくれているなら大満足だ。

「それにしても、絶倫か……」
　オルタはこっちを見てくる。
「もう……その能力も悪いよ。いつの間にそんな、その……えっち……な能力まで……」
　ちなみに、息子がその娘に合った適切なサイズになることは言ってない。
　オルタの目つきが怪しくなってきた。
「つまり、いくらしても枯れることは無いんだな？」
「や、枯れないかもしれないけど、体力は削られるから……」
「勃てば問題は無い。まさかとは思うが、小娘相手に勃って、私相手には勃たないということはあるまい？　貴様は寝ているだけでいい。絶倫だろうと、残らず搾り取ってやろう」
「だーめーでーすっ！　少しは節度を持たないと！　エ……エッチな、玩具……だけじゃなくてそういう薬まで使うなんて、流石にやりすぎだよっ！」
　アスナはどうしても認められないらしい。
　ＳＡＯに人生を変えられたとはいえ、元はいいところのお嬢様。アブノーマルな性行為はお気に召さないみたいだ。
　評価が分かれるのは理解できるけど。
「……まあ、そういうならいいさ。個人的な嗜好はホテルでやれ、ということだな？　子供の教育に悪い。そう言う事だろう？」
「ホテ……っ!?　ち、違いますからね！　そういう意味じゃありませんから！」
　１人で納得しているオルタと珍しくキーキーと騒ぐアスナ。
　こちらに飛び火しないように眺めていると、アルトリアが近寄ってきた。
「翔。ホテルとはどういうことでしょうか？　あそこは宿泊するところでは？」
「……や、まあな。そうなんだけど」
　この場合のホテルってのは、『ラブ』のつくホテルのことだ。この島にもある。どこでも需要はあるもんだ。

俺はアルトリアに耳打ちする。
「え!?　せ、っくす、するための場所、という事ですか……？」
「ん。ま、俺も行ったことは無いんだけどさ……今度誰かと行ってみてもいいかもな……」
何事も経験ってことで。や、何か新しい経験あるかもしれないしね？
「は、はいっ、そうですね。今度一緒に……できれば2人で――――」
「翔、貴様……」
「今日こんなにしたのに、もう次の予約するって、どういう事かなぁ？」
言い争っていたはずの2人に詰め寄られていた。
「あはは……やー……おっと？」
その追及から逃れるために、都合よく届いたメールを開く。ええと、相手は……
「聖天子様？　なになに……」
内容は、仕事を依頼したいというもの。
どうやら、夢のように穏やかな時間は終わりになったみたいだな。

激動の８月　編
秘密の会議　前編

暖かなランプの光に照らされた廊下を２人の人物が歩いていた。
踏みしめる床は最高級の赤い絨毯。そうでなければ、磨かれた革靴が小気味良い音を奏でていただろう。
２人ともそれぞれに特徴のある人物だった。
１人は長い黒髪が特徴の――――男性だった。手入れの行き届いた髪の毛は女性のあこがれになるには十分すぎるものだが、男性の眉間に刻まれた深いしわと不機嫌そうな顔がすべてを台無しにしてしまっている。
もう１人は室内であるというのに深くフードをかぶっている。そのせいで容姿と表情は全く分からない。それどころか全身を覆う服装のため体格がわからず、男性か女性かすらもわかりづらい。１人目の男性の後ろを歩く姿はさながら従者だ。
男性の名前はウェイバー・ベルベット――――知る人にはロード・エルメロイⅡ世と呼ばれている。数年前の少年からは想像もできないくらいにしっかりとスーツを着こなし、そのスーツには年季を感じる。
もう１人の名前はグレイ。連れのことを考えずに歩くエルメロイ２世について歩く女の子だ。
見事な調度品が並ぶ廊下は、少しでも歴史をかじっていれば腰を抜かすほどの豪華さであり、少しでも魔術をかじっていれば震え上がるほどの警備である。その突き当り、ひときわ豪奢な扉の前に立つ。
「ふぅ～……」
本当に憂鬱そうに、エルメロイⅡ世は息を吐く。
意を決して、扉を開いた。中にはすでに数人の女性が円卓に座っている。アフタヌーンティーを楽しみながらくつろいでいた。テーブルに置かれたティーカップからは５メートル離れた扉まで香しい紅茶の香りが届いている。

「遅れてしまい、申し訳ない。時計塔代表ウェイバー・ベルベット、ただいま参上した」
「いえいえ。問題はありませんよ、ロード。むしろ時間通りですから。どうぞ、そちらに」
中にいた女性がそれに答えた。
エルメロイⅡ世は促されるままに席につく。いちいち高級品が目に入り、落ち着かない。もちろん、この屋敷に住む人間の格式というものがあるのだろうが、こうも露骨だとうんざりしてしまう。
「師匠」
「どうした」
「ここでは、まずいと思います」
「……っ、ああ、そうだな」
無意識のうちに愛用している葉巻を取り出していたエルメロイⅡ世は、グレイの忠言で火をつける前に我に返った。複数の人間、しかも女性が多いこの場で紫煙をくゆらすほど、エルメロイⅡ世は常識知らずではない。
それほどまでにイライラしていたという事実に、エルメロイⅡ世の意識が引き締まる。何とか平静を保とうとする彼の耳に、余計な一言が飛び込んでくる。
「かまいませんよ、ロード。ここはそこまで礼儀を重んじる場ではありませんから」
「いや、そういうわけにはいかない、レディ。場は許しても紳士としての礼儀というものがある」
「流石、若くして時計塔に名を轟かせるだけはあるわね。そういったことも戦略の1つなのかしら？」
「これはこれは。更識家当主にお褒めいただけるとは思いませんでした」
扇子で口元を隠す更識楯無に皮肉をもって返す。2人は視線だけで互いの腹の内を探りあっているいるが、根っこが臆病なウェイバーの旗色は悪い。
楯無は笑顔のままだが、エルメロイⅡ世は苦い顔をしている。この

まま言い合ったら不利だということをエルメロイⅡ世は自覚しているらしい。それ以上に突っかかることはしない。
「まあまあお二人とも、ここは言い争う場所ではありませんよ。この島の、強いては世界の平和のための集まりですから。無意味な言い争いは避けましょう？」
　そう言いなだめるのはクローディア・エンフィールド。
　顔は笑っていても、内心ではどのような表情をしているのか。本人曰く『暗黒物質を煮立てて、焦げ付かせたものをブラックホールにぶちこんで黒蜜をかけたくらいには真っ黒』という腹の内を予測することは不可能だ。
「その通りですよ、皆さん。ここは全員の力を合わせなければならないのです。どうか立場のしがらみを忘れ、協力していただきたいと思います」
「その通りや。これから起こる大災厄に対抗するために、こんなメンバー集めたんやからね」
　そう収めるのは聖天子様と特務六課部隊長の『八神　はやて』だ。この島の日本代表である聖天子と、なのはやフェイトの上官にあたるはやても、この場に招待されていた。
「こんなメンバーとは、ずいぶんな物言いだな。まるでイロモノを集めたような」
「まさか。前の事件では、ＵＱホルダーの皆さんには随分とお世話になりました」
　挑発的に笑うのは『エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル』。不死身の集団、『ＵＱホルダー』のトップ、吸血鬼の真祖だ。
　悪魔的な美貌とＹシャツとタイトスカートにようやく収まる豊満な肉体を持つ彼女だが、実際の姿はちんちくりんのロリっ子。しかしその実力は、全力のブラドにも引けを取らない。
「メンバーはそろった。そろそろ始めてもらいたいが」
「そうね。私も忙しい仕事の合間をぬいたりて、時間を作りけるのだけれども？」
　この２人はこの場にいる人間ではない。ＰＣのスピーカーから聞

こえてくる声だ。この場に翔がいれば、両者ともに、『とある魔術の禁書目録』のキャラクターだとわかっただろう。
前者の声は男性にも女性にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも聞こえる。声の主は『アレイスター＝クロウリー』。『とある』原作では、科学サイドのトップを務めている男。この世界では管理局に所属しつつ、この学園島の長を務めている。
もう1人は、ローラ＝スチュアート。こちらは変わらず英国魔術サイドのトップだ。
アレイスターが音声だけなのに対し、彼女はビデオ通話。時差の影響か、外に見える空は暗く、彼女も簡素で、上質な寝間着姿だった。身長の倍以上ある髪の毛をメイドに手入れをさせつつ、本人は頬杖をついていた。
「わかりました。それでは、始めさせていただきます」
今回の会議は聖王教会の支部で行われている。よってこの聖王教会の重鎮『カリム・グラシア』が今回の司会を務めることになっている。
そして、今回の会議を設けられたのは、カリムの意思があったからだ。
「今回集まっていただいたのは他でもありません。私の予言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）に新しい予言が現れたからです」
予言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）とは、カリムが持っている希少技能（レアスキル）のことだ。その名の通り、未來に関する事象を予言することができる。
月と星々の魔力（原作では二つの月の魔力）がうまく揃わないと発動できないため、ページの作成は年に一度しかできない欠点があり、書き出される事件のランダム性と、詩的な文章の解読ミスを考えれば、的中率は『よく当たる占い』程度。
ただし、『事件が起こる』ことだけは確かであるため、無視はできない代物なのだ。
ウェイバーは自分に与えられた情報を整理する。
「（確か前回の予言では『ＪＳ事件』についてを的中させたとか……メンバーを見る限り、そのレベルの災害が起こるということか）」

「そろそろ、皆さんにも話しておいた方がいいと思い、この場を設けさせていただきました」
「ほう。やはり、今回の設立にも裏の理由があったということか？」
エヴァンジェリンが興味を示した。
「はい。今回記された著書の内容はこれです」
はやてが端末を操作すると、画面に文字が移された。
《魔法と科学が集い交わる地、
未知の力が満ち、さらなる混沌を極める、
６つの輝石集まりし時、
時空の魔王が現れ、すべてを無に還す》
「ほう？　魔王とはな。随分と思い切った文章を出したものだな、カリム・グラシア」
「い、いえ。この文章は私が書いているものではないので……」
以前に魔王と呼ばれていた過去があるからか、エヴァンジェリンはからかうように笑った。
「……確かに、あまりめでたい文章たりけるわけではないようね」
「（に、日本語だよな？　翻訳機能がおかしくなっているのか？）」
めちゃくちゃな言葉遣いに、ウェイバーは内心で首をひねった。
「そうです。この文章の解釈は……」
「魔法と科学が集い交わる地……これは間違いなくこの島、学園島の事でしょう」
はやての言葉を楯無が続ける。
確かに、魔術が発達しているヨーロッパ、科学が発展しているアメリカなど、１つに特化している国はいくつもあるが、すべてが高いレベルにあるのはこの学園島だけだ。
世界中と戦争して勝てる、とまではいかないが、大国を相手どれるほどの戦力がこの小さな島に集結していることは間違いない。
「未知の力が満ち、さらなる混沌を極める……これは言うまでもありませんね。ここ最近の島の様子を見ていれば、すぐにわかるでしょう」
「新種の能力、スタンド、ですね」

自身もスタンドに襲われたことのある聖天子が呟く。
1年ほど前に突如現れた能力。特定個人にのみ現れる能力だがレアスキルという訳ではない。個々のスタンドの能力がバラバラでも、ある特定のルールが存在しているのだ。
それは1つの能力体系を作り始めていた。
「今のところ発動していないスタンドを外部から検知することは不可能。相手のルールに引きずり込まれれば、個人が使用しているとは思えないほどのパワーを発揮する……厄介な能力や」
デンジャラスゾンビが金稼ぎのために矢をむやみに使っていたため、島の見えないところにはたくさんのスタンド使いが未だ息をひそめている。
公表されていないが、何十人ものスタンド使いがすでに捕まっていた。
だが、検知できないのでは島から出さないようにする、という処置が使えない。これまでに何人のスタンド使いが世界に散らばっていったのかわからない。
「つまりすでに予言の半分ほどが、現実に起こっているということだな」
この事態をどう思っているのか、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも聞こえる声は、全く慌てた様子はない。
「後半部分は全く解読が進んでいませんが……ここ1年の事態が、予言に当てはまっていると考えて間違いないでしょう」
「このままいくと、時空の魔王が全てを無に帰す。おそらくは……」
「最後はこの島だけじゃない。世界を巻き込む事態になるでしょう」
深刻な雰囲気のはやてたちに、エヴァンジェリンは納得がいったという声をかける。
「なるほどな。だから今回も、自分たちで自由に動ける部隊を作ったのか。身内で固めて、予言なんてものに大真面目に立ち向かえる部隊を」
「そういうわけです」
「予言のスパンを考えると、おおよそ3年以内に、予言の最後の出来事

が起こると予想されます。その途中の混沌……その段階ですら、何人の犠牲者が出るのかわかりません」
「未知の力も、もしかするとスタンドだけではないのかもしれませんしね」
近い将来、しかしいつ起こるのかわからない災害に立ち向かうために作られたのが、今回の特務六課という訳だ。
しかし、後手に回ってばかりでは仕方がない。
何か反撃の手立てが無ければ、時空の魔王が全てを無に帰すその時まで、指をくわえて待っていることになる。
「6つの輝石。どうにもこれが崩壊の鍵になるようだが。目星はついているのか？」
ウェイバーは顎に手を置き、気になった箇所を挙げる。
難解な文章だが、ここではしっかりと数が明記されている。世界を崩壊させるようなアイテムなどそう転がっているわけがない。
そこから突き止めることが出来れば、事態を未然に防ぐことも可能かもしれない。
「そこについて、皆さんに力を借りたいと思い、今日、この場に集まっていただきました」
聖天子がテーブルに座る全員に目を向ける。
「皆さんはそれぞれ、各方面で大きな知識を有しています。その中に手がかりは無いでしょうか」
それが、今回このメンバーが集められた理由だった。
イギリス清教のローラ＝スチュアート、時計塔代表のロード・エルメロイ2世、吸血鬼として何百年も生きているエヴァンジェリン、管理局で高い地位にいるアレイスター……下手に調べるよりも早く、表に出ていないことでも分かるだろう。
「それともう1つ」
はやてが指を立てる。
「例のスタンド能力を広めた可能性が高い人物を拘束、そして関係者と思われる人物が今六課に所属しています」
「なんだ、もうそこまで来てるのか」

「……む」
エヴァンジェリンが一気に冷めたと言わんばかりの声を上げる。
それはウェイバーも同じだった。
これまでは詳細不明の世界滅亡の予言。どうすれば良いのか、という話だったはずだ。
しかし目下の問題であるスタンドに関係する人物をすでに見つけているとあっては、前提が覆る。
「見つけたと言っても前者は読心能力者でも意味不明なことしかわかりませんし、後者の方は、そんな犯罪を犯すようには見えなくて……」
「手ぬるいな、八神部隊長」
アレイスターが割り込む。
「事は世界の危機だ。手に入れた手がかりであれば積極的に活用していくべきだろう」
「かと言って、彼は何か犯罪を犯した訳ではありません。強引な捜査は違法に……」
「だったら、ウチでやってみるのはどうだ？」
次に割り込むのはエヴァンジェリンだ。
「多少の汚れ仕事、私たちが請け負ってもいいぞ？　何せ、世界の危機だからなぁ」
興味が出たのか、ニヤニヤと提案してくる。
「……それは後日検討するとして」
これ以上言われてしまうとマズいと判断したはやては、ディスプレイを表示する。
空中に出てくるそれらは、デンジャラスゾンビ――新谷　航平と夜月　翔の詳細データだ。経歴からわかる範囲の能力まで、事細かに書かれている。
「ふむ……」
ウェイバーはそれを手に取る。
その後ろに控えているグレイもディスプレイをのぞき込む気配を感じつつ、目を走らせる――
「……は？」

「……何？」
「その映像は、先日、六課の戦闘シュミレーターでの模擬戦の様子になります。見ていただけるとわかる通り……どうかしましたか？」
その映像を見て、顔色を変える人物が２人。
さっきまでの様子はどこに行ったのか、眉を寄せて考え込んでいるエヴァンジェリン。
「い、いや、なんでも……話を続けてくれ、ミズ八神」
ウェイバーは何とか取り繕うが、挙動不審な様子はごまかせない。
今にも叫びだしそうな気持ちだった。だがこんなところで叫んでは、周りの面々にかわいそうな人を見る目で見られてしまう。
代わりに、
「（あいつはっ！　何をやっているんだ!!）」
映像の中で暴れまわる翔に向けて、心の中で絶叫するのだった。

秘密の会議　後編

「（……これは驚いたな。まさか、闇の魔法（マギア・エレベア）とは）」
多少のことは笑って流すか、笑いつつ魔力弾を撃ち込むエヴァンジェリンだったが、今回ばかりは眉を寄せて考え込んだ。
映像の中で翔の使う技法は、間違いなく闇の魔法（マギア・エレベア）。画面越しでもわかる禍々しい気配。エヴァンジェリンの持つ魔法技法だ。
エヴァンジェリンを不死たらしめている秘術、つまり彼女は大部分の吸血鬼とはまた違った不死性を持っているのだが、今問題なのはそこではない。
正確には技術ではなく、呪いに近い危険な代物を、どうして夜月翔が体得しているのかということだ。そもそも手段が存在しない。
「（一番高い可能性は、同じ境遇の人間がいた……そんなヤツを見逃していたか？　この私が何百年間も？　ハッ、ありえんだろう？　だとすれば……）」
それは異常事態だ。
「（この夜月　翔というガキ……予言のこともあるが、確かに何かあるようだな……）」
普段の遊ぶような笑みではなく、獲物を見つけた時のような凄みのある笑みを浮かべる。
そしてそれとは別に、表情を崩さないことで精一杯になっているのはロード・エルメロイ2世ことウェイバー・ベルベットだ。
「（あいつ！　アイツはっ!!　何をやっているんだっ!!）」
成長した自分とは違い、前に別れた時と全く変わらない姿。こんな場面でなければ、無事を確認出来た事を喜ぶところだ。
そう、こんな場面……まるで事件の容疑者のように名前が上げられなければ。
「（もちろん予想はしていたさ！　未来からの英霊なんて、訳の分からない存在として呼ばれるくらいだ。未来でも、そりゃあもう変な奴なんだろうってのは！　それがまさか、こんな――――）」
よりにもよって、世界の滅亡を予言した詩文に関わっているとは、

想像の範囲外だ。
「(そもそも、あの時は何も言ってなかったじゃないか――――)」
「それで、６つの輝石についてですが……」
色々と考えこんでいたウェイバーとエヴァンジェリンは、聖天子の声で現実に引き戻される。
「皆さんの意見を聞かせていただきたいのです。何か、お心当たりが無いのかを」
目を向けられたウェイバー、エヴァンジェリン、ローラ、アレイスターは全員黙り込む。
誰が最初にしゃべり始めるのか、その機会を窺っているのだ。
知っていることをしゃべる。言葉にすれば簡単だが、つまり機密情報を話すということだ。
知らなければそう答えれば良いと思うかもしれないが、後で発覚し、大きな被害を出した時が怖い。トップ、代表という立場の人間は、『知らなかった』では済まされないのだ。
それを踏まえたうえで、ウェイバーが口を開く。
「……知っての通り、魔術師の魔術は秘匿が基本……この島への時計塔支部も、ようやく成立されたくらいだ。いくら身に余るロードの名を拝命しているとはいえ、他の家の秘術まで網羅しているわけではないことを予め分かっていただきたい」
「確かに、時計塔はある意味イギリス内の治外法権たりけるものね。清教派もそこの堅物にはいつも手を焼きたるところよ」
ローラのちんぷんかんぷんな言葉のせいで柔らかくなっているが、時計塔の外とのかかわりは、ウェイバーにとって悩みのタネの１つだった。
イギリスはロンドンにある魔術の学び舎『時計塔』は、その国よりも長い歴史を持っている。
通常であれば魔術という力を学習、研究する機関、それも世界１，２を争う規模ともなれば、国に管理されるのが当然だ。
当然のことが当然に行われていないから、揉め事が起きている。
例えば今回のように、国に届け出を出さずに時計塔初の海外支部を

作ろうと計画され、実行されてしまったり、だ。
その責任者のウェイバーが、いったいどれだけのお役人に睨まれたことか。そしてどれだけ時計塔内部の魔術師に白い目を向けられたものか。
全ては時計塔のトップ、宝石翁の発案のせいだ。
一介の魔術師、そこまで代を重ねていない凡庸な家庭の魔術師だったというのに、なぜ国のお偉いさんの相手をすることになっているのか、本当に悩むことが月に何度もある。今もそうだ。
「……それでも良いのならばお答えするが、私の知識の中に、世界を滅ぼしうる6つの輝石の心当たりはないな」
「本当に？」
今まで表情を窺っていた楯無が追及する。
「本当だとも。この状況で嘘をつく必要は無い。確かに、『6つの輝石』などという代物だ。我々に疑いの目がかけられるのはしょうがないが――――」
「でも、何か思い当たることはあるんじゃないの？」
蒼い瞳がウェイバーを射抜く。
楯無の態度は、時計塔のロードを相手にしているとは思えない。
だが、その迫力に押され、のけ反っているウェイバーを見れば、どちらが優勢なのか、はっきりしていた。
というか、あれだけ露骨に表情を変えていて、怪しむなと言われる方が無理だが。
「逆だ。思い当たるものが無いのさ」
「ん？」
「科学技術には疎い私だが、魔術にはそれなりの覚えがある。何しろ、これでもロードの名を冠しているのだからね」
「（師匠……なんでそんな嘘を……）」
後ろに立っているグレイは、フードの中で視線だけを動かす。
魔術に覚えがあるなんて、いつもなら口が裂けても、体が裂けても言わないジョークだ。それどころか、ロードの名前をこんな風に使うなんてありえない。

「しかし私にも、この少年が使っている術式は見たことがない……いや、どちらかというと、呪いに近しいもののようだが……これについては、そちらの方が詳しいのではないかな、レディ？」
「さあな？　昔戦ったやつにそんなヤツがいたかもなぁ」
　話を振られたエヴァンジェリンだったが、肩をすくめるだけで受け流す。
「なるほど。まあ、そう言う事にしておきましょうか。ロードとして、未知の術式に心が躍ったってことにね」
「……」
　何とか追及を逃れたが、楯無は疑いを隠そうとしない。
「次に私だが、知っていることは何もないな。６つの輝石についても、この２人の男についても」
「本当ですか？　正直、陣営を問わず長い年月を生きているあなたが、一番可能性があると思っていたのですが……」
「残念ながら」
　聖天子の縋るような声も、片手を上げて受け流す。
　素直すぎる聖天子に、ローラはあからさまに不満そうに、
「そう言われたる後に話すのは癪たるのだけど……実際、何も知らないのでは形無しけるわね」
「同じく、管理局がそのような危険なロストロギアを保管しているという情報は無いな」
　ローラとアレイスターが短く否定する。
　ロストロギアとは、管理局が保管している超古代のオーパーツ、無暗に技術が拡散しては危険だと判断された道具、技術の総称だ。
　形上は協力関係にある２人に情報を共有しておきたかったというだけで、はやても楯無もクローディアも、情報がもらえるとは思っていなかった。
　それどころか、新しい悪だくみの種にされるのではないかという不安すらある。
「ふわぁ～……それで？　話というのはもう終わりたるのかしら？」
「はい。現状ある情報は、これで全部になります」

盛大にあくびをかましたローラ。時差のせいかずいぶんと眠そうな声だ。
「ならこちらから……近々、禁書目録をそちらに送りたる予定よ」
「――――はい？」
「……!?」
はやては言っている意味が分からなかった。ウェイバーは瞬時に意味を理解して息を呑む。
禁書目録。１０万３千冊の魔導書――――現代の人間なら１冊読んだだけでも即廃人コースのそれを、完全記憶能力によって１０万３千冊も記憶している人間図書館だ。
対魔術師相手なら、見ただけでたちどころにその秘術を看破されてしまう。しかも噂では、魔術回路を１本も持っていないにもかかわらず、魔導書の力を引き出せるとか。
イギリスの治安を裏から支える必要悪の教会（ネセサリウス）が有する、切り札の１つだ。
そんな重要人物を送る？　ウェイバーは何かの冗談にしか思えなかった。
「それはどういうご用件で、でしょうか？」
クローディアの質問に、ローラは笑って答える。
「どういう？　これは面白ける問いね。ただ単に、イギリス清教からの応援。それ以外の何があるかしら？」
「……」
「もちろん管理局所属に、ではなく島のイギリス清教協会に。でも、まぁ、有事の際は無償で貸し付けたるのもやぶさかでもない、そういう話よ」
そう言いきられてしまっては、それ以上の追求は出来ない。
協力関係にあるイギリス清教が、虎の子の切り札を貸してくれる。話の上で、会話の上ではそう判断するしかない。
そして、未知の敵と戦う上で、禁書目録の知識はこれ以上ない戦力になる。相手が魔術関係なら、たちどころに対抗策を見つけられるはずだからである。

「(しかし、おそらくは……)」
この場の全員が思っていることである。
「(本当の目的はほかにある)」
例えば、時計塔の隠し事を残らず暴く、とか。
「(数百年の積み重ねがある時計塔とは違って、この島の支部は赤ん坊同然。禁書目録の目を使って、盗めるだけ盗んでおこうと、そう言う事か?)」
ウェイバーも詳しくは知らないが、今回の支部はあの宝石翁の発案だ。情報が出に入れば、何かあると思われ、禁書目録を差し向けられても仕方ない。
「(また、面倒なことになりそうだぞ……!)」
そして苦労するのはウェイバーだ。
「到着の日時は追って伝えたるわ。少なくとも、騒がしかる8月の内は無いと思ってよりけるわ」
「は、はぁ……わかりました」
すでに決定されている事らしく、ローラは有無を言わせない。はやては首を縦に振るだけだ。
「ふむ。まさかイギリス清教が禁書目録を出してくるとは思わなかったが……管理局からの追加の支援は予定していないな」
「いえ、例の特権だけで十分助かって……」
アレイスターは抑揚のない声で言う。
はやては社交辞令的な返答をしようとして――――思いついたことがあった。
「……1つ、質問してもいいですか?」
「なんだ?」
「先日、六課が解決した事件、ご存知ですよね?」
事件というのは妹達の実験のことだ。
「ああ。それが?」
「あの事件で、管理局に実験に加担していた内通者がいるのかもしれません。実際、我々から捜査権限を持っていった部隊が、不自然に実験を守るような動きをしていました」

「何か証拠を掴んでいるのか？」
「……いえ、それは」
「不要な軋轢を生む疑いはやめたほうが良い。いくら特権があっても、周りに疎まれれば動きにくいだろう？」
「……では、このことは忘れろと？」
「……いや、そちらについては私が調べておくことにしよう。特務六課は通常の業務に力を入れてくれれば良い」
そう言って、本当に会議は終了したのだった。

モニターの電源が落ち、アレイスターとローラの目と耳が無くなった。
「それじゃあな、何かあれば連絡しろ」
そう言って、エヴァンジェリンは颯爽とその場を後にした。
ウェイバーもさっさと立ち去ってしまいたかったが、そうはいかない事情があった。
「お久しぶりですね、エルメロイ2世。グレイちゃんも」
「桜の面接以来ですね、八神部隊長」
「はい、お久しぶりです」
実はこの3人、面識があった。
桜は魔術師ではなく魔術使い。とはいえ、時計塔に所属していた人間が管理局に入ったのだ。過去に例がない事態だ。
桜の先生だったウェイバーは、同時に保護者の真似事もしていた。一種の保護者面談のようなことも行われることになったのだが、その時に顔を合わせたのだった。
「その後どうですか、桜は」

「良くやってくれてますよ。小さい頃のエース・オブ・エースを思い出しますよ。色々と圧倒的です」
「ハハハ、それは……」
桜の力を知っているウェイバーは乾いた笑いを漏らす。
自らの師であるケイネスの姪に当たる少女。彼女に課せられる無理難題にも難なく答える実力を備えているのだ。
「(あの胃を壊す悪魔と対等に渡り合える時点で、な……)」
「それでそれで？　本当は何か知ってることがあったんじゃないの～？　あの2人がいなくなったことだし、話すなら今じゃない？」
楯無はテーブルに肘をつき、笑顔で語りかけた。
「いや、残念ながら(過去に英霊として召喚されて聖杯戦争したとか、錯乱したのかって思われそうだし)」
「ふぅーん、そっかぁ……ん～っ……あ～……」
楯無は両手を上にあげて背伸びする。
「六課に来た桜ちゃんが翔君と一緒に住んでるのも、高町さんのお子さんの友達が、翔君と一緒に住んでるのも、ぜーんぶ偶然かぁ……」
「(そんな偶然あるかっ！　というか、人間関係が繋がりすぎだろ！)」
ウェイバーは心の中でツッコミを入れる。
もう、わざとらしいほどの牽制だった。
「クローディアはどう思う？」
「私はそもそも疑ってませんから」
「ま、そう言うならそれでもいいわ」
カリムが話を変えた。
「ロードはしばらくこちらに？」
「ああ。この島の時計塔支部の責任者を任せられているので。もっとも、支部など名ばかりのハリボテですが」
宝石翁発案の支部計画だが、それを聞かされた時計塔のロード達は皆同じ事を考えた。それ、作って意味あるの？　と。
自らの神秘を外に出す理由が無い。時計塔の魔術師たちは、別に表舞台で勢力拡大したいわけでは無い。わざわざ支部に人を出す名家など、どこにもなかった。

だがウェイバーにとっては別だった。学園島に行く大義名分が出来たのだ。
「(や、別に、アイツがいるからってわけじゃないんだけどな！)」
桜から再会できたと連絡を貰っていたから、という訳では断じてない。決してない。
その時、
「む」
「っ！」
「あら？」
「これは……」
「？　皆さん、どうかされましたか？」
近くに結界が張られた。
それに反応する各人。魔力の無い聖天子が首を傾げている。だが、教会の主であるカリムは落ち着いていた。
「大丈夫ですよ。今頃、シスターシャッハが顔を真っ赤にして飛んで行ってるでしょうから」
「ああ、そういえば、そろそろ時間だものね。話がこじれないように、私はお暇しようかしらね」
「時間とは？」
ウェイバーは何も聞かされていなかった。口ぶりから、何やら予定があることは分かるが。
「この後、来る予定なんですよ。夏の間、護衛をして頂こうと思いまして。実は私、個人的に知り合いなんです」
「まさか……」
「はい。例の夜月　翔さんと」
聖天子は笑顔で告げ、ウェイバーは顎が外れるほど愕然とした。

翔が教会へ

メールで呼び出された俺は、聖天子様に指定された場所に来ていた。

場所は聖王教会。聖王と呼ばれていた大昔の人物、オリヴィエを主として崇めている場所である。

オリヴィエ、つまりはヴィヴィオちゃんの『母体』な訳だけど、これはやはりすごい人物だった。

科学の世界大戦が俺の世界にもあった１９００年代のものだとすれば、凡そ６００年前にあった魔法版の世界大戦を鎮めたのが、聖王オリヴィエということになっているのだ。

それも、『聖王のゆりかご』というデッカイ魔導戦艦を使ったとはいえ、ほとんど１人で。

そりゃ、当時の人から見れば神様に見えるだろうし、こうやって崇める団体が出てきてもおかしくはない。

ちなみに、ここのお偉いさんである『カリム・グラシア』は管理局の少将だったりもする。

聖天子様はどうしてこんな場所を指定したんだろうか。まさかとは思うけど、数か月会っていない間に変な勧誘に引っかかって、すっかり狂信者になっていたり……ない、よな？

「はいはーい！　こちらにどうぞー」

俺は多少警戒しつつも、シスターの後ろをついていく。このシスター、ノリが大分軽いんだけど。

そういえば、外に色々と高級車が停まってたんだけど。あれ全部職員の、って訳じゃないよな？

俺の他にも誰か来てるってことなんだろうけど、いったい誰が来てるんだ？　同じタイミングってことは、もしかして俺も会うんだろうか。

改めて聖天子様が偉い人だと考えていると、

「シャンテ！」

後ろから声をかけられた。これは聞き覚えのある声だ。

振り向くと、1人の女の子がこちらに駆け寄ってくるところだった。金髪で、左右が違う色の瞳、着ている学校の制服は、毎朝クロのもので見慣れている。ヴィヴィオちゃんだ。
「お、陛下だ。いらっしゃーい」
俺を案内していたシスターが軽く手を振る。
「翔さんも、こんにちは！」
「こんにちは。1人なの？」
「はいっ！」
ヴィヴィオちゃんは今日も元気いっぱいだな。
このシスターさんとの距離感、ヴィヴィオちゃんは頻繁にここに来てるのかな。
「そうなんですよ！　色々と、あー……はい。色々と用事があって！」
「やー、でもお客さん、まさか陛下と知り合いだったなんてねー」
「友達のお兄ちゃんなんだよ！」
ヴィヴィオちゃんが聖王のクローン（のようなモノ）であることは、あまり口にしない方が良い。その用事とやらも、むやみに口外するものではないんだろう。
話題が変わる。
「シャンテもインターミドルに出るんですよ！」
「ほーん、そうなんだ」
「はい。まぁ一応、聖王教会の代表ってことで」
「でも、無断で申し込んだんだよね？」
「うん……あの後シスターシャッハにメッチャ説教されたよ……」
言い忘れていたが、俺を案内してくれていたこのシスターは、リリカルなのはの登場人物、『シャンテ・アピニオン』だ。
そこまで出番の多いキャラクターではなかったけど、実力は確かだったはず。
「なんや、前にも見たことのある光景やなぁ」
……なんだ、このエセっぽい関西弁は。そのキャラは八神さんで間に合ってるぜ。
俺の後ろに何人もの気配がある。それも強大な。間違いなく強者

の気配だ。俺の後ろを見たシャンテは露骨に顔を引きつらせてる。
「自分、陛下に絡んだせいで、前にオットーやディードにお仕置きされたこと忘れたんかー？」
だが、この喋り口調と声。俺にはピンと思い付くキャラがいるんだが……！
「や、やだなー。もう、そんな冗談ばっかり。前回とは違って、ただおしゃべりしてただけなんですよー？」
「そうですよ！　今回は本当に、シャンテも私もおしゃべりしてただけですから！」
「まあまあ、そんなに焦んなくてもええよ。ウチはあのお堅いシスターと違って、オモロければなんでもオーケー。むしろ最後まで見たかったんやけどな――……んで？　そっちの坊主は初めてのお客さんかいな。喋ってる人にずーっと背中見せてるってのは、どうなんやろうなぁ？」
そう言われてしまえば、振り向くしかない。
後ろにいたのは、まさしく俺が予想していた通りの人物『達』だった。
予想していても、驚きを隠すことは――
「ロ――」
「何や、その顔。ウチの顔になんかついてるんか？」
ロキ・ファミリア、だと……!?　な、何でここにいるんだ!?
先頭にいるのは糸目で緋色の髪の『神』ロキ。
後ろには子供と間違えてしまいそうな体格、しかし子供には決して出せない『凄み』を持つフィン・ディムナ。
それと同等の実力を兼ね備えているだろう、俺が出会った魔法使いの中でも、１０本の指に入るリヴェリア・リヨス・アールヴ。
どっしりとした体に、豊かなひげを蓄えたドワーフの男性、ガレス・ランドロック。
細身ながらにしっかりと筋肉があり、『狼人』特有の耳と尻尾がチャームポイントになっている男性、ベート・ローガ。
眩しい褐色の肌を露出させている双子のアマゾネス、ティオネ・ヒ

リュテとティオナ・ヒリュテ。
そして一番後ろには――――『剣姫』、アイズ・ヴァレンシュタイン。
まさに、ロキ・ファミリアの主要メンバー大集合といった具合だ。
頭がくらくらしてくる。俺、聖天子様に呼ばれてきたはずなんですけどね？　ここは何時から迷宮都市オラリオになったんでしょうかね？
っていうかロキ！　あんたマジで神様じゃねーか！　この世界は、そんなポンポンと神様が出てきてもいいのか!?
「……この方たちは？」
「あれ？　翔さん知らないんですか？」
「聖王教会の武偵グループですよ。結構有名だと思うんだけどな～」
ロキ・ファミリアだろ？　知ってるよ！　知ってるけど知らないんだよ！
「武偵高の制服着とるのにウチらを知らないってのは、モグリが過ぎるわ」
「まあまあ。我々は別に、知名度を売りにしているわけではありませんよ、神ロキ」
フィンが間に入ってくれるけど、聞き逃さなかったぞ！　今、『神ロキ』って呼んだな！　やっぱり神様なのか!?
「初めまして、我々はロキ・ファミリア。聖王教会所属の武偵グループです」
名前もそのまんまか!!
ツッコミをおさえ、俺も挨拶を返す。
「初めまして、フィン・ディムナ。俺は夜月　翔、武偵……でもあり、管理局特務六課にも所属しています」
「うん？」
握手をする俺たちだが、フィンは不思議そうに眉を動かした。
「何か？」
「いや……ロキ・ファミリアの名前は知らなくても、僕の名前は知ってるんだね」
「ま、まあ、そう言う事もありますよ……！」

ついうっかり口走ってしまった。探偵みたいに言葉の違和感に気が付くな。や、武装探偵なんだから探偵か。
「それで……その、神ロキってのは？」
「ふむ、そうだね……知らないのなら、しっかりと説明しようか」
フィンの説明によると、この『ダンまち』ロキ。本当の神様……ではないようだ。
だがしかし、聖王教会設立からずっと、この人物は教会を支えてきたらしい。つまり、軽く５～６００年は生きている計算になる。謎多きおばあさんだ。
そこまで長い間支えてくれたとなれば、それはもう生き神様だ。自ら『ロキ』を名乗ることも相まって、いつの間にか『神ロキ』と呼ばれるようになったのだとか。
そしてこの世界のロキ・ファミリアは、聖王教会所属の武偵集団だ。聖王教会が、そもそも戦乱を収めた聖王を崇めたところ。それに則り、力で平和をもたらすことを容認している。教会の内側を守るのがシャンテのような武装シスターだとすれば、外へ構える剣がロキ・ファミリアという訳だ。
メンバーは基本的にこの島に捨てられた　置き去り（チャイルドエラー）。
ロキの加護（原作のステイタスのようなモノ）によって、主力メンバーの武偵ランクは全員Ｓというトンデモ集団だ。
武偵ランク自体は無能力者の人を基準に考えらているから何とも言えないが、まあ見掛け倒しじゃないんだろう。だってロキ・ファミリアだし。
やっぱり思う。この島はどこもかしこも魔境だと。
「それで、前にお仕置きされたってのは？」
事実を飲み込み、話題を変える。
「や、それは……」
「ヴィヴィオちゃんの出自は知ってるから」
そう言い添えると、シャンテはあっさりと口を開いた。
「ん、ならいっか。２ヶ月くらい前に陛下がここに来てね、大会に出るって言うから少し手合わせしたんだ」

２か月前って言うと、ちょうど大会に向けて特訓が始まるあたりだな。
「陛下、格闘にこだわってるけど、魔力資質的にそれは不向きなんだよ。戦闘魔導師になるとしても、後衛が向いてる。それを分かってほしくてねー、少し闘ってみたんだけど」
俺にはそのあたりのことは分からないけど、別に意地悪をしたという訳ではないようだ。本当に心配しての行動だったようだ。
「ただ、こんなところで陛下に斬りかかったって事で、叱られちゃってねー。でも、私も悪いと思ってるから。うん。反省してるから！」
「ヴィヴィオちゃんも、大会に向けてしっかり特訓してるからな。自分のことは自分で理解出来るくらいは、ヴィヴィオちゃんは大人だよ」
「ん、陛下、頑張り屋さんだからね……ってかそれ、前にも言われたよ。あー、もう！　やっぱり余計なお世話だったかー！　慣れないことはするもんじゃないね！」
そんな風に盛り上がっていると、
「んん？　どうした、こんなに多く集まって」
「おお？　なんや、帰ってみれば血なまぐさいと思えば、吸血鬼かいな」
「ははは、いや、まさか５００年生きても貧相な体のエセ神様にそんなことを言われるとはなぁ」
「だまらんかい！　お前はそもそも魔法を解いたらちんちくりんのガキンチョやろうが！」
「……いやいや」
俺は頭を振った。
流石に処理しきれない。もう今回はほとんど説明しかしてないんだぞ。これ以上人物を増やして収拾できるんですかね!?
そこにいたのは、ジャケットを指に引っ掛け、胸元のボタンを少し開けたスーツ姿、手で顔に風を送っているが、そんなことは気にならないくらいの超絶美女。
――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだった。

今度はなんだ。どうしてこんなところにいるんだ!? 俺はいったい何を試されているんだ!?
「……ん?」
見つかった。
目が見開かれた後、細められ、その口元が歪む。すんごく嫌な予感。
「(んん? んんん? アイツはさっきの映像の。確か……夜月 翔? アイツらめ、実は呼んでいたのか。ふんふん、なるほどなぁ)」
厄介なことになる前に、ここを離れたほうがいいな。
「あー、シスターさん? 俺も約束があるからさ、そろそろ案内してもらえると……」
俺の持っている魔法の1つ闇の魔法(マギア・エレベア)。アレは彼女に関わりがありすぎる。発動しなくても気配で気が付かれるかもしれないし、追及されれば逃れることは出来ないだろう。
今この段階で、それは拙い。
「まあ待て」
しかしそれは叶わなかった。
二の腕をがっちりと掴まれ、その指が全く離れてくれない。
そのまま体捌きだけでするりと絡みつくように、腕が首に巻きつく。
「別にそこまで邪険にすることは無いだろう? なぁ? 夜月 翔?」
「なんで俺の名前を……」
「まあまあ、どうでもいいじゃあないか、そんな些細なことは」
一番考えられる可能性は……やっぱりブラド関係だろうか。同じ吸血鬼を倒した男ということで覚えられていたのかも。
や、すでに名前を覚えられているというのが問題な訳なんだけど!
「お、俺に何の用でしょうか?」
「(……ふむ、だがどうするか。少なくとも、今のコイツの腕は見ておきたいが、私直々に戦うのは流石にまずいな。主に周りの被害的な意味で。となれば……)おいロキ! オマエのとこの、1人貸せ」
「あぁ? 突然何言っとるんや」

俺から離れたエヴァンジェリンはロキと内緒話を始める。この隙に逃げられないかな。逃げられないんだろうな。
「ロキ、お前予言のことは知ってるか？」
「そりゃ、まあなぁ。こう見えてもウチ、ココで結構いい暮らしさせてもらっとるし？」
ロキが行っているのは、あくまでファミリアの運営だけだ。実際の教会中枢には意図として関わらないようにしている。
だがファミリア経営の流れで、カリムから予言については知らされていた。だがその頃は、翔の情報は全くなかったのだが――
「あのガキ、予言に関係あるぞ」
「マジか!?」
なんかロキが、首が取れるんじゃないかって勢いでこっちを見たぞ。
「間違いないんか、それ」
「十中八九な。もし違っても、また別の理由でタダ者じゃない」
「んん？　その心は？」
「アイツ、私と同じ呪いを受けている」
「ははぁ、なるほどなぁ」
同じく長い時間を生きている者同士、お互いの事情にはそれなりの理解があった。
「そう言われると、流石に手ぇ振って別れるってのはムリやなぁ」
「そうだろう？　少しくらいはツバをつけておきたい」
「となると、そうやな……」
ロキは自分のファミリア集団の方へ行き、エヴァンジェリンはこちらに向かって歩いてくる。
「お前、今時間があるな」
「いや、無いんですけど」
「よし、あるんだな」
話聞いてないなこの吸血鬼。
「よし、今からここで戦ってみてくれ、ロキ・ファミリアのメンツとな」
「はぁ？　嫌で……俺が勝った時には？」

全力で拒否しようと思ったが、あることが引っ掛かり踏みとどまる。
「お前が知らないことを教えてやろう。知ってるか？　今自分が、どんな立場に置かれているのか。少しくらい自覚があるんじゃないか？」
「……」
言い争っていたはずのロキがあっさりと協力的になったことが引っ掛かる。これは本当に何かあるな。俺の知らない何かが。
それにこのレベルのキャラクターたちだ。ここから先、何らかの事件があるかもしれない。そのための繋がりを持っておくのは悪くない、のかもしれない。
もう目をつけられているんだし、隠そうとする方が無理だ。無駄な行動だ。
ここは受けるべきか。聖王教会でなら、面倒な政治利用されるってことも無いだろうし。
「分かりました。やりましょう」
「そうか、いやー良かった良かった。断られたら何をしてやろうか迷ってたんだ」
俺はずいぶんと賢明な判断をしたらしい。
俺が了承した丁度その時、向こうでも話がまとまったようだ。
「よっし！　それじゃ、リヴェリア、結界よろ！」
「断る」
「なんでや！」
まとまってなかったみたいだ。
しかし、ロキはその後何度も頼み込む。
「はぁ、しょうがない……」
溜息を吐きつつ、リヴェリアが結界を張ってくれる。
ロキ・ファミリアのメンバーから一歩前に出たのは、ベート・ローガだった。

夜月　翔　ＶＳ　ベート・ローガ

「さ～てと……だれがいいかな、っと……」
　ロキは顎に手を当て、自らのメンバーを見定めていた。
　リヴェリアには結界を張ってもらう予定だったから除外。フィンは色々と余計なことに気が付きそうで面倒。
「（や、そもそも、ウチのメンバーといい勝負できるかぁ？　や、あの吸血鬼が言うくらいやし、う～ん……）」
　となると、むしろ手加減が過ぎると翔の実力を見れないかもしれない。
　そう考えたロキは。
「よしっ！　ベート！　今からちょっと戦ってくれへんか？　あの坊主と」
「あぁ？　んで俺がそんなことしなきゃなんねぇんだよ。つかなんなんだよ、あの野郎はよぉ」
「うん？　あー、そやな……」
　ロキはまだまだ不確かだった予言のことは話していない。
「（説明、面倒やったからなぁ……）うーん……あれや、アレ。あの坊主、ロキ・ファミリアへの入団希望者なんよ。だからちょいと腕試しして欲しくてなぁ」
「あの子さっき、ロキ・ファミリアのことは知らないって……」
「細かいことはええんよ！　アイズたん!!」
　今一番のお気に入り出るアイズの言葉を、びしっとせき止めるロキ。そのままベートの肩に腕を回す。その絡み方はまるで酔っ払い、表情は詐欺師だ。とても胡散臭い。
「なぁベート、考えてみい？」
「……何をだよ」
「自分、アイズたんにぃ、思う所があるやろぉ？　あの入団前に『わからせる』のもアリやと思わん？　やー、活躍したらアイズたんも惚れ直すかもしれんなぁ。あ、惚れてへんかったかぁ」
　ロキの言葉に青筋を浮かべるが、ギリギリのところで抑え込むベー

ト。
「やらねぇっつってんだろーが」
「何でや!!　イケズ!!　分からずや!」
　それでも、ベートは承諾しなかった。
「ベート」
「あぁ？」
　フィンが声をかける。
「頼む。今回は僕の顔に免じて、受けてくれないか？」
「……しょうがねぇか、アンタがそう言うならな」
「なんでウチの言う事は素直に聞かないのに、フィンの言う事は聞くん？」
　だがこれで、ベートの説得は終わった。
　一度は結界を張ることを拒否するリヴェリアだったが、何度も頼み込まれ、ため息をつきつつ結界を張った。
「よーし、ベート！　一発カマしてきいや!!」
　ベートを送り出したロキは、阪神タイガースを応援するおばちゃんのように、腕を上げて声を張り上げる。
　そんな神（仮）の姿を、リヴェリアはため息を吐きつつ眺めていた。
「フィン、どういうつもりだ？　どうしてこんなことを……」
　隣にいる小柄な少年……に見えるロキ・ファミリア団長、フィン・ディムナに問いかける。
　リヴェリアはロキの頼みを聞くつもりは全くなかった。渋々ながら了承したのは、フィンからの合図があったからだ。知恵者の彼が許したのだ。ベートを促したのも彼。何か裏があると判断したのである。
「なに、僕も興味が出ただけだよ。ロキと雪姫が興味を持つ存在に。それに――」
　フィンが自らの親指を見る。
「――さっきから親指の疼きが止まらない。間違いなく、面白いものが見れるよ」

「それじゃあ夜月さん、頑張ってくださいね！」
「カッコいいとこ見せてよね！」
「ん、頑張ってくるよ」
右手にはめている指輪から、黒い物体が現れた。俺の新しい仲間にして、頼れるアドバイザー、レプリカ先生だ。
「レプリカ先生、行きましょうか」
《ああ、翔。我々の初陣だ》
「トリガー、オン」
言葉とともに、俺の体を包み込むようにレプリカ先生が変形する。黒を基調に赤いラインが走った服。ＢＪというよりも全身がデバイスになっていると言ったほうが近いのか。
とにかく、これで変身は完了した。
ここで、前回の行為で手に入れることの出来た能力を紹介する。なぜか行為の記憶が無いんだけど。なんで完全記憶能力をすり抜けたのかな？　でも５ポイントも手に入れていたからね。

プリンセスナイト
『プリンセスコネクト！　Ｒｅ：Ｄｉｖｅ』の主人公が持つ能力。
効果は仲間の能力強化、バフ。特定の項目を強化するわけではないため、味方と認識したあらゆる人物に対して効果を発揮する。

仮面ライダー博物館（ダイオラマ魔法球）
仮面ライダーに関するあらゆるアイテムを展示するための空間。展示ケース内は湿度、温度調節機能付きで、埃も積もらない。目指せコンプリート！

また、ケースの中に入ったアイテムはどこでも呼び出し可能。

ＧＮ―００１　ガンダムエクシア
機動戦士ガンダムＯＯに登場する兵器。
合計で７本の剣を装備することが出来るため開発時には『セブンソード』というコードが付けられていた。
セブンソードの名前の通り、近接戦に特化した機体である。
なお、本編に登場していないものも含め、多数のバリエーションがある。

ビルドドライバー
『仮面ライダービルド』、およびビルド系列のライダーに変身するためのベルト。『フルボトル』を使うことで仮面ライダービルドに変身することが出来る。

ラビットフルボトル
仮面ライダービルドに変身するためのアイテムであるフルボトルの一種。
兎の力が封入されている。

プリンセスナイトの能力は腐ることは無い良い能力……かな？
考えてみれば、俺ってみんなと一緒に戦ったことほとんどなくない？
そんな俺がこんな能力持ったって宝の持ち腐れになるのでは？
今回だってまったく使えないし。
もしかすると、手に入れる能力の方から、もっとみんなで戦いなさいって言われてるのか!?
……まあそれはそれとして、とうとう待望のガンダム枠が手に入った。ガンダムエクシア。コイツは小回りが利くし、無限に空を飛べる。多分俺が使うことになると思う。と言うか使いたい。
今回出番があるかは分かんないけどね。

ビルドドライバーはビルドドライバーだ。とりあえずもう1本ボトルを当てないと変身することも出来ない。現在は博物館の肥やしになっている。
まあ、今回出番は無いだろう。
俺はベートと向かい合っていた。
向こうの顔には明らかにやる気がない。上役に言われてしぶしぶ出てきたのが丸わかりだ。
「それじゃあ、2人とも準備はいいか？　――始めッ!!」
合図と同時に、蹴りが迫ってくる。やる気を出していなくてもこのスピード、流石だと言える。
だが、渡り合えないほどじゃない。
「お？」
ベートの表情が少し動く。
すると、どんどんペースが上がってくるが、俺も負けてはいない。風を切る拳が行き交うが、お互いがお互いを捕らえられない。
流石、格闘センスはずば抜けているみたいだが、今の俺は身体能力だけで渡り合えている。まともな戦闘なら、サーヴァント戦を超えた俺に恐怖はない。
ベートは蹴り技を中心とした素早い攻撃。俺は武偵高校の対人格闘訓練で学んだ格闘術に、周りの人からパクった格闘技のブレンドミックスだ。
周りの目も変わった。ロキ・ファミリアからは驚きが、ヴィヴィオちゃんからはキラキラするような目が、より一層強くなった。
少し試してみるか。
「『弾（バウンド）』印――――」
足元に現れる魔法陣。幾何学模様ではなく、漢字のような模様が描かれている特別品だ。
対象を跳ね上げるトランポリンのような効果を持つそれで、大きく空に――――
「逃がすか、よォ!!」
「うおおお?!」

飛び上がる俺の足を掴み、そのまま地面に投げられた。何とか着地できたが、
「あっぶな……」
「彼の前で不用意な行為は命取りだ。技の試し撃ちはやめた方がいいだろう」
レプリカ先生が俺を諌めてくる。
「おいおい！　つまんねぇ小細工なんざすんじゃあねぇよ!!」
対するベートはずいぶんと楽しそうだ。くだらない見世物に付き合わされたと思えば、思った以上に俺が戦えてうれしくなっているんだろう。
「翔。分かっているな」
「もちろん――――風精召喚!!」
呼び出した精霊が、ベートに攻撃を開始する。
わざわざ相手に付き合うことは無い。突けるのなら、徹底的に弱点を突く。それが俺の戦い方だ。こざかしい手だっていくらでも使ってやるさ。
「よし、いいぞ。君の戦い方は私に馴染むぞ」
「それは良かったよ！」
「カスみてぇな魔法だなぁ!!」
しかし、ベートはタフだ。多少攻撃しても、ひるまず突進してくる。
「ラシルドッ!!」
「っ!?」
無理矢理間に壁を作ることで、進撃を止める。
「しゃらくせぇ!!」
壁を壊した先にいるのは、
「『鎖（チェイン）』印、三重（トリプル）」
印を構えた俺だ。
3重に重ねられた『印』から、ベートを拘束せんと鎖が飛び出す。
「つまんねぇことしてんじゃねぇよッ!!」
それを纏わりついていた風精ごと、蹴りで粉砕する。
「うそぉぉぉ……？」

「翔、来るぞ」
「ザケルッ!!」
電撃を放射することで近づけさせない。ここで一度仕切り直しになった。
「おーい、つまらんぞー。もっと派手な奴でズバッと決めろー」
「そやそやー、ベートも顔のニヤつきが押さえられんくなってるでー」
「ッチ！　なんなんだアイツらはッ!!　闘り合ってる最中につまんねぇヤジなんざ飛ばしやがって……！」
ベートが相当にイラ立っているのがわかる。ベートはロキに無理やり戦わされて、そんなヤジを飛ばされてるんだ。気持ちは分かる。
でも俺には違う意味に聞こえる。というか、テレパシーが飛んできてるから普通に聞こえる。
「（おい、わかってるんだろう？　早く見せてみろ、オマエの闇の魔法（マギア・エレベア）を）」
「……ふぅ」
毒を食らわば皿まで。
「お望み通り……！」
見せてやることにしよう。
「――暗き夜の型」
黒いＢＪから滲みだすように黒いオーラが現れる。
ベートと目が合った。
「（コイツッ！　いきなり目つきが――!!）ッ!!」
俺の纏ったドス黒い闇のオーラに本能的な恐怖を感じ取ったのか、攻撃に移るまでが早い。ほとんど本能で動いている。
本能が叫んだのだ。今のこれは危険だと。
だが、今の俺にはスローモーションに見える。銃弾撃ち（ビリヤード）の時、一瞬だけ入ることが出来るスーパースローモーションの世界。ベートの拳が顔の脇を通り過ぎていく。
「『強（ブースト）』印――三重（トリプル）」
印を３重、周りに浮かぶ１１の光球。それをすべて右手に束ねる。
「桜華――」

狙いはがら空きのベートの腹だ。
その寸前、
「コラーーー!!!!
!!!」
鬼の形相のシスターが殴りこんできた。
その大声で、俺の拳は当たる寸前で止められる。
「シャンテ!!　またあなたですかっ!!　今度はいったい何を――――って、ロキ・ファミリアまで!?　リヴェリアさん！　あなたがいながら何ですか！　この騒ぎは！」
「すまない、シスターシャッハ。ロキにどうしてもと頼まれてしまってな」
「リヴェリア!?　や、確かにうちが頼み込んだのはあるんやけど！」
ロキは勢いよく隣を指さす。
「もともとはこの年齢詐称吸血鬼の提案で――――……あれ？」
そこにはすでに、エヴァンジェリンの姿は影も形もなかった。
「とっくに帰りましたよ」
「あ　ん　の　ク　ソ　吸　血　鬼　ィ　!!!　自分だけ逃げおったなァ!!!」
すでにリヴェリアによる結界が解かれ、手合わせの空気ではなくなっている。
俺もエヴァンジェリンがいなくなってしまったのでは、これ以上戦う理由が無い。
「ベート、行こう。夜月　翔。またいずれ」
「ッチ!!　クソが……！」
フィンから声がかかり、ロキ・ファミリアが建物に消えていく。
結局、勝敗はお流れになった。
舌打ちして背を向けるベートを見つつ、俺も能力を解除するのだった。

エヴァンジェリンは迎えの車に乗り込んでいた。
「待たせてすまなかったな、真壁」
「いえ。何か問題がありましたか？」
ハンドルを握るのは、給仕服を着た青年だ。メガネをかけたその男は、自らの主人がしっかりと腰を落ち着けたことを確認して、車を発進させた。
外見では何処にでもいそうな東洋系の少年だが、その実態は不死身集団『ＵＱホルダー』の一員。ある種の不死身能力を持つ男だ。
それだけに、エヴァンジェリンの口から出た言葉は、彼に驚きを与えた。
「実はな、新しい不死身衆候補（ナンバーズ）を見つけたんだ」
「ほう、それは……」
ハンドルを握る手が一瞬動く。
「どうするおつもりで？」
「様子見だ。今はまだな。どうにもアイツは今、厄介なことになってるらしいからな。そもそも、アイツが本当に不死身なのかまだ分からん」
「こちらも準備を進めましょう。色々と。この夏は忙しくなりそうですね」
「まったくだな」
車は、２人のホームへ向けて走り続けるのだった。

腕試しを終えた俺は、シャンテに連れられて、聖王教会の中に入っ

ていた。高級そうな絨毯を踏みしめて進んでいく。
「いやー、夜月さん強いんだねぇ。まさかあのベートさんと引き分けるなんて。インターミドルとか興味無いの？」
「無いなぁ。そういうのに出るのは興味ないんだ。みんなの応援はするけどな」
流石に大観衆の中、能力をお披露目するのは避けたい。それよりも、絶対に起こると確信している事件に備えたいのだ。
「でも災難だよねぇ。厄介だよ、あの神様達に目を付けられると。ってか夜月さん、何かやったの？　無礼なこととか」
「無礼って……何かした覚えはないぞ。向こうに何か思う所があったんじゃないか？」
俺自身、その辺りは望んでいた所があるからな。
そんなことを話していると、とある扉の前まで連れてこられた。
気さくな態度だったシャンテだったが、態度が変わる。
「それではお客様、こちらでございます」
扉の前で礼儀正しくお辞儀をしたシャンテ。開けられた扉。その向こうにいたのは聖天子様だけでなく。
「あれ……？」
何人かいた。しかも全員知っている顔。
もちろん呼び出した張本人である聖天子様はいる。それに加えて我らが部隊長、八神　はやて。そして直接の面識は無いが、原作知識で知っていたカリム・グラシア。
そして、
「お前えぇぇぇぇ……！」
「ウェイバーじゃん。何でこんなところにいんの？」
「こっちのセリフだ!!」
何故かものすごく嫌そうな顔をしている。なんでだ。せっかくの再会がうれしくないのか？
すっかり大人の顔になったウェイバーの叫び声が、部屋に響いたのだった。

8月の依頼

隣のウェイバーが死んだ顔をしている。なんだコイツ、せっかくの再会がうれしくないのか。

ウェイバーの隣に控えている灰色のフードをかぶった少女は、ちらちらと俺を見てくる。師匠をこんなに狼狽させた俺が気になるんだろう。近くにある獲物に何でもない風を装う肉食獣のように、俺に釘付けになっている。

この娘のことは、名前と簡単な設定くらいしか知らないけどね。

とにかく2人とも、俺には随分と言いたいことがありそうだ。

「(ま、このメンツの前では難しいだろうけどさ)」

ニコニコと笑っている八神さんと聖天子様。メンツ的に何か重要な会議があったんだろう。

立場って奴だ。ウェイバーの容姿は、すでにロード・エルメロイ2世のものになっている。この場にいるってことは、立場的には時計塔の代表みたいな感じだろう。

俺の知らないところで、ウェイバーも大きくなったんだなぁ。しみじみした気分になる。

「ふーん？　君は時計塔のロードとも知り合いなんやなぁ」

「ええ、まあ――――」

八神さんの言葉に普通に頷こうとして思い留まった。

時計塔のロードと知り合いって、しかもこんなフランクに接するって、普通じゃありえなくない？

もちろん俺がタダ者じゃないことは、八神さんも重々承知してるだろうから、今さらな気もするけど。

「――――まあ……はい。色々ありまして」

「……お前は……」

いっそ潔く認めてみるが、ウェイバーはとても何か言いたそうだ。

や、無理だって。君相手にずっとかしこまった態度とり続けるなんて。昔を知っていると、どうしても威厳があるように見えないんだよ。

眉間の皺は、木の年輪みたいに成長を示すものじゃあないってことだ。
だが意外にも、八神さんはそれ以上追及してはこなかった。メインは俺と聖天子様の話だからだろうか。
俺たちはお互い挨拶をして、さっそく本題に入る。
「今回は夏の間の護衛をして頂きたいのです」
「夏の間……？」
はて。赤道付近に位置するここは常夏の島、学園島だ。そこで夏の間護衛と言われても……いつまで護衛すれば良いんだろうか？　もしかしてずっと？
と、とぼけるのはやめておくことにする。
「8月の間ってことですか？」
「はい」
聖天子様は頷く。
日本人である俺たちの間では、8月は夏。そして8月は忙しくなるというのは、再三言われていたことだ。人が多くなる。
その間、護衛してほしいという事だろう。
問題は、
「また、誰かに命を狙われたり……？」
「そういうことはありませんよ。純粋に人が多くなるこの時期は、私に限らず特別に護衛を雇う人が多いんです。『何か』あってはいけませんから」
各国要人が集まるこの時期は、テロも多くなるってことか。
「ちなみに、聖天子様お守り隊は？」
「はい？」
「いえ、その、親衛隊はどうなったのかなって」
保脇の件。かなり昔に感じるが、実際はわずか3カ月前だ。色々あって俺の中では保脇が悪人確定になっているが、実際には俺との戦闘中に死亡。
保脇自身、暗殺者（ヤミ）を雇い俺を殺そうとする罪を犯した。それでも、デンジャラスゾンビが殺したとはいえ、俺はそれまで隊長を

務めていた人物の死に際に立ち合った人間だ。
　親衛隊の人達にどう思われているか。
「それなら安心して下さい。あの事件の後、部隊が再編されたんです」
「そうなんですか？」
　話を聞いたところ、あの暗殺未遂、よりも保脇の危ない人格を見抜けなかったことを受けて、親衛隊は完全に解体。
　天童菊之丞が直接面接をした人で新設されたらしい。それにより、直接近くにいるのは女性だけになったのだとか。
「ま、そういうトラブルって、何も男性だけに限定はされないと思うけど……」
「はぁ……？」
　歪んだラヴ（巻き舌）、女性版、みたいな？　その辺りに口を挟める権利は持ってないが、安心だと高をくくるのも不用心だ。
「でも、じゃあ無理じゃあないですか？」
「何が無理なんですか？」
「だから、一度実績があるからって、どこの馬の骨とも知れない男を近くに置くっていうのは」
　そんなに厳重に警戒してるって言うなら、
「俺だったら、絶対に許可しませんけどね」
　それも、あの天童菊之丞のことだ。大切な操り人形に埃や虫が群がるようなことは避けたいだろう。
「それについては問題ありませんよ。すべて承知の上ですから」
「はい？」
「承知の上で、お願いしているんです。すでに許可はとってあります」
　許可が出たってのか？
「それどころか、一度会ってみたいとも言っていましたよ」
「ううん……？」
　新部隊は直接目で見て選んだらしいし、俺のことも直接値踏みしたいってことか？
　でもそれだと、順序が逆になる。普通だったら、最初に顔合わせがあるんじゃないのか。許可が出るのはその後じゃあないのか？

何か企んでるのか？　や、むしろ企んでいないなんて場合があるのか？
色々と気になることはあるが、
「……まあ、その辺りに何も問題ないなら。受けますよ」
「ありがとうございます」
心なしか弾んだ声で、しかし余計なことは言わない聖天子様。
「では内容を説明します」
会議は前期と後期に分かれる。前半３日と後半３日、間に２週間の自由な時間がある。
それは一般にも公開されている情報だ。会議の議題についても、調べれば簡単に知ることが出来る。
少なくとも、表向きの内容は。
「会議の内容については、申し訳ありませんが、私の口からは言えません」
それは機密という意味だ。外には漏らせない重大な内容という意味。
そしてそれらについて、いくつかは心当たりがある。一つはスタンド。正体不明の新しい能力。
そして、
「聞きましたよ部隊長。妹達の事件、研究員達は持っていかれたのに説明責任だけ押し付けられたって」
「はぁ、フェイトちゃんか……」
「別にいいじゃないですか、俺たち身内なんですから」
実はティアーユ先生と出かけたあの日、フェイトからそのことについて聞いていた。
「ま、それもそやな。９月になったら、たんまりと仕事してもらうしなぁ？」
「や、教えてくれたのはフェイトさんなんで。書類仕事はそちらに……」
「あっはっは、新人の初仕事は報連相の練習と、書類の整理って相場が決まっとるんよ？　丁度よく書類が溜まっとるなぁ」

聖天子様が逸れてしまった話を修正する。
「私は会議には出席しません。出席するのは天童閣下です。私が出席するのは下の階で行われる懇親パーティです」
この会議はこの島の最高級ホテルの最上階で行われる。警備や避難の面から見ればどうかと思うかもしれないが、やろうと思えば飛行から瞬間移動、超電磁砲や魔力砲が飛んでくる世界だ。
どこでしようが大きな差は無い。
各国の首脳陣、そのレベルの要人は最上階である５０階での会議。
ファーストレディ、およびそのご子息達は遥か下、２階での懇親パーティに出席する……ことが多い。こっちは強制じゃないからね。
でも、世界中の偉い人が集まるということは、そこは世界一狙われ易く、世界一警備が完璧な場所ということになる。親としてそこにいてほしいというのは、当然のことだ。
しかし同時に、そこは政治の場になる。懇親パーティなどと謳っていても、そうなってしまうのは避けられない。
聖天子様もさぞかし面倒だと思っているに違いない。
そう思ってたんだけど、
「……意外と楽しみなんですか？」
「そうですね。もちろん仕事なので、羽目を外してはしゃぐなんてことはありませんが……あのパーティには同年代の方もたくさん出席しますから」
ど、同年代の方、ですか……そういえば数ある創作作品のお姫さまって言うのは、何故か主人公と同じくらいの１５～１６歳が多いよね。たいして意味のある話じゃないんだけどね？　そう言う事が多いって話。
「そう、ですね。それは楽しみだ……」
関わりを持ちたいとは思っているが、ペースというものを考えて欲しい。
「どうしましたか、翔さん。あまり顔色が良くないようですが？」
俺は何でもないと告げ、話の続きを促すのだった。

「それでは、失礼します」
「はい。当日はよろしくお願いします」
「それでは我々も、この辺りで」
「ロードも、これからよろしくなぁ」
話も終わり俺は帰ろうと立ち上がる。タイミング良くウェイバーも立ち上がった。
聖天子様と八神さんに見送られ……扉が閉じられた。
帰りの案内をしてくれるシスターの後ろをついて歩く。
ずかずかと前を歩いていくウェイバー。長髪が尻尾のように揺れているのを、フードの少女と並んで追いかける形になる。
「……」
「……ひさしぶり？」
「……ああ、久しぶりだな」
「どうした。何か怒ってんの？」
「別に怒ってるわけではない」
「そっか」
こりゃ怒ってるな。怒ってるやつに怒ってるって言っちゃ逆効果か。話題を変えよう。
「桜のこと、ありがとな。色々と面倒見てくれて」
「ほとんどケイネス先生のおかげだ。俺は何もしてない」
「そんなことないだろ」
ケイネスとはうまくやれてるみたいだな。
「わかっていたことだが、お前はこっちでも暴れているようだな」
「や、むしろ暴れてたから聖杯戦争に呼ばれたのかもな」
「違いない」

長く、色々と話したいことはあるが、出口までの道のりは短い。
「この後、時間あるか？」
「済まないが、予定が埋まっている。来週からの会議に私も出席しなければならないからな。その打ち合わせだ。何せ、時計塔からの出席者は初めての事態だ」
「大変だなぁ……連絡先くらい交換しておこうか？」
「……ああ」
結局その日は連絡先を交換しただけで別れた。もちろん、後日しっかりと会う約束は取り付けたけどね。

そしてここはロキファミリアのホーム。その談話室だ。その活躍ぶりを表しているかのような綺麗な調度品が並んでいる。
そこに主要メンバー全員が集合し、思い思いの時間を過ごしていた。
武偵と言えば粗暴な人間が多いが、ロキ・ファミリアは聖王教会のシスター達の教育で礼儀作法は……まあ、完璧と言える。そのおかげでこの空間に馴染んでいる。
しかし今、そのすべてをぶち壊してしまうほどの、とんでもないものが転がっていた。
高級絨毯の床に転がっている空の酒瓶と、べろべろに酔いつぶれたベートだ。
「んぐっ、んぐっ、んぐっ」
「おい、フィン、流石に飲ませすぎだぞ」
「ははは、まあ、何かあれば僕がどうにかするさ。今日ぐらいは大目に見てあげてくれ」

それに付き合っているフィンはまだまだ余裕だ。
「そうだな、リヴェリア。許してやれ」
「だよねー？　私もわかるなぁ、ベートの気持ち」
「確かに、今日のアレは、ぷくく、カッコ悪いもんねぇ？」
「るっせえぞ！　クソアマゾネス共！」
酔いつぶれていても、自分への悪口には敏感に反応する。
「そう言う事もある。お前達２人も、油断していると足元を救われるぞ」
歴戦の勇士であるガレスは、いたってまじめに、ベートの気持ちを理解していた。戦士として弱者を許さないベートが、油断していたとはいえ正面からの戦いで簡単に負けたことに。
いや、正確には負けてすらいない。シスターシャツハのせいで、勝負自体がお流れになったのだから。
むしろそのことが、ベートのプライドを余計に傷つけていた。明らかに負けていた勝負に、情けをかけられたような気分になってしまうのだ。
ここは下手に触れないのがベスト――しかし双子のアマゾネス、ティオネとティオナは違った。
「でもねぇ？」
「普段あんなおっきな態度なのにね？」
「特に最後なんて、腰が引けたヘロヘロパンチだったもんね？」
もう我慢の限界だと、ベートは立ち上がる。足元が怪しいが、拳はしっかりと握られていた。
フィンはいつもで動けるように力を入れつつ、ベートに声をかけた。
「落ち着いてくれ、ベート」
「そもそも、アンタが言わなけりゃ俺は戦ってなかったんだッ!!!」
「だから悪かったと思って付き合ってるんじゃないか。座ってくれ」
「クソ……っ」
「みんなも、これ以上ベートをからかうのはやめてあげてくれ。特にティオネとティオナ」

「はーい」
フィンの言葉に、素直に従いそれ以上は何も言わない。
乱暴に腰を下ろすベート。
「クソ、クソ……っ！」
「まあそう落ち込むな。そもそも、油断があったのはいけなかっただろう？」
リヴェリアが隣に腰を下ろし、ベートをなだめる。
ベートとしては、他のメンバーに何を言われようとも、何ともなかった。ただ1人、少し離れたところに座っている可憐な少女に何を言われるのか、それだけが恐ろしかった。
ふらふらする頭で想像する。

「よお、アイズ。俺とあの時のガキ、番にするならどっちがいい？」
「え、何ですか、急に」
「良いから選べよ！　俺とアイツ、どっちがいいんだ!?」
「……少なくとも、あんなカッコ悪く負けたベートさんとは、ちょっと……」
「うぐっ!?」

「うぐっ!?」
自分で想像して自分でダメージを受けていた。あまりのダメージに机に突っ伏してしまう。
「ベート？　どうした？」
「……俺は、俺は……」
ぶつぶつと虚ろな目で何かを言ってた。何度問いかけても反応が無い。そのうち、眠ってしまった。
ベートを自室へ運び、会話が再開される。ベートに気を使って話さないようにしていたこと、ベートを負かせた少年についてだ。
「それにしてもさ、あの子誰なんだろうね？」
「ロキは入団希望者だ、なんて言ってたけど……」
「それは考えるまでも無く嘘だろう」

団員の誰も、ロキの適当な嘘に騙されてはいなかった。
「と、すると？　本当に一体誰なんだ、ということになるが？」
「ふむ、どうやら陛下と知り合いみたいだけど……」
フィンはヴィヴィオと翔が仲良く話していたところを見逃していなかった。
「えー？　陛下ってまだ初等科でしょー？　知り合いにしてはちょっと年上過ぎない？」
「実力もな。ベートと引き分けるとは、並大抵の事ではない」
ガレスと、先ほどは馬鹿にしていたティオナもベートの実力を認めている。少し態度に問題があるとはいえ、銃弾を飛び交う戦場を構わず疾走し、敵を薙ぎ倒すベートはロキ・ファミリアの誇る前衛の1人。
そんな相手と互角以上にわたり合う武偵をフィンが知らないというのは流石に無理があった。
「僕の方でも少し調べてみたけど、特に特徴のない武偵だね。武偵高、強襲科の1年生。ランクはC」
「ランクC？　馬鹿な」
「だろうね。意図してランクを上げていないのか、何かきっかけがあって突然強くなったのか」
「変な悪魔とでも契約しちゃったとか？」
「あの禍々しい気配……あながち間違いとは言えんかもしれんな」
武偵ランクの更新は半年に一度。魔法や超能力を使える場合は『超偵』扱いになり別の試験があるが、あの実力なら、Sは固い。
そしていくら成長期でも、半年でつけることの出来るパワーの上り幅を軽く超えている。
何か危ない手段を用いて力をつけたと思っても仕方がなかった。
「……でも」
「うん？」
部屋の隅にいた少女。ベートを笑うでもなく、気遣うでもなく、静かに聞いていた少女――アイズ・ヴァレンシュタインが口を開いた。
「もし……もしも」
「アイズ？」

誰かと会話していたわけではない。心の声が思わず漏れてしまっただけだ。
だから、フィンが問いかけても、何も帰ってこない。
「何の不正も無く強くなったんだったら……」
剣姫の呟きは夜の闇に解けていくのだった。

インターミドル　～開幕～

沢山の観光客がひしめく8月の島。それでも人通りが少なくなる夜中。警備員しかいないインターミドルチャンピオンシップの会場に、1人の男がいた。

選手たちが戦うリングの中央に立ち、値踏みするように手に持つウォッチを眺めていた。

「よし」

手のひらサイズのソレをお手玉のように放り投げ、キャッチする。

「これでいくとしようか」

《ＯＯＯ》

手に持ったウォッチを落とす。地面にぶつかるかに思われたそれは、地面に吸い込まれて消える。

「さて、うまく育ってくれよ」

そう言い残し、男は消えていった。

聖天子様の依頼はあるが、俺達にとってはこちらも大きなイベントだ。

超巨大なスタジアム。溢れかえるような人。

常に満員電車に乗っているかのような人混みをかき分け、俺達は何とか前に進む。

「あ、主様……！」

「お兄さん……！」

「はいはい、手を離すなよ2人とも。迷子になるぞ……や、それよりも」

「「わっ!?」」
俺は両手で2人を抱える。
この人混みの中、子供の2人を引っ張りまわしては、怪我をしてしまうかもしれない。それにそろそろ試合開始の時間だ。それに遅れるわけにはいかない。
他の女の子達はそれぞれ仕事を受けている。俺は聖天子様の仕事しか受けていないため、会議が始まる5日後までは暇だ。
そんな俺は、同じく特に依頼を受けていない年少組のティナ、コッコロと共に、インターミドルチャンピオンシップの応援に来ていた。
何とか予約していた席にたどり着く。
「ふぅ……」
やっと落ち着けたか。
「お兄さん、ありがとうございました」
「主様、こちらをどうぞ」
コッコロから水を受け取り、一気に飲み干した。気温と人の熱気でスタジアムの外はとんでもないことになっている。
だが、中に入ってしまえば、そこは適温だった。技術の力ってものは凄まじいものだ。
眼下のフィールドには、予選用の小さいリングが10個ほど設置されている。
「もう予選は始まってるな」
「はい。パンフレットによりますと、ええと……皆様の出番は今の試合の4回後でございますね」
「あ、お兄さん、クロさんから電話です」
ティナが端末を開いた。
空中に浮いたディスプレイに、クロの顔が映し出される。
《もしもし！　お兄ちゃん聞こえてる？》
「聞こえてるぞ！　そっちもたくさん人いるな！」
周りの喧騒に負けないように声を張り上げる。
クロは今回、ノーヴェ達を手伝い、みんなのセコンドとして登録されていた。今頃は選手用の控室で、最後のミーティングを行っている

ところだろう。
《そっちは座れた？》
「なんとかな。みんなは？」
《今から会場に向かうところ》
《みんないますよー!!》
《わー！》
　元気なことで。これから本番だっていうのに、ヴィヴィオちゃん達はいつもと全く変わりないな。
《お兄さん、ヤミさんは来てますか!?》
　ヴィヴィオちゃんがひょこっと画面に入ってきた。
「いや、一緒にはいないぞ」
　でも、まあ、来てるだろ。人混みは苦手かもしれないけど、せっかくの大会なんだから。
《おっす、翔。中に入れたんだな》
「ノーヴェさん。みんなはいけそうですか？」
《今見た通りだよ。緊張してる奴なんか――や、まあ1人を除いては》
《聞いてくださいよ！　アインハルトさん、更衣室のロッカーに頭ぶつけちゃって――》
《ヴィ、ヴィヴィオさん！　そんなこと……！》
　何だかんだ、アインハルトはこういう空気は初めてだろうからな。
《逆にコロナと綺凛は全然いつも通りだもんな》
《そうですか？　あんまり自分ではわからないです》
《私は、刀藤流の門下生の前で刀を振るうことがありますから。こういうことは慣れてるんですよ》
「そんなに緊張してて、実力は発揮出来るのか？」
《それは、もちろんです》
「じゃあ――頑張ってこい」
《はい――！》
　頷くアインハルトの代わりに、ノーヴェさんが前に出てきた。
《んじゃ、後でな。ブロック分けはメールで送っとく》

そう言って通信を終えた。
この大会、国ごとの代表がいるわけではない。極論を言ってしまえば、申し込めば誰でも出場できるのだ。
未成年限定の大会では、世界一有名と言っても過言ではないこの大会。当然、参加者は膨大な数になる。
なのでまずは、８つのブロックに分かれ、５日間かけて予選会が行われる。
目の前にある小型のステージで、１試合５分だ。ランダムに選ばれた選手と２０試合行い、その勝ち星と与えたダメージ量で競う。
その上位６３人がブロック本戦へと出場。さらにブロック本戦で優勝した８人が、決勝トーナメントに出場するという仕組みだ。
前の年に決勝トーナメントに出場したことがある場合は、シードとして最初からブロック本戦に出場出来る。
今回のみんなの目標は、多くの選手たちが目標にしているブロック本戦出場だ。
年齢的に言えば、ヴィヴィオちゃん達は最年少に近いだろう。さてさて、うまく勝ち残ることが出来るだろうか。

「分かってるとは思うが、この大会は個人戦。チームメンバーと戦うこともある。それは大丈夫だな？」
「「はいっ!!」」
ヴィヴィオたちは元気よく答える。
これは命の取り合いではなくスポーツだ。勝っても負けても恨みっこなし。正々堂々と競い合う。
ノーヴェも試合の勝ち負けで、この娘たちの仲が悪くなることは無

いと確信していた。これは本当に一応の確認だ。
「じゃあ、それぞれの参加ブロックを発表する。ヴィヴィオ、第４組。リオ、第５組。リオの５組には『砲撃番長（バスターヘッド）』のハリー・トライベッカがいるな。去年はブロック本戦２位。間違いなく強敵だ」
「倒しますよ～!!」
「もちろんそれ以外にもブロック本戦出場者がゴロゴロいる。見た感じ、５組は激戦区だな」
　リオは強敵との戦いを想像し、武者震いする。
「ヴィヴィオの４組にはシード枠にミカヤちゃんがいるな」
「えー!? そうなんですか！」
　アインハルトと綺凛もお世話になったミカヤ・シェベル。もちろん彼女も大会に出場している。
「色々とお世話になりましたけど、とうとうライバルになるんですね！」
「強いですよ、彼女は」
「頑張ります！ あ、そういえば、ミカヤさんのおかげでアインハルトさんの調子も戻ったんですよね！」
「へっ!? あ、いや、その……そうです、ね」
　アインハルトとしては、あの練習であったとこはあまり掘り返してほしくないことだった。本人にとっては良くても、他人に話すことではないのだ。
「んんっ、ま、それはそれとして、ね」
「……ありがとうございます、クロさん」
「色々あってそのことは聞いてないからね、後で詳しく教えなさいよ」
　クロが割り込んでくれたおかげで、それ以上の追求はなかった。
　ノーヴェは続ける。
「綺凛は第７組。ここのシードには去年のベスト４、ヴィクトーリア・ダールグリュンがいる。正直コイツは隙が無いな。六課の面々レベルの魔力量と硬い防御、高威力の格闘、下手に正面から闘うと一発でライフを持って行かれるぞ」
「はい。何とかやってみます」

ヴィクトーリア・ダールグリュン。通称『雷帝』と呼ばれる彼女は、古代ベルカの『雷帝ダールグリュン』の血をほんの少しだけ引いている遠縁の子孫だ。
ほんの少ししか血を引いていないと言っても、同年代では5本の指に入るほどの力を持っている。
「それでな」
少し言いにくそうに、
「アインハルトとコロナ……お前ら2人は同じ第1組だ。同じグループになっちまったな」
「大丈夫です！　アインハルトさん相手でも負けません！」
「こちらこそです」
ノーヴェの心配は杞憂だった。
「あとは一昨年の優勝者が1組のシード枠にいるな」
「一昨年の？」
「ジークリンデ・エレミア。敗戦記録は、去年の決勝トーナメントの出場辞退だけ。つまりは、戦って負けたことが無いっていうとんでもねぇ選手だ。予選で当たることは無いが、ブロック本戦じゃ間違いなくあたるぞ。気をつけろよ」
「はい！」
説明したところで時間になった。そろそろフィールドに向かわなければならない。
「それじゃあ、やっておく？」
「そうだね」
選手5人とクロは円になり、手を重ねる。
「チームナカジマ、ファイトー……」
「「おーーーーー!!!」」
「……やめてくれよ、恥ずかしいな」
――――――チャリン、チャリン
呟くノーヴェを背中に、少女たちは会場に向かった。
空まで吹き抜けになっているスタジアムに出ると、出番はすぐに訪れた。

《それでは、予選第１５試合を始めます！　表示されたゼッケン番号の選手はリングに上がって下さい!!》
「落ち着いて行けよお前ら！」
「「はいっ!!」」
アナウンスに従って、みんなが散っていく。
全員がリングに昇ると、試合が始まった。
ヴィヴィオたちの相手は、試合の相手が小さいとわかると少し嬉しそうにする。儲け試合だとでも思っているのだろう。
その認識をすぐに改められることになる。
油断からか、試合が始まった瞬間から押し込まれる。慌てて意識を切り替えても、それでも勝てない。明らかに実力が上なのだ。
やがて全員の勝利が確定した。
やはり驚異的だったのはアインハルトと綺凛だ。２人とも一撃、１０秒で試合を終えていた。
その結果に満足そうに頷くノーヴェ。
「やっぱやるな。アインハルトは少し心配だったけど持ち直したんだな。翔とうまくいったか？　そういうのは、本人は話さないからな……」
すると後ろから声をかけられた。
「ノーヴェ」
「おお、旦那！」
ノーヴェに話しかけてきたのは筋骨隆々な男性だ。浅黒い肌と獣人としての狗耳が特徴的だ。
彼は八神　はやてが所有する戦力、ウォルケンリッターの１人、盾の守護獣『ザフィーラ』だ。
シグナムと同じく、八神道場で師匠として働いている。ここにいるということはつまり、選手のセコンドということだ。
「そっちは今から試合か？」
「ああ。そうだ」
「あっ！　ザフィーラ！　久しぶり～！」
試合を終えたヴィヴィオたち５人も近寄ってきた。

「ふむ、ちょうどいい。ヴィヴィオ達には、まだちゃんと紹介していなかったな……試合が終わるまで少し待っていてくれ」
しばらくすると、次の試合が始まった。
そしてすぐに、ヴィヴィオたちに負けないほど早くに終わる試合があった。
「ミウラ、ユウキ、こっちだ！」
ザフィーラが声を張り上げると、２人の少女が駆け寄ってきた。
たった今試合を済ませたばかりだというのに、息すら切れていない。
「あっ！　ヴィヴィオさんですよね！　はじめまして、ミウラ・リナルディです！　今回は八神道場の代表で大会に出てます！」
「同じく、紺野ユウキです！」
その２人にアインハルトが反応する。
「アインハルトは久しぶりだね」
「はい。お久しぶりです」
ユウキの笑顔に、アインハルトが頭を下げた。
「お知り合いですか？」
「前に、八神さんの家にデバイスを取りに行ったときに少し。やっぱりあなた達２人は大会に出てたんですね」
「ふぅーん……」
クロの目がスッと細くなる。なるほどそういうことかと。何か理解したような顔だ。
アインハルトは、この２人がデバイスの調整に付き合ってくれた時のことを思い出していた。
趣味で開いている道場にいるには、あまりに突出した才能を持っているのが分かっていた。大会に出れば、間違いなく強敵になる予感もあった。
「２人は何組なんだ？」
「ミウラが４組、ユウキは７組だ」
「ということは……」
ミウラとヴィヴィオ、綺凛とユウキが同じ組だ。
「なるほどな」

ノーヴェはニヤリと笑う。
試合を見て、ミウラとユウキの戦い方は分かっていた。
ミウラは強襲型、ひたすら敵に近寄って攻撃する打撃選手。ユウキは恐ろしいほどの反射神経に合わせた高速の剣術。
「面白い試合になりそうだな」
「ああ。そうだな」
指導者2人は、教え子たちの雄姿を想像して笑い合うのだった。
――――――チャリン、チャリン

「試合、あっという間に終わってしまいましたね」
「なー」
ティナの言葉に頷く。
ここまでこんなに苦労してきたにしては、試合があっけなく終わってしまった。でも、一番緊張するだろう初戦をうまく超えられた。良かった良かった。
そんなことを思っていると、観客席の一角が何やら騒がしくなっている。
「何でしょうか」
耳を澄ませると、応援の声以外に良く聞こえる単語があった。
「チャンピオン……？　主様。何やら皆様、口々にチャンピオンと言っておりますが……」
「うん……」
観客席だけでなく、リングの選手も指さしていた。
「一昨年の優勝者、ジークリンデ・エレミア選手だッ!!」
「それに、ハリー・トライベッカ選手、ヴィクトーリア・ダールグリュ

ン選手……上位選手がそろい踏みだッ!!!」
　周りの人がカメラを向け始める。
「どうやら、有名な方がいらっしゃるようですね」
「見に行きますか、お兄さん？」
「や、いいよ」
　原作で何となく知っている人だ。揉めているのかバインドされてるけど、別に険悪なムードという訳じゃない。
　ライバルに会って盛り上がったって所だろう。
　だったら、無理に首を突っ込む必要はない。
　というのが俺の理由だけど、
「2人は行きたいか？」
「私、あの人達知らないですから」
「はい。特別、見に行きたいということはありません。主様にお任せします」
　周りにとっては有名人でも、俺達にとっては知らない人だしな。そこまで興味をそそられるわけじゃない。
　やがて係員が来て、騒ぎを沈めた。有名人の方々は出口に向かっていく。これ以上騒ぎが広まると予選が進まないからな。有名になるってのは大変なもんだ。
　それから１０分もすると、大会は再開された。
　皆の試合は終わってしまったけど、俺は試合に興味があった。正確には、試合に出ている選手に興味があった。
　原作にはいない、違う作品のキャラクターが混じっていないかという調査だ。そのキャラクターを中心に事件が起きるかもしれないからな。
　まあ、パンフレットやネットで調べても良いんだけど、予選の段階だと人数が多すぎて面倒だった。
　そういうキャラクターって上の大会に出る可能性が高いし、予選が終わってからでも良かったんだけど……ついでの調査ってことで。予選全部を見れるわけでもないからな。
　この島のイベントを楽しみつつの行動だ。

「あ、ルーテシアだ。普通に勝ったなアイツ。やるもんだ」
相手が可哀そうになるくらいの試合だった。得意の召喚獣を使わなくても、全然いけるんだな。後方支援だけじゃないってことか。
そう思いつつ見ていたが、結論、1日目は特に収穫はなかった。

インターミドル　～注目選手達～

ここは学園島ではなく遠く離れたヨーロッパの、お屋敷と言っても過言ではない、むしろそう呼称しなければいけないほどの豪邸。
屋敷の主は１７歳の少女である。
今は執事のエドガーに午後のティータイムの準備をさせているところだ。
「そういえば、学園島を騒がせていた自称覇王。ぱったりと話を聞かなくなりましたね」
「まったく。わたくしが学園島に赴いたときに、ついでに叩き潰して差し上げようと思ってましたのに」
この少女、執事にティータイムの準備をさせている最中に、椅子に座りながらダンベルを持ち上げていた。
少女にしてはしっかりとした筋肉のついた腕だが、魔力のサポートがあることも間違いなかった。
いずれにしてもダンベルは、この場にそぐわないものである。格式を重んじるような嬢様なら、存在すら許さないだろう。
そんな異物を、エドガーは完全に受け入れている、
「今年は聖王陛下も１０歳になられましたので、参加なさるようですよ。もしかすると、その覇王の娘も出場するかもしれませんね」
「それはいい機会ですわね。旧ベルカ最強覇者は、聖王でもなく『雷帝』ダールグリュン」
立ち上がり、ダンベルを持った腕を腰に当てる。
「その現実を、雷帝の血を（ほんの少しだけ）引くこのわたくし！ヴィクトーリア・ダールグリュンが叩き込んで差し上げますわっ!!」
背後でタイミングよく雷が鳴る。雷帝の血を（ほんの少しだけ）引いているだけあって、雷に愛されているのかもしれない。
「今年は勝てるといいですねぇ。去年は決勝前に負けましたから」
「……それは言わなくていいですから。さっさと参加申請書を出してきなさい！」
顔を赤くしつつ、ティーカップに口をつけるのだった。

日本本土にも武偵高校はある。ここは日本の名古屋。名古屋女子武偵高校である。
なんと、生徒の８割がへそ出し制服を着用している。とんでもない学校だ。
校風として、肌が出ているほど『拍』が付くのだ。『私に防弾服は必要ない。闘っても撃たれないからだ』という意味があるからである。
生徒によっては、スカートもギリギリの長さにしている者までいるのだとか。そこまで行くと半分痴女である。
用紙を書いている赤髪ポニーテル少女も、例に漏れずへそ出し制服。スカートの長さは平均だ。
そんな少女に、３人の少女が近づいてくる。それぞれサングラスをかける少女、マスクで口元を隠す少女、上は胸元ギリギリなのにスカートは足首まである少女だ。
全員そろって、一昔前のスケバン少女のような恰好をしている。
「あ、リーダー！」
「それ、大会の参加申請書ですか？」
「おうよ、そろそろ締め切りだからな。渡航許可書と一緒に提出すんだ」
机の上で紙を整え、席を立つ。
「いやー、今年こそ、リーダーが優勝ッスよ！」
「去年は惜しかったですもんね！　ブロック本戦決勝で、あんな変なお嬢様に当たっちまうなんて……」
この少女、ハリー・トライベッカは去年の大会でヴィクトーリアと対戦していた。それはもう壮絶な戦いを繰り広げたのだ。

結果として、お互い相手のライフを削りきれず、ラウンドを使い果たし判定による勝敗になった。
負けたのはハリーだったが、この試合で力を使い果たしていたヴィクトーリアも、次の試合で負けることになる。
とても思い出深い試合だったため、思わず口走ってしまったが、
「バカ野郎!!　テメェ、リーダーが気にしてることを……!」
「え？　あ！　いや、でも……!」
ハッとして口を抑えるがもう遅い。
顔を引きつらせて、ハリーの背中を見る。肩が震えていた。鼻をすする音も聞こえる。
「ほら見ろ！　泣いちゃったじゃねーか!!」
「ス、スンマセン!!　本当にスンマセン!!」
ぺこぺこと頭を下げるが、ハリーはそれを手で制した。
「いいんだ！　泣くほど悔しい気持ちを胸に！」
涙を拭いて前を向く。
「オレぁ頑張る!!　今年は負けねぇ!!」
拳を握って、そう宣言した。

それから少しの時が立ち、翔が妹達の事件解決に奔走している頃、ヴィクトーリアは自室のトレーニングマシンを使って日課のトレーニングをしていた。
先祖から受け継いだ屋敷と最新のトレーニング機器。相変わらずのアンバランスだ。
「お嬢様、大会の参加通知が参りましたよ」
「開けてちょうだい」

「そう仰ると思ってすでに開封を。お嬢様は第７組のシード枠ですね」
ヴィクトーリアにとって、自分がどの組にいるのかなど、どうでもいいことだった。
祖先の雷帝が最強であると自負しているのだ。誰が相手になろうと粉砕するだけなのだ。
それ以上に気になるのは、大会で知り合ったライバルたちのことだ。
「ジークは出てる？　……それからあの不良娘は？」
「出場されています。シード枠で第1組です。ジークリンデ選手は去年途中辞退していますからね。おそらく前々回大会の優勝者ということを考慮されているんだと思います」
注目選手の途中辞退というのは、そのくらい大きな出来事だった。本来なら、シード枠を取り消されてもおかしくはなかった。
「そう……出てるならいいのよ。あの子はあの子で、色々と心配だったから」
ヴィクトーリアは飲み物を受け取って飲み始めた。
「ハリー選手は第５組ですね」
「よォし！　ちゃんと出てるのね！　あのポンコツ娘との決着は決勝ブロックでつけるのよ！」
「勝ち抜いていかないといけませんねぇ」
メラメラと闘志を燃やすヴィクトーリアだった。

ハリーは背中に取り巻きの1人を乗せ、そのまま腕立て伏せをしていた。魔力を使わないでのフィジカルトレーニングである。

背中に乗った取り巻きは端末を操作していた。そこには大会の参加通知のメールが表示されている。
「うーん……リーダー、今年はシードになれませんでしたねぇ」
「ま、しゃーねーよ。シード枠は去年の成績で決まってるからな」
喋っている間も、規則正しい筋肉トレーニングは止まらない。
ゆっくりと胸が地面につくギリギリまで下ろし、持ち上げる。
「そうッスよねぇ。去年はシード枠だったのに……」
「あ、あのヘンテコお嬢様は第７組かぁ。今年は勝てますかねぇ」
「お、おい！　だからお前らは……！」
いつもいつも口が軽い取り巻きが注意されるが、口に出してしまったものは呑み込めない。
このパターンはいつもの流れだ。
「まあ、あのヘンテコお嬢様は強かったからな」
ハラハラと見守っていた取り巻き達だったが、ハリーの静かな声に目を丸くする。
「また戦えるようなら、今度こそきっちりブッ倒すけどな。あんなグダグダの泥仕合じゃなくて、白黒はっきりつけようぜって。あいつもそう思ってんじゃねーかな」
去年の大会でヴィクトーリアに負けてしまったハリーは、予選から闘っていかなければならない。
試合も近く、集中しているハリーにとって、その程度でメソメソするような精神状態ではなくなっていたのだ。
「「(やっぱり、ウチのリーダーはカッコいいな!!)」」
取り巻き達の心は一致するのだった。

ヴィヴィオたちが予選で汗を流している時、ヴィクトーリアは観客席でとある人物を探していた。
「見つけた――――」
長そで長ズボンの黒のジャージ。フートまでかぶっている。体の凹凸からかろうじて女性であることは分かるが、それ以上は何も分からない。
それでも、隠しきれない強者の空気がある。
その少女は売店で売っているポップコーンを胸に抱えて、止まることなく口に運んでいた。
それを見たヴィクトーリアはため息をつく。
こっそり後ろから近寄り、フードを取った。
「んあ?」
今まさに口に運んでいたポップコーンが、ポロリと零れた。
フードで押さえつけられていたボリュームのあるツインテールが解放された。
「ヴィクター?」
「久しぶり、ジーク。そんなにフードを深くかぶってちゃだめよ。試合、見にくくないの?」
「目立つの、嫌やもん」
そう言ってまたフードをかぶろうとする。
この少女はジークリンデ・エレミア。インターミドルチャンピオンシップ、前々回大会の優勝者である。
前回大会はとある事情で辞退してしまったが、負けなし最強の選手であることは間違いない。それがこんなところに座っていることが分かれば、それはもう騒ぎになってしまうだろう。
静かに試合を見たいと思っていたジークにとって、それでは困るのだ。幸い、観客は試合に熱中しているため、今の一瞬ではバレていない。
「それに、またこんなジャンクフードを……」
「あー!」
フードをかぶり直す隙をついて、ポップコーンのカップを取り上げ

てしまう。
「ちゃんとしたご飯は食べてるの？」
「食べてるよ。それは偶々なんよ！」
ヴィクトーリアもずっと取り上げておこうとは思っていない。隣に座ってあっさり返した。
「はぁ……でもよかったわ。試合が始まる前にあなたに会えて。今年はどう？　最後まで戦えそう？」
「……去年はゴメンやった。あんな風に欠場してしもうて」
「そんなこと別にいいのよ。あなたが元気で、今年の大会に出るつもりがあるんだったら、それで良いの。あなたは私の目標なんだから」
「前から言ってるやん。ウチは目標にしてもらうような選手とちゃうよ……ウチなんかよりも、ヴィクターや番長たちの方がずっと凄い」
「それでも私は好きよ。あなたの戦技も強いところも」
「もう、恥ずかしいからやめて」
言っているヴィクトーリアの方も恥ずかしくなってきた。話が変わる。
「それで、今年の選手はどう？　予選はずっと見てるんでしょ？」
「ん、面白そうな娘は何人かいたよ」
開会式が終わってからずっと、ジークは予選の試合を見ていたのだ。
ライバルを観察しているということもあるが、純粋に強い選手を見るのが好きなのだ。
具体的な話になる……前に、騒がしい、ヴィクトーリアにとっては憎たらしい声が聞こえてきた。
「あーあ、やっちまった。すっかり寝過ごしちまったよ」
「ウチらが起きれたらよかったんですけどねぇ」
「全員そろって寝過ごしましたからね！」
「とりあえず、そろそろ出番ですから行かないと……」
３０分ほど前に会場に到着したハリー一行だ。
大会当日だというのに寝坊したせいで、開会式には出ることが出来なかった。

出なくても別にペナルティはない。いくら会場が広いと言っても、世界中から集まった参加者全員が整列することは出来ないからだ。
予選に出る選手は、指定された時間に指定されたリングの前に居さえすればよい。
「アホのエルスが生意気に開会宣言するって聞いたから、笑ってやろうと思ってたのによ、と……お？」
「な……！」
偶然にも、２人は出会ってしまった。
「ポンコツ不良娘！　どうしてあなたがここに!?」
「なんだ、ヘンテコお嬢様じゃねぇか。あれ？　お前、予選からのスタートだっけ？」
「ち　が　い　ま　す　わ　よ！　わたくしは第７組のシード枠!!」
「あー？　そうだったっけかぁ？」
わざとらしくとぼけるハリー。
「こちとらお前の事なんざ眼中になかったからなぁ。見落としてたかもしんねぇや」
取り巻き3人が『はじまった』と肩をすくめている。
お互い、誰よりも相手を意識しているのだ。忘れるわけがない。
「貴方こそ、確か予選からよね？　そのまま敗退してくれると助かるわ……っていうか負けちゃって？　あなたと戦うの面倒くさいからっ！」
いつものお嬢様口調が消え去り、年頃の少女の様に言い返すヴィクトーリア。
「んだとテメェ!?」
顔を近づけ、火花を散らせる。口角を怒りでひくひくと痙攣させている。
「あー、ヴィクター、番長……」
ジークが注意しようとするが、すっかり『温まった』２人にはそのボリュームでは聞こえない。
「「っ!?」」
次の瞬間、２人の体に光の鎖が巻き付いた。拘束用のバインド魔法

だ。
「なんですか！　大会上位選手が場外でケンカなんて！」
２人にバインドをかけたのは、眼鏡をかけた生真面目そうな少女だ。
「会場には選手のご家族もいるんですよ！　インターミドルがガラの悪い子たちの大会だなんて思われたらどうするんですか！」
この少女の名前は『エルス・タスミン』。ハリーが『アホのエルス』と呼ぶ少女だ。この島の武偵高の生徒で、去年の大会ではブロック本戦準決勝で、ハリーと熱戦を繰り広げた。
その生真面目さから、今大会の開会宣言の選手にも選ばれていた。
この行為も、そのまじめさからくる行為だったが、
「そやけど、リング外での魔法の使用もどうかと思うんよ」
おずおずと手を挙げてジークが主張する。
「え？　ああっ!?　も、もしかして、チャンピオン!?」
その大声が波紋となり、どんどん広がっていく。
始めは周りが、それが通行人に。みな口々に話している。
ジークはフードを深くかぶり、じっとしている。余計な動きを見せず、嵐が過ぎ去るのを待つ姿勢だ。
その様子を見たハリーとヴィクトーリアは、目線だけでやり取りをする。
「騒ぎになるのもめんどくせーしな。ま、ここはおとなしく退散するかね。試合に遅れちゃいけねぇや」
「そんなに簡単に!?」
「まったくよ。どうしてあなたに会うと、こんなにグダグダになっちゃうのかしら」
「こっちも!?」
ハリーは力任せにバインドを引きちぎり、ヴィクトーリアは魔力を放出し、バインドを粉々にする。
そんな簡単に抜け出されてしまうのは、エルスにとっても面白くない。
真面目と言っても、勝利を目指す選手であることには変わりない。

1年間鍛えた筈のバインドをこうもあっさりと抜け出されてしまうとは。
「お、そういやアホのエルス」
「アホの!?　何ですかその言い方は！　というか、私の方が年上です！　出来れば敬語を――――」
「はいはい、そのうちにな」
そのまま立ち去るのかと思われたハリーだったが、足を止めて、
「お前と俺は同じ組だよな。まあ楽しくやろうぜ」
「――――去年の雪辱は果たしますからね!!」
「はっ！　やれるといいなぁぁ。くれぐれも、予選で落ちるんじゃあねぇぞ。今年は初参加組もつぇぇからな」
今度こそ、立ち去っていくのだった。
その場に集まっていた人々も、徐々に散っていく。
大会の予選はこれ以外にトラブルはなく、進んでいくのだった。

プチ同窓会

大会の予選も今日が最終日。おそらくは島に一番人がいるであろう時期だ。聖天子様に依頼された護衛の初日は明日に迫っている。

それはつまり、例の偉い人たちの会議も明日に迫っているという訳だ。

そんな前日の夜。俺達――俺とアルトリアとオルタは、とある人物に会う約束を取り付けていた。

「いらっしゃませー！　何名様ですかー！」

「あー、や、待ち合わせなんですけ、ど……」

俺は席を見回す。

家族連れがいつも以上に目立つファミレス。普段は島にいない人の割合が多くなっているんだ。単純に観光に来た人もいれば、多少ケガしている子はインターミドルに出場しているのかもしれない。

その中で、明らかに場違いな人物を見つけた。

わざわざテーブル席に1人で腰かける長髪の男性。まだ何も頼んでいないのか、そのテーブルにはドリンクバーすらない。

不機嫌そうに腕組みして眉間に皺を寄せる姿は、注文を聞きたい店員さんも、周りのお客さんも、とても居心地悪そうにしている。

「あそこです」

俺達は速やかに案内された。

近寄ると、その男性は目を開けた。

「おっす。遅れてすまんな」

「来たか――はい……？」

待ち合わせしていた人物、ウェイバー・ベルベット――通称ロード・エルメロイ2世は、あっけにとられた顔で俺達を迎えてくれた。

この前聖王教会で連絡先を交換してから、何とか空いている時間を探した結果、こんな前日のタイミングになったのだ。

俺もウェイバーも当日の打ち合わせ帰り。夜ご飯を一緒に食べる時間くらいは取れるということで、集まることに成功した。

どうせだったらアルトリア達も連れて行こうと思い、合流していた

ら少し遅れてしまったのだ。
「お、おま、え。それ……」
俺が２人のアルトリアに挟まれる形で、席に座る。
周りからの視線が、一層強くなったような気がする。
大柄の長髪男性に、双子と見間違うほどよく似た美少女２人。そして特に特徴のない男子高校生の俺。
傍から見れば、訳の分からない組み合わせだろう。
「すまんすまん。やっぱりちゃんと言っておけばよかったな」
ウェイバーはぱくぱくと口を開閉させている。言葉を出したくても、出せないでいるみたいだ。言いたいことがありすぎて、逆に空気しか吐き出せていない。
それほどまでに、俺の隣にいるアルトリア達が衝撃的だったんだろう。
そりゃそうか。
俺だって、こっちの時代に帰ってきてからのガチャですぐさまこの２人が来たときは、驚いたなんてもんじゃなかったからな。
それこそ、運命めいたものを感じた。
それをアルトリアに言うと、顔がへにゃりとするのを我慢しようとして出来ないのが可愛い。
それをオルタに言うと『当たり前だ』などと言いつつも目を合わせてくれなくなる。やっぱり可愛い。
「惚気るな!!」
「いや、本当なんだって」
ウェイバーにこの２人がここに居る経緯を説明していたが、いつの間にか余計なことを言っていたみたいだ。
とりあえずウェイバーには、こっちの時代に戻ってきた時にこの２人が突然召喚された、という説明をしておいた。
女の子の召喚もサーヴァントの召喚も同じようなものだし（全然違う）、ウェイバーには何とかこれで納得してもらうとしよう。
「……お前、グレイについて何か知ってるのか？」
「いや、別に？　まあ、そんなに人に慣れてない感じだったし、今回は

いないほうがいいかなって。ウェイバーも、その方がしゃべりやすいだろ？　素が出せるっていうかさ」
「それはそうだな……」
俺も事件簿のストーリーはあまり知らないんだけど、グレイとアルトリアは混ぜるな危険。かどうかは分からないけど、何が起こるのか分からないのは否定できない。
一応ウェイバーが1人で来ているかを確認してアルトリア達のことは誘ったから、その辺りの対策は万全だ。
今回は、昔からの知り合いとの集まりってことで。
「そもそも何を触媒にしたんだよ……」
「そんなものは、私達の愛に決まっているだろう？　愛の力が、私たちを引き寄せた」
「よくも恥ずかしがらずに言えるな！」
流石に俺も恥ずかしくなる。
「あながち間違ってはいないかもしれんぞ？　実際翔は、私達が生涯守り続けた純潔を奪った男なんだからな」
オルタも、そういうことを公共の場で言うんじゃありません。周りの目があるでしょうが！
「ま、まあ……ぁぃ、かは分かりませんが、我々はここにいます。しかもあの時の、聖杯戦争の記憶を持ったまま」
「サーヴァントは基本的に、前回の召喚の記憶を持つことは無い。確かに、何か特別な事情で召喚されたようだが……」
アルトリアの場合は、その存在が特別だからな。
まあ、それを抜きにしても、いくら考えても答えなんて出るもんじゃない。
だって、この2人は魔術的に召喚されたんじゃなくて、俺の授かった謎能力によってこの世界に来たんだからな。
実際どんな基準で召喚される女の子が決まっているのかは分かんないんだよね。それこそ神のみぞ知るってところか。
いや、でも、もしかするとウェイバーなら、俺の能力の秘密が分かったりするのかもしれないな。

「確かに、目の前で起きている事象を否定するわけにはいかないが……」
それでも納得がいかないのか、眉間の皺がますます深くなり、腕組みをしながら俺たちを睨んでいるロード。
「ま、まあ、そんなに難しく考えなくてもいいんじゃない？　今のところ、何か起きたわけじゃないんだし？」
「何を言っている。何の前触れもなくサーヴァントが召喚されるわけがない。今なくても、今後起きるかもしれん。これはきっと何かの予兆が……」
そんなことをぶつぶつと呟き始める。
アルトリア達と会わせただけでここまで大ごとになるとは。
「翔の言う通りですよ。そんなに大したことじゃありません。案外よく起きているかもしれないですよ？」
アルトリアの声にも、
「伝説のアーサー王がそんなホイホイ召喚されてたまるか！」
「いえ、私たちはアルトリアですが？」
「人の名前を間違えるな」
「そ　う　じ　ゃ　な　い　だ　ろ　！」
すっかりウェイバーに戻ってツッコミを入れている。ツッコミを入れたくなる気持ちもわかるが。
しばらく肩で息をしていたウェイバーだったが、
「……まあいい。いくら話しても、この場では結論が出ないことだ。そのことについては、こちらで調べておく」
「あ、うん。別に無理して調べる必要ないからな？」
多分何もないから、本当に気にしなくてもいいんだけど……
座るだけでひと悶着あったが、ようやく料理を注文できた。
食べる最中でも、おしゃべりは続く。
「歴史が変わっていた、だと？」
「ん、まーな」
俺はミラノ風なドリアを口に運びながら答える。
そこまで昔の記憶じゃない。聖杯戦争からこちらの時代に戻って

きた時、それまではいなかったはずの桜が、俺の家に当たり前のようにいた。
「つまり、お前がサーヴァントとして召喚される事象は、本来の歴史にはないことだったと？」
「本来の歴史って言い方はどうかな。俺の知る限りの事実はそうだったってだけで、別に絶対に正しい歴史ってのが決まってるわけじゃないだろ？　知らんけど」
「それもそうだが……だがな。歴史改変か……私たちが思っている以上にあの聖杯戦争は歴史の分岐点だったのかもしれん」
「ふむ、と、言うと？」
　運ばれてきたパスタに箸をつけずに、ウェイバーは俺に講義してくれる。
「お前、召喚される前までは、聖杯戦争なんてものには縁もゆかりもなかったんだろ？　事件の資料として知っているだけで」
「まあな」
　流石に知っているだけでは、縁にはならないだろう。
「だとすれば、やはり何かしらの意図があったと思うべきだ」
「意図ねぇ……」
「大した縁も無く、例外クラスとして呼ばれる。ルール外の事には必ず何か原因がある」
「抑止力の仕業だったり？」
「もちろんそれも否定できない」
　単純に原作のイベントだからって考えていた俺には、全くない思考だったな。原因があるとすれば、やっぱり俺をこの世界に引き込んだ『存在X』何だろうか。
　だとすれば、そいつの意図で緊急クエストが出てるのか？　タイムベルトも、あの時以外は起動しないし。
「それで、あの聖杯戦争の後、どうなったんだ？」
「桜からは聞いてないのか？」
「なんだかんだで聞くの忘れちゃって」
　それよりも予定が立て込んでたってこともあるけど。

「まったく……」
ウェイバーは呆れつつも話してくれる。その時の記憶があるアルトリア達もだ。
「言うまでもないが、あの時の戦いで聖杯戦争は事実上終戦になった」
そりゃそうだ。あの時点で俺たちの陣営のサーヴァントしか残っていなかった。ライダーが面白半分に戦いを挑まなければ、あれ以上の戦いが起こることは無い。
さらに言えば、マイティブラザーズで分身したオルタの魔力は聖杯に溜まっていた分が使われていた。
そのおかげで、（ランサー、アサシン、キャスター、バーサーカー、アーチャー）5騎のサーヴァントを倒したのに、（セイバー、セイバーオルタ、ライダー）3騎のサーヴァントが存在している状態になっていた。
「そのおかげでアイリスフィールは動ける状態でしたが、長旅が出来る状態ではありませんでした」
アルトリアが続ける。
遠坂家（遠坂時臣）は弟子（言峰綺礼）の裏切りに遭い、その弟子は切嗣さんとケイネスさんに倒された。
間桐臓硯は俺に倒されて、アインツベルン家は特に監視をつけていない。監督役だった教会も、共謀していた遠坂が消滅し、アクションを起こす理由がなくなった。
つまりこの時点で、審判が存在していない。
「我々は二手に分かれました。一方は冬木に残り、動けないアイリスフィールを守りながら聖杯の解体に取り掛かるチーム」
「もう一方は、切嗣さんの娘さん……イリヤちゃんをアインツベルンのお城まで迎えに行くチームだ」
「なるほどね」
俺が出来なかった後始末はそんなことになってたのか。
「と言っても、迎えに行ったチームは切嗣さんとセイバーオルタだけだったがな」
「それでも十分だろ」

聖杯の泥に呪われていない切嗣さんと、サーヴァントであるオルタ。戦力としては十分だ。
「事実、そうだったな」
「向こうは向こうですんなりとイリヤちゃんを渡したわけじゃないんだろ？」
「ああ。聖杯を解体することを伝えれば、絶対に渡さないだろうとあの男――切嗣が言ったからな。かと言って、こっそり攫ってそのままでは後顧の憂いが残る。ゆえに、正面から叩き潰した」
「うわー……」
オルタは何ともないように言うが、それってつまり。
「……まあ、それでアインツベルン家は事実上滅ぶことになった」
「滅ぼしちゃったかー……」
相当暴れまわったらしいな。
「それで解体チームだが……そんな短期間で解体が進むわけがない」
「そりゃそうだ」
「だから私たちはずっと……散歩したり、ゲームしたりしてたな……」
「おい」
懐かしむように目を細めるウェイバー。
「そうですね……イリヤスフィールが日本に来てからは、旅行にも行きましたよね」
「ライダーの戦車に乗ってなー……」
「何をやっているんだ君たちは」
「や、もちろんただ遊びに回ってたわけじゃないぞ？　私だってケイネス先生の手伝いをしてたんだ。その時間の合間を縫ってだな……」
積もる話が多すぎて、時間になってしまった。
全てを聞くことは出来なかったが、その後の話はまた次回に持ち越されることになった。

「お疲れー、明日も頑張ってなー」
「お互いにな」
ウェイバーと別れ、店の外。俺の端末が震えた。
「ん？」
「どうかしましたか？」
「や、クロからメールが……」
なになに？　遅くなりそうだから迎えに来て欲しい？
あー、そういえば、今日は大会に出てるちびっ子組が、予選突破を祝してファミレスでプチ祝勝会してるんだっけ？
初日の様子を見てて、まあこれは行っただろうなって思ってたからな。予選は気にしてなかったな。
「ちょっと行ってくるな」
迎えに来て欲しいって言うなら行かなくては。
「そうか。われわれは先に戻っているぞ。あまり遅くなるなよ」
「そうですね。くれぐれも夜遊びをしないように」
「……はいはい」
すこし含みのある言い方の２人にそう返し、指定された場所に走るのだった。

「２人とも、おめでとう」
「「ありがとうございます!!」」
目の前のアインハルトと綺凛は満面の笑みだ。

呼び出された俺は今、アインハルトの家に来ていた。プチ祝勝会のお店ではなく、ここに来いと指定があったのだ。
最低限の生活用品に、沢山のトレーニング機器があるのは、本当に『らしい』部屋だと思う。未成年の女の子が1人で住むにはかなり大きい部屋だ。
さっきも言ったとおり、俺はそこまで熱心に予選は見ていなかった。それは心情的に、まあ余裕だろ、という考えがあったこともある。
だが聖天子様の護衛の準備があったため、ということも大きな要因だった。無事、全員揃って予選を突破出来たのは良かった。
晩御飯は『予選突破おめでとう』と、『明日からのブロック本戦頑張ろう』を兼ねて、ノーヴェさんがお店に連れて行ったらしい。
それも終わり明日から本選。一度でも負けたら終わりの試合だ。ここからは気を抜けないはずだが。
「……それで？　どうしてそんなに直接会いたかったんだ？」
こんな夜遅くに、わざわざ家に呼ぶなんて。
「それは今から2人が説明するわよ」
実はここにはクロもいる。何やら不満そうな顔をして、仏頂面になっているが。とりあえずは呼び出された理由を聞かないと。
「別に普通の事なんじゃないの？　直接祝って欲しいっていうのは。なんて言っても、2人はお兄ちゃんの『彼女』、なんだし？」
「……」

確かに仕事のせいで、おめでとうの言葉は電話越しになった。
それはもちろん申し訳ないと思う。でも、あんなに強く今会いたいと言われると、どんな理由があったのか気になってしまう。
ただ、直接祝ってもらいたい、ってだけじゃないよな。
「私たちは頑張りました」
「予選を勝ち抜いて、本戦出場です」
「もちろんおめでとう」
それはもう何度でも言うよ。
「頑張ったんですよ」

「うん」
「ですから、頑張ったんです」
「……おめでとう」
頑張ったのは十分に伝わってくる。全編を通して楽勝な試合展開だったとは聞いているけど、それでも頑張ったものは頑張ったんだろう。
「だ、だから、ですね」
２人は見合った。
「ご」
「ご？」
「ご褒美が、欲しいです……っ」
「ダメですか……？」
「ああー……」
俺はちらりとクロを見た。
「別に私の方を見なくてもいいんじゃない？　するかしないかを答えればいいんだから」
「……そうですね」
するかしないかって、もう１つしかない。そして答えも、１つしかなかった。

予選突破のご褒美　前編（アインハルト、綺凛、クロ）

俺は下半身を出し、恐れ多くもアインハルトがいつも体を休めているベッドの上に腰かけていた。

天にも昇りそうな極楽な気分で改めて部屋を見回す。

もちろん何か変化があるわけではない。あるのはたくさんのトレーニング機器。それと食事をするためのシンプルなテーブルだけだ。

壁にはダンスやバレエの教室で見るようなアレ。壁全体が大きな鏡になっているアレだ。流石に壁全面が、とはいかない。アインハルト1人が、おそらくはフォームの矯正で使っているんだろう。

「っ、ぁ……」

ぴりりとした刺激が下腹部から背中を通り、頭を突き上げてくる。

「こーら、ドコ見てるの、お兄ちゃん」

クロの咎める声に、俺は視線を下ろす。

「んっ、ちゅ、れぉ……」

「れろろ、んちゅ、えお、んっ……」

反りあがった俺の肉棒を、跪いたアインハルトと綺凛が一心不乱に舐めている。2人とも服を脱ぎ下着姿。

近しい年齢だと思えないほど、その肉体の成熟度には差がある。

綺凛の今にも零れそうなほど大きく実ったおっぱい。水色のブラに包まれ、窮屈そうに揺れている。腰や太もも周りの肉付きも、この場の女性の中では一番だ。パンツも柔らかく食い込んでいるのではなく、しなやかな筋肉によって持ち上げられていた。

それとは反対に、まだまだキャミソールだけでも十分なアインハルト。押し上げるカタマリが無く、布がゆらゆらと揺れている。だが俺は知っている。あのキャミソールの奥には、年相応のふくらみがあり、その頂点は彼女のお気に入りだということを。

そんな美少女2人が、ピンク色の舌を突き出して、俺の肉棒を必死に奉仕している。その光景だけで、チンポに快楽が蓄積していく。

「まったく、お兄ちゃんは。いつの間に2人をこんなにメロメロにし

てたの？　そりゃまあ、いつかはこうなるって思ってたけどさ」
後ろにはクロがいる。俺からは見えないが、それそれは妖しい笑みを浮かべている事だろう。
「ま、まだ言ってなかったっけ？　ほら、前に泊りがけで２人の特訓に付き合った時に……」
「ふーん、そうなんだ。特訓って『そういうこと』の特訓だったんだ？」
「ん、くっ」
背中に張り付き、その平坦な肢体を密着させてくる。それだけではなく、俺のシャツをまくり上げ、乳首を弄るおまけつきだ。
「どうしたのお兄ちゃん。もしかして、乳首弄られて感じちゃってる？　女の子みたいに？」
「んなわけないだろ……！」
「そうだよね～、後輩２人が頑張って奉仕してるのに、こっちで感じるなんてヒドいもんね～？　んっちゅ」
「う、あ……！」
耳に粘着質な音がゼロ距離で響いてきた。耳に舌を入れられ、かき混ぜられる。
決して、決して気持ちいいわけではないが、片耳の情報がすべてクロの舌に支配されている。
わざわざ唾液を溜めていたのか、耳全体に粘液がまぶされ、ざらざらとした舌先が俺の耳の中に侵入しようとしてくる。
直接の刺激でなくても、気分という官能は下腹部に血液を集める要因になる。
「翔さん、おちんちん、びくびくしてます……」
「ふぁい。あ、先っぽに、んっ」
「ホントだ。んっ」
２人の舌が、先走りの浮き出た亀頭を交互に舐めてくる。奪い合うように我先にと。
実際の快楽だけではなく、目の前では２人の少女が舌を突き出し、年に似合わない表情しているのは本当に目の毒だ。
後ろでは小悪魔のような少女がくすくすと笑い、２人にはまだ理解

出来ないことを、拙いながらも行っていた。
あー……このまま出せそうだ。
「……アインハルトさん、少しいいですか？」
「え？　綺凛さん？」
「ん、しょ……」
ぷち、と、音がする。
窮屈な戒めから解放された綺凛の双丘。見事な谷間が無くなった代わりに、２つのピンク色の果実が顔を出す。
その双丘が、俺の肉棒を挟み込み、圧迫する。
「き、綺凛……!?」
「ん、ど、どうですか？　気持ちいいですか、先輩？」
自分のおっぱいを両側から押し込みながら、綺凛が首を傾げている。
膣中とは全く違う、ふわふわの肉に包まれる。ヒダがない代わりに、何処までも沈み込むような柔らかさと、その中にあるしっかりとした弾力だ。
「お前、そんなの何処で……」
「そういう事は聞いちゃダメですよ」
「うっ」
ちょこんと顔を出していた亀頭が咥えられ、強制的に黙らせられる。
ぬろり、とした湿った熱が満ちている口内に包まれ、鈴口から先走りが漏れた。
「ここにょまま、ひまふね？　んっ、ふっ、ふっ、ふぅっ」
ゆさゆさと、乳房が揺すられる。初めてだからか上下運動とは言えないが、チンポ全体を優しくマッサージされているような心地よい感覚だ。
咥えられている亀頭は奥まで呑み込む必要がないせいか、丹念に舐めほぐされていく。決して強すぎるという事も無く、高まっていた性感もあり、緩やかに射精へと導かれていく。
チンポが痙攣しているのがわかる。

睾丸から飛び出していきたいと、肉棒の出口から出ていきたいとノックしているみたいだ。
「綺凛、そろそろ出そうだ……」
「はひ、我慢しないれくらさい」
元よりそのつもりだ。睾丸が脈動し、白濁した粘液がどんどん駆け上ってくる――
――びゅくっ、びゅるうっち、びゅぐぐっ。
「うっ、くっ……」
「っ!? ぷはっ!?」
喉奥に吐き出されたことに驚いたのか、綺凛は口を離す。
それでも、白濁液の噴水の勢いは弱まらない。肉棒を挟む上気したおっぱいをどんどん染めていく。
我先にと鈴口からあふれてくる精液を、綺凛は興味深そうに見ていた。
勢いよく出ていたそれは10秒ほどで打ち止めとなった。
「わー……いっぱい出ましたね。私のおっぱい、そんなに気持ちよかったですか？」
綺凛は満足げに胸に付着したモノを掬い取っている。
「わー……、男の人のって、こんななんだ。わー……」
「……ずるいです、綺凛さん。そういう事、私出来ないのに……」
その横ではアインハルトが不貞腐れていた。
確かに、アインハルトのボリュームでは少し難しいだろう……いつかのクロのように、大人モードになれば話は別かもしれないけど。
「えへへ、ごめんなさい。ちょっとやってみたくなっちゃって。でも、気持ちよかったみたいでうれしいですっ」
「……そりゃもう、格別だったよ」
「うううぅ～！」
やっぱり綺凛は色々と調べているみたいだ。自分の魅力的な体にも気が付いているのかもしれない。一度の本番を経て、弾けてしまったのかもしれない。
アインハルトにはそういう様子は感じられない。前、快楽でいじめ

ながら聞いた話では、前見た俺と綺凛の密談を想像してシていたと言っていたし、彼女は想像力豊かなんだろう。
でも、ここは。
「なあ綺凛、アインハルトから先にでもいいか」
「え、あっ……はい、いいですよ」
この場面で不機嫌になりかけているアインハルトに気をかけないと。綺凛も気が付いたみたいだ。
ようやく自分の魅力に気が付き始めた綺凛は、親に新しいおもちゃを買ってもらったばかりの子供と同じだった。無邪気に自慢する子供だった綺凛は、少しだけ現実に引き戻された。
「あ、その……ありがとうございます？」
順番を譲られたアインハルトだが、何と反応すればよいか微妙な反応だ。口角がぴくぴくとしてるから、喜んではいると思う。
「そっ、それでは翔さんっ、お邪魔します……！」
緊張した面持ちで、俺の上に跨った。
肉棒を目の前にしてからは、その表情が強まった。すでにしとどに濡れているおマンコと、次なる獲物を求める肉棒があいさつを交わす。
「っ、ぁ」
びくびくと震える肉棒を、アインハルトは適切な位置に添える。そのまま腰を下ろせばそのまま肉棒を丸呑みできる位置に。
「っ――――！」
一気に腰を下ろした。
いくら性に目覚めていると言っても、肉棒を咥えたのはたったの1度だけ。
「いいぃ……っ、あぁぁ……っ」
深く突き刺されただけで、アインハルトは達していた。幼い体に、俺のチンポは完全に飲み込まれていた。俺のチンポがアインハルトに合わせている。
初めて自分で動くアインハルト。始めは少しぎこちない。
「あ、おし、おしり、揉んじゃ……っ」

成長期に入ったばかりのアインハルトのお尻が、俺の股間とぶつかりパンパンという軽い破裂音が響き続ける。
まだ緊張の残るおマンコに杭を打つように、自ら拡張していくアインハルト。抜いて指して抜いて指して。
俺に奉仕しているというよりも、自らが気持ち良くなるための動きだ。
奥の子宮口にめり込んだ亀頭先が、ぐりぐりと刺激される。感覚でわかるくらい締め付けが強くなり、ざらざらとした肉粒が絡みついてくる。
本能で雄を求める自らのおマンコに逆らい、自らの性欲を満たすためにプチプチと肉ヒダを引き剥がす。
それが、暴力的な快楽になってアインハルトを襲っていた。
「ずいぶんと積極的だな、アインハルト」
「あっ、ず、ずっと、ずっと我慢してきて……！　オナニーも、最近は全然してなくて……！」
「アインハルト、あんな澄ました顔でオナニーしてたのね……」
「そうなんだ……」
見ている2人は意外そうな声を上げているが、女性にも性欲はある。それも女子中学生。初めて知る感覚を自分で制御しきれるわけがない。初めてセックスを知ったばかりで、大会だからとこれまでずっと我慢してきたのだ。
どれだけ我慢してきたのかは、この腰振りを見ればわかる。このおマンコの悦び具合を感じればわかる。
ばちゅん、ばちゅん、と薄いお尻が何度も何度も打ち付けられる。そのたびにコツコツと奥に当たり、中にある弱点の粒々を何度も削る。
凛々しい顔は快楽に歪み、それでも歯を食いしばって腰の速度を上げている。
元々濡れやすい体質なのか、挿入するときにはびしょびしょヌルヌルだったアインハルトのおマンコは、どんなに速度を上げて、愛液を掻き出しても、それを上回る速度で愛液を作り出していた。

２度目の少女にはつらいレベルの弱点集中攻め。浮き出た血管すらも、肉壺をイジメる部分になった俺のチンポを、しかし自分で動いて快楽を貪っている。
「あ、ぁぁっ、い、いいっ――――!!」
体を震わせ、俺にしがみつく力が強くなる。
しかししばらくすると、また腰振りが再開される。
「もっと、もっと下さい。翔さんの精液っ、私のナカに全部下さい……！　翔さんが出すまで、ずっとずんずんしてますから。私の体で気持ちよくなって下さい……！　うううぅぅっ……！」
俺の胸板に抱きつき、うつ伏せになりつつも、腰の動きは止めない。食いしばった口から、唾液の線がトロリと落ちる。
「アインハルトさんスゴイ……」
「人が乱れてるのって、見てるだけだと辛いわよね……」
顔までは見れないが、待たされている２人が話しているのが聞こえる。
「う、うん……それは……ひぅ!?　クロちゃん!?　ど、何処触って！」
「ん？　綺凛もなんだかんだ普通の女の子なんだなぁって思って……流石に育ち過ぎだとは思うけど……」
突然下腹部に手を這わされた綺凛は驚いて飛び跳ねている。
そわそわしている綺凛に、クロは何やら耳打ちをしている。それに赤くなりつつもすぐに意味を理解する綺凛。
「え、で、でも……」
「（この反応、こういうことがあるの知ってるわね）嫌だ？」
「重いって言われないでしょうか……」
「こんな場面で言わないでしょ……流石に、たぶん……」
何やら話していたが、顔を赤くした綺凛が俺の顔の上に跨り、
「し、失礼します……！」
腰を下ろしてきた。
布一枚でしっとりと湿り気を帯びた綺凛の秘部とキスする。
「クロの入れ知恵か」
「ひあっ!?　せ、先輩！　あんまりしゃべらないで下さいっ。くす

ぐったい……！」
そう言いつつも、ぐにぐにと腰を押し付けてくる。ぴったりと張り付いた白い下着には、はっきりとわかるほどのシミができており、布越しでも大陰唇の柔らかさが伝わってくる。
しっとりとした肉感の太ももに顔を挟まれつつ、鼻の奥の奥まで、女の子の発情している匂いが流れ込んでくる。
なんだかんだ言って、この娘もしっかりと濡れてるんだな。
そんなことを思いながら、綺凛の下着に舌を這わせる。
布越しにメスの匂いが舌の上に乗り、鼻に抜けていく。とても柔らかい。だがその中に少し硬くなっている突起がある。
「ひゃう、ひぅ、あっ」
そこを舌で突くと、カクカクと腰を揺らす綺凛。手は所在なさげにさまよい、突起をつつくと体を抱く。表情は見えないが、下の口は上の口ほどにモノを言う。
どんどん機能を失っていく三角布がどんどんずれていく。やがて柔らかな大陰唇に挟まれる。繊細な布がしっかりと食い込んでいる。
ぴょこんと顔を出していたクリトリスを舐める。それと同時に腰を突き上げる。
「ひゃうっ!?」
「ひぐぅっ!?」
２人の喘ぎ声が重なった。
「あいんはると、ひゃ、ん！」
「ご、ごめんなさい、綺凛さん……！」
ピストン運動はストップしている。
突然の刺激に力が抜けて、綺凛に寄りかかってみたいだ。
奥までピタッとハマる肉棒は、ぐりぐりと奥に当たり、幼い少女の肉壺の歓待を受けている。
綺凛は別に達しているわけではないんだろう。１秒ごとに愛液の量は増しているが、その体はあさましく左右に揺れている。自らの秘部を俺の口に押し付けて。
「うううぅぅっ……！」

反対にアインハルトは子宮への強烈なボディブローでダウン寸前になっていた。大会に向けて鍛えてきた体も、その内側は完全に無防備だった。
しかしどちらもまだ満足していない。俺もまだだ。
そして後ろにはまだ、小悪魔が控えている。
この行為はもう少し続きそうだな。

予選突破のご褒美　後編（アインハルト、綺凛、クロ）

前に打ち込んだ時と同じ、コリッとした奥の感触。きゅうきゅうと俺のモノを締め付けてくる肉壺。

これが、性行為が出来るギリギリの年齢の少女の動きだ。これよりも小さいと、そうだな、犯罪になる。や、今もそうだな。

「おごぉぉぉぉぉ……っ！」

可憐な少女のものとは思えない汚い喘ぎ声が聞こえ、締め付けが限界まで強くなった。

ベッドで横になっている俺の背中に手がまわされる。下腹部から広がる痙攣が背中に伝わっている。

「アインハルトさん……ひゃん!?」

しばらくアインハルトは動けないと思った俺は、変わらず俺の顔の上にある、飛び出だした肉芽に吸い付いた。

下着をずらすとのぞく綺凛の秘密の場所。しっとりと濡れた其処に口をつけ、顔を出し始めているクリトリスを唇で挟み、転がす。

「ひうっ、ひゃうっ、いぅぅっ、そ、っこ、そんなに吸っちゃ、ぁ……！」

少しだけかぶっていた皮が唇に引っかかり捲れる。

自らを押しとどめていた拘束具が無くなったからか、唇に挟まれている肉芽がぴんっ、と起立する。

「ひゃ、綺凛もひてくえたから」

「だ、だから、しゃべらないで……！」

逃げられないように腰を手で固定し、上どころか左右に逃げることも許さない。唇で転がすだけだったそれを、段々と舌で突き始める。

しっかりとお返しをしてあげないとな。

俺のイチモツをおっぱいで挟んで先端を舐めてくれたんだ。俺も同じように挟んで、先っぽを舐めてあげなければ。

まあ、挟んでいるのが綺凛のおっぱいと俺の唇では、価値に天地の差があるけど。

でも相手に与えるのはどちらも快楽だ。

「うふうぅぅうぅっ……!!」
綺凛は口を手で押さえ、下半身を痙攣させる。その間も俺の唇は綺凛を離さない。体の痙攣を伝えてくるそれを、痙攣が収まるまで転がし続ける。
痙攣が落ち着くと、綺凛は手をつき、腰を浮かせた。四つん這いになっている格好だ。
俺の目の前から綺凛の下腹部が遠ざかっていく。うっすらと生えたものが、その中にある艶めかしい割れ目が。
イッた時に吹き出してきた粘液が俺の唇と綺凛の下の唇の間に透明の橋を作る。
だが粘液が俺の顔に落ちてくることは無い。ねっとりとした液体は重力に逆らい、てらてらとおまんこをコーティングしていた。
「ううんっ、はっ、あぁっ」
そうしている間に、アインハルトが回復したようだ。ゆるゆると腰を動かしている。
「綺凛、ごめん。ちょっとどいてくれるか？」
「はー…っ、はー…っ、はー…っ、ぇ、あ、はい……」
綺凛は、俺の上からどいてベッドに横になった。
俺はそれを横目で見つつ体を起こし、アインハルトの背中に手を回した。
「あぇ？」
「大丈夫、大丈夫」
そう言って一度イチモツを引き抜いた。
「え、な、なんで？　私じゃ……私じゃ、気持ちよくなれませんか？」
「違うから。ほら、こっちに」
すでに足腰立たなくなっているアインハルトを、強引にフォーム確認用の鏡の前に連れて行く。
「鏡に手をついて。こっちにお尻を向けて」
「あ、ぇ？」
震える脚で立つと、鏡に映った自分の姿を見た。
鏡に映るアインハルトの瞳は虚ろだ。目の前に現れた自分の顔も

正しく認識出来ていないのかもしれない。
もしくは、真っ赤に上気したその顔が、いつも朝見ているモノとは違いすぎて、認識できていないのかもしれない。
まだ子供の体。二次性徴入りかけで、ロクに脂肪もついていないお尻が俺に向けられた。
尻タブに隠れてお尻の穴は見えないが、先ほどまで何度もイっていた前の穴はヒクヒクと口を開けていた。
「あんなに激しくしてたのに、抜いたらこんなにきれいに戻るんだな」
「あ、あの、何おおおぉぉぉっ!?」
もう一度、その体を貫いた。
鏡に映ったアインハルトの顔が大きく歪む。俺のチンポが既に陥落している子宮を殴打した。
「ぁ、か、ぁ……っ!!」
ぽたぽたとその股間から液体が漏れた。愛液とは違う液体。少しツンとする匂いの液体だ。
「今まで頑張ってくれたからな。ここからは俺がするぞ……っ」
「ま、っへ……まってください……!」
鏡に映ったボロボロの顔はそう懇願してくる。
そんなことを言われても困る。
自分の主の限界が近いのをわかっているのか、アインハルトのおまんこは今まで以上の締め付けで俺のモノを咥えている。ここまでのアインハルトのピストンで、俺の性感も限界近くまで膨れ上がっているのだ。
静止の声を聴かず、俺は猛然と腰を振りたくる。
アインハルトに後ろから覆いかぶさり、抱きしめて、最後のフィニッシュを決めようと必死に腰を動かす。
「いひぃぃんっ！　んっく、ひぐっ、ひぁぁっ、んはぁぁぁ……ひんっ！」
「ここも弄ったほうがいいのか？」
「ひんっ!?　そ、そこは……！」
キャミソールに隠れた２つのしこり。今まで一度も弄ってこな

かったところだ。手を潜り込ませて感じる感触は、わずかな膨らみよりもそちらの方がよくわかる。
抱きしめていた腕でその突起を摘まむ。締め付けはもう限界まで強くなっているのかあまり変化は無かったが、結合部からは濃厚な交尾の匂いが立ち込める。ぼちゅっ、ぼちゅっといやらしく響く水音が、行為の激しさを物語っていた。
「はひぃぃぃぃ……はひぃぃぃぃ……っ」
歯を食いしばり、その快楽に耐えているアインハルト。
だが、そちらばかりに気を取られていてはいけない。
ずぶっ、ずじゅぶっ、じゅぶぶっ、じゅぽ、じゅこじゅこ、じゅぽじゅぽじゅぽ……っ。
最後の追い込みとばかりに、俺は腰の動きを速める。一緒に絶頂する――なんてことを考える必要は無い。なぜならアインハルトは、もうずっと絶頂から降りてこれないのだ。
「ひぃっ！　ひんっ！　ひぁぁっ！　あ、あたま、おかひくなるぅ……はぁんっ！　ひぃっ、ひぃぃっ！」
「アインハルト、そろそろ出すぞ！　いいかっ」
「はいっ、はい……！　全部、ナカに出して、出してください……！」
張り詰めた肉棒は限界だ。感覚が切り離され、もはや自分の体の一部とは思えない。下半身が痺れ、立っている事すら、自分の意思では出来ていない。
そして、爆ぜた。
「んはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
一番奥で、アインハルトの子宮の口とキスした俺のチンポの先から白いマグマが迸った。
ごぷっ、ごぶっ、どぶぶっ、ぐぶっ、どぷぷっ、ぶぴゅっ！
「ひぁぁぁぁぁ……っ！　奥、わらひの奥に、出てる、翔さんの、いっぱい出てるぅぅぅ……っ！」
痙攣が収まると、力尽きたアインハルトからペニスを引き抜き、ベッドに寝かせた。肉棒が白い液体を掻き出す。
これ、大丈夫かな。布団に匂いとか染みついたしないか？　……そ

れはそれで、今のアインハルトなら喜んでしまいそうだ。
「……」
それはそうとして、ベッドに寝そべり、足を立てて、余韻に浸っている少女がいる。
びゅくびゅくと、一度すべて出し切ったはずの肉棒だったが、まだまだ固く反り返っている。まるで次の獲物を求めているかのようだ。
「ふーっ、ふーっ」
熱い吐息を何度も吐き出し、少しでも体を冷まそうとしているのか。
綺凛と目が合った。
「……」
すすす、と、立てていた足が広げられた。
真っ白で生っちろい太ももの付け根に、張り付いている布。俺にずらされたせいで中身が少しだけ見えてしまっている。
反り返り、痙攣する肉棒がその中心に狙いを定めた。
「っ」
それを見た綺凛はもう少し大きく足を広げる。
膝歩きで綺凛に近寄る。
「綺凛」
「せんぱ、ぁ……っ」
腰にあるか細い紐に手をかけ、ゆっくりと手前に引いていく。抵抗なく、最後の砦である下着が綺凛の体を離れていく。
「あううぅ……っ」
顔を真っ赤にして手で顔を覆った綺凛だが、それでも足を閉じることは無い。自分の大切な部分を惜しげもなくさらけ出し、貫かれるのを待っていた。
その証拠に、少しだけ空いた口が涎を垂らした。
「せ、先輩……！」
「ああ。そうだな」
「えっ!? あ、っちょ、先輩!?」
綺凛を抱えて鏡の前に移動する。

後ろから太ももを下から持ち上げ、下腹部の割れ目には俺の肉棒の竿が擦りつけられていた。
軽く腰を前後させ、綺凛の愛液を潤滑油代わりにまぶしておく。
「んっ、くっ、せ、先輩？　もしかして、このまま…するんですか……？」
「嫌か？」
「嫌、じゃ、ないですけど……恥ずかしいです……っ。耳もくすぐったいですし……」
鏡には綺凛の体が映っている。お風呂に入っても、よほどのナルシストでなければ、ここまでマジマジと自分の体を見ることは無いだろう。
綺凛は自分のおっぱいを手で隠し、顔を赤くしている。それでも、真っ白いお腹や、俺の指が食い込む太もも。何より、下腹部にある俺のペニス。鏡だけで見ると、まるで綺凛から生えているみたいだ。
俺の体が前後すると、たぷんたぷんと綺凛のお尻に当たる軽い音がする。竿でこすられた刺激があるのか、綺凛のお腹が時折不自然に戦慄いた。
腰のグラインドをだんだん大きくしていく。反り返ったエラが愛液を掻き出していく。
「流石に動きにくいか……黒影（ダークシャドウ）」
（コンナコトニ俺ヲ使ウナヨ……）
俺の影から出てきた黒影（ダークシャドウ）が綺凛の体を支える。これで俺は完全に自由になった。何か言ってたような気もするけど、従順な奴で良かった。俺だったら絶対嫌だ。
そんなことを思いつつも、腰を動かしていく。
だんだん。だんだん。腰のふりを大きく。
「ふっ、っふ、ぁ……！」
綺凛の愛液とお互いの熱によって、だんだんお互いの境界がわからなくなっていく。
「はっ、はっ、ぁ、入り口に……っ」
亀頭の先端が、少しだけ綺凛の中にお邪魔する。綺凛のお尻が一瞬震え、

「ううぅあぁあっ……！」
ふやけた穴を、一気に貫いた。
弓なりに反った綺凛の背中が俺の胸板にぶつかる。少しでも体を浮かそうとしているのか、快感を逃がそうとしているのか、綺凛は体を捻る。
そんな体を抱きしめ、落ち着くまで待つ。
「綺凛、見えるか？　繋がってる所」
「ふ、ぁ、ぇ……？」
鏡にはしっかりと映っている。俺のチンポがしっかりと綺凛に飲み込まれ、ぐぷぐぷと愛液を掻き出しているところが。
普通に行為していては、こんな絵を見ることは無い。
「あ、あぁぁっ、ぁあ……！」
空中に浮かぶ腰を掴み、上に持ち上げる。黒影（ダークシャドウ）のおかげで、重さを感じることなく上下させることが出来る。
「見えるだろ、綺凛。俺のが少しずつ抜けてるところ。綺凛の中に入っていくところ」
「ああぅぅっ、は、恥ずかしいですから、あんまり見せないで下さい……！」
自由な両手で顔を覆っているが、その指の隙間からチラチラと様子を見ているのは鏡を見ればわかる。
本当は興味津々な癖に、口ではそんなことを言ってる。
「あんっ、んんっ、ひぃっ、あふあっ、あんんっ……」
ぞりぞりと喜ぶ肉ヒダをかき分け、亀頭が少し見えるくらいまで抜く。そこからまたゆっくりと肉棒が中に入っていく。
優しく、優しく。俺のペニスと綺凛の子宮口がキスする。愛を確かめ合うような優しいキスだ。
「うぅぁぁ……っ」
綺凛がぷるぷると震えている。膣が小刻みに痙攣した。顔を覆っていた手が所在なさげにさまよい、だらりと力を無くす。
手がなくなったことで、顔がしっかりと見える。とろんと蕩けた、メスがイッた顔が。

「それっ、好きっ、好きです……っ。お腹の奥が、じんわり温かくなって……っ、体ふわふわします……っ」
「続けるぞ」
「はいっ、もっと、もっとお願いしますっ」
そう言う綺凛はもう顔を隠したりしなかった。むしろ食い入るように鏡を見ている。
1回のピストンを、時間をかけてじっくりじっくり行う。
時折綺凛の弱点を擦ると、肩がピクリと動く。そして最奥までたどり着き、一番の甘美な快楽を流しこむ。
「うぅ、あぁぁ、あっ、あっ……っ」
絶頂こそしなかったが、息が荒くなっていく。
「綺凛はゆっくりされる方が好きなのか？」
「へ、ぇ？　そ、そんなの分かりません。でもこれ、ずっとお腹がポカポカして、でも前した時も、先輩の、その……本気のえっちも、どっちも、はい……」
「気持ちいい？」
「……っ」
「綺凛？」
「うううっ……」
悪戯心が芽生えた俺は、いきなり、思い切り下に動かした。
「あきゅ⁉」
見せつける為にゆっくりだった動きとは違い、肉ヒダを一気にかき分けて子宮とキスした。
「こっちも気持ちいい？」
「あ……っ、あ……っ！」
今の一撃で絶頂まで持っていかれたらしい綺凛は、ぱくぱくと空気を求めて口を開閉していた。
その一撃で体が思い出したらしい。今は何をしている最中なのか。それとも、前のセックスの記憶がよみがえったのか。
とにかく、最奥にある口が開き始めた。
「……先輩」

「ん」
絶頂が落ち着いた綺凛は、首を回して唇を突き出してきた。
要求されるがままに、綺凛とキスする。
唇が離れると、
「どっちも、イイです……っ。ゆっくりされてぽかぽか溶かされるのもっ、強くされて頭真っ白になるのもっ、どっちも好き、です……っ！」
恥ずかしそうにそう告げてくる。
「で、でも、最後は前みたいに、その……」
耳まで赤くなりその希望を言ってくれる。
「先輩の、好きに……本気でしてほしいです……っ」
「お望みとあらば」
黒影（ダークシャドウ）を解除し、バックの体勢になる。
腰を掴み、準備は万態。
「綺凛、いくぞ」
「はいっ」
遠慮ない一撃を叩き込んだ。
「か、は……っ」
かろうじて立てていた綺凛の足が力を失う。
「綺凛、思い出すか？　一番最初にした時の事」
「あ、ィ……っ。思い、出します……頭真っ白になるっ、これ、もっろひてくりゃさいっ」
俺もそろそろ限界だ。
ごちゅっ！　ばじゅん！　ばちょっ！　ごきゅっ！　ぎゅちゅうっ！
全力で腰を振る。肉付きのいいお尻の肉にぶつかるたびに、ぶるぶると揺れる。
「これぇ、やっぱりしゅごいいぃ……っ！　あたまのなかっ、ぜんぶ、おかしくなっちゃいそう……！」
肉襞が絡みつき、それを乱暴に振り払う。後先考えずに行うピストン運動に、俺の性感もどんどん高まっていく。

元より、ゆっくりとはいえ動かしていたのだ。子作り準備万端になっているのは綺凛だけではない。
一体どれだけの時間をかけるつもりなのかと、俺のチンポはその欲望を吐き出す場所を求めていた。
「綺凛、もうっ、出すぞっ！」
「はいっ、ぜんぶ、ぜんぶ、わらひのなかに――――!!」
ごぷっごぷっ！　どくんっ、びゅるるっ、びゅぐぅっ、びゅるぐぅぅぅっ！
1回目から全く変わらない量、濃さの精液を綺凛の中に注ぎ込んだ。
そのまま力を失った綺凛を、アインハルトの横に寝かせる。
残るは1人。
「クロはどうする？　するか？」
最初に俺のことを弄ってきたクロも、この場に合わせて下着姿になっている。軽く押し倒せばすぐに行為に至れるが……
「ん、お兄ちゃんから誘ってくれるのはうれしいけど、もう帰ったほうがいいわね。2人とも明日からはまた試合だし、お兄ちゃんも明日から仕事じゃない」
それもそうだな。事が事だけに、明日に疲れを残すのは絶対に避けないといけないことだ。
それをクロに諭されるとは。
「それに、最近お兄ちゃんやらかしたんでしょ？　アスナの監視がすごく厳しくなったじゃない」
「あー……」
今現在の風紀はアスナの独裁状態。何せ、いつも秩序を保つ側だった桜と雪菜があの時の乱交に参加してしまっているのだ。
確かに、環境的に歯止めをかける人がいなければどこまでも行ってしまいそうだから仕方ないけど。
「あんまり遅いと、私を迎えに行ってたっていう言い訳も使えなくなるでしょ？　しょうがないから今日は諦めるわ。や、まあ、そんな言い訳しても全部バレちゃってるとは思うけど」

「そっか」
「それにここの掃除もあるもんね。流石にこんな状態の部屋を放り出してはいけないでしょ？　こんなにした綺凛だって、家に送らないと危ないだろうし」
「確かにな」
　かなり激しくした綺凛も、顔面騎乗のせいで下着がびしょびしょだ。このままだとノーパンで帰ることになっちゃうからな。
「だから、ね？　そんなヤル気満々でこっちに迫ってきてもね？　色々と困った事態になるのはお兄ちゃんなんだからね？」
「クロ、言ってたよな『人が乱れてるのを見てるだけは辛い』って」
「そ、それはぁ――――きゃ！」
　クロを軽く押し倒し、確認する。
「確かにそうみたいだな」
　下腹部をなぞった中指にべっとりと透明の粘液が付着する。
「うぅ……」
「こんなになってるのに、何もしないのか？」
「も、もうっ。今日はどうしたのっ？　そんなに興奮してるってこと？」
　それは確かに。
「そうかもな」

　上から押しつぶすように、何度も何度も腰を打ち付けていく。
　苦しさの無い、最高のサイズのチンポによる全力のピストンだ。どんなに小悪魔を気取っていたとしても、耐えられるものではない。
「ひぐっ、あがっ、かはっ、あえっ、ひんっ、も、やめ、も、むり、む

り、むり、〜〜〜っ……！」
足腰立たなくなり、それでも逃げようと床に這いつくばるクロを、組み伏せてひたすらに犯す。
「うっ、ぐっ……！」
「ひ、ぐうううぅぅぅっ!!」
ごぶっ、ごぽぽっ、ごぶぶっ!!　びゅるぐうぅぅっ！
クロのナカに3回目の精液を注ぎ込んだ。これで本日6発目だ。
流石の俺も、もうそろそろ限界だった。
「これくらい注げば魔力も満タンになったか？」
「も、もうっ、満タン、なって、とっくにオーバーしてる、わよ……っ」
非難の声を上げるクロだったが、声色はどうしてもトロけてしまっていた。幼い割れ目からは、中に入りきらなかった精液がとめどなく溢れている。
流石ここまで続けてすると俺も打ち止めだ。
後片付けをして綺凛を送り届けた後、ダウンしたクロを抱えて帰宅したのだった。

大物たちの会議　1日目

「み、皆さん……？　そんなに念入りに、あう」
「ダメですよ聖天子様！　聖天子様に何かあったら！」
「そうですそうです！　この真っ白な肌に日焼け跡が残るようなことがあってはいけませんからね！」
「マジ引くわー！」
　聖天子は自室でパーティの準備をしていた。パーティには当然ドレスを着ていく。白く透けるような素材でできており、ロングスカートに肩を出すタイプだ。
　今はメイクの前に、新たに『おつき』になった3人の武偵（女性）に揉みくちゃにされつつ日焼け止めを塗られているところだった。
　夏の強い日差しの影響を受けないように、いつも念入りに。
　聖天子の透き通った白い肌が小麦色になる、それは高貴な宝物を穢すに等しい行為だ。同性でそのケが無い彼女たちでも、本気で守らなければならないと思うほどの。
　この3人はさしずめ、その宝物を手入れする職人。や、それにしては少々扱いが雑かもしれないが。
　ようやく塗り終わり、聖天子は解放される。
　後はメイクだ。
「それで、あの男どう思いますかい？」
「まあ、見た目は冴えないけどねー。高貴な人は逆にあんな感じの人がイイのかー、って感じ。当の本人はＪＣと幼女を連れてきておりますが」
「マジ引くわー……」
　コソコソと話しつつ、3人はメイクの準備をするのだった。

大会の予選も終わり、様々なイベントが始まり、学園島が一番賑わいを見せるこの時期。桜は実家である冬木の遠坂邸に、理子は東京にあるコミックなマーケットに行くために島を離れたこの日。
俺たちは聖天子様の部屋の前で待機していた。中では今日の懇親パーティの準備、メイクアップ中だ。
今回一緒に護衛をするのは雪菜とコッコロ。俺と雪菜は防弾制服、コッコロはいつものあの服。
どういう事件が起こるのか分からなかったため、メンバーのバランスを考えたかったんだけどな。ギリギリだったせいで空いてるのが雪菜しかいなかった。それとこの世界に召喚されたばかりのコッコロ。
話をすると、２人ともすぐに快諾してくれた。
「主様は、そんなに偉い方ともお知り合いなのですね」
「……そうですね。『若い女性』の、偉い人ですね……」
何でそこを強調したんでしょうね？
「いえ、別に？　何かやましいことがあるんですか、先輩？」
「……そんなことは無いけど？」
不安があると言えば、今日これから会うかもしれない人たちだな。ニュースで毎日のように『どこどこの国の誰々が島に到着しました！』なんて言ってるのだ。もちろん映像付きで。
正直、魔境。何も起こらなくても大事件だと思う。そんなメンツがこの島に集結している。
「……もう仕事は始まってるんだよな。ただの護衛の俺に、そんな絡むとは思えないけど……」
そんなことを考えながら聖天子様を待っていると、とんでもない人物が現れた。
日本古来から伝わる伝統着である着物を着こなしている。それも無駄に豪華なものではなく、大名が将軍に会うような、必要とあればすぐさま刀を抜ける絶妙な格好だ。

この人物が天童式抜刀術の免許皆伝であることを考えれば、それも脅しではないのだろう。
顔には深い皺が刻まれているが、眼光は俺を刺し貫くほどに鋭い。喋ってもいないのに俺の内面全てを見透かされているようだ。
多数のガードマンを後ろに引き連れて、その老人、天童菊之丞が目の前にいた。
「っ……！」
「貴様達は……そうか」
当然のように俺達の顔は知っているようだ。
「今日は期待しているぞ。万が一にも、傷一つつけてくれるな」
「もちろんです」
それだけ言うと、その場を後にしていった。自分の護送車に向かったんだ。
「あれが天童閣下ですか……」
「確かに、ただならぬオーラを感じました……」
雪菜とコッコロも活力に満ち溢れた天童菊之丞に、唾を飲み込んでいた。
俺たちが固まっていると、聖天子様が出てきた。もちろん自分で扉を開けたのではなく『お付きの人』が開けて、だ。
その『お付きの人』にも見おぼえがあるが、ここは突っ込まないでおく。
「おはようございます。何かありましたか？」
「や、今天童閣下が通って」
「先に行ってしまいましたか？」
「そうですね」
「私達も急ぎましょう。遅れてはいけません」
聖天子様の言葉で、俺たちも移動を開始するのだった。
「……」
聖天子様の服、なんか気合入ってるな。や、そりゃあ国際的な交流会だと思えば当然なのか……それにしてもいつもＴＶで見るよりも透明感があって、神秘的な雰囲気で……

「痛っ!?」
「ふんっ！　行きましょう、コッコロさんっ」
「ぁ、は、はいっ」
　雪菜とコッコロは先に行ってしまう。
「うっわー……」
「最悪……」
「マジ引くわー……」
　後ろではなんか言われていた。

「閣下、よろしいのですか？」
「ああ。あれでいい」
　一番の側近に短く返す菊之丞。
「しかし……」
　側近は、翔と同じことを考えていた。保脇の一件で、翔に聖天子の護衛をさせることを不安に思っているのだ。
「あの男は使える」
「使える、ですか？」
「無知な民衆に必要なものは、なんだ？」
「……やはり、我々の都合よく動いてもらう事でしょうか？」
「そうだ。だが、思い通りに動かそうとしては、必ず抵抗が生まれる」
　人々の自由を奪うというのは、一番回避しなければならないことだった。
　思い通りに世界を動かすためにも、抵抗を作ってはならない。
「必要なのは納得だ。世間全てが納得すればいい。納得する血統の後継者ができれば、いいのだ」

「まさか……あの男を聖天子様の伴侶に？」
「そうなるのかはまだ分からん。しかし、あ奴が今、一番心を許しているのは、あの男で間違いないだろう。そうでなければ……」
わざわざ護衛として、もう一度雇おうという気持ちにはならない。
「立場上仕方のないことだが、世間受けがいいのは聖天子だ。自由意思を尊重した恋愛婚ならば、世間は納得する。子供ができ、それが次期トップになったとしても、そこには納得があるだろう」
多くの民衆が、祝福の言葉を贈ることになる。
「重要なのは納得だが、必要なのは教育だ」
菊之丞唯一の失敗は、幼少期の教育を他の人間に任せてしまったことだ。気が付いた時には優しい、争いを好まない少女へと育ってしまった。
だからこそ、次代の子供には最高の教育を施す必要があるのだ。
「だが、あくまで自由意思でなければならん。あの男が本当にそうなるのかは、まだまだ未知数と言ったところだ……」
高齢の菊之丞は生涯現役を誓っている。多少長い目で見ることに、何の抵抗も無い。今は目の前に迫った会議に意識を向けるのだった。

パーティが始まった。
入口は管理局と武偵に固められて、蟻一匹入る隙間もない。そんな物々しい雰囲気とは対照的に、会場は煌びやかな雰囲気に包まれていた。
たくさんの料理が並べられ、このままパレードにでも行けそうな服を着た人たちが互いの顔色をうかがいながら食事とおしゃべりを楽しんでいる。

「――」
聖天子様も他の国の方々と平和にお話をしている。当然のように全員顔立ちが違う。国が違うんだから当たり前だ。
ちなみに言うと、言葉に関しては万能翻訳機があるため、まったく困らない。俺にも話している内容は理解出来る。
「……」
予想外に平和だ。よくよく考えれば当然なんだけど。
チンピラのように絡んでくる奴もいないし、怪しい奴もいない。政治の場で立場ってものがあるんだからかな。やらかせばその国の信用問題だ。
今集まってきているのは、聖天子と、敷いては日本と仲良くしたい面々。個人的な付き合いが無いのは、聖天子様の口調ですぐにわかる。
だからと言っても気は抜けないが。
俺は遠目に会場を見回す。
同じように人だかりができている場所がいくつかある。
政治的に仲良くしたいというのはつまり、力のある強い国ということだ。あの人だかりの中心には多分、俺の知っている人がいるんだろう。
一日目は、どの国も我先にと強国に唾をつけに走る。強国同士が話すのは2日目以降になりそうだな。

「で？　どうだったよ、会議は」
「特に何とも。日程の確認、近況の報告、私の場合は多少嫌味も言われたが……もう慣れてしまったよ」

「ずいぶん余裕そうじゃないか。この会議、実質世界最強のメンバーが揃ってるだろ？　少なくとも表舞台では」
「それも含めて、慣れてしまったということだ」
無事、何事も無く終わった1日目。俺は旧友――――ウェイバーと合流して少々お高めのお店に来ていた。雪菜とコッコロは隣に座り、ウェイバーの横には相変わらずフードをかぶったグレイが座っている。
今は食事も終わり、コーヒーを飲みつつの時間だ。外の喧騒が嘘のように、静かな時間が流れている。
この場にさらにもう1人いなければ、それだけで終わっていたことだろう。
「それはそれは、時計塔のロードともなれば、常日頃から気苦労が絶えないという事か？」
「半分はお前のせいでもあるがな……！」
くつくつと嫌な笑みを浮かべるのは、俺たちのどちらにも属さず、会話を楽しそうに聞いていた少女だ。
傍らに鈍色のメイドを控えさせる姿は、黙っていればどこぞの貴族と言われても違和感がない雰囲気を持っている。実際、貴族みたいなもんだ。
ケイネス先生と同じ美しい金髪ロングヘアーのこの少女の名前は、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。
ケイネス先生の遠縁にあたる少女で、Ｆａｔｅの外伝作品『ロードエルメロイ2世の事件簿』のメインキャラクターでもある。
この世界線ではケイネス先生は生きているため、原作のようにエルメロイ家の当主になっているわけではない。
それでもこの場にいるというのは、
「昼間は特に喋れず残念だったが、こうして話せてうれしいよ、夜月翔」
ウェイバーが会議に出ている間、ライネスは懇親パーティに来ていたのだ。
1日目が終わってウェイバーと合流してから、同じ会場に彼女がい

たことを知った。ま、あんなに人がいれば、気が付かなくてもしょうがないよね。
　ライネスはライネスで、他の国の人たちに囲まれる聖天子様に近寄れなかったようだ。彼女の目的は俺だったというのに。
　ファミレス辺りに行こうかと思っていたところ、ライネスに引っ張られる形でこのお店に連れてこられたのだ。
　来るとき散々財布は無いぞって言ったんだけどね。
「当たり前だろう？　まさか君は、『ふぁみりーれすとらん』に入れとでも？　魔術の大家、エルメロイ家の人間に？」
「いやいや、この島のファミレスはヤバいぞ？」
　多国籍ファミレス。各国の郷土料理が手ごろな値段で楽しめるんだからな。
「それに、雪菜とコッコロが緊張してる」
「べ、別にそんなことは……っ！」
「も、申し訳ありませんっ、わたくし、森育ちで。このような場所にはあまり縁が無く……っ」
　コッコロは素直だが、雪菜は強がっている。持ってるコーヒーカップは揺れてるけどね。
　でもそれはウチの２人だけではない。ウェイバーの隣に小さく座っているグレイもここに来てからずっと喋らない。
「……お前も緊張してるだろ」
「え、なにか？」
　ウェイバーがぼそりと何か言ったね。とりあえずコーヒーで喉を潤しておこうか。
「それで？　どうしてお前はこいつに会いたいなんて言い出したんだ？」
「それはもちろん、好奇心さ。個人的な好奇心。思えば１０年前の聖杯戦争。あれはエルメロイ家の転機になった」
　原作では没落の転機だったが、この世界では違うようだ。
「当主、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトとソフィアリ家との仲は良好、まあ、婚約をしていたからそうでなければ困るんだが……それ

でも、以前の政略婚のような空気は無くなった。聖杯戦争という冒険が2人の仲をより強固にした……そんな2流のロマンスが本当にあるとは思わなかったよ」
　本来その2人は戻ってこないはずだったからな。
「だが、確かに正直言ってあの人のことは実力以外は全く評価していなかった。古臭い価値観、過剰な慢心、魔術師としては優秀だったのかもしれないが、殺し合いに参加して生きて勝利できるとは到底思えなかった」
　身内に対してもずいぶんと辛辣だな、この娘は。
「だが、戻ってきてみればなんだ。どこぞの3流魔術師と桜――私とそう変わらない女の子を自分の養子にするなんて言い出す」
　そりゃ仰天されるな。聖杯戦争で狂ったのか思われそうだ。
「それどころか、未来への投資だ、なんて言ってはぐれ者の生徒を集めた『エルメロイ教室』なるものを設立するともな。いや、あの時は笑ったよ。引退したはずの元当主の取り乱しようと言ったら……くくくっ、治癒術師に頼んで頭に異常が無いのか調べる寸前だったよ」
「……」
　ライネスは笑うが、ウェイバーは居心地悪そうに眼を反らした。
　そりゃあ話の渦中にいた人間だからな。それでも桜をここまで育ててくれたんだ、ケイネスさんにはそのうちお礼を言いに行かないといけないな。
「まあ結果として、エルメロイ家は時計塔の若い魔術師、歴史の浅い家、特異な体質の生徒に大人気になった。めでたいなぁ、兄上？」
「兄上はやめてくれ……まあ、エルメロイ教室は勉強になったよ」
「何だお前、お兄ちゃんなんて呼ばせてるのか。義妹をいいように使ってるな」
「呼ばせてないだろ!?　何処に耳ついてんだ！」
「おいおい。普段は眉間にしわを寄せて黙るのに、今日はどうしたんだ？　楽しくなってしまうじゃあないか」
「……この悪魔共……っ!!」
　破裂してしまうんじゃないか心配になるな。そんなに真っ赤に

なってると。
「それで、だ」
　ライネスは話を戻す。
「これまで話した通り、聖杯戦争はエルメロイ家の転機になった……その中心にいた人物で？　サーヴァントでありながら未来に生きる人間で？　その本人が１０年後の学園島から来たと明言していて？
　しかも桜の想い人らしいじゃあないか。機会があれば会ってみたいと思うのは、そんなにおかしいことかな？」
「それで？　実際に会った感想は？」
「実に面白いよ。真面目なのに私の様に悪魔的な部分がある」
「悪魔的って……」
　自分で言うのか。
「サーヴァントとして呼ばれるだけはある。口が裂けても平々凡々な人物とは言えないな。聖天子の護衛についていなければ、私の護衛につけたいくらいだよ」
　ずいぶんと高評価をもらえたみたいだ。
「だが、その横にいる女はいただけないな。」
　ニヤニヤ笑うんじゃねーよ。
「私の予想では、隣にいるのは桜のはずだったんだがね？　今日は久しぶりに桜とも会う予定だったんだが……それがなんだ、どこぞのＪＣにエルフの幼女だと？　我がエルメロイ家の恩人は幼女趣味（ロリコン）だったのか？」
「よくよく考えれば、桜もあの頃は小さかったな……」
「ウェイバー、テメェ……！」
「先輩……」
　俺へと向けられる視線を理解しているライネスは続ける。
　コッコロだけが、言葉の意味が分からずきょとんとしているが。
「もちろん恋愛は個人の自由。いくら桜が幼少期からずっと、お前のために身を磨いてきたとしても、それを受ける義務は発生しない」
　そうか。年齢が近いってことは、接する機会が多かったのか。や、むしろ桜の腹黒さは、ライネスから学んだものかもしれない。

何はともあれ、そこには確かな友情が芽生えて――――
「まあ玉砕したらそれはそれだが」
「と思ったら冷てぇ……！」
「それで、実際はどうなんだ？　小さい頃から見てきたが、アレはイイ女に育ったと思うぞ？　それとも、本当に幼女趣味なのか？」
実際にはもう抱いたあとなんだよなぁ。
「めったに自国の外に出ないと言われているエルフが、しかもその年齢で聖天子の護衛とは、よほどの訳ありか？　そっちの女も、それほどの礼装（雪霞狼）、そうそう個人で持てるものではあるまい？」
「え、や、それは……」
まさかガチャから出てきましたなんて言える訳もない。しどろもどろになっていると、
「ふう……その娘もそうなんだろ？」
「え？」
「だから、お前のことだ。世界中飛び回って、困ってる人を、だな。助けて回ったり、してるんだろ？　それで諸々合って引き取ったとか、そんな感じなんだろ」
「お、おう……そやな……」
ウェイバーがすごく都合のいい解釈してくれた。俺、あの聖杯戦争以外で、この島出たことないけどね。
「まあいいさ。他人の事情にとやかく言うつもりは無い」
ライネスもそこまで追求するつもりは無かったようで、あっさり引っ込んでくれた。
その後も適当に雑談をして、帰宅の時間になった。
去り際にライネスは、
「用心することだな。１日目というのは誰でも様子見をするものだ。本番は明日だぞ」
そんな不吉なことを言ってくる。
その言葉通り、会議の本番は明日。何かが起こるのも明日になるのだった。

大物たちの会議　2日目　前編

「――、――」

会議2日目は、相変わらず大人気の聖天子様の後ろに控える形で幕を開けた。それでも、昨日より人が少なくなったな。

そりゃ外交のあいさつなんだし、ずーっと同じところにいる訳にもいかないんだろう。昨日は大国相手に、今日は自分たちの周辺国にって感じだな。

「どこもかしこもご苦労なことだな。人の顔色を窺って、機嫌を取る……まあ、時計塔の老害共もそんなものだが。どの世界にいても、人間は変わらないという事か」

何故か横にいるライネスは、退屈そうに言う。

今日パーティ開始と同時に……どころではなく、会場の入り口にスタンバイしていたライネス。そのまま俺たちに並んで会場に入り、今に至る。

「なぜあなたがここにいるんですか……」

「硬いこと言うなよ、姫柊雪菜。私はこう見えてもか弱いレディなんだ。内心、初めての舞台に怯えているのさ。知り合いと一緒にいたいんだ」

「……」

雪菜はとてつもなく不満そうにしている。

「それに、こんなところにいるというのに、私の従者はトリムマウしかいない。コイツのことは信頼しているが、不安なんだ。昨日も言ったが、護衛が欲しいくらい不安なんだよ」

時計塔支部ができると言っても、他の家が協力してくれるわけではない。それどころか、エルメロイ家でも意見が分かれているのだ。当主であり、一番力を持っているケイネスの声でも、島に行こうというもの好きはいなかった。

ライネスを除いては。

「それは大変でございますね」

「そうだろう？　私は助けを求めているんだ」

「幸い、主様は優しい方です。きっと快く引き受けてくださいますよ」
「(この人は危険です。身の危険、という訳じゃありませんが、近くにいられると、どうしようもなく弄られてしまうような、そんな予感がしますっ)……護衛と言うからには、しっかりと料金をいただきますが？」
　コッコロはニコニコと受け入れるが、どうあっても刺々しい態度をとる雪菜。昨日の食事会で話したから、もう知らない人ってわけじゃないんだけど。
　知ってる人イコール一緒にいてもいい人ってわけじゃないからな。まじめな人が道を踏み外すところが大好きなライネスとは、あまり反りが合わないだろう。
　十中八九、自分がターゲットにされると分かっていればなおさらだ。
　スッとライネスが雪菜に身を寄せる。
「そうカリカリするなよ。別にオマエの男を取ろうってわけじゃないんだ。それとも、そんなに心配か？　アイツが私に惚れるかもしれない。そんな心配をしてるのか？」
「別にそういう訳じゃありませんっ。私が心配なのは――――(ライネスさん。あなたがいつの間にか先輩を好きになることですからっ！)」
「昨日も言ったろう？　恋愛は自由だ。小さい頃から桜が頑張ってきたのは知っているが、それはそれ。どうにも、恋愛という強い感情は抑えが効かないらしいからな」
「そ、それは……っ！　(抑えが効かない……この間先輩とした時もそうだった。好きだっていう気持ちと、この人に捧げたいって気持ち、そして――――気持ちよくなりたいって気持ちが抑えられなくて……って！　な、何考えてるんですか、私はっ！)」
「お前たちが相思相愛かは知らないが、胸は張っておくんだな。そうすれば少なくとも、私なんかが割って入る余地がないくらいには、君は魅力的な女性さ。桜にも引けを取らないくらいだ」
　ライネスと話している雪菜の顔が見る見るうちに赤くなっていく。

やっぱり相性は良くないんだな。
「お二人とも、すっかり打ち解けたようですね。あんなにくっついて、親しそうにお話しています」
「そだな」
純粋すぎるコッコロにはあの２人の関係をイマイチ理解出来ていないみたいだ。や、もしかして、理解してにこにこと笑っているのかもしれない。とんだママだ。
ライネスも、コッコロにはいたって普通に接している。いくらＳのライネスも、この年齢の少女に対しては、食指が動かないのかもしれない。
コッコロという存在が、ライネス相手のカウンターになるのかも……？
「ですが主様？」
「うん？」
「ご友人が増えるのはとても喜ばしいことでございます。ですが見たところ、女の子が多い様子。節度を持って、お付き合いくださいまし」
「お、おう……」
君相手ですら、もう節度を越えた付き合いをしてるんだけどね。
冷や汗を流していると、雪菜との会話を終えたライネスが訪ねてくる。
「それで？　引き受けてくれるのかな？」
「いや、聖天子様に聞かないと」
１人守るのも変わらない、なんて不用意には言えないが、何かあってからでは遅い。
そしてライネスは、何かあってもおかしくない人物だ。
「何の話をしているのですか？」
聖天子様が戻ってきた。あいさつに来た方々への対応はひと段落したみたいだ。ここからは多少自由な時間になるのだろう。
俺は事情を説明する。
「翔さんのご友人というなら、私は構いませんよ。お困りなのでしょう？」

「ご心配なさらず。本当に有事の時は、翔には聖天子様を優先してもらうからな」
　有事の時には聖天子様に、って、お前は護衛して欲しいのか、1人でも大丈夫なのかどっちだ。本当に、俺達にちょっかいかけたいだけなんじゃないのか？　だけなんだろうなぁ。
「それにしても、どうして夜月　翔を護衛に？　言い方は悪いが彼はまだ学生だ。命を救われた事実があるのかもしれないが、それはそれ。天童菊之丞が選んだ護衛の方が良かったのでは？」
「確かに、以前の成果もあります。ですがわたくしは、実力以上に彼を信頼しているのです。信頼は時に、実力以上の力を出しますから」
「……それはそれは。立派な考えだな」
　ライネスに肘でつつかれる。
「脈があるな」
「うるさいぞ」
　一抹の不安を残しつつも、ライネスが場に馴染んだところで、とうとうその時が来た。
　ざわざわと会場がどよめく。
　会場の一角から、こちらに進んでくる女性。聖天子様は白髪だが、向こうは銀髪。王族らしく均整の取れた体を、白いドレスが飾っている。
　聖天子様の空気が少しだけ緩んだ。仕事場でありながら、知り合いに会えた。そういう空気だ。
「久しぶりですね、聖天子」
「はい、ラフォリア」
　2人の美少女はお互いに微笑み合う。
「来たか……」
　俺は声を漏らす。
　ラフォリアの後ろに控える黒服に倣い、聖天子様の後ろに立つ。同じ立場のライネスは興味深そうに覗いている。
　ラ・フォリア・リハヴァイン王女殿下のご登場だ。『ストライク・ザ・ブラッド』のヒロインの1人。北欧、アルディギア王国の第一王女。

ガチ物の王族だ。
や、実は聖天子様もこの世界では皇族だったりするんだけど。考えてみれば、この平和な状況で、俺と同じくらいの歳の女の子が代表やってるってのが無理ある。
そこに、よほどの理由が無ければ。
まあつまりは、日本のアレね。象徴になってる一族に名前を連ねる方なんだよね。
やだ、今までの無礼とかどうしよう。
「それ、今さらじゃないですか？」
雪菜に呆れ顔で言われたのは記憶に新しい。
そんなことは重要じゃない。今は目の前で楽しそうにお話している2人だ。
聖天子様もラ・フォリアもお互いに笑顔で話している。こうしてみると、美しすぎることを除けば、本当に年頃の少女と言った様子だ。
俺はちらりと雪菜を見る。
「どうしたんですか？」
「や、何も？」
俺の持つ能力と女の子召喚システムについてと、この世界については、相変わらず謎だらけだ。
この世界について分かっているのは、いくつかの作品をベースに、都合の良いように混ざっているという事だけ。
しかし雪菜もラ・フォリアも同じ『ストライク・ザ・ブラット』のキャラクターだ。
片方は召喚され、片方はこの世界に元から存在していた。つまり、混ざっている作品のキャラクターすべてがこの世界に存在しているわけではないということだ。
これは調べたことであるため、確定している事だ。
だから何だということは無い。雪菜もラ・フォリアのことは知らないみたいだし。
積もる話は1年分。それこそいくらでもあるんだろうが、一番に出てくるのは、一番話したいことで――――

「心配したのよ、暗殺者に命を狙われたって聞いたから」
「はい。ですがこの通り、何処もケガしてませんから」
　無表情。
「おい、どうした、能面のような顔をして」
「何かおかしいか？」
「面白いな」
　うるさい。
「暗殺者って、ティナちゃんのことですよね？」
「そうだ、あの事件の事はあんまり口外できないけどな……」
「え……？　ティナ様は暗殺者だったのですか？」
「何？　どういうことだ？　暗殺者と知り合いだと？　もしやマッチポンプか？」
「んなわけあるかっ！」
　コッコロはこの島に来てまだ日が浅く、俺たちの関係のすべてを把握しているわけではない。
　そしてライネスは、俺たちの事情など何も知らない。
　俺たちがこそこそと話している時も2人の会話は続いている。
「情報によれば、あの金色のヤミすらも退けてしまったとか。よほど腕の良いガードマンなんですね。あの……前に見た、ヤスワキさん、だったかしら？　今日も一緒に？」
「い、いえ、あの人ではなく……この方に護衛していただいて。そのおかげで」
　聖天子様は非常に微妙な顔をして、俺たちを掌で示した。
「それは……」
　すっ、と前に出るラ・フォリア。そしてあろうことか、王族である彼女が俺に向かって頭を下げてきた。
「私の友人を助けて下さり、ありがとうございます。この感謝は言葉だけでは伝えきれません」
　周りの人々もラ・フォリアの護衛もその様子に慌てるが、彼女は全く動じていない。
「や、あの……っ」

何を言っていいのかわからず、何を言っても無礼に当たると思い、聖天子様に助けを求める。
「ラ、ラ・フォリア？　ホラ、周りの目もありますから」
「うーん……？　たしかに、この場であまり話し込むのはいけないかもしれないですね。聖天子、良かったらぜひ、この後。その方も連れて。その時のお話が聞きたいわ」
「そうですね……」
や、そうですねじゃないんですけど？　そんな簡単に予定を決めないで！
「あ、主様は一言も話していないのに、女性との約束が……？」
「そうですよ、これに困ってるんです……」
「爆速、などという言葉すら生ぬるいな。しかも王族と、とは。さすがの私も驚いたぞ……」
俺もびっくりだよ！
そこに、さらに加わる人物がいた。
「何してるんですか？　なんか騒ぎになっちゃってますよ？　ヤバいですね☆」
神聖な雰囲気を持っていた2人とは違う、明るい色合いを想起させる少女だ。連れている護衛は、スーツではなく甲冑姿というのだから、その特徴は際立っている。
俺のイメージでは、この子はいつも食べてる、って感じ。特にこんなパーティでは、その両手から料理が無くなることはない。そんな勝手な思い込みがあった。
しかし目の前の少女は、多少元気なところはあっても、はしたなく料理を頬張るなんてことはない。まだ『国』では何も起こっていないんだろう。
これからも起こらないことを願うばかりだ。そうすれば、魔物料理なんてサバイバルする必要もない。それでも、2人以上のボリュームに育った双丘が、ドレスの中で窮屈そうに跳ねていたけど。
ランドソル王国、王族の1人娘、ペコリー――ユースティアナ・フォン・アストライア王女殿下だ。

彼女は『プリンセスコネクト！　Ｒｅ：Ｄｉｖｅ』のキャラクターだ。この作品、メインの舞台はＶＲＭＭＯゲームの世界だ。現実でも王女様だが、この世界のランドソル王国は現実に存在している。
ロキ・ファミリアの一件でもはっきりしているように、この世界には亜人族……つまり獣人やエルフ、ドワーフなども種族として普通に存在している。数は少ないけど。ブラドみたいな吸血鬼もいるしな。
この世界の地球上には、マナの濃い場所、ホットスポットと言われる場所がいくつかある。
その地域ではマナの影響で特殊な生態系が築かれる。動植物が過剰なマナに汚染され、凶暴な魔物になるのだ。
そんな場所では、人類文化が育つのは難しい。
だがごくまれに、人が暮らせてしまう場合もある。亜人族は、そういった人達がマナに汚染された姿だというのが、この世界の理論だ。
森で暮らしていればエルフ、鉱山で暮らしていればドワーフなど、何故かは知らないが、そういう変化をすることが多いらしい。
さらにまれに、大きな国になる場合もある。
その１つがランドソルだ。ゲームのような魔物が生息し、人とたくさんの亜人が暮らす国。魔物のせいで近代まで外界からの影響が無く、独自の文化を形成している。
「久しぶりね、ユースティアナ」
「お久しぶりです」
「おいっす！　久しぶりですねっ」
外交の場とは思えないほど軽く話し始める２人。周りの護衛も平然としている。まあ、良くあることなんだろう。
歳が近く、立場も近いということもあり、３人は仲が良いらしい。というのは情報として知ってたけど、それは本当みたいだな。
「甲冑が並んでると落ち着かないな」
「ですね」
周りの好奇の視線を遮るように立つ黒服と甲冑は、まるで壁だ。みんなプロっぽい。実際プロか。聖天子様舐められないかな？　俺たちみたいな面々が護衛で。

「でもよかったです、２人とも元気そうで！」
「ふふ、ええ。実はこの後集まる予定なんだけど、あなたも来る？」
「わぁ！　楽しそうですね！　私も参加していいんですか!?」
「もちろん！」
「あ、あはは……」
　ちらりと聖天子様が見てくる。
「あ、主様……！」
「ホントに、ホントにっ、こういうところですよね……っ!!」
「ま、まさかここまでとはな……」
　もう、どうでも良いですよ……
「お話し中、失礼します」
　そこにさらに割って入る女性がいた。
「楯無さん、ご苦労様です」
「管理局の方ですか？」
「楯無……ああ、日本の更識家の」
「警備責任者として皆様にご挨拶を、と思いまして」
　管理局の制服姿の楯無さんは、きちんとした礼儀作法で礼をする。
「警備の方は順調ですか？」
「そうですね。本日はまだ何も。昨日は２件ほどありましたが、どちらも未遂で済みました」
　そうだったのか、全然知らなかったな。未然に防げるだけのメンバーが集まってるって訳か。
「失礼、お飲み物はいかがですか？」
　こんな場所だというのに、職務を全うしようという心の強いスタッフがいるみたいだ。というより、遠慮が無さすぎるような気も……
　壁になっている護衛の間を抜け、迷うことなく３人の美少女の真ん中へ。
「は――――？」
　全くの予想外だった。
　聖天子様の護衛をしていることも、ラ・フォリアとユースティアナがいることも、この後時間をとって話をするかもしれないことも、近

くに楯無さんがいることも。
そのすべてが頭から吹き飛んだ。

そのスタッフは、マゼンタカラーのトイカメラを首から下げていた。

大本たちの会議　２日目　後編

「私に何か？」
「や、何か、って……！」
とぼけたキメ顔をしているが、見間違えるはずがない。こんなにも隠し切れないオーラってものがあるのに、誰も不審に思わないのか？
それとも、ライダーじゃないと分からないのか？
ごまかしたいなら、せめて首からぶら下げているトイカメラをどうにかしろよ！
「先輩？　その人がどうかしたんですか？」
「や、あのな……？」
雪菜が不思議そうに聞いてくるが、あまりにも急なコトで俺の理解も追いつかない。聖天子様達もぽかんとしている。
多少の異常でも、この世界ではその人の『個性』として認知されてしまうのか……!?　それはさぞかし多様性にあふれた、というか実際にあふれてるな、この世界は！
そんなんだから、スタンドによる異常も見逃すんだぞ！
目の前にいる男、本編で見た時よりも多少歳をとっているように見えるが、仮面ライダーディケイド――――門矢　士だ。
世界を渡り歩く多次元ライダー。世界の破壊者の異名を持ち、仮面ライダーシリーズにとっても特異な存在……というのは作品の中の設定のはず。
無限の可能性の中で、まったく同じ存在がいたってことなのか？
本当にご本人なのか？
それとも、写真好きのそっくりさん？　……ありえないだろ。
考えているうちに、門矢　士（仮）はどこかへ行ってしまった。見回しても、首からカメラをぶら下げている人物は見当たらない。
「ああ、もう……」
何かあるのは確実だと思うのに、こう、喉にもやもやが残るこの感じ……！　護衛の仕事中じゃなければ、見つかるまで探し回るのに！
その時だった。

「ん、はい、何か？」
楯無さんが耳に指をあてた。
「……はい、……はい、わかりました。そちらで対応してください」
「何か問題ですか？」
「ん。ちょっと、ね」
俺が聞くと言葉を濁す。近寄って、耳元で囁いてきた。
「下の階に正体不明の怪物が現れたんだって。何か知ってる？」
「何も知りませんね」
疑いたくなる気持ちもわかるが、これはホントに何も知らない。
「ちょっと行ってくるわ。もしかしたら何かあるかもしれないから、ここはお願いね？」
「了解です」
「ん、それでは皆様、ごきげんよう」
不敵な笑みを浮かべた楯無さんは、その場を去っていった。
「何かあったのか？」
「下でなんかトラブったらしい」
「大丈夫でしょうか……？」
「あの口ぶりだと問題ないっぽいけど」
目つきの変わったライネスは鋭く聞いてきて、雪菜は不安そうに言っている。
しかし、俺もその『怪物』って奴を見てみたかったな。心当たりは無いにしても、見れば何かわかると思うんだけど。
ディケイドもいたことだし、ライダー系の怪人の可能性が非常に高い。あいつがいるってことは、そういうトラブルがあるってことだろうからな。
楯無さんの様子を見た各国の護衛が少し殺気立ってきた。何かあると悟ったんだろう。
異変が現れるまで、そう時間はかからなかった。
バタン!!　乱暴な音とともに、扉が開け放たれる。いや、開けられたのではない。人型の何かが、体当たりで壊したのだ。
扉に体当たりした個体は床に倒れこみ、それを踏みつけながら後続

がなだれ込んでくる。
ゾンビのような、顔無しのミイラのような怪物。そいつらの名前は。
「『屑ヤミー』……！　オーズ系の敵なのか！」
仮面ライダーオーズの戦闘員役。幸い、しっかりとした個体のヤミーや、敵幹部の『グリード』の姿は無い。
だが、
「次から次へと……!!」
とめどなく入り込んでくる屑ヤミーの群れ。どうも数が多い。
「まさか……」
まさか、楯無さんが突破されたのか？
実力的に倒せないってことは無いだろう。それでも倒しきれないくらいたくさん来てるのか。
「先輩！」
「主様！」
「ああ！　とにかく倒すぞ！」
護衛の仕事は要人にケガをさせないこと。当たり前だが、護衛対象の安全確保が一番の仕事だ。
そして、安全確保と敵を排除することは必ずしもイコールにはならない。倒すのは管理局に任せようと考えている人たちが多い。
だが明らかに局員の数が足りない。護衛に仕事が発生するのは間違いない。だが、下の階の様子も――楯無さんの様子も気になる。
「翔さん、下に行ってください！　私は大丈夫です！」
後ろにいる聖天子様が叫んでいる。優しい彼女は、俺と同じように楯無さんの身を案じているんだ。
ラ・フォリアとペコ――ユースティアナが一緒にいれば、彼女たちの護衛が守ってくれるだろう。２人の性格的にも、見捨てるなんてことは無いはずだ。
だったら、
「行ってくる。雪菜たちは、聖天子様を頼む。俺も１人はこっちに残すから」

「はいっ……はい？」
「１人はこっちに残す……？」
俺は久々のゲーマドライバーを身に着けた。こうして持ってみると、ジクウドライバーとは違う質感だな。
感動しつつも、変身アイテムを取り出す。
《ＭｉｇｈｔｙＢｒｏｔｈｅｒｓ　ＸＸ！》
アルトリア達に返してもらった、マイティブラザーズのガシャットだ。今回はこれを使わせてもらおう。
「変身」
《ダブルガッシャット!!》
《レベルアップ!!》
《マイティブラザーズッ！　２人で１人！　マイティブラザーズ！
２人でビクトリー！　Ｘ！》
「あら……」
「翔さん……」
「わわっ！　なんだかずいぶんと可愛い姿になっちゃいましたね！」
後ろにいる面々は、俺の変化に驚いている。
ずんぐりとした体形に大きな顔。真ん中から２色に分かれた髪の毛が生えたような頭部。正直言って、初見ではあまりカッコいいとは言えない姿だ。
「もう１回だッ！」
今度はレバーを開閉させる。
《ダブルアップ！》
《俺がお前で　お前が俺で！　Ｗｅ　ａｒｅ！　マイティ！　マイティ！　ブラザーズ！　Ｘ（ダブルエックス）　Ｘ!!》
ずんぐりとした外装が吹き飛び、中からオレンジと緑、２色のエグゼイドが現れた。
「あらあら……!?」
「翔さん……!?」
「増えちゃいました!?　ヤバいですねっ!!」
これまた思い思いの反応をしている。

「雪菜、俺は残るから！」
「俺は行ってくる！」
「え、あ、あの、はい？」
　雪菜はハテナマークを浮かべているが、長々と説明している時間は無い。
「ほら、持ってけ！」
「サンキュー！」
　下の階に怪物を倒しに行く方（緑色）は、残る方（オレンジ）から専用武器である『ガシャコンキースラッシャー』を受け取る。
「行ってくる！」
「さて、俺たちはこっちをどうにかしないとな！」
　ダブルアクションゲーマーによる戦いが始まった。

「確かに、正体不明の怪物ね……」
　現着した楯無が見た光景をそう評した。
　多数の局員が屑ヤミーと戦っていた。戦況は劣勢という訳ではない。強さ自体はそれほどでもないのだ。
　この状況ならば。
「2，3匹くらいは捕獲しておきたいわね」
　軽く言いつつ、扇子についているアクセサリに触れた。
「行くわよ、霧纏（ミステリアス・レイディ）の淑女」
　次の瞬間、楯無は光に包まれた。
　体のラインの出るインナージャケットに包まれた体に、装甲が装着されていく。さらに、装甲で覆われていない部分を、水のヴェールが包み込む。

手には主兵装である蒼流旋――――巨大な槍が装備される。
楯無の持つＩＳ、霧纏（ミステリアス・レイディ）の淑女だ。
ＩＳは『インフィニット・ストラトス』に登場するキーアイテムだ。
原作では『篠ノ之　束』が開発した宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツ。光学兵器、空を飛べる、パイロットを守る絶対防御、自己進化能力による拡張性などもあり、機動兵器として使われていた。
しかし何故か女性しか使えず、主人公である『織斑　一夏』は世界で唯一ＩＳを使える男性だった。
この世界でもそれはほとんど変わらない。
違う点は、化学製品ではなく魔法デバイスであるという点だ。
ただし、篠ノ之束の例にもれず、世界に大きな影響を与えている。
まず、適性が無くても空を飛べるようになる。
なのはやフェイトが普通に飛んでいるので忘れそうになるが、スバルやティアナは魔法に適性が無く、飛行魔法を使えない。数としては、そちらが圧倒的多数なのだ。
その不利を容易に覆せる。
また、近年、魔法を主戦力とする管理局で大きな課題になっているＡＭＦ（アンチ・マジック・フィールド）。その影響を全く受けずに魔法の行使が可能である。
しかし、ＩＳの中核である『コア』は篠ノ之束にしか作れず、その数には限りがある。とはいえ、平和のための大事な戦力になっているのは間違いなかった。
日本の国防で大きな力を持つ更識家。そこの１７代目当主として、楯無はＩＳの力を振るう。
ヴェールを構成していた水が、刃よりも鋭く、屑ヤミーを貫いた。力尽きた屑ヤミーが割れたセルメダルへと姿を変える。
「更識さんっ!!」
「状況はッ!?」
「この怪物、何処からともなく湧いてきます!!」
「倒しても倒してもキリがありません！」

「泣き言は言わない!!」
鼓舞する合間にも、楯無は蒼流旋を突き刺す。実際に槍に当たったヤミーはその場で爆散し、衝撃を受けたヤミーも次々と壁に叩きつけられた。
チャリン、チャリンとメダルが床に転がる。
その強さに士気が一気に高まるが、気合だけでは体力は回復しない。
「ふっ!」
楯無は一気に前に出た。一度槍を振るうごとに何匹もの屑ヤミーが吹き飛び塵に消える。それでいて建物への被害は最小限に抑える。
蒼流旋は楯無の魔力で操られた水を纏っている。通常の槍は振るえば鈍器になるが、蒼流旋は研ぎ澄まされた水によって剣の様に切断もできる。
纏った水のヴェールも同じだ。身を守る盾にもなり、相手を貫く槍にもなる。半端な防御ではすり抜けてしまう。水滴の1粒が楯無の武器だ。
「(さて、どうしようかしらねっ! こういう相手なら辺り一面を吹き飛ばすんだけど……それをするのは流石に危険。結局、ちまちま潰すしかない、かっ!)」
広範囲を攻撃する技はあるが室内で使うのは、まして上の階に護衛がいるのだ。選択肢には上がらない。
後ろから光弾が飛んできた。
「魔力弾……じゃない?」
現れたのはダブルアクションゲーマーに変身した翔だった。

「大丈夫ですか、楯無さん！」
「夜月君⁉　何であなたがここに⁉　上は大丈夫なの？」
「それなら、問題ないです。上にも俺がいますから」
「……なるほど。そういう力も持ってるってことね（この姿、パラドクスに似てるけど、見たことの無い形態……彼の仮面ライダーにはまだまだ知らないことがあるのね）」
「理解が早くて助かりますが、上にもあの怪物は出てます。要人はそれぞれの護衛で守れてますけど……」
「だったら、ここを突破されるわけにはいかないわね……！」
突破されてたわけじゃないのか。だというなら、上にも発生源があることになる。上は上の俺に任せるしかない。
柱の影から、扉の外から、屑とは言え無限湧きでは先にこちらが参ってしまう。どこかに発生のもとがあるのか？　や、出てくる場所がランダムすぎるな。
俺たちは背中合わせになりつつも、どんどん屑ヤミーを駆除していく。
それでも、一向に数が減らない。このまま時間をかけすぎるのはいけないか。でもどうする？
「……や、ここは……」
「何か方法がある⁉」
「ここにいる全員を強化します！」
俺は新しい能力を発動させた。

「雪霞狼ッ!!」
雪菜の槍が相手を切り裂き、柄で相手を殴打する。その攻撃の隙を

埋めるように、襲い掛かってきた屑ヤミーを俺が殴り倒す。
「翔さん……！」
「聖天子様、あまり前に出ないでくださいまし。精霊よ……お二人に加護を！」
コッコロの力で、疲労が少なくなる。
しかし、
「雪菜っ！　まだいけそうか!?」
「はぁ、はぁ、はいっ！　全然いけます！」
周りと見ると、押されている人はいなかった。それでも、何処から襲ってくるのか、いつ終わるのかもわからない屑ヤミーの相手に、疲労の蓄積が見える。
「クソっ、下はどうなってんだ……！」
何でこんなにたくさん、いつまでも出てくるんだ!?
「あの分裂した先輩がどうなってるか分からないんですか!?」
「分かんないな！」
背中合わせで戦いつつ、俺たちは会話を交わす。
残念ながら、ダブルアクションゲーマーにそんな便利機能は無い。
「はっ!?　……なるほどね」
「先輩？　何があったんですか？」
俺だけが感じ取れたんだろう。下の階で、あの能力が発動したのを。魔法、というよりも権能と言ったほうが良い力。
「こっちも使ってみるか……！」
俺の足元に黄金の魔法陣が浮かび上がる。
「この場にいる全員を強化する！」
プリンセスナイトの能力だ。

「これは……！」
「なんだ？　体が、急に軽く……？」
「こんな能力まで隠してたなんてね……」
「正確には、ついこの間手に入れたんですけどね」
　誰にも聞こえないようにぼそりと呟く。
『プリンセスコネクト！　Ｒｅ：Ｄｉｖｅ』の主人公の力。直接の効果が見えないから正直地味だが、その効果は絶大だ。最強クラスのサポート能力。それが弱い訳がないのだ。強化する相手さえいれば。
　押し寄せる敵に疲労困憊だった管理局員の顔つきが、見る見るうちに鋭くなっていく。まるで疲労を忘れてしまったかのように、攻撃を始めた。
「……これが味方だったら、確かに頼もしいわね……一気に押して!!」
「「はいっ!!」」
　俺と楯無さんを中心に、反撃が始まった。

「むむむ……！」
「先輩から力が流れ込んでくる……？　先輩、これって……！」
「俺の新しい能力だ。コッコロ！　俺たちに支援魔法をかけてくれ！」
「は、はい！　わかりました、主様っ！」
　俺のプリンセスナイトのバフの上に、さらにコッコロの精霊の加護が加わり、会場全体を満たした。
「おおっ!!」
「これならいけるぞ！　一気に押し込めるッ!!」

「先輩！　私達も！」
「ああ！」
一気にパワーアップしたことで、管理局員だけでなく護衛も勢いづく。
こうして、俺たちは何とか屑ヤミーの大軍を撃退することができたのだった。

大物たちの会議　2日目　裏

屑ヤミーの襲撃に会う少し前、会議はとある議題に入っていた。
下の華やかな政治の場とは違い、ひりひりとした緊張感が場を満たしている。誰も彼もが猟犬のように目を光らせている。
要人が大きな円卓に座り、その後ろには各1人の護衛が控えている。だが、そもそも護衛が必要な要人の方が少ない。
この混沌の島に来るのだ。自分の身は自分で守れるくらいには、それどころか、襲ってきた相手を返り討ちに出来るくらいには実力が無いと危ないのだ。
おかげで、単純な力の密度が凄まじいことになっている。
それが原因で、胃に大きなダメージを受けている者もいるが。
「(始まったばっかりだけど、もう帰りたい。昨日とは全然違うじゃんか……)」
「……っ」
それっぽい顔をしているウェイバーも、後ろに控えているグレイも同じ気持ちだった。
ロードの名前を冠しているとしても、本人の実力はたかが知れているのだ。唯一の救いは、魔術関係でなければ話を振られないことだ。
「えー……それでは次の議題ですが……」
司会が議題を進めようとする。ここまでは前年の会議の結果をだらだらと発表してきた。退屈な時間だった。これ以上なく、無駄な時間を過ごしてきた。
この場にいる人間が知りたいのは、わずか数日前、この島を世界の敵にするかもしれなかった大事件の真相だ。
「んで？　そろそろ本題に入ろうじゃねーか、なぁ？　みんな気になってんだろ？」
背格好は小さな子供。服装はスーツではなく、自国の民族特有のものだ。相手を切り裂くような鋭い眼光を備えた目が辺りを見回すと、いくつかの国が同意したように空気を作った。
行儀悪く机の上にあげていた足を下ろす少年。背もたれの後ろで、

普通のホモサピエンスには無い器官……尻尾が揺れた。
ギド・ルシオン・デビルーク。ランドソルと同じく、ホットスポット上にある特別な国――――デビルーク王国。その王だ。
「そうですね。ぜひとも、詳しい話をお聞きしたいわ」
「はっ、よく言うな、極東の魔王。本当はもう全部知ってるんじゃーないのか？」
２人の女性が軽い調子で口を開いた、
１人は日本の代表、『四葉　真夜』。そこだけ闇が濃い。そう錯覚してしまうほど艶のある黒髪の女性だ。
異性を妖しく惹きつけずにはいられない、大人の可愛いらしさが同居した美しさを持つが、それに惹かれるほどヤワな、または命知らずな人物はこの場にはいない。
もう１人はイギリスの代表、王室第２王女である『キャーリサ』。
肘をついた手に顎を乗せるその姿からは、可憐な姫君という印象は全く受けない。顔は整っているが、挑発的な笑みを浮かべ、真夜とは違い少々荒っぽい、豪快な印象を受ける。
「……」
そしてなんと、その後ろにはアリアが警護として控えていた。
キャーリサは流し目を送るが、真夜はそれを涼やかに受け流す。
ここまでくれば、司会の役割は終わったと言っても良い。元より制御できる人物ではないのだ。
後は流れに任せて、まとまるまで話し合ってもらうだけだ。
「では私から、説明させていただきます」
その為にそこに居たはやてが名乗りを上げる。
「八神はやて……夜天の書の主か。ずいぶんとまあ、大物が出てきたもんだな」
「おいおい、あんまりイジメてやるな」
「……始めさせていただきます」
ギドとキャーリサの軽口に反応せず、モニターを起動させる。
流石のはやても、このメンバー相手に緊張を隠すことが出来ない。
騒がしかったメンバーも、はやての説明には質問せずに静かに聞き

入る。自分たちの諜報部隊が仕入れていた情報と照らし合わせているのだ。
「……以上になります」
説明に一区切りつき、はやては席に着いた。
今回説明したのは、妹達を主軸にした、能力者量産計画について。それに伴う、最終信号（ラストオーダー）による暴走未遂だけだ。
レベル6シフト計画は闇に葬られ、証拠1つ無い状態。目の前の面々なら何かを掴んでいるかもしれないが、曲がりなりにもここは公式の場。事実報告で『妄想』を言う訳にはいかない。
「フーン、なるほどなぁ」
「じゃあ私たちは、けっこー危なかったわけだ？　暴走寸前って話だし？」
「私たち、というよりも、この島が、かしら？　今の時期、人がたくさんいますからね」
「……はい。そういうことになります」
3人の言葉を、唇をかみしめて肯定するはやて。自分のせいではなくても、自分たちが食い止めたとしても、こうした場では謝罪しなければならない。
それが責任者の辛いところだ。
「まあまあ、皆さん。こうして管理局の働きのおかげで、何事もなかったわけですから」
優しい声で諭すのはランドソルのアストライア王、つまりはペコリーヌのお父さんだ。
「そりゃもちろん。やってくれないと困る訳だし？　いざってときに役に立たない軍隊なんて、金の無駄でしかない訳だし」
「ですから、その責務をしっかり果たしたと言っているんですよ、私は」
「……ハッ」
キャーリサは鼻で笑う。
「私もそう思いますよ」
険悪な雰囲気になってきたが、そこに割って入るのは、そして意外

にもアストライア王の味方をする四葉真夜だ。
「責務をしっかり果たして、人的被害を最小限にとどめた。結果を見ればそれがすべてではなくて？」
「へー？　意外だな、極東の魔王。そっちの味方になる訳か？」
「今回の管理局に、責めるべき点が見当たらないというだけですよ」
「だがまあ、そんな大事な説明を部下に任せるってのは、いただけないけどなぁ」
　この島の管理局を取り仕切るアレイスターは目の前におらず、画面越しにもいない。今この場での管理局代表は八神はやてだ。
　各国の代表が集まる場に出席しない。例年であれば「ああいつもの事か」で流せるのかもしれないが、今回はそうもいかない。
　それほどの大事件だったのだ。
「……ま、ここで文句言っても仕方がないっていうのは分かってる訳だし？　特務六課にはこれからも期待してるってことで。次に行こーか」
　ギドも同意したことで、キャーリサはそれ以上何か言うのをやめる。
「（ぷはー！　なんとか、なんとか乗り切ったー！）」
　実際、事件をこの規模に抑えられたのは一方通行のおかげだったりするのだが、余計なことまで言う必要は無い。事実が大切なのだ。
「（というか多分、このメンツなら、夜月君が一方通行に勝ったことも知られとるんやろうなぁ……イギリスのあの王女サマとか、明らかに）」
　その後一方通行がどうなったのかも、場合によっては知られているのかもしれない。同じ時間、別の場所で戦っていた翔の事も、アナザービルドのことも。
「（何人かには見逃してもらってる。って考えたほうがええかもなぁ）」
　管理局を糾弾するよりも、もっと別のことに時間を使いたいということだ。だがそれは、自分たちが握っている情報を共有するという意味ではない。

はやての説明にあった内容についてだ。
「それよりも大きな問題があるだろう」
野太い声で場の空気を変えるのはルーカス・リハヴァイン。ラ・フォリアの父親であるアルディギアの国王だ。
「問題はこの島で、そんな研究がされていた件だ！　『学会』は何をやっているんだ！」
机を叩くドン!!　という音が響く。
『学会』とは、この学園島の最高議会だ。超能力を含めた科学技術開発を取り仕切っている。
学生への超能力開発から危険な研究の監視など、管理局が外部からの監視役なら、『学会』は国で言えば政府のような役割までしている。
この島が作られたのには２つの理由がある。
１つ目はもちろん世界平和だ。
それぞれの国がそれぞれに、秘密裏に技術研究をしては、それが新兵器となり、争いの火種になりかねない。
１か所に集めそれを常に世界に公開することによって、争いを防ごうという狙いだ。それにはもちろん、超能力開発も含まれる。
２つ目は篠ノ之束対策だ。
１人で世界を滅ぼしかねない『天災』に対抗するために、世界の英知を結集させているのだ。
「その見返りが、世界大戦では笑えないですけどね？」
「ま、しゃーねぇんじゃねぇの？　研究者ってのは変態が多いからなぁ。しかも樹形図の計算者（ツリーダイヤグラム）なんてオモチャまで与えてんだ。遅かれ早かれ、暴走すんのは目に見えてたさ」
ギドは分かっていたと言わんばかりにニヤニヤしている。
実はデビルーク王国も、極端に高い科学力を持った国である。この島を作る時にも技術提供していた。
「しかし今更この島を解体などできないでしょう？」
アストライア王の発言に、今度は誰も噛みつかない。
単純な科学者なら問題ない。その人たちはさぞかし母国の発展に力を尽くしてくれるだろう。

問題は異常な科学者。問題を起こすのはこいつらだ。今はここに集められているが、解体ともなれば世界中に拡散し、スポンサーはこぞって彼らを囲うだろう。
好きに研究させ、場合によってはその暴力を振るう。
科学技術という誰にでも使えるモノという点がさらに厄介だ。
「ならどうする？　現状維持か？　今回が最悪かもしれないなどという楽観視は出来んぞ？」
「まー確かに？　管理局内部に問題があるかもしれないって話も出てるからねぇ？」
「そのことについて、アレイスターから説明が欲しかったトコだがな……野郎、まさか逃げやがったのか？」
「（まさか、そんなことは無いと信じたいんやけど……）」
はやては、あの感情の読めない上司のことを考える。
その時、会議室のドアが勢い良く開かれた。
「申し訳ありません！　至急、皆さまのお耳に入れたいことがッ!!」
「騒がしーぞ。いったい何の騒ぎだ？」
転がり込んできたスーツの男が口にするのは、屑ヤミー襲撃の知らせだった。

襲撃があって、会議をまともに続けられるわけがない。安全確保のため、その日はお開きになった。
「ふーっ」
キャーリサはホテルの部屋で椅子に座り、天井を仰ぎつつ深く息を吐いた。
「王女殿下、本日は――？」

「ん、ああ――――」
　護衛のアリアの声に体を起こす。
「ま、少なくとも今日は、仕事はないだろーさ。かと言って外を出歩くわけにもいかない。っち！　これだから、どうせだったら姉上に任せておけばいいものを」
「第1王女……リエメア様ですか？」
「ああ、そーそー。あの偏屈者、『自分の身分を知っている人間は一切信用しない』ときた。会議中ならまだしも、夜はどこをほっつき歩くか分かったもんじゃない。扉の前で護衛している騎士すら信用していないからな。根本的に『海外に行く外交』には向いていない」
「はあ……」
「かと言って、妹も無理だ。あんな場所にいたら5秒で失神する」
「第3王女のヴィリアン様は、非常に人徳に優れた方だと伺っていますが」
「人徳であのメンツと渡り合えるものかよ……まあつまり、消去法で私しかいなかった訳だ。まったく、例年通り、お母さまが出席すればよかったものをッ。何が経験だ。忌々しい！」
　再度舌打ちしたキャーリサは着ていたスーツの上着を乱暴に脱ぎ捨てた。首元を飾っていたネックレスも。まるで酔っぱらったサラリーマンだ。
「という訳で今日の仕事は終わり。明日のことは追って連絡させる。もう帰っていいぞ」
「……キャーリサ様。帰る前に、1つ質問をしてもよろしいでしょうか？」
「好きにすればいーし」
　暇つぶしと言わんばかりにキャーリサはアリアの方を向く。
「何故私を殿下の護衛に？　それこそ騎士……別室にいる騎士団長（ナイトリーダー）に比べれば私は……」
「別に兵隊としての能力で、お前を護衛につけた訳じゃないし？　個人的に、ホームズ家の長女と繋がりを持っておきたいと思って」
「……家、ですか」

アリアは嫌そうな顔をする。
今回の護衛も、家を通しての指名だった。それが無ければ、今頃はバカンスだったのだが。
「そう嫌そーな顔をするな。お前が本家でどんな扱いを受けているのかは噂で知っているが、どんなに頑張ったって、自分の名前から逃げることは出来ないぞ」
「それは分かっていますが……ホームズ家としての『出来の良さ』なら、妹の方が……」
「お前の妹は、どちらかと言えばリエメア姉さま向きだろう？　裏でこそこそするのは私の趣味じゃないし、使いこなせない。お前が仮に『R』ランクの武偵になれば、本家の連中は最高の意趣返しになるし――母親を救う手がかりになるかもしれないぞ？」
Rランク。本来武偵の最高ランクは『S』だが、それ以上――例えば王室直属などの武偵には『Royal』の頭文字をとってRランクが与えられる。
その誘いを、今、こんなにも軽く受けている。
しかしそれ以上の条件を、キャーリサはちらつかせていた。
「ッ!?　マ――母の冤罪について何かご存じなんですかっ!?」
流石に平静を保っていられず、語尾が荒くなる。
「流石にこの場じゃー答えられないが……母上と姉さまだな。こう言った私も詳しいことは知らないし？　ま、考えておいてくれ」
「……わかりました。失礼します」
アリアは扉を開ける。
「気が変わったらいつでも連絡しろ。私は優秀な人材は拒まないからな」
結局アリアは、この話を家の誰にも出来なかった。

首からトイカメラをぶら下げた男――――門矢　士は、人込みを縫うように会場を後にしていた。
２０分にもわたる襲撃によって、会議が行われているビルからは煙が昇っていた。それにやじ馬が引き寄せられ、交通整理をしている武偵は苦労している。
「あの男、エグゼイドに変身していたな」
翔の目の前に士が現れたのは、もちろん偶然ではなかった。翔も思っているように、そんな偶然があるわけがない。
予め目星をつけていた。士はライダーの波長を感じ取ったのだ。
その予感はズバリ的中。
戦闘の一部始終を、士は目撃していた。押されはしないものの、攻めあぐねている状況。それを変えようと、少し手伝ってやるかと行動を起こすその寸前、エグゼイドに変身した翔が現れたのだ。
周りにいた兵隊と一緒に怪人を倒すその姿は、正しく仮面ライダーのものだった。
だからと言って短絡的にそのライダーの世界と結びつくほど、士は簡単な旅はしていない。
「エグゼイドに変身してはいたが、アイツはエグゼイドじゃない」
はっきりと断言出来ることだった。
どうしようもない違和感があった。
「ライダーのいない世界かと思えば、ライダーがいて、でもそいつは正しいライダーじゃない……中々分かりにくいな、この世界は。もう少し、見極めてみるとしようか」
そう呟き、士は姿を消した。

お姫様達とのお出かけ　前編

屑ヤミーの襲撃があった次の日。本来なら今日も護衛の仕事で会場に行くはずだったんだけど。
「すみません、まさかこんなことになってしまうとは……」
「いえいえ、別に聖天子様に原因がある訳じゃありませんから」
申し訳なさそうな聖天子様に、雪菜は慌てて手を振る。
今現在いるのは、聖天子様の家。
家、なんて軽く言ってるけど、もっと別の言い方したほうがいいかな？　もっとやんごとない感じに。
「わたくし達、こんなにのんびりしていてもよろしいのでしょうか……？」
「ええ。そんなに気になさらないで下さい」
こうしてお茶を飲んでいる間にもお給料は発生している。まじめなコッコロはだんだんと申し訳なくなってきたみたいだ。
今日、こうしてヒマしているのにはしっかり理由がある。
言ってしまえば、パーティが無くなったのだ。
あそこまで露骨な襲撃があってそのままパーティを続けるほど、皆さん平和ボケはしていない。
懇親パーティをキャンセルする国が大多数となり、パーティ自体が中止。会議は変わらず開催されているが、パーティの護衛をすべてそちらへ付けた超厳戒態勢になったらしい。
会議と言っても、それぞれ議題を決めて、分かれて行われている。そうでもしなければ、話し合うことが多すぎるのだ。
菊之丞氏はこの島の政治的な関係について？　ま、難しいところは分からないけど。
ちなみに八神部隊長はさらにその上、超政治的な極秘会議に出席しているのだとか。妹達関連の話を出すならそれも当然か。
それでだ。会議に出席しない聖天子様と、それこそパーティのために護衛として雇われた俺達は、超暇になったわけだ。
夏の大部分を占めていた予定がなくなったわけだからな。とりあ

えず今のところは、状況を見てパーティーが再開されるかもしれないからな。
「「「……」」」
　みんな揃ってお茶をすする。
「あーもう！」
「さっきからじれったい！」
「マジ引くわー！」
　聖天子様お付きの護衛。どこかで見たことあるような3人組だ。
　勢いよく扉が開けられ、3人そろって飛び出してきた。
「や。驚かすなよ。敵かと思っちゃったじゃん」
「何もすることが無いってんなら……」
「街にでも遊びに行きゃあいいでしょうが！」
「マジ引くわー！」
「「「え？」」」

「あっつー……」
　そんなこんなで、俺たちは街へ繰り出していた。
　危険だからパーティが中止になったんだ。絶対許可下りないだろ、と思ったが、
「まーまー、聖天子様のリフレッシュだと思って。ずっと働き詰めで学校にもまともに行けてないんだよ？　ひと夏の思い出くらい作っても罰当たんないっしょ？」
「でも、何かあるのは絶対勘弁ね？　まああんたは、前回の暗殺者騒ぎで結果残してるから大丈夫だと思うけど……何かあったらその時は」
「マジ、引くわ」

こんな感じでゴリ押しされた。
別に外出禁止命令が出ているわけではないのだから、咎められることは無い……訳ないよなぁ？
予定では今日1日中、聖天子様はこの部屋にいることになっている。扉の前にいた3人はいなくなるのを黙っているだけ。つまりは傷一つつけず、1日楽しませて来いという訳だ。
許可は下りてないよ。
あれよあれよという間に白いワンピースに着替えさせられた聖天子様と、町に送り出されてしまった。
来てしまったものは仕方ない。気合を入れてやるだけだ。
の、だが。
「……なんか、護衛対象が増えている気がするんだが？」
「そうでございますね……」
「どうしてこんなことになってるんでしょうか……」
真面目な雪菜、コッコロが既に疲れた声を出している。もちろん俺も同じ気持ちだ。
近場の出店にそれはもう目立つ送迎車がいくつも停まっていた。それだけで少し騒ぎになってしまっている。なっっっがいリムジン。俺たちはその内の1台に乗ってきた。
リムジンは広いからな。俺、聖天子様、雪菜、コッコロの4人が乗ってもまだ余裕があるし、1人1台あてがわれるほど俺たちは好待遇じゃない。
「おおー!!　どこかしこからもおいしそうな匂いが……！　やばいですね☆」
「この時期は学生の出店と企業の試食のテントがあちこちに立ちますからね。このエリアは食品がメインですね」
パーティでのドレスとはうって変わり、動きやすい服装をした2人のお姫様。
ラ・フォリアとユースティアナだ。
ラ・フォリアは、アニメはほとんどこの服装で過ごしている、と言える制服のような恰好。

ペコリーヌの方と言えば、こちらは原作ゲームの絆ストーリー、『夢みたいなもの』な世界で拝むことが出来る現実世界の服装だ。
どちらも大きく印象は変わっているが、それでも人目を引くのは変わらない。それが、あの方々が誰なのかを知っているからか、ただ単に可愛い少女がいるからなのかは知らないけど。
この２人、聖天子様からの連絡を受けて、ここに先回りしていたらしいのだ。
「まあまあ、良いじゃないですか。結局、ゆっくりお話を聞く約束、なくなってしまいましたから。しっかり責任を取ってもらいませんと」
「そうですそうです！　どうせなら、楽しまなきゃ損ですからね！」
「あっ！　ちょ、ちょっと……！」
笑顔で告げる２人は、聖天子を引っ張って出店へと向かっていく。
「……俺の責任じゃないんだけどね」
ぼやく俺だったが、ここまで来ていまさら変えることは出来ない。そしてもう１つ言えば、この場にいるお嬢様はこれで全員ではない。
「あまり人込みは好きではないが、ここまで活気がいいと私でも気持ちよく感じるな」
「……」
あまりにも自然と横にいるライネス。一番問題なのはお前だろ。お前にゃ誰も連絡してないはずだぞ。
「ライネスさんは、いったいどこで聞きつけてきたんですか？」
「刺々しいのは相変わらずだが、これは本当に単なる偶然だよ、姫柊雪菜」
えー？
「……」
「何か言いたそうだな？」
「流石に偶然はありえんだろ……」
「そんなに疑うな。普段から考えすぎてると、『偶然知り合いに会う』ことすら、誰かの作為に思えてしまうのか？」
「思える（ます）」
それ以外にないだろ。

「職業病だな。兄上のようにならない内に、治療をお勧めするよ……それはそれとして、今日はお前達もそこまで力を入れなくてもいいだろう？　周りにはたくさん人がいるようだからな」
「……」
　ま、どこかしこから視線を感じるのは気のせいじゃないんだろうな。見えないところから護衛してるってことか。
「だからって手は抜かないけどな」
「真面目なことだな」
「何かあってからじゃ遅いし……そもそも、お前だってその中に入ってるけどな」
「……うん？　なんだって？」
　や、だから。
「護衛云々言ってたの忘れたのかよ。何かあっても俺がどうにかするってことだよ」
「……そこは『俺たちが』ですよね、先輩？」
　雪菜が訂正してくる。そのやり取りを見ていたライネスはこらえきれないとばかりに吹き出した。
「あははは！　ああ、そうだな。期待しているよ、夜月　翔。今の君は私のナイトでもあるんだからな」
「もちろん、私達もいますからねっ！」
「はい、お任せください、ライネス様」
「ああ。もちろん頼りにしているさ。若干一名、違う感情を持っているようだが」
「じゃあそろそろ動こう。あんまり離れるのは良くないからな」
　視線を向けると、王女様達がどんどん前進している。人込みに紛れてもしっかりと分かる輝きがあるが、あまり離れるのは良くないな。
　立ち止まって何か買い物してるみたいだ。
　屋台の定番の１つ、たこ焼きだ。
「すみませーん！　このたこ焼き、２パックくださーい！」
「はーい、毎度ありー……ん？」
　店番をしている学生が首を傾げている。

「どうしたんですか？」
「お客さん……どこかで会ったとこありません？　というか、テレビに出てたりとか……」
「いえいえ！　そんなことないですよ？」
「えー、そうですか？　や、ホントに……うーん？」
有名人だってことがバレかけてるんだけど。
いくら悪いことじゃなくても、騒ぎになってしまうのは勘弁だ。
「流石にもう少し自重してくれ……！」
「下手に顔を隠しても、それはそれで怪しまれるからな」
「それは詰んでるな……！　お出かけ自体無理だろ！」
俺たちは急いでフォローに入るのだった。

一段落ついた俺たちは、何とか店の中に入っていた。パーテーションで仕切られている、さらにその隅、俺たちの体で隠し、何とか一息ついていた。
ちなみに、流石にお店の中に持ち込みは出来ないので、買った2パックのたこ焼きはみんなで処理した。
そう、みんなでお互いに食べさせ合って……え、もしかして回想シーンが欲しい？

「とりあえず、1回落ち着こう。これじゃあ、何かするどころの話じゃない」
俺の提案に、反対する人はいない。
一度目立ってしまえば、俺たちがいかに異常な集団か、周りに広がっていくのはそんなに遅くは無かった。

1人くらいなら『似ている人』でごまかせるかもしれないが、その『似ている人』が何人もいるとなっては、もうその言い訳は通じない。
動けなくなる前に、脱出してきたのだ。
「そうですね。流石に人が多すぎると、満足に身動きも取れないですし。色々とお話したいこともありますからね。良さそうなお店を予約させますね」
こういう時のラ・フォリアの行動は早い。端末を取り出して、どこかに連絡している。
「うーん……私もそのほうがいいと思いますけど、このたこ焼きはどうしましょうか？」
ユースティアナの手には、先ほどの出店で買ったたこ焼きの袋が。出来立てらしく、上にかけられたかつお節が躍っている。
「お店には持って入れないからなぁ。ここで食べちゃうか、それとも捨てちゃうか――」
「じゃあ食べちゃいますね！」
一拍の遅れも無く、ユースティアナが断言する。
「皆さんも食べちゃって下さい！　私1人だと食べきれないかもしれないので！」
「や、王女殿下だったら余裕でしょ。たこ焼きの1ダースや2ダース」
「ええ？　そんなことないですよ？」
「先輩！　失礼ですよ！」
間違った。ゲームのノリで言ってしまった。向こうだったら、このくらい余裕だろうからな。でも今はお腹が減る要因が無い。例のアイテムも今は持っていないみたいだしね。
女性にそんな、大食いだねっ！　なんていうのは失礼だな。まして相手は王女様なんだから。
「全然気にしていませんよ。それより、ほら、どうぞ！　熱いうちに食べちゃいましょう！」
「それじゃあお言葉に甘えて」
差し出されたたこ焼きを口の中に入れる。もちろん、竹串に刺さったたこ焼きを差し出されてそのまま『あーん』された――訳ではな

く、たこ焼きの入ったパックを差し出されたのだ。
もちろん自分で食べましたとも。
むむむ、カリカリ系じゃなくてとろとろ系のたこ焼きだったか。学生の文化祭にしては十分すぎるおいしさ。
「ではわたくし達も」
「そうですね。お言葉に甘えましょうか」
「ん。熱いから気をつけろよ」
雪菜とコッコロも、前に出てくる。それぞれ1つずつ口に運ぶ。
「考えてみれば、これってお姫様に奢られてるんだよな」
「むぐっ、へ、変なこと言わないで下さいよ！」
「あはは、そんなこと全然気にしなくていいんですよ！　今日一日はそんなつまらないことなんて忘れて楽しんじゃいましょうね！」
「恐れ多いお言葉ですが、とても光栄でございます」
俺は今さら気にしないけど、雪菜はそうじゃなかったらしい。意外にも、コッコロもそんなに気にしてないな。森育ちは強かったのか。
そんな会話を繰り広げていると、ライネスがたこ焼きを前に躊躇しているのが見えた。
「タコヤキ、か……」
「どうした、ライネス。食べないのか？　オクトパスは苦手なのか？」
割と知らない食べ物は苦手なのかもしれない。まあタコだしな。デビルフィッシュだしな。
「いや、食べるさ。食べるとも。せっかくなんだ。最近ではイギリスでも良く店に並べられているからな。変態の国、日本のせいで」
「人の母国を変態の国なんて言うんじゃねーよ」
「ふん、馬や戦艦を女の子として擬人化している国が何をほざいている」
それは……そうだな。
差し出された小さい手に、竹串を渡す。
「よし……」
意を決したように頷き、竹串を刺した。
そのまま持ち上げようとして――

べちゃ！
５センチほど持ち上げたところで、生地が破れてパックに落ちてしまった。
「……」
「もう1回やってみたら？」
「うむ……」
もう一度チャレンジするが、
「……とれんぞ」
「うぅーん……」
もはや球体ではなくもんじゃ焼きみたいになってるな。
「ま、まあ！　まだ残ってるわけだし！　ほら、そっちの奴にチャレンジしような！」
「何かコツは無いのか？」
「コ、コツ？」
そんなこと言われても。
「中にあるタコを刺せばいいんじゃないか？」
「透視の魔術は使えないぞ」
「はいはい、わかったよ……」
俺は竹串を受け取り、たこ焼きに刺す。
持ち上げて、もう片方の手を下に。落ちないようにそっと――
「先輩？」
「はい」
「私がやりますね？」
「あ、はい」
言われるがままに雪菜に竹串を渡す。
「ずいぶんと敏感だな、雪菜」
「アハハ、何を言っているのかわかりませんね？」
みんなで仲良く食べました。
――
という感じだった。
みんなで熱々のたこ焼きを頬張り、仲良く口の中を火傷した。そ

う、仲良くな。
「ふふふ、危なかったですね」
「あと少しで、身動き取れなくなるところでした」
「分かってるならもっと考えて行動してくれ……」
ラ・フォリアは分かってて迂闊な行動してるし、ユースティアナは騒ぎになる事の重大さをわかってないみたいだ。
「まあまあ、今はこうしてゆっくりできてるんだ。いいじゃないか」
そしてライネスは、こうしてくつくつと笑っているだけ。色々と面白い事がたくさんなんだろう。
「それじゃあ、ゆっくりと聞かせてもらいましょうか」
「何をですか？」
「パーティでも言ったじゃないですか。聖天子とあなたとの関係ですよ。」
ラ・フォリアはいたずらっ子のように微笑む。
「……関係、ですか。そうですね。私も聞きたいです」
「雪菜さん？」
そんな期待されたような目をされても困る。だって本当に、聖天子様とは何もないんだし……
なんと言ったものかと思案していると、
「あ、あのっ！」
「はい？」
見知らぬ男子学生が声をかけてきた。

お姫様達とのお出かけ　後編

「あ、あのっ！」
「はい？」
緊張した面持ちの男子学生が、俺達に声をかけてきた。正確には聖天子様にだけど。
よく見る防弾運動着。魔力の類は感じないので、超能力者か無能力者か。
「も、もしかして聖天子様でありますでしょうかっ！」
緊張からか、口調がめちゃくちゃだ。丁寧なのか軍隊に所属しているのか分からないしゃべり方だ。
額には汗を浮かべ、視線も泳いでいるその様子は、緊張しているというよりも挙動不審と言う方が正しい。
「……うん？」
俺はスイッチを切り替える。
「実は今借り物競走中で……」
そう言って男子学生は手に持っていた紙切れを俺達に見せてきた。その紙きれには一言、『有名人』と書かれていた。
まあ、武偵相手の借り物競走だ。校庭で声を張り上げた程度で手に入るものはお題にはならない。
大衆にもわかるもので、なおかつ武偵としての技術や人脈と言ったものが問われる課題が出されるのだ。
「……それが有名人だと」
まあ、そういうこともあるんだろうな。
「あのっ、もし良ければ、一緒に来ていただけないでしょうか！　僕、こういう課題は苦手で！　聖天子様に来ていただけないと多分ビリになってしまいます……！」
「……わかりました。護衛の方も一緒ですがよろしいですか？」
「もちろんですよ！　さっ！　早くいきましょう！」
聖天子様が男子生徒に手を引かれる――――ことは無く、俺が間に入り、男子生徒の後ろをついていく。

「それでは皆さん、ちょっと行ってきますね」
「いってらっしゃ～い」
「気を付けてくださいね？」
ユースティアナとラ・フォリアは笑顔で手を振っている。
「こっちは頼む」
「主様……」
「分かりました。先輩も気を付けて下さい」
雪菜とコッコロの言葉に頷いて歩きだした。
しばらく男子学生についていくと、路肩に止めてあるハイエースが見えてきた。
「じゃあこれに乗ってください！」
「用意がいいな」
「僕、車輌科なんですよ」
そう言って、扉を開ける男子学生。
「……翔さん？」
何の疑いも無く乗り込もうとする聖天子様の肩を掴んで、それ以上行かせない。
「……や、何をしてるんですか？　早く――――」
「一体、誰に頼まれた？」
「はい？　訳が分からないんですけど……？」
俺の口調から何かを察したのか、聖天子様の体を固くしている。半歩下がったため、彼女の背中が俺に当たる。
「……」
「……」
困り顔の男子学生と、睨み合う。
女性１人を間に挟んでいるその姿は、まるで１種の修羅場だ。しかもそれがとんでもない美少女で、洞察力がある人が見れば、ＴＶでたびたび見る聖天子様。
段々と周りの注目を集めていく。
暑さからか、それとも別の何かからか、男子学生の額に汗が伝う。
次の瞬間、

「クソっ!!」
　男子学生が銃口を突き付けて――
「きゃっ!?」
「があっ!?　な、何が?」
　すぐ近くで起きた銃声に、俺の手の中にすっぽりと納まるように、聖天子様が身を寄せてきた。
　男子学生――や、本当は学生ですらないかもしれない男は、手を押さえ、憎々しげに俺を睨みつけてくる。
不可視の銃弾(インヴィジビレ)によって、構えるよりも早く銃を叩き落されたのだ。
「なんで分かったんだ……!」
「騒ぎになる寸前だったからな。目ざとい奴らは何かしてきてもおかしくはない。それに、あのお店はラ・フォリア王女が用意させたんだ。店に着いてあんなすぐに一般人に見つかるわけがないだろ?」
　空閑遊真の嘘を見抜けるサイドエフェクトがあれば、カッコよく『お前、つまんないウソつくね』って言えたものを。残念ながら、そんな能力は手に入れていない。
「怪しいと思ったから、少しカマかけたんだよ。聖天子様を知らない人について行かせるわけないだろ（レプリカ、『響(エコー)』印は?）」
　耳元に、にゅっ、と出ているレプリカに問いかける。
「（すでに終了している。潜むように待機しているのは合計5人。場所は――）」
「（ふむふむ）それで?　俺の質問には答えてもらってないぞ?　何処の手先なんだ?」
　すぐにこちらに襲い掛かれる位置にいるのは3人。車の中に2人か。目の前のコイツを合わせて合計6人。
「それをお前が知る必要は無いッ!!」
　直後、周りから向けられる悪意。
「黒影(ダークシャドウ)!!」
　地面から飛び出してくる黒い影。大きく広げた翼で俺たちを包む。
「トリガー、オン」
　その隙に、俺はＢＪを展開。

「『弾』印（バウンド）」
俺は印を作り出す。
「え？」
聖天子様の足元に。
「きゃあああああああっ!!?」
「「ッ!?」」
強烈なトランポリンが突如足元に発生した聖天使様は、雅さからほど遠い悲鳴を上げながら、空に投げ出される。
周りを囲んでいた連中も、大空へ射出された今回のターゲットに息を呑んでいるのがわかる。
「なっ、あいつッ!! 何を考えているんだ！」
「受け止めろ！ 絶対に！ 傷一つつけるな！」
いつの間にか俺への攻撃は止まっている。視線すら外されている。
黒影（ダークシャドウ）を解除。
「はっ!!」
「「ぐあッ!!」」
後ろにいる3人を素早く気絶させる。
「むっ」
そこで、俺の体にオレンジと水色の輪っかが巻き付いた。車の中にいた2人は魔導師だったみたいだ。
さらに、俺達をここまで連れてきた男子学生の手が、一度弾き飛ばしたはずの拳銃を握り、俺に向けていた。
「問題は無い。すでに解析は終了した」
「バインド」
ブラックトリガーの能力でコピーした魔法をそのまま返してやる。
「うっ!? ク、クソ……！」
車の中に魔導師ともども、残りの3人を拘束する。
「――――ひあっ!!」
「おっと」
と、ここで空に逃がしていた聖天子様が帰ってきた。お姫様抱っこの体勢でしっかりと受け止める。

「お帰りなさい」
「あ、は、はい？」
自分の身に何が起こったのか分かっていないのか、目を丸くしている。
１０数秒の空中旅行の内に、襲ってきた奴らは全滅。少しざわついていただけだった周囲の視線は、完全にこちらに注がれている。
その視線は複数人の人間をノックアウトさせた俺と、落ちてくるときに盛大にワンピースがめくれあがっていた聖天子様へと半々だ。
一瞬だったし、まあ、ね？　もちろん俺は見てないけど。もちろん俺は見てないけど！　ヤミの時と同じような失敗はしてないけど！
「す、すみません。私が軽率でした……この方々、悪い人だったんですね。助けていただいて、ありがとうございます」
いや、そこは激怒してもおかしくないところだからね。
囲まれてたから上に放り投げたけど、もっといいやり方があったかもしれないし。
「な、なんて、滅茶苦茶な……お前、護衛じゃないのか……！」
なんかうめいてるな。
とりあえず、ここを離れないと。お忍びでここに来てるから、管理局とかがここに来ると面倒なことになる。
聖天子様の護衛、あのどこかで見たことのある３人に連絡しておく。そのくらいのケアはしてもらわないとな。
「このまま行くぞ」
「え？　あっ――――」
俺は聖天子様をお姫様抱っこしたまま、その場を離れるのだった。

「お帰りなさい！」
「どうやら無事だったみたいですね」
店に帰ると、ラ・フォリアとユースティアナが変わらない笑顔で迎えてくれた。
「こっちは変わりなかったか？」
「はい、特には」
「主様と聖天子様もご無事で。競技の結果はどうでしたか？」
「や、競技なんてなかったよ」
俺はみんなに事情を説明する。
「そんな、そうだったんですか……」
「危ないところでございました……お二人ともお怪我はありませんか？」
「見ての通りだ」
「はい。今回も助けていただきました」
聖天子様はあくまで、大空に飛ばされたことは言わないでいてくれるらしい。別に弱みを握ったとかではなく、単純に助けるための行為だと思ってくれているんだろう。
「（すべて俺の計画通りだ……！）」
「（狡いな、マスター）」
レプリカさんが何か言ってる。
「そうですね。見事な大立ち回りでしたよ、夜月さん」
「ラ・フォリアさん？」
「あなたほどの腕があれば、聖天子は安全でしょうね。私の護衛と比べても遜色ない……どうしてこれほどの人材が全くの無名なのか分からないくらいですよ」
まるで見ていたように言う……というかこれは実際に見てたな。ラ・フォリアじゃなくても、他の誰かが実際に。
「ええ。何かあってはいけないと思って、こっそりと私の護衛を。案の定だったようですね」
「ラ・フォリアっ、あなたはそんな、勝手にっ！」
聖天子様が少し顔を赤くしている。まんまと騙されていた自分を

恥じているのかもしれない。
何処まで詳細に説明されたのかは知らないが、このお店に入る一歩手前までお姫様抱っこをしていたのだ。場合によってはそれも。
「ふふ、別にいいでしょ？　お話を聞くよりも実際に見たほうがわかりやすいもの。それに、『もしも』のことがあっても、私の護衛がどうにかしてくれるわ。それに、あなたの護衛が優秀だって言う事が分かったんだもの」
もし俺がしくじっても大丈夫なようにしていたってことかよ。
「《それに》」
「う、ん？」
頭の中に直接ラ・フォリアの声が？　念話か？
「《あんなやり方、なかなか思いつきませんよ》」
「……」
「《敵を倒す手際は見事でしたけど……護衛対象を空に放り投げて、ふふふっ、もしも私が護衛されるときは気をつけないといけないですね。スカートの時には、中に見えても良いものを履いておくべきでしょうか？》」
ガタッ!!
「おい、どうした」
「なななに、なにがぁ？」
テーブルのラ・フォリア以外の視線が俺に集まる。特にライネスが不審者でも見るかのような目を向けてくる。
「そこまで挙動不審になっておいて、『何が』は無いと思うが」
「何か気になることがあるんですか？」
ある。
目の前で笑っている王女様がいったいどこまで知っているのかが。
「《別に言いふらすつもりは無いですよ。一瞬の事でしたし、最初から注目していた私たち以外、見た人はいませんから。面白いものを見せてもらったお礼ということで》」
「……」
護衛に話を聞いたんじゃなくて、その時の出来事を映像か何かで見

てるな。
　にこにこと笑って首を傾けるラ・フォリア。俺との会話（というよりも、一方的にしゃべられた）を知らないみんなは、俺が落ち着くとすぐに普通通りにしゃべり始めた。
「数少ない友達ですからね、聖天子は。そのくらいのことはします」
「ラ・フォリア王女は、あの人が怪しいと分かっていたんですか？」
「姫柊雪菜、ラ・フォリアって呼んでちょうだい？　私も雪菜って呼ぶから。コッコロちゃんとライネスも。別に私たちは、いがみ合うような関係じゃないでしょう？」
「え、で、ですが……」
「恐れ多いです……」
「はいはーい！　それなら私もユースティアナって呼んで欲しいです！」
　元気よく手を上げるユースティアナ。
　で、今挙げられたメンバーに俺が入ってないんだけど？　や、まあ、そういうこともあるよね？
「王女殿下がそれをお望みなら。私は構わないさ」
「……わかりました、ラ・フォリア、ユースティアナ」
「これからよろしくお願いします」
　顔を見合わせていた雪菜とコッコロだったが、ライネスが了承したことで首を縦に振った。
「これからよろしくね。と言っても、あまり会う機会はないかもしれないけれど」
「一気にお友達が増えちゃいました、ヤバいですね！」
「あなたももう少し、危機感を覚えましょうね？　ここはランドソルじゃないんだから。王宮騎士団（ナイトメア）の護衛も付けないで……」
「えへへ、こっそりお散歩でもしようかと思ってましたから。誘われてラッキーでした！」
　マジでゾッとするな、それは。この２人は先に集合場所に来てたんだけど、ユースティアナはもしかして徒歩でここまで来たのか。よく誘拐とかされなかったな。

今頃護衛の人は大慌てだろう。
「親御さんに連絡はしといてくださいよ。人が多いんですから、今みたいに何が起こるか分かりません」
「親御さんって……」
「ユースティアナ様の親御さんと言いますと……王様になるのでしょうか」
「そうなりますね！」
「……大丈夫でしょうか」
雪菜とコッコロの言葉にユースティアナは首肯する。
聖天子様は顔を反らしている。そう言えば、俺たちもこっそり抜け出している身でしたね。
そんな中、ラ・フォリアだけが笑っていた。
「いえ、ごめんなさい。翔の言い回しが独特で……大丈夫ですよ。ランドソルにはすでにこちらから連絡済みです。彼女の無事はアルディギアが保証していますよ」
「安心した……！」
そうじゃなかったら帰りに送り届けるまでがお仕事になるところだった。
「でも、あなたほどの腕があれば、お姫様3人を同時に守る、なんてことも出来るんじゃありませんか？　ね、聖天子？」
「そうですね。彼のことはとても信頼していますよ」
「主様が皆様に褒められると、わたくしまでうれしくなってしまいますっ」
「……そうですね」
「そうは聞こえないぞ、姫柊雪菜？」
「……そんなことありませんよ」
ライネスのからかいに、いちいち反応する雪菜。不満たらたらなのは手に取るようにわかる。
「それで？　聖天子はどうやって『カレ』と知り合ったの？」
「『カレ』って……とある事件に関わっていたんですよ。あんまり大きな声では言えませんけど……」

とある事件とは『武偵殺し』の一件だ。島のごく一部の偉い人の耳にしか入っていない事件。ラ・フォリアにも言えないことらしい。
歯切れの悪さに何かを察したのか、ラ・フォリアは事件への追及はやめてくれる。
その代わり、
「それで、どうしてわざわざその人を護衛に？　いくら腕が良くても、そんなわがまま。菊之丞さんは反対しなかったの？」
「お爺様はあまり何も。なぜかと言われると……その時のセリフで、とても印象に残ったものがあったから、ですね」
「聖天子様、やめましょうか。ね？」
あの時はスタンドを手に入れて少し『ハイ』になってたから！　もちろん本心なんだけど！　本音をさらけ出しすぎて少し恥ずかしいっていうか！
「本人もこう言っているみたいなので。これ以上は控えますね？」
「あら、彼との思い出は独り占めってこと？」
「い、いえ、そんなことはありませんけど……」
「おおっ、ずいぶんとグイグイ行きますね、ラ・フォリアちゃんっ！」
「……ええ、本当ですね、先輩」
「足が痛いんですけど……」
ぐりぐりと足を踏まれる。
「ごめんなさいね。近頃、嫌な話が多くて」
「嫌な話、ですか？」
「将来の伴侶の事よ。お母様にそろそろって言われてね。私の国、色々と面倒な位置にあるでしょう？」
「自分の国を面倒って……」
疲れ気味にため息をつくラ・フォリア。その姿も絵になりそうだが、口から出てくるのは愚痴だった。
「そう言えばアルディギアは隣国が」
「ええ。戦王領域があるから。おのずと私の将来に自由は無くなっているの」
「それは……」

戦王領域とは、ストライク・ザ・ブラッドに登場する第一真祖『キイ・ジュランバラーダ』の国だ。この世界でも強大な吸血鬼として知られており、その力は全力のブラドも軽く捻ることが出来るほどだ。
そんなところと、敵対と言わないまでも、仲のよろしくない状態。
さらに言えば、王家の血を引く人間には、つまりラ・フォリアには強力な霊的資質と魔力がある。国のために次の子供を産まなければいけない立場にあるのだ。
「それも宿命と言われればそうなんですけどね」
「魔術師の名家と同じだな」
「返す言葉もないな。だが、そうして成り立っている国なんだろう？
……ん？　待て、君の母上は確か、自分で相手を選んでいたはずでは？　現王は元々傭兵上がりだったはず」
じゃあラ・フォリアも自由に相手を選べるのでは？　ライネスが問いかける。
「お母様は、結婚直前まで自分の身分を明かさなかったから。もう逃げられない状況にしたらしいわ」
「そ、そんなことが可能なんですか？」
「そのくらい本気だったってことよ、雪菜」
まあそこはね？　お互い好き合っていたんなら問題ない……訳ないよな。結婚という人生の一大転機、そこにサプライズで明日から王族です。俺だったらご免被りたい。
「だから私もお母様に言われたの」
「何をですか？」
「そろそろだって。そろそろ――――自分の好きな人と一緒になりたいなら、準備しないといけないって」
「「……」」
「まあ、今のところ相手がいないんですけどね」
俺、雪菜、聖天子様は絶句する。
「あの国の王女様は、ずいぶんと強かなんだな……」
あのライネスですら、ちょっと引いてる。
「ユースティアナ様の国には、そういったものは無いんですか？」

比較的ダメージが少なかったコッコロだ。
「う～ん、私の所はそういうのはあんまりですね。最近までランドソルは他の国との関わりもありませんでしたし、隣にはエルフの国もありますけど、仲良しですからね」
「エルフの国ですか？」
「はいっ！　あっ、コッコロちゃんもエルフですよね。今度ランドソルに来た時に行ってみてください！　今は昔と違って、そこまで外の人を嫌いませんから！」
「はい。その時はぜひ」
エルフの国、ねぇ。うーん、何に警戒していくべきだ？

「まあ聖天子の場合はね。逆にむやみやたらに、という訳にはいかないのかも」
「どうでしょうね……」
「日本だもの。直接的な力よりも、他の国とのバランスもとらないと。それにあなたのイメージもあるからね」
「不自由なものですね、私達も」
「ホントですねー！」
「ユースティアナ？　あなた本当にそう思ってる？」
普段はあまり聞かない話を聞きつつ、時間は過ぎていくのだった。

幕間　とある超能力者達の８月

「んふふー、おいひいれすー！」
「この値段……普段だったら絶対手が出ませんよ！」
「うんうん、どんどん食べてね。今日は私が全部払うから」
少女４人――――御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子、その４人の少女は、『学舎の園』の内部にある、陰の者が入れば場違いで死んでしまうそうな、そのくらい小洒落たお店にいた。
テーブルには所狭しと並べられたスイーツの類、それだけで目が飛び出るほどの値段だ。
『学舎の園』とは常盤台中学含む、５つのお嬢様学校が運営する地帯。小さくはあるが街になっている、島の中にある異国の地と言っても過言ではない。
普段この敷地内には、５つのお嬢様学校の関係者しか入れない。お嬢様しか入ることの出来ない、夢見る乙女の憧れの場所。
この敷地内のすべて、高級なスイーツもブティックも、普段はその学生しか使うことが出来ない。
のだが、８月の間、この一月だけは一般に公開される。より正確には、一般入場のチケットが配布されるのだ。
配布方法は、抽選だったり、コネだったり、転売だったりと色々とあるが、どの手段でも超激レアであるのは間違いない。
そんなチケットを使い、美琴と黒子は友人２人を招き入れていた。
「今日はありがとうございますっ!!　学舎の園に入れるなんて……私、もう死んでも……っ！」
「こらこらー、うれしさのあまり昇天しようとするんじゃないの」
甘いスイーツと一緒に解けてしまいそうな初春を、佐天が起こす。
いつもの逆、佐天が初春を注意するという珍しい光景を見ながら微笑む御坂。
「ま、色々と心配させちゃったみたいだしね。このくらいはするわよ」
「……」
７月、御坂の様子がおかしかったのは親友ともいえるこの３人は気

が付いていた。当然、妹達の事件のせいだ。
　美琴は一貫して、『極秘の仕事があった』と言っている。初春と佐天はそれで納得させられても、一緒に住んでいるルームメイトにはそうもいかない。
「それで、その『仕事』というのは、もう終わったんですの？」
「ん。まあ、ね。や、今までで一番骨のある任務だったからね。黒子には、らしくない姿も見せちゃったかもだけど」
「いえいえっ！　どのようなお姉さまでも、どんなお姉さまでも、黒子にとっては最高の――――」
「あー、はいはい。分かった分かった。ありがとねー」
　飛びついて来ようとする後輩を片手で押さえる。
　周りのお嬢様は、この場所ではあまり見ない騒がしいお客をチラチラと見ているが、騒いでいる４人は全く気にしていなかった。
　周りの他人よりも身近な友人。美琴も黒子も、そういうタイプだった。
　今回のことは、色々と心配をかけたお詫びでもあるんだから。
「（そういえば）」
　御坂はふと思う。
「（お詫び、じゃないけど……アイツへのお礼って、あんなでいいのかしら）」
　アイツというのは当然、妹達の実験を阻止した男――――夜月　翔のことだ。
　お互い忙しかったため、あの日病室で話して以来、連絡は全く取っていない。そして日付が過ぎれは過ぎるほど、連絡を取ろうという気持ちが無くなっていくのだ。
　恩が無くなるわけではない。ただ、中学２年生という年齢、御坂の性格も相まって、気恥ずかしさが膨れていくのだ。
　同性の相手ならともかく、相手は男性。しかも、正直言ってそこまで知らない相手だ。顔を合わせたのも数回だけ。最初に会った時からタダ者ではないと思っていたが。
「（まさか、一方通行まで倒しちゃうなんてね……）」

目の前では、冷静になった黒子が初春と話している。
「(それに、一方通行と戦った後にも病院抜け出して色々してたみたいだし？　どこまで底無しなんだか)」
思考が逸れてしまった。
「(一応？　お見舞いでクッキーは渡したけど……あんなんで終わり？　って感じもするのよねー)」
もちろん、翔はお礼を望んでいるわけではないが、どうにも釣り合ってない気持ちの方が大きい。
罪の意識にも似た感情だ。どうしようもないもやもやとした感情が収まらない。
「(人のことを助けるだけ助けて、そのままどっかに行っちゃうなんて、子供向けのヒーローでもあるまいし……)」
美琴が悶々としている間も、会話は続いていく。
「そういえば、御坂さんも白井さんも、体操着なんですね？」
「ええ。常盤台は大覇星祭、上位常連校ですから。１年生から参加が義務付けられていますの。わたくしも、この後競技がありますのよ」
黒子は面倒くさそうに言う。
大覇星祭。原作では『能力者同士の大規模干渉のデータを収集する』という名目を持った、学園都市全学校の体育祭。
この島では、学園島の武偵が学校対抗で、己の腕を競い合う体育祭だ。血なまぐさい部分を極力排除した、それでも、近所の学校とは違う迫力を持った体育祭。
能力の使用も推奨されているため、直接ぶつかり合う競技では、ペイント弾や能力が飛び交う、大迫力のＳＦバトルを拝むことができる。
だがそんな大覇星祭。一般の、ノーマルな技能しか持たない生徒には難しいイベントだ。
「ひゃー！　流石、常盤台は違いますね！」
「私たちの学校はそういう事ありませんからねぇ～」
「というか、出ろって言われても困っちゃうよね？　まあ、流石にどの競技にも出ないってことは出来ないけどさ」

「常盤台の人と戦ったら、それはもう、花が散るみたいに吹き飛ばされそうですよね～」
　頭に花を飾っている初春が呑気に言う。
「心配せずとも、その辺りの対戦カードは考慮されていますのよ。間違ってもレベルの違いすぎる学校で対抗戦なんて起こることはありませんの」
「でも相手によっては、御坂さんと競わないといけないってことですよね？　死人が出そう……」
「大丈夫ですよ、佐天さん。能力を直接撃ち合うような競技では色々な保護機能がありますから」
「何より！　お姉さまはその辺りの『力加減』というものをしっかりと理解して……お姉様？」
「ん、え？　何？」
「どうしたんですか？　ボーっとして」
「うーん……や……そうだ、みんなに少し相談があるんだけど」
　軽い気持ちで言った。
「この前の任務でちょっと借りができた人がいてさ、ちょっとお礼がしたんだけど――……」
　言ってて、みんなきょとんとした表情になっていることに気が付く御坂。
「そんなの――」
　佐天が口を開く。
「別に気にしなくてもいいんじゃないですか？　武帝憲章1条、『仲間を信じ、仲間を助けよ』。助ける、助けられるなんて、いちいち気にするようなモノじゃないですって」
「そもそも、『借り』とは、いったいどのような借りですの？　お姉さまに借りを作れるような人、そうそういないと思いますけれど……」
「あー……うん、それもそうなんだけどねー……」
　普通の返しをされてしまい、何も言い返せなくなる御坂。事情を知らない相手ではやはり適切な判断は出来ない。
　そう判断した御坂は適当に切り上げようとして、

「……ひひふぉう確認しますけど。んくっ、その借りがある人って女性なんですか？」
　初春がパフェスプーンを口に含みつつ、何でもないように言う。
「はい？」
「初春？　あなたは何を言っていますの？」
「や、普通そういうお礼とか考えないじゃないですか。御坂さんだった余計に、それこそ『借り』なんてそうそうできないのに」
　御坂の不自然な態度を見て、初春がとある結論に辿り着いていた。
「つまりそれって、返す必要のない借りを返したいってことですよね？　……つまり」
「や、あの……」
「まさか御坂さん……その人の事……？」
「いや！　全然違うから！」
「そうとしか思えなくないですか？　そう考えれば、色々と納得できると思うんですけど」
「確かに、つまり『借りを返す』って名目で、何かプレゼントしたいってことなんだ！」
「あー、そうだよね。武偵の借りって返す必要無いわよね！　借りなんて作ったことなかったから分からなかったなー！」
　御坂が大きな声で遮ろうとするが、思春期入り立ての中学1年生。身近な人の恋バナという最高の餌を手に入れた2人は止まらない。
　そしてもう1人、暴走一歩手前の少女がいた。
「お、おね、おおね、おねねっ……!!　おね、さまにっ！　おおおおおお男が……！」
「ちょ！　黒子!?　あんた大丈夫なの？　すごい痙攣してるんだけど!?」
　結局この騒ぎは、御坂が競技に行く時間まで続くのだった。

「わー！　また救急車だよ！　って、ミサカはミサカは窓にへばりついてみるー！」
「……」
場所は変わり、ここはいつも翔が入院している病院。島が忙しくても病院はいつも通り静か――という訳ではない。
人がたくさんいるということは、急病人、とりわけ強い日差しにやられた熱中症患者がいつもより多く運ばれてくる。
その為に救急車の出入りも激しくなっているのだが、それに興奮している1人の幼女がいた。美琴をそのまま、幼稚園と小学生の間くらいまで小さくした娘だ。
飛び跳ねるたびに頭のアホ毛がびょんびょんと揺れる。
「元気だなァ、お前」
ベッドに寝転ぶ少年は、うっとおしそうに、はしゃぐ幼女に背を向けた。
頭に巻いた包帯が自身の白髪と同化している線の細い人物。一方通行だ。
2週間ほど前に頭を打ち抜かれ、集中治療室に運ばれていた彼だったが、5日前に意識を取り戻し、それからずっとベッドの上で過ごしている。
「つーかお前、何でここにいンだよ。アイツの家に行きゃあいいじゃねェか」
「う～ん、あの人は忙しそうだからなぁ。周りにも人が多いし。その点、あなたはずっとベッドでごろごろしてて、寂しそうだからっ！」
「人を暇人みたいに言ってンじゃねェよ。こっちは怪我人だぞ……寂しがりみたいに言うのもやめろ」
近くに寄ってきた幼女、すっかり回復したラストオーダーは楽しそうに跳ねている。
「あははー！」

ラストオーダーは笑いながら、再び窓のそばに駆けて行った。
「うん。どうなるものかと思ったけど、意外と仲良くやってるみたいだね？」
「何処を見たらそう思うンだよ」
病室に入ってきたカエル顔の医者は、白衣のポケットに手を突っ込んだまま、いつものようにとぼけた顔をしていた。
「それにしても、良かったのかい？　彼の提案を蹴ってしまっても。今からでも頼めば、すぐに良くなると思うけど」
「……いちいち掘り返してンじゃねェよ」
一方通行の首には、黒いチョーカーが付けられていた。それはアクセサリーとしての役割ではなく、とある電波を受信するための装置だ。そこから伸びる電極が頭に伸びていた。
これはミサカネットワークを受信するための装置だ。
一方通行は、銃弾によって脳にダメージを負ってしまった。特に彼の能力に必要不可欠な部分を、日常生活すら困難なほどに。
その部分を補うために、残った1万人のミサカネットワークの力を借りているのだ。
それが無ければ一方通行は、能力どころか、まともにしゃべることも、2本足で歩くことも出来ない。
能力に至ってはバッテリーの消費が激しく、たった15分しか使えない。
まさに前とは逆、妹達に生死与奪権を握られているという訳だ。最強の力も時間制限付き、しかも電波を遮断されれば使えなくなる。
「そこは、別に意地を張るようなことじゃないと思うけどね？」
「るっせェな。こういう事しか思いつかねェンだよ」
「罪滅ぼし。贖罪という訳かい？」
カエル顔の医者は、声色を変えることなく問いかける。
この脳へのダメージは、この島の科学力でも完治出来なかった。治癒能力者でも、繊細な脳、しかも最強のレベル5の脳を完璧に治せる人物はいなかった。
しかし例外的に、完璧に治せる、いや、元の状態に巻き戻せる人物

がいたのだ。
「時崎　狂三。彼女の能力は規格外だったね。治癒ではなく時間を巻き戻す。確かにあれなら、君を完璧な状態に戻すことが出来るだろうね」
「……断ったンだ。いい加減にしろよ」
翔はすでに狂三を一方通行に会わせていた。
翔は狂三の能力の1つ、物体の時間を巻き戻す弾丸である『四の弾（ダレット）』で一方通行の治療ができないのかと考えたのだ。
狂三も自らの治療に使っているこの能力ならば、一方通行の怪我も治せる。
狂三自身は、御坂と違って一方通行に思う所は無かったため、翔のお願いならと快諾した。
そうして2人が病院に来たのが今から2日前。
一度殺し合って10日程しか経っていないというのに、まるで友人の見舞いに来たかのような翔に、目元をヒクつかせながら出迎える一方通行。
超能力が魔力のように他人が感じられる波動を出せたのなら、管理局への出動要請が出るくらい。
そのくらいの濃密なやり取りが、翔と一方通行の間で行われた。ラストオーダーがいなければ、このまま取っ組み合いのけんかになってもおかしくない空気だった。
そんな状況で、説明がなされた。
事情を説明された一方通行だったが、当の一方通行がその治療を拒否してしまったのだ。
もちろん感情的に、翔の提案を受け入れるのが嫌だったから蹴ったわけじゃない。いや、それが理由ではないというだけで、感情が大きく関わっているのは間違いない。
「まあ、残念だったねぇ」
「アァ？　何がだよ」
脈絡のない言葉に、眉を寄せる一方通行。
「8月だよ。せっかくの島を上げてのお祭りなのに、ベッドで安静に

してなきゃいけないなんて。残念以外の何物でもないだろう？」
「この俺が人込みに紛れてはしゃぐとでも思ってンのか？　毎年この時期は、部屋にこもって、音も全反射で寝て過ごしてンだよ」
「分からないよ？　もしかすると来年にはラストオーダーと手を繋いで一緒に遊びまわっているのかもしれないよ？」
「ンな訳が……」
　否定しようとする一方通行に、カエル顔の医者は言葉を被せる。
「分からないよ？　現に今の状況だって、一か月前には夢にも思わなかっただろう？」
「……」
「んん、それじゃあ。呼び出しがあったみたいだからね」
　そう言い残して、カエル顔の医者は病室を後にする。
　その言葉に、一方通行は反論することが出来なかった。

インターミドル　ミウラＶＳミカヤ

「うーん……いきなりとは思いませんでしたね……」
「ああ。当たるカードが悪かったな」
リィンフォースⅡとシグナムは発表されたトーナメント表に眉を寄せていた。
「あ――、う――――」
滝のような汗をかいてワタワタとしているのはミウラだ。
八神道場の２人も予選を突破していた。明日から始まるということで、トーナメント表が送られてきたのだが、
「ユウキの方は問題ないとしても、ミウラはな」
ユウキの対戦相手は予選の成績から見ても、ユウキの相手にはならないだろう。
だが問題はミウラの方だ。
「ミカヤ・シェベル選手。最高戦績は決勝トーナメント３位。いきなりの超強敵です！」
「ひえ～～～～!!!」
改めて事実を確認すると、ミウラは頭を抱えてしまった。
「あはは、いいなぁ。剣を使う相手なら、ボクが戦いたかったよ」
そんなミウラを見て、ユウキは他人事のように笑っている。だが、強敵と戦えなくて残念に思っているのは本当だった。
いつまでもオロオロしているミウラに渇を入れるのは、ヴォルケンリッター、『鉄槌の騎士』であるヴィータだ。
「確かに強敵だけど、負けるつもりで戦うなんて許さねぇからな。アタシらが教えてんだ。お前だって負けちゃいねぇよ」
「わ、わわわわ分かりました！　頑張ります！」
ミウラは何度も頷いた。
試合まで時間はない。しっかりと休んで臨むだけである。

そして試合当日。翔が聖天子様の護衛（という名の町遊び、プリンセスを添えて）をしている丁度その頃。
ミウラとミカヤの試合が始まろうとしていた。
「う～ん、この上がり性は治らないもんだな……」
「すすすすみません!! おちつななちゃと思っちぇるんですが……っ」
「もはや、何を言っているかもわからんな……」
ヴィータとザフィーラも頭を悩ませていた。
ユウキのセコンドはシグナム1人で、ミウラが2人体制なのはこういう理由があった。
「うわあぁぁぁ!?」
メールの受信にすらここまで驚く具合だ。
「お前は……」
「え、えと……」
ミウラがディスプレイを操作する。
「ぷっ――――あはははは!!」
「おい……」
「今度はどうした、ミウラ」
《ミウラさん、緊張しないで頑張ってください！
チームナカジマも頑張ります！》
そんな文章が、写真付きで送られてきていた。チームナカジマのメンバーとユウキが思い思いのポーズをとっている写真だ。
「ヴィヴィオさんって面白い方ですね！ こっちまで元気になります！」
「確かに変わった娘ではあるな」
「ヴィヴィオさんと戦えたら絶対楽しいだろうなぁ……うん、そのためにも頑張りますね！」

「おし、その意気だ！　行ってこい！」
「行ってきます!!」
すっかり緊張の解けた様子で立ち上がり、
「スターセイバー、セット・アップッ！」
ＢＪを纏った。手と足に打撃補強用の装甲があるが、後は全体的にフェイトのように装甲を削ったインナータイプのＢＪだ。
リングへと続く道を歩いていく。
チームナカジマから応援メールが届いたのはミウラだけではなかった。
ミウラたちがいる控室とは反対の場所にある控室、対戦相手であるミカヤにもメールが届いていた。
《ミカヤさんに教わったこと、全部出して頑張ります！
ミカヤさんも思いっきり楽しんでください！》
そんなメールが、写真付きで送られてきていた。
流石に写真は変なポーズは取っていないが、友達であるノーヴェが教え子たちに囲まれてはにかんでいる様子には、思わず笑ってしまった。
「ふふふ、全く、ナカジマちゃんはかわいい弟子を持ったな」
「あら、私にとっては、あなたも可愛い後輩よ？」
「それは光栄です、姉弟子様」
セコンドである木更に頭を下げた。
「うむ、私も頑張らないとだな」
ミカヤもＢＪを纏った。腰には刀を２本。服装は和装だが、胸元が大きく開かれ、動きやすいように胸にはサラシが巻かれている。
「まずは初戦突破。それから決勝ブロックまで一直線だ！」
そう宣言し、リングへと向かうのだった。
――――――チャリン、チャリン

試合は1ラウンド5分で、最大4ラウンド。
ギブアップかライフ全損、すべてのラウンドを使った場合は判定によって勝敗が決まる。
試合は勿論、非殺傷設定で行われ、受けた攻撃に応じて怪我の痛みが再現される『クラッシュシミュレート』も搭載されている。
「あ～、こっちまで緊張してくるね！」
「ね！　ミウラさん緊張が解けてるといいけど」
観客席には午後からの試合であるチームナカジマの面々とユウキ、応援に来ていたなのはとフェイトもいた。
「はやてとシャマル先生は？」
「仕事があるから、それを片付けてからだって」
「そっか、ミウラちゃんの試合、間に合うかな……」
そんなことを話していると、
《皆様お待たせいたしました！　選手の入場です！》
ブロック本戦からは実況付きだ。観客席は有力選手のミカヤが出るとあって満員。試合開始を今か今かと待っていた。
《レッドコーナーからは、インターミドルチャンピオンシップには7回出場。内5回は決勝ブロック出場！　天瞳流抜刀居合師範代、ミカヤ・シェベルッ!!》
大衆の視線にさらされても、ミカヤは全く動じることは無い。
《そしてブルーコーナー。こちらは大会初参加。八神道場の若き新星、ミウラ・リナルディッ!!》
こちらはシャドーボクシングをしつつ進む。一種のルーティンなのか、緊張の色はない。今は試合しか見ていないのだ。
《ルーキー対ベテラン！　抜刀居合ｖｓ格闘技！　何もかもが対極的な2人の試合が始まります!!》
割れんばかりの完成が2人を包み込む。
試合開始の直前、一瞬だけ静かになり、

《試合開始ッ!!》
ゴングが鳴らされた。
動いたのは同時だった。
ミカヤは腰を落とし、刀に手をかける。抜刀居合で待ち受ける構えだ。
「(天瞳流抜刀居合――――月輪)」
対するミウラは猪突猛進と言って良いくらいの正面突破だ。
「(自分よりも強い相手の攻撃をずっと避けるなんて無理だ！　防御を固めて、先に当てていかないと……！)」
「バカバカ！　止まれバカッ！」
「突っ込むな！　止まれッ!!」
ヴィータとザフィーラが必死で呼びかけるが、ミウラは止まらない。
観客が気が付いた瞬間には、刀が抜かれ、ミウラは切られた衝撃で宙に浮いていた。
「おお――――っ!!」
浮いた体を、返す刀でもう一度切り落とす。
「(水月・二連――――)」
刀を収めると同時に、ミウラの体がリングの外に墜落した。
あまりにも一瞬の出来事に、会場全体が静まり返る。
《あ、と！　り、リングアウト・ダウン！　カウント１０ッ!!。ミカヤ選手はニュートラルコーナーへ！》
たった今到着した砲撃番長(バスターヘッド)ことハリー・トライベッカとその取り巻き達、そして、無敗記録を持つジークリンデ・エミリア。
「ああーーー!!　ぐずぐずしてるから終わっちまったじゃん!!」
「ん……？　や、多分……」
ハリーは騒ぎ出すが、エレミアは今の攻防を見切っていた。
カウントは進んでいくが、『４』でミウラは起き上がった。
「あれ……？」
「やっぱり、あの娘、ミカさんの斬撃をそれなりに防いでたんよ」
クラッシュシミュレートも発生していない。胴体が寸断されるほ

どの斬撃を、しっかりと受け止めていたのだ。
　その様子に、ノーヴェも一安心していた。
「何とか首の皮一枚繋がったって所だな……でもラウンドの残り時間はまだまだ４分半はある。ここからやれるのか……？」
「そうだね。立ち上がっても心が折れてるかもしれないし」
「そうだよね一撃でライフの９割……それこそ、ここから一撃も当たらないってくらいで戦わないと」
　なのはとフェイトの２人もコメントする。
「やるよ」
　ユウキは迷いなく言った。
「ずっと一緒に練習してきたからわかる。ミウラが『抜けば』、まだまだ戦える」
　ミウラがまだまだ戦うつもりだということは、対面するミカヤも分かっていた。
「（残りのライフから考えても、『撫でて落とす』というには少々多いな。やはりここは、受けに回ってカウンターを狙うべきか。問題は、今の攻防を経て、どうしてあの娘の目が全く死んでいないのか、だが……）」
「ごめんね、スターセイバー。ちょっと無理するけど付き合って！」
「（向こうはやる気だ。考えていても仕方がない。この１年、格闘戦技への対策ばかりしていたんだ、それもこれも、すべてあの娘に勝つため……）」
　ミカヤの頭にあるのは、去年の敗戦だ。ジークリンデ・エミリアに手も足も出せずに負け、エミリアはその後の試合を辞退した。
　あの試合以降、避けられてしまっているのか、まともに顔を合わせてもくれない。大会に出てすらくれないと考えていたが、そこまでではなかった。
「（雪辱を晴らすためにも、こんなところでは負けられない！！）」
　そしてミウラも、昔のことを思い出していた。
「（僕は本当に不器用で、口下手でおっちょこちょいで、何をやってもダメな娘だったけど）」

本当に特徴の無い平凡な女の子だった昔のミウラ。自分に自信を持てず、いつも下を向いて歩いていたあの頃を。
「(あの日師匠たちに差し出してもらった手が、ボクの始まりで、ここにいる理由！)」
シグナムやヴィータ、ザフィーラの指導で、どんどん格闘技にのめりこんでいった日々を思い出す。
「(だから怖くなんてない！　いつだって全力の自分をぶつけるだけだ!!)」
一瞬で踏み込んだミウラの蹴りが、刀をへし折りかねない衝撃をミカヤに与える。
「(なんだ、今の蹴りは!?)」
ミカヤが受けるだけで精一杯だった。
腕の痺れを気にした時には、すでに元の場所に戻っている。
「(あの間合いを一瞬で詰める速度に、この威力は……！)」
真っすぐ突進しているはずなのに、初撃の様に迎撃することが出来ない。
瞬きをした瞬間には、懐に入られていた。
「ハンマーシュラークッ!!」
ミカヤの鳩尾に拳がめり込む。
「〜〜〜っ!!(ご丁寧に拳まで重いッ!!)」
脇差を抜いて二刀流で迎撃するが、苦し紛れの攻撃は懐までもぐりこんだ純格闘選手には当たらない。
もう一発、拳が鳩尾にめり込んだ。
「が、は……っ！」
最初の一撃を見た観客達は、このまますぐに試合が終わると思っていた。だが蓋を開けてみれば、最初の一撃以降、ミカヤが攻撃に転じることが無い。
「ミカ姉、一気に動きが鈍くなったな」
「速度優先で防御はあんまりだから。密着されるとせっかくの抜刀術も使えへんし」
何とか距離を取ったミカヤは息を整えていた。

ラウンドの残り時間は1分。
「はぁ、はぁ……(この子の戦術は凡そ理解した！　俊足の蹴りと密着した時の爆弾の様な拳！　本当に純粋な強襲型だ。まっすぐで手ごわいぞ！)」
「はぁ、はぁ……ラスト1分、行こうスターセイバー！」
ミウラの足元に魔法陣が現れる。
「抜剣(バッケン)――――!!」
脚部の装甲が展開し、内部の装甲が露出する。同時に、リングに変化が現れる。
「(なんだ、何が起きている⁉　足に魔力が収束している、とんでもない圧縮率だぞ⁉　空間の残存魔力すら集まって……！)」
その光景、フェイトには見覚えがあった。
「なのは、アレって……！」
「うん。収束系魔法(ブレイカー)だよ」
なのはの代名詞とも言える砲撃、その中でも最強技である『スターライトブレイカー』。その技が最強と言われる所以は、空間に散布された魔力を再度収束させ、攻撃に使うからだ。
自分の限界を超える攻撃を行うことが出来る。
それと全く同じだ。
周辺魔力を集め、高密度に圧縮し、蹴り技に乗せて放つ。
「そういうことか。一閃必堕の逆転技。それが君の切り札ということか！」
誰でも出来ることではない。適正も関係する。そもそもミウラはまだ12歳だ。少なくとも、収束系魔法(ブレイカー)の技術は、同じ年齢の時のなのはに匹敵する。
「ふふ、あはははは!!　だからインターミドルは面白い！　君のような強敵に、思わぬところで出会えるのだから!!」
ミカヤは技の溜めを狙うような無粋なマネはしない。
腰を落とし、刀に手を添えるだけだ。受けて立とうというのだ。
「ありがとうございます。僕の全部、ぶつけさせていただきますッ！」
「心配するな。どんな攻撃でも切り伏せるだけだ……！」

２人の間の緊張は、会場全体に広がっていた。
「ミカ姉、守って逃げるつもりはさらさらねえな」
「そういう性格やからな、ミカ姉は。いつだって最強最速の一閃で切り伏せるんや」
「……知ってるよ。オレも３年前にそれで秒殺されてるんだから……」
「あ、うん……ごめんな」
涙ぐんでいるハリー。実は心が弱い砲撃番長（バスターヘッド）だった。
そうしていると２人の準備が完了した。
先に動くのはミウラだ。
「抜剣・飛燕ッ!!」
「天月・霞ッ!!」
二つの剣がぶつかり合う。
「はあああぁぁぁぁ――――!!」
威力も速度も互角。
２人は弾かれるようにして距離を取った。
「初めて受けたが凄まじいな、収束系魔法（ブレイカー）の打撃というのは!! 斬りにいったこちらの刃が削げたぞ!!」
「……っ!!」
全力の技がぶつかり合った衝撃で、お互いにライフが削れる。
だが危険なのはミウラだ。最初に受けたダメージが大きすぎた。もう１回、同じようにぶつかりあえば、たとえ今のように威力が互角だとしても、ライフ全損によって敗北してしまう。
しかし、ミウラの前進の意志は止まらない。
「（あの日僕は受け取ったんだ。自分の空を飛べる翼を――――!!）」
今の攻防で散った魔力を再度収束。
「自分の道を切り開く、星の剣をッ!!」
ミウラの蹴りが、今度こそ本当に、ミカヤの刀をへし折る。
「一閃必堕ッ!!」
武器をなくしたミカヤに、最後の一撃を繰り出す。
「抜剣・星煌刃ッ!!」

輝く足から繰り出される蹴り技は、まるで光り輝く剣のようで――

―

壁に叩きつけられたミカヤが立ち上がることは無かった。

《試合終了!!　なんと!　なんとッ!!　大会初参加のルーキーが大金星をあげました!!》

「……お疲れな、ミウラ」

何とか間に合ったはやては、そう呟いた。

ミウラ・リナルディは鮮烈なデビューを飾ったのだった。

――――――チャリン、チャリン

ユウキだけでなく、チームナカジマの面々、聖王教会のシャンテ、ルーテシアはこれといった苦戦もなく試合に勝つことが出来た。

そしてもう一つ、第1試合ではもう1つ注目の試合があった。去年の上位選手たちの試合だ。

第5組のブロック本戦、勝った方がリオと戦うという、エルス・タスミンとハリー・トライベッカの対戦である。

エルス・タスミンは学校では生徒会長、ハリー・トライベッカはアウトローな姉御肌というのだから、普段から馬の合わない2人だ。

この2人は去年もブロック本戦決勝で対戦した。結果的にハリーが勝利したが、試合は終始エルスが有利に進めていたのだから、2人のライバル意識は凄まじいものだった。

予選会で一悶着起こしていたのはこの2人なので、その意識の高さが伺える。

ハリーの戦法は砲撃番長（バスターヘッド）の異名の通り、炎の魔力変換が付与された高威力の砲撃だ。

なのはのものほど正確ではないが、連射性能と威力は匹敵する。一撃ヒットさせれば、ライフを半分以上吹き飛ばせる必倒の攻撃だ。

対するエルスは手錠型の特殊なバインドを駆使するコントロール、耐久型。

序盤の内は、良くも悪くも去年から変わらない戦法を貫くハリーを、意識して研究してきたエルスがうまく罠にはめ、拘束する展開になる。

だが、自分ごとバインドを砲撃で撃ち抜くという規格外の方法で脱出したハリーが、次第に押し始める。

そこからは射撃、砲撃で攻めに攻めるハリーに対し、守備にまわりながらも隙をつくエルスと去年の試合の再現になり、一進一退の攻防が続くことになる。

互いに負傷しつつも、最後はハリーの拳でエルスのライフがゼロになった。

試合はハリーの勝利で終わり、同時にリオの次の対戦相手も決まった。

――――――チャリン、チャリン

もう1人のお姫様　前編

パーティが中止になったことを理由にした無断外出も、今日で5回目だ。
最初の一日を超えてしまえば慣れてしまうもので、今では明日どこに行くのかを前日にしっかりと決めるようになっていた。
聖天子様、それとここに召喚されてまだ日が浅いコッコロを案内することを目的にして、俺たちは予想外に充実した夏休みを満喫していた。
聖天子様もこっそり外出にすっかり慣れてしまい、俺たちが行くとすでに準備万端。もはや現地集合になってしまいそうな勢いだ。
1日目はラ・フォリア達と一緒だったが、流石に2日目からは一緒ではない。向こうは向こうで用事があるらしい。王室だからね。
という訳で当初の計画通り、護衛対象は聖天子様1人。こんなので単位とお金を貰ってしまっていいんですかね。
雪菜とコッコロはすっかり聖天子様と打ち解けて、今ではすっかり友達。
性格がマッチしたのか、少なくともライネスよりも仲良くしている。コッコロは誰とでも仲良く出来るからね。心配ないね。
《ずいぶんとお気楽な護衛だな。人に調べ事を頼んでいるとは思えないぞ》
「そうだな。その分、気が緩まないようにするのが大変だよ」
俺は少し席を外し、ジャンヌと電話をしていた。
「それで、どんな感じだった？」
《ああ、そうだな……》
別に何かのお誘いをしているわけではなく、情報収集の依頼だ。
《島中に現れているようだな、例の正体不明の怪物は》
「みたいだな……」
例の怪物とは、あの時パーティ会場に現れた屑ヤミーのことだ。
送られてきた画像には、人を襲う屑ヤミーとそれと戦う管理局員、武偵の姿が映っている。

中には屑だけではなく、しっかりとしたヤミーの姿まであった。
「特に襲われる場所に共通点は無いよな……誰か特定の人が狙われてるってわけじゃないし」
《私にもそう見えるな。だが、日に日に出現頻度は増えている》
「……欲望が溜まってるってことか」
《ん？　なんだと？》
「や、何でもない。この強い個体（屑ではなく普通のヤミー）ってのも増えてるのか？」
《そうだな。この個体になると、通常の火器ではまるで意味がない。貴様なら問題ないのかもしれないがな》
ヤミーの数も増えている……こりゃあ不味い事になる前に解決に動きたいな。聖天子様の護衛が終わるまで待っていては、取り返しのつかない事態になるかもしれない。
「ありがとな。今度店に行くから」
《おい、やめろ》
「聖天子様も連れて行くから。確か最近は毎日シフトに入ってんだろ？」
《いや、余計に――――あっ、はい！　今戻ります！　とにかく、来るんじゃないぞ！　分かったな！》
その言葉を最後に、電話が切られた。席に戻ることにする。
今は海岸沿いのお店で一休みしていた。騒がしい中心部に比べると、ここはいくらか静かだ。
席に座っている雪菜、コッコロ、聖天子様は楽しそうに談笑していた。
「主様、何をされていたんですか？」
「ちょっと電話を」
「誰とですか？」
「ジャンヌだよ。この間のことを調べてもらってたんだ」
席に座った。
「あの時の……そうですか……私には何も情報は回ってきていないですね……」

聖天子様が申し訳なさそうに言う。
「や、一応ですから。何かあっちゃいけないので」
ジャンヌの話だと、首謀者のような人は見つかっていないらしい。本当に、何処からともなくヤミーが現れるのだとか。
「ん？」
端末に連絡が入った。
「んー……あー……」
「翔さん？　どうかしましたか？」
「や、クロの友達がインターミドルに出場してまして。そもそもインターミドルは知ってます？」
「はい。試合を見たことはありませんが。確か……もうブロック本選の期間に入っていますよね？」
その辺りのスケジュールはしっかりと頭に入っているみたいだ。
「ええ。その試合結果が送られてきたんです」
「どうでしたか？　この時間だったら、ヴィヴィオちゃんの試合ですよね？」
「確かヴィヴィオ様の試合相手は、主様の上司の……」
雪菜とコッコロも端末を取り出している。
「そ、八神部隊長の道場に所属してるミウラ・リナルディ。結果は残念だったってさ。あと少し、どっちが勝ってもおかしくない試合だったらしい」
「それは残念でしたね……」
「ですがヴィヴィオ様ならこの敗戦も必ず力に変えることでしょう」
聖天子様がぽつりと言った。
「見に行っても良かったですね」
「興味があるんですか？」
「有名選手も何も知りませんが、１度くらいは実際に見てみたいという気持ちはありますよ」
そう言うのならば。
「予定変更して見に行ってみます？　今日はこの後にも試合がありますから」

勝てない、とは思わないけど、ブロック本選は常勝出来るほど甘くはない。今日で大きく人数を減らしてしまうかもしれない。
「そうですね、行ってみましょうか」
依頼人の言葉は絶対ですからね。今日は試合観戦としましょうかね。
決まってしまえば行動は早い。
お店を出て、試合会場に向かう。向かおうとした。
「なんか聞こえてくるな」
「はい。騒がしいですね」
「何かトラブルでしょうか……」
「あっ！　皆様、あちらでございますよ」
騒ぎの大本であろう人達はすぐに見つけることが出来た。
1人の少女と、スーツ姿の男性3人が揉み合いになっている。特に少女が、とてつもなく特徴的な格好しているんだけど……！
うん？　うん!?
「三度見している先輩。あれが誰かご存じなんですか？　知り合いですか？　……またですか？」
「知り合いではないけど、誰かは分かる」
危ない声色の雪菜を抑え込む。
「聖天子様も知ってますか？」
「は、はい。公の場に出てくることがあまりないので、直接会話はしていませんが……」
なるほど。いることは分かってたけど、パーティには出席してなかったもんな。
それにしても、あの格好は一体何と形容すればいいのか。俺の語彙では説明出来そうにない。少なくとも、あれを普段着にしている人は絶対にいない。いたら普段からコスプレだ。
そして何よりも、そんな突飛な恰好なのに見覚えがある。その揺れる『尻尾』も。
「あの方は、デビルーク王国、第一王女のララ・サタリン・デビルークです……！」

「「っ!?」」
「……やっぱりか」
雪菜とコッコロの顔色が変わる。
その王女様が、黒服の男たち数人と揉み合いになっている。この状況は、どう見てもアレだ。
「はい、なんというか、とても特徴的な服装の方ですね。ですが、ここはっ！」
雪菜はギターケースから自らの獲物を取り出す。
「雪霞狼ッ!!」
変形し、光を反射する。
「はいっ！　雪菜様、参りましょう！」
コッコロも自らの槍を取り出す。
「あ、ちょっと――――」
そのまま2人して突撃していく。
「はーなーしーてー!!」
「いい加減に――――ッ!?」
ララの手を引っ張る黒服の間に割り込む雪菜。
「な、何だ貴様は！」
「ここから先へは行かせません！」
油断なく槍を構える雪菜。
「え？　え？」
「王女様、こちらへ」
その後ろではコッコロが、困惑しているララを誘導して俺たちの方へと連れてきていた。
「夜月さん！」
「……なるようになるしかないな」
真横で叫んでいる聖天子様と、目の前で黒服を一網打尽にしている雪菜を見つつ、そう呟くだった。

「えええええっ!?　あ、あの人たち、護衛の方々だったんですか!?」
「うん。そーだよ？　私の護衛」
お店の中に雪菜の声が響き渡る。
インターミドルの会場に向かうつもりが違うお店に逆戻り。ララというメンバーが増え、余計に賑やかになった。
主に騒がせているのはララなんだけどね。
「あの方々がララさんの護衛だとして、何故逃げていたんですか？」
聖天子様が最もな疑問を問いかける。
あの場だけ見れば、まあ誘拐現場だと思っても仕方がないからな。お粗末すぎる手際の誘拐に。
「お見合いが嫌になっちゃって！　ちょっと家出しちゃったの！」
「「えぇー……？」」
親に勉強しろとしつこく言われたから家出した。そのくらいのノリで王女様が家出をしている。
でも、まあ、予想通りなんだよな。これは。そもそもララだったら、多少の相手くらい自分で撃退できるし。
「だってパパ酷いんだよ！　今年に入ってからずっっっとお見合いお見合い。この島に着たら遊べると思ったのに結局お見合い。もうイヤになっちゃったんだもん」
「そ、それはあまりにも無責任ではないですか？　お父様やお母様も心配しますし……」
「最近のパパは嫌いだよ～。会うたびにその話しかしないんだもん」
「聡明なデビルーク王です。いつでも国の未来を憂いているのでしょう。確かに、強要は良くないと思いますけど」
「そーめい？」
「頭がいいという事ですよ」
「えー？　パパが？　そうかなぁ？」

真面目な聖天子様が、ララと言い合いになっている。そんな時、
「せ、先輩。どうしましょう……！」
雪菜は青い顔をして俺を見てくる。襲われているところを助けたと思ったら、実はこっちが誘拐していた。
しかも、一番多く護衛をぶっ飛ばしたのは雪菜だ。
「だ、大丈夫ですよ！　私も口添えしますから！」
「うんうん。私も言うから大丈夫だよ？　あのくらいいつものことだから」
「そ、そうですか？　お願いしますっ」
雪菜は何度も何度も頭を下げている。
そんなことを話していると、あることに気が付いた。
「うん？」
なんだ、これ。
ララの服、とても先鋭的なデザインだとは思ってたけど、あんなところにスリットあったっけ？
いや、無いよな!!　というか、服にどんどん穴が開いてきたんだけど!?
「あれ？」
「ラ、ララさん!?」
「な、何が起こって……」
「どんどん、服に穴が開いて……」
聖天子様と雪菜、コッコロ、ララも異変に気が付く。
「も、申し訳ありません、ララ様。バッテリー切れです……」
ララの頭に帽子のように乗っかっているペケが言う。コイツはララの発明品である万能コスチュームロボット。コイツが生成しているナノマシンによって、ララの服は成り立っているのだが……
「あ～、そういえば昨日、充電してなかったっけ？」
「はい……昨日は5回のお見合い。その都度コスチュームチェンジをしましたので……」
「そっかぁ～」
どんどん布地が無くなっているというのに、当の本人は暢気なもの

だ。朗らかに笑ってジュースを飲んでいる。
「ちょっ！　な、何でそんなに落ち着いてるんですか!?　あっ、見え……っ！」
「ら、ララさん！　どうにかできないんですか？」
「えー？　そんなこと言ってもなぁ。ペケの充電はホテルじゃないとできないし……」
「先輩、何とかなりませんか!?　あっ、あまり見ないで何とかしてください！」
「な、何とかって言われても……黒影（ダークシャドウ）で包んでみる？」
　そうすれば一応見えなくなるし、その間に代えの服を買ってくるか。こんな美少女を黒い影に包んでいれば、服が届く前に管理局を呼ばれそうだな。
　デビルーク王国の王女様のストリップを晒すよりはいいだろう。
「そ、そうですね！　とりあえずはそれでっ！　ああっ！　もうほとんど布が！　え、下着も消えてますっ！」
「全部ペケに作ってもらってるからねー」
「ホントに呑気だな」
「主様、お早く！　周りの方々の目がだんだんと集まってきています！」
　ほとんど悲鳴のような声色で聖天子様とコッコロが急かしてくる。
「黒影（ダークシャドウ）」
（マタコウイウ役目カ……）
　お前が便利なのがイカンよ。いつも助かってます。
「わわっ！　へー、これはあなたの能力？」
　鳥型の影がララを包み込んだ。これで一応見えてはいない。それでも目立っているのは変わらないんだけど。
「じゃあ次は服だな」
「別に気にしなくていいよ？　すぐにホテルに戻れば全然へーきだし」
「気にしますよ！」
　いくらなんでも、もう少し恥じらいを持ってくれ！

「一番近いのは、っと……ここだな」
「行きましょう！　ララさん！」
「はーい！　お洋服かぁ……自分で選ぶなんて久しぶりだなー」
「え、この格好で連れて行くのか？　職質受けるぞ？」
黒影（ダークシャドウ）に包まれて大事なところは見えないとはいえ、逆の意味で目立っている。
「誰かが買って来るしかありませんね」
となると必然的に聖天子様とララは除外。黒影（ダークシャドウ）の維持で俺は動けなくなる。コッコロもこの島に慣れていないため、時間がかかりすぎてしまうだろう。
「分かりました。それでは私が……」
「じゃあコレを使えばいいよ！」
ララがどこからか取り出すのは、ララがさっきまで着ていた服に似た意匠が施されたブレスレッド。
また嫌な予感がしてきた。
「それは？」
「これはね、『ぴょんぴょんワープくん改』。これを使うと行きたい場所にワープできるんだよ！　前までは目的地の指定が出来なかったんだけど、この前改良してね～」
嫌な予感は的中した。
「それを使えばここまでワープできるんですか!?」
「そう言えばデビルーク王国のララ王女は、その頭脳で発明も行っているとか……」
「うんっ！　これも私が発明したんだ～」
この世界でも、ララの頭脳は健在らしい。でもそれはそこまで知られていない。こんな小型の装置で人間のワープを可能にしているのなら、それは大発明のはずなのに。
つまりは、重大な欠陥があるということで、
「……はい、目的地の設定は出来たよ。私に掴まって！」
「や、それは絶対にやめた方が……」
俺は止めようとするが、慌てふためく女性陣には届かない。

「先輩、行きましょう！」
「いや、ダメだって――――……」
「じゃあ、いっきまーす！」
躊躇する俺、ララは静止を聞かずにぴょんぴょんワープくん改を起動させる。ララと一緒にワープするのはすでに掴まっていた雪菜だけ――――
「あーあ……」
光と共に２人はその場から消え失せた。
「え、どうして……？」
「主様、これはどういう事でしょうか……？」
確かに２人共、その場からいなくなっていた。
その場に残されていたのは、武偵中の制服。雪菜がさっきまで着ていた制服だけだった。

もう1人のお姫様　中編

「う、ん……あれ……？」
　ワープの光が晴れると、雪菜は自分が横になっていることに気が付いた。背中に感じるこの感触は、硬いカーペット。今、自分が倒れていることがわかる。
　上には心地よい人肌の温かさ。上に人が乗っているのだ。
　自分のおっぱいが、自分のモノ以上の質量をもったおっぱいに押しつぶされている。目の前には恐れ多くもララの顔。透き通った肌にわずかな痛みもないことが分かるくらい近くにある。
「（ララさん、すごくキレイ――――）」
　同性の雪菜でもそう思ってしまうほどの美貌。その体を自分の体全体で感じてしまっている。
「（すごく柔らかいし、温かい――――）」
　そして妙にすーすーする。
「って、えええええっ!?」
　ようやく雪菜は、自分が裸になっていることに気が付いた。
　そして自分がいる場所も。
「えへへ、成功したねー」
「っ！　すみませんっ！」
　雪菜は飛び起き、カーテンに飛びついた。
　しゃーっ！　とカーテンがレールを滑り、小部屋と外界とをシャットアウトする。ここでようやく息をついた。
「うぅ、なんですか、これ……！」
　自分を見下ろして、雪菜は真っ赤になる。雪菜はその身に何一つ衣服を身に着けていなかった。制服も、下着すらも。
　見下ろした視界に入ってくるのは、ツンと上を向いた2つの膨らみだ。後ろを振り返ると、壁にかかった大きな鏡に、羞恥で赤くなりつつある背中にお尻まで、余すところなく写っていた。
　少し目線を下げれば、はしたなく胡坐をかいたララが小首をかしげている。

「ここ……試着室、ですよね」
「しちゃくしつ？　この狭い部屋の事？　とりあえずさっき言ったお店にはワープしたよ？」
「なっ！　――――……っ、何で裸になってるんですかっ、私達は……っ！」
　ララは元々裸だったとしても、雪菜は違う。直前まで着ていたはずなのに。
「え、だって『ぴょんぴょんワープ君改』は、服まではワープ出来ないもん」
「え」
「改造前は本当に緊急脱出用で、場所の指定はできなかったんだけど。前に使った時にママの目の前にワープしちゃって。その欠点は直したんだ～」
「それ以上に重大な欠点が残ってるじゃないですか……！」
　そう言って雪菜はハッとした。
「服が無くなっても特に何とも思っていない人だから、この欠点に気が付いていない……!?」
「どーしたの、雪菜？　早く外に出ようよ」
「ダ　メ　で　す　っ」
　カーテンを開けようとするララを押しとどめる雪菜。
　外からはたくさんの人の声が聞こえ、賑わっているのが分かる。カーテンの隙間から見ると、すぐ目の前を親子連れが通り過ぎた。
　こんなところに全裸で飛び出せるわけがない。
「あーもう、先輩……っ！　早く来てくださいっ」
　雪菜には祈ることしかできなかった。

「あっちゃぁー……」
俺の忠告空しく、２人はこの場から消え去ってしまった。
「え、どうして……？」
「主様、これはどういう事でしょうか……？」
残されたのは雪菜の衣服。ワープの時に発していた光に引きつけられていた周りの人の目も、何も起こらないとあってはだんだんと少なくなっていく。
「うーん……」
どう言ったものか。聖天子様もいるからなぁ。
コッコロだけだったら、包み隠さず言えるんだけど。
ララが使ったアイテムは、衣服が転送できないワープ装置だ。原作から考えるとな。ララの言葉を信じるなら、場所は指定出来るらしいんだけど……それも定かではない。
もしかすると、本当にヤバいところに転送されている可能性もある。
時間が無い。聖天子様が素直なことを考えて、ここは……
「多分あのワープ装置、服までは転送できないんだと思います」
「ええ？　それはいくら何でも……」
いやいやと聖天子様が首を振る。
その気持ちは分かる。服を転送できないなんて不良品以外の何物でもない。そんなものを喜々として使おうとするとは。
「しかし、実際にいなくなっているのも事実でございます。早くお二人を見つけなければ」
「ですが、探すアテはあるのですか？」
「今はララ王女の言葉を信じるしかないですよ！　このお店に行きましょう！」
「「はいっ!!」」
俺達は立ち上がる。
「あ、っと、雪菜の制服も持って行かないとだな」
脱ぎ捨てられた形になっている制服を持ち上げると、

「ん？」
その中から落ちてきた。
スカートとセーラー服からそれぞれ、淡い水色の。
「おっとっと――――」
「っ!!」
その時、聖天子様の手が、俺も目にも追えないほどのスピードで動いた。床に落ちてしまったソレを拾い上げ、胸に抱くように隠した。
そして笑顔で、
「雪菜さんの服、私が持っていきますね？」
「や、そんな、聖天子様に――――」
「ね？」
「あっはい」
聖天使様の提案に素直に頷いた俺は、お会計を済ませ、すぐに店を出るのだった。

「ごめんね、雪菜」
「いえ、人の話を聞かないで焦ってしまったのは私ですから……」
地面に体育座り、体を抱えて局所が見えないように体を縮こませている。その様子を見たララは流石に申し訳ないと思ったのか、しおらしくなっている。
「（それに先輩の話も……あの時、先輩はやめたほうがいいって言ってた。多分、こうなること分かってたんですね。こんな特徴的な人、『そういう事』なんですよね）はぁ……」
不幸中の幸いは、ワープ先が人の目が届かない更衣室だったことだ。

とにかく今はじっとしてることしか出来ない。
「うーん、どうしようか、雪菜？」
「先輩の助けが来るまで待つしかありませんよ。先輩ならすぐに来てくれます」
「そうなの？」
「はい、先輩なら。すぐにここに来てくれるはずです」
こうなることが分かっていたのなら、行動も早いはず。
「ふーん、雪菜は信頼してるんだね。翔の事」
「それは……！　……はい。もちろんです」
言ってて顔が熱くなるのを自覚する雪菜。
「（気がづかれてませんよね？　でも、まあ、ララさんなら、からかってくることも……）」
「んー？」
「少しは隠しませんか？　そんな風に……」
雪菜と違って立っているララ。女性の魅力にあふれた肉体を惜しみなく晒している。
「いえ、いいです……」
雪菜は言っても無駄だと思い、注意をやめる。
「ってララさん!?　その手の！」
「え？」
「そのブレスレット！　ワープ装置ですよね！」
自分の体以外何一つワープしていないと思っていた雪菜は、ずっと見落としていた。ララの手首には、あの時使った『ぴょんぴょんワープ君改』があったのだ。
「それを使ってもう1度ワープしましょう！　私の家……もしくはララさんが泊まっているホテルに行けば……！」
さっきもそれを思いつけば、こんなことにはならなかったのだが。あの時は新しい服を買うという事しか頭になかった。
だがこれで万事解決――――
「えー？　無理だよ？」
雪菜の中に生まれた希望は、あっさりと崩れ去る。

「ぴょんぴょんワープ君改は、1回使うと充電に1日かかるから」
「そう、ですか……」
　空気が抜けて萎んでしまった風船のように、雪菜の体から力が抜ける。
「それでさっきの話に戻るけど」
「はい？」
「雪菜って翔のこと好きなの？」
「すっ！　な、何でそんなこと……！」
　突然すぎる質問に、思わず大声を上げそうになる雪菜。
「さっき、最近ずっとお見合いしてるって言ったでしょ？　でも、将来の相手は自分で選びたいの！」
「それは、そうだと思います」
「でも、どうやって選べばいいのかなぁ、って。やっぱり結婚するんだったら、好きな人としたほうがいいよね？」
「はぁ」
「でも私、全然そういうのって分からなくって。好きってどういうことなのかな？　雪菜は分かる？　翔の事好き？」
「っ！」
　ここまで直球に聞かれるなんて思っていなかった雪菜は、赤面して口ごもる。
「それはっ……先輩のことは、信頼してます。何かあったら、助けに来てくれるって思ってます」
「うんうん。それで？」
「それで？」
「好きなの？」
　どうしてもその一言が欲しいらしいララは、最後まで許してくれないらしい。膝に顔をうずめた雪菜は、か細い声で答えた。
「っ、ぁ、その……はい」
「わー!!　本当!?　ねえねえ！　それってどんな感じなの？」
「あ、あの！　もう許して――」
　様々なことを聞いてくる。出会いから、一緒に何をしているのか、

今一緒に住んでいることなども。
　その時だった。
「すみません、お客様？」
「っ!!」
「あれ？」
　カーテンの外から聞こえてきた声に、雪菜の心臓は大きく跳ねる。
ララは例によって、首を傾げているだけだ。
「は、はいっ！　なんでしょうか？」
　セリフから見て店員。黙っていては怪しまれると考えた雪菜は、とっさに返事をする。ララには喋らないでいるように人差し指を立てて動かす口の前に当てている。
「ご試着中に申し訳ありません。ですが、ずいぶんと長い時間ご試着されているようなので……」
「も、申し訳ありませんっ！　持ち込んだ服がたくさんあって！」
「本当は何も着てないけどね」
「ララさんっ！」
　雪菜は小声で注意する。
「とにかく問題は無いので！　もうしばらく試着させていただければ！」
「そう、ですか？　ですが外に靴がありませんが……」
「靴？」
　雪菜はつられて自分の足を見る。
　相変わらず何も身に着けていない。それは当然、靴も靴下もだ。ここに来た時から身に着けていなかった。
　試着室に入る時に靴を脱ぐのは当然。外に無ければおかしい。
「どう、して、でしょうね？　アハハ、もしかして盗まれちゃったのかも？」
「……お客様？　よろしければ、一度カーテンを開けさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「え、い、や、ちょっと今は服を着ていなくて……！」
「今度はホントのことだね」

不審に思ったのか、店員の声が少し厳しくなる。
もはやララの言葉にツッコミを入れる余裕すらない。焦りから体が熱くなり、全身に汗をかき始める。
「なので今開けられるのはちょっと……！」
「はい。２分ほどお待ちしますので、次にお声がけした時に開けさせて頂きますね」
「あ、あの……！」
「後ほど、お話はお聞きしますので」
完全に何かあると思われてしまっている。もしかすると、もう人を呼ばれてしまっているのかもしれない。
「ど、どうすれば……！」
どうするも何も、もう店員に事情を説明して、服を貰うしかない。
お金も持っていないが、この緊急時ならしょうがない。
「聖天子様とララさんには迷惑をかけてしまいますが」
「全然大丈夫だよ」
「うぅ、私にとっては、一生の恥です……！」
雪菜が悲壮な覚悟を決めたところで、店員からお呼びがかかる。
「お客様、よろしいですか？　開けますよ？」
「あのっ、開ける前に話を聞いて下さい！」
カーテンから顔だけを出して店員に呼びかける雪菜。幸い女性店員だ。幾分か事情は説明しやすい。
「……わ、わかりました」
その剣幕に店員は頷く。
一呼吸置き、今の状況を説明しようと――
「実は――――」
「雪菜さん！」
「雪菜様！」
ギリギリのところで、聖天子とコッコロが駆け込んでくる。
「コッコロちゃん！　聖天――――」
名前を呼ぼうとして口を閉じる。この人だかりで不用意に聖天子の名前を出すわけにはいかない。

「申し訳ありません。お騒がせしてしまったようで」
「は、はぁ……お連れ様ですか？」
「はい。雪菜様、こちらをどうぞ」
「あっ！　ありがとうございます！」
制服を手渡された雪菜は試着室に引っ込んでいく。
事態についていけない店員は、ずっとハテナマークを浮かべている。
「ここはもう大丈夫ですので。あなたはお戻り下さい。すぐに開けますから」
「その分、しっかりとお買物させていただきますので」
２人の説得に、店員も折れた。
「……分かりました。それでは」
こうしてララと雪菜は、事なきを得たのだった。

「ここですね！」
「はい！」
「ですがどこに……」
お店に到着した俺達は、その入り口で中の様子を窺っていた。
「お二人とも服を着ていませんし、もうどこかに行ってしまったのではありませんか？」
「いや……」
聖天子様の言葉に首を振る。
「特に情報は入ってないので」
武偵のネットワークには、そんな情報を入っていない。
「とすると？」
「場所が少しずれてるか、人に見つからない場所に隠れているか……」

「このお店で人に見つからない場所は……更衣室ですね！」
「コッコロと２人で見に行ってもらってもいいですか？　俺はここで全体を見てるんで」
「分かりました！」
　ヤル気たっぷりの聖天子様とコッコロに任せ、俺はお店の前で２人の背中を見ていることにした。
　本音を言えば、下手に裸の美少女２人が入っている更衣室に近づけば、『Ｔｏｌｏｖｅる』が起きると思ったからだ。
　特に騒ぎは起きてないみたいだし、無用な混乱は避けたい。
「（レプリカ先生。何かあったらよろしく）」
「（任せたまえ）」
　もしもの時を考えて、２人にはミニレプリカをつけている。
　ここにいるのかは少しドキドキするけど、多分大丈夫だろうという勘がある。
　初日以来だな、こんなに忙しいのは。
「ふぅ……」
「ずいぶんと大変だな。この世界の仮面ライダーは」
　全身の産毛が総毛立った。
　あの時とは違い、黒いジャケットを着た青年。俺がＴＶで見ていた時と比べて年をとっているように見える。そして首からぶら下げているトイカメラが妙に似合っている。
「門矢、士……！」
「なんだ。俺の名前を知ってるのか？　俺も有名になったもんだ」
　俺は生唾を飲み込む。
「何の用だ」
「俺のことを知ってるってことは、どういう要件なのかも分かるんじゃないか？」
「最近出てるヤミーについてか？」
「話が早くて助かるよ」
　満足そうに笑う士。
「アイツらは何だ？　何が原因なんだ？」

「その前に、俺から質問させてもらおうか。お前、一体何なんだ？」
「何なんだ、だと？」
「前に見た時はエグゼイドに変身していたが、あれはお前の本当の姿じゃないだろう？　いや、そもそもで言うなら、ここは『仮面ライダーのいない世界』だ。」
「そんなことまでわかるんだな」
「旅をしていればな。ニオイで大体分かる」
　やっぱりこの士は、本編の後、旅を続けた姿なのかもしれない。
「それなのに、仮面ライダーに変身した奴がいる。お前だ」
「詳しく話そうとすると色々と面倒だけど、こういうベルトも持ってるぜ」
　俺はジクウドライバーを見せつける。それを見た士は目を細める。
「お前、名前は？」
「夜月　翔だ」
「ソウゴじゃないのか」
「誰だよ、それは」
「いや、忘れてくれ」
　そう言うと士は考え込む。
「……、……、……、なるほどな。大体わかった」
「分かったのか？」
「大体は、な。だが、大本の犯人は分からない。それに、俺が知っているモノに比べると、パワーの大きさが全く違う。ここからどうなるのか、俺にも想像出来ないな」
「事態の収拾のために、協力してくれるのか？」
　ここで門矢士の協力を得られるのなら心強いが。
「俺をお前の女に紹介するっていうなら、遠慮させてもらう。お互い仮面ライダーだっていうなら、戦うときに協力すれば事足りることだ」
　必要以上に群れるつもりは無いってことか。それも士っぽいな。
「お前の連れが戻ってくるな……じゃあな、また会おう」
　言いたいことだけ言った士は、手を振ってその場を去っていくの

だった。

「何っ!? どういうことだ、貴様達!」
顔に痣を作った部下を怒鳴りつけるのは、長身の男性だ。
家出したララを連れ戻すのに失敗した。それどころか、見知らぬ人物に連れていかれてしまった。そんな報告を聞けば、怒鳴り声の1つや2つ、あげたくなるというものだ。
「そ、それが! これを見てください!」
「ん? ……これは!」
部下が渡したタブレットには、雪菜によってぼこぼこにされる直前の映像が映し出されていた。
「中々の使い手だが、この後ろにいる女性……日本の聖天子か? 何故だ。何故、そんなことを……」
「隊長、どうしますか!」
「居場所は掴んでいます! すぐにでも!」
「ああ。これ以上時間はかけられん。私も出よう。ララ様のわがままも、これで終わりにして頂かなくては」
理由を聞きたいのなら、直接出向けばいい。
デビルーク王室親衛隊隊長『ザスティン』は、マントを翻して家出王女のもとへ向かうのだった。

もう1人のお姫様　後編

「良かったです。すぐに合流出来て」
「はい……本当に助かりました。ありがとうございます、聖天使様」
こうして落ち着くのは、今日何度目か分からない。
雪菜に制服を渡し、ララには新しい服を、ペケが作ったナノマシンの服ではなく、普通の防弾繊維で出来た服を買って、着てもらった。
お店にも説明は済ませたし、一件落着だ。ただ、時間がかかり過ぎたせいで、時刻は午後3時を過ぎてしまっている。
この時間から試合を見に行っても、ほとんど終了してしまっているだろう。それに、ララも無事に送り届けなければならない。護衛から無理やり引っ張ってきてしまった責任がある。
「えー？　私まだ帰らないよー！」
「そんなこと言わないで下さいよ。護衛の人もお父さんもお母さんも心配してますから」
駄々をこねるララ。こっちも簡単に言うことを聞いてくれるとは思っていないけど。俺たちから逃げられても困る。
「というか、どうして先輩はお店の外で待ってたんですか？」
「無用なトラブルはご免だったから」
俺が行くと絶対に何か起こる。そんな予感がしたんだ。
でも、そう思って残ったのは間違いないけど、それ以上の相手が俺に近づいてきた。
「先輩？　どうしましたか？」
「……や、何でもないよ」
この場で話すことじゃない。言っても混乱させるだけだろうしな。とにかく、何かあったら頼りになるのは間違いない。
これが門矢士じゃなくて他のライダーでも、この安心感を得られるんだろう。
「本物のヒーローってことか……」
まさにレジェンド。次に会ったらサイン貰わないと……そんな暇あるかな。絶対、戦いになってるだろうからなぁ。

「じゃあそろそろ、デビルークの大使館に連絡を取りますか」
「だーかーらー、私は帰らないって」
「ララさん？　本当に、我が儘を言うのはやめましょう？　何かあってからでは遅いですし」
「それに帰らないというのは……今夜は何処に泊まるおつもりなのですか？」
　聖天子様とコッコロも説得するがまるで効果が無い。
「いーの、いーの！　私良いこと思い付いたから！」
「いいこと、ですか？」
　雪菜が首を傾げ、その先を聞こうとする、その時だった。
「ようやく見つけましたよ！　ララ様っ!!」
「お」
　この耳に残る超ベテラン声優のボイスは。
　俺が目を向けると、部下を引き連れた長身かつイケメンの男性。俺の知っている男だ。
「あっ、ザスティン!!」
　ララの声に聖天子様が立ち上がる。
「誰でしょうか？」
「デビルーク王室、親衛隊隊長。多分ララを連れ戻しに来たんだ」
　雪菜の質問に小声で答える。
　この圧。原作では残念キャラになってしまったザスティンだが、伊達に王室親衛隊の隊長ではない。偽物かと疑う方がバカだ。
　後ろにいる部下の中には、先ほど雪菜がぶっ飛ばした人達がいる。
「学園島日本代表、聖天子です」
「聖天子様。この度はララ様を保護して頂き、ありがとうございます」
「いえ。こちらもララ様を無事にお引渡しすることが出来て良かったです」
　ここはお互い、余計なことは言わず聞かずで終わらせるつもりなんだな。詳しく突かないほうが賢明なんだろう。
　俺たちがララを連れ去ってしまったことも、王室の護衛が簡単にララを連れ去られてしまったことも。

お互いお辞儀をすると、ザスティンはこちらに、席に座っているララに歩み寄ってくる。
「さあ、ララ様！　私達と共に帰りましょう！」
「いーっ、だ！　私帰らないもんね！　帰れない理由が出来たんだから！」
「……帰れない理由とは？」
「主様？　何処に行かれるのですか？」
「や、ちょっとトイレに」
身の危険を感じた俺は、自然な流れで席を立とうとする。この流れ、どこかで見たことがある。原作とは全く状況が違うし、そんなフラグは全然立ってなかったんだけど。
しかしそれでも、『流れ』はある。その『流れ』に乗せられてしまっている。
その流れから何とか脱出を――――
「私、ここにいる翔の事、好きになったの！」
「「はっ――――？」」
出来なかった。
繋がりは持っておきたいとは思ったけど、出会って1日でここまで濃密なつながりが欲しいとは思っていない！
ただでさえ色々あってキャパオーバー寸前なのに、この上さらにデビルークだと!?
「だから翔と結婚してここで暮らす！　だから帰らない！」
俺が口を挟む暇も無く、ララは自分の決意を高らかに叫んでいた。
その音量に、通行人が全員こちらを見る。こんな道端で結婚だなんて、気にしないほうが難しい。
「なるほど、そういう事ですか……」
そして素直に頷き始めるザスティン。
何故そこでもっと疑わないのか。ララの性格的に、そのくらい唐突な、突拍子もない行動は日常茶飯事なのかもしれない。
「わかったら帰ってパパに伝えて！　私はもう帰らないし、お見合いする気も無いって」

「……、……、はっ！　ララさん!?　いったい何を言ってるんですか!?
こんなに突然！」
フリーズから復帰した雪菜がツッコむ。
「ごめんね、雪菜。でも大丈夫だから」
「何も大丈夫じゃありませんよ!?」
「考えってもしかして、翔さんの家に泊まるってことだったんですか……？」
聖天子様はまさかと問いかけると、返ってきたのは満面の笑みと肯定だった。
「もちろん！　だって結婚するもんね！　だったら、別に一緒に住んでも問題ないでしょ！」
「あります！」
「それに主様の家には、今でもたくさんの女性が一緒に住んでおりますし……」
「え、夜月さん……？」
「シェアハウスです！　シェアハウスですよ聖天子様！」
聖天子様の訝しげな視線を、何とか躱す。
「そーなんだ！　じゃあ私1人が増えても全然大丈夫だね！」
「大丈夫じゃありませんって!!」
もはや誰の声にも耳を貸さないララ。本当にわがままなお姫様だ。
「……ララ様、もしかしてですが、このペケ、ララ様の魂胆が見えてしまったような……」
節電モードで今まで黙っていたペケが口を開く。
「ちょっとペケ、変なこと言わないでよ。私は本当に翔のことが好きなんだから」
ララの魂胆は俺も知っている。
原作でも主人公、結城リトに対して同じことをしていた。
好きな人が出来たことを理由として、王族としての窮屈な暮らし、様々なお勉強、お見合いから解放されようというのだ。
問題は、何で大したフラグも立てていない俺がその相手に選ばれたのかだ。誰でも良かったっちゃあ、そうなんだろうけど。

まあ手ごろな相手だったんだろうな。
だが、結婚すると言われてこの場から離れられる訳がない。自分のいないところで話が進むのは困るし、そもそも俺がどこかに行ってしまわないように、ザスティンの部下達が道を塞ぎ始めている。
「ですが、このまま帰る訳にはいきません」
黙って考え込んでいたザスティンが口を開いた。
「このザスティン、得体の知れない人物との結婚を認めて帰っては、王に会わせる顔が無い。それに結婚するというのなら、それは国に関わることです。ララ様の意志が固いというのなら、王に挨拶していただかなくては」
そりゃそうだ。
「えー……」
明らかにララのテンションが下がった。
「当たり前でしょう。認められれば国に来ていただき、王としての帝王学を身につけなければなりません。見たところ彼は一般市民。そもそもデビルークの王の器かどうかも分かりません」
「じゃあどーすればいいの？　翔はここで暮らしたいって言ってるよ？」
「そりゃ言うけどさ……」
でもそれは、さ？　結婚云々は全然意識の外なんですが？
それに、俺がここで暮らしたいって言うよりも、ララが王宮を離れたいって気持ちの方が大きいんじゃないのか？
「ふむ……」
ザスティンが俺をジロリと睨んでくる。
「貴様も、本当にララ様と結婚したいというなら、その気概を私に見せてみろ。王へ紹介するに値するのか、この場で試させてもらうぞ」
「や、あのですね？　これは――――」
言うよりも早く、剣閃が俺を襲った。
「ほう……！」
「こう言っちゃなんだけどな……！」
超宇宙聖剣（スペースカリバー）でザスティンのライトセイバーを受け止める。

「正直あんたのことを見た時から、こうなるんじゃないかと思ってたよ！」
「一度も顔を合わせたことは無かったはずだがな！」
　そのまま力で押し切られ、宙に飛ばされる。
「やっべぇ！　マジで殺すつもりか！」
「相手は本気だ。手ごわいぞ」
　セットアップしたレプリカ先生も、厳しめの口調で忠告してくる。
　下手なサーヴァントよりも強いかもしれんぞ。デビルークの王室護衛はやっぱり格が違う。
「あれは魔法ではないな。魔術でもないだろう」
「超能力でもない。デビルーク人の血筋ってわけだ！」
　ホットスポット上にあるデビルーク王国。そこの人たちは普通のホモサピエンスにはない尻尾と、未知のスーパーパワーを持っている。
　それに加えて科学力もあるというのだからとんでもない。
「未知の力には未知の力で対応するしかないな！」
「君の持っている力は、ほとんどが未知の力だと思うが……」
「細かいところは気にするな！」
　俺は家の格納庫にアクセスする。
「どうした！　来なければこちらから……む？」
　ザスティンの体にバインドが巻き付く。レプリカでコピーした魔法だ。
「なんて貧弱な魔法だ……この程度か」
「ザスティンさん！　やめてください！　こんな場所で……！　それにあの方はわたしの護衛です！　ケガをさせられては明日以降に支障が……！」
「ご安心を、聖天子様。すでに結界は張ってあります」
　気が付いた時には、関係者を残して人はいなくなっていた。
「お前たちは手を出すな。皆さんを安全なところへ」
「「はっ!!!!」」
　部下達は反重力装置を使いふわりと浮かんだ。雪菜たちも一緒に、

手ごろなビルの屋上へ移動する。
「ずいぶんと優しいな。他の人を巻き込まないようにしてくれるなんてよ」
「当たり前だ。王と会わせるのかを決める大事な儀式。生半可な気持ちでは、ケガでは済まんぞッ!!」
本当はこっちの話を聞いてほしいんだけど……コイツは一回落ち着かせないとだな！
「行くぞッ!!」
「ああ――――オープン・ゲットッ!!」
「ッ!?」
俺の背後から3機のマシンが現れる。3色の小型の飛行機だ。

ゲットマシン（イーグル号）（初代）
ゲッターロボを構成する3機のマシンの1つ。3機が変形合体することで、ゲッター線を動力にするスーパーロボット『ゲッターロボ』になる。
例によって体に纏うタイプのパワードスーツになっている。合体した時の大きさは2メートルほど。

ゲットマシン（ジャガー号）（初代）
ゲッターロボを構成する3機のマシンの1つ。3機が変形合体することで、ゲッター線を動力にするスーパーロボット『ゲッターロボ』になる。

ゲットマシン（ベアー号）（初代）
ゲッターロボを構成する3機のマシンの1つ。3機が変形合体することで、ゲッター線を動力にするスーパーロボット『ゲッターロボ』になる。

サイドバッシャー

仮面ライダーカイザの専用マシン。
普段はサイドカー付きのバイクだが、変形することでバトルモードになることが出来る。

予選突破のご褒美で手に入れたアイテム。６つの内の４つ。後の２つはあげてしまったので、もう手元には無い。
今回はこいつで行くッ！
「チェンジ、ゲッターッ!!」
３機のゲットマシンが変形し、俺の体を包むように合体していく。逆るゲッター線が３機それぞれの金属に作用。成長進化させることで、まるで粘土の様に形を変える。
「1（ワン）ッ!!」
完成したのはゲッターロボの第1形態。ゲッター1。赤い装甲に、同色のゲッターウイングがまるでマントの様にはためいている。
「機械仕掛けのロボットかッ!!」
「ただのロボットだと思うなよ!!　スーパーロボットだッ!!　ゲッタァァァトマホォォォクッ!!」
肩から飛び出す無骨な斧。ゲッターロボの象徴ともいえる武器、ゲッタートマホークだ。
互いの獲物が交錯する。
叩きつけるような豪快なスイングが、トマホークに乗せられる。単純な鉄板なら容易に斬り裂けるだろうザスティンの剣を、しっかりと受け止める。
パワーも十分ザスティンと渡り合えている。
「なるほど、良い機体のようだな！」
「そいつは――どうもッ!!」
力任せに腕を振りぬいた。
ザスティンはその力に逆らわず後ろに下がった。
「トマホォォォク、ブゥゥゥメラン!!」
「武器を投げるとは愚かな！」

剣を一振りしただけで、ブーメランを叩き落とすザスティン。
愚直に向かって来るザスティンに対し、俺はニヤリと笑った。
「オープン・ゲットッ!!」
俺の体に合体していたゲットマシンが分離し、ザスティンに殺到する。同時に浮遊能力を失った俺が、地上に落下し始めた。
「ザケルッ!!」
電撃を放ち、ゲットマシンが再び集まるまでの時間を稼ぐ。
「チェンジ、ゲッター――――2(ツー)ッ!!」
再び集まるゲットマシン。着地までのわずかな時間で変形合体する。しかしその姿は、ゲッター1ではない。左手に巨大なドリルを携えたゲッター2だ。
ゲッターの陸戦形態。超スピードで地上を駆け回り、右手のパワーアームと左手のドリルで敵を粉砕する。
ドリルなんてものを獲物にしている相手なんて、そうそう相手にすることは無い。唸りを上げるドリルの連続突きに、ザスティンはしかめっ面だ。
向こうからの反撃の気配を感じると、すぐさま距離を取り、再度突撃する。
地上を走破するそのスピードは、明らかに俺の方が早い。しかし攻めきれない。
「スピードはあるがパワーが足りてないなッ!!」
「パワーが見たいっていうなら――――オープン・ゲットッ!!」
あくまで俺の力を見るつもりなのか、今度は変形を待ってくれるザスティン。
「チェンジ、ゲッター――――3(スリー)ッ!!」
またしても形態が変わる。
ゲッター3。2本足ではなくキャタピラを装備した水中戦形態だが、ゲッター随一の力を持つ。
自在に伸びる腕がザスティンをからめとった。剣を振りかぶっていた腕も、拘束から逃れようとする足も、全て抑え込んだ。
抵抗を物ともせずに持ち上げ、

「うおおおおお!?」
そのまま宙へ放り投げる。
「オープン・ゲットッ!! チェェェェェェェンジ、ゲッタァァァァァァァ――1ッ!!」
もう一度ゲッター1に変身する。空を飛び追撃するのではなく、ゲッターの必殺攻撃を放つ。
「ゲッタァァァビィィィィィム!!」
ゲッター1の腹部から、収束されたゲッター線が発射された。
「うおおおおおおおッ!!!」
ザスティンは投げられる中でも態勢を整え、剣を振りかぶり、あろうことかビームを斬り裂いた。
「ぐうううううううッ!!!」
少し焼け焦げているが、2本の足でしっかりと着地した。
「その程度か……!」
「上等。だったらここからは闇の魔法も追加して――」
「ザスティン、ストーーップ!!!」
「ぷげっ!?」
「あー……」
ララの静止の声が、というか、静止のタックルが入った。
「もうやめて。分かったから、今日はもう帰るから」
「わ、分かっていただけたのなら、よかった、です……!」
今のあなたの一撃で結構ヤバ目だと思うけど。な、なんてパワーだ……ゲッタービームよりも強いんじゃないか？
「翔も、今日はゴメンね」
ララの一言で、この戦いは終わりを迎えるのだった。

「皆さん、お騒がせいたしました」
「それじゃあみんな、またね!!」
ザスティンは頭を下げ、ララは手を振りながらその場を去っていった。
「お姫さまっていうのは、皆さんあんな感じなんでしょうか……？」
「さあね……」
絶対に今日一番疲れただろう雪菜が、その疲れを言葉にしてくる。
サンプルケースが少ないとはいえ、今月に入って知り合ったお姫様がみんなあんな感じだからな。
それにしても。
「ううん……」
またね、かぁ。
そんなことを思いつつ、今日の護衛任務は終了するのだった。

幕間　とあるお姫様達の寝室

ここはアルディギア王国が借りているホテル。
「それでは、私はもう休む」
「はい、おやすみなさい」
ラ・フォリアの父であるルーカス・リハヴァインは、そう言い残して自分の部屋に帰っていった。残されたのは王室の女性陣。ラ・フォリアと母のポリフォニアだけだ。
アルディギア王国の第一王女であるラ・フォリアは、会議にこそ出席していないが、次のアルディギアの王座に座ることが確定している。
『もしも』のことがあった場合を備えて、会議の内容を聞かされていたのだ。
その時の態度は真剣そのもの。
翔がこれまでに会った王女様の中で、一番翔をからかってくるラ・フォリアだったが、一番王族としての責任感を持っていた。
「今年も上は大変の様ですね……」
「今年は特にねぇ。島でも大変なことがあったみたいだから」
聞かされた内容を思い出しつつラ・フォリアは口を開くと、ポリフォニアは穏やかな声で頷いた。
1日目から流れてしまった妹達の件について。管理局の内部にいるかもしれない裏切り者について。その裏切り者と一部の科学者が、違法な研究に手を染めているかもしれないことについて。
この島の裏側ではびこり始めている新種の能力、『スタンド』について。
そしてそれに大きく関わっている可能性のある人物について。
「調べましたけど、聖天子の件、護衛の1人の暴走だったみたいです。スタンド使いの」
「あら……」
ポリフォニアは口元を押さえる。
「そんな相手から聖天子を守ってくれたのだから、翔には感謝しない

といけないですね」
「翔さんというと、ラ・フォリアがお話した？」
「はい。今回のためにわざわざもう1回雇ったんですって。この暗殺事件で、護衛を新しくしたっていうのに。お母様、どう思います？」
「そうねぇ、聖天子さんは真面目だから。全然そういう話を聞かないものね」
　しかしだからこそ、あの聖天子が同年代の男の子を指名して護衛に付けたのは衝撃的だった。
「自分にも、そのくらいの自由が欲しかった？」
「正直、少しうらやましかったわ」
「そう……それで、今日はどうだったの？」
「特に進展はありませんでしたよ」
『どう』、『進展』とはラ・フォリアの将来のパートナー、結婚相手のことだ。
　パーティが無くなっても、活動が無くなるわけではない。もっとも、おしとやかな姫君を想像していた相手にとって、ラ・フォリアは刺激が強すぎたが。
「あの人も、心配してるから」
「それも分かっています」
　父親が親心から、多くの選択肢を用意してくれているのだということも、聡いラ・フォリアには理解出来ていた。
　そして母親も、自分のように本当に好きな人と一緒になりたいのなら、今からでも行動しないといけないことも。
「ままならないものね……」
　ラ・フォリアはそう呟くのだった。

ここはランドソル王国が借りているホテル。
ラ・フォリアのように将来に関して言われることも無く、会議についてもあまり聞かされていないユースティアナは、自分のベッドでごろごろと転がっていた。
「はぁ～、今日もたくさん食べ歩きしちゃいました☆　明日は何処に行きましょうか……」
今日も今日とて、ユースティアナは食べ歩きを楽しんだ。学生が出している出店だけではなく、ここが稼ぎ時と数を増やしているキッチンカー。1週間全てを使っても、全て回り切れるものではなかった。
パーティが無くなった今、その行動を咎める者は1人もいない。
その時、ドアがノックされた。
「姫様、もうお休みですか？」
「あっ、真那さん！　こんばんはっ！　どうしましたか？」
千里　真那。ユースティアナの傍付きであり、護衛でもある女性だ。姫の護衛を任されるだけあり、魔導士としての実力も超一流である。
「姫様の明日の予定をお聞きしておこうと思いまして。明日も出かけるのでしょう？」
「そうなんですか？　えへへ、実はまだ迷ってるんです」
食べ歩きツアーにも文句なく付き合ってくれる真那のことを、ユースティアナは深く信頼していた。
「今日はこのブロックを攻めたので、明日は……ココかココのどっちかにしようと思ってるんですけど……」
ユースティアナは明日の予定に胸を躍らせるのだった。

ここはデビルーク王国が借りているホテル。
その王女である3人の女の子達の部屋だ。
ララはザスティンに連れられてこのホテルに戻った後、心配そうな顔をした双子の妹に迎えられた。
もっとも、その心配そうな表情は、ララの話を聞いているうちに全く別のものへと変わっていくのだが。
「ずるいなぁ、姉上は。こっそり抜け出してそんなことしてたなんてさー」
双子の1人、背中の中ほどの長さの髪をツインテールにした少女、ナナ・アスタ・デビルークは、話の途中からベッドに寝そべっていた。
まだまだ発育途中の幼い身体と、チャームポイントの八重歯が特徴の女の子である。
護衛からの話を聞いて、てっきりララが誘拐されたと思い込んでいたため、考えと内容との落差が大きく集中を保つことが出来なかったのだ。
「ナナ、お姉様は私達と違っていつもお忙しいのよ？　少しくらい羽を伸ばそうと思っても、仕方がないでしょ？」
「はいはい……はー、まーたいつものぶりっ子かよ……」
そんなナナを窘めるのは、しっかりと最後まで椅子に座って話を聞き続けた双子の片割れ、モモ・ベリア・デビルークだ。
まだまだ幼さが残るナナとは対照的に、ともすれば姉のララよりも落ち着いた様子の少女だ。
しかしそれは姉に認められたいという気持ちからくる1つの仮面。年頃の少女が持つ、大人に見られたいという気持ちがそうさせるキャラクターである。
そんなモモは、ショートボブの少しクセっ毛になっている毛先を指で弄っていた。
そして笑顔で一言。
「何か言った？」
「べーつにぃー？」
本当は腹黒く容赦のない性格であることを知っているのは、王室護

衛と家族だけだ。
「もー、2人共ケンカしないの」
モモの追及に知らん顔で顔を反らせるナナ。そんな様子も、ララにとってはいつもの日常だ。
天真爛漫なララと元気一杯なナナ、そして腹黒なモモ。この3人がデビルーク王室のお姫様達である。
一通りの説明をし終わると、ドアがノックされた。入ってきたのはザスティンだ。あの時の戦いの傷はすっかり癒えていた。
「ララ様。今日の件について、王と王妃が少しお話があると」
「は～い……それじゃあ、行ってくるね」
ララは軽く手を振って部屋を出て行った。
残されたナナとモモ。
結局は、誘拐でも何でもなく、単なる勘違いだということが分かった。黒服と揉み合いになっているララと、聖天子の護衛が勘違い、ただそれだけの内容だ。
あとはザスティンが迎えに行くまで、楽しくお茶をしていただけ。
しかし、唯一気になる話があった。
「姉上本気かな？」
「本気？　……ああ、結婚するって話？」
「そーだよ！　モモは気になんないのか!?」
「そりゃあ、気になるけど」
でも、とモモは続ける。
「今までずっと、お見合いすら拒否してたのに、今日会った人と結婚するなんて本気で言うと思う？」
「そうだけどさ……」
お姉ちゃん子の2人にとってララに伴侶ができるというのは、心穏やかではいられない出来事だった。
今まで何度もお見合いがあっても慌てなかったのは、ララ本人が絶対に結婚しないと宣言していたから。しかし今回は自分から結婚すると言ったのだ。
だがモモには、大方の予想がついていた。ララが一種の隠れ蓑とし

て、その男を利用しようと考えていたことは。
「でも、どんな人なのかは気になるわね。その男の人」
「な！　もしものコトがあるもんな！　もし会ったら、姉上にふさわしい奴なのか試してやらないとな！」
「別にそこまで大ごとに捉えなくてもいいと思うけどね。ここを離れたら二度と会うことは無いんだし」
　どこの馬の骨ともわからない奴への考えが一致したところで話題が変わる。
「なあ、モモ。私達も明日出かけよーぜ！」
「うーん？　でも私、あまり行きたいところが……それにこっそり行くと、ザスティンさんに叱られるわよ」
　ララが脱走した昨日の今日で、今度は妹達が脱走など、優等生のモモにはあまり受け入れることの出来ない提案だ。
「だってザスティンに言ったらダメって言うか、ついてくるじゃんか」
「それはしょうがないでしょ」
「でも鬱陶しいだろ？」
「……ナナ。あなたね……」
　モモは特に否定することなく、ナナの名前を呼ぶ。
　ナナとモモは今年で１４歳。お年頃の年齢だ。そういった監視の目が一番イヤになる時期だ。
　ナナはもちろんのこと、真面目ぶっているモモですらそう思っているのだ。
「別に嫌ならいいけど？　そん時は私１人で行くから。実はずっと行ってみたかった場所があるんだよな～」
「……わかったわ。わかりました。あなた１人で行かせる方が不安だもの。明日はついていくわ」
「よしっ！　じゃあ明日は――――」
　こうして、ナナとモモの２人は明日の予定を立てるのだった。

ここはウェイバー達が住んでいるマンション。時計塔の支部を作るにあたって買ったものだ。時計塔でも大きな派閥になっているエルメロイ家の資金力もあり、ウェイバーとグレイで住むには少々大きすぎるくらいだ。
「ふぅぅぅぅー……」
たった今会議から帰宅した2人。着替えることもなくソファーに体を沈めたウェイバーは大きく息を吐いた。
「お疲れ様です、師匠」
「ああ、お前もな」
グレイはソファーに座ることは無いが、フードの奥の顔には疲労の色が見える。
今のところただ座っているだけの会議だったが、ただいるだけでも全く眠くならない。其のくらいの緊張感をずっと味わっている。
「おー、兄上、帰ったのか」
気怠そうな声で出迎えてくれるのはウェイバーの義妹であるライネスだ。奥の部屋からトリムマウを引き連れてくる。
「お前はお前で疲れているようだが。今日は何をしていたんだ？」
「何もしていないよ。何もすることが無いと逆に疲れる」
ウェイバーの対面に腰を下ろし、重いため息を吐いた。
「仕方がないだろう。あんなことがあったんだ」
「全く、10日間パーティがあると聞いてこの島に来たというのに、もう1週間近く部屋に軟禁状態だ。体の方が腐ってしまうよ」
ライネスの目的は懇親パーティ、もとい翔がどのような人間なのかを観察することだった。
その格好の場として考えていたパーティは中止になってしまったのだ。他の予定など考えてもいなかったライネスは暇を持て余していた。

「はぁ……流石にずっと部屋にこもりきりというのもな……いっそのこと会いに行ってみるか。なぁ兄上、アイツの連絡先知っているんだろう？」
「やめておけよ。向こうは仕事をしているんだ。要人の護衛。手を抜ける仕事じゃあない」
「何を言う。私だってこの夏の間守ってもらうと言質を取ったぞ？　その手の約束は違えない性格じゃないのか？」
「アイツはまたそんなことを……！」
　ニヤニヤと言うライネスに眉間の皺を深くするウェイバー。
「夜月さん……拙はあまりお話しませんでしたが、あの方が師匠の唯一のご友人、なんですよね？」
「や、グレイ。唯一って……」
「違うのか？」
「……そうかもしれないが」
　ライネスの問いに、渋々頷いた。
　そうかもしれない、ではなく、そうである。
　聖杯戦争前は自分の実力を過大評価して周りを見下していたせいで友達ゼロ。
　その後はなぜか仲が悪かったはずのケイネスと和解し、それどころか養子に。いつの間にか教室を任されるほど寵愛を受けている。
　敵はごろごろいるが、味方と呼べる人物が教室の生徒以外にいるかと言われると……
「まあ、そんな寂しい兄上の唯一の友達だ。妹としてあいさつしておかなければいけないだろう？　これからも、末永く付き合って下さいとな」
「余計なお世話だ！」
「でしたら拙も、師匠の従者としてごあいさつしたほうがよろしいでしょうか？」
「グレイ、お前も余計なことを考えるな……！」
　ウェイバー的にはあまりアルトリアには会わせたくない。
　様々な因縁によって、グレイは騎士王にあまりいい感情を抱いてい

ないのだ。
「(初めて会ったときは驚いたもんだ……)」
あまりにも騎士王に似ている顔で腰を抜かしそうになったのは懐かしい思い出だ。
いつの間にかアルトリアが受肉していて、翔との間に子供を作ったのかと思い、流石に年齢が合わないと思い至るまでグレイの目の前でフリーズしてしまった。
「(うーむ)」
「師匠？　どうされましたか？」
「(正直、あの翔にベタ惚れなアルトリアを見れば、騎士王に対する恐怖心は無くなる気もするんだけど……)」
むしろ自分がこんなにも恋愛脳(スイーツ)なのかと心配するようになりそうだ。
ウェイバーとしては、グレイのことも翔に相談しようと思っていたのだが、アルトリアが召喚されていたのは想定外だった。
「(そう言えばグレイは１０年前――第四次聖杯戦争の時に、一気に騎士王の顔になったって言ってたな)」
グレイはとある事情でアーサー王に深い縁がある。もともと、その縁はわずかなものだったが、１０年前、聖杯戦争の時にその運命は大きく変わってしまう。
顔は騎士王そのものになり、あのキューブ状の礼装『アッド』との会話もできるようになったのだ。
「(今回の召喚は特に影響がなかったのか？)」
いくら考えてもウェイバーには分からないことだった。
今回のアルトリア達の召喚は世界への違和感を消すために、『サーヴァントとして召喚された』という形がとられているだけなのだ。
本当に召喚されていたのなら、顔が似る以上の変化がグレイには訪れていたことだろう。
「師匠？　どうされましたか？」
「ん、いや……そのうち、お前のことはアイツに紹介する。だから今は待ってくれ。少なくとも８月以降じゃないと、お互いゆっくりと時間

も取れないからな」
「は、はいっ。分かりました」
グレイはこくこくと頷くが、代わりに非難の声を上げる義妹がいた。
「おいおい！　それは無いじゃあないか、兄上。目の前に暇で退屈で時間を持て余している妹がいるというのに！」
「アイツは仕事だし、私達もすぐに会いに行くわけではない。分かっているのか？　８月以降だ」
８月以降となるとパーティも終わり、ライネスの滞在期間もとっくに終わっている。
「いっそのこと、私もここに住んでやろうか？」
「絶対にやめろ」
何時までも言い合っていては時間の無駄だ。ウェイバーは、まずはこの疲れ切った体に栄養を補給しようと立ち上がるのだった。

インターミドル　アインハルトＶＳコロナ　前編

「お疲れ様です、いいタイムでしたよ」
「ありがとう、オットー」
　コロナはノーヴェの姉妹の１人、オットーからタオルと飲み物を受け取った。
　今日の試合も順調に突破したコロナとアインハルト。同じブロックの彼女たちは、いよいよ明日、公式戦で激突することになる。
「そろそろ終わりましょう。明日はいよいよ、です」
「うん、そうだね」
　あと片づけをして、家路につく。
「ね、オットー」
「はい？」
「私、アインハルトさんに勝てると思う？」
「それは勿論――――」
　オットーは一瞬躊躇ってしまう。
　ヴィヴィオたちの中では、コロナが一番賢い。大人だと言ってもよい。半端な慰めを言う場面ではない。かといって、あいまいな言葉で濁すことも難しいだろう。
「わかってるんだ。私は普通の初等科４年生。ちょっとだけ変わった魔法が使えるだけだって」
　それはコロナがずっと胸に抱えていたものだった。
「アインハルトさんは才能も実力もあって、ご先祖様から受け継いだ技もある。今でもずっと努力してる。普通に戦ったら勝ち目はないよね？」
「……はい」
　そこまで言われてしまっては、オットーも頷くしかない。
「でもね」
　言葉には続きがある。
「私にしかできない魔法があるって、みんなが言ってくれるの。オットーやノーヴェ師匠が、私を強くしてくれる。ルーちゃんが作ってく

れたブランセルもいる」
　沢山の人に支えられて、今ここに立っている。
　だから。
「だから勝つよ」
　確かな自信を携えた表情で、そう宣言した。
「次の試合は私が勝つ――――！」
「……はい！」
「そのために秘策を試したいの。ノーヴェ師匠、時間は空いてるかな？」
　オットーが連絡すると、ノーヴェはすぐに飛んできた。
　早速その秘策というものを披露する。
「……おいおい」
「これは……」
　その威力は予想以上だった。
「今のは一瞬でしたけど、後先考えなければもっとやれます」
「こんな技教えた覚えはねぇぞ！　体への負担がデカすぎる！」
「これもゴーレム操作の応用です。教えられた技の延長ですよ……これくらいやらないと、アインハルトさんとは戦えないですから」
　コロナの言いたいことは分かる。
「でもコーチとして、こんな危険な技は許容出来ねぇよ」
「うまくやりますから」
　ノーヴェは割と本気の注意をするが、コロナの態度は変わらない。
「お前な……」
「チームナカジマで、私の能力が劣ってること分かってます」
「「……っ」」
　それはコーチをしているノーヴェやオットーが一番理解していた。
　今はまだそこまで差が出ていないが、これからもストライクアーツを続けていけば、埋められない差ができる。
「みんなに気を使われたくないんです。みんなにガッカリされたくない。みんなのことが大好きだから、せめてこの大会では肩を並べていたいんです」

ストライクアーツでの限界が分かったからこそ、得意のゴーレム創造を独自に伸ばしていた。賢いからこその選択だった。
「だからって、今みたいな危険な技をバンバン使え、ってならないのは分かるよな？」
「あう……」
「（……はぁ、アタシもつくづく甘いな）仕方ねぇ。練習時間延長だ。ギリギリまで、その技を詰めるぞ。お前なりのやり方で、アインハルトに勝ってやれ！」
「っ!!　ありがとうございますっ!!」
本当にギリギリまで練習し、これ以上ないコンディションで試合への準備を完了するのだった。
――――――チャリン、チャリン

――――――

だが、この土壇場で使いこなしたのは、間違いなくアインハルトの努力の賜物だ。
それに、アインハルトが鍛錬に集中できなかった理由の大部分が俺にあるのだから、このくらいの助けはあっても良いだろう。
明日は例によって試合を見に行くことが出来ないしな。
コロナには悪いが。
「勝ってこいアインハルト。覇王流を……いや――次元覇王流を見せつけてやれ」
「はい――――！」

――チャリン、チャリン

《さあ、次の試合です！　両名共に初出場ながら、この2人をルーキーと侮る選手はもはやいないでしょう！》
会場の熱気は、まるでトップ選手の入場を待つレベル。そのくらい注目の試合になっていた。
《レッドコーナーからはゴーレムマイスター、コロナ・ティミル選手！　ここまでの試合ではゴーレム完成後は相手を寄せ付けない強さを見せてくれました！》
コロナがリングに上がる。
《ブルーコーナーは古流武術、アインハルト・ストラトス選手！　ここまでの試合、ほぼ無傷。かつ1分以内に勝負を決めてきました！》
アインハルトがリングに上がる。
《そして2人は同じチームで研鑽しあう仲間同士！　運命の対決が始まろうとしています！》

２人が向かい合った。
「じゃあ、アインハルト、ティオ、頑張って！」
「油断しちゃダメっすよ！」
「はいっ！」
アインハルトはセコンドであるディエチ、ウェンディに激励される。
「アレの使いどころは見極めろよ！」
「お嬢様、どうかご武運を！」
「うん。ありがとう、オットー」
コロナはノーヴェ、オットーに背中を押される。
始まりを告げるゴングが鳴った。
その瞬間に動いたのはアインハルトだ。
「（空破断で動きを止める――――え!?）」
てっきり距離を取ってゴライアスを創るのだと踏んでいたアインハルト。だからこそ、拳の衝撃波を飛ばす空破断を選択した。
しかし、違う。
「みんなと練習した格闘戦技と、私のゴーレム創成を組み合わせた」
リングの構成材料が再変換され、コロナの右手に集まっていく。一つの部位に集中し、持続性を放棄することで実現した、スピード創成だ。
アインハルトの攻撃よりも早く、コロナの右手にはゴライアスの右手が装着された。
「これが私のっ！　創成戦技（マイストアーツ）ですっ!!」
特大の拳、ゴライアスの拳がアインハルトに襲い掛かった。
「くっ……！」
慌てて防御するアインハルト。
「出鼻をくじかれた……！　ゴーレム創成に入られる――――!!」
「創成起動――――!!」
コアクリスタルがばら撒かれ、コロナの足元に魔法陣が現れる。
「創主コロナと魔導器ブランセルの名のもとに！」
「させないッ!!」

復帰したアインハルトが、妨害の攻撃する。
詠唱に集中しているコロナは、防御することで精いっぱいだ。
《止まらない攻撃！　コロナ選手は防戦一方です！　見る見るうちにライフが削られていきます!!　ゴーレム完成まで耐えられるのか!!》
格闘技の腕は圧倒的にアインハルトが上だ。防御をしていても、一撃でライフが５％は持って行かれる。
しかしコロナも負けてはいない。今まで特訓してきたのだ。アインハルト相手にほとんど完璧に防御している。
詠唱は残り少ない。
「これで、決まってッ!!」
アインハルトの渾身の一撃――――しかし、ライフを削りきれなかった。
「叩いて砕け『ゴライアス』ッ!!」
アインハルトに影が落とされる。背後に現れたゴライアスの影だ。
「まず――――ッ!?」
振り上げられた拳、肘から先が回転し、威力が挙げられている。
身の危険を感じて逃げようとするが、足に巻き付くロックバインドによってワンテンポ遅れてしまう。
「ギガントナックルッ!!」
身動きの取れないアインハルトに、鉄槌の様な拳が振り下ろされた。
《決まったぁぁぁぁ!!》
「よっしゃあぁぁぁっ!!」
実況とセコンド、観客までもが一体となって大歓声を上げる。
《コロナ選手、ゴーレム創成成功!!　そしてすでに1分経過!!　アインハルト選手の秒殺記録が途絶えました!!》
全身に打撲のクラッシュシミュレートが起きているアインハルトに、レフェリーが試合続行の意志を確かめる。
「もちろん、いけます」
お互いにここからだ。
コロナがゴーレムの肩に乗り、アインハルトが見上げる。

試合が再開された。
絶対的な攻撃力の差。いくらアインハルトでも、ゴライアスを相手に正面から戦うのは難しい。そうならないように、速攻をかけていたのだ。
だが、こうなってしまっては仕方がない。やることは決まっている。
「ゴライアス、グラインドゲイザーッ!!」
「――――!!」
肩に乗ったコロナが指令を出す。
岩が擦れる掘削機のような轟音を響かせながら、前方全てを薙ぎ払う蹴りを繰り出す。その速度は、陸戦試合以上だ。
だが、避けられないものではない。
飛び上がって避けたアインハルトに、ゴライアスの拳が迫る。
勢いに逆らわず、手の甲を転がるようにして着地する。
「ッ!!」
一気に加速した。
とりついてしまえばこちらのもの。魔力を集中させ、先ほどは不発に終わった技を放つ。
「空破断ッ!!」
「く……うぅ……!」
衝撃波を受け、コロナがゴライアスの肩から落ちていく。
「ティオ、力を借ります」
アインハルトの足元に魔法陣が創られる。
ゴライアスが暴れて振り落とされる前に、アインハルトの拳が振り下ろされた。
「覇王流――――破城槌ッ!!」
大昔の先祖は敵城の壁を壊すために使っていた技である。拳からひび割れが広がっていき、やがて粉々に砕けた。
《ア、アインハルト選手、あっという間にゴーレムを粉砕！　さらに墜落したコロナ選手、ライフが危険域です！》
コロナにダウン判定が起こる。

アインハルトは指示に従い、ニュートラルコーナーに戻った。
「ノーヴェ！　コロナお嬢様が――――！」
「騒ぐな！　終わってねぇ!!」
その言葉が聞こえたのか、起き上がり、リングへと戻っていく。
「確かにアイツには、目立った戦いの才能はねぇ。でも、ピンチになっても崩れない心がある。冷静に戦略をくみ上げる知性もだ」
「それに、アレも」
「そうだ。この時のために作り上げた切り札だってあるんだ」
フラフラとした足取りのコロナに、アインハルトは油断せずに構えていた。
「（残り1分半。インターバルで回復されたら何があるか分からない。コロナさんにはヴィヴィオさんのようなカウンターが無い。接近戦で押し切る！）」
《棒立ちのコロナ選手にアインハルト選手が突撃!!　ここで勝負が決まってしまうのか――!!》
コロナは確かに棒立ちしていたが、攻撃に備えていないわけではなかった。
「（ヴィヴィオと友達になって、格闘技をやってるって知ったときはすごくびっくりしたっけ）」
もうすぐ間合いに入る。くると分かっている衝撃を覚悟して目をつぶる。
「（一緒にいたいから、一緒に練習するようになって。闘うのは好きでも嫌いでもないけど、やめちゃったら一緒にいられなくなる気がして）」
そうしているうちにリオやクロ、アインハルトとも出会った。
「（皆みたいにうまくできなくて、もうやめちゃおうと思うことは何度もあったけど、その時はノーヴェ師匠が励まして、導いてくれた）」
はっきり言って、格闘技が自分に向いていないと言うのは分かっていた。
それでも、
「（もう少しだけ、みんなと同じ視線で歩いていけるように、痛くても

使うんだ!!）」
　コロナの右腕に自らの意思とは関係ない圧力がかかる。右腕が押しつぶされそうな圧力に逆らわず、身を任せた。
「ネフィリム・フィスト!!」
　強烈なアッパーがアインハルトの顎を打ち抜いた。
　流れるように、型にはまっているかのように、コロナの体は次の攻撃へと動いた。
　反撃が無いと高をくくっていたアインハルトには、現在、意識混濁のクラッシュシミュレートが入っていた。
　無防備なアインハルトに綺麗な回し蹴りが入る。
《凄まじいカウンターが入りました！　アインハルト選手は勝利を焦ってしまったか！　１０カウントです！》
　倒れたまま動かないアインハルト。このまま意識が回復しなければ、コロナの勝利になる。
　次の試合のため控室にいるヴィヴィオたちも、今の一連の攻防を見ていた。
　コロナに対して浮かんだ感想は、アインハルトに接近戦で一撃与えてスゴイ、というものではなく、
「今の、ヴィヴィオのアクセルスマッシュと、リボルバースパイクじゃ……？」
「うん、そう見えたね……」
　あまりにも完璧な模倣に対する疑問だった。マネしたにしては、出来過ぎていた。
「（ネフィリム・フィストがうまく作動してくれた。これで決まってくれれば……！）」
　体の痛みを我慢しながらそう思うコロナだったが、カウントギリギリでアインハルトは立ち上がった。
《立ち上がった！　立ち上がりました、アインハルト選手！　ラウンド１の残り時間は１５秒！　ライフはお互い危険域！　このまま決まってしまうのかァ!?》
「（コロナさんに反撃されるとは思っていなかった。コロナさんを

侮っていた。このままでは終われない――――）」
「（残り１５秒。創成してる時間はない。ネフィリム・フィストで押し切ろう！）」
　お互いが前に出る。
　ゴライアス創成の時の防戦が嘘のように、２人は激しく打ち合う。拳をギリギリでよけ続けるコロナの姿に、アインハルトは驚愕する。
「っ!?」
　甘く入った打撃を逸らし、コロナが一歩前に出た。
「ネフィリム・フィスト『虎砲』ッ!!」
　両手を使った強烈な掌底がアインハルトの腹に向けて放たれる。ギリギリ滑りこんだ左手に阻まれ、ライフを削りきれない。
《ここでゴング！　アインハルト選手は何とかライフを残しました！》
　２人とも息を切らしていたが、ここでいったん仕切り直しになる。１分のインターバルが入る。
　予想していた形とは違うとはいえ、白熱した試合に、会場は試合の再開を待ちきれない様子だ。
　しかし、事情を知っている者達はある確信を得ていた。
　控室のチームナカジマも。
「最後の技、私の虎砲だった」
「うん。やっぱり、コロナのあの技は……」
　実際に戦っていたアインハルトも分かっていた。
「身体自動操作？」
「はい。ゴーレムを動かす時の要領で、自分の体を操作してるんです」
　ウェンディに説明する。
「あの巨大なゴーレムを動かす魔法をそのまま転用してるのだとすれば、それはそのまま巨人の拳になります」
　しかし、それは同時に体に多大な負担をかけることになる。
　アインハルトが反応できないほどの速度を出すには、元のコロナの力を超えたスピードで体を動かす必要があるからだ。
「それを事前にプログラムした動作、特定の攻撃に対するカウンター

に設定すれば……」
「反応時間ゼロのオートカウンターっスね……」
「あの様子から見ますと、攻撃にも使われているようですが。対策は……？」
「あります。『思い出しました』。それに、私にも切り札があります」
「切り札……？」
何も聞いていなかったディエチ、ウェンディは首を傾げた。
「次のラウンドでやります」
説明する時間はなかった。もう次のラウンドが始まる。
ティオの働きでダメージが回復したアインハルトはリングへと登った。
それはコロナも同じだ。ダメージを回復させ、リングへと登る。
「ネフィリム・フィストは安定してるな」
「はい。このラウンドは格闘で押していきます！」
「……ああ、行ってこい！」
次のラウンドのゴングが鳴った。

インターミドル　アインハルトＶＳコロナ　後編

《おおっと!!　アインハルト選手は前に出ない！　ここは受けの姿勢か!?》
「（だったらこっちから！）ネフィリム・フィスト発動！　近接格闘ラッシュモード！」
　ラウンド1の終盤のように、激しいインファイト戦を繰り広げる2人。
「すごい、すごい……！　あの技があれば格闘戦で戦えるよね？」
「……っ」
　オットーの言葉にノーヴェは何も返せない。
　身体操作や自動反撃。格闘戦で非常に優位に『思える』それらの機能。だが、それらの機能を実戦で使う選手はほとんどいない。
　その理由は。
「（鋭い踏み込みからの連撃……これは完全にヴィヴィオさんの動き！）」
　コロナの左手が電撃を帯びる。
「（この動きから、スタンナックルに繋がる――――）」
　ノーヴェの技であるスタンナックルが防御される。
　一連の攻撃が終わり、今度はアインハルトの攻撃だ。
「（反撃が来る。ここから自動防御に切り替え――――！）」
　コロナの動きがガラリと変わる。
「（リオさんの春光拳。『捌き』の動作。ここから自動反撃が――――）」
「やあ!!　ッ!?」
　反撃が避けられたことに、驚愕の表情を浮かべるコロナ。
「（やっぱり……！）」
　一気に後ろに飛んで、間合いの外に出る。自動防御モードのネフィリム・フィストではそれ以上の追撃はなかった。
「コロナさん。あなたはそこに辿り着いたんですね。辿り着いて、しまったんですね」
「……はい。どうしても……どうしても勝ちたかった。どんな手を

使っても、今回だけは勝ちたかったんです」
　コロナも無理やりな手段だということは分かっていた。
　漫画やアニメで感覚がマヒしているかもしれないが、自分の体も壊しかねない技など、本来使うべきではないのだ。
　限界に挑んだ結果、反動が来るならまだ良い。だが、ハナから負担がかかる前提の技を使う選手などそうはいない。
　ノーヴェも、コーチとして考えれば、絶対に止めるべきものだった。コロナの気持ちを優先してしまうところは、プロ目線でいえば失格だ。
　だがそれだけ、コロナの気持ちが強かった結果だと言えた。
　だったら、それには答えなければならない。アインハルトの全力をもって。
「ティオ、出して下さい」
「ニャ!!」
　己の内にいるティオに呼びかける。
　次々と具現化する鎧達。
《こ、これは何でしょうか？　アインハルト選手に次々と鎧が装着されていきます!!　見たことが無いものです！　これがアインハルト選手の切り札なのでしょうか!!》
　赤と白がメインの色。武装の類は何も具現化せず、所々に青く透き通ったパーツがある。
　この『機体』の名前は、
「ビルドバーニングガンダム……！」

　ビルドバーニングガンダム
『ガンダムビルドファイターズトライ』に登場するガンプラ。主人公である『カミキ・セカイ』が操る。
　ビームライフルやシールドだけでなく、ガンダムの伝統的な固定武装である頭部バルカンやビームサーベルすら装備していない特殊な機体。

しかしその分、格闘性能に特化しており、モビルファイターのような徒手空拳を使って戦う。
カミキ・セカイが『次元覇王流拳法』の使い手ということもあり、爆発的な近接能力を発揮出来る。
これを装備した場合、次元覇王流拳法を扱えるようになる。
アインハルトとの行為によって生み出されたモノであり、次元覇王流拳法という共通点から、アインハルトに譲渡された。

《こ、これは何でしょうか？　リング上で未知のエネルギーが観測されています!!　アインハルトさんはレアスキル持ちだったのでしょうか!?》
青いクリアパーツ――――プラフスキー粒子放出用のパーツから、青い燐光が漏れている。
「アインハルトさん……！」
今までの訓練では見せなかった武装に、コロナに焦りの感情が湧き出る。
随分と仰々しい鎧だ。アインハルトにはあまり鎧のイメージは無かったが、この場面で出してきたということは、みんなに秘密にしてきた切り札だということだ。
「（だとしても……）ネフィリム・フィスト、ラッシュモード！」
アインハルトが格闘技以外の択を選ぶことは無い。それだけははっきりしている。だったら、防御と反撃を両立したネフィリム・フィストが一番だ。
そう考え前に出る。だが。
「（アインハルトさんの反応速度が上がってる、あの鎧のせい？　攻めきれない……っ、連携のラッシュも効かなくなってきてる……！）」
元々、身体操作にはタイムロスが出てしまう。
判断から初動までの微妙な遅延。それは一瞬一瞬の判断が重要な近接戦では致命的だ。
「（だったら、マイストアーツの大技で……！）」

単純な連撃では勝ち目がないと、コロナは距離を取って飛び上がった。
「ネフィリム・フィスト、マイストアーム!!」
右手に瓦礫が集まり、ゴライアスの拳が生成される。
「(身体自動操作や頑丈な腕部武装。私にとってその対策は……)」
そのどちらも大昔の聖王、オリヴィエが使っていた技で、アインハルトの祖先である初代覇王が乗り越えられなかった壁だ。
「(ずっと前から取り組み続けていた課題だったんです!!)」
迫りくる岩石の壁。それは試合開始直後に不意打ちを受けたものと全く同じだ。
それに対して、拳を握る。
「流星螺旋拳!!」
本来は手首のマニュピレーターを高速回転させて放つ技。しかしこの世界では、魔力によって回転のエネルギーを生み出す。
岩石の拳は完全に力負けし、砕け散る。
「つ、ぅ……!」
その威力はマイストアームを破壊するだけに留まらず、コロナの腕にまで達した。
互角にはなっても自分がダメージを食らうとは全く思っていなかったコロナは、想定外の痛みに意識を奪われてしまう。
その隙を、アインハルトは見逃さない。
「次元覇王流、聖槍蹴り――――!!」
「か、は……ッ!?」
大きく飛び上がり、背中に落下速度をプラスした蹴りが突き刺さる。ヒットの瞬間に、青いプラフスキー粒子が飛び散った。
《一気にライフを削られてしまったコロナ選手！　各部位にクラッシュも発生しております!!　しかし立っている！　ダウンカウントは入りません!!》
歯を食いしばって拳を握るコロナだが、力を入れるほど痛みがひどくなる。
「(痛い、痛い痛い!!　でもまだ行けるッ!!　左のリボルバーキャノン

からスパイクのコンビネーション！）」
　コロナに突撃の意志があると感じたアインハルトは、その場を動かず構えを取る。
「覇王流、鋼体の型。『牙山』」
《コロナ選手、防御の構えのアインハルト選手に突撃だ!!》
　ネフィリム・フィストのプログラム通り、左手のリボルバーキャノンから入る。
　攻撃が当たった場所から嫌な音が響いた。
　それは攻撃を仕掛けたコロナの拳からだ。
「あ、ぁぁ……っ!!」
　威力を殺さずに受け止める攻性防御だ。
　攻撃したはずのコロナの拳に骨折のクラッシュが入る。しかし、怪我をしてもネフィリム・フィストは止まらない。瞬き1回分の瞬間に、魔法を中止することは出来ない。たとえそれが、針山に攻撃することになったとしても。
　またもや嫌な音が響き、足にクラッシュの判定が入った。
　無理に体を動かした反動と痛みで、自動操作が終わると一気に動きがにぶくなる。
「次元覇王流、聖拳突き――――!!」
　胴体に真っすぐな正拳突きが叩き込まれる。
　拳圧によってコロナの体がふわりと浮き上がり、１０メートルも飛ばされてしまう。
　これで攻守交代だ。
「（っ……！　攻撃が来るっ。自動反撃モード――――）」
　自力で体勢を立て直す時間はない。ネフィリム・フィストに頼るしかない。
　最短で距離を詰め、拳を繰り出してくる。間合いに入り、あと数瞬で当たる――――寸前で、アインハルトの拳が止まる。
「（しまっ――――）」
　コロナはそう考えるので精一杯だ。すでに体は動き始めている、この一瞬で何かすることなど出来ない。

アインハルトは半歩引いている。
自動反撃は見事に空振りする。アッパーは伸び上がり、絶好の的だ。そこを叩き潰すように、拳が突き刺さった。
《カウンター!! 決まりました! 先ほどのお返しと言わんばかりの痛烈なカウンターです!! コロナ選手ダウン!!》
セコンドのノーヴェは歯を食いしばる。
あまりにも完璧なカウンターだったのだ。
間合いとタイミングを完全に読まれていた。それは同時に、ネフィリム・フィストの身体自動動作がこれ以上通用しないことを表していた。
「(さっきの攻性防御で手足がクラッシュしてる。心が折れてもおかしくない――――!)コロナ……!!」
その言葉に答えるように、コロナが起き上がる。
「大丈夫、です」
今まで以上に魔力が体を包みこむ。
まさか起き上がってくるとは思っていなかったアインハルトは、慌てて構える。
「創成戦技(マイストアーツ)とネフィリム・フィストは、ここからが神髄ですから……!!」
ダメージが嘘のようにしっかりと2本足で立つ。ダメージがなくなったわけではないのに、だ。
「ネフィリム・フィスト、フルコントロールモード……!!」
「外部からの、五体の完全操作……」
アインハルトの脳裏に、初代覇王の記憶がちらつく。
「やはりその技は危険を伴います。その前に、私が終わらせる!」
「まだまだ、終わらせません!!」
コロナのライフは残り２０％といった具合だが、無理に攻め込むようなまねはしない。体の限界を無視して動ける自動操作からは、どんな反撃が飛んでくるのかわからないからだ。
「(五体の完全外部操作、この距離。おそらく、コロナさんの最大攻撃は……)」

「ガイストダイブ――――」
　コロナの体がゆらりと動き、加速した。
　それはアインハルトですら反応が難しい速度だったが、
「ッ!?　（防がれた!?）」
「（やはり高速突撃！　読めなければまともに食らっていた!!）」
「だったら当たるまで……!!」
　ブレーキをかける足にも激痛が走る。それも我慢して、突撃を敢行する。
「（骨が折れようと、手足が千切れようと戦える五体の完全外部操作。引き換えになるのは膨大な魔力リソースと、限界を超え酷使される体の損傷）」
　せっかくの非殺傷設定も、自ら体を壊してしまえば意味がない。
「（平和な時代を生きる競技選手が使って良い技ではないんです……！）」
　アインハルトの拳は、突撃と同じ速度で後ろに飛ばれることで避けられる。
　ネフィリム・フィストを破られた今、まともな近接戦では敵わないと判断したからだ。
「はぁ、はぁ……（息が苦しい、手も足も、体中が痛いよ。最後の切り札も、決定打にはならない。魔力も残り少ない）」
　今の攻防でわかってしまう。
　ガイストダイブも惜しかったのは最初だけ。あとは無難に逸らされ、効果的な攻撃にならない。
「（やっぱり無理なのかな。私がどんなに頑張っても、アインハルトさんには……）」
　心が折れそうなその時、リングの外から声を張り上げる人物がいた。
「コロナお嬢様!!」
「オットー……」
「まだです！　まだ終わっていない!!　僕と一緒に練習したゴーレムマスターの戦い！　諦めないで見せて下さい！」

コロナは試合であることを忘れてオットーを見てしまうが、アインハルトも構えを解いている。
「秘密の切り札なんてなくたっていい!!　そんなものが無くたって、コロナお嬢様は強いんです!!」
「ぁ……」
コロナの腕から力が抜けた。
「ごめんね。ありがとう、オットー」
今まで体を動かしていた魔力が霧散する。
「そうだよね。私は格闘技選手でもあるけどそれ以上に……」
「(自律操作を解いた？　魔法戦に切り替える？)ティオ、全力警戒です!!」
タクトモードに戻したブランセルを、アインハルトに向ける。
「ケイジング・スピアーズ」
リングを材料に岩石の折がアインハルトを包み込む。
「創主コロナと魔導器ブランセルの名のもとに……甦れ、巨神!!」
バラバラに散っていたパーツが再び1つに集まっていく。それはコロナ元来の切り札。
「叩いて砕け、ゴライアスッ!!」
「再構築だけあって早い!!　でも破城槌なら一撃で……ッ!?」
目の前に出てきた大きな脅威であるゴライアスに気を取られていたせいで、回り込んでいたコロナへの反応が一瞬遅れてしまう。
右手には、回転する巨人の腕が装着されている。
「マイストアーム、スパイラルフィンガー!!」
「流星螺旋拳ッ!!」
2つの回転がぶつかり合い、相殺される。
コロナの脳裏によぎるのは、練習がつらくなったある日、ノーヴェにかけてもらった言葉だ。

「練習、やっぱりキツいか？　なんでこんな思いをしてまで……って、思ったりするか？」
「まぁ、練習も組手も痛い思いをすることはあるけどよ、それもみんな

最高の瞬間の溜めなんだよ」
「練習した技がきれいに決まった時。会心の一撃を撃ち込めた時。自分が前より強くなっていることを実感できた時。そんな瞬間を山ほど味わってほしいから、今は苦しい練習をさせることもある」
「乗り越えた先にある楽しさを、お前にも知ってほしいんだよ」
――――――
「そうだ――――」
先ほどまでなら前につめていたところだが、今のコロナは違う。
「コメットブラスト、シュート!!」
魔力弾と、先の尖った岩弾の混合弾だ。
視界を埋め尽くすほどに生成された弾丸で、アインハルトの足を止める。
それでもアインハルトは近寄ってこようとするが、手の届く間合いに近寄らせるほど、ゴライアスは甘くない。
この終盤で2対1だ。頑強な前衛のゴライアスはそう簡単には突破できない。
「ロックバインド!!」
「また――――!!」
岩石に足首を掴まれ、一瞬動きが遅れる。
ゴライアスがそこに狙いを定める。
《バインドからのゴーレムパンチ！　これが決定打になるのか――――!!》
「蒼天紅蓮拳――――!!」
錐揉み回転を加えたアッパーカットが、バインドを引きちぎり、振り下ろされた拳をも粉砕した。青い粒子が風に乗り、吹き荒れる。
《なんという頑丈さか!!　あの質量差でぶつかりあったにもかかわらず、ライフを残しています!!》
それはデバイスであるティオによるサポートが大きかった。ダメージ緩和と回復。補助に特化した性能のおかげだ。
それでも2人のライフは残り5％だ。
「ゴライアス、これで決めるよ……!!」

粉砕されていないもう片方の腕、それが高速回転し、
「パージブラスト……ドリルクラッシャーパンチッ!!」
高速で射出された。
迫りくるゴライアスの拳。それをアインハルトは、
「覇王流――――」
受け止め、
「――――旋衝破!!」
投げ返した。両手を失い棒立ちになっていたゴライアスの体に風穴が空く。
「これが本当に最後の攻撃ッ!!」
後ろに回り込んでいるコロナ。その足にはゴライアスの足が装着されている。
今度は反応したアインハルト、彼女も最強の技を使うために構えを取る。
「マイストアーツ、ギガントドロップッ!!」
「覇王流……――――覇王ッ!! 断空拳ッ!!」
２つの技。勝ったのはアインハルトだった。
アインハルトの必殺技は、コロナのライフを削りきり、勝敗を決めた。
《試合終了です!! 勝者は見事な戦技を見せてくれたアインハルト選手です!!》
試合が終了すると、すぐさま担架が運ばれてくる。
「コロナさん……! コロナさんッ!!」
「っ、ぁ……」
アインハルトに抱えられていることを理解して、試合がどうなったのか悟ったのだ。コロナは涙ぐむ。
「ありがとう、ございました」
「はい。こちらこそ、ありがとうございました」
担架に乗せられて運ばれるコロナと一緒に、退場していく。
「もう、ズルいですよ。そんな鎧、見たことないですもん。何処で手に入れたんですか？」

「あ、と、翔さんに頂いたもので……」
とっさにうまいごまかし方を思いつかず、素直に話してしまう。
「ええ!?　そうなんですか!?　いいなぁ、私もいただけないかなぁ……」
「はへぇ!?　そ、それは……!!」
ビルドバーニングのことを翔との愛の結晶だと考えているアインハルトは、変な声を出してしまう。
コロナも欲しいということは、つまりは翔とそういうことをするわけで。
コロナもそんなに本気で言っているわけではないのだが、アインハルトにとってはそうもいかない。
「(いやいや、いやいやいや!!　それは流石に!　流石に無いですよね!?)」
「アインハルトさん?」
《同門対決は先輩の勝利で決着!　しかし勝者と敗者双方に惜しみない拍手が送られます!!》
こうして、アインハルトとコロナの対決は終わりを告げたのだった。
――――――チャリン、チャリン

インターミドル　ヴィヴィオＶＳミウラ　前編

身体自動操作の負担で体が動かせなくなってしまったため、救護室のベッドにコロナは寝かされていた。
傍らにはノーヴェとオットーがいる。
「頑張ったんですけど、届きませんでした。やっぱりアインハルトさんは強かったですね……」
「でもあと一歩のところまで追いつめてたぜ。あのヘンテコな鎧が無ければ勝ってたかもな！」
「あの鎧、夜月さんにいただいたものらしいですよ」
「あぁ……あいつが、か」
ノーヴェはノーヴェで、ティアナから（姉のスバルではうまく説明できなかったため）翔のことを聞いていた。
翔が今六課で追っている犯罪に関わっている可能性がある、という話を。
勿論、普段は全くそんなそぶりを見せない翔のことを疑っているわけではないが。
「（でも、あんなものを用意できるってのは……まあ、いいのか？）」
黙り込んでしまったノーヴェに変わって、オットーが、
「それでもいい試合でしたよ！　コロナお嬢様はやっぱり強かったです」
「ありがとう、オットー。オットーのおかげで、最後まで戦えたよ！」
「あぁ……ああ、そうだな！」
ノーヴェは疑問を頭から追い出す。
「お前がすごいってことは、観客全員が見てたよ。お前の創成戦技（マイストアーツ）は、いくらでも応用が効くいい技だ。鍛えればいくらでも応用が効くぜ！　……だから、さ」
少し言いにくそうに。
「今のチームで、一緒にやっていけるよな？」
「はい！　私はチームナカジマの一員ですから。みんなと一緒に練習していきたいです！」

「それでは、よろしければ今後も、僕がトレーナーを」
「うん。ありがとう、オットー！」
決意も新たに、コロナのトレーニングの日々が始まったのだった。

「大変大変！　ヴィヴィオの試合が始まっちゃう!!」
「なのは、そっちだよ！」
なのはとフェイトは仕事を終わらせ、走って会場へと向かっていた。
同じように走っている女性が3人。
「急げ急げ！　はよせんと試合が始まってしまう～！」
「まだ間に合います！　足元に気を付けて！」
はやてとシグナム、シャマル、リイン、アギトの5人だ。
「はやて！」
「そっちの会議は終わったの？」
「なのはちゃんにフェイトちゃん!!　見ての通りギリギリ遅刻や！」
すでにコロナとアインハルトの試合は終わってしまっている。間に合っているとは言い難かった。
しかしギリギリ、本当にギリギリ、次の試合には間に合う。
ヴィヴィオとミウラの試合だ。

そしてこちらは選手用控室。
治療を終えたコロナとアインハルト、リオ、綺凛の４人は、会場へ向かうヴィヴィオと、セコンドのクロを見送った。
「コロナは寝てなくて大丈夫なの？　話は聞いたけど……」
「大丈夫！　ヴィヴィオの試合はみんなで応援したいから」
とは言え、すでに試合を終えた選手がいつまでも控室にいるわけにはいかない。
コロナとアインハルトはこれからはなのは達と合流して、客席で応援することになっている。
「ああ。いいね。みんなお揃いみたいで」
「ミカヤさん!?　木更さんも！」
ミカヤと木更も、自分を打ち負かしたミウラがどこまで行けるのか気になり、今日の試合を見に来ていた。
すでに敗退した選手ではあるが、選手控室に来るくらいはできた。
「試合、見させてもらったよ。いい試合だった」
「うん。みんな盛りあがってたわ」
「「ありがとうございます!!」」
「２人は会場で見るんだろう？　良かったら、一緒にどうかと思ってね」
観戦グループにミカヤと木更も、加わることになった。
「いいなぁ！　私も会場で見たい～！」
「私もです……」
「はは、２人は自分の試合に集中しないとね」
子供のように（実際子供な訳だが）駄々をこねる綺凛とリオを宥める木更。
「ハリーは強いよ。伊達に砲撃番長（バスターヘッド）とは呼ばれていないからね。そして、ユウキという娘も。今までの試合は、全員１分以内のＫ．Ｏ。私の見立てでは、アインハルトちゃんと同じか、それ以上の実力者だ」
「はいっ！」
「分かってます！　でも、勝つために頑張ってきましたから!!」
２人の決意を聞き、客席へ向かうのだった。

ヴィヴィオとミウラはリングの入り口にスタンバイしていた。
前回の試合の後片付けが終わり、いよいよ入場だ。
「そろそろね、ヴィヴィオ！」
「頑張るッスよ！」
「うんっ！」
セコンドであるクロとディエチに激励される。
身体が冷えないようにシャドーボクシングをしていたヴィヴィオは、空中に浮かぶウサギのぬいぐるみ、デバイスであるクリスを手に取る。
「セイクリッドハート、セットアップ！」
ＢＪを纏うだけでなく、その体は大人のサイズまで大きくなる。戦闘に適した間合いを得るための大人モードだ。
「待ちに待ったミウラさんとの試合！　頑張ってくるね！」
「ええ。思いっきりやってきなさい！」
一方、ミウラサイドは。
「はやてたち、間に合ったってさ。もう席に座ってるって」
「良かったです！」
ヴィヴィオと同じように、体を動かして待機していた。
「同じストライクアーツ選手同士、ずっと楽しみにしていた試合です。開幕から全開でいきますね！　スターセイバー、セットアップ！」
「ああ。でも、ヴィヴィオのカウンターには気をつけろよ！」
ザフィーラのアドバイスに、ミウラは頷いた。
《さあ、参りましょう！　次の試合はこれまたルーキー同士の戦いです！　そしてまさかのストライクアーツ対決！》

入場が始まった。
《レッドコーナー、ミウラ・リナルディ選手!!　収束蹴打『抜剣』と鉄槌の拳を振るうハードヒッターです!!　1回戦ではトップファイターに対してK・O勝利。その実力は本物です!》
《ブルーコーナー、高町　ヴィヴィオ選手!!　先ほどは素晴らしい試合を見せてくれたチームナカジマのメンバーで、軽快なフットワークとカウンターブローを駆使する屈指の技巧派です!》
2人がリングの上で向き合った。
《強打者対反撃型!・　同じストライクアーツ選手でもスタイルが真逆なこの2人。一体どのような試合を見せてくれるのか!!》
お互い所定の位置につき、構えを取る。
どんなに騒がしい観客席でも、この瞬間だけは静かになる。集中している選手2人には、相手の姿しか見えていないだろう。
むしろ、そわそわしているのは客席にいるフェイトの方だった。
「な、なんだか緊張してきた」
「えー?」
「今からそんなんじゃもたへんよ?」
プレッシャーに弱いフェイトだった。
「ヴィヴィオちゃん、緊張してるのかな?　いつもと様子が違うようだけど……」
「確かに、そうですね……」
合流したミカヤとアインハルトが首をかしげる。
「えーっと、ですね。あれは多分……」
理由を何となく察しているコロナは解説する。
観客席とは切り離された空間になっているリングでは、試合開始が秒読みになっていた。
《それでは――――試合、開始ですッ!!》
ゴングと同時にミウラが前に出た。
「(難しいことを考える必要は無い。とにかく防御を固めて近寄るっ!)」
ヴィータやザフィーラに教えられたことを頭の中で反芻する。

「（序盤は潜り込んでパンチ！　狙いはボディ！）」
　大人モードになっているヴィヴィオとは身長差がある。身を低く、しっかりと腕で顔面をガードして反撃に警戒しつつ、ミカヤの時の二の舞にならないように。
　ヴィヴィオはその場でステップを踏み。
「（私の格闘戦技、ミウラさんにお見せしますっ!!）ジェットステップ――」
　スッ、と前に出た。
「え、あれ……？」
　いつの間にかミウラのガードが外されていた。
　細かい拳に目を白黒させていると、強力なアッパーカットが命中した。
　脳震盪のクラッシュが入り、両足から力が抜けた。
《ダ、ダウン！　ダウン判定です!!　試合開始からわずか６秒！　閃光の連撃がミウラ選手を捕らえましたッ!!》
　大騒ぎしているのはヴィータとザフィーラだ。
「あああああ!?　なんでアイツは一発目を喰らうんだぁぁっー!?」
「十分に注意はしていたんだがな。ヴィヴィオの速度がそれ以上だった」
　意識を飛ばしかけているミウラが起き上がることなく、カウントは進んでいく。
《崩れ落ちたミウラ選手、これは立てないか!?》
「（うわー、目の前がチカチカするー。なん、か……眠く、なって……）」
「馬鹿馬鹿!!　寝るな！　起きろぉぉっ！」
「ミウラっ!!　試合が終わってしまうぞ!!」
「ッ!?」
　セコンドの声が、かろうじて意識を繋ぎとめた。
《立った！　立ちました!!　カウント９！　ギリギリでしたが立ち上がりました！》
「あー！　惜しいッス！」
「でも攻撃は確かに効いてるわ。立ち上がっても、ヴィヴィオの攻撃

からは逃げられない」
試合が再開される。
するとすぐさま前に出るミウラ。
一度ダウンを貰っているのだ。ここからは多少慎重に行くのだと誰もが思っていたが、ミウラはそう考えなかった。
「（逃げるとかない！　前に出るんだっ!!　僕にはそれしかないんだから!!）」
前に出るミウラとは対照的に、ヴィヴィオはそこから動かない。
攻撃をしっかり見て、避ける。ただそれだけだ。
ミウラの拳は当たらない。だが、拳圧でＢＪが傷ついていく。
《ダウン直後にもか関わらずこの豪速の強打！　ミウラ選手攻める攻める!!》
だが、ヴィヴィオには当たらない。ＢＪをいくら引き裂けても、ライフを削るには至らない。
《そしてミウラ選手の攻撃に合わせて、正確なカウンターが突き刺さる――!!》
踏み込めるところは踏み込み、しっかりとダメージを取っていく。
細かい連撃を積み重ね、足が鈍ったところで、意識を刈り取る一撃をお見舞いする考えだ。
「ヴィヴィオの奴、うめぇな……まさかここまでだとは……」
ヴィータの目から見ても、確かな技術だった。
クロは腕を組んで得意げに鼻を鳴らした。
「当然よ。私とヴィヴィオが、どれだけミウラの試合を研究したと思ってるのよ。全部学習済みなんだから！」
「知性と技巧！　文系格闘少女の本領ッス!!」
しかし、研究熱心ならミウラも負けてはいなかった。
「（ヴィヴィオさんの攻撃は、確かに早いけど、決め技以外はそんなに重くない！）」
いくら前に出ても、躱され、反撃を受ける。それでも前に進み続ける。
「だったら――」

拳が交錯する。
「相打ち覚悟で反撃できます！」
「う、く……！」
よりライフを削られるのはヴィヴィオだ。
自らの拳の３倍近いダメージを受け、ヴィヴィオの防御が一瞬だけ緩くなる。
「ここッ!!　空牙!!」
すかさず繰り出したミウラの蹴りが、ヴィヴィオを切り裂いた。
衝撃に踏ん張ることが出来ず、ヴィヴィオの体が後ろに飛ばされた。
「――!!」
リングの外、スタジアムの外壁にめり込むほどの勢いで激突する。
《何と言う事でしょうか!!　ガードの上から吹き飛ばすこの威力!!
たった２発でライフの３０％を削られてしまった！　ヴィヴィオ選手、危険か!?》
レフェリーが慌てて駆け寄るが、
「（だ、ダメだ。もう我慢できない……っ）」
「ヴィヴィオ選手、試合の続行は――え？」
その顔は苦悶の表情ではなく、
《え、笑顔!?　ヴィヴィオ選手、満面の笑みを浮かべています！　いや、ミウラ選手も笑っている！　これはいったい――？》
「ですよね！」
「はいっ！　ですね！」
実況も置き去りにして、２人だけで、言葉も使わずに通じ合う。
ヴィヴィオは試合中、真面目な顔をしていないと失礼に当たると思い、楽しい表情を我慢することにしていたのだ。
しかし、ミウラの凄さを体感して我慢が出来なくなってしまった。
ファイトスタイルの噛み合う者同士、一瞬も油断できない戦いで２人の心が通じ合い、ヴィヴィオにつられてミウラも笑ったのだ。
《格闘戦技使い同士の試合は、開幕からダウンを奪い合う激しい試合！　しかしリングアウトから復帰したヴィヴィオ選手、待ち受けるミ

ウラ選手ともに笑顔です！　ラウンド1は残り2分。試合再開です！》

試合はまだまだこれからである。

《さあ、リング中央、激しい打ち合いが続いています！》

ミウラの拳を防御し、受け流し、反撃の拳を叩きこむ。細かく削っていくヴィヴィオに対して、ミウラはどんどん前に出る。

被弾を覚悟で前に出て、防御の上からどんどん打ち込む。しっかり受け止めているはずなのにガリガリとライフが削られていく。

腕へのダメージも蓄積していく。

やがてガードが外れ、ヴィヴィオのボディに拳が突き刺さった。

《ミウラ選手、ボディブローが炸裂!!　さらに追撃を仕掛けますが……》

ヴィヴィオのステップはまだまだ素早い。ダメージを感じさせない動きで、これまで以上にしっかりと間合いを取る。

甘く踏み込んだミウラの顔面に、ヴィヴィオのカウンターが入る。

軽い脳震盪のクラッシュが入ったミウラの足から一瞬、力が抜ける。

「ここッ!!」

「まだッ!!」

ここを好機と踏み込んだヴィヴィオ。踏ん張って歯を食いしばったミウラ。2人の拳が交差した。

ここで1ラウンドが終了する。

前の試合に比べれば派手さは無いが、堅実な、それでいて拮抗した試合に観客は変わらない声援を送っている。

激しい格闘戦は、まだまだこれからだ。

――――――チャリン、チャリン

インターミドル　ヴィヴィオＶＳミウラ　中編

２人が汗を拭いながらセコンドの元へ移動する。
「いいぞ！　ボディにいいのが入ってる！　この後も潜り込んだらガンガン打ってけ！」
「はいっ！」
「しかし、ダメージ取れてるのはいいが、ヴィヴィオ相手にライフの大小は本当に意味がねぇな……」
「本当にそうです！　油断してるとすぐにカウンターが飛んできます！」
水分補給を済ませて立ち上がった。
「すっごく怖いですが……でも楽しいです！　勝てたらもっと楽しいです！　だから次のラウンド、『抜剣』を試してみます！」
ヴィヴィオサイドでは。
「いやー！　ミウラさんすごいよ！　動き早いし、何より攻撃が重い！」
「はいはい。分かってるわよ。外から見ても十分に伝わってくるわ。きれいに防いでるはずなのにライフが削られてるもの」
クロはヴィヴィオの手をマッサージしている。何度も何度も重い打撃を受けている腕だ。今はまだ大丈夫でも、積み重なれば動きが鈍る
異能の力を使ってのサポートは禁止されているが、この程度のサポートは許されているのだ。
「でも、その動きにも慣れてきた。クリスも頑張ってくれてる！　ここからはもう削られないから！」
「……まあ、『抜剣』が来るとしたら、あれを使わざるを得ないけど、基本的にやることは同じよ」
「うんっ！」
「頑張るッス！」
観客席でも、１ラウンド目の戦いを振り返っていた。
はやてたちは２人の戦いぶりについて話していた。

「あの2人は、空戦に例えると高火力型と高機動型――――そやけど、2人とも一撃で試合を決める技がある」
ミウラには『抜剣』。ヴィヴィオには必殺のカウンターアッパー。片やライフを無理やりにでも削り取り、片やいくらライフが残っていようと地面に沈める攻撃だ。
「しかし、ヴィヴィオには悪いがミウラが勝つ」
「その通り！」
シグナムとアギトはミウラの勝利を確信していた。
ミウラは決して器用な子ではなかった。道場に来た始めの方は失敗ばかりで、鍛錬についていくことすらもやっとといった具合だった。
しかし、入門から数か月でみんなが気が付く。ミウラの中に眠っていた才能の原石に。
その原石を本物の宝石に変えるための努力を、鍛錬をすべて受け入れてきたのだ。
そうして辿り着いた境地が、上位選手すら捻じ伏せる鉄槌の拳と斬撃の蹴りである。
シグナムとアギトの自信は、その努力を間近で見てきたからこそだった。
「実際、ヴィヴィオちゃんは抜剣を出されるとかなりマズイ」
離れた場所にいるミカヤも難しい顔をしていた。
「ヴィヴィオちゃんの防御力はちょうど私と同じくらい。私の場合は抜剣に対して抜刀術で防御や迎撃が出来たけど……」
「ヴィヴィオさんにはそれがない」
小手先の技ごと相手を切り裂く『抜剣』。収束魔力の打撃を跳ね返せるだけの威力を出すことは不可能だった。
しかし、ヴィヴィオがこのまま終わるとも思っていない。
「さあ、ヴィヴィオちゃん。このピンチをどう乗り切る？」
2人がリングへ上がって、2ラウンドが開始された。
ゴングが鳴らされてすぐだった。
「いくよ、スターセイバーッ!!」

《ミウラ選手、収束打撃『抜剣』を発動！　華麗なステップを駆使するヴィヴィオ選手、避けきれるのか――――!?》
　その姿はまるで、居合切りをする侍だ。腰を落とし、体のバネを限界まで縮める。
「行きますッ！」
「受けて立ちますッ!!」
　ミウラの姿が霞んだ。
「抜剣――――飛燕ッ!!」
　神速の踏み込みで、すでに目の前にいた。
「はあああぁぁぁっ!!」
　クロスした両手の防御ごと蹴り抜き、切り裂いく。
《抜剣・飛燕炸裂！　ヴィヴィオ選手は大きく吹き飛ばされました、が……？》
　抜剣を受けた体勢のまま、ヴィヴィオは立っていた。
「ぷはっ!!」
「……っ!?」
　クラッシュどころか、ライフも１０％しか減っていない。必堕の打撃を受けたにしては、この結果はあまりにも。
《ヴィヴィオ選手防ぎ切りました!!　抜剣はすでに攻略していたということなのでしょうか！》
「ナイスタイミングだったよ、クリス！」
　ヴィヴィオは自分の相棒にお礼を言い、
「前見た時よりもだいぶ防御力が上がってるみたいだね」
「そうなんです！　ヴィヴィオずっとこの技を練習してて」
「ずいぶんうまく待っていますね」
　観客席は盛り上がっている。
「スゲーッス！　まさかあの攻撃を防いじゃうなんて！」
「当たり前でしょ。私相手にずっと練習してたんだから」
　セコンドのクロは鼻を鳴らした。
「相手の攻撃が命中するその瞬間、その一点に魔力を集中。防御魔法で防ぎつつ、攻撃魔法で跳ね返す」

格闘ゲームのジャストガードのようなものだ。タイミングさえ合ってしまえば大幅にダメージを軽減できる防御方法。
ただ少しでもズレれば、全く防御出来ないというリスクも背負っている。
ヴィヴィオの『相手の攻撃を見切る目』をもってしても避けきれない攻撃のために編み出された技だ。
「ヴィヴィオの『目』と防御特化のクリスだからこその瞬間の防御、『セイクリッド・ディフェンダー』」
ヴィヴィオが相手の攻撃を見切れているうちは、まともなダメージを通すのは難しい。
「……スターセイバー!!」
《おっと!?　ミウラ選手、抜剣状態を解除！》
「あ、あれ？　ミウラさん、抜剣は終わりですか!?」
「あ、いえ！　その、上手に防がれちゃいましたから……！」
試合中にもかかわらず、まるで休憩時間のように会話をする２人。
「今はまだ抜くべき場面ではないと判断しました！　まだまだ見せたい技はたくさんあります！」
「っ！　私もありますよ！　まだ出していない技も魔法も！」
笑い合いながらお互い構え直す。
「どんとこいです！　何が来ても叩き斬ります！」
「はい！　ぶつけさせていただきます！」
実は、抜剣状態は長時間維持出来ない。セイクリッド・ディフェンダーの性能も未知数の今、体力の有り余っているヴィヴィオを削りきるのは無理だと判断したのだ。
そして、これは収束系魔法全般に言えることだが、収束魔法は終盤にこそ力を発揮する。
その理由は２つあり、１つは魔法の仕組みだ。
飛び散った魔力を集めるという性質上、お互いに魔法をたくさん使った後の方が、威力が出る。
もう一つは気持ちの問題だ。最後の一撃に決意を込めて放つ抜剣の威力は、破壊力の桁が違う。

一度は防いだとしても、ヴィヴィオには相当のプレッシャーだ。
だがそれは同時に、強い相手と競い合えるという喜びにもなる。抜剣を防がれたミウラも同じだった。
「魔法戦も全力でいきますっ！　ソニックシューター・ファントムシフトッ!!」
闘い方を切り替えて、２人の戦いは続いていく。
「ソニックシューター……ファイヤ!!」
ヴィヴィオの魔力光は珍しい虹色だ。よって形作られる魔力弾も虹色。
浮かんでいるだけなら綺麗なそれが、ミウラに向かって放たれた。
だがバカ正直に正面からの弾丸に当たるほど、甘くはない。
的確な打撃で逸らしていくが、その隙にヴィヴィオは後ろへ回り込み、本命の攻撃を叩きこんだ。
「ディバイン・バスターッ!!」
「ッ!?」
ダメージを受け、衝撃で吹き飛ばされつつも、前転することで効率よく体勢を立て直すミウラ。
「はあああぁぁぁ――――っ!!」
お返しと言わんばかりに左掌に魔力を集め、弾丸を形成する。
「ブレイジング――――」
それを軽く放り投げ、
「コメットッ!!」
蹴り飛ばした。
だがその軌道は直接ヴィヴィオを狙うものではない。床に着弾し大爆発を起こす。
「（爆撃弾!?）く……っ！」
ダメージとともに、砂埃で物理的に視界が遮られる。
その砂埃を突っ切り、ミウラが現れた。
ヴィヴィオのボディに強烈な打撃が命中するが、一点防御でダメージを抑える。
しかし、ここはミウラの距離だ。何度も打撃を受け、ヴィヴィオの

ガードが外されていく。
「てええェッ!!」
「はああぁぁっ!!」
ミウラの蹴りに合わせて、カウンターの魔力弾を用意するヴィヴィオだったが、蹴りはミウラのブラフだった。
「はあッ!!」
「ッ!?」
手に保持していた魔力弾を跳ね返され、無防備になったところに、本命の蹴りがめり込んだ。
今までとは違う、重い音が響いた。
「〜〜〜ッ!!」
完全にタイミングをずらされたせいで、セイクリッド・ディフェンダーが不発してしまう。
一点防御にかけていたため、防御魔法が展開できていなかったヴィヴィオ。一撃でライフの３０％を削られる。
打撃の感触に今が好機と考えたミウラがさらに距離を詰めてくる。
「っちぃ!!」
今度はうまく作動した。
強襲を回避したヴィヴィオは距離を取り、魔力弾を放った。
「せいやっ!!」
初めは３つだったが、途中で分裂し、最終的には１５発、逃げ場を埋めるように降り注いだ。
沢山の弾丸に隠れて、ヴィヴィオの意志で操作されているものが２つだけあった。
前方にガードを固めていたミウラの後頭部に命中。
「ファントム・スマッシュ！」
掛け声とともにヴィヴィオが腕を振り上げると、低空を飛んでいた弾丸が急上昇。ミウラの顎をしっかりと撃ち抜いた。
脳震盪のクラッシュが入り、足から力が抜ける――――が、何とか踏みとどまった。
それでも、歯を食いしばって立っているのが精一杯だ。

「（し、視界が揺れる……！　ボクの足、ちゃんと地面についてる!?）」
　そんな有利な状況でも、ヴィヴィオは追撃できない。
「（呼吸が苦しい！　今すぐ座り込んで休んじゃいたい……！）」
　２人とも、確実もダメージが蓄積されてきたのだ。いくら負けん気があっても、いくら根性があっても、避けられないものだ。
「（だけど、それでもッ!!）」
　息を整えた２人は、それでも笑顔だ。
「まだ行けるッ!!」
《両選手、再び突撃――――!!》
　ダメージの分いくらか勢いが落ちたとはいえ、拳の鋭さは変わらない。
「（避けられたって良い。ガードが固くても関係ない！　この手足が届くなら――――どんな守りでも打ち砕いて見せるッ!!）」
「（見切るんだ。どんなに強い攻撃でもッ!!　私がちゃんと反応すれば、クリスが絶対防いでくれる!!　だから怖くない。前に！　前に出るんだ!!）」
　お互いの得意を生かした打撃の応酬は、１ラウンドを思い出させた。
　魔法戦も見ごたえがあったが、やはり、格闘戦技の方が盛り上がっていた。
　そしてお互いギリギリで削りきれず、
《ここで２ラウンドが終了！　このラウンドも壮絶な削り合いでした！》
　セコンドの元へ戻っていく。
　どちらも譲らない良い試合だが、ダメージの面ではヴィヴィオが不利だった。
　体力がなくなれば得意のフットワークは殺される。新技のセイクリッド・ディフェンダーは完璧ではない。思わぬところでダメージを貰うことがある。
「だから打ち合いを嫌って下がってくれれば、こっちの思うツボなんだけどな。そうすりゃ遠間から抜剣で攻められる」

ヴィータの言葉にミウラは首を横に振る。
「下がりませんよ、ヴィヴィオさんは。きっと前に出てきてくれます！」
その考えは的中していた。
ヴィヴィオサイドでは、次が最後のラウンドになると考えたクロが、一生懸命手のマッサージしていた。
「もちろん前に出るよ！　最後の必殺技も、まだお披露目してないし！」
「わかってるから。しゃべらないで回復に集中して！」
時間が来た。２人がリングに登る。
「このラウンドで倒せるぞ！　ガンガン攻めていけ！」
「はいっ！」
「焦らないで、しっかりとカウンターを重ねていきなさい！」
「うんっ！」
３ラウンドが開始された。
《う、打ち合い!!　ここに来て！　リング中央、激しい打撃戦です!!》
正面からの打ち合い。お互い、終わりが近いことを悟っているからこそ、少しでもこの瞬間を楽しもうとしている。
「（そう。結局はこれ！）」
「（ボク達は魔法戦競技選手ですが、それ以上に格闘戦技選手です!!）」
お互いのライフがある程度減れば、必殺技をぶつけ合うことになる。その時が来れば、この戦いは一気に終わりに傾いていくだろう。
しかしそれまでは、この『好敵手』とも言える相手との戦いを楽しんでいたい。
「「（ストライクアーツでのぶつかり合いが一番楽しくて――――一番お互いを高め合える!!）」」
試合が始まったときからずっと、２人の表情から笑顔は消えない。
どんなに苦しくなっても。どんなに痛い攻撃を受けても。笑顔だけは無くならなかった。
《双方譲らず！　互いを押し返す形になりましたっ!!》
ヴィヴィオのライフは残り１０％。ミウラは少し多く１５％。力

のこもった一撃なら、今の２人なら、十分に削りきれる範囲だ。
さらに、
「3ラウンド、残り時間は1分半――――」
時間も丁度いい。
その時が来た。
「ここで決めるよ、スターセイバーッ!!」
抜剣である。
足のプロテクターが展開し、内部が露出する、だけではなかった。
なんと両手のプロテクターも展開し、内部が露出する。
「『抜剣・四天星煌』――――!!」
ここが勝負の時だと悟ったミウラが切った切り札だ。
両手両足、どこからでも放てる全開の収束打撃。ヴィヴィオのセイクリッド・ディフェンダーごと蹴り砕くつもりだ。
「天破の型」
足元に魔法陣が生まれ、魔力収束が開始される。会場全体が揺れるほどの魔力だ。
《ミウラ選手、抜剣を発動!!　両手両足４つの剣が抜き放たれましたッ!!》
興奮する実況者とは違うアナウンスが入る。
《リング内、基準魔力値オーバー。リング外周保護フィールド、エマージェンシーレベルに強化します。セコンドおよびレフェリーは、衝撃余波に注意して下さい》
その警告ともとれるアナウンスに、会場の歓声はどよめきに変わる。
クロは声を張り上げた。
「ヴィヴィオッ!!」
「大丈夫!!」
ヴィヴィオはこの程度では動揺していなかった。まるで見たことがあるとでも言いたげに、自らの何倍もの魔力を練り上げるミウラを見据えている。
「セイクリッド・ディフェンダー・フルドライブッ!!」

ヴィヴィオには収束魔法の技術はない。残り少ない魔力を総動員して戦うだけだ。
「(どんな攻撃でも、反撃型の私に出来るのはただ1つ。『打たれずに打つ』。防いで、捌いて、潜り込んで――――)アクセルモード!!」
セイクリッド・ディフェンダーにすべての集中力を注ぐ。ここから先の攻撃は、すべて必殺だ。タイミングをずらされるわけにはいかない。
そうして耐え忍んだ先にある相手の隙に、
「――――意識を刈り取る一撃を打つ!!」
構えを取るのだった。

インターミドル　ヴィヴィオＶＳミウラ　後編

ミウラは踏み込むのではなく、その場で足を振りかぶった。
「抜剣、飛竜ッ!!」
それは足で放つ『飛ぶ斬撃』だ。衝撃波に収束魔力が乗せられている。
ヴィヴィオはしっかりと見切り、回転して避ける。
「ディバイン――――」
「ッ!!」
前に、前に出ていたミウラの回転蹴りが、チャージされていた魔力を発射前に霧散させた。
回転の勢いのままに繰り出すのは、収束拳打の拳である。クロスする腕に命中する。
しかし、
「(効いてない!?)」
ライフはあまり削れない。何度打ち込んでもガードを外せる気配がない。
これはヴィヴィオの技術だった。セイクリッド・ディフェンダーだけでなく、体を使ってうまく衝撃を逃がしている。
焦った攻撃を続けていれば、
「そこッ!!」
「ッ!?　う、ぐ……!」
ヴィヴィオのカウンターが飛んでくる。攻撃ばかりで防御がおろそかになっていた顔面への膝蹴りだ。ギリギリまで耐えた分、ダメージも大きい。
「(しまった……!　焦りすぎだ!　一度離れて――――)」
ヴィヴィオのカウンターに逃げ腰になったミウラだが、後ろに下がる速度が遅すぎる。前に出るのとは勝手が違うのだ。
「アクセルスマッシュ!!」
ヴィヴィオの拳が顔面を捉えた。
《直撃!　直撃です!!　ミウラ選手まともに喰らい――――ヴィヴィオ

選手の連撃が止まらない！　もはや立っているのがやっとなのか!!》
かろうじて防御はしているが、勢いがなくなってしまった。
「（開いた！　これで……！）」
ガードを外し、顎まで一直線の道が出来る。
自分が絶対の信頼を置くアッパーカット。必殺の意志を持って放つ。
それが――――――ミウラに受け止められていた。しっかりと掴まれ、逃げることが出来ない。
「欲しかったのは、この距離です……！」
目が合った瞬間、ヴィヴィオの背中に冷たい汗が噴き出す。
今度誘い込まれたのはヴィヴィオの方だった。
ミウラの蹴りが、左腕ごと胴体を切り裂く。
「……ッ!!!」
《こ、これは強烈!!　相手のお株を奪うような強烈なカウンターだ!!
ヴィヴィオ選手に深刻なクラッシュが発生しています!!》
左腕には亀裂骨折。肋骨は3本ほど折れてしまっている。
それに伴う痛みの再現も抜かりはない。シミュレートとはいえ、激痛が走っていた。
「（左手はほとんど動かない。泣きたいくらい痛いし、魔力も、もうほとんど空っぽ――――でも、最後の一撃分は残してある……ッ!!）」
感覚が鈍い左腕に魔力を通し、何とか動かす。唇を噛みしめて、構えを取る。続行の意思表示だ。
「行けるね、クリス。最後の必殺技！　右手に全部の魔力を集めて！」
その様子を見たミウラは、胸の高鳴りを抑えられなかった。
「（ヴィヴィオさんは本当にすごい。こんな強い人に勝てたら、僕はもっと……）」
「（ミウラさんの一撃にカウンターを――――『ブレイザー』を打ち込む！）」
これが本当に最後だ。
「（これで決めます！）」
「（撃ち抜いて見せる！）」

小細工はない。一直線に距離を詰める２人。
ぶつかり合い、そして――――ミウラの蹴りが外れた。身をかがめたヴィヴィオの頭すれすれを空振りする。
「避けた!?」
「決まる!!」
両セコンドは思わず声を漏らしていた。
ヴィヴィオの残り魔力全てを集めた拳が、光り輝く。
「一閃必中ッ!! アクセル――――っ、ぅ!!」
拳とは腕だけで放つものではない。体全体を使うものだ。それが決め技ともなればなおさら。
折れた肋骨のシミュレートで、一瞬だけ体の動きが鈍ってしまう。力がうまく乗り切らない。踏み込みも甘い。
命中はするが、意識も、ライフも、どちらも持って行くには足りない。しかしヴィヴィオの体は、これ以上動いてくれそうにない。
「一閃ッ!! 必堕ッ!!」
試合の流れは決まった。
「天衝星煌刃!!!」
星の蹴打を食らったヴィヴィオは意識を手放し、その体はリングの壁に叩きつけられた。
《決着！ ３ラウンド残り１０秒！ 格闘技対決はミウラ選手に軍配が上がりましたァ!!》
――――チャリン、チャリン
会場が大歓声に包まれる。その熱量は、もはやトップ選手と比べても遜色ないものになっていた。
いや、事実ミウラはすでにトップ選手に片足を突っ込んでいる。１回戦の時点で、トップ選手だったミカヤを下しているのだ。
そのミウラと良い勝負をしたヴィヴィオも、もはや無視できる選手では――――
《……と？ どうしたのでしょうか。セコンドとドクターが何か……》
試合内容の興奮のままにしゃべっていたセコンドは、リングの様子

を見て口調を変える。
リングでは、倒れたまま立ち上がらないヴィヴィオに、クロたちだけでなく控えていたドクターたちも集まっていた。
ドクターが何やら指示を飛ばすと、奥から担架が運ばれてくる。
倒された選手が起き上がらないことはあったが、ここまで言い争うということは無かった。
つまり、何かがあったということだ。
《ヴィヴィオ選手の安否が気遣われます――――！》
盛りあがっていた会場だったが、一気にその温度が下がるのだった。

「心拍、脳波レベル正常。リンカーコアにも影響なし」
シャマルは自分のデバイスを操作しつつ続ける。
「ただし体の残存魔力は無し。脳震盪と体力と魔力の限界消費による一時的な昏睡……つまり、全力を出して疲れちゃったのね。治癒の魔法はかけたからもう大丈夫よ」
その言葉を聞いて、なのは達は胸を撫で下ろした。
あの後、ヴィヴィオは医務室に運ばれた。
観客席にいたなのは達は、全員で医務室に向かった。あわや病院に搬送するとかいうところで、シャマルが管理局員の手帳を提示。治癒に長けた彼女が診察を行ったのである。
「ありがとうございます、シャマル先生」
「いえいえ」
なのはとフェイトが頭を下げると、シャマルはやんわりと手を振った。

「あれ？　それならどうして変身魔法は解除されないの？」
　ベッドで横になるヴィヴィオはいまだに大人モードのまま、ＢＪも解除していない。
「あ、それはね。クリスが非常防御モードのまま機能が停止しちゃってるの。ミウラちゃんの星煌刃を防ぐのに、機能維持のための予備魔力も使っちゃったんだと思う。そろそろ、復帰すると思うわよ」
　その言葉通り、すぐにヴィヴィオの胸のあたりが光った。次の瞬間には、ヴィヴィオのいたるところは元の大きさに縮み、融合していたクリスが平らな胸の上でお座りしていた。
　なのはがクリスをそっと抱きあげる。
「お疲れ様、クリス。ヴィヴィオを守ってくれてありがとうね」
　優しい言葉に、しかしうさ耳は垂れ下がっている。全力を尽くしても守り切れなかったことを悔いているのだ。
「そんなに落ち込まないで。ヴィヴィオはすぐに元気になるから」
　フェイトも頭を撫でた。
　その様子を見たクロはもう大丈夫だと判断した。
「……それじゃ、みんなに伝えてくるから。ヴィヴィオもクリスも無事だって」
「大人やなぁ、クロちゃんは。あ、私も行くよ」
「私は係の人に伝えてくるね」
　クロ、はやて、フェイトが部屋を出ていく。
「一応、近くの病院に精密検査の予約を入れてくるわね。なのはちゃんは、ついててあげてくれる？」
「はい、わかりました」
　そう言ってシャマルは部屋を出ていった。
　残ったのは、なのはだけだ。
　椅子に腰かけ、眠るヴィヴィオに優しく語りかける。
「心配したけど、無事でよかった。立派だったよ、ヴィヴィオ」
「……」
「そんなところにいないで、部屋に入ってきたらどう？」
　数秒ののち、控えめにドアがスライドした。

「応援に来てくれてたんだね、ヤミちゃん」
「……はい」
こっそりだが、ヤミはずっと応援に来ていた。ヴィヴィオの試合だけではなく、チームナカジマ全員の試合を、予選からずっと。
毎日練習に付き合っていれば、ヴィヴィオ以外の女の子も応援したいと思ってもおかしくない。
あのヤミがしっかりと応援に来ているのが何よりの証拠だ。
「ヴィヴィオ、頑張ったね」
「……そう、ですね」
練習を近くで見てきたヤミだったが、まだ戦闘を競技にするという感覚に慣れることが出来ないでいた。
そのせいであいまいな返しになる。
なのはもそれを理解しているのか、それ以上は何も言わない。
「ヴィヴィオ」
「っ！」
目を開けるヴィヴィオを、なのはは穏やかな声で迎える。ヤミは口から洩れかけた声を飲み込む。
「ママ……ヤミさんも……えへへ、負けちゃった……」
「うんうん。頑張ったね。立派だったよ」
「……はい。よく頑張りました」
ヴィヴィオは悔しいだろうに、それでもすべてを出し切った笑顔を浮かべている。
そこにもう1組、病室を訪ねてくる女の子達がいた。
「あ、あの……！」
「よう……」
俯き、目尻に涙を溜めたミウラと、その後ろで済まなそうな顔をしているヴィータだ。
「あっ！　ミウラさん！」
その姿を見つけると、ヴィヴィオはベッドから飛び上がった。ミウラの手をみぎり、手をぶんぶんと振る。
「ありがとうございました！　いい試合でしたね！」

「あ、え？」
　思った以上に元気だったヴィヴィオに、目を白黒させるミウラ。
「色々気にしてたんだが、大丈夫そうだな」
「だね」
　ヴィータとなのはは頷き合う。
「ヤミさん！　行きましょう！　みんなの試合が残ってます！」
「え、わ、私も一緒に行くんですか？」
「もちろん！　ヤミさんも、ミウラさんも一緒ですよ！　みんなで応援に行きましょう！」
　元気を取り戻したヴィヴィオに引っ張られ、全員そろって試合会場に向かうのだった。

《次の試合に参りましょう。独特の魔法技術と格闘戦技『春光拳』の使い手。規格外のルーキーの揃うチームナカジマのメンバー、リオ・ウェズリー選手!!》
　一方こちらは会場、リング。ヴィヴィオが担架で運ばれるという非常事態はあったが、それはそれ。その程度で大会の進行を止める訳にはいかない。
　セコンドのディードと共に入場するリオだったが、その顔は暗い。
《迎え撃つは押しも押されぬトップファイター、砲撃番長（バスターヘッド）、ハリー・トライベッカ選手ッ!!》
　片手をあげて歓声にこたえるハリー。その顔は引き締まっているが、内心ではリオに対して複雑な感情を持っていた。
「仲間が意識不明……アイツ、気が気じゃねーだろうな……」
「誰にでも優しいのはリーダーの素敵なとこッスけど……」

「ダメですよ！　試合に集中しないと！」
　いつもハリーを取り巻き、大会ではセコンドも務めている一昔前の暴走族風の少女に、気のゆるみを注意される。
「本戦では雷帝のお嬢様やジークさんが待ってるんですから！」
「分かってるよ!!　心配すんな！　手ェ抜いたりはしねぇからよ！」
　２人はリングに登り、試合が始まる――その直前、アナウンスが入る。
《試合開始前ですが、ここで皆様に朗報があります！　先ほどの試合で意識不明になってしまったヴィヴィオ選手ですが、健康上の問題は全くないとの事、間もなく目を覚ますそうです！》
　その報告に、リオの表情が一気に明るくなる。
　それを見て、ハリーもにやりと笑った。
　試合の流れを止めるアナウンスは、ともすれば選手の集中を邪魔するものだ。だがこの２人にとっては、パフォーマンスを上げる大切なものだったようだ。
「ったくよ、一気に元気になりやがって」
　ハリーは気合のハチマキを巻く。
「オレ様の砲撃ですぐに泣きっ面に変えてやるけどな！　覚悟しろよ、ちびっ子ォ!!」
「残念ながら泣きません！　ヴィヴィオのためにも、チームのためにも！　アタシ勝っちゃいますから！」
　試合が始まった。

「うおおおぉぉぉっ!!　燃えとけえぇぇっ!!」
「はぁぁッ!!」

ハリーの炎熱砲撃『ガン・フレイム』と、リオの炎熱砲撃『紅蓮拳』がフィールドの中央でぶつかり合う。
強烈な熱波が風になってリング全体に吹きわたるが、防護フィールドに阻まれてそれより外には出ない。
《強力な砲撃のぶつかり合い！　しかし威力は全くの互角です！　両者の砲撃は完全相殺!!》
1ラウンドが始まってから3分が経過していた。
ハリーは得意の射砲撃で攻め、リオはそれに付き合うように闘っている。
何発もの砲弾が飛び交っているにもかかわらず、2人はいまだにノーダメージだった。魔力消費も熱気も凄まじいはずだが、涼しい顔をしていた。
「ちぃ、やるじゃねぇかよ、ちびっ子ッ!!」
「はい！　頑張ってます！」
あの砲撃番長（バスターヘッド）相手に撃ち合っていまだにノーダメージ。ストライクアーツ選手とは思えない戦いだ。
それもそのはず、リオはストライクアーツ選手だが、春光拳の使い手でもある。
春光拳は射砲撃も武器戦闘もある『魔導武術』だ。
「雷光縄ッ!!」
「いいっ!?」
リオが右足をリングに叩きつけると、地面から無数のバインド縄がハリーの体に巻き、体を地面に縫い止める。
リオが仕掛けておいた電撃でできたバインドだ。拘束した相手を痺れさせる効果がある。
「あーもう!!　ウチのリーダー、バインドかかり過ぎぃ!!」
「ううぅっ!!　素直すぎる性格が仇に……!!」
セコンドが騒いでいる。そんな取り巻き達に、ハリーが声を張り上げた。
「騒ぐな、おめーら!!　この程度のバインド、なんてこたぁ……あ？」
強力なバインドは、第1試合でハリーが戦ったエルス・タスミンの

方が怖かった。この程度なら数秒もあれば解除出来る。
だがそれよりも、重大なことが起きた。
リング全体が揺れた。
その原因は。
リオが拳をリングにめり込ませたからだ。
「よっ……こい……」
「おいおい、お前、それは……！」
あまりの光景に、ハリーはバインドから抜け出すことを忘れてしまう。
凄まじい握力によって指がリングへとめり込み、
「しょおーーー!!」
一気に持ち上げた。
負荷に耐えられなかったリングに亀裂が入り、リオの手には、手ごろなサイズと言うには大きすぎる岩塊が出来上がる。
「チームのみんなで約束したんです！　負けちゃったチームメイトの夢は、残った人が叶えるんだって！　だから番長にだって負けません!!」
「っ!!」
ハリーは息を飲んだ。次にされることが容易に想像出来たからだ。
「行きますっ!!」
リオの気合と共に岩塊がハリーを襲った。

インターミドル　リオＶＳハリー

《り、リオ選手、リングを破壊し巨大な岩塊に！　しかもハリー選手はバインド状態！　これは絶体絶命か――――!?》
「行きます！　龍王破山墜ッ!!」
「うおおおおおっ!!」
　ハリーが雄叫びと共に全身に力を入れる。あれを喰らってしまえばひとたまりもない。全身に巻き付いた雷縄がブチブチと千切れ始めるが、
「どおおおっりゃああぁぁぁっ!!」
　それよりもリオの投擲の方が速い。
　迫りくる巨大な岩塊に向かって、
「パイルバンカーッ!!」
　唯一脱出させた右腕を繰り出した。
　只の拳ではありえない、硬い者同士がぶつかり合ったような音が響く。
「ブチ抜けぇぇッ！」
《砕いた！　単車砲撃で、巨大岩塊を粉砕!!》
　一カ所が千切れてしまえば、縄を解くのはたやすい。まとわりついた縄を振り払うが、リオはすでに動いている。
「ちぃっ……！」
　とっさにハリーが右手に用意した弾丸。それは踏み込んだリオによって腕ごと逸らされ、明後日の方向に飛んでいく。
「虎心掌ッ!!」
　リオの掌底がハリーに炸裂する。サラシの中心を打ち据える一撃だが、ハリーは一歩も下がらず、リオの袖をつかむ。
「こ、の……！」
　しかしここは反撃ではなく、一度後ろに下がるべきだった。
　掌底だったリオの掌は、いつの間にか完全に開かれている。
「絶招――――」
　その掌に魔力が集中し、

「紅蓮吼牙！」
発射された。
弾丸を撃ち込むつもりが逆に撃ち込まれていたハリーは、大きく吹き飛ばされる。だが、攻撃はそこで終わらない。
「砕ッ!!」
「ぐあああ!!」
リオが印を結ぶと、その魔力弾が炸裂した。
《ほ……砲撃!! 岩塊攻撃から格闘戦、そして近接砲！ 変幻自在につながる技とあふれるパワー！ これが春光拳の戦い方なのでしょうか!!》
リオの予想以上の健闘に、会場全体が盛り上がる。
《ハリー選手はダメージ甚大！ 右腕にクラッシュも発生してます！》
今の攻防について、観客席にいるコロナはミカヤと話していた。
「ハリー選手って、上位選手の中では比較的、被弾やクラッシュが多いですよね」
「魔力を防御に回すくらいなら、それを弾丸に回しちゃうような娘だからね。それでも不思議とKOされないし、ライフも無くならない。不思議なタフネスの持ち主なんだよね」
つまりは桁外れに我慢強いタイプだということだ。
タイプでいえばミウラに近いものがある。
クラッシュしていた右肩をかばっていたハリーだったが、すぐに軽く回し、調子を確かめている。
実際にケガをしているわけではなく、あくまで痛みのシュミレートだ。可動自体には問題ないが、気にせず戦える人はなかなかいない。
「侮ってるつもりはなかったんだがな。心のどっかでルーキーだって、ちびっ子相手だって油断があったのかもしれねぇな」
ハリーは左腕に巻いていたチェーンを解く。
「悪かった。ここからは出し惜しみも様子見も無しだ」
チェーン全体に魔力が通され、熱によって赤く染まる。
「全力でぶっ潰すぜ!!」

「（赤熱鎖（ヒートチェーン）!!　しかもこの距離でも伝わるほどの超高熱!!）」
《リオ選手も剣を装備！　ここから武器戦か――――!!》
　意志を持っているかのように、鎖はハリーの手から伸びた。
「レッドホークッ!!」
　リーチでは完全に負けているリオが迎え撃つ形だ。
「はあああぁぁぁっ!!」
　刀身と鎖の先端の重りがぶつかり合い、甲高い金属音が響いた。拮抗することなく、鎖は逸れていくが、
「っ!?」
　速度を落とさずに急旋回。もう一度襲い掛かってきた。
《高速で伸びるハリー選手のレッドホーク!!　赤熱の鎖が変幻自在の軌道を描き、リオ選手に襲い掛かります!!》
　剣で弾いても、リングに激突しても、魔力弾を当てても、速度は落ちることなくリオに襲い掛かってくる。
　しなる鎖はそのまま鞭に、先端の重しは打撃に。鎖全体が高熱を纏っているため、どの部位に触れても大ダメージだ。
　いつの間にか鎖に囲まれ始めている。取り囲んだ鎖はそのままリオを閉じ込める檻になる。
「（鎖の攻撃も厳しいけど、それ以上に――――）」
　リオはちらりと、鎖の大元であるハリーを見る。
　攻撃を始めてから動くことなく、そこに立っているハリー。左手は鎖のコントロールに割かれているが、右手は完全にフリーだ。
「（こっちの動きが止まるのを狙ってる……！）」
　足を止めれば、フルチャージされている右手の砲弾が飛んでくることになる。
　しかし、いずれは鎖に取り囲まれ、逃げ場が無くなる。
「（なら、追いつめられる前に、まだハリー選手には見せてない雷攻撃でスタンさせる!!）」
《リオ選手突撃！　ハリー選手、防御は……》
　武器をしまい、電撃が付与された拳をスタンバイさせるリオ。
「へぇ――――」

静電気の様にバチバチと見える電撃に、ハリーは目を細め、頭を振りかぶる。
「雷光拳!!」
「ふんッ!!」
《頭突きだぁっ!!》
鈍い音が、リオの拳の方から聞こえた。
「う、ああ……!」
衝撃を無理やり返されたような感触に、拳を抑えて後退する。
《リオ選手、拳にダメージ！　ハリー選手は軽微だ!!》
「炎と雷のダブル変換資質。うらやましいぜ。スゲェ才能だ。だが悪いな。今年の俺は電撃じゃ倒れねぇよ!!」
構えるリオだったが、
「遅えッ!!」
生半可な防御では、フルチャージの砲撃を防ぐことは出来ない。
右手に溜められていた魔力が解放され、極大の『ガン・ブレイズ』が放たれる。
「ぐっ……!」
それでも何とか直撃を避けることが出来たリオだったが、無意味に飛び上がってしまったせいで、レッドホークに狙い撃ちにされる。
「うあああっ!!」
みるみるうちにＢＪがボロボロになっていく。
攻撃だけでは終わらない。
リオの体中に鎖が巻き付き、体の自由を奪われる。そのまま遠心力を使って振り回され、リングに叩きつけられてしまった。
《ハリー選手の連続攻撃！　これは強烈だ!!　リオ選手はダウン、１ラッシュでライフは危険域！》
息を切らし、女の子座りになっているリオ。その体にはいまだ鎖が巻き付いている。
《しかも判定はバインディングダウン！　このまま立てなければ試合終了。立ったとしてもバインド状態からの再開になります!!》
リオが優勢だった時も盛り上がっていたが、やはりトップ選手であ

るハリーが活躍するとまた別の盛り上がりになる。
　その観客席の一角、
「ハリー選手、あんな技も……」
「あの子は自分の経験を力に変えるのがうまいんだ」
　コロナのつぶやきにミカヤが応える。
「何度も戦っているエルス（エルス・タスミン）ちゃんの操鎖術、去年苦汁を舐めさせられたヴィクター（ヴィクトーリア・ダールグリュン）の電撃への対策」
　いずれも苦汁を舐めさせられた相手の得意技、代名詞ともいえる特性だ。
「自分の受けた技を1年かけて分析して、組み立てて、自分のものにしていく。ああ見えてまじめな努力型なんだよ」
　話していると、
《立ちました！　リオ選手、カウント8で立ちました！》
「ち、そのまま座ってりゃいいものを」
「ありがとうございます。それ、『立ってほしくなかった』って意味に受け取ります」
　リオの足元に魔法陣が浮かび上がる。自らを拘束している鎖をどうにかしようという訳ではないらしい。
「……因果なもんだよな。俺達はよ。ボロボロになっても、痛くても、動けんなら勝ちにいく。相手が誰でも、負けたくないってな」
　ハリーの足元にも魔法陣が浮かんだ。
「オレも同じさ。負けて泣きたくねぇから必死だぜ」
　右手に小型の太陽のような密度の魔力、砲撃魔力が顕現する。
「勝ちたいからずっと一生懸命です！　今だって、まだ勝てるって信じてます！」
　リオの後ろには炎と雷の魔力、それが龍を模してハリーを威嚇していた。
　お互いに最大魔力。リオはバインド状態のため、その場を満足に動けない。正面からの撃ち合いだ。
「ガンブレイズ・フルバーストッ!!」

「双破龍神翔ッ!!」
フィールドの中央で2人の砲撃がぶつかり合った。ミウラの『抜剣』とはまた違った魔力の波動が、リングに吹きわたる。
「ぐ……、うぎぎ……っ!!」
思った以上の威力に、ハリーが押し切れないでいる。
観客やセコンドは、砲撃番長(バスターヘッド)相手に砲撃の威力では勝ち目が無いと考えている。
それは正しく、リオ自身もそう考えていた。その上で、砲撃番長(バスターヘッド)に勝つために、正面からの撃ち合いという選択をしたのだ。
「行きますッ!」
リオは鎖をしっかりと握りしめ、そう宣言した。
「せえーのぉっ!!」
「っ!?」
左手に持ったレッドホークに強烈な力が加わったことに、ハリーはギョッとする。
「よいしょおーーー!!
「おおお!?」
何とリオは、自らを拘束している鎖を引っ張り、ハリーを引き寄せようというのだ。
リングを持ち上げるほどの怪力だ。少しでも気を抜けば、ハリーの体は持っていかれてしまうだろう。
さらに言えば、リオの双龍破は出してしまえば自動発射。龍の形になっているのは伊達ではなく、砲撃自ら相手に食らいつこうと動くのだ。
対するハリーの砲撃は、オーソドックスなモノだ。右手を砲身として維持し続けなければならない。
リオは両手で、ハリーは片手。砲撃と腕力の力比べだ。
「リオお嬢様！　引っこ抜いちゃってください!!」
「リーダー!!　ド根性ーーっ!!」
セコンドからも激が飛ぶ。
「んんん〜〜〜〜ッ!!」

「でええええええっ!!」
２人の踏ん張りで、足元にヒビが入る。
両者一歩も譲らない力比べは、金属が砕ける音によって終わりを迎える。鎖が真ん中から千切れたのである。
「この野郎……っ！」
砲撃が避けられる。
鎖が千切れたということは、リオの拘束も無くなったということだ。砲撃を維持する必要がないリオは、その場を素早く動く。
爆炎を切り裂き、ハリーの目の前へ。
「これでフィニッシュですっ!!」
その両手には炎の魔力が集中している。
「絶招ッ!!　織炎虎砲(しえんこほう)ッ!!」
「う、お……っ!!」
ハリーは右手で庇うが、重度の熱傷のクラッシュが発生している。ライフも残り５％だ。
「(いけるっ！　もう１発入れば――――!!)」
「どォらァッ!!!!」
もう１発入る前に、右手の炎弾で足止めされる。しかしそれは、ほんのささやかな威力だった。今の攻撃で、もう右手は使い物にならないことを表していた。
ハリーはリオの襟をつかんで引き寄せる。
だが襟をつかんでいるのは右手だ。少し力を加えれば放してしまいそうなほど、弱い力しかない。
両手でつかみ、思いっきり力を込める。
だが、
「(外れない!?)」
「右手はいらねぇよ。その代わり――――」
鎖が巻き付いた左手を振りかぶり、
「――――こいつを喰らっとけッ!!!!」
《ハリー選手、左ストレートォ!!　さらに追撃だァ!!》
レッドホークは中距離用の武器だが、拳を守る防具にも打撃武器に

もなる。
砲撃番長（バスターヘッド）の異名を持つハリー。当然、砲撃能力が警戒される。試合では距離を詰めようとする選手が多い。
接近戦まで詰められたハリーの反撃技が、左手の――――利き手の拳打である。
今の連撃で、リオのライフも１０％を切るが、
「（そんなの分かってる！　試合のビデオは何回も見たんだから!!）」
それを分かって、リオは前に出る。
「（だからって負けられない！　ストライクアーツと春光拳の本領は打撃戦なんだ!!）」
お互い、ライフは残り少ない。近接戦ならこちらに分があると、果敢に前に出るリオ。
しかし、
「油断も加減もしねぇって言ったぜ!!　テメェのスタイルにゃ付き合わねぇ!!」
ハリーは後ろに後退する。
左の拳打はあくまでも近寄られたときの反撃用。砲撃番長（バスターヘッド）のレンジはあくまで中、遠距離なのだ。
千切れた筈のレッドホークをリングの地面に突き刺す。
「ッ!?」
それは地面を突き進み、リオの真下から顔を出した。
「真ん中からブチ切れた程度じゃ、オレのレッドホークは死なねぇんだよ！　俺と同じでしぶとくってなぁ!!」
それはリオの雷光縄の使い方によく似ていた。体に巻き付き、動きを止める。
「（動けない!?）うあああああぁぁぁぁッ!!!」
この土壇場での拘束。渾身の力を込め、何とか脱出しようともがく。鎖が悲鳴を上げ、１つ、また１つと音を立てて壊れてく。
「こいつで終わりだ!!」
ハリーの足元に、これまでで一番大きな魔法陣が描かれる。
「爆烈ッ!!」

拳を地面に叩きつける。
「ヴォルガニック・ブレイズッ!!」
「ッ!?」
リオの足元、直下から、とんでもない熱量が吹き上げ――
《試合終了!!　1ラウンド残り2秒!!　文字通り、熱戦を制したのはハリー選手です!!》
会場から大歓声が巻き起こった。
正面からではなく、遠隔で砲撃を発射するハリーの新技だ。ジークリンデ・エミリアや、ヴィクトーリア・ダールグリュンと戦うための技だったが、本戦前でお披露目することになった。
試合は終わり、選手は退場するのだが、
《おっと、ハリー選手がリオ選手の所へ……?》
ディードに抱きかかえられるリオの近くで腰を落とす。
「よう、このチビ助め。オメーのせいで出し惜しみしとくはずの隠し玉を2つも使っちまったぜ。まったく、とんでもねぇチビだ」
「……っ」
試合が終わり、負けたという事実を認識したリオ。目頭が熱くなり、唇は嗚咽を漏らすまいと震える。
「な、なんだよ。そんな顔すんな！　泣かねぇんだろ?」
「うぅ……っ」
ぐしゃぐしゃと、乱暴に頭を撫でたハリーは立ち上がった。
「強かったよ、オメーは。また近いうちに、今日みたいなケンカをしようぜ」
背を向けて歩き出す。
「試合でも、どこでも、オレぁいつでも待ってるからよ」
振り返って、ニヤリと笑った。
「またな、リオ」
「はいっ！　ありがとうございましたっ!!」
そんな2人の姿に、会場から惜しみない拍手が送られるのだった。
――――チャリン、チャリン

インターミドル　綺凛ＶＳユウキ

《さあ、次の試合に参りましょう！　ご紹介するのは、今大会、すっかり台風の目になってしまった２つのチームの選手です！》

すでに残っているのは実力のある選手のみ。事前に残ると思われていた選手を下し、そうでなくてもその地位を脅かす選手が何人もいた。

《まず入場してくるのは刀藤　綺凛選手ッ！　本日は素晴らしい試合を見せてくれているチームナカジマ、最後の１人です!!》

綺凛が手に持つのは、愛刀の『千羽切』一振りだけ。その後ろにはクロとノーヴェがいた。

《刀藤流の名前を、剣術家で知らない人はいないでしょう！　綺凛選手は弱冠１３歳でありながら、その奥義である『連鶴』を使いこなす達人です！》

「綺凛、あんまり司会者の煽りを聞くんじゃねーぞ」

「大丈夫ですよ。集中してますから」

「イメージ違うわねー。アインハルトと真逆になると思ってたんだけど」

ノーヴェとクロの言葉に、落ち着いて返す綺凛。

周りの声よりも、目の前の強敵に意識が向ているのだ。

《反対からは八神道場の紺野　ユウキ選手ッ!!　超人的な反射神経と相手に吸い込まれるような剣技の持ち主です！　試合後のインタビューでセコンドにお聞きしたところ、あの剣技のほとんどはユウキ選手の独学らしいです！》

「いやー、八神道場も有名になっちゃったねぇ？」

「お前とミウラのおかげだ。他のメンバーと実力差がありすぎるがな」

セコンドのシグナムは、応援に来ている八神道場のちびっ子のことを考える。ミウラとユウキは突出しているだけだ。

「というか、いつの間にインタビューなんて受けてたの？」

「……それについては聞くな」

シグナムにとっては辛い時間だった。
自然体の２人が、リングの上で向かい合う。
《それぞれのチームメイトであるヴィヴィオ選手とミウラ選手は、素晴らしい格闘戦を見せてくれました！　そしてこの２人も！　奇しくも獲物は刀と剣！　歴史ある剣術と独学の天才！》
間にはレフリーが立ち。試合開始前の最後の確認がされる。
《本日２回目となるチームナカジマと八神道場の直接対決！　果たしてどちらが勝つのでしょうか！》
「頑張ってください、ユウキさん……！」
「綺凛さん、ファイトですー!!」
応援席のヴィヴィオとミウラも声を張り上げて応援している。
「いやー、ずっと見たかったんだよね。この試合」
「そうですね、どうなるんでしょうか……」
ミカヤとアインハルトも、この試合の行方を見守っていた。
２人共魔力を持っているが、それを射砲撃に使うことは無い。ユウキはかろうじてＢＪを纏っているが、綺凛は服装を変化させず、防御膜だけを展開しているスタイルだ。
お互いに、使う獲物は手に持った実剣のみ。
綺凛は大技物の日本刀。ユウキは黒い刀身を持つ細い片手剣だ。
「純粋に剣だけで戦っている選手はそういない。中でもこの２人は別格だったからね。綺凛ちゃんとは一度手合わせしているから知ってるけど、あのユウキって娘も相当だよ。どっちが勝つのか全然予想できないね」
「ユウキさんも、今までの試合では一度の被弾も無し。全て１ラウンドで勝利していますからね……」
被弾なし、１ラウンドで勝利しているのは綺凛も同じだ。そんな２人の戦いなのだ。
２人が刀を抜いた。
《それでは、試合開始ですッ!!》
開始と同時に激突とはならず、２人はお互いに間合いを測っていた。

綺凛は刀を正面に構え、ユウキも剣を構えたまま動こうとしない。
「どうしたの、綺凛さん。ずいぶんと慎重だね？」
「あなた相手に油断できるほど、私は強くありませんから」
いつもよりも鋭い口調の綺凛と、いつもと変わらない様子のユウキ。
相手の間合いと自分の間合いはほとんど同じ。有効打を与えようとすれば、相手の反撃も覚悟しなければならない。
だが、
「そっちから来ないなら、こっちから行くよっ!!」
《ユウキ選手踏み込んだッ!!》
「っ!!」
お互いの刀が火花を散らした。
綺凛の刀身が滑り、少しの間も無く、次の斬撃を繰り出していた。
と思えば次。さらに次。
「やはりすごいな、連鶴は……」
「はい、攻撃の切れ目がありません……」
ミカヤとアインハルトはその技術に驚嘆していた。
綺凛はミカヤのように重い一撃で相手を切り伏せるタイプではない。斬撃と斬撃を繋げる連鶴を駆使して細かくダメージを重ねていくタイプだ。
そしてそれは、ユウキも同じだ。
綺凛が折り鶴を折るような正確な斬撃なのに対して、ユウキは自らの反射神経と反応速度を生かした、ギリギリを責めた戦いだ。
自分の体に吸い込まれそうになる斬撃を、すんでのところで剣で払う。いかに完全な連続攻撃が出来る連鶴と言っても、一度振り切った刀から派生できる技には上限がある。
そこが、普段では弱点にすらならないものが、ユウキの勝機になる。
体を捻り、鼻先ギリギリで次の斬撃を避ける。
「そこッ!!」
「っ!?」
綺凛の刀と交差するように、ユウキの剣が綺凛の胸元を掠めた。

綺凛は慌てて距離を取る。ユウキも追撃することなく力を抜いていた。
「ひゃー、ギリギリだったね、お互いに」
「そうみたいですね……」
綺凛は自分の体を見下ろす。
服を内側から押し上げている大きな2つの膨らみ、その一番上のブレザーが横一文字に斬られていた。
体に直接当たっていないため、ライフは削れていないが、この試合で始めて出た攻撃の『ヒット』だ。
当然会場の盛り上がりも当然凄まじいことになっている。
「そんなにおっきなおっぱいじゃなかったら、掠りもしなかったかも」
「私も、連鶴の間に攻撃を挟まれるなんて思っていませんでした」
《す、素晴らしい攻防です！　綺凛選手の連鶴が破られてしまったのか！　それともユウキ選手のイチかバチかの攻撃が成功したのでしょうか！》
魔法が飛び交う派手な戦いではないとはいえ、あまりもレベルの高い試合に会場は熱狂している。
「何なのあの娘……！」
「マジで半端ないな。聞いちゃいたがここまでとは……！」
それはクロとノーヴェも同じだった。
「だが、あの綺凛という娘も相当だ。あれだけ撃ち合って、ユウキに1度しか反撃を許さないとは」
会場全体では、先に攻撃を当てたユウキに歓声が傾いている。だが、シグナムにとっては違った。
並の相手なら、あれだけ密着して斬り合っていれば、１０回は反撃の餌食になっているだろう。
「いや、そもそも攻勢に出ることが出来る者が何人いるか」
シグナムは試合の勝敗よりも、ユウキの同年代でこれだけ競い合える相手が現れてくれたことを喜んでいた。
「はやてちゃん、ユウキちゃんの防御力はどのくらいなの？」
「んー、そこまで高くはないよ？　防御するっていうよりは、全部避け

るって感じかな？」
　なのはの質問に、はやては顎に指をあてて数瞬考えて答える。
「私みたいな感じ？」
「そーそー、フェイトちゃんみたいな感じ。魔力もそこまで多い訳じゃあらへんから。シールドも最低限しか使わへんよ」
「じゃあ、先に入れたほうが勝つね」
　なのははそう断言する。
　あの鋭い剣戟。ヤワなシールドなんて役には立たないだろう。防御ごと切断され、大量出血のクラッシュまで入るかもしれない。
「せやなぁ。１回でもまともに入れば、クラッシュで動きが相当鈍くなる」
「今の２人の戦いぶりを見ると、確かにちょっとの差でも決まっちゃいそうだよね」
　はやてとフェイトもその判断に頷いていた。
　そしてそれは、今戦っている２人が一番よく理解していた。
　だからこそ慎重になる。どちらも紙一重だったのだ。ユウキの勝機は、さっきも言ったように連鶴の間にあるわずかな隙だけだ。しかしそれは綺凛も理解している。今の斬り合いで、理解させられた。
　だとすれば、あとはどちらの集中力が先に切れるのかだ。
　先に剣先が鈍ったほうが負ける。
「でもさ」
「はい？」
「全力を出さないで負けるっているのは、どうかと思うんだよね」
「ユウキさんは全力ではないという事ですか？」
「まさか！　そうじゃなくてね？」
　ユウキは軽い調子で核心をついた。
「綺凛さん、何か隠してるんじゃない？　切り札的な何かを」
「っ、それは……」
　確かにあった。アインハルトにあったのだ。綺凛にだって、新しい切り札が出来ていた。
　でも目の前の相手とは――ここまでの剣の達人とは、純粋に剣の

力だけで競いたいという気持ちもある。それは事実だった。
命のかかった『死合』ではないのだ。せっかくの『試合』、自分の実力だけで戦いたい。
《紙一重の攻防を経たことで両選手さらに慎重になっています！　攻めたほうが勝つのか、迎え撃つ方が勝つのか！》
リング上の音声までは拾っていない司会者が煽る間も、２人の会話は続く。
「むしろ、このままボクが勝ったら、負けた理由になっちゃいそうで嫌だから。あっ、もちろん綺凛さんがそんなことするなんて思ってないけどね！」
あくまで自分の気持ちのために、全力を、持てる全てを出してほしいとユウキは言う。
「……わかりました、そこまで言うなら――――!!」
《おおっと!!　これは――――!!》
司会者は見覚えのある光景に興奮した声を出す。
「来てください、レッドフレーム!!」

ガンダムアストレイ・レッドフレーム
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＡＳＴＲＡＹに登場する兵器。
ビームライフルやビームサーベルなどのガンダムにとって基本的な武装はもちろん装備されているが、一番特徴的なのは『ガーベラストレート』という銘の日本刀。ビームを切り裂き、ＭＳを一刀両断するこの武装を使いこなすことが、このＭＳを使いこなすという事である。
日本刀を最大限に使うことが前提になっているため、翔から綺凛に譲渡された。
また、原作パイロットがジャンク屋ということもあり、オプションパーツが充実している（別アイテム）。

「わぁ、派手派手だね！　でも、刀藤さんにはあんまり似合ってないかな？」
「それはちょっと思ってます……」
レッドフレームの名前の通り、フレームの骨格が赤くなっている。制服の上から身に着けた形になっているのが非常にアンバランスだ。
そしてその腰には新たな刀――『ガーベラ・ストレート』の姿があった。
「（２刀目……）どこかアインハルトさんが使ってるヤツとも似てる気がするけど……もしかして同じスポンサーなのかな？」
刀が２本あるということは、否応にも二刀流を意識させられる。事前にシグナムと研究した限りでは、刀藤流に刀を２本使った技は無かった。
「（とすれば、綺凛さんのオリジナルってこと？　二刀流の連鶴ってことかな？）」
「えっ!?　いえ、それは……」
「うん？」
分析のための時間稼ぎのつもりで振った話題に、綺凛は大きく反応していた。
確かに同じ相手から貰ったものだ。自分の憧れの人から、予選突破のご褒美として。
始めはそんな高価なものは貰えないとアインハルトと２人で拒否していたのだが、そこで翔は自分の能力の秘密を打ち明けた。
翔もそのことは言っておかないとフェアではないと思ったのだ。
「（あの時は驚きましたけど、別に先輩がそういうことが目的じゃないのは分かりますし……）」
だが１つ気になったのは、
「（先輩が知らない能力とか道具を持っていたら、それってつまり、誰かと、え、え、えっちなことしたってことなんだよね……はぅぅぅ……!!）」

翔の能力の秘密がわかると、周りにいる女の子達が翔とどういう関係なのかも分かってしまう。
それを承知で翔に告白したとはいえ、悶々とした気持ちになってしまう。
「――さん？　綺凛さん？」
「は、はいっ！」
「大丈夫？　もう始めてもいい？」
「（わ、私は、試合中になんてことを考えて……！）ごめんなさい！気を使わせてしまって！」
「別にいいけど……」
気持ちを切り替える綺凛。試合再開だ。第1ラウンドは残り1分。だが、次に切り合った時が決着になることを2人は直感していた。
レッドフレームには他のＭＳにはない特徴的な武装がある。腰に装備された日本刀である『ガーベラストレート』だ。
だが、その刀を抜くことは無い。その手に持っているのは相変わらず千羽切だけだ。
「はぁっ!!」
「（これ、連鶴だけど……！）」
剣筋は変わっていないのに、先ほどとはスピードが違う。
レッドフレームのアシストによって身体能力を向上させ、さらに防御を補うＭＳの装甲。単純に自らのパラメータを増幅させたのだ。
ユウキにとって救いなのはＳＥＥＤのガンダムの多くに搭載されているフェイズシフト装甲が、アストレイには採用されていないことだ。
フェイズシフト装甲は実剣や実体弾の衝撃をほぼ無効化するトンデモ装甲だ。これがあった場合、実剣がメインのユウキはかなり厳しい戦いを強いられることになっていた。
それでもユウキにとって厳しいことにかわりない。
「（装甲がある。１回じゃ斬れないかもしれない。もし弾かれてそれが隙になったら、その隙は絶対に見逃してもらえないよねっ!!）」
ユウキの望みは連鶴に対するカウンター。それも、装甲相手に有効

な、装甲の継ぎ目の関節を狙うという高等テクニックを要求されている。
「(当たらない……私のパワーも上がってるはずなのに……!!)」
だが綺凛も、レッドフレームを使いこなしているとは言い難かった。
アインハルトの様に覇王流の中に次元覇王流の技の一部を取り入れるならまだしも、二刀流の練習をするには流石に時間が足りなかった。
しかしそれは、技の1つや2つなら実戦でも使えるようになるということだ。
「多少無理にでもッ!!」
「それは迂闊だよッ!!」
装甲が削られることもいとわず、綺凛は前に出る。
その隙を突いて刀を弾き飛ばす。それでも、もう1本の刀が腰にあるが、
「(大丈夫、2本目を抜くには時間がかかる!　私の方が早い!)」
狙いは右肩。綺凛の利き手を潰してしまおうというのだ。
次の刀を抜きに動くと思われた右手は、ユウキの予想外の動きを見せる。
掌はガーベラストレートの柄を握るのではなく開き、ユウキに押し付けるように迫る。その手が光り輝く。
それは掌から放出されたビームサーベル用の荷電粒子を球状に固定、相手に叩き付ける技。
その名も。
「雷光球ッ!!」
「ッ!?」
光り輝く光球がユウキに叩きつけられる。
光が弾け、その衝撃でユウキの体ごと残っていたライフがすべて消し飛んだ。
《決まりましたッ!!　勝者はッ!　ここにきて隠し玉を見せてくれた刀藤　綺凛選手ですッ!!》

「いやー、負けちゃったねー」
プレートアーマーが吹き飛び、その奥にあったＢＪも大きく破れている。ともすれば危険な捲れ方をしてしまいそうなそれを、手で押さえている。
ふらつきながらもユウキは自らの足で立ち、綺凛の近くに歩いてくる。
「ごめんなさい。こんな裏技で勝っちゃって」
「そんなことないよ。ボクの方から使ってって言ったんだもん」
「それは、そうですけど……」
でもそれでも、やっぱり剣だけで勝負するべきだったのかもしれない。そんな気持ちが、試合が終わってから湧き出してくる。
剣での勝負なら、勝てるとも負けるとも思えない。本当に、最後まで分からない試合だったはずだ。
見かねたユウキは、
「もー……そんなに後悔があるんなら、今度は本当に、剣だけで勝負しようよ。別に試合じゃなくても、勝負の機会なんていくらでもあるんだから」
「……はいっ！　その時はぜひ！」
その提案に、綺凛は笑顔で応えた。
こうして、綺凛とユウキの試合は終わりを告げた。
――――――チャリン、チャリン

幕間　大会が終わって

ハリーのライバルである雷帝、ヴィクトーリア・ダールグリュンは自分の控室で、ハリーとリオの試合を見ていた。
もうすぐ試合だが、その顔には緊張がない。
「相も変わらず、あの不良娘は不格好な試合ですこと」
「いい試合でしたけどねぇ。新技も披露されてましたし。向こうもかなり腕を上げてきたようですね」
執事のエドガーも、顎に手を添えて試合の感想を述べた。
「雷撃対策も地面からの噴射砲撃も、ハナからわたくしには通じませんわ。見た以上、いくらでも対策が立てられますしね！」
「ふむ、『ハナから通じない』のか『対策出来る』のか、どちらでしょうか？」
「うるさいですわエドガー!!　重箱つつき禁止っ!!」
雷帝としての実力を兼ね備えるヴィクトーリアだったが、長年連れ添った執事の前では形無しだった。
あっさりと強がりを見抜かれ、逆にからかわれてしまう。
「ま、引き出してくれた春光拳の娘には感謝ですわ。本線ではあの子の分までギタギタに叩きのめして差し上げますっ!!」
「負けられない理由がまた1つ増えたのは結構ですが、今は目の前の試合に集中してくださいね、お嬢様？」
『言われるまでもありません！』という大きな声が、選手控室に響くのだった。
ヴィクトーリアの試合は、綺凛とユウキの試合の後だった。相手は聖王教会代表のシャンテ・アピニオンである。
序盤はシャンテが、自身の分身を作り出す魔法と持ち前のスピードで、ヴィクトーリアを翻弄する展開だった。
ラウンド1とラウンド2で削ったライフポイントは、シャンテがリードしていたほどだ。
だが、ヴィクトーリアの硬い防御と攻撃力の前には力及ばなかった。

第3ラウンド、一歩踏み込んだ攻撃を仕掛けたシャンテだったが、その悉くを防がれることになる。
返しの攻撃。一撃でライフの9割を削られ、フラフラになっているところに、ダメ押しの攻撃を叩きこまれ、惜しくも敗退することになってしまった。
――――――チャリン、チャリン

その後の試合も順調に進み、全てのブロックで勝者と敗者が決まった。
日も沈みかかり、試合が終わったスタジアムからは波が引くように観客がいなくなり始めていた。
ロッカールームでは選手達が帰り支度をしていた。その中にはチームナカジマのメンバーもいる。
「あーあ、これでチームナカジマ初等科チームは全滅かぁ」
「ね～」
「残念～」
激しい試合を繰り広げたというのに、ヴィヴィオとコロナ、リオが軽い調子で言った。元気いっぱいの子供達は、すでに疲労をどこかに置いてきてしまったらしい。いや、疲れてはいるが、まだ元気が残っているのだ。
「という訳で！　私達の夢はお二人に託されました！」
「明日の試合も頑張ってください！」
「は、はいっ!!」
「あはは……全力を尽くしますね」
アインハルトと綺凛は各々、その激励に答える。

話しながら歩いていると、ノーヴェやなのは達との待ち合わせの場所に着いた。
特に何かミーティングがあるわけではなく、このまま解散の流れだ。
「んまあ、今日は全員疲れただろ。アインハルトと綺凛はもちろんだが、ヴィヴィオ達もしっかり休めよ。３人は明日、応援に来るんだろ？」
「はいっ」
「もちろんです！」
「自分の試合と同じくらい全力で応援しますよ！」
ヴィヴィオ達は元気に答えた。
「ならしっかり休むこったな。ここ数日はずっと試合だったんだ。とりあえず８月いっぱいは体を休めることだ」
「そうだよ。休む時はしっかりと休もうね？」
ノーヴェとなのはは２人に告げた。
ええっ!?　そんなに？　と口々に不満を言う３人だったが、そこはノーヴェがしっかりと言い聞かせた。
「あはは、『体を休めて』かぁ。なのはが言うと説得力があるね」
「それはもう。自分が痛い目見てるからね」
フェイトの言葉に、なのはは笑って答えた。自分が昔、無理をし過ぎたせいでやらかしたことがあったため、少し強めに言ったのだ。
ノーヴェの説得に納得しない場合は、なのはが『おはなし』するつもりだったのだ。
３人が納得したところで、しなければいけないことがある。
「色々ありがとうございました！」
「今度、教会にお礼に行くね！」
「い、いえ、お気になさらず！」
「ゆっくり休んで下さいね」
それは、今までこの大会に出るために手伝ってくれていた人たちへお礼を言う事だ。
その人たちにとっては、立派な試合をすることが何よりのお礼だっ

たのだが、しっかりと言葉にすることも大切なのだ。
リオとコロナはオットーとディードに、今まで特訓に付き合ってくれた2人に頭を下げる。
そして今まで付き合ってくれて、一番お世話になった人物と言えば、
「ノーヴェコーチも！」
「お、おう!?」
「「ありがとうございました!!」」
今度はヴィヴィオも一緒に頭を下げた。
「や、やめろって！　そんな大声で！」
人が少なくなっているとはいえ、周りの視線が集まる。少女たちの真っ直ぐなお礼に、そもそもお礼を言われることに、こそばゆい感情が芽生えてしまうノーヴェは赤くなってそっぽを向いた。
「じゃあ、リオちゃんとコロナちゃんは私の車で送っていくね」
「うん、よろしくね、フェイトちゃん。私はご飯作って待ってるから」
「アインハルトさんはこちらにどうぞ」
「はい。よろしくお願いします、綺凛さん。それでは皆さん、また明日、会場で」
「「はいっ、また明日!!」」
アインハルトの一言で、それぞれの車に乗り込んでいく。3台に分乗した子供たちは、それぞれの家へと出発するのだった。

綺凛は刀藤家の娘、送り迎えは当然ついていた。その車の後部座席に並んで、アインハルトと綺凛は座っていた。
2人共自分から話しかけるタイプではないため会話は無いが、それ

でも考えていることは同じだった。
今日の試合、そして明日の試合についてだ。
アインハルトの明日の相手は、元チャンピオン、負け知らずの最強選手、『ジークリンデ・エレミア』だ。
「(誰が相手でも負けません。私の願いとチームの想い。この拳にかけて――――きっと勝ちますっ)」
綺凛の相手は『雷帝』、ヴィクトーリア・ダールグリュン。優勝予想では、エレミアについでの番付だ。
「(あの人の防御……今日のユウキさんとは違う意味で私の攻撃が通るかどうか……それでも、皆さんの分まで、切り裂いて見せますっ)」
勝ち進んでいけば、必然的にトップ選手が残っていく事になる。その中でもこの2人は、最強の相手を引き当てていた。
「お互い、明日の試合が勝負になりそうですね……」
「はい。頑張りましょう」
2人は頷き合うのだった。

「とうちゃーく!!」
なのはとヴィヴィオは自宅に到着した。
「お疲れ様、ヴィヴィオ。ママはご飯作り始めるけど、先にお風呂に入っちゃう?」
「うん!　そうする!」
試合終わりにシャワーは浴びたが、それとお風呂は全く違う。湯船に浸かれば1日の疲れがどこかへ吹っ飛んでしまうのだ。
頷いたヴィヴィオは2階の自室へ荷物を置きに、そして着替えを取りに向かった。

それを見送り、なのははキッチンに立った。
鼻歌を歌いながら料理を始めるなのは。今日は試合を頑張ったご褒美にヴィヴィオの大好きな料理を作ると決めていた。
材料の下ごしらえを終えて、念のためにレシピを確認しようとして――天井へ視線を向けた。
「(ヴィヴィオ、部屋から降りてきてない？)」
すぐにお風呂に入るものだと思っていたなのはは、不思議に思い、様子を見に行くことにした。
「(魔力を限界まで使ってたし、寝ちゃったのかな？)」
それならそれで、お風呂は後回しにしてしまっても問題は無い。疲れているのならご飯の時間まで寝かせてあげようと思っている。
すぐにヴィヴィオの部屋の前に着いた。そこには、
「クリス？」
扉の前にはヴィヴィオのデバイス、ウサギ人形の外装が特徴のクリスが浮かんでいた。短い腕をバッテンに交差させている。
ここから先にはいかないで欲しいと、行動で示していた。
「どうしたの？　ヴィヴィオ、寝てる？」
ふるふると首を横に振るクリス。
「なら……、ぁ」
一歩踏み出したとき、なのはは気が付いた。
扉の向こう、布団に顔を押し付けているのか、くぐもった泣き声が聞こえてくる。
「ん……じゃあ、私は下に行くね。料理が出来たらまた来るから」
こくこくと、クリスは頷いた。
そしてそれは、車でコロナとリオを送っていたフェイトも同じだった。
目だけを動かしてルームミラーを確認すると、後部座席に座っていたリオとコロナがお互いに抱き合い、声を押し殺して泣いていた。
フェイトにばれないように唇をかみしめているが、それでも漏れる声を押さえることが出来ていない。
「……」

フェイトは聞こえないふりをして、車を走らせるのだった。

「ずいぶんと浮かない顔だな、ノーヴェ」
「ん、あ、ああ……」
　帰りの車の中、ノーヴェ達のグループで、ミカヤがノーヴェに声をかける。
「まったく、コーチが選手以上に落ち込んでてどうするんだい？」
「べ、別に落ち込んでるわけじゃ……っ」
　ノーヴェは否定するが、天瞳流の剣士の眼力はごまかせない。
「君は今、『もっと勝たせてやりたかった』、『教え方を間違ったんじゃないか』ってことで頭がいっぱいだ」
　ノーヴェは何も言わない。
「明日の試合のことは半分くらいしか考えてないし、試合のことも、『負けた時にどうしよう』って事しか考えてない」
「……ああ、正直言って後悔ばっかりだよ。もっともっと勝たせてやりたかった」
「でも、みんな全力で、良い試合をしたよ」
　コロナはアインハルトとの同門対決で、どちらかは負けてしまう試合だった。リオはトップ選手との試合。ヴィヴィオとミウラは本当に紙一重の試合だ。ミウラも1回戦でミカヤを破っている。それはもうトップ選手と言っても過言ではない相手だ。
「それでも勝たせてやりたかったんだ。やっぱりさ、こうして結果が出ると考えちまうんだ。アイツらのコーチが、アタシじゃなくて他の、もっとちゃんとした指導者だったらって」
「その先を言ったら友達をやめるよ。慰めてもあげない」

「わーってるよ!!　思っただけだ！　アイツらの前じゃ見せねーよ!!」
「ならよし。みんなも、1回泣けばすっきりしてまた頑張れるさ」
負けない選手はいない。一部を除いて、本当に一部を除いて、負けない選手はいないのだ。
みんな敗北を乗り越えて次の試合のために強くなっていくのだ。
「ああ！　アタシも、今回の敗北をアイツらの強さに変えて見せるさ！　まずは、明日の試合だな！」
調子の戻ったノーヴェを見て、ミカヤも微笑むのだった。

そうしてヴィヴィオ達が青春の涙を流している頃、各国のトップ層の会議も終わりを迎えていた。
各々が護衛に連れられ、滞在しているホテルへと帰っていた。これにて今日の護衛は終了。雇われの身であるアリアもそうだった。
「ん、じゃー帰っていいぞ」
キャーリサは椅子に腰を下ろし、足を組んだところでそう言った。
「はい。それでは……」
「ああ、そうだ」
帰っていいと言ったキャーリサだったが、思い出した様にアリアを呼び止めた。
「前に言った件、考えたのか？」
前に言った件とは、アリアを王室御用達の武偵、『R』ランクの武偵として、王室に雇われないかという話だ。
それを受けた場合、当然この島にはいられなくなる。学校だって退学になるし、王室の護衛になると下手に誰かと会うことも出来ない。
「それは……申し訳ありません、まだ……」

「そーか。まあ別に急がなくてもいいとは言ったがな。期限は分かってるんだろーな？」
「はい」
　期限。それはキャーリサがこの島に滞在している時間だ。もし受けるのなら、キャーリサの帰国の時に、一緒にイギリスに行くことになっている。
「ま、その時までに答えを決めておいてくれ」
「はい、わかりました……」
　そう言うと、アリアは家路についたのだった。
　その途中でも、アリアは考えていた。
「（キャーリサ様について行けば、間違いなく『イ・ウー』についての情報が今以上に入る。でも……入るだけで身動きはとれなくなるかもしれない）」
　王室の護衛になるとは私生活を犠牲にすると同義だ。キャーリサは実力があればいいなんて言っているが、実際はそんなことは無い。
　自分の身を国に捧げられるくらいの愛国心が無ければ、すぐにリタイアすることになる。
　だが、『イ・ウー』の情報はそのくらいの価値があった。
　ブラドを倒してからというもの、メンバーが全く尻尾を出さなくなってしまったのだ。このままでは母親の裁判に間に合わなくなってしまう。
「（みんなのおかげで、ブラドを捕まえることが出来た……まあ、最後にブラドをブチのめしたのが理子ってのは気に入らないけど……みんながいなかったらダメだった）」
　このメンバーならあるいは、イ・ウーとも戦えるのではないか。そう思っていたアリアだったが、相手の方が見つからずにタイムオーバーになってしまっては意味がない。
　そしてこの事は、みんなに言っていなかった。
　みんなはみんなで忙しそうだったし、アリアはアリアで自分にため込むタイプだった。ずっと長い間『アリア（ひとり）』だったのだから、仕方のないことなのだ。

「でも、パートナーくらいには、言ったほうがいいかな……」
そう思うこともあったが、翔は翔でたくさんのお姫様、聖天子様の護衛、子供達の大会と抱えていることがたくさんあった。
「ま、いっか……」
今のままだったら、断ることになるんだし。アリアは、そう考えるのだった。

夜のツーリング　（オルタ）

「はい、はい、それじゃあ、明日はインターミドルの試合ですね。一度そちらに向かうので、はい。おやすみなさい」

俺は聖天子様との電話を切る。

今思うと、こんな偉い人と直接電話するコネがあるとか普通にヤバいよな。

しかも今かけてた番号、聖天子様のプライベートの番号だし。そもそも普段は使わないものだって言ってたし。

要件も『明日何処行きます？』みたいな、そんな気軽なものだし。

それもこれも、このお出かけがこっそり行われているからなんだけどね。

「それにしても明日かぁ……」

今日はララとのドタバタで結局試合を見に行くことは出来なかった。今日の試合でヴィヴィオちゃん達は負けてしまい、残っているのはアインハルトと綺凛だけだ。

そして明日の試合では、そのどちらもトップ選手との試合になっている。

綺凛の相手は『雷帝』、ヴィクトーリア・ダールグリュン。

ちょっと試合映像を見たけど、やはり世界は血筋ゲーだと思い知らされる圧倒的な内容だった。

圧倒的な魔力量に加えて、漲る自信によって繰り出される技の数々。攻撃に当たらないわけではないのに堅い防御でライフは削られず、相手の攻撃のすべての上を行き、叩き潰すその戦い方。

俺も戦いたくない相手だ。

綺凛の攻撃が通じるのか少し心配だ。

でもそれは普通の強敵だ。大会に出場している以上、そういう組み合わせがあってもおかしくない。

問題はアインハルトの方だ。

アインハルトの相手は元世界チャンピオン。ジークリンデ・エレミアだ。原作を知っている身からすると、ジークリンデ・エレミアはた

だの元チャンピオンではない。
ご先祖様の時代からアインハルトと因縁がある相手なのだ。
最近はその影を見せなくなったとはいえ、もとは路上試合をしてまで強さを追い求めていた。そのくらいご先祖様の過去に囚われていたアインハルト。
戦いの中でそれが再発する可能性は十分にあった。
「翔君、ご飯の時間だよー」
「今行くよー」
アスナの呼び声に部屋を出る。
試合の組み合わせなんて、俺が考えてもしょうがない事なんだけどな。どうにもならないことは一旦忘れることにしようか。
そう思って俺はリビングへと向かうのだった。

ご飯も食べ終わり後は寝るだけ。雪菜たちに明日の予定も伝えたし、他の娘もみんなそれぞれに仕事がある。みんな特に夜更かしをすることも無く床につく。ここ数日の光景だった。
その例に漏れず、今日もそうなるんだと思ってたんだけど、
――コンコン
「ん？」
ドアがノックされた。
「どうぞー」
「入るぞ」
「オルタ？　どうかしたのか？」
その格好は現代風のファッション。新宿の霊衣だ。寝る時にはいつも下ろしている髪も、後ろで１つに束ねられている。

まるで今からどこかに出かけるみたいだ。
「ついてこい」
短い言葉で用件を伝えてくる。
「や、どこに？」
「夜のツーリングだ」
俺の返答を待たずに、オルタは歩き出していた。

「メットはかぶるんだな」
「交通規則だからな」
昼間とはうって変わって人の少ない通りを、俺達はサイドバッシャーに乗り走っていた。
運転はオルタで、俺はサイドカーに乗っている。騎乗スキルのためか、オルタは現代マシンのバイクを難なく扱っていた。
実は俺が色々と忙しい時期に免許を取っていたオルタ。すでにサイドバッシャーはオルタの私物になりかけていた。
程なくして、俺達は海岸沿いの公園に到着した。港とも反対側に位置するこの公園からは、今の時期たくさん停泊している客船も見えない。
いつも通りの暗い海面がどこまでも広がっていた。
その海岸線に沿って配置されているベンチに、俺達は腰かける。
「それで？　お前は一体何が気になっている？」
「全部お見通しって訳か」
考えないようにしていても、この王様には分かってしまったらしい。
「明日のインターミドルの試合がな。ちょっと心配なんだよ。特にア

インハルトの方が」
「過保護だな。あの娘も1人の戦士だ。試合の勝敗で何かあるわけではあるまい。怪我の心配をしているのならさらに侮辱になる」
「そうじゃなくてな」
　言葉を選ばずに言うのなら。
「オルタの目の前にモードレッドとかモルガンの子孫が現れる感じかなー」
「……なるほど。それは確かに一筋縄ではいかないな」
「ああ。自分の事じゃあないから余計にな」
　アインハルトの場合は、そこまで負の因縁があるわけじゃないんだけど。まあそんなイメージだ。
　そういや、ＦＧＯの方ではどうなんだろうな。モルガンとかモードレッド以上に濃いネタになりそうだから絶対に実装されると思うんだけど。
　カルデア吹き飛んだりしないのかな？　アルトリア達とバチバチでしょ。
「俺が心配してもどうにもならないんだけどな。試合を棄権するわけにもいかないし」
「なるほどな」
　オルタにもその気持ちはある程度分かるようで、過保護だとは言われなかった。
　代わりに、
「王として、お前の悩みを解決してやろうかとも思ったが、無駄だったようだな」
「や、無駄なんてことは」
「他の女についての悩みだったからな」
「そうですね」
　ちょっと申し訳ない気持ちになりかけるが、普通に嫌味を言われただけだった。
「そろそろ戻るか。あまり長い時間外にいると、色々と勘繰られる」
「そうだな」

オルタは立ち上がり、サイドバッシャーの方へ歩いていく。
それにしても、こうしてみると無防備な格好だな、オルタの服装は。
キャミソールのようなトップスに上着、下はショートパンツ。
それがすべて色合いの違う黒で統一されている。家を出る時も思ったが、ＦＧＯの新宿の服装だ。
横から見た時には、トップスの下には何も着ているようには思えなかった。病的なまでに白い足も、太ももの付け根からさらされ、月光を反射している。
「あー、やっぱ……」
ここ最近ご無沙汰だったからか、それだけで下腹部に血液が集まるのが分かってしまう。
「翔、どうした？」
俺はヘルメットをかぶろうとしているオルタに後ろから抱きつく。
「お、おい……！　こんなところで盛るな……！　んっ、ぁ」
「何だ、これ1枚しか着てないのか？　流石に無防備じゃないのか？」
ふにふにと、服の上からオルタの胸元に手を這わせる。薄い布切れ越しにオルタの柔らかい双丘を感じる。この下には何も身に着けていないらしい。
「お、ぃ、うぐっ！　ぁ……っ」
「少し硬くなっただけで服の上からわかっちゃうじゃないか」
少し揉んだだけで、その頂点は固くなっていた。トップスを密着させてみると、しっかりと2つの突起が分かってしまう。
「こんな格好で外を出歩くのはどうかと思うぞ？　な？」
突起をぐにぐに。
「こんな場所、でっ、盛るお前も、どうかしてぅ……っ！」
硬くなった先を指先でカリカリと引っ掻くと、オルタの腰が引けた。
すでに固くなっている俺の息子を、小ぶりなお尻がぐりぐりと刺激している。本人はそういう気はないのかもしれないけど。誘っているようにしか見えなかった。
俺は一度手を止めて抱きしめる。

「なあ、ダメか？」
「……家に戻ってからにしろ」
「家に戻ってからだと、余計な勘繰りがあるかもしれないんだろ？
前にした時も桜がいたし、２人きりでちゃんとしたことないよな」
「外でするのは、『ちゃんとする』に入るのか？　……おいっ！　そんなに押し付けるな……！」
そう言われるとそうだな。
耳がほんのり赤くなっているオルタは、金の瞳を細めて注意してくる。でも、本当に拒否するつもりならその腕力にモノを言わせればいい。
抱きしめる腕に伝わってくる心臓の鼓動は早いままだし、硬くなった突起の興奮が収まる気配もない。
オルタは持っていたヘルメットを置いた。俺の意志が固いことを悟ったんだろう。そして渋々と言った様子で、
「……ほどほどにしろ。あまりされると、帰りが困る」
「その時は俺が運転するよ」
「っ、外でそこまで許すつもりは無いっ……！」
強めの口調で言われるが、オルタも今さら嫌とは言わない。周りを気にしつつも、ショートパンツと下着を一緒に下ろした。
サイドバッシャーの座席に突っ伏すような態勢になるオルタ。俺に向かってお尻を向ける。
真っ白なオルタの体に、数少ない色づいた部分。暴君とは思えないほど綺麗な縦筋だ。その上には薄いセピア色の菊門がある。
どんなに冷徹な態度をとっていても、アルトリア達は少女なのだと実感させられる。そして今、そこに俺の息子を突き付けていることも。
肉壺の入り口を少し広げる。
「っ、ぁ……！」
王様としてのプライドがあるのか、自分の恥ずかしい場所を広げられても声を上げることなくじっとしている。
前のようにはしたなくおねだりすることは無い。

これから俺の肉棒が蹂躙する穴から、トロリと透明な液体が溢れてきた。体の方は期待でいっぱいみたいだ。もどかしそうに腰が揺れる。
「もう濡れてるんだな」
「うるさいぞ」
ありきたりなセリフがばっさり切り捨てられる。セリフの温度はいつもと変わらないが、果たして内心はどう思っているのか。
「いくぞ」
「ああ……っ」
オルタの体が硬くなった。緊張してるのか、それとも快楽に耐えようとしているのか。
なんだかんだ言ってもオルタは2回目だ。ゆっくりと腰を進めていく。
反り返ったカリがうねった膣道をならしていく。かと思えば、潰された肉粒が起立して竿に吸い付いてくる。
「おおおおぉぉぉぉっ……！」
必死で声を押し殺そうと口を両手で覆っているオルタだが、その隙間から1オクターブ上がった声が漏れている。
「ふうううぅぅぅ……っ」
無様に声を漏らさないようにしているのか、長く息を吐いて呼吸を整えている。
奥までぴったりとフィットする肉棒。フィットしながらも少しだけ余裕があり、本当に奥までピストンすれば、子宮をノックできる。最高の状態だ。
「どうだ、オルタ」
「まあま、ぁっ！　っ、まあまあ、だ……っ」
一番奥を小突くとオルタの言葉が乱れる。
「まあまあか？」
「……まあまあだ」
あくまでも今日はこの態度を崩さないつもりらしい。以前の乱れ方を見せてあげたい。

外だしあんまり時間はかけられないけど、じっくりととろとろにしたいな。外で迫ったのはちょっと失敗だったかもしれない。
オルタに覆いかぶさり、小刻みに腰を振る。
どんなに大人ぶっていても、このおまんこはセックス2回目で、よわよわだ。激しくするよりも、丁寧に弱点に擦りつける方がいいだろう。
ねっとりと往復するちんぽが、まんこをほぐしてとろとろにしようとする。
ぬちっ、にちっ、にゅっ、と激しくは無い粘膜の擦れる音が風に乗って消えていく。
「ふぅー……っ、ふぅー……っ！　このっ、ケダモノめっ。そんなに夢中で、腰を振って……！」
恋人に何度も口づけするように、冷徹な王様のお口を解きほぐしていく。たらふく愛液を溢れさせ、そしてトドメとばかりに、ぷちゅんと子宮にキスを行う。
2回目のセックスで緊張している子宮口は徐々にチンポを受け入れ始める。口を開き、子種を飲み込む準備を始めていた。
ナカだけではなく体も震えだしていた。
「オルタ、そろそろ射精（で）そうだ……！」
「ああ……っ！　早ぐっ、出してしまえ……！」
ごぷっごぷっ！　どくんっ、びゅるるっ、びゅぐぅっ、びゅるぐぅぅぅっ！
「うっ！　――ぐぅぅぅぅ……っ！」
「――っ!?　っ、っっ……っ!!」
オルタは絶頂していた。それは隠しきれない体の痙攣でわかる。だが、その痙攣が収まるまで、はしたない声を上げることなく耐えていた。
恐れ入るよ、オルタには。
たっぷりと白いモノを吐き出したチンポを引き抜いた。
白いものが溢れている穴とは別に、まだ汚れておらず、しかしいやらしくヒクついている窄みがある。お尻の穴だ。

そう言えば前桜が弄った時、すっごい良い反応してたよな。
アナルか……そう言えば最近、狂三が俺に会うと時々お尻を押さえるんだよな。なんでだろ。
「……」
「はぁ、はぁ、はぁ……、こ、これで、満足――――ひっ、ぁ！　しょ、翔!?　そっちは……！」
「大丈夫だよ、オルタがお尻好きの変態じゃなければ」
「い、いや、そっちは……！　ひぐっ、あぁぁっ……！」
ダメなんだろうな。
親指を使って入り口を引っ掻いただけでこれだ。柔らかい尻穴が、次はこっちに欲しいとおねだりしている。
「っ!!」
力を取り戻した俺の肉棒が、今度はアナルに狙いを定めた。亀頭が菊門にキスすると、オルタの体がびくりと震える。
「帰りは俺が運転するから」
「やっ、め――――!!」
言葉で否定していても、体が受け入れていた。
「うわ……っ！」
前の穴とはまた違った感触とともに、俺のチンポが根元まで呑み込まれた。初めて挿入したとは思えないほどすんなりと俺の肉棒が飲み込まれてしまった。
挿入しただけで限界になっているオルタ。じっとりと汗をかいた体を抱きしめて体を起こす。
「なあオルタ。どうしてこんなにお尻が弱いんだ？」
「うるひゃいいぃ……っ」
腰を引いてもう一度押し込む。くぷくぷと柔らかく包み込まれていく。この感触、どう考えても使い込まれた名器だ。
「最初からこんなじゃなかったんだろ？」
「当たり前だ……！」
「じゃあどうして？　アイリさんとの特訓でこうなっちゃったのか？」

アイリさんが喜々としてオルタのお尻を責める映像……割と想像できてしまいそうだ。
「ひっ、あ、かひゃく、なってぇぇぇ……っ」
そのことを想像しながら腰を振る。この冷徹な王様が、アイリさんの指でケツ穴をほじられ、涙を流しながらやめてくれと懇願する様子を。
俺の興奮を現した様に反り返ったカリが、ケツ穴をめくりあげる。
「アイリさん、そんなにSかな……」
「ひょ、ひょぅっ!! こし、こひ、止めて……! あ、あ、ぁっ――――イ、イグッゥゥ……っ!!」
オルタの体がカクカクと痙攣し、ペニスが締め付けられる。
情けない声を隠すこともせずに、オルタは絶頂していた。
「なあオルタ、実際どうなの? アイリさんにここまで開発されたのか?」
「い、ぁ、そ、れは……」
「言ってくれるまでオルタは何回イクのかな」
「っ、わ、分かった。分かったから止めてくれ……!」
言われた通りに腰を止める。それでも奥まで挿入されたままなので、時々説明がつっかえる。
「最初は、ちょっとした対抗心だったんだ」
ふむ。
「10年前、結局お前は私には何もせずにいなくなった。青い方はお前と結ばれたのに、だ」
「そうだな。でもそれは」
「仕方のないことだ。それは分かる。だが、その点において、あの時の私は絶対的に青い方に劣っていた」
性的な経験がね。
だから、いつか来る再会のために、アルトリア（青い方）に負けないくらいの性知識と経験を積んでおこうと思ったってことか。
「だからってなんでお尻を? その、前の方じゃなくて」
「……それは」

「それは？」
「……本当の純潔は、お前にと思って……」
興味深々で聞いた俺が恥ずかしくなるくらい初々しい理由だった。
「オルタ……」
「なにおごぉぉぉぉぉっ!!???」
奥まで入っていたチンポを、亀頭の先と菊門の入り口がキスするまで引き抜いた。
その恥ずかしさをごまかすようにピストンを再開する。
「じゃあ責任取らないとだな。こんなにお尻が好きな変態になったのは俺のせいだってことだもんな」
「へんた……っ！　おごっ、ぁ、がっ、はげし……っ!!」
ぬぽぬぽとお尻をほじくり返すと、いとも簡単にオルタは痙攣する。
でも、このレベルで開発されてるって、本当に経験を積むためだけなのかな？
アルトリアって年頃の女の子が人生を捧げて王様になったわけで、そういうことをする機会もなかっただろう。意外と自分でする快感にハマったんじゃ？
それは今後聞いていくことにしよう。
そしておまんこも、その内このくらい感じるようにして見せる。でも今日は、こっちを堪能させてもらおう。
「うっ、くっ……また、射精（で）そうだ……！」
「イ、ぅ、ずっと、イっでるぅぅ……!!」
ごぷっごぷっ！　どくんっ、びゅるるっ、びゅぐぅっ、びゅるぐぅぅぅっ！
「うぐぅぅぅっおおぉぉぉっ!!」
チンポの先から白濁液を叩きつけると、オルタの口から今日一番汚い声が聞こえた。痙攣する体をがっちりとホールドし、奥の奥にすべての子種を吐き出す。
体の力が抜けたオルタの股間から、生暖かい液体が流れ出ていた。
「はぁー……、はぁー……、はぁー……っ」

前後２つの穴から精液を溢れさせるオルタは、バイクに跨るどころか自分の足で立つことすら出来ない状態になっていた。
腰砕けになったオルタをサイドカーに乗せ、俺はバイクを発進させるのだった。

インターミドル　アインハルトＶＳエレミア①

人工島であるこの学園島だが、自然が皆無という訳ではない。絶滅危惧種の植物や動物の保存エリア。品種改良植物のエリア、武偵のサバイバル訓練エリアなど、島全体に緑が点在している。

さらには娯楽として、キャンプ場のエリアなんかもあったりする。

人工島でも、その手のアクティビティには困らないようになっているのだ。

しかしまさか、そんなキャンプエリアで元世界王者が寝泊まりしているとは、誰も思っていなかった。

川で顔を洗ったジークリンデのデバイスに連絡があった。

《ジーク、おはよう。もう起きてた？》

「ん、起きてたよ、ヴィクター」

上位選手同士、前の大会から仲良くなっていたヴィクトーリアだった。執事のエドガーも一緒だ。

《迎えに来たわよ。一緒に行きましょう》

《朝食の用意もございますよ》

「うん。ありがとう～」

ジークはテントを畳み、指定された場所へと向かうのだった。

同時刻、所変わってここはアインハルトの部屋。

部屋の主であるアインハルトは、姿鏡の前に立っていた。

「相手は1度も負けたことの無い上位選手。この試合に勝てたら、覇王流の悲願に少しは近づけますよね」

ベッドにお座りしていたティオを抱きかかえる。

「行きましょう、ティオ」

「にゃあ！」

とうとう、覇王流アインハルト・ストラトスと元世界王者ジークリンデ・エレミアの試合が始まる。

「す、すごい熱気ですね……」
「今日は特にそうですね」
予選の時よりも圧倒的に多い人。それだけこの試合は注目されているということだ。
それもそのはず。この試合に出るのは前々回大会のチャンピオン、ジークリンデ・エレミア。
もちろんチャンピオンの試合はこれまでにもあったが、今までは、ブロック本選でも試合にならないという具合だった。
だが今回の相手はこれまでとは違う。この盛り上がり方を見ると、少なくとも周囲の人々はそう思っているようだ。
相手はチームナカジマのアインハルト・ストラトス。ここまで破竹の勢いで勝ち進んでいるスーパールーキーだ。
注目の2人の試合という訳だ。わざわざこんな混む試合に聖天子様を連れてきてしまって申し訳ないと思うけど、まったく知らない人の試合を見ても面白くないと思ったから。
というか、俺も面白くない。
「聖天子様、しっかりと水分を取ってくださいね」
「はい、こちらをお飲み下さい、聖天子様」
「ありがとうございます、コッコロさん」
聖天子様はコッコロから水を受け取って飲んでいた。
「帽子をかぶってきたのは正解でしたね」
「はい、試合のことを言ったら、護衛の方が持たせてくれたので」
雪菜の言葉に、聖天子様は自らの頭に手を乗せる。そこには昨日までは無かった麦わら帽子があった。
服装もローテーションして、今日は初日に見た白いワンピースになっている。や、もしかすると、細かいところで違うのかもしれないけど。

それはそうとして、その麦わら帽子はとてもよくマッチしていた。
そういう所は気が利くんだよなあの3人。絶対に人が多くて、熱いところに行くってんであらかじめ対策を立ててくれたんだ。
何とか人込みをかき分けて、俺達は席に辿り着いた。
もうそろそろ、試合が始まる。

ここは選手控室。ジークリンデの方の控室だ。関係者以外立ち入り禁止のそこには、ヴィクトーリアとエドガー、そしてエドガーの作ったご飯を食べているエレミアがいた。
「試合前に食べても大丈夫なの？」
「ん。食べんと力が出えへんから」
その手には本日2つ目のおにぎりがあり、どんどん口の中に消えていっている。
「もう……言うまでもないけど、準備は万端みたいね」
「うん」
いつもと全く変わらない様子のジークリンデに、ヴィクトーリアは呆れつつも安心する。
「昨日改めてあの娘の試合を見た。ベルカ古武術、覇王流の継承者、アインハルト・ストラトス。試合時間が短いから目立たへんけど……体捌きも打撃も十代の娘にしては飛びぬけてる」
エレミアの言葉に思い当たるところがあったヴィクトーリアは静かに頷いた。
「先祖への想い、流派への誇り……過酷な訓練をしてきたんでしょうね」
「ん……強い想いがあるんやろうね。つらい想いや寂しい想いもしてきたんかな……勝っても笑わへんのは、きっとそのせいや」

「……」
控室にジークリンデの咀嚼音だけが聞こえる。
しばらくして、扉がノックされた。
「チャンピオン！　そろそろ準備をお願いします！」
扉を開けて入ってくるのはハリー・トライベッカに負けてしまったエルス・タスミンだ。
エルスは自分の試合で負けてしまってから、エレミアのセコンドを務めていた。別にこの大会、セコンドがいなければ参加してはいけないというルールは無い。
だがジークリンデはどこかに所属しているということは無く、基本的に野宿生活だ。そのため大会ではずっと1人で戦っている。そこでエルスがセコンドに名乗りを上げたのだ。
「あっ、待って、すぐ食べちゃうから……」
「い、いえ！　そこまで急ぎでは！」
おにぎりを食べ終えたジークリンデは手を合わせた。
「ごちそうさま。っと、よしっ。ほんなら、ヴィクター、行ってきます」
「ええ、頑張って」
軽く手を振って、ジークリンデはエルスのもとへ駆けていくのだった。
そしてこちらはアインハルトの待機室。
「うん、時間ね」
「はい」
クロの言葉に、すでにＢＪを纏い目をつぶって集中していたアインハルトは、目を開けて立ち上がった。
チームメイトという事で、試合のある綺凛だけではなく、すでに敗退してしまったヴィヴィオやリオ、コロナも応援に駆けつけていた。
「アインハルトさんっ！　綺凛さんっ！　チームナカジマ一同、全力で応援しますっ！」
「まずはアインハルトさんですね！」
「チャンピオンを倒してきて下さい!!」
「――――はいっ!!」

後輩たちからの激励を受け、アインハルトはリングへと向かっていった。

「始まるな」
「こちらまで緊張してきますね……！」
普段はまじめな聖天子様だが、すっかり会場の雰囲気に？まれているみたいだ。落ち着かない様子で、そわそわと俺達とリングを交互に見ていた。
「最初はアインハルト様の試合でございますね」
「相手は元チャンピオンですね……」
俺たちが話していると、実況のコールが始まった。
《皆さん、お待たせしましたッ!!　本日、注目している方も多いでしょう、次の試合に参りましょう!!》
まず出てくるのは、
《ブルーコーナー、４戦４勝４ＫＯ！　うち３試合は一撃での秒殺勝利！　覇王流、アインハルト・ストラトス選手ッ!!》
今までで一番の大歓声に迎えられているアインハルトだが、いつもと変わらない様子だ。その後ろにはクロとノーヴェさんが続いている。
《レッドコーナー、前々回大会の覇者、いまだ負け知らずのチャンピオン！　ジークリンデ・エレミア選手ッ!!》
「「っ!?」」
「う、っわ……」
会場全体が震えるほどの歓声だった。アインハルトにも人気があるが、ジークリンデのものはそれとは別次元だ。
「アインハルト様、大丈夫でしょうか……」

「はい……まるで敵地（アウェー）です……」
コッコロと雪菜は心配そうな声を出すが……少し離れたところから子供たちの声が聞こえた。
「「「アインハルトさーん!!　頑張ってくださーい!!」」」
声の主は、昨日惜しくも負けてしまったヴィヴィオちゃん達チームナカジマのメンバー、それと八神道場のミウラちゃんと、ユウキだ。
さっきまで選手控室にいたって聞いてたけど、観客席に移動していたらしい。
ヴィヴィオちゃん達からの声援に対し、アインハルトは拳を軽く横に突き出した。
「大丈夫みたいですね」
それはアインハルトをあまり知らない聖天子様にも伝わったらしい。まっすぐジークリンデを見据える表情には余計な情報は何も映っていないんだ。
緊張の面では、問題ないことが分かった。
後はこの試合が無事に終わってくれることを望むだけだ。

《おおっと！　チームメイトからの熱い声援です！　それに無言で、しかし確かに応えるアインハルト選手！　これは心強いのではないでしょうか!!》
ミウラ以外負けてしまったとはいえ、チームナカジマは全員、素晴らしい試合を見せた選手である。気を利かせたスタッフが大型モニターにみんなの顔を映した。
突然大画面に映されて慌てているのはミウラ1人。他の面子はピースしたり、手を振ったりしている。

「あは、向こうは楽しそうやなぁ」
「そうですね。それでチャンピオン。今日はどういった試合の組み立てで？」
それをほほえましい顔で見ていたジークリンデは、緩んだ頬を引き締めた。
だがそこに緊張は無い。
「ん、いつもと同じや。エレミアの技で楽しませてみせるよ。見てる人たちも、戦うあの娘のことも」
２人がリングの上で向かい合った。
当然ＢＪを纏っている。このまま戦い始めることも可能だ。だがアインハルトはその上に、
「ビルドバーニングガンダム……!!」
鎧が現れ、体の各部に装着されていく。赤と白を基調に、各部に青いクリアパーツが使用されている姿。
アインハルトの覇王流と、ガンダムにインプットされている次元覇王流を同時に使用するアインハルトの新しい姿だ。
《前回の試合で見せてくれた『鎧』ッ!! アインハルト選手の切り札であるはずのそれを、今回は試合前から装着しています!! それだけチャンピオンを意識しているという事でしょう!!》
エレミアはその鎧の力をわかっていたが、それでも笑っていた。全力と戦えることがうれしいのだ。
《それでは試合――開始ですッ!!》
開始早々、
「覇王――――」
いきなり、
「――――断空拳ッ!!」
「んっ!!」
アインハルトの必殺技が炸裂した。
ビルドバーニングのスラスターと覇王流のパワーを合わせた重機のような突撃だ。
ジークリンデの後ろまで突き抜ける衝撃。だが、攻撃はジークリン

デを捉えてはいなかった。絶妙な捌きによって、蛇が巻き付くように左手が絡みつき、アインハルトの腕が反らされる。
さらにその反対の腕で形成される魔力弾。それをアインハルトに押し付ける。
大した威力は無かったが、断空拳の勢いは止まってしまう。
「それでもッ!!」
一度技を防がれたからと言って、後ろに下がるわけにはいなかい。アインハルトは前への打撃防御を固め、前進する。
「ふっ」
「ッ!?」
ジークリンデから帰ってきたのは打撃ではなかった。
顔の目の前で構えていた腕の間に入り込むエレミアの腕。拳は握られていない。さらにガンダムの装甲からはみ出しているＢＪの胸元を掴まれ――アインハルトの体が浮いた。
「よっと！」
「ッ!?」
直後、見事な背負い投げによって、アインハルトの体はリングに叩きつけられていた。全くの想定外の攻撃に、アインハルトのライフが一気に2割も削られる。
さらにそのまま右手を掴まれ、次の技に――
「こ、の――!!」
無事な左手で空破断を放ち、ギリギリの所で脱出するアインハルト。
ジークリンデに残ったのはほんのわずかなダメージと、ガンダムの装甲の残骸。攻撃を防ぎながらも、ジークリンデは掴んだ手を放していなかったのだ。
僅か一瞬、アインハルトから攻撃したはずが、結果はこの通りだ。
会場はチャンピオンの技に大歓声を上げている。
「な、投げ技ですか……!?」
「日本の柔道とも似ているようですが……」
「ああ、ジークリンデ・エレミアは本当に総合選手なんだ。距離を置い

ての射砲撃に、近接戦での格闘打撃。そして今見たゼロ距離での掴み技（グラップル）。あのまま何もしなかったら、今度は締め技に派生して終わってたよ」
翔も戦いたくない相手だと思っていた。投げ技とか締め技とか、どうやって対処すればいいのか分からないのだ。
「（そう、分からない――――ことも無いか？　何度かアリアにかけられてるし……）」
とは言っても、それだけの経験で戦うのは無理だ。
第四次聖杯戦争ではサーヴァントとも戦ったとは言え、ジークリンデの実力はそれに迫る。むしろ、並大抵のサーヴァントでは勝負にならない可能性もある。
「主様、ずいぶんとお詳しいのですね」
「ん、んん、まあね。前々回大会のチャンピオンだし」
「ふーん、そうですか。そうなんですか」
雪菜は何かを察したように目を細めていた。まだまだ翔に対する経験が少ない聖天子様とコッコロは、何も気が付いていなかったが。

「おや？　エレミア様とアインハルト様、何かお話していませんか？」
「そうですね……ここのカメラではリングの音声までは拾ってないみたいですけど」
何も知らない２人はリングの様子に釘付けになっていた。
アインハルトとジークリンデは確かに会話していた。試合中の会話は特に禁止されているわけではない。もちろん必要以上の挑発行為は禁止されているが、今回の会話はそれに該当していなかった。
珍しかったのは、今回の会話はジークリンデの方から声をかけていたということだ。さらに、その内容がかなりふわふわとしていることも挙げられる。
「君の試合を見てからずっと気になってたんよ。ウチらはきっと、少し似てるって」
「似て、いる……？」
訳が分からず首を傾げるアインハルト。

「まっ！　今は試合中や。ウチから話振っといてゴメンやけど、詳しいお話は試合の後でなー」
ジークリンデが右手を横に、人差し指を立てると、そこから次々に魔力弾が生み出され、回転しながら展開していく。
「エレミアの技、受けてもらおか？」
まだまだ自分には技がある。笑いながらそう告げるのだった。

インターミドル　アインハルトＶＳエレミア②

「エレミアの技、受けてもらおか？」
先ほどとは全く違う攻撃に、アインハルトの表情が引き締まる。
渦を巻くように空中に待機している魔力弾。滑らかに動くそれは、決してこけおどしの攻撃ではなかった。
「一発一発の密度がすごいわね……」
「ヒットすれば貫通判定を取られかねねぇ……あの鎧だってな」
「受ければ致命傷になるわね。体のどこかが使えなくなる」
セコンドのクロとノーヴェはエレミアの技を分析している。避けるか、防御するか、どちらにせよ対処するのが難しい技であることは間違いない。
しかしアインハルトには、
「ゲヴェイア・クーゲル――ファイヤッ!!」
「覇王流――」
アインハルトに殺到する魔力弾。次々と着弾し、リングが破壊されていく。
「カノーネ……」
ダメ押しの魔力がエレミアの指先に収束していく。アインハルトの姿は土埃で見えないが、ならばそのすべてを吹き飛ばしてしまえばいい。
その砲撃の発射よりも前に、
「――旋衝破ッ!!」
覇王流旋衝破。もはや仲間の間ではおなじみになったその技で、エレミアの弾丸を投げ返す。
弾丸をそのまま掴んで投げ返す旋衝破の前に、どれほど強くても弾丸は通用しない。
「むむっ！」
《な、なんと言う事でしょうか!!　アインハルト選手、弾丸を掴んで投げ返した!?》
大会で使ったのはコロナとのゴーレム戦が最初だったが、岩を投げ

返すのと魔力弾を投げ返すのはわけが違う。
残念ながら準備していた砲撃に相殺されたことでダメージにはならなかったが、この試合で初めてエレミアの表情を変えることに成功していた。
「ふぅん？　なるほどなぁ。君には『射砲撃（こっち）』は使わんほうがいいってことかぁ」
楽しそうに笑っているエレミア。
「ほんなら……」
エレミアは体勢を低くした。そのままの姿勢で、アインハルトめがけて突撃した。とてもその姿勢から出せるスピードではない。
「（古流武術家ちゃんは、低空タックルを如何捌く？）」
エレミアの出した問題に対してのアインハルトの回答は、
「はあああぁぁっ!!」
顔面をめがけての全力の蹴りだ。蹴りやすい位置に相手の頭が自分から飛び込んでくる。なら、反射的にそういう攻撃をしてしまってもしょうがない。
そもそもエレミアのタックルスピードは、ちんたら何かを考えていられるほどスローではない。
「ふっ！」
「ッ!?」
だが、アインハルトの回答は不合格だった。
がっちりと受け止められてしまう脚。そこを起点にして、
《チャンピオン投げたァッーーー!!　そしてそのまま関節技（サブミッション）ッ!!》
「う、ぐぅぅぅ……っ」
力を入れても技は全く緩まず、むしろ暴れれば暴れるほど関節が悲鳴を上げる。
クラッシュシミュレートは関節技の痛みの再現も完璧だ。ずきずきとした痛みに、額に脂汗を書くアインハルト。
「つ、ぅ……ッ!!」
「わッ!?」
アインハルトは自由な足で踵落としを決める。怯んだ隙に固定さ

れていた足を無理やり引っこ抜いた。
《アインハルト選手、強烈な蹴りで何とか関節技から脱出しますが――》
「う、つ……っ!!」
関節技を決められていた膝に鈍い痛みが走る。
関節技の痛みは経験が無く、ついその場所に目を向けてしまう。関節技であっても、この痛みはシミュレートだ。外から見ても、外傷があるようには見えない。
「(ッ!? チャンピオンは――――)」
戦闘中に関わらず、目の前の相手から目を離してしまう失態。それはすぐにアインハルトに跳ね返ってきた。
目の前にいたはずのエレミアがいつの間にか消えている。
「逃がさへんよ」
「ッ!!」
声が聞こえてきたのはすぐ下だった。体勢を低く、獣のように近寄っていたエレミア。腰をしっかりと固定され――
「か、っは――――」
次の瞬間、アインハルトは地面に叩きつけられていた。
「まだまだっ!!」
よろよろと立ち上がったアインハルト。前から股下に手を通され、腰をがっちりと掴まれる。
一切の抵抗も出来ず、再度地面に叩きつけられるアインハルト。
何度起き上がっても、待っているのは地面への固い衝撃だった。
《きょ、強烈!! 投げ技2連発がアインハルト選手を襲います!! この連続技にアインハルト選手は……ッ!! た、立っています!! ライフは大きく削れていますが、すでに2本足で立っています!!》
自分の力で立ち、ファイティングポーズも取っているのなら、レフリーが確認するまでもない。試合が再開された。
「良かったです。アインハルトさん、まだまだ大丈夫のようですね」
「ですが大きくライフを削られてしまっております……」
「はい。投げ技にもあまり慣れていないみたいですから、次に組み付

かれるとそのまま終わってしまうかもしれませんね……」
聖天子様、コッコロ、雪菜は今の攻防に思い思いの感想を述べている。
翔も、アインハルトの心が折れてしまう心配はしていなかった。翔が心配しているのはもっと別のことだ。
「さて、まだまだ序盤や。君もまだまだこんなもんとちゃうやろー？」
エレミアはぐるぐると肩を回す。
あれだけキレイに技をかけられ、ライフも削られているというのに、アインハルトの闘志は衰えることを知らない。
その様子に歓喜と安堵の気持ちが抑えられないエレミア。わくわくと軽くステップを踏む。
「その笑顔は余裕の証ですか？」
つい棘のある言い方をしてしまうアインハルト。
「あ……ごめん。失礼やったかな？　強い娘との戦いはやっぱり楽しいし、君にも楽しんでほしいかなぁーって……」
圧倒的に勝っている方が『楽しい楽しい』と笑っているのは失礼に当たる。どんなスポーツでもその理論に間違いはない。たとえ本人がそう思っていなくてもである。
エレミアは手を振って謝り、
「というか逆に聞いてもええかな？」
逆に質問をした。
「――何で君は笑わへんの？」
「……え？」
これまでの試合、予選から今まで負けなしのアインハルトだが、試合中に痛み以外で表情を変えたことは無い。
表情を変えたのは前回のコロナ戦だけだ。傷ついたチームメイトを気遣うときだけ。
試合を楽しんでいる様子は見せたことが無い。
これは命のかかった勝負ではなくスポーツだ。勝てば楽しいし負ければ悔しい。その感情があってしかるべきのはずなのだ。だが、アインハルトにはそれが無かった。

「私は……笑ってはいけないからです」
「うん？　どうして？」
「それは……」
「……ごめんな。試合中に話すこととちゃうかったね」
　エレミアも普段はここまで他人に踏み込もうとはしない。しかし、何かに追い詰められたように戦うその姿は、到底放って置けるものではなかった。
「あっ、ほんならこうしよ？　ウチが勝ったら、君と少しお話させて？」
「力づくでというのであれば、ご随意に」
　敗者は勝者に従う。単純な真理に、アインハルトも異論はない。そしてそれは、チャンピオン相手にも負けるつもりが無いというアインハルトの意思表示でもあった。
「よかった。ほんならスパーンと殴り合おか！　実はヴィクターともハリーとも、これで仲良くなったんや」
　握った右手の人差し指に、軽く口づけをする。
　そして、
「『鉄腕』解放――――」
　その一言で、エレミアのＢＪに変化が起こった。
　比較的軽装だったＢＪ。その両手に、肘までを覆う籠手のような防御武装が現れたのだ。
「（肘の上までを覆う防護武装……別に珍しいものじゃあない。試合映像で何度も見ている）」
　アインハルトは生唾を飲み込む。
　言ってしまえば、鉄腕はエレミアのパワーアップ形態だ。
　別にこの武装は、アインハルトのビルドバーニングのように秘密の武装という訳ではい。過去の試合では何度も見せている。エレミアの言葉通り、過去のヴィクトーリアやハリーの試合でも使っていた。
「（だけど、直接この目で見て、肌で感じて分かった……いえ、『思い出した』ッ!!　この装備ッ！　の構えをッ!!）」

脳裏に焼き付いた、自分のものではない記憶。それが叫んでいた。
「(私の記憶が、とてもよく知っているッ!!)」
古流ベルカの武術の世界は、広いようで案外狭い。いくつもの源流が混じり合い、今に繋がっているのだ。
その中でもエレミアが使う技は、『黒のエレミア』と呼ばれている。格闘技の概念もあいまいな時代、己の五体で人体を破砕する技術を求め、乱世の世の中でその技術を極めて行った一族。
「エレミア――――!!」
「うん！　エレミアの『鉄腕』、受けてみなー」
目の色が変わったアインハルトに、エレミアはまだ気が付いていない。
ラウンド1は残り1分を切っていた。

インターミドル　アインハルトＶＳエレミア③

遥か昔、無数の死体が転がる戦場。２人の若い男女が向かい合っていた。
人の肌が焼ける嫌な臭いの中にあっても、その男女の持つ育ちの良さは無くならない。
「もうやめましょう、クラウス。これ以上続けたら、本当にあなたを傷つけてしまいます」
眉を落とし、困り果てた声色でそう言うのは、初代聖王『オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』。
「行かせませんッ!!　ここを通せば、私はあなたを見殺しにすることになるッ!!」
男女の内の１人、初代覇王『クラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルト』は剣を構え、自分よりも二回り以上小さな女の子の行く手を阻んでいる。
オリヴィエはその手に何も持っていない。それどころか、その両手は義手だ。それでも、オリヴィエが一歩踏み出すと、クラウスは半歩後ずさりする。
それは単純な実力差もあるが、クラウスがオリヴィエを傷つけたくないと思っているからだ。そしてそれは、オリヴィエも同じだ。
この２人は、敵味方で殺し合っている仲ではなかった。
「だけど、私は行かないといけないんです。私が『ゆりかごの王』になれば、この戦を終わらせることが出来るかもしれない」
「『かもしれない』実験のために、全てを失うつもりですかッ!!」
剣を投げ捨て、必死に説得を試みるクラウス。
「あんなものは単に玉座を守る操り人形です!!　二度と船から降りられない!!　自分の意思で体を動かすことすらできなくなるッ!!『ゆりかごの王』になるとはそう言う事なんですよ!!」
「それでも、です」
オリヴィエの意志は固かった。長く続いた戦いを、この戦乱の世に平和をもたらせるのなら、オリヴィエは迷わない。

表情は変わらず、困ったような笑顔だ。それは気持ちが変わっていないことを表していた。
「お願いですから話を――――」
言葉による説得はもう出来ない。そう判断したクラウスは、大きく踏み込んだ。自らが使う覇王流、その技法を使った最高の技。覇王断空拳だ。
「――――聞いて下さい!!」
しかし、クラウスの全力の攻撃は、あっさりと受け止められてしまう。
「もう決めたことなんです。私がやらなければ、他の誰かがやることになります。もともと私は、■■■■のくれたこの腕と『聖王核』が無ければ生きることすら出来なかったんです。今までみんなと暮らせて、溢れるくらいに幸せでした。だから、もういいんです」
あまりにも綺麗な笑顔だった。自分の運命を受け入れた顔だ。
「よくありませんッ!!」
クラウスは泣きそうになりながらも拳を振るが――――結果は分かり切っていた。
去り行くオリヴィエの背を、薄れゆく意識の中で考えていた。
「(私の力は、私の拳は、彼女の笑顔を曇らせることも出来ないほど頼りなくて……止められなかったのは私の弱さが原因だ)」
だが、だけど。
「(いったい誰が彼女をここまで強くした？　ここまで自分を貫く強さを与えたのは誰だ？　誰が彼女にこんな運命を強いた？)」
――――――

――その記憶は、試合中のアインハルトと、観客席で応援しているヴィヴィオ、２人が共鳴して、共有していた。
自分のものではない記憶が強引に流し込まれる、あるいは思い出される未知の感覚に、ヴィヴィオの意識が一瞬遠のいた。
「っ!? ぁ……っ！」
「ヴィヴィオ!?」
「大丈夫!? どうしたのっ!?」
「どっ、どうしましょうか……！」
「とりあえず大人の人に連絡しないと……」
リオとコロナが心配して駆け寄る。
ミウラは突然の事態にわたわたして、ユウキは比較的冷静に端末を取り出し、連絡を取ろうとしていた。
そして、戦っているアインハルトは、
「エレミアァァァッ!!!」
「えっ!?」
咆哮と共に、ビルドバーニングの青いクリアパーツが、燃えるような赤に変わっていく。
それはアシムレイトと呼ばれる機能だった。。
原作の『ビルドファイターズトライ』では、ガンプラファイターが強力な自己暗示をかけてガンプラと五感を共有し、その機体性能を向上させる現象のこと。
この世界でも強烈な集中力によって、ガンダムの性能を最大以上に引き出す現象のことだ。
それがアインハルトの精神に反応して作動していた。相手への強烈な闘志。明鏡止水とは程遠いものによってだったが、確かに作動していた。
「あああぁぁぁぁぁぁッ!!!」
さらに受けたダメージはティオによって回復される。
「次元覇王流――疾風突きッ!!」
まさに疾風のような攻撃。先ほどよりも圧倒的にスピードもパワーも上昇している。

その衝撃はリングの外にも伝わっているが――――エレミアのガードを崩すことは出来ない。
「聖拳突きッ!!　蒼天紅蓮拳ッ!!　聖槍蹴りッ!!」
敵を射抜く拳、錐揉み回転を加えたアッパーカット、宙に飛び上がった勢いを利用した鋭い蹴り。そのすべてを、エレミアは最小限の行動で回避する。
「と、とと……!」
強引な攻めに、エレミアも眉を寄せる。
「流星螺旋――――」
アインハルトが大きく振りかぶった。突進するイノシシの様に攻撃しか頭にない行動。大きく開いた胴体がエレミアの目の前に晒される。
「君はちょう落ち着こうか？　――――シュペーア・ファウスト」
「ッ!!??」
アインハルトの体が破壊された。
突き刺さった拳はガンダムの装甲をいともたやすく破壊した。その下にあるＢＪも貫通し、右肺を守っていた肋骨を全てへし折る。その痛みの再現がアインハルトを襲う。
《リングアウト、ダウン!!　チャンピオンの打撃がアインハルト選手に直撃!!　アインハルト選手へのダメージはあまりにも甚大!!　触れるものすべてを砕く破壊の鉄腕に、全身を破壊されていますッ!!》
あまりの痛みに、起き上がれないアインハルト。エレミアも追撃することはない。なぜならもうすぐ――――
《そしてここで第1ラウンドが終了!!　勝負は次のラウンドに持ち越されますッ!!　いえ、もしかするとこのラウンドで試合が終わってしまうかもしれませんッ!!》
エレミアの圧倒的な試合展開に、会場は沸き立つ。
そんな中、眩暈が収まったヴィヴィオは席に座り直していた。
「やっとインターバルになったけど……ヴィヴィオ、本当に大丈夫？」
「う、うん。ちょっと眩暈がしただけだから」
まだ少し顔色が悪いとはいえ、調子は元に戻っている。

「（ほんの少しだけど、オリヴィエの思い出が私にも見えた……どうして？　今まで思い出すことなんてほとんどなかったのに……）」
　聡いヴィヴィオは、突然人が変わってしまったように攻撃を始めたアインハルトと、自分の異変を結び付けずにはいられなかった。
「（やっぱり、アインハルトさんも昔の記憶を……）それよりも今はアインハルトさんのことだよ！」
「そうだよね……大丈夫かな？」
　ヴィヴィオは、今は試合の心配をすることにした。
「第1ラウンドから熱い展開ですね、チャンピオン！」
　エレミアのセコンドのエルスは、興奮した様子でタオルを渡す。
「それにしても、アインハルト選手とは過去に何かあったりしたんですか？」
「ウチの方には心当たりが無いんやけど……」
　今の様子で試合を続けるのはやめたほうがいい。そう判断したエレミアの全力に近い攻撃だった。
　エレミアの視線は、アインハルト側のベンチに向けられているのだった。
「いったいどうした？　まるっきりらしくねぇ展開だぞ！」
　ノーヴェとクロによって運ばれたアインハルトは、目をつぶって荒い息を吐いていた。
「とにかく落ち着け！　練習でしてきたことを思い出せ！」
「それもあるけど……クラッシュは大丈夫なの？　試合を止められてもおかしくないと思うんだけど」
　クラッシュシミュレートは痛みの再現であり、実際にケガをしているわけではない。なので痛みを無視してしまえば、問題無く動けるのだ。
　だが、そのやり方はスポーツとしてあまり認められていない。ルールでは規定されていないが、審判には試合をストップさせる権限があった。
「アインハルト選手は大丈夫ですか？　厳しいようでしたら棄権も……」

当然の仕事として、審判はベンチに横たわっているアインハルトの様子を見に来る。
「大丈、夫です……っ。ティオ、お願いします……っ」
アインハルトが光りに包まれる。
ティオの働きによって、アインハルトのライフが大きく回復する。それだけではなく、クラッシュまで完全回復していた。
さらに、アシムレイトは継続されている。それはアインハルトの気持ちが途切れていない証拠だった。
「やれます」
「おいっ、ティオの回復補助にも限界はあるんだ！　もう無暗に突っ込むなよ!!」
「……すみません」
そう言い残し、アインハルトはリングへと歩いていく。
「聞いてないわね、アインハルト」
「そうだな……」
生返事だったのは2人ともよくわかった。
「(目の前のエレミアが悪い訳じゃない。オリヴィエに鋼の義手を送り、戦闘技能を教えた昔のエレミアが悪いわけでも無い。だけど、それでも———)」
一足先にリングにのぼり、エレミアに睨みつけるような視線を送るアインハルト。その様子を見て、エレミアはとあることを確信していた。
「なんとなくわかったよ、ウチのご先祖様関連や。ご先祖様同士になんや因縁があるとか、恨みを買ってるとか、そんなんやと思う」
「そんな……」
そう言ったことに無縁のエルスは、それ以上の言葉を繋げられない。
「ほんなら、ウチが受け止めたげなアカン」
「チャンピオン！　だからと言って手心を加えたりとかは……」
「あー、それは心配あらへん……ウチはずっとエレミアやから」
意味深なことを言い残し、エレミアはリングへと向かう。

アインハルトがはるか昔の、初代覇王の記憶を受け継いでいるように、エレミアも先祖から受け継いでいるモノがあった。
ただしそれは個人の記憶ではなく――――先祖から続く、数多くの『エレミア』達の、『戦闘経験だけ」を受け継いでいるのだ。
最低でも５００年分の経験と記憶が、エレミアの心と体に刻まれているのだ。
アインハルトとエレミアはよく似ていた。
望まずして受け継いでしまった記憶という鎖に縛られ、過去と未来に迷いながら今を生きているところが。
《第二ランド……開始ですッ!!》
ラウンドが始まっても、無暗に突撃するようなことは無かった。
アインハルトも少しは頭が冷えたらしい。もしくは、思考が一回りして逆に冷静になったのか。
エレミアもただ試合を楽しむのではなく、自分の運命と向き合う覚悟を決めていた。
「君の望みは？」
「全力のあなたに勝利することです。そしてその上で、あなたのご先祖様について伺いたいことがあります」
「うん。ほんなら、ヴィクターに聞いてみよ。過去の事なら、ウチよりもヴィクターの方が詳しいし」
別にそんな約束なんてしなくても、エレミアはその場を設けるつもりだった。しかし、これは大事な儀式である。
さっきエレミアは、自分が勝った時の要求を言った。自分が勝ったらお話しようという要求を。
しかしアインハルトは何も言わなかった。勝手にしろと言っただけで、何も求めなかったのだ。それを今、求めた。
結果として、どちらが勝とうがゆっくりお話しすることに変わりないのだが、それは些細な問題だ。
これで２人は対等になった。
「まあ、それはそれとして……」
「っ!?」

瞬きの瞬間に踏み込まれていたアインハルト。
とっさに繰り出した右ストレートは、エレミアにとって格好の餌だ。
捻られながら、一本背負いで床に叩きつけられる。
肺の中が一気に吐き出されると同時に、背中は割れるような痛みを、右手は砕けるような痛みを訴えてくる。
「い、っ……！」
「全力のエレミアを相手にして、五体満足で帰れると思ってもらったら困るよ」
しばらく呼吸ができなくなりむせているアインハルトに、エレミアは冷たく告げる。
『全力のエレミアに勝利する』とのたまったアインハルトに、エレミアは一切の手心を加えない。全てを破壊する『鉄腕』は、たった一撃でアインハルトに深刻なダメージを刻み込む。
背中はともかく、アインハルトの右肘には複合骨折のシミュレートが入るが、
「たとえ五体が砕けようとッ!!」
その怪我はティオによって瞬時に回復する。
「どれだけ血を流そうとッ!!」
起き上がり構えを取り直すアインハルト。
「守るべきものを守りきる！　それが覇王の意思です!!」
2ラウンドは始まったばかり、しかしお互いに全力のぶつかり合いだ。この試合、もう長くは続かない。それだけは確かなことだった。

インターミドル　アインハルトＶＳエレミア④

「（オリヴィエに鋼の義手を送り戦技を教えた『エレミア』の末裔ッ!!
この人に勝てれば、私はきっと――――！）」
アインハルトの顔つきが変わる。試合をするときの冷静な顔ではなく、戦場で戦うための、敵を見る表情だ。
「んー」
そんなアインハルトにエレミアは渋い顔になる。
「ご先祖様を誇りに思うんはええことや。そやけど――――君が生きてるんはご先祖様のためだけか？」
その言葉に、アインハルトはたまらず反論する。
「ッ！　私は私です!!　私は自分のためにここにいて、自分の意思で戦うだけです!!」
「そうは見えへんからゆーてるだけや。これは単なるお節介」
我慢の限界とばかりに、アインハルトが飛び出した。
アシムレイトによって燃え盛る炎のようなプラフスキー粒子の尾を引き、突撃する。素晴らしい速度だ。並の選手では反応することすらできないだろう。
しかし、
「あああああ!!　落ち着けアインハルトッ!!」
「無暗に突っ込まないでッ!!」
ノーヴェとクロは声を張り上げる。
この程度の攻撃では、エレミアのカウンターの良い餌食だ。
予定調和と言わんばかりに、エレミアは拳を繰り出す。
「っ!!」
しかしアインハルトは、周りが見ているよりも冷静だった。カウンターを予め読み、途中で体の軌道を変えたのだ。
見事、エレミアのカウンターは空振りに終わる。カウンターを読み、そこに自らの攻撃を合わせる。コロナとの戦いを思い出させるが――――相手は元チャンピオンだ。
アインハルトの顔面に、人差し指が向けられた。次の瞬間、アイン

ハルトの視界が閃光で染まる。
それはエレミアが発射した高速砲撃だ。
吹き飛ばされるアインハルトの左腕を掴み、その場に引き留める。逃がさない、距離はとらせない。ここまで近寄ってきたのなら、存分に『鉄腕』の技を受けて行け。
「せーの――――」
「は、か……っ!!」
ガンダムの装甲なんて関係ないとばかりに、アインハルトの鳩尾に拳がめり込む。
掴まれたままになっていた腕は、不自然に捩じられたせいで脱臼のクラッシュが入っていた。
「もういっこ!」
さらに右肩に手刀が振り下ろされる。
装甲が完全に破壊され、赤い粒子がまるで血のように噴き出した。
《アインハルト選手ダウンッ!! ジークリンデ選手の『鉄腕』を前に、アインハルト選手撃沈!!》
残っていた右腕も手刀によって破壊された。一瞬で両腕を破壊され、受けたダメージも併せて、気絶寸前の状態になる。
「(あの人は、まだ力の半分も出していない。エレミアの神髄を見せてもいない。あの時と同じだ。彼女の微笑みを曇らせることも出来ないまま優しく制されて――――あの頃からずっと続いていた痛みが、また……っ)」
朦朧とする思考の中、走馬灯のように蘇るのは一番胸に焼き付いた記憶。
祖先の覇王イングヴァルトが、聖王オリヴィエに負けてしまう場面だ。
「(目の前の相手に戦ってすらもらえない。すべてをかけた戦いの中ですら、哀れまれ微笑まれてしまう……っ)」
だが、記憶の中のそれは戦いにすらなっていなかった。終始あしらわれ、傷一つつけられず、オリヴィエの背中を見送ることしか出来ない場面だ。

「(それは私が弱いから)」
いくら技を磨いても、絶対に負けられない場面で、いつも負けてしまう。まるで呪いのように、自分には勝利の女神は微笑まない。
「(だけど、認めちゃダメだ！　諦めたらまた終わってしまう！　今までの努力も、翔さんから頂いた力も！　すべてッ!!　今立たないと終わってしまうんだから――――!!)」
両腕の痛みをこらえ、歯を食いしばって立ち上がった。
《た、立ちました！　そしてこの回復能力!!　まだまだ試合は分かりません！》
自らと融合しているティオの力で、クラッシュだけでなく、受けたダメージの半分を回復するアインハルト。
ビルドバーニングの装甲までは治せないが、まだまだ闘志は萎えていない。
「私が君と話をさせてって言ったんはな、君がもし自分の過去に縛られてるんやったら――――」
戦場でこれ以上喋ることは無い。
突撃するアインハルトの拳で、回転エネルギーが唸りを上げる。
「流星螺旋拳ッ!!」
「――――それは、とても悲しい事やから」
纏っていた回転のエネルギーは、受け止められた瞬間に霧散していた。
「ッ!!」
捕まれた拳を起点に体が引き寄せられ――――
《腕十字ッ!!　元チャンピオンの締め技がアインハルト選手を苦しめます!!》
「無くなった国や、いなくなった人のために、君が人生を犠牲にするんは間違ってる。それに何より――――ッ!!」
「う、あああああぁぁぁっ!!」
おしゃべりに夢中になっていたエレミアは、締め技に力で対抗してきたアインハルトに息を呑む。
耐えきれなくなったのは、アインハルトのＢＪだった。

ＢＪを破り、何とか脱出するアインハルトだったが、その首にするりと腕がまわされる。
《今度はフロントチョークッ!!　これは完全に決まっています!!》
　司会者の言葉通り、今度は力で対抗するわけにもいかない。意識を遮断する締め技に、アインハルトの視界が暗くなり始める。
「君の戦いは痛々しすぎる」
　今度はしゃべっていても締め付けは一切緩まない。
「過去にとらわれ過ぎて体と心を痛めつけて……自分の人生を犠牲にしてご先祖様が喜ぶと思うか？」
　何か言われているのは分かるが、技から抜け出すのに必死なアインハルトは内容までは理解出来ない。
「今日の試合は私の勝ちや。もう痛くせえへんから、眠ってええよ。起きたら、もう少しゆっくり話そ？」
「（苦しさが消えていく……何も聞こえなくなっていく。このまま眠ってしまえたら）」
　アインハルトの中にいるティオが必死ににゃーにゃーと鳴いて、落ちてしまわないように頑張っている。
　またしても意識が無くなり始めるアインハルト。観客の声がだんだん遠くなり、視界がぼやけ始める。さきほどは覇王の記憶が想起されたが、今回は。
「アインハルト――――!!」
　ぼやけ始めた意識の中に、とある男の子の声が確かに聞こえていた。
「空破……弾――――」
「っ!?」
　かろうじて意識を繋ぎとめたアインハルトは、エレミアの横っ腹に打撃を炸裂させる。
「あそこから抜け出すなんて……」
「締め技の対策はしていたんです……！　みんなにっ、みんなにしてもらっていた……ッ!!」
　チームメイトのみんなと一緒に、試合相手の対策を立てていた。そ

の時のことを思い出していた。
せっかくの対策も今まで全く生かせていなかったが、この土壇場で何とか生かすことが出来た。
そして、その原動力になったのは。
「(翔さんが応援に来てくれている！　もうこれ以上、無様なところは見せられないッ!!)」
「そっか……でも逃がさへんよ」
アインハルトは襟を掴まれる。
しかしこの流れも、みんなで練習した内容に含まれていた。
手ごたえが重くなり、エレミアは投げるのを諦める。投げの動作をキャンセルしたとは思えない速度で、今度は打撃に入っていた。
だがそれも。
「(ヴィヴィオさんとのカウンターのトレーニングッ!!)」
それよりも速く、鋭い拳を叩き込むことで黙らせる。
顔面に叩き込まれたことで少しよろめくが、倒れることは無いエレミア。それでも、会場は大歓声に包まれる。
《素晴らしいッ!!　アインハルト選手この試合初のクリーンヒットッ!!　ここから反撃が始まるのでしょうか!!》
「(みんなとの練習に救われた……一緒に戦ってくれているティオに、そして何より、翔さんの応援に……!)」
それは試合開始からずっと心配そうな顔をしていた聖天子様も興奮するほどだった。
「翔さん！　ストラトスさんが！　もしかするとここから逆転してしまうのでは?!　元チャンピオン相手に！」
「だといいんですけどね……」
今のは多分、偶然ハマっただけだ。練習は積んでいたんだろうけど、それでもアインハルトとエレミアとの実力差は歴然。ビルドバーニングの力をプラスしても、勝つのは難しいだろう。
それに、エレミアには『この先』があるはずだ。
「今、主様の応援で、持ち直したようにも見えましたが……」
「コッコロちゃんが見た通り、間違いないと思いますよ。ええ、絶対そ

うです……」
翔の横にいる2人はじっとりとした目をしていたが、翔はあえて気が付かないふりをした。
そんなまさか、この歓声の中、翔の声を聴き分けるなんて出来る訳ないと思っていたからだ。
そしてそれ以上に、試合の行方が気になっていたからだった。
「んん、今のはちょっとマズいか」
「ええ、マズいですわね」
観客席にいるハリーとヴィクトーリアはお互いに同じ感想を抱いていた。今のカウンターは賞賛に値する『うまい』ものだったが、それがある物を呼び起こしてしまう。
「みんな、しっかり見ておくんだよ」
去年『ソレ』にやられたミカヤは、ヴィヴィオ達に言う。
「今から『エレミアの神髄』が見られるから」
アインハルトのこれからの運命を思ってか、その表情は暗いものだった。

ヴィクトーリアがエレミアと初めて会ったのは7年前、場所はヴィクトーリア家のお屋敷だった。祖先からの繋がりでエレミアを保護したとの報告を受けたのだ。
当時、ヴィクトーリアが10歳、エレミアが9歳の頃。
その時のエレミアは、世界のすべてに興味を無くしたような目をしていた。たんにませた子供ではなく、実際に経験してきたと言わんばかりの『凄み』を持っていた。
ヴィクトーリアはどうしてそんな顔をしているのか。そんな分かりきったことを聞いた。

答えは目の前にあった。それでもエレミアは答えた。
「私が触れると、みんな壊れてしまうから」
彼女が望まずして行ってしまった破壊によって、部屋の壁がなくなっていたのだ。

それから7年。望まぬ記憶と運命を背負わされた少女は、超一流の競技選手になった。
人を傷つけるのはルールの範囲。光弾射撃と投げ技、締め技のエキスパートとして。『全力モード』では受け継いだ『鉄腕』の力を振るう圧倒的な戦力の持ち主。
「だけどジークには試合で見せない姿がある。ベルカ最古の戦場格技……人体破壊技術の継承者にして遂行者」
「『エレミアの神髄』ってヤツだな」
「ええ」
ハリーの言葉にヴィクトーリアが頷く。
「私も去年、あのジークに倒されたんだよ」
ヴィイヴォ達に聞かせているミカヤの瞳は細められていた。
「引き際は見誤るなよ、ノーヴェ……!」
いくら心配に思っても、1観客に過ぎないミカヤにはどうすることも出来ない。出来るのはセコンドと務める親友に祈ることだけだった。
フィールドの上で睨み合う両者、止めることが出来る者は誰1人としていない。
エレミアが腰を落とした。
「アインハルト！　反撃も防御も無しだッ!!　絶対に当たんじゃねぇぞッ!!」

「はいッ!!」
ノーヴェの注意に頷いた瞬間、
「ガイスト・クヴァール――――」
「消え――――!!」
上を取られていたアインハルトが全力で身を捻る。そのおかげでエレミアから、彼女の振るった左手から逃れることが出来た。
直後、アインハルトのいた場所が破壊され――――削り取られていた。
その破壊はリングの保護フィールドを超え、外壁にまで亀裂を入れる。
《け、削れた……!! チャンピオンの爪が、指先がッ!! リングを削り取りましたッ!! アインハルト選手の装甲も、まるで引き裂かれたように消失していますッ!!》
その言葉通り、自分の体にこそ当たらなかったが、ビルドバーニングの胸部装甲が大きく消滅していた。
「(魔力付与打撃……ミウラさんの『抜剣』に似てるけど……)」
そのレベルは全く違うものだった。ミウラの抜剣は斬撃だった。切り裂くような鋭さがあった。しかし今の一撃は削り取る、消し飛ばす一撃だ。
「なのは、アレって?」
見慣れない魔法に、フェイトはなのはに問いかけた。
「うん……たぶん、魔法分類的には『イレイザー』。消し飛ばす一撃だと思う」
なのはもあの練度のイレイザーは見たことが無いために断言はできなかったが。
「去年のミカヤさんの試合でも使ってたよ。あの時はクラッシュシュミュレートを超えて、ミカヤさんの右手から先が本当に粉砕されたの」
「ええ!?」
「そのせいで剣が握れなくなってミカヤさんは敗退。もちろん試合中の怪我だからエレミアさんに責任は無かったんだけど、そのまま出場

辞退」
　そこから消息不明になってしまったのだ。
「つまりは、飛びきりヤバいモードだって事だ」
　翔も隣にいる女の子たちに説明していた。
「そんな……そんな危険な技を……」
「しかしこれは競技、ですよね？　そんな技を使っても良いのですか……？」
　確かにな。スタンドで言えば、『ザ・ハンド』みたいなものだからな。攻撃性能はまるっきりあれだ。
　本体のスピードがある分、こちらの方が強いまである。
　一応は非殺傷設定だからよほどのことは起こらないと思うんだけど……去年起こってるからな、よほどのことが。
「ノーヴェ……！」
「分かってる……っ！」
　この攻撃を体験したミカヤからは、エレミアがこのモードに入った時はいつでもタオルを投げられるように準備しているようにと言われていた。
　次の攻撃が来る。
『イレイザー』の魔力を纏った左手が、アインハルトに向けられた。
　たった1人で駆け抜けた数多の戦場の記憶。目の前には幾戦もの兵士。何人いようとも関係ない。
　眼下の命をすべて刈り取る。『黒のエミリア』の鉄腕の前に、あらゆる命は価値を持たない。
　アインハルトは、とっさに反撃してしまった拳を受け止められ、引き寄せられる。
「（当たっ――――あ、れ？）」
　一瞬の4連撃。アインハルトの両肩、両足の付け根が破壊され、四肢の感覚が無くなる。だが幸いにも、これはクラッシュシミュレートの範囲内。試合が終わればなくなるものだ。
　アインハルトには痛みよりも先に悪寒が走る。
　四肢を奪われ、何もできずに倒れるその一瞬、放っておけばダウン

勝ちできるはずの相手に――――エレミアは大きく振りかぶっていた。
「マズいッ!!　ノーヴェッ!!」
「アインハルトさんッ!!」
　ミカヤやヴィヴィオ達、
「馬鹿ジークッ!!　防げねぇ相手にそんな大技かましたら……!!」
「ジークッ!!!」
　ハリーやヴィクトーリア達がいくら叫んでもフィールドには届かない。
「ノーヴェッ!!　タオルをッ!!　早くタオルを投げてエエエッ!!」
「わかってる――――!!」
　クロの必死の叫びにノーヴェは振りかぶるが、どう考えてもエレミアの爪先がアインハルトを捉える方が早い。
「(クソッ!　何やってんだアタシはッ!!　もっと早くにやってれば……!　間に合わねぇ……ッ!!)」
　その時、アインハルトの中にいるアスティオンが鳴き声を張り上げた。
《にゃあああああああ!!!》
「ッ!!　旋風竜巻蹴りッ!!」
　ぎりぎりのところで次元覇王流の技を出すことに成功するアインハルト。体を回転させながら繰り出す蹴り技によって、イレイザーの腕を何とか反らす。
　周囲に巻き起こった突風がエレミアの肌をなでると、その瞳に正気の色が戻った。
《残した!?　チャンピオン必殺の一撃は、直撃に至らず!　しかしアインハルト選手にはダウン判定だッ!!》
「ティオ……!　助かりました。ありがとう……!」
　自らの相棒の全力の治癒。魔力のほとんどを使ってしまったが、それでも大怪我を負う事だけは避けることが出来た。
「ティオ?」
《にゃぁ……》
　お礼を言っても弱々しい鳴き声しか返ってこない。

それもそのはずだ。ダメージ緩和から回復まで、特に被弾の多かったこの試合で、アスティオンも常に全力だったのだ。
アインハルトの魔力が底をつくということは、その魔力で動いているアスティオンも機能を停止するということだ。
「ティオ、私はもう平気です！　後は休んでいて……」
そう言って、アスティオンの機能を停止させる。
ビルドバーニングも度重なるイレイザーの攻撃によって装甲が削られ、あらゆるところから火花を散らしている。
こちらも、機能を停止して重い拘束具になるのは時間の問題だった。
だが目の前にいるエレミアの空気は暴走する前に戻っている。後は自分の力でやり抜くだけだ。
「最後まで……！」
「……っ」
《アインハルト選手立ちました！　ＢＪも装甲もボロボロですが、戦う意思は萎えていない！　チャンピオンは静かに構えをとります!!》
圧倒的に有利なのはエレミアのはずなのだが、今行ったことに対する負い目があるのか、その表情は曇っている。
「（何も成長できていなかった。たくさんの人に出会って、好きな人までできたのに。結局は過去に囚われたままだ。せめて、せめてこの一撃だけは――――）」
もはや技を放つ魔力も残っていなかった。すべての魔力を右手に注ぎ込み、
「うあぁぁぁぁ!!」
「……!!」
アインハルト渾身の拳は、余力を残しているチャンピオンには通用しなかった。
一撃に全てを賭けていたアインハルトとは違い、エレミアには二の拳があった。
鳩尾を打ち抜かれたアインハルトは、残り少ないライフをすべて失い――――倒れた。

《試合終了ッ!!　終わってみればチャンピオン盤石の勝利！　しかしアインハルト選手もルーキーとは思えない大活躍を見せてくれました!!　もはや全国レベルの選手として注目を集める存在となるでしょう!!》

２人の間にある事情を知らない司会者や観客は、素晴らしい試合に熱狂していた。関係者は、とりあえず大きな怪我が無く試合が終わったことにホッと胸を撫でおろしていた。

「ぷー……終わったー……」

最後の瞬間は息をするのも忘れて試合を見ていた翔も、その一人だ。

「素晴らしい試合でしたね……」

「はい……負けてしまいましたけど、良い試合だったと思います」

「それにしてもジークリンデ様、凄まじい実力の持ち主でございます。あのアインハルト様があそこまで一方的にやられてしまうとは」

聖天子様、雪菜、コッコロも、思い思いの感想を述べていた。

「……」

「……はぁ、先輩」

「何だ？」

「そんなに気になるなら、見に行ってくればいいじゃないですか。聖天子様は私たちが見てますから」

雪菜にはお見通しだったようだ。

呆れたような、おもしろくなさそうな顔で告げられる。

「ごめん、ちょっと行ってくる。すぐに戻るから」

ざわつく心を落ち着かせ、翔は立ち上がるのだった。

インターミドル　反省

「ティオは今、リインさんが預かってくれてるよ。魔力を補給して少し休ませておけば、すぐに良くなるってさ」
「はい……」
「お前も、ケガが無くて良かったよ」
ノーヴェの言葉に、アインハルトは力なく頷いた。
医務室に運ばれたアインハルトは、すぐに目を覚ましていた。最後の最後、正気に戻ったエレミアの攻撃は、アインハルトの残りライフをギリギリ削り取る程度のものだった。
大きな怪我も無く、無事に試合が終わったのである。
確かに、途中の『鉄腕』の攻撃を受けていれば分からなかったが。その点に関しては、ノーヴェはホッとしていた。
目を覚まして完全に冷静になったアインハルトは、今日の失態を深く反省していた。
「今日の私は自分の過去にとらわれて……競技選手としての本分も、周りの人のことも、今日は翔さんが見に来ていることも、全て忘れてしまいました。チームのみんなの夢を、受け取ったはずだったのに……っ！」
「謝るな。お前は悪くない。チビ達だって、お前を責めたりしないさ。翔だって、別に怒ったりしないだろ？」
涙を浮かべるアインハルトの頭を、肩に抱き寄せるノーヴェ。
「それにアタシも、練習を重ねるたびにどんどん強くなっていくお前達に、試合で観客を沸かせてるお前達に、チビ達の憧れの先輩をしっかりやってくれてるお前達に、すっかり甘えちまってた」
アインハルトも綺凛も、大会に出るのは初めてなのに、自分よりも年下のヴィヴィオ達に気をかけていた。
そのおかげで、同じく大会初参加のノーヴェは自分の仕事に専念出来たのだ。もっと自分に余裕があったら、何かのケアが出来たかもしれない。ノーヴェはそう思ってしまう。
「今日の敗戦はお前だけの敗戦じゃねぇ。指導者としてのアタシの敗

戦でもある」
乱暴に抱き寄せられたが、それに逆らわず、涙を流すアインハルト。
「うんうん。ノーヴェがいれば、アインハルトちゃんは大丈夫かな」
「ミカヤさん？」
「うん？　ああ、君か。君もアインハルトちゃんを励ましに来たのかな？」
「そう言うミカヤさんこそ」
そこに、こっそりと忍び込んでいた翔が到着する。大会関係者ではない翔は、見つかればすぐに摘まみだされてしまう。
だがそれは、すでに試合が終わったミカヤも同じだ。
トップ選手であるミカヤは翔と比べれば、軽い注意で済むかもしれないが。
「ノーヴェに加えて君までいれば安泰だね。じゃあ私は、もう1人の方を励ましてくるとしようかな」
扉越しに聞いていたミカヤは、寄りかかっていた壁から背中を離す。
軽く手を振りながら、どこかへ行ってしまうのだった。

ミカヤさんの背中を見送った俺は、医務室の中をこっそり覗き込んだ。
中にいるのはアインハルトとノーヴェさんだけ。どうやら常駐のスタッフはいないらしい。負けた選手に気を使って席を外しているのかもしれないが、俺にとっては好都合だった。
２人して抱き合って涙を流している中に声をかけるのは大変勇気がいるが、ここにずっといてもしょうがない。

心の中で謝罪しつつ、部屋の中に入る。
「アインハルト、ノーヴェさん」
「えっ、あっ、翔さん……!?」
「あ、おまっ、どうしてここに!?」
俺の登場に、２人はたいそう慌てていた。
「アインハルトの様子が気になって」
「そりゃ、そうかもしれないけどな……っ」
ノーヴェさんは凄まじいスピードでアインハルトから離れ、腕を組んだ。顔が赤くなっているが何とか取り繕いたいらしい。
その後ろで、アインハルトは涙に濡れた自分の目を擦っていた。
やっぱりタイミングが悪かったか。
「や、アインハルトが元気そうなんで、俺はこれで」
アインハルトがここから持ち直すことを、俺は確信している。特に大きな怪我がないことを確認出来れば、俺は満足だ。
「バ、バッカお前！　アタシを気にすんな！　ほらほら、せっかく会いに来たんだろ！」
ノーヴェさんは俺の後ろに回り、グイグイと背中を押してくる。
でも、俺への善意での行動ではなく、恥ずかしさをごまかすためってのが理由の９割を占めているだろうな。
「じゃ、アタシはこれで！　綺凛の試合があるからな！　アインハルト、これからも頑張ろうぜ！　翔も、綺凛の試合までには観客席に戻れよ！　じゃあな！」
残された俺とアインハルト。良いというのなら遠慮なく。
「アインハルト、体の調子はどうだ？」
「はい。少しだるいですけど、ケガはありません」
「そっか」
魔力を限界まで使って、アシムレイトまで発動させていたんだ。疲れていて当然。むしろその程度で済んで良かったとすら思う。
原作ではアシムレイトを使うまでもっと時間がかかっていた。手に入れてからのこの短期間で発動させたのは凄いんだけど……自由には使えないだろうな。

試合の様子から見ると、自分の意思で発動したってわけじゃないだろうし。明鏡止水の心には程遠かった。
でも、俺ももう少し説明してあげても良かったかもしれない。原作と変わらない部分はなるべく手を出さないようにって思って、今回は何も言わなかったんだけど。
こうなることがわかってるんだったら、少し口を出すべきだった。言ったところで、どれだけ効果があるかわからなかったとはいえ。
「ごめんな。俺ももう少しアドバイス出来ていれば」
「違います。私が未熟でした。でも、最後の方には皆さんに、何より翔さんの応援に助けて頂きました」
「俺の声援？」
「はい。チャンピオンの締め技の時に聞こえてきたんです」
「流石にわからないでしょ。試合中には」
「本当ですっ、何故かはわからないんですけど、本当に聞こえて……あっ！」
アインハルトは何かに気が付いたのか、顔を真っ青にする。
何事かと思っていると、アインハルトは勢いよく頭を下げた。
「ご、ごめんなさい!!　翔さんに頂いたガンダム、壊れてしまって……！」
「ああ、その事ね」
アインハルトは何度も頭を下げてくる。
確かに試合での損傷で、ビルドバーニングは最終決戦もかくやという姿になってしまった。もはや装着しないで戦った方が強いと言えるくらいまで。
アインハルトには俺の能力を説明している。別にお金をかけて手に入れた道具ではなかったし、何ならアインハルトのおかげで手に入れた感まである。
今までは手に入れたＭＳの整備は出来なかったんだけど、ついこの間、と言うか今朝、その問題が解決されたのだ……昨晩のオルタのおかげで。

ＭＳ修理ドッグ（ダイオラマ球）
手に入れたＭＳのメンテナンスを行うことが出来る施設。
ここに格納しておくと、自動的に修理される。
ガチャ回数を消費することで即時の修理が可能。
また、別アイテムである『ハロ（修理用）』を使う事で、修理スピードを速めることも可能。

気配遮断ＥＸ（行為中）
女性との行為中、まったく関係ない第三者から介入を受けることが無くなる。たとえ外でしていても、気づかれなくなる。

このアイテムのおかげだ。
ＭＳ修理ドッグ（ダイオラマ球）に入れておけば、多分大丈夫だろう。
試しにビルドバーニングを受け取ってドッグに放り込んでみると、携帯に修理中の通知が届いた。残りの修理時間が1週間と表示されている。あの大破の状態で、大体修理に1週間かかるってことだな。
つまり、基本どんな状態でも、ＭＳは修理出来るようになったってことだ。
気配遮断ＥＸ（行為中）については、はい、あんな外でしてたから手に入れたんじゃないでしょうかね。
その内役に立つのではないでしょうか。
ＭＳは修理出来ることを伝えると、アインハルトはホッと胸を撫でおろしていた。
「良かったです。ＭＳは壊れたら直せないと聞いていましたから」
「ん、ま、偶然ね。タイミングが良かったんだよ」
「……？　……もしかして、私達と……えっち……した後、誰かとしたんですか？」
アインハルトはジトッとした目を向けてくる。

非難、とまではいかないが、おもしろくなさそうな顔をしている。
「別に、分かっていたことですから。翔さんのことを好きな人は他にもたくさんいて、翔さんもそれに応えているってことは」
「うん」
アインハルトの言葉を甘んじて受け入れる。どんなに言い繕ってもそれは事実だ。
「その分、私ともして頂ければ……」
アインハルトは消え入りそうな声でそんなことを言ってくれる。
「それは男冥利に尽きるな」
「あっ、いえ！　翔さんもお忙しいでしょうし！　他の方との兼ね合いもありますから！」
アインハルトは真っ赤になって手を振る。
さっきまであんな激戦をしていたとは思えないな。あの真面目だったアインハルトがねぇ。流石は中学生の性欲か……。
「もうっ、私はもう大丈夫ですからっ。綺凛さんの応援に行ってあげて下さいっ」
「分かった分かった。そうするよ」
綺凛の試合まで時間が無い。アインハルトに言われた通り、俺は客席へ戻るのだった。

「またやってもーた……」
試合が終わり、シャワーを浴びていたエレミアはそう呟いた。
「公式試合じゃ使わへんって決めてたのに……」

イレイザーの技は封印していたはずだった。あれは『エレミアの神髄』の象徴ともいえる技。子供のころとは違い、めったな事が無ければ出てくることは無くなったとはいえ、今日のような、自分の奥底にあるモノを呼び起こすような戦いでは表に出てしまう。
まともに振るえば必殺、非殺傷設定でも場合によっては大怪我に繋がる。
それでも戦いから離れられないのは、エレミアの中にある５００年分の記憶のせいだった。
「あの子が避けてくれたから大ごとにはならへんかったけど……もし当たってたら、ウチはまた……」
思い出されるのは去年の記憶だ。
ぐしゃぐしゃになったミカヤの手と、運ばれてくる担架。呆然とするエレミアと、それとは関係なくアナウンスされる、エレミアの勝利。
「(いろんな人に救ってもらって、導いてもらったのに……あのころから、何にも変わってへんのかなぁ……)」
壁に手をついて頭からシャワーをかぶる。
「ん？　なんだ、まだいたのか。ずいぶんと長ぇシャワーじゃねーか」
「あ、番長……」
シャワー室に入ってきたのはハリー・トライベッカだ。隣のシャワーを使いだした。
「あれ？　試合は？」
「んなもんとっくに終わったよ。昨日のチビの方がまだ歯ごたえがあった」
「アハハ、そっか……」
「案の定、ボケッとしてやがるな」
「……ん」
髪を洗いつつ、ハリーは言う。
「まさかとは思うがテメェ、イレイザーを使ったことを後悔してやがんのか？」
「それは……」
「言っとくけどな、ああ、前にも言ったけどなぁ、お前はいずれ俺らが

倒す相手だし、俺らが目標にしてんのは『鉄腕』も含めたお前だ。そこんとこは分かってんのか？」
「それは……」
吐いた唾は？めない。
公式の場で見せた技を目標にされるのは当たり前だった。他の人にとってはチャンピオンの全力は『エレミアの神髄』なのだ。
もし試合で戦った時にアレを使わなければ、使わずに負けたのなら、それはつまり『手抜き』をしていることになる。
「私もそう思うよ」
もう1人、シャワー室に入ってくる女性がいた。
「ミカさん!?」
ジーンズに、上は脱いでさらしだけという恰好のミカヤだ。そしてその手に持っているのは、
「（刀!?）」
エレミアは体にタオルを巻いて向き合った。
持ち運びのための袋に入っているが、間違いない。この場にそんなものを持ってくるなんて――
「自分を負かした相手は、強い選手であってほしいというのもあるけどね」
腰を落とし、袋に手を添えるミカヤ。
「ちょ！　ま、待ってミカさん！」
「そんなこと言ってる場合かジーク？　もうミカさんの間合いだぜ？」
標的になっていないハリーは呑気なことを言っている。もちろんそれは理解しているエレミア。だが、いきなり襲ってくる理由までは理解出来ない。
「（でも、もう構えに入ってる。私は防具を付けてない。斬られ――）」
「ッ!!」
次の瞬間、空間を切り裂くような抜刀術が繰り出された。それと同時にエレミアの腕が魔力を纏う。

迫る斬撃を下から跳ね上げるように消し飛ばした。
「……あ」
「君の体が命の危機を感じると反射的に発動してしまう『エレミアの神髄』状態。ご先祖様がくれた大切なギフトなんだろう？」
ころころと転がるのは刀身の真ん中を消し飛ばされた刀――――竹刀の先端だ。
「（竹刀……ミカさんの殺気で本物に見えた……）」
「由来はどうであれ、君が手にしている力のすべてを私たちは目的にしている。選手なら、負傷はみんな覚悟の上だしね」
かつて破壊された右手首を振って見せるミカヤ。
「全力を出した君の力と技を超えて、次は必ず自分が勝つ。君に負けた人たちはみんなそう思っているはずだよ。もちろん私もだ」
それと同じくらい、エレミアにくよくよして欲しくない理由があった。
「それに、アインハルトちゃんも君と同じ痛みを背負っている。分かっているだろう？」
「そ、それは……」
確かに試合中は、みんながそうしてくれたように、今度は自分が導く側になろうと思った。
「だったら、迷っていてはいけないよ」
「……はい」
「……それならよかった」
満足そうにその場を後にしようとしたミカヤだったが、
「ああ、そうだ。忘れていたよ」
思い出した様に立ち止まって振り返る。
「今回の大会では戦えなかったからね。それは回復完了のお披露目だと思ってくれ」
「え……？」
すぐには意味が分からなかったが……その直後、胸元を押さえつけていたタオルが緩くなった。
「おお、神業」

「え、えええええええええええ!?」
ハリーは呑気に言うが、切られたエレミアはたまったものではない。
斬撃は防いだと思っていたのに、何と、タオルだけが切り裂かれていたのだ。
「ふふ、アインハルトちゃんはもう目を覚ましてるよ。早く上がっておいで。じゃないと、今度はヴィクトーリアに活を入れられることになるよ」
「……はい～」
しゃがみ込み、局部を隠すエレミアは、赤くなりながら答えるのだった。

インターミドル　綺凛ＶＳヴィクトーリア

「ごめん！　ギリギリだった！」
「先輩！　良かったです。戻ってきたんですね。見損なわないで済みました」
　席に戻ると、雪菜は心底ホッとしたという表情で迎えてくれた。
　本当にギリギリだった。リングでは綺凛とヴィクトーリアが向かい合い、試合が始まる５秒前といったところだ。
　や、それにしても、そんなにホッとした顔で迎えてくれなくても。
「いえ、その……」
　雪菜が顔を寄せてくる。
「いつまで待っても帰ってこなくて、もしかして、何かしてるんじゃないかと……」
「何かしてる？　……まさか雪菜。それはいくら何でも」
　俺の言葉に、雪菜は真っ赤になる。
「だ、だって！　先輩、アインハルトさんともしてるんですよね？　慰めるために色々言っているうちにそういう雰囲気になって……」
「だとしても、流石に今は無いだろ……」
　アインハルトとセックスしていて試合を見ていなかったとか、綺凛に対して失礼過ぎる。
　や、まあ、アインハルトも、色々と望んでいた節はあったけど。そこは毅然とした態度で断るのが大人ってものでね。
「クロさんやコッコロさんに手を出している先輩が言っても、全然説得力がありませんけどね。本当にいやらしいですね」
「それとこれとはまた別だから」
　そもそも、
「あそこでするなんて、俺は全然考えなかったけど。雪菜の方がいやらしいんじゃないのか？」
　雪菜といい、アインハルトといい、中学生の性欲って奴か……そうしたのは俺なのかもしれないけど。
「違っ……！　何言ってるんですかっ！　怒りますよ！」

雪菜は茹でダコの様に真っ赤になるけど、照れか怒りか分かんないな。
「主様、もう試合が始まりますよ」
《それでは、試合開始ですッ!!》
コッコロの注意とアナウンスはほとんど同時だった。
「まあまあ、今は試合に集中しようか」
「うぐぐ……っ、本当にっ、本当に違いますからねっ！」
雪菜はすごく納得いかなそうだが、今は綺凛の試合に目を向けてくれる。
俺も、アインハルトに対して以上に応援しないとだな。

「行きます。レッドフレーム……！」
「そう来るでしょうね」
《綺凛選手、アインハルト選手と同様に鎧を装着しました!!》
赤く派手なＭＳ、レッドフレームの鎧を身に着けた綺凛。脚力とブーストを合わせて一気に接近。
そして連鶴が始まり、規則正しい斬撃がヴィクトーリアを襲う。
試合で幾度となく披露されてきた連鶴だったが、大本は連続攻撃という単純なものだ。何か大きな種があるわけでも無く、ゆえに対策も取りにくい。
大会でも上位に食い込む技量を持つ綺凛。剣技で対抗出来ていたのはユウキくらいだった。
ヴィクトーリアも実力者だが、綺凛と正面から撃ち合うのは難しい。
「ならばっ！」

力強く踏み込んだヴィクトーリア。踏み込んだ足は雷撃を纏っていた。
「四式、瞬光ッ!!」
雷を纏わせた斧槍を横なぎに振るう。膨大な魔力にモノを言わせ、剣技ごと叩き潰す。
前方全てを両断できるほどの攻撃範囲の技だ。しかしその範囲は平面の話だ。
リンボーダンスの様に背中と腰を反らせて、すれすれで回避する。
だがそのすれすれの回避は、綺凛の計算通りだ。
「ッ!?」
ヴィクトーリアが冷や汗を流す番だった。
不安定な体勢から体を起こす。切り上げる刀を半歩下がることで、何とか回避するヴィクトーリア。かすった金髪が数本中を舞う。
だがヴィクトーリアに息をつく暇はない。連続攻撃こそ、連鶴の真骨頂なのだ。
「はぁッ!!」
気合と共に振り下ろされた刀は、
「っ!」
ヴィクトーリアの鎧に阻まれ、ライフを削ることは出来なかった。
回避ではなく防御に魔力を回したヴィクトーリアの鎧はそう簡単に斬れるものではない。
ひるんだ綺凛に斧槍の柄が振り下ろされる。
だが綺凛は不安定な体勢から、アストレイのスラスターを噴かすことで遠くに離れていた。空中で1回転して着地する。
ここ数日で練習したとは思えないアクロバティックな動きを見せる綺凛。地上にいる時も細かくスラスターを使い、動きに緩急をつけていく。
飛び回る綺凛に対してのヴィクトーリアの選択は、
「九十一式、破軍斬滅ッ!!」
ヴィクトーリアは頭上で斧槍を回転させた。纏っていた雷と斬撃が嵐にとなって全方位にまき散らされる。

とっさに後ろに下がる綺凛だったが、予想以上の範囲に回避しきれない。さらにスラスターを使うことで、なんとか攻撃範囲から脱出した。
《綺凛選手が被弾！　ヴィクトーリア選手の一撃はやはり重たい！　ライフが3割も削られてしまいました!!》
「（先輩に頂いたこの鎧が無かったら危なかったかも……！）」
装甲越しに伝わってきた衝撃。装甲自体にも傷がついているし、もう少し逃げるのが遅かったら感電していただろう。
綺凛は改めて、今戦っている相手の実力を思い出す。
「ふう……」
だが、一息ついたのはヴィクトーリアも同じだった。ようやく連鶴による斬撃の雨から抜け出すことが出来たのだ。
研ぎ澄まされた斬撃は、ヴィクトーリアも油断できない攻撃なのだ。
そこでゴングが鳴った。
綺凛は一度刀を鞘に納める。２人は何か話すでもなく、互いのベンチに向かった。
「どう、綺凛？」
「やっぱり厳しいです。速度では勝っていますけど、魔力の鎧に隙がありません」
「そうよね……」
額に流れる汗を拭きながら、綺凛はクロの問いに答える。
ヴィクトーリアの実力は大会上位常連だけあって相当高い。クロも剣だけでヴィクトーリアにダメージを与えようと思ったら、かなり難しい。
空間転移を併用すれば何とか、といったレベルだ。しかも宝具を使うクロとは違い、綺凛は通常の刀。防御力の高いヴィクトーリアの魔力障壁を突破するのはかなり難しい。
「それでも、出来るだけやってみます」
「そうね。お兄ちゃんからもらった鎧もあるし、うまく削っていきましょう」

集中している綺凛には余計なアドバイスはいらない。
そして集中しているのはヴィクトーリアも同じだった。
「刀堂家の宗家の人間。流石の練度ですわ」
「ここまで綺麗な剣術は中々見れないですね。ミカヤさんとも違う戦い方ですし」
「ええ。ミカヤの速さとはまた別の速さを持っている……そして綺麗な剣ですわ」
ヴィクトーリア自身も近接技も一通りこなせる。しかし、綺凛相手に積極的に使う気にはなれなかった。
近接戦のスペシャリストが相手では、反撃の良い的になってしまうからだ。
「なら、わたくしの戦い方を相手に押し付けるだけですわ」
「落ち着いて戦えば勝てますね」
「もちろん」
敵だけを見据えた2人がリングに上り――次のラウンドのゴングが鳴った。
お互い小手調べは終わり、本格的な戦闘に移る時間だ。
「はあっ!!」
綺凛はヴィクトーリアに斬りかかった。
《綺凛選手、再度斬りかかりますッ!! ヴィクトーリア選手はそれを迎え撃つ形ですッ!!》
綺凛がその手に持つ刀は2本。自らの千羽切を右手に、ガーベラストレートを左手に逆手に持ち、コマの様に回転しながら斬りかかる。
連鶴を交えた連撃。ヴィクトーリアの巨大な斧槍型のデバイスでは、その速度に対応しきれない。
斧槍をリングに突き刺す。2本の刀に対して、素手で挑もうというのだ。
「来なさいッ!!」
「行きますッ!!」
両者は正面からぶつかり合う。
「(私の刀じゃヴィクトーリア選手の鎧は斬り裂けなかった。正面か

ら斬りかかっても駄目だ！）」
ならばと綺凛が狙いを定めるのは、鎧を着た相手の弱点とも言える部位。鎧で守られていない関節の部分だ。
超速で振るわれる刀が、甲冑型のＢＪの籠手で受け止められ、火花が散る。それどころか、油断していると刀を掴まれそうになる。
鎧の継ぎ目を狙う、その当然の思考をヴィクトーリアが思いつかないはずがない。
そして、鎧の間という、ごく限られた狙いを守ればよいヴィクトーリアは、綺凛の剣劇にも余裕を持って対処出来ていた。
「二十三式改、刀咬――――！」
「（この人、刀を素手で……！）」
甲冑の無い部分でも、ヴィクトーリアの莫大な魔力量が両手に集中し、堅牢な防壁を作っている。
それを突破するためにアストレイの鎧を纏い、練習途中の二刀流まで持ち出したのだ。だが付け焼刃で持ち出しても、ヴィクトーリアには通じない。
《すさまじい剣戟です!!　地面に突き刺された斧槍を中心にッ!!　両選手の刀と拳が交差しています!!》
手に持っているわけではないのに、地面に突き刺さった斧槍が刀を振る邪魔をする。手に持たずに武器を利用する。ヴィクトーリアは両手と斧槍、３つの武器を使っていた。
「くっ……！」
「二刀流はあまり練習していなかったようですね」
「それでもっ!!」
斧槍の持ち手に阻まれ、火花を散らした千羽切を手放し、バックパックからビームサーベルを引き抜く綺凛。
「甘いっ！」
その攻撃をヴィクトーリアが一喝する。
斧槍の一部分が分離して、電撃が刃を形成する。電撃で出来たビームサーベルだ。
２人のサーベルがぶつかり合い、スパークする。

アストレイのパワーアシストをもってしても、ヴィクトーリアの膂力には敵わない。後ろに大きく跳ね飛ばされた綺凛は、着地してすぐに構えを取り直す。
ヴィクトーリアはサーベルの部品を斧槍に戻し、地面から斧槍を引き抜いていた。
「大したものですね、刀藤流というのは。あなたが特別、ということもあるのかもしれませんが」
ヴィクトーリア純粋に称賛の言葉を述べていた。
「あなたは魔力を攻撃には使わない。身体能力を上げるだけで、使うのは刀の技のみ。それでここまで戦って来るなんて」
「それほどでもありません。ミカヤ選手も同じような物ですから」
「ふふ、そうですわね」
綺凛の返しを、ヴィクトーリアは笑いながら肯定する。
「(でも……)」
「ですが」
2人の思考が重なる。
「あなたと彼女の間には、決定的な差がある。他の選手相手ならその戦い方で勝てるでしょうが、私には勝てない」
その言葉に、刀を握る力が強くなる。
それは薄々、綺凛にも分かっていた。技術だけではどうしても突破出来ない部分があることは。
「(ヴィクトーリア選手の防御を突破できない。それに、今は私の戦い方に合わせてくれてるけど、あの高威力の範囲技を撃たれたら、負ける)」
ずっと刀の技を極めてきた綺凛には、魔法を使った大技というものが無い。必殺技というものが無い。
連鶴での連続攻撃が、綺凛の無二の必殺技である。
まともな斬り合いでは強い技だが、相手を切れなければ意味がない。
さらに連鶴では、広範囲を吹き飛ばすような技、例えば目の前のヴィクトーリアの技の様に、広範囲に雷でも落とされれば、それを防

ぐ技が無い綺凛はなすすべなく敗北することになる。
　ミカヤの抜刀居合なら、試合開始とともに、全速力で突っ込み、防御ごとヴィクトーリアを切り裂くチャンスがあるかもしれない。
「それでも、今まで倒してきた選手のためにも、ここで諦める訳にはいきません」
「結構。残り時間は1分半。このラウンドで試合を終わらせますわ」
「だったら私は、何としても一矢報いて見せます」
　その言葉に満足そうに笑ったヴィクトーリアは、すぐに試合の顔になる。
　斧槍で地面を突く。すると、巨大な魔法陣が現れた。
「百式、神雷ッ!!」
《ヴィクトーリア選手の大技ッ!!　フィールド中に雷が降り注ぎますッ!!》
　リングの全てを覆いつくす巨大な魔法陣。つまり、リングのどこに逃げても、逃げきれない。
「だったら前に出る!!」
「な――――」
　ヴィクトーリアの顔が驚愕に染まる。自分に向かって一直線に駆け抜けてくる綺凛を見たからだ。
　ヴィクトーリアも綺凛には突撃以外の策は無いとわかっていた。同時に、自分に辿り着く前に、雷に撃ち抜かれるだろうということも。
　当然、上からは雷がこれでもかと降り注いでいる。
　それらを、
「(雷を、切り裂いて――――!!)」
　ガーベラストレートを使って、雷を切り裂きながら突き進む綺凛。ビームすら切り裂けるガーベラストレートだからこそ出来る技だ。
「雷切とでも言うつもりですか……っ!!」
「はあああああっ!!」
　結果、ほとんど被弾することなく綺凛の間合いまで接近を許してしまう。
「雷光球ッ!!」

必殺の意思を込めて繰り出す光球。それは前の試合、ユウキにとどめを刺した技だ。
「ッ!!」
「くっ……!!」
その攻撃を、ヴィクトーリアは左手で受け止める。
「つ、ぅ……!」
この試合で初めて、ヴィクトーリアの顔が苦痛に歪んだ。左手の鎧が砕け、亀裂骨折のシミュレートまで入った。
確かに綺凛はヴィクトーリアに一矢報いていた。だがそれもここまでだ。
「六十八式――――」
無事な右手で綺凛の後頭部を持ち、
「兜割ッ!!」
「か、は――――!!」
地面に叩きつけた。
あまりの衝撃に、体が一瞬バウンドする。頭を中心にリングには亀裂が入り、その威力の高さを物語っていた。
綺凛の四肢は完全に投げ出され、ピクリとも動くことは無い。
完全に気を失っている。すぐにカウントが開始されるが、最後まで起き上がることは無かった。
《勝者ッ！　ヴィクトーリア・ダールグリュン選手！　ダメージを受けてなお攻撃を叩き込むッ!!　トップ選手の貫録を見せつけた素晴らしい試合でしたッ!!》
運ばれてくる担架や綺凛のセコンドを横目に、ヴィクトーリアはクールにリングを降りた。
「お疲れ様でした。お嬢様」
「ええ」
執事兼セコンドのエドガーがタオルを渡してくる。
「捨て身とは言え、思いがけない反撃を貰いましたわね」
「相手も、ここまで勝ち上がってくる選手ですからねぇ。楽な試合ばかりではなくなってきましたね」

すでに痛みは消えている左手を見るヴィクトーリア。
最後の綺凛の突撃、何処かヴィクトーリアのライバル（ヴィクトーリア自身は認めないが）であるハリーを彷彿とさせた。
「まあこれも、あの不良娘との試合の予行演習だと思えば、良い経験でしたわ」
そう言って控室に続く道を歩き出すヴィクトーリア。
エドガーはいつも通り、その後ろをついて行くのだった。

インターミドル　お食事会

今日の試合がすべて終了した。アナウンスが流れ、明日のためのリングの清掃作業が始まっていた。
お客さんもだんだんと減り始めている。でも、最後まで客席は満席だったな。ま、各予選ブロックのベスト８が出揃う試合なんだし、そのくらいの注目度があって当然か。
まあ、そういう理由もあって、入り口はごった返してるだろうな。聖天子様もいるし、そんな混雑してる場所には行きたくないな。
「そうですね。少し待っていましょうか」
雪菜に話すと、すぐに賛成してくれた。
余ってしまった時間には、やっぱり
「はぁ……終わってしまいましたね……初めて見ましたが、こんなに激しいものなんですね……」
「すごい試合もありましたね。競技選手でもあんなに強い人がいるなんて……」
「はい。やはりここまで来ると、皆様のレベルも高くなっているようですね」
聖天子様、雪菜、コッコロはそれぞれ、試合の感想を言っていた。
聞いた話によると、色々とスカウトの人が来てるっぽいしな。競技選手としてだけじゃなくて、どっかの軍隊だったり、要人だったりも。単純に強い人が集まるから、自分たちで面接試験を行わなくてもいいから楽ってわけだ。
流石にチームナカジマの面々には来ないと思うけど……期待の新星だとしても、いくら何でも小さすぎるし。ジムのお誘いくらいは来るか？
「そうなんですか？」
「色々と細かいルールは決まってるらしいですけどね。無制限に許したら無法地帯になっちゃうんで」
あくまでもこれはインターミドルの大会。実力のある人をスカウトするオークションではないのだ。

選手が健全に競うために、例えばお札で頬を叩くような行為は全面的に禁止になっている。
選手は選手で、スカウトを目的にしている人もいるかもしれないけどね。
「確かに、実力を見るならここ以上の場所は無いかもしれないですね」
「でも、試合で戦えるが実戦で戦えるとは限らないけどね」
雪菜の言葉に俺は軽く返す。
ヴィヴィオちゃんとか、試合だと強いかもしれないけど、ただ単に相手を傷つけるために戦えって言われたら、試合の力の半分も出ないだろうし。
アインハルトと戦ったチャンピオンなんかは全然どっちでも行けるタイプだろうし。
と、電話がかかってきた。クロからだ。
「はいはい？　どうした？」
《あ、お兄ちゃん？　まだ会場にいる？》
「いるぞー。そっちはもう外なのか？」
《んーんー、違うよ。まだ中。結構人数が増えちゃったからね》
人数が増えた？
増える人と言えば……八神家と今日試合をしたチャンピオンとかか？　そりゃまあ、今出てったら大変だろうな。上位選手揃い踏みなんだから。
《そういうこと。それでね》
「んー？」
まだ続きがあったらしい。
《今からご飯に行くんだけど一緒にどうかって、八神さんが》
そういう事か。

「稼いでますねぇ、八神部隊長は」
「なっはっはっ！　なかなかええ眺めやろ～？」
　案内されたのはホテルの上階にあるレストラン。高級店ではなく手ごろな価格でバイキングが楽しめる形式のお店だ。
　そこを貸し切ってあった。
　窓の外には中々の夜景が見える。いつもはたくさんの人にふるまわれているバイキング料理も、今夜は俺達が独占していた。
「あ、君も好きに食べてな？　多少人数は増えたけど、そこは融通してもらえてるから」
「多少？」
　俺はちらりとメンバーを見る。これ多分、当初の想定の倍くらいになってるんじゃないのか？
　ヴィヴィオちゃん達チームナカジマのメンバーだけではなく、八神道場の２人。それは序の口で、ハリーとその取り巻き、ハリーのライバルであるエルス、ヴィクトーリアにエレミア。
　そこに俺たち一行だ。流石に聖天子様をそんなに遅い時間まで連れ回すわけにはいかなかったから、家に送り届けて俺達だけで来たんだけど。
　ちょっと残念そうだったな。やっぱり聖天子様でも、目の前で見たスターには会いたいと思うみたいだ。
「ま、それはしょうがないなぁ」
　俺と八神さんが話していると、コッコロが一歩前に出た。
「本日はお招きいただき、ありがとうございます。はやて様」
「あらあら、礼儀正しい娘やなぁ……夜月君、誰との娘？」
「誰との娘でもありません」
　俺の年齢でこの年の娘がいるとかありえんだろ。
　俺と初めて会う人たちが『マジで？』って顔してるじゃねーか。マジじゃないよ。
「でも先輩だったら、１０年後とかに突然、子供を連れた女性が押しか

けてきてもおかしくないですよね……」
「主様、ぜひとも節度あるお付き合いをして下さいませ。くれぐれも、で、ございますよ」
雪菜と、コッコロまでもがじっとりとした視線を向けてきた。
そして再び注がれる『マジで？』という視線。これについては……まあ、うん、明言は避けておこうかな。
「おいおい、主様、ってどういうことだ？」
「わ、分かりません。八神さんのお知り合いみたいですから、ああ見えてすっごい人なのかもれないです」
ハリーとエルスがこそこそと話していた。
ああ、そっちね。『主様』もたいがいおかしいよね！
「ミカ姉は知り合いなのか？」
「う～ん、私も知り合いではあるけど、実際どういう人物なのかは分からないな……だが、アインハルトちゃんと綺凛ちゃんが、という話もあったからな……」
「ん？　なんだって？」
「……いや、もしもそこまでふしだらな人間なら、周りの大人が止めているだろう。今のは八神さんなりの軽いジョークだよ」
いや、俺は想像を超えるふしだらな人間だよ。
「……ここにいる人、何人が先輩の毒牙にかかるんでしょうね」
「毒牙……まあ、毒牙なんだろうけど……」
雪菜は冷たくそっぽを向いた。
そんなこんなでお食事が始まったが、初顔の人で、得体のしれない俺にわざわざ話しかけてくる人はいなかった。
それよりも久しぶりに会った旧友とお話していた。俺も無理に関わろうって気はない。ヴィヴィオちゃんの原作は比較的平和だし、俺が下手に関わらないほうがいいだろう。
そっちでも知らない事件が起こったら、俺パンクしちゃうよ。
そしてほどほどに時間が経った頃、八神さんが手を叩いた。
「さて、みんな～、食べながらでいいからちょっと聞いてなぁ」
よく通る声に、全員の視線が集中する。

「みんな知っての通り、今日の試合を戦った2人には少し因縁がある。ああ、2人って言うのはアインハルトとジークリンデや」
　みんな知ってることなのかな？　ま、詳しくは知らなくても、2人の人となりを知っていて、今日の試合の様子を見ていれば、何かあると思ってもおかしくは無いか。
「『黒のエレミア』の継承者、ジークリンデと、『覇王イングヴァルト』の末裔、アインハルト。そしてその2人を繋ぐ『聖王女オリヴィエ』。かつて戦乱の時代を一緒に生きた人の末裔が、今この時代にまた集まってる」
　いきなり歴史の授業かとも思ったが、歴史の英雄の子孫が集まっていると言いたいんだろう。
「それにこの場には、『雷帝ダールグリュン』の血統、ヴィクトーリアがいるし、ここにはおれへんけど、もう1人、旧ベルカ王家直系の娘もいる」
　名前を呼ばれたヴィクトーリアはスカートを摘まんで一礼する。年季の入った動作だ。幼い頃からの教育の成果だろう。
「これが偶然なのか、何かの縁や導きなのかは分かれへん。そやけど、これはあくまでも老婆心というか、大人側の心配としてなんやけど、これだけ濃密な旧ベルカの血統継承者たちが一堂に会するゆーんは、ちょっぴり気にかかるところなんや」
「……」
　八神さんの声が少しマジのトーンになった気がした。
　まさか、だよな。
　この流れって原作にもあったことだし、それを踏襲しているだけだよな？　何かわけのわからない事件が起こる前振りってわけじゃないよな？
「インターミドルも終わりに近づいて、一番大変な時期や。みんなが事件に巻き込まれへんように私達も守っていきたい。やから、何かあったら相談して欲しいんよ」
　八神さんの声色が穏やかなものに戻った。
「大会が終わったら、2人の過去について話し合う場所も作りたいと

思うとる。同じ真正古代ベルカの継承者同士、行きたい場所や探したいものがあったら私も全力で協力するよ」
穏やかに笑いながら、そう言うのだった。

そうして再び談笑の時間に戻った。
みんなは集まってアインハルトの話に耳を傾けている。この中で一番昔の記憶を引き継いでいるのがアインハルトだからだ。
「先輩は聞かなくてもいいんですか？」
「雪菜とコッコロで聞いてきてくれないか？」
「えっと……それは構いませんが、主様はどうされるのですか？」
「俺はちょっと八神さんと話したいことがあって、や、変な事じゃないからね？」
「まだ何も言っていませんけど？」
「主様、信じておりますよ？」
雪菜とコッコロはそう言って話の輪の中に加わっていった。
俺は俺で八神さんの近くに行った。
「八神さんも優しいじゃないですか」
「子供を守るのは大人の役目やから。私も、子供のころは一杯助けてもらったし」
今度は自分の番って訳か。
俺も俺で聞きたいことがある。
「で、何か嫌な予感とかあるんですか？」
「ん……」
わざわざみんなを集めて注意するような真似、優しいのかもしれないけど回りくどい。何か心配事がありますと言っているようなもの

だ。
「というか、ずっと異常が起きてますよね？　８月に入ってから、ずっと」
　そう、ずっと正体不明の怪物、『ヤミー』が島中に発生しているのだ。この島にいると不思議なことに慣れ過ぎて、怪物が発生しているのに普通の生活を送ってしまうが、異常事態である。
　それについてどう思っているのだろうか。
「はぁ、君にはお見通しって事かぁ……そやね。それもある」
　それも？　じゃあ他にも何かあるってことか？
「（あの予言に出て来た『時空の魔王』……今調べている文献にはそんな記述は無かったとはいえ、『聖王』、『覇王』、『冥王』からの『魔王』やからな……文献には残っていない何者かがいて、それが古代ベルカ絡みってことも、無いとは言えんからなぁ。用心しておくに越したことはない、っと）」
「八神さん？」
　黙り込んで、何か考えてるみたいだけど。
「ん、まあ色々とな。考えることがあるんよ。あの正体不明の怪物についてはこっちでも調べてる。特に何かを狙って暴れているって訳や無いみたい。でも……」
「でも？」
「管理局員や武偵が倒した怪物の強さや発生数のデータをまとめてみたら、どうもインターミドルの会場が中心になってるみたいなんよ」
「それは……このタイミングを考えると、やっぱり出場選手を狙ったものと考えるのが」
「普通やろ？　そして、その対象になりそうなのはみんなって事」
　みんな揃って、普通の出自ではない。どう活用するのかは分からないけど、狙われる理由にはなり得るな。
　とは言え、俺の知ってるグリードは、こんなにヤミーを乱造したりしない。そもそもヴィヴィオちゃん達を狙う理由が無い。
　とすれば、誰かがグリードを作り出していることになるけど……
「（『誰か』が作り出してるってことは、そいつは俺と同郷の奴だ。ティ

アーユ先生にビルドウォッチを渡した奴と同一人物かは分からないけどな）だったら、大会を止めればいいのでは？」
「それがなんとも。何か異常があった訳や無いから、大会を止める訳にもいかなくて」
「証拠がないってことですね」
「今は裏で何かあったらすぐに対応できるように待機してるって感じや」
　ま、いつも通り後手に回っているってことか。
　でも、アナザービルドと同じってことは、今回のヤミーもアナザーオーズが原因の可能性が高い。
　そうなるといくら特務六課のメンバーでも解決することは出来ないだろう。
「何かあったら俺も呼んで下さいよ」
「や、今君は聖天子様の護衛任務中やろ？」
「それは、そうですけど……」
「まあまあ、お祝いの席、ってわけでもないけど、この場でそんな仕事の話はナシにしとこ？」
「いやっ！　……そうですね」
　俺としてはアナザーオーズ（多分）の件について、もう少し詳しく聞いておきたかったところなんだけど、八神さんはそれ以上話してくれそうにない。
「で、全く話は変わるんやけど、２日後、空いてる？」
「空いてないですよ。聖天子様の護衛の仕事ですから、あと３日は。何かあるんですか？」
「みんなの試合も終わったことやし、プールに行くんやけど、良かったどうかと思って」
「まさかと思いますけど、ここにいるメンバー全員を誘うつもりは無いですよね？」
　エレミアとかヴィクトーリアとか、その辺りも。
「残念ながら、みんなその日は試合やから、いつものメンバーになるなぁ」

その『いつものメンバー』でも、相当の人数になりそうだけどな。
「でも聞いてるよ。護衛の仕事と言い張って街を遊びまわってるって」
「まあ実はそうなんですよ。聖天子様を連れて行ってもいいなら、行けるんですけどね」
「別にいいよ？　許可が下りるんなら」
そもそもお出かけ自体、見逃されているものだからな。どこにも許可を取ってるわけじゃないし。
問題は聖天子様の意思だ。別に拒否はしないだろうな。
「じゃあその時は連絡してな」
「分かりました」
そう言って八神さんとの会話を終わる。
「先輩」
「主様っ」
戻ってきた雪菜とコッコロ。
「どうだった？」
「そうですね、要点をかいつまんで……」
２人に聞いたところ、俺の記憶にある話と、アインハルトの話に大きな違いは無かった。やっぱりその辺りは、変更されていないってことだな。
「それで大会が終わったら、無限書庫？　という場所で、昔のことについて調べ物をすることになりました」
そこも変わらずか。俺も八神さんと話したことについて２人に報告する。
「私は別に構いませんよ」
「はい。聖天子様も賛成してくださるでしょう」
２人はプールに行くことに賛成してくれた。
こうして、今度の予定が決まるのだった。

幕間　デビルークの妹達の外出

「おー！　すごいな！　モモ！　見たことない動物がいっぱいいる！」
「……行きたい場所って、動物園だったのね……はぁ」
ナナとモモの周りにはたくさんの子供連れがいる。
ここは確かに動物園だが、ただの動物園ではない。絶滅してしまった動物、絶滅の危機にある動物の遺伝子を複製し再び繁殖させようという実験室でもあるのだ。
環境的な目的とともに、動物の生態や機能を人の生活の役に立てようという目的もある。
強化ガラスの向こうには動物園の定番の動物から、野生ではもう見られなくなった動物までそろっていた。
その内、リアルジュラシックパークになる可能性も秘めている施設なのだ。
「はぁ……」
モモはため息を吐きつつ、髪の毛を弄っている。クセっ毛の髪先を指先に巻き付ける。モモの癖だ。
「何だよ、モモ。そんなにつまんないのか？」
「私はあなたと違うもの。まあ、興味深いとは思うけど」
少なくとも周りの、二桁の年齢にも満たない子供の様にはしゃぐことは無いのだ。
それにもう1つ、ナナには楽しめる理由があった。
「そっちだって植物と喋ってればいいだろ？」
「機械管理されて育った植物って、会話にならないのよ。単純なロボットと喋ってるみたいで」
「へー。大変だな～」
「あなたね……」
ナナにはデビルークの中でも特別な力、世間ではレアスキルと呼ばれる特殊能力を持っている。
それは、動物と意思疎通出来るという能力だ。そのおかげで小さい

子供の様に動物に声をかけたとしても、それは本当に会話しているという事なのだ。
　そのナナに対抗するように、モモは植物と会話するレアスキルを備えている。
　ナナの能力に全く劣らないが、本人の言ったようにこの場ではあまり役に立たないものになっていた。
「別にいいわよ、私の事は。今日はあなたのお守りで来てるんだから」
「はーっ、はいはい。そーですかー」
　双子だというのにいつもお姉さん顔してくるモモに、いつも通り適当な返事をする。
「（ったく、そもそも双子なんだから『どっちが上』なんてないだろー）……ん？」
　ナナは気が付いた。
　よくある光景だ。ガラスの向こうにいるライオン。手を伸ばせば届きそうな距離にいるそれに、しかし絶対に触れることは出来ない。
　だがそんな簡単なことも、小さい子供には分からない。
　壁の張り紙に、『ガラスを叩かないでね』とポップな字体で書かれていたとしても、子供には理解することが出来ないのだ。
　だがナナには、ライオンの気持ちが分かる。少し疲れていて、休みたいと思っていることが分かった。
「まったく、しょうがないな……」
　本来注意するべき子供の親は、近くに見当たらない。
　ナナは注意してやろうと、その子供の方へ歩き始める。
「おいっ！　そこの――――」
　声をかける直前。
「君、ダメだよ」
「あ」
　それよりも先に、施設スタッフの制服を着た少女に、子供は注意された。
「ガラス叩くと、ライオンさんびっくりしちゃうからね」
「う、うん」

「お父さんとお母さんは？　近くにいるの？」
「え？　あ、あれ……？」
「――――やっと見つけた!!」
人込みをかき分けて1人の女性が走ってくる。子供の母親だ。
母親は何度も頭を下げて、子供を連れて行った。
「あなたの出番はなかったみたいね……ナナ？　どうしたの？」
「あいつ……」
ナナの興味は子供から今注意した少女に向いていた。
「これで静かになったね。疲れたならもう少し奥に行ったほうがいいと思う。ん、それじゃあ」
一見、言葉の通じない動物に適当に声をかけているだけのようにも見える。
だが、ナナには分かった。同じ能力を持っているナナにははっきりと。
「お、おいっ！　お前っ！」
「え？　何か？」
思わず声をかけていた。
「お前さ！　もしかしてお前もっ、動物と話せるのか……!?」
「……お前も？　じゃあ、あなたも？」
スタッフの服装の少女――――春日部　耀も、その短いやり取りですべてを理解した。

「へー、そうなのか」
「うん。私はこのペンダントが無いと動物とは話せない」
「これって何かの『れいそう』？　なのか？」

「んー、私も詳しいことは知らないんだけど……」
同じ能力を持つ者同士、耀とナナはすぐに打ち解けた。希少な能力だったからこそ、今まで家族ともできなかったような話も出来たのだ。
この短時間で、お互い名前の呼び捨てをするほどの仲になっていた。
2人と1人、耀とナナが話し込んで、モモは完全に忘れられている。
この夏、耀はこの動物園の警護の任務に就いていた。貴重な動物が密猟者や企業スパイに盗まれないようにという護衛だ。
館内をくまなくパトロールして、異常があればそれに対応する。ナナはそれについて回っている。
「えと、春日部さん？　お仕事のお邪魔でしたら……」
「大丈夫。人と話してるくらいなら、私の感覚は鈍らないから」
「はぁ……」
モモが、あまりにもグイグイと迫るナナを見かねて声を上げるが、耀は首を横に振る。
生命の目録（ゲノムツリー）の能力によって動物の感覚を得ている耀は、人の何倍もの嗅覚や聴覚、人には見えない波長の色が見えている。
それらを活用すれば、ただ歩いているだけで周りの情報すべてを知ることが出来た。
「ずるいよなぁ。話せるだけじゃなくてそんなことも出来るなんてさぁ」
「えっへん」
「お仕事中なら、おしゃべりしているのはどうかと思いますけど」
モモの呟きも当然聞こえていたが、問題児の耀が気にすることは無かった。
しかし、そんな耀の探知をすり抜けてくる人物がいた。
「あれ？　耀ちゃん？」
「え？　どうしてここに？」
「やだなぁ、そんなに警戒しなくてもいいでしょ？　お姉ちゃんもいないし、今日は何かしようってわけじゃないんだから」

赤毛のおさげを揺らす少女、メアだ。
メアの言葉はウソではなかった。
武偵高校に通っているメアだったが、別に武偵になろうという訳ではない。多くの学生が受けている依頼も受けていなかったが、それが災いしてこの夏は暇を持て余していたのだ。
「お前の知り合いか？」
「え、う～ん……」
「もしかして、コイツも動物と話せるのか!?」
「動物と……？」
流石の耀も即答することが出来ない。メアはメアで、いきなりの単語に首を傾げていた。
翔から説明を受けていると言っても、耀は直接の被害を受けたわけではない。厳密にいえばアゼンダの件に関わっているので、まったくのゼロという訳ではないのだが。
だが、面と向かって話すのは初めてだ。
「あ～、ごめんな？　耀の知り合いだっていうから、てっきりお前も動物と話せるのかと思ってさ」
「う～ん？　全然気にしなくていいよ。でも、動物と話せるって？」
「おう！　実はそういう能力を持ってんだ！　例えば……」
ナナは手ごろな動物を指さす。
「アイツなんかはな、「お腹が減った」――――って！　オイ！　何で先に言っちゃうんだよ、耀！」
「ごめん。ついとっさに」
「素敵！　２人共楽しそうだね！」
メアは無邪気に目を輝かせる。
「えへへへ、まあな！　……そうだ！　良かったら一緒に回ろうぜ！
っと、まだ名乗ってなかったな。あたしはナナ・アスタ・デビルーク。ナナって呼んでくれ！」
「ちょ、ちょっとナナ！　春日部さんの時も言ったけど、そんな簡単に名乗って……！」
デビルークと言えば、かなり有名な名前だ。尻尾は隠しているとは

いえ、特徴的な双子であることには変わりない。
この人込みであまり大っぴらに名乗るのはよろしくない。
そう考えているモモの注意だが、
「もちろんいいよ！　私はメア。黒崎メア」
「メアか！　よろしくな、メア！」
「うん！　よろしくね、ナナちゃん！」
メアは特に意に介した様子は無く、周りの人は動物の方に夢中だ。
メアは珍しく難しい顔をしている耀を見る。
「春日部さんも仲良くしよ？」
「そうだね。あなたが何もしないなら」
向こうに戦う意思がないのなら、耀も戦う気はない。
「(ここには人も動物もいるし、そもそも私じゃ勝てるか分らないしね)」
ならば楽しむしかない。なんだかんだ言っても、動物の声がわかるナナと一緒に遊ぶというのは、いつもの悪戯とは違った面白さがあるのだ。
いや、そもそも仕事中の耀が遊ぶというのはいけないのだが……この問題児に何を言っても無駄である。
人数を増して、より楽しそうに歩き出す3人。
そしてただ1人、
「……もう、いいわ」
モモは疲れた声を出して、動物達を流し見た。
「(ま、ナナが楽しめてるならいっか)」
思いがけずできてしまった繋がりに、モモは心の中で独り言ちた。
そしてお姉さんモードになった。ナナを見守るモードだ。
「でも……」
どうしても退屈だという気持ちを拭うことは出来ない。
「はぁ、うまくいかないものね」
姉のララは、少し外に出ただけで中々に刺激的な体験をしたようだが、お子様の多い動物園ではそれも望めない。
ため息を吐きながら、3人の後に続いて歩くのだった。

「あー……今頃部隊長はインターミドルの会場ですかねぇ」
「かもなぁ」
「高町さんとテスタロッサさんも一緒ですかねぇ」
「だろうなぁ」
「暇ですねぇ」
「それは良いことだなぁ」
　ここは六課の事務所。特に出動要請は出ていないため暇な時間だ。つい最近まで妹達の処理で忙しすぎたのだが、それが終わって見ると、すっかりやることが無くなってしまった。
　しかし管理局は一般企業ではない。
　祝日や土日関係なく、事件に備えていなくてはならない。
　特に警戒が厳重になっている今は、六課にお呼びがかかることも少ないのだが、今日は蛇倉が当番だった。
「どうなんでしょうね、謎の怪物騒ぎ」
「今の所大丈夫なんだろ。特に被害が出てるって話は聞かねぇからな」
「そうじゃなくて……なんか、噂では管理局に裏切り者がいるらしいじゃないですか。謎の、って聞くと疑っちゃいません？　こっちに情報が来てないだけで……」
「やめとけよ。余計なことに首を突っ込むと寿命を縮めるぜ」
「そういうもんですか？」
「そういうもんだ」
　蛇倉と部下はお茶をすする。
「お茶のおかわりはいるかしら」

「ああ、ラムちゃん。よろしく～」
「俺にもよろしく」
急須を持って現れたラムに、部下は鼻の下を伸ばした。
双子のメイドはすっかり六課のアイドルになっていた。最初の内はまじめな局員が、公務機関にメイド服を着たガチメイドさんがいるのはいかがなものか、と言っていたが、今ではこの通りだ。
特に男性局員から（当たり前だが）支持を得て、今ではヤル気の向上に一役買っている。
「蛇倉さん、俺、この部隊に配属されてよかったです……！」
「だろ？　だから最初から賛成してればよかったんだよ。まじめなだけじゃ息が詰まるぜ？」
「勉強になりました！」
休憩を終えた部下は仕事に戻っていく。
「どれ、俺も戻るかな」
「本当に暇してるのね」
「まあね。そっちも、今日は片割れの姿が見えないが？」
「レムはお休みよ。出社している人が少ないからお休みをって、部隊長が」
「（つーことは、今日の掃除は微妙ってことか……）」
「なに、何か言いたいことでも？」
「いや別に？」
メイドはどちらも人気だ。レム派とラム派が作られるくらいには大人気だ。しかし、メイドとしての腕も、すっかり知れ渡っている。
今や、六課の生活機能はレムがいなければ成り立たないほどになっていた。レムもレムで、自分の世界とは大きく違うこの世界に、しっかりと順応して結果を出していた。
よし行くかと立ち上がった蛇倉だったが、
「ん？　んー」
「何処に行くのよ、仕事部屋はそっちじゃないでしょ」
「ん、茶ぁ飲んだら、トイレに行きたくなっただけだ」
蛇倉は軽く手を振って、休憩室を後にするのだった。

学園島から遠く離れた無人島。うっそうと茂ったジャングルの中に、その場にあるはずのない建造物があった。
それは本来砂漠の国にあるはずのモノ――黄金に輝くピラミッドだ。
その中にある巨大な空間。そこで生きている人間は2人しかいなかった。
「決行は最終日にしましょう」
「ふむ」
そのうちの1人、長い三つ編みの美女が、もう1人を見上げながら提案した。
ミラミッドの中に、ピラミッドがあるような構造。内部のピラミッドの頂点には、王が座るための椅子がある。
そこに座っているのは、ツンと高い鼻と切れ長の目の、おかっぱ頭の美人だ。
三つ編みの美女は、一番下から見上げている格好になっている。
その絵を見れば、この場でどちらが偉いのかは一目瞭然だった。おかっぱ頭の美人は玉座にふんぞり返りながら続きを促した。
「情報によると、これまでの動向を見て最終日だけ懇親パーティが開催されることに決まったらしいわ。その分、上と下で警備が分断される」
「むう、妾の力があれば、警備の数など物の数ではないのぢゃが」
「それでも、慢心はいけないわ。それに情報では夜月翔もそこに居る。彼は下の警備らしいけど、何かあれが必ず首を突っ込んでくるわ」
「例の異世界から来た男か？　それほどの脅威なのかのう？」

おかっぱ美人は不満そうだが、自分で代案を出すつもりは無いようだ。
「あなたのスフィンクスは、強いけど無敵ではない。まず間違いなく各国の護衛は追って来ないとしても、夜月　翔は別よ。もしかすると奪還されるかもしれない。当日は私も行くわ。念のためにね」
「ま、すきにせい。妾は当日ここにおる。兵隊はいくらでも送りこんでやるからのう。なにせこの場にいれば、妾の魔力は無限ぢゃ」
おかっぱ美人の高らかな笑い声が、ピラミッド内部に響き渡るのだった。
これで会話は終了だと、三つ編み美女は耳に付いている通信機を指先で叩いた。その向こう側にいる人物は、何も答えず、通信を切るのだった。

みんなでプールに①

チームナカジマも全員敗退してしまい、俺のインターミドルへの興味はほとんどなくなった。
護衛の任務も今日を入れてあと2日という今日は、みんなでプールに来ていた。
一年中夏のこの島では、プールも一年中やっている。大型レジャー施設のこのプールには、ウォータースライダーから流れるプールまでそろっている。
メンバーはチームナカジマと八神道場の面々、その保護者達。そして護衛の対象である聖天子様。もはや護衛しているのか遊びまわっているのか分かんないんだけどね。
俺の家の女の子達は雪菜とコッコロしかいない。例によって、みんなは他の仕事が入っていた。
やー、何かみんなに悪いね。こんなことになっちゃって。
だが、そんな楽しい時間はもう終わりだ。明日は会議最終日。今までの島の様子を見て、最終日だけ例のパーティが再開されることになった。
聖天子様が一緒にいるのは今日で最後だ。楽しんでもらわないと。
「やー、夜月君も連れてきたい人がいるゆうたから、いったい今度はどんな女性かと思ってみれば……」
「や、昨日連絡したと思うんですけど。というか、女性限定なんですね」
「まさか本当に連れてくるとは、ちゅー意味や。君が男友達連れてくるとは思えんもん」
俺が部隊長と話していると、聖天子様が前に出て頭を下げた。
「八神部隊長、本日はよろしくお願いします」
「ま、私は別に構へんけど」
この2人はいったいどこまで親しい間柄なのかは分からないけど、聖王教会で一緒にいたからなぁ。初対面ってわけじゃない。
「ま、子供たちが待ちきれないみたいなので、そろそろ入りましょう

か」
俺は入り口を指さすのだった。

女性は女性でも、子供たちの着替えは早かった。
ヴィヴィオ達年少組はさっさと着替えを済ませ、アインハルトと綺凛を引っ張っていった。同じくらい着替えの早いノーヴェもそれについて行っている。
残っているのは雪菜と聖天子様、そしてみんなの保護者であるなのは達だ。
「うーん……」
「はやて？　どうしたの？」
同性だとしてもぶしつけな視線を向けてくるはやてに、フェイトは軽く体を隠しながら問いかけた。
丁度着替えが終わり、その体には水着しか身に着けていない。ビキニタイプのシンプルな紺色の水着だ。
それを見たはやての感想は、
「なんか、地味やなぁ……」
「えぇ？　何が？」
「その水着が、や」
世の女性が聞けば石を投げてきそうな言葉だった。確かに水着はシンプルで飾りっ気が無いと言えばそうだ。しかし、その豊満な肉体にはそれで十分だ。
普段から体を酷使している仕事だからこそ、鍛え上げられたしなやかな肉体。それでいて出るところは出ていて、引っ込んでいるところは引っ込んでいる。

水着をこれでもかと着こなしているのだ。むしろシンプルな水着だからこそ良い。
だが、はやてが言いたいのは、別に水着が似合っていないとか、そういう事ではなかった。
「その水着、前に海行った時もおんなじの着てたんやない？」
「あー……確かにそうかも。前に行ったのっていつだっけ？」
「前の六課の解散の時じゃないかな？　３人一緒に揃ってなんて、それ以外ないと思うよ？」
なのは達はそれぞれに思い出す。前の六課が解散した時となると、もう３，４年前だ。ゆっくり休暇を取れたことなんて、１年間働き続けたあの時以来だった。
同じ職場になったのもその時以来だったのだ。世界各地を飛び回る仕事をしている３人は、集まってご飯を食べる機会も少なかった。
「たしかあの時買ったんだよね？」
「そやな」
「３人揃って海で遊ぶなんて、中学生以来だったからね」
その時は、中学生の時よりもさらに育ったなのはとフェイトが、水着が合わないと言い、特に違和感のなかったはやても新調することにしたのだ。
「ふむー……ということは、や」
はやては気が付いた。フェイトにだけ指摘したが、なのはも自分も数年前に買った水着を着ているということになる。
それは、まだまだ二十代の、ぴちぴちの乙女としてどうなのか。
「ここは来月からの部下にちょっとサービスするのも悪くないかもなぁ……」
「はやてちゃん？」
「よし！　２人とも――――！」
はやては２人に指令を出した。
その数分後、着替えを終えた雪菜は妙なものを目撃した。
「あれ？　八神さん？　どこに行くんですか？」
「ん、ちょっとな～、雪菜ちゃんは先に行ってて」

「は、はい。分かりました……？」
雪菜の問いに笑顔で応えたはやて。先ほどまで水着を着ていたはずの３人が、何故か服を着て更衣室の外へ、入り口の方へ行こうとしている。
「雪菜さん？　どうかしましたか？」
「いえ、何でもないんですけど……って、その水着……！」
振り返った雪菜は、聖天子の姿に衝撃を受ける。あまり着替えをじろじろと見るのは失礼だと見ていなかったため気が付かなかったが、まさかその水着をチョイスしていたとは。
しかし当の本人は特に気にしていない。
「はい？　何かおかしなところがありますか？」
「ありませんよ？　ありませんけど……本当にそれで？」
「はい。側近の方が無難にこれが良いと」
「無難……？」
側近というと、ちょくちょく出てくるあの３人組の女の子か。雪菜は３人の顔を頭に思い浮かべた。
「無難……」
首を傾げつつも、雪菜は聖天子とプールの方へ向かうのだった。
一方、外へ出たはやて一行は、
「ちょ、ちょっとはやてちゃん？　別に私達まで買わなくても！」
「そうだよ、はやて！　そもそも私だって、わざわざ買い替えなくても……！」
「まあまあ、せっかくの機会なんやし！」
引っ張られるなのはとフェイトは抗議するが、はやては全く意に返さない。
「こういうレジャー施設には、そういう売り場があるって相場が決まっとるんよ」
はやてはニコニコと笑いながら、とあるお店へと入っていくのだった。

一番最初に出てきたのはちびっ子達だった。旅行の時もそうだったけど、やっぱり子供は着替えるのが早いね。それに元気も有り余ってるから。
「お兄さん！　お待たせしました!!」
「うんうん、全然待ってないよ」
駆け寄ってくる子供達。
水着は、以前学校指定の水着を着ていたコロナちゃん以外、前と同じだ。ちなみにコッコロの水着は、プリコネの水着だ。こうしてみんなが並んでいると、旅行先で川遊びをした時のことを思い出す。
でも子供達の体つきは、前に見た時とは明らかに違う。あまり無理に筋肉が付くようなトレーニングはしていないと聞いていたんだけど、それでも健康的な魅力が増しているように感じる。決して変な意味じゃなくてね。
アインハルトと綺凛は特に変化は無いかな……その、数日前に全身確認しちゃったから。
「子供は成長が早いってことか……」
「変態ですね」
何を今さら。
「ヤミか」
「幼い子供たちを視姦。万死ですね」
「だから違うっての」
前に見た時と変わらない黒い水着を身に着けているヤミ。
視線は相変わらず冷たいが、それは以前ほどの温度ではないように思う。少しは心を許してくれたのか？　まあ一緒に寝た仲だしな。
「今回もヴィヴィオちゃんに説得されたのか？」
「そうですっ！」

「でも今回は……」
「すぐにオーケーしてくれたんです」
「ほーん」
ヴィヴィオちゃん達は3人でセリフを分けて説明してくれる。
「別に……もう断る理由がありませんから」
そう言って顔を背けるヤミ。
「断る理由が無かったのか」
「そうですね」
「ごみごみしているところは好きじゃないと思ってたんだけどな」
「好きじゃないですよ。でもそのくらい、別に断る理由にはなりませんから」
ほーん。
そう言ってヤミは向こうに行ってしまった。あらら、ヴィヴィオちゃんをおいて行っちゃったよ。
すると、ヴィヴィオちゃんが駆け寄ってきた。
「お兄さん、お兄さん」
「ん、どうしたの？」
しゃがんでヴィヴィオちゃんの身長に合わせる。
「もしかして、ヤミさんと仲良くなりました？」
「ん、どうして？」
感覚じゃそうかもしれないなんて思ったけど、ヴィヴィオちゃんから見てもそうだったのか？
「ヤミさん、今日お兄さんが来ること知ってたんです。お誘いするときに説明したので」

「ヤミさんっ！　この日なんですけれど、みんなでプールに行きませんかっ!?」
「プール、ですか？」
「はい！　ママが、みんな大会を頑張ったからお休みをとって連れて行ってくれるって、言ってるんです！」
「みんなというのは、チームナカジマのメンバーですか？」

「あっ、それと、八神道場の人もいますけど……」
「それだけですか？」
「ルールーも来ますよ！　前に行った旅行の時にいた！」
「それで全員ですか？」
「あ、あとぉ……お兄さんも来ますけど……」

ヴィヴィオちゃんにも色々と気を使われていたと思うと情けなくなるな。年上の俺たちの不和を気遣って配慮してくれていた。
まあそれはそれとして、
「じゃあヤミの奴、俺が来ること知ってたのか」
もしかして向こうに行ったのって、『断る理由が無い』って、俺が来ることはもう断る理由にはならないって事になって、恥ずかしくなったからか？
「や、無いな。ナイナイ」
「そうですか？」
無いって。ヤミだもん。大方、俺の事なんて眼中になかったんだろう。
「ヤミだったら、言葉よりも早く変身が飛んでくるから」
「もー、お兄さんは～。そんなことないですよ。ヤミさんは優しいんですから」
そうかもしれないけど、その優しさが俺に向けられることは無いんだけどね。
「ヴィヴィオ～、早く行こー！」
「うんっ、今行くよ～！　お兄さんは……」
「一応仕事だから。聖天子様が来るまで待ってるよ」
「はいっ、それではまた後で！」
ヴィヴィオちゃんは元気よく走っていった。
その後ろ姿を見送っていると、
「翔さん」
後ろから声をかけられた。護衛対象である聖天子様だ。
「ああ、聖天子――――え」

振り返った俺は言葉を失った。
聖天子様だけではなく、その横には雪菜がいた。当然だが雪菜も水着を着ている。水色を基調にしたシンプルなビキニタイプの水着だ。引き締まった体が太陽の光を反射して、うん、色々と我慢するのが大変だ。
そんな雪菜だが、しきりに周りを警戒している。
「先輩。あまりジロジロ見ないで下さい」
「そ、そうですね。私もあまり見られるのは恥ずかしいですから……」
雪菜がじろじろ見るなと言っているのは果たして『自分』なのか、それとも『聖天子様』なのか。
雪菜はジトッとした目を向けてくる。分かってるだろと言いたげな目だ。そんなものは『どちらも』に決まっている。
聖天子様も、落ち着かない様子で自分の体を抱いていた。
問題は聖天子様の水着だった。
今までで一番露出のある格好だ。なんせ、太ももの付け根まで見えてしまっている。雪菜の健康的な白さとは違い、透き通るような、透明感のある白さだ。
この人の立場を考えたら、同性にこんなにも無防備な姿を晒したのは初めてだろう。
自分のボディラインを見せつけるようなこの水着、誰が考案したのか、こんなものを成人前の女の子達が、学校という集団の中で着ているなんて信じられないな。
そう、聖天子様が着ているのは学校のプールの授業でおなじみ、スクール水着だった。
スク水だ何だと言っても、同年代のスク水なんて、実際に見る機会は絶無だからなぁ。
でも実際ヤバいな。こりゃ下手な水着なんかよりもよっぽどだわ。周りの男が前かがみになる理由もわかる。
着てるのが聖天子様だからってこともあるんだろうけど、ボディラインがごまかせないってのがこんなにえっちだとは。
「いやはや……」

「先輩……」
上から下までじっくりと眺めてしまった俺は、雪菜は心底軽蔑したと言われた。絶対言われた。心の中で。
「や、だってさ……」
コロナちゃんとかの年齢ならともかく、高校生になって公共のプールでスク水は……軽く犯罪では。というか犯罪では？
え、何？　もしかして聖天子様っていじめられてるの？　違うよね？
「そういう訳ではありませんよ。水着はこれしか持っていなかったので」
「そりゃそうかもしれませんがね……」
聖天子様の立場では、気軽にプールに行くなんてことも出来ないだろう。あったのは在籍はしていても、ほとんど行けていないお嬢様学校のスク水だけ。
聖天子様の立場ならすぐに用意出来るのではとも思ったが、こっそりお出かけしている立場だったな、俺たちは。
「別に、この水着で公共のプールに行っちゃいけない決まりがあるわけじゃないもんな」
「はいそうですね、先輩」
「でも、しっかりと警護しないとな。コッコロには今日は楽しむように言ってあるから、俺たち2人で」
こんな美少女2人だ。謎の襲撃者だけではなく、ナンパ男にも注意しないとな。
「でも先輩――」
「周りの目もあるしな。みんな開放的な気分になっているだろうし――」
「先輩？」
「何か？」
雪菜が何か言いたそうだ。
「今日は聖天子様、こういう恰好なので、私が警護しますね？」
「こういう恰好って、お仕事なんだし、そんなこと言ってられないで

しょ」
「今、はっきりとわかりました。今日の聖天子様に先輩を近づける訳には行けません」
「雪菜さん？」
聖天子様の前に立ちふさがる雪菜。聖天子様の手を取り、
「それじゃあ先輩、先輩もゆっくり休んで下さい。くれぐれも知らない女の子を引っ掻けないで下さいね？」
そのまま2人で向こうに行ってしまった。
ま、まあ？　雪菜もなんだかんだ言ってこういう場所は初めてだろうし？　知り合いの目を気にしないではしゃぎたいって気持ちもあったりするのかもしれないね！　護衛の仕事はあるんだけど！
「はぁ～……」
一人残された俺は、これからどうしようかと考えるのだった。

「ゆ、雪菜さん!?　本当に良かったんですか!?」
「別にいいんですっ。今日は先輩抜きでっ」
「そうですか……」
翔の姿が見えなくなると、雪菜は引っ張っていた手を離した。
雪菜は聖天子をちらりと見る。
すらりと均整の取れた体形がくっきりと浮かび上がるスクール水着は、雪菜目線から見てもかなり危ないものだった。
だが、実際の反応は予想以上だった。それは周りを見ればわかるし、何より翔の反応も劇的だった。
何より、せっかく水着をお披露目した雪菜よりも、明らかに聖天子に視線が奪われていた。

「まさかとは思いますけど、ワザとじゃ……」
「違いますよ!?」
周りの視線を集める少女2人は、ただの友達のような会話を交わすのだった。

みんなでプールに②

とりあえず流されてみた。
このプール敷地の外周をぐるりと流れている流れるプールだ。そこに浮かび、日向ぼっこする。
雪菜だけではなく、みんな散り散りになっている。一応各々が持ったデバイスで何処にいるのかはわかるけど。
さっきなのはさんから、パラソル付きの休憩エリアを確保したという連絡が入った。大人組は交代でそこに居るらしい。
そして交代で子供の相手をしに行くのだとか。今日は何時ものメンバーに加えて八神道場のミウラとユウキがいる。ノーヴェさん1人じゃ面倒を見きれないのだ。
俺もそっちに合流しようかな。いつまでも1人で流れていてもつまんないし。
そんなことを考えていると、声をかけられた。
「あっ、翔。こんなところにいたんだね」
「フェイトさん？　ああ」
ボーっとしていたらいつの間にか1周してしまったらしい。
俺は流されないようにプールのへりに掴まった。フェイトさんも近づいてきて、俺の目の前にしゃがむ。
「おっふ……」
「え？　どうしたの？」
「いえ、なんでも……」
そんな足を揃えてしゃがまれると、もう色々と強調されてる。本人は無意識みたいだけど。
足が畳まれたことで肉付きのいい太ももがぱつぱつになってるし、お尻から女性の秘部のラインが足の間から見えている。
水着と下着。ほとんど同じ形のそれらだけど、フェイトさんは水着なら全然恥ずかしくないって考える人みたいだ。まあ、全力状態のＢＪがレオタードだしね。あの格好で空を飛び回るんだから。
というか、あの水着、ちょっと緩そうじゃないか？　下はまあ、そ

うでもないんだけど、上の方がちょっと緩そうっていうか……仕方なく一番大きなサイズの水着を選んだって感じだ。
　フェイトさんの豊満な胸部があってなお、余裕がある水着なんだもん。
「フェイトさん、その水着……」
「あ、うん。変じゃない、かな？」
「結構緩そうですけど。試着はしなかったんですか？」
　ここは遠慮なしに言わせてもらう。
「あー、やっぱり気づいちゃうんだ。うん。実はこの水着、さっきここのお店で買ったんだ。はやてに年頃の乙女が～、って言われちゃって」
「なるほど？」
　うちの部隊長、大丈夫なんだろうか。
「でも私に合うサイズ、ちょうど売り切れちゃってたみたいで」
「だったら買わないって選択肢もあったでしょうに。水着は持ってきてたんですよね？」
「そうなんだけどね。はやてが、フェイトちゃんのサイズなら、引っかかれば問題ないって言うから」
「ただのセクハラじゃねーか……」
　同性でも友達じゃなかったら絶対アウトだぞ、それ。
「私も断れなかったから……」
「フェイトさんも断りましょうね」
「なのはだったら断ってるんだけどね……」
「ああ、なのはさんは断ったんですか」
「ううん、買ってたよ」
「どっちなんだ……」
　この辺りは幼馴染のノリがあるんだろうな。俺にはついていけんよ。
「選んでたら時間がかかっちゃって。入ったらみんないないんだもん」
「子供たち相手に待てって言う方が無理でしょう」

「ふふ、翔も待てなかった？」
「や、俺は」
やることなかったから、目の前にあった流れるプールに飛び込んだだけです。
「そうなの？　護衛の仕事は大丈夫？　たしかコッコロちゃんも、今日はみんなと遊んでるんでしょ？　今は雪菜ちゃん1人で？」
「ちょっと雪菜とありまして」
「ケンカ？」
「ま、不機嫌にさせましたね……」
スク水姿の聖天子様に気を取られたから。そしてプールで流されながら気が付いたけど、雪菜の水着姿について何も言ってなかった。そんなしょうもない理由、説明したくないなぁ。
「だから1回、子供達の所に行こうかと。雪菜とは時間をおいて合流します」
流石にずっと怒ってるってことは無いだろうし。俺だって、ずっと任せっぱなしにするつもりは無い。
「ふ、ふ～ん。そっかぁ……子供たちの所にはすぐに行くの？」
「や、特に決めてませんけど」
気分だし。
「ね、私もプールに入っていい？」
「別に俺の許可取らなくても」
「そうじゃなくてね？　交代の時間まであと少しあるから、一緒に1周しない？」
そういうことか。
「もちろんいいですよ。それはもう喜んで」
「ふふ、ありがと」
フェイトさんは子供の様に飛び込むことは無く、プールのへりに座り、足のつま先から水の中に入れる。手をついてお尻を持ち上げ、入水した。
なんで俺はこんな事細かに実況してるんだ。
そりゃ、隣にフェイトさんの顔が来たからだよ。流れる水のせいで

わからなかっただけかもしれないけど、もしかするとおっぱいも掠っていたかもしれない。そのくらいの距離だ。
「あ、ご、ごめんね！　近かったね！」
「い、いえ、お気になさらず……」
俺達は流され始めた。
「あ～、気持ちいい。プールなんて本当に久しぶりだなぁ……」
そんなことを言いつつ、フェイトさんは仰向けに浮かび、先ほどの俺の様に流されていく。
でも、俺とは決定的に違う部分がある。
それはぷかぷかと浮かぶ、大きな大きな二つのふくらみだ。
正面から見ても谷間が素晴らしいんだけど、下から――今は横からだけど――見ると、ウエストと比べてどのくらいボリュームがあるのかが一目でわかってしまう。
そんなもの、当然周りの注目を集めてしまう訳で。
「ふんっ!!」
「痛ッ!?」
「やっぱり、おっきいほうがいいんだ……」
「え!?　い、いやっ！　違うって!!」
ああ、カップルクラッシャーになってるよ……
「フェ、フェイトさん？　そういう風に体を広げてると、周りの人の迷惑になりますからね？　今日は人も多いじゃないですか」
「え？　あ、うん。そうだよね」
俺が声をかけることで、そのテロ行為をやめさせる。
周りのカップルの女性の視線が俺に突き刺さった。なんで俺に？
「「(自分の彼女くらい、しっかり面倒見て!!　こっちに迷惑かけないでよ!!)」」
なんか理不尽なことを思われてる気がする。まあ実際には何も言われないし、そのままにしておくけど。
足が届く深さではあるが、俺たち2人共、あえて浮かびつつ、他愛のないおしゃべりをしながら流されていく。

だがしばらくすると、フェイトさんに異変が起きた。正確には、フェイトさんが身に着けているモノがズレ始めたのだ。
紐でしっかりと固定されているハズのそれが、するりと、流れるプールに攫われ始めている。
「(元々緩かったからか……？)」
俺が指摘するよりも、着ている人が気が付くほうが圧倒的に早かった。
「えっ!? わっ、わっ!? な、なんでっ……!!」
すかさずズレた水着を直すが、
「ひ、紐!? 後ろの紐もほどけてる……！ ご、ごめん、翔！ 隠れさせて！」
「え、ちょ、それは……！」
冷たい水の中で、フェイトさんの温かさが伝わってくる。2つの柔らかい物が背中にある!? これもう完全に密着してるよね!? フェイトさん!? さっきプールに入った時とは段違いだよ!?
幸い周りは自分たちが楽しむことに夢中で俺達には気が付いていない。もし見られても、『ああ、バカップルがイチャイチャしてんな。死ね！ 爆発しろ!!』ってくらいにしか思われないだろう。
「う、動かないで！ 今結んじゃうから……！」
「は、はい」
焦っているフェイトさんは、水着越しとは言え、自分がおっぱいを押し付けている自覚が無いみたいだ。
後ろにいるから今どうなってるのか全く分かんない。とにかく密着している事と、うんうん唸っているフェイトさんの声しか、情報が入ってこない。
ここはじっとして、事が過ぎるまでおとなしくしたほうがいいだろう。下手に動いてフェイトさんがぽろりしてしまうのは避けたい。
「うぅ～……なかなか結べない……っ！」
「……何なら俺が結びましょうか？」
「だっ、大丈夫だからっ!! もうちょっとだけ待ってて！」
フェイトさんの必死さを表すように、ふにふにと、柔らかい物が俺

の背中でバウンドしている。
ここがプールじゃなかったら、俺の下腹部が大変なことになってたよ。水で冷やされてくれてよかった。
悪戦苦闘していたフェイトさんだったが、1分ほどで結び終わったみたいだ。
「よかった。これでもう……――――」
だがそれが終わっても、また別の問題がある。
プールに入った時とは比にならないくらい、近いというよりも密着しているこの状況。
耳まで紅潮させたフェイトさんは、ゆっくりと俺から離れた。
「や、やっぱり、水着戻してくるねっ!!」
「あっ、ちょ、ちょっと!」
俺の静止も聞かず、胸元を押さえつつ、プールから上がってしまうのだった。

顔を真っ赤にしてどこかに行ってしまったフェイトさん。
お互い悪くないとはいえ、どんな顔で会えばよいのか分からない。そんな状態で流石に追いかけることも出来ず、予定通り子供達の所に来た。
フェイトさんは子供達の所に行くって言ってたから、ワンチャンいるんじゃないかとも思ったんだけど。
「なのはさん」
「ん。翔君、こっちに来たんだ」
ノーヴェさんと一緒にいたのはなのはさんだった。
「フェイトさんはいないんですか?」

「フェイトちゃん？　フェイトちゃんだったら連絡があって。子供達の面倒を見る順番変わってほしいって」
「何だお前、フェイトさん目当てで来たのか？」
「少なくとも、あの子供達目当てで来ましたって言うよりは健全だと思いますけどね」
　ノーヴェさんのニヤけた顔の質問に対して、肩をすくめて返す。
　目を向けた先には子供達。元気に泳ぎ回っているみたいだ。その輪の中にはしっかりとコッコロも入っている。
　仲間外れにするような娘はいないから心配はしてなかったけど、コッコロの方もうまく馴染めているみたいだ。
「そりゃ、世間一般的に言えばそうかもだがな……じゃあお前、アイツら全員の目の前で言えんのか？　『自分はこの中の誰にも興味ありません』って」
「……」
　それをしたらガチで泣かれる娘がいるな。
　何も答えられない俺に、なのはさんが察したらしい。
「へぇ～？　そうなのノーヴェ？」
「そうなんですよ。そのせいで大会前に調子崩しちゃったヤツもいて」
「ちなみにそれ、ヴィヴィオだったりは――――しないか。いつも通りだったし」
「や～、どうでしょうねぇ。誰かまでは本人のプライバシーもありますし」
　ヴィヴィオちゃん達は大会まで個人練習だった。もちろん連絡は取り合っていただろうけど、細かいところまでは伝わってないんだろうな。
「でもみんな、大会ではすごくいい試合だったよ？　持ち直したってことでしょ？」
「そうなんですよ！　アタシもそこが聞きたかったッ!!　なあ翔。実際どうなんだ？　ミカ姉の道場に行った時に何かあったんだろ？」
　そこまで言ったら誰が対象なのか分かっちゃうと思うんだけど。

「ノーコメントですぅー。プライバシーですぅー」
「おいおい、そりゃあないぜ？　あの時ミカ姉にいろいろ言って焚きつけたのはアタシなんだぜ？」
「あんたが犯人だったのか……」
　あんな同じタイミングで２人が告白してきたのにはそんな理由があったとは。
　それにしてもノーヴェさんはこの話題にしつこいな。そんなにも自分の教え子の恋愛事情が気になるのか！
　俺も俺で、まさか２人と付き合うようになったとは言えない。
　困っていた俺に、なのはさんが助け舟を出してくれた。
「もう、ノーヴェもほどほどにしないと。じゃあ翔君は、その子に会いに来たってことだね」
「その割には、迷わずにフェイトさんって言ったけどな」
「まあ、それは……」
　実際のところ、今はフェイトさんを探していたからなぁ。もちろんみんなの様子も気になってたけど、一番初めに出てきたのがフェイトさんだったのは間違いない。
　だがそれには理由がある。
「さっきまでフェイトさんと一緒にいたんですけど……ちょっとトラブルが起こりまして」
「ほう！」
「へぇ！」
　なんだ。なんでこんなに２人の食いつきがいいんだ。なのはさんまで。
「まあまあ。そんなのはどうでもいいじゃねぇか」
「そうそう、続きをどうぞ。そのトラブルの内容を、事細かにね？」
　あんまり続きを話したくはないんだけど……観念してさっきのことを説明する。
「ほほーん？」
「へぇぇー？」
　ノーヴェさんはともかく、あのなのはさんまでニヤニヤしてるんだ

けど。
「見たのか？」
「見てないです」
「ズレた水着は？」
「それは見ましたけど……」
「あら～」
「そりゃあ幸運、いや、災難なのか？」
「どっちとも言えないでしょうね」
「どっちとも言えないのか。そうかそうか、フェイトさんに避けられて幸運な部分があるのかぁ？　いったい何が幸運なんだろうなぁ？」
　ノーヴェさんはとことんからかってくるな。
「（なのはさん。今六課、あの話題で持ち切りなんですよね？）」
「（うん。フェイトちゃんが夜月君のこと好きなんじゃないかって）」
「（浮いた話のないあの3人（なのは、フェイト、はやて）の中で、一抜けは誰になるのかって）」
「（甚だ不本意だけどね……）」
　何か2人でこそこそと喋っている。ずいぶんと盛り上がっているな。
「まあ、そういう訳で。フェイトさんがここにいないのかと思ったわけですよ。ケンカ別れ、ってことも無いですけど、良い別れ方じゃなかったんで」
「じゃあ残念だったな。ここにはフェイトさんはいないぜ。いるのはあの通り――――」
　ノーヴェさんが指さす先には、開始からずっとあの調子で遊びまわっているだろう子供達がいた。
　以前の旅行に比べて、たった数カ月だがみんな体力がつき、面子も多くなっている。
「――――元気のいいチビッ子だけだぜ」
「ヤミはしっかり付き合ってるんですね」
「うん。ヤミちゃん、本当にヴィヴィオと仲良くしてくれてるんだよ」
　なのはさんが嬉しそうに言う。

俺もヤミに前向きな理由を与えてくれたヴィヴィオちゃんには感謝しかない。
ほのぼのとした気持ちでみんなを眺めていると、すぐにみんな、俺が来たことに気が付いて手を振ってくる。
「あっ、お兄さんだ！」
「え!?　あっ、本当だ！」
「主様、こちらでございます」
フェイトさんがいなかったのは残念だけど、とりあえず、子供達の相手をすることにしようか。

みんなでプールに③

みんなに呼ばれるがまま、俺はプールに入った。周りはたくさんのチビッ子。まるでこの前の旅行のようだが、メンバーが増えていた。

それは新しく俺の家に来たコッコロであり、八神道場のユウキとミウラの2人だ。この2人とは大会を通して仲良くなったみたいだ。

「みんな、コッコロと仲良くしてくれてありがとな」

「いえいえ！」

「コッコロちゃん、すごくいい子ですから！」

「私達もお友達になれてうれしいです！」

そんなに心配はしてなかったけど、コッコロはうまく馴染めているみたいだ。

「主様？　聖天子様の護衛をなされていたのでは？」

コッコロが不思議そうに聞いてくる。

「ああ……まあ、ね。今は大丈夫」

「そうでございますか……？」

流石にコッコロに言うことは出来ないなぁ。

「あのコッコロって娘、前の旅行にはいなかったけど、最近知り合ったの？」

「ああ、そうだよ」

「ふーん、そっか」

ルーテシアはすんなりと納得してくれた。ここには多分、この世界の修正力が働いているんだろう。

「そう言えば、ルーテシア。お前、試合はどうなったんだ？」

「あなたねぇ、全然応援に来ないじゃない」

「こっちも仕事があったから」

しょうがないことだと納得してもらうことにする。

聞くとなんと、ブロック本選で4位入賞になっていたらしい。ガリューとかの召喚中、ルーテシアのメインウェポンを使わずに（インターミドルではルール上召喚獣は使えない）ここまで戦えるとなると、実力は相当だな。

「むむむ、でも私の活躍は全く眼中になかったってこと？　これは今度埋め合わせをしてもらわないといけないわね」
「埋め合わせぇ？」
　買い物に付き合うとかか？　もしくはご飯を奢るとか？　実は聖天子様の護衛任務のおかげで、今の懐はとっても温かいのだ。１食や２食くらいは全然奢れるぞ。
「んー？　や、そうじゃなくてね？　もっと他のものかな？」
　何だ？　何を要求されるんだ？
「お兄さん、実は私達も！」
「え、ヴィヴィオちゃん達も……？」
　なんで？
　首を傾げていると、アインハルトと綺凛、クロが近寄ってくる。
　なんだかアインハルトと綺凛が何だか申し訳なさそうな顔をしてる。クロは怒ったような、呆れたような顔だ。
「アインハルトと綺凛にあげたんでしょ、手に入れたアイテムを」
「う、うん。２人の方が俺よりもうまく使えると思って」
　この島では１つや２つ未知の技術があっても、そんなに問題ではない。そういう環境なのだ。俺が問題視されているのは、それが１人の人間に集まりすぎているからだ。
　だから大会で使おうとも問題は無い、はずなんだけど……
「そうじゃなくて、全然そうじゃなくてっ。何も知らない人から見たらそうかもしれないけど、みんなから見たら違うでしょ？」
　そういうことか。
「翔さん、ごめんなさい。言わないで欲しいって言われてたのに、私、口を滑らせちゃって」
　アインハルトが謝ってくる。どうやら、コロナとの試合の後、傷ついたコロナに問われてとっさに答えてしまったらしい。
「それで、私のヤツもそうなんじゃないのかって言われてしまって……」
　綺凛が言う。
　確かにビルドバーニングもレッドフレームも、同じＭＳだけあって

似ている部分がある。
　それで、そこからはとんとん拍子だったらしい。
　なんだかんだ言ってみんな子供だ。チームメイトがいつの間にか知らない武器を貰っていたとなれば興味を持つのは当然だし、それが知り合いのお兄さんからのものとなれば、
「お兄さんは、どうやってあの鎧を手に入れたんですか？」
「教えて下さい！」
「アインハルトさん達にあげるってことは、そんなに高価なものではないんですか……？　でも、それならあの性能は……」
「ボ、ボクはその……」
「ボクはあの鎧に負けたみたいなものだからね～。どういうものなのかは知りたいなぁ」
「っていう感じなのよ。みんな２人『だけ』にあげたあのアーマーについて知りたがってるのよねぇ。教えてくれる？」
　チビッ子の後ろに立ったルーテシアがニヤニヤとした笑みを浮かべている。
　ヴィヴィオちゃんだけではなくユウキまでおねだりしてくる。唯一、ミウラだけは直接的なことは言ってこない。でも知りたそうにしてるぞ。
「あ、そう言えば、お兄さんにはしっかり挨拶してなかったね！　ボクは紺野　ユウキ、よろしくね、お兄さんっ！」
「ミ、ミウラ・リナルディです！　よろしくお願いします！」
　２人そろって頭を下げてくる。
「うん、よろしくね、２人共。俺は夜月　翔。そこのクロのお兄さん――まあ血はつながってないんだけど。それとコッコロの保護者――コッコロは俺のことは『主様』って呼んでくるけどあんまり気にしないで欲しい。チームナカジマには……特に何かしてるってわけじゃないね」
「??」
「お兄ちゃん……自己紹介に余計な情報を付け足し過ぎよ！　見て！　２人が混乱しちゃったじゃない！」

始めに誤解を受けないようにしっかりと説明しておかないといけないでしょ？　ただでさえ誤解を受けやすいんだから。
とにかく伝えたいのは、
「俺、普通の、人。ＯＫ？」
「先輩が普通……？」
「翔さんが普通は……無理があるような……」
「翔君、冗談にしても面白くないよ？　なのはさんとタイマン張れる人が普通はあり得ないでしょ？」
「うぅ～ん??」
綺凛、アインハルト、ルーテシアに全否定される。そのせいで、ミウラとユウキはさらに疑問符を浮かべてしまった。
「そんな普通じゃないお兄さんが、知らない間に怪しげなアイテムを配ってたんだから、気になっちゃうのはしょうがないでしょ？　もちろん、契約か何かで言えないときは無理にとは言わないけど」
う～む、どういうものか、ってことは説明してもいいんだけどなぁ。
「あのアーマーは博士Ｘが作った最新型のパワードスーツ。全体の名前はモビルスーツなんだけど、さらにその中でも特殊なガンダムタイプの試作機なんだ。で、最近新作が出来てそのテスターを探してたから、良かったら綺凛とアインハルトにどうかって」
という設定にしておく。
博士Ｘとは俺に与えられている不思議な道具を作っている、ということになっている人物だ。実在はしない。でも、説得にはこの人の名前を出しておけば大体なんとかなる。
「じゃあその内、また新しいＭＳ？　ガンダム？　の、テスターが募集されるかもしれないって事？」
「そう言う事だな。ま、向こうの要望があったら声かけるよ……うん」
俺の言葉に、ちびっ子たちがきゃっきゃと盛り上がる。
「大ウソつき」
「仕方ない」
クロに白い目を向けられる。
「ホントはエッチして手に入れたアイテムなのに」

「だからね？」
「その人とエッチしたほうが、その人と相性が良い武器が出るんじゃないの？　アインハルトと綺凛がそうだったんだし」
「何とも言えないな」
「じゃあそのうち、みんなともエッチするかもしれないってことね。とりあえず誰に報告するべきかな？」
「……」
　なんとか質問をかわし、俺はみんなと遊び始めるのだった。

「楽しんどるみたいやなぁ。この色男め～」
　ある程度みんなと遊んだ後、拠点にしている場所に行った。そこには、ニヤニヤと笑っている八神さんが待っていた。
「護衛のお仕事はええの？」
「今は雪菜がしてくれてます。というか、今日はあんまり聖天子様に近寄らないでって言われました」
「ぷっ、あっはっは!!」
　めっちゃ笑うじゃないですか。
「いやいや、君も罪作りな男やなぁ」
「多分、余計なハプニングを気にしてるんですよ。水着ですし、ぽろりとか」
「あの水着ならぽろりは無いやろ。君が水着の隙間から手でも入れなければ。フェイトちゃんやないんやし」
「フェイトさん？」
　あれから見つからなかったんだけど、ここに来てたのか。というか、知ってんのかあのことを。

「ん。ちょっと前に来てな、もう散々怒られてしもた。『ばかっ、ばかっ、はやてのせいで……！』って。今は水着取り換えに行って、そのまま子供たちのトコ」
そう言えば、あのちょっと緩い水着を着ることになったのはこの人のせいだったな。
怒られるのは自業自得だけど、後悔も反省もしてないだろうな、この人は。
「それは当然」
「やめてあげて下さいよ」
「水着がズレるなんて予想できへんよ。私としては、新しい水着でアピールしたらってだけやったし」
そう言われるとそうなんだよな。
それにしてもアピールしたらって、八神さん、すっかり『そう』思ってるみたいだな。
「そりゃ、見ればわかるもん。伊達に長い付き合いしとらんよ。やー、悩ましいなぁ。年上から年下まで、より取り見取りで」
実はもう、そのほとんどをいただいてしまってるんだけどね。
「やー、それにしても、まさかここにスク水持ってくる人がいるとは思わんかったなー。聖天子様って、そういう趣味なん？」
「不敬ですよ」
「でも、君もそう思ったんやろ？」
それは同感だ。1つの性癖アイテムだからな、アレは！
「んー、夜月君。君もそのクチなのかな？」
「そんなことないですよ！」
って、八神さんも聖天子様がスク水だって知ってんのか？
この人達が来た時には、もうすでにみんな散り散りになってたはずなんだけど。
「さっきここにいたんよ。丁度すれ違い。君がここに来たら、引き留めてくれるように言われてなぁ」
「ふーむ」
「それで？　君にとってスク水とは？　命？」

「だから違いますって」
「ふーん？　違うけど、まじまじと見てたんやなぁ？　姫柊ちゃん、ずいぶんと怒ってたけど、聖天子様のスク水に興奮したからなんやないのー？」
　こ、この人は……！　確かに目は奪われたけど！　でも誰だってそうでしょうが！　この人もそうじゃあないのか？
「そりゃまあ。でも私が目を奪われるのと、君が上から下まで舐めまわすのとでは訳が違うやん？」
「俺の時の言い方に悪意がありますね」
「君の場合は、近くに姫柊ちゃんがいるのに、聖天子様を見たって事やろ？　そして、そのせいで、姫柊ちゃんに言うべきことを言わなかった」
「うぅん……」
　まるで見ていたみたいに言うが、全部当たっている。
「そりゃあ怒るよ。怒って当然や」
　それを言われると何も言い返せない。
「それじゃあ、私に対して何か言う事あるんやない？」
　椅子から立ち上がり、自分の体を見せつけるような、片手を頭の後ろに、もう片方を腰に当てて体をくねらせる。
　言いたいことは分かる。
「いつも他の娘にしてるみたいに、水着を褒めて、口説いてくれてもええんよ？」
　別にそこまで口説いた記憶は無いんだけど。みんなの服装を褒めたりってこともほとんどないんだけど？
　でも、こんなこと言ってくる人を素直に褒めたら負けな気がする。
「とてもいいと思いますよ。そうですね……とてもスレンダーで。無駄な部分が無い感じで」
「何ぁに、それ？　ちょっと馬鹿にしてる？　来月からの上司を、ちょっと馬鹿にしてる？」
「そんなことないですって」
　ちょっと捻くれた言い方をしたけど、別に悪意があるわけじゃな

い。
　実際、八神さんは、同期のなのはさん達に比べると小柄だ。身長もそうだけど、体の出っ張り具合、引っ込み具合もお二人に比べると若干ささやかだ。まあ普通サイズと言ったところだ。超失礼だな、俺は。
　そう、言うなれば……小さくまとまっているのだ。決して悪い意味ではなく！　悪い意味ではなく！
「もっと別の言い方ないん？」
「うーん……八神さん、ちゃんとご飯食べてますか？」
「どういう意味や！　私の体がそんなに貧相っちゅう意味か！」
　だって……最近忙しすぎるからか、痩せてる気がするんだもん。この人も生き急ぎ過ぎだよなぁ。仕事忙しいんだろうなぁ。
「ふーん、ま、ええわ、しっかりと褒めてくれたわけやし、君にはご褒美をあげよう！」
「結構です」
「よいしょ、っと」
　俺を無視してシートの上に寝転ぶ八神さん。
「ちょっと？」
「それそれ」
　机の上を指さした。そこには都合よくサンオイルがある。
「これは」
「塗って？」
「……」
「そんなに嫌そうな顔せんでもええやん」
　うつ伏せの姿勢で、顔を向けてくる。口を尖らせているが本当に怒っているわけじゃないだろう。
「背中に塗ればいいんですか？」
「前も塗る？」
「はは、ご自分でどうぞ？」
　さっさと終わらせてしまおうと、俺は手にオイルを出す。よくあるパターン、出したものをそのまま塗って『ひゃん！　冷たい！』が無

いように、しっかりと温める。
「じゃあ塗りますよ」
「ん～」
　さっきは少しサゲ気味に言ったけど、八神さんの背中はきれいなものだ。日本人ゆえに真っ白とまではいかないが、シミ一つない背中が、無防備に俺に晒されていた。
「あ、水着の紐、邪魔？　ほどこうか？」
「お好きになさってください」
　でもこの人のサイズだと、水着を外した状態でちょっと背中を反らせたら見えちゃいそうだよな。前のあの部分が。
　そう思いながらもオイルを塗りこんでいく。うわ、この人、背ガチガチじゃん。
「あー、そこそこ、そこをもっと強く～」
「俺はサンオイルを塗っているのであって、マッサージをしている訳じゃあないんですけどね」
「そのくらいのサービスはええやろぉ～、おおぉー……！」
　でも、そのくらいの要望には答えることにする。
　オイルを塗りこむだけではなく、ぐりぐりと凝り固まった背中をほぐしていく。これって回転の技術を使えばもっと効率的にできるんだろうか。医学の知識があるジャイロだったらできそうだけど。
「八神さん、最近座り仕事ばっかりじゃないですか？」
「ん、ん～、まあ、現場にはなぁ。最近は全然かなぁ」
　この年齢で現場にいかないってのはどうなのかって思うけど、それは置いといて。
「体、なまっちゃうんじゃないですか？」
「確かにそうやけど、そもそも私が全力で戦う事なんてほとんどないし。戦ってもそこまで動かないからなぁ……」
「なるほどぉ……」
「何？　夜月君、そういう健康管理の能力も持ってるって事？」
「見るだけでわかるってことです。もっと動かないと。せっかく若いんですから」

「う～ん、時間がなぁ……」
もみもみ。
「んっ、あ、夜月君、その手つき……」
「……」
「いいよぉ～、すごくいいよぉ」
「……そうですか」
「ん、どうしたの？　そんな微妙そうな顔して」
わざわざそんな紛らわしい声を出してもらわなくてもいいですよ。いくらプールでも、ここまでしてるようなカップルは、そういないんですから。周りの人の目は気にならないんでしょうかね。
と、そこに、
「翔さん……」
「先輩、何、やってるんですか？」
とても冷えた声が聞こえた。
「ありがとなぁ、夜月君。これでお日様を気にせず、気持ちよーくお昼寝出来るわぁ」
いつの間にか起き上がっていた八神さん。大きめのサングラスをかけ、これ以上会話するつもりが無いとばかりにビーチチェアーに横になった。
「ゆ、雪菜さんや。ああ、これはこれは、聖天子様も」
そう言えば、八神さんは言ってたな。
さっき雪菜がここにいて、俺が来たら引き留めるように言ってたって。つまりそれって、合流出来るようにってことだよな。
まさかとは思うけど、八神さんこれを計算してたのか？
「……あの時は、私も意固地になっちゃった所があると思いましたけど……ずいぶんと楽しんでいたみたいですね」
「や、楽しんでいたというか、やらされていたというか……」
どうやら、また怒らせてしまったみたいだ。

みんなでプールに④

何とか許してもらった俺は、聖天子様、雪菜と一緒に行動していた。
「八神さんのことは、分かりました。あの人、司令官としてはとても頼りになりますけど、オフの時は、すごくお茶目なところがあることは分かっていますから。私達に見せるためにわざわざ先輩をからかっていたってことは」
「私は信じてましたけどね？　翔さんは紳士ですから。公共の場でそのようなはしたない行為には及びませんよね」
「……紳士かどうかはこの際横に置いておきますけど、その通りですね」
「分かってくれたようで何よりだよ」
誤解が解けたことと、時間が経ち聖天子様のスク水の件もだいぶ緩和されたみたいだ。
おかげでこうして一緒に行動出来ている。
「じゃあ、どうせなら遊びましょうか。2人でいた時は何してたんですか？」
正直、この2人がどうやって遊んでいるのか想像つかないな。
「いえ、あの……」
「あまりこういう場所に来たことが無かったので……」
「ああ、なるほど……」
どうやって遊べばいいのか分からなかったってことか。
「じゃあ何かやりたいこととかは無いって感じですか？」
「いえ、そういう訳ではないんです」
「別に遠慮しなくても」
「では……」
聖天子様が指さす。その先には、
「あれを一緒に滑っていただけませんか？」
プールの中央にそびえ立つ、ウォータースライダーがあった。

このプールの目玉でもあるこのアトラクション。当然長蛇の列ができていた。1回滑るのに1時間待ちだ。遊園地のアトラクションじゃないんだから。や、ある意味遊園地のアトラクションなのか？

地上５０メートルから滑り降りる、全長４００メートルのウォータースライダー。そりゃ乗りたくなっても仕方がないね。

「はい。真ん中にあってずっと目立っていたので乗ってみたかったんですけど……」

「雪菜がダメだと」

「ま、まぁ、高いところに行くわけですから？　飛べない私だと何かあった時に困ると思ったんです」

腕を組んで顔を反らしている雪菜はもっともらしいことを言ってるけど……

「そう言えば雪菜、高いところは苦手だったな……」

「そうだったんですか？　だったらそうと言っていただければ」

「ちっ、違いますから！　私は剣な……武偵なんですからっ！　そんな、高いところだって別にっ！　本当に！　本当に聖天子様の安全のために！」

そんな必死に否定すると逆に肯定していることになるぞ、雪菜さん？　あの聖天子様もにこにこと笑ってるぞ？

今俺達はウォータースライダーの滑り口に続く階段に並んでいる訳なんだけど、その階段は当然上りだ。

一歩一歩階段を上るごとに、手すりの向こう側の景色は高くなっていく。

雪菜は手すりから限界まで距離をとって下を見ないようにしている。

「なあ、雪菜。怖いなら下で待っててもいいんだぞ？」

「大丈夫ったら大丈夫なんです！」
強情な雪菜はそう言ってむくれてしまった。
そうして話しているうちに、ようやく頂上まで到達することが出来た。
それは良かったんだけど……
「え、ダメなんですか？」
「はいー、規則ですから～」
同時に滑ることが出来るのは２人までだと、スタッフの男性に止められてしまった。
こうしてみるとすごいな、このウォータースライダー。滑り台部分が全部透明なんだよ。東京スカイツリーの展望台にある透明の床みたいに、下が丸見えだ。
滑ればさながら、空を飛んでいるかのような心地になるだろう。
「これは――――」
「うぅ……」
「――――無理そうだな」
雪菜の腰が完全に引けている。
俺の腕にしがみつき、首を伸ばして下を確認している。
「夜月さん、どうしましょうか……」
反対の腕には聖天子様が軽く触れ、不安そうに見上げてくる。
「ッチ！　爆発しろ……！」
「おい、聞こえてるからな」
スタッフが舌打ちとか何考えてんだ！
「アハハ？　何のことでしょうか？　お早くお決め下さいね～」
「くっそ……」
だが、後ろの人を待たせているのは確かだ。
「うーん」
とりあえず聖天子様を１人で滑らせるのは絶対にない。何のための護衛任務だって話になるからな。
となると俺か雪菜が一緒に滑らないといけないんだけど、この様子だと雪菜は滑れないだろう。

「だっ、大丈夫ですよ！　私が聖天子様と一緒に滑っても！」
「そんな無理しなくても……」
　そもそもそれじゃあ、俺がいなくても関係ないじゃないか。雪菜が滑れるんなら、さっきも滑れただろ。
「翔さん、分裂とかできませんか」
「分裂って……」
「前２人に分かれていたので、行けるのではと」
　ダブルアクションゲーマーの事か。聖天子様も結構言うな。
「変身すれば出来ないことは無いけど……」
　え？　エグゼイドで滑んの、俺？
「どうしますか～？」
　スタッフが聞いてくる。
「ええい、ままよ！　変身！」
「え、ええ!?」
　ダブルアクションゲーマーレベルＸＸに変身する。２人に分かれた俺に、スタッフの男性は驚愕していた。俺もこの姿で滑ることになるなんてびっくりだけどな。
「じゃあ俺はこっちの娘と」
「俺はこっちの娘と滑るから」
「あ、は、はい……それで問題は、ありませんが……」
「それはよかった。ささ、早く行きましょうか。２人共」
　他のお客さんの目が恥ずかしくなってきた。
「どっちから先に滑りますか？」
「あ、えと……」
　雪菜はまだ決心がついていないらしい。
「それでは私から」
　それを察して、聖天子様が前に出て滑り口に座った。じゃあ俺も。
「あ……」
　聖天子様の後ろに座る。密着したからか、少し聖天子様は体を固くする。
　俺の足で挟まれると真っすぐ揃えられていた真っ白な足、その揃え

る力が強くなる。紺色のスク水に包まれているヒップにもきゅっと力が入った。
「あまり寄りかかると、ベルトに当たりますね……」
「そ、そうですね」
「ッチ!!　下に降りたら、係りの指示に従って下さいね～。途中で離れると危ないので、しっかりとくっついていて下さい～」
「お前また舌打ちしただろ」
　あはは～、と笑う男性スタッフ。
「時間も押してるんで、早く行ってくださいね～」
「……はいはい、分かりましたよ」
「行きましょう……！」
　俺は透明のウォータースライダーに漕ぎ出した。
「じゃあ次は俺達だな」
「は、はいっ」
　高いところが苦手な雪菜は前に座ることは出来ない。俺の後ろにしがみついた。
　まだ緊張した面持ちの雪菜。
「……なあ、雪菜。苦手だったら本当に無理しなくてもいいんだぞ？　楽しめないんだったら、本当に」
「大丈夫です！　楽しめますっ、先輩となら……っ」
「そ、そうか」
「ッチ!!　上のランプが青になったら出発してくださいね～」
「もういいわ……」
　男性スタッフへのツッコミはやめることにした。
　滑り口の上には信号機のようなランプがある。今は赤く点灯している。その横には今は点灯していないランプがある。先に言った俺が下に到達すれば、そっちが青く光るんだろう。
　それから1分ほどすると、青いランプが点灯した。
「じゃあ、行くぞ！」
「はい……っ」
　俺のお腹に腕を回し、小さく頷く雪菜。

俺達は滑り出した。

――――――

いていない、ように見える。
「(気が付いてないんですよね？　触れていると言っても、軽くですし。滑ってる途中ですし……っ)」
もちろん、おっぱいを触られることに軽いも重いも無いのだが。軽くても重くてもそれは等しく罪だ。
翔が変身していることもあって、表情が全く分からないことも、聖天子が判断できない理由になっていた。
「(とにかく、な、なんとか……っ、体勢を変えて)えええええ!?」
スライダーは最後の直線。スパートのためにさらに加速する。
もはや体を動かすどころの話ではない。今の体勢のまま、今まで以上に密着して滑り降りていく。少し触れていただけのおっぱいも、少しだけ形が変わるくらいは圧迫されていた。
数瞬後、２人は水を切りながらスライダーから飛び出した。
「いやー、面白かったですね、聖天子様！　流石、目玉のアトラクションなだけありますね！」
スタッフに誘導されながら、翔は興奮した様子で話しかけるが、
「……わざとでは、ありませんよね？」
「何がです？」
胸元を押さえた聖天子様の質問に、翔は首を傾げるだけだった。

「ひあああああああああっ!!」
「雪菜っ、ちょっと雪菜っ!!」
「先輩！　離れないで下さい!!」
滑る前に翔が抱いていた、このウォータースライダーが空を飛んでいるようだという感想は、全く間違っていなかった。

決死の覚悟で滑り出した雪菜の気持ちは5秒で崩れ去り、その口からはジェットコースターを乗っているかのような叫び声が上げられていた。
後ろにしがみついている雪菜の声が翔の耳に響く。
恥や外聞を全て投げ捨て、必死に翔にしがみつく雪菜に楽しんでいる余裕なんてものは存在していなかった。
ひとしきり大声を上げた後は、俺にしっかりとしがみつき、何かぶつぶつ呟き始めた。
「大丈夫、大丈夫です。このスライダーはこの島の特殊強化アクリルを使ったもので耐荷重量はスライダー厚さが5ミリだとしておおよそ５００キロ絶対に壊れません壊れない壊れない……っ」
そんなに心配なのか。
「大丈夫だっ、てっ、俺も一緒にいるんだから！」
「先輩と一緒なのは安心なんですけどっ、逆に不安なんですっ！」
「はいっ!?」
「先輩と一緒にいると、何か事件に巻き込まれるような予感がしますっ！　頑丈な石橋が落ちたり！　ビルが倒壊したり！」
「なんだそりゃ!?」
スライダーに流されながら、俺達は言い合う。
「だって先輩！　よく事件に巻き込まれるじゃないですか！」
「言うほど巻き込まれてない気がするけどね！　首は突っ込んでるけど！」
「そうですよねっ!!　ええ、そうです！　私達には何も言わないで、先輩はいつも一人で！」
「いやそれはっ！　俺にも色々と考えがあってだな！」
次の瞬間、
「ッ!?」
俺達は仲良く水面に投げ出された。
ヒートアップした俺の頭は、プールの水によって冷却される。
水面から顔を出すと、
「お～い、大丈夫か～」

先に滑り降りた俺が手を振っているのが見えたのだった。

スライダーで滑った後、2人は少し時間が欲しいとどこかに行ってしまった。
今度は怒らせたわけじゃない、と思いたいけど。顔が赤かったんだよな。あれは怒ってたんじゃなくて、恥ずかしがっていたんだと思うけど。
雪菜は分かるけど聖天子様は……ま、男と密着して滑ったんだから当然だよな。戻ってくるのを気長に待つとしよう。
「ずいぶんと大人気ですね、夜月　翔。いつものことですが」
「ヤミか」
そんな俺のもとにふらりと現れたのは、この前の旅行と同じ水着を身に着けたヤミだ。その美貌と雰囲気で周りの視線を集めているが、本人は特に気にした様子は無い。
それにしても、
「どうかしましたか？」
「いや」
確かに冷たい目なんだけど、前よりも柔らかい気が……
そんな下手なこと言わないけど。
「ヴィヴィオちゃんの方はいいのか？」
「今は八神はやてがいますから」
「いますから？」
だから？　別にここに来る理由にはならなくない？
「八神　はやては、少し気安過ぎます」
「なるほど」

八神さんのノリは、ヤミにはキツイってことね。でもよく離れられたな。みんなゴネそうだけど。それこそ八神さんとか絶対放してくれなさそうだけど。
「夜月　翔と話してくると言ったので。すんなり」
「じゃあ逆にニヤニヤしながら送り出されただろ」
「はい」
じゃあ何か話したほうがいいのかな。
「無難に。そうだな……最近、ティアーユ先生とはどうだ？」
「確かに無難ですが、あれ以来、話してません」
だろうなとは思ったけど。
「もったいない、せっかく再会できたのに」
「私にも私の考えがありますから。生存が確認できたのは良い事でしたが」
ティアーユ先生からヤミに会いに来ることは……あるだろうけど、そこまで強引に迫れるかって言えば無理だ。ヤミも逃げ続けるだろうし、これは俺達の方でまた何か行動しないと。
ここはヴィヴィオちゃんも巻き込んで。そうすればヤミも断れないからな……
「何か企んでますか？」
「まだ何にも」
「高町ヴィヴィオを巻き込もうと考えているでしょう」
バレてーら。
「そりゃあね、今までは大会でそんな余裕はなかったかもしれないけど、これからはそうじゃないだろ？　俺が何かしなくても、向こうから何かしてくる」
「それはそうかもしれませんが……」
「じゃあ俺が何かしても別にいいだろ？」
「本当に、余計なことをしないで下さい」
ここまで頑なだと強引に引き合わせるしかないよな。そのうち考えるとしよう。今日の所はこんなもんで。
「でも今日、ティアーユ先生も誘ってるんだぞ？」

「またそんな嘘を」
「ホントホント。ほら後ろに」
俺が指さした方向をヤミは胡散臭げに見た。当然ティアーユ先生は居ないけどね。俺は呼んでないし。ヴィヴィオちゃんがこっそり呼んでいなければ、絶対にいない――――
そう、俺の指さす方向に、ナイスバディの金髪美女がいたとしても。
「えええええっ!?」
「ッ!?!?」
俺とヤミは一緒に飛び跳ねる。
「テテテティアーユ先生!? な、何でここに?」
「え、え?」
「夜月 翔……! あなた、なんてことを……!」
「お、俺じゃないよ!? 多分ヴィヴィオちゃんが……!」
流石のヴィヴィオちゃんも人が悪い! ヤミだけじゃなく俺にまで秘密にしてるなんてさ!
おかげで慌てる必要のない俺までドキドキしてるじゃないか!
「ち、違うよ? 私、私!」
って、ん? あ、この声は……
「フェイトさん、ですか?」
「う、うん。そうだよ?」
よく見ると瞳の色が赤い。ティアーユ先生は緑だったはず。
俺達の気持ちが一気に落ち着く。
「ご、ごめんね? なんだか驚かせちゃったみたいで」
「いえいえ、そんな。俺が少し冗談を言っただけですから。いやー、びっくりした……」
「こ っ ち の セ リ フ で す っ !!」
怒ったヤミはどこかに行ってしまう。
「おいおい、みんなにはなんて説明するんだ?」
「あなたに失礼なことを言われたと言います」
それはそれで、みんなにニヤニヤされそうだけど。ヤミはどこかへ行ってしまった。

残されたのは俺とフェイトさんだ。
あの時のハプニング以来になる。ばったり会った形になったけど、これはいい機会だ。フェイトさんも逃げたりせずにそこに居てくれる。
「あの、翔……？」
「はい」
「さっきはごめんね。翔は悪くないのに走って逃げちゃったりして」
「いえ、そんな。こちらこそもう少し機転を利かせることが出来ていれば良かったです」
「そんなことないよぉ、私の方が慌てちゃって……っ、うぅ」
先ほどのことを思い出したのか、フェイトさんは顔を赤くして地面に視線を逃がす。
「はぁ……もう9月からは一緒に働くのに。こんな姿を見せちゃうなんて……」
「ああ、そう言えばそうなんですよね」
色々あって忘れていたけど、俺は来月からは特務六課にも所属することになっている。がらりと環境が変わって、新しい出会い（人的にも、事件的にも）があるんだろう。
フェイトさんはそこの機動部隊の1人。とすれば、そのうち共闘することもあるんだろう。
確かに、新しく入ってくる新人に頼りないと思われるのは嫌だな。
でも、
「いや、そんなに気張らなくてもいいんじゃないですか？　フェイトさんが頼りになるってのは疑っていないので」
「えっ、そ、そう？」
指揮官としては、若干ポンコツな所もあるけど。強さに関しては間違いない。むしろ肩に力が入りすぎている方がポカをやらかしてしまいそうだ。
「そう、今日みたいなポカを……じゃなくて、今日のことは全然気にしてませんし、フェイトさんの評価がおかしくなるなんてこともありませんから。もちろん、フェイトさんが嫌な思いをしていなかった

ら、って条件はありますけど」
「(全然気にしてないって言われると、ちょっとアレだけど)う、うんっ！　9月からも一緒に頑張ろうねっ」
フェイトさんがかわいらしくガッツポーズをしたところで、
「先輩……」
「翔さん……」
丁度、雪菜と聖天子様も戻ってきた。というか、今の話聞いてたの？
「……」
「……ダメでしょうか？」
「……いえ、別に。私は構いませんよ」
「雪菜さん、翔さんにこういう事が……？」
「はい。それなりの回数、あります」
「……そうですか」
引っかかる部分もあったけど、ここからはフェイトさんも合流して行動した。
子供達の所に行ったり、一緒に八神さんに抗議に行ったり。帰りの時間まで、充実した時間を過ごすことが出来た。
こうして楽しい時間は過ぎ去った。残るは明日。会議の最終日。そして、久しぶりに開催される懇親パーティだけだ。
何も起こって欲しくは無いが、このタイミング、期待するだけ無駄なんだろう。気を引き締めて臨まないといけないな。

大物たちの会議　最終日

そして最後の日。パーティが開催された。
参加人数はあまり変わっていないみたいだ。せっかくの貴重な交流の時間だ。襲撃の可能性は島のどこにいたって同じだ。だったら出席しようという考えなのだろう。
まあ、集まってくる面子も、変わらずだったけど。
「聞いたわよ、聖天子。パーティが開かれていない期間、ずいぶんと楽しんでたみたいね。あの護衛の人も一緒に」
「あはは……」
ラ・フォリアがニコニコと俺達を見ながら言ってくる。聖天子様が返すのは苦笑いだ。俺達の外出は非公式だ。まじめな聖天子様にとって、ちょっとした弱みのようなものになっているんだろう。
「んん？」
でも顔がほんのりと赤く染まっている？　俺の方をチラチラと見ながら？
「先輩、何かしたんですか？」
「そんな覚えは無いけど」
「本当ですか？」
「う～ん……無いなぁ」
「先輩は本当にいやらしいんですから。無意識のうちにそういう行為をしているのかもしれませんよ？　よく思い出してください。訴えられてからでは遅いんですから」
「無意識でやるようになったら、本当に病気だよ！」
俺と雪菜がこそこそと話していると、コッコロが一歩前へ出た。
「おはようございます、ラ・フォリア様。はい、わたくし達、あの後も連日お出かけしていました。とても有意義で、楽しい時間を過ごすことが出来ましたよ。最終日の昨日は、主様のお知り合いの皆様と一緒にプールにも――――」
「――――プール？」
聖天子様がサッと顔を伏せ、ラ・フォリアの目がキラリと光った。

そこに、
「おいっす～！　皆さん、元気にしてましたか～？」
相変わらず元気いっぱいのユースティアナ殿下。その後ろには護衛の騎士も一緒だ。
「いやはや、久しぶりだな、翔。ここ最近、暇すぎて死にそうだったよ」
気楽に手を上げて近寄ってくるのはライネス。当然銀色の体を持つメイド、トリムマウを引き連れている。
「お久しぶりです、皆さん。それで聖天子、昨日までのことについて詳しく」
「い、いや、詳しくと言われても、普通に遊んだだけで……」
「普通？　申し訳ないのだけど、私、プールで遊んだことが無くって。『普通にプールで遊ぶ』って、具体的に何をしたの？」
「ラ・フォリア、あなたね……」
ニコニコと楽しそうに笑うラ・フォリア。付き合いの長い聖天子様でなくてもわかる。あの笑みが何を表しているのかが、はっきりとわかる。
何か面白いことが無いのか、舌なめずりして探しているんだ。
それをこの、図ったようなタイミングで。
「昨日までの事？　あっ、もしかして、聖天使ちゃん昨日どこかにお出かけしていたんですかっ!?」
「そしてそれには翔も一緒だったと。一緒に遊びまわっているのは知っていたが、それはそれは愉快なことがあったんだろうなぁ」
無邪気（ユースティアナ）と悪魔（ライネス）が並んで興味を示してきた。
ラ・フォリアは、わざわざ詳しい説明をせずに話の先を求めることで、２人の興味を引いたんだ。
まあでも、そんな面白いことがあったのかって言われると、そうでもないんだけどね。
もちろん、聖天子様がスク水を着てきたのは面白いというよりも驚いたところなんだけど。それを言う必要ないよね。
ああ、そうか。聖天子様が言い淀んでいたのはそのことがあったからなのか。

「そうですね。広いプールで泳いだり、浮き輪で浮かんだり、流れるプールだとか、あとウォータースライダーに乗ったりですね」
「っ」
「……聖天子？　どうかした？」
「い、いえ。なんでもありませんよ？」
　何かを感じ取ったのか、聖天子様は息を呑んでいた。しかし慌てる理由は何もない。言ったことはすべて真実だからだ。
「（翔さんが気にしていないのなら、私もあの件に関しては忘れることにしましょう。はい）」
「そうですか……残念です。もっとハプニングが起こったのではないかと期待したのですが……」
「起こっていませんよ。はい」
　聖天子様はしっかりとした笑顔で完全に否定してくれる。これで名誉は守られた。
「しかし、1日中外で遊んだにしては、聖天子は日焼けしてないようですね。日焼け止めを塗ってあげたのはあなたですか？」
「そんなことするわけないでしょ」
　どうあっても、ラ・フォリアは『何かあった』ことにしたいらしい。
「プールですかぁ、毎日暑いですし、私も行ってみたかったです」
「ユースティアナ様は何をされていたのですか？」
　コッコロの問いに、ユースティアナは自らの両頬に手を添えて答える。
「私は毎日食べ歩いてました！　いや～。この島はいいですねぇ。世界各国の料理が食べられちゃうんですから。まさに、ご飯の宝島です！」
　色々な味を堪能したんだろう。幸せそうに笑うユースティアナは、空白の時間をとても有意義に過ごしたみたいだ。
「はぁ……うらやましい限りだ、ユースティアナ陛下」
「あら？　ライネスはあまり楽しく過ごさなかったのかしら？」
　ライネスの深いため息にラ・フォリアが反応する。
「ああ。そもそも私がこの島に来たのは、パーティでこの男に会うた

めだったんだが、知っての通りパーティは中止。元々の予定はすべておじゃんだ。兄上には仕事の邪魔をするなと言われ会いに行くのを止められるし……」
ウェイバー、それは本当にナイスだ。
「ウェイバーさん、ありがとうございます……」
雪菜も目を閉じて感謝の祈りを捧げていた。
そうした、まさにパーティにふさわしい、なごやかな会話をしていると、
「「「ッ!?」」」
勢いよく扉が開け放たれた。おまけに窓もぶち破られる。そこからわらわらと怪物がなだれ込んでくる。
「また襲撃かよ……!」
でもヤミーではない。しかし人間でもなかった。
全身が真っ黒の体をしており、腰に茶色い布を巻きつけているだけの姿。手には先端が湾曲した刀を持っている。そして頭が犬だった。
犬男がいた。
「あらあら、そういう予感はしていたけど」
「また襲われちゃいました！　やばいですね☆」
「ははっ、再開したとたんに襲撃とは！　呪われているな！」
ラ・フォリア、ユースティアナ、ライネス。お姫様方は呑気だが、パーティ会場はまたしても襲撃されてしまうのだった。

場所は変わり、ここは最上階の会議室。パーティとは違い連日開催されていた会議も、今日で最後になっている。
いくら話しても尽きない話題のおかげで会議がダレることは無い

が、疲労が積み重なるのは避けられない。
そんな人たちの退屈を吹き飛ばす存在が現れる。
凄まじい轟音と共に屋根が無くなる。そこから顔を覗かせるのは巨大なスフィンクスだ。
「ほー」
「あら……」
「んん？」
一般人ならすぐさま腰を抜かし、多少腕に覚えのある人物でも次元の違いに腰を抜かしているところだ。
明らかに異常な事態だが、各国の要人の反応はのんびりとしたものだった。いざとなれば自分の身は自分で守ることが出来る。その自信からの態度だ。
しかし、護衛としてこの場にいる人たちにとっては、そんなにのんびりしている訳にはいかなかった。全員が一瞬で防御態勢をとる。自分たちの護衛対象に指一本触れさせないという姿勢だ。
スフィンクスの狙いがどこに向くのか、それとも無差別な攻撃になるのか、一瞬の緊張の後――狙いが定められた。
視線が向けられるのはイギリス代表が座っている席。
「キャーリサ様――!!」
アリアは銃を抜いてキャーリサ様とスフィンクスの間に立つ。銃なんかで太刀打ちできないことは、特に分析しなくてもわかることだったが、アリアは銃口を向けた。
迷い無く引き金を引くが、スフィンクスの速度はちっとも変わらない。二丁拳銃から吐き出される鉛球がひしゃげて落ちていく。
「え――？」
アリアは気が付いた。
スフィンクスがこちらを見ている。アリアと視線がぶつかったのだ。しっかりと目が合った。後ろにいるキャーリサでも、他の国の要人でもなく、アリアをまっすぐと見ていたのだ。
「（ま、まさか、こいつの狙いは――!!）」
「――!!!!」

一気に加速するスフィンクス。前足が凄まじい速度で振るわれる。
「っ、ぁ……!!」
成すすべなくその前足に捕まるアリア。
目にも止まらない速度だったにもかかわらず、掠り傷一つなく、前足につかみ取られていた。繊細な力加減で、逃げられずしかし怪我も追わない程度に。
「(やっぱり私だ……!! それに殺すんじゃなくて捕まえるためのっ!!)」
ほんの10秒程度の出来事だった。
『神崎・H・アリアを捕獲する』という目的を達成したスフィンクスは、その場から飛び去って行く。
ずいぶんと風通しの良くなった会議室は、静寂を取り戻していた。天井が無くなったことで空調が無くなり、代わりに天然の風によって新鮮な風が入ってくるようになったが。
会議中、とある理由でひそかに注目されていたアリア。そのアリアがさらわれたという事実、そしてそれを行った下手人について、要人達は考えを巡らせる。
そうしていると、息を切らせて会議室に駆け込んでくる管理局員がいた。
「ま、また襲撃です! 今回は前回よりも激しく――――なっ……!」
飛び込んできた管理局員は空が見えるようになってしまった室内に絶句している。
「ああ。もう、遅かったようだぞ?」
連れ去られた自らの護衛の身を案じるでもなく、面白いことになりそうだと笑うキャーリサだった。

「何ですって!?」
　無線からの報告に、楯無は声を張り上げて問いかける。
《上階までの通路に、エジプト式の使い魔が多数!!　今のところは要人に死傷者は出ていません！》
「その次！」
《最上階会議室に到着しましたが、下の階の使い魔よりも強力なスフィンクスが存在したようです！》
「『存在していた』!?　今はもういなくなってるってことッ!?」
　窓から入ってきた砂の使い魔を薙ぎ払う。
《いえ！　スフィンクスは護衛の１人を拉致したのち、すぐにその場からいなくなったようで……》
「（この状況で拉致……しかも護衛の１人をわざわざ……狙いはそっちか！）　攫われたのは誰ッ!?」
《神崎・Ｈ・アリア!!　イギリスの護衛として雇われていた武偵です!!》
「何ですって……!?」
　アリアが攫われるという事実、今戦っている相手の術式系統を元に、今どういう状況なのか、敵の本当の目的を推測する楯無。
　すぐに１つの可能性に行き当たる。
「（今なら追いつけるか……？）分かったわ！　あなた達はそのまま要人の警護、建物内に侵入した使い魔を殲滅して！」
《更識さんはどうするんですかっ!!》
「私はそのスフィンクスを追いかけるわ!!」
　空を駆けるスフィンクスだが、ＩＳを纏っている楯無なら追いつけるだろう。
　しかし、管理局員には分からない。仲間を見捨てない姿勢は大切だが、襲撃を受けているこの状況で隊長である楯無が護衛１人の救助のためにこの場を離れる必要があるのか。
《しかし……！》
「詳しい事情は話せないけどっ、ここは任せるわ！」

楯無は通信を打ち切って窓の外に目を向けた。

「雪霞狼ッ!!」
槍を持つ雪菜が軽快な足運びで犬男を薙ぎ倒す。プリンセスナイトの力で強化されていることもあって、もう無双状態だ。
でも、無双しているのは俺も同じだった。
俺はエクシアを身に纏い、２本のＧＮブレードを振り回していた。青を基調にした装甲にＧＮドライブの粒子を飛び散らせ、２体の犬男を切り捨てる。
倒された犬男はさらさらとした、砂漠にあるような色合いと感触の砂になる。
「主様っ!!」
「ああッ!!」
聖天子様を守ってくれていたコッコロに迫る犬男。そいつに向けて右手のＧＮブレードを投げつける。
「――!!」
体に突き刺さるが、消滅には至らない。だが動きは止まった。
「はあああぁぁっ!!」
一気に近づいて、ＧＮソードで切り裂いた。
「翔さん！」
「聖天子様はコッコロの後ろに！」
「はいっ！　頑張ってください！」
「聖天子様はわたくしがお守りいたしますっ」
両手で槍を構えているコッコロ。その顔はヤル気に満ちている。
全体を見回すと、前回の襲撃の経験が生きているのか、混乱の中で

もみんな善戦している。
プリンセスナイトの強化の効果もあるかもしれないけど、この無尽蔵に湧き出てくる敵相手に良く戦えている。
敵の中心で暴れまわっていた雪菜が戻ってきた。
「先輩っ！　あぅ」
「ああ雪菜、あんまり背中と背中をくっつけると」
背中合わせになろうとすると、エクシアのＧＮドライブの出っ張り部分が雪菜をつんつんしてしまう。そう言えば、これはどういう構造になっているんだろう。胸から背中にかけて、俺の体を貫通してＧＮドライブがあるはずなんだけど？
どうでもいいことを考えていると、背中を押さえた雪菜がちらりとこちらを振り向いた。
「背中、出っ張ってるんですね……っ」
「ごめんごめん。や、それにしても……」
「手ごたえがありませんね。あのヤミーとは違うってことは、誰かが襲ってきているはずなのに……」
ヤミーについてはみんなに説明済みだ。
「中途半端過ぎるよな」
「そうですよね。いたずらにしては規模が大きすぎますし……だとすれば……」
「陽動か、足止めだな」
だとすれば、本当の狙いは何なのかってことになるが……俺の中では１つの予測が立っている。
「ん？」
前線で、雪菜と同じくらい暴れまわっていた楯無さんの手が止まっている。耳に手を当てて、何処かと通信しているのか？
「どうしたんですかっ！　楯無さん！」
何処かと通信していた楯無さん。それが終わると窓の外に目を向けていた。
「アリアさんが攫われたわ」
「ッ!?」

楯無さんの言葉に、俺は息を呑む。そして続けてしてもらった状況説明に、俺はある種の確信を得た。
原作とは全く状況が違うが、この砂で出来たアヌビスの様な敵、それをここまで無尽蔵に投入できる相手は限られている。
しかもアリアが攫われたとなれば、おそらく相手は『イ・ウー』のメンバー、砂礫の魔女『パトラ』だ。
「イ・ウーですか」
「あなたもそう思うのね」
「確信してますよ。いろいろと調べてますからね」
なら話が早いと楯無さんは、
「ここを任せてもいいかしら。私はアリアさんの救出に行ってくるわ」
「俺も行きます」
「気持ちは分かるけど、あなたまで来たらここの守りが薄くなるわ。あなたの力を信用して言ってるの」
力だけだろうと信用してくれると言ってくれるのはうれしいけど、こっちも引けない理由がある。
「俺も楯無さんのことは信用してますけど、何があるか分かりません。もしかしたら、伏兵がいるのかも」
おそらく、いる。この攻撃がパトラによるものだとすれば、間違いなく『カナ』がいる。アリアを攫って行ったのは巨大なスフィンクスという話だが、そこにカナが加われば、どうなるか分からない。
楯無さんでも苦戦、もしかすると負ける可能性もある。カナだってこの世界でそんな強化を受けているのか分からないのだ。
「ついてくるのはいいけど、私のＩＳの速度についてこれるのかしら？」
「それはご心配なく。空を飛ぶ手段は自前で持ってますから」
そう言うと、楯無さんはあっさりと納得してくれた。同行を許してくれるらしい。断ってもついて行くつもりだったので、協力出来るのは都合がいい。
だが、ここを離れる前に言っておかないといけない。

「雪菜、コッコロ！　ごめん、ここ頼む！」
「先輩!?」
「いったいどこに行かれるのですか!?」
「上にいるアリアが攫われた！　敵は飛んでる！　これから楯無さんと一緒に取り返してくる！」
空を飛んでいる。その一言に、雪菜は悔しそうな顔をする。雪菜には空を飛んでいる相手と戦うための手段が無いのだ。
それはコッコロも同じだ。
「……わかりました。気を付けてください、先輩」
「聖天子様はお任せください。わたくし達がしっかりとお守りいたしますので」
「ごめん、任せた！」
俺は窓の傍に待っててくれる楯無さんに走っていく。
「夜月君、早く！　ぐずぐずしていると、どんどん距離を離されるわ!!」
「はいっ！」
俺はＧＮ粒子を、楯無さんは水しぶきを飛ばしながら、２人で空に飛び出した。

スフィンクス追跡

「始まったみたいだな」
遠くからビルの様子を眺めている男――蛇倉がいた。
外からでは中がどれほどの騒ぎになっているのか分からない。だが、ビルの壁面を登る砂の使い魔を見れば、どうなっているのかは大体想像出来る。
しばらく観察していると、巨大なスフィンクスがビル最上階へと取り付く。あそこでは一番重要な会議が行われていると、蛇倉は記憶していた。そして、今回の目的の人物がいることも。
すぐにスフィンクスはビルから離れる。蛇倉の驚異的な視力が、スフィンクスの手に包まれているピンク色のツインテールを捕らえた。
「案外あっさりしてたな。こりゃ、俺の出番は無いか？」
呑気なことを言うが、その数分後、ビルから2つの影が飛び立っていくのが見えた。片方は今の同僚、更識楯無とミステリアス・レイディ。もう1つは見たことも無いパワードアーマーだ。
男――蛇倉正太は口元を歪めて笑う。その歪みは体全体に及び、その姿を変える。胸元に三日月形の傷がある怪人、ジャグラス・ジャクラーへと。
「ならしょうがないなぁ。俺も、最後の仕事を始めるとしようかね」
手に持ったダークリングが怪しい光を放ち、ジャグラスの顔を照らした。

陸路と違って道路のない空。行こうと思えばどの方向にでも行けるが、同時に障害物も無い。さらにスフィンクスはとてつもない魔力

の塊だ。探知は全く難しくなかった。
俺達は迷いなく直進し、敵を見つけた。
「あれか……!!」
「目的は分かってるわね！」
「もちろんです！」
前足に包まれているアリアは気絶してしまっているみたいだ。
よほどアリアのことが大切なのか、前足２本を使ってしっかりとアリアを抱えている。
「このッ!!」
俺は牽制にＧＮソード・ライフルモードのビームを連射する。それはスフィンクスの大きな頭に命中するが、特にダメージがあったようには見えない。
だが、俺達のことを認識したようだ。
――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!
咆哮が空気を揺らした。
しっかり俺達を敵と認識している。反転して向けられた顔は敵意に満ちていた。
逃亡ではなく攻撃を選んだらしい。
大きな口を開けて突っ込んでくるスフィンクス。
「ッ!!」
「おっと」
だが、アリアを抱えているからか、そこまでスピードは速くない。
俺達は難なく回避する。
「時間はかけられないわよ」
「俺の『右手』を使います」
「右手……あの能力ね。分かったわ」
右手、という単語だけで、俺が何をしようとしているのか察してくれたみたいだ。
「私が隙を作るわ。そこに叩き込んで」
「了解です」
俺達はお互い別の方向に散開する。俺は何もせず、楯無さんはバル

カン砲を連射することで、スフィンクスの気を引いている。
だが、相変わらずダメージは与えられていない。鬱陶しい豆鉄砲を潰したいのか、顔面に弾丸を食らいながらも、楯無さんを噛みちぎろうとしている。
傍から見ればギリギリの回避だけど、その顔には全然余裕がある。流石の飛行技術だ。
噛みつきによる攻撃も、
「はッ!!」
槍で受け流し、掠り傷一つ負わない。
「空中だとあんまり威力が出ないんだけどね」
気が付くとミステリアス・レイディの水のヴェールが薄くなっていた。
「あの技は……」
ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ水蒸気爆発を起こす。その衝撃や熱で相手を破壊する技。
「清き熱情(クリア・パッション)ッ!!」
スフィンクスの周りで爆発が起きる。
回避しながら、ナノマシンを散布していたんだ。
それにしても、
「ア、▪アリアに当てないで下さいよ!」
「あら。お姉さん、そんなに下手じゃあないわよ」
確かに、スフィンクスが前足をかばっていることもあって、アリアには命中していない。例えアリアを立てにしていても、アリアを巻き込むことは無かったんだろうな。
「でもダメージは与えられてないわ。チャンスは今しかない！　突っ込んで!!」
「はいッ!!」
エクシアは一気に加速する。
スフィンクスはどんなに強くても、あくまでも魔力の塊。俺のこの『右手』には敵わない。

「うおおおおおおぉぉぉぉぉっ!!!」
「――――――!!!」
幻想殺しになった右手で、スフィンクスを殴りつけた。
パキンッ!! と、スフィンクスを構成する術式を破壊する感触がした。
触れた瞬間にスフィンクスは動きを止め、魔力が霧散し始める。その前足からするりとアリアが落ちたが、
「おっとっと」
下にいた楯無さんが難なくキャッチする。
「お疲れ様。相変わらず反則ね、その右手の能力。かなり強力な使い魔なのに、一発で消しちゃうなんて」
「そのせいで、この能力をオンにしている時は俺も能力が使えないんですけどね」
「でも、パワードスーツなら問題ないってことでしょ？」
その辺りは本当に反則だと思うよ。原作上条さんも、そのくらいの装備はしてもいいんじゃないかって思う。
「とりあえず戻りましょうか。向こうの戦いも終わって、が――――はっ……!?」
「え――――？」
楯無さんの体が不自然に捻じれた。遅れて聞こえてくる銃声。
ＩＳが、その浮遊機能を無くしたのか、地面に向かって落下していく。それは、楯無さんが抱えていたアリアも一緒だ。
「ッ!! クソッ!!」
何が起きたのかは分からない。銃声が聞こえたが、拳銃程度に貫かれる防御ではないはず。
だが、考えるのは後だ。すぐさま助けに向かう。
落下を始めた楯無さんに向かって、一気に加速――――
「ッ!?」
ＧＮシールドにすさまじい衝撃が伝わった。
先ほどと同じ銃声。だがそれは、俺を吹き飛ばすほどの威力を兼ね備えていた。

「く、っそ……!!」
真下に向かいたいのに、斜めに落下する。このままではアリアも楯無さんも地面に叩きつけられる。
視線だけが、２人の行方を確認している。
「え？」
あわや地面と激突の直前、すごいスピードで女性が割り込んできた。その女性が２人をキャッチしてくれた。
体勢を立て直し、その女性の前に着地する。
その女性が、空から降ってくる人を見て善意で助けてくれた奇特な人だったらどれほど良かったことか。
だが残念ながら、俺はその女性の事を良く知っていた。今一番登場する可能性が高く、そして会いたくなかった人物だ。
「カナ……！」
「あら、私のことを知ってるのね。流石、と言ったところかしら」
長い茶髪を三つ編みにした絶世の美女。この人が出て来たってことは、この襲撃がパトラによるものであることが、確定したようなものだ。
しかし、その格好には少し違和感を感じる。
ハットやネッカチーフを身に着け、腰にはこれ見よがしに獲物であろう銃をぶら下げている。何というか、俺の想像通りの『ガンマン』の恰好をしているのだ。
それでもしっかり似合っているのは流石はカナだ。
その足元にはアリアが転がっている。
俺の足元には楯無さんがうつ伏せに横たわっていた。ＩＳの装甲部分が解除され、中のインナーだけになっている。
「っ！」
「う、ぁ……」
体のラインがわかる水着のような、レオタードのようなデザインの上と、くるぶしから膝上までを覆うサポーターから構成されるＩＳスーツ。
そのスーツの一部が変色していた。場所で言えば、丁度わき腹だ。

じわりじわりと、そのシミが広がっていく。
シミの中心、ＩＳスーツが丸く破れている。先ほど聞いた銃声、おそらくそれで――
「すぐに病院に連れて行けば助かるわ」
カナが冷たく言う。
「でも、アリアを取り戻すために私と戦えば、間に合わなくなる」
「お前……っ！」
カナと睨み合う。カナは一歩前に出た。戦うつもりなら構わないと言いたげな態度だ。
「……」
無言で牙（タスク）を構える。
「ッ!!」
「――!!」
ガガガガッ!!
俺達の間で火花が散った。
「無駄よ。あなたのスタンドのことは分かっている。爪を弾丸のように飛ばすスタンド。でも実体があるから、スタンドじゃなくても迎撃できる。早打ちの技術は中々だったけどね」
「そうだよな……！」
カナの得意技は、俺も使える不可視（インヴィジビレ）の銃弾。拳銃を抜いたことすら相手に知覚されない早撃ち。それですべて迎撃された。
俺も見えなかったぞ。何が来るのか分かっていたはずなのに。異常なスピードだ。
「分かるでしょう？　私が本気だったら、今頃どうなっていたのか」
楯無さんに止めを刺すことだってできた。そう言いたいんだろう。
「よる、つき君……っ」
「更識さん!!」
「あら」
足元の更識さんが弱々しい声を上げた。
「驚いたわね。確かに撃ち抜いたはずだったんだけど」
そう言って、腰のホルスターを揺らした。まさかあの拳銃で撃ちぬ

いたってのか？　見てくれは普通の拳銃なのに、ＩＳの防御を抜いたってのか？
「ただの拳銃じゃないわ。これはこの英霊の獲物。この早撃ちの拳銃王の、ね」
　英霊!?　早撃ちの拳銃王、だと……!?　じゃあ、まさか……！
「夢幻召喚（インストール）、『ビリー・ザ・キッド』。私の弾丸から逃げられるとは思わないでね」
　アメリカ西部開拓時代の代表的なアウトローで、代表的な早撃ちの名手。まさか早撃ちと早撃ちの融合とは。ここまで相性のいい組み合わせで責められるとは……！
　だとすれば、俺達の探知能力をすり抜け、ＩＳの防御を貫いたのは、ビリー・ザ・キッドの宝具だろう。
「アリアさんを、渡しちゃ、だめよ……」
「楯無さん……」
「絶対に、ダメ。ろくでもない、ことになるわ……っ」
　口から血を吐きつつ、楯無さんは声を絞り出していた。
「でもそうすると、あなたは助からないわ」
「それが楯無の責務、よ。日本の、世界の平和を守る。そのため、なら……っ」
「……そう、立派ね。でも、どうするのか決めるのは夜月　翔よ。あなたじゃあない」
「っ、夜月君……！」
　どちらかを諦めることなんて出来ない。何とか、手段は無いのか……！
「ではこの場は、私に任せてもらおうか」
　さらに新しい人物が1人。
「お前、ウォズか……！」
　数回しか会っていないのに強烈なキャラで記憶に残っていた人物、ウォズ。前もこうして出てきた気がするぞ。
「……あなたは何者かしら。夜月　翔の仲間、という訳でもなさそうだけど？」

「流石の慧眼だ。そう、私は我が魔王、夜月　翔の忠実な臣下。仲間などという括りに入れられるのは我慢ならないな」
「……」
カナが何なら言いたそうな視線を向けてくる。
友達は選んだほうがいいとでも言いたげだ。俺だってこいつのことはよく知らないけどな。突然現れて色々と言ってくる人だから。
「ウォズ、助けに来てくれたんなら本当にありがたいんだけど、今はマジで時間が無いんだよ。ふざけるんだったら引っ込んでてくれ」
カナの足元にはアリアが気を失っている。俺の後ろには、お腹を宝具で撃たれてしまった楯無さん。今すぐカナを倒してアリアを奪還、楯無さんを病院まで運ばなければならない。
それにビルに戻って雪菜達に加勢もしないと。
「我が魔王、それは無理だ」
「何ッ？」
「いくら我が王でも、今のあなたではそのタスクをこなすことは出来ない」
難しいのは分かってるけど、泣き言を言ってる場合じゃない。やらないといけないんだ。
「その考えは流石は我が魔王だが、それでも難しいことには変わりない」
「だから――――」
「何故なら」
ウォズは指を立てる。
「タスクはまだ増える」
その時、後ろで爆発音が聞こえた。驚いて振り向くと、島のあちこちから火の手が上がっている。
「まさか……！」
時間を稼ぐためにカナが何か仕掛けたのかと思ったが、
「私じゃないわね」
「犯人は君の知らない相手だ。今はまだ、ね。そいつが解き放った怪獣が、今、島で暴れまわっている」

ウォズの言葉に、わずかだがカナの表情が動いた。もしかして、俺の知らないイ・ウーのメンバーか？
しかし、ウォズはわざわざ『怪獣』と言った。つまり前に出たゼットンと関係がある……？
「さらにアナザーオーズ。そいつがインターミドルの会場に現れる。正確にはインターミドルの会場で育てられた欲望が、別の場所で開花させられ戻ってきたのだが……些細な違いか」
「アナザー、オーズ……」
ここ最近、島中にヤミーが出ていた理由、予想していなかった訳ではないが、やっぱりそうなのか。
アナザーライダー……前に倒したアナザービルドと同じ奴か。アイツは……
「そう、我が魔王の思っている通り、同じライダーの力を使わなければ倒せない。つまり、我が魔王にしか倒せない。いや……この本には、今の時期、この島には門矢　士がいると書かれている。彼がいればその限りではないかもしれないが……君の性格がそれを許すかな？インターミドルの会場には、君の知り合いがいるはずだが？」
確かにそうだ。今日はエレミアとヴィクトーリアの決勝戦。チームナカジマ、八神道場の面々が見に行っているはずだ。
それに決勝戦ってことは、観客席は満員だろう。そんなところで倒せない怪物が暴れたら、何人の犠牲者が出るか分からない。
「まさに島は地獄絵図。無数の怪獣とヤミーにあふれ、その片方は君でなければ対処できない。こんなところでぐずぐずしている場合ではないと言った意味が分かったかな？」
「……」
コイツの言っていることは事実だ。否定する材料が無い。
でも、ここでカナを見逃したら、アリアの居場所が分からなくなってしまう。
「だからこそ、ここは私が引き受けると言った」
《ビヨンドライバー》
「ベルト……!?」

俺の知らないベルトだ。まさか……！
《ＷＯＺ》
《ＡＣＴＩＯＮ！》
俺がジオウに変身する時に使うライドウォッチに似ているが、少し違う。それを起動させ、ベルトに装填した。すると待機音が流れ始める。
「変身」
《投影！》
《ＦＵＴＵＲＥ　ＴＩＭＥ！》
《スゴイ！　ジダイ！　ミライ！　仮面ライダーウォズ！　ウォズ!!》
「祝え！　過去と未来を読み解き、正しき歴史を記す予言者。その名も仮面ライダーウォズ！　新たなる歴史が誕生した瞬間であるッ!!」
見たことも無い仮面ライダー。仮面ライダーウォズ……自分の名前がライダーの名前なのか。
というか、
「お前……自分の時もそれ言うのか……」
俺はぼそりと呟くのだった。

欲望の開花

インターミドルの会場では、今まさに決勝戦が行われていた。

《ヴィクトーリア選手ッ!!　エレミア選手のイレイザーを正面から迎え撃っています!!》

「はあああぁぁぁぁぁっ!!!」

「ち、いぃぃ――――っ!!」

『エレミアの神髄』状態にはなっていないが、エレミアはイレイザーの掌を振るっていた。触れたものすべてを削り飛ばすはずの一撃を、それ以上の魔力が込められた斧槍で受け止め、跳ね返している。

「(アカン、ウチのエンジンのかかり方が遅い……!)」

「その程度ですか、ジークッ!!」

侮れない相手だとは理解していた。直接戦うのは2年ぶりだが、その時とは比べ物にならないくらい強くなっていた。

それに加えて、エレミアは今回の大会、そこまで苦戦することなく勝ち上がってきてしまったことが仇になっていた。

ヴィクトーリアも快勝の試合は多かったが、一瞬ひやりとさせられた綺凛との試合、そして準決勝でぶつかったハリーとの激戦もあった。

ヴィクトーリアとハリーの試合は、これが決勝戦ではないかと錯覚するくらい、盛り上がる試合だった。

2人共長引く試合をしない選手だが、この試合はラウンドを全て使い、それでもお互いライフがゼロにならなかった。最後の最後、判定にまでもつれ込んだ試合だったのだ。

結果敗北してしまったハリーは滂沱の涙を流し、来年のリベンジを誓っていた。

その激戦を潜り抜けてきたヴィクトーリアは、体力や魔力が万全ではなくとも、万全以上の実力を発揮していた。

2人が再びぶつかり合う、その瞬間。

《ッ!?　これ、は――――?》

「え?」

「誰ですか、あなたは！」
２人の間に、フードをかぶって顔を隠した人物が立っていた。体格から見て男性だ。２人の渾身の攻撃は、男に到達することなく空中で止まっている。
試合中に無関係の人間が乱入してきたのだ。
突然の乱入者に、観客もどよめいている。
「すまないな、試合中に。すぐに用件は済ませる」
軽く言った男は、その場に片膝をつき――――リングに腕を差し込んだ。
「「え？」」
リングは破壊されることなく、腕が沈み込んだ。泥の中を探すように、リングの中にある物を探し――――懐中時計のような『何か』を取り出した。
「（なんや、あれ……!!）」
「（どうしてあんなものがここに……っ）」
今までこんなに近くにあってどうして何とも思わなかったのか。エレミアとヴィクトーリアは男の手にある物体に冷や汗を流す。
魔力とは違う、何かヤバいエネルギーを限界まで貯めこんでいることが分かる。アレを使って一体何をするつもりなのか。
２人は知らず知らずのうちに構えをとっていた。
だが男は、
「すまないね、騒がせて。じゃあ試合、頑張ってくれ」
２人の試合には、２人程度には興味が無い。そう態度で示し、飛び去って行った。

ところ変わって、ここは『動物園』。
初めて会ってから毎日、耀、ナナ、メアの３人は、この動物園で会っていた。そのおかげで１週間も経っていないというのに、すっかり仲良くなった。
残念ながらモモは初日以降来ていないので、その輪には入っていない。その代わり、毎晩ナナに、その日何があったのかを聞かされることになっているが。
「耀ちゃん、そっち行ったよ!!」
「任せて」
「はぁ、はぁ……！　クソッ!!　しつこいガキ共が……！」
警備と言っても、毎日動物園を歩き回るだけ……だったはずが、今日は少し様子が違っていた。
貴重な動物を密輸、もしくはＤＮＡを採取して高く売りさばこうとする悪党が侵入したのだ。
ＤＮＡを入手するところまではうまくいった悪党も、動物相手にはそこまで警戒しない。まさか動物の言葉がわかる能力者がいるなんて夢にも思わなかったのだ。
散歩中に異常を知らされた耀達はすぐさま追跡を開始。今まさに捕物の真っ最中だった。
人込みを縫って逃げ回る悪党。お客さんはその様子に驚くが、その後からそれ以上のスピードで追跡してくる２人の女の子にさらに驚く。
「どけッ!!　どけ、どけッ!!!」
大声を張り上げ、息を切らしながら逃げる悪党。出口まであと少し。明らかな不審者に、みんな何も言わずに道を開けている。まっすぐ進めば、建物の外。駐車場に行けば逃走用の車に仲間が待機している。
しかし、扉の前で仁王立ちしている人物がいた。
「おいッ!!　そこの妙な服を着た女ッ!!　そこを退けッ!!」
威嚇しても動こうとしない。
「退かないなら――――!!」

男は懐からナイフを取り出す。
「怪我すんぞォォォォッ!!!」
「やあっ!!」
「ごぱぁっ!?」
ナイフが届くよりも早く、尻尾から発射されたビームが悪党を捕らえた。一瞬で黒焦げになり、その場に倒れる。
「よし！　お、２人共～!!」
「ナナちゃん、やったね！」
「おいしいところを持っていかれた」
追いついてきたメアと耀。ナナはＶサインしている。
「多分外に仲間がいると思うけど」
「管理局に連絡したから大丈夫だと思う」
「私達はこいつを逃がさないようにしといたほうがいいよな」
全てが終わったと思っていた３人は誰も気が付くことが出来なかった。ナナどころか、メアも耀も反応出来なかった。
耀の後ろから忍び寄った人物が、
《ＯＯＯ》
耀の背中に手を伸ばした。
「ッ!!??」
「耀!?」
「耀ちゃん!?」
ナナとメアも突然のことに叫び声をあげるが、すでに男が手に持っていた物体――アナザーオーズウォッチは耀のナカに吸い込まれていた。
「う、ぁ……！」
体の中に明らかな異物が押し込まれる感覚。しかし、その膨大な力に、抵抗は無意味だ。押し流されそうな意識を何とか保ち、その場にうずくまる耀。
「だっ、誰だよっ！　お前っ!!」
「ナナちゃん、下がって」
今にも飛びかかりそうなナナをなだめ、メアが前に出る。今までの

経験から、目の前にいる人物が自分達とは次元が違うことを直感したのだ。
「(この人……何なの？　何が目的？　今耀ちゃんに何をしたの？　ううん、それよりも、この人、全然私達に敵意が無い……！)」
　メアはかなりの殺気を出しているつもりだったが、目の前の人物は微動だにしない。
　間違いなく、今足元に転がっている悪党の仲間ではない。
「黒崎メアにナナ・アスタ・デビルークか。そこまで気にする必要は無い。春日部　耀には少し暴れてもらうだけだ。すぐに夜月　翔がどうにかするさ。してもらわないと困る」
「夜月　翔……？」
「(何でここに翔君の名前が……？　翔君が何か関係してるの？　でも耀ちゃんは翔君のオトモダチのはずだよね……)」
　ナナもメアも、それぞれ違った理由で頭に疑問符を浮かべた。
「うっ！　ぐ、うううぅ……っ！」
　その思考は、耀の苦しそなうめき声で中断させられた。
「耀！　大丈夫か!?　気分が悪いのか？　え、と、ど、どうしよう、メア！」
「……ナナちゃんは耀ちゃんを連れて下がって。ここの人に言って病院に連れて行って」
「賢明な判断だが、黒崎メア。お前はどうするつもりだ？　ここに残るつもりか？　残ってどうするつもりだ？」
「そんなの決まってるでしょ？　私だって、一応武偵ってことになってるんだから」
　この場で足止めして、到着する予定の管理局員に引き渡そうというのだ。
「別に、正義感とか、そういうやつじゃあないから。私のトモダチをこんな風にされたことに怒っただけ」
「……予言をするが。お前は俺に触れることすらできない。俺も今お前と戦うつもりはない。さらに助言をすると、春日部耀からは離れたほうがいいぞ。無駄な怪我をしたくないのならな」

ナナが離れたことで、全開の殺気をぶつける――が、それでも、男から敵意が向けられることは無い。
「っ！　あんまり――」
メアは変身（トランス）で腕を刃にして、
「――舐めないでッ!!」
斬りかかった。
「だから無駄だと言った」
刃は止まっていた。狙いは容赦なく男の首元。一撃で首を飛ばすつもりだった斬撃は、首元に届くことなく止まり、うんともすんとも言わない。
「（な、なんでこれ以上腕が進まないの……!?）」
腕を引くことは出来るが、それよりも先、首をぶった切ろうとするとそれ以上進まなかった。
壁に阻まれているという訳ではない。前に進んでいるはずのなのに、刃が相手に到達することは無い。
「（これは予想以上にヤバい!!　この人と戦うのはっ！　予想以上にっ！）」
「だから言ったはずだ。それに――見てみろ」
「うう、ううううあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」
次の瞬間、耀の体が数えきれないほどの『メダル』に包まれる。メダルは肉となり、見たことの無い生物へと変わっていく。
タカ、クジャク、コンドル、ライオン、トラ、チーター、クワガタ、カマキリ、バッタ、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウナギ、タコ、コブラ、カメ、ワニ、プテラノドン、トリケラトプス、ティラノザウルス――ありとあらゆる生物が寄せ集められ、一つの形に、怪物になっていく。
さらにそれらは、耀の持つ生命の目録（ゲノムツリー）と反応し、さらなる変化をもたらしていく。
この世のありとあらゆる生物を寄せ集めたような見た目だった怪物に、この世に存在しない生物の特徴が付与されていく。
四足歩行だが、翼が7枚ある。尻尾が3本もあり、顔も複数あった。

「たっぷりと。たっっっぷりと蓄えた欲望がようやく解放されるぞ」
インターミドルに出場する選手達の勝ちたいという欲望。試合に勝てば次も勝ちたいという欲望が生まれ、負けても来年は勝つという欲望が生まれる。
選手だけではなく、観客やセコンドからも欲望は集められていた。応援する選手が勝ってほしいという欲望も、漠然とした、『良い試合を見たい』という気持ちからも欲望は集められていた。
はち切れんばかりに貯めこまれた欲望が、今、解放される。
「アナザーオーズだ」
――――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!
怪物が咆哮を上げると、展示用の強化ガラスが全て粉々になった。そればかりか、近くにいた動物が気絶している。
「耀が、怪物に……？」
「ッ!!　ナナちゃん！」
「わっ!?　メア!?」
超巨大なナニカに変貌した耀。変化はまだ途中段階だ。ドクン、ドクン、と体が脈動するごとに膨らんでいるのだ。
「ナナちゃん！　離れないと！」
「だ、だけど！　だけど耀がっ!!」
メアがナナを抱えて離れようとするが、その腕の中でナナが暴れる。さっきまで一緒にいた耀が怪物になったのだ。その手段が無くても、何とかしようともがいている。友達だからだ。
謎の男はいつの間にか上空へ浮かび上がっていた。
「ふーん、そうか。自分の欲望の大本になった場所に向かいたい。そういう習性なのかな？　元になった欲望がそうだからか？　まあいいか。手伝ってやろう」
男が指を振ると、アナザーオーズは浮かび上がった。
「耀ッ!!」
ナナの叫びは謎の男には届かない。
「何だよ……！」
ナナは茫然と呟いた。

「何が起こったんだよ……!!」
ナナが見上げる先、施設の天井には大きな穴が開いていた。
その場にいたはずの男とアナザーオーズは、影も形も無かった。

そして再びインターミドルの会場。
謎の男がリングに現れたことで中断されていた試合は、まもなく再開されようとしていた。
「まったく、とんだ不届き者もいましたわ」
「いったい、何者でしょうかね」
ヴィクトーリアは憤慨し、エドガーは試合への気持ちが切れないように会話を繋いでいた。
「チャンピオン、大丈夫ですよ！　ポイントはあんまり差は無いですよ！　再開しても落ち着いていきましょう！」
「ん、ありがとうな～」
エルスの励ましに笑顔で応えるエレミアだったが、心の中では先ほど試合を邪魔した人物について考えていた。
「（ウチも全然感知出来なかった……多分、ヴィクターも。目の前に来るまで反応出来へんなんて……）」
タダ者ではなかった。正直、リングから取り出した物体で何をするつもりなのか、呑気に試合を続けていてもいいのか不安になる。
しかし決勝戦を見に来ていた観客は、少しでも早く試合が再開されることを望んでいた。
「まだですかね、試合……」
「そうですね……」
ミウラとアインハルトは、ぽつりと呟いた。

ヴィヴィオに勝利したミウラだったが、力を使い果たしてしまったことで、次の試合で敗北してしまっていた。残念ながら本選までは進めなかったが、次の大会からの注目選手になったのは間違いない。
「ま、何かされたわけじゃないし、すぐに再開するさ。ゆっくり待とうぜ」
「でも、選手の方はたまったものじゃないな。本当に悪質な悪戯だよ」
大人のノーヴェとミカヤは落ち着いているが、その内心は試合に乱入した男に対しての怒りがあった。
「悪戯、ね……」
クロはどうしても引っかかる部分があった。
明らかな異常事態。これまでの経験上、何かの事件の前触れではないかという気持ちになってしまう。
そしてその予感は、残念ながら的中してしまう。
会場の天井を突き破り、とてつもない物体が落ちて来た。
「「「――――ッ!!!??」」」
それはありとあらゆる生物が掛け合わされたような見た目の怪物――アナザーオーズだ。
「……」
それを会場に落とした男は、はるか上空でその成り行きを見守っている。別の方向へ目を向けると、スフィンクスがとりついているビルがあった。
「さて、うまくやってくれよ」
リングに乱入したのは男と同じだったが、男と怪物では訳が違う。会場は少しでも怪物から離れようとする観客で大混乱になっていた。
「まったく、ここまで成長していたとはな」
透明なオーロラから、マゼンタカラーのトイカメラを首から下げた男――門矢　士が現れた。
ベルトを装着し、カードを装填する。
「変身」
《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ》
マゼンタカラーとバーコードのような黒い縦線の入った仮面が特

徴のライダー――――仮面ライダーディケイドに変身する。
「アイツはいないみたいだが――――いや、来たか」
ディケイドは上を、怪物が下りてくるときに天井に作られた、大きな穴を見上げた。
「変身ッ!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
翔が変身したジオウが、リングに着地する。
「ディケイド……」
「どうやら、最悪の事態になったようだが……行けるな、ジオウ」
「当たり前だ……！」
大きく膨れ上がったアナザーオーズを前に、２人のライダーは構えを取るのだった。

ＶＳ　アナザーオーズ

カナに撃たれた楯無さんを御門先生の病院に送り届け、こうしてインターミドルの会場に来たわけなんだけど。
「デ、デケェ……」
目の前にいるアナザーオーズは、以前戦ったアナザービルドとは桁違いの大きさだった。
二足ではなく四足歩行。コアメダルの動物全てを寄せ集めたような見た目は、ありきたりだがキメラの様だ。
……いや、コアメダルの動物だけじゃないぞ。全く関係ない、それどころか現実には存在しないような動物まで混ぜられているような気がする。
「お前、オーズのウォッチは持っているのか？」
「いや、持ってない。持ってないけど……」
ディケイドの質問に、首を横に振る。
でもアナザービルドと同じなら、戦っていれば手に入るはずだ。どういう仕組みなのかは分からないが。
「……なるほどな。本当に、俺の知っているやつとは仕組みが違うな……」
何やらディケイドは呟いている。
「だが、それを待つつもりは無いぞ」
「ああ、俺だって待ってられないよ」
俺がオーズの力を手に入れるよりも、被害を押さえる方が大切だ。
ウォズが言った通り、この場にはディケイドがいる。この口ぶりだとオーズのことも知っている、そして変身できるんだろう。協力すれば、被害を少なくして倒せるはずだ。
「よし、行くか」
ディケイドはオーズのカードを取り出して俺に振って見せる。自分に合わせろと言いたいんだろう。
「ちょっとあなた達っ！　いったいアレは何ですのっ!!」
「ヴィクター！　前に注意して！」

そんな俺とディケイドにすごい剣幕で詰め寄ってくる甲冑を着た少女。口調といい、金髪縦ロールといい、いかにもなお嬢様だ。
あまりしゃべったことは無いが面識がある。この前の食事会でもいたヴィクトーリア・ダールグリュンだ。その向こうには、鋭い目つきでアナザーオーズを睨むエレミアもいる。
それもそうだ。今の時間、この会場ではインターミドルの決勝戦が行われているのだから。
ヴィクトーリアもエレミアも俺の正体に気が付いていない。まともに話していないし、ライダーに変身しているから当たり前だが。
「あの怪物が何なのか説明を――――！」
「いや、今はそんなことを気にしている場合じゃ――――！」
「２人共、危ないッ!!」
エレミアの鉄腕が、俺たち２人を踏みつぶそうとしていた足を殴り飛ばし、軌道を変えた。
「そこの、仮面？　の、ライダー？　の人ッ!!　とにかく、あの怪物は倒さないかんもんなのッ？」
仮面のライダーの人？　ああ、確かに顔を隠しているし、顔にはライダーって書いてあるからな……
エレミアはそう言う間も構えを解かない。５００年分の戦闘経験がそうさせているのだ。
「ああ！　見ての通りだ！　俺達はアイツを倒すためにここに来た!!」
アナザーオーズが生み出す轟音に負けないように叫ぶ。それでも２人は俺に気が付かない。戦場の極限状態で、そんなことを気にしている余裕が無いのだ。
「ならウチも協力する！　ヴィクターもそれでええ？」
「ッ!!　仕方ありませんわねッ!!　事情を聴くのはすべて終わってからにいたしますわッ!!」
ヴィクトーリアは斧槍をアナザーオーズに向けた。
「まとまったか。行くぞ」
《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ》

《ＴＡＫＡ！　ＴＯＲＡ！　ＢＡＴＴＡ！　ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！　ＴＡＴＯＢＡ　ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！》
ディケイドがオーズに姿を変える。
話がまとまるまで待っていてくれたのか。意外と面倒見がいいな。
「姿が変わった……？」
「変身魔法ですの？」
「最後はあの人が決めないと怪物は復活するから注意してくれ！」
驚いていた２人だったが、俺の言葉にはすぐに頷いてくれた。
ディケイドがオーズになったことが引き金になったのか、アナザーオーズの狙いが俺たちに絞られる。
一番最初に前に出たのはエレミアだった。
四足動物との戦闘経験もあるのか、その動きに迷いはない。
「（とにかく動きを止めるッ!!　まずは足ッ!!）」
「遅れはとりませんわッ!!」
エレミアはまず手始めに足を狙ったようだ。ヴィクトーリアもワンテンポ遅れてそれに続く。
ディケイドオーズはバッタの脚力を生かして背中にとりつく。
俺はジカンギレードをガンモードにして射撃の体勢に入った。
「怪物相手なら、遠慮はせえへん！」
エレミアが纏っているのは『イレイザー』の魔力だ。迷うことなく、その必殺の力を振るう。
「わたくしたちの試合を穢したこと、後悔なさい!!」
ヴィクトーリアの斧槍は電撃でできた刃を形成していた。
２人の攻撃は容赦なくアナザーオーズの足を破壊する。エレミアの掌は太い足を三分の一以上消し去り、ヴィクトーリアの斬撃は足を輪切りにしていた。
俺の銃撃も足の付け根を削る。
だが、その傷はすぐに塞がってしまう。
「っ!?」
「これは……!?」
２人が驚いたのは、傷が塞がったことにでは無いだろう。その傷が

塞がる際、銀色のメダル――セルメダルが、まるで寄生虫のように傷口を覆ったからだ。
少しダメージを与えた程度では、こうして回復してしまうようだ。
でも再生するのは別に関係ない。どちらにせよオーズの力を使わなければこいつは倒せないのだ。
俺達がするべきなのは、なるべくコイツの注意を引いて、ディケイドオーズが動きやすい環境を作ることだ。
「大丈夫だ！　そのまま攻撃を続けて――」
アナザーオーズがその場で足踏みをした。
次の瞬間、
「――ッ!!??」
見えない圧力がエレミアとヴィクトーリアを押しつぶした。俺は慌てて後ろに飛び下がる。
「う、ぐ……っ」
「なに、が……っ」
２人ほどの実力者が身動き一つとれなくなるほどの圧力。少し離れたところから見ると、空間自体が歪んでいるようにも見える。
これは、
「重力操作、か……!?　まさかコンボの能力を……！」
不思議なことではない。アナザービルドはベストマッチの能力を使っていたのだ。だったら、アナザーオーズがコンボの力を使ったことで何ら不思議はない。
さらに緑色の電撃がアナザーオーズの背中から放射された。背中で攻撃していたディケイドが吹き飛ばされている。
その電撃はあちらこちらに飛び散り、会場を破壊する。その破壊は瓦礫という結果を作り出す。
「ちい!!」
超重力で押しつぶされる２人を助ける前に、逃げる人の上に降り注ぐ瓦礫を何とかしないと！
ただの瓦礫だから破壊は出来るけど、全方位にあると全て撃ち落とすのは難しいか……！

そう思った時、明後日の方向から援護射撃があった。弾丸の飛んできた方を見ると見知った姿がある。
「クロ!!」
クロは瞳で応え、次の矢をつがえていた。発射された矢は赤い軌跡になり、さらに分裂して瓦礫を打ち抜いた。
「流石だな……」
クロの近くにはチームナカジマや八神道場の面々の姿がある。やっぱり会場に来ていたんだ。
さらに、
「吹き飛びやがれェェェッ!!」
威勢のいい掛け声とともに、とてつもない熱波がアナザーオーズを包み込んだ。肉を焼き、体を維持できなくなった部分は銀色のメダルになって散らばる。
炎熱砲撃だ。それも、なのはさんにも引けを取らないレベルの。こんなのを撃てるのは――
「リーダー！　危ないですよ……！」
「馬鹿野郎！　ヘンテコお嬢様が戦ってんだぞッ!!　このまま避難なんて出来っかよッ!!」
やっぱり砲撃番長、ハリー・トライベッカだ。観客席からリングへと飛び降りてくる。空中で光に包まれ、ＢＪへと姿が変わった。
そしてその左手には、魔力が集まっている。
「もう一発持ってけッ!!」
再び放たれるハリーの炎熱砲撃、『ガン・ブレイズ』。命中するが今度は、
「なにぃ……っ!?」
爆炎が晴れると、燃える翼に包まれていたアナザーオーズが、その翼を広げた。ダメージは先ほどよりも明らかに少ない。
「不死鳥の翼か……！」
燃える羽が分離し、新たな敵対者――ハリーへ向けて殺到する。
「うぉっ!?」
降り注ぐ攻撃に、ハリーは慌てて防御しようとする。だが、防御が

苦手なハリーは動きが遅い。
「このっ!!」
「はぁッ!!」
俺とディケイドが盾になる。お互いの武器で攻撃を反らせた。
「お、おう。あんがとな」
「いや、気にするな。でも、砲撃番長の攻撃も防いでくるとはな……」
「ああ。あの攻撃はなかなかだったがな……」
アナザーオーズの予想以上の力に、俺達はこそこそと話す。
そうしていると、さらに新しい少女が俺達の方に走ってきた。
「ハリーさん!」
「おっ! アホのエルスじゃねーか! お前避難してなかったのかよ!」
「アホの!? こんな時にまでやめてください! というか、避難しようと思ったらあなたがリングに飛び込んできたんじゃないですかっ!」
エレミアのセコンドを務めていたエルス・タスミンも、戻ってきてしまったらしい。
「ディケイド、さっきのでわかったと思うけど、ここのみんなかなりの実力者だ」
「ああ。全員の技を合わせて……」
計画を立てていると、アナザーオーズの足元で光が爆ぜた。
今まで押しつぶされていた2人が、溜め込んでいた魔力を一気に開放したのだ。アナザーオーズの体が浮かび上がり、重力攻撃が一瞬だけ弱まる。
その隙に2人が脱出した。
「やってくれましたわね!!」
斧槍で地面を突く。すると、巨大な魔法陣が現れた。これは綺凛との試合で使っていた、雷を雨あられと降らせる技だ。
「百式、神雷ッ!!」
ヴィクトーリアが発生させた雷に対して、全身からクワガタの雷を発生させるアナザーオーズ。

「はあああああっ!!!」
ヴィクトーリアの圧倒的な魔法に、俺達は下手に近寄れない。全力の魔法は、アナザーオーズの雷を力で押し切り、逆にダメージを与えていた。
――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!
「っ!? まさかっ！」
亀の甲羅を作り出し、それを盾代わりにすることで電撃を防いでいた。
「だったら、ドリルで削ってやるッ!!」
俺はビルドウォッチを起動させる。
《ＢＵＩＬＤ》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＢＥＳＴ　ＭＡＴＣＨ！　ＢＵＩＬＤ！》
アーマーとドリルが装備され、ビルドアーマーへと変身する俺。
「仮面ライダーの人っ！　合わせるよ！」
一緒に飛ぶのはエレミアだ。
「行くぞ！」
「うん！」
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＢＵＩＬＤ　ＶＯＲＴＥＸ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
グラフに乗り、滑走する俺。
「シュペーア・ファウストッ!!」
俺のドリルと、エレミアの鉄腕が甲羅を粉砕する。そこに、俺達の間を縫うように空から矢が降り注ぐ。クロの曲射だ。
俺はグラフに乗ってその場を離れるが、エレミアは追撃するつもりらしい。アナザーオーズの背中に着地した。
「ッ!?」
割った甲羅の中から細長い触手が飛び出してくる。これは電気ウナギだ。着地したエレミアを捕まえようと伸びてくるが、
「――」
エレミアの目つきが変わる。

空中で体を捻り、触手を掌で撫でる。するとその部分がごっそりと無くなった。
命の危機を感じた時に発現する『エレミアの神髄』だ。
だがその代償として、回避ではなく攻撃を選択してしまう。本来なら問題のない選択だ。通常の生物なら、胴体を真っ二つにされて絶命する。
しかし、今戦っているのは怪物だった。
薙ぎ払われた電気ウナギのさらに奥から、巨大なティラノザウルスの顎が急成長して、エレミアを飲み込もうと迫る。
何の疑問も無く、エレミアはその手を振るう。
「――――」
エレミアとティラノは、お互いに攻撃を弾き合った。
通常ではありえない『無』の力を持ったプトティラコンボの力が、イレイザーの力と渡り合ったのだ。
一瞬の空白をついて、横からトリケラトプスの頭部が激突した。エレミアは何とは突き出した2本の角を受け止め、離れた場所に着地した。
その様子を見て、俺はほっと息をつく。
「危な……」
「ジークッ!!　不用意に近寄るのはやめなさい!!」
ヴィクトーリアも声を張り上げて注意している。
「何とか拘束します!!　皆さんで攻撃を!!」
エルスは得意のバインド魔法を使って動きを止めようとしている。
アナザーオーズの周りにいくつもの魔法陣が現れる。そこから飛び出してくるのは手錠の形をしたバインドだ。
手脚や胴体、首や顔だけではなく、ちょっとした突起にまでいくつもの鉄の輪っかが巻き付いていく。
だが拘束された猛獣がおとなしくしているわけがない。
「うぐぐっ……!　皆さんっ!　なるべく早く、お願いします……!」
汗を流しながら、エルスは切羽詰まった声色で催促する。
動きを止めてくれたのなら!

誰も何も言わなくても、攻撃の準備をしていた。
俺はジオウライドウォッチをジカンギレードにセットする。
「やってみるか」
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＺＩ―Ｏ　ＳＵＲＥＳＵＲＥ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ！》
「ああ。なるべく削ってみるか」
《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ！》
ディケイドはカードを装填する。
「不良娘、今回は当てにしていますわ！」
ヴィクトーリアは電撃を纏う。
「言われなくても、なあ!!」
一番の得意分野に、ハリーは威勢よく声を上げる。
「みんな、行くよ」
エレミアも魔力が指先に集中していた。
「大丈夫、タイミングは合わせられるわ」
観客席にいるクロも、捻じれた矢をつがえていた。
そして、
「カノーネ・クーゲル――――ファイヤッ!!」
「ガン・ブレイズッ!!　フルバーストッ!!」
「十式、投雷ッ!!」
「偽（カラド）・偽（ボルグ）・螺旋剣Ⅲ！」
さらに、俺はスレスレシューティング、ディケイドはディメンションブラストを発射する。
亀の盾すら容易に破壊する攻撃が、アナザーオーズを滅多打ちにした。
「よし……！」
ダメージを与えたと判断したディケイドは、1枚のカードを取り出す。
《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＯＯ！》
「はッ！」

ディケイドオーズはバッタの力で、スタジアムの天井ギリギリまで大きく飛び上がる。そのまま空中で1回転。
ディケイドオーズの背中には赤い羽根、そして空中には赤、黄色、緑、3色のリングが形成された。そのリングめがけて急降下していく。
「くらえ――――!!」
タトバキックはアナザーオーズの大きくあけられた口――――その少し上、鼻先に命中した。
「はあああああぁぁぁぁ――――!!!!」
「いけぇぇぇぇっ!!!!」
俺は思わず叫んでいた。
2人のオーズの衝突点から、火花と共に凄まじい量のセルメダルが溢れ出している。破壊されたところからドンドン修復されているんだ。
そして――――蓄えられていた欲望が、キックの威力を上回った。
――――GYAAAAAA!!
「うぐッ!!」
アナザーオーズの号砲によって、ディケイドオーズが弾き飛ばされた。倒しきれなかったのか……!
地面に叩きつけられ、オーズへの変身も解けて元のディケイドの姿に戻っている。
アナザーオーズと言えば、すぐさまセルメダルが傷を覆い、元に戻っていく。
あれ以上のパワーが必要というと、コンプリートフォームになってもらうしかないが……
そう考えていたが、
「あれは……!」
だが完全に元に戻る直前、アナザーオーズから一筋の光が放たれ、俺の手に収まった。

タカとトラとバッタ２０１０

《ジカンデスピア！》
《カマシスギ！》
「ふっ――――」
「――――っ」
カナが使っているのは長い三つ編みの中に隠し持っていた大鎌、サソリの尾（スコルピオ）だ。
それに対抗して、あえて同じ鎌で受けて立つウォズ。専用武器である『ジカンデスピア』を鎌モードにして打ち合っている。
時折カナの腰のあたりが何度か光る。それは腰のホルスターにおさめられている拳銃で行った不可視の銃弾（インヴィジビレ）だ。
ウォズはジカンデスピアを回転させ、盾を作り出して防ぐ。
お互いに余裕がある戦いだった。
カナはその様子を見て首を傾げる。
アリアを取り戻すという明確な目的があるにもかかわらず、ウォズは形の上でしか戦っていない。適当に時間をつぶしているのではないかという錯覚すら覚える。
不可視の銃弾（インヴィジビレ）の跳弾を利用して攻撃も出来たが、不気味な相手であるウォズに、カナも手の内を見せようとはしない。
特に何かを言い合うわけでも無く、淡々と獲物をぶつけ合う２人。
「むっ!!!!　こ、これは……！」
ウォズは突然、何かの電波を受信したのか、明後日の方向を見た。その方向はインターミドルの会場だ。
「これは、祝わなければ……！　すまないがこれで失礼する、カナ」
「どういう意味かしら。あなたが私と戦っていたのは、アリアを取り返すためのはず。ここでいなくなったら、私はアリアを連れてこの島を離れるわよ」
「ああ、それで構わない」
ウォズの答えは、聡明なカナの思考でも読み切れるものではなかった。

「元々、囚われの眠り姫を助けるのは私の役目ではない。むしろ、ここで私が神崎・H・アリアを奪還してしまう方が問題になる」
変身を解除したウォズに、カナも武器を下ろす。
「王子様の役目は夜月　翔って事かしら？　この後で、アリアの奪還のために私達の所に来ると？」
「そういう事だ。我が魔王は間違いなく、君達から神崎・H・アリアを取り戻すだろう」
「すごい自信ね。それだけ信頼してるって事かしら」
「違うな。これは確定した未来だ。そしてもう1つ予言させてもらう。我が魔王は、君たちのボス、『教授』すら打倒し、この世界に新しい秩序を作り出すと」
「……何ですって？」
ウォズの口調は『教授』が誰なのかを知っているものだ。それなのに、こうも言い切る。カナはその根拠に少しだけ興味を持った。
だがその気持ちはウォズにお見通しだった。意地悪に口元をゆがめ、一礼する。
「すまないがその質問に答えていては歴史的な瞬間を見逃してしまう。再び言うが、ここで失礼する」
ウォズのマフラーが体を包み込んだ。次の瞬間、ウォズはその場から消え去ってしまう。
追手がいなくなったのであれば、もたもたしているつもりは無い。疑問を振り払ったカナは、アリアを抱え、島から脱出するのだった。

アナザーオーズから放たれた光は俺の手に収まり、一つの形になった。

迷わず起動させる。
《ＯＯＯ》
「変身ッ!!」
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＴＡＫＡ！　ＴＯＲＡ！　ＢＡＴＴＡ！　ＯＯＯ！》
ビルドの時とは違い、タカ、トラ、バッタ、それぞれを模した物体が出現し、体に装着されていく。
頭、胸部、足、３色に分かれた見た目が特徴的だ。胸部にある、原作では使ったコアメダルの動物の絵が描かれているはずの部分には、ジオウらしく『タカ・トラ・バッタ』と書かれていた。
何はともあれ、仮面ライダージオウ・オーズアーマーに変身し――
――
《祝えッ!!》
「「「「「ッ!!???」」」」」
会場中の人が――――変身完了した俺も含めて――――耳を塞ぐ。
どう考えてもボリュームを間違えたとしか思えない大音量で、実況用のスピーカーからウォズの声が聞こえてきたのだ。
《ちょ、ちょっとあなた、何を――》
《黙れ》
誰かの声が割り込むが、ウォズが一喝して黙らせている。
《全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者ッ!!　その名も仮面ライダージオウ、オーズアーマー!!　また一つ、王たるライダーの力を継承した瞬間であるッ!!》
会場中に響き渡るウォズの祝詞。
今まで怪物への恐怖で大混乱だった観客たちは、一言もしゃべらず唖然としていた。エレミアも、ヴィクトーリアも、ハリーもエルスも。
あ、あいつは……っ。って言うか、カナの方はどうなったんだ!?
ここに来てるってことは……どう言う事なんだよ!?　アリアは奪還できたのか？
「……この世界でもあるのか、あの意味不明な祝いの言葉は」
ディケイドは何か呟いている。

「おい。色々と言いたいことはあるのかもしれないが前を見ろ。オーズの力を使えるようになったのはいいが、まだ敵はいるんだからな」
「わ、分かってるよ！」
　そうだ。色々と言いたいことはあるが、まずは目の前のアナザーオーズを倒すことに集中しなければ。
「ディケイド。俺たち２人で技を合わせよう。さっきは弾かれたけど、２人のライダーキックを合わせれば行けるはずだ！」
「ああ。それはいいが……」
　何だ？　妙に歯切れが悪いな。
「アイツが化け物過ぎて忘れていたが、中に取り込まれている奴がな……」
「中に、取り込まれた人……？」
　俺もすっかり忘れていたことだ。
　アナザービルドの時はティアーユ先生が怪人化していたけど、今回は誰なんだ？　全く見当がつかないぞ。
　でも、その辺の一般人ってことは無い、そんな予感がする。
「その通りだ、我が魔王」
「ッ!?　ウォ、ウォズ!?　お前……！」
　音も無く後ろに現れたウォズ。もはやこいつがワープしてきたとしても驚きはしない。それよりもこいつには、聞きたいことがありすぎるぞ。
「まず神崎・Ｈ・アリアだが、申し訳ない。私の力及ばず、連れ去られてしまった」
「……」
　俺はウォズを観察する。
　力及ばずっていう訳にはどこもケガしているようには見えない。呼吸すら乱れていない。あんなに感極まって祝っていたくらいだ。体は何ともないんだろう。
　胡散臭い。素性の知れないコイツに任せたのは失敗だったか。
「そう言わないでくれ。私は何時でも、君の味方だ」
「……胡散臭いことは言わなくていい。俺の知りたいことに答えろ」

「なんなりと」
「アリアは無事なのか」
「ああ。少なくともすぐに危害を加えられることは無いだろう。そう、この事態を対処してからでも十分に間に合う」
　ウォズは本を開きながら俺の質問に答える。
「そうか、じゃあ次だ。アナザーオーズには誰が変身している？」
「変身者は、春日部　耀」
「耀が？」
　全く予想外の名前だった。
「知り合いか？」
「まあ……一緒に住んでる娘だ」
「ああ、お前の女か」
　ディケイドの呆れたような声に俺は顔を背ける。
「それよりも、どうして耀が？」
「彼女が一番適任だったからだ」
　欲望の王には似合わないと思うが。や、ある意味欲望に忠実とは言えるけど。ビルドがティアーユ先生って言う科学者だったことを考えると、もっとふさわしい人がいたんじゃないかとも思える。
「だが、このレベルの欲望を受け止められる人材となると、そう簡単には見つからない。しかし、仮面ライダーには変身者が必要だ。欲望以外で、オーズの力と結びつくことが出来る者。その力を、彼女は持っていた」
「力……生命の目録（ゲノムツリー）か……！」
　俺はハッと思い当たった。
　耀の力の源であるペンダント、『生命の目録（ゲノムツリー）』。それをトリガーにしてるってことか！
「元々アレはあらゆる異能と策略に対抗するために造られた、対魔王（ジェネラル）・全局面的戦闘兵装（ウェポン）。全能、万能を目指すのは人の欲望の極致ともいえる。さらに特性として、生物の系統樹を解析し、使用者を生態兵器――キメラを製造する」
　オーズも3枚のメダル、3種類の動物のパーツを組み合わせる。そ

ういう意味じゃキメラみたいなもんだ。
　そう言う意味じゃ、筋は通っているってことなのか。
「だが逆に、春日部　耀を選んだことがデメリットになっている部分もある」
「何？」
「春日部　耀にはもう1つ能力がある。ノーフォーマー。何者にも成れない者。本来は生命の目録（ゲノムツリー）による怪物化を押さえている恩恵だが、そのせいで完全なアナザーオーズの力を発揮出来ないでいる」
「つまりなんだ、こいつを使ったやつはマヌケだったってことか？」
「さて、そこまでは。知らなかったのか、計算の内なのか」
　ディケイドの質問に、ウォズは肩をすくめた。
「す、すみません！　お話、まだ続きそうですか……っ!!　私のバインド、そろそろ限界で……！」
　エルスが切羽詰まった声を出してくる。
「うぐぐぐ……っ!!　あっ!!」
　――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ!!
　凄まじい熱波とともに、アナザーオーズを拘束していたバインドがすべて砕け散った。
　でもまあ、倒さなければいけないことに変わりはない。
「すみません、拘束が……！　多分、後1回が限界かと……！」
「なら、あと1回で決めるだけだ。そうだな、ジオウ？」
「ああ！　もう1回みんなで――」
　――チャリン、チャリン
　メダルの落ちる金属音がした。見るとアナザーオーズの体から、メダルが落ちている。そのメダルは4足歩行のキメラになる。
　サイズをそのまま小さくしたようなアナザーオーズが大量に生産された。
　おそらくガタキリバコンボの能力。本体がそのままコピーされなかっただけ優しいもと言えるが、それが逃げ惑う人々を襲う脅威になることは変わりない。
「どうやら、あまり時間が無いらしいな」

「ああ！　クロ！　そっちは頼むぞ！」
　離れた場所にいるクロは、弓の代わりに二振りの剣を作りだして斬りかかっている。
「ヴィクター、ウチらも！」
「ええ！　不良娘！　無暗に撃つんじゃありません!!　無関係の人に当たるでしょう！」
「分かってるよ!!　クソッ！　ちょこまか動いてんじゃねーよ!!」
　他のみんなも分身体の処理に回り始めた。だが、元を絶たなければいずれ押し込まれる。
「おい、メガネ娘。もう1回拘束しろ。他の奴らは手が離せないらしいからな。俺とこいつで決める」
「メ、メガネ……わかりました……！」
　苦虫を噛み潰したような表情で了承するエルス。ディケイドはこういう人だから、許してあげて欲しい。
　ウォズは呑気に本を開いている。やっぱりここで手を貸すつもりは無いらしい。
「でも、俺達だけで行けるのか？」
「当たり前だ。この世界の奴に花を持たせてやろうかとも思ったが、そんな余裕は無くなったみたいだからな。ここからは全力で行くぞ」
　なんとも頼もしい言葉だ。
「お前にも少し手を貸してやろうか」
　ディケイドは一枚のカードを取り出した。
《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＴＩＭＥＭＡＺＩＮ》
「は!?」
　召喚されるのは見たことの無いエアバイク型のライダーアイテムだ。俺が全く知らないってことは、
「何を驚いてるんだ。お前のマシンだろ？」
「だよな……」
　でも使わせてくれるってんなら有難く！
　俺はそのマシンに乗り込んだ。騎乗スキルのおかげで、初めての乗り物でも難なく乗りこなせる。ファイズが初めてジェットスライ

ガーに乗った時の様にはならないぜ。
「おおっ!!　ロボットにもなれるのか!!」
　変形してロボットになる。それだけではなく、オーズのライドウォッチが頭部に埋め込まれた。
「ただロボットになるだけじゃなくて、そのライダーの能力も使えるってことか……」
「それと……こいつは俺も疲れるが、あれ以上となると出さない訳にはいかないな」
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡ！》
　ディケイドはタトバコンボを介さずに、直接ガタキリバコンボに変身する。そしてその固有能力『分身』によって数が増える。
　その１人１人が、さらに新しいカードを取り出していた。
「マ、マジで……!?」
　こ、これはかの伝説の……!?　ディケイド１人で再現できてしまうのか！
　原作の様にきれいに丸く並んではいないが、ディケイドの姿が変わっていく。
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＲＡＴＯＲＡＴＡ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＳＡＧＯＺＯ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＳＹＡＵＴＡ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＴＡＪＡＤＯＲＵ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＰＵＴＯＴＥＬＩＲＡ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＢＵＲＡＫＡＷＡＮＩ！》
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ！　ＴＡＴＯＢＡ！》
「うわぁ……!!」
　圧巻の光景だった。
　ベルトは違うが、オーズのコンボがすべてそろっているこの光景。映画館で見た時の興奮を思い出すな！
「なにボーっとしてる。ほら、お前も変わっておけ」
《ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＴＩＭＥＭＡＺＩＮ！　ＴＡＪＡＤＯＲＵ！》

「は？」
ロボットの頭部に装着されていたオーズの顔が、タジャドルコンボのものに変化し、背中に翼が生成される。
フォームチェンジまでできるのかよ、このマシン。そしてそれをすんなりとやってしまうディケイドさん。
「ほら、決めるぞ」
「ああ！」
《《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＯＯ！》》
同じ電子音がいくつも重なる。
「メガネ娘、やれッ!!」
「はい!!」
合図と共に再びアナザーオーズの周りに出現する魔法陣。
しかし、
――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ!!
アナザーオーズは咆哮と共に強烈な熱波を全方位に放射する。先ほどバインドを破壊したラトラータコンボの能力だ。
今度は拘束される前に、手錠型のバインドは魔法陣を含めて全て破壊される。
「そんな……！」
自身の魔法が全く通じないことに、茫然とするエルス。
「問題ない。行くぞ、ジオウ!!　お前は女を引っこ抜け!!」
「ああ、分かった!!」
力を解放したプトティラコンボが頭部から強力な冷気を放射した。それはアナザーオーズが発する熱気と拮抗し、逆に押し返していく。
さらにサゴーゾコンボが重力操作を行い、動きを封じる。だがそれも、同じ重力操作で打ち消されるのは時間の問題だ。
その前に完全に動きを止める。
ラトラータとブラカワニは足に向かって飛びかかった。
ラトラータはその俊足とトラクローを使って、ブラカワニはスライディングとワニに変形させた足で、アナザーオーズの足をズタボロにする。

その間に空に飛んでいた俺は、
「はあああぁぁぁぁっ――――」
ロボットの足が、猛禽類を思わせる形に変形する。鋭い爪先が炎の纏い、相手に向けて急降下だッ!!
動きを止められ、胴体だけになっていたアナザーオーズ。
何処を狙うべきかは、タカの頭部が教えてくれる。
「セイヤーーーー!!!!」
正確に、アナザーオーズの体を削り取る。
「耀!!」
ロボットのハッチを開けて飛び出す。
「翔……?」
意識はあるのか、ぼんやりと返してくる耀。
「今助ける!!」
俺はトラクローZとジカンギレードを使って、ウゾウゾと耀の手足を拘束していたセルメダルを切り離す。
抱きかかえてロボットの中に飛び込む。
俺が飛び去ったところを確認したディケイドオーズ達は、一斉に飛び上がった。
ガタキリバコンボが分身し、シャウタコンボはタコの様に8本になった足をドリルの様にして、タジャドルコンボはロボットと同じく足を猛禽類を思わせる形に変形させ、そしてタトバコンボはもう一度タトバキックを。
何発ものライダーキックが叩き込まれていく。
その攻撃を受けたアナザーオーズは、セルメダルをまき散らして爆発四散するのだった。

怪獣大決戦　前編

　爆発の衝撃によって雨のように降り続けるセルメダル。だがそれは雪の様に、地面に落ちた瞬間に消えていく。存在を支えていたものがすべて消滅したんだろう。
「ふぅ……」
「翔、やったね……」
　俺は操縦桿から手を放し、ホッと一息つく。腕の中にいる耀が、弱々しく笑っていた。
「体は大丈夫か？」
「うん……ごめんね、ちょっと力が入らないかも……」
「そうか……おっと!?」
　話していると、乗っていたタイムマジーンが消えた。ディケイドが消したんだな。
　耀を抱っこして着地する。
「助かったよ、ディケイド」
「気にするな。慣れていることだ。それに、まだ終わってないみたいだぞ」
「ああ。外ではまだ怪獣が暴れてる」
　原因がアナザーオーズとは別物らしいから、こっちにもすぐに対応しないと。
「怪獣……この世界にはウルトラの戦士もいるってことか？」
「……まさかとは思うけど、まさかウルトラマンの世界にも行ったことが……？」
「さあ、どうだろうな……おしゃべりはここまでだ。二手に分かれるぞ」
　銀色のオーロラに飲み込まれ、姿を消すディケイド。あのたくさんのオーズによる攻撃は疲れるって言ってたはずなんだけど、その行動は迅速だ。
　いつの間にか、ウォズもいなくなっていた。
　俺も行かなければ。

「お兄ちゃん！」
「クロ！　耀を頼む！」
「え？　ちょ、頼むって――――」
「外もヤバい状況になってる。俺はそっちの応援に行かなきゃいけない」
「――――分かったわ。みんなのことは任せて」
クロはすぐに状況を理解してくれる。
俺は頷き、飛び立とうと――――
「よっと」
「うお!?」
俺達の周りを囲むように巨大な剣が突き刺さる。
「これを取って……」
ライドウォッチを外され、変身が解除される。
「ク、クロ？　何を――――むぐっ!?」
「んっ、ちゅぁ、えろぉ、ちゅぱ」
クロに飛びつかれ、唇を奪われる。飛びつかれた勢いで尻餅をついてしまった。
そして魔力が吸われていく感覚。
「人の前でするなんて、けしからん。今回は私がお姫様のターンだったはずなのに」
この状況でも、耀の軽口は健在みたいだな。半眼で俺を睨み、口を尖らせていた。
「さっき戦うのに結構魔力を使ったから。その分の補充ね」
「だったら言ってくれれば……」
「お兄ちゃん、いつも行動が突然だから。仕返しっ」
唇をぺろりと舐めたクロは、小悪魔のような笑みを浮かべた。
「ちょっと！　怪物を倒したことですし、状況の説明をして下さらないかしら！」
ガンガンと外から剣を叩いてくるのはヴィクトーリアだな。多分近くにエレミアもいるんだろう。
「ディケイドのヤツ、説明が面倒で先に行ったんじゃないだろうな

……」
説明なんてしている時間は無い。
「じゃあ、行ってらっしゃい」
「ああ。そっちも気をつけろ。オープン・ゲットッ!!」
剣で作られた小部屋から飛び立つ3機のゲットマシン。ヴィクトーリアが何やら叫んでいるが、ゲットマシンのジェット音で何も聞こえない。
「チェンジゲッター、1ッ!!」
ゲッター1に変身した俺はマントのようなウイングを展開、天井に出来た大穴を通って、外へ飛び出した。
空から見ると島中が酷い有様だった。
サイズはウルトラマンの設定よりも若干小さくなっているが、そのパワーには変化が無いんだろう。目の前にある建物を簡単に破壊して、それぞれ別の方向に進んでいた。
だったら、
「来てくれ、セイバー――――!!」
俺の令呪が輝き、2人のアルトリアが召喚された。2人共、部屋着ではなく見慣れた鎧姿だ。
「状況はどうなっている」
オルタは短く問う。
「見ての通り。1人だと対処しきれない。それぞれ別の方向に行って戦おう」
「しかし、私たち2人が同時に戦えば、あなたの魔力が……」
「今回、俺の魔力は全部そっちに回す。遠慮なく使ってくれ」
今回は魔法じゃなくてゲッターで戦う。
「良いだろう」
「はい。翔も気を付けて」
俺達はそれぞれ、3方向に散った。

怪獣が暴れだしたことによって島は大混乱に陥っていた。
少々物騒なこの学園島といっても、それに対抗するだけの戦力は整っていた。そのおかげで、今まで大規模なテロや犯罪は防がれていた。
だが今回の怪獣は、それを超えていた。こっそり事態を収拾することがすでに不可能なレベルだ。
怪獣も、1体1体が雑魚ではない。通常の拳銃はもちろんのこと、超能力もレベル3以下では傷1つ付けることが出来ないような相手ばかりだ。
巨体を生かした剛腕でビルを破壊するものもいれば、口から火球を吐くもの、電撃を放射するもの、体中に備え付けられた兵器を乱射するものまでいる。
それは1国の軍隊を壊滅させるに足る戦力だった。
だが、それに対抗するために用意されていた島の戦力も、伊達ではない。
怪獣が現れたことで、島中の管理局と武偵にスクランブルが出された。その中でも一番早く動いたのは特務六課だった。
7人の機動部隊員が現場に向かうヘリに乗っていた。
「皆さん！　そろそろ現場に到着ですよ!!」
そう言って後ろに叫ぶのは、六課専属のヘリパイロットであるヴァイス・グランセニックだ。
出撃の瞬間を今か今かと待ちわびている7人――なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、ティアナ、スバル、クローディアはすでにBJを纏い、最後のブリーフィングをしていた。
《それじゃあ、今こっちで拾ってる情報を伝えます》
ディスプレイ越しのはやては普段のふざけた態度をおくびにも出さない。7人も今がどれだけ非常事態なのかを理解している。重苦

しい雰囲気だ。
《現在、島には7体の怪獣が出現しています。すでに何人かの死傷者が出ていて、崩れたビルの中には取り残されている人も多数おる》
画面上には怪獣の進行方向がわかるように、島の地図と矢印が映し出されていた。
「まずは人命が優先。だよね？」
「だが脅威も排除する必要がある。奴らを止めることが出来なければ、怪我人が増えるばかりだぞ」
なのはの言葉に頷きつつも、シグナムは腕を組んで意見を述べる。
「むしろ、アタシらが怪獣をぶっ飛ばして、救助は武偵とか他の管理局員に任せたほうがいいんじゃねーか？」
「そうだね。あの怪獣、前に戦ったやつと同じくらい強いんだったら、相手を出来る人も限られてるだろうし……」
この中では一番小さい、というか小学生の様な体つきのヴィータだったが、一番ヤル気に満ち溢れている。
怪獣の強さを身をもって体験したことのあるフェイトも、その意見に賛成した。
「こうしてみると、私たち全員が出勤のこの日でよかったですね」
「そうだね。こうしてみんなで動けるんだし！」
「元々この日は、何かが起こりやすいと一番警戒されていますからね」
ティアナはすっかりと仕事モード。スバルは普段とあまり変わらないが、それが逆に場の空気を盛り上げていた。
そしてクローディアは、この状況でもニコニコと余裕のある笑顔を浮かべている。
クローディアの言う通り、みんなの疲れが最高まで溜まる会議最終日は、狙われる可能性が高いとして警戒の度合いが上げられる。
もっとも、クローディアは他の要因で警戒することが出来るが。
「でも、他の所も手一杯だから、やっぱり1匹1匹確実に対処していくしかないね。増援もいつになるのか分からないし」
なのはの言葉に全員が頷いた。
《それでええと思う……それともう1つ。私らにとっては、かなり嫌

な報告が上がってきたんや》
はやては言いにくそうに口を開く。
「嫌な報告？」
《新しく怪獣が出現したらしい――――インターミドルの会場に》
「「「ッ!!??」」」
クローディアを除く全員が息を呑み、クローディアも顔つきを鋭くする。
インターミドルに出現した怪獣というのはもちろんアナザーオーズのことだ。もちろん厳密には違うものなのだが、六課にとってはどうでも良いことだ。
「そんなっ！　みんなはどうなったの!?」
今日はインターミドルの決勝戦。チームナカジマや八神道場の面々が観戦に行っていることはみんなも知っている。
なのはが多少取り乱すのも、仕方のないことだ。
《分からへん。向こうも相当混乱してるみたいで》
「……っ!!」
なのはは唇を噛みしめ、浮かしかけた腰を下ろした。自分の職務を思い出したのだ。他の者もなのはの様子を見て自分を押さえる。
《仕事に私情は厳禁、やけど、インターミドルは人が多く集まってる場所でもある。出てると分かってる場所を放ってはおけないなぁ》
「では隊を2つに分けましょう。比較的機動力のある私とテスタロッサがインターミドルの会場に。高町は空から支援砲撃を。スバルとヴィータで怪獣に打撃を与える。ティアナとクローディア下に降りて状況の報告と怪我人の救助を」
《ん、それでええよ》
最後に動き方を決めたのは『烈火の将』の異名も持つシグナムだった。はやても賛成したところで、現場に到着した。
開いていくヘリのハッチ。
《それじゃあみんな、よろしくな》
「「「了解ッ!!」」」
号令を返した7人は、それぞれの戦場へ飛び立っていった。

活躍するのは管理局だけではない。ここで活躍すれば、後々管理局から報酬が出る。稼ぎ時だと判断した武偵がこぞって行動を開始していた。
しかしその中でも、お金目当てではない集団がいる。
原作では迷宮都市オラリオ有数のファミリア、この世界では聖王教会の懐刀になっている――――
「ロキ・ファミリア、行けッ!!」
フィンの一言でメンバーたちが一斉に飛びかかっていく。
一番槍のベートが撹乱し、怪獣の重い攻撃をガレスが受け止める。動きが止まったところにティオネとティオナの連携が突き刺さる。
その戦いの様子を、フィンはビルの屋上から観察していた。
「ただ倒すだけなら容易いが、こうも街中で暴れられるとね……リヴェリア！　救助はどうなっている!?」
《もう少し待ってくれ。怪我人を最低限動かせる状態まで回復させている》
「急いでくれ。ここだけに時間はかけられない……さて」
ロキ・ファミリアのメンバーなら、崩れかけてビルを怪獣から守りながら、怪我人を救出することは出来るだろう。その後になって、怪獣を倒すことも。
だが、ただ状況に対応しているだけでは埒が明かない。そう判断したフィンは手元に残しておいた団員に指示を出した。
「アイズ、君は遊撃だ。この怪獣、見た目や能力こそ違うが、出現した時間はほとんど同じ。とすれば、召喚者が近くにいてもおかしくはない」

「わかった。行ってくる」
フィンの指示に、アイズは小さく頷く。
「――――目覚めよ（テンペスト）」
その一言で、アイズの体が疾風を纏った。
ロキのステイタスによって発現した魔法『エアリエル』、風属性の付与魔法だ。自身と武器に『風』を纏うシンプルな魔法。
武器に纏えば『攻撃力と攻撃範囲の拡大』、体に纏えば触れる事すら出来なくなる『鎧』に転じる。攻防で万能の威力を発揮する魔法だ。
飛び立とうと足に力を込めたところで、フィンに呼び止められる。
「ああ、そうだ、アイズ」
「……？」
今まさに飛び立とうとする直前、フィンが声をかける。
「今回の相手は『怪物』だけど、くれぐれも『あの力』は使わないようにね」
「……わかった」
小さくうなずいたアイズは飛び去って行った。

４階建てのビルの屋上から島の騒ぎを見物していたジャグラスは、怪獣を出す手を止めていた。
「出した先から倒される、か。流石は学園島。実力者がそろってるねぇ」
特にすごいのは抜群の砲撃能力を生かして怪獣のヘイトを一身に受けるなのはだ。誘導弾を使い怪獣に絶え間なく弾丸の雨を降らせる。それでも興味を無くしてしまいそうになれば、大威力の砲撃だ。
そのおかげで４体の怪獣はそれ以上前に進むことは無くなってい

る。
段々と怪獣の足元には武偵や管理局が集まり始めている。この状況をひっくり返すには、さらなる怪獣を投入する必要があるが……
「こんだけ暴れさせれば十分だろ。あいつらも無事逃げ切ったみたいだし、俺も退散しようかね」
ジャグラスにはそこまでする必要がない。適当なところで切り上げるのが吉であり、この辺りが潮時だ。
ジャグラスはダークリングを仕舞おうとして、
「動かないで下さい」
「ん？」
鋭い声で呼び止められた。武偵高の制服を着た少女だ。
「（確かこいつは結城　アスナ。あの夜月　翔の女だったな……面倒な奴に見つかったもんだぜ）」
「その手に持っているモノは何ですか？」
「ああ、こいつはな……別に、アンタにゃあ関係ないだろ？」
ジャグラスはとっさに良い答えが思いつけない。おもちゃだ、なんて言ってもごまかせるとは思えない。
その不自然な様子に、アスナの疑問は膨らんでいく。
「（あの女、思った以上に強かみたいだなぁ。俺を見て物怖じしないとはな）」
「（この人、多分何か知ってる。もしかすると、犯人なのかも）」
見た目で判断するのは失礼かもしれないが、アスナは確信しかけていた。目の前の人物が今の騒ぎの元凶であると。
「お話、聞かせていただいてもよろしいですか？」
「嫌だ、と言ったら、その腰にあるもんを抜くのかい？」
「場合によっては、そうなりますね」
「ハッ！」
その言葉をジャグラスで笑った。
「嫌だな」
「忠告はしました」
アスナはレイピア、ジャグラスは刀をそれぞれ抜いた。

「ちょいとばかし痛い目を見てもらうぜ、お嬢ちゃん。あんまり抵抗しないでくれよ」
「それはこちらのセリフです」
お互いの刀身が太陽の光を反射し――――次の瞬間、打ち合わされた。

怪獣大決戦　中編

「シグナム、あれ！」
「あれは……？」
　インターミドルの会場に着く直前、フェイト達は会場の天井に開けられた穴から飛び出す影を見た。
　赤いロボットのように見えたそれははるか上空で３人になり、散り散りになっていく。
「今の……」
「ああ。何者かは分からないが、今は人命救助が最優先だ」
　２人はロボットと入れ替わるように、天井の穴から内部に侵入する。真下に見えるのはこの夏いくつもの激戦が繰り広げられたインターミドルのリング。
　無残にもリングは破壊され、瓦礫の山が築かれている。観客席には逃げ遅れた人がまだたくさん残っている、皆天上に開けられた穴を、そこから降りてくる２人に視線を向けていた。
　怪獣出現の通報があったにしては足りないものが２つあった。それは観客のパニックと、怪獣の本体だ。
「怪獣がいない？　どうして……？」
「見ろ、テスタロッサ。あれが理由だろう」
　破壊されたリングには、フェイトやシグナムも知っている人の顔があった。
　試合の映像で見たトップ選手達だ。確かにあのメンバーなら、怪獣すら退けてしまっても不思議ではない。
　そのトップ選手に交じって、１人だけ小さい娘がいる。ぐったりとした様子の娘を膝枕してフェイト達に手を振っていた。
「クロちゃん！」
「春日部は無事か？」
「耀は大丈夫。気を失ってるだけだから」
　クロに言われフェイトも確認する。確かに問題は無かった。
　その間にシグナムはクロに質問する。

「これは怪獣にやられたのか？」
「と、言うよりも、耀が怪獣にされてたって感じかな……原因は分からないけど」
「ふむ……とりあえず、出現した怪獣はお前達で倒したと考えていいんだな？」
「そうね、とりあえずは――――」
「すみません、少しよろしいでしょうか？」
　話に割り込んでくるのはヴィクトーリアだ。礼儀正しく一礼する。その横にはガチガチに緊張したエルス、２歩後ろにはエレミア、さらに後ろには腕を組んだハリーがいた。
　全員そろって、今何が起きているのかを知りたがっている。
「わたくし、ヴィクトーリア・ダールグリュンと申します」
「管理局、特務六課所属のシグナムだ。怪獣が出現したとの通報を受けてここに来ましたが、怪獣はあなた達が？」
「いえ、協力はしましたが、最終的に倒したのは他の方です」
「他の……その人物はどこに？」
　怪獣について詳しい話を聞かなければならない。そう考えるシグナムだったがヴィクトーリアは首を横に振る。
「分かりません。２人いましたが、どちらも立ち去ってしまって。１人は銀色のオーロラのようなモノで。もう１人は――――」
「仮面ライダーの人は天井に空いた穴から、どこかに飛んで行ってしまいました」
　自らの主と同じようなイントネーションでしゃべるエレミアが、先のセリフを取った。
「仮面ライダーの人？」
「はい。２人共仮面をつけていて、天井に空いた穴から飛んで行った方の仮面には『ライダー』と書かれていました」
　ヴィクトーリアの補足説明にシグナムは考え込んでいるが、
「顔にライダー……」
　フェイトの記憶に引っかかるものがあった。ティアーユの研究所に乗り込んでピンチになった時、助けに来た翔が確かそんな姿ではな

かったか？
「もしかして、翔が？」
フェイトは小声でクロに問いかける。するとクロも小さく頷いて答えた。
フェイトはすぐさまシグナムの肩を叩く。
「どうした、テスタロッサ」
「その仮面ライダーについては大丈夫。その人、翔だから」
「ショウ……夜月　翔か。六課に配属される」
シグナムはほとんどしゃべったことは無いが、色々と話は聞いていた。何やら、並々ならぬ秘密を抱えているということを。
しかし周りの人間の信頼を得ていることも知っていた。特にフェイトの話は、はやてから聞かされて興味のないシグナムも知っている事だった。
「（つまり、オーロラに消えた人物も、夜月　翔の知り合いという事か。ならば、この場は一時置いておくか……）」
シグナムはそう判断した。
「怪獣と直接戦ったあなた方には後ほど、詳しくお話を聞くことになると思うので。質問はその時に」
フェイトと共に、大会責任者の場所へと向かうのだった。

「ハアッ!!」
「やあッ!!」
ビルの屋上、ジャグラスとアスナは激しい剣戟を繰り広げていた。
その剣戟は互角。魔力を纏うアスナのレイピアと闇の波動を纏うジャグラスの刀が、火花と魔力を散らす。

「（この人、強い……！）」
「（まったく、こんなお嬢ちゃん1人、すぐにあやせないとなはッ!!）」
武偵高の短いスカートを翻し、アスナが果敢に攻める。すらりと伸びた足が地面を蹴り、胸の中で引き絞られていた右手が解放される。
閃光になったレイピアが、ジャグラスの体すれすれを通り過ぎた。
ジャグラスも軽口の1つでも言って茶化したい気分だが、余計なことをしゃべっていると舌を噛んでしまいそうだ。
始めのうちは峰打ちで済ませようと思っていたが、そんな余裕は無くなりつつある。
「ハァッ!!」
ジャグラスは死神の鎌のような闇の斬撃を飛ばす。
アスナは焦ることなくレイピアの側面で逸らし、反動を利用して回転。勢いを利用した刺突を繰り出す。
「やあッ!!」
「ッ!?」
ジャグラスはかろうじて後ろに飛ぶことで回避した。
アスナも無理して攻め込むような真似はしない。伸ばしきった体を戻し、再び構えをとる。ジャグラスも同じだ。
「（今はまだ互角に戦えてる。何が飛んでくるか分からないから、油断しないようにしないと……）」
「（マジでやるな……下手にケガさせて、夜月　翔の恨みを買いたくはないんだけどな）」
これは長引きそうだ。そう感じたジャグラスは逃げる算段を立て始める。このまま戦っていて、余計な援軍が来れば本当に手加減する余裕がなくなるのだ。
このままダラダラしていては、怪獣をすべて倒され、逃げることも出来なくなってしまう可能性が高い。
「（悪いなお嬢ちゃん。俺を見つけちまったことを不運だと呪いな）」
「（何かくる……！）」
ゆらりと、ジャグラスが一歩踏み出そうとしたその時、
「……っ!?」

突如横から襲ってきた衝撃に、ジャグラスの体は大きく吹き飛ばされた。秒速数十メートルの突風によって、隣のビルまで壁をブチ破って墜落する。
「痛ってぇな……どこのどいつだ……」
その人物はアスナのすぐ横に降り立った。
軽装の鎧を身に着け、手には不壊属性（デュランダル）が付与されたサーベル。自らが巻き起こした風によって輝く金髪が風に揺れている。
フィンに言われて怪獣の召喚士を探していたアイズが、２人の戦いを見つけて救援に駆け付けたのだ。
もちろんアイズにはどちらが悪者か分からないが、邪悪なものを感じ取り正解を引き当てていた。
「あなたは……」
「大丈夫？」
ちらりと後ろを見たアイズだったが、すぐさま前を見た。
「ッ!!」
襲ってきた闇色の斬撃を跳ね返す。
その攻撃を放ったのはもちろんジャグラスだ。
「っち、駆け付けてきた援軍が、まさかロキ・ファミリアのアイズ・ヴァレンシュタインとはな……逃げ切れるか？」
学園島でも有数の剣士、『剣姫』だ。剣の腕だけではなく強力な風の魔法の使い手。攻撃だけではなくスピードもある。それにジャグラスに匹敵する剣士が、この場にはもう１人いる。
「２対１で戦ったら、まず勝ち目は無いが……」
ジャグラスの手で、ダークリングが妖しい光を放つ。
「味方を呼び出せば話は別かな」
１枚のカードを取り出した。
「パンドンよッ!!」
《ＰＡＮＤＯＮ》
リングにカードを読み込ませると、カードは粒子となり、全く別のものを形作っていく。それは双頭の怪獣へと姿を変えた。
ＴＶシリーズの『ウルトラセブン』、最後の敵である『パンドン』だ。

――ＧＹＡＡＡＡＡＡ!!!
双頭の四つの目が２人を睨み、叫び声を上げた。
「やっぱり……」
「あの人が召喚士で確定だね」
アスナは自分の予感が外れていなかったことを理解し、アイズは目的の人物を発見したことで、サーベルを握り直す。
パンドンに隠れて見えなくなっているジャグラス。
「（召喚士を確保したいけど……）」
それを妨害しようとしているパンドンを無視することも出来ない。
「あなたは下がって。あの怪獣は私が」
「大丈夫です。私も合わせますから」
「そう？　分かった」
２人の女剣士は、並んで剣を構えた。

「まったく、クローン実験の次は怪獣なんて、本当に退屈しない世界ですわね……ッ!!」
狂三は悪態をつきながらも必死で体を動かしていた。
狂三はこの夏、メイド喫茶で働くジャンヌの伝手で、その系統のお店で働いていた。ビルが雑多に立ち並ぶ地区、珍しいジャンク品があるとマニアに人気の場所だ。
そこに現れたのはロボット怪獣『ギャラクトロン』。目や胸部に備えられた武装から光線を発射しつつ、進軍していた。
元々そこまで火力のある精霊ではない狂三。その特殊能力で相手を翻弄する戦い方は、ギャラクトロンには効果が薄かった。
そのため狂三は、人命救助に全力を出している。

「く、くるみん……！」
「その呼び方はやめてくださいまし！」
この事態にすっかりおびえてしまった同僚を抱えて、疾駆する狂三。
降り注ぐ瓦礫を避けるために、短銃を自らのこめかみに押し付け、引き金を引く。
「一の弾（アレフ）ッ!!」
刻々帝（ザフキエル）の能力の1つを使い加速する。突如ぶれた視界に抱えた同僚が悲鳴を上げるが、気にしている暇はない。
「（足止めに出した分身体はほとんどやられてしまったようですわね。いっそ、皆さんをわたくしの影の中に避難させた方が良いかもしれませんわね……）」
「苦戦しているようだな、狂三」
狂三の思考を断ち切るように、空から漆黒の斬撃と共に降下してきたのは、
「オルタさん!?　どうしてここに……」
黒い聖剣の圧倒的な威力は、この状況を打開出来る最強の武装だ。
「翔もすでに動いている。あいつの相手は私が引き受けよう」
「そうは言ってられませんわ。わたくし達」
狂三の影から分身体が複数出てくる。その中の1人が狂三（本体）が抱えていた同僚を受け取り離れていく。
「ここを荒らした報いは受けていただきますわ……！」
「勝手にしろ」
完全に立ち上がったギャラクトロンを目の前に、2人は武器を構えるのだった。

そして怪獣の魔の手は、懇親パーティが開かれているビルにまで迫っていた。
相も変わらず砂で出来たアヌビスに襲われていたビルは、怪獣の対処にまで手が回らない。

三日月型の巨大な双角と鼻先の一本角、胴体前面の松かさ状の鱗、太く長大な尻尾が特徴。古代怪獣、ゴモラである。
何人かの管理局員は足止めのために外に出る。また違うビルの屋上から魔力弾を撃ち込むが、その強靭な肉体には傷をつけることが出来ない。
それどころか、攻撃をうっとおしく思ったゴモラの攻撃――体を回転させての尻尾の一撃――によって、轟音と共にビルのフロアが達磨落としの様にぶち抜かれる。
フロアが丸々一つなくなったビルは倒壊し、上に載っていた管理局員はなすすべなく墜落していった。
その様子を見ていた各国の要人達は、管理局員には任せておけないとビルからの脱出の機会を窺っていた。
それはアルディギアやランドソル王国も同じだった。
自国の、それも両国とも王女を護衛している立場だ。周りの国を見捨てることになったとしても、最悪の事態を避ける必要がある。
だが、
「ラ・フォリア殿下、いかがなさいますか？」
「わたくし達だけが逃げる訳にはいきません。ここに残り、最後まで戦います」
「そうですっ！　みんな、同じ食卓を囲んだ仲間なんですから！　私だけ逃げるなんて出来ません！」
「ユースティアナ殿下……！」
ラ・フォリアとユースティアナがその場を動かなければどうしようもない。
「コッコロちゃん、まだいけますかっ！」

「はいっ!!　主様がお戻りになられる、その時まで！」
肩で息をする雪菜も、精霊の加護をかけ続けるコッコロも、この場での戦闘続行を叫んでいた。
砂を魔力によって動かしているこの使い魔は、雪菜の雪霞狼の敵ではなかった。構成される武器すらも砂が固められたものであるため、魔力を無効化する雪霞狼とは打ち合うことすら出来ない。
雪菜が処理したアヌビスは１００体を超え、この奮戦によって前線を維持できていると言っても過言ではない。
コッコロは風の加護を与えることで、雪菜の動きのサポートに徹していた。
「2人共……ありがとうございます」
当然、聖天子にもみんなを見捨てるという選択肢は無い。
「やれやれ、お嬢様というのは、どうしてここまで強情なんだか」
ライネスはそう言いつつも、事の成り行きを見守っていた。
ライネスの場合、別に誰かが犠牲になるのが許せないとか、そんな殊勝なことを考えていたわけではない。
ただ、この夏を丸々費やした島での生活、その最後に起きた刺激的な出来事を、最後まで楽しんでいたいのだ。
女子供にそこまで言われてしまっては、護衛の騎士達が気張らないわけにはいかない。幸い、怪獣は空から降り注ぐ魔力弾に気を取られて動けないでいる。
窓の外で大怪獣が暴れている様子は非常に心臓に悪いが、この均衡が続き、各国の精鋭部隊が来てくれれば、状況が変わるかもしれない。
そう。それまで、この均衡が続けばだ。
ラ・フォリアはその女神とも見間違う美貌に微笑みを浮かべ、みんなを見る。
「大丈夫ですよ。いざとなれば私が何とかしますから」
「ラ・フォリア殿下！　それは……！」
王家の義務として、最後には自分が責任を取ると言っているのだ。
いくらなんでも、ラ・フォリアを矢面に立たせるわけにはいかない。
騎士が抗議するが、

「――――ですが、その心配はなかったようですね」
ラ・フォリアの視線の先にいるのは、上空から飛来した、マントをはためかせた赤いロボットだ。
その装備について何も知らないラ・フォリアだが、直感でそれが誰なのかを理解していた。
「おおっ！　アレってもしかして！」
「ああ。あんな妙な形をしたロボット（人形）を持っているのは、アイツなんだろうな」
ユースティアナはヒーローショーを見る子供の様に目を輝かせ、ライネスはその出来過ぎたタイミングに肩をすくめる。
そして、答えを知っている3人が同時に叫んだ。
「先輩！」
「主様！」
「翔さん！」
スーパーマンの様に、ゲッター1を纏った夜月　翔がそこにいた。

怪獣大決戦　後編

「ゲッタートマホークッ!!」
俺が取り出すのは、ゲッター1愛用武器のゲッタートマホーク。並み居るインベーダーを薙ぎ倒してきたこの武器は、ウルトラ怪獣に対しても十分に通用する。
さらにそれを、赤い血管の様な魔力が侵食する。騎士(ナイト・オブ・オーナー)は徒手にて死せずの魔力だ。
魔力とゲッター線が混じり合う。圧倒的な力がトマホークを満たした結果、全体にヒビが入り、一回り膨張した。
「でええぇぇりゃあぁぁぁッ!!」
一撃で武器を壊す勢いで振り下ろしたトマホークは、ゴモラの皮膚を削り派手な火花を巻き散らす。それと同時に粉々に砕け散った。
「なのはさん!!」
《合わせて！　行くよッ!!》
上空にいるなのはさんとタイミングを合わせ、
「ゲッターッ!!　ビームッ!!」
《ディバインバスターッ!!》
空からは桃色の、ゲッターからは緑色の光線が叩き込まれた。
「どうだ……」
煙が晴れると、倒れてはいるがまだ動いているゴモラの姿があった。
《まだ倒れないんだ、ねッ!!》
再度、なのはさんの砲撃がゴモラに命中する。
――――――ＧＹＡＡＡＡＡＡ!!
流石のゴモラもこれには耐えられなかったらしい。断末魔と共に爆散、消滅した。
「容赦ねーな……」
俺も容赦したつもりは無かった。むしろゲッタートマホークで真っ二つにするつもりで攻撃した。
こういう所が悪魔だ何だと言われる理由だと思うんだけど。そん

な失礼なことを考えるが、もちろん口には出さない。来月には自分の上司になる相手なのだ。
それでなくても色々と怖いし。
後ろを振り返ると、ビルにはみんながいた。
「なのはさん、中の状況を確認します！」
《わかった！　ヴィータちゃんの方が苦戦してるみたいだから、なるべく早くそっちに向かって！》
「了解です！」
俺はゲッターロボへの合体を解いてビルの中へ着地する。
すぐさま雪菜達が駆け寄ってくる。
「どういう状況ですか？」
「原因は分からないけど、ああいう怪獣が島中に出現してる。俺も行かないといけない」
「……わかりました。聖天子様のことは私達に任せて下さい」
「主様もお気をつけて」
「ありがとう。２人共。聖天子様も……」
「私のことは気にせず、自らのやるべきことを果たして下さい」
「はい！」
その言葉を受け、俺はビルから飛び出した。
「チェンジ、ゲッター１ッ！」
俺は次なる戦場へと向かうのだった。

振り上げられた腕が、アスナとアイズがいたビルを叩き割った。原作よりも大幅にサイズダウンしたと言っても、パンドンの大きさは５階建てのビルほどもある。

通常の召喚獣と比べてもかなりの巨体を誇るパンドン。地面に大きく影を作るその体を見ただけでも、相手の戦意をそぐには十分だが、
「（ＳＡＯのボスモンスターなら、このくらいの大きさ、全然普通!!）」
「（大丈夫、落ち着いて。怪物相手でも冷静に戦う。戦える）」
怪獣相手にも、２人の剣士は全く臆していなかった。
２人共隣のビルにジャンプで飛び移り、攻撃の機会を窺う。
アイズは風に乗り、アスナはビルの屋上を走ってパンドンに近寄ろうとする。お互い優れた剣士だが、攻撃を当てるにはまず近寄らなければならない。
パンドンも敵対者に攻撃する。
空を飛ぶアイズには火球を発射する。
「ッ!!」
空で花火が咲いた。
風のおかげで何とか直撃は免れたものの、衝撃は殺しきれずにビルまで吹き飛ばされた。
「この隙に……！」
アスナは屋上からジャンプ。レイピアが光りを放ち、ソードスキルを――
「嘘!?」
なんとレイピアの先を掴み取られてしまう。そして地面に投げつけられる。アスナですら受け身を取れないようなスピードだ。
「ッ!!　あ、ありがとうございます！」
「うん」
それを受け止めるのはアイズだ。ところどころ服や鎧が焼け焦げているが、その輝く金髪には一切の傷がない。
「合わせましょう」
「合わせるよ」
アスナとアイズは頷き合う。
そして２人は、それぞれの大技の準備に入る。
アスナはレイピアを構えつつもパンドンに突貫。アイズは自らの

魔法、エアリエルを最大出力で発揮する。
ある程度の助走を行うと、アスナのレイピアがソードスキルの光を放ちだした。
選択したソードスキルは最上位の細剣技の1つ、フラッシング・ペネトレイターだ。
単純な刺突ではなく、体全体を使った攻撃。レイピアが纏う光は剣だけでなくアスナの体をも包む。まるで彗星のように切先を前に突き出した。
一方アイズ、彼女が選択した技も、自分が放てる最大威力の技だ。アイズを取り巻く疾風は限界まで圧縮され、解放された。
先に走っていたアスナに一瞬で追いつき、並ぶ。
だが、正面から突撃してくる相手に何もしないパンドンではない。並んで突進してくる2人に向かって火球を吐くが、
「はあああああっ!!」
「リル・ラファーガ!!」
その火球を貫き、
――GYAAAAAA……
2人の斬撃を受けたパンドンは倒れ、爆散した。
獲物を収めて向かい合う。
「ありがとうございました。助けていただいて」
「ううん、下手に手を出したせいでアイツに逃げられちゃった」
アイズが割り込んだせいで、ジャグラスに怪獣を召喚させる隙を与えてしまった。そう思ったアイズは頭を下げる。
パンドンの吐いた火球によって、辺りは荒らされてしまった。当然ジャグラスの姿はどこにもない。
探したとしても見つかるような場所にはもういないだろう。
「いえ！　そんな！　あのまま戦っていても、勝敗は五分五分でしたから」
「ありがとう。私は戻って報告するけど、あなたはどうする？」
「私もそうします」
アイズとアスナは、そう言って別れるのだった。

「はあああああ!!」
オルタの黒い聖剣が、ギャラクトロンの光線を跳ね返す。
「狂三、跳ね上げろ!」
「わたくしはトランポリンではありませんわ!」
そう言いつつも、狂三は言われた通りにオルタに組み付く。その下に別の分身体が出現し、組体操の様にオルタを発射した。
ギャラクトロンのセンサーをすり抜けるほどのスピードの攻撃だ。
ガキィィン!!
金属同士が衝突する甲高い音が響き渡った。竜の炉心と魔力放出によって、単純な力比べでもオルタはギャラクトロンに勝っていた。
攻撃を受けたギャラクトロンは横のビルを巻き込んで倒れた。
だが、
「なるほどな。私の聖剣でも両断できないとは。並の人間が苦戦するわけだ」
オルタは今の鈍い感触に顔をしかめている。何度斬りつけても結果は変わらなかったのである。
「まったく、立て直しに一体いくらかかるのやら」
狂三は周りを見回してため息を吐いた。
見慣れた景色が、ギャラクトロンの砲撃によってすっかり変わってしまった。そこに追い打ちをかけるような、オルタの力任せの戦い方だ。
ギャラクトロンの耐久力もあり、オルタは剣で斬るというよりも棍棒で殴りつけるようにしてダメージを与えていた。
オルタが地面を踏みしめるたびに道路が割れ、ギャラクトロンが倒

れるとビルが1つ倒壊する。
「いや、破壊されたおかげで、やりやすい」
オルタは聖剣を両手で握り直した。単純の斬りつけても駄目ならば、もはや手段は1つだ。聖杯戦争とは違い、出し惜しむ理由が無い。
「タイミングを見て分身を下がらせろ。焼かれたくなければな」
「合図をして下さってもよろしいのですよ？」
「貴様にそんなものが必要か？」
「きひっ、言ってくれますわね」
顔を歪めて笑う狂三。
「素敵な信頼のお返しに、わたくしの能力であの機械の動きを止めて差し上げましょうか？」
「ふん。あんな巨大な的、外す方が難しい」
「ええ、ええ。そうですわね。それまでは――――わたくし達!!」
狂三の影の中から大量の分身体が飛び立つ。ギャラクトロンを挑発し、誘導し始めた。これから放たれる攻撃の被害が少しでも少なくなるように。
その間にも、聖剣へ蓄えられた魔力が収束し、聖剣自体が黒い十字架の様に輝き始める。
じりじりと、すり足で体の方向を整えた。そして、
「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）ッ!!」
漆黒の斬撃が放たれた。ギャラクトロンの装甲すら容易く溶断するその斬撃は、はるか上空まで伸びていく。
ギャラクトロンの大きさもあり斜め上方向に、狂三の誘導のおかげで、後ろに高いビルが無いように調整されていた。
「……確かにこれは、多少見晴らしがよくなっていたのは幸いでしたわ」
狂三がぽつりとつぶやく先、縦に両断されたギャラクトロンがバランスを失って倒れるのだった。

一方こちらでは、アルトリア、スバル、ヴィータ、クローディアが1体の怪獣に苦戦していた。
地鳴りのような地響き、地震の様に地面が揺れている。いずれも人工島ではありえない現象だ。
「クソ!! 今度はどこ行きやがった!!」
「マズいですよ、これ以上地下を壊されると!」
スバルとヴィータはこの状況に焦りを見せている。
「くっ! 私も聖剣が使えれば……!」
「この位置関係で使うのは少しマズいですね……」
クローディアに言われるまでも無く、アルトリアは分かっていた。
自慢の聖剣の一振りによってギャラクトロンを葬ったオルタと比べて、アルトリアは苦戦していた。
苦戦と言っても相手が強すぎるという訳ではない。地下に潜るために、無暗に聖剣が使えないのだ。
3人が相手にしているのは、地底怪獣『ガボラ』だ。この島は人工島であり、『地下』というものは存在していないのだが、内部の複合素材をぶち抜きながら進んでいる。
あまり暴れられると、この区画が丸ごと壊れてしまうかもしれない。かと言って地面に潜っているガボラに攻撃しようとすれば、それはそのまま島を傷つけることになる。
「大丈夫ですよ」
「何がですか?」
この状況でも落ち着いているクローディアに、アルトリアは疑問を浮かべる。翔からの情報で、クローディアが未来予知を行えることは知っていたが、それなのかと。
「すぐに分かります」
クローディアは微笑みを浮かべるだけで、それ以上何も言わない。

しかし、その答え合わせはすぐに行われた。
《みんな、聞こえる？》
「なのはさん！」
「このままだとヤベーぞ！　この怪獣、うかつに攻撃出来ねぇ！」
　なのはからの念話だ。
《うん。他の所はあらかた片付いたから、今そっちに翔君が向かってる。フェイトちゃんとシグナムにも知らせてあるから、みんなで連携しよう》
「翔……今度来る新人か！」
　聞きなれない名前だったが、ヴィータはすぐに理解した。
「（人数さえ増えれば、何か策が出来るかもしれない。それまではあの怪獣の被害を押さえることに集中すれば……）」
　ヴィータの中にかすかな希望が生まれ始めるが、その希望を打ち砕くのが怪獣というものだ。
　地面から巨大なドリルのような生物、ガボラが姿を現す。進撃する先には避難のための車両が。
「やべぇ!!」
「くっ!!」
　それを見たヴィータとスバルは焦ってガボラを止めようと駆けだした。
　そんな中、
「アルトリアさん、なのはさん、砲撃の準備をして下さい」
《え？》
「なにを……」
　クローディアは先を見越して指示を出していた。唐突な指示に困惑する。
　目の前に襲われそうな人がいるというのに砲撃の準備とは、どういうことなのか。
「大丈夫ですよ」
　待ちわびたヒーローが到着する。そんな無邪気な子供の様な笑みを浮かべたクローディア。

「彼が来ますから」
その言葉に答えるように、空から1機のスーパーロボットが飛来した。

「本当にタイミングがいいな……！」
ゲッターを全速力で飛ばしてきた俺。眼下にはガボラとあと１０秒で踏みつぶされてしまいそうな車。
ゲッタービームで攻撃を――――ダメだ、倒しきれなかったらそのまま突っ込んじまう！
ここは押し止める!!
「チェンジ、ゲッター３ッ!!」
マントの代わりにキャタピラを得たゲッターロボが、道路に降り立つ。目の前に迫るのは巨大なドリルのような形状のガボラ。後ろに民間人がいる以上、ここで食い止めなければならない。
「いけえええええッ!!」
突進してくるガボラにアームを向け、受け止めた。それと同時にキャタピラを全開。全力で前進する。
「うお、お……っ!!」
ひっくり返らないように全力で抑え込む。
何とか突進を抑え込むことが出来たが、ガボラの方にも動きがあった。
自らの進行を止めている相手が誰なのか確認するためか、ドリルの様に閉じていたヒレを開いたのだ。
花のようになったソレの中央には頭部がある。口からはチロチロ

と光が漏れ出していた。
「やば……！」
あれは放射能熱線の構えだ。この至近距離は――――躱すことは出来るが、それだと後ろに……!!
「させるかあぁぁぁぁッ!!!」
スバルのリボルバーナックルがガボラの顔面を捉えたことで、俺にかかる力が弱くなる。
「好機ッ!!」
ガボラに巻き付いているアーム出力が上がる。ゲッターロボ最強の腕力を誇るゲッター3の出力ならば！
ガボラの体が浮かび上がる。
「大・雪・山ッ！　おろしィィィィィッ!!!」
ゲッター3の必殺技でガボラを振り回し、それを空に向かってブン投げる。
さらに、
「おまけだ！　ブッ飛べええええエェェッ!!」
ヴィータがその下に回り込む。自らのデバイスであるグラーフアイゼンのハンマー部分を巨大化させ、空に向かってかっ飛ばした。
「なのはさん、アルトリアさん、それでは」
《了解！》
「はい……予知できていたというのなら、あらかじめ言って欲しかったですが」
「申し訳ありません。私の予知は必ず当たるというものではないので。頼り切ってしまうと、この子にどんな悪戯をされるか分かりませんからね」
クローディアはそう言って自らのデバイスを撫でた。
アルトリアも必要以上に責めるつもりは無い。今重要なことは、
「この千載一遇のチャンス、無駄にはしません」
《撃ち抜く――――!!》
なのはもアルトリアも準備は整っていた。狙いは空に放り出されたガボラ。翼を持たないガボラは手足をじたばたとさせるだけで格

好の的だ。
「約束(エクス)された勝利(カリバー)の剣ッ!!」
「ディバインバスターッ!!」
俺の魔力がごっそりとなくなる。それに見合うだけの最強の聖剣の斬撃が、空に向かって放たれる。
そこに交差するように、桃色の光線がガボラを貫いた。その攻撃には耐えられず、空中で爆散した。
「みんなー！　大丈夫ー!?」
「高町に言われて急いできたが……すでに終わったようだな」
1分ほどでフェイトさんとシグナムさんが到着した。
《うん。こっちで確認する限り、出現していた怪獣はすべて討伐完了だね。後、夜月君。パーティ会場の方も落ち着いたって連絡が来たよ》
「そうですか……！」
なのはさんの報告に、俺も少し安心する。
こうして学園島はひとまずの平穏を取り戻したのだった。

最強チーム結成

「ご苦労やったな、夜月君。聖天子様も、ご無事で何よりや」
「八神さん、いえ、それよりも……」
島中に解き放たれた怪獣を全滅させた俺達機動部隊は、六課に帰還していた。
俺の前にいるのはシグナムさんとヴィータさん。後ろには雪菜とコッコロ、聖天子様だ。なのはさんとフェイトさんも一緒だったんだけど、別の仕事があるらしい。
聖天子様も一時ここに避難してもらっている。ここ以上に安全な場所なんて、そうそう存在しないと思うしな。
他のお姫様は自分たちの国の護衛に守られ、ライネスはウェイバーと一緒にいるらしい。
程なくして俺達は部隊長室に通された。
八神さんが部屋の真ん中の椅子に座っているのは良い。その横には見慣れない男性がいる。名前は蛇倉さん。六課の事務方のトップらしい。そりゃまあそう言う人もいるだろうね。
それはそれとして、
「やあ、また会ったね、夜月　翔君」
「何故、ロキ・ファミリアのフィン・ディムナさんがここに？」
「そんなよそよそしくしなくてもいいじゃないか。ボクのことは気軽にフィンと呼んでくれ」
朗らかに笑っているのは、小柄な八神さんのさらに胸元までの身長しかない男性。以前聖王教会で会ったフィン・ディムナだ。
なんで特務六課にロキ・ファミリアがいるんだ。
「びっくりしました。先輩にウェイバーさん以外に男性の知り合いがいたなんて……」
「はい。ですが、やはり男女のバランスが悪いと思います……」
雪菜とコッコロは何か言っているが。
「ん？　ああ、そっか……六課と聖王教会は仲良くしてるんよ。色々と情報を交換したりなぁ」

八神さんが補足してくれた。
「今回の事件もそうだ。僕達ロキ・ファミリアは君たちが戦っていた丁度反対側で戦闘をしていてね。その時の情報を共有するために少しお邪魔しているんだよ」
なるほど。そこの繋がりでか。
「八神部隊長、フィン団長、どういう状況になっていますか」
聖天子様は凛とした声で聞く。
「とりあえず今は落ち着いてます。確認された怪獣は全て討伐完了。ですが、この騒ぎを起こした張本人は捕まっていません」
「張本人……」
「ああ。間違いなくこの怪獣を召喚した召喚士がいたはずだ。アイズが接敵したらしいが、逃げられてしまってね」
俺の呟きにフィンが補足を入れてくれる。
「なに？　ヴァレンシュタインが？」
それに対して俺よりも早く反応するのはシグナムさんだ。
「ええ。アイズに並ぶ剣士がもう1人いて、それでも逃げられてしまいました。並大抵の召喚士ではありませんね」
「問題は、それだけの召喚士がどうしてこんな騒ぎを起こしたのかって事や。やっぱりアリアちゃんかな」
八神さんは会議が襲撃されたことも知っていたらしい。
「うん。楯無から連絡があってね。もう目が覚めたって。命に別状はないみたいや」
「そうですか！　良かった……！」
「君が病院まで運んでくれたんやろ？　ありがとうな」
楯無さんが無事だったことには一安心だが、まだまだ問題は山詰み。一番大きいのはアリアの行方だ。
「そうだね。召喚士に逃げられてしまったものはしょうがない。それよりも仲間の救出を優先しないと……と、言いたいんだけど」
フィンが申し訳なさそうに、
「僕たちは一度聖王教会に戻らなければならないんだ。その後も、島の警備が優先されることになる。それについては協力出来ないな」

それはしょうがない事だろう。なにせ島中で怪獣が暴れるという異常事態だ。砂で出来たアヌビスが大挙して襲って来るなんてかわいく見えてしまう。俺はその前にアナザーオーズとも戦ったわけなんだけどね。
たった数時間で島は大混乱だ。めぐるましく変わる状況に俺も大混乱だよ。
「八神さんは、特務六課はどうするんですか？」
「管理局は厳重警戒で待機だ」
「ああ。いったんは全滅させたとはいえ、またいつあの怪獣が出てくるか分かったもんじゃねぇからな」
八神さんの代わりに、シグナムさんとヴィータさんが答える。
「でも、仲間を助けるためになら、多少の命令違反はしょうがないなぁ」
「八神さん……！」
流石我らが部隊長！　なんて男気溢れるセリフなんだ！
八神さんは頷いて、
「それで、攫われた神崎さんは、何処に連れていかれたの？」
「……え？」
「や、何処に連れていかれたのかって聞いたんやけど」
「ああ、えっと、ですね……」
「うん？」
歯切れの悪い俺に、八神さんが停止する。
「もしかして、全く見当がついてない感じ？」
「はい。その辺りも込みでお力をお借りできればと……」
流石の俺も、そこまで万能ではない。手がかりの無い状態だが、だからこそ力を借りたいのだ。
「うぅん……そう言われてもなぁ……」
八神さんは椅子に寄りかかった。
「流石に手掛かりゼロやと、探すのに時間がかかるなぁ……」
こめかみに手を置いて、難しそうに唸る。
「一応ウチらで探してみるな。夜月君は一回帰って、他のみんなとか、

家の様子とか確認しておき。聖天子様のお迎えも、こっちで手配してるから」
その一言で、俺達はひとまず家路につくことになったのだった。

八神さんに促され、六課を後にした俺達。
「アリア……」
八神さんに言われた通り、今から行方を探したとしてもすぐには見つかりっこないだろう。島の怪獣騒ぎは、パトラ達に逃げるための十分な時間を与えてしまった。
あの場面で信じるべきだったのは、ウォズじゃなくてディケイドの方だったのかもしれない。
実際、あの場面はディケイドだけでどうにかなっていた。奴が本当に本気を出せば余裕だったんだ。
雪菜とコッコロは心配そうな顔で励ましてくれる。
「元気出してください、先輩」
「主様が来て下さったおかげで、わたくし達は怪我をせずに済みました」
「ああ。ありがとう。もちろんそれは良かったと思う。でも……どうするか」
アリアを助けに行くのは確定事項として、一番の問題はやっぱり居場所だ。ぴたっと的中させるくらいの何かが無いと。
そして戦力。アリアを奪還するには間違いなく戦闘が起きる。場合によってはアナザーオーズと同等の戦闘が。
「とりあえず戦力については、みんなにお願いして……」
「主様、それが……」

「ん？」
　コッコロが端末の画面を見せてくる。
「皆様、とてもお忙しいようで……」
「う～ん……」
　みんな今回の騒ぎのせいで警備が強化され、時間延長されてしまったみたいだ。みんな揃って、今日は帰れないかもしれないと言っている。
　この警戒は数日続くだろう。アリアの救出はすぐにでも行わなければいけない。みんなが動けるようになるまで待っているわけにはいかない。
「はい。それにイ・ウーに攫われたのなら、あのアリアさんがおとなしくしているとは思えませんし」
「何か酷いことをされているかもしれません。一刻も早く助けに行かなくてはなりませんね」
　結局その結論になるのだが、残念ながらお話は一番最初に戻る。すべての手段が足りていないという話に。
「あ、あの、先輩」
「ん、どうした、雪菜？」
「雪菜様？」
　立ち止まった雪菜は、遠慮がちに、顔を反らしながら俺に声をかけてくる。その不自然な様子にコッコロと俺は首を傾げた。
　雪菜は何も言わずに俺を軽く手招きして、口元を手で覆った。俺は意図を察して耳を向ける。コッコロには聞かれたくない話なのか？
「その、この状況を打破する何かが欲しいんですよね？　アリアさんの居場所と、奪還のための新しい能力が」
「まあ、最悪、アリアの居場所だけでも分かればと思ってるけど」
　そんな簡単に能力が生まれてくれれば……生まれるな。
「雪菜……」
「なんですか、その表情（カオ）は。言っておきますけど、今回は非常事態で、仕方なく、ですからね！」
　つまり雪菜は、今回の事態を打破するためにセックスしようと言っ

ているのだ。
「そ、そんなはっきり言わないで下さい！　それしか方法が無いのなら仕方ないじゃないですか……！」
「や、そうなんだけど……」
　俺の能力はガチャで追加される。つまり狙って都合の良い能力が出る訳ではない。それこそ、何回かかるのか分かんないぞ。
「それは……私も、頑張りますから……」
「お、おう……」
　真っ赤になりながら、絞り出すように言う雪菜。
　雪菜がそれで良いというのなら、この場ではそれに頼るしかないのか。雪菜から申し出てくれたことだ。向こうはすでに覚悟を決めている。
　だったら俺も甘えるしかない。
「コッコロはどうする？　混ぜるのか？」
「そんな訳ないじゃないですかっ!!　何言ってるんですかっ!!」
「……もちろん冗談だよ。うん」
　軽快なジョークを飛ばした俺は、会話を終えて離れる。これからのことを想像して、お互いに顔を赤くした状態で。
「主様？　雪菜様？　いったいどうされたのですか？」
「や、何でもないんだ」
　さて、雪菜はコッコロを混ぜることは絶対にないだろうから、何とかする方法を考えないと……
「おっ」
　電話だ。
「ウェイバー？　もしもし？」
《繋がったか。そちら無事か？》
「ああ。そっちも無事みたいだな」
《私は世界最高のＶＩＰと一緒にいたんだ。島の誰よりも安全だったよ》
　そう言えばそうだったな。
《島の騒ぎも収まったからな。ようやく解放されて、今自宅についた

ところだ。そっちはあのスフィンクスを追って、ずっと戦っていたんだろう？　あの娘は取り戻せたのか？》
　スフィンクスを追ったことはライネスから聞いたらしい。
「……無理だった。途中で邪魔が入ってな」
《そのまま追わなかったのか？》
「追えない事情があったんだ」
　アナザーオーズは俺にしか倒せない相手だった。いや、ディケイドならいけたのかもしれないけど、放り投げることは出来なかった。
《なるほど。そして今は、攫われた娘を取り戻すために頭を捻っていると》
「なんだよ、俺のこと分かりすぎだろ」
《これでも伊達にロードエルメロイ2世とは言われていないからな》
「でもな、肝心の居場所が分からないんじゃな……」
　やる気満々でも、何処を目指せばいいのかがわからなければ意味がない。
《ふむ……》
　電話の先にいるウェイバーが、何やら考え込む気配がする。
　そして、
《私の家に来てくれ。力になれるかもしれない》
　そんなことを言ってきた。

「やあ、よく来たな……ん？　どうした、雪菜。何やら不機嫌そうだが」
「……いえ、何でもありません」
「そうか？　私の目には、楽しみを無理やり取り上げられて拗ねてい

るように見えるんだが？　ものすごく興味があるなぁ」
「何でもありませんっ!!」
　出迎えてくれたライネスと雪菜が言い合っている。
「主様、先ほどから雪菜様はどうされたのでしょうか？」
「嫌なことがあったんだよ」
　雪菜が不機嫌になってしまった原因は俺に……あるわけでも無いけどな！　だったら、突然電話をかけてきて、現状を打破する案がある的なことを言ってきたウェイバーが悪い。
「ふぅん？　まあいいさ。兄上が待っているぞ」
　そう言ってライネスは部屋の中へ手招きした。
「来たか」
「済まないな。何も手土産は持ってきてないんだけど」
　明るいリビングでは、黒いスーツ姿のウェイバーがソファーに腰かけていた。その後ろにはグレイが控えている。
「気にするな。そこまで時間はかからない……座ってくれ」
　俺達は促され、ウェイバーの体面に座る。ライネスはウェイバーの隣に座った。
「よっと、それで？　今日は兄上の『アレ』を見せてくれるのかな？」
「そのために、翔をここに呼んだんだ」
「『アレ』？　それを使えば、アリアを見つけられるってことか？」
　俺は食い気味に問いかける。
「見つけられるかどうかは分からない。しかし、確実に手掛かりは見つけられる」
「師匠」
　後ろのグレイが、ウェイバーに何やら手渡す。テーブルに置かれたそれを観察すると……小さい箱のような機械、かなり古いタイプのカメラか？
　それも、あの本体下部についている細長い溝。撮った写真をその場で吐き出すポラロイドカメラだ。
「この力は１０年前、お前が帰ってから少ししてから使えるようになった。あの時は突然体調が悪くなって驚いたよ」

ウェイバーが右手を振り上げる。
その手に巻き付いているモノを見て、俺は驚愕した。
「お前、まさか――――!!」
「ああ、その通りだ。――――隠者の紫(ハーミットパープル)ッ!!」
紫色の茨が巻き付いた手刀がカメラを破壊した。
「「っ!?」」
あの茨が見えず、事情を理解していない雪菜とコッコロには、ウェイバーが突然、意味も無く自分のカメラを破壊したように見えただろう。
だが、実際はそうではない。
破壊されたカメラが駆動し、1枚の写真を吐き出す。
「まさかスタンド使いになっていたなんてな」
「誰にも言うなよ。私の数少ない武器なんだ」
ウェイバーが吐き出された写真を摘まみ上げる。
「お前が切嗣さんに渡した矢があっただろ？　実はあれで指をケガしてたんだ。すぐに影響が出なくて放置していたが、三カ月程経って私にも発現した」
「名前は自分で考えたのか？」
「名前は……これが正式な名前だと、誰かに言われたような気がしたんだ。私自身、妙にしっくりくるからそのまま使っている」
ふーん。まあ、名前については世界の修正力的な何かが働いたってことかな。
隠者の紫(ハーミットパープル)。ジョセフ・ジョースターの持っていたスタンドで、紫色の茨の形をしている。
能力は念写で、ポラロイドカメラやＴＶなど映し出すものに触れることで遠くの場所を映し出すことが出来る。
一応茨を伸ばして相手を締めあげたり、ターザンロープのように使うことも出来るけど、もっぱら情報収集に使うスタンドだ。
もちろん、俺がこのことを知っていては不自然過ぎるので、ウェイバーの説明を黙って聞く。特に変わったところは無いみたいだな。
ウェイバーはカメラの破片を片付け、写真を置いた。

「連れ去られた娘は、ここにいる」
俺達は全員そろって写真を覗き込んだ。
そこに映っていたのは、
「島、だな」
「島ですね」
「島でございます」
上空、斜め上からの島の写真だ。そこまで大きな島ではないようだが、学園島の周辺にある島だろうか。
「もう一度やってみよう」
ウェイバーは再びスタンドを使う。
しかし、
「また島だな……」
撮られた角度こそ違うが、多分同じ島だ。
「先輩、流石にこれだけだと……」
雪菜が不安そうに言う。
そう言えば原作でディオを念写した時も、スタープラチナのおかげでエジプトにいるってことが分かったんだよな。スタンドの力を過信しすぎたか……？
「や、でもどこの島か分かれば行けるはずだ。写真があるわけだし、データベースから探せば」
この世界の技術があるんだ。こんな写真からでも特定できるかもしれない。
「そうでございますね。では、さっそくはやて様に連絡しましょう」
「いや、その必要は無いぜ」
突然現れた怪人に、全員が戦闘態勢になる。
その怪人はいつの間にか部屋の中に立っていた。胸の中央に、三日月形の傷がある、トゲトゲとした怪人だ。
何だコイツ、見たことが無いぞ……！
「おいおい、武器を下ろしてくれ。俺は別に、お前らの敵じゃあない。神崎・H・アリアを奪還するのを手伝ってやろうと思ったんだよ」
「何ィ……？」

このおどけたような所作、こいつは絶対に油断しちゃいけない奴だ。
「警戒するのは結構だけどな。その写真だけで見つけるにはちょいと時間がかかるぜ。それまで無事だといいけどな」
このトゲトゲ、いったい何をどこまで知っているんだ？　いったいどこ所属の誰なんだ？
「八神はやてに連絡するのは構わないけどな。その時は、俺は手を引かせてもらうぜ」
つまり選べという事だ。間違いなく手遅れになるが確実な手段を取るのか、正体不明のコイツに背中を預けるのか。
「その戦いには俺もついて行こう」
部屋の中に突然現れた銀色のオーロラ。そこから出てくるのは何時の通りの様子の門矢　士だ。
「ここは私の家なんだが……」
「良かったじゃあないか、兄上。今日は客がたくさん来て」
呼んでもいないお客に、ウェイバーはげんなりとしていた。
「私も同行させてもらおうか」
「ウォズ……」
「いや、だから私の家……」
「諦めろ、兄上」
相変わらず神出鬼没な男、ウォズが不敵な笑みを浮かべて語り掛けてきた。
インターミドル会場で姿を消して、どこで何をしていたんだ、コイツは。
「今回、神崎・H・アリアを敵に連れ去られてしまったのは、私の実力不足が原因だ。その償いをするチャンスを与えて欲しいのだ、我が魔王よ」
恭しく礼するウォズ。
「先輩、どうしますか？」
「……アリアの救出に時間はかけられない。このメンバーでやるしかない」

ウォズもトゲトゲも得体が知れないが、この雰囲気は間違いなく実力者だ。ディケイドもいるし、今すぐ揃えられる戦力としては最強だろう。
「それで、そこのトゲトゲ怪人」
「……、……、ああ、俺か。なんだ？」
わざとらしく右左を見た怪人は、とぼけたように自らを指さす。
「名前は？」
「ああ？」
「これからずっと、トゲトゲって呼ばれたいのか？」
「そいつはご免被るな――ジャグラス・ジャクラーだ」
「よろしく。お前が知ってること、色々喋ってもらうけどな」
「喋れることだったらな」
俺たち2人は握手する。
ウォズは本の内容を確認し、士はそんな俺達の様子を写真に収めている。
こうして、アリア救出のための即席チームが誕生したのだった。

ＶＳパトラ＆金一　前編

俺達はジャグラスにとある場所まで連れていかれていた。港の倉庫。それも管理局の兵器庫だ。
そこにアリアが捕らえられている島までの移動手段があるらしい。メンバーは俺、雪菜、コッコロ、士、ウォズ、ジャグラスだ。
ウェイバーは流石に連れて来れなかった。相手が相手だったからな。その後起こりそうなことも考えると、ウェイバーの戦闘力で立ち向かうのは厳しい。
それでもそうそうたる面子だ。
目的の場所に向かう道中、ジャグラスは俺達の質問に色々と答えてくれていた。
「その写真に写っている島はな、イ・ウーが密かに使っている島だ。技や兵器の試し撃ちだったり、決闘だったりにな」
俺は軽く告げられた言葉に驚愕する。
「お前、イ・ウーを……！」
「ああ。俺もメンバーだからな」
「先輩……！」
ジャグラスに向けられる雪菜の視線も厳しいものになる。
「そのイ・ウーってのは？」
「この世界の犯罪組織のことだ。『教授』と呼ばれるリーダーが統括している」
流石の士も、イ・ウーのことまでは知らなかったらしい。その質問に答えてるのはウォズだけど、コイツも何でこんなにさらりと答えられるんだよ。
「犯罪組織か、違えねえな。今日の島の怪物騒ぎ、ありゃ、イ・ウーの仕業なんだからな」
「何だと!?」
つまり、ウルトラマンの怪獣も、アナザーオーズもイ・ウーの仕業だってのか!?
ゾンビがブラドと繋がっていたことを考えれば……アイツの使っ

た道具がイ・ウーに流れてしまったのか？
「……さあ、何処までイ・ウーの仕業なのかは想像に任せるぜ」
「ですが、それならばなぜ、あなたは私達に協力して下さるのですか？
主様のお話では、今回の相手である『砂礫の魔女』は、イ・ウーのメンバーのはず」
「その辺りには色々と事情があるんだよ、お嬢ちゃん」
コッコロの疑問をはぐらかそうとするがそうはいかない。俺達の睨みに、ジャグラスは肩をすくめて答える。
「パトラはイ・ウーにとっても問題児なんだ。や……だった、と言ったほうがいいかもな」
「どういう意味ですか？」
何処までも含みのあるジャグラスの言い方に、雪菜も少しイラ立っている。
「パトラはイ・ウーを退学になったんだ。もともと結束のある集団じゃないんだが、パトラはその中でも特別だった。特別過ぎてはみ出しちまったんだよ。他人の下につく性格じゃないしな。教授とケンカして、最終的に出ていく事になった。神崎・Ｈ・アリアを攫ったことについても、うちのリーダーに対して何かしようって事らしいからな」
その辺りは確かに原作と大きく違っていないな。
「それほどなのですか……」
「ああ、パトラは強敵だ。もともとヤバかったが、イ・ウーで『クラスカード』を手に入れてからさらに手が付けられなくなった」
ん？
「何だって？　クラスカード？」
「ああ。知ってるか？　聖杯戦争って儀式がもとになっているらしいがな。その礼装を使えば、過去の偉人の能力を一時的に自分に置換することが出来るって代物だ」
「……先輩」
「……そうだな」
雪菜と頷き合う。そこについてはもっとよく情報を集めておく必

要があるな。
俺が情報を聞き出そうと口を開く……その前に目的の場所に到着したらしい。
「こいつに乗っていこう」
足を止めたジャグラスが指さすのは、
「主様、あれは何でしょうか……船には見えませんが」
「……さあ」
長さ2メートルほどの細長い筒状の物体。装飾の類は一切なく、黒一色だ。
「船で島にある程度まで近寄ったら、コイツに乗り換える」
「これは何なんだ？」
「魚雷を元にした強襲用輸送艇だ。魚雷と同じ要領で発射されて、相手に近寄ったら中の人間は脱出、本体はそのまま魚雷として相手に命中する。中の人間は魚雷で混乱している相手をぶっ飛ばすってわけだ」
軽く言ってくれるが、
「そういうのって、訓練とかいるんじゃないのか!?　タイミングとか！」
「自分でどうにかしてくれ」
俺のツッコミを無視してジャグラスは魚雷の搭載された船に乗り込んでいく。
「どうしてこんなものを使う？」
士も不思議に思ったのか質問している。俺に比べて落ち着いているが。
「下手に島に近寄ると、撃墜されるからだ」
「パトラにか？」
「正確にはアイツの使役しているスフィンクスにだ」
アリアを攫って行ったあのスフィンクスか。
「ああ。俺としてはアイツをあっさり倒せてしまったことの方が驚きだが。あのスフィンクスは普通の使い魔じゃない。龍なんかと同じ幻想種だからな」

「主様、そんなものを倒してしまわれたのですか……!?」
「……まあ、ね」
どうやって倒したのかは企業秘密にしたいけど……状況が状況だ。しっかりと説明して作戦を立てる必要がある。
「そうしてくれるとありがたいな。詳しい説明は向かいながらにしようか」
「そうだな」
俺達は船に乗り込んだ。
時刻は深夜。島に到着するのは夜明けだ。俺の疲労も限界に近いし、少しくらいは休んで体力を回復させたいんだけどな。

そしてその数時間後、目的の島付近に到着した。一応仮眠は取れたけど、まだまだ全快には程遠いな。
でも俺の回復を待っているわけにはいかない。俺よりも小さいコッコロが、眠い目を擦って作戦に参加しているのだ。
「作戦の確認は以上です。各自、よろしくお願いしますよ」
《分かりました》
《お任せ下さい、主様》
《了解》
《ああ》
《我が魔王の仰せのままに》
雪菜、コッコロ、ジャグラス、士、ウォズはそれぞれの返事を返してくる。
すでにあの魚雷の中。内部に備え付けられた通信機のテストも兼ねて作戦確認を済ませたところだ。

《それにしても、中々大胆な作戦を考え付くもんだな》
《我が魔王の采配は的確だ。2、3匹消し去れば、カナは確実に食いついてくるだろう》
《カナの方はそれで何とかなっても、パトラとまともに戦うのは無謀だからな。その後の流れも、ハマれば何とかってところだ》
何故か俺を全肯定のウォズ。ジャグラスはパトラとカナのコンビを俺達よりも知っているという観点からコメントしている。
《その辺りは俺がどうにかしてやるさ》
士は頼もしいことを言ってくれた。ディケイド、アンタはマジで信頼してるからな！　ホント、頼みますよ！
《雪菜様、緊張なさらずに》
《大丈夫ですよ、コッコロちゃん》
「ごめん、雪菜。重要な役を押し付けちゃって」
《はぁ、先輩……》
雪菜は呆れたような声を出した。
《武偵憲章1条を忘れたんですか？》
「仲間を信じ、仲間を助けよ？」
《そうです。先輩だけが危険な目に合う必要なんてないんですよ。私のことも、もっと信じてください》
「……分かった。頼むぞ」
《はい！》
《見せつけてもらっているところ悪いが、そろそろ発射するぞ》
《は、はいっ！　分かりました！》
この通信機、顔は映らない仕様だけど、今頃雪菜が顔を赤くしているんだろうってのが手に取るようにわかるな。
俺も顔が熱いもん。
《主様、雪菜様だけではなく、わたくしのことも信頼してくださいましし》
「そ、それはもちろん！」
《うらやましいねぇ、子供にも好かれて》
ジャグラス、そのセリフに他意はないよな？

そんなことを言いながら発射された魚雷は、ジャグラスの狙い通り、特に妨害されること無く島の近くまで到達出来た。
こっそりと、魚雷に搭載された潜望鏡で島の様子をうかがう。
すると、とんでもない物が視界に飛び込んできた。
「おいおい……」
こんなところにあるとは思えない巨大な建造物。黄金色に輝く、巨大なピラミッドだ。その頂上には光り輝く船が停泊していた。当然のように、その船は空を飛んでいる。
空中には何匹ものスフィンクスが――――すべてこちらを見ていた。
「やっば……!!」
潜望鏡越しに目が合い、俺たち全員そろって息が止まる。
光り輝く船から、1人の美女が顔を出した。
全身を金銀財宝で飾り、胸や下半身には布を巻いただけの恰好。半裸と言っても過言ではない。服の防御力は皆無だが、その周りに侍るスフィンクスがいれば、心配する必要は無いのだろう。
その絶世の美女の名は、『砂礫の魔女』パトラだ。
「よく来たのう。下賤の者ども」
魔術を使っているのだろう。魚雷の中にいる俺達にまで、声がはっきりと聞こえてくる。
「何ゆえ、妾がお前達をここまで近づくことを許したのか分かるか？」
ピラミッドの頂点でふんぞり返りながら、パトラは得意げに言う。
「この戦いを見ているイ・ウーのメンバーに、妾の力を見せつける為ぢゃ。ブラドとシンタニコウヘイを倒したお前達を妾が倒せば、奴らも納得せざるをえんからのう」
じゃらりと装飾品を揺らし、パトラが足を組みかえる。
「小賢しくもスフィンクスの目を躱したと思っているかもしれんが、その気になればここに来る前に海の藻屑にすることも出来たのぢゃ！」
「……おい、ジャグラス」
《いや、責めないでくれよ。まさかそこまでとは思わねーよ》
この作戦、全然意味無かったんじゃねーか！　こんな窮屈なところ

に押し込まれた意味よ！

「イ・ウーの次の王はアリアではない。妾ぢゃ!!　頑固者の『教授』も、妾がアリアの一味を倒し、さらにアリアの命を握って話せば、素直に王位を譲るに違いないじゃろう」

　そんなパトラの演説を聞きながら、俺達は通信している。

「でも、しっかり出てきてくれて助かったよ。とりあえず、第一段階は成功だな」

《まあ、それがパトラの性格だからな。プライドが高くて目立ちたがり。それに見合うだけの力も備えているが》

「だが今回はその慢心を突く訳だ」

《ピラミッドに引きこもられちゃ、絶対に勝てないからな。自信はあったが、内心ドキドキだったぜ》

　それは俺もだ。じゃなかったら尻尾を巻いて逃げ帰って、作戦を立て直さないといけなかった。

　ジャグラスから告げられたパトラのクラスカードの力、それは聖杯戦争を経験した俺ですら、驚愕するものだった。

　そもそもクレオパトラの生まれ変わりを名乗るパトラ。そんな彼女の持つクラスカードに収められている英霊は――――最強のファラオ、『オジマンディアス』の力だ。

　……いや、言いたいことは分かる。俺も聞いた時は、なんでクレオパトラじゃねえんだよ！　って思ったもん。そこは合わせろと思うよな。

　でも実際に戦うとなると笑い事じゃない。

　まず目の前にある巨大なピラミッド。これがもう宝具だ。

　光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンティリス）。パトラやその配下に不死の加護を与えたり、サーヴァントですら弱体化を受ける呪詛を付与したりする複合ピラミッド。

　とにかくすんごいピラミッドと思ってくれて構わないんだけど、問題なのはピラミッドである点だ。

　パトラは伊達にクレオパトラの生まれ変わりを名乗っているわけではない。彼女の持つ、特異なレアスキルが理由だ。

それが驚きの『ピラミッド型の建物が近くにある場合、魔力が無限になる』というモノ。言っててかなりバグってると思うが、その条件が光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンティリス）で達成できてしまうのだ。ピラミッドだからな。

そのレアスキルのおかげで、莫大な魔力が必要なはずのオジマンディアスの宝具を無制限に使うことが出来るのだ。

「パトラ、油断するな」

スフィンクスの1体に跨っていた男が、パトラに近寄る。その男も、パトラに負けず劣らずの美形だ。

「アリアの一味は、あれで全員ではない。それにそれを撃退したとしても、今度は特務六課が相手になる可能性があるぞ」

「ならば！　それも皆殺しにするのぢゃ！　祝いの席で全員の首を並べるのぢゃ！」

「『アリアには仕掛けても良いが、無用の殺しはするな』。俺が伝えた教授の言葉、忘れてはいないだろう？　ルールを守らなければ、王にはなれないぞ」

「うぅ～～～っ!!」

その2人は敵の目の前だというのに、言い争いを始めていた。

《ど、どうしたんでしょうか。あの2人、味方なんじゃ……》

《はい。あれではどう見ても、駄々をこねる子供と、その親でございます》

《パトラにとって唯一頭が上がらないのが、アイツだからな。名前は『遠山　金一』。素直に強いぞ、気をつけろ》

《カナって女がいないな。どこかに隠れているのか？》

《ん？　んん～、いや、気にしなくていいぞ。今は金一がいるからなぁ。夜月　翔も、カナの代わりに金一を相手にしてくれ》

《？？？》

士の疑問に、ジャグラスは笑いをこらえて返した。だが、その意味不明な返答に、みんなハテナマークを浮かべている。

余計なことを言って混乱させたくないんだろう。本当にことを言っても、バカにすんなって言われるだろうからな。

「それに……いるんだろう、ジャグラス。俺はお前の真意もはかりか

ねている」
《それはこっちのセリフだぜ、金一》
ジャグラスは笑いながら返した。
今まではじゃれ合うように金一と言い争っていたパトラだったが、ジャグラスの名前を聞いた途端、目を吊り上げた。
「ジャグラス？　まさか、ジャグラス・ジャグラーか!!　あの下郎、妾の邪魔をするか！」
「お前、ずいぶんと嫌われてるな」
《らしいな。泣けてくるぜ》
嘘つけ。
「キンイチ！　アイツは殺すぞ！　良いな！」
「パトラ、落ち着け」
「男は嫌いぢゃ！　特にジャグラスのような粗暴な男は！　妾がイ・ウーの王になった暁には、側近はすべて美女で固めると決めておる！
今死ぬか、後で死ぬかの違いじゃ！」

金一はごく自然な動作でパトラとの距離をゼロにした。パトラの顎を右手で上げさせると、
「……!!」
ひえっ！？
いきなりキスをした。魚雷の中の女性の悲鳴が重なる。
《この世界の奴らは、男女でいちゃつかないと戦えないのか？》
士が呆れてる。
何も知らなかったらそう思うよな。うん。
実際にキスをされたパトラはもう大変だ。顔を真っ赤にして自らを抱き寄せる金一を押し返そうとするが……やがて眼を閉じて体の力を抜いた。
ドラマや映画ではない、他人のキスシーンを見せつけられるという時間はすぐに終わり、金一がゆっくりと唇を離す。すると、
「すまない。俺の一言で混乱させてしまったな」
金一の雰囲気が変わっていた。より一層手ごわい雰囲気に。

我に返ったパトラは自らの唇を手の甲で拭う。
「トオヤマ　キンイチ……！　妾を使ったな……！　好いてもおらぬくせに……！」
「まさか。そんなことが出来るほど、俺は器用な男じゃない」
顔がイケメンなら笑ってもイケメンだな、金一は。
《わたくしたちは一体何を見せられているのでございましょうか……》
《……もしかすると、私達の周りの人はいつもこう思っているのかも……》
雪菜は何かに気付き始めている。
「頼むよ、パトラ」
「わ、わかった！　なるべくは殺さんようにするっ!!　だがここからは戦いだ！　その結果殺すこともあるのぢゃぞ！」
「ああ。そうだな。その時はしょうがない」
緩みつつある緊張感の中、戦闘が始まろうとしていた。

ＶＳパトラ＆金一　中編

「あいさつ代わりぢゃ」
パトラが指を上げると、自身が乗っている船――――闇夜の太陽船（メセケテット）の舳先が光と熱を放ちだす。
指を振り下ろすと同時に、その光が光線になって放たれた。
蛇を屠る蛇（ウラエウス）と呼ばれる攻撃だ。
狙いはもちろん俺達の乗っている魚雷。強がりではなくパトラは俺達の場所は完全に理解していたらしい。
「ッ!!」
それを察知した俺は、発射よりも前に魚雷から脱出するためのボタンを押していた。
あと少し遅かったら、体が真っ二つになっていただろう。
眼下の海中に突き刺さる光線は、そのまま海面を切り裂いていく。海中にあった魚雷は真ん中から切断され、魚雷の爆発と沸騰した海水の水蒸気爆発が海面を押し上げた。
周りを見ると、全員無事に脱出できたみたいだ。コッコロと雪菜を同じ魚雷に詰め込んだのは正解だったのかもしれない。
「エクシア!!」
青い装甲が飛び出して俺の体に装着されていく。胸部と背中には特徴的なＧＮドライブ、そこから緑色の粒子が放出された。
左手にはＧＮシールド、右手には格納状態のＧＮソードが装備された。
対空能力を得たことで、周りを確認する余裕が出来る。
「これはこれは……」
空にはオジマンディアスのスフィンクス型の宝具、熱砂の獅身獣（アブホル・スフィンクス）。砂浜にはパーティ会場にも現れた犬男達。
森の奥には光り輝くピラミッド、光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンティリス）。今回の攻撃目標だ。
空を飛ぼうものならスフィンクスが撃滅し、地上から迫ろうにも犬男たちが無限に湧き出てくる。

厄介なもんだ。
だが俺達の味方である２人の男も、既に砂浜に辿り着いていた。士とウォズだ。
「変身」
《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ》
士はディケイドに。
《ＷＯＺ》
《ＡＣＴＩＯＮ！》
「変身」
《投影！》
《ＦＵＴＵＲＥ　ＴＩＭＥ！》
《スゴイ！　ジダイ！　ミライ！　仮面ライダーウォズ！　ウォズ!!》
ウォズはウォズに変身した……分かりにくいな、コレ！
２人のライダーは各々の武器を持ち、さっそく砂浜を埋め尽くしている犬男と戦い始めている。２人共、犬男に後れを取るようなことは無い。次々と相手を処理していく。
「先輩！」
「ああ！」
俺も雪菜とコッコロを回収し、砂浜へ着地した。ディケイドとウォズが無双してくれたおかげで、砂浜の真ん中には安全に着地出来た。
――ＧＹＡＡＡＡＡ!!!
そこに襲い掛かってくるスフィンクス。だが、
「雪霞狼ッ!!」
雪菜が一歩前に出る。
ケースから取り出された槍が可動し、本来の姿になる。槍先に浮かんだ魔法陣が淡い光を放ち、襲い掛かってきたスフィンクスの足を難なく切り裂いた。
あらゆる魔力を無効化する神格振動波駆動術式は相手が宝具であろうと容赦なく発動する。いや、むしろ魔力の塊の宝具だからこそ、より力を発揮するのだ。

「やあぁぁぁぁっ!!」
ひるんだスフィンクスを雪菜は逃がさない。
雪菜の雪霞狼は難なくスフィンクスの胴体を貫いた。ダメージが許容量を超えたのだろう。そのままスフィンクスは消滅する。
「やるもんだな、あのお嬢ちゃんも」
いつの間にかジャグラスが近くに来ていた。
「そう言うお前も相当だけどな」
その後ろには、俺に近づくために邪魔だったのだろう犬男が何体も倒れている。音もなく全員切り裂いたんだ。
「そりゃどうも。それで、どうする？　上か下か」
「上だろうな……」
俺達はここから、パトラの所までたどり着かなければならない。そのためのルートを決めないといけないんだけど……
下の場合は森の中を隠れながら進むことになる。それだと生い茂った木々のせいで余計な体力が消費されてしまうし、しびれを切らしたパトラが闇夜の太陽船（メセケテット）で攻撃してくるかもしれない。
それにピラミッドの下までたどり着いても、パトラと戦うためにはそこから空に浮いている闇夜の太陽船（メセケテット）まで登らなければいけない。
だったら最初から空を飛んだほうがいい。
もちろん上は上で、狙い撃ちにされる可能性はあるんだけどな。
「コッコロ、頼む」
「お任せください、主様」
プリンセスナイトの能力で、この場にいる全員の強化を始める。
「ん？」
「これは……」
ディケイドとウォズの動きが目に見えて変わった。斬撃の一振りで、打撃の一発で数体の砂男をまとめてブチのめす。
「へえ？　お前、こんな能力も持ってたのか」
ジャグラスも急激に増した自らの力に驚いていた。
「まあな。なるべく早く移動しないと……」
全員で固まっているこの状況はよくない。あらゆる敵がここに集

まり、攻撃が集中する。こうして喋っている間も、ＧＮソードのライフルモードで犬男を牽制する。
一番負担が大きいのは雪菜だ。さっきから襲い掛かるスフィンクスの相手を１人でしている。
「はあああああっ!!」
雪菜が気合とともに、再びスフィンクスの胴体を貫いた。今は何とか霊視のおかげで優位に立てているが、スフィンクスが学習すればその均衡が崩れる。
何故なら光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンティリス）のおかげで不滅だからだ。無限の力を持つ相手に持久戦など意味がない。
だからその前に動かなければいけない。
その要はコッコロだ。
コッコロの風の精霊が森から木の葉を集めて、それを編み合わせていく。ここから大きく飛翔するための、木の葉で出来たグライダーだ。
完成まではもう少し時間がかかる。
「雪菜！　合わせるぞ！」
「はいっ!!」
スフィンクスもだんだんと雪霞狼の特性に気付き始めている。無暗にその刃に触れないように立ちまわり始めたのだ。
だが警戒されているのは、まだ雪菜の雪霞狼だけだ。エクシアの機動力を生かして雪菜との間合いを測るスフィンクスへ突っ込んでいく。
パキンッ！　と俺の右手がスフィンクスの術式を破壊する感触があった。
その直後に、スフィンクスがバラバラに崩れ落ちる。幻想殺（イマジンブレイカー）しが消し去ったのだ。
幻想殺（イマジンブレイカー）しは雪霞狼よりも凶悪だ。なんせ触れただけで消し去ってしまうんだからな。
「次だ!!」
その場で急旋回し、俺に攻撃しようとしていた別のスフィンクスに

触れて消し去る。
さらにそこから2，3体消し去ったところで、俺もスフィンクスに近寄れなくなる。俺の危険性を理解したらしい。
だが、時間は十分に稼ぐことは出来た。
「主様！　完成いたしました！」
コッコロの方向を見ると、全員で乗ってギリギリの広さのグライダーが完成していた。葉っぱで作られているだけあって全て緑。強度もそこまでではないだろう。
犬男やスフィンクスも出来上がったものに興味を示し始めている。壊される前に飛び立たなければ。
「よし！　みんな乗り込んで――――ッ!?」
俺はとっさに盾を構えた。
その直後、凄まじい衝撃と共に盾が弾き飛ばされてしまう。
その攻撃に全員が身構える。犬男の海が真っ二つに割れ、その人物が姿を現した。
「カナ……いや、遠山　金一か……！」
その手に持っているのは古いタイプのリボルバー銃。そこからうっすらと煙が昇っている。
ビリー・ザ・キッドを夢幻召喚（インストール）した金一が、俺達の目の前に立ちはだかる。俺達の後ろでコッコロが準備したモノを見た。
「なるほど、空を選ぶのか」
「……っ」
金一の呟きに俺は息を呑む。全員がかかれば行けるか？　このメンバーなら、流石に金一といえど……
「行っていいさ。お前以外はな」
金一の言葉は予想外のものだった。金一は俺を指さしている。
「その右手、予想以上に厄介のようだ。スフィンクスには任せておけない」
俺の幻想殺し（イマジンブレイカー）を警戒している。前のスフィンクスとの戦いを見ていれば当然の判断だろう。
この右手で触れば、クラスカードの夢幻召喚（インストール）すらも解除出来るの

だ。パトラに万が一のことがあってはいけないと考えているんだろう。
とは言え、こんなにあっさりと行かせてくれるとは……戦力を分散させたいってことなのか？
でも、行って良いと言うのなら甘えさせてもらおう。無限の魔力を持っているパトラ相手にはとにかくスピード勝負をしなければスタミナ負けしてしまうのだ。
「みんな、行ってくれ！」
「先輩！」
「主様！」
雪菜とコッコロが叫ぶが、ディケイドとジャグラスが２人を抱えてグライダーに乗り込んだ。
カナは行っても良いと言っているが、周りの犬男はそうではないらしい。何かをしようとしていることを感じ取ったのか、攻撃を集中させようとしている。
「コッコロ！」
「っ!!　風の精よ――――!!」
俺の大声を聞いて、コッコロは槍を掲げる。
プリンセスナイトの力を受けて一回り大きくなった風の精が、強力な上昇気流を発生させた。
『４人』を乗せたグライダーが浮かび上がり、空に昇っていく。
……あれ？　４人？　雪菜、コッコロ、ディケイド、ジャグラス。あれ!?
「私はここに残ろう」
ウォズはグライダーに乗り込んでいなかった。
「お前……」
「遠山　金一は我が魔王に興味がある様子。ならば私は臣下として、群がる羽虫を掃わなければ」
わらわらと寄ってくる犬男を切り伏せて一礼した。
上に飛んだグライダーを迎撃するためか、スフィンクスの攻撃は無くなった。しかしその代わり、地上の犬男全てがこちらに向かってき

ている。
　確かにカナが犬男の影から銃撃してくるのは厄介だ。それを食い止めてくれるウォズの行動は確かに有難いけど。
「お前……」
　だったら俺も、カナをどうにかしないとだな。
「（あのウォズとかいう男、やはり……だが）別に俺は、逃げも隠れもするつもりは無い。それに、俺としても都合がいい」
「なんだと？」
「俺は俺で、あの男が言ったことを確かめないといけない。お前の腕を見せてもらおうか」
　そう言って金一は大鎌『スコルピオ』を構えた。
「望むところだ」
　ＧＮブレイドの二刀流を構える。
　次の瞬間、俺達はぶつかり合った。

「先輩――――!!」
「雪菜様、乗り出さないで下さいまし！」
　雪菜の声はグライダーを上空に運ぶ風にかき消される。
　空まで運ばれたグライダーは、パトラの乗る闇夜の太陽船（メセケテット）よりも少し高い位置まで上昇し、そこから平行移動に変わる。
　風の精霊によって進みたい方向へとグライダーが進んでいく。
「妾と同じ空まで登ってくるとは、あまつさえ、妾よりも高い位置から見下ろすとは――――不敬じゃな」
　闇夜の太陽船（メセケテット）から発射される熱線。
　それを、

「雪霞狼ッ!!」
雪菜の持つ槍の一閃が、真っ二つに切り裂いた。
「先輩はいつもそうやって……！　もういいです！　先輩がそのつもりなら、先輩抜きでどうにかして見せます！」
「はいっ！　全力を尽くしましょう！」
目の前を飛び回るスフィンクスとパトラに向かって、コッコロと雪菜は宣言するのだった。

俺と金一の武器が打ち合わされ、何度も火花が散る。
「このっ!!」
「ふ――――」
金一は俺を倒そうというよりは、戦いを長引かせたいように見える。
俺の斬撃は難なく躱され、下から救い上げられたスコルピオが俺の手からＧＮブレイドを奪い取った。
回転して打ち上げられたＧＮブレイドが、地面に突き刺さる。
「ふむ。余程の強敵と戦ったことがあるらしいな。思い切りがいい。しかし勢いや度胸はあるが、技量はまだまだといったところか」
これがヒステリアモードの金一か……！
『緋弾のアリア』の主人公、遠山キンジとその一家が持つ特殊体質、『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』。キンジはヒステリアモードと呼んでいる。
性的興奮をトリガーにして神経伝達物質を媒介し、大脳・小脳・精髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる能力だ。
ヒステリアモード時には思考力・判断力・反射神経・視力・聴力な

どが通常の３０倍にまで高まる。
そりゃあキンジも、生身の素手で銃弾を跳ね返したり、音速を超えた打撃を行っていたからな。
金一も、するりするりと俺の攻撃を受け流すくらいやってくるだろう。
「世の中は常に変化の中にある。だが、今起ころうとしている変化はこの数百年で一番大きなものだ」
呑気にもお話を始めた。
空いてしまった片手にＧＮソードを持ち、それに応える。
「そもそも君は、イ・ウーについて何を知っている？」
原作知識として知っている部分はあるが、せっかく説明してくれるんだ。話を聞こうじゃないか。
「理子に聞いた話じゃ、無法者の学校だろ？　お互いのスキルを学び合うとか」
「そうだな。それも間違いではない」
俺は不意打ちに備えて構えているが、金一は実にリラックスしている。
「組織での活動目的は自己の鍛錬や目的の実現など、各自の自主性に委ねられている。組織内には法規が存在せず、またいかなる国家の法律もイ・ウーでは無意味。真の意味で『無』法者の集団だ」
「自分の目的のためなら何をしてもいいってことか。メンバー同士でも、自己の目的の障害になるなら排除しても良いって？」
そんなものはもはや集団ではない。
「イ・ウーは今まで、トップである『教授』の絶対的な力によって束ねられていた。だが、彼の死期が近づいている」
徹底した実力主義、そのトップに立つ人間が圧倒的だからこそ、なんとか集団の形を保てていた。それが今なくなりそうだってことだ。
「今、イ・ウーは２分されようとしている。教授の気質を継ぎ純粋に己の鍛錬を目的とする研鑽派（ダイオ）。世界に対して侵略行為を行おうと目論む主戦派（イグナティス）に。もしも跡目争いで主戦派（イグナティス）が勝つようなことがあれば、世界は争いで満ちることになる」

この世界、様々な作品のおかげで猛者は多い。いくらイ・ウーの主戦派（イグナティス）と言えども、世界征服なんて……と思うかもしれないが、それはイ・ウーにも言えることだ。
俺の知らないメンバーがいるかもしれない。いや、確実にいる。
「それで、アリアのことをどうするつもりだ」
「パトラがイ・ウーのリーダーになるために利用する。それはさっき言った通りだ。あいつはああいう性格だが、戦争を望んでいるわけではないからな。だが……」
金一を俺へスコルピオを向けてくる。
「それと同時に、お前の実力を知りたかったというのも本音だ。あのウォズという男は、お前は教授すら倒しうると言った。それを確かめたい」
「……だったら存分に見せてやるよ！」
俺と金一は再びぶつかり合った。

ＶＳパトラ＆金一　後編

翔と金一の戦いを背に、ウォズは無数のスフィンクスと向かい合う。金一は翔の実力を測ろうとしているが、パトラにとってはそんなもの知ったことではない。

砂浜に残った翔とウォズの所には、どんどん生み出されるスフィンクスの大軍が集結することになった。

「さてさて、ここから先は我が魔王の舞台だ。邪魔者はご退場願おうかな？」

近寄ってきたアヌビスを軽く振り払いながら、ウォズは不敵に笑う。

俺の右手から、ＧＮブレードが跳ね飛ばされる。くるくると回転して空中に飛び、落ちて地面に突き刺さった。

金一はわざとスコルピオを振りぬいた体勢で止まっている。俺の体勢が崩れているにもかかわらず、追撃を仕掛けてこない。

「ちいッ!!」

左腕に残ったＧＮブレードで斬りかかるも、

キンッ!!

回転したスコルピオの柄がＧＮブレードの刃に当たり、俺の手からどこかに飛んで行ってしまった。

「この程度かッ!!　夜月　翔!!」

「まだまだッ!!」

俺は背面に装備されているＧＮビームサーベルを引き抜く。

グリップから発生したビーム刃が、受け止めたスコルピオの表面を火花を散らしながら滑る。
「あの男、ウォズと言ったな。あいつはお前は教授すら倒しうると言っていたが……」
その目は言外に期待外れだと伝えてきていた。
「俺すら倒せないようでは、教授を倒すなど夢のまた夢だ」
「だろう――――な!!」
俺は言葉を言い終わると同時に、ＧＮダガーを投げつける。だがそれを読んでいたのか、銃声が響く。
金一の不可視（インヴィジビレ）の銃弾だ。
銃弾によって破壊されたサーベルのグリップが小さな爆炎を上げた。
その爆炎を突っ切り、突撃する。
「見え見えだぞ」
金一にはあっさりと避けられてしまう。俺の動きを全て先読みしているかのように。ビームサーベルを受け止めるのは危険と判断したのか、全て避けられる。
ピンクの光刃は光の軌跡を抱けを残し、全て空を切る。
「狙いも見え見えだ。右手を狙ってるな」
そうだ。クラスカードさえ剥がしてしまえば、金一の力は大きく削がれる。そしておそらくは、そこが金一の合格ラインだ。
それは上等。俺を認めさせてみろって言うなら、そうしてやる。奥の手を使ってでもな。
「――――トランザム」
「ッ!?」
機体が赤く染まる。胸部のＧＮドライブは回転率を上げ、高濃度のＮＧ粒子を最大散布する。
トランザムとはオリジナルの太陽炉にのみ搭載されているシステム。
機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体が赤く発光し、一定時間その出力を３倍にまで引き上げることが

出来る制限時間付きのパワーアップだ。
内部に蓄積されている粒子をすべて使う関係上、この機を逃した場合、俺の勝利は無くなる。
新たに引き抜いたサーベルと合わせ、スコルピオをばらばらに切断する。
「急激なパワーアップ……なるほどな……!!」
近接武器を破壊された金一は、腰のホルスターに手を添えながら後ろに下がる。
「追撃しないとはな。そのスピードとパワーなら、あのまま俺を仕留めることも出来ただろうに」
「アンタが俺のことを殺す気が無いみたいだからな」
「フッ、この状況でそんなセリフを言えるとはな」
笑みを浮かべた金一だったが、すぐに目つきが鋭くなる。
「ならば、これを最後の攻撃にしよう。俺の宝具、破ってみろ」
俺はその言葉に、唇の端を吊り上げる。
「ああ、そうしようじゃないか」
俺は2本のサーベルを構えた。そのまま金一は動かない。どうやら先手は俺に譲ってくれるらしい。
「いくぞッ!!」
赤い残像を引きながら金一に突進する。
「見事なスピードだが、それよりも俺の早撃ちの方が速い。壊音の霹靂(サンダラー)――!!」
ＩＳの防御を貫通する弾丸だ。ガンダムだろうと当たればただでは済まないだろう。だが命中する、その直前。
「牙(タスク)ッ!!」
「ッ!?」
俺の体がＡＣＴ３が地面に作った回転に吸い込まれる。
「貴様の十八番か……!」
俺のスタンドのことを知っているから出たセリフなんだろう。この戦法は何度も使っているとはいえ、突然使われて対応できるものではない。

金一がうめくがもう遅い。
回転の穴から飛び出した俺の右手にはもう何も握られていない。あるのは握りこぶしだけだ。
クラスカードを排出させるだけなら、触れればＯＫだが、
「楯無さんの分もあるんだ。文句は無いよな？」
「ああ、もちろんだ」
砂浜に、鈍い音が響き渡った。赤い残像を引く右手が、金一の顔面を捉えたのだ。
「うぐ……っ」
「ふぅ……」
５メートルほど離れた場所に転がる金一。俺も息を吐いてエクシアの装甲を解除した。
「まったく、未知の能力とは恐ろしいものだな……」
「いつもそんなもんだよ」
ひらひらと落ちてくる一枚のカード。俺達の丁度真ん中に落ちた。俺も金一も、それを拾いに行こうとはしない。
俺達の戦いは終わったのだ。そして向こうの戦いも、もうそろそろ決着がつくはずだ。
そう思い、俺は上空に目を向けるのだった。

上空に舞い上がったグライダーは風に乗り、ゆっくりとピラミッドの近くに、パトラの乗る闇夜の太陽船（メセケテット）に近づいていく。
だが、このままでは辿り着く前に撃墜されるのは目に見えていた。
ここからは、さらに作戦を進める必要がある。翔が足止めされたせいで若干早くなってしまったが、文句を言ってはいられない。

「コッコロさん、お願いします!!」
「はいっ、雪菜様！　風の精よ――――!!」
新緑色の精霊が雪菜の周りを飛び、加護を授ける。体が軽くなり、空中でも多少の自由がきくようになる加護だ。
「よーし、お嬢さん。後ろは俺達に任せて行ってきな」
「……はい」
雪菜の後ろを守るのは得体の知れない怪人とディケイドだ。
ディケイドを知らない雪菜にとっては、どちらも良く分からない人物。だが、翔が信用して作戦を立てた以上、ここは信じるしかない。
「行きますッ!!」
風の精が育てた葉っぱをトランポリン代わりにして、雪菜はパトラに向かって一直線に発射される。
「おほほッ！　愚かなり！　正面から突っ込んでくるとはのう！」
雪菜の行く手を阻むのは何体ものスフィンクスだ。いかにコッコロのサポートがあったとしても、この数のスフィンクスに狙われてはひとたまりもない。
すぐさま2匹のスフィンクスが雪菜に襲い掛かる。鋭い爪と強靭な顎が雪菜に向けられた。それが無くても、前足で地面にでも叩きつけられれば、それだけで終わりだ。
そうならないように、この2人がいるのだ。
「お二人とも、よろしくお願い致します！」
コッコロの声に、動いたのはディケイドだ。ジャグラスは腕を組んでその様子を観察している。
「お手並み拝見といこうか？」
「勝手にしてろ。そうだな……向こうがスフィンクスなら、こっちも出しておくか。たしか、龍やドラゴンはこの世界では幻想種って言うんだよな？」
「……へぇ？」
ディケイドの言葉に、ジャグラスは興味深そうに眉を動かした。
そんなジャグラスを無視して、ディケイドは2枚のカードを読み込ませる。

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＲＡＧＲＥＤＥＲ》
《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＷＩＺＡＲＤＲＡＧＯＮ》
空中に出来た鏡からは『ドラグレッダー』が、魔法陣からは『ウィザードラゴン』が出現する。
ドラグレッダーは龍騎、ウィザードラゴンはウィザードのそれぞれ相棒と呼べる存在である。２人のライダーに力を与えているモンスターだ。
その龍とドラゴンは、雪菜に襲い掛かろうとしていたスフィンクスに食い掛る。
ドラグレッダーはスフィンクスの胴体に巻き付き、締めあげる。ウィザードラゴンは正面からぶつかる。
だがスフィンクスも負けてはいなかった。拘束を振りほどき、激しくぶつかり合う。スフィンクスの発射する光線や、ドラグレッターの吐き出す火球が、森を焼いた。
突然真横で始まった怪獣大戦に緊張しながらも、雪菜は前へと進む。
ジャグラスはパトラの次なる攻撃に備えてカードを取り出した。
「次は俺も出すか――――――ゼットンよッ!!」
《Ｚ―ＴＯＮ》
闇夜の太陽船（メセケテット）の舳先が光る。朝日よりも眩しいその光は、強力な熱線となって雪菜に向かって放たれる。
その間に割り込むのはジャグラスが召喚したゼットンだ。雪菜の盾になり、熱線が命中する。
「なんぢゃとっ!?」
パトラは驚きに顔を歪めた。
圧倒的な威力の熱線だが、ゼットンの全方位バリアーを片手間で突破することは出来ない。それどころか、ゼットンは反撃の準備すら始めていた。
「くっ!!　熱砂の獅身獣（アブホル・スフィンクス）ッ!!」
パトラは急いでスフィンクスを呼び戻し、ゼットンを襲わせる。
スフィンクスの相手をし始めたゼットンはパトラへ攻撃は出来な

くなるが――――雪菜はその隙にゼットンの横を突破する。
「獅子の巫女たる高神の剣巫が願い奉る」
雪霞狼を両手で、胸の前で持つ雪菜。目を閉じて祝詞を唱える。
「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威を持ちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」
オジマンディアスの力を得たパトラを直接倒すのは不可能。大切なのはクラスカードの夢幻召喚（インストール）を解除することだ。
そうすればオジマンディアスの宝具が使えなくなり、パトラを支えていた無限の魔力もなくなる。
翔の幻想殺し（イマジンブレイカー）が使えれば楽だったのだが、それは前に、よりにもよってカナに見せてしまっている。パトラに接近しようにも警戒され、最優先で排除されるだろう。
だが翔達にはもう1人、魔力に対して絶対的な力を持っている娘がいた。あらゆる魔力結界を切り裂き、吸血鬼の真祖すらも倒しうる破魔の槍を持った娘が。
練り上げられた魔力が雪霞狼の機能を最大にする。槍の先端に魔方陣が浮かび上がった。
「くっ――――こ、のっ!!」
目の前まで迫る雪菜に、パトラは焦って自らの魔術を行使する。砂を使ってアヌビスを作ったように、分厚い盾を作り出す。
だがそんなもの、雪菜の雪霞狼の前には、波にさらわれる砂の城よりも脆い障害だ。
「はあッ!!」
槍を一閃。それだけで、砂の盾は解けるように消え去った。
「ひっ……!!」
パトラは初めて情けない悲鳴を漏らす。もはや魔術は間に合わず、スフィンクスが助けに入るよりも雪菜の方が早い。
唯一回避する方法があるとすれば闇夜の太陽船（メセケテット）を移動させ音速で逃げることだが、パトラのプライドがそれを許さない。
パトラの薄皮を、雪霞狼の刃が撫でた。
その瞬間、パトラの体から1枚のカードが排出され、ピラミッドや

スフィンクスが消え去る。
この戦いの勝敗が決した瞬間だった。

金一との決着をつけた俺は、雪菜達と合流していた。ディケイドとジャグラス、そしてウォズの助力があったとはいえ、ずいぶんとあっさり片付いてくれたもんだ。
後は攫われていたアリアなんだけど、
「あそこだ」
金一が指さしたのは、先ほどまでピラミッドがあった場所だ。
そこには大きな棺がある。森の中にポツンと棺があるのはとてもシュールだな。
重い蓋を開けると、パトラと同じくビキニのような服装のアリアが横たわっていた。
「特に怪我はしていないはずだ。少なくとも、俺達は何もしていない」
その金一の言葉通り、アリアは寝ているだけで掠り傷1つなかった。
「そいつのことは信用していいぜ。何しろ『元』が付くとは言え、武偵庁特命武偵なんだからな」
「ええっ!?」
「何故、そのような方がイ・ウーに?」
「詳しく話すと長くなる。だが、イ・ウーを壊滅させるためには必要なことだったんだ」
ジャグラスが説明した予想外の肩書に驚く雪菜とコッコロ。何も知らなければそうなるよな。
てか、普通にそんな経歴の人でも組織の一員になれるってのはホン

ト凄い。
「黒の組織みたいだな」
「黒の組織？」
「何でもない」
公安の『ゼロ』が忍び込んでるみたいな。ＦＢＩやＣＩＡが潜入調査してるみたいな。向こうと違って、分かってて見逃されるんだろうけど。や、決してジンの兄貴が無能って言ってるわけじゃないんですよ！
話を戻して。
「どうすれば目が覚めるんだ？」
「その棺自体に呪いがかけられてる。眠りの呪いだ。蓋が開けば呪いは解けるはずだ……そうだな、パトラ」
「……」
呼びかけられたパトラはそっぽを向いているが、とりあえず呼び掛けてみるか。
「アリア、アリア！」
「……っ、んっ……？」
すぐに反応が返ってきた。
「翔？　あれ、雪菜とコッコロも……？　あたし、何して……」
眠気眼を擦りつつ、アリアが起き上がった。
「アリアさん、とりあえず……」
「え？」
「上に何か羽織りますか？　いえ、そう言う服ですから、気にしないなら、それでもいいんですけど。先輩の目もありますし……」
雪菜がちらりと俺を見てきた。
「服？　何を言って――――」
アリアが自分の体を見下ろす。
するとすぐに、自分の服装に気が付くことになる。薄い布をそのまま巻き付けたような格好だ。それも胸や下半身しか隠れていない。
「バッ!?　ちょっ！　見るな!!」
アリアは瞬時に真っ赤になり、体を手で隠す。さらに棺の淵でガー

ドした。
　アリアの命令に従い、俺はくるりと後ろを向いた。
「そこまで恥ずかしい服装なのでございますか？」
「民族衣装だからな。着慣れていないと恥ずかしいもんなんだよ」
　コッコロはきょとんと首を傾げていた。この娘の常識がどうなっているのかは分からないけど、エルフ方向の常識だと、この服装は全然普通なのかもしれない。
「ちょっと！　私の服どこよ!!」
「それはそっちだな。武器もまとめておいてある」
「取ってくるよ」
　金一の指さす方向に行こうとするが、
「いや、女性のほうがいいだろう。ここに来るまでに着ていた服、『全て』があるからな」
　全て？　ああ、うん。下着とかもあるって話ね。そりゃ、あの格好で今までつけてた下着のままだったら違和感バリバリだろうけどさ。
「先輩……アリアさん、そちらで着替えてきましょう」
「そうね。そうするわ」
　雪菜とアリアが森の中に一緒に向かい、すぐに戻ってきた。アリアは見慣れた武偵高の制服になっている。
　そのアリアは俺達の所に来ると、恥ずかしそうに言った。
「翔……その、今回はありがとう。ドジしたアタシを助けてくれて」
「当たり前だろ。仲間なんだから」
「はい。先輩の言う通りです」
「気にすることはございませんよ、アリア様」
「みんな……んんっ！　この２人もイ・ウーのメンバーなのよね！
これでまた、ママの刑期を短縮できるわ!!」
　わざとらしい咳払いと共に、そう言うのだった。
　その様子を見て、俺達はこっそりと笑う。
「よし、それじゃあ……」
　無事アリアを救出できたことだし、そろそろ島を脱出することにしよう。

「おとなしくしてくださいね」
「うぅ～……!!」
クラスカードは回収された。ピラミッド型の建物が無い今、パトラはもはや普通の魔術師だ。それでも、十分な実力があるのは間違いないが。
しかし、霊視のある雪菜に睨まれていてはどうしようもない。パトラが魔術を発動させる前に、確実に意識を刈り取られることになる。
「キンイチ、何とかするのじゃ！」
「すまんな。流石の俺でも、こうも包囲されていては、脱出は無理だ」
嘘をつけ。逃げるくらいは出来るだろ。
でも、本当に逃げるつもりが無いんだろう。素直に俺達の指示に従ってくれる。ちなみに金一のクラスカードも武器も、俺達が預かっている。
金一の答えにパトラは地団太を踏むが、それでもどうしようもない。
歩いていると浜が見えた。そこには自動操縦で俺達を迎えに来ていた船がある。それに乗り込んで島を後にする。
波しぶきを上げながら、船はどんどん島から遠ざかっていく。
こうして俺達は島からのアリアの奪還に成功するのだった。

教授

「ふぅ……これで終わってくれるのか……？」
「なんだ。まるでこれじゃあ終わらない、物足りない、みたいな言い方じゃないか」
　船の上、小さくなる島を見ながら呟いた一言が、ジャグラスに聞かれていたらしい。
「……や、そんなつもりは無いんだけど」
「そうか？　だったらすまないな。俺の勘違いだ」
　もちろん、身構えていた所ではある。原作で考えれば、この後のことは……
「複雑な気分だなぁ」
「なんだよ、それ」
　原作通りに進んでくれれば安心できる反面、来ないで欲しいと思う気持ちもある。
「夜月　翔」
　金一が普通に1人で歩いてきた。逃げる心配が少ないとしても、誰か1人は監視してないと。
「いまさら逃げないさ。それよりも、少し話が――――」
　言い終わる前に、船が揺れ始めた。否、海が揺れているのだ。
「船を止めろ!!」
「言われなくてもわかってる!!」
　金一の叫びに、同じくらい大きな叫び声で返すジャグラス。
　リモコンを操作して、船を止める。それでも揺れは収まらない。金一は周りの海面を確認している。俺も同じように確認していると、海中に黒い影が見えた。それがどんどん大きくなる。
　海の底から出て来たのは、巨大な潜水艦だった。その巨体が海面を待ちあげ、大きな波を作り出していた。
　浮上してきた潜水艦に、金一は歯を食いしばっている。
「ボストーク号……っ！」
　潜水艦が現れたことで、いつの間にか全員が集まっていた。

「こんな、巨大な潜水艦が……」
アリアが潜水艦を見て驚く。他のみんなも同じように驚いていた。史上最大の原子力潜水艦だ。それが俺達の船のギリギリ近くまで近づいている。
「来て、しまったのか……」
金一の声は小さかった。その顔は苦々しく歪み、その声色には絶望が浮かんでいた。
「き、金一様、これは……？」
「かつてボストーク号と呼ばれていた、戦略ミサイル搭載型の原子力潜水艦だ」
「な、何故そのようなものがここに……？」
コッコロの質問に金一は答える。
「それは簡単なことだ……！」
一呼吸置き、金一は潜水艦を睨み付けながら告げる。
「ボストーク号は盗まれたんだ……！　史上最高の頭脳を持つ『教授』にッ!!」
「盗、まれた……!?」
「それはいったいどういう……？」
「……」
意味が分からないんだろう。雪菜とコッコロは疑問符を浮かべている。俺はまだ潜水艦を睨み続ける。
横を見ると、ジャグラスも同じように睨んでいた。甲板に立っている男を。
「出たか……あ？」
俺は驚愕した。その男は、狙撃銃を持っていた。
構えるよりも先に、その銃口は光っていた――――否、俺や金一が全く反応出来ない速度で、不可視の銃弾（インヴィジビレ）が行われたんだ。
「ぐ……ッ!!??」
銃弾は金一の胸を貫いていた。
魔力障壁ごと防弾服を貫く装甲貫通弾（アーマーピアス）。世間に流通しているものと比べて別物の様に威力がある。

「キ、キンイチッ!!」
パトラが拘束を振り切って倒れた金一に駆け寄る。
「先輩……!」
「油断するな。来るぞ……!」
黒いコートを着ており、右手にはパイプ、左手にはステッキを持っている。元の世界とは違い、教科書に載っているくらい有名な人物。
特に武偵は一番最初に学ぶ人物だ。
「「「ッ!?」」」
アリアが一番驚いたであろう。
「曾……おじいさま……!?」
アリアの曽祖父、シャーロック・ホームズ1世がそこにいた。
「キンイチッ! 無理をするな!」
パトラが泣きそうな顔で起き上がろうとする金一を抑え込もうとするが……いつの間にか金一の呼吸が整っている。出血はしているが、ダメージは感じられない。
「余所見をするな……!」
金一の警告とそれは同時だった。
パチンッ!!
「「「「!?」」」」
俺達は目を疑った。海が一瞬にして凍りついたのだ。ジャンヌの技……だがジャンヌよりもはるかに強力だ。
「コッコロ! 金一に治癒を!」
「は、はいっ! 金一様、動かないで下さいまし」
「そんなことをしている場合ではない……!」
自分が倒れているわけにはいなかいと、コッコロの治療を拒む金一。
超人たちが自分の目的のために、メンバーの能力を学習し合う無法者の集団。それがイ・ウーだ。そのトップであるシャーロック・ホームズ1世。
こいつはイ・ウーの生徒全員の能力を兼ね備えた完成形の、最強の存在なのだ。

「もう会える頃と、推理していたよ」
最強の名探偵はふわりと浮かび上がり、ボストーク号の甲板から俺達の船へと降り立つ。
「初めまして。僕はイ・ウーのリーダー、シャーロック・ホームズだ」
教授とも呼ばれているね、などと微笑みながら自己紹介してきた。
「アリア君」
呆然としていたアリアはビクッと体を伸ばした。
「時代は移ろってゆくけれど、君はいつまでも同じだ。ホームズ家の淑女に伝わる髪型を君は守ってくれているんだね」
ツインテールがホームズ家に伝わる髪型なのか。ヤベー家だな。
そんな適当なことを思っていなければ、この緊張に押しつぶされてしまいそうだ。目の前にいるのは生ける英霊。本来死ぬタイミングを超越し、さらなるスキルを身に着けた存在だ。
敵だと認識した雪菜が雪霞狼を構えるが、
「鋭い刃物を弄んでいると、いつかはその手に怪我をすることになるものだよ」
その言葉だけで、雪菜の体は金縛りあったかのように動かなくなった。
「(視えない……霊視を使ってるのに、この人の隙が全く視えない……!)」
「そう、良い娘だ」
シャーロックは雪菜の前を素通りしてアリアの目の前に行く。
「アリア君。君は美しい。そして強い。ホームズ一族で最も優れた才能を秘めた君。一族に認められない日々はさぞかし辛いものだったろうね」
シャーロックはさらにアリアに近づく。
「だが僕は、君の名誉を回復させることができる。僕は君を、僕の後継者として迎えに来たんだ」
「え……あ……」
アリアが小さく声を上げた。何か言いたくても言葉が出てこないという感じだ。

「おいでアリア君。君の都合さえ良ければ、おいで。悪くてもおいで」
シャーロックはアリアに手を差し出す。
「そうすれば、君の母親は助かるよ」
「ッ!?」
「僕はイ・ウーのリーダーだ。僕なら君のお母さん、かなえさんにかけられている冤罪をすぐにでも解くことが出来る」
アリアの目が見開いた。卑怯だが効果的な作戦だった。訳の分からない状況で、たった一つだけ明確にわかる条件を提示する。それも、アリアが求めてやまないものを。
ゆっくりと持ち上がるアリアの右手。ふらふらと前に出されたそれを、シャーロックは掴もうと――
「アリアに触るんじゃねぇ!!!」
俺は牙(タスク)を連射する。
ガガガガガッ!!!!!
「邪魔をしないでくれないかい？」
「ッ!!!」
その全てを、いとも簡単に不可視の銃弾(インヴィジビレ)で迎撃される。
だが俺は止まらない。『暗き夜の型』を発動させ、シャーロックとの距離を詰める。俺とシャーロックとの距離は2メートルほどしかなかった。
気が付いた時には、シャーロックに蹴り飛ばされていた。
「ガハッ!!!???」
腹にめりこんだ蹴りは、俺の力をそのまま返されたかのように重い。
そのまま俺は凍りついた海に吹っ飛び、硬い氷の床に叩きつけられる。
「先輩ッ!!」
雪菜の叫ぶ声が聞こえる。視界の端に、船から飛び降りて俺のもとへと走ってくる姿が見えた。
ぱきぱきぱき……っ!!
俺が墜落した衝撃で凍りついた海にヒビが入り、溶け始めた。

「くそ……ッ!!」
俺は必死に体を動かそうとするが、それよりも速く、冷たい海に落ちてしまった。

「先輩ッ!!」
あっけなく吹き飛ばされた翔を助けに、雪菜が船から氷の大地へと飛び降りる。
「翔……!!」
アリアも正気を取り戻し、助けに行こうと体を向けるが、
「さぁ、アリア君」
「あ……!」
動こうとしたアリアの力を利用して、まるでダンスを踊っているかのように、アリアの動きをコントロールする。
だが、パートナーにダンスを申し込むにしては、その誘い方はあまりにも無粋だった。
そのアリアとシャーロックの間に、白刃が振り下ろされた。ジャグラスの刀だ。
「ふむ……やはりこのタイミングかい？」
「流石は教授だな。全部お見通しってことか」
ジャグラスの刀を二指白刃取りしたシャーロックは、事も無げに言う。
ジャグラスの方も、この程度の攻撃は意味がないとわかっていた。自分の渾身の斬撃を指2本で止められても、対して驚いた様子は無い。
「ちょ！　何よ……！」

「じっとしてな」
いともあっさりと、シャーロックからアリアを奪還してしまう。しかしそれは、善意の行動ではなかった。
アリアの腕を抑え込み、首を後ろから乱暴に掴む。そう、ジャグラスはジャグラスで、アリアを人質に取ったのだ。
シャーロックはあらかじめジャグラスの行動を予期していた。アリアを取り返されたというのに、いたって冷静な表情だ。
「『教授』、取引だ。内容を言う必要があるかい？」
「もちろん、君の推理を聞きたいからね」
全てを推理できるシャーロックにとって、他人の説明を聞く必要は無い。だがあえて、この場の花を持たせるために、ジャグラスに説明を求めた。
「教授、アンタは自分の死期が近いことを悟っている。自分がいなくなれば、それまでおとなしくしていた犯罪者が自由に動くようになる。『穏健派』と『主戦派』が跡目争いをすれば、それだけでとんでもない被害が出る。勝者によっては戦争が起こることもあり得る。あんたは早急に後継者を作り上げる必要があったんだ」
「ふむ、それで？」
ジャグラスは視線をアリアに落とす。
「だからこそ、俺に協力させてまで、このお嬢ちゃんを島の外まで、自分の目の前まで連れてこさせたんだ。自分の後継者にするためにな」
理路整然と説明され、自分の立場を理解し始めるアリア。
「だが問題は、神崎・H・アリアにはイ・ウーのメンバーをまとめ上げるだけの力が無いってことだ」
「確か、イ・ウーは無法者の集団だって話だったな」
士は、ぼそりと呟いた。
「確かにこの嬢ちゃんはアンタの子孫かもしれない。だがそれだけじゃあ、無法者は誰も従わねぇ。従えるだけの力が必要だ。教授、リーダーの席を譲るってことはつまり、その従えるだけの力も譲るってことじゃねぇか？　その強さの源も、そっくりそのまま、このお嬢ちゃんにな」

そこまで言ったところで、金一と士はジャグラスの目的に気が付いた。
「ジャグラス、貴様……!!」
「なるほどな、大体わかった」
「ああ。あんたの持ってる『強さの源』。そいつを俺によこしな」
ジャグラスは自身の右手をシャーロックへと差し出した。
反応が無いシャーロックに、ジャグラスは笑って言う。
「心配するな。俺がリーダーになったとしても、無暗に戦争を起こすような真似はしねぇからよ」
「残念だがジャグラス君。それは無理な相談だ」
「この嬢ちゃんが死ぬことになってもか？」
ジャグラスの手が、アリアの喉を締めあげる。暴れて逃げ出そうにも、小柄なアリアにはどうすることも出来ない。
「手に入れたところで、あの力は君を選ばないよ」
「それは手に入れた後、俺が実際に確認するさ」
だからまずはよこせ、そう告げるジャグラス。
「ふぅ……良い推理だったよ、ジャグラス君」
その言葉に、ジャグラスは身構える。これでお話の時間が終わったことを悟ったのだ。シャーロックが要求を呑まなかった以上、ここからは戦闘の時間だ。
サーッ!!
パトラの面積の少ない服から、砂がこぼれ始めた。
「こ、これはっ!? 教授、貴様っ！ 妾の砂を操って……！」
「少し使わせてもらうよ、パトラ君」
パトラは焦って砂のコントロールを奪い返そうとするが、今まで手足のように使ってきたはずの砂は全く言う事を聞かない。
全身を砂に拘束され、身動きが取れなくなる。刀を握っていた指も無理やり開かされ、刀が手から滑り落ちた。
「ダメだよ、金一君」
「ぐあッ!!」
金一が動き出す。その前に、銃声が鳴った。

「一応動けるようにはなっているらしいけど、君は重傷だ。そんな状態では、僕の早撃ちには勝てない。これが、元は君の技だとしてもね」
不可視の銃弾（インヴィジビレ）の速度は、圧倒的にシャーロックが上だった。今の銃撃で金一の拳銃が破壊される。
「君たちはどうするんだい？」
「私は、あなたと戦うつもりは無い」
「戦うべき場所と相手は、俺も弁えているからな」
ウォズと士には戦闘の意思はない。シャーロックは２人の前を素通りして、アリアの目の前まで歩いていく。
「アリア君」
シャーロックはアリアをお姫様抱っこをしてボストーク号に向かって飛ぶ。
「行こうか。君のイ・ウーに」
「あ、あの……っ！」
「アリア様っ!!」
コッコロが叫ぶ。
だが、叫んだだけでは状況は変わらない。
シャーロックとアリアは、２人そろって潜水艦の中へ姿を消してしまうのだった。

「ぷはっ!!」
俺は海面から顔を出す。
「先輩っ!!」
雪菜が氷のふちに両手をつき、俺の名前を呼んでいた。雪菜の手を借りて海から上がる。

「痛つつ……悪い、心配かけたな。それよりアリアは？」
「……潜水艦に。連れていかれてしまいました」
俺はすぐに船まで戻った。
「主様っ、ご無事で……！」
「うん、ごめん……」
涙目のコッコロに出迎えられる。
コッコロのおかげか、金一のケガはそこまで体を蝕んでいないようだ。
士はカメラを弄り、ウォズは本をめくっている。ジャグラスは、面白くなさそうに肘をついて座っていた。
そこから、俺が沈んでいた時間の話を聞いた。
「……分かった。これからすぐに、アリアを助けに行ってくる」
「はい！　今すぐに――――」
「いや」
俺は雪菜の言葉を止める。
「潜水艦に行くのは俺だけでいい」
「……え？」
「……主様？」
２人が困惑したような声を出す。
「コッコロには金一の治療を、雪菜には、ここにゲットマシンを残して行くから、学園島に戻ってはやてさんにこの場所の位置を知らせて欲しい……いいよな、ジャグラス」
「……ああ。好きにしてくれ」
最初の約束では六課には頼らないはずだったが、ジャグラスの企みは潰えたのだ。ジャグラスは半ば自棄になっている部分もあった。
「私は我が魔王について行こう」
「俺もだ。お前を見極めさせてもらう……もっとも、今のままじゃ不合格だがな」
ウォズは恭しく頭を下げ、士は鋭い視線を俺に向けてくる……最後に何か言ってたみたいだけど聞き取れなかったな。
雪菜が明確な怒気を持った視線を向けてくる。

「ふざけないで下さい……！」
　雪菜の怒りもわかる。でも、全員で突撃して全滅するリスクはおかせない。敵の本丸だということを考えると、この世界の影響でどんな変化があるのか分からないのだ。
「ふざけてない。これが一番――――」
　言い終わる前に、頬に鋭い痛みが走った。
「どうして、先輩はそうやって……！　一人で戦おうとしないで下さい！」
「そうでございます！　私たちがここにいる意味を、もう一度お考え下さい！」
「っ！」
　２人の訴えに、俺は大切なことに気が付いた。確かに効率や役割を考えれば俺の言う形が良いのかもしれないが……くそっ、まだまだだな、俺も。
「ごめん、２人共。やっぱり一緒に戦って欲しい」
「はいっ!!」
「もちろんでございます!!」
　２人は元気よく頷いてくれた。
「……」
「……ま、ギリギリってところか」
　そんな俺達を見て、ウォズは何も言わず、士はため息を吐いた。
「お前はどうするんだ、ジャグラス」
「このままやられっぱなしじゃあいられねぇよ」
　座っていたジャグラスは立ち上がる。
　よし、これで準備は……
「あ、そうだ、コッコロは……」
　負傷している金一をこのままにしてはおけない。流石に治療役のコッコロは残ってもらったほうがいいのでは。そう思ったが、
「俺のことは気にするな。治療はいらない」
　金一が笑って言った。痩せ我慢ではないのだろう。
　こうして俺達は、みんな一緒に潜水艦に突入するのだった。

Wは誰？／サイクロン・ジョーカー２００９

俺達が潜水艦に潜入すると同時に、
ドゴンッ!!
というエンジンの駆動音が聞こえた。
どうやら潜水艦は沈み始めたみたいだ。もう後戻りは出来ない。
「何ですかここは……」
雪菜は目の前に広がる光景に声を漏らす。
そこはまるで博物館か美術館だった。高い天井から巨大なシャンデリアが照らし、床には恐竜の全身骨格標本がそびえ、周囲には動物の剥製が並べられていた。
生きたシーラカンスや熱帯魚を入れた水槽が並べられた暗い部屋は原子力潜水艦にあるはずのない芸術的、学術的な部屋だった。
「こいつは教授の趣味だ。全部本物だよ」
ジャグラスは何度も見たことがあるんだろう。それらには目もくれずに前に進む。
「まずはアリアさんですね」
「ああ。早く探さないと」
世界最大は伊達ではないらしく、船室の数も尋常ではない。それぞれが異なる芸術品の展示室になっていた。
手当たり次第に扉を開けるがなかなか見つからない。
多彩な部屋の数々を走って突っ切るが、全くアリアが見つからなかった。
だがコッコロが、
「おや？　主様！　わたくしが飛ばした風の精霊に反応がございます！」
コッコロの導きに従って、俺達は走る。
その先にあったのは教会だった。奥ではステンドグラスが綺麗に光っている。元々あったものか、それともこれもシャーロックの趣味なのか、教会に備え付けられているとは思えないほどの設備だ。
「アリアッ!!」

アリアはステンドグラスの下で祈りを捧げていた。服装は見慣れた防弾制服になっている。その周りでコッコロの風の精霊が舞っていた。
「翔……雪菜……コッコロ……」
アリアは振り返る。
俺達はアリアのもとまで駆け寄る。だが逆に、アリアは一歩下がってしまった。
「帰って」
「え……？」
「……」
冷徹な一言。アリアの言葉に耳を疑う雪菜。その言葉を予測していた俺は何とか冷静に受け止める。
「あたしはここで、曾お爺さまと暮らすの」
「何を言ってるんですかっ！」
雪菜はたまらず詰め寄るが、アリアは体の向きを変え、正面から取り合わない。
「……」
俺は黙って話を聞く。
「雪菜……一族は果たすべき役割を正しく果たすことが求められるものなの。そうじゃないと、存在することが許されない……」
アリアは自分の一族について、悲しげに言う。
「あたしは欠陥品と呼ばれ、バカにされて、ママ以外には無視されてきた」
アリアはスカートを掴む手に力を込める。
「あたしはッ！　ホームズ家にはいないものとして扱われてきたのよッ!!　ずっと昔からッ!!」
アリアは叫ぶ。声と一緒に涙が零れていた。その叫びは怒りや悲しみなどの、負の感情が詰まったものだった。
「アリア様……」
「あたしがここまでやって来れたのは、曾お爺さまを心の支えにしてきたからよ。彼は武偵の始祖でもあるの。だからあたしは武偵に

なった」
　アリアはさらに後ろに下がる。
「あたしにとって曾お爺様は神様のようなものなの。その人があたしの目の前に現れて、あたしを認めてくれたの！　欠陥品と呼ばれたあたしを後継者とまで呼んでくれた！」
「でもそのシャーロックさんが、かなえさんに罪を着せたんですよ！」
　雪菜の反論にも首を横に振る。
「そんなのもう解決できるわ。曾お爺様はあたしにイ・ウーをくださると言った。だからこの事件は……」
「は、犯罪者の一員になるんですか……!?」
「そうじゃないとイ・ウーに勝つことは不可能よ！　曾お爺様がリーダーだった時点で！」
　アリアは叫んだ。だが、
「あなた達じゃ……曾お爺様には……勝てない……」
　すぐに声は小さくなった。
「私のことはもういいから、ケガする前にみんな帰って！　みんなにお別れを言えないのは残念だけど、今までありがとう、雪菜。コッコロも。あんたとはあんまり話せなかったけど、元気でね……」
　そのお別れの言葉に、雪菜たちの顔が青くなる。あのアリアがこんなに素直にお別れを言うなど、ここでの言葉が本気であることの何よりの裏付けだったからだ。
　雪菜とコッコロが俺を見た。俺からも何か言って欲しいと訴えている。
「アリア……」
「翔、あなたは凄い人よ。たくさんの人を助けて、救ってる」
「アリアだってその一人だ」
「もういいの、私のことは。あなたには他に助けないといけない娘がたくさんいるでしょ？　自分のことは自分で出来るわ……最初からそうだったのよ。私はアリアなんだから」
独唱曲（アリア）なんだから、か。
　武偵も血も涙もない奴らばかりではない。アリアがきちんと事情

を説明すれば、実力差はあるにしても、協力してくれる人はいるだろう。
それでもアリアが一人だったのは、その性格ゆえだ。俺の様に最初から事情を知っている人でもなければ、近寄りがたい性格だった。
でも俺達の仲間に、パーティになってアリアは独唱曲（アリア）じゃなくなったはずだ。それなのに……
俺は目を閉じた。
「でも、俺もここで帰るわけにはいかない」
「じゃあ、『こう』するしかないわね」
「ああ」
最後は武偵らしく、『強い方の言う事を聞く』。
「ごめん、みんな。ついてきてもらって早々だけど」
「わかってます。1対1じゃないのは、って私も思いますし」
「ジャグラスもいいのか？」
「俺は俺で好きにやらせてもらうだけだ。ま、今回はおとなしくしておいてやるよ」
それが聞ければ十分だ。
俺は一歩前に出た。
アリアは強い。だが一方通行やサーヴァントに比べてしまうとどうしても劣る。今の俺なら――
「翔、あなたもしかして、私には楽に勝てるって思ってるんじゃないの？」
「……アリア？」
様子がおかしい。
「確かにあなたは強いわ。ううん、どんどん強くなってる。でも――」
アリアが手を伸ばすのは、スカートの中のホルスターではなかった。懐から取り出したのは、
「――何の勝算も無しに、私が決闘を受けるわけないでしょ？」
《W》
「ウォッチだと……!?」

アリアの体が怪物のものへと変わる。体半分が緑、もう半分が黒の怪人に。
「そ、そんな、アリアさんが……！」
「アリア様が、怪物に……!?」
アリアが、アナザーダブルへと変身してしまった。何の脈絡も無しに。
「どうして……まさかシャーロックが渡したのか……？」
全くの予想外の出来事に、俺も動揺を隠すことが出来なかった。
「私は本気よ。そしてこれが最後。今なら曾お爺様にお願いして、学園島に帰れるようにするわ。だから今すぐ帰って。ここで曾お爺様に手は出さないって誓って」
意識はしっかりとある。アリアはアリアの意思で変身したんだ。
なぜ、どうして、という疑問は尽きない。
だが、
《ＺＩ―Ｏ！》
「変身……！」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
今は戦うしかない。
「それは出来ない」
「そう。残念ね」
側頭部にすさまじい衝撃が走った。
「がっ、ぅ……!?」
それは疾風を纏った蹴りだった。一切の手心が無い攻撃。気が付いた時には地面に転がっていたため受け身を取ることも出来ない。
「ぐっ……!!」
転がりながらもジカンギレードのガンモードを構え、発砲。
「そんなもの!!」
アナザーダブルは弾丸を拳で打ち消し、蹴りで跳ね返す。そして外れた数発が教会のステンドグラスに風穴を開けた。
「はッ!!」
風で加速された蹴りが、俺の手から武器を奪い取った。

ここで、俺はようやく理解した。
目の前にいるのは異形の怪物ではない。ライダーなんだ。俺はアリアと戦っているのではなく、ライダーと戦っているのだという事を。
それもビルドの様に戦闘経験が無いティアーユ先生が変身しているわけでも、アナザーオーズの様に暴走状態になっているわけではない。
パワーで言えばアナザーオーズに及ばないのかもしれないが……1本のベルトを何人かの人が使いまわす感覚に近い。
変身者が違えばこうも強くなるのか、という感想だ。
《Ｃｙｃｌｏｎｅ》
《Ｍｅｔａｌ》
アナザーダブルの半身の色が変わった。鈍い銀色に。背中には専用武器の『メタルシャフト』が形成された。
普段使っていない武器のはずだが、アリアにとってはそんなことは関係ないらしい。
俺の体を強かに打ち付けてくる。何とか防ごうともがくが、素手ではどうしようもかなった。
《Ｃｙｃｌｏｎｅ》
《Ｔｒｉｇｇｅｒ》
またもやアナザーダブルの半身の色が変わる。メタルシャフトが消え、拳銃型の武器、『トリガーマグナム』が出現する。
「くそ……!!」
遮蔽物が無いッ!!
俺は走り出した。とにかく動き続けなければ。
アナザーダブルは銃を横にして連射し始めた。静謐な教会に銃声が響き渡る。瞬く間に壁に弾痕が増えていく。
サイクロン状態のトリガーマグナムはそこまで精密な射撃は出来ないのが救いだった。それでも確実に追い込まれていく。
銃弾は容赦なくステンドグラスを破壊し、バラバラになった色とりどりのガラスが降り注いだ。

ガラスの雨の中、俺は走るが――いつまでも逃げきれるものではなかった。
足元に着弾した衝撃でよろける。そこを見逃すアナザーダブルではない。
「貫ったわ」
「ぐあああああぁぁぁっ!!!!」
俺は全身を撃たれてしまう。
変身が解除され、倒れた俺にアナザーダブルがゆっくりと近寄ってくる。そして俺の額に銃口を向けた。
「チェックメイトよ、翔」
「……ああ、そうみたいだな」
アリアを見くびったツケだったな。自分と同等の力を持つライダー相手に戦うことになるとは。
「どうした撃たないのか？」
「……撃って欲しいの？」
「そりゃ撃たないで欲しいけど。俺にとどめを刺さないとシャーロックと戦いに行くぞ」
「……っ!!」
トリガーマグナムが揺れている。
「アリア、戻ってきてくれないか？」
「戻ってどうするのよ。あたしは曾お爺様と戦えない。それどころか、曾お爺様の言う通りにすれば、ママを助けることが出来るのよ」
「お母さんを助けたとしても、アリアが犯罪者になっていたら意味がないはずだ。雪菜だって、コッコロだって一緒に戦ってくれる。それに俺は、アリアのパートナーなんだろ？　俺達でシャーロックを倒して――」
「……アンタ、アタシの事まだパートナーだと思ってたの？」
「え？　それはもちろん――」
そうだ、と言おうとして、
「パートナーだって言うなら！　アタシのことをもっと気にしなさいよ!!　いつも、いっつも他の女の事ばっかりじゃない!!」

「そ、それは……」
　ちょっと否定できないかもしれない。
「ブラドと戦ったのは理子のためだし、あの覇王の娘の悩みを解決して、特務六課への入隊も勝手に決める！　この前はほとんど関わりが無い娘のために第1位の超能力者と戦った!!　アタシに相談無しで!!　どこがパートナーだって言うのよ!!」
　それはその通りなんだけど、アリアに言われるとは。みんなとの関りで丸くなったからこその言葉なんだろう。
「おい。この流れ、さっきも見た気がするんだが？」
「……そうですね。そろそろ止めに入ります」
「そうでございますね」
　後ろでジャグラスと雪菜、コッコロが何か話しているのが聞こえる。
「アリアさん、落ち着きましたか？」
「ふーっ、ふーっ!!　……ふぅぅぅぅっ」
　アリアの姿が元に戻った。
「雪菜、コッコロ」
「分かりますよ、アリアさん。先輩、私達の心配なんてお構いなしに戦いに行きますから」
「はい。わたくしも、そう思っていたところでございます」
　そうだね。それも否定できないよ。
「でも、あたしは……」
「シャーロックと戦えないのは分かってる。それは俺に「俺達に」……俺達に任せて欲しい」
　雪菜に訂正されるが、最後までセリフを言いきることに成功する。
「そうです、アリア様。アリア様の曾お爺様が悪いことをされているというのから、わたくし達の手で捕まえなければ」
「もうアリアさんだけの問題じゃないんです。私達の手で、イ・ウーを事件を終わらせましょう」
「コッコロ、雪菜……」
　アリアが涙ぐんだ。

「翔」
アナザーウォッチを持ったアリアの右手が、俺の右手に重ねされる。ウォッチが手渡された。アリアが腕をどかすと――――――そこにはダブルウォッチがあった。
アリアが俺達の所に戻ってきてくれた。その証だった。

「それで、私はどのタイミングで祝えばよいのかな？」
「お前、今回は空気を読んどけよ……まあ、いちいち痴話喧嘩しないと戦えないのか、とは思うけどな」
ウォズと士が、そんなやり取りをしていたのだった。

「みんな、覚悟はいい？　この先に曾お爺様がいるわ」
今度はアリアを先頭にして進んでいた俺達だったが、無骨な、飾り気のない扉の前に到着する。これまでの美術品に飾られた部屋とは大違いだ。
扉を開けて先に進む。
今までに一番広い場所に出た。今まであった美術品は１つも無い。

だだっ広く、奥には巨大な柱が並んでいた。
「ＩＣＢＭ……!?」
雪菜が驚く。柱の正体は大陸間弾道ミサイルだ。しかもこれだけの数。搭載する弾頭次第では複数の国を滅ぼせるだろう。
「なんでなの……!」
アリアが周りを見渡す。
「あたし、この部屋を見たことがある……!」
「え？　どういうことでございますか？」
「……」
コッコロは疑問に思っているが、俺は理由を知っている。
「本当なんですか？」
「ええ、間違いないわ。それだけじゃない。ここでみんなを見たことがあるわ……」
雪菜が何か言おうとしたとき、音楽が流れてきた。独特のノイズ音から、流れてくる音楽レコードだ。曲はモーツァルトの『魔笛』。
「音楽の世界には和やかな調和と甘美な陶酔がある」
その曲をＢＧＭにシャーロックがＩＣＢＭの裏から現れた。杖をカツカツッと響かせながら近づいて来る。
「それは僕らの繰り広げられる戦いという混沌と、美しい対象を描くものだよ」
シャーロックは立ち止まり、笑みを浮かべる。
「このレコードが終わる頃には、戦いのほうも終わるだろうね」
「曾お爺さま……」
アリアは一歩前に出る。
「わ、わたしはあなたを尊敬しています。だから銃を向けることは出来ません」
アリアの声は小さいが、目を逸らさずにシャーロックと向き合っている。
「彼らは私がやっと見つけた大切な人たちです。だから……」
「いいんだよ、アリア君」
シャーロックは笑顔だった。

「それでいいんだ。僕より彼らが大事な存在になったことはとても良いことだ。君達は先ほど、より強く結びついたのだろう」
シャーロックの言い方に苛立ちを感じる。
「全部推理通りってことかよ、名探偵」
シャーロックの推理力は条理予知（コグニス）とも呼ばれ、未来予知のレベルまで研ぎ澄まされている。
さっきの戦いも、全て推理通りだったんだろう。
「こんなの推理の初歩だよ。人の気持ちというのは、推理しにくいものではあるけどね」
シャーロックは俺たちを弄ぶかのように笑う。俺の横にいる雪菜とコッコロの熱も、だんだん高まっていくのを感じる。
「ジャグラス君もやはりここに来たんだね。君の求めていたものはすぐに見ることが出来るよ」
「……ッチ！　言ってくれるな……！」
ジャグラスがここに来ることも推理通りだったってわけだ。や、それも推理の必要が無い、まさに初歩だってことなんだろう。
まさに俺達はシャーロックの掌の上ってわけだ。
「ウォッチを渡したものお前なのか？」
「その通りだ。それが無ければフェアな勝負にならなかっただろう？」
「お前……！　これをお前に渡したのはどこのどいつなんだッ!!　これは――」
この世界に存在しないはずの物だ。ギリギリの所で、アリアが横にいることを思い出して踏みとどまる。
「この世界には存在しないはずの物。そう言いたかったのかな？」
「存在しない……？」
「ああ、アリア君にはまだ説明していなかったね」
あのゾンビはシャーロックに会っていた。だったら、俺達の秘密について知っていてもおかしくない。
そしてそれをしゃべろうとするシャーロックを、俺は止めない。
「彼はこの世界の出身ではない。彼の出身も能力も、異世界が起源な

んだよ」
「……本当なの？」
「……ああ。本当だ」
素直に認める。能力の入手方法について何も言わないのは、アイツなりの情けだろうか。それとも、アリアの（性）知識では理解できないと推理してあえて口にしていないのかもしれない。
「そう……でも色々と納得できるわ。あんたの不思議な能力も、別世界のものなのね」
なんとも、アリアはすんなりと納得してくれた。
「すぐに言ってこなかったのは腹が立つけどね！」
「すぐに言ったって信じないだろ」
後ろでは雪菜とコッコロがほっと息をついていた。突然の暴露だったが、また先ほどのようなケンカにならずに済んで良かったと思っているんだろう。
そして、人の秘密を勝手に暴露してくれた名探偵は、
「ああ。それも推理通りだよ」
そのセリフで、俺の中の何かがキレた。
いちいち推理推理うるせえんだよ。そんなに自分の推理自慢がしたいのかよ！
「シャーロック、俺達はお前をマジで倒す」
「そうかい」
俺はシャーロックを睨み付ける。だがその表情は余裕だ。
「戦っても得るものは何もないよ。僕の推理では、君達では僕に傷一つつけることは出来ないからね」
「そんな下らねぇ推理、今すぐにぶち壊してやるよッ!!」
俺、雪菜、コッコロ、ジャグラスが武器を構える。
シャーロックとの戦闘が始まった。

緋弾覚醒

一番槍は俺だ。
「術式兵装（アルマティオーネ）、疾風（アギリタース・フルミニス）迅雷ッ!!」
雷と暴風を纏い、一直線に突撃する。
「シャーロック!!」
「君にはとても興味があったよ。さあ、君の実力を見せて欲しい」
「ああ、お望み通りな!!」
雷を纏っている俺と打撃を交わしているというのに、シャーロックの顔は涼しいものだ。
「『鎖（チェイン）』印、三重（トリプル）」
地面から飛び出した鎖が、シャーロックの胴体に巻き付いて動きを止める。
「左腕開放（デクストラー・エーミッタム）――雷（ヤクラーティオー・フルゴーリス）の投擲ッ!!」
予め仕込んでおいた雷の槍を投げつけた。
だがそれは、ドーム状の砂の盾に防がれてしまった。
「白き雷（フルグラティオー・アルビカンス）ッ!! ザケルッ!!」
２種類の電撃魔法を放つが、地面から現れる砂の盾にすべて防がれてしまう。やっぱり砂と電撃では相性が悪いらしい。
鎖を破壊したシャーロックは1枚のカードを取り出した。
「限定展開（インクルード）、『剣』」
「クラスカードかッ!!」
「その通り。もっとも、どの英霊にもつながっていない出来損ないだけどね」
シャーロックの手に現れるのは、細長い、黒い靄。剣とは言っているが、こちらから見ると、黒い霧を振り回しているように見える。
「俺に任せな!!」
代わりに前に出てくれるジャグラスだったが、輪郭がぼやけているせいで、戦いにくそうにしている。
「ジャグラスさん、下がって下さい!! はあッ!!」
雪菜の一閃が、黒い霧の剣を吹き払った。

「ふむ。あらゆる魔力を無効化する槍、雪霞狼か。パトラ君との戦いも見ていたけれど、相当に厄介な代物のようだね」
魔力で強化された物体では雪霞狼と打ち合うことは出来ない。シャーロックは次なる剣を取り出していた。
「実剣……!!」
「ああ、これは昔、女王陛下に下賜されたものだよ。銘はイクスカリヴァーンという」
「たいそうな名前だなぁ、教授!!」
そこにジャグラスも加わる。
「良いだろう。２人まとめて稽古をつけてあげよう」
シャーロックが二刀流で雪菜とジャグラスを相手にしている、ように見える。だが実際のところは、雪菜をイクスカリヴァーンで、ジャグラスを『剣』でそれぞれ相手にしていた。
実質、腕１本で１人の相手をしている。
「２人共避けろ!!」
俺は光輝く剣を空に掲げていた。
「超宇宙聖剣（スペースカリバー）ッ!!」
光線の斬撃を放った。
「ふむ」
シャーロックは砂の盾を出現させる。それも１０枚も。
さらに、
「限定展開（インクルード）、『盾』」
黒い靄が、今度は平べったく立ちはだかる。
光の斬撃は砂の盾を次々切り裂いていく。そして最後の黒い霧の盾に当たり、
ピキッ!!
「推理通りだ」
盾にヒビが入るが、受け止められてしまった。
「まだです!!」
雪菜にはその結果が分かっていたんだろう。一息つかせる余裕を与えずに攻撃に入る。

シャーロックの目の前にはいまだ黒い盾があるが、そんなもの、雪菜にとっては障害ではない。盾を無視して槍を突き出した。
盾は簡単に貫通するが、
「まず……っ!?」
さらに雪菜はさらにその先を視た。
雪菜が作った槍の穴から、野球ボールほどの大きさの球体が転がり落ちた。それを見て、ジャグラスも顔を引きつらせる。
「グレネード……!!」
シャーロックが放ったグレネードは爆発する――のではなく、煙を吹きだした。
「これは……!!」
「ちいッ!!」
急いで離れる2人だが、
「なんで……!!」
雪菜を取り巻く煙は離れる気配がない。それどころか、飛び散っていた煙も集まっている。
シャーロックが気流を操作しているんだ!!
「ならばわたくしが!!」
コッコロが風の精を操り、煙を吹き飛ばそうとしている。だがシャーロックの方が上手らしく全く効果が無い。
やがて雪菜は、
「あ……」
力が抜けてその場にへたり込んでしまう。
「雪菜!!」
「心配しなくてもいいよ、夜月君。ただの筋弛緩剤だ。効き目が強い分、時間は短い。ああ、残念ながら、魔法の治療でどうにかなるモノではないよ」
それを聞き、コッコロの動きが止まる。
治療しようとしていた手を止め、槍を構えて雪菜の前に出る。
シャーロックの推理通り、俺達はコイツにダメージを与えられないまま、雪菜を戦闘不能にされてしまった。

流れていた音楽、『魔笛』の曲調が変わる。
「翔君、戦いの真っ最中だが、今から『緋色の研究』を講義を始めないといけない」
「緋色……だと……？」
シャーロックは静かに目を閉じた。
「「!?」」
雪菜達は目を見開いている。
シャーロックの体が緋色に光だしたのだ。
「それが……！」
「その通りだよ、ジャグラス君。僕がイ・ウーを統一出来たのはこの力があったからだ」
シャーロックはポケットから一発の銃弾を取り出す。
「これが緋弾だ」
弾頭は薔薇のような、炎のような、血のような、緋色をしている。見たことも無い金属だ。
「これは超常の力を人間に与える物質。『超常世界の核物質』なのだ」
「それが色金か……」
倒れていながらも、シャーロックの言葉を返す。
「おや、知っているのかい？　それも異なる世界の知識なのかな？」
もはや隠していても仕方がない。
「ああ。日本では緋緋色金（ヒヒイロカネ）って名で呼ばれてる金属だろ。確か他にも種類があったはずだけど？」
「素晴らしい。そこまで知っているのかい」
シャーロックは本当に感心していた。
「アリア君」
シャーロックは右手の人差し指をアリアに向ける。
その瞬間、
「え……!?」
アリアの右手の人差し指が光だした。それだけではない。指先から波及するように、ぼんやりとした光は全身に広がっていく。
「な、なによ……これ……あたしの体、どうなって……！」

「アリアさん、失礼します！　……ッ!?　雪霞狼でも打ち消せない……!?」
魔力を打ち消す神格駆動の光でも、アリアが発生させる緋色の光は無くならない。
自分の体が発生させる未知のエネルギーに、流石のアリアも恐怖と驚愕の感情を浮かべていた。
「それは『共鳴現象（コンソナ）』だ。質量の多いイロカネ同士は、片方が覚醒すると共鳴する音叉のように、もう片方も目を覚ます性質がある」
シャーロックは目を細めた。
「ふむ、僕が推理していた程の光の強さじゃないね」
シャーロックは左に銃を持ち。
「翔君、申し訳ないが――」
銃口をこちらに向けて、
「――トリガーになってほしい」
どんな弾丸が使われたのか分からない。
だが確かなのは、俺の額が撃ち抜かれたという事だ――

翔が頭から血を流して倒れた。
「先輩ッ！　先輩ッ！」
「主様っ！　そんな……」
「……ぁ……ぁぁ、そん、な……」
雪菜は目に涙を溜めながら、必死に頭から血を流す翔の体を揺らす。しかし、ぴくりとも動かない。コッコロは必死に治療を行う。アリアはその光景にショックを受け、何も出来ないでいた。

「いや、いや……っ」
アリアは後ろに下がり、
「いやあああああああああっ!!!!!」
激しい感情に呼応して、アリアを包んでいたぼんやりとした光は、はっきりとした緋色に染まる。
その様子を見て、シャーロックは満足そうに微笑んだ。
「これで準備は整った。さあ、指をこちらに。アリア君」
「あ、え……？」
錯乱状態のアリアは、シャーロックの言う通りに右手の人差し指を向ける。それはシャーロックも同じだ。
お互いに向けられた人差し指から光が放たれ――その２つの光はぶつかり、融合した。
「僕には、自分の死期が推理できた。どんなに引き伸ばしても、今日この日までしかもたないと」
二つの光は１つの球体になる。
「あれは……」
士は目を細める。その光が、単純なエネルギーの塊ではないことに気が付いたのだ。それはいくつもの次元を渡り歩く彼だからこそ理解出来る事柄だった。
「（時空が歪んでいる。他の世界か――あるいは他の時間か）」
士の些細な思考にも、シャーロックは微笑みを返した。
「僕はその日までに緋弾を子孫の誰かに『継承』する必要があった」
雪菜とコッコロは翔を抱きながら聞く。
「だが緋弾の継承にはいくつか条件があった。ひとつは性格だ。情熱的でプライドが高く、どこか、子供っぽい性格をしていなくてはならない。僕は――自分のことをそう思ってはいないけどね」
シャーロックは続ける。
「２つ目はアリア君が女性として心理的に成長する必要があったこと」
「心理的……」
雪菜はぽつりと、その言葉の意味を噛みしめた。

「3つ目、継承者は能力が覚醒されるまで、最低でも3年のあいだ緋弾と共にあり続ける必要があること」
　球体だった光はレンズのような形に変わっていく。
「これが一番難しい条件だったよ。これを成立させるために、僕は今日までこの緋弾を持ち続けて、さらに3年前の君に渡されなければならなかったからね。そのために、今日、この瞬間が必要だった」
　レンズに何かが映りだした。
「うそ……」
　アリアはレンズを見て驚愕する。
「これが、日本の古文書にある『暦鏡（こよみかがみ）』。時空のレンズだ」
　レンズには1人の女の子が映っていた。
「アリアさん？　あの人は一体……」
「あれ、アタシよ！　3年前のアタシ！」
「え!?」
　雪菜は想定外の、しかしどこか予想していた答えを受け取る。
　金糸のような亜麻色のツインテールを煌めかせている少女。目の色も赤紫色ではなく、サファイアのような紺碧の瞳をしている。髪どころか瞳の色も違うアリアだった。
「アリア君。君は13歳の時、母親の誕生日パーティーで狙撃されたことがあるね」
「……はい」
「撃ったのは僕だ」
「「ッ!?」」
　全員が目を見開いた。
「いや、これから撃つのだ。これはどちらの表現も正しい」
　シャーロックは左手に拳銃を持ち、構える。込める弾丸は『緋弾』――
――あの金属だ。
「緋弾の力をもってすれば、過去への扉を開くことさえも出来る」
　シャーロックは銃口をレンズに映ったアリアに向ける。
「僕は今から、3年前の君に『緋弾』を継承する」
「よけてッ!!」

雪菜は思わず、レンズに向かって叫んでいた。
レンズの中のアリアが雪菜の方を向き、背中はシャーロックのほうに――
「――!!」
銃弾はアリアの背中を貫いた。
レンズの中のアリアが倒れると、レンズも消滅した。
「……ッ!!」
アリアは自分の左胸を抑えていた。
この時の銃弾は心臓の近くで止まってしまい、手術でも取り出せない位置にあるのだ。今この胸の中にある弾丸が、今まで目の前にあった『緋弾』なのだ。
「緋弾には2つの副作用がある。1つは延命の作用。共にある者の肉体的な成長を遅らせる。アリア君の体格が、この頃からあまり変わらなくなったのはそれが原因だ」
シャーロックは続ける。
「もう一つは体の色が変わることだ。髪や瞳などが綺麗な緋色に近づいていく。今の君のようにね」
シャーロックは緋弾を失ったせいか、いきなり何歳か歳を取ったように見える。
「これで講義は終了だ」
一仕事終え、シャーロックは愛用のパイプを取り出した。

「そうか。話が長すぎて寝ちまうところだったぜ――――――――ザケルガッ!!」
「「ッ!?」」

シャーロックに向かって一直線に伸びる電撃。
シャーロックもこのときは驚いただろう。それでもとっさに砂の盾を出して攻撃を防ぐが、
ピキッ!!
「……ふむ。先ほどよりも、貫通力が上がっているね。それにしても……」
「ラウザルクッ!!」
金色の光を纏った翔がシャーロックの目の前にまで接近していた。
「しっかり額を撃ちぬいたと思ったんだけどね。どういうトリックだい？　それとも、そういう能力を持っているのかな？」
「さあな!!　得意の推理をしてみろよ!!」
それは復活した翔だった。

ふわふわとした感覚から、急激に意識が浮上した。
その時にはすでに理解出来ていた。今回の死闘を経て、新しい呪文が本に書き記されたことを。それも一気に3つも。
「そうか。話が長すぎて寝ちまうところだったぜ――――――ザケルガッ!!」
まず使うのは第五の呪文、『ザケルガ』だ。
ザケルが電撃を放射する呪文なら、ザケルガはより光線に近づき、貫通力を高めた呪文になる。
だが、いかに新呪文とはいえ、シャーロックの防御を突破できるほどの威力は無い。

「ラウザルク!!」
立ち上がった俺は第六の呪文、『ラウザルク』を使う。
次の瞬間、俺に落雷が落ち、金色のオーラを纏い始めた。これは純粋に身体能力を強化する呪文だ。術式兵装が解けてしまったため、この呪文を使った。
「しっかり額を撃ちぬいたと思ったんだけどね。どういうトリックだい？　それとも、そういう能力を持っているのかな？」
「さあな!!　得意の推理をしてみろよ!!」
俺にだって分かんないからな！　あのふわふわしてる時のことは！
これが最後の攻撃だ。
「バオウ――――」
第４の呪文、そして、ガッシュの最大呪文であるこいつに……!!
「――――ザケルガァァァァァッ!!!」
俺が放つのは単純な電撃ではない。バオオオオオオオオオオオッ!!　と雄叫びを上げる金色の龍だ。大きく口を開けたバオウは、あらゆる敵を飲み込む最強の呪文だ。
「これは……」
格納庫が金色に照らされる。それほどまでに大きな龍が口を開け――――シャーロックを飲み込んだ。
凄まじい閃光と雷撃が室内を満たす。バオウが消えてもしばらくの間空気が帯電しているほどだ。
そんな攻撃を受けてなお、
「そん、な……」
「流石の僕も、少し焦ったよ。中々の魔法だったよ。僕も見たことが無い魔法だった。でも、私を倒すことは出来ない」
「く……っ」
シャーロックの手には３枚のクラスカードが握られていた。そのすべてが朽ちて消え去っていく。
一か八かの攻撃だった。このバオウ・ザケルガはさらに強化される。というよりも強化されるまでは、必殺技にもかかわらず威力不足

が目立つ呪文だったのだ。
それでも今は雷の暴風よりも威力のある魔法だった。それでもダメだったのだ。
もう1発撃つほどの魔力はもう残っていない。
「これで万策尽きたのかな？　ならそろそろ僕は――」
「おい、ジオウ――夜月　翔!!」
「え？」
土が声を張り上げている。
「受け取れ!!」
土が何かを俺に投げてきた――

カメンライド２００９

門矢　士は旅人だが、同時に仮面ライダーディケイドだ。次元を渡る旅で何人もの仮面ライダーを見てきた。仮面ライダーではない、まったく別の戦士も見てきた。

そんな士にとっても、仮面ライダージオウというのは特別だった。

自分と同じように何人もの仮面ライダーの力を持ち、最強のライダーになる可能性を持つ存在。

前に見た仮面ライダージオウにはいくつもの可能性があった。孤独に覇道を極めた可能性も、仲間と共に決められた未来を乗り越えた可能性も。

「（今度はどういう存在になるのか、見極めさせてもらうぞ）」

今回１つ懸念があるとすれば、今までとは変身者が違う事だった。

私欲のままに振るえば世界を混乱させてしまうほどの力だ。邪悪な意思があればその時は、と思っていた。

邪悪な意思が無くとも、独善的な覇王になってはいけない。そう思って翔を観察してきた。

行動力があり、正義感もあるが、やや合理的になりやすい部分がある。時には周りを考えない行動をとってしまうこともある。それは危険な兆候だったが、

「いいだろう。そうやって、周りにいる奴らが支えてくれるならな」

別に士も、完璧を求めていたわけではない。

雪菜やコッコロ、口ぶりでは他にもたくさん、翔の支えになる存在がいる。足りない部分は周りに支えてもらえばいいのだ。

士も、そうやって仲間に支えられて旅をしてきたのだから。

「もっとも、女ばっかりっては、少し気になるところだがな」

ぼやきながらも、その手にはとあるアイテムが握られていた。自らの力の半分ほどを込めたアイテムだ。

見極めは済んだ。後は先輩として、少しだけ力を貸してやるだけだ。

「少しの間貸しておいてやる。おい、ジオウ――――夜月　翔!!」

士は大きく振りかぶった。

―――――――

ジオウの姿はアーマーの分一回り大きくなる。今までに比べると、より原型に近い姿だ。明確に違うのは頭部。平べったい画面に顔が映し出されるような形になっている。
「祝えッ!! 全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え過去と未来をしろしめす時の王者ッ!! その名も仮面ライダージオウ、ディケイドアーマーッ!! また一つ、特別なライダーの力を受け継いだ瞬間であるッ!!」
「お前、やっぱり言うんだな……」
後ろからは、待ってましたと言わんばかりのウォズの祝いの言葉が聞こえてきた。
「先輩、無事なのはよかったんですけど……」
「これは喜ばしいこと、なのでしょうか……?」
「ホント、どうなってんのよ……」
雪菜達はやっぱりこういう反応になるよな。そう言えば、ウォズの祝いの言葉を2回聞いた娘って今のところいないんじゃないのか?
《ライドヘイセイバー》
「専用武器まであるのか」
このまま反撃、といきたいところだけど、バオウ・ザケルガを使った反動か、体言う事を聞かなくなり始めている。
それにディケイドアーマーを身に着けたからと言って技量でシャーロックを上回ったとも思っていないからな。剣で斬りかかったらあっけなく返り討ちにされるだけだろう。
必要なのは小細工ごと撃ち抜ける圧倒的な火力だ。未完成のバオウでは貫けなかった防御をブチ抜けるほどの。
最初から必殺技をかます。それ以外に道は無い。
その前に気になっていることがある。ディケイドウォッチの形状だ。
「これ、もしかして――――」
ディケイドウォッチは他と形状が違う。つまり、
「こういう事か?」
俺はオーズウォッチを起動し、ディケイドウォッチに装填する。

《ＯＯＯ》
《ＦＩＮＡＬ　ＦＲＯＭ　ＴＩＭＥ！》
《Ｏ・Ｏ・Ｏ　ＯＯＯ！》
ディケイドアーマーがさらに変化した。
メインのアーマーはそのままに、各部がオーズのタジャドルコンボのものに。
「なるほど、こうやって違うライダーの力も使えるってことか」
それも、ただカメンライドするだけじゃなくて、強化形態だ。流石ディケイド、大盤振る舞いだな。
「いくぞッ!!」
ディケイドウォッチについているボタンを押す。
《Ｏ・Ｏ・Ｏ　ＯＯＯ！　ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
その音声と共に、俺の背中に翼が形成される。炎で出来た不死鳥の翼だ。
《ＲＹＵＫＩ》
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！》
龍騎ウォッチをライドヘイセイバーに装填する。
剣についている時計の針を回した。
《ＨＥＹ!!　ＲＹＵＫＩ！》
《ＳＣＲＡＭＢＬＥ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
待機音声が流れ始め、さらに俺の後ろ、空中にできた鏡からドラグランザーが出現する。
――――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ!!!!
ドラグランザーが俺の周りでとぐろを巻き、不死鳥の翼と混ざり合った。
「炎か……」
俺の周囲に圧縮されていく炎に、シャーロックの顔が引き締まる。
「――――!!!!」
俺は渾身の力でライドヘイセイバーを振り下ろした。不死鳥の翼を形作る炎を巻き込み、圧縮され、３枚のメダル状の形になる。

――ＧＹＡＡＡＡＡ!!!!
さらにそこにドラグランザーがブレスを吐きかける。
タジャドルコンボとサバイブの力を組み合わせた最強の火炎攻撃だ。
炎に包まれたメダルがシャーロックに迫る。
「はっ!!」
ここまで気合の入ったシャーロックの声は、今回の戦闘で初めて聞いた。
周囲の気温が急激に下がり、霜が降り始める。先ほど海を凍らせた凍結の超能力だ。だが下がった気温は俺の攻撃が通り過ぎると急上昇する。
作り上げられた氷の壁を溶かし、シャーロックへと命中した。
派手な爆発が起こった。
爆炎のせいで攻撃の結果が分からないが――やがて拍手が聞こえてきた。
「まわりにＩＣＢＭがあるにも関わらず火を使うとは……誘爆すれば我々はひとたまりもなかったよ」
シャーロックの声だ。皮肉を込めて言ってくれる。
「だが、実に見事だった」
ヤツは立っていた。服はボロボロになってはいたが。
「これは確かに僕の敗けだね」
自らの右手を見ている。右肩から先のスーツが無くなり、露出した腕全てが惨たらしく火傷していた。
「全然ぴんぴんしてるくせに、何言ってるんだよ」
今になって疲れが出て来た。今の攻撃ですらこのダメージとなると、少々うんざりした気持ちになってしまいそうだ。
「どんな攻撃が来るのか分かっていてここまでのダメージを受けた時点で、僕の完全敗北だよ。見事に推理を破られてしまったね」
シャーロックはＩＣＢＭに乗り込んだ。
「それと君を殺してしまってすまなかった。あとでどうにか生き返らせようと思っていたんだが、その必要はなかったね」

「人を1回殺しておいて、ずいぶんと軽い謝罪だなオイ!!」
　しかもそんな軽い調子で生き返らせるとか！
「ははは、本当に申し訳なく思っているよ。アリア君のためにも本当に手を尽くそうとは思っていたさ」
「は、え!?　アタシですか!?」
「ああ。今はそれでいいよ。これからゆっくりと理解していけばね……まあ、世界がそれを待っていてくれるかは分からないが……」
　突然話を振られて動揺するアリアに、シャーロックは笑いかけた。
「ジャグラス君。君のことは本当に都合よく利用してしまったね。本当に済まない。そしてありがとう」
「良いのか、俺を野放しにして？　今、『緋弾』がどこにあるのか、俺は知ってるんだぜ？　とりに行こうと思えば、いつでも取りに行けるんだ」
「僕の『緋色の研究』を聞いてそういう行動に出るのなら、それも仕方のないことだ。成功するかは……僕の口から言う事ではないか」
「……ちっ」
　ジャグラスは顔を反らす。
「そう拗ねないでくれ。僕が君にあげた立場、それもうまく利用して欲しい」
「……」
　あげた立場？　いったい何のことだ？　……まあ、それは後で考えるとしてだ。
「ずいぶん素直だけど、今から死ぬつもりか？」
「『老兵は死なず。ただ、消え去るのみ』。私から教えられることはすべて教えたよ。さぁ卒業式の時間だ。花火で彩ろう」
　シャーロックは笑い、ＩＣＢＭのドアを閉めた。
「曾お爺様ッ!!」
「アリア様、いけません!!」
　コッコロの静止を無視して、アリアはＩＣＢＭに駆け寄る。
「アリア君、短い間だったが楽しかったよ。何か形見をあげたいところだが、申し訳ない。僕はもう、君にあげるものを持っていないんだ」

シャーロックの声が中から聞こえる。
「だから名前をあげよう。僕は『緋弾のシャーロック』という2つの名を持っている。その名を君にあげよう」
シャーロックは最後の言葉を言う。
「さようなら、『緋弾のアリア』」
ＩＣＢＭがゆっくりと持ち上がっていく。
「アリア、危ないって!!」
俺は体を無理矢理動かし、上昇を始めたＩＣＢＭに縋りつくアリアのもとに行く。
「もう離れないと！」
「嫌よ！　曾お爺様がどこかに行っちゃう……！」
アリアの目には涙が溜まっていた。アリアにとってシャーロックは神様のような人と言っていた。アリアにとってシャーロックは敵ではなかったのだ。
《翔君》
「曾お爺様!?」
格納庫のスピーカーからだ。
《アリア君のことをよろしく頼むよ。あまり他の女性にうつつを抜かしすぎないように》
余計なお世話だ。
《そうかい？　僕の推理ではこれからも女性関係でたくさん苦労するのだが……まあ君のことだ。今回の様に僕の推理を覆してくれることを期待するよ》
「いえ、それは絶対に的中する推理です」
「はい。間違いございません」
「雪菜さん？　コッコロさん？」
《ははは、頑張ってくれたまえ、若人。それでは――――――離れなさい》
俺はアリアを無理やり引き離した。
「――――!!」
アリアが何かを叫んでいるが聞こえない。

一気に速度を上げたミサイルは、もの凄い速さで上昇した。
「黒影（ダークシャドウ）！　守ってくれ！」
アリア、雪菜、コッコロと一緒に、羽を広げた黒影（ダークシャドウ）に包まる。ロケットエンジンの熱は一瞬で通り過ぎた。
「曾お爺様……」
白い煙の軌跡を引きながら、何処までも高く昇っていくＩＣＢＭ。アリアはそれを呆然と眺めていた。
退場も派手だったが、これで終わったのか。
「先輩、終わったんでしょうか……」
「あるいは始まりかも？」
「もう、先輩は」
雪菜は困ったような顔をする。
「ははは」
全然冗談を言ったつもりは無かったんだけどね。
俺は変身を解除する。
「あ、そうだ」
手に持ったディケイドウォッチ。戦闘中のどさくさで渡されたけど、改めてお礼を言わないと。
「士！　……士？」
士はいつの間にかいなくなっていた。ウォズもだ。仕事は終わったって事だろうか。
だとしたら、
「ジャグラス」
「何だ？」
「今回は助かったよ。ありがとう」
イ・ウーのメンバーだったとはいえ、コイツの情報が無ければここに来れなかったのは間違いない。
「俺の目的は全く達成されなかったけどな。まあ、もっとも……」
ジャグラスはちらりとアリアを見た。
「もしもアリアに手ェ出したら、分かってんだろうな」
「そん時は、お前と戦うことになるか？　……はっ、馬鹿らしい。教授

の推理を狂わせるような奴と戦ってられるかよ」
　ジャグラスは後ろを向く。
「帰りはどうするんだ？　俺が学園島まで乗せて行ってやろうか？」
「海の真ん中にコイツを放置してはいけないだろ」
　なんせ原子力潜水艦だ。イ・ウーの犯罪の証拠も残ってるかもしれないし、六課に連絡して来てもらわないと。
「そりゃ仕事熱心なことで。それじゃあな。また会おうぜ」
「次も味方でな」
「だといいがな」
　そう言ってジャグラスも姿を消した。
「あれ？　そう言えばアイツらの船にはパトラと遠山　金一がいたわよね？」
　ジャグラスがいなくなってから、アリアが思い出したように言った。
「ああ、そうだっけな……」
　俺もすっかり忘れてた。まあ逃げられてるだろう。
「まあいいわ。ママの冤罪を晴らすためにも、そのうち絶対に捕まえてやるから」
「その時は俺も手伝うよ」
「当たり前でしょ！」
　アリアは笑って言った。
「アンタはアタシのパートナーなんだから!!」
「もちろんだ」
　俺もそれに応えるのだった。

「もちろん、先輩は私の先輩でもありますけどね？」
「わたくしの主様でもありますよ？」

「お、おお、もちろん」
雪菜とコッコロもニコニコと言うのだった。

幕間　桜の帰省

「ふう……」

ようやく見えてきた遠坂家の館を目の前に、桜は息を吐いた。

去年まではロンドンからここ、日本の冬木市に帰省していた。学園島から外に出るためには色々な手続きが必要だったためか、それともいつも一緒に帰っていた姉がいなかったからか、いつも以上に移動の疲れが溜まっているように感じる。

桜は館を見上げた。

小さいころに間桐に養子に出された桜には、この家で過ごした記憶がほとんどない。だが自分の一番最初の記憶がある場所であることは間違いない。

まだ何も知らなかった頃の楽しい記憶が。

もっとも、今更それに対してセンチメンタルな気持ちになるほど、桜は過去に囚われていない。思っているのは、『帰ってきたなぁ』という当たり前の感情だ。

夏ということもあり学園島ほどではないが日差しがきつい。そろそろ中に入ろうというところで、扉が開いた。

中から出てくるのは、現在ロンドンの時計塔に留学中であり、現在の遠坂家当主である少女、『遠坂　凛』。桜の姉だ。

「どうしたの？　そんなところに立って」

「ううん、ちょっとね」

スーツケースをからからと引きながら、玄関へ歩いていく桜。凛は大きく扉を開けて桜を迎え入れる。

「久しぶりね、桜」

「うん。ただいま、姉さん」

姉妹２人が久しぶりに顔を合わせたのだった。

第四次聖杯戦争終結後、凛と桜の人生は原作とは大きく違ったものになっていた。
まず桜だが、間桐家がなくなったことで、聖杯戦争が落ち着き次第、ウェイバー、ケイネスと一緒にロンドンの時計塔に渡った。
そこからエルメロイ家の改革に参加しながら、翔と一緒に戦うための魔術を研究した。
そして凛だが、後見人になるはずだった言峰　綺礼が死亡したことで、土地の管理がより面倒に。そのどさくさで、母親である遠坂　葵が病死してしまう。
そのせいでさらに土地の管理が難しくなるが、そこに割り込んだのがエルメロイ家、もといケイネスと切嗣だった。
元より聖杯の解体をするつもりだった２人は、余計な介入をされる前に全権を奪い取ったのだ。
その過程で姉妹は再会することになった。
それからは姉妹揃って、魔術の勉強に励むようになった。
遠坂の土地や館の管理はエルメロイ家の関係者が行い、夏には２人で帰省して様々な作業をすることになったのだ。
２人がそろってまず行うことは、
「……」
両親のお墓に手を合わせることだ。
幼い頃に死んでしまった両親だが、運命のめぐりあわせは引き裂かれた姉妹を再び引き合わせてくれた。
そのことを毎年報告しているのだ。
墓参りも終わり、土地の見回りをしながら次の場所へ歩く。
その合間、他愛のない話をする。
「それで、ずっと言ってた『愛しの君』には会えたんでしょ？　どうだったの？」
「もう、からかわないでよ、姉さん」

「だって気になるじゃない。桜の原動力になったヒーロー。会えたんでしょ？」
２人が再会した時、お互いの今までについてはある程度話した。当時は蟲の影響の治療中だったこともあり、桜が間桐で受けた非道な仕打ちについても、ぼかして伝えられた。
何の因果か桜がマスターになってしまい、サーヴァントを召喚したことも。そのサーヴァントに桜が助けられ、多くの人が救われたことも。
そして、今度は自分が助ける番だと言って、魔術の勉強をしてきたのだ。
桜の腕はいつしか、先に鍛錬を始めていた凛に並び、追い越し追い越されという関係になっていた。
凛も怠けていた訳ではない。むしろ遠坂家の当主として全力を尽くしていた。そんな凛に追いすがるのは尋常ではなかった。
そんな桜を見て、凛は聞いたことがあった。

「桜、何でそんなに頑張るの？　別に桜は無理して魔術を勉強しなくてもいいのに」
「あれ？　前に言わなかった？」
「聞いたわよ。聖杯戦争でお世話になった人に恩返ししたいんでしょ？」
「うん」
「でも、本当にいるか分かんないじゃない。未来から来たって言っても嘘かもしれないし」
「嘘じゃないもん」
「そ、そう……？　でも、仮に本当だとしても――」
「『仮に』？」
「そ、その人と再会出来ても、別に大丈夫、桜の力はいらないって言われるかも」
「その時は、私が勝手に助けるから」
「う、うん……そう……」

実際、再会した時はまだ翔に聖杯戦争の記憶が無かったため、拒否というよりも困惑されたのだが。
「（今思うと、めっちゃ重いわねこの娘）それで、どうなの？」
「それはみんながいるところで、ね？　多分みんなも知りたがってるから」
だが、こうして嬉しそうにしている桜の姿を見ると、そんな気持ちなんて吹き飛んでしまう。
それよりも、この焦らすような言い方。凛はその裏の意味を察してニヤニヤと笑った。
「ふ～ん、じゃあ何か進展はあったってことね？　期待してるわよ？」
「だから～！　もうっ！」
妹の恋路が順調そうなのは喜ばしいことだった。
そうして喋りながら歩みを進め――――目的地に到着した。小高い丘の上に立つ日本家屋だ。
チャイムを鳴らすと、すぐに扉が開いた。
「あら、桜ちゃん、凛ちゃん！　久しぶりね～」
「お久しぶりです」
そこから顔を出したのは、１０年前と変わらない、むしろより若々しくなった美貌を持つ女性、アイリスフィール・フォン・アインツベルンだ。
「暑いし中に入って？　もうすぐ切嗣と舞弥が買い物から帰ってくるから」
聖杯戦争中に拠点にしていた例の日本家屋。今ではこうして、衛宮家が日々の生活を営む拠点として使われていた。
「あら、桜、凛、来たのね」
「待ってました！」
アイリの後ろから顔を出すのは『２人』の子供だ。
１人は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。正確には『子供』と表現するのはおかしい年齢の少女だ。
アイリと切嗣の間に生まれた子供――――ホムンクルスであり、聖杯

戦争終結後、切嗣とオルタでアインツベルン家から取り戻した娘である。
もう1人は本当に子ども、今年で１０歳になる男の子だ。名前は『衛宮　拓哉』。聖杯戦争の後に誕生した、切嗣と舞弥の子供だ。
聖杯戦争中、最終的にアイリを犠牲にするための予行演習、裏切り慣れる為と言って切嗣は舞弥と性行為をしていた。
その行為の中で身ごもった子供だ。
その事実が発覚した時、それはそれでひと悶着遭ったのだが、それはまた別の機会に。
「久しぶりだね、２人共」
「うん、拓哉君も大きくなったわね」
拓哉と桜、凛は年の離れた兄弟の様に、小さい頃から仲良くしていた。何せ赤ちゃんの頃を知っているのだ。
ホムンクルスで成長が止まっているイリヤとは違って、拓哉は目に見えて成長している。
「はい、ありがとう、ございます……」
２人に視線を向けられると、拓哉は恥ずかしそうに下を向いた。
体が成長するという事は心も成長するという事。特に小学生も中学年から高学年に入り始めるこの時期は、異性への関心も出てくる。
そんな拓哉にとって、凛と桜は眩しすぎた。
そんな弟の様子をイリヤは面白くなさそうに眺めていた。
「ふーん、凛と桜も大きくなったわね。特に桜なんて。凛はもう少し頑張ったほうがいいんじゃない？　お姉さんなんだし」
「余計なお世話よ！　ってか何処見て言ってんのよ！」
「べぇつにぃ～？」
初めて会った時はほとんど同じだった背丈も、すっかり追い抜かされてしまった。
第二次性成長の前で成長が止まる体ではしょうがないが、イリヤも年々女性らしく成長していく２人をうらやましく思っていた。
そんな我が子達の成長をほほえましく見ていたアイリだったが、家の敷地に２人の人影を見て手を振る。

「2人共！　お帰りなさい！」
それは買い物に行っていた切嗣と舞弥だった。聖杯戦争中と比べると血色がよくなった2人は両手に買い物袋を持っていた。
「ただいま。それと、いらっしゃい、凛ちゃん、桜ちゃん」
桜と凛は頭を下げる。
「それじゃあ一休みしたら、いつものところ、行きましょっか」

アイリの提案で向かう『いつものところ』とは、銭湯だった。
駅前にあるスーパー銭湯。
ここは聖杯戦争中、翔やウェイバーたちと一緒に入りに来た場所だ。数年前、みんなで偶然通りかかった時に、気の向くまま入ったことがあった。
それ以来、みんなが集まった時には、この銭湯に入るのが定番の流れになっていた。
「それじゃあアイリ、また後で」
「ええ、先に上がったらいつもの場所で待ってて」
女性陣、男性陣に分かれて入っていく。
お風呂に入るのなら、当然服を脱がなければならない。
「む～……」
「どうしました、イリヤちゃん」
「桜、去年に比べてすごく育ってない？　色々と。すごく」
イリヤの一言に、全員の視線が集中する。
アブナイ気配を感じ取った桜は、自分の体をサッと隠した。淡い水色の下着に包まれた双丘が少しだけ形を変える。
「成長期だからじゃないかな？　最近運動もしてるし」

「運動？」
「向こうの学校は武偵高で、管理局にも入ったから。魔術補助抜きの体力訓練とかもあるの」
「なるほど、道理で……」
「ね！　おっぱい大きいのに体のバランスが取れてるよね！」
凛も興味深そうに桜の体を観察し始めた。イリヤは余計に興奮した様子で何度も頷く。
この年になって姉と一緒にお風呂に入ることも無ければ、裸体を見せ合うと言ったことは当然ない。
だが毎年みんなでこの銭湯に来ているという事は、毎年の成長を観察されているという事だ。
1年分おきに見られる方が、かえって変化がわかりやすいかもしれない。自分が諸事情のせいでほとんど成長しない体であることも、イリヤが特に反応する理由になっていた。
「凛は……まあ、そんなもんなんじゃない？」
実際に見られている分、その言葉には先ほどよりも憐みの感情が多分に含まれていた。
にっこり。
「どういう意味かしら、イリヤ？」
「痛い痛い!!　頭に食い込む指が食い込んでるっ!!」
めきめきと頭蓋骨に指がめり込んでいく。イリヤがじたばたと暴れるが、凛の握力は全く変わらない。
凛も言い返したかったが、成長しない幼児体形相手に『やーい、お前、幼児体形〜！』と言ったとして、それはこちらが空しくなるだけだ。
「ほら、3人とも。そんなに騒いでは周りの迷惑になりますよ」
「そうそう、積もる話はお湯に浸かりながらゆっくりとね？」
すでに服を脱いだ舞弥とアイリが止めに入ると、凛はあっさりとイリヤの頭蓋から手を離した。
「ごめんね桜ちゃん」
「いえ、大丈夫ですよ、アイリさん」

桜は笑って下着を脱ぐ。
「でも……そうなのね」
「な、なんですか？」
謝ってきたにもかかわらず、アイリはジロジロと桜の体を観察している。
すべて脱いでしまったことで、恥ずかしさは先ほどの比ではない。
「うん。ちょっとね――――」
アイリは桜の耳元に口を寄せ、
「――――無事、翔君とは結ばれたのね。良かったわ」
「え……ええっ!?」
『結ばれる』の意味を悟り、真っ赤になる桜。いったいドコを見てそういう言葉が出て来たのか、もちろん思い当たる部位はあるが、まさか、そんな。
「ど、どうしてわかったんですか……？」
思わず聞き返す桜。
「そうね。今、分かったわ」
「今？　……あっ！」
ようやくカマをかけられたと理解するが、今さら遅かった。
「まったく、アイリも人が悪い」
「ふふ。だって桜ちゃん達も、私にとっては娘みたいなものなんだもん」
話しながら、女性陣は湯船に向かうのだった。

「「「乾杯!!」」」
グラスが打ち合わされた。
テーブルに広げられるのは宴会用のオードブル。これもみんなが集まった時の恒例の光景だった。
銭湯から帰って、今度は夕飯の時間だった。
親戚がお盆に集まるように、この家族がこうして集まるのは当然になっていた。
「それで再会は出来たんだね」
「はいっ。今年の４月に！」
切嗣の問いに桜は笑顔で頷く。
「良かった。あれから学園島の学校に入学する学生を調査してみたが、彼は発見できなかったからね」
「もう、切嗣ばっかり先に桜ちゃんに連絡貰ってるんだから」
切嗣は一足先に桜からメールを受け取っていた。そのことにアイリは膨れていた。
「アイリ、いまだに電子機器が苦手ですからね」
この１０年の生活で、舞弥からアイリへの呼び方は『マダム』から『アイリ』に変わっていた。
「そ、そんなことないわよ？　最近はパソコンだって使ってるし！」
「そうなんですか？　だったらメールアドレスさえあれば送れますよ」
「え、あどれす……？　ごめんなさい。私、検索しかしてなくて……」
携帯電話で電話する程度なら問題なく行えるようにはなったが、それ以上はなかなか難しかった。
「まあまあ、それを言うなら姉さんも苦手ですからね」
「うっ」
話題がそちらに流れてからというもの、すっかり黙っていた凛が喉を詰まらせた。
「な、何よ！　デバイスを使えるのがそんなに偉いの!?　別にいいじゃない、困ってないんだから！」
魔術師は現代の機械に弱い。この場でその原則に当てはまってい

るのは凛とアイリだけだった。
　魔術師の間にも技術革新の波が来ていた。いくら魔術師の家に生まれたと言っても、年頃の子供が電子機器を触れないという事はありえなくなってきている。
「イマドキ普通よ。私も拓哉も、もう自分のデバイスを持ってるんだから」
「ええっ!?　拓哉君も持ってるの!?」
「はい！　５年生になった記念に買ってもらいました！」
　イリヤは得意げに鼻を鳴らしながら、拓哉は両手で持って自分の顔を半分隠すように自分のデバイスを披露する。
「私が拓哉君くらいの時は携帯を持ってる子だっていなかったのに……」
「そのくらい、日々色々と変わってきてるってことよ、姉さん。姉さんもデバイス持てばいいのに。ちょっといいＡＩを積めば、音声認識で自分で操作する必要はほとんどないよ？」
「別にいいわよ……あったってどうせうまく使えないし。余計なお金を使うつもりは無いわ」
　凛が得意とする宝石魔術はその名の通り宝石を使用する、というか使い捨てにする金食い虫のような魔術だ。遠坂家も貧乏という訳ではないが、別に必要と感じていないことにお金を使いたくはないのだ。
「それは……そうかも……」
　桜は桜で、凛が携帯電話すらまともに扱えない、魔術師の典型のような人物であることを思い出した。
「でも、せめて携帯くらいは使えるようになったほうがいいよ。連絡も取りやすくなるし、今回の翔君のことも――」
「ああ、それは別にいいのよ。来月には実際に見れるから」
「はい……？」
　凛の意味不明な言葉に、首を傾げる桜。
「ふふん、桜には言ってなかったけどね」
「言ってなかった？　電話が使えなくて連絡出来なかったの間違い

じゃない？」
　イリヤに睨みをきかせる凛。
「言ってなかったけどっ！　――――――私、来月から学園島の時計塔支部に行くから」
「……え？」
「ウチの師匠からの指令でね。エルメロイ先生を手伝って欲しいって――――――桜？　聞いてる？」
　もちろん聞いてはいた。
「（姉さんが来るのは素直にうれしいけど、翔君に会う？　姉さんが？　……大丈夫かな？　その、色々と……）」
　桜は心の中でそう思うのだった。

８月の終わり　～各国の反応～

どこかでウォズが本をめくっていた。
「さあ、これにて長かった８月も終わりを迎える。イ・ウーのリーダーであるシャーロック・ホームズが消えたことで、世界各国には新たな混沌が生まれようとしていた」
ウォズは物語を読み上げる。

時間は前後する。
シャーロックと翔との戦闘が行われている丁度その時、少し離れた場所でその戦いを観戦している女性がいた。
メイド服をモチーフにしたような服と、頭には機械で出来たうさ耳を装着した女性、篠ノ之束だ。
イ・ウーの内部に設置された監視カメラを使って、ポップコーンとコーラを用意して、まるで映画を鑑賞するように。
強力な電撃によってカメラがショートした時も、その次に放たれた炎によってカメラが吹き飛んだ時も、ポップコーンを摘まんでいない薬指と小指だけで、画面の映像を復旧させて見せる。
「にゃはは～、うんうん。確かにすごいパワーだねぇ。でも、どの計器でも判別は出来ない。分かるのはただ未知のエネルギーだってことかぁ、あー、面白いなぁ」
どこまでも楽しそうにその死闘を観戦する姿は、確かに『天災』と言われるに恥じないものだった。
「あのゾンビ君は研究する暇なく捕まっちゃったからねぇ。監獄結界に収容されちゃったから脱獄させるのも一苦労だし。その点、あの子

ならうまくやってくれそうだよね～」
ポリポリと、口に入れたポップコーンを咀嚼する。
そうして見ていると、戦いの決着がついた。
「ふーん、やるじゃん」
束も翔がシャーロックに一矢報いることが出来るとは思っていなかったため、呑気な口調だが、素直な賞賛を述べていた。
束は画面を切り替える。
そこに映るのは空に昇っていくミサイルだ。中にはシャーロックが乗っている。どんな技術を使っているのか、超音速に到達したミサイルに追従してカメラが移動していた。
だがそれもここまでだ。
過ぎ去る時代に縋りつくような真似を、篠ノ之束がするわけがない。ミサイルを追っていたカメラが徐々に速度を落とし、画面のミサイルが小さくなり始める。
束は指を銃の形にして、画面に向ける。
「さようなら、シャーロック・ホームズ。今までこのつまらない世界を守ってくれてありがとう――これからはこの束さんの時代だぜ♪」
撃ち抜く真似をするのだった。

「今年の島は、いつにもまして騒がしかったですね」
「ええ、本当に。島の方には死者も出てしまったというお話で」
ラ・フォリアとポリフォニアが座っているのは、アルディギア王家御用達の空中艇の椅子だ。
怪獣騒ぎが集結し、すべての公務を終わらせたアルディギア外交団

が、今まさに帰国しようとしているのだ。
すでに離陸の準備が整えられ、後は国に向けて帰還するだけになっている。
そんなひと夏の大仕事を終えた王女王妃の前に、1人の女性が進み出た。
「お話し中失礼します。『例の件』について、ご報告したいことが」
彼女の名前は『ユスティナ・カタヤ』。この夏、極秘裏にとある人物について調査を行っていた女騎士である。
「ああ、どうでしたか？」
「やはり情報には間違いないようです」
「まあ……」
「そうですか……」
王妃、王女は難しい顔をして唸った。できれば間違いであった欲しかった情報なのだ。だが、認められてしまったものはしょうがない。王族として、務めを果たすだけだ。
「どうされますか？」
「今は護衛をつける程度にして下さい」
「今回はお会いにならないという事ですか？」
「ええ。今は他の国の目もありますからね」
「まだ内密に。今後も、表立って公表するわけにはいきませんけれど」
ユスティナの疑問に、ラ・フォリアとポリフォニアは今後の対応を告げた。
全てを聞いたユスティナは一礼して去っていく――――前に、ラ・フォリアに呼び止められた。
「そうそう、もしも何かあれば、彼に助力を求めて下さい。これ以上なく力になってくれるはずです」
「はぁ、この方は……いえ、分かりました」
「ラ・フォリア？」
ユスティナは手渡された写真に首を傾げつつも、再度一礼して去っていく。
ポリフォニアもラ・フォリアの行動に首を傾げていた。

「大丈夫ですよ、お母様」
「――――そうですか。あなたがそう言うのならば、わたくしは何も言いません」
ポリフォニアは安心したように微笑んだ。よくできた娘のことを信頼しているのだ。
「それにしても、お父様にも困ったものです」
「そうですね。まさか本当に隠し子なんて。お婆様が知ったら大変なことになりますね」
何気なく交わされる言葉に、護衛の騎士たちが青くなる。ラ・フォリアの祖母であり、ポリフォニアの母は、やるときはやる女性だという事が知られているからだ。
「出来れば今回、事情を説明して国に迎えたかったのですが……」
「他の国の諜報機関の目がありますからね。スキャンダルの種を与える必要もないですから。ですが……」
ラフォリアは窓の外へ視線を向けた。
「すぐに戻ってくることになりそうですね。この島には」
笑いながら言うのだった。

「つまり、断るって事か？」
「はい。申し訳ありませんが……」
アリアはキャーリサに頭を下げていた。護衛の最終日にパトラに攫われてしまったアリアは、結局雇い主のキャーリサへのあいさつが出来ていないままだった。
それを今日行っているのだ。
合わせて、イギリス行きの話の返答もした。答えはもちろん『ＮＯ』だ。

「そうかそうか。まあいいさ。今日までご苦労だったな」
「はい、失礼します」
アリアは退出する。
「やっぱり断られたか」
キャーリサの性格から言って、そこまで細かい理由は聞かない。普段の態度から、おそらく断られるだろうという事も分かっていた。
「イ・ウーの壊滅。アイツが戻ってきたってことは、神崎・H・アリアはイ・ウーのトップにはならず、緋弾の継承だけが済んだってことだろーな」
他の誰かに渡る前に緋弾を確保したかったという気持ちはあるが、こうなってしまってはしょうがない。
無理に刺激したところで、暴発してしまっては意味がない。強力な力だからこそ、適切なコントロール下に置かなければいけない。
『軍事』に強いキャーリサだからこその考えだった。
「それよりも、今のホームズのパートナー……何者だ？　シャーロックから一本取るなんて、タダ者じゃー無いが、もしくはこれもあの探偵のシナリオ通りなのか。宝石翁の動きも気になるな」
イ・ウー関連の話が出て来たと思えば、狙いすました様に時計塔支部を作った宝石翁。魔術師が世界のバランスや緋弾に興味があるのかなど知ったことではないが、何かあると思ってしまう。
状況は大きく動いた。
「とりあえず、次の手を考えるとしよーか。我が祖国のために、な」
そう言って、キャーリサは獰猛に笑うのだった。

「はー、今日でこの島ともお別れですかー、残念です」

そう言ってため息を吐くのはランドソルの王女、ユースティアナだ。世界各国のおいしいものが集うこの島はまさに楽園、国の料理も嫌いではないが、種類ではどうしても敵わないのだ。
そんな娘の様子をいとおしそうに眺めていたランドソル王だったが、一瞬で王の表情になり、ユースティアナに語り掛ける。
「ユースティアナ、少しいいかい？」
「はい？　なんですか、お父様？」
めったに自分に向けない真剣な表情に、ユースティアナの背筋も伸びる。何か重要な話があると確信したのだ。
「国に戻ったら、武者修行の旅に出てもらうよ」
「武者修行、ですか？」
「そうだ。王族の伝統で、王位継承者には王位を継ぐ時に、武者修行、冒険をして見識を広めるというものがある。ユースティアナも、それをしなさい」
「ええっ!?　お父様、もう引退しちゃうんですか!?」
「あなた、いくら何でも早いんじゃ……」
ユースティアナは突然の話に驚愕し、その母も唐突過ぎる話にストップをかけようとする。
「いや、なに、何も今日明日に引退するという意味ではないよ。ただ……」
「ただ？」
「うむ、ただ、妙な胸騒ぎがするのだ。出来る用意はしておかなければいけない」
今回の会議で、ランドソル王は何かを感じ取っていた。自らの知らない場所で、巨大な陰謀が動き出しているかのような、そんな嫌な予感を。
そして世界各国が、そのたくらみに対して一致団結できるとは、とても思えなかった。それどころか、他国を出し抜いて利益を出そうとする国すら現れるかもしれないとも。
自分に何かあってからでは遅い。そう考え、少し早いが準備を進めることにしたのだ。

「それって、真那さんもついてこないってことですか？」
「そうだ。自分の力で冒険し、見聞を広めてきなさい」
「……わかりました!!　私、頑張って冒険してきちゃいますね!!」
むんっ、とやる気を出すユースティアナの後ろで――――――真那の目が妖しく光っていた。

各国が自国で用意した飛行機に乗り込んでいく中、滑走路では一際目立つデザインの乗り物があった。
黒を基調にした他とは違う機体は、デビルーク王国の特別機だ。世界でも進んだ科学力を持つデビルーク王国は、飛行機も特殊だった。
その中、他とは違う王専用の座席に座ったギドと、親衛隊隊長のザスティンが最後の調整の会話を行っていた。
「……んじゃあザスティン、話は通しておいてくれ。ララの奴は後でこっちに向かわせる」
「はっ、分かりました」
ザスティンは一礼して船を降りていく。今から帰国するというのに、数人の部下を引き連れて。
指示を出したギドの後ろから、双子の姉妹が顔を出した。
「ねー、父上、あの話って本当なの？」
「私も、詳しく聞きたいです」
ナナとモモだ。窓の外、機体から離れていくザスティンを見ると、この２人は黙っていれなかった。
こうして帰国当日になった今でも、親に聞かされた言葉を信じられないでいた。姉が大好きな２人にとって、姉が――――ララ・サタリン・

デビルークが、デビルーク王国を離れ、留学するなどという話は。
「詳しい話も何もねぇよ。決まった話だからな」
ギドは面倒くさそうに頬杖を突く。
「まあ、アイツに言われちまったからな……」
ギドは一足先に帰国した自らの妻のことを思い出した。
一国の主であるギドだったが、自らの妻には頭が上がらないのだった。
前々からギドの強引なお見合いに良い感情を抱いていなかったこともあり、ララのあの日の出来事を聞いたことで、いつの間にかこんな流れになっていたのだ。
「良い相手を見つけるには冒険が必要、だとよ……ったく、自分のガキの頃に重ねてんじゃねぇよ」
ギドと妻の出会いも、ギドが武者修行に出ている時代、妻が暴漢に絡まれている場面だった。
「でもっ！　でもさ！　この島は危ないじゃん！　あたしの友達も大変な目に遭ったし！」
「そうですね……あんな騒ぎがあった後ですし、留学するにしても別の場所にしたほうが……」
「この島以外に、そう簡単に王族を受け入れてくれるような場所が無いな」
ナナとモモの提案をあっさりと切り捨てるギド。
様々な要素が混じり合っているこの島。実際、危険も多いが懐も深かった。たった数日で、王族の留学を受け入れてくれるくらいには。
「とにかく、もう決まった話だ。文句はララか母さんに言え」
「「う……」」
姉妹はそろってひるんだ。どちらも一度言ったことをそう簡単に覆すような人物ではない。
「分かったら座れ。もう出発するぞ」
こう言われてしまえば、これ以上反論は出来なかった。２人はしぶしぶ自分の席に座る。
「なー、モモ。どうする？」

「どうすると言われても、これ以上我が儘を言ってもどうしようもないでしょう？」
「いっそのこと、あたし達もこっちに留学するとか？」
「あのね……それは姉さまだから許されたのよ？　何の理由もない私達に、許可が下りる訳ないじゃない」
「だよな～、姉さまと違って、あたしたちはお見合いとかしてなかったし……あ、でもあたしはこっちに友達がいるし」
「無理よ。いくらなんでも、友達じゃ」
　ナナの幼稚な考えを、モモはあっさりと否定した。
「えー、友達と学校生活とかしてみたかったのに～」
「はぁ……今年は楽しめたみたいで何よりよ」
　そんな会話をしていると、離陸の時間が近づいてくる。

「お疲れ様です、真夜様」
　恭しく礼をするのは執事服を着た老人だ。
　７０歳を超えるにも関わらず、背筋が伸び、口調もはっきりとしている。この常夏の島でも黒い執事服をしっかりと着こなし、汗一つ掻かない――――歴戦のバトラーだ。
　そんな彼の目の前を主が通り過ぎる。四葉家の当主、四葉　真夜だ。
　主が通り過ぎるのを待って、葉山はその背中について行く。
　余計な護衛は存在しない。この２人だけだった。
「よろしかったのですか？」
「ええ。存在を確認できただけでも、今回は良しとしましょう。彼は逃げませんよ。むしろ、向こうからこちらに関わってくるでしょう」

「ははは、それは面白い」
そう言って葉山は自分の席に向かった。
「久々にわくわくしましたね、まるであの夏のようでしたね」
懐かしそうに目を細めるのだった。

世界各国の要人が学園島から離れていく中、逆に学園等に向けて進んでいる船があった。
船の名前は『洋上の墓場（オシアナス・グレイヴ）』。俗にメガヨットなどと呼ばれる外洋クルーズ船である。
東欧にある最古の夜の帝国、『戦王領域』から出発し、遠路はるばる学園島へ向かって舵を切っていた。
この船の主は、『戦王領域』の貴族、真祖に近い実力を兼ね備えていると言われている吸血鬼、ディミトリエ・ヴァトラーである。
吸血鬼であるため外見と年齢は一致しない。しかし、金髪碧眼の美しい容姿は、伝説の中の吸血鬼通りだ。
ヴァトラーは愛船の屋上デッキでのんびりと月光浴を楽しんでいた。サマーベッドに横たわり、のんびりと赤い液体が注がれたグラスを傾けている。
「こちらでしたか、ヴァトラー様」
「ああ、キラかい。どうだい、君も」
「いえ、ボクは」
キラ、と呼ばれた吸血鬼は、ヴァトラーから勧められたグラスを丁寧な所作で断る。
「ヴァトラー様、今回はどうして学園島に？」
今回の出立は、とても急なものだった。国の許可を事後承諾にして

までのスピード出発だったのだ。
キラ含め、部下にも詳しい事情を話さずに出発した。振り回される部下に文句はなかったが、理由を知りたいと思う心があるのも事実だった。
そんな気持ちを知ってか知らずか、ヴァトラーはあっさりと答えた。
「面白い情報が入ったからサ」
「それは……？」
「ああ。何でも、イ・ウーが壊滅したとか、ネ」
「それは……！」
裏世界でバランスを取っていたイ・ウーの壊滅、それは確かに大きな出来事だ。
「そして、それを成し遂げた人間が、学園島にいるとか」
ニヤニヤとヴァトラーは笑う。
「クズ鉄と魔法を使って作られた人工の大地。ずいぶんと面白いガラクタを作ったものだね。これだから人間は面白い。自然の摂理に逆らっているからこそ、面白い事件が絶えないのかもしれないけどサ」
けなしているとも褒めているともつかない態度を取るヴァトラー。
「あの島の先任大使だった、ブラド様は……」
「ああ、今は法を犯して監獄結界の中。あの人も力で負けて逮捕されたって言うんだから面白いヨ」
ヴァトラーは犬歯をむき出しにして、獰猛に笑う。それこそがヴァトラーの目的だった。
ヴァトラーは自他ともに認める戦闘狂（バトルマニア）だ。強い相手と戦えるのなら、周りにどんな被害が出ても全く気にしないという最悪な性格をしている。
同属の吸血鬼すら喰ってしまうその姿は、同属喰らいの戦闘狂として恐れられている。
「ああァ、待ちきれないな。いったいどんな強敵が待っているんだろうねェ」
ヴァトラーの笑い声が、夜空に響き渡るのだった。

8月の終わり　～蒔かれる種～

「そして、新たな種は蒔かれた」
島から飛び立っていく飛行機を見送りながら、ウォズはページをめくった。

ここは遠阪邸。滞在期間中に凛が私室として使っている部屋だ。
「それじゃあ姉さん、明日も早いし、私はもう寝るから」
「そうね。と言っても、『向こう』ですぐに会うことになるけどね」
「そうだね」
桜は笑って頷く。
凛が学園島に来るとカミングアウトしたのは、何の冗談でもなかった。それどころか、このまま時計塔に戻ることも無く学園島へ向かうつもりだ。
お互い、冬木への滞在時間は知っていた。桜が帰る日に合わせて凛も計画を立てていたのだ。
流石に飛行機の便まで一緒ではなかったが、明日の夜には凛も桜も学園島にあるベッドで眠っているだろう。
「ふふ、私、意外とワクワクしてるみたい。桜の『カレ』がどんな人なのか」
「あはは……まあ、翔君も忙しいし、すぐに会えるかは分からないけどね……」
「大丈夫よ。今は一緒に住んでるんでしょ？　だったら姉として、ちゃんとあいさつしないと」
「う、うん……」

桜は翔と一緒に住んでいることは話してしまっていた。
だが、２人で住んでいるわけではないことは話していなかった。シェアハウスと言えば聞こえはいいかもしれないが、実態は世間の常識とはかけ離れた爛れた空間だ。
タイミングを逃した桜は、とうとうそのことを言えずにここまで来てしまった。
「（どうせだったら、最初から正直に言えばよかった……！）」
嘘とは長引けば長引くほど訂正し辛くなる。隠しておこうにも、凛は会う気満々だった。それを訂正させるのは不可能だ。
「（寝ればいい考えが思いつくかも……）それじゃあ、おやすみ、姉さん」
「うん、おやすみ、桜」
そう言って桜は自分の部屋に戻っていった。
「さてと……」
凛は荷造りを再開した。着替えを詰め込み、魔術の触媒になる宝石のストックを確認していく。
「ん？　これって……」
凛は宝石箱の中に転がっていたモノを手に取る。
「何だったかしら……」
少なくとも凛の知らないものだった。懐中時計のような形だが、時を刻むはずの針が無い。その代わり、『２０１２』の文字があった。
「誰が入れたのかしら……」
悪戯にしても、こんなおもちゃを荷物に忍ばせるような相手に心当たりが無かった。
「……まあいいわ」
凛は特に深く考えずに、荷造りを再開するのだった。

「ふう、明日から学校かぁ」
机に座るメガネの少女、『暁美　ほむら』は憂鬱そうに息を吐いた。
楽しかった夏も過ぎ去り、明日からは学校が始まる。その事がほむらの心に重くのしかかっていた。
それは単純に休みが終わるという気持ちからではなく、武偵としての生活が始まることに対しての不安だった。
ほむらにはある種の才能があった。豊富な魔力に加え、レアスキルに近い反則的な魔法、『時間停止の魔法』が使えたのだ。
だがその反動か、他の魔法がまともに使えなかった。基本の基本である身体能力強化と念話がかろうじて使えるという程度だ。
さらに言うと、ほむらは絶望的に運動が苦手だった。普通の銃や剣の扱いも、徒手格闘もうまく無い。
そのため、せっかくの能力も宝の持ち腐れになっていたのだ。そもそも性格的に他人と争うことが絶望的に向いていなかった。
どうせ高い魔力を持って生まれたのだからと選んだ道だったが、それが仇になっていた。親友である『鹿目　まどか』がいなければ、この夏にはドロップアウトしていてもおかしくは無かった。
「はぁ、銃の手入れしとこ……」
デバイスの格納空間から拳銃を取り出す。机の上に敷物を敷き、分解を始めた。ここ一月まともに撃っていなかった銃はそこまで汚れていない。一種の現実逃避のための行為だった。
攻撃魔法が苦手なほむらにとって、拳銃は大切な獲物だ。撃つ時には決まってへっぴり腰になり、マズルフラッシュに驚いて目を瞑るせいてまともに当たらないとしても。
そんなほむらの部屋、閉められていたはずの窓を通り抜けるものがあった。黄色い人魂だ。その中心には『２００７』が刻印された時計がある。ソレは、音も無くほむらの背中に吸い込まれていった。
「……？」
何か気配を感じたのか、後ろを振り向くほむらだったが、その時に

はすでに体の中だ。
ただ、足と服の隙間から、砂が落ちるだけだった。
さらさらと。落ちるだけだった。

「――――ふっ!!」
アイズの剣閃が何人もの人間を吹き飛ばした。実際に切り裂いたわけではなく、纏っていた風を叩きつける打撃のような技だが、コンクリートの壁に叩きつけられて一撃で昏倒させられる。
「このッ!!」
横にいた男がマシンガンを構え、弾丸をばらまく。しかしアイズを取り巻く風によって、全ての弾丸が明後日の方向に飛んでいく。
「はっ!!」
上段から剣を振り下ろす。上から下に叩きつけるような暴風が、男を地面に押しつぶす。
「ふぅ……」
「よし、これで全員だな」
今日のリーダーであるリヴェリアの声で、アイズは戦闘の緊張を解く。それと同時に纏っていた風が収まった。
夏の騒ぎに乗じて増えてしまった犯罪者を狩る依頼を受けたロキ・ファミリアは、連日島中の犯罪者を逮捕して回っていた。
アイズが剣を鞘に納める。するとティオナが勢いよく、後ろからアイズに抱きついた。
「アイズ～！　なんだか最近調子いいんじゃない？」
「そう、かな？」
「ああ。前よりも魔法の精度が上がっているように思えるぞ」

「ありがとう、２人共」
２人に褒められたアイズは、嬉しそうに表情を変えた。
そしてその夜。アイズはロキの部屋で、ステイタスの更新を行っていた。
「ほい、終わりや」
「ん……」
上に跨っていたロキがアイズからどける。
ステイタスの更新のためには背中を露出する必要がある。まくり上げていたシャツを元に戻しながら、アイズは起き上がった。
「ふ～む、ふむふむ」
ロキは、アイズのステイタスの書かれた紙を見てうんうん唸っていた。ステイタスを更新すると、まるでプリンターの様にこの紙が作成されるのだ。
「リヴェリアに聞いたんやけど、最近調子いいみたいやなぁ」
「うん。そうなのかも」
「ステータスもずいぶんと伸びとるよ。数値にも現れるなんてなぁ」
「そうなの？」
紙に書かれている文字はアイズには読めない。そのためどのくらい数値が変わっているのかが分からないが、実際そうなのだ。
自分の子供の変化には敏感なロキ。何か理由があるのか気になっていた。
「なんかコツとかあるん？」
「うーん？」
アイズは少し考え、
「鍛えてるから？」
「ぷっ、あはははっ！　それはそうやな！」
「うん。最近は鍛えてる」
「うんうん、それじゃあ、今後も続けてもらおかな」
「うん」
そう言ってアイズは部屋を出て行った。
「鍛えてるかぁ。やー、若いってええなぁ」

「あなたが言うと、別の意味に聞こえますね」
「何でや!!」
独り言のつもりで言ったロキだったが、アイズと入れ替わるように部屋には行ってきたフィンにツッコまれてしまう。
２人は向かい合って座る。
「それで、やはり今回も」
「そやな、今回も要請があればウチらが手を貸すことになった」
今回も、というのは数年前に有ったＪＳ事件のことだ。あの時もロキ・ファミリアは機動六課と協力して事件の解決にあたった。
「分かりました。それでは、いつでも動けるように準備しておきます」
「ん、よろしく頼むわ～」
話題が移る。
「それと、イ・ウーの件ですが」
「ああ、リーダーがいなくなって事実上の壊滅したって？」
「それをやったのが、夜月　翔だとか」
「驚きやなぁ。ベートとの戦いを見た時からやるもんやとは思ってたけど、まさかここまでとは」
あはは～、お気楽に笑うロキだったが、内心では、
「（ま、あの夜月　翔ちゅーガキ、あの予言に関係しとるらしいしなぁ。むしろ頭角を現してきたってとこか……）」
「どうかしましたか？」
「……そやな、フィンには伝えといたほうがええかもしれんな」
ロキは予言の話をした。全てを聞いたフィンは頭を抱えていた。
「はぁ、そういうことは先に言っていただかないと……」
「あはは～、まあまあ、細かいことはええやん――そんじゃ、そっちも合わせて頼むわ」
「――はい。わかりました」
一瞬で真面目な表情になったロキに、フィンも硬い声で返すのだった。
一方アイズは、自らの部屋に戻っていた。
物が少ない簡素な部屋だ。アイズに何かを集めるような趣味が無

いからか、無駄な小物の類が全くない。
そんな中でも、ひときわ目立つものがあった。
「これを拾ってから、なんだか調子がいいな」
それは『２００５』と書かれた時計だった。数日前、依頼を受けに行く直前で、部屋の中に転がっていたことに気が付いたモノだ。
帰ってきたら捨てようと思い、帰ってきてからは明日捨てようと思い……いつの間にか机の上の棚に定位置を作っていた。
確かにアイズとしても、このところ自分の鍛錬がいつも以上に身になっていると感じていた。しかし、他から見ても、さらにはステータスという数値にも現れるなんて。
実は最初のころ、アイズが効果を実感し始めた頃に、リヴェリアにこの時計を見せたことがあった。何かそう言うまじないのかかった品ではないのかと思ったからだ。
リヴェリアの結論は『ただの玩具』。この時計に特別な力が無いというものだった。
「でも、実際効果が出てるわけだし」
たとえ特別な力が無いとしても、人のプラシーボ効果というのは馬鹿に出来ない。
「私は、もっと強くならないといけない――――」
だったら、玩具だろうとうまく利用しなければ。
「明日は休みだし、しっかり鍛えよう」
そう考えたアイズは、部屋の電気を消し、布団に潜り込むのだった。

「あ～、よかったぁ」
「ああ。病院には予備電源があるからね。病院が直接襲われない限り

は集中治療室の患者さんは大丈夫なんだよ」
　担当医の言葉に、ほっと胸をなでおろすユウキ。
《もう、慌てすぎだよ、ユウキは！》
「だってだって！　外は本当にすごいことになってたんだよ！」
　スピーカーから聞こえてくる声に、ユウキはムキになって言い返した。声の主はユウキの目の前で横になっている人物だ。
　透明なアクリルガラスに遮られた無菌室、そこでベッドに横たわりながら、頭を巨大な機械にすっぽり覆われている。女性と言われなければ性別も分からないほど、その体は痩せ細っていた。
　この少女の名前は『紺野　藍子』。ユウキの双子の姉に当たる人物だった。
　紺野家は父、母、ユウキ、藍子、全員揃ってとある難病にかかってしまった。
　唯一の希望は学園島で開発されていた試験薬だった。その希望に縋り、そして家族の中でユウキだけがこうして回復した。外で飛び回れるくらいに。格闘技の大会に出場出来るくらいに。
　だが、家族で平等に薬の効果が出たわけではなかった。
　父と母には効果が表れずにそのまま亡くなってしまい、姉である藍子は容体を安定させることしか出来なかった。
　それ以来、藍子は医療用のＶＲ機器であるメディキュボイドに繋がれ、そこで生活するようになったのだ。
「それじゃ、ボクはそろそろ帰るね」
《うん、それじゃまたね～》
　別れを告げてユウキは病室出る。そして扉が閉まると同時に、担当医が口を開いた。
「紺野さん、少しいいかな？」
「はい？　なんですか？」
　その内容は、年の割に飄々としているユウキの表情を凍り付かせるに十分なものだった。
「え、それ、って……」
「もちろん、今日明日なにかあるのか、という訳ではないけどね」

それは、藍子に投与している薬の効果が薄くなってきているという話だった。
「で、でも！　このままじゃ……！」
「紺野さん、落ち着いて。何度も言うけど、今日明日何かあるわけじゃないよ」
「……はい」
何年も、それこそ両親が逝ってしまうその時も診てくれていたこの担当医のことを、ユウキは信頼していた。
だからこそ短い言葉で落ち着くことが出来たのだ。少なくとも表面上は。
「大会に出るって言ってたから、その期間中は言わないようにしてたんだけどね」
「え、じゃあ……」
「兆候自体は今年の４月から出ていたんだ。でも――――」
ユウキの視界が暗くなる。
「（そんな、４月、から？　ボクは、ずっと何にも知らないで……）」
「――――さん？　野さん？　紺野さん！」
「は、はいっ！」
「大丈夫かい？　一度、落ち着ける場所に移動したほうが良いかい？」
「い、いえ！　大丈夫です!!　すみません、今日はこれでっ」
ユウキは逃げるように病院を後にした。
治療のためにこの島に移り住んでからというもの、両親の代わりに姉妹２人で助け合って生きてきた。
両親が死んでしまってもこうしてやってこれたのは、姉がいたからだった。お互いに励まし合っていたからだ。その姉がいなくなってしまう、かもしれない。
「どうしよう、どうしよう……！」
ユウキの心はかつてないほど、ぐちゃぐちゃに乱れていた。
いつの間にか、ユウキは自宅に辿り着いていた。一人暮らし用の学生寮だ。
「はぁ……」

少しだけ落ち着いたユウキはため息を吐きつつ扉を開けた。簡素なワンルームだが、年頃の女の子の部屋らしく、可愛らしい家具や小物が並んでいた。
そんな部屋の中に、
「やあ、帰ってきたな」
「っ?! だ、誰ッ!?」
見知らぬ男が座っていた。
相対するまで気配に気づくことが出来なかった。
「あなた、誰? ここ、ボクの部屋なんだけど?」
「まあそう言うな。姉の話を聞いてきたんだろう?」
「な、どうして、そのことを……」
ユウキは背筋に悪寒が走った。そのことを知っているのは自分と担当医だけ、なんていうつもりは無いが、少なくとも知らない人物が知っているはずがない。
「そんなことはどうでもいい。説明したところで、理解は出来ないだろうからな。重要なのは、俺がお前の姉を救う手段を持っているという事だ」
「……何それ。信じられないよ」
「それは道理だな。だが、いいのか? 俺の手を振り払っても。唯一の家族なんだろう?」
「……っ」
「それとも、都合の良い奇跡やヒーローを待つのか?」
「ボクは……」
ふらふらと伸ばされていくユウキの手。
その手に、『２０１５』と書かれた時計が手渡された。

「今回の事件で、我が魔王の存在は広く知られ、我が魔王の力も次の段階に進みつつある。物語は、一度幕が下ろされ、また開かれる」
ウォズは一度本を閉じた。
「再び幕が開かれる時を、お楽しみに」
そう言い残し、その場から消え去るのだった。

後処理（８月）

「せ、先輩！　それよりも!!」
「お、おう？　なんだ？」
　このまま綺麗に終わると高をくくっていた俺は、雪菜の剣幕に圧倒される。
「あああ主様!!　その頭……!?」
「アンタ……大丈夫なの？」
「え？　ああ……おう」
　意識したとたん、足元が怪しくなる。今までどぱどぱだったアドレナリンが切れたのか、積み重なった疲労を思い出したのか、それとも単純に血が足りないのかは分からないが。
　そんな俺を慌てて支えてくれる雪菜。
「あ、ありがとう……」
「いえ、そんな……先輩、やっぱり……」
「結構疲れたかもな……」
　そのまま地面に寝かせてもらう。
　俺の額にはいまだに大量の血液が付着していた。シャーロックに撃たれた部分だ。
　俺が奇跡的な復活を果たしたせいで忘れていたが、シャーロックに撃たれていた事実は本当なのだ。
　俺を見てそれを思い出したのか、コッコロとアリアも涙ぐんでいた。
　……でも、割と意識ははっきりとしているというか、や、朦朧とはしてるんだけど、死ぬような感じじゃないというか。
「当たり前だ。我々が防御したのだからな」
「アア。間一髪ダッタケドナ」
　俺の横からにゅっ、っと出てくるレプリカ先生と黒影（ダークシャドウ）。
「そ、そうだったのか？」
「我々にはこれと言った指示を出していなかったからな」
「コッチデ勝手ニヤラセテモラッタッテワケダ」

「う……」
確かにシャーロックとの戦いで、この２人には特に何も言ってなかったけど。
でも助けてくれたって訳か。あの土壇場で。
「ああ。緋弾の一連の出来事に気を取られて銃弾すら防御出来ていなかったからな」
「れぷりかガ無理矢理後ロニ引ッ張ッテ、俺ガ何トカ盾ニナッタンダ」
「ギリギリだったが、防御することが出来た。幸運だったな、額の皮を切るだけで済んだ」
「ああ、それで……」
なんてことはない。俺は単純に仲間に助けられたってことだ。こうしてたくさん出血しているのは、どこかのＢＬＥＡＣＨの一角さんが言ってたよな。額をケガするとたくさん血が出るって。
本当にギリギリのタイミングだったからこそ、俺が死んだと思わせることが出来たってわけだ。俺自身もそう思ったくらいだ。
や、あの名探偵にそんなものが通用するかは分からない。もしかすると全部分かっていてあんなセリフを吐いたのかもしれないな。
「傷自体は深くない。安静にしていれば命に別状はないだろう」
「アア。幸イ、ココニハ傷ヲ治セル嬢チャンモイルシナ」・
「はいっ、お任せ下さい！」
コッコロが力強くうなずいた。
「じゃあ、とにかく今は横になってなさい。助けは私たちが呼んでおくから」
「コッコロさん、先輩をお願いしますね」
「お任せ下さい。お二人が戻るまで、主様には回復魔法をかけておきますね」
そう言って雪菜とアリアはどこかに向かっていった。
「それでは主様、失礼いたします」
「コ、コッコロ？」
２人を見送ったコッコロは、迷うことなく俺を膝枕した。もちろん俺は何も要求したりしてない。

「な、何をやっているんですかね？」
「はい。このような冷たい床に、いつまでも主様を寝かせているわけにはまいりません。せめて頭だけでも、と思いまして……その、ご迷惑でしたか？」
いや、まさか。
揃えた両足は俺の頭がはみ出してしまうほどの幅しかない。こんなか小さな女の子を、この戦場まで連れてきてしまっていたんだな……
「何をおっしゃいますか。常に主様と共に生き、寄り添うのがわたくしの役割でございます。それでは、そろそろ」
コッコロが風の精を呼び出し、回復魔法の体勢に入る。
「お願いな。よっと」
「あっ」
コッコロを金色の光が包む。俺が発動させたプリンセスナイトの力だ。
コッコロはため息をついた。
「まったく。主様？　主様は楽にしていてくださいませ」
「でも、コッコロも疲れてるだろ？　こっちの方がコッコロの負担は軽くなるんだからさ」
「それは、そうでございますが……」
不服そうにしているコッコロだが、
「いえ、主様のお力を借りたからには、主様の治癒、完璧にこなして見せます……！」
決意に満ちた表情で宣言した。
周囲を飛んでいた風の精の数が3匹に増えた。その精霊たちが俺達の上を回っている。
「精霊よ、主様の傷を癒したまえ……オーロラっ!!」
精霊から発生していた魔力の黄緑のオーラが、まるでオーロラの様に様々な色に光り輝いた。
その光が俺に降り注ぐと額だけでなく、体中の傷が癒されていくのを感じる。

この魔法は『ユニオン・バースト』、ゲーム内では必殺技として扱われる技だ。
「ふう、ふう……主様、どうでしょうか？」
余程魔力を込めたのか、コッコロは息を切らし、額に球の汗をかいていた。
「ああ、ありがとう。もうほとんどよくなった、と思う」
失われた血液すら補充されるのか、朦朧としていた意識すらはっきりしていた。
「それは、本当に、良かった、です……」
とさ、という軽い音が聞こえた。
「コッコロ!?」
俺に膝を貸していたコッコロが、後ろに倒れていた。
「申し訳ありません、主様。わたくしも、少々疲れてしまって……」
「お疲れ様、ゆっくり休んでくれ」
「はい。それでは、お言葉に甘えさせていただきます……すう、すう」
コッコロはすぐに寝息を立て始めた。
硬い床に寝せるのはかわいそうだと思い、先ほどとは逆に、今度は俺がコッコロを膝枕する。
「あとは待ちか……」
俺も目をつぶって力を抜く。
色々あったけど、流石にこれで終わりだな……や、こういうことは言わないほうがいいのか？　フラグになっちゃうかな？
実はこの隙に、学園島が違う勢力に襲撃されて……そんなことになったら、本当に対処しきれないな。そうなったら本当に諦めよう。
「ようやく一人になったな、夜月　翔」
「ッ!?　士!?」
どこかに消えたと思ったら、突然出てくるな！　でもまあ、言いたいことはあったし、再会できてよかった。
「ディケイドウォッチ、ありがとう」
「気にするな。可愛い後輩のためだ」
「後輩、か……」

つまりは、士は俺も仮面ライダーだと言っているのだ。その事実にちょっとニヤケそうになる。
「何をニヤニヤしている。気持ち悪いぞ」
「それは悪かったな……」
「まったく、そんな年の幼女を膝にのせてニヤニヤするなんてな」
「理由が違う!!」
「あんな何人も女を侍らせておいて、説得力が無いな」
どうやら士の中でも、俺のキャラがそっち方面で固まってきてしまったようだ。
「それで？　わざわざ他の人がいなくなるまで待ってたってことは、他人に聞かれちゃまずい話なんだろ？」
「察しがいいな」
そう言いながら、士は俺達の写真を撮った。
おい、なんで写真を撮ってんだよ！
「だが、他人に聞かれたくないというよりは、あの男――ウォズに聞かれたくない話だ」
「じゃあ話ってのは……」
「ああ、ウォズについてだ」
俺は話を聞いた。前に会ったという『ウォズ』の話を。
「クォーツァーねぇ……」
歴史の管理者、クォーツァー。その目的は平成という歴史を消滅させること。そしてウォズはそのクォーツァーの一員だということ。
さっぱり分からん。平成という歴史を消滅させるってなんだ!?
「というか、やっぱりアイツは敵なのか？」
色々と胡散臭い動きをしているアイツだが、確かに、ずっといいように操られているという感覚はあった。
「それは分からない。だが、俺の知っているアイツはそう言う存在だったというだけだ。世界が違えばそれは別人になるからな」
「そう、だな……」
胡散臭いと言えど、アイツの行動のおかげで助かった部分も大きい。

不確定な情報で無下にするのは申し訳ない気持ちもある。
「だが、仮に奴がクォーツァーだとすれば、この世界だけの問題じゃなくなる可能性がある」
「……そんなにか？」
「平成仮面ライダーの要素は、この世界で無視できないモノになっている。それがいきなり消えるようなことがあれば」
「何が起こるんだ？」
「正確には分からないが、ロクでもないことが起こるのは間違いないな」
例の3年後の問題に加えて、今度はウォズの問題も出てきたってことか。いや、もしかすると3年後の問題にウォズが関わっているのかもしれない。
「だから忠告だ。アイツには心を許しすぎるな。手懐ける自信があるなら話は別だがな」
考え込む俺に、士はそう言うのだった。

言いたいことを言った士は、またすぐに姿を消してしまった。あの感じからして、もうこの世界にはいない。いざとなれば戻ってくるのかもしれないけど、なにぶん相手は通りすがりだ。変に期待するのはやめておこう。
そうしてしばらくすると、雪菜とアリアが戻ってきた。
海の真ん中だけあって手持ちの通信機は使えず、通信室にまで行っていたらしい。
そうして連絡を取った管理局、というか、俺が所属する予定になっ

ている特務六課が迎えに来てくれることになった。知っての通り、怪獣騒ぎのせいで他の部隊は動けないからな。
甲板に出て空を見ていた俺は、近づいてくるヘリの音に立ち上がった。
《翔！　聞こえてる!?》
念話の有効範囲に入ったのか、フェイトさんの声が聞こえてきた。
「はい。ここにいますよ」
それに応えると、ヘリのドアが開いて人が飛び降りてきた。
「躊躇なく飛び降りるもんな……」
その光景を見て、俺はぼそりと呟いた。パラシュートをつけていたとしてもこの高さでは意味がないし、命綱を付けているわけでもない。
常識で考えれば、普通に大怪我するところだけど、その人は一直線にこちらに飛んでくる。
「翔！　大丈夫なの!?　どこもケガしてない!?」
「は、はい。大丈夫ですよ。全然。みんな無事です」
フェイトさんのすごい剣幕に、若干驚きながらも応える。
「下にみんないます。アリアの奪還も出来たので――」
「うん。その話は戻ってからね」
フェイトさんはニコリと笑った。
「覚悟しておいてね？」

「それで？　そのほかに言う事はないん？」
「い、いえ。以上になります……？」
俺は六課の部隊長室で気を付けしていた。

現在時刻は夜が明けて昼を過ぎた。またまたヘリの中で仮眠を取ったが、戦闘の疲労で限界が近い。怪我が治っても疲労までは取れなかった。
もう立ったままでも眠れそうな気分だ。でも、この場の緊張感がキツイ。胃がキリキリする。
部隊長室にいると言ったけど、いるのは八神さんだけではない。
机に座る八神さん、その両脇を固めるのはフェイトさんになのはさん。さらにその隣には2人よりも厳しい顔をしたシグナムさんとヴィータさんだ。
アリアはアリアでどこかに行ってしまった。まあ今回に関しては、アリアは被害者だ。後で取り調べを受けさせられるかもしれないけど、今日の内は特に何もないらしい。
雪菜とコッコロもそう。年下ってことで、今日は帰ってる。
つまりは俺一人で、この面々を正面から受け止めているという事だ。
唯一の救いはクローディアと蛇倉さんがニコニコ、にやにやしていることだな。この2人は特に怒っているという訳ではないらしい。
「そか……」
八神さんは椅子に深く寄りかかる。背もたれがギシっ、と音を立てた。
「君の上司として、知らない人にはついていかない、なんて小学生でも分かってることをわざわざ説教したくはないんやけど？」
「……まだ、六課に正式に所属したわけではないので。その辺りは何とか……」
「じゃあ自分、六課に所属したらこういうことはもうしないって約束できる？」
「そー、れは……」
まあ、無理だよな……その時が来れば、静止の声なんて無視して動いてしまう事だろう。
「はぁ……まあ、それが君のええとこではあるのかもしれないけどなぁ」

「今回のような行動を取るというのなら、注意せざるを得ない。それは分かるな、夜月　翔」
「……はい」
　八神さんのため息に、シグナムさんが合わせた。
「まあでも、注意したからって治るもんでもないんやろ？　なぁ、なのはちゃん？」
「にゃはは、なんで私を見るのかな～？」
　なのはさんは苦笑いして頬をかいた。
「でも、そうだよ。本当にケガしてからじゃ遅いんだからね」
「そうだな。周りをうかうか、ヒヤヒヤさせんのは1人で十分だぜ」
「ヴィータちゃん？　その理論だと夜月君の行動は認めちゃうことになるよね？　まさかとは思うけど、私はその数に入ってないよね？」
「さあ？　どーだかな？」
　……もしかしてなのはさん、昔のヤンチャぶりでずっと弄られてるのか？
「まあまあ、みんな。それはもう昔のことだしね？　……もう危ないことされてドキドキするのは、ね……」
「フェイトちゃんまで……」
　緩んでしまった空気を、シグナムさんが引き締める。
「んんっ！　……それで、もう一度聞くが、インターミドルの会場に出た怪人はお前が？」
「はい。その通りです（あれは怪人じゃなくて仮面ライダーなんですけどね……）」
　そういえば、ヴィクトーリアやエレミアに説明するって話だったのに、完全に無視してたな。
　ま、そうそう会うわけないしいっか。あの様子だと、ジオウが俺だってわかってないみたいだし。
「お前が倒したというのなら、それでいい。その場にいた2人はお前の仲間か？」
「仲間……敵ではないと思いますが」
　士は通りすがっている人だし、ウォズは良く分からない人だ。

「その場で集まったのか？」
「そうですね」
　それは間違いない。
「ふむ……カメラの映像によると、その２人は島の住民票には登録されていない不法滞在者だ。だが、特にピンク色の装甲を纏っていた人物は、その後も怪獣の殲滅に力を尽くしてくれていた」
「ピンクじゃなくてマゼンタですね」
「何？」
「いえ、何でも？」
　思わず突っ込んでしまった。
「まあいい。できればその人物たちからも話を聞きたかったのだがな。知り合いではないのならしょうがない」
　連絡先も知らないし、俺にもどうしようもないな。
　そうして、なんとかこの場を切り抜けることが出来たのだった、

依頼完了報告

「あ〜、やっと帰ってこれた〜」
疲れた体を引きずって、俺はようやく家に到着することが出来た。
もう寝る。仮眠とかじゃなくてしっかりとベッドで寝る。おいしいものを食べてぐっすりと。
そう思ってドアノブにかけた手が止まる。
「まさかとは思うけど、ここに入ったらまた怒られるんじゃ……」
妹達の一件を思い出す。あの時ドアを開けた先には、激怒したみんながいたんだよな。
雪菜とコッコロが一緒に行ったとは言え、敵の本拠地に勝手に乗り込んだわけだしな。
「いやいや、まさか」
乾いた声で笑いながら、ドアを開けた。
「ただいまー……」
恐る恐る中に入る。
「誰もいないか？」
びくびくしながら家の中に入っていくが、家の中はしんと静まり返っていた。
「まさかな……」
こんな連戦はもうやめて欲しいが……まさか、イ・ウーの誰かが敵討ちに来たか？　それともウォズがまた意味不明なことを言いに来たか？
そんな風に警戒していたが、
「帰ったか」
「お疲れ様です、翔。今回も大変でしたね」
リビングにはアルトリアとオルタが普通にいた。
「ただいま。みんなは？」
「皆、働きに出ている。クロとティナは友の家に行っている」
「雪菜とコッコロは上で寝ています」
「あー、そっかそっか」

怪獣騒ぎのせいで、どこもかしこも人手が足りないんだったな。
今はお昼を回って午後の3時だ。そりゃまあ、まっとうな人間や企業なら活動している数の方が多いだろうな。
「ふー……そっかそっか、みんななんか言ってた？」
「いえ、特には？」
「兵は拙速を尊ぶ、という言葉があるだろう。今回に限って言えば、お前の判断は正しかった」
「そうですね。元々こちらは隙を突かれていたのです。限りある戦力で、最高の戦果を。もともと戦場に『安全』なんてありませんから」
2人はずいぶんと高評価をしてくれているみたいだ。
「他の者もおおむね同じ考えだったぞ」
「はい。それよりも、あなたが戦っているレベルを知って、やる気を出していましたよ」
それならよかったけど。
「それをいうなら、2人ともお疲れ。どうだった？　この時代に召喚されて、初めての戦闘だったけど」
この2人には怪獣の相手も任せていたんだったな。
「問題は無かったな」
「そうですね。前に召喚された時と大きな違いはありませんでしたよ」
「ま、流石に宝具を2回使われると俺の方が持たないけどな……」
この2人の場合、剣技だけでも十分の場面も多いかもしれないけど、切り札が使えない状態で戦闘してもらうのは少し怖い部分もある。
話をしていると、俺の端末が振動した。
「ん？」
メールだ。聖天子様から。
内容は……なるほど、明日依頼満了のあいさつを正式にしたいってことね。俺は了解の旨を返信した。
「ああ、そう言えば」
今回、聖天子様の依頼を達成したから、新しい女の子を召喚できる

んだったな。
　確認すると、女の子ガチャのポイントが増えていた。正式な完了報告前だが、依頼期間が過ぎていれば、依頼完了扱いになるらしい。
　そのことを2人に伝える。
「そうなんですか。私としては複雑な気分ですが、早めに召喚したほうがいいでしょうね」
「召喚したらお前も少し休め。その間に、私達がここのルールを叩き込んでおこう」
「新人いびりはやめてくれよ……」
　弱気な女の子なんて、オルタの視線が向けられただけで物陰に隠れてしまうだろう。オルタとか、その辺りの配慮なんて絶対できないだろうし。
「それじゃあ……」
　俺は女の子のガチャを回した。
「……」
「翔？　おや？」
「おい、どうした？　む？」
　2人も何かに気が付いたようだ。
「この気配、召喚されたのはサーヴァントですか？」
「そのようだな。もっとも、すでに最良の私がいるからな。出番はないだろうな」
「私が？『我々が』の間違いでしょう？」
　2人は呑気にしゃべっている。
　だが俺は、内心焦っていた。慌てていた。ともすれば、アリアが攫われてしまった時と同じくらいに。
「（ヤバいか？　ヤバいよな？　絶対ヤバいな!!）」
　カチャカチャと、鎧が擦れる音と階段を下ってくる音が聞こえてくる。もう時間が無い。
　俺のデバイスに表示されていた女の子の名前は、

『モードレッド』をゲットしました。
「セイバー、モードレッド推参だ。父上は――――」
「――――」
召喚の口上を述べていたモードレッドだが、その威勢の良いセリフがぴたりと止まる。
ひやりとした殺気が俺の後ろで研ぎ澄まされていく。
「ちょま――――」
俺の静止の声よりもはるかに大きな轟音が響き渡る。魔力の波動が部屋に亀裂を入れ、物理的な衝撃が壁を突き飛ばした。
「ああ……」
気が付いた時には壁に大穴が空き、モードレッドの姿は消えてしまっていたのだった。

「おはようございます……大丈夫ですか？　ずいぶんと疲れているようですが」
「いえ、聖天子様の時間を無駄に取らせるわけにはいきませんから」
アハハ、と笑う俺。
横の雪菜とコッコロが本当に大丈夫なのかと言いたそうな顔を向けてくる。
「ダイジョブ、ダイジョブ」

「そうですか……？」
「主様……なんとお労しい……」▪
あの後は本当に大変だった。
いつか来るとは思っていたけど、ここで来ることになるとはね……こういう、仲の悪いキャラクターが召喚されてしまうことが。
来るとすれば、やっぱりＦａｔｅ系のキャラクターだろうとは思っていた。アルトリアが来た時点で、爆弾になりそうなキャラクターはいた。そしてそのキャラクターが召喚された。それだけの話だ。
あの時、オルタを止めるために結局令呪を使うことになった。この世界での初令呪だったな。
だが、その時にはすでに壁は切り裂かれ、大穴が空いてしまっていた。

昨夜、リビングにて
「やっぱりダメか？」
「反逆者と肩を並べるつもりは無い」
「――――」
オルタは絶対に曲がらず、アルトリアは徹底的に無視だ。
「……父上がなんと言おうと、今のマスターはこいつだ。マスターが言うなら従うだけだ」
「よくも吠えるな」
「オルタ……」

３人の仲は絶望的だった。
その為、現在モードレッドは部屋に籠っている。軟禁状態と言っても良い。
サーヴァントであるため食事も排泄も必要もないため、本当に部屋から出てきていない。まだ１日も経っていないが、多分ずっと。
オルタも、とりあえず見ただけで攻撃を始めるような状態ではなくなってくれたけど、同じ空間にずっといられると、こっちが参ってしまう。

こうしてまた、悩みの種が増えてしまったという訳だ。
「疲れているように見えても、それはこちらのお話なので……」
「そ、そうですか？」
はぁ、壊れた壁は狂三の能力で直してもらったからいいんだけどね。長年の不和はそううまくはいかないな。
「それは……大変でしたね」
「いえいえ」
聖天子様は気の毒そうな顔をするが、
「それでは改めまして」
雑談になってしまいそうだった空気を引き締める。
「今回の護衛の件、ありがとうございました。このあいさつで、その任を完全に解きたいと思います」
「いえ、こちらこそ、ご贔屓にしてもらって、ありがとうございます」
思い返すと、武偵として正式に受けた仕事は聖天子様のものしかないと思う。ああ、探し物とかガイアメモリ関連の仕事もしたっけか。
そうだとしても……なんだこれ、俺はずいぶんと偉い人とかかわりがあるな。Ｒランクみたいじゃないか。
「でも申し訳ないですね。８割くらい遊んでいましたから」
「ですが、楽しいひと時でございました」
「そうですね。結果的に私には何もなかったので良かったのではないでしょうか」
聖天子様も楽しめたのなら何よりです。
実際の襲撃でもそれなりに役に立ってたよな？　立ってたよね？
「はい、それはもちろん」
聖天子様は笑顔で答えてくれた。
「最初の襲撃を乗り切れたのは翔さんのおかげですよ。最終日も、怪獣を撃退できたのは翔さんのおかげでしたし」
「先輩はすぐに離れてしまって分からないかもしれないですけど、あの後周りの反応がすごかったんですよ」
「はい。特にラ・フォリア様とライネス様が」
「なぬ!?　そうだったのか……」

緊急事態だったから会話もそこそこで、この夏はもう会うことも無いだろうけど、次が怖いな。
「特にラ・フォリアさんは先輩にすごく興味を持ったみたいで。だから先輩、次に会う時には気を付けてくださいね」
「はい。主様は女性の方には流されてしまいやすいので」
「そうですね。あの顔になったラ・フォリアは何かを企んでいますから」
「え、聖天子様まで……？」
ちょっとショックだ。
「い、いえ！　もちろん翔さんが頼りになるのは重々承知しているのですが！　私はラ・フォリアの強引さも知っているので！」
ちょっと大げさなくらい謝ってくる。
もちろん冗談だ。ラ・フォリアの思考が読めないのは俺も知ってるし、いざ何か言われれば、自在に操作されてしまう自信がある。
「そこに自信を持たないで下さい……」
「油断してると既成事実を作られて、アルディギアに連れて行かれるかもしれないな」
「さ、流石にそのようなことは、しないとは……」
否定しようとした聖天子様だったが、途中で声がしぼんでいく。やりかねないと思われたんだろう。
「それで、ですね。次のお話ですが」
「次ですか？」
はて、次とは何だろうか。このほかに重要なことがあったっけ？
「はい、次の護衛の件についてです」
「え、ちょま、次って、そういう『次』ですか!?」
さらりと出て来た言葉に、俺も滑らかに言葉を出せなくなる。
「はい、そのつもりでお呼びしたのですが」
さも当たり前のように言って来る。
「せ、聖天子様？　先輩は来月から管理局の特務六課に配属されるので、これまでの様には時間が取れないと思うのですが……」
「それは存じています。なので、予め予定を聞いておきたいと思いま

して。それに八神さんなら、多少の融通もききますから」
　そんな、権力をチラつかせなくても。
「どうしてそこまで俺を？」
「どうして、と言われましても……翔さん以外を雇う理由がありますか？」
「む……」
　前回の暗殺を防ぎ、内部にいたストーカー（保脇）を炙り出した。もちろん聖天子様には傷一つつけていない。
　今回も結果的に成功。俺は怪獣騒ぎであちこちを飛び回っていて、しっかり護衛をしていたかと言われれば微妙だけど。
「それは私が言ったことですから。結果的にあなたは、私の身だけではなく、島も守り切った。実績と信用を考えれば、『もう一度』という話が出るのは難しくありませんよ」
「まあ、そうです、ね……」
「ちなみに、すでに許可はとってあります」
「はっや……」
　行動が速い。
「一つお聞きしますが……」
　雪菜が口を開いた。
「先輩を再び雇用する、というのは聖天子様の判断ですか？」
「え？　ええ、そうですよ。天童閣下にも確認したところ、すぐにＯＫを貰えたので」
　ああ、天童菊之丞閣下ね。そう言えば護衛初日にちらっと会ったな。
「……それは天童閣下から言われたものではないんですか？」
「そうですね。閣下に言われる前に私から提案しました」
　雪菜は何を考えて行っているんだろう。
「いえ、このまま先輩が聖天子様の護衛を続けていくと、勝手に公認の護衛として認識されてしまうのではないかと思ったんです」
「あー、なるほどね」
　長く続けていれば、その人がやるのが当然になる、という感覚だ。

「それに先輩も聖天子も、ラ・フォリアばかり警戒していますけど、今一番先輩に近い権力者は、聖天子様ですから」
「ですがわたくしは」
「分かっています。聖天子様にそんなつもりは無いことは。でも、聖天子様の上にいる人にとってはそうじゃない」
「それは、そうですね……」
「えと……？」
　中々話が難しいのか、コッコロは首を傾げていた。
　つまり、天童菊之丞が俺に対して何かアプローチをしていないかという事だ。
「はい……翔さん、申し訳ありませんが、今回のお話は一度保留にさせていただいても――――」
「いえ」
　俺は聖天子様の声を遮り。
「やります。何かあれば知らせてください」
「翔さん？」
「先輩っ」
「上の思惑が何であれ、それは聖天子様には関係ないでしょ。危険があるというのなら、どうにかしますよ。俺が出来る範囲で」
「ですが、それは……」
「『自分から選ぶ』のと『いつの間にか取り込まれている』のでは全然違いますから。俺はあくまで聖天子様の味方です。そちら側の、他の誰の命令も聞くつもりはありませんよ」
「っ、あ、ありがとう、ございます」
　当たり前のことだ。
「……はぁ、先輩がそういうのなら。分かっていたことですけど」
「そうでございますね。それが主様です」
　雪菜とコッコロは呆れとも、あきらめとも言えない表情で、そう言うのだった。

その夜。
「失礼します」
「ん、ああ。これは聖天子様。どうされましたか、このような時間に、このような老体の部屋に」
聖天子は菊之丞の部屋を訪れていた。菊之丞は聖天子の補佐官という事もあり、聖天子と住まいを共にしているのだ。建物は別になっているが。
時間も時間だ。２人共寝間着に身を包んでいる。
だが、そこまで長い時間話すつもりは無い。確認したいのは１つだけだ。
「一つ、お聞きしたいことがあります」
「ふむ、何でしょうかな？」
「私の護衛、翔さんのことについてです」
「フム？」
菊之丞はとぼけたようにあご髭を弄った。
「彼に何かしようと考えていますか？」
駆け引きなど考えない直球の言い方だった。
「何か、と言われましてもな。もっと具体的に言っていただかなくては」
「それは……ですから、私を起点にして彼を利用して、我々の利益になるようなことを考えているのでは、と」
「ですが、彼の雇用を続けたいと申されたのは聖天子様では？　私はそれに対して、首を縦に振っただけに過ぎませぬ」
「それでは、そのようなことは何も考えていないと？」
「それはもちろんでございます。聖天子様のご友人相手に、そのよう

なことは」
「……そうですか。分かりました。お時間を取らせました」
一応の納得をした聖天子は菊之丞の部屋を出ていくのだった。

六課入隊　編

お見舞い

シャーロックとの決戦から2日が経った。
イ・ウー関連での進展は特にない。メンバーの誰かが襲撃しに来たりとか、そういうことは全くなかった。黒服の人たちが口止めには来たけどね。
ボストーク号の内部捜査も、シャーロックが集めていた美術品しか残ってなかったらしい。
「それで、そのジオウが問題なんでしょ？」
「そうですね……」
ベッドに横になっていた楯無さんがタブレット端末を俺に向けてくる。
今は病院に来ていた。今回の件で知り合いが何人か入院しちゃったからな。
その1人がこの人だ。
話を戻すと――そう、ジオウも問題だった。というか、ジオウが一番の問題になりつつあった。
タブレットでは動画が流れている。
インターミドルで俺が戦っている動画だ。
「まったく現代人ってのは。勘弁してほしいですよ」
アナザーオーズとはインターミドルの会場で戦ったわけだけど、その時の戦いを撮影していた人がいたのだ。それも1人や2人ではない。
「決勝戦ってだけあって各国のテレビ局も入ってたし、世界的な有名人になっちゃったわねぇ」
「顔が出ていないのが救いでしたね」
ジオウへの反応は様々だった。
観客の危機に颯爽と現れたヒーローという意見もあれば、アナザーオーズからウォッチのパワーを受け取った部分を切り取って壮大な

マッチポンプだと言う人もいる。一番酷いものだと、ウルトラ怪獣の騒ぎも俺（とディケイド）の仕業っていうものもあるな。
世間というのは勝手なものだ。勝手に盛り上がってくれるよ、ホントに。
「仮面ライダーって名前も定着しそうよね」
「そうなんですよね……」
仕切り直しになった決勝戦で、見事勝利を収めたのはエレミアだった。
俺を『仮面ライダー』と呼んでいたエレミアは、優勝会見であの時のことを質問され、『仮面ライダー』という言葉を使った。
それがすっかり定着してしまったよ。
おかげで俺のせいで、この島に『仮面ライダー』の都市伝説が出来上がりつつある。そのうち仮面ライダー部も出来るんじゃないの？
ちなみに、あの時の陸戦試合にいたメンバーには俺がジオウだってことはバレてしまっているが……はやてさんの判断で、部隊の外には漏らさないようになっている。
「ホントに助かりますよ。楯無さんもそれに賛成してくれたんですよね？」
「正体が知られると色々と面倒なことになるからよ」
世間的にも同じ管理局的にもな。
「そう言う事。だから翔君も不用意に人がいる場所で変身したりしないでね？」
「肝に銘じておきます……」
成り行きとは言え、正体を隠して行動する仮面ライダーっぽくなったわけだ。
まあ、目の前にアナザーライダーがいなければ大丈夫だと思うけど……多分、きっと。
「まあ、私も強いことは言えないけどね。今回はお姉さん、足引っ張っちゃったから」
「いえ、そんな。本当に無事でよかったですよ」
楯無さんは怪我を感じさせない軽快な笑みを浮かべている。

「もう怪我は大丈夫なんですか？」
「うん。私、更識家の当主だから」
　これは自分が超人だから、という訳ではなく。
「更識家の当主はそう簡単には死なないのよ。『盾』としての役割は持っているけど、壊れていなければ何度でも治されるから」
　つまりは今後も戦うために、高度な治療を受けることが出来るという事だ。
「そう言う事。そのおかげで……ほら。傷一つないでしょ？」
　布団をまくり上げ、身に着けていた病院着までまくり上げた。
　真っ白なお腹が惜しげもなく晒された。
　本人が意識しているのか分からないが、非常に危険なまくり上げ方だ。あと少しめくれれば、胸のふくらみの南半球、俗にいう下乳と呼ばれる部分まで見えてしまう。
　服と肌の境界線から意図的に目をずらす。
　しっかりと引き締まった美しい体だ。楯無さんの言う通り、そのすべすべの肌には擦り傷一つない。
　さらに楯無さんは、傷があったであろう場所を指でぐりぐりと弄った。それで回復をアピールしているらしい。
「ほらほら、どう？　どう？」
「本当に良かったと思いますよ。嫁入り前の大切なお体に傷が残らなくて」
「なーんだ、つまらない反応。女の子のおへそなんて見慣れてるってことなの？」
「いえいえ、そんなことは」
　あはは、と笑う俺。
「じゃあそろそろ」
「えー？　もう行っちゃうの？」
「もう1人の方にも行かないといけませんからね」
　俺は立ち上がり、病室を出る。
「それじゃあお大事に。来月、六課で会いましょう」
「は～い。今日はありがとね、翔君」

その言葉を背に、俺は病室を後にした。

「――――ええ、そうですね」
翔が去った後の病室。楯無はとある場所に電話をかけていた。
「はい。今回の戦果を鑑みると……そうですね。彼が善人か悪人かは問題ではありません」
彼女が電話をしているのは日本の国防を担う防衛省。そのトップだ。翔がジオウであることは黙っているとは言ったが、翔について何も報告しないとは言っていない。
「問題は、事実上、イ・ウーを壊滅させてしまったのが彼だという事です。この情報はすぐに裏に広まります。今まではこの島に止めておけた彼の情報が、世界中に拡散されることになる。彼の特異性も合わせて」
翔はイ・ウーが、シャーロックがとっていた裏世界のバランスを崩してしまったのだ。大黒柱をいきなりへし折った衝撃が、今後世界に広がることになる。
その原因である翔は、世界中の注目の的になるのは間違いない。
「敵ではないにしても、多少の監視を付けるのはやむを得ないかと。何かの事故で、彼が敵対組織の手に渡るのは何としても阻止しなければいけません。早急に手配していただきたいです」
それだけ話して楯無は電話を切った。
「ごめんね、翔君。命を助けてもらったけど……これも私の仕事だから」
そう呟くのだった。

「お前はすっかり元通りだな」
「私は検査入院だから。どこもケガしてないし」
次に訪れたのは耀の病室だ。楯無さんの部屋よりもグレードは下がっているようだが、それでも1人部屋だ。
まあ、今回怪物化したことを考えれば、隔離の目的もあるのかもしれないけど。
今回のアナザーオーズの件、耀が罪に問われることは無い。働いていた動物園の監視カメラに映っていたからな。謎の男が背後からウォッチを埋め込むところが。目撃者も多かった。
「それで、例の男についてなんだけど……」
「ごめん。全然分からない。後ろに近寄られたのに気配もなかったから。顔も見てないし」
「そうか……」
ウォッチを植え付ける謎の男。シャーロックにダブルウォッチを渡したのも、同じ人物だろう。
……おそらく、俺と同じ世界の出身の。
「3人目か……」
「敵かな？」
「やってることを見ればな……」
ライダーの力を悪用してあんなことをするなんて、少なくとも正義の行いではない。
耀を無理やりアナザーライダーにしたことも考えると、俺達のこともしっかりと理解している可能性が高い。ゾンビよりも厄介だな。
「ごめん、耀。変なことに巻き込んだ」
「別に大丈夫だよ。嫌じゃないから。でも、不満はある」

「不満とは？」
　耀はわざとらしく腕を組んだ。
「今回は、私がヒロイン役だったと思わない？」
「まあ……」
「怪物になったか弱い女の子「か弱い？」そう、『か弱い』女の子。それが私だったよね？」
「まあ……」
　登場人物の女の子が多いから、誰がヒロインとか考えるだけ無駄なような気がするけど。敵に攫われた女の子って言うなら、アリアだって当てはまるし。
　か弱いかは……議論の余地があるとしても。
「それなのに、私を助けた後、小学生とチューしてそのままどこかに行っちゃうし。私のお見舞いもせずに、アリアを助けに行っちゃうし。何か言い訳はありますか？」
「何もないですね」
　全部事実だからなぁ……
「どういう埋め合わせをお望みなんでしょうか？」
「それはもう、恋人にするような熱い口づけを」
「あはは、またまた御冗談を」
「別にいいよ？　私は嫌じゃないし。私へのお詫びと私からのお礼、どっちもそれでオッケーだけど？」
　そんなことを話していると、病室の扉が開いた。
「耀ちゃん。元気？　あ、翔君も来てたんだね」
　入ってきたのはメアだった。
「うん。元気だよ」
「メア、結構お見舞いに来てくれてるんだって？」
「うん。耀ちゃんとは友達だからね……でも、お邪魔だったかな？」
　何でだ。
「だって2人でいるし。何か始めるつもりだったのかなって」
「何も始めないよ！」
「そうそう」

俺と耀は２人で頷く。
「だって――――」
耀の手が俺の首に回される。
「ん？」
顔が近づき、唇が触れる。
「――――今回はこれくらいで許してあげるから」
「あ、お、おい……！」
「わー！」
耀の不意打ちに、メアが歓声を上げている。
俺も忘れていたな。耀が問題児だってことを。

お見舞い帰り、病院の廊下を俺とメアは並んで歩いていた。
「そうそう翔君。わたし、耀ちゃんを怪物に変えたヒトと少しだけ戦ったよ」
「ああ。そうらしいな」
耀がメアと仲良くなったという話は聞いていた。というよりももう１人……ナナ・アスタ・デビルークと耀が仲良くなったところに、メアが偶然居合わせたのだとか。
メアとナナはどちらも同じ『Ｔｏｌｏｖｅる（ダークネス）』のキャラで、原作でも仲の良いペアでもある。
さらにナナと耀には同じく『動物と喋ることが出来る』というスキルが備わっている。
まあ妥当な組み合わせだろうと思う。比較的常識人のナナが大変そうだけどね。

そういう訳で、メアがその場にいたという情報は俺も耀から聞いていた。
や、『そういう訳で』ではないよな。ララがいたとは言え、ナナとも繋がりが出来てしまうとは。こうして見ると、ナナの双子であるモモとも、どこかで接点が出来てるんじゃないかと疑ってしまう。
当然そんな低すぎる確率は引き当てられなくて当然なんだけど、俺の場合はそう言う確率を超越した必然を引き当てそうだ。
話を戻す。
「戦ったって、そりゃ誇大報告だろ。一発も攻撃が当てられなかったって聞いてるぞ」
「あ～……確かにそうだけどねぇ」
あはは～、とメアは笑う。
「正確に言うと、当てられなかったんじゃなくて『止まった』の」
「止まった？」
「うん。攻撃を当てようとするとそれ以上手が前に進まなくなる。体を押さえつけられてるわけじゃないのにね」
止まる、ねぇ。
「それって、暗示の類じゃないのか？　無意識のうちに攻撃できないようになる暗示とか」
「かもしれないけど、だったらその人は世界最高クラスの暗示使いだね」
「もしくは……」
この世界にはない特殊な能力か。
「……もしくは？」
「……いや、ずいぶんと詳しく話してくれると思ってな」
「え？　何かおかしい？　友達がひどい目に遭ったから。協力するのは普通なんじゃないの？」
「いや、普通だよ」
出来れば、その普通の感覚をこのまま持ち続けて欲しいものだけど。
「うん？」

「いや……」
でも、今はまだそこまでではない。
マスターに『斬れ』と言われれば、耀でもナナでも迷わず斬ることになるだろう。
でも、それもこれからだな。友達が出来たって言うんなら、その友達がメアの心を育ててくれるんだろう。
「ま、これからも耀とは仲良くしてくれよ。それと、謎の男について何か分かったら俺にも教えてくれ」
「耀ちゃんと仲良くするのはモチロンだけど……アイツの情報については、ちょっとだけ条件があるかも」
「条件……？」
「どうせだったら言ってみようかと思って」
その言葉に警戒する俺。
「そんなに難しい事じゃないよ。ヤミお姉ちゃんに何かしてほしいとか、そう言うことじゃないから」
「じゃあ何だ？」
メアはにっこりと笑って。
「私とセックスしてほしいな？」
「は……!?」
こんなところで何を言ってるんだ、君は。周りに人がいなかったからよかったものの！
「え？　私変なこと言った？」
「言ったよ！」
少なくともこの場にそぐわない発言を！
「病院で何の話をしているのかしら？」
後ろから声をかけられ、心臓が飛び跳ねそうになる。
「み、御門先生!?」
振り返ると、ニヤニヤと笑う御門先生が経っていた。
「ふーん、また新しい女の子？　すごいわね～」
「いやいや」
「違う女の子のお見舞いの後に、病院の中で？」

「いやいや！　違いますからね!!　コイツが勝手に言ってるだけで！」
「ひどい！　私本気だったのに！」
「翔君？」
「適当なこと言ってんじゃあないぞ!!」
「えへ」
　メアは舌を出しておどけていた。
　御門先生も肩をすくめて後ろを向いた。
「ま、ほどほどにしなさいね。あんまり遊びすぎると、そのうち刺されることになるから」
　そう言い残して、御門先生は去っていく。
「それで、どうするの？」
「今の流れで、よく話を続けるつもりになるな。ＮＯだよ。ＮＯ！」
「えー!!」
　メアは不満げに口を尖らせる。
「別にみんなにバレなければいいじゃん。翔君にも得しかないでしょ」
「や、得しかないって……」
「別に濁さなくてもいいよ。私、全部知ってるから。前に繋がった時に、ね」
「繋がった？」
　滅茶苦茶不穏な単語だけど、この繋がるってのはメアの能力で繋がるってことのはずだ。俺は覚えてないんだけどな。
「よく知ってるね。そ、アタシのサイコダイブで繋がった時にね。アタシも翔君の事、色々知ってるよ。翔君がいろんな女の子とえっちぃ事してることも。翔君がおちんちんから白いのを出すと新しい能力を手に入れられることも――翔君が他の世界から来たってことも」
「……そうか」
　別に俺としては、バラされても問題は……風評被害は大変そうだけど、や、事実を話されるだけで大ダメージになるんだろうけど、死活問題という事も無い。

そもそも何人が信じるかって話もあるし、たとえ後ろ指を指されたとしても、やることは変わらない。
「別に脅そうって思ってるわけじゃないよ。脅しとか、アタシよくわからないし。そうじゃなくてね、翔君にも得しかないって話をしたいの」
「や、そうじゃなくてな……」
イマイチ話が噛み合っていないように感じてしまう。
「え？　何かおかしいかな？　性欲って生物としてごく自然な欲求でしょ？　私も体験してみたくって」
まさかそのセリフをここで聞くことになるなんてな。
「そうじゃなくてだな。なんで相手が俺なのかってことだよ」
メアほどの美少女、町で適当な学生に声をかければ相手には困らないだろう。
「そこはホラ、『ココロに決めた相手』っていうのが大切なんでしょ？　アタシ、翔君を心に決めたから。それに翔君は経験豊富だし。初めては気持ちいい方がいいもん！」
「色々と間違ってる……!!」
なんかもう、色々と！　大体!!ほとんど間違っているよ!!
俺が快諾しないことで、メアも首を捻っている。
「う～ん、何がダメかな？　身体？　変身を使えば調整出来るけど。もっとおっぱいがおっきいほうがいい？　あ、でもイッちゃう時は集中出来ないから、その時は萎んじゃうけど。それまでは頑張るよ！」
「だからね……」
もうもう色々と、この娘には教育を施したほうがいいんじゃないだろうか！
「そっか……ごめんね。分かったよ」
「分かったのか」
「翔君とするのは諦めるね。街に行って適当な人としてみるから」
そうじゃないから！
「……ふぅ、ちょっと来なさい」
「え、何処に？」

「良いから！」
俺はメアをひっぱって、自分の家に向かうのだった。

メアの初体験（メア）

「というわけなんだよ」
俺はメアを自宅に連れて行って事情を説明した。説明した相手は、雪菜とアスナと狂三、そしてヤミだ。
他の娘だと小さすぎたり拗れすぎると思ったからな。この人数に絞っておいた。
事情を説明すると、全員が苦い顔をしていたが……やがてアスナが口を開いた。
「……それで？　翔君はその話を私達にして、どうしようって言うの？」
「どうって、や、説得したり……みんなからも何か言ってもらえないかと……」
「何か、と言われましても……」
狂三も困ったように顔に手を添えた。他の女の子もみんなそんな感じだ。
「……先輩、確認したいんですけど、メアさんとそう言う行為をしたいわけではないんですよね？」
「それは――」
もちろん、と言いかけて止まる。
や、別にしたいって訳ではないですよ。本当に。でも別にするのが嫌だって訳ではないと言いますか。真っ向からしたくないというのは違うと言いますか……こう……難しいな！　言語化が！
こうしてうんうん唸っていると、女性陣の目がどんどん冷たくなっていくのが分かった。
「先輩、最低です」
「うん、本当にどうかと思うよ？」
「わたくし、翔さんのことを誤解していたのかもしれませんわ。悲しいですわ。悲しいですわ……」
「いやっ!!　違う違う違う！　そうじゃなくてだな！」
マズい。このままでは本当にマズい！　これはもう不名誉とかそ

ういう次元じゃなく、ただただ屑に成り下がる直前だ！
　そんな俺を見かねたのか、ヤミがわざとらしくため息を吐いた。
「夜月　翔。何を勘違いしているのか知りませんが、黒崎　メアは敵です。性行為がしたいと言うなら、勝手にさせておけばいいでしょう。あなたが心配することではありません」
「えー？　ヒドイなー、ヤミお姉ちゃんは」
　ヤミの吐き捨てるようなセリフにも、けらけらと笑って答えるメア。
　その姉妹の言い合いで、俺へと向けられていた非難の視線が少しだけ和らいだ。
　なんだか、姉であるヤミのことを気遣って、こういう相談をしてるって感じになってくれてるぞ！
「先輩、そうならそうと言ってくれれば……」
「そうだよ。もうっ、わざとそんな不安になるような言い方して！」
「あ、ああ、そうだよな。その通りだよな……」
「翔さん？　なんだか歯切れが悪いようですけれど……」
　それは気のせいです。
　狂三の鋭い視線に顔を反らす。
「まあでも、他のみんなはともかく、ヤミおねえちゃんは翔君とエッチしたことないんだよね？」
「当たり前でしょう」
「ちょっと見せてもらうね。他の人のも一緒に」
　メアをにこりと笑い、髪留めを外した。
　意味不明な行動に、全員首を傾げる。だがその直後、ゆらりと動いた髪を見て、俺は察した。
「「「ッ!?」」」
　俺を含め、全員にメアの髪の毛が接続される。精神侵入されたんだ。だが俺達の体が乗っ取られるとか、そう言った不都合は起きていない。
「ふむふむ、なるほどね～」
　精神侵入はすぐに終わった。メアは呑気に頷いているが、みんな

揃って臨戦態勢になっている。
　不意打ちで能力を使われたんだから当然だけど。
「メアさん？　どういうおつもりですの？」
　狂三はすでに、霊装を纏って銃を向けている。
「みんなが普段、翔君とどんなことしてるのかと思って。例えば狂三センパイは、１月くらい前にした、お尻でのえっちが忘れられないんだね」
「な、ぇ……？」
「へぇ～、狂三センパイって、普段そんな感じなのにどっちかって言うと酷いことされるのがいいんですね」
「ち、違っ!!　何を言っていますの!?　わたくしがそんな……!!」
「またまたぁ、そんなこと言って。あのときのことも、今思い返せばよかったって思ってるんですよね？」
「嫌あああああぁぁぁぁっ!!」
　狂三が銃を放り投げ、悲鳴を上げながらうずくまってしまった。
　な、なんて恐ろしい事を……!!
「そんなこと言ったら雪菜ちゃんもそうなんだね。自分からじゃ恥ずかしくて誘えないから、なるべく翔君から誘って欲しいんだね」
「はっ!?　やっ、違いますからね!!　先輩も変な勘違いしないで下さい!!」
「何も言ってないけど……」
「またまた、そんなこと言って。他の人とするくらいなら自分としてほしいって思ってるでしょ？」
「お、思って、ませんよ……？」
　その否定の言葉には全く力が籠っていなかった。
「じゃあ、次は」
「ま、待って！　分かりました。もう分かったから！　ストップストップ!!」
　アスナは慌ててメアの口を塞ごうとするが、
「２人共？　どうして私を後ろから取り抑えてるのかな？」
「まあまあ、良いではありませんの。そんなに必死になって防ごうと

なさらなくても」
「そ、そうですよね？　やましいことが無ければ、全然問題ないはずですし！」
　いや、これはもうやましいとかそういう問題じゃないと思うんだけど。２人共恥ずかしさで感覚がバグってない？
「アスナ先輩はねぇ、色々考えてるね。みんなの波風が立たないように、本当にいろいろと考えてるみたい」
「ちょ、ちょっと……」
「でも、隙を突こうっていう意識は２人よりも大きいね。もう、隙あらばって感じだよ」
「ちょっと―!!!」
　みんなのバランスをとりながら、虎視眈々とタイミングを見計らってるってことか。何というか、女の子だよな。
「でも良かったね！　みんな翔君とのエッチはすごくいいって思ってるよ！」
「お、おうおうおう……」
　どうやらメアは、この場の全員をぶち殺すつもりらしい。
「でもスゴイなぁ、翔君は。こんなにいろんな女の子を満足させられるなんて。ここにいる娘以外にも――――」
「はい。やめようか」
「「そこは詳しく」」
　３人の食いつきが異常です。
「……分かりましたメアさん。翔君との、許します。ご飯用意しておくから。メアさんも食べて行って……その時に色々と聞くからね。ううん、これからも定期的に報告してくれるなら。２人とも、それで良いよね？」
「何だその交換条件!?」
　アスナの条件に目が飛び出そうなんだけど！
「……それなら仕方ありませんね」
「そうですわね。その条件なら致し方ないですわ」
「おい!?」

「はーい。ありがとー！」
場をかき乱したメアは笑って言うのだった。
「……はぁ、まあ、あなた達がそれでよいのなら」
ヤミは1人でため息をついていた。

「ふんふんふーん」
俺の部屋に入ったメアは、鼻歌を歌いながら色々なところを物色していた。
「楽しそうだな、メアは」
「モチロン！　だってこれからキモチイイことするんでしょ？」
言いつつ、メアはベッドの下を覗き込んだ。
「おいおい……」
四つん這いになってお尻を上げるような姿勢をするせいで、スカートでお尻のラインがわかってしまう。あと少し腰が持ち上がれば、その中身がチラチラと見えてしまうだろう。
メアのことだし、何か考えてやっているわけじゃないんだろうけど。
「そんなにベッドの下が気になるのか？」
「うーん、えっちぃ本とかあるんじゃないかなって思ったんだけど……」
「ないだろ、今の時代」
そう言うのってたびたびネタにされるけど、完全に過去の文化だよな。ベッドの下に隠すとか、本の背表紙を変えて偽装するとか。
今はもう全部ネットで済むからね。素晴らしきかなネット文明。
「そうなんだ。まあ翔君は、そんなものに頼る必要は無いもんね？」

それについてはノーコメントで。
「じゃあ、早く始めよっか！」
メアはスカートをぴらりとめくりあげ、お尻を向けてくる。履いていた水色と白の縞パンが、何もしていないのに消えていく。メアが変身を使ったんだ。
つるりとしたシミ一つないお尻が眩しい。その尻肉の奥の窄みには、小さな子供の様にきれいな筋があった。
でも、
「いやいや、そんないきなりは挿れないって」
「え？」
メアは体勢を元に戻しつつ首を傾げた。
俺はベッドに腰かける。
「だから、その前の準備とか色々あるだろ？」
「濡らしたりって事？　そんなの変身を使えば――――」
「まあまあ、今回は俺の言うようにしてくれ」
「……そだね。翔君は経験者だし。せっかくだからそうしてみるね」
メアは納得した様子で、ベッドに腰かけた俺を背もたれにして、ベッドに座る。
「それで、どうすればいいの？」
「まずは上から弄らせてくれ」
「ん」
俺はメアのふくらみに手を伸ばした。
そこまで大きな膨らみではないが、服の上からでもその柔らかさはしっかりと分かる。だが、メアは特に何でもなさそうにしていた。
「そんなに興味あるってことは、自分でも弄ったことはあるのか？」
「うん。そうなんだけど全然で。うーん……じれったいなぁ」
そう言うと、メアの服が消えていく。先ほどの下着と同じ現象だ。
結果、メアはいとも簡単に全裸になってしまった。ムードもへったくれも無いが、メアは気にした様子は無い。
「さあさあ、早く触って！」
「ああ」

そう言うならと、俺は手を動かし続ける。柔らかな双丘が俺の指に合わせて形を変えるが、まだメアには響いていないみたいだ。
だが、だんだんと指の位置が変わる。ツンと突き出した乳首、その周りの乳輪に差し掛かると、
「んっ……っ……」
もぞもぞと身じろぎした。
「メア、どうした？」
「ちょっと、くすぐったくて」
「そっか」
試しに、乳輪の色の変わり目をゆっくりとなぞってみる。
「ん……んぅ？」
再びもぞもぞと体をよじるメア。
「どうだメア」
「んっ、さっきから、くすぐったい、よっ……！」
「それは良かった」
段々とメアの息が速くなっている。胸の上下も大きくなってきている。
下準備がだんだんと出来てきたんだ。俺はさらに先に指を伸ばした。最初に比べて随分と硬さを増した乳首を、２つ同時に弾いた。
「ぁふっ!?」
メアの体が跳ねた衝撃が俺に伝わってくる。
ここまでくれば、もう細かく確認していく必要は無い。
「や、それっ、その触り方、にゃっ!?　あうっ」
指先で弄ぶ二つの突起は、どんどんその硬さが増していく。
「自分でするときは、もっとぐりぐりっ、してたからっ」
「なるほどね」
力加減がわかってなかったのか。それとも激しい方が気持ちよくなると思っていたのか。初心者のありがちな間違いだった。
そう思いながらも、指の動きは止まらない。充血した乳首は汗にまみれ、もはやどんなに強く扱いてもすべてが快楽に変換されてしまうだろう。

あの無邪気なメアが、あの残酷なメアが、たかだか乳首をつねられた程度で体を痙攣させている。
「そ、そろそろ挿れてもいいよ？　もう充分濡れたから、ね？」
「ん、どれどれ」
「え、ちょ、ちょっと！　ひうんっ!!」
俺の行動に抵抗しようとしたメアだが、乳首を扱かれると途端に動けなくなってしまう。その隙にメアの足の付け根、これから俺の肉棒がお邪魔する場所に指を這わせる。
先ほど見た時には1本の線だったソコは、確かにしっとりと濡れていた。
ピタリと閉じていた秘肉をかき分け、人差し指を侵入させる。
「あっ、やぁ……っ」
指の関節を折り曲げると、くちくちと音が鳴る。細い指を必死に噛みしめる肉ヒダが切なげに震えているのが伝わってきた。
「指じゃ、足りないからっ！　もっと奥まで……!!」
恥骨をぐりぐりと押し付けてくるが、どんなに頑張っても俺の指は最奥までは届かない。長さも太さも不十分な指では、メアを満足させるには程遠いらしい。
「ねぇ、おちんちん挿れて？　もう本当に大丈夫だからっ。早く奥までずんずんしてよぉ」
ぷるぷると震える手で俺の手が抑えられる。
ここまで情けなく懇願されると、逆にもっと焦らしたくなる。
「まあまあ、今回は俺のやり方でやらせてくれるんだろ？」
俺は一度指を抜き、今度は2本同時に挿入しようとしたところで、
「やだっ」
「うお!?」
メアがすごい力で俺のことを押し返してきた。
「やだよ、もう待たない」
メアの指が刃物になる。それによって俺の下半身の衣服がすべてはぎとられてしまった。必然的に、それまで衣服によって押さえつけられていたモノが解放される。

「あはぁ、素敵ぃ……！」
縮んでいたバネが解放されたかの様に、肉棒が反り返った。血管の張り出した竿に真っ赤に腫れた亀頭。その先からは先走りが漏れている。俺の息子はすでに準備万端になっていた。
それもそうだ。今までメアを弄ってきた俺だったが、メアの初々しい反応のすべてを体で感じていたのだ。それでこうなるなという方が無理な話だった。
「すんすん、匂いもすご。これって勃起してるってことだよね？　私で興奮してくれたってことだよね？　準備万端ってことだよね？」
「それはもちろん」
「じゃ、じゃあ、もう挿れていいよね？　ね？」
俺の答えなんて、メアはもう聞いていない。
血走った眼で俺の肉棒を自らのおまんこに添えた。
「はいって、きたあぁ……」
メアは学習したのか、これだけ切羽詰まった状態でもゆっくりと腰を沈めていく。それとも、ゆっくりでしか挿入出来ないのだろうか。
男根が挿入されるのを待ち望んでいたメアの体が、ようやくの刺激に歓喜していた。
「あは、や、っぱぁ……!!　本物のオチンチン、圧迫感凄すぎぃ……っ。奥の奥まで、指じゃ絶対届かないところまで届きそう……っ」
ずるずると、メアの肉ビダをかき分けながら肉棒が奥へと進んでいる。メアが望んでいたであろう最奥まであと少しだ。
「あ〝、、もうイ――――」
奥に到達すると同時に、
「ふォっ、お〝っ!!　ごお〝っ!!」
メアは汚い声を漏らして絶頂した。
俺に跨って体を跳ねさせるメアはひどく無防備だ。少しチンポの位置をずらしてぷにぷにの子宮口にキスさせると、さらに大きく体を跳ねさせた。
体勢を変えて正常位になる。
「翔君のおちんちん、私にぴったりだね……っ」

「ああ、そうだな」
メアは息も絶え絶えに言ってくる。
その言葉通り、軽く揺らしただけでメアはぴくぴくと体を震わせる。
「ほ、ほら、遠慮しないで、どんどん動いて？」
「ああ、そうさせてもらうよ」
ゆっくりとペニスを引き抜き、
「あ、あああっ、抜け――――」
勢いよく奥に叩きつけた。
プチプチと膣内の肉粒をすり潰す感触が伝わってくる。膣内を一度慣らし、なんども何度もピストンしていく。
「お゛っ!?　はげっ、はげしっ!?」
肌と肌が激突する規則的な音が部屋に響き渡る。メアの両手が俺の背中に回された。口からは断続的に喘ぎ声が漏れている。
先ほどからずっと痙攣を繰り返しているため、いつ絶頂しているのかもわからなくなっていた。
それはメアの様子を気にせずに、自分のペースで腰を振っている俺も原因なのかもしれないが、そのせいで俺の限界も近づいてきた。
そんな中、俺の亀頭が、奥の奥でメアの子宮口を舐めあげた。
――――――ぶちゅ、しぶくくっ、びゅるるるっ!!
「――――――っっっ!!??!?」
メア、人生初の中出し。それを容赦なく子宮に叩きつけた。抉じ開けられた子宮口に注ぎ込まれた白濁液は、即座にメアの子供袋を満たした。
子宮口はくぱくぱと吸い付き、子種はどんどん呑み込まれていく。
「ふう……」
射精が収まり、余韻も抜けたところで、俺は肉棒を引き抜いた。
「あ、や、やだぁ。1回だけなんて、もっとしよ？」
メアは体勢を変えた。顔を布団に押し付け、お尻をこちらに向けて上げている。あまつさえ、そのお尻を振って誘惑までしてきた。
「っ！」

綺麗な1本筋だったおまんこは少しだけ広がっている。そこからどろどろと、白いものが漏れ出ていた。その光景に俺のペニスが力を取り戻す。
俺はメアのお尻を鷲掴みにし、位置を調節した。チンポの位置を整え、腰を突き出す。
「おう〝!?」
2回目の膣内は、にゅるりにゅるりと俺のペニスを迎え入れた。奥まで一気に、奥の肉壁に激突する。
「これで満足できるくらい、徹底的にしてやるからな……!!」
「おくっ、奥潰れてるっ、こんなに乱暴にされてるのに、気持ちいいの、止まんない……!!」
メアの顔は見えないが、背中はぞわぞわと快楽におののいているのがわかる。
すっかり降りて来た子宮口を何度も何度もサンドバックにする。そのたびに子宮口は行かないでくれと吸い付いてくるが、そんなものはお構いなしだ。
「1回出したのに、メアのここはまだ欲しいんだなっ」
「うん、うんっ、だからもっと出して、も〝っと……!!」
そこまで言うのなら、
「メア、また、出すからな……!!」
「う、んっ、だして、全部私の中にっ！」
「う、くっ……!!」
――――――びゅぐ、びゅびゅるっ!!　ぶびゅるるっ!!
「お〝っ、あああああっぁぁぁぁっ!!!!」
本日2回目の白濁液が、メアの膣内を染め上げた。それと同時に布団に押し付けられたメアの口から絶頂声が叫ばれた。
俺が肉棒を引き抜くと、あげられていたお尻がぐらりと揺れ、倒れた。
「あは、セックス、素敵ぃ……」
ひくひくと痙攣してるメアは、幸せそうにそんなことを呟いていた。

リフレッシュ　前編

夏休みも残り2日になったこの日。夜ご飯を食べ終えた時のことだった。
「ふう……」
アスナが疲れたようなため息をついた。
「おや、アスナ様。お疲れですか？」
俺と同じことを思ったのか、食べ終えたお皿を運んでいたコッコロが問いかける。
「何か疲れるようなことしたっけ？」
諸々の事件も片付き、今日は1日中家でのんびりしてたと思うんだけど。
「今日の、っていうか、昨日までの疲れが取れてない感じかな。こんなに体を動かすのって初めてだったから」
「あー……」
そう言われて納得する。
アスナはゲームの中でこそ超人的な動きと剣技で戦う剣士になるが、現実世界では本当の意味で普通の女の子だ。
ゲームでも疲労は溜まるかもしれない、だが現実で実際に体を動かしての戦闘は、ゲームの疲労の比ではないだろう。
それに夏も働きっぱなしだったと考えると、確かにお休みも欲しくなるかもしれない。
「じゃあ、どうしよっか……」
疲労回復の方法なんて、寝る以外に思いつかないぞ。
「もー、大丈夫だって。私よりも働いてる翔君が平気なんだし。明日ゆっくり休めばすぐに元通りになるから」
そう言って笑うアスナだったが……うーむ。
「それはいけません。アスナ様、良ければわたくしがマッサージなど致しましょうか？」
「へぇ～、コッコロちゃんマッサージできるの？　じゃあちょっとお願いしようかなぁ」

「はい。お任せください。わたくし、主様にもマッサージをしているので……アスナ様に同じマッサージは難しいと思いますが」
「翔君に、マッサージ？　ふぅん？　そういえば、そう言う事もしたんだよね、翔君？」
　メアからの情報提供のおかげで、俺の性事情はすべて筒抜けだ。プライバシー的な観点からどうかとは思うけど、それ以上のクズ行為をしている俺は口を挟めないんですよね。
　どれ、刑が確定する前にこの場を離れると致しましょうかね。

「というわけなんだよ」
《あ～、なるほどねぇ》
　部屋に戻った俺は、理子に電話していた。
　用件はもちろんアスナに関してだ。女性の疲労回復の方法なんて全く分からない俺は、その手の知識の豊富そうな理子を頼ることにしたのだ。
「つか、理子いつ帰ってくるんだ？　もう明日で夏休み終わりなんだけど？」
《予定では明日の夜だよ～。荷物置きたいからその日は向こうに帰るけどね》
　向こうというのは、元イ・ウーメンバーであるジャンヌや夾竹桃と一緒に借りている部屋のことだ。
「ギリギリだな。や、まあ桜もそういう予定らしいけど……」
《向こうは向こうでお姉さんに会ってるんでしょ？　ギリギリまで一緒にいたいんじゃない？》
「お姉さん、か……」

それが誰を指しているのか、俺には心当たりがあった。まあ、今はここにいない人のことを考えていても仕方がない。
「それで、アスナの事なんだけど」
《ああ、おけおけ、それはこっちで考えてみるよ。やっぱりお世話になってる人にはリフレッシュしてもらいたいよね～》
「そうだよな。申し訳ないけど、お願いしてもいいか？」
《まっかせて～……どうせ、最後は翔君が仕上げすることになるんだしね》
そんな感じで、リフレッシュプランは理子に任せることになった。

翌日、３人の女性が並んで歩いていた。
メンバーはアスナ、アリア、そしてジャンヌだった。
３人とも、理子からのメールで呼び出されたメンバーだった。
翔が想定していたのはアスナだけだったが、蓋を開ければこのようなメンバーになっていたのだ。
「なんだか不思議だね。この３人で集まるなんて」
「そうね。あたしはジャンヌとは何度か会ってるけど」
アスナの言葉に、アリアはちらりと横を見ながら答える。
視線を向けられたジャンヌは、目を瞑りながら鼻を鳴らした。
「フン、お前の弁護士と会うためにだがな」
「ああ、司法取引で……」
アスナは納得して頷いた。
犯罪者であるジャンヌや夾竹桃、そして理子がこうして自由に過ごせているのは、司法取引をしているからだ。
アリアの母にかけられた冤罪について証言することを条件として

いる。
　そのため度々話し合いの場が設けられていた。
　ジャンヌが言いたいのは、つまりそういう事情があるからであって、アリアと好き好んで仲良くしているわけではないということだ。
「でも、２人ともしっかり協力してるよね」
「そうしなければ即座に刑務所だからな。私も別に、組織に対してそこまで忠誠があったわけではない。自分の身を守るためなら、いくらでも話すさ」
「それに敗者が勝者の言うことを聞くのは当然だもの。あのジャンヌダルクの子孫って言うならなおさらね」
　その言葉に、ジャンヌはピクリと眉を吊り上げた。
「言っておくが、私達は夜月　翔に負けたのであって、お前に負けたわけではない。さも自分の手柄のように言っているがな」
「あたしのパートナーが倒したんだから、別にいいでしょ！」
「パートナーにしては、ずいぶんと浮気癖があるようだがな、あの男は。せいぜい他の誰かにとられないように気を付けることだ」
「なんですってぇぇぇぇ!!」
「ま、まあまあ、２人とも！」
　アスナが慌てて止めに入る。
　元々が敵同士だったのだ。戦いが終わったからと言って、そう簡単に仲良くできるものではない。何食わぬ顔で一緒に生活出来ている理子の方が大物なのだ。もっとも、理子には他の目的があって翔の家にいるのだが。
　それがどうして、今回は一緒に出掛けているのか。
「あっ、ほら、もうすぐ着くよ！」
「みたいね」
「ふむ」
　それは理子から、とある施設のチケットを貰っていたからだった。
「いらっしゃいませ」
　施設の中に入ると、明るい色調の受付があり、そこにいる店員が頭を下げてきた。

そう、今回3人が訪れたのはマッサージ店だった。
「な、なんだか緊張するね」
「そうね……」
こういった場所に慣れていないアスナとアリアがひそひそと話していた。
そんな中でも堂々としているのはジャンヌだ。
「峰理子の名前で予約が入っているはずだが」
「少々お待ち下さい」
店員が端末を操作する。
「確認が取れました。こちらにどうぞ」
案内されるがままに、3人は店の奥に入っていく。
「今更だけど、今日受けるのどんなコースか全く知らないよね」
アスナが思い出したように口にする。
「そうだな。理子からのメールにも、場所と時間の指定しかなかったからな」
「そうだけど、マッサージはマッサージでしょ？　寝転んでたら終わるわよ」
適当な雑談を交わしながらも、店員の後ろをついていく3人。
「それでは、こちらで施術着にお着換え下さい」
そう言い残して、店員は扉を閉じた。
「ま、それもそうよね」
まさかこのままの服装でマッサージをするわけがない。施術着とやらは、かごの中に準備されているようだ。その横には着てきた服をひっかけるためのハンガーが準備されていた。
アリアは何気なくかごの中を見て、
「……え？」
固まった。
「どうかしたのか？」
「これ……」
アリアは施術着を摘まみ上げた。
そう、それらは摘まみ上げられるほどの面積しなかった。下はいつ

も身に着けている下着とほとんど同じ面積、上はへそから上の胸元を覆う布地だ。色はどちらも白になっている。
　どちらも極端に面積が少ないという訳ではない。だが、急に誰かが用意した水着に着替えろと言われたようなものだった。
「こっ、これに着替えるの!?」
「そのようだな」
　それを見てもジャンヌは落ち着いていた。
　隣のかごから施術着を取り出す。頷くとすぐに着替え始めた。
「ほ、ホントに!?」
「何をそんなに恥ずかしがっている」
「ジャンヌさんは経験あるの?」
　アリアと同じように尻込みしていたアスナの問いに、
「ああ。このタイプの施術着は単に体を揉み解すだけではない。肌のケアで美容液やオイルを塗るだろうな」
　そう言う間にも着替えを進めていたジャンヌ。
　モデルの様に引き締まった体が惜しみなく晒された。極限までシンプルな水着のような服だが、それが逆にジャンヌの長い手足を引き立てていた。
　腰に手を当てて立っているだけだが、それがそのまま雑誌の表紙を飾れそうなプロポーションだ。
「何をためらっている? これは病院で聴診器を当てるのと何も変わりは無い。あまり時間をかけると店にも迷惑がかかるぞ?」
「そう、だよね」
「うううっ……っ、しょ、しょうがないわね……!」
　顔を赤くしつつも、2人は着替えるのだった。
　着替え終わった3人は従業員に連れられて、ベッドが3つ並んだ部屋に通された。何やらお香がたかれているのか、甘いにおいが充満している。ベッドは仕切りによって区切られていた。
「それでは、そちらにお願いします」
　3人はそれぞれのベッドに仰向けに寝かされ、マッサージ師も準備する。

「それでは、失礼します」
「ああ。よろしく頼む」
横になったジャンヌはリラックスして目を閉じた。
「あれ？　お嬢ちゃん、もしかしてお姉さんがコースの選択間違えちゃったのかな？　小学生はこのコース受けられないはずなんだけどな……」
「……あたしは高2だから。2度と間違えないで」
「……？　え？」
青筋を立てたアリアに、マッサージ師は首を傾げた。
「ふふ、お客様、そんなに緊張なさらずに」
「は、はいっ、ひゃうっ!?」
ぬるりとした液体が纏わりついた手で触られたことで、変な声が出てしまう。
「(は、恥ずかしい……！　大丈夫、大丈夫。これはマッサージだからっ)」
店員は慣れた手つきでアロマオイルを塗り込んでいく。手の平の中で人肌に温められたどろりとした液体が薄く伸ばされる。
「け、結構際どいわね」
「大丈夫ですよ、リラックスしていてくださいね～」
アリアは寝た状態から首を動かして、自らの手を這いまわる手を見ていた。両手がぴくぴくと動いている。何とか自制して体を動かないようにと我慢していた。
はじめは上半身から、仰向けになった晒されたお腹を重点的に、店員の手が滑らかに動く。
上、下、上、下、上のインナーギリギリから、下のインナーギリギリまで、アリアの場合体の起伏に乏しいために、油断すればイケナイ場所を触られてしまうのではないかと、アリアはひやひやしている。
オイルの塗られた部分がピリピリとするような感覚がある。焚かれたお香の匂いが胸を満たすと、なんだか頭が重くなったような気がした。
「……んっ」

「痛みますか？」
「いや、続けてくれ」
ジャンヌは取り繕って答えた。
へその下あたりをグリグリと押し込むような動き。そこから執拗に繰り返される内臓を圧迫するような刺激に、じんわりと体の内側が熱くなるような感覚が広がってる。
体全体の代謝が上がっているのか、丁度の室温だったはずなのに、汗が噴き出してくる。
「では追加のオイルを塗っていきますね～」
「あ、は、はいっ」
上塗りされていくオイルに、アスナは慌てて返事をする。ぼーっとしていたせいで、意識がふわついていたのだ。
「（気持ちいい……これがデトックスってものなのかな……）」
お腹の中心から広がった熱は体全体に及んでいる。
手足の指先まで揉み解され、凝り固まった関節を柔らかくされる。
「はぁ～……生き返るわ。最近忙しかったから……」
「へぇ～、そうなんだね～、大変だね～」
「……そこはかとなく馬鹿にされているように感じるんだけど……まあいいわぁ、ああ……」
あのアリアですら、子供扱いされても許してしまうほど、極楽のマッサージだった。
「お客さん、本当にスタイル良いですね。日ごろから何かされてるんですか？」
「そ、そうだろうか？　私としてもう少し小さいほうがいいのでないかと思っているのだが……」
「そんな、もったいない。この引き締まったヒップ。コツがあるのならぜひ教えてもらいたいですよ」
「そ、そう言われるのは、悪い気はしないな……むふふ」
ジャンヌはにやけるのを止めることは出来なかった。
そうして、天国のマッサージは進んでいった。

施術を終えて、３人はシャワーを使って体を清めていた。
「すごく良かったね！」
アスナは水滴を弾く自分の肌を見て興奮した様子だ。
「そうだな。私もこんなに目に見えて効果があるマッサージは初めてだ。心なしか、体の体温も上がっている気がするな」
「これでお金も理子からだって言うんだから信じられないわね。何かあるんじゃない？」
「うーん……」
疑わしいとアリアは眉を寄せている。アスナはそんなわけないと言いたかったが、いつもの様子を見ると断言できなかった。
「でも、やっぱりいつものお礼なんじゃない？　照れくさくて言えないだけなんだよ」
「そうなのかしらね……」
「理子は義理堅い奴だからな。感謝をしていれば何か返そうとするだろう」
「それをするなら翔にだと思うけど……まあ、いいわ。どうせ聞いたって答えないだろうし」
アリアは考えるのを諦め、体を洗うのを再開するのだった。

「さーて、そろそろ終わった時間かな～」
理子は飛行機の機内にいた。学園島行きの飛行機だ。
「急だったけど、予約とれてよかったなぁ。夏休み最終日だったらかな？」
翔に言われて用意したアスナ達のリフレッシュマッサージだったが、当然ただのマッサージではない。
学園島の研究成果を利用したマッサージ。科学的に解明された人体のツボを効果的に刺激することで疲労を取り、そのほか様々な効果をもたらすマッサージだ。

3人に塗られていたオイルも、肌から吸収されやすい成分を含んでいた。
「アスナってやっぱり風紀委員だから、理由を作ってあげないと自分からは難しいよねぇ？」
リフレッシュとは体だけではなく心に対しても重要な行為だ。その理由を無理やり作ろうという魂胆だった。
「アリアはまあ……このままじゃ、勝負にもならなそうだからな」
アリアの時だけ、口調が少し鋭くなる。
何の勝負か、それははっきり口にしない。何せ2人の間には因縁がありすぎる。その中のどれを指しているのか。理子本人にしか分からないことだった。
だが、それとはまったく関係ないジャンヌを巻き込んだのは。
「ま、面白そうだしね」
そこだけは適当だった。
「マッサージはこれからジワジワ効いてくるはずだから。お楽しみは夜だね。くふっ……ふわぁ～あ」
ここ数日の打ち上げのせいで寝不足の理子は、そのまま眠りに落ちていくのだった。

リフレッシュ　中編　（アスナ、アリア）

帰宅したアスナは、自分の体に現れた変化に戸惑っていた。
「ふぅ、どうしたんだろう、私……」
体が火照っている。お店を出た時はマッサージの効果で血行が良くなっているのだろうと軽く考えていたが、その火照りは別の場所に伝播していた。
帰宅途中には気が付いていたことだった。何もしていないにもかかわらず、激しく自己主張する2つの突起に。
熱を帯びた下腹部と、油断すれば下着に恥ずかしい染みを作ってしまいそうな状態の秘部。
「ん、くっ」
上の下着を外す。ブラの裏地に突起が擦れるだけで甘い吐息が漏れる。
「代謝が良くなるって、こういう事なのかな……？　あっ」
気が緩んでしまったことで、履いている下着に染みが出来てしまう。
「もう、こっちも変えないと……」
アスナは気だるげに下着を脱いだ。上はすでに脱いでしまっているため、これで生まれたままの姿になったことになる。
鏡の前に立つと、自分のあられもない姿が映し出される。
「でも、マッサージは効果あったよね」
しっとり、もっちりになった肌は、自分から見てもかなりイケていると思う。やはり科学的に証明されたやり方はしっかりと効果があったのだ。
透き通った肌が、光を反射しているが――それとは別に、股間から洩れた恥ずかしい液体がきらりと光っていた。
その液体を、根元を含めてタオルで優しく拭き取る。
「あっ、う……っ」
優しくと意識していたはずが、ふわりとしたタオルの刺激にも甘い吐息が漏れてしまう。

その刺激が呼び水になって、新たな蜜が自分の奥から溢れてきそうになる。
「下はともかく、上はつけなくていいかな……」
アスナは慎重に大きめのTシャツを着る。服の布で胸の突起を乱暴に擦らないように。
そうして身なりを整え、部屋を出るのだった。

「そう言えばアスナ、アリア、今日のマッサージはどうだった？」
夕食の最中、出し抜けにそんなことを聞いてみる。
結局理子に任せきりになってしまった今日のリラックスメニュー。何やらジャンヌも一緒に行ったらしいのだが。
「えっ!? あ、あー、うん！ すごく良かったよ」
「そ、そうね。理子が予約した場所にしては、中々だったんじゃあないかしらっ？」
「そうなのか？ それは良かった」
２人とも、なんだか歯切れが悪いような気もするが、別に嘘を言っているようにも見えない。
それにしても美容マッサージとか。俺には全然思いつかなかったよなぁ。流石は女の子だ。まあ、この年齢で美容マッサージとか早くね？ とか、そんなのしなくても十分きれいじゃね？ とか、色々と考えるけど、本人が満足しているなら良かった。
それに、俺の目で見ても明らかにマッサージの効果が出てるんだもんな。肌のハリ艶が全然違う。完全記憶能力のある俺が言うんだから間違いない。
やっぱりこの世界の、この島の施設は一味違うって訳か。科学の力

か。
それからは、女性陣の方もマッサージの内容が気になっていたらしい。俺が会話に加わるまでもなく、マッサージのことで話が進む進む。
そうして各々食べ終わったお皿を片付ける――――その時にちょっとしたハプニングが起きた。
狂三が流しの中に食器を入れ、その後ろにアスナが並んでいた状況だった。
「狂三ちゃん、これもお願い」
「分かりましたわ」
狂三がアスナから食器を受け取ろうと振り返る――――その時、勢い余って狂三の肘がアスナの胸先を掠めたのだ。
「あぃ……っ!?」
アスナの手からお皿が滑り落ちた。
材質は陶器だが、学園島製のお皿は床に落ちた程度では割れない。だが床に激突したことで、派手な音は出る。
俺も含めて視線が集中するが、それが単なるお皿を落とした事故だと分かると、みんな興味を無くしていく。
だが、近くにいた俺には聞こえていた。
「……アスナさん、少しいいですか？」
「な、なに？　狂三ちゃん？」
お皿を拾おうとかがんでいたアスナに、狂三が声をかけていた。
狂三は自分の胸元を指で軽く叩く。
「今日はつけていませんの？　めずらしいですわね」
「う、うん。たまには、ね？　楽な恰好でいようと思ってね？」
「それはそうですが、もしかして……」
「う、うん？　な、なにかな？」
「成長、しているんですの？」
「……はい？」
「先ほどは言っていませんでしたが、もしやマッサージにそういう効果が？」

「え、えーっと……」
……ふむ。
マッサージで顔のむくみとか姿勢が良くなるってのは一時的な効果だと思うんだけど。この島のマッサージならそうじゃないのか？
少なくとも、終わってから数時間効果が持続するってのは凄いことだよな。
や、どんな『効果』なのかは俺も知らないんだけどさ。狂三が胸をトントンとしてるだけで！　それがどういう意味を持つのかは！
「何を見ているんですか、先輩……」
「いや別に」
雪菜に注意され、俺は２人から視線を外すのだった。

そしてその夜。
「う、うううぅ、なによ、これぇ……っ」
布団に入ったアリアは、顔を赤くしてもぞもぞと動いていた。
じわりじわりと自分の体を焼く未知の熱に、アリアは翻弄されていた。全く知識が無いゆえに対処方法も分からない。
虫に刺された部分を引っ掻くように、ツンと突き出した胸の突起を擦るアリア。そのたびに心地よい痺れと共に腰が浮き上がる。
水風船のようにふにゃりとした、まだまだ膨らみかけのアリアの胸部でも、しっかりとメスの感覚は研ぎ澄まされていた。
「くっ、ふ……っ」
寝間着にしているシャツを押し上げる突起は、布を挟んでいるおかげでアリアの乱暴な引っ掻きにも甘い快楽を生み出す。
「あ、やぁ……ふぅっ、ぁ、ぅ……！」
心地よい刺激に、アリアの手の動きは早くなる。

思わず今まで出したことの無いような甘い吐息が漏れるが、本人には気にしている余裕が無い。
腰が勝手にぐねぐねと動き、浮かび上がる。
もはやアリアには、爪ほどの大きさにまで肥大化した乳首をいじめることしか頭になかった。本人には自覚がなくとも、それは完全に自慰行為だった。
「ホント、これ……っ」
アリアは寝ながら自分のシャツをまくり上げる。
ここまでずっと布越しに弄っていた部分だったが、まるで自分のものでなくなってしまったかのような未知の感覚を伝えてくる突起。
いつもよりも明らかに大きく腫れているように見えるそれが、今どのような状態になっているのか。気になるのはしょうがない事だった。
「これ……んきゅ!?」
どうなっているのか、試しに指で摘まんだところ――息が詰まった。コリコリにしこった乳首が、アリアのちっこい手で弄ばれる。程よい弾力を返してくる突起が、弾けるような快楽を発生させてくる。
散々高ぶらされたアリアの体は、簡単に頂点まで上り詰めた。
「んっ!? んんんんっ!!?」
アリアの体が弓なりにのけぞり、不自然に何度も痙攣する。腰がカクカクと動き、股間のワレメから透明の液体が滲み出る。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……っ!!」
乱れていた息が整い、ようやく自分の体が自由に動くようになると、自分の下着が湿っていることに気が付いた。
「え、ぁ！　こ、これ……!!」
その意味を『誤解』して、アリアの顔が赤くなる。
急いで飛び起き、布団への被害を確認する。
「ほっ……」
幸い、シミになるほどではなかった。そのことに、アリアは心からホッとした。
この事が、面倒なヤツ――特に理子に知られた時のことを考える

と、そのまま自害したくなるほどの屈辱だ。

「ぶあっははっはっは!!!　アリア、さ、流石にそれは！　この歳になっておもらしってっ!!」
「い、いやっ！　違うから！　これは――――」
「ンンン？　何が違うのかなぁ？　布団に描かれたこの見事な世界地図、言い逃れは出来ないよねぇ？」
「うううううぅぅぅぅぅ～～～～～～ッ!!!!!!」

「じ、地獄だわ……」
その光景を考え、ブルリと震えるアリア。そうなってしまえば、これから先、一生理子に頭が上がらないだろう。
何度も思う。
「本当に良かったわ……」
だが、
「ね、寝る前にもう1回トイレに行っとこうかしら……」
勘違いで不安になったアリアは、絶頂後の重い体を起こし、トイレへ向かうのだった。

「ふーっ……」
台所で水を飲んだアスナは、ホッと一息ついた。流し台に両手をついてうなだれる。
「マズいかも……」
体を蝕む熱……いや、もう言い繕っても仕方ない。体の疼きは限界

に達しようとしていた。
無意識のうちに内股をこすり合わせている。何もしていなくても下着がビチャビチャになるほどの蜜が溢れ出す。
「はっ、はっ、はっ……！」
限界まで早くなった心臓の鼓動は、無理矢理に呼吸を短くさせる。
「こ、これぇ、やっぱり、マッサージの、せい？　理子ちゃん、どんなマッサージを予約したの……？」
もちろん、理子の選んだマッサージのせいだった。人体のツボとオイルを利用した特別なマッサージ。
性行為が初めてだったり、感覚が鈍い人用に全身を敏感にするものだ。
そして当然ながら、その効果はずっとは続かない。明日の朝には元通りになっている。それは計算によって、この時間、行為が行われるであろう夜の時間に効果が最大化されるようになっているからだ。
「明日から学校なのに……」
油断すれば秘部に伸びてしまいそうな手を引っ込め、顔を振る。
ここまで疼いた体で考えなかったかと言われれば嘘になる。
翔の部屋に行って抱きついてしまえば、後はもうそれでいい。
だが今の状態でそれを求めれば、きっと1回では済まない。きっと何回も、それこそマッサージの効果がなくなるまで求めてしまうことになるだろう。
優等生であるアスナは、学校の前日に徹夜で何かをやろうかなんて思ったりしない。いや、出来ない。
その辺りは理子の計算外だった。
理子の計算では、この時間にはすでに翔の部屋に突撃している想定だった。予想以上にアスナの忍耐力が高かったのだ。
何とか作りあげた壁で、理性を保っていた。
「アスナ？　大丈夫か？」
「っ!?」
アスナの心臓が不具合を起こした様に跳ねる
作り上げた理性の壁にヒビが入るのを感じた。

そこには心配そうな顔をした翔が立っていた。

何となく下に降りて来た俺は、アスナを見つけた。明らかに様子がおかしかった。
「アスナ？　大丈夫か？」
「っ!?」
俺が声をかけると、アスナはひどく驚いた様子で俺を見ていた。そんなに驚くことか？　別に足音を殺していたわけでも無いのに。
こちらを向いたアスナの顔は赤く、呼吸も平常とは言えなかった。
そしてそれ以上に気になるのは、
「……んんっ」
見つけてしまった俺は咳払いをしつつ目を反らす。
「え？　どうしたの？」
「や……」
アスナの来ているのは無地のTシャツだ。それを押し上げる双丘、その頂点にくっきりと見えてしまっている。明らかに硬くなっているであろう2つの突起が。
なんと言おうか迷ってしまう。そもそもこれは指摘したほうがいいのか？
アレを見ると、アスナの違和感の意味が、やっぱり、そういう方向に思えてしまう。
よく見ると、体をもじもじとこすり合わせている。心なしかアスナと目線が合わない。俺の顔よりもずいぶんと下を見ている。
「まあ、それもそうか……」
「え、な、何が？」

アスナは上ずった声でとぼけた。
俺の下腹部には血液が集まり始めている。段々とズボンを押し上げ始めているのだ。それを見ていたことはごまかしようがない。
俺は一歩前に出た。
もう1歩前に出て抱きしめる。
「アスナ」
「や、ぁ、だ、だめ……っ」
お互いの体が密着し、お互いの興奮した部分が押し付けられた。アスナのおっぱいが俺の胸板で潰れ、その先っぽのコリコリとしたものが擦れる。
俺のイチモツはアスナのお腹をぐりぐりと押す。逃げようと腰を引くので、背中に回していた右手を下に下ろし、お尻を鷲掴みにして逃がさない。
「あぁ……っ、ほ、ほんと、もう、ね？　明日もあるし……」
すっかり固くなった俺のイチモツに、アスナの手が添えられ、撫でられる。まったく、口で言っている事と行動が全然違うじゃないか。
今のアスナの体が、これをどれだけ求めているのか、この行動で嫌というほどわかってしまう。
「――――」
「ふんぅっ!?　ちゅぱ、ちゅぷ、むちゅ、ンぅぅぅ……っ、ずちゅ、じゅるるっぅぅぅ!!」
重ねられた唇から、いやらしい音が響き渡る。舌が絡まり、互いの粘液を交換していく。
「へぅ、へぁ、ぁぁっ……」
終わった時には、アスナから否定の言葉が聞こえなくなっていた。
俺は一気にズボンを下ろした。
「っ、んぅ」
飛び出した俺のペニスに、アスナは息を呑んでいる。硬く反り返ったそれは真っ赤に腫れ上がり、アスナに向けられていた。すでに女の子を貫く準備ができている。
それはアスナも同じだ。

ゆっくりと自分の股間に手を伸ばし、服の中に手を入れている。その中でせわしなく指が動いているのが分かった。その動きに合わせて、くちくちと水音が聞こえる。
目の前でアスナが自分の所を弄っているところを見て、俺の息子がますます硬さを増す。
お互い準備は万端なのだ。もう我慢する必要なんてない。
「アスナ、良いか？」
「明日もあるから……早く終わらせようね？」
絶対に早くは終わらないな。
そんな確信を抱きつつ、俺達は１つになった。

リフレッシュ　後編（ジャンヌ、アスナ）

「ふっ、く、ぁ……ぅく……っ」
マッサージを受けたその日の夜。ジャンヌはシャワーを浴びながら身悶えていた。
ジンジンとした熱を訴える体。今日は早く寝てしまおうと、こうして身を清めているのだが、最初の体を洗う段階で躓いてしまった。
スポンジで泡立てられた泡。本来なら体についた汚れを柔らかく落とす道具だが、今はそうではない。
そこまで強く押し当てているわけではないというのに、いや、だからこそ、スポンジでこすった部分にむず痒い刺激が走るのだ。
早く湯船に身を沈めたいと思って手を動かせば、それだけ体に走る刺激も強くなる。
ジャンヌはその刺激の正体を知っていた。そしてその原因についても、おおよその見当はついていた。
「理子め……！　いったいどんな店を予約していたんだ……！」
恨み言を呟いた瞬間、
「ばーん!!」
「ッ!?」
勢いよく開かれた扉に、ジャンヌの心臓が大きく跳ねた。
そんな派手なことをしてくるのは、この家でただ1人。しかし、その人物は今はいなかったはず……だが、ジャンヌの目に入ってきたのは紛うことなく、
「り、理子!?　何をしている!?」
「ん～？　たった今帰ってきて、明日もあるから早くシャワー浴びて寝ようかと思って？」
「それはいい！　私が言いたいのはなぜ今入ってきたのかという事で……！」
ジャンヌは急いで自分の体を隠した。丸まるように、両手を使って局部を隠す。
「ちょうどジャンヌが入ってるって聞いたから。ほらほら、久しぶり

に背中を流してあげようかなって」
「そんなことをされた記憶は無いっ!!　おい！　入ってくるな！」
「そんなに嫌がらなくてもいいじゃん～」
ジャンヌの声も空しく、理子はニコニコと浴室に入ってくる。
扉を背にしているため、隙を突いて逃げることも出来ない。
「そうだ！　今日のマッサージ！　そもそも、お前はいったいどんな店を予約していたんだ！」
ずっと言ってやろうと思っていたことを口にするジャンヌ。それに対して、理子は真顔で首を傾げた？
「どんなって？　人気のお店だったからあそこにしたんだけど？　何かヤなことあった？」
「え、あ、いや、そ、れは……」
ジャンヌは言い淀んでしまう。今日のマッサージが体の異変の原因だという事は確信していたが、理子が狙っていたのかは分からないのだ。
理子ならやりかねないとも思うが、こうも真顔になられると判断に困ってしまう。
それこそ理子の術中なのだが。
「ふんふん、体を洗ってたの？」
「そうだが……お、おいっ！　スポンジを持っていくな！」
持っていたスポンジをするりと盗まれる。そのことに抗議しようとするが、
「そう言わずに～」
「や、やめっ、んっ」
理子は聞く耳持たずにジャンヌの背中を擦り始める。優しい手つきにジャンヌの体がブルリと震える。
「どお？　力加減とか、丁度いい？」
「あ、ああ、いいっ、感じだ……」
ジャンヌは声が上ずらないように気を付けながら返答する。理子の性格を考えて、下手に拒否するよりもある程度受け入れてしまうほうがよいと考えたのだ。

流石の理子も、背中を流す以上の行為はしないだろうと、そんな甘い考えをジャンヌは持っていたのだ。
「やー、ホントにきれいな肌だよねぇ、ジャンヌは」
「そ、そうかっ？　ん、んんっ、まあ、マッサージの効果も、ぉっ、あるかもしれないが」
理子の雑談にも応じる。相変わらず、敏感な肌を擦られた反応を声に出さないことに苦労はしたが、それでも会話を繋げることは出来ていた。
そうすることで、心配したほどの事態にはなっていなかった。ごく普通に、背中を洗ってもらっているだけだ。
「むふふ」
「な、なんだ？」
「なんでも？　そ～れ、ごしごし～」
だが理子の視点で見れば、理子の思い通りの反応だった。最初は警戒心マックスだったジャンヌが、体の力を抜いている。
お化け屋敷で序盤に脅かさないことで油断させるように、怪しいことをしがちな理子が何もせずに普通にふるまう事で、警戒心を解いたのだ。
「(それに、マッサージの効果はしっかりと出てるみたいだしねぇ)」
理子は真っ赤になって熱を持っているジャンヌの耳を見てニヤニヤしていた。恥ずかしさだけではなく、もっと他の感情があることを、理子は知っていた。
「(じゃあ、そろそろ……)」
「おい、そろそろ背中はいいんじゃないか？」
ジャンヌもそう考えたようだ。
「そうだね。背中は終わりだね」
「ああ、そうだな」
背中は終わり。それは2人の共通の考えだった。違うのは、その後に何をするかという事。
「ひうっ!?」
ジャンヌの声が裏返ったのは、理子の手が何の迷いもなく前に伸び

たからだ。
「お、おい！　理子⁉　なんで……っ」
「んー？　や、背中が終わったら次は前でしょ？」
当てが外れたことで、一気に焦りだすジャンヌ。
慌てて理子の手を押さえようとするが、
「お、おひっ⁉」
胸のふくらみの間を通り過ぎるスポンジは捕まらない。ならばと体を隠そうにも、お腹を這いまわる手のせいでうまく力が入らない。
それに四苦八苦していると、ジャンヌは何やら柔らかい感触を背中に感じた。ヌルヌルと、背中を洗った時の泡で滑る2つの双丘とその頂点にある2つの突起。
「お、おい！　お前の胸も当たって……！」
「何恥ずかしがってんの～？　女の子同士じゃ～ん」
そう言う理子の手は、どんどん遠慮がなくなっていく。
理子の手を止めようと伸ばされたジャンヌの手が逆に捕らえられ、扱くようにスポンジで磨かれる。
特に念入りにわきの下の窪みをぐりぐりとすると、それだけの刺激で腰が引けそうになってしまう。
「おま、えっ！　そんなところ……っ！」
「どうしたのジャンヌ？　ここ弱かった？　くすぐったい？」
ふざけたことを言いながら、理子の手はさらに動く。これまでの刺激でしっかりと硬くなってしまった2つの突起へと。
「や～、ジャンヌってホント、イイカラダしてるよねぇ～、どこを触ってもすべすべだし」
「ば、か、どこ、触っ、て……！」
形のいいお椀型のおっぱいが、理子によって形を変える。その中の一番の性感帯である乳首への刺激は、スポンジ越しとは言え耐えがたいものだった。
もはやジャンヌは抵抗する余裕すらなくなってきた。声を出そうとすれば、それは恥ずかしい喘ぎ声へと変換されるほどに高ぶってしまっている。

「(ああ……っ、まずっ、ホントに……!!)」
ジャンヌの思考にモヤがかかり始める。自分でも止められない絶頂への波が押し寄せてくる。
理子を止めようとしていた手にも、うまく力が入らなくなってきた。自分の下腹部に蜜が溢れ、お腹が不自然に痙攣する。
そして、とうとう決壊した。
「〜〜〜〜〜〜〜っ!!!!」
歯を食いしばって、声を上げることだけは堪えた。
「あれ〜？　ジャンヌ、どうしたの？　大丈夫？」
「なん、でも、ない……っ」
理子の白々しい心配にも、ジャンヌはリアクションすることも出来ない。自分の体の反応を沈めるのに必死なのだ。
もちろん隠せていない。
丸まって体を震わせるその姿は、紛れもなく女性が絶頂してる時の姿だ。
座っている椅子には、秘部から噴き出した大量の液体が水たまりを作っていた。お風呂でなければおもらしだと勘違いしてしまうほどの量。
経験のないジャンヌにとって、まず間違いなく一番深い絶頂だった。
内股になった足が震えるのを必死に我慢して、漏れそうになる嬌声を、口を手でふさぐことで飲み込む。
「(うっわ、えっちじゃん)」
その様子に、理子は思わず息を呑んでいた。
湯船に浸かったわけでも無いのにほんのり赤く染まった背中は、乱れた呼吸で何度も上下している。ジャンヌが必死に我慢している――つもりになっている体の痙攣も、そんな簡単に我慢できていれば苦労は無い。
もう少しこの光景を堪能していたいという気持ちはあったが、
「じゃ、じゃあ、やっぱり私は後に入るから。ごゆっくり〜……」
理子はジャンヌが正気を取り戻さない内に、さっさと退散するの

だった。

ぬぽっ、ぬぷっ、ぷぽぽっ、ぬぽっ。
台所に粘着質な音が響いていた。
「も、もっと、おくっ、奥にぃぃ……っ」
ぐずぐずに濡れそぼったアスナの肉壺に、何度も何度も肉棒を突き入れる。
肉棒を入れた瞬間から分かっていた事だったが、アスナの体はこれ以上なく準備が万端になっていた。
キッチンに突っ伏すようにして腰を上げたアスナ。弾力のあるお尻を割り開くと、その奥には少し口を開けた秘部が、挿入を今か今かと待ちわびていた。
その格好をしたのはアスナ自身だった。俺は何も言っていないというのに、しようといったアスナは、何も言わずにその格好になったのだ。
てっきり部屋に移動してからだと思っていた俺は面食らってしまった。
だが、お尻を突き上げる格好で、ちらりとこちらを振り返ったその瞳は、『どうしたの？　しないの？』と言っていた。
そう言われてしまっては俺が嫌という筈がない。場所を移動することなく繋がり、お互いに腰を振る。
そう、お互いにだ。俺が腰を突き出すだけではなく、アスナは自分で腰を動かし、俺の肉棒をより良い場所に当てようとしてくる。
貪欲に快楽を貪ろうというその姿勢は、いともあっさりとその体を絶頂まで押し上げる。

「お゛、ぁぁ、ぅぃっ、ひぅ、えぁっ、い、イく……っ、ううッ!!?」
そしてこれが数回目の絶頂だ。
始めの方は我慢していた声も、もう隠せなくなっていた。
「やば……っ」
うねうねと締め付けてくる膣内に、俺も限界になった。
――ごぷっ、ぶりゅりゅっ、びゅくっ、ごぷぷぷっ
アスナに覆いかぶさるように抱きつき、本日1回目の、一番濃いものをアスナの奥に吐き出した。
右手でアスナの胸を潰すように、左手でお腹の、今俺のチンポがある辺りを両手でしっかりと固定し、アスナを逃げられないようにする。
奥の小部屋以外にこの欲望の捌け口はないと言わんばかりに、チンポの先から出てくる白い粘液を送り込んでいく。
「〜〜〜〜〜〜っ!!!」
アスナはその衝撃で追い絶頂を迎えていた。
左手に、アスナの体の中の子宮が痙攣を起こしているような錯覚すら覚える。
お互いに一度ゴールまでした。
聞いてみるか。
「アスナ。満足、したか？」
「……もうちょっと、したい」
分かりきっていた答えが返ってきた。
「ぁ……なんで？　しないの？」
ペニスを引き抜かれたことに、抗議の声を上げてくるアスナ。
「や、お前……これでそんなこと言うか？」
見下ろすと、そこには大きく反り返った肉棒がある。一度種付けが終了したというのに、まだまだやる気だ。
「ここでやめたらこっちも辛いよ。ちょっと場所変えようと思って」
「場所？　ああ、うん、そうだね……」
「ん？　や、俺が言ったのは」
アスナはリビングのソファーへ向かい腰を下ろした。俺が言いた

いのはどっちかの部屋に移動してって意味だったんだけど。
「もう遅いし、ここでも大丈夫だよ」
「あんな声出してたら、誰か起きてくるかもしれないけど……まあ、アスナがいいなら」
俺も移動した。
アスナは両足もソファーに立てて座っていたが、下半身に何も身に着けずにその格好をすると、足の付け根で影になっているのにもかかわらず。秘部が強調されるという不思議な格好だ。
生唾を飲み込みながら、アスナの足を開く。そこでは俺とアスナのが混ざり合った液体を溢れさせた肉穴が、ヒクヒクと『次』をおねだりしていた。
「じゃあ、入れるぞ」
「うん……」
何度も絶頂を経験した肉壺は、すんなりと俺の肉棒を迎え入れてくれた。ふかふか、とろとろのヒダが、俺の息子を歓迎してくれる。
「はあぁっぁぁぁ……」
お互いに背中に手を回す。
ただ挿入しているだけだというのに、ゾワゾワとした感覚が背中を駆け抜ける。アスナも同じのようで、寄せられた眉とせわしなく動く背中がそれを伝えてくれる。
「お〝、あ、ぁ〝ぁぁっ……！」
ぞりぞりと肉ヒダを掘削し、俺の肉棒が奥へ奥へと向かっていく。肉襞を一枚通り過ぎるだけでアスナはプルプルと震えている。
最後の一押しは一気に突き出した。
下に降りてきていた子宮口と亀頭が勢いよくキスした。
「い、ぐう〝、うぅぅ……っ!!」
ぴったりとフィットしたチンポが、絶頂の痙攣に包まれた。
「アスナ、大丈夫か？」
「う〝、ん……！　大丈夫、だからっ、好きに動いて？」
1回目で散々絶頂したはずのアスナだったが、そのおかげで程よくほぐれていた。むしろこれからが本番だと、たった1回で枯れるなん

て許さないとばかりに、絡みついてくる。
それを強引に引きはがし、ペニスを打ち込んでいく。
「へぁ、あぅ、はっ、んく……っ」
決して激しい動きではないが、その分深く、ねちっこく突いていく。
深く挿入したままで小刻みに動かすと、アスナの腰がぷるぷると震え、自分で腰を擦りつけてくる。いや、擦りつけているのは種付けを待ち望んでいる子宮口かもしれない。
「アスナ、上も一緒に弄るぞ」
「へ、ぁ？」
アスナの服の中に侵入する俺の手。すぐに形のいいバストの感触がする。うっすら汗に濡れたその表面を俺の指が滑り、頂点にあるモノを捉えた。
この行為のすべての原因になった、２つの突起だ。
「は、あぁ!? い、いっひょに、いじ、あ゛ぁ、まら、イ……っ!!」
乳首を少し転がしただけで、アスナの体はカクカクと震える。
その間も、突起を転がす指の動きは止まらない。程よい感触のそれを、指の腹で転がし、押しつぶしていく。
カクカクと震えるだけではなく、アスナの体が弓なりに反られていく。股間からはたらたらと液体が垂れていく。
「イ、▪って、るのに……っ、またイ、くぅ……っ!!」
アスナの体の反応に、俺のペニスも限界が近くなってきた。
弓なりに反りかえるアスナの体を抱きしめ、腰振りを速めていく。ラストスパートを悟ったアスナの膣壁が、せわしなく収縮を繰り返し、俺の精を搾り取ろうと必死になっていた。
そして、俺にも限界が訪れた。
「あっ、あっ、あぁぁぁぁぁぁっ――――!!」
「うぐぅ……!!!」
――ごぽっ、びるるっ！　ぶぶりゅるるるっ!!
俺達は抱き合ったまま、絶頂に酔いしれた。二回目とは思えないほどの量の精液が、アスナのナカに吐き出されていく。
それを一滴残らず、アスナの子供部屋が飲み込んでいく。射精が済

んでも心地よい事後の感覚に、俺達は何も言わずにキスをしていた。
だからこそ気が付かなかった。
この場に近づいてくる人影に。
「なに、してるの……？　２人とも、そんな恰好で……」
「ア、・アリア……!!」
「あひあ、ちゃん……」
そこにはこの家で一番行為がバレてはいけない人物、アリアが立っていた。

理子の目論見通り（アリア、アスナ）

「あなた、やったわね」
「ふひひ、なに言ってるかわかんな～い」
お風呂から撤退した理子は、リビングで夾竹桃と一緒にくつろいでいた。
「今日ジャンヌが行ったお店、面白いコースがあるみたいね」
「ぴ～ぴ～」
夾竹桃の指摘に、理子は口笛を吹いてとぼけている。
端末でマッサージ店のサイトを見ている夾竹桃。薬品に詳しい彼女には、今日、ジャンヌたちが受けたマッサージで使われていたオイル。その成分に見覚えがあった。自分も仕事でたびたびお世話になるモノだったからだ。
「や～、まさか、あんなに効果があったなんてねぇ」
「相手もプロよ。マッサージ師のプロフィールも見たけど……元武偵、それも尋問関係の仕事を中心に引き受けていたらしいわね」
「現役時代は、どんな『尋問』をしてたんだろうねぇ？」
理子はいやらしい顔になって、いやらしい妄想を繰り広げている。
「どうかしらね。でも、今日のジャンヌの様子を見ると、相当の腕だったでしょうね」
それとは対照的に、夾竹桃は冷静に返す。
世界にはそういった方面で活躍する武偵もいるのだ。スパイまがいのことをして相手に近づき、様々な手段を使って情報を得る武偵も。情報を得るためには手段を選ばないのだ。
もちろん、あのお店のマッサージ師がそういったことをしていたのかは分からないが。
「ま、今はお店を開いてまっとうに働いてるってことで」
「どうでしょうね。夜は怪しげな集まりに使われてるかもしれないわよ。何も教えないで連れていくのはやめなさい」
「は～い」
あまり反省した様子の無い理子に、夾竹桃はため息をついた。

「そもそも、どうしてホームズ４世をマッサージに？　そんなことをする間柄じゃないでしょう？」
「ん～、まあ、そうなんだけどねぇ……でも、このまま何もしないで勝ち逃げもつまんないでしょ？　張り合いがないもん」
「あのお子様には早いような気がするわね」
「あはは、そうかもね。理子もあの家にいるせいで感覚がおかしくなってるのかも」
　つい１０分前にジャンヌに色々としたとは思えない態度で、理子は笑うのだった。

「なに、してるの……？　２人とも、そんな恰好で……」
「ア、・アリア……!!」
「あひあ、ちゃん……」
　よたよたと近寄ってくるアリア。
　俺の顔から血の気が引く。息も絶え絶えなアスナは、気だるげに視線を向ける。声の主が誰かを確認した瞬間、緊張からか膣内がきゅっと締まった。
　お互いが下半身を丸出しにして密着しているこの状況、普段のアリアなら就寝時間だろうと拳銃が飛び出してきてもおかしくない。
　だが、どうにも様子がおかしかった。
　足元はふらつき、視線も定まっていない。何より、俺達を見てもこの程度の反応しかしていない。
「アリア、もしかしてお前も……？」
「は、え？　何、言ってるの？」
　アスナのこの変調の原因は、どう考えても今日のマッサージだ。そ

れ以外に考えられない。
　それはもう、ＡでＶなビデオではよくあるような展開かもしれないけど、そんなものが本当にあるなんて。そして理子がそんなお店を知っていたなんて。
　色々と驚きポイントはあるんだけど……大丈夫だよね？　理子の紹介だったんだし、危ない事にはなってないよね？
　……とまあ、そんな不安は置いといて。
　マッサージが原因だとすれば、それは当然、同じマッサージを受けていたアリアにも効果があるはずだ。
　目の前のアリアの様子を見れば、その考えは正しかったんだろう。
「アリアちゃん……」
　アスナもすぐに同じ結論に到達したらしい。いや、今のアリアの状態について、俺よりもアスナの方が理解出来るんだろう。
「ね、翔君」
「や、それは……」
　アスナは俺にしてあげて欲しいと言っている。体の火照りを収めるために必要なことなのだと。
　でも、良いんだろうか。アリアはそういうこと知らないだろうし、騙すような形で初めての行為をしてしまっても。
「今回を逃すと、アリアちゃん、ずっと自分の気持ちに素直になれないと思うから。理子ちゃんも、これを狙ってたんじゃないかな？」
「理子が？　そうかな……」
　そうだとすれば敵に塩を送る行為だ。でも、理子ならあり得るんだろうか。確かにアリアのことは、あくまで正々堂々倒そうとしている気がするし、そこをプライドにしている部分もある……
「きっとそうだよ。私も説得するし、本当に嫌がるなら、無理強いはしないから」
「……分かった。アスナがそう言うなら」
　俺はアスナから自分のモノを引き抜いた。引き抜かれた衝撃で、アスナの腰がびくりと跳ねる。
「きゃっ！　な、なによ、それ……早くしまいなさいよ……っ！」

膨張した俺のイチモツを見て、アリアは顔を真っ赤にする。こんなモノ、アリアも初めて見るんだろう。
その間にアスナはゆっくりと起き上がった。
「アリアちゃん」
「な、何？　って、下！　アスナも早く下を穿いて……！　ちょ、ちょっと！　何で近寄ってくるのよ！」
アリアの静止を無視して近寄ったアスナが、何やら耳打ちしている。すると、
「え、ええ!?　あ、あれを!?」
アリアは突然大声を出した。自分の股間を押さえ、俺のイチモツを指さす。
「む、無理よ、そんなの!!　絶対入るわけ……!!　それも、ここになんて……！」
アリアは視線を下げる。アスナにどんな説明をされているのか詳しくは聞こえないが、行為についての説明をされているのは分かるな。
「でも、ね？　アリアちゃんも辛いでしょ？　好きな人にしてもらえば、少しは和らぐはずだから」
「すすす好きな人!?　な、何言ってるのよ!!　そんな人アタシにいるわけないじゃない!!」
突然アリアの大声が聞こえた。
「……アリアちゃん」
「な、何よ、その目は……！　いないものはいないのよ！　そもそもこの場には……」
アリアの視線が俺を捉える。
「翔しか、いないし……って、まさか……!!　む、無理よ！　そんなの……!!　だってアイツにアソコを見せるってことで……そもそも、ここは誰かに見せるところじゃないでしょ！」
「……でも、翔君ならいいでしょ？」
「よくない、わよ……」
「体も辛いでしょ？」

「辛いけど……」
子供を諭すようなアスナの声だが、アリアは逡巡している。しかし、その後の決断は早かった。
「ああもう!!　分かったわよ!!　翔、やりなさい!!」
そう言いきった。
「お、おいおい……」
そんな、勢いだけで。
俺は止めようとするが、今のアリアの様子を見ると、俺の言葉に耳を貸すようには見えない。むしろ、覚悟を決めているアリアに意見すると、何が飛んでくるのか分からない。
「あ、あんまりじろじろ見るんじゃないわよ……！　目ぇ瞑りなさい！」
「そ、そうだな」
下半身のパジャマに手をかけたアリアが、真っ赤な顔に犬歯を覗かせながら威嚇してくる。
俺は言われるままに目をつぶった。
「アリアちゃん、ソファーに横になろ？」
「う、うん……」
「翔君はこっちに来て？　……そう、そのあたり。あ、もう少し腰を下ろして」
「わかった」
アスナに誘導されて俺とアリアは移動する。俺には見えていないが、俺はソファーの上で膝立ちになっている。アリアがどんな態勢なのかは分からないが。
「こ、こんなの入らないでしょ……」
「ああ、アリアちゃん、そこじゃなくてね……」
声と共に、２つの手が俺のペニスの位置を調整している。やがて、俺の先端がぷにぷにの肉を少しだけ割り開く感触があった。
「うん、翔君、それじゃあ……」
「ゆっくりしなさいよ……!!」
「ああ」

俺は腰を前に突き出し始める。
「痛っ、たい……!?　あ、れ……？」
恋愛には興味が無いと言ってたアリアのことだ。当然初めてだっただろう。俺が目を開けていれば、その結合部から鮮血が垂れているのが見えたはずだ。
最初は引きつった声を出したアリアだったが、次第に困惑に変わっていく。
そして俺も、
▪
「うわっ、これ、ヤバ……!!」
俺のペニスはアリアの中にどんどん吸い込まれるように呑み込まれていく。そのくらい、この肉壺が俺のペニスを求めているのだ。
そして相手に合わせて最適なサイズになる俺のペニスは、それに逆らうことなく飲み込まれていく。
相手に合わせるという事はつまり、俺に対しても最適な刺激を与えてくれるという事だ。キツすぎず緩すぎず、お互いが最高の状態になっている。
「あっ、あっ……!!　なんかくるっ……!　翔っ、翔っ……!!」
手をさまよわせているアリアを抱き留めると、背中に手がまわされた。
それと同時に、
「うっ!?　ぐうぅぅぅぅっ??!!?」
抱き留めたアリアの体が細がく痙攣する。
「う、ぁ……!」
それと同時にうねる肉壺。アリアの背中に回した腕に力を込めて、俺もその刺激に必死に耐える。
すでに2回も射精した俺のペニスは、これ以上なく敏感になっている。でも、こんなにすぐに射精(だ)してしまうわけにはいかない。
この状態のアリアの奥にぶちまけてしまったら、アリアの初めては、それだけで終わりになってしまうかもしれない。
「ぁ、ば、バカ、目、開けてんじゃない、わよ……」

「あ、ああ、そうだったな……」
絶頂で余裕がないだろうアリアが、舌足らずな声で注意してくる。言われて目を瞑る。俺も余裕がなくなってしまったのだ。
膣内の痙攣が落ち着いたことで、俺にも腰を揺らす余裕ができてきた。だが、アリアはそうではないらしい。
少しだけ揺らすだけで、
「い、ぁあああ……っ、ゆらさない、ぁっ、まら、くる……ぅっ!!」
アリアの体がカクカクと揺れる。それに合わせてきゅうきゅうと心地よい締め付けが俺を刺激してくる。
「アリア、落ち着いたか？」
「分かんないわよ……っ、ずっとふわふわして、アタシの体、おかしくなってる……！」
ペニスが肉ヒダを擦るだけで快楽が発生しているせいだろう、今まで感じたことの無い『快楽』という感覚が、アリアの判断を鈍らせていた。
とは言えアリアは初めてだ。そこは配慮しないと。
ゆっくり引き抜く。
「あぁ……っ、中、めくれる……っ」
そしてゆっくりと差し込んでいく。
「入って――――ぅぃ!?」
奥の、降りてきている子宮口に到達すると、アリアが変な声を出した。
ゆっくり、ゆっくり、初めての侵入者に驚いているアリアのおマンコに、俺のペニスは敵ではないと教え込むようにピストンしていく。
「アリア、どうだ？」
「だ、からっ、わかんない、って、言ってるでしょ……！」
「そうだな」
あまり負担になっていないようなので、腰の動きを速めてみる。
「ひ、ぃ、でっぱり、が、あぁ……っ」
張り出したカリ首が、より乱暴にアリアの膣ヒダを抉るようになる。ぐぷっ、ぐぽっ、と、アリアの愛液を掻き出す下品な音も聞こえ

てくる。
だがそれでも、いくらゆっくりしていると言っても、快感は溜まっていく。
俺も段々と限界に近付いてきた。
「アリア、そろそろ射精そうだ……!!」
「は、え？　な、なに？　ないが、出るの……？」
アリアが何を言われているのか分からないと言った反応をしているが、すでに幸丸から昇ってきているモノは止められない。
――――ごぴゅ、ぷりゅ、ぶりゅりゅっ
「――――ぅっ、あああああああぁぁぁぁぁっ!!??」
初めて精液が叩きつけられた子宮がお腹の中で痙攣している。その様子を、俺のペニスが詳細に感じ取っていた。
「はっ、はっ、はっ……!!」
深い絶頂に体の自由がきかないんだろう。苦しそうに体をこわばらせている。
アリアの肉壺は今日一番の締め付けを見せ、逆に尿道が緩んでしまったのか、ちょろちょろと漏れてしまっていた。
それが落ち着いてくると、そのまま眠ってしまう。初めての体験で、体力がなくなってしまったんだろう。
力尽きて寝てしまったアリアをソファーに寝かせる。
顔は赤く、下腹部からは俺の精液が漏れ出している。だが、その寝息は安らかだった。
アリアも気を失ってしまったし、体が冷えないように下の服を着せようとして、アリアの下着がびしょびしょになっていることに気が付いた。
これを穿かせるわけにはいかないか。
そう思って、アスナに声をかけようとした。
「アスナ。……アスナ？　どうした？」
俺の後ろに立っていたアスナは、両足を揃えて立っていた。落ち着きなくもじもじと。揃えられた足の内股には、てらてらと光る透明な液体が垂れている。

何か言いたそうにしている。視線はいまだ丸出しになっている俺の下半身に向けられている。
これは……
「……ね、翔君。もう1回だけ、しない？」
「アスナ……」
アスナの顔が真っ赤になった。すでに2回もしているのに求めるのは相当に恥ずかしいんだろう。
だがそれは、今のアスナの体がどれだけ昂っているのかがわかる。
俺は立ち上がり、アスナに向き合った。当然、俺の息子は臨戦態勢になっている。
アスナは唾を飲み込み、揃えられていた足を少し開いた。俺は前に踏み出す。すると、俺の肉棒がアスナのお腹に突き刺さった。
「アスナ……」
「うん……ちゅっ、ちゅぱ、ちゅるっ、ずりゅっ、んっ、ぁ……っ」
俺達はお互いの舌を絡ませる。
その間にアスナは俺の肉棒を操作する。お腹を滑り、下腹部へと、足の付け根へと。恥丘と足の付け根の間、少し暗くなっている部分に俺のペニスが埋まる。
次の瞬間、俺の亀頭がねっとりとした肉に包まれた。俺のペニスよりもはるかに熱を持った。アスナの身体。
俺はそのまま腰を動かし、
にゅるん。
「あうっ!?」
亀頭がアスナの体に埋まる。それだけでアスナの体の脈動が伝わってくる。
「ふぅぅぅ……っ」
大きく息を吐くアスナ。お互いに腰を動かし、少しずつペニスを奥まで進めていく。
にゅるる、くぷぷぷっ。
「あぁ……入、って……っ」
「ああ……」

肉をかき分けて進む感触が、俺の背骨にビリビリとした感覚を伝えてくる。
激しくしなくても、こうやって揺らしているだけで、緩やかに性感が溜まってくる。
「このまましてるだけでも、出せそうかも……」
「はぁ、はぁ、はぁ、わ、わたしも、このままでも、イイ、かも……」
お互い、もう激しい行為は求めていなかった。
抱き合いながら腰を揺らす。ぐぷぐぷと音が鳴り、細かくアスナの奥を突く俺のペニス。それだけで腰が痺れるような快楽が伝わってくる。
「へっ、へぁっ、ふぅ、ふぁぁっ」
お互いの湿っぽい息遣いだけが、耳元で聞こえる。時間をかければ、その声はどんどん切羽詰まってくる。
「おくっ、とんとんされるの、いい……っ」
「ああ、すごく締められる……！」
亀頭が何度もポルチオをノックする。今日だけで2回も男の精を飲み込んでいるはずだが、チンポが近づくと口を開けて飲み込もうとしてくる。
ぴったりとフィットしたペニスに、アスナの肉壺は絡みつき、扱きあげてくる。
そうしているとアスナの体が震えだした。
「しょ、う君っ、あたし、もう……！」
「ああ、俺もそろそろ……！」
俺達は抱き合い、そして。
「うっ、ぁ……!!」
「お、っ、ごぉぉ……っ」
――――ごぴゅ、ぴゅるる、ぷりゅりゅ
これが最後だと言わんばかりに、幸丸に残っていたものを全て吐き出す。
「うあぁぁぁぁぁ……っ！」
アスナも体をぷるぷると震わせた。

最後の一滴まで振り絞った俺の肉棒を、アスナの身体は必死に扱きたててくる。こんなものではないだろうと、肉襞がゾワゾワと竿をくすぐってくる。

子宮口がちゅぱちゅぱと吸いつき、尿道に残った『残り』まで吸い取ろうとしてきた。

アスナの足から力が抜け、俺の足もアスナの体重を支え切れない。2人でカーペットの上に座り込む。

「すごく、よかったな……」

「みんなには、秘密、だね？」

俺達はお互い、最後の絶頂を味わうのだった。

新学期の朝（理子）

「うう、ん……」

ぼんやりと意識が浮上してきた。

体が気怠い。結局夜中を超えて朝方まで2人とセックスしていた。後片付けをして布団に入ったのはいいけど、睡眠時間はおおよそ2時間だった。まだいつもの時間よりは早いけど、なんとも微妙な時間に起きてしまった。

少し寝不足だけど、でもそこは若さで乗り切るとしようか。六課の入隊式なのに夜通しセックスしてる俺も俺だけど。

「ん？」

なんだか温かいものが布団の中に入ってる？

そう思って布団をまくり上げると、

「ん、ぁ、もう朝……？」

「理子か」

久しぶりに会った理子はもぞもぞと動き、丸まって布団にくるまっていた。子供っぽいもこもこパジャマに身を包んだ理子は、その童顔も合わさってかなり幼く見える。

この娘、いつの間にウチに来たんだろうか。

「や～、まだ起きたくない～、布団返して～」

もぞもぞと上へ、俺の枕まで登ってくる。

「布団～」

「ああ、はいはい」

俺は布団をかぶせる。

「ん～」

理子はぴょこんと布団から顔を出した。

「いつの間にこっちに来てたんだ？」

「ついさっき。最近昼夜逆転してたからさぁ、全然眠くなくて。翔君と一緒だったら寝られるかなぁって」

それはそれは。

「んふふ、ニヤけてる～。まあでも、翔君は翔君で、昨日はずいぶんと

お楽しみだったみたいだねぇ」
「ああ、おかげさまでな」
昨日のアスナとアリアの異変、やっぱり理子が用意したマッサージが原因だったのか。
「でも――――」
布団の中の理子の手が、俺の下腹部を撫でた。
「――――翔君のここは、全然元気みたいだね」
「……みたいだな」
幼く見えると言っても、その実、理子の身体は出る所が出ている。理子は全く気にしていないのか、ぐりぐりとすり寄ってくるのだから、こうなってしまうのも仕方がない。
と言うかコイツが下着しか着ていないのが悪いんだよ。
まあ、ほんの数時間前まで何発も出していたとは思えない回復力だとは思うけど。本当に節操がない。
そんな硬くなった肉棒を、理子は指で弄んでいた。
「ん、いいよ」
布団がはがされる。
俺が腰を上げると、慣れた手つきで俺のズボンが脱がされていく。
「はい、ご対面〜」
ズボンを押し上げていた肉棒が解放された。
「それじゃあ、いただきまーす……んえろぉ……」
「く、あ……っ」
理子のむっちりとしたお尻のせいでどんな風にされているのかは分からないが、ねっとりとした空気が俺の肉棒を包んでいる。
理子の舌が舐めまわり、じゅぽじゅぽと音がする。温かい何かが上下に動く感覚もする。
「じゅる、ぐぽ、くぽぽっ、じゅずるるるっ」
それに合わせて理子の身体も揺れている。ハニーゴールドの派手な下着とそれに窮屈そうに収まっているお尻。そして女性の秘部。
そんなものを目の前に突き出されていて、我慢できるわけがない。
人差し指を差し込む。

「んんっ!?」
布越しでも粘ついた液体が付着するのがわかる。突くだけでなく上下に動かしてみると、薄い下着はだんだんと割れ目に張り付いてきた。
「もう、そんな急に。そんな悪い子には、こうだっ」
「う、く……っ」
文句を言って来る理子だったが、口を離しても手は止めていない。亀頭全体を掌で包み込むように刺激してくる。
漏れ出した先走りも掬い取り、潤滑油にしてくるのだ。
その強烈な刺激に、俺の口から声が漏れた。
それに気を良くしたのか、理子の手の動きが大胆になっていく。亀頭だけに収まらず、竿も、大胆な指使いで巧みに責められる。
理子の口で唾液コーティングされた肉棒は、そんな動きでも快楽に変換してくれる。
心地よい快楽を堪能していると、すぐに限界が訪れた。
「理子、そろそろ……っ」
「ん……んぁ」
再びぬろぬろした口内に包まれた。
その快楽に身を任せ、理子の口内に吐き出した。
――びゅるる、ぐぶぷぷっ、びゅくく
「んっ、んん……」
そのすべてを飲み込んだ理子。向きを変えて、頭をこちらにした。
「苦ぁ……」
「すまん」
「いいのいいの。理子が好きでしたことだし……でも、昨日た～くさんしたとは思えない量だね……それとも昨日はそんなにしてなかったの？」
いや、そんなことは無かったと思うけど。
「確か、４回は出したはず……」
「うわぁ、アスナ、よくもったね」
「向こうからもっともっとって言ってきたんだよ。１回はアリアだっ

た――――」
「――――アリア？」
理子の口調が変わった。え、なんで？
「あ、ああ。アリアもマッサージ受けたんだろ？　理子がそう差し向けたんじゃないのか？」
「ああ。でも、まさかそこまで一気に進展するなんて……」
何やらぶつぶつと呟いていた理子だったが、
「――――よし」
下着を脱ぎ捨て、俺に跨いで立つ理子。その秘部はすでに涎を垂らし、今すぐにでも何かを食べたいと言っていた。
そしてその目は、捕食者の目になっていた。
「お、おい」
「今から何されるのか、分かってるよね？」
腰を下ろし、復活した肉棒を添え、
「ううあああぁぁぁ～～～……っ」
一気に腰を下ろした。口とはまた違う圧迫感を、俺のペニスは感じていた。
だがそれよりも、
「あっ、ヤバ、もうイきそ、ぅ!?」
体を丸めて痙攣している理子だ。
「理子？」
「……だって前にした時からずっとシてなかったし。女の子だって性欲は溜まるよ」
理子は恥ずかしそうに言った。
「でも、ぉぉ〟」
理子は腰を持ち上げ一気に振り下ろす。痙攣する理子の足はカクカクと震え、上下運動をするにも相当の体力を消費するはずだが、その勢いは衰えない。
「アリアとシたって言われ、てぇっ！」
もう一度。一度絶頂を迎えたことで顔を出してきた子宮が殴打される。

「このままっ、引き下がれるわけないっ、でしょっ！」
一発、一発、理子の奥にある子宮に響くようなくい打ちピストンだ。
だが久しぶりというのは本当のようで、そんな暴力的なピストンにも理子の膣内は歓喜の涙を流していた。
それは理子自身が一番分かっているはずだった。
「う、うううぅぅっぅ……!!」
再び体を震わせる理子。それでも理子の深い腰振りは止まらない。
「ふっ、ふっ、あうううぅぅ、うぁ、はっ、はっ」
アリアのおまんこよりも、自分のおまんこの方が気持ち良いのだと、そうすり込もうとするようなピストンだ。
「理子っ、俺、そろそろ出そうだ……!!」
「理子もっ、またっイッ、あああぁぁあっぁあ!!」
最後のスパートとばかりに速度を増す理子の腰振り、だがすでに快楽の限界値は超えているんだろう。後はどれだけ溢れさせることが出来るかだ。
「お゛ごぉ……!!」
ひときわ深い腰振りが、理子の子宮に突き刺さった。汚いオホ声が理子の口から洩れ、膣内が急激に収縮を繰り返した。
それと同時に、俺も限界を迎えた。
「う、ぐぅっ」
――びゅぶるるっ、びるるっ、びゅるるう
俺達は抱き合いながら、お互いの絶頂に酔いしれる。汗ばんだ体で抱き合いながら、繋がったままで。
そうすること1分ほど。呼吸が落ち着いてきた理子は、
「ね、もうちょっとしない？」
「や、今日から学校だろ？　それに俺は六課の入隊式がある」
「学校は別にいいじゃん？　六課に間に合えば――」
「ダ　メ　で　す！」
俺の部屋の扉を勢いよく開いたアスナによって、それ以上の行為はストップさせられてしまうのだった。

２学期が始まった。１週間前には怪獣に踏み荒らされたことが原因で島中の機能がダウンしていたというのに、今ではすっかり元通りになっているように見える。
俺はというと朝の行為が嘘のように普通に登校した。理子は文句言ってたけど、アスナの圧力には勝てなかったみたいだな。
アスナは、そんな俺に対して何とも言えない視線を向けていた。前の日にあんなにしたのにって顔だ。まあ本人から誘ってきたんだし、そこは見逃してもらいたい。
当然、そんなコトがあったとしても武偵高の始業日は変わらない。
「おはよう諸君。１週間前にあんなバカ騒ぎがあったというのに、全員揃って登校したことは誉めてやろう」
担任である那月先生も休み前と一切変わらない様子だった。相変わらずの尊大な態度も、暑苦しい黒のゴスロリドレスも。
那月先生は全員揃ってと言っているが……例によって何人かいなくなった生徒がいる。その人たちは転校扱いなんだろう。ホントの所はどうか知らないけどね。
そして、それとは逆に転校してくる人もいた。
１人は派手な金髪にサングラス、金色のネックレスをかけている不審者だ。
「土御門　元春だにゃ～、これからよろしくだぜぃ!!」
何でこいつはいきなり馴れ馴れしいんだ。肩を組んでくるな！
那月先生からチョークが飛んでくるだろうが！
もう１人は首にデカいヘッドホンをかけたヤツ。
「矢瀬　基樹だ。よろしくな、夜月」

土御門ほどじゃないが、いきなり俺に話しかけてくる。ってか、その首掛けヘッドホン、邪魔じゃないのかな？
分かるとは思うけど、２人は原作のキャラクターだ。
『土御門　元春』は『とある魔術の禁書目録』、『矢瀬　基樹』は『ストライク・ザ・ブラッド』の。
能力や性格云々は置いといて、両者に共通する原作での立ち位置は、主人公の友人兼どこかしらのスパイ、エージェントだってことだ。
このタイミング、俺のことを監視しようとどっかから派遣されてきたんだろうなぁ。やたら俺と仲良くしようとしてるし。逆に露骨過ぎないか？　こんなもんなのか？
何人かのクラスメイトもそれを察したのか、いつも以上に俺から距離を取っていた。いつもは女たらしの変態としてだったけど、明確に危険人物って認識された感じ。
面倒なモノには首を突っ込まないようにしようという、武偵の防衛本能だろう。
そうして転校生の紹介を終えた那月先生は、ホームルームを続ける。
「始業式後、速やかに宿題を回収する。忘れてきた者は今日から補修だ。覚悟しておけ」
俺はもちろん大丈夫だ。絶対忙しくなると予想していたおかげで、宿題なんてものは休みの序盤に片づけていたからな。でも、クラスの何人かが息を呑んだ雰囲気が伝わってくる。
那月先生のクラスで宿題を忘れるなんて愚かな行為をした奴らに同情はしないけど……マジかよ。今日始業式なのに？　今日から補修すんの？　鬼じゃない？
「それでは始業式に向かう。さっさと並べ」
那月先生はなんの抵抗もさせず、粛々とプログラムを進めるのだった。
とまあ、色々な行事をしている間、ここ数日の行為によって手に入れることの出来た能力を紹介したいと思う。

ジクウドライバー強化パーツ
ジクウドライバーの強化パーツ。
このパーツを組み込むことで、以下の効果を追加出来る。
・ライダーのウォッチ、ライダーのベルトを揃えると、フォームチェンジアイテムを使うことで、フォームチェンジが可能になる。
フォームチェンジを行うと各形態の専用武器も使用可能になる。

タンクフルボトル
仮面ライダービルドに変身するためのアイテムである、フルボトルの一種。
戦車の力が封入されている。

ホークガトリングフルボトルセット
仮面ライダービルドに変身するためのアイテムである、フルボトルの一種。
タカとガトリングのセット。

ダブルドライバー
『仮面ライダーW』に変身するためのベルト。『ガイアメモリ』を使うことで仮面ライダーWに変身することが出来る。

ガンダム
機動戦士ガンダムに登場する兵器。
言わずと知れた、すべてのガンダムタイプの祖。
基本的な武器が全て揃っている。ＭＳの操作を練習したい場合はこの機体を使うべし。

Ｚガンダム
機動戦士Ｚガンダムに登場した兵器。
簡易サイコミュである『バイオセンサー』を搭載した可変ＭＳ。
バイオセンサーが人の魂を集めることで、兵器以上の力を発揮する

ことも……？
変形機構はＭＳのアーマーが装着者から外れ、変形することで再現される。

ガイアメモリ詰め合わせセット
仮面ライダーＷに変身するためのアイテムである、ガイアメモリの詰め合わせセット。
このセットには基本６本であるサイクロン、ヒート、ルナ、ジョーカー、メタル、トリガーのメモリが入っている。

悪魔の実栽培キット
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥに登場するアイテムである悪魔の実を育てるための栽培キット。
どんな実が出来るのかはお楽しみに！　たわわに実らせよう！

……こうして並べてみると、シャーロックとの戦いの後にかなりの数の行為を致したんだなぁと思う。
まあ一つ一つ見ていくと、だ。
一番初めのジクウドライバーの強化パーツ。これは実際にどのような効果か、丁度条件が整っているビルドを例に説明する。
現在ビルドはウォッチもベルトも持っている。そして今回の行為でタカとガトリングのボトルも手に入れた。
ジオウのアーマータイムはそのライダーの基本形態になる。だが、ウォッチと変身アイテム、今回の場合はタカとガトリングをウォッチに融合させることで、ホークガトリングにアーマータイムすることが出来るのだ。
つまるところ、アイテムさえそろえれば、別形態（フォーム）にもアーマータイム出来るようになったという訳だな。
ダブルのベルトとメモリも手に入れたので、こっちでもフォームチェンジ出来る。
そんな面倒なことしなくても、ビルドだったらビルドドライバー使

えばよくね？　と思うかもしれないが……他のライダーへの変身は、ダイオラマ球の仮面ライダー博物館の中でしかできなかった。
その外はもちろん、変身した状態でダイオラマ球の外に出ると、変身状態を保てなかった。多分ジオウが関係してるんだろうけど、これは少し残念な仕様だった。他のライダーは写真撮影で我慢することにしよう。
そして新しく手に入れたＭＳであるガンダムとＺガンダム。ヴィヴィオちゃん達からＭＳをねだられていたけど、これはみんなには貸せないな。俺が使うことにしよう。
それで、最後の悪魔の実栽培キットだけど……これが一番扱いに困った。
あの悪魔の実を作れてしまうキット。食べるだけで確実に能力者になってしまう悪魔の実はスタンドよりもはるかにお手軽だ。
原作の悪魔の実がどのように作られるのかは知らないけど、この世界では木になる実のようだ。
しかもこれ、多分複数できるんだよね。不用意に育てると大変なことになりそう、という訳で、今は育てないで封印しておこうと思う。
こんな危険物を作っていると、別の罪に問われそうだしね。
てかコレ！　栽培キットってつまり、これで出来る悪魔の実って『ＳＭＩＬＥ』じゃないのか？　やばすぎるだろ！　ドフラミンゴになっちゃうよ！
ま、そんな感じだ。で、だらだらと行事を流していくと、いつの間にか始業式の行事はすべて終了していた。
始業式終了後、宣言通り宿題が回収された。２６人中、提出できなかったのは４人。中には家に忘れてきたという奴もいたが、そんな言い訳に応じるほど、那月先生は甘くなかった。
全員等しく補修の刑だ。
俺はもちろん何ともなかった。今日の午後からは六課での顔合わせがあるんだからな。補修で行けませんなんて格好が悪いにもほどがある。
「それじゃあヤミ、夕方には帰るから」

「わかりました」
ヤミともこの程度の会話なら問題なくこなせるようになった。
鞄を持って教室を出ようと……
「おい、夜月　翔」
「……」
那月先生に呼び止められた。
「なんでしょうか」
「そう怯えるな。取って食おうというわけじゃない。少し話があるだけだ」
手を使ってこっちに来いとジェスチャーをされる。この人に逆らったところで、俺に得はないか。
近寄った俺の肩に、那月先生が手をのせる。
「場所を変えるぞ」
次の瞬間、不快な浮遊感とともに景色が切り替わる。
空調が効いた室内とは違う、カラっと晴れた夏の日差しが降り注ぐ屋上。ここまで空間転移したらしい。
「それで話っていうのは？」
「ああ」
何処から取り出したのか、1人だけ日傘を差した那月先生は口を開く。
「夏はずいぶんと活躍したようだな」
「まあ、そうかもしれないですね」
『活躍』というのはあの怪獣騒ぎと、その後のイ・ウーのことだろう。黒服に口止めされているとはいえ、那月先生なら知ることが出来るんだろう。
とは言え、わざわざ忠告してくれるなんて優しいな。
「お前にはお前の考えがあっての行動だったんだろうが、これから面倒なことになるぞ」
「自分で蒔いた種ですからね。しっかり責任は取りますよ」
「言ったな？　その言葉、忘れるなよ。だがこれ以上の面倒を起こすな」

「や、那月先生には面倒かけてないでしょ」
「ふん、どうだかな」
何故か遠い目をしている那月先生。いったいなんだというのだろうか。俺には心当たりが無い。
どうせすぐに騒ぎを起こすだろと呆れられているのかもしれない。そんなまさか。俺だって進んで戦いたいわけじゃないですよ。
「そう言えば、那月先生はどうだったんですか？　夏は」
「私か？　ウチの教え子（馬鹿ども）が羽目を外しすぎないように監視だ」
「それは……ご苦労様です」
武偵はヤクザのようなモノだからな。一般のお客様に迷惑をかけないように、注意が必要だったんだろう。原作よりも大変そうだ。
「いや、毎年のことだ……それに私は、どこかに旅行に行くわけにもいかんからな」
「はい？」
「なんでもない。時に夜月。お前は今学期から、長期の校外学習カリキュラムを受講しているな」
長期の校外学習とは六課での仕事のことだ。
「せいぜい気を付けるんだな。あそこの部隊は、というかあのお人好しどもは進んで厄介な事件に首を突っ込むぞ」
そう言い残して、那月先生は空間転移で消え去るのだった。
「どうせ戻るなら、俺も連れて行ってくれればいいのに……」
そう言えば、イ・ウーの件はともかくとして、どうして六課のことも気をつけろなんて言ってきたんだ？　あの口ぶり、六課のメンバーと親しいのか？
ぼやきながら下駄箱に向かう。今日は六課初日だ。

六課入隊

「それじゃあ、これからよろしくお願いします」
「「「はいっ!!」」」
俺たち、俺とアスナ、そしてエリオとキャロは八神部隊長から辞令を受け取った。
雪菜と退院した耀はすでに候補生としての書類を受け取っている。
「はい。これで形式ばった儀式はお終い」
八神部隊長は手を打って空気を変える。
武偵高から真っすぐ六課の隊舎に向かった俺達。真新しい管理局の制服に着替えたらすぐに部隊長室に通され、この儀式――――入隊式が３０分ほど前から行われていた。
エリオとキャロだが、俺達と時期を合わせての入隊になったらしい。その方が色々とやりやすいのだとか。
だがそれもすぐに終わった。
手際が良いのかは分からないけど、部隊長室に行った時には六課の偉い人（なのはさんやフェイトさん）が集まっていた。
「まあ、もともとはやてはそう言うのは苦手だからね」
というのはフェイトさんの話。
という訳で面倒な手続きも済んだ。その後に待っているのは、
「よっし!! それじゃあ、今から新人歓迎会を始めまーす!!」
「「「わーーーーあ!!!!」」」
八神さんの音頭でグラスが打ち合わされる。
職務中だというのに普通に宴会になっていた。
形式ばった物はお終いだと言われ、そのまま食堂に通された。そこではすでに料理が並べられ、準備が万端になっていたのだ。
「まあはやてちゃん、楽しみにしてたから」
というのはなのはさんの話。
「なんというか、イメージと違いますね……」
「そだな」
雪菜はこの場のノリについていけていないのか、両手でジュースの

注がれたグラスを持ちながら周りを見回していた。
多分、もっと軍隊的なものを想像していたんだろう。
「ま、うちの部隊長がそう言う性格だからな。慣れてくれや」
３０代前半の男性が俺達のテーブルに座ってきた。
「よろしくな。事務方の部長、蛇倉だ」
「あ、はい、よろしくお願いします」
「……」
アスナは背筋を正して頭を下げる。
「……前にどこかで会ったこととかありませんか？」
「んー？　いや、ないな。前にウチに来た時に見かけたとかじゃないか？」
「そうですかね？」
まあ、そうなのかな？
全員の前に立った八神部隊長はスクリーンを起動する。
「それじゃあ、このまま新人のためのレクリエーションをしよか～」
「ああ、そう言うのもあるのね」
てっきりずっとこのままなのかと思った。
「流石にそりゃマズいだろ？　勤務時間なわけだし。むしろ、形だけでもレクリエーションがあるから、このメシ代が全部経費で落ちるんだ」
「ちゃっかりしてますね」
「おいしいおいしい。もぐもぐ」
それにしても、耀には遠慮が無いのか。信じられない食欲でテーブル中の食料を食べつくしていく。それが問題児たる所以なのかもしれないけど。
そうしている間に、部隊長の説明が始まっていた。
「まず基本から。この特務六課について、まずは成り立ちから説明しよか」
特務六課は管理局の1部隊だ。もちろんこの島にはこの島で、しっかり管理局の支部が設置されている。それとは別に作られた部隊なのだ。なぜわざわざそんな措置が取られたのか。

「発端はとある予言や」
時空管理局少将、そして聖王教会の重鎮でもあるカリム・グラシアは未来を予言するレアスキルを持っていた。
だが、的中率は『よく当たる占い』程度。そのままでは管理局に新しい部隊を設立させるのはかなり難しい。
「でも、前例があった」
数年前に起きた事件。ジェイル・スカリエッティが首謀者のＪＳ事件の時にも、同じように予言が行われ、それが的中した。
そうなってしまえば、『よく当たる占い』でも無視することは出来ないのだ。
「その予言に対抗するために作られたのが、この特務六課っちゅうわけやな」
表向きは複雑かつ多様な犯罪が多いこの島での警備の強化。元々ある支部よりも柔軟に事態に対応できるスペシャルチーム。
裏の目的はその予言に対抗、または未然に防ぐことだ。
「基本的に六課は、島で何かあれば無条件で手を出せるようになっとる。その分、仕事も多いんやけどね」
まあつまり、管理局の何でも屋ってことだ。
と、ここで、
「お疲れ様です、翔君」
「どう、翔君。楽しんでる？」
「仕事中に楽しんでるって言うのも、どうかと思いますけどね」
桜となのはさん、２人が並んでこちらに向かってきた。
桜の方とはこの島に帰ってきてからまともに話していなかったため、久しぶりな感じだ。
「お二人はお仕事だったんですか？」
アスナの問いに、なのはさんが頷く。
「そうだよ」
「違法取引の業者を少し。その後すぐに現地の管理局に引き渡しちゃいました」
２人とも軽い調子で言うなぁ。犯罪者を潰してきたとは思えない

な。なのはさんはともかく、桜もずいぶんと慣れたもんだ。
「そうか、桜はもう配属されて数ヶ月は経つのか」
「そうだよ。今はもう六課の主力だからね」
「あはは、そんな、言いすぎですよ。スバルさんやティアナさんがいるのに」
　そしてずいぶんと信頼されている。そりゃ優秀だもんな、桜は。陸戦試合の時もそれは感じていた。
「あ、それでですね。翔君」
「ん？」
「この歓迎会が終わったら、私に付き合ってもらえませんか？」
「何かあったのか？」
「それなら私達も」
「そうですね、先輩1人だと不安ですから」
　話を聞きつけたアスナと雪菜はささっと寄ってくる。
「そ、れは……うーん……」
「私達がいると都合が悪いことがあるんですか？」
「アスナさんはいいんですけど、雪菜ちゃんはちょっとおっちょこちょいだからなぁ……」
「わ、私がおっちょこちょい……!?」
　桜からの評価に、雪菜はショックを受けていた。
「私はいいの？」
「耀さんはその場をかき乱すので絶対にダメです」
　そりゃそうだろ。
「そんで？　実際には何があるんだ？」
「連絡したと思うんですけど、この島に姉さんが来てるんです。その件で」
「ああ……」
　遠坂　凛か……とうとう来たのか。
「それで、翔君に会いたいって言ってるんです。それと、冬木にいるみんなも。あっ、みんなは実際に来てるわけじゃないんですけど。ビデオ通話で」

「それは気になるなぁ」
話には聞いてたけど、実際に話しておきたいという気持ちはある。
「それじゃあ、私達はお邪魔かな？」
アスナは気を利かせてくれる。
「ああ。ゴメン。そのうち皆にも紹介するから。じゃあ桜、これが終わったらだな」
「はいっ、ありがとうございます！　それじゃあ連絡してきますね」
端末を持ち離れていく。
それを見送りながら、思いついたことを口にする。
「そう言えば」
「うん？」
「や、今の六課には関係ない事なんですけどね。昔の六課はどんな感じだったのかなって」
「昔の？」
そうだ。この特務六課は、機動六課のメンバーを再び集めて作ったのだとか。
問題は実働部隊だ。エリオとキャロが年齢的な問題で機動六課には参加出来ていなかった。とすれば、原作と比べてメンバーが少ない訳だ。その穴埋めはどのように行われていたのだろうか。
「ああ～、そう言う事。確かに前のメンバーが全員再集合したわけじゃないんだよね。事務方もそうだけど。特に、翔君の言う通り実働部隊が」
「やっぱり、他にもメンバーは居たんですね」
「うん、前は武偵の人にも手伝ってもらってたから」
「聞いたら目ん玉飛び出るような人がいたんですよね、前は」
蛇倉さんも会話に混ざってきた。
「そんなに有名な方がいたんですか？」
雪菜も興味があるらしい。
「うん。知ってるかな、『空隙の魔女』って。結構有名な人なんだけど、聖王教会のツテで格安で雇ったんだって。六課が解散してからは学園島の武偵高の先生になったって聞いたよ」

聞いたことある。
ここに来る直前に話した。
「空隙の魔女……１０数年前に欧州の魔族を虐殺して回ったって言う魔女ですよねぇ。そんなおっかない人がここにいたって聞くと震えてきますよ」
「にゃはは、でも実際に見たら、全然怖くないんですよ。むしろ可愛いくらいで」
「ううん？　なるほど？」
なのはさんの言葉に、蛇倉さんが首を傾げていた。
確かに、空隙の魔女の正体がゴスロリ少女だって知っていれば、確かにかわいいって感想も出てくるのかもしれない。
「先輩、空隙の魔女って……」
「ああ、南宮先生だな」
「だよね……」
俺、雪菜、アスナの３人は揃って頷いた。
だから屋上で警告してくれたのか。だったら納得だ。あの人がいれば、戦力的にもエリオとキャロの穴を埋めて有り余るな。
「それとね」
「はい？　あ、他にもいたんですね」
あの人１人でも十分だと思ったけど、この流れで行くと
「うん。むしろこっちの方が大変だったというかね……」
メンバー１人で？
「昨今の情勢にも関わってくることだったからね」
「ああ。今は、魔法優位が無くなりつつある時代って言われてるからな」
「魔法、優位？」
なんだそれは。もしかして魔法こそ至上。それ以外はクソ！　的な危険な思想か何かなのか？
「いやいや、そう言うのじゃなくてね」
「魔法が使えれば使えるだけ有利だって考えだ」
ふむ？

「翔君、学校で習ってない？」
「習ってないですね」
「先輩？　歴史の授業とかでは？」
「うーん……」
　完全記憶能力があるし、忘れているわけがないんだけど。
「それって、単純に聞いていなかっただけでは？　……寝てたりして」
「あり得る」
　聞いてなきゃせっかくの記憶力も意味がないよね。
「もう、授業はしっかり聞かないとダメだよ？」
「その文句は事件の方に言って下さい」
　なのはさんの言葉に、俺は肩をすくめる。
　事件は俺の都合を待っちゃくれないぜ。
「じゃあ私達は、無暗に事件に首を突っ込まないでって言っておくね？」
「ついでに、どこかしらから女の子を引っ張って来るのもやめて下さいね？」
　アスナと雪菜はニコニコと言って来る。それも約束できませんね……
「話を戻そうか」
「痴話喧嘩は帰ってからやってくれ」
「はい」
　話が戻される。
「それで、魔法優位が無くなってきてる、って話でしたけど」
「そう。魔法はかなり万能な異能力だよね」
　それはそうだ。射撃、斬撃、打撃、防御、治療、移動……戦闘に限らず、たいていこのとは出来るようになっている。だからこそ、他作品の能力の多くが『魔法』のカテゴリに分類されているのだ。
　そのくらい懐の広い能力ともいえる。使えれば使えるだけ有利になるのだ。
「その優位性がＪＳ事件のせいで崩れかけたの」
「ＡＭＦですか？」

「今度は知ってるんだな」
原作知識だけどな。
ＡＭＦはＡｎｔｉ　Ｍａｇｉｌｉｎｋ―Ｆｉｅｌｄの頭文字だ。魔力の結合を邪魔する魔法の一種。ある種、毒を以て毒を制すという感じの魔法だ。
で、ＪＳ事件ではそのＡＭＦをガジェットドローンという雑魚敵が使ってきたのだ。そのせいで中堅以下の魔導士はまともに魔法を使うことが出来ず、戦力にならなかった。
ちなみになのはさん達のような高位の魔導士の場合、魔法を使うときにＡＭＦに対抗するための工程を加えることである程度ＡＭＦの影響を無視出来る。
それは知っている。
「問題はガジェットドローンだったんだよ。そこに内蔵されたＡＭＦ発生装置がね」
「……なるほど」
話が見えてきた。
「ＪＳ事件の最終局面じゃ世界各地にガジェットドローンが出現した……最終的に首謀者は捕まったけど、その後には機能停止したドローンが世界のあちこちに放棄されたの」
その片づけは誰がやった？　そりゃ色々な人がやるよな。当時の状況は知らないけど、管理局だけじゃなくて、武偵や警察、ボランティアもいたのかもしれない。
「スカリエッティ自身は、ドローンのことを使い捨ての駒にしてたんだけど、その技術は本当にすごかったの。これだけの精度のＡＭＦ発生装置を、これだけ小型化して、しかも量産できるなんて」
当時の最新技術を軽く上回るものだった。それが技術革新を起こしたのだ。
その危険性を理解していなかった訳じゃないだろう。だが、全てを公的な機関が管理するのは無理だった。
「世界各地に拡散した小型ＡＭＦの技術は、中堅魔導士のほとんどを『ただの人』にした」

アリアの武勇伝には９９人の犯罪者を連続で、１度の強襲で捕まえたというものがある。
それは犯罪者もＡＭＦ発生装置を手軽に入手出来るため、魔法が従来のような効果を発揮しにくい環境になったことが大きかった。
なのはさん達の様に、ＡＭＦを無視できる魔導士はかなり限られている。おそらく全体の１０％もいないだろう。そりゃ、環境が変わるのは想像できる。
「……それで？　話が逸れているような気がしますけど……」
六課のメンバーの話のはずが、世界情勢的な話になっている。ＪＳ事件の規模がデカかったことは分かったんだけど。
「焦らないで焦らないで。それで、それと同時期にとあるものが発表された」
「それは？」
「『ＩＳ』」
なのはさんは短く答えた。
「『ＩＳ』――『インフィニット・ストラトス』。こっちはこっちで大変なことが起こっちゃってね」
インフィニット・ストラトス。原作では宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。この世界では特殊な魔法デバイスの一種だ。そして何より、あの篠ノ之　束が関わっている一品だ。
その辺りの事件が関わってくるのか？
「ＩＳのコアがブラックボックスだってことは知ってる？」
「それはまあ」
コアは束博士しか作成できず、そのせいで各国が量産出来ないんだよな。
「そのコアに機能が追加されたんだよね、ＡＭＦジャマー機能が」
「うん!?」
ＡＭＦ、ジャマー……？　え、それって。
「そう。魔法を無効化するＡＭＦを、逆に無効化しちゃう機能」
束さん天災すぎだろ。そしてそんな機能を付けたら、各国からの需

要がより高まるはずだ。そう何度も何度も環境をぶち壊さないで欲しい。
「あはは、そうなんだよね～」
「あんときゃ、大変でしたよねぇ」
なのはさんと蛇倉さんは笑っている。
こうして世界はスカリエッティが作り出した小型ＡＭＦ発生装置と、それすら無効化するＩＳの脅威を同時に味わうことになったと。
束博士にとっては、ＪＳ事件はＩＳの良い宣伝になったことだろう。もしかして、それも計算通りだったのか。はいはい、みんな計算通りにすごいこと出来ますね。シャーロックも束博士も。
「……それで？　結局はメンバーの事とは関係ないと思うんですけど……」
ＩＳの原作との違いについて説明されたのはいいけど。
「いや、だからね？」
察しが悪いなぁ、と言いたげなのはさん。
「いたんだよ。当時の機動六課に。あの篠ノ之　束さんと、最初期のＩＳ『白騎士』を纏う、織斑　千冬さんが」
「……マジですか」
俺は顎が外れるほど驚くことになった。

久しぶりの顔合わせ

篠ノ之　束と織斑　千冬が、過去の六課のメンバーだった。
当時から影響力のあった篠ノ之　束は、どういう風の吹き回しか六課の専属のエンジニアになることを申し出たらしい。
この機会に束の技術を盗み取りたいと考えた上層部はそれを承諾。もちろん技術を盗み出すことなどできなかったが、事件の解決には大きく貢献した。
束の目的が何かと聞かれれば、やはりＩＳの宣伝だったんだろう。ＡＭＦを物ともせずにガジェットを薙ぎ払う千冬の姿は、広く世界へ放映されることになった。
事件解決後、束はすぐに姿を消した。そしてその後、各国に向けてＩＳのコアがばら撒かれた。
千冬はその場に残されたが、ＩＳのコアのデータは何一つ持っていなかった。唯一持っていたのは、卓越したＩＳの操作技術だけだった。現在はこの島のＩＳ学園で教鞭を振るっているらしい。
一通り聞いた俺の感想としては、まさかそこで繋がってくるとはな、って感じだ。
遠い存在だと思っていた篠ノ之　束が存外近いところにあった。この六課にはいないとはいえ、用心はしたほうがいいな。
「翔君、大丈夫ですか？」
「あ、ああ」
桜に声をかけられて現実に引き戻される。
今は六課での歓迎会を終え、次の会場に移動していた。
場所はよくあるファミレスだった。毎回のことだけど、集合場所が庶民的で助かる。
「翔君、緊張してます？」
「そりゃすこしは」
これから会う人がどんな人なのかは知ってるけど、初めて会う人もいるのだ。
店の中に入ると、相手はすぐに見つけることが出来た。

気候的に俺の中のイメージの服装では暑いからか、いつもとは違った服装だった。だがそれは赤いポロシャツにミニスカートという、上下のイメージはしっかりと守った出で立ちだ。
「ごめんなさい、姉さん。待った？」
「いいえ、今来たところよ――――それで、そっちの人が？」
「初めまして、夜月　翔です」
「こちらこそ初めまして、桜の姉の遠坂　凛です。ああ、名字が違うのは――――説明しなくてもいいのよね？」
「はい。ある程度の事情は知っているので」
そんなことを話しつつ、俺達は席に着いた。
凛とは向かい合って、桜は俺の隣に。
「ふーん」
凛はにやにやと俺たち2人を眺めている。それはもう楽しそうだ。桜は苦笑いでごまかしているが、恥ずかしさを隠しているのは見え見えだ。俺も恥ずかしい。
「それで？」
「え？」
「それで、お二人の関係は？」
「……桜？」
言ってなかったのか？
「ね、姉さん？　何言ってるの？」
桜も困惑していた。これは、
「いえいえ、彼のことは名前しか知らないわ。そうでしょ？　直接教えてくれないと、ね？」
カップの淵を指でなぞりながら凛が笑っていた。
分かってて言ってるんだな、これは。
「……桜さんとお付き合いしてる、夜月　翔です。よろしくお願いします遠坂さん」
「はい。よろしくね」
「うぅ……っ」
わざわざ言わせた凛は相変わらずくすくすと笑っていた。そして

桜は顔を赤くしていた。それはもう、妹の幸せをからかうごく普通の姉妹だった。
俺もちょっと恥ずかしい。お相手の親族に向かって、堂々と彼女ですと宣言するのは。
「妹のこと、末永くよろしくね？　この娘、自分のこと全然話さないでしょ？　貴方の力になるって、ずっと頑張ってたのよ？」
「は、はぁ……」
「ちょっと姉さん……!!　翔君困ってるから……！」
「そうなの？　夜月君？」
「いえ、別に……」
「そ、それじゃあ、自己紹介も済んだことですしっ」
桜が話を無理やり打ち切り、端末を取り出した。そのまま通話を開始した。するとすぐに大きくアップになった切嗣さんの顔が映し出された。
「あー、聞こえてますか？」
《お、繋がったかな？》
切嗣さんが後ろに下がっていく。すると、見覚えのある人が何人か見えた。
画面に映ったのは切嗣さん、舞弥さん、アイリさん。初めて見るのはアイリさんと瓜二つのイリヤちゃんと、男の子だ。
《あ、あれっ？　これってもう繋がってるの？　翔君、聞こえてる～？》
画面の中のアイリさんが手を振ってきた。
「聞こえてますよ、アイリさん。お久しぶりです」
《久しぶりね～、あの時から全然変わってない》
「それはそっちもそうでしょう」
俺にとって聖杯戦争は数カ月前の出来事だけど、向こうからしてみれば１０年前の出来事だ。
その証拠に、
「切嗣さんも舞弥さんも、お久しぶりですね」
２人はしっかりと年をとっていた。でも、正直言って当時よりも

若々しく見える。
　それはあらゆる事にくたびれていたという印象がなくなったからだろう。肌に色つやが出て、笑顔もずいぶんと柔らかくなっている。
《君も元気そうで良かったよ。話では戻ってからもずっと戦いっぱなしだとか》
「ええ、まあ。勝手に首を突っ込んでるだけなんですけど」
「小耳にはさんだんだけど、ちょっと前までこの島大変だったんでしょ？　それにも？」
「ま、ちょっとは」
「……ちょっと、ですか？」
「ちょっとちょっと」
　凛からの質問に、視線を逸らしながら答える。まだそこまで詳しく話していない桜からは、訝しげな視線を向けられた。
《桜ちゃんに聞いた話じゃ、要人警護の依頼を受けたんだって？》
「色々と聞いてるんですね」
　でも依頼人が誰かまでは言ってないっぽいな。
《ニュースでも見たわよ。おっきな怪獣が暴れまわってるところ。各国要人を狙ったテロだって話だけど》
「ま、そうだったんじゃないですかね」
　本当は緋弾関係だったんだけど、世間的には分かりやすくそう言う理由になっている。
《君のことだ。警護だけじゃなくて、実際に怪獣を倒して回ったんだろう？》
「あはは、お察しの通りで」
「ホントに？　映像は見たけど、ビルくらいの大きさの奴もいたわよね!?」
「そうですね。やっぱりおっきいですよ、怪獣は」
「いや、そうですねって……」
「姉さん、諦めて？」
　切嗣さん達は落ち着いているな。ま、聖杯戦争で散々戦ったんだ。いまさらその程度ではってことかな。

《ふーん、みんなが言ってた事って嘘じゃなかったのね。ちょっと意外かも》
《はいっ、やっぱりヒーローです！》
２人の子供が話に入ってきた。
《イリヤ？　ほら》
《わかってるわよ……初めまして、夜月さん。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。よろしくね》
アイリさんに促され、イリヤちゃんがあいさつする。
《拓哉も、ほら、挨拶して？》
《はいっ。衛宮　拓哉です。よろしくお願いします！》
拓哉君も舞弥さんに言われて。
「よろしく、２人共。イリヤちゃんは元気になったんですね」
《ああ。聞いてるとは思うけど、サーヴァントのおかげで城から簡単に連れ出せてね。エルメロイ家の伝手のおかげで普通の生活ができるようになったんだ》
《でも、イリヤちゃんって言うのはやめて。わたし、そこまで年下じゃないわ》
「それもそうか」
実際に生きている時間を考えれば、俺よりも年上なんだっけ。
俺は視線を横に映す。そこには黒髪の男の子が。
「それで、拓哉君？」
《はいっ》
「揉めなかったんですか？　大丈夫だったんですか？」
《ああ、それはね……》
《私は全然よ？　相手が舞弥だったんだから》
《はい、認めてくれたアイリには感謝しています》
じゃあ問題は無かった？
《騒いだのは私。びっくりするでしょ？　自分に突然弟が出来たら。しかも違うママの》
イリヤが挙手する。
自分のパパがいつの間にか浮気して子供を作ってたら、そりゃ驚く

よな。
《別に今はなんてことないわよ》
《はいっ、イリヤお姉ちゃんとは仲良しです！》
それは良かった。幸せならオールオーケーです。
《そうね、こっちは何とかなったけど……翔君は気をつけないとよね？　桜ちゃんから聞いてるわよ》
《そうですね。その辺りは自己管理になるかと》
女性２人に釘を刺されてしまう。
《それよりも、夜月さん！》
「ん？」
拓哉君が食い気味に聞いてくる。
《僕、将来は正義の味方になりたいんです！　アドバイスが欲しいんです！》
「……な、なんだって？」
画面内の切嗣さんと舞弥さんが苦笑いしていた。
《すまないね。当時のことを聞かせたらこう言って聞かないんだ》
「そんなにヒロイックな展開じゃなかったと思うんですけどね……」
一体どんな風に当時のことを伝えてるんだ？
《それは桜ちゃんが》
「それは桜よ」
桜以外の全員の声がそろう。
「え、ええ!?　で、でも！　嘘は言ってないですよね!?」
《言ってないわね。だから驚いてるのよ。そんな常識外れのお人好しがいるのかって。話を聞くと、ホントに都合のいい人なんだもの》
《はいっ、もっとお話聞きたいです！》
当時を知らない２人。態度は少し違うが、俺に興味があるらしい。
そして凛も。
「そうね、私も聞きたいわ。私達の運命を変えた人のお話を」
「えー……そうだな……」
俺達は笑いながら談笑を続けるのだった。

「見られていますね」
「そうみたいだな」
ファミレスでの談笑も終わり、家まであと少しの俺と桜は、家の周りに妙な気配が張り付いていることに気が付いた。
おいおい、もしかして学校が始まったばっかりなのに、もうトラブルですか？　スパンが短すぎる気がするんだけどね。
「このままだとここで戦闘か？」
「それは避けたほうがいいだろう。この辺りは人が多すぎる」
にゅっと出て来たレプリカ先生。桜も俺も、戦闘態勢になりつつある。だがレプリカの言う通り場所は街中だ。まともに戦闘するには拙い。
「最悪、戦闘になってもいいように、人払いの結界を……」
桜が最初の一手を打とうとした、そこに、
「お待ちしていました、夜月様」
強面の黒服が俺達の前に出て来た。戦意は感じない。っていうかこの人……
「何で……？」
その黒服には、見覚えのある尻尾が生えていた。

「おお、ようやく帰ったか」
黒服に急かされて急いで家に帰ると、
「何でアンタがここにいる……!?」
デビルーク王国親衛隊隊長――――ザスティンがさも当然と言いたげな顔で俺達の家のテーブルに座っていた。
お茶まで出されて歓待されているみたいだけど、みんな困惑している様子だ。
「ちょっとちょっとお兄ちゃん！」
帰宅した俺達の所にかけてくるのはクロだ。
「どういう事？　また何かやったの？　モードレッドの事まだ何にも解決してないのに！」
「や、マジで何もやってないが」
「そうですよね。翔君、今日の午後はずっと六課に居ましたからね」
まあ、それよりも前に会ったことはあったけど、アレはあの時限りの出会いだと思ってたんだけど。そんなに早くデビルークからのアクションがあるとは。
「あの人って、前に会った人ですよね。あの、ララさんと会った日に」

その時一緒にいた雪菜が会話に混ざってきた。
「そうだな。デビルーク王国の人だ」
「お姫様の護衛なんでしょ？　つまりお姫様のことで何かお兄ちゃんに用があってきたって事よね？」
「……そうなりますね。先輩に、お姫様の護衛の人が、お話があると」
雪菜とクロが何やら頷き合っている。
だがこそこそ話していてもザスティンは帰ってくれないだろう。
間違いなくララ関係の何かだろうとは思うけど、ここは素直に聞いてとっととお帰り願うとしよう。
大方、ララがまた家出したとか、だから見つけた時には連絡してくれとかそんな感じなんだろう。
だって、深刻な事態だったら、まったりお茶飲んで俺の家で待って

る訳ないんだからな。
　家出が深刻じゃないのかと言われると……そのくらい頻繁にしてると考えれば。
「夜分遅く済まないな。何分、こちらもバタバタしていてな」
「いえ、別に。今日はどういう御用で？」
　俺は体面に座る。と、待ってましたとばかりにザスティンが話を切り出してきた。
　みんなも、口を出さないが聞き耳を立てている。
「察しはついているだろう。ララ様のことだ」
「でしょうね」
　そのララ様について、どういう御用件なのか聞きたいんだけど。
「ふぅ……ララ様の留学が決まった」
「はい？」
「場所はこの島。対象の学校は、貴様が通っている武偵高校だ。その2年に明日から」
「「「「えっ!?」」」」
　え、何？　留学？　何処に？　ここに？　俺が通っている学校に？
　明日から？
「え、えええええ……」
「そう言いたくなる気持ちは分かるが、これはすでに正式に決定したことだ」
　多分俺とザスティンの気持ちは違うと思う。色々と。
「諸々の手続きに手こずってしまったせいで初日には間に合わなかったが、明日からは正式に留学の形になっている」
「ど、どういった理由で？」
「……ララ様の希望だ」
「や、希望って……」
　ララは一国のお姫様なんだから、そうやすやすと希望が通るわけないでしょうに。それにあのララが武偵に興味を持つとは思えない。
「まあ、それはそうだな。元々ララ様は、基本的な学問は全て修めている。いまさら学校に行って学ぶことなどないだろう」

武偵の教育が基本的かはともかく、まあそれは分かる。
「どちらかと言えばララ様のお母様の提案なのだが……」
「はい？」
「いや、何でもない。なので実際には生徒との交流がメインになるだろう」
授業には出るがな、とザスティンは付け加えた。
「交流ねぇ……」
「ああ。デビルーク王国は他国との交流があまりなく、独自の文化を築いている。だが時代に合わせて、その辺りもオープンにしていかなければならないのだ」
「その役割をララが？　言っちゃなんですけど、向いてないのでは？」
目の前のイケメンフェイスが苦虫を噛み潰したように歪んだ。
「……それは我々も重々承知している。貴様の気にするところではない」
「さいですか」
ところで、
「俺には一体、何が望まれているんですか？」
今のところ、俺には全く関係のないお話だけど。や、もちろん何かあれば、力になるとはいえね。
「それについてだが……君にララ様の父上、デビルーク王直々のメッセージを持ってきた」
嫌な予感が膨れ上がった。
「いらないです」
「それでは再生するぞ。心して聴くように」
俺の話は聞いていないらしい。ザスティンは端末を取り出し、再生し始めた。
《よぉ、初めましてだな、夜月　翔》
端末から声が聞こえてくる。その声に、周りの何人かの女の子が息を呑むのが伝わってくる。
それもそうだ。何せ、これは一国の王様の言葉なのだ。
でも、その中身というか、実態を知ってる俺にとっては、そこまで

身構えることは出来ない。王様の言葉を聞く、という部分では身構える必要は無い。
問題は何を言われるのかってことだ。
「録画ですよね？」
「もちろんだ」
《ザスティンからあらかたの説明は受けたな？》
そうしている間にも動画は進んでいく。
《そして今お前はこう思ってるはずだ。どうして自分にそんな話をするのかってな》
そりゃそうだ。
《それは関係あるからだ、大いに関係がある。というか、お前が原因なんだぜ？　すこし前、お前がララを『保護』したことがあったな？》
保護……ああ、雪菜が勘違いして護衛をぶっ飛ばしちゃった時か。保護って形になってんのね。
《その夜、その時の話を聞いたんだが、セイテンシやらお前の周りにいる女が楽しそうだとか、その手の話をずっとされてな。しまいにゃあ、改めてお見合い婚はしねぇ、相手は自分で見つけるって宣言されちまった》
そんなに長い時間居たわけじゃないんだけど、楽しんでもらえたらよかった。結婚については当人の問題だから何とも言えないけど。
《そしたら、ハァ……セフィの奴が本気にしやがってな》
何を本気にしたって？
《おかげでお見合いは全部取り消し。永遠に再開の予定立たずだ。本当に恋愛婚させるつもりらしいぜ》
それは今までのツケだからな。
そう軽く構えていた俺は、
《つまり、分かったよな？　こんなめんどくせぇ事になったのは、テメーにも責任があるってことが》
「何でだよ!?　違うだろ!?」
な、なんて無茶苦茶な……!!　これが王か……!!
《つー訳で、ララの面倒はテメェが見ろ。何かあったら分かってんな》

「ちょ、ちょっと!!」
動画相手にいくら叫んでも意味がない。そのまま画面が暗くなってしまう。
ザスティンは端末をしまう。
「平時は当然我々が護衛に当たるが、学校の中までは厳しい。と、いうよりもララ様に拒否されてしまってな。ずっと護衛と一緒なんて、王宮にいるのと変わらない、と」
「それって、何かあれば俺のせいになるってことでしょうが!!」
「それは王が言っていた通りだ。諦めてくれ、決まったことだ」
き、決まったこと……
理不尽な命令を『決まったこと』の一言で納得させられる会社員の気持ちを味わうことが出来ましたよ。
大きな変化は、初日ではなく次の日に起こることになりそうだ。

ララの転校と六課初訓練

そしてザスティンが家に来た次の日。
さっそく通常の授業が始まったこの日だったが、ずっとそわそわしていた。
学年が違うせいで実感がわかないが、昨日の話は全て冗談ではないのだ。今頃は2年生の教室は大騒ぎになっているだろう。
そしてその波は、1年生の教室にも伝わってきていた。
昼休み。
「なあなあ、聞いたかヨルやん？　なんでも、2年に偉い別嬪さんが転校してきたって話だぜぃ！」
原作で上条　当麻を『カミやん』と呼んでいた名残からか、許可してもいないのにヨルやんと呼んでくる土御門。
クラスの雰囲気は浮ついているが、この男のテンションの上がり方は凄まじかった。
「なんでも、どっかの国の要人だって話だよな？　なんでわざわざこの島に転校してきたんだろうなぁ」
矢瀬も話に加わってきた。こちらは逆に落ち着いている。
お前ら、どうせ知ってるくせに白々しいな。
「らしいなぁ」
「なんだよ2人共！　テンション低いじゃねーか！　もっともっとテンション上げていこうぜぃ！」
「つってもなぁ、この学校じゃ転校生なんて珍しくないだろ？」
「つーか、土御門。お前、妹一筋じゃねーのか？」
矢瀬と俺はあくまでも冷静だった。
「何故それを!?　いや、それとこれとは別の問題。多少ストライクゾーンから外れていたとしても、可愛い女の子は目の保養になること間違いないんだぜぃ！」
「それはそうかもな……」
「いや、俺は上級生に彼女がいるからあんまり」
矢瀬はするりと身をかわしてきた。

「なんだと貴様ぁぁぁぁ!!　貴様、リア充側の人間だったのかぁぁぁ!!」
激高した土御門が矢瀬に掴みかかる。
「お、おいっ、やめろ!!　それを言うなら、夜月だってそうだろうが！　いっつも女子を侍らせてるって聞いてるぞ!!」
「ッッッ!!!」
グリンと、土御門の顔が俺を向く。それも今更だろうが！　と言い返したい気分だが、残念ながら土御門は冷静ではない。
その顔は攻撃信号を発している。拳が飛んでくると思い構えるが、
「何を騒いでいる、馬鹿どもが」
その時、我らが担任教師の声が聞こえた。視線は俺達を捕らえている。
「おい、夜月　翔」
舌足らずな声でお呼びがかかる。
今日も今日とて黒のレースで飾られたゴスロリ服に身を包んだ那月先生が、俺をまっすぐ見ていた。
「さっそく来ちゃったのか……」
俺は抵抗せずに指示に従うのだった。

俺達は職員室に向かいながら言葉を交わした。
「それで、何か私に言う事はあるか？」
「いえ、特には」
「図太い奴め」
俺のせいじゃないもん。
「昨日言っていたな、私には迷惑をかけないと」

「デビルークの人達に言って下さいよ。こっちも驚いたんですから」
聞くと、1週間前から準備は進められていたらしい。俺に知らされたのは昨日だっていうのに。もしかして、デビルーク王がわざとこうしたのかもしれない。一種の嫌がらせだ。
「ふぅ、まあ留学してきてしまったものは仕方がない。相手がいくら王女だったとしても、正当な理由なしには留学を断ることは出来んからな」
「それは大変そうですね」
「そうだろう？　だから優秀な生徒である貴様に、少し手伝ってもらおうと思ってな」
「くっ……」
俺が黙っていると、那月先生は続ける。
「まあそこまで気負う必要は無いさ。たかだか王女の身の回りの世話だ」
「いやぁ、簡単なら那月先生がやってくれてもいいんじゃないですかねー？」
「学年が違うからな」
「俺も違うじゃん……」
エレベーターに乗り、上の階に。普段生徒の使用は禁止されてるから、俺も乗るのは初めてだ。
どんどん上に登っていく。職員室のある階も通り越して。
チンっ、という音とともに扉が開いたのは、学校の一番上の階。さらにその一番奥の部屋に連れていかれる。
「最上階に一番奥の部屋って、一番偉い人がいるところじゃないですか？」
「なら、私が一番偉いという事だろう？」
「ですね」
突っ込むだけ野暮か。
部屋の中に入った。そこには、
「あ、みんな」
「翔君！」

「ようやく来ましたのね」
アスナや狂三、理子やアリアと言った2年生メンバー。そしてそれに追加されて、
「あっ、ヤッホー！　翔、久しぶり～」
「……そうですね、久しぶりですね」
無邪気なララ王女が、武偵高の制服に身を包んで手をぶんぶん振っていた。背中では尻尾が揺れている。
「さて、夜月　翔も座れ。話を始めよう」
部屋の中央に置かれている黒の皮張りのソファーに腰かける。
「知っての通り、今日からララ王女殿下が今日から2年の教室に留学なされる。その警護――もとい、お世話についてだな」
その一言で、部屋にぴりぴりした緊張感が走る。呑気なのはララだけだ。
「えー、別にいいよー？　そんなに気を使わなくても」
「そういう訳にもいかないんだ、ララ王女殿下」
敬っているのか分からない口調で那月先生は言う。
「向こうの国からの要請では、夜月　翔にさせることが条件だった。だが、学年の関係で、常時というのは難しい」
「だから私達に声が？」
アスナの問いかけに那月先生が頷く。
「その通りだ。コイツの手が回らないところはお前らがサポートしろ」
「それはまた、ずいぶんと強引ですのね？」
「もちろん、これは『お願い』だ。強制する権利はこちらにはない」
「だから、翔君の関係者を集めたんですか？」
アスナの問いかけに那月先生は肘をつく。
「そうだな。少しでもコイツの負担を減らすために協力して欲しいとお願いしているんだ」
それ、お願いちゃうよ。
「さらに言ってしまえば、護衛という表現も正しくは無い。向こうからは、『ララ王女と一緒に過ごしてほしい』としか言われていないから

な」
　そんなわけがない。それは昨日ザスティンの話でよくわかってるんだ。
「わかりました。教室では友達として、仲良くさせてもらいたいと思います」
「そうですわね。あくまで良き友人として、これからよろしくお願いしますわ」
「いやー、ちょっと目を離した隙に王女様とお知り合いになるとか、翔君の運命力はとんでもないですなー」
「……ま、そうね」
　４人共、それで納得してくれたみたいだ。
「４人とも友達になってくれるって事？　うれしー！　ありがとー！」
「ああ、それはいいことだな……どうでもいいが、お前たち、声が似ているな」
　那月ちゃんがアスナとララを見て言った。
　それは中の人が同じだからな。
「そうだよね！　アスナがもっとはっちゃければ、そっくりになるんじゃない？」
「え、え～……？　そうかなぁ？　そんなことないと思うんだけど」
　自分じゃ自分の声は分からないからな。
「試しに、少し意識して喋ってみればいいのではありませんの？」
「面白そう！　アスナ、やってみて！」
「え、えぇ～……」
　狂三とララに言われて、アスナはしぶしぶ、
「いえーい!!　私は結城　アスナ！　ララさん、これからよろしくね～！」
　それに対しての反応は、
「ふむ、まあ、似てるな」
「そうですわね。思った以上に似てますわ」
「うん、普通にそっくりさんで行けると思うよ！」

だから、中の人が同じだからな！
「……なんで私、こんなことしたんだろう」
アスナは激しく微妙な顔をしているのだった。

「という訳でこうなりました」
「こんにちわー！」
「君な……」
六課への出勤後、八神さんに事情を説明したら呆れられてしまった。横ではララが興味深そうにあたりをきょろきょろと見まわしている。
ララは別にこっちに来なくても良かったんだけど、興味があるという事で今日はこっちに来てくれた。
「所属2日目からそんなことになるかぁ？　普通？」
「普通はならないでしょうね。でも俺は普通ではないので……」
「そない中二あふれたセリフを、そない悲壮な顔で言わんとって」
もう全方位に迷惑をおかけしてしまって申し訳ない。
「そう言う事なら、こっちでも出来るだけフォローはするけど。そっちの女の子たちは大丈夫なん？」
「協力してくれることにはなりました」
「ホントに？　全員が？」
「全員、と言われると……何となく返事をもらえてない娘もいますけど」
「誰？」
「アリアです」

那月先生の部屋でも上の空って言うか、あんまり真剣に返事を返していなかった印象がある。
「それは確かに妙やな……あの娘、仕事でそんな手ぇ抜くようには見えへんのやけど」
心当たりはあるけどね。俺が勢いに任せて肉体の関係を結んでしまったからだ。
せっかくシャーロックから奪還してより仲良くなったと思ってたのに、俺の軽率な行動のせいですべてが台無しだ。
実際に話を聞いたわけじゃないんだけどね。そりゃ聞けないよ。向こうもこっちを避けてるし。
「一回話し合ったほうがええんちゃう？　多分、勘違いしとるよ？……2人共」
「ですかね？　ってか、最後何て？」
そう言う感じで、事情の説明を終えたのだった。

「じゃあ、今日から訓練を本格的にスタートするんだけど」
新隊員である俺を含め、アスナ、エリオ、キャロ、候補生ではあるが雪菜、耀も加えた6人が、なのはさんの前に整列していた。
場所は六課の隊舎があるすぐ近く。平べったい、見渡す限り何もない鉄色の区画だ。
「今日は初回だから、個々のスキルを見ておきたいんだ。だから、1人ずつ、仮想敵相手に模擬戦をしてもらおうと思ってるの」
「あ、えと、全員1人で、ですか？」

キャロが不安そうに手を上げる。
キャロは後方支援型。自分が正面切って戦うのは少し苦手だ。どちらかというと他人を組んだ時のことを想定してのスキルを磨いてきた。
だが、そのくらいのことはなのはさんもわかっている。
「大丈夫だよ。その辺りはこっちで調整するから。他のみんなも、極端に自分と相性が悪いみたいな相手は出てこないから」
ふむ。あくまでも、自分たちの得意分野でのスキルを見たいって事らしい。
更に聞いた話によると、出てくる敵の強さもこっちのレベルに合わせて変化するらしい。
丁度視力検査みたいだ。視力検査は大きな輪っかと小さな輪っかを交互に見せることで、今の自分の視力を割り出していく。今回割り出すのは、自分の実力ということだ。
それをもとに、今後のポジションやら訓練内容やらを決めていくらしい。
ちなみに敵役は、スカリエッティのガジェットを改良したモノらしい。良いものは利用しようって考えらしい。まったく、スカリエッティさまさまだ。
「それじゃあ、さっそく始めよっか」
なのはさんが端末を操作した。
「うわぁ……」
「こんなことが……」
アスナと雪菜が驚愕している。俺もそうだけど。
何もなかった場所に高層ビルが立ち並んだのだ。
前に陸戦試合をした時にもここを利用したが、実際に立つのを見ると、それは圧巻の光景だった。
「よし、最初は――――」
なのはさんが順番を発表し、訓練が開始された。ちなみに俺は最後。何か期待されてるんですかね。
ってか、最後やだな。こう、誰かに見られながら、評価されるって

のはやっぱり緊張する。できれば最初に終わらせて、のんびり観戦したかったんだけど。
ま、文句言っても仕方ないから、各々の戦績だけど。
まず不安がっていたキャロだけど、確かに配慮されていたおかげで極端に近くに寄ってくる相手はいなかった。
少し離れたところにいると相棒のドラゴン『ヴォルテール』が焼き払っていたため、最終的には近くに寄ろうという敵も増産されたが、ヴォルテールを突破することは出来なかった。
そしてその流れでエリオ。陸戦試合ではフェイトさんとタメを張っていたらしいが、それはもう強い強い。と言うか速い。一直線に加速して装甲を貫き、次の目標に向かっている。
まあ、常日頃からフェイトさんやシグナムさんに鍛えられていればな……いや、やはり天才か。
この２人に関しては、世界の修正の関係でＳｔｒｉｋｅｒＳ原作を経験していないはずだけど、また別の場面で成長していたらしい。
次は雪菜……と、アスナ。どちらも近接主体だけど、明確に違う部分があった。
雪菜は雪霞狼が武器という事もあり、魔力を使う相手にはめっぽう強い。でも逆に、物理的にある程度硬くなってしまうと、途端に攻め手がなくなってしまう。
実際には魔力を叩き込む格闘もあるので人相手ならもう少し戦えるんだろうけど。
アスナは多少敵が硬くなってもソードスキルで強引に突破していた。
その代わりアスナは、複数の敵に集中砲火されると逃げる以外の択がなくなっていた。
雪菜は霊視で避けつつ攻撃出来ていたけど、アスナは某黒の剣士の様に弾丸を切り裂くことは出来ないのだ。１，２発なら出来るかもだけど。
２人についてはこんな感じで、最後に耀。
耀は派手さは無いが、全てにそつなく対応していた。

動物の感覚で隠れている敵も容易に見つけ出し、攻撃もブラドのスケアリーモンスターズでコピーした恐竜の力である程度こなせている。
流石、世界最高の問題児。生命の目録（ゲノムツリー）の本来の力を開放していなくてもこれだ。
……さてと、最後は俺の番か。

はやてとララは、一緒に訓練の様子を見学していた。
会ってそんなに経ってはいないが、２人ともすっかり打ち解けていた。
「へぇ～、ララちゃん、割とこういうのもいける口なんやねぇ」
「うんっ、暇なとき、私もザスティンたちの訓練に混ざったりしてたから！　はやても好き？」
「う～ん、私は好きって言うよりも、仕事やからなぁ」
まるでスポーツ観戦でもしているように、２人は歓声を上げていた。
「はやて、お疲れ様～」
「ん、お疲れ、フェイトちゃん」
そこに外回り帰りのフェイトが現れた。
「そちらの人は？」
「デビルーク王国のお姫様」
「ララで～す、よろしくね！」
フェイトはララの顔を見て、もう一度はやての顔を見た。
「……え？」

「あははっ、そやね、そう言う反応になってまうわ。なのはちゃんもそうやったよ」
「もうっ、冗談はやめてよ！」
「いやいや、冗談やないけど？」
「……え？」
　再び固まるフェイト。
「あ、あのはやて？　それって、え？　本当に？」
「んー。おっ、次は夜月君やん。フェイトちゃん、一緒に見よ？　あ、一緒に行ってたシグナムはどうしたん？」
「シグナムなら、新人の訓練を直接見に行くって……いや、だからね？　それよりも、もっと説明を――――」
　翔の模擬戦が始まる。

《翔君、準備はいい？》
「はい、いつでも」
　俺はＢＪを纏って高層ビル群の間に立っていた。全く人の気配が無い町って言うのは不気味だな。
　今頃みんな、自分の出番が終わったことで、リラックスして俺の戦闘を見ている事だろう。
《じゃあ、始め！》
　なのはさんの声で、目の前に敵が現れるのだった。

実力調査

目の前に出てくるのは5機の卵型の機械。これが模擬戦の相手、ガジェットドローンだ。

《結構攻撃は鋭いから、油断してるとケガするよ》

「了解です」

そう言うのなら、手加減はいらないだろう。

「……っ」

俺は暗き夜の型を発動、どす黒い闇のオーラを纏う。

それを合図にしたのか、ガジェットの銃口にエネルギーが集まる。

だがその前に、

「『強（ブースト）』印」

『強（ブースト）』印で強化、加速した俺が、超宇宙聖剣（スペースカリバー）を振りぬいた。

黄金の剣閃が、ガジェット5機を一瞬でバラバラに解体する。

そこからは目に見えて攻撃のレベルが上がった。なのはさんの采配だろう。

一瞬で取り囲まれる。

「ラシルド!!」

後ろにラシルドを展開。前方には魔法の射手を。

「ファイヤ」

全方位から爆発音が鳴り響く。

さらに次のウェーブだ。ここで今までとは違うガジェットが現れた。卵型ではなく完全な球体型。アームを伸ばして攻撃してくる。

「『弾（バウンド）』印」

空中に大きく飛び上がることで避け、

「バオウ……ザケルガッ!!!」

――バオオオオオオオオオッ!!

大きく口を開けた金色の龍は、新たに出て来た丸形のガジェットともども、残りのガジェットを灰にした。

それ以降、追加のガジェットは現れない。

《……うん、ちょっと早いけど、このタイプの敵とのデータはこのくら

いでいいかな》
なのはさんから念話が飛んでくる。
《それじゃあ次は、ＡＭＦ状況下での戦闘、行ってみよっか》
言い終わるとすぐに新たなガジェットが出現する。
すると、
「うわ……っ」
体が一気に重くなる。
「どうやら、ＡＭＦが展開されたようだな」
「ああ、そうみたいだな……っ」
体が重くなったというのは、暗き夜の型を維持するための魔力量が跳ね上がったことが原因だった。
「ザケルガッ!!」
丸型のガジェットに向かって突き進む電撃。だが、
「装甲に弾かれるか」
電撃は丸い装甲を滑るように拡散し、地面や空中に逃げていく。
「そのようだな。到達するまでに、かなり威力が減衰してしまっている」
レプリカ先生も冷静に分析している。
「もっと魔力を込めればいけそう？」
「効果は出るだろうが、効率が悪い事には変わりないな。魔力以外で戦うのがいいだろう。幸い、翔にはその力がある」
そうだな、ここは、
「なのはさん、ちょっといいですか？」
《ん？　どうしたの？》
なのはさんに念話で呼びかける。
「この場だったら、ライダーの力を使ってもいいんですか？」
《うーん、そうだね……あ、はい？》
「ん？」
なのはさんが向こうで誰かと喋っている？
《はい、はい……わかりました。翔君、大丈夫だよ》
「それでは」

俺はジクウドライバーを腰に巻く。
《ＺＩ―Ｏ！》
「変身!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
俺は魔法を解除、ジオウに変身した。
「うん」
ＡＭＦを発動させたことでレベルが下がったのか、先ほどよりも動きが鈍くなったガジェットをパンチやキックで破壊する。
「やっぱり、ライダーだったらＡＭＦは関係ないな」
「魔法でなければ、やはり問題ないのだろう」
話している間も、銃撃で相手を近寄らせない。ＡＭＦ戦闘はなのはさんも慎重になっているようで、いきなり敵が強くなったりはしなかった。
それでも徐々に敵のレベルが上がり始めていた。
そうだな、どうせだったら、
「これも使ってみるか」
《Ｗ》
アリアから受け取って使っていなかったＷウォッチを起動させる。
「変身」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＪＯＫＥＲ！　Ｗ！》
現れるのはグリーンとブラックの人型ロボット。それはさながら仮面ライダーサイクロンと仮面ライダージョーカーが並んでいるかのようだ。
それらが変形し、俺の体に装着される。上半身から上を中心に、半分半分でグリーンとブラックに。肩からメモリが突き出すように合体した。
仮面ライダージオウ、ダブルアーマーだ。
「さあ、お前の……ガジェット相手に言っても仕方ないか」
こんなところでキメてもしょうがない。黙々と戦うとしようか。

「はっ!!」
風を纏った蹴りが、手頃な場所にいたガジェットをへこませ、黒い拳のパンチが、装甲を貫通した。
「おい、っしょーーー!!」
穴の開いたガラクタになったそれを、思い切りぶん投げる。複数体がまとめて誘爆した。そうしている間にも後ろから迫ってくるが、何体突っ込んでこようが
だが、ガジェットの攻撃手段は突撃だけではない。
ガジェットの銃口が光る。
「おっととと!」
次の瞬間、3機のガジェットに集中砲火される。転がってビルの中に隠れたため当たることは無いが、被弾ゼロで近寄ろうと思うと面倒だ。
それよりも、ライダーには便利な能力がある。状況に合わせて能力を変える、フォームチェンジの能力が。
「やるか」
《ＴＲＩＧＧＥＲ》
ガイアメモリを起動させ、メモリチェンジを行う。起動したトリガーメモリがＷウォッチに吸い込まれた。
すると、ウォッチの絵柄がサイクロン・ジョーカーから、サイクロン・トリガーに変わる。
ベルトを回転させる。
《ＦＯＲＭ　ＴＩＭＥ!》
《ＣＹＣＬＯＮＥ!》
《ＴＲＩＧＧＥＲ!》
左半身に装着されていた黒い装甲が分離する。代わりに空中に、青いトリガーカラーのロボットが現れた。
それが同じように変形し、俺に装着された。さらに、サイクロンジョーカーと違って武器が生成される。
俺の変身に付き合ってくれていたのか、今まで攻撃をしてこなかったガジェット達。銃口からは光が漏れ、今にも発射寸前という様子

だ。
その前に左胸に装備されたトリガーマグナムを手に取り、引き金を引いた。
発射される弾丸はサイクロンの風を纏っている。軽い反動と共に、無数の弾丸が吐き出された。
「うーん？」
発射された弾丸を見て首を傾げる。
ガジェットは確かに穴だらけにはなっていた。でも、
「何処に弾飛んでったんだ？」
どうも、思ったところに弾が飛んでいってくれない。よくサイクロン・トリガーは『弱い』とか『使いにくい』とかって話を聞いたけど、確かにこれは……
「トリガーを使うなら、やっぱりこっちだよな」
《ＬＵＮＡ》
金色のメモリを取り出す。
《ＦＯＲＭ　ＴＩＭＥ！》
《ＬＵＮＡ！》
《ＴＲＩＧＧＥＲ！》
ソウルサイドが切り替わったことで、弾丸の性質が変化する。
発射されるのは金色の弾丸。トリガーマグナム自体の連射速度は落ちているが、ルナメモリの効果によって、この弾丸は曲がる。
特に狙いをつけなくても、勝手に的に当たってくれる。撃った後は俺が操作する必要もない。引き金を引いているだけで相手が溶けていくこの感覚。
「これは人をダメにする組み合わせだー」
「油断をするな。後ろからも来ているぞ」
「了解」
俺は２丁目の銃、ガンモードのジカンギレードを取り出す。そして、取り出したときには射撃は終了していた。
不可視（インヴィジビレ）の銃弾によって放たれた弾丸は、迫っていたガジェットを全て撃ち抜いていた。

こっちにはルナの効果は乗ってないみたいだな。
だが問題は無い。むしろ使い分けが出来る。ここは建物の中、高層ビルの一階の受付だ。様々な障害物があるが、その裏に隠れている敵にはトリガーマグナムで、不用心にも顔を出した敵にはジカンギレードで。
全く敵を寄せ付けない。
そして出てくる、ＡＭＦなしの時にも出て来た大玉だ。だとしても関係ない。そう思って引き金を引くが、
「む」
弾丸が跳ね返された。２丁を揃えて各部関節を狙ってみるが、それでも結果は同じだ。
「弾丸が弾かれるな」
「強度が上がっているようだな」
「最後の大ボスってトコか。さっきはバオウ・ザケルガで消し飛ばしたからあんまり意識してなかったけど」
一応、最後の関門的な相手だったらしい。
「来るぞ!!」
「ああ!!」
触手のような蛇腹状のＡＲＭが俺を捕らえようと伸びてくる。転がって柱の裏に。
「硬い装甲を破るにはこれだな」
《ＨＥＡＴ》
《ＭＥＴＡＬ》
再びメモリを取り出した。
《ＦＯＲＭ　ＴＩＭＥ！》
《ＨＥＡＴ！》
《ＭＥＴＡＬ！》
再びフォームチェンジを行った。身に着けていたアーマーが外れ、新たに赤と銀のメモリロボットが出現、変形して俺に装着された。
俺の背中には専用武器であるメタルシャフトが現れた。俺は調子を確かめるように軽く回して構える。

「実はこのタイプの武器は使ったことが無いんだけどな」
「うまく使いたまえ」
　再びアームが迫ってくるが、
「よいしょ!!」
　高熱を纏ったシャフトで撃ち返す。アームは熱で変形する。
「一気に決めるか」
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　Ｗ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
　メタルシャフトの両端が更なる高熱を帯びる。それは熱どころか、ジェット噴射のようだ。油断すれば武器がどこかに吹っ飛んでしまいそうなほどの力が俺の手にかかった。
　その勢いを利用して、滑るように接近する。
「メタルブランディング!!」
　振りかぶったシャフトを、大玉に叩きつけた。その一撃は、大玉をばらばらのスクラップに変える。
《はい、これで終了。なんだけど……》
「なのはさん？」
　終了の合図があり力を抜こうとしたのだが、なのはさんのセリフの歯切れが悪い。
《ちょっと待ってね。そっちに行ってるから》
「誰がですか？」
「私だ」
　暇を持て余した、神々の、遊び～。なんて冗談を言える相手ではなかった。目の前にいるのは、すでにＢＪを展開したシグナムさんだ。
「……もしかして」
「ああ、噂の仮面ライダーの力、確かめておきたいと思ってな。高町に言って使わせたが、やはり実際に戦ってみるのが一番早いだろう」
「おお、ここに来てなんてテンプレな……！」
　バトルマニアのシグナムに戦いを申し込まれる。そんな何度も使いつくされた展開が俺にも起こってしまうなんて！
　最近は予想外の出来事が起こりすぎてたから、感動すら覚えてしま

うよ!!
「どうした？　疲れているというのなら、無理にとは言わないが？」
「いえ、やります」
「ふっ、即決とはな」
シグナムさんは嬉しそうに微笑む。
普段だったら無駄な戦いは避けるところだけど、あまり使っていないジオウの力を試せるんだった話は別だ。存分に胸を借りるとしよう。
《翔君、本当に大丈夫？》
「はい。シグナムさんの胸を借りたいと思います」
《わかった。危なそうだったらこっちで止めるから》
「了解です」
「会話は纏まったか？」
もう待ちきれないとばかりにシグナムさん。
「はい。いろいろと試させてもらいますよ」
「私を実験台にするつもりか。いい度胸だ」
シグナムさんが剣を抜いて構える。
俺は無言で別のウォッチを取り出した。
《ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ》
「変身――――!!」

突然の乱入者に驚いたフェイトは、慌ててはやての肩を揺らす。
「え、え？　何で？　シグナムが入ってきたよ!?」
「うーん、なのはちゃーん？」
はやては訓練場にいるなのはに通信を繋ぐ。
《あっ、はやてちゃん？　丁度よかった》

「シグナムのアレは？　いつもの癖？」
《うん。そうかな》
「ならしょうがないなぁ」
「しょうがないの!?　ホントにそれでいいの!?」
はやての出した決断に、フェイトはツッコミを入れるのだった。

《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！　ＤＥＣＡ！ＤＥＣＡ！　ＤＥＣＡＤＥ！》
アーマーを変える。透明な残像が重なるように装着されるのは、ディケイドアーマーだ。同時に専用装備であるライドヘイセイバーが装備された。
「どうせなら……」
《Ｗ》
「こっちも試してみるか」
俺は先ほどまで使っていたＷウォッチを再び起動させる。それをディケイドウォッチと取り換える――のではなく、突き出ている部分に追加で読み込ませる。
《ＦＩＮＡＬ　ＦＲＯＭ　ＴＩＭＥ！》
《ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ　Ｗ！》
胸部を除く、手足の装甲が変化する。右が白で左が黒。鱗のような装甲は鋭利にささくれだっていた。
「また変わるかッ!!」
「それがライダーの真骨頂なもので」
ディケイドアーマーのＷフォーム。ファングジョーカーの力だ。この形態なら、手持ちの武器は必要ないな。

俺はライドヘイセイバーを放り投げ、構えを取る。
「本物に比べると、スマートじゃないけどな」
《ＡＲＭ　ＦＡＮＧ！》
右手首の装甲から出現した白い牙で、レヴァンティンの斬撃を受け止める。カウンターの左ストレートは剣の鞘で受け止められた。
素早く身を屈め、シグナムさんの足元を刈り取るように蹴りを繰り出す。
「甘いぞ!!」
地面すれすれの攻撃だったため、軽いジャンプで軽々と回避されてしまう。さらに両手でレヴァンティンを握り、振り下ろしてくる。
「まだまだ!!」
振り下ろされるレヴァンティンを、体を捻り、足裏で受け止める。
「なにッ!?」
そのまま踏みつけるようにして地面に突き刺す。シグナムさんをとっさに引き抜こうとしているが、俺が体重をかけているせいでびくともしなかった。
「はッ!!」
アッパー気味にシグナムさんに迫るアームファング。
だが、そこからの判断は早かった。剣がすぐには抜けないと悟ったシグナムさんは、剣から手を放し、その手でアームファングを防御する。
流石は騎士の鎧。俺の牙とシグナムさんの鎧は火花を散らして拮抗する。
さらにそこに鞘のフルスイングが襲い掛かってくる。
「っ!!」
俺は両手をクロスして防御するが、片手とは思えないパワーだ。
「はあああぁぁっ!!」
裂帛の気合と共に、力ずくで体を持ち上げられ、振り飛ばされてしまった。
「流石だな。予想以上だったぞ」
「それはどうも」

俺も色々と確認することが出来たからな。
「まだまだ余裕そうだな。これなら……」
レヴァンティンが駆動し、薬莢が排出された。
「もう一段階、レベルを上げても良さそうだ」
同時に、シグナムさんの魔力が一回り増えたような錯覚を覚えた。
「大技が来る――――」
俺もそれに応え、ベルトを操作した。
《ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ　Ｗ！　ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
炎を纏るレヴァンティンに対して、俺右足から水色のオーラと共に牙が生える。
「紫電――――」
「ファングストライザー――――」
シグナムさんが１歩目を、俺は飛び上がるために体を沈めたその時、
ビーーーー!!!!
「ッ!?」
訓練場にブザー音が響き渡った。緊迫した空気が一気に緩んでしまう。タイミングを外されてしまったことで、俺達の集中力を霧散してしまった。
な、なんだなんだ!?　敵襲か!?
逆の意味で身構えてしまった俺だったが、
《はい！　そこまでそこまで!!　この後もあるんだからそんな大技はやめてね！》
頭の中になのはさんの声が響き渡る。いくらなんでも、必殺技のぶつけ合いはダメだったか。そりゃそうか。
「という訳だ、勝負はお預けだな」
「そうみたいですね」
俺達はお互いに変身を解除して、なのはさんの所に向かうのだった。

平和な六課

俺の戦闘が終わったことで、初日の体を動かす訓練は終了になった。
なんでも今日の模擬戦の結果を元に明日からの訓練メニューを考えるとか。そのため今日はここまで。
とはいっても別にこのまま帰れるわけではない。管理局員になった俺達には、一応座学のお勉強もあるのだ。エリオとキャロは養成学校で一通りの勉強は済ませてきたため、この場にはいない。
そんな授業を担当するのは、
「事務方の蛇倉だ。よろしくな」
この男性局員だ。なんでも事務方のトップなのだとか。
「そんな偉い人が、どうしてわざわざ新人の授業を……？」
アスナの疑問は当然だ。
「単純に人がいないからだな。他の仕事は他のメンバーがやってる途中で、手が空いてるのが俺しかいなかったんだ。んじゃ、さっそく始めようか」
その返答に納得したらしいアスナは、姿勢を正してノートを開いた。それは雪菜も同じだ。基本、管理局に入ったのはまじめメンバーだったからな。
ただ、
「先生」
「何だ？」
「飲み物を飲んでも良いでしょうか」
「ああ。それは自由でいいぞ。おい、だからってマッ○シェイクを取り出すな。そいつは飲み物じゃねぇだろ」
「私は飲み物派です」
「俺は違うんだよ」
問題児の耀は別だが。
そんな感じに授業は進んだ。
授業が始まって大体1時間半が経った頃。

「おいっす～、やってる～？」
軽いノリで八神さんが入ってきた。
それに加えて、
「「皆様、お疲れ様です」」
感情の籠ってない、事務的な声が投げかけられた。それも２人分。
その２人を見て、俺は息をのんだ。だが、同時に合点がいった。
「っ、ああ、そういえば……」
「ん、ああ、翔君は会ったことあったんやね」
「ええ、まあ」
目の前に現れたのはメイドさんだった。姿かたちはほとんど同じ。唯一違うところといえば、髪と瞳の色。それと目つきだろうか。
それもそもハズ、この２人は双子なのだ。『Ｒｅ：ゼロから始める異世界生活』のキャラクター、双子のメイド、レムとラムだ。
前に会ったのはあのゾンビの家を捜索したときだった。それも会っただけだ。敵スタンドにいいようにやられていた俺たちのお世話、または監視をしていたのだ。
目立った会話もなく、捜査が終わった後は、六課に保護されていく女の子達と一緒にどこかに行ってしまった。
「誰かから聞いとるかもしれないけど、２人は六課専属のメイドさん」
あの家宅捜査の後どこに行ったのかと思っていたけど、そのまま六課で働くことになっていたんだな。
「そういうこと」
「ちなみに、他の娘達は？」
「今はまだ施設。今日明日には、って感じやないね」
「……そうですよね」
まだまだ、あのゾンビに負わされた心の傷って言うのは深いってわけだな。
「……」
俺は拳を握り締める。
そんな俺の雰囲気を感じ取ったのか、八神さんが少し口調を変えた。

「……ん。でも、この2人は、例のあの人とはあんま関わってへんかったみたいでな。だったらってことで、六課で働いでもらっとるんよ」
「そうなんですね」
寄る辺がなくなってしまった女の子たちにとって、六課の存在はありがたいものだったんだろう。
会話がひと段落したところで、蛇倉さんが、
「それで部隊長、何か御用で？」
「や、そろそろおやつの時間やん？　用意したからみんなもどうかなって」
「それは大変ですね。一刻も早く向かわなければ」
おやつの時間なんてものがあるとは驚きだ。そして、それに全く疑いを持っていない蛇倉さんも。もう慣れっこなんだろう。
俺達は促され、移動を開始する。八神さんを先頭に、一番後ろにメイド姉妹という順番だ。
食堂に向かう途中、
「……何か？」
後ろから視線を感じて振り返る。視線の大本はレムかラムのどちらかなのは間違いない。明らかに俺の方を見ていたと思うんだけど。
「……？」
「別に。なんでもないわ」
レムは首を傾げ、ラムが返答する。
「なんでもないってことは、無いと思うんだけどね……」
小声でぼやくが、それ以上答えてくれそうにない。
首を傾げながらも、食堂に向かうのだった。

「このお菓子、何処から出てくるんですか？　全体的に手作りに見えるんですけど」
「その通り、なのはちゃんとフェイトちゃんの手作りや」
「マジか」
　目の前に並べられたのはたくさんのクッキーと紅茶。いい感じのティータイムだ。
　クッキーはきれいに焼けているが、綺麗過ぎないというか、お店で売っている様に均一にきれいではない。
　まさに手作りクッキーの最高峰といった感じ。
　先に席に座っていた蛇倉さんの隣に腰かける。
「訓練での高町さんしか知らないと信じられねぇよなぁ。あれで家では家庭的なお母さんだっていうんだから」
「あー、あれですか？　ハンドル握ると人格が変わる、みたいな」
「それだな。デバイス持つと人格変わるんだよ、高町さんは」
「何言ってるのかなぁ、２人共？」
「いや～、うまいなぁ、このクッキー」
「そうですねぇ～」
　追及されそうになったため、急いでとぼける。
　実際、このクッキー、見た目だけじゃなくてうまい。もりもり食べれてしまう。
「どう、翔？　おいしい？」
「あ、フェイトさん。おいしいですよ」
　追加のクッキーを持ってきたフェイトさん。俺の肩越しにのぞき込んでくる。
「良かった～、最近作ってなかったから、うまく行ってるか不安だったんだよ～。どんどん食べてね」
「はい、どんどん食べます」
　うまい！　うまい！
「先輩が餌付けされてる……」
　離れた席から、雪菜の呆れ声が聞こえてくる。

ち、違うし！　美味しいものを美味しいって言ってるだけだし！
「ふふ、こちらもどうぞ、翔」
「ああ、クローディア。クローディアも作って……え？」
クローディアもお皿を持って来ていた。そのお皿にも山盛りのクッキーが乗っていたのだが……半分ほどが真っ黒になっている。というか、黒いオーラを纏っているようにも見える。
でも、これは焦げているわけではないようだ。これは……
「私も手伝ったんだよ～」
「ララも？」
クローディアの更に後ろから、尻尾を振ったララが近づいてくる。
とたんに嫌な予感がしてくる。
「……クローディア、ララは何か入れたのか？　このクッキーに」
「はい。何やら見慣れない調味料を」
「大丈夫だよ？　デビルークではメジャーなヤツだから」
「「……」」
席に座っている俺達は、ララの言葉に黙りこくる。ララは満面の笑みで大丈夫だと言っているが、真っ黒なクッキーに進んで手を伸ばしたいとは思えない。
でも、王女様のおすすめ調味料入りをあえて避けて食べては、あまりにも心証が悪い。
「ならば行くしかあるまい……!!」
「お前……!!」
「先輩!?」
「翔君……っ」
「毒見よろしく」
横の蛇倉さん、雪菜とアスナも驚愕に目を見開いている。他の局員も、固唾を飲んで俺の行動を凝視している。ただし耀、テメェはダメだ。
「ふう……」
覚悟を決めた。
真っ黒なクッキーを摘まみ、齧る。

途端に広がる、クッキーの甘さ全てをかき消す意味不明のコク。
「コパッ!?!!?」
「「ちょ!?!」」
椅子をひっくり返して倒れる俺。

「ちなみに王女様、何を入れたんです？」
「ダークマターっていうんだけど」
「ダークマター……デビルークで採れる珍味だな。体質的に、デビルーク人以外が食べると高確率でお腹を壊すとか」
「えー？　じゃあみんなは食べないほうがいいのかなー？」
「そうでしょうねぇ」

倒れた俺に、そんな会話が聞こえてくるのだった。

その後、何とか復活した俺。
「もうほとんど残ってないのですが……」
「お前の犠牲は無駄にはならなかったぞ」
蛇倉さんが肩に手を置いてくる。
「よし、休憩も済んだことだし、授業再開するか」
「あ、その前にトイレに行きますね」
「ああ、先に戻ってるぞ」
「了解でーす」
俺は軽く手を振って、その場を離れるのだった。

「ふぃ～」
スッキリした俺は、トイレから出ようとする。と、そこに、
「わっ、と」
そこには、出口を塞ぐようにラムが立っていた。
腕組みをして、俺を値踏みするようにじろじろと見ていた。俺はトイレを指さして、
「ええっと？　掃除？　……な訳ないよな？」
「当たり前でしょ」
つまり俺がトイレに立ったのを見計らって、ここに来たってことだ。俺に何か話があるんだろう。
「あなた、アイツと同じ、なのよね？」
「アイツ？　ゾンビの事か……そうだな、同じ世界出身だな」
まあ、正確にはこの世界の住人じゃないってだけで、俺とアイツが同じ世界から来た保証は無い訳だが。
むしろ別世界から来たって言われた方が、アイツとの価値観の違いに悩まなくて済む。
「あなたと一緒にいた女の子、貴方が召喚したのかしら」
「そうだな」
「うまくやってるのね。ずいぶんと仲が良さそうだったわ」
「だといいんだけど」
みんなとは、概ねいい関係を築けているとは思う。召喚した娘だけではなく、この世界にいる人とも。
「それはあなたの人柄よ。この世界で真面目に生きているからこそ、あなたは今、この立場にいる」
「……なんでそんなおべっか使ってるんだ？」
「気に入らないの？」
「キャラと違って違和感がすごい」
普段だったら絶対こんなこと言わないだろってセリフ、それも感情を殺したような無表情で言われればそれはね。

「そう。じゃあ普通に話すわ」
「そうしてくれ」
とたんに口調がぶっきらぼうになるラム。今までの声が半オクターブ上がっていたことがわかる。電話で話すときのような、作っている時の声だったようだ。
「でも、周りの娘達の様子で、あの男とは違うって言うのは分かるわ。じゃなきゃ、こんなに無防備にあなたの前に姿を見せたりしない」
「アイツにはひどい事を？」
「他の娘に比べれば大したことは無いわ」
「……」
つまり、なにかしらはされたってことか。
俺を見たラムはため息をついて、
「私達は1回しか会ったことは無いわ。この世界に召喚された日、アイツのスタンドで力を奪われた。そのくらいよ。他の女はいくらでもいたから、『その』相手にはされなかったわ」
食蜂に見せられたアイツの記憶にもあったな。召喚したその日に能力と抵抗の意思をＤＩＳＣにして奪うシーンが。
レムとラムのものは見なかったが、同じようなシーンは編集で削除されたんだろう。
「それで、そろそろ本題に入ってもいいかしら？」
その1回でもいい記憶ではなかったらしい。話を打ち切ったラムが話を進めようとする。俺は首を縦に振った。
「ラムがしたいのは簡単なお願いよ。これから私達に何かあった時、手を貸してもらいたいの」
「ああ、わかった」
そんなことは、わざわざ言われるまでも無い。
「二つ返事で了承してくれるのは助かるわ。それで、それに対する対価だけど」
「や、別に」
対価とか無くても2人の力になるけど。
「違うわ。分かってないわね。ラムが、あなたを信用できないのよ。

口約束だけじゃあね。でも、私達を庇護してくれる存在は多いに越したことはない。ラムもレムも、無責任にこの世界に召喚されたんだもの。こんな、訳の分からない世界に」
「まして、説明の必要なく事情を理解してくれる相手なんて、俺も俺以外に心当たりが無いからな」
「そういうことよ」
　信用できなくても、話しておくに越したことはないってことか。
　確かにレムとラムの原作世界とこの世界は全く違う。世界観だけ見れば正反対と言ってもいいくらいだ。知識だけでは不安があってもおかしくない。
　それに何より、ラムは。
「何、その目は。気に入らないわね。言いたいことがあれば言えばいいじゃない」
「ラムには角の問題もあったからなって思っただけだ」
「……どうしてあなたがラムのプライベートを知っているのかについてはこの際目を瞑るとして、確かにその問題も大きいわ」
　ラムとレムは一見普通の人間に見える。少なくともララのように、一目で見えるような特徴を外に出していないからな。
　だがその正体は鬼の一族だ。だが原作のとある事件によって一族は滅ぼされた。ラムはその時に、鬼の力の源である角を折られてしまったのだ。
　そのせいで、天才とまで言われていたラムの力の大半が失われるだけでなく、常日頃から倦怠感とマナ不足――この世界ではおそらく魔力が不足する状態になってしまっている。
　ストレートに言ってしまえば、ラムは身体に障害を持っているのだ。
「失礼な男ね。ろくに知りもしない相手のことをつらつらと」
「お前がはっきり言えって言ったんじゃねーか……それで、その症状は？」
「この世界の医療は優秀だったわ。魔力の補充は、専用の医療器具で何とかなってる」

「そっか」
「そんなラムが差し出せるものなんて、そんなにないわ」
「ふむ……」
　だったら無理してメリット提示してくれなくても、と言いたいところだけど、本人が納得してくれないんだからしょうがない。
「さて、そんなラムが提示するメリットは何でしょうか？」
「ここで問題形式かよ。この後、授業があるんだけど」
「なら早く考えなさい」
　ラムが提示するメリット。ちょっと考えるか。
　でも、もう答えが出てる気がする。この世界に召喚されて、おそらく半年も経っていないだろうラム。金品と言ったものを提示するとは思えない。
　だとすれば、ラムのメイドとしての働きか……それとももっと直接的に、ラム自身か。自分のことを好きにしていいから、その代わりの保護を求める。かなり追い詰められた思考だけどな。自分の『女』を使うやり方。言ってしまえばセフレだからな。
「何を考えているのかしら、いやらしいわね」
「何も言ってないよな？　口に出てないよな？」
　確かに安直かつかなり品のない考えだったな。
「でも、それはあながち間違いじゃないわ」
「ふむ？　つまり正解は？」
「ラムがあなたの獣欲の処理を手伝ってあげるわ。光栄に思いなさい」
「やっぱりか……」
　普通に正解じゃねーか。
「何？　何か不満があるのかしら？　あなたにはメリットしかないと思うわ。あなたはオスのものを出すことで新しい能力を手に入れることが出来るのでしょう？　便利に使える女はメリットしかない」
「まあ、そやね……」
　なんだか、こんな説得をちょっと前にされた気がする。興味本位の向こうとは違って、こっちはこの世界での生活が懸かってるけど。

「反応が薄いわね。あなたが望むのなら、多少過激なことも許すわよ。あるんじゃないの？　相手との関係を気にして、口にできてないことが」
「……」
　ま、まあ？　全くないとは言えないけれど、向こうが嫌がってるのにするつもりなんてない。そこまでの欲求じゃないぞ……たぶん。
「ただし1つだけ、条件を付けさせてもらうわ」
　気だるげだったラムの雰囲気が変わる。
「要求は、全部ラムだけにしなさい。この事を盾にレムに何かしようとしたら――――」
「しないって、そんなことは」
　ラムの目は本気だ。まともに戦えば俺相手に勝ち目がないのは分かっているはずだが、それでも俺の命を刈り取ろうとしてくるだろう。
　だがそもそも、ラムにそんな要求をするつもりはない。だからお互い、無用な心配だ。
「何を黙っているのかしら。さっそく頭の中でラムを辱めているの？」
「ちげーよ!!　はぁ、条件は分かった、それでいいから、そろそろ授業に戻っていいか？」
「そうね。あんまり待たせていると、変に勘繰られてしまいそうだもの」
　そう言って、俺はラムと別れるのだった。

まだまだ平和

「「「「ただいま～」」」」

六課での仕事も終わり、俺達、俺、桜、アスナ、雪菜、耀は帰宅した。あの後は特にラムからのアクションは無かった。向こうとしても、自分から来る必要は無いからな。用があれば呼び出されると思ってるだろうし。

リビングに行くと、

「帰ったか」

「お帰り～」

「お疲れ様、お兄ちゃん。初日はどうだった？」

「お疲れ様です」

オルタは足を組んでくつろぎ、理子はソファーでごろごろしていた。キッチンでは、夕食が作られていた。狂三とコッコロがメインになり、クロやティナがお手伝いをしていた。

ヤミやセイバーも、料理自体ではないが食事の準備をしている。

「理子、お前な……小さい娘も手伝ってるんだから、お前も動かないと……」

「えー、つーかーれーたーよー……朝から激しい運動しちゃったからねぇ……？」

「じゃあ、もうしないようにしようか」

「やだーー!!!」

「はいはい、イチャイチャするのは着替えてきてからにしてね？」

クロがジトッとした目を向けてくる。

「ああ、そうするよ……アリアは？」

見当たらなかったので聞いてみる。

「んー？　や、今日は来てないわよ」

「そう、か……」

「何か用がったの？」

「や、ちょっと気になっただけで……」

そう言って自分の部屋に向かった。

嘘です。この前の行為について色々と話したいことがあったんです。昨日はこなかったし、今日こそはと思ってたんだけど。
もしかして愛想をつかされたのかもしれない。や、判断能力が鈍っている状態で行為に、しかも初めての行為に及んでしまえばそりゃ嫌われるどころか、裁判になってもおかしくない。
今のところ音沙汰ないのが本当に心臓に悪い。まあ俺が悪いんだけど。
「翔君、ちょっといい？」
アスナに呼び止められた。俺達は2人で俺の部屋に入る。
「アリアちゃんのことだけど……」
「あ、ああ」
突然アリアの名前が出てきて、俺の声が裏返る。
アスナは俺以外にアリアのあの痴態を知っている唯一の人物だ。さらに同姓。色々と俺に言えない何かを相談されているのかもしれない。
「うん。アリアちゃんだけど、心配しなくても大丈夫だからね」
「え!? そ、そうなのか？」
「うん。アリアちゃん、ホントに何も知らなかったらしくて。その手の知識とか、全然なかったらしいの。だから少し時間をおいて考えたいらしくて、お母さんに話に行くって」
「お、お母さんに……」
親に相談とは、なかなかヘビーな問題になってきた。や、行為をした以上、そう言った責任が発生する可能性だってあるわけで。アリアは貴族なんだし、若い頃の火遊びでは済まなくなる可能性もある。
「その辺りはそんなに厳しくないらしいから、大丈夫だと思うって」
「……ああ、そっか」
アリアは実家では『いない者』とされるくらい、軽く扱われている。その辺りが理由なのだろう。
「うん、ごめんね。私がアリアちゃんを唆したせいでこんなことになって」
「いや、最終的には俺がしたことだから」

でも、いくら軽く扱われていると言っても貴族だ。ホームズ家から何かしらのアクションがあるかもしれない。
今後はそれについても考えていかないといけないんだな。
「2人共正気じゃなかったとはいえ、軽率なのはまずかったか」
「ううぅ」
アスナは昨日の行為を思い出したのか、顔を赤くした。
「あれはっ！　マッサージのせいだもん……っ」
「そういうマッサージ、本当にあったんだなぁ」
「そう！　そうだよ！　理子ちゃんの見つけてきたマッサージ、本当にすごい効果で……それに翔君、あんなにしたのに朝には理子ちゃんとしてたでしょ！」
俺の場合は能力ありきだから!!　それでも性欲が無ければ勃たないんだけどね！
「……やめようか、お互い良かったなら、それで」
「そ、そうだね。うん。よかった、もんね」
そのセリフでやっぱり昨日の行為を思い出してしまったらしく、再度顔を赤くするアスナ。何度も何度も、アスナが満足するまでしたからな。
俺達はそれ以上喋ることなく、夕食へ向かうのだった。

その夜、俺はモードレッドの部屋を訪れていた。
自分から部屋に籠っている彼女だが、籠りっぱなしで放置するつもりは無い。今すぐみんなと一緒に生活するのは難しくても、今後のことを考えて対話を重ねていくことにしたのだ。
ちょうど今、最近有ったことを話し終わったところだ。

「って感じなんだよ」
「オレが言うのもなんだがな、マスター。あんまり火遊びすると、ケガするぜ」
　部屋の中央に胡坐をかき、腕を組んだモードレッド。兜に覆われているため表情は分からないが、きっと苦い顔をしているんだろうな。
「直感で吐き気を催すゲス野郎じゃないってのは分かったんだがな……単純に良い奴かって言われても違うな」
「そりゃ、この人数の女性と関係持ってるのに善人っては言えないよな」
　その辺りは自覚してる。
「自覚してんのがいい事とは限らねぇけどな」
「ごもっともだ」
　むしろ自覚してるからこそ悪いまである。
「……なあ、マスター。今度はこっちから聞いていいか？」
「ん？　なんだ？」
　モードレッドからの質問は初めてだ。
「マスターは父上とは長いのか？」
「ん……」
　そっちの質問か。
「長い……長いか、うーん。や、そこまで長くは無いな。せいぜい数カ月だよ」
「そうなのか？」
　モードレッドは意外だと言う。
「いや、俺を見た父上がマスターの声だけで止まったからな」
「止まってなかったけどね。壁吹っ飛ばされたぞ？」
「本気だったらあの程度じゃすまないだろ。マスターの声があったから止まったんだ」
　本気じゃなかったってのはそうかもしれないか。俺の判断に納得してくれてモードレッドの存在を許してくれているし。
「ああ。だからてっきり父上とは長く一緒に戦っているのかと思ったんだ」

長くは戦っていないけど、体の関係を持っちゃったからな……
「ん？　なんだって？」
「いや、何でも」
やっぱりモードレッドはアルトリアのことが気になるらしい。その後もあまり付き合いは長くないと言った俺に、アルトリアのことを控えめに聞いてくるのだった。

特に何事も起こらず、次の日になった。
「行ってきまーす」
家の扉を開けると、
「翔ーー!!　一緒に学校に行こー！」
ララ王女がそこに立っていた。
「何故ここにいるんでしょうか？」
「ザスティンがね、親衛隊と一緒に学校に行きたくなかったら、夜月翔と一緒に行け、って」
もうそういう事になってんのね。
「うん、自由にするじょーけんなんだって。でもそのくらいなら全然オッケー！　それに、翔の近くなら私も好きな人が見つかるかもしれないし！　ね、雪菜！　他の人も色々教えてね～」
「……そうですね。そしてそれが先輩になるってオチですね」
雪菜が何やらぼそっと呟いている。
「とりあえず、学校行こうか」
とても楽しそうなララを先頭に、俺達は学校へ向かうのだった。

新学期恒例の行事として、学校では健康診断や体力測定がある。どんな高貴な身分でも学生になった以上は逃れることが出来ない。
つまり、この武偵高に留学することになったララも同じだった。
「よし、行くぞ」
スタート位置に立ったララ。武偵校指定の体操服に身を包み、腰を落としている。
その両脇にいる生徒はそのララの存在感に圧倒されつつも、スターティングポーズを取っていた。
「よーい、どん――――」
「どーん!!」
一瞬でララの姿が消える。
「「「ッ?!」」」
砂埃が舞い上がり、
「ゴールッ!!」
すでにゴールテープを切っていた。
「ちょっとララさん!」
それに対して教師が眉を吊り上げる。
「はえ？　どーしたの？」
「この測定では能力は使ってはいけないと言ったでしょう!?」
「え？　使ってないよ？」
「……はい？」
教師目を丸くして、手に持ったストップウォッチとララを何度も見比べた。そこに記されているのはあり得ない数値。
あまりにも速かったせいで時間を止めるタイミングを逃してしまったが、それでもありえない数値になっていた。
「まったく、凄まじいものだな、デビルークの血筋というのは」

その様子を屋上から眺めていた那月はため息を吐いた。
ホットスポットにあるデビルーク王国。この国の住人はただ尻尾が生えているだけの人間ではない。個人差はあるが、魔力や超能力に寄らず、身体の性能が段違いなのだ。
そのおかげで現デビルーク王、ギド・ルシオン・デビルークは、世界でも5本の指に入る強者という話だ。
「デビルークの王女は3人、その中でもララ王女は一番、王の特徴を継いでいると聞く。これでは、護衛の必要などないように見えるな。下手な護衛など、ララ王女が少し暴れただけで吹き飛んでしまいそうだ」
那月が意地悪そうな笑みを浮かべる。
那月が思い浮かべる護衛の顔というのは、もちろん翔のことだ。
「だがまあ、面倒を起こしてくれなければいいさ」

「これは、どういうことだ……!!」
目の前で起こる惨状を見て、那月が青筋を立てている。
「ラ、ララちゃん!? これ、どうやって止めればいいの!?」
「最悪、わたくしの能力で時間を巻き戻しますけれども……」
「あれ〜? おかしいなぁ? ここかなぁ?」
ララの机には見覚えのない機械があった。
多数のアームが伸び、他の生徒の机の上にある銃のパーツに伸びている。それらが組み合わさり、得体のしれない何かが作成されている。
それだけではなく、教室にあるありとあらゆるものを取り込んで、新しい武器が作成されていく。
その机の周りに集まるアスナと狂三だが、その暴走を止めることは出来ないでいた。
「ふん!!」

那月は虚空から発射した鎖で暴走する機械を破壊する。
そして一言、
「1年の夜月　翔を呼んで来い……!!」
那月の怒気に全身から冷や汗を吹き出した生徒は、全速力で駆けだすのだった。

「なんで俺が呼ばれたんでしょうか？」
「お前が保護者だろう？」
「ごめんね～、私、何かやっちゃったみたいで」
腕を組み不機嫌になっている那月と、えへへと頭をかいているララ。
血相を変えた生徒に連れられ、向かった2年生の教室。そこには見たことの無い機械の残骸が転がっていた。
「これは、そもそもどういう状況なんでしょうか？」
「ララ王女、説明を」
「うん。今の時間は拳銃の組み立て、だったんだけど……」
ララが残骸のある机、その隣を指さす。
「隣の人が、この科目が苦手だって言うから、そのサポートをするアイテムを作ったんだ。パーツから、自動で拳銃をくみ上げちゃうマジックハンド。名前は――」
「ちょっと待て。作った、だと？」
ララは様々なアイテムを作成できる天才的な頭脳を持っている。それを利用したんだろう。
「そもそもお姫様は問題なかったのか？　お姫様は銃の組み立ては問題なく出来たというのか？」

「え？　そのくらい、一回見れば覚えられるよ？」
「……なるほどな」
　那月先生は非常に納得のいかないといった表情をしている。ララ様はこう見えて天才なのだ。
　原作では、小さい頃に宇宙戦艦を解体していたってエピソードもあった気がするし。
「……なぜこの能天気なガキにそんな才能があるんだ」
　那月先生！　口に出ていますよ！
「話を戻そう。それで？」
「うん、それでね、作って、最初はうまく動いてたんだよね。でも、装備科？　の人がもっと動かしてほしいって言ってきたから」
「動かしたら暴走したと」
「うん」
「その生徒はどいつだ？」
「えっと～……あれ？　いなくなってる？」
　逃げたんだろうな。怒られるとわかっているのに、この場にとどまっているわけがない。相手が那月先生だと無謀な行動になるんだろうけど。
「ふぅ、そうか」
「那月先生？」
「お前たちはここにいろ。絶対に、逃げるな」
　そう言い残し、那月先生の体は虚空に消えた。これは怒られるな。何故か俺も含めて。
「ごめんね、翔。私のせいで怒られちゃうね」
　流石のララも、申し訳なさそうにしている。
「べつにいいよ。そんなこと気にしないで」
「うん……ありがとう。優しいね、翔は」
「や、そうじゃないけどね」
　お姫様を相手にしてるんだ。この程度のトラブル、こっちも覚悟していただけだ。
　２分後、那月先生が帰ってきた。

「さて、私の言いたいことは分かるな、ガキ共？」
「あの、俺はこれから六課に行かないといけないので手短にお願いしま――――痛っ!!」
「そんなことを言える立場だと思うなよ、夜月　翔」
俺の額を叩いた扇子を腰に当てる那月先生。
そして始まるお説教。

その時の俺は――――それどころか、那月先生も気が付いていなかっただろうが、
「……」
そんな俺達の様子を、覗いているヤツがいた。

婚約（仮）編
綺凛のトラブル　前編

ララが転校してきて1週間が経った。
騒がしい日常ではあるけど、ララが加わった新しい学校生活、そして六課での訓練にも結構慣れることが出来た。
何も事件も起きてないからだとは思うけど、あっという間に過ぎていったな。
今はこうして、アインハルトと綺凛の朝練に出ている。ちびっ子たちの訓練も再開されてるって聞くし、表面上の島は実に落ち着いている。
そして現在、大方の朝練メニューも終わり、最後の一休み、雑談の時間になっていた。
そこで俺は、ここまでの日常を振り返り、こんなことを呟いた。
「そろそろ何か起きそうな感じがするんだけどな」
「翔さん……」
「それは不謹慎ですよ、先輩」
すると、年下2人注意されてしまう。
そうかなぁ？　俺が気にし過ぎなんだろうか。六課に入っても、今のところは一度の出撃もしていない。訓練の日々だ。
ララは相変わらずトラブルを起こしているが、それはいつも通りだ。
むしろ那月ちゃんの処理と理解の速度が上がってきているので、後処理のために突然空間転移で俺を拉致するようになった。
一緒の教室にいるアスナ達の話では、ララは本当に楽しそうに授業を受けているらしい。
お勉強をしていたのは国にいた時と変わらないと思うけど、同年代の友達がいるというのはやはり違うらしい。
俺も、今のところ良き友人としてお付き合いさせていただいている。

問題はララの引き起こすトラブル……だが、それも一種のスパイスとして楽しみの1つになっているらしい。
実は、実際にウチに泊まりに来た時にも、

「ふー、お風呂入ったよ～」
「あ、ララさん、上がったんだね。次はぶっ!?」
「アスナ？　ちょララ、お前……!!　何でバスタオル一枚なんだよ!!」
「えー？　別にいいじゃん～。私は平気だよー？」
「お兄さん、あまり見ていると国際問題になりますよ？」
「そうですね……」

なんてお決まりの展開があったりした。
「た、大変なんですね……先輩の家で、お泊り……」
「綺凛？　お泊りしたいのか？　家で」
「へ!?　い、いや、そんな、先輩もご迷惑でしょうし！　別にお泊りしなくても、こうして毎朝先輩にはお会いできていますし！」
綺凛がわたわたと手を振る。
次にアインハルトが質問してきた。
「ですが、翔さんは午後、六課に行ってるんですよね？　ララ王女の面倒を見る時間は無いのでは？」
「ああ、まあそうなんだけどね」
すでにシフトが組まれ、お休みがあるとはいえ、平日の最低４日は六課に行っている。
だから実際に面倒を見ているのは狂三が多い。だからなのか、最近狂三が疲れている気がする。今後、何かしらの埋め合わせをしなければ。
「でも、六課に顔を出すこともあったんだ。訓練に混ざってる」
この前、部隊長室から出て来たザスティンを見たからな。話はもう通っているんだろう。
「ララ王女が訓練に……？」
「ああ。べらぼうに強いぞ」

デビルークの身体能力、恐るべしだ。俺だけでなくなのはさんにすら食らいつくその姿に、全員そろって目を丸くしたものだ。
ゲッターとまともに戦えるザスティンを軽く吹き飛ばす力を持っているんだ、そのくらいはやってくるだろう。
その姿を見たシグナムさんがうずうずしていたが、相手は一国の王女、何とか理性を働かせていた。
「そ、そんなに、ですか……？　王女様なのに……？」
陸戦試合でなのはさんの力を体感しただろうアインハルトは戦慄していた。ってか、王女様なのにって、アインハルトも覇王、王様の子孫じゃん。
「まあそんな感じで。楽しんでるらしいよ」
「へぇ～……」
「そうなんですね……」
２人ともあいまいに頷いていた。別世界の話に聞こえるよな。王女様のお話なんて。
「じゃあ、もしかすると、この朝練にも、そのうち来るかもしれないですよね」
「どうかなぁ。興味を持ったら来るんじゃない？」
「うう、そうですよね……！」
アインハルトはまじめに頷き、綺凛はまだ起こってもいないことに緊張している。
そんな会話をしつつ、朝練を終えるのだった。

そしてその様子を、
「……」
やはり誰かが覗いていた。

訓練を終えて解散した3人。各々が帰宅し、登校の準備をしていた。
「よし、準備万端っ」
そう呟いた綺凛はバッグを持って立ち上がった。その荷物はいつもより多い。その中に入っているのは学校指定の水着と、替えの制服、それと濡れた服を入れるためのビニール袋だった。
「大丈夫だよね。うん。持ったよね……よし！」
不安になった綺凛はもう一度バッグの中を確認する。
今日は着衣訓練の日だった。実際にプールに服を着たまま入り、水中での体の動かし方を学ぶのだ。
授業は順調に進み、そして、とうとうその時間になった。
授業が終わると同時に、女子生徒が席を立ち始める。教室からプールに移動するためだ。ちなみに男子生徒の着衣訓練は、別日に行われる予定になっている。
女生徒の流れに従って、綺凛も移動を始めた。
だがある程度進んだところで、綺凛は首を傾げることになる。
「あれ？　みんな、そっちに？」
「ん？　どーしたの、綺凛ちゃん？」
「みんな、着替えないの？」
綺凛はとある扉を指さす。体育館やプールの近くに設置されている更衣室だ。
「あはは、何言ってんの～」
「ほらほら、行こ行こ！」
「え？　え、え？」
後ろに回り込まれ、背中を押される。
止まることなく、プールサイドまで連れていかれてしまった。そこにはすでに先生が待機していた。そして授業開始のチャイムが鳴っ

てしまう。
　そこには合同で訓練を行うアインハルトのクラスもいた。
「(え、あれ？　ど、どういう事？　みんな、下に水着着ないの!?　もしかしてこのまま!?　それとも、もう着てるの!?)」
「綺凛さん、どうかしましたか？」
「あ、アインハルトさん！」
　綺凛は事情を説明した。
　それを聞いたアインハルトは頭を抱えた。
「あの、綺凛さん……それはまずいですよ」
「それは――――」
「はいそこ！　無駄話はしない！」
　先生に怒られたことで、背筋が伸びる２人。
「それではさっそく始めたいと思います――――」
　先生の指示通り、次々とプールに飛び込んでいく女子生徒達。
　水に濡れたことでシャツが透け、肌に張り付いていく。そうすることで、その中に身につけているモノがあらわになる。
「あは、冷た！」
「うわ！　そんなの着けてんの!?　大胆だねぇ」
「ちょ！　あんま見んなって!!」
　赤、白、青、色とりどりのそれは、間違いなく下着だった。
「あわわわ」
「この訓練は限りなく実戦に近い環境で行うために、普段の服装のまま行うんです……！」
　そう言ってアインハルトはプールに飛び込んでいった。
「せ、先生！　ちょっといいですか！」
　綺凛は急いで先生に声をかける。
「何ですか、綺凛さん」
「あ、あの！　下に水着を着てきてもいいでしょうかっ！　私、このままプールに入るって知らなくて！」
「何言ってるんですか！　事前のプリントで連絡していたでしょう！
　そもそも、有事に着替えている時間があると思いますか!?　早く行

きなさい！」
「ひーん!!」
先生の声に背中を突き飛ばされ、綺凛はプールに飛び込むのだった。

「うう……」
「大丈夫ですか、綺凛さん」
現在、着衣訓練を受けていた女子生徒は、全員更衣室で着替えを行っていた。
授業2時間分をぶっ通して行われていた着衣訓練は、ようやく終わりを告げた。これで午前の授業は終了になる。
制服を着たままプールに飛び込んだ綺凛はぐっしょりと濡れていた。着ていた制服はぴったりと体に張り付き、そのボディラインをくっきりと表していた。
「むむむ……」
「な、なんですか、アインハルトさん？」
「いえ、なんでも？」
「そ、そんなに見ながら言われても……」
その視線がどこに向けられているのかを理解して、綺凛は微妙な顔になる。それは、他のクラスメイトからも向けられていた視線だった。
その大きく膨らんだ双丘。それを包む白い下着もはっきり見えてしまっている。
もちろん、下着が見えてしまっているのはアインハルトも同じだったが、そのわずかな膨らみは多少シャツが張り付いた程度でははっき

りとは見えなかった。
「はあ、補習になってしまいましたね……」
「そうですね……」
綺凛は憂鬱そうにため息を吐いた。
ただでさえ泳ぎが苦手な綺凛だが、翔との練習のおかげで何とか水に浮くことは出来るようになった。だがそれはしっかりと水着を着て、ゴーグルをしている時の話だ。
「服を着るとこんなに泳ぎにくいなんて……」
「そうですね、私も苦戦しました」
ノーヴェの訓練でも時折プールに行くが、流石に服を着たまま水に入った経験は無かった。
「アインハルトさんはいいじゃないですか。合格は出来たんですからっ」
合格できなかった綺凛は、明日再試験だ。
膨れながらバッグを開けた綺凛は、
「あ――」
マヌケな声を出した。
そこに入っているのは今朝確認した通りの準備物だ。水着、濡れた衣服を入れるためのビニール袋、そして替えの制服。
問題は替えの制服だ。
そもそも水着の上にシャツとスカートを身に着けると思っていた綺凛は、『替えのシャツとスカートしか』持って来ていなかった。
その下に着けるべき、下着は持って来ていなかった。
「あああアインハルトさん！　どどどうしましょう……!!」
「ど、どうしましたか!?」
綺凛が事情を説明すると、アインハルトもうろたえ始めた。
「おおおお落ち着きままましょう!!　そそそうです。一度深呼吸して……！」
こういったトラブルに弱いのはアインハルトも同じだった。
「と、とりあえず、下に水着を着るというのはどうでしょうか……！」
「そ、そうですね！　そうしてみます！」

小声で話していると、先に着替え終わったクラスメイトに声をかけられた。
「どーしたの綺凛ちゃん、とアインハルトさん？　着替えないの？」
「あ、さ、先に行っててください！」
「そ、そうですね！　私達は、ゆっくり着替えてから行くので！」
「そう？　じゃあ行ってるね？」
友人が全員、さらにはクラスの人間が全員いなくなるのを確認してから綺凛は水着を取り出した。
学校指定の紺のスクール水着を身に着けていく。
「（むぅ……）」
アインハルトはその様子を見て唸っていた。
今さら大きいことを説明する必要などないが、それを水着の中に、零れないように押し込める姿が、この上ない敗北感を与えてくるのだ。
アインハルトが完全敗北している間に、綺凛は水着を着終わり、さらにその上にシャツとスカートを身に着ける。
「ど、どうでしょうか!?」
「そうですね……かなり、目立つかと……」
スカートから下は問題ないとしても、シャツの部分が大問題だった。見事に紺色の生地が透けてしまっている。
この姿で外に出れば、まず間違いなく注目を集めてしまうだろう。
「ど、どうすれば……」
先生に相談しようにも、下手な内容では『自分でどうにかしろ』と言われるのがオチだ。
２人して頭を抱えるが、妙案は浮かんでこない。
「最後の手段です。申し訳ないですが、お呼びしましょう」
アインハルトは自らのデバイス、ティオに呼びかけるのだった。

「で、呼ばれたわけか……」
昼休み。
丁度お昼を食べ終わった俺は、雪菜に呼び出された。場所は何と中等部の女子更衣室。辿り着いた俺は、そこで繰り広げられる状況に顔を引きつらせている。
「ってかどんな場所に呼び出してるんだよ。びっくりしたわ」
「し、仕方ないじゃないですか!! 綺凛さんをここから動かすわけにはいかなかったんですから!!」
雪菜の反論はもっともだった。綺凛の状態を見ればな……
「着衣訓練があったのに、替えの服を忘れてしまったと」
「うう、申し訳ないです……」
上半身が不自然に紺色になっている綺凛が、申し訳なさそうに頭を下げていた。今は暫定的に中に水着を着ているらしい。
そんな状況を何とかするために、
「最初に雪菜を呼んだわけか」
選ばれたのは雪菜でした！
や、まあね、そりゃそうだよ。こういうトラブルが起きたら、普通は同姓に助けを求めるよね。それも一番近くにいて、なおかつしっかりしていそうな雪菜を。当然、耀は選ばれなかった。
だが悲しいかな。
「でも、特に何か出来たわけじゃなかったと」
「無理ですよ。そんな、普段から替えを持ってるわけないんですから」
「それもそうだ……まあ、それはそれとしてだ、雪菜さん？ こちらの方々は？」
「いえ、ですから、私の友達の――――」
２回目の紹介。しかしそれは俺の耳を通り過ぎていく。
名前なんて紹介されなくても、そんなもの、見ればわかる。目の前にいるのは、いずれも見覚えのある顔だった。

そう。
「(まどマギのキャラじゃねーか……)」
全員そろってよく知る見滝原中学校の制服ではなく、この島の武偵中の制服を着ている。つまりここの生徒だってことだ。
いくら俺でも、みんなの交友関係をすべて把握しているわけではない。とはいえ、まさか雪菜の友人になっていたとは思わなかった。
その辺りのお話はどうなっているのだろうか。この世界には魔女という存在はいない、はずだけど。
それに何やら俺が睨まれている、とまではいわなくても観察されているように見える。それが、どうにも歓迎されているように見えない。雪菜は一体俺のことを何て話しているんだ？
ま、細かく考えるのは後にしよう。今の問題は綺凛のほうだ。
「とりあえず、下に着るものがあればいいんだよな？」
「先輩、何かアテがあるんですか？　……頼もしいですけど、それはそれで変態ですよね」
「そうだけど言うなよ。君の友達もいるでしょうが」
俺だって女性が下に身につけるものについて心当たりがあるって言われれば、『うわ、何だコイツ』って思うよ。
ため息は吐きつつ、俺は端末を取り出した。
「あ、もしもし、理子か？」
呼び出した人物はすぐに飛んできた。
「早いな」
「そりゃーもう！　そんなエロゲみたいなイベントが起きてるって聞いたら！」
「ああ、なるほど……」
雪菜は納得がいったとばかりに頷いていた。
「理子さんになら安心して……それは難しいかもしれませんけど、綺凛さんのこと、よろしくお願いしますね
「おっけ～、まっかせて～！」
「先輩も、お願いしますね」
「ああ。それじゃあ、また後でな」

雪菜はその『友達』含めてその場を後にするのだった。

綺凛のトラブル　中編

雪菜達が去った後、翔は一度その場から離れていた。いつまでも女子更衣室の前にいては、通りすがった人に何と思われるのか分からないと考えたからだ。

アインハルトも翔と一緒に離れていった。アインハルトも、別に他人の着替えを見たいわけではないのだ。

そんなわけで更衣室に残ったのは綺凛と理子の２人。

「さてさて綺凛ちゃ～ん？　あなたが濡らしたのはこの下着なかぁ？　それともこっちの下着かなぁ？」

「い、いえ、どちらも私のものとはかけ離れていると思うんですけど!?」

「ほほほ、正直者にはどっちもプレゼントしちゃいましょう～！」

にじり寄る理子と後ずさりする綺凛。やっていることはそれだけだが、お互いに達人であるため、その様子は間合いを測っているようにも見えた。

もしくは肉食獣と、窮鼠猫を噛もうとする草食獣か。

どちらにせよ、和やかに着替えをしているという雰囲気ではない。

「理子的にはこっちがオススメかなぁ？　ほら、見てみて、アソコの部分が……ほらね？　すぐに『できる』ようになってるんだよ」

「そっ、んなの……!!」

着用者の秘部を覆う布部分がぱかりと割れる構造を見せつける。

喜々として下着の説明をする理子に、綺凛は赤くなって反論を試みる。だが、恥ずかしさと興味でその音量は小さくなってしまう。

「別にそんな恥ずかしがらなくてもいいじゃん。今回は『理子からしょうが無く借りる』だけなんだからさ。別にエッチな下着をつけたって、綺凛ちゃんがエッチだってことじゃないんだよ？」

「そ、それはそうかもしれませんけど……そもそも、どうして理子先輩はこんな、ぇ、えっ、際どい下着を持ってるんですか!?　もしかして、いつもこんなものを!?」

「え？　今日は違うけど」

「ひゃう!?」
　ぴらりと自分のスカートをめくって見せる理子。身に着けているのは赤を基調に金の刺繍が施された派手な下着だ。
　それでも綺凛には刺激が強く目をそらしてしまう。その初な反応に、理子はにやにやと口元を緩める。緩んだ口からは調子よくセリフが吐き出される。
「常在戦場。乙女は常に戦場にいると思ってないとね♪　特に、理子は好きな人と一緒に住んでるんだし？」
「す、好きな人と……」
『好きな人』。それが誰なのか、考えるまでも無い。そして今持っている下着を使って、その人とどんな『行為』をしているのか、想像も出来ない。
　だが、実際に理子もこの下着を使って誘惑したことは無い。使うまでもなく翔が盛っているという事もあるが。
「綺凛ちゃん、このあと流石に早退するんでしょ？　こんな状態じゃ集中して授業受けられないもんね？」
「そのつもり、ですけど……」
　控えめに頷く綺凛に、理子はニコニコと言う。落ち着いてきたとはいえ、他人の下着を身に着けた状態で、授業を受けるつもりは無い。それも、こんな卑猥なデザインのものしかないのならばなおさらだ。
「じゃあ翔君に送ってもらいなよ。ね？　1人で帰るのは不安でしょ？」
「そ、そんな！　先輩、午後は六課があるのに……」
「後輩を送っていくって言えば少しくらい大丈夫だよ。その時、何があるか分からないでしょ？」
「で、でも……」
「もー、乙女は何時でも戦場にいるんだよ？　ううん、今から戦場に向かうって分かってるんだから、そのための装備はしておかないと！」
「せ、戦場!?　何言ってるんですかっ、別に先輩に送ってもらっても、何か起こるなんてことは……！」
「それは綺凛ちゃん次第だよぉ。でも、これさえあれば翔君もイチコ

ロだと思うってだけで。それで、どうするの？　家まで送ってもらうのに、それで何もないのかな？」
「うぅ……」
綺凛に差し出されるちょっと際どい下着。それを綺凛は――――

こちらは女子更衣室から立ち去った雪菜とその『友達』。歩きながら話す話題は当然、
「ふーん、あれが雪菜のカレシかぁ、なんか、フツーだったな」
杏子は頭の後ろで手を組みながら呟いた。
「そうだよね。なんか、もっとこう、『遊んでる！』って感じの人かと思ってたんだけど」
杏子の意見に賛同するのはさやかだった。２人とも、雪菜のカレシは『遊び人の最低野郎』だと思っていたため、いざ実際に会った翔がイメージと違って困惑しているのだ。
「だよなぁ？　普通っつーか、もはや地味だろ、アレは」
「ねー。なんで雪菜さんは、あの人のこと好きになったんですか？」
「あ、あははー……なんでだろうー……？」
雪菜は何とも微妙な表情をしていた。
雪菜としてはこれ以上ライバルが増えるのはよろしくないし、ライバルが増える手助けをしたいとも思わない。そもそも、黙っていても勝手にライバルが増えているような状況なのだ。
確かにあの様子だけを見れば、確かに地味な印象を受けるだろう。特に他の上級生の武偵の実力者は、全員オーラのようなものを纏っている。
それが翔からは感じられなかったのだ。

それもそのはず、翔は少し前までは一般人。そんな強者のオーラを期待されても困る。
その辺りは、突然第四真祖にされた『暁　古城』に似た部分がある。
実際に戦ってみれば、一般人だったとは思えない度胸で強敵相手にも怯まないのだが。その辺りは実際に見ないと理解されるものではない。そしてそれと同じくらい、お人好しで女の子を引っ掛けてくるということを。
そんな翔の内面を、深く関わっていない杏子やさやかが知ることは不可能だった。
「(そうですよね。あんなに女の子を引っ掛けてくるなんて、一般的な常識では考えられません。先輩は、本当に元々一般人だったんですか？　何かそういう、女性を相手にするような職業についていたんじゃ)」
雪菜は思考を巡らせるが、残念ながら翔は完全な一般人だった。
翔がこんななのは、本人の気質による所が大きい。
「でも、連絡したらすぐに女の人が来たよね？　んー、すごく派手派手な」
「ああ。峰先輩は、そうですね。私も知り合いですから」
まどかの問いに、雪菜は頷いた。確かに理子であれば、こういった事態でも難なく対応出来るだろう。頼りになる先輩だ。頼りになりすぎて、何か良からぬことを考えて不安にもなるが。
だがそこも、翔がいればうまい具合に治めてくれるだろう。
「(や、本当にそうでしょうか。むしろ先輩もノリノリで峰先輩の提案に乗ってしまうんじゃ……綺凛さんも推しに弱そうですし、拒否できなかったら……)」
その後に何が『始まって』しまうのか、考えるまでもない。
だがこの話、『綺凛』を『雪菜』に変更しても成り立ってしまう。結局、押しに弱いのは雪菜も変わらないのだ。
「峰先輩……って、ことはあの人、峰　理子なの？」
「マミさん知ってるんですか？」
「結構有名人だからね、峰先輩は」

「名前くらいはね。この学校じゃ、結構有名人だから。来年には先輩になるわけだし」
マミは来年に向けて上級生のリサーチをしていたが、そこの中に理子の名前があった。もちろん武偵殺しやイ・ウー関連については調べても出てこないが、それを抜きにしても理子は優秀な武偵だった。
「へぇー」
「へぇー、って、あなた達も少しは調べるようにしないと、中等部も来年で終わりなんだから」
呑気なさやかに、少しだけお小言を言う。
態度を見るとそこまで効果があるようにも見えないが、これも先輩の務めだ。ため息を吐きつつも話を進める。
「そしたら最近、先輩には彼氏ができたって話があってね」
「「え？」」
「なんだよマミ、アンタがそんなこと気にするなんて、珍しいじゃん」
「ちょっとみんな？」
思わぬ方向に話が飛び、他の面々は驚きの声を上げる。付き合いの長い杏子は特にそうだ。
そのことに、抗議の声を上げようとするマミだったが、
「そ、そうです、よね。マミさん、あんまりそういうことに興味ないのかと思ってました……」
「暁美さんまで!? そ、そんなことないわよ。今まではそういう機会が無かっただけで！」
マミは縦ロールを振り回す勢いで反論する。
花も恥らう年頃の乙女が、恋愛に興味を持っていないはずがないのだ。だが、周りがそのような結論になるのは無理もなかった。
「でもマミさん、この前告白されたって」
「アタシも聞いたぞ。それで興味があるは無理があるんじゃねーか？」
「別に私だって誰でも良い訳じゃないわよ!?」
正直言って、マミは引く手数多だった。
誰にでも優しく、お姉さんのように余裕のある立ち振る舞い。それ

に加え、制服の上からでも分かる、同世代でも圧倒的に育ったその身体。
　年頃の男子中学生が引かれない訳がない。というか、マミが『良い』と思う相手にアタックすれば成功率は１００％だ。
「じゃあ今は、気になる相手はいないってことですか？」
「う、うん。今はそんな相手は……」
「全然、ですか？」
「そ、そう、かな？」
「マミちゃんは理想が高いんですね」
「そんなことないと思うけど……って！　全くもう、今は私の話じゃないでしょ！」
　いつの間にか、からかわれる側になっていたマミ。逸れてしまった話を元に戻す。
「何の話でしたっけ？」
「峰先輩の話！」
　とぼけるさやかを一刀両断する。
「それで、峰先輩の彼氏っていうのが」
「そう、さっきの男の人。夜月先輩」
　察しのついていたまどかの言葉に、マミは首肯する。
「……や、それはおかしいだろ？　だって、あの先輩は雪菜のカレシなんだろ？」
「浮気じゃん！　雪菜、どうなってんの!?」
「あ、そのぉ……大丈夫なんですよ。はい。大丈夫で……」
「全然大丈夫じゃないじゃん！　雪菜、はっきり言ったほうがいいって！　一人じゃ不安ならアタシもついていくからさ！」
「だな。そんなサイテー野郎には一発ガツンと食らわせてやんないと」
　さやかと杏子はすっかりご立腹だ。
　雪菜は雪菜で、この状態になった２人を止める術がない。
「（本当に、迂闊でした……）」
　雪菜は今さらながら、自分の失策に気が付くのだった。

更衣室から少し離れた場所で待つこと１０分ほど。
「おいっす。出てきたか。綺凛、理子に変なことされなかったか？」
更衣室から出てきた綺凛と理子。
「酷いなぁ、何もしてないよ、ね？　綺凛ちゃん？」
「は、はいっ。そんな、全然……」
「そうか？」
パッと見た感じでは不自然に紺色だった上半身は何の問題もないように見える。でも綺凛はモジモジとスカートを抑え、視線を忙しなく動かしていた。
「理子、本当か？」
「疑り深いなぁ、翔くんは」
理子はぶーたれるが、それは君の日頃の行いのせいだと自覚してほしい。
「そんなに疑うなら、めくってみる？」
「は？」
「ええっ!?　り、理子さん？」
理子は綺凛の後ろに回る。俺の視線からは見えていないが、綺凛のスカートが掴まれ、捲られている。それはもう、後ろから見れば、綺凛の履いているものが丸見えになるくらいに。
そんなことをされれば、綺凛は平静ではいられない、スカートが変にめくれないようにか、首だけを動かして理子に抗議している。
「ちょ、ちょっと……！　やめて下さい、峰先輩……！　せ、先輩に見

られたらどうするんですか……!!　こんなっ、こんな……ぇっ、な下着を！」
「くふっ、そうだよねぇ？　綺凛ちゃんは自分からこれをつけたんだもんねぇ？　理子のせいにするのはおかしいよねぇ？」
「それは、それ以外に選択肢が無かったからで……！」
　小声で話しているせいで、俺には内容までは聞こえないが。
「……2人共？」
「あ、大丈夫だよ～、ね？　綺凛ちゃん？」
「は、はい……」
　これは何かあるな。
　スカートから手を離した理子。だが綺凛の顔は真っ赤のままだ。だが、これ以上追及してもしょうがない。
「それで、綺凛ちゃん。翔君に何か言う事があるんだよね？」
「あ、はい……」
　理子に誘導されるまま、綺凛は口を開く。
「私、こんなことになったので早退しようと思って……先輩がよければ、家ついてきていただけないかと……ひ、1人では不安なので！」
「それは……」
　そう言われてしまえば、俺に断るという選択肢は無い。
　幸い、六課へ行く時間にはまだまだ余裕がある。不安だと言うのなら、送っていくのは当然のことだ。
「じゃ、帰るか」
「は、はいっ」
「ごゆっくり～」
　何がごゆっくりだ、理子は。意味が分からんぞ。
　そう思いながらも、やけに歩幅の小さい綺凛と共に、家路につくのだった。

綺凛のトラブル　後編　（綺凛）

そういう訳で、綺凛を送る途中。俺達は綺凛の家の最寄りまでの電車に乗っていた。
飛んでいければ早かったのだが、この島、というかこの世界では、たとえ管理局員であっても、何もないのに能力を使うのはまずいのだ。それを許可すると、成り立たなくなるルールがあるとかで。
という訳で、俺達はおとなしく電車に乗っている訳だが。
「うぅ……」
当然ながら一向に落ち着きがない綺凛は、そわそわと周りを気にしていた。
「綺凛、大丈夫か？」
「ひゃ、ひゃい！　らいじょうぶれす!!」
声をかけただけで飛び上がる。これは大丈夫じゃなさそうだ。
まあ、自分のじゃない下着をつけているとなれば落ち着かないよな。
男ならズボンで万が一にも見られる心配はないけど、スカートの綺凛はどんなアクシデントでめくれるのか分かったものではない。
俺に一緒に来て欲しいと言ったのも、そう言った理由があるからなんだろう。ここはなるべく気を使わなければ。
「綺凛、座るか？」
空いた座席を指さして、俺は問いかけた。

綺凛は自分のスカートを強く握りしめ、何があってもめくれないようにと下に下に、強く押さえつけていた。
だがそれも前だけ、後ろは全くの無防備だ。そのことが、綺凛の鼓

動を速める。
普段ならお尻を包み込んでいるはずの下着の感覚、それが全くない。その部分に布地が無いのだから当然のことだ。
「(うう、大丈夫だよね？　エスカレーターとかで見えてないよね？　先輩ずっと、すぐ後ろにいたけど……)」
限界まで翔に寄りかかっていたので、見える訳がないのだが、それでも綺凛は心配していた。
今は2人で吊革につかまり、電車に揺られている。
その時、
「綺凛、大丈夫か？」
綺凛の様子を心配した翔が声をかけて来た。
「ひゃ、ひゃい！　らいじょうぶれす!!」
だが突然のことに、声が裏返ってしまう。その声が周りの視線を吸い付ける。その視線に、綺凛はますます体を縮こまらせた。
透視能力でも持っていなければ、どんな下着をつけているのかわかりっこないが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。
駅に到着したことで、電車が止まった。
「綺凛、座るか？」
丁度、翔の目の前の席が空いたのだ。
「あ、ありがとうございます……」
綺凛は慎重に体をターンさせ、腰を落とす。
「あっ……」
その時に気が付く。気が付いてしまう。
熱く、粘っこい液体が、自分の股間を濡らしていることを。股間から、揃えた太ももの付け根にまで及んでしまっている。
「(わ、わたし、こんな……こんなふうになっちゃってる……!!)」
あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にして俯く綺凛。そのことに、綺凛の正面に立っている翔は気が付かない。
カチコチに固まった体と、ドキドキと心拍数を上げていく心臓。
『この後』のことを想像した綺凛は、自分の体の高ぶりを止めることは出来ないのだった。

そうして、大したトラブルもなく、俺達は綺凛の家に辿り着いた。
見事な日本家屋。道場もあるその建物は間違いなく回りからは浮いてしまっていた。それでも霞まないほどの存在感がある。
なんだかんだ言って、綺凛は刀藤家の娘なんだよな。
ともあれ、無事に家までたどり着くことが出来た。
「んじゃ、綺凛。俺はそろそろ行くから――――」
「せ、先輩!!」
「ん、んん？」
背を向けようとした俺を、綺凛は呼び止めて来た。
「す、少し上がっていきませんか？　外は暑かったので、よければ飲み物でも！」
「まあ、お茶くらいなら」
この後は六課だが、別にそこまで急がなくても十分に間に合う時間だ。せっかくだから、頂いて行くとしよう。
「はいっ！　すぐに、すぐに用意します！」
綺凛ははしたなく靴を脱ぎ散らかすと、家の奥の方に走って行った。どれだけ急いでいたんだろうか。普段なら、礼儀正しく靴を揃えるのに。
それと、
「……いやいや」
家の奥に走っていく時に少しスカートがめくれてしまっていたのだが、なんと言うかその……お尻を覆っているはずの布地がほとんど見えなかったというか、無かったというか……や！　きっとそこまで見えてなかっただけだよな！　そうだよな！　そもそも理子の下着

なんだし、そのくらい攻めたものを渡されていてもおかしくない。
俺は無理やり納得し、綺凛が呼びに来るまで玄関に待機するのだった。

迎えはすぐに来た。
女中だろうか。着物を着た女性が、綺凛の部屋まで案内してくれた。
特にかわいいものが置いてあるという訳でもなく、むしろ余計なものが置いてない畳の部屋だった。中央にはちゃぶ台があり、そこではすでに湯飲みに入ったお茶と和菓子が準備してあった。
「や、そんな……そこまで準備してもらわなくても……」
「いえいえ！　先輩をおもてなしするんですから！」
普通にお茶飲んだら出ていくつもりだったから、こんな高そうなお菓子まで出してもらわなくても良かったんだけど。
もちろん出されたものはしっかりと味わおう。ここで少しゆっくりしても、全然間に合うからな。
「ふう……」
正座で、両手で湯飲みを持ち、お茶をすする。
ああ、落ち着く。外は暑いけど、熱いお茶ってのも乙なもんだ。今日はこのまま六課に行って、訓練したらもう1日は終了か。本当に最近は落ち着いてるな。
「うま……」
和菓子を口に入れると、ほのかな甘みが広がる。訓練前の糖分補給としては最高だな。その優しい味を味わうために、俺は目を瞑る。
綺凛も何も言わずにお茶を飲んでいた。

「……」
飲んでるよな？　なんか隣から何の音も聞こえないけど。飲み食いする時に音を立てるのははしたないって話だよね？
気になって目を開けると、なにから難しい顔をしていた。
「綺凛――――？」
「しょ、翔先輩!!」
「は、何……ぶっ!?　お、おい！　綺凛、お前……!!」
突然、綺凛は膝立ちになり、スカートをたくし上げてきた。
すると当然その下にある下着が見えてしまう。綺凛のイメージにはない黒い下着。俺の見間違いでなければ、局部を覆っている布に切れ込みがあるように見える。
つまり脱ぐ必要もなく行為に至れる、男を誘うための下着だ。そんな下着を身に着けている理由はたった一つ。
「やっぱり理子に……」
「ち、違います！　確かにお話をいただいたのは理子先輩ですけど……決めたのは私ですから！」
「や、決めたのって……」
「先輩、しませんか？」
スカートをたくし上げたままの綺凛が言う。膝立ちのまま、半歩俺に近寄ってくる。さらに見てみると、下着の局部、そして太ももの周辺にも透明な液体が付着していた。
さらに片方を胸元のワイシャツのボタンに伸ばし、外し始めた。身に着けていたのは下とセットのデザインの黒い下着だ。
「先輩に気持ち良くなってもらえるように、私、頑張りますから……」
「あ、ああ……」
近寄ってくる綺凛。
「だ、だめですか？　先輩……」
「や、お前な……」
こんな姿にさせておいて、何もしないなんて選択をできるほど、俺は我慢強くない。頬を染めて俺を求めてくる綺凛の姿に、俺の息子はすでに大きく腫れ上がっていた。

この後には六課に行かないといけないとしても、この場で引き下がるには綺凛の姿は刺激的すぎた。
そしてそれ以上に、この状況にするために必要だった綺凛の勇気を考えば。
「綺凛」
「は、はいっ！　んんっ!?　……ん、んぁ、えろ、ちゅっ」
俺は綺凛に唇を重ねた。
綺凛は一瞬驚いた様子だったが、すぐに舌を出して絡めてくる。お互いの唾液を交換し合い、熱い吐息が漏れる。
抱き合うとブラに包まれた綺凛の胸が俺に押し付けられる。
この年齢とは思えないそのふくらみに、俺は手を伸ばした。下から掬い上げるように、ブラをずらした。その双丘に手を沈めると、綺凛はくすぐったそうに身をよじる。
その間にも甘えるように綺凛は何度も唇を押し付けてくる。
「ちゅ、ちゅぱ、ちゅるる、んんぁ、んん!?　ん、ひあっ、そ、そこ……！」

感触を楽しんでいると、胸の頂点を指がかすめた。
「もう硬くなってるんだな」
「は、はひ、んあ……！」
「下も濡れてるみたいだし、最初かっらこのつもりだったんだな。ああ、理子から下着を借りた時からそう思ってたんだよな？」
指の腹で乳首を転がしがしながら、俺は意地悪に告げる。
「そ、そうです。いぁ、あの、あっ、先輩を家に入れたのも、いぅ、このためで、はぅ……！」
「こっちもすっかり準備万端だもんな」
「そこ、はっぁ!?」
俺は手を伸ばして、綺凛の割れ目を擦った。
「すごい構造だな、この下着は」
綺凛が身に着けている下着は、局部を覆う布が真ん中から割れる構造になっていた。その部分を少しずらすだけで、綺凛の大事な部分に

直接触れることが出来る。
少し入り口をすくっただけで、綺凛の汁が畳の上にぽたぽたと垂れた。
「ははぁぁぁぁっっ……」
俺が中指を挿入すると、綺凛は深い息を吐いた。
俺の指を簡単に飲み込んでしまうほどに、その膣穴は飢えていた。
俺の細い指では足りないとばかりにきゅうきゅうと締め付けてくる。
ゆっくりと抽挿すると、綺凛の腰がカクカクと揺れる。
「もう、いれるか？」
「は、はい……！　わたしもう、したい、です……！」
「俺もだ」
俺は指を抜いた。
「あうっ」
その時にどこかイイところを擦ったのか、綺凛から変な声が出た。
それが恥ずかしかったのか、綺凛は顔を赤くして立ち上がった。
「ふ、布団、敷きますね……！」
綺凛はちゃぶ台をどかし、押し入れから布団を取り出す。これがいつも綺凛が寝ている布団か。
「今回は私が上になりますね……先輩はこれから色々ありますし」
「わかった」
綺凛がそう言うのなら。
俺が下を脱いで布団に横になると、勃起した肉簿が上を向いた。
続いて綺凛が俺の上に。下着を脱がずに。脱ぐ必要が無いのだ。
局部を覆う布地が真ん中から割れ、そのまま行為に至れるその下着なら。
「それじゃあ、行きますね……！」
位置を調整した綺凛はゆっくりと腰を下ろし始めた。
自分で広げたアソコに、ゆっくりとペニスが飲み込まれていく。熱い膣肉に俺のペニスが包まれていく。
「うううぅっ……!!」
俺の胸に手を突き、腰だけを下ろしていく。

やがて、
「うぐぅぅぅぅぅっ!!?!?!?!?」
俺の肉棒が、すべて飲み込まれた。綺凛の奥の子宮口に、俺の亀頭が少し乱暴なキスをする。その刺激に膣全体が慄いた。
軽く達しているのか、綺凛は荒い呼吸を吐き出すばかりで、しばらくじっとしていた。胸に押し付けられた顔から、熱い吐息が俺のワイシャツを貫通して胸に届く。
しばらくして、
「じゃ、じゃあ、動きますね？」
ゆっくりと動き出した。
奥にこすりつけるように、腰を前後させてくる。それだけでくちゅくちゅという卑猥な音が聞こえてくる。
「んっ、んっ、んあっ、はぅ」
ピストン運動が始まった。
だが、
「綺凛？」
「な、何でしょうか？」
「あんまりよくないか？」
「そういうわけでは……」
でも、さっきから表情が硬いんだけど。
「は」
「は？」
「恥ずかしくて……」
恥ずかしい？
「あはは、自分からこんなエッチな下着で誘っておいて、めんどくさいなって、思うんですけど……『先輩にされてる』んじゃなくて、『自分がする』って、そう考えると……エッチな声出したり、顔になるのが、恥ずかしい、です……」
そう言うのなら、いつも通り俺がしようか？　――――ではなく。
「恥ずかしがらずに、自分が気持ちよくなるように動いてほしい」
「え、で、でも……」

「むしろその方が興奮する」
「ええっ!?」
綺凛が顔を真っ赤にして驚いていた。その時に俺のペニスへの締め付けが強くなった。
その後、綺凛は少し悩んだが、
「わ、分かりました。先輩がそう言うのなら……」
こくりと頷き、動き出した。
俺の言葉に背中を押されたのか、その動きは徐々に大胆になっていく。
「はっ、はっ、はっ、きもい、いい……っ。ぁ、ここ、いいかも……っ」
リズミカルにするときもあれば、
限界まで引き抜き、
「あ、ああ。抜け、おうううっ」
一気に奥まで、子宮口をノックするまで押し込むこともあった。
ただ上下に動くだけでなく、途中の壁にこすりつけるように動くことも。
「はぁっ、はぁっ！　私、服着たままえっちなことしちゃってる……!!」
綺凛も燃え上がっているのか、どんどん腰のふりが速くなっていく。振り下ろされるお尻が心地よい感触を伝え、最奥を突くペニスからは蕩けるような快感が伝わってきた。
綺凛の顔はひどいものだった。唇を歪め、そこからは涎が少し漏れている。涙を浮かべ、それでも快楽のために腰振りを止めない。
先ほど恥ずかしいと言っていたのが嘘のようだ。
「綺凛っ！　そろそろ……！」
「あっ、あっ、せ、んぱいの……膨らんで……！」
蕩けた顔の綺凛が、腰のふりを速めていく。それは気持ちばかりの加速だったが、ラストスパートと、俺の射精を少しでも気持ちいいものにしたいという気持ちの表れだった。
その健気さと締め付けに、どんどん射精感が高まっていく。
たんたんたん、とお互いの体がぶつかり合う破裂音が規則正しく響

いていく。
限界を感じた俺は、綺凛の体に手を回し、
「えっ、せんぱひぐぃ!?」
腰を上げようとしていた体を押さえつけた。より奥まで肉棒が突き刺さるように、奥の小部屋の入り口にめり込むように。
そのまま白いモノを吐き出した。
びゅうっ!、ぶくくっ、びゅるるうっ。
「〜〜〜っ!?!??」
綺凛の腰が跳ねる。俺の胸に押し付けられた顔が、湿った吐息をせわしなく吐き出していた。
中では俺の肉棒を包む肉ヒダが痙攣し、俺から少しでも多く精を搾り取ろう躍起になっている。
俺はそれに逆らわず、心地よい射精感に身を委ねた。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……!」
お互いに達した俺たちは、抱き合いながら荒い息を整える。綺凛の頭を撫でると、何も言わずに俺の胸に顔を擦り付けてくる。
俺の息子は萎えてしまったが、お互い同じ体勢のまま、抱き合って余韻に浸っていた。
すると、
「翔」
「んー?」
レプリカさんが声をかけてきた。
「そろそろ六課の訓練が始まる時間だが。ここにいたままでいいのか?」
「――!?」
「わっ!?」
急に起き上がった俺に、綺凛は驚いた声を上げる。
そ、そうだ! こんなのんびりしてはいられないんだった!
「すまん綺凛! もう行かないと!」
「あ、そ、そうですよね! 先輩、この後には用事がありますから……!」

俺の言葉に飛び起きた綺凛は、自らの衣服を整え始めた。整えるといっても、下は穴が空いているせいで脱いでなかったし、上は胸の頂点だけを無理やりくり抜いたようなデザインなので、どちらにせよいやらしい姿だ。
俺も露出した局部をしまう。
「それじゃあ綺凛！　また明日！」
「は、はい！　先輩もお気をつけて！」
挨拶もそこそこに、俺は綺凛の家を飛び出したのだった。

翔を見送った綺凛は、身を清めるためにシャワーを浴びることにした。
身に着けていた衣服を脱ぎ、洗濯籠に入れていく。誰の目も無い今、衣服を脱ぐスピードも速い。すぐに下着姿になる。
「うわぁ……」
改めて見ると、なんという恰好だろうか。自分の姿に眩暈を覚える。
いつもなら絶対に選ばない黒い下着。それも、先ほど挿入のために広げてしまったからか、下着の中央に空いていた穴が広がり、いまだドロドロに汚れた秘部が見えてしまっている。
上の方は比較的被害は少ないとはいえ、肌が透けるほど薄いレースの生地が、窮屈そうにおっぱいを抱えていた。
「洗って返さないとだよね……流石にみんなの洗濯には混ぜられないし、手洗いしないと」
そして理子に返す時、今日のことを聞かれてしまうのだろう。
そのことを覚悟して、綺凛は洗濯を始めるのだった。

メアと妄想で　（メア）

綺凛を家まで送った翌日。昼休み、俺は土御門、矢瀬、メアと会話していた。
話題は昨日のこと、俺が綺凛を送って行ったことについてだ。
メアは大きな棒付きキャンディをぺろぺろと舐めていた。
「ふーん、じゃあ昨日は後輩の娘を家まで送って行ったんだ」
「そうだな。まあ、そうだな……」
少し言い澱む俺。
その後に何があったのかを考えれば、詳しく聞かれるのは……まあ別に不味くはないか。送っていったのは本当のことだし。その後のことを教えなければ。そもそも人に言う事ではない。
こいつらも学校の外までは監視していない、と思います。うん、思います。
そう、綺凛があんな下着をつけていたことを知っているのは俺と理子だけなのだ。そう思う事にしよう。俺だって、綺凛の家に着くまでは知らなかったんだ。
「なるほどな、それが、貴様が今日死ぬ理由か」
「何言ってんだお前は」
思わずその時の情景を思い出しそうになった俺は、土御門が暴走寸前になっていることに気が付かなかった。
「昨日は突然教室を飛び出していったと思ったら、そんな理由だったとは。後輩は雪菜って娘だけじゃ無かったのかにゃー！」
「んなことは誰も言ってない。後輩が1人しかいちゃいけない、なんてルールは無いだろ」
どうやら暴走の理由はくだらないことだったらしい。
「後輩キャラが2人も3人もいたら、属性被りで大変なことになるだろうがッ!!　加えて今にも『先輩』って呼んできそうな桜ちゃんもいるし！　そこんところ、しっかり考えてるのか!?　しかも、あんなバインバインのお姫様の面倒も見ることになるなんて……！
1人くらい分けてくれー!!」

「ホント知らんわ!!」
「えいっ」
キシャー!!　と奇声をあげ出した土御門をメアが沈める。
「よ、容赦ねぇな、メアちゃんは」
派手に吹き飛んだ土御門はいくつかの机を巻き倒して床に転がっていた。時折痙攣しているため生きてはいるが、顔面に突き刺さった正拳突きで首が嫌な音を立てていたような気がする。
「えへへ、殺気を感じたからつい」
「つい、の威力じゃねだろ……」
矢瀬は顔を引き攣らせているが、俺も同意見だ。
「しょうがないよ。殺気には反応しちゃうもん」
ちなみに、その殺気を向けられていたのは俺なんだよな？　土御門はどんだけ本気だったんだ。
「黒崎　メア。あまり暴れないで下さい」
すると横から声をかけられた。読んでいた本を閉じたヤミだ。
「あはは、ごめんね、ヤミちゃん。あ、私も手伝うね！」
メアは倒れた机を直す作業を手伝い始める。
その隙にヤミが顔を寄せてくる。
「馴染んでいますね」
「ああ、そうだな」
メアに机を倒されたクラスメイトも、あまり嫌な顔をしていない。面白い騒動があったという程度の認識なんだろう。一緒に机の修復作業を行なっている。
「ヤミも話してみれば？　案外仲良くできるかもしれないぞ？」
「必要があるとは思えません。向こうは私を殺し屋に戻そうとしているんですよ？　その辺り覚えているんですか？」
「いやいやいや！　もちろん覚えてるって。ってか、ヤミのイメージ的には殺し屋はもう引退してるんだな」
「今の私は武偵高の生徒ですよ。武偵憲章を覚えていないんですか？」
武偵は人を殺しちゃいけないってことか？　それは国にもよるか

らな。それよりも、この生活に馴染むためには人を殺しちゃいけない、って意識が強いんじゃないか？
「……とにかく、私が必要以上に関わる必要はないはずです。近況なら、すでに仲良くしているあなたから聞けばいい」
　それもそうだが。
「どうしたのヤミちゃん。なんか怒ってない？」
　おしゃべりな矢瀬が会話に混ざってくる。でもまあ、俺もそんな感じがしていた。俺だったら間違っても口には出さないが。
「あなたには関係ないことです、矢瀬　基樹」
　案の定、ヤミの鋭い視線を向けられてしまう。
　その視線にぶるりと体を震わせた矢瀬は、
「おっと、先輩からの呼び出しだ。ちょっと行ってくるぜ」
　わざとらしくそう言って席を立った。多分命の危険を感じたんだな。
「夜月　翔」
「何だ」
「まさかとは思いますが、矢瀬基樹の言葉を真に受けてはいないですね」
「受けてない。ヤミは怒ってない。俺に忠告してくれただけ」
「それはよかったです。いえ、そもそもアナタが黒崎メアと関わりすぎているのが問題です。普通に学友として接するだけではなく、まさかあんな関係にーーー」
「あんな関係とはどんな関係だにゃー!!　ぐふッ!?」
　飛び起きた土御門の顔面に、ヤミが変身させた髪の毛の拳を突き刺さした。鼻血を出して倒れる土御門を誰も気に留めない。
「とにかく、黒崎メアと仲良くするのはいいですが、あまり深入りしない方がいいです」
　そのセリフを聞いて、お前やっぱり怒ってるだろ、と思うのは極めて自然な事だと思う。でもこれ以上喋ることはないとばかりに、ヤミは読書に戻ってしまった。
　周りから人がいなくなっちゃったし、俺もトイレにでも行っとく

か。

「翔くん！」
「メア？　何だよ、こんな所で」
　トイレから出ると、メアに待ち伏せされていた。
「え？　やだなぁ、私たち『オトモダチ』でしょ？　最近忙しそうだし、色々と溜まってるんじゃないかな～、って」
「おいおい……」
　メアは笑顔だ。笑顔で『誘って』きている。
　周りには人がいないといえ、ここは武偵高だぞ？　那月先生に見つかったら殺されてしまう。
「ふ～ん？　そうなんだ。昨日は綺凛ちゃんとしたんだ」
「あ、お前、俺の記憶を……！」
　いつの間にかメアの髪の毛が俺に接続されていた。昨日のこともバッチリ読み取られたらしい。
「うわぁ、綺凛ちゃん、すっごくえっちぃじゃん！　翔くんの記憶だけでも、ドキドキが伝わってくるよ！　しかも……ふふふ、みんなには家に送るから六課に遅れるって言ったんだね。ホントはセックスしてたのに」
　これはまずいですね。
　俺の背中に冷や汗が流れる。
「メ、メアさん？」
「ね？　しよ？　大丈夫、この時間使われてない教室は調べてあるから。それに翔くんには、気配遮断？　っていう能力もあるんでしょ？　だったら見つからないよ！　万が一、那月先生に見つかった時は、

2人で戦お？」
「わ、わかった」
俺はコクコクと頷いて、メアの後ろについて行くのだった。
こういうことしてるから、ヤミが怒るんだよな。
「（ま、どっちにしても報告はするんだけどね？　そういう約束だし？）」
「メア？」
「んー、なんでもなーい」
メアに連れてこられたのは、無人の教室だった。鍵を変身で開け、もう一度施錠する。
「ここは午後の選択授業でも使われないから、今日は誰も来ないハズだよ……私たちみたいに、隠れてこそこそする人じゃなければ、ね」
メアの瞳が怪しく光っていた。獲物を狙う目だ。ここまで連れてこられた俺はさしずめ、自分から罠に飛び込んだウサギだろう。
「じゃ、始めよっか？」
その一言で、俺の視界の景色が変わる。
「っ！　サイコダイブか？」
俺の視界が一瞬にして切り替わる。揺れる床と車窓の外で流れている景色。ここは電車の中だ。それもただの電車ではない。俺は『覚えていた』。ここは昨日、綺凛と一緒に乗った電車だ。座席に座っている男性も、吊り革に捕まっている学生も、俺には見覚えがあった。
「そうだよ～。でも、ちょっといつもの奴とは違うんだよね」
「というと？」
「今回は翔くんの五感に働きかけて、ここが昨日の電車だって誤認させてるだけだから。実際にはここはさっきの教室だし、適当に歩いてると机にぶつかるよ」
わざわざこんな場面にしたってことは。
「うん。ほら」
メアはスカートをまくり上げた。
身に着けていた下着は、綺凛が昨日身に着けていた下着だ。あのエッチな下着。真ん中部分がぱっくりと割れてすぐさま挿入できる

ようになっているモノ。
「上もそうなんだけど、こっちは全然サイズが違うからね～。トランスでおっきくは出来るけど、気持ちよくなると集中出来なくて萎んじゃうちゃうんだよね」
メアは、一度自分のおっぱいを大きくしてすぐに元に戻した。
「完全に同じシチュエーションよりも、綺凛ちゃんじゃ出来ないコトのほうが翔君も興奮するでしょ？」
「ノーコメントで」
嘘です。確かに興奮します。
「ふふーん。翔君、嘘ついても駄目だからね？　今、アタシは翔君と繋がってるんだから。翔君が何考えてるのか、分かるよ？」
そうだった。今の状態のメアに隠し事は無意味。記憶どころかその場の感情すら読み取られてしまう。
「ほらほら、綺凛ちゃんの時はスカートをまくり上げたらキスしてたじゃん。私は、もっと無理やりな方が好みかもしれないけど？」
「……まったく」
他の娘との行為を知られているというのは本当にやりにくいな。

「じゃ、始めよっか」
その時、地面が揺れた――――いや、電車が止まった。
「え？」
後ろにある電車の扉が開く感覚。振り返るとたくさんの人がなだれ込んできた。
「お、おいおい！」
「あ～れ～」
その人ごみに押し流され、俺達はあっという間に反対側のドアまで押し込まれてしまった。メアは楽しそうに俺にしがみついていた。
「ど、どうなってんだ!?　昨日はこんなことなかったぞ！」
「うん。この人たちは本物じゃないから心配しないで。こういう事も、前にあったんだよね？」
思い出されるのはアリアのお母さんに会いに電車に乗った時のこ

とだ。
　その時のことを思い出していると、ズボンのチャックが下ろされ、肉棒が外に露出させられる。
「ふふっ、カチカチになってる。やっぱり興奮してるんだね。この状況に」
「……そうだな」
　体は正直で嘘はつけない。すでに女性を貫く準備は万端になっている。
「私もそうだよ」
　メアがスカートの中に肉棒を招き入れる。外と比べて、一段階湿度が高いような錯覚を覚える。
　その奥では、すでにしっとりと濡れた秘部が、物欲しげに口をパクパクさせていた。
「前にシた時から、ずっと次のこと考えてたんだ。私としては毎日シたいくらいなんだけど……あ、私も翔君の家に住もうかな？」
「それはヤミに聞いてくれ」
「あー……、そうだよね。ヤミおねえちゃんが反対するかな？　それに翔君の家に住んだら順番待ちとか有りそうだもんね？　女の子たくさん住んでるし。だったら、こうやってこっそりする方が回数は多くなるのかな？」
　喋っている間も、俺達はお互いの性器を刺激し合っていた。
　下着にある割れ目から、その奥の肉を割り裂いて、割れ目に沿って俺達は腰を前後させる。お互いが気持ちよくなることを考えて動く。硬く膨張した俺のイチモツが、メアのふやけた秘部を擦りあげている。
　メアの愛液でコーティングされ、滑りが良くなった先っぽが、とうとう入り口に引っかかる。
「メア」
「ん、入れて……」
　その言葉に頷き、腰を前に突き出した。
「はい、って、きたぁ……!!」

メアを壁に押し付けるように、一気に奥まで突き入れる。
立ったまま、抱き合いながら、俺達はつながった。俺の肩に顔を押し付け、メアは湿っぽい吐息を漏らしていた。
「あは、この圧迫感、また味わえるなんて――――最ッ高……っ」
子宮口に亀頭がキスするジャストフィット状態。腰を小刻みに動かせば、チンポの先端に痺れるような快感と、ねちねちといういやらしい音が満員電車に響く。
「もっと……っ、もっと激しくして……っ！　あっ、そこ、おっおぁ……!!」
電車の揺れも再現しているのか、揺れたことで挿入角度が変わる。それでいいところに当たったらしい。
「ここか？」
「うんっ、そこ、ああ、いぃー……、激しいのもいいけど、こういうのもいいー……」
メアに言われたところを何度も何度も擦りあげる。
メアに言われたメアの弱点を重点的に、肉棒のヒダでこすり、先端で舐めあげる。
いつもよりも快感のたまりが速いと思う。
このシチュエーションが原因かもしれない。
人に押しつぶされながら、俺達は行為にふけっていた。これは現実ではないというのに、背徳的な感覚が頭を満たしていく。
変に意識して周りを意識して、なるべく目立たないように腰を動かす。この電車に乗っている人にはバレないと分かっていても、そうしてしまうのだ。
それはメアもそうらしい。
「今回ヤバいかも……さっきから、ずっと甘イキしてる……どんどん気持ちよくなってるのに、まだまだ気持ちよくなる……」
周りの空間が歪んでいく。
メアの集中力が切れて、変身が解けてきているのだ。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ……！」
そのメアは俺の首元にかぶりついて荒い息を押さえている。ここ

は学校で周りにばれてはいけないというのを理解しているからだろう。メアなりの配慮だ。
少し痛いが、そのお返しにキツく抱きしめ、腰のふりを早くする。
「あっ、あっ、あっ、くる、くるよ、クルクルクル――――!!」
「俺も、そろそろ……っ」
2人そろって全長のために貪欲に快楽を求める。
――――ごぷっ、びゅるるるぅ、ごごぷっごぴゅるるぅっ
「ふぐうううううっ!!??」
「いたっ！　うぐうっ……！」
首元に立てられていた歯が、少しめり込む。足がカクカクと震え、背中に回されている手の力が強くなった。その反応はメアも絶頂したことを示していた。
「ん、ちゅぱっ、ちゅるうぅ、んんっ、うちゅっっ……」
お互いの体が落ち着くまで、俺達は舌を交えたキスをしていた。尿道に残った精子がすべて搾り取られ、メアに飲み干されるまで。
「んぁ……えへへ、気持ちよかったぁ……」
「ああ、俺もだ」
汗に濡れた顔でにへら、と笑うメア。
いつの間にか、教室の風景は完全に元通りになっていた。
「正直もっとしたいんだけど……」
「2回目をするには時間が足りないな」
「ん～、残念」
メアは名残惜しそうに身体を離した。そして乱れた衣服を整えていく。
わざとスカートをたくし上げ、見せつけるように、メアは青白のストライプ柄の下着を身につけていく。だが直前まで愛液で塗れ、精液が滴っていた部分だ。あんな布切れ、すぐにシミが出来てしまうだろう。
その感覚はメアも受け取っているらしい。
「あは！　翔くんのがナカに入ったままで、私は午後の授業受けちゃうんだ。垂れてきたらどうしよう？」

「バレないようにしてくれよ……」
「それはもちろん！　私もこの学校から追い出されちゃうのは困るからね！」
「全く……」
　俺はため息を吐いた。
　この態度のせいで、どこまで本気なのか分からないな。
「とりあえず、戻るか」
「そうだね。もうそろそろ授業が始まっちゃうし……それに翔くんは六課に行かないといけないもんね？　ふふ、今日も遅れちゃ大変だよ？」
「そうですね……」
　挑発するんじゃないよ。正しいことだけどさ！
　でもメアの言う通り、何度も遅刻はいただけない。
　でも、今から行けば十分に間に合う時間だ。
　俺たちは並んで自分達の教室に戻る。
「おい、メア」
「ん～？　なあに？」
「何でそんなにくっついて来るんだ？」
　ふらふらとした歩みのメアは、時折俺に寄りかかるようにその体を押し付けてくる。さすがに帰り道には生徒の目があるから、恥ずかしいんだけど。
　そんなメアはさらにくっつき、耳に顔を寄せてきた。
「もう、翔くんのせいでしょ？　あんなに激しくパンパンして、イかせてきて。私じゃなかったら立てなくなってるよ？　ホント、クセになっちゃうよ」
「お、おう」
　そんなコメントに困ることを。
　ヒソヒソ、ヒソヒソーーー
　周りから囁き声が聞こえてきた。
「……」
　俺はなんとか無視して教室への道を急いだ。

周りの目は痛かったが、特に何か起こることもなく教室までたどり着くことが出来た。
教室はそれぞれの選択授業に移動しようとする生徒で慌ただしくなっていた。土御門も矢瀬もいない。
「随分と長いトイレでしたね」
「……う、うん。まあ……」
「ね？」
メアはニコニコ。ヤミの視線がすごく痛い。ナニをしていたのか、予想がついたのだろう。
「そんなに気になるなら、お姉ちゃんも混ざればいいのに」
「誰が」
ヤミに近寄ったメアは、小声で何か言っている。おそらく俺のことで、間違いなく俺が全面的に悪いのだ。
「さて」
俺も六課に移動する準備を始めなければ。
と、
「翔。メールだ」
みょん、と首元に飛び出したレプリカ。
「ん、サンキュー、誰からだ？」
「それなんだが……」
レプリカの返答を聞いた俺は、すぐさまメールを開封した。
そこに写っていたのは、
『水』に縛られた綺凛だった。

綺凛の危機

「はぁ……」

綺凛は憂鬱だった。

それは補修になった着衣訓練の追試があるからだ。昨日の今日でそんな上手くなるわけがないのだが、武偵高に甘えは許されない。できないというのなら、体が覚えるまで徹底的にやるだけだ。

つまり綺凛には、地獄の特訓が待っている。それも、補修者には人権はありませんと言わんばかりに、お昼休みの時間すら補修の時間に充てられる。合格できなければ、合格できるまで、明日からずっとこのメニューだ。

だが真面目な綺凛には逃げるという選択肢は無い。憂鬱にはなるが。

制服のまま、プールサイドに足を踏み入れる綺凛。今日はしっかりと着替えを持ってきている為、昨日のような心配はない。

「先生？」

プールサイドには、当然視界を遮るような建造物はない。だが、担当の先生の姿は見えなかった。

「（まだ来てないのかな？）」

そう思って視線を移動させると、用具室の扉が開いているのが見えた。一般的なビート板などの水泳器具の他にも、さまざまな物を収納している場所だ。

「先生？　中にいるんですか？」

返事はない。

「……」

胸騒ぎを感じた綺凛は携帯している竹刀袋から愛刀を取り出した。

いつでも抜けるように構えつつ、部屋に入る。その中に、

「先生!?」

担当の先生はぐったりと倒れていた。

服のいたるところが濡れている。そう、全身ではなく部分部分で濡れているのだ。

綺凛は慌てて駆け寄り、安否確認を行う。
「良かった……」
幸い呼吸もはっきりしている。目立ったケガも無いため、単純に気絶させられたらしい。
「でも……」
先生には外傷がなかった。誰かと争ったにしては、その被害が服が濡れるだけというのは不自然だった。
「何かの能力者――」
綺凛は無意識のうちに刀を抜いていた。しゃがんだ状態とは思えない鋭い一閃だ。腰の回転も利用して後ろの相手を切り伏せる攻撃だ。
何の防御もしなければ、上半身と下半身が泣き別れになるところだったが、
「水!?」
刀に伝わるのは、水の塊を叩いた『バシャ!!』という感触だった。刀はそのまま抵抗なく素通りしてしまう。
「ケケッ、無駄だ、無駄！」
「（何、これ――）」
それは天井から伸びていた水の塊だった。
クモが糸を垂らすように天井からぶら下がっている。いくつもの目が付いている水の塊だ。顔や手があり、言葉すら発していた。
得体のしれない相手に、油断なく刀を構えて後退する綺凛。そんな綺凛を水の塊はあざげるように嗤う。
「んん？　何だ？　後ろに下がったりして。後ろに下がれば、何か解決するってのか？　水にダメージを与えられるってのかよ？」
「……っ」
「抵抗しなければ、痛い目見ないで済む、ぜッ!!」
その掛け声とともに、水が襲い掛かってきた。
「はっ!!」
苦し紛れに刀を振るう綺凛だったが、
「むぐっ!?　んんー!!　んー!!」

盾に真っ二つにされるのも気にせずに、水の塊が綺凛の顔にとりついた。口と鼻をふさがれ呼吸が出来ない。慌てて水を引き剥がそうとするが、
「だから無駄なんだよぉ。水はすくうことは出来ても掴むことは出来ない。そうだろ？」
綺凛の目の前に水の顔が現れ、残酷に宣言してくる。
掴むことが出来ないとしても、このままでは窒息してしまう。刀を放り投げ、酸素を求めて水をどかそうとするが、
「（だ、め……もう、息、が……！）」
誰かに助けを求めようと思ったところで、体から力が抜ける。床をはいずりながら、倉庫の外に手を伸ばす。
「（先輩……）」
呟いた声が、気泡となって水に浮かんだ。それを最後に綺凛の身体から力が抜けてしまった。
綺凛が完全に気を失ったことを確認した水の塊は、器用に動いて綺凛を壁際まで運んでいく。そして全身に巻き付いて、
「はい、チーズっと」
その様子を撮影した。
「こいつを送信だな」
送り先は当然、『夜月　翔』。この場所のことも文字で添えて、送りつける。
「しかしラッキーだったな。夜月　翔に都合よく戦妹がいるとは。おかげで事がスムーズに運びそうだ。調べたところ、アイツはこの娘を絶対に見殺しにはしないだろうからなぁ」
この依頼を受けてから調べた結果、ここ数日の観察の結果、夜月翔は重度のお人好しだという事が分かっている。
こんな見え見えの罠であろうとも、しっかりとかかってくれるという確信があった。
「さてと夜月　翔はすぐに来るだろうからなぁ、俺もお出迎えの準備をしないとな？」
水の塊はにやにやと笑うのだった。

メールを見た俺は、すぐさま教室を飛び出した。というより、窓から飛び降りた。
教室に残っていたクラスメイトがギョッとしていた気がするけど、そんなことは気にしてはいられない。
地面に着地する頃にはすでにＢＪを纏っていた。目的地はプールの用具倉庫。今の俺の足なら、１０秒もかからない。
「待ちなさい！　夜月　翔!!」
「そうだよ翔君!!」
「は？　あっ、ちょ！」
上を見上げた俺は、慌てて視界を下に戻す。
俺に一泊遅れて飛び降りて来たヤミとメアだった。制服のまま飛び降りたもんだから、スカートが派手に舞い上がっている。下からの眺めは、それはもう凄いことになっていた。
だから慌てて顔を反らしたのだ。
「……こんな時までえっちぃ男ですね」
「スカートで飛び降りる人に言われたくないけどな」
「もう、別にみられても困るモノじゃないんだからそんなに怒らなくても……私はそれよりもスゴイところ見られちゃってるし？」
ヤミの冷たい視線を躱し、メアの意味深な発言を聞き流す。
今はそんなことを気にしている暇はないのだ。
「分かっています。刀藤　綺凛が攻撃されている。それは間違いないでしょう」
「ああ、そうだろ！　だから――――」
「落ち着いて下さい。あなたらしくない」

「ッ!!」
ヤミの静かな声に、沸き立っていた俺の心が少しだけ落ち着く。
「そうだよ、翔君。こんな正直に罠ですって誘いに正面から行っても、絶対にいい事にはならないよ。特に、今回みたいに準備万端で待ち構えてるときは」
いつもと変わらない口調でもっともなことを言ってくるメア。こうもいつも通りだと違和感があるな。
「でもメールには」
すぐに来い、一人で来い、といった『いかにも』な文面も書き記されていた。
「相手の要求に従う義理はありませんよ。一人で行けば、判断も手札も手数も少なくなります」
「わざわざ人質を取って『ここに来い』って言うってことは、相手は翔君とお話したいってことだしね。私達が一緒に行ったとしても、問題ないって」
な、なるほど？　そうなのか……って、ちょっと待て。
「2人とも俺と一緒に来るってことか？」
「やだなぁ。ここにいるのに置いて行っちゃうの？」
「……」
メアは冗談めかして肩を叩いてくる。ヤミは何も言わないが、唇を尖らせて横を向いていた。
そう言ってくれるのなら。雪菜にも1人で何とかしようとするのはやめろって怒られたもんな。
ここは一度落ち着いて、
「引いておくか……」
「……引いておく？」
「ガチャ？　もしかしてガチャ？」
「……ガチャ？」
ここは一度、新しい能力ｏｒアイテムを手に入れることにしよう。もしかすると、この状況を打破できる力が手に入るかもしれない。
とにかく、選択肢を増やすのは重要だ。そうヤミに言われたから

な。
俺が何をしようとしているのか理解していないヤミは首を傾げている。逆にすべての事情を知っているメアは目を輝かせて俺の端末をのぞき込んできた。
「どんな能力が出るんだろうね！　えっと、昨日の綺凛ちゃんと今日の私で2回分かな？　ほらほら、早く引こ！」
テンション高いな！　人がガチャを引くのは面白いってのは理解出来るけどさ！
「あなた達、何を――あ」
「どうしたのヤミちゃん――あ」
「2人共動どうし――痛い!?」
後ろから凄まじい衝撃を受けて、危うく倒れそうになる。
すぐさま臨戦態勢になり、振り返った。だが、そこには誰もいない。
な、なんだ？　誰からの攻撃だ!?
「2人とも、見たか!?　誰だった!?　どんな奴だった!?」
わざわざ人質を取っているこの状況で、直接攻撃を行う理由が無い。だとすれば、さらに別の敵だ。
「気にする必要はありません」
「そーだね。時間もないし、早くガチャろ？」
「や、攻撃されて気にするなってのは……」
納得いかないが、2人はそれ以上何も言ってくれない。渋々納得した俺は、改めて武器ガチャを回した。
「これは――」
手に入れた能力を見て俺は考える。そしてヤミのことを見た。
「何ですか？」
「ああ、ちょっとな――」
俺は考えた作戦を伝える。
「ふむ、なるほど……」
ヤミは腕を組んでその作戦を吟味していた。
「分かりました。少なくとも、3人全員が馬鹿正直に向かうよりはいいと思います」

「私もいいよー。というか、私のことも躊躇なく作戦に組み込んでくるんだね。今回のこと、私が仕組んだ可能性だってあるんだよ？」
「そう言って来るってことは、今回はメアの仕業じゃないってことだ。よろしくな」
　話がまとまったところで、俺達は行動に映る。
「では手筈通りに」
「何かあったら、サポートよろしくな」
「それについてですが――」
「ん？　なんだ？」
「いえ、別に。なんでもありませんでした。気にしないで下さい」
「そうか？」
　ヤミは何かを呟いたようだったが、聞き返したときにはすでに背を向けていた。
「……彼のことを気にしているのは私だけではないようですからね」

　俺はすぐにプールに辿り着いた。
「何の妨害も無かったな」
　ここは武偵高。つまり犯罪者にとっては敵地だ。侵入でするだけでも難しいはず。つまり、敵地で交渉できるくらいの実力があるってことだ。
　昼休みのプールには人の気配はない。
　プールサイドに踏み込む。目的地は用具室。だが、それよりも目を引きつけられるものがあった。
「綺凛!!」
　水の張ったプールの中央には、先ほどの写真では用具室で拘束され

ていた綺凛が居た。ただ浮かんでいるようにも見えるが、水が不自然に体に巻き付いているようにも見える。
「ずいぶんと遅い到着だったようだなぁ、夜月　翔。のんびりとしてるじゃあねぇか」
「お前は……！」
　俺に声をかけてきたのは、水の塊だ。全身に目があり、かなり気持ち悪い。それがプールに浮かぶ綺凛の近くにいた。
　こいつは、まさか……
「アクア・ネックレス……!!」
「おいおい、このスタンドを知ってるのか？　流石は夜月　翔、と言ったところか？」
　意味が分からない。何故、このタイミングでスタンド使いが襲って来るのか。疑問を捻じ伏せて、俺はとっさに爪弾を構えるが、
「効かねえよなぁ、そんなものは。お前のスタンドは、俺には通用しないんだよなぁ」
　爪弾の発射はしない。しても意味がないからだ。
　目の前にいるのはアクア・ネックレスという名前のスタンドだ。
　こいつは、一言でいえば水のスタンドだ。実際の水と混ざる物質同化型のスタンドで、スタンド使いではなくともその姿を見ることが出来る、ある意味特別なスタンドだ。
　そして水であるからそこ、物理的な攻撃は意味をなさない。あのスタープラチナの拳でもダメージを与えることが出来なかったのだ。
　俺はプール全体に視線を映した。
　どの程度の水分と同化出来るのかは定かではないが、わざわざプールに呼んだのも、自分に有利なフィールドだからだろう。
「おいおい、それ以上近づいてくるなよ？　こっちには人質もいるんだぜ？　まあ、このプールに飛び込んで無事では返さないけどな？」
「はいはい、分かったよ」
「ならいい。まあ、座れ……と言っても椅子がねぇか」
「なんでもいいから早く話を始めろ」
「そうだな。早くしないと、午後の授業が始まるもんな。いや、お前は

特務六課に行くんだったか？」
　こいつ、何でそのことを……
「俺のスタンドの能力のこととといい、ずいぶんと俺に詳しいんだな」
「そりゃまあ、この1週間ずっと見ていたからな」
「見ていた……」
　なるほどね。
　コイツは水に同化するスタンド。液体の水だけでなく、水蒸気や湯気になった液体にすら同化することが出来る。
　そもそも、日常で液体が無い場所なんてない。家では流し場やお風呂など、外にも公共のトイレはあるし、植物には朝露が残っているかもしれない。
　そこにこっそりとスタンドを忍ばせておけば、監視カメラのように俺の様子を観察することが出来る。
　アクア・ネックレスは射程距離も長かったはず。スタンドの本体が俺達の視界に入ることなく、俺達の情報を集めることが出来る。
「流石、『重要な役割』を任されるだけあるな。クク、あんな大勢の女と一緒に暮らして、2日連続違う女とセックスしてるなんてなぁ。お盛んなことで」
「っち……」
　本当に全部見られてたって訳か。
「そのおかげで、お前の付け入るスキがあっさり見つかった。最初はお前と一緒に住んでいる誰かに、しようと思ってたんだけどな。昨日の会話でピンと来たのさ」
「昨日の会話？」
「この嬢ちゃんの話さ。プールの補修があるってな」
　昨日の、綺凛が着替えを持ってき忘れたって話か。
「どうせなら、俺の有利なフィールドの方が『やりやすい』ってもんだ。水のある場所に自分から来てくれるってのはな。お前とかかわりのある、人質にできそうなやつが、わざわざ捕まりに来てくれるなんてな」
「そこまで俺のことを調べて、何が目的なんだよ」

「ああ、それな……」
アクアネックレスは少し溜めて、
「お前には、ララ王女の誘拐を手伝ってもらおうと思ってな」
笑いながら告げるのだった。

アクア・ネックレス①

「んー！　今日は何しよっかな～。六課に遊びに行くのもいいし、狂三と一緒に街に行くのもいいよね～」
　昼休み。屋上にいるララは、大きく体を伸ばしていた。
　いつもなら教室でおしゃべりしているところだが、気分屋のララは、今日は屋上に風に当たることにしたのだ。
「ホントはもっと翔とお話したいんだけどねー」
「ララ様、その、本当にここで結婚相手を見つけるおつもりなのですか？」
「うん。もちろんだよ」
　耳飾りになっているペケの問いに、ララは快活に答える。
「私は結婚するなら自分の好きな人がいい。でもまだ『好き』って何か分からないから。ベンキョーしようと思って」
「勉強、ですか……」
「翔の家に住んでるみんな、みんなが翔のこと好きでしょ？　だからみんなに色々聞いて、私の『好き』を理解したいの」
　その答えにペケは黙った。その思いは理解出来たのだ。しかし、
「そのお考えは理解出来ましたが……しかし見たところ、この学校の生徒達は全員粗暴というか、高貴なララ様とは釣り合わないかと。その夜月　翔もあの人数の女性と一緒に住んでいるというのは、正直普通ではないかと」
「そうかなぁ？　それはそれだけ翔に魅力があるってことでしょ？……って、あれ？」
　ララは何か気にが付いた。
「ねえペケ、あれって……」
　ララの超視力がとあるものを捕らえた。
「あそこにいるのって翔だよね？　何してるんだろう？」
　それは学校のプールサイドに立っている翔だった。１人でプールの水面を眺めているように見える。
「確かに。あの男、あんなところで何をしているのでしょうか……？」

ペケも訝しげな声を上げている。
「もしかして、泳ごうとしてるのかなぁ？」
「いえ、それは無いと思いますが……」
だが気になったらララはじっとしていられない。
「行ってみよっか！」
制服を変化させ、背中から黒い翼を生やすララ。
「ララ様、空を飛ぶのは……」
「あ、そっか」
前に反重力ウイングを使った時、那月にこっぴどく叱られことを思い出す。というか、無用なトラブルを避けるために、ララの発明品を使うことは禁止されていたのだ。
「じゃ、走っていこっか！」
「ララ様、走るのはお控えくださいね？　廊下が大変なことになってしまいますよ？」
「うん、そーするね」
ララは屋上のドアを開けて、跳ねるように階段を降り始めたのだった。

「ララの誘拐、だと？」
「そうだよ！　簡単だろ？　高貴な身分の娘息子親族その他を強引に連れ去って！　金品その他を要求する行為だよ！」
んなことは理解出来る。言われなくてもな。
「今回誘拐するのは娘で、今回要求するのは、『その他』だがな」
誘拐する相手はララで、要求するのは『その他』？
「デビルークの技術の情報だよ。こいつは欲しがる奴が何人も、何ケ

国もある。単純に金を得るよりも、何度でも再利用が可能ッ!!　素晴らしい商材じゃあねぇか！」
　そこに、ララの留学という出来事があった。最強の王であるギドの元を離れ、最低限の護衛だけで学校生活を送るというのは、最高の状況なんだ。そう言ったことを狙う犯罪者にとっては。
　誘拐して身代金を要求する。そんな単純なことが出来る環境になってしまったのだ。
「もはや早い者勝ち。そこで一番に動いたのが、俺達だって訳だな」
「……俺『達』？」
　その言葉に、俺の背中に嫌な汗が流れる。まさかこの間にララの所にその1人が向かってるのか!?
「複数犯って訳か？　そいつは――――」
「というかよぉ」
　アクア・ネックレスは俺の言葉を遮る。
「何でお前は俺に質問してるんだ？　質問できる立場だって勘違いしちまってるのか？　今お前は、人質を取られてるんだぜ？」
「……」
　ぺらぺらと喋ってくれるからこのまま聞き出せるんじゃないかと思っていたが、そううまくはいかないらしい。
「そして、ここまで言えば分かるよなぁ？　お前が首を縦に振るしかないってことがよぉ？」
「……」
　気を失っている綺凛を見る。どこもケガしている様には見えない。だがそれは『今は』という言葉が付く。
「お前が断ったら今この場でこのお嬢さんを殺す。楽しみだよなぁ？
　この透明なプールが、嬢ちゃんの鮮血で染まるんだ」
「……」
「それだけじゃねーぞ。ここまで喋ってやったんだ。お前を殺してお前と一緒に住んでる女も皆殺しだ」
「……っ」
　アクア・ネックレスが家で暴れれば、理子のキラークイーンがある

とはいえ、犠牲者が出るのは間違いない。
俺の顔が引きつったことに、アクア・ネックレスが口角を上げる。
「別にいいじゃねぇか。別に特別親しい訳じゃねえんだろ？　無理矢理、デビルークに押し付けられた厄介ごとじゃねぇか。そんなことに自分や周りの人間を危険にさらす必要は無いだろ？」
何も言わない俺に、ゆっくりと、諭すようにアクア・ネックレスが語り掛けてくる。
「何もそんな難しいことを頼もうってんじゃないぜ。ちょっと俺の有利な場所まで連れてきてくれればいい。後はそうだな……俺が襲い掛かる時にちょっとララ王女の意識を反らしてくれれば」
「ララの力を知ってるのか？　綺凛みたいにうまくいくとは思えないがな。それに俺を味方にしても、ララには他に護衛がいる」
単純な身体能力でも、俺達をはるかにしのぐ。非力なアクアネックレスでは、いくら不意を突いても失敗の可能性の方が高い。
それに、学校の外ならザスティンがいる。首尾よく誘拐に成功したとしても、逃げ切れるもんじゃない。あいつらは地の果てまで追って来るぞ。
「そん時にはお前にも協力してもらうぜ。お前の無事は、ララ王女の誘拐が成功しなきゃ保証されないからな。それに親衛隊の方は大丈夫なはずだぜ。もう手は打ってあるからな」
じゃあ何も『簡単な事』じゃねえじゃねーか。完全にララ誘拐の片棒を担がせようとしてるだろ！
しかも、方から見れば俺が実行犯だ。俺が誘拐して何になるんだって話だけど、『性欲に任せて』なんて結論になれば言い逃れが出来ない。
や、ほんとに言い逃れ出来ないな！　俺の人間関係を調べられたら！
「ご明察だ。そこんところも含めて、お前を選んだんだからな。ま、自分の不運を呪うんだな。何のためにこんなにしゃべったと思ってるんだ？　絶対に逃がさねぇためだよ――――それで？　答えを聞こうか？」

答えは決まってるだろうけどな、とアクア・ネックネスは笑う。
ここまで、か。本当はもう少し時間を稼いでおきたかったんだけどな。
「ああ、決まってるさ」
「そりゃよかった。話が速くて助かるぜ。さっそく今日――――」
「もちろん断る」
「……はぁ？」
俺の答えに、アクアネックレスはマヌケな声を漏らすのだった。

「ララ様、これは……」
「うん……」
翔とアクアネックネスの会話を聞いていたララとペケ。ララは気にせずに出ていこうとしていたのだが、翔と会話の主の異様な雰囲気に気が付いたペケが隠れるように言ったのだ。
ペケの勘は当たった。
目の前で繰り広げられたのは、ララ王女誘拐の相談現場だった。
正確には翔が脅迫される現場だったが、この内容ではおそらく懐柔されてしまうだろう。
「ペケ、翔はどうするんだろう……」
ララは珍しく不安そうな声を出している。
「……いえ、それよりもザスティンに連絡を。あの男はもはやあてにはなりません」
「あ～、それがね……今日の朝、ザスティンから連絡があったんだ。なんか、みんなお腹壊したんだって」
「何ですと!?　っく、こんな時に……!!」

これはアクアネックレスの『仕込み』だった。ザスティン達親衛隊が寝泊まりする施設の水道に、こっそり毒薬を混ぜていたのだ。
それを飲んだザスティン達はまとめてダウン。本来なら2、3日入院するところを、デビルーク人の彼らは、腹下り程度で済んだ。
無事なものは何人かいるが、万全の状態には程遠かった。
「とにかく、集まれる者は今すぐに集まってもらいましょう！　それと、南宮　那月。彼女も優秀だと聞きます！　彼女に助けを求めるのもいいでしょう！」
「う、うん、でも、翔が受けるかは分かんないんだし……」
「何をバカな!!　この条件で受けない者などいません！　少なくともこの場では首を縦に振るに決まっています!!」
わざわざこの場で相手に逆らって、人質を危険にさらす必要はない。一番合理的なのは、この場では従うふりをして反撃の機会を窺う事だろう。
だが、一度裏切った者に今後も護衛を任せることなど出来ない。今回の留学に賛成していたララの母も、こんな事態になってしまっては考えを改めざるを得ない。
そうなれば、この短い留学は終わることになるだろう。だが今は、無事にこの事態を乗り切ることを考えなければいない。
「――それで？　答えを聞こうか？」
そうしている間に、翔とアクア・ネックレスの会話は最後の場面に差し掛かる。
「ララ様、あまり時間はありません！　学校の先生に知らせましょう！　ザスティンにも、動けなくても連絡をするのです！」
「う、うん」
今まで見たことの無かったペケの剣幕に、ララは素直に自分の専用端末『デダイヤル』を取り出す。
「ああ、決まってるさ」
「そりゃよかった。話が速くて助かるぜ。さっそく今日――」
「もちろん断る」
「……はぁ？」

「……はぁ？」
「ぺ、ぺケ？」
アクア・ネックレスとペケのセリフが重なった。ララもデバイスを弄る指が止まる。
２人とも思考を放棄して、真剣に翔の様子を観察し始めるのだった。

「断るって……お前な、もしかして、冗談か何かと思ってんのか？」
「冗談？　何がだ？　心配しなくても、お前が全部マジで言ってることくらいは理解してるぜ」
「それで断るってことはよぉ、この娘がどうなってもいいってことなんだよなぁ!?」
アクア・ネックレスがこれ見よがしに手の爪を見せつけてくる。確かに鋭く見えるが、そいつのパワー自体は人に引っかき傷を作る程度。
その凄みにひるまない俺を見て、アクア・ネックレスはさらに口を開く。
「昨日もこの娘とよろしくヤってたじゃあねぇか!!　それなりに深い関係ってことだよなぁ!?　押し付けられたララ王女よりも、よっぽど大切だよなぁ!?　そいつの命が目の前に転がってんだぞ!!」
確かに、どちらとより仲が良いのか聞かれれば、間違いなく綺凛だ。ララとはまだ半月にも満たない付き合い。しかも学年が違うから学校でもほとんど一緒にいない。

「だったら――」
「でもな」
　俺はアクア・ネックレスの言葉を遮る。
「ララを見捨てる理由にはなんねぇよ」
「は――？」
「確かにわがままな王女様だって思う所もあるさ。でもな、だからってお前みたいな悪党が好き勝手利用していい訳がねえだろうが!!
俺はやっと叫ったララのわがままを、こんなところで終わりにするつもりなんて、さらさらねえんだよ」
「(なんだ、コイツは……この状況で反抗するだと!?　いったい何を企んでやがる？　コイツがこのプールまで1人で来たことはセンサーで確認している！　誰かと協力しているにしても、ここをコイツの仲間が見ていたとしても!!　スタンドの俺に攻撃は効かないんだ！
そいつは、同じスタンド使いのコイツが一番よく理解しているハズだッ!!)」
　アクア・ネックレスは俺を睨みつけたまま何も言わない。
「(だが分かったぜ。これだけは分かった。コイツは『危険』だ!!　絶対に逃がしちゃいけない。ここで仕留めないといけない敵だ!!)」
　俺はちらりと水面に視線を向ける。アクア・ネックレスではなく、『別の物』に。
「……そうかい、よくわかったよ」
　アクア・ネックレスの声色が変わった。作戦を切り替えたな。俺を仲間にする方針から、別の方針に。
「立派だぜ。今どき見ない覚悟だ。キマッてるってやつだな。その辺りは計算外だったよ。仲間だったら心強いことこの上ない。敵だったら、ただウゼェだけだがな。流石、あの『教授』の推理を狂わせただけはある」
「……」
　そのことも知ってるのか、こりゃ全部片づけたら色々と聞かないといけないな。
「だがその覚悟が、このお嬢さんを殺すんだぜ!!　運命は決まった!!

死ね――――!!」
綺凛の体内に入ろうとするアクア・ネックレス。
それを読んでいた俺は、その前に爪弾を発射した。
「ごぽっ!?」
爪弾は水を突き抜け、アクア・ネックレスの後ろに消える。だが回転だけは水に残る。体に作られた渦にかき乱され、アクア・ネックレスを構成する水が飛び散っていく。
だがダメージは無いようだ。
「いまさら怖気づいたか？　だが遅い!!　俺の誘いを蹴った時点で、お前の運命は決まってるんだよ!!」
再度、綺凛の内部に入ろうとするアクア・ネックレス。ああ、確かに、もう結果は決まってるだろうな。
「ヤミ、『鳴き声』だ!!」
「翔!!」
「ラ、ララ!?　何でここに!?」
「ラ、ララ王女だと!?　な、何故ここに!?」
プールサイドに設置されているフェンスを軽々と飛び越えて、ララが俺の隣に降り立った。
突然のララの登場に、俺達はそろって驚愕する。学校でこんな誘拐会議を開いているもんだから、ご本人が登場してしまったのだ。
だが、すでに合図は出してしまっている。
「ララッ!!」
「わっ!?」
「き、貴様、なにを――――!!」
「黙って耳を塞げ!!」
ペケが怒りマークを浮かべるが、かまっている時間は無い。
直後。
バサッ!!!!
「「ッ!?」」
水面を切り裂いて、何かが飛び出してきた。それは人ではない。翼を広げたそれは、通常ではありえない大きさの蝙蝠。

ミラーモンスター、『ダークウイング』だ。
「は？　おいおい、なんだ、ありゃ――――」
忙しく変わる状況に、アクア・ネックレスが付いていけていない。
ただ茫然と、プールの上を飛翔するダークウイングを眺めている。
俺達は耳を塞いだ。
『ＮＡＳＴＹ　ＶＥＮＴ』
「――――――!!!!」
ダークウイングから、不快な超音波が放たれた。

アクア・ネックレス②

「ぎゃあああああああああああぁぁぁっぁっ!!????」

ダークウイングから放たれる強力な超音波は、水面に波紋を作った。それに負けないほどのアクア・ネックレスの絶叫。

「くううぅぅ……っ!!」

超音波は耳を塞いでも貫通してくる。予想していてもキツイ。蹲り、攻撃が終わるのを待った。

そうして耐えているとようやく収まった。時間の感覚はない。どれほど長い間こうしていたのか。

「ララ、大丈夫か……？」

気が付くと、ララは白いヘッドホンをしていた。そのせいで俺の声が聞こえていなかったのか、小首をかしげている。

すると、ヘッドホンが髪飾り――ペケに吸い込まれるように消える。どうやらペケのナノマシンで作られていたものらしい。

「ララ、無事か？」

改めて問いかける。

「う、うん。今のは？」

「大丈夫。俺達の味方だ」

初めて使う武器を、こうもうまく使ってくれるなんて、流石ヤミだな。

俺は作戦を立てた時のことを思い出しながら、そう思うのだった。

「これは――」

俺は新たに手に入れた能力を見て唸っていた。

ジカンギレード強化パーツ
仮面ライダージオウの専用武器、ジカンギレードの強化パーツ。
その作品の主役ライダーのウォッチを持っている場合、その作品のライダーのアーマーをジカンギレードを通して他人に付与出来るようになる。

仮面ライダーナイト変身セット
ナイトのカードデッキ、ウォッチのセットパック。
龍騎のライドウォッチを手に入れている場合、使用可能になる。

つまりこれって、他の人にライダーの力を付与できるってことだよな？　状況に応じて能力を付与できるって、めちゃくちゃな強化パーツだ。
しかも、使って下さいとばかりに出て来たナイトの変身セット。龍騎のライドウォッチはもう持ってるわけだし、ナイトにも変身出来るようになったんだよな？
ここは普通についてきてもらうよりも、ミラーワールドにいてくれた方が不意を突けていいのでは？
「どうしましたか？」
俺の視線に気が付いたヤミが首を傾げている。や、メアでもいいのか？　何となくのイメージでヤミを見ちゃったんだけど。
龍騎のウォッチもあることだし、２人でミラーワールドに待機してもらうってもの悪くないかもしれない。
「ん？　どうしたの？」
「ああ、それがな……」
俺は２人に説明する。
「なるほど……ですが２人で同じ場所に隠れている必要はありませんね」
「うん。私はこっちの世界で周りを見張ってるよ。他に敵がいないか」

「じゃあ連絡用にレプリカ先生をつけるぞ」
「わっ、カワイイ!!　何これ!?」
「よろしく頼む」
「こちらこそよろしくね」
　小型のレプリカがメアにつき、互いにあいさつを交わす。
「それじゃあ、それで行こう」
《ＫＮＩＧＨＴ》
　ウォッチを起動する。ガンモードのジカンギレードを取り出し、ウォッチをセットした。その銃口をヤミに向ける。
「行くぞ、ヤミ」
「どうぞ」
「ぷっ」
　なんだよ。
　突然メアが噴き出した。
「な、なんでもないよ?　うん、なんでもないの」
「……?」
　そうは見えないけどな。ほら、ヤミも疑問符を浮かべてるじゃないか。
「(お姉ちゃん、銃口向けられたのに無防備すぎるでしょ!　いくら翔君だからって、ちょっとは警戒するんじゃない?　それだけ翔君のこと信用してるってコトなのかな?)」
　お腹を抱えてぷるぷると震えているけど、何でもないと言うのなら気にしないことにする。
「じゃあ改めて」
「はい」
「ちょっとくすぐったい、かもしれないぞ?」
　俺は引き金を引いた。
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ!》
《ＡＤＶＥＮＴ!　ＫＮＩＧＨＴ!》
　ヤミの全身に装着されるアーマー。見慣れたナイトのものに近い。だが、あくまでアーマータイムであって変身ではない。その証拠に、

ナイトの仮面のような帽子？　髪飾り？　が装着された。
イメージとしては『ライダー少女』に近いかもしれない。
「ふむ……」
装着が完了したヤミは調子を確かめている。
「じゃあヤミ、詳しい使い方について説明するぞ。手短にな」

「鏡の世界にもスタンドにも、良い思い出はありませんが……」
その時の説明を思い出しながら、ヤミはプールの水面を見ている。
その水面に映るのは、手足と顔のある水の塊と、それに捕まる綺凛。
そして翔だった。
ヤミが自身のカードデッキからカードを引き抜く。
「『鳴き声』ならこれ、『分身』ならこれ……」
翔の話によると、カードによってさまざまな能力を発揮できるとのことだった。それに合わせた合言葉も決めている。
能力のことをより深く知っている翔が、状況に合わせて指示を出すのだ。
ヤミはただ身を潜め、翔からの指示を待つ。暗殺を生業にしていたヤミにとって、相手の不意を突くことに何のためらいもない。
今は、翔が出来るだけ情報を聞き出すために話を引き延ばしているところだった。
「それにしても相手がスタンド使いだったとは……このタイミングで襲ってくるのは出来過ぎた偶然？　それとも……」
ヤミはヤミで思考を巡らせている。
「もちろん断る」
「はぁ、あなたという人は……」

水面の向こうでは、翔がアクア・ネックレスの要求を断っていた。何の打算も無い即答に、ヤミはやれやれと首を振る。
翔なら確実に断るとは思っていたが、予想取り過ぎる回答にはため息を通り越して笑いすら起きる。
「……いえ、気を引き締めましょう」
水面に映る自分の顔が、笑みを浮かべていることに気が付いたヤミは、口元に力を入れて強引に表情を硬くする。
その時、視界の端にある人物を捕らえた。
「っ!? 何故ララ王女が……っ」
思わぬ侵入者に流石のヤミも驚く。フェンスを乗り越えるその姿に、翔よりも早く気が付いたのだ。
同時に召喚機『ダークバイザー』に手をかけた。カードの装填口を開いていつでも行動出来る状態になる。
こうなってしまっては、情報を聞き出すなんて悠長なことを言っている場合ではない。その考えとシンクロしたかのように、翔から合図があった。
「ヤミ、『鳴き声』だ!!」
「(鳴き声は――これか!!)」
水面の向こうでは、翔とララが合流している。ならば問題ないだろう。
翔の指示に従ってカードを装填した。
『ＮＡＳＴＹ　ＶＥＮＴ』
電子音が響き渡る。同時に、何処からともなく飛んでくるダークウイング。
「行きなさい」
その声で、ダークウイングがプールに飛び込んだ。だが水柱は上がらない。水に飛び込んだのではなく、その水面を鏡として『向こうの世界』に行ったからだ。
「――――!!」
ダークウイングの鳴き声が聞こえる。ナイトに変身しているヤミにとってはただの鳴き声にしか聞こえないが、翔やアクア・ネックレ

スにとっては頭蓋骨が割れるような不快な鳴き声だ。
その効果は十分に発揮されていた。
「それでは、私も」
そう呟いたヤミは、プールの中に、その向こうの世界へと飛び込んだ。

「夜月　翔!!」
ナスティベントが終わって、プールから飛び出してきたヤミ。そのまま変身（トランス）で空中に滞空する。
そんなヤミに向かって俺は叫んだ。今、一番欲しいものを。
「ヤミ、盾だ！」
「っ！　はいっ！」
ヤミは一瞬固まるが、すぐに新しいカードを使ってくれる。
『ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ』
電子音が鳴り響く。空を飛んでいたダークウィングがヤミの体に重なる。するとダークウイングはそのままヤミの体を包む黒いマントになった。
「な、何をぐっ!?」
その間に、俺は爪弾を連射する。綺凛から引き離すように。回転のエネルギーを使って、水の流れを操っていく。
「こ、こいつ」
その事実に焦りを見せるアクア・ネックレス。プールにつながっている体は残り少ない。
「包め、ヤミ！」
その言葉と同時に最後の爪弾を発射した。その回転エネルギーは、

プールにつながっていた最後の体を吹き飛ばす。
アクア・ネックレスの本体がプールに落ちるまでのわずかな時間。
「(クソッ!!　まさか人質から引き離されるなんてな。だが問題ないッ!!　プールに潜めば俺は無敵だ！　水から出てきたあの女ともども、ぶっ殺して――――いや、ここは一度逃げたほうがいいか？)」
アクア・ネックレスは何を考えているのか知らないが、全て無駄だ。
水面とアクア・ネックレスの間に、黒い布が割り込んできた。その布の正体はヤミが作り出したガードベントだ。マントになって背中に装着していたダークウィングを取り外し、アクア・ネックレスを受け止める。
そして、ヤミがプールサイドに着地する頃には、
「ふ――――」
変身(トランス)によって手になったヤミの髪の毛が、マントを器用に結んでしまった。
「――――!!　――――!!」
「な、何だこいつは!?　く、で、出れねぇ……!?」
自分の翼を使って結ばれたことに抗議の鳴き声を上げるダークウィングと、弱いパワーのせいで脱出できなくなったアクア・ネックレスが騒いでいる。
じゃばじゃばと、袋の中で水が暴れる音が聞こえるが、どんなに頑張っても外に出ることは出来ないようだ。完全に捕まえることが出来た。
「これでいいですか？」
「ああ、流石だよ」
こちらの意図を完全に読み切っての行動だった。こういう姿を見ると場慣れしてるって感じるな。
変身して手になったヤミの髪の毛に摘まれたガードベントは、こうしてみると黒いゴミ袋のように見える。
「そうだ！　綺凛！」
急いでプールに目を向ける。完全に脱力した綺凛は変わらず水面に浮かんでいる。俺は迷うことなくプールに入り、プールサイドに引

き揚げた。そして、その無事を確認する。
「よかった……」
特に怪我はしていない。服の乱れもないため、乱暴もされていないだろう。そもそもスタンドで交渉するような奴だ。この場には来ていない可能性の方が高い。
「夜月　翔。コレはどうしますか？」
「そうだな。思いっきり振り回して欲しい」
「はい？　分かりました」
俺の言った通り、変身髪の毛が縦横無尽に動き回る。あの中にいるアクア・ネックレスには、きっと戦闘機のアクロバティック飛行並みのGが襲いかかっていることだろう。
「ごぱがあぁぁっぁ!?」
何処からか、変な声が聞こえて来た。
「……今のは？」
「スタンド使いの本体だ。メア、聞こえるか？」
俺はメアのそばにいるレプリカを通じて通信を行う。
《うん。聞こえてるよー？　なんか変な声聞こえたけど、様子見に行った方がいいかな？》
「行ってほしい。多分、スタンド使いの本体がいるから気をつけてくれ」
《オッケー、行ってきまーす》
通信が切られた。
「軽いな、あいつ……」
何かあればレプリカから連絡が来るから大丈夫だと思うけど。俺も行くか。どんな奴か、顔を拝んでおかないと。
「ヤミ――――」
「翔ーーー!!」
「おっふ!?」
ヤミに一声かけようと思ったところで、かなりの衝撃と信じられないくらい柔らかい物体が俺の体に襲いかかってきた。不意打ちだったせいで俺の体がぐらつく。

「お、っと、っと……！」
俺はギリギリ、何とかプールサイドの縁で踏みとどまる。俺が耐えられなかったら、このままプールにドボンだ。
「っと!!　な、何だいきなり」
「ありがとーーー!!　翔ーーー!!!」
「ラ、ララ!?　お、おいっ、あんまり暴れるなって!!」
飛び込んできたのは、今までほったらかしになっていたララだった。全身で俺にタックルしてきて、そのままがっちりホールドされてしまった。羞恥心などないとばかりに全身で感謝を伝えてくる。
「まあ、よくやった。褒めてやる」
「お、おう」
ペケも褒めてくれた。
その間にも、ララの抱擁は止まらない。
俺の胸で２つの球体がばいんばいんと跳ねまわる。服の上からでもこんなに柔らかいなんて、とんでもないよ！　大丈夫なんだろうか、その、色々と！
「お楽しみのところ申し訳ありませんが、これからどうしますか？」
「あ、ああ。そうだな……」
アクア・ネックレスを持ったままのヤミが、ジトッとした視線を向けてきていた。
「ヤミはそのままそいつを捕まえておいてくれ。あ、それと、時々袋を振ってほしい」
「たしか、スタンドへのダメージは本体に伝わる、でしたね」
「ああ。今回はダメージは与えられなくても、振った時の衝撃は相手に伝わるから、身動きが取れないはず」
「分かりました。刀堂　綺凛とプリンセスのことも。気にせず行って下さい」
「ありがとう。行ってくる。じゃあララも。この事をザスティンに伝えておいて欲しい」
「あ、うん！　そうだね！」
デダイヤルを取り出すララを横目に、俺は声の聞こえた方向へと向

かうのだった。

アクア・ネックレス③

「うううクソが、ふざけやがって……」
ここは武偵高の実践用森林フィールド。ここでアクア・ネックレスの本体の男は、最悪な気分になっていた。
スタンドと共有している視覚が塞がれたと思ったら、天地がひっくり返ったのではないかという衝撃が体に伝わってきたのだ。一気に平衡感覚がなくなり、いつの間にか吐きながら地面に倒れていた。
捕まったアクア・ネックレスが何かされた。それしか考えられない。今もまだ視界は真っ暗なままだ。物質と同化するスタンドであるアクア・ネックレスは、自由に出し入れが出来ない。こんな攻撃を受けていては逃亡することすらままならない。
交渉は失敗し、人質は取り返された。完全敗北だ。
「俺のスタンドの弱点を、まるで知っているみたいに的確に突いてきやがった。これが夜月　翔か！　『教授』に一泡吹かせたってのは本当みたいだな……」
情報は知っていたが、ここまでとは思わなかったと、計算外だと呟く。
「な、なんとか、しないと……！」
今さら後悔しても遅い。未だ震える足に力を入れて、何とか立ちあがろうとする、が、
「よっと、アナタかな？　スタンド使いの本体は」
「っ!?　あ、赤毛のメア……!!」
男は、そばに着地したメアを見て体を震わせる。
男は絶望的な気分になる。いるのは知っていたが、こんなに早く見つかるとは思っていなかったのだ。まさか自分が倒れる際に大声を出しているとは思っていなかった。
「あれ？　あたしのこと知ってるんだ？　ふーん」
「……っ」
メアの態度はいつも通りだが、男は緊張で体が動かせなくなっていた。男の戦闘力では、どう転んでもメアに勝つことは出来ないから

だ。
水辺に誘い込み、姿を隠すことが出来れば時間を稼ぐことは出来るかもしれない。だがこうやって正面に来られると、1秒と戦えない。
男の絶望は、メアだけでは終わらなかった。
「おやおや、先を越されてしまいましたわ」
「お、お前は……！」
暗い森の向こうから出てきたのは、オレンジと黒のゴシック調の衣装に身を包んだ少女。霊装に身を包んだ狂三だった。
男は知っていた。この少女が、街に繰り出すララについていたことを。そして翔と一緒に住んでいることも。だが、こんな危険な顔を持っていたとは知らなかった。
裏の世界でもそうそうお目にかかれるものではない狂気を孕んだ笑みに、男の全身から冷や汗が流れる。
「あ、狂三ちゃん、こっちに来たんだ」
「ええ、あちらの方はわたくしがいなくても大丈夫そうですから」
スタンド使いを挟んで、2人は朗らかに談笑する。
実は狂三、ララの護衛が始まってから、ずっと自らの分身体を翔の影に忍ばせていたのだ。それはララに何かあった時のための連絡用として、そして、翔の監視の意味も含めて。
「さっきはびっくりしたよ。いきなり翔君の影から出てきたんだもん」
「きひ、思わず手が出てしまいましたわ」
先ほど翔のことを叩いたのはその狂三だった。音もなく影から出た狂三は翔をひっぱたき、また陰に沈んでいった。その一部始終を目撃していたヤミとメアには、優雅にお辞儀をしながら。
「翔君の事ずーっと見てたんだもんね？　私と翔君が、えっちぃことしてる時も」
「……そうですわね」
「そりゃあ、イライラしちゃうよね？　自分が見てることも知らずに他の女の人とセックスしてるんだもん」
「メアさんも、まさか学校で誘うとは思っていませんでしたわ」

「あは。シたくなっちゃったから」
　まるで、すでに戦闘は終わったという態度だ。だが悲しいことに、それは事実だった。
「（赤毛のメアはともかくとして、こっちの女も相当な化け物じゃないか……!!　ど、どうしてこんな奴が……）」
　確かに翔が六課から離れられない時は狂三が近くにいたことはわかっていた。
　だが、その時とは雰囲気からしてまるで違う。スイッチが切り替わったように、メアと同等の殺気をスタンド使いに向けていた。
　絶対に逃げられない。そのことに男が冷たい汗を流していると、談笑を終えた２人が視線を向けてきた。
「それで、この人どーしようか？」
「そうですわね。学校や管理局に引き渡してしまう前に、色々と聞いておきたいことがありますわ」
　狂三の笑みが一層邪悪になる。
「ただの犯罪者ならともかく、『スタンド使い』となれば、その出どころははっきりとさせたいですわ。メアさんには何か心当たりがありまして？」
「うーん、ないかな。イ・ウーにいたときはＤＩＳＣがあったけど、アレどこに行ったのかわかんないし。そもそもイ・ウーに知ってる人あんまりいないからなー」
「ＤＩＳＣ……」
　狂三は考え込んだ。
「（あのゾンビのスタンド能力……いったいどこまで影響を残しているのでしょう……それとも、話にある『３人目』が関わっているのでしょうか）」
「な、なんだお前ら！　この能力をどうやって手に入れたのかを知りたいのかッ!?」
　２人の会話を聞いて、生き残るチャンスがあると考えた男は、唾を飛ばす勢いで交渉を試みる。
「だったら知ってることは何でも話す!!　何でもだ!!　逃走経路も、

ララ王女を攫った後どうするつもりだったのかも！」
「あらあら、ずいぶんと軽い口ですわね」
「だ、だから命は助けてくれ!!」
「そう言われましても……あなたを裁く組織はこの島の管理局か、デビルークでしょうから。わたくしたちには何とも」
「それに、自分から仕掛けてきておいて、命は助けてくれって、それはないんじゃない？　やるんだったら、やられる覚悟もしておかないと」
　２人の無慈悲な言葉に、男は歯を食いしばった。
「ですが、素直な態度というのは良い印象を与えますわ。ぜひ、管理局の取り調べでもそうすることをお勧めいたします」
　そう言うと、狂三は短銃を持って男に近寄る。
「な、なにをするつもりだ」
「痛くはありませんわ。ただ少しだけ、あなたの記憶を読み取るだけですので」
　狂三はくすくすと笑いながら距離を縮める。実際、狂三には男を害する気持ちはない。ないのだが、この状況で銃を持って近寄られれば、恐怖心を感じてもおかしくはない。
　何をされるかわからない男は、狂三を止めようと必死に口を動かす。
「わ、わかった！　待ってくれ！　しゃべる！　いいか、俺は」
　それが仇になった。
「かぺっ!!?!?」
　変な声を出した男は、そのまま倒れた。
「おや」
「あれ？　どうしたの？　急に倒れちゃった。狂三ちゃん、なにかした？」
「いえ、わたくしは何も……まさか……っ！　刻々帝（ザフキエル）!!」
　狂三は慌てて自らの『天使』を顕現させる。背後に現れる巨大な時計盤。その『Ⅳ』から黒いエネルギーが短銃に充填される。時間を巻き戻す四の弾（ダレット）だ。物体だけでなく、人体のケガすらも時間を巻き戻す

ことで無効化してしまう強力な能力。
男に向けて引き金を引こうとするが、
「遅かった、ですわね……」
「そうみたいだね」
地面に倒れた男はすでに事切れていた。

「終わったみたいだな」
「結果はどうですか？」
矢瀬は耳に付けていたヘッドホンを外す。すると、後ろにいた女子生徒が声をかけてきた。眼鏡をかけた三つ編みで、ハードカバーの本を抱えている。
一見すると普通の女子高生、どちらかといえば地味な印象を受ける彼女だが、この場での立ち位置は矢瀬の上司である。
そんな相手に向かって、矢瀬は壁に寄りかかりながら報告を始めた。女子生徒もそれを咎めない。矢瀬が能力を使って疲労していることを知っているからだ。
「人質は無事救出。スタンド使いは死亡。こっちは自殺ってわけでもなさそうだが……」
「証拠隠滅のために何らかの能力がかけられていたということでしょう。魔法か、魔術か。あるいはスタンド能力か」
女子生徒の意見に無言で首肯する矢瀬。だが、それを認めるということは、自分を殺してまで、わざわざ証拠や情報を隠そうとするということは、自分以外にも仲間がいるということになる。
「それで、他に侵入者は」
「学校の敷地内には不審な人物は誰も。敷地の外まで広げた方がいい

か？」
「いえ、必要ないでしょう」
矢瀬は手のひらサイズのプラスチックケースを振って見せる。ケースの中に入っているものがジャラリという音を出した。
それを見た女子生徒は首を横に振った。
ケースに入っているのは、矢瀬の能力を一時的にブーストするケミカルドラッグだ。
矢瀬は『原石』と呼ばれるタイプの超能力者である。能力名は『音響結界（サウンドスケープ）』。効果は音波や気流を操るというものだ。
この能力を使って矢瀬は聴覚を拡張し、学校内での翔の様子を、そして今回の事件の様子を観察していたのだ。
「色々と面白い話を聞けたぜ。ガチャを引くとか、新しい能力とか。先輩、ガチャって知ってる？」
「それは馬鹿にしすぎでしょう。ランダムに商品を輩出する、自販機の一種でしょう？」
「そう。それそれ。向こうはガチャを引いて新しい能力が出るとか言っていたぜ」
「そんなふざけた能力があるとは思いたくないですね」
「そうだな。流石に何かの隠語だと思いたいが。その直後に新しい能力が増えたって感じの話もしてたからな……」
その時の会話を思い出して、矢瀬は唸る。手段はどうであれ、その場で新しい能力が生み出された可能性は高かった。
「詳しい報告は後ほど。どうやら管理局に連絡がされたようです」
「あいよ。そんじゃあな」
矢瀬と女子生徒は、お互い別の方向に歩き出すのだった。

襲撃は終わった。
ヤミに綺凛とララの2人を任せて、スタンド使いのいると思われる場所に向かった俺だったが、そこに居たのはメアと(何故か)狂三、そしてすでに息絶えた見知らぬ男。
2人の話によれば、この男がスタンド使いの本体だったらしい。それが話の途中で死んでしまった。間違いなく口封じされたのだ。つまり敵は複数いる。
顔の形が分からなくなるまでブン殴ってやるつもりだったんだけど、流石に死んだ相手にそれ以上手を加えるような真似は出来なかった。
それよりも敵が複数いては大変だと思い、すぐさまプールに戻った俺だったが、俺を迎えたのは特に変わりのないヤミとララ、そして目を覚ました綺凛だった。
ララに聞くと、デビルークの親衛隊もすぐに来るらしい。ヤミの指示で先生や管理局にも連絡済み。
とりあえず、今することはやったらしい。だとすれば、
「綺凛、大丈夫か?」
「先輩……」
俺は綺凛に声をかける。ずぶぬれになっていたはずだったが、今は乾いた制服に着替えていた。着衣訓練のために持って来ていたものに着替えたらしい。
俺を見る綺凛の顔は今にも泣きそうだ。
「先輩、ごめんなさい……」
「何が?」
「敵に捕まって、先輩にご迷惑をかけてしまって……」
そんなこと。
「相手がスタンド使いなんだ。綺凛とは相性が悪かったんだからしょうがない。正攻法じゃ倒せないんだから」
「……うん、そうだよ。綺凛が襲われたのは私のせいだもん……ごめんね」

「ララ様……」
ララも今回のことに責任を感じているらしい。珍しくしょんぼりとした顔で頭を下げている。ペケもその様子に何か感じるものがあるらしい。
だが綺凛の表情は晴れない。
「気にしないで下さい、ララさん。襲われて勝てなかったのは私が弱かったから、ですから」
「どっちの責任でもない。悪いのは突然襲ってきた奴だ」
弱いからとか、襲われる原因になったとか、そんなのはどうでもいいことだ。悪いのは、悪いことをしたヤツ。それ以外にない。
「でも先輩は、そんな相手でも倒しちゃったじゃないですか。初めての相手でも冷静に、人質の私も助けてくれて」
それは俺が原作の知識で、アクア・ネックレスのことを知っていたからだ。綺凛と同じ条件だったら、こうはいかない。
だがそれを説明するには順序がいるし、この場で話しても理解してもらえないだろう。
「もっと強くなりたいです。試合だけじゃなくて、先輩の敵とも戦えるくらいに」
そんな綺凛の呟きが、かすかに耳に届くのだった。

「――――って訳で、今日の学校は少し騒がしかったぜい」
「ふむ」
ここは学園島にある『窓の無いビル』。窓どころか扉が無いこのビル。中に入るにはテレポート系の能力が無ければいけないという特殊な場所だ。

その内部には、現在２人の人物がいた。
１人は翔のクラスメイトでもある土御門　元春。グラサンにアロハシャツというふざけた格好は、この場でも変わらない。
そしてもう１人。ビルの中央の試験管に満たされた液体。その中に浮かんでいる人間だ。男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えるその人物は、学園島を取り仕切る管理局の長である、アレイスター・クロウリーだ。
アレイスターから差し向けられた刺客である土御門は、今日の出来事について報告していた。
「どうにも彼は、事件に巻き込まれやすい体質のようだな」
アレイスターの声が空間に響く。
「確かに、敵と引かれ合ってるみたいだにゃー」
土御門は笑いながら同意する。
翔はそろそろ新しい敵が来るよな、だとか適当に考えているが、このペースで敵が来るのは異常だった。
そのことを理解していないのは本人だけだ。
「俺も、詳しい流れは知らないんだけどな。もう１人の監視者と違って、俺には便利な能力は使えないからな。そこらへんは、アンタの方が分かってるんじゃないのか？　いや、そもそも、俺なんかの報告を聞かなくても、この島の出来事は全部分かってるんじゃあないのか？」
「……」
土御門の問いに、アレイスターは答えない。答える義務が無い。土御門も答えが返ってくるとは思っていなかった。
「それよりも」
「なんだ？」
話が変わる。
「君にも話は通っていると思うが、禁書目録の移動日程が決まったそうだな」
「……ああ。１週間後だな。よりにもよってこの日程とは、向こうは向こうで何を考えているんだか」

アレイスターは楽しそうに、土御門は渋面になる。
「君には仕事が無いのかな？」
「禁書目録の移送は六課も関わってるからな。俺のことが夜月　翔にバレる可能性もあるし、緊急事態にならなければ待機だ」
「緊急事態にならなければ、か。私も、無事に終わることを祈っているよ」
アレイスターは含みのある言い方をする。
そのセリフに、そこはかとない不安を覚える土御門だった。

変わる関係性　前編

《失態だな、ザスティン》
「面目次第もございません……」
　ザスティン達、ララ王女の親衛隊の全メンバーは映像に映る相手に跪いていた。画面の向こう、王座でふんぞり返るのはデビルーク王、ギド。
　今回の襲撃の報告を聞き、怒り心頭だった。
《そっちに行って1週間。ララを狙う敵が来るってのは分かる。プロなら情報を揃えて行動を起こすには十分な時間だからな》
　ギドの言葉に、ザスティン達は頭を下げたまま動かない。今回自分たちが、下手すれば処刑されてもおかしくないほどの失態を犯したのだ。どんな言葉でも、どんな罰でも文句は言えない。
《だがな、肝心の親衛隊が揃いも揃って動けないってのはどういう事なんだ？　有事に動けない兵に何の意味がある？》
「おっしゃる通りです……」
　ザスティンは額を地面にこすりつける勢いだ。デビルークにはその文化は無いが、ジャパニーズ土下座寸前である。
　だがギドも、すでに終わってしまったことについてこれ以上言うつもりは無かった。そんなことをしても無駄だからだ。
　ザスティン達がこれ以上なく反省しているのは、態度を見ればわかる。ギドの言いたいことも、言わずとも分かっている。
　ギドはため息を吐きつつ、話を変えた。
《ふぅ……それで、ララはどうしてる？　怖くなって帰りたいって言いだしたか？》
「……いえ、それが……」
《――――あ？》
　ザスティンは、この報告で一番、重くなった口を開いた。

「はー……」
俺のため息がお風呂の湯気の中に消えていく。
様々な処理を済ませ、ようやく家に帰ってこれた。夕食も済ませて、今はお風呂の時間だ。
「久々に色々とあったな、今日は……」
色々と言っても、事件は1つだけど。でも結果的に特に怪我人も出なくてよかった。スタンド使いが死んでしまって、情報を引き出せなくなったことは心残りだけど。
「あいつはあの時、『俺達』って言ってた。間違いなく集団なんだ」
今日はあれ以降襲撃は無かったけど、夜、みんなの警戒が緩んだところで襲ってくる算段かもしれない。
今はデビルーク親衛隊に守られているんだけど、なんか、親衛隊は親衛隊でごたごたしてるっぽい。少し不安だ。
スタンドは初見殺し性能が高い。仕組みを知っていれば、今日のアクアネックレスの様に対処できるかもしれないが、そうでなければ完封されるかもしれない。
スタンド使いに対しては、知識のある俺が近くにいることが一番だ。
「スタンドのルール、か……」
綺凛のことを思い出す。
スタンドのルールを知らなかった綺凛は、今回人質にされてしまった。そのことを、本人はかなり気にしていた。
「そろそろみんなに話すべきか……」
俺の恋人や六課の面々、信用できる人にはもう話すべきなのかもしれない。そうすることで防ぐことの出来る被害が増えるはずだ。
「そこんところ、明日にでも……や、風呂あがったらすぐにでもみんなに相談しないと」

独り言を漏らしながら、目を瞑る。１０秒ほどそうしていると、
「ん？」
ぽこぽこという音が聞こえて目を開ける。見ると風呂の底から気泡が浮かんできていた。
「え、ナニコレ」
風呂が泡立ってる？　茹ってる？　や、温度は変化してないか？
俺は警戒レベルを引き上げる。何が来たんだ？　とりあえずみんなと合流するか。
俺は風呂から上がろうと立ち上がって、
「うわっ!?!?」
目の前に強烈な光が発生した。目を開けられず閉じて――――柔らかなナニカに湯船に押し倒された。
「うわ!?」
「わ!!」
２人分の声が重なる。湯船のお湯が増えた体積の分だけ溢れていく。
「や、ば……」
下腹部に血液が集まっていくのが分かる。や、突然何言ってんだって思うかもしれないけど！　実際そうなんだよ！
お湯とはまた違う温かさと、上に乗ったものを押しのけようとしたときに両手に触れた柔らかい２つの物体。それどころか右手には、相手の心臓の鼓動が伝わってくる。そのくらいがっしりと鷲掴みにしている。
俺は恐る恐る目を開ける。
俺を押し倒したナニカの正体は、
「ララ……!?」
ララだった。
学校で別れたはずのララだった。
「あぅ、く、くすぐったいよ、翔」
そのララが、一糸まとわぬ姿で俺の風呂に飛び込んできたのだ。長いまつ毛の本数まで数えられるくらいの至近距離で見つめ合う俺達。

ララの顔が赤くなる。
「おまっ、どうして、ここに……？」
「えへへ、私の部屋からぴょんぴょんワープ君でここまで『跳んで』来たんだ～。こうでもしないと、翔の所に行けなかったから」
俺はいまだにララの豊満なおっぱいを鷲掴みにしていたことを思い出し、急いで離した。俺の手による拘束がなくなったことで、ララの体が自由になる。俺から少し離れたララは、お風呂に女の子座りした。
このお風呂にはアニメの有能な湯気効果などついていない。胸の前面半球を覆っていた俺の手がなくなったことで、ララの全身が惜しげもなく晒されていた。
胸の突起どころか、足の付け根にある女の子の部分まで。
そんな俺の視線に気が付いたのか、微笑みながら小首をかしげた。
や、ホントにヤバいよ。
「翔？　どうしたの？　ソコ、おっきくなって……」
「い、いいから！　ララはちょっとここにいてくれ！　みんなを呼んでくるから――――」
俺は慌てて湯船から立ち上がった。
その時、外からどたどたと誰かが走ってくる音が聞こえ、
「翔君どうしたの!?」
「先輩！　何かすごい音が――――」
浴室の扉が勢いよく開かれ、アスナと雪菜が飛び込んでくる。
「あ、やっほー！　２人共～」
普通に俺が入ってるんだが!?　もうお互いの裸を見せ合ってるんだから、今さら恥ずかしがらないってコト!?
俺の絶叫は声にならず、ララの朗らかな挨拶には答えず、２人の視線がどんどん冷え込んでいく。
２人が見ているのは裸の俺と裸のララ。俺のイチモツはララの豊満な肢体に反応して、すっかりしっかり硬くなってしまっている。そんなものを、立ち上がった俺はララの鼻先に突き出してしまっていた。

そんな状態になっているのを見れば、ナニしようとしているのかと思われても仕方がない。
「雪菜ちゃん、私のレイピア持って来てくれないかな？」
「すいません。今は雪霞狼しか無くて」
「うん。それでもいいんじゃないかな？」
いや、よくないが？　魔力無効化が付いている武器の方が絶対に危ないが？
小気味よい音を立てて、収納状態だった雪霞狼が展開する。槍先が俺に、俺の下腹部に向けられた。
「ちょ待――――!!」
「はあああぁぁぁっ!!」
裂帛の気合とともに、雪菜が突進してきた。
事の結果については、本当に危なかったとだけ言っておこうと思う。

何とか落ち着いた。
今はお風呂から上がって、リビングで落ち着いている。当然ララも一緒だ。ペケもいないため、今はアスナの服を着ている。
ザスティンへの連絡は済んでいるので、すぐに迎えに来るはずだ。
「それで、こんな時間にどうしてウチに来たのかしら？」
「しかも、誰の目にも止まらずにお風呂に突撃してるなんて。私も見習いたい」
「しかも、お兄さんが入ってるお風呂に……」
上から、クロ、耀、ティナの順番だ。
というか耀。見習いたいってなんだ。見習いたいって。

「本当に翔君が連れ込んだんじゃないんですよね？」
「いったい何時、そんな隙があったよ。しかも相手は王女様だぞ」
桜の視線もだいぶ厳しい。
「まあ、翔君だしね……」
「はい。先輩なら、二重の意味であり得そうです……」
お風呂に突撃してきたアスナと雪菜もうんうんと頷いていた。
二重の意味であり得そう？　みんなに内緒で女の子を連れ込むこと、王女様をこっそり連れてきちゃうこと？
「あはは。みんな、ごめんね。ぴょんぴょんワープ君で部屋からワープしたんだけど、そこまで詳しい座標設定はしてなかったんだ～」
ララは笑いながら、腕輪型のワープ装置、ぴょんぴょんワープ君を指でくるくる回している。
「ぴょんぴょんワープ君……あの時のワープ装置ですか……」
雪菜が夏休みのことを思い出したのか、顔を引きつらせている。ペケのバッテリー切れでララの服が消えかかった時、それを使ってお店に転移したことを思い出しているのだろう。
「それで、入浴中の翔さんの所に転移したと？　にわかには信じられませんわね。そんな都合の良い偶然は……」
狂三は頭を押さえている。
「うん！　私もびっくりした！」
「びっくりしたって、ララちゃん、それだけなの……？」
「無駄ですよ、アスナさん。ララさんにはそう言う羞恥心は無いんです……」
雪菜は裸でワープさせられた被害者だからな。セリフに実感がこもってる。
そんなことを話していると、家のチャイムが鳴った。
来たのは当然、
「翔殿、夜分遅くに申し訳ない」
いつもの鎧に身を包んだザスティンだった。部下は家の周りで警護しているらしい。
「腹はもう大丈夫なのか？」

「……ええ、おかげさまで」
苦い顔で肯定してきた。や、別に皮肉じゃないぞ！　単純に心配してのセリフだから！　マイナスに捕らえないでね！
リビングに向かうザスティンは、心なしか早足になっている。
「あ、ザスティン」
「ララ様!!」
ララの姿を確認したザスティンは心底安心したといった表情を浮かべた。
「困ります、ララ様。このように無断で外出されては。しかも、今日は特に！」
「でも、翔の所だし、大丈夫だよ？　何かあっても守ってくれるし！」
ザスティンの心配はもっともだけど、ララもあっけらかんと言うなぁ。ここまで素直に言われると恥ずかしくなってしまう。
「ずいぶんと信頼されているんですね、先輩は。こんな短期間で」
「きょ、今日の事件があったからね」
雪菜の視線が突き刺さる。や、雪菜だけじゃないな。他のみんなからも見られてるぞ。
その間もララへのお説教は続いている。
「とにかく！　今日の所は我々が寝ずに警備を致します！　家に帰りますよ！」
「えー？　別にいいよ？　だって私、翔と――――」
「ララ様！」
え？　俺と？　何、俺と。
ララがぽろりと何か言おうとしたところを、ザスティンが止める。
「それについて、お父様からお話があると」
「パパが？」
なんだか嫌な予感がしてきた。
ザスティンが端末を取り出した。画面を付けると、待機状態になっていた通信画面が起動する。
そこに映っているのは少年のような顔つき、体つきの男性だ。デビルークの特徴的な尻尾が、苛立たしげに揺れている。

ララの父親、ギド・ルシオン・デビルークだ。
「これはリアルで繋がってるんですよね？」
「ああ、そうだ。貴様も言動と振る舞いには気を付けろ。こちらの映像も向こうに繋がっているぞ」
「いー……」
ザスティンに聞くと重々しく頷かれた。
《おう、ララ。話は聞いたが……お前、本気か？》
周りの人間の事なんて関係ないとばかりに、ギドは話を始めた。流石、デビルークの王だよ。
そしてそれは、ララも同じだ。
「うん、本気だよ」
ララは立ち上がり、俺の近くに来た。
「私――――」
俺の腕に抱きついて、
「――――翔と結婚するから!!」
「「「……」」」
「はぁ……」
固まる俺達とため息を吐くザスティン。

それに対するギドの反応は、
《ふーん、いいんじゃねーか？》
「投げやりか!!」
気の抜けたような肯定だった。
《あぁ？　別にいいんだよ。もともとこの留学は、コイツの結婚相手を探すためにやったことなんだ。相手が見つかったんなら何も言う事はねぇよ。ダメって言ったところで、コイツは聞かねぇからな》
それは！　……まあ、そうか。そうだな。納得しかできない。
《それに》
ギドが口角を上げる。
《誘拐犯のクソ野郎に言ったセリフ。なかなか気合が入ったヤツだっ

て分かったからな。面白れぇ。少しだけ気に入ったぜ、夜月　翔》
　あ、あの時のセリフ!?　何で知ってるでしょうか!?
「あの時の状況については、ペケの記録から全て閲覧済みだ。当然、王にも」
「さ、さいですか……」
　じゃああの時の宣言も全部聞かれてるって訳か。もちろん全部本心だったとはいえ、親御さんに聞かれるのは恥ずかしいですね！
《サイ？　まあいい。そういう訳だ、ザスティン。今日からこいつのことは、ララの婚約者として扱え》
「はっ!!」
　ザスティンは映像に向かってきれいな敬礼をしているが、
「ちょ、ちょっと待って下さい!!」
　何の意見も言えないまま、婚約者になってしまうのはヤバい。
《なんだ。なんか質問があんのか？》
「こんな突然言われて、疑問を持たない人の方が珍しいと思いますけどね!?」
《心配すんな。今すぐにこっちに来い、なんて言うつもりはねぇ。娘留学に出して1週間で戻す、なんて格好がつかねぇからな。最低でもララの卒業までは、その島で生活してもらうぜ。あんな啖呵きったんだ。その間もしっかりと面倒を見てもらう。王としての勉強はそれからだな》
「そうですね。政治については、王妃に任せるとして」
《だな。俺も、ややこしいことはアイツに任せてるからな。他の国への公表は、色々と準備が整ってからだな》
　ギドとザスティンが俺を王様にする育成計画を立てているけど、いやいや！　そう言う事ではなくてですね!!
「あの、拒否権というか、俺の意思というものは……」
《あぁ？　なんだお前、ララと結婚すんのが嫌だってことか？》
「何……？」
　2人の視線が鋭くなる。
「嫌だ、って訳、でも……？」

「翔君？」
「主様、はっきりされた方がよいかと」
桜からガチの黒いオーラが漏れている。怒りのオーラとかではなく、マジの魔術的なオーラだ。
そしてコッコロもご立腹。顔は澄ましているが、口調がぶっきらぼうだ。
それだけではない。口には出さないが、みんなに全方位から睨まれている。
《おい。はっきり言えよ。どうなんだ》
わかったよ。頭が冷えたよ。はっきりと言うことにしよう。
俺が口を開こうとしたその時、
《ギド、あまりイジめてはいけませんよ》
《お前……》
別の人物が通信に割り込んできた。ヴェールで顔を隠した女性に、ギドもたじろいでいる。
「王妃……！」
「あ、ママだ！」
ザスティンとララが反応している。
通信に割り込んできたのは、デビルーク家の王妃、『セフィ・ミカエラ・デビルーク』だった。

変わる関係性　後編

場の空気が一変していた。
それは、突然通信に割り込んできた女性の力だった。
この人がデビルーク家の王妃、『セフィ・ミカエラ・デビルーク』か……!!　あのギドの威圧的な空気すら塗りつぶす優しい空気。ギドどころか、殺気立っていたみんなも、この空気に呑まれていた。
《セフィお前、公務は終わったのか？》
《はい、先ほど。ララ、今日は大変でしたね》
「全然大丈夫だったよ！　翔が悪い人をやっつけてくれたから！」
や、実際にはヤミとナイトの力があったからなんだけどね。俺、実際には囮になってたくらいだし。
《ふふ、そうなの》
ララの笑顔を見たセフィさんは、全てわかっているとばかりに微笑んでいる。恐らくペケが記録した映像やら音声やらをすでに見たのだろう。
《夜月　翔さん》
「は、はい」
《本日は娘を助けていただき、ありがとうございました。デビルーク王家を代表して、お礼を言わせていただきます》
そう言って、頭を下げた。
「いえ。たとえ無理やりでも娘さんを任された身なので。当然のことをしただけです」
《無理矢理でも、ふふ、そうね。どうせギドに無理やり押し付けられたのでしょう？　私の知らないところで》
《ふん……実際、頼んでおいて良かっただろうが》
《そうね。少し調べたけど、日本の聖天子様のお気に入りの武偵なのよね。それに見合った実力がある。そう思ったから彼に頼んだんでしょう？》
《頼みやすい奴に頼んだだけだ。ララが留学したいなんて面倒なことを言い出したのは、コイツと聖天子が悪いんだからな》

ギドはそっぽを向いて、早口でまくし立てた。
武力では最強でも、奥さんとの舌戦では最強ではないんだな。完全に言いくるめられてしまった。これ以上、この場でギドが主導権を握ることはないだろう。
突然の夫婦の会話、今までただ威圧的だったギドの意外な姿に、俺達は全員そろって毒気を抜かれてしまった。
そうして場の空気が和んだところで――セフィさんは本命の会話をぶつけてきた。
《それで、ララ？　結婚のことだけど――》
「うん。私、翔と結婚する！」
再び俺の腕に抱きつくララ。
身体を寄せ、それどころか密着状態になる。
そのことで俺の周りが再び、かすかに殺気立った。だがそれも、先ほどとは比べ物にならないくらい弱い。
《ララは夜月さんのことが好き？》
「んー……好き、っていうのはまだよくわからないけど……」
《うん》
セフィさんが優しく続きを促す。
「でも、翔が、仲良しの娘が危ない目に遭ってるのに、それでも私のことを見捨てないでくれて、すごくうれしかった。なんでか分かんないけど、すごくドキドキして。それでね……」
《……うん。分かったわ。そうなのね》
《っち》
セフィさんはすべて理解したと笑みを浮かべている。ギドに至っては俺を横目でにらみながら舌打ちしてきた。
気持ちは分かりますけどね!!　これ、もはや公開告白だからね!!
「はぁ……」
さらに誰かのため息が周りから聞こえて来た。
俺は今すぐにでもこの場を立ち去ってしまいたい気分だ。ダメですか？
「翔、言ったことの責任は取らないと」

「耀、お前は面白がってるな？」
「何を言っているのか全然分からない」
　空気に耐え切れなくて、耀と余計な漫才をしてしまう。
「だから私、翔と結婚したい!!」
《でもね、ララ。夜月さんには夜月さんの気持ちがあるのよ》
「翔の気持ち？」
　ララがこっちを向く。すごい近い距離で見つめあう。
「翔は私と結婚するのはヤダ？」
《そう簡単に答えが出るものじゃないのよ、ララ。ギドも、あなたのパパもそうだったから》
「そうなの？」
《そうよ！　この人ったら、こんなに美しい私がアピールしてるのに、全然ちっとも全く気にしてくれないんだもん》
《おい、やめろよ。その話は……》
　ギドが居心地悪そうにしている。だろうな。自分達のなれそめを話されるなんて、罰ゲーム以外の何物でもない。
　でもそれ以上に気になったのは、
「こんなに美しい私が……？」
　誰かが呟いた。
　確かに、顔がヴェールで覆われているとはいえ、間違いなく美形であることは分かる。でもそれを自分で言うか？　と、みんな思ってるんだろうな。俺は知ってたけど。
「じゃあママは、どうやってパパと結婚したの？」
《もう我慢の限界になってね！　私から押し倒し――》
「お、王妃!!　それ以上は!!」
　たまらずザスティンからのストップが入る。
　俺達はそろって目線が泳いでいた。唯一ララだけが、意味が分からずぽかんとしている。
　そうだったんですね。デビルーク王家はそういう感じで……。
「よくわからないけど、ママは何かして、パパと結婚したって事？」
《そ、そうね！　もちろん？　やり方は人それぞれだから私から教え

られないけど……！》
失言を悟ったセフィさんが少し慌てていた。
《だから、こうしましょう？　ララが夜月さんを、ララと同じくらいドキドキさせることが出来るようになったら、その時は改めて正式な婚約者になってもらう。今は、そうね……婚約者候補ってことで》
ララから俺にそして俺の周りにセフィさんの視線が移る。
《夜月さんも、周りの皆さんもそれでいいかしら？》
その提案に、俺達は頷くことしか出来なかった。

「ホント、疲れた……」
デビルークの人たちは帰り、俺はベッドに横になっていた。
下手すれば、今日戦った時よりも疲れたかもしれない。早く寝てしまおう。
端末を充電しようとして、
「ん、メールか……業務連絡？」
六課からの連絡メールだ。その内容は、
「夜勤が出来ないか？　ふんふん……なるほどね」
それは禁書目録の移送について。当日の夜に、何かあってもいいように待機していて欲しいという内容だった。

ギドの私室の扉が、扉を破壊しかねない力で開かれた。そうして入ってくるのは寝間着姿の２人の少女だ。
髪の長さこそ違うものの、その目鼻立ちは非常に似ている。瓜二つと言っていい。デビルーク王家の双子の王女、ナナとモモだ。
その２人は、机で資料を眺めていたギドに詰め寄る。
「お父様!!」
「父上!!」
「るっせぇな……もっと静かに入って来い」
ギドは資料を適当に放り、２人に向き合った。
「それで、どうした？」
「っ、どうしたではありません!!」
「そーだよ!!　姉上に婚約者ってどうしてだよ！」
２人は家臣にララの婚約のことを聞き、飛んできたという訳だ。
「その話か」
ギドは面倒そうに机に寄りかかった。
「誰に聞いたのかは知らねえが、言葉通りの意味だろ。ララに婚約者が出来た。正確には婚約者候補だが。ま、どっちでも変わんねぇだろ」
ギドにとっては終わった話だが、姉を慕う２人にはそうはいかない。
「向こうに行ってからまだ１週間ではないですか。それなのに、もう婚約者が出来たと？」
「そうだな。俺も驚いてる。やっぱり、セフィの考えは馬鹿に出来ねぇ」
「今までどんなヤツ相手でもヤダって言ってたのに？」
「ああ。コイツだ。見るか？」
人の気持ちはそうコントロール出来るものではないとは言え、モモもナナも、急すぎる決定に納得が出来ていなかった。
ほら、とギドは手元の資料を２人に差し出した。

２人はその資料をひったくり、２人で持って目を通し始めた。すぐにモモは気が付いた。
「この方……お姉さまの護衛を依頼した、現地の武偵ではありませんか？」
「え!?　じゃあコイツ、自分の護衛対象に手出したのか!?　ヤバい奴じゃん!!」
モモの言葉にナナが激しく反応した。そしてその視線はギドに向けられた。どうしてそんな相手との婚約を認めたのかと。
「手ェ出した、ねぇ。確かにアイツの行動が全部計算なんだったら、見事なもんだけどな」
「違うという事ですか？」
くつくつと笑うギドに、モモは静かに問う。
「ああ。全くの逆だ。ララの方が猛アタックしてるんだよ。むしろ向こうの方が戸惑ってたぜ」
「それは……」
「姉上がぁ？　ホントにぃ～？」
まさかの事実に２人はそろって首を傾げた。
三姉妹の中では一番年上のララだが、一番子供っぽい性格をしているのもララだ。身体ばかり立派に育ってしまい、精神は幼いまま。
男性の目線どころか、己の裸体を他人に晒すことすら羞恥心を覚えていないほどだ。
そんなララが男性にアタックしているという話は、にわかに信じがたい事だった。
「しかも今回のことは、セフィも認めてるんだ。小賢しいことを考えたとして、アイツに通じると思うか？　あのセフィに？」
「「……」」
ギドのもっともな意見に、２人は口を開けない。その様子を見たギドは軽く手を振った。
「これ以上俺に聞いても仕方ねぇぞ。そんなに詳しい話を聞きたいなら、ララに直接聞くんだな。電話でも何でもしてよ」
その言葉を最後に、２人は部屋を追い出されてしまった。

２人は並んで、自分の部屋へ帰っていた。その手には貰った資料が握られている。
「どーなってんだろうな……」
「私にも分からないわ。まあ、昔からお姉さまには唐突なところがあったから……」
ララの思考を完全に理解している人間など、おそらく母親しかいないだろう。その母親が認めたというのなら信用出来るのかもしれないが、それでも心配なのは変わらない。
「こうなったら、私達が直接見極めるしかないかもしれないわね」
「直接、ってつまり……学園島に行くってことか!?　父上と母上が許してくれるかな？」
「そんなことを言ってる場合じゃないわ。お姉さまみたいに、こっそり行くしかない」
「お前、時々すっごい事言うよな……」
ララは小さい頃から城を抜け出してあっちこっちに遊びに行っていた。それを行おうというのだ。
覚悟を決めたモモ。普段はまじめな優等生を演じているが、いざとなったら手段を選ばないのだ。
ナナも、その意見に特別反対するわけではなかった。すぐに賛成する。
「でも、学園島、学園島かぁ……へへ」
「どうしたの？　ずいぶんと楽しそうだけど？」
にやにやと笑いだしたナナ。
「や、学園島に行けばさ、また耀とメアに会えるかなーって。前々から言っておけば時間作れるかな？」
「あなたね……目的はお姉さまの婚約者だからね？　そこを忘れないでね」
「分かってるって!!　ひひっ、日程が決まったら知らせないとなー」
はしゃぐナナを見て、モモはため息を吐いた。
「（あなたの場合は、お友達に会いたいだけでしょう？　別にいいけど。こんなにはしゃいで、子供なんだから……）」

あからさまに様子がおかしいと、城の人間に気が付かれてしまわないか。そのことを心配するモモだった。

世界のどこかにあるラボの1つ。篠ノ之　束はそこで、両手足を使ってキーボードを叩いていた。
足の指すら器用に使い、文字を打ち込んでいく。同時に接続されているモニターは１０を超え、その全てに全く別のプログラムソースが構築されていた。
「ふんふふーん♪」
ノリにノッている束。
シャーロックがいなくなったことで、もはや束の行動を制限する存在は居ない。制限できる存在もいない。ただひたすらに、自分のやりたいように好きなことを行うのだ。たった1人で学園島の科学を上回る天災が、新しいおもちゃを作成している。
そんな束に、恐れ多くも声をかける人物がいた。
「束様」
「ん？　どーしたの？　くーちゃん」
束はその体勢のまま応じる。その間も作業のスピードは全く落ちない。まるで別の脳みそを使っているかのようだ。
声をかけたのは束の側近であるクロエ・クロニクル。流れるような銀髪と白と青のゴスロリ系ドレスに身を包んでいる。
その目はずっと閉じられているが、瞼の奥の視線は束に向けられていた。
「あの男、失敗したようです」

「あー、そうなんだ。デビルークの技術には興味あったんだけどなー、残念無念だねー」
　束はそんな軽い調子で笑う。
　そう、あの男にスタンド能力を与え、ララの誘拐を陰から支援していたのは、この天災、篠ノ之束だった。
　束はイ・ウーが壊滅する際、ホワイトスネイクによって取り出されたスタンドＤＩＳＣを持ち出していた。そのＤＩＳＣを男に与えていたのだ。
「じゃ、今頃死んじゃってるかな？　そういうふうに書き込んでおいたし」
「ヘブンズ・ドアー……恐ろしい能力ですね」
「ま、寝返って攻撃されるのは面白くないしね。裏切り者には死を！　だよね！」
　束は虚空から特殊なグローブを取り出す。手に装着し、自分の頭に突き刺した。引き抜かれた指はＤＩＳＣを摘んでいた。そのＤＩＳＣにはヘブンズドアーの絵が描かれている。
　これもホワイトスネイクの能力を解析して作成したものだった。アゼンダがヤミを襲った事件で、メアがスタンドを回収した時に使ったものだ。
「はい、しまっておいて」
「かしこまりました」
　投げられたＤＩＳＣを、目を閉じたままキャッチするクロエ。
「ですが、良かったのですか？　あのスタンド、かなり使い勝手の良いものでしたが……ヘブンズ・ドアーで書き込むにしても、何があっても情報を秘匿する、という形にしておけば……」
「いーのいーの、いいんだよ。使うときには使っとかないとね。出し惜しみばっかりしてたら、心が貧しくなっちゃうもん。それにスタンドの能力がいくら強くても、学園島には心理掌握（メンタルアウト）がいるからね。殺すのが安心だよ」
「そうですか……」
　束の意見は絶対だ。束が言うのならば、絶対の忠誠を誓っているク

ロエがそれ以上何か言う事はない。
「じゃ、今日のご飯もよろしくねー！」
「……かしこまりました」
クロエが作る料理は、すべてベル状の何かや炭になってしまうのだが、それを一切気にしない束は毎日のように料理を作らせていた。
クロエが部屋を後にしても、束の作業は終わらない。いや、終わった端から新しい作業に取り掛かっている。
「……それに、彼の戦う所も見れたしね」
ウィンドウが立ち上がり、動画が再生される。

「アイツは生理的に無理で５分以上近くに居たくはなかったけど、こっちならいっかなー」
束はうっとりと画面を眺めている。
「未知の技術すら作成する能力。能力を生み出す能力。ホント、わくわくしちゃうよね！　――これからどんどん面白くなりそう♪」
そう言って笑うのだった。

婚約（候補）報告

目覚ましが鳴っている。
「もう朝か……」
俺は目覚ましが無くても起きれるタイプなんだけどな……今日は無理だった。それだけ昨日の疲労が大きかったってことなんだろう。
でも今日も朝練はある。あのまま別れてしまった綺凛のこともあるし、休むわけにはいかない。
「あぁ～……あれ？」
目を閉じながら体を伸ばすと、布団の中に明らかに俺以外の人のぬくもりを感じる。これは、誰か入ってるな。や、それにしても、人肌が人肌過ぎる。我ながら意味の分からない表現だな。
でも、そうとしか表現出来ないのだ。俺と相手、2枚の寝間着越しに伝わってくるにしては暖かい体温。これはもしや……
そう思って手を伸ばす。すると、何やら細いものを掴んだ。
「ひん!?」
「え……？」
耳元で聞こえた声に俺の意識が一気に覚醒する。
「ひぁ、あぁ、っ、し、しょうぅ？　し、っぽはダメぇ、ああっ！」
「ラ、ララ!?　何でここに……!?」
昨日帰ったはずじゃなかったのか？　や、確かに帰ってたよな!?
「しょれよりもっ、っしっぽ、はなし、いぁ……っ」
もじもじと体をこすり合わせるララ。甘く湿っぽい吐息が、ララのものとは思えない甘い声と共に俺に吹きかけられる。
しかもララは何も着ていない。布団のおかげで下は見えないとしても、豊かなふくらみが作る谷間が、俺の目に飛び込んでくる。
や、だからヤバいって……!!
俺は急いで尻尾から手を放すが、時すでに遅し。朝という事もあり、俺の息子がおっきしてしまった。
漫画だからそんな描写が無いだけかもしれないけど、リトさんマジヤバいよ。これを耐えてたのか。リトさんの誠実さは度を越えてる

よ！

尻尾を触られていたことで荒くなっていた息を整える姿も、見方によっては……というか、どう見ても行為を致していたとしか見えない。ララ、裸だし。

もちろん、身体が正直に反応していたとしても、欲情のままに襲い掛かるなんて馬鹿な真似はしないけどな！　そんなことをしたら婚約者を通り越して夫になってしまう。

息を整えたララに、俺は懇願する。

「ララ、これからはこうやって布団に忍び込むのはやめてくれ……」

「え？　どうして？」

いまだ固く反り返った俺のイチモツがララに触れないように、少し体を離しながら口を開く。

「色々と、俺の我慢の問題で……」

「え？」

当然の様にララは意味を理解できていない。性知識があったら、裸で忍び込んだりしないな。や、忍び込む場合はあるか。完全に夜這い目的で。

「や、だから……そもそも何でここにいるんだ？　昨日は帰ったよな？」

流石に王女様に性教育するつもりは無い。詳しい説明は避けて状況の説明を求める。

「あの後、ママとも話してね、こっちに来たんだ」

「来たって、部屋は!?」

まさか、これからずっと俺の部屋に住むつもりなのか!?

「この建物の上空に、私の飛行船を泊めてあるからそこに住むよ。あ、廊下の奥にワープポータルは置かせてもらうね？」

「あ、な、なるほど」

つまり、『ＴｏＬｏｖｅる』原作のようになるわけか。

「うん！　これからずっと一緒に住もうね!!」

「うんうん、それは良かったね？」

あれ、何か、似た声が全然違う声色で聞こえたんだけど？

視線を移すと、エプロン姿の女の子がベッドの脇に立っていた。
「ア、▪アスナさん……？　おはようございます？」
「おはよう、翔君。そろそろ朝練の時間だから起こしにしてみれば……昨日の今日で『コレ』なんだね？」
俺とララを交互に見たアスナがにこりと笑う。
それは絶対に誤解してる。けど、
「否定できる材料が無い……!!」
同じ布団に裸の女の子がいて、下半身はびんびんに反応していると なると……たとえセフィさんでも言い訳出来ないだろう。
「あ、おはよう、アスナ～」
ララは目を擦りつつ、布団から起き上がる。その時、裸体にタオルケットを巻きつけながら、布団に女の子座りになる。
そうすれば当然、俺の身体からは布団がはがれてしまう訳で。
「ふ～ん、そうなんだ？」
「いや、これは……」
見事なテントを作った俺の下腹部が、アスナの視線を受けて少しだけ力を失う。
朝から誤解を解くために時間を使うことになった。

何とか説得に成功した俺は、ギリギリで朝練に間に合った。
朝練開始前に、昨日あったことを2人に説明した。綺凛が襲われたことはアインハルトも知っていたみたいだ。つまり今回説明するのは、ララとの婚約関係の話になる。
「な、なるほど。そうなんですね……こ、婚約者候補ですか……」

「……」
アインハルトは何とか飲み込んだようだが、綺凛からは反応が無い。
「でもまあ、別に何か変わるわけじゃないぞ。みんなとも会っちゃいけないって言われてる訳じゃないし。あくまでそう言う目で見られるようになっただけだ」
それはそれでどうかとは思うけどな。
「そ、そうですよね!! 別に翔さんがその気にならなければ……!!……なりませんよね？」
「アハハ……でも先輩、いろんな女性とお付き合いされてますからね」
「はっ！ そうでした……!! このままだと、翔さんがこのままだと、翔さんがデビルーク王国に……!?」
ようやく口を開いた綺凛の冗談も、どこか覇気がないように感じる。や、言ってる内容は全然冗談じゃないんだけど。
綺凛の様子に、動揺しているアインハルトは気が付いていない。
「綺凛。昨日のことはもう気にするな。全然迷惑じゃないからな」
俺は改めて念押しする。すると綺凛はかすかに微笑んだ。
「はい。ありがとうございます。それじゃあ、練習始めましょうか」
何となくよそよそしい綺凛は、そう言って背中を向けてしまう。そうして朝練の最初のメニューであるジョギングを始めた。
「私達も行きましょうか」
「……そうだな」
まだ昨日のことを気にしているのは明らかだが、今これ以上何か言っても無駄だな。少し時間をおくしかないか。
そう考えた俺は、綺凛の後を追って走り出すのだった。

いつものジョギングコースを走る最中、前を走る綺凛に追いついたアインハルトは、声をかけた。
「綺凛さん。改めて私からも、ご無事で何よりです」
「……はい、ありがとうございます」
「その……」
こうしてまじかで見ると、流石のアインハルトも綺凛の異変に気が付いていた。そう言う相手を元気づけるという経験が少ないアインハルトは、それ以上の言葉が出ない。
「アインハルトさん」
「は、はいっ。何でしょうか？」
アインハルトが何も言えないでいると、綺凛の方が口を開いた。
「アインハルトさんは、ご先祖様の無念を果たすために強くなろうとしていたんですよね？　昔、戦いに向かう聖王様を止めることが出来なかったから」
「そうですね。今も、それは残ってしまっていますが……」
インターミドルの大会で、エレミア相手に暴走してしまったのは記憶に新しい。過去の記憶で我を忘れてしまったのは、自分が過去を乗り越え切れていない証拠だ。
「その気持ち、少しだけ分かったような気がします」
「え？」
「自分の力が足りなくて、悔しい思いをして、強くなりたいって、そういう気持ちになることが」
それだけ言うと、綺凛はさらにスピードを上げるのだった。

「おいっす。昨日は大変だったな」
学校に到着するなり、笑みを浮かべながら矢瀬が声をかけて来た。
コイツ、絶対昨日のことを分かって聞いてきたな。
「よく知ってんな、お前」
「そりゃ話題にもなるだろ？　ララ王女の誘拐未遂が武偵高の中で起こりそうになったんだぞ？　知らないヤツの方が珍しいぞ」
それもそうだ。話題にされても不思議じゃない。何も不自然じゃない。
だから俺もこう言わせてもらう。
「ああ。そうだな。でも、事件の詳細は話せないぞ。口止めされてるからな」
「でも、今日も変わりなくララ王女が登校してきたってことは、護衛の仕事はしっかり果たせたって事かにゃー？」
いつの間に来ていたのか、土御門が混ざってきた。胡散臭いサングラスがきらりと光る。
「その辺りも言えないな」
その問いに対しても、肩をすくめる。何も言いません。君達みたいな諜報のスペシャリストに問い詰められたら、いらんことまで喋ってしまいそうだ。
「ま、そりゃそうか」
「他の連中が向こうにも聞いてるが、全員撃沈だからにゃー」
土御門がヤミを指さして言った。
丁度声をかけられているが、
「私から言う事はありません」
そう言って対話を完全に拒否していた。
ヤミは俺よりもプロだからな。言っちゃいけないことをしゃべることは絶対にないだろう。そこは安心出来る。
「でもまあ、あと1人いるからな」
「そうだな。ある意味、一番口が軽そうなヤツが」
そう問題は、
「おはよー！」

メアが登校してきた。
問題はこっちだ。言わないよな？
待ってましたと言わんばかりに生徒が殺到するが、
「ごめんね～、そのことは言うなって言われてるんだ～」
口調は軽いがそれ以上のことは言わない。笑顔で生徒の壁を突破したメアは、自分の席に座った。そして昨日の事件のことで声をかける人はいない。今の一瞬で、メアから情報を引き出すことは無理だと悟ったんだ。
「意外だにゃー」
「ああ。てっきり、もう少し思わせぶりな態度を取るかと思ってたんだが」
そう言う2人だが、余裕綽々だ。メアが最初からこうすることを知っていたみたいだ。
そういえばこの2人って、メアのことも知ってるのか？　立場的に知っていてもおかしくなさそうだけど。
俺はメアの席に近づく。
「ん？　どーしたの、翔君？」
「昨日のこと、変なことは言わないでくれよ」
「もちろん！　そんなことしたら、こわーい人に捕まっちゃうもんね～？　そうしたらここにもいられなくなっちゃうし。それは困るもん。何も言わないよ、安心して」
それは一安心だ。
「そうじゃないと、翔君も気持ちいいことも出来なくなっちゃうしね。あ、でも別に私は学校じゃなくてもいいんだよ？　外でも呼んでくれれば――――」
「はいはい。それじゃあよろしくな」
昨日のことは、俺達の口から外に漏れることはなさそうで安心した。

「昨日はすいませんでした」
「いやいや、ええよ。そっちも大変だったやろ？」
「そうだよ。そっちが落ち着くまで無理に出勤しなくても大丈夫だよ？」
俺は六課に出勤して一番に八神部隊長となのはさんに頭を下げた。
昨日のごたごたのせいで、俺は六課に行けなかったのだ。もちろんそのことは連絡済みだし、特に事件もなかったから、実害は訓練に参加しなかったくらいだけど。
「いえ、そういう訳には」
事件からまだ1日しか経っていないとはいえ、捜査はかなり難航していると聞いている。やはりスタンド使いの本体が死んでしまったことが大きいようだ。
身元は島の外で手配されている犯罪者ということが分かったが、どうやってこの島に来たのかがわからなかった。
入島履歴にも監視カメラにも、どんな記録にも残っていないのだ。島の誰かが手引きしたにしても、ここまできれいにセキュリティをすり抜けるのは尋常ではない。
スタンド能力についても、持っていたという記録はないため、ここ最近で手に入れたのは間違いない。だが、その入手経路もわからないままだった。
「スタンド能力か……島の外の人間も持ってるっちゅうんは少し怖いな」
「そうだよね。いつの間にか島外の人にも発現するようになってるなんて……」
「……どうなんでしょうね」
と言う俺だったが、可能性は2つに一つだと思っていた。

１つは耀をアナザーオーズにしたヤツの仕業。もう１つはゾンビのスタンドであるホワイト・スネイクのＤＩＳＣだ。どちらの可能性も十分にありうる。
どちらにせよ、これまで以上に悪意を持ったスタンド使いの攻撃に備えないといけないのは確かだ。今回はララだったが、前はヤミやフェイトさんが狙われたこともあった。
２人とも実力者のはずだが、スタンドの前では遅れを取っている。もともとは取るに足らないような相手だったにもかかわらず、スタンド能力を手に入れたことで、相手を一方的になぶれるようになってしまった。
「改めて恐ろしい能力だね、スタンド能力」
「そやな。でもこうしてみると、夜月君のスタンド能力が少ししょっぱいようにも思えてくるなぁ」
「ははは、そうですね……」
部隊長の遠慮のない言葉に、俺は苦笑いを返すしかない。
そう言えば、俺の牙（タスク）は何時になったらＡＣＴ４に進化するんだろうか。
コイツを手に入れてから結構経っているけど、やっぱりＡＣＴ４は俺１人の力じゃ発動できないんだろう。そのためには相棒が必要だけど、騎乗スキルがあればその条件も満たせるんだろうか。
「で？　そろそろそっちのお方について、説明して欲しいんやけど？」
「そうだね。とりあえず、１回離れたほうがいいかな？　後ろの人も睨んでるし、ね？」
「や、俺が自分から近寄っているわけじゃないので……ララ、ちょっと離れて欲しいんだけど……」
「はーい」
俺の腕を取り抱きついていたララが、ニコニコと俺から離れた。
そう、学校からここに来るまで、ララはずっとこの態勢で俺にべったりくっついていたのだ。
学校を出るところから電車に乗る時も、さっきのあいさつの時にもずっとこの態勢だ。

「注意しなかったん？」
「しましたけど……」
「すぐに元に戻ってしまうので」
雪菜とアスナのボルテージは限界寸前だった。俺にはもう後ろを振り向く勇気はなかった。
俺は婚約のことについて説明した。
「ははぁ……」
「ええ……」
「そう言う事になってしまって」
「えへへ～」
ララが笑いながら俺に抱きついてきた。注意してもすぐに元に戻るというのはこの事だ。
「や、君も来るところまで来たなぁ……」
「そうだよね。王族の婚約相手なんて……」
「候補ですからね。まだ決まったわけじゃないですから！」
八神さんとなのはさんは驚くと言うより、もはや感嘆している。
「あ、翔。来てたんだね。２人共、どうしたの？」
そんな場面でフェイトさんが顔を出した。
「あのですね」
俺が説明しようとして、
「夜月君、婚約したんやって」
「え――――えええええええええええっ!??!?!!?」
無駄を省いた八神さんの間違った説明によって、フェイトさんの絶叫が響き渡るのだった。

禁書目録　編

禁書目録輸送ミーティング

「こここここここ婚約？　ええっ!!??　翔が!?　ウソ!?　え、ホント!?　ホントに!?　ど、どど、どういうこと?!」

「おやおや、これはこれは……」

「フェイトちゃん……」

「「……はぁ」」

「分かりやすくて、これはこれで」

これ以上なく狼狽するフェイトさん。

八神さんがニヤニヤと笑い、なのはさんも何とも言えない表情になっている。

後ろからは2人分のため息と、耀の楽しそうな声が聞こえて来た。

「……詳しく説明しますね」

フェイトさんにも同じことを説明した。

「は、はぁ～、なんだ、そうだったんだね。良かった～」

……良かった？

「翔君、ホントにいい加減にしたほうがいいと思いますよ？　見境なしなんですか？」

後ろから桜の冷たい声が聞こえてくる。

い、いや、そんなことを言われましても……

「はいはい！　フェイトちゃんがこれ以上墓穴掘る前に、翔君は今度の移送について、ミーティングがあるからミーティングルームに行って。他の人は先に訓練場に向かってね。ララさんは……フェイトちゃん、時間あったら見ててくれないかな？」

「なのは？　それはいいけど、墓穴って？」

まあまあ、とフェイトさんの肩を押して進んでいく。不満そうな顔をしたみんなも、この場では怒気を収めて訓練場の方向へ。俺はなのはさんと一緒にミーティングルームに。

俺達はそれぞれの場所に分かれるのだった。

みんなと別れた俺は、六課のミーティングルームに来ていた。
「それじゃあ、当日の予定について説明するぞ」
前に立つのは蛇倉さん。部隊長は別の仕事に向かったのだ。
席についているのは俺、なのはさん、スバルさん、ティアナさん、蛇倉さんだ。
「今回はイギリス清教の重鎮、と言っていいのかわからんが、必要悪の教会では『禁書目録』と呼ばれている、『ナニカ』の輸送についてだな」
蛇倉さんが口を開く。
「ナニカって、何かはわからないんですか？」
早速スバルさんが手を挙げて質問している。
「イギリス清教の秘密兵器、魔導書図書館、色々な呼び方をされてる有名な一品だが、詳しいことはあまり知られてねぇな。名前のまま禁書の目録なのか、武器なのか、あるいはそういう能力を持つ人間なのか」
「ただ、魔術に対して最強に近い対抗力を持っている。というところはすべての噂に共通してるわね」
蛇倉さんの説明をティアナさんが補足した。
「つまり、イギリス清教の虎の子だ。そいつが国を離れて輸送されてくる。どこかの誰かに狙われてもおかしくないよな？」
「た、確かに！」
スバルさんが素直に頷いている。
狙われてもおかしくないんじゃなくて狙われるんだよ。もうそこは諦めないと。俺とネームドキャラクターが揃う出来事では何か起こる。
俺のある所に事件アリ。こう考えると、俺って死神ですか？

「ただ、極秘の輸送だから警備の人数は最小限。それは俺たちもそうだが。向こうは腕利きの魔術師を２人つけるらしい」
「２人……本当に最小限ですね……」
「ああ。次のページに行ってくれ」
　言われた通りページをめくると、２人分のプロフィールが載っていた。顔写真付きで、簡単な経歴もまとめられている。ざっと目を通してみるが……うん、予想通りの２人組だ。安心したぜ。
「これがその魔術師だ」
「うわぁ……」
「えぇ……」
　スバルさんとなのはさんが若干引いた反応をしている。この写真を見れば無理もないけど。
　１人は男性。漆黒の修道服に赤く染め上げられた髪。１０本の指すべてにゴテゴテとした銀の指輪が嵌められ、両耳にジャラジャラと提げた毒々しいピアスがたくさん。極めつけに右まぶたの下のバーコードのようなタトゥー。
　もう１人は女性。比較的普通の服装だ。髪型も黒髪をポニーテールだし。ただ、Ｔシャツをへそが見えるように裾結びして、履いているジーンズの裾を片方、根元までぶった切ってるくらいで。
　見かけで差別はしたくないが、何も知らずに街で見かけたら、絶対にお近づきになりたくない風貌をしている。
　おなじみ、ステイル＝マグヌスと神裂　火織だ。インデックス絡みでこの２人が出てこないと逆に不安になるからな。
「す、すごいですね、魔術師の人って……」
「そうだね……」
「あ、そっか。救助隊と教導隊だと、あんまり魔術師と会う機会はないのか」
　唯一ティアナさんは、２人の格好を見ても驚いていなかった。
「捜査してるとね。割と見ることがあるのよ、魔術師」
　執務官であるティアナさん、それからフェイトさんは凶悪犯罪を担当することが多い。各地で様々な捜査を行っているのなら、そういっ

た経験が豊富でもおかしくはない。
「最初は私も驚いたけどね。こういうのって、魔術的な意味？　があるらしくて。向こうにとっては普通の恰好なんだって」
「ふーん。アタシ達のＢＪみたいなものなんだね」
　そう言えば、スバルさんのＢＪもへそ出しのローラースケートだもんな。あの格好だって、相当ヤバい。ＢＪに違和感ないのは、単純にＢＪを着用している人が周りにたくさんいるからだ。
「そうだね！　変な格好だって思っても何も言わないようにするね！」
「アンタ……絶対に言うんじゃないわよ……」
　ティアナさんは怖い顔で念押ししている。
「奴さんはプライベートジェットでこっちに来ることになっている。民間機じゃない。乗っているのは禁書目録と向こうの魔術師が１人。ステイルって奴が乗ってるな。もう１人は空港で待機する手はずになってる」
　蛇倉さんの説明を頭の中で噛み砕く。
　つまり空港にいるのは神裂か。飛行機に乗ってるのはインデックスとステイル……あれ？
「パイロットは乗ってないんですか？」
「乗ってないな。ＡＩ制御のオートパイロットだ」
　俺の質問に蛇倉さんは資料をめくって答えた。
「多分、情報の秘匿のために、輸送に関わる人数も最小限にしてるんだね」
「高町さんの言う通りかと。だが、機械制御にすると、それはそれで弱点ができる」
　ハッキングされたりってことか。
「そうだな。ＡＩ制御の機械で専門家が乗ってないってのは、それだけ電子的な攻撃に対して無防備だってことになる。同乗してるっつー魔術師が、スーパーハッカーだっていうなら話は別だけどな」
「それはもう、機械が苦手とか、苦手じゃないとか、そういう次元じゃないですよね……」

魔術師はなぜだかは知らないが、機械の類が苦手という人が多い。中にはそうじゃない人もいるかもしれないが、ハッキングを防げるレベルでＰＣに強い人はいないだろう。
最悪、コントロールを乗っ取られれば、墜落の危険もある。
「しかも面倒なのは……これだ」
ディスプレイが操作され、学園島の全体図が映し出される。島を一直線に横断する形で線が引かれている。
「立地的な条件で、こうして島の上空を飛ぶようなルートになってる。島に墜落したら一大事だな」
「えー!? ぐるっと海の方を飛んでもらうことはできないんですか!?」
スバルさんが指でディスプレイをなぞる。島の外の海上を飛ぶような形に。
「他の便との兼ね合いで出来ないな。せっかくこっそり運んでるのに、通常便の予定を変えちまったら、そこに何かありますよって言ってるようなもんだろ？」
「それはっ、そうですけど……」
人命が危険にさらされることが、スバルさんには我慢できないらしい。
「それに市民さまが安心して暮らせるように、俺たちが仕事をするんだ。そうだろ？」
「……はい。そうですよね!! 頑張ります!!」
むん！ とやる気を込めるスバルさん。蛇倉さん、スバルさんを乗せるのがうまいもんだ。
「よし！ つー訳でスバルとティアナは空港待機だ。不審者の捕縛、飛行機にトラブルがあった場合の対処、その他諸々だ」
「はいっ!!」
２人が声を揃えて応える。
「そして翔となのはさんだが、２人は六課で待機。主に空戦を想定している」
「飛行機に何かあったら飛んで行けってことですね？」

「そうだ。どちらのチームも臨機応変に対応してくれ」
『何が』起こるのかわからないからな。だが『何か』は起こるという勘がある。悲しいことに、この勘は当たってしまうことになりそうだ。
「なのはさん、よろしくお願いします」
「うん。こちらこそ。後ろは任せてね」
「……俺には当てないで下さいよ？」
「にゃはは。そうならないように、しっかり連携訓練しておかないとね？」
そういう形で、打ち合わせが終了するのだった。

翔が打ち合わせに出席している頃、ララとフェイトは食堂の中でくつろいでいた。
最初のうちはお行儀よく待っていたララだったが、今では暇を持て余してしまっていた。
「あー……翔まだかなぁ。何にもすることがなくて暇だよ～」
「あはは、でも打ち合わせが終わったらそのまま訓練だから。しばらくは一緒にいれないと思うよ？」
「頑張ってる翔の姿は見たいから大丈夫!!」
「そ、そっか……」
キラキラとした笑顔に
フェイトは慎重に口を開いた。
「ね、ララさん？　翔と、こ、婚約？　したいっていうのは、どうなの、かな？」
「え？　どうって？」
「どうっていうのは、その……」

フェイトも自分の中の考えをうまく言葉にできないでいた。出て来たのはありきたりな質問だった。
「翔の事、好きなのかなって」
口に出しただけで、恥ずかしさで顔が熱くなる。そんな問いに、ララはあっけらかんと答えた。
「あ～、それね～」
フェイトはララから昨日の事件のあらましを聞いた。フェイトも昨日ララの誘拐未遂が起きたのは知っていたが、その場でどのような言葉が交わされたのかは、初めて知ることになった。
「それでね。その時から翔のことを見るとドキドキするようになっちゃって。結婚するなら翔しかいないって思ったんだ」
「そうなんだ。翔らしいね」
ニコニコと語るその態度を見れば、経験の無いフェイトでもわかってしまう。
ララが翔に恋してしまっていることが。
「(そうだよね。そんなこと言われちゃったら、王女様が婚約者にしたいって思うのもしょうがないかも)」
「翔って他の人にもああいう事言ってるのかなぁ？」
「そうだね……結構色々な人に言ってると思うよ」
フェイトがぽっと思いつくだけでも、その数は片手では足りないくらいだ。周りにいる女の子全員がそうだとすると、１０数人規模だ。
「そっかぁ、じゃあ他にも翔と結婚したいって思ってる人いるかもしれないね」
「そ、そうだね……」
結婚まで考えている人が何人居るのかは分からないが、少なくとも翔のことが好きだと言う人には何人も心当たりがある。
「じゃあ翔は、その人達の誰かと結婚したいって思ってるのかな？」
「ど、どうなんだろうね？　翔もまだ高校生だし、あんまり結婚とか考えてないんじゃないかな？」
「かなー……」
王族である自分と一般市民の価値観の違いに、まだララは慣れてい

ない。
「でもやっぱり、このドキドキって翔のことが好きってことだよね」
「それは……」
　フェイトは頷けなかった。だがそれは、経験がない自分が無責任なことは言えないと思ったからであり、心の中では理解している。
「でも、これが好きって事だったらうれしいな」
「え？」
「だって昨日から、ドキドキするようになってから、ずっと楽しいんだもん。翔といろんな楽しいコトして、翔も私にドキドキしてくれるようになったら、すごくうれしいなって」
「（ま、まぶしい!!　うう、こんなことなら、私も学生時代にもっと経験しておけばよかったかなぁ……）」
　仕事や執務官試験の勉強に明け暮れた自らの青春時代を思い出し、少しだけブルーになるフェイト。そんなフェイトにララは問いかけた。
「フェイトにはそういう経験ないの？　誰かのことを考えて、ドキドキすることって」
「ううん、私には――――」
　否定しようとして、
「（……あれ？）」
　重要なことに気が付く。
「（私も、翔と会う時にドキドキしてる……？）」
　どきん、と心臓が跳ねた。
　多い。恋を恋と自覚出来ていないララと、自分と共通点が。
「（つ、まり？　私……私も、翔のことが、好――――）」
　その結論に到達する直前、フェイトの思考が正体不明の感情で沸騰する。
「（いやいやいや！　ないよね！　だって翔だし!!　ヴィヴィオのお友達のお兄さんで、今は一緒に働く同僚ってだけなんだし!!　そうだよ！　大体、年だって結構離れてるし!!　エ、エリオと同じくらいなんだよ？　そんな相手に、そんな……）」

いくら言い訳を重ねてても、心臓の鼓動はどんどん早くなっていく。
その様子に気が付いたララが、心配そうに首を傾げた。
「どーしたの？　顔、真っ赤になってるよ？」
「へっ!?　あ、そ、そっかなぁ？　あはは～……た、確かに暑いかも～!?　汗までかいてきちゃったっ」
少し胸元を上げて、手で顔を扇ぐ。だがそんなものでは、火照った顔は全く冷やされない。むしろ他人に指摘されたことで汗までかいてきた。
「ホントにへーき？」
「うん！　大丈夫だから気にしないで!!」
「そっか。それで、フェイトは経験ある？」
ララは改めて問いかける。
「そ、そうだね……学生時代は全然、そんなことなかったよ？　あっ」
「そっかー、そうなんだね」
「あ、うん。そうだよ……ほっ」
思わず『学生時代は』という言葉をつけてしまったことに焦ったフェイト。ララが細かい言葉尻をつつかない性格だったから助かっていた。
一安心したフェイトだったが、
「あっ?、翔だ！」
「ッ??!!!」
再びフェイトの心臓が飛び跳ねる。
「そっ、それじゃあ、翔も来たし私は行くね!!」
「え？　うん、それじゃあね～」
急に立ち上がったことで、床と椅子が擦れ不快な音をたてたが、そんなことを気にしてはいられない。
「あ、フェイトさ――――」
「ごめん翔っ、これから仕事があるから!!」
返答を聞かず、逃げるように隣を通り過ぎた。爆発しそうになる心臓を押さえながら。

翔の本性　前編

「ん」
　目が覚めた。そして布団を確認する。
「ふう……」
　よし、誰も入ってないな。ララはしっかり言いつけを守ってくれたみたいだ。これがいつまで続くのかわからないが、とりあえず一安心。俺が暴走する可能性が減ってくれた。
「よっと」
　俺は布団から起き上がった。今日も朝練だ。結局、綺凛との仲はあのままだけど、サボるわけにも行かない。
　昨日は六課でインデックス輸送のミーティングを行った。輸送決行日は今週末。当日は夕方から六課に行くことになっていて、それまではお休みだ。それまではしっかりと体を休めるようにしよう。
　部屋の外に出たところで、
「あ、翔！　おはよー！」
「っ!?　ラ、ララか……！　お前な……」
　ばったりとララに遭遇した。タオル1枚巻いただけという姿のな!!
　シャワーでも浴びたのか、髪が湿っている。それどころかララの周囲だけ、少し湿度が高いようにも感じる。まず間違いなくシャワーを浴びてきたな。や、じゃなかったらタオルを巻いた姿で出歩くわけがないな……ないよな？
「ララ、シャワー上がりか？」
「うん、そうだよー？」
　それが？　とでも言いたげなララ。色々と言いたいことはあるが、
「ララ、お風呂上がりにタオル1枚でうろつくのはやめような？　もちろん裸もダメだぞ？」
「えー？　だって着替え忘れちゃって。ペケもまだ充電中だし……」
「今度から忘れないようにしなさい。もしも忘れたら、誰か人を呼んでくれ……俺以外でな!!」

「はーい」
慌てて最後に付け足すと、ララは素直に返事してくれた。
言ったことは素直に守ってくれるのは本当に偉いと思う。それにしてもリトさんにとってはこれが日常か……
「……翔？」
その声に、背筋がぞわりと震える。
この特徴的なアニメボイス。そう言えば婚約云々の時に家にいなかったな……
「ア、アリア？」
後ろにいたのはお久しぶりにみるアリアだった。顔を真っ赤にして犬歯をギラつかせている。これはどう見ても噴火寸前といったところだ。
「その後ろのお方は、いったい何をしているのかしらぁ？」
「や、これは、それよりも拳銃はヤバいって!!　相手は王族!!」
「ッチ!!」
盛大に舌打ちしたアリアは、掴みかけていた拳銃を離して腕組みする。
「ちょっと話があるんだけどいいかしら。それともお邪魔だったかしら？」
「もちろん問題ありません！　さ、ララ、君は自分の部屋に戻ろうね？」
「はーい」
返事をしたララは廊下の奥へ駆けて行った。
それを見送った俺達は、リビングに向かい、テーブルに向かい合わせに座った。
アリアが口を開く。
「アタシ、イギリスに帰るから」
開口一番から本題だった。
「なるほど」
「あんまり驚かないのね」
「まあ、な」

ララのことに気を取られてしまったが、アリアも一般人ではない。アリアはアリアでイギリスの貴族なのだ。
俺はそんな相手と。
「そうだよな。俺達、したんだもんな」
「っ!!　そ、そうねっ!!」
顔を真っ赤にして、声を上ずらせながら同意するアリア。『何をした』と言わなくても伝わるのは当然だろう。今の俺達の間で『した』といえば、アレの事しかない。
それを想像して顔を赤くするアリアのことを、今日ばかりはからかえない。
「それで、家の人になんか言われたのか？」
「まあ、ちょっとね。古臭いとは思うけど、アタシの立場じゃ逆らえないから。それで一回帰らないといけなくなったの」
未婚の、しかも恋人でもない相手と肉体関係を持つのは、って事だろう。その考えは理解出来る。
まず間違いなく叱られるだろうな。
「すまん。俺があの時自制できてれば」
「や、べ、別に！　嫌だったとか、そういう訳じゃないから!!」
アリアが慌てた様子で否定してくる。
「あの時は、アレの意味は知らなかったけど、後悔とかしてないし……家の奴らに何か言われても、別にアンタ相手だったら……パートナーだしね!!　そう！　パートナーだから!!」
「お、おう」
今さら取り繕っても遅いとは思うけど、それを指摘すると銃弾が飛んできそうだ。
「とにかく!!　あんたは何も心配しなくていいから!!　分かった!?　アタシがいない間、むやみやたらに女の子にちょっかいをかけないこと!!　返事!!」
「は、はいっ!!」
俺を無理やり頷かせると、アリアはキャリーバックを引いて玄関に向かう。

「それじゃあ、行ってくるわ」
そう言って、アリアはイギリスへ飛び立っていった。

それからは特にトラブルが起きることも無く、登校することが出来た。
1日経って、あの事件の説明を求める生徒はほとんどいなくなった。や、俺達からは情報が取れないと分かって独自に調べ始めたのかもな。
つまり、早くも元の日常に戻ってきたってことだ。
学校内で事件があったにしてはみんなの切り替えが早いけど、それが武偵高なんだろう。俺が土御門や矢瀬と話す話題にも、事件のことは挙がらなくなっていた。
「それでにゃ～」
土御門のバカ話を聞いていると、
「ん？」
何やら教室の外が騒がしくなっている。
「なんだ？」
「さあ？」
矢瀬が首を傾げている。俺もわからなかったが、教室の入り口から見知ったピンク色の髪が見えた。
「あっ、翔～!!」
「ラ、ララ!?　何でここに……」
学年が違うはずのララが、何故かここに来ていたのだ。
「えへへ、授業が始まるまで暇だったから、来ちゃった～」

べたべたと俺に抱きつこうとしてくるララ。さ、流石に教室ではやめて欲しいんだけど……

教師中の視線が俺達に突き刺さり、ひそひそとした喋り声が聞こえてくる。教室には何人もいるはずなのに、舞台の上には俺とララしかいないみたいだ。

「2人とも、ずいぶんとお熱いにゃ～」

「だな。護衛との距離とは思えないが……ま、誘拐されそうになったってんならそんなもんか？」

2人のコメントを聞いてララは、

「うん！　だって翔は婚約者候補だもん!!」

「あ」

俺が声を出そうとした時には、すでに手遅れになっていた。

そして中等部。2時間目の授業が終わり、現在は休憩時間になっていた。

3年生の教室では、雪菜とマミが次の授業の準備をしていた。そこに駆け込んでくる女の子がいた。

「マミさんに雪菜!!　アレ、聞いた!?　ってか雪菜！　なんで教えてくれなかったわけ？　もしかして知らなかったの？」

「え、と……？」

「美樹さん？　そんな急に言われても分からないわよ？」

息を弾ませながら駆け込んできたのは、2人の友人である美樹　さやかだった。つかつかと雪菜の席に詰め寄ったかと思えば、肩をつかんで前後にゆする。

だが、よほど急いでいるのか、主語が抜けてしまっていてイマイチ

内容が伝わってこない。
「おい、さやか。おめー廊下走ったから先生が激怒して向かって来てんぞ」
気だるげに顔を出したのは杏子だった。杏子は顔を動かして教室の外を確認している。
確かに教室の外から、生徒に向けているとは思えない殺気を感じる。全速力で廊下を疾走したのはいけないことだが、それに対する罰がどう考えても重すぎる。それを予感させる気配だった。
「うわ、やっば……!! 詳しくはお昼の時間に話すから!! それじゃあね!!」
顔を青くしたさやかは一方的に2人に別れを告げ、教室から走り去った。
「何だったんでしょうか……」
「さあ……」
結局内容を伝えなかったさやかに、2人はもやもやとした気持ちになる。その答えが出るまで、あまり時間はかからなかった。

「それで、これってどういうこと!?」
昼休み。いつものメンバーを集めたさやかは興奮気味に端末を見せてきた。そこに写っているは武偵高の情報サイトだ。校内で起こったことを有志の情報科の生徒がまとめているもので、学生らしいゴシップが武偵の能力を使われてまとめられている。
つい最近も、デビルークの王族であるララが留学してきたことで大変な賑わいを見せたこのサイトだが、今日新しいネタが投下されていた。

《ララ王女婚約!?　お相手は護衛の男子生徒!?》
「これだよ！　これこれ!!」
雪菜の額を汗が流れた。
どこから漏れてしまったのか、なんて考えるまでもない。翔が自分から言いふらす訳が無いし、それは他の女の子も同じだ。ただ1人、ララ本人を除けば。
騒ぎになる可能性を考え、黙っていようと決めたことだったが、それをララがいつまでも守っていられるとは、全員思ってはいなかった。
故意に喋ってしまうことはなくとも、ぽろっと漏らす可能性は十分に考えられた。
「(予想以上にそれが早かっただけですね……)」
まさか1週間持たないとは思わなかった。というだけのことだ。
さやか以外の全員も端末を取り出してニュースを確認している。雪菜もみんなと同じように端末を取り出して書いてある内容を確認する。
「でもさやかちゃん。このサイトってたまに適当なことも書いてあるよね？」
「いやいや、まどか！　よく読みなって！」
「え？　うーん、と……」
内容はそこまで複雑ではない。今日の朝、ララ王女が夜月　翔の教室まで行き、全員の前で翔が婚約者候補だと言った。そのように書いてある。
「これで嘘だったら、この記事書いた人、大炎上でしょ!!」
「まあ、確かになぁ」
さやかの言葉に、杏子が適当に頷く。
朝の教室という不特定多数の目がある場所で、婚約者宣言が行われたと書いてあるのだ。少し調べればすぐに嘘かどうか分かってしまう内容を書くほど愚かなことはない。
「で雪菜、結局これは本当なの!?」
「お前は信じてんのか疑ってんのかどっちなんだ」

興奮したさやかに杏子のツッコミが虚しく響く。
「それは……」
何と答えるべきか、雪菜は考え始めた。
翔の前ではいろいろと言っている女の子たちだが、本心では理解していた。
ララの婚約者候補になったあの夜、ギドたちとの会話で。王族にあのように詰められて、面と向かって反論できる人物などそうはいない。
それに、あの時の翔の隣にはララがいたのだ。初めての感情を理解しきれずに、それでも有頂天になっていたララが。
そんなララを目の前にして、翔が無慈悲にも「やだよ」なんて言えるわけがない。だから流れに逆らえずにこんな状況になってしまってもしょうがない。
とは思うが、
「(先輩のそういうところは本当にいけないところだと思います！誰かれ構わず誤解させるようなことを言うから、こんなコトになってるんですよ。まったく、そのあたり自覚してるんでしょうかっ)」
「あ、あの、姫柊、さん？」
「何ですかっ！」
「ひうっ!?」
「あっ、ご、ごめんなさい、ほむらちゃん」
考え事をしていたことと、翔にムカムカしていたことが重なって、自分にかけられた声に対して過剰に攻撃的になってしまった雪菜。
その怒りを受け止めることになってしまったほむらは、小さく悲鳴を上げて少し縮こまった。
その様子を見ていた杏子がふーんと、気の抜けた声を出した。
「怒ってるってことは、この事は知ってたのか？」
「えっと……まあ、知ってはいた、かな？」
「じゃあ、あの男とは別れたってこと!?」
食いついてくるのはさやかだ。
あの男というのは当然、雪菜と付き合っている(雪菜は明言してい

ない）翔のことだ。雪菜の友達であるこの５人、特にさやかは翔のことを怪しんでいるのだ。
　それは多数の女性を侍らせているとか、肉体関係を持っているとか、その手のうわさが絶えないからである。それが嘘ならば堂々と「違います」と言えるが、残念ながら真実。それゆえに雪菜は、いつもあいまいに笑って乗り過ごすしかないのである。
　今回もなんとかその手で乗り切ろうとする。困ったような苦笑いを浮かべ、
「えっと、そういう訳でもないんだけど……」
「でも、さやかちゃん。これって、正式な婚約者じゃなくて、婚約者候補ってなってるよ？」
「どっちでもおかしいでしょ！　自分には彼女がいるんだからさ!!」
「（もっともですね……）」
　さやかの憤りは至極当然であり、雪菜もそこには反論できない。
　だが、一部誤解している部分もあるため、そこに対しては反論しておきたい。
「でも先輩も、自分からララさんにアピールしたわけじゃないんです。向こうから一方的に言われているだけで」
「本心じゃないってこと？」
「……そう、ですね」
「な、何で少し言い淀んだんですか？」
　ほむらは控えめに問う。言い淀んだのは雪菜にも断言出来ないからだ。剣巫の勘では嫌がっているわけではなかった。単に相手を傷つけないように気を使っている感じだった。
「でも、そうなんだな。向こうからアピールされてるんだな」
「佐倉さん？　何か気になることがあるの？」
　食べ終わったおにぎりの包みを握りながら、杏子は続ける。
「や、アタシだったら、恋人がいても結婚するけどなって。だって玉の輿じゃん。こんなの一生に一度ないのが普通の事だろ？　向こうの王女サマって美人なんだっけ？」
「これだよ」

まどかが端末を差し出す。そこには教室で談笑しているララが映っていた。これも情報サイトに乗せられている写真だ。
「ちょー美人じゃん。雪菜と比べてどうかって思ったんだけどな。胸もデカいし、これで嫌な男はいないだろ」
「あー、そっか。男って、こういう露骨なおっぱいが好きだもんねー……ほんとさー……」
「佐倉さん、少し下品よ」
「さやかちゃんも……」
杏子はマミに、さやかはまどかに注意される。
雪菜は自分の身体を見下ろしていた。
「(確かにララさんと比べれば、私は女性的な魅力には乏しいかもしれないですけど……)」
雪菜は2回、ララの身体を見ている。1回目はぴょんぴょんワープ君で更衣室に飛んだ時、2回目はこの前のお風呂場だ。
大きく実った2つの果実も、肉感にあふれたお尻もその目に焼き付いている。女性の雪菜でも魅力的だと思えたのだ。それが男の翔だったら。
「(露骨なおっぱい……やっぱり先輩も、あったほうがいいんでしょうか……)」
全く別のことを考える雪菜だったが、その間も話は進んでいく。
「でも結婚したら王様になっちゃうんですよね……？　色々大変そうです……」
「そうだよね……政治？　とかしないといけないんだもんね……」
ほむらとまどかの会話に杏子が乗っかる。
「あー……そっか、それがあったか……確かに面倒だな、そりゃ。そんなうまい話はないってことか……」
「そもそも、そんな動機で結婚相手を選ぶと、絶対に後悔するわよ？」
「そういうもんかね……」
杏子はしぶしぶと言った様子で頷いた。
「(よし、大丈夫かな)」
話題は逸れ、ララと結婚したらどうなるのか、といったものになっ

ていた。いつも通りあいまいに濁して終わらせることが出来た。
そう考えた雪菜は、
「あ、そろそろ行かないとなので、失礼しますね」
そう言って席を立つ。翔は夜勤のために休みになっているが、雪菜達は普通に六課に出勤なのだ。
「いってらっしゃい～」
５人に見送られ、雪菜は屋上を後にした。
それで終わりになる、そう思ったからこそ雪菜はあっさり立ち去ったのだが、
「それで、雪菜のカレシ、どう思う？」
まだ終わっていなかった。

翔の本性　後編

「で、雪菜のカレシ、どう思う？」
　雪菜がいなくなったところで、さやかが切り出した。
「その話、続けるんだね……」
「あったり前じゃん!!　いっつもはぐらかされてるけどさ、ホントの所はどうなのかって気にならないの!?」
「それは、確かにそうだけど……」
　雪菜が詳しいことを伝えないようにしているのは、みんなとっくに気が付いていた。
　最初の方は恥ずかしさなのかとも思っていたが、こうも色々なウワサを聞いてしまうと、実は違うのではないかと勘繰ってしまう。
　さやかの意見にだれも反対しないどころか、真面目なまどかやマミすらも頷く辺りが、みんなの疑いの深さを現していた。
「でも、前に見た時は普通に見えたよね……？」
「甘いよほむら!!　普通の男が雪菜と付き合えたり、王女様にアタックされるわけないじゃん!!」
　それもまた正論だったが、
「でもさやかちゃん。私達、雪菜ちゃんの彼氏さんのこと、全然知らないよね？」
「だったら調べるしかないよ」
　そう、彼女たちが通っているのは武偵になるための教育をする専門の学校。相手のことを調べるというのは基本技能だ。
「じゃあ、どうやって調べようかな？」
　だんだんとまどかも乗り気になってきた。
「大丈夫。基本的なプロフィールについてはもう調べてあるから!!」
「い、いつの間に……？」
「授業中にまとめておいた！」
「授業はしっかり受けなさいね？」
　マミの注意に舌を出しながら頭を下げるさやか。マミもそれ以上叱らない。彼女もなんだかんだ気にはなっているのだ。

さやかから送られてきたファイルを全員で見る。
「知ってることしか載ってないね……」
「そうなんだよね……」
だが、さやかのスキルで調べられる事柄など、学校に登録されている情報程度しかない。それだけ見ても翔の真の実力や実績を理解出来る訳がない。
翔の活躍は情報が規制されたり、記録に残らないようなものがほとんどなのだ。
「じゃあ、後はもう本人に聞くしかないな」
「そう。問題は誰が聞きに行くのかってこと」
杏子の言葉に同意するさやか。すでにここまではさやかの計算通りだった。後は誰にその任務を任せるのか。
「そこはマミしかねぇだろ。なんたってマミは、『ＣＶＲ』の誘いを蹴った女なんだからな」
「ちょ、ちょっと佐倉さん……!!」
「「ええっ!?」」
にやにやと、からかうようにマミを推す杏子。それに反応して他の3人が色めき立った。
「本当なんですか、マミさん!!」
「雪菜ちゃんが誘われたのは知ってしまたけど、マミさんもだったなんて……」
「でもそうだよね。巴先輩、すごくきれいだし。その、スタイルも……」
さやか、まどか、ほむらは口々にマミを褒め称える。そのことに全身がかゆくなってしまったマミは、秘密をばらしてしまった杏子を睨んだ。
「ちょっと佐倉さん！　秘密にしておいてって言ったじゃない……！」
「名誉なことなんだから、秘密にしておくのはもったいないだろ。コイツらにバラしたって何かある訳でもないし」
「そうじゃなくて……!!　もうっ!!」

『ＣＶＲ』――――特殊捜査研究科は武偵の学科の一つ。特殊条件下における犯罪捜査を学ぶ学科だ。
いわゆる色仕掛けの罠。ハニートラップの専門技術を磨く学科であり、美少女か美男子しか入科できない厳しい場所である。
しかもただの美男美女ではいけない。男女ともに身長の制限があり、女性に対しては一部の身体的特徴、つまり胸やお尻などの性的な魅力も入科の基準になっているのだ。
入科に厳しい条件があるために、他の学科にはない『スカウト』を行っていることも特徴に上げられる。
容姿や成績を加味して見込みのありそうな生徒に対し、先生の方から声をかけるというシステムだ。
マミもスカウトで声をかけられたことがあったが、その時から管理局志望だったため、丁重にお断りしていたのだ。
「なんだ、だったらマミさんにお願いするしかないじゃないですか!!」
「え、ええ？　自信ないけど……何話せばいいかな？」
「それはこっちからサポートしますから!!　お願いします!!」
みんなの後押しもあり、マミが翔との会話役になるのだった。

「ふう……」
今日はホントに疲れた。
ララの婚約者宣言で大騒ぎになった教室。すぐさま那月先生が飛んできてその場を収めてくれたが、見事に面倒な事態を引き起こした俺には理不尽な課題を課せられてしまった。
ララの方だが、自分が不用意に発言して騒ぎを起こしてしまったこ

とを反省したらしく、朝以降は俺の教室を訪れることはなかった。
自分の教室でも、アスナ達に様々な立ち振る舞いについて聞いているらしい。ララはララで成長しようとしているのだ。
でも昼休みはゆっくりできた。六課に出勤しないとこんなに時間に余裕があるんだな。
でも数日後には夜勤があるし、この疲れを残さないようにしないと……
「ん」
メールだ。
コッコロからか。内容は……俺の夜勤のために、今日から数日間、精のつくものを作ってくれるらしい。ありがたや。
「と、なると……」
夜まで本格的に暇になるな。ララは今日はザスティンの所に行って、『お勉強』をするとか言ってるらしいし。
「ま、おとなしく家でだらりとするか……」
変な事件に巻き込まれても、まあ、その時は上等だけど、巻き込まれて本命の夜勤に支障をきたしたら笑えない。
今朝のことが広がったせいだろう。あちこちから生徒の視線を感じながら、校門を出る。
そこで、
「あ、あのっ。夜月先輩、ですよね？」
声をかけられた。しかも覚えのある声だ。
視線を向けると、金髪の縦ロールが目に入る。武偵高に併設されている武偵中の制服に、この暑いのに黒いストッキングを履いている。
まどマギのキャラクターであり、この世界では雪菜の友達という立場の少女――『巴　マミ』だ。
「そうだけど、何か用？」
少し警戒しながら問いかける。
正直、まどマギのキャラクターが何の用で俺に声をかけてくるのか見当もつかない。さらに言えば、どんな事件が発生するのかも。
魔法のシステムが原作と違いすぎるから、原作で起きる悲劇がこの

世界だと起きないんだよな。それはそれで平和だからいいんだけど、だったら何が来るんだって身構えてしまう。
可能性があるとすれば雪菜についてだろうか。何か様子がおかしいとか、そんなことかもしれない。
……ダメだな。もう職業病になってるかもしれない。
そんな難しく考えずに、俺と普通にお話にしに来たって思えば……無いな低すぎる可能性だ。
……というか、何でマミさんは黙ったままなんだ？
「大丈夫か？」
「あっ、はい！　全然大丈夫です！　何も心配していただかなくても!!」
「……？」
気になって聞いてみたら明らかに様子がおかしいだけど。
マミさんは一度深呼吸して、
「少しお時間よろしいですか？　お話したいことがあって」
落ち着いた声と笑みで、そう言うのだった。

「よーし、滑り出しは上々だね!!」
「そうかな？　夜月先輩、怪しんでたように見えたけど……」
「マミが硬いんだよな……緊張してんだな」
「みんな、もう少し隠れないとバレちゃうよ……！」
物陰に隠れて様子を見守っているさやか、まどか、杏子、ほむらの4人。
今はマミが先頭になって翔を誘導している。
雪菜からの情報で、翔が今日六課に行かないことは分かっていた。

校門を出た翔を見つけて声をかけるところまでは大成功。
だがマミが緊張したことでその後のセリフが吹っ飛んでしまったのは大誤算だった。
何とかさやか達の指示で持ち直したものの、初手から翔に警戒されることになってしまっていた。
「と言うか私達も、授業さぼって大丈夫だったかな……？」
「そうだよね。こんなこと初めて……」
真面目なまどかとほむらが不安そうに顔を見合わせている。
翔は特別な課外活動として管理局の仕事が単位に反映される仕組みになっているが、そうではないこの５人は普通に授業をさぼってしまっている。
「大丈夫だろ。実技テストの点さえ取ってれば、向こうは文句言わないし」
「最後は実技がものをいうもんね」
杏子とさやかが軽い調子で言う。
実際、知識は大事だが、現場で生かせなければ意味が無い。その考えから、武偵高では実技の配点が非常に高くなっている。
「うう、ママにばれたら怒られちゃう……」
「私、実技苦手だし……」
それを聞いたまどかとほむらが少しだけ暗い顔になった。しかし、学校に戻ろうとはしなかった。
４人は今回の作戦の続行を決心している。
と、そこに、
《美樹さん？　ここからどうすればいいかしら？》
５人で繋げた念話のネットワークに、マミの声が響いた。それに対して、さやかが指示を飛ばす。
「じゃあマミさん、近くのお店に入りましょうか」
《わかったわ》
その指示通りに、マミは行動を始めた。

「ご注文はお揃いですかー？」
「はい」
注文した飲み物、俺はコーヒーでマミさんは紅茶が届いた。
マミさんに誘われるがまま連れてこられたのは学校から少し離れた、こじゃれた喫茶店だった。
え、何なんだろう、この状況。なんで俺はマミさんとお茶することになっているんだ？
「それで、巴さん。話って言うのは？」
「ええっと……」
マミさんは数秒視線を空中にさまよわせた。
「……？」
何だ？　なんか、言いにくいことを言おうとしている、っていうよりは、別の誰かからの指示を聞いてる？
「夜月先輩、私のことは知ってるんですか？」
「あ、ああー……ま、雪菜から少し聞いてるからな。君は巴　マミだろ？」
嘘である。
雪菜は学校の友達について俺には全然喋ってくれないからな。もし喋ってたら俺は、まどマギのメンバーがいることをもっと早く気づいていただろう。
どうして教えてくれなかったかは……雪菜に報告義務はないとしても、それ以上に女の子との接点を持ってほしくないと思っていたのか、マミさん他、まどマギのメンバーを見て、剣巫の勘が働いたのか知らないけど。
あ、実際の呼び方は巴さんだけど、心の中ではマミさんって呼ばせてもらってます。

「そうなんですね。それで雪菜ちゃん……雪菜ちゃんとは親しいんですか？」
「ん？　そう、だな……」
すかさず食いついてくるマミさん。聞きたいのはそこってことか？
「親しいというのはお付き合いしている、という意味で、ですか？」
「う、うん。そうだな」
ずばずば来るな。面と向かって付き合ってますと宣言するのは少し恥ずかしいところもある。
「でしたら……」
マミさんが端末を操作する。
「これはどういう事でしょうか？」
マミさんが差し出してきたのは学校の情報サイト。今日あったララの婚約宣言だった。当然そこにはお相手である俺の名前も書かれている。
「これは……」
ざっと記事に目を通す。ふむ、特に尾ひれがついている部分は無いな。だったら認めざるを得ない。
「事実だよ」
「そうなんですね……」
再びマミさんが視線を空中にさまよわせる。やっぱり誰かと相談してるだろ。相手は、他のまどマギメンバーか？
「雪菜ちゃんとは『遊び』だったってことですか？」
「あ、遊び!?」
喫茶店の視線が俺達に集まる。おまけにひそひそとした話し声も。
「ちょ、ちょっと……!!」
「す、すみません……!!」
マミさんは慌てて頭を下げてくる。自分が何を言ったのか今さらながらに理解したらしい。学生のちょっとした惚れた腫れたならまだしも、『遊び』だなんて言葉を使うから。
「それで、どうなんですか？」

「それでも押してくるのか」
声のボリュームは下がったが、追及はやめてくれないみたいだ。
「別に遊びってわけじゃない。真剣だ」
「先輩、雪菜ちゃん以外の女性とも親しいですよね？　しかも複数人と」
「……そうだな」
「その方たちとは？」
「もちろん真剣だ」
ごまかすことは考えなかった。話題に出されなければスルーしようとは思っていたが、言われてしまった限りは認めるしかない。たとえみんなの目が無い場所でも。
「言ってることがめちゃくちゃですよ……」
そんなのは分かってる。
めちゃめちゃな関係だけど、全員に対して真剣に責任を取るつもりだ……まあ、どうやって責任を取るのかは未定だけど。
ま、デビルークの王様になるのが一番の近道なのか。自分が王様になれば自分が法律だからな。ハーレム否定派のセフィさんっていう、でっかい壁があることに目を瞑れば。
「……」
マミさんは茫然とした顔で俺を見ていた。何か得体のしれないモノを見るような目だ。
そりゃそうか。実質、浮気しながらハーレム作ってますって宣言したようなもんだからな。これは、雪菜に申し訳ないことをしたな。明日からいろいろ言われることになるだろうし。後で謝らなければ。
冷めてしまったコーヒーを口に運ぶ。受け皿に戻すと、かちゃりと音を立てた。その間もマミさんは何も言わない。
マミさんに指示を出している奴も混乱してるんだろうな。
ようやく絞り出された声は、少し震えていた。
「そ、それでは、ありがとうございます。今日は時間を取っていただけて。こ、これで私は失礼します……あっ、お代は私が……!!」
伝票を握り締めたマミさんは、逃げるように、実際に逃げてその場

を後にするのだった。
マミさんが店を飛び出した後、レプリカ先生が出て来た。
「翔。先ほどからこちらを観察している者がいる。４人だな。どうする？　あの少女と連絡を取っていたようだが」
「別にいいって。こっちから会いに行って追い詰める必要は無いんだし」
「ふむ、翔がそう言うのなら」
俺はコーヒーを飲み干し、席を立った。
周りの視線もいたいし、さっさと退散するとしよう。

「さて、雪菜にどう謝るか……」
マミさんとの会話を終え、俺は家路についていた。
間違いなく厳しくなるであろう明日からの追及。雪菜には窮屈な思いをさせてしまう。
「不用意にしゃべったのは失敗だったか？」
「それは無いな」
レプリカの言葉に首を振った。した行為の責任はとる。それは初めて雪菜とした時からの俺の覚悟だ。この世界を生きていく上での覚悟。
そんなことを考えていると、
――クスクス
「……狂三？」
後ろから特徴的な声が聞こえてきた。
振り向くとそこには確かに狂三が立っていた。それも霊装を纏っ

て。
「ってかお前……」
俺の影に膝から下が吸い込まれていた。や、これは狂三の能力で、今まで俺の影に入っていた？
「何やってんだよ……」
周りの視線が集まりかけたところで、狂三が完全に俺の影から出てくる。
「翔さん、こちらに」
「は、あ、ちょっと!?」
狂三に手を引かれて、俺は路地裏に引き込まれるのだった。

翔の本性　事後（狂三）

マミは逃げるようにして、実際離れるように指示があったのだが、そうして翔と離れた後、まどか達と合流していた。

落ち着いたのはマミの自室だった。１人暮らしであるため、５人で入るとかなり狭く感じるが、いまさら学校に戻る気はしない。それにこの部屋なら、マミが淹れる紅茶が飲み放題だ。

「飲み放題って言えるほど出せるかはわからないけどね」

苦笑いしながら、マミは人数分の紅茶を用意した。おまけにお茶菓子のケーキも。

「オメーの家は、いつ来ても人数分のケーキが出てくんな。どうなってんだ？」

杏子はそう言いつつも、さっそくフォークでケーキをつついていた。

実は杏子の部屋はマミの部屋の隣だった。一見合わなそうなこの２人が親しい関係にあるのは、その部分が大きい。

「ちょうどよく買ってあって」

「だとすれば、すごい確率ですよね……？」

マミの家に上がったことはこれまでにも何度かあったが、別に定期的に集まっているわけではない。そのすべてでばっちりケーキセットはふるまわれていた。偶然ならすごい確率である。

「それにしても、学校さぼってこんなことしてるなんて、すごい不思議な気分です……」

「そうだよね。すごい悪いことしてる気分……」

「まったく、ほむらもまどかも、いい加減慣れなって！　それ以上のでっかい収穫があったんだからさ！」

いまだにくよくよしている２人を叱り飛ばすように励ますさやか。

全員が紅茶を飲んだところで、さやかが爆発した。

「にしても、堂々と浮気宣言するってどうなのっ!?」

「アタシはむしろ好感が持てたけどな。ぐちぐち言い訳するよりは全然マシだろ」

「そんなの、開き直ってただけじゃん!!」
一番盛り上がっているのはやはりさやかだ。その相方として杏子が付き合う。
２人の意見は真っ向から対立していた。だがその熱量には大きな差があった。これは、そもそも杏子が翔に対してそこまで目くじらを立てていないことが大きい。
さやかの興奮を受け流す杏子。そんないつもの図式を見ながら、まどかはマミに話を振った。
「マミさんはどうでしたか？　実際に話してみて」
「え、う、うーん……」
さやか達に操作されていたとはいえ、実際に顔を合わせて話をしたのはマミだ。その経験には言葉以上のものが詰まっているはず。
しばらく唸っていたマミだったが、
「正直、そんなに話してたわけじゃないから……」
「あっ、そうですよね……」
予想以上に翔が割り切りのいい返答をしたので、考えていた質問がいろいろと無駄になり、さらに予想よりも早く引き上げることになった。マミを責めることはできない。
「……でも、悪い人には見えなかった、かな？　真剣だったと思う」
「真剣、ですか？」
「うん。言ってることがすごくて、さっきは怖いなって思ったけど、怖いって思ったのは、真面目にその人たちのこと考えてるからなんじゃないかなって。だからそのくらい本気っていうか……うーん、何だろう……ごめんね？　うまく言葉にできなくて」
だがマミには、翔が悪い人に見えなかった。少なくとも、自分の欲望のままに女の子を扱うような人間には見えなかったのだ。
衝撃的な事実を聞いたというだけで、マミは翔へ悪い感情は抱いていなかった。
「ああ、マミさんまであの男の毒牙に……」
「毒牙って、美樹さん、あのね……」
さやかが絶望的な気分になって俯く。

「や、常識で考えて下さいよ。いくら真面目で、誠実な人だって現代倫理に反することはまずいですよ！　そんな相手に、友達が――――雪菜が何かされてるかもしれないんですよ!!」
「それは……そうだよね」
まどかが深刻な顔で頷いた。
むしろ複数の女性と付き合っていると堂々と宣言するのは、真面目で誠実な人間がやることではない。狂人のすることだ。
騙されてはいけない。そうさやかが言っている
「真面目ね……だったら、その真面目な精神ってやつをもっと直接的に試せばいいんじゃないか？」
「ぐ、具体的にはどうするんですか？」
フォークを咥えた杏子にほむらが遠慮がちに問いかける。
「だから、具体的に行動してもらうんだよ。聞いた話によれば、ソイツは相当の女好きなんだろ？　そんな奴が、チャンスを逃すはずがねぇ」
「どういうこと？　何が言いたいのさ、杏子！」
「焦んなって、さやか」
杏子はもったいぶって続けた。
「つまり、向こうが手を出したくなるような状況にして、実際に手を出してくるのかを試せばいい」
「佐倉さん、まさかあなた……」
マミが何かを察したようだ。
「そうだな……次は喫茶店じゃなくて、部屋に上げよう」
「ええっ!?」
まどかとほむらの絶叫も気にせず杏子は続ける。
「それで……あー……ま、なんかすれば誘惑できんだろ。真面目で付き合ってる雪菜のことを大切にしてるなら、そんな誘惑にも負けないはずだよな？」
それは恐ろしい、まさにハニートラップというにふさわしいトラップだった。
「なるほど……それだったら、少し安心できるけど……」

「いえいえいえ、ちょっと待ってね？」
その提案にマミが待ったをかける。
「それってつまり、この部屋に上げるってこと？」
「そーなんじゃねーのか？」
「流石にそれはちょっと……」
マミが苦い顔をする。
部屋に上げるという事は住所を知られるという事だ。友達とは言え、あまり知らない男を部屋に上げるのは躊躇してしまう。
「だよね……流石に自分の部屋に上げるのは……」
いままでイケイケだったさやかも、杏子の意見には賛成出来なかった。
「そうか？　だったらアタシの部屋でもいいぜ」
隣だからな、と言いながら親指で壁の方を指さした。その先に壁を隔ててあるのは杏子の部屋だ。
「それも駄目です」
マミはきっぱりと否定した。
「ええ？　じゃあ、カラオケでも何でもいいんじゃねぇか？　誘う理由がムズイけどな」
「そうじゃなくて！　そんな、誘惑する作戦とか、誰であっても許可できません！　もしものことがあったら危ないでしょ！」
先輩として絶対にダメだと言う姿勢を崩さない。
「大丈夫だって、もしもアタシを襲って来ようとしたら蹴り飛ばしてやるって」
杏子の実力でそんなことが出来るのかはさておき、躊躇はしないだろう。けらけら笑ってケーキを口の中に放り込んだ。
「とりあえず、このことについて雪菜に聞いてみるってことでいいですよね？」
「そうね。少なくとも、佐倉さんの意見を採用するよりはね」
さやかとマミが締め、翔の話題は終了になるのだった。

裏路地に引き込まれた俺は、狂三と向き合っていた。
「それで狂三。何でここにいるんだ？　ララに何かあったのか？」
ララの面倒は見ているから翔は休んでくれと言われてたんだけど、何でこんな場所にいるんだ？　しかもこんな強引に路地裏に引き込んだりして。緊急事態なんだろうか。
「いえ、違いますわ。ララさんはわたくしがしっかりと面倒を見ているはずです」
「わたくし……分身体か？　や、お前の方が分身体だな？」
「きひ、ええ、流石は翔さんですわ」
だとすれば、
「え、じゃあ何？」
ホントに分かんないぞ？　何の用でここに来たんだ？
「ひどいですわ。何の用も無ければ、翔さんの所に来てはいけませんの？　わたくし、だた翔さんと一緒に帰りたいと思っただけですのに……」
よよよ、と狂三は泣きマネをしているが、
「だとすれば分身じゃなくて本人が来るだろ」
わざわざ分身を送りつける意味が無い。
「それもそうですわね」
一瞬で泣きマネをやめる狂三。彼女の瞳には一滴の涙もなかった。完全にふざけてたんだな。
「はぁ、それで、どうしてここに来たんだ？」
「来た、というには少し語弊がありますわね。わたくしはずっと翔さんと一緒にいましたから」

「は？」
　ちょっと意味が分からない。や、可能性はあるか？
「俺の影に潜んでたってことか？」
「そういうことですわ」
「どうしてそんなことを……」
「緊急連絡用、ですわ。わたくし、翔さんに変わって王女様を預かる身ですから。何かあっても対応できるようにするのは当然だとは思いませんか？」
「それも、そうか」
　あんな楽観的な性格なララだけど、誘拐未遂がされるくらいには王族なんだよな。メインの護衛になっている俺への連絡手段を作っておくのは当然か。
　何も言っておかなかった俺の方が迂闊だったな。
「いえいえ、翔さんは抱えているお仕事はたくさんありますから。その程度の気遣い、わたくしがして当然ですわ」
　狂三は優しく微笑んでいた。
　なんて優しい笑みだ。時折見せる邪悪な笑みがまるで幻のようだ。
　と、ここで気が付いた。
「なあ、狂三」
「なんですの？」
「なんで俺に言ってないんだ？　その、俺の影に分身を忍ばせておくってことを。緊急連絡用なんだよな？」
「……」
　せっかくの用意も知らせてくれないと活用できないぞ？　そんな単純なことを狂三が忘れるとは思えないし。
「それは……」
「それは？」
　狂三が俺に一歩近づいた。
「もう１つの理由があったからですわ」
「も、もう１つ？」
　一気に距離が短くなった狂三の顔に、少しだけドキッとする。そう

言う場面じゃないとわかっていても、左右で色の違う狂三の瞳で見つめられると緊張してしまう。
　一歩後ろに下がろうとすると、そこは建物の壁だ。
「ええ、翔さんの監視、という重大な任務ですわ」
「か、監視？」
　予想外の理由だった。そんな、監視されるようなことはしてないぞ。
「あらあら、ご自分が何をなさっているのか、まったり理解されていないようですわね」
「な、何を？」
「ええ。行く先々で女性と知り合い、体を重ねている。あなたの恋人として、あなたがどのような生活を送っているのか、気になるのは当然のことではありませんか？」
　そりゃまあ、そうだけど。
「ですのでわたくし、翔さんがどんな生活をしているのかこっそりと調べようと思ったんですの。正確には私の本体が、ですけれど」
　わたくしも賛成でしたわ、と狂三が言う。
「ララさんが来てからの翔さんの生活の一部始終は、全て見させていただきましたわ」
「す、全て？」
「ええ、全て。ずいぶんと楽しい学校生活を送っているようですわね？」
「お、おう……」
　そう言われて、この1週間余りの生活について思い出してみる。
「後輩の綺凛さんを送ったと思えば、綺凛さんのお宅でシましたわね？」
「うっ」
「その次の日には学校で、あろうことかメアさんとするなんて」
「おうっ」
「婚約者候補になってからはララさんと同衾したり、シャワー上がりのララさんと遭遇したり……これではララさんと『いたす』のも時間

の問題でしょうか？」
「うぐぐ……っ」
本当に全部見られていたんだ。
ララと『いたす』云々についてはまったく予定は無いが、他については紛れもない事実。事実を指摘され、俺は目を反らしてしまう。
だが、
「目を反らさないで下さいまし」
狂三の手に顔を挟まれ、無理矢理正面を向かされた。
そして、
「ん」
「んんっ!?」
口づけをされた。
軽く唇が触れる程度の軽いものだったが、明らかに事故ではなく狂三の意思で行われたキスだった。
「お、お前……」
「好きな方が他の女性と性行為を行う現場をずっと、黙って見せられていたんです。このくらいは許されてもいいでしょう？」
そりゃ、そうだけど。問題はそこじゃない。
「……？　あらあら……」
狂三にも気づかれたようだ。
「あれだけでこんなになってしまうなんて、翔さんは本当に……」
「仕方ないだろ……」
くすくすと笑う狂三。
それは、あんな軽いキスだけで硬くなってしまった俺の息子だった。
俺はあのララにずっとくっつかれてるんだぞ。それでも何もしていない俺の理性を褒めて欲しい。その分『溜まって』しまうのは仕方ない。
「ええ、ええ。そうですわね。あんな風にずっとララさんとくっついていれば、そうなってしまいますわ。むしろよく我慢出来ていますわね。無知なララ王女になら、口八丁でなんでもさせられるでしょう

に」
　んなことしたら、結婚コースまっしぐらだよ。同衾程度ならまだしも、その先に行ったら終わりだ。
「そうですわね。このままデビルークに行ってしまわれたら、わたくし達とは離れ離れになってしまいますもの。では、どうされますか？
　このまま帰れますか？」
「や、帰るだろ……」
　他にどうしろってんだ。しばらく静かにしていれば収まるはずだ。って、まさか。
「はい。良ければわたくしが鎮めて差し下げようかと」
「ここでか？」
「ここにはめったに人も来ない場所ですし、翔さんには『行為中』に気配を消す能力がありますよね？　……一応、わたくしにも羞恥心はあるので、ここでは手と口だけで、にして頂きたいのですが……」
　蠱惑的に耳元で囁いてくる狂三。見つからないと言われると、理性の壁が崩れてしまう。
「じゃあ……」
「クス。分かりましたわ。それでは、失礼して」
　狂三はしゃがんで俺のズボンを下ろした。
「きゃ!?　こ、これは立派は……」
　しっかりと反り返った俺のペニスが、狂三の鼻先につきつけられた。狂三はおっかなびっくりに手を伸ばす。
「一応、わたくしもこちらでの経験はあまりないので、変なところがあったら教えてくださいまし」
「ああ……っ」
　俺のペニスは、そんな前置きなんてどうでもいいから触ってくれと脈打っている。それは俺の気持ちもそうだ。
　狂三が鼻を動かす気配があり――――ヌメッとしたものに飲み込まれた。
「うぁ……」
「ぁ、ほっきぃ……」

ゆっくりと狂三の口内に飲み込まれていく。セックスで入れるのとはまた違った感触だ。肉をかき分ける感触ではなく、裏筋をまんべんなく舌で舐め回される。
ペニスが半分ほど飲み込まれたところで、狂三の動きが止まる。これ以上は苦しくて呑み込めないんだろう。
ゆっくりと逆に動き出した。飲み込まれていたペニスがだんだんと外に出てくる。亀頭まで到達すると、狂三はペニスを握り、口を離した。
「いいですか、翔さん？」
「ああ……っ。このまま続けて欲しい」
「はい」
再び狂三にペニスが飲み込まれた。
先ほどと同じようにゆっくり入って、ゆっくり出ていく。狂三は丁寧にしているつもりなのだろうが、俺にとっては刺激が足りない。
正確には『溜まっている』ため刺激は十分だ。だが場所が場所だけに、急いで射精したいと思う気持ちがあった。
そのもどかしさに、自分で動き出したい衝動に駆られる。
「どうされましたか？　自分で腰を振って。わたくしがするので、翔さんはじっとしていてくださいな」
「や、それはそうなんだけどさ。場所もアレだし……」
「そうなんですか？　ですが聞いた話だと、オルタさんと外でしたこともあるとか？　その時は翔さんから誘ったと伺っていますよ？」
「それ、は……」
話している間も。狂三の手は止まらない。だが、非常に緩慢で。やっぱりもどかしい。
「なるほど、自分が主導権を握るというのは楽しいものですわね……」
「何て？」
「いえ？　なんでもありませんわ。わかりました。それでは……」
「う……っ」
何処で覚えたのか精液を作る場所、睾丸を狂三は揉み解し始めた。そこに詰まって固まっている粘性物をほぐし、なるべく多く出させよ

うとでもいうのか。
　手で行われていたペニスへの刺激も、フェラに切り替わる。それもさっきのようなゆっくりとした動きではない。リズミカルに、唇を使って絞ろうと動いている。
「おま、え、ホントに初めてか……!?」
　その言葉に狂三はむっとしてペニスから口を離す。ペニスへの刺激は手に切り替わる。
「心外ですわ。わたくしが翔さん以外に体を赦すと思っているんですの？」
「わ、わかった。わかったから、そろそろ……!!」
「んっ」
　にゅるりと、ペニスの半分まで狂三の口に飲み込まれた。その瞬間、
「うっ!?　くっ……!!」
　狂三の喉奥に、白濁液を叩きつけた。
　びゅるっ!!　びゅごるっ、ぶりゅりゅ、ぴゅるっ
「んっ!!??　んん……」
　射精した瞬間、狂三が目を見開くが、ペニスから口を離すことなく吐き出されるものをすべて呑み込んでいく。
　射精を促すように睾丸が揉み解され、痙攣する竿が狂三の唇によってゆっくりと扱かれる。チンポの途中に引っかかった精液すらも、その優しい刺激に外へ外へと絞られた。
　やがて狂三は俺のペニスを開放してくれた。
「たくさん、射精しましたわね……行為の時にもこんなに注がれていると思うと、ドキドキしてしまいますわ……」
　全て飲み干した狂三がうっとりとした顔をしていた。
　一回出したことで、俺の息子もおとなしくなっていた。
「それでは、帰りましょうか」
「ああ、そうだな……って、影に入るんだな」
「ええ、この服以外はご用意出来ませんので」
　確かに霊装のままで動き回ると目立ってしょうが無いな。

「それでは翔さん。いずれまた」
狂三が影に消えていった。
「じゃ、俺も帰るか……」
そう思い、俺は裏路地から出るのだった。

狂三と不思議な鏡　前編　（狂三）

「ただいま～」
　家に帰ってきた。
「お帰りなさい、ですわ」
「狂三……」
　リビングには狂三が1人でソファーに座っていた。制服姿の所を見ると、帰ってきたばかりなのかな。
「帰ってたんだな」
「はい。ララさんを送り届けて」
「そりゃ、ありがとな」
「いえいえ、お礼されるようなことではありませんわ……あ、そうそう、今日の騒ぎの事ですが、デビルークが情報をコントロールしてくれることになりましたわ」
「ああ。俺にも来てたよ」
　ザスティンからの連絡で、今回のことはなるべく外に漏れないようにすることになったと聞いている。
　それはいいんだが。
「お前、俺の影に分身仕込んでただろ」
「何を言っていますの？」
　表情を変えずにとぼける狂三だが。
「お前の分身、暗がりで俺のこと襲ってきたんだが？」
「はい？」
　ちょっと嘘をついてみる。すると狂三の表情が面白いぐらいひきつった。
　襲ってきたというのは、俺に攻撃してきたという意味ではない。そのことを一瞬で察したんだろう。ナニをしたのかってことが。
「ま、まさか、そんな破廉恥なわたくしがいる訳がありませんわ」
「そんなことありませんわ」
　もう1人の狂三の声が俺の背後から聞こえて来た。あの後再度俺の陰に潜んだ狂三（分身）だ。

「なっ、あ、あなた!!　何をしていますの!?」
　狂三（本体）がソファーから立ち上がって叫ぶ。
　狂三の分身は個々に意識を持っていて、本体に絶対服従という訳ではない。さっきこの分身狂三が俺に言ったことを考えれば、本来は俺に知られる予定ではなかったんだろう。
「それはこっちのセリフですわ。翔さんの監視、それがどれほど大変な役目か、わたくしは分かっていますの？」
　か、監視、ですか。そうだね。確か監視されてたんだね、俺は。
「そ、そんなに大変ですの？　見てるだけでは？」
「そうですわ。見ているだけ。それがどれだけ大変か……！」
「……」
　その内容を知っている俺は、下手に突っ込めない。
「どういう意味ですの？　詳しく聞きますわ」
「それでは」
　狂三２人が向かい合って座る。なんだこの絵面は。
「ストレスがすごいですわ」
「ストレス？」
　ストレスか……
「翔さんがこの１週間何をしているのか、よーく思い出してくださいまし！」
「え、ええ。報告は受けていますが……いかにも翔さんらしいなと」
　複数の女性と関係を持っているのが俺らしいですか。そうですか。そうでしょうね……。
「言葉だけで聞いていれば、その程度の反応で済むのかもしれませんわ。ですが、実際にその光景を見せられるわたくしの気持ちになって下さいまし」
「っ!!　それは……」
　狂三（本体）は息を？んだ。
「とにかく、今後は同じ『わたくし』に翔さんの監視をさせるのはやめていただきたいですわ」
「……わかりましたわ。わたくしが浅はかでした……」

何だこの空気……でも、本人にしか分からない『何か』があるんだろう。話し合いは終わったみたいだ。
分身の狂三は本体の影に沈んでいく。その際、何やら耳打ちをしているみたいだ。
「ああ、ですが」
「はい？」
「わたくしのストレス発散のために、少し翔さんにはお付き合いいただきましたわ」
「どういうこと、ですの？」
「そんなこと、説明しなければ分かりませんか？」
「……」
分身が完全に影に沈んだ。それと同時に、狂三が俺を見る。
「翔さん？　さっき分身のわたくしに襲われたって言いましたね？」
「ああ、ちょっと言い方には語弊があったかもしれないけど……ちょっと」
「何回ですの？」
「1回だけど……」
「それでは1度引いていただきましょうか」
「ここで？」
「ここで」
「すぐに？」
「すぐにですわ。わたくしには確認する権利があるはずです」
どういう理屈かは知らないが、俺は言われるがままにガチャを引いた。

不思議な鏡
念じることで自分と結ばれた相手を見ることが出来る。
さらに鏡越しに触れることも出来る。

「何ですのこれは」

「これは……」
最近ライダー系のアイテムが多かったから忘れそうになってたけど、このガチャってこういう物も出るんだな。
見たところ普通の鏡だ。念じろと書いてあることだし、試しに念じてみる。
「お」
「あら」
すると鏡に俺ではなく狂三が映し出された。鏡の角度を変えてみても、映し出されている狂三の角度は変わらない。
「ふーん」
さらに試しに、鏡の中に指を差し込み、狂三の頬をつついてみる。
「ひゃう!?」
狂三が少しのけぞった。
「触られた感覚あるか？」
「あ、ありますわ。触られた瞬間に頬っぺたも少しへこんでいますし……」
「はー、なるほどね」
こりゃ凄いかもしれない。使い方次第でなんにでも使えるじゃん。ちょっとよからぬことにも使えるかもしれない。
「これ、別の場所も映せるのかな？」
「別の場所？」
「例えば……」
念じる。狂三だけではなくもっと詳細に。
「えっ!? ちょ、な、なんで……!?」
狂三が焦って立ち上がり、スカートを押さえた。鏡には、肌色に挟まれて黒い布地が映っている。
狂三を見るに、その光景に見覚えがあるんだろう。そしてそれは俺のイメージ通りの結果が映し出されているという事。
「翔さん、まさか……」
「ああ。そうだ」
この鏡には今、狂三のスカートの中が映し出されているのだ。

「こういう使い方も出来てしまうと……」
頬っぺたよりも肉感たっぷりの太ももに指が跳ね返される。そのままなぞることだってできてしまう。
「ちょ、しょ、翔さんっ、くすぐったい……!!」
狂三が身をよじってスカートを押さえている。
太ももがぴったりと合わされても、鏡の中にある俺の指には何の影響もない。抵抗も許さず、俺の指はだんだんと黒い布地の方に。
「ふぅ、ぁ……」
いつの間にか狂三も脱力し俺に身を任せている。それはこの実験がこのままエスカレートしてしまっても良いという意思表示だ。
だがその時、
ガチャ！
玄関の開く音が聞こえた。
「っ!!」
俺達は我に返る。鏡から指を抜き、とっさに後ろに隠す。
それから１０秒ほどして、リビングに顔を出したのは、
「おや、主様。お帰りになられていたのですね」
両手にスーパーの袋を持ったコッコロ、アルトリア、オルタが帰ってきた。メールで話していた通り、今日はコッコロがおいしい料理を作ってくれるという事だろう。
「はい。今日はわたくし、腕によりをかけて料理をふるまわせていただきます」
「それは楽しみだな。それと２人も、荷物を持ってくれたんだな」
アルトリア達にもお礼を言う。
「我々も夕餉の準備は手伝うからな」
「実際に調理をするのはコッコロですが、微力ながら我々も翔の力になれればと」
微力か……ま、調理に関してはこの２人の王様の力も微力なものになってしまうだろう。コッコロのパワーが強すぎるともいえるけど。
話していると、狂三に袖を引っ張られた。
「それでは翔さん。わたくし達は部屋でゆっくりとしていましょう

か」
「……狂三、妙なことを考えていないだろうな？」
オルタが目を細めている。何かを直感したんだろう。その口調には確信めいたものを感じる。
「いえ、まさかそんな。わたくしも翔さんにくつろいでいただきたいと思っているだけですわ。ここにいては、翔さんが料理のことを気にしてしまうでしょう？」
「……まあ、そういう事にしておいてやろう」
オルタには2人きりになる口実であることはバレバレだったようだが、今回は見逃してくれるらしい。
「それでは翔さん、行きましょうか」
「そうだな」
俺達は2人でリビングを後にした。
俺はあの鏡をポケットの中に入れた状態で。

「ちょっと焦ったかな」
「そうですわね……」
別に本格的な行為をしていたわけじゃないんだけど、あのままでは時間の問題だった。こういうHに使えそうな道具ってアブナイ魅力があるな。歯止めがきかなくなりそうだ。
「それで、どうします？」
「そうだな……」
どうする？　というのは、『するのか』という意味だ。でも、この状況で何もしないなんてありえない。
「もちろん、狂三が良ければだけど」

「そんなこと言わせないで下さいまし」
俺達はお互いの顔を近づけ、
「んっ」
軽い口づけをした。
そのままベッドに向かう所で、
「ですが」
「ん？」
「いえ。最近、刻々帝（ザフキエル）の消費が激しかったので、できれば、その、はしたないとは思うのですが、複数回頂きたいと思って」
狂三は能力を使うために自分の寿命を使っている。何もしていないと死んでしまうが、他人の寿命を奪う事で、能力で使う寿命を延ばすことが出来るのだ。
この世界では俺の『アレ』の寿命をいただくことで凌いでいるが、確かに夏の戦いを乗り越えてから『補給』していなかった。
「そういえばそうだったな……それも狂三がしたいのなら。俺は全然いいけれど」
「翔さんの『責め』をわたくし1人で何度も耐えるなんて無理ですわ」
「そんなバカな」
「翔さんは自分がどれだけの『モノ』をお持ちか、しっかりと理解したほうがいいですわ」
それって、相手に合わせて最適なサイズの息子になるっていう能力ありきだとは思うけど、ちょっと嬉しくなってしまう。
「ですので……『わたくし』」
「あ」
狂三の影の中から、もう1人の狂三が姿を現した。
「何ですの、わたくし。先ほどお休みを頂いたばかりですが」
どうやらさっき影の中に入った、俺のことを監視していた狂三らしい。
「ええ、あなたには今から翔さんとまぐわってもらおうと思いまして」
「はい……？」
呼び出されて突然そんなことを言われれば、そんな声も出してしま

うだろう。
そして狂三の意図も理解出来た。
人手が足りないというのなら、増やしてしまえばいいという訳だ。能力の燃料を補給するために能力を使うのは本末転倒のような気もするが。
「えっと、わたくしは話についていけていないのですが……」
狂三の分身体は首を傾げている。
「貴方にはずいぶんと辛い役割を押し付けていました。わたくしの言いつけを破って、翔さんにバラしてしまうほどに。ですから、その欲求をここで解放していただきたいと思ったんですわ」
「まったく慮っている様には聞こえませんが。それに選択肢が無く強制では？」
それは俺もそう思う。
「翔さん、分からせてあげてください」
「分からせてって」
「これから何をするのか、その分からず屋に教えてあげて下さい」
「いえ、わたくしが分からないのは、何故そのような話になったのかという事なのですが……」
狂三（分身）が呆れ顔で更なる説明を求めている。
「……」
俺はこっそりと後ろから近寄り、幻想殺しをＯＮにした右手で狂三（分身）の服に触れた。
その瞬間、
「ひあっ!?」
狂三（分身）の霊装がはじけ飛んだ。後ろにいる俺にはシミ一つない背中とお尻が、前にいる狂三（本体）には胸と下腹部が晒される。
霊装を着ている時は下着まで全て霊装になっているのか、本当に一糸まとわぬ姿になってしまった。頭についているものまで消えてしまっている。
一拍遅れて、狂三(分身)が自分の身に起こったことを理解する。自分の体を隠そうとするが、

「させませんわ！　刻々帝（ザフキエル）、七の弾（ザイン）ッ!!」
　気が逸れたところに、弾丸が命中する。
　対象の時間を完全に止めるこの弾は、分身狂三の動きを完全に止める。
「だからさ……」
　能力使っちゃダメでしょ……
「まあまあ、その分たっぷりといただきますから。それよりも、早く準備を」
「準備って」
　怒涛の展開で下腹部の準備が全然できていないんですけど……いや。
「なるほど……」
「翔さん？　どうかされましたか？」
　目の前にいる身じろぎ1つしない狂三（分身）。
「この分身の狂三って、狂三本体との違いは無いんだよな？」
「そうですわね。この分身は過去のわたくしを刻々帝（ザフキエル）を使って生み出しているモノですから。多少能力が劣ったり、天使が使えなかったりはしますが」
「だよな……」
「翔さん？」
　つまり、この裸で立っている狂三（分身）は狂三（本体）と同じ身体なのか。
　俺は後ろから狂三（分身）を抱きしめる。時間が止まっているが、触った感触は生身と同じだ。手を前に回せば柔らかなふくらみがあるし、その頂点にはまだ柔らかな突起がある。
　すべすべのお腹をなぞり下腹部に手を這わせると、そこにはまだ全く濡れていない割れ目があった。
　そのすべてが自分と同じ身体なのだ。
「あ、あの、翔さん？　目の前でそう触られると恥ずかしいのですが……」
「これから狂三の目の前で狂三（分身）とセックスするんだから、そん

なこと言ってられないだろ？」
「……っ」
狂三が息を呑む気配があった。
忘れていたのか、それとも考えていなかったのか、狂三の顔に赤みがさす。
今は時間が止められているせいで狂三（分身）は何も言わないが、時間が動き出せばその口から嬌声が紡がれることになる。自分と全く同じ身体の女の子が獣のように交尾を行い、乱れる姿を見ることになる。
そうなれば、恥ずかしさは今の比ではなくなるだろう。
「……か、かまいませんわ。わたくしが言い出したことですから。お二人のセッ……行為、しっかりと見させていただきます」
赤くなりながらもきっぱりと宣言した。狂三のことだし、今さら引っ込みがつかないのかもしれない。
別に見る必要は無いんだけどね。終わるまで別室にいればいいだけだし。
だがそう言うのなら。
俺は狂三（分身）をベッドに横たえ、服を脱ぐ。すると、しっかり反り返った肉棒が顔を見せた。先ほど一度抜いたとは思えないほどパンパンに張りつめている。
「……もう、準備万端になってますのね」
「そりゃあ、狂三の体を味わわせてもらったからな」
「そ、そうですわね」
直前まで狂三（分身）の体をまさぐっていたのだ。これで興奮しないわけがない。
寝かせた狂三（分身）の足を開きM字にし、その間に入る。流石に時間が停止している最中に挿入は気が引ける。時間が動き出すまで待つとしよう。
「そろそろ刻々帝（ザフキエル）の効果が切れますわ」
「ああ」
狂三の言葉通り、

「……、……、……、はっ!? わ、わたくしは、どうなって……?
ひぅぅぅっ!?」
時間が動き出し、同時に体をよじった。時間停止中に触った感覚が一気に襲ってきたんだ。
「狂三、大丈夫か?」
「翔さん? な、なんですの、その格好は……!?」
すぐに自分の秘部に擦りつけられているモノの正体を確認した。俺も一気に溢れ出した粘液を潤滑油にペニスを擦りつける速度を早くする。
『わたくし』
「な、何ですの、わたくし」
「先ほど言った通りですわ。あなたにはこれから刻々帝(ザフキエル)の寿命の確保のため、翔さんとシテいただきます。もちろん嫌でなければ。その場合は、他の『わたくし』にお願いします」
何か覚悟を決めたのか狂三は淡々と告げている。
「イ、イヤという訳ではありませんが……わ、分かりましたわ。翔さん、お願いします……」
赤くなった狂三がこくりと頷くのだった。

狂三と不思議な鏡　中編　（狂三、オルタ）

「しょ、しょうさっ、ひぐっ!?　そこばっかり、擦るのやめ……っ!!
あ、ぅ!!　わたくし、もう見ない、で、あぁっ!!」
俺に縋りつくようにしがみついてくる狂三。少し動きにくいがそれなら奥で小刻みに動くだけだ。
ペニスの先端が発見された狂三の弱点に何度も突き刺さる。
腰をカクカクと動かし俺のペニスから逃れようとしているみたいだけど、そんなことはさせない。ねちっこく狂三の弱点だけを責め立てる。
「うぅ……っ」
その様子を狂三（本体）は無言で見ていた。
かなり居心地は悪そうだ。挿入の時は正面から見ていたはずが、今では顔を横に向けて横目になっている。
さらには身体をもじもじと太ももをこすり合わせている。
それもそうだろう。自分が行為の時どのような声を出しているのか、どのように乱れているのかを様々と見せつけられているのだ。
それだけではない。目の前でセックスを見せつけられるのは、辛い拷問になっているだろう。擦られている太ももの奥がどうなっているのか、予想は難しくない。
「狂三、大丈夫か？」
「ひぃ、あぁ、まって、だめです、もう、また、イきそうで……!!」
「ああ、そっちの狂三じゃなく、て!!」
「イ゛……っ!?」
いままで弱点をひたすらついていたペニスがごりっと、ペニスが最奥にめり込む。完全に下に降りてきていた狂三の子宮口を潰し、無理矢理抉じ開けた。
いきなり攻撃の対象が変わったことで、ただでさえ限界だった狂三が一気に頂上まで上り詰めた。
その反動は俺にも返ってきた。
狂三の肉壺がわななき、俺のペニスを締め付けてくる。締め付ける

だけに飽き足らず、射精を促そうとペニス全体に絡みつき扱いているような感触すら覚える。
子宮口に突き刺さった亀頭がそのまま甘噛みされ、この中に出してくれと懇願された。
「うっ、く……っ!!」
それに逆らわず、俺は駆け上ってきた白濁液をぶちまけた。
――びゅごっ、ぶぅっりゅりゅ、ごぽぽっ……!!
「〜〜〜〜っっっっ!!!!」
子宮に粘っこい液体をかけられた反動で、狂三は再び達していた。絶頂に絶頂を重ねたせいで体が弓なりに反りかえり元に戻らなくなってしまっている。
「イッて、ますから、うごかない、で……っ」
流石にこの状態で動くほど、俺は鬼畜じゃない。
「狂三、大丈夫か？」
声をかけたのは、今行為している狂三ではない。分身とは言え自分が絶頂する場面を声も無く見ていた本体の狂三の方だ。
「別に、しているのはわたくしではありませんから」
「見てるだけでいいのか？」
「……わたくしがしてしまっては、それで終わってしまいますから。出来るだけ多く出していただきたいですわ……まったく、こんなに激しく攻められたら、わたくしだって持ちませんわ……」
最後の方、何やらぼそりと呟いていたな。
「ひぁ、はぃ、はぁ……」
絶頂していた狂三もようやく落ち着いたみたいだ。ベッドに体を沈め、呼吸を落ち着けている。
限界だと判断した俺はペニスを引き抜いた。
「それでは、いただきますわ」
ベッドの上に狂三の影が広がっていく。狂三が寿命を吸い上げるために使う時喰みの城だ。
荒い呼吸を繰り返す分身狂三が、影に飲み込まれていった。あの狂三の中には俺が出したものがたっぷりと入っている。あの影の中で

ゆっくりと『食べる』つもりなのだろう。
「それでは、次にまいりましょうか？」
左右で違う狂三の瞳が怪しく光っている。それだけ見れば恐怖を誘うかもしれないが、頬が赤く染まっていてはすべて台無しだった。

「む」
「これは……」
「狂三様、でしょうか？」
翔の部屋の方から伝わってくる強力な力の波動を感じ取り、アルトリアたちは眉を寄せる。
「何をされているのでしょうか？」
「何でしょうね」
コッコロの問いかけに、アルトリアも首を傾げた。明らかに能力を使っているのは分かるが、狂三が翔に対して攻撃を仕掛けるとは考えにくい。能力を使ってじゃれているのかもしれないが。
「仕方がない。私が見てこよう」
玉ねぎを切っていたオルタが、包丁を置いた。そのまな板には不ぞろいにぶった切られた玉ねぎが散乱している。王になってから聖剣以外の刃物を持ったことがなかった弊害だった。
「敵の攻撃という可能性も捨てきれん。何かあれば合図を送ろう」
「わかりました。お願いします」
アルトリアはオルタを送り出した。

「もう、むり……っ、イく……！　イってるぅ……っ!!」
「……っ」
バックで何度も突いていた狂三が限界を迎える。弱点も何も考えずただ力任せに腰を打ち付け、最奥に射精する。
このセックスはわざと狂三の正面で行っている。
狂三には俺のベッドに座ってもらい、セックスしている狂三の顔をその鼻先に突き出している。
自分が蕩けていく姿を至近距離で見せつけられていたのだ。狂三は自分のスカートの裾を押さえてじっと動かないでいるが、耳まで赤くなっている。
「ぁぁ……っ」
「あ、ちょ……！」
射精が終わりペニスを引き抜くと、狂三（分身）は力なく倒れた。ベッドに座っていた狂三を押し倒すように。
「おっと。大丈夫か、狂三」
「は、はい。問題ありませんわ。これで3人目、ですわね……」
またもや影に飲み込まれていく狂三（分身）。1人一回、3人としたため、合計3回出している計算になる。
「まだまだ元気ですのね……」
「ふぅ、はぁ、ああ、まあな」
まだまだ俺のペニスはしっかり反り返っている。それは目の前でセルフ焦らし攻めをしている狂三のおかげでもあるんだけど。
わざわざセックスの様子を見せつけるようにしたのは、その辺の悪戯の意味もあった。
ここまで来たらもう少し焦らしてみたくなる。
「まだまだ全然できるけど、一回休憩していいか？」
「え……」

「狂三？　ダメか？」
「い、いえ！　そんなことは。そうですわね、一度休憩にしましょうか」
　これはもしかしなくても、次は自分がするつもりだったんだな。
　俺は一度服を着ようとする。その時、こっそりとあの鏡を使ってみた。さっきの様に狂三のスカートの中と念じてみる。
「（うっわ……）」
　光源がどうなっているのかは知らないが、狂三のスカートの中がはっきりと映し出される。狂三の下着は黒だが、その黒がはっきりと変色しているのが分かった。それどころか太ももにまで垂れている。
　こんな光景を見せられれば俺までお預けされている気分になってしまう。俺から言ったことだし、今さら撤回するつもりは無いが。
　ちょっと残念に思っていると、
「……おや、オルタさんがこちらに向かっているみたいですわ」
「え。そうか……」
　じゃあさっさと服を着てしまうとしよう。オルタも俺達がナニをしているのか予想はしていると思うけど、だからといって丸出しで迎える度胸はない。
　下着を手に取ろうとしたところで、
「あ、やべっ」
　不思議な鏡を落としてしまった。横から落ちたため、ころころと狂三の足元まで転がった。
「翔さん、これ、落ちました、わ……」
　そして狂三は鏡に映ったものを見た。
「翔さん？　これは……？」
「あ、そ、それは……」
　そこに映っていたのはさっき俺が映したもの、つまり狂三の下着がはっきりと映し出されていた。
　その鏡、俺が手を放しても映ったものはそのままなのか……!!
　言い訳は出来ない。その鏡を起動できるのは俺だけだからだ。俺がこっそりと狂三のスカートの中を覗いたことが、これ以上ない形で

バレてしまった。
「いつの間にこんな……!!」
しかも狂三にとっては、こんな恥ずかしい状態になっている時に覗かれたのだ。抗議する気持ちもわかる。や、スカートの中を覗かれて抗議しない人も、抗議しない状況もないと思うけど。
「ご、ごめん！　それは……狂三、どうした？」
何故か黙って何か考え込んでいる狂三。
「翔さん、このことについて反省していますか？」
「そ、それはもちろん」
狂三が鏡を見せつけながら聞いてくる。映ってるのは狂三のパンツなんだけど、それはいいのか？
「そうですか」
狂三はにっこりと笑った。
「それでは、ベッドに横になって下さいまし」
指を指してそう告げるのだった。

翔の部屋へと向かうオルタ。
「（まあ、あの女と二人きりだ。間違いなく抱いているんだろうが……今日のところは見逃してやるとするか。近頃はあのララとかいう小娘のこともあって翔も苦労していたからな）」
ララの婚約者宣言の時にオルタもその場にいた。本来なら一番怒りそうなオルタが静かにしているのは、オルタの思考に原因があった
「（あの小娘には悪いが、翔はすでに私の伴侶だ。貴様になびくことはない。将来は私と国（家庭）を作ることが確定しているからな。多少ほかの女を抱いたとしても、最終的に私の元に戻ってくればいい）」

このような漲る自信からだった。
翔との将来を疑っていないからこそ、雪菜やアスナのように慌てたり、怒ったりしていないのだ。
比較的穏やかな気持ちで翔の部屋に向かう。
その時、
「ひっ――――」
下腹部に強烈な違和感を覚えた。ぬるぬるとした熱い棒のようなものが、自らの股間を往復している。
生理的な嫌悪感に、とっさに情けない声を出してしまう。オルタは立ち止まって自分の様子を確認した。
だが何もない。体だけではなく周囲を確認しても、そこにあるのは静かな廊下だけだ。相変わらず狂三の能力の気配はあるが、それ以外には何もない。
そのことがオルタの警戒心を引き上げる。正体不明の現象が、スタンド攻撃を想起させる。今も変わらず、自分の大切な部分にナニかが押し付けられているのだ。
「……」
オルタは漆黒の聖剣を呼び出した。
が、タイミングが悪かった。
「かひっぃぃぃ……!?!?」
突き立てられていた棒が、オルタの体内に侵入してきたのだ。ぴったりと閉じていたはずの女性器が無理やり割り裂かれ、掘削され、奥の奥まで侵入される。
その衝撃に聖剣を掴み損ねてしまう。床と聖剣がぶつかって大きな音を出した。
「っ、ぁ……!!」
棒だと思っていたものは反り返っており、先端にはちょっとした出っ張りがある。それがまだ準備運動もしていなかったオルタの膣壁を抉った。よろよろと頼りない足取りで壁に手をつく。足からは今にも力が抜けそうになるが、床を睨んで踏ん張った。
まったく濡れていなかったオルタの膣壁は、かすかな痛みを伝えて

くる。それでも止まらずにその棒に奥をノックされたのは、棒自体があらかじめぬるりとした液体にコーティングされていたからだ。
ここまでされればオルタは気づく。この棒の正体に。
「こ、れぇ、ぺに、す……？　翔の、ペニスが、どうして……っ！」
まったく準備ができていなかったはずの身体が、大急ぎでこの棒――ペニスを迎える準備を整えていた。オルタの身体がここまで気を許している相手など、翔以外にいない。
突然の挿入で硬くなっていた膣内が、だんだんとほぐれていく。それに合わせてペニスが膨らむため、少しの余裕もできることはない。
そんな中、挿送が始まった。

「う、ぐぅ……!!」
俺の下腹部にそり立っていたはずの息子がなくなっている。正確には鏡の中に吸い込まれている。鏡の先につながっているのは……
「……ふぅ。どうですの？　オルタさんのナカの具合は？」
「お前なぁ……」
狂三に言われるがまま、オルタの下腹部と鏡を繋げた俺。繋げたことを狂三に伝えるとその鏡を取られ、ベッドに寝るように指示された。
その段階で狂三が何をするつもりなのか察しがついていたが、俺はそれを受け入れた。
そして俺の予想通り、狂三は鏡越しに俺のモノをオルタに擦りつけ、刺し貫いたのだ。
「オルタさんの足も止まりましたわね」
「そりゃそうだろ……」

何もないところから突然挿入されれば、誰だってそういう反応になる。それはいくら王様でも変わらないだろう。
「残念ながらどのような反応をされているのかはわかりませんが」
オルタ（の下腹部）を映している鏡は俺のペニスを呑み込んでいるから、こちらに鏡の面を向けていない。
伝わってくるのは俺のペニスをきつく締め付ける肉壺だけだ。狂三の愛液のおかげですんなり奥まで入ったとはいえ、オルタ自体の体はまだまだ固い。
「う、ん……!?」
「どうされましたの？」
「や……」
硬いと思っていたオルタのナカが急速に俺のモノに馴染み始める。
狂三のだけだった愛液にオルタのものが混じり始め、それを潤滑油にして肉ビダが絡みつき始める。
「……そういうことですのね」
狂三は俺の反応を見て理解したらしい。
「でしたら……このまましてしまうというのはどうですの？　わたくし、もっとたくさん翔さんのものが欲しいですわ」
「すごいこと考えるな……」
だが、あえて拒否することもしなかった。

「おぐっ、いぅ、ぃ、ああぃ、あぐっ！　ひぃ……!!」
まるで機械のように一定の間隔で奥をノックし続ける肉棒。それもそのはずオルタを貫いているペニスは確かに翔のものだが、動かし

ているのは狂三だからだ。
翔が動いた時なら、もう少し緩急がある。色々なところを探るようにかき混ぜられ、ねちねちと責められるのだ。だが今回は違う。
翔から搾精するために、オルタの穴が使われている。本来はオルタの快楽は目的にしていない。いや、狂三なので、もしかしたらそのあたりも目的になっているのかもしれないが。
なのでこれはオルタに快楽をもたらすことが目的ではない。
だが、
「イ゛、くぅ……っ!!」
オルタは歯を食いしばって、快楽絶叫だけはしない。
しゃがみ込み、額を床にこすりつける。まるで四足動物か土下座でもしているかのような無様な絶頂ポーズだ。
何かが入っているせいでぽっかりと口を開けた肉唇は、はしたなく愛液を噴き出していた。
だが全身がしびれるような快楽を味わっている間も、ピストン運動は止まらない。
痙攣する肉壺をかき分け、奥にあるコリコリとした子宮口に突き刺さる。張り出したカリ首が、この冷徹な王の一番弱い部分を丁寧に削ぎ落とす。
「イってるの、降りて、これな……!!」
懇願しようとも動かしているのはこの場にいない狂三だ。あの鏡越しに翔のペニスを挿入している状態なので、オルタが今どのような格好をしているのかはわかっていない。
そしてやがてペニスがびくびくと震え始める。射精直前の動きだ。オルタは吐き出されることになる精液の衝撃を覚悟するが、
「おうっ!?」
ペニスを一気に引き抜かれるという予想外の刺激に、情けない声を出す。
狂三が精液を得るためにペニスを引き抜いたのだ。
「なん、だったんだ……っ」
いまだに自由の利かない身体を投げ出しながら、オルタは呟くの

だった。

狂三と不思議な鏡　後編　（狂三）

「オルタ様、遅いですね」
「そうですね……」
　オルタが翔の様子を見に行くといってキッチンを出てから、すでに１０分以上が経過していた。翔の部屋に向かう程度なら1分あれば十分。何かを話し込んでいるにしても、オルタが長々と無駄話をするとは思えない。
　当然、この2人は知らなかった。この時オルタが鏡越しに翔のチンポに犯され、無様にも廊下でイキ果てていたことを。噴き出した愛液で汚れた服や廊下の処理のために、翔の部屋に行くこともキッチンに戻ることもせずに奔走していることを。
　この時のオルタは相当焦っていたが、事情を知らない2人はただ不安に思うだけだった。
「……様子を見に行った方がいいでしょうか」
　特にアルトリアは自分の分身ともいえるオルタが帰ってこないことに、直感めいたものを感じていた。
「（最悪の場合、すでに敵にやられているかもしれないですね。オルタに限って、まさかとは思いますが……）」
　もっとも、想定していたのは敵襲の可能性であり、不意打ちで犯されていた可能性など微塵も考えていなかったが。
「そうでございますね。わたくしたちも一度、様子を見に行った方がよいかもしれません」
　コッコロも同意して調理の手を止める。
「それでは2人で行きましょうか。別々に行って連絡が取れなくなる方が愚かです」
「はい。それでは……」
　頷きあった2人は、翔の部屋へ向けて出発するのだった。

「んっ……」
「う、く……っ」
射精の直前に鏡から引き抜かれたチンポは、今度は狂三の口に飲み込まれていた。
追加の刺激は必要ない。引き抜かれた時点で竿を精液が昇ってきていたのだ。むしろ狂三がペニスを口に含むまで我慢するほうが大変だった。
亀頭が飲み込まれた瞬間に放たれた白濁液は残らず狂三に飲み込まれ、最後の一滴まで吸い取られた。
「ごちそうさま、ですわ」
「そりゃよかったよ」
狂三が満足そうに舌で唇を舐めていた。
「あとでオルタに何を言われるか」
「この鏡のことを知られなければ、何も言われませんわ。それに翔さんだって抵抗しなかった時点で同罪ですもの」
俺は布団の上に無造作に転がっていた鏡を手に取る。手に取っただけでなく、そのままそれを見続ける。
「……何を見ているんですの」
狂三が警戒した様子で問いかけてくる。俺には一度、パンツをこっそり覗き見たっていう前科があるからな。その反応は間違ってはいないが今回は違う。
「オルタの様子だよ」
そう言って俺は鏡を見せる。そこにはオルタの様子が映し出されている。局部のアップでもバストアップ写真でもなく、大きく引いた映像が映っている。オルタだけではなくその周りの様子も分かるように。
廊下を歩くオルタの手には湿ったタオルが握られている。洗面所から持ってきて、つい先ほど床をふいたものだ。あれにはオルタのア

ソコから噴き出した恥ずかしい液体がこれでもかと染みこんでいる。
床の処理を済ませたオルタ。次は自分の服を着替えるつもりなのだろう。その足は自室へと向かっていた。下半身がぐしょぐしょの状態で俺たちの部屋に来ることはないだろう。
「随分と使いこなしていますのね」
「慣れてきたんだな」
そして慣れれば慣れるほど思う。このアイテムはヤバすぎる。
相手のプライバシーも何のその。不思議な鏡なんて生易しいものじゃない。相手の様子をいつでもどんな角度からでも見ることが出来る、どこでも監視カメラだ。
良識ある使い方をしなければ……え？　もう遅いって？　そうかもしれないな……
俺は鏡の接続を切った。こうすれば何の変哲もない鏡なんだけどなぁ。
「それで、どうする？」
「そうですわね……」
俺達は2人で考え込む。
どうするというのは、このまま行為を続けるのかということだ。
オルタは今の『処理』を終わらせるまでは部屋に来ないだろうけど、それは結局、時間稼ぎにしかならない。むしろ異常なことがあったのだから、超特急で処理を終わらせてくるだろう。
そうなると、ゆっくり行為をするのは難しい。途中で乱入されるのは間違いない。
「ですわね……残念ですが、今日はここまでということで。幸い、たくさん頂けましたし」
「そっか。ま、４回もしたからな」
「……あまりそういうことは言わないで下さいまし」
狂三の顔がさっと赤くなる。俺に犯されていた分身達の痴態を思い出したのかもしれない。言っとくけど、そのやり方を提案してきたのはそっちだからな？
「や、でも革命的な使い方だったな。主に悪い方向で」

いくら一度繋がったことがある相手だとしても、突然断りなく行為に至るのはやっぱりマズいだろう。
「ですが、こっそりするにはこれ以上ないやり方ですわ」
「狂三もやってみたいか？」
「え？　わたくしが？」
「試しに挿れてみるか？　オルタが入って来ても外からじゃ分かんないんだし」
狂三だって、このまま終わるのは苦しいんじゃないのか？　とは口に出さなかった。４回したとはいったが、目の前の狂三とは１回もしていないのだ。
昂った体をそのままにして帰るのは狂三も我慢ならないだろう。
「そ、そう、ですわね。じゃあ、一度お試しで……」
狂三はあっさりと折れた。
「それじゃあ」
「……元気になりすぎですわ」
再び反り返ったペニスを鏡の中に差し込む。鏡はすでに狂三の下腹部に繋がっていた。糸を引き少し口を開けている秘肉が俺のペニスに食いついてくる。早く挿れて欲しいと懇願していた。
「じゃあ、行くぞ」
「はい……っ」
俺はベッドに横になって下半身には布団をかぶせていた。これで誰かが入って来てもぱっと見では分からないだろう。
布団の中で腰を突き出す――のではなく、鏡を下に押し込んだ。
「ひ――っ」
オルタに比べて抵抗感がなかった。ぬるりとしたヒダ肉が、俺の肉棒を包み込んで締め付けてくる。
鏡が俺の股間の根元まで到達すると、ペニスの先端がこりっ、っとしたものを捕らえた。
それと同時に、ベッドのそばに立っていた狂三がカーペットの上に女の子座りした。
「ふ、ぁぁぁ……っ、これ、変なかんじ、しますわ……っ。翔さんが近

くにいないのに、翔さんとセックスしてる感覚が……っ」
カクカクと体を揺らし、恍惚とした声を漏らしていた。
「俺のだってわかるのか？」
「バカにしないで下さいまし。そんなの当り前ですわ……こんな凶悪なモノ、間違えるはずがありません」
「そ、そうなのか……」
オルタの時はどうなっているのか実際には見えていなかった。でもこうしてみると、本当に鏡越しに挿入しているのがわかるな。
じゃあオルタも狂三みたいに、これは俺のペニスだって分かってたのかな？
そんなことを考えていると、焦れてしまったのか狂三が甘えたような声を出してきた。
「翔さん？　……動かしませんの？」
「あっ、そうだな」
オルタの心情は今考えても仕方がない。今は目の前の狂三が大切だ。
そうして鏡を動かそうとした時、
「翔。入ってもいいですか？」
「っ!?」
ドアの外からアルトリアの声が聞こえてくるのは同時だった。声は同じだが、トーンが全く違うので間違えることはない。
何故オルタではなくアルトリアが来たのかはわからないが、
「ああ、いいぞー」
「っ!?」
狂三はアルトリアが部屋を訪ねてきたこと、俺があっさりと入室を許可したことで2回も驚いていた。
時間を操る精霊である狂三も、この時ばかりは時間の流れを止めることはできない。俺に許可されたことで部屋のドアが開いた。ドアの向こうには2人の少女が立っていた。
「アルトリア、とコッコロもいたのか。どうかしたのか？」
普通に対応しているように見えるかもしれないが、声が震えないよ

うにするのが大変だ。
俺は下半身に布団をかけているため外からは異常はないかもしれない。だが実際には、バキバキに勃起したチンポが鏡越しに狂三に挿入されている。
気を抜けばそのまま搾り取られるのではと錯覚するほど締め付けてくる。狂三もこの状況に興奮しているのかもしれない。
そんな俺たちの様子を知らずに2人は口を開いた。
「お休み中に申し訳ありません、主さま。ですが……」
「はい。緊急で。こちらにオルタは来ませんでしたか？」
「先ほどこちらに向かわれたはずなのですが……」
オルタではなくこの2人が来た理由が分かった。いつまでも戻ってこないオルタを心配して訪ねてきたんだな。
「や、来てないよ？　な、狂三」
「そ、そうでぅ、わね……っ」
狂三が首肯しながら横目でにらんでくる。その目は潤み、今にもとろけそうになっている。全然怖くないぞ。
俺はただ、鏡を揺らして狂三の奥をかき回しているだけなんだけど。
明らかに様子がおかしい狂三にアルトリアが近寄る。
「狂三？　どうかしましたか？」
「い、いえ!?　どうもしませんわ！」
「そうでしょうか……？　体調が悪いのでしたら、無理はなさらない方が……」
「ぁ、あり、がとうございますわ。ですが、本当に何でもないので……」
コッコロも心配しているが、狂三の様子がおかしいのは俺が布団の中で鏡を小刻みに揺らしているからだ。音が出ない程度に奥を軽く、何度もノックする。
表面上は違和感を持たれる程度で済んでいる。だが事情を知っている俺から見ると、狂三の体が前後に揺れ、下腹部を床に擦りつけているのがわかる。
これ以上刺激してはバレてしまう危険がある。そのギリギリを責

めるようなスリルがたまらない。
　それは狂三の締め付けからも伝わってきていた。
「そうですか？　ならいいのですが……」
「はい……っ、お気になさらず……！」
　きゅっ、と狂三からの締め付けが強くなる。ぶるりと体を震わせる狂三の言葉に、アルトリアは眉を寄せながらも納得してくれた。
「それでオルタの事ですが」
「ああ」
　悶えている狂三に変わり、俺が答える。
「狂三、オルタの捜索を手伝って貰っても？」
「主様はそのままお休みいただいて」
　返事をした俺ではなく狂三をご指名とは、どうあっても俺を働かせたくないみたいだ。
「わ、わかり、ましたわ」
　狂三はオルタが何をしているのか大まかに把握している。簡単なミッションだ。
　よろよろと立ち上がった狂三は俺を見る。
「よろしくな、狂三」
「……はい。わかりましたわ」
　非難の視線を向けられるが、俺はそれ以上何も言わない。
　狂三は２人の後に続いて部屋を出ていくのだった。
　静かになった部屋。俺はある場所を見た。狂三が先ほどまで座っていたカーペットだ。
「うわー……」
　そこは何らかの液体によって色が変わってしまっている。その液体が何なのかは、確かめるまでもなかった。

「ふー……っ、ふー……っ」
アルトリアとコッコロの後ろをよたよたとついていく狂三。
下腹部には翔のペニスの感触。それが（翔なりに気を使っているのか）小刻みに動き、狂三の奥を何度も小突いていた。
ただ歩いているだけで下の口からは洪水のように愛液が垂れ流しにされている。鏡越しに挿入されている時は、おマンコはペニスの形に変形するだけで、ぱっくりと口を開け続けている状態なのだ。
狂三の下着はとっくに吸水限界を超えていた。先ほど翔の部屋で達した時は、吹き出した愛液でカーペットに漏らしてしまった。
「（翔さんは……もうっ）」
翔の部屋を出るときにペニスを抜いてくれないかと視線を送ったが、見事に無視されてしまった。
「（翔さんが気が付かない訳もないですし、この状況を楽しんでいるでしょうけど……わたくしもそうですわね……）」
そもそもこの状況は、アルトリアに体調を聞かれた時の返答でいくらでも回避出来たのだ。それをしなかった時点で狂三もこの状況を楽しんでいる、もしくは下の口が翔のペニスを離したくないと言ってる。
「オルタ様、何処に行かれたのでしょうか」
「そうですね……」
前を歩く2人が話している。
「そう、ですわね……っ、オルタさんの、部屋には、行きましたの？」
声が震えないように、単語を短く切って2人を誘導する。
時間を考えると、そろそろ自分の部屋で着替えをしている頃だと思ったからだ。
「そうですね。まずはそこから行きましょうか」
アルトリアを先頭にオルタの部屋に向かう。
すると、
「……なんだ」

オルタはあっさりと見つかった。狂三の予想は正しかったのだ。
「オルタ、なぜ自分の部屋に？　翔の様子を見に行くのではなかったのですか？」
「……ああ。そのつもりだったのだが、な」
「何かあったのですか？　お着替えもしているようですが……」
「……いや。それはな……」
二人の質問に歯切れが悪い言葉を並べるオルタ。すると、２人の後ろで顔を赤くして俯いている狂三を見つけた。
「狂三……」
「な、なんでしょうか？」
オルタに声をかけられ、心臓の鼓動が速くなる。まさか翔が手に入れた鏡のことを知らないオルタが、事の真相に辿り着くわけがない。そうは思っていても、まっすぐ見られてしまうと少しばかり焦ってしまう。
「……まさかな。何でもないさ」
「そう、です、の……っ」
そしてこうしている時でも、翔のペニスの動きは止まっていない。最初にあった配慮も無くなってきている。だんだんと動きが大きくなってきたのだ。相手のことが見えないと加減というものは分からないことが原因だった。
「(はぅぅっ、ヒダ、擦れて……っ　奥もそんなずんずんされると……っ)」
そして最大の理由は、翔の限界も近くなっているからだ。
バレないようにというぬるい刺激ではなく。精液を放出するための大きい刺激を求め始めているのだ。
そしてそのタイミングは狂三には分からない。
ごぶ!!　びゅるるり、ぐぶぷぷっ!!
予告も無く奥に白濁液を叩きつけられた衝撃で狂三の足から力が抜ける。
「らい、じょうぶ、れすわ……っ。すこし、立ち眩みが、した、だけで……」

「コッコロ！　すぐに狂三を部屋に！」
「はい！」
２人に抱えられ、部屋に連れていかれる狂三。オルタはその足元を見ていた。透明な雫が数滴垂れている。
「まさかな……」
オルタはそんなことを呟いていた。

禁書目録輸送当日

闇夜を飛ぶプライベートジェット。それはイギリスの機体だった。
中に乗っているのは2人。そのうちの1人である長身、赤髪の魔術師であるステイル＝マグヌスは、自動で動く操縦桿を見ていた。
「……ふん」
ＡＩ制御によって自動で操作され、目的地まで連れて行ってくれるシステムだ。ステイルには詳しい仕組みは分からない。だが目的地を設定したプログラマーも、この飛行機が何を乗せて目的地まで行くのかは知らない。
「学園島、か……」
そう呟いたステイルはコックピットを出る。
客室に戻ると、もう1人の同乗人がいた。ステイルが着ている黒い修道服とは対照的な、白地に金の刺繍が施された、高級なティーカップを思わせる修道服を着た少女だ。
「体調は？　問題ないか？」
「うん。予定日までまだ1週間あるから」
その言葉を聞いてステイルはほっと一安心する。ステイルの今回の任務は、この少女を学園島まで送り届け、とある儀式をすることだ。
「まったく、どうしてこんな大事な時期に移動なんて……!!」
ステイルは上司の無茶な指令に対して口を苛立たし気に吐き捨てる。彼が必要以上にイライラしているのは、ここが飛行機でタバコが吸えないことも大きい。
「むしろ、最大主教（アークビショップ）の気遣いなんじゃないかな？　最後まで一緒にいれるようにって。私の移送も、最大主教（アークビショップ）だけの判断でされたわけじゃないだろうし」
「あの女にそんな考えがあるとは思えないけどね」
ステイルの頭に浮かんだのはおかしな日本語を話す上司だ。何も考えていないように見えて、アレはイギリス清教の最大主教（アークビショップ）。何か深い考えがあるのは間違いない。
「（間違いないか？　ホントか？　単純にこの娘のタイムリミットを

忘れていただけなんじゃ……？）」
「ステイル？　どうかしたの？」
「……いや、なんでもないさ」
どんな思惑があろうとも、ステイルの行動原理は変わらない。
「（障害はすべて焼き払う。それだけだ）」
学園島までは８時間。護送任務が始まった。

インデックス移送当日。
俺は夕方、午後７：００。通常なら帰宅しているはずの時間に六課に出勤した。
「お疲れ様です」
「おう、来たか」
顔を出して挨拶する。事務所の椅子に座っているのは蛇倉さんだけだった。今日の待機メンバーは全員、この時間からの出勤になっている。俺が一番乗りだったみたいだ。
「蛇倉さんはもう終わりですか？」
「や、今日は普通に通常出勤プラス夜勤だ」
「……お疲れ様です」
管理局に労基法は無いんだろうか。
「人手不足だからな。事務方は特に。部隊長も実行部隊の補充には熱心なんだがなぁ」
そのしわ寄せが蛇倉さんに行ってることか。俺も出来るところはサポートしたいと思う。

「何か手伝いましょうか？」
「や、別にいいっつーの。お前はこれから仕事があんだから。力は残しとけよ。お前達がうまくやってくれれば、それだけ六課の評価が上がって人員の補充もしやすくなるだろ。志願者も出るかもしれないしな」
　そりゃどうだろうね。目の敵にされるだけかもしれないよ。
「……じゃあ、ゆっくりしてます」
「どうぞ」
「どうも」
　ラムがお茶を淹れて来てくれた。
　お言葉に甘えてぐだーっとしていると、すぐになのはさんが出勤してきた。
「お疲れ様です～」
「お疲れ様です」
「お疲れ。ヴィヴィオちゃんは、今日はフェイトが？」
「はい。今日はご飯用意して、フェイトちゃんにバトンタッチです」
　なのはさんとフェイトさんは仕事をうまいことして、ヴィヴィオちゃんを育てている。フェイトさんが長期の仕事の時はなのはさんが、なのはさんが家を空けないといけない時にはフェイトさんが面倒を見ているらしい。
「そういえば、フェイトさんですけど」
「うん。フェイトちゃんが？」
「こう……抽象的な質問ですけど、どうですか？　どんな様子ですか？」
「……そうだね。まあ、普通だよ？」
　それならいいけど。前に食堂ですれ違って以来、六課に来ていない俺はフェイトさんには会っていない。
　ただ、ララに聞いた話だと……気になってしょうがない。入隊してすぐに人間関係でトラブルなんて勘弁だぞ。
「私達の前では普通ってだけだから。フェイトちゃんも初めてのことで戸惑ってるんだよ。色々ね。今はそっとしてあげて……って、言う

相手、間違ってるかな？」
「でしょうね……」
フェイトさんの『その相手』がおそらく俺だからな。
「や、絶対そうだろ」
蛇倉さんからにやにやとしたツッコミが入った。
「この男は……」
ラムも呆れていた。
そうして話すこと３０分。
「お、お疲れ様です……!!」
「ま、間に合った……!!」
スバルさんとティアナさんが集合時間ギリギリで滑りこんできた。
「ずいぶんとギリギリだったね、２人共」
確かに、ティアナさんとかきっちりしてそうなイメージだったんだけど。
「はぁはぁ、スバルが、起きてなくて、はぁ」
「仮眠してたんですけど、目覚ましつけ忘れちゃってたみたいで……」
「不安になって連絡してみたら、私の連絡で起きた、って返ってきて。急いで迎えに行ったんです」
「仮眠取るなら隊舎ですりゃあ良かったじゃねーか。ま、間に合ったならいいけどな」
「はい、どうぞ」
俺が水を差しだすと、２人は水をひったくるように奪い取り飲み干した。
時間ギリギリに集まったという事は、この後すぐに予定があるという訳で、
「はい、みんな集まって」
八神さんが顔を出した。
「お客さんや」
何時になく真面目な顔で告げるのだった。

俺達は部隊長室に集められていた。
俺、なのはさん、スバルさん、ティアナさんが並んで立ち、その前に今回の『お客さん』が俺達に背を向けて立っている。
お客さんが見ているのは、部隊長のデスクの前に立つ八神さんだ。
「必要悪の教会所属、神裂　火織です。今回はよろしくお願いします」
「特務六課部隊長、八神　はやてです。こちらこそ、よろしくお願いします」
２人はお互いに頭を下げた。日本人らしいお辞儀だ。
「……」
俺は無言で一歩下がる。
危ないんだよ、あの腰に下げた日本刀が！　２メートル近い日本刀を腰のウェスタンベルトに引っ掛けているもんだから、先っぽが俺に突き刺さりそうになってるんだけど。
「荷物、預かる人はいなかったんですかね？」
「ラムちゃんだからね……」
なのはさんは苦笑いしながら答える。そう言えばアイツ、ギリギリまで俺達とお茶飲んでたよね。じゃあ諦めるしかないな。
「すっごいね！　写真で見るよりも足長い!!」
「アンタも黙ってなさい……!!」
「痛たたた……!!」
スバルさんが太ももをつねられている。
ため息を吐いて視線を前に戻す。
六課に挨拶に来たのは予定通り、空港で待機する予定になっていた神裂　火織だった。前日にこの島に到着して今後の宿泊場所などの下調べをしていたとか。

神裂が後ろの気配を探っているように感じた。彼女の耳が、俺達が何を言っているのかを察知したのだろう。
「心配せんでも、みんなやる時はやる子やから。安心してな」
「そうですか……」
そのことを察した部隊長がフォローを入れてくれるが、神崎の声色は大分心配そうだ。
それは俺達が頼りないというよりも、自分に比べれば他人の戦力はそこまであてにする必要が無いことが大きいだろう。そのくらい神裂は『特別』なのだ。
神裂は『聖人』――――世界に２０人ほどしかいない超人の１人なのだ。偶像の理論によって、『神の子』に似た身体的特徴や『聖痕』を持つ事で発現する先天的体質。
つまりはスーパーレアな才能を持っているのだ。
人体の存在レベルが違うと言わんばかりの性能を誇っており、音速で動いたり素手でコンクリートを破壊したり、テメーはワンパンマンかとツッコミを入れたくなる力を持っている。
原作では登場する時期が早すぎたせいで活躍に恵まれない　ｏｒ当て馬にされることが多かったんだけど、設定だけ見れば頭のおかしいレベルだ。
その人から見れば、俺達の実力なんてたかが知れている。心配だと思われても仕方がない。
俺達は俺達に出来ることをするだけだ。
「それじゃあ、スバル、ティアナ。神裂さんと一緒に空港に向かってな」
「「はいっ!!」」
「分かりました」
３人は揃って空港へ向かっていった。

で、空港組を見送った俺達なんだけど。
「暇ですね……」
「そうね。今のあなたは、給料泥棒の穀潰しだわ」
「にゃはは、何もないのが一番だけどね」
事件が起こらないと俺達はマジでやることが無い。その方が良いとわかっていても、こうしてお茶飲んで駄弁っているだけだと暇でしょうがないのだ。
「じゃ、俺は仮眠取ってきますわ」
あまりにもやることが無かったためか、蛇倉さんが仮眠室に行ってしまった。
その後ろ姿を見ながらコーヒーを啜る。
じゃあ新しく手に入れた能力の確認でもしておこうかな。

仮面ライダーアクセル変身セット
アクセルドライバー、アクセルメモリ、アクセルウォッチのセットパック。
Wのライドウォッチを手に入れている場合、ジオウで使用可能になる。

エンジンブレード　＋　エンジンメモリセット
アクセルが使う剣。生身でも扱うことが出来るが、とてつもない重量があるため一般人には持ち上げることも難しい。
エンジンメモリをセットすることで、アクセルメモリから力を引き出して刀身に付与出来る。

メダルセット（重量系）
仮面ライダーオーズに変身するためのアイテムである、コアメダル

の詰め合わせセット。
このセットにはサイ、ゴリラ、ゾウのメダルが入っている。

ウイングガンダム
新機動戦記ガンダムWに登場する兵器。
地球圏統一連合に対する一大テロ作戦『オペレーション・メテオ』のために建造されたガンダム。
飛行形態の『バード形態』、強力な射撃武器である『バスターライフル』を使った一撃離脱戦法を得意とする。バスターライフルは一回の出撃で最大出力で3発しか撃つ事が出来ない。ただし威力を調整すれば普通のビームライフルとして、3発を超えて撃つ事が出来る。
同時期に開発された他4機のガンダムの中では一番原型機に近い。

ガンダムバルバトス
機動戦士ガンダム　鉄血のオルフェンズに登場する兵器。
本編３００年前、『厄災戦』にて開発されたガンダム・フレームを採用された機体の1つ。
本編で使用した兵装、追加装甲は一通り使用可能。
パイロットの三日月・オーガスは阿頼耶識システムを用いて機体の操作精度を上げているが、この作品ではパワードスーツ扱いなので特に関係がなくなっている。

こんな感じだった。
と、振り返ったところで本当にやる事がなくなってしまった。もう雑談くらいしかやる事が無い。
「フラグ立てておきますか？」
「やってみたら？」
それでは。なのはさんの許可も得たことだし。
「いやー、今回は何事もなく終わりそうだなー」
ビーッ!!　ビーッ!!
「「……」」

けたましいサイレンが鳴り響いた。
「……出撃ですかね？」
「そうみたいだね」
「見事過ぎるわ」
ため息を吐くラムを背に、俺となのはさんは出撃準備を始めた。

機体がミシミシと音を立てていた。
どこからともなく現れた細長い卵型のドローン達。飛行機が警告音を出した時にはすでに取り囲まれていたのだ。
空を飛んでいる事、飛行機が自動で救援信号を送っている事を考えたステイルは、飛行機内部への籠城を決意したのだが、
「ステイル……」
「……っ」
傍らにいる少女の不安そうな声に歯噛みする。
幸い、飛行機内部にドローンが入ってくる事はない。だが、窓の外を飛び交う様子やこちらに向けて放たれた光弾の衝撃は、十分すぎる恐怖を与えてくる。
その様子を見せまいと、ステイルはローブで少女の顔を覆った。
「大丈夫だ。何があっても僕から離れるな」
少女とは反対にステイルは落ち着いていた。
必要悪の教会の魔術師として数々の魔術結社を潰している彼にとって、この程度の荒事で心を乱す理由がない。心配があるとすればステイルに縋り付いている少女だ。むしろこの少女の存在によって、ステイルの心はかき乱されていた。

「(この狭い機内の中では僕の魔術は使いにくい。この子を巻き込むなんてヘマは万に一つもないけど、この飛行機がもたないだろう)」
機内の壁には、そのすべてを埋め尽くさん勢いでルーン文字が書かれたカードが張り付けてある。これらはステイルの魔術の起点だ。現在は飛行機全体に強化の魔術をかけているが、その気になればすぐに彼が得意とする炎の魔術を発動させることが出来る。
そうなればドローンの群れごとき、一瞬で焼き尽くすことが出来る。
だがその結果、飛行機まで破壊、最悪の場合墜落してしまったら元も子もない。
「(でも最悪の場合も想定しないとだね。このまま空港に行ければそれでいいけど、もしも内部に侵入された場合はこの機もろとも奴らを破壊する。この子は『歩く教会』を着ているから、落下してもそこまでのダメージにはならないはずだ)」
すでに飛行機はかなり島に近づいている。墜落する飛行機はどうするのかとか、自分の命はどうなのかとか、その手の計算はすべてステイルの頭からはすっ飛ばされている。
だがそれはあくまでも最後の手段。
「(このまま何も起こらなければ。空港には神崎がいるんだ。どうとでもなる――――っ!?)」
「あれ？　なんか、傾いてる……？」
ステイルもその傍らの少女も異変に気が付いた。
明らかに機体が傾いている。
「(なんだ？　何か、エンジンにでも異常があったのか？)」
ステイルの予想は全く外れているわけではなかった。
正確には『この飛行機全体のコントロールを奪われつつある』だ。
ステイルが抵抗しないのをいいことに、操縦席にとりついたドローンが操縦ＡＩにハッキングを仕掛けていたのだ。飛行機の防衛プログラムも頑張ってはいたが、度重なる攻撃とかけられた時間にとうとう陥落。ウイルスプログラムに浸食されつつあった。
「(コンピュータの不調か？　それともコントロールを奪われたのか

？　どちらにせよ、このまま乗っていてはこの娘に危険が及ぶ……!!）」
　ステイルが決意を固めかけたところで、
「っ!?」
　オレンジ色の爆発が窓の外で見えた。ドローンが撃つビームとは違う閃光――――ドローン自体が爆散したのだ。
「今度はなんだ……!?」
　飛行機の窓を白い人影が通り過ぎる。小型の飛行機に乗った、トリコロールカラーの装甲を纏った人影だった。

輸送機襲撃

「それじゃあ、出撃！」
「はい!!」
俺となのはさんは特務六課基地から発進する。
禁書目録を輸送している輸送機が襲撃を受けた。それ以上の情報が入っていない。敵が誰なのか、今どの程度の被害なのか、送られてくるのはエマージェンシーコールだけだ。
俺達は戦闘服に着替えていた。
なのはさんは当然、見慣れたＢＪ姿。
俺はレプリカを纏い、その上からガンダムの装甲を装着する。さらに２機のガンダムを呼び出した。Ｚガンダムとウイングガンダムだ。それぞれウェイブライダー、バード形態に変形している。
変形している。
「レプリカ、制御は任せるぞ」
「心得た」
俺はガンダムのスラスターで飛び上がり、ウェイブライダーをドダイのように使う。
「翔君がいれば、１人で軍隊みたいなこと出来ちゃうね」
「そこまでではない。私のコントロールでは１００％の性能は発揮できないだろう」
レプリカがやんわりと否定した。
俺達は空を飛び、救難信号を発している輸送機の場所を目指した。すぐに目標は見えてくる。
島の上空に差し掛かる輸送機。その周りには多数の卵型の機械がとりついていた。
「あれは……ガジェット!?　どうしてガジェットが……!?」
「……確かに。何が起きてるんでしょうね」
なのはさんが驚いた声を上げている。俺も予想外の敵に驚いていた。
てっきり魔術師の襲撃だと思ってたんだけど、相手はまさかのガ

ジェット。いったいどんな相手が襲撃してるんだ？
色々と分からないことがあるけど、いまするべきことは一つだ。
「ガジェットを破壊します!!」
「ＡＭＦがあるから気を付けて!!　あと、輸送機への誤射も!!」
「了解です!!」
俺はビームライフルを両手持ち、背中にシールドを装備してウェイブライダーの速度を上げる。それに追従してくるウイングガンダム。
さらにプリンセスナイトの力でなのはさんの強化も始める。
「先行します!!」
「練習通りにね！」
ＡＭＦの影響で戦闘力が下がりにくい俺が前衛になり、なのはさんが俺のサポートを行う。ここ最近の練習でずっと行っていたシフトだった。
ライフルの有効射程距離まで近づく。機械の補正と能力（キンジの銃技）による補正がかかり、銃口が吸い付く感覚。
そのまま引き金を引いた。
なじみのある音とともに、ピンク色の閃光が一直線に発射される。狙い通り輸送機の壁面に張り付いていたガジェットを打ち抜いた。
仲間が破壊されたことで、ガジェット達が俺を捉える。色が変わったり音が出たりするわけでも無いが、怒っているようにも感じた。
「くらえ!!」
構わず引き金を引いた。
射線上に重なっていた2機を同時に吹き飛ばす。
この程度の相手なら俺の敵ではない。もちろん油断はしないが変な緊張もしない。
俺は淡々とガジェットの処理を続けるのだった。

「うまいなぁ……」
輸送機の周りを飛び回りながらガジェットを撃墜している翔を見て、そう漏らすなのは。
ガジェットは輸送機にとりついている。それゆえに誤射に気を付けてと言ったのだが、この様子を見ているとそんな心配はいらないと思えてしまう。
まさに百発百中。どんなスレスレにいるガジェットに対してもしっかり当てている。ＳＦＳ（サブフライトシステム）に乗っていて射線が限定されているのにだ。
しかもただ撃つだけじゃなくて、なのはの誘導弾を使ってビームの軌道を曲げる技――――訓練の中で連鎖撃ち（キャノン）という技だと教えてもらった――――まで織り交ぜている。
それだけでなくなのはへの強化まで同時にこなしている。
「（これは確かに、みんなが注目するわけだね……）」
翔を取り巻く環境の複雑さは、直接話を聞かなくても十分すぎるほど理解していた。スタンド使いというだけでなく、事件を引き寄せる体質があるのか、ことあるごとに厄介ごとに巻き込まれている。
そしてそのすべてに背を向けず、立ち向かっていた。
多少背負い込み易い性格という事も理解した。それがどことなく昔の自分に似ているとも思っている。
だからこそ教導官として、うまく導いていきたいと思っていた。
そして親友の恋の相手としても。
「（まあその辺りは、色々と難しいかもしれないけどね）」
翔は暴力沙汰だけでなく、色恋沙汰でも大変な状況になっていることを考え、なのはは苦笑した。
「アクセルシューター！」
考え事はしているが、もちろんなのはも遊んでいるわけではない。

対ＡＭＦの加工をした誘導弾を多数飛ばし、翔が撃ち漏らしたガジェットに対して正確に撃ち込んでいく。
「レイジングハート、残骸の回収をお願いね」
レイジングハートには、破壊したガジェットの残骸の回収を任せている。それは残骸からこの襲撃の手がかりが得られるのではないかと思ったことと、残骸が街に落下したことによる二次被害を押さえる為だ。
次々と機能を停止して落下していくガジェット。それがある一定の高度に達するとピタリと空中で止まる。
レイジングハートが制御している浮遊魔法だ。
「変な乱入者がいなければこのままで問題ないかな……フラグにならないよね？」
翔君じゃないんだし、そんな翔に対して非常に失礼なことを考えるなのは。
なのはの考え通り、ガジェットは着実に数を減らしていた。

ガジェットは残り少ない。順調そのものだ。攻撃を受けているのかと思っていた輸送機だけど、思ったよりも損傷が少ない。中にいる人が防御しているのかもしれない。
そんな時、レプリカが声をかけて来た。
「翔。どうやらこの輸送機。ハッキングを受けているようだ」
「何処から？」
「これは遠隔ではなく直接ハッキングを受けているな。コクピット近くのガジェットだ」
「了解!!」

センサーで調べた結果、人がいないとわかっていたコクピット周辺の安全確保は後回しになっていた。そのためコクピット周辺には、俺達が到着した時と変わらない数のガジェットが群がっている。
俺が周りのガジェットを倒していても、そこのガジェットだけは攻撃に加わることが無かった。
「なのはさん、周りはお願いします!!」
《うん!!》
レプリカとの会話は、なのはさんとの念話に乗っている。今の会話も伝わっていた。
サーベルを引き抜いた俺はウェイブライダーから飛び上がる。攻撃対象になったことでようやくコクピットのガジェットは戦闘態勢を取ろうとしているが、もう遅い。
ビームが発射されるよりも早く、ガジェットを串刺しにした。
「よし……!」
《こっちも終わったよ》
周りを見ると、輸送機の周りにいたガジェットはすべて撃墜されていた。
増援の気配も無し。
「これで終わりか……?」
「そのようだな。ずいぶんと中途半端な戦力だ」
レプリカの言う通り、襲撃するにはずいぶんと中途半端だった。この程度で終わりなのか……?
釈然としないが、敵は全滅したらしい。
輸送機は問題なく空港への進路を取り始めた。
どうやらこれで終わりらしい。

全てのドローンを撃墜した俺達は、そのまま輸送機を護衛しながら空港に向かった。
滑走路に着陸していく輸送機を見ながら、俺達は専用の着地スペース（飛行機用の滑走路と、飛行魔法その他を使って飛んでいる人の着地場所は違う）に向かう。
管制塔の指示に従い、なのはさんがふわりと着地した。
俺は１０メートルほど上空でウェイブライダーから飛び降りる。ガンダムのスラスターを使い、ガション！　と着地した。
「よし。レプリカ、Ｚガンダムとウイングガンダムは閉まっておいてくれ」
「了解だ」
その声とともに、飛行形態の２機は光の粒子に分解されて消える。格納庫に戻ったんだ。俺もガンダムの装甲を解除した。
残るのはＢＪ状態のレプリカだ。なのはさんもＢＪは解除していない。まだ安全確保が終わったわけではないのだ。
「翔君、スバル達が護衛対象と合流したって。私達も向かおうか」
「了解です」
とくに寄り道することなく歩くこと５分。空港の一室に辿り着いた。
扉を開けると、
「なのはさん！　お疲れ様です」
「お疲れ、ティアナ。えっと……」
なのはさんがティアナさんの後ろに視線を移す。
そこには先ほど六課で会った神裂に加えて、２メートルという体格と真っ赤に染めた髪、目元にはバーコードのタトゥーという出で立ちの派手な男。
その男が部屋に入ってきた俺達を見ると、近くにいたスバルさんに目を向けた。
「あっ、この人達は私と同じ部隊で、さっきまで飛行機の護衛をしてた

んです！」
「なるほど……」
　男は俺達を正面から見て、
「先ほどは助かった。必要悪の教会（ネセサリウス）所属、ステイル＝マグヌスだ」
「管理局特務六課所属、高町　なのはです」
「同じく、夜月　翔です」
　見た目と名前の確認が出来た。
　そしてさらにもう１人。
「で、その娘は……」
　ステイルが大きな体で隠しても、なのはさんは見逃さない。その後ろに小柄な人影があったことを。
「……」
　なのはさんの質問にステイルは答えないが、
「大丈夫だよ、ステイル」
　後ろの人物がはっきりした声で言った。そして前に出る。
「シスター、ですか？」
　なのはさんは見たままの感想を述べている。
　純白の布に金の刺繍。大きめのサイズの修道服を着ているせいではっきりとは分からないが、十分に華奢と思える女の子だった。
　エメラルドのような翠眼をまっすぐとなのはさんに向けて、言った。
「私はＩｎｄｅｘ―Ｌｉｂｒｏｒｕｍ―Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ―――イギリス清教の禁書目録（インデックス）だよ」
「……え、っと？」
　なのはさんは言われた言葉の意味が理解出来ないのか、先に合流していたティアナさんやスバルさんの方を見ている。
「はい……」
「らしいです……」
　なのはさんも絶句している。
　イギリス清教のトラの子で、魔術に対して絶対の力を持つ禁書目録。不透明だったその正体が、まさかこんな少女だとはなのはさんも

夢にも思っていなかったんだろう。
「これからよろしくお願いします、なんだよ」
インデックスも精一杯丁寧な態度を取ろうとしているのか、お辞儀してきた。
「うん。よろしくね、インデックスちゃん、でいいのかな？　本名？」
「うん。私のことはインデックスって呼んでくれればいいかも」
なのはさんはインデックスの気持ちを汲み取ったのか、すぐにしっかりとした態度でインデックスに向き合った。
「よろしくね！」
「よろしく、インデックスさん」
なのはさんに倣って、スバルさんとティアナさんも挨拶していた。この２人も妙な偏見を持ったりすることはない。たとえ相手が禁書を所蔵した魔導書図書館だったとしても。
その様子に、神裂やステイルは安心していた。この２人はずっとこの島にいる訳ではない。現地のイギリス清教、そして貸出先の特務六課のお世話になる。事情を理解してくれる相手ができるのは好都合なんだろう。
「じゃあ、そろそろ移動しましょうか。ずっとここにいてもしょうがないですし」
「翔君はあんまり驚いてないんだね？」
「え？　ええ、まあ……そう言う事も、あるんじゃないですかね」
だって知っていることだし。
俺が気にしているのは、これから何が起こるのかってことだ。『とある魔術の禁書目録』第１巻とはまるっきり状況が違っている。インデックスはステイルや神裂との記憶としっかりと持っている。この２人が敵にならないのなら、その辺りのイベントはまるっきりカットってことになるのか？
それはそれで楽でいいんだけど、だったらインデックスの一番の問題がどうなっているのかが気になる。
でも初対面で聞くことは出来ない。無理無理。絶対無理。こんな重要機密、どうして知ってるんだって話になる。

今日の所はここまでにするしかないのだ。
「じゃあ、宿泊先に向かいましょうか。移動は私の車で」
「わかりました」
ティアナさんの言葉に神裂が頷いた。
「なのはさん、俺達はどうしますか？」
「一度襲撃もあったし、最後までついていこうか」
「了解です」
こうして全員そろってイギリス清教組の宿泊先に移動する。ティアナさんの車には全員は乗れない。元々、空港からの移動はティアナさんの車での予定だったが、俺やなのはさんが乗ることは想定されていなかったからだ。
なので俺達は空を飛んでの移動だった。
特に何も起こらず、宿泊先に到着する。この島のイギリス清教の教会だ。
車から降りてくるスバルさんとインデックスが楽しそうにしゃべっている。移動時間中に仲良くなったみたいだ。でも、インデックスの表情がどこかぎこちないように見る。
ステイルがインデックスの肩を押して教会の中に入っていく。
「それじゃあね！　インデックス」
「……うん。それじゃあ、さようなら」
スバルさんが元気に手を振っていた。
その様子を横目に、神裂がこちらに向かってきた。
「本日はありがとうございました。おかげで無事、輸送が完了しました」
「いえ。トラブルはありましたが、無事に終わって何よりです」
「インデックスとは次はいつ会えますかっ!?　六課のみんなにも紹介したいんです！」
「……申し訳ありませんが、色々と手続きが必要なので。おそらく1週間は連絡が出来ないかと」
「……そうですか」
スバルさんは子供っぽくしょんぼりした。

「スバル、向こうにも都合があるんだから」
「うん……分かってるよ、ティア」
その様子を見て神裂は優しく笑った。
「どうか、これからもあの娘と仲良くしてあげて下さいね……1週間後の、あの娘とも」
「はい！　もちろんです!!」
「コイツだったら、誰とでも仲良くなれるので心配しなくても大丈夫ですよ」
スバルさんは元気よく返事を返した。
だが俺は神裂の言い方に引っかかりを覚えていた。
「1週間後のあの娘、ね……」
だがその場でそれ以上の追及はしなかった。
こうして禁書目録輸送任務は割とあっさり終了するのだった。

禁書目録輸送事後　（ラム）

仮眠に行くと言っていた蛇倉――――ジャグラスは、とある人物に呼び出されてビルの屋上に来ていた。
他よりも空に近いこの場所で、先ほどまで行われていた戦闘を見物していたのだ。輸送機に多数のガジェットが襲い掛かるも、２人の管理局員――――高町　なのはと夜月　翔にあっけなく撃退される場面を。
「残念ながら、オタクの企みは失敗したみたいだな」
「そのようだね」
ジャグラスのニヤついた皮肉に、そんなことは最初から分かっていたとばかりに呼び出し相手は応える。
タキシードにシルクハット、顔には笑顔を浮かべた仮面と言うふざけた格好ながら、ジャグラスに負けないくらいの邪悪な雰囲気を持っていた。
「俺からしてみればガッカリだぜ。貴重な睡眠時間を削ってまで来てやったってのによぉ」
「それはすまないことをしたね。最近は忙しいのかい？」
「公務員だからな。お前のおかげでもっと忙しくなりそうだぜ」
「うん？　まあそう言う事なら、謝っておくとしよう」
シルクハットの男の謝罪には興味のないジャグラスは帰ろうと背を向ける。
「何処へ行こうというのかな？」
「見世物が終わったんだ。帰るに決まってんだろ――――ん？」
屋上への扉の前に小さな人影がった。黒いドレスを着た少女だ。その赤い目が爛々とジャグラスを捕らえている。
「ただのガキじゃあ、なさそうだな」
「その通りだ」
２人に挟まれる形になったジャグラスからオーラが漏れ始める。戦闘モードに切り替わりつつあるのだ。
「警戒しないでくれ。我々に戦う意思はない」

「じゃあ何だ？」
「提案だよ。我々に協力しないか、ジャグラス・ジャグラー」
その言葉に。
「――――――っぷ」
ジャグラスは腹を抱えて笑った。笑い転げた。
「冗談は休み休み言いなよ。たった今あっけなく計画が失敗したところを見せて『協力しないか？』。くくっ、プレゼンが下手過ぎんだろうが。沈みかけの――――いや、すでに沈んでいる泥船に乗りたい奴なんていねぇっての」
ジャグラスの遠慮のない物言いに、ドレスの少女から凄まじい殺気が噴き出す。
「パパ、コイツ殺していい？」
「よしよし、小比奈。ダメだ」
「ぶー」
シルクハットの声を聞いて殺気を引っ込める少女。
「（まともじゃねぇな、このガキも）」
ジャグラスは内心でため息を吐きつつ、結論を述べる。
「ってことだ。お前の提案に乗るつもりは無い。やりたいなら勝手にやりな。まあ、あんな玩具程度しかないんじゃ、結果は見えているだろうがな」
ガジェット程度では、この島ではボヤ騒ぎ程度しか起こせないだろう。
「やはり協力は出来ないようですね、魔族崩れの夢幻魔人」
背を向けて去ろうとすると、そこには新しい2人組がいた。
「なるほどな。今はおっさんとガキの2人組が流行ってるのか？　俺もガキのペアを見つけるべきかね？」
姿を見せたのは大柄な男性と青い髪に無表情が特徴の少女だった。
大柄な男性は片メガネをかけ、その奥の瞳がジャグラスを冷たく睥睨している。その瞳には隠し切れない憎悪があった。
対して青い髪の少女は何の感情も見せない。電源の切れた人形のように、視線を前に向けているだけだ。

「協力せぬというのならば、この場で切り捨てるまで……!!」
　巨大な戦斧を取り出す男。
「その武器……ロタリンギアの殲教師か？　面白れぇ……!!」
　ジャグラスも刀を取り出した。
　一触即発の空気はすぐに霧散することになる。
「やめた方が良い」
　シルクハットの男が間に割り込んだのだ。
「君の敵う相手じゃあない」
「なんだと……!!　私に対して、魔族を前に矛を収めろと!?」
「本命の前に貴重な同胞を失う訳にはいかない。もっとも、そちらのホムンクルスを使えば話は別かもしれないがね」
「……アスタルテを無為に消耗させることこそ愚の骨頂。やむを得ないですね……」
　殲教師はしぶしぶ斧を収めた。
「（ホムンクルス、ね……）」
　ジャグラスも刀を収めつつアスタルテと呼ばれた少女を――――ホムンクルスを観察する。だが特に情報は得られなかった。
「（別に、そこを調べるのは俺の仕事じゃねぇな）それじゃあ、俺から1つだけアドバイスをしておいてやるよ」
　2人が――――シルクハットの男と殲教師が耳を傾ける。
「お前らがこの島でテロを起こそうとするなら、管理局の特務六課が相手になる」
「知っているよ。管理局のエース・オブ・エースを含め、名だたる魔導士が集結している部隊だろう？」
　その程度の情報、シルクハットの男は当然調べている。
　ジャグラスは無視して続けた。
「だが気を付けるべきは高町なのはでも、フェイト・T・ハラオウンでも、八神はやてでもない」
「ふむ、その面々なら私も知っていますが、それ以上の人物がいるという事でしょうか？」
　殲教師はそこまで詳しい訳ではなかったが、今挙げられた3人の名

前は聞いたことがあった。
「夜月　翔。この男に気を付けるんだな」
ジャグラスは質問を受け付けず、その場を去った。
「(まあこの程度の小物、夜月　翔が本気を出しゃあ一瞬だろうけどな)」
蛇倉の姿に戻りながら、思うのだった。

「ふぃ～」
俺はシャワーを止めてタオルを手に取った。軽く体を拭いて脱衣所に向かう。
戦闘から帰還した俺達は戦闘での汗を流すためにシャワーを浴びていたのだ。もちろん一緒に、ではない。
当然シャワーは男女で分かれている。この時間に男性でシャワーを浴びる人なんていないから、完全に俺の貸し切り状態だ。そもそもこの部隊は男性が少ないから一緒になることもまれだけどね。わざわざここでシャワーを浴びる人なんて、それこそ訓練後のエリオくらいだし。
まあ、そこまで豪華な設備ってわけでもないけどな。普通だよ。普通のシャワーだ。仕切りに遮られた、立って浴びるタイプのシャワー。それが４つ並んでいる。
脱衣所には市民プールのような青いロッカーが４つほど積み上げられている。
そのうちの一つに、手首に巻いていたカギを差し込んで回す。この辺りはアナログだった。
「それにしてもどうしたものか……」

インデックスの輸送は無事に終了した。だが誰が襲撃してきたのかは分からずじまいだし、インデックスともまともに話すことは出来なかった。そして神裂の1週間後という言葉。
色々と気になることがあるが、これ以上ツッコむことが出来ない。なのはさんが回収したガジェットは解析に回しているので、それが唯一の手掛かりだな。
考えながらロッカーに手をかけた。
きぃ、と軋むような音を立ててロッカーが開く。それと、
「ようやく浴び終わったのね」
後ろから声をかけられるのは同時だった。
「っ!? ラ、ラム!? 何やってんだよ!? というかいつ入ってきたんだ!?」
俺は手に持っていたタオルで局部を隠しながら、絶叫した。
入口の扉に寄りかかり、腕を組んでいるラムがこちらをまっすぐ見ていたのだ。
いくら俺でも、不意打ちで裸を見られるというのは恥ずかしさがある。
「うるさいわ。いくら人が少なくなっているとしても、隣には人がいるのよ」
「っ!!」
そ、そうだ。隣ではなのはさんやスバルさんがシャワーを浴びているはずだ。あまりうるさくするとこの状況に気づかれてしまうかも

「や、この状況だとお前の方が怒られるだろ」
「ラムは掃除に来て鉢合わせたって言えるわ」
「そう言ってくれれば、俺への誤解も解けそうだな」
「……それもそうね」
ラムはしまったとでも言いたげな顔になる。どれだけ俺を陥れたいんだ。
「じゃあ早く出てってくれ、ドッキリを仕掛けたいのならまた別の方法にしてくれよ」

そう言って俺はロッカーの中から衣服を取り出そうとする。
「や、早く出てくれるとありがたいんだけど」
ドアの前から動こうとしないラム。一体何かと首をひねり――――1つの可能性に思い当たった。
「んっ……」
その考えを裏付けるかのように、ラムは着ているメイド服を脱いだ。『脱ぎだした』ではなく『脱いだ』のだ。
止める隙もなく、メイド服の上下が重力に従って地面に重なり落ちた。
もともとあの扉に立っている時から、服を体に身に着けるための機能――例えばリボン、ボタン、ファスナーなど――がすべて取り払われていたのだ。扉の前から動かなかったのは衣服がずり落ちるのを防いでいたからだろう。
後はもう衣服を脱ぎ去るだけ。その状態になっていたからこんなに素早く、俺が抵抗する隙もなくこんなあられもない姿になれたんだ。
「っ」
「何呆けているの？　お世辞の一つでも言ったらどうなのかしら」
上下セット、ガーターベルトまで揃えられている白い下着。下着の白とはまた違う白い肌。胸のボリュームはそこまでもないが、全体のバランスの取れた綺麗な体だ。
「まじまじと見ないで。汚らわしい」
「さいですか……」
この状況でも、ラムの毒舌は健在のようだ。
俺は目を反らした。
「や、いいって。そんなことしなくて。前も言ったけど――――」
「前も言ったけど、何もしないで庇護下に入るのは気分が悪いの。その方が私が安心できる」
「……なんでこのタイミングで、俺まだ何もしてないだろ」
「前払いよ。それに、こんなに人がいないタイミングなんてそうそうないんだし。あなたもシャワー浴びてくれたしね。まさかあなた、身

体を清めもせずに相手をさせるつもりだったの？」
　そもそも相手をしてもらおうと思ってなかったんだよ!!
「はいはい。じゃあさっさとソレ、取りなさい。出来ないでしょ」
　ラムが目を細めて俺の下半身のタオルを指さしている。
「今は気分じゃないから――――」
「……そうは見えないけど？」
　視線を下に向けると俺の下腹部が見事なテントを張っていた。
「さっさとどけなさい」
「おい……!!」
　タオルを引っ張られて、めくりあげ上げられる。
「っ……!?」
　ラムが息を呑んでいる。その反応は、パンパンに膨れたペニスを突き付けられた者として当然の反応だった。
「……こんなにしてるんだから、遠慮する必要は無いわ」
　だが、あくまで態度を崩さずに俺の前の跪いてきた。
　ロッカーに追い詰められる形になっている俺には抵抗の手段が無い。
「んろぉ……」
　たっぷりと唾液をまぶした両手で、俺のイチモツに触れてくる。何かで勉強でもしたのだろうか。自分の唾液をローション代わりにしたその手淫は、ペニス全体に抗いがたい刺激を与えてくる。
　浮き上がった血管ごと竿をマッサージされれば、あっという間に先走り汁が漏れ、ラムの唾液ローションと混ざり合う。
「シャワー浴びたんじゃないの？　すごい匂い……先っぽから出て来たヤツのせい？」
「あ、ぁ。そう、かもな……」
「ふうん」
　そう言う間もラムの手は止まらない。だが俺の反応に気分を良くしたのか、手の動きがより大胆になったように感じる。
　機械のように規則正しかったものに緩急が付き始めた。さらに追加で、手のひら全体で亀頭を撫でまわすようにして刺激してくる。

するとあっという間だった。
「ラム、そろそろ……!!」
「はいはい」
ラムはそう言ってペニスの先っぽを口に含んだ。
その瞬間。
――ごびゅっ！　じゅぶぶっ、ゆゆびゅっ!!
「んんんっ!?　ん……っ」
ラムの口内に白濁液をぶちまけた。ラムは最初は驚いていたようだが、すぐに飲み込み始めた。むしろ吸い付くように俺の精液を飲み込んでいく。
「じゅぶ、じゅるる、じゅぷぷ……っ」
「う、お……っ」
亀頭しか咥えていなかったラムだったが、いつの間にか顔をストロークさせて尿道に残った精液も吸いださんとしていた。
ラムが口を離してくれたのは、一度の射精によって萎えたペニスが、ラムの口内の刺激によって再度勃起する寸前になった時だった。
「ずいぶんたくさん出したわね。他の娘とはご無沙汰だったのかしら」
「全然そんなことはないが」
「ま、ラムはあなたの女性関係なんて興味ないけど……次はどうするの？」
ラムの言う『次』とはつまり、これ以上の行為があるのかという事だ。
「これ以上は、アレだろ」
「別に、私は覚悟できてるけど？」
顔を反らしながら後ろで手を組むラム。身体を前に出すように、差し出すように。耳が赤くなっている。ラムも恥ずかしく思っているんだ。当然だ。男性に向けて体を差し出すなんて行為、恥ずかしくないわけがない。
それに対して俺は、
「や、だから……いいって。これ以上は」

だからといって、そんな気持ちは受け取れない。
「そう。意気地がないのね」
そう言うラムだったが、どこかホッとした様子だった。俺の横を通り過ぎ、洗面台に向かい口をゆすいだ。
地面に脱ぎ捨てられたメイド服を身に着け始める。流石に面倒な構造になっているらしく、俺の方が先に着替えが済んだ。
「別に待たなくていいわ。一緒に出て誰かと鉢合わせしたら面倒だから」
「……それもそうだな」
俺は着替え中のラムを置いてシャワー室を出た。
それから夜勤の勤務時間が終わるまでラムに会うことなく、俺は退勤するのだった。

「ふわぁ……」
夜勤勤務を終えたラムがあくびをしながら帰り支度をしていた。
そこに、たった今出勤してきたレムが笑顔で近寄って来る。
「姉さま！　おはようございます！」
「おはよう、レム」
２人は挨拶を交わして着替えに入る。ラムは着ていたメイド服を脱ぎ、レムはハンガーにかかっているメイド服を着ていく。
衣服が交差する。レムは私服から仕事着に、ラムは仕事着から私服に。
「姉さま、それ……」
「え？　ああ……」

ここで働くにあたって、レムとラムは衣服一式を六課のメンバーと買い揃えていた。現代風な衣服や下着類、こまごまとしたものを。
だがその中に、今ラムが身に着けているような下着はなかった。数少ない別行動の時間にこっそりと購入したのは間違いない。
「ええ、ちょっとね」
「素敵です姉さま！　やはり姉さまはどんな服を着ていても可愛いです！」
妹の賛美に少しだけ気分が上がるラム。良い気分になって着替えを済ませた。
２人はそろってロッカーを出る。
「お疲れですよね。六課のことはレムに任せて、今日は家でゆっくりと休んで下さい！」
「ありがとう。そうさせてもらうわね」
とは言ったものの、ラムには眠気こそあれそこまでの疲労感があるわけではなかった。それは身体に充足している魔力だ。
翔から取り込んだ魔力のおかげで消耗していた体力が元通りになってしまったのだ。
「（予想以上ね。相手の精から魔力を取り込む行為。これなら六課に『もしも』のことがあっても大丈夫）」
「姉さま？　どうかしましたか？」
「いいえ。何でもないわ」
余計なことを考えているとすぐにレムに察知されてしまう。ラムはそれ以降余計な思考を放り出して妹との雑談に集中する。
すると、
「あ、ラムちゃん、レムちゃん」
「「おはようございます、シャマル先生」」
白衣を着たシャマルが顔を出した。
「おはよう。ラムちゃんは今帰り？　夜勤だったものね」
「はい。今日はこれで失礼させていただきます」
「ん、魔力は大丈夫？　帰る前に補給しておこうか？」
ラムの魔力はいつもシャマルが補給していた。１日に１回、出来る

だけ満タンにしておくのはシャマルの仕事の1つだ。
「いえ、大丈夫です。昨日はそこまで仕事が無かったので消費しませんでしたから」
ラムは少し嘘をつく。仕事がそこまでなかったのは事実だが、補給の必要が無いのはすでに翔から補給したからだ。
「そうなの？　ちょっと見せてね」
そう言ってシャマルはラムの魔力を測定する。
「あら、本当ね。確かにこれだけあればしばらくは大丈夫そう」
「……？」
シャマルは納得していたが、レムはそのことに疑問を覚えた。
「(仕事が無くても1晩起きていればそれなりに消耗するはず……何か別の手段で補給したのでしょうか？)」
レムが疑問に思っても、ラムが話さなかったという事はレムが知る必要が無いことだという事だ。
「それではシャマル先生、失礼します。レム、しっかりね」
「はいっ、姉さま！」
「何かあったらいつでも連絡してね」
ラムの背中をレムは笑顔で見送るのだった。

島の異変

「ふわぁ～、ねむ……」

夜勤が終わったが俺は学校に行かなければいけない。

どうせなら夜勤の日は週末にしてほしかったとか、夜勤の次の日は学校休みにしてほしかったとか、色々と望みはあるが望みを叶えられるほど武偵校は甘くない。

何時出席出来なくなるのか分からないため、行ける時には行かないと。最悪居眠りしてでも席に座っておかないと。出席日数を稼ぐんだ。補習は後でどうとでもなる。

我ながら考え方が末期だな。

という訳で六課から直接学校へ行く。

夜勤明けという事で今日も六課には行かなくてもいい。実質学校は半日だ。それが終わったら存分に休むとしよう。

と、思っていたのだが、

「爆睡してしまった……」

那月先生の授業が無かったおかげで、俺が寝落ちしてしまっても無理やり起こされるようなことが無かった。それでいいのが武偵校の先生方。

気が付けば授業が終わり、お昼の時間になっていた。家でゆっくりと休むつもりだったが、眠くなくなってしまった。

「相当お疲れだったみたいだな」

「矢瀬か……」

「お前、今日来た意味あるか？　授業中ずっと寝てたじゃねぇか」

「そうだな……」

俺だって寝たくて寝ていたわけじゃない。や、眠かったのは事実だけど、睡魔には抵抗してはいたんだ。負けただけで。

「意味ねーよ、それ」

「だな、テストで巻き返すわ」

「それを言えるのは強ぇな」

完全記憶能力のおかげだけどな。

「そういえば土御門は？」
何時も俺に絡んでくる監視役その２の姿が見えない。
「さあ？　授業が終わったらどっか行っちまったぞ。用事があるって言ってたが」
「ふーん？　珍しいこともあるもんだな。アイツが忙しそうにしてるなんて」
俺の監視よりも優先しないといけないことがあったってことか？
インデックス関連なのかな？
矢瀬は……まあ、詳しくは知らないのかな。管轄が違う訳だし。
「じゃ、俺は帰るかな」
家に帰ってもやることがあるわけじゃないけど、授業の無い学校にいつまでもとどまっている趣味はない。
「ララ王女はいいわけ？」
「ああ、今日はね」
今日も狂三にお任せだ。
ララは王女様だけど、学校のルールには従わなければいけない。ララにも授業があるし、その授業に学年の違う俺は参加出来ないのだ。
俺は矢瀬に挨拶して教室を出た。
校門を出たところでメールを受け取る。
「ん……聖天子様？」
予想外の相手からのメールだった。
だがお呼びがかかったとあれば、参上しないわけにはいかない。
俺は進路を自宅ではなく聖天子様のお屋敷に向けるのだった。

「急にお呼びしてしまって申し訳ありません」

「いえ、とんでもない」
３０分後、俺は聖天子様と向かい合っていた。
テーブルにはお茶……ではなく、お昼御飯が並んでいた。移動中にお昼ご飯は済ませたのか、という追加のメールが届いたことが原因だろう。
特に遠慮する理由も無かったので素直に返信しておいたら、こうして食事が並んでいたのだ。
「こちらこそ、お昼を待たせてしまって申し訳ない」
聖天子様は見知った私服（ドレス？）ではなくどこかの学校の制服を着ていた。恐らくは仕事のせいであまり登校出来ていない学校の制服だろう。
わざわざ学校の合間を縫って会う時間を作ってくれたのだ。
「あ、えと、学校にはもう行ってきていて。これから仕事なので。この後すぐに着替えて出なければいけないんです」
「忙しいですね……」
学校と仕事の合間だった。それでも忙しいことには変わりない。
「それではお話を始めましょうか。あ、遠慮なく食べて下さいね」
「いただきます」
聖天子様は食べながらしゃべるなんてはしたない真似はしない。俺もそれに倣い、しばらくの間は食べることに集中する。
５分ほど経った頃に、聖天子様が口を開いた。
箸を置き、俺を見る。
「それでお話ですが……あ、翔さんは食べながらで結構ですよ」
箸を置こうとした俺を聖天子様が止める。
「日本政府から連絡がありました」
「むぐッ!?　に、日本政府から？　な、何でしょうか……？」
流石の俺も、政府からの連絡と言われれば身構えずにはいられない。まじめな顔の聖天子様も相まって、自然と背筋が伸びてしまう。
「ふふ、別に翔さんに何かあったわけではありませんよ」
「や、やめて下さいよ、脅かすのは……」
ごめんなさい、と笑う聖天子様。これ、もしかしてわざとやったの

か？
「それで、日本政府からの連絡ですが」
「はい」
俺が問い詰める前に聖天子様は話を進めてしまった。
「とある人物がこの島へ不法侵入したという連絡が入りました」
「とある、人物？」
新たな登場人物。その言葉に心がざわつく。不法侵入という事はつまり、相手は悪人である可能性が高い。
「はい。その人物の名前は『蛭子　影胤』、および『蛭子　小比奈』」
「なるほど……」
ここでその名前が出てくるのか。
「日本の極秘計画、魔導士を無力化する兵士、機械化兵士計画の産物です」
機械化兵士計画とは『ブラック・ブレット』に登場する単語だ。薬物による強化や体の一部に機械を埋め込むなどして、超人的な攻撃力や防御力を持つ兵士を造り出す計画。
日本の他、アメリカやオーストラリアで行われた。日本では『新人類創造計画』と呼ばれている。
被験者に特に才能が必要ないため、誰にでも改造手術は受けられることが一応の魅力になっている。
こうしてみてみると、学園島でもやってそうなことだよな。一応、機械化兵士計画は学園島の力を借りずにそれぞれの国で行われていることになっているが。
「機械化兵士計画は魔導士に対抗するために考えられたものでしたが、その低い手術成功率と出来上がる兵士の能力が釣り合わず、長い間凍結状態になっていました」
「それがなんでまた？」
「蛭子　影胤は数少ない成功例です。後期に作成された最も完成度の高い機械化兵士の1人ですから。蛭子　小比奈は――――こちらは幼い少女で機械化兵士ではありません。こちらに来ている情報では彼の娘だと。ただし母親は不明、情報はありません」

原作の設定だと攫ってきた女性に影胤が無理矢理子供を作らせ、さらにその子供に殺し合いをさせ、残った1人が小比奈という事になっている。
恐らくこの世界でも大きくは変わらないだろう。
「蛭子　影胤はかつて日本の陸軍に所属していましたが、犯罪を繰り返し指名手配されていました。蛭子　小比奈も警官や軍関係者の殺害に関与しています。そんなん2人がどのような目的でこの島を訪れたのかは不明ですが……」
「わざわざこんな孤島に来るんですから、何かの理由があるのは間違いないですね」
「はい……」
聖天子様は不安そうな声を出している。
犯罪者が不法侵入してくると聞いて、犯罪を思い浮かべない人はいない。日本政府から警告があるのは当然と言えた。
計画に関して、聖天子様は完全に無関係だろう。それでも責任を感じているのかもしれない。
「日本政府は情報をよこすだけで何もしてくれないんですか？」
だとすればかなり無責任な話だ。
「いえ、これから六課と楯無さんに連絡を入れようと思っています。日本の警察や軍隊はこの島で活動しにくいですからね」
「そうなんですね」
そりゃそうだ。表立って人を派遣することは出来ないとしても、すでにこの島にいる人を使って解決する分には問題ない。というか、解決しなければいけない。
その点、この島で起きる事件に無条件で介入できる六課、日本の国防を担う家の1つである更識家はうってつけだと言えた。
六課と楯無さんを分けたのは、管理局への連絡と日本国としての連絡で分けているからだろう
「……あれ？」
「はい。どうかしましたか？」
「まだ連絡してないんですか？　六課と楯無さんには。あ、俺から伝

えて欲しいってことですか？」
　聖天子様はこれから連絡を入れようと思っていると言っていた。つまり、その２人よりも俺に先に連絡を入れたってことだけど。
「そんなことはしませんよ？　六課に対しては八神さんに連絡しますし、楯無さんにも直接お話しますから。そのために今日は学校を早引けしたので」
「……はあ」
　じゃあつまり、今日の午前中に受け取った情報を、俺が一番最初に連絡されたってことになるけど。
「はい。そうなりますね」
　それが何か？　みたいな顔されても。どうして？
「翔さんならいち早く知りたいと思うのではないかと考えまして。何かあったら、翔さんすぐに首を突っ込んでしまいますし。なら、最初から情報を知っていた方がこちらも安心できます」
「そんな、手のかかる子供みたいに……」
「雪菜さんとコッコロさん、他にもたくさんいるんですよね？　翔さんが心配をかけている人が。私もそうですから、あらかじめ知っておいて欲しいと思ったんです。この島には今、そう言う相手がいるってことを」
「……分かりました。ありがとうございます」
　その２人が騒ぎを起こせば俺は間違いなくかかわることになる。なるべく心配をかけないようにしようと心に誓います。
「こちらとしては、心配をかけさせるような行為は控えて欲しいんですけどね？」
「……善処します」
　聖天子様の困ったような表情に、俺はあいまいな笑みを浮かべるのだった。
　多分無理ですけど。

翔が聖天子様から話を聞いている頃。
「よし、休憩！」
シグナムの号令で六課の訓練が休憩時間に入った。
今日はなのはが夜勤明けで休みのため、シグナムが教導官を代行しているのだ。
「ふぅ……」
雪菜はタオルを使って汗を拭きとる。飲み物を飲んで水分補給も忘れない。雪菜と耀は候補生なので何かあっても六課として出撃することはない。来年になるまで訓練の日々だ。
訓練自体は雪菜にとって苦ではないが、翔と一緒に出撃出来ないのは歯がゆい気持ちになっていた。六課の任務なら何をしているのか分かるのでそのモヤモヤも少なくなるが、翔の場合、外に出れば事件を引っ掻けてくるので気が休まらない。
だが、今日の雪菜は少し気分が良かった。
それは周りにも伝わっている。
「雪菜さん、最近何か良いことありました？　今日はずいぶん調子が良いみたいですけど！」
「そ、そうですか？」
先ほどまで組み手を行っていたエリオが笑顔で声をかけて来た。
雪菜は最近、似たような獲物を使うエリオとの訓練が多かった。そのおかげで真っ先に気が付いたのだ。
「そうだな、数日前までは力押しの印象があったが、今日は以前の柔らかさが戻ってきているように感じる」
歴戦の戦士であるシグナムも頷いていた。
だが同じ場所に住んでいるアスナと耀にも心当たりが無い。

「なん、でしょうね？」
だが雪菜には心当たりがある。そのせいで言い方が少しぎこちなくなってしまった。
「いや、何であれ調子が上がるのは良いことだ」
「そうですね！」
シグナムとエリオは無理に聞き出そうとはしなかった。シグナムは細かい事情までは興味が無いし、エリオも女性の事情に首を突っ込むのは野暮だと思ったからだ。
「はい。ありがとうございます……」
「それで、結局何があったの？」
シグナムとエリオは離れたが、アスナと耀――特に耀は逃がしてくれない。
「うん。実は――」
雪菜は今日、学校であったことを2人に説明した。
先日、まどマギ組が翔に仕掛けたその顛末を、雪菜は聞かされたのだ。
「なるほど」
「翔君がそんなことを……」
雪菜の報告にアスナと耀が頷く。
「そんな言葉で機嫌がよくなるなんて、雪菜は単純だね。本人に言われたわけでも無いのに」
「うぐっ」
そんなこと、雪菜にも分かっていた。だからこそ、あまり人に言いふらしたくなかったのだ。
だが、翔の婚約者候補騒動で、『分かってはいても』翔に対して不満を持っていた娘がいたことは事実だった。もしかして、万が一、まず無いことだとわかっていても、ララと婚約したことで他の女の子との関係が切れてしまうのではないかと。
そんな不安に対して、翔はわざわざ本当のことを言う必要のない相手に対しても断言して見せたのだ。
その不安を取り除くには十分すぎる行動だった。

「でも、そうなんだね」
「おっと、こっちにも単純な人が」
アスナはしみじみと、雪菜の言葉を頭の中で反芻していた。
「3人共」
翔のことを知っている人にしか分からない空気を作っていた3人にシグナムは声をかけた。3人は訓練の再開かと思ったがそうではなかった。
「主から連絡が入った。行くぞ」
その言葉で訓練が中断された。

「はい、集まってくれたな～」
ミーティングルームに集められたのは訓練途中だったシグナム、アスナ、雪菜、耀、エリオ、キャロだった。
前に立つのは部隊長であるはやてだ。
「ついさっき聖天子様から連絡があった。現在この島に、不法侵入した犯罪者がおる。名前は蛭子　影胤、および蛭子　小比奈」
モニターに情報が映し出される。それは翔が聖天子様に教えられたものと全く同じものだった。
「この者の捜索を我々で行うのですか？」
「いんや、違うよ」
シグナムの質問にはやては首を横に振る。
「極秘の情報を聖天子様から個人的に貰ったいうだけで、表向きには管理局には何の要請も来とらんから」
「政治という訳ですか。私には理解しがたいものです」
シグナムが冷めた口調で切り捨てた。

「まあまあ。ちゅうわけで、そっちは何か起きてから……もちろん表向きはな。みんな警戒はしといてな」
「「はいっ!!」」
はやての緩い忠告にみんなが返事を返す。
「で、本命の、ウチの部隊が手伝うのは……」
モニターが切り替わった。
「最近、魔族への襲撃件数が急激に増えとる」
映された棒グラフには、ここ数日で急激に増えている事件件数が示されていた。
魔族、特にD種と呼ばれる――――一般的に吸血鬼と呼ばれる種族への襲撃件数（単なる小競り合いを超えたレベルのものが）が大きく増えているのがわかる。
グラフを素早く読み取ったアスナが質問をする。
「これもその蛭子　影胤という人物の仕業なんでしょうか？」
「それは何とも言えんなぁ。時期的には重なるけど、この孤島まで来て、わざわざ吸血鬼に手ェ出すなんて。どういう意味があるのか」
今度は雪菜が口を開いた。
「これは同一人物の仕業なんですか？」
「襲われた吸血鬼はもれなく魔力を吸いつくされて干からびてしもうてる。戦闘があったにしても、全員揃ってそうなるんはおかしいやろ？」
確かに全員揃って同じ症状というのはおかしな話だった。
「という事でみんなにはしばらく、この捜査に加わってもらう。詳しい内容についてやけど……」
はやては吸血鬼襲撃事件の捜査について話を進めていくのだった。

平和な午後

聖天子様から情報を得た俺は、これからどうしようかと考えていた。

「蛭子　影胤か……」

予想外の人物だった。少なくともインデックスの物語で出てくるとは思っていなかった。ガジェットドローンが出て来たってことは、敵は魔術師以外の可能性があった――――いや、それ以外の可能性の方が高かった、ってことなんだろう。

とは言え手掛かりが無い。ここから走り出して影胤を見つけるのは不可能だ。

「六課とか楯無さんにも伝えるって言ってたし、具体的な捜査は明日からかな……」

きっと六課でも何かしらの対策を講じることになるだろうからな。一人で焦っても仕方がない。

「一人で動くのはやめましょう、ってね。我慢我慢……」

心を落ち着けた。

端末を見ると丁度１５時。初等科や中等部の授業が終わるころだ。まだ眠くも無いことだし……

「よし！　今日はみんなの特訓に顔出そうかな」

ちょっと試したいこともあることだし、な！

「どうもー」

「おっす」

いつもちびっ子たちが特訓を行っている公園に向かうと、ノーヴェ

さんが手を上げて迎えてくれた。
　子供たちの姿はない。みんなはランニングに行っているらしい。
「今日は六課は？」
「お休みです。昨日は忙しかったもので」
「ふーん？　そういやスバルの奴もティアナに引っ張られて夜出てたな……」
「ま、そういうことです」
「なるほどね」
　いくら身内でも部外者であるノーヴェさんには詳細は話せない。極秘の輸送計画だしな。ノーヴェさんも理解しているようで、それ以上の追及はなかった。
「……」
「何だよ、そんなじっと見て」
　逆に俺が気が付いてしまった。
　ここに来たのは本当に別の目的だった。それに部外者には話せないこともある。でも今さっき貰った情報は個人的に頂いたものだ。だったら、話してしまってもいいかもしれない。
「……」
「だから何だよ！　そんなに見てきて！」
　そうだな、子供たちの安全のためにもノーヴェさんには伝えておこう。
「実はですね……」
　俺は影胤についてノーヴェさんに話した。
「……お前、それ言っても良かったのか？　機密とかじゃあ……」
「個人的に教えてもらったことですからね。別に悪用したわけじゃありませんから」
「ちゃっかりしてんな、お前……」
「先走って勝手に事件に首を突っ込むよりはよっぽどいいと思いますよ？」
「それ自分に言ってんだよな？」
「それはもちろん……そういう訳なんで、子供達は早めに帰らせた方

が良いかもしれないですね」
「だな。しばらくは暗くなる前に終わりにするよ」
子供を預かる人間として当然の判断だった。そしてここからは子供を預かる『ノーヴェ師匠』ではなく、ジェイル・スカリエッティに造られた『戦闘機人ノーヴェ』として問いかけて来た。
「それで、さ。そいつ、蛭子　影胤……体を改造した機械化兵士ってヤツなんだな」
「はい」
そしてこれが、俺の気が付いてしまった繋がりだ。
ノーヴェさんも戦闘機人――――すなわち体を改造された機械化兵士のようなモノだ。とはいえかなり希薄な繋がりなのは間違いない。捜索に繋がる手掛かりが得られる可能性は非常に小さいとは思っていた。
「いや、なんつーか、さ……」
ノーヴェさんも言葉に詰まっている。
思う所はあるんだろうけど何も言えないんだろう。こうして話した俺だけど、ノーヴェさんが戦闘機人であることを俺は話されていない。
いくらノーヴェさんでも、テロリストが自分と似たような存在と言われて、秘密を明かせるほど図太い訳ではなかった。
言葉に詰まってしまったノーヴェさん。そうしていると、
「お、帰ってきたぞ」
「そうみたいですね」
みんなが戻ってきた。それによって話題が打ち切られてしまった。
「あっ!!　お兄さん！」
「「お疲れ様ですー!!」」
俺を見つけたヴィヴィオちゃんがスピードを上げ、その後ろにリオちゃんとコロナちゃんが続いている。
さらに後ろにはアインハルトと綺凛、クロ、ティナ、ヤミが続いている。というかヤミも走ってたんだな。一緒に走ったほうがヴィヴィオちゃんに何かあった時に対処がしやすいってのがあるんだろ

う。
流石に子供のランニング程度では息1つ切らしていない。
学校指定の体操服姿のヤミが俺に近寄ってきた。
「刀藤　綺凛ですが、調子は持ち直してきたみたいです。少なくとも、私の目から見ては」
「見ててくれたのか。ありがとう」
「いえ。ついでですから」
あの事件にはヤミも関わっていた。その辺りの縁で綺凛のことも見てくれたらしい。
ヤミと入れ替わりになり子供たちが近寄ってきた。
「お兄さん、今日はどうしたんですか!?」
そうだ。こっちがここに来た本命だったな。
「ちょっとみんなに協力して欲しいことがあってね」
俺はみんなにやってほしいことを説明した。
「……って感じなんだけど、協力してくれる人いるかな？」
「「はいはいはいーっ!!」」
全員がそろって手を挙げた。アインハルトも綺凛も、控えめながら手を上げている。
子供達は顔を見合わせ、
「「じゃーんけーん!!」」
の結果は。
「勝ちました!!」
Vサインをしているのはコロナちゃんだった。
「いいなぁ、コロナ！」
「次は私ね!!」
「ま、まあまあ、ヴィヴィオさん。次もありますから」
「そうですよね……ちょっと気になりますけど」
ヴィヴィオちゃんとリオちゃんがうらやましがっている。なんだかんだ言ってじゃんけんに参加していたアインハルトと綺凛もやっぱり気になっていたみたいだ。
「……ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんと一緒に戦うのは私達の方が多

いんだし、私達で試した方が効率良くない？」
「そうですお兄さん。私達で試すべきです」
クロとティナが何やら大人げないことを言っているが、勝負（じゃんけん）の結果がすべてだ。その提案は受け入れられない。
「じゃ、いくぞー」
「はいっ！」
コロナちゃんがわくわくといった様子で胸の前でガッツポーズをしている。
ヴィヴィオちゃんたちの中では（クロは年齢と中身が釣り合っていないのでノーカン）一番おとなしそうな娘なんだけど、こうしてみると年齢相応の所もあるんだとほほえましくなる。
《Ｗ》
俺はダブルウォッチを起動させる。ジカンギレードにセットして引き金を引いた。
今回は、先日手に入れた他人をアーマータイムさせる能力の検証をしようと思ってきたのだ。
他人に自由にライダーの力を付与する能力。どの程度までやれるのか、制限などはないのかはしっかりと検証しておきたい。
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＪＯＫＥＲ！　Ｗ！》
コロナちゃんにアーマーが装着される。
トレーニングウェアが分解され、それが体のラインがわかるアンダーウェアとアンダーアーマーに。さらにその上から俺も装着したことのあるＷアーマーが、コロナちゃんの身体に合わせたサイズにスケールダウンして装着された。
頭にはダブルをイメージしたと思われる、『Ｗ』の形をした緑と黒２色の髪飾りが装着された。
そして一番重要なベルトだけど……なんとダブルドライバーが、サイクロン・ジョーカーの状態で装着されていた。
どうやらこの方式でアーマータイムを行うと、本家のベルトが装着されるらしい。

……いいなぁ。俺もこの方式で変身しようかなぁ……
「「わー!!」」
俺が黄昏ていると、コロナちゃんに起きた変化に本人も含めた3人（残り2人はヴィヴィオちゃんとリオちゃん）が歓声を上げていた。
「すっごい派手だね！」
「ね！　半分半分で！　コロナ、いつもと違うところある？」
ヴィヴィオちゃんとリオちゃんがペタペタと装甲に触りながら問いかける。
「うん……魔力は全然使ってないのに体がすごく軽いよ！」
コロナちゃんがアーマーの性能を確かめるためか、色々と動き回る。その過程で右手を大きく振りかぶった。
「へぇ～！　そうなん――――わっ!?　風が!?」
俺達の所にまで風は伝わってくる。子供の手で扇いだ程度でこの強さの風は起こらない。サイクロンの力を無意識に使ったのだ。
「ねえコロナ、ちょっと組手してみようよ！」
「うん！　いいよ！　いいですか？」
「ん、いいよ。違和感があったら教えてくれ」
許可を求められたので、頷いて返した。
そうして始まる2人の組手。全力には程遠いだろうけど、軽い音と共に何度も拳や蹴りが交差する。
「へぇ～、確かにいつもより動きがいいな。動きが軽い」
ノーヴェさんが呟いている。
純粋に身体能力が上がるジョーカーの力もあるからな。
しばらく体を動かしていた2人は、満足したのか戻ってきた。
「じゃあ次の実験だ」
俺はメモリを取り出した。
《ＴＲＩＧＧＥＲ》
コロナちゃんの腰にあるベルトを操作しようと腰をかがめる。
……でもこれ、ベルトがスケールダウンしてるから元の大きさのメモリ入らないぞ？
「無理だよな……」

試しにメモリを近づけてみると、ベルトに合わせて段々とメモリが縮み始めた。
「……ガリバートンネルかよ」
「え？　なんですか？」
「何でもない、よっと」
最終的にぴったりの大きさになったメモリを差し込み、
《ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＴＲＩＧＧＥＲ！》
フォームチェンジを行った。
左側に装着されていたアーマーが消え去り、青い色の装甲が装着された。その胸にはトリガーマグナムが引っ掛かっていた。
「「「おー!!」」」
みんな、いちいちい歓声を上げてくれて楽しいな。
「私、銃なんて持ったの初めてだよ～」
「人に向けちゃだめだぞ」
銃を持ってポーズを決めているコロナちゃんに注意しておく。
「フォームチェンジも問題なし、っと」
恐らく変身アイテムさえあれば、いくらでもフォームチェンジできるんだろう。今は基本フォームしかないけど、アイテムさえあれば強化フォームにも、最終フォームにもなれるだろう。
これは夢が広がるな。
「じゃあそのままで、次いこうか」
「はい！」
次の予定だったリオちゃんが元気よく頷く。
新たにウォッチを起動させ、引き金を引く。
《ＢＵＩＬＤ》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＢＥＳＴ　ＭＡＴＣＨ！　ＢＵＩＬＤ！》
ビルドアーマーが生成され、コロナちゃんの時と同じように今度はリオちゃんに装着される。
すると、
「あれ!?」

コロナちゃんが装着していたダブルアーマーが消えてしまった。
「ふむふむ、なるほどね」
つまり2人以上同時にライダーの力を貸し与えることは出来ないってことだ。全部のライダーの最強フォームをズラリと並べるなんてことは夢物語になったってことだ。少なくとも、現状の強化パーツでは。
「お兄さん、これ……」
「あー、いいのいいの。こういう実験だから」
でもこれで試してみたいことは全部試すことが出来た。
「じゃ、他のみんなも使ってみる？」
俺が新しいウォッチを取り出すと、子供たちは歓声を上げるのだった。

ここはイギリス清教の教会。そこを訪れる男がいた。
教会には全くふさわしくないグラサンにアロハ、金属製のアクセサリーをじゃらじゃらと首にかけた軽薄そうな男――土御門　元春だ。
「やー、久しぶりだにゃ～」
声をかけるのは必要悪の教会の同僚でもあるステイルと神裂だ。
静謐であるアズの教会には場違いなほど軽い挨拶に、2人の顔がしかめられる。嫌な顔になったのは土御門が顔を出したからでもある。
「あなたは相変わらずですね、土御門」
「んん？　そうかにゃ～？　ねーちんこそ、相も変わらず、相変わらず！　そんな恰好で！　――のわっ!?」
「次はありませんよ」

神裂が繰り出した鞘付きの一閃は土御門の鼻先を掠めた。次は頭蓋骨が叩き割られるだろう。と言うか叩き割る。神裂はそう決心している。
「……君のような人間にあの娘を任せないといけないと思うと、胃痛で倒れそうだよ」
ステイルもうんざりとした声を出す。
今の一連の流れを見ているだけで、インデックスに悪影響がありそうだと感じてしまう。
「まあ――――俺は俺で、別の仕事もあるからな。一日中つきっきりってわけじゃない。むしろ顔を合わせるのは本当に何かあった場合だけだ。それ以外はここの教会の奴に任せるさ」
土御門の口調が一瞬だけ変わる。
「それを聞いて安心したよ」
「おいおいステイル！　護衛がいない方が安心ってのはどういうことだにゃー!?」
一通りふざけたところで、仕事の話に戻る。
「で、『予定日』は何時なんだ？」
「3日後です。そこから現在の状況の説明を行って引継ぎの予定です」
「ふーん、なら『今の』禁書目録ともあと3日でお別れってことか。もう動けないのか？」
他の2人ほどインデックスに執着していない土御門は軽い調子で言う。インデックスの事情を知っていれば薄情にも見える態度だが、仕事だと割り切って神裂は応じた。
「頭痛はまだです……その前に少しこの島を見てわかる予定ですが」
「見て回る？　ああ、思い出作りか」
要人を連れて観光など、まっとうな組織では許されることではない。だが、一般に魔術使いに分類される魔術師は個人主義が強い。
組織に属しているのは『個人的な願い』をかなえるための手段でしかなく、利用できる間は利用するが、邪魔になれば容赦なく裏切るのだ。

その為に様々な対策は講じられているが、『やる奴はやる』。
ステイルと神裂にとってインデックスが最優先であるために、インデックスの願いは出来るだけ叶えようとしているのだ。たとえそれが、イギリス清教にとって多少のリスクになろうとも。
「(それにしても、襲撃されたってのに呑気なもんでもあるけどにゃ〜)」
そうは思っても土御門は口に出さない。代わりに、
「ま、観光するなら気を付けてくれ。ねーちんもいるし問題ないとは思うけどな」
土御門はにやにやと笑って言うのだった。

吸血鬼襲撃事件の捜査①

「おはようございまーす」
子供達とライダー変身遊びをした翌日の午後。特に何事もなく学校が終わり、俺は六課に来ていた。今日からまた普通の勤務だ。
だが、普通というと少し違うかもしれない。
「みんな、すでに聞いたと思うけど」
なのはさんの前に並んでいるのは俺と、スバルさん、ティアナさん。あの時の夜勤のメンバーだ。
ちなみに、なのはさんの横にはなぜかにこにこと笑っているクローディアがいた。
「今日から魔族襲撃の犯人捜査のお手伝いをします」
「「はいっ!!」」
そう。今日からは何時も行っていた訓練ではなく、終了の時間まで外回りで捜索を行うのだ。
アスナ達は昨日からすでに捜索に加わっている。そこからすでに詳しい情報は聞いていた。やっぱり影胤の捜査は俺達は行わないらしい。
代わりに今日は楯無さんが六課に来ていない。向こうは向こうで捜査しているんだろう。
「2人一組で捜査してもらいます。スバルとティアナ、翔君とクローディアで」
そういう事か。
「そう言う事です♪」
クローディアが嬉しそうに言う。
「私も昨日偶然、六課に来ていなくて。捜査の割り振りがされていなかったんですよ」
「偶然ね……」
「翔も、私と一緒でうれしいですよね？」
「……」
今はなのはさんからの指示を聞いている場面だ。余計な私語は慎

む……という体でクローディアの質問への返答を控える。
「クローディア、今は控えてね？」
「はい」
なのはさんに注意されてもクローディアのにこにこは収まらない。
「はぁ……まあ、これ以上説明することも無いから。みんな、出発してね」
「「了解です！」」
敬礼して俺達は出発するのだった。

「クローディア、運転できるんだな」
「はい。基本的な車両は全て運転出来ますよ。まあ、街中なら自動運転で十分ですが」
外回りの捜査と言っても、管理局の車（パトカー的な物）で街中をぐるぐると走る回るだけだ。こんな明るい時間からあからさまに吸血鬼を襲う奴なんていないからな。パトロールして威嚇している感じだ。
そもそも吸血鬼は夜型の種族だから、この時間は彼らにとって夜中だ。
「それで翔さん、今回の事件はどうですか？」
「どうですかって？」
「何か思い当たる節はありますか？」
運転しながら横目で見てくる。
「クローディアは俺のことを何だと思ってるんだよ。流石に無理があるぞ」
吸血鬼が襲われるなんて、それだけの手掛かりじゃ何の予想も立て

られない。もっとネームドのキャラクターが関わってくれれば話は別だけどな。
　そもそも、俺の知らない原作だって可能性もあるしな。
「そう言うクローディアの方はどうなんだよ。意地悪なデバイスから何か手がかりは渡されてないのか？」
　クローディアのデバイスであるパン＝ドラは、その所有者に未来の出来事を悪夢という形で見せる。その手掛かりだってあるはずだ。
「そうですね」
　信号に引っかかり車が止まった。
「ここ最近、同じ夢を見ます」
「それを話したくて俺と一緒の捜査になるようにしたのか？」
「もちろん、翔と一緒にドライブしたいという気持ちもありますよ？」
　何やら怪しい手つきで俺の太ももに伸びてきた手を、持ってハンドルを握らせる。ハンドルを持っていなくても車は自動で進む。
「夢の内容はこの島の崩壊です」
「またか……」
　よく崩壊するな、この島は。
「島が廃墟になる、程度のものではありません。この人工の大地が自重を支えきれなくなり、バラバラに分解されて崩壊していくのです。恐らくはこの島の要石、キーストーンゲートが破壊されたのだと思います」
「キーストーンゲートが……」
　キーストーンゲートとはこの島を支えているまさに要石。島の中央にそびえる巨大なタワーのことだ。
　当然この島でも一番の警備が施されている。管理局の学園島支部の本部がある場所だし、武偵局だってある。
　そこを突破して最下層にある要石を破壊された……？
「そんな大事件が……いったいいつ？」
「日付もわかっています。今日を入れて後３日です」
「３日!?」
　何だそれは!!　急すぎる!!

「今回の吸血鬼襲撃が何か関係しているってことか？」
「それは分かりません。私が夢を見るのはいつも島の崩壊が始まり、住民の避難を行っている時ですから」
「でも、手がかりではあるってことか……」
「はい。なので、この手掛かりで何か思いつくことはありませんか？」
「……」
　俺は思考を巡らせる。同時に、クローディアに問いかけた。
「このことは、他の誰にも言っていないのか？」
「はい。翔さんにしか言っていません」
　そこが引っ掛かる。どうしてだ。
「何でだ。別にそのことを誰かに話せないなんて制約があるわけじゃないんだろ？　クローディアだったら予知の内容を理論立てて説明することだって出来るはずだ」
「そうですね。恐らくは出来るでしょう。ですが、私が信頼しているのはあなただけです」
「……っ、信頼しているのが、俺だけ？」
　いきなりの重い発言に息を呑む。
「なのはさんもフェイトさんも、はやてさんも？」
「信用しています。ですが、信頼しているのはあなただけです。だから話しているんです」
　そこまで信頼されるなんてやっぱり、
「……俺達、昔どこかで会ったことあるか？」
「いえ？　私とあなたが初めて会ったのは、間違いなくあの日の病室ですよ」
　俺が過去に行って何かしたわけじゃないのか……
「……」
　考える。
　クローディアがなぜ俺をここまで信頼しているのかではなく、どんな事件が島に破滅をもたらすのかを。
　今の情報はクローディアの悪夢の内容、聖天子様からの蛭子親子の情報、そして吸血鬼襲撃事件だ。

さらに忘れてはいけないのが禁書目録の記憶消去。あの時のステイルたちの態度を考えると、そろそろその時期なのは間違いない。破壊に繋がる行為ではないが、ちょっかいをかけられれば厄介だ。輸送で襲撃もされてるしな。

これがどう絡んで島の破滅に繋がるのか。

点と点はあるが、それがどう繋がるのかが分からない。何かが足りない。

「……すまん。断言は出来ない」

「……そうですか」

クローディアは一瞬だけ気落ちしたようだったが、

「それでは、もっと手掛かりを見つけないといけないですね♪」

「そうだな。それしかないな!!」

あと3日しかないんだ。落ち込んでる時間はない。

「ふふ、私が言うのもアレですけど、よく信じますね。夢の内容なんて」

今さら何を。

「前、散々助けてもらってただろ」

妹達の時には完璧な作戦立案で俺を助けてくれた。その内容を疑う必要は無い。

「あの時は翔にも心当たりがあったからあんなにあっさり信じたのでは？　今回は私が言ってるだけでそれ以外の証拠がありませんよ？」

確かに？　え、じゃあ……

「からかってたのか？」

「いいえ、全てホントです」

「何だよ！」

ちょっと期待しちゃったじゃないか！

「頑張りましょうね、翔」

「……そうだな」

テンションの変わらないクローディアに対して、俺は肘掛で頬杖をついて答えるのだった。そして窓の外を見ると、

「お、あれは……」

とても目立つ3人組を見つけた。
「翔？　何かありましたか？」
「ああ、アレだ」
俺が指さす方向には、ティーカップのような修道服を着た少女、赤髪に目元にバーコードのタトゥーの男、腰に長大な日本刀を提げた女性がいた。イギリス清教の面々だ。
「何でアイツら、呑気に出歩いてんだ……!?」
輸送で襲撃されたのに。数日後にはインデックスの記憶消去っていう大事な用事を控えてるのに。
「そうですね。何かあったんでしょうか」
「行ってみようか」
俺達は適当な場所に車を停め、3人の所に向かう。
すると3人は先ほどすれ違った場所から動いていなかった。何やら端末を広げてステイルと神裂が画面とにらめっこしている。
「おいっす」
「「っ!?」」
余程集中していたのか、2人が飛び跳ねてこっちを見てくる。
「君は……管理局の。何か用かな？　職務中のようだが。いや、それとも勤務時間に逢引き中だったか？」
ステイルが警戒心を顕わにして聞いてくる。俺の服装（勤務中なので学生服ではなく管理局の制服を着ている）を見ての発言だろう。
警官に話しかけられて嬉しいと思う人はいないよな。
そして俺の後ろからついてくるクローディアを見て皮肉も言ってきた。
「困ってるみたいだったからな。こう見えて管理局だからな」
「……別に困ってなどいないが」
「そうですか？　道案内も管理局の仕事の1つなのですが？」
クローディアが端末に表示されている地図アプリを見て言った。
魔術師は機械の扱が苦手。原作ではインデックスは電話を取れないし、神裂は洗濯機を泡だらけにしていた。ステイルは比較的そういう描写はないが、実際にはこんな感じだったという事だろう。

「ステイル、素直に聞いた方が良いんじゃない？」
「……そうだね」
インデックスに言われ、ステイルは渋い顔をしながらも頷いた。
「ここに、行きたいんだが」
硬い声で端末を差し出してきた。
「ふむふむ……」
マップに表示されている目的地は『学園島』、『観光地』で検索すれば最初にヒットするであろう観光地、商業施設だった。
端末を操作する俺を神崎が覗き込む。
「この島は凄いですね……電車の路線も複雑で。ここまで来るにも迷ってしまいそうでした」
「……それ、帰れますか？」
「……どうでしょうか」
無理じゃないのか……？
「帰り道までインプットしておいた方が良いんじゃないでしょうか？」
「そもそも、マップ通りに行けないんじゃないか？」
クローディアと俺は意見を出し合い、最終的に金銭的に問題ないと確認を取ったので、
「じゃあ、自動運転のタクシー呼んだんで。カード支払いでいいですよね？」
「はい。助かりました。これを使って下さい」
「帰り道までインプットされてるんで、タクシー呼ぶときはこのアプリ起動してここを押して下さい」
「……はい。分かりました」
不安だな。その声のトーン。
ちなみに、対応してくれているのは神裂だ。
「不安だったらこの番号にかけて下さいね」
電話番号をメモして渡す。メモにしたのは電話帳に登録してしまうと、そこから呼び出せないのではないかと思ったからだ。
「重ね重ねありがとうございます」

「タクシー呼んでみましょうか」
神裂は俺に言われた通り端末を操作した。
「い、意外と簡単ですね」
「次もこうしてくださいね。呼べば5分くらいで到着するので」
そして到着するまでの5分間、特に会話は発生しなかった。
ステイルはインデックスを守るように俺達との間に立ち何もしゃべらない。神裂はそわそわしていた。こちらはタクシーがちゃんと到着するのかどきどきしてるって感じだな。
タクシーが到着し3人が乗り込んでいく。一応神崎が運転席に、ステイルとインデックスは後部座席に座った。
「それでは」
「お気をつけて」
タクシーは行ってしまった。
「大丈夫でしょうか」
「まあ、最悪迷ってもその辺りの人に泣きついてもらえれば。アプリさえ動かしてもらえればタクシーは着ますから」
「いえ、そちらではなく。輸送機は襲撃されたんですよね？　こんな風に外出していて大丈夫なんでしょうか」
「どう考えても戦力過多だよ」
神崎さえいれば十分だ。襲うヤツに同情するね。蛭子親子でも何も出来ないだろう。
「なのであれば。行きましょうか」
俺達はパトロールに戻るのだった。
その日は特に収穫はなかった。俺達の方は。

「遅くなっちまったな」
「そうですね」
　こちらは捜査チーム、雪菜とヴィータのペアだ。初めて会った時はその容姿からヴィータの実力を少し疑っていた雪菜だったが、今はそんな気持ちは微塵もない。頼りになる上司として敬意をもって接していた。
　ヴィータも真面目な雪菜を高く評価していた。
　ペアを組んで2日。今日はヴィータの知るすこし危ない裏道を中心に歩き回っていた。
　その時、
「っ!?」
　濃密な魔力が膨れ上がるのを感じ取った。それも2つも。現れたと思った瞬間にぶつかり合い、スパークした魔力が2人の感覚を刺激した。
　ぶつかり合う魔力は周りのビルにも被害をもたらし始める。
「行くぞ、雪菜!!」
「はいっ!!」
　管理局としてその事態を放っておくわけにはいかない。すぐにその場から駆け出した。
　魔力で強化した身体能力を使えば魔力の発生源まで1分もかからない。その道中。
「ヴィータさん、アレを!!」
「なんだ!?　……っ、アレは……!」
　破壊されたビルの上空、燃える怪鳥が翼を広げていた。それは魔力を纏う魔獣ではなく、魔力そのもの。意思を持った魔力の塊。
「吸血鬼の眷獣か……」
「そうですね。あっ!」
　空を飛んでいた燃える怪鳥を、下から伸びて来た青白い腕が掴んだ。もがき苦しむ怪鳥だったが、すぐに力を失いその腕と同化――吸収されていく。
「急ぐぞ!!」

雪菜の返事を聞かず、ヴィータは駆けだした。管理局の制服からＢＪに姿が変わる。手には柄の長いハンマー型のデバイス、グラーフアイゼンが握られた。
雪菜もギターケースから折りたたまれた槍を取り出す。一振りすると変形し、戦闘形態になった。
２人が犯行場面に踏み込んだ。
「やめろテメェ!!」
「管理局です！　戦闘をやめて下さい!!」
武器を構えた２人は警告としての定型文（ヴィータは乱暴に停止を促しただけ）を発する。
だがすでに戦闘は終了していた。
黒衣を着た大柄な男が背を向けて立っており、地面には金髪の若い男性が倒れている。金髪の男性は口から涎を垂らし完全に気を失っていた。
黒衣を着た大柄な男は、雪菜達の警告にゆっくりと振り向いた。
「とうとう管理局に見つかってしまいましたか……」
片メガネをかけた瞳が２人に向けられる。
「そう言うこった。さっさと両手を上げな。街中で魔力を使った戦闘行為。現行犯だ」
「そういう訳にはいきません。私はまだ、道半ばなもので――――アスタルテ」
黒衣の男――――ルードルフ・オイスタッハは後ろにいた少女に命令を下す。
「命令受諾（アクセプト）。執行（エクスキュート）せよ、薔薇の指先（ロドダクテュロス）」
アスタルテの背中から、翼のように青白い腕が飛び出した。

吸血鬼襲撃事件の捜査②

「眷獣だと!?」
ヴィータは目の前の光景に驚愕の声を上げる。アスタルテの背中から伸びた青白い腕。それは魔力の塊であり、異界からの召喚獣である眷獣だった。
ヴィータの見立てでは、青い髪の少女は人間――いや、ホムンクルスだ。それが吸血鬼しか使えない眷獣を使っている。
だが考えている暇はない。すでに眷獣は召喚され、攻撃が始まっているのだ。
「雪菜ッ!!」
「はいっ！　雪霞狼ッ!!」
雪菜が前に出る。
迫りくる巨椀を、槍一本で迎撃しようというのだ。
「これは……!?」
次に驚愕するのはオイスタッハの番だった。
魔力の塊である眷獣には物理的な攻撃は意味が無い。対応するには同等以上の魔力をぶつけるしかないのだ。
だが魔力そのものを無効化する雪霞狼ならば問題ない。むしろ最適な武装と言えた。
そもそも雪霞狼は、吸血鬼の真祖を殺しうる性能を持った秘密兵器なのだ。そして雪菜もそのことを理解している使い手だ。
「……」
表情を変えないアスタルテだが、一撃を防がれたことで次の攻め手を決めかねていた。
そこに切り込むのはヴィータだった。
「テメェがアイツの司令塔だなッ!!」
「――っ!?」
手が空いているヴィータが襲い掛かるのはオイスタッハだ。小さな体とそこまで凶悪な見た目ではない武器だが、振り下ろされた地面が砕け割れる。

オイスタッハは戦斧を取り出す。体格では圧倒的に勝っているオイスタッハだが、押されているのもオイスタッハだった。
武器で受け止めるオイスタッハだが、ヴィータのハンマーで大きく吹き飛ばされてしまう。実力では圧倒的にヴィータが勝っていた。
「オラオラ、どうしたッ!!」
「ぐうっ……!! アスタルテ、援護を!!」
「命令受諾(アクセプト)――」
「させません!!」
ターゲットをヴィータに変えたアスタルテだったが、その間に雪菜が立ちふさがる。形的には雪菜達が挟み込まれている形だが、戦況は雪菜達が圧倒的に有利だ。
「このまま決めんぞ、雪菜!!」
「はいっ!!」
雪菜がアスタルテを引き離し、ヴィータがオイスタッハに攻め入る。雪菜は深追いせずに、ヴィータとオイスタッハの1対1の状況を維持し続ける。
「りゃあああぁぁぁぁっ!!」
「うぐっ!?」
ヴィータの強振がオイスタッハの戦斧を吹き飛ばす。建物の壁面に深々と突き刺さる。
獲物を失ったオイスタッハはヴィータから離れようとするが、
「逃がすかよォッ!!」
ヴィータの目の前に野球ボールほどの大きさの鉄球が現れ、
「はあッ!!」
ハンマーで打ち出された。
それがオイスタッハに当たる寸前。
「ッ!?」
鉄球が見えない壁にぶつかり跳ね返される。
「同士よ。あまり力を浪費するな」
ヴィータとオイスタッハの間に、シルクハットの男が割り込んできた。

「ッ!?」
その姿にヴィータと雪菜が息を呑む。それはブリーフィングで聞いた密航犯罪者――――蛭子　影胤だったからだ。
それを理解した２人が体に力を込めるのと、不可視のフィールドが辺り一帯に張られるのは同時だった。魔導士の力を奪う力場、ＡＭＦのフィールドだ。
「こいつ、ＡＭＦか……!!」
身体が重くなったことに、ヴィータが苦い顔をする。
「テメェ、蛭子　影胤だなッ!!」
「八神はやての個人戦力、鉄槌の騎士ヴィータか」
お互い会話をしていない。
会話できない相手に向けるのは、『コレ』しかない。
「アイゼンッ!!」
カートリッジがロードされる。
アイゼンが変形する。片方からは三つに分かれたブースターが。もう片方には鋭利なスパイクが作られる。
そのブースターが火を噴いた。
「でええええりゃああぁぁぁぁぁぁッ!!!!」
ハンマー投げのようにぐるぐると回転ながら勢いを増していくヴィータ。ラケーテンハンマー。生半可なバリアごと相手をぶち抜くヴィータの得意技だ。
だが、カートリッジがロードされたからと言っても、ここはＡＭＦ影響下だ。普段通りの威力が出る訳がない。
迫りくる攻撃に対して影胤は掌を向ける。
そこから透明な力場が発生した。
「ぶっ!?」
力場の壁にぶち当たったヴィータ。構えていたアイゼンが変な方向を向いたことで攻撃が逸れ、ビルの壁に激突してしまう。
「あれが……!!」
雪菜は息を呑んだ。
魔力は全く感知できない。はやてに見せられた資料にあった、影胤

の機械化兵士としての能力だ。斥力のフィールドを張る力だ。
「その通り。私はイマジナリィ・ギミックと呼んでいるがね」
魔導士殺しの機械化兵士。魔力に頼らないからこそ、体内にＡＭＦ発生装置を埋め込むことができ、魔導士に対して一方的に優位に立てる。
そこに薬物や機械でサポートされた兵器や異能力をぶつけるのが機械化兵士の基本戦術だ。
「……ん？　ＡＭＦのフィールドが届いていない？　いや、防がれているのか。面白い」
魔導士の力を奪うＡＭＦを、さらに神格振動波駆動術式のフィールドで無効化している雪菜。
だが、
「雪霞狼ッ!!」
雪霞狼に魔力を送り込んだ雪菜だが、斥力フィールドには何の意味も無い。自分の体を持ち上げられるほどのエネルギーをぶつけられれば、踏ん張ることも出来ない。
「っ!?　ぐっ……!!」
ヴィータと同じようにビルの壁面に叩きつけられてしまう雪菜。
対戦車ライフルや工事用クレーンの鉄球すら防ぐことが出来る影胤の斥力フィールドは『最強の盾』とも形容されるものだ。盾としてだけでなく、相手にぶつけることで攻撃にも使うことが出来る強力な能力だった。
「くそっ……!!」
「（そもそも近寄れない……!!）」
じりじりと痛む背中を無視して、武器を構えるヴィータと雪菜。
近接戦を主にする、搦手があまり得意でない２人にとって、影胤は戦いにくい相手だった。霊視を使って未来を『視る』ことが出来ても、相手に勝てるような都合の良いビジョンが視える訳ではない。
２人に武器を向けられている影胤だが、そのしぐさは余裕たっぷりだ。残念ながら表情は仮面のせいで見えないが、その余裕は本当だった。

「同士よ」
　戦闘から離脱していたオイスタッハに声をかける影胤。
「これ以上ここに留まるのは危険だ。ここは退散するとしよう。そちらの食事は済んだかね？」
「ええ。これだけ吸えば十分です」
　アスタルテが倒れていた吸血鬼から魔力を吸いつくしたのだ。戦闘で使った分いつもより多めに吸っていたが、吸血鬼の生命力なら問題ない。
　だが雪菜達にとって、目の前でのんびりと逃亡宣言されていて黙っている訳出にはいかない。
「ざっけんな!!　おめおめと逃がす分けねぇだろうが!!」
「逃がしません……!!」
「今の君たちに、我々が止められるのかな？」
　２人の宣言を影胤が嗤う。
　そう言って自らの右手に斥力フィールドを纏わせた。
「エンドレス・スクリームッ!!!」
　影胤の腕から、透明な力場が槍となって放たれる。ただ力場をぶつけるのとは違う。明確に攻撃の形で放たれたのだ。
　その力場が魔力ではないことを思い知らされている雪菜はとっさに叫ぶ。
「っ!?　ヴィータさん!!」
「アタシの後ろに来い!!」
　ヴィータは全力で障壁を張る。ＡＭＦで落ちる強度を、魔力を注ぎ込むことで無理やり補強した。
　障壁に斥力の槍が激突した。後ろに吹き飛びそうになるヴィータを支える雪菜。槍の形に収束していた力場がほどけ、周りに拡散していく。
　建物や道路を削り、粉塵を巻き上げ――――やがて攻撃が終わった。
「ふぅ……」
　ヴィータはホッと一息ついているが、障壁は解除しない。油断したところを攻撃されるかもしれないからだ。

しかし構えていても何も起こらない。
「ヴィータさん……」
「アタシは大丈夫だ。でも……」
影胤の攻撃の粉塵が収まり、辺りの様子が見え始める。
「ッチ!! 逃げられちまったか……!!」
ヴィータの舌打ち通り、その場には誰もいなくなってた。

「今日は楽しかったね！」
「そうですね」
「ああ。そうだな」
インデックス、神裂、ステイルの３人は帰りのタクシーに乗っていた。今日一日遊び倒した３人は、無事にタクシーに乗り家路についていた。
２回目以降、アプリの操作を間違えることなくスムーズに観光することが出来た。最後の思い出作りとしては上出来の内容だっただろう。
「インデックス、体調は大丈夫ですか？」
「うん。まだ平気だよ」
「そうですか」
予定日が近づけばインデックスは強烈な頭痛に襲われる。その痛みは他人が想像することは出来ないが、前回の周期で苦しむ姿を２人は見ている。
今回のお出かけ中に発症しないか、２人ともひやひやしていたのだ。

今日の思い出を話していると、イギリス清教の教会へ到着した。ここで降りるのはインデックスだけだ。この仕事が終わればこの島を去る2人には、この教会の部屋が無い。
「それじゃあ、また明日、2人共」
「はい」
「ああ」
教会の中に入っていくインデックスを見送った2人はタクシーを発進させた。
2人共、インデックスがいなければ雑談するような間柄でもない。会話するとすれば仕事がらみのことだ。
インデックスがいなくなったと同時にタバコに火をつけたステイルは、窓の外を見ながら言った。
「予定日のことを考えれば、明日には動けなくなっている可能性が高いな」
「そうですね。これが最後だったかもしれません」
神裂は端末を取り出した。そこには今日撮った写真が映っている。満面の笑みのインデックスの後ろにぎこちない笑みを浮かべた2人が映っている写真だ。
その他にも様々な写真を撮っている。そのどれもが笑顔の写真だ。
その写真を見る神裂は優しい笑みを浮かべているが、
「あまり思い出に浸るなよ神裂。浸ればその分、空しくなるだけだ」
「……そうですね」
神裂は端末を閉じる。
「儀式の準備はぬかりありませんか？」
「昨日の時点で準備は整っている。今から引き返してもすぐに開始できる程度にはね。ああ、もちろん、儀式の術式は予定日の星の巡りに対して調整してある」
「……後は、その日が来るのを待つだけという事ですか」
その声にステイルは何も答えなかった。

ステイルと神裂の予想は間違っていなかった。
その夜、教会のシスターが寝泊まりするシスター寮で、インデックスは頭を押さえていた。
「痛つつ……」
身を清めたインデックスはいつもの修道服を脱ぎ、寝間着に着替えていた。眠る支度をして襲ってきた鈍痛。頭がガンガンと痛む。風邪をひいた時とは違う痛みだ。
インデックスにも覚えのない痛み。彼女の体質からして、『覚えがない』と表現するのは極めて珍しいことだ。1年周期で自分に訪れる体の変化だとしても、覚えていない。覚えていることが出来ないものだった。
それでも、これが何を示しているのかインデックスには理解出来た。
「うぅ……」
ベッドに横になる。
この調子だと明日、目覚めることはないかもしれない。目を閉じればそのまま今の自分は居なくなってしまうかもしれない。
電灯を見ながらぼんやりと考える。
「人、呼んでおかないと……」
机に置いてある呼び鈴を手に取ろうとする。これをならせば魔術の信号が送られ、当番のシスターに連絡が届くようになっているのだ。
「あれ？　窓……」
開いていた。開けた記憶が無いのにだ。
そしてそこから、
「っ!?」

黒いドレスを着た少女が音もなく部屋に侵入してきた。机の上にあったはずの呼び鈴は、少女に盗られていた。
「それ――――」
インデックスが抗議しようとしたところで、少女に布で口をふさがれる。
少しの抵抗も出来なかったインデックスは頭痛の痛みも忘れ、強烈な眠気に誘われていった。

「なんだって？」
拠点に戻ってきた影胤とオイスタッハペア。影胤はオイスタッハに不気味な仮面をつけた顔を向けた。
「はい。あの娘が使っていた槍に神格振動波駆動術式が組み込まれていました。ロドダクテュロス（薔薇の指先）にすでにサンプルのデータを読み込ませています」
「なら、もう禁書目録は必要ないかな？」
影胤が目を向ける先には、苦しそうな寝息を立てているインデックスが寝かされていた。薬で眠っている間も頭痛の強さが増し、着ている寝間着はぐっしょりと汗で濡れていた。
明らかに普通の状態ではないが２人の男性は気にせず、２人の少女も無関心――――ではなく、アスタルテは少し気になっている様子だった。
アスタルテは医療用のホムンクルスとして作られた。病人を目の前にすると、自分に刻まれた命令が疼くのだ。
ただ、主の命令なしに勝手なことは出来ないため、直立のまま微動

だにしない。
　そんなアスタルテを気にせず、オイスタッハは続ける。
「ええ、これならば危険を冒して禁書を読まなくても大丈夫でしょう。仕事をしてくれたあなたの娘には悪いのですが」
　小比奈を見て言うが、特に反応はなかった。
「もう少しタイミングが良ければ、イギリス清教が介入する理由を作らずに済みましたが」
「いや、それは元々背負うリスクだった。今は神格振動波駆動術式を容易に完全なものにできると考えよう」
　神格振動波駆動術式――――つまり魔力の無効化は、影胤たちの計画に無くてはならないものだった。
　元々はインデックスの力を借りてロドダクテュロス（薔薇の指先）に実装するつもりだったのだが、今回の雪菜との戦闘でより完全なデータが入手できた。
　これで２人の計画は大きく進むことになる。
　拉致したインデックスを使う必要は無くなった。元の計画ではインデックスの身柄はステイルや神裂を牽制する目的で使う予定だった。
　自分たちを追撃するよりも、インデックスに対しての儀式の方が大切であることを利用した逃亡の手立てだ。
　管理局は島が沈むとなれば救助活動を優先せざるおえない。最初から障害になるとは思っていなかった。
「そうですか。しかしアスタルテの調整の必要もあります。明日は協力企業の施設に向かおうと思っています」
　２人の目的が成就することを望んでいる企業がこの島には存在していのだ。だからこそ、この２人があっさりと島に侵入出来た。
「ああ。管理局に見つかった以上、もう時間はかけられない。明日にはホムンクルス調製施設に捜査の手が伸びる可能性が高い」
　いざとなれば切り捨てられるだろうが、管理局の捜査程度でその心配はない。そのくらいのリスクで切り捨てる考えなら、最初から犯罪者の支援なんてしていない。

「分かっています。あなたの方も、もう1つのピースの入手。しくじらないで下さいよ」
「フッ、もちろんだとも。本命の作戦も含めて、2日後までに決着をつけるとしよう」
そう宣言する影胤。
いくら魔力を無効化できたとしても、この島を敵に回して生き残るのは難しい。島のシステムを掌握していれば話は別だが。
「しかし本当なのですか？　この島のシステム中枢が女子高生によって運営されているというのは」
「ああ。信じがたいかもしれないが裏も取ってある」
影胤は懐から端末を取り出してターゲットの顔を確認した。
「『電子の女帝』――――藍羽　浅葱か」
影胤の仮面は相変わらず笑っていた。

吸血鬼襲撃事件の捜査③

「はい。わかりました。それではその方向で」
時刻は１９時過ぎ、楯無は通信を切った。そして深々と身体をソファーに沈ませる。
「ふーっ」
上を向いて大きく息を吐いた。
通信の相手ははやてだった。内容はヴィータが遭遇したロタリンギアの宣教師とホムンクルス、そしてその逃亡を手助けした蛭子影胤について。
ここ数日、楯無は六課には顔を出していなかった。蛭子親子の件を優先的に調べていたからだ。
管理局では捜査されていないとはいえ、日本の国防で大きな影響力を持つ更識家が蛭子親子を無視するわけにもいかない。
この島でテロ行為をされてしまっては、日本政府への非難が避けられないからだ。
そうなる前に蛭子親子を拘束、出来なければ殺害を以て無力化しなければいけない。
この島へ密航してきただけはあり、更識家の情報網をもってしてもここまで足取りを掴めていなかった。だが、ここにきてようやく情報を手に入れることが出来た。
「それも、目撃情報どころじゃなくて、実際に交戦までするなんてね」
楯無はヴィータのデバイスに記録されていた映像を再生する。
タキシードにシルクハット、それに悪趣味な笑う仮面は間違いなく蛭子影胤のものだ。使う戦闘技能にも間違いは一切ない。
「能力はともかく、恰好くらい変えればいいのに」
ぼやく楯無。今までなかった手掛かりを入手して、すこしだけ気が緩んでいるのかもしれない。
「それにしても、今回遭遇したのは翔君じゃなかったのね」
それははやても言っていたことだった。
敵に遭遇するのなら翔だと言って笑っていたはやてには、楯無も

笑ってしまった。
「ま、そんなジンクス、いつまでも当たっても困るわよね」
実は楯無も翔の動向には気をかけていた。楯無も少しはそのジンクスを当てにしていたのだ。いつの間にか頼っていたのだ。翔の事件体質を。
「明日からの動きも決まったし、今日は早めに休みましょうか」
まずは身体を清めようと、楯無は立ち上がるのだった。

俺は放課後が待ちきれなかった。
雪菜から聞いた話ですべてが繋がったのだ。昨日雪菜が遭遇したという敵のおかげで、シナリオが出来上がった。
六課でクローディアと合流した俺はさっそく目的地に出発した。
「クローディア、ここに向かってくれ」
「はい？　それは構いませんが。此処は……病院ですか？」
俺の考えはすでにみんなに伝えてある。それに備えて動いてくれているはずだ。
「何か思い当たることがあったんですね？　……昨日の雪菜さん達の戦闘ですか？」
さすがはクローディア、と言う必要はないか。昨日はまで確証出来ないと言っていた俺が、突然迷いなく動き始めたのだ。その明らかな変化に気がつかない程、クローディアは鈍感ではない。
「確かロタリンギアの宣教師とホムンクルスだったと言う話でしたが……」
昨日の戦闘はすでに六課に伝わり、素性の調査が進められている。

管理局を通してロタリンギア本部へと協力の要請が送られている。
すでに宣教師の素性――――ルードルフ・オイスタッハの名前や経歴は入手出来ていた。
ただ眷獣を使うホムンクルスについての情報は（当たり前だが）出てこなかった。現在調査中らしいが、これからも出てくることはないだろう。
現在管理局はヴィータの証言――――ホムンクルスの眷獣が吸血鬼から魔力を補給していたと言う証言――――を元に島中のホムンクルスの調整施設の調査を行なっている。
オイスタッハが連れているホムンクルス、もう面倒だからアスタルテと言ってしまうが、アスタルテはどこにも登録されていないホムンクルスだった。
オイスタッハがホムンクルスの少女をペットにする特殊な趣味が無ければ、つい最近製造されたホムンクルスという事になる。
「新造されたホムンクルスに眷獣を植え付けて戦力としている。許しがたい行為ですね」
眷獣は吸血鬼にしか扱えない。召喚の代償で寿命を大きく消費してしまうからだ。無限の負の生命力を持つ吸血鬼だからこそ、そのデメリットを無視することが出来るのだ。
だが自分の身の安全を考慮しないなら、ほんの少しの間なら眷獣を扱うことが出来る。それは自殺前提の愚かな行為だが。
その対象として、アスタルテが使われているという事だ。
「少しでもホムンクルスを『もたせる』ために、吸血鬼を襲って魔力を回収していたという訳ですね」
「それに合わせて魔力だけじゃ補えない部分を、島の施設で調整しているってわけだ」
そこで、管理局の権限で島中のホムンクルス調整施設を捜査することになったのだ。
六課を出る前にそういう話になった。
それぞれに調査対象の施設が割り当てられ、今日はパトロールではなくその施設の捜査を行うことになっているのだ。

最近六課に顔を見せていなかった楯無も、今日は六課に来ていた。影胤が発見されたことで、オイスタッハと影胤が協力関係を結んでいたことがはっきりしたからだろう。
この一連の流れは、『ストライク・ザ・ブラッド』1巻の流れそのままだ。だとすれば、島の崩壊についても説明がつく。
オイスタッハの最終的な目的は、この学園島の要石。それを取られるとこの島を支えている呪術が維持できなくなり、島がバラバラになる。
パンドラの予知夢はそれを示していたのだ。
問題はオイスタッハと組んでいるらしい蛭子親子だが……原作のことを考えると、ふわっとした表現になるが、戦いを求めているって感じか？
島が物理的に崩壊すれば、この島の技術や能力者が世界各国に散らばることになり、争いの火種がばら撒かれることになる。
その事が目的かな、とぼんやりと考えていた。兵器としての自分の存在意義について、蛭子影胤は証明したいと思っているのだ。
「それで、どうして病院に？　早くホムンクルスの調整施設を捜査した方が良いのではないですか？」
「その前にちょっと知り合いに会おうと思って」
「知り合い、ですか？」
そう。事件が終わった時に必要なものがある。正直足りないが、準備はできうる限りしておきたい。
「俺達の割り当てがヒットする確率なんて、そう高くないだろ？　だからそっちをしておきたいと思って」
「……え？　本気で言っていますか？」
「全然本気だけど？」
「あはは、あまり笑えない冗談ですよ？」
いやいや、冗談じゃないけど？　数的に考えて、その確率の方が何倍も高いよね？
「いまさら翔が当たりを引かないなんて、そんなわけないじゃないですか」

「そう言うジンクスは、信じてるから当たるんだよ」
そんなことを話していると、目的地である病院――俺が良く入院している病院に到着した。

――――――

「翔？　大丈夫ですか？」
「何が？」
クローディアは俺の後ろに座ってにこにこしているだけだ。
気を取り直し、視線を２人の医師に向ける。
「そうです。今回の事件の終わりにはホムンクルスの娘が保護されそうなので、あらかじめ準備していただければと思って」
「確かに、眷獣を植え付けられたホムンクルスなんて下手な病院には預けられないものね」
アスタルテには眷獣が植え付けられている。
そんな貴重な個体、研究機関が黙っているわけがない。量産出来れば爆弾の様に大量生産され戦地に投入されてしまうかもしれない。
研究機関どころか、アスタルテの情報を漏らすことすらしてはいけないのだ。信頼できる人にしか任せられない。
もう那月先生にも話はつけてある。めんどくさがってはいたが、何かあった時には対処してくれることになった。
「そう言う事なら、もちろん私も協力されてもらうわ。ホムンクルスの調整なら何度もやったことがあるから」
「ありがとうございます」
俺はティアーユ先生に頭を下げた。
「じゃあ私も、院長に言っておくわね」
「あんまり広めないで欲しいんですけど……」
「だからって院長に黙ってるわけにもいかないでしょ？　大丈夫よ。私、院長と『仲が良い』から」
そう言って笑う御門先生。どういう意味で仲が良いんだろうか。
「でも……」
ティアーユ先生が苦い顔をしている。言いづらそうに口を開いた。
「植え付けられている眷獣についてはどうしようもないわね……」
「やっぱりそうですよね……」
根本的に、眷獣が植え付けられているアスタルテの寿命は長くない。いくら調整しても延命がやっとだ。
原作では第四真祖――吸血鬼である主人公の『暁　古城』が自ら

の魔力を提供することで問題を解決していたが、俺はあいにく吸血鬼じゃない。そして俺の知り合いには吸血鬼がいない。
今考えているのは、ティアーユ先生がアスタルテの延命をしている間に、協力してくれそうな吸血鬼を探すことだが、
「あら？　だったら――――」
御門先生が口を開いた。
「あなたの知り合いの吸血鬼、入院してるわよ？」
「え？」
誰だそれ。

「おや、君は……」
「貴方でしたか……」
ベッドで横になっていたのは確かに吸血鬼だった。顔は知っていたがまともに話した時間は1分にも満たない相手。
なんとも吸血鬼のイメージにふさわしい金髪の美少女だ。
「レティシアさん。体は大丈夫ですか？」
御門先生が言っていた吸血鬼とは、ブラドの館で戦ったレティシア＝ドラクレアだった。
ブラドとの決戦の後、昔の世界に飛ばされたり六課に入隊したりでその辺りの動向について全然気にしていなかった。
ブラドにひどいことをされてしまったらしいけど、この様子を見る限り
「ずいぶん元通りになってきたよ。一時は本当にひどいものだった」
可愛らしい見た目なのに笑い方に品があるのは、それだけ長い時間

を生きて来たからだろう。
「あの時、君たちがブラドを倒してくれなければ私はさらなる辱めを受けていただろう。本当に、ありがとう」
「いえ、こちらもレティシアさんがいるのは予想外でしたから」
あの時は本当に思いもよらない人物が出てきて焦ったものだ。
「それで用件は？　今日は単にお見舞いをしに来たわけじゃないんだろう？」
俺の後ろに立っている御門先生たちを見て言っている。理解も早くて助かる。
「はい。実は……」
俺は事情を説明した。
すると、
「良いだろう。すべてが終わり次第、私の所に連れてくると良い。眷獣の制御は私が何とかしよう」
あっさりと承諾してくれた。
「良いんですか？」
「君は恩がある。そのホムンクルスが保有している眷獣がいかほどのものかは分からないが、どうにかしよう」
こう見えてレティシアさんは原作『問題児たちが異世界から来るそうですよ？』では『箱庭の騎士』と呼ばれる純血の吸血鬼。この世界では真祖に最も近い吸血鬼の1人だ。
彼女に制御できない眷獣は、それこそ真祖すら手を焼くような暴れ馬くらいだろう。
そして騎士と名のつく通り、信用に値する人物だ。
「よろしくお願いします」
俺は再度、頭を下げるのだった。

「うまくいきそうで良かったですね」
「ああ。これで心置きなく事件を解決できる」
アスタルテについて目途が立ったのは本当に良かった。特にレティシアさんの協力が取り付けられたのは本当に僥倖だった。
車に乗り込み、エンジンをかける――ところで、
《パトロール中の全車へ》
「ん？」
「本局からの連絡ですね」
車に備え付けられている通信機が何やら受信した。
《家の中に不審者が入っているとの通報がありました。付近を巡回中の局員は至急現場に急行してください》
それを聞いたクローディアは、
「行きますか？」
「もちろん」
迷わず頷いて車を降りる。
「飛んでいこう。その方が速い」
「私は飛べませんよ？」
「その場合は、っと」
まずは飛行形態のウイングガンダムを召喚する。そして俺はエクシアを装着した。
「それでは」
俺達は送られてきた住所データに従い、空へ飛び立つのだった。

吸血鬼襲撃事件の捜査④

「……ただいま」

午後１６時半過ぎ、『藍羽　浅葱』は帰宅した。金髪と華やかに着崩した制服。見た目だけ見れば派手なギャルだ。

《オカエリナサイマセ》

豪邸と言って差し支えない家からは、セキュリティを兼ねたホームロボットの合成音声しか返ってこない。

浅葱はそれに何も返すことなく、自分の部屋に向けて進む。

今日はバイトも無い。偶然友人にも予定があり、今日の放課後はどこに行くでもなく早めに帰宅したのだ。

特に最近はその回数が増えていた。その原因は、

「ったく、基樹のやつも突然武偵高に転校とか、何考えてんのかしら」

生まれた時から学園島で生活して生きた浅葱にとって、同じく小さい頃からこの島にいた矢瀬は腐れ縁だ。

決して幼馴染とかそう言った表現をするつもりは無いが、ずっと同じ学校に通っていたのだ。それが突然、夏休み終了間際になって転校すると言い出した。

決して向いているとは思えなかったが、浅葱が意見する義理も無い。そうしたいのなら勝手にやってくれと言うだけだ。

結果、暇な時間が増えてしまったという訳だ。

「暇だし、バイトの時間増やしてもいいかもなー……」

そんなことを呟きながら自室の扉を開けた。

「……は？」

部屋の中には人がいた。

タキシードに笑う仮面というふざけた格好の男だ。壁に寄りかかり浅葱の本棚にあった本を勝手に読んでいた。

浅葱はこの島育ちだ。様々な能力者や種族が共存するこの島で、物心ついてからずっと生活してきた。

一般校に通っている身とは言え、硝煙の匂いを嗅いだことは一度や二度ではないし、異能力が飛び交う場面に遭遇したこともある。

だが、
「(なに、コイツ……!?)」
こんな濃密な悪意を持った相手を目の前にしたことはなかった。恰好を笑い飛ばすことも出来ない。全身から汗が噴き出してくる。その場にへたり込まないのが精一杯だった。
無意識のうちに後ずさりしようとして、
「だめだよ」
後ろから可愛らしい声が聞こえてくる。同時に背中につきつけられる硬い物。
浅葱が顔だけを動かしてその相手を見る。
「ひひっ」
「……っ」
血のように真っ赤な瞳と目が合った。
黒いドレスを着た少女。背中につきつけられていたのは彼女が手に持った黒光りする金属だった。
「変に動くと刺さっちゃうかもよ?」
無邪気な声だが、そのことが余計に恐怖を増幅させる。全く冗談じゃないのが分かったのだ。背中につきつけられているのが単なる金属の棒ではなく、刃物の類であることを理解した。
「そのまま部屋に入ってくれ。藍羽　浅葱」
「……」
タキシードの男が落ち着いた声で言ってくる。事実上の命令だ。浅葱は黙って部屋に入った。
浅葱に続いて部屋に入った少女が扉を閉める。
「……何の用？　ただの居座り強盗、ってワケでもないんでしょ？」
「ふっ」
浅葱の態度にタキシードの男が笑う。
「いや、この状況でその態度とは恐れ入る。恐怖は感じているのは間違いないだろう？」
「島育ちを舐めないでよね。ヘンテコな恰好だけでビビらせられると思ってるの？」

身体は震えているが、浅葱は自分のペースを取り戻し始めていた。それは理論的に安全が確保されていると思ったからだ。
「殺すだけならもうやってるでしょ。私は何の力も持ってない、ただの女子高生なんだから」
会話が成立しているという事は、そんな普通の女子高生である浅葱に何か用があると考えたのだ。
最も、『普通の』という言葉については少し議論の余地がある。どうせその辺りが目的だろうと考えていたのだ。
「それで何がお望み？　スパイソフト？　それとも、もっと直接的に破壊工作用のアプリケーション？」
「察しもいいな、『電子の女帝』」
「やめてくれない？　そのあだ名」
茶化すような雰囲気になった影胤の発言に、浅葱は顔をしかめた。
電子の女帝とは、天才的なプログラミング能力を持つ浅葱に着けられた異名だ。本人は趣味の範囲と言い張っているが、その趣味で人工島管理公社のシステムの大部分を管理している。
浅葱のバイトとはそのことだった。
「謙遜はする必要は無い。前にもそう言う事はあっただろう？」
「まあね。でも実際に会いに来たのはアンタらが初めてよ」
浅葱の電子の女帝としての能力は別に隠しているわけではない。ネット上では隠しているが――――ハッキングの形跡を残さないという意味で――――現実世界で宣伝しているわけではない。
そのことに目を付けた産業スパイやテロリストが、様々な工作用のアプリケーションの作成を依頼することがあった。
「ま、そう言うやつらは成果物（餌）で釣って、管理局とか武偵に突き出してやったけどね」
もちろん素直に従う浅葱ではなかった。犯罪の依頼をしてきた相手は、悉くお縄につくことになっていた。
「だからあんた達も、気を付けた方が良いわよ。私に変なこと依頼すると、捕まっちゃうから」
それでもいいの？　と浅葱は逆に挑発した。それに対して、

「もちろんだとも」
　笑う仮面の口元がさらに引き裂かれ、笑いが深くなるような錯覚を覚える。
「破滅こそが我々の望みなのだから」
「そ、変わってるわね」
　浅葱は愛用の椅子に座る。
　何枚もあるモニターに、個人が持つには過ぎたレベルの高スペックのＰＣ。女子高生の私物とは思えないものだ。
　ＰＣを起動した。
「それで、お望みは？」
　仕事モードに入った浅葱。正直言って、ありきたりなアプリケーションは作るまでもない。今まで作ったものを繋ぎ合わせるだけで十分だ。
　その上での軽い発言だったのだが、
「この島の総てを」
「……は？」
　あまりにも抽象的な表現に浅葱が眉を寄せる。
「君がこの島を動かすために預けられている５基のスーパーコンピュータ。その制御権を私に」
「は!?　アンタ何言ってんの!?」
　思いがけない要求に椅子を蹴飛ばして立ち上がる浅葱。影胤はこの島の制御権を渡せと言ってきたのだ。
　そんな浅葱の焦りを無視して小比奈が影胤に語りかける。
「作ってもらった後は連れて行くんだよね、パパ？」
「よしよし。よく覚えていたね、小比奈。小比奈の言った通り、君のことは連れていくよ。君の腕は窺うべくも無いが、妙なバックドアを仕込まれては面倒だ。何かあればその場で修正してもらわなければね」
「……っ」
　浅葱は歯噛みする。この場では素直に従って、後から無理やり制御権を奪い返す策を考えていたのだが、それは出来ないらしい。
「事が終われば君は解放しよう。余計なことをしなければ危害は加え

ないと約束する」
「……そんなの、信じられるわけないでしょ」
影胤のよくあるセリフをばっさり切り捨てる浅葱。
「それに、私にも仕事を選ぶ権利があるわ。その仕事は絶対に受けない」
きっぱりと言い切った。
相手の目的は学園島の制御権。それを手に入れるには浅葱の力が不可欠だ。仮にこの場で殺された場合、浅葱が作ったロックを解除するのに膨大な時間がかかる。
つまり相手は、どうあっても浅葱に首を縦に振らせるしかないのだ。
その為に目の前の相手は浅葱を拷問するかもしれない。だが、その流れを想像できたとしても、何もされていない時から屈することはない。その程度の正義感は浅葱にもあった。
そして、影胤がそのことを想像出来ないはずがない。
「小比奈」
「はい、パパ」
小比奈は部屋の外に走っていった。
しばらくすると1人の女性を抱えて帰ってきた。
「……っ」
「君のお父さんは再婚したらしいね」
浅葱は何とか悲鳴を漏らすのをこらえた。小比奈が連れてきたのは『藍羽　菫』。浅葱の継母だった。
後ろ手で縛られ猿ぐつわを噛まされている。そのせいではっきりとした声は出せないが、浅葱を見て必死にうーうー何かを伝えようとしていた。
「……この人に何をするつもり」
浅葱は父親の再婚相手である菫のことを苦手としていた。だからといってこの場でソレを持ち出すつもりは無い。
「予想はついているだろう？」
「だから何するつもりなのか聞いてんでしょ！」

浅葱を拷問する代わりに、菫に何かしようというのだ。自分に何かされる覚悟はしていても、自分のせいで他人を痛めつけられるのは耐えられないのだ。
浅葱に良識があると踏んだ影胤の策だった。
「それは君の答えと行動次第だ……それで、どうするのかね？」
「……分かったわよ。やればいいんでしょ、やれば!!」
具体的に何をするのか教えられないことで、逆に恐怖心を煽られる浅葱。視界の奥で小比奈が握っている刀が見えたのだ。予告なく菫が斬られるかもしれないと思ってしまう。
「ああ、それと」
「……まだ何かあるの？」
うんざりとした様子で振り返る浅葱。
「だらだらと仕事を引き延ばされても困るからね。作業を始めて１０分ごとに、足先から１センチずつ切り落としていくとしよう」
「はい、パパ」
「――っ、――――っ」
小比奈が暴れる菫を踏みつけ、その右足に刀を添える。
「それでは」
影胤がこれ見よがしに時計を取り出す。
「始めてくれたまえ」
「っ！　ざけんじゃないわよっ!!　モグワイ!!」
浅葱は吐き捨ててＰＣに向かう。それと同時にポケットからスマホを取り出し、相棒を呼び出した。
「ケケケッ。嬢ちゃんも面倒なことに巻き込まれるなぁ」
スマホの画面には不細工な人形のアバターが映し出されていた。
人形は島を管理するスーパーコンピュータの化身である人工知能。浅葱の相棒としてスマホに住み着いているのだ。
浅葱はその軽口に付き合わず、スマホを立てかけるタイプの充電器に置き、ＰＣの開発アプリケーションを起動した。
今は１秒でも時間が惜しいのだ。
「アンタは黙って処理しなさい!!　何やるかはわかってんでしょ!!」

「はいはい、っと、これは……」
モグワイの呟きがタイピングの音でかき消される。
「黙って処理しなさい!!」
「へいへい」
アバターはポップに腕を振っているが、浅葱が打ち込むコードをどんどん処理し始めた。
しばらくタイピング音だけが部屋に響く。影胤も小比奈も仕事中の浅葱に気を使っているのか、一言も発しない。人質になっている菫も浅葱の空気にじっとおとなしくなっていた。
「っち」
普段はしないようなタイプミスに浅葱は舌打ちしながらも作業を進める。
そして浅葱がひときわ強くエンターキーを押し、
「ふー……っ」
大きく息を吐いた。
「素晴らしいじゃないか。もう終了したとは」
「うっさいわね……」
９分３２秒。ＰＣを起動する時間を考慮すればそれ以下の時間で浅葱は作業を完了させた。
おかげで菫に危害を加えられることはなかった。
制御用のアプリケーションをノートＰＣにインストールする。
「準備は出来たようだね」
「……まあね」
ノートＰＣを乱暴にカバンにしまい、立ち上がる浅葱。今回は作っただけで終わりではない。影胤の要求でついていかなければいけないのだ。
「（流石に間に合わなかったか……ま、ついていって機会を窺うか）」
浅葱は仏頂面でそんなことを考えていたが、
「パパ」
「嗅ぎつけられたか、だが……」
強い魔力がこちらにまっすぐ向かってきていることに気が付いた。

仮面の奥の視線が浅葱を突き刺す。その威圧感に負けず浅葱は睨み返した。
「何よ」
「いや、君は予想以上にお転婆だと思っただけだ」
そもそも影胤は警報装置には全く引っかからずに家に侵入した。全く騒ぎも起こしていない。それで管理局に感知されているはずがない。
だとすれば、浅葱が何かをしたと考えるしかない。
実際、浅葱は何かしていた。
影胤の注文に答えながらホームセキュリティを起動させ、警報を鳴らすことなく管理局に通報していた。
浅葱の思惑はほぼ成功していた。
問題は、
「(タイミングが悪いわね……完成しちゃったじゃない!!)」
すでにアプリケーションは完成している。アプリケーション入りのノートPCも、カバンの中だ。影胤がカバンをひったくれば浅葱は抵抗できないだろう。
「パパ、どうするの?」
「相手はずいぶんと思い切りがいいようだ。来るよ」
次の瞬間、影胤と小比奈を挟み込むように壁をぶち壊し、2人の人影が突入してきた。

「どうするんですか?」
目的地に近づくとクローディアが問いかけて来た。どうするのか

というのは、どのように突入するのかという意味だろう。
どちらかというと慣れているクローディアに決めて欲しい気持ちがあるが。
「不意打ちで挟み込もう。家の壁を壊しても……大丈夫だよな？　家を壊しても」
「それは管理局に請求されると思いますよ。限度もありますが」
「人命には代えられないよな？　しょうがないよな」
「そうですね」
俺は疾風迅雷を纏い黄金の剣を取り出し、クローディアはパン＝ドラを起動させる。
そして手筈通り壁をぶち破り、突入した。
が、
「うぐっ!?」
「っ!?」
部屋の内部にいた見覚えのある2人、いや3人。
だがそれを視認した瞬間、俺とクローディアは反対方向に吹き飛ばされてしまった。不可視の力場――――蛭子　影胤のイマジナリーギミックだ。
「ふむ」
影胤が指を鳴らすとさらに不可視のフィールドが周囲に展開された。
「っち」
「これは、ＡＭＦだな」
「ああ。情報通りだな」
雪菜達の戦闘記録では、影胤は原作のイマジナリーギミックだけではなくＡＭＦも使っていた。対魔導士用の人間兵器という触れ込みは伊達ではなく、雪菜とヴィータさんのコンビを近接戦で圧倒していた。
ＡＭＦのフィールドが張られた瞬間に俺の術式兵装が乱れる。どんなに頑張っても維持が出来ない。
クローディアの方も、展開した魔力刃が乱れていた。俺よりは影響

が少なそうだな。ＡＭＦ用の術式に切り替えたらしい。残念ながら俺はそこまで器用な真似は出来ないが。
俺は術式兵装を破棄する。
「やっぱり無理っぽいな」
「それ以外の戦い方で行くしかない」
レプリカの声で、俺はジクウドライバーを取り出した。
《ＺＩ―Ｏ！》
《ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！》
「変身!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！　ＤＥＣＡ！ＤＥＣＡ！　ＤＥＣＡＤＥ！》
俺はディケイドアーマーのジオウに変身、ジカンギレードとライドヘイセイバーを二刀流で構えた。
クローディアも赤と青、２本のパン＝ドラを構えた。
「目的のものを手に入れた。そろそろお暇させてもらおうか」
「させるわけないだろ!!」
戦闘が始まった。

吸血鬼襲撃事件の捜査⑤

「さて、始めに聞いておきたいが、素直に我々を逃がすつもりはあるかね？」
「あるわけないだろ！」
「だろうね」
タキシードに仮面の男、蛭子影胤の言葉を真っ向から否定する。
「小比奈」
「はい、パパ」
小比奈と呼ばれた少女はクローディアに向いた。
「あらあら、私ですか？」
クローディアは余裕そうに剣を構える。ＡＭＦ影響下でもその笑みは変わらない。
「ちょ、やめ……!!　引っ張るな……!!　あっ!?」
影胤は傍にいた派手めな恰好した少女からバッグをひったくった。
「（まさか、ここで出てくるとはな）」
その少女の名前は知っている。藍羽浅葱だ。ストライク・ザ・ブラットに登場するヒロインの1人で、天才プログラマーだ。
影胤が彼女にどんな用事があって家を訪ねてきたのかは知らないが、ロクでも無い理由なのは間違いなさそうだ。
なお、藍羽さんが影胤の仲間になっている可能性は微塵も考えていない。そんな性格ではないことを理解しているからだ。
今気が付いたが、部屋の床にはもう1人女性が転がされていた。猿轡を噛まされ縛られているところを見ると、被害者なのは間違いないだろう。
てかあの人、藍羽さんのお母さんじゃないっけ？　流石にお母さんまでは判別出来ないな。挿絵も無いだろうし、アニメでも登場してたっけ？
だが考えるのは後だ。今は蛭子親子を撃退しなければ。
《ＯＯＯ》
俺は攻撃に移る。

《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＯＯＯ！　ＧＩＲＩ　ＧＩＲＩ　ＳＬＡＳＨ！》
オーズウォッチをジカンギレードにセット。技を発動させる。
「待ちたまえ、こちらには人質が――――」
影胤がもっともなことを言っているが俺はそれを無視する。間違いなく、あいつは避けてくれる。
クローディアは未来を見ているのか、俺の技の射線上にいても構わず戦い続けている。
ある種の信頼を持って、わざとらしく大振りに剣を振るった。
「セイヤーーーー!!!」
刀身に３つの『Ｏ』が浮かんだジカンギレードは、剣線に沿って『空間』を切断する。
「は!?　ふざけ――――!!」
「ちぃ……!」
「パパ!!」
影胤は舌打ちしながらその場から大きくジャンプする。小比奈にはそもそも当たらないように技を撃った。藍羽さんからも抗議の声が上がっているがすでに遅い。
影胤がいた場所、ついでにクローディアと藍羽さんも巻き込んで空間は横一線にズレてしまっている。
自分の体の見て、藍羽さんが目を見開き、クローディアは構わずに戦い続けている。切断面からは出血していない。だが体は真っ二つ。それが次の瞬間。
「なんだと……!?」
影胤が驚愕の声を上げている。
ズレていた藍羽さんとクローディアの体が元通りくっついたのだ。
オーズバッシュを再現した技だ。信じられないほど広範囲を空間ごと切り裂き、敵以外を修復してしまうド派手な攻撃。
初見の人間が驚くのも無理はない。その隙を突かせてもらう。
《ＨＥＹ!!　ＦＡＩＺ！》
《ＳＣＲＡＭＢＬＥ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》

今度はライドヘイセイバーの刀身赤く――――フォトンブラットのエネルギーが充填される。地面をなぞるようにヘイセイバーを振るうと、充填されていたエネルギーは地面を這って影胤まで一直線に突き進む。
「おっと」
だがあっさりと回避されてしまった。当たったら拘束できたんだけどな。そううまくはいかないらしい。
しかし、これで藍羽さんから引き離すことが出来た。小比奈はクローディアが引き付けてくれている。
俺は影胤と藍羽さんの間に入った。これで人質に取られる心配もなくなった。
「全く驚かされるよ。まさか人質ごと私を攻撃してきたのかと。まんまと騙されてしまったわけだ」
「……」
影胤だけでなく、横にいる藍羽さんも俺のことを睨みつけてくる。まあ、何も言われずに体を真っ二つにされれば、たとえ助けられたのだとしてもそんな顔になるのは当然だが。
「空間ごと相手を切り裂く武装。このＡＭＦ下でそのレベルの魔法を使えるとは思えない。君自身のレアスキルか、それともそのパワードスーツの効果か」
「さあ、どっちだろうな」
影胤はシルクハットのふちをなぞった。
「申し遅れたね。私は蛭子　影胤。君の名前は？」
「管理局、特務六課所属、夜月　翔だ」
「……」
影胤の名乗りに返すと、なぜか仮面の奥の瞳が興味深そうに細められた。
「何だよ」
「（夜月　翔……ジャグラス・ジャグラーが忠告していた警戒すべき人物か）……いや、何でもないさ。まさか、こんなに早く管理局に嗅ぎつけられるとは思ってなかったからね。君の仕業だね、藍羽浅葱」

「はっ！　アタシが黙ってあんたに協力するわけないでしょ!!」
　まじかこの人。自分のお母さんも人質に取られてる状況でそんな賭けをしてたのか!?
「君の勇気には感服するよ（つまり、モタモタしていると他の局員も駆けつけてくるわけか）」
　そう言いながら、影胤は趣味の悪い装飾の施された拳銃を2挺取り出した。
「（最低限、このＰＣがこちらにあれば計画は進められるが……藍羽浅葱の回収と夜月　翔の威力調査を兼ねて、少し戦ってみるとしようか）小比奈、そちらは任せるよ」
　影胤は俺の後ろに向かって叫んだ。後ろからはずっと剣戟が響いている。俺は振り返らずに――――影胤から目を逸らさずに名前を呼んだ。
「クローディア！」
「私のことは大丈夫です！　翔はそちらに！」
　戦っている最中とあって、いつものように余裕のある口調ではない。だがしっかりとした口調で答えてくれる。どうやら実力は互角のようだ。いや、ＡＭＦというハンデがあって互角なら、それが無ければすでに勝負は決まっていたかもしれない。
　ならば俺の役目はその均衡を崩すこと。すなわち目の前の影胤を倒すことだ。
　２丁拳銃を構える影胤と睨み合う。
　影胤は引き金を引いた。ためらいなく、藍羽さんに向けて。
「ッ!?」
　弾丸を弾いた剣に、予想以上の衝撃を感じた。
「対魔導士用の弾丸か……！」
　防弾服やＢＪの着用が前提になっているこの世界の戦闘では、通常の拳銃は『打撃武器』になっている。体に撃ち込むのではなく、防弾服の上から衝撃を与える武器なのだ。
　そこで防弾服やＢＪ相手にも有効な武器が作成された。１つが武偵弾、もう１つが火薬の量や調合を変えて威力を上げたハイパワーラ

イフルだ。防弾服など言うに及ばず、障壁を展開したＢＪ越しに、魔導士に有効な威力を発揮する銃。
当然、生身では反動が大きすぎてまともに狙えるものではない。
だが、
「くッ……！」
２発、３発、４発５発。影胤の狙いは正確だ。おそらくは全身を改造手術で強化していることで、この正確な射撃を可能にしているんだろう。
ライダーの装甲にもそれなりの衝撃を与えてくる弾丸を、丸腰の藍羽さんやそのお母さんに当てる訳にはいかない。
必然的に俺が前に出て盾になるしかない。
「黒影（ダークシャドウ）、守ってくれ!!」
「アイヨ!!」
「ちょ、ちょっと！　何これ!?」
俺の足元から影が伸び、藍羽さんとお母さんを包み込む。これでひとまずの安全は確保されたな。
攻勢に転ずる!!
「はあああぁぁぁぁッ!!」
銃弾の雨を掻い潜り、俺は影胤に接近する。
《ＨＥＹ!!　ＧＡＩＭ！》
ヘイセイバーに今度はオレンジ色のフレッシュなエネルギーが蓄えられる。あと数歩で刃が届く、その直前で、
「ふっ――――」
影胤が手のひらを向けると、
「うわっ!?」
俺の体が不可視の力場に押されて持ち上がる。そのまま家の壁にめり込み突き破る。
「クソ……」
昨日の戦闘映像と同じだ。いくらライダーに力があったとしても、自分の体を持ち上げられてしまえば踏ん張ることが出来ない。近接戦を挑むには足腰や重力だけでなく、別の手段で加速する必要があ

る。
「ふむ」
影胤は黒影（ダークシャドウ）を一瞥し、
ガキュン！　ガキュン！　ガキュン！　ガキュン！
その体に何発も銃弾を打ち込んだ。
「特に効果はなし。銃弾で突破するのは難しいようだね」
いくらハイパワーライフルだとしても、物理攻撃で黒影（ダークシャドウ）を突破するのは難しい。ならばと影胤の右手が揺らめく。力場が集中しているのだ。
「オイ！　ヘルプ！　ヘルプ！」
「分かってる!!」
《ＢＵＩＬＤ》
新しいウォッチを起動させた。
《ＦＩＮＡＬ　ＦＲＯＭ　ＴＩＭＥ！》
《Ｂ・Ｂ・Ｂ　ＢＵＩＬＤ！》
体の各所がラビットタンクスパークリングのものに変化する。
「エンドレス――マキシマムペインッ!!」
影胤が黒影（ダークシャドウ）に放とうとしていた斥力の槍が、俺の方向に壁となって押し寄せてくる。
俺の接近を予知して狙いを変えたんだ。
激突する俺の拳と斥力の壁。だが、ただの拳では長くは持たない。だからこそ俺はこの形態に変身したのだ。
軽い破裂音が響く。
「……!?　なんだ？　これは……！」
跳ね返されるはずの俺の勢いが強まる。そのたびに軽い破裂音が何度も響く。ラビットタンクスパークリングの能力、泡による高速移動をロケットの二段階ブースターのように使って対抗している。
そして、
「ぐっ、が……っ!?」
斥力の壁を突破した拳が、影胤の顔面を捕らえた。派手に吹き飛び転がるが、すぐに立ち上がった。

仮面はヘルメットの役割も果たしているのか、衝撃を食われる感触がした。だがひび割れた仮面の破片が地面にぱらぱらと散らばった。しかしシルクハットを深くかぶり直したせいで、表情は全く分からない。
「ヒ、ヒヒ、痛い。痛いじゃあないか、夜月君。予想以上だよ」
頭から血を流しながら笑う影胤。右手で傷口を押さえているが、白い手袋がどんどん赤く染まっていく。
だがこれで影胤が高ぶってしまったようだ。まだやるつもりらしい。それも、あの様子を見ると周りへの被害など気にしないレベルで。
「必殺技……いや……」
今の様子を見るとイマジナリィ・ギミックを突破することは可能だ。だが力加減が難しい。
「使うか……？」
取り出したのは灰色の3枚のメダル。コイツのコンボを使えば、影胤のイマジナリィ・ギミックの力場を逆に押しつぶすことが出来るだろう。
だが、
「使ったら殺しかねない……いや、うまくやるしかないか……!!」
キンッ!!
3枚のメダルを空に弾く。
《ＯＯＯ》
起動させたオーズウォッチに、落下してきたメダルが次々と吸い込まれていく。すべて吸い込まれると、オーズの絵柄が変わった。
ベルトにセットし、回転させた。
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＳＡＩ！　ＧＯＲＩＬＬＡ！　ＺＯ！　ＯＯＯ！》
サイ、ゴリラ、ゾウ、3匹の動物ミニチュアが出現し、俺に装着される。
ただアーマータイムした時とは違う、膨大な力が俺に流れ込んでくることを感じる。

「う――――オオオオオオオオオオ!!!」
その力を吐き出すように、全力で咆哮する。何の能力も使っていないはずが、それだけで空気が震え微細な振動が周囲を揺らしていた。
「これは……」
影胤も俺への警戒度を高めていた。
「黒影（ダークシャドウ）さん、こちらへ」
「オ、オイ――――」
パン＝ドラで一瞬未来を観たクローディアが戦闘を中断、黒影（ダークシャドウ）を引っ張って翔の後ろへと移動する。
クローディアの流石の判断。これで心置きなく暴れられる。そうまさしく、これからコンボの力を開放するのだ。
「逃げないで、うまく斬れないよ――――」
「小比奈、待ちさない!!」
突進してくる小比奈。迫りくる2本の黒刀。影胤の静止の声。だがそれよりも速く、俺の右手が俺の胸を叩いた。
それはゴリラなどの動物が行う動作――――ドラミングだ。
「――――あれ？」
小比奈の体がふわりと浮き上がる。
何度も何度も自分の胸を叩く。そのたびに衝撃波が空間を揺らし、周りの重力を歪める。小比奈だけではなく瓦礫も浮かび上がりその自由を奪う。
サゴーゾコンボの固有能力、重力操作だ。
「エンドレス・スクリームッ!!　何ッ!?」
流石の危機察知能力で効果範囲外に逃げていた影胤が放った斥力の槍だが、超重力にへし折れ、地面に突き刺さる。
じりじりと重力が広がっていく。ギリギリに立っていた影胤はその境界で後ずさりしていたが、
「小比奈、後で迎えに来るからね」
短く言い、影胤は退却していった。
「まっ、う――――」
待て！　と叫ぶことも出来ずに俺はその場に膝をついた。そのま

ま地面に転がり、何とか変身を解除した。
「か、は、はぁはぁ……」
攻撃を受けたわけでも無いのに心臓が早鐘を打っている。
「凄まじいな、コンボは……」
軽くその力を使っただけで周囲の建物を半壊させる能力。特にサゴーゾは広範囲に影響を及ぼす能力だけあって、派手にやってしまった。
サゴーゾの絵になっているオーズウォッチを眺めていると、取り込まれていたメダルが排出されて地面に転がった。
「大丈夫ですか、翔!?」
「ああ、だいじょぶだいじょぶ」
駆け寄ってきたクローディアが俺を起こしてくれる。疲れ切っているが、ケガをしたわけじゃない。
「ううーー!! はーなーせー!!」
小比奈がバインドにぐるぐるにまかれて転がされていた。アレはクローディアのバインドだ。手際が言いな。
「クローディア、その辺りにメダル転がってないか?」
「はい。ええっと……」
「はい、これ?」
綺麗に整えられた爪先が、ゾウのメダルを摘まむ。
「ああ、ありがとう」
「ずいぶん疲れてるわね」
藍羽さんも苦笑している。だが、しっかりとメダルを拾い集めてくれた。俺の掌に乗せられたメダルを倉庫に転送した。
「助かったわ。ありがと。あんた達、管理局の人でしょ?」
「はい。通報を受けたので」
クローディアが答えてくれる。
その後も、どうしてこんな事態になったのか、軽い事情聴取のような事を行っている。
「はぁ……ちょっと休んでいいか?」

「そりゃもちろん。休めるスペースが残ってればいいけどね」
藍羽さんが自分の家を見て言った。
「あー……」
戦闘の爪痕（主に俺の攻撃で）が残る家だ。家どころか、サゴーゾの力で庭まで滅茶苦茶になってしまった。完全に修復するには重機が必要だな。ホントにこれは管理局の経費でどうにかなるんだよな？
「だといいわね。ま、命は助かったわけだし、アタシからも口添えするわ」
「そりゃありがとう、藍羽さん。俺は夜月　翔だ」
「浅葱でいいわよ。気使わないほうがやりやすいでしょ。アタシも翔って呼ぶから」
ずいぶん気安いな。確かにそんな性格か。
「う、うん……まあ、アンタらとはもう少し付き合うことになりそうだし、ね？」
浅葱が気まずそうな表情で顔を逸らすのだった。

蛭子影胤戦、事後

「つまり島の制御権を渡しちゃったってコト!?」
「そ、そうなるわね……」
「それは……」
浅葱の告白にクローディアも渋い顔をしている。
現在は他の管理局員がやってくるまで、家の中で休ませてもらっていた。めちゃめちゃになってしまった家だが、その広さのおかげで休むスペースは確保出来た。
そこで、何があったのかを簡単に解説してもらっているのだ。
だがその内容は、一歩遅かったというモノだった。重要なＰＣはあの時のどさくさで持ち去られてしまっていた。
「はい、どうぞー」
「あ、どうも」
浅葱のお母さんがお茶を淹れてくれた。そのまま座る母親に浅葱は微妙な表情になるが、文句は言わない。代わりに浅葱のお母さん――――菫さんが頭を下げた。
「ごめんなさい。私が捕まったせいで」
「謝らないで。別にあたしはあなたのためにした訳じゃ無いから」
「いや、この状況でそれは無理があるだろ……」
浅葱の態度に俺はボソリと呟く。
聞いたところによれば、浅葱は最初に拒否していたところに、縛られた母親を見せられて相手の要求に従ってしまったらしい。まあ、下手なことは言わないようにしよう。
「何か言ったかしら？」
「いや別に。あー、だるいー」
コンボのだるさは抜けてきたが、ちょっと仮病を使って切り抜ける。
それにしても、
「コンボか……」
変身後の疲労がそのままってことは、変身した時のデメリットはそ

のままってことなんだろうか。
　コンボで疲労するのは別にいいが、古代のオーズの様に暴走するのは勘弁だ。ここぞという所に取っておかないといけないな。
　他のライダーでも変身すると深刻なデメリットがあるモノがある。それを考えると、安易にアイテムを使うのは危険かもしれない。
　もちろん、いざというときにそんなことを言うつもりは無いが。
　俺が密かな決心を固めていると、
「ですがそうなると、のんびりしているわけにもいかないですね」
　緩みかけていた空気をクローディアが引き締めてくれる。
「だな。どちらにせよ相手にピースは渡っちまったんだ。此処からはいつ行動を起こされても不思議じゃない」
「あいつらの目的ってもう分かってるの？」
　浅葱が次々とスナック菓子を口に放り込みながら聞いてくる。クローディアは質問で返した。
「予想はつきますか？」
「少しはね。わざわざ島の制御権を欲しがったってことは、キーストンゲートでテロでも起こすつもりなんじゃ無い？」
「８０点ですね。正確にはキーストンゲートの最下層。要石に用事があるみたいですよ」
「要石に？　どんな用事よ」
「どうやらあの方々は、要石が欲しいらしいです」
「ほ、欲しいって……そんなホイホイあげられるようなもんじゃないでしょ、アレ」
　浅葱は顔を引き攣らせながら茶化す。要石がなくなるとどうなるのか、浅葱には説明されるまでもなく理解しているのだ。だからこそ、そんなことをする人間がいる事が信じられないのだ。
「残念ながら事実です。このままではこの島は、あと１日半で沈みます」
「そんな……」
　浅葱は顔を青くしていた。自分が、その凶行に実行のピースを与えてしまったことを後悔しているのだ。

「大丈夫だ。そうならないために俺達がいる」
「ですね」
いくらピースが揃ったところで、パズルを完成させなければ問題ない。
「あと1日半なんでしょ？　アンタ、ぶっ倒れたけど大丈夫？」
「それまでには回復するよ！」
「翔は間違いなく今回の戦いで重要になります。しっかりと体力を回復させなければ」
重要になるってのは、影胤がＡＭＦを使うからだろう。
実際、ＡＭＦを武器にする影胤は本当に厄介だ。今回の戦闘ではっきりわかった。俺も魔法関係の能力が役立たずになってしまった。それは他の魔導士でも同じだろう。
だが、
「翔、実際戦ってみてどうでしたか？」
「勝てないとは思わない。あの時が全力だったらな」
コンボもそうだが、ラビットタンクスパークリングでも最終的にはどうにかなったと思う。
「ＡＭＦといえば」
浅葱が思い出したように口を開いた。
「キーストーンゲートにもＡＭＦの防御機能があるわよ」
「そうなのか？」
「ええ。理論上はＳランク魔導士でも魔法行使が困難になるレベルのね。それに加えて学園島の化学兵器が大量に配備されてるわ。アンタんとこの隊長陣が攻め込んでも落とせないはずよ」
そいつは凄い。
「……で、影胤はそれを自由に使えるわけだ」
「……そうなるわね」
「そうなると私も突入は厳しいですね」
つまり、キーストンゲートに踏み込まれる前に影胤たちを捉えられなければ、魔道士は戦力外になるって事か。
「制御権を奪い返せないのか？」

「出来ない事はないわ。でも設備がね……さっきの戦いであたしの部屋吹っ飛んじゃったわけだし。持ち歩いてるノートＰＣすらあいつに持ってかれたし」
　ノートＰＣ１台あればスパコン５台に対抗出来るのか？　ま、出来るんだろうな。電子の女帝だし。
「自由に動けるようになったら六課に行こう。あそこだったらある程度の設備がそろってるはずだ」
「そうですね。もちろん、浅葱が協力してくれるのなら、ですが」
「当たり前でしょ。アタシのせいで島が大変なことになりそうなのに、何もしないわけにはいかないわ。幸い、得意分野だしね」
　浅葱は闘志をむき出しにしている。
　そうしていると、
「お」
　通信だ。相手は蛇倉さん。
「はい。こちら夜月です」
《おう。研究所に向かったはずの翔。ずいぶんと寄り道したみたいだな？》
「……や、それは……」
　浅葱からの通報が入った時間は、甘く見積もってもすでに研究所で捜査していなければいけない時間だ。
　病院に行ってアスタルテ関連のお願いをしていた所が響いた。
「け、研究所に行ったみんなはどうですか？」
《残念ながら全部空振りだ》
「そうですか……」
《やっぱ、お前んとこが当たりだったんだな》
「いやいや、実際そうだったのかは分かりませんからね！」
《そうだな。お前の代わりが捜査員が向かった時には、すでに研究所はもぬけの殻。設備には稼働した痕跡が残っていたらしいが》
　それでも、シュレディンガーであることに違いはない。他の犯罪者だったのかもしれないから。
　……ま、多分、影胤からの連絡を受けてオイスタッハが慌てて逃げ

たってところなんだろうけど。
つまりは二分の一というか、二兎追うものはとか、つまりはどっちかしかどうにかできなかったんだろう。
だったら人の命がかかっている浅葱の方に来た方が良かった。
《ま、そうだな。そういう事にしておこうか。そっちの状況もすでにこっちに入って来てる。とりあえずお前らは六課に戻ってきてくれ。必要な奴を連れてな。こっちにも動きがあった》
必要な奴っていうのは捕まえた小比奈の事だろう。
「それなんですが……」
俺は追加で浅葱のことを説明した。
《そうか。部隊長に話は通しておく。お前はすぐに、寄り道せずに戻って来いよ》
「了解です。すぐに戻ります」
蛇倉さんとの通信を終了する。
俺はその場の人たちに内容を説明し、藍羽宅を後にするのだった。

「さてと」
翔との通信を終えた蛇倉は立ち上がった。向かう先は部隊長室だ。メッセージを飛ばしても良かったのだが、あいにく今は取り込み中。だがこちらも火急の案件だ。
すぐに部屋の前に到着した。開ける前に一言。
「部隊長！　取り込み中ですか？」
「ん、ええよ。入って」
許しを得た蛇倉は部屋の中に入る。はやては部屋の中央奥にある

部隊長の机ではなく、お客さんに対応するための対面ソファーに座っていた。
「すみません、取り込み中に」
「や、大丈夫。話は一通り聞き終わったから。そっちも急ぎの話やろ？　研究所の件？」
「いえ、翔の件です」
「ああ……なにかした？」
翔の件と言っただけではやては何かを察したらしい。話題を指定しないで聞き返す。
「アイツが蛭子影胤と接敵したらしいです」
「……ふー」
はやては大きく息を吐いて、
「どうなったん？」
「結果だけ言えば、蛭子小比奈を拘束、現在こちらに向かっています」
「彼の悪運もここまで行くと一級品やね……」
はやてが苦笑いして言う。
「その悪運をこっちにも分けて欲しいもんやわ」
はやては目の前のソファーに座っている相手に視線を向けた。
「「……」」
はやての正面に非常に厳しい顔で座っているのは、ステイルと神裂――イギリス清教の魔術師だった。
この２人は重要な用事があってここに来た。その用事というのはもちろん。
「それでインデックスちゃんの事やけど、全然心あたりが無いってことでええよね？」
「……はい。お恥ずかしながら」
はやての言葉に神裂が苦々しく頷く。
「いなくなったのに気が付いたのは今日の朝。それまで誰も気が付かなかったと」
「はい」
確認するようにはやてが言葉を並べていく。

インデックスが攫われたことが発覚して、イギリス清教の教会は大騒ぎになった。が、複雑なこの島の交通網を魔術師が使いこなせるわけもなく、神裂の脚力で捜索していたところ、街中で能力を不正使用していると勘違いされて検挙されてしまったのだ。
その際、六課の名前を出したところ、ここまで流されてきたという訳だ。簡単な説明を受けた蛇倉は
「こちらも、単純な人探しで片づけるのは難しいですね。対象が対象ですから」
「そうやね。まさか島についてこんなに早く厄介ごとに巻き込まれるなんて」
「我々の警備が甘かったことが原因です……」
神裂は悔しさを滲ませている。
「でも、教会の警備魔術にはなんも引っかかってなかったんやろ？ずいぶんと手慣れていると思うんよ。心当たりはある？」
「狙ってくる相手はいくらでも考えられる。だが、この島についてすぐにとなると、今回の移送計画がどこかから洩れていたとしか思えない」
ステイルが答えた。
「内部に裏切り者ってこと？」
「可能性は高い。見つけ次第、灰にする」
「……そっちの組織のやり方に口を出すつもりは無いけど、管理局員の目の前でそういうことはあんまり言わんといてな？」
ステイルの口調は冗談ではない。その相手に明日はないだろう。
そんな中、蛇倉は考え込んでいた。
「（イギリス清教の教会といえば、魔術師の工房とほぼ同等。そこにあっさり侵入して人1人を攫う、か……それこそ特殊部隊の人間じゃなきゃ不可能な芸当だ……関わってるのか、アイツらが？）」
蛇倉の目が鋭くなり、元に戻る。いつもの仮面をかぶり、口を開いた。
「それで、翔の件には続きがありまして」
「ん、何？」

「蛭子影胤の目的について、予想がついたそうです」
蛇倉はキーストーンゲートの件について報告する。
「島の制御権……そら本当にまずいなぁ」
「はい。一刻も早く彼らを逮捕しなければ、大変なことになります」
「人命に優劣はない。申し訳ないけど、インデックスちゃんの件は他の部署に任せるしかないかもなぁ……」
他の部署への引継ぎを考えれば、動き出しが遅くなるのは間違いない。だが六課としては、島の危機とあればその解決に全力を注がなければならない。
優先度を考えれば、そうなってしまう。
「それは……くっ」
「……」
神裂は口を開きかけたが、管理局の事情を考えているのか何も言えないでいる。ステイルは最初からあまりアテにしていなかったのか、あまり表情を変えない。
「……案外、繋がっているのかもしれないですね」
そこに、蛇倉が差し込んだ。
「繋がっている……？」
神裂は蛇倉をみてぽつりとつぶやいた。
「ここ数日、禁書目録移送や島の外部からのテロリスト侵入が続きました。いや、重なりました。これらがすべて繋がっているのでは、という事です」
「なるほど……」
「島の要石は科学だけではなく魔術も使われていたはずです」
「そうだな。地下の龍脈と風水を使っていると聞いている」
ステイルも流れが変わったことを察知したのか口を出してきた。
「だとすれば、目的を遂げるまでのどこかで、インデックスちゃんの力が必要になる場面が出てきてもおかしくはない、ちゅう事？」
「可能性があるのでは、と思っただけです。教会に侵入して攫ったという話も、影胤のような元特殊部隊の人間なら現実味がありますからね」

「なるほど。一理あるなぁ」
はやてが唸り始める。
「推測の域は出ないですし、だからと言って影胤を早急に捕らえなければいけないことに変わりはありませんけどね」
そう言って締めくくった。
「可能性が高いというのなら、我々も捜査に加わります。良いですかステイル」
「……それであの娘が助けられるのなら」
神裂は乗り気になっているが、蛇倉が首を振った。
「やめた方が良い。向こうには知り合いがいるんだ。いいように利用される可能性がある。特に今回の相手は、どんな悪辣な手段を取ってくるか分からない」
単純な話、インデックスの身柄の代わりに管理局の妨害を命じられたらこの2人がどのような行動をとるのか。それを考えると、捜査に加えることは出来ない。
「それは……」
神裂も否定できなかった。流石に管理局員を虐殺して回るような真似はしないが、戦況を見てどちらにつくのかを判断する可能性はあった。
ステイルは躊躇なく燃やすだろう。
「ま、詳しくはみんなが帰って来てからってことにしよか？　あ、蛇倉さん、キーストーンゲートに連絡して欲しい。今回の件について。インデックスちゃんのことも、他の部署に連絡しとこか。全く関係ない人に誘拐されたって線もまだ残っとる訳やし」
「了解しました」
一礼して部屋の外に向かおうとする。その直前。
「し、失礼します!!」
青い髪のメイドさんが、部屋に飛び込んできた。
「レム？　どうかしたん？」
「たった今連絡がありました！　キーストーンゲートが――襲撃されています！」

それは早すぎる攻撃だった。

キーストーンゲート突入①

午後１７時過ぎ、キーストーンゲートに併設されている武偵局。その受付。

そろそろ今日の受付も終了という時間。受付に立つハーフエルフの女性、『エイナ・チュール』は最後の追い込み作業をしていた。

時間ギリギリに滑り込んでくる武偵が列を作っているが、エイナはそれをどんどん捌いていく。

若干１９歳ながらこの受付でも上位の手腕を誇るエイナ。その容姿も相まって人気の受付嬢として知られていた。

受付と称して軽いナンパをされたことは何度もあったが、仕事一筋の彼女は全くなびかない。仕事に私情を持ち込まないことを信条にしているのだ。

そして今も、

「エイナちゃん、そろそろ終わりでしょ？　その後時間あれば――」

「手続きは終わりましたので」

受付カウンターに肘をついてナンパしようとした男を、にこりと笑って退散させる。

慣れたもので疲れは全く感じさせない。

そこで、

「……あれ？」

ふと視線を流した先、エントランスの入り口に丁度今入ってきた人影が見えた。

シルクハットの男と、片メガネをかけた大柄な男、そして長い青髪の少女だ。シルクハットの男はその格好には合わないバッグを持ち、長い青髪の少女はその背に銀髪の少女を背負っていた。

中々に不審者だが、この島ではギリギリ普通、通報されないスレスレだ。

「……エイナちゃん？」

「えっ？　あ、ご、ごめんなさい!!」

次に並んでいた人が、いつまでたっても処理を始めないエイナに声

をかけてきた。慌てて手を動かし始めるエイナだったが、視線は何となくその３人（４人）組を追ってしまう。
シルクハットの男が持っていたカバンからＰＣを取り出して操作する。
すると突然、
ビーッ!!　ビーッ!!
「な、何!?」
けたましいサイレンが鳴り始め、出入り口にシャッターが下りる。
「な、なんだよ、コレ!!」
「突然なんだ!?」
「ふざけんな！　おい!!」
閉じ込められたことで、短気な武偵がシャッターに蹴りをいれたり、人によっては拳銃を抜き始めた。
だが、特殊合金製のシャッターには傷一つつかない。だが暴力は周りに伝播して、さらなる混乱を生む。その前にエイナは声を張り上げた。
「み、みなさん！　落ち着いて下さい!!」
さらに異変が起こる。
「っ!?　う、ぁ、これ、って……！」
急にエベレストのてっぺんに投げ出されたかのような、抗いがたい不快感がエイナを襲う。この感覚には覚えがある。
「（これ、訓練で受けたＡＭＦ……!?　非常事態用のプログラムが働いたの!?）」
エイナの他にも不快な気分に陥っている人は何人もいる。無意識のうちに魔法で身体のサポートをしている人は、余計に影響を受けていた。
その中で平然と立っている不審な３人組。
「では、次だ」
シルクハットの男がＰＣを捜査する。
すると、
ガシャン!!

床からせり上がった４台の砲塔。それはハイパワーライフルを連射するマシンガンの砲台だ。
それらが周りの人たちを攻撃し始める。防弾制服を貫通する威力の弾丸はあっという間にロビーを血の海にする。
そんな中、平然と立っている３人組。どんなに鈍い人間でも、その３人組がこの状況を作り出したと判断するだろう。
最初の掃射を逃れた武偵がスキを見て攻撃を仕掛けるが、
「ネームレス・リーパー」
それでも群がってくる武偵に向かって、力場で構築された刃を投げつける。防弾制服を引き裂き、鮮血が噴き出した。
その光景に学習し、不用意に近づくことなく銃を構える武偵や管理局員。
全方位から発砲されるが、
「ふむ……」
それらはすべて斥力の壁に受け止められ、跳ね返された。
中には砲塔を狙う者もいるが、手持ちの銃器で破壊できるほどヤワな造りはしていなかった。
カウンターの後ろに身を隠したおかげで怪我をしていないエイナ。
「（キーストーンゲートにテロ行為!?　とにかく外部に連絡を……!!）」
そう思って緊急用の端末を取り出すが、
「（繋がらない……通信妨害……っ）」
これでは非力なエイナに出来ることはない。
銃声が止む。
無事な人は物陰に隠れたことで、ターゲットがいなくなったのだ。少しでも体を出せば即座に銃弾が飛んでくるが、ひとまずはロビーは静かになった。
片メガネの男――――オイスタッハが周りに転がる武偵や管理局員を見て、
「ふむ。だいぶ力を温存出来ましたね」
「兵は神速を貴ぶ、とは違うかもしれないがね。ピースがそろったの

ならすぐに行動に移すべきだ。我々は孤立無援。時間が経てば消耗し、不利になる。目的についてもすでに知られてしまっているだろう」
「対策をうたれる前に行動に移すということですか。しかし、あなたの娘は……」
「捕まったのは管理局だ。拷問の心配はないし、貴重な情報源としてむしろ丁重にもてなされているさ」
　影胤の表情は仮面のせいでうかがい知れない。翔に割られた仮面だったが、すでにスペアに取り換えられていた。
「それに、夜月　翔のこともある」
「例の、ジャグラス・ジャグラーが警告してきた人物……それほどでしたか？」
「ああ。魔法に拠らない戦闘手段を豊富に持っている。戦ったが底が見えなかった。君のホムンクルスの眷獣で勝てるかどうか」
「ふむ……」
　だが影胤は、翔は疲労しているとも予想していた。単純に逃げたにもかかわらず、特に追撃が無かったからだ。
「（小比奈を捕まえたあの力……あれだけの能力を使えば、それなりに消耗しているはず。行動するなら今しかない）」
「それでは進みましょうか」
　逸る気持ちを抑え、オイスタッハはゆっくりと歩きだした。

「――――ちゅうんが、今から３０分前、最後の映像や」
　映像が終了し、画面には奥へと向けて歩く影胤、オイスタッハ、アスタルテ、そしてアスタルテに背負われたインデックスが映し出され

た状態で止まる。
「これ以降、キーストーンゲート関連施設へのすべての通信が遮断され、内部にいた職員の安否は不明。キーストーンゲートを中心とした半径１００メートルに超高濃度のＡＭＦが展開されている」
部隊長と蛇倉さんが変わりばんこに説明している。
「さらに施設の外に設置されている警備システムも作動。不用意に近づくとハチの巣にされるな」
「ＡＭＦの影響でＡランク魔導士でも魔法の仕様は困難になっとる。そのせいで管理局の対応は後手後手。今は急いで超能力者中心の部隊を編成している最中」
というのが現状だった。
今はホムンクルス調整施設へ捜査に行っていたみんなも六課に戻り、現在は六課でこの状況の対策会議をしている。
「で、六課なんやけど」
「特に指示はない。ま、本部がダメになってるからな。もともとウチは独立部隊だし、こっちにまで気を配る余裕はないって事だろう」
……じゃあ。
「六課は動かないってことですか？」
「翔君はそれで我慢出来る？」
出来る訳がない。
「そ、だから六課も動く」
部隊長は頼もしい顔でニヤリと笑った。
「だとしても、六課も他のトコとそんなに状況は変わらへん。六課も魔導士主体の部隊やから」
「正面からぶつかるなら、キーストーンゲートの防衛設備全てと戦うことになるな。非効率極まりないことだ」
蛇倉さんも憎々しげに息を吐いた。
浅葱も言っていた。六課の隊長陣が攻め込んでも、計算上ではキーストーンゲートは落とせないと。仮に計算結果を覆したとしても、時間がかかりすぎるだろう。その間に影胤達が目的を遂げてしまう。
核ミサイルでも撃ち込めば話は別かもしれないが、六課にはそんな

備えはないし、周りへの被害が大きすぎる。
　正面から突撃するのが難しいのなら、
「鏡の中から侵入するのはどうでしょうか」
　俺は提案する。
　すっかり潜入用になってしまった龍騎系のライドウォッチ。だってしょうがない。ミラーワールドが便利すぎるんだもん。
「鏡の世界を進んで、適当なところ……まあトイレとかですかね。そこで出れば、少なくとも外の防衛設備に関しては無視して進むことが出来ます」
「確かに大幅な時間短縮になるな。何人いける？」
「２人です」
「２人か……少ないな」
　シグナムさんの質問に返すと厳しい表情になる。
　確かに警備システムが張り巡らされている施設に突入するにしては少ない人数だ。
　しかも施設には高濃度のＡＭＦ。魔導士はそもそも数に入らない。六課は（この世の大部分がそうだが）魔導士主体の組織だ。
　今回突入できるのは、それ以外の能力を使える人物。俺、耀、それとＩＳを持っている楯無さんだ。
「（まあ、数を増やそうと思えば……や、さすがに今回は厳しいか）」
　ネタに流されそうだった脳みそだったが、その考えが打ち消される。
　運によってはゾルダとか、王蛇とかのライダーウォッチがゲットできるかもしれない。でもそれには行為が必要で、刻一刻と迫ったこの状況でそんなことをしている暇はないのだ。
　……よくよく考えてみれば、ライドウォッチが増えたところでアーマータイム出来る人数は変わらないな。俺と、後誰か１人だけだ。
　まあ往復すればいいんだけど……
「正面の防御を突破っていう時間を短縮するために、部隊を送り込む時間を増やしてたら意味ないですよね……」
「そうだな。だが、現状それが一番いいプランだ」

蛇蔵さんは顎に手を当てて頷いている。
「はい」
ここで手を上げたのは意外にも、
「耀？」
「翔にちょっと話がある」
「俺に？」
会議に出席している人の視線が俺に集中する。
「思いついたことがあったから試してみたい」
「ふむ……？」
「みんなもちょっと見て欲しい」
俺達は耀の言われるままに外に連れ出され、数分後、会議室に戻ってきた。
耀の『考え』というのは、大成功だった。俺も盲点だったことだが、こういう手段があったのかとビックリしたよ。
「それじゃあ、再開するけどもう結論は出とるね。楯無、翔君、耀」
「「はい」」
俺達３人は立ち上がる。
「その３人で突入。建物内部に取り残されている人の救助は最低限に、ルードルフ・オイスタッハ、および蛭子影胤の足止めを優先して」
「「了解!!」」
俺達は敬礼した。
「そして、藍羽さん」
「ん」
部隊長に声をかけられた浅葱だったが、ＰＣの画面から顔を上げない。もちろんそれを咎める人はいない。浅葱は浅葱にしかできない仕事をしているのだ。ここに来てからずっと。
「あとどのくらいかかりそう？」
「あと１時間かからないわ」
あと１時間で浅葱がキーストーンゲートの制御を取り戻すのだ。
「そのまま作業を続けて。藍羽さんが作業を完了次第、魔導士組も突入。こっちは救助をしつつ、先遣隊と合流。犯人を逮捕します」

「この情報はほかの部隊にも伝えます」
蛇倉さんの手配で六課の動きは伝えられていた。
「いつタイムリミットが来てもおかしくない。みんな、動き始めよう!!」
その声で、俺達は各々の仕事に取り掛かるのだった。

残された時間は短い。出発は5分後だ。それまでに準備を済ませてヘリポートに集合しなければいけない。
俺もトイレを済ませて集合場所に向かっていたが、
「ん?」
通路の突き当りに設置されている自販機の前に、2人の人影を発見した。話には聞いていたけど会議には参加していなかった、ステイルと神裂だった。
神妙な顔で何かを話している。
俺は先ほどの映像のことを思い出して話しかけた。
「ども。どうかしました?」
「……あなたは」
「何でもない。気にしないでくれ」
そっけない態度だった。
それもそうだろう。何せインデックスが誘拐されているのだ。
先ほどの映像でも見たが、影胤達が連れている。だが、それについてこの2人に伝えることは蛇倉さんに禁止されていた。曰く、余計な情報を渡して勝手に動かれるのを防ぐためだとか。
思わず声をかけたが、余計なことは言えないからな……

微妙な空気が流れる中、
「あれ？　アンタこんなところで何してんの？」
声をかけてきたのは浅葱だった。俺の横を通り過ぎ、自販機で飲み物を買った。
「浅葱こそ」
「アタシはプログラムを走らせてる最中。ちょっと休憩よ」
腰に手を当てて小首をかしげる。そんな姿も様になっているように見えた。
「そろそろ出発でしょ？　さっさと行った方が良いんじゃない？」
「ああ、すぐに行くよ」
ちらりと後ろを振り返ったが、魔術師達はすでに会話する気はないようだ。
俺は2人から離れて歩き出す。浅葱は横に並んだ。
すると、ぽつりと口を開いた。
「……ごめん。アタシのせいで危険な役割することなって」
「悪いのは犯人で浅葱じゃない。無事に帰ってくるから心配するな」
「ま、アンタが強いのはもう見てるしね。その辺りは心配してないわ」
「実際、3人で突破出来そうか？」
「さあ？　アタシは戦いの専門家じゃないから。内部データは送ったし、そっちの更識さんの方がわかるんじゃない？　あの人、日本国防を担ってる家の人でしょ？」
「……そりゃそうか」
雑談しながら歩いていく。
「先輩！　更識先輩が出発するって――――」
雪菜が顔を出した。
「ああ。すぐに行くよ。それじゃあ、言ってくる」
「ええ。気を付けて」
「そっちも頼んだぞ。早めに復旧させてくれれば助かる。じゃあ雪菜も。また後で」
俺は駆け足でヘリポートへ向かった。

ヴァイスさんが操縦するヘリで現場に向かっている。
管理局に包囲されているキーストーンゲート。その外側が目的地だ。
「それでは皆さん！　気を付けて!!」
そう言って飛び去って行く。
「それじゃあ行きましょうか」
突入メンバーは俺、楯無さん、耀の３人。メンバー的に楯無さんがリーダーだ。
「了解です」
俺はジクウドライバーを装着した。
《ＺＩ―Ｏ！》
《ＲＹＵＫＩ！》
「変身!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＡＤＶＥＮＴ！　ＲＹＵＫＩ！》
俺はジオウの龍騎アーマーに変身する。
「それじゃあ……」
俺はナイトのウォッチを取り出して、
「やりましょうか」
突入開始だ。

キーストーンゲート突入②

《ＫＮＩＧＨＴ》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＡＤＶＥＮＴ！　ＫＮＩＧＨＴ！》
ＩＳを展開した楯無さんに追加でナイトの装甲が付与される。
「なるほど……ＯＫ。いけるわ」
身体の調子を確かめた楯無さんが頷く。ＩＳを展開していても、特に問題なく装着出来たみたいだ。
「(他人への能力付与か……しかも基礎能力じゃなくて、一般ではレアスキル扱いされても当然の能力を)」
楯無さんが何か言いたそうにしているが、口は開かない。他人へのアーマータイムを六課で披露したのは今回が初。大方、また新しい能力を、だとか、危険な力を、だとか思っているのだろう。
だが、事件解決に出し惜しみするつもりは無い。その評価は甘んじて受け入れよう。
「行きましょうか」
楯無さんを先頭に鏡の中に入る。
そう、アーマータイムしていないはずの耀も。『何の問題も無く』鏡へ侵入する。
全てが反転した鏡の世界へ。誰一人いないこの世界は、俺たち以外の物音はしない。ビル群の中で車一台、人っ子一人いないというのは正直不気味ではあるが、危険が無いのは分かっている。
俺達はキーストーンゲートにまっすぐ走る。ＡＭＦも防衛設備も起動していない。障害物は何もなかった。
一直線に進めば、キーストーンゲートの入り口まで５分もかからない。
「ホント、反則ね……」
楯無さんの呟きが聞こえる。
「作戦を考えるのが馬鹿らしくなっちゃうわ」
と思ったら俺へ話しかけてきた。ここまであっさりキーストーン

ゲートまで近づけたことによる感想だろう。
「俺からすれば、耀も反則だと思うけどな」
「そうかな？」
耀は首を傾ける。流石、世界最高の問題児の１人のギフトだ。
「私から見れば、どっちもどっちよ」
楯無さんが呆れを含んだ口調で言った。
丁度到着する。
キーストーンゲートの玄関口、大きなガラス張りの自動ドアだ。近づいてみたが開かない。どうやら電気系統は動いていないらしい。
「これって壊してもいいのかしら？」
「良いですよ。現実には影響はありませんから」
「なら、遠慮なく」
楯無さんがランスのバルカンを連射した。ガラスは粉々に砕け、扉としての役目を終える。
俺達は進む。
無人のロビー。誰もいない受付。監視カメラの映像では、ここで影胤達が警備システムを作動させていた。銃撃に倒れた人が何人もいたはずだ。その証拠に、マシンガンの砲座が起動していた。
「楯無さん」
「無駄な戦闘をしている時間は無いわ。私達の目的は影胤達を足止めすること。一刻も早く追いつかないといけない。そうでしょ？」
分かってはいるが……撃たれて出血している人もいたのだ。砲座から隠れていては応急処置も出来ていないだろう。助かる命も助からないかもしれない。
「うん。せめてここだけでも、この銃を破壊するだけでもしておきたい」
耀も俺に賛同してくれる。
実際にはこのロビー以外にも人はいる。ケガをしている人もいるかもしれない。その人たちのことを考えれば、優遇することになるのかもしれないが。
「……はあ、分かったわ。言い合う時間がもったいない。あのタレッ

ト４台くらいなら大した時間にならないしね」
「ありがとうございます!!」
俺達は行動を開始した。

「はぁ、どうなるんだろうねぇ……」
「そうだね……」
最初の銃撃からずっとカウンターの後ろに隠れていたエイナは、同僚のミィシャと肩を寄せ合っていた。
幸いこのカウンターは、有事のことを考えて装甲車と同等の耐久力がある。ハイパワーライフルでも貫通するのは難しい。
だが依然として、マシンガンの銃座が展開し身動きが取れない事実は変わらない。
他にも物陰に隠れて凌いでいる人は何人もいた。誰一人として物音を立てていない。ロビーにはタレットの駆動音、そして、そのタレットに撃たれた人のうめき声だけが響いていた。
「うう、気持ち悪くなってきたかも……」
「ちょっと、大丈夫？」
ミィシャは顔を青くして口元を押さえていた。
それも無理はない。ロビーには血濡れで倒れた人が何十人も転がっている。適切な処理をされることなく出血を続けているため、すでに死んでしまった人もいるかもしれない。
その匂いも充満していた。気分が悪くなってもおかしくはない。
「……ん、大丈夫」
「無理しないで言ってね」
エイナは背中をさすりながら考える。

「(こんな規模のテロ、管理局が動いてないわけない。ＡＭＦのせいでうまく動けてないんだ。あの人達は何処に向かったんだろう。管理局との交渉かな……でも、わざわざ私達を人質にする意味なんてないよね。キーストンゲートの警備システムを乗っ取るなんてコストに見合ってないし……)」
考えることはいくらでもあるが、いくら考えても答えは出ない。
「ッ!?」
その考えを中断するように、タレットの銃声が響き渡った。

鏡から飛び出した俺達。４つの銃座が一斉に俺達に狙いをつける。
防御は楯無さんに、攻撃は俺と耀が担当する。
「はっ!!」
楯無さんが腕をかざすと、ＩＳの一部になっていた水のヴェールの一部が分離し、発砲よりも前に銃座を包み込む。
そこまで分厚い膜ではないのだが、銃弾のエネルギーのほとんどが水のヴェールに吸収されているようだ。ヴェールの外まで到達した銃弾は、その表面をころころと転がって地面に落ちる。
「私は向こうの奴をやるね」
「分かった」
耀が大きく跳躍した。狙いをつけたタレットの水膜を、楯無さんが解除する。
耀の攻撃は、なんと、
「ぼあーー!!」
口から火を噴いた。
大道芸のレベルではない。鉄すら溶解させる５０００℃の火球—

――ドラグレッターの攻撃だ。
「ゴジラかよ……」
俺はその光景に思わずつぶやいていた。
火球が命中したタレットは派手に爆散――――する前に再度水の膜に包まれる。その中で爆発することで、周りへの被害は出ない。
分かっていたこととはいえ、耀の真価をこの目で見ている気分だ。
生命の目録（ゲノムツリー）は『接触した生命体の情報を採集、情報を解析し模倣、融合させて新しい力を生み出す』という能力を持った恩恵（ギフト）だ。
そう、『生命体』。ミラーモンスターも生命体とみなされるのなら、生命の目録（ゲノムツリー）の収集対象になりうる。
それが耀の考えで、結果が今の光景だった。
耀の生命の目録（ゲノムツリー）はミラーモンスターもしっかりと対応していた。そのおかげで各モンスターの能力や一番基本のミラーワールドへの出入りなど、わずか数分で能力を得てしまった。
そうしている間も、耀は次の敵に狙いを定めていた。
そして俺はというと、
「俺も行きます!!」
「ええ!!」
走り出した。
「コンボは使えないけど」
銀色のメダルを1枚弾く。メダルが吸い込まれたウォッチを起動させた。
《ＯＯＯ》
「変身!!」
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＴＡＫＡ！　ＧＯＲＩＬＬＡ！　ＢＡＴＴＡ！　ＯＯＯ！》
タカゴリバのオーズアーマーを装着する俺。
連射されるマシンガンを両手のゴリラアームを使って防御する。強大なパンチンググローブになっているそれは、銃弾の衝撃を大きく吸収し、ダメージを軽減する。
銃弾を受け止めつつ、前へ。タレットとの距離を詰める。

「ふんぬ!!」
タレットの銃身をぶん殴り、へし曲げる。
残るタレットは少し離れている。
「よし!!」
俺はベルトを操作した。
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＯＯＯ　ＳＣＡＮＩＮＧ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
「はぁッ!!!!」
バッタレッグの能力で大きく飛び上がる。装填を済ませたマシンガンが発砲を始めてきた。
被弾も気にせず、両腕を引き絞る。
タカの目がタレットの装甲のつなぎ目をロックオン。
「セイヤーーー!!!!」
発射されたゴリラアームがタレットに突き刺さり、爆散した。
「ふぃ～……」
地面に着地した俺は息を吐いた。
耀も破壊を完了していた。タレットすべて破壊したことで辺りが静かになる。
「ん……？」
周りの人が俺を警戒――――まではいかないが、俺への接し方を測りかねている空気を感じる。当然か、突然、仮面をつけたヤツが現れたんだからな。
俺は一度、変身を解除しようとして――――
「待った」
楯無さんに止められる。
「忘れたの？　一般人の前でライダーの正体を明かしちゃダメ」
「そ、そうでしたね」
大勢の目の前でアナザーオーズと戦ったことで、ジオウのことは島中に知られてしまっている。その評価は微妙な物だ。
大半は怪物を倒したヒーローだが、少数とは言え怪物を使ってマッチポンプを行ったとも言われている。武偵高で流布されている『女好

き』という噂とは比べ物にならないだろう。
俺はベルトから手を離した。
近くに着地した耀が腕を引っ張ってくる。
「翔、先に行ってよ？」
「そうね。翔君は向こうに行ってて。この場の責任者には私から話しておくから」
「分かりました」
俺は耀に腕を引かれ、周りの視線を逃れるように奥へ向かう。
「耀、周りには誰もいないよな？」
「うん。大丈夫」
誰の視線も感じないことを確認し、
「ふぅ～……」
再度息を吐き、変身を解除した。
「大丈夫？　疲れてない？」
「ん、ああ。大丈夫」
「六課に来た時にはずいぶんと疲れてるみたいだったけど」
「動けるようにはなってるから大丈夫」
コンボの疲労は、まあ、多分大丈夫だ。耀にも言ったように動けないわけじゃない。
「無理しないで、もしもの時は私が前に出るから」
「おい。ミラーモンスターの力を使えるようになったからって、あんまり油断するなよ？」
強くなったのは間違いないが、前線に出ても問題ないとは思うが、だからと言って油断できる相手ではない。
「翔こそ、いつまでも自分が『護る側』だと思わないでよ」
「それは……」
別にそんなつもりは無いが……
しかし生命の目録（ゲノムツリー）なら、俺が一方的に守られる展開もあり得るのかもしれない。
「うん。今回は責任もって翔の面倒を見ます。それにみんなから、特にコッコロから言われてることだからね。翔にケガさせないで、翔が

知らない女性を引っ掻けないようにって」
「おい！　そんなこと本当に――――言われてるかもしれないな……」
　女性云々はまあ、いつものことだとしても、ケガさせないでか。それもいつも思われていることかもしれないが、今回は耀に言いつけられているのか？
　コンボで疲れ切ってたのが原因か？　その辺りは説明してなかったからな……
「じゃあ、楯無さんが来るまで任せる」
「うん、そうして。周りの警戒は私がしておくから」
　妙に張り切る耀にこの場を任せ、俺は体を休めるのだった。

「む……」
「どうかしましたか？」
　ＰＣを開きながら歩いていた影胤は、そこに映し出された内容に眉を顰める。後ろを歩いているオイスタッハが問いかけた。
「ロビーに設置されているタレットが破壊されたようだ」
「反撃を受けたという事ですか？」
「そうだね。問題は誰がやったのか、だが。これは……」
　影胤は監視カメラの映像を確認して声を詰まらせる。
　何も答えない影胤を、オイスタッハは後ろから覗き込んだ。そこに映っているのは3人だ。
「彼らは……もしや特務六課ですか？」
「そのようだね」

影胤は説明していく。
「ＩＳを纏っているのは更識　楯無。だが、情報とはＩＳの武装が違うな……決戦に合わせて特殊装備をしているんだろう」
「日本の更識家ですか。あなたを執拗に追いかけていた人物でしたね」
「この少女は正規隊員ではないな……春日部　耀か……？　特務六課の候補生のようだね」
「候補生まで動員して来るとは……」
「島が沈むかどうかの瀬戸際だからね。魔導士ではない戦力を出し惜しむことは出来ないんだろう」
　そして、
「この全身装甲を纏っているのが夜月　翔だ。まさかこんなに早く戦線に復帰して来るとは……」
「この少年が……」
　オイスタッハが初めて見た翔を見て感想を漏らす。
「正確には彼の使っている全身装甲だがね。どういう技術なのかは不明だが、空間の切断やおそらく重力の制御までやってくる」
「危険ですね」
「だが対応方法もある」
　それは？　というオイスタッハの視線を受けて続ける。
「どのような手段を隠し持っているのかは不明だが、能力を使う起点はある。ベルトの操作だ」
「ベルトの……？」
　オイスタッハの視線がジオウのベルトに向けられる。
「この映像でも分かるが、姿が変わると能力も変わる」
「確かに。ベルトに何かを装着して、回転させていますね」
「つまり、ベルトを操作させる隙を与えなければ、この全身装甲も性能を発揮できないという事だ」
「なるほど……」
　影胤は翔との戦闘で、変幻自在に姿と能力を変えるジオウの戦闘をしっかりと見ている。結果的に退却することにはなったが、情報は生

かされていた。
「更識　楯無は君のホムンクルスの眷獣の敵ではない」
「そうですね。薔薇の指先（ロドダクテュロス）の神格波駆動術式はＡＭＦとはわけが違いますから」
　ＡＭＦの影響を無効化するＩＳも神格波駆動術式を使われてはどうにもならない。
「もう１人の春日部　耀に関しては情報が少ない。人数合わせの苦し紛れか、それとも未来ある新人か」
「相手が誰でも、我々の道は変わりません」
「それはもちろんだ。今のうちに最深部まで到達しなければ」
　影胤が制御権を握っている間に先に進まなければいけない。浅葱を確保できなかったことで、彼女が制御権を取り戻す可能性が出てしまったことを。
「（彼女の腕前は予想以上だ。このアプリケーションもいつまで機能するか……）」
　今は正常に動いているが、表示されていない時間制限がある。
　要石の封印を解除してしまえば、管理局や武偵は住民の避難に対応するしかない。影胤達を追いかける暇はない。解除さえしてしまえば。
「時間との勝負、という訳か」
　戦場で味わうゾワリとした感覚に武者震いしつつ、影胤達は歩みを進めるのだった。

キーストーンゲート突入③

「あ、お疲れ様です、藍羽先輩」
「ん？　ん～、お疲れ～」
六課のＰＣでキーストンゲートの制御権奪取の作業をしている浅葱のもとに、雪菜が顔を出した。
浅葱はゆったりとしている。せわしなくキーボードをたたいていると思っていた雪菜は、その姿を意外に思った。
「休憩中ですか？」
「や、今はプログラムを走らせてるところ。時間かかるのよねぇ」
そう言って浅葱は画面を見た。
その中央にはデータの進行度を示す数値やグラフが並んでいる。
浅葱のプログラムは完璧だ。こうして動かしてしまえば、後は座っているだけで十分。
元々ここの防御は浅葱が管理していたのだ。勝手知ったるではないが、簡単なのは間違いない。それでも、浅葱だからこその芸当だが。
「もう待ってるだけで奪還できるんですか？」
「そうね。でも、全部をそっくり取り戻すのは時間がかかりすぎるから――」
浅葱は解説する。
「一番最深部の警備システムから復旧させてるわ」
影胤達の目的地は最深部。その最深部から上層に向かって警備システムを復旧させていくことで、いつかは影胤達に突き当たる。そうすることで時間稼ぎしようというのだ。
「そうすれば、アイツが間に合うかもしれないでしょ？」
浅葱は軽い調子で言うが、並大抵のことではない。システムの復旧というが、権限がない状況でのアクセスはハッキングだ。
「そ、そうですね」
雪菜は顔を引きつらせて頷く。だがそれは浅葱の技術に驚いたからではない。
翔のことをアイツ――この状況ではそれ以外の選択肢はない―

――と呼んだからだ。
「先輩に助けてもらったんですよね？　家に侵入されたって」
「そうね。引き換えに家が吹っ飛んじゃったけど」
「それにしては先輩のこと、信用されてるんですね……？」
「は？　あ～……、何かゴメンね？　なんか勘違いさせちゃって。全然そういうのじゃないから」
「え!?　ぁ、あ！　そうなんですね!!　……いえ！　別にそういう訳じゃ……！」
　雪菜の分かりやすい反応に浅葱は苦笑いする。
　浅葱には翔への特別な感情は全くない。
「（や、一回助けられたくらいで惚れるとか、漫画とか小説の読みすぎでしょ。ありえないって）」
　浅葱が翔のことを口に出したのは、知っている人間が戦っていることを意識した結果だった。
　そこに新しい人物が入ってくる。
「浅葱さん、あとどないかかりそう？」
　それははやてだった。シグナムと蛇倉を引き連れている。
「あと２０分、ってところだと思います。これより早くなることないですね。遅くなることはあっても」
「そか……」
　はやては考え込んでいる。
「雪菜、そろそろ現地に向けて出発する。準備をして５分後に集合だ」
「はい！」
　シグナムに言われた雪菜は鋭く返事を返し、部屋を出て行った。翔が戦っている場所に一刻も早く駆け付けたいのだ。
「浅葱さんはそのまま作業を続けて。蛇倉さんは残ってるから、何かあったらこの人に言ってね」
「はい。ありがとうございます」
「蛇倉さんもよろしく。あ、あの連絡もね」
「了解です」
　はやてとシグナムは、蛇倉を残して部屋を出て行った。

「（あの連絡……？）」
浅葱も気になりはするが、その件に関してはやては詳しく説明するつもりは無いようだ。そんなに知りたければ浅葱にはその『手段』がある。だが、そのつもりは無かった。
蛇倉はその思考に気が付いている。こちらはこちらで特に口を開かなかった。自分の席に座り、端末を起動した。
「（さてと、事件も大詰めだが……特攻気味とはいえ、ここまでやってくれるとはね）」
蛇倉は浅葱からは見えない位置でニヤリと笑う。
だがそれも終わりだ。
蛇倉ははやてに命じられたダメ押しの一手を打つ。
はやての名前を使ってとある学校に連絡する。
「はい、特務六課の八神　はやてからの要請で……はい。織斑　千冬さんに取り次いでいただけますか？」
ダメ押しの一手、それはＩＳ学園だった。

「つーん」
「うーん……どうしようかしらね」
「今は確保しておくだけでいいんじゃないですか？　こんな小さい娘ですし、無理矢理尋問するのは規定違反になりますし」
ところ変わってここは医務室。そのベッドにはバインドにぐるぐる巻きにされた小比奈が横にされていた。
小比奈は壁の方を見て口を尖らせている。何もしゃべるつもりは無いという意思表示だ。
その様子に困った顔になっているのはシャマルとフェイトだった。

翔に捕まえられた小比奈だったが、非常事態という事もあり、何処へも移送できる状態ではなかった。事態が収束するまで、六課の預かりになっている。
影胤にとっては愛する娘だ。悪の組織ならここで小比奈を使って交渉でも始めるところだが、管理局はその手段をとらない。そもそも影胤と連絡を取ることも出来ないので、交渉という選択肢が無いが。
さらに六課はこれから、浅葱が権限を奪い返した後に備えて現地に行かなければいけない。
シャマルは監視役として、この場に残ることになっていた。
そこに踏み込む人がいた。
「失礼する」
「ステイル!!」
赤髪の神父が、同僚の制止を振り切って医務室に踏み込んできた。
「ちょ、ちょっと、あなた達何を……!」
2メートル近い長身のステイルが、ベッドに横たえられている小比奈を見下ろした。
小比奈は首を傾げている。
「この娘か……」
ステイルは目を細める。フェイトの方を振り返った。
「尋問は誰が行う予定になっているんだ?」
「尋問? 今は予定されていないです。年齢のこともありますし、人でも足りていないので」
「なら僕がやろう。心得がある」
「「は?」」
ステイルの提案にフェイトとシャマルの声が重なる。
ステイルの言葉は真実だ。必要悪の教会の神父として魔術結社をいくつも潰してきた。魔女狩りとしての尋問、拷問という表現の方が正しいが、その行為も行ってきた。
「……管理局が確保した容疑者への尋問は、管理局の規定に従って行われます。管理局員ではないあなたの尋問の許可は出来ません」
「この非常事態にそんなことを言っている場合か? 少しでも情報が

欲しい。違うか？」
フェイトの声が硬くなる。ステイルの纏う本気の雰囲気を感じ取ったからだ。
フェイトとステイルが睨み合う。
「だからと言って、この娘に過度な尋問を行うことは認められません」
「ステイル。焦る気持ちは分かりますが、ここは抑えて下さい」
ステイルの後ろにいた神裂が声をかけて来た。
「そうね。インデックスちゃんのことが心配な気持ちは分かるけど、だからってこの娘に強く当たったら、インデックスちゃんが悲しむことになるんじゃない？」
シャマルの声でステイルの勢いが弱まる。
「……心配ないさ。僕達のことは忘れるんだ」
誰にも聞こえない大きさで、ステイルが呟いた。
部屋では数瞬、沈黙が流れるが、
「インデックス？　って、あの娘かな？」
「ッ!?」
口を開いたのは小比奈だった。
フェイトは息を呑んだ魔術師を制し、小比奈に優しく問いかける。
「知ってるのかな？　銀春碧眼の女の子なんだけど」
「うん。その娘って、パパと一緒にいるよ。私が連れて行ったんだし。だいぶ具合が悪そうだったけど――――」
そこまで答えて、小比奈はハッとした表情になる。
「つーん……」
そのまま横を向いてしまった。
インデックスが影胤達と一緒にいたという事は、突入前のミーティングに参加していたフェイト達は知っている。だがステイルたちにとって、蛇倉の予想でしかなかったことが確定されたのだ。
しかも、具合が悪そうという追加情報付きで。
「今までの非礼を詫びたい。本当に、申し訳なかった」
「は、はい。いえ、非礼というほどでは……」
突然頭を下げて来たステイルに困惑したフェイトだったが、すぐに

気を取り直す。
「重ねてお願いがある。今回の突入作戦、ウチの神裂も参加させては貰えないだろうか」
「……申し訳ありませんが、それは……」
フェイトが首を横に振る。丁寧な態度を取られたとしても、命令系統を乱す可能性がある人物を作戦に加えることは出来ない。
「……その場合はこちらで勝手に動くことになる。こちらも一刻を争う事態だ」
「それは……」
「我々が責任をもってインデックスちゃんを保護します。それではダメですか？」
シャマルの言葉はステイルに受け入れられなかった。その頑なな態度はかつての自分達――――自分たちの主を救わんと躍起になっていた自分達の姿――――に重なって見えた。
「そこまで言うのは、何か事情があるからではありませんか？」
「……」
ステイルは迷っていた。協力を申し出た以上、ステイルも事情について説明するのが筋ではないか。むしろ説明したほうが、自分たちの意見が通りやすいのではないか。
それは神崎も同じだった。
「分かりました。それでは……」
魔術師の２人は自分たちの、インデックスの事情を話す決意をしたのだった。

そしてキーストーンゲートを下へ下へと下っている影胤達。外側

はとっくに海、つまり海抜０メートル以下になっている。
ここで問題が起きていた。
「閉まっていますね」
「……やられたか」
影胤達がこの階層に降りた時、同時に大きな音がした。その時の嫌な予感通り、奥へと続く隔壁が閉まっていたのだ。
「ダメだね。こちらからの操作を受け付けない」
「まさかこんなに早いとは……」
ＰＣを操作する影胤だが、隔壁が開く気配はない。オイスタッハはそれがどういう意味なのかすぐに理解出来た。浅葱が操作権を奪い返したのだ。
ここからは隔壁を破壊して進むしかない。だがこの隔壁は、影胤の能力でも破壊するのは困難だ。
よって、オイスタッハは傍らのホムンクルスに命令する。
「アスタルテ。破壊しなさい」
「命令受諾（アクセプト）」
呟いたアスタルテが、背中に背負っていたインデックスを下ろした。
「執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテュロス）」
背中から広がる透明な翼。それは巨大な腕だ。調整によって神格波駆動術式が埋め込まれた眷獣、薔薇の指先（ロドダクテュロス）。
握られた拳が隔壁に叩きつけられる。
その一撃で隔壁には巨大な穴が開いた。
「流石、眷獣と言ったところか」
信じられない攻撃力に影胤は呟いた。人間の作った壁など一蹴する異界の獣。この力を兵器に転用してしまえば、世界には今以上の混乱が発生するだろう。
「行きましょう。もう時間がありません」
影胤からの視線に気づかず、オイスタッハは穴の向こうへ進もうとする。
だが眷獣を消したアスタルテが道を引き返し――――インデックス

を背負った。その間もオイスタッハは進んでいく。
どうせ今後も隔壁があり、そのたびにアスタルテに頼るしかないのだが。
その後は雑談もせずに前へ進むが、
「止まれ」
影胤が静止の声を出す。
目の前には3人の人影。
「やっと追いついたわね」
「追いつかれてしまったか」
そこには楯無を先頭に翔と耀。
特務六課が追い付いていた。

管理者と話しをつけた楯無さんと合流して再びミラーワールドに入った俺達。電源系統が停止していたため、エレベーターを無理やりぶち抜き下へ。隔壁を破壊し、全速力で。
妨害が無かったため、意外なほどあっけなく鏡の向こうに影胤達を見つけた。コントロールできるはずの隔壁を何故か破壊して進んでいる。
「これって、あの娘がコントロールを奪い返したって事かしら」
「じゃあ六課の増援も今頃向かってる？」
「んー……、でもＡＭＦはまだ展開されてるわね。隔壁の操作だけ優先して取り返したのかもね。少しでも足止めさせるために」
流石は浅葱だ。その辺りの小技も効いているってことか。
それはそうとして、
「それで、どうしますか？」

「奇襲する？」
俺と耀は楯無さんに指示を求める。俺達が鏡の向こうから観察していることを影胤達は知らない。最高のアドバンテージを持っている状態だ。これなら楽に取り抑えることが出来るかもしれない。
「いえ、そんな博打はしなくていいわ。私達の任務は影胤達の足止め。少しでも戦闘を長引かせて、六課の本体が来る時間を稼ぎましょう」
翔君は本調子じゃないしね、と、楯無さんは言う。
確かにコンボの疲労は抜けている、ように感じている。でも動きが鈍っている可能性は十分にあるし、誰か1人でもやられれば人数差ができる。
楯無さんは冷静にそろばんを弾いたんだろう。俺達は素直に、その指示に従って動いた。耀もこんな場面でフリーダムな行動はしないでくれる。
俺達はミラーワールドから外に出る。隔壁を背に、影胤達と相対した。
「やっと追いついたわね」
「追いつかれてしまったか」
影胤が苦々しく呟いていた。それは間違いなく本音だろう。
「こんなにも早く追いつかれてしまうとはね。キーストーンゲートの防衛設備は想定よりも脆かったという事かな」
影胤は俺達が鏡の世界を通ってきたことを知らない。もちろん、正直に話すつもりは無いが。
「問答は無用です、我が同士よ。目的の場所は眼前に。歩みを止める理由にはなりません……!!」
オイスタッハがローブを脱ぎ捨てる。その下からは無骨な黒い鎧が現れた。
「ロタリンギアの聖戦装備、要塞（アルカサバ）の衣か……良い装備ねぇ。ロタリンギアの殲教師に、日本の脱走兵。中々奇妙な組み合わせだとは思ってたけど、どういう繋がりなのかしら？」
楯無さんはおしゃべりを始める。本人の言葉通り、時間稼ぎを始めたのだろう。そして、それに付き合ってくれるほど、目の前の2人は

優しくない。
「我らがロタリンギアの聖堂より簒奪された不朽体、それをようやく我ら信徒の手に取り戻すことが出来る!! アスタルテ、やりなさい!!」
「命令受諾(アクセプト)」
　呟いたアスタルテが、背中に背負っていたインデックスを下ろした。インデックスのことも何とかしないとだな。
「執行せよ(エクスキュート)、薔薇の指先(ロドダクテュロス)」
　過去の映像では腕だけだった薔薇の指先(ロドダクテュロス)が完全な巨人になる。内部にアスタルテが取り込まれ、どの方角からの攻撃も受け付けなくなった。
「なんとしても、君達を突破しなければ、我々に活路はないという事だ。ここは死に物狂いで行かせてもらおうか」
　戦闘が始まった。

キーストーンゲート突入④

「なるほどなぁ……」
　キーストーンゲートへ出発する直前の車両の外、そこではやてとフェイトが魔術師から事情の説明を受けていた。インデックスに施された忌まわしい宿命を。
「ああ。だから我々は呑気に救出を待ってるわけにはいかない」
「はい。このままではあの娘は……」
　ステイルと神裂は神妙な面持ちになっていた。２人としては、これ以上の真実は話しようがない。信じてもらえなければ、強硬手段に訴えることを決めていた。
　それでイギリス清教と管理局の仲が悪くなっても、この２人は実行するつもりだった。
「インデックスちゃんにそないな事情が……まあ、イギリス清教の虎の子やし、そういう処理があってもおかしくはないのかもしれないけれど……」
「それでも、そんなの……」
　はやてとフェイトは憤りにも同情にも似た感情を浮かべていた。
　インデックスの禁書目録（インデックス）としての能力。それは何かしらの異能の能力を持っているわけではない。それはインデックスの体質を利用したものだった。
　完全記憶能力。一度見たものを瞬時に記憶し、絶対に忘れないという能力。それを使って１０万３０００冊もの魔導書を記憶しているのだ。
「確か魔導書は１冊でも危険なものだと聞きますが……本当にそれを１０万３０００冊も？」
　フェイトの質問にステイルは頷いた。
　魔導書は魔術の使用方法がまとめられた『力のある書物』。魔術や宗教的な防壁の無い一般人は、１冊読むだけで発狂する危険がある。
　そのため魔導書の原典はバチカンや大英博物館に厳重に封印され、一般人の目に触れないようになっていた。管理局でもいくつか管理

しているモノがある。
「ああ。その代償としてあの娘は脳の８５％を魔導書の知識に占領されてしまっている。残りの１５％で記憶できるのは、たった１年分だ。それを超えてしまえば、あの娘は死んでしまうことになる」
「……そうなる前に、我々はあの娘の記憶を消さなければいけないんです」
感情を殺して話すステイルとは違い、神裂は絞り出すように言った。これが演技なら神裂は名女優になれただろう。
「それは……」
フェイトはそれ以上かける言葉を見つけられなかった。その様子を見て、フェイトは色々なことを悟ったのだ。
目の前の２人が、記憶消去などさせまいと手を尽くした結果、記憶を消すしかないという結論にたどり着いたのだと。
「魔導書、か……」
はやてが小さく呟く。
自らも『夜天の書』という魔導書の主だ。夜天の書は魔術師が管理する魔導書とは少し毛色が違うが、魔導書によって運命を狂わされたという点は共通していた。はやての場合は、それが幸運に働いたのだが。
だからこそ、魔導書によって不幸になる人物を見逃してはおけない。
「はやて、どうする？」
「そやね……とりあえず部隊のみんなに共有、してもええ？」
「ああ、構わない。だがあまり広められるのも困る」
はやての問いかけにステイルが頷いた。
「分かっとるよ。この話はうちの部隊の中だけに留めておく。インデックスちゃんを奪還したら最優先で地上へ輸送。病院や無くてお二人に引き渡す、という事でええ？　あ、一応うちの部隊からも１人――フェイトちゃんに同行してもらおうかな」
「僕は先に教会に戻り、儀式の準備をしたいと思う。神裂が１人で残ってくれ」

「分かりました。そちらの同行についても了承します」
こうして方針が決まった。
「よし！　じゃあ出発しよか！　みんなへの共有は車の中で！」
はやてが号令を出し、車輛が出発した。

始まった戦闘。
俺と耀のペアがアスタルテを引き受け、影胤とオイスタッハを楯無さんが相手取る。
これは元々決めていたことだ。ＡＭＦを無効化できるＩＳだが、神格波駆動術式を搭載している薔薇の指先（ロドダクテュロス）を相手取るのは、魔導士である楯無さんには厳しい。
「耀さん、よろしくね！」
「ん」
楯無さんが水を纏ったランスを振ると、水が蒔き散らされる。俺達の足元にも、影胤達の足元にも。
水たまりの１つに、耀が吸い込まれる。
「何……？」
「これは……」
影胤達が警戒しているが、
「ほらほら！　よそ見している暇は無いわよ!!」
思考をぶった切るために楯無さんが攻撃する。魔力で作り出した水は、楯無さん最大の武器だ。しなる水の鞭が、横薙ぎ　に２人を襲った。
空中に散布された水滴は影胤の斥力フィールドの範囲を正確に割

り出す。そのせいで楯無さんが力場に捕まらない。
オイスタッハの鎧もかなりの剛力を付与しているはずだが、水のように動く楯無さんには攻撃がかすりもしない。それどころか斧に水がまとわりつき、その動きを鈍らせていた。
その間に、インデックスの近くに造った水たまりから耀が顔を出し、ちゃっかりインデックスを確保。そのまま水たまりの中に消えていった。
「奇妙な能力を持っているな……」
影胤が呟く。
耀にはインデックスの避難をお願いした。
ミラーワールドを使って隔壁の向こうに連れて行ってもらっている。とりあえずインデックスはこれで大丈夫だな。
でもこれで耀が戻ってくるまで、俺は1人でアスタルテを相手にしないといけない。
だったら、
「ここはスピードでかく乱する！」
《ＡＣＣＥＬ》
俺は真紅のライドウォッチを取り出す。
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＡＣＣＥＬ！　ＡＣＣＥＬ！》
２回、ＡＣＣＥＬという音声が鳴る。分かりにくいかもしれないが、前半はガイアメモリの、後半はライドウィッチの音声だ。
本家と同じような真紅の装甲に車輪。仮面には『アクセル』の文字が刻まれていた。
「よっと!!」
纏っている装甲が変形する。
本家アクセルに搭載されている変形システム。ジオウでも再現されている。
スロットルを吹かし、前輪が浮くほどの勢いで発信する。
その直後、俺がいた場所に薔薇の指先（ロードダクテュロス）の拳が突き刺さった。
だが当たらない。平面はおろか壁や天井すら爆走する俺に、拳はか

すりもしない。
薔薇の指先（ロドダクテュロス）はパワーはある。防御も硬い。だがスピードが無い。アクセルのスピードにはついていけないのだ。
後ろを取り、エンジンブレードで斬りかかった。
「ちぃ……！　硬いな……！」
だが、火花を散らして弾かれてしまう。純粋な魔力の塊である眷獣には物理攻撃は意味が無い。
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
エンジンの回転数が上がる。
薔薇の指先（ロドダクテュロス）の武士をすり抜ける耀に避け、顔面に肉迫する。
空中で回転し、赤いタイヤの軌跡を残しながら後ろ回し蹴り――
アクセルグランツァーを繰り出した。
正面から喰らった薔薇の指先（ロドダクテュロス）が後ろに倒れる。
この分だと十分に戦えそうだ。
俺は再びバイクに変形し、アクセルを噴かしたのだった。

戦場は膠着状態になっていた。
楯無の目論見通り、翔達は時間稼ぎに成功したのだ。このままいけば影胤達はこの場を突破することできず、管理局に捕まることになるだろう。その可能性は非常に高い。
ほとんど決まった戦局。だがそれを快く思わない人物がいた。

《ＦＯＲＭ　ＴＩＭＥ！》
《ＴＡＫＡ！》
《ＧＡＴＬＩＮＧ！》
インデックスを隣の隔壁の奥に避難させた耀が戻ってきた後、俺達は連携して戦っていた。
ビルドアーマーのホークガトリングになった俺は空を飛び、専用武器のホークガトリンガーで弾丸の雨を降らせていた。
同じように飛びながら火球を発射する耀。
だが薔薇の指先（ロドダクテュロス）は何でも無いように拳を振り上げてくる。
「さすがに火力が足りないか……」
その拳を避けつつ呟く。
だがあくまでも俺たちの目的は敵の足止め。この膠着状態をできるだけ長引かせるのが目的だ。
だが、インデックスの様子も気になる。戻ってきた耀に聞いた話によると、かなり具合が悪そうだったとの話だった。
もしかすると、こっちにもリミットが迫っているのかもしれない。
俺に攻撃が向いているところに、耀が吐き出した火球が命中する。背中に着弾して爆発を起こすが、ダメージが入っているようには見えなかった。
相変わらずアスタルテの防御は鉄壁だった。これが眷獣の力だ。魔法の攻撃だけでなく、物理的な攻撃もシャットアウトする。これを吸血鬼だけが使えるというのだから、そりゃ強いと言われるわけだ。
すると突然、
「――がッ!?」
俺をすさまじい衝撃が襲った。タカの羽がバラバラにされ、俺は墜落してしまう。さらにその衝撃で変身が解除されてしまい、ビルド

ウォッチとボトルが地面に転がった。
「翔!?」
「翔君!?」
地面に転がった俺を見て、耀と楯無さんが声を張り上げる。その声が耳に入るころには、揺れていた視界が収まり始めた。
「何、が……?」
同時に疑問符が浮かぶ。
今のは誰の攻撃だ？　アスタルテの攻撃は完全に避けていた。オイスタッハはあそこまでの遠距離攻撃の手段は持っていないはず。じゃあ影胤か？　楯無さんとの戦いの最中、隙を見つけて攻撃してきたってことなのか？　あいつがいくら強くてもそんなこと出来るのか？　なにより、楯無さんが許すわけがないはずだ。
だが、均衡が崩れかけているのは間違いない。
俺は再度変身するために、急いで地面に転がっていたビルドウォッチを拾い上げる。
《ＢＵＩＬＤ》
「変身――――」
「待った」
「え？」
ビルドウォッチを持っていた手を横から掴まれる。
「だ、誰だ、お前……！」
見たことのない男だった。フードのせいで顔が半分以上隠れているが、体格や口元を見ればその判断は出来る。
この場所に人がいること、そいつが戦闘に介入してきたこと、今の今まで俺たちの誰にも存在を気取られていなかったこと。
すべての要因が、この男が危険であることを示していた。
「翔、離れて!!　そいつは――――！」
「おっと」
猛スピードで俺のところに突撃してきた耀だったが、男の指から放たれた赤い球体が直撃する。
「耀!!」

「大丈夫だ。威力は絞ってある」
男の言う通りだった。まともに当たった耀は反対側の壁まで吹き飛ばされている。だが意識はあるようだ。殺すつもりなら、今の攻撃で死んでいたんだろう。
その事実のゾッとするが、
「それよりも」
男の声で思考が打ち切られる。
男はもう一方の手をマジックのように振った。するとその手にとあるアイテムが握られた。
「ただ変身するだけじゃつまんないだろ？」
悪魔のトリガーだった。
ソイツはビルドウォッチに近づけ、
《ＨＡＺＡＲＤ　ＯＮ！》
悪魔のトリガーを――――ハザードトリガーを起動した。起動されたハザードトリガーがビルドウォッチに吸い込まれる。
すると、赤と青２色だったビルドウォッチが焦げ付いたような黒に変わった。
俺の意識は完全にソイツに向けられていた。外敵など眼中に入らない。そいつが握っているウォッチこそが最大の敵だ。
「離せ……ッ!!」
「まあまあ、『いいから変身しろよ』」
「っ!?」
俺の意思に関わらず体が動く。俺の抵抗が現れているのか腕は震えているが、それでもウォッチがベルトに装填され、
「変、身……っ!!」
《ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ！　仮面ライダーＺＩ―Ｏ！》
《ＡＲＭＯＲ　ＴＩＭＥ！》
《ＹＡＢＥＥ！　ＨＡＺＡＲＤ！》
変身したジオウの上に、真っ黒いアーマーが、通常のビルドのものと違ってかなりスタイリッシュになっている。
「電子レンジ？」

最後に鳴った『チン！』という音に、楯無さんが感想を漏らしている。どこか気の抜けたような声色だ。
赤と後ではなく、黒が基調。漆黒ではなく、焦げ付いたようなくすんだ黒だ。仮面に書かれているビルドの文字だけが赤と青２色になっている。ハザードフォームはハザードフォームでも、ラビットタンクの力を使っている証拠だ。
だが俺はこの姿に『変身してしまった』ことに、全身から冷や汗を流すのだった。
コンボには原作通りの疲労効果があった。つまり、デメリットも引き継いでいる可能性が高い。
そして、ハザードのデメリットは本当にシャレにならない――
「アスタルテ、やりなさい!!」
「命令受諾（アクセプト）」
オイスタッハの命令が飛ばされる。
突然現れた謎の男にいいようにやられてしまった俺と耀。その間、アスタルテはフリーになっていた。誰にでも攻撃出来る状態だ。
壁に叩きつけられていまだに起き上がれないでいる耀にとどめを刺すのか。影胤とオイスタッハの２人を相手にしている楯無しさんを一気に押し込むのか。
だが、アスタルテが向いたのは俺だった。
「ベルトを操作させてはいけません！　その隙を与えないように！」
「馬鹿野郎！　何言ってんだ……!!」
俺はヤケクソに叫ぶが、敵であるオイスタッハが聞き入れる訳がない。
アスタルテが執拗に俺を狙って来る。
薔薇の指先（ロードダクテュロス）が地を揺らしながら俺に近づく。巨大な腕が振り上げられ――振り下ろされた。
俺はとっさに拳で応戦する。
「っ!?」
驚愕の表情を浮かべた。それがわかるほど、あのアスタルテの表情が変わった――ように見えた。

俺のパンチの威力が、薔薇の指先（ロドダクテュロス）のパワーを上回ったのだ。ぶつかり合った衝撃が空間を駆け抜け、薔薇の指先（ロドダクテュロス）がひっくり返った。
「これがハザード……じゃなかった！」
俺は急いで変身を解除しようと試みる。
そこに、
『いいからそのまま戦え』って」
「うぐっ!?」
ウォッチを取り外そうとする俺に、謎の男の声が響く。それだけで腕の動きが止まる。
「じゃ、頑張れよ」
そのまま男は笑いながら消えていった。どこかテレポートしたのか、はっきりとしたことは分からない。
そして、それは問題じゃない。
アイツがいなくなっても変身解除できない。しようとすると体が拒否する。つまりアイツの言った通り、このまま戦うしかないんだ。
薔薇の指先（ロドダクテュロス）が起き上がる。ひっくり返ったが、アスタルテ自体にダメージはないらしい。
こうなったら、『アレ』が始まる前にこの場の戦闘を終わらせるしかない。
「はっ!!」
下手な能力はいらない。単純な肉弾戦で十分だ。
起き上がりに踵落とし。強引に寝かせたところに何度も拳を叩きつけ、影胤やオイスタッハの方向にブン投げる。
薔薇の指先（ロドダクテュロス）に比べ格段に体躯が劣る俺が、一方的に攻撃を行っていた。
「ま、まさかここまでとは……!!」
オイスタッハが憎々しげに呟いている。
「よし行ける……！」
ハザードの性能があれば、時間稼ぎではなくこのまま取り押さえてしまうことも出来る！
「楯無さん！　このまま行きましょう!!　……うっ!?」

それは唐突に来た。
鈍い頭痛。それがどんどんひどくなりつつある。
「焦らないで！　目的を忘れずに――――」
楯無しさんの注意もどこか遠くに響いている。
俺の意識は段々と薄れ、まるで夢を見ているかのような気分になる。
身体の力が抜け、全ての神経が再接続されるような感覚が――――

ハザードは止まらない①

すっかり夜になった学園島。管理局に包囲されたキーストーンゲート。特務六課は現場に到着した。
そこではやては、とある人物と向き合っていた。
「久しぶりやな、千冬ちゃん」
「千冬ちゃんはやめてくれ、はやて」
笑顔のはやてに千冬は苦笑しながら返した。
黒いジャケットとタイトスカートを着こなすクールビューティ。現在はＩＳ学園の教師である女性、『織斑　千冬』だ。
蛇蔵の要請を受け、ＩＳ学園からここに来てくれたのだ。
千冬と六課の面々は、ＪＳ事件の時に面識があった。特に年齢も近かったはやて達は、千冬と仲良くなっていたのだ。
「全然変わってないね」
「互いにな。また教育論についてご教授いただきたいところだ」
「にゃはは。方針が違いすぎて、朝まで言い合うことになりそうだけど……」
同じく教育者である千冬となのは。後から教育者になった千冬は教導についてなのはからアドバイスを貰ったこともあった。だがなのはの言う通り、方針が違う事で言い合いになることもしばしばだった。
「フェイトはどうした」
「フェイトちゃんはちょっと、ね。いつでも3人一緒にいる訳じゃないから」
「そうか。まあ、無理には聞くまい」
フェイトは現在、神裂と一緒に待機していた。ステイルたちの意向を汲み取って、インデックスのことは他の部隊には秘密にしていた。
千冬は察して、下手に突っ込んだ事は聞かなかった。
「それで、突入はいつになる？」
千冬は仕事の話に切り替えた。
「ん、もうすぐ防衛システムが復旧する予定やから、それからになる」

「今のうちに、千冬ちゃんの教え子達に偵察してきてもらう？」
なのはは千冬と一緒に来ていた２人の少女のことを思い出して問いかけた。
この場に来たのは千冬１人だけではなく、学園から引き連れてきた生徒がいた。代表候補性と呼ばれる、自分専用のＩＳを国から貸与された生徒達だ。
この世界、ＩＳは今後の魔導士の花形になると言われている。将来、国のエースになる人材に専用のＩＳを貸し出し、ついでにデータの収集も行っているのである。
当然、同年代に比べれば、大きな才能を持っているのは間違いない。
蛇倉が『戦力が欲しい』という要請を出したため、千冬が気を利かせて連れて来たのだ。
「……やめておこうか。あのヒヨッ子どもには荷が重いだろう」
だが、千冬の評価は厳しいものだ。
確かに露払い程度には役に立つだろうと思っているが、そこまで過度な期待はしていなかった。
特別な立場というのは、時に人を増長させるものだ。確かにそれ相応の才能を持ってはいるのだろうが、代表候補性という立場、専用のＩＳを貸与されるという特別感は、その２人の生徒を調子づかせるのには十分なものだった。
下手なことをして、島が沈む原因を作ってもらっては敵わない。
「にゃはは、それは厳しいね……」
「むしろそちらの指導方針を教えて欲しいくらいだ。今回の突入部隊。一人は楯無だが、他２人はスカウトの隊員だそうだな？」
「ああ、あの２人――というか１人は勝手に育ってくれるから……」
なのはが思い浮かべるのは１人の少年だ。
耀の方は、なのはもまだ掴みかけているところだった。
「本当にうらやましいものだ……いや、いっそのこと、ウチの生徒も同じ環境で揉んでもらおうか……」
千冬は何やらぶつぶつと呟いていたが、すぐに切り替えてはやて達に向き直った。

「それでは我々の役割を聞こうか。八神部隊長殿？」
冷静な声色でそう言うのだった。

なのは達が千冬と話している最中、フェイトと神裂は車の中で待機していた。
フェイトが運転席、神裂が助手席だ。後部座席から前方に向けて、2メートルを超える日本刀である七天七刀がぶち抜いている。
車内で会話はなかった。
だが、
「……」
フェイトには神裂が内心落ちつかない気持ちでいることは容易に想像出来た。出来ることなら、今すぐにでも自分で突入したいのだろう。
「大丈夫ですよ。インデックスちゃんのことは、突入メンバーがしっかりと保護しますから」
「はい。ありがとうございます」
その返事もどこか気の抜けたものだった。フェイトはさらに口を開く。
「それに先行部隊には翔もいますから。彼がいるなら大丈夫です」
「翔……あの少年、ですか？」
神裂はすぐに思い当たった。六課には男性が少ないし、何より一度道を教えてもらっている。印象としては普通の少年。少なくとも、歴戦の猛者という空気は感じられなかった。

「ずいぶんと信頼されてるんですね、彼は」
「彼には助けられてますから。無理だって思えるような状況でも、彼ならなんとか出来る。してくれる。今回だって、キーストーンゲートだけじゃなくて、インデックスちゃんのことも何とかしちゃうかもしれないですよ？」
「まさか……そんな都合の良い展開が起こるわけがありませんよ」
フェイトは半分本気、半分冗談で口にした。それを神裂は軽く笑って流した。
『前の1年』でインデックスをどうにかしようと奮闘した自分たちにとって、そこまで簡単に『何とかなる』という言葉は使って欲しくはなかった。こっちは散々手を尽くしたんだよ！　ど素人が！　と言いたくなる気分にもなる。
だが神裂も、この場の空気を気にしての発言に、そこまで腹を立てることはなかった。
雑談をする程度の空気になった2人は、比較的穏やかに突入の時間を待つのだった。

時間は翔がハザードフォームに変身する少し前に戻る。
翔と耀がアスタルテを、楯無が影胤とオイスタッハを相手取って戦っている場面だ。
楯無達の思い通りに進んでいる戦闘。優勢だからこその緊張感を持ちつつ、いつも通りにふるまい、戦う楯無。
「ほらほら！　まだまだ行くわよ！」
地面だけではなく、空中に設置された『水』という名の鏡。

楯無は今も自らの専用ＩＳ、『ミステリアス・レイディ』の上にナイトのアーマーを装着している。
実戦で新しい武器はあまり使いたくないという楯無の考えから、カードを使った攻撃はしていない。だが、『ミラーワールドに入る』という能力は最大限に利用されていた。
「ぬぅぅぅん!!!」
振りかぶられるオイスタッハの斧。それをクスリと笑って迎え入れる。
次の瞬間、楯無の身体は水の中に吸い込まれる。
目標を見失い地面に突き刺さる斧。オイスタッハが引き抜こうと力を入れるのと、水から出て来た楯無が斧の上に着地するのは同時だった。
「はい、ダメよ」
「ッ!?」
ランスに搭載されているバルカンを連射され、たまらず後退するオイスタッハ。
「ホント、この力は私と相性が良すぎるわね」
ミラーワールドへの出入口を自在に作り出し、一種の無敵時間を作ることが出来る。頼りすぎるのは良くないが、破格の能力を使わない理由にはならない。
だが、影胤達もバカではない。水の中に入り水から出る。メカニズムが分からなくとも現象を理解できれば対抗策は取れる。
「下がりたまえ――マキシマム・ペイン」
斥力の力場を壁にして放つ。空中に浮かぶ水球も地面の水たまりも一緒に、自分たちの周辺から押し出した。
楯無はその光景を笑って眺めていた。
「無駄よ。いくらでも再配置できるんだから」
「再配置の手間を作ることは出来るだろう？」
「ぬおおおぉぉぉッ!!」
号砲と共に床に突き刺さっていた斧を引き抜き、楯無に斬りかかるオイスタッハ。

今度はミラーワールドには入らずに、体捌きの身で対応する。
「ＩＳって、的が大きくなるのが玉に瑕よね」
楯無のぼやき通り、ＩＳはＢＪ（ＩＳの場合はスクール水着のような体にフィットするインナータイプが主）の上に装甲を纏うものが一般的だ。
ミステリアス・レディは比較的大きな装甲がない。小型の装甲から水をヴェールの様に噴出、それを纏う形で形を成している。
オイスタッハの斧は、その水のヴェールを切り裂くだけで精いっぱいだった。
それどころか水がまとわりつき、どんどん武器が重たくなっていく。その負のスパイラルによって、オイスタッハの攻撃はどんどん精細さを欠いていく。
「（とは言えこちらも攻め手に欠ける、か……）」
ＡＭＦの影響を受けない楯無の全力魔法なら、影胤の斥力フィールドを突破することは出来るだろう。
だがその場合、周りの施設にもダメージを与えてしまう可能性がある。
作戦的には時間稼ぎなので、このまま戦っていればよい。
そう思って戦闘を継続していた、その時だった。
「――がッ!?」
何かが墜落した。
それは、
「翔君!?」
地面に転がる翔は変身も解除されていた。
「（均衡が崩れた!?　……いや、大丈夫か）」
タイミング的に変身は間に合う。楯無は目の前の２人に翔を攻撃させないことを最重要目標に据えるが――
「え？」
瞬きの後、見知らぬ第三者が翔の隣に立っていた。
「……」
「あれは……？」

影胤とオイスタッハも首をひねっている。どうやらその人物に心当たりが無いようだ。
「（２人の仲間じゃない？　じゃあ一体……）」
刹那の思考の間に、助けに入った耀が赤い弾丸のようなモノで反対側の壁まで吹き飛ばされる。
「（マズい。均衡が崩れた……!!）」
楯無はこの時点で謎の人物を敵と定めた。
翔が変身する。見たことの無い真っ黒の姿。翔が見たことの無い姿になるのは今更なので、そこに驚いたりはしない。
だが、変身した翔はひどく狼狽しているように見えた。
「アスタルテ、やりなさい!!」
そこに飛ぶオイスタッハの命令。フリーになっていたアスタルテが翔に近づく。
「ベルトを操作させてはいけません！　その隙を与えないように！」
それは事前に影胤から言われていたからこその指示だった。
通常は正しいはずのその指示は、この場では最悪のものになる。
振り上げられる薔薇（ロドダクテュロス）の指先の腕。ジオウは避けずに、それを迎え撃った。
「え？」
次の瞬間、薔薇（ロドダクテュロス）の指先がひっくり返った。ジオウが力で押し勝ったのだ。
謎の人物が翔に何かを囁いてその場から消える。
ジオウは真っ黒の姿のまま戦うことにしたようだが、
「脅獣を、ああも一方的に……!?」
オイスタッハが掠れた声を漏らす。
単純な打撃にしか見えないが、マウントポジションを取られた薔薇（ロドダクテュロス）の指先は、なすすべなくハザードの猛攻に晒される。
３人は自分の戦闘すら忘れ、ハザードの戦闘力に目を奪われている。するとジオウは、倒れていた薔薇（ロドダクテュロス）の指先を持ち上げ、こちらに投擲してきた。
巨大な質量攻撃となった薔薇（ロドダクテュロス）の指先は、オイスタッハと楯無との間

に落下する。
「ま、まさかここまでとは……!!　しかしッ!!　大義のためにはここで引くわけにはいかないのです!!」
楯無と翔も合流する。
壁に激突した耀が復帰してこない。意識を失ったか、それとも怪我をして動けないのか。どちらにせよ、ここは2人で固まって戦った方が良い。
「楯無さん！　このままいきましょう!!　……うっ!?」
「焦らないで！　目的を忘れずに！　耀さんのことが心配なのはわかるけど、今は目の前の……翔君？　どうしたの？」
頭を押さえ、何度もかぶりを振るジオウ。激しい頭痛に耐えているような、そんな様子だ。

「あ――――」
突然身体から力を抜き、だらりと棒立ちになるジオウ。
棒立ちになろうとも、ジオウへの攻撃は止まらない。
「チャンスです！　やりなさい、アスタルテ!!」
「命令受諾（アクセプト）」
薔薇の指先（ロドダクテュロス）のこぶしを軽く飛んで避ける。兎のパワーを引き出した軽い跳躍だ。だが着地点にはオイスタッハが待ち構えていた。
次の瞬間、
「ご、――――あ？」
ジオウの拳の一振りによってオイスタッハの戦斧が粉砕され、胴体に対して中段蹴りが突き刺さった。
オイスタッハが着ていた鎧は粉々になる。その体も、くの字になって壁に激突した。
その攻防に、戦場に一瞬の空白が訪れる。
オイスタッハがジオウに攻撃を仕掛け、結果的に返り討ちにあった。結果だけを見ればその通りだが、オイスタッハがピクリとも動かない。くの字に折れ曲がっていた身体は、不自然な部分で折れ曲がっていた。

「……」
影胤が全神経をジオウに集中させる。
不自然な部分。人間には存在しない胴体の真ん中でキレイにくの字になっている。
あまりの衝撃に鎧を貫通して背骨をへし折ったのだ。
眷獣がひっくり返るほどの打撃をまともに受けたのだ。その結果は当然だが、あまりにも――
「（全然手加減してない!? どうしちゃったの翔君!?）」
楯無は心の中で叫ぶ。
今の自分のパワーを見誤ったのか。普段の翔とはかけ離れた攻撃だった。
相手を殺そうとしている攻撃、とも違うように思える。結果的に相手が死のうが何とも思っていない。死んだら死んだ。動くのなら追加で攻撃する。そんな機械的な印象を受けた。
「マキシマム・ペイン!!」
迫りくる斥力の壁。それに押されて後ろへと飛ばされるジオウ。
影胤の攻撃は楯無のことを全く考えていないものだったが、今の一番の脅威は間違いなくジオウだ。その判断は間違いではない。
だがそれは同時に、次の攻撃目標は自分だと宣言している行為だった。
「ッ!?」
ジオウの姿がかすむ。
影胤はとっさに全力で防御の構えを取っていた。
間に合ったのはそのおかげだ。
斥力の壁に阻まれ、大きく跳ね返されるジオウ。
「ふー……っ!!」
何とか命を拾ったことに息を吐くが――ジオウが茶色と鈍色のボトルを取り出した。
《ＦＯＲＭ　ＴＩＭＥ！》
《ＹＡＢＥＥ！　ＨＡＺＡＲＤ！》
仮面の『ビルド』の文字の色が、赤と青から茶色と鈍色に変わる。

ホークガトリングの能力を得たのだ。
ホークガトリンガーとジカンギレードガンモード、二丁の銃を構える。
「くっ……!!」
逃げ切れないと悟った影胤は、斥力のフィールドを、範囲を絞った最大出力で展開する。攻撃ではなく防御のための行動だ。
だが、
「が、っは……!!」
やすやすと突破した弾丸が影胤を貫通する。
それも何発も。
何十発も。
ハザードフォームになったことで、通常の武器の性能も跳ね上がっていた。貫通した弾丸は後ろの壁も削り始める。
「ちょ……!! 翔君! ストップ! ストップ!!」
慌てて楯無が止めに入る。
明らかなオーバーキル。戦闘の結果やむ負えずのものではなく、相手の原形を残すつもりもない攻撃だ。
体の各部に仕込まれていた制御用の機械が破壊されることで、元々意味がなかった斥力フィールドが完全に消失する。
影胤は踊るように鮮血をまき散らしながら倒れこんだ。
「翔く――――」
楯無が呼びかける寸前、
「執行せよ（エクスキュート） 薔薇の指先（ロドダクテュロス）」
マスターの命令に忠実なホムンクルスがジオウに対して攻撃を仕掛けた。
《ＭＡＸ　ＨＡＺＡＲＤ　ＯＮ！》
次の標的が定まった。

ハザードは止まらない②

《ＭＡＸ　ＨＡＺＡＲＤ　ＯＮ！》

その電子音とともに、装甲から黒い霧のようなモノを噴出させ始めるジオウ。

「執行せよ（エクスキュート）、薔薇の指先（ロドダクテュロス）」

アスタルテが命じ、薔薇の指先（ロドダクテュロス）が動く――その前に、すでに目の前にまで移動していた。

「ッ!?」

アスタルテはその速度に対応出来ない。

黒い暴力装置になったジオウが振り上げた拳を叩きつける。

薔薇の指先（ロドダクテュロス）はその攻撃だけで再度転倒する。

そうなればもう駄目だ。マウントポジションを取られ、拳を蹴りを、雨あられと叩きつけられる。

何とか薔薇の指先（ロドダクテュロス）を操作して上に載っているジオウを放り投げる。

空中でタカの翼を展開して停止。そのままホークガトリンガーを構えた。

「ッ!?」

変わったのは打撃が弾丸になったという点だけだった。同じ武器でもハザード以前とは比べ物にならない。

結局何もできずに魔力を削られていく。

その戦いの結末は最初から決まっていた。

機械化兵士である影胤は、常人なら出血によるショック死を引き起こすような怪我でも、その意識をかろうじて保っていた。
だが、指一本動かせない。動くのはぼやけた視界だけだ。
その視線の先に映るのは、アスタルテの眷獣と互角――――いや、それ以上の力で暴れまわるジオウだ。
敵味方問わず、外敵を徹底的に破壊するキラーマシーン。
声すら上げずに攻撃を続けるジオウは、まさに戦闘のための機械だった。
圧倒的な光景に、影胤の動かないはずの口が開く。
「欲しい」
その声色には隠し切れない。
「私は君が欲しいよ、翔君……！」
動かない手を必死に動かし、その力を求めるのだった。

何とか体勢を立て直したアスタルテだったが、ハザードのスピードに翻弄され続けていた。
そんな最中、
「……っ」
薔薇の指先（ロドダクテュロス）のシルエットが揺れた。
それはハザードの攻撃の成果だけではなく、アスタルテの問題でもあった。ハザードフォームの攻撃に対抗するための眷獣の全力使用。それがアスタルテの体を蝕んだ結果だ。
内部に取り込まれているアスタルテも、表情を変えず泣き言も言わないが、全身から脂汗を流し、その顔は真っ蒼になっていた。もはや

眷獣を維持するだけの余力をアスタルテは持っていない。
その隙を見逃さない。
《ＦＩＮＩＳＨ　ＴＩＭＥ！　ＨＡＺＡＲＤ！　ＴＩＭＥ　ＢＲＥＡＫ！》
空中へ舞い上がり、
「――――」
タカの翼を羽ばたかせ、必殺のライダーキックを発動させた。
激突。
「ッ!!」
楯無は水のヴェールを盾にしてその衝撃から身を護る。
眷獣を形作っていた魔力がバラバラになり、激しい光になって飛び散った。
どさっ！　と人が落下する音がした。眷獣の中にいたアスタルテだ。青く長い髪はぼさぼさに乱れているが、
「う……ぁ……」
小さなうめき声が聞こえる。危険な状態だが生きていた。
「(良かった……)」
楯無は胸を撫でおろしていた。
命令に従うホムンクルスにはそこまでの罪はないと考えていた。今の戦いでも分かったが、オイスタッハの命令を聞かなければ攻撃行動をとっていなかった。
眷獣を植え付けられて無理矢理従わされてたのならば、刑務所に入ることはないだろう。
それに加えて、今の翔では『やりすぎてしまう』可能性があると思っていたからだ。
だがこうして良い塩梅で無力化することが出来た。
主犯の２人は虫の息だが、この島へのテロ行為という大罪を犯している。戦闘中に殺されたとしても文句は言えないし、基本的に敵に殺人がＮＧとされている武偵や管理局員であっても、罪や責任を負うことはないだろう。手加減して負けてしまっては意味が無いのだから。
「(だとしても、翔君の攻撃は異常だった)」

あそこまで淡々と相手を処理する動き、普段の翔とは思えなかった。時間稼ぎをするという目的も完全に忘れてしまっている。
その点は注意しなければいけない。
「翔君」
そう思って声をかける。だが、
「ちょっと、聞いてる？」
聞こえていないはずがない。だがジオウは無視して前に歩く。アスタルテの方に。
具合の悪いアスタルテを慮っている……わけではない。急いで駆け寄っているわけではなく、ゆっくりと近寄っている。
「……翔君？」
その動きに不審なものを覚える。
ジオウはアスタルテを抱き上げる。ただし、
「ちょ！　何やってるの!?」
それは背負うでも、両脇を持ち上げるでも、お姫様抱っこでもない。
首を両手で包み、締めあげながら持ち上げたのだ。
「う〝ぁ〝……っ」
気道を塞がれたアスタルテが弱々しく抵抗する。もちろん、そんな抵抗は意味をなさない。酸素を取り込めないことで、アスタルテの意識が遠くなり始める。
このままでは窒息死――――その前に首がへし折れることになる。
「やめなさい!!」
楯無は本気で流水による砲撃を叩きつけた。
魔力だけではなく実際の質量を伴った攻撃は、無防備なジオウの横っ腹に突き刺さる。
大きく吹き飛ばされるジオウ。だが、大したダメージになっていない。
立ち上がり、楯無を真っ直ぐに見る。
仮面の奥の翔の目。それと目が合ったような、そんな錯覚がした。もちろんそんなものは錯覚だ。今の翔には意識はなく、目の前の敵を排除するだけなのだから。

「ッ!?」
ノーモーションで姿がブレ、目の前で繰り出された拳。楯無がそれを何とかいなすことができたのは、翔の様子があまりにおかしかったからだ。
「勘弁してよね!」
楯無の声に翔は何一つ返さない。後ろに下がる楯無に対して無言で距離を詰め、鋭い拳を何度も繰り出す。
その拳が眷獣をブチのめす威力を持っていることを知っている楯無は、冷や汗を流しながら必死に捌く。
殺気がない。ただ目の前の障害を破壊するための攻撃だ。おおよそ人間による攻撃とは思えなかった。そしてこれが、翔の意志によるものだとも思えない。
つまり、
「暴走状態ってことか……!」
翔が見たことの無い姿に変身するのはいつものことだが、今回はあのフードの男に強制的に変身させられた姿だ。本人の意思に反して何か変な機能が追加されていてもおかしくはない。
例えば、本人の意思に関係なく相手を殺すような機能を。
そう考えれば、今までの動きにも説明がつく。あの男によって強制的に今の状態にさせられたのだ。
「思いっきりぶっ飛ばして、おとなしくしてもらうしかないわね」
壊れたテレビを叩いて治すように、衝撃を与えて元に戻すしかない。眷獣を正面から叩き潰す相手を。
「まったく……全部終わったら、色々と教えてもらわないとね」
苦い笑みを浮かべながら、そう呟くのだった。

「うぅん……？」
ぼんやりと耀の意識が覚醒してきた。
「あれ、私、どうしたんだっけ……？」
遠くではまだ派手な破壊音が続いている。その音で、今自分が何をしている最中だったのかを思い出した。
「そうだ。私、アイツに……」
直前に見た赤い閃光と凄まじい衝撃。何をされたのかはわからなかったが、そのせいで今まで昏倒していたのだ。
「呆れた頑丈さだな、お前。最低出力とは言え、まともに喰らったってのに」
「っ!?」
隣から聞こえた声に、耀は飛び起きる。
あのフードの男がすぐ隣に腰かけていたのだ。
「お前……っ」
耀はそう呟くや否や、鋭い蹴りを放つが、
「だから意味無いって」
男に当たる直前に脚が止まってしまう。だが攻撃されたというのに、男は何の行動もとらない。敵対する意思が無いのか、そもそも攻撃とも思っていないのか。
「そんなことしてないで。ほら、見ろよ」
耀も、男に攻撃しても無駄だと悟り、言われた通り現在行われている戦闘に視線を向ける。
今までは音でしか感じていなかった戦闘だが、実際に視界に入れると信じられない光景だ。
「翔……？」
変身した翔が、楯無相手に攻撃を仕掛けている。戯れというレベルではない。本気で相手を潰すための攻撃だ。
「すごいもんだ、ハザードフォームは。流石の俺も、ただのパワーだけで眷獣を殴り飛ばすなんて、俺でも骨が折れるようなことをサラッと

やっちゃってさ」
「眷獣を……？」
　眷獣と言えば、先ほどまで自分と翔が戦っていた相手だ。２人の攻撃でもなかなか有効打を与えることが出来ず、時間稼ぎに徹していたあの？
　翔ならば何か奥の手を持っていても不思議ではないが、それでも耀には納得できない内容だった。
　そんな考えを見透かしたように、男が笑って告げる。
「ああ、違う違う。俺が変身させたんだよ。ハザードフォームにな。コイツはな、正義のヒーローが人殺しをする回に出て来たヤベー代物なんだよ。実際ヤバかったな」
「あなた……翔にそんなことして、何が目的なの？」
　男の適当な口調に、耀は怒りを何とか抑え、問いかける。
「俺の目的、なんてどうでもいい。今はそれどころじゃない。そうだろ？」
「翔があのまま暴れまわるから、って事？」
「ああ。俺もハザードフォームの正確な能力は知らんから、お前ら２人で戦えばなんとか出来るかもしれないが……少なくとも２人は今すぐ処置しないと命に係わるぞ。や、もう死んでるのかな？」
　翔はいざとなれば人を傷つける覚悟がある。だが、自分の意思に関係なく、敵味方問わず虐殺したとすれば話は別だ。
　そんなこと、耀が許すわけがない。
「……それじゃあ、あなたがこれ以上何もしないなら行くけど」
「何もしない。約束しよう」
　軽い調子で男が言う。
「早く行ってやれ。観察していたが、更識　楯無１人じゃ、ハザードフォームの相手は荷が重かったみたいだ。この場では、お前が一番の切り札だ」
　男の言葉を普通に考えれば、ここからもう１人加われば翔をどうにか出来る、という意味だ。
　だが耀は別の意味を感じ取った。どこか、それ以上のニュアンスを

含んでいるのではと。
「どういう事？」
「生命の目録（ゲノムツリー）。お前の能力だ。だが、まだまだ真価を発揮していない。今回、ミラーモンスターの系統樹を学んでちょっと成長の兆しはあったが、それでは足りない。言ってしまえば使いこなせていない」
「……っ」
耀は唇を噛みしめる。
今回、自分の力が大きく拡張される感覚があった。それでもまだ足りないというのか。それ以上に、自分の力について、自分以上に知っている目の前の男が気に入らない。
「そんな怖い顔をするなよ」
「……あなたは何を知ってるの？」
「それが人にものを聞く態度か、問題児？　……っと、冗談冗談。教えてやるって」
耀の殺気が向けられたことで、おどけるように両手を上げて降参のポーズをとる。
そして、口を開いた。

「――」
「ぐうぅ……っ」
ＩＳが稼働の限界を超えて悲鳴を上げている。
ジオウは右手にジカンギレードソードモード、左手にはホークガトリングを持ち、楯無に肉迫する。
ミラーワールドに逃げ込むことも出来ない。楯無が長時間姿を消

せば、他に攻撃が向くかもしれないからだ。倒れたまま動かないアスタルテや、いまだに戦線に復帰しない耀などに。
攻撃のために利用しても、超人的な反応速度で迎撃される。死角から攻撃しても、
結果として、防御のために一瞬だけ入り、距離を取ってすぐに出る。そのくらいにしか使えない。
むしろそう言った回避手段を取らなければ、すでにやられていた可能性が高い。衝撃を与えて元に戻すなんて、夢のまた夢だった。
「(手加減なんてしてられないわ!! 大技を使っても、動きを止めないと!!)」
散布する水滴。大技を繰り出すための準備だ。それに気を取られたせいで回避が疎かになる。
楯無の右の脇腹から嫌な音が聞こえた。
「――う、ぐ……っ!!!」
派手に吹き飛ばされ、地面に転がる。
確認するまでもない。ジオウの蹴りが突き刺さったのだ。
常に纏っている水のヴェールはハイパワーライフルの弾丸を完全に受け止める。ＩＳには装着者を守るために常に最適な防御魔法を張るシステムがある。
それらすべてが威力を殺してもなお、ここまでのダメージを与えてくる。むしろこの場合は、楯無が戦闘不能にならなかったことを賞賛しなければいけない。
「(肋骨、何本逝ったのかな……！ 無茶苦茶ね、ホントに……っ)」
傷口を押さえると、インナーが破れているのが分かった。
「でも」
ゆっくりと近寄ってくるジオウを見る。一言も発せずに淡々ととどめを刺そうとするその姿は恐怖の一言だが、楯無の顔には笑みが浮かんでいた。
「……距離は取らせてくれたわね」
準備していた魔法を起動させた。
「――清き熱情（クリア・パッション）」

水を霧状にして散布。一気に気化させて水蒸気爆発を起こす大技だ。
範囲を絞りつつも威力は最大で。このブロック全体が揺れるほどのエネルギーが発生する。
起き上がった楯無にホークガトリンガーを向けていたジオウは避けきれるわけもなく、その爆発に巻き込まれる。
発生した霧はすぐに晴れる。
痛む体を引きずって、楯無は様子を確認する。
そこには。
「倒れてる……？」
地面に倒れ伏しているジオウがいた。
数秒の間動かなかったが、
「う、嘘でしょ……」
ジオウがゆっくりと起き上がった。
ダメージはあるようだが、戦闘不能には陥っていない。
楯無が武器を構える、その時、
「――――!!」
「ッ!?」
何かが横からジオウに撃ち込まれ、大きく吹き飛んだ。
続いて響き渡る銃声、いや、それはもはや大砲の音だ。
「今度は何よ……!!」
楯無はいら立ちを隠しもせずに、音の合った方向を見る。
そこには、
「生命の目録（ゲノムツリー）。形態（フォルム）――マグナギガ」
右手で緑色を基調とした巨大な大砲を構えた耀が立っていた。

ハザードは止まらない③

「か、春日部さん!? その能力は……!?」
まさか耀からも、今まで見たことの無い武器が飛び出してくるとは思わなかった楯無。
「ん、今出来るようになった」
耀は詳しく説明する気はない。説明したくても詳しい理論は分からないし、使えるのならばそれでいいと思っていた。
この状況を打破できるのなら。
アドバイスをした男はすでにいなくなっている。その言葉を思い出した。
「(生命の目録(ゲノムツリー)……動物と話せて、仲良くなった動物の力が使える恩恵(ギフト)だと思ってた)」
それはこの世界に来た当初の耀の認識だった。
「(でも、それが違うってことは薄々気づいてた)」
例えばブラドのスタンド『スケアリー・モンスターズ』。あの恐竜とは特に友情を結んだりはしていない。ただ一度か二度接触しただけだ。
それなのに、彼らの超反射神経を自分のものにしている。
そのことが頭の隅にあったからこそ、今回、ミラーモンスターの力を得ることを思いついたのだ。
「(生命の目録(ゲノムツリー)――接触した生命体の情報を収集、解析して模倣。融合させて新しい力を生み出す。それがこの恩恵(ギフト)の本質。犬や猫だけじゃない。私の世界では幻想だった生物も。私はすべての種の力を使うことが出来る)」
そして接触していない種であっても、首飾りをその種の特徴を取り入れた意匠の武装に変化させ、系統樹を組み上げることで未知の種族の恩恵を模倣することが可能だ。
どんな理不尽な相手に対しても、すべての種の力を使えるという点で勝率が0にならない。
原作では『対魔王・全局面的戦闘兵装(ジェネラル・ウエポン)』とも呼ばれていた。

「下がってて。私がどうにかするから」
「え、ちょ、今の翔君、普通の状態じゃないから――――!!」
話しているうちに、立ち上がるジオウ。その攻撃目標はたった今攻撃を行った耀だ。
ジオウが狙いを定めた瞬間、耀が担いでいた大砲が光りとともに消え失せる――――否、本来の姿である木彫りのペンダント、生命の目録（ゲノムツリー）の姿に戻る。
「生命の目録（ゲノムツリー）。形態（フォルム）――――光翼馬（ペガサス）」
今度は白銀の翼があしらわれたブーツへとその姿を変える。
淡い光を放つソレは、空を駆けるペガサスの恩恵を備えたものだ。
耀の体が空へ飛び立つ。それを追い、タカの翼を広げたジオウ。二人が空中戦を繰り広げる。
翼をはためかせて飛ぶジオウとは違い、耀はブーツが発生させる力場のようなモノで飛行する。
空でより自由が利くのは耀だった。
ホークガトリンガーの銃撃をかいくぐり、踏ん張りのきかない空中でも回転を乗せた一撃を叩き込む。
「やあ!!」
攻撃しか頭になかったジオウは、その耀の蹴りを避けられない。地面に激突し、転がるジオウ。
「すごい……」
楯無は思わずそう漏らす。
今の結果は楯無がダメージを与えていたこともある。だが、耀の急成長によるところも大きかった。
「これが、ダメ押し……!」
銀色のブーツがペンダントの姿に戻り、
「生命の目録（ゲノムツリー）。形態（フォルム）――――メタルゲラス」
再度ペンダントが変化する。銀色の重厚な装甲、そしてそれにつながるように、右手にはメタルゲラスの頭部と角を模した武具が顕現する。
光翼馬（ペガサス）の恩恵を失った耀が落下し始める。

角を突き出し、まっすぐジオウへ向けて。
「――」
ダメージを負ったジオウに、それを回避することは出来ない。直撃し、今度こそ動かなくなる。
こうして、ようやくジオウの変身が解除されるのだった。

「う、ぐ……っ」
意識が急速に浮上してくる。
恐らくはハザードトリガーによる脳への強化剤の浸透がなくなったことで、脳の回路が再接続されているんだ。
だが記憶がなくなったわけではない。
夢の中で体を動かすような、ふわふわとした感覚だったが、紛れもなく現実で起こったことだ。
同時に体中が痛みを訴えかけてきた。
これにも覚えがある。楯無さんと耀が俺を攻撃したことによる怪我だ。
ハザードフォームの対処方法が強制変身解除だとは知らないはずだけど、結果的にどうにかなってよかった。
体の向きを変えるだけでもかなりつらいが、この程度は甘んじて受け入れる。それ以上に被害を確認しないと。
「翔君、正気かしら？」
「楯無、さん……」
口調は普通だが、わき腹を押さえて顔をしかめている。俺が攻撃した部分だ。
「まったく、やってくれたわね、ホントに」

「すいません……ありがとうございます」
「お礼なら私だけじゃなくて、春日部さんにも言いなさい」
「そう、ですね」
俺はこの場で唯一怪我をしていない耀へ視線を向けた。
「翔、戦闘は終了したのか？」
にゅ、とレプリカが出て来た。
「済まない、翔。機能が停止していたようだ」
「機能が停止……？」
一体どうして……あの男の仕業なのか？
だが、もうアイツはいなくなっている。考えても仕方ないことだ。
もう、終わったことなんだ。
「ホント……」
酷い目に遭った。と、言いそうになって口を閉じた。どう考えても、周りの方がひどい目に遭っている。
「とりあえず、春日部さん。インデックスさんをこっちに連れてきてもらえるかしら」
「わかった」
そう言って耀は姿を消す。ミラーワールド経由で向かったのだ。
「さてそれで、この場をどうしましょうかね……」
ため息を吐きつつ、視線を周囲に向ける楯無さん。俺達の周りには俺達と戦っていた敵が全員倒れている。まさに死屍累々だ。
「楯無さん、あの２人は……」
「まだ生きてはいるわ。すぐに治療すれば助かると思う。その後どうなるのかは分からないけどね」
そのまま死刑になるか、刑務所にぶち込まれるのかって事だろう。
「影胤もですか？」
「生きて捕まえられるのならそうするわ。元々、そういう話になってたしね。捕まえた後は上の人の判断よ。っ、ふー……っ」
楯無さんも大分しんどそうだ。
「誰のせいだ、誰の」
「すいません……」

俺が頭を下げると、
「まったく……」
ため息を吐いた楯無さんは地面に転がっていたアイテムを回収してくれる。
「こっちは押収しておくわね」
「わかりました」
ハザードトリガー以外を受け取った。別に惜しくはない。あれ単体で使う事なんて、今後ないだろうし。
そうしていると、
「翔!!」
慌てた様子の耀が水たまりから飛び出してきた。
「ど、どうしよう！　この娘、すごく具合が悪そうだよ!!」
背中に背負っていたインデックスを、俺のすぐ横に横たえた。
汗まみれの顔に銀髪が張り付いている。ささやかな胸部は、その荒い呼吸で何度も何度もせわしなく上下していた。時折顔をしかめてうめき声を上げている。
「ただの風邪、じゃないわよね……もしかしてアイツらに、何か毒物を仕込まれてた？」
楯無さんがもっともな理論を組み立てるが、恐らくそうではない。そしてこの状態。恐らくタイムリミットが近づいている。
これはなりふり構ってはいられない。
「すぐに地上に行きましょう」
「……何かあるの？」
楯無さんはすぐに察したようで、余計な言葉は省いてくれる。
「このままだと、この娘が死にます」
「原因は？」
「禁書目録です」
俺はあえてインデックスではなく禁書目録と言った。
「彼女が保有している禁書が、彼女に悪影響を及ぼしているって事？」
「そもそも楯無さんは禁書目録の秘密は知っていますか？」
「知らないわ。春日部さんは？」

「私も知らない、です」
俺は2人に向けて説明する。
「――――という訳です」
「……なるほど、そういうことなのね。理解したわ。どうしてそんな機密をあなたが知っているのかは置いておくとして」
「……ひどい。1年おきに記憶を消すなんて」
楯無さんは本当に優秀な人だ。疑問は湧いて出ているはずなのに、今必要な事象を理解して、適切に受け止めている。
「この体調不良がタイムリミットの前兆ってことなのね」
「そのはずです。タイマーでもあればわかりやすいんですけどね。正確な時刻は魔術師に聞かないと」
「わかったわ。重傷者2名のこともあるし、何とか動くとしましょうか。春日部さんにメインで動いてもらうと思うけど、行けそう？」
「はい。行けます」
耀が動き始める。
「あ、さっきの話ですけど、まだ続きがあるので、上に向かってる最中に説明します」
「分かったわ。道中で聞きます」
俺達が動こうとしたとき、
ガコン!!　という大きな音と共に隔壁が開き始めた。
その向こうには、
「特務六課本隊、到着しました!!」
スバルさんを先頭にした、特務六課の本隊がいた。一直線にこちらに向かって来る。
「タイミング良いね」
「そりゃ清々しいほどの皮肉だな」
耀が悪い顔で呟いている。
「せめてあと１０分早かったら、翔を元に戻すのが楽だったのに」
「その節は本当に申し訳なかったと思ってるから……」
そんなことを話していると、
「先輩！　無事ですか!!」

「翔君！」
雪菜とアスナも踏み込んできた。
そして横になっている俺を見て、顔色を変えた。
「翔君……!?　大丈夫!?　どこかケガしたの!?」
「ケガと言えば、まぁ。全身痛いか」
「今回は一体どんな無茶をしたんですか？」
「翔が敵に寝返りそうだったからぼこぼこにして、おとなしくさせた」
「「え？」」
おい、適当なことを言うな。敵に寝返りそうになった瞬間なんて、一瞬たりともないだろ！　敵味方関わらず暴走しただけで！
俺達が適当な話をしていると、
「ゴメンね、楯無ちゃん！　インデックスちゃんは先に連れていかないといけないから！」
スバルさんがインデックスのことを連れて行こうとしている。この場の誰よりも優先して。
これはもしかして、上の方で何か交渉があったのかもしれない。そしてこれだけ急ぐという事は、タイムリミットが近くなっているという予想も間違いではないのだろう。
「痛つつ……それなんだけど、翔君から話があるらしいから、彼もいっしょに連れて行ってもらえるかしら？」
「私が背負っていきます」
耀が手を上げた。
「??　わ、分かりました！　それじゃあ行こっか!!」
「はい」
スバルさんは首を傾げたが、特に質問することなくすぐに頷いた。緊急事態で迷う時間が惜しいのだろう。
スバルさんがインデックスを、耀は俺のことを背負う。
「全速力で行くから、ついてきてね！」
「大丈夫です。翔、しっかり掴まっててね」
「はいよ」
耀の体が浮かぶ。

俺達は一足先に、外へ向かうのだった。

「詳しく説明して、夜月君。時間も無い事やし手早くな」
地上に戻った俺は、八神さんにインデックスについての説明を行うことになった。
俺もここに来るまでに話を聞いたが、どうやら六課とイギリス清教の間で情報共有が行われたらしい。
インデックスを早く上に連れて行こうとしていたのも、俺の予想通りタイムリミットが近づいていたからだった。
その証拠に、八神さんの後ろにいる神裂が苛立たしげに眉を寄せている。余計な話で時間を浪費したくない。それが表情から滲み出ていた。
そんな神裂をフェイトさんが心配そうに見ている。
「はい」
だが、この説明を放棄するわけにはいかない。
「結論から言いますと、今夜インデックスに行われる予定になっている儀式――――記憶消去は必要ありません」
「……何ですって？」
たった一言で、神裂の表情が変わった。
「あなたは、何を根拠に……!!」
「神裂さん!!」
フェイトさんの制止を振り切って詰め寄ってくる神裂。襟を掴まれ、憤怒の表情で睨まれる。
「適当なことを言うな!!　そんな下らない妄想のために、貴重な時間

を浪費するつもりかッ!!」
下手な言葉を続ければ、そのまま拳が飛んできそうだ。
慎重に言葉を選ぶ。
「インデックスの記憶を消さなければいけないのは、魔導書の知識で脳の容量が圧迫されているから。そうですよね？」
「……そうですッ！　だからもう時間がない！　あの娘は完全記憶能力はどんな些細な内容でも記憶し、忘れることが出来ないんです!!」
「だから、元々魔導書の知識で埋め尽くされているインデックスの脳は、その些細な記憶の積み重ねですぐに容量がいっぱいになってしまい、死んでしまう」
「だから……!!」
だから、自分たちを早く解放して欲しい。その言葉が出ないほど、神裂は冷静を失っていた。
俺は静かに告げる。
「俺もそうですよ」
「……はい？」
「ですから、完全記憶能力。俺も持ってます」
「……はぁ？」
神裂はぽかんとした表情になる。
まあ俺の場合、この世界に来てからの後付けだけどな。
だから完全に記憶しているのはここ半年の記憶だけ。でも、周りにとっては生まれつき持っていると思われるだろう。その勘違いを利用させてもらう。
「1年で15％、でしたっけ？　脳の容量がいっぱいになって死ぬんだったら、俺、とっくに死んでますよ」
「そ、れは……」
この辺りについて、少し調べればすぐにわかることのようにも思うが。魔術師ゆえにネット検索という手段を思いつかなかったのか、単に上司の言ったことを信じ込んでしまったのか。
言葉を詰まらせる神裂。畳みかけるように、つまり、と続けた。
「完全記憶能力は人を殺すような体質じゃないってことです。イン

デックスの記憶を消す必要なんてないんです」
「……っ」
自分たちが涙を呑んで取った選択が、実は無意味なものだった。その事実に、神裂の表情が歪む。よく見ると涙すら浮かべているようにも見える。そのことに罪悪感を感じるがこうしないと話が進まない。
だが、そんな神裂の様子を見かねたのか、八神さんが助け舟を出す。
「んー……でも、現に苦しんどるわけやろ？　インデックスちゃんが記憶しとるんは魔導書。それが悪さしてる可能性は？　例えば、普段よりもたくさん、脳の容量を消費してるとか」
「それはないです」
俺はきっぱりと否定する。
「仮に魔導書にそんな効果があったとしても、圧迫されるのは知識を記憶する意味記憶だけ。思い出を司るエピソード記憶を消したとしても、何の解決にもなりません」
「そ、っか……」
その助け舟はあっけなく沈没してしまった。
「翔、詳しいね」
「……まあ、自分の事ですからね」
フェイトさんの賞賛に顔を反らしながら答え、話を続ける。
「……では、どうしてあの娘は苦しんでいるんですか？」
「そやね。実際、記憶を消したら体調は戻るんやよね？」
「はい……それは、間違いありません……」
八神さんの疑問に神裂は弱々しく頷く。
「簡単ですよ。インデックスが1年周期で記憶を消さなければ生きていけない。そういうシステムを作った人がいるんですよ」
俺の発言に、その場の全員が息を呑むのだった。

首輪破壊

「システムを、作った……!? どういうことですか！」
神裂が先を急かすように早口で言う。
「インデックスには『1年周期で記憶を消さないと死んでしまう』そんな術がかけられているんです」
「……ありえません。そんなこと」
神裂達は1年間ずっとインデックスと一緒にいた。当然、怪しい術がかけられたとすれば気づいているだろう。
「はい。あの娘に何かされれば、我々が気が付かないはずがない」
「部外者の仕業じゃないから、じゃないのか？」
「……どういうことでしょうか」
神裂は分かっていないようだが、
「はぁ……なるほどなぁ」
八神さんがうんざりとした様子でため息を吐いた。
「つまりは神裂さんのお仲間――――イギリス清教がインデックスちゃんに術をかけた、っちゅうことやな」
「そんな……！　何の為に！」
「裏切りの防止、敵に渡った時の安全装置。強い武器には色々と制限をつけておかないと、自分に向けられた時が怖いやん？」
意外にも八神さんが淡々とした口調で言う。や、自分も管理局ではそう言った立場にいるからこその意見なのかもしれない。
こう見えてこの人は、『歩くロストロギア』の異名を持っているくらいなんだ。
「……っ」
神裂も『聖人』という力ある特性を持っている。自分にも心当たりがあるのかもしれない。
「だから、その術を解除出来れば、インデックスちゃんが記憶を消す必要は無いって事やね」
「その通りです」
ここで悲壮感にくれていても仕方ない。八神さんが話を進める。

まあ実際、どんな術がかけられているのかは分からないんだけどね。
脳みそに細工して1年でいっぱいになるようにしているのかもしれないし、1年周期で相手を殺す呪いが掛けられていて、そのカウントを戻すトリガーが記憶消去になっているのかもしれないし。
「だとすると、今から解呪を行うのは時間的に難しいのではありませんか？　どのような術なのか分からないのでは。だとすれば、やはり今回は……」
「や、そこは問題ないんやない？　なあ、翔君？」
「ですね」
「どういうことですか？」
神裂は俺の右手について知らない。
「俺の右手には幻想殺しって、異能の力を無効化する能力が備わっているんだ。どんな術でも関係なく破壊出来る。しかも、術が掛けられている場所を触るだけでな」
「それなら……!!」
神裂の顔に希望の光が灯る。喜びに笑みがこぼれそうになる顔を引き締めて頷いた。
「……一度試してみたいと思います」
無理をして神妙な顔を作っていた。
時間をかけずに無効化できるのなら、儀式にも影響はないだろう。その結論に至ったことで説得が成功する。
「では、さっそくお願いします」
インデックスはすでに車の中に乗せられている。そちらを指し示してくるが、
「……や、ここでするのは危険ですね」
「何故ですか？」
……どう説明するか。
理由としては、1回の幻想殺しでは、インデックスの首輪を破壊しきれないからだ。そして1段階目の首輪を破壊すると、10万3千冊の魔導書を使って対象を破壊するモードに切り替わる。

キーストーンゲートの目の前で、そのモードになってもらうのは困るのだ。
だが流石にこれは、自分が完全記憶能力を持っていても推理しきれるものではない。だが、こう言うしかない。
「……まあ、あれですよ。俺みたいにこの秘密に気が付いて、術を解除しようとした場合のカウンターがあるんじゃないかと思ったんです。だからもう少し人気のない……そうだ、イギリス清教の教会とかに行った方が良いんじゃないかと思います。」
「そう、ですか……そういうのなら……」
少し納得していないように見えるが、それ以上は何も言わなかった。ダメだった場合、すぐに記憶消去の儀式に入れると思ったんだろう。
だとすればすぐに移動、という話になると思いきや。
「ん、ちょっと待ってな」
八神さんに通信が入った。
「ん、あ、了解了解」
「部隊長？」
「ん、突入しているみんながそろそろ上に戻ってくるって」
ああ、説得にも結構時間がかかっちゃったからな。これじゃあ、先に戻ってきた意味がなくなっちゃったな。
「そう言う事。でも事情が変わったことやし、インデックスちゃんのことは、みんなですることになりそうやね」
八神さんが肩をすくめて言うのだった。

みんなが戻ってきた。
集まったところで状況説明、今後の方針を伝える。
全員揃って教会に向かうことは出来ない。流石に持ち場を放棄することは出来ないからだ。
教会に向かうのはフェイトさん、ティアナさん、雪菜、耀、アスナそして、俺だ。
「じゃあ早くいきましょう。時間もないことですし――」
「「は？」」
なんだかみんなの声が重なった。
「先輩、何言ってるんですか？」
「や、何って――」
「動けないくらいケガをしてる翔君が、何を言ってるのかな？」
「や、でもね……」
「『でも』、じゃ、ありませんよ先輩。先輩は病院です」
雪菜とアスナにきっぱりと断言されてしまう。だが、俺には体を引きずってでも行かなければいけない理由がある。
「インデックスの『首輪』を破壊するには、俺の幻想殺しがないとダメだろ？」
「いえ、私の雪霞狼があれば十分ですよ」
俺が右手を握ると、対抗するように雪菜が雪霞狼を振る。
「そやな。雪霞狼で十分なら、翔君には病院に行ってもらったほうがええな」
八神さんも同調して頷いた。
楯無さんはすでに、いつもの病院に搬送されているらしい。俺もそこに運ばれようとしている。
どちらも魔力を無効化する性質を持つ。確かに『2段階目』なら雪霞狼で十分だろう。だが、1段階目の『場所』は刃物で触れるには少々危険すぎる。
「……そう言えば、場所の説明はしてなかったか」
俺がやる気満々だったから忘れていた。

「場所、ですか？」
「ああ、その呪いの魔法陣というか、そういうやつが刻まれている場所……の予想」
俺は慌てて付け足した。
当然、俺が確定情報を知っているわけがない。でも事情を知っている女の子達には伝わっているはずだ。これが真実であると。
「どこでしょうか、その場所というのは。私はあの娘と1年間過ごしてきましたが、心当たりがありません」
1年という長期間、魔術を持続させるには、相応の準備とその核となる魔法陣が必要だ。霊装に刻んだり、時には体に刻んだり。
「彼女が常日頃から身に着けるものは支給されている『特殊な修道服』だけですが、見ての通り今は着ていません」
特殊な修道服というのは原作にも登場していた『歩く教会』の事だろう。『教会』として必要最低限な要素だけ詰め込んだ『服のカタチをした教会』。
神裂やステイルの攻撃にもびくともしないという防御霊装だが、アレは関係ない。
「当然、彼女の体に刻まれているという事も無い。誰かがこっそりかけ直しているという事でしょうか？　いや、それはないか……」
身体に刻まれていることはない。断言するなぁ。まあ、確認する機会もあったんだろうな。女性同士だし。
誰かが掛け直すという線も、神裂やステイルの監視を潜り抜けては難しいだろう。
「……先輩？」
「話を続けると、えー、体に刻まれてる……と考えています」
「ですから彼女の身体には……いえ、続けて下さい」
「神裂さんでも見ていない場所にあるんじゃないですか？」
「私でも見ていない場所……？」
その言葉でみんなが考え始める。
「クイズにするつもりは無いので言ってしまうと、喉奥にあるんじゃないかなーと……思うんですよね。ほら、普通そんなとこ人に見せな

いし。例え同姓でも」
「じゃあ、確認してみよっか」
アスナがすかさずアシストしてくれる。
「そうですね。そこまで言うのなら」
神裂も頷く。
２人で車に乗っているインデックスの所に向かった。
すぐに２人は戻ってくる。

「あった？」
「うん。喉の奥に魔法陣があったよ」
「何処の系統に属する術なのかは分かりませんでしたが」
アスナが頷き、俺は胸を撫で下ろした。原作と位置が変わっていなかったこともそうだが、ここまで推理を披露しておいて『違いました』では格好がつかない。
「な？　そこに雪霞狼は厳しいだろ？」
「……そうですね」
雪菜は悔しそうに顔を歪めた。
どんなに技量があろうとも、刃の幅がある雪霞狼をインデックスの口の中に突っ込むのは不可能だ。
「……わかりました。最初だけ先輩にお願いします」
「ああ、その後何かあればみんなにお願いするよ……まあ、何もないかもしれないけどね！」
最後に慌てて付け加えた。
まあ、何かあるのは確定してるし、できればそっちにも手を出したいんだけどな。相手が相手だ。今の俺では間違いなく足手まといになる。
俺たちの会話を遮るように、
「大丈夫」
耀が待ったをかけた。
「耀？」
「翔はこのまま病院に行って。私がどうにかするから」

「や、どうにかって……」
どうにかしようと思って、どうにかできるモノでもないと思うんだけど。
「見てて」
そう言って、耀はとあるものを見せてくる。
それを見たみんなは、
「うん。なら翔君は無理に行く必要はないんじゃないかな？」
「そやね。翔君以外にも出来るなら、翔君には早よ病院に行ってもらわな」
「翔はゆっくり休んでてね。私達でどうにかしちゃうから」
「そうですね。あ、救急隊の皆さん。この人がどこかに行こうとしたら絶対に止めて下さいね。そういう人なので」
あれよあれよという間に救急車に詰め込まれ、俺は病院に搬送されることになってしまった。
何なんだ、あの異常な連帯感は。
救急車の車内、雪菜の注意もあってか皆さんの視線が厳しい。これは脱走出来なさそうだ。もともとまともに動く身体じゃないんだけどね。
「携帯はいじってもいいですよね？」
俺は知りうる限りの情報をみんなに送り、力を抜くのだった。

「それじゃあ、始めましょうか」
フェイトの言葉にその場の全員が頷いた。
イギリス清教の教会に到着後、話はスムーズに通された。

儀式の準備をしていたステイルは、インデックスの喉奥の魔法陣を見ると一瞬で意識を切り替え、協力的になっていた。
教会の建物に囲まれた中庭のような場所、その中心がインデックスの儀式の場所として準備されていた。今はそこに寝かされているが、儀式のためではない。
インデックスを取り囲むようにＢＪを纏ったフェイト、ティアナ、雪菜、アスナ、ステイル、神裂が立っている。
また、魔術の心得のあるシスターは建物に被害が出ないように防御用の結界を張っていた。それは建物に張られた、ステイルのルーンが刻まれたカードを保護する役目もある。
準備万端。だからこその『始めよう』という言葉だった。
先ずは第一段回。翔が行う予定だった喉奥の魔法陣の破壊だ。
代わりを買って出た耀が、寝かされているインデックスの前に立つ。
「ふぅ……」
軽く息を吐き、目を瞑る。
すると、ぼんやりと耀の体が光ってきた。
「(耀さん、本当に……)」
それは雪菜にとってなじみのある光だ。自らが持つ槍の光に酷似しているのだ。
生命の目録（ゲノムツリー）の能力を開花させた耀。
耀はさっきまで、アスタルテの眷獣である薔薇の指先（ロドダクテュロス）と戦闘を繰り広げていた。
雪菜の雪霞狼の神格駆動波術式を解析、搭載した眷獣と。
生命の目録（ゲノムツリー）は眷獣すらも収集対象としてみなしていた。
そのため耀はすでに、生命の目録（ゲノムツリー）を変幻させずに、薔薇の指先（ロドダクテュロス）の力を使うことが出来る。
それは腕力や防御力だけではない。眷獣が持っている特殊能力すらも、自由に行使できる。
魔力を無効化する神格駆動波術式すらも。
「(耀さん、どうしてこんなに一気に……私の一番の武器を……)」

そんな雪菜の想いをよそに、耀が光を携えた指をインデックスの口の中に挿入する。
それはすぐに起きた。
否、起こるのが分かった。
「獅子の巫女たる高神の剣巫が願い奉る」
霊視によってその未来が見えた雪菜は、祝詞を捧げ始める。その行動に迷いはない。霊視による未来予知もそうだが、何よりも翔からの連絡で『コレ』が起こるのは分かっていたのだ。
雪菜の行動に、事情を知らない者は怪訝な表情になる。だが、それよりも、
「わっ!?」
「耀ちゃん!」
耀がインデックスから弾き飛ばされた。
その耀をフェイトが抱き留める。
「大丈夫?」
「はい。魔法陣は壊しました。多分」
そう、魔法陣は破壊された。それは間違いない。
それにもかかわらず、
「彼の予感は的中したという事ですか……っ」
「……っ」
神裂とステイルの視線の先には体を起こすインデックスがいた。だがそれは体の筋肉を使った動きではない。浮遊するように物理法則を無視して起き上がる。最終的には地面から足が離れていた。
その目には光が無く、代わりに赤い魔法陣が描かれていた。
自動書記(ヨハネのペン)。首輪の真実に気付いた者をインデックスの頭の中にある10万3千冊の魔導書の力を以て撃滅する形態だ。
「首輪の破壊を確認。対象術式を神格波駆動術式と断定。首輪の再構築は不可能。対象術者、および周辺人物の排除を開始します」
自動書記がインデックスの声を借りて警告してくる。
その異様な空気に、周りのシスターに恐怖が広がりそうになるが、
「ティアナ、バインド!!」

「はいッ!!」
フェイトの声で2人の全力のバインドがインデックス――――自動書記に巻き付く。
だが、それよりも速く、
「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威を持ちて我に悪神百鬼を討たせ給え!」
祝詞を完成させる雪菜。
練り上げられた霊力が雪霞狼に宿り、破魔の光を宿す。
それは耀が作り出したものよりも強い。それは雪菜の適正か、それとも意地か。
警戒すべき神格波駆動術式の使い手。自動書記が雪菜に視線を向けた時には、
「はぁッ!!!!」
雪菜の一閃が自動書記を捉えていた。
「術式、破壊。修、復、ふの、う――――……」
「よっと……ん、大丈夫そうだよ」
魔法陣が消える。浮力を失って地面に倒れこむインデックスを、アスナが受け止めた。
直前まで熱に浮かされていたインデックスの体温が、みるみる下がっていく。呼吸も落ち着いていた。
「こちらも大丈夫そうですね」
翔からの情報で、『自動書記(ヨハネのペン)破壊後、妙な羽が飛び散ったら注意』というモノがあったが、雪菜が速く動いたことで何もさせずに収めることが出来た。
こうして、インデックスの首輪が破壊されるのだった。

キーストーンゲート襲撃事件事後処理　前編

「そうか、良かった！」
俺がインデックスの首輪破壊成功の知らせを聞いたのは、いつもの病院のベッドだった。そこまで深い傷はなかった俺。
最後の方は結構ぼこぼこにされたと思ったんだけど、ハザードの防御力のおかげだろうか。手足は無事だし、手術も必要ないらしい。
「それでも、全身打撲で動くのも辛いはずだけど？」
「ですね……」
御門先生が呆れたように指摘してくる。
戦闘が終わって緊張が解けたからか、マジで動けなくなった。身体も痛いし、これは行かなくて正解だったと思う。足手まとい以外の何物でもない。
「うおぉぉぉ……っ」
身体を襲う鈍痛に耐えようと、変な唸り声が出てしまう。
「ま、これに懲りたら無茶してケガするんじゃないわよ。これから鎮痛剤と修復用ナノマシンが効いてくるから。明日の午後には完治してるはずよ。退院はその後の検査の結果次第ね」
「ありがとうございます。……や、まあ、今回は俺の無茶で怪我したわけじゃないんですけどね」
後半はぼそりと言う。
むしろそうだったら、どんなに良かっただろうか。実際は俺が散々周りに迷惑をかけ、命がけで止めてくれたのだ。この程度のケガは甘んじて受け入れるべきだ。
「そういえば、ここに運び込まれた3人は？」
影胤とオイスタッハのことだ。キーストーンゲート深部から最優先で運び出されたのは俺とインデックスだったが、その次は瀕死の重傷であるその2人とアスタルテだった。
「ホムンクルスの娘の方はもう大丈夫よ。レティシアさんが眷獣の制御を引き受けたから、後は安静にしてれば元気になるわ。他の2人は、今は集中治療室。しばらくは出てこれないでしょうね」

３人とも俺が手をかけた。捕まえたかったが殺したかったわけではない。
「……どうかしたの？」
「……いえ。なんでも」
俺の様子がおかしかったんだろう。御門先生が眉を寄せている。
３人は戦闘の結果、重体になった。そのことは当然、御門先生も分かっているだろう。だが、『どのような戦闘が行われたのか』については知らないはずだ。
「……と、はい、御門です」
御門先生の病院用端末に連絡が入る。
「……了解です。じゃあ翔君、私もそっちの応援に行かないといけないから。ゆっくりしてるのよ」
「分かりました」
そう言って、御門先生は病室から出ていくのだった。

「そか、良かった」
インデックスの件については、キーストーンゲートで怪我人の救助に当たっていたはやてにも連絡されていた。
「うん、じゃ、そっちはそのままよろしく。無理にこっちに戻ってこなくても大丈夫そうやから」
はやては救助状況を見てそう判断する。
浅葱の仕事は完璧だった。始めは影胤達を先に進ませないために、下層へ至るために必要な通路の警備システムを奪い返し、次に六課が突入しやすいように侵入経路の確保を行う。
最後にキーストーンゲート全体だ。

その最終段階も終わり、システムは完全に復旧している。救助隊は魔力弾の一発も使うことなく、クリアリングができていた。
これから戦闘が起こる可能性は限りなく低いと言えた。
元々島中の管理局が集まっていたこともあり、救助隊の人数は飽和状態になっていた。
「逆に持ち場に戻って、警戒に当たれって話も出とるくらいやし」
キーストーンゲートが乗っ取られたという情報はとっくに島中に広がっている。その対応に管理局が追われていることも。その間に犯罪組織が動き出してもおかしくない。
「……うん。だからうちの部隊も戻ることになったんよ。戻る時には隊舎にお願いな」
そう言ってはやては通信を切った。
「結局、全部翔君の推理通りになったわけかぁ」
独り言を言うはやて。その後ろから近づいてくる女性がいた。
「今のは、ここを離れて行った連中からか？」
「千冬ちゃんか。そう。ちょーっと用事があったらしくてな」
レディスーツを着こなした千冬。その後ろには不満げな表情の少女が2人いた。
「ごめんなぁ。来てもらったわええけど、出番はなさそうや」
「いいさ。何事もなく事態が収まったのならな」
千冬はそう笑うが、夜遅くに無理やり連れて来られる形になった2人の少女にとっては溜まったものではない。
そう考えたはやては後ろの2人に視線を移す。
「後ろの2人もごめんな。こんな時間に無理やり引っ張られて迷惑やったやろ？」
「……まぁ、ちょっとは」
「わたくしは別に……代表候補性として、このようなことがあるのは覚悟していましたわ」
2人の少女の片方、小柄なツインテールの少女は、顔を背けつつもしっかりと不満を口にする。もう片方の金髪お嬢様ロールの少女は不満を口に出さない。出さないが、不本意であることは態度でわかっ

た。
「バカ者共が。国からＩＳを『専用機』として貸与されるという事は、不測の事態が起これば休暇や時間を問わずに呼び出されるという事になる。そのことを頭に入れておけ！」
「ッ!!」
千冬の一喝に２人の少女は身をすくませていた。
「ま、まあまあ。千冬ちゃんもそんなに怒らんといて」
「自覚が無いのなら早めに覚えさせるべきだ。我々も前とは違うのだからな」
「それは……そやけど」
はやては苦笑いする。
はやての場合、夜天の書の件で無理やりにこの世界に引き込まれたが、自覚を持つのは早かった。それは個人の違いだろう。
「ふむ。それで、だな。少し相談があるのだが……」
「ん、なんや？」
千冬の言葉に、はやては耳を傾けるのだった。

「ん……あれ……？」
インデックスが目を覚ました。
「インデックス!!」
落ち着かない様子で部屋を行ったりきたり、タバコを吸ったりしていた神裂とステイルが、すぐに駆け寄ってくる。
インデックスはきょとんとした顔で２人を見返している。
「え？　あ、れ……？　火織、ステイル？　私、どうして……？」
インデックスは小比奈に誘拐されてからずっと意識が無かった。

その直前の頭痛から、記憶消去のリミットを考え、『今の自分』はもう二度と起きることはないと思っていた。
それがこうして、記憶を保持したまま再び意識を取り戻した。
「良かったです。なんともなさそうで」
後ろにいたフェイトがホッとした様子で言った。
首輪を破壊してそのまま帰るというのはいささか無責任だ。そう感じた六課組は、インデックスが目を覚ますまで、とはいかなくても安否が確認できるまでは教会に留まることにしたのだ。
それが、予想以上にインデックスが目を覚ますのが早かったのだ。
「はい。本当に、ありがとうございます……！」
「この術については、こちらでも調べて報告する……礼を言おう」
２人は六課に――――特に術を破壊した耀と雪菜に――――対して頭を下げた。
その様子を見てインデックスは何かを悟ったのだろう。寝台から起き上がり頭を下げた。
「私からも、ありがとう、なんだよ」
「うん。元気になってよかった」
耀が微笑みながら言う。
その声につられてインデックスの視線が耀に向き――――
「ッ!?」
その目が見開かれた。
「ちょ、ちょっと！　そのペンダントちょっと見せて欲しいんだよ!!」
「……え？　これを？」
「どうした、インデックス」
ステイルが問いかけるが、インデックスの興奮は収まらない。寝台から身を乗り出しそうになり、ステイルに抑え込まれていた。
耀が見せるくらいならとインデックスにペンダントを差し出した。もちろん首にかけたままで。
見開かれた目が生命の目録（ゲノムツリー）を読み解く。その頭の中にある１０万３千冊の魔導書の知識が、生命の目録（ゲノムツリー）という恩恵（ギフト）の構造を理解させる。

「すごい……生命の円環と系統樹をこんな形で纏め上げるなんて……!!　でも、これって……」
5分前まで寝ていたとは思えないほど深刻な顔で、生命の目録（ゲノムツリー）を睨みつけるように凝視する。
「あの……？」
自分の世界に入ってしまったインデックスに、耀は声をかけた。
返ってくるのは返答ではなく質問だった。
「このペンダント、いつから持ってるの？」
「いつから？　ええっと……結構前、から？」
原作では年単位で持っているものだが、耀がこの世界に召喚されたのは数カ月前だ。その辺りは曖昧になっているため、ぼかした表現になった。
その返答を聞いたインデックスはさらに少し考えこみ、
「……みんな、ちょっと私とこの娘だけにしてくれないかな？」
そのような要求をした。
「行くぞ」
「そうですね。言う通りにしましょう」
「そう、ですね」
ステイルと神裂は、モードの切り替わったインデックスの声に素直に従う。六課組は困惑しながらも部屋の外に出て行った。
2人きりになった耀とインデックス。
「改めて、私を助けてくれてありがとうなんだよ」
「ん、私1人だけの力じゃないけどね。雪菜も手伝ってくれたし、翔の情報が無かったら何もできなかった」
インデックスは『そうだね』と笑い、本題に入る。
「そのペンダントがあなたの力の源だよね」
「そうだよ」
「能力は、『接触した生物の能力を解析して、あなたに付与する』で合ってるよね？」
「合ってる、と思う。正直、私もよくわかってないから」
耀の理解は非常にふわっとしたものだった。

「このペンダント、危ないと思う」
それに対して、インデックスは耀以上にこの恩恵を理解していた。
「危ない？」
「うん。この礼装は、持ってる人に収集した生物の情報を継ぎ足していくもの。下手に使うと、その内、人じゃなくなっちゃうかもしれない」
「……っ」
インデックスの真剣な表情に、流石の耀もつばを飲み込む。
「（そういえば）」
耀の頭に閃くことがあった。
「（コレの使い方について、今回はあの男に教えられたけど、本当は翔も知ってたんじゃ……それで今まで教えてくれなかったってことは、危険だってことも分かってたのかも）」
だが、生命の目録（ゲノムツリー）が無ければ耀はまともな生活を送ることが出来ない。だからこそ、伝えていなかったのかもしれない。
「それ、いつも持ってないといけないかな？」
「……うん。これは私の大切な人からもらった、大切なものだから」
「そ、っか……でも気を付けて。何かあったらすぐに周りの人に言ってね。何かあってからじゃ遅いかもだから」
インデックスの言葉に耀は頷くのだった。

そんな会話をしている時、部屋の外では。
「彼はどこの病院に？　今回のことで、直接お礼を言いたいのですが」
「あ、そうですね。個人情報なので、翔に聞いてみないと……明日以降にご連絡しますね。もしかすると、退院しちゃっているかもしれない

ですけど」
「分かりました」
　神裂とフェイトがそんな話をしていた。
「神裂」
「どうかしましたか？」
　険しい表情のステイル。
「インデックスにかけられていた術について、本国に問い合わせてくる」
　インデックスの無事は確認できた。次はいったい誰が、こんな悪趣味な術をかけたのか。そこに一体どのような意図があったのかはっきりさせなければいけない。
　インデックス本人に聞ければ早いのだが、残念ながらその時の記憶は消されてしまっている。その時にどのような契約が交わされていたのか、知る術はない。
　だが、
「必ず見つけ出して灰にしてやる……!!」
　犬歯をむき出しにして、そう吠えるのだった。

「ふむ。事態は終息したようだな」
「ああ、そうみたいだな」
　学園島のもう一つの中枢、窓の無いビル。その中央を貫く円柱状の水槽に浮かぶ人物――――アレイスター・クロウリーが口を動かした。水槽を満たす液体がごぽごぽと気泡が発生する。

それに応えるのは金髪グラサンの男、土御門元春だ。
「今回はずいぶんと危なかったな」
「そうでもないさ。いざという時の備えは準備してある。管理局がしくじってもテロリストの思惑が成功することはなかった」
「そうかい」
その『いざという時の備え』を土御門は知らされていない。だが、ここまで自信満々に言うという事は、ハッタリではないのだ。
「それで、今回の事件はどこまで予想通りだったんだ？」
「さてね。事件が起こることは分かっていたが、どのような結末になるのかは予想していなかった」
「つまり、今回の事件はアンタの『プラン』には影響を及ぼさないってことか？」
管理局の調査によって、オイスタッハの犯行動機はすぐに調べられることになる。その狙いは学園島の要石として使われている聖人の右手だ。
違法建材である聖人の右手を使わずとも、今の技術なら学園島は十分に形を保つことが出来る。オイスタッハの罪とは別に、学園島には遺体の返還命令が下るだろう。拒否権はない。
超ド級の聖遺物をみすみす手放すことになる。
「それを君に答える義務はないが……だが、そうだな。面白い人物の干渉はあったな」
乗っ取られていたはずのキーストーンゲートのシステム。だがアレイスターには別の回線からその時の映像が送り込まれていた。
キーストーンゲート下層で起きた戦闘について、彼には筒抜けになっていた。
だがその映像は土御門には見えていない。アレイスターの浮かぶ水槽の内側に表示されているからだ。
つまり情報共有するつもりは無いという事だ。
「そろそろ迎えが来る頃だろう？　引き続き、彼の監視を続けてくれ」
「……仰せのままに」
土御門は余計な事は聞かず、その場を離れていった。

そうして『窓の無いビル』は一時の静寂に包まれるが、すぐに別の場所から連絡が入る。電話ではなく魔術通信だ。
「私だ」
《首尾よく事は進んだりけるわね》
それはイギリス清教の最大主教、ローラ＝スチュアートだった。
「良かったのかね。君が禁書目録に刻んだ首輪が、こうもあっさり解除されてしまって」
《まあ、それ自体は想定通りではありたるけど、今部下に鬼電されてたるのよ。ああ、またかかってきた……》
言うまでもなくステイルだ。
長々と雑談を行うつもりは無い。確認さえできればそれで十分だ。
「そちらの事情には干渉しない」
《そうね。我々は我々で、お互いをお互いに利用したるだけだから》
２人の黒幕は暗闇で笑うのだった。あと、ステイルの電話に対応するのだった。

キーストーンゲート襲撃事件事後処理　後編

キーストーンゲートの襲撃は夜中の内に終結した。管理局全隊が目を光らせていた甲斐もあり、その後に予想された混乱も起こることが無かった。

早めに撤収して島に目を光らせていた六課だったが、日が昇ったあたりで警戒モードが解除され一息つくことが出来た。

だが、六課にはまだもう一つやらなければいけないことがあった。

「これなぁ……」

流石に疲労が見えるはやて。その目の前にあるのは赤いトリガー、楯無が回収したハザードトリガーだった。

楯無のＩＳに記録されていた戦闘映像は、はやてにも送られている。そこに記録されていたのは、圧倒的な戦闘力で相手を蹂躙するジオウだった。

敵を打ちのめした後は楯無に襲い掛かり、耀によってようやくその動きを止めた。控えめに言って暴走状態だった。

それを引き起こしたのがこのハザードトリガー。謎の男が翔に使ったアイテムだ。

「そちら、どうするんですか？　上に回しますか？」

傍らの蛇倉が問いかける。

「……いや、やめておこか。何処に流れるか分からんしなぁ」

詳しく分析すれば何か分かるかもしれない。だが、不用意に広まると不要な兵器が作られてしまうかもしれない。

妹達事件の件。内部にいるかもしれない裏切り者のことを考えると、不用意に広めることは出来ない。

「そうですね。それがいいかと思います。幸い、このことを知っている人間はごく限られていますからね」

「しばらくはうちの部隊で分析、話が聞ければ翔君からもお話を聞くって方向で進めようと思う」

はやての意見に蛇倉は首肯する。

「それで、夜月の件ですが」

「ああ、まあ……一旦こうするのはしゃーないわな」
はやては自分の判が押された書類を見て、ため息をつくのだった。

時刻はお昼前。
検査前、ティアナさんが病室を訪ねて来た。昨日から休んでいないのか、ずいぶんと疲れているように見える。
わざわざここに来たのは、俺に対して重要な用事があったからだ。手渡された書類、そしてその説明を受けた俺は、
「謹慎、ですか……」
ティアナさんに告げられた言葉を繰り返した。
「そうね。今回の件はあなたには責任が無いとしても、実際にケガ人が出てしまった。形だけでも処罰しないといけないの」
「いえ、分かります」
ハザードで暴走した結果、俺は犯人だけではなく味方にまで手を上げた。軍隊で言えば味方に向かって発砲したようなモノ。通常ならば叛逆行為だ。
今回はハザードフォームにより制御不能な状態になっていたことを鑑みて、2週間の謹慎処分。かなり軽い処分だ。
でも、六課でなければあの男との関係を根掘り葉掘り聞かれることになるだろう。それも含めたかなり私的な処分に留めてくれたんだな。文句は言えない。
「謹慎って言っても、学校に行くなってわけじゃないからね。学校が終わってから、通常は六課にいる時間は出歩かずに家にいること」
「分かりました」

それを告げると、ティアナさんはお大事にと言って帰っていった。

「おーす」
「おう、浅葱か」
そして午後。検査が終わり、病室で暇を持て余していたところに入ってきたのは、制服をセンス良く着崩した派手めな少女。藍羽　浅葱だった。
「調子はどう？」
「もうほとんど元気。手続きが終わって、今日の夕方には退院だって」
検査結果は特に問題無し。昨日の投薬がしっかりと効いてくれたらしい。
「そりゃよかったわ。はい、お見舞い」
浅葱が適当なお菓子の詰め合わせを小さな机に置いた。
「わざわざお見舞いに来てくれるなんてな」
「あのまま別れるってのは締まらないでしょ」
浅葱にはキーストーンゲートのシステムの復旧を頼んだまま戦闘に向かった。そのまま病院に搬送されたため、顔を合わせることなくここに来ていた。
「つーか、なんで病院の場所が分かった――――いや、何でもない」
浅葱にすれば、俺が搬送された病院を調べるなど朝飯前なんだろう。
「そう言う事。ってかアンタ、この短期間に入院しすぎでしょ。どうなってんのよ」

「ほっとけ」
　どうやら過去の入院記録まで見られたらしい。
「別にアタシがどうこう言う事じゃないかもしれないけどさ。あんま周りには心配かけないようにしなさいよ」
「はいはい……」
　まさか浅葱にも注意されてしまうとは。
　言いながら、お見舞いとして持ってきたお菓子に手を伸ばし始めた。
「お前が食うのか……」
「別にいいじゃん。いっぱいあるんだし。1人で全部は食べれないでしょ？」
「別に俺1人で食う訳じゃないし」
　食べきれない分は家のみんなに分ければいい。むしろ家にいる人数を考えると、この程度では足りないくらいだ。人によっては1人で平らげてしまう娘もいるし。
「ふぅん？　誰かと一緒に住んでんの？　親？」
「……いや、シェアハウス、かな？」
　間違ってはいない。ちょっとごまかしているだけだ。この島では学生の一人暮らしと家族暮らしの割合は半々程度だ。
「姫柊さんと？」
「何でそう思った」
　シェアって言ったら、普通男性だと思うんじゃないのか？
「何でって、付き合ってんじゃないの？」
「や、付き合ってるが」
「でしょ？　あの反応見たら誰だってそう思うわよ」
　どうやら、浅葱と雪菜はどこかで会話していたらしい。俺がキーストーンゲートに先行突入している時だろうか。
　だからって、一緒に住んでいるってのは飛躍しすぎじゃないのか？
　当たってるんだけどさ、その推理は。ただ、その相手が1人じゃないだけで。
「別に隠す必要は無いでしょ。邪魔したりしないわよ」

そりゃ、浅葱はそういう性格じゃないし、俺達のことを言いふらしてもメリットはないけどな。俺の相手が雪菜1人だったら。
浅葱と話をしていると、ノックも無しに病室の扉が開いた。入ってきたのは、
「おいーっす。どうよ、調子は」
「矢瀬!?」
「基樹!?」
俺と浅葱が同時に驚愕し、浅葱は怪訝な顔で俺を見た。
「え、何よ。アンタ、基樹と知り合いなわけ？」
浅葱と矢瀬は原作では同じ高校に通う幼馴染。幼馴染というのはこの世界でも変わらないらしい。だがこの世界では、矢瀬は武偵高で浅葱は一般校。同じ高校ではない。
「夏休み前までは同じ学校だったんだけどね。突然転校したのよ、コイツ。それがまさか武偵高で翔と同じクラスなんてね……」
「ああ。不思議なこともあるもんだな」
矢瀬はお見舞いの品（浅葱のものよりもずいぶんコンパクト）を机に置き、椅子に腰かける。
「ああ、そうだな」
俺は素直に頷く。
まあ、多分偶然だしな。俺と浅葱が知り合ったのは。矢瀬が俺のクラスに転校してきたのは明らかな思惑があるけど。
「で、オメーはどうしてここが分かったんだよ」
「那月ちゃんに聞いたんだよ。昨日、管理局絡みで色々あったんだろ？　お見舞いついでに……ほれ、今日渡されたプリントだ」
「そりゃどうも」
その程度のことで、わざわざ病院まで来てくれたのか。その心遣いに涙が出そうだ。
「ホントはヤミちゃんに頼もうかとも思ったんだけどな。『机にでも入れて置いたらどうですか』って言われちまって」
「いや、ヤミは引き受けないだろ。そういうのは」
「……そうか？　そうは思わないけどな」

そういう雑用は引き受けないだろ、アイツ。
「ま、何事も無くて良かったよ。翔もこの島もな」
「それは同感だよ」
入院している俺に向かって『何事も無くて』ってのはどうかと思うが。
「それに今回は腐れ縁のコイツを助けてくれたんだろ？　そのことについても礼を言わないとな」
「……えぇ？　アンタ、そんな殊勝な心掛けがあったの？　初めて知ったんだけど」
ヘラヘラと頭を下げる矢瀬に浅葱は怪訝な顔を向ける。
「あって悪いかよ！　ないよりマシだろ！」
「あったらあったでキモいけど」
幼馴染特有の遠慮のない物言いだ。
話していると、
コンコン。
病室の扉がノックされた。
「またお客さんか？　流石、人気者の夜月　翔だな」
「何言ってんだ。どうぞー」
「失礼します」
顔を見せたのはステイル、神裂、そしてインデックスの3人だった。
「じゃ、俺らは帰るか」
「そうね」
その面子を見た矢瀬は椅子から立ち上がった。それに浅葱も続く。ステイル達の格好を見て、何かしらの関係者であることを悟ったんだろう。
「んじゃまた、学校でな」
「そのうちね」
2人が病室から出ていき、入れ替わりで3人が入ってくる。
「すみません。お話し中でしたか」
「いや、大丈夫だ」
今朝起きたらフェイトさんから、イギリス清教の人たちに入院して

いる病院を教えてもいいかと連絡があったのだ。当然ＯＫを出していた。
いつ来るという連絡はなかったが、突然の来訪は浅葱と矢瀬も同様だ。どちらかを優先することはない。
神裂達が横一列に並んだ。
「この度は本当にありがとうございました。あなたのおかげで、この娘の記憶を消す、などという愚行を冒さずに済みました」
そう言って頭を下げて来た。神裂は深々と、ステイルは軽く、インデックスはその中間あたりまで。
「話には聞いてましたけど、うまくいったのなら良かったです」
「はい。この娘の体調や記憶には、何の問題もありません」
わざわざあいさつに来てもらったとは言え、俺達の間でそこまでおしゃべりすることはない。
「お二人はイギリスに戻るんですか？」
「はい。今日の夕方には」
「闇討ちとかされないように気を付けてくださいよ」
闇討ち相手はもちろんイギリス清教だ。インデックスの秘密を知ったものは～とか、そう言う事が無いとは限らない。まあ、原作では全然そんなことなかったわけだけど。
「そうですね。気を付けます」
神裂も心得ているのか、素直に頷いていた。
「それよりもこの娘の警備についてだ」
ステイルが話を変える。今回、記憶の件はどうにかなったが、インデックスが小比奈に攫われたという事実は変えられない。
「……まさかとは思いますが、俺に護衛をしろと……？」
「何を言っている？　そんな訳が無いだろう」
何か、見た流れを感じたが、ステイルはきっぱりと否定してくる。
「いや、完全に外れとは言えないか。今後はこんなことが無いように、教会の警備を強化させる。だが、何かあった時は済まないが……」
「もちろんです。その時は全力で対応しますよ」
その後簡単な挨拶をして、３人は帰っていくのだった。

「じゃ、俺はここで」
「あれ、アンタどこ行くの？」
出口に向かっている最中、矢瀬が急に進路を変える。明らかに出口ではなく他の病室に向かおうという足取りだ。
「もう1人お見舞いに行かないといけない人がいるんだ」
矢瀬の親はこの島の重鎮。今回の事件で怪我した知り合いがいて、その人のお見舞いだろうと適当に判断する浅葱。
「そ、んじゃ、先に帰ってるわね」
手を振って別れた2人。
矢瀬は誰も通っていない通路を歩き、やがて1つの扉の前に辿り着いた。
中に入る。
「どうも」
「いらっしゃい、基樹君」
ここは楯無が入院している病室だった。どちらかと言えば、こちらの方が本命だ。
この2人は知り合いだった。
それは裏の仕事をしている仕事仲間であり、矢瀬家と更識家という日本の格式ある家に生まれ、年も近いことが理由だ。小さい頃から顔を合わせる機会もあり、独特の友人関係になっていた。
「今回はお疲れ様でした」
「まさに水際。ギリギリの所だったわね」
日本からの逃亡犯である蛭子　影胤の企みを無事に阻止すること

が出来た。
キーストーンゲートを占拠されてしまったものの、彼らの思惑を潰し、捕まえることが出来たのだ。
それだけでも各国からの批判は免れないだろうが、企みが成功して島を沈められた時の批判と比べれば、塵のようなモノだ。
「で、それもこれも夜月　翔のおかげってことか」
「……ま、そうね。連中の足止めはともかく、あんなにスムーズに内部に侵入できたのは彼のおかげで間違いないわ」
今回の事件で、翔の一番の貢献はミラーワールド経由での侵入だった。
それが無ければ多数の犠牲を覚悟で要塞と化したキーストーンゲートへ突入し、それでも間に合うかギリギリだった。いや、おそらく間に合わなかっただろう。
「浅葱が攫われなかったのもアイツのおかげだしなぁ。偶然にしちゃあ出来過ぎてるって感じだが」
こんなに早いうちにキーストーンゲートの制御を取り戻せたのは、翔が浅葱の誘拐を阻止したことも大きい。
駆け付けたのが並みの局員であれば、奪還は無理だった。
「今まで見てきた感じだと、能力の出自はともかくとして人間性に問題があるようには思えないな」
「一番の問題がわかってないってことじゃない」
いくら翔が人格的に優れていようと、その能力が周りに被害を出すなら放置することは出来ない。まして今回は正体不明の人物が翔に影響を与えたのだ。悪意を持つ人物が翔の能力を振るえばどうなるか。想像もしたくない。
楯無のため息に、矢瀬は肩をすくめた。
「ま、監視は続けますよ。何かあれば報告します」
「くれぐれも絆されないでね」
「……アイツの周りを見てると、楯無の方が心配なんだが」
「言ってくれるわね」
軽口をたたき合いながら、矢瀬は病室を後にするのだった。

「そう、それでいい。今はそのままだ」
何らかの手段を使って楯無と矢瀬の会話を盗聴していたウォズは、満足げに頷いた。
楯無と矢瀬の結論は現状維持。何か行動を起こすという訳ではなく、今まで通り翔の監視に留めるらしい。
ここで何か行動を制限されるようなら、対策を講じなければいけないところだった。
「さて、次の出来事は……ふむふむ」
手に持つ本をぺらぺらとめくり、今後の出来事を確認していくウォズ。
その途中。
「……なんだ、これは」
ページをめくったウォズの声が、少し硬くなった。

矢瀬を待たずに家路についていた浅葱。
「アンタも戻って良かったわ、モグワイ」
《ああ。今回は流石に焦ったな》
携帯に映る不細工なアバターは、人を小バカにしたように笑ってい

る。
「何笑ってんのよ。アンタも抵抗しなさいよ」
《おいおい、プロテクト破ってプログラム書き換えたのはそっちだろ？　無茶言うなよ》
「ったく」
モグワイの言い分はもっともだったため、浅葱は言い返さない。
そんな浅葱の背中に、『２０１９』と書かれた時計が吸い込まれていった。

アナザーゴースト編
方針転換

魔術師組が帰った後、俺にも退院の許可が下りた。特に荷物が無かった俺は、日が沈む直前に帰宅した。
「ただいま」
「先輩！」
「おかえり、翔君！」
俺が帰ると、みんな――――雪菜、クロ、アスナ、狂三、理子、ティナ、ヤミ、耀、桜、セイバー、セイバーオルタ、コッコロがリビングにそろっていた。
荷物を部屋に置き、戻ってきて落ち着く。
「みんな聞いてるかもしれないけど、今回のことで２週間の謹慎になった」
特に隠すことでもなかったので、普通に告げる。
すると六課組の雪菜とアスナが頷いた。
「はい。その話はもうみんなに」
「翔君も災難だったね……」
「まあ、な」
聞いた話によると、あの時の戦闘記録は楯無さんのＩＳに残っていた。それをブリーフィングで確認したらしい。何しろ監視カメラも停止していたのだ。その記録だけが当時の状況を知る手段になる。
当然、楯無さんや耀からは事前に俺がどのような状態になっていたのか、言葉では伝えられていたはずだ。
だが、実際に映像で見た衝撃は凄まじいものだっただろう。情け容赦のないハザードの攻撃は。
「一応聞いておきますけれど、もうあの姿にはならない、ということでよろしいんですの？」
「ああ。変身アイテムは六課が押収したし、手元にあっても使うつもりはないよ」

正直、ハザードの力は絶大だが、アレを使わなければいけないほど戦力がひっ迫しているわけではない。
制御アイテムが手に入れば話は別だけど、ハザードトリガーは六課の手にあり、一度暴走した俺に使用許可は下りないだろう。
「向こうに使われれば話は別だけど」
「謎の人物、ですか」
雪菜は深刻な顔で呟く。
「ああ。アイツが出てきて無理矢理使われれば……」
間違いなく抵抗できず、変身させられるだろう。
「ですが、怖がっているわけにはいきませんわ。こちらがおとなしくしていても、向こうが好き勝手動き回るだけですし」
狂三の言葉はもっともだ。こちらが抵抗をやめたとしても、向こうがおとなしくする理由にはならない。
「だよねぇ。攻めるとはいかなくても、撃退できるくらいには強くならないとだよねぇ」
理子も目をギラギラさせながら舌なめずりしている。ここにいない『獲物』を意識しているのだろう。
「……強く、か」
強くなる手段なんて、そんなものは簡単だ。だが、目的と手段は逆転させない。見誤ることはしたくない。
「……翔君、大丈夫？」
「ああ。大丈夫だ。何も変わらない」
アスナの言葉にそう返す。
「ん？　何？　何か心当たりがあるの？　何が変わらないの？」
まだ仕組みを知らない理子が聞いてくる。
「や、何でもない――」
「翔さん」
俺の言葉を狂三が遮る。
「ここはもう、話してしまったほうが良いのでは？　ここには事情を知っても問題の無い人しかいませんわ」
「……そう、だな」

この中で俺の詳しい事情を知らないのは理子、ティナ、ヤミの3人。この3人だったら、情報を共有して困ることはない。どこかに漏らされることも無いだろうし。ここにララがいたら控えていたな。
ちなみに、ミッション達成のガチャでこの家に来たアルトリア達は、俺の事情について理解している。
俺は説明した。
俺の出自、能力について。そして、話題に上がる謎の男が俺と同じ境遇である可能性が高いことを。
女の子の召還や、この世界が元の世界の創作物に似ているといった話は今回はやめておく。
「はへぇ～……」
「……なるほど」
「……？」
3者3様の反応をしていた。
理子とヤミは柔軟に受け止めてくれている。ティナは少し難しかったのか、ぽかんとしているが。
「え、つまり翔君はリアル異世界転生者？　チートで無双しちゃってる感じ!?」
「そうなるか……いや、死んだ覚えはないから転生とは言えないかもな。チート、はチートかもしれないけど、そんなに無双してる覚えはないな」
「理子の計画はボッコボコに潰されちゃったけどね？」
そういやそうだったな。
「どうやって能力を増やしていたのかと思えば、そう言った手段だったとは……本当にえっちぃ人ですね」
ヤミがゴミを見るような視線を向けてくる。
「そんなこと言われても、俺が望んで手に入れた能力じゃないからな」
「女の子とラブラブセックスしてチート能力生み放題って、控えめに言っても最強じゃない。というか最高じゃない？」
理子のエンジンがかかってきた。
「らぶらぶせっくす……お兄さんといちゃいちゃするって意味ですよ

ね」
「うんうん。ティナちゃんは流石に早いからね～。後５年くらいは」
　ティナが視線を向けて来た。え、もうしましたよね？　という視線だ。声には出さないが。本当に助かる。
「で？　そんな簡単に能力が増やせるなら、毎日とっかえひっかえすればあっという間に最強じゃない？」
「そんなに簡単に行くのかは分かんないけどな」
「でも実際、ちょー強かったよねぇ？　眷獣をあんなふうにぼこぼこにするなんてさ」
　否定できない。
　オーズのメダルが増えてもいいし、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクをセットで当ててもいい。
　仮面ライダーに絞らなくてもガンダムやゲッターなどのスーパーロボット、ほかの異能力でもＯＫだ。
　現に今も、悪魔の実の栽培を見送っている。
　だが、
「下手に広めると、この世界のパワーバランスを崩すことになるだろ」
　どちらかというと、俺が目をつけられている理由は、俺自身の強さよりも未知の能力を生み出せるところにあるんだと思う。
「それはそうだけどね。理子のスタンドだけでも全世界の人が持ったら、そりゃ大変だけどさぁ。アタシ達だけでもそういうので武装したほうがいいんじゃない？」
「みんなに共有できるような能力がない」
　ジオウの力でライダーの能力を貸し出せるようにはなったけど、対象は１人だけ。スタンドにしたって、俺の『矢』はすでに使い切ってしまっている。
「それ、『今は』って言葉が付くんじゃないの？」
「……理子さん？　何を」
　雪菜が警戒している。だが、俺は何となく読めて来た。
「だったらそういう能力が出るまでエッチすればいいじゃん」
「俺は能力のためにそう言う事は致しません」

「あー……頑固というかなんと言うか……」
　めんどくさいヤツ～、と言いたげな顔だ。
「翔」
　冷静な声が場に割り込んできた。オルタだ。
「お前の心意気は素晴らしいが、現状は正確に把握するべきだ。理想を並べるだけではどうにもならないことは、今回のことで貴様も理解出来たのではないか？」
　冷静な瞳が俺を射抜く。
「戦力の強化は必須だ。間違いなくな。取れる手段があるのなら取る必要がある」
「あれ～!?　王様凄く話が分かるじゃん！」
　オルタの発言に、理子は大喜びだ。
「そもそもさ。翔君が嫌なのって、能力を得るために義務的にするのが嫌だってことだよね？　理子、別にそんなつもりは無いよ？　する理由が１つ増えるってだけ。理子がしたいからっていうのが一番大きいかな？」
　そんなことを言いながら体をくねらせる。
「別に難しいこと考える必要は無いじゃん。したいからするって感じで。ま、理子は少し回数が増えちゃうかもしれないけどね？」
「心持ちはそれでいいだろう。翔もそれでいいな？」
「そう、だな……」
　理子とオルタに押されて俺は頷いた。
　能力のことを話した時点で、このことが頭をちらつくのは避けられない。だとすれば理子やオルタの言うように少し頭を空っぽにしてみるのがいいのかもしれない。
「他の者もそれでいいな。翔の意思を尊重し、計画的な能力の生産は行わない。だが戦力の強化は必須だ。後は『各々の行動に任せる』」
　その一言で、場の空気がぴりっとしたような気がした。
「ちなみにさ。誰か個人を強化できるアイテムが出たとして、それを優先的に使えるのは当然、その時に相手をした娘だよね？　や～、みんなゴメンね？　理子、どんどん強くなっちゃうかも」

その一言で、場の空気がさらにぴりついた。
「とりあえず、ご飯にしよっか？」
そう言うアスナの声も、何処か硬いような気がした。

オルタの宣言後、夕食になった。談笑しながら食事を楽しみ、各々の自由時間になる。
その間、俺はずっと感じていた。何か空気が違うという事を。原因ははっきりしている。オルタの宣言があったからだ。
「ねえ、翔。みんなどうしたのかな？」
と、夕食直前に家に来たララにも心配される始末だ。でも俺から説明出来ることはない。みんなの心情を推し量ることは出来ないから。
「ん～？　そうなんだ？」
ララも理解出来ていないようだ。ま、ララには事情は説明してないししょうがないか。
ちなみに今は俺の部屋にいる。夕食後の自由時間だが、この微妙な空気に耐え切れずに早々に部屋に引っ込んだのだ。
と、ここで思い出した。
「なあ、ララ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「ん？　なぁに？」
「ララって妹居るよな？」
「うん。いるよ？　それがどうかしたの？」
ここで何故知っているの？　みたいな話にはならない。だって王族だしね。正式に認められている王女様なんだから、ちょっと調べれば情報は出てくるし。

それは、その能力も。
「モモって娘、植物と話せるんだって？」
だからこういう話題を出しても不自然じゃない。
「うん！　モモはね、電脳空間に自分の植物園を持ってて――――」
ふんふん、と相槌を打つ俺。ララの口から出る言葉に引っかかることはない。モモについては原作通りと考えていいな。
「ちょっと育てたい植物があってさ。アドバイスをもらえないかなって」
手に入れてからずっと手元で腐らせていたアイテム、悪魔の実栽培キッド。能力の不要な広まりを考えて今まで手を出さないでいたが、少し準備くらいはしておいた方がいいだろう、と考えるようになった。
まあ未知の植物？だし、モモに聞いたところでわかるとは思えないんだけど。ダメで元々、聞くならダダだし。
「いいよ。電話する？」
「突然電話して大丈夫か？」
向こうにも都合があるだろうし、とも思ったが、あの姉妹ララのことが大好きだからな。突然の電話でも大いに喜ぶだろう。
ララはさっそく取り出したデダイヤルで通話を開始した。
《お久しぶりです、お姉様》
「モモ～、元気だった？」
《はい。お姉様もお変わりなく》
電話の向こうにいるモモの声が少し聞こえてくる。今回はビデオ通話ではなく音声のみの通話だ。
姉妹はしばし談笑を楽しんだ後、ララではなくモモが用件を尋ねる。
《それで、お姉様？　本日はどのようなご用件で？　何か私に御用があったからお電話されたのでは？》
「そうなんだよ！　よくわかったね～」
ララの場合、『便りの無いのは良い便り』とは違うんだろう。普通に連絡しなさそうだ。その辺りはペケが担当しているんだな。

そんなララがわざわざ連絡してきたというところに、モモは違和感を感じたんだ。
「実はね、モモにちょっとお願いがあって」
《私で力になれることがあれば、何なりと》
「ありがと！　それでね、翔がモモに植物について聞きたいことがあるんだって」
《翔……お姉さまの婚約者候補の方、ですよね？　……わかりました。今からでしょうか？》
「翔、どうする？」
ララがこちらを見てくる。
「じゃあ今からで」
「うん。今からだって」
《わかりました》
ララからデダイヤルを受け取り耳に当てる。
「電話代わりました。はじめまして、夜月　翔です」
《はじめまして、モモ・ベリア・デビルークです。お姉様がお世話になっております♪》
俺と話すモモはあからさまに余所行きの、猫を被った声色だった。
「や、お世話だなんてそんな――――」
してるかもしれない。
《そんなかしこまらなくても大丈夫ですよ。普段のようにお話いただければ》
「そうか？　それじゃあそうする」
許可をもらったことで口調を崩した。
《本日は植物について、何かご相談があるとか》
「そう……実は――――この島で品種改良された植物が手に入ってさ。せっかくだから育ててみようと思うんだけど」
そんな感じで話を始めたが、
《なるほど……それはどのような品種ですか？》
「品種？　品種……」
いきなり行き詰ってしまった。

分からん。悪魔の実の品種なんて。
《何か目でわかる特徴はありますか？　あれば写真を撮って送っていただけると。例えば、葉の写真とか》
「や、まだ種だからな……一応送るけど」
色々な角度から種を撮影し送信するが、
《う～ん……これだけですとお答えするのは難しいですね……物自体を送っていただければ、こちらで解析できるとは思いますが》
「それはちょっと……」
悪魔の実の効能について知っているのは俺だけ、とは言い切れない。そうでなくても輸送の最中に変な事故で紛失したら大変だ。デビルークに送ることはできないだろう。
《そうなると、アドバイスも難しいですね……》
「だよな……」
こちらもそこまで期待していたわけではない。運が良ければ、程度に考えていたことだ。
「申し訳ない、急に変な頼み事しちゃって」
《いえいえ、お気になさらず。こちらこそお役に立てず、申し訳ありません。もし私がそちらに行くようなことがあれば、その時は改めてお話を聞かせて下さい》
「計画してるのか？」
《――いえまさか。自分勝手に出歩けるような身分ではありませんから》
「……そっか。じゃあ、その時にはよろしくな」
俺はそう言ってララに電話を返した。
モモの返答は自然だった。
俺が気が付けたのは、あらかじめそうだろうと予想――ではなく確信していたからだ。あの2人がこのままおとなしく自分の国にいる訳がないという事を。
こりゃあ、色々と計画してそうだな。
楽しそうに妹と会話するララを見ながら、そんなことを思うのだった。

夜月翔のハーレムな謹慎①（理子、メア）

謹慎が始まって数日経過した。
つまり、あのオルタの宣言があってから数日が経過したことになる。
その日の夜にいきなりみんなが押し寄せてくる、という事はなかった。原因は寝る直前までララが部屋にいたって事と、事件が終わってすぐだったからみんな疲れていたからだろう。
やる気満々だった理子も、ララの目の前では流石に控えたんだ。
だが事件の残り香も無くなり、日常が帰ってくれば『すること』をすることになる。
「なんか、前にもこんなことあった気がするな」
「別にいいじゃん？　こういうことは何度あってもいいでしょ？　んっ」
俺と理子はお互い絡み合いながら、お互いの服の中をまさぐっていた。
「でもこれ、理子が不利すぎ、っ、ない？」
「そうかもな」
お互い正面を向いて、服の中に滑り込んでいるのはお互いの上半身だけだ。理子のたわわなおっぱいを揉みしだき、時折、硬くなりつつある突起を指ではじく。
対する理子は俺の上半身を撫でているだけだ。別に俺に対抗する必要なんてないんだけどな。
「この機会だし、翔君のここ開発しちゃう？　あん!?　ちょっと！　うくぅ!?」
「ここの事だろ？」
理子が俺の乳首に指を這わせてきたので、俺も弾くだけだった突起を摘まんでみる。
「あ～～……やば、これだけでイけそう……っ」
背中に手を回し、おでこを俺の胸にぐりぐりと押しつけてくる理子。表情は分からないが、真っ赤になっている耳を見れば、絶頂する

準備をしているのがわかる。
「このままするか？」
「う、ん。このまま、いっかい、シて……っ、あ、ちゅーも……っ」
顔を上げた理子が、うるんだ瞳を閉じる。
唇を合わせる。２人の唾液が混ざり合い、
ますます硬くなる２つの突起を摘まみ、ひっかき、圧迫し、軽くつねる。
「〜〜〜っっっっ!!　ぅぅっ!!」
繋がれた唇からバニラの香りの吐息が断続的に流れ込んできた。
それだけでなく、理子の舌が俺の口内に侵入し、俺の舌と絡み合う。
ちゅぱちゅぱと吸い付く唇から、吐息と共に声にならない艶声が聞こえてくる。
しばらくすると理子の方から唇を離した。
「はぁ〜……寝起きでするのってちょっと疲れるかも……」
脱力した様子の理子。
「大丈夫か？　疲れるなら――――」
「え？　終わってもいいの？」
「いや、それは……」
「ひひひ、だよねぇ？　だって、こんなに――――」
理子の手が俺の股間に伸びた。
「カッチカチだもんねぇ？」
理子は布団の中でもぞもぞと動く。
「腰上げて？」
「ああ」
腰を浮かせると俺の衣服が取り払われた。布団の中で俺のイチモツが反り返った。その上に理子が乗っかる。
布団から理子が顔を出した。
「じゃ、挿れるね？」
「ああ」
理子の指が俺のイチモツに触れ、位置を調節する。
そして、

「あああああぁぁぁぁぁっ～～……!!」
「う、ふぅ……!!」
にゅるりと俺の肉棒が暖かな肉壺に包まれた。
一度イッた理子の体はこの肉棒を待ちわびていたようで、心地よい抵抗感と共に、最奥まで一気に飲み込んできた。コリっとした部分にわずかにめり込む。相変わらずのジャストフィットだ。ピストンを開始すればこの奥にある子宮をぷちっと潰すことが出来る。
俺は理子の背中に腕を回す。
跨っている理子がぷるぷると震えていた。
「ちょ、っと、待ってね？　軽くイッてる、から……！」
落ち着くのを待つこと３０秒ほど。
「ホント、翔君のちんちんってエグくない？　挿れただけで甘イキするって普通じゃないよ？」
「普通ってのがどんなか知らないけど」
「いやいや、ヤってる娘と話すとね。そんな挿れただけで～なんて全然聞かないよ」
この時のヤってる娘とは、俺の知り合いではなく理子の知り合いのことを指している。
「女子でもそういう話するんだな」
「そりゃするでしょ。やってることやってるんだったら」
まあ、そうだよな。
「……ちなみに、この家の娘もそういう話してんの？」
「ん？　ん～、秘密～。翔君のご想像にお任せします」
ちょっと好奇心で聞いてみるが、理子は答えてくれなかった。
「それで話は戻るけどさ、他の娘とエッチしている時も挿れただけで行かせちゃうことってあるの？」
「さ、さあ……？」
ここまでジャストフィットなのは『適切なサイズの息子』の能力があるからだとは思うけど。
まあでも、この能力にはすごく感謝してる。これのおかげでどの娘としても一定以上の満足をしてくれるんだから。

「さあって、他の娘ともいっぱいエッチしてるくせに～。じゃあ、こんなに相性がいいのって理子だけって事？」
俺は返答の代わりに不意打ちで理子の腰を掴み、俺の腰を突き上げる。甘くキスするだけだったペニスが、激しく子宮を殴打した。
「いっ――――!?」
変形した子宮を叱りつけるようにぐりぐりと亀頭を擦りつける。
「――――くぅぅぅ……っ!!」
膣内がきゅうきゅうと締まり、理子が絶頂に達したことを伝えてくる。
「……卑怯じゃん。そうやってごまかすの」
「理子だってごまかしただろ。みんなでそういう話をするかどうか。それに他の人がどんな感じなのかは、その人のプライバシーがある」
「もっともらしく言っちゃって」
理子は絶頂で緩んだ顔で悪戯っぽく笑う。
「じゃ、私達は私達で気持ちよくなっちゃおっか？」
「それが良い」
こっちも余計な詮索がされなくて都合が言い。
「他の娘の様子が知りたいなら、誰かと一緒にすればいいよね？」
「……それはまあ、その時に」
余計な会話はここで終了。ここからは性欲のままに腰を振るだけだ。
「はっ、はっ、はっ」
俺の上に跨る理子が必死に腰を振る。自分ばかり気持ちよくなってしまって申し訳ないと思っているのかもしれないが、明らかにオーバーペースだ。途中で何度も体を震わせながら、それでも俺のペニスへの奉仕はやめない。
「ちゅぷ、ちゅろ、じゅるりゅ、ちゅ……!!」
背中へ腕を回し、貪るようなキスの雨が降り注ぐ。その吐息には快楽が混じり、ともすれば苦しいんでいるようにも聞こえる。
俺と理子の結合部は理子から噴き出した液体でべちょべちょになっていた。

「理子、俺、そろそろ……！」
「うんっ、出してっ！　理子のナカに全部……!!」
言われるがまま、理子の最奥の先の小部屋に白いものをぶちまける。
びゅびゅるっ！　どびゅどぴゅ！　びゅるぐぐるるっ!!
「――っ!?!?!　ッッッッッっ!!!」
理子は艶声すら上げることが出来ずに、ただただ俺の精を飲み込んでいた。
今回は行為が終わっても、誰かが突入してくることはなかった。

今回の行為で入手したアイテム
メダルセット（昆虫系）
仮面ライダーオーズに変身するためのアイテムである、コアメダルの詰め合わせセット。
このセットにはクワガタ、カマキリ、バッタのメダルが入っている。
理子のコメント
「えええっ!?　虫ぃ？　昆虫ぅ？　う～ん、理子はあんまり昆虫は好きじゃないかなぁ？　でも翔君が強くなれたならＯＫです！……強くなれた？」
「ああ。これはかなり」

「あ、翔君、ヤミちゃん、おはよ～――……ん？　くんくん……んん？」

学校に着くと、挨拶もそこそこにメアが鼻を鳴らして近寄ってきた。
「……なんだよ」
「や、ちょっとね……この匂い……」
メアが耳を寄せて来た。
「朝からシたの？」
……なんでわかるんだよ。いやまあ、匂いなんだろうけど。確かにシャワーとかは浴びる時間はなかったけど！
メアは小声だったが、ヤミの耳には届いていたらしい。
冷たい視線を向けたかと思えば、黙って自分の席に向かっていった。
「じゃ、行こっか、翔君――もちろん、拒否権なんてないからね？」
メアに引っ張られる形で、俺は教室を連れ出された。
向かった先は階段。それを登り、屋上手前のドアまで。
「んふふ……」
メアが楽しそうにズボンを下ろしてくる。
ベルトを外し、パンツまで一気に下ろされた。外気に触れる俺の息子だが、
「あれ？　勃ってないね？」
「そりゃな……」
「男子高校生って、セックスできると思ったらすぐに勃起するんじゃないの？」
「お前は男子高校生を何だと思ってるんだ」
……正直、間違っていないようにも思うが。
「翔君はみんなとセックスしすぎて慣れちゃったんじゃない？」
「そんなことは……」
「ない？」
「……とも、言えないかもしれない」
でも慣れたっていうのは、性的なことに対してどっしり構えられるようになったとかそう言う事であって！
「はいはい。ま、私のやることは変わんないけどね～」

メアは俺の前に跪き、
「はむ。じゅるる、くぽ、あぅ、じゅずじゅるぅぅ」
まだ力のない俺の息子を咥えこみ、しゃぶり始めた。とても素直な俺の息子はすぐに硬くなり始める。
「じゅるるろ、んふ、すーぐ硬くなるじゃん。やっぱり口だけだよねぇ？」
「刺激されたらそうなるだろ」
「そう？　アタシは自分でしてもそんなに良くならないケド？」
半立ちした肉棒を、自分の唾液をローションにして扱くメア。その手に育てられた肉棒が完全な形になった。
「よし、それじゃあ」
「おい、何をするつもりだよ」
何故かメアのおさげが持ち上がる。先端の形状が変わり、２０センチほどの長さの円柱になった。
「ん～、偶には私が主導権を握ってみたくって？」
円柱が俺のペニスに迫ってくる。
「男の人がオナニーする時に使うモノ、オナホールっていうんでしょ？」
「お、お前……!?」
その言葉に俺は円柱を凝視する。メアの髪の毛と同じ赤い色のブツ。俺もオナホールの現物は見たことが無いが、これがそうなんだろうか。
「な、何で？　主導権って……？」
「だって翔君にずぷってされると、もうどうしようもなくなっちゃうんだもん。たまには私がひいひい言わせたいんだよ」
「や、だからって――――うっ！」
円柱が俺のペニスとキスした。変身は人肌も再現しているらしい。それどころかその『入り口』には透明の粘液が漏れ出していた。
「じゃ、行くよ？　――――えい！」
張り出したカリも、抵抗なく飲み込まれた。血管の浮いた竿に内部のヒダが密着する。血液の流れを助けるように脈動するオナホ。す

ぐに最奥まで呑み込まれた。
「うぁ……!?」
「アハ、いい表情……素敵っ」
メアもどこかトリップしたような表情になっている。
ぐにぐにと動かされるとぬちぬちという卑猥な粘着音が聞こえてくる。ぴったりと密着した俺のペニスが襞にいじめられる。そのたびに俺の口から堪えられない声が漏れた。
その様子にメアが面白そうに目を細めた。
「このオナホ、誰のモデルにしてると思う？」
「お前、だろ？」
「当ったり～」
他の人のだって言われても反応に困っていたところだ。
「一回変身（トランス）で私のナカを型取りしてね。それを逆に再現して……あ、出てる愛液もその部分を再現してね――――」
「そういう生々しい話はいいから！」
とにかくこのオナホはメアが作った特注品らしい。いったい何を研究しているんだとツッコミを入れたくもなるが――――ツッコミを入れる余裕はない。
こぷこぷというかすかな音を立てながら、血管が浮き出た竿が赤い筒に出たり入ったりしている。
速度はそれほどでもないが、メアが俺の反応を窺って締め付けを強くしたり少し早さを変えたりする。
戦闘兵器として与えられたセンスのようなモノを応用しているのかもしれない。それとも、雄の性を搾り取るための凶器を与えられたことが原因か。
ともかく自分でペースを握ったメアは、それはそれは楽しそうに、俺から精を搾り取ろうとしていた。
しかもメアが持っているのは、自分のアソコをモデルにしていると言っても変身によって作られたものだ。
「へぇ～……この先端の張り出したところがイイんだ？　じゃあ、きゅ～」

「うぐっ!?」
言うや否やカリ首の根元を中心に、肉ビダがうねり始める。動かしていないのに動かしているような錯覚すら覚える。
通常の人体ではありえない搾精に俺は早くも、
「メ、メアそろそろ……!」
「え、もう？　ん、髪の毛に出されるとちょっと困るかな……よっと」
「うっ!?」
ひときわ締め付けがきつくなったと思ったら、オナホが一気に引き抜かれた。根元から絞り上げるように、引っかかったカリ首も強引に、腰が持っていかれるのではないかと主程の快楽が背中を駆け巡る。
ペニスが何度も痙攣し、睾丸から本日2度目の精液がせり上がってくる。もはや発射を止めることは出来そうにない。
「はむ」
ぶちまける直前、メアが亀頭を咥える。さらに鈴口を下の先端で突いてきた。そんなことをされなくても結果は変わらないかもしれないが、さらに快感が追加されたことで腰から下がなくなったような感覚に陥る。
そしてそのまま、
びゅごるっ、ごびゅびゅぶ、ぶりゅりゅ……っ!!
「んんっ!?　んぐぅ、ごくっ」
メアは一滴もこぼさずに飲み干していく。根元に残っている物も吸い出された。
「ふう、ご馳走様♪」
メアが自分の上唇を舌でなめとりながら微笑んだ。
「じゃ、次は私にも――」
その時だった。キーン、コーン、カーン、コーンとチャイムが鳴った。朝礼が始まる合図だ。
「まずっ……!　戻るぞ、メア!」
「あ～、自分だけ満足して終わりにするんだ～?」
メアは不満そうに口を尖らせるが、

「那月先生に叱られるぞ」
「……っち、あの女か。そうだよね～、那月先生、怒らせると怖いもんね～」
メアが何やら呟いていた気がするが、焦る俺の耳には届いていなかった。
急いで戻った俺達だったが、チャイムが鳴ったという事は時間切れという事だ。当然のように那月先生には怒られるのだった。

今回の行為で入手したアイテム
ファイズギア
ファイズドライバー、ファイズフォン、ファイズポインター、ファイズショットと、それを格納するアタッシュケースのセット。
メアのコメント
「アタッシュケースに入った……携帯電話？　わっ、これってガラケーって奴じゃん！
今どきこんなもの出てくるんだね～……どうしたの？　なんかニヤけてるけど？」
「……なんでもない、よ？　……何も知らないメアには、このロマンは伝わらないよな」
「???」

夜月翔のハーレムな謹慎②　（メア）

「終わった～」
お昼過ぎ。謹慎期間である俺は足早に学校を後にしていた。
残っていてもやることがないし、そもそも今やるべきことは家でおとなしくしていることだ。
まあ、『おとなしくしている』にしては朝っぱらから理子としたりメアとしたり、充実した性活になってしまっているけど、プライベートだからね！
そんなアホなことを考えていた俺だったが、特に何ごともなく家に辿り着くことが出来た。別に事件を期待していたわけじゃないけど一安心だ。
「ただいま～」
と言っても家には誰もいない。学校がある人はそっちに行ってるし、アルトリア達もずっと家にいるのは暇だという事で出かけることが多いらしい。子供たちの練習にも付き合っているのだとか。
という訳で珍しく俺は1人の時間を楽しむことになっていた。
そんな俺が真っ先に行う事と言えば、

「変身！」
《ＣＯＭＰＬＥＴＥ》
俺は今、仮面ライダーのアイテムを格納するダイオラマ球の中にいた。今朝のメアとの行為で手に入れた能力、その試運転だ。
……正直言って、コイツの試運転のことを考えると、今日の授業が手につかなかった。
手に持った折り畳み式の携帯電話をベルトにセットする。するとベルト本体から発生した赤い光が俺の全身を走り、姿が変わった。仮面ライダーファイズだ。
ちなみに問題なく変身出来ているが、付属の説明書によれば別に『アレ』じゃなくても変身できると記載されていた。じゃないとホン

トの玩具になっちゃうからな。
それはそうとして、
「ウヘヘヘヘ……!!」
備え付けの鏡に映った自分の姿を見て、変な声が出てしまう。
「翔、控えめに言って気持ち悪いぞ」
「アア。他ノ奴ラニハ見セラレネェナ……」
「うるさいな」
何をするのかと俺を見ていたレプリカと黒影（ダークシャドウ）が辛辣なことを言ってくるが、気にせずガジェット弄りを再開する。
「これは『試運転』ではなく、『遊んでいる』だけでは？」
レプリカのぼやきに俺は何も返さない。
やっぱり、本物のファイズギアは凄い。しかもしっかりとアタッシュケース付き。ＣＳＭにも負けないぜ。変身出来るからこっちの方がはるかに上か。
俺は腰にマウントされたファイズポインターを取り外し、ミッションメモリーを挿入した。
《ＲＥＡＤＹ》
「ふひ……っ」
「イチイチ変ナ声出スナ」
黒影（ダークシャドウ）も無視。
ポインターを足に取りつけ、エンターボタンを押す。
《ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ》
すると電子音と共にベルトからフォトンブラッドの赤いエネルギーが右足へと送り込まれる。
狙いはダイオラマ球に備え付けられている練習用のマネキン。
ジャンプして空中で一回転。足を揃えた状態からポインティングマーカーを発射して目標をロックオンする。
キックの体勢に移行。マーカーがドリルの様に相手に突き刺さり

「よっと……っ」
マネキンを貫いた俺は反対側に着地する。振り返ると浮かび上が

る『φ』のマーク。ファイズの必殺キック、『クリムゾンスマッシュ』だ。
「うまく出来たもんだ」
他のライダーと比べてただ蹴るだけじゃない２段階の工程があるキックだ。もうちょっと練習しておこう。
今まで言ってこなかったけど、新しいアイテムを入手した時はここで練習していた。そう、だからファイズのガジェットもしっかりと練習しておかなければいけないのだ。たとえウォッチが無くて実戦の予定が無かったとしても……！
「ここだけ見ると、しっかりと練習しているように見えるな」
「イヤ、アレハ遊ンデルダロ」
相棒２人のぼやきは、変身によって強化された聴覚がしっかりと捉えていた。もちろん反論せずに訓練を続けたけど。

ライダーアイテムで一通り遊ん――――訓練した俺はリビングに戻ってきていた。
「後はこれが、こっちでも使えればな……」
ダイオラマ球で変身出来ても実戦では使えない。ファイズウォッチがあれば別だが、何処にあるのかなんて皆目見当つかないからな。
ウォッチが出てくるってことは、アナザーライダーが出てくる可能性があるわけだし。まあ、俺がガチャで引くって可能性もあるか。平成ライダーは１９作品もあるんだし、その可能性は十分にある……のかな？　このアイテムは他のとは意味合いが違う気もする。
機会が来れば分かることか。
「ふむ。一通り訓練を見ていたが、先ほどの姿――――ファイズだった

か。あのライダーを実戦で使ったとしても、戦力的にはそこまで変化は無いと思うが？　ファイズでなければ出来ないことがある訳でも無いだろう」
　確かにそうだけど！　ファイズアクセルもないから高速移動も出来ないし、今では高速移動出来るライダーはたくさんいるから、あえて１０秒しか加速できないアクセルを使う意味は少ないけど！　でもそうじゃないんだよ！
　レプリカにそう力説する。
「ふむ。それならば私から言う事はない。翔のやりたいようにすると良い」
　こういう所、レプリカは物分かりが良いな。
「あ、そうだ。音声通話はこっちに来るようにしておいて」
「……わかった」
　俺はファイズフォンに電話が転送されるように設定した。それにしてもどうしたんだレプリカ。今ちょっとだけ声のトーンが下がったような気がしたんだが？
「よし、それじゃあ晩御飯の準備するか」
　謹慎期間中は俺が引き受けた役割だ。ずっと家にいるしな。
　そう思ってキッチンに向かおうとしたところで、
　ピンポーン
「ん？」
　誰か来た？
　この家の住人ならわざわざチャイムは鳴らさないだろうし、お客さんか？
「はいはい、どちら様ですかー」
　カメラで相手を確認する。画面の中でクラスメイトの赤いおさげが揺れた。
「メ、メア……!?」
　何で!?
　急いで玄関に行き、扉を開ける。
「暑いね～、入って良い？」

「や、いいけど。何しに来たんだよ？」
「え？　そんなの決まってるじゃん」
話ながらリビングに向かう。
「朝、翔君だけ満足して終わっちゃったでしょ？　だから今度は私を満足させてもらおうと思って」
つまりセックスしようと言っているのだ。
「お前な……だからって家まで押しかけてくるか？」
「え？　普通は家とかホテルでするんじゃないの？　学校の方が良かった？」
「……それもそうだな」
当然のことを指摘されて何の反論も出来ない。
どんなに人気の無いところでも、学校ではバレるリスクがある。いや、それはそれでスリルがあって刺激になるのかもしれないけど。
「でしょ？　じゃ、さっそく始めよか」
メアがソファーに座り、スカートをたくし上げた。
「っ!?　お、お前……」
スカートの奥には下腹部を守る三角布が――――なかった。毛が1本も生えていない綺麗なアソコが、そのまま俺の目に飛び込んできた。すでにしっとりと濡れており、メアの言う通り何時でも始められる状態になっている。
「変身か？」
メアの変身は自らの衣服を変化させることも出来るはずだ。それを使ってこの場で下着を消したのかを思ったのだ。すでに濡れているのは……ヤる気満々ですでに興奮しているのかな？
メアは首を横に振ってこたえた。
「違うよ？　学校からここまでこれで来たの」
「は!?」
学校からここまで、電車にも乗らないといけないと思うんだけど!?
階段とか、エスカレーターとか！
「うん。プチ露出プレイって感じだよね。もうちょっとドキドキすると思ったんだけどね。やっぱり1人だと盛り上がれないみたい」

あっけらかんとした様子のメア。
「それじゃあ、少し準備するか」
「え？」
俺はメアを一度立たせソファーに座る。足を広げてその間にメアを座らせた。後ろから抱きつく形になる。
「メア」
「え？　ああ、うん……んっ」
俺達は唇を重ねた。
「別に前戯なんていらないよ？　おちんちん入れられたら気持ちよくなるんだし」
「まあまあ、俺がしたいからするんだ」
「ま、翔君がそういうなら……」
右手を下腹部に、左手を上半身の脹らみに。右手にはメアの愛液を塗りたくり、割れ目をゆっくりと擦る。左手は半立ちになっていた乳首を転がし、血液を集めて硬くさせていく。
「ふ、ぅ……っ」
前戯がいらないという言葉は本当だったようで、弄り始めてからすぐに甘い声を漏らし始めるメア。だがこれは単純に感じる為ではなく、気分を盛り上げる目的もあった。
つぷっ
「っ、ぁ……っ」
ワレメを擦るだけだった指を内部に侵入させた。奥ではなく手前の方で指を折り曲げる。ざらざらとした部分を優しく擦った。
「あっ、ぁ、翔君、そこ、もっとっ、もっと……っ」
だが指による刺激では足りないのだろう。メアは腰をへこへこと上下させ、俺の指をもっと奥へと飲み込もうとしていた。
俺は胸を弄る手を止め、お腹に回す。腰がそれ以上前に行かないように、今の状態をキープさせるように。
「やば、やっぱり、人にされるの気持ちいぃ……」
「そんなに違うのか？」
「ぁっ、そ、だね。自分だと弄っても、全然……っ」

「ふーん」
俺には分からない感覚だ。何人もの女性と関係を持った俺だが、全然自分1人でも出来ると思うぞ。
「え、翔君、この家に住んでるのに、自分ですることなんてあるの？」
「……ま、自分でするのと誰かとするのは違うから。実際、メアがそうだろ？」
実際のところ、ここに住んでいる男は俺だけで、しかも行為をしている娘がほとんどのこの環境。みんな外ではしないような薄着だったり、ラフな格好だったりをしているせいで、ふとした動作でむらっとすることは（多々）あるのだ。
始めのころは不自然に前かがみになることもあったが、今では自然に隠すことが出来るようになった。
隠すことが出来るようになっただけで押さえることが出来るようになった訳じゃないから処理はする必要がある。
でも毎晩毎晩誰かを呼びつけてセックスっていうのは、ね……
「あは、贅沢だね～。というか、今さら常識人ぶってもしょうがないじゃん。たくさんしたほうが翔君も便利なんだし」
「……そうかもな」
「あ、あ、あ……っ」
その辺りについては考えを改めないといけないと思いつつ、入り口で折り曲げていた指をまっすぐにして、ゆっくりと膣内に沈めていく。
メアの腰が再びカクカク動きそうになり、それを俺が押し止める。メアのおまんこは差し込まれた俺の指を締め付ける。何度も挿送するが少し物足りなさそうだ。太さも長さも不満を覚えているのがわかる。
そろそろいいかな。
「メア」
「うん」
メアに立ってもらい、俺も立つ。そしてズボンを下ろした。
「あは、もうガッチガチじゃん」

「メアがエロい反応するからだろ」
言い合いながら体勢を整える。
「じゃ、いくぞ」
「手加減とかしなくていいからね。翔君のしたい様に動いて」
メアの秘部に肉棒を添え、後は腰を突き出すだけ。
その時だった。
――ガチャ、と玄関の開く音が聞こえた。
「っ!?」
「んあっ!?」
その音に俺の体がビクンと跳ねる。その動きで入り口に添えられていたチンポが滑り、亀頭がメアの下の口を舐めあげた。
その刺激にメアが腰をヒクつかせるが、俺はそれにかまっている余裕がなかった。
だ、誰か帰ってきたのか？　や、そうとしか考えられないだろ！
そうじゃなかったら泥棒だし。
足音が近づいてくる。顔を出したのは、
「お兄ちゃん、いる――……」
「お兄さん、いますか――……」
「主様、お帰りですか――……」
クロ、ティナ、コッコロの3人だった。
2人の視線は俺へ。メアの服の中に手を差し込んでいる俺へと向けられていた。
「2人共――ＧＯ！」
「はいっ」
クロの号令でティナとコッコロが突撃してきた。
素早いのはティナだ。障害物を乗り越えた勢いでメアに飛び膝蹴りを繰り出す。久しく見ていなかったティナの機敏な動きだ。
「わわっ!?」
慌ててメアが回避する。
「主様こちらへ！」
その隙にコッコロが割り込み、メアに向かって『通せんぼ』のポー

ズを取った。
　メアはティナの攻撃を回避していつも料理を並べているテーブルに着地していた。
「まったく、油断も隙も無いわね！」
　クロは両手を軽く開いてメアを睨んでいた。あの構え、いつでも武器を投影できるようにしてるな。
「人がエッチしてるの邪魔するのは良くないと思うよ？」
「人の家にまで上がりこんでくるドロボウ猫に言われたくないわよ！」
「え？　じゃあ、私の家に誘ってもいいの？」
「良いわけないでしょ!!」
　クロとメアの言い争いを聞きながら、俺はズボンを履いていた。この空気でいつまでも下腹部を露出していたくはなかった。
「お兄ちゃん」
「はい」
　クロがこちらに振り返った。
「お兄ちゃんが誰とするのかはお兄ちゃんの自由だから口を挟まないけど……私達は焦ってます」
　私達っていうのはクロを含めた小さい娘達だろう。
「オルタの宣言があってみんな積極的になるはずなのに、お兄ちゃんがロリコンじゃないから私達が置き去りにされるかもしれないでしょ？」
「そりゃあ……」
　俺は頷いた。
　や、ロリコンは『自分はロリコンじゃない！』っていうのかもしれないけどさ。少なくとも俺はクロやティナをかわいいなと思う事はあっても、性的興奮を覚えるってわけじゃない。
　アインハルトも綺凛も中学生なわけだけど、その辺りの線引きは俺の感覚というか……
　そもそも論でいえば、クロの年代の娘が性行為をするべきじゃないし……

「え、でも翔君、前科あるでしょ？」
「そ、それは……そういう空気があったから……」
「うわー、厳しい言い訳だね～」
あのメアが苦笑いして言った。
確かにしたことはあるけど、目の前であんな所やこんなところを露出してあんあん言われたら、こっちだって変な気分になるだろ！
「それって結局、エッチだと思ったらその気になるってことじゃない？」
そうとも言う。でもそういうもんだ。男子高校生なんだから。
「開き直りが清々しい……あ」
メアが何か妙案を思いついた。
「じゃあクロちゃん、ちょっと交渉しない？」
「交渉？」
「うん。今からみんながセックスできるように、翔君を興奮させるから、私が翔君とセックスするのも認めて欲しいんだよ」
「え」
何やら話が進み始めた。
「……どうやって興奮させるっていうのよ。言っておくけど、アンタのおこぼれにあずかるなんてまっぴらごめんだからね」
「クロちゃんならそう言うと思ったよ。だからね――――私がしてあげる」
ニヤリと笑うメア。その背後ではおさげが怪しく蠢いていた。

夜月翔のハーレムな謹慎③（コッコロ、ティナ、クロ）

『だからね――私がしてあげる』
メアが楽しそうに言ったその言葉、一体何が起こるのかと身構えていた俺は――
「いったい何が起きてるんだ？」
今度は首を傾げていた。
目の前のソファー――先ほど俺とメアが行為をいたそうとしていたソファーに今度はクロ、ティナ、コッコロが３人並んで座っていた。それも全員が目を閉じている。
寝ている、訳ではないのか？　でも……
「んっ、は、あぁ……っ」
「んふっ、ぁ、ひ、ぁ……っ」
「ぇぅ、はぅ、ぁあ……っ」
この悩ましい吐息は一体……？　顔も赤くなってる感じがするし。原因は何となくわかるけど。
「メア、何やってんだ、お前」
「うん。これはね」
メアは自分のおさげを持ち上げた。そのおさげから髪の毛が３本、みんなのおでこにそれぞれ接続されていた。
「みんなにはちょっと眠ってもらって、精神世界に行ってもらってるんだ。そこで色々としてるって訳」
「色々？」
「そう、色々」
その言葉だけで一体どんなコトが行われているのか察してしまう。
「感覚は共有されてるから、ね？」
「『ね？』じゃないだろ」
「これで準備万端になるって事だね」
「そうなんだな」

精神世界とやらで何が起きているのかは分からないが、メアは自信たっぷりに言うが、
「で、俺の方の準備はどうするんだ？」
悩ましい気な吐息が絶え間なく吐き出されているが、これだけ見れば風邪をひいているようにも見える。そう思うと、それだけでは興奮はしない。
まさかこの状態のみんなの服をはぎ取って裸体を鑑賞しろとでも？
「大丈夫、これから翔君も精神世界に送っちゃうから」
「は？　精神世界でするってことか？」
「違うよ。精神世界でえっちなことされてるみんなを見て、翔君のアレがおっきくなったら現実世界に戻すから。そうしたらセックスできるでしょ？」
なるほど。それなら『自分の痴態で俺を興奮させた』ってことになるのか。
「そう言う事。それじゃあさっそく、いっきまーす！」
その言葉とともに、メアの髪の毛が俺に接続された。
そう言えば、順番とかどうなってるんだろうか。その辺りの細かい話は全然してないな。
そう思いながら、俺の意識は精神世界へと飛ばされていった。

コッコロの精神世界。
「ここは……？」
コッコロは気が付くと深い霧に閉ざされた森の中にいた。辺りを見回していると、頭にメアの声が響いてきた。

（はい。コッコロちゃんは森の奥まで頑張って進んでね～。奥まで行けば、ご褒美があるからね）
「よくわかりませんが、どうやら進まなければいけないようですね」
と、歩き始めたのだが、
「っく、これは!?」
歩き始めてすぐに襲い掛かってくる動く植物。コッコロの腕よりも太いツタを振り回し、コッコロを捕まえようとしてくる。
「精霊よッ!!」
慌てて迎撃しようとするが、いつも自分を守ってくれる精霊はうんともすんとも言わない。あっという間に四肢を絡めとられてしまう。
「は、放してください、はぷっ!?」
植物に言葉は通じない。
暴れるコッコロに黄色い煙のようなモノが吹きつけられた。それを吸い込んでしまったコッコロから暴れる力がなくなる。
（メア、これは？）
（実在する植物だよ。魔物の一種だね。こうやって相手を弱らせて、その人の魔力を吸収するの。ここは精神世界だからそういうことはしないけど、代わりに――――）
「や、やめてください……っ」
もはやコッコロに出来る抵抗は通じない言葉を投げかけるだけ。服の中に侵入するツタ。服の上からは全く分からない年相応の膨らみを無遠慮にまさぐる。
「そ、そこは、ひうっ!? 」
ツタはねとねととした粘液を纏っている。服を汚し、それだけではなく
「ぁ、ふ、服、溶けて……っ」
着ていた服が布切れになってしまい、甘く蕩けかけたコッコロの頬に朱が指す。
（ふ、服だけを溶かす粘液……）
（実際はそんなことないよ。精神世界だから）
綺麗な桜色の蕾が体に巻き付くツタに圧迫され、転がされる。その

たびにコッコロは慣れない感覚に襲われる。
　これを味わったのは少し前、翔に『マッサージ』と称した行為をした時だけだった。
　ツタが絡みつくのは上半身だけではない。下半身に巻き付いたツタが足を開かせ、股間を何度も行ったり来たりする。
　粘液がだんだんと衣服を溶かし、最後には下着も溶かしきる。じかに伝わる敏感な部分への刺激は背骨を駆け巡り、幼いコッコロの脳に新しい感覚を刷り込んでいく。
「ぁ、あ、なに、これぇ……っ」
（ずいぶんと的確に責めるな）
（実際、自然の植物はこんなに的確に弱点は責めないよね。人の体の構造なんて知らないんだし）
「あ、ぁ、まっ、て、でちゃう――――ぁ」
　気の抜けたような声と共に、コッコロの体は痙攣した。股を擦っていたツタが透明な液体でちょろちょろと漏れる。
（あ～、イっちゃったね～……お、でもこっちは良さそう）
（……まあな）
「も、もうやめて、くだいさいまし。あたま、ふわふわして、おかしい……っ、メア様もう、わたしくし……っ」
（はいは～い。もう翔君も準備万端みたいだから、戻ってこようね）
「はぇ？」
　メアからの返答があるとは思っていなかったコッコロは、涎を垂らした顔でマヌケな声を出してしまう。
　次の瞬間、コッコロの意識は現実世界に引き戻された。

「あ、え？　主、様？」
「……お、おはよう」
「わたくし、は……？」
　コッコロが目を覚ました。
「ほら、翔君、準備万端なんだから」
　うるさい、という反論も出来ないな。こんなに硬くなった股間を指でつつかれてる状態では。
　でもコッコロはそんな俺の状態に気が付いていないらしい。精神世界から戻ってきたばかりで夢うつつといった状態だ。
　でも向こうで受けた刺激はそのまま現実の世界にも反映されている。
　例えば植物のツタに目に見えるほどの愛液を漏らしていたアソコは、同じ量の液体をソファーに噴出していた。
「あ、そ、その、わたくし……！」
　それを目にしたコッコロは慌てて自分の下腹部を隠した。漏らしてしまったと勘違いしているのかもしれない。
「じゃあコッコロちゃん、汚れちゃったし脱ぎ脱ぎしましょうねぇ～」
「あ」
　メアが有無を言わさずコッコロの服を脱がせた。ぐしょぐしょに濡れた下着とスカートが取り払われ、コッコロも真っ白な下腹部が晒されてしまった。
「わ、わたくし、森の奥にはたどり着けず……」
「ああ、そうなんだけどね……」
　俺の方がその気になったからな。
　こんな小さな娘とは思えないほど、コッコロも体の準備が万端になっていた。いきり立ったペニスをコッコロの小さな秘部に向ける。張り出したカリはサイズ的に、無理をしなければ絶対に入らないと思われたが、
「う、おおおっ!?」
「ふあああぁぁぁぁぁ!?」
　今まであまり、『適切なサイズの息子』の能力を意識したことはな

かった。だが、このくらい小さな娘相手だとその効果を実感させられる。
腰を突き出した瞬間からペニスが縮小されコッコロの体に飲み込まれたのだ。縮小されたと言っても勃起していることには変わりなく硬さはそのまま。俺の感覚もしっかりしている。コッコロの奥にピタッとハマる。
「ある、じさまっ、おなか、ふわふわ、おくにっ、はぅ……っ!?」
挿入された衝撃でコッコロは背中を弓なりに反らす。前にセックスした時は『適切なサイズの息子』の能力を手に入れる前だった。
だから挿入自体がギリギリだった。だが今回は違う。この未成熟な果実に適したサイズになっているのだ。
この行為の名称も意味も知らない少女には、逆の意味で辛くなっているかもしれない。
「はーっ、はーっ、はーっ……!!」
コッコロは深く息を吸って吐いて、何とかこの衝撃を逃がそうとしているようだが。
「コッコロ、どんな感じだ？」
「あるじさまっ、おく、とんとんは……っ、ぅ、く……！」
コッコロが体を弓なりに反らした。同時にきゅっきゅと締め付けが強くなった。肉棒を伝って、愛液がソファーに流れ出ている。
「へぁ……っ、ぁ、わたくし、おかしく……っ、もう……」
「分かった。じゃあ早く終わらせるな」
俺はいつもよりもダウンサイズしているペニスに気を付けながらゆっくりと腰を動かす。
まだ男を迎える準備の整っていない膣道が、まだ完成されていない肉襞が俺のカリによって掘削されて行く。
ゆっくりだが確実に俺の性感は高まっていく。適切なサイズになっていることで、前は強すぎた締め付けが程よい具合になっているのだ。
「あるじ、さまっ、ある、じさまっ……!!」
「うん、もうすぐだからな」

抱きしめたコッコロが俺の言葉に何度も首を縦に動かして応える。
喘ぎ声を漏らさないようにか、俺の胸に顔をうずめて快感に耐えているコッコロ。普段感じる母性とは真逆の征服される女の姿に、俺のペニスが熱を帯び、幸丸から精液が昇ってくる。
「コッコロ、そろそろだぞ」
「は、いっ、はい――――!!」
びゅりゅりゅっ！　びゅろ、びゅぶぅっ！
「お゛、、ぁ゛――――!!」
子宮の中に俺の子種を注ぎ込んだ瞬間、コッコロから今まで聞いたことの無い、雌が絶頂
するときにのみ出す汚い声が、ほんの少しだけ漏れる。
だがそれも一瞬のことだ。コッコロは俺にしがみつきながら、ぴゅるぴゅると絶頂汁をソ
ファーにこぼしていた。
射精が落ち着いた俺は肉棒を引き抜き、ぐったりとしたコッコロをソファーに横たえるのだった。

ティナとクロの精神世界。
「で、これは何なのよ」
「……」
クロとティナは裸で椅子に座らされていた。
椅子は背中合わせになっており、分娩台の様に足を開かせ拘束する機能がついている。クロやティナの年代で分娩台のお世話になる娘はいるはずがない。だが、椅子のサイズは2人にぴったりだった。
腕も上に上げる形で拘束されている。精神世界であるため能力も

魔法も使えない。
身動きの取れない状態になっている2人は、ただ1人一切拘束されていないメアに視線を向けた。
「ん？　ん～まあ、ぶっちゃけそこまでシチュエーションとか思い浮かばなかったからね。2人は一緒にってことで」
何ともメアらしい適当な理由だった。
「それに全員を相手にしたら、私の分がなくなっちゃいそうだしね」
「……どういう意味よ」
「みんなにこうして協力してるのは私も翔君とセックスするためでしょ？　でも全員としちゃったら私の時に勃たなくなっちゃうかもだから。2人のうち1人には、今回は諦めてもらおうかなって」
メアが指をならすと、天井から機械のアームが下りて来た。
その先は指の様になっている物、激しく振動している物、細長くなっている物と様々だ。
「先にイっちゃった人には今回は我慢してもらおうかなって。1回、イっちゃえば満足できるもんね？」
「「……っ」」
迫ってくるアームに2人は息を呑んだ。
メアに意見したところでその意思は変わらないだろう。
「ティナ、悪いけど」
「はい。ここは勝負、ですね」
その言葉を言い終わったとたん、複数のアームが2人に殺到した。
「いい!?　ひう、あく、はぁっ!?」
「んっ、ぇぁっ、ひぁ、へぅ……っ！」
メアの責めは最初から苛烈だった。メアもコッコロと翔のセックスを見て我慢の限界になりつつあったからだ。
（私もセックス中断されてるんだし。このくらい『巻き』でしてもバチは当たんないよね？）
アームに弄ばれる2人を見てメアは笑った。
褐色と白。2色の少女達は幼い艶声を奏でる。アームはどれも先端からぬるぬるとした液体を生成している。それが幼女らしい平坦

な体を無遠慮に撫でまわる。
「んっ、はじめから、激しすぎない……!?」
「んふっ、あ、そこ、くりくり……っ」
真っ先に向かったのはわずかな膨らみに咲いているピンク色の蕾だ。粘液を纏ったアームがまだコメ粒ほどの大きさの突起に群がる。
米粒程の大きさしかなかったはずが、指アームに弄ばれると二回りほど大きく硬く成長する。
指を使って両側から圧迫され、器用にしこしことこすられると、背もたれについていたはずのお尻が勝手に浮き上がる。
「へ～、こんなに小さくてもしっかり気持ちよくなれるんだね！　あ、小さいっていうのはおっぱいの事じゃなくて年齢の事ね。ま、セックスしたがってるんだし当然なのかな？」
「うる、さいわね……っ」
「はっ、ぁ、ぅぃ……っ」
クロは悪態を返す余裕があるが、ティナにはすでにそんな余裕はなくなっていた。
そんな様子を見て、メアは早くとどめを刺してしまおうと次なる手を打つ。
「ん～、ナカに入れるのは翔君のために取っておいてあげるね」
（何をするつもりだ、お前……）
だがそれ以外はするという事だ。
乳首を弄っている物よりもさらに細かいアームが２人の下腹部に近づく。幼い秘肉を丁寧に広げ、その奥にある皮をかぶった突起に狙いをつけた。
「うくっ……!?」
「ひっ……！」
ティナはもちろん、クロでさえ初めての感覚に身震いする。
皮をむかれたことで、初めて外気に触れるクリトリス。そこにさらにもう一つ近づくアームがあった。それにはピンク色の小さい円錐形状の物体が取り付けられていた。
「な、なに、するつもりよ……!!」

形状からして挿入するものではない。
「ふふ、こうするんだよ」
顔を出したクリトリスに、円錐状の物体がかぶされた。
「いぃ〝!?」
「はぇ〝っ!?」
「アハ、いい反応」
（おいメア、なんだそれ）
メアはこの状況を見物している翔に心の中で返答した。
（今朝翔君としたでしょ？　オナホールで。アレは女の子版のオナホール。おちんちんはないからクリちゃんをしこしこする奴だよ）
つまり、ただ被されたように見えた円錐状の物体――クリトリス専用のオナホールは小豆ほどの大きさのクリトリスを吸い出し、中にある無数の突起でこれでもかと擦られていた。
陰核は一瞬でビキビキに勃起し、じゅるじゅると舐められていた。外からは動いているようには見えないが、繊細な性感帯がいくつもの繊毛によって締め付けられ、擦られ、２人の性感は急速に高められていく。
「はああ、ひが、はああっ!?　ぃぃっ!!」
「うぅ……!!　ぁぃ！　がぁっ、ぁ……っ」
２人共もはや意味のある言葉を発している余裕はなかった。
我慢すらできない快楽の濁流は、２人を絶頂の高みに引っ張り上げている。耐えるとかそういう次元ではない。絶頂するのは時間の問題だった。
後はどちらが先にその頂点に行くのかだが、
「ぃ〝〜〜〜〜〜〜ッッッッ!!!!」
ティナが天井に達する潮を吹きながら絶頂することで、勝負が決した。その瞬間にメアはすべてのアームを消す。
天上に吹いた後も、断続的に愛液を垂れ流しているティナ。
「はっはっはっはっ……っ」
タッチの差で絶頂を免れたクロだったが、結果として寸止めされた形になっていた。

ギリギリまで高ぶらされた性感と、クリ虐めが中断されたもどかしさで苦しそうな顔をしていた。
「は～い、イっちゃったティナちゃんは脱落～。じゃあ……え？　翔君？　……分かった。約束だからね」
その言葉とともに、ティナの意識が急速に浮かび上がってきた。

「はぇ……」
息も絶え絶えなティナが目を覚ました。
コッコロよりは意識がはっきりとしている。すぐに状況を理解したのかしょんぼりと肩を落とした。
「そうでしたね……私は勝負に負けてしまって……」
「あー、うん、その予定だったんだけどね」
「ティナ」
「お兄さん？」
俺を見たティナが目を丸くした。正確にはしっかりと反り返ったペニスを見て、だな。
「翔君回復速すぎ～。もしかして、こういうのが好みなの？」
「誰か1人だけしないとか、そういうのは無しだ」
メアを無視して俺は言う。メアも特に無視されたことを気にしていない。
「ってことで、ティナちゃんもしちゃいましょう～」
「もちろん、ティナが嫌じゃなければ」
「嫌なわけありませんよ。お兄さん」
ティナは濡れて使い物にならなくなった衣服を脱ぎ去った。
「来てください、お兄さん……」

「ああ」
ティナの頭をなでながら、肉棒の位置を整え、腰を前に突き出した。
にゅるるるうぅ!!
抵抗なく挿入されていくペニス。
「ぁ、れ？　なんだか前よりも……っ、ふぁっ!?」
コツコツと、コリッとした部分と亀頭が何度かキスをする。その刺激にティナは身震いして愛液を生成していた。
「どうだ？」
「すごく、いい、です……っ、お腹ふわふわして、体、勝手に動きます……っ！」
結合部をへこへこと動かして、控えめに快楽を味わっている。体が勝手に動くというのは、快楽を体が勝手に求めているという事だろう。
なら問題なさそうだ。
「ちょっとずつ動かすぞ」
「はい……っ」
ヌルヌルと肉棒を動かしていく。そこまで激しい動きではない。ティナの反応を見ながらの小刻みな動きだ。
「はぅっ、お兄さ、んっ、そこ、そこいいです……っ」
「ああ、この辺りだな」
こんなに小さくても膣内の性感帯はしっかりと育っているらしい。ティナのリクエストに応えてペニスを突き出す角度を少し変える。
するとぽたぽたとソファーに滴る愛液の量が目に見えて増えた。
「すごい、です。前よりもずっと……っ」
ティナが恍惚とした表情でつぶやいている。
「どうして……？　もしかして、わたしが、大人になったん、でしょうか……？」
「はは、どうだろうな」
実際はペニスが最適化されたことが大きいと思うけど。わざわざ説明することでもないか。
それにしても、ティナは加減なしに締め付けてくれる。や、俺が挿

送してるから締め詰めているのか？
何を言いたいのかというと、ティナに合わせていた俺だが、段々と俺も限界になってきたという事だ。
「ティナ、そろそろだ……っ」
俺はスパートに向けて少しだけ速度を速める。
「ぁ、あっあっあっあっあっ……!!」
それはティナの性感を余計刺激することになる。ますます強くなる締め付けに、不規則な痙攣も合わさり、俺はあっという間に頂点に上り詰めた。
びゅるるっ、ごぶっ、びゅるるっ!!
「あ、あああああぁぁぁぁぁっ――――!!」
ティナのナカに本日2回目――――いや、4回目の白濁液が注がれる。焼けつくような熱さを持つソレは、まだ幼いティナの中を染め上げる。
ティナは狂ったように腰を跳ねさせる。暴れる腰を掴み、ペニスを最奥に固定、準備不足ながらも俺のペニスから精を搾り取ろうとする動きに合わせる。
やがて落ち着くと、ティナは気を失ってしまった。
ペニスを引き抜き、視線を他に向ける。
精神世界にいるのは、あと1人。
「ひぁ、いう、あぁ……っ」
ゲームは終わったにもかかわらず、未だに甘い声を漏らしているクロだけだ。

夜月翔のハーレムな謹慎④（クロ、メア）

「ちょ、っと、んふ、何で戻んないのよ、ぁ……っ」
「ん～、ちょっとね～。翔君の準備ができてないっぽくて～」
ティナと翔がセックスしている間、クロはずっとメアに弄ばれていた。
「何よ、それ……ぁ」
「うん？　どうかした？」
「……何でもない」
メアはとろ火で煮込むように、弱い刺激を与え続けていた。ティナとの勝負でギリギリだったクロはギリギリまで高ぶらされていた状態で、
「あ、向こうの準備ができたみたい。じゃ、もどろっか」

クロが目を覚ました。
すぐに状況を把握したクロは、こちらに向けて手を伸ばしてきた。
「やった、やったよ、お兄ちゃん……」
「ああ、お疲れ様」
クロと抱き合う。熱っぽい吐息が俺の耳をくすぐった。
この抱擁はただの愛情確認ではない。この先の行為に進むための確認作業だ。
「早く、早く、イかせて……っ、ずっと我慢してたから辛いの……っ」
そう言ってクロは四つん這いでお尻を向けて来た。そして自分の割れ目を指で割り開いて見せた。そこから涎のように愛液が垂れる。
「ああ、分かった」

コッコロに一発、ティナに一発出したはずの俺のペニスだが、頬を紅潮させたクロに懇願されるとすぐに硬さを取り戻した。
「行くぞ――――!!」
「うん――――はぁぁぁぁっっ!?」
クロの腰を掴み、一息で貫く俺の愚息。
クロとは何回かしたことがあったが、適切なサイズの能力を手に入れてからするのは初めてだ。
前回、前々回の感覚で身構えていて、それを外されたのだろう。だから奥に到達した瞬間に絶頂に達し、潮を吹いているんだろう。
それにしても、みんなの体液でソファーが大変なことになってしまったな。
「2人で慣れたし、クロはちょっと力を入れても大丈夫だよな?」
「はっ、はっ、は、え? 2人で……? だって、ティナはゲームに負けて……それに力を入れる……?」
サイズダウンしているせいでコッコロとティナの時はピストンの感覚が掴めていなかったけど、今なら何とかなりそうだ。
まあ、サイズダウンしてるからそこまでダイナミックには出来ないけど。
とんとんとん、とリズミカルにペニスが出入りする。潤滑油は十分クロから分泌されている。俺の動きを遮るものは、クロの膣の中にある肉襞だけだ。むしろひっかけているのは俺のカリの方だな。
「おにいちゃ、待っ! これ、おかし……いっ!!?」
それに俺も今2回目だ。今までのようにゆったりとした動きでは、中々イけないかもしれない。
「痛いか?」
「ちが、うっ!? そうじゃ、なくてぇ……ぇっ」
「なら続けるぞ」
「……っっっ!!」
クロは四つん這いからソファーの座面に顔を押し付ける体勢に変わった。
俺はその間も変わらないペースで肉棒の出し入れを続ける。

「〜〜〜〜!!!」
クロの声はソファーに吸収されてしまっているが、しっかりと感じてくれているのは肉壺から噴き出している液体が物語っていた。
「クロ、そろそろ出そうだ。そっちはどうだ？」
「〜〜っ、ぁ、〜〜〜っ!!」
返事をする余裕がないみたいだ。そのくらい感じてくれているという事なんだろう。だったらこのまま続けるだけだ。
射精の予感が高まった時に、今までよりも少しだけ強めに子宮を押しつぶす。幼い子宮口を抉じ開け、尿道を登ってきた白いものをぶちまけた。
「う、ぐ……っ!!」
ごぽっ、ぶりゅるっ、びゅうるるるっ
「ふあぁぁぁぁぁぁっっ!!??」
その瞬間ソファーからクロが顔を上げた。
ペニスから発射された白濁液によってクロの子宮が満たされた。俺の股間に潮を吹きつけながらクロは何度もその小さな体を跳ねさせる。
お互いが落ち着いたところで、ペニスを引き抜く。
「ふう……っ」
愛液と精液で汚れたペニスをクロから引き抜く。最適なサイズに調節されていたペニスが、クロの身体から離れると元の、見慣れたサイズへと戻っていく。
ソファーには俺の白濁液を股間からこぼれさせた幼女3人。完全に犯罪現場だ。みんな快楽の衝撃で眠ってしまっているけど、少ししたら起こして掃除しないと。
それに3回もすると流石に疲労感が……俺も少し休もう――
「えい！」
「うわ!?」
後ろからの衝撃で床に倒れこんだ。
「お、おい……！」
「えへへ、まだ終わってないよね？　私とのがあるじゃん」

俺を押し倒した犯人――――メアが俺に跨ってニヤリと笑った。
「うく……っ!?」
身体で見えないが、俺のペニスがぬるぬるの手で扱かれている。メアのおさげが上下しているところを見ると、変身で手か何かを作って扱いているのだろう。
そんな詳しい仕組みなど関係なく、急速に強制的に肉棒に血液が集められていく。
「お、おい、メア、それは激し……!!」
「はい準備かんりょ～」
手加減の無い刺激に悲鳴を上げそうになったところで、メアが手を離した。そして向きを変える。俺に背中とお尻を向け、腰を上げる。
そして、
「うぐぅ……!?」
「はあああぁぁっぁぁあっぁぁ……!!」
一息で奥まで差し込まれた。
他の娘としてる時に弄っていなかったはずだが、それでも最初以上にどろどろになっているメアのおマンコは、俺のペニスを嬉しそうに咥えこんでいた。
ペニスを奥に突き刺したまま、腰を揺らす。
子宮口がちゅぱちゅぱと吸い付いては離れ、幼女よりも成熟した少女の女性器がゾワゾワと肉襞を絡めてくる。
もはやこれだけでもイけそうだ。
「はぁ、気持ちいぃ～。ずっとしてたい……っ」
それはメアも同じのようだ。表情は見えないが、絶え間なく動くスカートがそれを伝えてくれる。
だがそれだけでは終わらない。
「は、ぁ、ん……っ！」
メアが腰に力を入れ、持ち上げる。すると、肉襞を何枚も擦りながら、俺のペニスが引き抜かれていく。
「お゛、お゛、お゛、……っ」
その1枚1枚を通り過ぎるたびに、メアからは汚い声が漏れてい

る。
挿れる時は一瞬だ。
ばちゅん！　という音が鳴り、俺達の結合部が密着する。噴き出した愛液が辺りを汚した。
「おぐぅ〝ぅぅぅ……っ」
自分で自分の子宮を潰す。その刺激にメアは身体を震わせ、ペニスを締め付けていた。
俺への刺激もかなりのものだ。
「もっと……っ、もっとよくなろ……？」
「メア……っ」
メアの小ぶりなお尻が、俺に何度も打ち付けられる。俺も負けずにメアの腰を掴み、タイミングをずらして主導権を握ろうとする。
俺たち2人は快楽を貪る獣になっていた。2人で動いているが息を合わせてお互いが気持ちよくなろうなんてことは考えていない。
快楽で言えばとっくに上限に達しているのだ。俺はすでに今で3回、今日で言えば5回も射精している。いつ暴発してもおかしくはない。
メアだって、数回のピストンで1回イっている。流れ出る愛液は白く濁り、失禁しているのではないかと思うほどの量だ。
後は力尽きるまで動くだけだ。
「メア、そろそろだ……」
「う、ぅん、わたしもそろそろ、限界、かも……っ。一番深いの欲しい……！」
俺は一度、ペニスを限界まで引き抜く。一瞬止まり、今まであったペニスを求めて子宮口がさらに降りて来たタイミングを見計らって、ペニスを突き刺した。
子宮がぺちゃんこに潰れ、その弾力で元の形に戻る。突き刺された子宮口にめりこんだ亀頭はその扉を抉じ開ける。
それと同時に、
「う、が。ぁ……っ！」
ごぶっ、びうるるっ、ぴゅるりゅ!!

本日最後の白濁液をぶちまけるのだった。
「イッ――――――!!!!」
メアは声にならない悲鳴を上げながら、カーペットに黄金水の染みを作った。

「じゃーね、翔君。また明日」
しばらく余韻に浸っていたメアだったが、３０分休んで何とか動けるようになった。かなりダルそうだったが。派手に汚れた服は変身で元通りにしていた。
問題はソファーだったが、こちらはクロの宝具やコッコロの精霊に何とかしてもらっていた。
「ご飯作るか……」
「はい。わたくしもお手伝い致します」
「私達は掃除ね」
「はい。皆さんが帰ってくる前に済ませましょう」
射精後の倦怠感を振り払い、俺達は各々の作業を始めるのだった。

今回の行為で入手したアイテム
行為後、みんなが意識を取り戻してからガチャを引いた時の様子。
「今回って複数人でした訳だけど、誰の行為がどのアイテムになるの？」
「あのなクロ……そんなの気にしなくても……」
「いいえ主様。重要なことでございます」
「そうですよ。もしかしたら自分で使うことになるかもしれないんで

すから」
「そ、そうかな？」
「あはは、翔君ちっちゃい娘にも人気なんだね～」
「じゃあ、射精した順番ってことで……」

ガンダムエアリアル　＋　機動戦士ガンダム　彗星の魔女ＢＤセット（１話～１２話）
機動戦士ガンダム　水星の魔女に登場する兵器。
標準的な武装に加え、遠隔操作兵器『エスカッシャン』も使用可能。
詳細についてはＢＤを見るべし。
コッコロのコメント
「これは……ガンダム、でしょうか主様」
「あ、ああ……俺の知らないガンダムだ。水星の魔女ってなんだ？もしかして新作？　ＢＤ見ないと……！」
「良くは分かりませんが、主様のお力になれたのでしたら本望でございます」

覇気習得指南書（見聞色編）
覇気の習得指南書。この指南書には見聞色の覇気の習得方法、練習方法が記載されている。ただし習得できるのかはその人の適正次第。
ティナのコメント
「本、ですね」
「ガチ指南書か……勉強すればみんな使えるようになるのかな。でも適性は必要か」
「頑張って勉強します」
「みんなにも読んでもらうかな」
「私が最初に読んでもいいですよね？」
「……最終的にはみんなに読んでもらうからね？」

眼魂セットＶｏｌ．１（ムサシ、エジソン、ロビンフット）
仮面ライダーゴーストに変身するためのアイテムである、ゴースト

眼魂の詰め合わせセット。
このセットにはムサシ、エジソン、ロビンフットの眼魂が入っている。
クロのコメント
「あいこん？　なにこれ」
「ライダーの変身アイテムだな。設定では英雄とか偉人の魂を宿してる」
「え!?　じゃあこれに武蔵とかエジソンの魂が入ってるって事!?」
「そう。で、その英雄の力を借りて戦うんだ」
「サーヴァントと一緒に戦うって事!?」
「……まあ、そうなるな」

メダジャリバー
オーズの専用武器である剣。
投入口からセルメダルを投入することで威力を上げることが出来る。
メアのコメント
「普通の剣かな？　まあ今朝のすごく当たりだったんだもんね？　それに比べれば外れかな？」
「まあ、今朝のに比べればな……セルメダルってどうやって調達すればいいんだ……？」
「???」

翔の家を後にしたメアはすぐに、まっすぐこちらに向かって来る４人と鉢合わせした。

「あ」
「「あ」」
それは六課から帰る途中だった雪菜、アスナ、桜、耀だった。
「メアさん……」
雪菜は警戒心を顕わにしている。それはそうだろう。単純に街中ですれ違ったのではない。ここは自分たちの家の近くなのだ。
「あは、そんなに警戒しないでよ、雪菜ちゃん。別に何もするつもりはないから、ね？」
「……こんなところを散歩するのがメアさんの趣味だって事？」
警戒しているのはアスナも同じだった。
メアと談笑するくらいに打ち解けているのは翔だけである。雪菜達から見たメアは、ヤミを殺し屋に戻そうとしたり、翔のセフレになったりと、色々な意味で警戒せずにはいられない人物だった。
自分たちの家の周辺をうろついているとあっては、心穏やかではいられない。
「みんな、大丈夫だよ。メアは変なことしないから」
「耀ちゃん！　ありがとう！　やっぱり持つべきものはオトモダチだね！」
否、メアと打ち解けている人物はもう1人いた。
それは夏の間、ナナと一緒に仲良くなった耀だ。メアは嬉しそうに耀に抱きつく。
「でも、こんなところで何してたの？　私には言えないこと？」
「ん？　ん～、別に隠すことじゃないよ。翔君の家に行ってたの」
そのセリフに場の空気が緊張する。
「やだなぁ、そんな怖い顔しないで下さいよ～センパイ」
「私達の家で何をしていたんですか？」
桜の問いかけにメアはすらすらと答えた。
「セックスしに行ってたんですよ。翔君、謹慎で家には誰もいなくて暇だ～、って言うから」
「嘘、ですよね？」
「あは、嘘です」

メアのふざけた回答に、桜の身体から魔力が漏れ出す。
「でもセックスしたのは本当ですよ。翔君にしようって言われたわけじゃないですけど」
武士の情けで小さい娘３人としたことについては黙っていた。
メアの口調から、それは真実だと判断した女の子達。同時に形容しがたい気分になる。確かに翔とメアが『そういう事』をするのは許可したが、こうもあっさりと告白されると。
メアに遠慮なんてものは存在しない。したいと思ったことはする。おかげで正式な彼女であるはずの自分達よりもメアとの回数が増えているように思える。
「彼女とセフレは違うんじゃないですか？　私、色々とキョーミあるし、色々と翔君のしたい事させてあげられますから」
「し、したい事？　それってどんな……？」
「んー……野外プレイとかですか？」
「そ、外!?　翔君と!?」
「まだしてないですよ？　でもずーっと同じようなセックスだと、飽きちゃうかもしれないじゃないですか」
アスナの悲鳴のような問いかけに、顔色一つ変えずにメアが答える。
ちなみにアスナにとって、学校ですることも『外でしている』ことになるのだが、メアとの感覚の違いである種の誤解が発生していた。
「ま、翔君なら恋人の皆さんとセックスしなくなるなんてことはないと思うので、心配しなくていいと思いますよ？　私とのセックスで出来た能力が、翔君のピンチを救うってことがあるかもしれないですけどね～」
メアの無意識の煽りに、それを受けた女の子の目元が引き攣る。それが事実かもしれないと思ってしまったことも原因だった。
そんな気分を知ってか知らずか、メアは話を続ける。
「そう言えば翔君の能力について、理子先輩にも話したんですね。先輩も積極的だし、今度は一緒にしてみるのもいいかも」
メアは先日の会議の内容についても、翔の記憶を読み取って把握し

ていた。そこから理子が一番乗りで翔とセックスしたことも。
「暗くなってきましたね。それでは皆さん、また～」
軽い挨拶と共に、メアはその場を立ち去った。
「……」
耀は他3人の表情を見る。
「わー、これは大変だ～」
大変だと言う割には楽しそうな声色だった。

夜月翔のハーレムな謹慎⑤

「「ただいま」」
玄関から3人分の声が聞こえた。六課に行ってる3人だ。1人分少ないけど。
「おかえり～……なんかあった？」
「ただいま、翔」
返事をしていなかった1人――――耀が手を振ってきた。
「別に変なことはなかったよ？　外で友達に会っただけだから」
「友達？」
耀の友達？　ってもしかして。
「メアか？」
「当たり」
「とりあえず家に入ってもいいかな？」
「あ、そ、そうだな」
アスナに言われて気がついた。ずっと玄関で立ち話をしているわけにはいかない。横に避けると、アスナ、雪菜、桜の3人は無言で俺の横を通り過ぎて行った。
「なんか、怒ってるな……」
「そうだね」
「メアがなんか言ったんだろ？」
「心当たりある？」
「まあ……」
メアが何を言ったのかは知らんが、さっきの行為について何か言ったのだとすれば、3人が怒るのも……でも、メアとの行為はみんなにも許可されてることだしな……
「だから口には出さないんじゃない？　言いたくても言えないんだよ」
「そっか……そうだよな」
実は最近、ララが家にいるせいでなかなかそういうコトをするのが難しくなっているのだ。

事情を知らないってこともあるし、同じく俺の事情を知らなかったアリアと比べて、ララはノックなしに突然部屋に入ってくることもあるのだ。
しかも夜中にこっそりと布団に忍び込んでくることもある。そういうはしたない行為はしないようにしましょうと教えている身として、他の娘と一緒に寝ているところを見られると都合が悪い。
だからと言って、ヤるためだけにララに出て行ってもらう訳にはいかない。出て行ってもらうことは出来ても、その理由を説明出来ないからな。
「いっそのこと、ララさんにも説明したら？」
「それで『私もやりたい』って言いだしたらどうするんだよ」
「してあげれば？」
「軽く言うな」
そんなことしたら結婚まっしぐらだ。
結婚が嫌という訳じゃないが、ん～、そういうと語弊があるな……とにかく！　今はそこまで先のことは考えられないってことだ。
「じゃあ、わたしもその内、ね？」
「は!?」
耀の言葉に素っ頓狂な声を出してしまう。
「私とするのもイヤ？」
「いや……ぁ、『いや』ってのは『嫌だ』って事ではなくてだな……」
「ふーん。そうなんだ」
耀はにやにやしながら、リビングへと向かっていった。
「からかってるのか本気で言ってるのか、判断できん……」
俺はそう呟きながら、みんなの後を追うのだった。
ちなみにその夜は何もなかった。

《以上になります》
「報告ご苦労様です、八神部隊長。今はゆっくりと休んで下さい」
《はい。それでは失礼します、聖天子様》
はやてが映っていた画面が消えた。それと同時に椅子の背もたれに首を預け、息を吐きながら天井を見上げる聖天子。
キーストーンゲート占拠事件について、そして影胤の件についてを報告した。事件発生から数日が経過したことで、より詳細な資料をまとめることが出来たのだ。
当然、事件の詳細については各国へと通達されている。はやてがしていたのは六課内部の報告だ。
後援者である聖天子には部隊の動きについて詳細な報告が必要だったのである。
「翔さんが謹慎だなんて……」
聖天子が呟く。
影胤やオイスタッハを無力化したまでは良かったが、そのまま楯無に暴力を振るい負傷させたことによる処分。
翔がそんなことをするとは思えなかったが、謎の男の乱入があったとすれば納得出来た。
「いったい何者が……やはり予言に関係があるのでしょうか……」
所属不明、それどころかどのセキュリティにも補足されていない。どの組織に繋がりがあるのかも分からないのだ。
予言に関係しているのではと考えられている翔に接触してきた謎の人物。それだけで警戒に値する。それに加え、翔や楯無を全く寄せ付けない異次元の実力を持っているのだ。
「はぁ、前途多難ですね……」
そう言って背もたれに預けていた頭を起こす。と、同時に部屋のドアがノックされた。
入室の許可をすると、入ってくるのは見知った顔――天童　菊之丞だ。

「お疲れのようですな、聖天子様」
「天童閣下。いえ、これくらいは」
菊之丞が入ってきたことで、居住まいを正す。
お疲れである、という言葉の否定はしない。してもすぐに？せ我慢だとわかってしまうだろう。何せこの数日間、ロクに寝ずに事件の後始末をしていたのだから。いくら聖天子の美貌でも、目元の疲れはごまかせない。
「本日はお早めにお休みになるとよいでしょう。これ以上はお体に障ります」
「ですが……いえ、そうさせていただきます」
聖天子は素直に頷いた。自分がここで数時間頑張るよりも、その数時間を休息に当てて体調を万全にする方が有益だと考えたのだ。
「それが良い。幸い、事件の方は落ち着きました。これでしばらくは静かになるでしょう」
「だといいのですが……現場の方が、疲労は溜まっているでしょうから」
「あの武偵……いえ、今は管理局員でしたかな。あの者は確か謹慎中のはず。心配なさらずとも、休息は取れているでしょう」
「……」
翔の謹慎について、聖天子もたった今聞いたところだ。別のルートからの報告があったのは間違いなかった。聖天子には知らされていないルートが。
今の自分がお飾りであることを再認識させられる。だがそれを口には出さない。
「……そうですね。彼にも、今度のことで何か報酬を差し上げなければいけませんね」
「必要ありますまい。彼奴は職務を全うしたまでです」
「だとしても、日本の不始末を彼が収めてくれたのは事実です」
菊之丞相手にも聖天子は引かなかった。
「……お好きになさるとよろしい。ですが、軽はずみな褒美を与えるようなことはありませぬよう」

「……はい？　いったい何を……」
「彼奴を前にして――――例えば、出来る限り望みの物を与える、などと口走らないように」
　意味を理解して、聖天子の目つきが厳しくなる。
「それは彼に対して失礼ではありませんか？」
「そうでしょうか？　こちらで調べたところによれば、彼奴は非常に多くの女性と『交遊』があるようですからな。まあ、あの年頃の男児ならば、そのくらいの方が頼もしいとも言えますが」
「……」
　聖天子もその意見は否定できなかった。翔の周りに女性が多いことは否定しようのない事実だ。
　菊之丞も翔を聖天子の相手にと考えたこともあったが、あまりにも女性関係にふしだらなのであれば、関係を断つことも考えなければいけなかった。
「……だとしても、彼が私に対してそのような要求をするとは考えられません」
　それは聖天子が自分に女性としての魅力が無いと考えている――――訳ではなく、翔の精神がそんな要求をするはずがないと考えているのである。
　聖天子は自分の美貌を理解している。周りからどのような評価を得ているのか知っているし、それを武器として使うために様々な努力をしている。それによって向けられる視線――――男女問わず――――にも慣れてしまった。
　だが翔からは一度もそのような視線を向けられたことはない。
「（そう、ない……あれ？）」
　いや、あったかもしれない。８月にプールに行った時に。
「（いえいえ、あれは私ではなく私の恰好のせいであって……決して私を見ていた訳では）」
　それはそれで、どうなんだという気分にもなるが。
「では仮に、もしも彼奴からそのような要求があった場合、毅然とした態度を取っていただけるのですね？」

「当然です。私と彼は、そのような関係ではないのですから」
頷きながら聖天子は思い出す。
「（そう言えばプールに行った時、どさくさで私の……）」
聖天子は視線を下ろす。そこには形よく膨らんだ２つの双丘がそびえ立っている。
「（あれはもしや、やはりわざとだったなんてことは……いえいえ、そんなことあるはずが――――）」
「――――様？　聖天子様？」
「っ、は、はい。何でしょうか？」
「……やはりお疲れのようですな。今夜は早くお休みになって下さい。報酬の件はくれぐれもお願いしますぞ」
「承知しました。それでは」
部屋の外に控えている護衛を引き連れ、自室に戻る聖天子。
流石に自室の中までは護衛も入ってこない。カメラや魔法による監視の目もない完全なプライベートの空間だ。（ちなみに保脇はレッド・ホット・チリペッパーの能力でこの部屋の中まで覗いていた）
誰の目も無くなると、疲労が一気に押し寄せて来た。
備え付けのシャワー室に入り、自らを聖天子たらしめている衣装を脱ぎ去る。聖天子はこの服を着ることでマインドセットを行い、弱冠１６歳でこの大役に従事していた。
衣装を脱ぎ去った聖天子は心まで少女になる。少なくとも、『聖天子』としてふるまっている時とは、心の持ちようが変わるのだ。
一糸まとわぬ姿で、シャワー室へと足を踏み入れた。
シャワーを浴びることで汚れと疲労を落とし、身を清めることで疲労を眠気へと変換していく。
聖天子の自室にある物は基本的に白を基調としたもので統一されている。壁や家具だけではなく、衣類にいたるまで。
シャワーを浴び終わった聖天子はクローゼットから白に精緻な刺繍が施された下着を身に着け、上はシルクのナイトブラを身に着ける。その上にパジャマを着てすぐにベッドに潜り込んだ。
目を瞑る。

自室に帰ってからベッドに入るまで、菊之丞の言葉をずっと考えていた。

「では仮に、もしも彼奴からそのような要求があった場合、毅然とした態度を取っていただけるのですね？」

「当然です。私と彼は、そのような関係ではないのですから」

「（そんなこと、ない……私は聖天子で、だから、そんなことはない……）」

とは言い切れないかもしれない。

そう考えながら、聖天子はまどろみの中に沈んでいった。

日付が変わる直前、まっとうな人ならば寄り付かない路地の奥にあるお店。目立たないそこは、スキルアウト達のたまり場として重用されていた。

今宵も明らかに未成年の学生に酒がふるまわれていた。バカ騒ぎする彼らに、店主は何も言わない。彼らは大切なお客様なのだ。バレなければ店にも被害は出ない。それどころか、彼らからのおこぼれもあり、積極的に受け入れていた。

「で、そっちはどうだったよ」

「ああ、予定通り体で払ってもらうことになったぜ」

「何が予定通りだ。ちゃっかり味見も済ませたんだろ？」

「へへ、まあな」

ゲスな笑いをこぼす男に対して、舌打ち混じりに酒を煽った。

「良いよなぁ、そっちは。こっちは金の取り立てだぜ」

「今度そっちにも恵んでやるよ」
彼らは落ちこぼれのスキルアウトとして、違法業者の取り立て屋の仕事をしていた。武偵がヤクザと言われる所以にもなっている。
周りでも似たような会話が繰り広げられていた。内容は最低だが、全員が楽しそうに酒と会話を楽しんでいる。
そこに、
「グギャ!?」
悲鳴が響き渡った。
椅子に座っていた男の1人が突然浮き上がり、壁に叩きつけられたのだ。
一瞬で静まり返る店内。全員自分の獲物に手を伸ばす姿は、腐っても彼らが武偵であることの証明だ。
「あそこだ!」
1人の声に従い、全員の銃口が向けられる。だが発砲されることはなかった。それはそこに居る存在が、
「なん、だ……? ぼやけてる……?」
霞の様にぼやけた、不安定な存在だったからだ。そこに居るのかいないのか、しっかりと目を凝らさないと分からない。男たちの中には全く視認できていない者もいた。
「なんだ? 鬼種のガキ、か……?」
ぼやけた体だけでなくフードを目深にかぶっているせいで顔が全く分からない。かろうじて体格がわかる程度だ。フードからは一本の角が伸びていた。
全員から銃口を向けられているというのに、その子供は全く動じていなかった。
ゆらり、と子供が体を縮める。
「ゴガッ!?」
店の誰も反応出来なかった。子供はいつの間にか自分たちの懐に入り込んでいた。手に持った何かで、男の1人が攻撃されたのだ。
「コイツ……!! 刃物だ! 気を付け――――!!」
注意した男が切り裂かれる。

「この……ッ!!」
銃を連射する者もいるが、
「ッ!? 何で当たんねぇんだ!?」
避けられているわけではないのに子供の向こうの壁に着弾する。
「この野郎……!!」
1人が能力を発動させる。レベル2程度の発火能力者の手に、野球ボールほどの火球が作られ、発射される。
だがそれも銃弾と同じ結果を招いた。違うのは着弾したのが炎という事だ。壁に火がつく。
幸い出力が低かったせいで、一瞬で燃え広がると言った事態にはならなかった。だが、騒ぎになるのは間違いない。
男達は逃げ出そうとするが、出口にあの子供が立ちふさがった。
「どけっ!! テメェ!!!」
素手で掴みかかろうにも相変わらず通り抜けるだけだ。通り抜けるのなら子供の存在自体を無視しようとする者もいる。
それらに等しく、剣による攻撃が襲い掛かった。
壁の火と暴れる子供によって、店内はパニックに陥る。
「ひいっ……!!」
店長は厨房に引っ込み、頭を抱えて震える。
しばらくすると、音が聞こえなくなった。
店長は這いつくばりながらフロアに向かう。フロアでは何人もの男が倒れ、うめき声を上げていた。壁で燃えていたはずの火も消えている。
暴力が渦巻いていたフロアは、ひっそりとした静けさに包まれていた。
あの靄のような子供もいなくなっていた。いや、見えていないだけかもしれない。
店主は色々なことを考えた。
床に転がっている男たちは生きているのか、先ほどのボヤ騒ぎは通報されたのか、あの子供は本当にいなくなったのか、自分の身の安全は確保されたのか。

そんな店主を現実に引き戻したのは、店の扉を乱暴に叩く音だった。ここは客層もあり、外からは中が見えなくなっているのだ。
「通報を受けてきました！　管理局です！」
「あ、ああ！　はい！」
通報はされていたらしいと、震える脚で立ち上がり扉を開ける。
扉を開けると確かに管理局の制服を着た男女が立っている。
「匿名での通報を受けました」
「はい、それが――――」
「ここに違法業者の依頼を受ける武偵がいると」
「――――はい……え？」
てっきりボヤのことだと思っていた店主の口から、間抜けな声が漏れる。
「すでに鎮圧されているとの話でしたが――――これは」
男性の局員は店内の様子を見て眉を顰める。
「これは詳しくお話を聞く必要がありそうですね」
男性局員は店主を見てそう言うのだった。

夜月翔のハーレムな謹慎⑥　（桜）

メアや子供達と致した次の日の朝。
トレーニングウェアを着て階段を降りた俺に、声が掛けられた。
「あ、翔君、おはようございます」
挨拶をしてきた桜はすでに制服を着てキッチンに立っている。今日の朝食当番は桜なんだな。俺はこれから朝練だ。水筒を作るためにキッチンに入る。
「ああ、桜か……おはよう」
いつも通りな桜に、俺は若干身構えつつ返事を返した。
昨日はかなり不機嫌だったからな……結局言い訳というか、弁明は出来てないし。でも一晩寝て機嫌は治った、のか？
「これから朝練ですよね？」
「ああ。何もなければいつもの時間に戻るよ。桜も早いな。もう準備万端なのか」
毎日顔を合わせていると、メイクの有無もわかるようになる。話によると最初は俺にすっぴんを見せるのを恥ずかしがっていたらしいが、今ではお風呂上がりの素顔を見ることはしょっちゅうだ。
メイクしたって言っても、完全記憶能力があるからわかる程度の変化なんだけどね。気持ちの持ちようが変わるんだろう。自信があるっていうのは表情にも出るもんだしな。
その観点から見ると、桜は制服を着ているだけでなくメイクも済ませている。いったい何時に起きて準備してたんだ？
そんなことを考えながら冷蔵庫の麦茶を水筒に移す。
と、
「ん？」
完全記憶能力が桜に対して違和感を捉えた。
と言っても深刻なものではない。無視しても良いものだ。良いんだけど……
「どうかしましたか？」
「や……なんでも」

気になるんだよ。俺が水筒を作っている３０秒程度の間に、どうしてそんなにスカートを短くしているかってことが！

さっきまでは膝まであったはずのスカートが、膝上２０センチ――――スカートの一番下が、お尻の一番下とほとんど平行になっている。少しでも動けば普通にパンツが見えてしまうだろう。

まさかとは思うが、今日はその格好で登校するつもりなんだろうか。流石に、その、一言言いたくなるな。

首を傾げつつ、麦茶を冷蔵庫にしまう。

「あっ」

「ん？」

桜がフライパンをかき回していた菜箸を落としてしまった。

「あ、大丈夫ですよ」

取ろうとする俺を静止して、桜が腰を折って、つまり前屈の姿勢になって床に落ちた菜箸を拾った。

「……」

俺はごく自然に、無言で、さりげなく視線を横にずらした。

先ほども言ったが、今の桜のスカートは（なぜかは知らないが）とても短くなっている。そんな状態で前屈の姿勢になればどうなるか。

これが膝を折ってしゃがめば別だったのかもしれないが、いつもはしゃがむ時そうしていたと思うんだけど、何故か今日に限ってその取り方をしてしまう。

そのせいで、俺に向けられた真っ白なお尻、それを包むお尻よりも白い下着までバッチリと丸見えになっていた。

前屈の姿勢になっていることで、お尻が突き出されている。お尻だけではなく局部を包む部分が、桜の秘部の形までも分かってしまいそうだ。

そんな姿勢になっている時間は1秒にも満たない。だが俺の眼にはしっかりと焼き付けられてしまった。

「どうかしましたか？」

それはこっちのセリフなんだがね。

「何でもないよ？」

「何か、見ちゃいました？」
そのセリフで俺はすべてを悟った。
動揺を悟られまいと桜を正面から見ていなかったから気が付かなかったが、桜の顔もほんのりと赤く染まっている。
つまり、
「お前、わざとかよ……」
「ふふ、何がですか？」
そう言って、桜は自分の腰を少し揺らした。
そうやって朝から挑発してきたってわけだ。服装もメイクのバッチリだったのは、それだけやる気満々で備えていたってことだ。
どうしてそんなことをしたのかは……聞くまでも無いか。
「こんな時間からして、みんなが起き始めたらどうするつもりだ？」
「見つかっちゃうと大変かもですね。特にララさんとか」
「ララはギリギリまで起きてこないから大丈夫だと思うけどな」
「先輩もすぐ朝練に行かないとですもんね？」
「そりゃそうだな。時間も限られてるし」
言いながら、桜はちょっとずつ俺の傍に寄ってきていた。
「じゃあダメですか？」
俺の首に腕を回し、足と足の間に桜の足が差し込まれた。もう逃がすつもりがないだろ、これは。
俺の手が短いスカートをめくる。その奥にある下着に指を這わせた。ずいぶんと湿度の高いそこは、フニフニと柔らかな感触を伝えてくれる。同時に粘性のある液体の感触も。
「もう濡れてるのか？　やる気満々だったもんな。ずっと誘うつもりで料理してたのか？」
「あっ」
下着をずらしてみると、しっとりと濡れた秘部がそこにある。指先で入り口をくすぐってやると、桜は切なげな声を漏らして抱きつく腕の力を強める。
「はぅ……っ」
指を差し込むと抵抗なく飲み込まれる。ゆっくりと出し入れする

と、しっかりと吸い付いてくる。
ざらりとした部分を指の腹でこすると桜の腰が揺れる。それは快楽から逃げようとしているのか、それとももっと弄ってほしいと懇願しているのか。
「翔君こそ」
桜が口を尖らせて俺の股間に手を伸ばす。
するとそこには、すっかり固くなった俺の息子がそびえている。
「昨日、すごくたくさんしたって聞きましたよ。クロちゃんから」
「クロからか……」
じゃあ誰としたのかも知られてるってことなんだろう。
「翔君、別に小さい娘が好きってわけじゃないですよね？」
「ロリコンではないはずだ」
そっちでも勃つときは勃つってだけで。
「じゃあ私でも」
「見ての通りだろ」
昨日あれだけしたというのに俺の息子は完全に臨戦態勢になっていた。
「あんまり声出すとみんなにバレちゃうぞ」
「は、ぃ、分かってます……っ、はぐっ、ぁ、ひぅ……！」
今までゆっくりと挿送していた指を、最後の最後で指を少し折り曲げて、内部を抉るように入り口付近のひだひだをわざと擦るように引き抜いた。
「〜〜〜っ!!」
桜は両手を口に当てて、何とか吐息が漏れるだけで我慢した。
その光景を見たことでさらに硬さを増したペニス。ズボンを脱いで外気に晒す。
「桜」
「はい……」
桜も自分の下着を脱ぎ捨てた。スカートに下着を穿いていないという倒錯的な姿になる。スカートをまくり上げ、こちらにお尻を向けた。身体はキッチンの作業スペースに突っ伏す形になった。

「お願いします」
「ああ」
そう言って桜は腕に口と鼻をくっつけた。これで声を出さないようにしようというのだろう。
俺はペニスを入り口に添える。そして、パンパンに張りつめたカリが入り口を押し広げ、肉壺に埋まっていく。続いて血管の浮きだした竿が。
「う、ぁぁ……っ」
「ふー……っ、ふー……っ、ふー……っ！」
ゆっくりと挿入することで、桜の中の様子をペニスに感じていく。膣内に生えそろっている肉襞を丁寧に潰し、やがて桜の腰と俺の下腹部が密着した。
「桜、するぞ」
俺の問いかけに、突っ伏したまま首を縦に振る桜。
複雑に入りくねった膣天井を擦る。ぎゅっと桜の膣が締まり、うにうにとペニスにしゃぶりついてくる。
腰を動かす。
大きく開いたカリが、ねたねたとペニスに絡み付いていた膣肉をガリッとこそげ落とした。
快感に酔って硬直した膣肉をこじ開けるように、ずぶりっとペニスを押し込み、奥のコリコリの所をずりずりとこすった。
ぬちっ、ぬちっ、ぬちっと桜の膣が鳴きじゃくっている。
ペニスから精を絞ろうと絡みついてくる逆立った膣肉を、ペニスによって平らに押し潰す。
膣襞の一つ一つをうぞうぞと蠢かせる桜に負けないように、悦ぶ肉天井にずりずりとペニスを擦り付ける。
「そ、そこっ、だめ、だ、ぁ、いく、く、いく……っ」
桜はくぐもった悲鳴をあげて、体を丸めるように痙攣した。
「桜、逃げちゃだめだって」
そのせいでペニスの挿入が甘くなるが、腰を掴んで無理やり奥まで差し込んだ。すると先ほどよりも下に降りてきていた子宮に勢いよ

くめり込む。
「ひはぁっ!?」
「桜、声」
「わかっ、ぁっ、まっ、またっ、イっ、イっちゃうう……っ、あぅ〜〜〜〜〜〜〜!!」
ずりっ、ずりっと子宮のそこをサンドバックにし続ける。そうすると桜の膣が良く締まり、にゅぐにゅぐと粘っこく絡み付いて来る。
あっという間に桜は絶頂した。
「ま、まっへ、まってくらさい……っ、いきすひて、いきできな……っ」
あんまりにも早くに連続絶頂させられた桜は自分から求めてきたというのに、今度は逃げ出そうとしている。
「大丈夫、俺ももうすぐだ……っ」
音を出さないようにゆったりとしたペースでしていたが、俺も桜の絶頂に導かれるように性感が高まってきた。
「射精る……っ!!」
ごぶっ、びゅるるるっ、ごぽぽっ！
「〜〜〜っ!!!」
朝一番の一番濃いものが桜の中に吐き出され、桜によって搾り取られていく。しっかりと腰を押さえつけ、奥の奥に。身体を支える脚がカクカクと痙攣している。だが、荒い鼻息だけで、桜は声を何とか我慢していた。
「はぁー……っ、はぁー……っ、はぁー……っ」
桜は横を向き、塞いでいた口と鼻を開放して、熱に浮かされたような吐息を排出していた。
「ふぅ……」
俺も何度も脈動して俺のペニスから精を搾り取った桜のおマンコ。少し力を失った俺のペニスを何度もマッサージしてくる。まるで、もう一度突いて欲しいと言われているみたいだ。
でも時間的に2回戦目は出来そうにない。朝練もそうだし、そろそろだれか起き出してもおかしくはない時間帯だからだ。
名残惜しい気持ちもありつつ、俺はペニスを引き抜いた。

「桜、どうだった？」
「は、ぃ、久しぶりで、こひ、抜けちゃうかと思いました……」
「次は本当に腰が抜けるまでしような」
「別に家じゃなくてもいいですよ？　ホテルでも学校でも――――」
と、その時、誰かが階段から降りてくる足音が聞こえて来た。
「っ!!」
余韻に浸っていた俺達は慌てて態勢を整える。俺はズボンを穿き、桜は――――
「しょ、翔君！　踏んでます……っ」
「え？　あ！」
脱ぎ捨てられていた桜の下着だが、どうやら行為の最中に俺が無意識に踏んでしまっていたようだ。
慌てて拾い上げるが、その時にはすでに足音の人物が顔を出そうとしていた。
「ふぁ、あ、おはようございます。先輩……どうしたんですか」
起きてきたのは雪菜だった。雪菜は早起きであるが、監視役という元の役職のせいなのか、俺が動き出すと絶対に起き出すのだ。
「え!?　な、何が!?」
「いえ、なんだか立ち方が不自然と言うか……」
「そ、そうかな？」
「それにまだ家にいたんですか？　もう向かってる時間だと思ってたんですけど」
桜のパンツだが、渡している時間が無かったため、俺のポケットにねじ込んでいる。おかげでポケットに不自然なふくらみができてしまっているので、体を傾けて隠しているのだ。
しかも腰が抜けちゃいそうと言っていた桜だが、こっちもまともに立つことが出来ていない。キッチンに寄りかかって何とか姿勢を保っていた。
「おはようございます、雪菜ちゃん。翔君はそろそろ朝練に出発しますよ。ね、翔君？」
桜が笑顔を向けてくる。え、俺今桜のパンツをポケットに入れてる

んだけど？　でもここは指示に従うしかないか……!!　雪菜にばれないためにも！
「そうだな！　早く行かないと遅れちゃうな！」
雪菜の訝しげな視線を背中に受けながらも、桜の下着を持ちながら、俺は家を出るのだった。

今回の行為で入手したアイテム
フルボトルセットＶｏｌ．１（ファイヤーヘッジホッグ、ライオンクリーナー、ゴリラモンド、海賊レッシャー、ニンニンコミック）
仮面ライダービルドに変身するためのアイテムである、フルボトルの詰め合わせパック。
以下、内容物。
・ハリネズミフルボトル
・消防車フルボトル
・ライオンフルボトル
・掃除機フルボトル
・ゴリラフルボトル
・ダイヤモンドフルボトル
・海賊フルボトル
・電車フルボトル
・忍者フルボトル
・コミックフルボトル
桜のコメント
「わっ、こんなにたくさん。なんですか、これ」
「仮面ライダーの変身アイテムだな。このボトルの中に色々なエネルギーの要素が入ってる」
「へぇ～、ライオン、ダイヤモンド……消防車？　掃除機？　なんですか、これ？」
「……さあ、俺も分からん。多分ネタが無かったんだと思うよ……無

駄に６０本とか作っちゃうから……」

早朝から桜と致して、その後。予定通り朝練のメニューをこなした俺達は、最後の雑談の時間に入っていた。
「翔さん、どうしたんですか？　今日はずいぶんお疲れだったようですが……」
「まあ、ちょっとね……」
アインハルトの質問に苦笑いしながら応える。
ここに来る前に事前に運動をしたからだな、これは。まさか、朝から桜に誘われることになるなんて思いもよらなかった。
そして今なおポケットにある下着。訓練中にコイツが飛び出さないか気が気ではなかった。だがずっと気にしていたおかげで、紛失すると言った間抜けなことは起きていない。
「……そうですか」
俺の態度で何があったのかを察したのだろう。アインハルトは口を尖らせて水筒を飲んだ。
というか、俺がいい淀む理由なんて１つしかないから、考えるまでもないのかもしれない。
とは言えなんて声をかければいいのか。そんな、『じゃあアインハルトもするか？』とか、唐突に言ってもおかしいだろ。ここでするわけにもいかないんだし。
俺が何も言わないことで、微妙な沈黙が俺達の間に広がる。
そんな中、綺凛の呟きが耳に入る。
「……アハハ、でも、そうですよね……」
「……綺凛？」

俺がその言葉の意味を聞き出そうとしたその時、不思議なことが起こった。
「わっ!?」
「っ!?」
俺の腕時計型端末から、光と共に何かが飛び出したのだ。光の中心にあるのは真紅の眼魂――――あれは、ムサシ眼魂だ！
光はそこまで強くないが、南国の朝日の中でもしっかりと分かる程度には、存在を主張していた。
アインハルトと綺凛は少し警戒しているが、俺の手元から出た光とあって、敵意は持っていないみたいだ。
「翔さんアレは？」
「ああ、俺のモノなんだけど……おい！　どうしたんだ！」
空中をくるくると旋回するムサシ眼魂に呼びかけるが、何も反応が返ってこない。
「頭に声響いたりしてない？」
「いえ、私は……」
「私もです……」
アインハルトと綺凛は首を傾げている。
「どうすりゃいいんだ、これ……」
恐らく害は与えてこないとは思うけど、いつまでも放置はしていられない。
俺の思念を感じ取ったのか、ムサシ眼魂が動きを止める。まるで俺達を見下ろすように、眼魂の中にいる偉人が品定めしているようにも感じる。
「っ!?　おいっ、そっちは――――!!」
突如動き出したムサシ眼魂。まっすぐに――――そう、まっすぐに綺凛に向かっていく。阻止しようと手を伸ばすがひらりと躱される。
「え、え？」
狼狽している綺凛。もしも真剣での立ち合いなら、その時点で致命傷を浴びているだろう隙だ。
そしてそのまま――――綺凛の体に吸い込まれてしまった。

「う、嘘だろ」

その予想外の光景に、俺はそう漏らすのが精一杯だった。

夜月翔のハーレムな謹慎⑦

放課後になった。
朝練でムサシ眼魂が綺凛の中に入ったが、結局取り出すことが出来なかった。ゴーストの力を持ってないからか、外からコンタクトを取ることが出来なかったのだ。
ムサシ眼魂はうんともすんとも言わず、綺凛も特に体に変化がないとのことだったので、時間の関係もあり解散となったのだ。
もちろん何かあれば連絡するようにとは言ったし、昼休みには一応様子を見に行ったのだか、特に問題はなさそうだった。
こうなると早くゴーストウォッチを手に入れたいな。とはいえ探して見つかるようなモノでもないか。
とりあえず、今日の所はまっすぐ家に帰ることにしよう。どこにも寄り道する予定はない。
無かったのだが、
「……」
歩道を歩いていると１０メートルほど先にリムジンが止まった。あのリムジンには見覚えがある。
ドアガラスから中を覗き込もうとするが、曇りガラスになっていて何も見えない。
すると、ドアガラスが開いた。
「入って。早く」
見覚えのある護衛の武偵。彼女と入れ替わる形で、俺は車内へと入った。
そこで待っていたのは、
「こんにちは、翔さん」
「聖天子様、どうも」
リムジンと言っても真っすぐ立つほどの車高はない。俺は座りつつ頭を下げた。聖天子様と正面から向かい合う。
聖天子様はなんと手ずから紅茶を用意してくれた。ティーバックだけどね。まあ、こんなところで茶葉から紅茶を作られても困るな。

「そうですね。いつもは茶葉からですが、車内ではこちらの方が便利ですから」
普通は車内でお湯沸かして一服したりしないと思う。俺はそんな聖天子様との感覚のズレに苦笑いする。
お茶が完成したところで、聖天子様が口を開いた。
「蛭子影胤の件、ありがとうございました。おかげで島に被害が出ることなく、事態を鎮静化させることが出来ました」
「被害が出てないとは言えないかもしれないですけどね」
現にキーストーンゲートは占拠され、内部では怪我人も出てしまった。
「ですが、大本の計画は阻止することが出来ました。これもひとえに、翔さんのおかげです」
聖天子様の立場なら、あの事件の詳細も知っているだろう。ミラーワールド経由の突入も、俺の暴走も。後半はともかく、前半ではかなり貢献したのは間違いない。
聞いたところによると、影胤とオイスタッハはどちらも一命をとりとめたらしい。そしてどちらも本国に強制送還の後、裁判が行われるようだ。
それぞれのパートナーだが、アスタルテはレティシアさんに眷獣の制御を任せた都合でそちらのお付きに。小比奈は……
「大変らしいですね、蛭子　小比奈は」
俺の言葉に聖天子様が頷いた。
小比奈は島の施設に入れられている。始めのうちは溌剌としていたが、父親と会えないことで次第に暴れ出し、今では逆に1日中ボーっとしているらしい。時折『パパ』と呟いているとか。放っておくと食事も摂らないのだとか。
「幼い頃から洗脳まがいの教育をされていたと聞いています。時間がかかるでしょうね……」
俺は無言でうなずいた。
暗い雰囲気になったところで、聖天子様が話題を変える。
「今回の件、本来は更識家に一任されていた件です。本国に報告すれ

ば、日本国防軍からお声がけがあると思いますが」
「謹んで辞退させて頂きます」
　これ以上タスクを抱えていられるか。今でもいっぱいいっぱいなのに。たとえそれが表彰の類だったとしても、今は遠慮しておきたい。
「そうですね。あなたならそう言うと思っていました。それでは現地管理局員との協力、という形にしておきましょう」
　それなら別に問題ないだろう。嘘は言ってないし不自然でもない。
「それでは別に報酬を用意しなければいけませんね」
「別にいいですよ報酬なんて。偶然かち合っただけですし」
　管理局の仕事の一環だったし、そもそも聖天子様には貸しがあった。数カ月前、腕をぶった切った時の治療費が。あれ、ポケットマネーから出してくれたんだもんな。
「そんなものは、夏ですっかり清算されていますよ。全部チャラです」
「や、アレは護衛の一環でしょう？」
　予定外の行動もあったとはいえ、それ以上でも以下でもない行動だ。それで追加報酬をもらう訳にはいかない。
「そんなこと言わずに。そうですね……『何でも』いいんですよ？　私から、心ばかりのお礼がしたいのです」
「ええ？『何でも』……？」
　何か良からぬ方向に思考が向かいそうになる。それもこれも、今朝からの行為に引っ張られているからに違いない。
　まだまだお昼を過ぎたばかりだというのに、すでに２人と２回ずつ。思考が流れるのも無理はない。そう言い聞かせる。
「まあ……王道なのはお金ですかね？」
「お金、ですか……」
　なんだろう。この選択肢を間違えた感じ。明らかに聖天子様の温度が下がった感じは。
「それは難しいですね。私が自分で振り込むわけではないので、理由を尋ねられてしまいます」
　ずっと言っているが、影胤については依頼でも何でもない。にもか

かわらずお金を支払うというのはおかしいだろう。友達の医療費なら問題ないのか。
「他にありませんか？」
「他にって……」
　思いつかないだろ、そんなの！　や、あれがいいか……？　ダメもとで言ってみるか。
「じゃあ」
「はい」
「無理そうだったら、断っていただいて構わないんですけど」
「……はい」
　聖天子様が少し緊張した面持ちになる。わざわざ『断ってもらっても』なんて前置きをしちゃったからか。
「日本政府のちょっとした情報とか、どうでしょうか」

「……」
「聖天子様？」
「……申し訳ありませんが、いくら翔さんでも機密情報をお話しするわけには……」
「ですよねー」
　そうなると思い浮かばないな。
「そうですか。それでは次にお会いする時までに考えておいてください」
「なん……いえ、何でもないです。分かりました」
　俺は素直に、そう素直に返事を返す。
　たとえ何故か口調が刺々しくなったとしても、おそらく俺の回答がマズかったからだし、それについて深堀すると大変なことになるのは分かっているのだ。聖天子様相手だとしても。
　だから『なんか怒ってます？』みたいなことは言わずに、今日の所は立ち去るのが吉だ。
　走り去っていくリムジンを見ながら、俺はそう思うのだった。

「はぁ～……」
翔と別れた後の聖天子のリムジン。聖天子は先ほどの会話を思い出してため息を吐いていた。
「(私は思い付きでなんてことを……)」
護衛が一緒に乗っているため声には出さないが、彼女の心臓は大きく跳ねていた。

「そんなこと言わずに。そうですね……『何でも』いいんですよ？　私から、心ばかりのお礼がしたいのです」

ちょっと思い付きで言うにしては軽率な発言だった。もしも敵対する権力者にそんなことを言ってしまえば、どんな無理難題を吹っ掛けられるか分かったものではない。
前日の菊之丞との会話が無ければそもそも頭に浮かぶこともない内容だったが、翔を信用しての発言でもあった。
「(翔さんも繰り返して確認していましたし、私が『何でも』なんて発言するのは控えた方が良いですね)」
心の中で何度も頷く。翔に良識があったおかげで変な要求はされずに済んだが。
「(あの時は少しドキッとしましたが)」

「じゃあ」
「はい」
「無理そうだったら、断っていただいて構わないんですけど」
「……はい」

一体どんなことを要求されるのか、一瞬とはいえ身構えてしまった。翔の力なら、聖天子を抑え込むことなど簡単だ。いくら外に護衛がいたとしても、そんなものは関係ないだろう。
そんな刹那的な行動をとる人物ではないとしても、ほんの少しだけその可能性を考えてしまった。
「(別に乱暴されるとは思いませんけどね。乱暴するつもりなら、確認なんか取らないでしょうし)」
実際に要求されたのは日本政府の情報だったのだが。
「(情報って。いや、情報ですか。あの流れで。『何でも』褒美を与えると言って日本政府の情報？　どれだけ仕事熱心なんですか)」
実は聖天子本人、あの場で刺々しい態度を取ったとは思っていなかった。あくまで必要な情報を必要な分だけ言葉にしたのだと。本人はそう考えていた。
「――聖天子様？」
「っ、はい。何でしょうか」
「いえ、これからの予定ですが……考え事ですか？」
護衛の武偵が不思議そうな顔をしている。
「何でもありません」
「もしかして、さっきの男に何かされましたか？」
「いえ何も。何も、ありませんでした」
「そ、そうですか。では、次の予定ですが――」
気づかぬうちに再び刺々しい態度を取った聖天子に、護衛は怯みながらも何も言わずに続きを話し始めるのだった。

夜、綺凛宅にて。綺凛はムサシ眼魂が体に入った影響を感じられずに床に就いていたが、
「……ん、あれ……？」
綺凛は目を覚ました。いや、姿勢を考えればうたた寝をしていたのだろうか。
綺凛は白い剣道着を着て畳の上に正座していたのだ。直前の記憶では布団で横になっていたはずだった。
しかもこの場所、自分の家の道場ではない。周りに目を向けると、畳の地面が広がるだけで四方に壁はない。畳以外は真っ白な空間だ。
「あー、良かった良かった。ちゃんと呼べたみたいね」
「っ!?　あ、あなたは？」
突如目の前に現れた人物。全身黒の体に上半身には赤いパーカーを着ている。控えめに言って不審者だが、その体からは抑えきれない剣気が溢れている。
だからこそ、単純な不審者と侮れない。
体を浮かせて、いつでも動ける体勢になる。
「うんうん。すぐに警戒するのはいいけど、ちょっと待ってね」
「え、と……？」
「あ～、はいはい。いい感じなのでここからは私が。はい。それでは」
何やらパーカーの人物が独り言を言っている。
「ごめんなさいね。ここの武蔵さんにお願いして私が表に出るようにしてもらったんだけど。や、なんかこの世界、すごく特殊みたいね」
「む、ムサシ……？」
「その通り！　私は新免武蔵守藤原玄信なのです！　こんな姿だと締まらないけどね？」
パーカーの人物は武蔵と名乗り、手を振っておどけて見せる。
ムサシというのはあの武蔵の事なのだろうか。朝練でのトラブルで自分の体に入ったモノも確か『ムサシ何とか』だったような気がする。でも武蔵は男のはず。目の前の人物は何というか、ずいぶんと女性口調だ。
混乱の中でも綺凛は考える。

「じゃあ手っ取り早く、死合ましょうか」
「ッ!?」
いつの間にか武蔵が持っていた二刀で、綺凛は斬られた。
「〜〜〜〜ッ!!!」
腹を裂かれた。そう思った綺凛だったが、
「運が良かったわね。夢(ここ)じゃなかったら死んでたわよ」
朗らかな雰囲気が一変。剣士としての貌を見せた武蔵に綺凛が息を呑んだ。
「(踏み込みが全然見えない!? ホントに……っ!?)」
「ほら、あなたも早く抜きなさい」
いつの間にか綺凛も手に愛刀を持っていた。言われるがままに刀を構える。
「うんうん。綺麗な構えね」
「な、何ですか、これ」
「うん?」
夢の中の登場人物に真面目に問いかける。だがすでに、綺凛にはここが夢だという認識はなくなっていた。
このまま斬られるがままになっていては、現実で目覚めることが出来なくなる。その予感が、綺凛の感覚を限界まで覚醒させていた。
「あなた、最近悩んでたでしょ? 同じ剣士としてのお節介。せっかく才能にあふれた若者なのに、このまま腐っちゃもったいないじゃない? だからちょっと荒療治しようと思ってね」
「それは……」
「ほら、油断しない!」
「ッ!!」
今度は何とか受け止める。衝撃までは受けきれず後ろに吹き飛ばされるが。
未だ状況を飲み込めずにおろおろしている綺凛に向かって、武蔵が吼える。
「いつまでも受けに回ってるつもり? 力が足りないと思ってるなら全力で斬りかかってきなさい!!」

「っ、はい!!」
綺凛の踏み込みは武蔵に遠く及ばない。だがあえて武蔵は綺凛の剣を受ける。
「良い剣ね。とっても素直」
「くっ……!!」
綺凛は連鶴を使って切れ目のない連続攻撃をしている。にもかかわらず武蔵には、笑って雑談をする余裕すらある。
インターミドルでは負けてしまったものの、そこの実力者も綺凛の剣技には一目置いていた。剣技だけならばと思っていた部分もあった。にも関わらず、目の前の人物には通じない。
目の前の人物が本当に武蔵なのかは分からない。だが、自信のあった剣術が通じないという事実に綺凛の心が蝕まれていく。
「(やっぱり、私の剣じゃ……)」
「ふ〜ん? この状況で他に考え事?」
「がっ――――ぁ?」
連鶴の合間。存在しない空間に、二刀によって綺凛の両肩から腕が切断される――――場面を幻視する。痛みを錯覚し、刀を取り落としてしまう。
「これで2回目ね。続ける気力ある?」
「はい……っ!!」
「それは結構。それじゃあ続けましょうか――――!!」

――

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ……!!」

綺凛は布団から飛び起きた。
心臓が痛いほど跳ねている。
荒い呼吸に体中にかいた気持ちの悪い脂汗。ズキズキとした痛みを、傷口もないのに体中に感じる。さらにはどっしりと重い疲労感。
そしてやけに鮮明に覚えている斬り合いの夢。否、あれはただの夢ではなかったのだ。
綺凛は自分の胸に手を添える。自分の中に入っていったムサシ眼魂に意識を向ける。あの夢は間違いなく、この眼魂の力によって引き起こされたものだ。
ズタズタに切り裂かれたが、何かを伝えようとしていたのではないか。夢の中での出来事を思い返す――と、自分の枕もとで鳴り響く携帯にようやく気が付いた。目覚ましのアラートだ。
「あっ、時間！」
慌てて時計を見る。現在時刻はすでに家を出て、朝練の場所に向かっている時間だ。
今からすぐに向かおうにも、軽く水浴びしたのではないかと勘違いしてしまうほど汗をかいた体だ。エチケット的にシャワーは浴びたい。だがシャワーに時間を使うと往復だけで家に帰ってくることになる。
「はぁ……アインハルトさんに連絡しよ」
今日の朝練には参加できない旨を、アインハルトに伝えるのだった。

綺凛とユウキの異変

綺凛にムサシ眼魂を渡した次の日。朝練に来た俺だったが、
「そうか……綺凛は寝坊か」
綺凛は寝坊でお休みらしい。ムサシ眼魂の影響について聞きたかったんだが。
「はい。珍しいですよね」
確かにそうだな。剣術道場の娘だからか、今まで綺凛が寝坊したところは見たことがない。まあ、それを言ったらアインハルトもそうなんだけど。え、俺？　お、俺はほら……夜更かしすることがあるから……
それが今日に限って――――ムサシ眼魂を持って帰った次の日となると、何かあったのではないかと勘繰ってしまう。
だが来ていないものはしょうがない。連絡は取れてるみたいだし、ここはいつも通り朝練をするとしよう。
「はい、それでは――――」
俺たちはいつものメニューをこなす。綺凛がいないからと言って特にトラブルが起きることはなかった。
あっという間に朝練終了の時間になる。
「お疲れ様でした」
「お疲れ」
最近では体力がついてきたのか、朝練が終わっても疲労を感じることがなくなってきた。あるのは運動後のさわやかな解放感だけだ。
いくら異能で体を強化出来るといっても、根底にあるのは生身の身体だ。そこをおろそかにするわけにはいかない。
「そうですね。覇王流でも基礎トレーニングは徹底するようにとされていますから」
どんな流派でも下地にあるのは体づくりってことか。それもただの見せる筋肉ではなく、実践で役立つ柔らかい筋肉が。や、わからんけどね。専門家じゃないし。
「その考えで合っていると思いますよ。自分に見合わない大きな筋肉

は、逆にスピードを殺すことになってしまいますから」
「どうりで」
練習用のスパッツに包まれたアインハルトの足を見る。やっぱり、むっちりしているのではなく引き締まっている。腕や腰回りもだ。六課での訓練も始まったし、俺もそのうちいい感じの細マッチョになるのかもしれない。
「あ、あの……そんなにじろじろ見られると……」
「そうだな。悪い」
俺は視線を足から顔にずらした。足をまじまじと見られるのは恥ずかしいだろうという判断だったんだけど。
「い、いえ！　翔さんが見たいとおっしゃるのなら、いくらでも……！」
それが逆にアインハルトのやる気？　を引き出してしまったらしい。確かにスパッツに包まれた健康美はいくらでも眺めていたいし、なんなら触ってみたい気持ちもある。だが、時間が迫っているもの確かだ。早朝に訓練している都合上、そこまで時間に余裕がある訳ではないのだ。
「……アインハルト、お前『見てほしい』じゃなくて、『触ってほしい』じゃないか？」
「っ!!」
俺の一言でアインハルトの顔が真っ赤に染まる。『触ってほしい』とはただ触るだけではなく、その先の行為も指した意味だった。
アインハルトの反応を見ると、その指摘は間違っていなかったようだ。
「綺凛がいないからって、お前な」
「ち、ちが、ぃ……ませんけど」
意外にもアインハルトはあっさりと認めた。恥ずかしいのか段々と尻すぼみになってたけど。
「だって、その、大会終わってからしてない、ですし。他の方とはしてるんですよね……？」
「まあ……」

思えば綺凛も(おそらく理子の入れ知恵があったとしても)、あの着衣水泳のトラブルをうまく利用して俺を家に連れこんでたもんな。
それに比べてアインハルトはまじめな性格が災いして、そういった機会に恵まれていない。俺と一緒に住んでいないから、昨日の桜のようにこっそり誘う、といったことも不可能だ。
実は大会が終わってから、アインハルト達とまともに顔を合わせているのはこの朝練だけだった。年齢や生活サイクルが違うのだから当然ともいえるが。
結果、約一か月半の間、俺との行為がないまま過ごしたことになる。意外とむっつりだったアインハルトにはつらい期間だったのかもしれない。
「……翔さんのせいで、こうなったんですもん」
「……や、結構アインハルトが自分でこうなったんじゃないか?」
俺から後輩の女の子にその手の話をふることはなかったし、アインハルトからふられたこともない。綺凛はその気配があったんだけど、アインハルトの場合はミカヤさんの道場での一件が初だった。
まあ、どっちが原因とか言い争っても意味がない。重要なのはそちらではなく。
「じゃあ、するか?」
「い、今ですか!?」
「や、まさか……」
外だし。朝だし。学校もあるし。
「そ、そうですよね! アハハ……」
……まさかとは思うけど、アインハルトの中では今から、学校に遅刻することも覚悟でOKだったってことはないよな? いやいや、まさかね。
「じゃあ放課後とか?」
昨日の今日でという話になってしまうが、結局のところそうするしかない。謹慎期間で俺から会いに行くわけにもいかないが。
「え、でも、放課後は皆さんとの練習が……うぅっ」
『皆さん』というのはヴィヴィオ達のことらしい。何でも今日は八神

道場の面々との合同練習があるのだとか。よりにもよって今日。この話をしたタイミングとは何とも間が悪い。
「そこはアインハルトに任せるけど」
「……さすがに今日の練習をお休みするわけにはいきませんから。また後日で、その、お願いします。明日、とか、どうでしょうか……？」
今日はだめだから明日しようというのもすごいとは思うけど。アインハルトはあんまり意識してないみたいだ。自分のセリフの意味を理解していないのか、緊張した面持ちで俺を見ている。
だが俺も、その日その場で誘われることはあっても、こうして約束を取り付けてする機会はあまりなかった。
「（明日、ね）」
1日しか休んでいないはずの俺の息子は、期待に少しだけ硬くなっているのだった。

「え～と、綺凛、綺凛……」
そして昼休み、俺は家に帰る前に綺凛の様子を見ておこうと中等部の校舎に足を運んでいた。
メッセージでは連絡を取ってみたが、予想通り『全然大丈夫です！気になさらないで下さい！』って返事が返ってきたからね。普通とは違うことが起きたのに、本人が言う『大丈夫』ほど信用出来ないものはない。
中等部に入ると嫌でも視線を集めるが、最近は高等部でも同じくらい視線を集めてるからな。
中等部では『高等部の人がこんなところで何してるんだろう』、高等部では『あれが噂の婚約者の……』という違いはあるけど。そのうち

中等部でもそういう目で見られるのかもな。
適当なことを考えていると、綺凛のクラスに到着する。
顔をのぞかせると、ちょうど友達と話していたらしい綺凛と目が合った。
「ぁ、ごめんね、ちょっと」
すぐに立ち上がってこちらに駆け寄ってくる。
「どうしたんですか、先輩？　あの件でしたらメッセージを送ったと思うんですけど……」
「や、一応自分の目で確認しておきたくてさ。本当に何ともないのか？」
「はい」
「変な夢とか見てない？　夢の中で武蔵が語り掛けてきたり」
「――はい。ありませんよ」
「そっか……」
淀みない解答に、俺は納得せざるを得ない。
夢の中で何かってのが、一番可能性あると思ったんだけどな。それもなかったのか。でも、じゃあなんで今日は寝坊を？
「そういうこともありますよ」
そういうこともあると言われれば、そりゃそうなんだけど。
「……ま、何かあったら言ってくれよ。言われてもすぐにどうにかできるもんじゃないけどさ」
「はい、わかってますよ、先輩」
話は終わった。『それでは』と一礼した綺凛が自分の席に戻っていく。
それを見届けた俺も体を回転させ教室から離れる。
今日の合同訓練、綺凛も参加することになっているらしいからな。何かあったら連絡があるだろ。
「俺も帰るか」
歩き出したのだが、
「あ」
「あ」

特徴的な青い髪。ショートとミディアムの間くらいの、肩にかかるくらいの長さ。そして俺を見た瞬間にその目に攻撃的な色を浮かべ、それを隠そうともしない真っ直ぐな性格。
「どうも、美樹さん」
「……ども」
この世界では雪菜の友人である『美樹　さやか』がそこに立っていた。周りには他の人物の姿は見えない。完全に一対一だ。
間に雪菜がいないときには、正直会いたくなかった人物だ。雪菜に聞いたところによると、まどマギキャラの中で俺の立場はかなり低くなっているらしいからな。その中でもさやかは、もはや敵意すら向けているのだとか。
そうなる前に少し反論して欲しかったところだが、
――――――――
「皆さん言うんですよ。複数の女性とお付き合いしてるのはどうなのかって」
「そりゃみんなが正しいわ」
「ですよね、先輩」
「……うん」
「いえ、理解してますけどね？　先輩の事情については」
「……ほんとですか？」
――――――――
って感じで、今では俺のせいで雪菜が友人関係で悩んでいないのか、不安になる日々だ。
あいさつは交わしたが、俺にこれ以上の話題はない。そのまま立ち去ろうとしたが、
「雪菜に会いに来たんですか？」
「……や、綺凛にな」
「キリン？　……ああ、刀堂　綺凛ですか」
前に一度、綺凛のトラブルの時に会っていたからか、綺凛のことは知っているみたいだな。
「中等部では有名人ですから。近接戦闘の授業ではいつも引き合いに

出されてますよ」
「ああ、そういう」
　中等部と高等部では当然授業の内容が違う。高等部では自分の専門を自分で選択して学んでいくが、中等部ではいくつかのクラスが合同で、体育の授業の様に1つの技術の基礎を学ぶ。
　綺凛の実力を考えれば、みんなのお手本にされてもおかしくないだろう。しかもそれが学年を超えて轟いているとはね。みんなの前に出て恥ずかしがっている綺凛の姿が目に浮かぶな。
　と、そこに、
「先輩！」
「「雪菜!?」」
　雪菜が現れた。走ってきたのか少し息を切らしている。
「ごめんね、さやかちゃん。先輩、私に用があるんですよね？」
「いや、この人、刀藤先輩に会いに来たらしいよ」
「……綺凛ちゃんのことで、私に用があるんですよね？」
「そ、う、だな！　そうだったそうだった！」
　雪菜の助け舟に何とか乗り込むことに成功する。
「じゃあさやかちゃん、ちょっとゴメンね！」
「あ、う、うん」
　雪菜が俺の背中を押して、さやかから離れた。
「それで、あの件ですか？」
　あの件――ムサシ眼魂のことはすでにみんなに伝えてある。
「ああ。でも、特に何もないって」
「……本当ですか？」
「俺も本当かどうか疑わしいと思うんだけどな。本人が答えてくれないんじゃしょうがないよ」
「綺凛ちゃんが先輩に隠し事、ですか……？　うーん……」
「とりあえず、雪菜も気にかけてあげてくれ。何かあった時、雪菜の方が近いんだし」
「はい、分かりました」
「こっそり、式神で見張っておくのもいいんじゃないか？　俺にして

るみたいに」
「……気づいてたんですか？」
　式神は分からないが、あんなに脈絡なく登場してきたからな。原作でも古城相手にしてたし。
「流石に式神で見張るのは……本人の許可も得ないとですし」
「俺、許可とられた覚えはないけど？」
「先輩はいいんです。先輩ですから」
　どういう意味だ。ま、いいけどさ。
「じゃあ、俺は帰るから」
「はい。寄り道せずに帰って下さいね」
　子供に対するお母さんのような言葉を背に受けながら、俺は中等部を後にするのだった。

「「こんにちわー!!」」
「おーっす、よく来たな」
　元気よくあいさつするのは、ヴィヴィオ、リオ、コロナの年少ちびっこ組。それに応えるのはヴィータだ。
「ヴィヴィオさん、お久しぶりです！」
「ミウラさん！」
　元気がいいのは八神道場の面々も同じだった。その中でもひときわ元気なのは、インターミドルの大会でヴィヴィオと熾烈な試合を繰り広げたミウラ・リナルディだった。
　ミウラも今日の訓練を楽しみにしていたのだ。
　和気あいあいとした雰囲気で始まる合同訓練。基礎的なストレッチから始まり、全員で列をなしての走り込み、お互いにアドバイスを

し合っての型の練習。
だがその訓練時間はいつもよりも短い。
なぜなら今日のメインイベントは、
「よっし、んじゃ、そろそろスパーはじめっか」
「そうだな。ガキ共も待ちきれねぇらしいからな」
「「やったー!!!」」
練習試合の様に、お互いのチームの垣根を超えた交流戦だからだ。
その最初の対戦相手は、
「こっちからは綺凛だな」
「こっちはユウキだ……おい、ユウキ!!」
「え？　は、はい！」
「どうした？　ボーっとして」
「そんなことないですよ！　じゃ、やろっか、綺凛さん」
「はい、よろしくお願いします、ユウキさん」
２人が広場――――八神道場で手合わせのスペースとして使われている場所に案内され、剣を抜いて向かい合う。お互いの刃が太陽の光を反射してきらりと光った。周りを囲む子供達もおしゃべりをやめ、２人に見入る。
「よし――――始めッ!!」
「はっ!!」
「やぁっ!!」
ヴィータの合図とともに打ち合わされる剣劇。それはインターミドルの試合の再現だ。
だが２人の指導者はその動きを見てすぐに眉を顰めることになった。
綺凛の場合、鶴を折るが如しと言われる連鶴がどこかぎこちない。連撃と連撃の間に無駄な力が入っているせいで、一番の持ち味が死んでしまっている。
ユウキはまるで回避を忘れてしまったかのように行動がワンテンポ遅い。綺凛の連鶴が本来の速度でなければとっくに勝負がついてしまっているだろう。

「ストップストップ！　やめだ！　やめ！」
　ヴィータは慌てて試合を止める。そして２人を呼び寄せた。それぞれのコーチが事情を聴く。
「どうした、綺凛。ずいぶん剣が荒いぞ」
「ユウキもだ。ふらふらしやがって。気い抜いてんじゃねえぞ」
　コーチに注意された２人は素直に頭を下げた。
「ご、ごめんなさい。実は……その……今日の合同訓練が楽しみ過ぎて、昨日あんまり眠れなくて……」
「ボクもだよ～。いやー、今日の練習が楽しみすぎて眠れなかったんだよね～」
「お前らな……睡眠不足で訓練したらケガすんぞ」
「だな。楽しみにしてんのはいいがけどな」
　遠足前日の子供の様な理由に、ヴィータとノーヴェは苦笑いしながらもため息を吐いた。
「しゃーねぇ、２人とも、今日は見学だな」
「それかさっさと帰って寝とけ。明日に引きずらねえようにな」
　ノーヴェからは見学、ヴィータからは帰って休む、という選択肢が提示された。
　それ以外は、たとえ軽いランニングでも許さないという意思を込めて。この２人の性格を考えると、どうしても続けたいと駄々をこねるかもしれないと思ったからだ。
「……すみません。それじゃあ私は、今日はお休みさせていただきますね」
「うん。ボクも今日は帰って休むことにするよ」
「あ？　お、おう。そうか」
「……じゃあ、気をつけて帰れよ。寄り道すんじゃねーぞ！」
　予想以上にあっさりとした態度に、２人のコーチは反応がワンテンポ遅れてしまう。
「はい。わかりました」
「それじゃあ、ボク達は帰るね。さよなら～」
　軽い挨拶をして２人は訓練場を離れていく。

「綺凛さん……」
「ユウキさん……」
２人の友人たちはその後ろ姿を不安そうに見送るのだった。

幽霊との遭遇

キーストーンゲート襲撃から1週間。１０月も半ばに入りかけた学園島。

混乱が予想された事件だったが、予想外に早く復旧が進んだことですでに以前と変わらない様子になっていた。

そんな学園島に、最近になって流れ始めたうわさがあった。

曰く、それはフードを被っている。

曰く、そのフードからは鬼のように1本の角が伸びている。

曰く、それは幽霊のようにおぼろげである。

「そう、これが今この島で一番ホットな噂！『裏路地の幽鬼（ゆうき）』なんですよ！」

場所はいつものファミレス。いつもの４人が集まったこの場所で、興奮気味の佐天　涙子が勢いよくテーブルを叩いた。

「それ、噂じゃなくて事実ですよ？」

「そうですわね。こちらの武偵の案件ですが」

そんな佐天をさらりと流すようなコメントをするのは、同じ武偵支部で働く初春　飾利と白井　黒子だ。

佐天が声高々に話した内容は、最近の風紀委員で取りざたされている事件だった。

常に裏路地やビルの隙間にたむろしているような学生、つまりはスキルアウトに対して暴行を働く謎の人物。その人物の特徴がフードとそこから伸びる一本の角、そして幽霊のような体だった。

襲われたスキルアウト達も、フードと幽霊のようにぼやけた身体のせいで顔どころか性別すら判断できていない。だが共通して、凄まじい剣技と建物の壁や障害物を透過する能力（この特徴が幽霊と言われる原因）が挙げられている。

自らの正体を明かさず、暴力沙汰や違法薬物の売買など犯罪行為を働いている相手だけを狙ったその姿は、

「ダークヒーローって感じですね！」

などと、ひそかにネットを騒がせていた。だがそれは一般大衆の考

えだ。
「何を呑気なことを言っていますの。大問題ですわ」
襲われたスキルアウトは全員『生気を抜かれた』と表現できる状態になっており、会話できるものは数名だった。幸い匿名の通報がされているため、病院には搬送されている。その通報は状況的におそらく『幽鬼』本人だろう。
犯罪者を取り締まるのはいいが、通報だけして放置というのはいただけない。無責任な行為だ。
「ヒーローを気取っているのかは知りませんが、早く捕まえて一度指導を受けさせなければいけませんわね」
「やってることは全然正しいんですけどね……」
黒子のつぶやきに、初春が苦笑いを返した。
『幽鬼』が襲っているのはチンピラだけではなく、明らかな違法取引をしているにもかかわらず、証拠がないために捕まえられなかった犯罪者も対象だった。
いったいどうやって取引先を突き止めたのか、まさに取引の瞬間を押さえるように攻撃が行われているのだ。
「へぇ？　私みたいにハッキングしてるのかもね」
「お姉さま？『私みたいに』とは？　どういう意味ですの？」
黒子のボヤキを、飲み物を飲むことで回避する美琴。
美琴は妹達の事件の際、持ち前の能力を使って常人には知り得ない情報を手に入れていた。同じ発電能力者なら、御坂と同じような手段で情報を得ることは出来るかもしれない。
「はあ……お姉さま、くれぐれもこの事件に対して、余計な詮索はなさらないよう」
「はいはい。知り合いが被害に遭わなければね」
「佐天さんもですよ！」
「分かってますって！　もう懲りてますから！」
「裏路地探検とかもしないで下さいよ」
「初春も疑り深いなぁ」
軽く笑う佐天と美琴だったが、黒子や初春からの疑い眼はなくなら

ない。２人の性格は友達をしていればいやというほど理解させられる。つまり、『注意したくらいで治るものではない』という事を。
「もう……あ、白井さん、そろそろ行かないとですよ」
「そうですわね」
　初春に言われて黒子が立ち上がる。
「何、２人共仕事？」
「ええ、ちょうど幽鬼についての対策会議を」
「今の所幽鬼さんの全勝ですけど、いつ間違って返り討ちに遭うか分かりませんから。そうなる前に事情を聴いて、こんなことはやめさせるか、どこかに管理してもらうかしないと」
　ウワサを聞くと、幽鬼は単独で行動している。もしも返り討ちに遭った場合、チンピラから相当な恨みを買っている分、壮絶なリンチが行われる可能性がある。
　幽鬼の攻撃は島の不良に無差別に降りかかっているため、そのすべての悪意を向けられる可能性があるのだ。
「そっか……ま、何かあれば相談しなさいよ」
「いえですから、お姉さまは風紀委員ではないのですから……」
　何度目かのやり取りをした後、４人は解散するのだった。

　という訳で１人になった佐天。元気が有り余る彼女には家に帰るなどといった選択肢はない。さりとて目的もないので、適当に街をぶらつく。
　ただ、佐天の悪癖とも言うべきか、友人たちに注意されて本人もいけないとわかっていても、してしまう事がある。
「っと、いけないいけない」

と、言いつつも、先ほどから何度もビルの隙間の裏路地をのぞき込んでいた。
「あ」
「アァ？」
偶然、本当に偶然。
街中や電車でも、思いがけず他人と視線がぶつかることはあるだろう。たいていの場合、何も言わず、そのままお互いの端末に目を戻したり、進行方向を向いたりする。
だが、今回は相手が悪かった。
「何だよ嬢ちゃん。俺達に何か用か？」
「えぇ……いや～……」
裏路地の入口にたむろしていた数人の不良とバッチリ目があってしまったのだ。硬直している佐天へ向けて、不良たちが一歩前に迫ってくる。
「（あ～、やっば～……!!）」
佐天は愛想笑いを浮かべながら半歩後ずさる。幸い佐天がいるのはまだ表の太い路地だ。全力で駆けだせば、目の前の男達も無理に追ってはこないだろう。
だが、その行動をとるよりも先に、
「え？」
「うわっ!? な、なんだ!?」
「ケイちゃん？ どうし――おごっ!?」
佐天に迫っていた不良。そのうちの1人が誰かに首根っこを掴まれ、裏路地に引きずり込まれた。さらにその仲間が、体をくの字に折り曲げながら裏路地に叩き込まれる。
さらに、その後ろにいた不良が慌てたような声を出している。
「いてっ!?」
「な、何だ、コイツ……!?」
「逃げろ!! ほら、行けって!!」
不良たちは急いで路地の奥へと消えていった。
「え、えぇ……？」

佐天の周りの人たちも怪訝な目でみてくるが、一番混乱しているのは佐天だった。
「も、もしかして、私に眠っていた能力が覚醒して――――な訳ないか」
くだらないことを言いながら、不良が吸い込まれた裏路地をのぞき込む。そこには人っ子一人いない。つい先ほどここに入ったはずの不良たちもいなくなっていた。
「何処行ったんだろう……？」
意味もなく目を凝らしていると、何やら声が聞こえて来た。
「これって……悲鳴!?」
かすかにだが、男性の悲鳴が聞こえてくる。それがさっきの不良のものかは判断できないが、人の悲鳴を聞いて知らん顔することは出来ない。
とは言え、佐天の力でこの先に進むには少し心もとない。
そんな佐天に声をかけたのは、
「あの、どうかしましたか？」
「え、あ、あの……！」
どこか疲れたような表情をした女の子。武偵中の制服に、肩からは竹刀袋を提げている。つい先ほど、合同訓練の途中で帰宅した綺凛だった。

「はぁ、集中してないな……」
ため息を吐きながら、綺凛は街をさまよっていた。
真っ直ぐに帰れと言われたのだが、帰りの電車でボーっとして乗り過ごしてしまい、そのまま引き返す気持ちにもなれず、こうして気晴らしがてら歩いていたのだった。

だが、それほど効果はなかった。
1時間ほど無心で歩いていたのだが、頭を占めるのは剣術の事ばかりだ。
昨日の夢で自分の弱さを自覚させられたからと言って、立ち合いで集中できないなんて、相当重傷だ。
「……先輩にも、隠しちゃった」
ムサシ眼魂が夢で語り掛けてきたこと、翔から具体的な指摘があった時は笑顔を保つのが大変だったものだ。
どうしてか、など考える必要もない。
綺凛自身、あの環境が――――『ムサシ』を名乗るあの人物との死合が、自分に新しい何かを見せてくれるのではないかと思っているのだ。
きっと翔に言えば自分の中にあるムサシ眼魂をどうにかするために動いてくれるだろう。だが、それではダメだ。それでは何もできない自分から変わることが出来ないのだ。
「(でも、少しくらい剣術がうまくなったって、先輩の役に立てるくらい強くなれる訳じゃないよね……)」
自虐的な笑みを浮かべたところで、
「(……あれ？)」
綺凛の目に、とある女の子が目に入った。別の中学の制服を着ているが、その体つきや足運びは素人同然だ。
そんな娘が、裏路地をのぞき込んで何やら唸っている。
綺凛の視線にも気づかずに、おろおろとしている様にも見えた。
たまらず声をかける。
「あの、どうかしましたか？」
「え、あ、あの……！」
佐天は慌てつつも、綺凛に状況を説明した。
「ホントだ、悲鳴が聞こえますね――――っ」
「ですよねっ!! これって放置しても……どうかしました？」
「い、いえ！ なんでもないですよ！」
確かに何でもない。外見に変化があったわけでも、体調が悪くなっ

たわけでも無い。ただ、胸の奥、自分の中に入り込んでいるもう1つの魂(眼魂)が、何かを感じ取った、そのように綺凛は考えた。
「(もしかして、コレと何か関係が……？)」
胸の鼓動が速くなる。綺凛にも理解出来ない欲求がわき上がってきた。今すぐ、この路地の先で起きていることを確かめなければいけない。そんな欲求が。
「管理局か他の武偵には通報しましたか？」
「え、あ、まだです！　そっか、早くしないと……！」
佐天は大慌てで端末を取り出し――――裏路地に向けて一歩踏み出している綺凛に目を向けた。
「もしかして……」
「はい。私は中の様子を見てきます。あなたはここに残って、駆け付けてきた人を誘導して下さい」
「ちょ、ちょっと――――!!」
戸惑う佐天の声には答えず、綺凛は駆けだしていた。細い路地を走り抜け、悲鳴の聞こえる方向へ。30秒ほど走る。するとビルとビルの間、ちょっとした空き地のスペースに辿り着く。
そこには地面に倒れた数人の男。そしてその男達から『何か』を回収するフードの人物。男の身体からエネルギーのようなモノを吸収している。
「やめてください!!」
綺凛は刀を抜いて叫んだ。
フードの人物が驚いた様子で振り向く。
「(どうなってるの……？)」
佐天の話ではガラの悪い男がいたと言うが、その人達は地面に倒れこんでいる。代わりにフードの人物が男達を襲っている。
男達が倒れているだけなら、フードの人物が制圧しただけかとも思える。だが、それ以上の行為をしていては止めるしかない。
「はぁっ!!」
「っ!!」
刀を向けているのにエネルギー吸収をやめないフードの人物に、綺

凛は斬りかかった。同年代から見ても神速と言われる踏み込みから、横なぎの一閃。
フードの人物は大きく後退する。
「(かすっただけか……!!)」
「……!!」
攻撃の結果に、綺凛は冷静に構えを取り直す。
それとは反対に、フードの人物は混乱していた。剣先がかすった自らの服を見て。
「(斬られた? どうして……)」
少しだけ切込みが入った程度だが、確かに綺凛の刀によって斬られていた。今の自分――半分幽霊になっている自分を、何の変哲もない刀で傷つけたのだ。
「(あれ? なんだ……?)」
フードの人物の眼には、綺凛から立ち上るオーラが見えていた。赤いオーラに体が包まれ、それが刀にまで及んでいる。
「(もしかしてアレが原因……?)」
「やぁ!!」
「ッ??!!」
綺凛の刀を何とか受け止めるフードの人物。考え事をしていたせいで反応がギリギリになってしまった。
「(とにかく、まともに戦っちゃダメだ……!!)」
何とかいなしてこの場を離れる。それだけを考えて、いつも使っているモノよりも大分幅広な――翔が見ればガンガンセイバーの面影を感じるであろう剣を構える。
だがそれは軽率な行動だった。
「……え?」
その構えを見て、綺凛が声を漏らす。
剣士ならば構えだけで、たとえフードによって顔が隠れていようと、それが誰か区別することが出来る。それも、つい先ほどまで剣を交えていた相手なら。
「ユウキ、さん……?」

「っ!?」
その呟きを聞いたフードの人物が、剣の構えを解いて一目散に走りだす。通路ではなくビルの壁に向けて。
一瞬気を抜いてしまったせいで、刀を握る手に力が入っていない。
「まっ、逃げないで下さい!!」
綺凛の静止も効かず、フードの人物はビルの壁に突撃し、
「そんな!?」
壁を切り裂くのではなく、その壁に吸い込まれるように消える。
壁を調べても何も不審な個所はない。綺凛にはこれ以上追跡する手段がない。胸の奥で鳴り響いていた鼓動も収まってしまった。
「大丈夫ですか!?」
広場の入り口からは武偵を引き連れた佐天が入ってくる。
「はい。でも、逃げられちゃいました……」
綺凛が申し訳なさそうに言うのだった。

夜月翔のハーレムな謹慎⑧　（雪菜）

特に何もなかった日の夜。俺は綺凛からの電話に出ていた。
「それで、綺凛の方にはケガはなかったんだな？」
《はい。私は全然。戦いにはならなかったので》
綺凛の話では、今日の八神道場との合同訓練を体調不良で早退、家に帰る途中で幽霊――巷では幽鬼と呼ばれている奴が引き起こした騒動に巻き込まれたらしい。
その場は納めたものの風紀委員の取り調べが長引き、家に帰ってきたのはついさっきとのことだ。
「怪我がないのは何よりだけど、気になることがあったんだよな？」
《はい……その幽霊なんですけど、もしかしたらユウキさんなんじゃないかって。あ、ユウキさんは八神道場の――》
「大丈夫、それは知ってる。そうか……何でそう思ったんだ？」
《構えです。刀の構えがユウキさんそっくり、というかそのもので。私が名前を呟いたら逃げちゃったんです》
「なるほど」
《それにユウキさん。私と一緒に訓練を早退してて……》
「丁度アリバイもないと」
《はい……》
状況証拠が過ぎるような気もするが、適当に流すことも出来ないな。綺凛にとっては普通の友人でも、俺から見れば原作キャラだ。
俺は立ち上げているＰＣの画面をスクロールさせる。それは学園島のウワサを集めたサイトだ。
そこにアップされている、最近では一番閲覧数が多い記事。『学園島の幽鬼』。フードに一本角の幽霊。その特徴には１つ心当たりがある。
原作キャラならば、
「アナザーライダーって線もあるからな……」
ユウキがアナザーゴーストになってる可能性も無いとは言えない。むしろ、あの謎の男は原作キャラを狙ってアナザーライダーにするだ

ろう。
《え？　なんですか？》
「や、なんでもない。綺凛の方は何ともないか？」
《はい？　何かというのは？》
「ほら、ムサシ眼魂。何ともないか？」
《あ、ああ、そっちですね！　はい。特に何も》
そうなのか。
アナザーとは言えゴーストの近くに行ったんだ。何かしらの反応があってもおかしくないんじゃないかとも思うんだけど。
考え込んでいた俺に綺凛が申し訳なさそうに、
《……すいません。わたしの変な妄想に付き合わせてしまって》
「何言ってんだ？　全然変じゃないだろ。筋は通ってるんだ」
《そ、そうですか？　……ありがとうございます》
こんなふうに断言できるのは俺のメタ推理も入ってだが。どっかの名探偵なら、この段階で真実に辿り着いてるのかもな。……っち、嫌な奴のことを思い出しちまった。
「ま、一応気にかけておくよ」
《はい、お願いします》
そんなところで綺凛との電話を終了させる。
「幽霊、か……」
考える。綺凛の話を聞く限り、どうにもアナザーゴースト臭い。だがまあ、他の線を完全に排除して考えるのもいかがなものか。
「幽霊。幽霊と言えば……」
今度は俺から電話をかけた。相手は、
《私だ》
「ウェイバーか？　俺だ」
我らがロードエルメロイ２世だ。やっぱり幽霊って聞くと、リリなの系統の魔法よりも、Ｆａｔｅ系の魔術って感じがするからな。
俺は状況を説明する。アナザーライダーのことはぼかし、知り合いの女の子が幽霊になっているかもしれない、というような形で。
《ふむ、生きている人間が幽霊に……》

電話の先で何やら考え込んでいる気配を感じる。
「間違いならそれはそれで良い――――わけじゃないか。とにかく、原因を突き止めたいんだ。協力してくれないか？」
《私は構わない。急いでいるのなら明日からでも。そちらの予定が空いていればな》
「一応聞くけど、捜索は夜だよな？」
こんな事態になっているのにアレだが、明日はアインハルトとの約束がある。かぶってしまった場合、先に約束していたとしてもこちらを優先せざるを得ない。
《日が落ちてからの方が幽霊は出やすい、というパターンは、今回は当てはまらんか。昼にも出たという話だからな。どちらにせよ、昼間は私にも予定がある》
「了解。じゃあ夜に。お願いしますよ、ロード」
《……やめろ》
不機嫌な一言と共に電話が切られた。
これで明日の予定も一杯と。
さらりと謹慎を無視して予定を立てているのは置いといてだが。アナザーライダーだった場合、俺じゃないとどうにもなんないんだし。六課にも任せらんないしな。
「今日は寝ちまうか」
明日に備えて就寝しようとしたところで、
「雪菜、しないか？」
「しないか……？　へっ!?　ぁ、な、何言ってるんですか!?　突然!?」
一瞬で真っ赤になった雪菜が、自分の体を抱いて半歩後ずさった。
「最近、雪菜とはしてなかっただろ？　だから久しぶりにしたいと思って」
「う、ぐ……私はそうかもしれませんけど、先輩はいろんな人としてるんじゃないですかっ？　別に無理に私としなくても……」
「そうか？　雪菜が嫌ならいいけど」
「え？　や、せ、先輩がどうしてもと言うのなら、いいです、けど……」
お互いがお互いに選択肢を与えている様にも見えるが、雪菜の口調

に拒否の色はない。むしろこのチャンスを生かそうとする心が見え見えだ。
「あ、でも、ララさんが……」
「そうだな……」
今日はおとなしく自分の部屋に行ってるけど、いつこの部屋に来るのか分からない。バッティングしたら最悪だ。
そうなると……
「あ、そうだ。あそこはどうだ？」
「え？」

雪菜と一緒に来たのはＭＳが格納されているダイオラマ球だ。
今まで獲得したＭＳがコレクションのように並べられ、メンテナンスを受けている。まだだいぶ空きがあるな。いつかはここがいっぱいになるんだろうか。
「こんなスペースが……」
「ああ。みんなには言ってなかったな」
普通に格納庫扱いだったし。
ここは俺の許可がないと入ってこれないようになっている。ある意味プライベート空間だ。
「ちょっと周りはあれだけどね」
「ムードの欠片もないですね」
雪菜も苦笑している。
でもまあ、
「ここで良ければ」
俺は持ってきた布団を敷いた。

「何言ってるんですか？」
「え？」
雪菜は布団の上に座りながら微笑んだ。
「私は先輩がどうしてもって言うからお付き合いするだけですから。別に私がしたいわけじゃないんですよ？」
「……ああ、そうだったな」
笑わないようにするのが大変だった。
俺も座って雪菜と正面から向き合う。
俺は雪菜の頭を撫でた。くすぐったそうに頬をヒクヒクさせた雪菜は、ゆっくりと瞼を閉じる。
俺の唇が、雪菜の口を塞いだ。
「んっ……んぅ」
雪菜の頬がぽっと染まり、ちゅっちゅっと唇を啄ばんで来る。
「……先輩。先輩の好きにしていいですよ？」
期待の浮かんだ瞳で、雪菜は悪戯っぽく微笑んだ。
その期待通り、座っていた雪菜の後ろに回り込む。そして後ろからパジャマの中に手を差し入れた。
上では程よい大きさの双丘が、下ではくちゅっと濡れた膣が出迎えてくれた。
「あっ、あっ、んっ」
ちゅっ、くちゅっ、と雪菜をほぐしていく。指を割れ目に沿わせ、柔らかな双丘の感触を楽しむ。
雪菜は深呼吸しながら快楽を受け取りつつ、うっとりと身を任せてくる。
「はっ、あっ……あっ……んっ」
雪菜の胸を持ち上げる。乳房がゼリーのようにぷるぷる震える。中学3年生の雪菜は育ち盛りだ。もしかすると前にした時よりも成長しているのかもしれない。
「やっ……あっ、あっ」
つぷぷっと雪菜の膣に指が埋められた。ほんの少ししか弄っていないというのに、指を挿入するには全く困らない程、愛液が溢れてい

る。
俺の指から逃れようとしているのか、雪菜は腰を引き、すりすりとお尻で俺の股間を擦る。
「はあっ……あっ……先輩、お尻、当たってます」
当たっているというか、雪菜が当てて来たというか。まあどちらにせよ、俺の息子がすっかり硬くなっている事には変わりないか。
雪菜はコクリと喉を鳴らすと、腰を浮かした。そのままパジャマ事するりとショーツを下ろした。
言葉は無くともそれだけで全てが伝わる。
俺は雪菜を後ろから押し倒し、
「わっ、せんぱ――――んっ、んんぅ、んっ！」
ずぷっ、ぬぷぷぷぅ！　とそのまま後ろから刺し貫いた。
「はあっ、はあっ、はあっ……」
久々にこじ開けられた雪菜の膣は、程よい締め付けで俺のペニスを迎えてくれた。腰の奥からビリビリと電流が流れるようだった。チリチリと頭のどこかが焼けているような気までする。
「ああっ！あっ、あっ、んっ！」
俺が腰をゆする。すぐに雪菜の膣から愛液が分泌され、ぬちゃっ、ぬちゃっとペニスを鳴らし始めた。
「はぁっ！あっ！んっ！はあっ！」
総毛立った膣襞が群れを成してペニスに襲い掛かり、凄まじい勢いで絞り尽くそうとする。だが、平気な顔で何度も何度も出入りするペニスによって次々返り討ちにあった。
ペニスを捕まえられないことにシクシクと膣が泣き始め、どろりと雪菜の太ももを垂れ落ちる。
「せっ、先輩！　先輩、先輩っ！　はぁっ!?」
小さな身体を後ろから抱きしめられ、大きな胸を揉まれながら、身体にジャストフィットのペニスを馴染まされた雪菜は、あっという間に切羽詰まった声をあげた。
腰を掴む俺の手を触ろうとして、その手が空を切る。諦めた雪菜は布団に突っ伏した。

「せ、せんぱっ！　あっ、ああ～～～～～～～っ!!」
雪菜は丸くなり、ビクビクと身体を震わせる。
ぐぢゅうっと雪菜の膣が締め付けられペニスに猛威を振る。俺はその締め付けに逆らわず、だがしかし緊張する肉壁を掘削しながら、ペニスの挿送を続ける。
「う、く……雪菜、出そうだ……」
「え!?　うそ、まっ――――」
びゅるるる、びゅるっ、びゅぐぐっ!!
「ひぐうぅぅぅぅぅっっ!?」
子宮口にぶちゅっとキスした亀頭から、白濁液が吐き出される。小さな部屋は簡単に満杯になり、溢れ、布団に垂れる。
絶頂の途中だった雪菜はその刺激で追い絶頂をかましていた。
収まりきらない精液だけではなく、雪菜から噴き出した愛液で、すっかり布団はびしょびしょになってしまった。
「はぁ……はぁ……はぁ……先輩、早いですね……」
「それは雪菜もそうだろ？　久しぶりだからか？」
「そんなこと……ないです。別に普通ですよ。何も変わってないです」
「そうか」
「あっ、ちょ……！」
俺は雪菜の片足を掴んで股を開く。
綺麗に手入れされた陰毛と、グジュグジュに濡れそぼった膣がさらけ出される。俺はそこにペニスを当てがうと、ぬぶりと膣が左右に開いて亀頭を呑み込ませた。
「んっ！」
にゅるぅ！　とペニスが雪菜の膣内に埋め込まれた。一度絶頂した雪菜のおマンコはペニスの形を覚えていた。
雪菜は眉を切な気に震わせてから、じっとりと俺を睨んできた。
「ず、ずいぶんと手慣れてますね……あっ！」
ぬぐっ、と腰を引いて押し込んだ。
「はあっ！　はあっ！　ああっ！　あっ！」

先ほどまでの続きのように、ずちゅっ、ずちゅっと激しく犯し始める。
「ひぃっ!?」
雪菜は目を見開いて仰け反った。
俺は雪菜の膝の裏を押して、柔らかい雪菜の身体をぺたんと折った。膝が顔の横になるまで裏返されても、雪菜は痛みを感じた様子も見せない。剣巫として鍛えたしなやかな肉体があってこそだ。
それをセックスに利用される。
俺は腰を持ち上げると、真上から雪菜に腰を打ち付けた。
「ひっ！　ひんっ！　ひぁん！　あああっ！」
まんぐり返しされて、ぶじゅぶじゅと泡立つ膣を見せられた雪菜は顔を真っ赤にした。
だがそんな余裕も、あっという間に剥ぎ取られることになる。重力を味方にして力強く撃ち抜かれた子宮。その衝撃は身体全体に波及する。
おマンコだけではなくお尻の穴すら丸見えの体勢で、それでも雪菜は全力でよがる。
「はぅ～～～～～～～～っ!!」
目を見開いてカタカタ震える雪菜。
「はっ……はっ……うぅ……ひぃんっ」
俺はグリグリとペニスを捻じ込んだ。奥までねじ込むと重力に逆らって口を伸ばしてくる子宮口に何度もぶつかる。
「あっ！　あっ！　やっ、もうっ、考えっ、らんなっ、ああっ！　あぁあっ！」
ずびゅうっ！とペニスが引き抜かれると、良くペニスに絡み付く膣のおかげで精液と愛液のミックスジュースがたっぷり掻き出されてびちゃびちゃと飛び散った。
「ふくぅ～～～～～～～～っ!!??」
ペニスに引きずり出される膣の中身を見せ付けられて、雪菜は泣きそうな顔で絶頂する。それでもペニスの動きは止めない。
遠慮無く、撃ち抜いた。パンパンパンと腰を叩かれ、雪菜はハラハ

ラ涙を流しながら泣き付いた。
「あああっ！　キス！　キスしてくらさい！　れふからぁ！　んみゅ!?」
　雪菜の懇願通りに、俺はキスをする。雪菜は快楽でロクに回らない口を実に情熱的に動かし、くちゅくちゅと暴れさせる。
「んんぅ！んっ！んんっ!?んん～～～～～～～っ!!んんんぅ?!んんぉ～～～～～～～～っ!!」
　ピーンと雪菜が足を伸ばした。足の先まで力を込めて真っ直ぐに伸ばし、舌も俺の中に突き出す。
　それと同時に。
「うぐっ、でる……!!」
　白いものをぶちまけた。下に下に。子宮の中に流し込んだ。
「んふむぅ～～～～～～～っ!!??　ふっ、ふんむ～～～～～～～～～っ!!ふうっ、ふうっ、ふううっ、ふぐ～～～～～～～～～～!!」
　ガクガクガクと雪菜の身体が妖しく痙攣する。ぐぶっ、ぶっ！と膣が激しく脈動し、ペニスを引きちぎるように食らいついてきた。
「はぁー……はぁー……はぁー……」
　はしたなく体を投げ出した雪菜の股間からは、白いドロッとしたものが流れ出ているのだった。

　今回の行為で手に入れたアイテム
　ゴーストドライバー　＋　オレ魂
『仮面ライダーゴースト』に変身するためのベルト。
『ゴースト眼魂』を使うことで仮面ライダーゴーストに変身することが出来る。
「ベルトですか。じゃあ当たりですよね？」
「ああ。雪菜もわかってきたな。それにしてもゴーストドライバーか。いよいよって感じだな……」
「え？　何がいよいよなんですか？」

「え？　や、別に？　いよいよそろってきたなって意味。別に変な意味はないよ？」

高級リゾートホテル（ダイオラマ球）

高級リゾートホテルのダイオラマ球。最高級のおもてなしで、日ごろの疲れを癒しましょう。ただし従業員は付属していません。

「高級リゾートぉ？　こんなダイオラマ球もあるのか」

「どんな感じなんでしょうね？」

「俺も普通の所ならともかく、『高級』が付くところには行った事ないからな……」

「でも従業員がいないのは不便そうですね」

「それはこれからのガチャなのかな？」

それぞれの就寝　（アインハルト）

アインハルトの自室。
日が落ちるまで続いた合同訓練の疲れをシャワーで洗い流し、今はベッドで横になっていた。
「はぁ……」
合同訓練そのものはとても有意義だった。一度も手合わせしていなかったミウラとの戦いは刺激的だったし、ヴィータの苛烈な攻撃は覇王流の攻撃に生かせそうな部分があった。
だがその序盤、綺凛とユウキが早退してしまったことがずっと気がかりになっていた。
特に綺凛だ。今朝の事といい、やはり何か具合が悪いのではないかと勘繰ってしまう。
「翔さんに聞いておこう……ティオ」
「ニャオ！」
自らのデバイスであるぬいぐるみに声をかける。主の指示通り翔の端末に向かって電話をかける。だが、
「通話中、ですか。お忙しいんですね……」
そう呟いて一度電話を切る。
翔は現在謹慎中だが、それでも六課からの連絡があるんだろう。そうでなくても翔には知り合いが多い。偶然同じ時間に電話がかかってきていてもおかしくない。
「もう少し経ったら、もう一度かけよう」
だが何もせずにベッドの上で横になっていると、
「……、……、……、はっ！　い、いけない！」
訓練の疲れもあり、ぼーっと天井を眺めているとそのまま眠ってしまいそうになる。上体を起こして頬を何度か叩いて眠気を飛ばす。
アインハルトの大声に、お腹の上で丸まっていたティオが驚いて飛び跳ねた。
「もう1回かけてみよう。ティオ、お願いします」
「ニャ！」

眠らない内にと思ったが、結果は同じ……いや、少し違っていた。
今度はずっとコール音が鳴る。ほどなくしてから留守番電話サービスの音声へと切り替わった。
「でない……」
今回は通話しているのではなく、単純に電話に出なかったのだ。
「何かしてるのかな？」
そう『何か』をしているのではないか。
「……っ、そんなこと」
ないとは否定できない。何せ翔はたくさんの女の子と一緒に暮らしている。それも、翔が声をかければ迷いなく夜を共にするくらいの仲の女の子と。
一緒に暮らしていて何もないという夜が、果たしてあるのだろうか。あんなに魅力的な女性たちと一緒にいるのに。アインハルトにはそうは思えなかった。
実際には様々な思惑によって絶妙なパワーバランスが成り立ち、割と何もない日はあるのだが。そして今日に限っては、その推測は的中していた。
「明日、私とするのに……」
アインハルトはぽつりと呟いた。
別に明日アインハルトとするからと言って、翔が今日の行為を控えなければいけない理由などない。約束した時だって、『今日はしないで下さい』などと言ったわけでもないのだ。
「誰としてるんだろう……」
アインハルトから見ても美しく鍛えられていると思える雪菜か。大人の女性のイメージのあるアスナか。ミステリアスな狂三か。小悪魔的な雰囲気で少し苦手にしている理子か。それとも、自分よりも年下のクロやティナか。まさかとは思うが、ララ王女としているのかもしれない。
「ん……っ」
妄想逞しいアインハルトは、自分の知っている女性たちが矢継ぎ早に翔とセックスするシーンを思い浮かべ、内股をこすり合わせた。

あっという間に我慢が利かなくなった。
「……ティオ、電話の通知を切ってください」
「ニャ」
ティオに呼びかける。
前にヴィヴィオ達からの電話で中断された教訓からの措置なのだが、これによってこれから行う行為が阻害される心配はなくなった。
アインハルトの手が自分の敏感な場所に伸びる――――のではなく、最近覚えたことを実行する。
ベッドから降りてその四隅、ベッドの足の部分に跨る。丸みを帯びた角の部分に自らのアソコが当たるように。
ゆっくりと腰を動かし始めた。
「んっ……ぁっ」
それに合わせて、自分の胸元に手を伸ばす。わずかな膨らみの頂点に手を這わせると、硬くしこり始めているモノがあった。
「(少しだけ、少しだけ、発散するだけだから。明日は、翔さんとするんだし。ほどほどにしておかないと……)」
そう考えてもアインハルトの腰の動きは止まらない。
結局この行為をやめたのは、腰がカクついてうまく立てなくなる頃だった。

「じゃ、おやすみ」
「はい。おやすみなさい、先輩」
改めてシャワーを浴びた俺と雪菜は手を振って別れた。
いつもの就寝時刻はとっくに過ぎている。明日のためにも今日はもう寝てしまわなければ。

とはいえ俺も現代っ子。就寝前に少し携帯をいじってしまうこともある。
と、あることに気が付いた。
「ん、アインハルトから電話あったのか」
何回かかかってきてるな。前半の方は綺凛やウェイバーと電話してた時で、後半の方は雪菜とセックスしている時にかかっていたようだ。
「こんなにかけてくるなんて、なんかあったのか？」
綺凛のことかもしれないけど、そうじゃないかもしれない。
「夜は遅いが……」
一応かけてみるか。ファイズフォンを手に取り電話をかける。
だが、
「……でないな」
「ああ。通話の通知が切られているようだ」
「何？」
レプリカの言葉に眉をひそめる。
単純に出ないだけなら、もう寝てしまったのかで片づけることも出来る。だが、通知自体が切られているとはどういうことか。デバイスというのは基本的に電源は入れっぱなし。通知を切るなんてめったなことではしないはずだ。
このまま布団に入っても、アインハルトのことが気がかりで眠ることはできないだろう。せめて画面越しにでも無事を確認できなければ。
「……すまん、アインハルト」
俺は手鏡を取り出した。
俺と結ばれた女の子のことを映し出す、あの鏡だ。
「アインハルトを映せ」
すぐさま鏡は命令を実行し、アインハルトの顔が映し出された。
普段よりも赤く上気した顔に、どこか虚ろな瞳。呼吸は短く口は半開きのままになっている。
というか。

「起きてるじゃん。一体何があった……？」
鏡を徐々に引いていく。
だんだん周りの状況が分かってくる。そこはアインハルトの部屋だ。特に変わった様子はない。
俺の意思をくみ取った鏡カメラが、ドローンのようにアインハルトの周りを旋回しながら、その様子を映し出す。
どうやらアインハルトは立っているようだ。ベッドの四隅にある支柱。木製で、ぶつかってもケガをしないように、角がカットされて丸みを帯びている部分。そこに跨っているように見える。
や、というかこれは……
鏡カメラがさらに動く。
アインハルトは薄着だ。上は黒いタンクトップ1枚に、下は薄水色のシンプルな下着だけ。部屋で1人なのだから当然だが、とても人に見せるような恰好ではない。
そんな格好で、一心不乱に自らの下腹部を押し付けているアインハルト。
オナってた。しかも角オナ。
声が聞こえないので断言できない――――訳がないだろ！　どう見たってそうだよ！　他に説明のしようがあるか!?　見ているだけでアインハルトの艶声が聞こえてきそうだ。
別にいいんだよ？　俺がとやかく言うことじゃないし、というか俺は覗いてごめんなさいをしないといけないし！
それにしてもこの鏡、やっぱり犯罪だな。プライベートも何もあったものではない。一番は使っている俺なんだけどね！　でもまさかこんな場面を覗き見ることになるなんて思わなかったんだよ！
無事も確認できたし、さっさと寝るが吉。年下の女の子の秘め事をこれ以上覗き見るものじゃあない。
そうは思うのだが、
「や、これはしょうがない、よな？」
先ほど雪菜としたばかりのはずの俺の愚息が、立派なテントを作り上げていた。我ながら節操がない。

鏡の中では一心不乱に腰を振り続けるアインハルト。その様子をローアングルから映し出す鏡カメラ。程よく丸くなっている角がアインハルトの割れ目に下着ごと食い込んでいる。程よい刺激なのか物足りないのかぐりぐりと執拗に、何度も何度も。
音や声が聞こえないのが残念でならない――――じゃなくて!!
「……すまん、アインハルト」
俺は――――

今回の行為で手に入れたアイテム
仮面ライダーライア変身セット
ライアのカードデッキ、ライアウォッチのセットパック。
龍騎のライドウォッチを手に入れている場合、使用可能になる。
「え？　これでも手に入る訳!?　確か自分でした時はダメだって……みんなのことをオカズにしたらＯＫってことなのか？」

深夜、とっくの昔に面会時間が終わった病院に、忍び込む影があった。
『忍び込む影』と言ったが、その人物に影はない。正確にはあるのだが、本人の輪郭がぶれるのに合わせて、影も現れたり消えたりする。
それはアナザーゴーストに変身したユウキだった。
アナザーゴーストの力によって半分幽霊になっているユウキは、とっくに電源が落とされている正面ホールの自動ドアを通り過ぎる。
さらに適当な場所まで進むとその場でジャンプ。天井を透過して上の階で着地する。

本来ゴーストの力によってふわふわと浮かぶことができるのだが、ユウキはそこまでゴーストの力を使いこなしているわけではなかった。そして使いこなしたいとも思っていなかった。

ユウキがこの力を使う目的はただ1つだ。

さらに上の階へ。目的地に、自らの姉の病室へ近づいていく。

当然病院には、見回りや監視カメラが設置されている。だが今のユウキは幽霊。カメラには映らないし足音や気配もない。直接見られなければ問題はないのだ。それも、霊的な能力を持つ者でなければいけない。

それを知っているユウキは、壁などお構いなしに、真っすぐ、最短のルートで歩き続ける。

「姉ちゃん……」

そしてたどり着いた。

いつもはガラス越しに眺めている無菌室。その中央にあるベッドと一体化した、寝ている人の頭部を覆い隠すような機械。顔は見えないが、手足は恐ろしいほどに細い。病室の関係上、寝たきり患者に行われるマッサージが最低限の回数になっているのだ。

姉にこんなに近づいたのは本当に久しぶりだった。この力を貰ったおかげで病気のことを気にする必要なく、こんなに無防備に近づけるのだ。

もっとも、カメラ越しにこちらの状況を確認する姉には、ユウキがここを訪れていることは分からないのだが。

「それじゃあ、姉ちゃん……」

ユウキは溜め込んだ生命エネルギーを送り込み始めた。

ユウキがアナザーゴーストとして活動を始めたのは9月の半ばに入ってからだった。

8月の終わり、謎の男の甘言に惑わされウォッチを受け取ったユウキだったがすぐには行動に移さなかった。

冷静になった後に考え、知らない相手の言葉に素直に従うことはなかった。だがそれでも、受け取ったウォッチを捨てることは出来なかった。

そうして過ごしていくうちにも容態が悪くなる姉。発作が起きたことで、ユウキの覚悟は決まった。
『ＧＨＯＳＴ』
初めての変身。詳しいことは分からないのに、力の使い方は分かる。あの男が、この力なら姉を救えるといった意味も理解出来た。
それからというもの、ユウキは毎晩のように島中を徘徊し、生命エネルギーを集め、こうして姉に与えに来ているのだ。
「バイバイ、姉ちゃん。また来るからね」
別れのあいさつに、返答はない。
ユウキが家に帰ると、空が白み始めていた。
変身したまま部屋の中に入り、変身を解く。そこでようやく一息つくことが出来た。
変身はすべて部屋の中で完結させていた。それはユウキの中に、この行為が褒められたものではないという意識があるからだ。人に見られるわけにはいかないという、いわば罪の意識が。
ネット上ではユウキ（幽鬼）のことをヒーローだ何だと書き連ねる文章もあったが、本人には全くそんなつもりはない。
すべては姉のため、身勝手な理由で他人から生命エネルギーを奪っている。ユウキの良心で罪のない人には手を出していないだけだ。
「仮眠、とらないと……」
そう呟いてベッドに倒れこむ。
眠れる時間は1時間ほどだ。学校もあるし、行く前にシャワーも浴びなければいけない。
疲労を考えれば余裕で寝過ごしてしまいそうだが、ここ最近はそこまで長く眠ることはない――眠れなくなっているという意味で。
だがユウキの周りにはユウキの身を案じる温かい人達が多い。不自然な姿を見せれば心配されるし、危険なことをしていると知られれば止められるかもしれない。この生活を続けるためには、誰にも知られてはいけないのだ。
眠るまでの少しの間、ユウキは昼間のことを考えていた。
「（綺凛にバレた……ばれた、かな……？　でも普通に剣構えちゃった

し、わかるか……）」
　綺凛が現れたことに驚いたせいで動揺して、名前を呼ばれてとっさにいつものように剣を構えてしまった。綺凛ほどの実力者ならそれだけで分かってしまうだろう。
「（でも、どうしようもない、よね……）」
　だからと言って何をできるという訳でもない。ユウキには綺凛に事情を話すつもりは無いし、だからと言って口留めをするつもりもない。
　誰かに相談されるかもしれないが、
「（それは、その、とき、考えよ……）」
　ユウキは眠りの中に落ちていった。

　綺凛の夢の中。
　綺凛は両手を地面について荒い呼吸を整えていた。
　今さっき、肩から胴体にかけて袈裟斬りにされたところだ。
　それ自体は昨日も繰り返された光景だが、達人であるムサシにはその些細な違いを敏感に感じ取っていた。
「はぁ、はぁ、はぁ……!!」
「ん～？　どうしたの？　昨日に比べて今日はずいぶんと集中できてないみたいだけど？　って、分かるけどね。昼間の事でしょ？」
　刀で肩を叩きながら、ムサシは軽い調子で言う。
「……何か知ってるんですか？」
「私じゃなくて、『違うムサシ』さんがね。私もそちらの方は専門外なので。詳しく聞きたいなら変わる？」
「……いえ、結構です。聞いたところで、私には何もできることはあり

ませんから」
そう言って刀を構える綺凛。
「……そ。そういうなら遠慮なく――――はっ!!」
「ッ!!???」
目にもとまらぬ剣戟に何とか食らいついていく綺凛。
「（今はただ、自分に出来ることを……！）」
その一念で綺凛は刀を振るうのだった。

予想外の来客

次の日。学校も終わった放課後。

『やめな――――さい!!』

「おおう……そうくるのね」

画面に映ったエアリアルが、手のひらを使って敵兵をぺしゃんこにした。こうして水星の魔女、１２話が終了する。

あれから数日、暇を持て余す俺は２日をかけて水星の魔女ＢＤを視聴したのだ。なんだかんだ、この謹慎期間にＢＤが出たのは良かったと思う。まとまった時間がとれたしね。

「で、続きは？」

手元にある物は最後まで見たが、明らかに終わりではない。あれで完結だったらサ○ライズにクレームが殺到するだろう。というか、最後にＳＥＡＳＯＮ２とか書いてあったし。

というか、

「分かった気がする」

今回、エアリアルには１２話までのＢＤが付属していた。だが中盤で中破したエアリアルは修理ではなく改造され、別の機体に変貌を遂げていた。つまりあれがこの後の主人公機なんだろう。

「あれを獲得しないと、続きが見れない……？」

あのラストで続きが見れないなんて何て生殺し。残酷なことを考えたものだ。

「でもこの仕組みで行くと……」

俺の知らないガンダムがあるってことは、俺の知らないライダーだったり、ジャンプ漫画だったりも、ガチャで来るかもしれないってことか。

そう考えるとちょっと……や、かなりワクワクするな。

「ま、それにはみんなの協力が必要不可欠なんだけど」

戦力強化でも俺の中ではギリギリなのに、アニメや特撮の続きが気になるから、なんて理由ではな。これは続きを観れるのは当分先になりそうだ。

「で、今度はこっちか……」
覇気習得指南書（見聞色編）に目を落とす。原作でもここの修行シーンはばっさりカットされてたからな。いったいどんな内容なのかと思ったんだけど、フムフム……こんな感じなのね。
まあ訓練自体は誰でも出来そうだな。問題は習得までにどのくらい時間がかかるのかってところだ。
才能の有無もそうだし、ルフィ達でも年単位で時間がかかっているはずだ。果たして例の『3年後』までに俺が習得できるのだろうか。
「ま、やらないよりはマシってね」
そう呟いて俺は指南書のページをめくっていく。やれることはすべてやらなければ。後悔してからでは遅いのだ。隙間時間を見つけて練習していこう。
しばらく指南書の文字を追う事に集中し、1時間ほどしたところで顔を上げた。
「……そろそろか？」
時間的にそろそろ来るはずだ。それも相当緊張してな。これからする行為を考えれば当然だけど。
昨日見たあの行為については……まあ触れないでおこう。あの鏡のことはアインハルトは全く知らない訳だし。
ピンポーン！
「お」
ウワサをすれば。
俺はソファーから立ち上がり、玄関に向かった。
「いらっしゃ――――い？」
「こんにちわ。アインハルト・ストラトス、参りました」
そこに居たのは俺の想像した通りの人物、緊張した面持ちのアインハルト――――と、
「「こんにちはー!!」」
「あはは、こんにちは……」
「おっす」
チームナカジマの面々がそろっていたのだった。

「……何で？」
想定外の娘達の訪問に、思わずそう呟いてしまうのだった。

「そうだ。みんなに連絡しておかないと」
翔との約束のことを思い出したアインハルトが、チームナカジマのグループチャットにメッセージを飛ばした。
（アインハルト）明日の訓練ですが、急遽予定が入ってしまったので参加できません。申し訳ありません。
「送信、っと、これでいいかな」
送信するとすぐに返信が返ってくる。
（ヴィヴィオ）えー!? どうしたんですか？
（コロナ）どこか具合でも悪いんですか？
（リオ）アインハルトさんが訓練を休む!? そんなことが!?
（ヴィヴィオ）確かに！ そんなに悪いのかな……
「……」
適当に学校の用事とでも返しておけばよいものを、3人の反応を見たアインハルトは、
（アインハルト）いえ、大したものではないので、気にしないで下さい。体調が悪いという訳でもありませんから。
そう言われて気にしないなんてこと、出来る訳がない。
（ヴィヴィオ）ホントですか!? 何か困ったことがあれば相談してください！
（リオ）そうですよ！ 大変だったらコーチにも相談したほうが！
「……ふぅ、ええと……」
善意のコメントにアインハルトは一息吐いて返信する。
（アインハルト）本当に大丈夫ですよ。用事と言うのは翔さんに呼ばれているだけですから。少し特訓に付き合って欲しいとかなんとか。

（ヴィヴィオ）えー!?　秘密の特訓!?
（リオ）一体どんなことをするんですか!?
　何故か『特訓』が『秘密の特訓』に変換されてしまった。言葉だけが独り歩きしてしまい、ヴィヴィオ達のボルテージが上がっていく。
「マズい、ですね……」
　ナニをするかなど、説明できるわけがない。これが綺凛だけなら話は別――――もしかすると一緒にするという話になったのかもしれないが、今の所綺凛からの反応はない。
　変な方向に話が大きくなる気配を感じて、
（アインハルト）翔さんからも内容は詳しく聞いてなくて。でも私1人だけで来て欲しいと。
　これで話を打ち切ろうとするも、
（コロナ）一人だけ……？　じゃあ、綺凛さんは呼ばれてないんですか？　アインハルトさんと翔さんだけで特訓を？
　アインハルトと綺凛が、ヴィヴィオ達の年代と比べて翔と仲が良いことは周知の事実だ。にもかかわらず、アインハルトと2人きりというのは違和感がある。
　聡いコロナだからこそ気づけることだった。
（コロナ）綺凛さん、最近様子がおかしいですし、もしかしてそのことで何かお話があるのかもしれないですね。
「流石です、コロナさん……!!」
　本当は全然そんなことはないのだが、綺麗にまとまる雰囲気を感じ、小さくガッツポーズをとるアインハルト。だが続くチャットに再びあわあわとした表情になってしまった。
（ヴィヴィオ）えー!!　じゃあ私達も参加したいよ！
（リオ）だよね！　綺凛さんの事、ほっておけないもん！
（コロナ）だよね。アインハルトさん、翔さんに何とか許可をもらうことは出来ませんか？
（アインハルト）聞いてみるので、少々お待ちください。
　メッセージを打ち終わって頭を抱えるアインハルト。
「……うぅ、どうしよう……!!」

「……という事があったんです」
「なるほどな……」
まあ、ウチに来るとなったら当然訓練には行けなくなるわな。そしてその連絡も、当然入れる。そしたらみんな気になって質問する。
アインハルトが訓練よりも優先する『用事』なんてそうそう思いつかないからな。1人暮らしだから家庭の事情云々も使えないし、下手な嘘はすぐにばれる。それにアインハルトは嘘をつくのに向いてない。
実際、うまくかわしきれなかったしな。
というか、水星の魔女に気を取られてアインハルトからの連絡に気が付かなかったみたいだ。やっちまったな。
とは言え、来てしまった以上どうすることも出来ない。子供達だけならまだしも、ノーヴェさんまでいるとは。下手な言い訳は通用しないと思った方が良いだろう。
「それで、秘密の特訓って何をするんですか!?」
「アインハルトさんに言われて、『コレ』持ってきたんですけど、何処で使うんですか？」
「もしかして、綺凛さんのことを話すのかなって思ってたんですけど……違うんですか？」
「……まあ、そうだな。みんなも持ってきちゃったか……」
『コレ』というのは別に変なものではない。場所によっては必須になる衣服だ。主に水辺で着用する――――要するに水着だった。
「ああ。ホント、こんなものアインハルトに持って来させて、何させようとしてたんだ？　ん？」

ノーヴェさんがニヤニヤと聞いてくる。
もちろん、ちゃんとした思惑ってものがあったんだけど。
「……ああ、わかりましたよ。今日アインハルトを呼んだのは別に綺凛のことを話したかったからじゃない。別に気にならないわけじゃないけどな。本当はこの世界を探検してもらおうと思ったんだ」
俺はみんなを新しく手に入れた『世界』に案内することにした。

『中』に入ると、俺たちは豪華なホテルのロビーに立っていた。柔らかな絨毯に、見ただけで高級だとわかるようなシャンデリア風の照明とソファー。そして誰も立っていない受付――いや、そもそもこのロビー自体に、人がまったくいないのだ。
「わー！　ひろ～い!!」
「すっご！　貸し切りじゃん！」
「ヴィヴィオちゃん、リオちゃん、待って～！」
「おーい、お前ら！　走んなって!!」
周りの状況を確認していると、すぐ隣にいた子供たちが我先にと駆け出した。
大声を出しながらあっちこっちに、色々なところをべたべたと触りながらだ。通常なら咎められる行為でも、前述のとおり誰もいない空間なら許されるのだ。一応ノーヴェさんが注意してるけど、誰もいない空間だってことを前もって説明していたからか、その口調はずいぶんと軽い。
ということでやってきたのは、昨日手に入れた高級リゾートのダイオラマ球だ。
今日の本来の予定とはだいぶ違ってしまったのだが、ここには来よ

うと思ってたからな。本来ならアインハルトと2人で色々と確認しながら色々するつもりだったんだけど、みんなも来ちゃったからな……

「……で？　そろそろ説明してほしいんだけど？」

ノーヴェさんがちびっ子たちを追って少し離れたところで、俺は横でただ1人縮こまっているアインハルトが上目遣いで頭を少し下げた。

「すみません。勝手な嘘をついてしまって……」

「や、いいよ」

しょんぼりと肩を落としてしまったアインハルトの頭をなでる。そしてそのまま耳を寄せた。

「それとも、みんなは邪魔かな？　これじゃあ、今日はできないかもしれないもんな？」

「そんっ、な、邪魔なんてこと……っ」

言葉に詰まるアインハルト。だがそれは図星であったことの証明にもなる。

「ごめんごめん、冗談だよ。ま、機会があったらな。見ての通り人もいないし、適当に隠れただけじゃバレちまう」

「そう、ですね」

この場で2人そろって姿を消すようなことがあれば、みんなは血相を変えて探し回るだろう。気配遮断があるので見つからない可能性もあるが、コトが終わった後に何をしていたのかと聞かれるもの面倒だ。

なので、『機会があれば』というのは別行動になる場合か、『みんなの目の前でしていても問題ない』という極めてあり得ない状況だな。

そんなことを話していると、みんなが戻ってきた。

「お兄さ～ん！」

「おう、どうだった？」

「すごいです！　人がいないのは少し怖いですけど！」

「でも、これが特訓……なんですか？」

ヴィヴィオ、リオ、コロナが思い思いの感想を述べている。

「特訓……ってのは方便で、ホントはここの探検をしようって話だったんだ。ほら、正直に言っちゃうとアインハルト来てくれないかもしれないだろ？」
　そんなことはないですけど、という視線がアインハルトから向けられる。
　コロナちゃんが手を挙げる。
「じゃあ水着を持ってきたのは……？」
「ここには屋上プールがあるからな。入りたくなったら入ろうかと思って」
「プール!?」
　俺の言葉に目を輝かせるのはヴィヴィオちゃんとリオちゃんだ。
「はいはい！　私プールに行きたいです！」
「私も私も！」
「あっ、私はもっと別のところも見て回りたいんですけど……」
　ヴィヴィオちゃん、リオちゃんがプール、コロナちゃんは別の場所と意見が分かれてしまった。
「うーん……ここは危なくないんだよな？」
「はい。少なくとも不審者が入ってくることはないですよ。出入りに俺の許可が必要なんで。乗り物も動いてないですし、事故の心配もありません」
「そっか、じゃあ、何かあったら連絡しろよ？　あぶねーことはすんなよ」
「はいっ！」
　コロナちゃんが元気よく頷いた。
「んじゃ、２時間後にここに集合にすっか。翔とアインハルトはプールにはいかないだろ？」
「俺は……まあ、どちらでもいいんですけど」
　ちらりとアインハルトを見た。選択はそちらに任せるという意味だ。
　どうしてノーヴェさんが決めつけて話しているのかは、俺とアインハルトに配慮してくれたからだろう。

本来ならここは、２人で来るはずだった。俺達の関係を何となく察しているノーヴェさんだったら、察してくれてもおかしくはない。
「私は、そうですね。私も見て回ろうと思います」
「じゃあ、俺もそうするかな」
「りょーかい……ガキ２人はアタシに任せな。お前は、な」
耳を寄せて小声で呟いてくる。
配慮してくれるのはありがたいんだけど、こう、ずっとニヤニヤされてるのは面白くないな。
「ホントはコロナもプールに行ってくれた方が良かっただろ？　変なところ見られちまうかもしれねぇしな」
「俺とアインハルトは、いったい何をすると思ってるんですか？」
俺はきょとんとした顔で逆に問い返してみた。本当に心当たりが無いとばかりに。
そんな俺の態度に、にやにや笑いを引っ込め、困惑するノーヴェさん。
「い、や……何って、ほれ、アレだってアレ」
「アレとは？」
「だからアレだよ！　恋人同士でするアレって言ったら、アレだろ？」
「はい」
「……だ、だからな」
もごもごと、ノーヴェさんは赤くした顔を横に向けて、
「……キスとか？　２人きりになってさ？」
何とも可愛らしいことを、小声のボリュームをさらに落として呟いた。そのうぶな反応に、思わず笑ってしまう。
「なっ!?　てめっ、何笑ってんだよ!!」
「いえ、お気遣いありがとうございますと思って。そうですよね。恋人になったら、そういうことしますよね」
俺の態度があまりにも余裕だったからだろう。ノーヴェさんが追加の質問をしてきた。
「……あの、さ。お前ってもしかして、いや、多分そうだとは思ってるんだけど……経験あんの？」

「普通にセクハラですよ」
「ぐむむ……!!」
俺の交友関係や生活状況を知ってる人なら、確信してるだろう。表立って喧伝することでもないが。
「それじゃあ、ノーヴェさんの厚意を有難くいただきたいと思います」
「……ケッ！　余計な気回すんじゃなかったぜ！」
耳まで赤くしたノーヴェさんはそう吐き捨てて、屋上プールに行くためのエレベーターに向かっていった。
「翔さん？　ノーヴェさんと何を話されていたんですか？」
「いや、別に何にも？　じゃ、行くか」
「お二人は一緒に行動するんですか？　それでは、私はこっちの方に行ってみますね」
コロナに手を振りながら、ホテルの外に向かって歩き出すのだった。